デビルバスター日記

黒雨みつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
デビルバスター日記

【Ｎコード】
Ｎ４０４２Ｗ

【作者名】
黒雨みつき

【あらすじ】
【デビルバスター】とは人々の生命を脅かす異界の者――“魔”を退治する力を持つと認定された者たちの称号である。……この物語は中世に似た異世界を舞台に、『女性アレルギー』という特異体質の少々頼りない青年ティーサイトが、デビルバスターを目指して成長していく姿と、そんな彼の戦いを描いた長編ファンタジーです。
※個人サイトとの重複投稿になります。

プロローグ

――大陸。

ここに住む者は、自分たちのいるこの大地に特別な名前をつけることもなく、ただ“大陸”と呼ぶ。だが、他の大陸とどうやって区別をつけるのか、などという心配は、ここに住む者たちにとっては意味のないものだった。

何故ならば、彼らにとっての大陸とは、自分たちが住む場所以外に存在しない……いや、存在していたとしても、それを彼らが目にすることはないから。

絶対領海――“シルベスク”

大陸人は、大陸の外側を囲む海のことをそう呼ぶ。

シルベスクとは大陸に言い伝えられる神話上の生き物で、自分の領域に進入した船を片っ端から呑み込んでいく海の怪物だ。……その名を冠した海は常に大嵐にさらされている領域であり、その海はまるで神話上の怪物さながらに大陸から離れようとする船を呑み込んでしまうのである。

この嵐の領域を抜けた者は――正確には、抜けて戻ってきた者は――未だどこにも存在していなかった。

そのため、大陸人にとっては、この大陸が世界の全て。だから当然“大陸”といえば、彼らの住むこの大地のことを指すわけである。

さて、その大陸には数十にも及ぶ大小様々な都市国家が乱立している。過去には数百という数の勢力が存在していたこともあり、そのためこの大地は古くから争いの絶えない場所であった。

だが、約三百年ほど前、国家間の争いを禁じた“ヴォルテスト条約”に、大陸の約八割ほどの国が同意してからは、この大陸は平穏そのものだ。国家間の往来は身分の証明さえ出来れば基本的に自由

であり、一般的な法律は統一され、その中で生じる都市国家間の問題には、盟主である“帝都ヴォルテスト”が間に入って調停を行う。
最初のうちは小さないざこざが絶えなかったものの、それでもここ百数十年、ちょっとした小競り合い程度のことはあるにせよ、少なくともこの同盟国間での大きな問題はほとんど発生していなかった。

――さて。

大陸のほぼ中央に位置する“帝都ヴォルテスト”から北に移動すると、帝都に負けずとも劣らぬ大規模な都市がある。
大陸でも有数の歴史を誇り、古くは“北の雄”とまで呼ばれた実力を持つ“学園都市ネービス”である。
ここはその“学園都市”の名が示すように、学問の都として栄えた都市だ。他国の重鎮の中にもこの街の学園出身という者が多く、まさに大陸における学問の中心地。また、街の治安の良さも大陸随一といっても過言ではなく、知識人から旅の商人までもが集まる交易都市。
そして物語はここ、ネービスで始まる――

「ウガァァァァァァッ！！！」
「ひぃっ！！」
夕日に染まるネービスの街――その入り口から約一キロほども離れた街道。
その場所には、一台の馬車が止まっていた。
……いや、“止まっていた”という言い方はおかしいだろうか。
「たっ、助けて……っ」
その馬車を引いていたはずの馬はすでに動かぬ骸となって地面に

横たわり。その手綱を握っていた男は、たった今、地面に尻餅をついて上空を見上げている。
上空？
いいや、違う。
彼が見上げているのは上空ではなかった。
彼が見上げていたのは――
「ばっ、化け物……！！」
そう。
化け物だ。
体長約四メートル。体重は……見た目で四百キロ以上はあるだろうか。
それほどの巨漢が、まさに男に襲いかからんとしていた。

――それは、日常茶飯事。

彼が言うところの化け物――“魔”と呼ばれる異世界の生き物たちに脅かされ、そして日に何人もの人間が命を落としている、ここはそんな世界。
そして人々が化け物たちに抗う術は少ない。何故なら、彼らは普通の武器では容易に傷つけられないのだ。
ある化け物は体に触れる前に刃を溶かし。
ある化け物は外皮でそれを破壊してしまう。
そしてまた、ある化け物はあまりにも素早く、普通の人間では姿を追い切ることも難しい。
ほとんどの人々は無抵抗のまま彼らに殺されていった。あたかも、それが自然界の摂理であるかのように。
――だがもちろん、人間たちもただやられっぱなしだったわけではない。
特殊な資質を身に備え。
特殊な武器を手に携え。

特殊な知識を駆使して彼らを撃滅する者たちがいた。

「化け物――か」

「！」

突然、風に乗って届いた声は、この場にはそぐわない、あまりにも緊迫感のないものだった。

自然では考えられないような、異質な力によって空気が歪む。

直後――化け物の動きが止まった。

「正確には違うな。こいつは」

毛皮に包まれた胸の辺りがモゾモゾと動いた。

――いや。

「ひぃっ！！！」

まるで破裂するように、化け物の胴体が弾けた。

どす黒い血飛沫が辺りに飛び散る。

「こいつは地の四十八族。人に似た姿を取ってるわりにオツムの弱い、体だけ異様に丈夫な、いわゆる筋肉バカってヤツさ」

オレンジ色の夕日を反射したのは二本の剣。半楕円型という奇妙な形、刀身に奇妙な文様の描かれた二本の刃。

生々しい音を伴って、化け物の体が真っ二つに裂ける。

「っ……っ……！！」

尻餅をついた男は驚きに声が出ず、ただ黙って、化け物の大量の血を浴びるだけだった。

「……ふん」

二つに分かれた化け物の体が地面に落ちる。いくら化け物とはいえ、その状態ではもはや動くはずもなく――

「被害が出る前で良かった、というところか」

血に汚れた半楕円型の剣を拭い、化け物の背後から姿を現したのは、額に灰色の布を巻き付けた眼光鋭い一人の青年。

そしてその背後には、さらに三人の人物がいた。

「ええ。間一髪でしたねぇ」

黒縁眼鏡の中心に中指を添えた、目の細い学者風の男性。
「ふん……」
面白くもなさそうにただ鼻を鳴らすだけの、ずんぐりした体躯で無愛想な三十過ぎの男。
「ちぇっ。隊長、今回は俺に任せてくれるって言ったじゃないっすかぁ」
そしておそらくは十代半ば、まだあどけない色を残した不満顔の少年。
「あ、あ……」
そこまで来て、尻餅をついた男はようやく悟ることができた。
自分が助かったこと。
そして――
「あんたたちは……」
自分を助けてくれた、化け物をいとも容易く葬ったこの青年の正体を。
「デビル、バスター――」
男がそう呟くのと、青年が薄い笑みを浮かべて背を向けるのはほぼ同時だった。

魔を狩る者――デビルバスター。
これは、その称号を受けた者たちによる、熾烈な戦いの記録である――

その1『ティーサイト＝アマルナ』

学園都市ネービス。そこは盟主ヴォルテストに次ぐ大陸第二の都市との呼び声も高い、学問と交易の街。

この街の構成は非常にわかりやすくなっている。北高南低とでも言おうか。

中央には一本の大きな通りが走り。

その最北端に領主である“ネービス公の屋敷”

その周辺には貴族たちの屋敷がある“高級住宅街”

少し南に下ると、そこにはこのネービスの象徴ともいえる“学園群”

そこをもう少し南に下ると、今度は普通の市民が住む“一般住宅街”

という構成だ。

あとはその周囲、街外れともいうべき場所に一種のスラム街のようなものもあるが、他の街に比べればずっと規模が小さい。それは、この街がそれだけ裕福であるということの証明でもあるが――さて。

春の麗らかな陽気。

たくさんの人が訪れ、たくさんの人が交流する、ここネービスの昼下がり。活気に溢れ、威勢の良いかけ声や元気な子供たちの声が響き渡る中央大通り。まるでお祭りのような賑わいのそこから……ほんのちょっとだけ、静かな路地裏の方に視線を移してみることにしよう。

あれだけ騒がしかった街の喧噪が微かに遠くなり。同じだけ降り注ぐはずの太陽の光も心なしか遠慮しているような、そんな路地裏。

「フゥーーッ！！」

「おー、よしよし。いい子だから大人しくしていてくれよー……」

そこに二つの影があった。

もっと正確に言うと、一人と一匹の影。

――もう少しじっくり観察してみることにしよう。

片方は白と黒の斑模様の服……ではなく、毛皮に身を包んだ、まん丸の目とちょっと長い尻尾と鋭い牙を持つ獣。それは俗に“ネコ”と呼ばれる、愛玩動物として飼われることもある類の獣だった。

黙っていればなかなかに愛らしいのだが、残念なことに彼（彼女？）は現在ご機嫌斜めのようで、毛を一杯に逆立て、まるで威嚇するようにツメとキバを剥き出しにしている。

「そーっと、そーっと……」

そしてもう片方。完全に敵視モードのネコに対して手を伸ばすという“無謀”としか思えない行為に及んでいる男。

いや、少年。

……いや、男か。

その人物は何とも年齢の断言し難い外見をしていた。

――さらに細かく見ていくことにしよう。

まずは特に描写する必要も感じない“ごく普通”で“ごく平凡”な服装。センスの善し悪しを五段階で評価するならギリギリ及第点の二といったところか。背は相当高く、成人男性の平均を十センチ以上は上回っていた……が、若干猫背気味で体型はひょろっとしており、上背の割に威圧感というものを感じない。

髪は中途半端な長さでそこそこキレイに整えられてはいた。

――と、まあ、とりあえずここまでの説明だと、中身はどうであれとりあえず成人した男性を思い浮かべるかもしれない。

が、視点を彼の顔面に向けたとき、再び首を傾げざるを得ないだろう。

まず最初に断っておくが、そこに乗っかっている顔は特別ハンサムではない。優しそうな目が多少の好印象を与えるかもしれないが、それ以外はごく平凡――決して悪いという意味ではない――であり、少なくとも婦女子がキャーキャー騒ぐような容姿ではなかった。

ただ……そう。

一言で済ますならば“童顔”だったのである。

「そーっと、そーっと……」
と、説明している間に、彼の手がネコの警戒領域までに迫っているようだ。
ひとまずはこの成り行きを見守ることにしよう。
とはいえ――結末はそれなりに想像がつくであろうが――――
「ふにゃぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」
「……ぎゃぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

――合掌。

「はい、こちらがお探しの子猫です……」
数分後。
先ほどの彼の姿は、とある一軒家の玄関先にあった。
「あー！　ベテルギウスっ！！」
「にゃぁぁぁ……」
とりあえず休戦協定でも結んだのか、彼の腕に抱かれていた先ほどのネコは、幼い少女の声とともにそこから飛び下り、家の中へと入っていく。
状況から察するに、ベテルギウスという――奇妙な――名前のネコは、この家の飼い猫であったらしい。
そして、
「あらあら、すいませんねぇ」
その場にはもう一人、どうやら少女の母親らしき人物がいた。
「大変でしたでしょう？　あの子、家族以外には懐かないものだから……」
「あ、いえ。ははは、それほどでも……」
照れたように頭を掻く彼の顔は、誤魔化しようもないほどのひっかき傷で一杯だ。母親の方もそれは承知しているようだったが、そ

こには敢えて突っ込まなかった。
「それじゃあ、これがお約束の報酬です。大した額ではないですけど」
「あ、いえ、そんなことは――あ、それと、また何かございましたら……」
「ええ。そのときはまたあなたにお願いしますね」
母親はニッコリと微笑んで頷いた。
「はい。よろしくお願いします」
嬉しそうにしながら大袈裟に頭を下げて……そして彼は再び街の中へと戻っていくのだった。
――さて。
彼の仕事もどうやら一段落ついたようなので、ここいらで正式に彼――このお話の主人公であるところの――ティースという人物について説明しておくとしよう。
“ティース”
たった今そう呼んだばかりだが、それは彼の本名ではなくペットネームだ。
正式な彼の名はティーサイト。ティーサイト＝アマルナというのがフルネームであり、ティーサイトを略して“ティース”なのである。
年齢に関しては先ほど色々と説明したが、正確なところは一ヶ月ほど前に誕生日を迎えた十八歳。まあ、なんとも中途半端な年齢であるが、この世界の常識に当てはめるなら充分に大人であるといえるだろう。
つまり彼は、妙に背の高い少年などではなく、単に童顔な青年だというわけである。
「今月も不作だなぁ」
さて、先ほどの家を出たティースは、未だにチクチクヒリヒリと痛む腕と顔面の傷を何度も撫でながら昼下がりの大通りを歩いていた。

手にしていたのは先ほどのお宅で入手した“お礼”。そこにあったのは小さな銀色の硬貨が三枚。

「生活、ヤバいかもなぁ……」

それがどのぐらいの価値かというと――十歳を越えた程度の子供が月にもらう小遣いと同じぐらい――といえば大体想像できるだろうか。飼い主の家を飛び出した子猫を探して街中を駆けずり回り、腕と顔にひっかき傷を作って……それに見合った報酬であるかどうかはまた微妙なところであった。

しかしまあ、彼がぼやいているのは今回の報酬が少ないということに対してではない。“迷子の子猫探し”なんて仕事までこなさなくては生活していけないという、仕事そのものが不作な状態を嘆いているのだ。

「傭兵つっても、俺みたいに知名度が低いとこんなもんだよなぁ……」

傭兵。

それが彼の職業だ。

ここで頭に“？”マークが浮かんだなら、それはこの世界における知識が若干不足しているということなので、補足しておく必要があるだろう。

この世界でいうところの“傭兵”。それはわかりやすく言うと“何でも屋”のことである。依頼主との間で取り交わした契約に基づき、報酬と引き換えに様々な仕事をこなしていく者。

それがこの世界でいうところの傭兵。

彼のように、子供の小遣い程度の報酬をもらって迷子の子猫探しをするような者でも、それはこの世界でいう傭兵なのである。

……とはいえ。決して彼がそういう仕事しかできない人物だというわけではない。こう見えても彼は剣の腕にはそれなりに長けているし、警備とかそういう方面の仕事にだって適正があるのだ。

ただ――先ほど彼が自分でぼやいていたように――知名度の低い傭兵にはそれなりの小さな仕事しか入ってこないというだけの話。

気楽そうに見えて、これでなかなかに競争の激しい業界なのだ。
「ふぅ……」
子猫の家を出てから何度目になるかわからないため息をついたティース。とりあえず傭兵専門の仕事斡旋所に顔を出し、当然のように空振った彼は、太陽が若干西に傾きかけていた頃、ようやく自宅に戻ってきていた。
ネービスの中域の大半を占める一般住宅街。
その中でも大通りから大きく離れ、比較的貧しい人々の住む閑散とした地域。そこにある若干みすぼらしい、古ぼけた平屋。
そこが彼の家だ。
見た目からして貧しそうだが、実際に貧しいのだから是非もない。
そのドアに手を伸ばしかけて……ティースはふと思い出したようにふと呟いた。
「あぁ……あいつ今日は休みだっけ。家にいるかな……」
彼には親はなく、兄弟もない。もちろん結婚もしていないため、家族なんてものは一人もいない。
ただ、このボロ家に一人暮らしなのかといえば、そういうわけでもなく……家族という言葉には決して当てはまらないが、一緒に暮らしている人物なら、一人だけ存在していた。
「ただいま――」
そして彼がくたびれた様子でドアの取っ手に手をかけようとした、そのとき。
ガチャ。
「え……？」
いつも以上にボーっとしていたティース。
そして内側から勢いよく開かれた“外開きの”ドア。
――訪れた結末は、周囲の期待を寸分たりとも裏切らなかった。
ガンッ！！
「ぶっ！！！」
「……あら？」

同時に聞こえたのは怪訝そうな声。
透き通るような――凛とした印象のその声は――顔を確認するまでもなく女性。それも、おそらくは彼よりも年下であろう少女のものだった。
「てててて……」
尻餅をついて鼻面を押さえるティース。
ドアはゆっくりと開き、そして中から声の印象に違わぬ一人の少女が姿を現した。
「ティース？」
その少女は長い髪を後ろでまとめた、いわゆるポニーテールと呼ばれる髪型であり、その髪は、まるで水飴で出来ているかのように透き通った綺麗なブロンドだ。背はそれほど高いわけではなく、女性としてはだいたい平均ぐらい。ただ、この先も成長するのであれば、若干平均を超えることになるだろう。
年齢は……どうだろうか。
ポニーテールという少々子供っぽい髪型からは“少女”という表現が似合う――おそらくは十三、四歳ぐらいであろうと予想できる。が、ティースとは逆の意味で、彼女もまた、年齢を断言し難い容姿をしていた。
それは――そう。その、顔立ちだ。
それを一言で表現しようとするなら、文句なしに“美少女”という言葉がピタリと当てはまるだろう。そしてさらに一言付け加えることが許されるとするなら、おそらくは“完璧な”としか表現のしようがない。
それはまるで凄腕の職人が、持てる技術の粋を集めて作り上げた芸術品のような、冷たさすら感じさせるほどものだった。それが、おそらくは実際の年齢よりも彼女を大人びて見せている。
「ティース、お前……一体、なにをやってるの？」
凛とした少女の声。
口調も思った以上に大人びている……というより、少々高圧的な

色がある。その容姿の印象と合わせて、どうにも冷たい響きを持っているように聞こえてしまうのも仕方のないところか。
それに、彼女の言い様は客観的に見てもあんまりな物言いだった。
「な、何をって――」
状況を見れば、何がどうなって彼が地面に尻餅をついているのかなど、容易に想像できそうなもので。
「いきなりドアを開けるから、顔をぶつけちまったんじゃないか……」
それを、身振り手振りを加えてわざわざ説明するティース。
だが、
「そんなことを聞いてるんじゃないわ」
少女は当然のようにそう言うと、呆れ顔で腰に手を当てた。
「どうしてドアの前でぼーっと突っ立ってたのかを聞いてるのよ」
「だ、だからそれは、ぼーっとしてたんじゃなくてドアを開けようとして――」
しかしまあ、彼が少々……いや、“かなり”ぼーっとしていたこともまた確かだ。強くは反論できない。
「あら」
少女は特に興味もなさそうに言って、
「もう少し周囲に気を付けた方がいいわね」
そのまま彼の横を素通りしていく。
「あ、あのなあ」
そんな彼女の態度に、当然のように彼は不満の声を上げた。
「そりゃ多少はぼーっとしてたかもしれないけど、少しは謝るとか――」
「――謝る？」
彼の言は特に常識を逸したものではなかったはずだが、少女は振り返った途端に形の良い眉をひそめた。
「私が？　お前に？　何故？」
「……い、いや、いいよ」

そんな彼女の前では、ティースはあっさりと引き下がる以外の術を持っていなかった。……そういう関係だった。

「で、一体どこ行くんだ？」

気を取り直したようにそう尋ねるティース。

よく見ると、少女は外出用の服を着ているようだ。平々凡々なティースに比べ、彼女の服装はなかなかに洗練されており、完璧な容姿と相まってかどこか高貴な――いやむしろ神秘的な印象さえ見る者に与えている。

「どこって」

少女は面白くもなさそうにティースを見ると、風で少々乱れた前髪を直しながら、

「決まってるわ。デートよ」

「……デート？」

ティースは怪訝そうに返したものの、特に珍しいわけではなく。特にここ一年ほど、彼女は恋人――ティースはまだ見たこともないのだが――とのデートによく出掛けている。

ただ、

「それはいいが……勉強の方は大丈夫なのか？　最近遊んでばかりでちっとも――」

「……なに？」

彼が心配して言いかけたところへ、少し不機嫌そうな声が重なる。

「落第だってしてないし、ちゃんと進級してるじゃないの」

「そ、そりゃそうだけどさ……」

ティースが言い淀むと、彼女はさらに不機嫌になった。

髪を押さえていた右手がそのまま、ポニーテールの根元についた質素な髪飾りへと移動する。

「お前に言われなくてもやることはきちんとやってるわ。余計な口出しはしないで」

「そ、そんな言い方しなくたっていいじゃないか」

その剣幕に少したじろぎながらも、やっとの思いで反論するティ

ース。だが、少女は彼の言葉をまるで無視すると、不機嫌そうに鼻を鳴らして、
「とにかく。留守番は任せたわよ。あと、今日は少し遅くなるから」
「……。わかった」
情けないことに、彼はただ黙って頷くしかなく。
口喧嘩になったとしても勝てる見込みはなかったし……確かに彼女はきちんと進級している。最低限のことをこなしている以上、遊んでいるからといって――心配はするにしても――喧嘩をする理由にはならなかった。
「……」
そんな彼に少女はもう一度、眉をひそめた。右手はまだ髪飾りに添えられたまま。……それを弄るのは彼女の機嫌が悪いときのクセだった。
「他に言うことは？」
「ああ――行ってらっしゃい。気を付けて」
「ええ」
少女は一つ頷くと、透き通るようなブロンドのポニーテールを揺らして、その後は一度も振り返ることなく街の中へと消えていった。

「……やれやれ。シーラの奴、デートだなんて呑気なもんだよ」
先ほど手にした幾ばくかの硬貨を秘密の金庫――というより貯金箱に近い――にしまって、ゴロンと無人の部屋で横になったティース。
そして一人、愚痴の続きを漏らしていた。
「そろそろ貯金も心許なくなってきたなぁ……」
外から想像できる通り、この家の中はそれほど広くない。リビングとキッチンが一緒になったこの部屋と、他には個室が一つあるのみ。

ここの住人はティースと先ほどの少女だけなので、決して手狭というわけではないが、夫婦ならざる彼らのこと、たった一つの部屋は少女に完全占拠されており、当然のごとく進入不可のお達しがでている。だから実質、彼にとっての空間はこのリビング――というには少々狭すぎる――この空間だけであり、プライバシーなんてあって無きような生活を強いられているわけなのだ。

……そうそう。話を先に進めるにおいては、一応先ほどの少女のことをもう少し説明しておいた方がいいだろうか。

ティースが先ほどちょこっと口にしたように、彼女の名はシーラという。フルネームはシーラ＝スノーフォール。このネービスでももっとも伝統のある学園、“サンタニア”の薬草学科に通う学徒である彼女は現在十四歳。いや、約一ヶ月後に誕生日を控えているのでほぼ十五歳と言ってもいいだろうか。

つまり彼女は、ティースより三歳と二ヶ月ほど年下の、多少大人びた外見を持つ、こちらは大人というにはまだ若干早い気のする少女だった。

さて……そうなるともう一つ疑問が出てくるかと思う。

つまり、ファミリーネームからも明らかなように、家族というわけでも夫婦というわけでもない彼らが、こうして一つ屋根の下で暮らしている“理由”だ。

が、それはここではひとまず置いておこう。

もちろん本来ならばきちんと説明すべきことなのかもしれない……が、今は“幼き頃からの浅からぬ因縁ゆえ”という程度で記憶の片隅に片付けておいてもらいたい。

とにかくそんな因縁故にティースは彼女と共に暮らしており、ついでに彼女の学費や生活費までその全てを稼ぎ出しているという、勤労青年なのである。

で、そんな彼に対し、一方の彼女はといえば。

「昔は結構真面目に勉強してたのになぁ……」

とまあ、そんなボヤキを聞けば大体想像はつくだろう。

彼女は現在、薬草学科の三回生になったばかり。ここまでは落第することもなく順調に来てはいる。が、話を聞くところによると、いずれもギリギリでの進級らしい。

“らしい”というのは、ティース自身、彼女の学校での生活にはまるで関与していない――させてもらえない――からであり、結局は彼女の話を鵜呑みにするしかないというわけなのだ。

まあ、サンタニア学園というところは、本来なら帰宅してからも懸命に勉強するぐらいでなければまるでついていけない、そのぐらいハイレベルな学舎である。今日みたいに遊び回っている彼女のことを考えれば、進級できているだけで奇跡ともいえるだろう。

それに彼女には薬師としての天性の才能でもあるのか、時折作る特製の風邪薬や強壮薬といったものが、そこら市販の薬よりずっと効果があったりすることをティースは身を以て知らされている。

そこから考えても学業について心配するようなことはないのかもしれない。

「……にしても、遅くなる、か」

ゴロンと寝返りを打ったティース。少しだけ心配そうな様子がその声色から見て取れる。

いくら遊び回っているとはいえ、彼女は夜遊びは全くしないタイプだった。だから、今日のように遅くなると断っていくことは珍しい、というかおそらくは初めてのこと。

「どれぐらい遅くなるのかな……晩飯はどうすんだろ」

呟いたところで答えが返ってくるはずもない。

デートなんだから食べてくると考えるのが普通だ。が、そう思って用意しないでいると食べてこないで帰ってきたりして、結局は彼が怒られるのである。

聞かなかった彼を責めるべきか、あるいは断っていかない彼女を責めるべきか。

難しいところだ。

まあ……万人の意見がどうであれ、現実は彼が責められると決ま

っているのだが。
「ふぅ……」
そして、どことなく気怠い空気の中。意味もなく本日何度目かの寝返りを打つティース。うつらうつらとしているうちに、外はいつの間にか赤く染まりはじめていた。
と。
「……ん？」
突然、跳ね起きたティース。
「なんの――音だ？」
その呟きは、彼の耳が何らかの異音を捕らえたことを示していた。
強めの風にガタガタ、ガタガタと揺れる窓。
夕暮れを告げるカラスの鳴き声。
未だ、遙か遠くで響き渡る大通りの喧噪。
――それとは違う、ごく近くで聞こえる異音。
「！」
それに気付いたティースはすぐに周囲を見渡した。
視線の止まった先は……毎日寝起きしているベッドの脇にある一振りの剣。
一応、護衛というような仕事も請け負うタイプの傭兵である彼は、外見に似合わず小さい頃からその道を嗜んでおり、そこそこ腕に覚えがあった。だからこそ、自らの耳に届いた異音が何であるかもすぐに察したのだ。
（――金属音……！　刃の擦り合う音だ……！）
剣を手に取り、素早く留め具を外していつでも引き抜ける状態にすると、ティースはすぐさま家を飛び出して行った。
外に出た途端、少々冷たさを増した強めの風が彼の体に吹きつける。
……異音の発生源はすぐ近く。
閑散とした辺りはこの時間になると人通りも少なく、しんと静まり返っている。

喧嘩か、あるいは事件か。
（どっちにしても……放っておくわけにはいかない！）
彼の思考が一瞬でその結論に達したのは、彼の人格に因るところが大きい。
一言で言うところの“お人好し”
彼はそういう人物だ。
それに――それがすぐ近くで起こっている以上、万が一にでも、彼の同居人である少女が巻き込まれていないとも言い切れない。
彼が家を飛び出したのは、いわば必然のことだった。
（……近い……っ！！）
角を何度か曲がり、殺伐とした空気が近づいてくるのをティースは全身で感じていた。
左手を鞘に。右手を柄に添え、いつでも引き抜ける状態。
――そして。
（……！！）
そこに展開していた光景は予想に違わぬものだった。
夕日にきらめく刃の輝きが五つ。
大勢は……どうやら四対一。
全身に黒いフードをかぶった、いかにもな風体の人物が四人。
それと刃を合わせるのは、黒い髪を持つ細身の男。
「……やめろぉっ！！」
彼の頭は瞬時に判断した。――数の多い方が悪！　と。いや、たとえそれが間違っていたにしても一向に構わなかった。彼の目的はとにかく争いを止めさせることであり、そのためには劣勢にある方を助ける必要があったのだから。
「！」
争っていた五人はいずれも突然の闖入者に驚いた。
確かにここは住宅街であり、誰かが目撃していても全くおかしくはない。だが、ほとんどの住人は自分の身を守るために関与すまいとするはずだし、大半の人間にとってはそれが完璧に正しい判断。

それに、通報で憲兵が駆けつけるにしてもあまりに早すぎるタイミングだった。

「っ……危ない！　君！　逃げるんだっ！！」

叫んだのは、一人で四人を相手にしていた黒髪の男。

そして、それに反応したかのように、集団の方――四人のうちの一人がティースの方へと刃の切っ先を向けてくる。

彼が判断するまでもなく、戦うべき相手は定められてしまったようだった。

（くっ……！）

考える間もなくティースは抜刀した。

刃先が鞘を擦る。

手入れ以外では数ヶ月ぶりに日の光を浴びた彼の剣は、まるで水に濡れたかのような瑞々しい刀身を煌めかせ、空気を切り裂くような小気味よい音を立ててその姿を現した。

それは彼に似合わない――というと可哀想だが、一目見るだけで名剣とわかるほどのものだった。

「さぁ……来い！」

その場に足を止め、相手を迎え撃つ体勢を整える。

が、

「……えっ！？」

その直後の展開に、ティースはいきなり度肝を抜かれた。

「はっ、はや……っ！？」

まだ五メートル以上も先にいるはずの――常識から相手の速度を計算した上ではそのはずだった――敵が、早くも剣の届く範囲にまで迫っていたのだ。

「っ……！！」

ほとんど反射的に、両手で握った剣を相手の剣筋に合わせる。

キィィィン……

「くぅぅぅぅ……っ！！！」

久々に感じる衝撃。予想を遙かに超える剣圧がティースの両腕を

襲う。
続けて、二撃、三撃。
「っ……！　くそっ……！」
想像を遙かに超越した敵の動きに、ティースはアッという間に、身を守るのが精一杯の状況に追い込まれていた。
（こいつ……ハンパじゃなく強い！！）
背筋を冷たいものが走り抜けた。
と同時に、早くも後悔する。
――安っぽい正義感なんかで考えなしに飛び出して来るんじゃなかった！　と。
もちろん冗談なんかではなく。
それは――紛れもなく、本当の殺し合いだった。
「くっ――！」
黒髪の男も三人を相手に見事に戦っていたが、ティースの方を気に掛けるほどの余裕はなさそうだった。
チッ……キィンッ……！
刀身が擦れ合い、弾き合い……ティースの足は徐々に後方へ。
嫌な汗が止まらなかった。
恐怖が全身を駆け抜ける。
（――殺されるっ！）
相手の技量……というより、ズバ抜けた身体能力は、彼がこれまで剣を合わせてきた数少ない相手の誰よりも圧倒的に優れていた。
ここまでの強さは未だかつて一度も感じたことがない。
――いや。
ただ、一人を除いて。
「！！」
剣が大きく弾かれる。
敵の視界の中、ティースの胴体が全くのガラ空きとなった。
（っ！！！）
思考が停止する。

と同時に、彼の体中は燃えるように熱くなった。
スローモーションのように。
敵の切っ先が胴体に迫る。
（斬られる――っ！！？）
そして。
脳裏の奥がチカチカとフラッシュバックした――――

――そいつは勝利を確信していた。
相手は多少剣の腕に覚えがあるようだったが、所詮はただの人間。
敵うはずがない、と。
視界に大きく広がった、無防備な相手の胴体。そこに一撃を加え、
自分は早く向こうに加勢しなければならなかった。
向こうは三人がかり。おそらくそれでも楽にはいかないはずだった。
あいつを早く始末して。そしてその後ろで守られている――彼女を殺さなければ、彼らの目的は達せられなかった。
鋭い一撃が目の前の胴体に吸い込まれる。
そして……手首に感じる僅かな手応え。
剣が敵の胴体を切り裂く感触。
――捕らえた！
そいつは口元に微かな笑みを浮かべ、そのまま肉を裂き、骨を砕き、確実に致命傷となる一撃を相手に与えたのだ。
――いや。
そのはず、だった。
「っ……？」
驚愕したのは、一瞬。
剣は確実に相手を捕らえたはずだ。
実際、切っ先には今も敵の姿が――――なかった。
「！！？」
消えた。

その状況を、そいつの脳はそうとしか判断できなかった。
いや……たとえ第三者がその場面を見ていたとしても、おそらく同じ判定を下しただろう。
消えた――と。
一瞬の出来事。
そして、まるで止まったかのように思えた世界は。
――風を切り裂く音。
――続く金属音。
――剣を持つ腕を襲う振動。
そして、鳩尾を突き抜けるような衝撃を最後に……途絶えた。

「はぁ……っ！　はぁ……っ！！」
ガタガタ。
ガタガタと。
その体は両腕も両足も、言うことをきかないほどに震えていた。
嫌な汗で衣服がベッタリと背中に張り付いている。
耳の奥がキンキン鳴って痛む。
明らかに過剰な血液が頭の中に集まっていた。
「はぁっ……はぁっ……！」
そんな彼……ティースの視線の先にあるのは――地面に伏す黒いフードの人物。
剣の柄で鳩尾に加えた一撃は、普通の人間なら血ヘドを吐くほどに強烈な一撃だ。手加減をする余裕など、彼にはなかった。
とにかく夢中だったのだ。
どうやって“敵の攻撃をかわし”どうやって“敵の剣を弾き飛ばし”そしてどうやって“懐に入り込んだ”のかも記憶にない。
混乱の極み。これほどまでに“死”を意識した戦いは彼にとって初めての経験だったのだ。
「はぁっ……ふぅっ……」
少し息が落ち着いてから、胸のチクチクした痛みに気付いた彼は、

衣服が少し切り裂かれ、軽く血が滲んでいるのにようやく気付く。
（斬られた……のか）
だが、それはごく軽傷。衣服と薄皮を切り裂いたに過ぎないようだった。
「ふぅ……」
ようやく一息ついて、
「――そういえば……！？」
色と音を取り戻し始めた五感が、現在の状況を再び彼に思い出させた。ハッとして振り返ると、当然のように戦いはまだ終わっていない。
（……どうする！？）
僅かに落ち着きを取り戻した頭に、再び血が上り始める。
状況の再確認。
向こうは三対一。
――いや。
今まで気付かなかったが、戦っている四人の他に、そこにはもう一人の人物がいた。
（あれは……女の……子？）
黒髪の男の背後――それに守られるように佇む、一人の少女。
あまり目にする機会もないような上質な洋服に身を包み、手には豪華な装飾を施された八十センチほどのステッキを手にしていた。
……それ以上の観察は後に回して。
ティースはすぐに判断した。
あの少女はどうやら高貴な家の娘であり。
狙われているのは間違いなく彼女であり。
そしてそれを守るように戦う黒髪の男は、三人を相手にしながらその場からほとんど動くこともなく――それでいて“互角以上に”戦っていること。
（――ならっ！！）
ティースは駆けた。

向こうで剣を交えている四人は、こちらがすでに戦いを終えたことに気付いていない様子だった。
「……君！　こっちにっ！！」
「！」
「！？」
少女の視線がティースに向いた。
同時に黒髪の男と、黒いフードの人物もそれに気付く。
「……」
どうやらティースの意図を察したらしく、少女は迷うことなく地面を蹴った。
黒髪の男の背後から抜け出し、ティースのいる方向へ。
「！」
当然のように、敵の一人がそれを狙う。
だが――少女に向かって伸びた剣は、直前で遮られることになった。
「こ……のぉっ！！！」
ティースが渾身の力を込めて、敵の剣を弾く。
慌てていたのか、敵の一撃にはそれほどの力はなく……そして続く第二撃。
――いや。それが襲い来ることはなかった。
ブシャァッ！！！
まるで弾けたように、敵の背中から赤黒い血が吹き出したのだ。
「え……」
剣を構えたままのティースの視界に映ったのは、流れるようにその背後を通り過ぎた、黒髪の男の影。
その口元は、戦いの最中にありながら微かな笑みをティースに向けていた。
そして、驚いたのも束の間。
状況はさらにめまぐるしく展開して。
「あ……」

残った二人の敵は敗北を悟ったのか、すでに彼らに背を見せていたのである――。

その2『ミューティレイクとアレルギー』

件の戦いからまだそれほども経たない――十数分後のこと。
場面は再びティースの家へと戻っていた。
家――貧乏な一軒家といえ、その中はそれなりに清潔だ。ティース自身はそれほどでもないのだが、同居人のシーラが比較的キレイ好きなので、頻繁に掃除するのである。
いや。
掃除を“やらせる”のである。
誰に――という問いはあまりに残酷なのでやめておこう。
とにかくそんなこんなで家の中は非常に清潔だ。もちろん脱ぎっぱなしの衣類――特に下着とか――が散らばってるというようなこともない。そういうことをすると、ありとあらゆる罵詈雑言が飛んでくるのだ。
誰から誰に向けて、どんな類の――なんてことも断る必要はなかろう。
だから、家の中は清潔であり、かつ整然としているのだ。
そして……ティースも、このときばかりは彼女のキレイ好きに心から感謝していた。
「先ほどは本当に助かりましたわ」
というのも。
「私、ファナと申します」
感謝の言葉を述べた後に、あからさまに高貴な家の者とわかる少女は名乗ったのである。
「ファナ＝ミューティレイクです」
「……ファナ？」
オウム返しのようにティースは繰り返した。
その状況を見れば、彼が少なからず驚いていることは想像できるだろうが……実をいうと彼が繰り返したかったのはそっちではない。

その後、つまりはファミリーネームだ。
「ミューティレイク……――ミューティレイクだってぇっ！！？」
彼が驚きの叫びを発したのは、彼女が名乗ってから軽く十数秒が経過してからのことだった。
「はい」
にこやかに頷く少女――ファナ＝ミューティレイク。
ちなみに彼女は今、ティースがいつも寝起きしているベッドに腰掛けており（ソファなどという贅沢なものはないので）、彼女に付き添っていた黒髪の男がそのすぐ横に立ち、ティース自身は床に直に座っている。
それはもちろん、相手がおそらく貴族の娘であることを気遣ったためであり、それが彼にできる最高のもてなしでもあったのだ。
が。
彼女の名を――正確にいうとファミリーネームを――耳にした瞬間、彼は自らの浅はかさを悟っていた。
（あ……後で怒られてもいいから、隣の部屋からまともなクッションの一つでも持ってきておくべきだったぁっ！！）
そう思ってみても後の祭り。
というか実際は、それを持ってきたところでおそらく大して変わりはしないだろう。
“ミューティレイク”
ネービスにいる貴族の家名など、ティースはほとんど把握していない。もちろん領主であるネービス公は知っているが、いわゆる貴族の枠に入る家ってのは結構数があって、それもピンからキリまである。そんなものの名前をいちいち覚えられるはずがないし、また覚えていなくとも支障はないし、ついでに言うとこのネービスに住む一般市民のほとんどは彼と同じだ。
だが、そんな彼であっても……そして、彼と同類項で括られる一般市民であっても、ミューティレイクの名はそのほとんどが知っているはずだった。

簡潔に言うと、かの家はこのネービスのナンバー二だ。
領主であるネービス公とも緊密な親戚関係にあるミューティレイク公は、政治的なことにこそほとんど関与しないものの、このネービスのシンボルともいえる学園群の“総元締め”ともいうべき存在なのである。
「って……てことは、君――じゃなくて、あなたはミューティレイク公のご息女様ってわけですかッ！？」
混乱しているのか、ティースの敬語はかなり微妙だった。
「？」
対するファナは不思議そうな顔をする。
といっても、彼の言葉が理解できなかったわけではなさそうで、
「私、まだ独身ですけれど？」
「――は？」
その瞬間――微妙な空気が流れた。
（……どういう意味だ？）
その言葉の意味を、ティースの頭は全く理解できなかった。
いや、彼ならずとも理解するのは難しいだろう。会話が食い違っているらしいことは容易に想像がつく。
だが、そんな彼の心中にも気付かず、ファナは言葉を続けていった。
「私ぐらいの年齢でご結婚なさってる方もたくさんいらっしゃいますけど、私はまだ独身ですわ」
ニッコリと答えるファナ。
「……あの」
聞くのは失礼にあたるかもしれないとは思ったが、結局理解できなかったティースは尋ねることにした。
「私は、その……ですから、あなたがミューティレイク公の――」
「ティースさん」
その言葉を遮って、ファナが少しだけ目を細める。
（……ヤバ！）

どうやら気分を害してしまったらしい、とティースは一瞬恐れた。が。

「ティースさんはおいくつですの？」

「――は？」

またわけがわからなかった。

全く理解できない展開を見せる流れに、彼の頭の中は完全に混乱モードである。

「ご年齢の話ですわ」

律儀に付け加えるファナ。

「いや、それはわかってる……ますが」

「おいくつですの？」

さらに追求してくる。

ティースは答えるしかないと、そう判断し、

「えっと、先月、十八歳になったばかりです」

「そうですか」

すると、彼女は再び先ほどまでの穏やかな微笑みを取り戻した。

「私は今年の一月で十七歳になりましたの。ですから、ティースさんは私よりも年上ですわ」

「……はあ」

やはり何が言いたいのかわからない……が、その先に続いた彼女の言葉で、彼はようやく理解することができた。

「ティースさんは私を助けてくださいました。それに、私より年上でもありますのに……どうして私に敬語を使うのですか？」

「……え」

それは彼にしてみれば唐突過ぎる質問だ。

……確かにこのネービスでは結構前に明確な身分制度というのはなくなっている。いわゆる貴族という言葉も、そのほとんどは古くから続いている金持ちという意味でしかなく、そういう意味で本当の特権階級というのは領主であるネービス公のみなのだ。

だがそうはいっても、人々の心には古くからの身分格差みたいな

ものが染み付いているのも確かなことであり、特にミューティレイクのような“ほぼ特権階級”というのが暗黙の了解と化している大貴族には、ほとんどの人間が自然と畏まるものなのである。

向こうもそれを当然だと思う者が多い。

もちろんティースもご多分に漏れずという感じだったのだが……こうして面と向かって質問されると返答に困るところではあった。

「そりゃまあ、あなたはミューティレイク公のご息女様ですし、私は一般市民なわけでして……」

少し考えた末、結局ティースは正直に答えることにした。

「？」

再び、ファナは不思議そうな顔をする。

「その、ご息女様というのは、どなたのことですの？」

「え？」

また話が噛み合わなくなっている。

と、そこへ見かねたのか、

「ティースさん。……どうも勘違いなさっているようですね」

それまで黙っていた黒髪の男が口を挟んでくる。

「え？」

見ると、男は穏やかに微笑んでいた。

戦いの最中は逆るばかりの殺気を放っていた男だったが、こうして改めて見てみると、全体的に線の細いお坊ちゃん風の雰囲気で、黒い正装姿は僅かに戦いの痕跡を残して汚れていたが、それさえなければ完全に良家のご子息といった雰囲気だった。縁なしの眼鏡がなおさらそのイメージを増幅させている。

口調もまた、それに似合った優しげなもので、

「こちらの、姫――ファナ様はミューティレイク公のご息女様ではありません」

「え？　でも、ミューティレイクって……」

ティースは当然のように戸惑った。

もちろんかの家は古くから存在しているから、枝分かれしていっ

た分家がいくつも存在してはいる。が、ミューティレイク家は領主であるネービス公家と同じく、その姓を名乗るのは本家の人間だけ……というのは、ネービスに住む人間にとって周知の事実。

ミューティレイクを名乗った以上は、少なくとも現在はミューティレイク本家の人間であるはずなのだ。

……と、そんなティースに向かって、黒髪の男は相変わらずの笑みを浮かべたままで付け加えたのである。

「何故なら、ファナ様はすでにミューティレイク家の御当主なのですから」

「……え？」

男の言葉にティースの思考が一瞬停止する。

（……そういえば）

それからティースはすぐに思い出した。

（俺たちがここに来る一年ぐらい前にミューティレイク公が暗殺されたって事件があったっけ……）

もちろん忘れていたわけではない。が、彼にはあまり関わりのない世界の話だったので、ついつい頭から抜け落ちていたのだ。

そしてもう一つ彼が思い出したこと。……ミューティレイク公は子供に恵まれず、その後継ぎは歳の離れた娘一人しかいないという、人伝いに聞いた話。

（ってことは、つまり……）

「？」

驚愕の視線で見つめたティースに、ファナは相変わらずの穏和な笑顔で応える。

（この子が……現在のミューティレイク公!?）

決して大袈裟ではなく、それは大事件だった。

――そりゃ彼とて、貴族という人種に接する機会が全くなかったわけではない。過去にはその元で仕事したこともあるし、ごく普通の一般人に比べれば接する機会が多い方だったと言ってもいいだろう。

が……今回ばかりは少しレベルが違っていた。
大陸第二と言われるこのネービス。その中でネービス公に次ぐ実力者ということは、つまり大陸全土を合わせても有数の力を持っているということでもある。ティースのごとき一般市民など、その存在ごと抹消してしまえるほどの――何故か思考がネガティブ方面に傾いているが――力を持っている存在なのだ。
と。
そんな彼の心情を知ってか知らずか。
「ところでティースさん？」
ファナはまるで旧知の友人であるかのように、ごく自然に彼に話しかけてきた。
当然、この状況で彼がまともな反応などできようはずもなく、
「は……はい！　なんでしょうッ！？」
敬礼でもしそうな勢いで畏まったティース。
「……」
その返答にファナは少しだけ首をかしげる。
そして、
「は……？」
それから少し思案げな顔をすると、怪訝そうなティースの眼前で、ゆっくりとベッドから立ち上がった。
「あ、あの――」
ふわりと、微かな花のような香りが鼻孔をくすぐる。
当初、ティースはその行動を怪訝そうに見つめていたが、彼女が向かい合うように床に直接腰を下ろしたのを見て、大いに慌てた。
「……え、えっと、その！　な、何かお気に召しませんでしたか！？」
「はい」
ファナは即答した。
表情は柔和なままでそれほど怒っている感じはしないが、それがかえってティースにとっては恐ろしい。

（な……なんだ！　何が気に入らなかったんだ！？）

考えてみても、すぐに思い当たる要因はない。

ベッドはキレイだったし……いや、そうは言っても彼が毎朝寝起きしているベッドであり、毎日洗っているわけではないから汗も染み込んでいる。

あるいはそれが気に触ったのだろうか――と。

彼が混乱した頭であらゆる可能性を探っているところへ、

「先ほども申しましたけれど」

正座で向かい合ったまま、それでもやはり上品さを感じさせる佇まいでファナは言った。

「ティースさんは私よりも年上です。私の侍従というわけでもありません。……できればもっと自然に話していただきたいですわ」

「……え？」

先ほどの言葉を思い出す。

（そういや……そんなようなこと言ってたけど……）

「……」

失礼だとは思いつつも、ティースは少々呆気に取られてマジマジと見つめてしまった。

「それとも」

ファナは少し不思議そうな顔をして、

「それがティースさんの普段の話し方なのですか？　もしそうであれば仕方ありませんけれど……」

「あ……いや」

（……どうやら、この人……）

ティースもそこでようやく納得いった。

この、目の前にいる少女――ファナという名のミューティレイク家当主が、“少々変わった性格”の持ち主である、ということに。

そう認識して改めて彼女を見てみると、なるほどと思う。

ほんの僅かに垂れ目がちな穏やかな瞳。体全体に纏うおっとりした雰囲気と、育ちの良さを覗かせる仕草。そしてよくよく聞いてみ

れば、非常にのんびりとした柔らかな口調。
高貴さを失わずにいながら、とても親しみやすい。
「じゃあ……」
さすがにその瞬間は緊張したが、ティースは決意して口に出した。
「……ファナさん、って呼んでもいいのかな？」
「はい。そうお呼び下さい」
ニッコリと。本当に何の裏もない、眩いばかりの笑顔で頷いた。
その様はまるで満開に咲いた可憐な花のようだ。
（……う）
それを見た彼の頭に、瞬間的に血が上る。
（ダ……ダメだダメだ！　しっかりしろ！）
真っ白になりかけた自らを、ティースは心の中で思いっきり叱咤した。
――そうそう。
どうやら彼について、最も大事なことを説明し忘れていたようだ。
（こんなところで例のアレが出たら……目も当てられないぞ！！）
実を言うと――彼は病気なのだ。
いや、病気というより、悪いクセとでも言おうか。
こういう若い女性……ことに魅力的な女性を間近にすると、どうしてもそのクセが顔を出し始めてしまうのである。
それは、まともな日常生活を送ろうとする上では結構大きな障害となる病気だった。原因は不明で治し方も不明であり、彼もほとほと困っているところなのだ。
「……ところで」
満足したのか、ファナは会話を元に戻した。
「ティースさん？　もしよろしかったら、その剣を見せていただけないでしょうか？」
「え？　あ、剣？」
突然の申し出に、ティースは自分がまだ腰に剣を帯びたままだったことを思い出す。

「もちろんいいけど……」
刃物を握らせても大丈夫なものか、と思い、黒髪の男の顔を窺うと、
「お願いします。私も少々興味がありますので」
「わかった」
男の答えに頷いて、腰から鞘ごと外す。
「失礼します」
手を伸ばしたのは黒髪の男の方だった。
両手で丁寧に受け取ると、縁なし眼鏡の奥からじっと鞘を見つめ――それからその視線は柄へと移動する。
「……この宝石は？」
その動きが、柄の先にはめ込まれたエメラルドブルーにきらめく宝石のところで止まった。
「ああ、それは……昔、知り合いにもらったんだ。身を守る道具につけるお守りだっていうから、そこに填め込んでもらったんだ」
「お守り、ですか」
納得したように頷いて、
「刀身を見てもいいですか？」
「ああ、構わないよ」
微かな摩擦音を立てて、剣が引き抜かれる。
「なるほど」
現れた刀身を眺めつつ、
「なかなかいいものですね」
男は特別な反応を示すことはなく、明らかにお世辞とわかる程度の言葉を添えてそれを再び鞘に納めた。
「ところで、ご職業は？」
それをティースに戻して、男はさらに質問をしてくる。
「一応、傭兵ってのをやってる。……仕事はあんまりないけどね」
自分で言っていて空しくなりつつ、特に隠すことでもないので正直に答えた。

ファナは不思議そうに首をかしげながら、
「ティースさんほどの腕前でしたら、仕事はたくさんありそうですわ」
「そ、そんなことないよ」
真顔で言われ、ティースは照れながら頭を掻く。
「実際には剣なんて小さい頃に少し習ってたぐらいでさ。さっきのだって無我夢中で、自分でもよくわからないうちに……ほとんどまぐれだよ」
「まぐれ……ですか」
黒髪の男はそう言って、少し苦笑する。
「まぐれでどうにかなる相手ではなかったんですけどね」
「？」
その呟きはティースの耳にまでは届かなかった。
会話が一瞬途切れる。
（……そういや）
そこでようやく、一番聞いておかなきゃならないことを確認してないことにティースは気付いた。
一瞬だけ迷ったが、結局それを口にする。
「ところで……あの、ファナさんを襲った連中って？」
「……」
「……」
その問いに、二人は一瞬だけ視線を合わせた。
話すべきか否か……それがそんな感じの仕草であったのは、いくらティースでもすぐに理解できた。
「あ、いや、俺なんかが聞いていい話じゃないなら、もちろん話さなくても――」
「いいえ」
ファナは首を横に振って、
「ただ、お話しすることでティースさんにご迷惑がかかるかもしれませんわ」

「迷惑……か」
言葉の意味は充分に理解できた。
ミューティレイク家の当主を狙うほどの相手。……その情報を耳にするということはすなわち、ティースもまたそいつらの標的になるかもしれないということを意味する。
気軽に関わることじゃないのは明らかだった。
「アオイさん」
「はい」
ファナの呼びかけに、黒髪の男が答えた。
ここで初めて、彼がアオイという名の人物らしいことが判明する。
「屋敷に戻ることは叶いますでしょうか？」
その問いにアオイは難色を示した。
「今は――危険かもしれません。敵の規模もわかりませんし、ひとまずは身を隠して機会を待つのが最善かと。明日になればレイさんやアクアさんが屋敷に戻る予定ですし、一日二日もすれば発見してくれるでしょう」
「ですが、この辺りでは身を隠す場所の心当たりがありませんわ」
「とは言いましても、今の状況で屋敷に戻ろうとするのは危険です。もちろん敵がこの奇襲の失敗ですでに諦めた可能性も高いですが……」
「……あの」
「？」
「はい？」
口を挟んだティースに、二人の視線が一斉にティースを向く。
「いや、もしよかったら」
二人の会話の細かい部分までは彼には理解できなかった。が、どうやら彼らが身を隠す場所に困っているらしいことはわかる。
そう認識した瞬間、特に深く考えることもなく彼は口に出していた。
「ここでよければ、とりあえず使ってくれてもいいけど」

「……え？」
驚く顔をしたのはアオイだった。
「よろしいのですか？」
一方のファナの方は素直に感謝の色を表しながら、それほど意外な顔はしない。
あるいは彼女はティースという人間の性格を、ある程度見抜いていたのかもしれない。
「それは助かりますけど……本当にいいんですか？」
そう問いかけたのはアオイだ。
「確かにこうした一般家屋に隠れてしまえば、敵もそう易々とは見つけられないと思いますが……万が一、危険があるかもしれないんですよ？」
「……あ、いや、それは困るなぁ」
途端に弱気になるティース。
考えてみれば、ここに住んでいるのは彼一人ではない。一人だったとしても多少は躊躇うところだが、一緒に住んでいる彼女まで危険に晒されるとなれば、やはり考え直す必要があった。
（でも、困ってるみたいだしなぁ……）
と、ここが根っからのお人好しであるティースという人物である。
厄介事が嫌いでありながら、困っている人間を放っておくことができない。だからこそトータル的にはいつも厄介事を引き寄せる。
今回、この二人と関わることになったのも、元はといえばその性癖が原因であり。
……それにここで二人とサヨナラした後、明日になって“ミューティレイク公、再び暗殺さる！！”なんてニュースが流れていたら、彼はおそらく本気で首を吊るほど落ち込むに違いなかった。
こうして少しでも相見え、言葉をかわしてしまった以上、単なる“赤の他人の不幸な事故”で処理することは、彼には到底不可能なことなのだ。
それに……彼はこの、ファナという大貴族の少女に、常人よりも

若干上向きの好印象を抱いてしまっている。
「じゃあ、とりあえず」
そこで、ティースは妥協案を出すことにした。
「一緒に住んでる――えっと、妹――が帰ってきてから相談ということでどうかな？」
とっさに妹だということにしたのは、もちろんあらぬ誤解を避けるためだった。
まあ、向こうはそんなことに興味などないだろうし、誤解されたところでどうということもないのだろうが、そういう意味のないところに気を遣うのもこのティースという人物なのである。
「一緒に暮らしてる方、妹様だったのですね」
二人とも特に意外そうな顔はしなかった。
おそらくもう一つの部屋の存在から、同居人がいることには気付いていたのだろう。
「奥様かと思ってましたわ」
「まだ独身だよ」
本気で意外そうなファナの言葉にティースは苦笑し、
「とにかくあいつが帰ってきたら話してみて……それから決めよう」
そう結論づけた。
（とは言ったものの……）
その“あいつ”――つまりシーラがどんな返事をするのか、ティースにはいまいち想像できない。
（最近のあいつはちょっと……わからないからなぁ）
以前のことならともかく、今の彼女の心を予測するのは彼にとって難しいことだった。
「では、それまで待たせていただいてもよろしいのですか？」
「うん。大したもてなしはできないけど。……えっと、そっちの……」
ティースが少し困った様子で見ると、アオイはハッとした顔をして、

「あ、す、すみません！　そういえば私、自己紹介がまだでしたね！」

初めて気付いた、と言わんばかりの顔をして慌てた。

……そんな様子が、どうも最初のイメージとだいぶ違っている。

ティースはそんな風に感じたが、アオイはそれには気付かない様子で自己紹介を始めた。

「私、姫の執事兼ボディガードで、イングヴェイ＝イグレシウスと申します。以後、よろしくお願いします」

「執事兼ボディガード？」

思わず繰り返したが、それよりももっと疑問なところがあった。

「イングヴェイ……？　でもさっき、ファナさんが“アオイ”って……」

「あ、そ、それは」

アオイはやはり慌てた様子でファナを見る。

一方のファナは特に慌てた様子もなく、ずっと保ち続けているのんびりとした口調で答えた。

「愛称ですわ。ティースさんもどうかそうお呼びください」

ニッコリと。

「あ、愛称……？」

“イングヴェイ＝イグレシウス”なんていかつい名前が、どうやったら“アオイ”になるのかティースにはまるで理解できなかったが……さすがにそこまで突っ込む気にはなれなかった。

「それと……“姫”ってのは？」

よく考えてみると、彼の自己紹介はツッコミ所満載であった。

「あ、いえ、それは……私のクセで、ついつい主のことを姫と呼んでしまうのです」

「はぁ」

これまた理解に苦しむクセであったが、これも突っ込まないことにした。

どうやらミューティレイク家の当主と執事ってのは、相当に変わ

ったコンビらしい。
「……では」
そんな“？”マークが五個ぐらい付きそうな自己紹介を終え、気を取り直したアオイ――ここではこれで統一することにしよう――は軽く会釈して、
「私は一応この周辺を探ることにします。地形も把握しなければなりませんし……おそらく十分ほどで戻ると思います」
そう言うと、今度は懐から笛のようなものを取り出した。
「ティースさん。もしも私がいない間に何かありましたらこの笛を吹いてください。すぐに駆けつけますので」
「ああ、うん。わかった……」
「とは言っても」
ちょっと緊張した面持ちで受け取ったティースを安心させるように、
「何かあれば吹く前に私の方が気付くはずです。あまり歩き回ると敵に見つかる可能性もありますし、近くをチェックして歩くだけですから」
「あ、なるほど」
ティースは安心した。
（けど、何か……おかしいような？）
ホッとしつつも何か釈然としないものを感じながら、
「では、行ってまいります」
アオイの後ろ姿が玄関の方へと消えていくのを見送るのだった。
「……あれ？」
パタン、とドアが閉まる音を聞いて、ティースはようやくその疑問に気付いた。
「いいのかな？　ボディガードの人が離れちゃったりして……」
「？」
不思議そうな顔のファナに、ティースは彼女の方に向き直って、
「だって……その、俺ってのは、ファナさんたちにとっちゃ、ほと

んど初対面なわけだよね」
「ええ、そうですわ」
「だからつまり……そんな俺と二人っきりにしちゃってもいいのかな、って」
それは彼でなくとも当然の疑問だった。
確かに彼は先ほどこの二人を助けはしたが……それだけで信じるというのも少し浅はかすぎる。助けたことだって、邪推しようと思えばいくらでも理由付けができるはずで。
彼女のような身分の人間であればもっと慎重であってしかるべきだろう。
「それは大丈夫ですわ」
が、ファナは事も無げに答えた。
「ティースさんは信用できる方ですから」
「……なんで？」
意表を突かれた様子のティースに、ファナはちょっとだけ首をかしげ、
「と言われましても」
それでもあまり考えた様子もなしに、
「なんとなく、ですわ」
「……なんとなく？」
「はい」
ファナはニッコリと微笑んだ。
やはり何の邪気もない、心が和むような笑顔だった。
「なんとなく、ティースさんは信用できる方だと思いました」
「……」
無言のティース。
そのときの彼の心情をどう表現すればいいだろう。
（な、なんて純真な人なんだ……！）
とりあえず感動すると同時に、当初、色眼鏡で彼女を見ていた自分を恥じるのだった。

……普段、シーラに色々なひどい仕打ちを受けているためか、少々感動のラインが低くなっていたのかもしれない。

と、そんなわけで。

（よし！　シーラの奴がなんと言おうと、俺は絶対にこの人たちを匿ってみせるぞ！）

それは、彼にとってはかなりの“一大決心”であった。それほどまでにこのファナという少女の言葉は彼の心を動かしたわけなのだが。

ただ……だからこそ。

彼が普段、最も“気を付けて”いること。

そして今の“この状況”であれば尚更、気を付けていなければならないこと。

――それが頭からスッポリと抜けていたのである。

「あ、ティースさん？」

予兆は、何事かに気付いたらしいファナの声。

「お怪我をなさってるみたいですわ。胸の――」

「……え？」

感動の世界に浸っていたティースが、ようやく気付いたとき。

“それ”は彼の第一次防衛ライン及び第二次防衛ラインをとっくの昔に突破し、警戒領域をも越えて危険領域へと到達しつつあった。

すなわち。

「――！？」

ファナの手が、彼の胸に触れようとしていたのだ。

……ドクンッ！！

心臓が一際大きな鼓動を打つ。

避ける術はなかった。

「ちょっ……！」

制止も間に合わず。

まるで陶磁器のような可憐な指先が、そっとティースの胸に触れる。

その瞬間、脊髄を貫いていくような衝撃。
（ぅ……！）
全身の血が頭に集中した。
両手、両足の先の感覚がすぅ――っと薄くなって。
「ティース、さん？」
不思議そうなファナの声。
……彼が覚えているのはそこまでだった。
何故なら――彼の意識はそのときすでに闇の淵へと落ちていたのだから。

その3『支配者の帰宅』

“女性アレルギー”

もちろん名称は彼と周りが勝手に命名したもので、それを実際にアレルギーと言っていいものかどうかは甚だ疑問だが……とにかくティースは、女性、特に歳の近い女性に触れられると、途端に全身の血が頭に上って前後不覚、ひどいときには気絶してしまうという特殊体質（？）だった。

発症した……というより、その事実に気付いたのはほんの数年前のこと。原因は不明でありもちろん治療法もわからない、ひどく厄介なものなのだ。

「……アレルギーですか？」

幸いなことに、ティースが気を失っていたのはほんの五分ほどのことだったらしい。

気が付くと彼はベッドの上に寝かされ、額に濡れタオルまで乗せられていた。

「あはは……恥ずかしいところを見せちゃったな」

そしてティースは苦笑いしつつ、自らの“病気”についてファナに説明するハメとなっていたのだった。

もちろん彼としては隠しておきたかったことである。

だって……情けないにもほどがあるだろう。一体どこの世界に、女性に触れられただけで気絶してしまう男がいるというのだ。

「気を張っていれば大丈夫なことが多いんだけどね。突然触れられたりすると、さっきみたいになるんだ」

「そうでしたの」

笑われることも覚悟していたティースだったが、彼女は笑わなかった。

それどころか、律儀に頭を下げて、
「そうとは知らず、申し訳ありませんでした」
「いや！」
ティースは逆に慌てて、手を振った。
「そんなのわかるわけないって！　言わなかった俺がいけないんだし！」
「ですけど……」
ファナは少し心配そうな顔になって、
「それですと妹様と生活なさるのも大変ではありません？」
「あ、あいつは……大丈夫なんだ」
「？」
「例外ってこと」
ティースはそう答えてゆっくりと体を起こした。
「起き上がっても平気ですの？」
「ああ。別に気分が悪くなったりするわけじゃないから」
特に強がったわけでもなく、彼はそう答える。
それにまあ……いくら彼女がこういう性格だったとしても、かのミューティレイク公に看病してもらうというのは、考えてみればなかなか心臓によろしくない状態であった。
「無理なさらないでくださいね」
ファナは素直に引き下がると、その視線はゆっくりと動いて部屋の隅にあった時計の上で止まる。
「ところで、妹様は何時頃お戻りになられるのでしょう？」
「ああ……遅くなるって言ってたから」
額に乗っていた濡れタオルを手にとって、同じように時計を見た。
時刻はすでに五時を回ろうとしている。
いつもならすでに帰ってきて晩御飯、というところだが……
「もう少しかかるんじゃないかなぁ。日が完全に隠れるまでには帰ってくると思うけど」
と、ティースがそう口にした時である。

玄関からドアの開く音がした。
「……あ。アオイさんが戻ってきたかな？」
そんなティースの反応に対し、ファナが少し首をかしげる。
「アオイさんではありません」
「え？」
物音か気配か……そんなものを察したのだろうか。彼女は自信ありげにそう断言した。
（アオイさんじゃない……？）
それを理解した瞬間、ティースは反射的に笛を手にし、もう片方の手を愛剣に向かって伸ばしかける。
脳裏を過ぎったのはもちろん、先ほど彼女らを襲っていた連中のこと。
（まさかこんなに早く……？）
確かにあの戦いの場所からそれほど離れてはいない。が、その距離で描く円の中には当然他にも無数の家屋が建ち並んでいるわけで、よほど大胆に動かない限りそう簡単に突き止められるはずもない……というのは、ティースもまた同じ意見だった。
それが突き止められたのだとすれば――見通しが甘かったのか。
緊張に手の平が汗を掻く。
……が、その緊張は次に続いた声で消えた。
「女の方ですわ」
ファナの相変わらず緊張感のない声。おそらく彼女はそれが敵ではないとわかっていたのだろう。
「妹様ではありませんの？」
「え？」
ファナがそう言った直後、
「……ただいま」
聞こえてきたのは彼女が言うとおり女性の声……しかも、その透き通るような凛とした声には嫌というほどに聞き覚えがあった。
「シーラ？」

間違いなかったが、ティースはもう一度時計の時刻を見て、
「おかえり。随分……早かったな」
玄関に向かって声を掛けると、
「ええ。思ってたよりも早く終わってくれて――」
返ってきた声は途中で途切れた。
そして、
「……だれ？」
玄関から姿を現したシーラはそこで足を止めていた。視線もまた、怪訝そうな色を込めて止まっている。
それはもちろん……ファナの顔の上で。
「ティース？」
問いかける言葉だけがようやく彼に向けられた。
「ああ……」
彼女が怪訝に思うのも当たり前のことだった。ただでさえこの家は客人が来ることなど滅多にない。というより、ティースとシーラ以外でこの場所に立ち入ったものなど、ここ一年では大家――ここは一応借家だ――ぐらいのものである。
そんな場所に、彼女にとっては見知らぬ女性、しかもどう見ても一般人とは思えない服装に身を包んだ人物がいて。しかも同居人はベッドの上、見知らぬ人物はそれを看病するかのように寄り添っている。
……いや、それについては、
「また悪い病気が出たらしいのは見ればわかるけど」
さすが長い付き合いだけあって完璧に見抜いていた。
「ま、まあ、その通りなんだけどさ……」
“情けない”と言わんばかりの彼女の表情に、ティースはほんの少しだけ落ち込みながら、
「えっと、だな。この人は――」
早速事情を説明しようかと思ったところ、その前にファナが自ら口を開いた。

「お初にお目に掛かります」
相変わらずのゆったりとした動作ながら、どこか気品の漂う動きでシーラに向き直り、
「ファナ＝ミューティレイクと申します。先ほど、こちらのティースさんに危ないところを助けていただいた者ですわ」
「助けた？　……ミューティレイク？」
シーラは事態を理解しようとするかのように、宝石のような輝きを放つ利発そうな瞳を少しだけ泳がせて、
「ミューティレイクって……もしかすると、あのミューティレイクかしら？」
それに対し、不思議そうな顔をしたファナ。
「どのミューティレイクかは存じませんが、この街にはおそらく一つしかないミューティレイクの者ですわ」
「そう。なら、私が想像してるのと同じね」
そう言って、シーラはようやく止まっていた歩みを再開した。
隣の部屋――つまりは自分の部屋に向かって。
「わかった。とりあえず着替えるわ。話はその後で聞くから。……それと」
その途中、彼女はベッド上のティースに少し苛立たしげな視線を送って、
「お前はいつまでそこに寝てるつもりなの？　みっともない」
叱咤の声が飛ぶ。
「あ、ああ」
ティースは慌てて布団をはね除け、ベッドから身を下ろしつつ、
（……相変わらず度胸がいいというか）
と、そんなことを思う。
ミューティレイクと聞いて物怖じした彼とは対照的に、彼女の態度は全くのいつも通りである。男であるティースとしては、その強心臓を自分のと交換してもらいたいぐらいであった。
……とはいえ、もしもそんなことを口にしようものなら、

『お前のノミの心臓なんていらないわよ』
とか言われるのは目に見えているのだが。

外はそろそろ夜の闇が支配しそうな時間になっている。
カタカタという窓の震える音が、若干風が強まってきたことを伝えていた。
「ふぅん、そういうことね」
家の中では数分後に戻ってきたアオイも交え、たった今、シーラへの事情説明が終わったところだった。
ベッドの上にはファナが。シーラは自分の部屋から持ってきたクッションに腰を下ろし、ティースはさっきまでと同じように床の上、アオイは相変わらずファナの横に立っている。
「そりゃま、ティースが普通に女の子を家に連れ込むなんて思いもしないけど」
「って、そりゃどういう意味――」
「なにか間違ってる？」
そう言って冷たい視線を向けてきたシーラに対し、
「いや、間違ってないけどさ……」
反論できないのはあまりに情けないが、実際にそうなのだから仕方なかった。ただ、彼にも言い分があるとすれば、生活が苦しくてそんなことをしている余裕などないのだとも言える。
（その割に、向こうは彼氏を作ったりして遊んでるんだよなぁ）
なんとなく理不尽な匂いがしなくもないが……それが彼の選んだ道なのだから仕方なかった。
それに彼の場合は、他に先ほどの“病気”だとか色々な要因がある。
「で、どうだろ？」
とりあえずいつものように反論はしないまま、ティースは彼女の意志を問う。
「……」

「……」
ファナとアオイの二人も彼女を見ていた。
「そうね」
シーラはアオイの顔を一瞥し、それからベッド上のファナへ。
相変わらずの穏やかなファナの笑顔と、少し探るような色を込めたシーラの瞳が交錯する。
二人とも動かない。
（……こわ）
ティースは思わずそんなことを考えてしまったが、とはいえ別に火花を散らしているわけではない。
ファナの方は単純のシーラの答えを待っているだけだろうし、逆にシーラの方はファナという人物のことを見抜こうとしているだけだろう。
その証拠に数瞬後、シーラの表情がふっ……と緩んだ。
「……いいわ」
「え……い、いいのか！？」
その彼女の言葉に真っ先に反応したのはファナでもアオイでもない。驚きに目を見開いたティースである。
逆にその反応に目を細めたシーラは、
「何よ、その意外そうな顔は。それに――随分と嬉しそうね」
「え、いや……」
当然のように突っ込まれて、ティースはしどろもどろになりながら、
「なんというか、俺としてはこんなに困ってる人を放っておけないというか……」
「そう」
シーラは嘲るように鼻で笑って、
「素直に可愛い子だから放っておけないって言えばいいのに」
「え……！？」
「？」

「……」

不思議そうなファナや苦笑するアオイの視線を受けて、ティースの顔が赤くなった。

「そ、それは誤解だ！！」

そのまま反論する。

「俺は別に……その、そういう基準で物事を判断したりはしないぞ！　大体、いくら可愛くたって性格が悪けりゃ……いや、ファナさんは性格もいいんだけど――！？」

そこまで口にした途端、彼の背中を強烈な悪寒が走った。

「つまり、性格が悪いのは私の方って言いたいわけ？」

「え　ぇ！？」

彼はどうやらムキになりすぎて自ら泥沼にハマってしまったようだ。

「そっ、そんなことは一言も言って……」

「ま、そんなことはどうでもいいわ」

それを口にしたシーラの方は本気なのか冗談なのか区別のつかない顔だった。

彼女はゆっくりとクッションから腰を上げると、

「とにかく、これからどうするにしても今日は遅すぎるわね。――ティース。早速、お前のベッドを私の部屋に運んでちょうだい」

「……え？」

「なにを意外そうな顔してるの？」

見上げたティースを見つめる彼女の視線は――どうやら先ほどの言葉が冗談でなかったらしいと推測するに充分なほどの――冷たさを帯びていた。

「彼女には私の部屋で寝てもらうわ。ベッドは二つ。だったら、このベッドがここにあるとまずいでしょう？」

「そ、そりゃそうか……」

ティースはそこまで考えてなかったが、彼女の言葉は至極まともであった。ベッドは女性陣に譲るのが、まあ男として当然の義務で

ある。
　が、問題だったのは、
「……あれ？　予備の布団ってあったっけ……？」
「毛布が一枚だけあるわね。でも」
　そんなティースにシーラは相変わらずの冷たい声で答えた。
「それはもちろん、お客の彼に使ってもらうわ」
「え？」
　彼女が何を言っているのかティースには理解できなかった。
　いや、理解はできていたが、彼の頭は容易にその現実を受け止められなかったのだ。
「お、俺は……？」
　恐る恐る尋ねるティース。
　……平然と返ってきた答えは、まさに彼が恐れていた通りのものだった。
「平気よ、もう凍死する季節でもないわ。場所は……そうね。台所にでも転がっててちょうだい」
「……」
　それは確かにその通りではあったが。
　四月初頭。
　ポカポカした陽気とはほど遠い、朝方には布団が恋しくなる季節。
　今はまだそんな季節なのである。
（お、鬼だ……）
　しかし……残念ながら彼に抵抗する術はなかった。

　そして、翌日の朝。
　ティースは――彼にとっては本当に意外なことに――この朝を、心地よい空気の中で迎えることができていた。
　遠くに聞こえるスズメの声。窓から射し込む暖かい日射し。

この日は晴天だった。
「ん……ん――っ」
毛布の中で大きく伸びをするティース。
体温で暖まっているとはいえ、堅い床の上で一晩を過ごしたために体中が若干痛んだ。が、意外にも寝付いてからは一度も目が覚めることはなく、それがこの心地よい目覚めにも繋がったのだろう。
（思ったより寒くなかったし――って）
起き上がろうとして、彼はその原因に気付く。
「……毛布？」
見覚えのあるそれは、本来は彼のベッドで使用されている、少々年季の入った毛布だ。
……とまあ、そう考えれば誰がかけてくれたのかも大体想像はつくというもので。
（ああ……やっぱ優しい子なんだなぁ、ファナさんは）
朝っぱらから微かな感動を感じていると、微睡んでいた視界が突然暗くなった。
「おはようございます、ティースさん」
同時に頭上から響く柔らかな声。
「……え、あっ、お、おはよう、ファナさん」
暗くなったのは彼女の影が太陽の光を遮っていたためだったと気付く。
そして、彼が返事をするのに一瞬戸惑った理由は、
「その服……シーラのかい？」
「はい。シーラさんが――」
「あの服じゃ目立つし動きにくいでしょ」
「――と、おっしゃいまして」
視線をキッチン側に移動させると、朝日を受けて輝くブロンドの髪が揺れている。
いきなり息がピッタリな二人に、ティースは少々呆気に取られた。
「どうでもいいけど」

とはいえ、シーラから彼に向けられた視線は相変わらず。
「お前はいつまでそこに転がってるつもり？　邪魔なんだけど」
「あ、そ、そうか」
自分の寝ていた場所を思い出し、ノロノロと体を起こす準備をするティース。
幸い彼は就寝時にはそれなりの格好で寝ている。だから布団から起きたら下着だけとか素っ裸とかそういう心配はない。まあ、今日に限って言えば寝た時点だと何もかぶっていなかったわけだから当たり前なのだが。
「それと……ファナ？」
「はい？」
驚いたことに、シーラはファナのことを呼び捨てた。
しかもそれはティースに向けたものとは違い、親しみのこもったもので……先ほどの息の合った様子から考えると、昨晩のうちに友人の契りでも交わしたのかもしれない。
「そんなところに立ってたら、ティースにスカートの中を覗かれるわよ」
「なっ……！」
ティースは跳ね起きた。
そして当然のごとく猛抗議する。
「ば、馬鹿言うなって！　お、俺がそんなことするわけないだろ！」
「どうかしら」
だがシーラの方は相変わらず、まるで気に入らないことでもあったかのようだ。
いつものクセでティースは一瞬怯んだが、もちろん彼とてそんな不名誉な冤罪を着せられたままにするわけにはいかなかった。
無謀を承知の上で反論する。
「だっ、だいたい、俺は今までそんなこと、一度たりともしたことないぞ！」
「それはそうよ。今までなんて女の子自体が一人もそばにいなかっ

たんだから」
「そ、そりゃ……！　まあ、そうだけど……」
呆気なく折れたティース。
だが、
「ちなみに」
シーラの眉が僅かに動いて、さらに鋭さを増す言葉が重なった。
「こう見えても、私はその“女の子”よ」
「……あ」
さぁっ……とティースの顔が青くなる。
かと思ったら、すぐに赤みを帯びて、
「ま、待て！　今のは汚いぞ！　誘導尋問みたいなもんじゃないかっ！！」
「別に悪いなんて言ってないじゃない」
背を向けたシーラは、まるで犬を追い払うかのように手を振って、
「とにかく邪魔よ。さっさと退けなさい」
そう言うと、その後は一瞥もせずにキッチンへと向かっていってしまった。
反論を考えたティースだったが、結局何も思い浮かぶことはなく。
「……」
結局、無言で肩を落とすだけだった。
いや、おそらく何か思いついたところで、到底彼女を言い負かせるほどのものではないだろう。
（ちぇっ……）
理不尽さに納得できないながらも、反論を諦めて毛布を手に立ち上がる。
と、
「ふふっ……」
「ファナさん？　……何かおかしかった？」
ファナは微笑んでいた。彼の情けない様子を笑っているのかといえば、おそらくそうではない。彼女の笑みは圧倒的に好意的な響き

を持っていて、それはティースにもすぐに理解できた。
ファナは答える。
「羨ましいですわ」
「……え。なにが？」
きょとんとして尋ねると、
「なんとなく、です」
「はあ」
彼女の言葉は相変わらず難解だった。
ティースは首を捻りつつも、手にした毛布の感触を思い出して、
「……あ、そうだ。毛布、どうもありがとう。おかげで凍えずに済んだよ」
「毛布、ですか？」
だが、ファナは首をかしげた。
「私は存じませんわ？」
「あれ？」
予想外の返答に、ティースはもう一度手にした毛布を見る。
それは確かに昨日まで彼のベッドにあった毛布で、彼女が使っていたはずのもの。まさか彼女が寝てるところを誰かが剥ぎ取ったわけでもないだろう。
（じゃあ、ファナさんが起きてから誰かが……？）
一瞬だけシーラを見たものの、彼女の態度を見る限りは考えにくい。
「じゃあアオイさんかな？　そういやアオイさんは――」
ふと思いついて尋ねかけたティースに、ファナがニッコリと微笑んで答えた。
「アオイさんでしたら、まだお休み中ですわ」
「……は？」
振り返ったティースの視界。
そこに映ったのは――部屋の壁に背中を預け、首をだらしなく曲げて眠りこける――ミューティレイク家執事の姿。

「……」

寝返りを打とうとして壁に擦ったのか、髪はところどころが乱れて跳ね、かけたままの眼鏡は僅かにずり落ち、少し開いたままの口元には微かなヨダレの跡。服装こそ昨日から変わらぬままだったが、そこに昨日の戦いで見せた凛とした雰囲気は微塵も存在していない。

本当に同一人物なのかと疑うほどである。

「って……執事が主人より遅く起きても大丈夫なものなの？」

ティースの質問に、ファナは口元に手を当てて少し考えると、

「どうなのでしょう？」

「どうなのでしょう、って……」

「ですけど」

ファナはすぐに柔らかな笑顔に戻って言った。

「昨日は負担をかけてしまいましたから。ゆっくり休んでいただきたいですわ」

「……」

その言葉はまたもやティースの心の琴線に触れた。

（や……優しい……）

まるで女神のような笑顔（ティース視点による）でそう言い切ったファナに、彼は再び感動を覚えるのだった。

……とはいっても、

「――ちょっとティース！　起きたなら、ぼさっとしてないで早く手伝いなさい！」

「あ！　わ、悪いっ！」

人生、そういいことばかりではないようだ。

――さて、そんなこんなで数十分後。

「ま、また寝坊をっ！　もっ、申し訳ございませんでしたっ！！」

アオイが跳ね起きて壁に後頭部を痛打し、我を取り戻した後で平身低頭してみせた頃、他の三人はすでに朝食を終えており――口に

合うかどうかということを心配したティースだったが、心の中ではどうであれ、ファナは特に文句を言うこともなかった。

「気になさらないでください」

よく聞くと彼女は使用人のアオイに対しても敬語だ。これは相手がどうこうというものではなく、もともとこういう喋り方なのだろう。

「昨日はあんなことがありましたし、アオイさんもお疲れだったでしょう？　もっと休んでらしても構いませんでしたのに」

「きょっ、恐縮です……！」

アオイはますます畏まってしまった。

（……彼女みたいな人の下で働けるのって、結構羨ましいかも）

そんな光景をぼーっと眺めながらティースはそんなことを考えていた。

もちろん、アオイがただの寝坊助でないことはティースにもわかっている。昨日、目にしたあの光景――超人的な男数人を相手に互角以上に渡り合っていた姿――は容易に網膜から離れるものではなかった。

その実力故に彼はこうしてミューティレイク家当主のそばに仕え、実際にああやって彼女を危険から守っているのだ。実際、苦労も相当あるのだろう。

（俺の場合は望んでも到底無理だなぁ……）

「？」

ぼーっとしていると、不思議そうなファナと視線が合った。

「あ……」

ティースは無意識のうちに彼女を見つめていたらしい。

「どうかなさいました？」

「あ、いや、なんでもないよ」

ブンブンと手を振って誤魔化すと、その横から、

「――バカじゃない」

「う……」

隣のシーラはしっかりとその様子を捕らえていたらしい。
食後の紅茶を口に運びながら、
「変なこと考えてる前に、お前にはやることがあるんじゃないの？」
「へ、変なことなんて考えて――」
「言い訳なんて、見苦しい」
「く……」
反論を試みたいティースではあったが、余計なことを考えていたのは確かなことであり、言い返したときの猛反撃を想像すると、やはりいつものように口を閉ざすしかなかった。
そんな二人の様子を見て、ファナは相変わらずニコニコしている。端から見れば意地の悪いようにも思えるが、もちろん彼女にはそんなつもりもないらしく、どうやらこのやり取りが二人の“じゃれ合い”と映っているらしい。
実際のところは――少なくとも当人であるティースが感じているところでは――それはじゃれ合いでもなんでもなく、一方的な“虐待”みたいなものだったのだが。
「あの……それではいただきます」
一方の客人アオイはといえば、なんともいえない表情を浮かべて少々遠慮がちだ。彼の方は、ティースに対するシーラの態度に若干の萎縮を覚えているらしい。
――確かに。シーラの言葉遣いは年上の男に向ける言葉とは到底思えないところがあり、彼が少々困惑しているのも無理からぬところか。
「それで――」
（それにしても……）
言葉を聞き流しながら、ティースは考え、
（シーラも……昔はこんなじゃなかったのにな）
そして密かにため息を吐いた。
（いつからこんな風になったんだっけ……）
彼女が彼に対して言葉を向けるとき、その整った眉はいつでも微

かに皺を寄せる。
まるで話すこと自体が不快だとでも……いや、そこまでは言わないまでも、できれば会話せずに済ませたいという意志は明らかだった。
このティースとて“普通”からそれほど逸脱していない感性の持ち主だ。彼女の態度に全く何も感じていないわけじゃない。が、彼が真っ先に感じるのは、彼女の言葉に対する“怒り”よりも“困惑”の方だった。
（これでも、俺なりによかれと思って色々やってきたんだけどなぁ……）
彼は自分が大して取り柄のない人間だということも、人から特別に慕われる人間じゃないこともよくわかっている。だが、彼女と付き合ってきた十数年間、少なくともそのうちの半分以上はそれなりに上手くやってきていたはずだった。
おかしくなったのは……とある事情から二年前にこのネービスで生活を始め、それから一年ほどが経過した頃だったろうか。その頃から彼女は休日や放課後に外を遊び回るようになり、ティースに対する態度も露骨に冷たくなり始めたのだ。
……丁度その頃に出来たらしい彼氏が原因か、と考えなくもなかった。が、そんなことは怖くてとても口に出せない。
「――どうするつもり？」
「え……あ、なんだっけ？」
「……」
聞き返したティースに、シーラはこめかみに指を当てた。そして大きく、まるで不機嫌さを隠さないため息を吐くと、
「ただでさえ頼りないのが、色ボケしてますます役に立たなくなったわけね」
「んなっ……そんなんじゃないぞ！」
先ほどと同じように反論するティース。ただし今回は胸を張って、だ。

何しろ、今回は本当にファナのことを考えていたわけじゃない。
「なにがどう違うのよ」
「今のは――ちょっと思い出していただけだよ」
「なにをよ？」
ますますシーラの表情が険しくなる。いや……これはただ怪訝そうにしているだけだろうか。
「いや、だから……その」
言いかけて、ティースは思わず口を噤む。
本当のこと――“昔はこんなじゃなかった”なんて、そんなことを口にしようものなら、かえって彼女を怒らせてしまうのは目に見えていた。
一瞬の間にそう考えて、
「……ゴメン」
結局、いつものようにただ謝ったティース。
もちろんそれを見るシーラの表情はますます厳しくなった。そして彼女の視線はすぐ、まるで興味を失ったかのように移動して、
「ま、どうでもいいわ。それより今後のことよ」
正面のファナへと向かう。
「あなたたちをここに置くのは構わないんだけど……結局、迎えが来るまでじっとしてるつもりなの？」
それに対してはアオイが答えた。
「へぇひへふぁ――」
「飲み込んでからでいいわよ」
即座にシーラが突っ込む。
……当初の彼に対するイメージが見る見るうちに音を立てて崩れていくようだった。
「むぐっ……そ、その、できれば屋敷と連絡を取りたいところなのですが」
胸を叩きながらようやくアオイが答える。
「屋敷の方でも姫――ファナ様がお帰りにならないことで騒ぎには

なっているはず。おそらく憲兵隊とも協力して探し出してくれることと思います」

「こっちから連絡を取ることはできないのかしら」

「敵がこの周辺を監視している可能性がありますから。――残念なことに、昨日のことは通報者がいなかったのか騒ぎになってないようですし、死体も敵が片づけてしまったようです」

「だったら、ティースを通達役にすればいいんじゃないの？」

「いえ、ティースさんも敵に顔を知られている可能性が高いです。……危険すぎます」

「そう。だったら私が行けばいいのね？」

「え？」

「あ……」

「……」

驚いた顔のアオイ。意表を突かれたという顔のティース。小首をかしげるファナ。

そこに三者三様の表情が並ぶ。

……一瞬の沈黙の後、ようやくアオイが口を開いた。

「そ、そういえば――ですが、敵が万が一あなたに照準を定めてきたら――」

「それは本当に“万が一”ね」

そんな心配を、シーラは苦笑で返した。

「その敵とやらが私のことを知っているはずないもの。大体、私は今日だって普通に学園に行く予定だわ。その途中で憲兵の詰め所に寄っていけばいいだけの話じゃないの？　……そうね。ファナの知り合いだってことを証明できる何かを持っていけば」

「そ、それは確かに……」

アオイは納得して頷いた。

いくらなんでも、敵がこの近辺の住人全ての動きを見張ることができるわけでもない。……もしそれほどのことができるのであれば、身を隠しているファナのことなど昨日のうちに見つけているはずだ。

だからアオイが言うような“万が一”は、本当に“万が一”だった。それこそ、路上を歩いていて通り魔に会うほどの確率だろう。
「ですが」
しかし意外にも反論したのは、穏やかな様子で何も考えてないような顔（と言っては失礼だが）をしていたファナだった。
「この近辺の住人に無差別に接触している可能性はありますわ。シーラさんにも接触して情報を引き出そうとするかもしれません」
「それは私が知らないフリをすれば問題ないことよ。……そりゃ、無差別に刺されたりさらわれたりするのなら話は別だけど」
「いえ、それは――この状況で無用な騒ぎを起こすことは、敵にとっても本意ではないはずですから」
少し弾んだ表情で語るアオイは、どうやらシーラの提案に傾きかけているようだった。
ファナも納得したのか黙って頷く。
もちろんティースにも反論らしい反論は思い浮かばなかった。
ただ、
「シーラ……お前、大丈夫なのか？」
「なにがよ？」
向けられた視線に、少しだけ遠慮がちにティースは答える。
「いや……なんとなくだけどさ」
明確な理由のないことだったから、そうとしか答えようがなかった。もちろんそれは彼女の身を心配したために出てきた言葉だったのだが、
「だったら余計な口は挟まないで」
彼女は迷惑だと言わんばかりに、いつものように不快そうな顔をするだけだった。
「……」
そう言われてしまうと返す言葉はない。
「……で、昨日は聞き忘れたんだけど」
シーラは一呼吸と紅茶のカップを置いて、再びアオイたちに向き

直った。
「その敵っていうのは、一体何者？　ファナを狙うぐらいだから、よほどなんでしょうけど。政敵みたいなもの？」
「あ、いえ、そういうものとは少し違うのですが……」
アオイの返す言葉は昨日と同じように歯切れが悪く、それ以上は口を閉ざして隣のファナを窺った。
それを受けて、ファナは少し考えるように首を傾けてみせる。
……それはティースに対して見せた反応と同じだった。彼らはやはりそのことをあまり話したくないようだ。
「どうしたの？」
だが、シーラは彼と違ってすぐに引き下がろうとはせず、アオイには期待できないと悟ったのか、すぐにファナへと視線を移動させて、
「ファナ？　何か話せない理由でもあるの？」
「いいえ。ただ、お二人にご迷惑がかかるかもしれませんわ」
彼女の回答はティースが昨日聞いたものと同じだった。だからこそ彼は、それ以上の追求を避けたのである。
しかし――ティースが驚いたのは、迷った様子もないシーラの返答だった。
「だったら構わないわ。話してちょうだい」
「まっ……待て待て！　シーラ、ちょっと！」
ビックリしたティースはその肩を掴み、シーラを促して部屋の隅へと移動する。
「……なに？　ちょっと、離して」
シーラはうるさそうな顔で自分の肩を掴んだ手を払う。その表情には躊躇いなど微塵も感じられない。が、ティースは気にせず、ヒソヒソ声ながら強い調子で言った。
「何を考えてるんだよ！　そこまで首を突っ込んじゃ……ファナさんだって迷惑がかかるって言ってるじゃないか！」
「……お前こそ何を言っているの？」

シーラは逆に眉をひそめると、相変わらずの強い調子で言い返した。
「ファナを助けると決めたのはお前の方じゃなかったかしら？」
「そ、そりゃそうさ！　でも、だからって敢えて危険に飛び込むようなこと――」
「バカね」
反論を、シーラはその一言で一蹴した。
「敵のこともロクに知らずに手助けするつもりなの？　お前は男でしょ。自分が決めたことなら、徹底的にやり遂げなさい」
「け、けど――」
シーラの言葉はもっともではある。そりゃティースだってできれば敵のことを知っておきたいし、多少なりとも首を突っ込んだ以上は、状況や事情を把握しておきたいとも思っている。
だが、それがさらなる危険を招く可能性があるというなら、話は別だった。
それが自分一人のことならいいが、彼が関わるということはつまり――――
「まさかとは思うけど……お前、私のことを気にしてるんじゃないでしょうね」
まるで心を読んだかのように、シーラが絶妙のタイミングで口を開いた。
それは彼の正直な心を引き出すには充分すぎる“不意打ち”で。
「っ……いや……」
咄嗟にそう答えたティースだったが、一瞬の空白が彼の心情を如実に物語っていた。
「……」
その瞬間、シーラの表情が見る見るうちに不快そうに歪む。僅かに視線が斜め下に動くと、その右手が苛立たしそうに髪に触れ、無意識の動きで髪飾りへと移動する。
「――ふざけないで」

視線が再びティースに向けられたとき、その瞳には色が灯っていた。……今までの興味のない冷たい瞳とは違う。明らかな“怒り”の色だ。

「今以上にお前の世話になるつもりなんてないわ。やりたいことがあるなら、好きにやればいいでしょう？」

「好きなようにったって……」

口ごもるティースに、彼女の口調はさらに苛烈さを増した。

指先がその眼前に突きつけられる。

「お前、何か勘違いをしてるんじゃないの？　私とお前は“つがい”でも何でもないのよ。……いざとなったら私はここを離れればいい。もうお前の助けがなくとも、ただ生きていくことぐらいならできるわ」

「……シーラ」

彼女の言葉に、ティースは何も返すことができなかった。

――当たり前だ。彼女の言葉はつまり、彼の心配など自分にとって不必要なものだと切り捨てる発言だったのだから。

（勘違い……か……）

僅かに項垂れるティースを睨み付けるようにして、シーラは何も言わず、不機嫌そうにそのままテーブルへと戻っていった。

「――お話は、まとまりましたか？」

彼らの険悪な空気を読めなかったのか、あるいはそれさえも彼女の中では“じゃれ合い”に変換されていたのか。

ファナが変わらぬ微笑みでそう尋ねると、

「……あの一応、断っておきますと」

一方のアオイはやはり空気を察したのか、やはり遠慮したような口調で付け加えた。

「聞いたから急にどうこうというものではありませんよ。ご迷惑というのは、ただ万が一の話をしているに過ぎませんから」

「ああ……」

遅れてテーブルに戻ってきたティースは、彼の言葉にただ頷いた。

「……話してくれ」
確かに本心では事実を知りたい。それを躊躇ったのはシーラの存在が少なからず影響していた。その彼女にあそこまで言われてしまったのでは、他に選択肢はなかったのだ。
「では……」
そんな彼に、アオイはもう一度ファナを見、彼女が頷いたのを確認するなり口を開いた。
「彼らは――“魔”なのです」
「“魔”？」
聞き返したティースに、シーラの怪訝そうな声が重なった。
「“魔”というと……つまり化け物のことかしら？」
「ええ、そうですわ」
頷くファナ。
「けど……ちょっと待って。俺が戦ったのは確かに人間だったぞ」
ティースの疑問は当然だった。
“魔”といえば普通、狼や牛の変化したようなモンスターや、人間に似ていても体長が四メートルあったりするようなものばかりなのである。少なくとも、一般の人々が想像するのは大抵そんなものだ。
だが、アオイは首を横に振って、
「“魔”の中にも人型の者が数多く存在するのはご存じでしょう？」
「そりゃ――」
言いかけて途中で口を噤んだティース。そう言われてみれば確かに思い当たるフシもあった。あの人間離れした動き、それが“魔”の者であったとするなら充分に納得がいく。
だが、
（俺はそんなのを相手に戦っていたのか……？）
知らなかったこととはいえ、それが事実だとするなら驚くべきことだった。
それほど、一般的に“魔”と人間の力量差は大きいとされている。
「でも、どうしてそいつらにファナが狙われたのかしら？」

続いたシーラの疑問もまた至極当然のことだった。
人間世界の政治や経済というものにそれほど興味を持ってないはずの“魔”が、わざわざ守りの堅いネービスの要人を狙う理由などなかなか考えにくい。
たまに人間と結びついてそういうことを行う“魔”の者もいないではないが、それはごく少数である。
「それは――」
だが、アオイの返答はそれとは違うものだった。
少しだけ居住まいを正すような仕草を見せ、そして言ったのである。
「姫――ファナ様がミューティレイク家当主であると同時に、デビルバスター部隊“ディバーナ・ロウ”の総帥でもあるからです――」

その４『夕日の中の犯意』

学園都市ネービス。その中央を走る大通りを北に真っ直ぐ歩き、普通の市民が住む一般住宅街と貴族や大金持ちの住む高級住宅街のちょうど境目を西の方角に向かって進むと、そこに高い壁に囲まれた大きな敷地がある。

一般住宅はもちろん、高級住宅街の敷地と比べてもまるで勝負にならないぐらいの大規模な、一辺がキロメートル単位であろうかという広大な敷地。

それこそがこのネービスで……いや大陸でも有数と言われる大貴族ミューティレイク家の敷地であった。

門をくぐり、そこから数百メートルを歩いてようやく到達する二つの大きな建物。左側が本館、右側が別館。この二つは内部通路で繋がっている。

右側――別館の玄関を抜けると、そこには少々奇妙な光景がある。天井を飾るシャンデリア。正面に位置する大階段。その他、豪華に屋敷内を飾り付ける装飾類。……そしてそんな玄関ホールには、それと全く対照的とも思える質素な丸テーブル群が設置されていた。

まるで一般住宅街に見える屋外カフェテラスさながらに。

そのミスマッチ具合からして、丸テーブル群が後から設置されたものであることは疑う余地もない。

と、それはともかくとして。

今、その丸テーブル群の一つに二人の人物が腰掛けていた。

「……やれやれ。ようやく仕事を終えて帰ってきたと思ったら」

本来ならば平穏な朝食時を迎えているはずの屋敷は今、普段では滅多に見られないほどの騒動に見舞われているところだった。

なにしろ――

「いきなり総大将様の御姿が見えなくなってるとは、な」

呟いたのは額に灰色の布を巻いた青年。屋敷の雰囲気には到底そ

ぐわない、どちらかといえばワイルドな風貌の男だった。若干無造作に伸ばされた濃い金髪が微かに揺れている。
「キミらはまだ一仕事終えてきたんだからいいじゃない。……あたしたちなんて敵のアジトの見当つけて、さぁこれからってときよぉ？」
それに答えたのは頭に大きなお団子を二つ結った女性。女性……そう、少々子供っぽすぎる髪型だが、それ以外は——少なくとも見た目は——大人の女性だった。
「で？　どうすんだい、総隊長殿？」
男が少々からかいの混じった口調で問いかける。が、女の方は大して気に掛けた様子もなく、
「アオイくんがついてるんだし、滅多なことはないんじゃない？きっと」
「どうだかな。相手にもよるんじゃないのか」
「ま、大丈夫でしょ」
女はパタパタと手を振って答えた。
「この世には、美形の男は死なないって法則があるのよ。知らなかった？」
「そんなもんがあったら、世の中とっくに美形だらけになってるだろうよ。……ま、その理論だと俺も大丈夫なわけだが」
鼻だけで笑って、男は椅子から立ち上がる。
「とはいえ、手掛かりもなにもないこの状況だ。とりあえず俺たちも捜索に参加するしかない、か」
「そりゃいいんだけど、こうなった以上は屋敷の方も少し警戒した方がいいんでない？」
「そこまでは知らんよ。……ま、カノンの天才少年様にでも任しときゃいいんじゃねえの？」
「大いに不安だけど。——あ、フィリスちゃん！　ちょっとこっち！」
「あ、はーい！」

女の声と手招きに反応して、食堂に続く通路を歩いていた使用人が駆けてくる。
若干ながらクセのある髪が子羊を思わせる、生真面目で純朴そうな少女だった。歳は明らかに女よりも下、十代半ばだろう。
「なんでしょうか、アクア様」
両手を前で重ねて畏まるフィリスに、女――アクアは頷いてみせて、
「んとね。あたしとレイくんは、これからファナちゃんを迎えに行くことになったから」
「え――お嬢様の居所がわかったのですか！？」
身を乗り出したフィリスだったが、アクアはすぐに手を振る。
「あ、ゴメンゴメン。迎えに行くってゆーか、探しに行く？」
「あ……そういうことですか」
フィリスは視線を落とし、見るからに落胆した。
「泣かしたな」
「泣かしてないっつーの」
横からの茶々をアクアは軽く流して、
「で、悪いんだけど、みんなに準備するように伝えて。あとついでに、レアスくんに留守番よろしくって頼んどいてくんない？」
「あ、はい。それは構いませんけど」
言ってから、フィリスは自信なさげに目を伏せて、
「レアス様、私などの言うことを聞いてくださるでしょうか」
「そりゃ大丈夫だろ」
笑いながら答えたのは、アクアの隣で二本の剣を背負った男――レイだった。
「あの天才様は、年上の女にゃ滅法弱いからな」
「はあ」
「心配するな、フィリス」
レイの表情は突然真剣な色を帯び、ゆっくりと伸びた手がそっとフィリスの両頬に重なった。元々の精悍なイメージがさらに際だつ。

「あ、あの、レインハルト様……？」
戸惑った様子の彼女と、視線が真っ直ぐに交差して、
「キミがいつものように微笑んでくれさえすれば、どんな男もその願いを断ったりはできな――」
「こら」
パコン！　と、レイの後頭部が派手な音を立てる。
「って……！」
「ウチのフィリスちゃんを誑かすなんて、このおねーさんが許さないわよ」
音の主はアクアの手にいつの間にか握られていたスリッパだ。
「……人聞き悪いな」
と、レイは後頭部を軽くさすりながら舌打ちして、
「俺はただ、感じたことをそのまま口にしたつもりだが？」
「誰彼構わずそういうこと言ってなきゃ、信じてあげなくもないけどさ。――ああ、フィリスちゃんは気にしないでね」
「は、はあ……」
どうしたらいいかわからないという様子で佇むフィリスに、アクアは軽くウインクしてみせると、
「大丈夫大丈夫。心配しなくても、あ・た・し・の・フィリスちゃんにはぜぇったいに手出しさせないんだか――」
パコン！！
「った～～～！」
「お前もな」
スリッパはいつの間にやら持ち主を変えていた。
よほどクリーンヒットしたのか、後頭部を押さえたアクアは涙目で振り返って、
「……あ、あのねぇ！　あたしのはレイくんとは違うの！　ただ可愛いものを愛でようという純真な、言うなれば芸術性に満ちた愛なのよっ！！」
「何が芸術だ。独占欲で満ち溢れてただろ」

「あ、あの――……」

そんな二人のやり取りに一人置き去りにされたフィリスは、どうしていいかわからずにオロオロするばかりだった。

アクア――アクア＝ルビナート、二十三歳。

レイ――レインハルト＝シュナイダー、二十歳。

公の決定事項ではないといえ、事実上、彼らこそがミューティレイク家の誇るデビルバスター部隊“ディバーナ・ロウ”の総隊長及び総副隊長というべき存在であった。

その先行きに不安を感じたならば……その感性はおそらく正しい。

“魔”を狩る者、デビルバスター。

普通の人間、普通の武器では到底太刀打ちできない“魔”に対し、唯一対等に渡り合うことを許された者たち。それは“魔”に脅かされる人々にとっては尊敬と憧憬の的であり、その称号があるだけで何もせずとも一生を食べていくのに困らないと言われるほどのものだった。

さて……治安が良いとはいえ、やはり“魔”の驚異にさらされることのあるここネービスにおいて、デビルバスターといえばまず二つの有名な部隊が挙げられる。

一つはネービス公直属のデビルバスター部隊“ネスティアス”

もう一つは、一般的には所属不明とされるデビルバスター部隊“ディバーナ・ロウ”

前者はこのネービスに危機をもたらす大いなる“魔”を打ち払うために結成された部隊であり、後者は人々を脅かす“魔”を討つために結成された部隊とされる。わかりやすく言うと、前者は軍隊であり、後者は治安部隊といった感じであろうか。

ただし、前者が公的部隊であるのに対し、後者はあくまで私的部隊であり、だからこそその所属や素性は明らかにされていないので

ある。

――ティース宅へと話を戻すことにしよう。

「……」

「……」

シーラが家を出てからすでに十数分が経過している。

時折外の様子を伺ってもみるのだが、今のところは普段とそれほど大きな変化もない。ファナやアオイはもちろんのこと、顔を知られているかもしれないティースもなるべく窓から離れたところに待機していた。

そして何となく沈黙が訪れていたその場を破ったのは、相変わらずファナのそばに控えるアオイだった。

「……いくら“魔”の者とはいえ、この街のただ中でそれほど大っぴらに動くわけにはいかないはず。心配することはないと思います。あるとすれば、我々のことを目撃した付近住民が、敵に情報を与えてしまった場合ですが――」

少し心配そうなティースに、アオイは少し微笑んで言葉を続ける。

「昨日、ここに案内される途中も少し周りに気を配ってましたから。暗くなりかけていましたし、目撃者はいたとしても少数。確率は低い、少なくともこの家を特定されるようなことはないと思います」

「……俺なんか、そんなの全然気にしてなかったよ」

そう答えて、ティースは改めてこのアオイという人物を見直した。

……いや、正確に言うと“見直し直した”とでもいうのだろうか。

「正直、あの奇襲の様子からすると、敵はすでに諦めて姿を眩ませているのではないかと、個人的にはそう思いますし……万が一、これから敵に発見されたとしても、私が何とかしますから」

そう言いきる彼は、朝の失態など帳消しにするほど頼もしかった。

「……そういや、ディバーナ・ロウのことだけど」

ホッと胸を撫で下ろしつつ、先ほどの話を再び引っぱり出してく

ることにしたティース。
順調であれば、迎えがここにやってくるまでにせいぜい一時間弱。せっかくの機会だったので、今のうちに話を聞いておくことにしたのだ。
「アオイさんもやっぱりデビルバスターなのか？」
「……いえ」
ちょっと間があって、アオイは答えた。
「正式なデビルバスターの称号は持ってません。私はあくまで姫のボディガード……いえ、ボディーガード兼執事ですので」
「へぇ……アオイさんぐらい強ければ、そうでもおかしくないのにな」
そんなティースの感想に、アオイは胸に片手を置いて、
「私は姫に一生を捧げることを心に決めてます。ですからそのような称号は必要ないんです」
「……へぇ」
ティースは感心した。
どうやら彼は典型的な忠義に厚い人物らしい。
（これで朝に強かったら完璧超人なんだけどなぁ）
ついついそんなことを考えてしまったティースだったが、まあそれも愛嬌（？）というものだろうか。
ティースは話を続ける。
「でも考えてみれば、無償で動くデビルバスターを何人も抱えるなんて、ファナさんとこぐらいの財力がなきゃできないよな」
その言葉は確かに正しい。自ら報酬を得て働く場合はもちろんのこと、誰かに雇われた場合でも彼らはかなりの高給取りだ。並の金持ちじゃ一人を抱えるのにも一杯一杯であろう。
だが、
「何故ですか？」
「え？」
ひどく不思議そうな顔をするファナに、ティースは一瞬呆気に取

られて、
（……一般人とはやっぱり感覚が違うのかな）
素直にそう考え、やはり素直に答える。
「だってほら。デビルバスターってやっぱりものすごく高いお金を払って雇ってるんだろ？」
「……あ、そういうことでしたの」
ファナは納得したようにポンと手を叩いて、
「確かにそうですわ。危険なお仕事ですし、他の使用人の方々よりは少しだけ多くお給金をお支払いしております」
「だろ――って」
ティースはその言葉を聞き咎めて、
「……少し、だけ？」
「はい」
眉をひそめた彼とは対照的に、ファナは手を合わせたままで朗らかに答えた。
「他の方々の五割増しぐらいお支払いしてますわ」
「……あ。あ、そうか、なるほどなるほど」
一瞬、唖然としたティースだが、すぐに思いついて、
「そっか。ミューティレイク家の使用人だもんな。俺が想像してるよりたくさんもらってるはずだし、それの五割増しだから――」
「はあ」
ファナは怪訝そうに首をかしげた。
「厳密に比べたことはないですけれど、他とそれほど大きく違うというのは耳にしたことないですわ」
「……そ、そうなの？」
辻褄が合わなかった。
無理矢理合わせることは可能だったが、それだとディバーナ・ロウのデビルバスターたちは、常識ではちょっと考えられないような報酬しかもらっていないということになりそうなのだ。
「あ」

複雑な表情の彼に、ファナは再びポンと手を叩いて、
「それ以外にも他の方と違うところがありますわ。……デビルバスターの方々にはお客様用の個室を使っていただいてますの。それと朝昼晩の食事もこちらで用意させていただいてます。暇なときにはお昼寝の時間までついてますわ」
「……」
冗談なのか本気なのか、満面の笑顔でそう言い切ったファナに、ティースは何も言葉を返すことができなかった。
（普通の使用人の五割増し程度ってことは、えっと、多分――）
彼の頭の中でそろばんが弾かれる。
かなり曖昧な計算ながら、はじき出された答えはおそらく間違ってはいまい。
（……本当なのか？）
それは一般的にデビルバスターに支払われるといわれる金額の、およそ五分の一以下だ。まあそれだって、来月の生活すら危ぶまれている彼なんかにしてみれば夢のような収入であるが、しかしデビルバスターという称号に見合うものとは到底思えない金額である。
彼女流の冗談なのか。あるいは真実なのか。
その答えは、彼女の隣にいる執事が明らかにした。
「その疑問はもっともだと思いますが」
主人とは違い、ティースの困惑を承知しているらしい様子でアオイは答えた。
「ティースさんが思っているほど資金が余っているわけでもないんですよ。ディバーナ・ロウは私設部隊ですから公的援助が得られるわけでもありませんし――」
「でも……そのデビルバスターたちはそれで納得してるの？」
アオイは苦笑した。
「ほとんどの方はやはり個人でやるか、ネスティアスの方に行ってしまいますね。向こうは見合うだけのお給金がもらえますから」
「そりゃそうだろうなぁ……」

というより、それでもなおディバーナ・ロウに所属している人間がいるということの方が驚きだ。

と、それが表情に出ていたのか、アオイはフォローするかのように続ける。

「ただ、悪いことばかりではありませんよ。我々はサポートの方に力を入れてますから、働く環境は向こうよりいいはずですし、それに……」

ちょっとだけ口調が曖昧になる。

「色々と――」

「みなさん、楽しい方ばかりですわ」

「……」

満面の笑顔で微妙にピントのズレた発言のファナに、ティースは一瞬だけきょとんとして、

「……はは」

そして思わず笑ってしまった。

（確かに……楽しそうではあるかな）

その総帥であるところの彼女を見る限り、ディバーナ・ロウという部隊は相当に働きやすい場所なのかもしれない。もちろん、実際に所属しているデビルバスターたちにはそれ以上の何らかの理由――アオイが言いかけたような何か――があるのだろうが……もしティースの前に同じ選択肢があったとしたら、あるいは彼もまたディバーナ・ロウを選ぶかもしれなかった。

（ま、俺なんかには全く縁のない話だけど……）

「……あ、そうそう。それについて昨日から言おうと思っていたんですよ」

アオイが急に名案を思いついたかのような顔をした。

「？」

不思議そうなティースの視線に、微笑みながら、

「私たちはデビルバスターの育成も行っているんですよ。もしよければ」

そう前置きし、あながち冗談でもないような表情で言ったのである。
「ティースさんも、挑戦してみませんか？」
「……え？」
戸惑うティースに、アオイは少しだけ身を乗り出して言葉を続けた。
「あれほどの実力があるのなら、ティースさんにも充分にその資格があると思いますよ」
「……？」
（“あれほどの実力”って――）
それが一体何を指して言ったのか一瞬だけわからなかった。
が、すぐに気付いてティースは苦笑する。
「……あ、ああ。えっと……ほら。だからあれはまぐれみたいなもんだって。大体、どうやって勝ったのかすら覚えていないよ」
だが、アオイはすぐに首を横に振った。
「夢中だったにせよ、あなたが“魔”の者に勝利したのは確か。――あなたの中にある素養が発揮されたからこそ勝てたんです。そうでなければ、まぐれやラッキーだけでどうにかなる相手ではありませんよ」
どうやらからかっている雰囲気は微塵も見られなかった。
「……」
唖然としたままでティースは黙り込んでしまう。
（俺が……デビルバスターに……？）
そんな大それた事、彼は考えたこともなかった。
確かに彼も人並みに剣の腕に自信を持ってはいる。が、それはあくまで普通の剣使いとしてのレベルの話だ。人外のものを相手にするデビルバスターともなれば、また話が変わってくるだろう。
「訓練次第では、そのときの力をいつでも発揮できるようになると思います」
「……」

アオイの口調はほんの僅かに熱を帯び始めていた。
「もしティースさんがその気になってくださるのなら、その訓練からデビルバスター試験まで全て私たちが面倒を――」
「アオイさん。困ってらっしゃいますよ」
それを止めたのはファナだった。
「は……」
わからない顔をするアオイだが、考え込むティースの様子を見て自分が熱くなっていたことを悟ったようだ。
「あ、す、すみません。勝手なことばかり喋って……」
「あ、いや、別に構わないよ」
恐縮するアオイにティースは手を振ってそう答えたが、
「ただ――うん。どっちにしても俺には無理だと思う。そんな根性ないし」
笑いながら、少し冗談に紛らせた。
「大して大きな志も持ってないしね。アオイさんみたいに、立派な信念みたいなものがないから」
「……そうですか」
残念そうなアオイ。
どうやら彼は本気でティースを引き込みたかったらしく……先ほどの賃金条件などから邪推するなら、ディバーナ・ロウは慢性的な人材不足なのかもしれない。
「誘ってくれるのは嬉しいけど……」
「ティースさんには他に目標があるのですわ」
「……え？」
横からの言葉にティースがファナを見ると、彼女はニッコリと微笑んで言った。
「シーラさん、サンタニアで薬草学を学んでいらっしゃるそうですね」
「あ、ああ、そうだよ」
「サンタニアで？」

アオイは驚いた顔をした。高名な学園だけあって彼にとっても意外な事実だったのだろう。

「そういえば昨日いただいた傷薬も……もう痛みもほとんどないですし、市販の薬よりよほどよい出来だったので不思議だったんですけど――」

そんなアオイに、ティースは頭を掻いてちょっとだけ誇らしげに答えた。

「あれはあいつの作った薬だよ。勉強してない割に色々な薬を作るのは得意みたいで……って、ファナさん、それはシーラから聞いたの？」

「はい。昨晩、色々お話ししていただきましたわ。シーラさんのこと……もちろんティースさんのことも」

「色々……？」

「詳しい事情はお尋ねしませんでしたけれど、ティースさんはシーラさんの学費を稼ぐために頑張ってらっしゃるそうですね」

「あ、まあ……」

その言葉を聞いて、一体どこまで喋ったのかと少し不安になる。

彼女――シーラは気に入らない相手に対しては素っ気ないし当たりもきつい。それは彼を見ていればよくわかるだろう……が、決して根っから気難しいわけではなかった。少々高圧的なところは性格だが、普通に接していれば決して人当たりは悪くない人間だ。

特に……今朝の様子から予測するに、ファナは彼女にとって“好印象”に分類された模様であり、それならば本当に“色々なこと”を喋っていてもおかしくないのである。

（まさか、俺の恥ずかしい過去の話とか喋ってないだろうな……）

それが彼の不安の正体だった。

心当たりはありすぎるぐらいだ。何しろ古すぎる付き合い。お互いにお互いの恥をいくつも所有している関係だ。

……もちろん彼が抱えている彼女の秘密に関しては、その先端でも匂わせようものならとんでもない仕打ちが返ってくるのが目に見

えている。だから彼がそれを他人に話すことはまかり間違ってもありえないのだが……その逆がどうなのかはわからない。
「シーラ、俺について何か言ってた？」
結局、ティースは我慢できずにそう問いかけてしまっていた。
「はい。……シーラさんにお願いして、たくさんお話ししていただきました」
あっさり頷いたファナに、おずおずと尋ねるティース。
「そ、それで……どんな悪口を言ってた？」
「悪口？」
「だらしないとか要領悪いとか頼りないとか？」
言っていてあまりに情けないが、それは彼自身が自覚している弱点である。それに普段から正面切って言われまくっていることだから、彼にとってはダメージが少ない。
恐ろしいのは、その具体的事例を挙げられている場合だった。
だが、
「はあ。そういう類のことはおっしゃってませんでしたわ」
「じゃあどんな悪口を――」
「……」
ファナは何か不思議なものを見るかのような目でティースを見た。
それから少し考えるように視線を泳がせて、
「ティースさんは……シーラさんのことがお嫌いなんですの？」
「……え？」
一見、前後の繋がりがないように思える問いに、ティースは一瞬だけ言葉に詰まった。
「いや、俺がどうこうじゃなくて――っていうかむしろ、あいつが俺のことを嫌ってるっていうか……」
「はあ」
「ほら、見ればわかるだろ？　なんだかわかんないけど、最近はほとんど邪魔者扱いでさ。……ああ、これって娘に疎まれる父親と同じなのかな」

最後は少し冗談に紛らせた。ティースも別に、ファナに対して愚痴るつもりはなかったのだ。

「……」

ファナは再び思いを巡らせるように首を傾け、それから少し……ほんの少しだけティースの真意を探るかのように上目遣いになって、

「お二人の事情はわかりませんので、私には何とも言えませんけれど……それはティースさんの思い違いだと思いますわ」

「……はは、ファナさんって変わった見方するよなぁ」

気を遣われているのかと思って、ティースは笑いながらそう言った。

だがそれは決して自虐的になっているわけではない。確かに普通の人が彼らの会話を聞けば、決して仲の良いやり取りだとは思わないはずだった。

もちろん彼の方は、彼女に対しての悪意などこれっぽっちも持ってない。が、その逆がどうなのかは――少なくとも彼女の態度を素直に受け止めるなら――おそらくティースの言葉が正しいと言えるだろう。

しかしそれでもファナは言葉を続けた。

「昨晩は、私がシーラさんのベッドをお借りしましたの」

「え？　……ああ」

急に話が変わって戸惑うティースだったが、そんな彼女の反応にも少しは慣れたようですぐに苦笑を返す。

「あいつならやりそうだなぁ。客を俺のベッドになんて寝かせられない、だろ？」

「はい。そうおっしゃってました」

ファナは素直に頷いて、それからニコリと微笑んだ。

「ですから――ティースさんはきっと愛されておりますわ」

「は？」

今度はまるで理解できなかった。隣のアオイでさえもわからない顔をしているぐらいだから、ティースにわかるはずもない。

（……やっぱお金持ちって変わった人が多いのかなぁ）

そんなことを心で呟くティースだったが、彼女のそれは金持ち云々とはおそらく関係ないだろう。

「ティースさんはもちろん、シーラさんのことを愛していらっしゃるのですね？」

続いたファナの言葉に、ティースは先ほどの意味を理解することを諦め、すぐに気持ちを切り替えて答えた。

「……そういう言い方をすると何だかな」

照れたように頭を掻く。

もちろん彼女の言う“愛してる”に特別な意味など何も含まれていないことは、その前後の会話から理解している。何しろ、彼女はまだ二人のことを兄妹だと思っているはずなのだ。

だからティースははっきりと答えた。

「そりゃあ、そうでなきゃこんなことしてないよ。――とにかく、あいつを無事に卒業させることが今の俺の一番の目標だからね」

「ご立派ですわ」

「はは……――ありがと」

心からの応援の意を込めて向けられたその言葉に、ティースの気分は少しだけ明るくなった。

――実を言うと、彼はシーラに言われたことで少しだけ落ち込んでいた。先ほどの言葉通り、彼女の卒業に全てを尽くしているというのが彼の現状なのだ。そんな彼女にあんなことを言われたのでは、落ち込むなという方が無理な話だった。

「ありがとう、ファナさん」

もう一度礼を言って、そしてティースは大きく息を吐く。

（そう……なんだよな）

そして再確認する。

それ以外のことなんて考える余裕はない。ましてデビルバスターになるなんてこと、どう間違っても有り得るはずがなかった。

そう。

少なくとも……今回の、この出来事がなかったならば。

日が西に傾き始める。

ネービス大通りの喧噪は最高潮を越え、ここからは淋しくなる一方。頻繁に行き来していた馬車、学園群から戻ってくる学徒たち、買い物に現れた主婦、あるいは元気に周囲を走り回る子供たち。

美しいブロンドの髪の少女――シーラは、その喧噪の中、通い慣れた大通りのとある角を左に曲がっていった。

そこは大通りの綺麗に舗装された道と違い、少しだけデコボコになっている。歩きにくいというほどでもないが、ハシャギ回る子供が足を引っかけて転ぶ光景を良く見掛ける場所だ。

「危ないわよ――」

鬼ごっこでもしていたのか、前方不注意で自らにぶつかりそうになった子供に軽く注意を与え、再び前方に長く伸びる自らの影を辿っていく。

「……」

立ち止まってふと背後を振り返ったシーラ。

特に変わった光景は見られない。

朝も結局特に変わった出来事は発生しなかった。

（ファナはこの付近が監視されてるかもしれないと言っていたけれど……）

もちろんこういうことに関しては素人以外の何者でもない彼女だ。たとえいつもと違う“何か”があったにせよ、それを察することはできないかもしれない。

それに、彼女が憲兵隊の詰め所に立ち寄ってからすでに六時間ほどが経過している。いくらなんでも全て解決している頃だろう。

（もう少し、あの子と話してみたかったけれど……）

シーラが、二度と会う機会はないであろうファナという名の少女

の顔を思い浮かべ、そして……再び正面を振り返った刹那だった。
「――！」
「お嬢さん」
赤色の光を全身に受け、壁に背を預けるように一人の男がそこに立っていた。
先ほどまでそこは無人だった。少なくとも彼女の視界には入っていなかった。……それが、知らぬうちに三メートルほどまで接近していたのだ。
頭に巻かれたバンダナのような布。身に纏った雰囲気は旅人風といえばいいのか、ならず者風といえばいいのか。少なくとも堅気の人間には見えない。
「悪いな。怖がらないでくれ。少し聞きたいことがあるだけだ」
男は自らの格好に自覚があるのか、少し口調を緩めてそう言った。
「……いきなりそこに立っていたからビックリしただけよ」
だが、すぐに我を取り戻しいつもの強気でそう返答するシーラ。
もちろん一人歩きの女が彼のような身なりの男に止められれば、少々警戒して当然のところだ。が、今はまだそれほど日が沈んでもいないし、数分置きとはいえこの辺りにはまだ人通りもある。声を上げれば少なくとも数人には声が届くだろう。
「そうか、失礼した。で、ちょっと聞きたいんだが……この辺りで、変わった格好の女性を見なかったか？」
「変わった格好の女性？」
すぐにそう切り返したシーラだったが、男の言葉が何を意味するのかは理解していた。
（……ファナのこと、ね）
確かにあれだけお金のかかった服装なら、この辺りでは充分に“変わった格好”である。
その次にシーラの頭に過ぎった疑問は、目の前のこの人物が敵なのか味方なのかということだった。
「……曖昧すぎてわからないわね」

即座にそれを判断して自然に返答した彼女の言葉は、少なくとも男に不信感を与えることはなかっただろう。

（でも……まだ解決してなかったのかしら……）

あれから時間は充分に経っており、常識的にはすでにファナは発見され全てが解決した後だと考えるべきだ。が、例えばシーラが家を出た後で“何か”が起こり、そのために憲兵隊がファナを発見することができなかった……それは全く考えられないことではない。

（それとも、敵がまだ気付いていないだけ……？）

言いしれぬ不安が彼女の胸を襲った。

早く家に戻って事実を確かめたい衝動に駆られる。が、目の前の人物が何者であるかわからない以上、軽はずみな行動は取れない。

シーラは細心の注意を払って言葉を続けていくことにした。

「誰か捜しているの？　……格好からすると、あなた傭兵かしら？」

「ま、そんなところか」

「どんな人を捜しているの？」

「とある貴族のお嬢さんだ」

「家出か何か？」

「ああ――そんなところか」

男は細かいところまで語りたくないようだ。

「……残念だけど」

少し考えたフリをして、結局シーラはそう答えることにした。

「わからないわね。他を当たって」

「そうか」

頷いた男とすれ違い、シーラは振り返ることなく進んでいった。

……彼女の判断は至極当然だ。今の会話だけでは相手が何者なのか判別できない。無理に探ろうとすればボロが出る。ファナを探している味方という可能性もあったが、敵がフリをしているという可能性も捨てきれないのだから。

（でも――）

すっかり全て解決したものだと思っていただけに、これは彼女に

とっても予想外の出来事だった。
角を曲がり、男の視界から消えたことを確認してその足は自然と速くなる。
（何があったのかしら……）
ほんの少しだけ彼女の鼓動が速くなる。
遠くに聞こえる街の喧噪。
長く伸びる影。
オレンジ色に染まる地面。
見慣れた景色。見慣れた通学路。帰路の奥に映り始めた、見慣れた自宅……それを視界に捕らえ。
そして――路地から飛び出してきた“何か”に気付いたときは、すでに遅かった。
「……！？」
突然彼女を襲った凶器は、彼女に声を出すことさえも許さなかった。
（な……に……！？）
それが痛みであることさえも認識できないまま。彼女を貫いた衝撃は、一瞬にしてその感覚全てを奪った。
――訪れたのは、闇。
（ぁ……）
最後の一瞬に彼女の脳裏に映ったものは何だったのか。
それを認識することすら許されることはなく……そして、彼女の全ては闇に包まれた。

その5『二人の協力者』

「ふぅっ……」

ため息をともなって勢いよく落ちてきた大人一人分の体重に、ベッドが僅かに軋む音を立てた。

窓から射し込む陽光はオレンジ色を纏い、狭い部屋の中を哀愁の色に染め上げている。

「疲れたぁ……」

安堵の息を吐いたティースは自宅のベッドにその身を預けていた。

まるでクッションのないベッドであっても、精神的に疲れて帰った彼の体を休ませるには充分すぎる機能を持っているようだ。

（……なんか、夢みたいな出来事だったな）

結局、彼を襲った一連の出来事は、予想していた障害など何一つなく落着した。あの後、すぐにこの家を訪れた者はミューティレイク家のデビルバスターを名乗り、ファナとアオイは扉越しのその人物の言葉を肯定した。

それで終わりだった。

まるで平穏、予想外の出来事など起きることもなく、拍子抜けするほど呆気ない幕切れ。

……いや、彼にとって予想外だった点が一つだけ。

（まさか女性のデビルバスターだなんて思わなかったけど……なんて言ったっけ、あの人）

しかし結局はその程度のこと。その後、ティースは屋敷へと招かれ、お礼代わりという豪勢な昼食を振る舞われ、そこで少しだけファナと話をした後、今、こうして馬車で送られて帰ってきたのだった。

（でも、いくら見た目が可愛い女の子でも、やっぱり世界が違うんだよなぁ）

彼の頭に焼き付いていたのは、少し前まで彼の目前に広がってい

た屋敷の光景。アオイの存在と高価な服装だけではいまいち現実味がなかった“ミューティレイク公”という存在だった。

屋敷、食事、周りを固める使用人の群れと、予想していたとはいえあまりの大貴族ぶりに、彼が少なからず萎縮してしまったのは言うまでもない。

しかしそれもすでに過去の話。

「うっ……ん――っ――……って、あれ？」

大きく伸びをしたティースは、太股に微かな違和感を感じて身を起こす。そしてその原因を探るまでもなく、彼は思い出していた。

「ああ、そっか。ファナさんにもらったんだっけ」

彼がポケットの中から取りだしたのは、二つのアクセサリーらしき物体。片方は十字架の模様が入ったブローチ……というかバッジのようなもの。そしてもう片方は綺麗な薄緑の石がはめられた、こっちは紛うことなきブローチ。

もちろん彼の関心を引いたのは、そのブローチの方だ。

（無造作に入れてたけど……まさか本物じゃないよな）

改めて眺めたティースは、今更不安になっていた。

（大したものじゃないとは言ってたけど……でも、相手が相手だしなぁ）

本物であれば、それがエメラルドという名の宝石であることは、いくら彼でも知っていた。バッジの方は彼自身に、ブローチの方はシーラにということで特に何も考えずに受け取ってきたのだが、本物だとしたら――彼の価値基準から言って――気軽に受け取るようなものではない。

「ま、シーラに見せてみりゃ、本物か偽物かすぐわかるか」

立ち上がったティースはバッジを自らのポケットに、ブローチはテーブルに置いて、もう一度ベッドに横たわる。

――目を閉じた彼の周囲を、途端に静寂が襲った。遠くに聞こえる喧噪。どこかから流れ込んでくる肌寒い空気。

（ファナさん……もう会うことはないだろうけど、でも、変わった

人だったなぁ）

ティースの日常に飛び込んできた非日常。あっさり解決したとはいえ、それは彼にとってなかなか体験できない貴重な経験だった。こうして微睡みながら回想していても、ちょっとした高揚感が体を包むのがわかる。

（怖い思いをするのはゴメンだけど、また会って話をしてみたいな……シーラとも気が合いそうだったし……）

ふと。

「あれ……？」

我に返って、唐突に感じた違和感。

「……シーラ？」

体を起こしたティースの耳には、もちろん返事など聞こえなかった。返ってきたのは相変わらずの静寂。聞こえなくなりつつある喧噪。

時計を見る。

それが指し示している時刻を見て、ティースの胸が一つ大きな鼓動を打った。

「おい……シーラ？」

微かな残光が部屋を照らしている。

静まり返ったそこにはもちろん誰もいない。

……この辺りは決して裕福な地域ではない。夜になればその大半を暗闇が支配してしまうし、もちろんそこを一人で歩くことにはそれなりの危険が伴う。

浮かれていてティースは気付かなかった。この時間であれば当然、“彼女が帰ってきていてしかるべき”だということに。

（なんで……帰ってきてないんだ……？）

シーラという少女は頭の良い少女だった。たとえ帰りに恋人に会って寄り道をしていたとしても、決して危険な時間帯にまで遅くなることはない。遅くなると言って出掛けた昨日ですら、もう少し早い時間に帰ってきていたぐらいで。

まして……今日はいつもとは違う状況だ。いくら彼女の肝が据わっているとしても、寄り道をしてくることは考えにくい。

（今日の……状況……？）

ざわっと。

何かがティースの背中を駆け上がった。

「……っ！」

ティースは反射的にベッド脇の剣を手に取って家を飛び出した。

強く吹きすさぶ風。

薄い闇に染まりつつある街並み。

浮かれていたその気分が一気に冷めきっていく。

悪い予感……いや、それは予感などという曖昧なものではなかった。状況を分析した結果による、充分に起こりうる現実の予測だ。

（だって……あいつが危険に晒される理由なんてないじゃないか……）

胸が締め付けられるような感覚に、彼の鼓動は徐々にその速さを増していった。

太陽は今、まさにその姿を完全に隠そうとしている。

足取りは徐々に速く。

（報復？　通報したことへの……いや、まさか……）

彼の心はすぐにその可能性を否定した。

それは決して希望的観測というわけではない。何百人もの人間が行き交うこの地で、学園に行く途中の彼女が憲兵隊の詰め所に寄り、そしてファナの居場所を伝えたなどということが、敵に知られるはずはないのだ。

（なら――）

だが、その結論が出ることはなかった。

何故なら、

「――！？」

彼の結論が導き出される前に、状況が結果を示してしまったからだ。

「これ……は……」

自宅からそれほど遠く離れていないその場所。ティースの目に映ったのは路上に落ちていた小さな髪飾りだった。

「あいつの……髪飾り……」

背筋から脳天に向かって、突き抜けるような震えが走る。

小刻みに震える手を伸ばした先――僅かな残光を浴びた髪飾りは、その年季を示すかのように鈍い光を反射して――そして。

「なんで……っ！」

点々と、路上に乾いてこびりついた血の色が、ティースの中から冷静さを奪い去った。

「なんだよ……どうなってんだっ！！」

辺りを見回しても、血の跡はそれ以上発見できない。その姿を探そうにも辺りはすでに人気もなく、なんの気配も残されていなかった。

それが何の故に起きた出来事なのか、彼にはわからない。

だが、彼の目の前に突きつけられた事実はただ一つだった。

――失踪。

この世界において、一度失踪した人間を見つけることがどれだけ困難であるかということ。まして――“五体満足で”という条件付きであれば、それがどれだけ至難の技であるかということ。

早いうちに発見できれば、命は助かるかもしれない。だが、それは個人の力では絶対に無理だった。

（どうする……どうすりゃいいっ！！？）

拾った髪飾りを握り締め、ティースは頭を掻きむしった。

頭を過ぎる最悪の可能性を懸命に押し流し――憲兵隊、傭兵仲間への依頼――それらの対策が一通り頭を巡った後、

（……！？）

最後に脳裏に留まったのは、天啓とも思えるひらめきだった。

少なくとも、絶望的な気分にあった彼に、ほんの僅かな希望を持たせるに足る名案。

（それしか……ない！）

後先のこととか、それが可能であるかどうかとか、そういったものは今の彼の頭になかった。

そして、完全に日が落ちた街の中。

僅かな希望に縋り付くように、ティースは駆け出した――

「――賭けはあたしの勝ちかな？」

「なんの賭けだ？」

ミューティレイク邸。一時は騒然としていたこの屋敷も、その主が無事戻ってきたことでいつもの平穏を取り戻していた。

夕食を終えた邸内、玄関ホールの丸テーブル群には朝の二人の姿がある。

「美形の男は死なないって言ったでしょ？」

頭に二つのお団子を結った女性――アクアがそう言って微笑むと、対する灰色の布を頭に巻いた男――レイが苦笑して反論する。

「死んだなんて俺は一言も言ってないと思うが」

頭の後ろで腕を組み、足をテーブルに乗せて椅子を傾け、そこで微妙なバランスを取っている。どうにもだらしのない格好だったが、誰一人としてそれを注意するものはいなかった。

「そうだった？」

「しかもなにも賭けちゃいない」

「あら。フィリスちゃんの所有権を賭けたんじゃなかったっけ？」

「……それが本当なら、あの二人には改めて失踪してもらわなきゃならんな」

「こらこら……お二人でなんて物騒な話をしてるんですか」

眼鏡の奥で苦笑しながら現れたのは、血で汚れた正装から綺麗な正装姿に着替えたアオイだった。

「あらあら、アオイくん。今回はご苦労さんだったね」

アクアは手招きしてアオイに席を勧め、アオイはその座席に腰を下ろして真面目に返答する。
「それが私の使命ですから」
「んで。アオイくん、なんか飲む？」
「あ、いえ」
アオイは手を振って断ると、少し姿勢を正し改まって口を開く。
「それと、今回のことではお二人に迷惑をかけてしまったようで、申し訳ありませんでした。私が不甲斐ないばかりに……」
だが、アクアは笑いながら手を振って、
「しょうがないっしょ？　下位族とはいえ、まさか人型の“魔”が四匹も紛れ込んでるなんて思わないしさ」
「ですが……」
慰めとも取れるアクアの言葉に、アオイが少し視線を伏せる。
と、その瞬間。
「……うわわっ！」
突然アクアが身を乗り出した。
「ちょっとアオイくん！　今の！　……今の顔、もう一回！」
アオイはビックリした様子で、
「……え？」
「ちょっとレイくん、見た今の!?　自分の不甲斐なさを責めるアオイくんの図！　……もう、おねーさん、胸がキュンときちゃったわっ!!」
「あ……あの、アクアさん……」
アクアは勢い良くアオイの両手を掴むと、キラキラと目を輝かせて言った。
「結婚して、アオイくん！　今すぐ！　ここで!!」
「い、いや、アクアさん……その、ですね」
「あぁん！　その困った顔も可愛い～～～っ!!」
「あ、アクアさん！　ちょっと待ってくださ――」
今にも抱きしめて頬ずりでもしそうな勢いのアクアに、何とか逃

れようとするアオイだったが、椅子の背もたれが邪魔で下がることすら出来ない。

……と。そんな彼のピンチを救ったのは、ボソッと呟いたレイの一言だった。

「やれやれ。適齢期を過ぎた女はがっついててみっともないな」

「……」

ピタッとアクアの動きが止まる。

そしてゆっくりと視線がレイの方へ。

「……ちょっと、レイくん？　世の中には言っていいことと悪いことがあるのよ？」

「本当のことだからな」

途端に、アクアはテーブルを叩いて反論した。

「過ぎてないってば！　お肌はまだ十代の輝きを保っているし、屋敷のみんなだって若い若いって言ってくれるもんっ！！」

「それは単なるお世辞か、お前の妄想だ」

「そ、そんなことないわよぉ……ね、アオイくん！　あたしってまだまだイケるわよね！？」

再びアオイに迫るアクア。

「は、はぁ……」

常識的には否定できないところだったが、肯定すればまた先ほどの光景が繰り返されるかもしれない。アオイにとっては板挟みで非常に辛いところだった。

結局、彼は誤魔化すように軽く咳払いをして、

「そ、それよりも、できれば経過の報告をお願いしたいのですが……」

「……そうだな」

「ちょっ、ちょっとレイくん！　なに、その含み笑いはっ！」

「特に意味はないさ。……街道の“魔”はひとまず片付いた。なかなか姿を現さないんで苦労したがな」

「そうですか。ご苦労様です。……それで、アクアさんの方は？」

「う～……」
まだ何か言いたそうなアクアだったが、話題が移ってしまったことで仕方なさそうに答えた。
「……あたしの方は一応まだ調査中。だけど、敵の隠れ家らしきとこの見当はついたわ」
「やはり……例の失踪は“魔”の仕業ですか？」
「そうらしいわね。いなくなったのは近所でも可愛いって評判の女の子ばかりだから、もしかしたらどっかの変質者か人買い連中の仕業かもと思ったけど……どうも常識じゃ考えられない芸当もやってのけてるみたいだし」
真面目な顔に戻ったアクアは、紅茶を口に運びながらため息をつく。
「“魔”の中にもいるのよね。可愛い女の子好きってのが」
「ああ、いるな」
鼻を鳴らしたレイが皮肉っぽい笑みを浮かべる。
「可愛い娘の、苦痛にのたうち回る姿が好きな奴とか、な」
「……」
僅かに眉をひそめたアオイに、アクアはさらに言葉を付け足した。
「それと、もしかしたらその犯人、ファナちゃんを襲った連中と関係あるかもね」
「？　なにかそう思える要素があったんですか？」
アクアは首を振って、
「ううん、ただの勘だけど。根拠といえば……そうねぇ。同時期に別の、しかも人型の“魔”が事件を起こすなんて珍しいってことかな」
「ウチの主人を襲う計画の傍ら、自分の趣味にも時間を割いていた、とかな」
と、レイが補足する。
「それは確かに考えられますが……とすると、敵はそれほど統率が取れた集団ではないということですかね」

「そうだとしたら、ね。“例の奴ら”とは別じゃないかな、とあたしは思う。……とにかくウチのチームは明日、明るくなってからそのアジトらしき地下通路を当たってみるつもり」
「わかりました。……ファントムだけで平気ですか？　幸い、今なら第四隊以外は待機中ですし――あ、カノンは明日出立の予定でしたから――その」
アオイはチラッとレイを見て、
「ナイトは――お疲れでしょうが、もしどうしても危険そうであれば……」
「ああ、いいってば、そんなの」
アクアは笑いながらヒラヒラと手を振って、
「ウチのチームって信用ない？　そりゃ見た目はあんま強そうじゃないけど、これでも結構骨のあるメンバーなのよ？」
「いえ、そういうわけでは――」
「なんてったって、隊長がこんなに可憐な乙女なんだから！」
胸を張って断言したアクア。
強いこととはまるで関係なかったが、本人は気付いているのかいないのか。
「は、はぁ」
「……」
今度はレイも無言でため息をつくだけだった。
そのまま目を閉じ、背もたれに身を預けて――
「ん？」
閉じかけた目が開いた。同時にもたれかけていた上半身がゆっくりと起き上がると、その視線は玄関の方へと向いて、
「外が騒がしいな」
「え？」
不思議そうな顔のアオイに、少し耳を澄ませた様子のアクアが付け加えた。
「ホントね。門の方が少し騒がしいみたい」

「……お二人とも耳がいいですね」
アオイが感心したのも当然のこと。この屋敷本館から正門までは数百メートルの距離がある。もちろん玄関の扉が閉じていることから考えても、よほどの騒ぎでなければ聞こえないはずだった。
「一体なんでしょうか……あ、フィリス！」
「はーい！」
やはりタイミング良く近くを通りかかったフィリスがアオイに呼び止められ、クセのある髪を僅かに揺らせてやってくる。
「アオイ様、なにか御用でしょうか？」
アオイは頷いて、
「門の方が騒がしいみたいですけど、何か知りませんか」
「え？　……あ、じゃあ私ちょっと見てきますね」
「頼みます」
「はい」
小走りにフィリスが玄関へと駆けていく。玄関の大きな扉を開けて外へ。夜とはいえ、敷地内は明かりが灯っていてそれほど暗くはない。
「……また酔っぱらいがくだを巻いているのかもな」
レイが言ったのは過去実際にあった出来事だった。一般住宅街と近いことから、再び起きても不思議ないことではある。
「あー、だとしたらフィリスちゃんを行かせたのはマズかったかもねぇ。あの子、絡まれやすい体質だし」
「まさか」
アオイが笑って返したところで……結局、二分も経たないうちにフィリスが戻ってきた。
「あの……アオイ様」
戻ってきたフィリスは急いで来たようで、ほんの僅かに息を弾ませている。その様子を怪訝に思ったアオイは、
「どうしました？　なにか問題が？」
「はい。あの……」

フィリスは胸の前で軽く拳を握り、少し戸惑ったように答えた。
「若い男の方が、しきりにお嬢様に会わせてくれ、と騒いでいるんです」
「姫に？」
当然、アオイは眉をひそめる。その表情の中には、もちろん非常識な来訪者に対する不審と、加えてわざわざ伺いを立てに来たフィリスへの戸惑いが入り混じっていた。
「……どこの誰ともわからない方に会わせるわけにはいかないと、そう言って断ってください。どうしてもというなら、後日、明るい時間に改めて連絡して――」
「あ、そう言ったんです。でもどうしても今、時間がないんだって……その……」
フィリスは少しだけ目を伏せた。
「本当に必死で、それで私、執事様に取り次いでみますって……」
「やれやれ」
呆れたように呟いたのはレイだった。
「お前は人が良すぎるな。いくら必死だろうが、無茶なものは無茶だと言ってやれ」
「そ、そうなんですけど……」
その言葉に、フィリスはしょぼんと落ち込んで俯いてしまった。
「で、でもその方、目に涙まで浮かべてて……私、男の人があいう風に泣くのってあまり見たことないからビックリしちゃって……」
「……ふぅ」
アオイは少しだけ好意的な意味合いのため息を吐いて、それからゆっくりと立ち上がった。
「その方のお名前はお聞きしましたか？」
「あ、はい」
その動きを見てフィリスは少しだけ表情を明るくする。
……が、その次に続いた言葉は、逆にアオイの表情を険しくさせる結果となった。

「ティーサイト＝アマルナ様とおっしゃってました」
「……え！？」
過剰すぎるその反応に、フィリスはビックリした顔をし、その場にいた他の二人も怪訝そうに彼を見つめる。
「どうしたの、アオイくん？」
「なんだ？　お前の知ってる奴か？」
「いえ、それが……」
すぐには答えず、アオイは少しだけアタフタした様子を見せると、
「フィリス！　その方、すぐにここにお通しして……あ、いえ、やはり私が直接行きます！」
「あっ……アオイ様！」
「アオイくん！？」
疑問を投げ掛ける面々にアオイは途中で振り返り、言った。
「ティースさんは……彼は昨日、私と姫を匿ってくれた方なんです！」
「……なんだって？」
「え、じゃあ……昼間のあの男の子？」
「ほ、ホントですか！？」
「何かあったのかもしれません……レイさんたちもそこにいてください！」
そう言って……驚く三人を後目にアオイは屋敷の外へと飛び出していったのだった。

――ティースが門番と押し問答をしていたのはどれぐらいの間だっただろうか。
途中、無理矢理押し通ろうとしたティースと門番の間で剣呑な空気も流れたが、直後に登場した使用人らしき少女、そしてすぐ後にやってきたアオイによって、その状況はなんとか打破されていた。

そして屋敷へと連れられたティースが事情説明に要した時間がだいたい七、八分。

「……なるほど。だいたいの事情はわかりました」

焦りと緊張によって上手く説明できたかどうかティース自身もあまり自信がなかったが、それでも頷きながら彼の言葉を聞いていたアオイは、どうやら全ての事情を把握したらしい。

その場にはあと二人の人物がいる。

ティースとアオイが座るテーブルのもう一座席。

「ティースくん、だったわよね。……キミが住んでいるのはどの辺り？」

そう質問してきたお団子頭の女性。ティースにも見覚えのあるその女性は、昼間、ファナを迎えに来たデビルバスターを名乗るアクアという女性だった。

「東地区の十一ブロック……十八の七です」

ここに通されて少しはティースの気持ちも落ち着いていた。が、その反動からか、質問に答える口調は若干弱々しい。

「東の十一ブロックか……」

考え込むアクア。

その横から、一人だけ隣のテーブルに座った男が口を挟んだ。

「そりゃ多分、アオイやファナを匿ったこととは関係ねぇな」

レイと名乗ったその男は額に灰色の布を巻き、無造作に伸ばされた髪も、どこかワイルドな服装も、到底屋敷にそぐわなかった。ただ、アオイやファナのことを呼び捨てにすることから考えて、彼もやはりデビルバスターなのかもしれない、とティースは思った。

「別に責任逃れをするつもりはねぇが、ウチには一切責任のない事件だ。……ま、運が悪かったと思うことだな」

「なっ……！」

「……レイさん！」

激昂したティースが食ってかかる前に、アオイから叱咤の声が飛んだ。そしてアオイはすぐにティースに向き直ると頭を下げて、

「すみません。彼はどうしてもああいう言い方をしてしまうもので……」
「責任の所在は明らかにしとくべきだと思うがな」
だが、レイは黙らなかった。
「あとでその女が死んだのは俺たちのせいだとか言われちゃ、たまったもんじゃ――」
「……んなことはどうでもいいだろっ！！」
「……」
激昂して立ち上がったティースを、レイは横目で鋭く見据えた。
その瞬間、彼の体を強烈な威圧感が襲う。
「っ……」
一瞬だけ怯んだティースだったが、直後、胸に溢れ出した炎がすぐさまそれを打ち消した。
そして拳を握り締めたまま、
「俺はただ、あいつを助けて欲しいだけなんだっ！　責任なんてどうでもいいっ！！」
「……」
無言のまま、レイはティースから視線を外して目を閉じる。……
一瞬、その口元に微かな笑みが浮かんだ。
アクアが間に割って入る。
「レイくん……今のはキミが悪いんじゃない？　ティースくんも、落ち着いて」
「……っ」
奥歯を震わせてレイを睨み付けるティースだったが、アクアの宥める声に唇を噛みしめながら再び腰を下ろす。
「っ……」
途端、その顔が意識せずに歪むと、ティースは俯き、祈るように両手を組んだ。
「責任なんてどうでもいいから……だから……頼むからあいつを助けてくれよ……」

「ティースさん……」
そんなティースの姿にアオイは目を細め、それから無言で隣に座るアクアへと視線を向けた。
「ええ」
アクアは頷いて、
「十一ブロックだとしたら、例の事件に巻き込まれた可能性が高いわね。……ティースくん」
「……」
その言葉にティースはいつの間にか目に溜まっていた雫を拭い、赤くなった瞳をアクアへと向ける。
アクアは言った。
「あたしもレイくんが言うように、キミがアオイくんたちを匿ったことには直接関係ないと思う。……キミは知ってた？　キミが住んでいる十一ブロック近辺で、最近、若い女の子が頻繁に行方知れずになっている事件のこと」
ティースはハッとして、
「それは聞いたことが……じゃあまさか……」
「わからないけど、冷静に考えればその可能性が最も高いんじゃないかな。……大体、アオイくんたちを襲った連中がその彼女をさらったって、何も良いことなんてないし……その彼女って、もしかして美人じゃない？」
「……たぶん」
おずおずと頷いたティースに、アオイが付け加えた。
「多分なんてものじゃないですよ。怖くなるくらいに整った顔立ちの子です」
「それなら、尚更可能性は高いわね」
ティースは身を乗り出した。
「そ、それで！　もしそうだとしたら助ける方法はっ！？」
「……」
一瞬黙ったアクアに、ティースはテーブルに擦りそうなほど頭を

下げて、
「頼む！　あとでなんでもするから、助ける方法を教えてくれっ！！」
「ちょっ、ちょっと。だから落ち着いて、ティースくん」
あまりの勢いに、アクアは両手を前に出して制止する。
「別に出し惜しみするつもりはないから。キミはアオイくんやファナちゃんの恩人だし、出来る限りの協力はするつもり。……ただ、ね」
「……ただ？」
顔を上げたティースに対し、アクアは手を下ろしてゆっくりと息を吐いた。
「難しい、と思う。……一応、前からこの事件については調査してて、犯人の隠れ家らしき場所の見当はついてるの」
「じゃあすぐに……！」
「それがダメなの。……地下通路だから」
「地下通路……？」
その単語に、ティースは唖然とした。
「ええ。……わかるでしょ？　こんなに暗くなってからじゃ危険すぎて行けないの。まして、相手が“魔”である可能性が高いとなったら、尚更」
「……」
ティースは絶句した。
――このネービスの地下には大規模な通路が存在している。それは過去、大陸がまだ戦乱の最中にあった頃に造られたもので、ネービス公ですらその全貌を掴んでいないとされている。そのため、大多数の入り口が封鎖された今でも地下通路への入り口は数多く存在しているというのが実際のところだ。
しかもそこは“とある理由”から昼間だけしか明かりがなく――逆にいえば昼間は明かりがあるということだが――夜にそこに入るとなれば自ら照明になるものを持っていかなければならない。

それはつまり敵の標的になりやすいということを意味し、アクアの言う“危険”というのは至極もっともな意見なのである。
だが……ティースがそれで納得できるはずもなかった。
「そんな！　じゃあシーラは……あいつは……！？」
「……」
アクアの沈黙が何を意味するか……それは鈍いと言われるティースであってもすぐに理解できた。
少し沈痛な面持ちでアクアは答える。
「あたしもチームの隊長として、部下の子たちをそんな危険な目に合わせるわけにいかないの。……助けてあげたいのは山々だけど……明日の朝、日が昇るまで待って」
「っ……そんなこと言ってたら、あいつが！」
「わかるけど、そのために犠牲者を増やすわけには――」
「っ！」
ティースは唇を噛みしめて、椅子を蹴飛ばすように立ち上がった。
「なら、その場所を教えてくれるだけでもいい！　あんたたちに迷惑はかけない！　俺が……一人で行く！！」
「ちょっ……それこそ無茶！　死にに行くようなものじゃない！」
「それでもいい！　それでも――っ！！」
暴走気味のティースに、アクアの口調も熱を帯び始める。
「よくないってばっ！　それに――こんなことは言いたくないけど、その子が生きてる可能性は限りなく低いんだから！」
「！！」
アクアの言葉は、まるで鈍器のような衝撃でティースの頭を打った。
「……アクアさん」
アオイの呼びかけに、アクアはしまったという顔をしたが、自らの言葉を引っ込めることはしなかった。
少し口調を落ち着かせて、言葉を続ける。
「考えてみて、ティースくん。この事件、二日に一人ぐらいの割合

で人が消えてるの。……それがどういうことかわかるでしょ？　まさか犯人が地下通路で十数人もの子たちを養っているはずはないんだから」

「っ……」

「犯人はおそらく“魔”よ。おそらくは……若い女の子を嬲り殺すことを楽しんでる。彼女が消えたのが夕方以前なら、もう……」

「そんな……」

足が震え、ティースは崩れ落ちるように膝をついた。

「そんな！　そんな馬鹿なっ！！」

振り下ろされた拳に、木製のテーブルが派手な音を立てる。が、そこから流れた痛みは、麻痺しかけた彼の脳にまでは到達しなかった。

「嘘だ……嘘だ……っ！！」

そのままティースは泣き崩れた。無情に突きつけられた現実に、頭の中が真っ白になって何も考えられなくなる。

「……」

沈痛な表情でそれを見つめるアオイにも掛ける言葉はなく、同じような表情で視線を伏せたアクアも軽い慰めを言うのが精一杯だった。

「……可能性がないとは言わない。明日になったら私たちがそこに向かうから……でも、過度の期待はしない方がいいわ」

「っ……うっ……！！」

祈るように組んだティースの両腕の震えがテーブルに伝わって、紅茶のカップが耳障りな音を立てた。

「……アオイくん。今日は……彼、ここに泊まっていってもらったら？」

アクアの提案にアオイは頷いて、

「そうですね……フィリス？」

いつの間にかその状況を遠巻きに眺めていた数名の人物――その中にいたフィリスが、今にも泣き出しそうな顔でやってきた。

「客室の準備をお願いします」
「は、はいっ！」
そう答えたフィリスは泣き崩れるティースを視界に捕らえ、まるでそれに触発されたかのように目に涙を溢れさせると、逃げるように中央の階段を駆け上がっていった。
「……」
「さ、ティースさん……それに、可能性はゼロではありませんから……」
アオイが支えるようにティースの両肩に手を添え、慰めの言葉をかける。アクアもそれを手伝うように手を伸ばしかけた。
……と、そのとき。
「慰めはヤメろよ。可能性なんてゼロに決まってる」
「っ！」
視線を上げたティースは声の主……レイを睨み付けた。
顔は怒りに歪み、その視線には殺気すらこもっているようだった。
だが、レイは動じた様子もなくテーブルから足を下ろし、今度は正面からティースに向き合うと、
「二日に一人はさらっていってるような奴だぞ？　……原型もわからんようなバラバラ死体になって発見されるのがオチだ。間違いないね。賭けてもいい」
「っ！！」
「レイさん！　……ティースさんっ！？」
「……貴様ぁぁぁぁっ！！」
今度こそティースは怒りを抑えることができなかった。地面を蹴った体はレイに向かって真っ直ぐに突進する。
そして、握り締めた右拳がレイの顔面を捕らえ――いや。
「そんなに怒るほど大事か？　……そいつは恋人か？　親よりも大事な人間か？」
まるで平然としたまま、首を僅かに傾けるだけでレイはその拳を避け、その手首を捕らえていた。

続いて振り上げられた左の拳は、宙で止まっている。
……お互いに素手であっても、二人の間の力量差は明らかだった。
左拳を振り下ろしたところで、それがレイの体を捕らえることはないだろう。
「お前みたいな……お前みたいな奴に……なにがわかるっ！！」
ティースは声を振り絞るように叫んだ。
頭が熱くなって何もかもわからなくなっていた。
絶望、憤り、無力感……あらゆるものがない交ぜになって正常な思考を遮ってしまう。
ただ、頭に浮かんだ言葉だけが口をついて出た。
「あいつは宝なんだ！　他に変えようのない大事な……俺の全てだったんだっ！！」
レイは手首を掴んだまま、怒りに震えるティースの顔を無表情に見つめていた。
「それを……それをお前は……っ！」
「……勘違いするな。俺がそいつをさらったわけじゃない」
振り上げたままの左拳をチラッと見て、レイはほんの僅かに口元を緩めた。
それが微笑んだものなのか、あるいは嘲笑したものなのか、その状況ではいまいち判断できなかった。
「……っ！！　くそっ！！　ちくしょぉぉぉぉぉっ！！」
振り下ろされた左拳は力なく垂れ落ちた。その双眸からは再び涙が溢れ、レイの膝に点々と染みを作っていく。
「なるほどな」
笑みを浮かべたままそれを見つめていたレイは、泣き崩れるティースを振り払うように椅子から立ち上がった。
そのまま崩れた彼を横目で見ると、すぐさまアクアへと視線を移動させる。
そして言った。
「アクア。その隠れ家ってのはどこだ？」

「……レイくん？」
怪訝そうなアクアの声。レイはそれには答えずに背を向け、遠巻きに眺めていた使用人の少年に向かって言った。
「パース、俺の剣を持ってこい。それとカンテラもだ」
「……！？」
「レイくん！？」
怪訝そうに顔を上げたティースに、アクアの驚きの声が重なった。
レイは二人の疑問には何も答えないままだったが、
「アオイ、今晩は特に何もないとは思うが、一応あんなことがあった後だ。俺がいない間も警戒を怠るなよ」
その言葉から、彼の意志は明白だった。
アクアはレイに詰め寄って、
「まさか行くつもりなの！？　……無茶よ！　いくらあなたたちのチームでも、この暗闇の中じゃ何があるかわからないでしょ！！」
「誰がナイトを連れていくと言った？」
額の布を巻き直し、少年が持ってきた二本の半楕円型の剣を背負ってレイはようやく振り返った。
「行くのは俺と、お前だ」
「え、あたし！？」
ビックリした顔で自分を指し示すアクア。
「チームを危険な目に合わせたくないんだろ？　だったら俺たちだけで行けばいい。何の問題がある？」
「そりゃ、でも……ううん、確かに……あたしとレイくんなら可能かも……」
アクアは得心が行ったという顔で頷いた。
……その流れに口を挟んだのは、意外な人物だ。
「ちょっ……ちょっと待ってくれ！」
「……なんだ？　まだ何か文句があるのか？」
あまりに予想外の展開に戸惑っていたティースは、まだ状況を理解できていないようだった。

フラフラと立ち上がり、涙に濡れた顔を拭おうともせずに、
「な、なんで……あんた、さっきまでは……」
レイは鼻を鳴らした。
「誰も助けに行くのに反対だとは言ってない。俺はただ、責任の所在をはっきりさせろと言っただけだ」
「で、でも、助けに行っても無駄だって言ったじゃないか……」
「明日になれば、な。……二日に一人ってことは、逆に言えば半日ぐらいは生きてる可能性もあるってことだ。そうだろ、アクア？」
「……可能性は低いけど、明日よりは、ね」
アクアは正直に答えた。
「だ、そうだ。……どうする？　別にお前が望まないなら、俺だって無茶なことをするつもりはないぞ」
「っ――」
「もちろんお前には照明を持って先頭を歩いてもらう。一番危険な役だが、少しの可能性にでも命を賭けられる……それぐらい大事なんだろう？」
「あ……」
ティースの口から咄嗟に言葉が出てこなかったのは、決意が鈍ったからじゃない。
胸がいっぱいになったからだった。
「当たり前だ！！　何でも……何でもやってやるっ！！」
「よし。……言っておくが期待はするなよ。……アクア。準備はいいのか？」
「全然オッケー！」
どうやら使用人が持ってきたらしい手甲を両腕に填め、それを軽く打ち鳴らしてアクアは答えた。
「アオイ。ファナには後で事情を説明しといてくれ」
「はい。……本当にお二人で大丈夫ですか？」
「狭い地下通路なら少ない方がかえっていい。……アクア、お前は大丈夫なのか？」

「大丈夫に決まってるっしょ！」
からかうようなレイの口調にアクアは明るい声を出した。
「あたしを誰だと思ってるの！　泣く子も黙る神風チーム、ディバーナ・ファントムの隊長よ！！」
「……」
ティースは彼女の真剣な様子しか見てなかったので、そのテンションに少し驚いたが――先ほどまでとはまるで違うその吹っ切れた様子から、どうやら助けに行けないことが彼女にとっても不本意だったらしいことが充分に伺えた。
「よし」
再び、レイは口元に笑みを浮かべる。
今度こそは、間違いなく好意的に解釈できる笑みだった。
「俺もアオイが褒め称えるほどの美人ってヤツを見てみたいからな。……お前、ティースとかいったか？」
「あ……ああ！」
カンテラを受け取ったティースは、預けていた自らの剣を腰に纏い、乾きかけていた涙を拭って力強く頷いた。
「言っとくが、自分の身は自分で守れ。相手次第じゃ、俺たちにも余裕があるとは限らないからな」
「ああ……わかってる……わかってるさ！」
二度、三度と頷いたティースに、レイは満足そうに言った。
「よし、行くぞ」
そのまま先頭を切って歩き出す。その後を、強く拳を握り締めたティースが続く。最後にアクアが振り返って、状況を見守っていた面々に軽い口調で言った。
「じゃ、行ってくるから。あとよろしく」
「はい。……三人とも、気をつけてください」
そしてアオイ、フィリス……それにティースには名前もわからない数人の使用人たちに見送られ、三人は屋敷を出発したのだった。

その6『惨劇の地下通路』

――薄暗い石造りの部屋。

壁に据えられた照明は僅か一つで、十メートル四方ほどの部屋を照らすにはあまりに弱々しい光だった。四方は全て壁。扉らしきものは見当たらず、一見出口のない部屋のように思える、そんな場所。

“そいつ”は待ち続けていた。――いや、待ち焦がれていた。

“そのとき”が訪れる瞬間を。

冷たい石の床に腰を下ろし……果たして何時間待っただろうか。時間の感覚は薄かったが、半日は経っていないだろう。

「っ……ここ……は……？」

女が目を覚ましたのを知って、“そいつ”は歓喜に打ち震えた。照明が暗すぎて、女の動きはその大半が薄暗い闇の中に隠されている。が、“そいつ”にとってはそれで充分だった。“そいつ”はただ、近付いたときに女の表情さえ確認できればそれで良かった。

――数名の仲間たちはすでにその場を去っている。作戦の失敗からここにはもう用はないと踏んだようだったが、“そいつ”に言わせればそれは実にナンセンスな行動だった。

せっかくこれほど大規模な人間の街に侵入し、これほど便利な隠れ家を見つけたというのに、作戦が失敗したからといってすごすごと引き下がろうなどとは。

そもそもが、“そいつ”には本命の作戦などどうでも良かったのだ。“そいつ”にとっては、自らの欲求を満たしてくれる“こっち”の方が大事だったから。

ゆっくりと立ち上がり、手にした剣で石の床を擦る。

「っ！？」

その音に、女はようやく“そいつ”の存在に気付いた。

透き通るほどに美しいブロンドの髪が揺れる。

「お目覚めか」

「お前……は……っ」
女は“そいつ”の顔を知っているかのような反応を見せた。
当然だった。今まで意識を失っていた女にしてみれば、つい先ほど出会ったばかりという感覚だろう。
「なんのつもり……こんな……」
まだ鳩尾に痛みが残っているのか、女は時折顔をしかめる仕草を見せた。が、目には強い輝きが宿ったまま。微かな恐怖を浮かべてはいても、屈服しようという意志は微塵も感じられない。
「いいな、その表情……」
“そいつ”は舌なめずりした。
空腹にも似た感覚。目の前のご馳走にすぐさま手を伸ばしそうになるが、“そいつ”はすんでのところでその欲求を堪えた。
――まだ。まだ早い。もう少し――もう少しの味付けが必要だ。
「ああ、先に言っておくが……」
女が懐を探ったのを見て、“そいつ”は口を開いた。
「懐に忍ばせていた護身用のナイフらしきものだけは捨てさせてもらった。ま、あってもどうにもならんとは思うが一応、物騒だからな」
「……」
女は意外に慌てた様子もなかった。右手を懐に入れたまま、壁に寄りかかるようにして立ち上がる。左手は近くに落ちていた木の棒を拾った。
そのまま視線は油断なく辺りを窺う。が、どこにも出口がないことを悟ったのか、形の良い眉が少しだけ曇った。
――女の心の動きは、“そいつ”には手に取るようにわかる。これまで何人もの女が同じ状況で色々なリアクションをしてきた。が、個人差こそあれ、基本的に思考の辿る道はそう大差ない。
最初に状況に戸惑い、“そいつ”の存在に恐怖を覚え……あとは絶望に全てを諦めるか、少しでも突破口を探るかの二つに分かれる。
この女は明らかに後者だった。しかも、その中でも圧倒的に強い

意志の輝きを放っている。
“そいつ”の背筋は言いしれぬ期待感にぞくぞくと震えた。
「さぁ……二人きりのショーの始まりだ……」
カリカリと剣先が石に擦れて心地よい響きを奏でる。
「っ……」
その距離が五メートルを切った辺りで、女が動く。
女が手に取った木の棒は、“そいつ”が自ら用意したものだ。抵抗する相手を追いつめていく方が楽しいから、という単純な理由によって。
今までの女どもは二通りだった。木の棒の存在にも気付かずに――あるいは気付いてても拾わずに――そのまま殺されるか、あるいは木の棒を手にして無謀にも殴りかかってくるか。
……だが、今回は少し違った。
「なに……？」
女の手を離れ、正確に顔面向けて飛んできた木の棒を、“そいつ”は少し驚きながらも右手の剣で叩き落とす。
何の躊躇もなく、唯一の武器を手放した女は初めてだった。
「！？」
直後、その向こう側からこぶし大の塊が飛んでくる。
――石か。
驚愕から一瞬体が固まったものの、“人”よりも遙かに強靱な肉体を持つ“そいつ”の体は即座に反応し、返した刃でその塊を叩き切った。
だが、
「っ……！！」
その瞬間、“そいつ”は自らの失敗を悟った。
こぶし大の塊――小さな小袋のようなもの――そこに入っていた粉末が、まともに“そいつ”の顔に降りかかったのだ。
「っ……ゲホッ、ゴホッ！！」
コショウだろうか。目から鼻から喉の奥にまで侵入した刺激物が、

“そいつ”の視界を奪う。
だが、
――小賢しい。
一瞬の混乱から、“そいつ”はすぐに冷静な思考を取り戻した。
視界が見えなくとも、女の動きは気配ですぐに読みとれる。逃げ場がないことを悟っていたのか、女は攪乱するように大きく弧を描く動きで突進してきている。
途中、微かに石床を擦る音がしたところをみると、先ほど叩き落とした木の棒を再び拾ったようだ。
――面白い。
背筋が震えた。今までに感じたことのない感覚だ。
かつて、ここまでの抵抗を見せた相手はいなかった。大抵は最初から絶望しているか、あるいは木の棒を叩き落とされて戦意を喪失するかのどちらかだった。
抵抗すればするほど、追いつめ甲斐がある――
女のささやかな抵抗など“そいつ”にとってなんの危険もない。だから女が知恵の限りを尽くして反撃してくるこの状況は、“そいつ”にとって喜び以外の何物でもなかった。
女は躊躇うことなく殴りかかってきた。微かに光を戻し始めた“そいつ”の視界に、女の美しいブロンドの髪、意志の強い瞳……これ以上ないほどに整った美しい容貌が映る。
「ははっ……ははははっ！！！」
「っ！？」
女の顔が歪んだ。
甲高い音。
その手に握られた木の棒が大きく宙を舞い、壁に備え付けられた照明の下に落ちる。
一瞬、女の顔に浮かんだ怯えの表情。
――それがまた、心地よい。
「ぐっ！！」

振り上げた足が女の脇腹を捕らえ、女は苦痛に顔を歪ませて石床の上に転がった。

「げほっ……げほっ……！！」

脇腹を押さえ、痛みに耐える表情の女。

“そいつ”は抑えきれなくなって、愉悦の笑みをそこに浮かべた。

剣先が再び石床を擦って綺麗な音色を奏でる。

今までにないほど――視界がグラグラと揺れるほどに――“そいつ”は興奮した。

「最高だよ、お前……今までで最高に強い。今までで最高に美しい……もっと！　もっと抵抗してみせろよ……はは……ははは……ははははぁっ！！」

“そいつ”は大笑いした。

「っ……」

すでに女に武器はなく、おそらくこの場から逃れる術は一つもない。

だが、女はそれでも変わらぬ瞳で“そいつ”を睨み付けていた。

「お前……異常だわ……」

女に残された抵抗は“言葉”しかなかった。

「何を言う。お前たちだって同じだろ？」

――愉快。

女の侮蔑の言葉でさえも、今は“そいつ”を愉快にさせるだけだった。

「お前たちだって子供の頃、逃げまどうトンボを網で捕らえ、その羽をむしって遊んだだろう？　……それが俺たちと共通の本能ってやつだ。標本になったトンボの羽など、誰が面白がってむしるものか」

「……それは違うわ」

女はさらに反論してきた。

「それはまだ命というものを理解していないから。……でもお前は違う。お前は命というものを理解しながら、それを弄ぼうとしてる。

生きるためでもなしに、楽しみのためだけにそれを奪おうとしてる。
それは本能でもなんでもない」
薄暗い部屋の中には似つかわしくない、太陽のような瞳が“そいつ”を見据えた。
「お前は――ただの異常者よ」
「ふっ……ふふっ……」
興奮が“そいつ”の体を突き抜ける。
――この状況にあってさえ、強さを失わない女の美しい瞳。そしてそれとは対照的に、隠しようもなく恐怖に震えているその華奢な体。
何もかもが“そいつ”を興奮させていた。
またとない美しい獲物。それは長いこと追い求めていた、至上の快楽だった。
一瞬、意識が遠くなるほど、産まれてこの方感じたこともないような異常な興奮。
――それをこれ以上抑えておくことは、“そいつ”にとってもはや不可能だった。
背筋をゾクゾク震わせながら、“そいつ”の右手がゆっくりと動く。
そして、口元を大きく歪ませながら死の宣告をした。
「ほんの数分間だけ長らえた、キミの命とその瞳に乾杯――」
「！！」
鈍色のきらめきが女の肩口に吸い込まれた瞬間、一瞬だけ時が止まった。
“そいつ”は少なくともそう感じていた。
「――――ぁぁぁぁぁっ！！」
女の口から溢れた絶叫は、言葉では言い表せない叫び。
その声に、“そいつ”の頭の中は真っ白に染まった。
断続的な快感。
緊張を失った頬はだらしなく歪み、引きつった笑みが止まらない。

赤黒い液体が周囲に飛び散る。右手に力を込めると、ゴリッという感触があって、直後に抵抗がなくなった。

「ぁ……ぁ……っ！！」

ボトリと石の床に転がったのは、先ほどまで女の右肩から生えていたモノ。

激痛にのたうち回る女の顔は、これ以上ないほどに醜く歪んでいた。それはおそらく、彼女が産まれてこの方、一度も表したことのない表情だろう。

美しい金髪が、自らの出した赤黒い液体によって赤銅色へと染まっていく。

それを見て、再び“そいつ”の頭の奥は真っ白になった。

――まるで芋虫だ。

“そいつ”はそう思った。

一瞬前まで、溢れんばかりの生命と眩いばかりの輝きを放っていた女は、今や一匹の芋虫のようだった。

そして“そいつ”は考える。

――芋虫ならば左肩から生えているモノも必要ないはずだ、と。

もはや止まらなくなったヨダレを拭おうともせず、女に歩み寄っていく。

「はっ……はっ……っ！！！」

絶え絶えになりながらも止まることのない女の呼吸は、懸命に生きようとする意志の現れだろうか。

それを見て、“そいつ”の興奮は何度目かの絶頂を迎えた。

「はぁ……ははははっ……ははははっ！！！」

鈍色の輝きが左肩へと吸い込まれる。

「――――！！」

声にならない絶叫。

飛び散る飛沫。

歪む顔。

「あははははははぁっ――――！！」

――狂宴は続いた。
“そいつ”の耳に、女の絶叫が聞こえなくなるそのときまで――

ヒタ、ヒタ。
ヒタ、ヒタ。
足音を立てないように、ティースは真っ暗な通路を慎重に歩いていた。
古ぼけた石の通路は、大きな地震でもあれば崩れてしまうのではないかというほど、あちこちがヒビ割れている。
天井のところどころに生えている白っぽいカビは、“陽カビ”と呼ばれる特殊なカビ――一説によれば“魔”たちが自らの住む世界から持ち込んだものらしい――で、その名の通り、日中にはほんの微かに発光する性質を持っている。ネービスの地下道にはほとんどの場所にこのカビが生えているらしいが、もちろん夜の今はまるで発光していない。
斜めに長く伸びた影は壁から天井にまで及び、歩くたびに前方の通路が徐々に迫ってくるかのような感覚だった。
「ティースくん。そんなに足音を潜めなくてもいいから」
ティースの斜め後ろを歩くアクアがそう言った。
「この真っ暗な中でカンテラ持って歩いてるんだから。近くまで行ったらどうせ気付かれるんだし。……そりゃ大声をあげるとかってのは論外だけどね」
「え、ええ……」
とはいえ、ティースの声は緊張に強張っていた。
当然だ。カンテラの明かりは所詮十数メートル先を照らしているに過ぎない。暗闇の先からいきなり何が飛んでくるかもわからない状況で、緊張するなという方が無理だった。
既に鞘から抜きはなった剣を握るティースの手は、汗でベトベト

に湿っている。
　それでも彼の歩みが緩まないのは、もちろんシーラを助けたいという一心によってのものだった。
「特に気配はないが……息を潜めてる可能性もあるからな」
　逆の斜め後ろを歩くレイは、ティースとは対照的に剣も鞘に収めたまま。さすがに慣れているのか気を張っている様子も――おそらくはそう見えるだけだろうが――それほどは感じない。
　それから再びしばらく歩いて……アクアが首をかしげて呟いた。
「おっかしいな……確かもうそろそろのはずなんだけど」
　レイが頷いて答える。
「逃げたか？　……もしファナを狙った連中と同じなら、すでに姿を眩ませててもおかしくないな」
「でもそうすると、ティースくんの奥さんをさらってったのは別の奴ってことになるんじゃない？」
「さぁな。そうなら……いいやら悪いやら。ま、人買いにでもさらわれたんなら、命だけは無事の可能性が高いか」
「……」
　後ろで繰り広げられる会話――しかもアクアの言葉の一部には多大な誤解が含まれていた――にも、ティースは何も答えなかった。
　答えられる余裕がなかったのと、事実が何であれ、今はただ彼女の無事を願って足を進めるしかないのだと、そう理解しているからだった。
「……？」
　ティースは立ち止まって後ろを振り返る。
「右。そこに通路があるから」
「あ……」
　てっきり行き止まりだと思ったティースは、右手の一メートルぐらい上がったところに通路が続いてることに気付く。
「気をつけろ。……気配はないが、登った瞬間、ドン！　って可能性もあるからな」

「ああ……わかった」
レイの言葉に頷いて、その通路の先を慎重に窺ったあと、素早く登って体勢を整える。
……が、特に変わったことは起こらなかった。
「いよいよおかしいな」
後ろから登ってきたレイが首をひねる。
「え？」
不思議そうな顔で振り返ったティースに、微かに潜めた声でアクアが言った。
「すぐそこ……右に曲がったところに部屋があるはず。……そこよ」
「……」
カンテラで照らすと、通路の先はすぐ行き止まりになっていて、確かに右手に入り口のようなものがある。が、扉があるわけでもなく、もしそこに誰かいるならこちらの明かりにはとっくに気が付いているはずだった。
もちろん息を潜めているという可能性がないでもない。
ゴクリと喉を鳴らし、ティースはゆっくりとその部屋へと――
「待て」
「え？」
怪訝そうなティースに、レイはアクアに目配せして、
「その先は、俺が行く。予備のカンテラに明かりを灯せ」
「え……？」
突然の言葉にティースが理解できない顔をすると、アクアは少しだけ視線を泳がせながら答えた。
「……おそらく、その部屋には誰もいないわ。気配を消しているにしても……多分、間違いない」
「じゃあなんで……」
「死臭がする」
「……！」
レイの言葉に、ティースは初めて自らの鼻を襲う異常な匂いに気

付いた。
　視覚と聴覚に意識を集中する余り、嗅覚の方がその機能を麻痺させていたのだ。
「……たぶん、キミは行かない方がいい」
「それって……」
　アクアの言葉の意味は、ティースにも理解することができた。
　人の気配がない……その理由が、否応なしに彼の頭の中で形を結び始める。
「……」
　口元を震わせて見つめたティースに、アクアは無言を返した。
　その間に、もう一つのカンテラを手にしたレイが無造作に部屋の中へと入っていく。
　さすがに片手は背中の剣に添えていたが、どうやら彼はそこに誰もいないことを確信しているようだった。
「ティースくん……」
　レイの姿を放心したように見送るティースの肩に、アクアはそっと手を添えた。
「いい？　もしどうしても我慢できなかったら、あたしの胸を貸してあげる。思いっきり泣いてもいいから……だから、落ち着いて現実を受け容れるのよ？」
「……」
　ティースはただ黙って頷いた。
　半分、放心したような状態だった。
　――漂ってくる死臭は強烈な腐敗臭だ。しかも明らかに大量の。
（……こんな……）
　深い絶望感……ティースの胸に芽生えていたその奥から、言いしれぬ怒りが沸き上がってくる。
（こんな……馬鹿なことがあるかよ……）
　レイが部屋に入っていってから数秒。
　中からは何の反応もない。

ティースのいる場所から見る限り、それほど広い部屋だとは思えなかった。そこに少しでも動くものがあったなら、すでに反応があってもいいはずだった。

それはつまり――

（……こんな……っ！）

ティースの握り締めた拳から、僅かに血が伝った。

「……ティースくん」

肩を掴むアクアの手に力が入る。

（……許せない……許せない……っ！！）

手が震えて、抑えきれない怒りが込み上げる。

「レイくん？　どう？」

二分ほど経ってレイが部屋から顔を覗かせた。その表情は明らかな嫌悪感に染まっている。

「ひどいな。まるでハイエナが食い散らかした後だ」

一瞬だけティースを気遣うような仕草も見せたが、レイは結局言葉を続ける。

「あちこちに色んなパーツが飛び散っている。あれじゃ犠牲者が何人いるのか数えるのも大変だ。……それと」

レイがそっと手を差し出す。

そこに握られたモノは、カンテラの光に照らされて微かに金と鈍色の輝きを放った。

「！？」

それを見たティースの目が大きく見開かれ、顔が見る見るうちに青くなる。

……その反応でレイはすぐに察したようだった。

「そうか。……落ちてたものの中じゃ、一番新しかったんでな」

「それは……あいつの……」

「……」

無言でそれを差し出すレイ。

震える手で受け取ったティースは絶望感を表情に滲ませながら、

それでももう一度カンテラの明かりに照らした。
――金色の装飾が施された小さなナイフ。だが豪華な装飾を見ればわかるようにそれは実用品ではない。刃もついていないし、思いっきり力を込めれば突き刺すぐらいはできるだろうが、実際のところは護身用にも役不足の代物だ。
「……あいつの……持ってたヤツだ……！」
間違えようもなかった。
ティースは良く知っている。それはシーラが昔から持っている……彼らの故郷にいた頃から持っていたものだから。
「っ……！」
溢れてくる涙に全身の力が抜け、ティースはその場に崩れ落ちた。
「……っ……うっ……！」
間違いなく彼女はここにいたのだ。
それがどういうことかなんて、考えなくともわかることだった。
「レイくん。……やっぱり生存者はいないの？」
耐えきれないという様子でアクアがそう問いかけたが、レイは鼻を鳴らした。
「あれで生きてるヤツがいるなら、あまりお近づきにはなりたくないな。……アクア、そいつを頼む。俺はもう少し状況を把握してくる」
そう言って、レイは再び部屋の中へと入っていった。
「……」
掛ける言葉もなく立ち尽くしたアクアは、黙ってティースを見つめる。
「……なんで……！」
「うん……」
頭を振って、泣き叫ぶようにティースは言った。
「なんで……なんでこんなことが！　なんでこんなことが起きるんだよっ！　どうして……っ！！」
「……それが、この世界の現状だから」

アクアは淡々と答えた。……いや、その表情を見れば彼女もまた辛い気持ちなのは明らかだった。ただ、感情を爆発させようとしているティースの前で、彼女が先に感情を露わにするわけにはいかないだけのことだ。

「だからあたしたちみたいな存在がいる。……全部を防ぐことは無理だけど、でも出来るだけこういうことをなくそうと努力してるわ」

「でもこんなの……こんなのひどすぎる……っ！！」

ティースの拳は、力もなく冷たい石床にうち下ろされた。

アクアはそれでも淡々と答える。

「あたしも……何度もこういう状況に接してきた。正直、何度も挫けそうになったわ。……でも、目を背けちゃダメだと思ったから。背けたらヤツらの思うつぼだと思ったから」

「……」

「キミも……お願いだから自暴自棄にならないで。辛いのはわかるけど――」

「でも……俺は……どうすればいいんだよ……」

「……」

アクアを見上げたティースは、もう何がなんだかわからないといった様子だった。

焦点が合っていない。

錯乱したような、放心したような、そんな状態だ。

「大袈裟なんかじゃない……あいつは本当に俺の全てだった。疎まれたり、邪魔者扱いされたりもしたけど……でも！　それでも俺は……っ！！」

「……ティースくん」

そっと、アクアの体温がティースを包み込んだ。

「っ……！」

同時に、行き場を見つけた悲しみが彼の中から溢れ出す。

「何もなくなったんだ……夢も、目標も……俺が……俺が目指してきたものが、何もかもなくなっちまったんだよ……！！」

「……」

「なぁ……アクアさん……俺はどうすればいい？　どうやって……どうやって生きていけばいい？　俺は……俺はどうすれば……この先、生きていける……っ！？」

「……キミが……もし望むなら」

抱く腕に力を込めて、アクアは答える。

「あたしたちの後を……追いなさい。……それがキミの傷を癒してくれるかはわからないけど、でも」

ティースの首筋に、生ぬるい液体が一粒、二粒と落ちてきた。

「……」

確認しなくとも、アクアが泣いているのはすぐにわかった。

「そうすれば、キミのような思いをする人はきっと減る。彼女のような犠牲者が必ず減るから……だから」

「……」

それは安っぽい同情の涙なんかじゃない。

……漠然と、朦朧とした頭の隅でティースはそんなことを感じていた。

多分、彼女もこれまでにいくつもの辛い経験をして、真にティースの気持ちを理解できている。だからこそこうして泣いているのだと。

そしてティースはようやく、彼女の言葉の意味を考え始めた。

（……アクアさんの……この人たちの後を追う……）

後を追う――それはつまり、デビルバスターになるということ。

……ティースが失ったものはあまりにも大きい。これまでの全ても、この先の目標も、その全てを失ってしまったのだから。

そしてアクアに示されたその新しい目標は、彼が失ってしまったものを埋めるには、あまりにも小さすぎた。犠牲者を減らすということも、自分のような思いをする人を減らすということも、全てを埋めるにはあまりにも物足りない動機だった。

だが……それでも。あるいはそれは、彼が“かろうじて”この先

を生きていくための目標にはなるかもしれなかった。
少なくともティースはそう思った。
アクアの言うように、傷を癒すことは不可能かもしれなくても。
（俺が、デビルバスターに……）
「……ティースくん？」
ティースの両足に力がこもったのを感じて、アクアは怪訝そうにしながらもゆっくりとその体を離した。
が、
「……ちょっと！　ティースくん！　どうするつもり！？」
ティースがレイのいる部屋へ向かって歩き出そうとしたのを見ると、驚いてそれを制止した。
「見ない方がいいわ！　それこそ――！」
「大丈夫……」
グッと拳を握り締めて、ティースは真っ直ぐにアクアを見つめ返す。
「……！」
そこに灯っていた瞳の色――それはまだ複雑な感情の色を示していたが――それを見て、アクアは息を呑んだ。
それは悲壮な、決意の色――
「見なきゃ、俺は先に進めない。……アクアさんも言っただろ。目を背けたら思うツボだって」
「そりゃ……でもそれは――！」
「……それに」
ティースは小さく微笑みを浮かべた。
「どんな風になってもシーラは……あいつはあいつだから。俺は、あいつを連れて帰ってやらなきゃならない。……でしょ？」
「……！」
アクアは再び息を呑んだ。
「……ティースくん……」
「ちゃんとお墓を作って……ちゃんと謝らなきゃ。守ってやれなく

てゴメンって……」
「……」
アクアは唇をギュッと結んで天井を見上げた。
――制止の声はもうなかった。
「だから俺は……行く」
そうすることしか、今のティースには残されていなかった。
――多分、現実は彼に壮絶な傷を植え付けるだろう。
それは彼にも良くわかっていた……が、今の彼はそうすることでしか次の目標に向かって進めなかった。刻みつけられた痛みを動力にしなければ、先に進むことができない状態だった。
アクアもそれを理解している。……だからこそ、それ以上彼を止めることができなかった。
ティースは歩みを進める。
過去と訣別するために。
そして――未来へと進むために。
「……ん？」
途中、ティースは再び部屋から出てきたレイと鉢合わせた。
「なんだ？　……おい、アクア？」
ティースの手首を掴んでその動きを止め、レイは状況が理解できない表情でアクアに問いかけた。
「……行かせてあげて、レイくん」
「なに？　……おい、どういうことだ」
今度はティース本人に問いかける。
そんなレイをティースは真っ直ぐに見つめ返して、
「俺、あいつの遺体を持って帰りますから。だって、俺が行かなきゃわかんないでしょ……？」
「……そりゃまた、随分な決心だな」
レイは納得したようだったが、それでも経過が理解できない故かティースの手首を離そうとはせず、付け加えるように言った。
「けど、お前が行ったところでそいつの死体を探すのは無理だ」

ティースは反論した。
「そんなことはない。どんな姿になったって、あいつのことぐらいわか――」
「無理だ」
「……無理じゃない！」
決め付けるレイの言葉に、ティースが僅かに声を荒げる。
「レイくん！」
そこにアクアの声が飛んだ。
「いいから行かせてあげなさい！　彼だって、それなりの決意をしてるんだから！！」
「……」
レイはアクアを見て、それからため息を吐いた。
「そりゃ行かせてやる分には構わねぇが……さっきも言ったように、お前の大事な人間の死体を探すのは不可能だ」
「なんで……そんなの……」
ティースはそこで言葉に詰まった。
それは確かに、本当に原型を留めないほどにひどい状態であればわからないかもしれない。が、まさかそこまでは……という想いもある。だからこそ、最後まで言葉にすることはできなかった。
その様子を見てレイはもう一度息を吐くと、
「……いいか、よく聞け」
「うっ……！」
ぐいっと、まるで気合を入れるかのようにティースの胸元を引き寄せ、レイはその鋭い瞳を近付けた。
「調べた結果、この部屋には新しくとも“数日前の”死体しかない」
「……え？」
ティースは驚愕の表情で顔を上げた。
「え、なにそれ？　……ちょっとレイくん、どういうこと？」
駆け寄ってきたアクアの問いに、レイは視線を動かしてパッとティースを離すと、

「そのままの意味だ。……お前の大事な彼女とやらは、朝までは生きてたんだろ。だったらここにそいつの死体はない。そういうことだ」

「じゃ……じゃあ探すのが無理ってのは……」

ティースの問いに、レイは馬鹿馬鹿しいといった表情で答えた。

「無理に決まってるだろ。……お前は無い物を作り出す超能力でも持ってるのか？」

「で、でも、その彼女がここにいたのは間違いないんじゃなかったの？」

アクアが納得できない顔をする。

「ああ。……勘違いするなよ。別にそいつが生きてるって言ってんじゃない。ただ、万が一があるかもしれないってことだ。……アクア、来てくれ。お前も……バラバラ死体が怖くないならついてこい」

そう言って、レイは再び部屋の中へ姿を消す。

呆然としたままのティースは、後ろからやってきたアクアに肩を叩かれてようやく正気を取り戻した。

「……」

頷いて、そのまま部屋に足を踏み入れる。

その途端、

「……うっ」

想像していたとはいえ、その光景はティースに目を背けさせるに充分すぎるものだった。

まず、外にいたときの何倍にも濃縮された死臭。まるで空気の密度が違うかのように、一瞬だけ息が出来なくなった。

カンテラの明かりに照らされた室内は、壁際に赤黒いものがひしめいている。すぐに視線を逸らしたために詳細は把握できなかったが、それが人の成れの果てであることは想像に難くない。

「ひどい……うわっ！」

グニュッという感触に、ティースは慌てて足を退ける。

……足下を見る気にはなれなかった。

「壁際には死体が山になってるだろ。……けど」
言って、レイは四方の壁の一角……入り口から見て左手、一番奥の隅を指し示す。
「ここだけ妙に綺麗だと思わないか？」
「……隠し部屋、か」
すぐにアクアが答える。
「ああ。お前、こういうの得意だろ？」
「ええ、任せてといて。……ティースくん。カンテラを貸して」
「あ、ああ……」
まるで人形のような返事をして、ティースはカンテラを手渡した。
（……）
実際、彼の心は複雑なままだった。
完全に死んだと思っていたのに死体が見つからない。かといって生きているのかといえばその可能性は限りなく低い。
一体どうすればいいのかわからない、宙ぶらりんな状態だ。
だからただ、まるで他人事のようにアクアの背中を見つめていた。
「……」
最初は慎重に動き回っていたアクアだが、どうやら罠がないと確信したのか壁を探り始めた。
「……これね」
スイッチか取っ手のようなものを見つけたらしい。
振り返って、ティースとレイを見た。
「中に潜んでるかもしれない。気を付けて」
「ああ。……おい、ティース。大丈夫か」
「あ、ああ……」
放心状態にあったティースも、ようやく我に返って剣に手をかける。
「行くわよ」
ガコンという音がして、どういう仕掛けかその一角の石壁が自動的に横にスライドしていった。

「……」

剣にかけたティースの手が汗を掻く。

扉が開くまでの時間はほんの一瞬。

一瞬の沈黙。

一瞬の――

「ぁ……」

まず最初、ティースの視界に入ったのは壁の照明だった。

たった一つだけ備えられた照明が、十メートル四方ほどの部屋を薄暗く照らしている。

次に視界に入ったのはその照明の下に転がる木の棒だった。

まるで刃物で真っ二つにしたかのような折れ方をしている。

次に視界に入ったのは……見覚えのある美しいブロンドの髪。

いつものポニーテールではなく、少し乱れて広がっている、美しい髪。

そしてそれを持つ、美しい少女の姿――

「シーラ……？」

それが――太陽のような強い輝きを持つ瞳が――驚いたように振り返って彼を見つめていた。

「……ティース？」

その人物は紛れもなく、彼の同居人――シーラ＝スノーフォールだった。

顔も、声も、何もかもが間違いない。

間違えるはずがない。

「……」

見つめあった時間はほんの二秒ほどだったはずだが、ティースにとってその時間は異様に長かった。

長い……あまりに長く感じられた沈黙の後。

「……ちょっ、ちょっと……ティース！　なに……っ！！」

気が付いたとき、ティースは無言のまま彼女に駆け寄って、その体を思いっきり抱きしめていた。

周りのことなどまるで目に入らない。ただ、彼女が生きてそこに立っているという事実だけで、頭の中が真っ白になってしまった。
「シーラ……！」
「ちょっ……ティース！」
ティースは華奢な彼女の体を掻き抱き、まるでその存在を確かめるように背中を撫で、それから髪に触れる。
全てに質感がある。
その全てが、それが現実であることをティースに知らせていた。
「はっ、離しなさい……」
「シーラ……あぁ……夢じゃない……夢じゃない……！！」
「な……お前、泣いて――」
その瞬間、ほんの一瞬だけ彼に身を預けるような仕草を見せたシーラだったが、
「――じゃなくてっ！　は、離しなさい！　ティースっ！！」
すぐに我を取り戻す。
「良かった……良かったぁぁぁぁぁっ……！！」
だが、その声はティースの耳にはこれっぽっちも届いていなかった。
涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら、何度も何度も美しいブロンドの髪を撫で、しつこいくらいに感激の声を口にする。
――それは彼の気持ちを考えれば決して大袈裟ではなかった。
だが、
「っ……！」
シーラは顔を真っ赤にして、叫んだ。
「離しなさいって……言ってるでしょっ！！」
「……ぐえぇっ！！」
ティースの鳩尾辺りから鈍い音が響いた。
……どうやら彼女の膝が彼の腹部にキマったらしい。
「な……なんで……」
お腹を押さえてうずくまるティースに、シーラは腰に手を当てて

言い放つ。
「なんでじゃないわ、この馬鹿！　状況を考えなさいっ！！」
その叱咤の声に、ティースはようやく少しだけ我に返った。
「え……状況……？」
「……どうやら、その王女様の言うことが正しいな」
後からやってきたレイが皮肉っぽい口調ながら、険しい表情で部屋の中央に視線を投げていた。両手にはすでに半楕円型の二刀が握られている。
アクアも手甲を鳴らして、流れるような動きで半身の姿勢を取った。
「そいつが犯人、ってことで間違いなさそうじゃない」
「……」
無言で視線を追ったティースは、そこに膝をついた一人の男がいるのを見た。
「……なんだ……？」
そう呟いた男は少し虚ろな視線だった。片手に剣を携えてはいたが、状況を把握していないように見える。
「どうなっている……どうして……お前が生きている……？」
男の視線は、そこに立つシーラの姿に疑問を投げかけていた。
「お前は確か、俺がこの手でバラバラに解体してやったはず……」
「……冗談でしょ」
シーラは脇腹を押さえ、ほんの僅かに苦痛の表情を見せながら、男に向かって侮蔑の視線を向けた。
「お前は途中から幻を見てたのよ。……私が特別に調合した、幻覚作用のある薬でね」
「幻……？」
一瞬、理解できない顔をした男だったが、どうやら思い当たるフシがあったらしく、
「なっ……まさか、あの小袋……」
驚愕の表情でシーラを睨み付ける。

「ふん……」
が、シーラはまるで怯むことなく、ありとあらゆる侮蔑の意志を込めた瞳で、真っ直ぐに男を見つめ返し、答えた。
「お前が考えもなしに思いっきり吸い込んでくれたおかげで、命拾いしたわ」
「くっ……！」
屈辱からか、男は顔を歪ませる。
「ならば、今からでも！」
「そうは――」
「いくわけないでしょ――」
そう言ってレイとアクアが同時に前に出ようとした……そのとき。
「なっ……！？」
「えっ……ティースくんっ！？」
二人が驚愕の声をあげた。
その間を駆け抜けるようにして、ティースが男に向かって突進していったのだ。
「人間ごときが……この俺に……っ！！」
男は口元に笑みを浮かべ、右手にした剣を振り下ろす。
人外の体から繰り出された剣筋は、あまりに単純な軌道ながらも、達人なみの強さと速さを秘めてティースに迫った。
「……ティースっ！！」
その声は、おそらくシーラのものだろう。
だが、
「なっ……！？」
驚愕の声を上げたのは……男の方だった。
……人としては達人の域に迫る剣筋よりも圧倒的に速く。常人としては限界に迫るほどの速さで、ティースの剣は男の胸元に吸い込まれていた。
「かっ……！」
「意識が途切れる前に……懺悔しろ……」

ティースの口からこぼれた声は、押さえきれないほどの怒りに充ち満ちていた。
「お前が殺した人たちに！　お前が悲しませた人たちに！！　懺悔して、償えぇぇぇぇぇぇっ！！」
「ばっ……こんなっ……！」
男は微かな抵抗の意志を見せたが、勝負はこの場にいる誰の目から見ても明らかだった。
稲妻のような速さで貫いたティースの剣は、すでに男から確実に致命傷となる一撃を奪っていたのだ。
「がっ……！」
男の口から赤黒い液が溢れ出して……そして、男の首はガクリと項垂れた。
「……」
剣を引き抜くと、支えを失った男の体は新たな血を吹き出して地面に崩れ落ちる。
それで終わりだった。
あまりにも呆気のない幕切れ。男はもう二度と動くことはない。
「はぁ……はぁっ……」
そしてしばらく――その部屋には、ティースの荒い息だけが木霊していた。
「……」
「……」
レイとアクアは、予想だにしなかったティースの動きに意識を奪われて。
そしてシーラは……今までに見たこともない彼の姿に、驚愕して。
――剣が乾いた音を立てて、石床に落ちる。
沈黙が、重苦しい空気を纏っていた。
「ティー……ス……？」
意を決した様子で、シーラが一歩彼に歩み寄る。
脇腹に怪我をしているのか、そこを庇うようにして一歩、また一

歩と近付いていく。
……と。
「すぅぅぅっ……」
「？」
「はぁぁぁぁっ……」
そしてシーラが立ち止まった瞬間、
「っ……ちょっ……！！」
彼女の体は、振り返ったティースによって改めて拘束されていた。
「シーラぁぁぁぁ……ホントに良かった……無事で……無事で良かったぁぁぁぁぁ……！」
無言のまま、しばらく驚いたような表情で固まっていたシーラだったが、
「……」
今度こそは彼を振りほどくこともなく、されるがままだった。
その体が微かに震えていたことは、おそらくティースにも容易に感じ取れたことだろう。
「……」
その様を黙って眺めていたレイの肩を、アクアが叩く。
「……良かったじゃない」
振り返ったレイは、微かに皮肉っぽい苦笑いを口元に浮かべて、
「あいつらは良かっただろうが、な」
「いいの。……あたしたちの仕事は、一人でも多くの人を救うことでしょ。そりゃ犠牲になった子たちは可哀想だけど、ここは素直に喜んでもいいんじゃないの？」
「……ま、そうかも、な」
そんな二人の会話は、再会を喜んで抱きあう――というより片側が一方的に抱きしめているだけだが――二人の耳には届いていない様子だった。

その7『デビルバスターへの道』

それから二ヶ月後――

「ヤバいなぁ……」

夏を思わせる日射しが照らす大通りを、ティースはトボトボと歩いていた。

昼下がり。大通りの商店街は活気に溢れている。

……が、対照的にティースの気分はどん底に近い状態だった。

「どうしよう……」

進行方向は北から南。それはつまり、彼が高級住宅街……いや、その先にある学園群から戻ってきたことを意味する。

もちろん学徒ではない彼が学園に赴く理由などそう多くはない。シーラには学園生活に極力関わるなと釘を刺されており、そんな彼がそこへ行って来た理由はただ一つ。

「そりゃ今年度も二ヶ月過ぎてるし……二ヶ月も滞納すりゃ文句も言われるよな」

というわけなのである。

つまり彼は今年度の授業をまだ、シーラの通うサンタニア学園に払っていなかったのだ。

といっても別に忘れていたわけじゃない。理由はごくごく単純。金がないのだ。

加えて――

「……今日も空振り、と」

仕事斡旋所に行ったところで、仕事の“し”の字も見つかることはなかった。

どうにも最近、この業界における不況が蔓延しているらしく、業界の“底辺”の一角を担っているティースに回ってくる仕事など、あっても最下級の仕事のみ。

何とか生活費程度は稼ぎ出すことが出来ているが……安定した収入を持つわけでもないティースにとって、サンタニアの授業料は決して安くはない。

「はぁ……」

このことがシーラに知れたなら、一体何を言われるかわかったものではない――おそらくは“役立たず”だろうと思うが――ので、今のところは秘密にしている。

が、いつまでも隠し通しておける問題でもなかった。

「あいつ、もう帰ってるかな……あ、今日もまたデートだって言ってたか……いい加減、その彼氏、紹介してくれてもいいのにな」

肩を落とし、一人呟きながら家路を辿るティース。

昨日の雨で湿度の高い暑さが憂鬱な気分を増幅させた。

「でも、こうなったらもう、やるしかないかぁ……」

家の前まで来てそう呟いたティース。

――金欠なこの状況を打破する秘策は、実をいうとずっと彼の胸の中にあった。

ただ、今まで決心がつかなかっただけのこと。

だが、こうなった以上は“それ”を実行に移すしかないのかもしれなかった。

「ただいまー……」

誰もいない室内に声をかけ――いや。

「あ……どうも、ティースさん」

「……へ？」

「お久しぶりです、ティースさん。……お逢いしたかったですわ」

「あら、ティース？　随分早かったわね」

家の中に入るなり、ティースは思いも寄らぬ三人の出迎えを受けることになった。

一人はもちろんこの家の同居人、シーラ。

そして後の二人は――

「ファナさん……アオイさん？」

いつかのようにベッドに座り穏やかな微笑みを浮かべる少女。
その横に直立する正装の青年。
それは紛れもなく、二ヶ月前にこの家にやってきたミューティレイク家の当主と執事の姿だった。
「え？　な、なんで……？」
あまりに非現実的な光景にティースがうろたえていると、ファナが相変わらずの笑みで言った。
「今日は時間が取れましたので遊びに来ましたの。……もしかしてお邪魔でしたか？」
「え！　あ、いや！　全然そんなことはないです……けど」
だがこの場合はティースの戸惑いが正しい。いくら面識があるとはいえ、ミューティレイク家の当主が、こんな貧しい区画の貧しい家に遊びに来るなどと……常識では到底考えられないことなのだから。
「……で？」
シーラから飛んだ声も、相変わらずだった。
「お前はいつまでそこでファナに見とれてるつもり？」
「は！？　い、いや、別に見とれてたわけじゃ……」
「だったらとっとと中へ入ってお茶でも煎れなさいな」
「……わ、わかったよ」
ティースが彼女に反論できないのも、もちろん相変わらずのことで。
おずおずと家の中に入る途中、苦笑を浮かべるアオイと視線が合ってティースも思わず苦笑を返してしまった。
……本当なら情けなく思う状況なのかもしれないが、ティースは彼女に命令されることに慣れて——というより染み付いてしまっていて——いまいちそういう気持ちが沸き上がってこないのだ。
「そういやシーラ……今日ってデートの約束があったんじゃないのか？」
「……そうだった？」

とぼけたように返すシーラに、ティースは怪訝な顔を向ける。
「そうだった、って……朝に言ってたじゃないか」
「別にいいわ、そんなの」
あまりにもあっさりとシーラは答えた。
「どうせ大した男でもないし。……なによ」
「いや……だってお前、そいつと毎日のようにデートしてたじゃ――」
「誰も毎日同じ相手だなんて言ってないじゃない」
「え……あち――っ!?」
「……なにやってるのよ」
お湯を指に零したティースを見て、呆れ顔をするシーラ。
もちろんティースも反論する。
「だ、だって……お前、そんな二股みたいなことするなんて……」
「うるさいわね。そんなことお前には関係ないでしょ」
「そ、そりゃそうだけどさ……」
「シーラさん」
そんな二人のやり取りに、ファナが微笑みながら言った。
「あまりそういうことを言っては、ティースさんが無駄に心配なさってしまいますわ」
「……え?」
その言葉の意味がわからずにティースが怪訝な顔をすると、ファナはその微笑みを彼の方にも向けて、
「ティースさん。シーラさんは本当は――」
「ちょっ、ちょっと、ファナ。余計なことは言わないで」
シーラが珍しく慌てたようにそれを制止する。
「? なに?」
ティースにはまるで理解できなかった。
……わかったことといえば、どうやら彼女がシーラから、ティースの知らない“何か”を聞いているらしいということだ。
だが、

「ほら、ティース。お茶、早くなさい」
「あ、ああ……」
シーラに急かされて、結局その話題はうやむやのうちに終わってしまう。
まあ、彼女がその話題をどことなく嫌がっている以上、彼の“身の安全”を考えるならこの辺で切り上げるのが賢い選択でもあった。
お茶を配り終え、テーブルについたところでティースは次の話を切り出すことにする。
……それは先の金策についてのこと。
予想だにしていなかったことだが、正直、ファナがここにやってきたことは最高に都合が良かった。
「ファナさん……だいぶ前の話になるんだけど」
「はい」
一呼吸置いて、ティースは切り出した。
「俺……ファナさんのところで働かせて欲しいんだ」
「はい」
「……」
「……」
「……え？」
「？」
呆気に取られたティースは、思わずファナと見つめ合ってしまった。
今度は幸いなことにシーラの突っ込みはなく。
「えっと……え？　はいって？」
「？　私たちのところで働いていただけるのですよね？」
「いや、でもそんなアッサリと……」
「……戸惑うお気持ちはわかりますが」
アオイが苦笑しながら、ティースにその理由を教えた。
「実を言うと、今日私たちがここへ来たのは、ティースさんをもう一度お誘いするためでもあったのですよ」

「え？」
それにファナも相づちを打った。
「そのことについて、先ほどまでシーラさんとお話ししておりましたの」
「あ……そうなんだ」
そういえばシーラも、ティースの決心について口を挟む気配がない。
だが、それにしても随分見事なタイミングだなとティースは思った。
（いや……でも、それって偶然っていうか……）
そしてふと、ミューティレイク家があの学園群の総元締めという立場であったことを思い出す。
「あの……もしかして、ウチの事情とか知ってて？」
「……」
問いかけられたアオイは突然口を噤んで視線を泳がせてしまった。
それだけでもある程度の答えになっていたのだが、ティースは一応ファナの方にも視線を移動させると、
「その通りですわ」
ファナはあっさりとそれを肯定した。
「ですから、この先の選択肢の一つとして考えていただこうかと思いまして」
「……ってことは」
ティースは恐る恐るシーラの表情を窺った。
それはつまり、ティースがひたすらに隠していたこと――つまりはこの家の経済状況について――を喋ってしまったかもしれないと、そう考えて。
「……そんな大事なこと、私に隠していたなんてね」
結果は案の定、だった。
「馬鹿じゃないの。隠したってどうなるものでもないじゃないの」
シーラの鋭い視線を受けて、ティースは思いっきりたじろいだ。

「そ、そりゃそうだけど……その、なんていうか」
「なによ」
「い、いや……」
まるで針の筵にいるかのような気分だった。
ちょっとだけファナたちのことを恨めしく思ったが、彼女たちとしては当然に知っているものだと思って話したのだろう。仕方がない。
「余計な心配させると、学業にも支障が出るかと思ったし……お金の心配なんてさせたくなかったし……」
「で？　その挙げ句に二ヶ月も授業料を滞納させてたってわけ？」
「う……」
返す言葉もなかった。
「まったく。半人前のくせに言うことだけは一人前ね」
「うう……」
「……ですけど、丁度良かったのではないですか」
そこへ、まるで助け船を出すかのようにファナが口を挟んだ。
表情は相変わらず……だが、そこにはどことなく、シーラに対する悪戯っぽい調子が含まれていた。
「シーラさんも隠し事をしていたのですから、お互い様ということで」
「……」
「隠し事？」
ティースは不思議に思ってファナを見る。先ほどの話の続きかとも思ったが、彼女の言い方からして少し違っているようだった。
ファナは頷いて、
「ティースさんはご存じないようですけど……シーラさんの学費、実は半額免除になっているのですよ」
「え？」
ティースにとっては初めて聞くことで、まさに寝耳に水の話だった。

「え、いや、だって半額免除ったって、最初からずっと授業料は変わってな――」
「それはそうですわ」
ファナはゆったりとした動きでお茶を口元に運ぶと、一呼吸置いて、
「シーラさんは入学試験から常に成績トップで、ずっと半額免除を受けていらっしゃるのですから。……半額免除は、定期試験ごとに成績上位者三名に与えられる特権ですの」
「……ええっ!?」
ティースは驚愕に目を見開いた。
それはそうだ。彼はずっと彼女から違うことを聞かされていたのだから。
「だ、だってお前、ずっとギリギリだって……」
「……別にいいでしょ。悪いものを良いって言ってたわけじゃないんだから」
シーラは相変わらずの突き放す言い方をした。
が、どことなくバツが悪そうだった。
(……けど、言われてみれば)
ティースにも思い当たるフシはある。
例えば今日、学園の事務と授業料の話をしているときも、“二ヶ月も待ったのは彼女が特別だから”みたいな言い方をされて、そのときはまるで意味がわからなかったのだが――トップの成績を取っていたのだとすれば、確かにその意味も理解できた。
「だ、だけど、そんな嘘なんてつかなくても……」
うろたえたようなティースの言葉に、ファナはニッコリとして、
「きっと照れくさかったのではないですか？　ティースさんになるべく負担を掛けないために頑張っているなんて――」
「……ちょっと、ファナ。あることないこと吹き込もうとしないで」
「あら？　違いましたの？」
シーラは眉間に皺を寄せ、不機嫌そうな顔を形作ると、

「違うに決まってるでしょ。それは私がもともと頭がいいからで、別に頑張ってるわけじゃないし……私が男と遊び回ってることだってティースが良く知ってるわ」
ファナはクスクスと笑って言った。
「あまりムードのないデートコースばかりだと、男の方も退屈なさいますわ？」
「……」
シーラは肩を落とし、諦めたようにため息を吐く。
と、
「……あ、でも、すごいよ」
そんな二人の会話の意味がいまいち理解できなかったティースだったが、それでも一つだけはっきりわかったことがあった。
素直にそれを口に出す。
「ホント、ぜんっぜん勉強してないのにあのサンタニアで成績トップだなんて……お前って本当に頭良かったんだなぁ」
「……」
「……あら」
どこか呆れたような表情で黙り込むシーラに、ファナはますますおかしそうに微笑むのだった。
「あの、話が戻りますけど……ティースさん」
そこへ、その成り行きを見守っていたアオイが、タイミングを見計らって口を開く。
「正式に我々ディバーナ・ロウに参加してくださるということでいいですか？」
まるで待ち望んだかのような口調だった。
そういや彼は二ヶ月前も熱心にティースを誘ったことがあり、ティースの気が変わらないうちに、という気持ちがあったのかもしれない。
「ああ……シーラ。構わないか？」
「そんなのはお前の勝手よ。いちいち私に聞かないでちょうだい」

シーラは相変わらずの返答だったが、ふとファナに視線を向けて、
「でも……本当にこいつに務まることなの？　見た目からしてそうだけど、はっきり言って情けない奴よ？　高所恐怖症だし、すぐ風邪ひくし、馬車に乗ればすぐに酔うし……」
「お、おい、そこまで暴露しなくたって……」
だが、ティースの反論はまるで意に介されることもなく一言で叩き伏せられた。
「すべて本当のことでしょ。……それで、どうなの？」
「……」
ファナは少し考えるように視線を泳がせる。
そして今度は少し真剣な顔で、シーラ……ティースの二人へと視線を注ぐ。
「もちろん危険なお仕事ですわ。……二ヶ月前のこともございますし、シーラさんもおそらく理解してらっしゃるからこうして心配なさっているのだと思いますけれど……」
「……」
「ただ、それなりの代価はお支払いするつもりです。それに、極力安全であるように配慮もしております。ですから……あとはティースさんのお気持ち一つですわ」
ファナの返答はシーラが問いかけた質問からは少しズレているように思えたが、シーラは何も言わなかった。
そしてファナは真っ直ぐにティースを見つめる。
「どうなさいますか、ティースさん？」
「……」
（俺の気持ち、か……）
それはすでに決まっていた。
そしてティースはすぐに答える。
「……役に立てるかどうかはわからないし、多分、俺の動機って他の人と比べたらものすごく不純なものかもしれないけど……」
彼の夢――シーラを無事に卒業させるという夢。

それを叶えるためにもっとも近い道であるというのなら――
「それでも認めてくれるのなら、やらせて欲しい。……俺なりに頑張るつもりだから」
「そうですか」
ファナは正面からティースの視線を受け、全て理解しているという顔で頷くと、付け足すように答えた。
「不純などではありません。前にも言いましたけれど、ご立派だと思いますわ」
厳しい表情が崩れて、そこから再びいつもの柔和な笑顔が現れる。
「ホント……お二人は本当のご兄妹みたいで、羨ましいです」
「あ、はは……って」
照れくさそうに頭を掻いたティースだったが、すぐにその違和感に気付く。
「……ファナさん、いつから俺たちが兄妹じゃないって――」
「最初から、ですわ」
ファナは再びおかしそうにクスクスと笑って、
「ティースさんは、あまり嘘をつけない方ですわね」
「……」
ティースが唖然としていると、横からシーラが呆れ顔で言った。
「ホント間が抜けてるわ、お前は」
「あ、でも……その……ほら、ファナさんだって本当の兄妹みたいだって……」
「召使いならともかく、お前みたいのが兄だなんて冗談じゃないわよ」
「……」
どうやら……というかやはりというか、彼女にとってのティースは結局のところ召使いらしい。
（ま、召使いでもなんでもいいんだけどさ……）
そう思ってしまう辺り、やはり彼にも使用人根性が染み付いてしまっているのだろうか。

そして――数日後の昼下がり。
ティースとシーラは二年間暮らしてきた家を引き払い、ミューティレイクの屋敷へとやってきた。主要な荷物は屋敷の馬車がすでに運び込んでおり、体一つの非常に楽な引っ越しである。
馬車に揺られてやってきたミューティレイク家の屋敷。そして迎えに来たアオイから、さっそく屋敷の中を把握するように言われた。
「この敷地には本館、別館、迎賓館と三つの館があります。その他、ディバーナ・ロウ各隊の詰め所や色々な施設があって、全部で十の建物があります」
広大な敷地内を歩きながらティースとシーラの案内をしているのは、十五歳ぐらいの少女だった。
そしてティースはその少女をほんの少しだけ見たことがある。
「あ、そうだ。紹介が遅れてしまいました」
一通り建物の案内を終えた少女は、ようやく自らを名乗った。
「私、フィリスといいます。フィリス＝ディクターです。この屋敷では一応お嬢様……当主様の侍女をやらせていただいてます。よろしくお願いします」
「フィリスさん、ね。うん、よろしく」
ティースの言葉に、フィリスはちょっとビックリした顔をして、
「あ、あの、私のことはどうかフィリスと呼び捨ててください。ティース様はデビルバスター候補生ですし、その身内のシーラ様はお客様という扱いですから……」
「え、でも、初対面の人を呼び捨てるなんて……」
ティースが戸惑っていると、その横からシーラがアッサリと口を挟んだ。
「じゃあフィリスね。よろしく、フィリス」
「はい。よろしくお願いします、シーラ様」

「お、おい、シーラ……」
シーラはうるさそうにティースを見て、
「……こういう人たちにはそれなりのルールがあるのよ。お前だって知らないわけじゃないでしょう？」
「そ、そうか……あ、でも、俺はちょっと慣れないし、しばらくはフィリスさんでもいいかな？」
「え……あ、その、ティース様がどうしてもそうしたいとおっしゃるのでしたら」
フィリスは少々困惑した様子だったが、拒否する素振りはなかった。
「ティース様とシーラ様の部屋は別館の二階にあります。……こちらです」
別館というのは正面の門から見て右側の館……以前ティースがレイやアクアと出会った方の館だ。
「基本的にデビルバスターの方々も、私たち使用人も外部からいらっしゃる方以外は全てこちらの館で暮らしています。本館はお嬢様が……ただ、実はお嬢様もこちらにいらっしゃることが多いので、本館の方はちょっとしたお客様をお迎えするぐらいにしか使われていないんですよ」
玄関を抜けると、例の丸テーブル群が広がっている。
「……なに、これ？」
初めて見るシーラは案の定、驚いたような呆れたような微妙な表情で眉をひそめた。
「ファナの趣味なの？」
「あ、その……みなさまが気楽に過ごすことができるようにと……」
「へぇ……ま、らしいといえばらしいけど」
それ以上は特に言うこともなく。
……しかしそれにしても、改めてその光景は異質だった。
「こうして見ると、この屋敷って色んな人がいるよなぁ」
「はい」

ティースの感想に対しては、フィリスは満面の笑顔で答えた。
……そのホールには現在、四人ほどの人間がいる。
まず目に付いた玄関から一番離れた隅っこのテーブル。妙に分厚い本に読みふけるショートカットとセミロングの中間ぐらいの少女。ただ少女といってもシーラのような年齢ではなく、もっと下……おそらくは十か十一歳ぐらいだろう。この年頃の少女にしては珍しくスカートではなくパンツルックで、例えるなら“舞台で少年役を演じる少女”といった感じか。
そして同じテーブルにいるのは――後ろ姿しか見えないが――おそらく同席の少女より少し年上ぐらいの、やはり女の子。彼女は少し髪が長く栗色でさらさらのセミロング。こちらは少女らしい可愛らしい服装で、他にあまり例えようもないが言うなれば“中流階級のごく普通の女の子”だろうか。
そこからだいぶ離れた席。白衣に黒縁眼鏡の男性がコーヒーを飲んでいる。歳はティースよりもだいぶ上、二十代半ばといったところか。見ただけで頭の良さそうな風貌、その格好から想像するに“医者か研究者”で間違いなかろう。
……これに“真面目そうな執事さん”のアオイや“見るからに旅人風”なレイの姿を同居させてみると、まるでごった煮の集団だった。
さて……そしてその場にいた最後の一人。
例えるなら“孤児院で子供に好かれてそうな気のいいお姉さん”というところだろうか。
「あら？　フィリスちゃんに……あ、キミたち！」
それはティースはもちろんシーラにも見覚えがあるはずの、頭に二つのお団子を結った女性だった。二人の顔を見るなり、椅子から勢い良く立ち上がって駆け寄ってくる。
それに気付いたフィリスが軽く頭を下げた。
「アクア様。……こちら、ティース様とシーラ様です」
「知ってる知ってる！　へぇ、二人ともひっさしぶりねー！」

「や……あの、ちょっとアクアさん……」
今にも抱き付かんばかりの勢いで迫るアクアに、ティースはほんの少し後ずさった。
……例の地下道で彼女に抱きしめられたことは、今も彼の記憶の中に新しい。改めて思い出すと恥ずかしいということもあったし、何よりも違う理由で今はまずい。
（こんなとこで例の病気を出すわけにはいかないぞ……）
あのときは気を張っていた、というより、意識する余裕すらなかったから良かったが、今、この場で同じことをやられたらどうなるか――それは想像するまでもない。初日から、屋敷の面々にとんでもない醜態を晒してしまうことになるだろう。
だが、そのティースの態度をどう勘違いしたのか、
「あら？　どーしたのティースくん？　……あ、わかった！　また、あのときみたいにおねーさんに抱きしめて欲しいのね！？」
「い、いえ！　それは結構です！！」
慌てて手を振るティース。
もちろん逆だ。それだけはご勘弁願いたいところなのだ。
「あのときみたいにって？」
シーラが怪訝そうな顔をする。
「なに？　お前、この人にも不意打ちを受けたの？」
「ふ、不意打ちって……」
だが、その表現はあまりにも的を射すぎている。基本的に“女性アレルギー”であるティースが自分からそれを受け容れるはずはなく、抱きしめられるとしたら“不意打ち”しかありえないのだ。
（まぁ……あのときはちょっと特殊な状況だったから、別に不意打ちだったわけじゃないけど……）
「あれ？　……あ、そっか。ごめんごめん、ティースくん」
奇妙な沈黙に、ふと思い出したようにアクアが謝る。
が、ティースにしてみればその後こそ余計な一言だった。
「こんなこと、奥さんの前で言うことじゃなかったか」

「!?」
「……奥さん?」
「あ、あの、アクアさん!!」
ティースは大声を張り上げ、慌てて弁解した。
……言葉はアクアに向けていたが、もちろん弁解した相手は別の人物である。
「そ、それ、前に言いそびれたんですけど! それって全然これっぽっちの根も葉もない真っ赤な誤解で――」
「……」
後ろに目のないティースに、そのときのシーラの表情を窺うことはできなかった。
が、
(ヤバイ! めちゃめちゃ怒ってる!!)
雰囲気で察することは可能だった。彼は周囲の空気がまるで凍りついているように感じた。
が、アクアはそれを察した様子もなく、明るく笑って、
「あ、わかってるってば。まだ籍は入れてないんでしょ? そりゃ二人とも若いしね。でもほら、同棲してたわけだからやっぱラブラブでメロメロだったわけでしょ?」
(……火に油!!)
言ってる意味はよくわからなかったが、とにかく彼女の暴走を止めなければ新天地におけるティースの未来がいきなり地獄のような状態になること請け合いだった。
「ま、まさか! 一緒に暮らしてたって言っても、俺なんて召使い同然ですから! 全然、奥さんとか恋人とかそんなもんとはほど遠い関係なんですよ!!」
「召使い? ……あぁ、ティースくん」
察したと言わんばかりの表情で、アクアは小さくため息をついた。
「結婚する前から尻に敷かれてるのね……可哀想に」
(だ……だめだ……全然伝わってない……)

「ティース」
「は、はいぃっ！」
「……なによ、その返事」
確認するまでもない。これ以上もなく不機嫌な声が、ティースの背中に降りかかってきていた。
「いや……あ、な、なんだい、シーラ」
「……」
勇気を振り絞って振り返った――振り返らなければ良かったと、後にティースは思ったが――その瞬間。
「……ぐぇぇぇっ！！！　シ、シーラ！！　足！　あしぃぃぃっ！！！」
「アクアさん、だったわよね？」
そのまま、シーラは一歩前に出る。……もちろんティースの足は踏みつけたまま。
「え？　えぇ、そうだけど……っていうか、ティースくん、ものすごく痛がってるみたいなんだけど……」
「そんなのはどうでもいいわ。……ひどい誤解があるようだけど、私とティースはそういった類の関係じゃないの。そういう表現をされるとものすごく不愉快だから、やめてもらえないかしら？」
「……」
アクアは無言でティースを見た。
「ぎ、ぎぶ、ギブ……！！」
「……そ、そうみたいね」
答えなければティースの命が危ないとようやく察したのか、アクアは少々引きつった笑みでようやくそう言った。……後ろでその様子を見守っていたフィリスは、脅えてちょっと泣きそうになっている。
「お願いするわ。……ああ、ティース。いたの」
「い、いたのって……あ、あのな……」
「悪かったわ。踏みつけてることに気付かなくて」

「……」

アクアは呆然、フィリスは固まってしまい、もはや一言も言葉を発することはなく。

「それじゃフィリス。部屋までの案内、お願いできる？」

「は……は、はい」

「あ、おい、ちょっ、ちょっと待てって……」

そうしてシーラは、まるで下僕を従えるかのように先頭を歩き出したのだった。

――ちなみにこの出来事は後に瞬く間に屋敷中に広まり、新入りである彼らに対しての印象は初日にして決定づけられてしまった。

以下、その状態を克明に表した、その晩のアクアとレイの会話である。

「さすがのあたしも思わずうろたえちゃったもんねー。あれは大物だわー……」

「ま、綺麗な花には棘があるもんだ。……あれだけの花だ。棘も相当鋭いんだろ」

「いやー、それにしてもまさかあそこまでとはねー……こないだティースくんのあんな姿を見た後だけに、なーんか報われない感じしちゃうねぇ」

「……意外に愛情の裏返しってやつじゃないのか？」

「おねーさんにはそれ以前の問題に思えて仕方ないわー……っていうか、その前に……ティースくんって、もしかするとマゾなのかしら……」

「……そうかもな」

――合掌。

その翌日。
「ティースさんにはひとまずカノンに所属していただくことになります」
朝一番で――慣れない環境で少々寝不足気味だったが――本館の執務室に呼ばれたティースは、アオイから今後の説明を受けていた。
ファナの姿はない。
「カノンってのは……第三隊だったっけ？」
「はい」
簡単に説明すると、ディバーナ・ロウは現在四つの隊に分かれている。
第一隊がティースにも馴染みの深い女性デビルバスター、アクア＝ルビナートを隊長とする“ディバーナ・ファントム”
第二隊が二ヶ月前、シーラを助ける際に世話になった少々ワイルドな風貌の男、レインハルト＝シュナイダーを隊長とする“ディバーナ・ナイト”
そして第三隊。
ティースが今回所属することになったチーム、“ディバーナ・カノン”
「レアス……ヴォルクスさん、か」
隊長の名は当然ティースには聞き覚えのないものだった。
「はい。レアスさんにはすでに通達してありますので、とりあえずティースさんはカノンの詰め所に行っていただくだけで結構です。あとは向こうで色々聞いて下さい」
「わかった」
念のためカノンの詰め所の位置を記したメモを受け取って、
「……そういや第四隊ってのは？」
部屋を出ようとしたところでふと振り返って尋ねる。
確かに第四隊まであると言った割に、アオイの口から説明されたのは第三隊までだった。

「あ、いえ」
だが別に隠し事というわけではなかったらしい。それに隠したいのなら最初から第四隊まであるなんて言うはずもなく、
「第四隊は少々特殊で……チーム名もありませんし、チームといっても現在所属しているのは一名なんです」
「ふぅん？」
ティースには良くわからなかったが、つまりまだメンバーが揃ってないということだろうか。
（もしかして、俺は将来的にそこに配属されるのかな……）
そんなことを考えながらティースは執務室を出た。
いや、出ようとしたところで、
「うわっ……と」
丁度部屋に入ろうとしていた人物と鉢合わせしそうになる。
「わっ……危ないな、もう。気を付けてよ」
そう言って一歩下がった場所からティースを見上げていたのは、
（って……子供？）
長身の彼に比べると三十センチ以上も背の低い女の子だった。少々長めのショートヘアに、若干つり目ながらも幼さを残した瞳が真っ直ぐにティースを捕らえている。
特徴的なのは、この年頃の女の子にしては珍しくパンツルックで
――
（あ、この子は確か、昨日見た……）
その手に握られていた分厚い――“経済と流通”という少女には似合わないタイトルの本を見て、ティースは思いだした。
「ん？　どうしたの？　……あ、もしかして」
せいぜい十か十一ぐらいと思える少女はティースを見上げ、真面目な顔のままで言った。
「あたしが愛らしすぎてムラムラきちゃった？」
「……ぶっ！！」
「うわ、汚いな、もう」

少女はさらに一歩身を引いて、少し眉をひそめる。……が、その表情には嫌悪感というより、悪戯が成功して喜んでるような色が見受けられた。

「そ、そんなはずないだろ。大体、君……」

言いかけたティースの言葉を遮って、少女は言った。

「リディアだよ。……歳はティースさんのご想像通り、まだ十一歳。あと二ヶ月ぐらいで十二歳だけどね」

「リディア？　なんで俺の名前――」

「新入りさんの名前ぐらい、もうほとんどの人の耳に入ってるよ」

「そ、そうなのか……ていうか、なんで歳、俺の想像通りだって――」

「だってティースさんの目、いかにも『なんだこのガキ』と言わんばかりだもんね。……でもよかったよ。期待の新人さんがロリコンだったりしなくて」

「……」

淡々と言葉を続ける少女――リディアに、ティースは目を丸くしてしまった。

「とにかく今後ともよろしくね」

「え？　あ……」

ティースは差し出された右手を凝視する。

（えっと……）

情けない話だが、差し出された手を握ることは――このぐらいの年齢ならさすがに大丈夫かもしれないが――できれば避けたいところだった。

と、そんなところへ、閉じたばかりの執務室のドアが開いて、

「リディア？　なにをしているんです？」

「あ、アオイさん。新人さんへ挨拶してたんだけど」

パッと手を引っ込めたリディアはアオイに向き直って、すぐにチラッとティースを見る。

「幸い“まともな”人みたいだね」

「……」
アオイは何も答えずに苦笑した。
「まともな、って？」
その言葉に引っ掛かったティースがそう質問すると、リディアは腰に手を当てて大人のような仕草で答える。
「ほら。ウチは上流階級と野蛮人が一緒に暮らしてるようなものだし。ファナさんの“人を見る目”は確かだけど、中にはやっぱり変なのもいるんだ」
「変なの？」
問いかけるティースに、リディアはケロッとした顔で言った。
「ちょっと前、夜中に某侍女さんの部屋に忍び込もうとしたデビルバスター志望のお兄さんは、半殺しの目にあって屋敷から叩き出されたよ」
「は、半殺し……って誰に……？」
侍女と言われてティースの頭に真っ先に思い浮かんだのは、昨日のフィリスという少女だったが、まさかあの少女がやったわけではあるまい。
……と思っていたのだが、そんな彼にリディアは少し悪戯っぽい笑みを浮かべて、
「ティースさんも試してみたら？　……あ、ほら。ウチって恋愛は自由みたいだし、ティースさんって優しそうだからフィリスさんが受け容れてくれるという可能性もなくはないし」
「……え、遠慮しとくよ」
怖いというより、彼の性格的にそんなことができるはずもなかった。
「なーんだ。つまんない」
頭の後ろで手を組んで、リディアは本当につまらなさそうだった。
……大人びた態度を取ってみたり急に子供っぽかったりと、忙しい。
で、結局、誰が半殺しにしたのかはうやむやのままだったが、
（まさか、なぁ）

「……そうだアオイさん。先月の月末の支出、用途不明になってるのがあったんだけど、あれってなんに使ったの？」
「あ、はい。それについては……あ、ティースさん。それではそろそろ……」
「あ、うん」
頷いてティースが立ち去ると、アオイとリディアは再び執務室の中に入っていってしまった。
（……あれ？　ていうか……）
途中、ふと振り返ってティースは思った。
（あのリディアって子、結局なんなんだ……？）
どうもこの屋敷の面々は、見た目だけでなく中身も少々変わった構成になっているようだった。

ディバーナ・カノンの詰め所は敷地の東側、外周の近く、まるでそこからの侵入者を監視するかのような位置に建てられていた。小型の別館とでも言おうか、この敷地内にあっても決して浮いていることはない。一階建てながら外観から想像するに広さは結構あるだろう。
（ここか……）
さすがにドキドキしながらティースは建物の入り口に立っていた。
（どうすればいいんだろう……呼び鈴みたいなものはないし……ノックするのかな）
だがノックしても反応はない。
（そのまま……入っていいのかな）
どうやらそうらしいと判断し、ティースはそっと入り口のドアを開けた。
「お邪魔しま――」
その瞬間、ティースは絶句した。
視線の先……そこに見た光景に。
（……な、なんだあれ……）

そこは武道場のような広い空間になっていた。壁際には木刀や長刀、防具や様々な器具らしきものが並んでおり、詰め所というよりは鍛錬所といった雰囲気だ。

だが、ティースの目を引いたのはそこではない。

その広い空間の中央。

そこにいる一人の人物だ。

「ラーラー……ラララー……」

歌っている。

いや歌っているだけではない。歌いながら華麗なステップを踏んでいる。

……それはいい。ティースだって踊り子ぐらいは見たことがあるし、それが例えこの場にそぐわない存在であってもここまで呆気に取られることはなかっただろう。

問題は、その踊り子らしき仕草をしている人物がウェーブがかった長髪だということ。

……いや、違う。

踊り子のように踊るその人物が、ウェーブがかった長髪に、全身真っ白な軍服らしきものを着た――明らかに“大人の男”だったということだ。

「ルールルー……ルルルルー……」

くるくると華麗なステップを踏み、男はティースの存在に気付くこともなく踊り続けていた。

時折、悩ましいため息を漏らしながら、

「あぁ……この回る世界のなんと美しいことか……これこそまさにこの世の真理、輪廻転生を表している！」

残念ながら高尚ならぬティースには、意味が全く理解できなかった。

（も……もしかしてあれがここの隊長……なのか……？）

周りを見ても人はいない。奥の方に他の部屋へ続く入り口らしきものも見えたが、人の気配はない。

隊長がここで待っているというアオイの言葉が本当なら、どうやら“アレ”が隊長で間違いないらしい。

（……な、なんかものすごく不安になってきた……）

ティースがそう思って天を仰いでしまったのも、無理からぬことであった――

その1『ディバーナ・カノン』

大陸第二の規模を持つ学問都市ネービス。
その中央通りを北に向かって歩き、一般住宅街と高級住宅街の境目辺りを西に歩けば、やがて広大な敷地が見えてくる。
ミューティレイク家。
ネービスのシンボルともいえる学園群、その総元締めともいえるネービスきっての大貴族が所有する土地だ。
同時にそこは、このネービス近郊を襲う異形の者たち――“魔”から人々を救うべく結成されたデビルバスター部隊“ディバーナ・ロウ”の本拠地でもあった。

――ティーサイト＝アマルナ。男。十八歳と三ヶ月。
成人男性の平均を十五センチほど上回るひょろっとした長身と、年の割に幼い顔立ちが特徴的な青年だ。
彼はつい先日、ちょっとした出来事からその素質をイングヴェイ＝イグレシウスという――何故か“アオイ”という奇妙なニックネームがついている――ミューティレイク家の執事に見込まれ、デビルバスター候補生ということでこのディバーナ・ロウに参加することになったばかりである。そんな彼が所属することになったのは、ディバーナ・ロウの第三隊“ディバーナ・カノン”と呼ばれるチームだった。
そしてその日の朝、執事のアオイから説明を受けたティースは、早速敷地内にあるディバーナ・カノンの詰め所に向かったのだが……そこで待っていたのは思いも寄らぬ光景だったのである。

（な……なんなんだ、あの人……）
詰め所に入ってすぐ、まるで鍛錬所のような広いスペースの中央。
「ルルル……ルラララー……」

そこにいた人物を見て、ティースは絶句したまま立ち尽くしていた。

ウェーブがかった長髪。身長は少々高めだが長身のティースよりは若干低いだろうか。真っ白い軍服のような衣服に身を包み、まるで踊り子のようにクルクルと周っている。

その人物は――どうやら薄く化粧をしているようだが――どこからどう見ても明らかに男だった。

しかも、

「あぁ！　来た来た、来たぞっ！　今まさに、私の中に美の女神が下りてこようとしているではないかっ！！」

（……）

何を言ってるのかティースにはまるで理解できない。

（あ、あれが……ディバーナ・カノンの隊長……？）

ティースはここにその――レアス＝ヴォルクスという名の隊長が待っている、と聞いてやってきたのである。周りを見るに他に人影はない。とすると、アオイが嘘をついているか、あるいはその隊長が約束をすっぽかしたのでない限り、あの踊っている男が隊長で間違いなさそうだ。

が。

「素晴らしい！　ブラーボ！　ブラーボーッ！！」

男はくるくる回りながら手を叩き始めた。

……別にティースの感想を待つまでもないだろう。

明らかに“キテ”る。それもかなりぶっとんだ方向に、である。

（ど、どうしようか……）

隊長らしき男は踊りに夢中なのかティースの存在に気付いた様子もない。いや、気付いているのかもしれないが、少なくとも彼に向けてアクションを起こそうとはしなかった。

（止めて気分を壊されると後が怖いからなぁ……）

そうティースは考えた。

たとえあんなのでも、これから先しばらくは上司となる人物であ

る。出来る限り波風は立てたくない……というのが人として当たり前の感情であり、ましてティースという人物の性格を考えれば自ずと結論は出る。

結局、ティースは待つことにした。

あれだけ派手に回っているのだから、それほど長くは保たないだろうと……そう考えて。

――そして十分後。

（……ど、どうなってるんだ、あの人！）

クルクルという円運動を中心に踊り続けている男は、未だにその動きを止めていなかった。さすが隊長というだけあって素晴らしい体力だとはティースも思うが、これではさすがにラチがあかない。

（あと三分待って止まらなかったら声をかけよう……）

……すぐに、じゃない辺りが実にティースらしい考え方だった。

まあ、結局、最終的には声をかけずに終わることになったわけだが。

「おい、邪魔だ」

「え？」

突然背後から聞こえた声にティースは驚き、

「……あ、ご、ごめん」

誰かが入ってきたらしいことをようやく悟ると、慌てて通り道を開ける。

「ったく、でかい図体してぼーっと突っ立ってんじゃねーよ」

「……え？」

振り返り、現れた人物を見てティースは困惑した。

……いや、正確には違う。

そこにいるはずの人物の姿が“見えなかった”から困惑したのだ。

だが、その原因はすぐに判明する。

「おい。……どこ見てんだ、てめえは」

「？」
聞こえた声はすぐ近く。
……妙に低い位置から。
「え……こ、子供？」
視線を落とした先にいたのは、ツンツンした赤毛短髪の少年だった。
ティースとの身長差は三十センチ以上ある。これだけ接近していれば、一瞬彼の視界に入らなかったのも無理からぬところだ。
「君は……？」
この街では珍しい長羽織のようなものを上に纏い、子供ながらつり上がった目が下からティースを見据えている。
そして背中には、
（……剣？）
少年の身長……あるいはそれ以上あろうかという長剣を斜めに背負っていた。
それを見てティースは目を見開く。
「え、あ……君もここの隊員なのか……？」
その赤毛少年はどう見ても十代前半。どれだけひいき目に見ても十五歳には達していない風貌だった。
（まさか――）
確かに真に剣の道を目指すものは小さい頃から鍛錬し、このぐらいの歳からすでにかなりの技術を身につけている場合が多い。が、このディバーナ・ロウが相手にするのは人ではなく“魔”である。このような子供がその一角を担っているなどということは、常識的に言えばあまり考えれないことだった。
だが、赤毛少年はただでさえ吊り気味の目に、さらに睨み付けるような色を纏って、
「なんだ？　俺みたいなガキがやってちゃおかしいってか？」
「あ、いや……」
喧嘩を売るかのような赤毛少年の態度に、ティースは弁解する。

「別にそういうわけじゃないけどさ。ただ君みたいな子供が“魔”と戦うなんて……」
「なら戦えるかどうか、確かめてみるか？」
「え？」
その言葉に、ティースは困惑の表情を浮かべた――その瞬間。
「……なっ！？」
ぞわっとした感触がティースの背中を貫く。
そして直後、驚愕に目を見開いた。
（え……！？）
――赤毛少年の姿は、いつの間にか彼の視界の中から消えていた。
自らを襲った強烈な威圧感に、彼が視覚から意識を離したのはほんの僅かな時間、おそらくはコンマ数秒のことだろう。
「俺にてめえを殺す意志があったなら――」
赤毛少年の声が“背中に”聞こえた。
驚きにティースの体が凍り付く。
「三回は死んでるぜ。間違いなく、な」
「……」
冷や汗が、首筋から背中に向けて流れ落ちる。
――ティースは動けなかった。
一瞬感じた圧倒的な威圧感。直後に起きた、まるで時間を飛び越えたかのような動き。
あまりにも子供――いや、人間離れしすぎている。
「おい、ビビ！　てめえはいつまで踊ってやがる！」
「ちがぁぁぁぁぁう！！」
踊っていた男は赤毛少年の言葉にピタリと動きを止め、人差し指を突きつけると、
「ビではない！　ヴィだっ！！　私の名はヴィヴィアン＝ミットフォードだっ！！」
「聞いてねーよ！　いいからとっととその目障りな踊りを止めやがれ！」

「……え？」
ティースはようやく我に返って振り返った。
「ヴィヴィアンって……あんたがレアスって隊長なんじゃ……」
「む？」
ヴィヴィアンと名乗った男はティースを見て怪訝そうに眉をひそめたが、やがてチッチッと目の前で人差し指を振ると、
「誰かは知らんが、違うな。……私は美の伝道師、ヴィヴィアン＝ミットフォードだ！！」
「二度も名乗ってんじゃねーよ、タコが。いいから、てめえは変な踊りを踊ってねぇで他の二人を呼んできやがれ」
「変な踊り！？」
命令口調で追い払う仕草をした赤毛少年に、ヴィヴィアンは手で顔を覆って、
「ああ、これだから美しさに対しての造詣がない凡人は！！」
「……で？　てめえがティーサイト＝アマルナだな？」
赤毛少年はヴィヴィアンのセリフを全く無視し、入り口で立ち尽くすティースを肩越しに振り返った。
……驚くべき事実がそこから明かされる。
「俺がレアスだよ。……俺がディバーナ・カノンの隊長、レアス＝ヴォルクスだ」
「……え？」
ティースの動きが数秒間、完全に停止した。
少年がただ者でないことを見せられた後だけに、それは決して受け容れ難いというほどのものではない。
が、
「き、君が……隊長……？」
とはいえ、かなり常識外れな出来事であることに変わりはなかった――

「ファナさん。あの新人さん、結局カノンに行かせたんだ」
ミューティレイクの屋敷は内部で繋がった本館と別館に分かれている。本館の方は当主であるファナ＝ミューティレイクの生活空間、執務室、応接室や蔵書庫などがあり、別館の方は主に使用人が生活する場所だ。
だが、実際のところ当主であるファナもまた、別館の執務室や、その玄関ホール――カフェテラスさながらの丸テーブルが並んだ場所――を好む傾向にあるため、このミューティレイク邸は結局のところ、別館が主となっていた。
さて、その別館の方にある、本館のものに比べると少々小さめの執務室。
そこには今、二つの人影がある。
「本気で期待してるんなら、素直にナイトに加えてあげれば良かったのに」
部屋の正面にあるファナ専用の机。その隣に直角に配された机に座っていたのは、十代前半の少女だった。
リディア＝シュナイダー。それが彼女のフルネームだ。
若干長めのショートカット、ほんの僅かにきつめの瞳は、まだ幼さを残している……が、右手にはミューティレイク家の先月の決算報告を示す紙束が握られており、左手で手元の紙にペンを走らせる姿は、まるでキャリアウーマンさながらだった。
だが、それもそのはず。彼女は十一歳にしてこのミューティレイク家のスチュアード……つまり当主であるファナを補佐する、アオイと並ぶもう一人の執事としての役割を果たしている少女なのだ。
「カノンではいけませんでしたか？」
顔を上げたファナは、まるで春の日射しのような穏やかな微笑みを湛えている。
「ダメってことはないけど」
そう答えるリディアなどは、“この人の笑顔と家の肩書きがあれ

ば大抵の男は落ちるだろうな”などと、十一歳の少女には似つかわしくないことをいつも考えるのだが……それはひとまずおいておこう。

「間違ってコメディアンにならないことを祈るよ」

「まあ」

しれっとしたリディアの言葉に、ファナはクスクスとおかしそうに笑った。

「ティースさんは真面目な方ですから。それは大丈夫だと思いますわ」

「カノンの連中はみんな真面目だよ。ただ、その真面目さがあさっての方向を向いているだけでさ。ビビさんとかはその典型だよね」

「ヴィヴィアンさんは面白い方ですわ」

「……そりゃファナさんにかかればね」

リディアの言うとおり、ファナの人物評には“面白い方”という言葉が頻繁に出てくる。

ヴィヴィアンの場合は確かにそう表現できなくもないとリディアも思うのだが、例えば誰が見ても“面白い”とは言えない無愛想な人物でさえそう評してしまうほどで、とある人物曰く『彼女の中では“悪人”の逆は“善人”ではなく“面白い人”らしい』と言われるほどであった。

つまり、根の善い人間は彼女にかかれば全て“面白い”のである。

「でも、本当にカノンでいいの？　あまり教育に適した場所じゃないと思うんだけどなぁ」

リディアは話を戻した。

“ファントム”

“ナイト”

“カノン”

ディバーナ・ロウという部隊を支えているのは基本的にこの三チームだ。

第一隊の“ディバーナ・ファントム”はこの屋敷で（おそらく）

唯一の女性デビルバスター、アクア＝ルビナートを隊長とするチーム。ただしこの部隊は機動性、隠密性、諜報力を重視した部隊であるため、入ったばかりのティースには少し荷が重い。それはリディアも理解できた。

第二隊、レインハルト＝シュナイダーを隊長とする“ディバーナ・ナイト”は、総合的な見方をすればディバーナ・ロウの最強チームと言って間違いない。世間がディバーナ・ロウに対して持つイメージ――あらゆる“魔”を蹴散らす正義の味方――を、そのまま体現しているようなチームであり、ディバーナ・ロウを理解するためにも、あらゆるノウハウを学ぶためにも最も適していると言える。

そして“ディバーナ・カノン”

ここは――正直なところ“イロモノ”チームだ。まず隊長のレアスからして普通じゃない。

なにしろ彼はリディアより四ヶ月程度年上の、誕生日を迎えてまだ二ヶ月ほどしか経たない十二歳の子供なのである。それだけでも普通のチームとはひと味違うことが窺えるが、チームとしてその隊長をサポートする三人も少々クセのある面子が揃っている。

新人教育という点でいえば、あまりにもアクの強すぎるチームだった。

「ティースさんにはカノンだけでなく、将来的にはファントムやナイトにも行っていただこうと思ってますの」

ファナの言葉にリディアは目を丸くした。

「え？　そうなの？」

それもそのはず。彼女も今までに数人のデビルバスター候補生を目にしてきたが、複数の部隊に所属させられた人間は未だかつて見たことがなかったのだ。

リディアは怪訝そうに眉をひそめて、

「それって、期待してるから？　それともそうでもしないと――」

「両方ですわ」

躊躇うことなく、ファナはにこやかに答えた。

「ティースさんには色々なことを学んで欲しいのです。ディバーナ・ロウの将来のためにも、彼の未来のためにも」
「……ま、見るからに今のままじゃ役に立ちそうになかったけど」
皮肉っぽいその言葉に対しては、ファナは何も答えなかったが、
「カノンにはサイラスさんがいらっしゃいますでしょう？　なんとなくティースさんに良い影響を与えてくれそうな気がしますの」
「あ、なるほど」
リディアはようやく納得顔をした。
「つまりけしかけるってことかぁ。……ファナさんって、何も考えてないような顔して結構計画的だね」
「？　そうですか？」
ファナはとぼけた風でもなく首をかしげてみせた。
あるいは彼女にしてみればその采配は計画的でもなんでもなく、単なる直感じみたものだったのかもしれない。

「こいつらがウチのメンバーだ」
鍛錬場のようなディバーナ・カノンの詰め所には今、ティースと向かい合うように四人の人間が集まっていた。
まず、集まって早々に口を開いた赤毛の少年。ティースも他の三人も座っていたが、何故か少年だけは立ったまま、
「一応アオイのヤツに言われてるし、改めて紹介しておくぜ。……俺が隊長のレアス＝ヴォルクスだ」
「あ、えっと……早速質問いいかな」
ティースは手を上げた。
「なんだ？」
「そのレアス君――」
「馴れ馴れしく“君”とか呼ぶんじゃねぇよ」
子供らしからぬつり目がティースを見据えた。

「い、いやそれじゃ……レアス隊長？」
「なんだ？」
「隊長はやっぱりデビルバスター……なんですか？」
レアスは小馬鹿にしたような呆れ顔をして、
「お前、何にも知らないんだな。――まあいい。そのことは後でこいつらにでも聞けよ」
親指でその他の三人を示し、
「お前らも今のうちに適当に紹介しておけ。……俺はリディアのヤツに呼ばれているから、ちょっと屋敷の方に行ってくる」
そう言うなり、レアスは長剣を負った背中を向けてさっさと詰め所を出ていってしまった。
（な……なんか無愛想な子だなぁ……）
と、呆然とした表情を隠そうともせず見送ったティースに、メンバーの一人が口を開いた。
「では……ティースくんでしたかしらぁ？」
それはメンバー中唯一の女性。
黒縁の眼鏡、ボブカットの優しそうな印象の女性だ。白衣を纏っている辺りが場の雰囲気から少々浮いてはいたが……歳はティースよりも二、三歳上、二十歳過ぎぐらいだろうか。
外見的には大人しそうな感じだったが――
（……なんだろ）
ティースはその女性にどことなく不自然な印象を受けた。
どこが、と言われれば“全体的に”だろうか。一見上品そうな笑顔、物静かな佇まい――それがどことなく“作られたもの”のような、そんな感じがした。
……鈍感な彼がそう感じるぐらいである。実際、彼女の仕草はかなり不自然だった。
綺麗に正座した足は見るからにムズムズしていたし、ピンと伸ばした背筋もたまにフラフラと揺れており、少なくともその上品な佇まいが元来のものでないことは明らかだったのである。

だが、それでも女性はあくまでそのままで言葉を続けた。
「私、医事担当のフローラ＝カンバースと申しますの」
「医事？」
ティースの疑問に、フローラは頷いて答えた。
「各チームはそれぞれ、医療に通じたメンバーを一人入れることになってるんですよ。ここを離れて活動することも多いですからぁ」
「え、でもそれって――」
危険じゃないのかと問いかけようとしたティースに、その機先を制してフローラは言葉を続けた。
「ええ。もちろんご覧になってわかる通り、戦うことは“とても”苦手なのですけど、皆さんがきちんと守ってくださいますからぁ」
ニッコリと。
「はぁ」
その瞬間、何故かティースの目には、黒縁眼鏡の奥がキラリと光ったように感じられた。
が、それは見なかったことにして、一応社交辞令を述べておく。
「そ、そうだよなぁ。フローラさんて見た感じ育ちも良さそうだし――」
「……！」
「……」
「……え？」
一瞬表情の固まったフローラと、ハッとした他の二人に気付いて、ティースは言葉を止めた。
「あ、え？　俺、なんか悪いことを――」
「そ……そう見えますかぁ！？」
「え？」
いきなり満面の笑みを浮かべたフローラに、ティースは呆気に取られてそれを見つめてしまう。
黒縁眼鏡の奥は……明らかな喜色を浮かべていた。
「いえ、“わたくし”別に育ちがいいとかそんなことはないんです

のよぉ！　で、でも、ティースくんにそう見えたのは、もしかすると、“わたくし”の内面の上品さが自然と滲み出てしまったせいかもしれませんわねぇ！」

「……」

（な……なんなんだ……）

ホホホホホ、と不気味な笑い声をあげるフローラにティースが呆気に取られていると、

「ティースくん」

少し離れた場所からヴィヴィアンが手招きしていた。

ティースはフローラが“トランス”してしまっていることを悟り、こそこそと彼に近付いていく。

ヴィヴィアンはそっと耳打ちした。

「彼女は“育ちが良い”とか“上品”とかいう言葉に過剰に反応する。今後は気を付けた方がいいだろう」

「……過剰に反応？」

「ま、つまり実際はそうではないということだよ。……ふ。自らを偽ろうなどとは、私には到底理解できない行動だ。まあ、美しすぎてパーフェクトな私には自らを偽る理由などどこにもないのだがね！」

「……」

無言で振り返ると、フローラはまだ高笑いを続けていた。

（あ、あの人“も”普通じゃないのか……）

ティースの心に広がった不安は、決して杞憂などではないだろう。

「では私の番だな」

まだ“こっち”に戻ってこないフローラを蚊帳の外に置いて、自己紹介は続いた。

ヴィヴィアンは大袈裟な仕草で目に掛かっていた前髪を払うと、

「ヴィヴィアン＝ミットフォードだ。……ま、それ以上の説明は必要あるまい」

ティースを真っ直ぐに見て口元に笑みを浮かべると、指先をティ

ースに突きつけた。
「この私の美しい姿さえ見てもらえれば、それだけで全てが理解できるであろう！」
「……はぁ」
その言葉でティースに理解出来たことといえば、やはり彼がフローラ以上に“アレ”な人物だということぐらいだった。
（五十歩百歩ってやつだなぁ……）
とはいえ、フローラが医事担当だというのだから、おそらく他の二人は純粋に戦闘用のメンバーだろう。とすると、彼もそれなりの剣技に長けた人間のはずだった。
「じゃ、あとは俺かな」
最後にそう言ったのは、フローラやヴィヴィアンの自己紹介を苦笑いで見守っていた――おそらくはティースと同じ年齢ぐらいの青年だ。
どうやら彼が一番まとももそうである。
外見は“優男風”と表現するのがもっともわかりやすいだろうか。はっきりいってティースの目から見てもかなりのハンサムで、身長はティースより若干低いが、彼よりはしっかりとした体つき。それでいてスラッとしており、なんとも無駄のない体型だった。
身につけているものも特に着飾ったものではなく、実用的で動きやすい服装。胸にロケットのようなものをつけている以外は特に飾り気もない。が、それでいてそれなりに洗練されたイメージがあるのは、やはり質素であってもモノを選んでいるからだろうか。
（なんかいかにも女の子にモテそうだなぁ）
羨望でも妬みでもなく、ティースは素直にそう思った。
というのも、その青年の爽やかなイメージは、他ならぬティースにも充分な好印象を与えていたからである。
「俺はサイラス＝レヴァイン。カノンでは唯一のデビルバスター候補生だ」
「え？」

ティースは怪訝に思って、
「唯一の？　ヴィヴィアンさんとかは――」
「ノンノン！」
ヴィヴィアンが人差し指を振った。
「他人行儀な呼び方は止めたまえ。これから私たちは生死を分かち合う戦友となるのだからな。私のことはヴィヴィアンと呼び捨てにしてくれたまえ」
そこへサイラスが口を挟んだ。
「呼びづらかったらビビでもいいんだぞ」
「ノゥッ！　ビではない！　ヴィだ！！　私はヴィヴィアンだっ！！」
ヴィヴィアンがサイラスに指を突きつける。どうやら彼はそこに異常なこだわりがあるようだった。
「は、はぁ……」
ティースはそのテンションに少々置いてかれつつあったが、
「じゃあ……えっと、ヴィヴィアンはデビルバスター候補生じゃないのか？　あ、っていうかすでにデビルバスターなのか？」
「ティース……だったっけ？　お前、ホント何も知らないで来たんだな」
サイラスは馬鹿にした風でもなく明るく笑いながら答えた。
「まず前提として、このディバーナ・ロウにデビルバスターは四人しかいないんだ。つまり各チームの隊長、アクア隊長、レイ隊長、レアス隊長、それに第四隊……って言っていいかわかんないけど、そこのアルファさんって人」
「あ、そうなのか」
ティースにとってはもちろん初耳だったが、考えてみればそれはもっともな話である。
だいたい一つのチームが四人で構成されるとして、全員がデビルバスターだとすると――第四隊の所属者が一人であることを考えても――十三人。いくらミューティレイクとはいえ、個人の力でそこ

までのデビルバスターを雇う……いや金銭的に可能でも、それを探して集めることはそう容易なことではないと考えられる。
「じゃあヴィヴィアンとかは一体……？」
サイラスは頷いて、
「俺たちみたいなサポーターの中でも、最初からサポーターに徹する人間と、将来的にデビルバスターを目指す人間と、二種類いるんだ。ビビは前者。俺やお前は後者」
「私の夢は別にデビルバスターになることではないのでね」
前髪をふわさっと掻き上げてヴィヴィアンはそう言った。
サイラスが付け加える。
「っていうか、デビルバスターを目指す人間の方が圧倒的に少ないんだよ。今のデビルバスター候補生は俺とお前と、あと半々で揺れてるパーシヴァルって子がいるだけさ。……ま、正直、努力の他にある程度の資質も必要な職業だからな」
「……」
その言葉がティースの不安を煽ったのは言うまでもない。
（それなのに、俺みたいのがデビルバスターになんてなれるんだろうか……）
「ま、ともかく」
そう言って、サイラスは改めてティースに手を差し出してきた。
「同志として、ライバルとして一緒に頑張っていこうぜ。よろしくな、ティース」
「あ、あぁ……」
そんなサイラスの真っ直ぐな視線に、ティースは思わず引け目を感じてしまうのだった。

夕方。
ミューティレイクの門をくぐった美しいブロンドの髪の少女は、

ポニーテールを微かに揺らし、別館へと足を向けながら小さく辺りを見回していた。

綺麗に刈り揃えられた芝生。遠くに見える花壇には季節の花が綺麗に咲き乱れている。その世話をしていた使用人の少女が頭を下げた。

それに軽く応え、逆方向に視線を向けると三十代ぐらいの男が立派な庭木の手入れをしている。

「シーラ様。お帰りなさいませ」

「ええ」

シーラ＝スノーフォールは特に戸惑った様子もなく、ミューティレイク家の使用人と言葉を交わし、別館の中へと入っていった。

入った途端、目の前に広がる丸テーブル群にシーラの足が一瞬だけ止まる。さすがの彼女もこのミスマッチな光景にだけは慣れるのに少々時間がかかりそうだった。

「おや。王女様のお帰りか」

そこに座っていた、旅人風の精悍な青年。

昨日ここにやってきたばかりのシーラでも、その青年のことは知っている。

「レイさん、だったかしら」

「ああ。……ヒマならそこに座ったらどうだ？　一人で飲むのも淋しいもんでな」

第二隊ディバーナ・ナイトの隊長、レインハルト＝シュナイダーだ。シーラにとっては命の恩人の一人でもあり、この屋敷においては先輩でもある。

が、シーラはきっぱりと答えた。

「遠慮するわ。この時間からお酒を飲む気にはなれないもの」

「別に酒に付き合ってくれなくてもいいんだがな」

レイは笑った。

片手に握られたコップに入っているのは、麦酒だろうか。

「美人の顔なら、見ているだけで随分と違うもんだ」

その言葉に、シーラは嫌悪感を隠そうともせずに眉をひそめた。
「そういう理由なら、なおさらご免被るわ。私は男に鑑賞されるために産まれてきたわけじゃないの」
「……ほう」
レイは特に気分を害した様子もなかった。それどころか、少し興味深げにシーラのことを見つめている。
そしてわざとらしく話題を変えた。
「ティースなら今頃、カノンの詰め所でしごかれてるんじゃないのか？」
「……だから？」
階段の手前でシーラは振り返った。
「様子、見に行かないのか？」
「私が？　何故？」
「……なるほど」
クックッと喉を鳴らすようにレイは笑った。
「お前らはホントに面白いコンビだな。……いまいちどういう関係なのか見えてこない」
「そうかしら」
「ああ。最初は駆け落ちしてきたどっかのお嬢さんと使用人かとも思ったが……それにしちゃ、お嬢さんは他に男がいるらしいし、使用人の方はそれを気にしている様子もない」
「……何が言いたいの？」
シーラは不機嫌を隠さずにレイへ向けた。人形のように整った顔立ちが感情を露わにしてようやく人間味を帯びる。
それを見たレイは口元を緩めた。
「いや。ただ、あいつがお前のためにあそこまで一生懸命なのはどうしてかと、純粋に疑問だっただけさ。……その美しさの虜になったといえば簡単に説明できそうなんだが、そうでもなさそうなんでね」
「理由なんて知らないし、どうでもいいわ」

それに対してのシーラの返答は、あまりにも素っ気ないものだった。
「あいつが尽くしてくれるというから、私はそれを利用してるだけよ。……何か文句でもあるの？」
「そう突っ掛かるなよ」
レイは愉快そうにコップを口元に運ぶ。
一呼吸。
空になったそれをテーブルに置いて、戯けと鋭感を纏った目がシーラに向けられる。
「そういう態度、逆にお前自身が納得してないように見えちまう」
「……」
口を噤んだシーラに、レイは再び口元を緩めた。
「無理に詮索する気はない。……けど、半端な決意で進むにゃキツすぎる道だからな。あいつの決意の源がどこにあるのか、それがどれほどのものなのか。少し気になっただけのことだ」
「……知らないわ」
「いつ死んでもおかしくない仕事だからな」
「知らないって言ってるでしょう。……だいたい」
シーラの表情から、突然苛立ちが消えた。
「……？」
怪訝そうに眉をひそめたレイに、シーラはそのまま言葉を続ける。
「私が強制したわけじゃない。あいつが選んだ道よ。あいつがどうなろうとあいつの勝手。死んだら死んだで――それこそ」
一転、怖いほどに整った顔に微笑が浮かぶ。
「私の美貌を持ってすれば、貢いでくれるだけの男なんていくらでも見つかるもの」
「……なるほど」
レイは否定しなかった。……いや、否定する理由などありはしない。それは彼女の自信過剰でもなんでもなく、おそらくは事実だ。
「わかったなら、これ以上余計な詮索はしないで欲しいわね」

微笑のまま、シーラは背を向けて階段を上がっていく。
「……」
レイもまた無言で、冷たく美しいブロンドの少女を見送ると、もう一度、口元に笑みが浮かんで呟いた。
「……可愛い娘だ」
「あら、レイくん。それは聞き捨てならないわね」
「……」
レイが口を噤んで振り返った先。
三メートルと離れていない――先ほどまで何の気配もなかった――その場所に立っていた人物に、レイは特に驚いた様子もなく首を横に振った。
「ま、いきなりそこまで近付けるのはお前ぐらいのものか」
「他人の奥さんに手を出そうだなんて、おねーさん見逃せないなぁ」
第一隊ディバーナ・ファントムの隊長、アクア＝ルビナートは、からかうような色をそこに浮かべ、ゆっくりと歩み寄ってレイの向かいへと腰を下ろした。
「ありゃ本当に奥さんって感じでもなさそうだがな」
レイは頭の後ろで手を組んで背もたれに体を預け、テーブルに足を乗せて椅子を傾ける。
アクアは階段の方を見ながら頷いて、
「確かに彼女の方は意外に冷たいのよねぇ。死んだら死んだで――なんて、あれじゃ旦那も浮かばれないなぁ」
「ま、それはさすがに本心じゃないだろうが」
「でもねえ。旦那があれだけ一生懸命やってるんだから、少しぐらい素直に応えてあげてもいいと思わない？」
「……そんなもんかね」
「なに？」
「いや」
レイは体を伸ばすようにして、豪華なシャンデリアの揺れる天井を見上げながら、

「もっと色々と複雑そうだなと思ってね」
「あら？　昨日は『どうせ愛情の裏返しじゃないのか』とか言ってなかった？」
「それは撤回させてもらう。……ま、複雑になっただけで結局のところは同じことなのかもしれんが」
「？」
まるで理解した様子もない、怪訝そうな顔のアクア。レイは横目でそれを見ると、小馬鹿にしたように鼻で笑って、
「お前はそんなんだからいっつも男に逃げられるんだ」
「なっ……ちょっとレイくん！　それは聞き捨てならないなぁ！」
アクアは思いっきり身を乗り出すと、胸に右手を当てて、
「言っとくけど、これでもあたしに言い寄ってくる男なんてごまんといるんだぞ！」
「しかしまあ、いざとなると誰も彼もが後込みして逃げ出しちまうと」
「うっ……！」
どうやらかなり身に覚えがあるらしく、アクアは言葉に詰まった。
「い……いいのよ。いつかきっとあたしのことを理解してくれる王子様が現れるんだから……」
「何十年先の話やら」
「何十年！？」
「三十路まであと七年を切った女にゃ厳しい話だな」
「あぁぁぁぁぁっ！　それ以上歳のことは言わないでぇぇぇぇぇっ！！」
アクアは耳を塞ぎ、崩れるようにテーブルに突っ伏してしまった。
こういった反応といい、この歳でお団子頭にするところといい、彼女はどうも大人っぽい部分と子供っぽい部分とのギャップが激しい人物だった。……とはいえ、そういう部分がまた、屋敷内での彼女の人望にも繋がっているのかもしれない。
レイはゆっくりと身を起こして、

「で？　その旦那の方はどうなんだ？　どうせ様子でも見に行ってたんだろ？」
　だがその視線の先で、アクアは頭を抱えたままだった。
「し、仕方ないわ……こうなったら力尽くでもアオイくんをモノに――」
「おい」
　ゴン！
「……った～～～～っ！　ちょっ、今……もしかしてコップの底!?」
「夜這いの計画なら後で立ててくれ。……で？」
　コップを置いて平然と先を促すレイ。
「新入りは役に立ちそうなのか？」
　アクアは恨みがましい目で後頭部を撫でながら、
「あ、えっと……あー、もう。レイくんが頭を打つから旦那の名前忘れちゃったじゃない」
「お前が顔と名前を覚えないのは元からだろ。……ティースだ」
「ああ、ティースくんね。……なんかねー。とりあえずダメっぽい」
「全然か？」
　その問いに、アクアは頷いて、
「まあサイラスくんに歯が立たないのは今は仕方ないけど、ビビくんにまで軽くあしらわれちゃってるんだもの。レアスくんなんか『役立たずが来た』って機嫌悪くしちゃって」
「そうか」
　レイは特に意外に感じた風でもなかったが、アクアは納得できない顔で首を捻る。
「アオイくんの言うように、あのときの彼の動きはあたしも結構見所あると思ったんだけど。……レイくん、どう？」
「ああいうタイプにはよくあることさ」
　悟ったようにレイは答えた。
「人間、限界に近付けば近付くほど精神面の占める割合は高くなる。

おそらく、能力を全て引き出すだけの精神的体力が全く足りてないんだろ」

「見込み、あると思う？」

「さぁな。この仕事を甘く見ているうちは絶対に無理だと思うが」

バッサリと切り捨てたレイに、アクアは首をかしげて、

「甘く見てるってことはないと思うけど。実際、一度は現場を見てるわけだし、その上で彼には彼の目的があってここに来たわけじゃない？」

その言葉をレイは特に否定しなかった。

「ま、超実戦タイプってことも考えられなくもない。としたらカノンにはピッタリの人材かもしれん。……にしても」

そう言って、空になったコップを持って立ち上がる。

「もしピンチにならなきゃ力を発揮できない……ってんなら、保ってせいぜい三ヶ月だろうな」

「彼、そんな根性なしかな？」

アクアの疑問に振り返って、レイは鼻で笑うと短く言い放った。

「いや……命の話、さ」

鍛錬場を思わせるディバーナ・カノンの詰め所では、この日、昼前から夕方まで休みなく、激しく甲高い打撃音が響いていた。

「くはぁっ……はぁっ……！」

「……」

堅い木刀を正眼に構えたティースと向かい合うのは、ウェーブがかった長髪の青年、ヴィヴィアン＝ミットフォードだ。

ティースの全身には滝のような汗が流れ、疲労を色濃く映した瞳は虚ろ。対するヴィヴィアンは片手に木刀を構え、まるで構えらしきものを見せていない。

「おい、ティース！　てめえ、いつまで休んでるつもりだ！」

対峙する二人を見ていた三人の人物――その中の一人、このディバーナ・カノンの隊長である少年から苛立たしげな声が飛んだ。
「くっ……！」
子供とはいえ、充分な威圧感のある怒声にティースの体は押し出されるように動いた。が、まるで宙に浮いたような浅い踏み込み、力強さの欠片もない打ち込みはヴィヴィアンの手元に届く間もなく弾かれた。
「っ！」
甲高い音を立てて、ティースの木刀が宙を舞う。
「……隊長」
ヴィヴィアンが息を吐く。
「今日はこの辺にしておこうではないか」
丸腰になったティースに木刀の先を突きつけて言った。
「初日からこれでは、ティースくんも厳しかろう。それに……これ以上やったところで良い結果が出るとは思えんよ」
「ちっ……」
ガクリと膝をつき肩で息をするティースを、レアスは苛々した目で一瞥すると、
「やる気も実力もねぇヤローがこんなとこに来るんじゃねぇよ！役立たずはとっとと消えちまえっ！！」
「はぁっ……くっ……！」
反論する余裕もなく、ティースの視線は床を見つめたままだ。
……いや、余裕があったところで反論などできようはずもなかった。
（こんなに……力差があるなんて……）
力試しにと挑んだサイラスとの試合。お互いが本気で打ち合ったその結果は……僅か一撃、ほんの五秒ほどの決着。決着というのもおこがましいほど、ティースは何もできないままだった。いつ打ち込まれたのかもわからない。ただ、気が付けば手に痺れるような衝撃が走り、木刀が宙を飛んでいたのだ。

続くヴィヴィアンとの試合。……あくまでサポート役、デビルバスターを目指してすらいない彼との試合もまた、結果は同じ。
“次元が違う”とさえ言える内容だったのだ。
彼が落胆するのも当然だった。
「……ま、そう落ち込むな、ティース」
タオルをかぶり壁際に移動して項垂れたティースに、隣のサイラスが軽くその肩を叩いて励ました。
「お前はまだ来たばかりだ。勝手がわからなくて当然さ」
「……」
ティースにはそれに答える気力もなかった。
（……遠すぎる……）
アオイにスカウトされたことで、ティースの中にも多少の自惚れらしきものがあった。自分には少しぐらい見込みがあるのだと思っていたのだ。
だが……ここで起きた一連の出来事は、その甘い考えを跡形もなく打ち砕くのに充分すぎる内容だった。
“勝手がわからない”とかそういうレベルの問題ではない。
歴然とした力の差だ。
「おい、ビビ。体力が残ってるなら少し肩慣らしに付き合え。……つまんねぇ試合を見てストレスが溜まっちまった」
レアスが長羽織を軽くはためかせ、木刀を片手に立ち上がる。
「ふむ。別に構わないが、今日の私は絶好調だ。怪我をしても知らないよ」
「アホか。てめえがどうやって俺に怪我させるってんだよ」
数言のやり取りがあって、沈黙。
ぼんやりとしたティースの耳に、それはまるで幻聴のようにしか聞こえていなかったが、
「おい、ティース。見てみろ」
「……？」
サイラスの言葉にティースが顔を上げると、ちょうどレアスとヴ

ィヴィアンの試合が始まるところだった。
ヴィヴィアンはティースのときと同じように、片手の無造作な構え。どうやらティースを見下していたわけではなく、これが元々の彼の構えらしかった。
対するレアスは剣先が床に擦りそうなほど下段に構え。両者の視線がぶつかり合うところに、渦のような熱量が発生している……かのようにティースには感じられた。ヴィヴィアンの視線もさっきまでとは比べものにならない真剣さがある。
（あぁ……俺とやってるときはやっぱ本気じゃなかったのか……）
それに気付いて、ティースは再び愕然とした。
（……これ以上は――）
「項垂れるな、ティース。良く見ろ」
「っ……」
サイラスに首根っこを掴まれ、ティースは仕方なく顔を上げた。
――動く。
打ち込んだのはヴィヴィアンだ。
まるで、何かに突き動かされたかのように。
（あっ……そんなのじゃ――）
ティースがそう思った瞬間だった。
ヴィヴィアンの長めの腕から繰り出された剣筋は極端に加速度を増し、まるで伸びるようにレアスの体に迫る。
（当たる……いや！）
レアスが動いた。
引いたのではない。無謀とも思える突進だ。
（なっ……！？）
その動きは驚愕に値するものだった。
小柄な体躯が地を這うように移動したかと思うと、変則的な軌道を描くヴィヴィアンの太刀筋を難なく避け、その懐に入り込んだのだ。
カッ……！

レアスの手にした木刀が床と軽く擦れ合う。風を起こしながら跳ね上がった太刀はヴィヴィアンの顎へと吸い込まれるように伸びた。

「く……」

だがヴィヴィアンも黙ってはいない。

バックステップを踏み、その剣筋からかろうじて逃れる。

「――!!」

ティースは再び息を呑んだ。

……剣筋にばかり集中していたティースの視線がレアスの方へ――その体がある“はず”の場所へ移動したとき、そこに彼の姿はすでになかった。

同時に、ヴィヴィアンの顎を狙っていた剣筋が、まるで残像のように消える。

「あっ……」

ティースが次にレアスの体を“見つけた”のは……バックステップを踏んだヴィヴィアンの、そのさらに背後。

「くっ――!」

気付いたヴィヴィアンが体勢を立て直そうとしたときにはすでに遅い。

「っ……」

勝負は決していた。

レアスの木刀は斜めにヴィヴィアンの体を袈裟切ろうという辺りで止まり、ヴィヴィアンは額に微かな汗を滲ませながら両手を挙げて降参のポーズ。

少し離れたところでそれを見ていたフローラは、パチパチと手を叩いて喜んでいる。

「隊長！　お見事ですわぁ！」

「すっ……すごい……」

その光景に目を見開いたティースは、思わず正直な気持ちを声に乗せていた。

「これが……デビルバスター……」

「たいしたものだろ、ウチの隊長も」
サイラスの言葉に、ティースはそのままの表情で、ただただ頷く。
「ああ……あんな……あんな動きができるなんて……」
口をつくのは、何の変哲もない感嘆の言葉のみ。。
……本来ならばそれを見て、さらに自信喪失するはずだったかもしれない。が、今のティースは驚きの方がそれを遙かに上回っていた。
「……」
そんなティースの反応を満足そうに見つめ、サイラスは笑顔でもう一度その肩を叩く。
「けどな」
そして立ち上がった。
「お前も……やっぱり大したものだよ」
「……え？」
ヴィヴィアンが“やれやれ”というように両手を広げて戻ってくる。
立ち上がったサイラスは木刀を片手にしていた。どうやら次は彼の番らしい。
「普通なら今の試合、目で追うことも難しい。……けど、お前の目、隊長の動き、太刀筋の動きをほぼ正確に追ってたじゃないか」
「……あ」
自分でも気付かなかったその事実に、ティースは少し戸惑って、
「いや、でもそれはたまたま……」
「たまたま、か。……んじゃ、それが本当にたまたまだったかどうか、確かめてみるといい」
笑顔でそう言ったサイラスの瞳に、瞬間的に炎が灯った。
「俺と隊長の試合でな」
「あ……」
背を向けたサイラスは、すでに声をかける雰囲気になかった。
無駄のない体つきが一回り大きく見えるような、そんな錯覚をテ

ィースは覚える。
「……ティースくん。見ているといい」
戻ってきたヴィヴィアンが、チラッとサイラスの背中を振り返って言った。
「彼が今、おそらくはこのネービスで“もっともデビルバスターに近い一般人”だ」
「え……？」
「実力は折り紙付き。おそらく来年のデビルバスター試験、彼は確実に受かるだろう」
対峙したレアスとサイラス。
先ほどと同じ構えのレアスからは、先ほど以上の緊張感が迸っている。
対するサイラスもまた。
まるで本気の殺し合い――そんな雰囲気をティースは感じていた。
そうして始まった試合。
――ティースにとってそれは、一瞬のようにも永遠のようにも感じられた不思議な時間。
超人同士が互角に打ち合ったその内容は、彼にさらなる劣等感と、それを遙かに上回る憧憬を植え付けたのだった。

その2『穏やかな風に波立つ海』

数日後。

ティースが自信喪失したとかやる気を出したとか、そういったことは一切関係なく、鍛錬と勉強の日々は淡々と続いていた。

再びカノンの面々と何度か打ち合ったティースは、初日ほどひどい内容ではなかったものの、ヴィヴィアンとの対戦成績は結局のところ十回やって二回勝てるかどうかというところ。しかもそれだけの差をつけられながらヴィヴィアンはもともとが剣使いではないらしく、それがまたティースの自信を喪失させることになったわけだが――まあそれはともかく。

「本日のテーマですが」

デビルバスターには実力だけでなく、魔に関するあらゆる知識も必要とされる。

というわけでこの日の午前中、ティースは別館の執務室にてアオイの講習を受けることになっていた。

「そろそろ話しておいた方がいいですね」

「？」

いつもは玄関ホールの丸テーブルで向かい合って学習していたが、今日は執務室だった。いくら鈍いティースでも、いつもと違う雰囲気を察したのは当然のことである。

アオイは話を始めた。

「ティースさん。我々“人”が基本的に“魔”に対抗するのが難しいと言われるのは、何故だかわかりますか？」

縁なし眼鏡の奥から向けられたアオイの視線と口調は、まるで本物の教師のようだ。

それを少しだけ可笑しく思いながらも、ティースは真面目に答える。

「そりゃ……普通の武器じゃ、魔を傷つけることが難しいから、か

な？」
　アオイは満足そうに頷いて、
「そうです。全ての魔は“魔力”を持ち、その魔力は普通の人間の攻撃ならば何の苦もなくはね除けてしまうのです」
　そこまではティースも、おそらくは一般人でも大抵の人間が知っていることだった。
「そこで我々が魔に対抗する手段として活用するのが、そういった魔力を打ち破るための、“破魔具”と呼ばれるアイテム。……では、ティースさん。あなたはこの破魔具と呼ばれるアイテムの本来の効能をご存じですか？」
　ティースは怪訝そうに眉をひそめて、
「本来の効能……って、魔力を打ち破る効果じゃないの？」
「もちろんその通りですが、それは結果的にそうなるだけのこと。……破魔具そのものが魔力を打ち破る力を持っているわけではないのです」
「？」
　怪訝そうなティースにアオイは微笑んでみせて、
「実際に魔力を打ち破るのは破魔具ではなく、人が先天的に持つ“聖力”と呼ばれる力です。破魔具は身につけることによって、その聖力を高める効能があるのです」
「聖力？」
　ティースには初耳……いや、どこかで耳にしたような気もしていたが、少なくとも詳しい説明を聞くのは初めてだった。
「え？　じゃあ例えば、破魔具は別に武器じゃなくてもいいってこと？」
「その通りです。……実は」
　アオイは頷いて、それから襟元のバッジをティースに示してみせた。それはミューティレイク家の紋章の入ったバッジで、レイやアクア、それにディバーナ・カノンの面々も似たようなバッジを身につけている。

「これも破魔具なのですよ」
「……そのバッジが？」
「ええ。ただし破魔の力を宿すのに適した素材というのは、少なくとも人の技術で作れる範囲ではだいたい決まってましてね。破魔の力がほぼその“質量”に左右されることもあって、結局武器などに宿すのがもっとも効率的なのです」
ティースは納得した。
「ああ……つまり、武器の他に重たい金属を背負うよりは、武器そのものを破魔具にした方がいいってことか……」
「ええ。ですからこのバッジも、有事の際にもしも破魔具が手元になかったときのための保険でしかありません。……とはいえ、実はこのバッジ、かなり貴重な素材で作られてまして、大きさの割になりの力があるのですよ。もちろん武器型の破魔具に比べればせいぜい半分程度ではありますが……」
「へえ……でも確かに、大きさから考えるとすごいなぁ」
ティースが素直に感心すると、アオイはまるで自分が誉められたかのように嬉しそうな顔をして、
「そうでしょう？　……これを創るためだけに、姫は各地にある先祖代々受け継いできた避暑地や別荘を十三も手放して資金を作られたのですよ」
「じゅ、十三……」
ティースは正直、ファナの心遣いよりもその途方もない資産の方に目を丸くしてしまった。
（きっと、一つ一つがとんでもない広さなんだろうなぁ……）
しかしそう考えてみると、ティースにもそれがどれだけすごいことかというのが理解できてくる。いくらミューティレイクとはいえ、それは決して無視できない財産だろう。
と、アオイはティースの驚いた顔に、満足そうな微笑みを浮かべて、
「で……まあ、破魔具と聖力、魔力との関係については後日改めて。

今回は破魔具について、もう少し深いところまでご説明します。……これを見て下さい」

そう言ってアオイは近くに立てかけてある剣を手に取り、鞘から抜き放った。

「これが私の破魔具、光の力が込められた剣、“閃（ひらめき）”です」

「へぇ……」

初めて間近で見たその剣に、ティースは感嘆の声を漏らす。

“光の力が込められた”とアオイは言ったが、それが充分に納得できるものだ。僅かに反った珍しい形の片刃の剣。太陽の光が直接当たっていないにも関わらず、それは僅かな輝きを放っているかのように見えた。

「では、ティースさん」

魅入られたように見つめるティースに、アオイは微笑みながらその柄の部分を差し出した。

「持ってみてください」

「え？　あ、ああ」

少しドキドキしながら受け取ったティース。

だが、

「――あれ？」

直後、その口から疑問の声が漏れた。

「わかりますか？」

「輝きが……消えた？」

そう。ティースがそれを掴んだ瞬間……いや、正確にはアオイがそれを手放した瞬間、“閃”は突然にその輝きを失い、まるで普通の武器のようになってしまったのであった。

「これが破魔具の中でもさらに特殊な“神具”と呼ばれる武具です」

それがアオイの手に戻ると、それは再び微かな輝きのオーラを放ち始める。

「破魔具と違い、神具はこの世でただ一人の持ち主にのみ、その力を貸し与えます。つまり、少なくとも現時点においては、この“閃

”を扱えるのは私だけということです。私が死ぬか、特殊な儀式によってそれを誰かに譲るまで」

「へぇ……なるほど」

ティースは破魔具の存在こそ知ってはいたが、その特殊な破魔具――神具の話は初耳だった。

「制約がある分、破魔具よりも神具の方が強い力を持っており、さらに多くの神具は聖力を高める以上の効能をもたらす場合が多いのです。……神具以外にも特殊な破魔具は存在しますが、滅多に見られるものではないので説明は後日に回しましょう。ちなみに――」

さらにアオイはあらかじめ用意し、机に置いてあったいくつもの武具をティースに示してみせて、

「みなさんからお借りしてきました。この半楕円型の二刀がレイさんの神具“夜叉”で、こちらの手甲がアクアさんの神具“氷雨”。これがドロシーさん愛用の破魔具で――これがヴィヴィアンさんの――……さんの……」

「はあ、はあ……」

あまりに数が多い上、聞いたこともない人物の名前まで登場して、ティースにはまるで覚えきることができなかったが、その種類はナイフだとか鞭だとかトンファーだとか、とにかく様々だった。

が、

「えっとこれが確か……えっと、誰が使ってましたっけ……」

長引きそうだと思ったティースは、途中でそれを止めて尋ねることにする。

「アオイさん。その……神具ってのはレイさんとアクアさんだけなのか？」

「あ、そうですね」

自らも途中で飽きていたのか、ティースの言葉にアオイはすぐさま説明を放棄して頷くと、

「神具はレアスさんも第四隊のアルファさんも持ってます。つまりウチのデビルバスターは全員が持っていることになりますね」

「え……ってことはそれって、デビルバスターになったらもらえるとかそういうものなのか？」
「いえ」
アオイは首を横に振った。
「もともと神具というのは数も少なく特殊なもので……おそらく大陸にいるデビルバスターでも、普通に破魔具を使っている方が多いと思います」
「？　じゃあ、みんなはどうして……」
アオイは少しだけ考えて、
「たまたま……としか言い様がありませんね。私に関していえば、家に代々伝わっていたものです」
「……ふぅん」
別に秘密にするようなことでもないようにティースは感じたが、あるいはそれぞれに何か深い事情や思い出したくない過去があるのか。
ティースはそれ以上詮索しないことにした。
「ですが」
アオイは気を取り直したようにティースを見た。少しだけズレていた眼鏡を直し、それから微かに笑みを浮かべる。
「その言い方を見ると、ティースさんはやはり気付いていないようですね」
「？　なにが？」
「覚えていますか？」
そう言ってアオイはゆっくりとティースに歩み寄った。
「二ヶ月前、あなたに助けていただいたあの日……姫があなたに武器を見せてくれとおっしゃられたこと。そして私があなたの武器を実際に見せていただいたこと」
「え？　あ、ああ、そういや……」
それほど遠い昔の話ではないし、ティースももちろん覚えていた。
「私たちが何故、あんなことを言ったかわかりませんか？」

「え……？」
戸惑うティースの脇をすり抜け、アオイはその背後にあったティース愛用、中型サイズの剣を鞘ごと手に取った。
そして、
「――細波」
「？」
呟いたアオイにティースが振り返ると、
「神剣……というよりは、神石……というべきでしょうか」
そう言って、アオイは柄の先の部分――そこにはめ込まれた少々大きめのエメラルドブルーの宝石をティースに指し示した。
「この宝石の中を覗いてみたことはありますか？」
「え？　ああ」
ティースは頷いて、
「中に変な模様みたいのが浮かんでいるんだろ？　最初は傷かと思ったんだけど――」
「ええ、もちろん傷などではありません。これは古代語――古代語で“穏やかな風に波立つ海”という意味の言葉が書かれています」
「穏やかな風に……波立つ海……？」
「わかりやすく言えば“細波（さざなみ）”というような意味でしょうね」
言いながら、アオイはその剣を鞘から抜き放った。
そこから現れた何の変哲もない刀身……それを見て、アオイは納得したように頷く。
「なにか変だとは思いませんか？」
「え？　なにかって……」
眼前に出されたその刀身をマジマジと眺めたティース。
「……？」
だが、刀身を見ても刃が欠けているということはないし、特になんの変哲もないもので、ティースにはアオイの言いたいことがまるで理解できなかった。
仕方なくティースは少し冗談っぽく笑いながら、

「そうだなぁ……汚れてきてるからちゃんと手入れしなきゃならない、ってこと？」
「汚れ……ですか」
その言葉にアオイは笑い返して、
「当たらずとも遠からずですね」
「え？」
「どうぞ」
意外な言葉で驚いたティースに、アオイは先ほどの“閃”と同じようにその柄を差し出してきた。
「気にしなければ気付かないほど……ですが、これはあまりに素晴らしいものです」
「……！？」
その“変化”はティースにもすぐに理解できた。
「これは……！」
ティースが握った瞬間、刀身は確かに“変化”した。
汚れている――そう感じた彼の感覚は確かに“当たらずとも遠からず”だ。
汚れていたのではない。
ティースが手にした瞬間そこに現れたのは、吸い込まれそうなほどに美しい刀身――
「汚れていたわけではありません。あなたがこの美しい刀身に見慣れてしまっていたからこそ、普通の状態の刀身が汚れているかのように思えてしまったのです」
「じゃあ、これって……」
今までその剣をティース以外が握ったことはない。だから彼が今まで気付かなかったのも無理はなかった。
アオイは頷いて、
「それは紛れもない破魔具……いえ、あなたにしか反応しない力を秘めた“神具”です」
「で、でもこの剣はごく普通の店で――」

「先ほども言ったように、剣ではありません。“穏やかな風に波立つ海”――つまり“細波”と刻印されたその宝石。それが剣に特殊な力を与え、なおかつあなた自身の聖力を大きく高めています。……しかも」

アオイはそこで言葉を止め、唾を呑み込む。

「……？」

そこでティースは初めて気付いた。

――冷静なように見えて、彼が少し緊張しているらしいことに。

「それは普通では考えられないものです。その宝石には、二つの力が同時に込められています」

「二つの力……？」

「穏やかな風と波立つ海――つまり“風”と“水”の二種類の力がその宝石には込められているのです。そのためその力は、私の“閃”をも完全に上回っている……」

「……」

改めてティースは“細波”の刀身を見つめる。

確かに彼もおかしく思わないでもなかった。普通の鋼で出来ているにしてはあまりに軽すぎる重量、そしていくら使おうとも決して美しさを失わず、全く刃こぼれすることのない刀身。

「それって……」

アオイの態度を見ればそれがどれだけすごいことなのか想像はつくが、それでもティースは尋ねずにはいられなかった。

「それって……そんなにすごいことなのか？」

「……少なくとも」

空になった鞘をティースに手渡し、アオイは再びその脇を抜けて元の位置に戻っていった。

そしていつもの直立で真っ直ぐにティースを振り返る。

「実物はおろか、誰かが実際にそれを持っているという話も聞いたことがありません。そういうものが存在するということは歴史や文献などで目にしますが……」

「……歴史や文献」
ティースは唖然とした。それは彼の想像以上だった。つまり……アオイが知っている限りでは、それは歴史書にしか存在していない代物ということなのだから。
「ティースさん。……もう少しお話させていただきますが――」
アオイは自らを落ち着かせるように天井を見上げ、小さく息を吐いた。
「破魔具というのは人の手で作ることが可能です。それは人が、魔と戦ってきた歴史において、その知識を総動員して作り上げた武具。実際、現存する破魔具の大半は人が作ったものです。……でもそれじゃあ」
アオイは壁に立てかけてあった“閃”を探り、そしてそれを軽く握り締める。
「このような神具は……誰が作ったものかわかりますか？」
「……」
もちろんティースは知らなかった。
だが、それを想像することは容易だった。しかも断言に近いレベルで。
「魔が……作ったもの」
「ええ。その通りです」
アオイもまるでティースがそう答えることを確信していたかのような態度だった。
「これらの神具は過去、“人”が“魔”と戦い奪い取った成果。……あるいは」
眼鏡の奥の瞳が、ほんの僅かに真剣味を増す。
「歴史上でも数少ない“人”と“魔”の友好の証……」
「……」
「人を選ぶほどの力を込めた神具は、やはりそれなりの力を持つ魔によって作られたものです。私の“閃”はもちろん、あなたの“細波”も。だからこそ、人の作った破魔具とは違って質量と性能が必

ずしも比例しないし、破魔具ではありえない効能も持っている」
「……」
「しかもあなたの“細波”は風と水、その両方の力を持っています。魔というのは基本的に種族間の対立が強い生物。つまりそれが、複数の力を持つ神具の存在を希少なものにしているのです。……ティースさん」
「……なに？」
顔を上げたティースに、アオイはゆっくりと大きく息を吐く。
そして改めてその目を見つめ、言った。
「あなたは以前言いましたね。その宝石は“知り合い”に“お守り”としてもらったものだと」
「……ああ」
アオイが何を言わんとしているのか、ティースにもようやく理解できていた。
彼自身があのとき、常識的に考えて、どれだけ“ギリギリ”なことを口走ってしまったのかということを。
「それがどうやってあなたの手に渡ったのか、事実がどうであるかは確認しません」
アオイは“閃”を再び壁に立てかけ、それから少し疲れたような顔で近くの椅子に腰を下ろした。
「ただ、今後は決して“知り合いにもらった”などと他の方に軽々しく口走らないよう気を付けてください。家に伝わっている、どこかから見つけた、あるいは魔から奪い取ったということにした方が無難です」
「でも、これは――」
ティースの反論を遮って、アオイはきっぱりと言い切った。
「でなければ、あなたが魔に通じていると勘ぐる人も出てくるでしょう」
「……」
ティースは二の句が継げなかった。

（……魔に通じている、か）

アオイの言うことはこの世界の常識から言えば概ね正しい。世の人々は大半が“魔”イコール“化け物”と認識しているし、人と同じような知能を持った魔の存在を知ってはいても、彼らと友好関係が築けるなんて思っている者は少ない。

だが。

「アオイさんも、やっぱりそう思うのか？」

ティースは知っていた。――彼の過去には、決してそうではないと思わせる出来事があったから。

もっと具体的に言うなら……彼は過去、魔の者と出会い、話し、そして友人としての契りを結んだことがあったから。

（やっぱり、普通の人は信じないんだろうな……）

だが、アオイはあっさりと答える。

「いいえ、思いません」

「……え？」

「言ったじゃないですか。“他の方に”口走らないように気を付けてください、と」

呆気に取られて顔を上げたティースに、アオイは少しおかしそうに微笑んで、

「こんな部隊を抱えている我々が言うのも難ですが……私も姫も、魔との友好には僅かながらも可能性を感じているのですよ」

「じゃあ……」

少し明るい気持ちになって問いかけたティースに、アオイは含みのある口調で続けた。

「それにこのディバーナ・ロウには……大きな声で言えない秘密が色々とありましてね」

「……？」

「さ、それではその話はこの辺りにして。……勉強の続きを頑張りましょうか、ティースさん？」

結局、それについては曖昧なまま、アオイの授業は続くのだった。

ミューティレイク邸の本館には巨大な書庫が存在している。
もちろん歴史も財力もある家系のこと、そのこと自体は決して驚くべきことでもないのだが、ただ、大小様々なものを合わせて“七桁”を超える蔵書量は、個人としてはあまりに度を超しているといってもいいだろう。
もちろん書庫自体も簡単に迷子になってしまうほどの膨大な広さで、中に入るときはよほど慣れた人間でない限り、常駐している二人の司書の一人が必ず付き添うことになっていた。
さて……大部分が薄暗いその書庫の中、入り口付近には読書ができるように採光され、椅子やテーブルの設置されている場所がある。
「あれれ？」
「？」
そこで本を読んでいたシーラは、背後で聞こえた素っ頓狂な声に顔を上げた。
「シーラさん、だよね？」
「あなたは……？」
開いていた本とノートを閉じ、椅子を引いて振り返ったシーラ。
その視線の先にいたのは、分厚い本がトレードマークのパンツルックの少女――あまりにも若すぎるミューティレイク家の執事、リディア＝シュナイダーだった。
「リディアだよ。こうして直接話すのは初めてだよね。……そこ、座っても？」
「ええ。構わないわよ」
シーラにはリディアとの面識がない。ただ、リディアの方はシーラという人物のことを知識として知っていた。
「よいしょっと」
向かいに腰を下ろしたリディアは、たった今、書庫の奥から持っ

てきた二冊の本をテーブルに置く。
「……」
それを見てシーラは再び怪訝な顔をした。
ドスッという重そうな音から、その本がどれだけの厚さを持っているかが伺える。が、それ以上に……どうやらこのリディアという少女、司書の付き添いなしで書庫に入っていたようなのだ。
と、リディアはシーラが読書を再開しないのを見て取ると、チラッとシーラの手元に目をやって、
「珍しい本読んでるね。……それにしても意外だなぁ、こんなところで会うなんて」
「なに？」
「あたしが聞いたところじゃ、シーラさんって人はとっても美人で、とっても気が強くて――」
「ええ」
「とんでもない遊び人で、とんでもない尻軽女だって。話だけ聞くと、少なくともこんなところで黙々と勉強するような人とは思えなかったけど」
「……」
あまりにストレートなリディアの物言いに、シーラは一瞬だけ呆気にとられたように目を見開き……それからすぐに口元に微かな笑みを浮かべた。
「そうね。私はその噂通りの人間よ」
「うっそだぁ」
ケラケラと笑うリディアを、シーラは興味深げに見つめて、
「どうして嘘だと思うのかしら？」
「んー、そうだね。……さっきの笑った顔が、ものすごく優しかったから、かな」
「……」
もう一度、シーラは呆気に取られた顔をして、
「ぷっ……あはは」

「なんで笑うかなぁ。ホントのことなのに」
口を膨らませたリディアだが、それはもちろん演技だ。
「だって……それじゃまるでナンパされてるみたいだわ」
「それはきっと血の持つ業というやつだね。ウチの兄がそれ系だから」
「お兄さん？」
「そう。シーラさんも知ってるでしょ？」
「……」
シーラは美しい形の眉を怪訝そうに動かし、リディアの顔を見つめる。
そして、
「もしかして、レインハルト＝シュナイダー――」
閃いたようだ。
……似ているというほどのものではないが、確かに目元には少々面影があるし、髪の色が全く同じだということにもすぐに気付く。
「あれ。すぐわかんなかったってことは、まだナンパされてない？　珍しいなぁ」
「……」
無邪気にそう言ったリディアに対し、シーラは少し考えるような表情をする。
リディアは怪訝そうに、
「どしたの？　あ、もしかしてあの人、なんかとんでもない失礼なことした？」
「いえ。でも――確かに兄妹っぽいわ、あなたたち」
そう答えたシーラの表情には、特に嫌悪感らしきものは浮かんでいない。実際、先日程度のやり取りでレイに悪印象を持つほど彼女は単純ではなかった。
「うーん。あたしとしては、あの人に似てるって言われて良いことなんか何もないんだけどなぁ」
「そんなこと言ったら、彼が悲しむのじゃないかしら？」

「あはは、まさか。そんな可愛い性格してないって。……そういや」
何気ない仕草でリディアが話題を変える。
「シーラさんってティースさんと一緒に来たんだったよね？」
「ええ、そうよ」
「あたしね。これでもファナさんのサポート役をやってるんだ」
「……あなたが？」
シーラは驚きの表情を浮かべたが、すぐにその視線を、彼女が持ってきた分厚い本に移動させて、
「ああ、ここにいるだけあって見た目通りじゃないのね。……それで？」
尋ねたシーラにリディアは真顔で、
「で、色々と参考までに聞きたいんだけど……ぶっちゃけ、ティースさんってシーラさんのなんなの？」
遠回しなのかストレートなのか微妙な問いかけだった。
「なにって、どういうことかしら？」
「家族？　恋人？　それとも下僕？」
あっけらかんとした物言いに、シーラは再び笑った。
「ふふっ……そうね。その中で強いて言うなら下僕かしら」
「うわ。今、ものすごく本気の匂いが漂ってたんだけど」
リディアの言葉に、シーラはテーブルの上で自らの手を重ね合わせる。
「実際そうでしょう？　彼は自分の収入を私のために使ってるし、私は彼に何の見返りも与えていないわ」
「へぇ……健気なんだね、ティースさんって」
「健気？　あれはただ単に馬鹿なだけよ」
少しだけ眉をひそめてシーラはそう言った。
「……」
そんな言葉に、リディアはちょっとだけ考えるように視線を泳がせて、
「でもその馬鹿のおかげでシーラさんは学園に通えてるんでしょ？」

「ええ、まあそうね」
「あはは」
リディアは笑いながら頭の後ろで手を組んだ。
「じゃあ馬鹿で良かったじゃない。……やっぱしアレ？　尽くしていれば振り向いてくれるかもしれないとか、そういう幻想抱いちゃってるのかな？　男ってホントに馬鹿だよね」
「……随分スレたようなこと言うのね」
シーラが少しだけ目を細めたが、リディアはそれに気付かない様子で言葉を続けた。
「そんなことないけどね。でもほら、ティースさんって見た目も特別ハンサムじゃないしさ。あれでシーラさんと釣り合うと思ってるならやっぱ笑えるもん」
「別に……私は顔がどうとか言うつもりはないわ」
「あ、そっか」
リディアはポンと手を叩いた。
「じゃあ性格かな？　確かにああいう一見誠実そうな人って、裏で何考えてるかわかんないもんね。きっと女の人とすれ違うたびに頭の中で裸にして――」
瞬間、その場の空気が冷える。
「……やめなさい」
鋭く、シーラの一言が場に響き渡った。
それは決して大きいわけでもドスの利いた声でもなかったが、年下の少女を一言で黙らせるには充分すぎるほどの重みがあった。
「……」
黙り込んで真っ直ぐに見つめ返してくるリディアを、シーラは人形のように整ったその顔から、細めた目で射抜くように見据えた。
「あなた、どういうつもりか知らないけど、単なる想像で他人のことを悪く言わないでちょうだい。……気分が悪いわ」
「なんで？」
だがそんな視線に、リディアは驚いた様子も怯んだ様子もなく言

い返す。
「だってシーラさんだってティースさんの悪口言ってたじゃない。いきなり否定するなんて変だよ」
「悪口？　違うわ」
シーラは相変わらずの冷たい表情――だが、その中には確実な怒りが潜んでいる。
「私は想像で言ってるわけじゃない。彼が馬鹿だと思うのは長く彼を見てきた経験。下僕だと言ったのは彼が私に無償で尽くしているという事実。……あなたみたいに無根の中傷をしているわけじゃないわ」
「へぇ……それって重要なこと？」
「少なくとも私が見てきた彼は、馬鹿だけどあなたの言うような男じゃない」
「……」
睨み合う形で沈黙が下りた。いや、リディアの方はあくまで普通だったから、“睨み合う”と言ったら語弊があるだろうか。
ただでさえ静かな場所が、これ以上ないほどに静まり返る。
そして……十数秒。
「取り消しなさい、リディア」
シーラは凛と透き通る声に、まるで氷の刃のような鋭さを乗せて言い放った。
溢れる緊張感。
――だが。
「うん。じゃあ、取り消すよ」
返ってきたリディアの言葉はその場にそぐわない、あまりにもあっさりとした口調だった。
「……？」
シーラは怪訝そうに眉をひそめ、全身に溢れていた緊張を僅かに緩める。
すると、

「ごめんね。実を言うとあたし、ティースさんの第一印象はすごく良かったんだ」
「……なに？」
その言葉はさっきまで言っていたこととあまりにもアベコベで、シーラには容易に理解できないものだった。
リディアはさらに続ける。
「でね。それなのにシーラさんって人がひどいヤツだって聞いたから、ホントにそうだったらちょっとからかってやろうと思ってたの。……でも、なんか違ったみたい。ホント、ごめんね」
「……」
しおらしく謝罪するリディアを見て、ようやくシーラは自分が“試されていた”のだと悟った。
「怒った？」
「……」
普通なら怒って当然のところである。シーラにしてみれば相手はいくつか年下の少女であり、初対面でもある。いきなり性格を試すようなことをされて、気持ち良いはずもない。
だが意外なことに、彼女の胸に込み上げてきたのは、怒りではなく――
「ふふっ……あなたって……本当にお兄さんと似てるわ」
「あれ。怒ってない？」
笑いながらそう言ったシーラを、リディアは意外そうな顔で見た。
「っていうかホントは怒ってる？　似てるっていうのは実は嫌味？」
「さあ、どうかしら」
真顔のリディアに再び笑いながら、シーラは目を細める。今度は突き刺すような視線ではなく、逆にそこに穏やかな色を帯びて。
「うっわ……」
そんな彼女を見て、リディアは一瞬言葉を失った。
……どこか世間を斜めに見つめているこの少女をして、素直に“綺麗”だと思わせるほど――シーラの微笑みは、男であろうと女で

あろうと関係なく虜にしてしまう“魔性”の美しさを秘めていた。
「……やっぱティースさんって変人かも」
「？　なに？」
怪訝な顔をしたシーラに、リディアはあっけらかんとした口調で答える。
「だってシーラさんみたいな人と一緒に暮らしてたのに、ぜんぜん手を出さずにいられるなんて絶対おかしいって。絶対変。“物理的”にあり得ないよ」
「……」
シーラはさすがに苦笑するしかなかったが、リディアは真顔のまま眉間に皺を寄せ、まるでオバケでも見たかのような表情を作り、ことさらに声を潜めた。
「ティースさんってもしかして……男の人じゃないとダメなんじゃ」
「……」
一瞬、微妙な沈黙。
「ぷっ……あははははっ」
「あ、今のは無根の中傷じゃないよ。シーラさんに手を出さなかったっていう“信じ難い事実”に基づいた推測だかんね」
「ふふっ……いえ、確かにそうだわ。私みたいな美人と一緒に暮らしてて――」
「うわ。自分で言っちゃったよ」
「あら。本当のことよ？」
「遠慮のない人だなぁ」
だが、そう言ったリディアの言葉にはひどく好意的な響きが含まれていた。
「でも、想像よりずっと話しやすいね、シーラさんって。……なのに、なんでティースさんには冷たいのかな？」
「……」
シーラは一瞬だけ言葉を躊躇った。
……が、リディアの質問のタイミングが巧妙だったのか、あるい

はそれが年下の少女だったからか。
レイのときのようにそれをはねつけるようなことはなく、
「別に冷たくしてるつもりはないのよ。ただ……そうね」
あるいは――否応なしに広がる勝手な想像や風評をこの辺りで堰き止めたかったのかもしれない。
「あいつとはできるだけ口を利きたくない。だから自然と冷たくなるのかもしれない」
「……」
リディアは唖然としてシーラを見つめた。
「口を利きたくない？　ティースさん、あんなにシーラさんのために頑張ってるのに？」
シーラは頷いて、そして――少なくともリディアには本心としか思えない、淡々とした口調で言い切った。
「別にあいつが悪いわけじゃないわ。でも、あいつを見ていると胸が苛ついて仕方ないの。……それでも夢を捨てられずに今まで一緒にいたけれど」
「それって照れ隠し……とかじゃないよね。うん、違う」
シーラの顔を見て、リディアは自らの疑問をすぐに撤回する。
首をひねって、
「……わっかんないなぁ。ホント、わかんない。なんでそんな関係が成り立ってるんだろ」
「わからなくてもいいことよ」
トン、とテーブルに置いた本とノートを揃え、シーラはゆっくりと立ち上がった。
だが、リディアは食い下がって、
「だって、デビルバスターになるための決意って、言うほど簡単じゃないんだよ。ほとんどは戦闘狂だとか欲に目が眩んだ人だとかそんなのばっか。“人々のため”って言う人たちだって、大抵は過去に酷い目に合わされたことへの復讐だもん」
真っ直ぐにシーラを見つめる。

「それが、ただ、シーラさんのためだって言うんなら、ティースさんは馬鹿みたいなお人好しだよ」
「だから馬鹿なんだって言ってるじゃないの」
シーラは苦笑した。
「でも私はここに来て良かったと思っているわ。ティースとは滅多に顔を合わせなくて済むし……それにほら。図書館に行かなくても調べ物ができる環境が整ってる」
「それも本気なんだ、やっぱ。……つかみ所ないなぁ」
「そうね。あなたも大人になればわかるかもしれないわ」
「うっそだぁ、そんなの。……ね、シーラさん」
微笑みながら背中を見せたシーラに、リディアは椅子から腰を浮かせてもう一度だけ言葉を投げ掛ける。
「何があるかわからないんだからね。縁起でもないって怒るかもしんないけど、ここは実際に何人もの人が死んでる場所だよ。もし何か理由があるんだったら、今のうちに何とかした方がいいよ」
「……見掛けに寄らずおせっかいなのね」
「そんなんじゃないよ」
リディアは真顔で答えた。
「単なる好奇心。納得いかないから」
「そう。……だったら」
シーラはチラッと振り返って、それから皮肉な笑みをそこに浮かべた。
「私とティースは本当はお互いに好き合ってるけど、つまらない意地を張り合ってなかなか素直になれないだけの関係よ。……それなら辻褄が合うかしら？」
リディアは口を尖らせて、
「合うかもしんないけど、絶対事実じゃないし。少なくとも、シーラさんがティースさんを避けてるのはホントっぽいもん」
「ならやっぱりティースが単なる馬鹿で、私がそれを誑かして利用してるっていうのでいいんじゃない？」

「……あーあ」
リディアはストンと椅子に腰を下ろし、背もたれに身を預け頭の後ろで腕を組む。
「振り出しに戻っちゃったよ。……それもシーラさんの性格を考えるとなさそうなんだけどなぁ」
「人のことなんて見掛けじゃわからないものよ」
書庫の扉を開けて、立ち去り際にシーラは言った。
「あなたが私のことを過大評価してるだけだわ。多分、私はあなたが思っているより自分勝手で悪い女よ」
「……」
扉が閉まる。
それを見送ったリディアはやはり納得できない様子でため息を吐き、
「本当に悪い人って、自分が悪いって自覚もないものなんだけどなぁ……」
そうしてしばらく考えた末、独り言を呟いた。
「……ま、いっか。これ以上考えてもお金にはならないし、ね」

夕日がその姿を山間に隠そうとしていたころ、ディバーナ・カノンの詰め所では、本日一番長引いた試合がようやく佳境を迎えていた。
「――やぁっ！！」
「まだまだ！　甘いよ、ティースくん！」
ティースの打ち込みを払ったヴィヴィアンの長い木刀。それを持つリーチの長い腕がまるで鞭のようにしなって、横からティースに迫る。
「くっ！」
色白で細身の体からは信じられないことだが、それの持つ威力は

相当だ。まともに受けては体勢を崩されかねない。
（……どうする！？）
一瞬の思考停止。
結論が出るより先に、体が動く。
「！」
ヴィヴィアンの顔が驚きに染まった。
――突進。
いつか見たレアスの動きがティースの頭に残っていたのだ。だが、もちろん彼のような超人的な動きができるわけではない。
木刀の重なる音が高らかに響いた。
「うぉぉぉっ！！」
横から迫った木刀を自らの木刀で受け、その威力に体勢を崩しながらもティースは床を蹴ってヴィヴィアンに肩から突撃する。
「おおおっ！？」
全くの不意打ちにヴィヴィアンが驚きの声を上げよろめく。――いや、支えきれずに腰から床に倒れ込んだ。
木刀が双方の手から離れる。
体勢はマウントポジションを取ったティースの方に有利だった。
……だが。
「――」
「隙アリっ！」
「ぐぇっ！！」
一瞬固まったティースの脇にヴィヴィアンの膝蹴りが決まって、ティースは横に転がった。
怒声が飛ぶ。
「ティース！　てめぇ、なにボサッとしてやがるっ！！」
声の主はもちろんこのディバーナ・カノンの隊長、弱冠十二歳の赤毛少年、レアスだった。
「その体勢になったなら関節を極めるなり何なりして動きを封じ込めろよ！！　この阿呆がっ！！」

「っ……」
「ふぅっ……まあまあ、隊長。そう目くじらを立てることもないではないか」
ゆっくり体を起こしたヴィヴィアンがそれを宥める。
その額には僅かながらに汗が光っていた。
「今まで剣を合わせる訓練しかしてなかったのだからな。どこまでやればいいのか、彼もわからなかったのであろう」
「ふん……“実戦形式”の意味がそいつにはわかってねぇようだな」
「すみません……」
ゆっくり立ち上がってティースは素直に謝った。
ヴィヴィアンの言った通り、あの瞬間、どうすればいいのかわからなかったのは事実だった。ただ、実戦形式ということを考慮したなら、どうすべきだったのかは一目瞭然。
気を抜いたことを咎められるのは当然だった。
……それに、そうでなくともどっちみち、口答えできるほどの体力は残っていない。
「でも、なかなか良い奇襲でしたわぁ」
レアスの隣のフローラがニッコリと笑顔でティースに笑いかける。
「ね、隊長もそう思いますわよねぇ？」
「……悪くはねぇが、そう何度も通用するもんじゃねぇぞ」
「え？」
その言葉は、またボロボロにこき下ろされると思っていたティースには意外な言葉だった。
が、レアスはすぐに視線を移動させて、
「ビビ、てめえも油断しすぎだ。なんてザマだよ」
「いやいや。どうにもこの木刀というやつは美しさがなくてダメだな。やはり私には少々合わない気がするよ。……隊長。やるかい？」
レアスはチラッと夕日が沈み始めたのを見て、
「時間もねぇな。最後に俺が直々に全員稽古をつけてやる。……ティース。てめえは少し休んで息を整えておけ」

「はい……」
「お疲れさん」
壁際に戻ったティースをサイラスが労いの言葉で出迎える。
「日増しに動きが良くなってきてるじゃないか」
「……そんなもんかなぁ」
肩で息をしながらティースは疑問を返した。彼自身はそれほど変わった気がしていないのだから当然だ。
が、サイラスは顎で中央に立つレアスを示して、
「隊長も最初ほど言葉に刺がないだろ？　少しはお前の素質を認めてきてるってことさ」
「……うーん」
（棘がない、ねえ……）
それこそ疑問だった。そりゃ確かに、先ほどの言葉は意外だったものの。
「……ふと思ったんだけど、あのフローラさんって隊長と何か関係あるのか？」
「ん？　どういうことだ？」
サイラスの怪訝な顔に、ティースはますます声を潜めて、
「なんか隊長ってあの人の言うことだと、いつもより素直だったりしないか？」
その視線の先ではフローラが手を叩きながらレアスとヴィヴィアンの双方を応援している。
あくまでこの数日を見た印象だったが、レアスもフローラに対してはほとんど厳しい言葉を使わないのだ。……まあ医事担当ということで稽古にも参加しないし、特に叱咤される場面がないということもあるのだろうが。
「ああ、そんなことか。それは単に隊長が――」
納得した様子で頷いたサイラスの言葉に、甲高い木刀の音が重なった。
「サイラス！　次はてめえだ！！」

「おっと。今日はやけに早いな」
こっちの会話が聞こえたはずもないが、サイラスは首を竦めて立ち上がると、
「ま、大した理由じゃない。……隊長もあれで、結局はまだまだ子供だってことさ」
「？」
いまいちティースには理解できなかったが、サイラスはそのままレアスとの試合へ向かっていった。
（まだまだ子供、ねぇ……）
サイラスとレアスの試合が始まった。
どちらかといえば隊長のレアスが攻め、サイラスは相手の動きに合わせて柔軟に対処する。
身長以上の剣を無茶な動きから鋭く振り回すレアスはもちろんだったが、それを最小限の動きで受け、払いのけるサイラスもまたとてつもないセンスの持ち主だ。
ほぼ互角に見える打ち合いだったが、やはり地力の差か徐々にサイラスの動きに余裕がなくなってくる。
（……子供、ね）
攻撃性の高い自分本位の打ち込みは、確かに微かな幼さを連想させないでもない。
が――
（あそこまで強烈にやられちゃ、可愛さの欠片もないなぁ……）
「へっ！　どうした、サイラス！　そんなもんかよっ！！」
少しずつ下がり始めたサイラスに、薄笑いを浮かべたレアスの挑発が飛ぶ。
「……」
対するサイラスは何も言わずにただ受けるまま。
だが、
（あっ……！）
一瞬、何かに気を取られるかのようにサイラスの視線が右を向い

た。
「どこ見てやがるっ！！」
その瞬間をレアスは逃さない。
集中の途切れたサイラスの左側、死角から唸りをあげてレアスの木刀が迫る。
だが、次の瞬間、
「なっ――！？」
驚愕の声を上げたのはレアスだった。
サイラスの肩口に迫っていたレアスの剣筋が突然に乱れ、軌道を変える。
――それもそのはず。
「油断大敵ですよ、隊長」
なんと、視線を逸らすと同時に伸ばしていたサイラスの左足が、死角からレアスの足を払っていたのだ。
どうやら“誘った”らしい。
「ちっ……！」
それでも転ぶまでには至らず、すぐに体勢を立て直したレアスだったが、
「今日は俺の勝ちですね」
「……」
サイラスの木刀を突きつけられ、レアスは一瞬呆然とした顔だったが、それはすぐに憮然としたものに変わる。
「サイラスさん、お見事ですわぁ！」
「うむ。見事！」
フローラとヴィヴィアンから喝采の声が飛んで、サイラスはそれに笑顔で応え。
そして一方のレアスはといえば――
「……くそっ」
見るからに不満そうな顔だった。が、それでも自らの油断を自覚していたのか文句を言うでもなく、自分自身に腹を立てているかの

ように床を叩いている。
サイラスの言葉があったからではないが、ティースにはその仕草がまるで癇癪を起こした子供のように映った。
（……確かにサイラスの言うとおりかも）
思わず失笑を漏らしたティースの視線が、ふと振り返ったレアスのものと重なった。
（――ヤバ！）
慌てて表情を取り繕ってはみたものの、時既に遅し。
「……」
レアスは無言のまま、ふらりと立ち上がると、
「ティース。次はてめえの番だ……」
「――いぃっ！！」
「？」
悲鳴を上げたティースに、他の三人は不思議そうな表情を浮かべ。
結局、それから一時間以上も続いた“しごき”に、ティースは本日もボロボロになって帰宅（？）するハメになったのだった――

その3『遺書』

それはティースがディバーナ・カノンに配属されてから約半月後の夜のこと。

使用人達はその半数以上が本日の仕事を終え、自宅、あるいはこの別館の自室へと戻っており……そしてこの時間、別館に住む幾人かは決まって玄関ホールへと出てくる。

ある者は誰かと酒を飲み語り合うために。

ある者は自室の孤独な空気を嫌って。

そしてその中の一人、シーラ＝スノーフォールはこの日、初めて自らこの玄関ホールの丸テーブルに腰を下ろしていた。

彼女が今までここに来なかった理由は簡単だ。……ただ、偶然にでもティースと鉢合わせることが嫌だったからである。

では、そんな彼女が、どうして今日に限りやってきたのかというと、

「こうしてシーラさんとお話するのはいつ以来でしょうか？」

シーラの目の前には、紺色の落ち着いた上質な衣服に身を包み、手にした白い陶磁器のティーポットから紅茶を注ぐファナがいる。

相変わらずの和やかな笑顔と育ちの良さを感じさせる雰囲気は、この質素な丸テーブルにあってもまるで損なわれていない。

「ここに来てからは初めてじゃないかしら？　――ありがと。いただくわ」

受け取ったティーカップにミルクを少量注ぎ、スプーンで軽くかき混ぜる。紅茶の香ばしい薫りがその周囲に漂う。

笑顔のまま、ファナも自らのカップに紅茶を注ぎ始めた。

彼女はもちろんのこと、シーラもまたその容姿故かどこか貴族然とした雰囲気があるため、そのテーブルだけは周りとまるで違う世界に包まれているように思える。

……いや、本来ならば彼女たちの作り出す世界こそが、本来のこ

の屋敷に相応しいものであったが――まあそれはともかく。
「ここでの生活は如何です？」
「文句ないわ」
シーラはすぐにそう答えた。
普通の人間なら萎縮してしまいそうな屋敷の生活も、彼女にとっては別段どうということもないようだ。
「サンタニアに通うにも近いし、食事の準備も洗濯の心配もいらないもの」
「そうですか。……慣れたようでしたら、たまに部屋ではなく食堂の方で食事を摂ってみてはいかがですか？」
「食堂？」
「ええ。給仕の方にあらかじめ言っていただければ、食堂のテーブルに席を用意させていただきますわ」
「そうなの。あなたもいつもそこで？」
シーラの疑問にファナは少し考えて、
「いつもではありませんけれど、時間が合ったときにはよく」
「なるほどね。……それも楽しそうだけど、でもとりあえず遠慮しておくわ」
「どうしてですの？」
不思議そうなファナに、シーラはそっと口に運んだティーカップを下ろす。
「もちろん、この屋敷の人がたくさん来るでしょう？」
「ええ。毎日食堂でお召し上がりになる方も、時々気が向いたときにいらっしゃる方も……様々ですけれど」
シーラは苦笑して、
「この屋敷の人って、どうも人を質問責めにするのが好きみたいなのよ」
「あ」
納得したようにファナはニッコリと微笑んだ。
「如何でしたか？　みなさん、面白い方ばかりでしたでしょう？」

「私が挨拶とか用事以外で話したのはレイさんとリディアって子だけよ」
「レイさんとリディアさんだけ、ですの？」
「ええ。……だって私、この屋敷にいるときは部屋にいるか書庫にいるかのどちらかだもの。そんなに話す機会なんてないわ」
「それは勿体ないですわ。シーラさんでしたら、必ず仲良くなれますのに」
「そうかしら。……まあ、あのリディアって子はなかなか面白い子だったけれど」
「リディアさんはとても頭の良い方ですのよ」
「ええ、わかるわ」
シーラの脳裏に書庫でリディアと話したときの記憶が蘇る。
年相応の好奇心と悪戯心を剥き出しにしながらも、言葉の端々には子供離れした“したたかさ”がある――というのが、彼女の正直な感想だ。
「それと、レイさんは第二隊の隊長を務めていただいている方ですの」
「ああ、よくは知らないけど……彼がティースの隊長なのかしら？」
「いいえ。ティースさんは第三隊の方へ行っていただいております。そこの隊長はレアスさんとおっしゃる方ですわ」
「そうなの」
素っ気なく言ったシーラに、ファナは少しだけ首を傾けて、
「気になります？」
「……すぐそういうことを言う」
シーラは嫌な顔をしたが、それは少し演技っぽいものだった。
どうにもこのファナという人物の言葉、まるで邪気のない口調の故か、何を言われてもなかなか嫌な気持ちにはならないのである。
それはシーラも例外ではなかったのだ。
「別にティースがどこにいようと、私には大して関係ないわよ」
「ですが、ティースさんは淋しそうにおっしゃってましたわ。ここ

に来てからシーラさんと一度も顔を合わせてないと」
「合わせる理由がないもの」
ファナが不思議そうな顔をする。
「理由がなければいけませんの？」
「少なくとも私の方には、ね」
「でしたら」
ファナは悪戯っぽい笑みを浮かべた。
それを見たシーラの胸に嫌な予感が走ったが、時既に遅し。
「私が理由をお作りいたしますわ。――あ、ドロシーさん。申し訳ありませんが、ティースさんをここに呼んでいただけますか？」
近くを歩いていて呼び止められたのは、男の子のような短い髪で使用人の服を着た女性だった。女性と言っても歳はシーラよりも若干上程度、おそらくファナと同じぐらい……十七、八歳だろう。
「ティースというと、新入りの人ですね……」
「ええ、そうです。お願いしますね」
「了解……」
言葉遣いは丁寧ながら、どこか無愛想に女性は二階への階段を上っていった。
「ファナ。私は部屋に戻るわよ」
「いけません」
ファナは穏やかな微笑みできっぱりと言い切った。
「どうしても戻るおつもりでしたら、ティースさんを即刻解雇いたしますわ」
「……公私混同もいいところね」
立ち上がりかけたシーラはため息とともに腰を下ろした。ティースの解雇はすなわち彼女の居場所の消失、及び学園に通う資金の断絶を意味する。
「ふふ、冗談ですわ」
そんなファナにシーラは呆れ顔で、
「でも、私がここを離れるのは許さないんでしょ？」

「ええ。――それと、ティースさんが来るまでに少しお話ししておきますわ」
「……なに？」
和やかなままでありながらそこに混ざった真剣な色に、シーラは怪訝そうに眉をひそめた。
ファナは頷いて封筒のようなものを取りだす。
「これは……なに？」
「ティースさんの遺書ですわ」
その封筒の裏には確かに、ティーサイト＝アマルナと署名されていた。
「……？」
シーラの眉間に皺が寄る。
彼女の疑問は当然だ。ティースはまだ死んでなど――いや、しばらく会っていないシーラには断言できないが――まさかファナが死人を呼びに行かせたはずはなかろう。
それを見て取ったファナが答えた。
「ディバーナ・ロウでは、任務が決定すると必ず全員に遺書を書いていただくことになってますの。これは私自身が保管し、無事に戻られた場合にはこのまま全て焼却します。ですが、もし戻られなかった場合は――」
ファナはそれをテーブルに置いた。
表情が真剣になる。
「この封を切り、出来る限り、その方の最後の望みを叶えて差し上げようと思っております」
一瞬、視線を泳がせたシーラだったが、すぐに変わらぬ調子で答えた。
「つまり、ティースの初陣が決まったのね？」
「ええ。その通りですわ」
「そう。役に立てばいいんだけど」
視線を横に向けて大して興味なさそうに言ったシーラを、ファナ

は真っ直ぐに見つめて続けた。
「二日後の朝、カノンはここを発ちます。移動も含めて戻られるのは早くても一週間後になるはずですわ」
「……」
シーラの視線がファナのものと重なる。
その口からため息が漏れた。
「私、やっぱり部屋に戻るわ」
「シーラさん」
席を立ったシーラは首を振りながら背を向けて、
「なんなら、あいつを解雇してくれても構わないわよ」
「いいえ。ティースさんはディバーナ・ロウに必要な方ですもの」
「だったら、私が部屋に戻っても問題はないわね？」
「ええ。そういうことになりますわ」
「……」
シーラは無言でファナを振り返り、呆れた表情を浮かべて、もう一度首を振った。
「この屋敷に詮索好きが揃ってるのは、もしかしてあなたの影響かしらね？」
「？」
「……そのティースの遺書は、必要のないものよ」
「何故ですの？」
当然のように疑問の声を向けるファナに、シーラはどこか薄い笑みを浮かべて答えた。
「何が書いてあるかわかるもの。……それが“遺書”である以上、あいつの願いはきっと、あなたにも決して叶えられないものだわ」
「はあ」
一見、わかったようなわからないような微妙な返事だったが、ファナはすぐに続けた。
「シーラさんに関することですのね？」
何も答えず、シーラはテーブルから離れて階段に向かっていく。

「……」

しばしの沈黙がテーブルの周囲を支配した。先ほどまで彼女の座っていた場所では、僅かに残った紅茶がシャンデリアの明かりを反射している。

「もし……とすると」

それをじっと眺めていたファナはそっと独り言を呟くと、ゆっくり目を閉じて、

「……責任重大ですわ、ティースさん」

「――え？」

突然呼びかけられたティースは、怪訝な顔をファナに向けたままで固まっていた。

彼が驚いたのも当然。ファナは目を閉じていたし、つい先ほどまではティースがやってきたことに気付いていなかったはずだったのだ。

（も、もしかしてこの人も達人なのかなぁ……）

などと、ティースは現実味のないことを考えながら、

「な、何のこと、ファナさん？」

「ようこそ、ティースさん」

顔を上げたファナは、ちょっと夢見がちな男なら“勘違い”してしまいそうな微笑みでティースを迎えた。

まあ幸いなことにティースはそれとは全く逆の性質――たとえ実際にそうだとしても、それに気付かないぐらいの性格であったが。

「どうぞ。今、紅茶をお入れしますわ」

ティースに席を勧め、茶葉を新しくしてポットにお湯を注ぐファナ。テーブルにはもう一組のティーセットがあり、誰かがそこにいたらしいことはティースにも理解できた。

「もしかして、シーラかい？」

「ええ。その通りですわ」

「そっか」

ここに来る途中、ティースは階段でシーラとすれ違っていた。
実を言うと顔を見るのも約半月ぶりのことで、ティースは喜びの色を隠すこともできずに声をかけてしまったのだが、彼女はチラリとも視線を向けることはなく、あっさりと無視されてしまったのである。
彼が少々――いや、かなりヘコんだのは言うまでもない。
（やっぱ避けられてるんだよなぁ……）
ここに来てからのすれ違いを、ティース自身は“忙しさ故”ということで内面処理してきたのだが、ここに来て決定的な一撃を喰らわされてしまったわけである。
と、そんな回想をしながら再び落胆していたティースを見て、ファナが好意的な口調で言った。
「ティースさん、なんだか淋しそうですわ」
「え？　あ……」
考えがまともに顔に出ていたと気付いて、ティースはすぐさま取り繕う。
「い、いや、シーラにああいう風に扱われるのはもう慣れっこだから。別に淋しいとかそういうことは一切――」
「では、やはりシーラさんのことですのね？」
「あ……」
クスクスとおかしそうに笑うファナに、ティースの顔は真っ赤になる。
「……いや、うん。淋しいよ、実際」
仕方なく顔を赤くしたまま席に腰を下ろし、ティースは正直に告白した。
「やっぱりさ。どう扱われてもあいつは……ほら、俺にとって家族みたいなものだって、俺は勝手にそう思ってるから」
差し出された紅茶を受け取り、それに砂糖を二杯入れてかき混ぜる。
「質問してもよろしいですか？」

「え？」
スプーンを動かす手を止めファナを見ると、
「ティースさんは何故デビルバスターになってまで、シーラさんを養育しようとなさるのです？」
「……」
ティースはいきなり言葉に詰まった。
だがその質問自体は、端からティースたちを見ている者にとっては当たり前すぎる疑問だった。
親子でもない。夫婦でもない。恋人ですらない。だが、ティースがシーラに対してやっていることは、確かに親が子に対してするそれと全く同等のものだ。それは決して、単なる友人や知人相手に軽々しく行えるものではない。
「それは――」
「もしおっしゃりたくないのであれば、無理にとは言いませんけれど」
言い訳を考えかけたティースに、ファナはすぐにそう付け加えた。
「ティースさんの決意は本物だと思います。それを疑うわけではありませんもの」
「じゃあ……どうして？」
ファナはニッコリと微笑んだ。
「単なる好奇心ですわ」
「……はは」
ティースの胸に渦巻いていた焦りが、徐々に暖かいものへと変わっていく。
そして、
「そうだな……ファナさんが知りたいのなら」
自然と、そんな言葉がティースの口をついていた。
……このネービスに来てから、ティースはそのことを誰にも喋ったことはない。それは万が一起こりうる“弊害”を考えてのことだった。

が、大した理由もなく自分の人格、その決意を信じてくれた少女にならば、話しても問題ないだろう、と、ティースはそう思ったのである。

「シーラはね……俺の大恩人の娘なんだ」

「恩人の娘さん、ですか？」

ファナは怪訝そうな顔をした。

ティースとシーラの年齢、そこから導き出される関係を想像したのだろう。

そして彼女が最初に想像したのは、“家族”という彼の発言から考えて、おそらくもっともわかりやすい関係だった。

「もしかしてティースさんは孤児だったのですか？」

「いや。養親とかそういうんじゃない」

ティースはすぐにそれを否定したが、

「でも、それに近いものはあったかな。俺に色々なことを教えてくれた人でね……本当の両親より好きだったな。……あれ？　どうしたの？」

「いいえ。ただ、意外だったものですから」

その言葉通り、確かにファナは少し意外そうな顔をしていた。

「私、ティースさんはてっきりシーラさんを愛してらっしゃるものだと思ってましたの」

「あ、もちろんシーラのことは好きだし大事だよ。……いや変な意味じゃなくてさ」

慌てて手を振ったティースだが、もちろん彼の言わんとしているところはファナにもわかっていた。

そしてティースの目が不意に遠くを見る。

「でもやっぱり、その人の存在が大きいかな。……小さい頃、その人に言われたんだ。シーラのこと助けてやってくれって。守ってやってくれって。その言葉が、ずっと耳から離れなくて――」

「……」

それを見つめるファナの瞳は少しだけ思案するような色を秘めて

いた。
「シーラさんは、そのことをご存じなのですか？」
「え？　……いや、知らないんじゃないかなぁ」
ティースは笑って答えた。
「大昔の話だし、そういうこと言うのって何だか恥ずかしいだろ？」
「……」
再びファナは沈黙した。
「どうしたの？」
「いいえ。ただ、シーラさんがティースさんを避けるのには、何か理由があるのだろうと思いまして」
「？」
ティースにとっては少々不可解な会話の流れだった。
「それはただ、シーラが俺のことを嫌いだから――」
「いいえ、まさか」
ファナはおかしそうに笑ってその言葉を否定した。
「それはないと思いますわ」
「……？」
ファナは紅茶を口に運びながら一呼吸置く。
つられてカップに手を伸ばしたティースに、ファナは言葉を続けた。
「もしかするとシーラさん、負い目を感じてらっしゃるのではないですか？」
「負い目？　何に対して？」
怪訝そうに聞き返したティースに、ファナは一瞬呆気に取られたような顔をして、
「……本当に面白い方ですわ、ティースさんって」
やはりおかしそうにクスクスと笑った。
「え？」
どうして笑われたのか理解できないティースに、ファナは答える。
「ティースさんのなさっていることは、大変なことですわ。たとえ

親子であっても、それを放棄してしまう方がいくらでもいるのですから」

「あ……ああ、なるほど。……でも負い目って言われてもなあ。俺は別に無理してるわけじゃないし、それだって元々あいつの方から言い出したことなんだ。それで負い目なんて感じられても……」

「私には詳しい事情はわかりませんけれど、何か納得できないものがシーラさんの中にあるのではないですか？」

「うーん」

ファナの言葉には説得力がある。が、当事者であるティースとしては納得できなかった。

『ネービスへ行きたい』

そう言ったのはシーラの方だった。薬師になりたいという彼女の夢はティースも昔から知っていて、それを叶えるために請われて彼女をネービスへ連れてきた――少し大事な部分もいくつか省いてしまったが、それが彼ら二人がここへやってきた大まかな事情である。

もしファナの言うように負い目を感じていたのだとしても、それは最初からわかっていたはずのことであり、それで一方的に避けられ、まるで嫌うかのような素振りを見せられたのだとしたら、ティースが納得できないのも当然だ。

それならまだ、一緒に暮らすようになって自分のだらしないところが嫌われたのだと考えた方がよほど納得できた。

と、そこへ、

「おぉーい、ティース！」

玄関の入り口辺りからティースを呼ぶ声が聞こえた。

振り返ると、そこにいたのはサイラス、ヴィヴィアン、フローラといった隊長のレアスを除くディバーナ・カノンの面々。

（……あ、そういや今日はみんなで街に繰り出すって言ってたんだっけ……）

忘れていたわけではなかったが、ファナとの話に夢中になっていて時間の感覚がなくなっていたようだ。

「ごめん。ファナさん、俺――」
「ええ、お気をつけて」
ファナはどうやら事前に知っていたらしく、事情も聞かずに頷いて変わらぬ笑顔でそう言うと、すぐに付け足した。
「それとサイラスさんに伝えておいていただけますか？　今回は遺書に冗談を書かないようになさってくださいね、と」
「？」
いまいち意味がわからないままに頷いて、ティースはサイラスたちの後を追うのだった。

「――ああ、そのことか」
ミューティレイク邸から若干南、一般住宅街でも大通りからほんの少し中に入った目立たない場所にある酒場“樫の木亭”。
煌々と明かりの灯った店内には合計十ほどの四人掛け丸テーブルと、カウンターに数席。広さでいうなら中程度の酒場だった。
ただ、今はそのほとんどの座席が埋まっており、騒然とした空気が流れている。
そんな中、ティース、サイラス、ヴィヴィアン、フローラの四人はもっとも隅っこにある丸テーブルを囲んでいた。
「ファナさんへのラブレターさ」
サイラスは言った。
「ラブレター？」
「彼は遺書の封筒にいつでも彼女への愛の告白を書くのだよ」
ヴィヴィアンはこの酒場の雰囲気に似合わない、透明なグラスに注いだワインをくゆらせながら答えた。
「え、サイラスってもしかしてファナさんのことを――」
「まさか」
驚愕したティースにサイラスは笑って答えた。

「俺だってそこまで身の程知らずじゃない。単なる冗談だよ」
「まったく。常識外れの不謹慎な男だよ」
「ははは……まさかお前に常識を説かれるとは思わなかったな」
そんな二人のやり取りに、ティースは少し眉をひそめて、
「……でも。俺もヴィヴィアンの言うとおり、遺書にそういう冗談を書くのはどうかと思うぞ。――ねえ、フローラさん？」
そう言って水を向けると、
「そうですわねぇ」
どこか浮ついた様子のフローラは、テーブルに並んだツマミの一つを口に運びながら、
「どうすればあの子みたいに自然で気品溢れる仕草ができるのか、それが問題ですわねぇ……」
どうやらかなり酔いが回っているらしく、話の流れを全く理解していないようだった。
「気にするな、ティース。フローラさんはいつもこうなんだよ」
「こんな酒場でくだを巻いているようでは、ファナくんのようになるなど一生無理だろうがね」
ヴィヴィアンの言葉には、ティースもちょっとだけ同意してしまった。
「で、遺書の話だけど、お前はもう書いたのか、ティース？」
「え？　あ、ああ」
「そうか、早いな。――あ、麦酒を一つ……いや、二つ頼む！」
「はーい」
注文を終えたサイラスは飲み干したコップを寄せ、テーブルに肘を乗せると、
「遺書ったってな。死んだ後のことなんて俺にはあまり考えられないよ」
ふうっと息を吐いた。
「フローラさんと違って連れ合いがいるわけでもないし、ビビのように銅像を造ってくれなんて馬鹿な希望があるわけでもない」

「なにを言うか！　私のこの美しい姿を後生に残すことこそ、歴史の語り部たる全人類にとって当然の義務であろう！」
「はいはい」
「銅像って……えっ！？」
ティースは苦笑してヴィヴィアンを見たが、直後、その前にすんなり流しそうになった言葉に気付く。
「フローラさんって旦那さんがいるのか！？」
「なんだ。知らなかったのか」
「知らなかったんですのぉ……？」
身を乗り出したフローラに据わった目で見つめられ、ティースは思わず怯んでしまった。
「うふふ……とても素敵な旦那様なんですのよぉ……」
そんなフローラにヴィヴィアンが一言、
「フローラくんは旦那フェチなのだよ」
「え、それはフェチっていうのか……？」
ティースの疑問にはサイラスが答えた。
「崇拝するほどに心酔しているという意味なら、まあ」
「あれは私がサーカスの一員として大陸中を旅している頃のことでしたわ――……」
フローラの昔話が始まったが、どこまでが本当なのか判断できないほど現実味のない内容だったのと、ろれつが上手く回っていないので、三分もするとティースを含めた誰もがすでに聞いていなかった。
「そういやティース。お前って連れがいるんだっけ？」
「連れって、まあ……」
「なんでも、とっくに尻に敷かれてるらしいって耳にしたが」
「いや、そういう言い方は語弊が――」
「ほほう、ティースくん。君はいわゆるマゾヒストなのかね？」
「なっ、ごっ、誤解だ！！」
ヴィヴィアンのストレートな言葉をティースは思いっきり否定し

た。そんな風評は彼としても黙って見過ごすわけにいかなかった。
だが、ヴィヴィアンは人差し指を振って、
「いやいや、別に隠すことではないよ。人の性質というのは千差万別だ。たとえ痛めつけられることによって満足感を得るとしても、それは別に恥ずべきことでは――」
「だ、だから違うって！」
顔を真っ赤にして懸命に否定するティースに、サイラスが笑いながらフォローを入れる。
「ま、つまり虐げられても離れられないほどイイ女だってことなんだろ？」
それもあまりフォローになっていなかった。
「だから違――」
「それとも、二人きりになったら攻守が逆転するのか？」
「……」
ティースはため息を吐いた。
そもそも根本から勘違いしている上に、アルコールが入って面白い方向へと話を動かそうとする二人には、ティースが何を言っても無駄なようだ。
（まったく。こんな話をシーラに聞かれたら、それこそどんな目に合うかわかったもんじゃないよ……）
「でも、ま」
追加した麦酒を一気に呷ってサイラスがポツリと呟いた。
「何にしろ遺言を残せる相手がいるってのはいいことだな」
ティースは少し怪訝に思って、
「お前は？　家族とか恋人はいないのか？」
「ああ、いないな」
サイラスはあっさりと答えると、少し冗談っぽく笑って、
「敢えて言うなら、いつも色々と世話になってる使用人の子ぐらいか」
「じゃあそのロケットは？」

「あ。――ああ」
彼の胸元に光るロケットは記念の品などを収めておくためのものだった。大抵は恋人から送られた品や小さな肖像画を収めておく場合が多い。
「こいつは友達さ」
躊躇いもなく開いたその中には、やはり小さな肖像画が収められていた。年の頃は十代半ばだろうか。それほど精巧な肖像ではないが、少し細身で人の良さそうな男性だ。
「……」
それについてさらに問いかけるべきかどうかティースは少し迷ったが、その前にサイラスの方から口を開いた。
「俺がデビルバスターを目指すことになったキッカケだ。イイ奴だったんだがな」
「……そうか」
事情を察するにはそれだけで充分だった。
サイラスはすぐにそのロケットを閉じて、
「ティース。お前はどうしてデビルバスターになろうと思ったんだ？」
「俺は……」
ティースは答えることを躊躇った。何気なく語ったサイラスの言葉の中に潜む、強い決意と悲しみに気後れしたためだ。
だが、嘘を言うわけにもいかず、ティースは結局正直に答える。
「シーラを……連れを学園に通わせる金が欲しかったんだ」
「そうか」
だが、サイラスはティースが予想していたような反応はしなかった。
それどころか、
「すごいな、お前は」
「え？」
「すごいよ」

もう一度、サイラスはそう言った。
「俺なんか大事な友達を殺されて、踏みにじられて……復讐のためにデビルバスターを目指してるんだぜ？」
「え……でも、俺は――」
「お前みたいに自分以外の人間のためにデビルバスターになろうなんて、そんなことを考えるヤツ、滅多にいるもんじゃない」
口調からして、どうやらそれは偽らざる言葉のようだった。
（……そういう考え方もあるのか）
いつだったか、ファナがティースに言った“立派”という言葉も、どうやらサイラスが言ったのと同じ意味だったのだと気付く。
だが、ふと気付いて、
「でも……お前だってその友達のためにデビルバスターを目指してるんだろ？」
サイラスは首を横に振った。
「違うな、ティース。……復讐ってのは結局、エゴの産物だよ。死んだヤツが復讐しろって遺言を残したならともかくな」
「……」
それはそうなのかもしれない、と、ティースは正直にそう思った。
「でもま、今更こんなことを言うのもアレだけど」
言いながら、サイラスは空になった五本目のコップをテーブルの端に寄せた。
「そういう理由なら、デビルバスターになるのはちょっと考え直した方がいいかもしれないぞ」
「？　どういうことだ？」
「お前みたいなヤツなら、デビルバスターなんかにならなくても好きな女の一人ぐらい幸せにできるんじゃないかってことさ」
「……」
ティースは黙った。
（デビルバスターにならなくても、か……）
確かにデビルバスターになる以外の選択肢も彼にはあった。シー

ラが卒業するまでおそらくはあと一年。たとえば高利貸しに金を借りたとしたって、どうにかこうにか返していくことはできたはずだろう。

ただ、それでもティースがこの道を選んだのは――

（……なんでだろう）

わからなかった。

厳しい道なのはティースにもわかっていた。実際、厳しい。

「連れにもしょっちゅう心配かけることになるぞ？」

「あ、いやそれはどうかなぁ」

思考を中断してティースは苦笑した。

本当にそこまで心配してくれるなら、ティースとしても非常に嬉しいのだが。

「……」

テーブルに肘をついて、サイラスは人差し指で皿の上の串を弄び始めた。少し酔いが回って来ているようで、

「……ホント、お前みたいなヤツは普通にやった方がいいよ」

「サイラス？」

いつの間にか目元がおぼつかなくなってきていた。

「ふむ。そろそろ頃合いのようだ」

ヴィヴィアンを見ると、テーブルに突っ伏したフローラに上着をかけているところだった。

「あ、フローラさん、いつの間に……」

「ウチのメンバーはそれほど酒に強くないのでね。飲みに来るといつもこうなるのだよ」

「すぅ……すぅ……」

直後、寝息が聞こえてくる。

ヴィヴィアンが言い終わるか終わらないかのうちに、サイラスもまた夢の世界に旅立ってしまったようだ。

「って、ヴィヴィアン、あんたは……」

よく見てみるとヴィヴィアンの前にはサイラス以上に酒を呑んだ

形跡がある。ティースこそは結果的に一杯しか呑んでないからいいにしても、ヴィヴィアンが平気な顔をしてるのは明らかに不自然だった。

ヴィヴィアンはいつものように人差し指を振ると、

「ふ……美しい私には“酔っぱらう”などという下品な単語は似合わないのだよ」

「……」

（つまり“ザル”なのか……）

顔色を見ると、呑んだのかどうかもわからないのだからよほどである。

「しかし今日はティースくんがいて助かった。サイラスくんが潰れると、いつもは私が二人を運ばねばならなかったのでね」

「あ、そっか。じゃあ俺がサイラスを運ぶから……」

素早くそう主張したティースに、ヴィヴィアンは怪訝そうな顔をして、

「ふむ？　フローラくんの方が軽いし、君のような凡庸な男にとっては色々と役得があっていいのではないのか？」

「え、遠慮させてくれ！」

「？　まあ、私はどっちでも構わないが？」

ティースの慌てぶりにヴィヴィアンは首を捻ったがそれ以上追求してくることはなく、そのままウェイトレスを呼んで勘定を支払った。

「あ、俺も――」

「いや。今日は君の歓迎会も兼ねているからね」

ティースはその好意に甘え、突っ伏したサイラスを背負うことにした。

（うわっ……結構重いな……）

スリムな体から想像する以上に、サイラスの体は引き締まって重みがあった。

ヴィヴィアンも同じようにフローラを抱えて、

「では、行くとするか」
「……ってか、ヴィヴィアン。それってお姫様抱っこ――」
「女性を運ぶときはこれが基本であろう」
「……」
ティースは突っ込む気にもなれずにそのまま帰路を辿ったが……
屋敷に着く頃、さすがにヴィヴィアンの腕は辛そうだった。

――屋敷に戻り、サイラスを部屋まで送り届けた後、ヴィヴィアンと別れたティースは酔いを醒ます意味もあって少し屋敷の中を散歩していた。
ホールや各部屋にはまだ明かりが灯っていたが、屋敷の奥に通ずる辺りの廊下は薄暗くなって窓から射し込む月が良く見える。
（ふぅ――さすがにちょっときつかったな）
肩を軽く回しながら歩いていて……ふと、
「あれ？」
庭の方に見覚えのある後ろ姿を見つけた。
「シーラじゃないか」
何をしているのか――よく見ると一人ではない。その前をもう一つの影が歩いていた。
「誰だ？」
遠目には男か女か分かりづらいが、スカートでないことと背の高さからいってどうやら男のようだ。
（こんな時間に……）
もちろんミューティレイクの敷地内だ。どれだけ夜が更けようと危険なんてものは滅多にないのだが、さすがに少し気になった。
シーラは屋敷内のティースになど気付いた様子もなく、男の後をついていく。
（ここにいるんだから屋敷の人なんだろうけどなぁ）
心配することもないとは思ったのだが、ふとここ数ヶ月のシーラの様子が脳裏に浮かぶ。

（……いやいや！　あいつはそんな男遊びをするようなヤツじゃないぞ！）

彼女の後ろ姿から目を離し、気にしないように再び歩き出す。

そして廊下を抜け、明かりの灯る玄関ホール、そして外へと散歩コースを移していった。

「……いない、よな」

月明かりの下、まるで人影のなくなった庭は寂寥とした空気を残していた。

辺りを見回しても、動くものの気配は見当たらない。

「……」

ティースは数秒間そこで立ち尽くした後、結局すぐに諦め、背を向けて館へと戻っていくのだった。

その４『遺志を継ぐ者』

“ネービス”という言葉には二つの意味がある。
一つには高い外壁に囲まれたネービスの街そのものを指す場合。
そしてもう一つは、それ以外も全て――つまり“都市国家ネービス”の領土全体を指す場合だ。
ティースを含めたディバーナ・カノンの面々は、ネービスの街を馬車で出発して二日目の夜遅く、ようやく目的地であるネービス領内の外れにある小さな村へと到着すると、その日は村人たちの歓迎を受けた後、そのまま体を休めていた。

そして、次の日の朝。

空は快晴だった。
「んぅ――っ」
布団から上半身を起こし、大きく伸びをするティースを出迎えたのは、ネービスの街よりも遙かに元気の良い小鳥の囀り。麗らかな日射しと食欲をそそる朝食の匂い。
そして、
「よっ、目が覚めたか」
昨晩、布団を並べて寝ることになったサイラスの声。どうやら彼の方はティースよりだいぶ先に目覚めていたらしい。
ティースは軽く首を鳴らしながら言葉を返す。
「おはよう。……随分といい天気だなぁ」
「まったくだ。最近は暑くなってきたし、少しは太陽さんにも遠慮してもらいたいもんだよ」
そんな愚痴を零すサイラスに、ティースは苦笑して身支度を整え始めた。
レアス、ヴィヴィアン、フローラの三人は別の家に宿を借りてお

り、この家にいるのはティースとサイラス、それに家主の初老夫婦だけだった。
「今日はこれからどうするんだっけ？」
肌着に手を通しながら問いかけたティースに、サイラスは頷いて、
「朝飯が終わったら村長さんに話を聞きに行く。で、色々調べ物をして対策を立て、実際討伐に行くのは明日以降だろうな」
「そっか」
その話を聞いて、ティースは少しだけホッとした。
そんな表情を見て取ったサイラスは笑う。
「ま、お前は初めてだし、今回はどんなもんか体験するだけさ。隊長も言ってたが、お前に剣を抜かせるようなことはないよ」
「けど、何があるかわからないし……」
ティースは着替え終えると、枕元に置いた荷物を手にして何度目になるかわからない点検をする。
（いざというときの水筒、非常食……剣はぴかぴかに磨いてあるし、それに――）
「ん？　……ティース。その包みはなんだ？」
「え、ああ」
サイラスが指さしたのは、腰にぶら下げる大きめの巾着袋だ。
「これは出発前、ファナさんにもらったんだ」
「ファナさんに？　中身は？」
「それが――」
ティースは困惑した顔で、袋を開ける。
「なんだ、これ？」
覗いたサイラスも怪訝な顔をした。
中に入っていたのはさらに小さな袋が五つ。そのそれぞれに何か書いてある。
「なんだ、薬袋じゃないか。――鎮痛薬、止血薬、解毒薬、あとの二つはなんだ？　痺れ薬に……煙玉？」
「一応説明書きもあったんだけど……痺れ薬は無味無臭だから食べ

物に混ぜろとか、煙玉は水を染み込ませて五秒後に派手な音と煙が出るとか」

サイラスは苦笑しながら巾着の口を閉じた。

「あの人の考えることはたまにわからなくなるな。しかも解毒薬って、何の解毒薬かわからないじゃないか」

「何にでも効くとかじゃないのか？」

「まさか。古代の超薬学でもあるまいし」

「そ、そういうもんなのか」

ティースはそういった方面に関しては、現時点で全く無知なのである。もちろん、デビルバスターになるためにはいずれ覚えなければならないことでもあったが。

「でも……ってことは、やっぱみんなはもらってないのか？」

「ああ。俺も昔、お守りみたいなものをもらったことはあるけどな。……ん？　でも出発の日って確か、ファナさんは屋敷にいなかっただろ？」

「あ、いや。持ってきてくれたのはフィリスさんだったんだけどさ。それが何かちょっと変な話で――」

そしてティースは出発の日のことを思い出していた。

――三日前、出発の朝。

「頑張って来いよ」

「気を付けてね」

「ムリしないようにな」

屋敷の門の前には一台の馬車が留まっている。そしてそこには今、二十人以上もの人間が集まっていた。ディバーナ・カノンの面々。そしてそれを見送りに来た屋敷の使用人や、それぞれの関係者たちである。

「……」

ティースは馬車のそばでそれを眺めている。

門から少し離れたところでは、隊長のレアスが十五、六歳ぐらいの少女に何やら声をかけられている。屋敷では見たことのない顔だから、もしかすると彼の個人的な関係者だろうか。恋人だとしたら随分とマセているが……いや、すでにデビルバスターの称号を持つ少年に対してそんなことを言うのもナンセンスだろうか。

門の前ではフローラが白衣を着た黒縁眼鏡の長身男性と話し込んでいる。その男性はティースも屋敷で何度か見掛けたことがあり、あるいは彼がフローラの旦那なのかもしれない。そういや黒縁眼鏡も密かにお揃いだ。

サイラスは屋敷の使用人――特に年齢に関わらず女性に多く声を掛けられている。あの甘いマスクに気取らない爽やかな性格だ。おそらく屋敷内でも普通に人気者なのだろう。肩を叩いて励ます年輩の女性もいるし、不安そうにしながらお守りのようなものを手渡した少女もいる。

そしてヴィヴィアン。意外といえばいいのか当然といえばいいのか、彼の元には最も多くの人間が集まっていた。老若男女、屋敷の関係者からそれ以外まで。いまいち統一性のない面々が見送りに来ていた。

さて、そしてそれを眺めているティースであるが。

「ふぅ……」

このため息を聞けばわかるだろう。

それは別にティースにとって予想外の出来事ではない。何しろ彼は屋敷にやってきて日も浅い、修行やら何やらで忙しく屋敷の人間と交流を持つことも少ない、加えて、彼はそれほど積極的に交流の場を求めるタイプの人間でもなかった。

（でも、実際にこういう光景を見ると淋しいもんだなぁ）

ティースにとっては間の悪いことに、屋敷でも数少ない知り合い――と言っていいかどうかはわからないが、ファナとアオイは早朝から用事で不在。他、見送りに来そうな知り合いなど心当たりもなく。

――いや。
「ティース？　連れはどうした？　来てないのか？」
やってきたのはサイラスだ。ティースが一人でいるのを見て怪訝そうな顔をしている。
「……」
ティースは黙って首を振った。
シーラが見送りに来るか来ないか、実を言うとティースの中では半々だった。最近の様子からすると望み薄だとは思っていたが、それでもこうして危険な場所に赴くのだから、来てくれるかもしれないとも考えた。
だが、現実はそういうものでもないようで。
「今日は平日だし、まだ早いから寝てるんじゃないかな」
「寝てるって……そんな馬鹿な」
サイラスは眉をひそめた。
「これから、魔と戦いに行くんだぞ？　ヘタすりゃそれこそ今生の別れになるかもしれないんだ。……誰かに言って、起こしてきてもらった方がいい」
「いや、いいよ。あいつの機嫌が悪くなるから」
「機嫌が悪くなるって……」
どうやらティースたちの関係を勘違いしているサイラスにはそれが理解できなかったらしい。
気にしていないことを示すように笑いながら、ティースは説明した。
「前も言っただろ？　俺たちはそういうんじゃないんだって――……あれ？」
「？」
途中で言葉を止めたティースに、サイラスは怪訝な顔でその視線を追う。
その先には、
「……ごめんなさい。ちょっと通してもらうわ」

門の前に出来た人垣から顔を出した、美しい金髪ポニーテールの少女の姿があった。
（シーラ……？）
ティースは目を見開き、それから二度、三度とまばたきする。が、その人物はどこからどう見ても、彼女に間違いない。消えることも別の人物に姿を変えることももちろんなかった。
「へぇ、これは、また……」
サイラスは察したらしく、少し口元に笑みを浮かべた。
「噂には聞いてたけど……なるほど。お前が手離せない気持ちもわからないでもないな」
そう言って、ポンッとティースの背中を押す。
「いや、だからそういうんじゃ……」
誤解をさらに深めることになったようだったが、ティースはそれ以上は反論せずにシーラの元へと向かった。
もちろん、期待していなかったこの思わぬ出来事に少しだけ胸を弾ませながら。
「シーラ」
「ああ、そこにいたのね」
声をかけるとシーラは不機嫌そうにティースを見た。
不機嫌？　……いや、違う。
ティースはすぐにその原因に気付いた。
「シーラ？　お前……どうしたんだ、その顔」
「……顔？」
一瞬わからない表情のシーラだったが、直後、見る見るうちにその目が険しさを帯びていく。
ティースは慌てて、
「いや！　じゃなくて、ほら！　顔色が良くないっていうか、眠たそうっていうか！」
「ああ、そういう意味」
まるで風船がしぼむようにシーラの怒りゲージが収まっていく。

そして少しだけ眩しそうに目を細めながら、
「眠いのよ。わかってるなら聞かないでちょうだい」
「……なんで？」
「なによ」
「いや、なんで眠いのかなって……」
一瞬、ティースの頭に二日前の夜の光景――屋敷の敷地を誰かと歩いていた彼女の姿が過ぎった。
何だかんだと言って古くからの付き合い、しかもティースにとっての彼女はかなり特別な存在なのである。結局は気にするなという方が無理な話だった。
だがそんな彼の問いにシーラは眉をひそめ、
「お前にそれを説明しなきゃならない義務でもあるの？」
「……」
黙ったティース。
いつもならそのまま引き下がるところだったが、この日のティースは珍しくさらに一歩踏み込んだ。
「いや、ほら……一昨日の夜さ。お前が外を歩いているのを見たから」
「……それで？」
一瞬の空白は、シーラが微かに動揺した証だったようにティースには思えた。
（……まさか）
そう思ってティースは少し不安になる。
ただ、もちろん想像通りだったとしても、それはティースが口を出すことではない。シーラも先月の誕生日で十五歳になっていたし、恋愛だのなんだのは本人の自由だ。それを咎める権利などティースにはない。
ただティースが心配するのは、あんな夜更けにわざわざ屋敷を出てコソコソと会うような相手が、一体どんなものかというところなのである。

そんな心配が――止めておけばいいものを――ティースの口からさらに踏み込んだ言葉を吐き出させる。
「なんか、男と逢い引きでもしてるみたいに見えたから――」
「……だから？」
瞬間、ティースは自分の言葉を後悔した。
シーラの目が明らかな厳しさを纏い、口調はまるで刃物のような険を帯びたのだ。
（しまった……）
だが、時既に遅し。続くシーラの言葉は苛烈にティースを責め立てた。
「だったらなに？　お前に何の関係があるの？」
「いや……ダメとかそういうことじゃなくて、ただちょっと心配だっただけで――」
「心配？　お前が？　何を心配する必要があるの？　お前に操を立てた記憶などないけれど？」
「そ、そういう意味じゃなくて」
疑問系を必要以上に含んだシーラの言葉は、ティースの焦りを増幅させ、後悔を募らせる。慌てて言い訳しても、出てくるのは気の利かない言葉ばかりだった。
「ただ、なんとなく気になっただけで……」
そんなティースはシーラはそっぽを向いて、
「お前には関係ないことでしょう」
「あ……」
引き留める間もなく、彼女は機嫌を損ねた様子でその場から去っていってしまった。
そんな後ろ姿を少し呆然と眺めながら、ティースは自らの頭を軽く叩き、大きなため息をつく。
（……馬鹿だ、俺。せっかく来てくれたってのに、怒らせちまうなんて……）
その様子を見ていたサイラスは首をかしげながら近付いてくると、

「どうしたんだ？　……怒って帰ったみたいに見えたけど」
「怒って帰ったんだよ」
肩を落とすティースにはそれ以外に答えようもなかった。
サイラスはいまいち状況を理解できないようだったが、やがて仕方なさそうに首を振ると、
「お前なあ……あれだけの美人なら大事にしてやんないとそのうち逃げられるぞ。あれなら引く手数多ってやつじゃないのか」
「大事にしてるつもりなんだけどなぁ」
彼女が詮索されることが嫌いだってのはティースだって知ってはいる。
（心配なんだから仕方ないじゃないか……）
だが、心配すればするほどに嫌われるのだ。ティースにとってはどうしようもないジレンマである。
「なあ、サイラス」
ティースはシーラの後ろ姿が消えた先を眺めながらポツリと呟いた。
「詮索されるのが嫌いな人ってのは、他人に心配されることも嫌なのかなぁ」
「はぁ？　……いや、それは人それぞれだし、状況次第だろう？　けど、赤の他人に詮索されるのは嫌だったにしても、親しいヤツが真剣に心配してくれるのは嬉しいものじゃないのか？」
サイラスの言葉はティースにも充分納得できた。
（ってことは、あいつにとっての俺ってのは結局、その程度の存在なんだよなぁ）
考えれば考えるほどに、ティースの胸を寂しさが襲う。
（ま、仕方ないか……）
ただ、それも今に始まったことではないので、ティースはすぐに立ち直って考えることを放棄していた。すでに落ち込むほど、彼女との関係に希望を持っていない——半分諦めている状態なのである。
そうこうしているうちに出発の時間が近付いてきた。

集まっていた人々の半数以上はすでに去り、最後まで残っていたのはメンバーと特に親しい人間たちだろう。
「じゃ、出発しますよ」
御者が顔を覗かせた。
それを合図にディバーナ・カノンの面々は一人ずつ馬車に乗り込んでいく。
まずレアスとヴィヴィアンが乗り込み、フローラは最後まで残っていた男――おそらく旦那だと思われる人物――といくつか言葉を交わしてから。そしてサイラス。
最後にティースが乗ろうとしたところで、
「あっ！　ちょっと待ってくださーいっ！！」
「？」
振り返ったティースの視界に入ったのは、屋敷の方から駆けてくる使用人の姿。羊を思わせるクセのある髪の少女は、ティースにも見覚えのある人物だった。
（えっと、確かフィリス――）
「ティース様！　忘れ物です！」
「忘れ物？　……なにそれ？　巾着？」
はぁはぁと息を切らせ、フィリスは大事そうに抱えていたものをティースに差し出した。
「あの、ファナ様からです。ティースさんに渡してくれとおっしゃっていたそうです」
「？　ファナさんから？」
怪訝に思いながらひとまず受け取ってみると軽い。中を覗いてみるといくつかの小袋が入っていた。
「これは？」
「あ、いえ、私もファナ様から直接お預かりしたわけではないので、中身に関しては全然わからないんです」
「？」
どうしてそんなものが人伝いに渡ってきたのかティースは不思議

に思ったが、それでも中身を見てみると、どうやら戦いにそれなりに必要になりそうな薬類らしい。
とはいえ若干、変なものも混ざっていて、ティースは再び首を傾げずにいられなかったのだが――

「……ああ、あのときにフィリスが持ってきてたのがそれか」
サイラスもどうやらその状況を目に止めてはいたらしい。
「しかし確かに妙だな。最初から直接、侍女のフィリスに持たせておきそうなもんだけどな」
「だろ？　いや、だからどうだというわけじゃないんだけどさ」
もちろんそれはティースにとって重大な問題というわけではない。フィリスだってまさか見知らぬ人間から受け取ったわけではないだろう。
「ま、何か事情があったんだろうな」
サイラスもそれ以上は何を言うこともなく。
「ティース様、サイラス様。朝食の準備が出来ましたよ」
二人は老夫婦の声に、朝食を採るべく部屋を出たのだった。

村長の家。
しかし村長といっても、ここの村長は非常に若い人物だった。おそらくは三十代後半、ヘタをすれば三十代前半にも見える。少し恰幅のいい人の良さそうな好人物――それがティースの第一印象だった。
「昨日は大したおもてなしもできませんで、失礼いたしました」
村長の家は周りの家と比べて特別大きいわけではない。いや、むしろ小さい――背の高いティースなどは入り口で何度も頭をぶつけそうになったぐらいで、なるほど、ティースたちを別の家に泊まらせたのもわからないではない。小さな村とはいえ、そこの長であれ

ば多少は裕福な家庭を想像するものだが、この村に関してはそういうわけでもなさそうだった。
ちなみにカノンの面々は勧められたソファに腰掛けており、そして村長の言葉に答えたのは、相変わらず上品そうに微笑んだフローラだった。
「いえいえ、私は充分楽しませていただきましたわぁ」
「それで？　早速だけど、話を聞かせてくれよ」
「え、ええ」
フローラに続いたレアスの言葉に、村長は僅かに困惑の色を浮かべた。
――彼がこのチームの隊長だということは昨晩のうちに明かしてあったが、それでも村長の戸惑いは消えていないらしい。
もちろん、その気持ちはティースにも充分に理解できた。
（そりゃ、なぁ）
レアスは常人離れした闘気と目つきの悪さを別にすると、外見は全く普通のヤンチャ坊主だった。そんな彼が隊長で、しかも態度が尊大だと来たら戸惑わない方がおかしい。
「その前にお茶をどうぞ」
お茶を運んできたのは、やはり三十代前半の線の細い綺麗な女性だった。村長とはタイプが全くの逆だが、おそらく彼の妻なのだろう。
「む、申し訳ない」
ヴィヴィアン、レアス、フローラの順でお茶を置き、奥さんは一度キッチンの方へと下がっていった。
さて、この家にいるのはあと二人。
「……どうぞぉ」
「え？」
ティースとサイラスへお茶を持ってきたのは別の人物だった。
ソファに座るティースたちと丁度目線が合うぐらいの身長……左右についた二つの赤いリボンが印象的な少女だ。

年は九歳か十歳ぐらいだろうか。
「ありがとう」
言葉を探っていたティースの横から、サイラスがにこやかに少女に挨拶をする。
「君はここの家の子かい？　名前は？」
「え、あ」
少女は少し困惑した様子だったが、それでも人見知りしない子なのかすぐに答えた。
「リズだよ」
「リズか。利発そうな良い名前だ」
「……えへへ」
照れたのか、リズははにかむようにしてサイラスに笑いかけた。
「お兄ちゃんたちは余所の人でしょ？　どうして来たの？　旅の人？」
どうやらリズは事情を知らないらしい。いや、歳を考えれば当たり前だろうか。
もちろんサイラスもそれを察していて、
「ああ、そうだよ。お兄ちゃんたちは大陸の色々なところを旅しているんだ」
「じゃあじゃあ、何か面白い話とかできる？」
どうやら彼女はその活発そうな外見の通り、好奇心の旺盛な性格らしい。
サイラスは頷く。
「そうだな。……もしゆっくりお話できる時間があったら、色々と話してあげるよ」
その言葉にリズは目を輝かせた。
「ホント！？」
「ああ、約束だ」
優しい笑顔で、サイラスは少女と小指を交わした。
……それを見て、ティースは妙に暖かい気分になる。

そんな姿だけを見ていると、いつか彼の言った“復讐”だなんて言葉が、とても似合わないように思えて仕方なかった。

そこへ、村長がリズへ声をかける。

「リズ。お前はそろそろ外へ行って遊んできなさい。パパはこのお客さん方と大事なお話があるからね」

「はーい」

リズは元気良く答え、それからねだるようにして、

「できるだけ早く終わらせてね。私、このお兄ちゃんにいっぱいいっぱいお話してもらうんだからっ」

「ああ、わかったわかった。……森へ行っちゃダメだぞ」

「はーい」

手を振って、少女はアッという間に外へ飛び出していってしまった。

村長はリズを送り出してから、サイラスに向かって頭を下げる。

「……どうもすみません」

「元気で素直そうなお子さんですね」

見送ったサイラスの言葉に、村長は頭の後ろを掻きながら照れたように答える。

「いえいえ。見ての通りお転婆な子でして……」

「いいえ、元気なのはいいことですよ。僕がもう少し若かったら、お嫁さんに欲しいぐらいです」

「……」

村長は目をぱちくりさせていたが、その後ろに控えていた奥さんがクスクスと笑い出す。

「はは……」

ようやく冗談だと気付いて村長も苦笑いした。

そこへヴィヴィアンが、腕を組んで何やら納得顔をする。

「そうか、サイラスくん。君がなかなか女性に興味を示さないのは、成熟した赤い果実よりも未熟な青い果実を好むからなのだね？」

「ご両親の前じゃ問題発言になりかねないな、それは。――とまあ、

冗談はこのぐらいでしょうかね、隊長」
「……」
レアスは相変わらずのツンとした表情のまま、サイラスの言葉にゆっくりと頷いて、
「じゃ、事情を詳しく説明してもらおうか」
「……ええ」
サイラスが演出した場の和やかな空気は、すぐに緊張感溢れるものへと変わった。
そして……この家にいる残りの一人。
村長の隣に座っていた男。
「彼が“魔”に襲われて命からがら逃げてきた村の者です」
顔の半分に巻かれた包帯が生々しい。年の頃は二十代後半だろうか。骨折もしているのか腕を吊っており、その他にも爪で引っかかれたような細かい無数の傷が痛々しかった。
「なるほど」
早速レアスが男へと問いかける。
「まず、その魔の特徴を出来る限り話してくれ」
「ええ」
男はそのときのことを思い出しているのか、微かに顔を歪めながら答えた。
「最初は猿かなにかだと思ったんです。でも、私が知っているものとは微妙に耳の形とか目の色とかが違っていて……なにより普通の猿に比べてかなり大きかったんです。私より一回り小さいぐらいでしょうか――それが三匹、狩りをしていた私と私の知人四人に突然襲いかかってきたんです」
「体毛の色は？」
「全体的には茶色で……でも、ところどころに黒い斑点がありました」
「知能は高そうだったか？　言葉は？」
「少なくとも意味のありそうな言葉は喋ってませんでした、変な鳴

き声みたいなものは上げてましたけど……」
「そうか」
頷いてレアスは村長の方を見ると、言った。
「それで生き残ったのはこいつだけか？」
「……はい」
村長は沈痛な表情で答える。
隣の男も顔を歪めてうつむき、唇を震わせていた。
村長が言葉を続ける。
「実は……昔からこの辺には同じ種類の魔が出没していたんです。ただ被害は決まった時期、年にせいぜい一、二回。それで今まではその時期に注意を呼びかける程度で済んでいたんです。でも、ここ最近は急に活動が頻繁になり……それに、今まで安全だった村に近い森でも被害がでるようになって。……彼も村に近い場所で襲われたのです」
「それで俺たちに頼ったってわけだな」
レアスは腕を組んで頷いた。
が、それは彼らもすでに知っている情報だった。
――ディバーナ・ロウには“影裏（かげうら）”と呼ばれる情報収集部隊がある。
大抵の場合、彼らが依頼について様々な情報を集め、実際に部隊が派遣されてくるのはその後。だから彼らディバーナ・カノンのメンバーは、あらかじめその辺の事情は承知済みなのである。
村長と男に尋ねたのは、あくまで確認のためだ。
「今は森を立入禁止にしてはいるのですが、森にはこの地の特産物が群生してまして、それがなければ私たちの生活もままなりません。それに、奴らがいつこの村にまで押し入ってくるか心配で心配で……」
村長はまるで祈るように手を組み、そして深々と頭を下げた。
「お願いします。私たちの村を救ってください」
「……言われるまでもない」

そんな村長に対し、レアスは相変わらず尊大な態度ながら、きっぱりと答えた。
「俺たちはそのために来たんだからな。任せておけ」

「――地の七十三族だな」
ディバーナ・カノンが借りている家のうち、レアス、フローラ、ヴィヴィアンが泊まっている家。そこはこの村でも裕福な家らしく、ざっと見たところ村では一番大きい。家主は村長の兄夫婦だった。
村長から状況説明をうけたメンバー五人は、大きな部屋の床に村周辺の地図を広げ、先ほど運ばれてきた昼食のサンドイッチを食べながら、その対策を練るべくこうして集まっていた。
とはいえ――
「地の七十三族か……なら、多少群れてても大丈夫でしょうかね、隊長」
「どうだかな。確かに、話を聞く限りじゃ数もそれほど多くなさそうだったけどよ」
「何か心配でも？」
「ちょっとな。最近になって急に被害が増えたってのが――」
（……うーん）
正直なところ、ティースを含めた他の三人はいなくても同じようなものだった。レアスとサイラスの会話は少々専門的な知識も入っているのか、ティースには理解できないところが多かったし、その証拠と言っては難だが、フローラとヴィヴィアンの二人は会話に参加する気もなさそうである。
ティースは一応、将来のために彼らの話を聞き逃さず、彼なりに理解しようと努力してはいたのだが……
（地の七十三族ってなんなんだ？　魔の種族名らしいけど……）
ただ、二人の会話の内容から、さほど手強い相手ではないらしい

ことは、かろうじてティースにも理解できていた。
「とりあえず地図だけじゃわからねえこともある。明るいうちに少し周りを歩いて――」
「村の人たちのことを考えると、できれば明日には解決――」
（……ん？）
いい加減痺れを切らし、二人の会話を半分聞き流しながらティースがふと窓の外に目を向けると、そこに丁度見覚えのある人影が見えた。
（あ、リズって言ったっけ、あの子）
日射しの溢れる中、同い年ぐらいの子供数人を引き連れて歩く少女。
（村長はお転婆なんて言ってたけど、本当みたいだな）
そんなリズの姿に、ティースは思わず苦笑してしまった。
中にはどうやら男の子も混じっているようで、その先頭を歩いているのだからよほどのものだ。
……そしてふと、リズの後ろを従者のようについていく男の子に、自分の姿がダブってしまった。
（シーラはあんな子供じゃなかったけどなぁ）
それに気付いて再び苦笑する。ただ、まあどうにも逆らえそうにないという部分に関してはやはり一緒かもしれない、と、ティースはそんな風に思ったのだった。

――さて。

結局、それから数十分ほどの時間をかけて結論が出た。すなわち今日は周辺の地形を含めた下見に徹し、翌日、日の高いうちに掃討作戦を実行するということである。
そしてその決定通り、昼から夕方までの三時間ほど、ティースを含めたディバーナ・カノンのメンバーは全員が固まって村周辺の森を浅い位置まで調べ、被害者の男に同行してもらって彼が襲われた

場所も調べることにした。
そこは村長が“村に近い場所”と言ったのも頷ける、村から十分ほど歩いた程度の浅い場所。話によると昔は子供たちですらその辺りにまで入り込んで遊ぶことがあったという。
彼と一緒に襲われた村人たちの遺体は、どうやら村の者が総出で回収し葬ったらしく、その場にはなかった。が、その痕跡は僅かにティースの目にも止まった。どす黒い血と泥に汚れ引き裂かれた洋服の破片、そしておそらく必死の抵抗をしたのであろう、切り傷のようなものが周囲の樹木に残っていたのだ。
そうしてその周辺を少し探り――といってもティースはほとんど何もできなかったが――今日の作業が全て終わる頃、太陽は西に向かってゆっくりと沈み始めていた。
「はぁ……」
そして今、ティースは沈みかけた太陽と同じような気分で、部屋の片隅に座り込んでいる。
「緊張してるのか、ティース？」
逆側の壁に背を預け、念入りに獲物――ティースと似たタイプの中剣――の手入れをしているサイラスは、ティースと違って平然とした表情だった。
「緊張っていうか……まあ、ね。俺が役に立つのかなっていうのもあるし――」
サイラスは笑って答える。
「朝にも言っただろ。今回のお前は研修みたいなもんさ、深く考えることはない。……それに隊長は色々と言っていたが、今回の相手は地の七十三族ってやつで、こいつは魔の中でも取るに足らない部類だ」
「それでも“魔”は“魔”だろ？」
「ピンキリさ。凶暴で大型の猿だと思えばいい。……それより今回は思ったより早く帰れそうだ。帰ったら出掛けに喧嘩した彼女に早めに謝っておいた方がいいぞ」

サイラスは緊張している様子もないし、早くも終わった後のことを考えている。その辺は経験の差か、あるいは性格の違いか。どちらにしろ今のティースには彼のように楽観的になることなどできなかった。

いくら大したことはないと言ったところで、その魔は実際に何人もの人を殺害している邪悪な存在なのだ。

（あぁ……なんか胃が痛くなってきた）

「……」

そんなティースを見つめ、サイラスは少しだけ目を細めた。

「……ん？」

それに気付いてティースが疑問を向けると、

「いや……なんでもない」

再び、サイラスは視線を手元の剣へ落とす。

そうしてしばらく続いた沈黙。

窓から射し込む光は徐々に赤みを帯び始め、あと一時間ちょっともすればその姿を山間へ隠してしまうことだろう。

外から聞こえる声は子供たちが友達に別れを告げる声だろうか。

明日の再会を約束し、家へと戻っていく。

（……また明日、か）

ティースはそんな子供たちの言葉を、少し懐かしく思いながら耳にしていた。

……少年時代、ティースはここの村の子供たちのように、友達と遊んだりはしなかった。というのも彼の少年時代は彼らのように自由に遊べる環境になく、そして同年代の友達というのもほとんどいなかったからだ。

ただ、そんなティースにも、おそらく唯一と言っていいだろう、同年代の――正確には少々年下だったが、周りから比べればずっと歳が近い友達が出来たことがある。

いや、正確には“唯一”ではなかったが。

（今頃どうしてるんだろうな……）

“また明日”
確かにティースも毎日そんな約束をしていた。おそらくはあの日――別れが訪れた日の前日も。
それは彼がまだ子供だった頃の、懐かしい想い出――
「また明日、か」
「？」
ふと、そう呟いたのはティースではなかった。
「いい言葉だな」
「……サイラス？」
いつしか剣を磨くサイラスの手は止まり、その視線は窓から外へと向けられていた。
二つの瞳が赤みを帯びた光を受け寂色に染まる。
そして、眩しそうに目を細めた。
「……俺も昔は信じていた。“また明日”ってな。そう伝えれば、明日には必ず会えるものだと、何の疑いもなくそう信じていたよ」
パチン、と剣が鞘に収まった。それを脇に置いてサイラスは軽くため息をつき、ゆっくりと天井を見上げる。
その指先は、無意識の動きで胸元のロケットを弄んでいた。
（あ……そうか。サイラスは――）
その視線に気付いたのか、サイラスは少し躊躇ってから口を開いた。
「こいつとは親同士が仲良しだったんだ……ああ、ウチは街から街へ頻繁に移動する商人の家でな。安全のために他の家族と一緒に集団で移動することが多くて、こいつの家族とも事ある毎に一緒に旅してたんだよ」
「……」
ティースは黙って耳を傾けた。
どうしてサイラスが急にそんなことを話す気になったのかはわからない。が、おそらくそれは彼がデビルバスターを目指すことになるきっかけとなる話だ。おそらく、金のためでも名誉のためでもな

い。そんな彼がデビルバスターを目指すことになったきっかけ。
ティースはそれを聞いてみたかった。
「俺が確か十二歳だったから……七年ぐらい前か。いつものように街から街に移動する途中、急に魔に襲われてな。一応、護衛みたいのも何人かいたんだが、敵わないと知るとほとんどが逃げていった。俺たちも必死でな。取る物も取り敢えずに逃げ出したよ。両親ともはぐれて、一緒にいたのはこいつと、どこかの家族の小さい女の子が一人だった」
弄んでいたロケットの蓋が開く。
現れたのは以前ティースも目にした、細身で人の良さそうな青年の肖像画。
「いかにもお人好しっぽいだろ？」
ティースの心を読んだわけでもないだろうが、サイラスは笑いながら、
「十歳にも満たないような子を連れて逃げるなんてムリだったんだよ。案の定、俺たちは一匹の魔に追いつかれた。こいつは見ての通りお人好し……っていうか、馬鹿みたいなヤツでな。ほとんど顔も知らないその女の子を助けるために、勝てるはずもない魔に立ち向かっていったんだよ」
「……」
サイラスのその笑みが、途中から自嘲的な色を帯びていたことにティースは気付いていた。
「でも俺は逃げた。だってそうだろ？　勝てるはずなんてないさ。俺は子供だったし、だいたいが丸腰だ。死ぬのは怖かったし、顔も知らない子を命がけで助ける――いや、そんなことで犬死にするなんて真っ平ゴメンだったからな」
「それは……正しいと思う」
ティースがごく正直にそう言うと、
「だろうな」
サイラスは喉の奥で笑った。

「けど、俺は納得できなかったんだ。そのときは目の前の恐怖から一目散に逃げ出したけど、後になって何度も頭を過ぎった。……あのとき、俺にも何か出来たんじゃないかって。結局あいつも女の子も殺されちまったけど、あのとき俺が背を向けなければ、もしかしたら二人を助けられたんじゃないかって」

「……」

「過去には戻れないからな。その答えは出ないが……」

パチン、とロケットの蓋が閉じる。

寂色に染まっていたサイラスの瞳は、真っ直ぐティースに向けられていた。

まるで……そこに何かを重ね合わせるかのように。

「あいつは無念だったと思うんだ。女の子を助けることができなくてさ。だから、俺がもしデビルバスターになってたくさんの人を助けられたら……そしたらあいつの無念も少しは晴れるんじゃないかってな」

「……そっか」

サイラスの気持ちはティースにもなんとなくわかるような気がした。

親友が果たせなかったことを代わりに果たしてやりたい。厳密にいえば意味が異なるだろうが、それは“無念を晴らす”というよりは“遺志を継いだ”と言った方が近いかもしれない。

「ま、もちろん、単純に俺から家族や親友を奪った魔が憎いってのもある。……むしろそっちのがデカいかもな」

最後にサイラスは明るく笑った。

今度は自嘲的ではなく、自虐的でもなかった。

「ああ、こんな話、ビビや隊長たちには秘密だぞ？」

「……どうして俺に？」

素朴な疑問を口にしたティースに、サイラスは自分でもその理由を探すかのように視線を泳がせて、そして答えた。

「さぁ、なんでだろうな」

曖昧だった。
本人も理解していないのか。あるいはその理由を口にすることが躊躇われたのか。
「……悪い。なんかしんみりしちまったな」
「いや……聞けて良かったよ」
それはティースの偽らざる気持ちだった。
「そうか」
サイラスは頷いて、少しだけ微笑んだ。
彼もまた、どこかすっきりしたような、そんな表情で。
――異変が訪れたのはそれから数分後のこと。
「みなさん！」
「？」
「村長？」
真っ青な顔で突然家に飛び込んできた村長は、自らの動揺を隠そうともせずに言ったのである。
「娘が……娘が森に向かったまま帰ってこないんです――！」

その5『憧憬と共感と』

夕日はまだ山間からかろうじて顔を覗かせており、ちょうど本日の最後の任を全うしようとしているところだ。淋しげな鳥の鳴き声と地面に長く落ちた家々の影が、一日の終わりを告げ始めている。

「というわけだ、村長」

薄暗い家の中、レアスの言葉が殊更に冷たく響き渡った。

青ざめた村長夫妻、レアスたちが家を借りている村長の兄夫婦、そして村長たちの母親らしき老婆は、絶望の色を隠そうとしていない。

「可哀想だが、その娘のことは諦めてくれ」

「ちょっ……ちょっと待ってくれよ、隊長！」

そんなレアスの宣言に真っ先に異論を唱えたのは、村長夫妻でもその関係者でもない。

ティースだった。

「……なんだ？」

向けられた鋭い視線に、ティースは食ってかかる。

「なんでだよ！　あの子が森に入ったのだってまだ二時間ぐらい前だろ！？　魔に襲われたとは限らないし、今ならまだ助かるかもしれないじゃないか！」

だが、そんなティースの言葉に、レアスは鋭い視線と冷たい言葉で返した。

「ティース。てめえは人の話を聞いてなかったのか？」

「そりゃ聞いてたけど……暗くなって危険だってのもわかるけど……でも、敵だってそんなに手強い相手じゃないんだろ！　隊長やサイラスぐらいの実力があればどうにか出来るんじゃないのか！？」

「……」

レアスは無言でティースを見ていた。……いや、“見ていた”というよりは“睨みつけていた”という方が正しい。

それは相変わらずの子供らしからぬ威圧感。
だが、ティースはひるまずに言葉を続けた。その脳裏には、いつかのシーラのこと――今回と似た状況だった――が頭に浮かんでいたのだ。
「そんな簡単に諦めろとか言うなよ！　助かる可能性があるなら、そのために精一杯努力すべきじゃ――！」
「……黙れよ、てめえ」
「！」
逆った怒気に、ティースは思わず口を噤んだ。
「勝手な憶測で適当なことばかり喋ってんじゃねえ。何もわかってねえんなら黙ってろ」
「なっ……！」
ティースはカッとなって反論した。
「そ、そりゃ俺は入ったばかりだし何もわからないけど、でも間違ったことは言ってない！」
「間違ったことは言ってない？　じゃあなにか？　てめえは“どうにかなるかもしれない”とか、そんな曖昧なことのために、ここにいる全員の命を差し出せって言うのか？」
「なっ……そんなこと言って――！」
「言ってると同じなんだよ。何を根拠にどうにかなるとか思ってんのか知らねえが、てめえは魔を甘く見てるんじゃねえのか？」
「……！」
「ティースくん」
そこへ口を挟んだのはヴィヴィアンだ。
ティースは助け船を少し期待したが、彼の口から出たのは想像とは違う言葉だった。
「ここは隊長の言うことが正しい。気持ちはわかるが、そのぐらいにしておきたまえ」
「ヴィヴィアン――」
「残念ですけど。私もその通りだと思いますわ……」

「フローラさんまで……」
ティースには返す言葉がなかった。
だが、もちろん納得したわけじゃない。
（だって……こういうときに助けてやれるのがディバーナ・ロウじゃないのかよ……）
実際、“あのとき”だってそうだったのだ。常識的には危険だと言われて、それでも助けにいったからこそ救うことができた。
（あの子だって、今頃、森の中で……怖い想いをしているに違いない）
それを想像すると、ティースの胸は締め付けられるように痛んだ。それと同時に、レアスやヴィヴィアン、フローラたちに対する不満が胸に広がってくる。
（これがレイさんやアクアさんなら、きっと助けてくれるのに……）
「……それはそうと」
そこへ、それまで無言だったサイラスが少し話題を逸らした。
「どうしてあの子は今日に限って森に入って行ったんです？　今までは言いつけを守っていたんじゃないんですか？」
「それが……」
村長は落胆を隠し切れない顔で答えた。
「途中まで一緒だった子の話ですと、硝子花を採りに行くと言っていたらしくて……」
「硝子花というと、例の特産品の？」
「ええ……」
「それはもしかすると――」
サイラスは言いかけて、途中で止めた。
村長も何も答えない。その場にいる誰もが無言になった。
（……そうか）
それを怪訝に思ったティースだったが、やがてその理由に気付く。
……硝子花というのはその名の通り、ガラスのように半分透き通った美しい花で、ネービスの街では贈り物などによく用いられる。

その生産地では、客を迎えるときにその花を贈ったり客室に飾ったりすることが多いとティースも聞いたことがあった。

ただ、ティースたちはこの村でその硝子花を直接見てはいない。何故なら硝子花は非常にデリケートで人の多く住む場所では育たず、生産地では“集落から離れた森の中”などで自然栽培している場合がほとんどなのだ。

（あの子、きっと俺たちのために採りに行ったんだ……）

ティースの胸の締め付けはさらに強くなった。

なんとかしたい――なんとかできないものか――

……だが、

「とにかく」

その場の沈んだ空気を裂くように、レアスはもう一度断言する。

「話はここまでだ。……明日、日が昇ったらすぐに行動に移る。全員、今日はゆっくり体を休めておけ」

すでにそれ以上、ティースが口を挟む余地はなかったのだった。

レアス、ヴィヴィアン、フローラの三人が滞在する村長の兄夫婦の家では、夕日がその姿を半分以上隠し始めた頃、ようやく夕食の準備をする音が漂い始めていた。

もちろんリズという名の少女は彼ら夫婦にとっても姪であり、彼らが村長夫妻と同様にショックを受けているのは当然のことだったのである。

「ちっ、ティースのやつ……」

そんな中、小さな舌打ちが部屋に響き渡った。

その主……ディバーナ・カノンの隊長、レアス＝ヴォルクスとて人の子である。彼らの気持ちが理解できないわけではないし、本来の激しい彼の気性から言えば、むしろ自分を抑えることに苦労しているぐらいであった。

ただ、だからこそ自分勝手に気持ちをぶつけてきたティースの態度は、彼にとって非常に腹立たしく、同時に羨ましいことでもあったのだ。

――その手に握られている長剣。刃渡りは百五十センチ近くもあるだろうか。柄を入れれば――あるいは入れなくとも――彼の身長より長く、ひどくミスマッチだ。その割に刀身は細長く、僅かに赤銅色の光沢を放っていた。

それを念入りに手入れしながら、レアスの愚痴は続く。

「あの野郎、なにもわかってねえくせに、余計な口を挟みやがっ――」

「あぁ、かの夫婦の胸は今、張り裂けんばかりに悲鳴をあげている。しかし、しかし非力な我々にはこの定めをどうすることもできないのだ。あぁ、この世のなんと無情なことよ……」

「……」

「せめて私がこの悲しみを詩にしてみせようではないか。それが彼らにとってせめてもの慰めとな――」

「……あああっ！　うるせえぞ、ビビ！！　てめえは少しだぁってろ！！」

「ビではなぁいっ！　ヴィだと何度も言っているではないかぁぁっ！」

「んなことはどーでもいいんだよ、この、タコが！　てめえも猿芝居してるヒマがあったら武器の手入れでもしてやがれっ！！」

「……猿芝居？　ふっ……これだから凡人は」

「あぁっ！？」

レアスの鋭い視線が突き刺さっても、ヴィヴィアンはまるで平然と手を広げるだけだった。

「私に言わせれば、そうやって気を紛らわせるためだけに何度も武器の手入れをすることこそ時間の無駄というもの。それならば余った時間を自らの修練に費やした方が何倍も有益ではないか」

「はっ……てめえの狂った独り言のどこか自己修練だってんだ！？」

「あぁ、天才はいつの世も孤独なものだ」
「てめえが天才？　笑わせるんじゃ――！」
「……隊長！」
そこへ、それまで黙っていたフローラが、やはり苛々した様子で口を挟んだ。
「ビビさんも、こんなときにそんなくだらないことで口論しなくてもいいでしょう！？」
「っ……」
「私は別に、口論する気はなかったのだがね」
口を噤んだレアスに、ヴィヴィアンは平然と受け流す。
フローラは少し眉間に皺を寄せ、少しズリ落ちていた眼鏡を直し、それから自らを落ち着かせるようにコホンと咳払いすると、
「と、とにかく、お二人が苛々するのはわかりますけれど、ここは落ち着いて対処するべきですわ」
そう言った彼女自身もそれほど冷静だとは思えないが、その言葉は至極もっともだった。
「隊長が責任ある立場としてああいった判断を下したのは、間違ってないと思いますし……」
「……んなことは当たり前だ」
そっぽを向いてそう答えたレアスに、フローラはチラッと夫妻がいる居間の方を見る。
どうやら客が来たらしく、それを出迎える夫妻の声が聞こえた。
フローラも少々胸につかえるものがあるようで、言葉には切れがなかったが、
「……今晩は夕飯を戴いたら早めに休みましょう。いくら相手が雑魚とはいえ、体調が万全でなければ万が一ということもありますわ」
「雑魚、か」
夕日を反射した赤銅色の刀身が、細めたレアスの瞳を赤く染めた。
そこには思案げな色が灯っている。
「もし本当に雑魚ばかりなら、多少無茶しても構わねえんだろうが

……」
「やはりなにか気になることでもあるのかね、隊長？」
「……」
レアスは尋ねたヴィヴィアンの方を見ようともせず、ただ刀身を見つめるだけだった。
と、そこへ、
「あの――……」
「……あ、はい。なにかございましたかぁ？」
いつもの調子を取り繕って返答したフローラに、部屋に入ってきた家の主人――村長の兄である男性が、少し怪訝そうな色を表情に浮かべて答えた。
「他のお二方は、なにか用を足してらっしゃるのでしょうか？」
「……どういうことだ？」
パチン、と甲高い音を立てて、赤銅色の刀身が鞘に納まる。
見上げたレアスの目は厳しさを纏っていた。
「い、いえ、それが……」
子供とはいえ圧倒的な威圧感を秘めるその瞳に、主人はほんのわずかにたじろぎながら答える。
「他のお二方がまだ戻ってこないと、家の者がやってきましたので……」
「……！」
瞬間、その場にいたカノンのメンバーたちに同様の緊張が走った。
「まさか……隊長」
フローラの言葉に、全く同じことを考えていたレアスは唇を軽く噛んだ。
「ちっ……だが、サイラスの野郎に見張りを命じたはずだぞ？　あいつはバカじゃねえ。たとえティースの奴が俺の命令を無視してそのかしたとしても、それに安易に協力するなんてこと絶対にねえはずだ」
だが、そこへヴィヴィアンが、他の二人に比べれば冷静な様子で

口を挟む。
「……あるいはサイラスくんが率先して救出に向かったのかもしれんな」
「なんだと？」
その言葉にレアスは苛立ちを隠しきれない様子で、ヴィヴィアンに食ってかかった。
「けど、あいつ、さっきは何も言ってなかったじゃねえか！」
「彼はティースくんと違って隊長の立場を理解していた。だから反対されるのがわかっていて敢えて口にしなかったのかもしれんよ」
「じゃあ……二人は……森に――？」
不安げなフローラの言葉に、一同は沈黙した。
それは、その彼女の不安がおそらく事実であると、全員が認識していることの証明でもあったのである。

太陽の残光がほぼ見えなくなりかけていた頃、村の近くに繁る広大な森、その村にごく近い付近――おそらく村からは歩いて十五分ほどだろう。
その場所には今、おびただしい血の臭いが充満していた。
「キィィィィッ！！」
まるで猿のような雄叫びをあげて、そして猿とは思えない、成人男性ほどの体格を持つ獣が太い木の枝から飛んだ。
めがけた先は、血にまみれた剣を携える一人の男。
スタイリッシュな服装に身を包んだ男は、しかし返り血にその姿を汚し、髪にも、顔にも殺戮を繰り返した跡がこびりついていた。
足下、そして周囲に伏すのは数匹――いや、十数匹もの獣たちの死骸。
“地の七十三族”……知識のある者たちからはその名で呼ばれる、最下級の魔に分類されるものたちの大量の死骸だった。

飛びかかった魔に、男の鋭い視線が走った。
同時に煌めいたのは、まるで一陣の風のように研ぎ澄まされた太刀筋。
獣の爪もまた男の体を狙って振り下ろされた。
人の世界に住む獣たちとはまるで異質の頑丈で鋭い爪は、人の体など易々と引き裂いてしまう威力を秘めている。
だが――
「キィィッ！！？」
おそらく驚きの意志を込めたのであろう鳴き声が、森に木霊する。
一瞬の間も持たずに、鮮血が飛び散って森を汚した。衣服に、地面に、同族たちの遺骸に、汚れた血が染み込んでいく。
（すっ……すごい……）
それほど深くはない木々の隙間から、太陽に代わって月の光が顔を覗かせ始めている。
鬼気迫るその姿を、ティースは荒い息を吐きながら見つめていた。
彼の足下にも、先程苦労して倒した二匹目の“地の七十三族”が横たわっている。その剣は微かに血に汚れていたが、水のような煌めきを放つ刀身はまるでそれを拒否するかのように自らその血を弾き、すぐさま元の美しい姿を取り戻し始めていた。
「キィィィィ――ッ！！」
僅かに残っていた獣たちは、自分たちが決して敵わない相手だと悟るや否や、蜘蛛の子を散らすように逃げていく。が、現れた大半は、サイラスの足下に動かぬ骸となって横たわっていた。
――圧倒的だ。
「サイラス――……」
目を細め、獣たちの死骸を見つめるサイラス。
鬼気迫る。
怒りに燃える。
いや……そのどちらも正しくはない。
――冷酷に。そう冷酷に、サイラスの瞳は獣たちの死骸を射抜い

ていた。
ピッ……と、新たに微かな血が森に飛び散る。
サイラスが剣の血を払い、それを地面に突き刺したためだ。
その瞳は徐々にいつもの彼の姿を取り戻し始めてはいたが、まだ声を掛けるのが躊躇われる雰囲気だった。
そして――サイラスは足を向ける。
傍らで意識をなくしている少女の元へ。
……いや。
「可哀想に……」
少女は動かない。
いや……動くはずもない。
泥に汚れた洋服。サイラスの腕の中で安らかに目を閉じた姿。
それだけなら、まるで遊び疲れた子供のようにも見える。
背中に――その背中に、骨が見えるほどに引き裂かれた無惨な傷さえなければ。
必死に逃げたのだろう。赤い靴は片方が脱げ、膝や脛は擦りむけていた。
そばに散っているのは、おそらく彼女が摘んできたのであろう、血に汚れた美しい一輪の花――
「っ……」
胸に熱いものがこみ上げ、ティースは思わず目を背けそうになる。
だが、そんな自分を叱咤し、サイラスの一挙一同を、そして無惨な姿で見つかった少女を見つめ続けた。
見つめ続ける必要があると、そう思った。
「ごめんな、リズ」
そっと、サイラスは泥に汚れたリズの額に口づける。肩を優しく抱き寄せ、まるで愛おしい者を気遣うかのように、その髪を撫でた。
「いつか、もっともっと強くなって、きっと君たちを守れるようになってみせる。……だから今は、君を助けてあげられなかった俺を、どうか許してやってくれ……」

「……」

ティースはそんなサイラスの姿に、涙をこらえきれなくなった。

怒り？　悲しみ？　哀れみ？

（……違う）

そのどれとも違っている。

（俺も――）

それは“共感”とも“憧憬”とも取れる感情。

彼のようになりたい。いや、彼の目指す道を同じように目指したい。

ティースの胸に溢れていたのはそんな想いだ。

……サイラス自身は“復讐”とか“罪滅ぼし”とか言ったが、たとえきっかけがそうであったとしても。今の彼は違う。今の彼は確かに、魔に襲われる人々を助けるために、そんな人々のために戦う存在だった。

そんな彼の姿にティースは共感し、触発されたのだ。

「俺も――」

剣を握る手に力を込め、サイラスに向かってティースは口を開いた。

サイラスがゆっくりと彼を振り返る。

それに向かって、ティースは思いの丈を口にした。

「俺も、いつか――」

そのときだ。

ティースを振り返ったサイラスの表情が険しさに染まったのは。

「え……？」

同じように視線を背後に向けたティースの視界にも、彼の捕らえていたものが映った。

数メートル先に姿を現していたのは、一振りの剣を携えた一人の男。

一人の男？

ティースはそう思ったが、その認識には付け足すべき言葉がある。

「なるほどー……お前たちが噂に聞くディバーナ・ロウってやつか」
男の声にはどこか楽しそうに響きがある。
頬が痩けて顎が尖った輪郭。目は細く少しくぼんだ感じで全体的に病的な印象を受ける。
そして、どこかが違う。
目、鼻、口……いや――耳だ。
「どうやら黒幕がいたらしいな」
リズをゆっくりと地面に横たえ、サイラスは立ち上がった。
「人型の魔が関わっていたか……しかもどうやら上位族だな。なるほど、隊長はこれを懸念していたわけだ」
（耳の形が……違う）
そう。ティースも知っていた。
その奇妙に先の尖った耳こそが、魔であることの証だと。
「ティース、下がってろ。人型はまだお前には荷が重すぎる」
「サイラス――」
「はっきり言うと、邪魔だ」
「っ……」
そう言われてティースは引き下がるしかなかった。
……サイラスの実力はこれまでに何度も目にして承知していたし、二人がかりというのは有利そうに思えてその実、仲間に切りつける危険があるため、よほど息が合っていないと難しい。ティースとサイラスの実力差を考えるなら、サイラス一人の方がやりやすいに違いないのだ。
「……」
無言で前に出たサイラスの瞳に、先ほどの冷酷の炎が再び灯っていたのをティースは見た。
いや、もしかしたら先ほどよりも強いかもしれない。
……人の想いを踏みにじる魔に対する、冷たい怒りの炎。
それはきっと、友人を見捨てた自分を責め、魔に踏みにじられた人々を見つめ続け、そして辿り着いた彼の生きる道。

ティースの胸に言い知れぬ熱いものがこみ上げてきた。
――この人のようになりたい。
サイラスの背中を見つめるティースの中は、そんな想いで一杯だった。
「ほっほう」
現れた魔は、相変わらず楽しそうに戯けている。
「ディバーナ・ロウってのは自信過剰な奴らが集まっているのかなぁ。キミがボクに勝てるとでも？　ムリだね。ムリムリ」
「そう思うのなら、やってみるといい」
サイラスは剣を抜き放ち、稽古でなんども見せた構えを取る。
ティースをまるで寄せ付けず、隊長のレアスですらも何度か退けたその剣技。それが決して自信過剰などではないことをティースは知っていた。
そしておそらく、彼が勝つであろうことも。
（こいつが……こんな人が……あんな卑劣な魔に負けるはずがない……）
「償わせてやる。この子の痛みを、思い知れ――」
そして全身から静かな闘気を迸らせ、サイラスは地面を蹴った。

「……どうするもこうするもねえだろ。ほっとけよ」
「隊長……本気ですか」
レアスの発言に、フローラは眉をひそめた。
残光の微かに残る部屋の中を、重苦しい空気が支配している。
レアスは先ほどよりも苛々した様子を隠しきれないまま、吐き捨てる口調で言った。
「ティースの野郎だけならともかく、サイラスが一緒なら雑魚程度どうにかしやがるだろ。たとえ何かあったって、そんなもん奴らの自業自得だ」

「さっきも言ってたが、隊長。その“何か”ってのに心当たりがあるのかね？」
「……」
ヴィヴィアンの問いに、レアスは腕を組んだまま壁に身を預け、それから微かに唇を噛むと、
「……今まで大人しかった奴らの活動が急に頻繁になったってのがな。偶然ってことも考えられるが、奴らを統率する知能を持った魔――人型の魔が出てきたって可能性がある」
その言葉にヴィヴィアンは納得顔をした。
「人型の……なるほど。隊長が慎重だったのはそのためなのだな」
「それが下位族ならまだいいけどよ。上位族や、まして将族だったりすれば、こっちも万全の体勢で挑まないとなんねえ」
ヴィヴィアンは少し考え、それからチラッと窓の外へと視線を伸ばして、
「もし隊長のその心配が現実だったとするならば、サイラスくんたちの命運はどうなると思うね？」
「……下位族なら問題ねえ。上位族なら相手次第。将族なら――」
「今のサイラスくんでは歯が立たない、と？」
「剣技は申し分ねえ。けど、あいつは――」
「……そうか。彼は今年もそれで合格に一歩届かなかったのであったな」
そんな二人のやり取りに、フローラはますます不安の色を濃くした。
「本当に……二人を追いかけないつもりなのですか、隊長……」
「知るかよ。それに将族が姿を見せることなんてそんなにあるもんじゃねえ」
「ま、本当に人型の魔が関わってるかどうかも定かではないのだしね」
「……」
再び、重苦しい空気が部屋の中に充満する。

太陽はその姿を完全に山間の中へと隠そうとしていた――

一閃。

刃の輝きが月の光を反射し、宙に踊る。

戦いはティースの予想通り、サイラスが圧倒的だった。彼の冷徹に研ぎ澄まされた剣技の前に、魔は防戦一方でしかなかった。

「なるほど……キミは人間にしてはいい動きをする……」

魔は肩で大きく息をしながら、呟く。

「……けど、それではダメだなぁ」

その瞬間。

薄暗い森の中に、血が飛び散った。

（な――!?）

スローモーションのように訪れたその光景を、ティースは信じられない想いで見つめていた。

「くっ――」

サイラスの膝が折れる。

左肩から流れる血が、服を汚し、さらに獣の血に汚れた地面へと吸い込まれていった。

「サイラスっ!?」

ティースには信じられなかった。

戦いは、間違いなくサイラスが優勢に進めていたのだ。動きも、剣技も、そしておそらくは戦いに込めた意志も、その全てがサイラスの勝利を示していた。

実際、魔は彼の攻撃に為す術もなく、防戦一方だったのだ。

それが――崩れたのは一瞬。

それは甲高い音とともに訪れた。

宙を舞い……サイラスの“折れた”剣先が地面へと突き刺さって。

魔は口元に嫌らしい笑みを浮かべ、そして言ったのだ。

「人間は学習能力が低いねぇ。剣技だけではボクたちに勝てないと、過去に何度も学んでいるはずじゃ――」
その瞬間、サイラスの懐から、一陣の煌めきが放たれる。
「っ！？」
それがバックステップを踏んだ魔の頬をかすめ、そこから一筋の血が流れ落ちる。
サイラスは左腕をだらりと垂らしたまま、素早く踏み込んで右手のナイフを繰り出していく。
だが、魔が驚愕の表情を浮かべていたのは一瞬のこと。
「頭が悪いな、キミは」
魔の瞳が輝いたように見えた。
その瞬間、その体に伸びていたナイフの刃先が甲高い音を立てて砕け散る。
「その程度の破魔具とキミ程度の聖力じゃ、ボクの魔力の壁を突き破ることはできないよ」
同時に、サイラスの太股から新たな血が飛び散った。
「……ぁぁぁぁっ！！！」
ついにその口から悲鳴が漏れる。
「サイラスっ！！」
――信じたくはなかった。
だが、ティースの眼前に広がったのは紛れもない現実。サイラスの敗北は、誰の目にも明らかだった。
技術の差でもなく。気持ちの差でもなく。――ごくごく単純な、力の差によって。
それは絶望的な、現実だった。
「貴様ぁぁぁぁっ！！」
ティースが弾かれるように地面を蹴った。抜き身の剣を両手で強く握りしめる。
――水のように美しく、風のように鋭い刀身を持つ神剣“細波”
彼自身も自覚していない、彼の持つ秘めた強い聖力によって、そ

れは圧倒的な力を秘め、圧倒的な破壊力を込めて、一直線に魔の体へと向かっていった。

だが――

「キミの方は、それ以前の技術が足りてないな」

魔の姿はティースの眼前で消えた。

「!?」

感じた悪寒に、ほぼ無意識に地面を蹴って後ろに飛ぶ。

直後、ティースの胸の辺りに熱い感触が走った。

「っ!!」

かがんだ体勢から伸び上がるように滑った魔の剣先が、ティースの胸を薄く切り裂いたのだ。

「ティース……!!」

血塗れの左肩を押さえ、サイラスが何とか立ち上がろうともがいていた。

だが、その出血はかなりの量だ。下手をすれば――いや、そのまま長時間放っておけば、間違いなく死に至る出血だった。

「サイラス！　……くそぉおっ!!」

ティースは再び剣を握りしめ、魔の動きに集中する。

（見える……はずだっ!!）

完全にティースに照準を絞った魔は、畳みかけるように攻撃を仕掛けてくる。

刃の長さはほぼ互角。だが、決して洗練されたとは言い難い剣筋は、それでも常人の枠から逸した鋭さでティースに迫った。

「――く……ぁっ!!」

まるで風を相手にしているかのようだった。

ただ空気を切り裂く音を頼りに、ほぼ無意識に反応する体の動きだけで受け、払い、そして避ける。

避けきれなかった攻撃が、彼の体に無数の傷を植え付けていった。

徐々に思うように動かなくなってくる体、全身を襲う痛み……そして、

（これじゃ……どうしようもない――）
精神的な疲労。
ティースにはもはや為す術がなかった。
魔に対する怒りも。
サイラスを助けたいと願う気持ちも。
その全てが、この力量差の前では完全に無力だった。
（どうすれば――）
そして一瞬の気の緩み。
「！？」
ピッ、と顔に血が飛んだ。
同時に焼け付くような痛みが右肩を襲う。
「っ……ぁぁぁぁっ！！」
まるで焼けた石を肩にあてられたかのよう。……そこが切られたのだと認識するまでには、またもう少しの時間が必要だった。
そのまま、地面を埋め尽くした獣の死体に足を取られ、もつれて後ろに倒れ込む。
「っ……！」
背中に当たった冷たい幹の感触に、ほんの一瞬だけ息が詰まった。
ティースの腰にぶら下げていた水筒の蓋が外れ、肩から流れた血と混ざって地面に吸い込まれていく。
剣は転んだ際に手から離れていた。
「ふふ、もう終わりかぁ」
勝利を確信したのか、嵐のような攻撃は止んでいた。そのまま、魔はゆっくりとティースに近付いてくる。
「くっ……」
「では……身の程を思い知りながら死ぬんだね……」
魔が剣を振り上げた。
「っ！！」
ティースは咄嗟の判断で、腰にぶら下げていた小袋を水に浸し、投げつけた。

「……？」
魔がそれに気を取られた一瞬。
「なっ、これは――！？」
その袋から突然煙と派手な破裂音が飛び出す。
――それはティースが出発間際、ファナから受け取った煙玉だった。
（今だっ！！）
ティースは下半身に力を込めて立ち上がると、そばにあった剣を拾い上げ、真っ白に染まった視界の中、サイラスのいた場所まで駆けていく。
「ティース……」
「しっかりしろ、サイラスっ！！」
自ら止血しようとしたのか、左の肩口と両太股は布のようなもので縛ってあったが、それでも血が止まっている気配はない。近くで見ると、どうやら傷口はかなり深い。
意識も朦朧としてきているようだ。
（ああ……）
それを見て、ティースは激しく後悔した。
……あのとき、どうしてレアスの言葉にもっと耳を傾けなかったのか。自分が冷静になっていたなら、自分がもっとその言葉の意味を深く考えていたなら、あるいは命令を無視して森に向かおうとしたサイラスを引き留めることができたのかもしれない、と。
だが……それは今更考えても詮無きことだった。
「ティース……俺はいいから――」
その言葉には耳を貸さず、ティースは剣を腰の鞘に収め、左腕一本だけでサイラスの体を背負う。
（悔しい……悔しいけど、でも今は逃げるしか――）
だが、
「くっ……」
背中の重みにティースの膝が折れる。ズキズキと右肩が痛み、そ

こから新たな血が溢れ出した。
「くそっ……こんなことで――！」
「ティース！　その怪我じゃ無理だ……だから……」
「……っ！」
ティースは耳を貸さない。
もちろん、彼を見捨てて自分だけが逃げるなんてこと、できるはずもなかった。
（絶対に、死なせない……っ！）
震える両足に力を込め、そして地面を蹴る。崩しそうになるバランスを必死に制御し、デコボコの土に足を取られそうになりながらも、ティースは懸命に走った。
「ティー……ス……」
背中のサイラスは半分意識をなくしているようだった。が、彼はそれでも、まるでうわごとのように繰り返す。
その目から、悔し涙を流しながら。
「……くそっ……もっと……もっと強くならなきゃ……！」
「……」
――もっと強く。
（そうだ……もっと強くならなきゃ……）
その言葉は深くティースの胸にも刻まれていた。
（強くならなきゃ――）
「――逃がさないよぉ」
「！？」
背後から聞こえたのは、絶望の声。
振り返って剣を抜く暇もない。
（――殺される……）
ティースは感覚でそれを悟っていた。
すぐ背後に、凶刃が迫っている。
一瞬の間に、さまざまな光景が走馬燈のように脳裏に走った。
（俺は……死ぬわけには――！）

それもまた咄嗟の判断だった。
腰にぶら下げていた残りの袋を全て、振り向かずに放り投げる。
「ちっ、また――！？」
背後の気配が動きを止めた。
距離が離れる。
……もちろんティースが投げたのは煙玉などではなく、ただの薬草が詰まった袋だ。
おそらくはそれもほんの僅かな時間稼ぎにしかならないだろう。
（どうすれば……どうすれば――！！）
ズキズキと右肩が痛む。足が地面につくたびに膝が折れそうになる。右肩は真っ赤に染まり、左肩はサイラスから伝った血でやはり真っ赤だ。それが手の方にまで伝ってきて、支える左手が何度も滑りそうになった。
（どうすれば……）
「小賢しい真似を……！」
再び背後に迫る凶刃。
（どうすれば――）
――どうしようもない。
今度こそ、逃れる術はなかった。
（ああ……）
足がもつれる。
ティースの体力もまた、すでに限界だった。
闇色に染まった木々。
体を包み込む生ぬるい風。
見上げた空に、不気味な姿を浮かべる月。
そして――迫り来る風切り音。
……ヒュッ！！
それは絶望の音を立ててティースに迫り、そして――
「……？」
それはティースの前方――森の暗闇の奥から迫ってくると、その

脇をすり抜け、地面に甲高い音を立てて着弾した。
「ちっ……」
背後で、魔が足を止めた気配がする。
（え……？）
魔の足を止めた“鞭”のようなものは、再びティースの脇をすり抜けて持ち主の元へと戻っていった。
「……ティースくん！　しっかりしたまえっ！！」
朦朧とする意識と眼前に迫り来る地面。
その中で、ティースは確かに仲間たちの声を聞いていた。
「二人ともひどい怪我だわ……隊長！」
「フローラ！　ビビ！　てめえらは二人を連れて村へ戻れ。――急げ！！」
（ああ……）
幻覚か、現実か。
それすらも今のティースには判断できなかった。
「仲間が来たかぁ……ほほう。今度のは随分とちびっこいが、少しは骨がありそうだ」
「隊長……」
ティース自身、それが言葉になっているかどうかわからなかった。
「気を付けて……そいつはサイラスでも歯が立たなかった――」
「行け！！」
燃えるような赤髪。背負った身長よりも長い剣に手をかける後ろ姿。
――そこから迸る、目に見えるほどの闘気。
（レアス……隊長……）
その光景を最後に、ティースの意識は闇へと落ちていった――

――静まり返った森の中で、二人は対峙している。

「ふふっ……さっきの二人はキミの部下かい？　ダメだねぇ、あの程度の実力でボクたちに喧嘩を売らせたりしちゃ」
「……」
剣の柄に手をかけたまま、レアスはその鋭い瞳で魔を睨み付けていた。
「おぉ、こわ」
そんなレアスに、魔は戯けてみせた。
「ま、それぐらいじゃないとボクも張り合いがない。ようやく本気も出せそうだ」
にやりと口元に笑みを浮かべ、血に濡れた刃をぺろりと舐める。
ジリッ……と、レアスの足指に力がこもった。
「てめえは……地の上位族だな」
「ほぅ、よくわかったねぇ。ボクは地の上位、アベイ族のグリフィル＝アベイ＝ウッドワードだ。……キミの名前も聞いておこうか？」
「レアス＝ヴォルクス」
レアスは答え、すぐに付け足した。
「名の由来は、“てめえを地獄に叩き落とす者”の意だ」
「ほう？　それは一体どこの言葉――」
魔……いや、グリフィルの言葉は最後まで続かなかった。
代わりにその口から溢れたのは、
「かっ――！」
「灰になって、土に還れ。てめえには――」
まるで世界を縮めたかのように、レアスの体はグリフィルの足下にまで移動していた。
そして、その手に握られた赤銅色の刃が、グリフィルの胸を貫いている。
――常識を越えた、瞬発力。特訓で見せていたそれをも、遙かに凌駕するほどの――
「てめえには……地獄の炎が相応しい……！」
赤銅色の刃が一際赤く輝いた。

“終末の炎”と刻まれた神剣“終炎”が、その力を解放する。

「――」

そしてそれはほんの一瞬。まるで稲光が輝くほどの一瞬の間。

断末魔の悲鳴が聞こえることさえもなく……グリフィルの体はレアスの言葉通り、跡形もなくその姿を消していたのだった。

その6『意志を継ぐ者』

ミューティレイク邸はその日の朝、いつもと少しだけ違う雰囲気だった。

「なにかしら……？」

その日、いつものように自室で朝食を終えたシーラは、学園が休みだったこともあり、書庫へ向かおうと階段を下りていた。

微かな違和感を感じたのはそのときである。

そして彼女はその要因――見知った使用人の少女、フィリスが、玄関ホールでほんの少しだけ青ざめて、目の前にいる一人の少女に問いかけている光景を目にした。

「それは……間違いないんですか？」

「まだ情報が混乱してるからわかんないけど、ほぼ間違いないみたい」

そこにいたのもやはりシーラが知っている少女。いつものラフな格好ではなく、まるでアオイのような正装を身につけたリディアだった。

「……」

その近くを通るときに少しだけ耳を傾けたが、シーラはすぐに自分には関係のないことだと判断して通り過ぎる。

……と、そのとき。

「どうも、ティースさんの方もひどいみたいで――」

「……」

「――あ」

振り返ったシーラと、リディアの視線が交錯した。

「……シーラさん」

どうやら彼女はシーラの存在に全く気付いていなかったらしい。

「なに？　ティースがどうかしたの？」

「あ、えっと……待った、シーラさん。まだ確実な情報じゃないか

ら――」
手を振ったリディアは慌てているというほどではなかったが、その態度は確かに不自然だった。
シーラは眉をひそめて視線を鋭くすると彼女に向き直り、有無を言わさぬ口調で言った。
「いいから答えなさい、リディア」
「あ、あの……」
その後ろでフィリスが遠慮がちに口を挟んでくる。
「シーラ様。それについては後で、正確な情報を――」
「黙りなさい。私はリディアに尋ねているのよ」
「は……はぃ……」
その剣幕にフィリスは怯えたように口を噤んだ。
これでもフィリスはシーラと同い年――産まれた日付で言えば若干年上なぐらいだったが、どうやら性格上、彼女に太刀打ちするのは不可能なようである。
「……うん」
やがて、リディアは観念したような表情をすると、
「わかったよ。あ、フィリスさんは仕事に戻ってて。あたしが説明するから」
「は、はい……」
フィリスが去って、リディアは改めてシーラに向き直る。
「まず先に言っておくけど、これはまだ正確な情報じゃないかんね」
「ええ、構わないわ」
頷いて即答したシーラにリディアは頷いて、それから言葉を続けた。
殊更に淡々と。
「少し聞こえたかもしれないけど……あたしが聞いた限りだと、どうもティースさんとサイラスさんが、魔と戦って大怪我をしたらしくて」
シーラの眉が少しだけ動く。

「大怪我というのは、どの程度？」
「詳しいことはわかんない。でも、大怪我ってことはヘタしたら生死を彷徨うぐらいだと思う」
「……」
そのときシーラの表情を過ぎったのは、紛れもない不安の色だ。
それがティースの生死に関しての不安だったのか、それとも全く別のものだったのか、リディアには判断できなかった。
そしてすぐに付け加える。
「あくまで未確認情報だかんね。……あ、あたしが話したってことは内緒だよ。本当ならディバーナ・ロウに深く関わってる人しかまだ聞いちゃダメな話だか――……ちょっとシーラさん？　聞こえてる？」
「え……ああ」
床の一点を見つめて考え込むようにしていたシーラだが、その呼びかけにすぐ我に返ると、
「ええ、わかったわ。悪かったわね、リディア。無理に聞いたりして」
「うん。ま、シーラさんは関係者みたいなものだしね。……ね、何度も言うけど未確認情報だかんね」
「気を遣わなくても大丈夫よ」
口調はいつものまま、シーラはその端正な顔を僅かに緩め、静かに微笑んだ。
「別にショックを受けているわけじゃないわ。こうなる可能性があるのは、最初からわかっていたことだもの」
「……」
無言のリディアに背を向けて、シーラは階段を上っていく。
背筋を伸ばして凛とした姿はまるでいつもと変わらないように見えたが……そんな後ろ姿にリディアはため息を吐くと、呟いた。
「……笑い方、前と全然違うじゃん」
そのまま彼女は執務室の方へと足を向けていく。

そして、
「ああ、フィリスさん。……ちょうど良かった」
途中、遠くから様子を窺っていたフィリスと鉢合わせたリディアは、彼女を呼び止めると、
「さっきの言葉撤回。悪いんだけど、今日一日、それとなくシーラさんの様子を見ててくれないかな？」
「え？」
きょとんとした顔のフィリスに、リディアは詳しい説明をすることはなく、
「あたしの思い過ごしだとは思うんだけどね。あの人、もしかしたらとんでもない“旋毛曲がり”かも」
「？　あの……それはどういうことですか？」
「いいからいいから。今日はどうせあたしがファナさんにずっとついてることになるし、仕事ほっぽっといていいから、お願い」
「はあ……」
それでも文句を言うことなく、フィリスは頷いた。
満足してリディアは再び歩みを再開する。
新しい情報が入っていないかを確認するために。
（二人とも無事なのが一番だけど……）
この、屋敷に漂う重苦しい雰囲気にだけは、さすがのリディアも未だに慣れることができなかった。

ティースが目を覚ましたとき、最初にその視界に入ったのは薄明かりに照らされた天井だった。
「う……」
口から自然とうめき声が漏れ、そばにいたフローラがそれに気付く。
「ティースくん？　大丈夫？」

「こ……こは……？」

ティースの頭の中はまだ混濁としており、状況を把握できていない。

「フローラさん……？」

ベッドの横にいたフローラに気付き、そしてティースはゆっくりと室内を見渡した。

そこは見覚えのある……彼がこの村にやってきて一日の宿を借りた家である。外は雲に覆われて時間がわかりにくかったが、早朝というには遅く、昼というには少々早いぐらいの時間だろうか。

そしてティースは、自らの肩に巻かれた包帯、そしてそこを襲う断続的な痛みに自分の状況を思い出していた。

「つっ……フローラさん……あれからどうなったんですか……？」

体を起こそうとするティースを押しとどめ、フローラは静かに答えた。

「心配ないですわよ……例の魔は隊長が退治してくださいましたから」

「そう……ですか……」

その事実に安心し、ティースは再び体を布団に預ける。

（さすが……隊長だ）

サイラスですら太刀打ちできなかったあの魔を倒してしまったのだ。やはりデビルバスターの名は伊達ではない……と、ティースは改めて感心した。

（俺も、もっと強くならなきゃな……）

カタカタという音は、フローラが手元で何かをかき混ぜている音だった。微かに草の匂いがするところから、どうもティースのために薬を作っているらしい。肩の痛みは決して軽くはなかったが、ひとまず全てが落着したということにティースは安堵の息を吐いて、それから改めてフローラに質問する。

「そういやサイラスの奴は？　もう目覚めてるんですか？」

「……」

フローラは無言のまま、ティースではなく後ろを振り返った。ちょうど玄関から聞こえた音は、どうやら誰かがこの家に入ってきた音らしい。

「フローラさん？」

「ええ……そうですわね」

フローラは改めてティースの方に向き直ると、膝の上に手を重ね、背筋を伸ばし、眼鏡の位置を軽く直して、そして言った。

あまりにも、あっさりとした口調で。

「サイラスくんは今朝方、亡くなられましたわ」

「……え？」

その一瞬、ティースの思考は停止した。

――言葉が耳の奥で止まり、そこで燻っているような感覚――

だが、それには構わずにフローラの言葉は続く。

「手は尽くしましたが、肩の傷も太股の傷もあまりに深く、出血が多すぎてどうにもできない状態――」

「ちょっ……ちょっと待ってよ、フローラさん！」

淡々と続いたフローラの言葉は、まるで冗談のようにティースには聞こえていた。

「やめてくれよ、そんな縁起でもない冗談――」

「冗談？　……冗談ですって？」

空気が止まった。

そして一瞬の後……それが突然に弾ける。

「冗談で……冗談でこんなこと言えるわけないでしょっ！！！」

「っ！？」

叫んだフローラの語尾が、微かに歪んで乱れた。

そして、それまで淡々としていたのが錯覚ではないかと思うほどに、その目から涙が溢れ始める。

「……私にはどうにもできなかった！　だって仕方ないでしょう！？　どうにもできない状態だったの！　見ているしか……彼の命が手の平からこぼれ落ちていくのを見ているしかなかったんだからっ

！！！」
「――」
「どうしようも……なかったんだから……！」
ティースは呆然とした。
震えるフローラの手から木製のすりこぎが落ちて、床に乾いた音を立てる。
「っ……うっ……！」
口に手を当て、そして糸が切れるようにフローラは泣き崩れた。
「……フローラ……さん」
「……」
その向こう……部屋の入り口にいつの間にかレアスの姿があった。
その表情はいつも通り――いや、いつもにも増して厳しく、そしてフローラを見つめる目には微かな哀しみの感情が浮かんでいる。
それは――もはや疑う必要のないことではあったが――フローラの言葉が真実であることを嫌というほどティースに実感させていた。
「隊長……」
「今、サイラスの遺体を埋葬してきたところだ。てめえもあとで行ってやりゃいい。……フローラ。あんたはそろそろ体を休めた方がいいんじゃねえか？」
「っ……！」
フローラは泣き顔を伏せたまま、レアスに背中を叩かれ、足取りも頼りなく部屋を出ていく。
だがその泣き声は、いつまでもティースの耳の中に残ったままだった。
「……サイラスが……死んだ……？」
それはティースには到底信じられないことだった。だが……この重苦しい沈黙。そしてレアスの表情も、フローラの涙も、その全てが疑いようもない真実だった。
そして歩み寄ったレアスが、トドメの一言を発する。
「冗談でも夢でもねえ。あいつが死んだのは紛れもない事実だ」

「そんな……だってあいつが死ぬはずが――」
自然と声が震え、肩を打ち振るわせ、そして直後、
「死ぬはず……ない……」
ティースの目にも熱いものがこみ上げて、頬を流れた。
同時に彼を襲ったのは、限りない後悔だ。
「……俺だ。俺があいつを助けられなかったから……俺が考えもなしに森になんて入り込んだから――！」
パァン！！！
「っ！」
直後、甲高い音が部屋に響いた。
ティースは自らの頬を襲う痛みを覚え、そしてようやく自分がレアスの平手打ちを喰らったのだと認識する。
「……隊長……？」
レアスは彼を思いっきり睨み付けた。
「寝ぼけたこと言ってんじゃねえぞ、ティース。てめえに責任なんかあるもんかよ」
「隊長……だって、俺――」
涙目のまま呆然とするティースに、レアスは吐き捨てるように言い放った。
「あぁ？　だったら何か？　サイラスはてめえごときにそそのかされて、てめえの意志に流されて、それで命を落としたって言いてえのか？　……違うだろうがっ！！」
「！」
「あいつはそんな意志の弱ぇ奴じゃねえ！　あいつはあいつの意志で助けに行った！　あいつの信念で助けに行った！　……違うのかよ！！」
「……」
確かに事実はレアスの言うとおりだった。
だが――
「けど……俺はあいつなら大丈夫だって……止めることもしないで、

それどころか喜んでついて行ったんだ……だから――！」
「……はっ。てめえが止めたところで、あいつが立ち止まるかよ。……あいつにはものすげえ信念があった。てめえごときに止められるもんかよ。……力ずくででもあいつを止められたのは……この俺だけだ」
「……」
一瞬、レアスの表情が歪んだように、ティースには思えた。
だが、それはほんの一瞬の間。
レアスは唇を噛みしめ、そして続けた。
「……ティース。てめえが自分を責めるだけなら、んなもんはてめえの勝手だがな。それは同時にあいつの行動を、あいつの信念を、あいつの意志を侮辱する行為だ。……それは絶対に許さねえ」
「あいつの……意志……」
「命令違反は命令違反だ。それはてめえに償ってもらう。けど、サイラスのことはあいつ自身と、そして隊長である俺だけの責任だ。……繰り返すぞ、ティース」
最後に、レアスの指先がティースの眼前に突きつけられた。
「以後、てめえがあいつのことで自分を責めるのは、あいつの意志を侮辱する行為だ」
「……」
（あいつの……意志――）
背中を見せ、遠ざかっていくレアスの姿を眺めながら、ティースはその言葉を頭の中で繰り返していた。
彼の持っていた意志。
魔に脅かされる人を一人でも多く救いたい――
（……サイラス）
目の奥からは新しい涙が溢れてきていたが、それは先ほどまでとは少しだけ意味が異なっていた。
後悔ではなく、純粋な悲しみの涙。
……ほんの短い間。それでもティースにとっては憧れ、そして共

に同じ道を目指したいと思った友人の死。それは彼にとって、涙を流さずにはいられない出来事だったから。

（サイラス……俺――）

痛む体を押して、フラつきそうになる足を壁に手を当てることで支え、初老夫妻の協力を丁重に断って、ティースは外へと出ていく。

今にも泣き出しそうな空の下、サイラスの墓は、彼が助けようとした少女のものと並ぶように作られていた。

「身寄りがない方とのことだったので……娘のものと一緒に、私たちが守っていこうと思うのです。……よろしかったでしょうか？」

そこに佇んでいた村長夫妻も、同じように目を赤く腫らしている。

ティースは彼らを見て、そして頷いた。

「ええ……彼も喜ぶと思います」

墓を飾っていたのは、数本の硝子花。決して墓に添えるような種類の花ではなかったが――それでも、それを飾った村長たちの気持ちはティースにも充分に想像できる。

目を閉じて、ティースは二つの墓の前に膝をついた。

瞼の奥から、再び涙がこみ上げてくる。

ゆっくりとその口が開いた。

「サイラス、俺は――」

そして冷たく吹きすさぶ風が、彼の決意を乗せて運んでいく。

空の向こう側へと――

ディバーナ・カノンがミューティレイク邸へ戻ったのは、それから二日後のことだった。

サイラスの訃報は一足先に屋敷に伝わっており、悲しむ者はすでに涙を流し終え、ひとまず――表面上は――重苦しい空気が収まりかけている……そんなミューティレイク邸、別館の執務室。

そこには四つの人影がある。

「報告ご苦労様です、レアス君。この後はゆっくり体を休めてください」
「ああ」
ディバーナ・カノンの隊長、レアス＝ヴォルクスはたった今、その総帥であるファナ＝ミューティレイクに報告を終えたところだ。
アオイの承認の言葉を受けて、レアスは退室していく。
それでこの件に関しては全て終わる……そのはずだった。
だが、
「さて、ティースさん」
その部屋にはファナとアオイの他に、もう一人いた。
「……」
少し強ばった顔で立っていたのは、いわずとしれたティースである。肩には包帯を巻いたまま、体中には治療の跡がしつこいほど残っているが、ひとまず歩くのに支障ない状態までは回復していた。
彼はレアスとともにここに呼び出された理由を聞いていない。命令違反についての解雇通告があるのかと思っていたのだが、どうも二人の態度はそんな雰囲気でもなかった。
「ティースさんを呼んだのは他でも――」
言いかけたアオイを、ファナの言葉が遮った。
「アオイさん。それについては私の方からお伝えしますわ。……ティースさん？」
「……」
直立のまま、ティースは机の向こうのファナを見た。
そんな態度に、ファナはそっと微笑んで、
「もっとリラックスなさってください。それではまるで、これから処罰を受ける方みたいですわ」
「？」
その言葉に、ティースは少しだけ驚きに目を開いて、
「……違うの？」
逆にファナが不思議そうな顔をする。

「？　どうして私がティースさんを処罰しなければならないのですか？」
「え……だって隊長がさっき言っていたように、俺は命令無視をして……その罰があるのかなって」
「それはレアスさんがお決めになることですわ」
微笑んだまま、ファナは机の上に載っていた一枚の紙切れを手に取った。
「今回お呼びしたのは、ティースさんにお渡ししなくてはならないものがあるからです」
「？」
「その前に、お話しなくてはなりませんね。……ティースさんは、出発前に遺書を書かれたことを覚えております？」
「あ、うん。そりゃ……」
ティースの答えに頷いて、ファナは手にした紙切れに視線を落とした。
いつもの暖かな声色が、ほんの僅かに陰を帯びる。
「……残念なことに、今回はサイラスさんが命を落とされてしまいました。ですから、私は彼の遺書を開きこうして手にしています」
「……あ」
サイラスの遺書。
それをティースは少し複雑な表情で見つめていた。
……遺書を残す相手がいない、と、そう口にしていた彼の姿が浮かぶ。
そして、ファナは言った。
「ティースさん。……サイラスさんの遺書には、あなたとシーラさんに関することが書かれておりました。ですからこうしてお呼びしたのです」
「……え？　俺と……シーラ？」
まるで彼と接点のないシーラの名前が出てきてティースは困惑する。

「要点だけお伝えしますわ」
そう言ってファナは遺書を広げると、ゆっくりと続けた。
「願いは二つ。一つ目には、シーラ＝スノーフォールが卒業するまでの学費の面倒を見て欲しいということ」
「……？」
だが、ティースの疑問は、続いたファナの言葉で全て立ち消えた。
「二つ目には、ティーサイト＝アマルナを解雇し、別の仕事を世話して欲しいということ……です」
「あ……」
その言葉の意味は、ティースには容易に理解できた。
「……あいつ――」
それは本気の願いだったのか、あるいは冗談混じりに書いたことだったのか。ただ、どちらにしても、彼がそれを書いて遺したことだけは紛れもない事実だった。
（……けど……サイラス。俺は――）
「私はこの願いを叶えて差し上げたいと思っています」
その言葉に、ティースは少し慌てて、
「ま、待ってくれ、ファナさ――」
「ですが」
すぐにファナは付け加えた。
真剣に、ティースの顔を真っ直ぐに見つめて、
「もちろん、こういうことに関しては本人の意思が一番大切です。ですから、あとはティースさんのお気持ち次第ですわ」
二組の視線がティースの返答を待っていた。
「……」
――確かにティースがここに来たのは、シーラの学費を稼ぐためだった。そしてサイラスがああいった遺言を残した以上、彼がここにいる理由はなくなったと言える。今まで通り、細々とした傭兵の仕事をこなしていれば、少なくともシーラを卒業させることはできるのだから。

だが、
「それは――」
それでも、ティースの答えはとっくに決まっていた。

「……ティース」
ティースが執務室を出ていくと、シーラがまるで彼が出てくるのを待ち伏せていたかのように――いや、実際に待ち伏せていたのだろう。扉の前に立っていた。
「シーラ？」
ティースは戸惑った。
何故なら、ここに来てからというもの、彼女が自ら会いに来たことなど……出発のあの日を除いて他になかったのだから。
「どうしたんだ、一体……」
そう尋ねたティースに、シーラは少しだけ躊躇って視線を泳がせた。
が、すぐに決心したように再び彼を見て、そして驚くべき言葉を口にする。
「ティース。……私、サンタニアを辞めるわ」
「……え？」
あまりにも唐突、あまりにも予測外の言葉に、ティースは呆気に取られてまじまじとシーラを見つめてしまう。
その意味をようやく理解して、彼が口にしたのはもちろん疑問の声。
「学園を辞める？　どうして急にそんな――」
「半年以上前から思っていたのよ。……考えてみたら私は女だもの。必死になって勉強なんかしなくとも、どっかで金持ちの男を見つければそれで済むわけじゃない？」
シーラは事も無げにそう答えたが、ティースは首をかしげずにいられなかった。
彼女が薬師になるという夢に対してどれだけの真剣で、どれだけ

情熱を注いでいたかティースは良く知っている。
――じゃあ、何故突然？
ティースの頭をそんな疑問が過ぎったのは当然のこと。
だが……それを考えるより先に口が反射的に開いていた。
「ダメだ」
「え？」
「急に辞めるなんてこと、俺は認めないぞ」
断言したティースの言葉がよほど意外だったのか、シーラは驚いたように目を丸くした。
彼が彼女にこうして反論すること自体が珍しい。その上、ここまで強硬な態度を取るのはさらに珍しいことなのだ。
シーラはすぐに我を取り戻し、目を細めた。
「お前は何を言っているの？　私が辞めるって言っているのよ。お前なんかにそんなことを言われる筋合いなんて――」
「……じゃあ言い直すよ」
ティースは少しだけ視線を落とした。彼女の剣幕に、いつものように屈したのかと思えばそうでもない。
「頼むから、辞めないでくれ」
「……」
頭を下げたティースに、シーラは困惑の表情を浮かべた。
ティースは続ける。
「気持ち悪いって言われるかもしんないけど……お前が自分の夢に向かって歩いてくれることが、今の俺にとっては唯一の励みなんだ。お前がそうしていてくれなきゃ、俺は自分の道を歩いていくのが辛くなっちまう」
「……なんなの、それは」
シーラは眉をひそめ、そして彼の発言を気味悪がる――かと思いきや、そうではなかった。
「お前の道？　……何のこと？」
ティースはゆっくりと顔を上げる。

「俺は……デビルバスターになりたい」
シーラはさらに困惑の表情を浮かべた。
「どうして？　だってお前は――」
「お金のこととか、お前のこととか、それとは別なんだ。……罪のない人を苦しませる魔が、どうしても許せないと思うようになった。傷つけられる人の苦しみも、残された人の悲しみも、どっちも理解できるようになったから」
「……」
「いや……本当はお前が魔にさらわれたあのときから、そうだったのかも」
シーラは視線を横に逸らした。
それがどんな心境だったのかティースにはわからない。苛々しているようにも見えたし、困っているようにも見えた。
そんな彼女に向かって、ティースはもう一度頭を下げる。
「……悪い。俺、本当はお前のことを一番に考えてやるつもりだった。お前の望みを叶えてやるのが俺の使命だと思ってた。でも……今回だけは、俺のわがままを許してくれ。その代わり……それ以外だったら、俺に出来る限りお前の望みを叶えてやるから」
「……」
「頼む」
シーラは何も答えなかった。視線もティースに向けようとはせず、眉を曇らせたまま。
……沈黙が下りた。
すぐそばの執務室からも物音一つ聞こえない。あるいはこの会話は、中のファナやアオイにも聞こえているのかもしれなかった。
「……ティース」
ようやくシーラが口を開いた。
頭を下げたままのティースに、その表情を見ることはできない。
だが、その声色から大体想像はできた。
きっとここ最近、彼が見たこともないような表情だ。

「聞いたわ。仲間が……死んだのでしょう？」
「……ああ」
「辛くはないの？　お前だって、そんな怪我をして……」
眉をひそめ、シーラはティースの右肩へと視線を止める。そこはまだがっちり固定されていて、全く動かすことのできない状態だった。
「そりゃ辛いけど、でも……それ以上に、なんていうか……」
ティースはそう答えながら、ようやくゆっくりと顔を上げる。
ようやく目の当たりにしたシーラの表情は、やはり戸惑いの色に染まっていた。
「……理由はきちんと言葉にできないけど、でも今回のことがあって、それでどうしてもやり遂げたいと感じたんだ」
「私が学園を辞めても？」
「それは……多分……」
「多分？」
不審そうな顔のシーラに、ティースは慌てて付け加えた。
「そ、そんなの実際にそうなってみないとわかんないだろ。お前が学園を辞めてどうするかにもよるしさぁ……」
「……ふぅ」
シーラは呆れ顔でため息を吐いた。
「つまりお前は私を学園に通わせたいとか、お前がデビルバスターになるとかだけじゃなく……どうしても私を学園に通わせて、その上でお前がデビルバスターを目指すって形にしたいわけね？」
「そ、そうなるかな……」
確かにその言葉が、ティースの気持ちを簡潔にそして正確に表していた。
ティース自身、自分の中に産まれた決意を大事にしたいという想いは強い。が、それと同じぐらいシーラに対する情熱も今まで同様に強かったのだ。
そして……再び沈黙が訪れた。

シーラは何事か考えるように再び視線を横に逸らし、ティースは黙って彼女の答えを待っている。
時間が止まったようにも思える、長い長い沈黙だった。
そして、ようやくシーラが口を開く。
「……そうね」
何事かを決心したような顔で、だけど口調だけはいつものように素っ気ないまま。
「そこまで言うのなら、好きにすればいいわ」
ティースの表情が輝いた。
「じゃ、じゃあ、学園を辞めないでくれる――」
「なにを言っているの？」
「……え？」
ドキッとして表情を硬くしたティースだったが、シーラの口から出た言葉は彼の不安とは全く逆のものだった。
「当たり前でしょう。理由もないのに、どうして辞めなきゃならないのよ」
「えっ？」
ティースは当然のごとく戸惑う。
「い、いやだってお前さっき――」
「それと……さっき、お前に出来ることなら、何でも私の願いを叶えてくれると言っていたわね、確か」
「……」
（な……なんなんだ……？）
ひどく理不尽な――彼女にとって都合のいい態度にティースは唖然とした。
（からかわれたのか？　それとも仕組まれたのか……？）
シーラはそんな彼の心境を悟ったのか、小さく鼻を鳴らして、
「心配しなくても、お前に過度の期待はしていないわ。私の願いはたったの三つよ」
「三つ……」

それが多いか少ないかは微妙なところだったが、少なくともそれでティースの望みが叶うのであれば安いものだと――理不尽ではあったが――少なくとも彼はそう思った。
「わかったよ……じゃあ三つだ」
「一つ目」
ティースの返事に、シーラは即座に言った。
「お前のその怪我が治ってからでいいから、ここでの食事はなるべく食堂を利用するようにしなさい」
「食堂？」
ティースは早速首をかしげた。
もちろん彼も、ファナからここの食事のシステムについては聞いたことがある。が、今までは特訓でヘロヘロだったこともあり、わざわざ食堂に行って食事をするようなことはなかったのだ。
とはいえ、意図はわからないまでも、その程度のことなら彼にとって何の困難でもない。
「ああ、わかった。そうするよ」
シーラは頷いて
「じゃあ二つ目。……私は良く知らないけど、ディバーナ・ロウには情報部隊のようなものが存在してるはずね？」
「え……ああ。“影裏”って部隊なんだけど……」
「じゃあそいつらに言っておくこと。……情報はもっと迅速、かつ正確に伝えるようになさいと」
「はあ……」
またシーラには直接関係がなさそうな要求で、これにもティースは首をかしげざるを得なかった。
「伝わるかどうかはわからないけど……一応、言っておくよ」
「三つ目」
最後の願いのところで、シーラが初めて言葉を切った。
どうやらこれが本命らしいと気付き、ティースもゴクリと喉を鳴らす。

（無茶な要求じゃなきゃいいけど……）
内心は不安でいっぱいだったが、それを表に出さないように彼は尋ねた。
「最後に……なんだい？」
「一年以内――」
もう一度言葉を切って、それからシーラは続ける。
「一年以内に私がお前にある要求をするわ。……お前は決して、それを断ってはいけない」
「……ま、待った！」
これにはさすがのティースも無条件に頷けなかった。
シーラはあからさまに不満そうに眉をひそめて、
「なによ」
「それって……つまり願いを先延ばしにするってことか？」
「ええ、簡単に言えばそういうことになるわね。……ただ、それは今すぐに実現できないことだからよ。内容はもう決まってる。変わることはないわ」
ティースは彼女の表情を窺うようにして、
「……それは俺に実現可能な願い事なんだよな？」
「おそらく可能ね。だってお前は何もしなくてもいいのだから。ただ、拒否することさえしなければ」
「……」
ティースにとって、その内容を予測することはあまりにも難解だった。
「な、なんかものすごく怖いんだけど……」
「心配しなくても、一生独身で過ごせとか呼吸をするなとか、そういう理不尽な願いじゃないわ」
「でもわざわざ約束させるってことは、俺が嫌がりそうな願いなんだろ？」
シーラははっきりと答える。
「ええ。嫌がるでしょうね」

「せめてヒントとか……」
さらに後込みする素振りのティースに、シーラは目を細め、有無を言わせぬ口調で言い放った。
「約束なさい、ティース」
「う……」
一応、躊躇ってはみたものの……どっちにしろ、彼の希望を通すためには、結局頷くしかないわけで。
（いくらなんでも、そんなひどいことは言い出さない……よな）
そんなひどく曖昧な希望的観測のもと、ティースは決心した。
「……わかった。約束する」
シーラは満足そうに頷くと、
「ええ。間違いなく約束したわよ、ティース。……それと」
ゆっくりとティースに背を向けた。
「当たり前だけれど、約束を果たす前に死ぬのは絶対に許さないから」
「そ、そんなの許さないって言われても――」
その言葉を遮るように、彼女は肩越しに彼を振り返ると、
「地獄まで追いかけてでも、必ずひどい目に合わせるわ。覚えておきなさい」
「……」
本気の目だ、とティースは思った。
思わず怯んでしまった彼は何も言い返せず……いや。
「でも、もしかしたら天国だったりするかも……」
「……」
「……なんでもない」
そしてティースの引きつった笑みは、すぐさまため息へと変わるのだった。
（妙な約束させられちゃったなぁ……）
遠ざかっていくシーラの後ろ姿に心の中でぼやきながら、それでもひとまずのところ、自らの希望が満たされたことに安堵して。

（さて、頑張らなきゃ、な――）

その誓いは、彼が本当の意味でデビルバスターへの道を一歩踏み出した証でもあった。

その7『そして、更なる試練』

ネービスの街は八月に入って猛暑が続いていた。大陸でも比較的北側に位置するネービスですらこの状態なのだから、南方ではおそらく記録的な暑さになっているに違いない。

街行く人々も薄手の服が目立ち、外で仕事をする者たちの中には上半身裸で働く者たちも少なくはない。

その暑さはミューティレイク邸の食堂もまた、例外ではなく――

「……ごちそうさま」

カタンとティースの隣りで席を立った少女は、早くも首筋にうっすらと汗を浮かばせ、頭のてっぺん近くで縛った長い髪を邪魔くさそうに揺らせていた。

「シーラ？　もういいのか？」

「食欲なんてないわよ……」

手を振って食堂から立ち去っていくシーラ。

（ま、そりゃあなぁ……）

彼女の気持ちはティースにも充分に理解できた。というより彼自身、体力を維持するために無理矢理詰め込んでいるという状態であり、少なくとも食が進む状態とは言い難いのである。

「シーラさん、相当参っておられるようですね」

「……みたいだね」

食堂の長テーブル、その短い辺のところに座っているのは屋敷の主人、ファナ＝ミューティレイクだ。今日は珍しくアオイの姿はなく、彼女の一番近くは空席となっている。

屋敷に来てから約二ヶ月。

ティースは相変わらず屋敷の人間とはあまり交流が――その余裕が――なかったが、一ヶ月前、シーラとの約束に従って毎朝の食事をここで採るようになってから、同じようにここで食事を採る面々とは知り合うことができていた。

（でも考えてみりゃ、最初からこうしていればシーラとだってもっと話ができたんだよなぁ）

主を無くした隣の席を眺めながら、ティースはそんな風に考えていた。

実際のところ彼のその認識には根本的な間違いがあるのだが、とにかく、こうすることによってシーラとの関係も以前より良くなっているように思えたし、彼にとっては良いことずくめだったのである。

さて、シーラが立ち去ったその場にはファナ以外にもう一人、ティースが新たに知り合った――毎日、毎朝、この食堂で食事を採っている人物がいた。

「でも確かにこの暑さは殺人級です……はぁ、食欲もなくなりますし、干物になってしまいそうです」

そんな言葉に、ティースはちょっと眉をひそめて、

「セシル……君、言ってることとやってることが違わなくないか……？」

「？」

不思議そうな少女――セシルに、ティースはその手元を指さして、

「いや、俺の目にはとてつもなく食欲旺盛に見えるんだけど……」

「――二十点」

「え？」

「ティースさん、赤点です」

「いや、だからなにが……」

フォークとスプーンを置いたセシルが顔を上げると、綺麗な栗色のセミロングが揺れた。

その顔立ちはまだ幼いが、かなりの見目麗しい少女である。とはいえシーラのように“美しい”というよりはむしろ“可愛らしい”と言った方が正確だろうか。

彼女は人差し指を立て、そしてまるで生徒に言い聞かせる教師のような口調で言った。

「女の子に対して、食欲旺盛とか食べ過ぎとか太ってきたとか言ってはいけないのです。特に年頃の女の子はそういうことを非常に良く気にするものなのですよ――……くすん」

最後は何の前触れもなく急にテンションが下がって、セシルはガックリと項垂れた。

そんな彼女の言葉にティースは苦笑しながら手を振って、

「いや、太ってきたなんて一言も言ってないって……それどころか、君の場合はもう少し食べ――いや食べてはいるけど――じゃなくて、もっと肉を付けた方が……」

「そ、そうですよねぇ……」

その言葉にセシルは顔をちょっとだけ赤くして、自分の体を見下ろす仕草をした。

「やっぱりティースさんもそう思いますよね……」

一瞬、彼女が顔を赤くした理由に気付かなかったティースだったが、

（……って、そういう意味かっ！？）

ようやく気付いて、思いっきり首を横に振る。

「い、いやいやいや！　そんな話はしてな――」

「で、でも、年齢的にまだまだ成長の余地はあるんじゃないかと思ったりしてるのですけど……アクアさんとまでは言わなくても、シーラさんぐらいには――」

「だからしてないって、そんな話！」

そんな二人の会話に、ファナがクスクスと笑い始める。

と、同時に、セシルもティースの慌てぶりを見て少しおかしそうにしながら、

「あはは、本気にしないでください。途中から冗談です」

「あ、あのなあ……ったく、大人をからかうもんじゃないぞ」

ちょっと憮然とした顔をしながら、それでもホッと安堵のため息をついたティース。

……幸か不幸か、どうやら彼は“途中までは冗談じゃなかった”

という事実に気付かなかったらしい。
セシルはニッコリと可愛らしい笑顔を浮かべて、
「ごめんなさい。ティースさんってとても話しやすいので、つい」
セシル――本名セシリア＝レイルーンは、この屋敷に住む十二歳……一月後の誕生日を迎えて十三歳になる少女で、ここの住人曰く“屋敷のアイドル”だ。先ほども言ったように、いかにも“女の子”という感じの可愛らしい顔の作りに、パッチリとした大きく穏やかな瞳。栗色でセミロングの髪はシーラほどの美しさはないが、触れてもまるで抵抗感を感じないほどにサラサラだった。
性格はたった今見てもらったように基本的には明るい。が、普通の人と比べると少々ベクトルのズレた反応を返してくることがあり、ティースも会話をしていて戸惑うことばかりであった。
（ファナさんといい勝負だよな……）
「？」
注目されて不思議そうな顔をするファナにティースは苦笑しながら、これがいわゆる“類友”というものか、などと思うのだった。
さて。
彼がそんな彼女とこうして仲良くなった理由には、実はここで毎日朝食を採っているという以外に、もう一つある。
「セシル。そろそろ行くわ」
「あ、はい。……ごちそうさまです」
どうやら学園に行く準備を整えてきたらしいシーラが食堂に顔を出すと、ちょうど食事を終えたセシルが空の食器に向かって手を合わせた。そして彼女はすでに用意してあった鞄を片手にシーラの元へ駆けていく。
……そう。実はこのセシルという少女、シーラと同じサンタニア学園に通う学徒であり、しかも同じ薬草学科の一回生……つまりシーラにとっては二学年後輩ということになるのである。つまり、非常にシーラとの繋がりが深い少女なのだ。
（なんだか、ああいうシーラを見るのは新鮮だよな……）

見ようによっては姉妹のようにも思える二人をそのまま見送ろうとしたティース。
だが、ふと思いついて、
「ああ、そうだ。せっかくだから途中まで見送るよ。……ごちそうさま」
「なに？」
怪訝そうなシーラの声。だが、特に嫌がっている素振りはなかった。
……決してティースの妄想ではなく、以前では考えられないほど彼女との関係は改善されつつあった。今では、廊下で話しかけても無視されることはなかったし、向こうから声をかけてくることも珍しくはない。
彼はこうして一緒に食事を採るようになったおかげだと信じていたが、実際のところ彼女の中でどういう心境の変化があったのかは謎のままである。
「俺もどうせ外に出るんだ。せっかくだから途中まで……いいかな？」
「私は別に構わないけれど」
シーラがチラッとセシルを見ると、セシルは何故か手を合わせてティースの方を拝んでいた。
「感謝感激雨霰です」
「そ、そこまでされると逆に気が引けるなぁ」
「ううん、お見送りはとても嬉しいことです。一日の元気の源です」
「そんな大げさな……」
ティースは照れの入り交じった表情を浮かべ、シーラはそれを見てため息をつく。
「どうせ“ついで”なのだから、そいつに感謝する必要などないわ、セシル」
そんな冷たい物言いはあくまで元来のもので、これはもちろん以前と変わらない。

さて……そんなこんなでティースたち三人が外へ出ると、そこには、ほぼ毎朝繰り広げられる不思議な光景がある。

「おはよう、マルスっ」

外に出るなりセシルはピタリと足を止め、それからニッコリと微笑んだ。

端から見てる者は一瞬不思議に思うだろう。何故なら、彼女の周囲には人の姿などなく、もちろん彼女に挨拶を返す人物もいなかったからだ。

ただその代わり、そこ――その足下にいたのは、無言で彼女を見上げる二つの瞳と、銀色の体毛に包まれた体。

一瞬、犬かとも思うのだが、違う。鋭い牙の存在を否応なしに想像させる、大きくせり出した口……それは犬ではなく、紛れもなく“狼”だ。

ティースなどは敷地内で飼われている（？）この“マルス”という名の狼に最初はビックリしたものだが、どうやら彼は――オスらしい――このセシルによく懐いているらしく、彼女の周りで見かけることが多かった。

「今日も元気そうだね、マルス」

セシルがそう言って軽く頭を撫でてやると、マルスと呼ばれた銀色の狼は呼応したかのように、ゆっくりと目を閉じて体を彼女の足に擦り付ける。

そんな彼女たちを取り巻くように、黒い体毛の犬たち――こちらは正真正銘の犬だ――が徐々に集まってきていた。

その数、およそ十数匹。

「おはよう。みんなも元気そう――あれ？　イオタは元気なさそうだね。夜更かしでもしたのかな？」

セシルは一匹一匹を見つめながら首をかしげたり笑いかけてみせたりしている。

――見るからに獰猛そうな番犬たちが、集団で彼女に尻尾を振る姿はかなり異様だった。

そしてそれを少し離れた場所から眺めているティースとシーラ。
「……今日も盛大な見送りね」
「なにしろアイドルだからなぁ……」
感心とも呆れともつかない感想を漏らすティースの視線の先で、“屋敷の（番犬たちの）アイドル”セシリア＝レイルーンはそうしていつものお見送りの儀式を済ませるのだった。

シーラたちを見送った後、ティースが足を向けたのはミューティレイクの敷地内、その西側だった。相変わらずの広大な敷地では庭師が手入れをしていたり、使用人たちが花の世話をしていたり……微かに遠くで聞こえる気合の入ったかけ声は、ディバーナ・カノンの面々が早速稽古を始めた音だろうか。
（そうだよな……朝食後、いつもああやって軽い稽古をやってたんだよな）
――と、そんな他人顔をしているティースを不思議に思うかもしれないが、実をいうと彼は、昨日をもってディバーナ・カノンを除隊となった。
もちろん悪さをしたわけではなく、あくまで予定通りのことである。
（あれから一ヶ月か……）
あの出来事以来、ティースは二度の任務をこなした。どちらも低級な魔の退治ばかりで、それでも隊長のレアスは最後までティースに剣を抜かせなかった。
曰く、『てめえはまだそのレベルじゃねえ』とのことである。
（……一ヶ月かそこらで認められようっていうのも確かに無理だけどさぁ）
とはいえティース自身は、この一ヶ月に多少の手応えを感じていた。事実、ヴィヴィアンとの稽古では星をほぼ五分近くにまで持ってきていたし――もちろん彼が不得手な剣を使っているというハンデはあるにせよ――間違いなく、確実に成長していたのである。

（でもホント、変わった部隊だったよなぁ……）

思い返す。

子供のくせに妙に偉そうでしかも鬼のように強い隊長のレアス。

相変わらず淑女のように振る舞いながら時折“地”が顔を出してしまうフローラ。語るまでもなく相変わらずあんな調子のヴィヴィアン。

それと一ヶ月前、新たに入隊したガードナー＝ロドリゲスという名の寡黙な巨漢が、実は寡黙なのではなく重度の吃音だと判明したのはつい最近のことだった。

そして――

（……よし！）

肩に力を入れ直し、ティースは目的地へと足を進めていく。

向かった先は今日から彼がお世話になる第一隊“ディバーナ・ファントム”の詰め所。かの女性デビルバスター、アクア＝ルビナートが統率する部隊である。

（アクアさんかぁ……レアス隊長――じゃなくて、レアスくんよりは色々と話しやすそうだけど……）

一ヶ月半前、カノンの詰め所を訪れたときと同じように期待と不安感をその胸に同居させながら、ティースはミューティレイクの敷地を横切っていく。

その先に、とんでもない光景が待ち受けているとも知らずに――

「ティースさん、今日からファントムだってね」

別館の執務室には朝食を終えたファナとリディアの姿があった。

相変わらずの分厚い本を手にしたリディアは専用の席に腰を下ろし、持っていた本を机の端に置くと、早速、目の前に積まれた紙の山を一つずつ手に取っていく。

そうしながら、彼女の言葉は休まることもなかった。

「ファントムの面々と並んでるとこ想像すると、なんか笑えるなぁ」
「何故ですの？」
ファナの手元にもいくつかの書類が存在していたが、こちらはリディアと違って手際よく、という感じではなく、彼女らしく非常にのんびりとした手付きだった。が、それでも仕事の速さでいえばリディアとそう大差なく、それは見た目にそぐわない彼女の頭の回転の速さを証明するものである。
「だってあの図体だよ。アクアさんと比べたって二十センチ以上デカいんじゃない？」
「なかなかお似合いだと思いますわ」
「……何がお似合いなのかわかんないけど」
とはいえ、さすがにリディアは彼女のこの程度の言動で戸惑ったりはしない。
「そういやファナさん聞いた？　……あのアベイ族とか名乗った地の上位魔、やっぱり“例のヤツら”の一味だったみたいだって」
その言葉に、穏やかだったファナの表情がほんの一瞬だけ強ばった。そしてすぐに、ゆっくりと息を吐くようにして、
「やはりそうでしたか……」
「本格的に動いた気配はないけど、少し警戒した方がいいかもね。この前のアレだって、今考えてみたらウチを挑発するのが目的だったのかもしんないし。ここも少し警戒を強めた方がいいかも」
ファナは手の動きを止めてゆっくりと頷いた。
「わかりましたわ。ネスティアスの方々にも警戒を強化するようにお願いしておくことにします」
「あと二部隊以上は絶対にここに残すようにした方がいいよ。いつ襲撃があるかわかったものじゃないから。いつかみたいに――あ」
リディアは珍しくちょっと慌てたような顔をして、それから視線を落とした。
「……ゴメン、ファナさん」
だが、ファナはニッコリと微笑んで、

「構いませんわ。それは忘れてはいけないことですもの」
「……」
「同じことを繰り返さないために、みなさん頑張ってくださってますわ」
まるで陰を感じさせない笑顔と口調に、リディアは少しだけ横に視線を逸らしたが、すぐに表情を変え明るい言葉を出す。
「……ファナさんって見かけによらず強いよね」
リディアの言葉にファナは少しだけおかしそうに微笑んで、それから視線をゆっくりと自らの机に移動させると、小さく首を振った。
その瞳に強い光を湛えながら。
「そんなことありませんわ。私はただ、お父様の意志を継いだだけですもの――」

アクア＝ルビナートという人物に対し、ティースが抱いていた印象というのはかなり両極端な二つのイメージだった。
まるで無邪気な大きな子供のようなイメージと。
そして他人を包み込む母親のようなイメージと。
ただまあ、どちらにしても彼の抱くそれは間違いなく“好印象”だ。シーラを助けてもらったということを別にしても。
……だからこそ。
「え？」
その扉を開いたとき、目の前に広がった光景を見たティースは、心臓が止まるほどの衝撃を受けたのだ。
ディバーナ・ファントムの詰め所は、鍛錬場のようだったカノンのものとは根本から違っており、まるで一つの一軒家のような作りだった。
玄関の扉をノックしても反応はなく――呼び鈴があったのだがティースは気付かなかった――中に入ると正面と右手に廊下が続いて

いる。内装はおそらくアクアの趣味なのだろう、少々女性っぽい雰囲気に包まれていた。

そしてティースが向かったのは、正面の廊下、その先にあった扉。構造からしても、おそらくその先がこの建物の中心……普通の家で言うところの“居間”だろうと考えたからだ。

そして扉を開けたティースが目にしたものは――

「な――っ！？」

やはり一軒家の居間を彷彿とさせるその空間。簡素なソファらしきものが一つ、テーブルがあって中央には絨毯が敷かれている。

そして……絨毯が敷かれていない部屋の隅。

そこに人が倒れていた。

――倒れていた？

いや、違う。

床に撒き散らされた赤い液体。

うつ伏せになったその人物の背中に生えた、普通では絶対にあり得ないもの。

剣の、柄。

しかも、倒れているその人物は――

「アクア……さん……？」

ティースの言葉は掠れて声になっていなかった。

（なんだ……これ――）

あまりのことに、脳が考えることを拒否する。だがそこにいるのは紛れもなく、ディバーナ・ファントムの隊長、アクア＝ルビナートだった。

（そんな……馬鹿な……）

そしてようやくティースの脳が僅かに思考能力を取り戻す。

争ったような痕跡は見当たらない。辺りには誰も見当たらない。

――彼が考えたのはそこまでだった。

「アクアさんっ！！」

床を蹴る。

おびただしい血にまみれ、ピクリとも動かないアクアの元へ向かって――

「待ちな」

「!?」

だが、ティースの体はすんでのところで何者かに引き留められた。

その人物はいつの間に近付いていたのか……ティースの背後に立ち、その肩を掴んだままアクアの遺体を見つめている。

「君は――」

ティースがそれほど焦らなかったのは、その人物――その女性を、これまでにも屋敷で何度か見かけたことがあるからだ。

まるで男の子のような短い髪に、我の強そうな吊り気味の目。見た目、十七、八歳だろうが、背はリディアと同じぐらいしかなかった。肌はネービスの人間にしては珍しく少々浅黒い。

「……あんた、アレだろ？　今日からここの部隊に入ることになってる奴だよな？」

「ああ……けど、今はそれどころじゃ！」

「待てって言ってんだろ」

それでも女性はティースの肩を離さない。

「どうして――」

そしてその後の展開に、ティースはさらに驚いて言葉を止めた。

「……え？」

その後ろからもう一人、女性が姿を現したのだ。いや――それだけなら大して驚くべきことではない。

（目の……錯覚？）

問題は新たに現れた女性が、ティースの肩を掴んだ女性と“全く同じ顔”をしていたということである。

ティースが一瞬、夢でも見ているのかと思ったのは無理もない。

「……」

新たに現れた女性は無言のまま、無造作にアクアの遺体へと近付いていく。

そして――

（な……？）

突然、そばにあったスリッパを手に取ると、それを振りかぶった。

「な……なにを――！」

ティースが驚く暇もなく。

パコォォォォンッ！！！

「……いったぁぁぁぁぁぁ～～～～～っ！！！」

「へ？」

それが後頭部に振り下ろされるなり、アクアの遺体は痛みに苦しみながら床を転がっ……いや、もう言い換えた方がいいだろう。

遺体の“フリ”をしていたアクアは、スリッパの一撃を喰らって悶え苦しんでいた。

ポツリと呟きが聞こえる。

「ったく、相変わらずガキみてぇだな、アクア姉は……」

「？？」

ティースにはいまいち状況が飲み込めていなかった。

「ってなわけで、あたしはダリア。ダリア＝キャロルだ。で、そっちのが――」

「ドロシー＝キャロル……」

もう一人がボソリと答える。

「見りゃわかると思うけど、双子だ。一応そっちが姉貴……って、なんだよ、そんなに珍しいのか？」

「いや、っていうか……」

ティースはそんな二人の顔を交互に見て――よく見ると姉のドロシーと名乗った方は右目の下に小さな傷跡があり、肌の浅黒さもダリアより少々薄い。なんとか見分けることは出来そうだった。

「その、つまり、君たちはこのファントムの……？」

「ああ。あたしもドロシーもファントムの一員さ。戦闘要員ってやつ」
「な、なるほど……」
ティースが以前見たときとは違い、ドロシーもダリアも使用人の服ではなく薄手で袖のないシャツにホットパンツ姿だ。この暑さだから……とはいえ、このネービスではここまで肌を露出させる女性は多くない。ティースが少々目のやり場に困ったのも仕方のないところだった。
（でもまさか、女の人がアクアさんだけじゃないとは……）
「で、あたしが隊長の――」
「自己紹介はいいから、あんたは黙って掃除してろよ」
「……なーんか損した気分。せっかくみんなを驚かそうと思ったのに、全然驚かないんだもの」
ごしごしと床に付いた血糊を拭きながら、アクアは口を尖らせている。
そんな彼女もまた、背中に血糊がついたままのシャツの袖を肩口までまくり上げ、下はやはり他の二人と同じホットパンツだ。
（いや、俺はかなり驚いたけどね……）
なんとなしに視線を上の方に逸らしながら、ティースは彼女らの会話を聞いていた。
「あんたの悪戯はワンパターンすぎんだよ。ったく、いい歳こいてなに考えてんだか」
「あ、ちょっと聞き捨てならないなぁ、それ。あたしはまだ若――」
「つい先日、二十四歳になったばかりだと思ったけどな？」
「……なってない！　なってないってば！！」
現実逃避をするアクアに、ドロシーがボソッと呟いた。
「最近、肌がカサカサしてきた……」
「いやぁぁぁぁぁぁっ！　言わないでぇぇぇぇぇっ！！」
まるで断末魔の叫びのようだ。
（……やっぱり不安になってきたぞ）

何故か既視感のようなものを感じつつ、それでも一応ティースは社交辞令替わりにフォローすることにした。

「あの、俺はアクアさんってすごくキレイだし、別にそんなに歳なんて気にしなくてもいいと思いますけど……」

途端、視界の隅で、ダリアの顔に“あちゃぁ……”という表情が浮かぶのが見えた。

その意味を考える間もなく、

「そう思う？　ティースくん、ホントにそう思う！？」

「うわぁっ！」

いきなりドアップで迫ってきたアクアに、ティースはのけぞった。その距離、僅か数センチ。彼の頭の中で警報が鳴り響いたが、ソファに座っていたのが仇となり、そこから身動きが取れない。

仕方なくティースは目一杯逃げ腰になりながら、

「そ、そう思います。思いますから……その、少し離れてくださ――」

だが、アクアはその距離を保ったまま――いや、さらにティースに迫ってくると、まるで祈るように両手を組み、目をキラキラ輝かせながら言った。

「なら、結婚して！！」

「な、なんでいきなりそういう話になるんですかっ！」

あまりにも唐突だった。

「年上は嫌！？　でもあたし、これでもかなりお肌の手入れには気を遣ってるし、心はまだまだ純真無垢な少女のつもりだし！」

後者はある意味――純真無垢かどうかはともかく――その通りかなと、ティースは密かにそう思いつつ、

「と、とにかく！　いきなりそういう無茶な話はヤメてくださいって！」

「……ううう……わかったわよ」

渋々、といった様子でアクアがやっと引き下がり、ティースはホッと胸をなで下ろした。

と、そこへ、一人掛けの椅子で脚を組んだダリアが呆れ顔で口を挟む。
「なんだ、アクア姉。こないだのなんとかっつー優男にはもうフラれたのかよ？」
ティースから離れたアクアは、ペタリと床に腰を下ろした体勢で振り返ると、
「……だってあの人、あたしがデビルバスターだってわかったら、急に態度がよそよそしくなるんだもの」
「引かれるに決まってんだろ、女だてらにデビルバスターだなんて。娼婦だって告白する方がまだなんぼかマシだぜ」
「実際そうなんだから、しょうがないじゃない」
「だからそういうことはもっと仲良くなってから告白すりゃいいんだよ。付き合うか付き合わないかのうちに言や、そりゃ上手くいくわけねぇじゃんか」
そんなダリアの言葉に反論できず、アクアはちょっとすねたような顔をして、
「いいの。そのうちきっと、私のことを本当に理解してくれる王子様が現れるんだから」
「……俺の方を見て言わないでください」
ティースが思わず突っ込んだのは言うまでもない。
（しかし……なぁ）
このアクアという人物、ティースが見てもかなり女性としての魅力に溢れている。デビルバスターとはいっても背は女性の平均を若干上回る程度でデカすぎないし、ルックスだって普通に美人の部類に入るだろう。スタイルだってかなりいい。見た目だけならイイ男を何人も従えて歩いてもおかしくないぐらいである。
そんな彼女が、どうやら彼氏ができなくて困っているというのだから、世の中というのはわからないものだ、とティースはそう思った。
（性格だって悪くないと思うんだけど……何か俺の知らない欠点で

もあるのかなぁ）

そんなことを考えつつ、ひとまず話題を変えることにした。

「そういやドロシーさんとダリアさんの他に――」

「いぃ！？」

「え？」

ティースの発言に、ダリアはいきなり肩を竦めて両腕を押さえると、

「おいおい、やめてくれってのぉ。明らかに年下ならともかく、あんたみたいな男に“さん”付けで呼ばれちゃ寒気がして仕方ねぇよ」

「あ、な、なるほど……」

そういう人もいてもおかしくないか、と考え、ティースは言い直すことにした。

「じゃあ、ドロシーさんにダリア？」

「つーか、なんであたしだけ呼び捨てにすんだよ」

「いや、だってドロシーさんは何も言ってないし……」

それにティースが見たところ、このちょっと蓮っ葉な感じのダリアと違って、姉のドロシーは少々大人しいような印象があって――

「オレも呼び捨てにしていい……」

「……」

（……オレ？）

どうやらそうでもないようだった。

「はぁ、やっと終わったわ。……で、ティースくん？　なにか質問があったみたいね？」

ようやく掃除を終えて腰をトントンと叩きながら体を起こしたアクアが――その仕草を年寄り臭いと思ったことは絶対に秘密だが――ティースの言葉を促す。

「ええ。あの、このファントムにはフローラさんみたいな人はいないのかなって」

ディバーナ・カノンには医事担当のフローラがいた。が、このメンツを見回したところ、どうやらそういった役割の人物はいないよ

うに思えたのである。
だが、
「まさか。ちゃんといるわよ。ただ、今日は“仕事”の関係でちょっと遅れて来るの。……ああ、その子、ティースくんも良く知ってる子よ」
「え？」
「ま、それについてはあとのお・た・の・し・み。まずは改めて自己紹介しましょっか。……まずそっちの二人は聞いたと思うけど戦闘補助の二人で、ドロシーとダリア。カノンで言うところのヴィヴィアンくんとサイラ……ガードナーくんね。歳はティースくんよりちょうど一つ下かな？」
「あ、年下だったのか」
ティースより一つ下ということは十七歳だ。
（やっぱ二人ともヴィヴィアンぐらい強いのかなぁ……）
一瞬、そんな彼女らにこてんぱんにされる自分の姿が脳裏に浮かび、彼の心は少々複雑だった。
「で、あたしが隊長のアクア＝ルビナート。……通称、男の心を盗む“怪盗デビルバスター”よ」
「はぁ」
何とも言い難い表情のティース。そこへダリアとドロシーの突っ込みが入る。
「アクア姉のそれは通称じゃなくて自称だろ」
「しかも恥ずかしい……」
「なんで！？　恥ずかしくないってば！」
「……」
ティースも恥ずかしいと思ったが、それは一応口にしないことにした。
アクアも気を取り直した様子で咳払いすると、
「……で、うちのチームについてはアオイくんからある程度聞いてると思うんだけど」

「ええ。なんだかちょっと特殊な任務に就くことがあるって……」
アクアは頷く。
「そ。まあ特殊って言っても、本当に専門的なことはやらないんだけどね。……あたしたちがデビルバスターだと知られない方がいい、そんな状況での任務がたまにあるの」
「つまり、隠密っぽい感じですか？」
「そう、そんな感じ。……ティースくん。先入観を捨ててあたしたちを見て？」
「？」
「“魔”を追いかけているように見える？」
「……」
ティースは改めて三人を見つめた。
腰に手を当てて妖艶な笑みのアクア、興味のなさそうな顔でそっぽを向いているドロシー、そしていかにも我の強そうなダリア……正直、女性にしては少々“手強そう”なイメージは感じるものの、確かに“戦う者たち”という雰囲気ではない。穿った見方をしたところでせいぜい、少々育ちの悪い不良少女という程度だ。
……いや、それはどっちかというとアクアではなく、他の二人のイメージそのままだったりもするのだが。
（ミューティレイクの服を着てるときは、それなりに見えたんだけどなぁ）
イメージの力は偉大だ、などとティースは思いつつ、
「見えないですね、確かに」
「でしょ？　どう見ても麗しい乙女のトリオにしか見えないでしょ？」
「……それは無理が――いや」
思わず本音が出そうになった自らの口を塞ぎ、ティースは言い直す。
「見える……かも」
「無理しなくていいんだぜ、ティース」

やれやれと手を振ってダリアが言った。
「あたしだって恥ずかしいっつーの。あたしたちのどこが“乙女”だってんだ」
ボソッとドロシーが付け足す。
「オレたちは外見的に無理。姐さんは年齢的に無理……」
「……ちょっとドロシー！　諦めたら人生そこで終わりなんだから！　一念岩をも通すって言うじゃない！」
「岩どころか分厚い鉄板だと思う……」
「……」
ドロシーの突っ込みはいちいち厳しかった。
「と、とにかく。大事なのはあたしたちがとてもデビルバスター部隊なんかには見えないってことなの。そうよね、ティースくん？」
「はぁ……」
しかしそれは確かにその通りで、
（それで“ファントム”か……）
ティースはなるほどと思った。最初は特に意味も考えなかったこのチーム名だが、よくよく考えてみれば、戦闘力に特化した“カノン（大砲）”、隠密性に特化した“ファントム（幻影）”、そしてどうやら総合力に特化しているらしい“ナイト（騎士）”と、それぞれにちゃんとした意味があったのだ。
しかし、ティースはふと考えた。
「でも……なんでそんなチームに俺が？」
「……」
「……」
「……」
三人とも黙ってしまった。どうやら答えられる人間は一人もいないらしい。
（なんだよ、そりゃ……）
だが、無理もない。ティースは背だって高いし、まあ童顔でイメージそのものは確かに“戦う者”っぽくはないが、そこそこ目立つ

ので少なくとも隠密行動に向いているとは思えなかった。
「それは……アレだわ。心優しいファナちゃんが、何故か男に恵まれない乙女たちに愛の募金をしてくれたのよ！」
「はぁ」
適当に取り繕うアクアの言葉の意味はティースにはよくわからなかったが、それはつまり猛獣の檻に投げ込まれたエサと同義なのだろうか。
と、そこへダリアが口を挟む。
「つーか、恵まれてないのはアクア姉だけだろ」
途端、アクアは目を見開いて詰め寄った。
「ちょっとあなたいつの間に！？　おねーさんに報告もしないで――！」
「じゃなくて。あたしとドロシーはあんたみたいに飢えちゃいないってことだよ」
「……飢えてるだなんて、人聞き悪いわねぇ」
と、そんな会話が延々と繰り返されていたところへ、詰め所の玄関から来訪者を告げる足音が聞こえてきた。
何の断りもなしに入ってきたことからして、どうやら残るもう一人のメンバーらしい。
「来たみたいね」
アクアも当然気付いたようだ、少し小走り気味に近付いてくる足音を振り返る。
もちろんティースも注目した。
（でも俺の知ってる人で、医療に通じていそうな人っていうと――）
「……あ、もしかしてマイルズさんじゃ？」
思いついて、ティースはそう言ってみた。
マイルズ……マイルズ＝カンバースは屋敷の主治医的存在だ。そのファミリーネームからもわかるように、フローラ＝カンバースの旦那である。お揃いの黒縁眼鏡がトレードマークで、後から知ったところによるとフローラの眼鏡は伊達眼鏡らしい。

だが、アクアは微笑んで、
「残念」
それと同時に扉が開いた。
「すみません！　遅くなりましたっ！！」
「……え？」
その人物を見て、ティースの口はポカンと開いたままになった。
……それは確かに彼の知っている人物だ。
「フィ……フィリスっ！？」
そんなティースの反応に、アクアは思惑通りという顔で楽しそうだった。
「あ、ティース様。そういえば今日からでしたね」
子羊を思わせるクセっ毛を揺らし、ニコニコしながら深々と頭を下げたフィリス。
「ディバーナ・ファントムの医事担当、フィリス＝ディクターです。改めて、よろしくお願いします」
当然のごとくティースは困惑して、
「で、でも待ってくれよ。フィリスって、確かファナさんの侍女じゃ――」
「あら、知らなかったの、ティースくん？」
それにアクアが答える。
「デビルバスターとその候補生以外はみんな、屋敷での他の仕事を持っているの。ティースくんもドロシーやダリアが屋敷で働いてるのを見たことがあったでしょ？」
「そ……そういえば確かに……」
「あのビビくんだって普段はコックをやってるんだから」
「ヴィヴィアンがコックっ！？」
それがティースにとっては一番衝撃的な事実だった。
「……ていうか」
そしてさらに彼は、改めてメンバー全員を眺め、そして重大な問題に気付く。

「もしかして俺以外はみんな――」
うろたえるティースに、アクアはちょっとお茶目にウインクしてみせると、
「ええ、良かったわね、ティースくん。まさにハーレム状態よ」
「……アクア姉以外はあんま色気のないメンツだけどな」
ダリアがそう付け加えたが、そのこと自体は彼女が言うほど問題ではなかった。
ティースにとってもっとも重大だったのは、
（……ハーレムどころか、針のむしろじゃないか……）
そう。忘れてはいけない。
彼は“女性アレルギー”なのである――

その1『“出逢い”は王道にて』

ティーサイト＝アマルナは十八歳の健康的な男性だ。そりゃ少々痩せ形だったり若干猫背だったりというところはあるが、内面的には何の問題もない。

一部ではマゾヒストだとかホモセクシャルだとかいう風評も微かに流れていたが（その原因はどちらも一人の女性の存在故である）、少なくとも本人にはそういうケは一切なかった。

ちなみにそれはいわゆる女性の好みに関しても同じことである。

将来、結婚するなら優しくて面倒見のいい女性がいいな、とか、できれば歳が近くて気の合う人がいいな、とか。まあ、彼の理想というのは総じてごく普通のものなのだ。

そしてもちろん健康的な男性であるから、綺麗な女性や可愛い女の子を見るのは――決して変な意味じゃなく――嫌いじゃなかったし、女性に囲まれることだって嫌なはずはない。

――そのはずなのだが。

学園都市ネービスの大貴族、ミューティレイク。大陸でも第二の実力を持つとされるこのネービスにおいてナンバー二の実力者であるこの家は、大陸全土で見ても有数の力を持つ名家だ。

ネービスの街の中央から少し西に存在するその屋敷は、敷地の一辺がキロ単位であろうかという広大な敷地を誇り、敷地内に存在する建物は細かいものを省いて十にも及ぶ。

使用人の数はこの敷地内で働く者だけで三桁、書庫の蔵書は七桁。その他、その力を示す数字は枚挙にいとまがない。

そしてそんなミューティレイク家だから、もちろん屋敷内に主治医を雇っていた。

「ほほう。なるほどねぇ……」

マイルズ＝カンバースというのが彼の名前だ。年齢は二十五歳。十四歳でここネービスの学園に入学し、十七歳で正式な医師としての資格を取った後、紆余曲折あってここミューティレイクに籍を置くことになった。

いつも白衣を纏っており、黒縁眼鏡を中指でくいっとやるのがクセだ。百八十センチ程度の長身。屋敷で彼と親しい人々からは“根の良い悪乗りマッドサイエンティスト”という、何とも本質のわかりにくい称号を得ている。

そして……八月も下旬を迎えようとしていたこの日、マイルズは彼の自室ともいうべき医務室に一人の奇妙な患者を迎えていた。

「これは面白そうな被験体だ」

「全然面白くないですよ……」

その患者とは、言わずとしれたティーサイト＝アマルナ――ティースである。

……彼がこのミューティレイクの抱えるデビルバスター部隊“ディバーナ・ロウ”に所属するようになって約二ヶ月半。その第一隊“ディバーナ・ファントム”に新たに配属されて一週間が経とうとしている。

これまで医務室とは何の縁もなかったティースが、この一週間でここに“運び込まれる”ことになったのはこれで三度目のことであった。

そのいずれもマイルズの診断は貧血。だが、その原因が違うところにあるのは明らかで。

というのも……このティースという人物、実に不思議な体質――“女性アレルギー”の持ち主なのである。

「しかし、それならそうと前のときに言えば良かったじゃないか」

そう言いながらも、マイルズの声はひどく弾んでいる。どうやら彼はこの奇病（？）についての興味が津々らしかった。

そんな医者の様子に、ベッドに横たわったティースはどことなく不安になりながら、

「できれば秘密にしときたかったんです。だって、なんだか情けないでしょ」
「とはいえ、ファントムにいたんじゃそういうわけにもいかない、か」
「……」
そうなのだ。
彼の女性アレルギーというのはあくまで“触れられること”が発作の原因となっている。だから彼自身が気を付けていれば良かったし、実際、今までは病気について打ち明ける必要もなく、上手くやってきていたのだ。
だが、問題は彼が新たに所属することになったディバーナ・ファントムという部隊である。
（よりにもよって、俺以外のメンバーが全員女性だなんて……）
と、いうことなのだ。
「そろそろファントムの面々も気付いたんじゃないのかい？　どうやら君が気絶するのは、誰かが君に触れたときらしいって」
「いい加減気付いたでしょうね。……まあ“誰か”と言ったところで、俺が触れられるのはいつも同じ人ですけど……」
ティースはそう答えて、憂鬱な気分とため息を一緒に吐き出した。
「あぁ、なるほど」
マイルズは得心がいったという顔で笑う。
「アクアくんのアレも病気みたいなもんだからなぁ」
ディバーナ・ファントムの隊長――アクア＝ルビナート。
外面は大人の女性としての魅力に溢れ、そのくせ内面は多分に子供っぽいという彼女は、現在（らしい）恋人熱烈募集中の二十四歳だ。頭には二つのお団子を結い、比較的、肌の露出が多い服を好むが決して露骨なほどではなく、むしろ彼女の性格と相まって逆に健康的な感じさえするタイプだった。
そして彼女はファントム――幻影――の隊長だけあって、いつもまるで気配を感じさせない人物である。

それはいい。
それはいいのだが――
（あの人のスキンシップ好きはホントになんとかして欲しいよ……）
そうなのだ。このアクアという人物、相手が男だろうと女だろうと、子供だろうと大人だろうと関係なく、とにかく体に触れたがるのだ。それが肩を叩いたり頭に触れたりする程度ならともかく、ひどいときには何の前触れもなく抱きしめたりするのである。
もちろんそれが同性だったり子供だったりするならそれほどの問題はない。が……それなりの年齢に達した男性だった場合はそうもいかない。
何しろ彼女は先ほども言ったように、外面は非常に女性的な魅力に溢れた人物だ。それを役得と感じられる人物なら――そばで恋人が見てたりしない限り――いいのだろうが、ティースはそういうタイプでは決してなく、ましてこういう病気持ちとなればなおさらのことである。
（一瞬触れるぐらいなら大丈夫なこともあるけど……抱きつかれたら百パーセントアウトだもんなぁ……）
しかも気配もなく忍び寄ってくるのだから、ティースとしては対処のしようもなく……そして三度目の“奇襲”を受けたこの日、ついに耐えきれずに病気のことを話す決意をしたのだった。
「でも、アクアくんも特別に大柄なわけじゃないし、これだけ長身の君に抱き付くのは大変だろうなぁ」
マイルズはその光景を想像したのか、ティースの頭からつま先までを眺めながら苦笑する。
「それで……原因はわかりますか？」
だが、ティースの問いかけに、期待の色はまるで込められていない。
実際、彼は今まで何度もこの病気について診察を受けたことがあった。……が、そのことごとくが“原因不明”、結論としては“精神的なものだろう”という、どうにも対処しようのない結果ばかり

だったからである。
「ふむ」
そしてコーヒーを啜ったマイルズの口から出たのも、やはり同じ言葉だった。
「ま、精神的なものじゃないかな、と」
「……そうですか」
項垂れかけたティースに、マイルズの言葉は続く。
「――そう思うのが普通だろうけどねぇ」
「え？」
驚きに顔を上げたティースに、マイルズは口元に小さな笑みを浮かべながら、
「そんな結論は聞き飽きたって顔してるなぁ。……そりゃま、そんな結論は医者じゃなくたって出せる。君が聞きたいのはそんなことじゃないんだろう？」
「え……ええ」
「可能性としては考えられるものもある」
くいっと黒縁眼鏡を中指で持ち上げ、そしてマイルズはコーヒーカップを机の上に置いた。
一転、期待に染まったティースの視線を受けて、続ける。
「ティースくん。君は過去、女性にとてつもなくひどいことをした記憶はないかい？」
「……え？　ひどいこと？」
「例えば貢ぐだけ貢がせといて何股もかけた挙げ句に手酷く振ったとか」
「ま、まさか！」
ティースはブンブンと首と振って、
「俺がまさかそんなこと……だ、だいたい俺は二股どころか女の子とキスしたことだって――」
「いや、そこまで暴露しろとは言ってないよ」
「……！」

真っ赤になったティースに、マイルズは苦笑して、
「まあまあ、それは仕方ないよ。そんな病気を抱えていたんじゃ、ねぇ。……ちなみに、その病気が発症した――それに気付いたのはいつのことだい？」
「え、えっと……そうだな。初めて気絶したのが……だから――」
ティースは過去の記憶を辿り、指折り数えながら答えた。
「三年半ぐらい前かなぁ……ちょうど十五歳の誕生日ぐらいから、そんな感じになった気がする」
「思ったより最近だね。じゃあそれ以前は大丈夫だったわけか。……ふむ」
「それで……さっき言った、考えられることってのは……？」
身を乗り出しかけたティースに、マイルズは少しだけ声を潜めて、
「“呪い”だよ、ティースくん」
「の……呪い？」
あまりに縁起の悪い言葉にティースは頬を引きつらせた。
マイルズは頷くと、
「古代王国にはそういった類のものが実在していたんだ。口が利けなくなる呪い、丸い物や尖ったものに急に恐怖を感じるようになる呪い……その中に異性に触れられなくなる呪いもあった。まあ呪いと言っても文献によると、性犯罪や姦通などの罪を犯した者への刑罰に主に用いられたそうだがね」
「だ、だって俺はそんなこと全然――」
少し青ざめたティースだったが、マイルズは笑いながら、
「だから聞いたんだよ。女性に対してとてつもなくひどいことをした記憶はないかって。……ま、あったとしたって、今の時代にその呪いを行使できる人物がいるとは到底思えないけどさ」
「じゃあその可能性ってのは……」
「無きに等しい。……結局のところは精神的なものだろうというのが、常識的な結論だと思うよ。さっきとは逆になるけど、君、女性にひどい目に合わされたことがあるんじゃないのかい？　それも常

習的に」
「……いえ」
「その“間”はかなり怪しいな」
そう言ってマイルズは笑ったが、それ以上追求しようとはしなかった。
（ひどい目というか、こき使われたりすることは多かったけどなぁ）
――そうしてティースの頭に浮かんだのは、とある少女の顔。
シーラ＝スノーフォールという名のその人物は、冒頭に書いたいくつかの誤解の主な原因となった人物であり、彼より三歳ほど年下で、透き通るようなブロンドのポニーテールと、精巧な人形のように整った冷たく美しい容姿を持つ美少女だ。
確かにもし原因となる可能性があるとすれば、彼女しかありえない。なにしろこのティースという人物、産まれてこの方、女性というものにはほとんど縁のない人生を歩んでおり、トラウマになるほどひどい目に合わされるなんてことはあり得ないのだ。
（でも、まさかなぁ）
とはいえ彼女にだって、所詮は理不尽な要求を突きつけられ、それを無理矢理実行させられたり、ちょっとしたミスで必要以上にこき下ろされたりする程度――それが客観的に見てどうなのかはまた微妙なところであろうが――少なくとも彼自身がそう感じている以上、それが原因でアレルギーになったというのも考えにくいことではあった。
「でも、どっちにしても、すぐに治すとかそういう方法は――」
「ないねぇ」
キッパリと言い切ったマイルズに、ティースは深いため息をつくのだった。
「うわ。お前、変な病気持ってやがんなぁ」

医務室から戻ったティースは結局、詰め所の奥にてファントムの面々に事情を話すことになった。

そして真っ先に、まるで遠慮のない反応をしたのは、ファントムの戦闘補助、双子の姉妹の妹、ダリア＝キャロルだった。

「それってなんだ？　あたしが触ってもダメなのか？」

少々蓮っ葉な口調から想像できる通り、まるで男の子のようなショートカット、日に焼けているのか元々なのか肌は少々浅黒く、目はいかにも我の強そうな光を纏っている。年齢はティースより一つ下の十七歳だ。

そして彼女の顔は、何故かティースから見て“逆さ”の位置にあった。

「俺も基準はよくわかんないけど、君は間違いなくアウトだな……もちろんドロシーもだけど」

「オレは別に触る気もないけどな……」

答えた別の少女の手の中では、六本のナイフがくるくると回転しながらお手玉のように宙を舞っていた。

右目の下の微かな傷跡と肌の色が若干薄い以外はダリアとまるで同じ、双子の姉、ドロシー＝キャロルは妹と比べて口数も少なく大人しい印象がある……が、実のところ口調は妹よりも……少なくともティースに対してはさらに汚かった。

「へぇ。ってことは、あんたの中じゃあたしやドロシーみたいのでも女のウチに入るのか。――よっと」

かけ声とともに、逆さになっていたダリアが“地上”に降り立った。彼女がいたのは地上から二メートルぐらいの高さに張られたロープだ。

とはいえ、彼女はそこにぶら下がっていたわけではない。

ロープ上に“倒立”していたのだ。

「いや……っていうか君たちは普通に女の子だろ？」

「そうかぁ？」

めくれ上がったシャツの裾を直しながら自分の格好を見下ろすダ

リアは、確かに仕草こそは少々乱雑だが、ティースにしてみれば男だと思いこむのが難しい程度には女性だった。

ましてーー

「じゃあ、アクア姉みたいに無駄にフェロモン撒き散らしてるようなのは、当然問題外だな」

「……まあ」

ティースが答えにくそうに苦笑すると、ダリアはニッと笑って、

「無駄に、の辺りがポイントな」

「なんで無駄なのよ！」

口を尖らせて反論するのは、このファントムの隊長アクア＝ルビナートである。

髪型は相変わらずトレードマークともいえる子供っぽいお団子頭だったが、着ているのはまるでステージ衣装のような派手な服で、両方の裾には横にかなり大きなスリットがあり太股が半分露出している。中は下着の上に一枚穿いているようだったが、大半の男性はそこに思わず視線を集めてしまうことだろう。

「みんないつもあたしの魅力にメロメロになるんだから！」

だが、ダリアはうるさそうに手を振って、

「大事なのは経過じゃなくて結果だろ？」

「うっ……」

確かに、先ほども書いたようにこのアクアは二十四歳にして恋人募集中の身であった。

客観的に見るならば、男など選り取りみどりとも思える外見の彼女だったが、それが現実であったから反論のしようもない。

「それはいいんだけど……アクアさん？」

アクアはガックリと肩を落として、

「はぁぁ……いい加減、無理矢理にでもなんとかするしかないかなぁ……」

「……」

とてつもなく不穏な独り言だったが、ティースはとりあえず聞か

なかったことにして、
「……あの、アクアさん？」
「なにぃ？　あたし今、ものすっごくテンション下がってるんだけどなぁ……」
やる気なさそうに振り返ったアクアは、まるで機嫌を損ねた子供のようだ。
だが、ティースはそれにも構わず――というより、構っていたらキリがないので――数日前から抱えていた“疑問”について質問することにした。
「あの……俺、なんで毎日一輪車なんかに乗らされてるんでしょうか……？」
「勉強、勉強」
「はぁ」
そう。この五日間、彼に課されたものは“一輪車に乗ること”だった。
カノンのときのような特訓を想像していた彼としては拍子抜けというか、物足りないというか、首をひねるしかない状況である。
とはいえ。
（うーむ）
辺りを見ると、違和感はない。
ダリアは先ほどのようにロープ上で曲芸のようなことをやっているし、ドロシーは手にしたナイフでまるでダーツのようなことを延々と繰り返している。アクアにしてもリングやバトンなどを使って、まるで一人アクロバットのようなことをやっているのだ。
（これって、なんか大道芸の一団みたいだよな……）
「遅くなりましたっ！」
そこへやってきたのはこのファントムの最後のメンバー、医事担当フィリス＝ディクターである。
「あぁ、フィリスちゃん！　待ってたわっ！」
「きゃっ!?　ア、アクア様！　く、苦しいです……！！」

どこか子羊を連想させる容貌のフィリスは、メンバー中もっとも若い十五歳だ。医事担当といっても実は正式な資格を持ってたりするわけではなく、そっちの道に造詣があるというだけのことである。

そして何より、彼女はアクアの“お気に入り”だった。

「はぁー。すべすべー。気持ちイイー」

「あっ……あはははっ！　アクア様っ！　くっ、くすぐったいですってばっ！！」

「……」

フィリスと頬をこすり合わせて陶酔しているアクアの様子は、傍目に見ているとかなり微妙だった。

（この人、結局何でもいいんじゃ……）

そしてその後、何故か楽器の練習を始めたフィリスを見て、ティースは別の意味でもますます不安になるのだった……

ネービス領内、北方の街クレイドウルはネービスの街から馬車で約一日強の場所にある。背後には大陸でも有数の山脈“ヴァルキュリス”が横たわり、冬には大量の雪が降ることで有名な街だ。

街の一部が山にかかっているため起伏の激しい構造となっており、昔の都市国家時代にはネービスの最後の砦とされていた場所である。その名残は今も高くそびえ立つ外壁に残っていたが、その門は昔ほど堅く閉ざされることはなく、簡単な身分証明だけで中に入ることができた。

今年の猛暑の中でも、この街は山から吹き下ろす風が比較的涼しく、体感温度はそれほどでもない。

そんな昼下がりの陽光の中、ザヴィア＝レスターという名の男がそのクレイドウルの街を歩いていた。

見た目、年齢は二十代前半だろうか。背に負った剣、砂埃に薄汚れた衣服、そして頭に深く巻いたターバンのようなものは、彼がどうやら旅の者らしいことを物語っていたが、それにしては眼光は比較的穏やか、街行く人々を見つめる視線もどこか楽しそうである。

しかし、辺りが平穏だったのはその瞬間までだった。

――悲鳴がその周辺の空気を切り裂く。

「！」

明らかに女性の、それもこんな昼下がりの陽気な街にはまるで似合わない、絶望と恐怖に満ちた叫び声だった。

「ばっ……化け物だぁっ！！」

今度は野太い男の声。

その声が聞こえるか聞こえないかというううちに、ザヴィアは地面を蹴っていた。

向かった先は悲鳴が聞こえた方向。恐怖に怯える人々が逃げまどう流れに逆らい、緩い傾斜の坂を駆け上がって……そして辿り着いたその場所。

「ぁ……あぁ……」

そこにいたのは翼の生えた三匹の“魔”。成人男性と同じかそれよりも一回り大きいぐらいで、カギ爪のついた二本の脚で地面に立ち、くちばしはまるで刃物のように研ぎ澄まされ、人間で言えば手の部分に生えた翼にはやはり鋭く大きな爪がついていた。

そばに倒れていたのは黒い服を着た二人の男。抵抗したのか、近くには無惨に折れた剣が転がっている。一人は肩の辺りから体が千切れかけていて即死、もう一人は背中を真っ赤に染めて虫の息だった。

そして、誰もが逃げ出したその場で、唯一息をしている人間がいる。

もはや言うことを聞かない体で地面に尻餅をつき、恐怖に見開かれた瞳で三匹の魔を見つめている一人の女性。

間一髪と言っていいだろう。ザヴィアが駆けつけたのはちょうど

そのときだった。
「……お前たち、その子から離れるんだ！」
鞘擦りの音を立てて背中の剣が煌めきを放つ。
「ケェェェッ！！」
奇妙な鳴き声を上げた魔がザヴィアの存在に気付いてその視線を移動させた。
その鳴き声からは、せっかくの“食事”を邪魔されたことで機嫌を損ねた様子が容易に見て取れる。
だが、その直後、
「大人しく離れないと、痛い目を見るぞ……」
ザヴィアの体から放たれたのは強烈な威圧感。
先ほどまで穏やかだった瞳が突然冷たい光を帯び、突き刺すような視線が三匹の魔を射抜いた。
その切っ先が向けられる。
「離れろ。そして帰るんだ」
一歩、ザヴィアが足を踏み出すと、魔は見るからに怯えた様子を見せ始めた。だが、動物としての本能故か、なかなか目の前の“食事”を諦めようとはしない。
「帰れと言っているのが、聞こえないのか……？」
ザヴィアの声は穏やかだった。……いや、大声を出す必要はなかった。
彼らの間での優劣はとっくに決していたのだ。
そしてただ、彼はその手に握った剣を一振りする。風を巻くようにして、その剣筋が唸りを上げる。
それで、完全に勝負は決した。
「ケェェェ……」
そんなザヴィアに、完全に戦意を喪失した様子の魔は翼を大きく羽ばたかせ、人間ほどもある体を宙に浮かべると、山の方へ向かって飛び去っていったのである。
「……」

それを見送ったザヴィアは背中へと剣を収めると、女性に近付いていった。
「大丈夫ですか……？」
「あ……」
「……こっちの男の人もダメか」
先ほどまで息があった男も、彼が脈を取ろうとしたときにはすでに事切れていた。
「ぁぁぁ……！」
「落ち着いて。もう大丈夫」
まだ錯乱している様子の女性はよく見るとまだ十代半ばぐらいの少女だ。着ているものや近くに転がった日傘の装飾から見るに、高貴な家の者であるのは間違いない。とすると、死んだ二人の男は護衛だろう。
少女の震える肩に触れようとして、ザヴィアは思い直したようにふと自分の手を見つめた。
――その手の甲には涙型のアザのようなものが三つ。
周りには徐々に人が集まってきている。
「……大丈夫ですね？」
それに気付いたザヴィアはすぐにその場に背を向け、
「ぁ……」
少女の声にも立ち止まることはなく。
そして彼の姿はざわめく人混みの中へと消えていったのだった。

ティースは現在、アオイ――この屋敷の執事かつ当主の護衛役である男から、デビルバスターになるための教養を教わっている。彼の都合によって午前だったり午後だったりするが、それはほぼ毎日

のように続けられていた。
そして本日の午後も当然、一階ホールの丸テーブルには二人の姿がある。
「今日は魔の分類について学んでいただきます」
縁なし眼鏡の奥から向けられた瞳は穏やかで、口調もまるで優しい教師のようだ。彼はティースよりも三つほど年上の二十一歳だったが、その職業故にか彼に対してもいつも敬語だった。
「分類ってのは、例のなんとかの何族ってやつ？」
それはティースもこれまでの実戦で何度か耳にしたことがある話だった。
アオイは頷いて続ける。
「魔は大きく十に分類されます。すなわち、炎族、水族、風族、地族、氷族、雷族、空族、幻族、光族、闇族です」
「えっと……？」
「対で覚えてください。炎と水、風と地、氷と雷、空と幻、光と闇というように。……これらは基本的にお互いの仲が悪く、それぞれが持つ力の性質に加えて、性格や体格的にも相反するところが多いのです」
「……？」
わからない顔のティースに、アオイはまるで本物の教師がそうするようにわかりやすい例を挙げた。
「例えば……炎族というのは基本的に気が荒く攻撃的で、小柄な男性上位の種族が多いのですが、逆に水族は穏やかで保守的、大柄で女性上位の種族が多いのです」
「あ、なるほど……」
「地族は頑固で義理堅く、大柄で男性上位。風族はおおらかで奔放、小柄で女性上位など……もちろん個体差はありますので一概にそうだとは言えませんが、そういう傾向が強いということですね」
「それってやっぱり覚えておいた方がいいのか？」
「そうですね。覚えておいて損はないと思います。ただし、先ほど

も言ったように、個体差が当然にあるということは忘れないでください。人がそれぞれ性格が違うように、彼らももちろん個々の性格を持っていますから」

「ああ、わかったよ」

頷いたティースに、満足そうにアオイは先を続ける。

と、その前に一人の使用人が紅茶を運んできた。

「どうぞ、執事様」

「あ、ご苦労様です、パメラ」

アオイにパメラと呼ばれた使用人の少女は若干長めの髪を左右でお下げにしていた。

年齢は十四、五歳ぐらいだろうか。

考えてみればこの屋敷、妙にこの年代の少女が多いが、これはあるいは当主のファナ＝ミューティレイクが十七歳という若さであるが故、かもしれない。

ティースもその少女には見覚えがあり、声をかける。

「どうも、パメ――」

「……」

が、パメラはティースを一瞥することもなく。彼が声をかける間も与えずに、冷たく踵を返してそのまま去っていってしまった。

「？」

それを不思議に思ったのだろう。アオイがその後ろ姿を追いながら、

「どうしました？　パメラは確か……」

「ええ。俺の部屋の掃除をしてくれる子なんですけど」

ティースもまた、納得できない表情で去っていく少女を見ている。

「なんだろう？　気難しい子なのかな？　いつもあんな感じで。……まあ、俺もあんまり気の利く人間じゃないから仕方ないかもしれないけど」

「いえ、それはおかしいですね。彼女は元から明るい子だったと記憶していますが……」

「単に俺が嫌われてるのかなぁ。何も嫌われるようなことをした覚えはないんだけど」

落ち込んでそう呟く。

――彼女がティースの部屋の担当になったのはつい最近のことだ。が、それにしても、顔を合わせる回数は比較的多いのに、未だ言葉を交わしたことがないというのは確かに異常だった。

そして言葉を交わしたことがないのだから、ティースに嫌われる心当たりがあるはずもなく。

（部屋には変なもの置いたりしてないし、そんなに散らかしてもいないんだけどなぁ）

アオイもまたしばらく首をひねっていたが、やがて気を取り直したように、

「では、授業を続けましょうか。……えっと、どこまでお話ししましたっけ？」

ティースもすぐに気持ちを切り替えた。

「ああ……魔が大きく十種類に分かれるってところかな」

「そうでしたね。……さて、魔にはさらに大きく二種類のタイプがあります」

そう言ってアオイは指を二本立てて見せた。

「それはすなわち、獣型と人型。これは見た目がどうこうではなく、知能的に人間レベルか否かで判断されます。ですから人に似ていても知能が低いものは獣型に分類されます。……ちなみにその逆はありません。知能が高いタイプの魔はほぼ人型をしていますので」

その言葉にティースは疑問の表情を浮かべて、

「あれ。でも俺、獣魔で人より高い知能を持つタイプがいるって聞いたことあるけど」

アオイは頷いて、

「それは“契約者”と呼ばれる特殊な魔のことで、別名“獣人型”とも言われる者たちですね。それについてはまた別の機会にお話しします。……さて」

納得したティースに、アオイは一呼吸置いた。
その手元、テーブルの上に置いた紙には二つのピラミッドが描かれていた。そのピラミッドの上にはそれぞれ“人魔”“獣魔”とある。
そのうちの“獣魔”の方のピラミッド内部に、アオイは七つの横線を引いた。
「獣魔はその強さに応じて八段階に分けられ、数字で表されます。例えば――ティースさんがここに来て初めての任務で戦った獣魔は“地の七十三族”」
そう言って、ピラミッドの一番下を指し示す。ティースの視線も自然とそこに注がれた。
「彼らはこの最下層。獣魔の七十番台はもっとも与し易いと言われるタイプです」
「なるほど……」
確かに、ティースが以前戦った“地の七十三族”は未熟な彼でも充分に対応できる程度だったし、本職のデビルバスターなら造作もない相手だろう。
「そして通常、デビルバスター……いえ、人が相手できるのは十番台、つまりこの上から二層目までと言われています」
「その上は？」
「一番から九番までは完全に別格です。神話に出てくる空飛ぶ竜や、全身が炎に包まれた巨大な鳥を思い浮かべてください。……実際、番号が割り当てられているだけで、存在すらも怪しい者たちです」
そう言って、アオイはチラッと視線を横に向けた。
その先……ホールの壁の一角にはこの大陸の地図が掛けられている。
「この大陸の外海に名付けられた“シルベスク”も、デビルバスター的に言えば“水の二族”。北方の山脈に名付けられた“ヴァルキュリス”も“地の四族”という言い方ができる……そういう存在です」

「じゃあ、そいつらが姿を見せるってのは……」
「少なくとも、正確な記録が残っている歴史から推察するに、ほぼあり得ないことです。ですから覚えるべきなのは十番台以降ですね」
「ふぅん……ちなみにその十番台ってのはどんなもんなんだ？」
「デビルバスターでも単体で相手できるのはほんの一握り、というところですかね」
そう言って、アオイは上から二番目と三番目の二つの線……つまり十番台と二十番台、二十番台と三十番台の境に太い線を引いた。
「ここにも少々力の開きがあります。もちろん出現率にも大きな開きがあって、三十番台は私たちも良く相手にしますが、二十番台となると滅多になく、あったとしても必ず二隊で向かってもらうことにしています。十番台となれば私たちよりむしろネービス公の抱える“ネスティアス”の出番かもしれませんね」
アオイのその言い方からは、十番台や二十番台の出現率の低さ、それに比例する手強さが充分に窺えた。
「……ところで、気になったんだけど」
注視していた紙から顔を上げて問いかける。
「例えば七十番台とかって言うけど、七十から七十九まで十種類ピッタリいるのか？」
「ああ、いえ。正確には炎や水などでも分類されますので、七十番台は百種類いることになりますね。……ただ、実際にはわかりやすくするためにこういう分類をしているだけで欠番も多々ありますし、逆に例えば“〇〇族の亜種”というのも無数に存在します」
その答えにティースはちょっとため息を吐いて、
「全部の特徴を覚えるの、大変そうだなぁ……」
アオイは苦笑して頷きながらも、
「ですが、これはデビルバスターとしては非常に大切な知識ですよ」
「わかってはいるけどさ……それに加えて人型もあるんだろ？」
「そうですね。ですが、こちらは比較的楽です」
そう言って、アオイは隣のピラミッドに四つの線を引いていく。

「人魔も強さで五つに分類されます。こちらは番号ではなく、上から“神族”“王族”“将族”“上位族”“下位族”と呼びます。こちらもさらに細かい種族の分類はありますが、これらは覚える必要がほとんどありません」

「どうして？」

不思議そうなティースに、アオイは笑って答えた。

「人間だって住む場所が違っていても二本の足で歩き、両手で道具を使うでしょう？　人魔に関しては、細かい種族の違いとはつまりその程度のことなのです。なので、強さによる五つの分類だけ覚えてしまえば、あとは特に学習の必要はありません」

「あ、そっか……人型の種族名って、つまり部族みたいなものか」

「そうですね。それにこちらも“神族”に関してはその名の通り神のごとき存在で、姿を見せるなんてことはまずありません。王族というのもほぼ……ですから実際、私たちが相手をするのは将族以下ということになりますね」

「でも人型は下位族でも手強いはずだったよなぁ……」

アオイは頷いて、

「人魔は獣魔よりもさらに個体差が激しいので一概には言えませんが、少なくともこの世界にやってくるような魔は戦いに優れたものが多く、下位族といえども並の人間では太刀打ちできません」

その言葉はティースも実感として備わっている。

以前、彼が第三隊“ディバーナ・カノン”にいた頃、戦うことになった“上位族”の魔は、彼にはまるで太刀打ちできない存在だった。そのときは隊長のレアス＝ヴォルクスが助けに来てくれたが、もしそうでなければ彼は今、この世にはいなかっただろう。

そこから考えてもおそらく今の彼は、下位族が相手でようやくどうにかなるかならないかという程度のレベルに違いなかった。

「さて、それでは早速、よくこの世界に現れるタイプの獣魔について、細かく学習していきましょうか」

そう言ってアオイがにこやかに取り出したのは、とんでもなく分

厚い資料の束。
「うへぇ……」
それは元来、学業というものにあまり縁のない人生を送ってきたティースには、あまりにも酷な量であった……

その2『“再会”は突然に訪れ』

三日後。

「わっ……わっわっ……！」

ガシャーン！！

「あちゃぁ……」

ファントムの詰め所、その奥にある広めの一室にてティースの“特訓”は続いていた。

「ティースくん、不器用ねぇ」

一輪車とともに床に転がったティースを見て、アクアが顔を覆って苦笑する。

それに追い打ちをかけるように、

「そいつのは不器用の次元を越えてる気がすっけどな」

「猿でももうちょっと上手い……」

「あたた……」

ダリアとドロシーの容赦のない酷評を受けながら、ティースは腰を押さえて立ち上がりつつ、

「俺には君たちが超人に思えて仕方ないよ、ホント」

そう言った。

その視線の先では、ダリアが相変わらずロープ上を片足でピクリとも動かずにバランスを保っていたし、ドロシーはティースの方によそ見しながらも、数メートル先の小さな目標に次々と投げナイフを突き立てている。

「だ、大丈夫ですよ、ティース様！」

そんな彼をフォローしたのはフィリスだ。手にしているのは俗に“アコーディオン”と呼ばれるものに似た楽器である。

「私だってティース様と同じぐらい不器用ですから！」

「つまり、あんたはフィリスと同レベルってわけだ」

「……」

意地の悪いダリアの発言に、ティースは肯定も否定もできず反応に困ってしまった。

アクアはおかしそうに笑いながら、

「そうねぇ。私が触れてもいいのなら、もっと手取り足取り教えてあげられるんだけど」

その言葉に、ダリアがパタパタと手を振る。

「あぁ、ダメダメ。アクア姉が触れると、別のことを教えちまいそうだ」

「……ちょっと、ダリア。あなたねぇ、あたしのことを何だと思って――」

「恋人募集中の二十四歳だろ？」

「わざわざ歳を付けて言わないでってば！」

「……あの」

女性アレルギーということを別にしても、ティースは女性が苦手――いや、アレルギーだからこそ接する機会が少なくて苦手になったのかもしれないが――それはともかく、そんな彼が、彼女らのノリについていくことはなかなかに困難だった。

「とにかく俺、練習続けますので……」

「……あ。そうそう」

「はい？」

背中を向けたところへアクアが近付いてくる。思わず反射的に身構えてしまうティースだったが、アクアはすぐに立ち止まると、眼前でピッと人差し指を立てた。

「大事なのは“集中”よ、ティースくん」

「え？　集中？」

「たぶんティースくんは、なんでこんなことをさせられてるのか……なんて考えてるんでしょ？」

「……はい」

まったくの図星だったので、ティースは正直に答える。

「やっぱりね。でも」

正直なのがよかったのかアクアは満足そうに頷いて、そして妙に艶っぽい微笑みを浮かべると、人差し指をティースの口元に近付けた。

二つの意味でドキッとしたティースだったが、幸い、彼女の指はその目前で止まると、

「それじゃダ・メ・よ。……キミは一輪車に乗ることに“集中”しなきゃ。色々なことを同時に考えるのも大切だけど、ここぞというときには“一点集中”。それが大事よ」

「はぁ」

確かに。彼女の言いたいことはティースにもわからないでもなかった。

が、

（一輪車に集中しろって言われてもなぁ……）

ガシャーン！！

「あたた……」

「……こりゃ相当時間かかるな」

呆れたようなダリアの言葉に、ティース自身も思いっきり頷きたい気分だったのである。

クレイドウルの街の昼下がりには、今日も強い日差しとそれを緩和する心地よい風が吹いている。

「……」

ザヴィア＝レスターはその時間、安宿から外を眺めていた。

室内にあっても彼はターバンを深く頭に巻いたまま、その手には細長い管楽器……フルートのようなものが握られている。時折、その楽器を口にして何らかのメロディを奏で、そしてすぐに思い直し

たようにそれを口元から下ろす。そんなことを繰り返していた。
そこへ、
「うん？」
ザヴィアは下が妙に騒がしいことに気付いた。窓から軽く身を乗り出し、宿の入り口の方に視線を向けると、そこには一台の馬車が止まっている。しかも普通の馬車ではない。装飾も豪華なそれは、見るからに街でも最上位の資産家が所有するようなものである。
「……」
窓から離れザヴィアはフルートを古ぼけたリュックの中にしまい込んだ。
宿の階段を上がってくる複数の足音が聞こえてくる。
コン、コン。
ドアは穏やかにノックされた。
「はい」
ターバンを深くかぶりなおし、少し身なりを整えてザヴィアは答えた。
「失礼します」
入ってきたのは予想通り。身なりからしても、表の馬車に乗っていたに違いないであろう正装の男。歳はザヴィアより少し上……二十代後半だろうか。あと二人。こちらはそれより少々年上か。三十過ぎだろう。
「ザヴィア＝レスターさん？」
「ええ、そうですよ」
男たちはザヴィアにとって顔見知りではない。名を知っているのはおそらく、宿の主人から聞いたからだ。
「やはり……」
「ん？」
男たちの後ろから聞こえた呟きは、女性のものだった。
一番若い男が振り返って、
「間違いありませんか？」

「ええ、コン。この方です。……ザヴィア様、覚えていらっしゃいますか？」

道を開いた男たちの間から出てきたのは、やはり高貴な出で立ちの少女だ。

「君は確か……」

それはもちろんザヴィアにも見覚えがあった。

「三日前は危ないところを助けていただきました。見るからに旅の方でしたから、もう街におられないかと思いましたけど、良かったです」

「……」

ザヴィアはどう反応すべきか迷っていたが、それを見た少女が名乗る。

「私、ノエル＝オルファネールと申します。……ザヴィア様、どうしても先日のお礼がしたいので、どうか屋敷の方へ来ていただけないでしょうか？」

「……」

「お願いします。どうか」

懇願するノエルを見て、ザヴィアは少し視線を伏せると、

「……私は見ての通り薄汚い格好の男だけれど、それでも？」

「それはもう！　格好など何も関係ありません！」

まるで考える様子もなく言い切ったノエルの言葉に、

「そうですか」

ザヴィアはようやく笑顔を見せた。

「私も事情あってしばらくはこの街に逗留するつもりでした。ですから、もし迷惑でなければ――」

こうして、ザヴィア＝レスターとノエル＝オルファネールは二度目の出逢いを果たしたのである。

シーラ＝スノーフォールは前章で述べたように、ティーサイト＝アマルナのあらぬ風評の原因となった人物であり、そして彼の“女性アレルギー”の原因考察について、唯一その名が挙がった少女である。

さて、伝統あるネービスのサンタニア学園で薬草学を学ぶ彼女は、今日もその本分である学園での授業を終え、そして毎日の日課ともいえる“恋人とのデート”を終えて、ようやく自室へ戻ろうとしているところだった。

「あら……？」

そんなシーラの目に止まったのは、廊下に立ちつくす使用人の姿である。

彼女の部屋は別館の二階にあり、ティースの部屋と隣り合っていた。玄関の方向から見るとティースの部屋が手前にあるため、大階段を通って自室に戻るときは当然にその部屋の前を通ることになる。

使用人の少女が立っていたのは、そのティースの部屋の前だ。扉に掛けられたネームプレートをじっと見つめており、シーラの存在に気付いた様子はない。

（……なにかしら？）

お下げを二つぶら下げたその少女は、シーラも顔を見たことはあったが名前までは知らなかった。

「ティースに何か用？」

「！」

驚いたように少女が振り返る。

「あいつならまだ戻ってないはずだけど？」

「……いえ……」

「？」

蚊の鳴くような声で少女はボソッと何事か答え、そして慌てて走り去っていってしまった。

その背中を見つめながらシーラは首をかしげたが、結局それほど気にすることもなく自室へ――そして、ドアノブに手をかけたところで呼び止められる。

「シーラさん」

「……あら、リディア」

大階段の方からやってきたのは、リディア＝シュナイダーだ。ディバーナ・ロウの第二隊“ディバーナ・ナイト”隊長レインハルト＝シュナイダーの妹であり、当主であるファナのサポート役としての職も持つ彼女は、数日後に誕生日を控えた弱冠十一歳の女の子である。

相変わらず、この年頃の少女としては珍しいパンツルックで、一見少年のようにも見えてしまう。

「ダメだよ、シーラさん。メイドの子を怯えさせたりしちゃ」

「見てたの」

真顔で言ったリディアに、シーラは答えて、

「何もしてないわ。ただ声をかけただけよ」

「またまたぁ。ティースさんの部屋を熱い視線で見つめてたから、軽く宣戦布告しちゃったんでしょ？」

シーラは苦笑して、

「それは面白い冗談だわ」

「うわ。歯牙にも掛けない発言。……最近はティースさんと仲直りしたみたいなのに」

探るようなリディアの言葉。

彼女は相変わらず、ティースとシーラの奇妙な関係について興味津々のようだった……が、シーラはそれに平然と返して、

「変なこと言うわね。最初から仲違いなんてしてないわよ」

「そっか。じゃあ言い方を変えるよ。……ティースさんと話すことには抵抗なくなったの？」

そこで初めて、シーラの視線が少しだけ横に逸れる。

「なくなったわけじゃないわ。……今も、あいつの顔を見ると苛々

するもの」
　リディアは首をかしげて、
「うーん。それが、いまいちわかんないんだけどなぁ。……優柔不断だからとか、はっきりしない人だからとか、そういうこと？」
「いいえ。……前にも言ったけど、あいつが悪いわけじゃないわ」
　少し言葉を躊躇ってから、仕方なさそうに答える。
「とにかく。それとは別に、あいつのやっていることを考えたら、私自身の苛々なんて些細なことなのかもしれないと、そう思ったの。我慢することにした。ただ、それだけのことよ」
「ふーん。……ってことは、やっぱりシーラさんも少しはティースさんに感謝してるんだ？」
「……してないことはないわね」
　そんな反応にリディアはおかしそうに笑って、
「あはは。シーラさんって、クールなイメージの割にはものすごく意地っ張りだよね」
「……」
　シーラは何とも言えない表情で、そして仕方なさそうに首を振る。
「そういうあなたは、第一印象そのままに意地が悪いわね」
「うわ。こんな幼気な少女を捕まえてなんてことを」
「よく言うわ。――あら」
「あ」
　シーラとリディアが向けた視線の先。そこに、大階段を上ってきたひょろっとした背の高い青年がいた。
「あ、シーラ」
　たった今、話題に上っていたティースである。
　半袖から除く肘にはいくつかの擦り傷を作り、少し疲れた表情を見せていたが、シーラの姿を見るなり表情を明るくして、
「今、帰りか？　あ、この時間ってことは、今日もデートだったのか？」
「え、デート？」

その言葉に怪訝そうな顔をしたのはリディアだ。
「え、シーラさんって恋人いたの？　でもシーラさん、今日はずっと書――」
「そんなことより」
疑問の声を遮り、シーラは言った。
「ティース。……お前、ここの使用人でお下げを二つ下げた私と同い年ぐらいの女の子を知っているかしら？」
「お下げ？　……ああ」
当然、ティースには心当たりがあった。
「それってパメラのことかな？」
「パメラ？」
確認するように、シーラはリディアを振り返った。
「あ、うん。パメラさんだよ、あの人」
「そう。……お前はどうしてその子を知っているの？」
「どうしてって……その子、俺の部屋の掃除をしてくれる子だから」
「そう」
考えながら呟いたシーラに、リディアはそっと小声で、
「気になるの？」
「ええ。気になるわね」
「？」
あっさりとした答えに、リディアは怪訝な顔をする。
だが、そんな彼女にその理由を答えることもなく、シーラはドアノブを掴むと、
「夕食までまだ時間があるようだし、少し休むわ」
ドアはそのまま閉じてしまった。
「……ねえ、ティースさん」
「ん？」
“シーラ＝スノーフォール”と書かれたプレートを見上げながら、リディアはティースに疑問を向けた。
「シーラさんに恋人がいるって、本当？」

「え？　ああ、結構前からね。……あ、君もそういうのに興味のある年頃かい？」
　相手がかなり年下だからか、ティースは珍しくからかうような言葉を口にしたが、リディアは平然と子供らしくもない言葉で答える。
「恋愛って他人のを眺めてるのは楽しいけど、自分でするのはゴメンだよ。色々とややこしいみたいだから」
「そ、それまた達観した意見だなぁ……」
　ティースは思わずたじろいだが、すぐに思いついたように、
「あ、でも俺はどっちかというと君とは逆かな」
「逆？」
「他人のを眺めるのはあまり好きじゃないよ。……だって、そういうのってついつい応援したくなっちゃうし、もし上手く行かなかったらこっちまでガックリしちゃうだろ？」
「……それ、人が良すぎるよ、ティースさん」
　馬鹿にしてるとも感心してるとも取れる口調で、リディアはゆっくりと部屋のドアから離れた。
　そして頭の後ろで手を組むと、
「でもあたし、ティースさんみたいな人なら応援してもいいかもなぁ」
「はは……そりゃどうも。けど、今のところはその必要もないようだよ」
　リディアはそんなティースを覗き込むように見て、
「ふーん。やっぱり見当違いだったか」
「？」
「あ、気にしないで。こっちの話。……ちなみにティースさんの好きな女性のタイプって？」
「え？　……いや、急にそんなこと言われてもなぁ」
　戸惑った顔のティースに、リディアは手をヒラヒラと振って、
「考えなくてもいいよ。パッと思いついたことを言ってくれれば」
「そ、そうだなぁ。えっと、まず優しくて――」

「可愛くてよく気の付くいい奥さんタイプ？」
「……そ、そうかな」
リディアは“やっぱり”と言わんばかりの顔で頷いた。
「ティースさんってホントわかりやすいなぁ。……でもそれだと、シーラさんはこれっぽっちも当てはまってないね。あの人、とんでもなく綺麗だけど、可愛いってのとは違うし」
「……って、君もなかなか言うなあ」
（部屋の中に聞こえてなければいいけど……）
ティースは苦笑しつつ、
「まあ、あくまで俺の好みだから。あいつはあいつでいいところもたくさんあるよ」
「でも結局、シーラさんはティースさんの好みじゃないってことだよね」
「というか……あいつの場合は好みとか好みじゃないとか、そういう問題じゃないなあ」
リディアは難しい顔で首をかしげて、
「よくわかんないけど」
「ほら。たとえば君だって、お兄さんのレイさんのことを好みとか好みじゃないとか考えたりしないだろ？　それと同じ――」
「いや、あの人はあたしの好みじゃないよ。彼氏としては最低じゃないかな、きっと」
リディアはきっぱりと答えた。
「そ、そうか」
どうやらティースと彼女の間では感性にかなりの違いがあるらしい。
それでも何とか言葉を続けて、
「で、でもほら。たとえそうだとしても、別に嫌ったり仲が悪かったりしないだろ？」
「そりゃ兄だし、最初からそういう対象じゃな――……あ、そういうことか」

自分で言って、リディアはようやく納得顔をした。
「でも変なの、別に兄妹じゃないのに。……そんなようなものだから？」
「ん……兄妹だなんて言うと、あいつが嫌がるからなぁ」
別に自嘲的でもなく笑いながらティースが答える。
「だから、ほら。やっぱり、召使いとお嬢様でいいんじゃないかな」
「それはあまり理由にならないと思うけど。そういう関係だって、絶対にあり得なくはないことじゃない」
「でも、それは上の立場の人にその気がなければ絶対に成立しないよ」
リディアは少し視線を泳がせて、
「……あー、確かにシーラさん、見た目にはまるでなさそうだもんね」
「召使いの方も同じさ。実際、よほどのことがない限り、そういうこと考えもしないよ」
「ふーん」
納得したのかしないのか、よくわからない表情でリディアは少し考えていたが、やがてポツリと呟く。
「召使いかぁ。でも考えてみたら、シーラさんの態度って確かにそのものだなぁ」
「だろ？」
自分の言葉が通じたことにティースは満足そうな顔をした……が、リディアはそれでも何事か考えていた。
「？」
首をかしげるティースに、リディアはやがて口元に当てていた手を下ろして、
「ま、いいや。……あ、ところでティースさん。シーラさんって、古い歴史について興味あるのかな？」
「え？　いや、どうだろ、聞いたことないけど。どうして？」
「ふーん。別に何でもないんだけど、ちょっと気になって」

「……？」
「じゃ、ティースさん。ゴメンね、引き留めちゃって」
「あ、いや、別にいいけど」
「……でも、そっかぁ。シーラさん、他に恋人がいるのかぁ。ふーん」
リディアはそんなことを呟きながら去っていった。
それを見送り、ティースは一人首をかしげながら、
「やっぱそういうことに興味のある年頃なのかなぁ。……でも、俺とシーラなんか見ててもなんの参考にもならな――」
そんな独り言を呟いたところへ、
「え……？」
突然、シーラの部屋のドアが勢い良く開いた。
もちろん避ける間もなく。
ガンッ！
「てっ！！」
「……うるさいわよ、ティース」
ティースが見事に尻餅をついたところで、その向こうからシーラが顔を出した。
いつものポニーテールをほどいて髪を下ろしており、その眉根には不機嫌そうに皺が寄っている。
「お前には私が“休む”って言ったのが聞こえなかったのかしら？そんなにくだらないおしゃべりがしたいのなら余所で思う存分やればいいでしょう？」
「い……いてて……」
したたかに打ち付けた腰を押さえながら、ティースは顔をしかめて立ち上がる。一輪車の特訓で何度か打ち付けた箇所だったこともあり、あまりの痛みに彼はちょっとだけ涙目だった。
「あ、あのなぁ、だからってわざとそんなことしなくたって……」
途端、シーラはさらに不機嫌そうになって、
「口答えするつもり？」

「……ゴメン」
きつい口調にすごすごと引き下がるティースの様は、確かに“召使い”そのものであった。
（やっぱ聞こえてたのかなぁ……）
そしてやはり不機嫌そうに閉じたドアを見てそんなことを思いつつ、ティースは痛みに顔をしかめ、腰を何度も何度もさすりながら自室へと戻っていくのだった。

夕食を終え、再び自室に戻ったティースにもやることはたくさんある。
「炎の五十六族――体長は五十センチから一メートル程度、四本の脚で地面を這うように動く“は虫類”系の姿で、体長とほぼ同じ長さの炎の尾を鞭のように使って敵を攻撃する……と」
明かりを灯し、机の上にアオイから借りた膨大な資料とメモ用紙を置いて、懸命に勉強する彼の姿がそこにはあった。
時刻は午後の十一時を回っている。この時間、屋敷は人が圧倒的に少なくなり、外部から通っている使用人はもちろん大半が自宅へと戻っているし、ここに住み込んでいる者もほとんどが自室へ。あとは幾人かの気の向いたものたちがホールなどに出て静かに歓談したり酒を楽しんだりしている程度である。
「風の五十四族――体長は二メートル前後。鋭いくちばしを持ち、鋭い爪のついた大きな翼で空を飛び、大きな足爪で人を抱えて易々と飛び去っていくほどの力を持つ……ふぅ」
気が付けば、夕食を終えてから五時間近くもひたすら机に向かっていた。
「喉が乾いたな……」
残念なことに、彼が頑張っているからといって気を利かせて飲み物を持ってきてくれるような人物はおらず。

ティースは大きく伸びをして、そして席を立った。
「ふぅっ……」
腰を叩きながら、ドアへと向かう……と、彼が手を掛けようとしたところで、ノックの音がした。
「？」
こんな時間に部屋を訪れる人物の心当たりはなく、ティースは一瞬躊躇してしまったが、
「どうぞ？」
カチャ……
そっと、ドアが向こうから開く。
そこから顔を出したのは、
「え？　アクアさ――」
「しっ」
アクアは口元に人差し指を立て、それから廊下の左右を確認してから部屋の中に滑り込むように入ってきた。
パタン、とドアが後ろ手に閉じられる。
一歩下がってその様子を見ていたティースは少々呆気に取られて、
「な……なにやってるんですか？」
「え？　ああ、気にしない気にしない」
ニッコリ笑顔を浮かべたアクアはすでにワンピース風の寝巻――ネグリジェというのか――で、頭のお団子はまだそのままだったが、どう見てもこれから寝ようとしている者の格好だった。
そしてその両手に握られていたのは、
「さて。……じゃあ飲もうか、ティースくん」
再びニッコリと。
「は？」
未だ状況を理解できていないティースを後目に、アクアはずんずんと部屋の中央に進んでいって、サイドテーブルの上にワインのビンと手にしてきた二つのグラスを置き、そして自らはベッドの上に腰掛けた。

「……」
ただ呆然と、それを眺めていたティースだったが、
「ちょっ……ちょっと待ってくださいよ、アクアさん！」
「しぃーっ」
アクアは眉をひそめ、再び人差し指を口元に当てて、
「静かに。この時間にそんな大声を出したら隣の部屋から苦情が来るでしょ」
隣はもちろんシーラの部屋である。
「そ、それは確かに怖――じゃなくて！　一体どういうつもりですか！？」
それでもしっかり声を潜めている辺り、彼の立場の弱さが存分に窺えた。
だが、アクアは平然とした様子で、
「どういうつもりもなにも、ただ単にティースくんとお酒を飲もうと思っただけよ？　ほら、やっぱり隊長としては隊員との交流も大切にしなきゃ」
「だったら何も部屋で飲まなくても、ホールか何かで――」
「ダメダメ。あそこは色々と邪魔が入るから」
「邪魔って……」
その言葉に不穏なものを感じてティースの顔色が少し悪くなったが、それに気付いたアクアは拗ねたように口を尖らせた。
「ちょっと……もう。そんなお化けを見るような目をしなくてもいいじゃない。……もしかして何か変なことされるとでも思ってる？」
「い、いえ……」
だがしかし、この格好でいきなり部屋に来られたのでは、彼が怯んでしまうのも無理からぬことである。
はっきりとしないティースの返答に、アクアはますます機嫌を損ねた様子で、
「もう、あの二人が変なことばっかり言うから。……あのね、ティースくん。そりゃ確かにあたしはもう二十四よ。どーせ行き遅れで

焦ってるし、未だに恋人だっていないし、ティースくんから見れば立派なオバサンよ」

「いや、そこまでは……」

いきなり卑屈なアクアに、ティースは困った顔で一応フォローしようとする。

……というかティースにしてみれば、決してオバサンだなどと思ってないからこそ、触れられたら気絶するし、今もこうして困っているのであるが。

アクアは続けた。

「でもね、あたしだって別に誰でもいいとか思ってるわけじゃないんだから。そりゃ、もうそんなに高望みはしてないけど、やっぱりちゃんとあたしを愛してくれる人じゃなきゃダメなわけじゃない？」

「それは……そうですね」

「でしょ？　あたしだって、その気がない人を無理矢理、なんてことはこれっぽっちも考えてないんだから。冗談では口にするけどさ」

「あ、はい。そうですよね」

至極まともな意見に、ティースは少しだけホッと胸をなで下ろす。

（そうだよな……考えてみたら、アクアさんってたまに暴走するけど、それ以外は結構まともな人だもんな）

確かに、ダリアやドロシーの言葉で惑わされていた部分もあったのかもしれない、と、ティースはちょっとだけ反省するのだった。

「わかってくれた？」

言いながら、サイドテーブルのグラスにワインを注ぎ始める。

「ええ。……いえ、すみません。確かにちょっと誤解してたかも」

アクアは満足そうに微笑んで、

「わかってもらえれば万事オッケーよ。……じゃ、飲みましょうか」

「ええ、そうですね」

意を決したティースは机から椅子を持ってきて、ベッドのアクアとサイドテーブルを挟んで向かい合う。

「じゃ、乾杯」

「乾杯」
チン、とグラスが音を立てた。
ガーネット色の液体を口元に運ぶと、芳醇な香りが漂う。口当たりはマイルドで比較的飲みやすいし、それでいて味わい豊か。相当高価なワインなのかもしれない。
「あ、おいしいですね、これ」
二口、三口と運んでいくティース。こう見えて彼は、アルコールに関してだけは“常人並”だった。
「そう？」
アクアの方はといえばちょこっと口をつけただけで、あとはティースの飲みっぷりを眺めている。そのグラスが空になったのを見ると、すぐにワインの瓶を手に取って、
「はい、ティースくん」
「……あ、すみません。って、あれ？　アクアさんは飲まないんですか？」
怪訝そうなティースの問いに、アクアはちょっと苦笑して、
「あー、あのね。誘っといて難だけど、あたしって実はそんなに強くないの。あまり飛ばすとすぐ寝ちゃうから……ああ、ティースくんは気にせず飲んで飲んで」
「あ、はい。じゃあ遠慮なく」
産まれて初めて飲んだといってもいい素晴らしいワインの味に引かれて、遠慮なく二杯目に口をつけるティース。
アクアも自身の言葉通り、少しずつ飲みながら、
「どう、ティースくん？　屋敷にはだいぶ馴染んだ？」
「そうですね……ええ、まだ顔見知りもそんなに多くはないですけれど、あまり不自由はないです」
「そっか。結構面白い人多いし、きっと色々と勉強になるから、もっと積極的に話しかけてみたらいいと思うけどねぇ」
「うーん、あまりきっかけがないんで。仕事と関係ないところで知り合ったのって、まだセシルぐらいです。……あ、もちろん知って

ますよね？」
　問うと、アクアは口元に笑みを浮かべて、
「あったりまえでしょ。あれだけ可愛い子、このあたしが知らないわけないじゃない」
「……あはは」
　乾いた笑いで返したティース。
　確かに。セシル――セシリア＝レイルーンは“屋敷のアイドル”と呼ばれるほど見目麗しい少女だ。……いや、アイドルといっても実は“屋敷の（番犬たちの）アイドル”なので、容姿は全然関係なかったりもするのだが、可愛らしい少女であることは間違いない。
「セシルちゃんはいいわよぉ。ちょ～っと変なところもある子だけど」
　ティースは笑って、
「あー、わかりますわかります。普通に話していたら、いきなり“二十点！”とか言われるんですよね」
「あたしってば、まだあの子から最高でも七十二点しかもらってないのよねー。何が悪いのかなぁ……」
「……それって、いきなり頬ずりしたりするからじゃ」
　その光景が容易に想像できてしまう。……とはいえ、彼女の場合はそれほど嫌がらないのかもしれない。
「と言いつつ、俺はまだ赤点しかもらったことないんですけど……」
「あ。あたしの研究によるとそれは逆にいいのよ、ティースくん。日常の平均点が高いからこそ、たまの失敗を指摘されるんだから」
「……なるほど。研究ですか」
　確かにティース自身、セシルに嫌われているなどとはさすがに思っていない。
　――そうやって話を弾ませているうちに酒もすすみ、ティースの頭にも少し酔いが回ってきた。アクアの方も手にしているグラスの中身で三杯目。自らが言ったようにどうやら相当弱いらしく、顔はすでに赤く上気していたし、目も少し眠そうになってきている。

そろそろ潮時だと感じ、ティースは提案した。
「あの、アクアさん。そろそろ……」
「……うん？」
「時間も遅くなってきましたし、お開きにしませんか？」
「あー、そうねぇ。そろそろ寝ないと明日に響くし」
幸い、まだまともな判断力は残っているようで、時間を見たアクアは納得して頷いた。
「じゃ、お開きにして寝よっか」
「ええ」
ティースは頷いてグラスの中身を飲み干し、中身のほとんどなくなった瓶とともにサイドテーブルに置く。
アクアもティース以上におぼつかない感じだったが、それでも少し残ったグラスをサイドテーブルに置いて寝る準備をしている。
（……あれ？）
そしてティースは気付いた。
「……ちょっ、ちょっとアクアさん！　なに、当たり前みたいに布団の中に潜り込もうとしてるんですかっ！？」
「んー……部屋に戻るのめんどくさい」
「め、めんどくさいって……」
アクアはヒラヒラと手を振って、
「大丈夫大丈夫。ここのベッド広いから、並んで寝ても全然大丈夫」
「そりゃ大丈夫ですけど……いや、そういう問題じゃなくて！　常識的というか倫理的というか……道徳的に！！」
「んー……？」
すでに下半身までを布団の中に埋め、頭のお団子をほどいて髪を下ろしたアクアは、怪訝そうな顔をティースの方へと向けて、
「ティースくん、あたしのこと愛してたんだっけ？」
その視線が妙に色っぽくて、ティースはとんでもなく焦った顔になる。
「ど、ど、ど……どっからそういう話になるんですかっ！？」

「違うならいいじゃない」
「……は？」
ティースはその意味をいまいち理解できなかったが……その後のアクアの言葉でようやく理解することができた。
「愛していないなら、一緒に寝ても間違いが起きることはないでしょ？　……あ、大丈夫よ。あたしの方はお酒飲むと何もできないもの」
「……」
黙り込んだティースに、アクアは軽く投げキッスをして、
「じゃ、おやすみなさい、ティースくん」
「……」
ティースはそれを呆然と眺めていた。
一体どこまでが本気でどこまでが冗談なのか――いや。
（……本気だ……この人……）
確かに。外見や言動とその中身が随分とアンバランスな人物だ、とはティースも以前から感じていたが……どうやら実態はそれ以上だったようである。
少なくとも、こういう方面に関しては。
「……どういう子供時代を過ごしたんだろ、この人……」
だが、これだけ大人っぽくて魅力的な彼女にどうして全く恋人ができないのか、ティースにもなんとなく理解できていた。
確かに。彼女は変なところだけ、彼女自身が言うように“純真無垢な少女”なのだ。
（これじゃあ、なぁ……）
ただそれは決して、ティースにとって彼女の印象を悪くするものではない。それどころかすでに寝息を立て始めた彼女に、どことなく今まで以上の親しみすら感じていた。
「……さて」
息を吐いて、ティースは自分の寝床を一人掛けソファの上に定めた。

ベッドは確かに広い。が、彼とて健康的な成人男性だ。こんなに魅力的な女性とベッドを共にすれば、間違って――気絶してしまうかもしれない。いや、どうせこれから寝るんだろと言ってしまえばそれまでだと思うが、寝るのと気絶するのとではやはり彼にとっても全然違うわけだ。

一人掛けソファだと少々体勢がきついし、朝には体が痛くなるだろうが、それも止むを得なかった。

（でも……この人、悪い男に騙されたりしなきゃいいけどなぁ……）

と、思わずそんなことを考えてしまったが……それが無用な心配だということは、微妙にはだけた彼女の布団を直しに行ったとき、その身をもって嫌というほど思い知らされることになるのだった――

翌日。

「……昨日は随分と遅くまでお楽しみだったみたいね」

部屋を出てばったりと出くわしたシーラは、心なしか少々寝不足の様子で、そしてそれ以上に不機嫌な顔だった。

彼の目前に指を突きつけて、

「ただ言っておくわ、ティース。別にここで何をしようとお前の勝手だけれど、私の眠りを妨げるようなことは――」

言いかけた彼女の眉間に、突然怪訝そうに皺が寄る。

「――なに？　お前……どうしたの、そのアザ」

「あ……はは……」

押さえた左手の隙間から覗くティースの頬には、くっきりと紫色のアザがあった。

「いや……寝ぼけてベッドから落ちたんだよ」

だが、シーラはさすがにその嘘を見抜いたらしく、

「殴られた跡にしか見えないわね」

「……」

「昨日、お前の部屋から聞こえたのってアクアさんの声だったわ」
「……もしうるさくて寝付けなかったのなら、謝るよ」
だが、どうやら彼女の興味はすでに彼のアザの方に移っていたらしく、少し眉をひそめてじっとそれを見つめながら、
「何かイヤらしいことでもしようとして――ってのは、お前のことだからあり得ないと思うのだけれど」
「……それ以上は、追求しないでくれ……」
「……」
ガックリと肩を落としたティースに、シーラは相変わらず怪訝そうな顔をしていたが、やがて何か納得できるものでもあったのか、ため息を吐きながら頷いて、
「……来なさい。手当するわ」
そう言って自室のドアを開いた。
「え？」
その意外な言葉にティースは困惑して、
「あ、でもそんなに大した――」
「来なさいと言っているのよ」
シーラは肩越しに彼を振り返り、有無を言わせぬ調子で言った。
「……あ、ああ」
相変わらずの口調だったが、どうやら彼女の機嫌は直っているようだ。それなら、ティースとしてもせっかくの申し出を無理に断る理由はなく。
――ちなみにこの日、頬にガーゼを当てて詰め所に行ったティースを、アクアは当然のように不思議そうな顔で出迎えたのだった。

その3『恋に〝障害〟は付き物で』

ティーサイト＝アマルナがディバーナ・ファントムに配属されてから初めての任務。

それは配属から三週間ほど経った頃、うだるような暑さにようやく微かな翳りが見え始めた時期に訪れた。

「クレイドウルの街って……どんなところなんだろ？」

ネービスを発ってから二日目の朝。宿を出発した馬車はガタガタと揺れながら、ティースを含めたファントムの面々を乗せ、目的地である北の街、クレイドウルへ向かっていた。

彼らを乗せた馬車はサイズこそそこそこ大きめだったが、見た目はミューティレイクの持ち物であることが信じられないほどに質素だ。しっかりとした座席があるわけでもなく、ティースたちは積まれた荷物とともに揺られている状況である。

ティースの疑問に答えたのは、頭の後ろで手を組み、仰向けに寝転がった体勢のダリア＝キャロルだった。

「冬にはたくさん雪が降ることで知られてるけどな。あと、お偉いさん方の避暑地としても結構有名……ってかお前、クレイドウルを知らないってことは、元々ネービスの人間じゃないのか？」

「あ……まあね」

「ふーん」

ダリアは特に追求してくることはなかった。

その隣では、隊長のアクア＝ルビナートが手鏡を見て化粧を直しながら、

「でも、この時期に行くには一番いいところよねぇ。仕事じゃなければもっといいんだけど」

と、そんな彼女に、

「姐さん、今日はいつもより化粧厚いな……」

片膝を立ててそこに頬を乗せる、という、ダルそうな体勢で、ダ

リアの双子の姉、ドロシー＝キャロルがボソッと呟いた。
「そ、そんなことないってば」
たじろいだアクアに、ドロシーはさらに突っ込む。
「あわよくばオルファネールの御曹司をオトして玉の輿……」
「ぎくっ」
どうやら図星だったようだ。
（……この人は）
「あの、それ以前に……」
そこにいるのはあと一人。このファントムの医事担当であり、同時にイジられ役でもあるフィリス＝ディクターだった。
隅っこにちょこんと正座したフィリスは怖ず怖ずと、
「オルファネール家のご子息様はすでにご結婚なさっていたと思うんですけど……」
「ええっ、ホントにぃ！？」
「……」
ガックリと肩を落としたアクアは放っておいて、ティースたちの話は続いた。
「ところで……詳しい事情がわからなかったんだけど、どうして俺たちは正体を隠して、その……オルファネールとかいう家に行かなきゃならないんだ？」
「ん？　……アクア姉。ほら、こういうときこそ隊長の出番だろ」
ダリアが水を向けると、
「はぁぁ……急にやる気なくなっちゃったなぁ……」
「ちょっとちょっと、アクアさん……」
苦笑するティースに、アクアは子供のように口を尖らせながらも答えた。
「なんかねー。クレイドウルに現れた獣魔が、何故かオルファネール家の関係者ばかり襲うんだって」
「……それとこれとどういう関係が？」
「獣魔がそんな器用な真似をするわけがないでしょ？　何者かの意

図がそこにあるということ。それと敵が何故か、オルファネール関係者たちの行動をあらかじめ知っているということ。でなきゃ、大型の獣魔にピンポイントで襲わせることは難しいもの。それに大型の魔の割に、最初の事件以外“死人がほとんど出てない”っていうのも意図的なものを感じない？」

「……つまり？」

理解してない様子のティースに代わり、ダリアが推測を口にした。

「要するに、今回の敵は“デビルサイダー”かもしれないってことだろ？」

「その可能性があるらしいんだけど」

その言葉にティースは驚いて、

「……魔に通じている人間がいるってことか？」

“デビルサイダー”……“魔の側の人間”という意のそれは、人でありながら魔に通じ、人魔と意志を交わしたり獣魔を意のままに操ったりする者をいう。魔は基本的に人間を自分たちより格下に見ているため、その数は決して多くないが、存在そのものは何度か確認されている。

ドロシーも納得したように頷いて、

「しかもオルファネールの内部に、ということだな……」

「……」

ガタガタと揺れながら、彼らを乗せた馬車は——途中、ティースが酔って一休みするというアクシデントに見舞われながらも——ほぼ順調にクレイドウルの街へと到着したのだった。

オルファネール家は傾斜のついたクレイドウルの街でも高台の方にあった。基本的には二階建ての屋敷だが、その西側には屋敷と一体化したかなりの高さの塔が備わっており、表側からは街並みが大きく見渡せ、山を背にした裏側にはすぐに背の高い木々が生い茂っ

ている。
さて、“客人”という名目で迎えられたファントムの面々だが、その正体を知っているのはオルファネール家の主人、オーダス＝オルファネールだけであった。
そうなるともちろん、ファントムの面々には客人として迎えられるだけの“理由”がなければならないわけだが――
（な……なるほど……）
ティースはそのときになってようやく、一輪車の練習をさせられていたわけを理解するのだった。
テンポのよいアコーディオンのリズムに合わせて、ドロシーがクルクルと器用にナイフを回している。言葉で書くと簡単に聞こえてしまうが、ドロシーが手にしているのは合計六本ものナイフだ。それを宙に投げたり手の中で回転させたりと、それぞれに別の動きをさせながら、しかも自らも小さくゆっくりとした動きで踊っているのである。
当然、それだけで観客――と言っても数人だが――から拍手が聞こえていた。
だが、本番はこれからである。
……それを、数メートル離れた場所で見つめているティースは、正直、生きた心地がしていない。
『ティースくんはまだ“実用”には耐えられないだろうから、大道具係を任せるわね』
アクアの言葉に快く頷いたティースは、もちろん大道具を作ったり運んだりする役のことを思い浮かべていたのである。
（けど、まさか――）
ティースはその考えが甘かったことを悟っていた。
（“俺自身が大道具”だったなんて！）
両肩の上にはキャベツがヒモで軽く固定され、広げた両腕にリンゴ、そして頭の上にはレモン。
……ドロシーが狙う順番は容易に想像できた。

（でも……なんかナイフの数の割に的が一個足りないような……）

ティースの体は動かないように背後の板にしっかりと固定されている。ちなみにこの直前には、嫌がるティースをダリア以外のみんなで無理矢理板に張り付けるというコメディタッチの演技――いや、彼は本気で嫌がっていたのだが――が行われており、今回のナイフ投げはその流れで繋がっている。

フィリスが少し顔を紅潮させ、演奏のリズムが速くなる。ゆっくりとした動きで踊っていたドロシーの視線が徐々にティースの方を向いてきた。踊り子のような衣装の彼女はうっすらを化粧を施しており、いつもとは違う印象になっている。

――と、その刹那。

「ひっ！」

何の前触れもなく、二本のナイフが踊っているドロシーの手から飛んだ。それはティースが声を挙げるより先に、両肩のキャベツを射抜く。

どうやら観客たちもそのタイミングは予想してなかったらしく、息を呑む音が聞こえてきた。

（……う、打ち合わせもしてくれないんだもんな……）

ティースはナイフを投げるタイミングについて、全く聞かされていない。だから当然彼も驚いた。――ちょっと心臓が止まりそうなほどに。

ピタ。

ドロシーの動きが止まる。と同時に、演奏も止んだ。

右手には二本のナイフ。左手にも二本のナイフ。

……一瞬、その場にいる誰もが呼吸を止めた。

そして。

ヒュッ、ヒュッ！！

立て続けに二つの風切り音。ティースの手の平に微かな衝撃を残し、ナイフはリンゴをさらって背後の板に突き刺さった。

拍手は起こらない。――誰もがまだ、最後の一つ……頭の上のレ

モンが残っていることを知っている。
クルッ……と、とてつもなく緩慢な仕草で、ドロシーがその場で回転した。
（え……）
同時に、その左手からナイフが離れる。それは今までのような直線的な動きではなく、山なりに放物線を描きながら、ティースの頭に乗せられたレモンに向かって飛んでいった。
（お……おい……それって――）
ティースが焦ったのは当然である。
山なりに放物線を描きながらレモンに命中するということはつまり、レモンの真下にあるティースの頭にも――レモンがとてつもない強度を持っていない限り――突き刺さるということであるから。
「な――」
だが、ティースが叫びを発しようとしたその刹那。
ドロシーの目が瞬時に細められ、そしてその手から最後のナイフが飛んだ。
「――」
その場にいる観客――ティースも含む――は、おそらくその全員が驚愕に息を呑んだだろう。
五本目のナイフがレモンに突き刺さるその瞬間、六本目のナイフは凄まじい速さで先にレモンを捕らえ、さらに五本目のナイフを弾き飛ばして背後の板に突き刺さったのだ。
冷や汗が、ティースの背中を流れた。
彼の頭は幸い無事だ。
「……」
クルリ、ともう一度優雅に回転して、そしてドロシーは観客に向かって恭しく一礼する。
――一瞬の静寂。
直後、数は少ないながらも盛大な拍手が彼女に向かって送られたのであった。

「いや、素晴らしい！」

催し物が終わった後、ティースたちファントムの面々は夕食の席に招待され、オルファネール家の当主オーダス＝オルファネールからねぎらいの言葉をかけられていた。

口ひげとかなり太めの眉毛がなかなかたくましいオーダスは、ティースたちが事前に調べた情報によると五十一歳。低音の聞いた声色でなかなかに魅力的なナイスミドルだった。

もちろん彼はファントムの正体を知っているはずであったが、それでもその賞賛の言葉はまるで嘘偽りのない言葉である。

「恐れ入ります」

恭しく礼を述べたのは、この“大道芸の一団”の団長、アクア＝ルビナートだ。

「お気に召していただけたようで、なによりです」

アクアはさすが、敬語の方もなかなか自然だった。それに比べて、ここに来てから屋敷の住人の前ではほとんど口を開こうとしないのがダリア。彼女はおそらく――ティースの勝手な想像だが、敬語そのものが苦手なのだろう。

「いや、でも確かにすごかったね」

横から口を挟んだのは、二十代前半、体型はややスリムでスラッとした体型ながら、少々太めの眉が父親の印象を色濃く残しているオルファネール家の長男、いかにも好青年といった印象のエルトン＝オルファネールだ。

「僕も長いこと大道芸やサーカスを見てるけど、技術だけならその中でも一番かもしれないよ」

「そ、そう？　……ですか？」

一瞬、敬語が崩れかけたアクアに、テーブルの下でダリアの肘打ちが炸裂するのを、ティースはしっかりと目撃した。

さて、他の一同。

縦に長いテーブルの上座に当主のオーダスが座っている。その右

手の長い辺にファントムの面々、オーダスに近い方からアクア、ダリア、フィリス、ティースの順。ドロシーの姿が見えないのは、アクア曰く“仕様”らしい。先ほどの出し物の中には双子であることを生かしたトリックも使用していたため、彼女の存在自体がネタバレになってしまうようだ。

そう言われてみると、ドロシーの見世物のときにダリアの姿が見えなかったことも納得できる。

お腹は空かないのかとか、一体どこに隠れているんだろうとか、ティースは余計な心配をしてしまうのだが、どうやら“いつもなんとかなっている”らしいので口は挟まなかった。それに当主のオーダスだけは存在を知っているので、そう大きな問題はないだろう。

と、それはともかく。

ファントムの面々が座る席の正面側、オーダスから見て左手の長い辺には屋敷の人々が座っている。オーダスに一番近いのが長男のエルトン、その隣りにいるのが彼女の妻――資料によると、カティナ＝オルファネール、年齢は夫より三つ年下の二十歳。それほど良い家の出ではないが、こうしてオルファネール家長男の嫁に収まっているということは、家同士ではなく恋愛結婚だったのだろうか。もちろんなかなかの美人だ。どちらかといえば大人しめの印象か。

そしてカティナの隣りにいるのがオーダスの娘、ノエル＝オルファネール。少々ウェーブがかった長い髪でこちらも大人しい印象はあるが、表情を見ると意外に勝ち気そうな部分が覗いている。ファントムの演技に一番はしゃいでいたのもどうやら彼女だったようだった。年齢は十六歳。

最後に……そのノエルの隣りに、少々違和感のある青年がいた。食事中にも関わらず頭には深くターバンを巻き、先ほどから一言も発しようとはしない。ただ温厚そうな印象から察するに、無口なのではなく遠慮しているというところだろうか。

「ところで……」

アクアもその人物についての情報は持っておらず、失礼にならな

いようにと注意しながら、オーダスに問いかけようとする。
が、それを先に察したのか、オーダスの方から答えた。
「ああ、彼はザヴィアくんだ。……以前、魔に襲われた娘を助けてくれた恩人でね。それ以来、この屋敷の客として居てもらっているんだよ」
「ザヴィアさん？」
アクアの声に反応したのか、ザヴィアが初めて口を開く。
「ザヴィア＝レスターです。……このターバンが気になっているのでしょうが、どうかご容赦ください」
異様な格好の割に口調は丁寧で穏やかだった。そこに隣のノエルが、まるで彼を援護するかのように口を開く。
「ザヴィア様は昔、頭にひどい怪我をなさってその傷が大きく残ってらっしゃるのです。ですから――」
「あ、いや、私たちは別に気にしません」
アクアは慌ててそう答え、それからニッコリと笑顔で冗談交じりに言った。
「私たちも元々、それほど上等な家の出ではありませんから。……ねえ、みんな？」
その言葉に頷いた一同。
それはおそらく、誰もが嘘偽りのない本心からの同意だったに違いない。

「この並びがみなさまのお部屋になります」
夕食を終え、ファントムの面々はそれぞれの部屋へ案内されていた。割り当てられた部屋は一階の奥にある客室、四部屋。ダリアとドロシーが同室で、他は当然一人一部屋という計算だが、まあ予想に違わず一人で過ごすには少々広すぎる個室だった。
「私は執事補佐のコンラッド＝フランシスと申します。皆様のお世話も言い遣ってますので、何か不都合がございましたら遠慮なく」
二十代後半と思われるその人物はなかなかに体格の良い男だった。

長身のティースよりは若干低いが、正装の上からでも鍛えられた筋肉質の体が窺える。顔は少々角張った感じで眉毛も太く、見るからに実直で頑固そうだ。

「お屋敷の中は自由に歩かれて結構ですが、あまり夜遅くに出歩くのはお控えください。それと鍵がかかった場所への進入もご遠慮ください」

その他にも色々と細かい注意事項を事務的に述べて、そしてコンラッドという使用人は去っていった。

そしてアクアがすぐさま号令を下す。

「じゃ、みんな早速情報収集お願いね」

勝手を知る面々はすぐさま、それぞれに行動を取り始めたのだが、

「あの……俺は？」

唯一勝手のわからないティースは立ちつくしたままだった。

それを見たアクアは、まるで“初めて気付いた”と言わんばかりの顔で、

「ん、ティースくん？　……そうねぇ」

考えて、そして少し意味ありげな微笑を浮かべた。

その表情に、ティースの背中に一瞬痺れのようなものが走る。……魅了されたのか、あるいは単なる怯えだったのか微妙なラインだ。

そしてアクアは言った。

「それじゃティースくんは私と一緒に、楽しい一時を過ごしましょっか？」

「え？」

意味のわからなかったティースだが、アクアが向けた視線の先――廊下の向こうを見て納得した。

そこに見えたのは、こちらに向かって歩いてくるオルファネール家の長女ノエル＝オルファネールと、それに手を引かれて遠慮がちについてくる青年、ザヴィア＝レスターの姿だったのである。

約二時間後。
外はすっかり日も落ちて暗くなっていた。
「……ふーん。魔から助け出して、それで、ってのは面白いぐらい出来過ぎた話だなぁ」
ノエルとザヴィアの関係について、二人掛けソファで身を逸らしたダリアが真っ先に述べたのはそんな感想である。
「でもどうなんだ、そういうのって？　うまく行くもんなのか？」
ダリアの疑問に、机に備え付けられた椅子の上でフィリスがうーん、と考えながら、
「それってファナお嬢様とティース様が恋愛関係になるようなものですよね？」
そう言った。
ちょこんと椅子に腰掛けた様は、まるでお人形さんのようである。引き合いに出されたティースはベッドの端で苦笑して、
「楽じゃないと思うよ」
ちなみに彼らが現在話題にしているのは当然、ノエル＝オルファネールとザヴィア＝レスターがどうやら恋仲らしいということについて、である。
彼らが集合しているのは隊長であるアクアの部屋だ。窓の外はすでに真っ暗。屋敷の中も必要最低限の場所を除いてすでに暗闇に包まれている。
「でも俺が見た限りだと、どっちかというとノエルさんの方が積極的だったし、エルトンさんとカティナさんの前例もあるだろうから、もしかしたら……どうかな、アクアさん？」
振り返ってティースが尋ねる。
「それは確かねぇ」
答えたアクアはベッドの上にうつ伏せになって話に参加していた。膝を曲げて足をブラブラさせて落ち着かないところが、まるで子供のようである。

「あたしやティースくんと話しているときも、ノエルちゃんの方からずっと手を握ってたし」
「へぇ。ああいうお嬢様ってのはそういうことに消極的なもんだと思ってたけどな」
「ダリア。それはお前の偏見だ……」
中庭での出し物が終わってから今まで、一体どこに隠れていたというのか。数時間ぶりに一同の前に姿を現したドロシーはダリアの隣で膝を曲げ、その膝を両手で抱えるようにして座っている。
どうも彼女は、こうして縮こまる体勢が好きらしい。
「ああいう箱入りってのは、一度沸騰すると見境なしにどこまでもいっちまうもんだ……」
「ドロシーは随分と否定的だなぁ」
ティースが笑うと、ドロシーはチラッと彼を見て、
「別に。オレには関係ないからな……」
「そ、そうか」
そこへダリアが頷いて、
「でもま、それが原因なのか知らんけど、お嬢さん以外、屋敷の住人たちのウケは良くないな、そのザヴィアって男」
どうやら早速仕入れてきた情報らしい。
「良くない？」
「ああ。得体が知れないとか、不気味で気持ち悪いとか」
ティースは首をかしげる。
「そっかなぁ。言葉遣いとか物腰とか意外と丁寧だし、俺なんかは結構好印象だったけど……」
「ま、やっかみ半分かもしれないけどな。……あたしらを案内したコンラッドって男とか、使用人を束ねるアーバンって男とか、露骨に嫌ってるみたいだけど」
「アーバン？」
初めて聞く名前にティースが怪訝そうな顔をすると、それにドロシーが答えた。

「アーバン＝マクブライド……屋敷の執事で、話によるとあのオーダスって当主の腹違いの弟らしいな……」
「弟！？」
「別に珍しくない話だろうよ……」
そのドロシーの言葉にダリアが補足する。
「それは当主さんも半分認めていて、それでいながら重用しているみたいだな。その仲が悪いって話は全く聞かない」
そこへフィリスが口を挟んだ。
「あ、あの、それと私が聞いた話だと、コンラッド＝フランシスさんは元々ノエル＝オルファネールさんのボディガードだったらしいです。ノエルさんは小さい頃から彼を愛称で呼ぶほど慕っていたんですけど、最近はザヴィアさんのことがあって少々疎遠だとか」
「なんか混乱してくるなぁ……」
「そうねぇ」
アクアはベッドの上に肘を立て手を組み、その上に顎を乗せて考えるようなポーズを取った。
「オルファネールの人ばかり襲われることに何らかの理由があるとすれば、その理由を持ってる人がデビルサイダーってことなんだけど……きっとそう単純でもないだろうし、頭が痛いわねぇ」
その言葉にダリアは笑いながら、
「いっそ、魔がとっとと現れてくれりゃ楽だよな」
冗談交じりにそう言った。
……そのときクレイドウルの街に、まさにその“魔”が現れていたことなど、彼らは知る由もなかった。
オルファネール家の一室からは、聞き慣れないメロディが聞こえ

てくる。
その発生源は明らかに管楽器、その形状や音色からするとフルートのようなものだったが、そのものとは微妙に異なり、音がかなりこもっていて音量自体も小さめの不思議な音色。
それを発する人物は、オルファネール家の客室――ティースたちのものとは少し離れた部屋にいた。
薄暗い部屋の中、窓を開け、枠に腰掛けてその楽器を演奏するのはザヴィア＝レスターだ。目を閉じ、まるで遠い場所に想いを馳せるように、彼はゆっくりとそのメロディを奏でていた。ターバンから微かにはみ出た髪がそよ風に揺れる。外からは犬の吠える声が聞こえていた。
その部屋にはもう一人いる。
言わずと知れたオルファネール家の長女、ノエル＝オルファネールである。部屋の一人掛けソファに腰を下ろし、やはり目を閉じてその音色に聞き入っていた。
「……ノエルさん」
「ザヴィア様？」
メロディが止み、そして楽器を離したザヴィアの口から漏れたのは、少々憂いを帯びた言葉だった。
「私は……あなたに相応しい人間ではありませんよ」
「……」
そっと楽器を脇に置くザヴィア。月明かりの下、その手の甲に三つの涙型のアザが浮かび上がる。
「あなたが私に好意を寄せてくれるのは嬉しい。でも私はすでに業を背負ってしまっている男だ。まして……あなたはこのオルファネールという高貴な家の方。私と釣り合うとはとてもじゃないが思えない」
その言葉にノエルは少し視線を斜めに落として、
「その、ザヴィア様の背負った“業”については、やはり話してくださらないのですね」

「それは……」
ザヴィアの視線が泳ぐ。……それが辿り着いた先は窓の外。そこにある“見えない何か”を見ようとするかのように、彼はほんの僅かに目を細めた。
そんな彼に、ノエルは顔を上げて答える。
「……私は確かに世間のことをそれほど知っているわけではありません。ですが、私なりに考えることぐらいはできます。私には、ザヴィア様が自分で卑下なさるほどの方だとはどうしても思えません」
「……」
ザヴィアは何も答えなかった。
ただ黙って、もう一度手元の楽器を口にする。
再び流れ出したメロディに、ノエルは心地よさそうに目を閉じて身を委ねた。
「私……ザヴィア様の故郷の曲、優しくてとても好きです」
ゆっくりと窓の外へと流れ出していく不思議な音色。
……そして部屋の外でその様子を伺っていた長身の男は、苦々しい表情を隠そうともせずに、じっとそこに佇んでいた……

翌日。
「……えっ!?　魔が現れたって!?」
まだ太陽が昇り始めて間もない早朝にティースを襲ったのは、ダリアがもたらした驚きの情報だった。
「そ、そんな馬鹿な！　い、いくら眠りこけてたからって気付かないはず――」
ちなみに彼は寝巻から普段着に着替えているところで当然半裸状態だったが、ダリアはそんなこと気にした様子もなく苦い表情で答

えた。
「それがこの周りじゃなくて街の方に現れたらしい。……詳しいことはアクア姉が話すだろうから、とにかく急いで来てくれ」
「あ、ああ」
急かされ、ズボンを踏みつけて転びそうになりながらも、ティースは着替えも半端にアクアの部屋へと向かった。
途中、屋敷がどことなく忙しない様子にも気付く。
「……襲われたのはカティナさんの実家よ」
フィリス以外の全員がそこに集まるなり、ベッドの上に腰掛けたアクアは眉間に皺を寄せて口を開いた。
「今までは襲われるのが屋敷の人間だけに限定されていたんだけど。……今回も関係者ではあるけど、厳密にいえば屋敷の人間じゃない。これまでは初めてのケースだわ」
「そ、それで……襲われた家の人は！？」
「もう少し静かに喋れ……」
昨日と同じソファの上で、昨日と全く同じ体勢のドロシーがたしなめる。
「オレたちが表向きは芸人の一団だってのを忘れるな……」
「す、すまない、ドロシー。……それで。アクアさん……」
素直に謝って質問を続けたティースに、アクアは小さく首を振って答えた。
「両親と弟、三人とも亡くなったそうよ。……今までの被害に比べて遙かに容赦なく、徹底的にやられたらしいわ」
「……」
グッと拳を握りしめたティースを横目で見て、ダリアが重い息を吐きながら、
「どうなってんだ、アクア姉？　今までと違う、が二つも並んだんじゃ、“たまたま”じゃ片づけられねーぞ」
アクアは厳しい顔で頷く。
「そうね……あたしたちが来たから、という可能性もなくはないわ

ね」
　ティースはその言葉に否定的な表情を浮かべて、
「まさか。バレるようなことなんて……」
「ええ、だからどっちとも取れるんじゃない？　私たちの正体を疑っていて挑発しているのか、あるいは全く気付いていないからこそ、大胆な行動が取れたのか」
「後者だとしたら、今までと違うのは単なる偶然ってことになるがな」
　ダリアはどうやら前者の意見に傾いているらしいが、アクアは彼女を見て言った。
「その可能性も決して否定できないでしょう？　敵の目的だってわからないんだから」
「それで、姐さん。これからどうする……？」
　ドロシーの問いに、アクアは今までにない厳しい表情で、
「昨日、屋敷から外に出た人間について調べてもらっているわ。……いくら魔と言っても、手下を思い通りに動かすには何らかの形で彼らと意志を交わす必要があるはずよ。屋敷のすぐ近くに魔が潜んでいた痕跡はないし、それである程度は絞り込めるかもしれないわ」
　そこへティースが口を挟む。
「外部の人間って可能性は？　それならいくら屋敷の人間を調べても……」
「まあ、ないとは言わないけど。ただ、前にも言ったように犯人はオルファネールの人たちの行動をある程度把握しているフシがあるのよ。だからおそらく――」
　コンコン、とドアがノックされ、外からフィリスの声がした。
「アクア様。フィリスです」
「ああ、フィリスちゃん。……ご苦労様」
　入ってきたフィリスは数枚の紙切れを手にしていた。ドアの外を確認し、後ろ手にしっかりと閉じてから、部屋の中に入ってくる。
「外、どう？　あたしたちの部屋を窺ってたりする人はいなかった

？」
「はい、いないと思います。屋敷の中はそれどころじゃないって感じです……」
「そりゃま、長男の嫁の実家が皆殺しの目に合ったんだからさ。当然だろ」
ダリアの遠慮のない物言いに、フィリスの顔が少しだけ嫌悪感に歪む。それはもちろん彼女のセリフ自体ではなく、その言葉が示した事実に対しての嫌悪だ。
「……それでフィリスちゃん？」
「あ、はい。これが昨晩、夕食後に外出した使用人の方々のリストです。一応、その方々については雇った時期や役職などの細かい資料も戴いてきました。……それとエルトン様とカティナ様も昨晩は歌劇を見にお出かけになっているようです。ノエル様は昨日は一歩も御屋敷から出ておられません」
紙を受け取って、それに目を通しながらアクアはさらに尋ねた。
「あの子は？　ほら……あれよ。あの……なんていったっけ、あのターバンの子」
「ザヴィア、だろ」
ダリアの言葉に、アクアはポンと手を叩いて、
「あ、そうそう。そのザヴィアって子」
（……アクアさん、昨日あれだけ話したのに、名前も覚えてなかったのか）
が、それはどうやら日常茶飯事のようで、ティース以外の面々は特にツッコミを入れることもなかった。
フィリスが答える。
「ザヴィアさんも外には出てないようです」
「そう」
そうしてアクアが目を通す間、しばらく無言が続いた。
「……こないだ名前の出た二人の使用人さんはどっちも夜に外出してるじゃない？」

「あ、はい。ただアーバンさんとコンラッドさんはオーダス様の言いつけで一緒に外出してるんです」
「一緒にってことは、可能性は低いかな。……でも、その他はどうも、関係者の動向を把握できるほど高い地位にないわねぇ。自分で調べたにしても……」
「で、でも普通に働いていたらなかなかそんな余裕はないと思いますよ。ある程度そういう情報が入りやすい立場でないと」
「よねぇ。……そこの二人みたいな偽メイドじゃない限りは」
アクアの言葉に、その二人が反論する。
「間違っちゃいないけどよ。“偽”って言い方はなんか納得いかねーな」
「姐さんみたいな偽乙女よりはよっぽどいい……」
「……偽じゃないってば！」
いつもの調子で脱線しかけたところを、ティースが方向修正する。
「それはともかく……そのコンラッドさんかアーバンさんが犯人……デビルサイダーである可能性が高いってこと？」
だが、アクアの返答はいまいちはっきりしないものだった。
「どうかなぁ。それ以外でもオルファネール家の一員ならそういう情報は簡単にわかるだろうし、それはノエルちゃんと懇意にしてるザヴィアくんだって同様なわけでしょ。ま、昨晩外出してないとか色々材料はあるけど、断定できるほどのものじゃないし。……何にしろまだまだ情報も足りないし、今の段階じゃ何とも言えないわね」
「そ、そんな悠長な……」
その言葉に食ってかかろうとしたティースだったが、アクアの指で制止される。
「焦ってもいいことはないわよ、ティースくん。犠牲者が出て気が逸るのはわかるけど、今回のことはあたしたちにはどうやっても阻止できなかったわ。それはわかるでしょ？」
「でも……」
確かに、今回に関しては今までの傾向からは予測できないことだ

った。
　しかし、それでも納得できない顔のティースに、アクアは目を細め、頬を引き締めて続ける。
「この先起こりうる、あたしたちに阻止できるはずの悲劇。それを阻止するために最善の努力をすることが、あたしと、あたしたちと、そしてキミの役目よ」
「……」
　真っ直ぐ見つめるアクアの視線に、ティースは思わずゴクリと息を呑んで、そして……力強く頷いた。
（阻止できるはずの悲劇……か）
　その彼の頭を過ぎったのは……過去、彼に助けることができた人と、そして助けることができなかった人、その両方の顔だ。
　グッと、その拳にもう一度力がこもった。
「……ふぅん」
　そんなティースをちょっと感心したような表情で見ていたダリアだったが、やがて視線をアクアへと戻しつつ、
「それで、どうするアクア姉？　今回みたいなパターンも想定して……つっても、それだと、とんでもない数の人間を守らなきゃならなくなるが」
「それはひとまず考えないことにしましょ」
　あっさりとアクアは答えた。
「たぶん、屋敷以外の人が襲われるのは今回だけよ」
「え。アクアさん、それは……」
　尋ねたティースに答えるアクアの言葉は、ほぼ大半の想像通りだった。
「お・と・め・の勘、よ」
「そ、そんな無茶苦茶な……」
　うろたえるティースにアクアは小さく微笑んで、
「どっちにしろ、あたしたちの人数じゃ今以上のことは不可能でしょ？　ピンポイントで目星がついてるなら別だけどさ。……何にし

ても今は、ここで犯人の尻尾を掴むことが先決。わかるわよね？」
「あ、なるほど……」
納得したティースに、ダリアが意地の悪い笑みを浮かべて言った。
「アクア姉は何も考えてないようで、少しは考えてるんだぜ？」
「……なんでよ！　あたしってば、見た目からして思慮深いでしょ！？」
「姐さん。――辞書、引いてきた方がいい……」
「ちょっ……もう！　そこまで言わなくてもいいじゃない！」
相変わらずドロシーの突っ込みは苛烈を極めていた。

朝食の席にエルトンとカティナの姿はない。昨日あったはずのザヴィアの姿もなく、いたのはオーダスとノエルの二人だけだった。
その場において、ティースたちがすでに知っている事件についてオーダスから改めて説明があり、そしてファントムの面々（ドロシーは相変わらずいなかったが）は表面上驚いた反応を示して、そして心から犠牲者の冥福を祈った。
朝食後、ファントムの面々は思い思いの場所へ……表面上は散歩だったり屋敷の見物だったりだが、その実は昨日に引き続いての情報収集だ。
そんな中、そういった任務についてのノウハウを全く持っていないティースはといえば。
「ふぅ……」
アクアの指示によって自室にこもった状態で、荷物の中にカムフラージュして持ってきた剣を密かに磨きながら、ティースは深いため息をつく。
（……なんか俺、役立たずだよなぁ）
とはいえ彼自身、自分が基本的に単純で迂闊な人間であることを知っており、もちろんこういった活動に不向きであることは自覚し

ている。だからこそ、極力足を引っ張らないようにと大人しく指示に従ったわけであるが――

（でも、何か出来ることがないかなぁ……）

昨晩起きた事件に憤りを感じていたティースに大人しくしていろというのが、どだい無理な話だったのだろう。

磨き終えた剣を同じように荷物の中に隠すと、ティースは早速居ても立ってもいられなくなって、ウロウロと部屋の中を歩き始めるのだった。

（コンラッドさんとかアーバンさんとかの話を聞けたりすればいいんだろうけど、それを自然にやるのって難しいだろうしなぁ）

ウロウロ、ウロウロ。

（……あー、くそ！　俺にもうちょっと機転ってのがあったらなぁ！）

落ち着かない様子で部屋を歩き回るティースは、さながら出産を間近に控えた父親のようであった。

と、そんな彼の元へ、ノックの音が聞こえてくる。

「？　アクアさん？」

反射的にそう返してしまったティースだったが、そこから返ってきたのはそれと全く違う、男の声だった。

「ティースさん。よろしいですか？」

「え？」

一瞬、声だけでは判断できなかったティースだったが、

「えっと……ザヴィアさん？」

「ええ」

「……どうぞ」

予期しなかった来訪者に戸惑ってしまったティースだが、一応、彼も“容疑者”の一人であることを思い出し、そして思わず訪れた機会に感謝しつつも緊張した。

「昨日はどうも。色々と楽しい話を聞かせてもらいました」

入ってきたザヴィアは相変わらずのターバン姿で、片手には見慣

れないフルートのような楽器を持っていた。
　ティースはできるだけ自然にするよう心がけつつ――その実、表情は少々焦りと緊張に強ばっていたが、とにかく一人掛けのソファをザヴィアに勧める。
「いや、まあ話したのは僕じゃなくてアクアさ――団長だし」
　そして自身はクッションの利いたベッドの上に腰を下ろした。
　ザヴィアはティースの言葉に苦笑して、
「昨日はその団長さんとノエルさんばかり話してましたからね。……私もどちらかといえば話し下手ですが、この屋敷にいると同性と話すことがほとんどないもので、この機会に色々ティースさんとお話したいと思ったんです」
　そう言った。
　確かに、使用人たちには避けられているという話だったし、オーダスやエルトンとは直接話す機会などほとんどないのだろう。その状況はティースにも充分に理解できた。
　が、
「どうして？」
　もちろん知らないフリでティースは尋ねていた。
「結構男の人とか多いでしょう？　ほら……えっと、昨日僕らを案内してくれたコンラッドさんとか」
　これはティースにしてはなかなか気の利いた返答だ。言葉も決して不自然ではない。
　それに対するザヴィアの反応は、微かに寂しそうな笑みを伴った。
「コンラッドさんですか。私はどうも、あの人には特別に嫌われてるらしいんですよ」
　それは自嘲的と言おうか、諦観していると言おうか、そんな笑みだ。
「嫌われている？　それは何故？」
「実際のところは私にもわかりませんが、私がノエルさんと親しくするのが気に入らないのでしょうか。……ただ、当然といえば当然

でしょうね。だって私は、あの人たちにとってはどこの誰とも知れない男でしょう？」

それから冗談っぽく苦笑して、

「笑えることに、私は屋敷の番犬にまで嫌われてしまっているようで。何故か執拗に威嚇されるのですよ」

「で、でも、ザヴィアさんはノエルさんを助けたんじゃ……」

「ですからあの人たちにしてみれば、お金でも受け取ってさっさといなくなって欲しいのだと思います。……もちろん、私はお金が欲しくて彼女を助けたわけではないので、そうするぐらいなら黙ってここから去りますけどね」

「……あなたは旅を？」

「ええ。この街にも私の探し求めているものがなかったので、これ以上長居する理由はなくなったのですが……」

ザヴィアは膝の上で手を組んで視線を下に向けた。手の甲の奇妙なアザがティースの視界に入ってくる。

（なんだろ、水滴みたいな模様……）

「ところでティースさん」

顔を上げたザヴィアは急に話題を変えた。

「お聞きになりましたか？　昨日も魔が現れたという話を」

「……昨日“も”？」

慎重に受け答えたティースに、ザヴィアは特に不審を感じた様子もなく頷いて、

「知りませんでしたか？　私がノエルさんを助けたとき、それと昨日……それ以外にも、最近この町では魔が頻出しているのです」

「それは初耳だなぁ」

そんなティースに、ザヴィアは少し怪訝な顔をして、

「……意外に冷静ですね。もっと驚くかと思いましたけど」

「え？　あ、いや……」

ティースはしまった、と思ったが、そこへ思い出したように続けたザヴィアの言葉によって、幸いなことに傷口は広がらずに済んだ。

「ああ、そういえば昨日、団長さんが話してましたよね。……移動中に魔に出会ったことが何度かあるんでしたか？　中には人型の魔もいたとか」
「あ……うん、そうなんだ。だから慣れてるってわけじゃないけど……」
ホッと胸を撫で下ろしたティース。もちろん昨晩アクアが話したのは完全な作り話であったが、それが思わぬところで功を奏したらしい。
「……」
そんな彼を、ザヴィアは急に無言になってじっと見つめた。
「……え？」
（な……なんだろ。また何か失敗したかな……）
ティースの背中を冷や汗が流れた。……こういうやり取りはやはり心底苦手なのである。
だがその後、ザヴィアから彼に向けられた問いは、彼の心配とはまるで無縁の、まるで想像だにしないものだった。
「ではティースさん。……人型の魔は、人と同じように話したり、人と同じように泣いたり笑ったりするということを、ご存じですか？」
「……え？」
意表を突かれた顔のティースに、ザヴィアは続ける。
「魔が、人と同じような感情を持ち、時には他人を愛し、時には自分を犠牲にしてでも愛する人を守ることがある……などと言ったら、ティースさんは笑いますか？」
「……」
あまりに唐突な問いに、ティースは言葉を失っていた。だが、冗談だと片づけるにしては、ザヴィアの視線は彼を真っ直ぐに見つめるまま。少なくとも彼には、それが冗談だとは思えなかったのである。
だからティースは答えた。

彼が思うままの言葉を、ほんの僅かに控えめにして。
「笑わない……かな。あり得ることだと思う」
ザヴィアは一瞬驚いた顔をした後、ふっ……と表情を緩めて微かな笑みを浮かべた。
「……変わった人ですね、ティースさんは」
「それは……よく言われるかも」
頭を掻くティースを横目に見て、ザヴィアはゆっくりとソファを立った。
「今日は良い天気ですね。昨晩、悪いことがあったなんて嘘のようです」
フルートのような楽器を手に窓際に歩み寄ると、
「窓、開けてもいいですか？」
「あ、うん。それはもちろん」
緩やかな風が流れ込む。カーテンが微かに踊り、花のような香りが室内に漂った。
ザヴィアは窓の縁に腰掛け、枠に背中を預けると、ティースを振り返って、
「ティースさんは何か楽器を演奏しますか？」
「え？　あ、いや、僕はそういう方面は全然……」
「そうですか。私もあまり取り柄の少ない男ですが、“これ”は少し自信があるんです」
言って、ザヴィアはその楽器にそっと口づけた。そこから流れ出したのは不思議な音色。曲は……ティースにも聞き覚えのあるものだった。
（これって有名な曲だったな……なんだっけ……）
それはネービスの街角でもよく耳にする曲だったが、“こういう方面は全然”なだけあって、ティースの頭にその曲名が思い浮かぶことはなく。
（不思議な音色の楽器だけど……うん。演奏は多分上手い……）
ザヴィアの演奏はティースが素直にそう思えるレベルだった。指

の動きも息の入り方にもまるで淀みがない。
「……これは最近、ノエルさんに教わった曲です」
演奏を終えてザヴィアは微笑して言った。
「私の故郷は辺境で、大陸で有名な曲とかはあまり教わらなかったもので」
「へぇ……いや、でも最近覚えた割にすごく上手いよ」
「どうも。……もし退屈でなければ、私の故郷の曲も聴いていただけますか？」
途中から彼の演奏に聴き入っていたティースとしては、当然退屈だなどということはなく、
「ああ、もちろん」
頷いたティースにもう一度微笑んで、ザヴィアは再び楽器に口を付けた。目を閉じ、そして先ほどよりも集中した様子がティースにも伝わってくる。
そして楽器が音を奏で始めた。
（……不思議なメロディだな）
ティースの感想はそれが最初だ。耳慣れないメロディ。どんな音楽にも大抵は法則というか聞き慣れたリズムというか、そういうものがあるはずだが、ティースの中のその常識とは少々毛色の異なる音楽だった。
だが、
（でも……うん。この楽器の音色には不思議としっくり来るメロディだ……）
一分ほども経つと、ティースはすぐにそのメロディに馴染んだ。まるで語りかけてくるようなメロディが、先ほどの聞き慣れた曲よりもよほど心地よく感じる。
……長い曲だった。五分以上経っても終わらない。似たようなメロディを繰り返しながら、まるで物語を辿っているかのように、曲調はやがて速く、急かすようなリズムに変わっていく。
（こりゃ……もしかして“上手い”なんてレベルじゃないのかも…

…）

結局、十五分以上もの時間をかけて曲は終わりを告げた。

「ふぅ……」

息をついたザヴィアの額にはうっすらと汗が浮かんでいる。

「……」

その頃には、ティースは完全に聴き入っていて、曲が終わってからもしばらくそれに気付かないほどだった。

「ティースさん」

ザヴィアの呼びかけ。風がカーテンを揺らす音。外から聞こえる犬の吠え声。

ようやくティースは我に返った。

「……え？　あ……」

「やはり退屈でしたか？」

「あ、いや、そんなこと！」

ティースは手を振ってそれを否定すると、

「思わず聴き入っちゃったぐらいだから！　いや……ホント、お世辞抜きで素晴らしかったよ」

「そう言ってもらえると安心します」

ザヴィアは額の汗を拭って、そしてやはり微笑んだ。その表情には達成感といおうか満足感といおうか、そんな類の色が見える。

「でも……ホントにすごいよ。耳慣れない曲なのに、聴いてるうちにそれがすごく心地よくなっちゃって」

「ノエルさんにも同じことを言っていただきました。……嬉しいものですね、故郷の文化を誉めてもらえるというのは」

そしてザヴィアはゆっくりと窓を閉じ、そして室内へと戻ってくるとソファへ腰を下ろす。

それを見て、ティースは思った。

（さっきからノエルさんの名前をよく出すけど……この人も……なのかなぁ）

昨日の様子から、ノエルのザヴィアに対する気持ちは間違いない

と思っていたティースだったが、その逆はいまいち半信半疑だったのである。

（……じゃあ、目的がなくなったのにここに居続ける理由って、やっぱり――）

そんなことを考えた直後のことだった。

――甲高い悲鳴が響き渡る。

「！」

「っ……」

ティースとザヴィアは同時に腰を浮かせた。

「……化け物――っ！！」

響いたのは硝子の破裂音。そして重なった複数の悲鳴。

近い。

「この方向は……っ！！」

ザヴィアが弾かれたように部屋を飛び出していく。

「……っ！」

もちろんティースもすぐさま、その後に……少し迷いながらも荷物の中から剣を掴み、それから部屋を飛び出した。

「ザヴィアさん！　待ってくれ！」

すでに遠くなっていたザヴィアの背中を懸命に追いかける。だが、その足はティースよりよほど速かった。

「ノエルさんっ！！」

そしてザヴィアの背中は迷わずに廊下を突き進み、とある一室へと飛び込んでいく。

……ティースが数秒遅れて辿り着いたとき、部屋には四つの影があった。

（こいつらは――っ）

部屋の奥にはノエル。一見したところ怪我はない。そして飛び散ったガラス窓……そこに成人男性より大きめの二匹の魔がいた。鋭く大きな足爪、そして大きな翼。

ティースにとって見るのは初めてだったが、頭の中にそいつらの

知識はあった。
（風の五十四族！）
ザヴィアは部屋の入り口で、彼らの動きを牽制するように睨み付けている。丸腰だが、その威圧感はティースにも伝わるほどに強烈だった。魔もそれを感じてか、割れたガラス窓の位置から先に進もうとはしていない。
「性懲りもなく……」
ザヴィアの声色に、先ほどまでの穏やかな雰囲気は微塵もない。まるで突き刺さるような迫力があった。
「……帰れ。ここはお前たちの来る場所じゃない」
二匹の魔はザヴィアの眼光に見据えられたまま、動かない。
「ザヴィアさん、丸腰じゃ――！」
「ティースさん。……あなたは危険だから下がって」
振り返らずにザヴィアは鋭く答え、そして一歩、部屋の中へ踏み出した。
「ザヴィア様……」
部屋の隅で、ノエルが弱々しい声を発する。が、その表情に絶望の色は全く見えない。それだけ彼を信頼しているということなのだろう。
「ノエルさん。動かないでください」
そしてもう一歩、魔を見据えたままでザヴィアが部屋の中に踏み込んでいく。
「ケェェェ……」
魔が不思議な鳴き声を発した。
ザヴィアがさらに一歩進んでいく。
（……無茶だ……）
ティースは剣を携えたまま、どうすべきか迷っていた。
……ザヴィアの発する威圧感は、どう考えてもただ者ではない。おそらく二匹の魔もそれを感じて襲いかかるのを躊躇しているのだろう。が……いくら彼がただ者でなくとも、丸腰ではどうしようも

ないのもまた確かだった。魔力の壁を打ち破るための破魔具も身に付けているようには見えない。
（俺じゃ力不足かもしれないけど……ここはやるしか――）
そう言って鞘から剣を抜こうとする。
――だが、その前に状況が動いた。
「……ザヴィアさん！！」
片方の魔がノエルに向かって飛びかかったのだ。と同時に、ザヴィアも床を蹴った。……もちろんティースも同時に。
「ケェエエエエッ！！」
「っ――！！」
魔の鳴き声と、ノエルの声にならない叫びが重なる。
その瞬間、ザヴィアは人とは思えない瞬発力でその間に割って入っていた。だが、彼は丸腰だ。襲いかかる魔の鋭い爪を防ぐ手段はない。
「ザヴィアさんっ！！」
ティースの叫びとともに、ザヴィアの体が魔と向かい合う。鋭い爪が襲いかかる。
（……間に合わないっ！！）
数歩遅れたティースにはそれを助ける手段がなかった。
そして彼の目の前で、ザヴィアの体は無惨にも引き裂かれ――ようとした、そのとき。
（――えっ！？）
ざわっ……と。
まるで衝撃波のように、部屋の中に何とも言えない感覚が広がった。……それは決して物理的なものではない。圧迫感というか、威圧感というか、そういった類のものだろう。
（なんだ……これ……！？）
だがティースは確かに感じた。全身を襲う、思わず総毛立ってしまいそうな力の迸り。
……それが彼の気のせいなどでないことは、その後の展開を見れ

ば明らかだった。
「ケェェェェッ……」
二匹の魔は情けない鳴き声を上げ、ザヴィアの眼前まで迫っていた爪を収め、そしてゆっくりと後ずさっていったのだ。
（まさか……魔が怯えてる！？）
「帰れ」
ザヴィアの声は、まるでそこに何らかの力を帯びているかのような、奇妙な重圧感がある。
「帰らなければ――」
言い終わるまで待つ必要はなかった。
「ケェェェェ……」
二匹の魔は再び情けない鳴き声を上げると、そのまま、まるで慌てたように窓から飛び去ってしまったのである。

その4『“キューピッド”はアレルギー』

昼間に起こった騒ぎもひとまず落ち着いた頃、オルファネール家には夜が訪れていた。

「どうもあの獣魔は山の方から飛んできているみたいね。……もう少し長居してくれれば、あたしも間に合ったんだけど」

ティースを含むファントムの面々は、前日と同じように本日の成果について報告し合っている。

そして今日、その焦点になっていたのはもちろん、昼間にノエルの部屋に現れた二匹の獣魔について、であった。

「風の五十四族。あたしも飛び去っていくとこを見たけど、おそらくティースくんの言うとおりだわ」

アクアは昨日と同じようにベッドにうつ伏せに転がっていた。が、昨日のように足をブラブラさせたりはせず、組んだ両手の上に顎を乗せて、その視線は比較的真剣だ。

「五十四族ねぇ。それじゃあ」

他の面々も陣取っている位置は昨日と全く同じ。そしてソファに座った片方、双子の妹のダリアが少し首をひねりながら言った。

「本当にデビルサイダーが紛れ込んでるとしたら、そいつは結構な“大物”かもしんねーな」

「え？　どういうことだ？」

疑問を向けたティースに、

「お前、本当に何にも知らね――……って、ま。まだ二ヶ月ぐらいじゃ当たり前か」

ダリアは言い直して、それから丁寧に答えた。

「五十番台ともなると、主に上位族か将族の使い魔クラスだ。言い換えりゃ、下位族じゃちょっと制御が難しいぐらいのクラスってことさ。わかんだろ？」

もちろんティースは理解した。そして今日現れた二匹の獣魔の姿

をもう一度思い出す。
「……ってことは、あの鳥みたいなの、やっぱ手強い相手なのか」
ダリアは頷いて、
「お前ぐらいだと二匹を相手にするのはちょっと難しいんじゃないか？　あたしだってできれば遠慮したいさ。ヘタすりゃ命を落とすからな」
そこへ、その隣で相変わらず体を丸めた体勢のドロシーが鼻を鳴らす。
「本当に恐ろしいのは風の五十四族なんかじゃない……」
「？　どういうことだ？」
疑問の目を向けると、ドロシーは何も答えずにアクアを見た。それにつられて、ティースの視線も自然と彼女の方へ移動する。
アクアは答えた。
「簡単なことよ、ティースくん。ノエルちゃんを襲った魔はそれなりの力を持つ獣魔だったわけ。……それじゃあ」
一瞬、アクアの目が鋭い光を放った……ように、ティースには思えた。
「その風の五十四族を眼光だけで追い払ったザヴィアって子は……一体何者なのかしら、ってこと」
「……まさか」
その言葉が意味するところは、ティースにも理解できた。そしてそれは、彼としては少々受け入れがたいものだった。
思わず声が大きくなる。
「アクアさん！　彼が……その、敵だって――！」
「声がデカい。何度言わせるつもりだ……」
「ご、ごめん……」
ドロシーに睨まれて、ティースは咄嗟に手で口を塞ぐ。
そして改めて声を潜め問いかけた。
「アクアさん。彼が……その、デビルサイダーだって言うんですか？」

だが、アクアはすぐに否定の意を示す。
「別にそうだと言ってるわけじゃなくて。ただ、彼は“ごく普通の旅人”なんかじゃない。それだけは間違いない気がしない？」
「……そりゃあ」
いくらティースでもそのぐらいはわかる。威圧だけで魔を……それもそこそこ強い獣魔を追い払ったのだ。とんでもない“腕利き”らしいということは感じていた。
「でも、あの人は騒ぎが起こってすぐにノエルさんを助けに行って、それで実際に魔を追い払ってるし……」
納得できずに言いかけたティースに、思わぬところから援護が入った。
「ま、確かにそいつの言うことにも一理あるぜ、アクア姉」
「……ダリア？」
ティースにとって彼女の援護は少々意外だった。
ダリアはチラッと彼を見てからソファに背中を預け、頭の後ろで腕を組むと、
「あたしが聞いた話だけどな。朝食後、ノエルはそのザヴィアの部屋に行ってしばらく一緒にいたらしいんだ。で、別れて部屋に戻ったのが十一時頃。……ティース。お前確か、ザヴィアが部屋に来たのはやっぱり十一時ぐらいだって言ってたよな？」
「あ、ああ……」
「ってことは、ザヴィアはノエルと別れてすぐ、お前の部屋に行ったってことだろ？」
「つまり？　ザヴィアくんには獣魔と接触する時間がなかったってこと？」
「そう考えられないか？」
アクアは少し思案する顔になって、
「でも、たとえば最初から無差別に屋敷の人を襲うように指示してあったかもしれないじゃない？」
「いや、だって考えてみろよ、アクア姉。昨日の事件、それに今日

の騒ぎ。どっちも今までにはなかったパターンじゃないか？　ザヴィアはあたしたちが屋敷に来てから一歩も外に出ていないんだぜ？」
「……ああ、そっか。獣魔が屋敷の中にまで押し入ったのは初めてかぁ」
アクアは納得して頷くと、
「今までと違う行動を取っている以上、そこにはやっぱり何らかの指示が必要ってわけね。……ドロシー？　どう思う？」
「ああ。オレもそれについては間違っちゃいないと思う……」
「そっか。ドロシーもそう思うのねぇ……」
ティースはホッとする。
どうやら場の意見は、彼の心配を否定する方向へ向かっているようだった。
「うーん……あ」
そこへ、アクアがふと思いついたようにティースを見て、
「そういやティースくん？　“剣”については、何も追求されなかった？」
「……え？　あ」
剣……ティースが騒ぎのときに持ち出した“細波”のことである。もちろん騒ぎの後、彼が剣を持つ姿は何人もの人に目撃されていたのだ。
「いや。もちろんザヴィアさんとか、その後に駆けつけたコンラッドさんとかに聞かれましたけど……その、旅の危険から身を守るために持っているって説明したら納得してくれました」
「そっか。上出来上出来」
アクアはまるで子供を誉めるような笑顔だったが、そこへ、ダリアが意地の悪い笑みで口を挟む。
「ま、お前は芸の方じゃ“役立たず”だったし、あたしたちの護衛役だってことにすりゃ、かえって自然かもしんねーな」
「……」
笑いながら言ったダリアの言い様に、ティースは少々納得できな

いながらも、事実なだけに何も言い返すことができなかった。

その翌日も晴天で、オルファネールの屋敷には朝から鳥の鳴き声が聞こえている。

「あれ……ノエルさん？」

そんな中、昨日、獣魔と相対した興奮が残っていたのか、いつもより早めに目が覚めたティースは、部屋を出たところでノエルとばったり出くわしていた。

「おはようございます、ティースさん」

ノエルはにこやかにそう言うと、貴族の娘らしく上品な仕草で挨拶した。

その様子を見る限り、彼女は昨日の出来事を引きずっていないようだ。襲われたのが初めてではないということもあったし、おそらくはザヴィアが必ず助けてくれると信じているからだろう。

だが、ティースが怪訝に思ったのはそのことではない。

「あの。ノエルさんって……部屋、こっちの方でしたっけ？」

そう。彼女はたった今、ティースたちのいる客室と同じ並びから出てきたのである。

ノエルは笑って、

「いえ。私の部屋は昨日、窓が壊れてしまったものですから」

「……あ、そういやそっか」

「昨日はどうもありがとうございました」

「え？　……ええっ？」

ペコリと頭を下げたノエルに、ティースは慌てて、

「い、いや、やめてくださいよ。僕は全然何も……ほら。ザヴィアさんが追い払うのを見てただけで……」

だが、ノエルはゆっくりと顔を上げると、

「いいえ。恐ろしい魔が相手ですから。駆けつけてくださっただけ

でも大変なことではないですか」
「あ、いや……」
ニッコリと微笑まれて、ティースは少し赤面してしまった。
そして、
（い、いい子なんだなあ、ノエルさんって……）
単純と言おうかお人好しと言おうか。彼はその言葉だけでノエルの印象を一気に良くしてしまったようで、
（貴族のお嬢さんってわがままな子が多いと思ってたんだけど……違うみたいだ）
などと思ってしまう。
ティースの周りにはファナという例外もいるのだが、それでもなお、彼の中では“お嬢様＝わがまま”というイメージが定着していたのであった。
「で、でも」
赤くなった顔を隠すように、ティースは話題を変える。
「ザヴィアさんってすごいですね。あんな恐ろしい魔を相手に……その、丸腰で」
「ええ」
ノエルは嬉しそうに目を細め、そして少し頬を染めて答えた。
「ザヴィア様は素晴らしい方です。確かに、見た目は少々変わっているかもしれませんけど、とても優しい目を持っておられます」
「……」
ティースの誉めた内容とはあまり関係のないことだったが、あまりに嬉しそうに語るノエルに、そのことを突っ込む気にもなれなかった。
「それなのに……」
と、そのうち、弾んでいたその声がほんの少し影を帯びる。
「みんなわかってくれません。得体が知れないとか、何を考えてるのかわからないとか」
「……」

それが徐々に憤りを帯びてくるのがティースにも感じられた。そして直後、強い視線がティースの方へ向けられる。
「コンなどはひどいんですよ！　ザヴィア様が何か企んで来たのかもしれないって、そんなことを言うんです！」
「……あ、いや」
その剣幕に、ティースは少々たじろぎながらも、
「コン、って？」
「あ……す、すみません」
ノエルは我に返った様子で口をおさえ、それから少し恥ずかしそうに俯くと、
「えっと、コンというのは執事補佐のコンラッドのことです。私、小さい頃から世話になってきたものですから、つい」
「あ」
ティースは思い出す。
（そういやフィリスがそんなことを言ってたっけ）
もちろんティースは最初から疑ってなかったが、その情報が正しかったことがどうやら立証されたようである。
（コンラッドさんはそれでノエルさんのことを心配してるのかな……？）
「だから私、コンが謝ってくるまでは絶対に口を利かないことにしたんです。……ティースさんもひどいとは思いませんか？」
「そ、そうですね」
なんとも答えにくい問いかけだったが、ここで否定することなどできるはずもなく。もちろんティース自身もどちらかといえばノエルの意見に賛成だったわけだが。
「前はあんなこと言う人じゃなかったんですけど……ザヴィアさんに対してだけは、本当にひどいんです」
ノエルが最後に少し淋しそうな顔をするのが、ティースの視界にも入った。
（コンラッドさん……か。ノエルさんを心配する余りのことなのか

なぁ……）

それはわからなかったが、それとは別に、ティースの中ではっきりしたこともある。

「あの、こういうこと聞いたら失礼なのかもしれませんけど……」

「はい？」

躊躇ってから、切り出す。

「ノエルさんって、ザヴィアさんのこと……その、つまり……」

「あ」

聞きづらくてしどろもどろになったティースに、ノエルは逆に恥ずかしがる様子もなくきっぱりと答えた。

「ええ、お慕いしてます。……別に隠すつもりはないですから、気になさらないでください」

そして満面の笑顔を見せる。

「そ、そうですか」

そんな彼女の態度に、ティースはドロシーの言葉を思い出した。

（こういう子は一度沸騰すると見境なし……か）

しかしまあ、ティースとしてはドロシーのように否定的になれない。それどころか、この“身分違いの恋”を応援してあげたいとも思った。

「それってやっぱり、何度も助けてもらったからですか？」

「それもありますけれど……少しお恥ずかしい話なのですが」

ノエルは言葉通りに少し恥ずかしそうな表情をすると、

「ごらんになってわかると思いますけど、私、あまり世間のこととか知らなくて。何もしなければずっとこのまま、何も知らないままで終わってしまいそうで、それは嫌だな、って以前からずっと思っていたんです」

「……」

「でもザヴィア様は私と違って、色々なことを知っていて、色々なことができて、それでいてとても優しい。それが、私みたいな人間にはとても素敵に思えて……」

「……そうですか」
ティースは彼女のような状況に陥ったことがないので、その気持ちが理解できるとは言い難い。が、言いたいことは何となくわかる気がしていた。
（これだけ素直に想っていて……多分、ザヴィアさんの方も……それなら、なんとかしてあげたいよなぁ）
「ティースさん？」
「あ、いえ……」
ノエルの不思議そうな視線に、ティースは視線を泳がせて誤魔化しかけたが、
（……そうだよな。味方がいないんじゃ可哀想だよ……）
思い直し、そして視線を戻して言ったのだった。
「僕は……応援しますから。二人のこと。だから……その、頑張ってください」
「……」
驚いたようなノエルの顔。
「……ティースさん」
だが、その困惑はやがて、素直な喜びの感情となって表れた。
「……ありがとうございます」
それは心からの言葉のようだった。
やはり心細かったのだろう。何しろ彼女は大貴族の娘。相手はどこの誰とも知れない旅人の男。……それは想像以上に高い壁だ。たとえ相思相愛であっても、その恋が成就するにはたくさんの障害を乗り越えなければならない。
世間知らずな彼女でも、そのぐらいのことは理解していたのだろう。
だから、彼女は喜んだのだ。少しだけ泣き出しそうな顔で。
「え？　あ、あの、ノエルさん……」
何が悪かったのかとオロオロするティースに、ノエルはゆっくりと笑みを浮かべて、

「そう言ってくれる人なんて、今までいなかったから……」
「……」
「本当に、ありがとうございます」
そして自然な流れの中、感謝の意を示すために、呆然としたティースの手を取って。
手を取って。
――手を。
（あ）
そう。油断してすっかり忘れていたようだが――
「え……ティ、ティースさんっ！？」
彼は、“女性アレルギー”なのである。

――全治、一時間――

（変だな……どう考えても、獣魔とコンタクトを取ってそうなヤツが浮かばねぇ）
ティースがノエルに触れられて気絶している間、朝食を終えたファントムの面々はいつも通り、それぞれに情報を集めていた。
その中の一人、ダリア＝キャロルは、ミューティレイクにいる頃よりはずっと大人しい服装――着慣れない長袖のワンピース姿でオルファネールの屋敷を歩いている。アクアなどはそんな彼女を見るたびに笑ったりするが、ダリア自身、それが自分に似合っているとはこれっぽっちも思っていないので気にはならなかった。
と、そんなことより、今の彼女の頭は今回の件でいっぱいなのである。
（あれだけ大型の獣魔だ。街の方に下りてくりゃ目撃者がいないはずはねえ。けど、事件のとき以外で獣魔を目撃したヤツは皆無。……ってことは、やっぱ“犯人”がコンタクトを取りに山の方に行っ

てるはずなんだけどな）

玄関から外へ出る。外は今日も夏の日差しが射していた。

（屋敷の外に共犯者がいて、そいつが獣魔に命令を下している可能性もあるか？　……にしても、そいつと連絡を取るのだって屋敷の中からじゃ難しいはずだ）

少し歩いて視線を右に向けると、そこには屋敷と繋がった高い塔があり、さらに視線を斜めに移動させるとそこには街の背後にそびえ立つ山、山脈“ヴァルキュリス”の一部が視界に入ってくる。

（塔か。……ん？）

そのときダリアの目には、一瞬、何かが光ったように見えた。

塔の最上階……その窓から。

（……なんだ？）

もう一度。

（塔？　光？　……まさか）

彼女の思考が、その“可能性”に辿り着くまでそれほど時間はかからなかった。

（そうか……接触しなくても意志を伝達する方法はある……）

急いで屋敷に引き返す。

塔は屋敷の中から繋がっており、そこ以外からは入れない。

ダリアは頭に叩き込んだ屋敷の断面図を思い浮かべながら、塔の入り口へと向かった。

（光……アレが何かの信号を送っているのだとしたら――）

だが、

「……当然、鍵、か」

塔へ続く入り口には鍵がかかっていた。

「……」

ダリアは辺りを見回した。幸い、近くに人の気配はない。

（鍵がかかっている場所への進入はご遠慮下さい……か）

コンラッドの言葉を思い出したダリアは、もう一度辺りを見回し、そしてポケットを探った。

（鍵がかかってる部屋なんてほとんどない……ってことは、ここにはどうしても入って欲しくないってことだよな）

彼女がポケットから取り出したのは細い針金のような工具だ。

（結構頑丈な鍵を使ってやがるな……まさか罠はないと思うが）

それでも慎重に、何度も辺りの様子を窺いながら鍵の構造を調べる。

（罠はねえな……けど、ちょっと時間がかかりそうだ）

塔への入り口は当然屋敷の端っこにある。だから人通りもそれほど多くはない。が、もしこじ開けているところを見られたら一大事だった。

（……どうする？　アクア姉に相談してからにするか……）

と、そのとき。

「！」

ダリアは素早く扉から離れた。そして一番近い――といっても十メートルほど離れた曲がり角に隠れる。

（誰か下りてきたな……誰だ……？）

鍵の外れる音、続いてドアの開く音。

ダリアがそっと覗いてみると、ちょうど、出てきた人物がそこに鍵をかけているところだ。

（ありゃ……コンラッドか）

ティースに迫るぐらいの長身、がっしりとした体格に正装。遠目でも間違えるはずはない。

「……」

ダリアは少し考えてから一つ頷くと、曲がり角から出ていった。

「……あなたは」

「や、あんた、コンラッドさんだっけ？」

「……こんなところで何をなさっているのですか？」

怪訝そうなコンラッドに、ダリアは笑いながら、

「いや、あたしってこういうお偉いさんの住むとこってどうも馴染めなくてな。じっとしてると息苦しいから散歩してんだよ」

まるで男のような言葉遣いにコンラッドは少し困惑したようだったが、すぐにいつもの仏頂面に戻る。
「この先は鍵のかかった部屋があるだけです。散歩なさるのでしたら別の場所へ行かれるべきでしょう」
「ああ、そうなのか。そりゃ悪かった。なんせこんな広い屋敷、滅多に来ないんでね」
「では、私が仕事がありますので」
コンラッドはそう言ってダリアの横を通り過ぎていった。
（……動揺してたのかどうかもわかんないな、あれじゃ）
それでもダリアは満足そうな顔でそれを見送ると、そしてもう一度ポケットを探る。
（ま、でも……おかげでこじ開ける必要もなくなったわけだ）
そっと笑みを浮かべた。
（……さて、鬼が出るか蛇が出るか）
その手にコンラッドがポケットにしまったはずの鍵を握り、辺りの様子をもう一度窺ってから、ダリアは塔の入り口へ向かったのだった。

（うう、油断していた……）
ティースが目を覚ましたとき、そばにはノエルとザヴィアがいた。
その話によると、彼が気絶したところにザヴィアがやってきて、そのまま部屋に運んだとのことだ。屋敷の医師も来ていたようだが、すでにその姿はなかった。
「ちょっと貧血気味なもので……たまにああいうことがあるんです。体は全然大丈夫なので、その、ご心配なく」
「びっくりしました」
ホッとした様子で、ノエルは答えた。
「急にお倒れになられたものですから……てっきり、心臓の病でも

抱えておられたのかと……」
そこへザヴィアが続ける。
「私も驚きましたよ。廊下を歩いていたら急にノエルさんの叫びが聞こえたもので、またヤツらが現れたのかと」
「騒がせてしまったみたいで、本当にすみません……」
二人の言葉にも、ティースは恐縮するばかりだった。
（ホント、情けないよな……俺……）
自身ではどうにもできないとはいえ、気絶するたびにティースはそう思うのだ。もちろん本当の事情など恥ずかしすぎて目の前に二人に話すわけにもいかなかった。
だが、ノエルは逆に頭を下げると、
「こちらこそ。お加減が優れないことにも気付かず、舞い上がってしまって」
「あ、いや、そんなこと……」
そんな二人の会話に、ザヴィアは怪訝そうな顔をして、
「何の話ですか？」
ノエルがようやく少しだけ微笑みを浮かべて、そして正直に答える。
「ティースさんが私たちのことを応援すると、そう言って下さったのです。それで」
「え？」
一瞬、わからない顔をしたザヴィアだったが、やがてその意味を悟ったのか、
「……ノエルさん。私は――」
少しだけ眉をひそめた。
が、そんなザヴィアに構わず、ノエルは急に何事か思いついた顔をすると、
「そうだ、ザヴィア様。せっかくの機会です。この場ではっきりさせましょう」
「え？」

「ノエルさん？」
戸惑うティースとザヴィアを余所に、ノエルは視線を真っ直ぐにザヴィアへと向けた。
「私はザヴィア様のことをお慕いしております。……ザヴィア様は、私のことがお嫌いですか？」
「……」
ザヴィアがチラッとティースを見た。
ティースもあまりに大胆な彼女の言動に少し呆気にとられて、
（……この子、俺の目があるのに……これが“若さ”ってやつなのかなぁ）
せいぜい二つぐらいしか違わないはずだが、“精神的に枯れている（シーラ談）”ティースとしては、そんな彼女の態度が信じられなくもあり、また感心でもあった。
だが、当事者であるザヴィアとしてはそうも言ってられないようで、
「ノエルさん。そんなこと、ここで――」
「いいえ」
だがノエルは頑なだった。
「ザヴィア様は二人きりだと必ずはぐらかしてしまいますから。……ティースさん。証人になってもらえませんか？」
「え、証人……ですか？」
ノエルは頷いて、そして再びザヴィアを見る。
「嫌いなら嫌いとはっきりおっしゃってください。それなら私は諦めますから。……ただし、下手な言い訳はなしにしてください」
それに対しては、ザヴィアははっきりと答えた。
「いえ。……嫌いなどということは決してありません」
「では、どうして私の気持ちに応えてくれないのです？」
「それは……」
たじろぐザヴィアに、詰め寄るノエル。
……それを間近で見ているティースは、少々息の詰まる思いだっ

た。
（しゅ、修羅場……っていうのかな、こういうのも……）
しかし、ティースは気絶する前にも言ったように、ノエルのことを応援したい気持ちだ。もちろんザヴィアが躊躇う理由はわからなくもないし、もしもそういう関係になったなら彼の方がよほど苦労するに違いないが、それでも。
（ノエルさん、真剣だもんな……）
純粋と言おうか一途と言おうか。応援すると言ったときの嬉しそうな顔といい……その全てが、ティースにとっては思わず応援したくなるようなものだったのである。
だが、それに答えるザヴィアは、やはり煮え切らない態度だった。
「……ノエルさん。あなたは高貴な家の方です。私は――」
「そんな言葉は聞き飽きました！」
ノエルはまるで彼の言葉を振り払うように首を振って、そしてキッと彼を見つめる。
「もしそれが理由だと言うのなら、わかりました！　私、この家を出ます！」
「……無茶を言わないでください。そんなこと、できるはずがない」
「無茶なんかじゃありません！　ザヴィア様が、どうしてもそれが気になるというのでしたら、私――！」
「……待って下さい。それだけが理由ではないのです。私は決して、あなたと結ばれることのない男なのですよ」
「だったら、その理由をおっしゃってください！」
「それは――」
再び、ザヴィアは言葉に詰まった。視線を泳がせ、言葉を探しているようだ。
ノエルはそれを厳しい目で見つめている。空白が続くほどに、その視線は険しさを増していくようだった。
「……」
ティースももちろん口を挟む余地などなく、ただ黙ってそれを眺

めている。
そして……一分近くも沈黙が続いただろうか。
ようやくザヴィアが答えた。
その視線は、部屋の時計を捕らえて、
「……ノエルさん。そろそろお出かけの時間ではありませんか？」
「っ……！」
「今日はお父様方と一緒に街へ行かれるとか。遅れてはまずいのではないですか？」
「……」
ノエルは顔を赤くして立ち上がった。少し、唇が震えているように見える。
（……ノエルさん）
何も言わずに部屋を出ていったノエルを見送って、ティースは少し胸が締め付けられる想いだった。
「……」
ザヴィアもまたそれを無言で見送っていた。
――部屋の中に、なんとなく気まずい雰囲気が流れる。
言葉を探し、結局何も思いつかず、それでもティースは言葉を整理できないままに呼びかけることにした。
「あの……ザヴィアさん」
「……」
ザヴィアの口から一つ、息が漏れる。そして言葉が続いた。
「どうも、エルトンさんやカティナさんが先日見に行った歌劇を見に行くそうですね」
「……歌劇？　この状況で？」
もちろんティースも眉をひそめた。
（な、何を考えてるんだ……襲ってくれって言ってるようなものじゃ――）
だが、ザヴィアは怪訝そうな顔をして、
「ティースさんはご存じなかったのですか？　団長さんがそれに同

行すると聞きましたけれど」
「え？　あ……」
（なるほど、そういうことか……）
それならティースにも納得できる。
（アクアさんが一緒に行くなら大丈夫か。オーダスさんもその辺はちゃんと考えてのことなんだろうな）
安心したところで、ティースの頭には再び先ほどのノエルの顔が思い浮かんでくる。
（ノエルさん、歌劇どころじゃないだろうな、きっと……）
「とはいえ、昨日のようなこともありましたし、屋敷の中でも絶対に安全とは言えませんが――」
「……ザヴィアさん」
どうやら彼は、さっきの話題から離れたがっているようだ……と、そう感じ、ティースは無理矢理言葉を割り込ませた。
そして、思ったままに口を開く。
「ノエルさん、あれじゃ少し可哀想じゃないかな……？」
「……」
ティースの言葉にザヴィアは急に口を噤む。
「俺が口を挟むことじゃないのかもしれないけど……」
「……」
ザヴィアは無言でゆっくりと立ち上がった。
そして窓際へと歩いていく。
気を悪くしたのかとも思ったが、それでもティースは続けた。
「でも、少なくともノエルさんは真剣なんだろうし――」
「ティースさん」
窓を開け、そしてザヴィアはいつかのようにそこに腰を下ろして振り返った。
その表情から察するに、どうやら気分を害したわけではないらしい。
そしてザヴィアは言った。

「わかっています。ノエルさんが真剣であることも、私がそれにどう応えなければならないのかも」
「それじゃあ――」
ザヴィアは首を横に振って、
「ただ、それでもできることとできないことがあります。ノエルさんがいくら慕ってくれても、たとえば私がいくら彼女を愛していたとしても……」
「それはわかるよ。相手があんなお金持ちじゃ腰が引けるだろうけど――」
「それだけではないのですよ」
「え？」
窓の枠の上で外に目を向け、ザヴィアは何事か迷っているようだった。その視線の先で、屋敷の馬車が敷地の外へと出ていく。
そっと、ザヴィアは手にした楽器に口をつけた。
――流れ出したのは、ティースにも聞き覚えのある、“別れ”を題材にした曲。
（それだけじゃない？　じゃあ一体……）
どこか物悲しいメロディは、五分ほどで終わりを告げた。
「これも……ノエルさんと出会ってから覚えた曲です」
「……ザヴィアさん」
ゆっくりと、ザヴィアの視線がティースの方へ向けられる。
微笑んでいた。
「ティースさん。あなたはノエルさんに親切にしてくれたし、私のことも気に掛けてくれる。……だから、あなたを信用してお話しします」
「……？」
「覚えていますか？　私が昨日、あなたに尋ねたことを」
「え？」
「魔が、人を愛し、その愛のために生きることがあると。魔が、人と同じような感情を持っていると」

「……」

「ティースさんはそれを肯定してくれましたね」

その瞬間、ティースの頭に過ぎったのは、

（……――まさか）

とある可能性。

それは容易には信じがたい、だが、昨日の魔を追い払った異常なまでの威圧感、そしてアクアの言った“ただ者じゃない”という言葉。そして今、彼が口にした言葉。

そこから導き出されるものは、自然とそこに収束していくしかなかった。

「まさかザヴィアさん、あなたは……」

ザヴィアは外から見えない角度でターバンをズラした。

「たぶん、今、あなたが思った通りです」

その下から現れたもの……最初に目についたのは、右の額辺りから後頭部にかけての大きな傷跡。どうやら刃物傷のようだった。

そしてもう一つ。

「その耳は……」

実際にティース自身も見たことがある、長く尖った耳。

それは、彼が“魔”であることを示すもの――

「ティースさん、もしあなたが私の本当の姿を受け入れてくれるなら、という前提ですが――」

ザヴィアはすぐにそれを隠し、いつも通りにターバンを深くかぶった。

「このことは誰にも秘密にしてもらえませんか？　もちろん、あなたのお仲間にも」

「……」

あまりのことに、ティースは返す言葉が出なかった。

（ザヴィアさんが……魔だって……？）

そう認識した瞬間、普通の人間ならパニックになったかもしれない。

あるいは人を呼び、彼を捕らえようとしたかもしれない。
だが、ティースはそういう点で言えば、普通ではなかった。
おそらく彼は、大陸中でも珍しい、魔と意志を交わしたことのある人間だったから。彼がもし悪い意志を持っていたなら、人々から“デビルサイダー”と呼ばれていてもおかしくないような、そんな人間だったから。
だからティースは、ほんの僅かに深呼吸して気持ちを落ち着かせると、そのままで言葉を返した。
「……で、でも……ザヴィアさん。ノエルさんたちは頭の傷のこと知っていて――ってことは、そのターバンを外してみせたんでしょう？」
「……」
ティースが比較的落ち着いていることが意外だったのか、ザヴィアは少しの間、疑問の視線をしていたが、やがて答えた。
「……ええ。ティースさんはご存じないでしょうね。……デビルバスターなど、魔に詳しい方なら知っているはずだと思いますが、最近では“人に姿を変える方法”というのが発見されているのです」
「人に姿を変える？　……魔が？」
「いくつかの方法があります。とてつもない制約を課して半永久的に人の姿でいる方法、あるいはリスクは伴わないものの、ほんの短時間しか人の姿でいられないもの。……ノエルさんたちに見せたときは、その方法で一瞬だけ人の姿になったのです」
「……そんな方法があるのか」
やはりティースには初耳だった。
「ええ。といっても、私たちが人と違うのは耳と、あとは魔力を行使するときに若干変わる程度。幸い……と言っていいかわかりませんが、私にはターバンを深くかぶる理由が他にもあった。だから、今まで気付かれずにいられました」
ザヴィアはもう一度窓の外に視線を移した。
そして少しの無言。

開いた窓から流れ込む風が、カーテンを微かに揺らした。
再び、視線がティースの方を向いたとき、そこには先ほどまでよりも真剣な光が宿っていた。
「ティースさん。……私を捕らえ、そして引き渡しますか？」
「……」
だが、その問いに対しては、ティースは少しも迷うことなく答えた。
「いいや。だって……あなたは何も悪いことはしてない」
「そうですか？」
ティースの言葉にザヴィアは微笑んで、
「最近の事件、私が引き起こしたものだとは考えないのですか？」
「……あ」
それは確かに、真っ先に考えてしかるべきことだった。……いや、ティース以外の誰かなら――たとえば昨日、彼の犯行に否定的な意見を口にしたダリアであっても、おそらくそう考えたことだろう。
だが、ティースは首を振って、
「でも……そんなの、証拠がない」
ザヴィアはおかしそうに笑った。
「面白い人ですね。私が魔であることは、証拠にならないと？」
ティースはそれに真正面から答えて、
「だって、それはさっきも言ったじゃないか。……魔だから悪だとは限らない。そりゃ、そういうのが圧倒的に多いのも確かだけど、でも……そう。魔だって人を愛したり、人と友達になったりするはずだから」
「……」
ザヴィアの表情から笑みが消えた。
……一瞬、何とも言えない表情がそこに浮かぶ。
「変わっていますね」
そして再び、そこには笑みが戻った。
「本当に変わった人だ、あなたは」

ザヴィアは言いながら口元に楽器を運ぶ。
そこから流れたのは、昨日も聞いた彼の故郷の曲……昨日のものとは若干違うメロディ。
そこにどんな意味があったのか。ティースにはもちろんわかるはずもなく。
（……大変な話、聞いちゃったな）
演奏に身を委ねながら、ティースは考えていた。
（でも……そう。この人が獣魔を動かしていたなんて証拠、一つもない……でも）
そしてそっとため息を吐く。
（確かに……これって、身分差以上に高い壁だよなぁ……）
応援すると決めた矢先の出来事で、ティースの落胆はかなりのものであり――
――ちなみにこの日は、彼が聞いた“告白”以外にも、事件の進展を促す出来事が二つ、同時に起こっていた。

「みんな、今日は色々と大変だったみたいね。……じゃ、まとめるとしましょうか」
夜、ファントムの面々がいつも通りに集まったのは、昨日や一昨日までよりも少々遅い時間だった。
「まずはあたしだけど……みんなもすでに聞いた通り、オーダスさんやノエルさんと一緒に歌劇に向かう途中、獣魔に襲われたわ」
その場にいたファントムの面々は全員が同時に頷いた。
……そう。ティースがザヴィアとちょうど話していたその頃、ノエルたちに同行したアクアは獣魔の襲撃を受けていたのである。
「何度も目撃されているのと同じ、風の五十四族。幸い相手は一匹で、もちろんあたしが始末したけれど」
アクアは事も無げに言った。……いや、デビルバスターである彼

女にしてみれば、この程度は実際それほど苦でもなかったのだろう。
そこへダリアが質問する。
「それって、オーダス氏はともかく、一緒にいた他の連中には怪しまれなかったのか？」
「そりゃ怪しまれたけど、まさかあの状況で黙っているわけにもいかないじゃない？　ちゃんと口止めしておいたわ。……ノエルさんにしろ御者にしろ、護衛についていた二人にしろ、最初から容疑者の枠から外れてる人たちを選んでもらったの。だから、おそらく大丈夫よ」
「それで？　何か収穫はあったのか？」
「ええ。もしかしたらあるかもしれないわね」
「？」
そこへ、ドロシーが続ける。
「今回の外出の件、あらかじめ知っていたのは二人だけだ……」
「二人だけ？」
怪訝そうなダリアにアクアは頷いて、
「そうよ。オーダスさんの計らいで、屋敷の人たちの行動については極力漏らさないようにしてもらったの。今回の外出、あらかじめ知っていたのはオーダスさんとノエルちゃんの二人だけ。ノエルちゃんにしても聞かされたのは昨晩のことで、それ以外の人は外出直前まで知らなかったわ」
そこでティースは初めて、今日の外出の意図を悟るのだった。
（……今回の外出自体“罠”だったのか）
「そりゃまあ、アクア姉はあたしらにも言わなかったぐらいだからな」
ダリアは少し憮然とした顔だったが、アクアは笑って、
「ほら、敵を知り己を知れば百戦危うからずって言うじゃない」
「姐さん、それを言うなら“敵を騙すにはまず味方から”……」
「わ、わかってるってば！」
「……」

どうしてわざわざ難しい方の言葉と取り違えるのか、ティースにはとんと理解できなかった。

「……と、とにかく。今回に関して言えば、外出前からオーダスさんの行き先を知るのは一部を除いて完全に不可能だったわけ。にも関わらず襲われたってことは……」

「外出後に指示を出したか、あるいはその前に知り得た誰かが犯人か……の二通りしかない。かなり絞り込める、ってことか」

「そういうことよ、ダリア」

アクアはそう言ってお茶目にウインクしてみせた。

「へえ……」

その説明に聴き入っていたティースが感心の声を挙げると、アクアは苦笑して、

「と言っても、考えたのはドロシーなんだけど」

「……あ、なるほど」

妙に納得したティースに、アクアは不満そうに口を尖らせた。

「ちょっと、なぁに、ティースくんのその反応。それってつまり、ドロシーは頭いいけど、あたしはお馬鹿ってことぉ？」

「え？　あ、い、いや、そんなことは全然……」

ティースは慌てて否定したが、言ったも同然である。

そこへ、ダリアもニヤニヤしながら付け加えた。

「ま、アクア姉は昔っから細かいことを考えるのが得意じゃなかったからな。なにかっつーとすぐに“乙女の勘”だしよ」

「う、うるさいわねぇ」

だが、どうやら反論はできないようである。

「あたしの勘はよく当たるからいいじゃない。……で、フィリスちゃん。資料はもらってきたんでしょ？」

視線をフィリスに向ける。

フィリスは相変わらずお人形さんのようにちょこんと椅子に座り、その手にはアクアが言ったように数枚の紙が握られていた。

が、

「はい……でも……その、アクア様たちが出発なさってから魔に襲われるまでの間、屋敷の敷地から出た方は全部で六名なのですけど……」

フィリスのトーンは低めだった。

それで悟ったのか、ダリアが尋ねる。

「それほど長時間外出したヤツはいない、か？」

「少なくとも……山へ向かって戻ってくるほどの時間は……」

「そっか」

アクアは特に意外な様子もなかった。

「つまり？」

ティースは自身の頭の中で整理しながら、アクアに向かって尋ねる。

「犯人は“あらかじめ知っていた人”に限られるってこと？　……あれ？　でもそれってオーダスさんとノエルさんだけじゃ……」

「もう一人いる……」

ドロシーは答えて、そして膝を抱えた腕から鋭い視線をティースの方へ覗かせた。

「たった一人だけ、ノエルが今日の外出のことを話した男が……」

「……あ」

もちろんティースにもすぐに思い当たる。

……そう。確かにその人物は今日、ティースの目の前でそれを口にしていたのだ。

「ザヴィアさん……？」

「ああ……」

「まさか――」

「ただ、ねぇ」

ティースが反論する前に、アクアが首を横に振ってため息を吐いた。

「そのザヴィアくんは、最近ずっと外に出ていないわけ。だから少なくとも、そういう意味での容疑者の枠からは外れるのよ」

「……あ、そっか」
ホッと息を吐いて、ティースは納得する。
ダリアも頷くと、
「いくら事前に知っていても、その事前に魔とコンタクトを取っていなきゃ何の意味もない、ってわけか」
「……つまり？」
尋ねたティースに、アクアはちょっとだけ疲れた笑みを浮かべて答える。
「どうやら骨折り損……ってことかな？　ま、魔を一匹退治できたのは収穫だけど」
「……そうなのか」
ティースはアクアよりもよっぽど落胆してしまった。
そんな彼に、アクアは笑って、
「ま、そう上手く行くとは思ってなかったけどねぇ……最近の状況を見ても、犯人がわざわざ山まで魔とコンタクトを取りに行っているとは思えなかったし」
と、そこへダリアが手を挙げる。
「もしかしたらそれと関わることかもしんないんだけど、ちょっといいか？」
「ええ。……なんか変わったことがあったみたいね？」
「ああ。実は――」
そしてダリアは自分が見た塔の光のことを話した。
「……光？　それって何時頃のこと？」
「外にいたから、残念ながら正確な時間はわからねーんだ。けど多分、アクア姉が出掛ける直前か直後か、そんなもんだ」
「……なるほど」
アクアは興味津々だった。
「それで？　塔の方には行ってみたの？」
その言葉にドロシーが補足して、
「確か、塔は鍵がかかってたはずだな……」

「ま、そこんところはてきとーにな」
ダリアが笑いながら曖昧に濁すと、アクアはわざとらしいため息と吐いて、
「……またやったのねぇ」
「いいだろ。任務のためなんだからよ」
「小さい頃のクセってのはなかなか抜けないもんだからな……」
「？」
三人の会話の意味はティースにはわからなかったが、とにかくダリアの話は続いた。
「まず、あたしが入る前に塔から出てきたヤツがいる。……コンラッドさ」
アクアは頷いて、
「コンラッドさん、ね。じゃあその光は彼が？」
「いや、どーもはっきりしねーんだ」
首を振って、ダリアは続ける。
「塔のてっぺんには部屋があってさ。つっても立派な部屋さ。ベッドがあって、子供が遊ぶオモチャがあって」
「オモチャ？」
「ああ。ベッドの上には女の子がいた。七つか八つぐらいだろうな」
「……それって、どういうこと？」
「わかんねーけど、多分……」
ダリアの言葉に、ドロシーが鼻を鳴らして続けた。
「オレも少し噂を耳にした……どうやらここの一族には、少々クセの悪い血が流れてるようだな……」
「あ……ああ、なるほどね」
アクアはそれで納得したようだったが、
「クセの悪い血？」
まるで理解できなかったティースが怪訝な顔で問いかけると、ダリアは少し呆れた感じで両手を広げてみせた。
「アーバンって執事がオーダス氏の腹違いの弟だって話はしただろ

？　……つまり、そういうことさ」
「……え？　どういうことだ？」
それでも理解できないティースに対し、ダリアは呆れ顔をそのまま彼に向けて、
「お前、ほんっとに鈍いな。……要するに、塔の女の子は誰かの隠し子だってことさ」
「かっ、隠し――！？」
ティースは思わず叫びそうになって、ドロシーの視線に気付きすぐにそのトーンを落とす。
「か、隠し子って、それは……」
「ま、年齢からするとあの長男じゃなくてオーダス氏の子供だろうな。親が親なら子も子、ってことだろ」
「で、でもそれって、邪魔だから塔に閉じこめ――」
そんなティースの意見をダリアはすぐに否定する。
「いや、違うと思うぜ。……見た感じ、病気っぽかった。環境も悪くはなかったし……このクレイドウルでは“ヴァルキュリス”のことを“神の山”って呼んでてな。山に近付くほどにその加護が得られるって言い伝えがあるんだよ。だから、この屋敷もこうやって高台にあるだろ？」
アクアもそれに同意した。
「実際、オーダスさんは腹違いの弟であるアーバンさんを重用しているしね。まして自分の子供なら公にすることはなくても、邪魔者扱いして閉じこめるなんてことはないはずよ」
「そ、そっか……」
とりあえずティースはホッとした。
……事件に関係ないこととはいえ、もしそんな状況が目の前にあったとしたら、彼の性格上、とても黙ってはいられないのである。
「……で、話が少しズレたな。別に隠し子だとかそんなのはどうでもいいんだ」
「その光、結局なんだったわけ？」

アクアの問いに、ダリアは再び首をかしげた。
「わかんねーんだ。多分、その女の子の手鏡が太陽に反射したんだろう、と思った。けど、確信はない」
「……」
考え込んだアクアに、
「その……光って、そんなに重要なことなんですか？」
「ええ、かなり重要ね」
アクアは答えた。
「つまり、犯人はここを出なくても指示を出せたかもしれない……ってことでしょ？」
「……あ」
ティースにもようやく理解できた。
「信号……」
アクアは頷いた。
「その光がたとえ違っていたとしても、そういう方法を使って指示を出している可能性は確かに考えられるわ。風の五十四族は決して知能が高くはないけど、しっかり躾られているとすれば、ありえない話じゃない」
「ああ、あたしもそう思う。……今日のドロシーの計画で犯人の影が浮かび上がらなかっただけに、なおさら、な」
ダリアがそう言って、ドロシーもそれに頷いて相づちを打つ。
――どうやら、ようやく手がかりらしきものが掴めたようだった。
「その塔については、明日、直接オーダスさんに聞いてみるわ。塔に出入りしている人のことも。……もちろん、ダリアの“おいた”については、ひ・み・つ、でね」
「……おい、アクア姉。あたしはあくまで任務のためにやったんだからな」
アクアは笑って、
「わかってるわよ。……さてと。他に報告は？」
と、その言葉に、それまで何故か仏頂面で話を聞いていたフィリ

スが、
「あ、えっと、大したことではないんですけど……」
ふと我に返った様子でおずおずと手を挙げた。
「なに、フィリスちゃん？」
「アクア様たちがお出かけになった後……昼過ぎなんですけど、アーバンさんとコンラッドさんが執事室の前でちょっと気になるお話をしていたんです」
「気になる話？」
「はい。……その、どうやらノエル様とザヴィアさんのお話をしていたみたいでした」
「ああ、あの執事さんと執事補佐さん、あまり快く思ってないみたいだったものねぇ。……それで、どんな話だったかわかるの？」
フィリスは頷いて、
「そばで聞いていたわけではないので、はっきりとはしないんですけど……その、ザヴィアさんがどうこう――きちんと聞こえなくて――でも、あの方を早く屋敷から追い出したいとか、そういう話だったみたいです」
「ああ、そういうこと話してそうだもんねぇ、あの二人」
ダリアは少し首をひねって、
「あたしは別に、そんなに嫌なヤツだとも思わねーけどな。ま、貴族だとかその周りの連中だとかの考えることはあたしにゃわかんねーけどさ」
そこへドロシーが付け加える。
「あるいは、それ以外の意味があるのかもしれんが、な……」
「ザヴィアくん、か。……確かに、彼がここに来たのと、獣魔がオルファネールの人を襲うようになったのは同時期なのよねぇ」
「で、でも！」
何気なく呟いたアクアの言葉に、ティースはすぐさま反論した。
「それって逆じゃないんですか？　魔がオルファネールの人を襲うようになったからこそ、ザヴィアさんがたまたまノエルさんを助け

ることになって、それで屋敷に招かれたんでしょう？」
　アクアはそれについては反論せずに、
「まあね。実際、ザヴィアくんは何度もノエルちゃんを助けているわけだし……彼が犯人だとするとその辺の説明が難しくなるわけだけど。……まさか、ノエルちゃんと仲良くなるために恩を売りたかったってことはないでしょうし」
「だな。あのザヴィアってヤツ、疑わしいっちゃ疑わしいけど、そうだとしたら目的がいまいちわかんねーんだよな」
「理由……理由、ねぇ……」
　アクアは口元に手を当てて考えていたが、やがて、思い出したように視線がティースへと向けられる。
「そういやティースくんはどう？　今日は何もなかった？」
「あ……いえ。特になにも」
　一瞬だけ、ザヴィアの“正体”が脳裏に過ぎったが、もちろんそのことは口に出さなかった。
　ザヴィアが明らかに疑わしい行動を取っているのならともかく、行動自体はどこにも怪しいところはなく、彼が疑われているのはただ、この屋敷に現れたタイミングと、そして姿や格好が妙だということだけなのである。
（でも……それでも、話したらきっと犯人扱いされる）
　ティースはそれを絶対に避けたかったのだ。
「じゃあ――」
　そんな彼を疑った様子もなくアクアは頷くと、会合の終了を宣言した。
「みんなご苦労様。また明日、頑張りましょ」
「ああ」
「了解……」
「はい、アクア様」
「……」
　一瞬だけほんの僅かな後ろめたさを感じたが、それでも自分の判

断に間違いはないことを信じて、ティースは他の面々とともに部屋を出た。

「潮時かな……」

ザヴィア＝レスターは自室のベッドに仰向けで寝転がり、一人、そう呟いていた。

左手には肌身離さずに持っているフルートのような管楽器を握り、右手は顔の前にかざす。その甲には三つのアザ。

「何も言わずにいくか……いや――」

視線が泳ぐ。

しばし考えて、そしてザヴィアは呟いた。

「出ていく前に、全て話してみるのもいいか。……受け入れられなければ、そのときは仕方ない、か――」

その5『“ハッピーエンド”は目前に』

翌日もクレイドウルの街は晴天だった。特有の、山から吹き下ろす風も今日は比較的穏やかで、街からは少しずつにぎやかな声が聞こえ始めている。

少々不穏な情勢も、未だ街の人々の生活にはそれほど大きな影響を与えていない。

そしてそんな街の高台にあるオルファネール邸。

「ロゼッタ＝マクブライド。七歳。表向きはアーバンさんの娘ということになってるみたいだけど、実際はやっぱりオーダスさんの娘だそうよ」

その日の朝食後、アクアはオーダスから直接聞き出したらしい“塔の女の子”の正体をファントムの面々に明かしていた。

その内容は、ドロシーが予測した通りのもの。

「その事実を知っているのは屋敷でもアーバンさんやコンラッドさんを含めて数人。あと、コンラッドさんは自ら申し出てその子の世話をしてるみたいね」

アクアは例によってベッドに横になっている、かと思いきや、今回は行儀良くベッドの上に正座していた。……どうやら先ほどドロシーがボソッと口にした、“食べてすぐ横になったら牛になる”の格言を気にしているらしい。

「へぇ。あのコンラッドって男、見かけによらず随分と世話好きだな」

ダリアが意外そうな顔で言うと、隣に座っていたドロシーが呟く。

「ノエルとロゼッタ……どっちもオーダスの娘に限定されているがな……」

アクアは冗談っぽく笑って、

「もしかしたら手懐けて玉の輿なんてことを考えてるのかな」

すると、ダリアが待ってました、とばかりに意地の悪い笑みを浮

かべた。
「アクア姉じゃあるまいし」
「ちょっ……聞き捨てならないな、もう！　あたしのどこが――！」
だが、反論は言い終わる前にアッサリと流されて、
「ま、ロゼッタの方は表向きはオルファネールの人間じゃねえんだし、まずあり得ないだろうけどな」
ダリアの言葉に、頷いたドロシーが続ける。
「大事なのは、塔に出入りしているのがほぼコンラッド一人……たまに医者やオーダスが様子を見に行くぐらい、ってこと……病気の子供一人誤魔化すのは別段難しくないし、信号を送るのは無理じゃない……」
「……でも、待ってくれよ」
そこでふとティースは疑問に思って、
「たとえば、その光とかで手下の獣魔に信号を送っているとしても、それって別に塔からじゃなくてもいいんじゃないのか？」
「この屋敷の場所を考えてみろ……」
「え？」
ドロシーの言葉に屋敷の周りの地形を考えて、そしてティースはようやく気付いた。
「あ、そっか。この屋敷、山側の方はすぐ背の高い木が生い茂って――」
「山から見えるのはせいぜい屋根ぐらいだろ……例の、あの塔以外はな……」
「そうね。だからもし光で信号を送っているのだとしたら、あの塔か、あるいは屋敷から離れた場所かどちらかよ」
そこにダリアが補足して、
「けどま、犯人が屋敷の誰かだとすると、街の方だとよほど目立つ場所じゃねーと無理だと思うけどな。それに、ここより低い場所から山に向かって信号送ってりゃ、目撃される危険も多いだろうし」
「それも含めて、フィリスちゃんが情報を集めてくれてるわ。……

だからひとまず、今のところはいつも通りにいきましょ。みんな、よろしくね」

と、そのアクアの号令によって、いつも通りにファントムの面々は解散した。

――が。

「あの、アクアさん」

「ん、なーに？」

ダリアとドロシーが部屋を出ていった後、ティースはそれまで腰を下ろしていたベッドから立ち上がって、

「俺にも何かできることないですか？」

そうなのだ。

“いつも通り”だったから、彼もまた“いつも通り”やることがなかったのである。

「ん、そうねぇ。……あ、そうそう。その前に聞いておきたいことがあるんだった」

「え？」

不思議そうな顔をすると、アクアはその顔を下から覗き込むように見て言った。

「ティースくん。キミ、ザヴィアくんと何か話したの？」

心拍数が一瞬にして跳ね上がる。

「……え？　なにかって……？」

しかし、アクアの言葉は彼が心配したような意味ではなかったらしく、

「ほら。昨日もそうだったんだけど、どうもザヴィアくんのことをかばっているように思えたから」

「あ……ああ、そういうことですか……」

「？　他にどういうことだと思ったわけ？」

「あ、いえ！　今のは言葉のアヤというやつで……」

「ふーん。……それで？」

「……別にかばってるとかそういうんじゃないんですけど」

その問いかけに対しては、ティースはごく正直に答えた。
ただ、一つの真実だけを省いて。
「ザヴィアさん、そんな悪い人みたいに思えないって、ただそれだけのことです」
「そう」
アクアは納得した様子で、
「それならいいんだけどね。……でも忘れちゃダメよ。ザヴィアくんも容疑者の一人なんだってこと」
「ええ、わかってます」
「それと、ね」
アクアはゆっくりとベッドから下りて、鏡台の前に移動した。どうも結ったお団子が気に入らないらしく、それをほどいて直し始める。
目だけでその動きを追ったティースに、背を向けたまま、
「これはザヴィアくんがそうだって言うんじゃなく、他の誰にも言えることなんだけど……自分と仲良くなれる人全員が善人だとは思わないことよ。仲良くなれることと、相手が善人であるということは、似ているようで全然違うことなの」
「……」
「善人と悪人は簡単に友達になれるわ。悪人が悪人であると発覚するその日までは、ね」
ティースは意を決して尋ねた。
「……アクアさんは、ザヴィアさんが怪しいと思ってるんですか？」
アクアは一瞬だけ手の動きを止め、少し考えてから曖昧な言葉で答える。
「怪しすぎるんだけど、残念なことに行動がまともなのよねぇ」
ティースは少し眉をひそめて、
「残念なことにって……それじゃまるで、彼をどうしても悪人にしたいみたい――」
「あ、ゴメンゴメン。別にそういうつもりはなくて。ただ……どう

も違和感があるのよね、彼」
「……」
アクアは何か感じているようだった。そしておそらく、彼女にとって得体の知れないその“違和感”こそが、ザヴィアに対しての疑いとなっているのだろう。
（アクアさん、もしかして感付いているのかな……）
ティースが知っている事実。彼が“魔”であるということ。
だが、それをアクアに説明するわけにもいかなかった。彼女がティースのような考えを持つ人間ならば、その正体を説明することで納得し、逆に疑いが薄れるのかもしれないが、そんな保証はどこにもない……いや、彼女もデビルバスターである以上、その可能性は低いと言わざるを得ないだろう。
「あ、そうそう。ティースくん」
難しい顔をして黙り込んだティースに、アクアが明るい声で振り返って、
「やることないんだったら、ほら。アレ、やってきたらどう？」
「アレ、ですか？」
ティースには思い当たるフシがなかった……が、そんな怪訝な顔をするティースに、アクアは言った。
「一輪車、よ」
「い、一輪車ぁ！？」
固まったティースに対し、アクアは少し笑った。が、その直後、人差し指を立てて、それをゆっくりとティースの眼前に向ける。
「……ティースくん、この指先をじっと見つめて」
「……？」
「何が見える？」
「……アクアさんの指、ですけど」
「それ以外は？」
「それ以外？　……アクアさんの顔とか、その後ろの鏡台とか……？」

「じゃあ、あたしが今、どんな表情をしているかわかる？　……ああ、ほら！　指先から視線を離しちゃダメ！」
「す、すみません」
「もう一度、指先をじっと見つめて。あたしの指先だけを見つめて。あたしの指先だけ……」
「は、はい……」
意味がわからないまま、素直に従うティース。
そして数秒。
「……はい。それじゃそのまま、あたしがどんな顔をしているか言ってみて」
「顔、ですか？　……えっと、その」
もちろんティースの視界にはアクアの顔が映っている。しかし、どう表現したらいいものかと迷って、そして迷った末にティースは言った。
「あの……キレイだと思います」
「……」
一瞬、アクアはきょとんとした顔になり……そしてすぐに吹き出す。
「そ、そういうことじゃなかったんだけどなぁ……ま、いっかぁ」
「……え？　え？」
困惑するティースを見て、アクアは急に悪戯っ子のような表情になると、
「こうして見ると、ティースくんってホント可愛いわー。……ねえねえ。ちょっとだけギュってしてもいい？」
「そ、それは無理ですっ！」
ティースは手をブンブンと振りつつ、頬を赤くしながらそれ以外の部分で青ざめるという人間離れした技を披露してみせた。
「むー……残念ねぇ」
アクアは口を尖らせて本当に残念そうだ。
「あの、それで、結局……」

「あ、うん。つまりね。キミはどれだけ集中できるのかなって」
「……集中？」
「前にも言ったでしょ？　一輪車に集中すること、って」
「そういや……でも俺、結局乗れるようになってませんけど」
「それはまだ集中してないからよ。……ティースくん」
そう言って、アクアは微笑みながらも少しだけ真面目な口調になった。
「はい？」
「常に全てのものに対して集中するなんてこと、人には絶対に不可能なことよ。だからこそ、大事なときに一点集中なの。何かを為すとき、何かを為さなければならないとき。そういうときこそ、集中しなければならないの。……わかる？」
「は、はぁ……」
もちろんティースにも理解はできる。が、何故それが一輪車なのかがわからなかった。
「覚えておいて損はないわ。これから“人”よりもよっぽど強い存在――“魔”を相手にしていく以上は、ね」
「……わかりました」
ひとまず頷いては見たものの。
（で、結局、俺は……？）
アクアはすでにお団子を結い終え、部屋から出ようとしている。
「あ、あの、アクアさん！　俺、もしかして本当に一輪車――」
「じゃあ、頑張ってねっ。……ちゅっ」
茶目っ気たっぷりに投げキッスをしてみせて、アクアは出ていってしまった。
「あの――……」
手を伸ばしかけて固まったままのティースの背後を、何故か一陣の風が吹き抜ける。
――どうやら、そういうことらしい。

ファントムの面々は情報収集にもそれぞれの特徴がある。
幼気で邪気のなさそうな外見を武器（？）に、会話を中心に情報を引き出すフィリス。とにかく行動力を武器に広範囲の様々な情報や怪しい場所を見つけだすダリア。そして普段からどこに隠れているのか、ほとんど姿を見せることなく何故か重要な情報を発見してくるドロシー。
そんな三人の中で“誰が一番優秀か”と言えば甲乙付けがたいが、“誰が一番危険な目に合いやすいか”といえば、それは比較的簡単に答えが出る。

フィリス＝ディクターは実のところ盗賊の娘である。もちろん彼女が盗賊だという意味ではなく、彼女の父親が盗賊だったという意味だ。
その父は三年ほど前に捕まり、今はネービスの監獄所で刑に服している。
そんな彼女が――常識的にはとても考えられない――ミューティレイクで働けるようになったのは、もちろんファナと、そして“とある人物”のおかげだった。彼女はその二人にとても感謝しているし、自分が働くことで間接的にでもその二人の役に立てるならと、いつもそう考えて行動している。
生い立ちがどうであれ、彼女はそんな、見た目通りの健気な少女なのである。
「……うーん」
そしてこの日の昼過ぎ、様々な情報を集め、一度自室に戻ったフィリスは一つの結論に達していた。
（塔以外から信号を送るのは無理みたい……）
それについてはダリアが言った通りなのである。人のたくさんいる場所から、おそらく山に潜んでいるであろう魔に対して光の信号

を送ることは非常に困難だ。
　鳥型である風の五十四族は視力自体は良いが色を判別することはできない。知能ももちろん高くはないから、例えば光の信号を送るにしても、やはりよほど目立つ場所からでなければ難しい。
　そして次にフィリスが考えたのは、本当に塔から信号が送られているのか、あるいは別の方法が使われているのか、ということであった。
　と、そのとき、開きっぱなしになっている窓から流れてきた微かなメロディに、現実へと引き戻される。
「あ……」
　それでフィリスはふと思いついた。
（音、ならどうかな……？）
　その不思議な音色を発しているのがザヴィアだということはフィリスも人伝いに聞いて知っていた。とはいえ、彼女はザヴィアを疑ったわけではない。どこか聞き覚えのあるそのメロディは、とても山まで届くほどに大きくはなく、窓を閉めるか屋敷の敷地外に出るかすれば確実に聞こえなくなる程度の音量だったからだ。
　ただ、“音”という可能性はフィリスの頭の中に留まった。
　問題は、山まで届くほどの音量ならば、当然に屋敷の誰もが確実に聞こえるぐらいの音だということである。風の五十四族と呼ばれる今回の魔は、人以上の聴覚は持っているものの、それほど極端に優れているわけでもない。
「……あれ？」
　次に聞こえたのは犬の吠え声だ。
　フィリスは窓の外に視線を移動させる。
「あれは、コンラッドさん？」
　コンラッドと一緒にいるのは屋敷の番犬数匹。遊んでいるのか、エサでもやっているのか。遠目でフィリスには判別できなかったが、番犬たちはまるで合唱するかのようにしきりに吠えていた。
（随分吠えるなぁ、あの子たち……一日に一、二回はああやって吠

えてるもの……）

こんな光景を見るのはフィリスも初めてではない。この家の番犬は躾られているにしては珍しいぐらいに吠えるのである。

もちろんミューティレイクの番犬たちは、絶対にこんなことはしない。

（やっぱりご主人様がいいと、犬たちも行儀良くなるんだ、きっと。……お嬢様はここの当主様と違ってとても立派な方だもの）

フィリスはこのオルファネールの当主、オーダス＝オルファネールにはあまり良いイメージを持っていない。

いや、元々はそうでもなかったが、今は悪い印象を持っている。

理由は簡単だ。

彼女はまだ、幻想であれ何であれ、結婚とか恋愛とかいうものに夢を持っている年頃であり……早い話が、“隠し子”云々の話で幻滅したというわけなのである。

そのことを思い出し、フィリスは再び気分を害して一人で口を尖らせていた。

（お父さんは悪いことしてたけど、でもお父さんは死んだお母さんだけだったんだから……）

思考が脱線しかけたことに気付き、フィリスは頭を振る。

“子羊”を連想させるクセのある髪が微かに揺れた。

「よいしょっ……」

休憩を終了してベッドから下りると、部屋を出ていく。

（次は、やっぱりあの塔を調べなきゃ）

そんな彼女のポケットには、今朝、アクアがオーダスから借りてきた塔の鍵があった。ロゼッタという子に直接話を聞くに当たって、一番歳の近い彼女に白羽の矢が立ったのである。

（塔から何か信号が出ているのなら、そのロゼッタっていう子が知ってるかもしれないもんね……）

そしてフィリスは部屋を出た。

――先ほど見ていた庭から、逆にその後ろ姿を見つめる視線があることには気付かずに。

その頃、ティースはといえば――

（集中……集中――）

ガシャン！！

「いたた……」

律儀にも、アクアに言われたとおりに中庭で一輪車の練習をしているところであった。

（おっかしいなぁ……）

腰をさすりながら立ち上がり、どうしても納得できずに首をかしげる。

（ちゃんとアクアさんに言われた通り、集中してるんだけどな）

再び一輪車にまたがった彼の視線は、じっと“足下に”集中していた。

――どうやら、誰も基本的な乗り方を彼に教えなかったらしい。

（集中……集中――）

ガシャン！！

「いててて……」

とまあ、そんな彼がまともに乗れるようになるのはずっと先の話であろうから、そこからほんの少しだけ時間を進めるとしよう。

「……あれ？」

しばらく経ったあと、ティースは微かに聞こえるメロディを耳にした。

（これは、ザヴィアさんの……？）

特徴のある音色は間違いなく彼の楽器だ。ティースたちの部屋の方向から聞こえてくる。

一瞬不思議に思ったが、すぐに思い出して、

（あ、そっか。ノエルさんの部屋、移動したんだっけ……）

物悲しげなメロディは、街角でもよく耳にするごく一般的な曲。

彼が昨日、ティースの前で演奏したものと同じで、確かノエルに教えてもらったという“別れの曲”だった。

ふと“予感”が胸を過ぎる。

（……まさか）

思い出す。

――彼は昨日、その曲を演奏した後でティースに自らの正体を打ち明けたのだ。

音楽が止んだ。

「……」

ティースは少し考えた後、屋敷の中へ足を向けることにした。

到着するまで約五、六分といったところだろうか。ちょうど、一人の人物がノエルの部屋から出てくるところだった。

「ザヴィアさん」

そこから現れたザヴィアは、ターバンを直しながら現れた。

部屋の中は、不気味なぐらいに静まり返っている。

ティースは確信した。

（……打ち明けたのか）

そしてザヴィアの方もまた、ティースの問いかけを待つまでもなく答えた。

「ティースさん。……ええ、そろそろ潮時かと思いましてね」

「……じゃあ、やっぱり」

頷いて肯定し、ザヴィアは苦笑した。

「黙って出ていっても良かったのですが……そうですね。どうせ出ていくのなら、最後に少しでも彼女の要求に応えてあげようかと思いまして」

ノエルが一体どんな反応を示したのか……それはティースにはわからない。ただ、少なくとも“彼の正体”を全面的に受け入れるものではなかったのだろう。

そしてそれは普通の人間としては、ごく当たり前の反応だ。
「……」
何とも答えられずに視線を泳がせたティースに、ザヴィアは右手を差し出した。
「あなたには色々と感謝しています。ただ……あなたのような考え方の人がそれほど多くないのは経験からわかっていましたから。だから、別にどうということはありませんよ」
そう言った彼の顔は、それほどショックを受けている様子はない。“慣れ”ている。彼のそんな姿が、ティースの目には逆に少し淋しく映った。
「……ノエルさんは？」
「彼女には酷な話だったかもしれませんね。やはり黙って出て行った方が良かったのかもしれません」
そこで初めて、ザヴィアは視線を泳がせる。
「とにかく、私は準備を終えたらすぐにここを出ることにします。この事件が落ち着くまで滞在しようかと思っていましたが、これ以上は旅立つ決心がつかなくなりそうでしたから……ちょうどいい機会です。私も、通報されて縛り首になるのはさすがに嫌ですからね」
ティースはすぐに反論する。
「そんな……ノエルさんはきっとそんなこと――」
「だと、いいですね」
どこか淡々と答えるザヴィアの言葉には、ひどく重みがあった。単なる慰めや、根拠のない感情論など、まるで歯が立たないほどに。
もちろんティースはそれ以上の言葉をかけることはできず、
「とにかく、これでお別れです。……お互い、旅を続ける身、あるいはどこかで出会うことがあるかもしれませんね」
「……ああ。そうかも、ね」
どこかすっきりしない気持ちのまま、それでも他に適当な言葉も見当たらず。ようやく差し出されたままのザヴィアの右手を握り返して、そしてゆっくりと頷いた。

「……本当に面白い人だ」
「え？」
手を離して、ザヴィアは口元に笑みを浮かべた。
「あなたの方が、私よりもよほど悲しそうな顔をしていますよ」
「あ、いや」
それは客観的に見ても確かにその通りである。そしてティース自身、そうかもしれないと思った。
実際、彼はこの結末に対してどこか納得できないものを感じていたのだから。
（……そうだよな。こうなるのが嫌だから、俺は他人の恋愛に首を突っ込むのは嫌だったんだ……）
後悔先に立たずとはこのことだった。
が、
（でも――）
「それでは、ティースさん。旅の無事をお祈りします」
「あ、ああ……ザヴィアさんも」
最後にもう一度微笑んで、そしてザヴィアはティースの前から去っていった。これから旅立ちの準備をして、そしておそらくは一時間もしないうちに旅立つことになるのだろう。
「……」
そんな彼の後ろ姿が廊下の向こうに消えた後、ティースは大きく深呼吸して、そしてグッと拳を握りしめた。
（でも……ここまで見たんだから、最後まで見届けなきゃ！）
踵を返し、ノエルの部屋の前に立つ。
中から物音は聞こえない。
そっと、ノックをした。
返事はなかった……が、人の気配は確実にある。
「ノエルさん？」
「……ティースさん、ですか？　……どうぞ」
ティースが声を掛けると、かろうじて返事が聞こえた。平然を装

おうとはしていたが、声色はショックをまるで隠し切れていない。
「あの……」
部屋に入ると、ベッドの端に腰掛けたノエルの姿があった。
窓は開け放たれたままでカーテンが揺れている。おそらく、先ほどまでザヴィアがそこに腰掛けていたのだろう。
「どうか、なさいました？」
あくまで平然を装おうとするノエルは、隠し通せない困惑の表情を浮かべてはいても、ザヴィアの正体について自ら口に出そうとはしなかった。
どうやら彼女は、少なくとも今の段階では、正体を明かした彼のことをどうこうしようということは全く考えていないようだ。
その事実に、ティースはひとまずホッとし、それに後押しされて口を開く。
「ザヴィアさんのことですけど……」
ノエルはハッとした顔をする。
「……まさか……先ほどの話、聞かれていたのですか？」
「あ、いや！」
険しくなったノエルの表情に、ティースは慌てて弁解した。
「違います！　そうじゃなくて……その、僕も昨日、彼から聞かされていたので」
「え？」
ノエルはひどく意外そうな顔をする。が、ティースの表情を見て、それが嘘ではないことを悟ったのか、視線を斜め下に泳がせた。
「そうですか。……ザヴィア様は、ティースさんとよほど気が合われたのですね。でも……」
怪訝そうな瞳が向けられる。
「ティースさんはどうしてそんなに平然としていられるのです？　彼は……恐ろしい魔なのですよ？」
「僕は……その」
少しだけ言い淀む。

ティースには彼女を説得しようなんて気持ちはこれっぽっちもなかった。ただ、自分の感じたことや自分の経験を彼女に教えようと思っただけだ。

それをどう判断するかはもちろん彼女次第で――

「……昔、僕には魔の友達がいたんです」

切り出したティースに、ノエルはもちろん呆気に取られた顔をする。

「とも……だち？」

「ええ。友達です」

それはティースにとっても、勇気を必要とする言葉だった。

にわかには信じがたい、あるいは相手が疑り深い人間であれば、魔の側の人間――デビルサイダーとしてのレッテルを貼られてもおかしくない告白だ。

「……」

だが、ノエルは驚いたような顔のまま、やがてその表情が真剣味を帯びて、言葉の先を促すように向けられた。

ティースはそれに応えて、

「信じられないかもしれませんけど……その僕の友達は、面白い話をしたら笑ってくれたし、悩みを打ち明けたら真剣に相談に乗ってくれました。……それに、最後のときには、泣いて別れを惜しんでくれたんです」

ノエルは半信半疑の表情だ。

当たり前の反応だった。

「それは……本当の話なんですか？　作り話ではなくて？」

「全て、本当のことです」

それは確かに、全てティースの記憶の中に実在する話だった。それが事実であることを証言してくれる人物もいる。

ティースはさらに決意を強くして言葉を続けた。

「魔って、確かに悪いことをするのがほとんどで。だけど、全部が全部そうじゃないって、僕はそう信じてます」

「……」
目を見開いたノエルは、やがて視線を落として、そしてポツリと口にした。
「ザヴィア様は……？」
ティースは少し視線を泳がせて、
「彼は確かに魔で、もしかしたら恐ろしい存在なのかもしれない。だから僕はあなたに対して無責任なことは言えません。……ただ、僕は彼を見送りに行くつもりです」
「……」
ノエルは視線を泳がせて、そしてティースの言葉に何事か考えているようだった。
「……それだけです」
それ以上は何も言わず、ティースは無言で一礼して部屋を出る。
……それは一般常識から言えば決して正論ではなかった。確かに魔は大半が危険で恐ろしい存在なのだ。だから他人に押しつけられる考えではなかったし、ティースにもそんなつもりはない。
だから、後は彼女の判断に委ねるしかなかったのだ。
と。
「あら？」
神妙な顔で部屋を出たティースの前に、突然使用人の格好をした女の子が現れた。
一瞬ドキッとしたが、よく見ると少女はいつもこの時間に部屋の掃除をしている人物だった。もちろん聞き耳を立てていた様子もない。
「ノエル様は、部屋におられます？」
「え……あ、うん」
そう答えると、少女は少しあどけなさの残る笑顔を浮かべて、
「そうですか。では、掃除はもう少し後にしますね」
他の部屋に向かった。
鼻歌混じりのその後ろ姿を見送りながら、ティースは額の僅かな

冷や汗を拭いつつ、
（そうだ。急がないとザヴィアさんが行っちゃうな）
少し早足にザヴィアの部屋へと。
その途中、
（……あれ？　コンラッドさん？）
コンラッドの後ろ姿を見かけて、ティースはふと立ち止まった。
（塔の方へ向かっていく……？　昼ご飯には少し遅いと思うけど……）
とはいえ、ロゼッタという子の世話をしている彼のこと。それ自体は決しておかしなことでもなく。
結局ティースは気に留めることなく先を急いだのだった。

「姐さん……」
「ドロシー？」
アクアが部屋に戻ると、いつから待っていたのかドロシーがベッドの上に座っていた。相変わらず膝を抱えた体勢で背中を丸め――それは見ようによっては少し病的にも思える。が、もちろん長い付き合いのアクアはそれを気に留めることもなかった。
時計が十六時近くを差しているのを確認して、アクアは早速尋ねる。
「何かあった？」
「ああ……ちょっと気になる情報だ……」
「……」
アクアは表情を引き締めた。
そのドロシーの口調から、いつも以上の“手応え”を感じたからだ。
「話して」
アクアがソファに座るのを見て、ドロシーは話し始めた。

「魔が頻繁に現れるようになってから、屋敷じゃもう一つの異変があったらしい……」
「もう一つの異変？」
「ああ……オレも少しおかしいとは思っていた……けど、オレたちにはなかなか気付けなかったことだ……」
「どういうこと？」
「“犬”……」
「犬？」
アクアは怪訝そうに眉をひそめた。
「犬って、今も外で吠えている、あの？」
「ああ……」
ドロシーは膝の間で小さく頷いて、
「ヤツらがよく……といっても一日に二回程度だが……吠えるようになったのは、つい最近のことらしい……」
「……なんですって？」
その言葉で、アクアはようやく悟った。
「最近って……まさか」
「ああ……魔が現れ出した時期だ……屋敷の連中は暑さでストレスが溜まっているとか、勝手にそういう解釈をして、そんなに気にしてなかったらしいがな……」
確かに、犬が吠えることと魔が現れることを単純に結びつけるのは、そう簡単なことではない。
「……」
アクアは無言で口元に手を当てた。
もちろん彼女にもすぐには答えが出ず、それがどういう意味なのかを考えているらしい。
「……あの犬、四六時中吠えているわけじゃないわね？」
ドロシーは満足そうに頷いて、そして答える。
「屋敷の面々も注目していたわけじゃないから記憶は曖昧だ。もちろん吠えたから必ず現れるってわけじゃないが、魔が現れる前には

必ず吠えているようだな……」
だが、アクアはすぐに難しい顔をして、
「じゃあ犬の鳴き声が引き金に……？　でも、そんなことが可能なのかしら？　犬だったら屋敷以外にもいくらでもいるし、山まで届く遠吠えだってかなりの数があるはず……」
「姐さん……」
ドロシーは口元に、彼女にしては珍しい笑みを浮かべていた。
……それは彼女が何らかの答えに達したときに浮かべるものだ。
「よく躾られた犬が、命令もされず、何もなしに吠えるはずはないだろ……？」
「……あ！」
閃いたようだ。
「そっか……じゃあ魔を操っていたのは――！」
「おそらくな……確証はないが、可能性は高い……」
アクアは立ち上がって、すぐに荷物の中を漁ると、そこから目的のものを取り出した。
手甲型の破魔具“氷雨”
それを軽く打ち鳴らすと、氷の粒が宙を舞った。アクアの表情からはいつもの明るさが消え、視線が鋭さを増す。
「……ドロシー！　すぐに確認しに行くわ！」
「了解……」
そして――二人がそう言葉を交わした直後のことだった。
――突然、屋敷中に派手な破裂音が響き渡る。
発生源はかなり近い。
「ドロシー！！」
「……ああ」
声を掛け合う前に、二人の体は部屋を飛び出していた――

そこから時間は少し遡る。
「それにしても変な話ですね。先ほどお別れを言ったばかりだというのに」
言いながら、ザヴィアはゆっくりと楽器から口を離した。
別れの記念にと最後に彼が演奏したのは、やはり彼の故郷の曲だった。その印象的なメロディは、しっかりとティースの耳の奥に焼き付いて、いつまでも離れそうにない。
「あのヒステリックな犬の鳴き声も、これが最後かと思うと惜しいものですね」
そう言って苦笑するザヴィア。
二人は人気のない裏口から屋敷の外へ出ていた。どうやら彼は、当主のオーダスにも感謝の置き手紙を残すだけで、黙って出ていくつもりらしい。
もちろん途中、幾人かの使用人たちに出ていく姿を目撃されていた。が、誰もザヴィアを引き留めたり理由を問い質したりするものはいない。今、彼らがこの場にいることも、屋敷の中や外で仕事をしている使用人たちの目に留まっているはずだったが、やはり誰一人として声をかける者はいなかった。
確かに彼は、屋敷の人々に歓迎されていなかったのだ。
「それでも、一人でも見送りがいるというのは嬉しいことですね。……ティースさん」
裏門の前まで歩いていって振り返り、そしてザヴィアは微笑みを浮かべた。門の先はもちろん山で、すぐに高い木々が生い茂っている。
「こうして立ち去る私が言えた義理ではありませんが……あなたがここにいる間だけでも、ノエルさんのこと、お願いできませんか？」
「え……？」
「この前、ノエルさんが襲われたとき、ティースさんはあの鳥型の獣魔を相手にも、恐れずに剣を握りしめていましたね。相当腕も立つとお見受けしました」

「……いや」
ティースは正直に答えた。
「俺はただ、あそこに立っていただけだ。多分、俺だけじゃノエルさんを助けられなかったと思う」
ザヴィアは首を横に振って、
「それでも、あなたにはノエルさんを助けようとする気持ちがあった。気持ちが人を動かす。その気持ちが人を強くするのですよ」
「……」
「あなたにはその気持ちがある。あなたはきっと、この先も多くの人を助けることになるのでしょうね」
「……そんな大げさな」
少しだけ照れて、そしてティースは頭を掻いた。
「俺はただの……芸人一座の下っ端だから」
「……そうでしたね」
ザヴィアは笑った。そして空を見上げる。
「日も少し傾いてきましたね。そろそろ……十六時になる頃でしょうか」
「あ、ああ。俺が部屋を出たのが四十分頃だったから、そうかもしれない」
「では、私はそろそろ行きます。……最後に」
ザヴィアがゆっくりと背を向け、そして呟くように言った。
「ティースさん。ノエルさんに“楽しかった”と伝えておいていただけますか？」
「……」
ティースは黙って頷いてそれを見送った。
これ以上かける言葉はない。
ザヴィアもまた、ティースの反応を確認することなく歩みを進めていく。空では太陽が、あと数分で十六時を刻もうとしていた。
そしてザヴィアの姿は木々の間へと消えていく。

――と、そのときだった。

「……ザヴィア様！！」

「！」

響き渡った声は、その場にいた二人を同時に振り向かせた。

足を止めて振り返ったザヴィアも、そして裏口の前のティースも、一様に驚いた顔で。

「……ノエル、さん？」

最初に言葉を発したのはティースだった。

少しだけ、信じられない思いで。

「……」

ノエルは無言のまま、真剣な表情で足を進め、そしてティースに向かって小さく頭を下げると、そのままザヴィアの方へと歩み寄っていく。

「ノエルさん……」

ザヴィアもやはり意外そうな顔をしていた。背負った荷物を支える右手が微かに力を失い、少しだけ背中を滑り落ちる。

そんな彼の目前まで行って、そしてノエルは言った。

「ザヴィア様。私、決めました！」

「……なにを、ですか？」

戸惑うザヴィアに対し、ノエルの声は明らかな熱を帯びていた。後ろで聞いているティースが思わずたじろいでしまうほどに。

そしてノエルは言った。

「ザヴィア様が何者であろうと、気にしないことにしました！　……だって、私にとって大事なことは、ザヴィア様がザヴィア様であるということですもの！」

「……」

ザヴィアは目を見開いてノエルを見つめていたが……やがて、その視線がティースの方へ向けられた。

それでもやはり驚きは消えないままで。

「……ティースさん。あなたがノエルさんを説得したのですか？」
「あ、いや……」
だが、そんなノエルの姿に一番驚いていたのは、もしかしたらティースだったかもしれない。
「俺はただ……ちょっと自分の考えを……」
ノエルが強い口調できっぱりと答える。
「ティースさんがきっかけを下さいました。……ただ、決めたのは私自身です！」
「……」
ザヴィアは僅かに視線を泳がせた。どう答えればいいのか迷っているのか。
……ただ、それは一瞬のこと。
やがてザヴィアは、苦笑を浮かべた。
「あなたといい、ティースさんといい……本当に変わった人たちだ」
「変わっていても構いません！　ザヴィア様……どうか、もうしばらく屋敷に留まっていただけませんか！？」
「……」
ザヴィアは目を閉じ、そして深く息を吸って……吐く。
目が開いて、
「残念ですが、それはできません」
きっぱりとそう言い放ったザヴィアに、ノエルの肩が一瞬だけ震える。
「……どうしてですか……？　私はザヴィア様のことを誰にも言いません。今まで通りにしていただければ――」
「お気持ちは嬉しいのですが、それは無理な相談なのです」
ザヴィアは空を見上げる。そして自らの右手を口元に運ぶと、涙型のアザにそっと口づけた。
まるで、何かの儀式のように。
そして、
「だって、私は――」

彼がそう言いかけた瞬間だ。
「なっ……！！」
「えっ……！？」
――屋敷から、派手な破裂音が響き渡った。
微かな爆発音と、それに重なったガラスの割れる音。
「まさか……また魔が――！！」
ティースは即座に状況を理解した。
だが、屋敷の中へ飛び込もうとしたティースを、ザヴィアの鋭い声が制する。
「ティースさん！」
「！」
怪訝そうに振り返ったティースの頭上。
そこを照らしていた太陽の光が突如途切れる。
「え……？」
反射的に頭上を見上げたティースの視界に入ったのは――
「こっ……こいつらっ！！」
空から降下してくる二つの人影。
……いや、それはもちろん“人”などではない。
「風の五十四族――！！」
「ノエルさん！　こちらへ！！」
「は、はいっ！」
ザヴィアがノエルをかばうように立つ。ティースも即座に間合いを取った。
（くっ……武器がない――！）
それに気付いたのか、ザヴィアは叫んだ。
「……ティースさん、ここは私がなんとかします！　あなたはすぐに屋敷に戻って武器を！！」
「だ、だけど――！」
「心配は無用です……！」
地面に降り立った二匹の獣魔は、すぐに威嚇の声を発した。

だが、ザヴィアが怯むことはない。
「私がこの程度の相手に遅れを取るはずがありませんから……」
背中の荷物から剣を引き抜く。
その切っ先を魔に向けると、ザヴィアの体からとてつもない威圧感が放たれた。
――いつかと同じように……いや、それ以上に、二匹の魔が怯える仕草を見せる。
「さぁ、ティースさん！　今のうちです！」
「……」
迷っている暇はなかった。
確かに武器を持たない今のティースは、ここにいてもなんの役にも立たない。
「すぐ、戻る！　死ぬなよっ！！」
ティースは駆け出した。
気付いた獣魔が飛びかかろうとしたが、それはザヴィアの牽制に止められた。
それを確認し、ティースはそれ以上振り返らず、一目散に駆ける。
（急がなきゃ――！）
屋敷の中もまた、例の破裂音のために騒然としていた。おそらく裏口に現れた獣魔に気付いている者は少ないだろう。
「……ティース！！」
「ダリア！？」
部屋に向かう途中の分岐路で、同じように駆けるダリアと鉢合わせた。横に並んで、ダリアは興奮した様子を隠さずに、
「お前、今までどこでなにやってやがっ――！」
「裏口に獣魔が現れたんだっ！！」
「……なんだって！？」
言葉を交わす間も、二人の脚色は衰えない。
「今はザヴィアさんが一人で食い止めてる！　ノエルさんも一緒だ！！」

「ちっ……ってことは、二カ所に同時に現れやがったのかっ！？」
「……あの破裂音は！？」
「あたしにも詳しいことはわかんねぇ！　けど、若い女の子が一人犠牲になったらしい！」
「女の子……！？」
一瞬、ダリアの顔が大きく歪んだ。
「……フィリスのヤツの姿が、ここ二時間ぐらいずっと見えねぇんだ！」
「な――っ！」
目を見開いたティースに、ダリアはギリッと奥歯を噛みしめて、
「とにかく……あんたは裏口へ行ってくれ！　アクア姉もドロシーも騒ぎを聞きつけているはずだから、すぐに誰かを助けに向かわせる！！」
「あ……ああ！」
ダリアの言葉はティースの胸に不安を植え付けたが、それを気にしている暇すらもなかった。
部屋の前でダリアはそのまま直進し、ティースは部屋へと飛び込む。荷物の中から愛用の剣“細波”を手にすると、すぐに来た廊下を戻り始める。
途中、どうやら騒ぎが起こっている部屋が、すぐ近くだと気付いた。
（……フィリス……！）
今の彼にはただその無事を祈ることしかできず……そして、事件はようやく“終幕”を迎えようとしていた――

その6『そして“フィナーレ”へ』

部屋の中は窓ガラスが内側から派手に吹き飛び、部屋の中はまるでミキサーでかき回したかのようなひどい惨状だった。

「……っ」

部屋に入ったアクアは嫌悪感に眉をひそめる。

――ベッドの上。そこには、まさにミキサーに巻き込まれたかのようにボロボロになった少女の遺体があった。血がペンキを撒き散らしたかのように壁まで飛び散っている。その手に微かに見えるのは赤く染まったシーツの切れ端だろうか。

「どうやら、部屋の掃除をしていたらしいな……」

いくらか冷静に、ドロシーは部屋の状態を把握し始めていた。

ギリッと、歯ぎしりの音がする。

アクアの拳は、怒りで微かに震えていた。

「風の“トラップ”だわ……ドロシー……」

「時限式だな……最初からこの子を狙ったものか、あるいはノエルを狙ったものか……おそらく後者だろうが、敵は“デビルサイダー”なんかじゃないな……」

彼女たちが話している間にも、そばでは屋敷の人々が大騒ぎしている。屋敷の中で人が死んだのは初めてのことだったから無理もない。

「どうする、姐さん……詳しく調べるなら、いい加減正体を明かす必要があると思うが……」

「……その必要はないわ」

騒ぎがどんどん大きくなる中、アクアはきっぱりとそう言い切った。

「姐さん……？」

「犯人の目星はついているのよ。もう間違いない」

踵を返し、もう一度、歯ぎしりする。

「あとはあいつを……捕まえるだけだわ！」
「……アクア姉！　ドロシー！！」
そこへ駆けつけたのは、息を切らせたダリアだった。
「どうなってやがんだ！　魔は！？　誰か犠牲になったってのは本当かっ！？」
「こっちはトラップよ。……使用人の子が一人、亡くなったわ」
「使用人の子が……？　そ、そうか……」
ダリアは複雑な表情をした。
そしてすぐに思い出したように叫ぶ。
「だったらこっちは後回しにしてくれ！　裏口の方に魔が現れたらしくて、今、ティースの野郎が向かってる！　ザヴィアとノエルも一緒らしい！　……とにかく、急いでくれ！！」
「……なんですって？」
「姐さん……」
ドロシーの言葉に、アクアは深く頷いた。
「……ええ！　とにかく行きましょう！！」

「ザヴィアさん！！」
ティースが駆けつけたとき、場の状況は変わらないままだった。
「……ティースさん！」
相変わらず二匹の獣魔と睨み合うザヴィアは、ノエルが後ろにいるためか、そこから一歩も動かずにいた。対する獣魔の方も、相変わらずのザヴィアの威圧感に動くに動けない。
だが、ティースが来たことで状況は変化した。
「片方は、俺に任せてくれ！」
「ええ、わかりました！」
「さぁ、こい！」
ティースの鞘から剣が抜き放たれる。

正眼に構えた美しい刀身が、太陽の光に照らされて輝いた。
「ケェェェェッ！！」
それに反応したかのように、片方の獣魔がティースに向かってくる。
その動きは体躯に似合わず、素早い。
「くっ……！」
羽ばたきとともに巻き起こった風圧が、わずかにティースの視界を奪う。が、襲いかかる足爪の動きはかろうじて捕らえることができた。
剣と爪が交錯する。
「っ……！」
両腕が痺れた。
ティースを襲った衝撃は想像以上だ。人よりも大きい体で、ほぼ全身の体重を乗せた攻撃。いくら見た目ほどひ弱ではないとはいえ、ティースには少々酷な圧力だった。
ぐらりと体勢を崩したところへ、手爪が斜め上から襲いかかる。
（まずいっ！）
咄嗟の判断で、足の力を抜いた。尻餅をついたところへ、頭上を鋭い爪が通り過ぎる。
「ケェェッ！？」
そのまま横に転がり、なんとか体勢を立て直したところへ、すぐさま獣魔の巨体と足爪が襲いかかってくる。
（まともに受けたら、さっきの二の舞だ……どうす――！？）
そのとき、ティースの背中に堅い幹の感触が触れた。
そして咄嗟に思いつく。
（……いちかばちか！）
背筋を緊張が駆け上った。
（……今だっ！！）
紙一重のところで、思いっきり右に飛ぶ。
「っぅ！！」

爪が左腕を掠めて微かに肉を抉った。激痛が走ったが、その後に響いた“ミシッ”という音は、ティースの思惑が上手くいったことを示していた。

体勢を立て直し振り返ると、獣魔の足爪は見事に木の幹に突き刺さり、身動きが取れなくなっている。

ティースの視界にあったのは、まるで無防備な獣魔の背中。

（……チャンス！）

剣を握り直し、ティースは地面を蹴った。

気合が思わず口をつく。

「やぁぁぁぁぁっ！！」

「……ケェェェェッ！！」

ミシッ……メキメキメキメキ。

（……え？）

だが、ティースの剣が届く前に、木の方が呆気なく悲鳴を挙げた。

太い幹に亀裂が入り、枝葉がガサガサと音を立てて揺れる。

（な……なんて馬鹿力……でも！）

ティースとしてもここは最大のチャンスだった。ここで止まるわけにはいかない。

「ぁぁぁぁぁっ！！」

「ケェェェェッ！！」

ティースの気合の叫びと、獣魔の鳴き声が交錯する。

メキメキメキ……バキッ！！

「！？」

紙一重の差。

ティースの剣が届く前に木の幹は真っ二つに裂け、そしてティースの剣は強い衝撃とともに、獣魔の足爪に押さえつけられた。

グラリと、体が前につんのめる。

（……しまった――っ！！）

直後、手爪が迫った。

もう体勢を立て直す暇はない。避けるには一か八か剣を手放すし

かなかった。……が、剣を手放すことはすなわち、戦う手段を手放すことでもある。
「くっ――！！」
「ケェェェェッ！！」
それはまるで勝利を確信した雄叫びのようだった。
――だが、その直後、
「えっ……？」
「……ケェェェェッ！！」
黒い影が獣魔の背後を横切ると、同時にその鳴き声は、驚きと、そして痛みの悲鳴へと変わった。
「だらしねぇぞ、ティース！」
「……ダリア！！」
魔の背中を裂いたナイフの持ち主はダリアだ。宙からティースの隣へ降り立つと、二本のナイフを構える。
「さぁ！　あの鳥の化け物にトドメを刺してやんな！！」
「……ああっ！！」
ティースは両手で剣を構えた。
迷うことはない。あとはただ、痛みに我を忘れた獣魔に、その剣を真っ直ぐに撃ち込むだけだった。
「やぁぁぁぁぁっ！！」
今度こそ、遮るものはなく。
ドスッ……という鈍い感触が、微かに汗ばんだティースの両手に伝わってくる。
「ゲェッ！！　ケェェェェッ……！！！」
それは間違えようもない、致命的な一撃の感触だった。
剣を抜くと、そこから血が吹き出してティースの体を汚す。そのまま、獣魔の巨体は地面に崩れ落ちて痙攣を始め……そして、やがて動かなくなった。
「はぁっ……！」
確実に動かなくなったのを確認し、そしてティースの視線はすぐ

さま移動する。
（ザヴィアさんは――！）
だが、そちらもまるで心配する必要はなかった。
「パワー全開っ！！」
宙に踊るのは、トレードマークのお団子頭。その周囲はキラキラと、細かい粒がまるでダイアモンドダストのように輝いていた。
「ケェェェッ！！」
獣魔の爪がそれを捕らえようと宙を裂く。が、それは彼女に命中するどころか、掠ることさえも叶わなかった。
残像を残し、それほど大柄でもないアクアの体は呆気なく獣魔の懐へと進入していく。
「あなたには、氷の柩をプレゼントしてあげるわっ！！」
「ケェッ！！？」
最初の一撃が撃ち込まれると、あとは一瞬だった。体の制御を失った獣魔に対し、目にも止まらない速さでアクアの拳が叩き込まれていく。
“氷雨”の力によって、見る見るうちにその全身が凍り付いていく。
「はぁぁぁっ！！」
そして最後の一撃が、完全に凍り付いた獣魔の体を破壊して、勝負は決した。……いや、“勝負”ということであれば、戦う前から決していたといってもいいだろう。
それほどに圧倒的だった。
（すごいや……あの化け物が、まるで相手になってない……）
「……ふぅっ」
まるで軽いジョギングを終えた後のように短い息を吐いて、アクアはチラッとザヴィアとノエルを見る。
そしてすぐにティースの方に振り返った。
「ご苦労様、ティースくん。……よくやってくれたわ」
「あ……」
その誉め言葉を素直に喜んだティースだったが、状況を思い出し

て、
「そ、そうだアクアさん！　屋敷の方は――！？」
アクアはすぐに厳しい表情をして、
「一人、使用人の子が犠牲になったわ。でも、それも今回が最後よ」
「え……それじゃあ！？」
「ええ、敵の見当はついたわ。あとは捕まえるだけ」
頷いたアクアに、その向こうで疑問の声が上がった。
「あ、あなたたちは、一体……」
ザヴィアだ。
アクアは振り返り、そして笑顔を浮かべて、
「その話はひとまず後よ、ザヴィアくん。……ノエルちゃん？」
「は……はい」
ノエルは昨日、出掛け先でアクアが獣魔を撃退するところを見ているはずだ。が、それでもやはり戸惑いは隠せないようだった。
そんな彼女に、アクアはすぐに表情を引き締めて答える。
「今回の件、犯人はコンラッドさんよ」
「……え！？」
ノエルが驚きに目を見開く。
それはティースも同じだった。
「コ、コンラッドさんが……？　アクアさん、それは――」
「ええ、間違いないわ。色々な状況を照らし合わせても、それしか考えられない」
「……」
ザヴィアもまた信じられないのか、怪訝そうな顔だった。
「ノエルちゃん。あなたがまた襲われる可能性は高いわ。……あたしたちと一緒に来て。安全は必ず保障するから」
「で、でも……まさか、コンが……」
だが、アクアは厳しい表情を崩さずに言った。
「急いで、ノエルちゃん。急がないと、次の犠牲者が出るかもしれないわ」

「は……はい」
ノエルはまだ信じられない様子だったが、この状況ではアクアの言葉に従うしかなかったのだろう。ザヴィアの後ろから一歩、彼女の方へ向かって踏み出す。
だが、
「……待って、ノエルさん」
「え？」
ザヴィアがそれを制止した。
怪訝そうに振り返るノエル。
「あなたはここにいてください。私がこの手で守って――」
「いいえ、それはダメよ」
アクアは厳しい表情でその提案を却下した。
「まだ、敵がどれだけの力を持っているかわからない。……ザヴィアくん。あなたの腕が立つのは認めるけど、でもあたしたちはそれに関してはプロよ。あなたよりもずっと確実だわ」
「あ、でもアクアさん……」
そこへ、ティースが口を挟む。
「それなら、ザヴィアさんにも協力してもらったらどうかな？　そりゃアクアさんほどじゃないかもしれないけど、彼だって俺なんかよりはずっと役に立つだろうし」
「……それもいいかもしれないけど」
アクアは腰に手を当て、ティースを振り返る。
（……え？）
その表情に、ティースは少し違和感を覚えた。
（なんだ……？　アクアさん、何を――）
訴えかけるような視線。
だが、それが一体何を意味するのか、ティースにはすぐにわからなかった。
そのままで、アクアが続ける。
「だけどティースくん。あたしたちにとっては、ザヴィアくんもま

た一般の人と同じよ。あまり危険な目に合わせるのは――」
言いかけた、そのとき。
――悪意は、突然に牙を向いた。
「えっ……？」
一陣の風。
風……いや、突風だった。
何の前触れもなく発生したそれは、地面の土を舞い上げ――いや、土の表面を抉るようにしながら――
「アクア姉っ！！」
「！？」
ダリアが叫び、そしてアクアも驚愕の表情を浮かべたが、彼女が反応したときにはすでに遅かった。
「っ！！！」
鈍い衝撃音を残し、まるで木枯らしが落ち葉を舞い上げるように、アクアの体が宙に舞う。
「アクア姉ぇぇぇっ！！！」
「え……？」
ティースがその事態をようやく把握したのは、ダリアの二度目の叫びが聞こえてからだった。
アクアの体は山なりに弧を描き、そしてティースの背後、二メートルの辺りに落下する。
「な……アクア……さん……？」
振り返ると、うつ伏せに倒れたアクアはピクリとも動かなかった。
じわり、と、赤いものが地面に流れ出す。
――あまりにも、呆気なく。
（一体、なにが――）
「……てめぇっ！」
ティースのすぐ隣で、ダリアが地面を蹴る気配。

その声が向かった先は――
「動かないでください」
「……！」
視線を戻したティース。
その視界に映ったのは、足を止めたダリアと、驚きの表情を浮かべるノエルと、そして――
「……ザヴィアさん」
ノエルの体を拘束し、その喉元に刃を当てたザヴィアの姿、だった。
その口元には、見慣れた微笑みが浮かんでいる。
――信じがたい、光景。
「……どうして……」
「どうして？」
ザヴィアは小さく首を振った。
「どういう意味ですか？　何故彼女を攻撃したのかと？　それとも、どうして裏切ったのかと聞きたいのですか？」
「……」
あまりのことに、ティースは言葉を返すことができなかった。それほど、今の状況は彼にとって信じがたいことだったのだ。
そんな彼に、ザヴィアは淡々と答える。
「前者の質問に対しては、最初からそのつもりだったとお答えしましょう。後者については言うまでもないことですよね……ティースさん？」
そしてもう一度……笑みが口元を支配した。
今度は今までに見たことない、本当に嬉しそうな“愉悦”の笑み。
「私は最初から最後まで、あなたたちの味方になったつもりはありませんよ。だって、私は――」
そしてザヴィアはゆっくりとターバンを外す。
そこから現れたのは、彼が人ならざる者であることを示す、尖った耳――

「魔の者、なのですから」
「そんな……」
目の前が一瞬真っ暗になって、膝が震えた。
――それは、常識や、周りの意見に反発してまで彼を信じた、その結果。それは、想像を絶するほどの衝撃だった。
もちろんそれは、もう一人、その魔を信じようとした人物にとっても同様である。
「ザヴィア様……何故……」
刃を当てられたまま弱々しく問いかけたノエルに、ザヴィアはチラッと彼女を見下ろして、
「楽しかったのは事実ですよ、ノエルさん。色々と面白い体験をさせてもらいましたからね。……まさか、正体を明かしてなお、騙されてくれるとは思いませんでしたけれど。お人好しと言おうか世間知らずと言おうか、表現に困るところですね」
「――」
ノエルの瞳は、まるで光を失ったように見えた。
“絶望”
もう、どう好意的に解釈しても疑いようがない。
彼は――二人を欺いていた。
それは、どうやっても動かしようのない事実だった。
「……アクア姉。おい、しっかりしろよ……」
いつもからは信じられないほどに弱々しいダリアの声が、ティースの耳に届いてくる。
アクアのもとへ移動したダリアが、軽く肩を揺すりその脈を取っていた。
「っ……！」
途端、ハッとした顔で、そしてダリアはゆっくりと自分の両手を見つめる。
――真っ赤だった。
「ダリア……アクアさんは……」

「……」
ダリアは唇を噛みしめて――そして、首を横に振る。
「！」
ドクン、と、ティースの心臓の鼓動が跳ね上がった。
「そんな……アクアさん――！」
「ふふ、呆気ないものですね」
その様子を見て、ザヴィアは相変わらず楽しそうだった。
「少し不意を突かれただけで、こうもあっさり死んでしまうとは。……ここまでの芝居を打つ必要もなかったですかね」
「貴様……！」
ティースはザヴィアを睨み付け、剣を握る手に力を込める。
ショックが喉元を過ぎて、あとに残ったのは煮えたぎる怒り――
「貴様は――っ！！」
「ああ、そうそう。でもティースさん。信じる心ってのも、捨てたものじゃないんですよ」
ザヴィアは彼を牽制するように、ノエルの喉元の刃を小さく動かして見せながら、
「ノエルさんが私を信じて追いかけてこなければ、今頃、私の仕掛けたトラップでボロ雑巾になっていたでしょうから。その点でいえば、あなたたちの信じる心がノエルさんの命を救ったことになる。……もっとも」
喉で笑う。
「代わりに、少々運の悪い子が犠牲になったみたいですけどね。ははは」
直後、押さえきれない怒りの声がティースの口をついた。
「貴様は……許さないっ！　絶対に、許せない――っ！！」
「では、どうするつもりです？」
ティースはギリッと歯を鳴らして、
「……ノエルさんを離すんだ！」
「何故？　……ああ、確かに。私は人質など取らなくとも、あなた

たちを楽に倒すぐらいの力は持ってますね。怖い怖い隊長さんは、あの世へ旅立たれてしまわれたようですし」

怒りの声を発したのはダリアだった。

アクアの手を離し、ゆっくりと立ち上がってザヴィアを睨み付ける。

「……だったら、とっととその子を離しやがれっ！　あたしが、この手でてめえをぶっ殺してやるっ！！」

だが、ザヴィアは平然と、まるでからかうような笑みを浮かべて、

「なるほど。……では、どうやら私にとっては特に必要もないみたいだし、この子にはとっとと死んでもらうことにしましょうか」

剣を握る左手に力がこもり、刃がノエルの喉元に近付いていく。

ティースの顔が青ざめた。

「――っ！！　やめろぉっ！！」

捕らえられたままのノエルは、それほど反応を示さなかった。……あまりのショックに、状況を把握できていないのかもしれない。

「……冗談ですよ」

ザヴィアはおかしそうにクスクスと笑って、剣をノエルの喉元から少し遠ざけた。

「どうやらノエルさんはショックのあまり放心しておられるようですし……私にはあまり、無抵抗のものを痛めつける趣味はないのです。……私が好きなのは、誰かの大切なものとか、誰かが信じてるものとか、愛とか絆とか友情とか……それが壊れたときの、壊されたときの、顔。悶え苦しむ、顔――」

そして、人差し指をティースの方に向ける。

「ほら。ちょうど、今のあなたがしている、その顔です」

「貴……様……！」

ティースはあまりの怒りに全身が震え、煮えくり返って頭の中がどうにかなりそうだった。

――彼が少なからず親しみを感じ、そして信じようとしたその男は、単なる悪人ではなかった。どうしようもない、これ以上救いよ

うのない、他に表現しようのない、紛れもない“悪”だった。
「さて。では、ティースさんの怒りが頂点に達したところで“ゲーム”でもしましょうか。……ちょうど、観客も集まってきたようですし」
涼しい顔で、ザヴィアが裏口に視線を向ける。
「お嬢様！」
ちょうど、そこから姿を見せたのは、屋敷の執事補佐、コンラッドだった。
ザヴィアは恭しく礼をして、
「どうも、コンラッドさん。あなたの大事なお嬢様はお預かりしていますよ」
「貴様は……やはり――！」
「ふふ、あなたは最初から私のことを疑っていましたね。なかなか良い判断でしたよ」
「コン……」
そこで初めて、ノエルが微かな反応を見せる。ゆっくりと顔を上げ、涙が浮かんだままの視界に、その、幼い頃から面倒を見てくれた男の姿を映すと、そこから涙の筋がこぼれ落ちた。
そんなノエルの姿を見て、コンラッドは普段無愛想なその顔に、明らかな怒りを浮かべて叫んだ。
「貴様……お嬢様を離すんだ！　さもなくば――！！」
「ああ、そうそう」
ザヴィアはまるでそれが聞こえていないように、ふと思いついたような顔をすると、独り言のように呟いた。
「……ちょうどよかった。“賭け”は商品が多い方が盛り上がりますね」
剣を握ってない方――右手の甲に口づける。
――途端、突風が吹いた。
「っ！！」
一瞬、誰もが視界を奪われる。

そして直後。

耳に届いたのは、“何か”が“何か”に叩きつけられる鈍い音――

「……いやぁぁぁぁぁっ！！」

真っ先に叫んだのは、ザヴィアの腕の中のノエルだった。

そしてティースも気付く。

「……コンラッドさんっ！！」

コンラッドの体は、屋敷の壁に叩きつけられていた。ガックリと項垂れ、やがれその首筋に赤いものが伝い始める。

ノエルが狂ったように叫んだ。

「コン！　コンッ！　しっかりしてぇぇぇっ！！」

「ノエルさん。動いてはいけませんよ」

悲痛な叫びの満ちる中、ザヴィアの声だけがまるで浮いたように落ち着き払っていた。

「ほら。あなたが動くと、私の手元が狂って――」

パン、パァンッ！！

前触れもなく屋敷の窓ガラスが破裂し、それが意識を失ったコンラッドのすぐそばに降り注いだ。

「……せっかく“まだ”生きているコンラッドさんが、今度こそ命を落としてしまうかもしれませんから」

「――あなたはっ！！」

ノエルは逆上して、すでに冷静な判断ができないようだった。剣を突きつけられていることも忘れ、ザヴィアを睨み付ける。

「あなたは悪魔ですっ！　あなたは――っ！！」

「そうですか……」

ザヴィアはわざとらしい――今となってはわざとらしいと確信できる――悲しい表情をそこに浮かべて、そして答えた。

「悲しいことですね。女心と秋の空、とはよく言ったものです」

「っ――！！」

その場にいる誰もが、押さえきれない怒りをその一人の男に向けていた。

だが……誰も動けない。今は、誰にもどうすることもできなかった。

「さて、ティースさん」

ノエルを捕らえ、そして同時に強大な力を所有しているその“悪”が、その場の支配権を完全に握っていた。ティースたちは今、ただ一人で楽しそうに戯ける彼の言うなりになるしかなかったのだ。

「私を信じてくれたあなたに、チャンスを上げることにしましょう。……なに、簡単なゲームです。あなたが勝てばノエルさんを解放します。コンラッドさんもおそらく、すぐに治療すれば助かるはずですよ」

「ゲーム……？」

「簡単なことです。……ほら、ティースさん」

ゆっくりと、ザヴィアは足下にあった長い木の枝を拾い上げた。右腕を伸ばし、その先をティースの方へ向ける。

「あなたのその自慢の武器で、この木の枝を叩き折ってください。チャンスは三回。折れたらあなたの勝ち。三回で折れなければ私の勝ちです」

「……？」

ティースにはその言葉の意味が理解できなかった。

ザヴィアが手にしたのは、なんの変哲もないただの木の枝だ。先ほどの突風で折れたばかりのもので、もちろん中に金属の棒が仕込まれてることなどありえない。

（なにを……言っているんだ……？）

鋼鉄製の剣で折れないはずがなかった。太さも直径にしてせいぜい二、三センチ。素手でだって容易く折れるに違いない……と、ティースはそう考えた。

だが、

「待て、ティース！！」

「……ダリア？」

「お前じゃ、たぶん無理だ！　あたしが代わりに――！！」

ザヴィアはすぐにそれを拒絶した。
「それはダメです。ティースさんだからこそ、チャンスを与えるのですよ。……ほら、ティースさん。私の気が変わらないうちに、早くチャレンジしてみてはどうですか？」
「……」
ダリアの言葉は気になったが、ティースにはもとより選択肢などない。何より……彼の中には、“折れないはずがない”という気持ちがあった。
「……本当に、ノエルさんを解放するんだな？」
「ええ。信じてもらえないとは思いますが、せっかくのゲームをつまらなくするような無粋な真似はしないつもりですよ」
「……」
ティースが近付いても、ザヴィアは何も妨害しようとしなかった。右腕も伸ばしたまま、ピクリとも動かさない。
（ただの木の枝……邪魔する気配もない……なら――）
剣を振りかぶる。
（折れないはずが――っ！！）
それでも渾身の力を込めて振り下ろした。
振り下ろした剣は、木の枝を真っ二つに――いや。
「な……っ！」
木の枝は、折れていなかった。
ティースの手に残ったのは、まるで柔らかい壁に剣を叩きつけたような奇妙な感触。
“折れなかった”という表現は、あるいは正しくないかもしれない。
「なんだ……これ――！！」
刃は、木の枝まで到達していなかった。まるで、木の枝に透明な膜……剣ですら切り裂くことのできない特殊な膜をかぶせているかのように。
「ほら、ティースさん。あと二回です」
ザヴィアは笑みを浮かべたまま、余裕の表情だ。

「生半な気合では破れませんよ……私の、“魔力の壁”は」
「魔力の……壁――！」
ハッと気付いた。
（これが……魔力の壁……）
それはティースにとって初めての体験だった。
彼がこれまで魔と相対したのは、ほんの数度のこと。そしてその中で、たとえば能力的に歯が立たない相手はいくつもいたが、“魔力の壁”というものに阻まれたことは一度もなかった。それは彼が元々高い聖力を持っていたのと、彼の持っている神剣“細波”が、圧倒的に高度な増幅力を備えていたからである。
だが、今度ばかりは明らかに勝手が違っていた。
「ティース！　そいつは！」
ダリアが絶望的な叫びを発する。
「そいつは並の魔じゃねえっ！　そいつはおそらく――！」
その言葉に、ザヴィアが続けた。
「では、改めて自己紹介でもしましょうか？　……私は風の将、フェレイラ族のザヴィア＝フェレイラ＝レスターといいます。年齢は二十一歳。趣味は……先ほども言ったので省略させていただきますよ」
「風の……将――？」
アオイから教わったものがティースの脳裏に蘇った。
――神族、王族、将族、上位族、下位族。
神族と王族は滅多に姿を見せることはない。つまり将族とは実質、この世界における人魔でもっとも手強い存在のことだった。
「じゃあ、こいつは……」
「お前じゃ……どう足掻いたって勝てっこねぇっ！　あたしでも……っ！」
「っ――」
「では、足掻くのをやめますか？」
ザヴィアはつまらなさそうに言った。

「なら私は、この場にいるあなたたちを皆殺しにして帰るだけですが」
「……ふざけるなっ！！　誰が――っ！！」
ティースは再び両腕に力を込めた。
（こんなヤツに……こんなヤツに負けるわけには……！！）
全身全霊の力を両腕に集める。
怒りが全身に炎を灯す。
「……」
ザヴィアは黙ってティースの様子を見つめていた。
「負けて……たまるかぁぁぁぁぁっ！！！」
そして、“細波”が振り下ろされる――！
「……あと、一回です」
「っ！　……どうして……っ！！」
切っ先はやはり枝に届く前に止まっていた。力を込めすぎたせいか、肩の関節がズキズキと痛む。
「ティースさん……」
ノエルが絶望的な表情でティースを見つめていた。
（どうして……どうして破れないっ！！）
「日が暮れるまでなら、悩んでも構いませんよ。……ただし、あまり時間をかけるとコンラッドさんが死んでしまうかもしれませんね」
「っ！！」
「……ああ、そこの方々。外には出てこないでくださいね。出てきた瞬間、頭と胴体が永遠にお別れすることになりますよ」
ザヴィアは屋敷の裏口に視線を向け、冷たく言い放った。が、言われずとも、そこから身を乗り出そうとする者はいない。
「くっ！」
「ほら。ティースさん。どうします？」
ティースは今の一撃に渾身の力を込めていた。今、再び最後の一撃を放ったとしても、結果は間違いなく同じだろう。
（なら……どうすれば……）

ティースの視線が虚ろに周囲を彷徨う。
ザヴィア、ノエル、ダリア、コンラッド――
（……アクアさん）
そして最後に行き着いたのは、血を流して倒れたままのアクアだった。
（……どうしたらいい？　ダリアの言うように……俺には……無理なのか……っ！？）
ティースの心の中での問いかけに、もちろん答えが返ってくることはない。……いや、たとえ声に出していたとしても、すでに事切れた彼女がそれに答えることができるはずもなかった。
（……こんなときにも、何もできないなんて……！）
手が……いや、全身が震える。
（……どうにかできないのかっ！？　俺はやっぱり役立たずなのかっ！？　俺に何かできることは――っ！！）
だが、その瞬間――
（……あ……）
手の震えが止まった。
暗く、沈みかけていたティースの胸に、微かに言葉が聞こえてくる。
（……俺に……できること……？）
それは、記憶の中に沈んでいた、言葉。
こういう状況がなければ、特に思い出すこともなかったであろう、言葉たち。
それが、彼の胸の中に広がっていく。
「決心はつきましたか？」
「……」
その問いかけに、ティースはゆっくりと顔を上げた。
「……？」
ザヴィアが怪訝な顔をする。
――先ほどまでティースを支配していた弱気の色は、完全に姿を

隠していた。
（俺にできること……それは……）
アクアの言葉が、ティースの中に蘇る。
（……アクアさん……俺、やってみる――！）
熱いものが胸を満たす。
決意が、折れかけた心に炎を灯す。
そして、叫んだ。
「……俺の役目はっ！」
まるで、自らに言い聞かせるかのように、声を振り絞って叫んだ。
「この先起こりうる、俺に阻止できるはずの悲劇を！　それを阻止するために最善の努力を尽くすことだ！！」
「……？」
ザヴィアは怪訝そうな顔をした。……が、遠くでそれを聞いたダリアは、彼の言葉の意味を理解していた。
「ティース……お前――」
「大事なことは……！」
両腕に力がこもる。
「何かを為すとき、何かを為さなければならないとき……そういうときにこそ、“集中”すること――！」
全身の力が集中していく。
ティースの視界は狭まり、その色を濃くする。その視界に映るのはただ一つ。
彼が打ち砕くべき、悪――
そして“細波”は彼の決意に応える。
「集中――為すべき事を、為すために――っ！！」
刀身は艶やかさを増し、刃先は触れただけで大気を切り裂き、その全身に圧倒的な破壊力を備える。
――魔力を打ち破る、圧倒的な質量の聖力を。
あとは何も考える必要はなかった。ただ、決意のこもった刃を振り下ろす――それだけでよかったのだ。

「ぁぁぁぁぁぁっ！！！」
空気が、悲鳴を上げる。
「っ！？」
その瞬間、正体を現してから初めて、ザヴィアの顔が驚きの色を見せた。
「まさか……！」
空を引き裂いた“細波”の一撃は、いとも容易く木の枝を――いや、ザヴィアの魔力の壁を断ち切っていたのだ。
「さぁ……ザヴィア！」
そして、その切っ先が真っ直ぐに彼の方へと向けられた。
「約束だ！　ノエルさんを離せっ！！」
「……」
ザヴィアは目を見開いて、ティースを見つめていた。
折れた枝の先が地面に落ちても、一瞬だけ強く吹いた風が彼のそばを吹き抜けても、まだ、驚きは消えない。
ティースはさらに言葉を強める。
「もし離さないというのなら――！」
「……ええ」
だが直後、ようやく我を取り戻したザヴィアは、いとも容易くノエルから手を離した。
「約束です、ティースさん……ノエルさんは解放しましょう」
そうして一歩、後ろに下がる。
「……」
「……」
ティースも、そしてノエル自身も、最初は半信半疑の表情だったが、やがてザヴィアが何もしないのを見て、
「……さぁ、ノエルさん」
「は……はい」
ノエルは足を進め……途中、よろけながらも真っ直ぐにコンラッドの元へ向かっていった。

「……」

そんな彼女の後ろ姿を興味をなくした目で見送って、そしてザヴィアはティースに視線を戻しながら言った。

「……正直、驚きましたよ、ティースさん。まさかこの土壇場でよもやのレベルアップを果たすとは、ね」

「ザヴィア……お前は……」

“細波”の切っ先を向けたまま、ティースは吐き捨てるように答えた。

「お前は決して許されないことをした！　俺は、お前を絶対に許さない！！」

ザヴィアは口元を歪める。

「だったらどうします？　その剣で、私を切りますか？」

「当然――！」

「どうやって？」

「！？」

突如、背筋を悪寒が襲う。

「なっ……！」

その瞬間、視界からザヴィアの姿は消えていた。

「どうやって、あなたが私を切るのですか？」

首筋に、冷たい手の平の感触。

「っ！！」

すぐさま振り返って剣を振るうと、そこにもザヴィアの姿はない。

「魔力の壁を打ち破るということは――」

「！？」

声がしたのは頭上。

咄嗟に見上げると、ザヴィアは木の枝からティースを見下ろしながら、

「それは私たちと戦うにおいて、最低限の条件。いわば、あなたは私と戦う権利をようやく得たに過ぎない。――まして」

手の甲に口づけた。

風が巻く。
「くっ……！！」
押されて後ずさると、ザヴィアは木の枝からふわりと飛び降りて、
「あなたはおそらく、極限にまで集中しなければ私の壁を破れない。そして私の動きについてくる技術も経験もない。……逆に」
少しだけ視線を鋭くし、手にしていた剣を背中の鞘に収めた。
一見戦う気がないようにも見えるが、それは違う。彼にとって、手にした剣などオモチャのようなものなのだ。それ以上の殺傷力を、彼はその体から作り出す事ができるのだから。
「私にはあなたを容易に殺すことができる。……そして私は考える。あなたは危険だと。その未熟な状態で私の壁を破るのは、おそらく常人離れした聖力と、そして驚異的な成長力を備えている証だと」
右手が、そっと口元に移動した。
「……っ」
ティースは咄嗟に正眼に構える。
……かつて、風の五十四族たちが味わったであろう威圧感を、今、ティースがその身に感じていた。
それは本能の部分で感じる、生命の危機――
「そして私が達する結論は、今、あなたをこの場で殺してしまうべきだということ。ですが……さて、どうしましょうかね。すぐに殺してしまうのも惜しい気がします」
「っ……」
圧力は容易くティースを押しつぶそうとしていた。
それは、先ほどティースが“克服”したものとはまるで次元が違う。決意や気持ちではどうにもできない、圧倒的なまでの力量差――
（くそぉ……っ）
だが、後ずさろうとしたティースを、背後の声がすんでのところで押しとどめた。
「そんなことさせるかよ」
「……ダリア」

いつの間にかティースの背後まで近付いていたダリアは、その一瞬だけ微笑みを浮かべると、
「ティース。お前、さっきはちょっとカッコ良かったぜ」
「……」
だが、ティースは表情を歪ませた。
「あれは、アクアさんが俺に何度も話してくれたから……」
「ああ。……アクア姉が今のお前の姿を見ていたら、きっと感激して抱きついていただろうな」
「――」
一瞬、目の奥に熱いものがこみ上げるところだったが、グッとこらえた。
今はまだ、そのときじゃなかった。
そして再び、決意に炎を灯す。
（アクアさん……俺が仇を――っ！）
そんな二人を見て、ザヴィアは小さく首を振ると、
「後ろのあなたも、まるで問題外ですね。たぶん、私の壁を破ることすらできない」
「ああ、そうかもな」
ダリアはあっさりとそう答えた。
「けど、てめえにはもう、ティースを殺すことはできないぜ」
「何故――？」
言いかけたザヴィアの表情が、一瞬だけ固まった。
――風を切る音。
飛び退いたザヴィアの腕を浅く切り裂いて、“それ”は地面に突き刺さった。
「な……」
ザヴィアは微かに血の流れ出した腕を押さえ、そして視線を移動させる。
その、ナイフの持ち主へと。
「……ドロシー！？」

屋敷の屋根の上……そこに、ドロシーの姿があった。そこに立ったまま、相変わらず無表情にクルクルとナイフを回している。
どうやら彼女のナイフは、ザヴィアの魔力の壁を破ったようだ。
「同じ顔がもう一人……？」
ザヴィアは信じられない顔をしながら、だが、それでも余裕の表情を崩さないままに笑みを浮かべた。
「なるほど、双子だったとは……私としたことが……でも、今の一撃で決められなかったのは致命的――」
「てめぇが見落としたのはそれだけじゃねぇ」
ダリアは静かにそう宣告すると、直後、ゆっくりと彼に指を突きつけて、吐き捨てる。
「……覚悟しな。この変態サド野郎っ！」
「――っ！？」
その瞬間、今度こそ確かに、ザヴィアの表情から“余裕”が消えた。
――背中に影が走る。
それはあたかも、ファントム――幻影――のように、誰にもまともには捕らえきれない速度で。
「な――っ！」
「あなたには……極上の棺を用意してあげるわっ！！」
「……まさか――っ！？」
身を翻し、ザヴィアは地面を蹴った。
砂埃が舞い、そして風が巻く。
……それは、ティースにとっても信じられない光景だった。
「ア……アクアさんっ！？」
全員がドロシーに気を取られたその一瞬。“死んだはず”のアクアが、いつの間にかザヴィアの背後に接近していたのだ。
「ちっ……！」
アクアの一撃がザヴィアの胸を浅く抉る。が、ザヴィアはすぐに体勢を立て直すと、離れながら右手を口元に移動させた。

「生きていたのなら……それなら、今度こそ死ぬといい……！！」
途端に突風が吹き荒れて、アクアを襲った。
「あたしを、甘く見ないことねっ！！」
だが、アクアは意に介することなく、“重たい風”を全て素手でうち払う。そのたびに“氷雨”が氷の粒を撒き散らして輝いた。
「風の将――ザヴィア＝フェレイラ＝レスター！　ここがあなたの墓場よ！　このあたしが、あなたに引導を渡してあげるわっ！！」
「く……っ！」
ザヴィアの表情には、見紛うことなき焦りが浮かんでいる。疾風のように迫るアクアの攻撃は、確実に彼を追いつめていた。
「っ――」
そして――響いたのは、笛の音。ザヴィアが懐から取り出したのは、彼がいつも吹いていたフルートのような楽器だった。
「っ……！？」
途端、辺りの木々がざわめく。
……いや。
「っ！？　こいつら――っ！！」
枝葉を揺らしそこから現れたのは、風の五十四族たちだった。
その数は六匹。
「ちっ……待機させてやがったかっ！　……アクア姉！　そっちにも行ったぞっ！！」
そのうちの二匹が屋敷の方へ。二匹はアクアの元へ。
「くっ……」
アクアもさすがに追撃の手を緩めざるを得ない。
そして残りの二匹は――
「ザヴィア……逃げるつもりっ！？」
アクアが空を見上げる。
二匹の獣魔は、その足にザヴィアをぶら下げ、そして飛び立とうとしていた。
「ええ、ここは少し分が悪そうなのでね……それより、急がないと

屋敷の方が大変なことになりますよ。……ティースさん。機会があったら、またお会い――」

その瞬間、空気を裂いて閃光が飛ぶ。

だが、ザヴィアはそれを左手の剣で弾いた。

「……訂正します。他のみなさんも、機会があれば、また」

もう一撃、ナイフが飛んだ。……が、結果は同じだった。そのまま、ザヴィアの体はとても届かない高さにまで上っていく。

「くっ……ザヴィア……！」

「ティース！　仕方ねえ、屋敷に戻るぞっ！！　……アクア姉っ！！」

「ええっ！　そっちは任せたわ！　……ドロシー！　あなたもそっちをお願いっ！！」

「……」

屋根の上のドロシーは何事か呟いたが、少し遠かったので言葉は届いてこなかった。

そして、ザヴィアの姿は空の向こうへ消えていく。

「っ……！」

（ザヴィア……レスター……っ！！）

ティースは唇を噛みしめた。

今はただ、それを見送ることしかできない。

が、その名は間違いなく、彼の胸の中に刻まれた。

（いつか……俺自身の手で……今日のことを後悔させてやる！　必ず……必ずっ！！）

その7『“エンド・ロール”』

「ひ、ひどすぎますっ！！」

その日の夜更け、まだ事件の余韻も冷めないオルファネール家にて、響いたのはどこか拗ねたような少女の声だった。

場所はもちろん、ファントムの面々が集合したアクアの部屋。

その発端はというと……屋敷の人々が全ての事情を大体把握して、怪我人の治療を終え、そして犠牲となった少女の冥福を祈り終わった、午後九時頃のこと。

ドロシーがポツリと発した一言。

「今、気付いたが、フィリスの姿が見えないような……ん、気のせいか……？」

「「「あ」」」

もちろん気のせいなはずはなく。

そして、口を塞がれ縄で縛られたフィリスが、塔の内部にある物置から発見されたのは、それから一時間後のこと。

「そ、そりゃアクア様たちが大変だったのもわかりますけど、で、でも、私だってすごく怖かったんですよ！　そ、それなのに、みなさん揃って“忘れてた”だなんて、ひどすぎますぅっ！！」

「ま、落ち着けよ、フィリス。いいじゃねえか、怪我らしい怪我もなかったんだからよ」

「ダ、ダリアさぁん……！」

慰めなのかそうでないのか微妙すぎるダリアの言葉に、フィリスは今にも泣き出しそうだった。

「よしよし、泣かない泣かない。……でも不思議ねぇ。一体、誰がフィリスちゃんを気絶させて縛ってったのかしら」

「そりゃ、やっぱコンラッドじゃないのか？」

「コンラッドさんが？　どうして？」
「塔に不法侵入した輩……とでも思われたんだろ……昨日、ダリアがヤツの鍵をスったことも、後で気付いただろうしな……」
ドロシーの言葉に、アクアはポンと手を叩いて、
「あ、なるほどねぇ」
「わ、私、ちゃんとアクア様からいただいた鍵を使って……使ってぇぇぇ……」
「ああ、ほらほら、フィリスちゃん。泣かない泣かない」
手を伸ばしかけたアクアだったが、ふと思い直したような顔をして、
「……でも、泣いてるフィリスちゃんも可愛いっ！！」
「むぎゅっ！？　ア、アクア様っ……く、くるしぃぃっ……！」
「……ったく」
呆れ顔のダリア。
そこへ、ティースがようやく抱いていた疑問を口に出す。
「ところで……アクアさん。あの、そろそろ色々と説明して欲しいんですけど……」
「ん？」
アクアの腕の中では、フィリスがぐったりとしていた。
そういえば彼女は晩飯も食べていない。その上にこの“仕打ち”では、グロッキーになるのも致し方ないところであろう。
「俺……てっきりアクアさんが死んだものだと思って――」
アクアはおかしそうに笑って、
「まさか。あたしがそう簡単に死ぬわけないでしょ」
「そりゃ、一度も結婚せずに死ねないわな」
「……イヤミねぇ」
「で、でも」
早くも脱線しそうな会話を、なんとか方向修正しつつ、
「アクアさん、完全に不意を突かれてたし、まさか演技をする余裕があるようには思えなかったし……」

「ああ、ティースくん。まず、そこからして間違ってるわね」
「え？」
「あたしが不意を突かれたなんてこと、絶対にありえないのよ」
「？」
怪訝そうな顔のティース。
アクアは人差し指を立てて、得意そうに答えた。
「だってあの時点で、あたしは彼が犯人だって確信してたもの。敵の目前で油断するはずがないでしょ？」
「で……でも、あのときアクアさん、犯人はコンラッドさんだ、って――」
「それは、ノエルちゃんが彼と一緒にいたから。芝居を打ってでも、あの子を引き離さなきゃならなかったのよ。……ま、それは見破られたのか、見事に失敗したわけだけど」
ダリアが頭の後ろに手を回して、
「つーか、あたしだって最初は、アクア姉が素でやられたもんだと思って焦ったけどな」
「だ・か・ら。よく言うでしょ。敵を知り――」
「敵を欺くにはまず味方から……」
言い終わる前から突っ込んだドロシーに、アクアは少し口を尖らせて、
「わ、わかってるってば！　今、そう言おうとしてたでしょ！」
「……」
「コホン。そういうわけで」
全員の冷たい視線に耐えきれず、アクアは咳払いをして続けた。
「あたしが死んだことにすれば油断してノエルちゃんを離すかもしれないと思ったの。幸いダリアも血糊に気付いて、すぐにあたしの意図を察してくれたしね」
「……」
やや納得できない顔のティース。つまり、彼女たちの演技にすっかり騙されていたということになる。

（そ、そりゃ、あの状況じゃ仕方なかったかもしれないけど……）

演技だなどとは夢にも思わず、しかも涙まで流しそうだった彼としては、非常に複雑な気分であった。

そして、次の疑問を口にする。

「でも……どうしてあいつが犯人だって？　だって――」

言いかけて、ティースは口を噤んだ。

あのザヴィアが魔だと知っていたのは、彼だけのはずだった。直前にノエルも告げられていたが、アクアたちがそれを知る時間はなかったはずである。

「どうしてって？　……ふふ、それじゃあ」

アクアは少し悪戯っぽい笑みを浮かべて、

「逆にクイズよ。……どうしてあたしたちがそれに気付いたか当ててみて？」

「え……」

わかるはずがなかった。

もちろんアクアもそれは承知済みだったようで、

「ヒントは、“笛”と“犬”よ」

「笛と犬……？」

笛と言われて、ティースの頭に浮かんだのはザヴィアの持っていた楽器だ。確かに去り際、彼はあの笛で魔を操っていたようだった。

が、それがおそらくあり得ないことにすぐ気付く。

「だ、だって、あんな小さな音だと、屋敷の中からじゃ、とても――」

「だから、犬、なのよ」

「？」

「……じゃあ、はい。一番最初に気付いたドロシー先生から説明してもらいましょ」

アクアが水を向けると、ドロシーはあからさまに迷惑そうな顔をしたが、やがて仕方なく答えた。

「“犬笛”ってのは知ってるだろ……」

「あ……ああ。人間には聞こえないけど、犬には聞こえる音を出す笛……だっけ？　でも、あいつの笛は普通に俺たちにも聞こえて――」

「だから……あの笛は二つの音を同時に出す代物だったのさ。表はオレたちにも聞こえる、ごく普通で物静かなメロディ。その裏で、オレたちには聞こえない、山まで届くような別の音……」

「……あ」

それでようやくティースにも理解できた。

「屋敷の犬が吠えていたのは、その“裏の音”が聞こえていたからよ。そっちは彼らにとって不快な音だったのね、きっと」

ダリアがふうっとため息をついて、

「犬どもの様子がいつもと違うってわかってりゃ、もっと早く気付けたのにな」

「そうね。あたしたちは最初からうるさいものだと思いこんじゃってたから。……それさえなければ、もっと早く――少なくとも今日の女の子は助けられたかもしれないわね」

「……」

ティースは視線を逸らした。

――罪悪感。

（俺は……わかってたんだ。あいつが魔だって……）

昨日の時点でそのことを打ち明けていたなら、その少女を助けられたかもしれない……そう考えて、ティースは胸が締め付けられる思いだった。

（俺の勝手な思いこみで――）

「いや、でもすごかったわ、ティースくん！」

「……？」

自己嫌悪を中断して顔を上げると、

「魔力の壁、よ。……あたしも死んだフリしながら、どうなることかとハラハラしてたけど、まさか本当に破っちゃうなんて！」

「あ……ああ……」

ティースはどこか上の空で、視線を逸らしたまま答えた。
「それは……アクアさんが何度も“集中”の話をしてくれたから――」
「それでも、あの土壇場で思い出してくれるなんて思わなかったもの！」
「……」
明るい気持ちにはなれなかった。
（だって、俺は……）
「ティースくんがあたしの言葉を叫んだときなんて、おねーさん、思わず――！」
そのときのアクアの目はキラキラと輝いていて。
……上の空だったティースは、そんな彼女の変化に気付くことができなかった。
「思わずこうやって――！」
「あっ……アクア姉っ！　……待てぇっ！！」
「……」
「……え？」
ダリアの叫びと、ドロシーの無言の視線に、ティースが“それ”に気付いたときは、すでに遅かった。
「ティースくんっ！」
「――！！」
そのときティースが感じたのは。
一瞬だけ、暖かいものに包まれた感触と、そして直後、その温もりがアッという間に消え失せていく感覚だった――

次にティースの目が覚めたとき、時計はすでに夜中の一時を回っていた。薄暗い中を見渡すと、どうやらアクアの部屋のベッド。気絶する前には明かりが灯っていたこの部屋もすでに真っ暗で、もちろんダリアもドロシーも、フィリスの姿もなく。
「……アクアさん」

「なぁに？」
隣には、当たり前のようにアクアがいて、広いベッドの上、触れないように少し離れた場所から彼を見つめていた。
「俺はあいつが“魔”だって、知ってたんだ――」
「……」
その告白にも、アクアは黙ったまま。時を刻む時計の音が、まるで小さな楔を打ち込むように静かな空間に響く。
「昨日、本人から聞かされてた。……あいつ、俺の反応を見て楽しんでたんだ。きっと、俺のことを馬鹿にして見てたんだろうな……」
「……」
アクアはまだ、なにも言わない。
ティースはさらに続けた。
「俺……信じたかったんだ。魔だからって、全部が悪いヤツじゃないって。……みんながそうやって言うから、なおさら信じたかった……！」
今になって、彼の胸の中に悔しさが溢れていた。
部屋を照らすのは月の光。……どこか寂しさを触発するその雰囲気が、なおさら彼を惨めな気持ちにさせる。
情けなくて、その目に涙が浮かんだ。
「俺が昨日、みんなに打ち明けていれば……そうしたら――！」
「ティースくん」
薄暗闇の中、ようやく口を開いたアクアの表情は、いつもの明るいものではなく、かといってティースを責めるものでもなかった。
「あたしも、感付いていたわ」
「……え？」
「あたしも彼が魔じゃないかって、そう思っていた。ターバンで耳を隠していたこともそうだし……そう。彼が眼光だけで獣魔を追い払ったって話を聞いたときに、ね。だから、キミが話そうと話すまいと、結果はそれほど変わらなかったわ」
「……」

最初は庇ってくれているのかと思った。が、彼女の表情を見ると、どうやらそうではないらしいことがすぐに窺えた。

そしてわき上がるのは当然の疑問。

「じゃあ、どうしてアクアさんは、すぐにあいつを捕まえようとしなかったんですか……？」

アクアは答える。

「それはティースくんと同じよ。……魔の者だからって、悪いとは限らない。実際、彼はそれ以外に疑わしい行動を取っていなかったから。だからティースくんにも言ったでしょ？　怪しすぎるけど、行動がまともなんだ、って」

「……」

「今回の事件はデビルサイダー……つまり“人”の仕業である可能性が高いと言われていたわ。だから、私にはあの時点で、彼を捕まえる理由がなかったの。もちろん、ある程度行動を注意して見てはいたんだけれど」

「で、でも、アクアさんはデビルバスターなのに――」

布団の中からそっとアクアの手が伸びて、ティースは緊張する。が、意外なほどにほっそりとした人差し指は、彼の言葉を制止するように口のすぐそばで止まった。

「デビルバスターだからこそ、よ、ティースくん。色々な魔と関わるから、彼らが本当はどんな存在なのかも見えてくる。……まあ、これはあたしの師匠の受け売りなんだけど、ね」

「……」

意外な言葉だった。

（デビルバスター、だから……？）

ティースにとって、デビルバスターというのはあくまで“魔を退治する者”というイメージしかなかった。当然、彼らにとって魔は敵であり、敵でしかない。そういうものだと勝手に思いこんでいた。

「でもアクアさん……俺、そのせいでノエルさんを深く傷付けて――」

「それは結果論だわ。それに、仮に結果論で話したとしても、キミはノエルちゃんの命を救っているじゃないの」
「だけど……代わりに使用人の子が犠牲になったじゃないですか……」
沈んでいく言葉に、アクアは初めて厳しい表情を見せた。
「代わり？　どうして“代わり”なの？　ノエルちゃんがいてもいなくても、あの子は部屋に行ったわ。だってそれが彼女の仕事だったんだもの」
「え……あ、そ、それはそうかもしれないですけど……」
アクアはますます厳しい目をして、
「あの男の言ったことなんて気にしちゃダメよ。……あいつは紛れもなく、人が苦しむのを見て楽しんでるわ。口車に乗せられてあいつを楽しませる必要なんてこれっぽっちもない。でしょ？」
「……」
ティースの中のやり切れない気持ちが、ほんの僅かにではあるが緩和されていく。
……そして、ふと胸に沸き上がったのは、押さえきれない感情。
前触れもなく涙が溢れて、ティースは少し目を伏せた。
「アクアさん」
「ん？」
「……アクアさんが生きていて、本当に良かった……」
心からそう感じていた。
もしこの人物が死んでいたなら、自分は二度と立ち直れなかったかもしれない、と、そう思った。
「ありがと、ティースくん」
そんな彼の言葉に、アクアは少しだけ嬉しそうに目を細め、そして、
「それって、もしかしてプロポーズの言葉だと思ってよかったりする？」
「ダ……ダメに決まってるじゃないですか！」

慌てて答え、誤魔化しながら涙を拭ったティースに、アクアは本気で残念そうな顔をして、
「なぁんだ、つまんない。ようやくあたしの魅力に気付いてくれたかと思ったのにぃ」
口を尖らせるアクアは、先ほどまでとは違ってまるで子供のような反応だった。
（ほ……本当に捕らえどころのない人だな、この人……）
ただ、魅力に気付いた、という点ではまさにその通りで……もしもティースがもっと恋愛に積極的で、もっと色々と自由に動ける身分で、そしてこんな体質でなければ、あるいは彼女の言うとおりになっていたかもしれない。
もっとも、それは意味のない仮定である。
（デビルバスターって言っても……本当に色々な人がいるんだな……）
ホッと息を吐いて、ティースは天井を見上げる。そしてふと、もう一度アクアの方に視線を向けると、
「……あ、ところで、さっきから疑問だったんですけど」
そう言ってようやく疑問をぶつけた。
目覚めたときからずっと抱えていた疑問を。
「アクアさん……なんでベッドに縛り付けられてるんですか？」
途端、アクアはハッと気付いた顔をする。
「そうでしょ！？　これってやっぱり変よね、絶対！」
ティースの言葉通り、彼女の体は腕以外の部分が動けないようにしっかりとベッドに固定されていたのである。当然、結び目は手の届かないところにあった。
「その……俺自身、どうしてここに寝かされているかという経過もわからないので、なんとも言えませんけど……」
「ああ、それはね。あたしが、どうしてもティースくんと二人っきりで話がしたいって主張したからなんだけど」
「はぁ」

「……でも普通、逆じゃないの、これ！　ティースくんが縛られるならともかく、なんであたしが縛られなきゃならないの！？」
　ティースはなんともいえない表情で、ひとまずフォローすることにした。
「はぁ……でも、その、俺は多分、なにがあっても自分からアクアさんに触れることはないので――」
「それにしたって、ちょっとひどすぎない！？　……これじゃあ、ティースくんを抱っこして寝られないじゃないのぉっ！！」
　そんな彼女の言葉に……ティースは視線を泳がせて、そして咳払いして答えたのだった。
「……そのままで、お願いします」

　一週間後。
　その間、ザヴィアの屋敷での行動を辿ることによって、彼の目的――正体までがほぼ判明することになった。
　そして、ネービスへと向かう帰りの馬車の中で、ティースはアクアに質問する。
「アクアさん。……“例のヤツら”っていうのは、なんのことなんです？」
「ティースくんは知らなかったわね」
　ガタガタと揺れる馬車の中、ファントムの面々は来たときと同じように、荷物の山の中で思い思いの体勢を取り、今日の宿へ到着するのを待っている。
　まだ、日は高い。
「正式には“タナトス”と呼ばれていてね。大陸にいくつも存在する、魔を中心とした犯罪集団の一つよ」

「タナトス……？」
ティースには聞き覚えのない名前だった。
そこへ、ダリアが寝転がった格好で目を閉じたまま続ける。
「ウチらの間じゃ、大抵“例のヤツら”で通じる。そういうヤツらさ」
「ええ。タナトスは、あたしたちにとって宿敵と言ってもいい存在なのよ」
そしてアクアの視線がティースに向けられた。
そこに妙に感情のない――いや、感情を抑えたような光を宿して。
「ティースくんも知っているでしょ？　だいたい三年ぐらい前、ファナちゃんのお父さん……前のミューティレイク公が暗殺された事件」
「あ、ああ。それはネービス以外でも結構騒がれたから……」
アクアは頷いて、
「あれは、実際は暗殺じゃなくて襲撃だったの。タナトスが、ミューティレイクの屋敷を襲ったのよ」
「え!?」
ティースはビックリして、
「そ、そんな話、初耳――」
「一般にはあまり知られていないもの。……だって、ネービスの街の中心近くまで、魔が大勢入り込んでいたなんて、知られるわけにはいかないじゃない？」
「そ、それは確かに……」
それは、治安の良さを一つのウリにしているネービスとしては、致命的な汚点だろう。
「その事件で、当時のディバーナ・ロウは壊滅状態になったわ。所属していたデビルバスターたちはほぼ全員、使用人もかなりの数が命を落としたの。……あたしの師匠もその中の一人」
淡々と説明するアクアから少し視線を逸らして、ダリアがその先を続ける。

「あたしたちは、ちょうどデビルバスター試験を受けるアクア姉に付き合って帝都まで行っていたから、何とか無事だったんだよ」
「……そうだったのか」
そしてティースは同時に悟った。……ディバーナ・ロウの隊長である彼らが、そして使用人たちの大半が、どうしてあんなに若い者たちばかりなのかということを。
それは古くからの名家としては、あまりにも不自然すぎることで。
（つまり、古くからいた人たちは……ほとんど――）
だが、ティースはふと疑問に思う。
「でも、そのタナトスはどうしてディバーナ・ロウを？　ネービスにはネスティアスだって……むしろ、そっちの方がそいつらにとっちゃ邪魔なんじゃ――」
「ゲームなのさ……」
「ゲーム？」
ティースが視線を向けると、ドロシーが相変わらず膝を抱えた格好で呟くように答えた。
「別に邪魔だからとかそんなんじゃない……ヤツらはただ、オレたちを挑発して戦うことを楽しんでいるだけだ……」
「そんな……」
「タナトスはそういう集団なのよ」
愕然としたティースに、アクアはきっぱりとそう言い切った。
「手段とか行動に深い理由なんてない。……あのザヴィアという男を見ればわかるでしょ？　基本的に、ああいうヤツらなの」
「じゃあ、ザヴィアが今回あんなことをしたのは――」
「おそらくは、あたしたち新しいディバーナ・ロウの力を確かめるため。あとはあいつの言うように、自分の趣味よ」
「……」
ティースはグッと拳に力を込めた。
（そんなことのために……ノエルさんを騙して、何人もの人を殺したのか……！）

「とにかく覚えておいて。あたしたちの当面の敵といえば、間違いなくヤツらのことだから」
アクアの言葉に、ティースはゆっくりと頷く。
言われずとも、彼には忘れることの方が難しかった。
――重苦しい沈黙が馬車の中を包む。
「でも、ま」
やがて、沈み込んだ空気を吹き飛ばすように、無理に明るい口調でダリアが口を開いた。
「何にしろ、あのコンラッドってのが助かったのは不幸中の幸いだったな」
「そうね」
アクアも同意して、そして少し柔らかい表情を見せる。
途端に、場の空気がほんの僅かに緩んだ。
「……」
ティースにとっても、それだけが今回の事件で唯一の救いだった。
そして、彼同様に深いショックを受けたノエルにとってもそれは同じだっただろう。
（本当に……良かったよな）
コンラッドが目覚めたとき、ノエルが泣きながら抱き付いた光景は今もティースの網膜に焼き付いている。そのときはあまりの安堵感に彼まで涙がこみ上げてきた。
ティースは希望を込めてポツリと呟く。
「ノエルさん……きっと大丈夫ですよね」
「そうね」
アクアはその気持ちをすぐに察したようで、即答した。
「コンラッドさんもいるんだし、大丈夫よ、絶対」
少し笑みを浮かべて、
「もしかしたら案外、あの二人でくっついちゃったり――」
「それはないだろうな……」
「……ドロシー？」

振り返ったアクアに、ドロシーは小さく息を吐いて答える。
「ノエルがどうであれ、コンラッドは承知しないさ……」
「え……どうしてだい？」
今度はティースの質問だ。
確かに、これで二人がくっついたら出来過ぎだと彼も思ったが、それを完全否定するほどの理由が思い浮かばなかったのである。
同様に、ダリアとフィリスも怪訝そうにドロシーの言葉を待っている。
「……」
そんな一同の姿を見て、ドロシーは少し面倒そうな顔をしたが、やがて口を開いた。
「ノエルが小さい頃はノエルのそばで護衛……そして今はオーダスの隠し子、ロゼッタの世話……不自然だと思わないのか……？」
「え？」
ティースはもちろんその意味を理解できなかったが、同様に不思議な顔をしたフィリスとは対照的に、残りの二人は何事か思いついた顔をした。
「あ……」
「もしかして……」
ドロシーは続けた。
「護衛って名目だった昔ならともかく……今は執事補佐って立派な役職もあるのに、だ。自ら申し出たとはいえ、何の理由もなくそんなことが通るはずないだろ……」
「つまり……そういうことなのね、ドロシー？」
アクアは完全にわかったようだった。それはダリアも同様で、
「あー、そっか。そう考えりゃ、色々と辻褄合うもんなぁ」
「？　どういうことだ？」
「……ほんっとに鈍いなぁ、お前」
まだ全然理解できていない様子のティースに、ダリアはため息をついて、

「アクア姉が言っただろ。あの一族にはクセの悪い血が流れてるみたいだって」
「……え？　あ……つ、つまり？」
そこでようやくティースも気付く。“彼にしては”なかなか察しが良かった。
「コンラッドさんは……もしかして、その……ノエルさんのお兄さん！？」
「確証はないが、な……」
ドロシーの言葉に、アクアは視線を少し上に向けて、
「言われてみれば、あの太い眉毛とかオーダス氏にそっくりなのよねぇ――って、フィリスちゃん？　どうしたの、口を尖らせちゃって？」
「……なんでもありません」
ダリアも少し怪訝そうに見る。
「なんだよ。なに怒ってんだ、フィリス」
「別に、怒ってなんかないです」
「変なヤツだなぁ」
その言葉に、フィリスはますます機嫌を悪くした様子だった。
「変なのは……変なのは、そんなことを平気な顔で話してるみなさんの方です！」
「？？」
結局、ファントムの面々は誰一人、彼女の怒りの理由を察することはできず。
最後の最後にどうでもいい謎を残して、馬車は、北の街――クレイドウルを離れていくのだった。

夜のミューティレイク邸。
薄手のシャツとゆったりとした形のズボン。寝巻に近い格好で一階の玄関ホールに姿を現したのは、つい先日十二歳になったばかりの屋敷の執事、リディア＝シュナイダーである。
「あらら？」
手には毎回タイトルの違ういつもの分厚い本を抱え、そしてその目は僅かな驚きと好奇心に開かれていた。
その視線の先。
そこにいたのは――
「ティースさん。珍しいね、ここでお酒呑んでるなんて。しかも一人？」
「ん？　……あ、リディアか」
ワインの入ったグラスを片手に振り返ったティースは、どうやらほんのほろ酔い気分といったところか。
彼は今日、任務から帰ってきたばかりのところで、いつもなら疲れてベッドに入っているはずだった。
「君こそ、こんな時間にどうしたんだ？」
僅かに赤くなった顔で、ティースは逆に質問した。
時計は夜の十一時を回っている。普通なら、彼女ぐらいの年齢の子供は眠っている時間だった。
ただ、もちろんそんな常識など、最初から常識外れのこの少女に通用するはずはなく、
「ホールにいる人たちに、十二歳になったあたしのセクシーな寝巻姿を見てもらおうかと思って」
「……」
「うわ。鼻で笑ったね、今」
「いや、笑ってないよ。そっか。こないだ十二歳になったんだっけ？」
言いながらも、ティースの頬は緩んだままだった。
「あーあ、馬鹿にしちゃって。知らないよ。あたし、将来は絶対に

美人になるって言われてるんだからね」
「誰に？」
「街角の胡散臭い占い師」
「わざわざ見てもらったのかい？」
リアリストっぽい彼女のイメージからかけ離れた言葉に微かな疑問を向けると、リディアは首を横に振って、
「まさか。お金もったいないし」
「じゃあ――」
「あの人、いっつも見かけるんだけど、誰に対しても同じことしか言わないんだ。だから、あたしにもきっと同じこと言うんだろうなと思って」
「はは……」
相変わらずの少女に、ティースは苦笑いした。
「考えてみたら、将来美人になるとかって、占いとあまり関係ないじゃんねぇ」
そう言いながら、リディアは向かいの席にストンと腰を下ろす。
ティースはそれを見て、少し不思議そうに、
「俺みたいな酔っぱらいに付き合って楽しいかい？」
「自分のこと酔っぱらいって言うのは、まだそれほど酔ってない証拠」
「相変わらず、子供らしくない発言だなぁ」
笑ったティースに、リディアは真面目な顔をすると、
「子供じゃないってば。もう赤ちゃんも産める体になってるし、胸だって少しはあるよ。見てみる？」
「……あ、あのね」
アルコールとは別の理由で赤面したティースに、リディアはおかしそうに笑う。
「あはは。面白いなぁ、ティースさん。そんなことで赤面する男の人って珍しいよ」
「そ、そんなもんかな？」

「少なくとも、ここにいる十八歳以上の男の人ではティースさんぐらい。……でも、あたしは好きだな」
「……ありがとう。素直に喜んでおくよ」
彼女相手だと、さすがのティースもそれほど照れることなく返すことができた。
グラスの中のワインを飲み干すと、リディアがワインの瓶を手につぎ足してくれる。周りはいつの間にか無人になっていて、ホールにいるのは彼ら二人のみ。
……そしてしばらく。話題もなく沈黙が続いていたところへ、リディアがまるで不意を突くようなタイミングでポツリと言った。
「辛かった？」
「え？」
リディアは少し上目遣いにティースを見て、
「ティースさん、前に言ってたもんね。他の人の恋愛は、ついつい応援したくなるって」
「……」
思わぬ指摘に驚き、無言で見つめ返す。
もちろん彼女は今回の件の大まかな経過を聞いてはいる。が、ティースがどんなことを考えて、そしてどんなことを感じたか、などということまで知っているはずはなかった。
だからもちろん、それは彼女の単なる想像で、しかしきちんと的を射ていたのだ。
「なんとなくね。ティースさんって、そういう無茶な恋愛とかすごく応援しそうな感じだったから」
「はは……君はホント、俺なんかよりよっぽど鋭いな……」
リディアは小さくため息を吐いて、
「人が良すぎるのも考えものだね。そういうのいちいち抱え込んでたら、潰れちゃうよ」
「そういうんじゃないよ。ただ、許せないと思っただけだから」
「許せないって？」

その言葉に、リディアはほんの少しだけ目を細める。
「“魔”が？」
ティースは一瞬、言葉に詰まった。
そして少し声を落とし、答える。
「……違うよ。俺が許せないのは、人の心や命を弄ぶヤツらだけだ」
「そっか。……なら、大丈夫かな」
「？　なにがだい？」
「ティースさんが、魔への復讐だけに燃える人になったら、なんかヤだな、って」
「……ならないよ。俺、今でも、魔が悪いヤツばかりじゃないって信じてるから」
「あれ？　今回、騙されたのに？」
「それはあるけど、でも、それ以上に俺は――」
「なに？」
「……ごめん。なんでもない」
軽々しく口にすることではないと思い直し、ティースは口を噤んだ。
リディアは少し探るような目で見た。
（う……）
ティースには、どうにも心の奥が見透かされているような気がして落ち着かない。ただでさえ彼は考えていることが顔に出やすく、かつ、目の前の少女はそういうことに鋭い人物であったから。
「――ま、いいや」
あっさりと、リディアの視線が離れた。そして立ち上がる。
「あ……リディア。そのワイン――」
「呑みすぎはよくないよ。それにお酒は本性をさらけ出すものだからね」
それから振り返って、真面目な顔で言った。
「フツーの女の人に触れないストレスで、あたしみたいな微妙な年頃の娘に襲いかかってくる可能性が高いし」

「……そ、それは絶対にないっ！！」
即座に否定したティースに、リディアは笑いながら目を細めて、
「慌ててるところが怪しいなぁ。……セシルさんにも気を付けるように言っておこーっと」
「ちょっ、ちょっと、リディア！　……ったく」
屋敷の奥へ消えていく少女を見送りながら、ティースは仕方なさそうに息を吐く。グラスに半分ほど残ったワインにちびちびと口をつけながら、独り、自嘲気味に笑って、
（……あんな年下の女の子に心配されているようじゃ、ダメだなぁ）
それでも、彼女の心遣いに深く感謝するのだった。

――その翌日。

「あの、ティースさん」
「うん？」
「リディアちゃんが、ティースさんと一緒にいると、私の貞操が危ないって言うんですけれど……」
「あ、あのね、セシル。それはとんでもない誤解――」
「“貞操”って、なんですか？」
「……なんでもないよ」
「……」
妙に冷たいシーラの視線を背中に感じながら、ティースは深いため息をついた。
（やっぱ、遊ばれただけなのかも――）

その8『繰り返す“ラブ・ストーリー”』

十月に入るとネービスの街は早々に冬支度に入り始める。大陸でも比較的北に位置するこの都市は紅葉の訪れも早く、それが過ぎればすぐに冬。二ヶ月前には薄着で溢れていた大通りも、そろそろ厚手の服が目立ち始めている。

そんな秋の、とある日のこと。

ミューティレイクの敷地を、その中心にある本館から少し西側へ移動した場所。

ディバーナ・ファントムの詰め所に、一つの別れが訪れていた。

「じゃあ、あの、色々お世話になりました」

「ええ……ティースくんも元気でね」

「はい」

見送られているのは、もちろんひょろっとした長身の男――ティーサイト＝アマルナである。そしてそれを名残惜しそうに見送るのが、二つのお団子を頭に結った女性、ディバーナ・ファントムの隊長、アクア＝ルビナートだ。

「……ティースくんがいなくなると、おねーさんホントに淋しいわぁ」

「大げさだっつーの。屋敷でほぼ毎日会ってんだろうが」

そのアクアの後ろでは、ダリア＝キャロルが呆れ顔で腰に手を当てていた。夏の間はずっと露出の高い格好だった彼女も、今はラフではあるが、比較的落ち着いた服装になっている。

ティースは苦笑して、

「でも、毎日同じ場所で特訓したりするのは多分最後だろうからさ」

「ま、そりゃそうだけどよ」

なんだかんだで彼女は結局、ティースにとって一番話しやすい相手だった。

他の二人、ドロシーとフィリスの姿はそこにはない。ドロシーは

もともとこういう場に顔を出す性格ではないだろうし、フィリスはファナの侍女という副業（？）のため、時期によってはなかなか忙しかったりもするのだ。

「でもま、お前の成長ぶりにはあたしも驚かされたよ。さすが、アオイのヤツに見込まれただけのことはあるよな」

ダリアの言葉に、ティースは照れながら、

「でも、結局ダリアには負け越したままだったじゃないか」

「なに言ってんだよ。それは最初の頃のアドバンテージのせいだろ。……あたしにしてみりゃ、お前みたいな頼りなさそうなヤツにたった二ヶ月で追いつかれて、かなりショック受けてるんだぜ？」

アクアが二度頷いて、

「そうねぇ。この前の任務のときなんて、一人で氷の五十六族をやっつけちゃったもの。……おねーさんを追い抜く日もそう遠くないかな？」

「無茶言わないでくださいよ……」

苦笑したティースに、アクアは妖艶に微笑みながら、

「もしあたしに勝てるようになったら……そのときはティースくんのお嫁さんになってあ・げ・る・わっ」

パチッとウインクする。

「……はあ」

すかさずダリアの突っ込みが入った。

「そりゃないぜー、アクア姉。それって報酬っつーより罰ゲームじゃんか」

「なんでよ！」

アクアは思いっきり口を尖らせて、少し焦ったような表情でティースを見る。

「……ね、ねぇ、ティースくん！　そんなことないわよね！？　あたしって、そこまで魅力のない女じゃないわよね！？」

「あ……その、えっと……」

肯定しても否定しても、彼に待っているのはおそらくよからぬ出

来事であろう。
「ど、どっちにしろ、それは多分、かなり遠い話ですので……」
結局、曖昧に濁して答えたティースだったが、それは偽らざる言葉でもある。いくら成長したとはいえ、アクアはまだ彼にとって雲の上の存在だった。
「な、なんか適当に濁されたわぁ……」
ガックリ肩を落としたアクアに、ダリアは勝ち誇ったように喉で笑いながら、
「……ま、それはいいとして。さっきの話だけどよ」
話題を元に戻した。
「お前ってなんか、筋がいいっつーより、基礎がしっかりしてるって感じだよな？　上達の妨げにならないように基礎を覚えてるっていうか」
「そ、そうかな？」
「聞いたことなかったけど、誰に剣を習ったんだ？　もしかして有名なヤツじゃないのか？」
「まさか」
ティースは笑って、そして答えた。
「俺の故郷の神父さんだよ」
「神父ぅ？」
ダリアが胡散臭い、と言わんばかりの表情をする。
「ああ。もうかなり高齢だったけど、昔は剣の道を目指したこともあったらしくてさ。物知りな人だったなぁ」
「ふーん。神父に剣、ねぇ。変な話だなぁ。……ま、いいか。そろそろ時間、だろ？」
「あ、ああ」
詰め所の中にある時計を見て、ティースは頷いた。
時刻はちょうど正午の十分前。
「じゃあ、アクアさんに、ダリア。……えっと、いつでも会えるのに改めて言うのも変だけど……ひとまず、お世話になりました」

「ああ。向こうでも頑張れよ、ティース」
「プロポーズ代わりの果たし状、楽しみに待ってるからね。……ちゅっ」
「……はは」
アクアの投げキッスに見送られ、そしてティースはディバーナ・ファントムの詰め所を去っていくのだった。
向かう先はもちろん、次の配属先――ディバーナ・ナイト。
それはディバーナ・ロウの最強チームであり、“ディバーナ・ロウそのもの”と言っても決して過言ではない。その隊長はレインハルト＝シュナイダー。ティースにとってはシーラの命を救ってくれた……そのために立ち上がってくれた大恩人である。
（厳しそうな人だけど――）
武者震いする体に気合を入れ直し、
（よし……気後れしないように頑張らなきゃな！）
そしてティースはディバーナ・ナイトの詰め所へと向かうのだった。

――一方、そんなティースを見送った二人。

「……しかし今度はナイト、か。お嬢さんの考えることもいまいちわかんねぇよなぁ。英才教育なんだか落ちこぼれ教育なんだか」
頭の後ろで手を組んで詰め所の中に戻っていくダリアに、アクアもまた振り返ってその後をついていく。
「期待されてるわ。間違いなく、ね」
「アクア姉もやっぱ期待してんのか？　……そりゃそうか」
馬鹿らしいと言った様子ですぐに自分の言葉を撤回するダリア。
アクアは頷いて、
「なんだかんだ言いながら、彼はカノンの厳しい特訓に耐えたし、まだ未熟だけどここで“集中”も会得したわ。ディバーナ・ロウに来て四ヶ月、最初はヴィヴィアンくんに軽くあしらわれていた彼が、

今じゃ五十族とも戦えるようになった。……誰もはっきりとは口にしないけど、これは驚異的なことでしょ」
「本人に一番自覚がなさそうだけどな」
笑いながらダリアは居間を抜け、奥の鍛錬場へと向かっていく。
そこにはティースの一輪車が残っていた。
「ま、結局こっちの才能はゼロだったわけだが」
アクアも苦笑しながら、
「そうね。でも、ここに来たデビルバスター候補生としては、もしかしたらルゥくん並の逸材かも」
「あぁ、ルーベン、か。……そういやここに来た時期もよく似てんな。性格はだいぶ違うけどよ」
「……そこね」
「？　アクア姉、どういうことだ？」
「性格よ。……彼の才能を邪魔するものがあるとすれば、あの性格だと思うわ」
ダリアは納得できない顔をした。
「そうか？　あたしは、あいつはあのままでいいと思うけどな」
アクアは少し意外そうに、
「あら？　あなたいつも、女々しい男はみっともないって言うくせに。……もしかして彼に惚れちゃった？」
「んなわきゃねーだろ。……そりゃ確かに女々しいとこもあるけど、やるときはやるんだからいいじゃねえか」
「あたしも彼の性格自体がダメだというつもりはないわ。……可愛いし」
「……あんたは結局それだもんな」
「なによぉ。可愛いに越したことないじゃない」
「どうだか」
特に相手が男の場合は……などとダリアは思うのだが、アクアに対しては馬の耳に念仏なのでそれ以上は何も言わなかった。
そしてアクアは続ける。

「でもね……もう少し切り替えが上手ければ、と思うのよ」
「切り替え？　どういうことだ？」
「これはリディアちゃんも言っていたんだけど……ほら、彼って何でもかんでも背負っちゃいそうじゃない？」
「あぁ……」
それはダリアにもわかった。
「サイラスくんのこと。この前のザヴィアのこと。……今はまだ、それを成長の原動力にしてるみたいだからいいけれど」
「……」
「ナイトは、あたしたちや出来立てのカノンと違うから。……彼がここでの任務に耐えられなくなるとしたら、多分――」
思い直したように口を噤んだアクアの瞳が、心配そうに揺れた。
そこに浮かんでいたのは微かな期待と、それを遙かに上回る不安の色。
「誰か、彼を強力に支えてくれるような人が、いればいいんだけど、ね……」
そしてアクアは目を閉じ、ゆっくり息を吐いたのだった。

さて、それから約一時間後のこと。
ティースの姿は、何故かネービス中心近くの広場にあった。その視線はとある人物の姿を探して彷徨っている。
（ここにいるって、マイルズさんは言ってたけど……）
詰め所を訪れたティースを出迎えたのは、屋敷の主治医でもあるマイルズ＝カンバースだった。彼がナイトの一員であるということにまず驚いたティースだったが、医術に関してはいえばもちろん屋敷で一番であり、考えてみれば特別に不思議なことではない。
（でも、マイルズさんがいない間に病人とか出たらどうしてるんだろうなぁ）

とまあ、そんな心配は、あれだけの規模を持つミューティレイクにとっては余計なお世話というところなのだろうが……それはともかく。そんなマイルズが中指で黒縁眼鏡を持ち上げながら（どうやら彼のクセらしい）口にした言葉によると、ナイトの隊長であるレインハルト＝シュナイダーは、用事で街の方に出払っている、ということだったのである。

もちろん今日ティースがやってくることは承知済みだったはずであり、おそらくは緊急の用件だったのだろう。

好天の昼下がり。辺りには人が溢れており、露店もいくつか姿を見せている。その中から人一人を捜すのは骨が折れるが、レイという男はティースほどではないにしろ長身で目立つ格好だ。不可能ではないと思えた。

（えっと、背が高くて、確か旅人風の……）

旅人風の格好をした男というのはそれなりに数が多い。大陸の中心からやや離れた北方とはいえ、ネービスは大陸の有力都市の一つ、人が集まればそこには利益が産まれ、仕事もある。特に交易に力を入れているわけでなくとも、自然と人は集まるものだ。

それこそつい最近彼が演じたような大道芸人や、仕事を求めてやってきたのであろう傭兵風の男、旅の食料を求めて露店に姿を見せる一団、中には何をしにやってきたのかわからない――ネービスの町娘だと思われる女性に背筋が震えるぐらい軟派な言葉をかけている男もいる。

「見ろよ。君の瞳はまるで、あの夜空に輝く星のようじゃないか」

「……夜空なんてどこにもありませんけど」

「いいや、そんなことはないさ。よく見てみるといい」

「……」

つられて空を見上げたティース。

広がっているのはもちろん青空だ。輝く星はもちろん、月すらもその姿を現していない。

「俺にはちゃんと見えてる。……ほら、その瞳の中。君の心の美し

さを映したように、キラキラ輝いてる」
「……」
女性は戸惑っている。が、言葉そのものというよりは、その雰囲気に呑まれてしまっているようで、そこから逃げだそうとはしていない。
客観的に見れば、脈アリ、といったところだろうか。
そして男はここぞとばかりに続けた。
「見えないのなら、俺の目を覗き込んでみるといい。その中に、きっと美しい夜空が見え――」
「って！」
そこまで来て――“彼”にとっては不幸なことに――ティースはようやく我に返った。
「レイさん！　い、一体、何をやってるんですかっ！！」
「ん？」
唇まで僅か三十センチほど。女性にとっては幸かあるいは不幸か。レイが動きを止めて振り返ると、女性はハッとした様子で慌ててその場から逃げていった。
「あ……あらら、逃げられちまった」
改めて声を掛ける間もなく女性の背中は遠ざかり……そしてレイは再びティースを振り返ると、
「……おい、ティース。どうしてくれんだ。せっかくいいところだったのに」
「そ、それはすみま――じゃなくて！」
反射的に謝ってしまうところだったが、ティースはすぐに気付いて、
「レイさん、任務でここに来ているんじゃ――っ！？」
「しっ」
だが、レイは少し眉をひそめ、口元に指を当てて答えた。
「大声出すんじゃない。標的が逃げちまうだろ」
「標的？　……あ」

急に厳格さを帯びたレイの言葉に口を噤み、ティースはすぐさま自らの愚かさを悟ることになった。

（そ、そっか。今のはもしかしてカムフラージュ……）

考えてみれば当然のことだ。ディバーナ・ロウを象徴するナイトの隊長が、本来の仕事をほっぽらかしてナンパに精を出しているはずもなく。冷静に考えればそのぐらい察してしかるべきだったと気付く。

（そんな簡単なことにも気付かないなんて……）

すかさず自己嫌悪に陥るティース。だが、幸い、と言おうか。周りを見てもティースの大声に注目している人間はそれほどいなかった。

レイも頷いて、

「とりあえず大丈夫だ。……が、軽率すぎるな。気をつけることだ」

「は……はい。すみません」

「わかればいいさ。……お前はしばらくその辺で時間を潰していろ。こっちはあと一時間もあれば終わる」

「は、はい」

そう頷きかけて、ティースはふと考え直す。

少し声を潜めて、

「あの、俺にも何か手伝えることはないですか？」

「ん？」

レイは少し怪訝そうな顔をしたが、すぐに思案して、

「……なるほど。使えるかもしれんな」

――そして一時間後。

「……」

「どうした、ティース」

人の溢れる大通りには、ようやく“任務”を終え、ミューティレイクへと戻る二人の姿があった。さすがにこの二人が並べば目立つ。

しかも片方はいかにも精悍な旅人風、もう片方は長身の割に頼りない童顔と、アンバランスな組み合わせで尚更目立っていた。
……が、どうやらこの組み合わせは、結果的に言えば今回の任務には不向きだったようで。
「結局……任務ってのはなんだったんですか」
やや、憮然とした表情のティース。一応尋ねてはみたものの、その表情からすると、彼の中ではすでに答えが出ているようだ。
そしてレイの返答もまた、その彼の推測と寸分違わぬもので。
「残念ながらことごとく失敗だったな。……お前の人の良さそうな顔は、初期段階の警戒心を除くのに有効かと思ったのだが」
「……どこが任務ですっ！　単なるナンパじゃないですかっ！！」
だが、ティースの抗議にもレイは涼しい顔を返して、
「任務だなんて一言も言ってないだろ？　俺はただ、標的……イイ女がお前の大声で逃げ出しちまうことを懸念しただけだ」
「……」
黙り込んだティースに、レイは軽く頭を掻きながら、
「ま、そう膨れるな。初日から気張ってもいいことないぞ」
「……」
どうやら彼の性格に関しては、ティースが思い描いていたものとは少々違っているようで。
（はぁ……こんなので、本当に大丈夫なのかなぁ……）
そしていつものように、彼の心は不安で一杯になるのだった。

ネービスからは少し離れた、とある森の中。
――チャプ、チャプ。
満月の下、森はまるで水を打ったように静まり返っていた。普段、

森を支配している獰猛な動物たちも、この日ばかりは息を潜め、物音一つ立てることはない。

――チャプ、チャプ。

そこに唯一響いているのは、微かな水音だった。

森の奥にポツンと湧き出る小さな湖。射し込む月光が、その周囲だけを薄明かりで照らしている。

――チャプン。

たった一つだけ、動くもの。

浮かび上がったのは――肌の色。

「……ふぅ」

それは人の姿をしている。スラリと伸びた足は染み一つないほどに美しく、全身にタオルを巻いて湖を出た姿を見ると、性別に関しては“女性”だと断言して間違いなさそうだ。

頭はもう一枚のタオルで覆い、それでは収まりきらない水に濡れた長い髪が、月に照らされてキラキラと輝いている。

「……」

無言の瞳がタオルの奥から覗いた。深い色のそれは穏やかに夜空を見上げると、満月を映し、微かに憂いを帯びる。

風が吹いて、草木がざわめいた。

「……様――」

誰かの名を呟いたその言葉は、折しも吹いた風にかき消されて。

「どこに……どこに、おられるのですか――？」

幕間『眠れない夜の夢』

ティースとシーラの二人がこのミューティレイクに来てから、すでに二ヶ月余りが経過している。

屋敷自体の規模も、働いている人数もかなり大きなこのミューティレイクであるが、この頃になると二人の存在もようやくこの場所に溶け込むようになっていた。つまり、屋敷の大半の人間が、彼らの存在を認知するに至っていたのである。

しかし、だ。そうはいっても、彼らに直接接する機会のある人間はそう多いわけではない。彼らが姿を見せるのは別館と、正門から別館までの道、別館の中でも訪れる場所というのは一部に限られている。

だから、ほぼ接点のない人々にしてみれば、彼ら二人の存在というのは、ほとんど気にも留めない程度のものか、あるいは無責任なうわさ話の対称でしかないのである。

そして、屋敷の大半の人々にとって、ティースは主に前者であり、シーラは後者だった。

シーラ＝スノーフォールは、その保護者であるディバーナ・ロウの一員、ティーサイト＝アマルナよりも、よほど屋敷の人々の話題にのぼることが多い。ティースのことはほとんど知らずとも、彼女のことは知っているという者も数多い。

だがしかし、それも考えてみれば致し方ない。

ティースという男は、あれだけの長身にも関わらずどこか影の薄いところがあったし、見た目もそれほどのインパクトはなく、平々凡々とした容姿。とにかく背が高いという以外に特徴らしい特徴のない男だ。

それとは逆に、このシーラという少女は、遠目からでもわかるほどに輝く美しい髪を持っていたし、すれ違う者が必ず目を惹きつけ

られてしまうほどに浮世離れした美貌を持っている。
だから男女を問わず、彼女は屋敷の使用人たちの注目の的だった。ある年輩の女性は感心し、ある若い男は胸を走らせ、若い少女たちは憧憬と羨望の視線を向けるのである。
だが、しかし。そんな使用人たちの間で否応なしに流れる彼女に対する様々な噂や評判は、意外に一定していなかった。
――ある者は、わがままで高慢ちきで、すねかじりのくせに偉そうだと酷評する。
――ある者は、そんなことはない、見た目以上に親しみやすく細かい心遣いのできる人物だと反論する。
その真っ二つに分かれた主張がまた、男女年齢問わずにバラバラだという辺りも、彼女の本質を掴みにくい要因となっていた。
そんな使用人たちの中に、マグナス＝ラングリッジという少年がいる。
彼は、後者の意見を持つ者の一人だった。
十五歳、奇しくもシーラと同年代であるこの少年は当初、どちらかといえば前者の意見に傾いていた。実際に言葉を交わすことなどもちろんなく、人伝いに話を聞けば、耳に入ってくるのは傍若無人とまでは言わないまでも、自分勝手な発言や振る舞いばかり。特に彼女の、彼女の保護者である男性――ティースに対する態度が、尾ひれをつけて広がったばかりに、少年の中での彼女に対する悪評価は、ほぼ確定的といえるところまで来ていた。
だが、その評価はある日、とあることから彼女と頻繁に言葉を交わす機会を得たことによって、徐々に傾いていったのである。

「ご苦労様、マグナス」
「……あ、シーラ様」
まだ太陽が昇って間もないというのに、その部屋は薄暗くジメジメとしていた。ぼんやりとした石造りの空間に、微かに流れる水の音。壁際には薄明かりに照らされ、何やら不気味な外観の植物類が

びっしりと並んでいた。
　このミューティレイクでは実に多くの植物が栽培されている。外観を飾る木々や花畑もそうだったし、こうして人目に触れることはなくとも、有用な薬の元となる様々な薬草類もかなりの数だ。
　マグナスはそういったものの世話、特にこの地下室にある、稀少な植物たちの世話をする係だった。
　そしてシーラはよくこの場所に顔を出す。それは彼女が薬草学を学んでいることから考えてもごく自然なことであったが、マグナスにとっては、最初、彼女にこの場所への案内を頼まれたときは、まさか、という気持ちだった。
　何故なら、ここにある植物はいずれも一般的とは言い難いものばかりで、もちろん使用される頻度も低い。彼が耳にしていた悪評では、彼女がこれらの植物を必要とするほどに勉強熱心な人物だとは到底思えなかったからである。
「今日も少しもらっていくわ。構わないかしら？」
「はい、それはもう」
　反射的にそう答えてから、マグナスは思い出した顔で、
「……あ、ただ、グレゴスの葉は少し生育が悪くて、その、できれば――」
　シーラの足が止まる。
「そう。……残念ね」
　どうやら、ちょうどそれが彼女の欲しがっていたものだったらしい。
　それを察したマグナスは少しどもりながら、
「あ、そ、その、シーラ様。どうしてもというのであれば、少しぐらいは……」
「いえ。少し実験用に欲しかっただけ。どうしてもというほどではないわ。ごめんなさいね、仕事の邪魔をして」
「じゃ、邪魔だなんてこと！　決して！」
「そう？　ありがとう」

シーラの微笑みに、マグナスは首筋まで真っ赤になった。薄暗いために気付かれることはないだろうが、それでも少し慌てて、
「シ、シーラ様は……その、勉強の方ははかどっておられますか？」
「ええ、そうね」
シーラは部屋に広がる植物の元へ足を運び、その一つ一つの様子を観察し始める。
「あなたのおかげで、それなりに、ね」
「あ、そ、そうですか」
さらりと言い切ったシーラの言葉にマグナスはさらに慌て、見るからに地に足がついていない様子で話題を変えた。
「……で、でも、シーラ様はすごいですよね！　なんと言っても、あのサンタニアで学んでおられるのですから！」
だが、
「別にすごくないわ」
「……え？」
素っ気なく答えたシーラに、マグナスは少し怪訝な顔をして、
「で、でも、ものすごく頭が良くないと――」
「私がすごいというのなら、私と同い年で立派に働いているあなたもすごいじゃない」
「あ……そ、そんなこと、全然――！」
慌てふためくマグナスに、そんな彼の気持ちを知ってか知らずか、シーラは壁際の青紫色の葉を持つ植物から離れ、少しおかしそうに笑いながら振り返って、
「ここの植物たちがきちんと育っているのは、あなたが丁寧に世話をしているからよ。……もっと自信を持ちなさい」
「シ、シーラ様……」
「それじゃあ、私は行くわ。これからも、よろしく頼むわね」
「は、はい」
そしてシーラは部屋を出ていった。
「……」

感激の余り立ち尽くすマグナス、
――そんな彼が数分後、様子を見にやってきた先輩にどやされるハメになったのは言うまでもない。

（グレゴスの葉がなくてはお手上げね……）
地下室から部屋に戻ったシーラは、早々に今日の計画の打ち切りを決定していた。
学園が休みのこの日、彼女は実は以前から試そうと思っていた“とある薬”の実験を行うつもりで、そのために“グレゴス”と呼ばれる、あまり一般的とは言い難い植物の葉が必要だったのである。
（どうしたものかしら）
そんな彼女の部屋は、他の住人たちの部屋と比べると雑然としているように思えた。色々なものが色々な場所に散らばっているせいだ。
が、それは決して彼女が無精だからではない。
彼女の部屋は、様々な薬の調合実験を行うにあたって必要な器具が色々と置いてあったり、あるいは生成中の薬――例えば数時間の日の光を必要とするもの――が日光の良く当たる窓際に置いてあったり、あるいは自ら栽培している特殊な植物の鉢がいくつか置いてあったり……一見散らかっているように見えるのはそのためなのである。実際よく見れば、いくら物が多くとも、それらが決して邪魔にならない位置に考えて配置されているのがよくわかるだろう。
むしろ彼女はキレイ好きであり、部屋の掃除に訪れるミューティレイクの使用人たちも、彼女の部屋に限ってはほとんど触れるべきところがないほどである。
「ふぅ……」
各部屋備え付けの机に着いて、シーラは本日の予定について再考していた。

日は昇ったばかり。休みだからといってゆっくりするという考えは、彼女の中には最初から存在していない。彼女にとって、やりたいことはいくらでもある。時間はいくらあっても困ることはなかった。

その手が机の下に伸びる。そこはこの部屋で唯一、本当に雑然としている場所。何冊もの本が積まれ、そのほとんどが表紙のついていないものだった。

それらは書庫から借りてきたものではなく、彼女の私物だ。

伸びた手は雑然とした本の山の奥の奥から鍵付きの箱を取り出した。外観は特に何の変哲もなかったが、かなり頑丈な作りのものだ。大きさは十数センチ四方。

シーラは指に填めていた指輪を外すと、慣れた手付きでそれを奇妙な形の鍵穴に填め込んだ。

カチリと音がして鍵が外れる。

中から出てきたのは一冊の本。表紙はない。が、真っ黒で妙に質感のあるカバーに、縁には妙な文様が描かれており、大事に保管されているだけあって、どことなく“重み”を感じさせる書物だった。古びている割に、日焼けしていなければ腐食してもいない。

「……」

視線を一度、部屋の入り口へと向けてから、シーラはおもむろにその本を開いた。

中は……いや、中もまた白紙だった。あるいは古い日記帳か何かだろうか。だが、彼女はそこに何を書き込むわけでもなく、ただじっと見つめるだけ。

「ビアリス……パッフル……グレゴス……アルセフィ……」

呟いたのは聞き慣れない単語だったが、どうやらこの大陸に存在する植物の名前のようだった。

難しそうに目が細められ、美しい睫毛が微かに震える。

「眠りを妨げる……を避けるには……天空の……飛沫と……弐の神の恵みを――」

カタン。
「？」
物音に気付いて、シーラは本を閉じる。
振り返ってみたが、誰もいない。物音は、どうやら隣の部屋のようだった。
隣の部屋の主は、今は屋敷にいないはずで――時計に視線を向けて、そして気付く。
（もう朝食の時間……じゃあ、隣にはそろそろ掃除の子が来てる頃ね）
本を元の位置に戻し、そしてシーラはゆっくり席を立つのだった。

「何か、お悩みですの？」
「え？」
食堂では朝食も終わり、希望した者には食後の紅茶が配られている。……とはいえ、今、シーラの他にこの場にいるのは二人だけだ。
上座にはこの屋敷の主である弱冠十七歳の少女、ファナ＝ミューティレイク。
そしてその隣の席には、屋敷の執事兼ボディガードを務める縁なし眼鏡の男性、イングヴェイ＝イグレシウス――通称、アオイである。
「何か難しい顔をなさってましたわ？」
そして、丁寧な口調でシーラに対して鋭い観察力を示したのは、もちろんファナの方だった。アオイの方はといえば、寝起きに弱いという噂どおり、まだどこかはっきりしないボーっとした表情をしている。
シーラなどは、これで本当に護衛が務めるのかと心配になってしまうところなのだが、ファナは『大丈夫ですわ』の一点張りだったし、当の本人は『何があっても絶対に守り抜きますから』と根拠の

ない自信を示している。
もちろん、このアオイという人物について、それほど詳しいことを知る由もないシーラとしては、それ以上口を挟む理由もなかった。
――と、それはともかく。
「悩み事ってほどのものではないのだけれど」
ファナの問いに対して、シーラは紅茶を口に運びながら答える。
「ティースの部屋の机の上に、明らかに女物のガラスの小瓶があるの。……多分、香水を入れておくものだわ。中身は入ってないようだけど」
「ええ、私も存じております。それが、気になるのですか？」
「気になるというほどではないわ。ただ、少なくとも、あいつが自分で持ってくるようなものじゃないし、何の意味があるのかと思っただけ」
シーラの疑問に、ファナは納得した顔をして答えた。
「ティースさんがカノンでの最後の任務の際、お礼にいただいた物だそうですわ。……かの地方には、女性が自らの使用した香水のビンを感謝の印として男性にプレゼントする慣習があるのです」
「……ああ。聞いたことがあるわ」
目を閉じ、カップを置いてシーラは頷いた。
「今は主に、意中の男にプレゼントするようになっているそうね。……ま、あいつのことだから、それはないにしろ」
「そうでしょうか？」
ファナは不思議そうに首を傾げて、それからそっと笑みを浮かべる。
「ティースさんはとても魅力的な男性だと思いますわ」
「その言葉をあいつが聞いたら、きっと真っ赤になって慌てふためくわね」
光景を思い浮かべたのか、シーラは微かに口元を緩める。
確かにそれは、古い付き合いの彼女でなくとも、想像することは容易だったろう。

「それも、ティースさんの良いところです」
「そうかしら……？」
少しだけ視線を流したシーラに、ファナはおかしそうにクスクスと笑って、
「では、女性にだらしのないティースさんの方が、魅力的だと思われます？」
「……天地がひっくり返ってもあり得ないわね」
誤魔化すようにそう言って、再びティーカップを手にすると、
「とにかく、あのビンはあいつが大事にしてるもの、ということね」
「ええ、そう思いますわ。……シーラさん？」
少しだけ不思議そうなファナに対し、シーラはしばらくテーブルクロスを見つめた後、ゆっくりと顔を上げて、言った。
「なんでもないわ、ファナ。……あともう一つ、確かめておきたいことがあるんだけど――」

その日の夕方、ティーサイト＝アマルナの部屋。
今は主がいないだけあって散らかりようもなく、また、毎日朝と夕方に定期的に掃除が入るため、埃が溜まるようなこともない。
そのドアは鍵がかかっていることもなく、何の抵抗もなく開いた。
住人によっては、自らが不在のときの部屋への進入を嫌う人間もいたが、ティースに関していえばまるでそんなことはなく、そういう点ではよく言えばおおらか、悪く言えば無警戒ということができるだろう。
先の朝食の席で話題に上った香水のビンは、机の上にあった。ハート型の小瓶で確かに中身はなくなっていたが、蓋を開ければ香水の残り香が確認できることだろう。
――それは感謝、あるいは、好意の証。
これをティースに手渡した女性、あるいは少女がどんな人物なの

かはわからない。が、どうやらカノンの他の面々に渡していないところから見ても、単なる感謝以外の意図が僅かにでもあったのは確かだろう。

……その事実が、彼女を苛立たせる。

どす黒く胸に広がった感情の名前は――嫉妬、だ。

その感情が、震える手を動かした。それは小瓶に伸びて、やがて触れる。

小瓶の感触は、ほんの少しだけヒンヤリとしていた。いや、鼓動が速まるにつれて、彼女の体の熱が少し上昇していたせいかもしれない。

（こんなもの……）

嫉妬が胸を焦がす。それをティースに渡した女性の顔、それを受け取ったときの彼の顔。それを想像するだけで、狂おしいまでの怒りが胸を支配した。

（こんなもの――）

グッと、それを握りしめる。

簡単だった。それをただ、床に叩きつければいい。それだけでおそらく、小瓶は粉々に砕け散るだろう。割れた理由は、あとでいくらでもでっち上げることはできる。

迷うことは、もう必要なかった。

唇を噛みしめてそれを持ち上げると、怒りにまかせ――

「こんなもの――っ！！」

「――そこまでよ」

「！？」

振り上げたところで、手が止まった。

その制止の声は、先ほどまで彼女以外に誰もいなかったはずの部屋の中。その入り口にいつの間にか一人の人物が立っていた。

彼女とほぼ同い年だろう。片手を腰に当て、細めた目で振り上げた小瓶を見つめている。

窓から射し込む夕日で、その綺麗な金髪が水飴のように輝いてい

た。

「それは、あいつがきっと大事にしているものだわ。元の場所に、戻しなさい」

そう言ったところで、そうやくその人物の正体を認識する。

「シーラ……様……」

「その小瓶を、元の場所に戻しなさい、パメラ」

うろたえた表情のパメラに、シーラは有無を言わせぬ冷たい口調でそう言い放った。

「っ……」

「パメラ！」

おそらく無意識の行動だろう。小瓶を手にしたまま後ずさろうとしたパメラに、叱咤の声が鋭く突き刺さった。

「それを元の場所に戻しなさい！　さもなくば、あなたは職を失うわよ！」

「っ！？」

シーラの言葉は脅しでもなんでもなかった。使用人が客のものを意図的に破壊したとなれば、彼女の言葉が現実となる可能性は低くはない。

……パメラは決して裕福な家の出ではなかった。父親も母親も健在だったが父親は定職に就けずにいたし、二人の弟を含めた家族の生活費の半分以上は、比較的恵まれている彼女の給料で賄われていた。

解雇が即刻破滅に繋がるほどではない。が、それでもここで職を失うことが、それほど学があるわけでもない彼女にとって、そして父親が定職に就けていない家族にとって、暗い未来を暗示していることは間違いない。

だが、それを考慮にいれてもなお。彼女はシーラの言葉に素直に従えなかった。

彼女には彼女なりに、それだけの理由があったからだ。

「わ、私は――」

「パメラ」
言いかけたパメラの言葉を、シーラはすぐに遮った。
「話は聞かせてもらうわ。理由次第では、あなたの今の行動を黙っていてもあげる。……ただ、先にその小瓶を元の場所に戻しなさい」
「……」
視線を落としたパメラの体は微かに震えていた。
表情に浮かんでいるのは、興奮と、絶望。
おそらく彼女の中では、“大変なことをしてしまった”という気持ちと、それでもなお収まりがつかない“何らかの理由”がせめぎ合っているのだろう。
「よく、考えることよ」
そんなパメラに、シーラは淡々と言葉を突きつけた。
「あなたがその小瓶を割ったところで、何が解決するというの？あなたの気持ちは、収まるどころかさらにエスカレートして膨れ上がるだけだわ」
「っ……」
観念したように項垂れて、そしてパメラはゆっくりと腕を下ろした。
コト、と軽い音がして、小瓶が元の場所に戻ってくる。窓から射し込む夕日の光を浴びて、透明な小瓶はどこか寂しげな色に染まっていた。
「いい子ね」
それを視線の中に捕らえ、シーラは後ろ手に扉をしっかり閉めると、パメラの方に向かってゆっくりと歩き出した。
表情は、まだ厳しい。
「でも、わかっているわね？　あなたがしようとしたことは、許されないことよ」
「っ……」
パメラの体が震え、二つ結った短いお下げが小さく揺れた。どこか垢抜けない、よく言えば純朴なそばかすの顔が、大きく歪んでそ

こに大粒の涙を湛える。
そんな彼女に、シーラは短く言い放った。
「サイラス＝レヴァイン」
「！？」
ハッとしてパメラが顔を上げる。
その表情だけで、シーラは自らの憶測が正しかったことを悟っていた。
「図星、ね。……あなたが以前、そのサイラスって人の部屋を担当していたのは、ファナから聞いたわ」
「……」
「他の人からも色々と聞いた。……彼が任務に出掛けるときには必ず見送って、彼が戻ったときには必ず出迎えて、彼のためにお守りを作って、彼の功績を耳にするたびに、まるで自分のことのように顔を輝かせていた、って」
「っ……！」
パメラの目に浮かんでいた涙が、一気に溢れて流れ落ちた。両手で顔を覆っても、涙はその指の隙間から溢れて夕日色に染まる。
「わ、私は――！」
そのまま、震える声でパメラは言った。
「あ、あの人が……サイラス様を殺したあの人が、当たり前のように幸せそうに生きているのが、どうしても許せなくて……っ！！」
「……殺した？　ティースが？」
シーラは怪訝そうに声を潜めた。
「私は、二人で命令違反して、それでサイラスって人が運悪く命を落としたのだと聞いたけど？」
パメラは顔から手を離し、涙に汚れた顔を隠そうともせずにシーラをキッと見つめた。
「わ、私、聞きました！　あの人がサイラス様をそそのかして、それでサイラス様は命を落とされたのだと！」
「……」

シーラは何も答えなかった。
——確かに死んだのはサイラスで、生き延びたのはティースだ。
彼が嘘をつけば、事実をねじ曲げることはいくらでも可能だろう。
そして真相がどうであれ、少なくとも、パメラはそれが事実であると信じているようだった。
パメラはそのまま、忌々しそうに机の上の小瓶を睨んで、
「サイラス様はもう戻ってこられなくなったのに……そ、それなのに……あの人はのうのうと、楽しそうに生きて——！！」
「だから、なに？」
「っ——」
パメラの視線がシーラの元に戻ってくる。驚いたような視線が、やがて苛立たしさを含み、そして唇を噛んだ。
「サイラス様は……サイラス様は、あの人にそそのかされて、それで命を落とされたんですっ！」
だが、シーラは淡々としたまま、
「同じことを繰り返さなくても、あなたの言いたいことはよくわかってるわ」
そして冷たい視線を彼女に向ける。
「それが本当だとしても、だからなんだというの？　そそのかされた？　だったら聞くけど——」
そこで一度言葉を切って、馬鹿馬鹿しいと言わんばかりの口調で続けた。
「例えばあなたは、人殺しをしようとそそのかされて手を下した人間にはまるで罪がないと、そう言うつもりかしら？　“そそのかす”というのは強制でも脅迫でもないわ。最後はあくまで当人の意志よ」
「な——」
シーラはさらに付け加える。
「それにあなたの言うのはあくまであなたの妄想でしかないわ。あなたの耳にしたのは無責任なうわさ話であって、正式には、ティー

スが彼をそそのかしたなんてことは誰も言っていない」
その冷たく鋭い指摘に、パメラは激しく首を振って、そしてさらに涙を溢れさせた。
「も、妄想なんかじゃありません！　それに……それに私、今でも夢に見るんです！　サイラス様が無事に戻られる夢……目を覚ますたびに、何度も何度も泣いて――」
「……」
だが、その言葉にも、シーラはほんの僅かに眉を動かすだけだった。
「よかったわね。夢の中とはいえ、愛しい彼に何度も会えて」
パメラがシーラを睨み付ける。
「……あなたはっ！　あなたは遺された人の気持ちが全然わかってない！　私の気持ちなんてこれっぽっちもわかってないっ！」
「……」
シーラは無言だった。
ただ、視線が徐々に、ではあるが、険しさを増していく。
「もう二度と……二度とサイラス様は私に笑いかけてくれないんですっ！　よくやった、って、ありがとう、って、もう二度と、二度と、誉めてくださることもないんですっ！！　私がどれだけ苦しいかなんて、私の気持ちなんて、あなたにはこれっぽっちも――！！」
「気持ちがわかってない、ですって……？」
シーラが押さえつけたような声色で、そう呟く。
いや、正確には違う。
“ずっと押さえつけていた”のだ。それが“押さえきれなく”なった。
それが正しい。
そして――爆発。
「ふざけるのも、大概になさいっ！！」
「っ！？」
あまりに唐突であり、そしてあまりに激しい感情の迸り。叫びは

空気を振るわせ、決して演技ではない怒りが充ち満ちる。
“堰が切れた”
その表現ですら、どこか物足りなく感じるほどに。
怯んだパメラに、シーラはそのまま言葉を走らせた。
「気持ちが……わかってないですって！？　だったらあなたは、あいつの……ティースの気持ちを、一体、どれだけ理解しているというの！！」
「あの人の……気持ち……？」
パメラの意外そうな呟きに、シーラの言葉はさらに苛烈さを増す。
「あなたは、あいつが何も感じていないとでも思ってるの！？　……あなたは知らないだろうけど、あいつは今でも彼の名前を呼びながらうなされてるわ！　夢のことなんて私には話そうとしないけれど、でも、それがどんな夢かなんて私にだってわかるっ！！」
いつものクールな様子からは想像もできない激情をそこに浮かべ、そしてそのあまりに端正な顔が、どうしようもない苛立ちで覆い尽くされる。
ギリッと、歯ぎしりの音が静かな部屋に響き渡った。
「それが、どれほどのものか、あなたに想像できるの！？　あいつは夢の中で、何度も何度も仲間を失ってるわ！　そのたびに何度も何度も許しを求めて！！　そのたびに何度も何度も泣きながら自分の不甲斐なさを責めなきゃならないのよッ！！」
「そ、そんなの……」
その剣幕におののきながら、それでもパメラはかろうじて反論した。
「そんなの……だってそれはあの人の自業自得――」
パァン！
「……な……っ！」
頬を押さえたパメラを、シーラは平手を止めたまま、細めた目で睨み付けた。
「……だったら、あなたの好きだったそのサイラスという男は、自

分の行動にも責任を持てないほど、くだらない男だったということ？　あなたはそんなしょうもない男を好きになったのね？」

「そ、そんな……そんなこと――」

手を下ろし、シーラはその拳をグッと握りしめる。

「あなたの言ってることは”そういうこと”なのよッ！」

「――」

返す言葉を探しながら、パメラは頬を押さえたままで恨みがましく見つめた。そんな彼女に、シーラは自らの頬を差し出すように顔を近づけると、

「反論があるなら遠慮せずに言いなさい。そして私の頬を張り返してみるといいわ。……私はそれを誰に訴えたりもしない。自分が正しいと思うなら、やりなさい」

「っ……！」

「さあッ！　やってごらんなさい！！」

突きつけられた言葉に、パメラの目からは止めどなく涙が溢れ、唇を噛みしめ、肩は小刻みに震える。

反論はない。

その手がシーラの頬を張り飛ばすこともなかった。

「っ……うっ……ううっ……っ！！」

そして、パメラは膝を落とし、そのまま泣き崩れる。

「ううっ……サイラスさま……サイラスさま……ぁぁぁぁっ！！」

あとは、二度と戻って来ないその男の名を呼び続けるだけだった。

「……」

シーラは黙ってそれを見つめていた。

それは先ほどまでよりは、だいぶ穏やかさを取り戻して。そしていつもよりも、よほど感情を宿した瞳――そこに、微かな憐れみをも込めて。

「ううっ……ぁぁぁぁ……！！」

綺麗に敷き詰められた絨毯の上に、いくつもの黒い染みが出来ては、すぐに色褪せていく。

「……」

やがてシーラは、聞こえない程度の小さな息を吐いて視線を横に逸らす。

その表情には……何故かほんの少しの後ろめたさが伺えた。

「泣きたいだけ、泣けばいいわ」

彼女は間違いなく、屋敷の誰よりも彼を愛していた。だから、その死を悲しむことは、彼女にとって当然に与えられるべき権利だ。

言葉も、温もりも伝えられなくなった今となっては、彼女が彼を愛していたことを示す、唯一の手段だった。

シーラはそのまま、ゆっくりと窓に歩み寄る。

……外は夕日が綺麗だった。空に浮かんだ薄雲をオレンジ色に染め、街の風景を綺麗に萌やし出している。

その綺麗な景色を映したシーラの口から、独り言が漏れた。

「偉そうなこと言うわね、ホント……」

自嘲の言葉だ。

窓に触れた手が、グッと握られる。

その後ろでは、いつまでも嗚咽が聞こえていた――

「え？」

「……すみませんでしたっ！」

「え、あ、ちょっ、ちょっと待ってよ」

ティースにはちんぷんかんぷんだった。

それはそうだろう。

クレイドウルの任務から戻って数日の夕方。今まで話しかけても素っ気なかったり無視してばかりだった使用人の少女――パメラが、いきなり自分から話しかけてきたかと思うと、唐突に謝り出したの

だから。
　ティースは自室に備え付けの椅子から少し腰を浮かせて、
「ま、まず顔を上げてよ。いきなりそんなこと言われても、なんのことだか、さっぱりわからないじゃないか」
「……」
　夕日の支配する部屋の入り口で、パメラは神妙な表情でゆっくりと頭を上げた。
　そして、その視線が机の上――そこにあった、小瓶に向けられる。
「私……ティース様の、その小瓶を壊そうとしたんです」
「小瓶？　え？　これ？」
　ティースが手元にある香水を入れる小瓶を示すと、パメラは頷いた。
　その小瓶はカノンでの最後の任務の際、数日間護衛についた女性から感謝の印にと差し出されたものだった。彼自身は実際に一度も剣を抜いていなかったから気は引けたものの、ヴィヴィアンなどの助言もあって結局ありがたくもらったものである。
　それは感謝の印……つまりは自分が役に立ったという証だったから、まだ未熟で不甲斐ないティースにとっては素直に嬉しいことだった。それを机の上という目立つ場所に置いてあるのが、彼がそれだけ喜んでいることの証明でもある。
「……なんで？」
　もちろん、パメラがそれを壊そうとする理由など、ティースにはまるで思いつかなかったのだ。
「……」
　そんなティースを真っ直ぐに見て、そしてパメラはまるで懺悔するように答える。
「私、以前はサイラス様の身の回りを担当してました。……サイラス様のこと、慕っていました」
　ドクン、と、胸の鼓動が跳ね上がった。
「サイラス……？」

穏やかな表情が、ほんの僅かに、無意識のままに引き締まる。
「……そうか」
それだけで――彼にしては珍しいことに、全ての事情を理解したようだった。
そして視線を泳がせ、目を閉じ、その後に、ゆっくりと、絞り出すように、
「君が俺に素っ気なかったのは……俺のことを恨んでいたから、だね？」
パメラは無言で頷く。
そして――重苦しい沈黙。
「……」
「……」
それはティースにとっても、パメラにとっても、悲しい記憶だった。決して消えることのない、この屋敷に存在していた一人の男の記憶だ。
やがて、ティースはゆっくりと頭を下げて。
そして開いた口から漏れた言葉は、
「ゴメン。……俺は、君の愛する人を守ってあげられなかった」
偽らざる、心からの謝罪の言葉だった。
「……」
無言のまま、パメラの瞳が揺れる。
ティースは続けた。
「あのとき、あいつを助けられるのは俺だけだった。でも、俺は助けられなかった。……それは紛れもない事実だ。だから、俺は君に責められても文句は言えない」
「……」
「俺は――」
ティースの言葉の語尾が微かに震えて。
――だが、先に涙を流したのは、パメラの方だった。
「いいえ、ティース様……」

「……え？」
「私は……きっと、誰かに責任をなすり付けたかっただけだから……」
「パメラ……？」
「あの方が死んでしまったのが、あまりに理不尽なことに思えてしまって。……でも私、ある人に言われて、それで何日も何日も考えてみて、わかったんです」
パメラは俯いて涙を拭い、そして潤んだ瞳を再びティースへと向ける。
――そこから、また涙が溢れた。
「あの方は……そういう場所で戦って、それを承知の上で戦って、強い意志の上で亡くなられたのだから……だからあの方の死は、きっと誰のせいでもないんだって……」
「……パメラ」
パメラの涙は止まらない。
拭っても、拭っても、止まることはなかった。
「誰かのせいにすることは、死んだあの方の尊厳を傷つけることなんだって。それは……それは、遺された人が絶対にしちゃいけないことなんですよね」
泣いたままで、パメラは最後に笑おうとした。
だが、それは寸前で失敗する。
「だから私は……二度と――」
それ以上の言葉が、彼女の口から出てくることはなかった。あとは顔を上げることもなく、ただ肩を振るわせる。
静まり返った部屋に、嗚咽の声だけが響いた。
「……」
ティースには、返す言葉が思い浮かばなかった。
……彼女がその結論に達するまでに通過したであろう葛藤と苦しみ。それを想像するほどに、今、こうしてティースの前で笑顔を浮かべようとした彼女が、あまりに健気で、そしてあまりに哀しく思

えたから。
そしてティースは考える。
どうすれば、この少女の強い気持ちに応えてやれるだろうか。
どんな言葉をかけてやれば、少しでも彼女の強い意志に報いてやれるだろうか、と。
……もしも今、自らの命を半分だけサイラスに分け与えられるとしたなら、ティースは迷わずにそうしたに違いなかった。
だが、それは叶わぬ願いだ。
（……あ）
そしてティースが最後に思いついたのは……生前、最後の任務に向かう数日前の酒場で、サイラスが何気なく口にした一言だった。
「あいつ……言ってたんだ」
「……？」
僅かに顔を上げたパメラに、ティースは少し目を細め、そして彼女の顔を見て自分の想像を確信に変えた。
そして続ける。
「ある使用人の子に、いつも色々と世話になってるって。自分が何かを遺すとしたら、あるいはその子かもしれないって……」
「……え……？」
パメラが目を見開く。
「名前とか、どんな子だとか、そんなことは全然聞かなかったけど……それって、もしかしたら――」
だが、パメラは思いっきり首を横に振って、
「そ、そんなこと……だって、サイラス様は人気もありましたし、私より親しかった人だって、私よりずっと綺麗な人だってたくさん――」
「でも、それなら“世話になってる子”なんて言い方しないんじゃないか？　……たぶん、それに当てはまるのは、あいつの部屋とか、身の回りのこととか、色々と世話をしていた君だけだと思う」
「で、でも私、色々と至らなくて、サイラス様にいつも庇っていた

だいて――」
「パメラ」
確かに。そこにいる少女は自身で言うように特別美しいわけではない。女性としての魅力に溢れているわけでもないし、使用人として完璧な技術を持っているわけでもないようだった。
だが、ティースは思うのだ。
小さな頃に家族も友人も失ったサイラスはきっと、そんなことよりももっと自分にとって必要なものを、この少女の中に見出していたのではないか、と。
確かにあのときは酒の席で、冗談交じりに言ったことなのかもしれない。
が、それでも彼は確かに言ったのだ。
『恋人も、家族もいない。だけど敢えて言うなら、いつも色々と世話になっている使用人の子に言葉を遺すかもしれない』
と。
結局、彼はそれを遺さなかった。しかし、もしも彼が、自分を待つ運命に最初から気付いていたのであれば……あるいは本当に彼女に言葉を遺していたかもしれない、と、ティースはそう思うのである。
「……本当に強い想いは、通じるものだから。あいつは君が思うよりずっと、君に感謝していたんだと思う。そうでなきゃ、酒の席の軽口でだって、君のことが出てくるはずはないと思うから」
「――」
まるで時が止まったように、パメラの目は大きく見開かれて。
そして彼女を再び動かしたのは、やはり涙だった。
溢れて、溢れて、止まらない。
「サイラス……様……！」
だけどそれはほんの少し。先ほどまで流していたものとは、ほんの少しだけ意味合いが異なっている。
悲しいだけ、ではない。

ティースはゆっくりと天井を見上げた。
彼自身、目の奥に熱いものがこみ上げてくるのを自覚していたのだ。
（……サイラス……お前は、こんなにも他人から好かれていたのか……）
その死から二ヶ月が経った今でも、こうしてその死を悼んでくれる者がいる。その言葉に涙を流してくれる者がいる。
自分はどうだろうか、と考えた。
それは読心術を心得ていない彼にわかるはずもないことだったが、せめて、一人はこの少女のように想ってくれる人がいて欲しい。そうであるように生きていきたい……そう思う。
（……あ）
そこへふと、ティースの視界の隅に、夕日を浴びて輝くものが映った。
（シーラ……？）
半開きの扉から微かに覗いた美しい金髪は、どうやら彼女のものだ。とはいえ、別に聞き耳を立てていたわけではなく、たまたま部屋の前を通り過ぎただけだろう。
視線を動かさずに、ティースはふと尋ねた。
「……パメラ。君、“ある人に言われて気付いた”って言ってたよね」
「は……はい……」
涙を拭いながら、ようやく落ち着いた様子でパメラはゆっくりと顔を上げた。
ティースは問いかける。
「その、“ある人”って、誰のこと？」
「……あ、それは……」
パメラは少しだけ口ごもって、そして視線を逸らして答えた。
「私の、先輩です」
「先輩……そっか」

もしかしたら嘘をついているかもしれない、と、ティースは直感的に思ったが、彼女が嘘をつく理由もわからなかったし、それを追求する理由も思い浮かばなかったので、それ以上は何も言わなかった。

「……あらゆる……ヴェイダ……の妨害から……身を……沈む？いえ……落と……安らぐ……？」

その日も、シーラの部屋には夜遅くまで明かりが灯っていた。

「ヴェイダ……は――」

ページをめくる乾いた音が静かな部屋に響く。辺りからは物音一つ聞こえない。

――いや。

コン、コン。

遠慮がちなノック。

「……。つまり……ヴェイダの妨害は、不眠の――」

コン……コン……

二度目はさらに小さく。

「……」

シーラは不機嫌そうに眉をひそめ、二冊の本を閉じて扉を振り返ると、

「誰？」

「あ、起きてたか……？」

扉の外から遠慮がちに聞こえてきたのは男の声だ。もちろんそれは、シーラもよく知っている男のものである。

「ティース？　何の用？」

「あ、いや、特に用ってわけじゃないんだけど……もし時間があっ

たら、ちょっとだけ話をしたいなと思って……」
さらに遠慮がちに聞こえたティースの言葉に、シーラはやはり不機嫌さを隠そうともせずにため息を吐いた。
「勝手になさい」
「あ、そ、そっか。じゃあ失礼――」
ガチャ。
「あ、あ、あれ？」
ガチャ。ガチャガチャ。
――沈黙。
その後、扉の向こうから少し情けない口調の言葉が聞こえてくる。
「あ……あのさ、シーラ。なんか、鍵が開いてないみたいなんだけど……」
「そう、残念ね」
冷たく言い放って、シーラは再び机に向かった。
「……」
「……」
数十秒の沈黙。
シーラはまるで何事もなかったかのように、再び本をめくっている。
そして……一分ほどが経過しただろうか。
「……シーラ？　あの――？」
どうやら、ティースはまだ扉の向こうに居座っているようだった。
……というより、彼女の言葉の意味を理解できなかったのかもしれない。
「……」
シーラはこめかみを押さえ、本を閉じてその片方を引き出しの中に入れると、ようやく椅子から立ち上がって扉へと向かった。
「……なに？」
扉の向こうに立っていたティースは、寝巻というわけではないが、その一歩手前ぐらいの楽な服装だった。普段着以上に、どこか頼り

ないというか、情けないというか、そんな雰囲気が漂っている。
「あ、勉強中だったか？　もしかして邪魔――」
「もう充分邪魔されたからいいわ」
「……わ、悪い」
「で？」
謝ったティースの言葉を意に介した様子もなく、シーラは細めた視線を向けた。
「世間話をしたいのなら、アルコールでも呑みながら商売女を相手にしていたらいいでしょう？　お前にとっても、私と話すよりよほど楽しいんじゃないの？」
ティースは僅かに不満を顔に浮かべる。
「そ、そんな言い方しなくてもいいじゃないか。ただ、最近は忙しくてゆっくり話をする機会もなかったし……任務もあったし、たまに色々な話をしたいなと思って……」
「……」
シーラはあからさまに迷惑そうだった。
そんな彼女に、さすがに手応えの悪さを感じ取ったのか、
「……ごめん。なんか、俺のわがままだったみたいだな……」
ガックリと肩を落として立ち去ろうとしたティース。
が、
「待ちなさい、ティース」
「……？」
シーラは視線を少しだけ泳がせて、それから大きなため息を吐く。
機嫌の悪そうな表情は相変わらずだったが、それでも彼女は言った。
「まさかそのまま戻るつもり？　……結局、私の邪魔をしに来ただけ？」
「え？　い、いや、でも――」
シーラは片手を腰に当て、そしてもう一度、大げさなため息を吐く。
「邪魔されただけで終わるのも馬鹿らしいし、お前のつまらない世

間話に付き合ってあげるわ。……ただし」
細めた視線が、冷たく、鋭くティースを射抜いた。
「本当につまらなかったら……“吊す”から」
「つ、吊す……？」
あまりに本気のこもった言葉に、ティースは少し冷や汗の浮かんだ首筋に手をやって、乾いた笑いを浮かべる。
「じょ、冗談だよな、もちろん――」
シーラはきっぱりと言い放った。
「死なないわ。今の季節なら」
「し、しかも外かっ！？」
確かに死にはしないが、朝になったら虫にたかられてひどいことになっていること請け合いだ。
うろたえるティースの鼻先を、美しい彼女の金髪がふわりと踊る。
「なにをボサっとしてるの。ホールに行くわよ」
「あ……ちょっ、ちょっと！　待ってくれよ、シーラ！」
シーラはとっとと歩いていってしまう。その後を追いかけながら、ティースは本気で情けない顔をして、言った。
「い、いつも言うだろ？　俺には大した期待してないって。……も、もちろん今回もそうなんだよな？」
「……」
「お、おーい……シーラぁ……」
ティースの呼びかけは、空しく屋敷の廊下に響き渡るだけだった。

――翌日。

「ファナ」
「はい？」
朝食の席で、シーラはファナに向かって言った。
どこか呆れたような苦笑を浮かべて。
「あいつはあのままの方が、まだいくらかマシだわ。……無理に虚

勢を張られると、薄ら寒くて仕方ないもの――」

その日、外に吊されている人間を目撃した者は、一応、いなかったらしい。

その1『慟哭の夜』

小鳥の囀りが軽快に弾んでいた。
上空は見渡す限り一面、青、青、青。
果てのない、青。
肌に感じる風はネービスの街に比べて優しく、そして穏やかだ。
「ティー……ス……」
「そう！　そうだ！」
そこには二つの人影がある。
一人は長身、痩せ形で、見るからに人の良さそうな容姿の青年――ティーサイト＝アマルナである。通称“ティース”と呼ばれるこの人物は、人に仇なす“魔”を退治する“デビルバスター”――を目指す十八歳の男だ。
彼は約一ヶ月前、大貴族ミューティレイク家が保有するデビルバスター部隊“ディバーナ・ロウ”の第二隊“ディバーナ・ナイト”に配属されることになった。そして今は、彼らのホームである“学園都市ネービス”から若干南に下った場所にある、ネービス領ブラダマンテという、やや規模の大きな村にやってきていた。
「ティー……ス」
そしてもう片方。
どことなく辿々しい言葉付きで彼の名を呼ぶのは、一人の少女。
長身のティースと並ぶと四十センチ近く小さいだろうか。かがみ込んでようやく目線が合うぐらいで、おかっぱのような髪型に花柄の白いカチューシャ。十四歳という年齢にしては少し顔立ちが幼く、ほっぺたが少し赤く見えるのは元来のものらしい。
ナナン＝トリストラムというのが彼女のフルネームだった。
「ティース……ティース……？」
「合ってる合ってる！」

ティースが嬉々として何度も頷くと、ナナンはニッコリと笑みを浮かべた。

一見しただけでは、どうして彼がこんなに喜んでいるかわからないだろうと思う。が……このナナンという少女がひどい難聴、いや、難聴どころか、完全に聴力を失っている少女だとすれば、すぐに事情は察してもらえるだろう。

ようやく言葉を覚えた幼少の頃に音を失った彼女は、同時にほんの一部を除いて言葉すらも失ってしまった。だから、新しい言葉を綺麗に発音することは、彼女にとってそれほど容易なことではないのだ。

「ありがとう……ナナン」

だからティースにしてみれば、彼女が自分の名前を覚え発音してくれたことは、それだけで大きなプレゼントをもらったようなものなのである。

「？」

「あ・り・が・と・う」

一言一言、綺麗に区切り、ティースはナナンの手を取って感謝の意を伝えた。

紙に書いて伝えることは簡単だったが、今の彼はそういう気持ちではなかった。彼女が苦労して言葉にしてくれたように、彼もやはり言葉で伝えたかったのだ。

「あり、がとう？」

ナナンは首を傾げ、そしてティースが頷いたのを見ると、嬉しそうに微笑んだ。

「ティース。……わたし、も、あり、がとう」

「ナナン……」

それだけで、ティースの胸は暖かくなった。今までの辛かったことを、全て忘れてしまえるほどに。

――ティースが彼女と知り合ったのは、ほんの五日ほど前のことだった。

今回は彼がディバーナ・ナイトに配属されて三度目の任務。ナナンは彼らが宿を借りた家の隣に住む娘だった。

出会いは、ナナンが淋しそうに外を眺めているのを、ティースが目撃したことから始まる。どこか影と憂いを帯びた少女の表情は、彼がお人好しの虫を騒がせるには充分過ぎるものだった。

その後、借宿の主人から、耳が不自由であること、それ故に同世代の友達もできないという事情を聞き、ティースはすぐに任務の合間を縫って彼女に会ってみることにしたのだ。

……実は彼がそこまで積極的だったのは、彼がただお人好しだったから、ではない。彼にも彼なりの事情――ナイトにおける過去二回の任務で、自分の無力さを痛感していたという事情があった。そしてそれ故に、他人の役に立ちたいという願望が、彼の中ではち切れんばかりに膨れ上がっていたのだ。

とにもかくにも……そうして二人は出会うことになった。

打ち解けるまでに要した日数は五日間。短いようであっても、そこにあった二人のやり取りは決して薄いものではない。ナナンはあまりに不自由な“言葉”と、人と接触することに対して嫌気を差していたし、ティースも決して他人の心を掴む術に長けているわけではなかったから。

それでも彼らが打ち解けたのは、何よりも、彼女の役に立ちたいというティースの真摯な願いがあったからこそだろう。そしてナナンもまた、彼の想いを感じ取れるほどに根は素直で、そしてその態度とは裏腹に、他人からの言葉に飢えていた。

「ティース……わ、た、し……」

十一月にも関わらず、辺りには真っ白な花が咲き乱れている。

見渡す限り一面の、白、白、白。

ナナンは歩き出し、そして後ろで手を結んでティースを振り返った。

――そこにはもう、以前までの暗い影など微塵も残っていない。

自分の巣から飛び出す方法をようやく見つけ、そして羽ばたこうと

している、他よりもほんの少しだけ成長の遅れただけの小鳥。
「わ、た、し――」
と、その一瞬。
（……？）
ティースの視界が乱れた。
――ちょうど浮かんだ嬉し涙のせい？
いや、違う。
（あれ……なんだろ……？）
微笑むナナンの背後に、何かが重なって見えた。
「ティース？」
ナナンが不思議そうな顔をする。
「……あ、ゴメン。なんでもないんだ」
「？」
「あ、そっか。……な・に・も・な・い」
「……なにも、ない？」
「そうそう」
頷くと、ナナンは首を傾げながらもひとまず納得したようだ。
が、視界の乱れはその後も断続的に彼を襲う。
（……なんだろ、これ）
目を擦っても、まるでノイズのように。不思議な映像は何度も、何度もティースの視界を襲った。
青しか存在しない上空に時折夜空のような黒が混じり、一面の白い花畑は深く赤い茂みの情景に。
――白昼夢？
いや、違う。
「ティース……？」
ナナンが心配そうに近付いてきた。
「どう、した、の……？」
「い、いや」
手を振って答えながら、ティースは何度も首を振った。

（なんだ……でも、どこかで見た……）
夜空。深い森の奥。
頭がフラつく。
「か、ぜ？　きぶん、わるい？」
ナナンの問いに、ティースは首を振って否定する。
気分は悪くなかった。
ただ、視界にノイズが混じるだけ。
夜空と深い森。
黒い――
赤い――
「っ！」
黒と赤。赤と黒。
「ティース……？」
「っ……ナナン……」
点滅する。
生ぬるい風。
目の前にいる、優しい少女。
空と、森と、黒と、赤と、赤と、黒と、森の中の――黒い空と、赤い月――
「っ！！」
「ティース……」
心配そうに伸ばされたナナンの手が、そっとティースに触れた。
「ごっ……ごめん。俺、なんか変――」
「へん、じゃない……」
「……えっ」
「へん、じゃない……ティース……」
「ナ……ナナン……キミ、俺の言葉が聞こえて――」
ナナンの手がティースの頬に触れていた。
それは、彼が知らないはずの温もり。彼が知るはずのない、彼女の体温。

何故なら――

（……！）

彼は“女性アレルギー”だったから。

一定以上の年齢の女性に触れたら失神してしまう特異体質だったから。

（……あ……あああ……）

触れられるはずが、ないのだ。

触れられるはずが、ない。

――これが、現実であるならば――

（ああ、あああ……！！）

赤と黒。

彼の視界にあったのは、ただそれだけ。

心臓の鼓動は不気味なほどにゆっくりで、胸を突き破りそうなほどに強い。

吐き気。

頭痛。

横隔膜の蠕動が、止まらない。

「ナナン……ナナン……っ！！」

青と白は消え失せて、彼に残されたのは、赤と、黒と、触れられるはずのない生々しい温もり。

「ああ、ああ、あああああ……っ！！」

暗い。暗い。暗い。

目の前には誰もいない。

いたけど、もう、いない。

ただ、ただ、生きて、生きて、生きて。

そして、ようやく生きた証を刻もうとしていた。これから、全てが始まろうとしていた。

たった一度の。ただ一度の。

彼女の、世界が、消えた、その瞬間。

――彼に残されたのは、赤と、黒と、触れられるはずのなかった、温もり。

そして――

「ああ、あああ……ぁぁぁぁぁぁぁぁ――――――ッ！！！」

――慟哭。

朝。

「シーラさん、寝不足はお肌に悪いよ」

十一月の半ばになって、ネービスの街は本格的な冬支度の時期だった。今日も空には薄い雲がかかり、太陽はここしばらくその姿を見せていない。ミューティレイクの屋敷もまた、庭、使用人たちの服装――そのあらゆるところに、冬の訪れを予感させていた。

さて、そんな屋敷の、一部の使用人や客人などの生活空間でもある“別館”の二階。

「……リディア？」

“ティーサイト＝アマルナの被保護者”という扱いで屋敷に住んでいる客人、シーラ＝スノーフォールは、学園都市と呼ばれるネービスにおいても古く伝統のあるサンタニア学園、薬草学科に通う十五歳の少女だ。透き通るような美しいブロンドのポニーテールと、それすらも霞むほどに完璧な造形の容貌を持つ美少女である。

そしてそんなシーラが自室を出てきたところに声をかけたのは、ミューティレイクの執事、リディア＝シュナイダーだ。年相応の容

姿、見ようによっては可愛らしい少年に見えなくもない……そんな彼女はまだ十二歳である。手には彼女のトレードマークと言っても良いであろう、分厚い難解そうな本が握られていた。

「誰が寝不足だと言ったの？」

振り返ったシーラは、比較的よく言葉を交わす目の前の少女に向かってそう問いかけた。

確かに。振り返った彼女の顔には別にクマが出来ているわけでもなかったし、若干疲れらしきものが見えるとはいえ、その原因が寝不足であると断言できるほどのものはない。

だが、近付いたリディアは断言した。

「でも、寝不足でしょ？　今、ティースさんの部屋の隣に入ったら、誰でも寝不足になるよ、きっと」

シーラは少し嫌な顔をして、

「わかってるなら、最初から簡潔に言えばいいでしょ。……そりゃ、あの叫び声に毎晩何度も起こされるんじゃ、寝不足にもなるわ」

若干、突き放すような言い方だった。寝不足故か、明らかに不機嫌だ。が、このリディアという少女は、そんな彼女に対して臆することもなく、

「それだけ？」

「どういう意味？」

「心配で、気になって、眠れない、とか」

「心配？」

その言葉に、シーラは眉根を上げた。

そしてきっぱりと、まるで躊躇いもなく答える。

「私が気にしてどうするの？　あの男がうなされている理由も知らないのに」

「あたしは知ってるよ。理由」

「そう。でも話さなくていいわ」

言葉の端々に垣間見える苛立ちは、その強さを増していた。

「……」

リディアは少しだけ視線を泳がせて、そしてそれをティースの部屋の扉に止める。
朝の早い時間にも関わらず、おそらくその部屋はすでに無人だ。
早起きなのではなく、寝たくない、寝ようとしても寝られない、そのために諦めて起き出してくるという状況。
そんな彼の状況を充分に理解し心配もしているリディアだったが、それでも彼女らしく、それほど深刻ではない口調で言葉を続ける。
「ティースさん、もう、かなりキてるよ。……ナイトの任務は特に激しいのが多いもん。多分、現実はあの人が思うほどに甘くない。助けたくても助けられない人だって、たくさん出てくるからね」
「そうね。あいつのことだから、落ち込んでいる理由ぐらいは想像できるわ」
素っ気ない言葉に、リディアは探るような目をした。
「支えてあげようとか、思わないんだ？」
「……私が？　支える？　あいつを？」
シーラは口元を歪めて首を横に振る。
馬鹿にしたような、嘲るような笑いだった。
「それを私に期待してるなら、見当違いもいいところよ、リディア」
少しだけリディアの視線が横に流れ、それから上目遣いになる。
「……ティースさん、潰れちゃうよ」
「だったら、聞かせてちょうだい」
逆にシーラは問いかけた。
「一体どうすればいいというの？　励ます？　あなたが台本を用意してくれるのなら、やっても構わないわ」
「……」
無言のリディアに、シーラは口元をますます意地悪そうに歪めると、
「それともなに？　あいつと“寝て”あげでもすれば少しは慰めになる？　……もっとも、あいつが相手じゃ、本当にただ寝るだけになりそうだけど」

「……シーラさん……」
リディアは再び視線を泳がせて、少しの思考を挟む。
そして――苦笑した。
「あたしもそう思うな。ティースさんって、いざとなると怖じ気づきそうだもん」
「――」
あくまで冷静なその返答に、シーラはハッとした後、なんともいえない表情をして目元を押さえた。
僅かな思考。
後悔したような表情が過ぎると、静かに、深く息を吐いた。
「……ごめんなさい。変なこと言ったわね、私。あなたみたいな子供に――」
だが、リディアは平然としたまま、
「そう？　あたしって耳年増だし、フィリスさんとかセシルさんに言うよりは適当だと思うけどね。……それに、シーラさんだってあたしと三つしか違わないじゃん」
「でも、どうかしてたわ。……ごめんなさい。疲れてるせいね、きっと」
髪飾りが寂しげに揺れ、そのままシーラは背を向ける。目の前から去っていくその背中は、失言を気にしているせいか、いつもより凛々しさに欠けていたように映った。
「……」
それを無言で見送ったリディアは小さくため息を吐いて、再び“ティーサイト＝アマルナ”と書かれたプレートを見上げる。
一呼吸。
そしてもう一度ため息を吐くと、
「……あたしがストリップしてもダメなんだろうなぁ、きっと」
冗談っぽく呟く言葉にも、いまいちキレが感じられなかった。

ディバーナ・ロウの第二隊、“ディバーナ・ナイト”の詰め所。
「くはぁ……くっ……！　ぐぐぐ……っ！！」
午後の筋力トレーニングは、ディバーナ・ナイトの日課だ。
基礎体力の向上、戦闘技術の強化。それを延々と繰り返す日々。
魔を退治し、人々を救う。そのための力を養う、あるいは維持し続けるために。
それは一歩間違えれば体を壊しかねない、過酷な訓練だ。
「そこまでだ、ティース」
「っ……ぐぐぐっ……！！」
「ティース。やめろと言ってるだろ」
冷たく響いた声の主は、このディバーナ・ナイトの隊長、レインハルト＝シュナイダー――通称、レイだった。先ほど登場したリディアの実兄でもある彼は、ティースより三つ年上の二十一歳だ。
額に厚めに巻いた灰色の布、そこから覗く無造作に伸びた髪、ティースほどではないが長身。どことなくワイルドな風貌だが、それでいて野蛮さをそれほどに感じないのは、そこに強い知性の灯った瞳がある故だろう。
「くっ……はぁっ！　はぁっ！！」
まるで潰れるように突っ伏し、背中に乗せていた重りを下ろして、ティースは荒い息を吐いていた。だが、その視線は息つく間もなく、怪訝そうにレイを見上げる。
「レイさん……はぁっ……でも、まだ以前より全然少な――」
「お前の体調が以前と同じならな。けど、今日のお前ならそんなもんだ」
「はぁっ……はぁっ……」
肩で息をし、上半身をゆっくり起こしながら、去っていくレイを横目で見つめるティース。……そこには少しだけ、納得できていない色がある。
「ま、医者としての視点で見ても、隊長の意見に賛成だね、僕は」

「……マイルズさん」
すぐそばで様子を見守っていたのは、マイルズ＝カンバースだった。ミューティレイク家の主治医でもあるこの男は、ディバーナ・ナイトの一員というもう一つの側面を持っている。もちろん担当は戦闘ではなく医事の方。
レイと同じぐらいの長身で、クセなのか、それほどズレていない黒縁眼鏡を中指で持ち上げながら、
「ま、気持ちによって肉体の限界をどこまで超えられるか……というのは、僕にとっても非常に興味深いテーマだ。研究者としてなら、むしろ死ぬまで続けて欲しいと思うけどね」
「……遠慮しておきます」
本気とも冗談ともつかないマイルズの言葉に、ティースはすぐに休憩を取ることにした。
そして、そんな二人のやり取りを、少し離れた場所から見ている少年がいる。
「隊長。ティースさん、相当参ってるみたいっすね」
その横を通り過ぎようとしていたレイは、そんな言葉に振り返った。
そこにいたのは、若干幼さを残した大人しそうな少年。だが、その外見に反し、その目は強い意志を秘め、見た目通りの性格ではないことがすぐに窺える……そんな人物だった。
レイは意地悪そうに鼻で笑って、
「おっと、パース。お前には、まだ他人を気にする余裕があるらしいな？」
「え、あ……」
少年の顔がサァッと青くなる。
「よし。お前には今のメニューをもうワンセット追加してやろう」
「うわっ！　マジっすかっ！？」
「ああ、大マジだ。頑張れよ」
「ひぃぃ」

この“パース”の愛称で呼ばれる少年は、本名パーシヴァル＝ラッセル。このディバーナ・ナイトの戦闘補助を担当する十六歳の少年だ。そして、現在のミューティレイクにおいては、ティース以外で唯一、デビルバスターを志望する人物である。

そして、ナイトのメンバーはあと一人。

「……」

他のメンバーのやり取りには目もくれず、左目だけを閉じ、ティースやパーシヴァルとは明らかに違ったメニューを黙々とこなす男。短髪にヒゲを生やしたその人物は、見た目からして他の面々より一回り年上に見える。

その彼の名はギレット＝フレイザー。ディバーナ・ロウでは最年長の三十三歳。身長はレイやマイルズ、ティースと比べれば一回り小さく、パーシヴァルより少し大きいぐらいで男性としては平均だが、常に身に纏う戦士としての威圧感が、実際よりもその体を大きく見せている。

いかにも百戦錬磨と思える容貌。そして実際、彼はその外見に恥じないだけの実力の持ち主だ。常に左目が閉じているのは、そこにあるべきはずの眼球が存在していないからだった。

「よーし。ひとまず全員終了だ」

レイの号令によって、ナイトの面々が集まった。レイの隣にはマイルズ、それと向かい合うようにギレット、パーシヴァル、そしてティース。

（いよいよ、今日の実戦稽古だ……）

ディバーナ・ナイトにおいて、筋トレが終わった後のメニューはその日によって大きく異なる。大抵は実戦を想定した稽古だが、一対一だったり、対複数だったり。様々な特殊な状況も想定され、狭い場所、守るべき存在等々、とにかく一週間の間で同じメニューの日は一度もない。

もちろん勝ち負けは度外視されるが、基本的に過酷であることに間違いはなかった。

「今日のメニューは――」
「……」
ティースは軽く拳を握りしめて、レイの言葉を待った。汗ばんだ体が徐々にヒンヤリとしていたが、体内の熱はまだ冷めていない。
たとえどんなメニューであろうとも、こなすつもりだった。……いや、むしろ今の彼にとっては、それが過酷であればあるほどに喜ばしい。
それによって、自分が少しずつでも強くなっていると信じられるからだ。
（強くなるためなら、どんなメニューだって――）
「ギレット、パース」
レイの声は最初、他の二人に向いた。
ティースは即座に今日の趣旨を理解する。
（今日は二対一……？）
それは確かに、彼にとっては過酷すぎる条件だった。なにしろギレットもパーシヴァルも、最強と言われるディバーナ・ナイトのメンバーだけあって、ティースが今まで所属したカノンやファントムのメンバーよりも基本的には上……パーシヴァルはあのサイラスほどではないにしろ、デビルバスター候補生として充分な実力を持っていたし、強面でいかにも経験豊富なギレットなどは、その二人を確実に上回っている。
だが、臆する気持ちはなかった。
（……望むところだ）
たとえそれでボロボロに惨敗することがあっても、それが自分の糧になるのなら。それで強くなれるのなら本望だった。
（よし――）
だが、
「今日はお前らで一対一だ」
「……えっ？」
続いた言葉に、ティースは目を丸くした。

どうやら早とちりだったようだ。
（ってことは、今日はレイさんと一対一？）
しかし、それもどうやら違うようで、
「マイルズ。お前はここで二人の面倒でも見といてくれ」
「ああ、いいよ。隊長はどうするんだい？」
「俺か？　俺は――」
レイの視線がティースを向くと、
「こいつと、ちょっと勉強会だ」
どこか楽しそうな笑みを浮かべた彼に、マイルズは納得顔でやはり笑い返す。
「ああ、なるほど、それは面白そうですねぇ。結果報告、楽しみにしてますよ」
ティースは呆気にとられて、
「べ……勉強会？」
外では太陽が頂点から徐々に西に傾きかけていた。

その一時間後。
レイとティースの二人はミューティレイクの屋敷から北へ。学園群を抜け、さらに北へ。辺りに立ち並ぶ、いわゆる高級住宅街には目もくれずにさらに北。
その先にあるもの。
それを知らない者はこのネービスにいない。
ネービスの最北端、そこにあるのはただ一つだ。
「はぁ」
思わずため息をついたティースの視線の先にそびえ立つは、あのミューティレイクよりも大きな屋敷。大きく、高く、頑丈な門、その奥に浮かぶあまりにも巨大なそのシルエットは、“屋敷”と呼ぶよりは“城”と表現した方が正しいかもしれない。

それこそがこの学園都市ネービスを含めた“ネービス領”を統治する、ネービス公の屋敷なのである。
門の前には門番が立ち、おそらくその内部も厳重な警備で一杯だろう。ティースのような一般人の枠からそれほど逸脱していない人間にとっては、一生縁がないはずの場所だった。
一瞬の放心状態から解放されて、そしてティースは疑問を隣のレイに向ける。
「レイさん、一体――」
「どこ見てる。こっちだ」
「え？」
レイが向かったのは、その屋敷のすぐ隣にある別の建物だった。外観からすると三階建てぐらいだろうか。ネービス公の“城”と並んでも違和感ないほどの大きさだが、その割に外観や内装はそれほど凝っておらず、どことなく無骨な雰囲気を漂わせている。
（こっちもかなり大きいけど、なんだ……？）
無造作にその入り口をくぐっていくレイについていくと、その受付らしきところには一人の女性がいた。
「……あら？」
「よっ、アレッタ。久々だな」
手を挙げて軽い挨拶をするレイ。
が、呼びかけられたアレッタという女性――ティースよりは年上、おそらくはレイよりも若干上だろう――は、彼の姿を認識するなり、ショートボブの髪を微かに揺らせ、すぐにその眼鏡の奥から不満げな視線をレイに向けた。
「よっ、久々……じゃないでしょ、レイ。覚えてないとは言わせないわよ、前回のこと」
「前回？」
とぼけた表情で近付いたレイに、アレッタは椅子から腰を僅かに浮かせ、カウンターに少しだけ身を乗り出し、真っ直ぐに人差し指を突きつける。

「約束、すっぽかしたじゃないの。なによ、あれだけ熱心に人のこと口説いたくせに」
「あ、あー……いや、待て待て。それには海より深い事情があってな」
「へぇ」
まるで信じてない顔で指を下ろすと、ふふんと鼻を鳴らして、
「どんな事情？　他の女との約束？」
レイは真顔で答える。
「いや。他の“男”との約束だ」
「はぁ？」
眉間に皺を寄せたアレッタに、レイは少し戯けた様子で答えた。
「体重が四百キロぐらいあるナイスガイでな。人の命に関わるってんで、急な呼び出しをくっちまったのさ」
「……」
アレッタは両手を広げてため息を吐くと、
「ま、いいわ。私も、あなたが本気だったなんてこれっぽっちも思っちゃいないから」
「ひどいな、そりゃ。まるで俺がろくでなしみたいじゃないか」
「そう言ったつもりだけど。……あら？」
そこで初めて、少し後ろに立つティースの存在に気付いたらしい。怪訝そうに彼の顔を見上げ、それから品定めするように頭のてっぺんからつま先まで視線が移動する。
そして首をかしげ、視線は再びレイの元へ。
問いかけられる前に、レイが答えた。
「ティーサイト＝アマルナ。ウチの新人さ――っても、もう五ヶ月ぐらい経つけどな」
「へぇ、新人さん」
もう一度、アレッタの品定めの視線が向けられて、ティースは慌てて頭を下げた。
「あ、ティーサイト＝アマルナです。よろしくお願いします」

状況を把握していない彼としては、何をよろしくすればいいのかもわかっちゃいなかったが、ひとまず型どおりの挨拶である。
「……へぇ」
アレッタは呟くと、もう一度彼の全身を見回して、そして最後にその顔に視線を止めた。
「身長の割に可愛い顔してるわね。……アクアが好きそうなタイプじゃない」
「ま、あいつは基本的に守備範囲広いからな」
「ティーサイトくん、だったわね？」
じっと見つめられているせいか、ティースは緊張気味に答える。
「あ、はい。でも、あの、ほとんどの人からはティースって呼ばれてますけど」
「ティースくん、ね」
そう言って、アレッタはすぐに意味深な笑みを浮かべると、
「アクアのベッドの寝心地はどうだった？」
「え？」
一瞬、ティースの周りの時間が止まった。その間に、クレイドウルでの光景が彼の頭を過ぎったが、もちろん彼女がそんなことを知っているはずはない。
――数秒の思考の後、
「な、な、何ですか、それはっ！」
ようやく意味を理解すると、ティースは顔を真っ赤にして叫んだ。
「そ、そんなこと……それに、アクアさんはそんな軽はずみな人じゃない！」
「……へぇ」
ムキになって反論したティースに、アレッタは少し感心したような呟きを発し、そしてレイに向かって言った。
「アクアの真偽はともかく、この子、あなたよりはよっぽどいい男っぽいじゃない？」
レイは苦笑して、

「俺はなんて答えりゃいいんだ？　……ティース。そうムキになるな。こいつはこういう女なんだ」
「誤解を招く言い方をしないでよね。私はただ、自分の心に正直なだけよ」
眼鏡の奥の目を可笑しそうに細め、それからアレッタは悪戯っぽい笑みを残しながら、唐突に口調を変える。
「それで？　今日はどのようなご用件ですか？　どなたかに御用でも？」
「いや。特定の誰かに用ってわけじゃない」
レイはチラッとだけティースを振り返って、そして言った。
「今日は少し他流試合を申し込みたくてな。……候補生の中で、受けてくれそうなヤツを探してくれないか？」
「後ろの子の相手？　どんなのでもいいわけ？」
「できれば、極端な落ちこぼれでもなく、かといってとんでもなく優秀でもないヤツがちょうどいい」
「……微妙な注文ねえ。ま、いいわ。当たってあげる」
アレッタは仕方なさそうに立ち上がると、
「では、結果が出るまでそちらの椅子にでもお掛けになってお待ち下さい」
そう言って、奥の方へと消えていった。
「……レイさん」
言われた通り入り口近くの椅子に腰を下ろし、ティースは疑問を投げかけた。
「ここって、もしかして――」
「ああ。見りゃわかるだろ？」
レイは答える。
「ネービス公直属のデビルバスター部隊“ネスティアス”の本部さ」
「……」
ティースの心臓がドクンと高鳴った。
（ネスティアスの候補生と……他流試合……）

それは彼にとって願ってもないことだった。
エリート集団、ネスティアス。候補生とはいえ、その実力はおそらくハイレベルだ。自分の力がどこまで通用するか、自分が果たしてどれだけ成長しているのか、それを計るには申し分ない。
（よし……！）
グッと拳を握りしめ、そしてその表情は緊張に徐々に強ばっていく。
（やってやる……！）
「……」
そんなティースを、レイは横目で見つめていた。
――どこか、冷めた視線で。

「あ、戻ってきましたね」
上空の太陽がオレンジ色に染まり始めた頃、稽古を終えて汗を拭っていたパーシヴァルが、建物に向かってくる二つの人影を見つけていた。
隣では、少し意地の悪い笑みを浮かべたマイルズが口を開く。
「結果がどうだったか、賭けるかい、パース」
パーシヴァルは笑って、
「賭ける意味、あるんですかね？」
「オッズは十対一ぐらいでどうだい？」
「俺は一の方に賭けますけど、マイルズさんはそれでもいいっすか？」
「……残念。不成立だね」
マイルズはそう言って、もう一度、戻ってくる二人に視線を向ける。
答えは聞かずとも、戻ってくるティースの表情を見れば明らかだった。おそらく、彼自身が思っていた以上のひどい内容。

悔しさ。無力感。
そんなものが、戻ってくる彼の顔に満ち溢れていたのだから。

「――くそっ！」

ダン！　と、詰め所の壁が鈍い音を立てる。
誰もいなくなったはずの、夕日に染まるディバーナ・ナイトの訓練場。
そこで拳を壁に叩きつけた人物は言うまでもない。ティースだ。
そして、そこに浮かんでいたのは彼としては非常に珍しい、とてつもなく苛ついた表情。
ネスティアスでの“他流試合”の結果は、マイルズやパーシヴァルが予想した通りだった。思い出すのも忌々しいほどの、惨敗。興味半分で見物していた連中の、冷笑にも似た表情が頭から離れなかった。
が、彼が苛立っているのは、そんな周りの目とは関係のないこと。
「全然……全然成長してないじゃないか……っ！」
彼を苛んでいたのは焦燥感と、途方もない無力感。
強くなりたい気持ちは今までになく溢れているのに。強くなるための努力も、少しも惜しんでいないのに。
なのに――強くなれない。強くなっていない。少なくとも、彼自身が期待していたほどの成果は上がっていない。
ギリッと歯ぎしりの音が鳴る。頭を壁に押しつけ、そしてもう一度拳で壁を叩いた。
「なにが、悪いってんだよっ！」
厳しいトレーニングにも耐え、過酷な稽古も乗り越えた。だから、自分は着実に強くなっているものだと信じていた。パーシヴァルやギレットを相手にするときも、もちろん負けはするものの、少しずつでも彼らに近づいていると、そう信じていた。
だが――それも今日までのこと。
ティースは今日の出来事で悟っていたのだ。

自分が、このディバーナ・ナイトにやって来てから、ほぼ全くと言っていいほどに成長していないことを。

……今日の相手は、パーシヴァルよりも若干劣る程度の相手だった。来年のデビルバスター試験は元より受けるつもりはなく、再来年に照準を合わせているような、そんな人物だった。

それなのに、結果は――

「俺には……才能がないのか……っ！」

「おい」

「！？」

誰もいないはず――そう思っていたティースは驚いて振り返った。

「ギレット……さん」

「冗談じゃねぇぞ。おめぇみてぇなヤツが才能がないとか軽々しく言うもんじゃねぇ」

そこにいたのは、ナイトのメンバーの一人、ギレットだった。

――寡黙で、無骨。彼はそんな外見のイメージそのままの人物で、ティースがこのナイトに来てから一ヶ月と少し経つが、任務上の必要事項以外でまともに言葉を交わしたのは、二、三度しかない。

そんな彼が自ら声をかけてくるのは、非常に稀なことであった。

「見て……たんですか？」

ギレットはそれには答えず、片目だけでティースを見上げた。身長差は十五センチ以上ある。もちろんティースの背が高すぎる故だが、それでも下から見上げるその視線に、ティースは微かな息苦しさを感じていた。

「そういう言葉は、おめぇより強くなることに一途で、おめぇより強さを渇望していて、それでもどうにもならねぇような連中に失礼だ」

「ど、どういうことです、ギレットさん……」

その言葉に、ティースは反発せずにいられなかった。

「……俺が真剣じゃないって言うんですか！？　俺は……俺は、強くなりたいって気持ちなら誰よりも大きい！　少なくとも今は――

！！」

「ふん」

気色ばんだティースに、ギレットは鼻だけで笑って答える。

「中途半端な野郎がいっちょまえに吠えるんじゃねぇよ」

「ちゅ、中途半端……？」

「おめぇが望むのは何のための強さだ？」

下から向けられたのは、まるで見透かすような視線だった。

「サイラス＝レヴァインを助けるための力か？　それとも、ナナン＝トリストラムを守るための力か？」

「――！？」

二つの名は、今のティースにとってはとてつもない“痛み”だ。

その二つの死に、成長を誓ったはずだった。だが、今の彼はその誓いとは裏腹に、思うように成長できていない。

だから、胸が軋んだ。

情けなさに涙が溢れそうになった。

「その……両方だ」

視線を落とし、拳を握りしめ、唇を噛んで、震える声でティースは答える。

「どちらも助けたかった。二人とも生きていて欲しかった！　……それだけじゃない。俺が強ければ、俺に力があれば、もっともっと多くの人を助けられた……助けられたはずなんだ……ッ！！」

「……ふん」

もう一度、ギレットは仏頂面のまま、鼻で笑った。

「だから、おめぇは強くなれねぇんだ」

「……な！」

顔を上げたティースは、猛烈に反論しようとして、それを喉の部分で止めた。

いや……止めざるを得なかった。

「おめぇが求めているのは、誰かを助けたいとか、誰かに復讐したいとか、そんなもんじゃねぇ」

「っ……」
息が詰まる。
そこにあったのは――途方もない威圧感。
「ただ、おめぇ自身の無力を否定してぇだけじゃねぇのか？」
「！」
ギレットの片目から放たれる視線は、圧倒的だった。
――なにが？
そう問われても、おそらくティースには答えることができない。
ただ、圧倒的。
全てにおいて自分を上回っている。故に、口答えできない。直感的――いや、“本能的に”ようやく感じたのは、それだけだった。
ギロリと、視線がティースを睨め付ける。
「おめぇはさっき言ったな。……ナナンを守りた“かった”。サイラスを助けた“かった”。だが、それ以上のことは一言も言ってねぇ。今、近くに生きている誰かを守りてぇとも、そのために強くなりてぇとも」
ティースは狼狽した。
「そ、それは、ただ……」
「たまたまだってぇのか？　……違うな。それこそがおめぇの本心だ。おめぇが口にしてる決意ってのは所詮、小腹減ったから何か食いてぇとか、イイ女がいたから仲良くなりてぇとか、その程度のクソみたいに薄っぺらいもんでしかねぇ」
「そんな……そんなこと――！」
だが、そのティースの反論はあまりに弱々しいものだ。
もちろん、目の前に立つギレットの雰囲気に飲まれたこともある。が、それだけでないのも確かだった。
ギレットは続けた。
「もし後悔を糧にして生きてぇんなら、そりゃそれで構わねぇ。だが、それならおめぇ自身を責める前に、その元凶である魔を根絶やしにするほどの決意を見せてみろ。全ての魔を、殺して、殺して、

殺し尽くしても足りねぇぐらいに憎しみを極めてみせろ」
「全ての魔を……殺し尽くしても……足りない――？」
ギレットは背を向けた。そしてその手は、鍛錬上の隅に残されていた朱色のタオルを拾っていく。
どうやら彼は、忘れ物を取りに戻ってきただけらしかった。
「憎しみを、極める――」
その偶然は彼の未来にとって幸運だったのか、あるいは不運だったのか。
ただ……“停滞”を抜け出すきっかけは与えられた。
それだけは間違いない。

「……ギレットさん」
「マイルズ……おめぇか。なんだ？」
詰め所の入り口に立っていたマイルズは、ズレてもいない黒縁眼鏡を中指で押し上げて、そして微笑を浮かべた。
「医者っぽい見解で言わせていただくと、ですね。ティースさんの成長を妨げていたのは、睡眠不足による体力の低下と、精神の不安定さからくる各機能の――」
「知らねぇよ、んなこと」
「……そりゃそうです。結局、治療法はただ一つ、克服すること、ですから」
マイルズは笑って、通り過ぎるギレットを見送りながら、
「隊長の仕事、取っちゃいましたね。……ま、隊長が言うより、あなたの言葉の方が重みも真実味もありそうですしね」
「……」
無言のまま、無愛想な男の後ろ姿は小さくなっていった。
「……憎しみを極めて強くなる、か。体現してそうな人、多いからねぇ」
腕を組んで壁に背中を預けると、マイルズはそのまま夕暮れの空を見上げる。

少しだけ強い風が吹き抜け、白衣の裾を揺らした。
「さて、ティースくんはどう転ぶかな。このまま終わるとは思いたくない。けど、転ぶにしても、果たしてどっちに転ぶことやら――」

その2『苦悩の日々』

ティースがネスティアスの候補生と他流試合をおこなった翌日の朝。

朝日が射し込み始めたばかりの屋敷の廊下に、ほんの少し甲高いソプラノの鼻歌が響き渡っていた。

「〜♪」

屋敷の執事、リディアの一日は、朝一番で書庫に向かうことから始まる。どこへ行くにしても本を持っていなければ落ち着かないという彼女にとって、朝一番に本を探しに行くことは、一日の糧となる朝食を採ることよりもよほど重要な事項なのであった。

そしてそれは朝一番。本来ならばまだ誰もいないはずの時間。

だが、

（ありゃ？　あれは――）

その日は、書庫の入り口付近のテーブルに先客がいた。その後ろ姿を目に留めたリディアは、目をまん丸に見開いて、それからゆっくりと近付いていく。

「今日も、寝不足？」

「……」

振り返ったポニーテールの人物については、もはや説明はいらないだろう。

「なんてことはないわ。ただ、いつもより早く目が覚めただけよ」

その顔を見て、リディアは即座に“違和感”に気付いていた。

「ふぅん」

曖昧な言葉を返しながら、その向かいの席に腰を下ろし、言った。

「目元の辺りとか、化粧濃すぎるんじゃない？　お化粧なんてしなくても、シーラさんより綺麗な人なんてそうそういないよ」

シーラはチラッと彼女を見て、すぐに視線を本に戻しながら、

「……ホント、嫌な子ね」

「あはは、誉められちゃった」
頭の後ろに両手を回して、リディアは無邪気に笑った。
そんな仕草だけは年相応である。
「そっか。ティースさん、やっぱり昨日もうなされたんだ？」
「そうね。……そのようね。迷惑な話だわ」
「またまた。そんなこと言っちゃって」
「なに？」
視線だけ上げたのを見て、リディアは続けた。
「あたし、少し考えて気付いたよ。……シーラさんはやっぱり、ティースさんのことを心配してるんだよね。心配してて、なのに何もしてあげられないから苛々してるんだ」
シーラは怪訝そうに、
「……何故、そう思ったの？」
「だって苛々してる割に、最近はちっともティースさんに直接当たろうとしないでしょ？　いつもはもっとどうでもいいことで冷たく当たるのにさ。……それって、やっぱり気遣ってるからなんでしょ？」
その言葉に苦笑したシーラは、肯定も否定もせずに、
「私が死者に鞭打つ鬼婆だとでも言いたいの？」
「あはは、死者はひどいや」
そう答えながらも、リディアは心の中で首をひねった。
（……微妙な反応だなぁ）
もちろんリディアとて他人の心が読めるわけではない。だから、この目の前の冷たく美しい年上の少女のように、表情と内面の感情が一致しにくい人間の本心を探ることはなかなかに難しかった。
結局、その真偽を探るのは諦め、リディアは話題を変える。
「そういやシーラさんって、ティースさんとは結構長い付き合いなんだよね？　どれぐらい長いんだっけ？」
シーラは素直に答えた。
「そうね。……常識的に考え得る、ほぼ最大限の長さかしら」

「え。マジ？　それって、オムツを取り替えてもらってたとか？」
「……それはないわ」
「うわ、冗談だってば。怒らないでよ」
「怒ってないわ」
そう言いつつ、シーラの表情は寝不足であることとは別に、若干不愉快そうだ。幼い頃の話は、あまり触れられたくない話題なのかもしれない。
「でも、つい最近ぐらいまで一緒にお風呂に入ってたりし――うわわ、じょ、冗談！　冗談だって！！」
「……」
すっと細めた目が、リディアを射抜いていた。
――確実に、本気だ。
「そんなに過敏にならなくてもいいのに……あたしだって小さい頃は兄さんにお風呂に入れてもらってたよ」
「……それとは話が違うでしょう」
リディアはわざとらしく納得できない顔をすると、言った。
「昨日は寝るとか寝ないとかの話をしてたくせに、今日はお風呂ぐらいで怒るの？　ホント、わかんない人だなぁ」
「……」
シーラは気まずそうに黙ると、少し苦い顔をする。どちらも口は達者な方だが、どうやらこの場はほんの僅かにリディアが上回ったようだった。
「でも、どうにかならないのかなぁ、ティースさん。……ねぇ、長い付き合いとかで、パッと立ち直らせるような方法を思いついたりしないの？」
少し機嫌を損ねたせいか、シーラは視線を横に向けて素っ気なく答える。
「あるなら、とっくにやってるわ」
「そっか。……そうだよね。寝不足は、お肌の天敵だもんね」
リディアはようやく納得した顔で、椅子から立ち上がった。

「もし辛いみたいだったら、しばらく部屋を変えてもらったら？あたし、ファナさんに言っておいてあげるよ」
「……そうね」
最後はやはり興味なさそうに答えて、シーラは再び手元の本を開いた。
それを視界の隅に捕らえながら、リディアは付け足す。
「ナイトは、また任務だよ。多分、明日の朝には発つと思う」
「……」
本に集中して聞こえていないのか、あるいは特に言うこともなかったのか、返事はなかった。
それを確認して、リディアは彼女に背を向けて薄暗い書庫の奥へと歩いていく。
（……シーラさんでも役者不足ってことだと、ホント、出口が見えないなぁ）
そして首を横に振ると、やはりため息をつくのだった。

「今日の授業は聖力と魔力について、少し深く説明することにします」
午前中、ティースはいつものように、屋敷のもう一人の執事、インングヴェイ＝イグレシウス――通称“アオイ”から、デビルバスターに必要な知識の授業を受けていた。
「まず聖力についてですが――」
つい先日、二十二歳の誕生日を迎えたばかりのアオイは、線の細いお坊ちゃん風の外見で、縁なし眼鏡がより一層穏やかなイメージを促進させている優男である。そして実際に彼は、少なくとも普段は穏やかで、そしてどこか微妙にネジの抜けているような、そんな人物だった。
だが、その穏やかな表情が、少し怪訝そうな色に染まる。

「――ティースさん？　大丈夫ですか？」
「え……あ、ああ」
顔を上げたティースの目の下には、うっすらとクマのようなものができていた。
「……」
アオイもまた、その原因については知っていたが、その場はひとまず何も言わずに、
「では、説明を続けます。きちんと理解してくださいね」
言いながら、テーブルの上に用意したものを示す。
「……これは？」
そこにあったのは長さ一メートルほどの筒のようなもの。真ん中の八十センチほどは透明なガラスでできており、両端の十センチは金属のようなもので覆われている。中には僅かに黄色がかった液体が半分ぐらい入っていた。
「この中に入っている液体は、聖力に反応する特殊な液体です。……見ててください」
それをテーブルに用意された台座の上に置くと、筒の中の液体はユラユラ揺れながら水平になる。
が、アオイがその筒の片側……金属の部分を握ると、明らかな変化が起きた。
「あ……」
中の薄黄色の水面は、アオイが触れた方の端に引き寄せられるように微かに傾いたのである。
アオイは言った。
「聖力というものは基本的に、人が生まれつき備えているものです。これは修行などで増やすことはできません。……ではティースさん。リラックスしてそちらに触れてみてください」
「ああ……」
逆側の金属部分に触れると、やはり水面は動いた。水平……いや、明らかにティース側へと大きく引き寄せられている。

アオイは頷いて、
「これはつまり、生まれ持った聖力が、私よりティースさんの方が優れていることを示しています。しかも……この傾きを見る限り、ティースさんはなかなか類い希な強い聖力の持ち主ですね」
「え。そうなのか？」
「ええ。レイさんやアクアさんでは、ここまで引っ張られませんから。今、この屋敷で一番優れた聖力の持ち主は第四隊のアルファさんですが、ティースさんはそれに匹敵する聖力を持ってるようです」
「？　俺の聖力が、レイさんやアクアさんより強いってことか？」
「ええ。そうですよ。……ただし」
アオイは小さく微笑んで、もう一度筒を見るように促した。
「こういう方法が、あります」
そう口にした瞬間、中の液体がいきなりアオイ側へと勢い良く動いた。
「！」
そのまま一秒、二秒、三秒……五秒ほど経つと、再び元へ戻る。
「今のは……？」
「これが、ティースさんがファントムで習ったであろう“集中”というものです」
「集中？」
確かに、ティースは以前所属していたディバーナ・ファントムで、その隊長のアクアからしつこく“集中”という言葉を聞かされていた。が、それが具体的にどういうことなのかは、未だにわからないままである。
アオイは言った。
「聖力というのは基本的に体中と身につけているものを巡ります。武器を持てばもちろん武器にも巡ります。……その全身に巡る聖力を、一時的に一部分に集中すること。この場合、私は手の平へと全身の聖力を集中させたのです」
「……あ、なるほど。それで、俺とアオイさんの聖力が逆転したの

か」

「もちろん、産まれ持った聖力の強さは大きな武器です。しかし、それだけでは強い魔力の壁を打ち破るのは至難の業。……それはティースさんにも、覚えがあるでしょう？」

「……ああ」

ティースの頭に蘇る、一つの名前。

――ザヴィア＝フェレイラ＝レスター。

ティースの中に決して忘れられない“しこり”を植え付けていった風の将魔の名だ。

「あなたほどの聖力を持ち、そしてあなたの持つ驚異的な能力の破魔具“細波”を持ってしても、集中なしには太刀打ちできない敵がいるのです」

集中。

ティースはあの――ザヴィアの壁を一度だけ破ったあのときは、全くそんなことを意識していなかった。が、今になって思い返してみると、確かに全身の力が一点――刃先へと集中していたような、そんな感覚が思い出される。

「集中は人によっては聖力の効果を数倍にも高めます。一般的には、最大で十倍程度までは可能だと言われていますね」

「十倍……？」

いまいち感覚はわからなかった。

「聖力の基準としては、ですね。……ごく標準的な人間が、ごく標準的な破魔具を手にした場合の力――聖力と破魔具の増幅値を掛け合わせた値を“破魔値”と言いますが、その破魔値は大体、人魔で言うとごく標準的な下位魔、獣魔で言うと五十族辺りの“魔力の壁”とほぼ同程度と思っていいでしょう。人魔はクラスが一つ上がる事に二倍強、獣魔は二倍弱といったところです。……実際には聖力の属性や性別などによる相性もあって複雑なのですが、だいたいそんな感じです」

その言葉に、ティースは少し意外に思って、

「ってことは、全く普通の人間でも、破魔具を持ってさえいれば下位魔ぐらいとは戦えるってことか？」
「そう、考えますか？」
アオイは苦笑して、
「魔力の壁を破れないということは、イコール“ほぼ絶対に”勝てないということです。もちろん魔力の壁はあくまで“体内のエネルギーを使って創り出す”ものですから、不意を突いたり、あるいは大勢で魔力をどんどん消耗させてしまえば不可能ではありません……が、“魔力の壁”と同程度の破魔値ということは、基本的に下位魔の約半数について、普通の人間はどんなに優れた技術を持っていたとしても、ほぼ確実に勝てないわけです」
「あ、そっか」
納得顔のティースに、アオイは続ける。
「魔との戦いにおける大前提は、まず“確実に”魔力の壁を破れるということです。……ちなみにデビルバスターになるような人間は、大体普通の人間の二倍の聖力を持っていると言われています」
「二倍……」
つまり、そのぐらいの聖力を持っていなければ、デビルバスターになるのは難しいということであろう。
アオイは少しだけ目を細め……そして躊躇った後に口を開いた。
「サイラスさんの聖力について、ティースさんは詳しくご存じでしたか？」
「サイラス？　……いいや」
アオイは頷いて、神妙な顔で言葉を続ける。
「彼は技術的にはデビルバスターになっていても少しもおかしくない人物でした。それは、ティースさんもよくご存じのことかと思います」
「ああ」
「ただ不幸なことに、彼の生まれ持った聖力というのは、常人並……いえ、常人のそれよりもさらに低い値でした。弛まぬ努力によっ

て集中を会得し、なんとか上位魔にも太刀打ちできるだけの破魔値を叩き出してはいましたが、彼が最後に戦った相手は、おそらく上位魔としても高い魔力を持っていたのでしょう」

「……」

ティースの耳に蘇ったのは――甲高い音。

サイラスの剣が無惨に砕け散ったときの、あの絶望的な音だった。

……それは、技術でも気持ちでもどうにもできない、単純な力の壁。

「聖力とは、それほど重要なものです。その点でいうと……ティースさん。あなたは恵まれすぎていると言ってもいい。あなたの聖力は、私やレイさんたちよりもさらに上……常人との比較だと三倍近いはず。“細波”を手にしたあなたの破魔値は、上位族ほどの魔でも集中無しに破ることが可能な値でしょう」

「……恵まれすぎている」

昨日のギレットの言葉がティースの頭を過ぎった。

（お前みたいなヤツが、才能ないとか軽々しく言うもんじゃない……か）

聖力のことといい、“細波”のことといい、確かに彼は恵まれているのだ。

だが――

「ただ、もちろんそれはあくまで大前提。……それに加え、魔の動きを捕らえ、うち倒すだけの戦闘技術が必要になります」

「……」

アオイの言葉が、ティースの胸に暗い影を落とす。

戦闘技術。それが、思うように伸びない。おそらくこのアオイの言葉は、それを踏まえてのものだったろう。

（中途半端……それが原因なのか……？）

昨日、ギレットに言われた言葉が蘇る。一晩考えて、彼の言うことは確かにその通りかもしれないと思った。

だが……それならどうすればいいのだろう。

思考の行き着いた先は結局そこだった。
サイラスのことも、ナナンのことも、ティースにとって到底忘れられる出来事ではない。毎日の悪夢も、寝不足であることも、それは当然自分が背負うべきものだと思っていたし、何事もなかったように忘れて生きていくことは、少なくとも彼には不可能だった。
（なら――）
全ての魔を憎むこと。
それは簡単なことなのかもしれない。
サイラス、ザヴィア、ナナン――いくつもの出来事が重なった。
それは一つ一つが、魔を憎むのに充分過ぎる出来事だった。
だが……ティースは未だ、ギレットの言うような境地に達することはできていない。
憎いのは確か。
なのにあと一歩、どうしても届かない。
（わからない……どうすればいいのか……）
そして、苦悩は続く――

「目的地はネービス領の南方端にある小さな街、フォックスレア。複数の獣魔と、おそらく高位と思われる人魔が一体、確認されている模様」
淡々と、事務的な口調がミューティレイク別館の執務室に流れる。
だがその声は、大人びた口調とは裏腹に幼い少女のものだった。
「犠牲者はすでに三十名近くにも及び、ディバーナ・ロウとして、これを見過ごすわけには参りません」
屋敷の主人でありディバーナ・ロウの総帥でもあるファナ＝ミューティレイクは、若干十七歳にして、ミューティレイクと、そしてディバーナ・ロウの全てを統率するネービスきってのスーパーお嬢様である。

「第二隊隊長、レインハルト＝シュナイダー」
が、実はその声は彼女――ファナのものではない。
ファナの隣に直立し、指令書らしきものを読み上げているのは、どこかアンバランスな男物の正装に身を包んだ屋敷の執事、リディア＝シュナイダーの方である。
そして、そんなリディアと、何やら楽しそうに微笑むファナの視線の先に立っているのは、どこか飄々とした雰囲気の男。
頭には灰色の布を巻き、そこから黄土色に近い金髪が覗いている。
その口元には、どこか皮肉めいた苦笑。
「あなたに、彼ら獣魔と、彼らを統率する者の排除を命じます」
「はいはい。了解しました、と」
しかしまあ、彼がそんな笑みを浮かべていたのも当然のこと。
レイは両手を軽く広げて、
「んで？　我が愛しの妹君は、どうして俺のときに限ってそのような格式張った言葉を使うのかな？」
「そりゃ、公私混同しないために決まってるじゃん。色々考えてるんだよ、これでも」
そう言って、指令書をポンと無造作に投げ渡すリディア。
言ったそばから公私混同しまくりだった。
レイは口元に笑みを浮かべたまま、
「いい心がけだな。……けど、それなら仕事中に小遣いをせびりに来るのも今後一切やめてもらえないか？」
だが、リディアはヒラヒラと手を振って答える。
「それとこれとは話が別だってば」
「どこがだよ。……おい、ファナ。いいのか、こんなんで」
言葉を向けると、ファナはおかしそうにクスクスと笑って、
「ええ。構いませんわ」
「やれやれ、ディバーナ・ロウの将来が大いに不安だよ。――で、そこの執事さんが話をかなり端折ったんで確認しておくが……」
レイは指令書に目を落としたまま、

「高位の人魔。これは上位以上ってことか？」
その問いには、“話を端折った執事”自身が自分の席に腰を下ろして答えた。
「そ。上位以上は確実ってことみたいだね。もしかしたら将族かもしんない」
「情報の信頼性は？」
「実際、その魔を目撃した人の話から、“影裏”の人が推測したんじゃないの？」
“影裏（かげうら）”とはディバーナ・ロウの誇る、ネービス全土にネットを持つサポート部隊のことである。
「その目撃者の目と記憶が信頼できるのか、ってことだがな」
「あ、そゆこと。主な目撃者は、そこの依頼主みたいだね」
「ほぅ……パトリシア＝ラムステッド、二十七歳、女か。……この歳で独身とはな」
呟いたレイに、リディアが早速突っ込む。
「やめてよ、兄さん。依頼主だけはダメだよ。ディバーナ・ロウの看板が傷つくから」
「おいおい。なんの心配だ」
レイが苦笑して視線を上げると、リディアは真面目な顔のまま、
「二十七歳ぐらいなら全然オッケーでしょ？　兄さんは上も下も広いからね」
「冗談だろ？　アクアの奴と一緒にしないでくれよ」
「アクアさんは下は広いけど上は狭いじゃん」
「俺だって下は狭いさ」
「またまたぁ。だってあたしなんか、兄さんと一緒にいるときはいつでも貞操の危機を感じてたもん」
「そりゃ、広いとか狭いとかの次元じゃないな」
軽口を交わしながらも、レイの視線は素早く指令書の内容を読み解いていく。
そして、次の疑問が口をついた。

「ん？　フリーのデビルバスターとの共同任務か？」
「はい」
今度はファナが答えた。
「ネービスと南のグレシット領を中心に活躍なさっている方ですわ」
「ルネッタ＝フィッシャー……か。確かに、どっかで聞いたことのある名前だな」
レイが少し眉間に皺を寄せて考えていると、そこへリディアが、
「書いてないけど、名前からすると女の人だよね。……手出すならそっちだよ」
「しつこいな」
ため息を吐いて、レイは言った。
「相手なんて選ぶ気は毛頭ないさ。……世俗の事情なんてもんは、瞬時に燃え上がる恋の魔力の前では全くの無力だからな」
「うわ、危ない！　早速正当化しようとしてる！」
「ああ、思い出した」
レイは指令書をヒラヒラさせながら、そんなリディアの抗議をさらりと流して、
「ルネッタ＝フィッシャー。グレシットのどこだかに闇の二十三族が現れたときに、そいつを葬った連中の一人だな」
ファナが頷く。
「もともとは単独で、状況によっては色々な方とチームを組むそうです」
「それでこっちに声がかかったってことは、もしかすると一人じゃ手に負えないかもしれない、と、そういうことか」
「あるいは、そうかもしれませんわ」
「やれやれ……。面倒な相手なのは間違いなさそうだな」
嫌気が差したようにレイは呟いたが、もともとナイトの任務で面倒でない相手の方が珍しい。ナイトにとってみれば、日常茶飯事とは言わないまでも、これまでに何度かこなしてきたタイプの任務だった。

ただ……今のナイトには若干の不安材料がある。
「兄さん」
それについて、一番最初に口を開いたのはリディアだ。
「ティースさん、大丈夫？」
「さあな」
レイは素っ気なく答え、その反応が不満そうなリディアに対して言葉を続ける。
「あいつの性格に難があるのはわかっていたことさ。割り切れないのなら最初から深く関わらなきゃいいものを、それもできない……相当厄介な性格だ」
「どうすればいいと思う？」
「死ななきゃ直らないんじゃないか？」
笑って答えたレイに、リディアはため息とともに首を振って、
「兄さんみたいのなら死んでも自業自得だけど、ティースさんの場合は可哀想。なんかやり切れないもん」
「おいおい、それが実妹の言葉か？」
「言われたくなかったら真面目に答えてよ」
「……そうだな」
そこで初めて、レイは考える素振りを見せた。ただでさえ鋭い視線をさらに細めて微かに泳がせる。
「ああいう性格ってのはそう容易く直るもんじゃない。結局、落ち込んで、立ち直って、それを繰り返して徐々に慣れていくしかないんじゃないか？」
リディアは納得したように頷いたが、すぐに困ったように首をひねって、
「でもあの人の場合、その“立ち直る”過程で異様な時間がかかるんだよねぇ」
「それこそ本人と、特に近しい奴らがどうにかすることだろ？」
「やっぱ、鍵はシーラさん？」
だが、レイは少し考えた末に、

「あの鬱屈した王女様には無理かもしれんな」
「？」
「あいつが今必要としているのは、もっとわかりやすい、目に見える形の支えさ。……本心がどうであれ、あの王女様は、あいつに対してそういう態度を取れそうにない」
リディアはため息を吐いて、
「その本心がなかなかわからないんだよねぇ、あの人」
「そうか？」
レイは可笑しそうに口元を緩めた。
「歪んでる理由はともかく、本心はわかりやすいと思うがな。……ファナ」
「はい？」
「そういやティースの奴が感謝してた。毎回毎回、役に立つ薬袋をどうも、ってな」
「はぁ」
ファナは不思議そうに首をかしげて、
「薬袋、ですか？」
「……と、いうことさ」
「？？　……わっかんないなぁ」
理解できない顔のリディアに、レイはもう一度笑うだけでそれ以上は答えようとしなかった。

ミューティレイクの敷地内では様々な植物――観賞用から実用のものまでが育てられている。それらを管理するのはミューティレイクに雇われた専門家と、彼らの手足となって働く幾人かの使用人たちだ。
そんな中、日光を嫌う植物のために用意された部屋が、ミューティレイクの地下にある。

鑑賞されることのないそれらの植物は、もちろん全てが実用のもの。その大半が薬の調合に使われる植物たちで、中には貴重なものも数多く存在していた。

そして、その植物たちの世話を主に担当しているのが、マグナス＝ラングリッジという名の、数日後に十六歳の誕生日を控えた少年である。

「マグナス」

「あ、シ、シーラ様っ」

薄暗くジメジメした部屋の中に、びっくりしたようなマグナスの声が響き渡る。マグナスはそんな自分の声に驚いて思わず口を塞ぎ、手にしていたハサミを落としそうになってしまった。

「いつも、ご苦労様」

「ど、どうも……」

階段を降りてきた人物、シーラ＝スノーフォールは、マグナスにとって憧れの人物だ。

こうして会話を交わすようになったのは結構前のこと。だが、未だに彼女の姿を見るだけで体はガチガチに緊張してしまう。

しかもこの日のマグナスは、実はいつもと少しだけ違った小さな決意を胸に秘めていて――

「……あ、あのっ、シーラ様っ！」

決心したように口を開くマグナス。

「なに？」

シーラもそんな彼の様子に気付いたのだろう。植物に歩み寄る足を止めて、怪訝そうに振り返る。

マグナスは言った。

「そ、そのっ！　きょ、今日は一段と、お……お美しいですねっ！？」

「……」

一瞬、シーラはきょとんとした顔で彼を見つめたが、やがて苦笑を浮かべる。

「……誰に入れ知恵されたの？」
「は！？」
「そういう歯が浮くセリフは、あなたには似合わないわ」
「は、はぁ……」
素っ気ない返事に、マグナスはガックリと肩を落とした。
……実際、その言葉は彼の先輩からの入れ知恵だった。普段の彼であれば、そうそう思いつきもしない言葉だったし、思いついたとしても誰かの後押しがなければ口にしない言葉だったから。
シーラはすぐに部屋の隅に並ぶ植物たちへ視線を戻す。その状態を確認するかのように、軽く手で触れたり、土を調べたりし始めた。
「……」
マグナスは少し浮ついた表情でそんな彼女の一挙一動を見つめている。薄暗い部屋に二人きりという事実も、彼の心臓の鼓動を少し速めていた。とはいえ、彼は大それたことは少しも考えていない。彼の先輩たちの中には、冗談混じりに彼をけしかけようとする者もいたが、彼はただ、こうして話をして、その姿を見つめて、そしてたまに植物たちについて会話する。それだけで満足しているのだ。
「グレゴスの葉は以前よりだいぶ良くなっているわね。……マグナス？」
「あ……はいっ」
ボーっとしていて反応が遅れ、マグナスは慌てて答えた。
「も、もう大丈夫です。その、お持ちになられても……」
「そう。助かるわ」
「い、いえ。育てるのが私の仕事ですから……」
微笑みにドキドキしながら、マグナスはそう答える。
いつものことながら、薄暗いことが彼にとっては幸いだった。もし太陽の下であれば、彼の顔面の血行が良くなりすぎているのが容易に悟られていただろうから。
「それじゃあグレゴスの葉を少しもらっていくわ。……あと、いつものを、またいくつか」

「あ、はい。それは全然大丈夫です。……鎮静剤か何かの実験ですか？」

マグナスはそう尋ねた。

グレゴスの葉には、若干ながら精神の安定を促す効果がある。他の薬草と調合することでその効果を高め、鎮静剤などに利用することが可能なのだ。

それはシーラも否定せず、

「ええ、そんなところよ」

切り取った葉や草をそれぞれ別の袋に入れ、そして満足そうにシーラはマグナスを振り返った。

（……あれ？）

そこでふと、マグナスは違和感に気付く。

「助かったわ。また、お願いするわね」

「あ、は、はい……」

立ち去っていくシーラの後ろ姿を見送りながら……マグナスは少し躊躇した後、決心したように口を開く。

「……あ、あの、シーラ様！」

「？　なに？」

足を止めて振り返ったシーラに、マグナスはしどろもどろになりながらも、

「そ、その、さっきのことですけど……」

懸命に言葉を紡いでいった。

「シーラ様、今日は……本当にいつもと違う感じがします」

「……」

無言で、シーラがほんの僅かに目を細めた。だが、必死だったマグナスはそんな彼女の表情に気付かず、言葉を続ける。

「こ、こういうこと言ったら失礼なのかもしれませんが……どことなく大人っぽいというか――」

「そうね」

シーラは素っ気ない口調で答えた。

「化粧してるのよ。これから男を引っかけに行くから」
「……は？」
「冗談よ」
相変わらず抑揚のない声で答え、シーラは地下を出ていく。
「……」
ポカンとしたまま、マグナスは立ち尽くした。
……彼女がほんの少しだけ機嫌を損ねたらしいことは、彼にも容易に理解できた。
そして理解した瞬間、
（で、出しゃばったことを言っちゃったのかなぁ……）
彼は大きく肩を落とし、そしてまるでこの世の終わりであるかのような重いため息を吐くのだった。
（もう来てくれなくなったら……どうしよう……）
それは結論から言うとまるで必要のない心配であったが、今の彼にとって、それはとてつもなく大きな不安であり……結局、しばらく頭を抱えていた彼は、後から仕事の様子を見にやってきた先輩にどやされるハメになってしまったのだった。

音もなく、扉が閉まる。
月明かりだけの部屋の中、ティースは照明を点けることなく重い足取りでベッドに歩み寄ると、背中から倒れ込んだ。
疲労感。
それは今の彼にとって、少しも心地よいものではない。
――今日の午後、隊長のレイから新たな任務についての説明があった。
（任務……か）

憂鬱だった。

視線を動かすと、ベッド上の枕が視界の中に映る。それもまた、今の彼にとっては憂鬱の種だ。眠ることすら、彼に安息をもたらしてはくれない。

それでも、立ち止まることは許されていなかった。彼が悩んで足踏みしていても、周りはどんどんと歩みを進めてしまうのだから。

「準備だけは……しておかなきゃな」

出発の朝は早い。

ティースは重たい体を押して、荷物の最終点検を始めた。とはいえ、荷物はいつの任務でもほとんど変わらない。慣れたもので、次々にチェックを終えていく。

そして、それらを全て終えたところで、ふと思い出した。

「……これの中身も確認しておくかな」

呟いて、ベッドの上にあった巾着袋を手にする。

ここに戻ってくる途中、ファナの侍女であるフィリス＝ディクターからいつものように受け取った薬袋――任務の際には毎回彼女を通してファナから送られるものだったが、時によっては少し首を傾げてしまう薬まで入っているため、こうして直前に中身を確認しておく必要があったのだ。

「鎮痛、止血、解毒……」

その三つだけは必ず入っているものだ。その先が問題だった。

「今回は……えっと、精神安定剤に安眠誘発剤？　なんだ、これ……？」

ティースは同時に袋に入っている説明書に目を通す。

「気持ちが高ぶっているときにリラックスさせる効果と……不安や興奮などから来る不眠の悩みを解消する効果――」

そこまで読んでティースは自嘲気味に苦笑した。

確かに、それらは今の彼に必要なものだったからだ。

「……ファナさんにまで気を遣われてちゃなぁ」

説明書きをよく読んで、もちろん体に害がないらしいことを確認

し、ティースは有り難くそれを使わせてもらうことにする。
安眠誘発……たとえ気休めであったとしても、今の彼には完全な休息が必要だった。
全ての支度を終え、寝巻に着替え、そしてもう一度薬の注意書きを読んでその通りに飲み下す。

――薬の効果か、あるいは偶然か、その日はいつもの夢を見なかった。
その代わりに見たものは――内容の思い出せない、遠い昔の夢――

その3『悪虐の獣魔』

フォックスレアはネービス領の南端、南に接するグレシット領との境からいくらも行かない場所にある小さな街だ。グレシット領からネービス領へ、あるいはその逆を目指す人々にとっては、宿場町として広く認識されている。

今回の依頼主、パトリシア＝ラムステッドは、このフォックスレアに古くからある名家の主人だ。その屋敷もまた年季の入ったもので、おそらく何度も改修はされているのだろうが、それでも基本デザインや間取りなど、少々古くささを感じさせる。まだ日は高いというのに、何故だか薄暗く感じてしまうほど。

規模的には小さめと言っていいだろう。使用人の数もおそらくは両手で数えられる。女主人パトリシアが、自らディバーナ・ナイトの面々を案内していることからも、それは容易に窺えた。

そんな屋敷の一階。

「あまり余計なところには触れないように。トラップが作動するかもしれないから」

淡々と言った女主人パトリシアの言葉は、屋敷の雰囲気を加味して考えると、到底笑えないものだった。

「トラップね」

そんなパトリシアのすぐ後をついていくのは、ディバーナ・ナイトの隊長レインハルト＝シュナイダーである。

頭にはトレードマークともいえる灰色の布を巻き、背中には二本の半楕円型の剣“夜叉”。その姿はプライベート時とほとんど変わらぬ旅人風の服装だ。

「上手く作動させたら、地下のハーレムにご招待、ってのはないもんかね」

パトリシアは冷たい視線を肩越しに向けて、

「この屋敷のことだから地下ぐらいはあるかもね。……いるのは、

あなたが望む美女などではなく、ネズミと白骨死体でしょうけど」
「……」
レイは肩をすくめ、それ以上は何も言わずについていく。
その後に続く面々……マイルズ、ギレット、パーシヴァル、そしてティースもまた、この“幽霊屋敷”の雰囲気に当てられてか、あるいは女主人の愛想のなさのせいか、口数が少ない。
（怖そうな人だなぁ）
そのパトリシアについては、“いかにもやり手っぽい”というのがティースの第一印象だった。実際に頭は切れるのだろう。彼女が二十七歳で独身なのは、あまりに優秀な彼女に男が敬遠するのか、あるいは彼女自身がそれを必要としていないのかのどちらかだろうと思われた。
「さすがの隊長も、今回ばかりは食指が動かないみたいだねぇ」
苦笑しながら呟いたマイルズに、レイはもう一度戯けたように肩をすくめてみせる。
幸い、一番前を歩くパトリシアには聞こえていないようだ。
その二人の直後を、相変わらず面白くもなさそうに無言で歩くのはギレット。
そして最後尾はパーシヴァルとティースである。
「ホント、何か変なものが出てきてもおかしくない屋敷っすね」
「はは、それは確かにそうかも」
「？」
笑ったティースに、パーシヴァルは少し意外そうな顔をする。
「ティースさん、何かいいことでも？」
「え？」
「いつもより調子良さそうなんで」
「……あ、いや、特に何もないよ」
ティースはそう答えたが、もちろん彼の体調がいつもよりいいのは事実である。
（やっぱ、ファナさんからもらった薬のおかげかな……）

ファナからもらった“安眠誘発剤”は思った以上の効果を発揮し、彼はあれ以来、充分に休むことができていた。もちろん、それは彼の不眠の原因そのものを解消するものではなかったが、無理矢理にでも体を休めることができれば、気持ちもだいぶ変わってくるものだ。

（いつまでも悩んではいられないもんな……）

「こっちへ」

パトリシアが応接室らしき扉を開ける。

招かれて、レイが最初に部屋に。マイルズ、ギレット、パーシヴァルと入って、ティースまで入ると、パトリシアが扉を閉じる。

入った途端、微かな眩しさを感じてティースは目を細めた。

（……へぇ。応接室だけは雰囲気明るいなぁ）

思わず部屋を見回す。

広々とした空間。十人ぐらいは容易に入って歓談できるぐらいのスペース。装飾もここだけは妙に新しく、壁も綺麗だ。南側を向いた大きな窓からは、太陽の光が大きく射し込んでおり、廊下の薄暗い印象とは正反対。暖炉の上には大きな肖像画がある。

そして部屋の中央。そこには大きめのソファが二つ、一人掛けのソファがやはり二つ、長方形を作るように設置されており、その一人掛けソファの片側に、先客がいた。

（え……まさか、この人が――）

その姿を認識して、ティースは驚く。

そこにいるのが、おそらくは今回共闘するデビルバスターであろうことは想像に難くない。

「……」

ゆっくりと立ち上がり、日の光を背中に浴びながらナイトの面々とパトリシアに一礼したのは、髪の長い美しい女性だった。刺繍の入った白いブラウスに裾の長いスカート。ゆっくり頭を下げるその仕草は、どこか愛想のない主人のパトリシアよりもよほど貴婦人らしい。歳はおそらく二十代半ば。

「ひゅぅ」
誰かが小さな口笛を吹いた。若干驚きの意が込められたそれは、おそらくレイの発したものだろう。
「……」
女性は少し眉をひそめたが、特にそれを咎めることはなく。
そのままパトリシアはもう片方の一人掛けソファへ、そしてナイトの面々はレイとマイルズが大きなソファの片側へ、残った三人がもう片方へ腰を下ろす。
最後に、立ち上がっていた女性がもう一度腰を下ろして、パトリシアが早速口を開いた。
「じゃあ、詳しい話に入る前に、それぞれ自己紹介をしてもらえる？」
「じゃ、こちらからさせてもらうとするかな」
レイがすぐに答えた。
「チームの隊長、レインハルト＝シュナイダーだ。よろしく、お美しい貴婦人方」
軽く腰を上げて恭しく礼をする。仕草と口調は軟派そのものだが、視線は飄々としたまま。
他の面々がそれに続く。
「僕はマイルズ＝カンバース。よろしく頼みます」
「ギレット＝フレイザー」
「パーシヴァル＝ラッセルです」
「えっと、ティーサイト＝アマルナです。よろしくお願いします」
それぞれに比較的事務的な挨拶を終え、そして全員の視線が髪の長い女性へと向けられる。
女性は頷いて、
「私はルネッタ＝フィッシャーです。よろしく、みなさん。……早速だけど、質問させてもらってもいいかしら？」
「どうぞ」
「チームということだけれど、デビルバスターの称号をお持ちの方

は？」
「俺だけだ」
レイの返事に、ルネッタは納得したように、
「じゃあ、あなたたちがあの有名なディバーナ・ロウというのは本当かしら？」
「なんだ。知らなかったのか？」
ルネッタは頷いて、
「パトリシアさんからは、デビルバスターの率いるチームが一隊、としか聞いてなかったもので。ただ、ネービスからはるばるやってくると聞いて、もしかしたらとは思っていたの」
「なるほどな。……で、質問ってのはそれだけか？」
「ええ。あとは追々、自分の目で確認することにします。……そちらから、何かご質問は？」
「そうだな」
レイは頷いて、ティースを含めたメンバーを見回す。
早速ギレットが口を開いた。
「ルネッタと言ったな。……おめぇさんは、どの辺までの魔を退治したことがある？」
初対面にしてはあまりに不躾な口調であったが、それは彼の性格だ。ルネッタもさすがに色々な人間と接してきているのか、嫌な顔をせずに答える。
「チームで闇の二十三族を葬ったことがあります。人型は、残念なことに上位までしかまみえたことがありませんけれど」
「ほぅ」
ギレットが感心したように呟いて片目を細めた。それ以降は口を閉ざす。
どうやら質問はそれで終わりのようだ。
「おっさんはそれだけか？　他は？　……いないか？」
誰も口を開こうとはしない。もちろんティースも、この場で質問しなければならないことは特に思いつかなかった。

レイはそれを確認すると、
「じゃあ俺がチームを代表して、一つ質問させてもらう」
「どうぞ」
「……」
「……」
快く答えたルネッタに、ナイトの面々は何故か視線を逸らした。
……それはおそらく、彼の質問の内容をだいたい予測していたからだろう。
「こっちの情報によると、あんたはデビルバスターになって八年、今年二十六歳だと聞いたが」
「ええ」
「それで、独身なのか？」
「……ええ。それが何か？」
怪訝な顔のルネッタ。ギレット以外のナイトの面々が非難する目でレイを見たが、彼は全く意に介した様子もなく、言った。
「ああ。……旦那がいるのといないのとじゃ、口説き方にも差が出てくるだろ？」
「……」
「……」
「……」
ナイトの面々が“やっぱり”といった表情で無言のため息を吐く。
ただ、ギレットだけは我関せずといった様子で腕を組み、じっとしているだけだった。
（というか、いても口説くことに変わりはないんだな……）
ルネッタは何とも言えない顔でレイを見ていたが、ほんの僅かに不快そうな色がそこを過ぎったのはティースにも認識できた。
（そりゃ、なぁ……）
彼女にしてみればレイは少し年下であり、デビルバスターとしても数年下の後輩である。そう考えてみれば、彼女が彼の――初対面としては失礼な言動を不快に感じたのは当然だろう。

「そんな心配は必要ないかと思います」
やがてルネッタがそう答えると、レイは僅かに口元を緩めて、
「ああ。独身なら何も心配ないな」
「……」
呆れた息を吐くルネッタは、それ以上は視線を外して何も答えなかった。
「そろそろいい？」
つまらなさそうにそれを眺めていたパトリシアが口を挟む。
だが、彼女の冷たい視線にさらされても、レイは自らのペースを乱さないまま、
「ああ。……こっちはいつ始めてもらっても構わないが？」
「……それじゃあ」
パトリシアは軽く咳払いのように喉を鳴らして、膝の上に置いてあった紙の束を手にする。
「魔が最初に姿を見せたのは九日前の夕方のことよ。その夜、街で最初の犠牲者が出た」
「質問いいか？」
レイがさっそく手を挙げる。
「……どうぞ」
いきなり話を中断されて、パトリシアはあまりいい顔をしなかったが、それでも紙束から顔を上げて彼に言葉の先を促した。
「最初に現れた魔ってのは、人魔か？　それとも獣魔か？」
「人魔よ」
「そいつが現れたのが夕方。なのに、最初の犠牲者が出たのは夜。……その時間差はなんだ？」
（あ、そうだよな……）
それはティースも少し疑問に思ったことだった。ルネッタも少し興味深そうに話に聴き入っている。
パトリシアは頷いて答えた。
「最初に現れた人魔は一度、街人の抵抗にあって退散した。その直

後、手下の獣魔を使って街を襲わせたのよ」
「……なるほど」
レイとマイルズが一瞬だけ目配せする。
どうやら少し疑問が残ったようだったが、それ以上は何も言うことはなく。
続けてルネッタが口を開く。
「私も質問、いいでしょうか、パトリシアさん？」
「どうぞ」
「その人魔は上位族らしいと聞いたのだけれど、姿形をしっかり記憶している人はいますか？」
「いいえ。その魔はフードをすっぽりと被っていたから、顔までは」
「じゃあ、その魔が上位族以上だと予測したのはどういう理由から？」
「その後に現れた獣魔のランクから、私が勝手に推測したものよ」
勝手に、とは言ったが、パトリシアの返答は自信に満ちあふれたものだった。
それはルネッタも感じたのか、納得したように頷いて、
「あなたは確か、街の対魔調査機関で要職に就かれているとか？」
「ええ」
「それなら、その見解を信用させてもらってもよさそうですね」
そのルネッタの言葉に、当然と言わんばかりの顔をしつつパトリシアは手元の紙を一枚めくって続けた。
「その夜の犠牲者は六人。その中の二名は街の警邏隊員。その深夜から、街は厳戒態勢に入って、素性のはっきりしない者は街へ入れなくなり……あなた方も見たと思うけど、昼夜問わず、警邏隊が厳重な警戒網を敷くようになった」
その言葉にティースは疑問を覚え、尋ねる。
「どうして旅人まで完全に拒絶する必要があるんですか？　魔かどうかだけを確認すればいいんじゃ……」
「……」

不審そうに顔を上げたパトリシアに、レイがすぐさま、
「ティース。それは俺が後で説明してやる。……パトリシア、構わず先だ」
「……ええ」
パトリシアはもう一度眉をひそめたが、これはおそらく呼び捨てにされたことへの無言の抗議だろう。もちろんレイは気に留めた様子もない。
（……な、なんか初歩的な質問だったのかなぁ）
微妙に落ち込んだティースを余所に、話は続いた。
「それ以後も魔の襲撃は続き、これまでに計七回。述べ三十六名が死亡してる」
「三十六人……」
思わず呟いてティースが他の面々を見ると、パーシヴァルやマイルズはもちろん、レイもさすがに神妙な顔をしていた。
確かに過酷な任務の多いナイトではあったが、それでも小規模な魔の襲撃で、しかもこれだけ短期間のうちに三十六人もの人間が命を落としているという事件は、そうそう多いことではない。
そんな彼らの反応に気付いたパトリシアが言った。
「これでもすぐ近くの街に応援を依頼して、被害を最小限に食い止めたつもり。……あなたたちのようなデビルバスターはあまりに数が少なく、招こうとしてすぐに、というわけにはいかないようだから」
少し非難するような口調だったが、それはもちろんレイやルネッタたちに罪があるわけではない。
「……聞かせてもらうが」
ドスの効いた低い声が響き渡って、パトリシアがギレットの方へ視線を向ける。
「警邏の連中もボーっとしてたわけじゃねぇ。だったら、何匹か魔を葬ってるんじゃねぇのか？」
「魔はいくら傷ついても退散することはなかった。だから七度の襲

撃で七匹、全てね」
　レイは口笛を吹いて、
「獣ども、よほど死に急いでいたんだろうな」
　そんな彼の反応に再び眉をひそめたパトリシアだったが、
「そいつらの種族は？」
　続いたギレットの言葉にすぐ視線を戻す。
「姿形から推察するに、地が一匹、炎が二匹、水が二匹、風が二匹。その中で六十台に属する魔が三匹、七十台に属する魔が四匹よ」
「間違いねぇのか？」
「私がこの目で確認したから、間違いない」
「なるほどな」
　ギレットとともにマイルズも頷いて、
「確かに、下位魔だとすると使役する数が多すぎるね。でもま、常識的に考えるならせいぜい上位魔ってところかな、隊長？」
「ま、将族ならもっとマシな奴らを使ってそうなもんだからな」
　レイも頷いて、その後、パトリシアからそれぞれに配られた資料に目を通し始める。
　それはもちろんティースの元へも配られた。
　十枚近くにも及ぶそれは、ほとんどが被害の詳細な解説で占められている。
（一度目は九日前の二十一時頃……薄暗い路地から男の悲鳴。同時に奇妙な鳴き声。茶色の体毛、背骨の上のみに白い毛の生えた犬型の魔が周囲の人々を次々に襲い、約三十分後、出動した対魔専門の警邏隊十六名の手によって退治。犠牲者は市民四名と、警邏隊員二名……いずれも首を鋭い牙で咬み千切られてほぼ即死――）
　背骨上に白い体毛が生えた犬型の魔。その特徴を持つものが“地の七十六族”と呼ばれる魔だということをティースは知っている。
　実物と戦ったこともあった。
　だからこそ、この街を襲ったその惨状は、彼の頭の中で容易に再生される。

――鋭い爪と牙。
――逃げ惑う人々。
――運悪く捕まった男は、恐怖に怯え、自らを襲う獣の凶器に目を見開いて。
そして、視界に迫りくるのは、涎を垂らした獰猛な獣の牙――
「っ……！」
ティースは思わず目を閉じた。
首筋にはうっすらと嫌な汗を掻いている。
意識しないままに、下唇を噛んでいた。
――その後は、あまり想像しないようにして読み流していく。
三十六人。
（どうして……）
それぞれに想いがあって、それぞれに夢や目的があったはずだった。それは数字で表す以上に、重い。今のティースにはそれが嫌というほど実感できる。
そして、それを奪ったのは、やはり魔の者――
（どうして、こんなことが平気で……！）
そこに重なるイメージは、一人の魔の姿。
“タナトス”という魔の犯罪者集団に所属する、ザヴィア＝レスターという名の、殷懃な快楽殺人者の姿だった。
「あー、っと。最後に確認しておきたいんだが」
一足先に全て読み終わっていたのだろう。レイが資料の束を脇に放って、パトリシアへと質問する。
「最初に姿を見せた人魔は、今は街の外にいるんだな？」
パトリシアは少し考えるようにしながら、
「そのときは間違いなく街の外に逃げていったから、知らないうちに侵入されていない限りは。さっきも言ったように、今は外部からの訪問者が市街に入ることも断っている状態だから」
「なるほど。……さて。それじゃあ」
レイの視線は次に、同じように資料を読み終えたルネッタの方へ

と向けられた。
「どうするんだ？　共同と言っても、そっちにはそっちのやり方があると思うが？」
その問いかけに頷いて、ルネッタは逆に質問する。
「あなた方はどういう方法を取るつもりです？」
レイは即答した。
「敵さん、なかなか仕事熱心なようだし、そいつらを潰しつつ敵さんの出方を待つさ」
「それなら、行動を別にする必要はないでしょう」
どうやら彼女も同意見のようだ。
レイは笑みを浮かべて、
「それは有り難い。君と一緒に仕事ができるだけでも、ここに来た甲斐がある」
「……本当、冗談が好きな人のようですね」
「冗談かどうか後で確かめてみるか？」
「遠慮させてもらいます」
ルネッタは立ち上がって、そばにあった剣を手に取る。
貴婦人然とした格好には似合わないと思ったが、不思議にそれを手にした瞬間、彼女の雰囲気が変わったようにティースは感じた。
それは静かな威圧感、とでも言おうか。
（……やっぱ、普通の人とはどこか違う）
「先に部屋に戻ります」
だが、凛とした口調でそう言った彼女に対し、レイは全く態度を変えることなく、それを見送りながら言葉を付け加える。
「ああ。あとで訪ねて行っても構わないかな？」
「……用事がある場合、でしたら」
眉をぴくりと動かして、ルネッタは部屋を出ていった。
今度こそ、機嫌を損ねたのは間違いなさそうだが、それでもレイは楽しそうな笑みを浮かべている。
続いて、パトリシアも席を立つ。

「じゃあ、私も失礼するわ。……あなた方の部屋は、さっき案内した通りよ」
まるで、ここにいることが時間の無駄とでも言わんばかりの態度でそう言うと、
「口が達者なのは構わないけれど、それなりの働きもして欲しいものね」
その嫌みにも、レイはさらりと流して答えた。
「それは心配ない。美しい女性の望みを叶えることは、俺の最大の趣味だからな」
「……」
まるで興味のない視線を送り、そしてパトリシアも部屋を出ていった。

ナイトの面々に与えられた客室はそれなりの広さだったが、やはりミューティレイクの個室と比べると狭い。妙に明るかった応接室と違い、綺麗にはされているもののどこか微妙に古くさい雰囲気も漂っていた。
昼食を終え、今はそこにナイトの面々が全員揃っている。
「今回はなかなか手強そうだねぇ」
「ああ。一筋縄じゃいかなそうだ」
レイやマイルズが話しているのは、一見今回の任務についてのようにも聞こえるが……“もちろん”そうではない。
「ま、デビルバスターになるような女だ。一筋縄でいく方が珍しいさ」
そんな二人の会話を、ギレットはつまらなさそうな顔で、パーシヴァルはちょっと興味ありそうにしながらもとりあえず口を挟む様子はなく、広場の露店で買ったらしい干し肉をかじっている。
昼食を終えたばかりだったのだが、どうやら彼にとってそれは“

おやつ”らしい。
「ティースさんも食べます？　おいしいっすよ」
「あ、いや、俺はいいよ」
差し出された干し肉を断りつつ、ティースは眉をひそめてレイに質問した。
「そんなことよりレイさん、さっき――」
だが、彼が言い切る前に、
「魔ってのは、常に魔の姿をしてるわけじゃない」
「――え？」
突然の言葉にティースがびっくりした顔をすると、レイは彼の方へ向き直って、
「なんだ？　街の厳戒体制の理由をしりたいんだろ？」
「……あ、そ、そうだけど」
「まだアオイから習ってないか？　魔ってのは、人間に姿を変えることができる。……だから、その魔が人間に姿を変えて街に進入する可能性を恐れてるのさ」
「あ」
それは確かにアオイの授業ではまだ習っていないことだったが、経験上、ティースはそれを知る機会があった。
が、それでも少し怪訝な顔をして、
「でも、いくら人間に姿を変えたって、見ればわかるんじゃ――」
「パトリシアが言ったのを聞いてなかったのか？　魔はフードをかぶっていて、その姿形をしっかり記憶してる者はいない……そう言ってただろ？」
「あ、なるほど……」
納得顔のティースに、レイは自らの耳を軽く指先で叩いてみせると、
「ついでだから覚えておくといい。魔が人に姿を変える方法は三つだ」
耳――そこは、人と魔を見分けるのにもっともわかりやすい場所

だ。逆に言えば、人と人魔の外見的な違いとは、ほぼその程度のものでしかない。

「一つ目はローリスク、ローリターン。魔力を使っての、かなりシビアな時間制限付きの変身だ。得手不得手はあるだろうが、その技に優れた将族クラスでも、せいぜい一時間が限度と言われてる。……が、それでも正体を隠して街に侵入するぐらいは可能だ」

マイルズが付け加える。

「実際、いつだったかファナさんを襲った――ティースくんに助けられたときのあの連中も、その方法といくつかの偽装を使ってネービスに入ったんだろうしね」

ティースは頷く。それは彼の知っている方法だった。

頷いて、レイは続ける。

「二つ目は魔力のこもったアイテムを使って姿を変える方法だ。モノによっては数日の効果をもたらすものもあるが、こいつの欠点は、人間の姿でいる間は魔力を行使できないことに加え、効果が切れるまで自分の意志で元の姿に戻れないし、いくつかの特殊な方法でその偽装を見破ることもできる。……だから、使われる場合はごく限られている」

「……」

魔力が使えないというのは、魔にとってはもちろん致命的なことである。特に、何らかの目的を持って姿を変えている魔の者であれば、なおさら。

興味深そうに聴き入るティースに、レイは一度言葉を切ってから、

「ラスト……三つ目はハイリスク、ハイリターン。刻印型の破魔具“朧（おぼろ）”だ」

「朧？」

ティースにとっては初めて耳にする単語だった。

「ああ。条件は厳しいが、半永久的に人の姿でいることができる上、魔力も行使できる、見破る方法もほぼ皆無って代物さ」

「半永久的って……」

口から驚きの呟きが漏れる。
もしそれが本当ならとんでもない代物だった。魔が、普通に人の世界に溶け込んで、その上で、いつでも人を遙かに上回るその力を行使できるということなのだから。
だが、もちろんそんな便利なものが、そうそう存在するはずもなく。
「魔力は……そのままで？」
ティースの問いに、レイは頷いて、
「それが条件その一さ。魔力は行使できるが、かなり制限される。およそ五分の一ほど……目安としちゃ、上位族なら下位族を確実に下回る程度、将族でもやはり上位族と下位族の間ぐらいまで制限されちまう」
「じゃあ五分の一って、かなりの……」
「ああ。下位魔が使おうもんなら、人間と大差なくなるだろうな」
「……」
そんなものを使う魔がいるのか……そう質問する前に、レイは表情からそれを読んだのか、
「ああ。実際に使用された例がいくつかある。……ま、それはあとの話だ」
薄い笑みを湛えたまま答え、続けた。
「条件その二は“身請け人”となる人間が必要だってこと」
「身請け人？」
「“朧”は身請けをする人間と、その効果を望む魔の者の合意によって初めて効力を発揮する。それは基本的に、身請けした人間が死ぬまで続く……が、こいつは強制ではなく誓約によって効果を発揮するタイプでな。魔が自分の意志でそれを破り、元の姿に戻ることは可能だ。ただし、その場合は漏れなく“死の制裁”がついてくる」
「……」
ティースは頭の中で整理することにした。

まず、“ 朧 ”というのは、魔を半永久的に人間の姿にとどめるアイテムだということ。
朧によって姿を変えた魔は、魔力を行使できるがその力は極端に制限されること。
朧の効果を得るには、“ 身請け ”をする人間が必要で、その人間と魔の双方の合意が必要であるということ。
その効果は身請けした人間が死ぬまで続くこと。
そして“ 死の制裁 ”
「……一度姿を変えた魔が、元の姿に戻るとしたら死ぬしかないってことか」
「いいや、もっと簡単さ」
レイは笑って答えた。
「安全に元の姿に戻りたければ、身請けとなった人間を殺せばいい。だろ？」
「……」
それは確かにその通りだ。
だが、身請けとなる人間側にもリスクがあるとすれば、ますます疑問だった。
「実際に使用された例があるって言ってたけど、本当に……？」
「魔と人間の間に子供ができるのは、お前も知ってるだろ？」
「え？　あ、ああ」
突然話の趣旨が変わって困惑したが、ティースは頷いて、
「実際、そういう子供がたまにいるらしいけど……」
「ああ。そのほとんどは、魔の男と人間の女の間に産まれる子供だ。……つまり、産む方にしても望まない子供でな。あまり大きな声じゃ言われんが、ほとんどが産まれる前に殺されちまう」
「……ああ」
その理由は言われずともわかった。
「だから、この世界で生きている“ 魔と人間の雑種 ”ってのは、何らかの手違いや勘違いで産まれ、そのまま育てられた者か、あるい

は捨てられてそれでも運良く生き延びた子供。……それともう一つある。わかるか、ティース？」

「……」

ティースの脳裏には一つの可能性が浮かんだ。

それは彼としては決して否定できない可能性だったが、レイが言った“もう一つ”がそれであるかどうかは自信がなかった。

だが、レイはまるでその返事を得たかのように頷いて、言った。

「そういうことだな」

「え……」

「つまり、基本的にさっき言った奴らとは全く別。“望まれた”子供のことだ」

その言葉の意味するところは、ティースにもよくわかる。

だから今度は、彼の方から口にした。

「それって、人と魔が――」

「ああ。そこで朧に繋がる。……つまり朧ってのは基本的に、何らかの理由で人間と生活を共にする決意をした魔と、その魔を受け入れようとする人間の間で交わされる誓約のアイテムなのさ」

ティースは信じられない思いで、

「……そんなことが、本当に」

「朧によって姿を変えた魔は、人間と区別がつかない。魔力を行使したとしても――」

レイは脇に置いてあった自らの武器“夜叉”に触れて、

「こういった特殊な破魔具の効果だと言い張ればそれで済む。だから、たとえば俺が朧で姿を変えた魔でもおかしくはないし、それは誰についても同じことが言える。それは本人と身請け人にしかわからないことなのさ」

「……」

思わずティースはレイを見つめ返した。

「言っとくが、俺は違うぜ」

レイは苦笑しながら、

「今回の件とは関係ない方向にズレちまったが、ま、そういうことさ。デビルバスターとしては、覚えておいて損のない知識だ。……中には、何か企んで朧を悪用する奴らもいないわけじゃないからな」
「わかった。覚えておく」
……朧。
今日この場で耳にしたそのアイテムの様々な知識が、後々、あらゆる意味で自分に深く関わってくることになるなどと、このときのティースは予想もしていなかった。

そして、その日の夕方。

――フォックスレアの街には悲鳴と、怒号が溢れていた。

「……！」
なんとも形容のし難い鳴き声とともにオレンジ色に染まる地面を蹴ったのは、まるで巨大な団子虫のような形の生き物だった。
体長は一メートル程度だろうか。表皮は油のようなものでテカっており、その表面には無数の棘のようなものがついている。
地の七十二族。
彼らは体を丸め、回転しながらの体当たりで獲物を切り裂くのを得意としている魔だ。
それを向かい合うように立つのは、取っ手のついた棒を両手に携えた少年。
パーシヴァル＝ラッセルだ。
「よっ……と」
まるで緊張感もなく、パーシヴァルは右手の棒――トンファーを

クルリと回して、凶器の固まりとなった地の七十二族へ自ら突進していく。
――距離が狭まる。
瞬間、パーシヴァルの目が細くなった。
「はぁぁぁぁっ！！！」
右手のトンファーが唸りを上げて正面から地の七十二族に打ち付けられる。
ただその表皮は堅く、容易にはダメージを与えられない。
――そのはずだった。
だが、
「……」
地の七十二族はその動きを停止していた。
濁った血が、表皮の隙間から流れ出す。
――パーシヴァルのトンファーは、回転する魔の表皮……その継ぎ目を正確に捉えていたのだ。
達成感を浮かべたその口から、呟きが漏れた。
「……まず一匹」

そこから少し移動した場所。
家の壁には血を流しながら倒れる女性がいる。その女性のそばですすり泣くのは、四、五歳ぐらいの男の子と、それより少し年上ぐらいの女の子。
おそらくは親子だろう。頬のコケた母親は目を開いたまま天を見上げている。
死んでいるのは誰の目にも明らかだった。
旦那は不在なのだろうか。あるいは、子供を置き去りにして逃げたのか。それはこの状況ではわからないことだ。
「……」
そんな親子に背を向け、立っている男がいる。
無愛想な表情。片目を閉じ、左手にはつるはしのような形の武器

を携えている。
ギレット＝フレイザーだ。
その彼が片目で見据えているモノ。
「ゲェェ……」
聞くだけで不快になるような粘着質の鳴き声を上げ、ヌメヌメした体の皮膚がより一層悪寒を増幅させる。
水の六十一族。体の大きさは成人男性と同じぐらいだろうか。ギョロッと飛び出した目、ずんぐりとした体はまるでカエルのようだ。
その大きな口からは、三本の長い舌が見え隠れしている。それが、女性の命を奪った凶器だ。見た目以上の質量を持ったその舌は、大人の男性が繰り出す棍棒の一撃ぐらいの威力を軽く秘めている。
しかも――それが三本、とてつもない速さで――
だが、右から飛んだ高速の舌を、ギレットの片目は造作もなく捕らえた。
「ゲェェェェッ！！！」
左手のピックが、風とともに魔の舌を切り裂く。ピンク色の物体が宙を舞い、地面に落ちた。
立て続けに、二つ、三つ。
「ゲ……ゲェェ……！！」
魔はあっという間に丸腰になっていた。
そのときになって、ようやく相手との実力差を悟ったのだろう。
――だが、すでに遅い。
「ガ……ゲゲゲゲェェェッ……！！」
肉を絶つ感触。ずんぐりとした腹が裂け、そこから気味悪い色の臓物と、緑に近い色の体液が噴き出した。
「……」
ギレットの手はさらに容赦なく、色を失いつつあった魔の両目を貫く。
……無愛想なその瞳に、明らかな憎しみの色。
徹底的に、完璧に魔が息の根を止めたのを確認するまで、彼の攻

撃は続いた。

街の中心部。いつもは露店で賑わう大きな広場。
そこもまた、今は戦いの舞台となっていた。
崩れた店の残骸。用を為さなくなった手押し車。
「あっ……ああっ……！　誰か……誰か、助けて……早く、早く……っ！！」
切羽詰まったような苦痛の声。
「ああ、大丈夫だ。もう大丈夫だから安心して、僕を信じて、少し我慢するんだ」
地面にうずくまる少年の元に白衣を翻すマイルズがいた。少年は頭から血を流し、苦痛の声を上げ、その手はまるで何かを探すように宙をさまよう。
「姉ちゃん……姉ちゃんは……っ！」
「心配しなくていい。君のお姉ちゃんも無事だ。僕たちが来たから、もう大丈夫だ」
白衣には彼のものと思われる血がベットリと大量に付着している。
マイルズは懐から白い粉のようなものを取り出すと、それを少年の口に含ませた。
「さぁ、呑んで。少しは痛みが楽になる。舐めて、溶かして、流し込むんだ」
「あ……ああ……」
少年の顔がようやく和らぐ。
「ァァ……ァァァ……ッ……！！」
その背後で、獣の悲鳴が響き渡り、ボトリと、首のようなものが地面に落ちた。
「どうなってやがる」
自らが葬った獣魔の体を蹴り飛ばし、レイは誰に言うとでもなく呟くと、
「敵さん、いきなり総力戦のつもりか？　……マイルズ」

少年の苦痛のうめきはいつの間にか止んでいる。
「……」
レイの視線の先で、マイルズは血で真っ赤に染まった白衣を揺らして振り返った。
「そうかもしれないね」
その手が少年の顔を撫でる。
「確認できただけで十匹。犠牲者は……この子と、そっちの女性を含めて二十一人」
右腕と右足の千切れ飛んだ少年は無惨な姿をさらしながら、それでも今は安らかな寝顔を浮かべている。
それだけが、救いだった。
マイルズは少年の遺体を抱え、そばにあった女性の骸の脇へ横たえると、二人の手をしっかりと繋いだ。
微かに、睫毛が震える。
「実際にはもっと犠牲者が出ているはず。でも、ようやく敵の数も減ってきたようだ」
「……」
そんな彼の行動を黙って見守っていたレイだったが、やがて視線を動かし、
「なら、全部潰して、一気に黒幕を引きずり出すとするか」
「ああ……了解、隊長。これ以上、好き勝手させるわけにはいかないからね……」
マイルズは二人に向けて軽く十字を切り、そして次の場所へ向かうのだった。

ティースはルネッタとともに行動している。
――パチパチという音とともに、辺りは真っ赤に染まっていた。
「くぅっ……！！」
彼が相手にしていたのは“炎の六十八族”と呼ばれる体長一メートルにも満たないネコのような形の魔だ。

警戒すべきは素早く柔軟な動きと、時折口から放たれる熱の息。
それほどの殺傷能力を持たないが、顔などに浴びると視界が失われる危険がある。
とはいえ、所詮は六十台に属する下級の魔。五十台の獣魔とも渡り合えるだけの実力を身につけているティースにとっては敵ではない。
その、はずだった。
だが、
（こ……こいつ、本当に六十台なのか……！？）
ティースは未だ、その魔の動きを捕らえきれずにいた。動きに翻弄され、時折襲いかかる爪や炎の息で、ところどころに軽傷を負っている。
狙いを定め、剣を振り下ろす。
だが、すんでのところで横に避けられ、無防備なところに魔が飛びかかった。
「ちっ……！」
反射的に剣を振るったが、間に合わない。
「つぅっ……！！」
右腕に焼け付くような痛み。
咄嗟に体をひねったおかげで直撃は免れていた。
そして、その一撃を避けたことで、ようやく勝負は決する。振り向きざま振るった彼の剣が、地面に着地した瞬間の魔を捕らえたのだ。
腕に伝わった感触は明らかな手応え。
その一撃が致命傷となった。
（ルネッタさんは――）
地面で動かなくなった魔を見下ろし、肩で大きく息をしながらティースが視線を移動させると、ルネッタは同じタイプの魔を三匹同時に相手しているところだった。
――いや、“相手している”という表現は正しくないかもしれな

い。
戦っている……そう思った次の瞬間、
（あ――）
すでに勝負は決していた。
そこから一歩も動くことなく。細長い剣が無駄なく閃いて、無造作にも見える一撃一撃の全てが、確実に、音もなく三匹の魔を葬り去る。
一匹に一撃ずつ。あまりにも正確無比な、無駄のない攻撃。
「……」
無言のまま血を払って、ルネッタがゆっくりと身を翻す。
（この人……）
その瞬間、ティースの体は戦慄に震えた。
（……強い。もしかしたら、レアスくんやアクアさんよりも――）
「苦戦したようですね。大丈夫ですか？」
あまりにも強烈な今の芸当を見てしまったせいだろうか。ルネッタの言葉は、その気遣う内容とは裏腹に、どことなく冷徹に聞こえてしまった。
ティースは我に返ると頷いて、
「え、ええ。すみません、足手まといで……」
「いいえ。仕方のないことです。……行きましょう。次の犠牲者が出ないうちに」
「……」
その言葉が、その場の陰惨な状況を彼に思い出させた。
「水だっ！　水を持ってこい！　……早くしろ！！」
「……誰かっ！　誰か来てぇぇぇっ！！！」
背後ではたくさんの家が燃えていた。
人々の悲鳴、怒号。
地面に倒れ、苦しむ男。
燃えさかる家の前で、狂ったように泣き叫ぶ母親。
絶望の表情で座り込む子供。

「……」

ギリッと奥歯を鳴らして、ティースはルネッタの後を追った。

そして約三十分後。

多大な犠牲を払いながら、街に現れた魔のほとんどがようやくその活動を止めた……まるでそのタイミングを狙っていたかのように。

何者かの一つの叫びが、人から人へ伝わって、そして彼らの耳にも届いた。

――現れた、と。

フードとローブに身を包んだその魔の者は、自らの歩みを妨げようとする警邏隊員をその圧倒的な魔力で軽く追い払い、街の中へと足を踏み入れていた。

大柄。ティースと同じぐらいはあろうかという長身だ。その顔はフードで完全に隠れており、体もローブで覆われている。

中の敵と、外からの侵入者。

街は今、まさに混乱の極みに達しようとしていた。

「……」

魔は駆け足に近い速度で、街の奥へと向かっている。その方角は、ディバーナ・ナイトの面々が駐留するラムステッド邸のある方向。

いや、その人魔は間違いなく、何らかの意図を持ってそこへ移動していた。

――と。

その正面から、一人の少女が駆けてくる。年の頃は七、八歳だろうか。

「た……たすけ――！」

その後ろには一匹の獣魔。比較的動きの遅い、だが少女の足よりは間違いなく速い、ずんぐりとした体型のナメクジのような形――“水の七十五族”と呼ばれる魔だった。

粘着質の体は酸を纏っている。一瞬で溶かすほど強い酸ではないが、彼らはそれで捕らえた獲物を食する。

少女のような小さな存在は、彼らにとっては絶好の獲物だった。

「！」

そこで少女の瞳が、目の前からやってくるフードの人影に気付く。

「たっ……たすけてぇぇぇぇぇっ！！」

少女がもしも大人だったなら。

あるいはあらかじめ予備知識があったなら。

決してその人物に助けを求めはしなかっただろう。

――それは、化け物に囚われ生きながら溶かされるか、あるいはひと思いに――おそらくはその程度の選択。

そしてそれが少女にとって吉だったか、それとも凶だったのか。

フードの魔の者は足を緩め、そしてその視線を少女へと向けた。

「……！」

そしてようやく、朧気ながらに少女は悟る。自分が助けを求めた人物が、何者であるかを。

ローブが微かに踊る。

その場に正常な判断能力を持った第三者がいたとして、その者がごく平凡で何の取り柄のない人間だったとしても、その“変化”にはおそらく気付いただろう。

肌に触れる空気が、急にその密度――いや、湿度を増したことに。

溢れ出す、圧倒的な魔力。

「ぁ……ぁ……っ！」

少女は足を止めた。

涙を一杯に溜めた瞳を、これ以上ないほどに、大きく、大きく、見開いて。

ガクガクと膝が震える。
もう走れない。逃げることはできない。
――少女は知っていた。その力を行使する者が、人ではないことを。
そしてそれが、どれだけ残虐な存在であるかということを。
「ぁぁぁぁぁぁ……っ！！」
少女の絶望の叫びは、大きく、大きく、響き渡って。
同時に放たれた圧倒的な魔力は、そこにあった生命をいとも容易く葬りさっていた――

その4『縁の暴君』

街の警邏隊も、たまたま街に逗留していた腕に覚えのある若者たちも、もはや誰もその人魔の進行を妨げようとしない。

いや、できなかった。

遠くから射た矢も、不意打ちで背後から放った一撃も。

その全てが、その者の体には届かなかった。

見えない壁――“魔力の壁”

もちろん、彼らの攻撃は破魔具によるものだった。が、そのことごとくが、その者には通じない。

――まさか。

腕に覚えのある一人は、そう思った。

彼は自らの聖力に自信を持っていた。事実、彼はデビルバスターの称号こそは持っていなかったが、ちょっとした依頼で低級の魔を退治したことはあったし、聖力は常人の倍以上軽くあると言われていた。

その彼に破れなかった、魔力の壁。

下位族ではあり得ない。上位族だとしても、少々考えづらい。

魔は彼を一瞥しただけで、まるでそれが路傍に転がる石であったかのように無視して立ち去った。

圧倒的。

まさに圧倒的な力。

決して小心ではないはずのその男は、それを感じて思わず地面にへたり込んだのだ。

誰も阻めない。誰にも止められない。

そのはず、だった。

「……どこへ向かうつもりだ？」

だが、それを阻む者が、その街にいた。
「この先は通行止めだ。特に、お前のような無粋な男は、な」
無造作に伸ばされた黄土色に近い金髪が風に揺れる。口元には笑み。だが、その目は視線の先の魔を油断なく見つめている。左手に持った半楕円形の剣を無造作に下ろし、右手に持った同じ形の剣は肩に乗せて。
「……」
魔は無言のまま、フードに包まれた視線が動いて、その場にいたもう一人へと向けられる。
「覚悟することですね。ここに姿を現したのが、あなたの運の尽きです」
そこにいたのは長い髪の女性。右手にはレイピアのように細長い剣。半身に構え、斜め下に下ろした剣先は微かに円を描いていた。
レインハルト＝シュナイダーとルネッタ＝フィッシャー。
前者はディバーナ・ロウの誇る最強チーム、ディバーナ・ナイトの隊長。
後者はこの地方に名を馳せた有能な女性デビルバスター。
――この二人を前にしては、どんな魔であっても先に進むことを躊躇うしかなかった。
「……」
事実、それまでほとんど歩みを止めなかった人魔は、初めて足を止め、警戒するような視線をフードの奥からその二人に向けている。
もちろん、二人の実力を察したからだろう。
今までとは違う。……彼らはあるいは、自分の魔力の壁を破るかもしれない、と、そう感じたのだ。
だから動かない。
ただ……それは、レイとルネッタの方もまた同様だった。
「どう、思う？」
「……」
問いかけに、ルネッタは一瞬だけ彼を見て、そしてすぐに視線を

正面に戻した。
「上位族程度では……ありませんね」
レイは満足そうに頷いて、
「君と俺はどうやら相性がいいようだ。価値観の一致ってのは、男と女が仲良くなる上じゃかなり重要なことだからな」
「……」
ルネッタは答えず、ただ黙って魔を見据えている。
動く気配はない。
「他の連中を救護に回して正解だ。こりゃ、俺と君以外は立派な足手まとい――」
言いかけて、ふとレイは怪訝な顔をした。
（……なんだ？）
ルネッタの表情。そこに“何かを待っている”ような色を感じたのだ。
そして一瞬の思考の後、僅かに表情を険しくして問いかける。
「そういや……ティースの奴がいないな。君と一緒じゃなかったのか？」
「ええ」
視線を動かさずに、ルネッタは答える。
「彼ならいます。すぐ、近くに」
「近く？」
レイの顔が厳しさを増す。
「まさか」
再び魔へと向けた視線の、その先。
――そこにティースの姿があった。
路地の陰から……今まさに、魔の無防備な背中に飛びかろうとしていたのだ。
（……この女――）
隣の涼しげな顔に、レイは思わず唇を噛んだ。
（あいつを囮に使いやがったか……！）

制止する間もなく。
ティースの体は路地から踊り出た――

ティーサイト＝アマルナの心臓の鼓動が激しくなる。体が熱くなって、首筋にはべっとりと汗を掻いていた。
遠くからは人々の悲鳴、怒号。
空には幾筋かの煙が立ち上っている。
……ごくり、と、喉が鳴った。それさえも、うるさくて仕方がない。
狭い路地に無造作に置いてある荷物の陰。身を隠すには絶好の場所だ。
たった今、路地の前を通り過ぎた魔は、彼に背を向けたままで立ち止まっている。その視線の先には、おそらくレイとルネッタがいるのだろう。そこに集中しているせいか、おそらくティースに存在には気付いていない。
チャンスだった。
（こいつが――）
荷物の陰からゆっくりと身を乗り出して、彼の視界にも魔の背中が映る。
ネズミ色のローブに同じ色のフード。細身だが背は高く、ティース自身と似たような体型だろう。だが、中にいるのは彼とは似ても似つかない。罪のない人々を大量に虐殺した、許し難い“悪”。
（許せない……）
胸に溢れる怒りとともに、ティースの脳裏に重なったのは、いつかの光景。
サイラス＝レヴァインを助けられなかった日のこと。
ナナン＝トリストラムが無惨な姿で見つかったときのこと。
（許せない――）

そして今日。
嫌というほどに見せられた、あまりに酷く、あまりに残虐な行為の数々。
（もう……迷わない……！）
汗ばむ両手に力を込める。
愛剣“細波”が微かに震える。
迷う必要など一つもないと思えた。
（サイラス……ナナン……俺は――）
ピタリ、と、その震えが止まる。
（こいつを倒して！　そして君たちのことを吹っ切ってみせる！）
集中力が研ぎ澄まされた。
いつかと同じ――風の将、ザヴィア＝レスターの魔力の壁を打ち破ったときと全く同じ感覚。
細波の刀身が艶やかさを増す。
魔の意識は、完全にレイとルネッタに向けられている。ティースの存在にはおそらく気付いていないだろう。
折しも吹いた、緩やかな風とともに。
ティースの体は路地を飛び出した。
「――」
音もなく。
魔との距離は、僅かに数歩。
周りの景色も。音も。
何も感じない。
ただ一点。
無防備な魔の背中に向かって、細波を突き立てるべく、ティースは翔けた。
「っ……！？」
魔がようやく微かな驚きの声を発して視線の方向を動かす。
だが、ティースは確信していた。
（もう、遅い――！）

たとえ相手がどのような瞬発力を発揮したとしても。あのザヴィアほどの動きを見せたとしても、もう避けることはできない。
圧倒的な破壊力を込めた細波の切っ先は、魔の体を確実に捕らえるだろう。
急所は外されるかもしれない。だが、ティースの頭はそんな余計なことは考えていなかった。
ただ無心に。
細波を、突き立てる。
極限の集中と、そして絶妙な奇襲によって、全ては彼の思惑通りだった。
「ぁぁぁぁぁ――っ！！」
「っ！！」
ティースの叫びとともに、細波の切っ先が振り返った魔の背中――左脇腹の辺りに吸い込まれていく。
熱くなる体。
鈍い感触。
そして――
「――な！？」
驚愕。
「なんだって……っ！！」
肩の関節と手首の骨が僅かに軋む。行き場のなくなったエネルギーが、ティースの両腕に真っ直ぐに跳ね返ってくる。
――そこにあったのは、覚えのある感触だった。
（魔力の……壁！？）
細波は、止まっていた。
振り返った魔の、体の直前で。
「馬鹿な……そんな馬鹿なッ！！」
それは信じられない出来事だった。
確かに、彼は“集中”していたはずだった。そして間違いなく、細波は彼の期待する破壊力をそこに秘めていたはずだった。あのザ

ヴィアの壁を破ったときのように。
じゃあ、何故？
ティースが思考していられたのはそこまで……わずか半瞬ほどのこと。
「！」
魔の体から、反射的に魔力が迸った。
左腕を薄い膜のようなものが包んだかと思うと、破裂して無数の水滴がティースに向けて飛んでいく。
もちろん、避ける余裕などなかった。
「くっ……！！」
無数の飛礫を浴びながら、ティースの体は魔から離れる。
幸いだったのは、それほど威力のある攻撃ではなかったことだろう。彼の体が離れたのも、吹き飛ばされたのではなく、危険を感じて自ら地面を蹴ったためだ。
だが、その直後、
「っ……！？」
二度目の驚きの声が、人魔の口から発せられた。

――それはおそらく、全て彼女の計算通り。

ルネッタ＝フィッシャーは、魔の意識がティースに向けられるその一瞬を待っていた。
もちろん彼が魔を倒せると思っていたわけではない。デビルバスターではない彼に、これほどの魔の壁が破れるとは最初から思っていなかった。
ただ、彼が少しでも魔の意識を引き寄せてくれれば。そうすれば、自分が一撃でカタをつけてみせる。
そして、全ては彼女の予想通りに進んでいた。
予想外だったとすれば、魔がティースを仕留め損なったことぐらいだが、それは彼女にとって悪いことではない。囮に使ったとはい

え、彼女は別にティースに恨みがあったわけではなく、死んで欲しいと思っていたわけでもない。
ただ、利用できそうだったから利用した。それだけのことだったから。
――ルネッタは女だったが、男のデビルバスターと比べても実力的にヒケを取るところはなかった。確かに非力であることは否定しようもないが、聖力はデビルバスターとして恥じることのないレベルで備えていたし、“集中”もかなりの高いレベルで習得している。
技術に関しては言わずもがな。その“一撃”の正確さは数多くのデビルバスターの中でも一目置かれていたし、実際、彼女を相手にして『必ず勝てる』と断言できる人間は、大陸広しと言えどもほんの一握りだろう。
デビルバスターとしても、おそらく中堅以上。
その細身の剣は、確実に魔を捕らえる。
ティースよりも鋭く、正確な一撃が、魔の体に吸い込まれる。
……だから、その結末を予測したのは、おそらくその場にただ一人。

「とんでもない」
呟いたのは、レインハルト＝シュナイダーである。
重なった二つの影――ルネッタと人魔の姿を、視界の中心に捕らえながら。
口元には笑みが張り付いていた。
「とんでも、ないな」
その光景は、彼にとっては想像の範疇だった。
レイはティースの聖力の高さを同僚のアクアから聞いて知っている。そして今、魔に飛びかかった彼の破魔値が“集中”によって高められていることも見て取った。一瞬、そのまま彼が魔を倒してしまうのではないか、と、そう考えたぐらいだ。

その一撃にはここ最近で見られたような迷いが微塵もなかったし、魔は確かに避ける余裕はなかっただろうから。

だから、彼の一撃が魔力の壁に阻まれたときに、レイは確信したのだ。

おそらく、ルネッタの一撃もまた、同じものに阻まれるだろう、と。

「……」

レイは自分の体が微かに熱くなるのを感じていた。

――らしくない。

彼が自分でそう認めてしまうほど、心臓の鼓動が速くなっている。

ルネッタは、おそらく信じられない表情でその“結果”を見つめているだろう。

デビルバスターである彼女にとって、自分の攻撃が魔力の壁に阻まれるということは、ひどく屈辱的なことであると同時に、もう一つの事実を意味している。

それは……自分の力が通じないほどのその相手が“一体何者であるか”ということ。

ルネッタの体が、魔から離れた。

おそらくはティースと同じように、軽い攻撃を受けたのだろう。

やはり大きなダメージを負った気配はない。

(こいつは……腹をくくる必要があるかも、な)

レイの口にはやはり笑みが張り付いていた。

別に楽しいわけではない。緊張しているのだ。

彼の目の前にいる魔。

それはおそらく、将族でも常識外れなほど高い魔力の所有者か。

あるいは――

(魔王降臨……ってとこか)

“王族”

常識的な範囲では戦うことが想定されていない、そういう存在。

レイもそれを目の当たりにするのは初めてだった。

自分の力が通用するか、否か。
――自信はある。だが、確信はない。
（見たところ水族か……水族との相性はあまり良くないんだが、な）
今度は意識的に苦笑して、そしてレイは二刀“夜叉”を構えた。
「……」
ルネッタは動けない。ティースもまた、ルネッタの一撃が届かなかったことに驚いているのだろう。動かないまま。
もう、彼らには戦う資格すらなくなったのだ。
その場に残された希望は、ただ一人。
肝を据え、レイは一歩踏み出して、魔に問いかけた。
「お前、王族、だな？」
「……」
魔の視線が彼を見る。
レイは緊張感を漂わせながらも、自分のペース――いつもの、どこか飄々とした口調で続けた。
「なんの気まぐれでこっちの世界に現れた？　人間ごときを殺して楽しいのか？　お前ら王族は、そういうことにはあまり興味がないって聞いていたが、な」
「……楽しい？」
「！」
レイは驚く。
――返事があったこと自体も、それはそう。
だが、それ以上に――
「それは、私が聞きたいことです」
「……女、か？」
レイは目を細めた。
おそらくは彼と同じかやや大きい……百八十センチ以上は確実。
その身長からはおそらく誰もが男だと想像するだろう。
だが、深いフードの奥から発せられた声はそのイメージからほど遠い、若干低く落ち着いた、それでも男性ではあり得ない、紛れも

ない女性の声だった。
確かにフードで顔は見えない。ローブで体の線も見えない。女性であることを否定できる材料はない。
それでも、その事実は驚きだった。
「あなたたちは、こんなことが楽しいのですか？」
レイは驚きを隠すように戯けて答える。
「少なくとも、あんたみたいな化け物クラスと戦うのは好きじゃないな。若い女だってんなら、なおのことだ」
魔は小さく首を横に振ると、
「……今はそこを通してください。そうすれば、私はあなたたちを許します。これ以上、手荒な真似はしたくありません」
レイが目を細める。
「ほぅ、面白いことを言うな。何を許すというんだ？」
「あなたたちが忌み嫌い“魔”と呼ぶ存在。……でも、彼らだって生きているのですよ」
答えて、一歩、レイの方へと足を踏み出した。
「彼らの命を弄び、踏みにじるあなたたちの所業は到底許せません。でも、今はそれどころでは――」
「ふっ……ふざけるなァァッ！！！」
その言葉に激昂する。
――いや、激昂したのはもちろんレイではない。
「貴様が……ッ！　貴様らが言えたことかッ！！」
ティースだ。
立ち上がり、一度は消えかけた戦意をそこに漲らせて。
「……？」
怪訝そうに振り返った魔に、ティースは両手で握った細波を構える。
せっかく自覚した“絶対に敵わない”という冷静な判断を、怒りの感情が上回った故の行動。
彼はそういう人間だった。

そして、叫ぶ。
「命を弄んでいるのは貴様の方じゃないかッ！　この街で一体どれだけの人が死んだか！　みんな、みんな、生きて、一生懸命に生きて、生きた証を刻もうとしていたんだッ！！　それなのに……それなのに……ッ！！」
その目に、うっすらと涙が浮かぶ。
剣を握る手が震えた。
そのまま、涙に濡れた目に憎しみを込め、ぶつける。
「貴様は、その、全てを奪ったんだ！　その重みが！　痛みが！　貴様らにはどうして……どうして、わからないんだァッ！！」
「え……？」
ティースの怒りを正面から受けて、魔は意外にも動揺したような声を発した。
「……まさか、あなたたちは」
それは、確かに奇妙な呟きだった。
だが、その言葉は怒りに打ち震えるティースの耳には届いていない。
手にした剣――細波が振動する。
その口から、咆吼にも似た叫びが響き渡る。
「だから……貴様らはッ！　貴様のような奴はァァァ――ッ！！」
地面を蹴ったティースに、魔は明らかに慌てたような声色の言葉を発した。
「ま……待ってください！　まさか、あなたたちは知らな――！」
だが、その瞬間。
「っ！？」
魔は“それ”に気付き、振り返って地面を蹴る。
直後、一閃――そして、もう一閃。
とてつもない質量の攻撃が、その立っていた場所を抉る。
レイの一撃だった。
「っ……」

飛び退いた魔のフードの奥から、微かに痛みの声が漏れる。切り裂いたローブから、右腕が覗いていた。
白い肌に血が滲み、そして一筋、流れる。
「ちっ……」
舌打ちして、レイは足を止めた。
立て続けに攻撃しなかったのは、もちろん彼なりの理由があり――
「ぁぁぁぁぁぁぁ――っ！！！」
代わりにティースの剣が、飛び退いた魔へと襲いかかっていく。
「……っ！」
さすがに危険を感じたのか、魔の全身から魔力が溢れた。
――溢れた？
いや、その表現では生ぬるい。
「なっ……！？」
強烈な圧迫感。
それはまるで、噴火のようだった。
信じられない質量の魔力がその体から噴き出す。
「くっ……！！」
攻撃ではない。ただ、体の周りを魔力が覆っただけだ。
だが、ティースの足は止まった。
止めざるを得なかった。
（こんな……っ！！）
近付けないのだ。見えない圧力に押されて、足が前に進まない。
（信じられない……ッ！　こんな――！）
直後、レイが彼の横を走り抜ける。
「ティース！　お前は下がってろ！！」
「……レイさん！」
「！」
その一瞬だけ、魔力が弱まった。
「あ――」
「手こずらせないでくれよっ……！！」

魔力の波に逆らい、手に持った二刀――夜叉で、魔力の渦を切り裂くようにして、レイの体は魔に向かって一直線に飛んでいく。

「待って……っ！！」

もう一度、魔の口からその言葉が漏れた。

「あなたは――っ！」

だが、それを遮って、レイの呟きが風に乗る。

「二体の夜叉よ……暴悪の拳を振るえ――」

夜叉は、唸り声を上げた。

まるで地獄の獣が威嚇しているかのように。

それが剣であるとは到底信じられないような、とてつもない質量を纏って。

――それは渾身の一撃。極度の集中と、極度の体力を消費するために、そう易々とは放てない、必殺の一撃だった。

極限にまで凝縮された聖力が、二つの刀身に集まって確実に魔力の壁を打ち破る。

「っ――――！！」

もちろんそれを察したのだろう。魔も胸の前で両手を重ね合わせた。

途端、今まで形を成さなかった魔力が、自らの身に迫る危険を前に、ついに具現化する。

――水。その体を覆ったのは、大量の水だ。

力と力。

あとはどちらが強いか。ただそれだけの勝負。

直後――まるで隕石が落下したかのような、轟音と衝撃が、小さな街に響き渡った――

その翌日。

昼時にも関わらず空は厚い雲で覆われて薄暗く、この日のフォックスレアは、異様な雰囲気に包まれていた。

――焼け落ちた家。壊れた塀。乾いてこびりついた血の跡もまだ消えていない。が、それ以上に異様だったのは、人通りの少なさである。

外を歩く人影はほとんど見当たらない。いたとしても、それは警邏隊のバッジを身につけた男たちが、何人か組になって歩いているだけ。

一般人の姿など、全くと言っていいほどに見えなかった。

「厄介なことになりましたね」

そんな異様な雰囲気の中、響いたのはマイルズの声。

ラムステッド邸の一室ではディバーナ・ナイトの面々が、それぞれに難しい顔をして今後の作戦を練っている。

レイ、マイルズ、ギレット、パーシヴァル……そして、ティース。

「でもレイ隊長の本気の一撃から逃げおおせるなんて、その魔、とんでもない奴っすね」

「本当に“王族”だったってぇのか？」

ギレットの問いに、ベッドの上に寝転がったレイは頭の後ろで手を組んで、

「おそらく、な。魔力は将族を遙かに上回る。けど、どこか戦い慣れてない。……典型的な王族の特徴……って、俺は習ったけどな」

最後にそう付け加えて苦笑する。

彼とて本物の王族とまみえたことはないのだから、当然だ。

「……ふん。確かにな」

「しかし、まぁ、取り逃がしたのは相手が相手だけに仕方ないにせよ」

マイルズが中指でくいっと黒縁眼鏡を上げる。口元には、やはり苦笑いだ。

「まだ街の中に潜んでいるらしいってのは、おそろしい話だね」
「ま、三日もすりゃ、話を聞きつけた腕利きのデビルバスターたちがこぞって駆けつけてくる。それまでの辛抱さ。……おい、ティース。何か言いたそうだな」
「え？」
ティースが驚いた顔を上げると同時に、レイは言った。
「そんな呑気なことを言っていていいのか、ってとこか？」
「……」
その言葉が、あまりに正確に彼の気持ちを言い当てていたため、ティースは何も言えずに黙ってしまった。
そんな彼に、レイは口元に笑みを浮かべたまま頷いて、
「気持ちはわからんでもないがな。……お前も見ただろ？　やぶ蛇も、毒のないヤツならともかく、今回のはとびっきりの毒蛇だ。つつかないで済むなら、その方がいい」
そう言ったその左肩には包帯が巻かれていた。
大怪我ではないが、あの瞬間、もしあの魔が逃げることを最優先せずに正面から向かってきていたなら、とてもじゃないがこの程度では済まなかっただろう。
「……」
それを見て少しだけ考え、それからティースは控えめに反論する。
「でも、もし、また昨日みたいなことがあったら――」
「それを言うなら、つついても同じことさ。……もし、追いつめられた敵が、今も従えているかもしれない魔を街中に放ったらどうする？　正直、王族ってヤツが本気になったら、今の戦力でどうにかできる保証はないぞ」
「……それは、そうかもしれないけど」
それでもティースは釈然としなかった。
昨日、彼が感じた怒りは、一晩経った今でも消えていない。
（あんなヤツを……野放しにするなんて……！）
「……」

拳を握りしめたティースに、レイはため息とともに言った。
「迷いは、消えたらしいな」
「……え？」
「昨日のお前の剣は、なかなか良かった」
「……」
思い返して、確かにその通りだったかもしれない、と思った。あのときの一撃は、結果的に敵の魔力に阻まれはしたが、それでも今までの不振からすれば充分すぎるほどのものだったろう。
（……迷いが、消えた？）
その理由を考えて、ティースはすぐに思い当たる。
あのとき感じていた――許し難い“悪”に対する、怒り、憎しみ。
それが、一瞬とはいえ、彼の“抱えていたもの”を忘れさせたのだ。
（……ああ、そうか）
そしてティースは理解した。
いつかギレットが口にした“憎しみを極めろ”という言葉。
今までに積もり積もって、そして昨日、街の人々の哀しみを全身に受けて。
そして彼は一瞬とはいえ、ようやく到達したのだ。
その場所。
憎しみを極めた、その場所に。
「……」
「ティース」
「……？」
レイの言葉に顔を上げると、マイルズの、そしてギレットの視線が一様に注がれていた。
「少し、外を散歩してこい」
「え？」
「大丈夫だとは思うが、一応、気を付けて行けよ」
「散歩って……なんで、突然――」

だが、ティースは途中で言葉を止める。
「いいから、行け」
レイは体を起こし、ベッドの上で片膝を立てていた。
いつも通り、捕らえどころのない表情。……それでも、その視線は彼に反論を許さなかった。
「……わかった」
わけがわからないまま、ティースは席を立つ。
部屋を出る直前、視線を感じて振り返ると、ギレットが片目だけで見つめていた。
その向こうでは、マイルズが小さく首を振っている。
（……なんだろう）
だが、その場の妙な雰囲気にそれを問いかけることもできず。
そしてティースはそのまま部屋を出るのだった。

「……ふん。迷いが消えた、か」
「ああ、言わなくていいぞ、おっさん。言いたいことはよくわかってるからな」
ティースに続いて、マイルズとパーシヴァルが退室した部屋の中。
ソファがあるにも関わらず床にあぐらを掻いたギレットは、ベッド上のレイを厳しい視線で見つめていた。
「結局、ああいう奴にはムリなのさ。……おっさんも見ただろ？さっきのあいつの表情」
レイは仰向けで天上を見上げたまま、片手をヒラヒラと振って、
「迷いが消えた理由を自覚した瞬間、また迷いが産まれた。……結局、一時的なものさ。あいつは一匹の犬に噛まれても、犬そのものを嫌いにはなれない。そういう奴だ」
「……向かねぇな」
「ああ、向かない。けど、ああいうタイプってのは、ちょっとした

きっかけで化ける可能性がある。……あんたもそっちに期待してるんだろ？　それに――」

少しだけ言葉を切って、レイは続けた。

「ディバーナ・ロウって部隊には、むしろああいうタイプが向いているんじゃないか？」

ギレットは鼻で笑う。

「おめぇさんが言うことじゃねぇな」

「おっさんもな」

レイも鼻で笑い返して、そして呟くように付け足した。

今度は彼らしい、どこか皮肉めいた笑みを口元に浮かべて。

そして宣言した。

「さて。それじゃあ、こっちもそろそろ疑問解消作業に取りかかるとするか――」

（散歩と言っても、なぁ）

今日のように太陽が出ていない日のラムステッド邸は、本当に“幽霊屋敷”だった。

そんな屋敷の中をティースはさまよい歩いている。彼自身の気分がいまいちすっきりしないということもあるが、はっきり言って気分転換できそうな雰囲気ではない。

それを示すように、彼の思考は自然と昨日の魔へと向かっていった。

（……街のどこかに潜んでいる、か）

ティースは足を止め、二階の廊下から街並みを眺める。

まるで人気のない街。昨日の襲撃は人々にとてつもない恐怖を植え付けたのだろう。

（そりゃ、今までは一匹ずつだったのが、今回は二十匹近くも、だから――）

だが。
ふと、不思議に思ってティースは思わず眉をひそめた。
（……なんで、俺たちが来た途端に？　偶然？）
それは当然の疑問だった。あまりにもタイミングの良すぎる偶然。
（俺たちが来るのを待っていた？　だから昨日になって、突然総攻撃を？　何故？）
だが……その思考はすぐに遮られて、
「ティーサイトさん」
「え？　……あ、パトリシアさん」
窓から廊下に目を戻すと、そこには屋敷の主人パトリシアが立っていた。
女性としてはそれほど大柄でもない彼女は、立ち止まった後、長身のティースを見上げるようにしていたが、やがて、先ほどの彼のように窓の外に視線を移動させる。
そして言った。
「街はひどい状態のようね。……今度は逃がすことなく捕まえて欲しいものだわ。また、昨日のような被害が出ないうちに」
その言葉には、明らかにティースたちディバーナ・ナイトに対する不満が込められていた。
もちろん、ティースとしては反論する言葉もなく、
「……は、はい。すみま――」
「頼むわ」
最後まで待つことなく、相変わらず無愛想にパトリシアは去っていってしまった。どうやらどこかへ出掛けるらしい。
（……はぁ）
さらに憂鬱な気分になりつつ、ティースは自らも歩みを進めることにする。
足は自然と玄関へ。
この屋敷では、気分転換など出来そうにない。
（今は……とにかく魔を倒すことだけ考えよう。他の色々なことは、

レイさんやマイルズさんが考えてくれるんだから……）

そう決心して、ティースの体は屋敷の外へ。

外には緩やかな風が吹いていた。十一月の風はヒンヤリしている。ネービスに比べるとまだ暖かいのだろうが、それでも太陽が出ていない分、思った以上に肌寒かった。

（少し、外れの方に行ってみようかな……）

閑散とした街は歩いていて気分が良くなるものでもない。

すぐに進路を変えて、町外れへと。

小さな宿場町だから、宿が建ち並ぶ中心部から離れるとすぐに風景が変わる。こちらも閑散としてはいたが、家が密集していない分、その寂しさもどことなく紛れているような気がした。

昨日の事件による傷跡も少ない。

「ふぅっ……」

少しは気分が落ち着いてくるのを感じながら……ふと、足が止まる。

（……あれ）

視線の先。そこにはポツンと二つの建物――古びた廃屋と、同じように古びた蔵が建っていた。何の変哲もない、おそらく使われなくなってから五年以上は経つだろう建物だ。

だが、

（あの蔵――）

それを見た瞬間、ティースの脳裏の奥が刺激され、そこに一つの映像がフラッシュバックした。

（なんだか、アレに似てるなぁ……）

一瞬の躊躇。

（……行ってみるか）

結局引き寄せられるようにして、彼の足はその蔵に向かっていた。

建物の高さは七メートルほど。面積はそれほど広くない。壁には蔦が生え、ひび割れ、屋根もボロボロになっていた。隣の廃屋も無人になって相当日が経つようだが、こちらは使用されなくなってさ

らに久しいのだろう。
どこかから微かな悪臭が漂ってくるが、それは気にせず扉の前に立った。
（鍵は……壊れてる。入れる……かな）
キィ……と、扉が軋む。意外なほどすんなりと開き、外の薄明かりがゆっくりと蔵の中を照らし出す。広さはせいぜい二十畳といったところか。半分崩れかけた木箱が隅に積まれているが、他には何もない。
カビの匂いが鼻を突く。
だがそれを感じて、なおもティースの胸は高鳴っていた。
（中まで本当に同じだ。もしかして全く同じ設計……？）
それは――彼の子供時代の記憶。
何度も訪れた蔵。彼ら以外に誰も訪れなくなった蔵。大事な思い出の詰まった場所。
楽しい記憶がそれほど多くないその時代にあって、数少ない、決して捨てることのできない大事な思い出の場所。
それと見間違うばかりのものが、今、目の前にあった。
彼がほんの一時だけ現状を忘れ、ほんの少しばかり浮かれたからといって、誰も責めることはできないだろう。
「……」
胸を踊らせながら足を踏み入れると、ホコリが辺りに漂う。ガランとした蔵の中。内部は入り口からその全てを見渡せる。
本当に、何もない。
だが――
（もし同じ設計なら……ここに……）
ティースが足を運んだのは、蔵の奥。その左端。
（……あった）
胸の鼓動が増す。
もう疑う余地はなかった。
その取っ手は、ちょっとした隠し部屋――この天井の上に隠され

た、小さな屋根裏部屋への入り口を開くスイッチだ。
（動けば……いいけど……）
取っ手を引く。と、カコン、と小さな音がして、壁の一部が凹んだ。
（……やった）
その部分に手を掛けて軽く力を込めると、まるで引き戸のように開いて、そこに小さな階段が現れた。
――昔、何度も何度もこの扉を開けたことがあった。
人目を忍んで。
三つ年下の少女を連れて。
手にしていたのは、パンやミルク、あるいは土産話。
決して誰も来ない、人々の記憶の中からも忘れ去られた蔵は、ティースたちにとっては絶好の隠れ家だった。
雨の日には雨漏りしてひどかった。冬、毛布があれば凍えるようなことはなかったが、それでも寒いことには変わりはなかった。
それでも文句を言うこともなく。
軋む階段を上ると、そこには八畳ほどの部屋がある。部屋といっても明かりは小さな窓一つから射し込む自然の光のみ、床から天井までは百五十センチあるかないかで、もちろん今のティースは立って歩くこともできない高さだ。
だが、そんな狭い部屋で、彼らはいつも待っていた。
ティースと、そしてシーラが訪ねてくるのを、いつも待っていた。
いつも、待っていたのだ。
「……え？」
それは確かに“既視感”だった。
その光景を、ティースは何度も、何度も見てきたから。
そこで待っている人物も。
ハッとして振り返る、その後ろ姿も――
「な……」
視線がぶつかった瞬間、体に電流のようなものが走った。

ただ、そこにいたのは、彼の記憶にあるものと同一ではない。
動きに合わせてたなびいたストレートの髪はこれほどに長くなかったし、背だってこの天井の低い部屋の中をギリギリ立って歩けるほどだった。
だが……それは、やはり既視感だったのだ。
「……」
尖った耳は、魔の証。
隅に置いてあるネズミ色のフードとローブは、昨日、目にしたばかりのものだ。百八十センチほどもある、女にしてはかなり大きな背丈も、ローブに隠されていたであろう僅かに細身の体格も。
その全てが、そこにいた人物の正体――彼にとって憎むべき存在であることを明確に示していたにも関わらず。
――既視感は消えない。
目の前の二つの大きな瞳が、驚きに見開かれる。
「……ああ」
その呟きにも、ティースは何も反応できなかった。
昨日からずっと携帯している剣――“細波”に手をかけることもなかった。
ただ、呆然としていただけ。
そして先に反応したのは、目の前にいた“魔”の方――
「ここを知っている……もしかして……いえ、やはり……あなたは――」
振り返って、唇を震わせる。
昨日までフードの中に隠れていたのは、穏やかな印象の女性だった。
たくさんの人を殺し。
たくさんの人を苦しめ。
暴虐の限りを尽くす、魔。圧倒的な力を持つ、王魔。
だが、そんなことが信じられないほどに、その女性は暖かく、優しい目をしていた。

……懐かしい目をしていた。
そこから、一筋の涙がこぼれ落ちる。
そしてその口からは、信じられない言葉が漏れた。
「ティース様……私を、覚えてますか――？」
「！」
名前を呼ばれて、ティースの心は大きく脈打った。
そこにあった――彼も薄々は感じていた――紛れもない“事実”に気付いて。
「……そんな、馬鹿な」
否定の言葉がその口をついて出る。だがそれに反し、心は少しも否定してはいなかった。
面影が、確かにあったのだ。
その少女が成長して、そして少し信じられないほどに背が伸びたなら、おそらくこんな感じだろう、と。そんな想像をするのは、彼にとってあまりに容易なことだったから。
「……」
何かを待ち望むかのように、その女性は涙の浮かんだ瞳で見つめている。
――何を？
ティースにはわかる。
それは先ほど、名前を呼ばれたときに彼もまた感じたことだから。
ゆっくりと、その口が一つの名を刻み出す。
「……リィナ……リィナ＝クライスト……」
「はい……っ！」
感極まった声で女性――いや、リィナは答えた。
「リィナです、ティース様……！」
「な、なんで……君がこんなところに……そんな、馬鹿な……」
それでも信じられずに、ティースの頭は混乱していた。
……四年。最後に彼女と別れた日から、それだけの月日が経っていた。

ともに成長している。その頃のティースは剣など携えていなかったし、身なりも髪型も今とは違う。背も伸びているし、童顔とはいえ成長期直中の当時に比べれば顔立ちも少しは変わっている。

彼女が昨日の慌ただしい戦いの中で彼のことを気付けなかったのは、至極当然のことだろう。

「……昨日、あなたの名が聞こえて、まさかと思いました。でも、本当にこんなところで偶然出会えるなんて……ああ、まるで夢のようです」

魔――いや、リィナはまるで神に感謝するように手を組み、目を閉じた。

溢れた滴が頬を伝う。

彼女は再会の喜びを、少しも隠そうとはせずにいた。

「……」

対照的に、ティースの胸に渦巻いていたのは複雑な想いだ。

純粋に嬉しい気持ち。それはもちろんある。

信じられない偶然に感謝する気持ち。

懐かしい人の成長を驚く気持ち。

だが、今はそれだけではない。

――苦悩と慟哭、“痛み”を伴う過去の映像、そこにあったいくつかの光景と、昨日の惨劇。

そして産まれる、ほんの僅かな“疑心”。

「……」

目の前の魔は、昨日までは憎むべき存在だった。とてつもない憎悪の対象だった。そして、これまでに街を襲った悲劇は否定しようのない事実だった。

（リィナが……そんなこと――）

信じたい気持ちはとてつもなく強い。

何よりこのリィナという少女は、ティースが“魔”という存在を信じようと思った、そのきっかけであり、彼の魔に対する見方を決定付けた存在であったから。

だが、四年という歳月が、そこに微かな揺らぎを起こす。
……あるいは、変わってしまったのだろうか、と。
裏切り、殺し、奪い尽くす……それが、ここ最近のティースが見てきた魔の全てだった。
彼女も結局は“魔”だ。
だから、そんな疑心に捕らわれてしまう。
思わず、腰にぶら下げた“細波”の重さを意識してしまう。
（――まさか）
ティースには考えられなかった。自分が彼女を斬るなどと。
だが……もしもそれが真実だったなら。彼女を斬ることが、人々を救うことになるのなら。
それが、自らの悪夢を振り払う唯一の方法であるのなら。
思考が、グルグルと回る。
（……確かめなきゃ）
最後にようやく辿り着いたのは、その結論。
（確かめなきゃ、ならない――）
口の中がカラカラに乾く。
その返事が、彼にとってはとてつもなく怖かった。
「リィナ……」
そして、掠れ、震えた声でティースはようやく口を開く。
「まさか、君が――」
だが、彼の問いかけはそこで“強制的に”途切れることになった。
――誰かが踏み込んできた？
――遠くで悲鳴が響き渡った？
いや、違う。
辺りは平穏そのもの。
事実、この外れにある蔵にティースが入り込んだのを目撃した人物はいなかったし、どうやらこの蔵のカラクリを知っている者は、少なくとも街を見回っている警邏隊の中にはいないようだった。
では、何故？

答えは簡単だ。

疑心に捕らわれていたティースの心情など知る由もなく、リィナの方は普通に“感動の再会”を果たしていたということ。

「ティース様……っ！」

「え……あっ！」

――つまり、彼の“特殊能力”の発動条件が満たされてしまったのである。

その5『必死の嘘』

――六年前。それは冬も近付き始めた、ある日のこと。

『ティース！』

誘われて、ティースは森の中へと足を踏み入れていた。

そう深いところではないし、猛獣が出るようなところからは離れている。

『ティース！　さぁ、早く！　早く私を捕まえてごらんなさい！』

笑いながら目の前を駆けるのは、最近伸びてきた髪を馬の尻尾のように結った三つ年下の少女だった。彼はその様子に苦笑しながらも、少し手加減して追いかける。

風は冷たい。夕日も沈み始めていて、こうして遊んでいられるのもそう長い時間ではないだろう。

と、そんなときだ。

『ぁ……』

少女が突然立ち止まった。

『？』

ティースが不審に思って近付くと、少女は大きく目を見開き、すぐに踵を返して彼の後ろに隠れた。

そして、

『ティース、あれ……』

『え？』

それを見た瞬間、警戒心が胸に溢れる。

『……あれは』

そこにいたのは、一見、警戒する必要などなさそうに見える二人の子供。

一人は、少女より少し小さいぐらいの、小柄な、おそらくは男の子。

そしてもう片方は、ティースと同じぐらいの年齢の、おそらくは女の子。
だが――
『……』
無言で後ずさる。
恐怖がティースの体を駆け抜けていた。
――魔。
その二人の子供は、その特徴である大きく尖った耳をそこに備えていたのだ。
『……下がって』
後ろの少女にそう言いながら、ティースは二人の魔を強い視線で見据えつつ、自らも少しずつ後退していった。
――魔は人に危害を加える存在。
――その生命を脅かす存在。
彼は大人たちからそう聞いていた。
だから。
だけど――
『ぁ……』
小柄な男の子は、そんな彼らの反応を悲しそうに見つめた後、
『……違う』
その瞳に涙を浮かべて言ったのだ。
『違うよ……ボクは、キミらの敵じゃない……！』

「随分と長い散歩でしたね、ティースさん」
「ん？　あ、ああ、パースくんか」
“幽霊屋敷”に戻ったティースが考え事をしながら歩いていると、廊下の向こうからパーシヴァルがやってきた。
パンを右手に、左手には肉料理らしきものを鷲掴みにして、

「この屋敷の唯一いいところは、こうやって行儀の悪いことをしても、誰にも咎められないってことっすね」
笑いながらロールパンにかじり付く。
確かに、廊下を歩きながらモノを食べるなど、ミューティレイクではなかなかできないことだ。
ティースは苦笑を返しながら、やがて思いついて問いかける。
「それ、もしかして夕食か？」
「ええ。例によって食堂に適当に用意してありますよ。……女主人さん、どう見ても一同に介して食事ってタイプじゃないですもんね」
その言葉にピンと閃いた。
「そうか。……じゃあ、俺も君を見習うとしようかな」
「？　またどこか行くんですか？」
すれ違いざま、ティースは頷いて、
「外の空気が意外に気持ち良くてね。お腹が空いたもんだから戻ってきたけど、そうやってパンでも食べながら外を歩くのも悪くなさそうだから」
「へぇ？」
パーシヴァルは少し意外そうに首をかしげたが、特に疑ったりそれ以上突っ込んだりすることはなく、
「でも、本当に暗くなる前に戻った方がいいっすよ。レイ隊長は大丈夫って言ってましたけど、ティースさんは例の魔に顔を知られてるから、狙われるかもしんないし」
「ああ、気をつけるよ」
そうしてパーシヴァルと別れ、食堂に向かう。
（……なるほど。確かに適当だ）
用意されていたのはバイキング形式の料理。パンやミルク、他にもいくつかの料理が並んでいたが、すでに冷めかけている。他の面々はすでに終えたのか、あるいはこれからか。そこには二人ほどの使用人がいるだけで、食事をしている人間はいなかった。
だが、それはむしろ好都合。

「これ、外に持っててもいいのかな？」
「え？　あ、ええ。はい」
彼の問いかけに、二十歳過ぎぐらいの使用人女性が頷いた。
どことなく素人っぽい感じの反応で、主人のパトリシアは使用人の教育にもあまり興味を持っていないのかもしれない。
「ありがとう」
他の料理には目もくれず、パンだけを三つ抱えて食堂を出た。その中の一つを口に運びながら、廊下を抜けて屋敷を出ていく。
（もうしばらくしたら日も暮れるな……）
夕日の中、相変わらず人気のない街の中をしばらくブラブラと歩き、かなり遠回りをしながらその足は外れの方へ。
（……多分、付けられてない）
確信ではなかったが、少なくとも彼自身は気配を感じなかった。付けられる理由はないものの、これからの向かう先を考えると警戒せざるを得ない状況だったのだ。
辿り着いた先はもちろん、街の外れにある廃屋。その隣の蔵。入り際に再び周りに注意し、素早く中に入ると、隠し部屋の入り口を開いて階段を上っていく。
「……リィナ」
屋根裏では、リィナが出ていったときと変わらぬ体勢で彼を出迎えた。
「ティース様」
ティースは一つ頷いて、天井の低い部屋の中、腰をかがめて入っていくと、
「パンを持ってきたよ。お腹、空いてるだろ？」
「あ、はい。すみません。……ティース様は？」
「ああ。俺は来る途中で食べてきたよ」
パンを二つリィナに手渡し、その場に腰を下ろす。
「それより――」
そしてすぐ、問いかけることにした。

彼がここで気絶して目覚めた後、彼女から聞かされた“真相”について。

「本当なのか？　獣魔を操っているのが、あの人だなんて……」

「はい。……ティース様。彼らは何も、全てが全て、好んで人を襲うわけではないです。もちろん好戦的な獣魔が多いのは否定しません。私も昨日、襲われる女の子を助けるために、獣魔を一匹殺すことになってしまいました。でも“水の七十五族”と呼ばれるその獣魔は、普通の状態では決して人を襲ったりはしない種類なんです」

「……それは初めて聞く話だなぁ」

水の七十五族。ナメクジのような体躯。粘着質の体は酸を纏っているが、動きは遅く、獣魔の中でもおそらくもっとも底辺に近い場所にいるタイプ……それが、ティースの――というよりも、それについて学習した者全てに共通する認識だった。

そこにはもちろん、彼女が言ったような内容は含まれていない。ティースを含め、この世界の人々がそれを学習するときは、その全てが人に害を為すものだ、という前提があるから。

だが、ふと思い出す。

（そっか……水の七十五族って確か、人前に姿を現すことが少ないって書いてたな……）

あるいはそれが、彼女の言葉の正しさを裏付けているのだろうか。

ティースは納得するとともに頷いて、

「じゃあ、それが人を襲ったというのは……」

少しだけ、リィナの視線が落ちる。

「人魔の支配によって強制的に動かされているのか、あるいは――」

そして表情が険しさを纏った。

普段は穏やかだが、露わにする感情は意外なほどに強い。それは、ティースが知っている昔の彼女と何ら変わりのないものだった。

「人が、何らかの薬品を用いて“改造”した場合です」

「……それはつまり」

目を見開いて言葉を切る。

そういう方法を使って、魔を使役する人間のことをどう呼ぶか、ティースは知っていた。
「デビルサイダー……？」
「……」
無言でリィナが頷く。
にわかには信じられないことだった。が、彼女を信じるという前提であれば、当然、獣魔を操っていたのも彼女ではないことになる。そして、昨日のように種族も強さもバラバラの獣魔たちが、自らの意志でいきなり結束して人を襲うことなどまず考えられない。
やはり他に統率する者の存在が不可欠……とすると、確かにその可能性も充分に考えられることだった。
――ただ、もちろんそれは全て、彼女を信じるのならば、という条件付き。
「……」
ティースの視線の先で、リィナは一つ目のパンを食べ終えるところだった。
まだ、最終結論は出ていない。
（……信じる？）
自問する。
魔を信じようとする彼の心は、とうの昔にひび割れていた。
何人もの人が死んでいった。
中には親しい人も混じっていた。
彼らを殺したのは。彼らの未来を奪っていったのは、全て――
（全て、魔だった――）
ゆっくりと、顔を上げる。
「……リィナ」
「はい？」
彼女はちょうど、二つ目のパンを口に運ぼうとしている。
そこに重なる、懐かしい記憶。
――胸の奥でぶつかり合う、相反する二つの激しい感情。

こじ開けるように、ティースの口は重々しく開いた。
「俺は……この道を選んで、本当に色々なことを見てきたんだ」
「……はい」
その表情から、彼女もまた何かを察したのだろう。パンを口元に運ぼうとしていた手が止まり、それはゆっくりと膝の上へ。視線は真剣な色を帯びて真っ直ぐに向けられた。
それは、そう。
彼女は一度、彼のむき出しの怒りをその身に浴びていた。彼がそれほどの怒りを発した理由……それを考えるならば、その先に続くであろう言葉の趣旨をおおよそ察したのは当然のこと。
そのまま、重い口が開く。
「……心から尊敬できる人がいた。行く末を見守ってあげたい子がいた――」
何か堪えるように一旦言葉を切って、一つ息を呑み込み、続ける。
「夢や希望を抱いている人もいた。荷物を背負ってそれでも懸命に歩こうとしてた人もいた。でも、みんな殺されていった。魔に、殺されたんだ。俺の見えるところで。俺の手の届く場所で」
視線が少しだけリィナを離れ、ゆっくりと斜め下に落ちた。
「……信じようと思った魔がいた。でも、そいつはとんでもない奴だった。人の命や想いや、色々な大事なものを弄ぶ、とんでもない“悪”だった。……俺は、騙されたんだ」
拳が震える。
それは未だに消えていない、怒りの証。
そして一瞬の躊躇い。
「……こんなこと言うと、いつまでも独り立ちの出来ない子供みたいだけど……でも、リィナ」
視線はもう一度、目の前の人物へと向けられる。
そんな彼の瞳は自身の言葉通り、まるで頼りない子供のように揺らいでいた。
その眼前にいる少女。

それはおそらく、彼の心にとって、最後の砦。
「俺は、君以上に信じられる魔を、他に知らない。……君のことなら、今はまだ信じられると思う。今は、まだ――」
「……」
ゆっくりと視線が落ちる。
沈黙。
そして、ポツリと、呟くように言った。
「それでも……リィナ。俺は……君を信じてもいいんだろうか……？」
「……」
リィナの視線は、変わらずに真っ直ぐ。
重苦しい沈黙。
……だが、一瞬の後。
「ティース様……」
厳しさを纏っていた少女の視線が、ふっと緩んだ。
そしてその右手が、ゆっくりと伸ばされる。
「リィナ……？」
ティースは微かに身じろぎした。
彼女には先ほど気絶させられてしまったばかりだった。
が、直前で手は止まった。
「あなたに触れられないのが……とても哀しい」
その口から紡ぎ出されたのは、まるで我が子を慈しむような――慈愛に満ちた暖かい声。
「……」
白くて細い、とてつもなく美しい指。
「触れられたなら、私の気持ちを全て伝えられる気がするのに……ままならないものですね」
顔の線をなぞるように、リィナの指が降りていく。
「どうか、泣かないでください……」
「え、泣いて――？」

ティースは慌てたが、確認するまでもなく涙など流してはいなかった。

だが、彼女の指はそのまま、まるで涙を拭おうとするかのように、ギリギリ触れない距離で目元をなぞる。

そして、穏やかなその瞳が優しげに細められた。

「私があなたの期待に応えられるかどうかはわかりません……でも、ティース様。少なくとも、私の気持ちがあなたを裏切ることはない。決して、ない」

「……」

ドクン、と、ティースの胸が強い鼓動を打つ。

奥が熱くなった。

それは――どんな感情だったのだろうか。

ただ、呆然としたように、彼は目の前の少女を見つめていた。

そして――

「話してもらえませんか？　あなたが今までに感じたこと、苦しかったこと、哀しかったこと……私は、その全てが知りたい。全てを知って、あなたの役に立ちたい」

「っ……！」

まるで染み出すように。

「……リィナ……」

いつしか、ティースは彼女の言葉通りに涙を流していた。

年下の少女の前で恥ずかしいとは思ったが、堪えきれなかった。

久々に流す、哀しくない涙――

「リィナ、俺……俺は――ッ！」

「はい……ティース様」

頭が熱くなって何もわからないまま、いつしか彼は全てを打ち明けていた。

サイラスのこと、ザヴィアのこと、ナナンのこと――助けられた人、助けられなかった人、許せなかったこと――その全て。

そのたびに、胸に大きく居座っていた黒い塊が溶けていく。

怒り、憎しみ、苦しみ、哀しみ、悩み――その全てが、すぅっと溶けていく。不思議なほどに、あっさりと、呆気なく。

そして彼は、その過程で初めて気付いた。

支えてくれる者の存在。その有り難さ。

それは彼にとって、必要なものだった。一人で全てを抱えられるほど、ティーサイト＝アマルナという人物は、まだそれほどに強くはなかったから。抱えてしまったものを、共に支えてくれる人間が、彼には必要だったのだ。

そうして――どれだけの時間が経っただろうか。

「あ……はは」

全てを吐き出し、涙が乾いた頃、ティースはようやく落ち着きを取り戻した。

途端に恥ずかしくなったらしく、誤魔化すように笑いながら乾いた涙の跡を拭うと、

「ご、ごめんな、リィナ。久々に会ったっていうのに、愚痴ばっかりで……」

リィナはクスッと笑って、

「いいえ。逆に安心しました」

「え？」

「ティース様が、昔とちっとも変わってないようで」

「……」

ティースはまだ赤く腫れたままの目を彼女に向け、それからようやく余裕ができたのか意識的に苦笑を浮かべて答える。

「はは……それ、成長してないって意味？」

「あ。い、いえ、そういうことではなくて」

口を抑えて、リィナは少し慌てたような顔をする。

その仕草もまた懐かしい。落ち着いているように見えて、その実、彼女は意外におっちょこちょいで、感情的で、そして頑固だった。

暖かさが、さらに胸に溢れ出す。

そして……同時に溢れたのは、決意の心。

「もっと色々話したいこととか、聞きたいこととかあるけど――」
ティースは腰を上げ、天井に頭を擦りそうになりながら階段へと向かった。
「それは、全てが解決した後にしよう。……リィナ。俺は屋敷へ戻るよ。戻って、全てを暴いてみせる。君の濡れ衣を晴らしてみせる」
「はい。ティース様」
リィナは素直に頷いた。
その目は、再会したばかりだというのに、彼のことを完全に信じ切っていた。
四年間のブランクなど、まるでなかったかのようだった。
「全て、お任せします。……私は、ここであなたの帰りを待ってます」
「はは。それって何だか、恋人の帰りを待つみたいだなぁ」
笑いながらそう言って、直後、しまったと後悔する。
「ふふ、そうですね」
「あ……」
彼女が躊躇いもせずに頷いたのを見て、自分の口走ったセリフに気付き真っ赤になる。
「ご、ごめん！　いきなり変なこと言って！」
だが、リィナは不思議な顔をして、
「ど……どうしたんですか、突然？」
「い、いや、だって俺、今、変なことを――！」
「？」
リィナは怪訝そうに眉をひそめると、
「恋人というのは変なことでしたか？　確か、“大事な人”という意味じゃなかったですか？」
「……あ」
その言葉に、思い出す。
――彼女が人間とは少々違った“常識”を持っているらしいということを。

「いや……うん。だいたいそれで合ってるんだけど」
「でしたら、ティース様は私の恋人です」
「う……」
ニッコリと微笑んだリィナに、彼女が少々勘違いしていることを理解しながらも、彼はますます顔を赤くして、
「……と、とりあえず行くよ。あ、食事時にはなるべく来るようにするから」
「はい」
「そ、それじゃ」
ティースは慌ててその場を立ち去る。
（……ふぅ）
外に出て感じたのは、ヒンヤリとした空気。何故か実際の気温以上に風が頬に冷たく感じた。
一息ついて、そして古ぼけた蔵を見上げる。
（リィナ……変わってなかったな）
それを実感するだけで、救われる。自分が今まで、揺らぎながらも信じてきたことは、決して間違いではなかったのだと。
そして、たった今別れたばかりの彼女の姿が脳裏に浮かぶ。
再び、頬が微かに熱を帯びた。
（で、でも、見た目は結構変わってたかな。ちょっと……じゃなくて、かなり綺麗になってたかも……）
そんなことを考えていられたのも、彼の心に余裕ができていた証拠だろう。
（……よし）
少し考えた後、彼の足は歩みを進めていく。
太陽は、すでに西に落ちかけていた。
迷いはもう、微塵もなかった――。

日は落ち、厚い雲に覆われた夜空には月も見えない。
「……まったく。大した女だ」
ラムステッド邸にある客室の一つ。ルネッタ＝フィッシャーの部屋には、歪んだ笑みを浮かべ、部屋のドアに背を預けたレイがいる。腕を組み、微かに顎を上げ、視線はまるで見下ろすようにルネッタに向けられていた。
「まさか、人の部下を勝手に囮に使おうとは、な」
「その文句を言いに、わざわざ訪ねてきたのですか？」
答えるルネッタはまるで涼しい顔のまま、鏡台に向かっていた。屋敷のバスルームを使った後で、長い髪を梳かしている。
そして鏡に映るレイをチラッと見やって、
「私が強制したわけではないですよ。私が提案し、彼がそれに乗ったまでです。実際、私は彼に奇襲のチャンスをしっかり作ってあげました」
「いいや」
だが、レイは答える。
「別に文句を言いに来たわけじゃない。ただ、見掛けによらないもんだ、ってだけさ」
「大人しいお嬢さんだとでも思いましたか？」
「本当にそうだとしたら、口説き方にも熱が入るってもんだがな」
静かな廊下に、使用人らしき微かな足音。
窓から覗く木の枝が風で揺らいだ。
ルネッタはしばらく無言の後、
「男には興味ありませんから」
「……おやおや。それは勿体ない」
戯けてみせて、レイはゆっくりと壁から離れた。
「男にひどい目にでも合わされたのか？」
「いいえ、別に。ただ、好きではないだけです」
「やれやれ、神様も酷いことをするもんだ。君のような美人が、花を咲かせることもなく枯れてしまう運命だなんて、な」

「……」
ルネッタは微かに眉をひそめた。
確かに彼の口調は、口説いているのか挑発しているのか、あまりに微妙な言い回しだった。
やがてルネッタは髪の手入れを終え、鏡台の前から立ち上がると、
「つまらない話をするだけなら、帰ってもらえませんか？」
ゆっくりと歩いて、ベッドのそばに置いてあった剣を手に取る。
レイの視線は黙ってその動きを追った。
（もう一本のレイピア……か）
「昨日の王魔は、私が必ず仕留めます」
「ほぅ……何か対策があるってのか？」
「対策？　……対策というほどのものではありません」
ルネッタは手にしたレイピアを引き抜く。
それは昨日のものとは違い、微かに赤味を帯びていた。
（……なるほど。キャリアを持つだけのことはある。さすがに考えているな）
相性がある。
確かにその武器であれば、あるいは昨日の魔力の壁を破れるかもしれなかった。
レイは薄い笑みで片手をヒラヒラと振りながら、
「だったら、そいつは君に任せるとするさ」
「……？」
ルネッタの手がピタッと止まり、怪訝そうな視線が彼へと向けられた。
「あなたは挑むつもりはないのですか？」
それは彼女にとっては当然の疑問。
王魔を倒したとなれば、デビルバスターとしての格が跳ね上がる。
もちろん相応の危険は伴うし、相応の実力も必要になることではあるが、彼は昨日、実際に王魔の魔力の壁を破っており、それほどの実力を持つのなら、倒して名を揚げようとするのがデビルバスター

としては当然の行動だった。
だが、レイはあっさりと答える。
「俺は君と違って、命の方が大事なもんでな」
「あなたも、見掛けによりませんね」
嘲るように呟いた言葉を、レイは涼やかに流すと、
「……ところで、ルネッタ。君は、昨日の魔の襲撃をどう考える？　不自然だとは思わなかったか？」
「……」
眉間に一瞬だけ皺が寄った。もちろん彼女もその点を不審には思っていたのだろう。
だが、すぐに首を振って、
「私たちが来たことであいう行動に出たのだとすれば、それは自分の力を誇示してみせたかったのでしょう。……他になにか？」
「なるほど」
レイは笑って背を向ける。それ以上、特に話すことはなく、彼女の方も呼び止めようとはしなかった。
部屋を出て、その足は薄暗い廊下を音も立てずに渡っていく。
（あれほどの力を持つ王魔が、な）
「レイさん！」
「……ん？」
振り返ると、その視線の先には長身の彼の部下がいた。
「ティースか」
同時に違和感を感じる。
（……なんだ？　こいつ、目の輝きが変わったな）
咄嗟に目を細め、その表情を観察する。
気分転換のためと勧めた散歩。その効果があったのか。いや、それにしても、その変化はあまりにも急激すぎた。
そのときの彼の表情は、まるで――レイが彼と初めて会ったあの日、シーラを助けに行ったときの、そのときの迷いのない姿を彷彿とさせるものだった。

「話があるんだ。……聞いてくれないかな？」
「……」
その言葉に、レイは一瞬の躊躇の後、口元に笑みを浮かべて頷いた。
「ああ。愛の告白以外だったら、な」

ティースはレイを連れて自室まで戻ってくると、椅子を勧め、そして自らはベッドの上に腰を下ろした。
彼をここまで連れてきたのは、もちろんリィナから明かされた“真実”を話すためだ。
……どう話すべきか、彼はギリギリまで迷っていた。唐突に言っても信じてはもらえないだろうし、もっともらしい根拠を示さなければ逆に突っ込まれることになるだろう。事実を話してしまおうかとも考えたが、昨日、実際にリィナと一戦交えた彼にそれを話したところで、彼女の言葉を信じてもらえる可能性は低いと思った。
だから、ティースは話をでっち上げることにしたのだ。
「ほぅ……」
椅子に座ったレイは足を組み、ティースが用意した飲み物――さすがにアルコールではないが、それを飲みながら頷いた。
「つまり？　昨日街を襲撃した獣魔どもは、あの人魔の使役するものじゃないと、お前はそう言いたいわけか？」
「ああ」
「その根拠は？」
当然の質問。
「それは――」
ティースはゴクリと喉を鳴らした。
その挙動をすら、レイの視線は見逃していないように思える。
（この人を……誤魔化さないといけない……）
口の中がカラカラに乾いた。
“明晰”

隊長であるレインハルト＝シュナイダーについて、ティースが抱いている印象を一つの言葉で表すとしたら、おそらくそれしかない。
軟派者であるとか、皮肉屋であるとか、それはもちろん彼のことを語る上で不可欠な言葉だ。が、ナイトに来てから一ヶ月と少し。それだけでないことにはもちろん気付いていた。
たとえ軟派な言葉を述べているときでも、皮肉な言葉を口走っているときでも、そこに必ず付いて回る“明晰”の二文字。
飄々としながら鋭い感覚を持つその視線は、いつでも目の前にいる人物の真意を見抜いているかのようだった。それは考えすぎの部分もあるのだろうが、事実である箇所もおそらく少なくはない。
（俺なんかがいくら考えたって……きっとこの人に及ぶはずはない。だったら――）
気付かれない程度にグッと拳を握り、決意を固める。
（とにかく、堂々と押し切るしかない！）
元来、嘘をつくのが苦手なティースのことである。どう頑張ったところで、完璧な嘘などつけるはずはない。だったら逆に何も考えず、疑う余地もないほどに堂々と嘘をつき、多少強引にでも納得させるしかない。
それが最終的に達した、最善と思える結論だった。
「俺、見たんだ。あの人魔が、一匹の獣魔から女の子を助ける場面を」
「女の子？　どういうことだ？」
「七、八歳ぐらいの女の子が、水の七十五族に追われていたんだ。それを、あの人魔が助けたんだ」
それは事実。
レイの表情が、少し怪訝そうになる。
「お前自身が、それを目撃したのか？」
「ああ」
声が震えないよう腹に力を込めて、強く頷くティース。
だが、

「ほぅ」
感心の息を漏らしたレイは机に肘を乗せ、頬に拳をついて少し腑に落ちない顔をする。
「お前みたいな直情的な人間が、よくその場面を見守っていられたな。少しは成長したのか？」
「え……？」
「いや、お前のことだ。そんな場面に出くわしたら、後先考えずに飛び出すもんだと、俺は思っていたからな」
「それは……遠かったから、助けに行く暇もなかったんだ」
「ルネッタもそれを見たのか？」
「え？」
「その頃は確か、お前と一緒にいたはずだろ」
「あ、いや……ルネッタさんは、余所見をしていて――」
「余所見？　あの状況で、もっとも手強いはずの人魔から目を離したと？」
ティースの胸の鼓動が速くなる。
「ち、ちが……ルネッタさんは存在自体に気付いてなかったんだ。俺もかなり遠目だったし、そのときはそれが話に聞いていた人魔だとは思わなくて、てっきり街に滞在している旅人が女の子を助けたものだと……でも、後で気付いたんだ。あのときのは間違いなく、昨日の人魔だったんだ」
「……まぁ、いい」
冷や汗が背中を流れ落ちた。
（こんなことで……どうする……！）
これから、もっと不自然な嘘をつかなくてはならないのだ。この程度のことで怯んではいられなかった。
「で？　例えばその人魔が元凶でなかったとして、お前は他にどんな可能性を俺に提示してくれるんだ？」
「……」
ここが一番重要なポイントだった。ここさえ乗り切れば、先ほど

の小さなミスなど取るに足らない。
まず、証拠は何一つない。事実、ティースが根拠としているものだって、ただ一つ、リィナの証言だけだ。
それを、何とかして信じさせなければならない。リィナの存在を伏せ、もっともらしい嘘をつくことによって。
（小細工は、なしだ）
喉の奥に力を入れ、声が震えないように意識し、視線はまっすぐに見つめ返す。
そして、ティースは結論から答えた。
「パトリシアさんは……おそらくデビルサイダーなんだ」
「……ほぅ」
レイの反応は意外に冷静だった。が、それはティースの言葉を信用したのとは違う。
「それは突拍子もない話だ。……もちろん根拠はあるんだろ？　なんといっても、彼女は今回の依頼主で、俺たちを呼び寄せた張本人だ。その辺りの矛盾の答えは、出ているんだろうな？」
「もちろん」
それについてはもちろん考えていた。
パトリシア＝ラムステッド。今回の依頼主であり、このラムステッド邸の女主人。
彼女がデビルサイダーであることは、リィナを信じる以上、もはや動かしようのない事実だった。そうでなくば彼女が嘘をついているか、あるいは勘違いということになってしまう。
とすれば、当然にパトリシアの行動の動機を考えなければならなかった。
ティースは頭の中で、リィナから聞いた話をもう一度整理する。
まず、リィナは昨日より前に一度、この街を訪れている。それはパトリシア自身の報告にもあったし、レイたちも当然に知っていることだろう。
そのときの真相を、ティースは彼女自身の口から聞いていた。

彼女は旅の途中、人気のない森でパトリシアを目撃し、彼女が立ち去った後に、明らかに自然ではない奇妙な死を遂げた獣魔の死体を発見したのだという。それを問い詰めに向かったのが、一度目の訪問。だが、そのときは逆に魔であることを暴かれ、街の人々に騒がれ、慌てて街の外まで逃げたのだ。

それが十日前の夕方のこと。

そしてその夜に、今度は獣魔が街を襲った。その後も、幾度か。ティースたちが駆けつけるまでに計七回。三十六人の命が失われた。その獣魔はおそらくパトリシアの差し金。

だが、彼女はそれまで、おそらく街の人々に危害を加えていない。いや、加えていたにせよ、それは表に出るほどのものではなかった。

とすれば、何故、突然？

その理由を考えるのは、比較的簡単だ。

『……あなたたちのようなデビルバスターはあまりに数が少なく、招こうとしてすぐに、というわけにはいかないようだから――』

ここに来た日のパトリシアの言葉が、ティースの脳裏に蘇る。

（おそらくリィナを殺すために、どうしてもデビルバスターを呼びたかった……そのために、事を大きくする必要があった……）

拳に力が入る。

もし、その想像が本当だとしたら、それはとんでもないことだ。あまりに自分勝手で、そして到底許せない行為だった。

そしてそう考えてみると、昨日の大規模な襲撃についても説明がつく。

つまり、レイやルネッタたちデビルバスターが見ている前で、事の重大さを知らしめ、そしてなるべく早くリィナを退治するように仕向ける――そう、考えられるからだ。

だが、しかし。

その推理は全て、ティースがリィナから話を聞き、そして彼女のことを信じているからこそ成立するものだ。それをそのままレイに伝えたとしても、単なる絵空事で片づけられてしまうだろう。

だから、それを成立させるために、嘘をつく必要があった。
それは、とんでもない嘘だ。もしもリィナが彼を騙していたならば、それは何の罪もない女性にあらぬ疑いを向ける中傷であり、卑劣な策略の片棒を担ぐものだった。
それを自らの判断と、そして個人的な信頼のために行う以上、その責任はとてつもなく重い。それが嘘だとわかっていて実行する以上、騙されていたからとか、そんなことは何の言い訳にもならない。
おそらくはディバーナ・ロウの仲間たちからも誹りを受け、彼はそこにいられなくなるだろう。
だが、
「さっき散歩したとき、町外れの森まで行ったんだ」
ティースは口を開いた。
まるで動じることのない、強い、強い、意志のこもった口調で。
「そこで見た。……薄暗い森の中で、あの人が、獣魔の死体を埋めていた」
「……」
レイは透かし見るような目をしたが、やはり動じることなく続ける。
「昨日の襲撃で倒した獣魔じゃない。だって、それは街の調査機関で処理されているはずだろ？」
「つまり、それはあのパトリシアが個人的に使った獣魔……と、そう言いたいわけか？」
「そう、考えられないかな？」
レイは少し考えて、
「……確かに、お前が散歩に出ている間、パトリシアもどこかに出掛けていたな」
「ああ」
もちろん、その直前に彼女と廊下で鉢合わせたティースはそのことを知っている。
レイは目を閉じた。

数秒。
その間、ティースの鼓動は静かに高鳴っていた。
――もう、後戻りはできない。
「もし、そうだとしたら」
やがて、レイは目を開いた。
「パトリシアが俺たちを呼んだのは、どういう理由だ？」
即座に答える。
「おそらくは、昨日の人魔を殺すため。……あの人魔が言ってたじゃないか。俺たちは、獣魔の命を弄んでいるって」
「……なるほど。昨日の人魔の言葉を信じるとすれば、確かにお前の言っていることの辻褄は合うな」
胸の鼓動がさらに速くなっていく。
――上手くいくかもしれない、と、そう感じて。
「だろ？　あの人魔の目的は、獣魔の命を弄ぶパトリシアさんだった。パトリシアさんは、その人魔をどうにかするために俺たちを呼んだ」
「そのために、動かせる獣魔を使って、街を襲わせた、か？」
「……そう」
一瞬の躊躇い。
だが、それは致命的ではなかったようだ。
「お前の言いたいことはわかった」
レイはゆっくりと椅子から立ち上がると、一瞬の空白を置いて、
「だったら、少し調べてみることにするか」
「……」
胸に、微かな光が産まれる。
（……やった）
少し信じられないほどだった。彼自身、ここまで上手く行くとは考えていなかったのだ。
（これで、リィナの疑いは晴れ――）
だが、その直後。

まるで、彼の緊張の糸が緩む瞬間を狙ったかのように、レイは呟いた。
「ところでティース。……不自然だとは思わないか？」
「え？」
びっくりして目を見開いてティースに、レイは続けて、
「たとえば……パトリシアが、どうしてわざわざこんな大事なときに、死体を処理するために森に行ったのか」
「え……？」
「どこかに獣魔を隠しているなら、その死体の一時的な隠し場所ぐらいあるはずじゃないか？　なら、俺たちが帰ってからでもいいはずだ。……そういや、妙だな」
レイは腕を組んで、さらに続けた。
「お前は確か、散歩に行く前にこういう類の主張をしたな。『あの人魔を野放しにしていて大丈夫なのか』と。……いや、これは俺の勝手な推測だったが、後の受け答えから考えると図星だったはずだ」
「え……そ、それは――」
畳みかけるような言葉に、頭は熱くなって混乱を始める。
「なら、“水の七十五族から女の子を助けた人物”とあの人魔が同一だと気付いたのは、今日の散歩中か？　それまた、随分と鈍感だったな。……散歩といえば」
目を閉じたレイは、まるでそらんじるように宙を見上げて、
「街の様子はどうだった？　あれだけ長い散歩をしたんだ。街の外れに寄り道していたといっても、それなりに眺めて来ただろう？　警邏の連中にも会っただろう？　……ちゃんと俺のアドバイス通りにしていたか気になってな。奴ら、全部が同じ人数で歩いてただろ？　何人一組で歩いていた？」
「ぁ……え、えっと……」
不測の事態に慌てながらも、ティースは懸命に記憶を辿る。
（落ち着け、落ち着け……落ち着いて思い出せ――）
警邏が街を見回っているとはいえ、基本的に外を歩いている人間

は少なかった。それに彼の目的地は町外れの蔵だったから、街の中心を見回っている警邏隊とは一度も出会っていない。
が、幸いにも、遠目に一組だけ目撃した記憶があった。
（確か……五、六、七……七人。七人だ）
思い出し、それが間違いないことを頭の中でもう一度確認すると、
「七人……そう。そういや、会った警邏隊は全部が全部七人一組で動いてたなぁ。……そっか。何か妙だと思ったんだけど、あれって全部レイさんの指示だったのか」
ホッと息を吐きながら答えたティース。
「いや」
だが、レイは真顔で答えた。
「冗談だ」
「……え？」
「いや、お前が会った警邏隊は、たまたま全部が七人一組で動いていたんだろうさ。見回りも、伝令も、様々な任務に従事する奴らが全員、な。……不便なこともあるだろうに。律儀なことだ」
「――」
絶句。
暗い影が、ティースの胸に去来する。
（あぁ――）
おそらくは、最初から見抜かれていた。
度胸を定めて口にした渾身の嘘は、もちろん全ての綻びを埋めていなかった。そしてレイはその態度に惑わされることなく、畳みかける言葉で彼の冷静な判断力を奪い、さらなる綻びを彼自身の口から引き出したのだ。
――終わった、と、ティースは思った。
レイはおそらく次々に矛盾点を突いてくるだろう。そしてやがてはその嘘の理由を考え始める。次に、その理由を探るために、彼の行動を調べるだろう。二度目の外出は気を付けていたが、一度目の外出――偶然、蔵に辿り着いたときのことは何らカムフラージュし

ていない。そこを辿っていけば、リィナの潜む蔵が見つかるのは時間の問題だ。
「……まぁ、いい」
「へ？」
呟いた言葉に、ティースは間抜けな声で顔を上げる。意外そうなその視線の先で、レイは首筋を掻きながら言った。
「お前は俺の部下で、俺はお前を部下にすることを承認した。……だったら、理由もなく一度ぐらい信用してみるのも面白い」
「……」
ティースは一瞬言葉を失って、
「……レイさん……」
あまりにも意外なその言葉に、戸惑うとともに、じわっと、胸に溢れるものがあった。
が、それを味わう間もなく、
「その代わり、交換条件だ」
「？」
「そうだな……」
レイは少しだけ考えた後に、ティースの目を覗き込むように見つめながら、先ほどまでとは一転、軟派な笑みを浮かべる。
「帰ったら、あの王女様とデート、ってのはどうだ？」
「王女様……？　……って、まさかシーラと！？」
「ああ」
事も無げに答えたレイに、ティースは狼狽して、
「そっ、それはちょっと……そ、それに、あいつにはちゃんと恋人が――」
「あれだけの美人が、どうでもいいような一般人と付き合ってるってのは、重大な社会の損失だ。俺がこれからその補填をしてやるとしよう」
「そ、そんな！」
この人なら本当にやりかねない、と、思った。それが彼女にとっ

ていいことか悪いことかはともかく――
「う……うぅ……」
悩むティースの顔を、レイはどこか楽しげに見つめていた。
「で、でも……例え俺が了承したところで……その、つまり、俺にはあいつに言うことを聞かせる権限なんてないわけで――」
「ほぅ」
レイは彼らの関係を思い出したのか、苦笑して、
「ま、それもそうだな。なら、諦めるとするか」
「え？」
ティースが顔を上げると、
「じゃ、代わりにこいつだ」
「？」
ポンと投げ渡されたのは、金属製の、手の平と同じぐらいの大きさのカード状のものだった。
「これは……？」
その中心には、重なり合う六つの剣――ミューティレイク家の紋章が描かれている。
「便利なもんだが、ずっと持ち歩いているのはなかなかに苦痛でな。ネービスに戻るまで預かっといてくれ」
「……？　あの――」
だが、次にティースが質問しようとしたとき、レイはすでに立ち上がって背を向けていた。
「じゃあ頼む。大事なもんだ、無くさないでくれよ」
バタン、と、ドアが閉まる。
「……レイ、さん？」
結局、ティースはカードを握りしめたまま、呆然とその後ろ姿を見送るだけだった。

「――人が悪いね、隊長も」
「盗み聞きしていたお前も、な」

部屋の外では、白衣姿のマイルズが腕を組んでレイを待っていた。表情に浮かんでいたのは、どこか呆れたような色。
「気付いてたのに咎めなかっただろ？　勝手に許可と取ったんだけど、悪かったかい？」
「いや、構わんさ」
「それは良かった」
背を向けたレイの後を、白衣のポケットに両手を入れたまま歩いて、
「部下だから、信じる、か。……なかなか感動的な台詞だけど、隊長の口から出たとなると途端に胡散臭くなるね」
「そりゃひどいな」
「……そんな性格、してないだろ？　僕やギレットさんのことだって、未だに全然信用してないくせに」
「いや、信用してるさ。アオイの時間感覚と同じぐらいには、な」
「あらら。想像以上に信用されてないねぇ」
マイルズは苦笑しながら、
「でも、これで隊長の根拠の薄い推測が立証されたかな。……ま、最初から不自然だったからねぇ。それだけの力を持つ王魔が、一度街の人に追い払われた、なんてさ。あっちが本気だったら今頃、ネスティアスが出向くほどの大事件になってるはずだよ」
それからチラッと、たった今、レイが出てきた部屋の方角を見やって、
「ティースくんがどんな経緯でその考えに辿り着いたかはともかく――」
「経緯、か」
レイは考えるまでもなく答えた。
「十中八九、昨日の魔に接触してるな。でなきゃ、あんな嘘をついてまでパトリシアに狙いを定める理由がない」
「なるほど。……にしても、ティースくんも随分あっさりと陥落したものだねぇ。最近の様子を見る限りじゃ、下手したらもう修復不

可能かと思っていたんだけど」
「なにか劇的な変化があったんだろ」
「誘惑された、とかかい？」
「だとしたら、羨ましい限りだ。王魔に誘惑された人間なんて、歴史を紐解いてもそうそういるもんじゃない。……ま、あれだけの大女だ。中身はひょっとしたらゴリラみたいな顔かもしれんがな」
「僕の先入観によると、神魔と王魔ってのは全部美男美女なんだけどねぇ」
「ホントにそうだとしたら、ティースのヤツにはもったいない」
レイは笑いながら自室のドアノブをひねった。マイルズはポケットに手を突っ込んだまま、部屋の中で振り返った彼と目線を合わせる。
笑っていた表情が、少しだけ真剣になった。
「……隊長はどう思う？　ティースくんとあの王魔のこと。事情はわからないけれど」
「それはパトリシアのこととはまた別問題だな」
扉を閉めようとして、レイは思い出したように答える。
そして……そこに続いた言葉は、冗談でも何でもなく、おそらくは真実。
「あいつがもしも王魔を庇おうとするなら、厄介だ。……そのときは、俺が面倒くさい役を引き受けなきゃならなくなるかも、な――」

その6『無情の剣』

二日後の昼過ぎ、ラムステッド邸の周囲は騒然とした空気に包まれていた。

怒号と悲鳴。

屋敷の周りは百人以上にも及ぶ警邏隊によって囲まれ、そのさらに外側を取り囲むように野次馬らしきものが集まっている。怒号は主に、野次馬たちの中から聞こえる。中には泣き声のような叫びも入り交じっていた。

そして屋敷の内側……その入り口に近い場所には、この騒ぎの原因を作ったと言っても過言ではないだろう。ディバーナ・ナイトの隊長、レインハルト＝シュナイダーの姿。

腕を組み、開け放たれた玄関を見つめるその視線の先では、一人の女性が複数の警邏隊に連れ出されるところだった。

獣魔を操り、人々を大量に殺害した罪で捕らわれた屋敷の主人、パトリシア＝ラムステッドだ。

その姿が衆目にさらされるなり、人々の怒声がひときわ大きくなった。

パトリシアは無言と無表情でそれに応えると、一瞬、その視線がレイの方へと向けられたが、すぐに興味なさそうに視線を正面に戻す。

「……大した人っすね」

それを見つめながら、レイの隣で感心したような声をあげたのはパーシヴァルだった。

「誰の協力もなしに、自分の屋敷の地下にあれだけの獣魔を隠していたなんて」

パトリシアの後ろ姿は、人々の罵声にさらされながら徐々に遠ざかっていく。

「ま、よほどの執着があったんだろうな」

答えるレイの口調はひどく素っ気ない。事実、彼女がどうしてその道に走ったかなどということは、彼にとっては何の興味もないことだった。

「にしても、随分とあっさり捕まったっすね。もしかしたら結構抵抗するかも、なんて思ってましたけど」

「俺たちを呼んだ時点で、覚悟はしていたんだろ」

そう言うと、レイはパーシヴァルに背を向けて屋敷の奥へと戻っていく。パトリシアが抵抗しなかった以上、彼がこれ以上それを眺めている必要はなかったのだ。

その途中。

彼を呼び止める人物がいた。

「どういう……ことですか？」

足を止め、レイは振り返って答える。

口元にはいつもの飄々とした笑みを浮かべて。

「見ての通りさ、ルネッタ。俺たちの依頼主は、どうやら自らが獣魔を操るデビルサイダーだったようだ」

「そんな馬鹿な！」

当然、これまでの話の流れはルネッタも理解している。

が、それでも納得できない顔で、

「私たちは、この目で人魔の存在を確認しているではないですか！」

いつもの穏やかな口調はなく、飛び出した言葉は苛烈に彼を問い詰めた。

だが、レイはいつも通りに軽く流して、

「何にしても、屋敷の地下には多くの獣魔が飼育されていた。パトリシアはそこに頻繁に出入りしていた。そして、本人もそれを認めた。これらは全て疑いようもない事実だ」

「っ……しかし」

それは認めざるを得なかったのだろう。ルネッタは少し声のトーンを落として、

「それでも、その陰に人魔が潜んでいたこともまた、紛れもない事

実です。……私たちの任務は、まだこれからではないのですか？」
「悪いが」
だが、レイは彼女に背を向けながら答えた。
「俺が受けた依頼は、この街に出没する獣魔の退治と、それを操っている存在の発見、及び排除でな。その人魔とやらを探す理由は、こっち側にはない」
「な――」
「そいつが今、この俺の目の前に現れたってんなら話は別だがな。どうしてもやりたいなら、君だけで勝手にやるといいさ」
「あなたは……あなたは、それでもデビルバスターなのですかッ！？」
感情を露わにするルネッタ。
レイは肩越しに振り返って、やはりそこに皮肉な笑みを浮かべた。
「文句なら、デビルバスター試験の試験官にでも言ってくれ」
「……」
ルネッタは唇を噛んだ。
――彼女の胸に溢れていたのは、途方もない腹立たしさだ。
パトリシアが捕まったこと自体は、特に親しかったわけでもない彼女にとって感じることはない。が、このレイという――どこか女を小馬鹿にしているような態度の男に出し抜かれたことが悔しくて仕方ないのだ。
……もっとも、彼が小馬鹿にしたような態度を取るのは男女問わず、単に相手次第というところなのだが、男に対する対抗意識の強い彼女にしてみれば、そう勘違いしてしまったのもムリからぬところか。
「……」
だが直後、ルネッタはほんの僅かに笑みを浮かべた。
そして去っていくレイの背中に言い放つ。
「私は……一人でも、あの人魔を見つけ出してみせますよ。もしかしたら、手がかりになるかもしれない情報も手に入れましたから」

「……」

レイは何も答えない。

その背中で、ルネッタの遠ざかっていく気配があった。

……屋敷に足を踏み入れて、天井を見上げる。

そして、独り言。

「ティースの奴は、また出掛けたらしいな。……浮かれるのはわかるが、もっと慎重にやってほしいもんだ」

窓から外に目を向けると、昨日までとは打って変わって空は晴れ渡り、十一月にしては暖かな陽気。遙か遠くまで見渡せそうな、眩いばかりの陽光が外を支配している。

「とはいえ……どんな強大な力を持つ王魔も、何も食わずには生きていけない……か」

ぼそりと呟いて、小さくため息をつくと、この後に起こりうる“もう一つの騒動”を予感しながら歩みを再開するのだった。

夕方。

「リィナ」

「ティース様」

振り返ったリィナは本日三度目の訪問にも関わらず、相変わらずの弾んだ笑顔でティースを出迎えた。

小さな窓から射し込む光はすでにオレンジ色に変わっており、さすがに風も冷たくなっている。この屋根裏も少し冷え込んでいたが、まだ耐えられないほどではない。

「ほら、夕食分のパン。……本当はもっとバリエーションのあるものを持ってきたいんだけど――」

「あ、いえ。私はこれで充分です」

二つのパンを受け取って、リィナは胸の前で手を組んだ。

食事の前にこうして祈るのは彼女のクセ……というか習慣だ。テ

ィースの古い記憶の中の彼女も、確かに同じことをしていた。
その変わらない行動にも、懐かしさと同時に不思議な喜びを感じながら、
「でも、まだそんなにお腹空いてないだろ？　あまり夜遅いとさすがに怪しまれるかと思って、今日は少し早めにきたんだ。……まあ、さっきも言った通り、パトリシアさんが捕まって解決ムードだから、俺の動きなんかに注目してる人はいないと思うんだけど」
「私のことを捜している方は、もういないんですか？」
問いかけに、ティースは少し考えて、
「全く捜してないってことはないと思う。でも、少なくとも俺たちの部隊はもう動いていないし……いや、それどころかレイさん――隊長はきっと、俺がこうして君と会っていることに気付いていると思う」
「レイさん……あの人ですか」
一昨日、彼と戦ったときのことを思い出したのだろう。目が少しだけ真剣になる。
「あの圧迫感、とても人間とは思えませんでした。恐ろしい人ですね」
「恐ろしい、か。確かにそうかもしれない。でも、いい人だよ」
「……」
それでもリィナは真剣な視線を床に落としたままだった。
（そりゃ……リィナにしてみれば、むき出しの殺意をぶつけられたわけだから、仕方ないか……）
ただ、今ならレイは決して彼女を殺そうとしたりはしないはずだ、と、ティースはそう信じている。もしそのつもりであれば、もっと早くに自分を問い詰め、この場所を探り当てているはずだったから。
そして、
「リィナ」
ティースは話題を変えることにした。
「君は……これからどうするつもりなんだ？」

そう尋ねる。
こうして無事に再会を果たし、事件も解決に向かっているとはいえ、諸手を挙げて喜んではいられない。彼女は魔である。昔は子供だったからこういった場所に長期間隠れ住むことも可能だったが、今はそういうわけにいかないだろうし、何よりそれではあまりに不便だろう。
それにそもそも、何のためにこっちに出てきたのかということも、まだ聞いていなかった。
「もしすぐに向こうに帰るつもりなら、せめてシーラに一目だけでも会って――」
だが、リィナは顔を上げて、躊躇うことなく答えた。
「いいえ、ティース様。私は、こっちの世界で暮らすつもりで来たのです」
「え？」
当然ティースは驚いて、
「こっちの世界で暮らすって……で、でもリィナ。君は向こうの世界に家族もいるんじゃ……」
「……ティース様」
リィナは再び視線を落とした。
「ティース様はもちろん知らないことでしょうけれど、向こうの世界の私たちの生活は、こちらの世界に比べて、とても寂しいものなんですよ」
「……寂しい？」
怪訝な問いにリィナは頷いて、視線を横に泳がせた。
言葉通りの寂しさが、その横顔を染める。
「人から“王魔”と呼ばれる私たちの種族は、生まれ付き強大な力を持っています。大昔から魔界における富の大半を保有し、何の不自由もないから、争う必要もない。黙っているだけで、死ぬまでを平穏に暮らすことができるんです」
「？」

理解できずに、ティースは首を傾げた。
「争う必要がなくて、平和なら……どこが不満なんだ？」
「ティース様」
リィナは首を横に振って、力無く答える。
「何もしなくてもいいということは、とても楽なことです。……でも、それは同時に、生きている実感すらも無くしてしまうということなんですよ？　何もしなくていいから、努力する必要もない。協力する必要がないから、仲間も必要ない。友達も、恋人も必要ない。ただ種族を絶やさないために結婚はしますけど、誰かを必要とすることも、誰かを愛することもないんです」
「……」
そこまで言われれば、彼女の言葉の意味がティースにも理解できた。
それは確かに寂しいことかもしれない、と。
リィナは続けた。
「私は偶然この世界に流されて、世界に“敵”がいることを初めて知りました。空腹を抱え、寒い森の中を歩いていて、獣に襲われて……何もしなければ、傷つき死んでしまうことを知りました。そして――」
そして真っ直ぐにティースを見る。
「あなたとシーラ様に出会って、初めて他人を必要とし、必要とされることを教わりました。だから、今度は私が二人の役に立ちたい。そして二人から必要とされたい……そう思ったんです」
「……」
子供の頃、彼女と一緒に過ごした二年間。彼女にとっても、それはティースと同じ……いや、おそらくそれ以上に大事な時間だったのだろう。
「……そっか」
胸が詰まる思いだった。
誤魔化すように、ティースは笑う。

「でも、そこまで言われると、逆に気が引けるなぁ。そんなに大したことをしたつもりはなかったから……」

リィナは微笑んで、

「もちろん一番の理由は、ただ二人にもう一度会いたかったということですけど……そういう気持ちですらも、二人に出会わなければ知らなかったことなんですよ？」

ティースはますます照れてしまった。

が、すぐに、そこに付随する重要な問題を思い出して、

「で、でも、リィナ。そりゃ俺だって、君が近くにいてくれれば嬉しいとは思うけど、でも君は――」

その視線が彼女の耳へと向けられる。

尖った、耳。

それがある以上、この世界で普通に生活するのは困難だ。もちろん、それは彼女だってわかっているはずだった。

「ええ。……ですから、ティース様とシーラ様にお願いが――」

リィナがそう言いかけた、そのとき。

……キィッ。

「！」

耳に届いた、軋む音。

（……誰か入ってきた！？）

咄嗟に口を噤むティース。反射的にリィナを見ると、どうやら彼女も察したらしく、同じように口を閉ざした。

微かな足音。

何者かが蔵の中に入ってきている。

心臓の鼓動が速まった。

（……まさか。誰だ……？）

隠し扉は閉めてきた。が、そのスイッチはそれほど巧妙に隠されているわけではない。もし入ってきた人物が、最初から“何か”を捜して入ってきたのだとしたら、見つかるのは時間の問題だろう。

「……」

呼吸音さえも押し殺し、二人は足音が立ち去るのを待った。
そして数秒……ふと、足音が消える。
（行った、か？）
だが、その直後。
……カコン。
「！」
ティースはリィナに目配せすると、階段の方へゆっくりと移動する。
手の平が汗を掻いていた。
そして、階下からの声。
「ティースさん」
「！」
聞き覚えがあった。
（ルネッタさん……か……）
「降りてきなさい。あなたがそこにいることはわかっています」
「……」
その声は確信を秘めていた。おそらくは後を付けていたのだろう。
相手が彼女なら、ティースが尾行に気付かなかったのも無理はない。
（なんとか……誤魔化すしかない）
リィナと視線が合う。
不安が過ぎっていた。
右手を向け、じっとしているように指示すると、階段を下りていった。
「ルネッタさん」
「……」
階下から彼を見上げるルネッタの視線は、まるで突き刺すような色を帯びていた。手はすでに腰のレイピアにかけている。
それに気圧されながらも、ティースは狭い階段を下りながら言葉を続ける。
「どうしたんですか？　……こんなところまで――」

ルネッタの言葉が冷たくそれを遮った。
「芝居は必要ありません。そこに、もう一人いますね？」
ティースは足を止めて、
「……なにを言ってるんです？　ここには俺しか――」
「……」
視線が外れ、ため息とともに下を向く。
そして再び顔が上がって――
「出てきなさい」
「――！」
心臓の鼓動が跳ね上がる。
――いつの間にか、喉元にレイピアの切っ先が突きつけられていた。
背筋が震えて、背中にドッと汗が噴き出す。
（……モーションが……ない……！！）
レアスやアクア、それにレイと稽古をしたときの……それ以上の威圧感。もちろん稽古とは状況が違うにしろ、それでも彼女の実力はティースなどがとても太刀打ちできるものではなかった。
「出てこなければ、彼が痛い目に合いますよ」
ルネッタの言葉は完全に確信を秘めて、階上に向けられていた。
それでもなお、ティースは言葉を続ける。
「ルネッタ……さん。なんの、つもり――」
「……」
ルネッタの視線が細くなってティースを捕らえる。
と。
「待ってください」
背後から、決意を秘めた声が聞こえた。
（……リィナ……）
振り返ることすらできない状況で、ティースは絶望に身を震わせる。
ルネッタがリィナを捜していた理由。それは考えるまでもない。

おそらくは決着をつけるためだろう。
「今、降ります。その前に、剣を収めてください」
「……来なさい。話をするには、ここは狭すぎます。……逃げようとしても無駄ですよ」
ルネッタは剣を収め、そして階下を離れた。
「ティース様。……ご無事ですか？」
「あ、ああ……でも――」
振り返ったティースは、リィナの姿に驚き、目を見開いた。
「リィナ、きみ――」
「はい」
頷いたリィナは尖った耳も形を変え、その姿は人間と同じものだった。
（……そうか。人に姿を変えて……でも――）
一瞬だけ安堵したティースだったが、すぐにその胸を暗いものが覆い尽くす。
（どれだけその姿を保てるのか……それに、ルネッタさんの剣幕を見ると……それで誤魔化せるかどうか……）
二人が蔵から出ると、ルネッタが夕日を背負うように立っていた。薄暗いところから出たせいか、夕日が少しだけ眩しい。
町外れだけあって、辺りは閑散としていて人影の一つもなかった。ただでさえ、今はパトリシアの件で街の中心に人が集まっている。こんな辺鄙なところにわざわざやってくる人間がそうそういるはずもなく。
そして開口一番、ルネッタは言った。
「元の姿を見せなさい。誤魔化そうとしても無駄ですよ。あなたたちが短い間、魔力によって人に姿を変えられることぐらい知っています」
リィナは答える。
「いいえ。これが、私の本当の姿です」
「ふざけたことを……」

「ルネッタさん」
ティースは口を挟んだ。
「何を言ってるんですか。彼女は普通の――」
「……どうやら、話しても無駄のようですね」
ルネッタがため息を吐いて、視線を落とす。
（……！）
その仕草を見て、ティースの頭を電流のようなものが駆け抜ける。
――逆った、一筋の煌めき。
「っ――！」
響き渡る、甲高い金属音。
「……」
ルネッタの視線が、明らかな怒りを込めてティースに向けられた。
「ティースさん。なんの、つもりですか？」
「ルネッタさん……こそ」
リィナに向かって伸びたルネッタの切っ先は、ティースの剣によって阻まれていた。
咄嗟に反応できたのは、先ほど一度彼女の剣を見たことによって、その行動を予測し、一足早く動き始めていたおかげである。
「そこを退くのです。騙されているだけなら、ただの愚か者で済みます」
「……」
キリッ……と、金属同士が微かにこすれ合う。
「しかし、全てを知っていて庇うのであれば、あなたはパトリシア＝ラムステッドと同様の罪に問われますよ」
「――」
確かにその通りだ。いくらティースがリィナを庇おうとも、魔である彼女を信用してくれる――彼女が黒幕でないと信じてくれる人間はまずいないだろう。
だが、彼は全く揺らぐことなく答えた。
「俺には、あなたが何を言っているのか、わからない」

「……」
ため息が漏れる。
「わからない男ですね」
ふっ……と、ルネッタの体から力が抜けた。
刹那。
「？」
風が通り過ぎた。
そう、思った。
――だが、直後、
「ぁぁっ！！！」
「ティース様っ！」
全身を襲ったのは、無数の痛み。
頬、肩、腕、脇腹、太股、足首……そのあらゆるところの皮膚が裂け、そこから少量の血が溢れ出る。
「全て浅い傷です。……あなたの将来を奪う傷は一つもない。数日で完治するでしょう」
ピッ……と、血が地面に跳ねた。
ルネッタの握るレイピアの切っ先は、微かに血に汚れている。
「でも、次の一撃は、あなたの利き腕の自由を奪います。その次の一撃は、あなたから自由に駆け回る能力を奪うでしょう。……ティースさん。今のうちに、そこを退けた方があなたのためです」
「くっ……！」
「退けないつもりですか？」
それでも剣を構える彼を見て、ルネッタは理解できない顔をする。
「何故？　どうしてその魔を庇うのです？」
「何故……だって？」
頬から血を流し、衣服の一部を血に染めてもなお、ティースはルネッタを睨み付け、声を張り上げて答えた。
「この子は……この子は俺の友達だ！　友達に向けられた剣を、黙って見過ごすわけにいくかよッ！！」

「その魔が、友達？」
ルネッタは理解できない顔で首を横に振る。
「どうやら、あなたは危険な思想を持っているようです。……ここで、将来を奪っておいた方がよさそうですね」
「――！」
くる、くる、と、レイピアの先が小さな円を描く。
（来る――！）
全身を襲う痛みは無視できなかったが、幸い、体の自由は充分に利く。
風を切って、レイピアが空を裂いた。
――見えない。
（でも、次は利き腕を狙ってくるはず……なら！！）
狙いさえわかっていれば、防ぐことは可能なはずだった。
右腕を狙ってくるレイピアの軌道を読み、そこに向かって細波を叩きつける。
――だが。
（え……っ！？）
レイピアの軌道をかろうじて認識はできた。
だが、動きにはついていけない。
――レイピアは右腕ではなく、ティースの左腕に向かって伸びてきていた。
（騙された――っ！！）
気付いたときにはもう遅かった。
正確無比なルネッタの一撃は、ティースの左腕……その要となる部分を切断するべく、伸びてくる。
「――っ！！」
だが、その瞬間。
突如、空気が震えたかと思うと、大きな質量を持つ何かが、二人の間に着弾した。
「くっ……！！」

ルネッタの足が地面を蹴って、レイピアの切っ先が離れていく。
が、その衝撃は彼女だけではなくティースにも及んだ。
「くぅっっ！！」
衝撃に吹き飛ばされ、バランスを崩して尻餅をついた。腰から突き抜けるような痛みが走ったが、幸い、それほどのダメージではない。
だが――
「正体を、現しましたね」
素早く体勢を立て直したルネッタが視線を横に滑らせる。
「……リィナ」
振り返ったティースの視線の先で、リィナは片手を広げていた。
目線はルネッタを捕らえ。
その体からは見紛うことなき魔力が迸り。
耳は……尖っている。
ついに正体を、さらしてしまったのだ。
「リィナ……どうして――」
「……」
彼の問いかけに、リィナの右の目尻が微かに震える。
「もう、誤魔化しきれるとは思えませんから」
「で……でも――」
「もう、いいのです。ティース様」
その言葉は不思議なほどに淡々としていた。まるで感情のこもっていない、口調。
――違和感。
「リィナ……？」
不思議な感覚が、ティースを襲う。
「残念です」
そこに立つ、彼のよく知っている少女は、今、明らかな“違和感”を纏っていた。
「もう少しで、あのレイという男に上手く近付けたのに……」

「え？」
彼女のその言葉が理解できず、ティースは眉をひそめた。
「リィナ？　何を言って――」
その言葉を遮ったのは、ルネッタだ。
「だから、言ったでしょう」
レイピアを構え、それをゆっくりとリィナの方へと向ける。
「ティースさん。あなたは騙されているのです」
「……騙されている？」
ルネッタに怪訝な顔を向け、すぐにそれをリィナの元へと戻して、
「リィナ？　……何の冗談だ？」
乾いた笑みを浮かべるティース。
「……」
だが彼女は何も答えず、彼に視線を向けようともせず、ただじっとルネッタの一挙一動を見つめていた。
警戒を強めたその目に、先ほどまでの暖かな色――ティースが安堵を感じたその面影は微塵も残っていない。
不機嫌そうに目尻が震える。
（リィナ……？）
ルネッタは半身に構え、そんなリィナを真っ直ぐに見つめると、
「昨日のことで私が彼より格下に見られているのだとしたら、少々不愉快ですね」
「彼……？　レイ……さん？」
「……」
リィナはティースを一瞥もすることなく、ルネッタに向かって答えた。
「私の壁を破れるのは、あのレイという男だけです。……あなたでは相手になりません。素直に、引き下がった方が良いのではないですか？」
「……言ってくれる」
その言葉に自尊心を傷つけられたのか、ルネッタは声を低くした。

小刻みに動いていたレイピアが、ピタリと動きを止める。
「だったら……試してみるといい！」
ルネッタの足が動いた。
「っ……」
挑発していた言葉とは裏腹に、リィナの表情が緊張に染まる。
――そのレイピア自体が以前と違うことに、彼女も気付いていたのだろう。ルネッタの力は決して侮れるものではなく、武器の相性次第では、彼女の魔力の壁を破る可能性は充分に残されていた。
ルネッタももちろんそれを考え、おそらく通用すると判断して挑むのだろう。
風が、裂ける。
まるで重力を無視したような軽く素早い動きで、ルネッタのレイピアはリィナの心臓を目掛けた。
対するリィナも万が一を考えたのだろう。右腕に魔力を集め、それを真っ向から迎え撃つ構えだ。
直後。
「！？」
辺りに響いたのは、レイピアがリィナの体を貫く音でもなく、魔力の迸りによる轟音でもなく――
「なっ……！？」
またもや、甲高い“金属音”だった。
驚きの声を上げたのはルネッタ。
いや。
「えっ……？」
それはリィナも同じだった。
「……何度言ったら……わかるんだ」
その口からは、荒い息が漏れている。全身の傷は、浅いとはいえ彼の体力を少なからず奪っていたのだろう。
だが、それでもなお、彼の剣は先ほどと同じようにリィナを庇っていた。彼女に襲いかかろうとするレイピアの切っ先を止めていた。

「ティース様――」
「何故――」
リィナの驚きの声と、真意を問い質すルネッタの言葉に、ティースは剣を合わせたままギリッと奥歯を噛みしめる。
そこに、迷いは一切ない。曇りのない瞳で、ルネッタを睨み付け、言った。
「彼女は俺の友達だ。……傷つけるのは、許さないと言ったはずだ」
「……馬鹿な！」
理解できない、という顔でルネッタは叫んだ。
「あなたはさっきの言葉を聞いていなかったの！？　利用されているのよ！　騙されているのだと、いい加減に理解しなさいッ！！」
「……」
ティースは眉間に皺を寄せる。
キリッ……と、金属が再び擦れ合う。
「騙されてなんかいない」
「なにを……！」
「リィナ」
ティースは視線をルネッタから動かさないまま。
「……君が無理に嘘をつくときのクセ、俺はちゃんと覚えてる。やっぱり、君はちっとも変わってないよ」
「嘘……？　嘘なんかじゃ――！」
反論しようとしたその瞬間、不機嫌そうに歪めたその目尻が微かに震えた。
「……あ――」
ハッとする彼女に、ティースの口元にはこの場にそぐわない笑みが漏れる。
「だから、聞いたんだ。何の冗談だ、って」
そして表情を再び引き締めると、
「ルネッタさん」
「っ……！」

ティースは視線を戻し、レイピアを弾いてゆっくりと細波を構える。
「リィナは人間ですよ」
眉をひそめるルネッタ。
「なにを……？」
「リィナは仮装するのが大好きなんです。あの耳は、作り物です」
「……ふざけたことを」
ふざけた言い訳だというのは、良くわかっている。
だが、それでもなお、ティースは言い張った。
「本当のことです。一昨日、あなたが戦った人魔は、もうどこかに行ってしまったんです」
「……」
「それでも、リィナに危害を加えようとするなら――」
グッ、と、細波を持つ手に力が入る。
「俺が、あなたを止めます」
決意の瞳には一点の曇りもなく、その口調には決して揺らぐことのない意志が込められている。
それほどに、彼はこのリィナという少女を信じていた。
たった今、彼女が咄嗟に自ら汚名をかぶろうとしたのを見て、信じる気持ちをさらに強めていた。
彼女を疑う理由など、もはや彼の心のどこを探したとしても見つかりはしないだろう。
「……」
ルネッタは目を細めた。
彼が本気だということが、彼女にも容易に理解できたのだ。
「……ティースさん。あなたは――」
言いかけて、止める。
彼女にしてみれば、目の前にいるのは所詮デビルバスター候補生。
デビルバスターとしてそれなりに経験を積んだ彼女にとってはまるで話にもならない相手だ。が、かといって、彼を完全に無視して後

ろのリィナに攻撃することはさすがに難しい。
そこまで考え、
「……わかりました」
ルネッタは諦めたように、大きくため息を吐く。と、同時に、全身から発していた闘気が、まるで風船がしぼむように消え失せた。
気配すら、消えてしまったかのように。
「ルネッタ、さん」
ティースの顔に、微かな喜色が浮かぶ。
――だが、直後、ルネッタは小さく呟いた。
「愚かな男……あなたは、死んでしまいなさい」
「え――」
「ティース様ッ！！！」
右手に軽い衝撃が走るとともに、そこにあったはずの重みが消えた。
「……え？」
宙を舞う、細波。
先ほどまでの逆る威圧感は感じない。
代わりにあったのは、まるで静かな、研ぎ澄まされた針のように鋭い殺意。
「っ――」
彼女は本気だった。そして本気であれば、ティースなど彼女の敵ではあり得なかった。
そこには、リィナの援護が入り込む隙間もなく、無重力の動きで、正確な一撃が心臓を捕らえる。
（――っ！）
声を上げることもできずに、ティースはただ、妙にスローモーションな切っ先を見つめていた。
体は動かない。
ドクン、と、心臓が鼓動を打つ。
風が吹く。

“回避不可能の死”
それを予感した、オレンジ色の光の中。
――巨大な“何か”がティースの背後を襲ったのは、その瞬間だった。
「っ！！！」
爆発音、と言っても過言ではない衝撃。
巻き上がる砂埃。
「なっ――！」
止まっていた世界が突然に動き出した。
ルネッタの驚きの声が聞こえ、レイピアが再び間一髪のところでティースの体から離れていく。心臓はどうやら無事のようだったが、それを安心している暇などなく、
「なんだ……うわっ！！」
彼の背後で轟いた爆音は、地面の土を大量に舞い上げ、砂埃がその場にいた全員の視界を奪った。
「っ……仲間か……っ！？」
ルネッタはどうやら、別の魔の襲撃だと思ったようだ。
だが、それは違う。
「……え？」
煙が晴れたとき、振り返ったティースの視界にいたのは知っている人物だった。
その地面には直径四メートルほどのクレーター。
そして、
「ちっ……」
舌打ちをしたのは、そのクレーターの中心に剣を振り下ろした男。
レイだった。
……一体どうすれば、剣でこれほどのクレーターができるというのだろうか。
いや、それよりも――
「レイ、さん……」

ティースの言葉は震えていた。
だが、それは喜びでも感謝の言葉でもない。
確かに、レイの発生させた爆風は彼の命を救っていた。だが、もし彼の命を救うのが目的であれば他にやりようはあるだろう。
もちろん、目的は別のところにあったのだ。
「……リィナ！！」
レイが振り下ろした剣の先……その近くにはリィナがいたはずだった。
その一撃の威力に、彼が最悪の結果を想像したのは無理もない。
だが、
「っ……ティース様……」
砂埃が晴れて、リィナの姿が視界に映る。
左腕を押さえていたが斬られた様子はなく、見たところ、それほど大きなダメージは見当たらなかった。
「リィナ……」
ひとまず安堵する。が、状況が好転したわけではない。
「やれやれ、勘のいいやつだ」
レイは不本意そうな顔でゆっくりと立ち上がった。そして“夜叉の切っ先を険しい表情のリィナに向けると、
「まあいい。今度こそ、逃がさないぜ」
「ま……待ってくれ、レイさん！」
ティースは慌てて口を挟む。
どうやら、事態は最悪の事態に陥ってしまったようだった。
「……」
レイの視線が動いた。
それに対し、必死に訴える。
「彼女は……リィナは違うんだ！　彼女は――！」
「こいつは魔だ」
だが、レイはまるで取り合わず、すぐに視線をリィナへと戻した。
「で、俺はデビルバスターだ。デビルバスターってのは、魔を退治

するもんだ。……わかるか、ティース？」
「そ、そんな！　だって、彼女は何も悪いことして――！」
「わかってないな」
リィナに切っ先を向けたまま、レイは呆れたように首を横に振った。
「他がどうだかは知らんが、俺は魔を殺すためにデビルバスターになったんだ。家族の仇を討つためにな。デビルバスターってのは大体がそういうもんさ」
「家族の……仇……？」
「アクア辺りからいい話でも聞かされてたか？　残念だが、俺にそいつは当てはまらない。むしろ、ああいうヤツの方が稀少だ」
レイは剣を構え、
「だから、俺は今度こそ、こいつの息の根を……止める」
「っ……！」
レイが地面を蹴ると同時に、ティースもまた細波を拾い上げ、地面を蹴った。
剣が、交錯する。
「おい、ティース」
「っ……！」
真横に構えた細波に、二本の夜叉が強い圧力をかけてくる。
「これ以上は、冗談じゃ済まなくなるぞ」
「くっ……」
間近の眼光に見据えられ、思わず怯む。無数の傷を負った全身から徐々に力が抜けていくのを感じていた。
そんな二人の横を、一つの影――ルネッタが走り抜けていく。
「っ……リィナっ！！」
ティースの背後で、魔力が迸る。
どうやら、リィナとルネッタが戦闘状態に突入したようだ。
――それを確認する余裕すらない。
「っ……レイさん！　頼む！　やめてくれっ！！」

少しずつ、押されていくのを感じながら、ティースは訴えた。
「俺にはあなたの事情とかはわからない！　でも、あなたが今やろうとしていることは、それは……それは絶対に間違ったことだッ！！」
「よく言うな」
だが、彼の必死の説得にも、レイは眉一つ動かさずに答える。
「お前だってつい最近まで同じだっただろ？　どんな心境の変化だか知らないが、今更それは都合が良すぎるんじゃないのか？」
「それは――でも！　でも！！」
歯を食いしばり、圧力に負けまいと両膝と腹の中心に力を込める。
「違う、違うんだ！　彼女は違う！　彼女は――！」
「諦めろ、ティース」
「！」
カチカチ、と、細波が小刻みに震え始めた。と同時に、彼の両腕にかかる圧力が徐々に大きくなっていく。
（な……なんだ、これ――！？）
交錯した夜叉と細波の間に、少しずつ隙間が出来てくる。
そこに“見えない何か”が産まれつつあった。
（これが……まさか……！）
そしてティースは気付く。
夜叉が今、その刀身に纏いつつある“何か”――それこそが先ほど、地面にクレーターを作ったものの正体である、と。
「拳を、振るえ――」
圧力が増す。
そこにあったのは、圧縮された空気のようなもの。
（まずい……っ！）
そう思ったときにはすでに遅かった。
衝撃が、眼前で破裂する。
「っ……！！」
思ったほどの威力ではなかった。おそらく手加減していたのだろ

う。だが、それでもティースの体は圧力に耐えきれず、弾かれて宙を舞う。

「……がはっ！！」

背中から地面に叩きつけられ、息が詰まった。

全身から力が抜けていく。

ルネッタから受けた無数の傷。強者と闘うことによる精神的な疲労。……そこに加えられたこの一撃によって、彼の肉体はすでにボロボロだった。

「お前はそこで眠ってろ。……あっちは、一人じゃやっぱ分が悪いらしい」

「っ……！」

「……ティース。いい加減にしとけ」

レイが足を止めた。

ため息を吐きながら振り返って、

「真っ直ぐで強情なヤツってのは、長生きできないぞ」

「っ……はぁっ……レイ、さん……」

それでもティースはフラフラと立ち上がり、細波を正眼に構えてレイの背中を睨み付けていた。

「リィナに危害を加えるつもりなら――っ」

「……」

それを見て、レイは仕方なさそうに首を振ると、

「走れるのか？」

「……え？」

レイの体が動く。

ティースではなく、戦いを繰り広げるリィナの方へ向かって。

「まっ……レイさんっ！！」

慌てて、ティースもその後を追う。

走るのに致命的なまでの支障はない。が、それでも、咄嗟の動きについていくことはできなかった。

「ルネッタ！　……そこにいたら巻き添え喰らうぜっ！！」

「っ！」
「――！」
ルネッタとリィナがその動きに気付く。
レイの構える二本の剣は、大きな渦をその身に宿していた。
先ほどティースに見せたそれを遙かに上回る、強大な質量。
「二体の夜叉よ……暴悪の拳を振るえ――！！」
ルネッタが咄嗟に飛び退く。
対するリィナは……反応が遅れたのか、その場から動けなかった。
「リィナ！　……リィナぁぁッ！！」
見開いたリィナの目がレイを見つめ……一瞬、その後ろから追いかけるティースにも向けられる。
そして、ふっ、と、少しだけ表情が緩んだ。
その姿はまるで、自らに訪れるその運命を受け入れようとするかのよう。
――ティースの目には、そう映った。
「やめっ……やめてくれ――ッ！！！」
その叫びも空しく。
彼の視界を遮るように土埃が舞い上がった。
それが、唯一の情けであったかのように。
「……やめてくれぇぇぇぇぇぇっ！！！」
絶叫が空気を裂いて。
そして無情の一撃は、確実に、振り下ろされた――

その7『訣別の日』

フォックスレアの事件解決から三日後の夕方。
「……ティースさんが、いなくなった？」
ディバーナ・ナイトの面々は街での後始末を終え、この日、ようやくミューティレイクの屋敷へと帰還していた。
「ああ」
そして別館の執務室。
当主であるファナと執事のアオイを前に、経過と結果の報告をしているのは、そのディバーナ・ナイトの隊長、レインハルト＝シュナイダーである。
厳格な雰囲気の漂う部屋には似合わず、相変わらずのラフな服装。瞳に宿る飄々とした雰囲気も相変わらず。
そしてやはりいつも通りの口調で、レイはもう一度、その“事実”を報告した。
「事件が全て解決した日――三日前の夜か。ティースのヤツが急に姿を眩ました。理由は俺にはわからん」
アオイは眉をひそめ、それから少し困ったようにファナに視線を送った。
「……」
椅子に腰掛けたファナは、机の上で両手を重ねたまま少し思案していたが、やがてゆっくりと顔を上げてレイを見ると、
「心当たりはございませんの？」
「心当たり、ねぇ」
レイは少しだけ笑い、それからわざとらしく視線を泳がせて、
「最近、妙に塞ぎ込んでたからな。大方、任務をこなすのが嫌になったんじゃないのか？」
アオイが納得できない顔をする。
「まさか。ティースさんが悩んでいたのは確かですが、いきなり前

触れもなく姿を眩ますような人ではないでしょう」
「知らんよ。……特に変わったことはなかったさ。ただ報告した通り、いつもより犠牲者は多かったがな」
「……」
ファナはもう一度、レイから受け取った報告書に目を通した。
犠牲者は確かに多い。だが、それは事件の規模と性質――街の中に数十匹の獣魔を操るデビルサイダーがいたということを考えれば、仕方ないともいえる結果だ。しかもその半数以上はナイトが到着する前の被害者で、派遣から事件解決までの日数を考えると、任務自体は失敗というほどでもないだろう。
ただ……そこに一つ、気になる報告がある。
事件と関係があったのか結局不明ながら、そこに存在していた一人の人魔。
「レイさん」
そしてファナはもう一度質問した。
「ティースさんは、ご無事なのですか？」
「俺のことじゃないからな」
「レイさんはどう思われます？」
少し考えて、レイは薄笑いで答えた。
「自殺はしてないと思うぜ」
「わかりました」
まともな返事ではなかったが、それでもファナは頷いた。そしてすぐ、隣に直立するアオイの方を見ると、
「アオイさん。……ティースさんは見聞を広める旅に出られるそうですわ」
「……は？」
怪訝そうな顔のアオイに、ファナは穏やかな微笑みを浮かべて、
「デビルバスター候補生として、それは必要な経験であると判断しました。そのように、手配をお願いします」
「あ……はい。承知しました」

アオイもようやく彼女の真意を悟って、頷く。
そんな反応にレイは苦笑して、
「甘すぎるんじゃないのか？　戻ってくるかどうかもわかりゃしないんだぜ？」
「大丈夫ですわ」
ファナは確信を込めた言葉で答える。
「事情がどうであっても、ティースさんは必ず一度は戻ってこられます。ここには、シーラさんがおられますもの」
「ま、確かに……」
「二ヶ月、待つことにしますわ。……それでよろしいですか？」
「俺に聞かれてもな」
レイはそう言いながら二人に背を向けて、それでもふと、思いついたように呟く。
「……ま、色々と解決するには充分な時間じゃないのか？」
「はい」
ファナはもう一度微笑んで、満足そうに頷くのだった。

ティースが戻ってこないことが問題となったのは、もちろん執務室の中だけではない。彼が過去に所属していた二隊――ディバーナ・ファントムやディバーナ・カノンの面々、あるいは彼と関わりのあった数少ない人々にとってもそれなりに影響の大きい出来事だったようだ。
ディバーナ・ファントムの隊長、アクア＝ルビナートは執務室から出てきたレイを待ち伏せして早速事情の説明を求めていたし、その背後にはやや神妙な顔でそれを眺めるダリア＝キャロルの姿があった。そこを偶然通りかかったディバーナ・カノン隊長のレアス＝ヴォルクスは、興味なさそうにしながらも、何気なくその会話を追っていたようだ。

そして当然それは、屋敷において彼ともっとも深い関係にあった少女にとっても、いつものように冷たく流せる出来事ではなく――。

「……リディア」

「そんな怖い顔で見ないでってば。あたしにもよくわかんないんだから」

「怖い顔なんて、してないわ」

「そうかなぁ？　それならいいんだけどさ」

さすがのリディアも少々困り果てていた。

その目の前。

「……」

そこに座っている少女――シーラ＝スノーフォールは、一見いつもと変わらない態度にも見える。が、その正面で言葉を実際に向けられるリディアは、それがいつもと確実に違っていることを容易に感じ取っていた。

明らかな焦りと、苛立ち。

「彼はあなたのお兄さんでしょう。もっと詳しい話を聞けないの？」

リディアは首を横に振って、

「ダメだってば。あの人、相手が妹だろうと上司だろうと、言いたくないことは絶対に言わない人だから。……ただ、あの人の言い様からして、ティースさんが生きてることだけは間違いないよ。それもおそらく、ほぼ五体満足でね」

カチ、カチ、と、シーラの爪が冷めた紅茶のカップを鳴らす。

「だったら、どうして戻ってこないの」

「だから、わかんないってば」

この問答もすでに三度目。いい加減、リディアもうんざりして、

「とにかく待つしかないよ。ファナさんも、二ヶ月はティースさんの居場所を空けて待ってるって言ってたしさ」

「……」

シーラは目を細め、じっと紅茶のカップを見つめた。その胸に去来していたのは果たしてどのような想いだったのか。

しばらく、動かない。

（……まいったなぁ）

そしてリディアは、想像していたよりも激しい彼女の感情の動きに――それはあくまで何重ものオブラートに包まれたものであったが――少しだけ驚いていた。

（これでも平然としていたらどうしようかと思ったけど……さすがに――）

だが、そんなことを思った矢先。

「？　……どうしたの？　シーラさん？」

シーラの口元が微かに動いた。……笑った、というには、少々無理のある歪み方だった。

「そうね……」

問いかけに、彼女はまるで体をほぐすように背筋を伸ばし、肩の力を抜いた。そして小さく息を吐くと、呟くように答える。

「いい加減、馬鹿らしくなったのかもしれないわね」

「なにが？」

「賢くなったということよ」

その言葉の意味を、リディアはすぐに悟って、

「それはないと思うなぁ。だって、ティースさんは馬鹿だからティースさんなんだし」

真顔でそう言った。

まるでけなしているような物言いでも、その言葉は比較的好意的だ。

「あの人から“馬鹿”と“正直”を取ったら何も残んないよ。だからきっと、あの人なりに、どうしても譲れない事情があったんだよ」

「……」

シーラはその言葉をしばらく考えていたが……やがて何事か思い出したように、ポツリと言った。

「ま……いいわ」
「？　いい、って？」
問いかけに、ゆっくりと顔を上げて、
「戻ってこないなら、戻ってこなくてもいいということよ。……いえ。むしろ戻ってこない方がいいのかもしれない」
「あはは、またまたぁ。そんなこと言っ――」
言いかけて、リディアはハッと口を噤んだ。
「……シーラさん？」
真っ直ぐに見つめ返す、濁りのない瞳。
ゆっくりと微笑む。
「嘘ではないわ、リディア。意地を張っているわけではないのよ」
「あ……」
そして、リディアは瞬時に悟った。
――彼女のその言葉は、決して偽りではない、と。
「何もないもの」
その指は小さくテーブルの上を彷徨い、そして冷めた紅茶のカップを掴んだ。
「少なくとも、私のために戻ってくる義務は、あいつにはない。……そうでしょう？　だって私は、あいつのために何もしていない。あいつが私に義理を果たす理由は何もない」
「……」
「だから、戻ってこない方が自然だと、そう思うだけのことよ」
淀みなく言い切ったその言葉に、リディアは素で驚きの表情を浮かべ、そしてすぐに誤魔化すように視線を泳がせた。
（……シーラさん）
一瞬だけ過ぎった、表情。
その一瞬を、リディアは見逃さなかったのだ。そして、理解した。
（でも、なんで――）
意地を張っているとか、おそらくそんな単純なことではない。この二人の間には――あるいは彼女の心の中だけなのか――それだけ

ではない何かがあるのだと。
（……似合わないよ、そんなの）
黙ったままシーラが席を立つ。
「あ、シーラさん！」
咄嗟の嘘が、反射的にリディアの口をついていた。
「言い忘れてたけど……今日からシーラさんに監視をつけることが決まったから！」
「……監視？　何故？」
当然のように、納得できない顔で振り返るシーラ。
リディアは答えた。
「シーラさんが家出したら困るから、って、ファナさんが」
「……用意のいいことね」
少し憮然とした顔。だが、それは図星をさされた故の表情だったようにリディアには思えた。先手を打てたことに少しだけホッとしながら、
「言ったじゃん。二ヶ月はティースさんの居場所を空けて待ってるって」
シーラは眉をひそめて、
「それと私を引き留めることに、一体どういう関係があるというの？」
「だってシーラさんのいる場所が、ティースさんの居場所だもん」
「それは、あなたの勝手な妄想よ」
「じゃあ、賭ける？」
リディアは真顔でシーラを見つめた。
「ティースさんが二ヶ月以内に帰ってこなかったらシーラさんの勝ち。帰ってきたらあたしの勝ち。シーラさんが勝ったら、一つだけ、なんでも言うこと聞くよ」
「……」
少し無言で考えたシーラは、やがてそれほど興味なさそうにしながらも、

「あなたが勝ったら？」
「そうだなぁ。……あたしの質問に、一つだけ正直に答えてもらおっかな」
「……」
真意を探るように、少女の目を見つめた。が、もちろん彼女はとぼけて考えを表情に出そうとはしない。
無駄だと悟ったのか、やがてシーラはため息をついて答えた。
「……そうね――」

丘の上で、ティースは沈みゆく太陽を見つめていた。
その先、北側へと折れ曲がって続いていく街道。その遙か遠くにネービスの街があるはずだ。
強い風が、身に纏う彼の灰色のローブをはためかせ、
「……」
無言のまま、その街道に背を向ける。歩くたび、腰にぶら下げた一振りの剣、細波が小さな音を立てる。
――今は、戻ることはできない。一時の訣別。
長い影を引きずり、ティースは緩やかな坂を下りていく。
（もう、みんなネービスに戻った頃だろうな。シーラは――少しぐらいは心配してくれてるかな……）
そのことを考えると罪悪感が胸を襲う。が、彼は自らの行動を後悔してはいなかった。
（お前が俺の立場だったら……きっと、同じ気持ちになったよな……）
それは共有する記憶。たとえ彼女があの頃と変わっていたとしても、そのとき感じていた想いはきっと同じだったと、そう信じてい

るから。
少し、早足になる。
歩む先はネービスとは全く別の方向。
ミューティレイク、そしてディバーナ・ロウ。たった半年とはいえ、確かに仲間だった人々に背を向けて。――いや、再びその場所に戻ってくるために。
顔を上げて、前を見た。
その視線の先に、一人の女性が立っている。
「ティース様」
彼と同じ灰色のローブとフードに身を包んだ、百八十センチほどはあろうかという長身の女性。フードの奥から向けられる瞳は、変わらずに穏やかで優しい。
「ああ。……リィナ。行こうか」
「ええ」
頷いて、リィナはフードの奥から微笑む。
そこには少しの不安と、それ以上の信頼の眼差し。……ティースはそれを見て、やはり自分の行動は間違っていなかったのだと再認した。
そして、二人は歩き出す。
「……レイさんという人は、最初から私を殺すつもりはなかったと思います」
途中、ふと呟いたリィナの言葉にティースは頷いて、
「ああ。俺もそう思う」
思い返すと、まさにその通りだった。
あのとき――レイが盛大に土埃を巻き上げたおかげで、二人はあの場から何とか逃げ出すことができた。彼の剣が結局リィナを捕らえなかったことも事実であり、ルネッタがすぐに追ってこなかったのも、あるいは彼の仕業だったのかもしれない、と、今ではそう思える。
「最初の不意の一撃も、わざと狙いを外したようでした。私は直前

まで、その気配に気付いていませんでしたから」
「……そうかもしれない」
だとしたら、彼は最初から二人を逃がすために芝居を打ったということになる。
――何のために？
それは、分かり切ったことだった。
ポケットに手を入れると、そこには金属の感触――以前、彼から預かったミューティレイクの紋章がある。
それはこの先、ネービス領内を放浪する上で役に立つはずのものだった。
（ここまで読んでいたのだとしたら……あの人、やっぱりとんでもない人だ……）
とにかく、今はただ感謝の気持ちで一杯だ。シーラのことといい、リィナのことといい。ティースは彼に大きな借りを二つも作ってしまっていた。
いつか、それを返せる日がくればいいと、そう思う。
そう。そのためにも、今は――
「このペースなら、二週間もしないうちにリガビュールの街に着く。約束には、充分に間に合いそうだ」
ネービス領西端の街、リガビュール。
そこが今の彼らの目的地。
「でも、なぁ。まさかエルのヤツまで一緒にこっちに来てたなんて、思わなかったよ」
その途中、ティースはそう呟いた。
“エル”
それはリィナと同じ時期、同じように彼の記憶の中に存在している者の名だ。
「エルさんは、もともと人の世界に興味を持ってましたから。……覚えてますか？　私たちが初めて出会ったときのこと」
「ああ、もちろん」

冬の日の森の奥。
そのときの光景を思い浮かべながら、ティースは呟いた。
「敵じゃない、って、あいつが涙を流しながらそう言ったんだ。それで、俺は君たちを信じようと思った」
頭に浮かぶ可愛らしい少年の顔。
リィナは頷いて、
「私がこっちの世界に流されたあのとき、偶然一緒に流されたエルさんと出会っていなければ、私たちが理解し合うことも、私がここにいることも、きっとなかったと思います」
ティースは思い出したように、
「そういや、あいつって最初からすごく“人”っぽかったっけ。……君は最初、ものすごく無愛想だったんだよなぁ」
「わ、私の話はやめましょう」
リィナは恥ずかしそうに抗議すると、
「エルさんは私とは違って、最初から“愛”とか“情”の意味を知っていたんです」
「言われてみれば、確かにそうだったかなぁ」
そう考えると彼にも、彼女のような“王魔”と呼ばれる存在が、どれだけ自分たちと違っているかが実感できた。
（ってことは、エルの奴は少なくとも王魔じゃないんだよな。……それとも、単にあいつが変わり者だっただけか……？）
子供の頃の話だ。二人の種族になんて興味はなかったし、当然その頃は下位族だとか上位族だとかの知識もなかった。が、リィナの言う王族についての話が本当であれば、彼はおそらく将族以下の魔なのだろう。
「ところであいつ、少しは成長したのか？」
そう問いかけながら、どんな風に成長したのかと想像すると、ティースの頬は自然と緩んだ。
何しろそのエルという少年、リィナより一つ下……シーラと同い年とはいえ、当時の彼女たちより十センチ以上も背が低かったので

ある。
と、その言葉の意味をすぐに察したリィナは微笑んで、
「背、の話ですよね？」
「ああ。ほら、あいつって、俺の中じゃいつまでもあんな感じのイメージしかないからさ」
リィナはクスクスと笑って、
「もちろん伸びました。……その、ほんのちょっぴり」
「ちょっぴりって……」
「これぐらい、です」
「……」
ティースは言葉を失った。
彼女の右手は、その胸よりも下で止まっている。
……彼女の身長が約百八十センチ。そこから推測するに、それではおそらく百四十センチを少し超えるぐらいだろう。
（レ、レアスくんより小さいじゃないか……）
当時の姿から考えて、それほど伸びてはいないかなと想像していた彼でさえ、その事実には唖然とせざるを得なかった。
「それって……百四十センチぐらい伸びた、ってことじゃないよな？」
リィナは笑って、
「まさか。それだったら三メートル近いですよ」
「そりゃそうか……でも、うん。それってあまりにもあんまりだなぁ」
女性としては背の高すぎるリィナ。
男性としてはあまりに背の低すぎるエル。
二人の姿を並べて浮かべると、失笑せざるを得なかった。
「でも、小さい方が可愛らしくていいじゃないですか。私はエルさんが羨ましいです」
「そうかなぁ」
確かに、彼女は女性としては少々背が高すぎる。ティースはそれ

よりも若干長身だから問題ないとしても、彼女より背の低い男にしてみたら、やはり威圧感を感じてしまうのかもしれない。

（逆ならいいのになぁ……）

そんなことを考えながら、約二週間後に迫った友人との再会を思い浮かべ、ほんの一瞬だけ現状を忘れて心を弾ませたティース。

と、そんな彼に、今度はリィナが質問する。

「ティース様。今度はシーラ様のこと、お聞きしてもいいですか？」

「え？　あ……うん」

頷いたティースに、彼女が口にしたのはいきなりとんでもない質問だった。

「ティース様とシーラ様は、結婚したんですか？」

「え！？　……ま、まさか！」

手を振りながら慌てて否定すると、リィナは少し首を傾げて、

「カザロスの人たちがそういう話をしていたので……」

「カ、カザロスの？　……そ、そっか。やっぱ向こうじゃそういう話になっているのか」

故郷――カザロスのことを思い浮かべ、ティースは少し複雑な表情だ。

だが確かに。彼らがネービスに出てきたときの経緯を考えれば、それは仕方のない話の流れだった。そのときは“駆け落ち”だと思われて当然の状況だったのである。

「では、やはり違うのですね？　……ホッとしました」

「え？」

その言葉に少しだけドキッとしたティース。……が、彼女から返ってきた言葉は、彼が期待したようなものではなかった。

「ティース様とシーラ様が結婚だなんて。本当にそんなひどいことになってたら、どうしようかと思っていたんですよ」

（……あ）

そして思い出す。

（そっか……リィナの中じゃ、結婚って“悪”なんだっけ）

そう。彼女……というより“彼女ら”にとっての“結婚”とは、子孫を残すために無理矢理課せられる“義務”のようなものであり、ティースたちが当然に考える結婚――愛し合って、結ばれて、というイメージとは大幅に異なるのである。

（うーん……）

「ティース様？　どうかしましたか？」

「あ、いや……その、リィナ」

理解できるかどうかは別にして、ティースはとりあえずこっちの常識を教えることにしてみた。

「こっちの結婚っていうのは――例外もたくさんあるけど、基本的には愛し合う者同士がお互いに望んでするものなんだよ。だから、リィナが考えてるような悪いものじゃないんだ」

だが、リィナは理解できない顔をする。

「？　愛しているというのは、大事だということですよね？」

「ああ、そりゃそうだよ」

「大事なのに結婚させるのですか？」

「え？」

思わず聞き返したティースに、リィナは眉をひそめて、

「結婚すると子供を産まなくてはならないんですよ？　大事な人に、そんなひどいことをさせるのが人間の世界では普通なんですか？」

「ひ、ひどいって……いや、だってほら、子供っていうのは夫婦の愛の結晶というか……俺は男だからわかんないけど、女の人だって好きな男の人の子供を望んだりする場合が多いっていうし……」

「……わかりません」

ティースは困り果てて、

「じゃ、じゃあさ。リィナは、小さい子供が可愛いとか思わない？」

「あ、はい。私、子供は好きだと思います」

その答えに、ティースはパッと顔を輝かせて、

「そ、そうだろ？　じゃあさ、それが好きな人の子供だったり、自分の子供だったりしたら、なおさら可愛いと思わない？」

だが、やはりリィナはわからない顔で、
「何故ですか？　誰の子供でも子供は子供ですよ？」
「ううー……」
お手上げだった。
彼女らのような王魔には、自分の子供を自分で育てるという習慣もなく、親と子供は全く関係のない別の存在という考え方を持つ種族が多い。家族の繋がりとして存在するのは“兄弟”のみで、そんな彼女がティースの言葉を理解できないのは当然だった。
「……難しいです」
リィナも少し困った顔をしていたが、やがて思い直したようにゆっくりと微笑むと、
「でも、いつか教えてくださいね。ティース様は、私に“愛”と“情”を教えてくれた人ですから。きっと、理解できる日が来ると思うんです」
「お、教えるって言われてもなぁ」
その意味を少し深読みしてしまって、ティースはまたもやドキドキしてしまった。
そして、慌てて話題を変える。
「……にしても、ものすごい偶然だよなぁ。だって、俺やシーラがネービス領まで来てることだってわからなかったはずだろ？」
そう問いかけてみた。
ティースやシーラの故郷はこのネービス領から見て東の方角、間に二つほど他の領地を挟んだ場所にあるジェニス領のカザロスという街だ。大陸は広く、“ヴォルテスト条約”に賛同した領地だけでも三十近い。だから、彼女がこのネービス領にやってきていたというだけでも、驚くべき事なのである。
だが、リィナはその言葉にクスッと笑って、
「偶然ではないですよ。……ほら。昔、シーラ様が口癖のように言っていたでしょう？　ネービスに行って薬師の勉強をしたいんだ、って」

「……あ。そっか」
思い出して納得するティース。
「他に情報もなかったですし、もしかしたらと思って。……カザロスにティース様たちの姿がなかったときは、途方に暮れて泣きそうでした。もう二度と会えないのかと思って……だから、この偶然には本当に、本当に心から感謝しているんです」
「はは……」
照れて、頭を掻くティース。
彼女の屈託のない笑顔に、頬が再び熱を帯び始める。
（……あぁ、もう。相手はリィナだってのになぁ……）
いくら言い聞かせても、胸の高鳴りは抑えることができず。
……当時とは、あまりに違っていた。
それを意識してしまうほどには成長していたから。
「ティース様。あと少しですね」
「あ、ああ……」
彼女の暖かい笑顔に、ティースの胸は充足感に満ちていく。
最近ではあまり感じたことのない安堵感に身を委ねながら。

――どうやらこの歳にして、ようやく彼の初恋らしきものが始まったようだった。

ガラガラガラガラ……
太陽が昇り始めて間もない早朝、薄暗い中、少しだけ肌寒い空気を切り裂くように、街道とは別のルートを通ってリガビュールに向かう一台の馬車があった。
大きく揺れながら進むその馬車は飾り気もなく、貴族が使うよう

なものではない。が、その割に作りは頑丈。馬車の周りには護衛らしき者たちが四、五名、馬に乗って周りを囲んでいる。よく見ると御者も剣を携え、馬車には光を採る窓も見当たらない。外側からは頑丈な鍵らしきものがかけられており、どこからどう見ても異様な雰囲気の漂う一団だった。

そして、その馬車とリガビュールを結ぶ道の間。

――丘の上に、馬上からその馬車を見つめる視線がある。

「来たぞ。……準備はいいか」

徐々に近付いてくる馬車をその視界に捕らえ、三十代後半ぐらいの男が後ろを振り返った。

顔を隠すように深くフードをかぶり、腰には一振りの剣を下げている。盗賊風、と言っても差し支えはないだろう。

その言葉に後ろで頷いたのは、五人。それぞれフードをかぶっており、出で立ちも全員が同じだ。

……その中に一人だけ、目立って背の小さな人物がいる。

先頭の男はその人物に視線を向けて、言った。

「エル。お前はまだ子供だ。無理はするなよ」

「わかってるよ、ボイス。無茶はしないって」

フードの中から返ってきたのは、やはり少年の声だ。まだ声変わりもしていない。年齢的にはおそらく十代前半というところだろう。

「では、行くぞ」

全員が頷いて、手綱を握る。

目標はもちろん、リガビュールに向けて走る一台の馬車――

「……来たぞぉっ！！」

馬車の一団が、自らに近付いてくる六騎の影に気付いた。

「キュンメルだ！　キュンメルの奴らが来たぞぉっ！！」

馬のいななき。

重なる抜刀の音。

怒号をあげて……そして、二つの集団は交戦状態に突入した。

ネービス領リガビュールは、西の国境近くに位置する中規模の街だ。古くから存在する街の一つだったが、大陸の主要都市を結ぶメイン街道からは大きく外れている……というより、意図的に“外されて”いる。

（今日も来ない、か）

この街に来てこれで一週間。十二月も半ばに至って風は冷たい。

ティースはこの日も太陽が沈むまで、このリガビュールの“表向きの名所”である、初代ネービス王（都市国家時代のものだ）の石像前で人を待っていた。

目印は“ネズミ色のフード”と、ローブの胸に“赤いリボン”だと聞いていたが、今のところ、そんなアンバランスな服装をした人物の姿は見掛けない。

（もう日も沈むし……また明日、だな）

諦めて、彼は石像の前を離れた。

リィナがエルと交わした待ち合わせの約束は“一年後”だという。正確な日付は今から十二日後のことだ。

（に、しても……）

そのまま彼の足は“表向きの名所”から“事実上の名所”の方へ進んでいく。宿へ戻るには、よほどの遠回りをしない限りそこを通らざるを得なかった。

そしてため息をつく。

（よりにもよって、こんな街を待ち合わせ場所にしなくてもいいのになぁ……）

活気のない街。

最初にここを訪れた旅人の、約半数ほどがそう感じるという。

何故“半数”なのかというと、それは簡単だ。

……このリガビュールの街は昼と夜で全く別の顔を持っているから。

つまり――

（ううう……）

嬌声。

笑い声。

日が沈んで風も冷たいというのに、街のメインストリートはやけに明るい。立ち並ぶ建物には煌々と明かりが灯り、辺りは異様な雰囲気に包まれていた。

その中を、ティースは視線を下に落としながら歩いている。

辺りにいるのは、どこからどう見ても健全とは言い難い、風邪を引きそうな格好の女たちと、ペアになって客引きをする男や老婆たち。目が合えば、すぐに手招きされ話しかけられてしまう。

だから彼は、極力視線を上げないように、縮こまって歩いていたのだ。

……ネービスといえば“学園都市”の名が示すとおり、どこか堅いイメージがある。が、それはあくまで首都ネービスだけの話であり、このリガビュールの街は、犯罪組織に似たいくつかの集団が事実上取り仕切っている、ネービス領最大の“歓楽街”だった。

ただ、犯罪組織が取り仕切っているとはいえ、そこにはそれなりのルールが存在し、多少の不穏な影がちらつく以外は、ある一定の治安を保っている。だからネービス公もこの街の状況を半分黙認しており、無責任なうわさ話によれば、その間には一種の利害関係のようなものが結ばれているとも言われていた。

……とはいえ、まあ、その真偽はどうでもいいことではある。

ただ、彼にとって大事だったのは、

（は、早く宿に帰らなきゃ……）

その一点なのだ。

油断すると、すぐに袖を引かれそうになる。……彼がただ小心なだけの男ならそれほど問題ないのだが、彼の場合、不用意に触れら

れでもしたら大変だ。気絶したからといって身ぐるみ剥がされるようなことは――よほど運が悪くない限りないはずだが、それでもこんな場所で意識を失うということは、とてつもなく不安なことであり。

どんっ。

「わっ……す、すみません！」

女たちの手ばかり警戒していて、通りを歩いていた男とぶつかってしまう。

頭を下げてその場から離れると、今度は、

「お兄さん、ちょっ――」

「ご、ごめんっ！　俺、客じゃないからっ！！」

顔を上げることもせずにそこから逃げ出し、まるで迷い子のようにオロオロしながら……そして、なんとかメインストリートを抜けていくのだった。

「ふぅ……」

賑やかな通りを抜けると、辺りは急に静けさを増す。ギャップがあるだけに、静けさに異様な重みを感じた。

ひとまず安堵の息を吐いたティースは歩みを緩め、無数の星が浮かぶ夜空を見上げる。

……その脳裏に、明るく無邪気な背の低い少年の姿が浮かんできた。

（エル――）

リィナの話によると、彼は彼らがこの世界で暮らしていくための“方法”を探しに、ネービスの南西に接するモルフィドレル領へ向かったらしかった。

その“方法”とは――

（……朧、か）

魔を人の姿に変える、刻印型の破魔具“朧”。

ほぼ完璧な性能を持つ代わりに、一度使ってしまえばそう容易く元の姿には戻れないという代物。

彼はそれを求め、モルフィドレル領へ心当たりを訪ねていったのだという。
『ですから……ティース様とシーラ様には、どうか私たちの身請け人となって欲しいのです』
その願いをリィナの口から聞いたとき、ティースはもちろん二つ返事で承諾した。
（一年……だもんな）
彼女たちがこの世界にやってきたのが一年前。それだけの月日を二人はティースたちとの再会のためだけに費やしてきたのだ。
（俺も二人の気持ちに応えなきゃ、な）
そんなことを考えて――ボーっとしていたのかもしれない。
彼は自らに近付いていた複数の人の気配に気付かなかった。
「え？」
突然、その脇を一つの影がすり抜けていく。
（――子供？）
一瞬だけその視界に映ったのは、灰色のローブにフードという格好の背丈の小さな人物だ。が、街中でのその奇妙な格好について疑問を抱く間もなく、さらに複数の気配が背後に現れた。
「……あ」
腰に剣を差した男が三人。特に声を上げるわけでもなく、無言のままで慌ただしく脇を走り抜けていく。
薄暗い闇の中に消えていく合計四つの人影。
（えっと……）
ティースは立ち止まってしばし思考を巡らせた。
奇妙な格好の人物。
追いかける複数の男たち。
腰にぶら下げた剣。
「……」
ある程度の治安が守られているといっても、やはり性質上トラブルの耐えない街だ。客と店の間で揉めたりはしょっちゅうのこと、

店で働いている女性が逃げ出したりとか、客と駆け落ちしたりとかで、少々物騒な展開になることも珍しくはない。
彼が不穏な想像をしたのは、当然の結果だったろう。
そして基本的に“お人好し”な彼の取った行動は――
（……えっと、確かこっちに……）
しばらく追いかけたティースは、先ほどの男たちが立ち止まって何やらひそひそ話しているのを見た。路地の裏や、少し先の分かれ道を指さしながら、小さく首を振ったりしている。
どうも見失ったらしい。
（なんだ……）
事情はわからないまでも、そのことにホッと胸をなで下ろしたティース。
だが、その瞬間。
――カラッ。
「!?」
ほんの微かな物音だ。が、すぐそばにいた彼には確かに聞こえた。
どうやらとっくに枯れているらしい古井戸。
暗くて一見わからないが、その縁のところに微かに指が見えている。
（……な、なんて無茶な！）
ティースは仰天した。
水があるならまだしも、枯れた井戸の中になど落ちたら一巻の終わりだ。しかも、そこから覗いている手はあまりにも頼りなく、どう見ても再び這い上がってこられるような状態には見えなかった。
その危なっかしさをとても見過ごせず、ティースは慌てて駆け寄って、井戸の中から生えていた腕を掴む。
「！！」
見つかったと思ったのか、井戸の中の人物が震えた。
「しっ」
「……？」

薄暗い井戸の中から、不審そうな視線が彼を見上げてくる。
頭にかぶっていたフードは重力に従ってめくれており、顔を見る限りはどうやら子供。薄暗いせいもあって、男か女かははっきりわからなかった。
ただ、
（……え？）
その瞬間、それよりももっと重大なことに気付く。
「……っ！？」
相手もそれに気付いたのだろう。とっさに隠そうと肩をすくめたが、もちろんその体勢で隠せるはずはない。
――その、尖った耳を。
（人魔……！？）
「おい、そこのお前」
「！」
三人組の一人がティースの存在に気付いて近付いてきた。
（……どうする！？）
背中に汗が浮く。
――彼が助けようとした井戸の中の人物は“魔”なのだ。
「……」
一瞬の躊躇。
「おい、聞こえないのか？　そこの、おま――」
「っ……おぇぇぇぇぇぇっ！！！」
「っ！」
井戸の中の人物が顔を歪める。と同時に、ティースの背後に近付いていた男も顔をしかめた。
「うぐっ……おえっ……おえぇぇぇぇぇぇ……っ」
「……ちっ。酔っぱらいか」
それは決して素晴らしい演技というわけでもなかっただろうが、特に珍しい光景でなかったことが幸いだった。井戸の中は彼の背中で完全に隠れていたし、まさか枯れた井戸にぶら下がっているとは

考えなかったのだろう。
辺りを少し見回ったあと、男たちは違う方向へ去っていった。
「……」
感覚を逆立て、気配が完全に消えたことを確認してから、
「ふぅ……まったく、無茶をするなぁ」
ティースは大きく息を吐く。そしてぶら下がっていた人物を井戸から引き上げると、ようやく月明かりの下で顔がはっきりと浮かんだ。
少年だった。年の頃は十四、五歳だろうか。幼さを残している分、少し中性的な顔立ちだが、抱き上げた感触は間違いなく男だった。というより、これでもし女だったりしたら、ティースの体の方が少々ヤバいことになっているはずである。
「さて、と。それじゃ事情を――って！　待て！　逃げるんじゃない！！」
逃げだそうとした少年の襟首を掴む。
「っ……離せっ！！」
ティースは暴れようとする少年を力ずくで押さえつけ、目立つといけないので路地の中へと引っ張り込んでいった。
「離せ！　この！　変態！　……ホモ野郎っ！！」
「だっ、誰がっ！！」
なんとも口の悪い少年である。……いや確かに。先ほども言ったように、少年は少々中性的な容姿だったし、まだ大人とは言い難い年齢で肌も綺麗だ。あるいはその筋の人たちにはウケるのかもしれないし、この光景だって、見ようによっては“そういう風”にも見えるのかもしれなかった。
が、一応断っておくと、このティースという男にそのケは一切ない。
「と、とにかく！　追いかけられていた理由を話してもらおうか！」
暴れる少年の両手を後ろ手に押さえつけて、路地の壁に軽く押しつける。

「っ……いたっ！」
「あ、わ、悪い！」
びっくりして咄嗟に力を緩めたが、もちろん離すようなヘマはしなかった。
そんな彼を、少年は肩越しにキッと睨み付けて、
「なんだよ！　お前もあいつらの仲間かっ！　それともなにか、商売女を相手にする金がないからって、代わりに俺を慰み物にしようってのかっ！？」
「だっ、だからそういうんじゃないって！」
（……お、俺って、もしかしてそういう風に見えるのか……）
そんなはずもなかったが、この言葉にティースはいたく傷ついてしまった。
「別に君をどうこうしようってことは考えちゃいない！　けど、もし君が悪いことをして追いかけられてたんなら、このまま逃がすわけにはいかない！」
「だったら、なんで助けたりしたんだよ！」
「そりゃそうだろ！　あんな物騒な連中に追われていたんだからっ！！」
「はんっ！」
少年は信じてない顔で笑い飛ばすと、
「あんたの目は節穴かよ！　俺のこの耳が見えないってのか！？」
「見えてるから、心配してるんだっ！」
「……はぁ？」
ようやく、少年の体から力が抜けた。
目が怪訝そうな色を帯びる。
ティースはそれに合わせ、少しだけ口調を落ち着かせて続けた。
「……君が魔だから、なおさら心配になったんだよ。悪いこともしてないのに、追いかけられてたんじゃないか、ってさ」
「……」
どうやら少年の中でようやく葛藤が始まったらしい。

抵抗を続けるべきか、目の前の人物の言葉を信じるべきか――
だが、結論は否応なしに出る。……自分を押さえている人物の力量が、自分より格上であることを少年は悟っていたのだ。
「……離せよ。もう逃げたりしないからさ」
そう言って、少年はペタンと座り込んだ。見上げる視線は不満に溢れていたが、それでも結果的に追っ手から自分を助けた彼のことを信じることにしたらしい。
「お前、俺が魔なのに、心配になったってのか？　……お前、何者なんだ？　まさか、お前も魔なのか？」
矢継ぎ早の質問に、ティースはホッと胸を撫で下ろしながら、自らも道の上に座って目線の高さを合わせる。
「俺は人間だよ。ただ……俺は魔が全部悪いヤツだなんて思っちゃいないから」
「……」
再び少年の顔が疑念の色に染まる。
が、やがてそっぽを向くと、ぼそりと答えた。
「悪いことはしちゃいない。……少なくとも、俺は自分が正しいことをしてると思ってる」
「そうか」
ティースはひとまずそれを信用することにした。
もちろんこのまま解放する気はない。ただ、もう少し安全な場所に移動してからもっと詳しい話を聞こうと思った。
「じゃあ、残りの話は後にして、まずはここを離れよう。……自己紹介もしておこうか。俺は――」
言いかけて、ふと気付く。
（……あれ？）
改めて目に入ったのは、少年が身につけているローブ。キレイなものではなく、長旅を物語る汚れがそこかしこについている。
が、注目したのはそこではなく……その、胸についている赤いもの。

（赤い、リボン？）

あまりにもアンバランスだ。

だが、ティースはそのアンバランスな組み合わせを知っている。

……というより、敢えてそのアンバランスな服装を“してくるはず”の人物を知っていた。

（……え。じゃあ、まさか……）

そうだと考えてみると、少年の尖った耳とも辻褄が合う。

「な……なんだよ」

マジマジと見つめられて、少年はたじろいだ。

「お、お前、やっぱりそのケが――」

「お前……」

だが、ティースはそれに構わずに言った。

――記憶にあるそれよりはかなり男っぽくなっている。が、改めて見ると面影があるような気がしたし、成長という要素を加味するのであれば、それは充分想像しうる範囲の変化だった。

「……エル？　お前、ひょっとしてエルなのか？」

「え？」

少年はきょとんとした顔をする。

そしてすぐさま、気味悪いものを見たような顔で、

「な、なんでお前が俺の名前を知って――」

「エル！」

ティースは嬉々として声を張り上げた。すぐにその手を取って、

「俺だ！　ティースだよ！」

「え……？」

再び、少年――エルは呆気にとられたような顔をした。

何を言っているのかわからない、という表情だったが……やがて、その言葉を理解したかのようにゆっくりと口を開きながら、

「ティース……？　あ、えっと、お前――」

「ああ！　俺だよ、ティースだ！　……ひっさりぶりじゃないか！」

「……」

エルはまだ戸惑っているようだった。

それはそうだろう。彼にしてみれば、ここにやってくるのはリィナのはずで、彼が直接やってくるなどとは考えていなかったのだろうから。

それでも、数秒後にはようやく整理が出来たのか、ようやくエルも声を張り上げた。

「……お前……あの、ティースか！」

「ああ！」

再会の喜びを手の平に込めて、少し浮かれながらティースは満面の笑顔を浮かべた。

「ははっ……お前、思ったより背伸びたなぁ」

少し冗談交じりにそう呟く。

確かに目の前にいる少年の身長は、リィナから聞いていたものと比べて十センチほど高く、百五十センチは確実に越えていた。が、彼女と別々に行動していたこの一年という年月を考えれば、それは決して驚くべきことではないだろう。

エルはそんなティースを見て、

「な、なに言ってんだよ。お前こそ……昔は、そんなに背ぇ高くなかったよ、な？」

「ま、そりゃそうだけどな。……けど、口調も男っぽくなったじゃないか。昔は自分のこと、ボク、ボク、って言ってたのになぁ」

「む、昔の話だろっ」

その抗議の声に笑って、ティースは立ち上がるとともに手を伸ばした。

「でもなんかトラブルに巻き込まれてるみたいだな。……よし。じゃあ詳しい話は宿に行って聞こう。リィナもそこで待ってる」

「リィナ……？」

ティースの口から出たその名前に、エルは少し考えて、

「あ、ちょっと待ってくれないか、ティース」

「ん？」
すでに路地から顔を出して辺りを窺い始めていたティースは、その言葉に振り返って、
「どうしたんだ？」
「……ちょっと今は都合が悪い。宿に戻るのは、少し待ってくれないか？」
「？」
怪訝に思ったが、その理由を推測するのは簡単だった。
「さっきの連中か？　……なんなんだ、あいつらは」
「あいつらは――」
言いかけて、急に止めた。
「？」
再び躊躇って、考え、そしてゆっくりと顔を上げる。
向けられたその視線は、ピタリとティースを見据えた。
「……ティース。さっきの言葉、信用してもいいんだろうな？」
「？　なんだ？」
「敵は悪い奴だけだ、って言葉だよ」
表情は真剣だ。
「……」
そして、その気持ちはティースにも充分に理解できた。
彼もまた、リィナと再会したとき、それを喜ぶと同時に、年月による変貌を疑ってしまったから。だからエルもおそらく、彼が昔から変わっていないかどうか、確認したかったのだろう。
だから、ティースは殊更に力強く頷いて、
「ああ。当たり前だろ」
「じゃあ……俺を手伝ってくれるか？」
ティースは眉をひそめる。
「なんなんだ？　お前、一体何に首を突っ込んでいるんだ？」
「……」
エルの表情がほんの僅かに歪んだ。

それは紛うことなき怒りの表情。
（……こいつが、こんな表情をするってことは――）
彼は本来、温厚だった。別におとなしいというわけではなく、どちらかといえばかなり明るい性格ながら、意外に感情的なリィナと比べると怒る回数は圧倒的に少なく、外見の幼さの割に精神的には大人だったともいえる。
だがその代わり、怒ったときは――
「リガビュールの地下組織、ゲノールト」
「ゲノールト？」
エルの口から出た単語には聞き覚えがない。が、このリガビュールに多数存在する、非合法組織の一つであろうことは容易に想像できた。
「エル……お前、なんだってそんな連中と……」
「多分、ゲノールトはお前が想像しているような組織とは違う」
そしてエルは言った。
「ゲノールトはこのリガビュールでも裏の裏に存在するサービスの提供者なんだ。……デビルスレイバーだ」
「なっ……！」
ティースは驚愕に声を張り上げてしまった。
慌てて口を抑え、そして潜めた声で続ける。
「……デビルスレイバー……だって……！？」
名は知っている。だが、それが実際に商売として行われている場面に出くわすのは始めてのことだった。
デビルスレイバー――それはその名から想像できる通り、魔を奴隷に見立てて売買する者たちのことだ。デビルサイダーと違うところは、魔を使役して何かをするのではなく、完全な商品とすること……檻の中に捕らえた獣魔、魔同士を戦わせて見世物にしたり……中には人魔の少女に娼婦まがいのことをさせることもあるという。
大きな危険の伴うビジネス、だがそれ故に、少々歪んだ成金や異常な趣味の連中による需要は絶えないと言われていた。

「このリガビュールに……デビルスレイバーの組織があるってのか……？」

コクリと、エルは頷いた。そしてグッと拳を握りしめる。

「俺はそれを救済する組織“キュンメル”に所属――協力していたんだ」

「……キュンメル？」

どこかで聞いたことがあるような名前だった。

（確か正体不明の魔の組織――）

その目的も不明。だが、

「キュンメルは人間に不当に捕まった罪のない魔を救済する組織なんだ」

エルはそう説明して、さらに続ける。

「けど、一週間ぐらい前、この街に来ていた仲間は俺を除いてほとんどがヤツらに捕まるか殺されるかしちまった。……本隊と連絡を取ろうにも警戒が厳重で街から出ることもできやしない」

その言葉にティースは街に入るときのことを思い出して、

「そういや……入るときも、検問が妙にピリピリしてたっけ」

リィナを連れていた彼も一瞬ヒヤッとしたものだが、そこはレイから預かっていたミューティレイクの紋章のおかげで事なきを得たのだった。

「仲間たちの命が危ないんだ。それで一人でなんとかしようとして組織の中に潜入したはいいけど……結局見つかってこのザマだ」

「ひ、一人でって、そんな無茶な……」

ティースがたしなめようとすると、エルの表情が歪んだ。

「無茶でも……やるしかないだろっ！」

「――！」

「あ……悪い」

驚いた顔のティースに、エルは少し慌てたように口を塞いだ。

「お前には……関係のないことかもしれないな。何より、危険だし……」

そしてチラッと彼のぶら下げた剣に目をやって、
「悪い。聞かなかったことにしてくれ」
背を向けた。
「……」
ティースは無言でその背中を見つめる。
（エル……）
明るく、見た目の幼い可愛らしい少年。自分のことを“ボク”と呼び、どこか女の子のようだった少年。
だが、そんな昔の印象は、この再会によってあっさりと崩れ去っていた。
今、彼の目の前にいたのは、外見は幼くとも、揺るぎない決意と勇気を秘めた、紛れもない一人の男――
胸の奥が熱を帯びる。
「エル。待ってくれ」
「……」
ピタッとエルの足が止まった。そして、ゆっくりと振り返る。
ティースは言った。
拳に力を込めて。
それよりも力強い意志を、言葉に乗せて。
「俺も、手伝う。……お前の言うことが本当なら、それは絶対に許せないことだ」
「……ティース」
驚きに、エルの目がゆっくりと見開かれた。
その目を見つめ返したまま頷いて、
「でも、無茶はなしだ。ひとまず、宿に戻ってリィナに事情を話してから――」
「ま、待ってくれ、ティース」
だが、エルはまたしてもそれを拒否した。
「……エル？」
「その……なんだ」

エルは少し視線を泳がせて、
「リ、リィナ……は……その、なんていうか……危険な目に合わせたくない、というか……」
「え？」
不思議そうな顔のティースに、エルは少し焦ったような顔をする。
「お、お前も男ならわかるだろっ！　女を危険な目に合わせるわけにはいかないじゃないかっ！！」
「……」
ティースはしばし、きょとんとした後、
「……えっと……エル。聞いたことなかったけど……お前って、アレだよな？　多分、下位族……」
思わずそう尋ねた。
先ほどの追われていた状況、そしてティースに抵抗しなかったこと……それらを考えると、力量的に彼が上位魔や将魔ということは確かに考えにくい。
「なっ、なんだよ、突然」
肯定はしなかったが、その反応はどうやら図星である。
「……」
そんなエルをしばらく見て……そして、ティースの口には苦笑が浮かんだ。
（危険な目に合わせたくない、か……）
それはそうだろう。下位魔である彼が、王魔であるリィナに対し、女だから危険な目に合わせられない、と言うのだ。どんな天変地異が起ころうとも、リィナの方が圧倒的に強いに違いないというのに。
「お、おい……俺、何か変なこと言ったのか？」
慌てた様子で少し不安げな顔のエルに、ティースは首を振って、
「いや、気持ちはわかる。……そっか。そうだよな」
そう言った。
危険――力という点では心配なくとも、そのために正体を現すことになるならば、それはもちろん危険なことだ。ティースとて、彼

女にそういう危険を侵させるのは本意ではない。
「だ、だろ？」
ホッと胸をなで下ろしたエル。
ティースはそんな彼を見て、ふと思った。
（こいつ、もしかしてリィナに惚れてるのかな……）
確かに彼らは昔から仲良しだった。こっちの世界にいたときは、子供だったとはいえ、あの蔵の隠し部屋で二年ほどを一緒に暮らしていたし、今回、こっちの世界に一緒に来たことから考えても、向こうでも少しは交流があったのだと思われる。
思わず、笑みが浮かぶ。
だが、少しだけ、得体の知れないモヤモヤしたものが胸を過ぎった。
（……？）
もちろん自覚のなかったティースは、それが微かな“嫉妬”の感情だったということには気付かずに。
――そうして再会したばかりの二人は、ゲノールトに囚われた者たちを解放すべく、共に行動することになったのだった。

幕間『エリートたちの晩餐』

サンタニア学園。

広大な敷地と優秀な設備を擁するこの学園は、そこに開かれた数十もの学科からそれぞれ各分野のスペシャリストを年に何人も輩出しており、卒業生のリストには他領の重鎮が幾人も顔を並べているという、この学園都市ネービスの中でも三本の指に入る名門学園。それもいわゆる坊ちゃん嬢ちゃん御用達の学園ではない。その門戸は広く一般にも開放されており、いわば、夢を持つ一般市民にとっての登竜門的な場所なのである。

さて、その広い敷地を持つサンタニア学園の、とある一角。

そこに、薬師を目指す人々の集まる薬草学科の建物がある。薬草に関する知識やその調合法……毒草の見極め方やその利用法までを教えているところだ。

この日の放課後、その薬草学科の学舎から出てきた一人の少女がいる。

輝くばかりの綺麗なブロンドの髪を持ち、一際目立つ端正に整った顔立ち。隙のない凛とした姿勢で正門の方に向かっていくと、そばにいた幾人もの生徒が男女問わず彼女に視線を奪われていた。――彼女の存在を認知済みであり、その顔をそれなりに見慣れているはずの人々が、である。

と、そんな、ある意味少々異様な雰囲気の中、

「おぉーい。シーラぁ」

「？」

後ろを追いかけるように学舎から出てきたもう一つの影があった。

その声に振り返った長いポニーテールが微かに揺れ、その人物を確認するなり、人形のようだった顔立ちがほんの僅かに崩れて柔らかくなる。

「ディアナ」
どうやら少女――シーラにとって、それが親しい間柄の人物らしいことは疑う余地もない。
「聞・い・た・わ・よぉー」
ディアナと呼ばれたこの人物は、シーラと同じ薬草学科の三回生であり、一年と一ヶ月ほど年上の少女だった。学園内の女性比率はそれほど高くない。その中で、特別相性の悪くなかった彼女らが親しくなったのは至極当然の流れだったといえるだろう。
「なに？」
追いつくのを待ってから、シーラはそう問いかける。
肩を並べると若干シーラの方が背が高く、ディアナの人懐っこそうな丸い顔立ちも手伝ってか、二人の年齢は実際よりも逆転して見える。
そのまま、二人は並んで歩き出した。
「あんた、法務学科のお坊ちゃんと最近仲がいいらしいじゃなぁい？」
「誰のこと？　……あそこはそういうの多すぎて区別つかないわ」
馬鹿馬鹿しいと言わんばかりの様子で切り返したシーラは、とぼけているというよりは本当に興味がなさそうな態度だ。
その返答に、ディアナは特に意外そうでもなく、ただ少しつまらなさそうにして、
「なんだぁ。また玉砕しただけか」
「ここを社交クラブか何かと勘違いしてる痴者のことなんか、いちいち覚えてられないわよ」
「……うわ、相変わらず言うねぇ。うまくいけば玉の輿なのに。アレでも将来はきっとエリートよ？」
「興味ないわ」
学園の敷地を出ると、半数以上の生徒がそのまま南に向かっていく。それはつまり、一般住宅街から通っている人間が多い証拠だ。
「相変わらず真面目ねぇ。……ていうか、やっぱりオーウェン一筋

なんだ？」
「どうかしらね」
やはり素っ気ない様子でシーラはそう答えた。
――オーウェン＝トレビック。その名を持つ少年はシーラたちと同じ薬草学科の三回生でディアナと同い年の十六歳。背が高くそれなりにハンサムながら性格的にはやや地味でそれほど目立つ存在ではなかったのだが、学園一の美女と噂されるシーラとの関係が明るみに出てからは、薬草学科で一番有名な男子学徒になってしまった、運がいいのか悪いのかよくわからない人物である。
「相変わらずお熱いこって」
おちゃらけてそう言ったディアナは、それからわざとらしく周りをキョロキョロ見回して言った。
「で、そのオーウェンくんの姿が今日は見えないみたいだけど、どしたの？　倦怠期？」
「まさか。あり得ないわ」
シーラは呆れ顔で反論する。……というか、一日一緒にいないだけで倦怠期なのであれば、世界中の恋人は大半が倦怠期ということになってしまうだろう。
「彼には彼の生活があるでしょう。毎日毎日付き合わせるわけにもいかないわよ」
「あらら、いいのかなぁ。あんたのことだから、一日離れただけで変な虫がいっぱい寄ってくるんじゃないのぉ？」
「そうね。でも仕方ないわ、こういう顔だから」
しれっと返ってきた言葉に、ディアナは苦笑して、
「あんた、そういうことばっか言ってるといつか友達なくすよ？　……あ、でも、あんたぐらいだと逆に嫌味に聞こえないか」
「……」
一瞬だけ空白があって、シーラは答えた。
「顔の善し悪しなんて、きっと取るに足らないことよ。それで望みが叶うわけでもないわ」

「なに言ってんのよ。金持ちのいい男が見つかるじゃない」
「どんな顔だって、世界中の男が振り返るわけではないでしょう？」
大通りを南に下っていくと、人の波が徐々に小さくなっていく。
「そんなもんかなぁ。あんたの場合は全員振り返りそうに思えちゃうけど」
二人の足はいつも通りの道を辿り、やがてパン屋の角に差し掛かると、
「――あ、それじゃ、あたしはここで」
ディアナはそこで向きを変えた。
「ええ。また――明後日」
翌日は休校日だ。
「ん。じゃね。……あ、それと」
別れ際、ディアナはちょっとだけ眉をひそめて、
「言おうかどうか迷ったんだけど……あんた、今日はちょっと顔色悪いよ。ま、明日はちょうど休みだけど、調子悪いならちゃんと休んだ方がいいんじゃない？」
「……」
指摘されたことが意外だったのか、シーラはやや意表を突かれた顔をしたが、やがて目を閉じ、ゆっくりと首を横に振る。
「いいえ。大丈夫よ」
「……そう。じゃ、また」
諦めた顔で、ディアナはそれ以上は何も言わずに路地に消えていった。
シーラはそれを――いつもより心なしか優しい視線で――見送ると、やがて踵を返して歩みを再開する。
大通りの喧噪は、いつも通り。
「……」
そのうちに、彼女の顔は再び冷たい表情を形作っていく。
――すれ違う人々から受ける好奇の視線も、たまに声をかけてくる好色そうな男への対応も、彼女はとうの昔に慣れてしまっていた。

出来る限り一人にならないようにはしているし、一人のときは人気のない道を極力避けている。それに、万が一襲われたときの対応も万全。護身術も心得ているし、普通には手に入らない特殊で危険な薬も常に服の下に忍ばせてあるから、いつかのように相手が“魔”だったりしない限りはまず大丈夫だ。実際、誰にも明かしていないものの、それを使用する機会はこれまでにも何度かあった。

ふと足を止め、道端に並ぶ建物のガラスに自らの姿を映してみる。そこに映ったのは、いかにも愛嬌のない、どこか不機嫌そうにも見える見慣れた顔。

「……」

鏡を見たことはもちろんある。風聞だって耳に入ってくる。自身の容姿について、周りがどんな評価をしているのか、当然のように知っている。

彼女自身としては、目元がちょっときつすぎるとか、もう少し丸みのある輪郭の方が良かったとか、色々注文がある。が、周りの人々に言わせれば彼女は“完璧な”美少女らしかった。

（……見慣れてしまえば、全部同じじゃないの）

馬鹿馬鹿しくなってガラスから離れる。

実を言うと、彼女は自分の顔があまり好きではない。……いや、昔は好きだったのだ。周りにちやほやされるのは嫌いじゃなかったし、可愛い可愛いと誰かに誉められるのも悪い気分じゃなかった。

が、年を経るに連れ――特にこのネービスに来てからというもの、それが逆に厄介事を産み出す原因になってしまっている。将来有望で優秀なエリートコースの学徒だとか、貴族の一人息子だとか、大商人の跡取り候補だとか、彼女はそんなものに興味はないのだ。

（……ホント、下らない）

思考がマイナス方面へばかり転がり続け、苛々が募ってくる。……本来ならばとっくに割り切ってしまっているはずのこと。なのに必要以上に気分が沈むのは、そこに全く別の要因――別の心配事もあったからだ。

通い慣れた道を左の路地へ入っていく。少しデコボコして足を取られそうになる道だが、歩き慣れている彼女にとってはさほど苦でもない。

「……」

そこはあまりいい記憶のない路地だったが、今はまだ人通りがある。それに他のルートはさらに人も少ないし、それ以外を通るならぐるっと大きく遠回りをしなくてはならなかった。

三分ほどで路地を抜けると、やや広めの道に出る。中央通りほどではないが、馬車が二台は楽に通過できる道で、そこに沿って歩けばやがてミューティレイクの屋敷が見えてくるはずだった。

（……あら？）

ガラガラガラガラ。

彼女の横を一台の馬車が追い越していく。装飾を施されたそれは、どう見ても貴族の馬車だった。

（珍しい。……この道を向こうに行くってことは、ファナのお客かしらね）

ミューティレイクの屋敷は、有力貴族としては少々変わった場所――高級住宅街と一般住宅街のちょうど境目辺りに位置している。だから、貴族風の馬車がこっちの方角に向かっているのであれば、ミューティレイクの客だと思ってほぼ間違いなかった。

「……」

赤味を帯び始めた夕日をその視界に捕らえながら、シーラは無言で帰路を辿っていく。

――その背後、およそ十数メートルの位置。

「ふふ。ふふふふふ……」

どこか気味の悪い笑みを浮かべながら同じ方向に歩く、やや常軌を逸した雰囲気の男の存在には気付かないままで――

太陽が徐々にオレンジ色を帯び始めていた頃、カレル＝ストレンジは、だだっ広い建物の通路をやや早足で歩いていた。
まるでその性格を表すかのように、冷徹に同じリズムを刻む足音。
「……」
軍服のようなきっちりした黒い服に身を包み、腰には一振りの剣を携えている。身長は百八十センチ近く、真っ黒な髪は長くもなく短くもない長さで、やや後ろに自然に流してある。かなりのハンサムだが目つきは異様に鋭く、優しいとか穏やかとかいうものとはまるで正反対の印象。年齢は……二十代前半だろうか。窓から射し込む夕日が、両袖に刻まれた“肆”の字をオレンジ色に染め上げていた。
と。
「……ん？」
ピタリと足を止め、カレルはその鋭い視線を横に移動させた。
視線の先にあったのは、とある部屋の入り口。――いや、部屋というには少し広すぎるだろうか。
そこはだだっ広い鍛錬場の入り口だった。
「……」
聞こえた歓声にカレルは眉をひそめ、そしてちょうど鍛錬場から出てきた一人の男を呼び止める。
「おい。何の騒ぎだ」
「ん？　……あっ、カ、カレルさん！」
出てきた男は、まるで厳しい教師に見つかった生徒のような表情を浮かべた。……いや、どうやら彼らにとって、カレルというのは実際にそういう類の存在らしい。
だが、そんな男の態度など意に介することなく、
「自主訓練にしちゃ随分と騒がしいな。お前ら、なにをやってる？」
「あ、はあ、それが――」

おそらくカレルより二、三歳は年下だと思われる男は少し言いにくそうにしながら、それでも自らに向けられた視線の威圧感には耐えられずに答えた。

「先ほど他流試合の申し込みがありまして、今、キャシアスがその相手をしていたんです」

それを聞いたカレルの視線がますます鋭くなる。

「他流試合だと？　誰が許可した？」

「そ、それは私にはちょっとわかりま――あ、た、ただ、もちろん許可はいただいているはずですよ」

「……」

眉間に皺を寄せ、カレルは鍛錬場の中に目を向けた。

（……あれか）

鍛錬場の中央、野次馬が集まっているために中心はよく見えないが、そこには確かにカレルの知っているキャシアスという青年がいて、それと向き合うように見知らぬ男が立っている。

そして周りの野次馬たちはニヤニヤと試合を眺めていた。

（キャシアスが受けたってことは、許可を出したのは“ヤツら”の方か……）

歓声。

どうやらキャシアスの太刀が相手の太刀を弾き飛ばしたようだ。

笑い声。――冷笑。

（……ふん、下らん）

試合というよりは、一方的に嬲っているのだろう。キャシアスと対峙している男は遠目にも動きが鈍っていたし、半分戦意を喪失しているようにも見えた。

「あ、あの、カレルさん……」

「……」

カレルは目の前の男を一瞥すると、何も言わずに背を向けた。

許可を得ているのであれば口を出すことはできなかったし、それに彼は今、そんなことに構っている暇はなかったのだ。

「……ああ、そうだ、お前」
途中で思い直したように足を止め、振り返って問いかける。
「どこかで、ラドフォードを見なかったか」
「え、ラドフォードさん……ですか？　いえ、見てませんよ」
「そうか。ならいい」
すぐに早足で立ち去ると、背中に、笑い声がもう一度聞こえた。
他の場所へ足を向ける。
（ふん……）
すれ違う人々から向けられるのはその大半が尊敬と畏怖の視線だ。
その中を、カレルはいかにも近寄りがたい鋭い雰囲気を纏ったまま、やはり淀みのない足取りで進んでいく。
――しかし。
「ちっ……」
自室、鍛錬場、中庭、武器庫……いくら建物自体が広いとはいえ、一人の人物が訪れる可能性のある場所などたかが知れているはずだったが、どこへ行っても、彼の探すラドフォードという人物の姿は見えなかった。
探し始めてから三十分以上は経っただろうか。
「どこ行きやがった」
ラドフォードの私室を出たところで舌打ちしたカレル。クールな表情の中にもほんの僅かに苛々した色が見え隠れしていた。
と――突然、
「……どうしたんだい、子猫ちゃん」
「うぉおっ！？」
妖しげな中高音の囁きが響いたかと思うと、耳元に生暖かい息が吹き付けられた。
反射的に身を翻す。
と、そこに立っていたのは、
「ふふっ……水臭いじゃないか、カレル。一人で何を悩んでいるんだい？」

女性――いや、美青年だろうか？　カレルと全く同じ、きっちりとした軍服風の制服に身を包み、胸の前で左手に右肘を乗せ、右手は口元に当てて妖艶に微笑んでいる。身長はカレルよりは微妙に低く、百七十センチ半ばといったところか。金髪だったが、まるでカレルとお揃いのような髪型。その両袖には“捌”の字が刻まれている。

「……リゼット、テメー……」

鳥肌の立つ首筋を押さえたカレルに、リゼットと呼ばれた人物はウインクとともに右手の人差し指と中指で軽く投げキッスをして、

「さぁ、カレル。遠慮することはないよ。君の抱えている悩みを全て、隠すことなく、赤裸々にこの僕に告白してくれ」

カレルは眉間に皺を寄せながらも、やや抑え気味に答える。

「……失せろ。オメーの存在自体が悩みの種だ」

「ええっ、そんな！」

リゼットは目を見開いて、

「そんな、急にプロポーズされても困っ――」

「……どんだけ無理矢理な解釈なんだよッ！」

思わず声を荒らげたカレル。が、そんなごく真っ当な突っ込みも通じることはなく、リゼットは憂いを帯びた表情で深いため息を吐くと、

「ごめんね、カレル。君は素敵な子猫ちゃんだけど、僕はまだ一人のものにはなりたくないんだ。……こんな罪な僕を許しておくれ」

ピキ。

「……おい。気色ワリィ冗談も大概にしねぇと……殺るぞ、コラ」

「え、冗談なんかじゃ――うわ」

首から数十ミリの距離まで接近した白銀の刃に、リゼットはようやく両手を挙げて、

「ま、待ってよ、カレル。早まっちゃダメだ。よく考えて」

「オメーが人生やり直すこと考えろやッ！」

マジ殺意のこもった強烈な突っ込みに、リゼットは降参してため

息を吐く。
「もう、しょうがないなぁ。照れ屋さんなんだから。……ごめん。もうしないから。今のところは」
「……」
カレルは疑わしげな視線を向けていたが、これ以上は無駄だと悟ったのか、無言のまま剣を鞘に収めて背を向けた。
「探しているのは、ラドフォードさん？」
ピタリと足を止め振り返る。
「お前が行き先を知ってんのか？」
「僕は知らないよ。……でも、ルーベンが知ってるんじゃないかな？　一時間ぐらい前に二人で何か話してたから」
「……ちっ、ルーベン、か。また厄介なヤツに――」
「え、呼びました？」
「……」
注目した視線の先。あまりにもタイミング良く通路の向こうに姿を現したのは、やはり彼らと同じ黒い制服を着た青年だった。色白で童顔、いかにも病弱そうな外見は青年というよりは少年っぽく見えるが、年齢はおそらく二十歳近いだろう。天然のものか髪の色は白髪に近く、この大陸でも比較的珍しい髪の色だった。その両袖には“陸”の字が刻まれている。
そして開口一番、
「カレルさん。リゼットさんも、こんにちは。今日も夫婦で仲睦まじいですね」
「ルーベン。てめぇ、初っぱなから喧嘩売ってやがんのか」
「嫌よ嫌よも好きのうちといいますし」
「……。立ち聞きしてたんなら話は早ぇ」
眉の辺りにやや苛々が見え隠れしながらも、カレルはなんとか堪えて流した。……このルーベンに関しては、リゼット以上に突っ込みが通じない相手だということを、彼は身を以て知らされているのだ。

「ラドフォードの野郎はどこだ？　知ってんだろ？」
「あー」
その問いに、ルーベンは少しだけ首を傾けて、
「ラドフォードさんなら色々用事があるって出掛けましたよ。学園群の元締めさんやディバーナ・ロウの総帥さん、あ、あと、ミューティレイクの当主さんにも用事があるんだそうで。なので、遅くなるそうです」
「……全部同じじゃねーか」
そこへリゼットが口を挟む。
「要約すると、この前の警備についての議論を煮詰めて、あとはデンジャラスでアバンチュールなアフターファイブを楽しもうということじゃないかな」
「どこが要約だ？　わかわけんねぇぞ。……とにかく。あいつがミューティレイクに行ったのは間違いないんだな？」
「至極つまらない言い方をすればそういうことだね」
カレルはただでさえ鋭い目をさらに細めてリゼットを見据えると、
「で、テメーも実は最初から知ってたわけか」
「ち、違うよ。ルーベンくんの話を聞いてピンときたんだヨ」
「……」
怒る気すらも失せ、カレルは背を向けた。
「ミューティレイクへ行く。ルーベン、お前もついてこい。……リゼット。お前は絶対についてくんな」
「ええ！？　僕だけ仲間外れなんてひどいじゃないか！　どうして！？」
「てめーの胸に手を当てて考えてみろ」
「胸？」
リゼットはきょとんとした顔をして胸に手を当てると、直後、少しだけ頬を染めて微笑んだ。
「僕の胸に興味があるのかい？　ふふっ、カレルってば、見掛けによらずスケベなんだか――」

白刃が煌めく。
「死・ん・で・み・る・か？」
「あ、ああ危ないよ、カレル。け、剣は仲間に向けるものじゃないだろう？」
刃の向こうにあるカレルの視線がさらに鋭くなる。
「ワリィな、リゼット。俺にとっての“仲間”ってのは、俺に不利益を与えない人間のことを言うんだ」
「は、はは……」
突きつけられた切っ先を前に、リゼットは笑顔を引きつらせながら後ずさった。
と、そこへ、ルーベンが呟くように歌い出す。
「愛し合う二人は～いつもすれ違い～♪」
「……」
「すれ違いながら～ジジイになって～ポックリポックリ死んでゆく～♪」
「どんな歌だ！」
ルーベンはさも心外だといわんばかりの表情を作って、
「え、知らないんですか、カレルさん。巷では今大流行ですよ。ベストヒットですよ」
「嘘つけよ！　どう考えても今即興で作った歌じゃねーかッ！！」
「いやいや。一年後にはきっと大ヒットですよ。間違いないです」
「んなもんが大ヒットするなら、俺はとっくに国の一つぐらい手に入れて――」
「そりゃムリだろ」
ピクッとカレルのこめかみが動く。
「……いきなりタメ口か、コラ」
「だって、ムリですから」
そこへリゼットも二度頷いて口を挟む。
「うん、カレルにはムリ。王様っていうよりは犯罪組織のエージェントみたいだし」

「く……！」

こうして二人におちょくられる様は、とても部下たちから尊敬され恐れられるカレル＝ストレンジとは思えない姿だった。

「……ともかく」

こめかみをピクピクさせながらも深呼吸で自制し、剣を鞘に収める。

「ミューティレイクへ行く。ルーベン、ついてこい」

「はい、カレルさん」

素直に頷くルーベン。

「ねえ、カレル。僕は？」

「だから、お前は――」

「もしダメだって言われたら、君が帰ってくるまで延々と受付嬢を口説いてることにするよ？　隊内の風紀が乱れてもいいのかい？」

脅しなのかなんなのかよくわからなかったが、それでもカレルはこめかみを押さえながら小さくため息を吐いて、

「……勝手についてこい」

「ふふ、ありがと、カレル。愛してるよ」

チュッと音を立てたリゼットの投げキッスに、カレルのこみかみが再びピクリと動いたが、それ以上は何を言うこともなく。三人は建物を出ると、道行く人々の注目を集めながら南の方向へ向かって移動を始めたのだった。

その人物の第一印象をたった一言で表す術を、シーラは知っていた。

「嬢ちゃんはミューティレイクの関係者か？　だったら悪いが、ファナさんへ取り次いでもらえないだろうか？」

「……」

ミューティレイク家の正門まで約百メートル。
その場所で突然声をかけてきた人物。振り返った視界に立っていた一人の男。
歳は彼女よりもずっと上、二十代半ばといったところか。まず目につくのはフサフサとした、まるでライオンのような髪。背の高さは百八十センチ以上、彼女の昔馴染みの青年――ティースと同じぐらいはあるだろうか。だが、童顔で頼りなさげな彼とは違い、いかにも男臭い印象の人物だ。
が、彼女の脳裏に浮かんだ第一印象は、そういうものとはまるで無関係だった。
ただ、
（……変態？）
その一言である。
右手には花束。男の印象からするとミスマッチだったが、それは問題ではない。
問題は……そう。服装である。
下半身は至極まともだ。いや、そこがまともでなかったら、彼女は立ち止まることなく一目散に逃げ出すか、あるいはあらゆる危険な手段を用いてでも男の意識を奪う作戦を実行に移していただろう。
上半身。
上着はあまり飾り気のない、それでも比較的生地の良い下とお揃いの黒服だ。袖は肘の上まで捲ってあり、裾はやや長く太股辺りまである。前をボタンで止めるタイプの服だったが、男はそのボタンを止めていなかった。
そこまではいい。問題はその上着の中に着ている服だ。
……いや、そう言うと語弊があるだろうか。
着ているものが問題なのではない。
“着ていないこと”が問題なのだ。
つまり……ボタンを止めていない上着からは、筋肉隆々の素肌と、そこをほんの少しだけ黒く染める胸毛がそのまま覗いていたのであ

る。
「……」
シーラは無言のまま空を見た。
まだ夕日は出ている……とはいえ、季節柄、風はやや冷たい。
今が夏であるならば、いい。外で働く男たちの中には上半身裸という者も珍しくはない。が、今は十一月。大陸でも北に位置するこのネービスは、すでに冬支度も始まっているという季節だ。
この時期、上着一枚、わざわざその袖をまくり、前のボタンを止めないままで歩いていれば、それは充分に変人だった。貧乏で服が買えないというのならばともかく、服の質自体が良いことから考えても、それはない。
「ん、どうした、嬢ちゃん。俺の顔になんかついてんのか？」
「……」
顔じゃなくて体の方だ、と突っ込みたかったが、そこはグッと堪えた。
そして、ミューティレイクの門を指さして、
「……直接門の方に掛け合ったら？」
「いや、それがな」
男は左手で僅かに無精ひげの生えた顎を撫でて、
「不思議なことに、全く取り合ってもらえんので途方に暮れていたところだ」
「……馬鹿じゃないの」
「ん？　なんだ？」
「いいえ」
表面上は涼しげな顔のまま答え、それから少しだけ考えた後、答えた。
「ファナは今、外出中よ。今日は戻ってこないわ」
もちろん口から出任せだった。
が、男はあっさりと信じたらしく、
「な、なにぃぃぃぃっ!?　ほっ、本当かっ!?」

「本当よ。残念ね」
結論……関わり合いにならない方が良い。
シーラは男に背を向けて歩き出した。
が、
「ま、待ってくれ！」
「！？」
男はびっくりするような早足で、立ち去るシーラの真横に並ぶと、
「や、約束していたんだぞ！？　今日のこの時間に訪ねていくと言ったら、ファナさんはあの女神の微笑みで『お待ちしております』なんて……ぐおぉぉぉっ、あの笑顔を思い出しただけで胸の奥が焼け焦げるようだぁぁぁぁっ！！」
「……」
「おっ、な、なんで急に早足に……」
「……」
「ま、待ってくれ！　ちょっと待つんだ、嬢――」
「シーラ様、お帰りなさいませ」
「ええ。……警備、ご苦労様」
ガシャン！
「おっ！？　な、なにをする！　は、離せっ！　離さないかっ！」
「さっさと去れ！　去らんと警邏隊を呼ぶぞ！」
「な、何故だぁっ！　俺はファナさんとちゃんと約束を、約束をぉっ！！　……ファナさぁぁぁぁぁぁんッ！！！」
遠くなっていく叫びを背中に聞きながら、シーラはホッと安堵の息を吐いた。
（なんなの、一体……ファナにもストーカーってのがいるのかしらね）
決して他人事ではないものの、ああいうある意味開き直っているようなのは、彼女も初めて見るタイプだった。
（そんな悪い虫がつく機会、あの子にはそう多くないはずだけれど）
そんなことを考えながら、いつものように使用人たちと挨拶を交

わしながら別館へ向かう。
……と、その途中、本館の入り口に視線が止まった。
（あれは……）
見覚えのある馬車がそこに佇んでいた。
（さっきの馬車はやっぱりここだったのね。……あら？）
微かに耳に聞こえてきたのは聞き覚えのある声。
「申し訳ありませんが……」
聞こえてきた穏やかそうな声色は、屋敷の執事、イングヴェイ＝イグレシウス――通称アオイの声だ。
その、少し困ったような反応に、不審に思って近付いてみる。
すると、
「何故だ。用事の合間を縫ってようやく訪ねたんだ。少しぐらい――」
「ですから、ファナ様はこれからお客様との面会があるのです。せっかく訪ねていただいたのに申し訳ありませんが、どうかご理解ください」
どうやら何事か揉めているようだった。
（誰かしら……？）
ようやく視界に入ってきたもう片方は見覚えのない男だ。が、着ているものから察するにネービスの若い貴族……おそらくは馬車の持ち主だろう。
「……せっかく来たというのに、門前払いしようというのか？」
「ですから、ファナ様にはこれから大事なお客様があるのです」
そこにファナの姿はない。アオイは丁寧に対応していたが、対する若い男の方は、何やら尊大な態度で彼を責めていた。
「では、それが終わるまで待たせてもらおう。それから夕食でも――」
「ですから」
何度も似たような問答を繰り返しているのだろう。アオイは今にもため息をつきそうな口調で答える。

「そのお客様との夕食の席もすでに用意してあるのです。お待ちいただいても、今日中に面会することは叶いません」
「な、なんだ、それは！」
相手の男は完全に気分を害したようだった。
「その客というのはどこのどいつだ！？　私が直接会って、遠慮するように言ってやる！」
（……なにかしら、あれ）
男の態度に、シーラの視線は完全な嫌悪感を帯びた。……もし対応していたのが彼女なら、とっくに侮蔑の言葉が口をついていたことだろう。
「……」
そしてアオイの方も、あまりに物わかりの悪い相手に呆れた色を浮かべ、気付かれない程度のため息を落とし……そして、仕方なさそうに答えた。
「……お客様は、ディグリーズのラドフォード＝マティス様です」
「ディ――！」
その途端、男の態度が豹変する。驚いたように息を呑み込み、むせた。
「ゲホッ！　ゲホゲホッ！　……ディ、ディグリーズだとっ！？」
（……ディグリーズ？）
それを遠くで眺めているシーラには聞き覚えのない単語だった。が、貴族の男はどうやら理解したようで、
「どうなさいます？　直接お会いになりますか？」
「――」
そのときばかりは、いつもは温厚なアオイの態度が少々意地悪く映った。が、男の方はどうやらそれを気にする余裕もないようで、
「……そ、そうだな。いや、考えてみたら先約は向こうなのだから、ここは私が引き下がるべきなのかもしれんな」
「そうですか。助かります」
急に態度を軟化させた男に、アオイはニッコリと微笑んで、

「では、少しこちらで休んでいかれます？　それとも、すぐお引き取りになられますか？」
「い、いや。私も忙しい身だからな。残念だが、帰らせてもらうことにしよう」
男はびっくりするぐらい素直になると、身を翻し馬車に乗り込んでいった。
慌ただしい音を立てて、まるで逃げるように馬車が去っていく。
「……」
それを無言で見送った後、
「ふぅ……っ」
「アオイさん」
シーラは早速近付いて声をかけた。
「え？」
アオイはハッとしたように振り返って、
「え？　あ、シーラさん。今、お帰りですか？　……ああ、ティースさんでしたら、今は少し出掛けられてますよ」
「いえ、それはいいわ。……それより今の、なんだったの？」
馬車の去った方向を眺めてシーラが問いかけると、アオイは少し照れたように、
「あ、はは、見られてましたか。いえ、そんな大したことじゃ――」
「……」
「……あの、他言はしないでくださいよ」
「ええ」
満足そうに頷くシーラに、アオイは声を潜めて答えた。
「スナークウェザー家のご子息、ウィンスロー様です。彼は……その、姫の――」
「ああ」
その説明だけで、シーラにはどういう事情か理解できる。
「ファナに求婚している男の一人、ってところね？」
別に詳しい事情を知っているわけではないが、彼女の立場、年齢、

独身であるということを考えれば、そういう話がいくつも持ち上がっていて不思議もなく。
「……そういうことですね」
肯定した眼鏡の奥の表情が少しだけ疲労を浮かべて、
「中でもあのウィンスロー様は……その、少々――」
「わがままで物わかりの悪い典型的なボンボンなのね」
「……」
アオイはその立場故か何も言わなかったが、苦笑するその表情は明らかにシーラの発言を肯定したものだった。
どうやら彼も色々苦労しているらしい。
（あの子も大変ね……）
心の底から同情しつつ、シーラは続けて質問した。
「ところでアオイさん。ファナのお客の“ディグリーズ”というのは一体なんのこと？　聞いたことのない家名だけれど」
「あ、ディグリーズは家名ではないですよ。……さあ、中に入りましょう。風も冷たいですから」
そう言って本館のドアを開くアオイ。
本館の方はシーラにもあまり縁のない場所だったが、中の通路を使って別館に移動することができる。その玄関ホールの作り自体は別館と似ていたが、もちろん質素な丸テーブル群は存在していなかったし、別館で見られるような憩いの風景も見られず、やや閑散とした雰囲気である。
途中、アオイは説明を始めた。
「ネスティアスはご存じですよね？」
「ええ」
それはもちろんシーラも知っている。
ネービス公直属のデビルバスター部隊“ネスティアス”。その規模はディバーナ・ロウの何倍にも及び、抱えるデビルバスターの数は三十人近く、傭兵やデビルバスター候補生など、直接戦闘に関与する主要構成員だけでもその数は軽く三桁を越える。ネービス領で

はもちろん最大規模、大陸全土を合わせても、これほどの規模を持つデビルバスターの部隊はそうそう存在しないだろう。
「では、彼らの深緑色の制服はご覧になったことありますか？」
話しながら、二人は玄関ホールの右手から別館へ続く通路へと足を運ぶ。
「ええ。軍隊みたいなあのきっちりした服ね」
「そうです。では、その中で、深緑ではなく黒い制服の方を見たことはありませんか？」
「黒？　……いいえ、ないわね」
「そうですか」
特に意外そうでもなくアオイは頷いて、
「ディグリーズというのは、そのネスティアスの中でもトップを占める十人の総称です。彼らは他とは違う漆黒の制服を身につけ、袖にはそれぞれの階級を示す文字が刻まれているのです」
「ネスティアスのトップ？　……ああ。それであの馬鹿男の態度がコロリと変わったのね」
シーラは納得して頷いた。
実質は単なる雇われデビルバスターだとはいえ、ネスティアスのトップクラスともなれば、やはり話は少々違ってくる。デビルバスターとしてもエリート中のエリート。そこらの貴族のボンボン程度では恐れるのも当然の話であった。
「ディグリーズといえば、泣く子も黙る存在ですから」
辛辣なシーラの言葉にやはり苦笑したアオイだが、あの若い貴族を“泣く子”扱いした彼にもまた、あの人物を腹に据えかねている様子が充分に窺えた。
通路を抜け、別館へ。
大階段の前に着くと、アオイは一礼し、
「では、私は姫の元へ向かいます。準備がありますので……にしても、遅いですね」
別れ際、独り言を呟く。

「とっくに約束の時間は過ぎているのですが――」
「……」
特に気にせず、シーラは階段を上る……いや、上ろうとして足を止めた。
ふと脳裏を過ぎったのは、少し前の記憶と、アオイの言葉。
（……ネスティアスの制服……？）
引っかかったのは“黒”
（そういえば――）
思い返してみれば“あの男”は確かに上下とも黒で、しかもそのデザインは――中に何も着ていないということを除けば――彼女の記憶の中にあるネスティアスの制服に酷似していた。
「……」
まさか、とは思った。
泣く子も黙る、である。……いや、ある意味泣く子も黙るかもしれないが、それにしても……しかし、偶然にしてはあまりにも不自然すぎる。
しばし迷った後、シーラは口を開いた。
「……アオイさん」
「え？」
振り返ったアオイに、シーラは神妙な顔のまま問いかける。
「その人って、もしかして――」

「な、何をする！　離せ！　離さないかっ！　俺はちゃんとファナさんと約束したんだぞぉぉぉぉっ！！」
「うるさいうるさい！　とっとと帰らんと、本当に警邏に突き出すぞ！！」
ミューティレイクの正門まで、約二百メートル。何やら派手な言い争いがカレルたち三人の耳にも聞こえてきた。

「うぉぉぉぉっ！　まさかっ！　まさかお前らは、俺とファナさんの恋路を邪魔する障害物なのか!?　そーなのかっ!?」
「ええい、何をわけのわからんことをっ!!」
その片方は、聞き覚えのある声だ。
「相変わらずお盛んなようですね」
大きめのひさしがついた白い帽子に手を当て、黒い制服とはかなりアンバランスな格好のルーベンが、いつものとぼけた調子でそう呟く。
「……」
カレルはこめかみを押さえた。
――その声は間違いなく、彼が探していた人物のものだったのだ。
「だがな、覚えておけよ！　俺と彼女の赤い糸はどんな障害に遮られようとも決して切れたりはしない！　何故なら、俺と彼女の愛こそが“奇跡”だからだっ！　そう、永遠という名の奇跡だ！　愛こそ全て！　ラブフォーエバー!!」
「まだ警邏に突き出されてないことこそが奇跡だと思うな、僕は」
リゼットの呟きに、今度は眉間に指を当てたカレルが絞り出すような声で、
「……誰か、あの馬鹿を止めてこい」
「カレルさんがそう言うなら、仕方ありません」
言葉とは裏腹に“待ってました”と言わんばかりの素早さで承知したルーベン。歩みを早めると、黒い制服の裾と白い帽子が微かに揺れて、直後、風を巻くようにその姿が高速移動する。
白と黒のコントラストが宙に舞った。
「さぁ！　わかったならさっさとそこを通さないか！　いくら邪魔しようとも、俺とファナさんの仲を裂くことが不可能だとこれでわか――ごふぅっ!!」
ごぃん！　と、鈍い音がして、門番に捲し立てていた男の体がゆっくりと崩れ落ちる。
ちゃきっ……パチン。

ルーベンは地面に着地するなり、幅の広い両刃の剣を鞘に収めて、
「ご安心ください。峰打ちです」
「……お前の剣のどこに峰があんだよ」
あとから追いついてきたカレルはとりあえずそう突っ込んで、唖然とした顔の門番に対し、懐からプレートのようなものを取り出す。
「怪しいもんじゃない。……ネスティアス所属、ディグリーズの“肆”カレル＝ストレンジだ」
門番の表情が変わる。
「ディ、ディグリ――」
ついてきたリゼットもやはり同じものをチラッと見せて、
「同じく、ディグリーズの“捌”リゼット＝ガントレット。……以後お見知り置きを、可愛らしいお兄さん方」
恭しく一礼する。
「か、かわいらしい……？」
リゼットのウインクに、二人の門番は顔を見合わせた。
……どう見ても可愛いとは言い難い、三十代の男二人である。
続いて、ルーベンが口を開いた。
「そして私がディグリーズの“陸”、通称“あまりにも優れた素質を持っているため嫉妬深い上司の不興を買い、出る杭は打たねばといわんばかりに不遇の扱いを受けている不世出の天才”ルーベン＝バンクロフトです」
「おいコラ。なげぇし、全くの事実無根じゃねぇか」
「あ、あの……」
突如現れた、ディグリーズを名乗る三人組に、二人の門番は当然のように困惑した様子だ。が、彼らが提示したプレートと、そしてそれぞれの制服に刻まれた文字は、確かに三人がネスティアスのディグリーズであることを示していた。
「今日来られる方はお一人だと聞いてましたが……？」
「ああ」
カレルはチラッと地面に倒れ伏した男を見やって、

「この馬鹿が、おそらくこういう騒ぎを起こしてるんじゃないかと思ってな」
「……は？」
「言いにくいことだが」
そう言ってカレルはこめかみを押さえ、心底嫌そうな顔で首を振りながらルーベンを促す。
ルーベンは倒れている男の捲れている袖を元に戻した。
そこに刻まれていた文字は“壱”――
「この馬鹿は俺たちの仲間でな。ディグリーズの“壱”ラドフォード＝マティス。ここの当主さんとの約束ってのも本当の話だ」
「……は……？」
固まった。
ムリもない。
カレルは小さく笑って、
「冗談だと思うか？　……いや、むしろ冗談にしてしまって、今からでもその事実をこの世から抹消してしまうべきか？」
「カレル。……目が、笑ってないよ」
「ああ。なにしろ真剣だ。というか、切実だ」
「……」
「……」
すぐ近くでそんな会話が交わされているとも知らず、地面に突っ伏した男――ラドフォード＝マティスは、何故か幸せそうな笑みを浮かべていたのだった。

「先ほどは申し訳ありません。こちらの不手際で」
「いやははははは！　そんな、ぜんっぜん気にすることないですって！」
「……」

「……」

夜のミューティレイク邸。普段は滅多に使われることのない本館の食堂には、今、五つの人影があった。

上座に位置し、謝罪の言葉を述べたのは屋敷の主人、ファナ＝ミューティレイク。その後ろに寄り添うように立つのが、執事兼ボディガードのイングヴェイ＝イグレシウスである。

そして客は三人。

ディグリーズの“壱”ラドフォード＝マティス。

同じくディグリーズの“肆”カレル＝ストレンジ。

そしてディグリーズの“捌”リゼット＝ガントレットである。

今はすでに会合と夕食を終え、それぞれの目の前に食後の紅茶が振る舞われたところだった。

「でも、お怪我なさったと聞き及びましたわ」

ファナの心配そうな顔に、ラドフォードは明らかに“ぽっこり”と盛り上がった後頭部を撫で、

「あ、これ？　これのことですか？」

やはり豪快に笑い声をあげながら、

「こいつはちょっとはっちゃけた部下がやっちまったものですから！　全然、これっぽっちもファナさんのせいじゃないっすよ！」

「……はっちゃけてたのはお前だ」

そんなカレルの突っ込みは当然届いていない。

隣のリゼットが声を潜めて補足する。

「ま、あの子も確かに活き活きした顔で剣を振り下ろしてたけどね」

「いやあ、それにしても！」

ラドフォードの演説は続いた。

「図々しい部下が二人もご馳走になっちゃって、ホント申し訳ない！　もう、こいつらと来たらなんつーか、俺がいないと何もできないっつーか！　……あ、いや、頼られるのは望むところなんですがね！　やっぱ男ってのは頼られてナンボですから！！」

「く……！」

「カレル。ここは場所が悪いよ」
「……わかってる」
懸命に怒りを堪えたカレルの背中が纏っていたのは、いわば“中間管理職”的なオーラだろうか。
「ふふっ」
そんなラドフォードのハイテンションな演説に、カレルとリゼットのみならず、アオイまでもが少々微妙な表情を見せていたのだが……言葉を向けられている当のファナはといえば、やはりいつも通りに穏やかなまま、クスクスと笑って、
「いつお会いしても面白い方ですわ。ラドフォードさんとお話ししていると、時間が経つのも忘れてしまいます」
「そ、そうですか！？　いやぁ、参ったなぁ、はははははっ！！」
嬉しそうに頭を掻くラドフォード。
「……」
カレルは時折、そんなミューティレイク家当主の精神構造が羨ましくもなる。
と、そんなこんなで、時間はアッという間に過ぎ去り――
「……そのとき俺は言ってやったわけですわ！　お前ら、その子の代わりに、この俺を――！」
「話の途中、ですが」
永遠に続くかと思われたラドフォードの独り舞台に、カレルはいい加減ピリオドを打つことにした。
「そろそろ、おいとまさせていただくことにします」
わざとらしく少し大きな音を立てて椅子から立ち上がると、素早く身支度を整え始める。
「まぁ。もうそんなお時間ですの？」
話を中断されたラドフォードは抗議して、
「お……おいおい、ちょっ、ちょっと待ってくれよ、カレル。これからが一番盛り上が――」
「では、ミューティレイク公。お騒がせしました。……あと、失礼

を承知の上で言わせていただきますが――」
　完全無視の後、カレルはテーブルの上に右手を置き、鋭い視線（意図したわけではなく、元来のものだ）をファナに向けて、
「あまりこの馬鹿を甘やかさないでもらえませんかね。色々とつけ上がりますんで」
「？　どういうことですの？」
「……」
　本当に不思議そうなファナに、カレルは閉口する。
　その隣ではラドフォードが笑いながら手を振って、
「いやいや、ファナさん、どうかお気になさらずに。こいつ、俺とファナさんが楽しく話してるものだから、きっと嫉妬してるんですよ。……いや、名残惜しいですが、仕方ないですね。モテない部下の可愛いわがままを聞いてやるのも、良識ある上司の役目ですから！」
「……く……ぐぐ……！」
「カレル。落ち着いて」
　今にも殴りかかりそうなカレルをリゼットが宥める。
　……いつも冷静（？）な彼も、このラドフォードに対しては冷静さを保つのに苦労しているようだった。
「……では、ファナさん。また会う日までお元気で！」
「はい。ラドフォードさんも、どうかお体にお気をつけて」
　自ら見送るファナの言葉に、ラドフォードは玄関でビシッと敬礼する。
「それは大丈夫！　この、ラドフォード＝マティス、いつでもネービス公とファナさんのお役に立てるよう、早朝の寒風摩擦を欠かさずやっておりますので！！」
「まぁ」
　ファナは微笑んだまま、ポンと手を叩いて、
「それなら安心ですわ」
「ははは！　当然ですよ、当然！！」

「……」
一足先に外へ出たカレルはやや諦め気味にため息を吐きながら、片手を腰に当ててリゼットを見やると、
「何が大丈夫で何が安心なのかさっぱりわからんのだが、これは俺の理解力が乏しいのか？」
「どうだろう？　ルーベンにでも聞いてみるかい？」
お手上げ、と言わんばかりに両手を広げるリゼット。
「え、呼びました？」
「……」
そこへどこから現れたのか、一人別行動を取っていたルーベンがトコトコとやってくる。……どうやら、別館の方から一足先に外に来ていたらしい。
「知り合いへの挨拶は済んだのか？」
カレルの問いにルーベンはちょっとだけ眉をひそめ、
「……アレを、あの行為を挨拶というのであれば」
「なんだ、アレって」
「フッ。男は秘密を抱えるほど魅力的になるもの」
「……ならいい。別に無理に聞きたかねぇ」
そう言って再び玄関の方を見やったカレル。ラドフォードとファナの会話――というより一方的な演説――は、まだ続いている。
どうやら、また強制終了が必要なようだ。
――と、カレルがそう思った、そのとき。
「あ」
「……」
カレルの視線を追ったルーベンの目線と、ラドフォードの広い背中の向こうにあったファナの視線がぶつかった。
一瞬だけ、時が止まる。
驚いたような顔のファナだったが、やがてその表情は柔らかい笑みを伴った。
「ルゥさんも、いらしていたのですね」

「……」

ルーベンは無言のまま大きなひさしの帽子を脱ぐと、普段の彼からは考えられないほど真摯な表情になる。

そして、帽子を持った右手を胸に当てると、そのまま一礼した。

「お久しぶりです、ファナさん。お元気そうで、なによりです」

「ルゥさん」

ファナはニッコリと微笑んで、

「らしくないですわ。もっと気軽になさってください」

「いえ」

だが、ルーベンは姿勢を崩さないまま答えた。

「私は、あなたの期待を裏切った人間ですから」

「……」

ファナは少しだけ目を見開いて、それから困ったように視線を泳がせた。その後ろにいるアオイも口を挟みこそしなかったが、どことなく気まずそうな表情だ。

そして——微妙な沈黙。

ディグリーズのメンバーも事情を察しているのか、カレルは我関せずといった顔で薄暗くなった庭を眺めていたし、ラドフォードでさえも頭を掻きながら、

「あ、あー、コホン。では、ファナさん。我々はそろそろ……」

そう言うのがやっとだった。

「はい。……ルゥさん」

頷いて、ファナは少し目を細めた。

……いつもと違うそれは、微かな厳しさと強い意志を伴った視線。

そこには少なからず、その相手に対する愛情が存在していた。

「どのような事情にしろ、ルゥさん自身が選ばれた道です。それを否定することなど、誰にもできることではありませんわ」

「……」

それに対しルーベンは何も答えず、ただもう一度だけ頭を下げる。

そしてディグリーズの面々はそのまま、ミューティレイクを去って

いったのだった。

ディグリーズの四人が屋敷を去った後。

ファナとアオイの二人が別館のホールへ移動すると、そこには丸テーブルで麦酒を口にするレイの姿があった。

「よぅ、ファナ」

彼女の姿を視界に捕らえるなり、手にした大きめのコップを軽く向けて、

「今、時間あるのか？　なら、少し付き合わないか？」

そう言った。

まるで親しい友人を誘うかのような気軽さで、その相手を考えると、普通ならば何を血迷ったことを言っているのかと思うところだが、

「あいにくお酒はお付き合いできませんけれど、それでもよろしいのですか？」

その申し出はこの場において、特別非常識なことではないらしい。

「あんたは茶でも飲みながら、話だけ付き合ってくれりゃいいさ。……ああ、俺のベッドの中にまで付き合ってくれるってんなら、それに越したことはないがな」

「……レイさん」

これにはさすがに後ろのアオイが眉をひそめた。

「いくら冗談でも、姫に対してそういうことは、どうか……」

だが、当のファナはというと、やはりおかしそうにクスクスと笑いながら自分の胸に左手を置いて、

「この娘にはレイさんのお嫌いな“しがらみ”が漏れなく付いてきますけれど、それでも構いませんの？」

「あぁ……」

レイは楽しそうに口元を歪めてコップを傾けると、

「そいつはゴメンだ。なら残念だが、まとめて後ろの堅物君に譲るとしようか」
「な！」
その言葉に、アオイは僅かに青ざめて、
「じょ、冗談でも、そ、そんな恐れ多いことを――！」
「アオイさん」
ファナがフォローするように口を挟んだ。
「紅茶を、お頼みしてもよろしいでしょうか？」
「は……！　は、はい！　ただいま！」
弾かれたように敬礼し、アオイはまるで逃げるように走り去っていく。
直後。
「うわぁっ！　ア、アオイさん、気を付け――！」
「すっ、すみませぇん！！」
通路から聞こえたやり取りに、レイは口元に笑みを浮かべて、
「……冗談のわからないヤツだ。ま、おかげでからかい甲斐があるけどな」
焚き付けた張本人だというのに、あまりにひどい言い様ではあった。
「あら？」
その向かいに腰を下ろしたファナは、ちょっと不思議そうな顔をして、
「冗談でしたの？」
「……俺としちゃ、どっちでも一向に構わんけどな。お偉いさん方の“社交界”とやらはぶったまげると思うが」
苦笑したレイに、ファナは何を考えているのかいまいちわからない表情のまま、目を細めて視線を斜め上に滑らせた。
レイも何気なくその視線を追う。
視線の先――大階段の上、二階の奥へ続く通路、その入り口に刻まれた“六剣”の紋章。それはこのミューティレイク家の紋章だ。

その視線を戻し、レイは話題を変えた。
「ルーベンのヤツには会ったみたいだな？」
ファナもまた、彼の元へと視線を戻しながら、
「はい。お元気そうでしたわ」
テーブルの上にもう一つあった空のコップ。“別の誰か”がここに座っていたらしいことはすぐにわかる。
「来年にはもう一つ階級が上がることがほぼ確実らしい。大したもんだな」
「まあ」
ファナは嬉しそうに微笑んで頷いた。
「入隊後、僅か二年半でナンバー五。……惜しいな」
僅かに反応を伺うような目をしたレイに対し、ファナは変わらず微笑んだままだ。
――その笑顔は、見る者を和ませると同時に、こうして探りを入れる者に対しては、彼女の中に存在する感情の動きを見事に覆い隠す役割も果たしているようだった。
そのままで、ファナは口を開く。
「ティースさんの御様子はいかがですの？」
「……？」
脈絡のない流れに、さすがにレイの返答にもワンテンポ空白があって、
「ティースか？　……まだ引きずってるようだな。ギレットのおっさんが活を入れたみたいだが、効果あるかどうか――ああ、そうか。そういう連想か」
ようやく悟った顔をして、少し考えると、
「そういやアクアのヤツも前に言ってたな。そのときは大してそう思わなかった……が、この状況に陥ってみると、確かに不思議なほど酷似してるか。性格以外は」
何も言わず見つめるファナに、レイは軽く手を広げてみせて、
「だが、どうかな。状況は似ていても、性格も歴史も違う。どう転

ぶかなんて予想できんな」
「ええ。ですが、たとえどうなったとしても――」
どうやらアオイが戻ってきたようだ。食堂へ通じる通路へ視線を向け、ファナは呟くように言った。
「それが御自身の選んだ道であるなら、私にそれを否定することはできませんわ。私の期待は他人に押しつけられるものではありませんもの」
「ま、そうかもな」
相変わらず探るような目をしていたレイだったが、やがて諦めたように視線をテーブル上に落とし、空のコップを指先で軽く小突くと、
「……できる限りはサポートするさ。少なくとも、あいつが後に悔いを残さない程度には、な」
「はい。私は、レイさんを信じております」
「……」
決して嫌とは言い返せない極上の微笑みに、レイはやれやれと言わんばかりに肩をすくめ、コップに僅かに残っていた麦酒を飲み干すのだった。

その1『四角い処刑台』

ネービス領リガビュールの街は、ネービス随一の歓楽街だ。
その中心部は他の街と全くの逆。昼の間は人もまばらでひっそりとしているが、夜になると煌々と明かりが灯り、一体どこに隠れていたんだと言わんばかりの人で溢れ返る。元来、夜は盗賊などが横行する時間帯であったが、この街の中心部はそこを取り仕切る非合法組織たちによりほぼ完璧に近い警備が敷かれているため、人々も例外的に安心して外に出ることができる場所だった。
そんな賑やかな中心部を取り囲むように、街の外からやってくる旅人のための宿がいくつもある。とはいえ、その周辺の宿は大体、基本的に誰かを連れ込むことを前提とした宿ばかりだ。
そしてそこからさらに少し離れた場所。
その辺りにようやく、一般の人々が住む静かな住宅街。あるいは大半の目的とは異なる理由でこの街に滞在する旅人のための、普通の宿が建ち並んでいる。
そんな街。

ティーサイト＝アマルナ。通称ティース。十八歳、男。長身だが細身で、背の高さからくる威圧感よりも頼りなく優しい印象の方が強いという、見るからに人の良さそうな外見。加えて、女性アレルギーというとんでもない業を背負ったこの男だが、これでもデビルバスターを目指して日々努力している。
ただ――普通、デビルバスターといえば、とにかく“魔を退治する”という印象が強いものだが、このティースという人物は少々変わっていた。
魔であろうと、悪意がなければ敵ではない。それが彼の主張だ。
それはごく当たり前のことのようにも思えるが、この大陸に溢れる常識に照らし合わせると、決して当たり前ではなかった。それも

そのはず。魔は元々、人に危害を加える方が圧倒的に多く、ならば人が魔を敵と見なすようになったのも至極当然のことだろう。

だから彼はやはり変わり者であると言ってもよかった。そして、そんな彼であるからこそ、魔のために、魔を助けるために動くという、普通では決して考えられない行動を取ることがある。

リガビュール、中心からは少し離れた一般住宅街の中の、とある家屋。――その、地下。

まだ夜中ということもあり、壁に生えている陽カビ――昼間だけ微かな光を発する特殊なカビ――も、まだ発光していない。その代わり、壁には二組のたいまつが掲げられていた。一辺が十メートルにも満たない閑散とした空間で、真ん中にテーブルが置かれてはいるが、他には何もない。

この場所こそが、罪のない魔を救済する魔の組織“キュンメル”が、この街の非合法組織“ゲノールト”用に作った隠れ家なのである。

そしてそこには今、四人の人物が座っていた。

一人は、もちろんティース。

そしてその隣。

「四人いれば、何とかなるはずだ」

十三、四歳と思われる背の低い少年がそこに座っている。

エル――エルバート＝ザザ＝ロージーというのが、その少年のフルネームだ。名が三つあることは、この世界では一つの事実――すなわち、その尖った耳が示しているように、その者が“魔”の者であるということを示している。名と姓の間に入るのは種族名であり、人間風に言うと、彼はザザ族のエルバート＝ロージーという人物なのだ。

そして……そのエルバートの正面に、言葉を向けられた二人の人物が座っている。

「しかし、まさか人間が我々の手助けをしてくれるとはな」

エルバートの言葉にそう返し、改めてティースを見つめたのは、精悍で真面目そうな顔つきの長身の男性。背の高さはティースとほぼ同じぐらい、おそらく百八十五センチぐらいはあるだろう。声もいかにも男らしい、それでいて良く通る声で、軽装の鎧を身につけている。耳はやはり尖っていた。

そしてもう一人、

「ホント、私もビックリ。……ん～～～、外れないなぁ」

少しのんびりした口調で呟いたのは小柄な女性だ。身長はエルバートよりやや大きい程度、百五十センチ半ばというところだろうか。なかなか可愛らしい顔立ちだが、年齢的にはエルバートよりも確実に年上、おそらくはティースよりも上で二十歳ぐらいだろう。こちらもやはり耳が尖っており、前髪はどうやって整えているのか、触覚が二本生えたような形になっている。

俯いてテーブルの下で何かカチャカチャやっていたが、どうやら知恵の輪のようなオモチャらしい。

「ねぇ、リューちゃん。ビックリだねぇ」

「……ネイル。その呼び方はやめろと言っている」

この二人、リューゼット＝カサ＝ドゥギラスと、ネイル＝メドラ＝クルティウスは、見た目からもわかるようにどちらも人魔である。本人たちによれば、リューゼットは光の下位魔。ネイルは炎の、やはり下位魔だという。ともにキュンメルのメンバーだ。

その二人にティースは答えて、

「そりゃ、俺もゲノールトのやってることは許せないと思うから」

「そうか」

リューゼットは頷いた。

――リガビュールに存在する地下組織“ゲノールト”。それはこのリガビュールにいくつも存在する非合法組織の中でも特に異質な存在である。

俗に“デビルスレイバー”と呼ばれる彼らは、魔を奴隷のように商品として扱い、時にはお互いに戦わせるなどして見世物とし、若

い女性の人魔には娼婦のような仕事をさせて、特殊な人々の異常な趣味を相手に商売している裏の組織だ。

そしてエルバートやリューゼットたち“キュンメル”は、そんな連中の元から罪のない魔を助け出すことを目的としている、やはり魔によって構成される組織である。本来はネービス全土に広がるそれなりに大きな組織なのだが、この街に派遣された彼らの仲間は一週間前にゲノールトによって一網打尽にされており、街の警戒が厳重なため本隊の救援すら仰げない状態であった。

現在残っているメンバーはこの三人。ティースを含めてもたったの四人。この四人で、ゲノールトに捕まった仲間たちを救出しなければならない状況なのである。

「それで？」

リューゼットがエルバートに質問した。

「ゲノールトの中はどうだった。一応、中には潜入できたのだろう？」

エルバートは答えて、

「外の警備はそうでもなかったけどさ。中はさすがに厳しかったよ。……一応、地下二階までは侵入できたけど」

「ん～～～、外れないよぉ」

カチャカチャ。

「仲間たちは見つかったのか？」

「……いや」

リューゼットの問いに、エルバートは首を横に振った。

「関係ない魔は何人か見つけた。……けど、みんなの姿までは見つからなかった」

「そうか。無事だといいが」

「んん～～～～」

ガチャガチャ。

「……正直、何とも言えないな。人間どものやることだ……もしかしたら……」

言ってから、エルバートはハッとした様子で、
「いや、ティース。別に人間全部が悪いってんじゃないからな」
「ああ、わかってるよ、エル」
特に気分を害したわけでもなくそう答えたティース。
エルはティースにとって、約四年ぶりに会った昔からの知り合いだ。人間に圧倒的に好意的だった当時に比べると、“人間ども”という言い方にやや残念な想いも抱いたが、少なくともゲノールトという卑劣な集団に対してそういう言葉が出てしまうのは、また仕方のないことだとも思った。
リューゼットの問いは続く。
「仲間たち以外に、そこに捕らわれている魔がどのぐらいいるのか、わからないか？」
「俺が確認したのは地下二階にいた三人だけ。……たぶん、比較的新しく連れてこられた連中だと思う。十代後半ぐらいの男が二人、それとは少し離れた牢に女の子がいた。獣魔に関してはわかんない」
「仲間たちが生きているなら、もっと深いところに幽閉されているかもしれんな」
リューゼットは腕を組んで頷いた。
「ああ、その可能性は――」
「……んっ！！」
バキッ。
「あ、外れたっ！　外れたよ、リューちゃん！！」
話の流れを全く無視し、嬉々として知恵の輪を示すネイル。
「……」
無言で、全員の視線がその手の中の知恵の輪に向けられる。……それは明らかに“変な方向に”歪んでいた。
「でも変なの。さっきまで何回やっても外れなかったのに、ちょっと力を込めるだけで簡単に外れちゃったよ。変なオモチャ」
「変なのは貴様の頭の方だ」
「？」

リューゼットの突っ込みも、ネイルには全く理解できてないようだった。首を傾げながら、やがてネイルは“知恵の輪だったもの”をポイッと投げ捨てると、

「ねぇ、キミ」

「え？」

ニコニコしながら、初めてティースを見つめる。触覚のような髪が小さく揺れて、

「キミはもしかしてデビルバスター？」

「え？」

驚いた顔で見つめ返すと、その言葉に反応したエルバートとリューゼットも彼の方を見た。

「い、いや」

その過剰な反応に、ティースは少し慌てながら手を振って、

「違うよ。……なんで急に？」

逆に質問すると、ネイルは頷いて、

「そう」

チラッとティースが腰にぶら下げている剣に視線を移す。

「キミの持ってる剣、異様な力を放っていたから」

「あ……ああ。これはもらったものなんだ」

その言葉でようやく思い出したティースは、剣を鞘ごと手にとって剣の柄を示し、そこにはまっていた宝石――“細波”をエルバートに見せて、

「エル、お前も覚えてるだろ？　四年前、別れ際にお前とリィナにもらったこの宝石」

「え？」

エルバートはマジマジとその宝石を見つめて、

「ああ、そういやそうだったっけな」

「へーぇ」

ネイルはその宝石とエルバートの顔を見比べて、

「そっか。じゃあ昔の友達だっていうのはホントなんだ」

「嘘を言っても仕方ないだろ。……なあ、ティース」
「ああ。……ネイルさん。俺を信用できないのかもしれないけど、俺は本当にゲノールトのやってることが許せないと思ってる。それは、信じて欲しい」
ティースは真摯にそう言ったが、ネイルはというと別に気にした風もなく、
「ん、それは別に疑ってないよ？　疑う理由もないし。私はただ、キミがデビルバスターだったらいいなと思っただけ」
「え？」
それを補足するように答えたのはリューゼットだ。
「デビルバスターが味方だということになれば、色々と都合がいいだろう」
「……あ、なるほど」
確かに、デビルバスターだということはかなりの実力の証明である。彼らにしてみれば、心強い味方ということになるだろう。
ティースは逆に申し訳なさそうにして、
「残念だけど、俺はそんなんじゃないんだ。一応、デビルバスターを目指してはいるけどね」
「ほぅ。なら、腕には自信があるのか？」
リューゼットの目が少しだけ興味の色、というか、少し異常とも思える輝きを帯びた。
「い、いや……そこまでは……」
エルバートが少しもどかしそうな表情で、
「なんだよ。はっきりしないなぁ」
「アテにしない方がいいってことなんじゃない？」
相変わらずニコニコしながら、ネイルが言った。悪意はないのだろうと思うが、なかなかきつい言葉だ。
「う……」
反論はできない。
と、エルバートはそれをフォローするように、

「ま、そりゃ、そこまではさすがに期待してないさ。……いや、アテにしてないってことじゃなくて、無理な高望みはしてないってこと」

それから少し目を細める。

「少なくとも、バラードの奴を何とかしてもらおうなんて思ってるわけじゃない」

「バラード？」

もちろん聞き覚えのなかったティースに、エルバートは答えた。

「バラード＝グラスマン。ゲノールトに雇われている腕利きのデビルバスターだよ。……こないだ仲間が一網打尽にされたのも、あいつのせいなんだ」

「……デビルバスターが、ヤツらに協力してるってのか？」

思わず低くなったティースの声に、エルバートは溜め息を吐いて、

「バラードの奴は元々、魔を生け捕りにしてはデビルスレイバーたちに売り払う仕事を裏でやってたヤツなんだ。それが実力を見込まれて、最近ゲノールトの用心棒として加入したってわけさ」

「……そんな奴が」

それ自体は法に触れるわけじゃない。が、一般的に、またデビルバスターたちの間でもそれほど容認されていない行為なのは確かだった。

（そんなデビルバスターがいるなんて……）

静かな怒りがティースの中に溢れ出す。

それはある意味、魔を憎んで無差別に退治しようとする連中よりも、さらにタチが悪いと思えた。

エルバートも忌々しそうに唇を噛んで、

「俺たち下位魔の集団じゃ、よほどのことがなきゃ歯が立たない相手だ。……とにかく、いかにあいつに出会わないように救出するか。今は、それを考えなきゃならない」

「……」

悔しいが、それは事実だ。

その言葉に頷いて、そして四人はこれからの作戦について話し合い始めるのだった。

オォォォォォォッ！

歓声。

決して数は多くない。が、それでもどこか重々しく、そしてドス黒いものを感じさせる歓声だった。

薄暗い中に浮かび上がるのは、いくつものたいまつが灯った中央の四角い空間。まるで檻のように高い金網に包まれたその空間には一つの人影がある。

「ぁ……はぁっ……！」

男だ。年の頃は二十代前半だろうか。服装は腰に白い布のようなものを巻いているだけでほぼ半裸。右の肩口はざっくりと裂け、そこからは血が流れ出ている。顔も太股も胴体も傷だらけ。息は荒く、立っている姿もおぼつかない。

手には一振りの剣。両手首は手錠のようなもので繋がれていた。

「……六匹目！」

どこからともなく、野太い男の声が響く。

ガシャン、と音がして、檻の中に六匹目の獣が放たれた。

歓声。

野太い男の声は続く。

「六匹目は氷の七十一族でございます！　狼の姿をしたこの獣魔は、我々の世界にいる狼と姿形、特性こそ大きく変わりませんが、それを遙かに上回る身体能力を持っており、今の疲労したチャレンジャーにはかなりの難敵であることは予想されます！！」

再び歓声が起こる。

「六匹目にベットしていただいたお客様の配当は十六倍となっております！　さぁ、どうぞご期待くださいっ！！」

「……」

氷の七十一族と向き合う男には、そんな野太い大声も届いていなかった。

――氷の七十一族。最下級の獣魔であり、普段であればたとえ手錠を掛けられていたにしても男の敵ではないだろう。なにしろ男は、その尖った耳が示すように下位とはいえ人魔であったから。

だが……意識は朦朧。手に持った剣も重く、体は動かない。

男は決して不幸な人物というわけではなかった。この世界にやってきて、人間に対していくらでも悪さをしてきたし、それを楽しんでもいた。もう少しの間だけ自由な身であれば、そのうち幾人かの人間の命を奪う存在となっていたかもしれない。

これは、そういう意味では天罰であったのだろうか。

だが――

ワァァァァァァッ！！

大歓声。

鋭い牙を喉に突き立てられ、男の意識は途絶えていた。噴水のように溢れ出した血が、リングを汚していく。

「おめでとうございますッ！！！」

その後に続いたのは、常人であれば目を背け、嫌悪感を覚えるであろう光景。……リング上の獣魔は極限の“飢餓状態”だったのだ。

生々しい水音と肉を食いちぎる音が響く。

だが、

「見事、的中なされた皆様には、配当金が後ほど支払われます！　どうぞ、次の試合にもご期待くださいませ！！」

リング上で繰り広げられる光景から、ことさらに目を背けようとする者は一人もいない。

まるで興味を持たない者。

逆に、ギラギラした目でそれを凝視している者。

そこにいるのは、その二種類の人間のみだ。
そうしながら、的中を喜ぶ声。あるいは、次の試合を待ち望む声。
いずれも、とてもまともとは思えない――いいや、そう言い切ってしまうのはナンセンスだろうか。
ここでは、これが“正常”なのだ。
「……つまんないの」
そんな中に、一人の少女がいた。
年齢は十歳ぐらいだろう。長い髪を左右のてっぺんに近い場所で縛り、そこを赤いリボンで縛っている。体型はやや……いや、かなり太め。両手にはリンゴを揚げたお菓子、あるいはドーナツのようなものが握られており、それをほぼ定期的に口に運んでいる。
その場には似つかわしくない赤いドレス――と言いたいところだが、この場にいる人々はほとんどが正装だったから、それは決して浮いているわけではない。
そして少女はリング上の光景を見つめたまま口をとがらせ、やはりやや太めの足をブラブラさせていた。
「セルマ」
そんな少女に声をかけたのは、すぐ隣に座っていた老人だ。老人といってもまだ全身には精力が漲っており、見たところ少女の祖父、あるいは父……どちらかはわからないが、厳格そうな顔に似合わず、少女に向けた口調は思った以上に優しかった。
「……」
そのすぐ隣には、背の高い男が立っている。短く切りそろえた髪、精悍な顔つきで眼光は鋭く、まるで獲物を狙う獣のような雰囲気を漂わせている。歳は三十歳近いだろうか。やはり正装だったが、腰には一振りの剣を携えていた。
素人でも、一目見ただけで彼がただ者でないことは感じるだろう。
「お前はどこに賭けたんだね？」
老人の言葉に、セルマという名の少女はますますふくれっ面になって、

「私、七匹目に賭けてたんだもん！　あと一匹頑張ってくれれば当たりだったのにさー！」
お菓子を口にしながら抗議する。
「そうかそうか」
男性はセルマの頭を優しく撫でて、
「だったら次こそは当てなきゃならんな」
その言葉に、セルマの顔がパッと輝く。
「次はどんなの？　強い？　弱い？」
「さぁ、それは言えんよ」
「ケチー」
再び口を尖らせたセルマに、男性は笑った。
端から見れば、単なる親子、あるいは祖父と孫の触れあい。
だが、それは確かに“異常”だった。
「さぁ、次の試合は――！！」
野太い男の声とともに、再び中央のリングに一人の魔が連れてこられる。
歓声。
そこは……たとえどれだけ勝ち残ろうとも決して生きて出ることのできない、処刑台だった。

リガビュールの中心から少し東に移動した場所。そこに一つの屋敷がある。建物自体はそれほど大きくなく、ミューティレイクなどに比べると少々貧相ともいえるかもしれない。が、この屋敷――ゲノールトの本領は、外からは見えない部分……屋敷の下に存在する、広大な地下空間にあった。
その地下へ向かうには四つの出入り口がある。
一つ目は、ゲノールトの屋敷内部から繋がる、来賓のための出入り口。
二つ目は屋敷の敷地のすぐ外の目立たない場所にある、地下で働く者たちの出入り口。

三つ目は屋敷の裏、小規模な林の中に隠された、捕らえた魔を乗せた馬車等が出入りできる大きめの入り口。

そして最後は、普段はからくりによって閉ざされた、屋敷から遠く離れた場所に地下通路で繋がっている非常口である。

その中で、もっとも侵入しやすいのが二つ目、地下で働く者たち用の出入り口だ。

屋敷の中の入り口はもちろん論外、三つ目の隠された大きな入り口も警備が厳重であり、四つ目の非常口は一本通行のため、万が一見つかったときに逃げ場がない。

その点、二つ目の入り口は普段から頻繁に関係者が出入りしていることもあって、警備そのものは薄く、上手く隙をつけば侵入することも可能なのである。

早朝。

その入り口から地下へと下りていった二人の男は、腰に剣をぶら下げている。片方は寝癖の残った頭を掻き、もう一人はあくびをしながら。地下とは思えない広大な通路を迷うことなく進み、やがて通路の脇にあった階段を下りていく。

「おい、交代の時間だ」

そこで見張りをしていた男たちにそう告げ、二人は入れ替わりにそこの椅子に腰掛けると、すぐに彼らが見張るべき対象……牢の中へと視線を向けた。

小さな牢だ。

その中に捕らわれているのはたったの一人。

「……」

牢の隅っこでじっと床を見つめている女の子は、襟ぐらいまでの髪、横髪は少しだけクセがあるのか、ほんの僅かに内側にカールしている。華奢で小柄の可愛らしい少女だ。見た目、歳は十代前半だったが、やはり耳は尖っており、少女が人ではないことを示している。

見張りの男達が変わっても、少女は視線を動かそうとはせず、声

も一言も発しない。自らの境遇と行く末に不安を感じているのだろうか、やはりじっと床を見つめるままだった。

そんな彼女を閉じこめているのは、ある程度の魔力を封じ込める特殊な牢。そして、やはり魔力を封じるための特殊な拘束具だった。この二つによって、計算上は下位魔どころか上位魔ですらも、この牢を脱出することはできないことになっている。

ただし、その牢の中は清潔。少女の身なりも同様。他の牢に比べて明らかに優遇されていることは容易に窺えた。

「やれやれ。今日もガキのお守りとはなぁ」

牢の中に異常がないことを確認し、片方の男がそう呟くと、それにもう片方が笑って答えた。

「いいじゃねえか。向こうで男どもの監視をしてるよりはずっとマシだろ？　それに、ガキっつっても顔は悪かねぇ」

そんな返事に、からかいの言葉がもう片方の口をつく。

「お前、もしかしてこんなガキが趣味なのか？」

「まさか。……けど、ま、世の中にゃそういう趣味のヤツもいるだろうし、こいつは下のリング行きだけは免れるだろうよ」

その言葉に男は頭の後ろで手を組んで、

「ま、こっちの牢に入ってるぐらいだから間違いないわな。……俺だったら金をもらってもゴメンだけどな。こんなヤツらを相手にしてちゃ、いつ寝首をかかれるか恐ろしくておちおち寝てもいられねえよ」

「もっともだ」

笑って、男たちはもう一度牢の中に視線を向ける。

「……」

中の少女は少しだけ顔を上げ、二人の男を見ていた。一言も喋らないが、少なくとも彼らの言葉は理解しているようだ。

「……しかし」

そんな少女の視線に、片方の男が少しだけ声を潜めた。

「妙なガキだ。……連れてきた連中の話によりゃ、街の外を一人、

旅の格好でフラフラしてたと言っていたが」
「なんだ？」
少女が再び視線を床に落としたのを見ながら、男は続ける。
「こんな歳の割にゃ、捕まって暴れるでもなきゃ、泣きわめくわけでもねぇ。時折、こんな風に妙な視線で俺たちを見る。……どことなく、不気味な感じがしねえか？」
「はっ……化け物相手に今更なに言ってやがんだ。こいつらなんぞ、全部が全部、不気味に決まってんだろ」
「……ま、そうかもしれんが」
男はそれでも、ほんの僅かに、まるでお化けでも見るかのような目で少女を眺める。
「……」
聞こえているのかいないのか、少女はじっとして、やはり動かないまま。――だが、その態度とは裏腹に、その目は何らかの目的をしっかりとそこに灯していた。
それが、善いものなのか、あるいは悪いものなのか……それは、まだ、わからない。

ネービスの朝といえば有名なのが学園生たちのいわゆる“登校風景”であるが、このリガビュールではそれよりもほんの少しだけ早い時間、仕事を終えた女たちが疲れた顔で自宅へと戻っていく姿が数多く見られる。これもある意味、この街の名物であると言ってもいいだろう。
そんな朝。
この日、リガビュールの街は晴天だった。
「う……」

中心から大きく離れた、街全体から見れば外れといってもいい場所に、一件の宿がある。もちろん、中心から離れれば離れるほど利便性は低くなるが、“それ”以外の目的でこの街に来る数少ない人々にとっては、宿賃が安い割に環境の良い宿が多く、割のいい地域だった。

その、若干薄汚れた感じの階段を上り、二階にある四つの部屋の中の一室。

「うぅん……」

そこに、椅子に腰掛け、ベッドに顔を乗せ、頭にフードをかぶったままの姿で寝ている人物がいた。

いや“寝ていた”と過去形にするのが正しいか。

「……ぁ」

たった今目を覚ましゆっくりと顔を上げた人物は、おそらく百八十センチ以上はあるだろう長身だった。が、体を起こすとともにフードの奥から現れたのは、艶のある美しい長髪に優しげな瞳を持つ女性の顔だ。

そして彼女が魔であることを表す、尖った耳。

リィナ＝グレイグ＝クライストというのが彼女のフルネームで、もちろん“人”ではない。

「……えっと……」

彼女はほんの一瞬だけ寝ぼけ眼だったが、すぐに周囲の状況を確認し、それから思い出したように、

「……あ、私、いつの間にか寝て――」

ハッとして、すぐさま視線を広い部屋の、何故か中央が敷居で遮られた、その向こう側へと向ける。そこにあるもう一つのベッド……だが、そこは彼女が寝たときと変わらず、空っぽのままだった。

「……ティース様」

状況を思い出したその穏やかな瞳に、心配の色が浮かぶ。

（ただ息抜きに遊んでいる……そうであればいいんですけど……）

リガビュールが遊ぶための街だということは、人間の常識に疎い

このリィナでもかろうじて知っている。
が、
（宿の人は、朝まで帰ってこないのは珍しくないって言っていたようだけれど……？）
その言葉とニュアンスからして、普通の人間だったなら容易に“遊び”の内容を理解するだろうが、彼女はそれを理解していなかった。
だがしかし、それはむしろ当然でもある。何故なら“王魔”と呼ばれる、人魔の中でも最上級に近い力を持つ彼女らの間には、いわゆる“色遊び”という文化そのものが存在していない。彼らにとっての男女の交わりはあくまで子孫を残すための義務であり、どちらかといえば“面倒事”だ。だからもちろん娯楽と成り得るはずもなく、従ってそういった文化も理解できない、というより、知識の中に最初から存在していないのである。
（とにかく……朝食を食べても帰ってこなかったら、エルさんとの待ち合わせ場所に行ってみよう）
考えた末、リィナはそう決めた。
すぐに……というより、昨晩のうちに探しに行かなかったのは、先ほどの“遊んでいるのかもしれない”という考えの他に、彼女の現在の立場上、下手に外に出るとかえってティースに迷惑をかける可能性がある、ということが大きい。昨日の彼の出掛けにも、外には絶対に出るなと何度も釘を刺されていたのだ。
「ふぅ……」
心配をため息に乗せて、リィナはベッドに腰掛けた。
こういうとき、自由に動けない自らの身が恨めしく思えて仕方ない。もし自分が人間であったなら、昨日のうちに迷わず彼を探しに行っただろう。
――ただ、それも、全てが順調に行くならばあと少しの辛抱。
あと少しで、彼女は人間――それとほぼ区別のつかない存在へ変わることができるはずだった。

（待ち遠しい……でも――）

目を閉じ、天井を見上げるようにして、リィナはその脳裏に一人の人物の姿を思い浮かべる。

（私よりも、エルさんの方がもっと……）

そこに浮かんだのは、背の小さい、外見的には“可愛らしい”と言っても過言ではない人物の姿。

彼女――リィナが人の世界で暮らしたいと考えるようになったのは、ティースとの出会いが原因だった。彼や彼と一緒にいたシーラという少女と出会うことによって、リィナは他人と触れ合うことを知り、友情や愛情……それらを全てひっくるめた“情”というものを知った。それを知ってしまったからこそ、それが存在しない故郷、何もかもがモノクロのようなその場所に居られなくなったのである。

だが……そんな彼女と違い、エルの方はティースたちと出逢う以前から人間に対して興味を持っていた。人間の世界のことを自ら学び、魔と人間が理由もなく争うことに対して憤りを感じ、偶然にもこの世界に流されたときには、右も左もわからないリィナを連れ、そして人間――ティースたちと交流することに成功した。

だから、人間世界への憧憬ということであれば、エルの方がリィナよりもよほど長く、そして強いはずなのである。

コン、コン。

「あ、はい」

ノックの音に振り返って、返事する。同時に微かな魔力が溢れて、リィナは人の姿へと変化した。

「失礼しますよ」

入ってきた中年のオバさんは宿の主人の妻だった。この宿は家族でやっているらしく、従業員も主人とその妻であるこの女性、それに娘らしき少女がいるだけである。

少し細身ながら、人の良さそうな笑顔にハキハキとした口調で、リィナもこの人物には好感を持っていた。

と、オバさんは部屋を見回すなり、

「……あら？　お連れさんはまだ帰ってないのかい？」
「ええ」
テーブルに食事を置いて、オバさんは呆れ顔をした。
「なんだい、こんな美しいお嬢さんをほっぽっといて。どうしようもない男だねぇ」
「？」
その言葉の意味がリィナにはいまいち理解できなかったが、それでもティースが責められていることだけはわかったため、反射的にフォローするつもりで、
「でも、たまには息抜きも必要だと思いますから」
「……あんたねぇ」
だが、オバさんはますます渋い顔をした。
「そんな物わかりよすぎる性格じゃ、都合のいい女で終わっちまうよ。たまにはガツンと言ってやんないと」
「ガツン、ですか？」
首を傾げたリィナに、
「そ。嘘でもいいのさ。こう、眉毛をピッとあげて、怖い顔で睨み付けてやって」
オバさんは指で眉を無理矢理上げ、それからギロッと睨め付ける芝居をする。
「あまりひどいようなら、もう口も利いてやんないよ、ってさ。……たまにはきつーくお灸を据えてやるのも愛情ってもんだろ？」
「え」
リィナは驚いた顔をして、
「それが……愛情なんですか？」
「ああ、そうさ」
得意顔のオバさんに、リィナはしばし考えていたが、
「……わかりました。そうした方が、彼のためなんですね」
やがて真剣な顔で頷いた。
会話は明らかに噛み合ってないはずなのだが、何故か通じ合って

しまったようだ。……どうやら多大な誤解を含んだままで。
そんなリィナを見て、オバさんは再びため息をつくと、
「はぁ、やれやれ。こんな子がいて、どーしてあんなところに遊びに行くかねぇ……」
「？」
「いや、こっちの話さ。さて、それじゃあ私はそろそろ――あ、そうそう」
出て行きかけて、オバさんはふと思い出したように振り返る。
そして今までの陽気な調子とは打って変わって、少しだけ怖い口調で言った。
「どうもね。最近、この街に魔が入り込んだらしくてさ」
「えっ？」
リィナはドキッとする。
（まさか……でも――）
この街に入るときは、ティースが持っていた紋章――ミューティレイクの紋章の効果で、大した疑いを持たれることもなく入れた。
それ以来、リィナは宿からほとんど出ていないし、宿の人間に正体がバレたということもないはずだ。
（それに……バレたなら、こうして話していられるはずない……）
そのリィナの考え通り、オバさんの口から出たのはその心配を否定する言葉だった。
「先月の終わり辺りから、どうも魔の仕業らしい殺人がたくさん起きてね。……ここ一週間ぐらいは鳴りを潜めているからもう安心なのかもしんないけど、一応外出するときには気をつけな」
「……そうですか」
ホッとすると同時に、それは同じ魔である彼女にとって、非常に心苦しい事件だった。
「ま、安心しなよ！」
リィナの顔が曇ったのを別の意味に取ったのか、オバさんは少しわざとらしいぐらいに笑いながら大声を張り上げ、

「ここにいる限り、このあたしが客には指一本触れさせないからさ！　大船に乗ったつもりでいてちょうだい！」
「……ありがとうございます」
そんな言葉にリィナが顔を上げておかしそうに笑うと、オバさんは目を細めて、
「ホント、可愛いねぇ、あんた。あたしの若い頃にそっくりだよ。……背は、見ての通りずっと小さかったけどね」
「でも、私はちょっと大きすぎちゃって……」
「いやいや。あんたぐらい可愛けりゃ、背の高さなんざ関係ないさ」
オバさんは座ったままのリィナと同じ高さの目線で、彼女の全身をもう一度見回すと、
「んじゃ、そういうことだから。……さっきのあたしの言葉、忘れるんじゃないよ」
「はい」
バタン、とドアが閉まる。
“さっきの言葉”――それがティースのことなのか、魔のことなのかはわからなかったが、リィナは彼女の心遣いに深く感謝する。
軽口、世間話、気遣いの言葉……それは、彼女が以前までいた故郷ではまず考えられないやり取りだった。
（やっぱりこっちの世界に来て良かった……）
胸の奥が暖かくなるのを感じながら、リィナはテーブルの上へと視線を向ける。そこにあった出来立ての朝食に食欲をそそられ、テーブルへと着いた。
魔とはいえ、彼女だってお腹は空くし、体が大きいこともあって食べる量はかなり多い方なのである。
――と、
「？」
カサッ、という音がどこかで聞こえて、彼女は朝食に伸ばしかけていた手を止める。
（なに……？）

視線を動かし、音のした方――扉の方へを見ると、ドアの下の隙間から白いものがはみ出しているのが見えた。
椅子を立って微かに警戒しながらドアへ向かう。……外に人の気配はない。
「これ……手紙……？」
拾い上げてみると、折り畳まれた白い紙切れだった。ドアを開けて外を見たが、やはり誰もいない。
鍵をかけてテーブルへと戻ったリィナは、首をかしげながらも椅子に腰を下ろす。
「……」
そしてゆっくりと、折り畳まれた紙を開くのだった。

場所は戻って、キュンメルの隠れ家。
「おい、ティース。リィナに手紙置いてきてやっ――」
そう言いながら地下へと戻ってきたエルバートは、そこにあった光景を見て言葉を切った。
そして、怪訝そうに眉をひそめる。
「なに、やってんだ？」
「なにって……」
振り返ったティース。
陽カビが光を発する時間になって、煌々とまではいかないまでも、地下室は普通に行動するのに支障ない程度の明かりに包まれている。
そんな中、リューゼットが“我関せず”という表情で壁際に座り込んでおり、そして中央のテーブルにティースとネイルの二人がいた。
「ほらほら。次はそっちの番」
「は、はぁ……」
急かされて、ティースは視線を戻した。

その視線の先――テーブルの上にあったのは、木片で組まれた高さ十センチほどの塔である。ただバランス良く組まれただけなので、少しの衝撃で崩れ落ちてしまいそうなものだ。

そして二人の手元には、その塔から抜き出したものであろう木片がいくつか。

「じゃあ……」

ティースがおそるおそる、塔に手を伸ばした。ゆっくり、ゆっくりと、塔を構成する木片の一切れを掴み、やはり、ゆっくり、ゆっくりと引き抜いていく。

「うわっ……」

塔が揺れた。

グラ……グラ……ピタ。

「ほっ……」

「ふふ。じゃあ、次は私の番だね」

その様を楽しそうに見つめていたネイルは、ティースとはまるで正反対の手付きでほぼ無造作に木片を手に取る。さすがに引き抜くときはゆっくりだったが、ティースとは違って淀みない抜き方だった。

が。

「あっ……」

もう限界だったのだろう。平気かと思われた塔は、その一欠片を失うことによって完全にバランスを失い、テーブルの上にバラバラと崩れ落ちてしまった。

一瞬の沈黙。

ティースの背後でため息が聞こえた。

「この状況でよくそんなことをしてられるもんだよ、まったく」

「い、いや……」

なんだかんだで思わず夢中になっていたティースは慌てて弁解しようとしたが、

「ああ、わかってるって。ネイルが言い出したんだろ？」

エルバートは呆れたようにそう言った。
どうやら彼女のこういう行動は初めてでもないらしい。
「とにかくお前の手紙、言われたとおりリィナのところに置いてきたから。……宿と部屋、間違ってないだろ？　部屋の中までは確認してないから、違ってても責任は持てないぞ？」
「ああ、間違いないよ」
ホッと息を吐いてティースはそう答えた。
――リィナに宛てたその手紙とは“しばらく帰れないが自分のこともエルのことも心配しないで宿で待っていてくれ”と、簡潔に言えばそういう内容のものである。もちろん彼女がティースを探しに街に出てしまうことを懸念した故のものだ。
「けど、俺が自分で行っても良かったのに」
ティースの言葉に、エルバートはちょっとだけ考えてから、
「いいだろ。俺は街に出るの慣れてるし、それに少し外に用もあったんだ」
「そっか」
とりあえずこれでリィナの心配はいらないだろう。安心するとともに、ティースは再びネイルの方へと視線を戻した。
「じゃあこのゲームは終わりってことで……って――」
「……」
怪訝そうなティースの問いにも答えず、ネイルはテーブルの上を見ていた。微動だにせず、じっと……テーブルではなく、崩れ落ちた塔をただ黙って見つめている。
「ネイル、さん……？」
もしかして悔しかったのだろうか、と、ティースは少し遠慮がちに声をかけたが、
「……うん？」
我に返った様子で顔を上げたネイルは、特に怒った様子も拗ねた様子もなかった。それどころか、相変わらずの屈託のない笑みを浮かべ、触覚をぴくりと動かし（？）て、

「強いなぁ、ティッティー」
「……は？」
誰？　と、問いかけようとすると、
「んー、やっぱり呼びづらいなぁ。ティ、ティ……ティモちゃんがいいかな。ねぇ、なんとなくしっくり来ない？　じゃあ決定。ティモちゃんにけってーい」
「……」
ただ呆然としていると、その肩をポンと叩いてエルバートが耳元で囁いた。
「諦めろ。……こいつは一度あだ名をつけたら、新しいあだ名を思いつくまで決して呼び方を変えないんだ」
「……」
ティースは絶句してしまった……が、いかにも精悍で男らしいリューゼットが“リューちゃん”などと似合わない名で呼ばれていることを考えれば、それも納得だ。
とはいえ。
（“ティモちゃん”がしっくり来るって……一体どんな目で見られてるんだろう、俺……）
ガックリ肩を落としたティース。……とはいえ、どうやらその被害に遭っているのは彼だけではないようで、
「お前なんかまだマシな方だよ。俺なんか――」
言いかけたエルバートの言葉に、ネイルが口を挟む。
「どしたの、チビちゃん？　二人でヒソヒソ話？」
「……」
ピキッとエルバートの表情が固まる。明らかに機嫌を損ねた様子が伝わってくるが、表情の端には諦めが漂っており、抗議の言葉は出てこなかった。……それに実際、女性としてもやや小さめのネイルより、さらに背が低いのだから仕方ないといえば仕方ない。
（……悪意がないのだとしても、ひどすぎる……）
本当に悪意がないのかどうかはともかく。ただ、彼女はそんな意

図など全く感じさせない、のほほんとした表情で大きく伸びをすると、

「う……っん、と。じゃあさ、ティモちゃんの問題も解決したみたいだし、そろそろ作戦の話をしよっか。あんま時間をかけたら、お仲間さんが皆殺しにされちゃうんでしょ？」

「あ、ああ、そうだな……」

僅かに眉をヒクヒクさせながらも、エルバートはテーブルに着いた。

「……」

リューゼットもまた、ゆっくりとやってくる。どうやら彼はネイルとの付き合いが比較的長いらしく、彼女のペースにも全く乱されていない。

――と、思いきや、

「あ、リューちゃん。その椅子、あぶ――」

「……っ！？」

ガターンッ！！

盛大な転倒音が小さな地下に響き渡った。一瞬、ティースにも何が起こったのかわからなかったが、どうやら彼の腰掛けようとした椅子が突然にバランスを崩したらしい。

どうして――だが、その理由はネイルが明かした。

「脚、一本使っちゃったから、危ないよ」

「……」

先ほどの“遊びの残骸”を指さしたネイルの言葉に、床の上に転がったリューゼットは無表情にゆっくりと立ち上がる。

そしてポンポンとズボンを払った。

「ネイル」

「なに？」

一瞬の沈黙。

その不気味な一瞬に嫌な気配を感じ取ったエルバートが、慌てて口を挟んだ。

「まっ、待て、リューゼッ――」
いや、挟もうとした。
が、既に遅い。
「決闘だ」
ドゴォォォォォンッ！！！
リューゼットの手から一筋の光が走ったかと思うと、ネイルの座っていた椅子が砕け散ったのだ。
「なっ……うわっ！　ちょっ、リューゼットさんっ！！」
慌ててテーブルから離れるティース。リューゼットの手にはどうやら魔力で作り出したらしい光の剣が握られている。
「うわ、危ない」
一足早く回避したネイルは、くるっと宙で一回転して着地すると、
「リューちゃん、時々意味もなく暴走するんだもん。ホント、困ったちゃんだなぁ」
あくまでのんびりとした口調の彼女に、リューゼットは剣の先を向けながら、
「意味もなく？　冗談も休み休み言うのだな」
「……いや、リューゼットさんもちょっと短気すぎるような――」
だが、ティースの言葉は全く無視された。
リューゼットは指を三本立てて、
「さあ、貴様に選ばせてやろう。一、私と決闘して半殺し。二、そこに座ったまま半殺し。三、とにかく半殺し。……さあ、どれだ」
そこから溢れていたのは、紛れもない殺気。
（っていうか、どれを選んでも半殺しじゃないか……）
あまりにも理不尽な選択肢だった。
「うーん。一もいいけど、三はどんな風になるのかちょっと興味あるなぁ。……うーん」
「って、真剣に考えてるし……」
「あ」
ネイルは何やら思いついた顔でポンッと手を打つ。

それからニッコリと、本当に楽しそうな笑顔を浮かべて、
「じゃあ、その四。……ここにいる全員皆殺し、っていうのはどう？」
「なんでっ！？」
「……」
何故か無言を返すリューゼットが、ティースには不安で仕方なかった。
エルバートが呆れ顔でため息を吐く。
「二人とも、その辺にしとこうぜ。今はそんなことしてる場合じゃないだろ」
「……そうだな」
リューゼットは剣を収め素直に従ったが、
「冗談なんかじゃないのになぁ」
ネイルの方は相変わらずニコニコしている。……本気のようにも聞こえるから恐ろしい。
――と、そんなこんなで。
「まず」
全員がテーブルに戻ってきたのを見るなり（椅子が壊れてしまったので二人ほど立ったままだったが）、エルバートは今回の作戦について話し始めるのだった。
「ティースには、ヤツらのアジトに潜入してもらおうと思うんだ――」

その2『ごっこ』

「あー、お前の名前、なんつったっけ？」
「ティ……ティモセオス＝アベールです」
ゲノール地下一階。
深緑色の制服に身を包んだ、どうやら新入りらしいノッポの男と、その指導を任された先輩らしき男が話している。地下のために太陽の光は一切入ってこないが、照明で明るさは充分に保たれていた。
「ティモセオス？　あー、覚えにくいな。……よし。面倒だから間を省いてティースだ。いいな」
「あ、はい」
新入りらしい背の高い男は頷いて、ポツリと呟くように付け足した。
「……ティモちゃんじゃなければなんでも」
「？　なんだ？」
「あ、いえ」
ティモセオス――いや、ティースは慌てて首を横に振った。
潜入作戦が実行に移されて五日後。キュンメルが事前に探ってあった“窓口”を通し、ティースは晴れてゲノールトの構成員としてこの地下に潜り込むことに成功していた。新人である彼が配属されたのは地下一階の警備部門。とはいえ、しばらくの間はこの先輩――ペドロとともに行動することになっている。
（でも……偽名なんて必要なのかなぁ……）
地下一階の各部の案内を受けながら、ティースは作戦内容を説明された日のことを思い出していた。

「……ティモセオス＝アベール？」
「ああ。いや、ネイルがお前につけたあだ名を聞いていて、パッと思いついたんだけどな。悪くないだろ？」

まだ陽カビは発光していたが、その光は徐々に弱くなりはじめており、そろそろたいまつの明かりが必要になってくる頃。
「……まぁ、確かに」
「えー、ティモちゃんでいいんじゃないの？」
「どこもよくない」
エルバートは渋い顔でネイルにそう返す。
部屋の隅ではリューゼットが座り込み、まるで精神集中するかのように目を閉じていた。
「……ティモちゃん、お気に入りなんだけどな」
ネイルの呟きはあっさりと無視されて、
「で、だ。ティース。ヤツらも多少警戒してるとは思うが、向こうはこっちに人間の協力者がいることは知らない。だから、お前が潜入することはそう難しいことじゃないと思うんだ」
「ああ」
頷いたティースに、エルバートは指を三本立てて、
「お前に探ってもらいたいことは三つある。……一つ目は仲間たちを含め、捕らわれている魔の状況確認。獣魔までは手が回らないだろうから、人魔だけでいい。二つ目に牢の開け方、おそらく鍵が必要だろうから、鍵の在処の確認。そして三つ目はバラード＝グラスマンの動向」
「……大変だな」
ティースは表情を引き締めた。
新入りの身分で動き回れる範囲などたかが知れている。その状況でそれだけの情報を集めるのは、おそらく困難――いや、比較的冷静な見方をすれば、ほぼ不可能だろう。
もちろんエルバートもそれは承知済みのようで、
「出来る限り、でいい。お前が頑張ってくれれば頑張ってくれるだけ、後に控えた救出作戦の成功率が上がる。……最悪、仲間たちの居場所だけでもいい。ヤツらの魔力を封じる牢は内側にしか耐性がないから、鍵がなくとも力業でどうにかできるはずだしさ」

そういったエルバートが指先をパチッと鳴らすと、そこでほんの僅かに風が渦を巻く。
「あとは……運悪くバラードの奴に出くわさないのを祈るのみだ。こっちは四人だ。バラードの奴さえいなければ、なんとかなる」
「……」
バラード＝グラスマンは腕利きのデビルバスターだ。実際のところはどうかわからないが、おそらくあのフォックスレアで出会った女性デビルバスター、ルネッタ＝フィッシャーと同等ぐらいだと思っておいた方がいいだろう。……とすれば、ここにいる下位魔三人とティース程度では、どう逆立ちしても敵うはずがない。
確かに責任重大だった。
圧倒的不利なこの状況を打破するか否かは、全てティースの活躍に懸かっていると言ってもいいのだから――
「……おい、聞いてんのか、ティース」
「え」
ペドロの言葉に顔を上げるティース。
視線の先にあるペドロの少々ダルそうな顔は、二度説明するのはゴメンだと言わんばかりの表情をしていた。
「ええ、聞いてますよ」
もちろん地理の把握は重要なことだ。考え事をしてはいても、その説明はしっかりと彼の頭の中に入っていた。
「とにかく、非常事態には手近にあるその取っ手を引けばいいんですね」
その返答に、ペドロは満足そうに頷いて、
「ああ、そういうこった。そうすりゃ、この地下の全域に異常が知らされる。……何もないのに間違って引いたりすんなよ。大変なことになっからな」
「……ええ」
十数メートル間隔で配置された非常用の仕掛け。仕組みはよくわ

からないが、それを全部黙らせることは少し難しそうだった。
さらに先へ進む。
「んで、ここが地下二階への階段だ。……ま、最初のうちは使うこともないと思うが、基本的にはここと、あと向こうにもう一つある階段を使うことになる」
通路の向こう側を示すペドロ。
「わかりました。……ところで」
その位置をしっかり把握し、ティースはさらに質問した。
「さっき途中にも二つほど下に降りる階段がありましたよね。あれは？」
その二つは少々薄暗い印象の階段で、片方はなにやら呻き声のようなものが聞こえたし、もう片方は妙に静かだった。
ペドロは答える。
「ああ、あれは牢に続く階段だ。新しく捕らえてきた魔を処遇が決まるまで閉じこめておく臨時の牢でな。入り口に近いところにあったのが、デカくて汚ねぇ“ゴミ牢”。で、さっきそこにあったのが、小さくて綺麗な通称“娼牢”だ」
「……なんで二種類あるんですか？」
問いかけに、ペドロは鼻で笑って、
「デカい方はその名の通り“ゴミ溜め”さ。で、小さい方は使えそうな女を閉じこめておくから“娼牢”って呼ばれてる。ほら、そっちはあんま汚くすると、色々マズいだろ？」
「……」
その意味はかろうじて理解できた。ほんの僅かな嫌悪感がティースの顔に浮かんだが、幸い、ペドロはそれに気付かなかったようで、
「ま、どっちだろうと俺らには関係のない話さ。一旦閉じこめりゃ逃げることなんてまずありえねぇし。娼牢の方は今、ガキが一匹入ってる。ガキっつっても顔は悪かねぇし、あと一週間もすりゃ使い道が決まると思うけどな」
「……」

振り返って、ティースは先ほど見えた階段の方を見つめる。
（……想像してはいたけど……ひどい場所だ）
エルバートの憤りがここに来て初めて実感できた。確かにこれなら、命を賭けてでもどにかしたいと感じても不思議はない。
そしてそれは、ティースにとっても同じだった。
（こんなの……許されるはずが、ない）
「さて、それじゃそろそろ戻るとすっか」
そんなティースの内心にはもちろん気付かず、ペドロは踵を返した。
「ま、最近ちょっといざこざがあったが、それもほぼ鎮圧したから、しばらくは面倒なことも起きねぇさ。気楽にやっていこうぜ」
「……」
言葉を返す気にはなれず、ティースはただ頷いてペドロの後についていく。
――と。
「……様ッ！！　……どこへ――――！！」
「？」
背中の方から騒がしい声が聞こえてくる。
振り返ってみると、どうやら騒ぎは先ほどの階段――つまり、地下二階からしい。
「……あちゃぁ。ついてねぇなぁ……」
同じく振り返ったペドロは、すぐに眉をひそめて片手で顔を覆った。
「ペドロさん？」
ティースが問いを向ける間にも、騒ぎは近付いてきている。
「……こっち来ねぇうちに行くぞ、ティース」
「え？　どういう――」
「面倒な馬鹿ガキが来やがった」
ペドロがそう言った直後。
「……別にいいでしょぉっ！

立ち去る間もなく、近付いていた騒ぎの原因はティースの視界の中に姿を現した。
「ゲームも終わっちゃったし、今、ものすっごく暇なの！」
「な――」
それを見て、ティースは唖然とした。
この場に相応しくない――騒がしく甲高い声
この場に相応しくない――真っ赤なドレス。
そして――
（こっ……子供？）
階段を駆け上がり、逃げるように走ってくるのはどう見ても十歳程度の、小太りな女の子だ。リンゴのように赤いほっぺ、身に纏ったのは赤いドレス。左右で縛った長い髪が走るたびに揺れていた。
（な、なんでこんなところに子供が――）
それはこの殺伐とした暗いイメージの場所に、あまりにも似つかわしくない。
「セルマ様！　困ります――！！」
その後を追いかけるのは、二十代半ばぐらいの男。身長は百八十センチぐらいあるだろう。長身で体格の良い黒服だ。――そんな男が、赤いドレスの女の子を必死に追いかける図は、ある意味シュールな光景だった。
「おい、ティース。知らんぷりしとけ」
「え……」
振り返ってみると、ペドロは壁の方を向いて、何やらメモを取るような素振りを見せている。――が、その手にはペンも紙も握られてはいない。
「ほら、早くしろ。とにかく目を合わせんな」
「そ、そんなこと言っても……」
その言葉に従おうとしたが、手には何も持っていないし、咄嗟に芝居しようにも何も思い浮かばず。
そうこうしているうちに、駆けてきた女の子がティースに気付き、

視線がピッタリと重なってしまった。
（あ……）
「？」
慌てて視線を逸らそうとしたが、女の子は不思議そうにティースを見つめると、その速度をゆっくりと緩め――そして、
「……」
ピタリ。
ティースの目の前で立ち止まった。
「あ、えっと……」
少女は、首をかしげ、覗き込むようにティースを見上げている。
……背後では、ペドロがコソコソと逃げていく気配があった。視線の奥には、女の子を追いかけてくる男たちの姿。
「……？」
一方の怪訝そうな女の子の表情は、少しずつ、少しずつ変化していた。まるで、何か大発見をしたかのように、目が大きく見開いていく。
とにかく何か喋らなければ、と、ティースはそう思い、
「ど……どうしたんだい？　なにか――」
言おうとした、その瞬間だった。
「……――パパぁッ！」
「えっ？」
一瞬、悪寒がティースの背筋を過ぎった。……少女が突然、ティースの胸に向かってダイブしてきたのである。
幸いなことに、少女の年齢はまだ彼のアレルギー対象外だったようだ。
が――
「うッ！！？」
胸に走った衝撃に息が詰まる。
もちろん十歳程度の少女だ。身長はせいぜい百三十センチ半ばほどだろう。が……その横幅はなかなかのものだった。決して支えき

れない体重ではないにしろ、不意打ちで咄嗟に対処できるようなものではなく。

「うわ……っと……っと――てッ！！」

見事に臀部から墜落し、尾てい骨から突き抜けるような痛みが背骨に走る。

が、その痛みを充分に味わう間もなく、事態はさらにティースにとって不可解な方向に進んで行き――

「おかえりなさい、パパ！　いつ！？　ねぇ、いつ戻ってきたのっ！？」

女の子は押し倒した彼の首筋に抱き付くと、いきなりそう捲し立てたのである。

当然、ティースは目を白黒させて、

「パ、パパぁ！？　……ちょっ、ちょっと、君――」

「パパっ……パパぁっ……！！」

「ちょ……ちょっと……」

まるで子犬のように胸に頬を擦り付けてくる少女。

追いかけてきた男。騒ぎに気付いた構成員たち。

それらが徐々に集まっているのを見て、思わずティースの口に乾いた笑いが漏れる。……笑うしかなかった。

潜入任務の基本、その一。

“なるべく目立たないように行動すべし”

（さ、最悪だ……）

そんなこんなで潜入初日から、ティースは望まぬ有名人デビューを果たすことになってしまったのだった。

陽カビはすでにその活動時間を終え、その薄暗い地下室には二組のたいまつが灯っている。

ぼんやりと浮かび上がる室内には三つの影。部屋の隅で目を閉じ

る男と、テーブルに着いている少年。そして、地べたにペッタリと座り込み、折り紙のようなもので遊んでいる女性。
　このリガビュールに残された残り少ないキュンメルのメンバー、エルバート、リューゼット、ネイルの三人である。
「で、ティースからの連絡はあったのか？」
　壁際でリューゼットが目を開き、口を開いた。
　言葉を向けられたのはエルバート。
「ああ」
　テーブル上のその手には、一枚の紙切れが握られている。
　一日一回の連絡。住み込みに近い形のゲノールトに潜入したティースと連絡を取る方法はごく限られている。
「指定通りの場所にきちんと手紙があった」
　あらかじめ街中のとある場所を指定しておき、短い休憩時間を利用して、現在の状況を記した手紙を置く――それが、色々と考えた末に出した連絡法。こちらからの指示も手紙によって伝えることができるし、もちろん怪しまれないように指定場所は毎日変えるようにしてあった。
「――ねぇねぇ、リューちゃぁん。折り紙で“やじろべえ”ってどーやって作んの？」
「それで、その内容は？」
「ああ。それが、さ。いきなり有名人になっちまったみたいだ」
　エルバートは少しだけ困った顔をする。
「ほぅ。なら、失敗か？」
「……ねぇ、リューちゃんってばぁ」
「そうとも言い切れないみたいだけどさ」
　そう言って、エルバートは軽く丸めた紙を放る。
　リューゼットはすぐ、受け取った紙に視線を滑らせて、
「セルマ＝ゲノールト？　……ゲノールトということは」
　エルバートは頷いて、
「ああ。どうやらゲノールト総帥の孫娘らしい。そいつに懐かれた

らしいってことみたいだ」
　リューゼットは興味深そうに目を細めて、
「ほぅ。それで。どうするつもりだ？」
「ああ……本当なら目立たないようにやって欲しいけど、逆に利用できる可能性もあると思う。だから、ティースにはそういう方向で――」
「……ねー、リューちゃぁん。やじろ――」
　ゴン！
「あたっ！」
　木片が前頭部を見事に直撃して、ネイルは思いっきりのけぞった。
「い、いったぁ……」
「少し黙れ」
　ゆっくりと、リューゼットが腕を下ろす。
「それにそれは、“やじろべえ”ではなく“やっこさん”の間違いだろう」
「……あ！　そーそー。その、やっこさん！」
　頭をさすりながらそう言ったネイルに、リューゼットは興味なさそうに視線を外して、
「貴様は“口は災いの門”という言葉を知らんのか？　貴様は紛れもない馬鹿なのだ。馬鹿は馬鹿なりに大人しくしていた方がいい。……それで」
　何事もなかったかのようにエルバートに視線を戻す。
「つまり、その娘から情報を聞き出すということか？」
「あ、ああ」
　さすがにひどい言い様だなと思いつつも、いつものことなのでエルバートもすぐに気を取り直し、
「少なくともそんなのが近付いてるってことは疑われてないってことだろうし、上手くいけば普通にやるよりもよっぽど成果が――」
　ゴァンッ！！
「うわッ！？」

ものすごい打撃音とともに、エルバートの目前でリューゼットの体が前方に九十度折れ曲がる。その光景はまさに“やじろべえ”を彷彿とさせるものだったが……いや、それはともかく。

その――背後。

たいまつの明かりに浮かび上がったのは、椅子を振り下ろした…いや、振り抜いた体勢のネイルだった。

「リューちゃん、知らないの？　馬鹿って言った人が本当は馬鹿なんだよ？」

「……」

リューゼットは動かない。……いや。

「……ネイル」

ゆっくりと。まるで地獄の底から響いているような超低音の声を発しながら、やじろ――いや、リューゼットの体が元に戻っていく。

「なぁに、リューちゃん？」

一瞬の――不気味な――沈黙。

そして、

「今日こそ、貴様の息の根を止める」

どぉぉぉぉん！！

「うわぁっ。リューちゃん、今日も苛々大爆発だねぇ」

「貴様が言うな」

ごん！　どぉん！　ごわっしゃぁぁぁぁん！！

「……また始まった」

エルバートはため息とともに顔を覆った。

決して珍しいことではないといえ――

「はぁ……」

諦めたように肩を落とすと、席を立つ。歩いていった先――部屋の隅には何やら手紙の束があり、エルバートはその中の一つを手に取った。

そして、乱闘を繰り広げる二人に向かい、言い放つ。

「ティースの残してった手紙、宿に置いてくるからさ。……戻って

くるまでには決着つけといてくれよ」
どがぁぁぁぁぁぁん！！
（……あの地下室、大丈夫なんだろうなぁ……）
去り際に聞こえた一際大きな破壊音にやや不安になりながらも、エルバートは地下室を出た。
「はぁ……」
吐く息が白い。外は日も沈み、冷たい風が辺りを支配していた。
……この気温では、客引きも大変だな、などと、全く関係ないことを心配しつつ、フードをかぶってブルッと一つ身震いする。
それから手の中に視線を落とした。
「しかしマメなヤツだな、あいつ。……そりゃ、毎日連絡した方が安心するだろうってのはわかるけどさ」
手紙――それはティースが残していった、リィナへの手紙。最初の一通後に全くの音信不通となれば不安になるだろうという配慮から、ティースがあらかじめ書いておいた複数枚の手紙を、毎日一通ずつ彼女に届けることを請け負ったのである。
ほぅ……っ、と、もう一度白い息を吐いて、エルバートは一つ頷くと、
「……ま、無理に協力してもらってんだ。このぐらいはやってやんなきゃ、な」
そう呟き、夜の空気が支配するリガビュールの街を東へと向かって歩き出すのだった。

三日後。
「えっと……ここをこう折って……」
「ああ、いえ、違いますよ。こっちを……こう、こうしてから、そ

っちを――」

ゲノールトの地下二階。階段を下り、二股の通路を左に三十メートルほど進んだ場所に、ちょっとした休憩所のようなところがある。

本来はゲノールトの構成員が仮眠を取ったり、ちょっとした博打を楽しんだりする場所。だが、ここ二、三日、その姿はすっかりと鳴りを潜めており、代わりそこにあったのは――

「んー……！！」

「ああ、ダメですよ。丁寧にやらないと、きちんと飛ばなくなってしまいますから」

どこか場違いな赤いドレス姿でそこに座り込み、どうやら折り紙らしきものを折っている少々太めの少女――セルマ＝ゲノールト。

なかなか上手く行かないのか、もともと丸々とした頬をさらに膨らませ、やや苛々した様子が表情に見え隠れしていた。が、それでも癇癪を起こさずに根気よく折り紙を続けている。

彼女を良く知るゲノールトの構成員に言わせれば、その“我慢強さ”は奇跡にも近い光景だった。

「……」

離れた場所から無言でその様子を見つめているのは、彼女の護衛を務める男二人。

そして、

「よく見ててください。ここを……こうやって――」

彼女の一番そばで折り紙を教えるのは、言わずとしれたティースである。

「こう……こうかな……」

「ええ、そうです」

「これでちゃんと飛ぶの？」

ようやく完成した紙飛行機を手に、無邪気な笑顔を見せるセルマ。

ティースは微笑むとともに小さく首をかしげてみせて、

「さぁ、それはやってみなければ」

「えー！」

不満そうな声を上げるセルマだったが、そこには小さな達成感のようなものが浮かんでおり、機嫌はすこぶる良さそうだ。少なくとも“暇つぶし”という彼女の目的は充分に達せられているらしい。

（ふぅ……っ）

思った以上に楽しそうな彼女の姿に、ティースも安堵の息を漏らした。頬を微かに緩めながら、

（……でも、まさかこんなことになるとはなぁ）

次のため息は、彼の中にある不安の入り交じったものだ。

――あの日、彼女にいたく気に入られてしまったティースは、その翌日から本来の任務を免除され、こうしてゲノール総帥の孫娘、セルマ＝ゲノールトの遊び相手をするように命じられていた。もともと彼女のわがまま振りはゲノール構成員の間でも有名であり、ペドロが態度で示したようにやや手を余している状態。だからティースをあてがうことで大人しくなるなら、彼らにとっても願ったり叶ったりだったのだろう。

「ティース、もっと食べる？」

ちなみに彼女もまた、ペドロの考え出したあだ名（？）で彼のことを呼んでいた。

「あ、いや」

常に持ち歩いている菓子の袋を差し出したセルマに、ティースは丁重に断って、

「もう残り少ないようですし、私は遠慮しておきます」

「いいよいいよ。なくなったらまたもらってくるからさー」

口の周りを粉砂糖で僅かに汚し、セルマはニコニコしながらそう言った。

「……」

そんな彼女に笑顔を返し、やはり丁重に断りながら、

（普通の女の子、だよな……）

少し意外に思っていた。

やや食欲旺盛ながら、年相応の、ごく普通に愛らしい少女。

ただ……周りはそうではないと言う。
わがまま。飽きっぽい。気まぐれ。すぐに癇癪を起こす。祖父の言うこと以外は聞こうともしない――だが、たった二日間とはいえ、そんな面をティースは一度も目にしていない。そしてそれはどうやら驚くべきことらしかった。
菓子を片手に紙飛行機で遊ぶセルマを眺めながら、ティースはもう一つ息を吐く。
（……そろそろ色々情報を聞き出さなきゃ、な）
もちろん当初の目的は忘れていない。
捕らわれているキュンメルメンバーの状況。
牢の鍵の在処。
そしてバラード＝グラスマンの動向。
二つ目、三つ目については、彼女が知っている可能性はそう高くはないだろう。が、あれだけ組織内を自由に動き回っている彼女だ。捕らわれている魔の居場所ぐらい知っていても決しておかしくはない。
「……」
視線を背後に向けると、そこには壁に背を預け、遠くで様子を窺っているセルマの護衛役が二人。……どこかやる気なさそうに見えるのは、これまで彼女に散々困らされてきた結果だろうか。
といってもちろん下手は打てない。距離的には通常の会話がギリギリ聞き取れるか取れないかという微妙な位置だったし、そうでなくとも、下手な探りを入れて、セルマが誰かにそれを話しでもすれば絶体絶命である。
（さて、どうしようか……）
考えるティースの目の前を、すいーっと赤い紙飛行機が飛んでいく。
（さりげなく……上手く会話を運べれば――）
と、
「あのねー」

「……はい？」
紙飛行機を追いかけて拾い上げたセルマが唐突に口を開いた。
「パパも得意だったみたいなんだ。折り紙」
「そうなんですか？」
苦笑するティース。
所詮は基本的な紙飛行機の作り方を教えただけだ。得意というほどではない。
（みたい……か）
その言葉に、再びティースは少女の境遇へと想いを馳せる。
……父親がいないことは確実だ。が、母親という人物の姿も、その話も耳にしたことがない。詳しい事情はもちろん新参者であるティースの知るところではなかったが、少しだけ気になった。
「あ、そうだ！」
と。
飽きたのか、あるいは満足したのか。何度か紙飛行機を飛ばして遊んだ後、セルマは突然、何事か思いついた様子でティースの元へ走り寄ってくる。
そして得意げに満面の笑顔を浮かべると、
「ティースに面白いもの見せてあげるよ！」
「……面白いもの？」
「ついてきてー！」
そう言うと、セルマは忙しなく駆け出した。その丸々と太った体型に似合わず動きが素早いのは、やはり子供だからだろうか。
チラッと護衛の二人を見ると、こっちの動きに気付いたようだ。僅かにため息を吐いて、寄りかかっていた壁を離れる。
（……面白いもの、か）
腰を上げ、ティースもまた彼女の後を追うことにした。
階段を上り地下一階へ。
走る。
「こっちだよ」

「……」

曲がり角ごとに立ち止まって手招きするセルマの向かった先は、ティースも知っている場所だった。

「……あ、セルマ様」

そこにあった階段を下りると、入り口付近にいた構成員が不審そうな顔で立ち上がり一礼する。が、セルマはそれを全く無視して、

「こっちこっちー！」

「……」

すれ違いざま、構成員の男が説明を求めるようにティースを見たが、もちろん説明する暇があるはずもなく、ティースは軽く頭を下げてその横を通り過ぎた。

そして――

（……ここが）

そういうものがあると初日に聞いてはいたが、実際に見るのは初めてだ。

そこは通称“ゴミ牢”。どことなく他の通路より薄暗くジメジメした空気。階段を下りた時点で奥の方から呻き声や微かな怒号のようなものも聞こえていた……が、セルマは気にした様子もなくどんどん先に進んでいく。

そこにあったのは、大きな牢が二つ。

（これは……）

一つがだいたい二十畳ぐらいだろうか。昼だというのに明かりらしい明かりは階段付近から照らされる微かな照明のみ。微かな悪臭、牢の中には計四人。目の細かい格子を掴んで何事か叫んでいる男。その後ろで無気力にうずくまる男が二人。その奥、ボロボロになった薄い布の上に横たわり、呻き声を上げている者が一人。

もちろん、全員が人魔だった。

「見て、ティース」

セルマは牢獄の前に立って、ティースを振り返る。格子を掴んでいた男が怒号を上げてセルマに手を伸ばそうとするが、格子の目は

指が入るか入らないかの大きさしかなかった。
「セルマ様……」
ティースはやや当惑した様子で口を開く。
――その無邪気な様子と、牢の中の悲惨な様子が、あまりにもアンバランスで、そしてあまりにも衝撃的な光景に思えていた。
「コレね、全部お爺様が捕まえてきたんだよ。すごいでしょー？」
「……」
直後、牢の中で微かな爆発音が起こった。
「ゴフッ！！？」
格子に捕まっていた男が転倒する。……どうやら牢の中で魔力を行使しようとして、跳ね返されたらしい。
「くっ……き……さまらァァァッ！！」
手首を押さえ、床にはいつくばったまま睨み上げる男の姿に、ティースの視線は釘付けになった。
その男は捕まって日が浅いのだろうか。うずくまる二人や後ろで横になったままの男に比べると、まだ元気が残っているようだった。
「ここを出たら、貴様らを真っ先に殺してやるッ！！　爪を剥ぎ、手足を切り落として、内臓を引きずり出してやるからなァァァ――ッ！！」
「……」
僅かにかすれた呪詛の叫びに思わず顔をしかめるティース。だが、セルマの方はその言葉がまるで聞こえていないかのようにニコニコしながら牢の中を指さして、
「ティース、コレ、何に使うか知ってる？」
「……」
言葉が出せず、ティースはただ首を横に振る。
……背中に、冷や汗。そこに二人の護衛の視線を感じていた。
今はただ、彼らに不審な態度を悟られないようにすることで精一杯だった。
「コレね、あとでゲームに使うんだよ。ティース、見たことないで

しょ？　今度、お爺様にお願いして、ティースにも見せてあげるね」
「ゲーム……ですか？」
何のことかティースにはわからない。が、それが“ゲーム”などという可愛らしいものでないことは容易に想像できた。
そして案の定、セルマの無邪気な口から出てきたのは、その想像通り。
「コレを、動物と決闘させるの。それで何匹目まで勝ち抜けるか賭けるんだよ。面白いんだからぁ」
「……」
「たまに強いのがいるんだけどね。そのときは手を縛ったり、かたっぽだけもいだりしてハンデ付けるの。だいたい三匹か四匹ぐらいでダメになっちゃうんだけど、私はいつも六匹か七匹目に賭けるんだ。だって、その方がいっぱいになるの！」
「――」
濁流が脳髄に流れ込んできたような、目眩。
身振り手振りを加え、顔を赤くし、丸々としたほっぺを一杯に緩ませて楽しそうに話す少女の姿に、ティースの冷や汗は止まらなかった。
――見てはいけないものを見てしまったような、そんな感覚。
「こないだは惜しかったんだよー！　七匹目に賭けてね、六匹目まで行ったの。当たってたらね、えっと、えっと……確か五十倍ぐらいだって。すごいでしょー！？」
「あ……ああ」
震える唇を意識的に引き締める。
「でも七匹目では全然ダメでさー。何もしないで頭もげちゃった。……お爺様が言うにはね――」
どす黒いものが心臓に流れ込む。
吐き気を催す。
（……ダメだ。しっかりしろ……）
言葉はいつもと変わらず無邪気なまま。なのにその内容は、普通

の人間であれば気分が悪くなって当たり前の、あまりに残酷なものだった。

それが普通のゲノールト構成員たちの口から出たのであれば、ティースもここまでショックを受けなかっただろう。が、それが、たった二日とはいえ一緒に過ごした、一見子供らしい無邪気な彼女の口から出たものだったから、なおさら衝撃だった。

（……異常だ――）

沸き上がった怒りは、目の前で残虐な描写を続けるセルマではなく、その背後に存在するものに向けられた。

（ゲノールト……）

この場所で産まれ、この場所で育ってきたセルマという少女。

その彼女にとっての日常。彼女にとっての常識。

――それこそが、このゲノールトが犯してきた罪の証明だった。

（許せない……！）

奥歯がギリッと音を立てる。

「でね！　近い内にまたゲームが――……ティース？」

「！」

歯ぎしりの音に気付いたのか、あるいは表情を悟られたのか。不思議そうなセルマの問いかけに、ティースはハッと我に返った。

「ねぇ、ティース。どうかしたの？」

「……いいえ。楽しそう、ですね……」

それでも、心に爪を立てながらそう答えるのがやっと。

幸い、セルマは疑問を持った様子もなく、すぐに表情を輝かせた。

「そうでしょ！？」

「……」

まるで父親に誉められた幼い娘のように。

複雑な思いがティースの胸に去来する。

（この子は――）

どうすればいいのだろう。――いや、どうすることもできやしない。

結論は即座に現れる。
ティースの立場で彼女にしてやれることは何もなかった。……むしろ、この先ここで生きていく彼女にとっては、罪悪感を感じず、純粋に楽しんでいられるこの状態こそがもっとも最適と言えるのかもしれない。
「セルマ様……」
ティースはギュッと唇を引き締め、出来る限り不自然にならないように問いかけた。
「他に……こういう人たちはいないのですか？」
「こういう人？」
一瞬、セルマは理解できない、という顔をした。
が、すぐに、
「あ、ああ。コレのこと？　……変なの。コレは人じゃないよ？」
「コレ……は、他にいないのですか？」
再び催してくる吐き気を押さえながら、言い直す。
「うん。たっくさんいるんだ」
セルマは自慢げにあっさりと答えた。
「三階のCブロックにたくさんいてね。四階でゲームがあるの。次か、その次ぐらいには連れてったげるからね」
「そうですか……」
（三階のCブロック……）
おそらくそこが、人魔たちを捕らえておく場所なのだろう。とすると、キュンメルのメンバーもそこに捕まっている可能性が高い。
このゲノールトの地下組織は三階がメインとなっており、もっとも広かった。AブロックからFブロックまでに分かれており、相互のブロックは普段開いていない非常通路からしか行き来することができなくなっている。だから、その中でCブロックだと判明したことは、救出作戦を実行する上で非常に重要な情報である。
だが、
（……この子は、このままじゃ――）

気分は晴れない。
それは自分の考えるべきことではないと、そうわかっていながらも。
「それじゃ、いこ、ティース」
満足したのか、セルマはその後も“ゲーム”の魅力について説明しながら、通称“ゴミ牢”を離れていく。
陰鬱な気分を懸命に隠し、ティースもまたその後をついていくことにした。
階段を上り一階へ。
そのまま、地下二階へ続く階段へと向かう——その途中。
「あ。せっかくだから、こっちも見てみる？」
「え？」
セルマが立ち止まったのは、その途中にあった別の階段。先輩構成員のペドロから聞いた話によれば、通称“娼牢”と呼ばれる牢のある場所だった。
「こっちはよくわかんない」
尋ねておきながら、セルマはティースの返事を待たずに階段を下りていく。
「なんか、ゲームには使わないみたいなの。それに、弱そうなのばっかなんだよ」
「……」
その牢の通称を知っているティースには、その理由がわかる。が、どうやらセルマはまるで理解していないようだった。
（これが娼牢……か）
先ほどの牢と違い、通路にも明らかに清潔感がある。いわゆる“陽カビ”が通路をしっかり照らしており、先ほどのような悪臭も全くなかった。
「あっ……セルマ様！」
そこにも二人の見張りがいて、牢は一つ。見張りの一人は壁にだらしなく座り込んでうたた寝していたし、もう片方は大きなあくび

の途中。セルマの姿を見て二人とも姿勢を正したが、セルマはやはりまるで眼中に入っていない様子で牢の方へ進んでいく。
ティースもまた、二人の見張りに小さく頭を下げながら牢に近付いた。
「……」
牢にいたのは一人の少女だった。
歳は……セルマより少し上、十二、三歳ぐらいだろうか。先ほど捕まっていた魔に比べると、きちっとした清潔な洋服を身につけ、ベッドもあり、おそらく定期的に風呂にも入っているのだろう。やや内側にカールしたクセのあるセミロングの髪は艶があったし、肌もキレイで健康的だ。
だが、その少女に待ち受ける運命を想像すると、ティースの心はやはり暗くなる。
（こんな……子供が――）
チラッとセルマの様子を窺ってみた。
相手は歳が近い女の子同士、あるいは違った反応を見られるかとも思ったのだ……が、セルマは腰に手を当て、つまらなさそうに牢の中の少女を見下ろすと、
「コレなら一匹目でダメになっちゃうよねー。こんな弱っちいの、すぐ捨てちゃえばいいのに」
「……」
同意を求めてきたセルマに、ティースは無言で目を閉じ、眉間に皺を寄せた。……どうやら彼女の目には、すでに歪んだフィルターがかかってしまっているらしい。
「やっぱつまんなかったね。行こ」
「はい……」
と。
……異変が起きたのは、セルマが踵を返し、ティースもその後に続こうとして、最後に牢の中に目を向けた、その瞬間のことだった。
（――え？）

ずっと俯いていた牢の中の少女が、いつの間にか顔を上げていた。
そして――
（な――）
視線がぶつかった瞬間、脳裏の奥の“何か”が刺激される。
――どこかで、見たことがある。
咄嗟に、そう思った。
思考の時間は、ほんの二、三秒。
思い当たったのは――
（……エルに……似てる……？）
そう。
もちろん性別の違いはある。が、その少女の顔は確かにエルと良く似ていた。まるで、兄妹かと思ってしまうほどに――
（兄妹……？）
まさか、と、ティースは考える。
そんな話は本人の口から一言も聞いていなかったし、彼に妹がいるということも聞いたことがない。
だが、
（まさか――）
それでもなお、思考はその可能性を否定しきれなかった。
（でも、それなら俺に言ってくれるはず……）
確かに隠す理由は見当たらない。
とすれば、他人の空似だろうか。
いや、しかし――
（……あまりにも似てる）
少女は、ティースの記憶の中にある少年の姿とあまりにもそっくりだった。彼が髪型を変えて少々女の子っぽくすれば見分けがつかなくなるのではないか、というほどに。
「……」
少女は視線を動かさなかった。口は開かない。
その表情も、どこか違和感がある。そこにあったのは絶望ではな

く、秘めたる何らかの意志。
そしてティースを見つめる目には、どことなく不思議そうな色が込められていた。

――何故、あなたはそこにいるの？　と。

「ッ……！」
見透かされたような気がして、ティースは視線を逸らした。
そしてそのまま、いつの間にか遠くなっていたセルマの後を慌てて追いかける。
（……なんだったんだ、あの子……）
胸に残ったのは、やはり不思議な感覚。
その日、少女の顔がティースの頭から離れることはなかった。

日が沈み、キュンメルの隠れ家をたいまつの明かりが照らしている。
エルバートの手の中にあったのは、ティースからの定期連絡。
それに目を通した後、安堵のため息をもらして、
「そうか。彼女はまだ、娼牢から移されていないみたいだな……」
どこに行っているのか、そこにリューゼットとネイルの姿はない。
揺れるたいまつの炎。テーブルの上には彼が街へ出る際に使う灰色のローブ。そのそばには、ほどかれた赤いリボンがある。
「仲間たちの安否は依然不明……か」
手紙を置いて、エルバートの視線は天井を仰いだ。
「ティース……早めに、頼むよ……」
祈るように、呟きが漏れた。

「みんなが、無事なウチに――」

その3『境界線』

夕日が斜めに射し込むやや広めの部屋の中、リィナはベッドの上に腰を下ろし、じっとドアを見つめていた。

「……」

無言のまま視線を僅かに横にずらす。壁のカレンダーに刻まれた日付は、ティースが戻ってこなくなって今日がちょうど十日目であることを示していた。

……さすがに、おかしい。

毎日届けられる手紙はおそらく彼の筆跡だ。長年離れていただけに確信ではないが、おそらく間違いないだろうという自信はあった。それは疑いないとしても……ならば何故、彼は直接事情を説明しに来ないのだろうか。

それが疑問だった。

そもそも、手紙を届けているのは彼本人なのか。……いや、直接姿を見せないことを考えれば、そうではない可能性の方が高いだろう。

考えられるパターンはいくつかある。

――どこかに捕らわれて、手紙だけを無理矢理書かされている。

――何らかの事情でその場から離れることができず、誰かに代わりに手紙を届けてもらっている。

前者であるならばすぐに探しに行くべきだろうし、後者であるなら、彼の言葉通り黙って待つべきなのかもしれない。

夕方。手紙は大体いつも同じような時間に届けられた。

確認する手段はある。もっとも単純な方法。

（今日は逃がさない……）

届けにきた人物に、直接聞けば良いのだ。

実をいうと、この試みは三日前からすでに始めていた。が、初日は手紙に気付いて廊下に飛び出したときはすでに誰の姿もなく、神

経を尖らせた二日目は手紙自体が届けられなかった。そして三日目……昨日は時間を大きくズラして届けられたために気付くことができなかった。

おそらく向こうもリィナの意図に気付いていて、そして姿を見られまいとしているのだろう。

だから、今日は昼過ぎからずっと神経を尖らせていた。

「……」

窓から射し込むオレンジ色の光が、その強さを徐々に弱めていた。もう夜が近い。

……もしかしたら、今日は来ないのだろうか。

そう思い始めた、そのときだった。

「？」

一瞬。

「えっ……？」

窓から射し込んでいた夕陽を遮った、小さな影。咄嗟に振り返ったが、誰もいない。

……いや。

「！？」

いつの間にか窓の隙間に手紙が挟み込まれていた。

（でも……ここは二階――！）

慌てて窓に駆け寄って外を眺めた。が、宿の近くを歩く人間は見当たらない。

（どこに――）

ガタッ。

「！？」

音が聞こえたのは、屋根の上。

上を見ると、ほんの一瞬だけ、何者かの後ろ姿が見えた。が、それはすぐに屋根の向こうに消えてしまう。

思わず、リィナは叫んだ。

「……待って！　あなたは……ッ！？」

返事はなかった。
一瞬追いかけようかとも思ったが、それではさすがに目立ちすぎる。今の彼女の立場からすると、それを実行に移すことは難しかった。
追跡を断念し、窓の枠から手を離す。
（でも――）
視線を床に落とすと、そこには先ほど届けられたばかりの手紙。
（あの後ろ姿……やっぱりティース様じゃ、ない）
それは確信だった。
「……」
無言のまま手紙を広い、そして視線を伸ばした先はカレンダーの日付。
（あと、三日……）
示していた日付。
エルとの約束――“一年後”まであと三日だ。
「……」
手紙の封を切る。内容はいつもと大差ないもの。何か暗号のようなものがあるかとも考えたがそれもなさそうで、筆跡にも動揺は見られなかった。自分の意志で書いている可能性は高い。
（でも……あと三日で進展がなかったら――探しに行こう）
魔である彼女にとって、昼間から街中をさまよい歩くことはとてつもないリスクを背負う行為だ。が……それでも彼女は、この不可解な状況にそこまで耐えられるほどの日和見主義でもなく――。
決意を固め、そしてリィナは部屋にある街の地図に手を伸ばすのだった。

「ふぅ……やれやれ」
エルバートが隠れ家へと戻ったのは、すでに日も沈み、そしてリ

ガビュールの中心街が“活気づいて”きた、そんな時間。
「……参ったなぁ」
地下へと続くはしごを下りていくと、たいまつが揺らめいて彼を出迎えた。
「あれ？」
そして、ふと気付く。
薄暗い地下室にいたのは、相変わらず壁際で瞑想するように目を閉じるリューゼットだけだった。
「ネイルはどこ行ったんだ？」
リューゼットは静かに目を開き、横目でエルバートを見ると、
「さぁな。だが、いない方が静かでいいだろう。……なにかあったのか？」
「あ、ああ……それが、最近、向こうもこっちの正体を掴もうとしてるらしくてさ。手紙届けるだけでも冷や汗もんだよ」
本当に疲れた様子で椅子に腰掛けたエルバートを、リューゼットは不可解そうな顔で、
「例の、リィナとかいうティースの知り合いか？　……なにかマズいことがあるのか？　お前にとっても知り合いなのだろう？」
「ま、ちょっと……な」
どこか歯切れ悪く答えたエルバート。だが、リューゼットはそれ以上追求せず、また目を閉じた。
空気穴から流れ込んだ微かな風が、カビの匂いを運んでくる。
そして、
「そろそろ、か」
「……」
リューゼットの呟きに、エルバートは無言で視線を彼の方に向けた。
「三階のCブロック。場所がわかっただけでも良しとせねばな」
「……リューゼット。お前は、怖くないのか？」
エルバートは視線を流して、

「仲間を助けるために命を投げ出してでも、って、そう決心した。……けど、やっぱいざとなると怖い。バラードの奴に出くわしたら、ヤツらに捕まっちまったら、ってさ」

その言葉通り、口調には隠しようもない不安が溢れていた。

確かに、キュンメル本隊と合流できないこの状況において、ゲノールトはあまりに強大すぎる相手だった。エルバートの言うとおり、ここにいる全員が命を落としても何ら不思議ではない。

だが、リューゼットはいつもの調子で答えた。

「私は、もともと戦うことが嫌いではないからな。強い者と一対一で戦って死ねるなら、それはそれで本望だ」

「……羨ましい性格してるよ」

エルバートはどこか呆れたようにしながらも笑って、

「けど、納得はできるな。お前みたいに日の浅い奴らは、全員が街から逃げようとして逆に一網打尽にされちまったのに、お前とネイルは……って、ネイルはなんでここに残ってんのか未だに良くわかんないけどさ」

「あれは、ただの阿呆だ」

リューゼットはそう断じた。

仲がいいのか悪いのか、よくわからない二人だった。

「……」

何も言わずに頷いて。

しばらくの沈黙。

エルバートはゆっくりと宣言する。

「あと三日。……それまでに他の有力な情報がなければ、作戦を決行しよう」

リューゼットもまた、無言で頷いた。

それとほぼ同時刻。

（ふぅ……）

ティースはちょうど、一時間ほどの自由時間を利用して手紙による定期連絡を終えたところだった。

（今日も、特に有力な情報はなし、か……）

ゲノール総帥の孫娘、セルマとの関係は相変わらず良好だった。彼女も捕らわれている魔についての詳細までは知らないようだったが、どうやらここ一ヶ月ぐらいに捕らわれた魔の中には、生き延びている者も多数いるようで、それはつまり、キュンメルのメンバーたちの大半がまだ生きているだろうということでもある。

「今日もご苦労だな、ティース」

「え？　……あ、ペドロさん」

地下一階に戻ってきたティースに声をかけてきたのは、初日に彼を案内したペドロという男だった。どこか調子の軽いやや年上のこの男は、新入りであるティースにも頻繁に話しかけてくる。

そうして二人が向かった先は、地下一階にある構成員たちの休憩所。そこは同時に食堂でもあり、今は多数の構成員たちが夕食をとっているところだ。

「お前、あのガキンチョに相当気に入られたみてーだな？　……ご愁傷さん」

テーブルについてペドロが話題にしたのは、もちろんセルマのことだった。

ティースが“世話係”となってからすでに四日目。当初はすぐに飽きられるだろうと予想していたペドロも、四日も保ったことにやや驚いているようだった。

「はは……でも、そんなに悪くないですよ」

流すようにそう答えたティースに、ペドロは夕食のスープを行儀悪く口に掻き込みながら、

「悪くない、ねぇ。ま、将来を考えりゃ気に入られて悪いこたねぇ

わな」
　器を置いて、それから意地の悪そうな笑みを浮かべる。
「しっかし、ま、あれで少しぐらい可愛けりゃ役得もあるったって、あんなブタみたいなおデブちゃんじゃなぁ」
「……」
　その言葉に少し気分を害し、ティースは僅かに眉をひそめた。
　セルマが少し肥満気味なのは彼にも否定できないが、そこまで言われるほどヒドいわけでもない。ペドロの言葉はおそらく、彼女の厄介な性格も考慮した上での罵言なのだろう。
　ただ、もちろんここでイザコザを起こすつもりはなかったので、ティースは表情を誤魔化すようにスプーンを口に運んだ。
　それには気付かず、ペドロは続ける。
「ま、あの母親は相当美人だったらしいが、娘もそうだとは限らねぇってことだな」
　ティースは少し興味を示して、
「……母親？　そういや彼女、父親も母親もいないみたいですね」
「ああ。お前は知らないんだっけな。っても、俺だって人伝いに聞いた話だけどよ」
　もともと噂好きなのだろう。ペドロはあっさりと話し始めた。
「あれの母親ってのはボスの一人娘さ。で、父親ってのは元々よそ者だったんだが、これがどうやら、最初からここに留まるつもりはなかったらしくてな。ボスもその男を信用してはいなかったんだが、あのガキが産まれてちょっと油断してる隙にドロン……ってことらしいぜ」
「母親も一緒に、ですか？」
「ああ、そりゃもちろん共謀さ。ボスはその一人娘をたいそう大事にしてたらしいが、娘の方はここの環境に馴染んでなかったらしい。……ま、こんな世界だ。嫌気が差したって不思議じゃねぇと思うしな」
　それはつまり、セルマの両親は比較的まともな精神の持ち主だっ

たということだろう。
「……何故、あの子――いえ、セルマ様も連れていかなかったんでしょう」
ティースの問いにペドロは肩を竦めて、
「そりゃ、産まれたばかりのガキなんか連れて逃げ出せるわけないだろ。要するにあのガキは、ボスを油断させるためのダシに使われたってこったな」
「……」
ティースは押し黙った。
理解は、できなくもない。あるいは女にとって、男は自らを解放してくれる白馬の騎士だったのかもしれない。
だが――
（わかる気がする……あの子が、どうしてあんなに歪んで育てられたのか）
夕食が終わり、ティースはペドロとともに食堂を出た。
「ティース。お前、今日はあと待機だけか？」
「あ、はい。ペドロさんは？」
「俺はこれから一階の警備任務さ。今日はお偉いさん方がビップルームの方に来てるらしいから、警戒を強めてんだってよ」
ペドロはやれやれと言わんばかりに肩を落とした。
確かに。廊下がどことなく緊張感に溢れているのはティースも気付いている。
「ビップルームというと……地下四階ですよね？」
地下四階。そこは色々な催し物がなされる場であり、週に幾度か“こっち側の”有力者が訪れるらしかった。セルマが良く口にする“ゲーム”が行われるのもその場所だ。
「ああ、だから今日は――」
言いかけたペドロの口が止まる。
「？　ペドロさん？」
問いかけようとして、彼もまた、進行方向から近付いてくる一団

に気付いた。
（なんだ……？）
先頭を歩く男の腰には一振りの剣。身なりは他の構成員と比べてやや立派で長身。歳は三十歳ぐらいだろうか。後ろに二人の男を従えている。
（……この、人――）
ただならぬ気配。
ティースが感じたその印象を肯定するかのように、ペドロは急に顔を強張らせ、無言のまま通路の端に寄って頭を下げた。
緊張感が漲る。
「……」
ティースもまたそれに習い、端に寄った。
……首筋に嫌な汗が浮かび、心臓の鼓動が速くなる。
まだ数メートルはあるというのに、まるで上から頭を押さえつけられているかのような圧迫感を感じた。
（まさか、この人……）
徐々に近付いてくる足音。
それが二人の前を通り過ぎていく。……いや。
「……新入りか？　顔を上げろ」
「！」
ドクン、と、心臓が踊った。
隣を窺ったが、ペドロは首筋に冷や汗を浮かべたまま、微動だにしない。
「……はい」
ティースはゆっくりと顔を上げた。
眼前で見ると、短く刈り揃えた髪で眼光の鋭い男だった。歳はティースより十歳以上は上だろうか。
目線の高さはほぼ同じだというのに、まるで見下ろされているように錯覚してしまう。身に纏った雰囲気は、どう控えめに表現してもタダ者とは言い難い。

「……」
幸い、男はすぐティースに興味をなくしたようで、視線を戻し、歩みを再開した。
――いや。
「!?」
ホッとしたその瞬間、首筋に悪寒が走った。
シュパァッ！
空気が裂け、咄嗟に身をかがめたティースの真上を、鋭い手刀が飛んでいく。
「っ……」
風圧が髪を揺らした。
「ほう。なかなかだな」
視線を上げたとき、男はすでに立ち去ろうとしていた。
「……」
ぞくっと全身が震え、総毛立った。背中を、冷たい汗が流れる。
廊下の空気が妙にヒンヤリと感じた。
（……あの、人）
無造作に放った手刀。おそらくかなり手加減していたのだろう。
だが、それでも――
「……お、おい、ティース。よく避けたな、お前……」
男の姿が廊下の向こうに消えたのを確認してから、ペドロがようやく頭を上げる。いつもの軽い調子はそこにはなく、額に浮かんだ汗は彼が極度の緊張状態にあったことを如実に示していた。
「前、新入りがあの一発で再起不能になっちまったんだ……俺のすぐ目の前でよ……」
「……」
間違いない。そう確信する。
（あの人が、バラード＝グラスマン――）
ドク、ドク、と心臓は落ち着かないまま。
――デビルバスター。それは善であれ悪であれ、等しく強大な存

在だった。今のティースでは決して歯が立たない、雲の上の存在。
（エルの言うとおりだ……あの人とは、絶対に戦っちゃいけない……）
身が引き締まる。
自らの任務の重大性。そして自分が立っているこの場所が、どれだけ危険な場所なのかということ。
そのことを、ティースは改めて自覚させられたのだった。

――この世に生を受けて四十年と少し。男の人生はなかなか波乱に富んでいた。

幼い頃、彼は突如として現れた理不尽な波によって人間界へ流され、両親とは生き別れることとなった。が、幸いにして男は幼い頃から機転の利く頭脳を持っており、新天地でも賢く生き延びる術をすぐに身につける。
身を潜めながら、生きる生活。それは決して楽なものではなかったが、これまた幸いなことに、彼は他人から物を奪わずとも生きていける場所を見つけたし、同じ境遇、同じように両親と生き別れ、幼い頃から力を合わせて生きてきた少女を妻にもした。
二年後、二人の間には娘が産まれ、それからしばらくが長い幸せの絶頂期だった。
ォォン……ォォン……
それは、何の音だろうか。
地上から漏れてくる風の唸りか。あるいは犬、狼の遠吠えか。あるいは……境遇を同じくする者たちの呻き声か。
ォォン……オォォン……

個別にあてがわれた一人牢の環境は、以前いたゴミ溜めのような牢と大差ない。常に空腹だったし、常にどこかから悪臭が漂ってくる。鎖に繋がれた手首は、何度ももがいたせいで擦り切れ、血がこびり付いた錆と入り交じり、膿が浮いている。顔も、その妻が嫌っていた無精髭で一杯だった。

ォン……コツ……ォォ……コツ、コツ……

何者かの足音が混じる。おそらくは見回りだろう。

男は薄汚い石床に額をつけ、うずくまったまま動かなかった。

やがて、何者かが明かりを持って牢の前に現れる。

「……」

元気の残っている者は、未だ遠くから怒号を発している。

無駄なこと。

かつては自らも繰り返したその行為を、今は愚かなことだと理解していた。

手を括る鎖。そして細かい網の目のような鉄格子。この二つによって、彼らの力はその大半が封じられている。それは、ここに捕らわれている者たちの中では珍しい“上位魔”である男にとっても同じことだった。

だが、その片方だけなら。片方だけならば、全力でどうにかできるかもしれない。

手を括る鎖だけなら。目の前を閉ざす鉄格子だけならば――

見回りが牢の中を一瞥して去っていく。

――どうして、こんなことになったのだろう？

自問するたび、男の胸は突き刺さるような痛みに襲われる。

人間と争うつもりなど微塵もなかった。ただ男は、理不尽な偶然によってこの世界に流され、それでも懸命に道を見つけ、深い山奥で自給自足の生活をしながら、愛しい家族とともに生を全うしようとしていただけだったのだ。

それなのに――

「……――」

思わず呟いたのは、最愛の者の名。それは、すでにこの世のものではない。その者は、その場で命を奪われてしまった。

――何故、自分は生き長らえたのだろう？

そう問いかけたとき、脳裏に浮かび上がるのはもう一人の愛しい者の顔。

十五歳になり、美しく成長した娘は、男とともに生きたままこの場所に連れてこられた。

生きているだろうか。……いや、必ず生きている。

それだけが、男の精神を支えていた。

「ナターシャ……」

たった一つ。

自らに残された希望、そして使命。

手錠が赤銅色に染まっても、痛みが痺れ、感覚を失いかけても、なお。

自らの種族名すら覚えておらぬ上位魔、ニール＝ソーントンは、ただそれだけのために力を養い、正気を保っていたのだ――。

翌日の昼過ぎ。

「ねぇ、ティース、聞いて聞いてー！」

「はい？」

地下二階。

いつもの場所で、いつものようにお菓子袋を抱えながら、セルマはいつも以上に上機嫌だった。ぷっくりとした頬を嬉しそうに赤く染め、両手を広げ、怪訝そうな顔をしたティースに主張したのだ。

「今夜、アレがあるのッ！」

「アレ……ですか？」

ティースは上の空だった。
本当ならばそのニュアンスで、“アレ”が指し示すものに気付くことはできただろう。だが今、彼の頭はそれ以外のこと――バラードの動向をどう察知するか、その情報をどのようにして手に入れるかということで一杯だったのである。
（とにかく、どうにかしてあいつのいない隙を狙わないと……）
昨日のエルバートからの連絡によって、作戦の決行日が近いことは知っていた。具体的な日付は今日の定期連絡によって知らされることになっていたが、その文面のニュアンスからして、早ければ二、三日後だろうと考えている。
今まで集めた情報によると、バラード＝グラスマンはもともとこの地下組織の警備ではなく、ゲノールト総帥のボディガードだった。だから、総帥がどこかに移動すればそこに付いていくし、ここにいないこともそう珍しいことではない。隙を狙うことは可能だ。
ただ、問題はそのゲノールト総帥の動向をどう察知するか、である。裏世界の大物だけあって、それは単なる一構成員であるティースに把握できるものではない。この地下での催し物に出席するときは警備が厳重になるので察することもできるが、外出する場合、その場所、時間などを察知することは非常に困難だった。
どこかに出たことを確認してから連絡したのでは遅すぎる。事前にそれを知っておく必要があった。
（こうなったら、それとなくこの子に直接聞くしかない……か）
だが、それは危険も伴う。少しでも不自然に思われ、それを周りの人間に話しでもされたら終わりなのだ。
――と。
「だ・か・ら。ゲームだよ、ゲーム。前に話したでしょぉ？」
ハッとする。
いつまでも上の空のティースに、セルマは少々気分を害したようだった。
「あ……ゲームですね。そうですか、今夜――」

再び、胸に黒い影。
「……それは、楽しみですね」
そこに出てくるのはエルバートの仲間かもしれない。だが、現状、それを救うことは不可能に近く、それがどうしようもなくやり切れなかった。
それと……もう一つ。
「お爺様がね、ちょこっとだけ教えてくれたの。今日はとっても強いのが一匹出てくるんだって。“じょういま”って言ったかな？だから、とっても楽しみなのッ」
好奇心に目を輝かせる姿。
親のいない寂しさを、様々な遊びで埋めようとする――健気。
「上位魔……そうですか……」
ただオウムのように彼女の言葉を繰り返し、ティースは力無く頷いた。
――そこにいるのは、決して極悪非道の者ではない。おそらく本来はとても素直で、明るく、子供らしい少女なのだろうと感じる。
だから、やるせないし、許せない。
「それでねー」
「……」
それでも今、余計なことを考えて彼女の機嫌を損ねるわけにはいかなかった。
「そうですか……ええ、そうですね――」
複雑な心境のまま、弾んだセルマの言葉に相づちを打ち続けるティース。
そしていつものように時間が過ぎ――それから一時間ほどが経った頃だろうか。
「……？」
カードゲームで遊んでいたティースは、ふと顔を上げた。
感じたのは、周囲に走ったさざなみのようなざわめき。同時に訪れた、緊張感。

「……ティース？　どうしたの？」
セルマは気付いていないようだった。が、振り返ったティースと一瞬だけ視線を合わせたセルマの護衛二人は、やがて廊下の奥に向かって頭を垂れる。
（この……圧迫感は……）
昨日感じたものと同じ。頭の上から押さえつけられるような圧迫感。
その視線の先にやがて現れた一行。その中にいたのは、やはり予想通り――
（バラード＝グラスマン……でも）
ただ、今日は少しだけ様子が違う。
（あれは――）
昨日はバラードが明らかに一行のリーダーだった。しかし、今日は彼も格上の人物に付き従う存在のようだった。
それは、彼の真後ろをゆっくりと歩いてくる、正装の男性。この世界においては老人と言ってもいいだろう、おそらく五十代半ば。白髪混じりながら厳格な顔付きは彼がまだまだ“現役”であることを物語っている。
（……ゲノールト総帥、か）
見たことはないものの、一目でわかった。その眼光は鋭く、おそらく若い頃は相当に血の気の多い人物であったろう。
だが、
「……お爺様ッ！」
ようやくその一向に気付いたセルマが、手にしていたカードを放り投げて駆けていく。
と、老人の厳格そうな顔は一瞬にして綻んだ。
「おお、セルマ。元気にしていたか？」
「うん！」
胸に飛び込んだセルマを難なく受け止め、頬を緩ませてその頭を撫でる老人。

「……」
それはティースにとっては少し意外でもあり、そして納得でもある。
（……だから、あの子はあんなに偏っている……）
娘に裏切られた老人が、おそらく孫娘を確実に自らの元に引き留めるために。非道の行いで財を為した老人にも、やはりそんな人間らしい感情があったのだろうか。
（でも、そんなの愛情じゃない。単なる自己満足だ……）
拳に力が入った。
老人は、それでもいい。
だが、歪められた少女にとってはそれで良いはずがなかった。
「さぁ、セルマ。そろそろ離してくれんか」
「えー！」
首に抱き付いたセルマを優しく離し、老人の視線が一瞬だけティースへと向けられた。
「……」
心にモヤモヤしたものを抱えたまま、無言でかしこまる。
どうしようもない。少なくとも、今、この場でどうにかできる問題ではない。
今にも吐き出しそうな衝動に、ティースは必死で耐えていた。
「……お爺様？　今日は何時頃迎えに来てくれるの？」
セルマの問いに、老人は再び笑顔で彼女へと向き直る。
「そうだな。少し遅くなるかもしれん……八時か、九時か。それまで待てんか？」
「ううん、平気。ティースと遊んでたらすぐだもん」
「おお、そうか。ホッとしたよ」
もう一度、老人の視線を感じた。が、特に声をかけてくるわけでもなく、
「なら、もうしばらくここにいてくれんか？　……行くぞ」
一団の気配が離れていく。

ゆっくり顔を上げると、ちょうどバラードが最後に背を向けるところだった。
「……ティース。じゃあ続きしよっ」
セルマが戻ってくる。近くにいた彼女の護衛二人も、ほんの少し緊張が緩んだように見えた。
――と、そのときだ。
「とっ……止まれぇぇぇぇぇっ！！！」
怒声と――轟音。
「！？」
突然、聞こえてきた叫び声に、その場にいた全ての者が動きを止めた。
（……なんだ？）
だが、近くではない。遠く……いや、どうやら声の発生源は少し離れた場所にある階段――どうやら地下三階の方だ。
疑問に思う間もなく、怒号は立て続けに二度、三度。視界の隅で、バラードがゲノール総帥を庇うように立つ。
続けて、もう一度轟音。
「……え？　なに？　どしたの？」
セルマも何が起きたのかわからないという表情で、キョロキョロと辺りを見回していた。
と、直後、
「どけっ！！」
「っ！？」
離れていた護衛二人が、ティースを弾き飛ばすようにしてセルマの周りを囲む。
「……」
突き飛ばされて打った腰を押さえながら、ティースもまた物音に集中した。
――何かが、近付いてきている。
「セルマ。じっとしていなさい」

老人の声は、さっきまでとは打って変わり、厳しいものだ。
「……」
バラードはその前に立ったまま、微動だにしない。
（なにかが……来る）
やがて――それは現れた。
（っ……あれは――）
地下三階に続く階段のうちの一つ。ティースが朧気に覚えているマップによれば、それは三階Cブロックへの階段。キュンメルのメンバーを含めた人魔が多数捕らわれているであろう区画だ。
（……人魔！？）
まだ遠目で詳細まではわからない。が、階段から飛び出してきた黒い影は、尖った耳を持ち、その身に魔力を纏っていた。手首には明らかに無理矢理外したのであろう手錠の残骸が絡まっており、半裸。全身は自らのどす黒い血と埃で汚れ、ボサボサの髪と無精髭、その表情はまるで羅刹のように恐ろしい形相だった。
「っ……！」
その威圧感に、咄嗟に腰の剣に手を伸ばす――が。
（……しまった。剣は一階か……！）
彼はセルマのそばでの帯剣を許されていなかった。“細波”は一階の控え室に置いたままなのだ。
戦う術はない。……行く末を見守るしかなさそうだった。
……ダンッ！
階段を上り終えた人魔は、一瞬の躊躇の後、その視線をゲノール総帥、そしてそのそばに立つバラードへと向ける。
怒りの声がその口をついた。
「……貴様は……っ！！」
「バラード」
対照的に、老人の冷徹な声が響く。
「あれは、なんだ？」
それに対する返答の声もやはり冷静だった。

「おそらく、一ヶ月ほど前に捕らえた上位魔でしょう。……充分に気を付けろと言ってあったのですが」
「ふむ。上位魔というと、今夜の催しに使う予定だったヤツか」
「どうなさいますか？」
「生け捕りにできるか？」
「不可能ではありませんが、手こずるかもしれませんな。もともとあの上位魔は、アレの娘をダシにどうにか連行してきたヤツですから」
「……ふむ」
老人の視線が一瞬だけセルマの方へと向けられる。
「？」
二人の護衛に囲まれた少女は、未だきょとんとした顔で全く状況を把握していないようだった。
老人の視線が戻る。
「ならば構わん。……殺せ」
「はい」
鋭利な声。同時に、抜剣の音。
ジリジリと、人魔は接近してきた。後ろから追う者は、いない。
おそらく、大半を無力化してここまでやってきたのだろう。
上位魔。
並の人間の太刀打ちできる相手ではなかった。
まして、
「……娘は――」
その人魔は、背負っていたのだ。
憎しみ。
そして、守るべきもの。
人となんら変わることはない。そのために強くなる。そのために命を、自身の全てを賭していた。
「ナターシャは、どこにいるッ！！」
床を蹴る。

「――」

ティースはその人魔――その男の事情を、詳しく理解していたわけではない。が、男の態度とほんの僅かなその言動から、一瞬だけ、不思議と彼が背負っている“何か”が見えたような気がした。

だから。

だから――

「……かはっ……！」

男の動きが止まったとき。

まるでノコギリのようなバラードの剣が、造作もなく男の体を斜めに切り裂いたとき。

時が、止まったように感じた。

「ぁ――」

ゆっくりと。

ゆっくりと、崩れ落ちる。

伸ばされた手は、何かを求めて。

――娘、と言った。

男が最後に求めたのは、おそらくそれだろう。

心臓が跳ねる。

内臓がせり上がってくるような感覚。

「っ……」

胸の奥に痛みが走った。

同時に吐き気を催す。

……男は、あるいは極悪人だったのかもしれない。人間を何人も殺めた悪い魔だったのかもしれない。それすらもティースにはわからない。

だが、

「っ……っ……！」

吐き気は止まらなかった。

動きを止めた男の体が、冷たい床の上に崩れ落ちて。

……ただ一つだけ、はっきりしていたこと。

「見事だ、バラード」

「恐れ入ります。やはり上位魔の場合、運ぶ際の警戒をもっと強化すべきでしょうな。滅多に捕らえられるものではありませんが」

「ふむ。そう考えると、勿体ないことだが、仕方あるまい。……バラード。代わりを早急に見繕うよう伝えてくれ」

「はい」

煮えくり返る。強く噛みしめた奥歯が微かに悲鳴をあげる。

そして改めて確信した。

たとえあの男が善であろうと、悪であろうと――

（こいつらは……紛れもない、悪だ……ッ！！）

男の遺体は、騒ぎを聞きつけた構成員たちが手早く片付けようとしている。

拳が震えた。

誰かの視線がそれを見つめているかもしれない。が、それを理解していてなお、ティースは言い知れぬ怒りを隠しきることができなかった。

……勘の鋭い人物ならば。あるいは彼のことをじっと観察する者がいたなら、今の彼の心の中を読みとるのは簡単だっただろう。そして、何人かはそんな彼の姿を視界の端には捕らえていた。

が、それに気付いたどうかはともかく、少なくとも咎めようとする声はなく――。

――じっと見つめていた者は、ただ一人。

「？」

少女は不思議そうに、彼の形相を見上げていた。

（ティース……？）

優しく、まるで幼い頃に別れたきりの父親のようだった青年。顔

の細かいところまで覚えているわけではなかったが、少なくとも持っている雰囲気は、少女の認識の中では父と瓜二つだった。だから少女は彼に懐き、彼と一緒にいることを望んだ。

だが、その一方で。長く一緒にいるうちに、彼には父親とどこか違うところがあると、密かにそう感じていた。同一人物ではないのだからそれは当たり前だったが、それが最近、少女にとっては少しだけ物足りない気がしていたのだ。

しかし――

「ぁ……」

その、どこか違っていた一欠片が、今、欠けていた部分にピタリと填ったような気がした。

「……」

彼が浮かべていたのは、見たことのない溢れるような怒りの表情。なのに、どこかで見たことがあるような気がしている。

それは――遠い昔。

（パパ……？）

いつか、彼女の父親がこれと同じ表情で、彼女の祖父を見ていたことがあった。……あるような気がした。

何故？

少女には理解できない。

そして興味が沸く。

それを知りたいと思った。近付きたいと思った。

幼い頃、自分の前から姿を消した父と母に。

「……ねぇ、ティース？」

騒動は一時間もすると完全に落ち着きを見せていた。

静まり返った地下二階の休憩所は、あんな騒ぎなどなかったかのようにいつも通り。騒動の後だというのに、セルマとティースは変

わらずにその場所で折り紙をしていた。
「……はい」
ティースの気分は沈んだまま。
いけない。このままじゃいけないと思いながらも、いつものように笑顔を浮かべることができなかった。先ほどの人魔の形相が脳裏をちらついて顔が強張ってしまうのだ。
（ダメだ、このままじゃ……）
幸いだったのは、相変わらず遠くで見つめているセルマの護衛二人が、彼から見て背中の方に居たことだろう。少なくとも表情を見られることはないし、声も少し潜めれば届くことはない。
だが、しかし。
突然セルマから浴びせかけれた質問は、そんな彼をハッとさせるに充分なものだった。
「ティースは、どうして怒ってんの？」
「……え？」
ドキッとして顔を上げ、戸惑う。
……誰かに指摘される危険は感じていた。が、それがまさか、この少女だとは想像していなかったのだ。
（……まずい……笑わないと――）
ようやく浮かべたのは引きつった笑み。
「セルマ様――」
だが、さらなる戸惑いが、その言葉を途中で遮った。
（……え？）
驚きに目を見開いて少女を見つめる。
――そこにいる少女は、いつもと少しだけ違っていた。
常に手にしていたお菓子袋は遠くに置いたまま。彼の前では常に緩んでいたまん丸のほっぺも、今は引き締まっている。
その瞳は、ただひたすら真っ直ぐに――
「ティースが怒っているのは、お爺様のせい？」
「！」

さらに核心へ。
心臓が跳ね上がり、背中に冷や汗が浮いた。咄嗟に背後の気配を探ったが、幸い動きは感じられない。セルマの言葉はいつもと違い落ち着いたもので、護衛たちにはその内容まで聞き取れていないのだろう。
今なら、まだ誤魔化せる。
ティースはそう思い、口を開いた。
「怒ってなど――」
だが、それもまた、すぐに遮られる。
「パパもね」
「……？」
「パパも怒っていたことがあるの。今のティースとそっくり」
「……え――？」
「でも、どうして怒ってんのか、私にはわかんなかった。……ねぇ、教えて？　ティースはどうして怒ってんの？　私……それが、どうしても知りたいの」
無邪気な、しかし真剣な問いかけ。
「――」
自分を見つめる少女の瞳に、まるで心臓が鷲掴みにされたような、そんな錯覚を覚えた。
言葉に詰まる。
（あ……）
“疑問”
それはおそらく、遙か昔から少女の心に根付いていたものだ。今まで芽吹くことすらなかった、ほんの小さな種。それは人として、当然に感じるはずのもの。
「パパはどうして怒ってたの？　ティースは、どうして怒ったの？」
問いかける、瞳。
「……」
すぐには答えられなかった。

今の彼はゲノールトの構成員だ。当然、その総帥である人物の行動に怒りを感じることなど、あってはならない。

「セルマ様。それは――」

誤魔化さなくてはならない。自分は怒ってなどいないと。それは勘違いだと。もしバレてしまえば、今までの努力が全てが水の泡となってしまう。いや、それどころか彼自身の命さえ危険にさらされかねない。

だが。

言いかけて、再び、心臓が鷲掴みにされる。

――本当に、それでいいのか、と。

自分にはどうすることもできないと、そう思った。他人の歩む道。その進路を変えることは非常に難しいことだ。まして、少女はすでに両足をどっぷりと浸からせてしまっていたのだから。

だが……今、少女は紛れもない疑問を抱いた。

否定することはおそらく簡単。それがもっとも無難で、もっとも失敗の少ない道だろう。何しろ、少女に道を指し示す行為は、この地下で助けを求める罪なき者たちの将来を奪ってしまうことにも繋がりかねないのだ。

しかし。それは同時に、少女の中に芽生えたものを潰してしまうことでもある。年齢的にも、根本的な変化を受け入れるにはもうギリギリの境界線上だ。この異常な環境の中で、踏みつぶされたものが再び芽吹くことは、おそらく二度とないだろう。

ほんの一瞬の、葛藤。

そして――

（っ……ダメ、だ……！）

賭けられない。

……それが、彼の出した結論だった。

微かな、エゴにも近い小さな希望と、囚われた数多くの命。その二つはとても天秤に架けられるようなものではない。

たとえそれが、少女の僅かな可能性を奪ってしまう選択だったと

しても――
「……怒ってなど……いませんよ、セルマ様」
絞り出すように答えたティースに、セルマは不思議そうな顔をした。
「？　そうなの？」
その表情は彼の言葉を疑っている風ではない。今の彼女は、彼の言葉を全て信用するだろうから。
続けて、答える。
「ちょっと、気分が悪かっただけですから……」
その言葉に、やはり疑った様子もなく、セルマはパッと顔を輝かせた。
「なんだぁ。……じゃあ、パパもあのとき、たまたま気分が悪かっただけなのかな？」
「……胸が」
問いには答えず、ティースはさらに続けた。
「胸が……苦しくなるのです」
その言葉に、セルマはきょとんとした顔をする。
「？　何かの病気なの？」
「いいえ」
まぶたが小刻みに痙攣する。
表情は苦しいまま。
「人の胸は……他人の痛みを感じられるように出来ているのです、セルマ様」
「他人の……痛み……？」
わからない顔だった。
「だから――だから、胸が苦しくなったのです……」
唇をギュッと噛む。胸をグッと掴んだ。
――それが、精一杯の言葉。それ以上は、踏み込めない。
だが、それが言葉足らずなのは、充分に理解していて――
「……良く、わかんないけど、でも、怒ってたんじゃないんなら、

いいや」
　案の定、セルマは理解できないままにそれを投げ出してしまう。興味をなくしたように視線が彷徨い、近くにあったお菓子袋を手に取る。
　それで、ほんの一瞬の“予兆”は、完全に彼女の元を去ってしまった。
「じゃあ、あそぼっ。折り紙の続きねー」
「……」
　落胆がないといえば、嘘だろう。だが、もうそれ以上の言葉は思い浮かばなかった。
　そしてすぐに気持ちを切り替えなければならない。作戦の成功のために。
「折り紙、ですね……」
　努めて冷静に、出来る限り明るく、ティースはそばにある折り紙を手に取った。
　……仕方がない。それに――たとえ彼女の意識を変えることに成功したとしても、それが必ずしも彼女のためになるとは限らないのだから。
　そう思いこませることで自分を慰め、そしてティースは口を開いた。
「……では、セルマ様。次は何を――」
「あれっ？」
　言いかけた彼を遮って、セルマが突然素っ頓狂な声を上げる。
「ティース……手、怪我してるよ！？」
「……え？　あ」
　言われて初めて気付く。どうやら先ほどの騒動の際、拳を強く握りすぎて爪が皮膚を傷つけていたらしい。半分以上乾いた血の跡が手の平に残っていた。
　セルマは眉をひそめて、
「痛い？　大丈夫？」

ティースは笑って答えた。
「大丈夫です。大したことはないですから」
「でも、痛そう……血が出るとね。すっごく痛いんだよっ」
その表情は、まるで自分のことのようだった。おそらく昔、自分が怪我したときのことを思い出しているのだろう。
「ええ。でも、ほら。もう血は止まっていますから」
「……」
彼が示した手の平を、セルマは恐る恐るという顔で見つめ、それを確認するとホッと息を吐くと、
「ホントだ。……じゃあ、もう遊んでも大丈夫……なの？」
そう尋ねてくる。
その遠慮がちな仕草が妙に可愛らしくて、ティースは思わず頬を緩めた。
「ええ」
「じゃあ……折り紙っ！」
「はい」
セルマはどうやら紙飛行機がお気に入りのようで、色々な種類の紙飛行機の作り方をせがんだ。とはいえ、ティースもそれほど多くを知っているわけでもなく、最近では本を買ってきてそれを二人で見ながらの作業であった。
「えっと……こう、かなぁ……？」
「違いますよ、セルマ様。ここはきっと、こう……こう、です」
「……あ、そっか！」
ここに来てから一週間が経とうとしていて、彼女が他の場所で見せる傍若無人さも何度か目にすることもあった。が、それでも相変わらず、彼の前では素直な少女だった。
だから……やはり残念なのである。
（環境さえ。環境さえ変われば、きっと――）
そして、そんな中。
「……あ、そうだ！　あのね、あのねー！」

突然、セルマが嬉々として漏らした一言。
「明後日ね。お出掛けなんだっ！」
「お出掛け？」
「うん！　お爺様と一緒にお出掛け！」
「……！」
ドクン、と、心臓が跳ね上がる。
……期せずして訪れた機会。彼の方から尋ねたのでなければ、ここで聞き返すことは、もちろん何ら不自然ではあるまい。
平常心を保つよう努力しつつ、ティースは口を開いた。
「どこに……ですか？」
「徒手のトーナメントがあるのっ！」
「トーナメント？」
一瞬、彼女がいつも語っていた地下での催しを想像してしまったが、わざわざ彼女が出掛けると言っている以上、それはおそらく“表の”ごくまともなトーナメントのことだと気付く。
“トーナメント”は、一般市民から上流階級の人々までもがほぼ等しく楽しめる娯楽の一つだった。昔はそれぞれの国家に所属する騎士たちが名誉と賞金を争う場だったが、今は一種のショー的なイベントのことで、徒手、剣、馬上槍など、さまざまなスタイルが存在している。
ただ、もちろん参加する人々は真剣だ。昔と違って死人が出るようなことはほとんどないが、興行主が抱える強者に、街の腕自慢などが参加し、真剣勝負で賞金を争う。観客は入場料を払い、ひいきの選手に声援を送りながら試合を楽しむのだ。
「トーナメント、ですか……」
このゲノールトの地下で行われる催しは別にしても、彼女は元来そういったものを好む性格なのだろう。
（と、すると……上手くいけば――）
このリガビュールの街でトーナメントが行われる場所といえば、西側にある闘技場しかなかった。距離は結構ある。馬で移動したと

しても町中のこと。スムーズでもおそらく一時間はかかるだろう。
「お昼頃から、ですね？」
「うん」
いくらこの街でも、一般的な催しである以上、そう遅くに試合が行われるはずはない。時間はおそらく正午から夕方にかけてだ。
「明後日は予選でその次の日が決勝なんだけど、レオニード＝アンサンクが出るから予選から見に行くの！」
「レオニード……アンサンク……？」
「ティース、知らないの？　すっごく強いんだから！」
どうやら徒手の有名な選手のようだ。ティースは知らないが、それが彼女のひいきする選手らしい。
が、そんなことよりも。
（明後日……か）
ティースにとって重要だったのは、彼女とともにゲノール総帥が出掛けるということだった。となれば、その護衛であるバラードももちろんついていく。闘技場は多くの人が出入りする場所、それだけ危険も多くなるだけに、ついていかないはずがないのだ。
……たとえばこっちで異常が発生し、知らせがバラードの元に届くまでに一時間。ただ、届いたとしてもすぐにゲノール総帥のそばを離れるわけにはいかないだろう。移動時間も含め、三時間ほどは猶予があると見ていい。
三時間。脱出ルートの確保などの問題もあるし、決して楽観できる時間ではないが不可能ではない。なにより、捕らわれているのは“魔”なのだ。一度解放されてしまえば、いくらゲノールトとはいえそう容易に収拾できないはずで、バラードが戻ってくる前に混乱に乗じて脱出することはおそらく可能だった。
（……これしかない……）
幸運、偶然にも転がり込んできた情報。
（これしか――）
そうして、ティースは決意を固めるのだった。

オォォォォォォッ！
重々しく、禍々しい歓声。
「明後日のトーナメント、すっごく楽しみっ！」
「そうかそうか」
ゲノールトの地下四階。そこで催されるイベントは本日も盛況だった。
今日起きた“不測の事態”もそれほどの悪影響を与えることはなく。
「あーあ、早く明後日にならないかなぁ」
セルマはいつものように祖父であるゲノールト総帥の隣で、お菓子の袋を片手にしていた。が、今日はトーナメントの方に気が移っているのか、いつもほど試合に集中していない。
そして――四角いリングの上。たいまつに照らされたその場所には、やはり半裸の男がいた。体はほぼ無傷、五体満足の状態で、足下には地の七十三族と呼ばれる犬型獣魔の死体が転がっている。
「……二匹目！」
野太い男の声が響いて、二匹目の獣が檻の中に放たれた。
もう一度、歓声。
「ところでセルマ。今回はどこに賭けたんだね？」
「え？」
祖父の声で、少女の意識がようやくリング上へと戻る。
「あ、えっとねぇ……八匹目だよ」
「……セルマ」
その返答に、祖父は苦笑して、
「せっかく今度のは弱いと教えてあげたのに、それでは意味がない

じゃないか」
「だって、弱いの嫌いなんだもん」
口を尖らせて答えるセルマ。
そこへ、すぐそばのバラードが薄い笑みで口を挟んだ。
「ま、よいではないですか。賭事は何が起こるかわからないから楽しい。それに一匹目はまぐれとはいえあのように無傷で退けたのですから、万が一がないとも言い切れませんよ」
「それはそうだがの」
だが、リング上で繰り広げられる戦いは、徐々にその“万が一”を否定する方向へと進み始めた。
手錠を填められたまま消極的な戦いを見せていた人魔はやがて、地の六十六族――ワニのような体躯の獣魔が皮膚から突き出した一メートル近い針に、その身体を捕らえられたのだ。
パッ、と。
人魔の脇腹から血が飛び散る。

……その、瞬間。

「ぁ」
セルマは何かに魅入られたようにその光景を見つめた。
焼き付いた。
「ぁ――」
薄暗い、四角いリング上に飛び散った、赤い飛沫。
赤い――赤い、血。
「……いたっ」
ハッとして、セルマは自分の手を見つめる。
手の平は、何ともない。
……胸がドキドキした。
興奮？
いや、違う。

（……あれ……？）

妙な悪寒が少女の体を覆っていた。

（なんだろ、これ……）

リング上。

もともと戦いに適した者ではなく、長い牢での生活がその体力も奪っていたのだろう。一撃を受けたところで、人魔は完全に戦意を喪失しているようだった。

二匹目にベットした人々は熱狂的な歓声をあげ、四角いリング上を見つめている。

そして再び、リング上に飛び散る鮮血。

「っ！」

もう一度、心臓が破れんばかりの鼓動を打ち、セルマは息を呑んで視線を落とした。

体がぶるっと震えた。

「？　どうした、セルマ？」

祖父の心配そうな声。隣のバラードも、眉をひそめて突然の変化を怪訝そうに見つめていた。

だが、今の彼女には届かない。

（なんで……？）

今まで、気付かなかった。

『……血が出るとね。すっごく痛いんだよ』

昼間、自ら語ったその言葉が脳裏に蘇る。

同時に蘇ったのは――彼女の世話をする青年の手の平に残っていた血の跡。

赤い、血の色。

痛い。――痛い。とてつもなく。

（おかしいよ……なんで……なんで血が出てるのぉ……っ！？）

気付かなかった。

今までは、そんな簡単なことにも気付かなかったのだ。

ゆっくりと、視線を上げる。

リング上。
脇腹、右肩、両太股を突かれ、血を流し、苦痛にリング上をのたうち回る人魔。
――苦悶の表情が、フラッシュのように網膜に焼き付いた。
「っ！！？」
ガタンッ！
「……セルマ？」
「ぁ……ぁ……ぁぁっ！！」
両肩を抱え、セルマは震えながらその場にうずくまった。
祖父の疑問の声を掻き消すように、どす黒い大歓声が会場を震わせる。
（なんで……なんで――ッ！？）
震えが止まらない。心臓は胸を突き破らんばかりだ。
吐き気がせり上がってくる。頭がガンガンする。
……オォォォォォォッ！
「っ！」
耳を塞ぐ。
（気持ち……悪い……）
リング上から響いたのは、おそらく試合の終了を告げる、断末魔の叫び声。
そして、歓声。
オォォォォォォッ！
「気持ち……悪いよぉ……」
「セルマっ！」
少女の体が椅子から崩れ落ちるのを見て、祖父は自らそれを抱き留めて叫んだ。
「おい、誰かっ！！」
そばにいた数人が慌ててセルマの体を支え、医務室へ運ばんと抱きかかえる。
「おめでとうございますッ！！！」

場違いな実況が会場に響き渡った。
熱狂は、止まらない。
（……助けて……）
薄暗い会場。
異常な熱に覆われた空間。
見慣れたはずの場所。なのに、まるで見覚えのない別世界のような、その天井を薄目で見上げ、朦朧としていく意識の中――。
（助けて……ティース……助けて――……）

「――四匹目！」
セルマが退出した後も催しは続いている。
「……調子の悪そうな素振りなど、なかったのだがな」
医務室からの“大事ない”という報告にひとまず胸をなで下ろし、老人は隣のバラードに疑問の声を向けていた。
「直前まで、明後日のことをあれだけ楽しそうに話していたというのに」
「……ですな」
バラードはただそう答え、リング上の戦いを見つめていた。
いつもと変わらない、彼にとっては退屈なことこの上ない殺し合い。
「まだ子供ですからな。体の調子が悪くとも、無理をしてしまうところがあるのでしょう」
「ふむ。ま、少々無鉄砲に育てすぎたところもあるか」
「……」
バラードは無言のまま、相変わらずの鋭利な目付きで無表情にリングを眺めている。
ほんの僅かな“疑惑”が、その脳裏を過ぎっていた――

その４『救出作戦』

二日後の朝。
朝と言ってもすでに日の短いこの時期、まだ日の出は訪れておらず、地下を照らす“陽カビ”もまだほんのりとしか発光していない時間。
午前五時半。
「おい」
ゲノールトの地下は魔界由来の素材によって建設されており、たとえ冬でも内部の気温はそれほど下がらない。とはいえ、外が非常に冷え込んだこの日、地上に近い場所はさすがにそれなりの寒さだった。
「おーい」
娼牢。
牢の中には十代前半ぐらいの少女がいる。ナチュラルにカールした微かに内巻きの髪。幼げなその瞳は相変わらず無言のまま床を見つめていた。
「おーい、エルちゃーん」
「なんだ、その“エルちゃん”ってのは？」
この日、交代で娼牢の見張りについたのは、片方はいつもと同じ顔。だがもう片方は二十台後半、年齢の割に頭髪は薄く、どこか薄気味の悪い笑みを常に浮かべた男だった。
「なんだぁ。ホントに喋らないんだなぁ」
「おいって！」
「……ん？」
語気を強めると、ようやく振り返る。
「なんなんだ、お前が呼んでるその名前」
「名前？　ああ」
男は少しはげ上がった前頭部を撫でながら答えた。

「お前、知らなかったのか。この子の名前さ。エルレーン、っていうらしいぞ」
「……は？　そうなのか？　一言も喋らねぇって聞いてたから、わかんねぇもんだと思ってたけどな」
「捕まったときに自分の名前だけ答えたらしいな。……おーい、エルちゃーん。こっち向いてー」
少女は動かない。
「おーい」
……かと、思いきや、
「ぉ」
少女は突然ゆっくりと、何かを思い出したかのように顔を上げた。
「ようやくお兄さんと喋る気になったのかい？」
やや気味の悪い笑顔を浮かべたままの男を、少女はじっと見つめた。嫌悪感を浮かべるでもなく、かといって笑顔でもなく、無表情というわけでもない。
ただ世間話をするかのように口を開いた。
「今日は、何日？」
それは、彼女がこの牢に入ってから初めてのことだった。外見と同じく幼さを残した声に、もう一人の男が驚いた顔をする。
「お……おい！　喋ったぞ！！」
「うるさいなぁ、お前は。俺だから喋ったんだっての。……で、今日の日付かい？　今日は二十四日だよ？」
「お、おい、余計なことは――」
「いいだろ、日付ぐらい。減るもんじゃなし」
「二十四日……もう、そんなに」
少女は視線を天井に彷徨わせ、思案していた。その表情は今までと違い、どこか困惑しているように見える。
そして再び、男たちへ視線を向けると、
「……いつになったら、ココを出してくれるの？」
「え？　……難しい質問だなぁ」

男がそう言って返答を思案しているうちに、もう一人の男が答えた。
「んなもん俺らが知るかよ。買い手のメドがついたらに決まってんだろ」
「……」
その返答に、少女は明らかに落胆したような表情を見せ、再び何事か考え込むように視線を床に落とした。
「おい、そんな投げやりな言い方ないだろ。……なぁ、エルちゃん。がっかりしないでさ、もっとお兄さんとお喋りしようよー」
「……」
だが、少女――エルレーンが二度と顔を上げることはなかった。

「え？　体調が悪かったって？」
「ああ。そうらしいぜ」
早めの朝食を終え、前日に引き続き一階の警備任務についていたティースは、先輩のペドロから、昨日姿を見せなかったセルマについての話を耳にしていた。
「なんか一昨日の夜ぐらいから調子悪かったらしくてな。昨日は三階Aブロックのビップルームで休んでたらしいぞ」
「そっか。それで昨日は来なかったのか……」
少々不安を感じていたティースは、その事実にホッと胸をなで下ろす。
「ははは。一日でも解放されてラッキーだったなぁ」
安堵のため息を、ペドロはどうやら違う意味に取ったようだ。
「けど、もう完全に回復したらしいから今日は来るだろうな。……ま、ガンバレよ」
意地の悪い笑みを浮かべて肩を叩くペドロ。
だが、ティースは今日も彼女が来ないことを知っていた。

（……あれだけ楽しみにしてたんだ。体調が戻ったなら間違いなく行くはず）

一時はどうなることかと思ったが、これなら予定通りに進みそうだった。

そして、ふと、

（でも、これでもう、あの子に会うことはないんだな……）

多少の名残惜しさがその胸を過ぎる。

……赤いドレス。まん丸にしたリンゴ色のほっぺ。いつも片手に携えていたお菓子袋と、無邪気に懐いてくる仕草。あのセルマという少女は、少なくとも彼にとっては、自分を慕ってくれる可愛らしい子供だった。

（結局、何もしてやれなかったけど……仕方ない、か）

それに微かに抱いていた危惧――“巻き添え”にしてしまう可能性がほとんどなくなって、安堵もしている。それだけは、避けなければならないと思っていたのだ。

「おっす」

「？」

突然隣で聞こえた声にティースは顔をあげた。が、それはペドロが他の同僚に声を掛けたものだったようだ。二人組の男がペドロに挨拶を返しながら、近くの階段――“娼牢”へと続く階段を下りていく。

（そういえば……）

ふと、ティースの脳裏に数日前の少女の姿が蘇った。

「ペドロさん。そこの牢って、まだ人がいますよね？」

「ああ。……人、じゃねえけどな」

ペドロは笑いながら揚げ足を取ると、

「あと数日だって話さ。こないだ初めて目にする機会があったんだが、なかなかのもんだったぜ。十年後だったら、俺が引き取りたいね」

無言のティースに、付け加える。

「ま、そんな金、どこにもないけどな」
「……」
それでもティースは無言だった。
（エルに似てた、子……）
脳裏にその姿が蘇る。
（エルと、絶対に何か関係があるはずだ……）
結局、その少女についてエルバートに尋ねることはなかった。が、日を増す毎に、疑惑は膨れ上がってくる。
「……」
すでに記憶したその牢の位置を、もう一度脳裏に焼き付けた。
どんな状況であろうと、あの少女はきっと助けてやろう、と、そう心に誓って。

それとほぼ同時刻。
「ただいまぁ。ふぅ」
熱い息を吐きながら隠れ家へ戻ってきたネイルは、微かに頬を赤く染めていた。
「……ネイル？　お前、どこ行ってたんだ？」
僅かに硬い口調で問いかけたのは、部屋の隅で薄い布をかぶっているエルバートだ。
その吐く息はやや白い。今日はかなり気温が下がっているため、特殊な設備によって微かな暖房が効いているこの地下室も、気温は確実に一桁だった。
はしごを下りてきたネイルは、濡れている髪をタオルで拭きながら答える。
「水浴びだよ」
「みっ……水浴びぃ！？」
素っ頓狂な声をあげるエルバート。

付近にこの時間から使える温水施設などない。とすると、文字通りどこかで水を浴びてきたということなのだろう。
「うん、さっぱりした。チビちゃんも行ってきたら？」
「よせよ……こんな日にそんなことしたら、確実に風邪ひいちまうぞ。大事な作戦当日だってのに」
ネイルはきょとんとした顔をして、
「風邪？」
「エルバート」
そこへ、エルバートと同じように布をかぶり目を閉じていたリューゼットが口を開く。
「馬鹿は風邪を引かない、という言葉が、人間の世界にはある」
「あ……ぁあ」
「？」
思わず同意してしまったエルバートだったが、幸い、ネイルには聞こえてなかったようだ。
ネイルはタオルを無造作に放ると、ブルブルと頭を振って、
「さて、と。そろそろ乾かそっと」
言った途端。
「うわっ」
魔力が溢れる。全身に炎のようなものが揺らめくと、直後、熱風が室内を支配した。一瞬だけ息苦しくなったが、それはすぐにおさまって、
「完了～」
ネイルの長い髪はアッという間に乾ききり、何故か特徴的な触覚型の前髪までもが再現されていた。
「便利……ってか、どうなってんだ、それ……」
「え？　これ？」
ネイルが首を傾げると、ピコピコと触覚が動く。……実際は頭の動きに合わせて揺れているだけなのだろうが、自分の意志で動いているように思えて仕方なかった。

「瞬間乾燥。私の必殺技の一つだよ」
「……」
便利は便利だが、戦いにはあまり役に立たない必殺技である。
「でもお前、そんな一瞬で乾燥させるだけの力があるんなら、もっと上手く使えば結構――」
「あ、ダメだよ」
ネイルは無邪気に笑い、頭を指さして答えた。
「私、自分の力で出来るのはこれだけだから」
「……」
脱力。
使えねぇ……と、エルバートが思ったのは間違いないだろう。
「それはともかく」
リューゼットがゆっくりと身を起こし片膝をつく。相変わらず生真面目、ネイルとは対照的にほとんど動かない表情をエルバートに向けて、
「作戦は予定通りでいいのだな？」
「あ、ああ……少し気になることもあるけどな」
寒さに少し身を震わせ、懐から紙切れ――昨日のティースからの最終連絡を手に取る。
「昨日は例の娘が姿を見せなかったらしい。……もしかしたら、何かあったのかもしれない。ティースのヤツも少し懸念しているみたいだ」
「例の娘？　総帥の孫娘とかいう者のことか？」
「ああ。だから――」
「どうでもいいじゃん、そんなの」
そこへネイルが口を挟む。
いつの間にか手にしていたのは、一面が九つに分かれたカラフルな立方体。どうやら面を回転させて色を合わせていくおもちゃのようだ。
「どうせ時間ないんでしょ。考えても仕方ないし」

「……ま、それもそうだけどさ」
ネイル自身はいつものように適当に答えたのだろうが、それは確かに一理あった。もともとバラードの動向が掴めなくとも動くつもりだったのだ。ダメで元々。ゲノールトに捕らわれている仲間たちの安否を考えれば、これ以上の作戦延長は考えられない。
「じゃあ、作戦は予定通りだ。……二人とも頼むぞ」
「ああ」
「うぅ～～～ん」
見た目に派手な炎の力を持つネイルと、大柄でいかにも目立つリューゼットが陽動。小柄ですばしっこいエルバートが侵入し、中で待つティースとともに混乱に乗じて仲間たちを救出する、単純な陽動作戦だ。
中に侵入するエルバートはもちろんのこと、陽動するネイルやリューゼットにも相応の危険が伴う。何しろ、仲間が救出されるまでの間、ゲノールトの構成員たちをたった二人で相手しなくてはならないのだ。いくら人魔とはいえ、下位魔であれば容易ならざる行為だろう。
――だが。
「ん～～～～～難しいよぉ～～～～」
カチャカチャカチャカチャ。
「……」
二人はいつも以上に、いつも通りである。下手をすれば命を落としかねない作戦だというのにも関わらず。
「……ホント羨ましいよ、まったく」
苦笑を浮かべたエルバートは大きく息を吐き、それでもどこか頼もしそうにその二人を眺めていた。

救出作戦が実行に移されたのは、正午を過ぎた頃。正確に言えば十二時三十二分。

ちょうど、リガビュール西の闘技場でトーナメント開催の花火が上がった頃である。

火蓋を切ったのは、派手な爆発音と、熱風。

そして――悲鳴。

ネイル＝メドラ＝クルティウスの放つ“炎の魔力”が、突破口を開いていた。

そして地下二階。

頭の上で轟音が鳴り響くたび、パラパラと粉のようなものが降ってくる。

「急げぇッ！　これ以上の侵入を許すなっ！！」

二階にいた構成員たちが武器を片手に、こぞって一階を目指し駆けていく。

そんな中。

「……また、派手にやってるな」

とある一室。食料品の保管してある倉庫の扉を僅かに開き、そこから小柄な少年が顔を覗かせていた。

「行ったか？」

その後ろにもう一人。少年より三十センチは背の高い青年が、上から同じように顔を覗かせた。

ティースと、すでに潜入を果たしていたエルバートである。

「ああ、どうやら行ったらしい」

キィ……とドアを軋ませ、二人の体がそこから現れる。ティースはもちろんのこと、エルバートも調達したばかりのゲノールトの制服に身を包んでいた。

そうしてエルバートはもう一度周囲の状況を確認すると、

「よし。じゃあリューゼットとネイルが粘っているうちに、急ごう」

駆け出す。
作戦はどうやら順調に進んでいるようだ。何より、ネイルとリューゼットの奮闘は予想以上で、地下二階にいた構成員たちは大半がその姿を消した。三階からもかなりの数が上に向かったようで、おそらく三階の各ブロックの警備も相当薄くなっているはずである。
途中、ティースはエルバートに疑問を向けた。
「エル……一階に捕まってる子は、いいのか？」
すでに素通りしてきた地下一階の娼牢。ティースはもちろん、先にそこを解放してから地下三階だとばかり思っていた。
だが、
「一階？　……ああ」
エルバートは一瞬思案するように目を細めたものの、迷うことなく答えた。
「今、一階に捕らわれているのは一人だけなんだろ？　だったらそれよりも、三階に捕らわれている大量の仲間たちが優先だ」
「けど、あの一階に捕らわれてる子は――」
――お前の関係者じゃないのか、と、そう問いかけようとしたティースに、エルバートはきっぱりと答えた。
「もちろん、彼女も最後に必ず助けるさ」
「……そうだな」
それ以上は問いかけることなく、そのまま無人の通路を駆けていく。
目指すは三階Cブロックへの階段。
ここまでは、おそらく気付かれていない。途中、幾人かの構成員とすれ違って声をかけられたが、向こうも彼らに疑問を抱いて深く問い質すほどの余裕はないようで、誤魔化すのは比較的楽だった。
（問題は三階、だな）
六つのブロックに分かれた地下三階は、魔を捕らえておく牢の他、要人たちのビップルームや金庫、大きな武器庫等もあり、地下二階までとは重要性が段違いだ。この騒ぎでいくら手薄になっているとと

はいえある程度の警備は残っているはずだし、そう簡単には通れないだろう。
とはいえ、
「けど、正直ここまでスムーズにいくとは思わなかった」
エルバートの表情は早くも達成感らしきものに満ちていた。確かに、ここまで順調に来れたことは信じられないほどの幸運だった。
「お前のおかげだよ、ティース。俺たちだけじゃ、この地下組織の構造を把握するのも難しかった」
「……感謝するのはまだ早いよ、エル」
だが、対照的にティースの表情は引き締まったままだ。
確かに、ここまでは怖くなるほど順調に来ている。が、このまま全てが上手くいくとは到底思えない。油断はできなかった。
それに――
（……なんだろう）
目指す三階への階段が近付くにつれ、不思議な感覚がティースの胸を襲っていたのだ。
（この、嫌な感覚――）
予感、とでもいえばいいのか。
何故か、黒い不安が拭い去れない。何か悪いことが起きるような、そんな予感。
「……ティース、あれか？」
やや興奮気味のエルバートの声に、現実に引き戻される。
「あ、ああ」
見えてきた階段。それこそが、三階Cブロックへ続く唯一の階段だった。その先に、エルバートの仲間たちが捕らわれているはずである。
「……よぅし！」
小柄なエルバートの足が心なしか加速する。
だが――その瞬間。
（……っ！？）

ぞくっと。
得体の知れない不安が、明らかな悪寒となってティースの背筋を襲った。背中を、一筋の冷たい汗が流れる。廊下の空気が妙にヒンヤリする。
（これは――っ！？）
その、感覚。
覚えがあった。
「……エルっ！！！」
咄嗟にティースは叫んだ。
進む先。
Cブロックへ続く階段。
その少し手前にある、路地のような曲がり角。
――そこから放たれていたのは、覚えのある圧迫感。
「エル！　止まれぇぇぇぇっ！！！」
「え？」
ティースが床を蹴り、細波に手をかけたのと、ほぼ同時。
「！？」
エルバートもまた、それに気付いた。
強烈な殺意が、そこから飛び出してきたのだ。
「……エル――！！！」

少し時間は遡って、地下一階。
「ルルルル～バルちゃん、バールちゃーん♪」
奇妙な歌を歌いながら、ネイルの小さな体からいくつもの炎の固まりらしきものが放たれる。それは集まってきたゲノール構成員たちを吹き飛ばし、怯ませ、混乱させるのに充分すぎるものだった。
「くっ……ひ、怯むなぁっ！！」
どうやら地下一階の警備責任者らしき男が必死に叫ぶ。が、もと

もとこの一階の警備をしている者たちは、魔を相手にすることなど想定していない。低級な獣魔ぐらいはどうにか退けられるにしろ、相手が人魔、しかも二人となれば完全に話は別だった。

轟音。

「思ったより楽だねぇ、リューちゃん」

その隣に立つのは彼女のパートナー、リューゼット＝カサ＝ドゥギラスだ。

「ネイル。もう少しセーブしておけ」

その場に腕を組んで仁王立ちしたまま、戦況を見つめている。

彼はティースからの情報によって、ゲノールトに警報システムが完備されていることを知っていた。そのうち、もっと深いところから手練れの構成員たちが出てくるであろうことは想像に難くない。

だが、

「でも、リューちゃんってさぁ」

話を聞いていないのか、聞こえないフリをしているのか。話をしながらも、ネイルの攻撃は少しも緩む気配を見せず、

「バ……バ……バなんとかってのと戦いたかったんじゃないの？」

「バラードだ」

「あ、そーそー。それ」

リューゼットはそれには答えず、やはり戦況を見つめていた。

ネイルの放つ攻撃は、陽動としては充分すぎるものである。いや、それどころか、少しずつ敵を押し込んでいた。

「……妙だな」

「え？」

「抵抗が弱すぎる」

「？」

ネイルはわからない顔だった。が、確かにリューゼットの言うとおり。いつまで経っても敵の抵抗が強まる気配はなく、ゲノールトとしては、あまりにお粗末な守備と言わざるを得なかった。

「随分と諦めが早い……後ろに何かあると見るべきか……」

と、そのとき。
「ちぃぃっ！！！」
一人の構成員が、ネイルの放つ炎の弾幕をかいくぐってきた。どうやら手練れの者らしい。明らかに他とは違う練達した動きを見せ、どうやら破魔具らしき二刀を携えて、真っ直ぐにネイルへと向かってくる。
「……あれ」
「くらえぇぇぇぇぇっ！！」
話と攻撃に夢中だったネイルは、その接近にまるで気付いていなかった。
全くの、無防備。
だが、
「な――っ！？」
瞬きほどの一瞬。
その間に、リューゼットの巨躯がネイルと男の間に割り込んでいた。
手にしていたのは、光の魔力で形作られた武器。男の持つ武器と同じ長さ、同じ形の二刀――
「去れ――刻苦足りぬ者よ」
「っ――！！」
片方の剣が男の二本の剣を弾き飛ばし、そしてもう片方が男の体を切り裂く。
「……かはっ」
一撃だった。
誰がどう見ても致命傷。
「ネイル」
男が倒れるとともに手の中の剣が姿を消し、リューゼットは言った。
「私は奥へ行く。もしかすると、謀られた……いや、謀られたというほどでなくとも、こちらも不安が的中したのかもしれん」

「あ、そーなの。たばかったんだぁ」
噛み合ってるのか噛み合ってないのかよくわからないやり取り。
ネイルはおそらく、いや間違いなく、理解していないだろう。
リューゼットは気にせずそのまま続けて、
「もし、私が死んだら――」
淡々とした口調でそう言った。
「あとは全て、貴様の好きにするがいい」
「うん、わかった」
まるで重々しさのない、だが、それについては二人の間で暗黙の了解でもあるのか、ごくスムーズな会話だった。
「それと」
去り際、リューゼットは振り返り、目を細めると、
「さっきも言ったが、必要以上にやりすぎるな。貴様も高等生物の端くれなら、少しは加減とか配分というものを覚えろ」
「うん、わかった」
ドォォォォン！
「……」
それ以上は何も言わず、リューゼットは襲いかかる構成員たちを打ち払いながら地下二階への階段を目指すのだった。

どちらかの反応があとコンマ五秒遅れていたら、エルバートの命はなかっただろう。
「――ぁぁぁぁぁっ！！」
バックステップを踏んだエルバートの身体と入れ替わりに、ティースの繰り出した一太刀が、路地から飛び出してきた影の剣筋を遮る。
重なり合う、金属音。
「っ！！」

手を襲ったのは強烈な痺れだった。微かに剣を弾かれたが、敵もおそらく不十分な体勢からの一撃だったのだろう。追撃はなく、何とか距離を置いて体勢を立て直すことができた。

かかとを鳴らし、細波を正眼に構える。飛び出してきた影もまた、無形の構えで二人を見据えた。

「……な――！？」

背後でエルバートの驚愕の声が上がる。

「こいつは……っ！！？」

だが、ティースは確認するまでもなくその正体を感じ取っていた。それはどこか、予感していた通りのもの。

「……バラード＝グラスマン――」

「ほぅ、やはりお前だったか」

短く刈り揃えた髪、鋭い眼光、圧倒的な威圧感。そこにいたのは紛れもなく、ゲノール総帥の護衛であり、デビルバスターでもある長身の男、バラード＝グラスマンだ。

ティースの首筋を、汗が流れた。

「少し疑問に感じた程度だったが、予定を取りやめにして正解だったな。キュンメルに、人間の協力者がいたか」

「っ……」

どうして見破られたのか。……いや、まるで心当たりがないわけではないし、それは今考えても詮無きことだと理解していた。

今はただ、どうやってこの場を切り抜けるか。それだけだ。

退くか、進むか。

「……ティース！　退けっ！　お前にどうにかできる相手じゃない！！」

我に返ったエルバートの咄嗟の叫びが通路に響き渡る。

それはもちろん理解できていた。

だが、

「……っ」

息苦しい。冷たい汗が次々に浮かび上がってきた。

この状況では、おそらく逃げることすら不可能だろう。一瞬でも視線を外せば。少しでも足を動かせば。その瞬間に切り捨てられそうな、そんな強圧感がある。

動けない。

まるで殻をかぶり、じっと耐えるしかないかたつむりのように。

……二人がかりなら……いや、それでもおそらく――

そして。

「エル――！」

お前だけでも逃げろ、と。

ティースがそう言おうとした瞬間だった。

「――行け」

「え？」

背後から、声がした。

「二人とも行け。この男は、私が相手をしよう」

「……リューゼット！？」

通路をゆっくりと歩いてきたのは、一振りの剣を携えたリューゼットだった。いつも通りの精悍な表情、だが全身からは今までにない闘気を迸らせ、視線は真っ直ぐにバラードを見据えている。

「……馬鹿なっ！！」

だが、エルバートは叫ぶ。

「お前一人でどうにかなるわけないだろ！？　……いや、俺たち三人で力を合わせれば、もしかしたら――」

だが、

「行け、と言っているのだ」

言うやいなや、リューゼットの足は地面を蹴った。

乱れのない動きは、実力という以上に、おそらく躊躇のない心の表れ。

「……」

バラードの目が微かに細められ、その一太刀は造作もなく受け止められた。だが、リューゼットはそれで怯むでもなく、全く変わら

ぬ口調で言葉を続ける。
「前にも言った。……私は強者と一対一で戦って死ねるのならば、悔いなど一つもない。手助けは、迷惑だ」
揺らぐことのない意志が、リューゼットの言葉の端々から溢れていた。強がりでも見栄でもない、それは紛れもない本心なのだろう。
「っ……」
迷っている暇はない。階段は彼らの目と鼻の先にあった。リューゼットが押さえている間なら、どうにか駆け抜けることもできるだろう。
「……ティース！　行くぞっ！」
「っ！」
決意したのはほぼ同時。ただ、行動したのは一瞬だけエルバートの方が早い。
ティースもすぐ後に続いていった。
「……」
バラードの視線が、一瞬だけ二人に向けられる。が、意外にも遮ろうとする動きはまるで見せず、二人が通り抜けた後もリューゼットと剣を合わせたまま。
……やがて、階段を刻む足音が二つ遠ざかっていくと、それを背中に聞きながら、バラードは落ち着いた口調で言った。
「お前、名前は？」
「リューゼット＝カサ＝ドゥギラス」
ガリッ！！
鈍い音がして、二人の間合いが広がった。
押し戻されたリューゼットはかかとを滑らせながらすぐに体勢を立て直す。構えた剣は彼が魔力で創り出したもの。通常より長めで、刃がノコギリのようにギザギザになっているものだった。
「なるほど。警備があまりに不甲斐ないと思っていたが……下位魔ばかりのキュンメルに、お前のようなヤツが潜んでいたのでは仕方ないか」

油断なく、バラードの視線はリューゼットを見つめた。が、それは今までのように、相手を見下したものではない。

「……面白い」

大抵の場合、バラードの前に立ちふさがる相手は、敵であって敵ではなかった。それはつまり、デビルバスターとして、すでに普通の下位魔や上位魔程度では相手にならないほどの実力を身につけていたからである。

だが……このとき、彼は久々に“敵”を認識していた。少なくとも、無造作の一太刀で片付けられる相手ではないと、そう感じていた。だからこそ、ティースとエルバートをそのまま見逃したのだ。

「凡庸な集団の中に、一人だけ逸材が埋もれているというのは稀にあることだ」

「全力で来るがいい、バラード＝グラスマン」

剣を正眼に構え、リューゼットは宣告した。

「さもなくば、大きな後悔が貴様を襲うことだろう」

「馬鹿な」

バラードは薄笑いを浮かべて答える。

「手加減などという無意味な行為、試そうとしたこともない」

それは、余裕ではない。

何度も死線をくぐり抜けてきた。アリとライオンほどの圧倒的優位でない限り、たとえ実力にそれなりの差があろうとも、油断することなど決してない。そういう男だからこそ、バラードはこの世界でこれだけの地位を築くことができたのだ。

油断など、あり得ない。

「ここでは場所が悪い。少しだけ、移動することにしないか？」

言って、バラードは階段から離れていく。

……階段を駆け下りていった二人のことは、どうでもよかった。

そもそも彼は、ただ条件が良かったから一時的にここに雇われていただけで、ゲノールトに対する忠誠心など最初からないに等しい。

今はその利益を守ることよりも、目の前の男を倒すことが優先だと

感じたのだ。
もちろんリューゼットにもその申し出を断る理由などなく、
「よかろう」
そのまま従った。
移動することはエルバートやティースが脱出してくる場合にも好都合――いや、そんなことより、彼もまた、誰にも邪魔をされないところで戦いたいという望みがあったのだ。

三階のAブロック。
他とは明らかに違う、豪華な装飾の施された部屋。このAブロックは来賓などを泊めることができるビップルームがいくつか並んでいる。
その中の一つ。
「きゃぁぁぁぁぁっ！！」
何度目かの振動に、パラパラと、粉のようなものが天井から降ってくる。
「も……もうヤダぁっ！！」
「セルマ様！　落ち着いて下さい！」
昼頃からこのゲノールトの地下を襲っていた異変は、ついにこの三階にまで波及し始めていた。振動の発生源……襲撃者は、おそらく地下二階にまで達しているだろう。
その部屋にいたのは、ベッドの上で半泣きになって頭を抱える少女セルマと、その護衛が四人。
当初、少数の襲撃を知らせるレベル一の警報が鳴ってから約二十分。三階以下に居た者たちの大半はすぐに鎮まると楽観していたが、今になって警報は大規模の襲撃――レベル四へと修正され、その余波はすでにこの地下三階の天井を揺るがすほどまでに接近していた。
未確認情報だが、三階Cブロックに捕らえていた魔が侵入者によ

って解放されたという情報も入ってきている。……もし事実であれば、大事だ。怒り狂った魔が万が一殺到しようものなら、それを防ぐだけの戦力などここにはない。

「助けて！　誰か！　誰か助けてよぉ――ッ！！」

「セルマ様！」

おそらくこれだけの恐怖を感じたことはないのだろう。平常心を失って取り乱すセルマを懸命に宥めつつ、彼女の護衛長である男は行動を決めかねていた。

ここでじっとしているべきか。

あるいはここを出て、非常口からの脱出を計るべきか。

事態はすでに深刻なものとなっている。どれだけの数の襲撃なのか詳しいことはわからないが、ここまで鎮まらないところをみると相当数と見るべきだろう。――事実とは違っていたが、彼がそう考えたことはおそらく正しい。

ならばもちろん、脱出を試みるのが最良だった。非常口の一つは、このビップルームのすぐそばにある。脱出することは可能だろう。

だが、不安もある。

――大きな、振動。

「いやぁぁぁっ……ぁっ！！！」

セルマの絶叫が示すように、その振動はどんな火薬を使っているのかと思うほど桁外れに大きい。堅固に作られたこの地下を大きく揺るがすほどだ。……とすると、一本道である非常口を辿ることは大きな危険も伴う。万が一道が崩れでもすれば、先へ進めないどころか生き埋めになってしまう危険もあるからだ。

「ティース！　誰か、ティースを呼んできてぇ――ッ！！」

「……ちっ」

思わず、男は舌打ちを漏らした。

……男は護衛対象であるこの少女に、主人としての尊敬など少しも抱いていない。少女はあまりに自分勝手で、護衛する者たちにとってはあまりに厄介な存在だった。ただ、自分が護衛をしている間

に死なれては自分の首が飛ぶことにもなりかねないから、仕方なく真剣に護衛を続けているだけのことだ。
振動は収まらない。
「セルマ様、大丈夫です。今頃、おそらくバラード様が――」
パァン！！
宥めようと伸ばした手が、払われた。
「……あんたはいいからッ！　早くティースを呼んできなさいよォッ！！！」
「……」
微かに残っていた感情が、凍り付く。
その瞬間だった。
……ミシッ……ッ。
「え――？」
「……な――！」
その部屋にいた誰もが、天井を見上げ――そして、見た。
「ば……馬鹿なっ！！」
天井に大きく刻まれた、亀裂。
――この地下を構成するのは、人の持つ最新の技術と、魔界に由来する特殊な資材。たとえ上の階で数トン級の動物が暴れようとも耐えられるだけの造りになっている。
その、はずだった。
だが――
「天井が、崩れる――ッ！？」
絶叫が、部屋を支配した。混乱の中、それが誰のものかは知れない。ただ、そこには確実に、幼く甲高い声――セルマのものが混じっていた。
それだけは、確かだった。

「……！？」
「どうした、ティース？」
絶え間なく襲う、轟音と振動。まるで大軍勢が攻め寄せたかのような混乱の渦の中、三階Ｃブロックで解放された人魔たちによって、“混乱”は“恐慌”へとその質を変貌させていた。
一部の魔たちは脱出よりもゲノールトへの復讐に燃え、何処かへと散っていった。ゲノールトの構成員たちは自らの命を守ることに精一杯で、地下内部はすでに組織としての形を保っていない。
「いや……」
そんな中、ティースとエルバートはかろうじて生き延びていたキュンメルのメンバー数人とともに、地下一階まで逃れていた。
「リューゼットさんとネイルさんのことが気になって――」
それは半分本当であり、半分は嘘だった。
バラードとともに姿を消したリューゼット。未だ地下二階で陽動を続けているらしいネイル。すでに彼らの目的は達していたが、二人が退いてくる気配はない。
だが、それとともに、もう一つ。
（バラードがいたってことは……もしかして――）
ティースの胸を過ぎった不安は、セルマのことだ。
本当ならトーナメント観戦に出掛けているはずの少女。だが、バラードは『予定を取りやめた』と言った。それが彼とゲノール総帥だけのものならば良いが、あるいは彼女も外出を控えていたという可能性は充分に有り得る。
ならば、解放された魔の怒りの矛先が彼女に向けられる可能性すら――いや、もしここに残っているのならば、その可能性は高い。
「……」
ネイル、リューゼット、そしてセルマ。
気になり始めると、先へ進む足取りが重くなった。
やがて……止まる。
「……エル。俺、一旦戻るよ」

「はぁ！？」
急に立ち止まったティースを、エルバートは信じられないという顔で振り返った。
「なに言ってんだよ！　ここまで来て！」
立ち止まった場所は、地下一階、娼牢に続く階段の入り口付近。再び、大きな振動があり、下での戦いはまだまだ鎮まる気配がない。
振動が静まるのを待って、ティースは口を開いた。
「もしかしたらネイルさんは、俺たちがここまで来てることに気付かないで、それでまだ無茶してるのかもしれない。だろ？」
「……そりゃ」
確かに、彼らは逃げる途中でネイルと顔を合わせていない。意外にも彼女は地下二階まで敵を押し込んでいるらしく、二階は一階と違ってやや入り組んだ構造になっているため、行き違いになったようだ。
「けど、状況を見れば俺たちがすでに成功したことぐらいわかるだろ？　いくらネイルだって――」
言いかけて、エルバートの言葉がピタッと止まる。
「……ああ、そうか。“あの”ネイルか……」
苦々しい表情になった。
「それにリューゼットさんだって、もしかしたらまだ頑張ってるかもしれない」
「……」
それに対しては、エルバートは視線を流すだけだった。
相手を考えれば、リューゼットの腕がいくら立つとしても、これだけの時間を耐えきっているとは考えにくい。もちろん、それはティースにもよくわかっていたが、まるで希望がないわけでもないだろう。
「とにかく」
それと、セルマのこと。
一旦引き返す理由としては、充分だった。

「敵の混乱も想像以上だし、今のうちなら戻ってもそれほど危険はないと思うんだ」
「……わかった」
エルバートは頷く。
「けど、それなら俺も行く。そもそもこの作戦は俺のものだし、俺にはその責任が――」
「いや」
だが、ティースは首を横に振った。そしてすぐ近くにある娼牢へと続く階段を指すと、
「お前はあの子を助けて、早く脱出するんだ。ここを出ても、まだ安全ってわけじゃないだろ？　お前はキュンメルのメンバーを安全な場所まで誘導してくれ」
「……ティース」
「全てが終わったら――」
心配そうな表情をしたエルバートに、ティースは微かに笑みを漏らして答えた。
「リィナのいる宿で待ち合わせだ。今度こそ、三人で昔話でもしよう」
「……」
「それと」
それから少し冗談っぽい口調を交えて、横目で娼牢へと続く階段を見て、
「できれば、あの子の紹介もな」
「……紹介？」
エルバートは怪訝そうに、眉をひそめる。
「お前……――うわっ！！」
言いかけたその瞬間、一際大きな振動が襲った。
どこかで、何かの崩れる音が響く。
「っ……エル！　とにかく頼んだぞ！！」
猶予している暇は、どうやらないらしい。表情を引き締め踵を返

す。
「あ……ああ！」
エルバートの言葉を背中に聞きながら、ティースは今来た道を引き返していった。
（……急がなきゃ――）
壁や床はところどころが黒っぽく焼け、どこかから焦げ臭い空気も漂ってくる。
途中、地下全体を襲う振動に何度か足を取られそうになった。
そして――ふと、不審に思う。
（でも……ネイルさんにしては、派手すぎるな……）
また嫌な予感がした。
状況を考えれば、この振動の発生源はネイルのはずだ。……だが、果たして下位魔でしかない彼女が、これだけの破壊力を持っているのだろうか。振動は断続的、かつ強烈。しかも、その威力は時間を経る毎に増してきている。
「……」
不審に思いながら、ティースは速度を緩めずに階段を下りていった。
地下二階。
そのまま破壊の跡を辿り、おそらくネイルが進んだであろう方向へと向かう。
と。
「っ……」
おそらく攻撃をまともに浴びたのだろう。ゲノールトの構成員らしき男たちが通路の脇に倒れていた。生死は不明だが、少なくともすぐに起き上がってくる気配はない。
壁に走っている亀裂。
そして、
「これは――」
先へと進んだティースは、驚愕にその足を止めた。目を見開き、

胸に冷たい空気が流れ込む。
「こんな……」
そこは一部、床が崩れていた。ここの床が崩れるということはつまり、地下三階の天井が崩れたということになる。
「……どうなってるんだ……？」
ゲノールトの床はかなりの厚さの石床で、さらに間に挟まれた魔界由来の建材によって強化されている。並大抵のことで壊れるようなものではない。
「ネイルさんがこんな力を持ってるはずは――」
それは下位魔程度には絶対に不可能な芸当だった。
（……何か。俺の知らない何かが起きている――？）
周囲に、人の気配はない。破壊音はさらに奥へと続き、聞こえる喧噪はその先。
「……」
ティースは自らを緊張に身を震わせながら、ゆっくりと“細波”を抜き放ち、そして一歩ずつ、奥の方へと歩を進めていくのだった。

階段を下りたところで、エルバートの表情は苦々しさに歪んだ。
「……ティース……すまない」
そして一言、そう呟く。
「俺はお前を――」
娼牢。
そこに捕らわれている少女。
エルバートは一度だけ、その少女と会ったことがある。
名前は知らない。素性も知らない。ただ、前回ここに潜入した際、ほんの僅かに脱出の手助けをしてもらった。だから、その恩を返す必要があった。
それ以外の個人的な感情は一つもない。もちろんティースが勘違

いしたような関係も、彼と彼女の間にはない。彼らが似ていたのは、単なる偶然でしかなかったのだ。

そして――

「……え？」

その牢の前までやって来たエルバートは、そこで驚愕に目を見開くほどの光景に遭遇することになる。

「いな……い？」

牢はもぬけの殻だった。

いや、それだけじゃない。

「なんだ……これ……！？」

僅かな戦慄がエルバートの身体を駆け抜ける。

――牢の扉はすでに何者かによって破壊されていた。

「そんな……」

背筋が冷える。それは、まず有り得ないはずの光景。

牢は格子が吹き飛び、破片が壁際まで飛び散っている。まるで数トンもの巨大な物体が衝突したような、そんな惨状だ。

しかも、それだけではない。

「そんな、馬鹿な……」

格子は“外側”に散らばっていた。つまりその牢は“決して破られないはずの内側から”破られていたのである。

見張りはとっくの昔に逃げ出しているようだ。

と。

「？」

突如風が吹き抜け、彼のすぐ背後で渦を巻いた。

その直後、

「！」

ハッとする。

風が集まったところに、まるで空気が実体化したかのように突然人の気配が現れたのだ。

そして、

「キミは――」
「……」
咄嗟には振り返ることができず、ドクン、と、心臓が大きな脈動を打った。
――ゲノールトの牢。それはたとえ上位魔であろうとも内側からは破ることのできない堅固な牢だ。……その、はずだ。
だが、それは今、疑いようもない事実を示して彼の眼前に現れている。
「覚えてるよ。キミは確か、前にもここに来た子だね？」
動けない。冷たい汗が流れた。
声に聞き覚えがある。それは確かに、この牢に囚われていた少女のもの。
だが……この状況を目の当たりにしては、認識を改めざるを得ない。
「……あんたは、一体――」
少女は、いつでも抜け出せた。それだけの力の持ち主だった。囚われていたのではない。おそらく何らかの理由があって、囚われたフリをしていたのだろう。
だが、少女はエルバートの緊張など知らない様子で、続けた。
「聞きたいことが、あるんだ」
「……」
心臓の鼓動は収まらない。
冷や汗を掻いたまま。
エルバートは抵抗することもできず、観念してゆっくりと振り返った。

地下二階の状況は凄まじい。あらゆる部分の壁が崩れ、ところどころでは火がパチパチと燃えている。ほとんどが石の造りなので急速に燃え広がる心配はないが、まるで戦乱に巻き込まれた街の様子を見ているかのようだった。

と、そんな中。

「……どけよ……このガキがッ！！」

ようやく人の声を聞いたのは、二階の比較的深い場所。

「ヤだッ！！　置いてかないでぇッ！！」

場所は、ティースの認識が正しければ三階Ａブロックに続く階段のすぐ近く。その方角から、逃げるように一人の男が走ってくるのを見た。

見覚えがある。それは確か、セルマの護衛の片割れだった。

（……ってことは――あの声！）

男はティースの存在には見向きもせず、慌てたようにその横を駆け抜けていく。右腕と頭からは血が流れており、どうやら負傷している様子だった。

破壊音はその奥から、どうやらこちらに近付いている。

ティースもまた、一目散にその場所へ急いだ。

そして――

「……セルマッ！！」

「え……ッ！？」

通路の、ずっと奥。まだ顔も確認できないほどの距離だったが、彼はそこにセルマの赤いドレス発見したのだった。

「……ティースッ！？　ティースなのッ！！？」

おそらくは護衛の男に見捨てられたのだろう。絶望に打ちひしがれ、声が掠れるほどに泣きわめいていた少女は、そこに頼りとする青年の声を聞き、喜びと安堵に涙で濡れた顔をほんの僅かに輝かせた。

「ティースッ！！！」

立ち上がり、真っ黒に汚れた赤いドレス姿で、フラフラと駆け寄

ってくる。どこか怪我をしているらしく、動きはひどくぎこちない。
「セルマ！」
ティースもまた、少女に向かって駆けた。
――やはりここに残っていた。戻ってきて良かった、と。
その心に、僅かな安堵感を抱きながら。
だが。
「……え？」
その背後。
ゆらりと陽炎のようなものが浮かび上がるのを、見た。
そして、爆音。
「きゃぁぁぁっ！！？」
「セルマッ！？」
背後から襲った爆風に、少女の小さな体が煽られ、うつ伏せに転がる。
破壊音は近付いていた。
――いや、すでに。
「ッ――！？」
ゆらりとそこに浮かんだのは……得も知れぬ邪気。
「セルマッ！　立て！　走れぇッ！！！」
自らも全力で疾走しながら、ティースは叫んだ。
浮かび上がった、人影。
背後に揺らめく炎で、顔は朧気だ。が、何故かそこに浮かぶ笑みだけは、確認できた。
……どこかで見たような、笑み。愉悦の、笑み。
胸に、無数の針が突き刺さったような、痛みが走る。
「セルマぁぁぁ――ッ！！」
「ティース！　……ティース……ッ！」
足を擦りむいたのだろう。痛みに顔をしかめながら、セルマは半ば床を這うようにして彼の元へ向かってくる。
だが、邪気は、それより速い。

浮かび上がった、笑みは――
（……ネイル、さん……ッ！？）
炎が、飛ぶ。
ティースの存在に気付いていないのか。
いや、あるいは――
「……セルマッ！　走れぇ――ッ！！」
絶叫が、熱のこもった空気を裂く。
「ティ――ッ！！」
それに応えようとしたセルマの叫びは、最後まで続かなかった。
「っ――――！！」
炎はセルマを避けた。偶然だったのか、意図的だったのか。
「え――ッ！！？」
だが、彼女を避けた炎の塊は、壁と天井を打った。場所は奇しくも、いや、まるで狙ったかのように、少女が居たその場所。砕かれた壁そのものが少女に向かって崩れ落ちる。
「セルマァァァッ！！」
「きゃぁぁぁぁっ！！！！」
少女の体の数倍はあろうかという石の塊は、しかし幸運にも彼女の体を避けた。小粒の石がその体を掠めていったが、大事に至るものはない。
「ぁ……ぁ……」
声も出せなくなって、大量の瓦礫の中に埋まるように、腰を抜かせたセルマがペタンと崩れ落ちる。
だが――
「――セルマぁッ！！！」
ティースの絶叫は止まらない。
……彼は知っていた。その幸運が、決して彼女の命を保証するものではないことを。
「立て！　立って、走れぇっ！　走るんだぁぁぁ――っ！！！」
「……え？」

彼が自ら助けるには、まだ遠すぎる。あと、十五――いや、十メートル。

――遠すぎた。

「え――」

天井を見上げ。

ピタリと、セルマの動きが止まる。

「ぁ――」

崩れ落ちる、天井。

一辺が四メートルはあろうかという、巨大な石の塊。

助けるには、遠すぎた――。

「セルマぁぁぁぁぁぁ――ッ！！！！」

絶叫が再び空気を切り裂いて。

「――」

絶望的な無言の声を残し……そして、赤いドレスは瓦礫の中へと消えていった――

その5『死を運ぶ者たち』

リガビュールの昼はこの日も静かだった。

“事実上の中心部”から少し離れた中央広場では市場らしきものも開かれている。が、そのにぎわいはネービスやそれ以外の主要都市に比べればたかが知れており、それはもちろん中心から離れれば、なおのこと。街自体の規模を考えれば、外を歩く人々の数はあまりに寂しいと言わざるを得ず。冷たい風とどんより曇った空が、その雰囲気をさらに増長させていた。

そんな中。

（ティース様……）

リィナはネズミ色のフードとローブ姿で街を歩いていた。正体をさらす危険を侵してまで街を歩いている目的は、もちろんただ一つ。

（一体、どこに……いるのですか……？）

失踪した彼を捜すため。

まず向かった先はエルとの待ち合わせ場所でもある、初代ネービス王の石像前だった。だが、この寒い日の朝、そこには人影一つなく。一時間ほどそこで待った後、夕方に再び戻ってくることを決めて、次は街の“事実上の中心部”へ向かうことにした。

まだ午前中、そこは当然のごとく閑散としていたが、それでもいくつか営業している店がある。夜ほどではないにしろ客引きもいくらかいて、当初、フードをかぶって大柄なリィナを男性と勘違いしたのか声を掛けてくる者もいたが、フードの中から返った声を聞いてはすごすごと引き下がっていく。それが何の店か理解していない彼女にとって、それはひどく不思議な光景だった。

ただもちろん、そんな状況でティース本人を見つけるどころか、何の手がかりを掴めるわけでもなく……そして昼も過ぎたこの時間、リィナは中心部を離れ、やや閑散とした郊外の方をアテもなく彷徨っていたのである。

（ティース様……）

この寒風の中を何時間も歩いていれば、いくら王魔と呼ばれる彼女でも体が凍えてくる。魔力の壁で寒風を遮ることは可能だったが、この街中で無闇に力を纏えば察知される危険もあり、そういうわけにはいかなかった。

はぁっ……と、手の平に息を吐きかけ、擦り合わせる。息は完全に白く、空を見上げれば今にも雪が降り出しそうだ。

（まさか、二度と会えないなんてこと、ないですよね……）

そんな自らの想像に、心までもが冷たくなる。

――まさか。

だが、彼の筆跡を持つあの手紙ですら、ここ二日間は彼女の元に届いていなかった。それはもちろん、エルバートが彼女に見つかることを恐れたためで、彼女自身もその原因が自らの深追いにあるのだろうとわかってはいたが、そもそも、手紙が届けられている間だって、彼が無事だったという保証はどこにもなかったのである。

ティースという青年の存在を心から大事に思う彼女にとって、その不安は当然のことであった。

（こんなことなら、最初から私もついていけばよかった……）

後悔しても、遅い。

彼が何かに巻き込まれたらしいのは、彼女にも理解できていた。

（エルさん――どうか）

ギュッと、胸の前で赤くかじかんだ手を握りしめる。

脳裏に浮かんだのは、一緒にこの世界にやってきた友人の姿。

（もし一緒にいるのなら、どうかティース様を守って――）

空からは、チラチラと雪が舞い降り始めていた。

ガリッ！！！

剣とは思えないような鈍い交錯音を立て、二つの影が反発した。

ゲノール地下三階、Ｅブロック。そこに、何もない広大な空間がある。もともとは何らかの催し物が行われる場所だったが、今は地下四階がメインとなっており、ほとんど使われていない場所。

そこで、リューゼット＝カサ＝ドゥギラスとバラード＝グラスマンが、未だ激闘を繰り広げていたのである。

「っ……」

間合いを取り、ほんの僅かに声を漏らしたのはバラードだ。百戦錬磨、冷徹で練達。優秀なデビルバスターである彼が、リューゼットの一撃に、左腕から微かな血を流していた。

「……信じられんな」

その視線の先。

バラードの持つ剣と全く同じ形、全く同じ長さの光る剣を手にしたリューゼットが、正眼に構えている。が、彼も決して五体満足ではない。ほんの僅かながら、ところどころに傷を負っているようだった。

ほぼ、互角。いや、現時点ではややリューゼットが押しているか。

“信じられない”

おそらく、ティースやエルバートが見ていても、同じ感想を漏らしただろう。

「そろそろケリをつけよう、バラード＝グラスマン」

カチリ、と、リューゼットの持つ剣が音を立てる。

「殺傷力の高い形状。貴様はもともと、持久戦を得意とするタイプでもなかろう」

「……付け焼き刃の分際で、知った風なことを言う」

バラードは薄く笑った。が、それは事実でもあった。

「なかなか面白い力だ。それは相手の武器を写し取る力か？　……なら精一杯、魔力を込めることだ」

「……」

リューゼットの眉が微かにピクリと動く。
――感じていた。バラードの持つ剣から漂う、鋭い気配を。
「吠えよ……“鎌鼬（かまいたち）”」
キィィィィ……ン。
「！」
超音波のような甲高い音が突然周囲を襲った。
目を細め、リューゼットはその音の発生源を捕らえる。
「刃……か」
刃が細かく振動していた。バラードがゆっくり下段に構えると、触れてもいない石床が微かに削れていく。
「魔力で創り出したその剣が、この一撃に耐えられるか？」
「……」
“鎌鼬”の一撃は、並の鉄や鋼はもちろん、魔力で象った物質も容易に切り裂く。下位魔、上位魔、将魔ですら、その一撃に耐えるのは難しいだろう。
「やってみるがいい」
だが、リューゼットは怯むことなくそう言い切った。
「それだけの威力、放った方もただでは済むまい」
「……」
バラードが微かに眉を動かした。
……確かに、いくら優秀なデビルバスターだろうと、自らの持つ神具の能力を限界近くまで引き出せば、その直後はとてつもない脱力感に襲われる。以前、レインハルト＝シュナイダーがリィナに向けて放った一撃と同様、連続では放てない。まさに必殺――いや、必殺としなければならない、一撃だった。
「私はその一撃を避けはしない。避ければ、おそらく貴様はすぐに体勢を立て直してしまうだろう。だから避けずに受け止め、貴様が作る、その一瞬の隙を逃さず、勝負を決める」
リューゼットの言葉に、バラードは目を細めた。微かに笑みが浮かぶ。

「面白い。やってみようじゃないか」
怯むことはない。
“鎌鼬”が纏う一撃はおそらく、将魔どころか王魔の体ですらも切り裂く威力だ。たとえリューゼットが自らの武器を強化していようと、並大抵のことで防げるものではない。
「本当に受け止めることができたなら、おそらくお前の勝ちだ。リューゼット」
自負がある。自らの実力と、そして長年のパートナーである“鎌鼬”。その一撃に、プライドがあった。もちろん、今まで阻まれたことはない。
「可能だ」
一方のリューゼットとて、負けるつもりはなかった。強い者と戦って死ぬのは確かに本望だが、強い者に勝つことは更なる至上の喜びだ。そしてこの目の前のバラードという人物は、そんな彼の望みを満たすに充分すぎるだけの実力を備えていた。
渾身の力を、自らが持つ光の剣に込める。もちろんその武器が破壊された経験など未だかつてなく、やはりそこにはプライドがある。武器を魔力で具現化するタイプであり、それを主な戦闘手段とする彼にとって、その武器こそが彼のプライドだった。
確実に、どちらかが崩される。そしてそれは、その者の敗北をも意味するだろう。どちらも自信がある。だが、確信はない。二人の戦いは予測を越え、それほどに拮抗していた。
神経が研ぎ澄まされる。
溢れんばかりの闘気に、肌がビリビリと震えた。
轟音と喧噪の中。
合図は……階上で響いた、一際大きな崩壊音。
「……」
「……」
無言で、二人の足はほぼ同時に、床を蹴った――

「おい……エル」
「……」
「一体、何がどーなってんだ？」
「俺にも、わかんないよ……」
困惑したエルバートの隣を走るのは、この地方に派遣されたキュンメルの部隊長、ボイスという男だ。歳は三十代半ばから後半ぐらい。長い牢生活のためか、あるいは元来のものか、口や顎には濃い髭がいっぱいに生えている。
出口は近い。遮るものもない。
それは当然だった。
「ゲノールトは……ほぼ壊滅に近い状態だ」
ボイスは信じられない表情で呟く。
「エル。お前は一体……何者を連れてきたんだ……？」
「……」
目的は達した。仲間たちは半分以上が無事だったし、他に囚われていた罪のない人魔たちを解放することもできた。
が、
「俺にもわかんないよ、ボイス……」
事態はいつしか、完全にエルバートの手を離れていたのだ。
再び、地下全体が揺れる。通路の端々には焼け焦げた死体がいくつも転がっており、凄まじいまでの光景だ。もちろん憎き相手のこと。それを見て感慨にひたることなどないが、信じがたい思いは膨れ上がった。
「……」
ボイスは神妙な顔だったが、やがて気を取り直したように、
「……とにかく、皆が脱出できたのはお前のおかげだ。事態を把握するのは、無事に脱出してからでもいいか……」
出口が見えてくる。

エルバートは無言でその後をついていった。
（リューゼット……ネイル……）
そのとき、少年の脳裏に浮かんだのは、ともにこの作戦を戦った三人の姿。
（ティース……一体、何がどうなってんだ――？）
何が起きているのかもわからないまま。
崩落音。
それはおそらく一階の床――二階の天井が崩れ落ちる音。
「エル！　急ぐぞ！！」
「あ、ああ……」
エルバートはそうして仲間たちとともに、一足先にゲノールトを脱出したのだった。

燃えさかる通路。
崩れ落ち、ぽっかりと空いた天井。
積み重なる瓦礫。
「――」
言葉が、出ない。
先ほどまでそこにあった赤いドレスは、完全にその姿を隠している。……いや、瓦礫の隙間からスカートの端が微かに覗いていて――そこから、じわりと赤い液体が染み出してきた。
心臓の内側に強烈な痛みが走る。
それは彼女が、確実にそこにいたことの、証。
「セ……ルマ……」
呆然としたままティースの口が紡いだのは、目の前で呆気なくその人生を閉じてしまった少女の名。
足が震え、一瞬だけ思考が止まる。
そして――

「や、ティモちゃん。元気そうだね」
「……なんで」
片手を上げ、相変わらず無邪気そうに笑うネイル。まるで何もなかったかのように、セルマの消えた瓦礫の脇を通り過ぎ、ゆっくりと彼の方へと近付いてくる。
「っ！」
その仕草に、カッと頭が熱くなる。そのまま、彼は堪えきれない憤りをぶつけた。
「なんでッ！　どうして彼女を狙ったんだッ！！」
「え？」
ネイルは不思議そうな顔をして、それからゆっくりと首を傾けると、
「どしたの？　私、まだキミが怒るようなことしてないでしょ？……あ、今の子？　でもセルマって、確かここの偉い人の子供じゃなかったっけ？　じゃあ、敵でしょ？　違った？」
「――！」
相変わらず何も考えてなさそうな彼女の言葉が、彼の怒りをさらに煽った。
……確かに。彼らにしてみればセルマは敵だったかもしれない。あるいは憎い相手だったのかもしれない。ネイル自身には何の悪気もなかったのかもしれない。
だが、それを理解していながらも、ティースは叫ばずにいられなかったのだ。
「なにも殺すことはなかったッ！！」
「え？　なんで？」
「ッ……！」
ギリッと奥歯が音を立てる。
彼はセルマの保護者でもなければ、教育係でもない。彼は情報を得るために彼女を利用し、そして彼女はただ、退屈を紛らわせるために彼と“父娘ごっこ”をしていただけだ。彼女の考え、この先の

人生、それを変える力が自分にあるなんて、そこまで自惚れていたわけじゃない。
だが、それでも。
それでも――
「あの子は……あの子は何も知らなかっただけなんだ！　こんな死に方をしなきゃならないような子じゃなかったのにッ！！　なのに……なのに――ッ！！」
どうしようもない憤り。涙が浮かびそうになるのを、懸命に堪えていた。
だが、
「あははは、そういう意味かぁ」
ネイルは気に留めた様子もなく、微かに返り血を浴びた表情に相変わらずのニコニコした笑顔を浮かべ、言った。
「でも、知らないよ、そんなの。どうでもいいじゃない」
「な！」
頭がさらに熱くなる。気色ばんだ。
「あんたは――！」
だが……その直後、
「私、ザッピーと違って、別に誰かの悶え苦しむ顔が見たいわけじゃないし。事情なんてめんどっちぃからいちいち気にしないの」
熱が、一気に冷め切った。
「……え？」
一瞬、彼女が何を言っているのか彼にはわからなかった。
だが、
（“悶え苦しむ顔”……？）
そのセリフは、彼の脳裏に強く残っていた言葉、強く残っていたイメージを刺激する。そこに浮かんだのは、本来、この場とは全く関係ないはずの人物。
ターバンを頭に巻いた、許し難き男の顔――
「ザヴィア……レスター……」

「あれ？」
思わず呟いた彼の言葉にネイルが反応する。
そして、驚愕の事実を口にした。
「ザッピーのこと、知ってるの？」
脳裏の奥がチカチカとフラッシュする。
「なん……だって……！？」
そして頭の一部がようやく冷静な思考を取り戻す。
――辺りを覆う強烈な炎。
それは明らかに不自然だった。とても、下位魔の力とは思えない。
そして、紡ぎ出された“あの男”の名前。屈託のないネイルの笑顔。
――そこに、いつか見た“あの男”の慇懃な笑みが重なり合う。
「！　まさか――」
繋がった先は、一見何の確証もない推測。だが、何故かそれは確信に近いものを彼に感じさせていた。
「まさか、お前は……タナトス――！」
「あれ、バレちゃった？　なんで？」
ネイルはあまりにもあっさりと彼の推測を肯定した。
「！」
頭の中が一瞬だけ真っ白に染まる。
「でも、ま、いっか。もう遊びは終わりだってリューちゃんも言ってたし」
「……！」
リューゼット。
彼もまた、タナトスのメンバーだったというのだろうか。
「リューちゃんはキミに興味持ってたみたいだけど、なんでかなぁ。あまり強そうじゃないのにね」
ゆらっ、と、まるで陽炎のように、ネイルの全身に炎が浮かび上がる。
「くっ……」
襲いくる熱波に、ティースは顔を覆った。まともに目を開けてい

られない。辺りにあったゲノール構成員たちの死体が勝手に燃え上がる。

（なんて……魔力――！）

それは王魔であるリィナにも匹敵する力だった。やはりどう考えても下位魔程度のものではなく、最低でも将魔クラス。おそらくは偽っていたのだろう。

「なんで……どうしてお前らが、エルに協力していたんだ！」

圧迫感に抵抗しながらぶつけたティースの問いに、ネイルはケロッとした顔で答えた。

「暇つぶしだよ」

「暇つぶし……だと……！？」

「リューちゃんはいつもの病気でね。強い人と戦いたくなっちゃって。私も何かむしょーにウズウズしてきたから、ヌーボーが、それならここがいいって教えてくれたの」

「……！」

無意識に噛んだ唇から微かに血が流れた。

（……タナトス――）

圧倒的な魔力。

背筋を襲う本能的な“恐怖”

脳裏を焼く抑えきれない“怒り”

せめぎ合う。

……後を押したのは――この数日間の記憶だった。

ジリッと、かかとが音を立てる。

（リィナ、エル……）

手にした細波が微かに震える。

（……シーラ……俺、帰れないかもしれない……）

グッと柄を握る拳に力が入る。

（けど――）

ネイルはすでに戦闘態勢に入り、どうやら次の狙いを完全に彼に定めたようだ。……見逃してくれるとは思えない。ただ、それでも、

一目散に逃げた方がまだ生き残る可能性は高いだろう。
だが、バラードのときと同じように、足が動かない。
恐怖？
いや、今度は違う。
それとは全く別の、全く正反対の感情。
――愚かだということはわかっている。誰かがその行動を『下らない』とか『犬死に』だとか言うかもしれない。
それでも――
（逃げたく……ない）
燃えさかる炎を瞳に映しながら、ティースはゆっくり細波を構えた。
「……あれ？　普通に立ってられる？」
ネイルは意外そうだったが、少し考えて、
「ははぁ、なるほど。リューちゃんが言ってたのはこういう意味か」
「……」
「強い力を、持ってるね」
ゆらゆらと、ネイルの瞳が揺れていた。自らの炎を映して真っ赤に。
笑顔のまま。微動だにしない。だが、その瞳の奥にあったのは、紛れもない、愉悦。ザヴィア＝レスターがあのときに見せた笑みと、全く同種のもの。
同じ、人種。
胸の奥が、ミシリと音を立てた。
「キミはどんな音を立てて、壊れるのかな？」
ネイルの足下にあった炎が形を成す。
「いくよ、バルちゃん」
「！」
陽炎のように、その背後に人の姿らしきものが浮かび上がった。
ゆらゆらしていてはっきりとはしない。が、どうやら狩人のような格好、手とおぼしき部分には弓らしきものの影が見える。そしてほ

とんどモーションもなく矢をつがえると、二本の炎の矢……というより、炎の塊をティースに向けて放った。
「っ……！？」
（どうする……！？）
考えるより先に体が動く。床を蹴って一本を避けると、もう一本の矢に向かって細波を振るった。
手の平に伝わったのは、滝に向かって剣を叩きつけたかのような、強烈な圧力。
「くっ……！」
押し戻されないように力を込めると、ようやく破壊された炎の塊が破裂して辺りに飛び散った。が、それ自体は、強い聖力に包まれた彼の体には影響しない。
「ふぅん」
ネイルは感心したように頷いて、
「じゃ、これならどうかなぁ？」
まるで未知のものに遭遇した子供のように無邪気な口調。
そしてもう一度、炎の矢が放たれる。
ただし――
「！」
その数は、十本を軽く越え――そしてその一つ一つが、致命傷となるに足る破壊力を秘めていた。
「っ――」
一瞬の“思考停止”
直後、頭にカッと血が上る。
体が熱い――まるで自分の体ではないかのように。
怒り。
魔の命を弄んでいたゲノールト。
人の命を弄ぶタナトス。
人であろうと――。
魔であろうと――。

――ドクン。

口が、無意識に叫びを刻んだ。

「どうして――――！！」

直後――爆音。

幾筋もの軌跡を残し、全ての炎の矢が轟音を伴って突き刺さった。

立ち上る、爆煙。

クスッと笑い声が漏れる。

「……バイバイ、ティモちゃん」

歪んだ口元は愉悦を刻み、瞳は真っ赤に燃え、大きく見開いていた。

――いや。

見開いていた目が、さらに大きく見開かれた。

「？」

愉悦ではなく……〝驚愕〟によって。

そのまま、視線を斜め上に向ける。

そこに――爆煙の中から飛び出してきた一つの影。

「どうして……お前たちはどうして！　そんなことが、平気で！　平気でできるんだァァッ！！」

炎の燃えさかる通路の中。ティースの体は風を切って宙を飛んでいた。

細波が炎を映し、オレンジ色に輝く。

「え――？」

ネイルの目は開いたまま。

動かない――反応できない。

彼女が遅かったのではなく。彼女にとってはあまりにも予想外、予測の範囲外の速度で、ティースの体はその眼前に達していたのだ。

「懺悔しろ……ッ！！」

宙を滑るように、細波が静かに唸りを上げる。水に濡れた刀身が、

風のように鋭く、熱を帯びた空気を切り裂く。
「お前が苦しめた人たちに……償えぇぇエェエッ！！」
「……」
驚きに目を見開いたまま、ネイルは固まっていた。
だが、
「カイくん――ッ」
ハッとしたようにその口から叫びが漏れ、背中の炎が形を変える。
浮かび上がったのは――羽根飾りをかぶり、サーベルを手にした炎人形だった。
「ッ！！」
間一髪。やはり炎で象られたサーベルが、ティースの振るった細波と激突する。
衝撃。
「くぅっ……！！」
反動がティースの両腕を襲い、炎が辺りに飛び散る。
「……」
未だ驚きに目を見開くネイルの眼前で、細波は炎のサーベルによって防がれていた。ジリッ、と、かかとが床に擦れる。
少しだけ、押されていた。
一瞬、全ての動きが止まる。
「……ティモちゃん」
剣を重ね合うティースと炎人形の狭間で、ネイルは見開いていた目を僅かに細め、呟いた。
「キミは、すごく、怖いね。ゼンゼン、見掛け通りじゃなかったね……」
「ッ！！」
衝撃とともに、細波が弾かれた。そのまま炎人形はさらにサーベルを振るう。
ティースもまた、負けじと細波を振るった。
「うぉぉぉぉぉぉっ！！！」

一撃、二撃、三撃――
そのたびに弾ける衝撃音。まるで、本物の剣豪とまみえたかのような手応え。
「……」
打ち合うその間で、ネイルはじっとその状況を見つめているだけだった。
――彼女が炎人形を操っているようには見えない。おそらく自動。
それが彼女の能力。
（強い……ッ、けど――！）
心臓がドクドクと早鐘を打ち、全身を熱い血が駆けめぐっていた。神経が研ぎ澄まされる。視界がクリアになる。熱に浮かされたように、まるで自分のものではないかのような体が、無意識に反応する。
（……見える……見えるッ！！）
とてつもなく高速で繰り出されるサーベルの軌跡。普段なら全く反応できるはずのない次元の速度だというのに――
少しずつ、少しずつ。
彼の繰り出す細波の太刀筋が、炎人形の攻撃を上回り始めていた。
「……」
それに気付いたのだろう。ネイルは微かに眉をひそめる。
「俺は――ッ！」
一際大きな音を立てて、細波とサーベルがぶつかり合った。両腕に渾身の力を込め、ティースは叫ぶ。
「お前たちのようなヤツは、絶対に許さないッ！　人であろうと、魔であろうとッ！！」
「！」
サーベルが大きく弾かれ、そして炎人形の輪郭がまるでノイズのように大きく揺らめいた。
もうネイルを守るものはない。
躊躇はなかった。
男であるか女であるかはもちろん、人であるか魔であるかすらも

関係ない。
今の彼に見えていたのは、打ち倒すべきものであるか、そうでないか、その二つを分ける、たった一つの単純な境界線――
「……」
ネイルは一瞬、目を細めた。その足が、軽くバックステップを踏む。
すぐにその差を詰め、ティースは両手に力を込めた。
カチリ、と、細波が音を立てる。
「逃がさない――ッ！！」
叫びが通路を満たす。
両手で握った細波を、振るう。
詰めの、一撃。
――だが、
「フォルっち」
ネイルの呟きは、未だ僅かな余裕を保っていた。
右手の平をティースに向ける。
「この子を、突き放して」
「！」
浮かび上がったのは、長い髭の騎士。
手にしていたものは、炎の槍――
「くぅっ！！！」
高速の突きが繰り出され、足が止まった。受け損なった一撃が左肩をかすめ、そこから焼け付くような痛みが走る。
「……くそっ！」
「ティモちゃん」
足を止めたティースに対し、間合いを取ったネイルは顔を歪めた。
そこに浮かんだのは、やはり愉悦の笑み――
「私はリューちゃんみたいに危険な戦いが好きなわけじゃないの。だから、バイバイ」
「なにを――」

「バルちゃん」
「！」
再び視界を埋める、炎の矢。
だが、今のティースにはそれを確実に捕らえることができた。
「こんなものッ！！」
細波がその潜在能力を遺憾なく発揮する。彼自身が自覚せぬまま
に、細波はその刀身から微かな水しぶきを迸らせ、剣筋は渦巻く風
を纏って炎矢の威力を削いだ。
周囲に飛び散る、炎の残骸。
「今度こそ――！！」
全ての矢を凌ぎきり、かかとを鳴らして、彼の視線は強い意志を
秘め、目の前の無邪気な邪悪へと向けられる。
――そのときだ。
「……！！」
耳鳴りがした。
地の底から響く振動。その震えが床から体と伝わる。
「な――」
その発生源は……ネイルの足元に急速に集まり始めた、巨大な質
量の魔力だった。
「ルルー」
炎の狩人が姿を消し、足下に広がった炎の中から“何か”が産ま
れる。
燃えさかる炎の中、孔雀の羽のように広がった雪のような白。
それは――“翼”だった。
「なっ……」
一枚、二枚、三枚――神々しいまでの輝きを放つ――十二枚の翼。
そして産まれる、炎の天使。
「！！」
再び耳鳴りが激しくなる。
ネイルの背後に浮かび上がった天使は、その両手に二つの球体を

携えていた。
それは――全てを燃やし尽くす“神の業火”
あまりの魔力に、崩れかけた通路の壁が小刻みに震え、それは床を伝わってティースの体にも到達していた。
パラパラ、パラパラと細かな瓦礫が崩れ落ちていく。
「っ！」
危険を察し、ティースの体は咄嗟に動いた。
後ろ。左右。
……逃げ場はどこにもない。
だから、向かった先は、
「っ……ぁぁぁ――ッ！！」
正面。
どれだけ冷静に考えようとも、この狭い通路、逃げ場はない。
だが――それはあまりにも無謀な賭け。それほどまでにネイルの魔力は圧倒的で、そして凶々しさに満ちていたのだ。
「じゃあね」
笑顔とともに、ネイルの手が小さく“バイバイ”のジェスチャーをする。
何の躊躇も容赦もなく、一撃は放たれた。
「！！」
生ぬるい小さな風が渦を巻いて。
そして天使の手を離れた球体は、ゆっくりと宙に浮かぶと一瞬だけ収縮し――弾けるように圧倒的な質量の波動と化すと、
「――」
轟音を残したまま、ティースの体をアッという間に呑み込んでしまった。

「え――？」

その音だけは、近くにいる街の人々も耳にしただろう。

微かに耳に届いていた破壊音。そして肌に伝わってきた紛れもない魔力の波動。それを感じたリィナが、その発生源へと足を進めていたそのとき。

――空気を伝わったのは、禍々しいまでの力。

王魔であるリィナですら、驚きに足を止めてしまうほどの――

「……」

確信など、どこにもない。だが、何故かその音、その出来事に“彼”が関わっている気がしてならなかった。

（ティース様……ッ！）

その無事を必死に祈りながら。

リィナは寒風の中を駆けていった――。

その6『風の妖精』

パチパチ……。
パチパチ……。
微かな残り火。崩れ落ちた瓦礫の山。
魔を見世物、売り物とし、それによって利益を得る者たち――“デビルスレイバー”ゲノールト。ネービスにおける非合法組織の聖地ともいうべきこのリガビュールの街で一時の栄華を誇った地下組織。
しかし今、それは無惨な姿をそこにさらしている。
ほんの数時間前まで、そこは魔を虐げる者たちによって支配されていた。
だが、今、そこを支配していたのは――
「ご苦労様、ルルー」
微かな風が爆煙をゆっくりと押し流す。そこに君臨していた禍々しい炎の天使は、主人である女性の元にその姿を沈めていった。
ネイル＝メドラ＝クルティウス。
それは炎の将族であり、凶悪な魔の組織“タナトス”の幹部でもある女性だ。
「さて、とぉ」
彼女が産み出す炎の天使の一撃は、タナトスでも横に並ぶ者のない、王魔にも匹敵する魔力を秘めていた。トップクラスのデビルバスターでも、それをまともに受けて無事でいられる者はそれほど多くない。まして、未だデビルバスターですらない青年など、どれだけ優れた素養を持っていようと、生き延びていられるはずがなかった。
そしてネイルは鼻歌混じりに足を踏み出す。
「リューちゃんは、生っきってるっかなぁっ♪」
どちらを望んでいるのかいまいち良くわからない、弾んだ声。

微かな風が、爆煙を払っていく。
風。
「――？」
跡形も残らない、強烈な一撃の痕跡を残しながら。
風が吹いた。
「……」
ネイルの足が止まる。表情が、一瞬だけ怪訝そうになる。
風。
……不自然な、風だ。それは一方向に吹いておらず、爆煙の中心で渦を巻いていた。
そして、
「！」
今度こそ、ネイルの表情が驚きに変わった。
聞き覚えのない人物の声とともに。
「……間一髪、だったね」
ゴッ！！
渦巻いていた風が、アッという間に爆煙を払う。
「っ……」
ネイルは腕で顔を覆った。長い髪がなびき、服がパタパタと泳ぐ。
腕の下から目をこらす。
「……」
その中心。
「！」
驚くべきことだった。跡形も残らない“神の業火”にさらされたはずのその場所に、人の形を留めているものが二つもある。
「――……？」
何が起きたのかわからない表情で、細波を構えたまま呆然と立ち尽くすティース。
髪の毛の先や服の端々に微かに焼け焦げた跡が残っていたが、生きている。それどころか、体そのものにダメージらしきダメージは

見えない。
そして、そこにいた、もう一人。
“風”だった少女は、まるで無重力の中を舞うように、つま先でふわりとティースの眼前に降り立った。
「間に合って、良かった」
ほんの僅かに内側にカールしたセミロングの髪が軽やかに踊り、身につけたヒラヒラした服が微かに宙を泳ぐ。小柄で可憐なその様はとても人とは思えない。
まるで空を自由に舞う――妖精のようだった。
「キミ……は……？」
混乱と、驚愕。
ティースは未だ呆然としていた。自分が助かったのはもちろんわかる。助けてくれたのが、目の前の少女だということもかろうじて理解できた。
が、それでも驚きに変わりはない。
……そこにいたのは、あの少女。娼牢に囚われ、エルバートに良く似ていた少女。彼の家族ではないかと、密かにそう疑っていた少女だった。
だが、
（あれだけの攻撃を……防ぐなんて――）
突如現れた少女の魔力は、桁外れなネイルの一撃を完璧に打ち払っていた。それはもちろん、下位魔や上位魔に出来る芸当ではない。
――ならば、一体？
だが、現状をなんとか整理しようと足掻く彼に、少女はさらに混乱に拍車をかける一言を口にした。
「ティース」
「……え？」
「ティース、平気？」
もう一度、少女はティースの名を呼んだ。
名乗った記憶はない。

「な……なんで、俺の名――」
だが、最後まで問いかける前に、少女は続けた。
「実は最初に見たときもアレ？　と思ったんだけどね。あまりにも大きくなってたし、まさかこんなところにいるなんて思わなかったから。……ティース。ボクだよ」
「え……？」
親しげな声と口調。
――脳裏が刺激される。
そのときになって、彼はようやく気付いた。
「……な……なんでッ！？」
“それ”がひどく聞き覚えのあるものだということ。それが、彼の脳裏の奥に存在する記憶と“全く同じ”だったということに。
だが……それは彼にとって、とんでもない“違和感”だった。
同じ。確かに同じだが、一つだけ、彼の記憶と明らかに違っている部分があったから。
ますます混乱する。
「な……なにがどうなって――」
なにしろ、目の前にいるのは紛う事なき“女の子”だったのだ。
それに……“彼”とはすでに再会を果たしていたはずで――
だが、少女はさらに言った。
「ボクのこと、忘れちゃった？」
「え？　い、いや……だ、だって、エルは――」
さらに困惑するティースに、ついに少女は微かに眉をひそめた。
「もしかして、あのエルバートって子のこと？」
「エ、エルバートぉ？」
彼にとって、それは全く知らない名だった。
そしてその反応で、少女は全てを察したらしい。
「……あの子から事情を聞いて、まさかとは思ったけど」
少女が右手を振るうと、再び一陣の風が吹いて残っていた炎を全てかき消した。そして肩越しに向けた可愛らしい瞳に、微かな不満

の色を浮かべると、
「キミ、二年間も一緒にいて、本気でボクのこと男の子だと勘違いしてた？　……それ、いくらなんでもちょっとヒドくない？」
「……え　ぅ？」
さらに混乱する。
エルレーン＝ファビアス。それはリィナとともに出会い、そして二年間をともに過ごした少年――のはずだった。
だが今、記憶の中にあるエルレーンの姿と、目の前にいる少女の姿が、彼の脳裏で重なり合う。
（あ、あれ……？）
不思議と違和感は、ない。いや、当然と言うべきか。もともとティースも、彼女とエルバートは顔が似ていると感じていたし、そうだと言われて見てみれば、確かにエルバートよりも彼女の方が昔の面影が強かったようだ。
「じゃあ……本当に、君がエル……エルレーン？」
「……呆れた」
少女はため息をつくと、やはり少々憮然とした様子で、
「そりゃ、昔からボクとリィナに接する態度がちょっと違うとは思ってたけど。まさか男の子だと思われてるなんて、さすがに想像してなかったよ……もぉ」
「……」
驚きに口が塞がらない。
それはそうだ。彼は本気でこの四年間……いや、一緒にいた二年間も含めた六年もの間、ずっと彼女のことを男だと思っていたのだから。
だがしかし。口調、声、態度……彼女が“少年”ではなく“少女”であったということを認めてしまえば、全てがピタリと当てはまった。違和感など、どこにもない。
どうやらそれは事実。
そして……数秒、

「……す、すまん」
ようやく事実を受け入れて、ティースは反射的に謝った。それが本当だとするなら、確かに失礼極まりないことだ。
「俺、本気で勘違いしてた……」
別に彼女――エルレーンが特に男っぽいわけではない。ただ単に昔は幼かったのと、彼女の言葉遣いが微妙なラインだったこと、そしてちょっとした勘違い――先入観のせいである。が、今は勘違いしようもない。年齢よりも幼く見えるのは昔と変わらなかったが、今の彼女は紛れもない女の子だった。
「……ま、いいけどね」
だが、ティースの謝罪に、エルレーンはすぐに表情を崩すと、
「キミらしいといえばらしいよ。変わりないみたいで、かえって安心したかな」
おかしそうにクスッと笑って、そしてすぐに視線を正面に戻した。
「詳しい事情は後だね。今はそれよりも」
「……」
その視線の先のネイルは、目を見開いたままじいっとエルを見つめている。どこか惚けたようにも見えるが、戦意を失ったわけではないだろう。
いや、むしろ、
「……すごいなぁ。ルルーの攻撃を吹っ飛ばした人なんて、初めて見たよ」
口調は、どこか浮かれたものだった。
「ルルーはすごいんだよ。ヌーボーもねぇ、ルルーの攻撃を受けて立っていられる人なんて、この世界にはそういないだろう、って言ってたんだから」
「……エル」
「大丈夫だよ」
だが、少女――エルレーンは全く怯むことなく、ネイルを見据えていた。

微かに、風がその髪をはためかせる。
「あの人、確かに信じられないぐらい強い。でも」
きっぱりと、言い切った。
「ボクの方が、強いから」
「バルちゃん」
再び視界を埋め尽くす、炎の矢。
「エル！」
「下がって、ティース」
エルレーンは左手を後ろに向け、前に出ようとしたティースを制止すると、右手をゆっくり持ち上げた。
「！」
直後、ぼうっ、と、その体が淡い緑色の光に包まれる。瞳も微かな輝きを纏ってネイルに向けられた。
そして、口が“呪文”のような言葉を紡ぎ出す。
「風は、いずこより来たりて……いずこへ行くかを知らず――」
口調も先ほどまでとは違う。まるで何かが乗り移ったかのようだった。
……微かにそよ風が吹いた程度。だが、ネイルの放った炎の矢は、そのそよ風に取り込まれるようにあっさりと消え失せていく。
「フォルっち」
だが、ネイルは炎の矢を弾幕にして接近していた。その背後に長い髭の騎士が炎の槍を手に浮かび上がる。
「エル！」
咄嗟に前に出ようとするティース。だが、エルレーンはまるで動じることなく、左手は彼の動きを制止したまま、右手がゆっくりと空を切った。
「されど、風の吹くところ、命が生まれ」
「！？」
再び、そよ風がネイルの両脇を吹き抜け、辺りを包み込んだ。
ネイルの足が止まった。

「え……？」
そして、何が起きたかわからない顔で、自分の背後を振り返る。
「……フォルっち……？」
まるで憑き物が落ちるように、邪悪なる力を込めた炎は掻き消えていたのだ。
「バルちゃん？　カイくん？」
続けて呼びかける。が、反応はない。
「万の邪なる者は、神霊の名の下、蠢き、止まむ――」
さぁっ、と。
涼やかな風が流れ、禍々しさに満ちていた通路を、清涼な静けさが支配した。
「ルルー？　……ルルー！？」
超絶的な破壊の力を持つ天使ですらも。
「……さぁ」
そしてエルレーンは緑色の光を纏ったまま、微かにその衣服をはためかせてネイルを見据える。
「これでもう、キミの力は動けないよ」
「……」
ネイルは驚きの表情で目の前の少女を見つめた。
その目が、徐々に見開かれていく。
（……すごい……！）
そしてティースもまた、驚愕に身動き一つできないままだった。
……あれだけの力を持つ、おそらく将魔であろうネイル。その彼女の力を完璧に封じたエルレーン。小柄なネイルよりもさらに小さな体躯だったが、緑の光に包まれたその存在感は、神々しさすら身に纏っている。
そんな彼女を前に、ネイルは今、あまりにもあっさりと戦う術を失ってしまったのだ。
「それじゃあ……ティース」
そしてエルレーンはゆっくりと問いかける。

「ボクにはまだ事情がよくわからない。だから、この先はキミが判断して」
「――」
それは思いがけぬ選択だった。僅かに躊躇する。
……それを判断することは難しい。圧倒的な力の下、力無き相手に死を宣告することは、純粋な戦いの中で命を奪ってしまうこととは、同じようで大きく違うものだ。まして……ティースという男の性格を考えればなおのこと。彼は視界に入ったものであれば、蟻を踏みつぶすことさえ避けようとする男だった。
だが――
「そいつは――」
体勢不利をようやく悟ったのだろう。
ネイルは間合いを取り、逃げようとした。
「……そいつは、悪だ……ッ！」
唇を噛みしめて、振り絞るようにティースは答える。
声は、微かに掠れていた。
「そいつは――……ッ！！」
「ありがと、ティース。……ゴメンね、嫌な質問して」
エルレーンは最後まで言わせなかった。
再び、風が渦を巻く。
「きっとボクもキミと同じ。でも」
何かを堪えるように、その目が鋭く細められた。
「奪うべき命は、確かに存在するよ。……ティース。ボクは、キミを信じてるから――」
風が周囲で鋭さを増し、やがて肌で感じ取れるほどに圧縮される。
「ボクは、あの人の命を……奪う！」
シュパァァァッ！！
螺旋を描きながら、鋭い風の槍がネイルの背を追った。目にも止まらぬ速さだ。逃げ出した彼女を貫くまでの猶予は、おそらく一秒もなかっただろう。狙いは正確。避ける余裕はおそらくない。防ぐ

手だても、また。それは確実に致命的な一撃。
――の、はずだった。
だが。
「！　あれは……ッ！？」
まるで、最初から示し合わせたかのように。ネイルが逃げた先。崩れた床。地下三階と繋がったその場所から、黒い影が一つ飛び出してきた。
「……」
長身、生真面目で無愛想な表情の男。手に携えたのは、刃がノコギリのようにギザギザになった長い剣だった。
「リューちゃん！」
「ふっ……！」
短い呼吸音とともに、リューゼットはその太刀を振るう。
「！」
衝突。
同時に、無音の衝撃が周囲に波及する。
「……ほぅ」
口から漏れた呟きは、微かに驚きを纏っていた。が、腕に力を込めるだけで、風の槍はその目前で四散する。
「！」
それを見たエルレーンの表情が、少しだけ厳しくなった。
力を、感じたのだろう。
「……リューちゃん！　ねぇ、聞いて聞いて！！」
リューゼットが床に降り立つなり、ネイルはすぐさま踵を返し、口を尖らせて彼に詰め寄った。
「あの子がなんかやった途端、ルルーもバルちゃんも出てきてくれなくなったんだよ！　ねぇ、なんでなんでー！？」
「相性の悪い相手に当たったな、ネイル」
リューゼットはそんな彼女をチラッと見やって、
「あの者が微かながらに纏うのは神気だ。おそらくは王魔。……格

が違う。力押ししか能のない貴様では、百年かかっても勝てはせん」
「ええーっ！　そんなの、つまんない！」
「つまるつまらぬの問題ではない。……さて」
リューゼットはすぐさまティースたちの方へと向き直る。
「ティース。それに王魔の少女よ」
「……エルレーンだよ」
エルレーンの口調には、ピリピリしたものが混ざっていた。それだけ、新たに現れたこの男に対し、脅威を感じていたのだ。
「ほぅ。ならば、エルレーン」
リューゼットは手にしていた剣を手放した。途端、剣は四散する光となって消える。
「貴様は、どうしても戦いを望むか？」
「……？」
不思議そうな顔をしたエルレーンを見て、リューゼットは視線を横に移動させる。
その先にいたのは、ティースだ。
「ティース。私は、この場におけるこれ以上の戦いを望まない。一対一は望めないし、これ以上留まってあまり人の目につくのも好ましくはない」
「ど……どういうことだ……？」
「貴様たちが戦いを望まないのであれば、私とネイルはすぐさまこの場所を去ろう、ということだ」
「ええーっ！？」
その提案に真っ先に意義を唱えたのはネイルだった。
「そんなの、つまんな――！！」
ゴぃン！！！
「……いったぁ～～～～～っ！！！」
「阿呆はしばらく黙っていろ」
肘打ちが額に見事に決まって、ネイルはその場にうずくまった。
が、リューゼットの視線は相変わらず、ティースとエルレーンをそ

の場に縫い止めるように射抜いている。
そして、言った。
「エルレーンとやら。貴様はその、隣にいる男の命を失いたくはないのだろう？」
「……！」
エルレーンの顔が強張った。
……コン。
リューゼットはさらに、ティースに向けて言い放つ。
「そしてティース。この中で、貴様だけは遙かに“低い場所”にいる」
「っ……！」
「このまま戦いになっても、勝敗はわからないだろう。だが、私とネイルがその気になれば、貴様の命だけは確実に奪うことができる。たとえその後、我々が負けるとしても、だ」
「……」
言い返せない。悔しいことだが、それはおそらく事実だった。
コン。……コツン。
「さて、どうする？」
「……」
「……」
沈黙。
複雑な感情が、ティースの中で渦巻く。
（ここで……こいつらを逃がせば――）
タナトス。
ザヴィアだけではない。ネイルもまた、許し難い悪だった。リューゼットも……未だ信じられないことだが、その仲間だという。ここで彼らを逃すことは、新たな惨劇の種を世に放つことにもなるだろう。
だが――
「……エル」

「ボクは――」
エルレーンは言いかけて淀み、少しだけ視線を泳がせた。が、最後まで言わなくともわかる。
そこに浮かんでいた色は、明らかに戦いに否定的だった。
（――情けない……）
理由は、考えるまでもない。ティースの身を案じてのことだろう。
――コツン、コツン。
拳を握りしめた。
彼は、この場ではあまりに無力だった。少なくとも、戦局を左右するだけの力は持っていなかった。
彼らに対する怒りは変わらない。つい先ほど、目の前で短い生涯を閉じてしまった少女のことも忘れていない。“それだけの力”を持っていたなら……いやそれどころか、もし自らの命が危険にさらされるだけならばおそらく、彼は戦いを是としたに違いなかった。
だが、この戦いに賭けるものはそれだけではない。
コツン。……ゴン。
「……わかった」
ティースは答えた。……そう答えることすら、今の彼には屈辱的だった。
本来、彼には選択肢を得られるだけの実力もない。彼がそう答えられるのは全て、隣にいるエルレーンのおかげなのだ。
しかし、そのエルレーンとて、ネイルとリューゼットの二人を相手にすればどうなるかわからない。事実、リューゼットは彼女の攻撃を造作もなく一刀両断していた。自信ありげなその態度も、決してハッタリとは思えない。
自らが手助けできない以上、それほどの危険を、この再会したばかりの昔馴染みに押しつけられない。
それが、決断を促した最後の理由だ。
そして、
「この場は――」

彼がそう言いかけた、そのときだった。
ゴン……ゴぃン！！！
「……っ！！」
リューゼットの後頭部を、一際大きな瓦礫がクリーンヒットした。
ドスン……ゴロゴロゴロ。
大きな破片が転がっていく。
「……」
「……」
「……」
一瞬の沈黙がその場を支配する。
言いかけたまま、思考停止したティース。
びっくりした顔で目を見開いたエルレーン。
そして、頭を垂れた体勢で固まったリューゼット。
……微妙な空気が流れた。
「ネ……イル」
だがそれは次第に重く、異様な気配を帯び始める。
「貴様には“状況”というものすら理解できんのか……」
ゴゴゴゴゴゴゴゴ。
ゆらりと。明らかにいつもとは違う雰囲気のリューゼット。
だが、その後ろ、ネイルはまるで言葉が聞こえていないかのようにしゃがみ込み、転がっていた壁や天井の欠片を次々とリューゼットに向けて放っていた。
……ゴン。
また一つ。
リューゼットは首を振って、少し赤くなった額を押さえながら、
「ネイル……答えろ」
だが、ネイルはそっぽを向いて何も答えない。
「……」
「……」
「……」

「……」
「……だってぇ」
ようやく、ネイルは口を開いた。
「リューちゃん……しばらく黙ってろって言ったじゃない」
「……」
その瞬間、その場の緊張感を保っていた何かが、キレた。
ドォォォォン！！！
「……うわぁっ。リューちゃん、すごい、すごぉい」
「死ね。貴様は死ね。馬鹿は死ななければ直らん」
手に産まれた、とてつもなく巨大な光のハンマー（？）を振り回すリューゼット。
「だ・か・ら、馬鹿は馬鹿って言った方が馬鹿なんだってば！　……あれぇ？　でもそーすると、馬鹿に馬鹿って言った人も馬鹿になるんだから――」
リューゼットの攻撃を巧みに交わしながら、ネイルはうーんと考えて、
「あ、そっかぁ。結局、みんな馬鹿なんだぁ！」
「……」
ガスッ！　ゴガンッ！　ドォォォォォォン！！！
爆音と土煙を上げながら、二人の姿は徐々にティースたちの視界から消えていった。
――敵役にあるまじき、あまりにも緊張感のない去り方。
だが、しかし――
「っ……」
グッ、と、握りしめたティースの拳に、悔しさが満ち溢れていた。
……ふざけているようにも見える、二人の敵。そんな彼らに対してすら、隙を見出すことのできなかった自分に。
（くそっ！）
戦いは、終わった。囚われた魔を助けるという目的は達していた。
本物のエルレーンにもこうして出会うことができた。なのに……清

々しい気持ちはどこにもない。
今の自分にはそれが精一杯だとわかっていても。悔しい気持ちは拭い去れなかった。
「……ティース。行こ」
その気持ちを少なからず察していたのか。エルレーンもまた、再会の喜びは後回しに、今はこの場からの離脱を彼に促した。
「これだけ暴れたら、ココもいつ崩れるかわからないよ」
「……ああ」
それは正しいし、理解もしていた。
だが、ティースには一つ、ここにやり残したことがある。
「……ティース？」
怪訝そうなエルレーンの声を背に、ゆっくりと歩いていく。
――崩れ落ちた瓦礫。微かな残り火。
あれだけの戦いの中にありながら“その場所”だけはそのままの状態で残っていた。
「俺は……また、守れなかったな……」
微かに覗く赤いドレスの切れ端。
その目前に、膝をついた。
「セルマ……ごめん、な……」
「ティース？」
後ろからやってきたエルレーンも、そこに積み重なった大量の瓦礫と、その隙間から覗く赤いドレス、流れ出す赤い血に、すぐ状況を察したのだろう。
「……そっか……」
そして微かに視線を伏せる。
だが、その直後、
「！？」
次の彼の行動を見て、エルレーンは血相を変えた。
「え……え？　ちょっと待ってよ、ティース！　何をする気！？」
「……」

ゆっくりと瓦礫に手を伸ばしたティースは、そのまま振り返らずに答えた。
「女の子がいるんだ。……まだ、子供だった。せめて、きちんと埋葬してやりたい」
「だ、だって、この瓦礫の下なんでしょ？　……ティース……キミ――」
「……心配するな。別に気が触れたわけじゃない」
瓦礫が崩れないように、ゆっくり、ゆっくりと力を込めていく。
声は哀しみに染まっていたが、比較的冷静だった。
「何度も経験した。俺は力不足だから。仕方ないって……でも、割り切れないから、全部持っていくことにしてるんだ。初めてじゃない。前にも、似たようなことがあった。そのときはきつかったけど、リィナのおかげで今はもう大丈夫だ」
「リィナの……？」
エルレーンは再び瓦礫を見つめる。
……その下にあるものが、どんな状態になっているかは想像に難くない。埋葬するにしても、全てを持っていくのはおそらく不可能な状態だろう。
「エル。……お前は見るの嫌だろ？　先に行っててくれ」
ググッ……と、上に乗っていた大きな瓦礫が微かにズレる。崩落した天井はそれほど細かくは割れずに、大きな破片のままそこにあった。そのため、人一人の力で持ち上げるのは不可能だ。少しずつズラしていくしかない。しかも、瓦礫が崩れないように注意しながらだと、体の一部が現れるまでと考えても何時間もかかる作業だろう。
「……」
しばらく、エルレーンは迷うようにその作業を見つめていたが……やがて、
「……手伝うよ」
「エル――」

「とんだ再会になっちゃったね」
その足下で風が渦を巻く。
「……すまん」
「男の子と勘違いされてただけでも、充分にヒドい再会だけどね」
「う……それもすまん」
風が吹き上げると、ティースの腕に感じる瓦礫の重さが半分以下になった。
「っ！」
力を込めると、少しずつ瓦礫が持ち上がっていく。
少しずつ、少しずつ。
赤いドレス。微かに流れ出した赤い血。目を背けたくなったが、ティースはそれをグッと堪えた。
（セルマ――）
脳裏を襲う、この数日間の記憶。
常に潜入任務と隣り合わせで、純粋にそれを楽しむことはできなかった。が、それは彼にとっても、決して苦痛ではなかった。
いや、もっと言うならば……確実に“楽しい日々”だったのだ。
（俺は……君の淋しさを、ほんの少しでも癒してあげられたのかな……？）
目の奥が熱くなる。いくら堪えようとしても、何度経験しようとも、それは決して耐え難いもの。
（ごめん……ごめんな……）
そして一筋、涙がこぼれ落ちる。

と――そのときだった。

「……え？」
エルレーンが突然、素っ頓狂な声を上げる。
「？」
怪訝な顔をしたティースの視線には構わず、彼女は続けて眉間に

皺を寄せ……そして直後、急にハッとしたかと思うと、
「……ちょっ、ちょっと待って、ティース！！」
「え？」
「あ、違うよ！　力は抜いちゃダメッ！！」
「え……っ！？」
慌てて力を込め直す。カラカラと細かい瓦礫が足下に転がった。
「ど……どうしたんだ……？」
当然のように不満の声を漏らすティース。だが、エルレーンはそれに構わず、やや耳を澄ませるような仕草をした。魔特有の大きな耳がほんの微かに動く。
「……？」
やがて、
「ティース……この子、瓦礫に巻き込まれたのはいつ？」
「え？　そりゃ……十分ぐらい前か――」
その後の戦いで、やや時間の感覚がおかしくなっている。実際のところは五分も経っていないだろう。
だがそれを聞いて、エルレーンは何やら確信したらしい。
そして、言った。
「この子、生きてるよ……」
「……へ？」
「生きてるよ、この子！！」
理解していない表情のティースに、エルレーンは繰り返した。
「瓦礫の下で生きてる！　潰されてないよッ！！」
「な――」
その意味が、彼の頭の中で形を為すのに、数秒。
「なんだってぇぇっ！！？」
「あ！　待って！　動かしちゃダメッ！！」
「っ……ふぬっ……！」
微かに瓦礫を持ち上げた体勢のまま、ピタリと制止するティース。
が、その体勢はややきついらしく、足がガクガクと震える。

「エ……エル……ッ！！」
顔が真っ赤に染まり、こめかみの血管がピクピクと震えていた。
「慎重に、慎重にやってね」
吹き上げる風がほんの僅かに強さを増す。それとともに、ティースの腕にかかる重さも少しずつ緩和されていった。
「呼吸が聞こえる。そんなに大きく乱れてないよ……大丈夫。普通に生きてるから」
大丈夫、とは言うものの。そんなエルレーンの言葉が、彼に充分すぎるプレッシャーをかけていた。
ゆっくり、ゆっくりと瓦礫が持ち上がる。
……ミシッ！
「！　……エル……」
「しっ」
持ち上げようとした瓦礫の中心に、ほんの小さなヒビが走っていた。
――もし、これが崩れたなら。
そう考えると、ティースは気が気でなかった。
風が、さらに強さを増す。
ぼうっと、再びエルレーンの全身を緑色の光が覆うと、
「大丈夫。風は、命を産み出す力だから」
そう言った。
ティースにとっては初めて聞く言葉だったが、今はそれに縋る気持ちで一杯だ。
（セルマ……）
少しずつ、少しずつ、赤いドレスの先――小さな指先が見えてくる。
（……これは――）
そこまできて、ようやく理解した。
（奇跡だ……）
最初に崩れ、彼女を襲った壁の残骸。それが周りを囲むように積

み重なり、その隙間にうずくまるようにしていた彼女を、天井の崩落から守っていたのだ。

もちろん、まだ安心はしていない。いくらエルレーンの言葉を信じるとしても、かなりの血が流れているのは事実。どこか大きな怪我をしていると見るのが妥当だ。が、少なくとも、先ほどより希望のある状態であることは確かで。

（見えてきた――）

指先、腕……その先に、ボロボロになった赤いドレスと――

ピシ……

「！」

ティースの手を微かな振動が襲った。

ピシ……ミシミシミシ……ッ

「エル……ッ！！」

「ティース！　……吹き飛ばされないように踏ん張って！！！」

それは、持ち上げようとした瓦礫が崩れ落ちるのとほぼ同時だった。

ゴ……ッ……！！

エルレーンの体を纏うオーラが輝きを増し、途端、床から吹き上げていた風が暴走したかのように威力を増す。

「うわっ……うわぁぁぁぁっ！！！」

踏ん張る以前の問題だった。ティースの体はアッという間に浮き上がると、まるで木の葉のように吹き飛ばされてしまう。

「うっ！！」

何とか受け身を取って急所を庇う。瓦礫の破片が突き刺さったのか、手の平に鋭利な痛みを感じたが、そんなことは無視してすぐ視線を戻した。

「セ……セルマは――ッ！？」

「ゴメン。大丈夫、ティース？」

振り返ったエルレーンは、緑の光に包まれたまま、ニッコリと笑みを浮かべていた。

「無事だよ。怪我はしてるけどね」
瓦礫に埋まるセルマを中心に、風が強烈な渦を巻いていた。彼女の上を覆っていた瓦礫は二メートルほど吹き飛ばされ、そこで粉々に砕け散っている。
「……無事……なのか？」
「うん」
もう一度、エルレーンは答えた。
「……」
風が、止む。同時に、彼女を覆っていた光も消えた。
ふらっ……と立ち上がり、ティースはゆっくりと近付いていく。
「……うわ……っと」
撒き散らされた瓦礫に足を取られ、転びそうになりながら。
――瓦礫の中。
「ホントだ……」
初めて、自分の目でそれを確認した。
「生きてる……」
丸々としたほっぺは汚れ、赤いドレスはところどころが破け、外気にさらされた右足からは血が流れている。その傷は決して浅くはない。
が、しかし。
「生きてる――」
頬に触れると暖かい。……あの、命の灯火が消えた直後の、嫌な生暖かさではなく。鼓動の感じられる暖かさだった。頭などの急所にも怪我はまったく見当たらない。
「……よかったね」
「っ！！」
何気ないエルレーンの一言。
その一言に、どうやら彼の涙腺は決壊してしまったようだ。
「っ……っ……！！」
俯き、言葉にならない嗚咽を漏らす。

――助けることができた。そう言ってしまうには、あまりに都合が良すぎるかもしれない。それはあくまで偶然であり、彼の力に依るところではないだろう。

だが――

「……良かった……」

どうでもよかった。自分が役に立てたかどうかなど、些細なことだった。

「良かった……ッ！」

怪我に触れないように、セルマの体をゆっくりと抱きかかえ、そっと抱きしめる。

「良かったぁぁぁぁっ……」

「……」

そんな彼を、エルレーンはしばらく、まるで自分のことのように見つめていた。微かに目を細め、少しだけ彼と同じように瞳が潤んでいるようだ。

が、やがて、尖った耳を微かに動かして、

「……そろそろ行かなきゃ、ティース。人が集まってくるみたいだし……その子も、医者に見せないと、ね」

「あ……ああ」

その言葉にようやく我に返り、涙を拭うと、力強く頷く。

考えなくてはならないことはあった。が、今はとにかく、彼女が生きていたことの喜びで頭が一杯だった。後のことは、彼女の意識が戻ってからでいいだろう。

こうして――リガビュールの事件は最後にほんの僅かな光を残し、ひとまずその幕を閉じたのである。

その7『二ヶ月の代償』

ゲノールトの事件から約一ヶ月。

「うぅ……寒っ」

年をまたぎ、寒さはさらに勢いを増していた。リガビュールの街には半月ほど前に雪が降り、それがそのままうっすらと積もったまま。さすがに夜の客引きたちも薄着の上に上着を着込んだりと、寒さ対策をしているようだ。

とはいえ――今は昼。リガビュール名物の歓楽通りも、今は静まり返っていることだろう。

そんな至って健全な街の通りを、ティースは手に息を吐きかけながら歩いている。

すぐ近くの広場にはいくつか店も出ているが、客足はいまいちのようだ。

「気をつけないと、道もすべっ――おわっ！！」

言った途端、足を取られてコケる。

「……いたた」

痛いやら情けないやらで、顔を歪めながらティースはゆっくり立ち上がった。そこからはさらに慎重に、まるでがに股のようになって歩き出す。

「つめた……まいったなぁ」

ズボンにはいかにも“コケました”と言わんばかりの濡れた跡が残り、どうにも情けない。が、まさか宿に着替えに戻るわけにもいかないし、仕方なくそのまま向かうことにした。

表向き、街は平穏だ。事が事だけに、半月前の事件は一般にはほとんど公にされていない。エルバートを含むキュンメルのメンバーも、未だ街に隠れているのか、あるいはすでに脱出したのか、あれ以来、音沙汰がなかった。

『申し訳なさそうにしてたよ、あの子』

というのは、エルレーンが語った、エルバートの最後の表情である。結果的にティースは騙されていたということだが、別にそれについての遺恨はない。結果的に彼の行動は、ティース自身の主義にも沿ったものであったし、その必死な気持ちは充分に理解できていたから。

ちなみに彼がエルレーンに似ていたのは単なる他人の空似。彼が最初、目印の灰色のローブと赤いリボンを身につけていたのは、最初にゲノールトに侵入した際、エルレーンのものを借りてきたそうである。確かに思い返してみれば、不自然な部分は多かったのだが……思い込みは恐ろしい、といういい教訓だろう。

向かった先は、街の小さな診療所。そこですぐに手続きを済ませる。金は……さすがに一ヶ月分の宿代と合わせると手持ちが乏しかったので、申し訳ないと思いつつも、ミューティレイクの紋章を示し、そっちに付けてもらうことにした。とはいえ、戻れば貯蓄がいくらかあるはずだし、どうにかすぐに返せる金額である。

一ヶ月。

それは、セルマの怪我が完治するまでにかかった日数だ。未だ足の傷跡は痛々しいが、普通に歩く分には支障無いところまで回復していた。

（さて、と……）

これでもう、この街でやり残したことはない。

「ティース様」

「ん……？」

宿の前まで戻ると、そこにはリィナが小さく手を振っていた。淡い水色のセーターに白のロングスカート。つい最近、この街で買った服だ。

「リィナ」

そんな彼女を見て、改めて胸が高鳴る。

無骨な旅用のローブとは違い、普段着の彼女はますます魅力的だ。

ずっとその格好でいて欲しいとさえ、ティースは思った。
「二人は？」
「中にいます。……全て、片付きました？」
「ああ。終わったよ」
「じゃあ、いよいよ出発ですね」
ニッコリと微笑んだ。
待ち侘びた、という表情。ある程度落ち着いてからこの数日というもの、彼女はもう一人の昔馴染み……シーラとの再会を心待ちにしている様子だった。
「ここからだとホルヴァートを経由して、ネービスまで一週間ってとこかな」
「楽しみです。……でも、ちょっとだけ不安もあるんです」
「ん？」
二人で宿の入り口をくぐっていく。
「確か“人”の世界は、仕事をしてお金を稼がなければ生活できないんですよね？　……私、この世界の常識には疎いですし、上手くできるかどうか……」
「ああ……でも、心配ないよ。こっちの世界に慣れるまでは、俺が何とかするからさ」
だが、自信ありげにそうは言ったものの、実は彼の心も不安で一杯だった。その不安の正体はもちろん、これから帰る先、その状況のこと。
（やっぱクビ、かなぁ、俺……）
彼がそう考えたのは至極当然である。事情はどうあれ任務中に勝手に隊を抜け、そしてすでに二ヶ月間も音沙汰なし。普通に考えればとっくに除隊されていておかしくない。
戻って、こっちで使った医療費を返し、なおかつリィナとエルレーンをもしばらく養う。また傭兵家業に戻ったとして――実のところ、単純に考えても少々厳しい気がしていた。
（……あ、それに）

もう一つの要素をすっかり失念していたことに気付く。
（セルマの養育費も必要だし……）
セルマ＝ゲノールト。結局、ティースは彼女をネービスに連れていくことに決めていた。それは彼女自身の意志とも相談した結果である。
あるいはこの治療期間に、ゲノールトが彼女を迎えに来るかもしれない、とも考えていた。が、結果的には誰一人として姿を見せることはなく――噂によれば、ゲノールト総帥は生死不明とも耳にする。それほど、ネイルとリューゼットは徹底的にゲノールトを叩き潰していったのだ。
（……でも、ま）
ひとまず考えるのをやめ、そしてティースは肩の力を抜いて深呼吸する。
（生きてるんだ。どうにかなるさ）
「……ティース！　おかえりっ！！」
「うわっ！　……うぷっ！」
扉を開けた途端、まるで待ち伏せしていたかのようなタイミングでセルマが飛びついてきた。
ここに来てから金銭的な理由もあって間食を止めてはいたが、それでも急に痩せるなんてことはあるはずもなく、相変わらずその背丈の割には激しく密度の濃い衝撃である。
「セ……セルマ。急に飛びついてくるのは止めてくれないか……心臓に悪い」
「ええ、なんでー？」
「おかえり、ティース」
奥では、エルレーンがおかしそうにクスクスと笑っていた。頭には大仰な包帯。……と言っても、怪我をしたわけではない。魔の証である尖った耳を、主にセルマに対して隠すためのものだった。もちろん彼女には、怪我をしているのだと言い含めてある。
少し間をおいて、後ろからリィナが部屋に入ってくると、

「では、そろそろ準備をしましょうか。九時半には馬車が出るはずですから」
「ああ、そっか。馬車で移動するのも久々だなぁ」
普通なら徒歩で行くところだが、今回はセルマも一緒のため、街道を走る馬車を利用することにしたのだった。もちろんそのための資金は別に取ってある。
「さ、行こうか」
「うん！」
元気良く返事をし、真っ先に宿を飛び出したセルマ。
「あ、セルマ。ダメだよ、勝手に行っちゃ。……ほら、ティースが淋しがるから」
それをエルレーンが追いかけていく。
「えぇー。じゃあ、早く早く！　エルも早く！」
不思議とウマが合うように見えるのは、エルレーンも幼いから……ではなく、その逆だ。彼女は見掛けとは裏腹に精神的には非常に大人びた人物であり、セルマとの付き合い方もすぐに悟ったようである。
そんな二人を視線の先に捕らえながら、ティースの隣のリィナがそっと呟いた。
「エルさん、まるで頭を大怪我をしたみたいですね」
「……まぁ」
耳を隠すほどなので、かなり大げさに包帯を巻いている。今はその上から帽子をかぶっているのでそれほど目立たないが、頭の半分は包帯に隠れていると言ってもいい。
「夏だったら汗掻いて大変だったって、冗談交じりに愚痴ってたなぁ」
笑いながらティースが答えると、リィナは苦笑しながらも申し訳なさそうに、
「少し、悪い気がします。本当はエルさんが先のはずなのに……」
答えた彼女の長い髪が、ふわっと微かな風に踊った。

――そんな彼女は、エルレーンと違って頭に包帯も巻いていなければ帽子もかぶっていなかった。馬車で移動するため、服装もほぼ普段着のまま。

「そうかな。エルは別に気にしてないと思うけど」

言いながら、ティースは自らの左手の甲を見つめた。

何の変哲もない、左手。だが時折、そこに自らの体温とは違う不思議な暖かさを感じる。

そこに埋め込まれたのは――刻印型の破魔具“朧”だ。

――それは、あの事件が終わった翌日の早朝のこと。

「これが“朧”だよ」

無事に再会を終えたティース、エルレーン、そしてリィナの三人は、新たにもう一つ借りた部屋に集まっていた。そして集まるなり、エルレーンが二人に向かって差し出したのは、何とも言い難いまるで古代文字のようなものが描かれた、手の平サイズの透明なプレートである。

「これが……？」

「朧、ですか？」

ティースもリィナも不思議そうな顔で見つめる。確かにそれは、ただ透明なプレートに変な文字を書き記したものにしか見えない。

「うん。でも、朧本体はこの文字の方。プレートは朧をしまっておくための容器なんだ」

「ふぅん……」

ティースは不思議そうに受け取り、裏返したり透かしたりしてそれを見ていた。

「……でも、エル。お前、これをどうやって手に入れたんだ？　モンフィドレル領に行ってたって聞いたけど……」

「あ、うん。それはね」

ティースが返したプレートを受け取って、エルレーンは答えた。

「モンフィドレル領に知り合いがいるの。ボクが子供の頃、こっちの世界のことを色々教えてくれた人で、ボクがこっちに興味を持つようになったキッカケなんだ」
「その人も、やっぱり魔なのか？」
「うん、もちろん。今は人と結婚して、そこで学者さんをやってる」
「……へぇ」
彼女は何でもないようにサラッと言ったが、それは一般的な常識人が耳にすれば驚きに飛び上がってしまうほどの事実である。
「効果は……二人とも、知ってたよね？」
無言で頷くティースとリィナ。
“朧”――それは魔が人に姿を変えるためのアイテムだ。人と魔の間に交わされた誓約によって効力を発揮し、その代償は約八割ほどの魔力。だが、その代わり、効力は半永久的であり、誓約を交わしたどちらかが命を落とすまで続く。逆に言えば、どちらかが死ななければ効力を取り消すことはできない、ということだ。
後戻りは出来ない。
エルレーンは今一度問いかけた。
「リィナ。これを使ったら、もう向こうには戻れないよ」
「ええ」
だが、リィナは即答。
次に視線はティースを向く。リィナに向けたものと比べると、そこにはほんの僅かな躊躇いがあった。
「……ティース。ボクは、キミがこんな仕事をして、あんな人たちと戦ってるなんて、思ってもいなかったんだ」
前日の出来事を思い返すように、視線が泳ぐ。
「これを使っちゃったら、もし昨日みたいなことがあっても、ボクもリィナも、もうキミを助けてあげられない。実際使ってみないとわからないけど、とても昨日の二人に対抗できるだけの力は残らないと思う。それでも――」
「……やめてくれよ、エル」

だが、ティースもまた、笑いながら即答した。
「それじゃあ俺があまりに情けなさすぎるじゃないか。……そりゃ、俺にはまだ力がない。今の二人には遠く及ばないし、そうなるまでに何年かかるかわからないし、もしかしたらそこまでの才能はないのかもしれない。……でも、俺は二人の夢を叶えてあげたい。そのために努力することぐらいできる。それに　――」
少しだけ、引き締める。そしてグッと、拳を握りしめた。
「……あいつらは俺自身の力でどうにかしたいんだ」
エルレーンはその気持ちを理解したようにゆっくり頷いて、
「うん、わかった。ティースのそういう前向きなとこ、ボクは好きだな」
「……はは。サンキュ、エル」
と、ティースは笑って答えたが、
（……前向き……か）
それはやや思いがけない言葉だった。
サイラスとナナンの死を目の当たりにして以来、彼はずっと後ろ向きだった。過去を引きずり、後悔することで強くなろうとしていた。
――だが。
（なんとなく……ギレットさんの言いたかったことがわかった気がする）
後悔することでも人は強くなれる。だが、それは強い憎しみによって、だ。
「大丈夫。……強くなる」
自らに言い聞かせるように、ティースは呟いた。
（ここにいる二人のために……俺自身のためにも――）
「じゃ……リィナ。準備はいい？」
だが、リィナは少し躊躇して、
「いいんですか？　私よりもエルさんが先に――」
「ううん。ボクはほら、小柄だし、リィナより目立たないから後で

いいよ」
　理由になっているのかいないのかわからないが、とにかくエルレーンは準備を進めた。
「それにティースも、男か女かわからないお子様より、大人っぽいリィナが相手の方がいいよね？」
「……もう許してくれよ」
「ふふ、冗談」
　笑って、朧のプレートを二人の間に掲げる。
「じゃ、プレートを挟んで、お互いの左手と左手を合わせて。……大丈夫だと思うけど、二人が心から朧の効果を願わないとダメだからね」
　ピタッと、ティースとリィナの左手の間でプレートが挟まれる。
「……」
「……」
　二人の視線が一瞬だけ交わされた。
　ティースは不思議な気恥ずかしさを感じ、慌てて目を閉じる。
（な……なんか緊張するな……まるで結婚式――）
　思わず想像した単語に、ますます頭に血が上った。
（な、なに考えてんだ、俺……相手はリィナだぞ。リィナ……リィナ――）
　気持ちを落ち着かせるべく、念じるように過去の映像を思い浮かべる。
（……そうそう。確か昔のリィナは無愛想で、ホントに非常識だったんだよなぁ）
　あの薄暗い屋根裏。あの頃の彼女は“おはよう”とか“おやすみ”という挨拶すら知らなかった。笑うことだって、ほとんどなかったのだ。
（それが今では――）
　昨日、ティースの無事を確認したリィナは、安堵した表情を見せた後、きちんと説明せずに姿を消したことに対し、微かな怒りを彼

にぶつけてきた。彼としてはエル――だと思っていたエルバートに止められたこともあり、仕方ない部分もあったのだが……それでも素直に謝った。

それは彼女が、心から自分を心配していたからだと、そう感じることができたからだ。

ようやく動悸が収まって、ゆっくり目を開く。

と――リィナはそんなティースを、不思議そうに見つめた後、

（っ！？）

小さく微笑んだ彼女に、心臓が再び跳ね上がった。

（……何やってんだろ、俺……）

「二人とも、目を閉じて」

プレートを中心に、微かな光が二人を包んでいく。

朧によって結ばれる絆。それさえも、今のティースには喜ばしいものだった。

錯覚であれ、それが彼女との繋がりを永遠にしてくれるような、そんな気さえしていたから――

「そういやずっと聞き忘れてたけど……エル」

舞台は再び現在へと戻って。

すでにティースたち四人は、二頭立て四人乗りの馬車に乗り込んでいた。盗賊対策のため同じ目的地の馬車がいくつも集ったこの一行は、リガビュールから約百八十キロほど離れたホルヴァートへ四日、さらに百二十キロほど離れたネービスへ三日、合計一週間かけて到着する予定である。

「お前、どうしてゲノールトに捕まってたんだ？」

馬車に揺られ始めるなりセルマはすぐ眠気を催したらしく、今はティースの膝の上に頭を乗せて眠っていた。そんな彼と向かい合う二人掛けの座席にリィナとエルレーンが並んで座っている。

「うん」
エルレーンは頭に巻いた包帯をほどいてやや軽めに巻き直しながら、
「リガビュールには十一月の頭ぐらいには到着してたんだよ。それで、あとはリィナを待つだけだったんだけど……そこにいるうちに、ゲノールトの噂を聞いたの。そしたら、居ても立ってもいられなくなって――」
「わざと捕まったのか？」
「うん。――もしかしたら、偉い人に直接文句を言えるチャンスがあるかなって」
ティースは呆れ顔をする。
「……それ、無謀すぎ」
彼に無謀と言われるのは、密かに結構ショックなことだと思うのだが……それはともかく、エルレーンは素直に頷いて、
「それはわかってたんだけど、他に方法がなかったんだよ。……今回みたいにあまりにも騒ぎを大きくすると、リィナと待ち合わせるのに支障が出ると思ったし。ボクら、こっちの世界に家があるわけじゃないから、もし待ち合わせに失敗したら、二度と会えなくなる可能性だって高いんだもの」
「まぁ……」
それでも無謀なことに変わりはなく。
ただ、彼女の名誉のためにここで断っておくと、本来の彼女はそこまで無謀でもなく、考えが足りないわけでもない。今回の状況は彼女の信念にとって、どうしても動かざるを得ないものだったのだ。
それを知っているティースには、一応彼女の心情は理解できた。
「あ、聞き忘れたといえば……ティース」
ふと思い出したように、今度は逆にエルレーンが質問を口にする。
「キミ、シーラと結婚したってホント？」
「え？　あ……ははは、お前までそんな話を聞かされてたのか」
苦笑いのティース。もちろん二人はティースの故郷であるカザロ

スまで行動をともにしていたのだから、同じ噂を耳にしていてちっともおかしくない。
「あ、エルさん。それはやっぱりデタラメだそうですよ」
嬉しそうにニコニコしながらリィナが答える。
……相変わらず、彼女の中での結婚は“悪”のようだった。
「そっか」
対するエルレーンの方は少し微妙な反応だ。彼女の方はリィナと違い、こちらの結婚の意味を知っている。だからこそ、だったのだろう。
「じゃあ駆け落ちっていうのは、やっぱりシーラの勉強のためなんだね」
「ああ。って、そもそも駆け落ちなんかじゃなくて……エルならわかると思うけど、あいつもう少しで――」
「うん、わかる。カザロスの人もそれらしい話をしてたから。だから、駆け落ちだと思われたんだと思うし」
「？」
リィナ一人が会話の流れを理解していないようだった。
「でもそれ、多分シーラの方から言い出したんだよね」
「そりゃそうさ。……考えてもみろよ。俺が自分から連れ出せると思うか？」
冗談交じりに笑ったティースに、エルレーンはちょっと考えて、
「女の子としては、少しはそういう強引さがあってもいいんじゃないかと思うけどね」
「はは……あいつ相手にそんなことしたら、こっちが蹴っ飛ばされちゃうよ」
彼は至極当然のようにそう言ったのだが、
「……え？」
エルレーンは理解できない顔で素っ頓狂な声を上げた。
「シーラが？　ティースのこと蹴っ飛ばすの？」
「え？」

逆に驚いたティース。だが、リィナもエルレーンと同じようにびっくりした顔で見つめていた。
「あ、そっか」
その理由に気付く。
（あの頃のシーラって、まだ今みたいな感じじゃなかったっけ……）
口調などは今とさほど変わっていない。が、彼に対し、今のように明らかに邪険な態度を取ることなどはなかったのだ。
ティースは苦笑して、
「今じゃ、ね。顔を合わせるたびに邪魔者扱いだよ。……ああ、いや、本当に直接蹴っ飛ばされるなんてことはほとんどないけどね」
だが、二人の驚きの表情は変わらないまま、
「ティース様を邪魔者扱いだなんて……シーラさんが、そんな……」
「あの、ティースにベッタリだった、シーラが……？」
「ベッタリってほどだったかなぁ……？」
実際はそうでもなかったのだが、その頃、ティースが二人を訪れるときは必ずと言っていいほどシーラと一緒だった。だから彼女らの目にはそう映っていても仕方あるまい。
（今と比べものにならないほど良好な関係だったのは確かだけど……）
一瞬の沈黙に、馬車の音が大きくなる。
「……だから、さ。二人ならきっと大丈夫だと思うけど、もしかしたら、昔とは少し勝手が違うかもしれないよ」
「……」
「……信じられません」
無言で思案顔のエルレーンに、リィナの呆然とした呟きが重なった。
そして再び、少しだけ重い沈黙。どうやらティースの語った事実は、二人にとって想像以上にショックだったらしい。
「はは、まぁ四年も経ってるしな」
そんな雰囲気を振り払うように、ティースはやけに明るい声を出

した。
「結構、色々と変わっただろ？　俺のアレルギーとかさ」
「……そっちは変わったとかのレベルじゃないよね」
考えるのを止めて、エルレーンがすぐさま話に乗ってくる。
「それってボクが触れてもダメなのかな？　セルマが大丈夫なんだから、とりあえず子供には反応しないんだよね？」
「多分……アウトかな。俺の経験からすると、子供っていってもせいぜい十二歳ぐらいがギリギリで……エルは確か、えっと十三――」
「十五だよっ！　あと三ヶ月で十六！」
「あ、そ、そっか」
だが、エルレーンはまるで迫力のない可愛らしい瞳で不満そうに、
「今の、絶対ワザとだ。シーラと一週間しか違わないって、覚えてないはずないもの」
ティースは苦笑を返した。……もちろん意図的だ。そんな冗談が飛ばせるほど、心には余裕ができていた。
ちなみに、一週間だけエルレーンが年上なのである。
「ま、なんにしろ、エルは確実にアウトだと思うよ」
「でも、シーラは大丈夫なんだよね？」
「ああ……それが不思議なんだよなぁ。あいつより一つ年下の子でダメだったんだ。昔から知ってる子ならいいのかと思ったんだけど、リィナはダメだったし……」
「でも、リィナはこの四年で結構変わったでしょ？　その点、ボクならそんなに変わってないから、大丈夫ってこともあるんじゃないかな？」
「……って、自分で言ってるじゃないか」
エルレーンは明るく笑って、
「だって、見た目が子供っぽいのは本当のことだもん。ホントは全然気にしてないよ。それに、これはボクらの種族の特徴でもあるからね」
“風”は魔の十属性の中でも、もっとも小柄――特に女性――な種

族なのである。
「じゃあ……」
ティースは膝のセルマを起こさないように苦心しながら、右手をエルレーンに向かって差し出す。
「一瞬だけ、触れてみてくれないか？　五秒未満」
「そんなに一瞬なの？」
「ああ。こう……なんていうか、触れた瞬間に視界がフェードアウトしていく感じなんだ」
「じゃあ……」
指先が、触れる。
その瞬間。
「っ……！」
案の定、頭のてっぺんから血が引いていくような感覚に襲われた。
頭がフラつく。
「ティース！　大丈夫！？」
「あ、ああ……やっぱダメみたいだなぁ」
触れたのが本当に一瞬だったため、気絶することは免れたようだ。が、頭の奥に痺れたような感覚が残っており、意識をはっきりさせるため頭を振る必要があった。
「……それに変わってないって言っても、俺から見れば結構変わったよ。だって、今はどこからどう見ても女の子だ」
「……うーん」
エルレーンは少し考えて、
「たとえばの話だけど、同い年ぐらいの、男の人か女の人かわからない人に触れられた場合、どうなるのかな？」
「……それは試したことないなあ」
そもそも原因がわからないのだ。が、例えばミューティレイク家主治医のマイルズが以前言ったように精神的な問題であれば、その判断はティースの認識に委ねられているということだろう。つまり、彼がその相手を女と認識しているか否か、ということになる。

（とすると、俺はシーラのことを女だと認識してないってことか？
……そんな馬鹿な）
そんなはずはあるまい。もしそれが、恋愛対象としてということであれば話は違ってくるが、
（……それならエルだって、なぁ）
他にも除外されそうな人間はいくらでもいそうなものだ。
「でも、本当に困ったね。……それじゃ恋人もできないんじゃない？」
「そりゃ、まあ……ね」
そこへ、リィナが不思議そうな顔で、
「え？　恋人でしたら、たくさんいますよね？　私もエルさんも、きっとシーラさんもティース様の恋人です」
「ちょっ……リィナ」
ティースは慌てた。……別に誰が聞いているわけでもないが、事情を知らない人間が聞いたらひどい誤解をされそうなセリフである。
（恋人ってのを、親友みたいなものと勘違いしているんだもんなぁ……）
そこへ、エルレーンがフォローを入れる。
「リィナ、違うよ。恋人っていうのは、その人にとって特別な一人のことなんだよ」
「え？　一人だけなんですか？」
「うん。リィナの考え方だと――」
エルレーンは少し考えて、
「リィナにとって、結婚して子供を産むことはものすごく嫌なことだよね？」
「それは、誰でも嫌です」
真顔での返答に、エルレーンは慣れているのか、ただ頷いて、
「だったら“その人”の頼みなら結婚して子供を産んでもいい、って、そういう風に思える人が恋人、かな」
「子供を……？」

「たとえば、ティースがキミに子供を産んでくれって頼んだとして――」
「ちょっ、ちょっと、エル！！」
突然のたとえ話に、ティースはびっくりして、
「そ、そういう例えにいきなり俺を使わないでくれ！」
「え？　……あ、そ、そっか」
顔を真っ赤にして抗議するティースに、エルレーン自身もその意味を深く読んでしまったのか、少しだけ頬を上気させた。
「？」
リィナは一人だけ、不思議そうなまま、
「とにかく……それぐらい大切な人、ということですね？」
「……うん。そうかな」
エルレーンはすぐに立ち直ったが、ティースは未だ頭を熱くしたまま、リィナの顔を正視できない状態だった。
……と、そこへ見事な追い打ちが炸裂する。
「でもそれなら、きっとティース様は私の恋人です」
「！？」
完璧にクリーンヒットだった。
「な……な……な……！」
何も答えられず、ティースはただ視線を合わせないことに必死だ。
が、リィナの方はまるで意味を理解した様子もなく、
「でも、ティース様がそんなひどいことを言うはずないですけどね」
冗談っぽくそう付け加えた。
俯いたままのティース。
「ティース？」
そんな彼を不思議そうに見つめていたエルレーン。
やがて怪訝そうな顔で何事か思いつき、
「ティース……キミ、もしかして――」
途中で切った言葉の先は、おそらく彼自身すらもまだ自覚しきっていない真実を捕らえていたのだろう。

「……そっか」
そう呟いて、その幼く見える顔に少々難しそうな色を浮かべた。
「？　……あの、エルさん？　私、何か悪いことを言いましたか？」
「え？　ううん。何でもないよ」
エルレーンはそう答えたが、やがて外を見つめ、何やら困った様子でそっと呟く。
「四年……だもんね」
再会の喜びをもう一度噛みしめるかのような独り言。だが、そこに全く別の意味が込められていたのは確かだった。

二月に入り、いくらか一時期の寒さは緩和されてきた。
大陸の北に位置するだけあって、ネービスの冬は他に比べれば長く厳しいが、それでも馬車の通行が困難になるほどの雪が降ることは少なく、北の街クレイドウルなどと違って、交通機関が麻痺することはほとんどない。
そんなネービスの街の昼時。
朝から働き詰めだった者も、学園に通う学徒たちも、今は一時の休息を取り昼食で腹を満たしている頃だろう。街の通りはまだ寒いにも関わらず厚着した人々が行き交い、商売人たちも精を出している。
そんな中。
中央通りを北に進み、一般住宅街と高級住宅街の境目を西に向かってずっと進むと、そこに大きな屋敷がある。
ネービスでも有数の大貴族ミューティレイク家の屋敷だ。
その、一辺がキロ単位であろうかという大きな敷地の正門……から、少々離れた場所。

「……行かなきゃなぁ」
白い息を吐きながらそこに佇むは、言わずと知れた長身の青年、ティーサイト＝アマルナだった。ここに到着したのは五分ほど前だったが、それからしばらくそこをうろついており、端から見ると少々不審な人物にも思えたかもしれない。
「よし。……あと六十数えたら行くぞ」
そんな彼の腰が引けてる理由は言わずもがな。
今回のことで迷惑をかけた人々を、どんな顔で訪ねればいいかわからなかったのである。
（二十……二十一……）
彼自身、自分の選択は正しかったと思っている。二人の昔馴染みと無事再会できたし、その一人は朧によってすでにその夢を叶えることができた。……が、それはあくまで、彼個人の問題である。迷惑をかけてしまったことは間違いないし、やむを得なかったこととはいえ、ミューティレイクの名を色々なところで勝手に利用してしまった。下手をすれば罪も問われかねない。
（三十二……で、でも……三十三……最低でも自分の荷物を引き払って……三十四……勝手にツケちゃった分のお金を返して……それから――）
ため息が口をつく。
（それに……三十七……クビになるなら……三十八……期待してくれたファナさんやアオイさんには……三十九……ちゃんと謝らなきゃな……四――よし！）
決意はできた。
六十数えるまでもなく、彼の足は正門へと向かい始める――かと思いきや、すぐに立ち止まって、
「……で、でも、待てよ。せめてお詫びの品でも買ってから――」
「なにやってんの、ティースさん」
「おわぁっ！！」
文字通り、飛び跳ねた。体も、心臓も。

「あ、こんなところでそんなに飛び跳ねたら――」
「うわっ……っと……っと……！」
地上に下り立った瞬間、やや凍っていた地面に足を取られる。踏ん張ろうとしたのも無駄な努力。アッという間に体と地面が平行になり――
……グキッ！！
「ッ～～～～～～！！」
「あれ。尾てい骨からいったみたいだね」
声にならない痛みが腰から脳天へと突き抜けた。
だが、その原因となった声の主は彼の痛みなど意に介した様子もなく、平然と言葉を続ける。
「で。こんなとこでなにコソコソやってんの？」
「……リ、リディア……」
微かに涙を浮かべたティースは腰をさすりながら顔を上げ、ようやくその相手の正体を把握するに至った。
厚着をし、三角の毛糸の帽子をかぶって立つ少女。歳の割にどこか冷めた印象の視線、その奥に潜む頭脳は大人顔負けというミューティレイク家の若干十二歳の執事、リディア＝シュナイダーである。
そんな彼女に対し、ティースはようやく雪の上から手を上げて、
「や、やあ……久しぶり……」
「久しぶりだね。二ヶ月と十二日ぶり」
リディアは驚いた様子でもなく、ごくごく普通に挨拶を返す。
「に、二ヶ月と十二日……そ、そうか。そんなに――」
「ちなみにそれは、ティースさんがフォックスレアの街に向かってここを発ってからのこと。ナイトがここに戻ってきてからは二ヶ月と四日だよ」
彼女らしく、意味があるのかないのかよくわからないデータまで披露する。
……いや、意味がないはずはなかった。
だが、

「あ、ああ……」
そんないつもと変わらない様子の彼女に、ティースは少しホッとしていた。緊張が僅かに緩和されて、
（これなら、中でもそれほど大きな問題になってないのかも）
そんな淡い期待を抱きながら、体を起こしつつ尋ねる。
「で、でもいいところで会ったよ。これから――」
「で」
だが、次の一言に、雪を払おうとした体が凍り付いた。
「今更、何しに戻ってきたの？」
「――」
淡々と。
いつも通りに。
……ゆっくりと、視線を彼女の元へと戻す。
そこには以前のように、秘めた親しみというのが微塵も感じられなかった。
いや、それどころか――
「ぁ……」
自らの考えの甘さに心の中で頭を殴りつけながら、ティースは頭を下げた。
「……すまない」
「なにが？」
だが、リディアは表情を動かさない。そこに突っ立って、頭を下げる彼をただ見下ろしたまま。……そこには、微かな怒りすら浮かんでいた。
「何を謝ってんの？　あたしに謝って、何か解決すんの？」
「あ……あぁ、そうか……」
ティースは頭を上げた。それからひどくゆっくりした動作で冷たく濡れたズボンの雪を払う。
そうしながら考えをまとめ、ようやく口を開いた。
「みんなに迷惑かけたのはわかってる。でも、俺、どうしてもやら

なきゃならなかったんだ」
「……」
「それが言い訳だってのはわかってるよ。責任は取る。ファナさんにも謝って、もし償う必要があるなら償う。それで……俺は、もう二度とここには来ないよ」
真摯な気持ちだった。少しでも自分の気持ちが伝わればと、そういう願いを込めて言葉を口にしていた。
「ファナさんに？　責任？」
だが、リディアの口調に変化はない。それどころか、怒りの色は表情だけでなく、言葉の中にすら微かな起伏をもたらし始めていた。
「別にファナさんに償う必要なんかないよ。ティースさんが突然いなくなったところで、ディバーナ・ロウはちっとも困らないもの」
「……そうか」
それは厳しい言葉だったが、少なくとも現段階では事実だろう。
「とにかく俺、ファナさんのところへ行くよ。それで荷物をまとめて……そう。シーラを連れて出ていくから――」
「だから」
リディアはもう一度言った。
「何しに戻ってきたの？」
「……？　だから荷物をまとめて、シーラを連れて――」
「だから」
繰り返す言葉は、あくまで淡々としていた。
「ここから連れていく？　誰を？」
一歩、リディアは近付いた。長身の彼を見上げる瞳が、微かに細められる。
「……」
ドクン、と。
心臓が鼓動を打った。
「……そうか」
その可能性は考えないでもなかった。ティースがいなくなったこ

とで、シーラもまた、このミューティレイクの客人ではなくなったのだ。ここに置いてもらえると考えるのは楽観的すぎるだろう。

「ってことは、俺の荷物もシーラが持ってったか。じゃあ、どこに移り住んだのか――」

「荷物はそのままあるよ。ティースさんが残していった蓄えも、全部そのまま。銅貨一枚たりとも動かしてない」

「え？」

ドクン、と。

心臓が再び嫌な鼓動を刻む。不安が胸を包み込んだ。

「だから言ってるでしょ。……ファナさんに責任？　もっと責任のある相手、他にいるんじゃないの？」

そんな彼に、リディアは淡々と続けた。

「ファナさんは優しいから。ティースさん、きっと何か事情があるんだろうって。だから“二ヶ月”待つって。そう言ったの」

「二ヶ月……？」

呆然と呟いたティースに対し、リディアは寂しげに視線を伏せた。

そしてポツリと呟く。

「……四日、遅かったよ、ティースさん」

「！」

その言葉が、胸に突き刺さる。

リディアは続けた。

「今、シーラさんはここにはいない。どこに行ったかも、あたしにはわからない。……ちゃんと生きてるかどうかだって――」

突如、肩が震え、語尾が乱れる。

――涙声だった。

「な――！」

「なんで……！」

「！？」

再び顔を上げた彼女の目には涙が浮かんでいた。そのまま彼を睨み付けると、拳を握りしめ、叫ぶ。

「なんで……なんで、もっと早く戻ってきてくんなかったのさッ！　シーラさん、ものすごく不安そうだった！　ティースさんがもう戻ってこないんじゃないかって……あの通りの性格だから、口には出さなかったけど……でも、でも！」

ティースは呆然と、その叫びを聞いていた。

「……あいつが……いなくなった……？」

「どんな事情があったのか知らないけど！　なんでもっとシーラさんの気持ちとか考えてあげられなかったの！？　ああ見えてあの人、ものすごく繊細で、ものすごく寂しがり屋だって……長い間一緒にいたくせに、そんなことも知らなかったっていうのッ！？」

「！」

言葉が、脳髄を焼く。

――知っていた。彼はそのことを知っていたのだ。

何故ならそれは……昔、まだ小さかった頃、今ほど強くなかったときの彼女そのものだったから。

（あ――）

彼女の気持ち。

最近の彼女は強くなった。だから大丈夫だと思った。もっとしたたかに生きてくれると思っていた。

だが、現実は――どうやら彼が思いこんでいたものとは、大きく違っていたようだ。

「ッ！！」

グッと拳を握りしめ、ティースは地面を蹴る。

「学園だ。サンタニアに行けば――！！」

「……無駄だよ」

だが、落ち着きを取り戻したリディアの言葉が、無情にもそれを引き留めた。

「シーラさん、ティースさんがいなくなったすぐ後からサンタニアには行ってない。休学届けを出したみたい」

「きゅ……休学届け……？」

唇を震わせて、ティースは振り返る。
「そ、それじゃあ……どこに――」
「だから、あたしにもわかんないってば……」
「……」
沈黙。
心臓の鼓動が、やけにうるさかった。
（学園にも……行ってない……？　じゃあ、一体どこに――？）
そう考えて、一瞬の思考の後、
（……そんな……俺――）
愕然とする。
――知らない。ティースは、シーラの行きそうな場所を一つも知らなかった。
このネービスに来てからというもの、彼女とどこかに出掛けた記憶がほとんどない。それは最初のうちは仕事で手一杯だったりとか、途中からは彼女に恋人が出来たからとか理由はいくつかある。だが、それにしても、彼はこの街での彼女を知らなさすぎた。彼女の交友関係すら、一つも把握していなかったのだ。
……浮かれていた。
リィナやエルレーンとの再会。久しぶりに会った昔馴染みの成長した姿に胸を躍らせた。その瞬間は、確かにここで待つ彼女の存在を忘れていた。
「っ……！」
自分の愚かさに胸がムカムカする。
たったの四日。
その程度、どうにでもなるはずだった。もちろん彼は期限のことを知らなかった。が、たとえそうだとしても、少しでも早く彼女の元に戻ることを考えて行動していれば、ここで待つ彼女の気持ちを考えていれば、間違いなく間に合っていたはずだろう。
「……探してくる！」
「あ、ティースさん！」

背後からリディアの呼び止める声がする。が、足は止まらなかった。

（出ていったのが四日前なら、まだどうにかなる！）

未だ雪の残る地面を蹴りつける。

まずは、ミューティレイクに移る前まで住んでいた、あの借家。

そこがダメなら、たまに買い物に出掛けた店。そこがダメなら――

（絶対、見つけ出してやる……！！）

とにかく、彼女と同じ記憶の存在する場所。たとえ些細なものでも。そこがダメなら、何日でも街を彷徨って探し出す。――探し出してみせる。

その決意は楔のように胸に打ち込まれた。

それは彼の中で、何事にも優先するものだった。

（絶対、絶対に――！！）

……と。

そうして走り出してから、ほんの数秒後のことである。

「あら？」

すれ違ったのは、屋敷に戻ってきたミューティレイクの使用人。

どうやら買い出し――というより、品物を注文に行っての帰りだろうか。紙のメモらしきものを手にして、

「ティース？」

どうやら顔見知りのようだ。使用人は足を止め、隣を駆け抜けようとした彼の名を呼んだ。

「……」

だが答える余裕もなく、彼はその場を走り抜け――

「お前……いつの間に戻ってきたの？」

「……――は？」

ピタリ、と、足が止まった。……いや、やや凍った地面に足を取られ、再び体が宙に浮く。

「おわっ……てッ！！」

再び痛打。だが、今度は痛みなど気にならなかった。地面に腰を

落としたまま、ゆっくり、ゆっくりと振り返る。
……その視線の先――冬の日差しに踊ったのは――透き通る水飴のような輝くブロンドのポニーテイル。腰に片手を当て、地面に尻餅をついた彼を呆れて見下ろす視線。
もちろん、見覚えがあった。
「え……」
それはまさしく――
「なにをやってるのよ。……私に、何か言うべきことがあるのではないの？」
そう言って彼を見つめるのは、どこか冷たさすら感じるほどに容姿端麗な美少女。
「し……し……」
ティースは、震える指を目の前の少女に向けた。
そして、
「……シーラぁぁぁッ！？」
「？」
指さして叫んだ彼に、シーラはその形の良い眉を僅かにひそめて、
「なに？　何かの嫌味？」
「な……どど……どこ行って……え……？」
「あ、シーラさん、おかえりなさーい」
その背後から、トコトコとリディアがやってくる。
「どこ行ってたのー？　あ、買い出し？」
シーラは彼女を振り返って、
「ええ。買い出しと言っても注文してきただけで、あとは勝手に届けてくれるみたいね」
「そっか。今日は寒かったし、もしかしたら凍死してるんじゃないかと心配してたよ」
「？　そこまで寒いかしら？」
「そうでもないかなぁ。……あ、そうそう。ティースさんが、つい先ほど戻ってきたみたいだよ」

「ええ、見ればわかるわよ」
「あはは。シーラさん、実は嬉しいのに我慢してるんでしょ？　いいよ、ほら。今はあたししか見てないし。どうぞ、感動の抱擁を」
「……怒りの鉄拳の間違いではなくて？」
だが、目の前で繰り広げられるその会話に、ティースはまるで参加できずにいた。
（な……なにが、どうなって――？）

「ご苦労様でした、ティースさん」
至って平然と、まるで何の違和感もなく、ティースはミューティレイク別館の執務室へと迎え入れられていた。
正面の机には、二ヶ月前とまるで変わらぬ暖かな微笑みのミューティレイク家当主兼ディバーナ・ロウ総帥、ファナ＝ミューティレイク。そしてその隣には、相変わらず温厚な表情に縁なし眼鏡のイングヴェイ＝イグレシウス――アオイ、がいる。
「期限の“三ヶ月”まではまだ時間がありましたのに。すでに何か収穫がおありでしたか？」
「え？　あ、は、はい……」
見聞を広げる旅。無断の失踪ではなく、許可を得た上での放浪。
……どうやらそういうことになっているらしいことは、すでに耳にしていた。意味ありげに笑うアオイの視線にも助けられ、ティースは懸命に話を合わせている。
「では、“お貸しした”紋章を戻していただけます？」
「は、はい」
懐から、六剣の紋章を出し、それを歩み寄ってきたアオイへと手渡す。
それを見て、ファナはニッコリと微笑むと、
「ご苦労様でした。しばらくはゆっくり体を休めていただいて結構ですわ」
「はぁ……」

「他に、何か？」
「あ、いえ……じゃなくて、えっと、その――」
あまりの展開になかなか頭がついていかない。が、こうなった以上、言うべき事は言っておく必要があると、ティースはそう思って、
「その、実は旅の途中でお金が――」
「それについては、ご心配無用ですわ」
「で、でも、ちゃんと返――」
だが、ファナは本当に不思議そうな顔をして、
「何故ですの？　ティースさんは任務で旅をなさったのです。その費用をこちらで持つのは当然ですわ」
「……」
口答えはできない雰囲気だった。
いや、もちろん口答えなどする必要はなかったのだが、
「……その、それと」
この後、またいくつかのお願い事をする立場の彼としては、非常に心苦しいことこの上なかったのである。
「実は――」
とはいえ……それも結局は、あっさりと受け入れられることになるのであるが。

「リディア。……一体、どういうことなんだ？」
ディバーナ・ロウ復帰の手続き、その他の懇願、全てが済んだ後、執務室の前で待っていたリディアに、ティースは不満げな顔で詰め寄っていた。
「なにが？」
トボける彼女に、ティースの眉間に微かに皺が寄る。
「あ、あのなぁ……冗談にしても、さっきのはタチが悪すぎだぞ。そりゃ俺が悪かったことは悪かったんだけど、それにしても……」
だが、リディアはあっけらかんと答える。
「冗談？　あたし、嘘なんて一つもついてないよ。全部、真実だし」

「な……だ、だって、シーラが出て行ったなんて――」
「え？　出て行ったなんて言ったっけ？」
「言っ――」
言いかけて、考える。
「――ってない……」
「今はここにいない、って言っただけだもんね」
勝ち誇ったように、リディアは悪戯っぽく言った。
「シーラさんがどこに出掛けたかだってホントに知らなかったし」
「で、でも」
会話を思い出し、どうにか反撃の糸口を探し出す。
「期限が二ヶ月、とかって言っただろ？　でも、ファナさんは三ヶ月だったって。……それは、どう考えても嘘じゃないか」
「ああ、そのこと」
何故かリディアは不満そうに口を尖らせて、
「実際はそうだったんだもん。……あーあ、嫌なこと思い出しちゃった」
「え？」
「ティースさんのせいで、あたし、一ヶ月も書庫の整理しなきゃいけなくなったんだからね。からかったのは、その腹いせだよ」
「へ？」
いまいち意味がわからない。
「ホント、あたしには感謝して欲しいぐらいなんだけどなぁ」
困惑するティースに、リディアは頭の後ろに手を回してそっぽを向きながら言った。
いつも通りの言葉の、ほんの端っこに僅かな真剣さを交えて。
「大事なこと、忘れかけていたこと、気付かなかったこと。色々と確認できたんじゃないの？」
「！」
ドキッとする。
それは……その通りだった。全てが丸く収まっていたのは結果論。

彼がシーラの存在を失念しかけていたのは紛れもない事実なのだ。
「文句は、それだけ？」
「……」
文句などあろうはずもなく。
「じゃ、あたしはファナさんに話があるから、そこどいて？」
「あ、ああ……」
扉の前から移動する――と、直後、ティースは思い出して、
「そ、それじゃあ、リディア？　シーラが休学して学園行ってないってのは……」
ドアの前に立ったリディアは振り返って、
「ああ、それ――」
「それも、嘘ではないわ」
「……え？」
廊下の向こうからやってきたのは、話題の少女――シーラだった。
やはり何故か、ミューティレイクの使用人服に身を包んでいる。
そして彼女はまず、リディアに視線を向けると、
「……あのときのティースのおかしな反応、やっぱりあなたの悪戯だったのね」
「あはは」
リディアはペロッと舌を出すと、ノックしながら執務室のドアを開いて、
「でも、嘘はついてないよ。……ちょっとだけ小道具使って芝居入れちゃったけどね」
ポケットから小さなビンを出して見せる。――目薬だ。
「相変わらず手の込んだことね……」
呆れるシーラに対し、笑って手を振りながらリディアは執務室の中に消えていった。
と。
「……お、おい、シーラ」
ティースは彼女らのそんな会話など聞こえていない様子で、

「ど、どういうことだ？　休学？」
「ええ。それは本当よ」
「な、なんで――」
「なんで？　……なんで、ですって？」
シーラは目を細め、彼を見据えた。
「お前がいなくなって戻ってくるかどうかわからなかった以上、働かなくてはここにいるわけにいかないでしょう。いくらファナの好意であっても」
「……」
返す言葉もなく。
「最終試験も受けられなかったし、卒業は一年延びることになりそうよ。……でも、もしお前が認めないのなら、このままやめてもいいわ」
「そ、それは困る！！」
ティースは即答した。……立場がどうも逆に思えて仕方ないが、彼女の夢は、彼にとっても夢だ。だから、彼らの間ではこれで普通なのである。
「そう。だったら、あと一年、頼むわね」
素っ気なく言い放つシーラ。その後、思い出したように付け加えて、
「それと。いつかの約束も、一年延長してもらうわ」
「え？　約束？」
「ええ。なんでも一つ、言うことを聞くという約束よ」
「あ。ああ……」
彼はすっかり失念しかけていたが、確かにいつだったか、そんな約束をしていた。
「どう？」
「……」
無言で、見つめ返す。
――リディアの冗談は、確かに起こりうる事実でもあった。もし

彼がディバーナ・ロウを除名されていたなら、彼女はここにいられず……いや、たとえファナが認めたとしても、ここにいることを良しとせずに出ていただろう。そして二度と、会えなくなっていたかもしれない。

……二度と、戻らなかったかもしれない――

そう考えると急に、胸を中心に、体が熱を帯びた。

「いや」

そして答える。

目の前の少女の顔を真っ直ぐに見つめて。

「そのぐらい、おやすい御用だ。……二ヶ月も留守にしていて、すまなかった」

「……え？」

頭を深く下げたティースに、シーラは少しびっくりした顔をする。が、視線はすぐに横に流れた。

「や……やめなさい。……気色悪いわ」

「あ、あのなぁ」

その言葉に少なからずショックを受け、ティースは顔を上げて抗議する。

「気色悪いって言い方はないんじゃないか？　せめて、らしくない、とか――」

シーラは横目で彼をチラッと見て、

「虫酸が走る、とか、蹴り飛ばしたくなる、とかの方がいい？」

「……いや、気色悪くていいよ、もう……」

諦めたようだ。

「……あ、でも、さ」

だがその後、再びティースはその顔に明るい表情を浮かべた。……その先の言葉は、確実に彼女を喜ばせることができると思ったから。

「え？」

そして、不思議そうな顔の彼女に、言った。

「きっとお前にとっても、嬉しい知らせがあるんだ――」

「……にしても、ほんっとわかんない人だなぁ」

「ふふ、そうですか？」

夕日の射し込む執務室の中。部屋にいるのは屋敷の主ファナと、彼女の補佐役である執事のリディアだ。

二人の机の上には書類のようなものが山積みになっている。ほぼ、日課。それを二人で捌いていく。話をしながらでも、その速度が緩むことはない。

そして二人の話題に上っていたのは他でもない。シーラのことだった。

「あの人、二ヶ月前はホントに出ていきそうな雰囲気だったんだ。だからあたし、嘘をついてまで引き留めようとしたのに――」

そうしてリディアは首をひねったまま、大きく息を吐いた。

「いざ期限になったら、今度は除名するのを一ヶ月でいいから延ばして欲しい、なんて。……おかげであたしは一ヶ月も書庫の整理をするハメになっちゃってさ」

「それは、賭けなどなさったリディアさんの自業自得ですわ」

リディアは口を尖らせて、

「何でも言うこと聞くって約束しちゃったんだもん。……ファナさんも鬼だよ。いくら交換条件だからって、こんないたいけな少女に一ヶ月も重労働を課すなんて」

「あら。でしたら書庫ではなく、庭の手入れになさいます？　外はまだ風も冷た――」

「ううん。ファナさんは天使様のように慈悲深い人だよ」

「……まぁ」

クスクスと笑うファナ。

「ですが、リディアさんの苦労はきっと無駄にはなりませんわ」

「やっぱり？　そう思う？」
「ええ」
ファナは微笑んだまま頷いて、そしてゆっくりと目を閉じた。
「ティースさんは、色々学んで戻ってこられたようです。……今年は無理かと思ってましたけど、もしかすると五月に間に合うかもしれませんわ」
五月。それは帝都ヴォルテストでデビルバスター試験の行われる月だ。
リディアは頭の後ろで手を組み、背もたれに体を預けて、
「うーん、あたしはさすがに無理だと思うけど……まぁ、行って自信を失うだけ、ってことはないかもね」
「次のことは、予定通りアルファさんにお願いしようと思ってますの」
「……え。ホントにやるの？」
びっくりした顔をして体を起こすリディア。
「ていうか、アルファさん、引き受けるって？」
「いえ、まだ何もお知らせしておりません」
「じゃあ、まずそこからスタートじゃん。……大丈夫かなぁ。それに、アルファさんから学ぶことなんてあるの？　そりゃ、実力は間違いないと思うけど、“あれ”はちょっと……他人には吸収できないよ、きっと」
「ええ、私もそう思います」
「……ファナさん。なにを考えてるの？」
「そうですね……すぐにではなくとも、そうすることが結果的に良い結果を導くような、そんな気がしますの」
「根拠は？」
まるで理解できない顔のリディアに、ファナは変わらぬ笑顔のままいつものように答えるのだった。
「なんとなく、ですわ――」

幕間『一撃の男』

カァァァァァ……ン。

「なっ……！？」

甲高い音が鳴り響き、レアス＝ヴォルクスの手から木刀が弾かれたとき、その場にいた誰もが目を疑った――

新年を祝う催しが終わり、普段通りの生活に戻って少しの日が過ぎ去った頃。

新たにディバーナ・ロウに入隊したデビルバスター候補生の青年は、その初日から“能力”と“外見”という二つの意味で屋敷の人々の注目を浴びることになった。

彼の名はクリシュナ＝ガブリエル。自己申告と戸籍によれば、ネービス西にある“剣の街”ジラート出身の十七歳、今月の誕生日を迎えて十八歳になる男性だ。身長は百七十センチを少し越えた程度で平均より少し高いぐらい、体型はスリムだが貧弱ではない、あまり無駄のない体付き。顔の作りも涼しげでかなりのハンサムだといえるだろう。

だが、しかし。実を言うと、それらの要素自体は多少人々の目を引きはするだろうが、極端に興味を集めるほどのものではない。

では、何故彼の外見が注目を集めたかというと――

ミューティレイク別館二階の一室。

「っしょっ……」

左右に結った短めのお下げ、そばかすの残る顔の純朴そうな一人の少女が、その部屋の掃除をしていた。

パメラ＝レーヴィットというのがその少女の名だ。年齢は十五歳。このミューティレイクに住み込みで働きながらネービスに住む両親

と二人の弟を養い続けて、今月で丸々三年になる、見た目のイメージよりは幾分活発で気の強い、明るい性格の少女だった。

パンッ、と小気味良い音がして、皺一つない純白のベッドシーツが外から射し込む真昼の陽光に映える。

「これでよし……っと」

彼女に与えられていた仕事は、主に屋敷――特に別館の清掃や各部屋のベッドメイクなどである。屋敷の客人と接する機会も多く、屋敷に住まうデビルバスターたちやデビルバスター候補生、その関係者たちとも顔見知りだった。

そして、

「ふぅ……」

いつも通りに自ら仕事をこなしていたこの少女が、あまりの驚きに立ち尽くすことになったのは……新たにやってくるというデビルバスター候補生の部屋を準備し終え、そこを出てきたときのことだった。

（……あれ？）

部屋を出た彼女の視界に映ったのは、ちょうど大階段を上ってくる二つの人影。

そのうちの片方――頭のてっぺん近くで左右に束ねた長い髪が印象的な少女は、パメラの良く見知っている人物だった。

（エレン？）

同い年で同僚。本人同士の認識はともかく、周りから言わせれば“仲が良い”と言える間柄の少女だった。

そして、もう片方。

（……あれが新たに来たっていうクリシュナ様かな……？）

話し掛けるエレンの言葉にテンポ良く言葉を返しながら近付いてくる青年。

その格好は“貴族風”とでもいえば一番わかりやすいだろうか。膝丈ぐらいの前が開いた装飾付きのコート、半ズボンにハイソックスという出で立ちはあまり一般人が身につけるものではなく、額に

備える古ぼけた薄黄色のゴーグルが妙にミスマッチだった。
（変わった格好――）
そう。
普通であれば“変わった人が来たな”ぐらいの感想で終わっていたことだろう。そして“変わった人”などという人種は、この屋敷ではそれほど珍しいものではない。
だが、
「――！？」
その青年の顔をはっきり認識した瞬間、パメラはハッと息を呑む。続けて口元に手を当てると目をいっぱいに見開き、まるで幽霊でも見たかのような驚愕の表情をそこに浮かべた。
幽霊？
――確かに。その表現は今の状況を表すに最適だったかもしれない。
「ん？」
青年がパメラの存在に気付いて視線を向ける。
と、同時にエレンも気付いた。
「あら、パメラ。部屋の掃除はきちんと済んだの？　……パメラ？」
エレンは彼女の返事がないことを訝しむと、その視線が隣の青年――クリシュナの顔に固定されているのを見て、
「ああ。この方が新たにいらしたデビルバスター候補生のクリシュナ様よ。ちゃんとご挨拶――って、ちょっと。あんた、なにボーっと突っ立ってんの？」
「え……あ」
パメラはハッと我に返り、慌てて廊下の脇に避けた。……が、その視線は、相変わらずクリシュナの顔を窺ったまま。
と、そんな彼女にエレンは少し意地の悪い笑みを浮かべて、
「なぁに？　あなた、もしかしてクリシュナ様に見とれてんの？」
「……え――」
普段であれば、そんな軽口に反論するところだった。このパメラ

とエレンは、本人たちこそ犬猿の仲を謳っているが、その実“喧嘩するほど仲がよい”と周りに評される関係であり、こういったやり取りは決して珍しいことではない。

だが――

「……」

パメラは何も答えられずに黙り込んで、俯いた。

――それどころではなかった。

（そんなはず――）

彼女の心臓は予測外の事態に早鐘を鳴らし、その脳はあまりの出来事に混乱して上手く言葉を紡ぎ出せない状態だったのだ。

（そんなはず、ない……）

ただ、心の中で呪文のように繰り返しながら。

「パメラ、というのか？」

「っ！？」

青年の声に、弾かれたように顔を上げるパメラ。だが、目が合うと、またすぐに視線を泳がせてしまう。

それでもかろうじて、震える唇が言葉を紡いだ。

「は……はい」

「へぇ」

青年――クリシュナはマジマジと彼女を見つめ、それからその涼しげな顔に小さな笑みを浮かべて、言った。

「こんなデカい屋敷だから使用人も垢抜けたのばっかりかと思ってたけど、キミみたいに田舎者っぽい子もいるんだな」

「……え？」

意表を突かれた様子で、パメラの表情が固まる。

が、クリシュナはそれに気付かないのか、それとも気付いていて気にしていないだけなのか、そのまま言葉を続けた。

「ああ、だからどうこうってのはないけどさ。だからキミもそんなに恐縮なんかせず、気軽に俺に話し掛けてくれればいい」

「……」

「ま、とにかく、これからよろしく頼――」
「――失礼します」
クリシュナが言い終わるより早く、パメラはその身を翻していた。
「？」
「パメラ？」
驚いたようなクリシュナの表情と、やはり拍子抜けしたようなエレンの言葉を背に、パメラは足早にその場所を離れた。
「……」
廊下を進み、まだ明るい日差しの射し込む大階段を一階へと下りていく。
周りで動く使用人たちの間を抜け、一階ホールから屋敷の奥へ続く通路の一つへ達すると、胸の早鐘はいつしか不快なものへと変わっていた。
（……違う。あんなの――）
冷静に考えれば簡単にわかったこと。
いくら顔が似ていても。
いくら声が似ていても。
（サイラス様じゃ、ない……）
当たり前のことだった。
彼女が慕っていたデビルバスター候補生“サイラス＝レヴァイン”は、すでにこの世の者ではない。これが夢でも幻でもなく、現実である限り。どんな方法を使おうとも、どんな奇跡が起ころうとも、死人が生き返ることなど決して有り得ないのだ。
他人の空似。
そんなことは、学のない彼女にもよくわかっていたはずのことで。
「っ……！」
涙が溢れてくる。
田舎者などと言われたことは、ちっとも悔しいと思わない。彼女は自分の容姿が垢抜けないことぐらい理解していたし、それを特別気にしているわけでもなかったから。

ただ……否応なしに記憶が呼び起こされた。そして、忘れかけていた悲しみが蘇ってしまった。

ただ、それだけのこと。

（……やっと、気持ちの整理ができたと思ったのに……）

涙の理由を誰かに詮索されるのが嫌で、パメラは顔を伏せながらそのまま屋敷の奥へ向かった。

書庫に通じる通路は比較的人の少ない場所だ。途中、怪訝そうに振り返る同僚の姿は目に入ったが、少なくとも彼女を問い質す声は一つもなく――

「……ふぅ」

どうにか気持ちを落ち着かせながら壁にもたれると、ほんの少しだけ頭痛がした。

（……意地悪）

それは確かに、彼女にとっては残酷な偶然。

（神様の、意地悪……）

また涙が溢れそうになって、パメラはゆっくりとその場に崩れ落ちた。

その日の夕刻。

別館の一階ホールには、豪華なメンバーが珍しく一同に介していた。

その内訳は、青年が一人、女性が一人、そして少年が一人、である。

「で、お前は呆気なくその新入りに負けちまったわけか」

「負けてねぇっ！」

「まぁまぁ。わかってるってば、レアスくん。……でも、ま」

口論する二人を宥めるようにそう言ったのは、大人っぽい外見とはアンバランスに子供っぽい仕草でお団子頭を小さく傾ける女性―

―ディバーナ・ロウの総隊長、及び第一隊ディバーナ・ファントム隊長のアクア＝ルビナートだ。

「いくら油断していたにしても、レアスくんがいきなり負けちゃうぐらいの子なんだから、相当なものなんじゃないの？」

「……てめぇ、ちっともわかってねぇじゃんか！　だから、負けてねぇってさっきから何度も言ってんだろうがッ！！」

そしてテーブルに身を乗り出して反論したのが、赤いツンツン頭が目立つ弱冠十二歳の天才少年、第三隊ディバーナ・カノン隊長、レアス＝ヴォルクスである。

さらに、

「ま、その真偽はともかく、だ」

そんなやり取りを適当に流しながらビールの入ったコップを傾けたのは、灰色の布を頭に巻き、一見“ならず者”のようにも見えるラフな出で立ちの青年、第二隊ディバーナ・ナイト隊長、レインハルト＝シュナイダーだった。

「聞いた話で確認しちゃいないが……どうもその新入り“誰かさん”にそっくりらしいじゃないか」

「え？　誰かさん？」

「……」

その言葉に、少しだけ勢いを失った赤髪の少年が眉間に皺を寄せた。

そのまま視線が横に流れる。

「なに？　なんのこと？」

わからない顔のアクアに、視線をそむけたままのレアスが殊更に素っ気なく答えた。

「サイラスの野郎にそっくりなんだよ」

「サイラスくん？」

きょとんとした顔のアクア。

もちろん彼女も、元レアスの部下であり、デビルバスター候補生でもあったそのサイラスという青年のことは良く知っている。

それから思い出したような顔で、ポンと手を叩くと、
「そういや昼間、使用人の子たちがサイラスくんのこと話してたわねぇ。どうして急にそんな話を、と思ったんだけど……」
「別に、だからどうってわけでもねぇ」
そう言いながらもどこか不機嫌そうなレアス。
レイは頷いて、
「ま、死人が生き返ったってわけでもないしな。……で？　そいつ、少しは使えそうなのか？」
アクアが口を挟む。
「決まってるじゃない。油断してたとはいえ、レアスくんが負け――」
「負けてねぇッ！　剣を弾かれただけだッ！　それに！」
勢い良く反論した後、一瞬の空白。
「それに――」
レアスは一つ息を吐くと、まるで懺悔するかのようにゆっくり目を閉じた。
「……油断は、してねぇ」
「え？」
「……」
驚きに目を見開いたアクア。その横でコップを傾ける手を止めたレイ。
動きを止めた二つの視線に、レアスは繰り返した。
「油断は、してねぇんだ。あの一撃は身をかわすのがやっとだった」
「……」
「……」
その告白に、アクアとレイは顔を見合わせる。
「本当にレベルの高い“瞬歩”だ。ヘタすりゃ、俺以上かもしんねぇ……」
「……」
「……」

もう一度、アクアとレイの間で視線が行き交う。
驚きは消えないまま。
――そして数十秒後。
一つの“疑問”を口にしたのはアクアだった。
「じゃあ……それほどの実力者を、なんだって一から鍛えることになっているわけ？」
レアスは小さく首を振って答える。
「それが、ちょっと“問題”のあるヤツでな……」

「――ぱんぱかぱーん♪　さぁ本日も新しい朝、希望の朝がやって参りました！　凍える空気、どんよりと曇った空、清々しい朝とは決して言い難いですがしかしそんなことは全然関係ナッシング！　我らがミューティレイクお掃除部隊はお嬢様のためお客様のため時にはいがみ合い時には助け合いながら今日も今日とて元気に屋敷中を駆け回るのであります！」
日が昇る前の薄暗く冷たい空気を引き裂くように、テンションの高いトークがその一室に響いていた。
「っとまあ、そんな前口上はこのくらいに、さぁ、それでは早速ゲストに歌っていただきましょう！　哀愁漂うカントリーソングを歌わせたら右に出る者なし、ちょっぴり残ったそばかすが愛らしい十五歳、パメラ＝レーヴィットさんです！　わーわーどんどんひゅーひゅーぱふぱふー！」
「……」
「って、アレ？　ちょっと？　おーい、パメラー？」
「……」
「パメラー、パメちゃーん。おーい、起きろー。座ったまま寝たら

死ぬぞー」
ヒラヒラ。
「……え？」
電源が入ったようにパメラは肩をビクッと震わせ、キョロキョロと辺りを見回した。
少し肌寒い空気。ミューティレイクの屋敷とは少し違う、やや質素な八畳ぐらい部屋にベッドが三つと小さな鏡台が一つ。
「……あれ……？」
ここはミューティレイクの敷地内にある建物の一つ、女性使用人寮の一室である。
そしてパメラが座っているのは、自分に割り当てられたベッドの上。着ているのは寝巻ではなく、ミューティレイクの制服。
そう。彼女は先ほど起床し、準備を終えてこれから仕事に向かうところだったのだ。
「……あ、なに、ヴァレンシア？」
状況を把握し、パメラはそう言ってようやく目の前に立つ女性を見上げる。
「聞いてないしね」
その反応に対し不満そうに口を尖らせたのは、パメラよりも二歳半ほど年上の同僚であり、基本的に三人一組で使われるこの寮部屋の室長でもあるヴァレンシア＝キッチンだ。
ややクセのついたショートカットの髪、かなり大きめで強い光を宿す瞳、悪戯っぽさを浮かべる口元がどことなく“猫”を思わせる女性である。
パメラは小さく首を振って、
「あなたのことだから、どうせまた意味不明なことを言ってただけなんでしょ？」
「ひ、ひどいわ、パメラッ！」
ヴァレンシアは大袈裟に目を見開くと、
「この陰鬱で怠惰な雰囲気の漂う重苦しい朝の空気を一掃するため

苦悩に苦悩を重ねた末に乙女の羞恥心さえもかなぐり捨てて一肌脱ごうとしたこのあたしの血の滲むような努力を意味不明だなどというまるでその存在自体を否定するかのような一言であっさりと片付けようとするなんて血も涙もない鬼や悪魔の所業としか思えないわッ！」

「きょ……今日はまた絶好調ね、ヴァレンシア……しかも意味わかんない……」

たじろぐパメラに、ヴァレンシアはグッと胸を張って、

「“今日”は？　……いいえ、違うわ、パメラ。あたしはいつでも絶好調。何故ならこのあたしこそが、ミューティレイクの美しく優雅で知的な使用人の鑑、ヴァレンシア＝キッチンだからッ！」

「喧しく幼稚で痴的、の間違いじゃないの？」

と、そこへ口を挟んだのは、洗面所から部屋へと戻ってきた少女だった。

「毎度毎度、朝から騒がしいこと」

どこか小馬鹿にしたような口調。やや自尊心の高そうな表情。

長めの髪を頭のてっぺん近くで左右に分けたその少女は、この三人部屋を使用しているもう一人の同僚、エレン＝ライブリだ。年齢はパメラと同じ十五歳だったが、背の低さもあってか見た目はそれよりも少々年下に見える。

エレンは小さなため息を吐くと、腰に手を当て呆れ口調で、

「まったく。二人とも、少しは格式あるミューティレイク家使用人としての自覚を持って欲しいものね。あなたたち二人がそんなんだから、同部屋のこの私まで一緒くたにされ――いでっ！　いだだだだだッ！」

突如彼女が上げたのは、とても格式あるとは言い難い悲鳴だった。

「ちょ……いでっ！　いでででッ！　痛いッ！　……はっ、離しなさい！　ヴァ……ヴァレンシアァァぁぁぁッッ！！」

「あれ？」

「あれ、じゃないわよォッッ！」

エレンは二つに分けて縛ってある髪の根本を押さえながら、いつの間にか後ろに回り込んだヴァレンシアを涙目で睨み付けると、
「あ、あああんた、一体、どういうつもりでいきなり私の髪を引っ張ったりするわけッ！？　せ、説明なさいよォッ！！」
ヴァレンシアはしれっとした顔で答える。
「いやほら。ちょうど手綱みたいだから、制御できるかなーって」
「ばっ……！」
エレンの顔がさらに真っ赤に染まって、
「で、できるわけないでしょぉっ！！　というか、私を馬なんかと一緒にしないでちょうだいよォッ！！」
「高さもちょうど掴みやすい位置じゃない？」
「き……きぃぃッ！　わ、私の背が低いとでも言いたいのぉっ！！？」
歯ぎしりしながら喰ってかかっていくエレン。
ちなみに彼女は百四十センチ半ばと、かなりのちびっ子だ。対するヴァレンシアも極端に高い方ではないが、それでも彼女に比べると十五センチは長身である。
「まぁまぁ、落ち着きなさいってば」
ヴァレンシアは両手を前に出してそんな彼女を制止すると、
「モノは考えようでしょ。背が低いってのも悪いことばかりじゃなくて世の中にはそういう子にしか情欲を呼び起こされない男も存在しているらしいしそういう点でいえばあなたのその背の低さとまるで幼児を連想させる態度は一種の武器であると考えることも不可能ではないわけで決して悲観する必要はないと思うのよね」
「？？」
いつも以上の早口は、エレンにはまるで聞き取れなかったらしい。
ただ、
「なんだかよくわかんないけど、ものすっごい悪口を言われたような気が――」
「エレン」

そこへパメラがすかさず口を挟んで、
「要約すると“可愛い”ってことよ」
「そ、そう？　……それならいいんだけど」
あっさり丸め込まれてしまう彼女は、やはり見た目通りの単純な性格だった。

空の端っこがほんの少しだけ明るくなり始めた頃、ミューティレイクの使用人たちは幾分早い朝食を終えて動き出す。
この時間、別館の食堂は男性使用人たちの、一階ホールは女性使用人たちの朝会の場となっており、その一階ホールでは女性使用人たちを束ねるハウス・キーパー、アマベル＝ウィンスターが、ズラリと並んだ使用人たちを前にして今日の来客予定、行事、心構え等々を喋っていた。
その特に代わり映えのしない“演説”に、聞く者の態度は様々だ。大半はきちんと耳を傾けているが、中にはあまりの退屈に全く関係のないヒソヒソ話を始める者もいる。
そしてそんな中、
「ねえ、聞いた？」
列の最後方近くに位置していたパメラに、そのすぐ後ろにいるエレンがそう話し掛けた。
「なにが？」
確かにこの位置ならば、よほどのことがない限りずっと前方で喋っている上司に聞き咎められる心配はない。
「新しく来たクリシュナ様のこと」
「……なに？」
それはパメラにとってあまり触れて欲しくない話題だった。が、逆に突っ込まれるのが嫌で平静を装う。
もちろんエレンはそんな心の動きには気付いた風もなく、
「すごいのよ。入隊試験、隊長との試合でいきなり一本取ったらしいんだから。しかも噂によると、たったの一撃で」

「一撃？　……隊長って、ディバーナ・ロウの？」
パメラは驚きを隠さずに聞き返した。……それもそのはず。ディバーナ・ロウの隊長といえば全員がデビルバスターだ。普通ならば一本を取るどころか、その体に触れることすら難しいはずだった。
と、そんな彼女の反応に、エレンは何故か得意げな顔をして、
「もちろんよ。……すごいわねえ。ハンサムでスマートでお金持ち、実力も折り紙付きでしかも性格も良いなんて――」
「……そうかしら」
パメラは思わず仏頂面でそう答えていた。言ってからすぐに後悔したが、仕方なく言葉を続ける。
「私はあまり好きになれそうにない。……ほとんど話してないけど、そんなにいい人とは思えない」
案の定、エレンは怪訝な顔で、
「はぁ？　……あ、そっか。あなたってどっちかと言うと泥臭い人の方が好きそうだもんね。クリシュナ様みたいに優雅でスマートな方はタイプじゃないのか」
「……」
パメラは視線を斜めに落とし、憮然として黙り込んだ。
……もちろんそんなことはない。彼女がこれまでの人生でもっとも憧れた人物は、確かに“優雅”というイメージではなかったが、充分にスマートでカッコ良かったのだ。
モヤモヤしたものが胸に広がっていく。
さらにエレンは続けた。
「それに、ほら。クリシュナ様って、あの方にもすごく似てると思わない？　私はあまり接する機会がなかったんだけど、前にこの屋敷にいたサイラ――ぐえぇぇっッ！！？」
「え？」
突然響いた“グキッ”という鈍い音に、びっくりして視線を上げるパメラ。
すると、

「エ、エレン？」
そこにあったはずのエレンの首が、後方に九十度ほど傾いている。
その、さらに後ろ。
「……んにゃ？」
眠そうな顔のヴァレンシアが、エレンの後頭部から生えた髪の束を握って惚けていた。
「……！！　！！！」
「……あ」
顔を真っ赤にしながらジタバタするエレンに、ヴァレンシアはようやく我に返った様子で手を離すと、眠そうに目を擦りながら、
「あ、あー、ごめんごめん。あまりに眠くてつい手近なものを頼っちゃった」
「ヴァ……ヴァ……ヴァレンシアァァァぁぁぁッ！！！」
さすがにこの怒りは正当だろう。
エレンは折れ曲がった首を元に戻すと、平然とした顔のヴァレンシアを振り返って烈火のごとく抗議を始めた。
「あ、あんた、この私を殺すつもりィィッッ！！？　わ、私の首はねぇ、あ、あんたの体重を支えるようには出来ていないのよぉッ！！」
本当に痛かったらしい。涙目だった。
だが、ヴァレンシアはあくまでマイペースなままで、
「ところがどっこい。人間って意外に丈夫なもんよ？　あたしなんか昔そこの大階段を派手に転げ落ちたことあるけど、ほら、こうしてピンピン――」
「一緒にすなぁぁァッ！　あんたと違ってねぇっ！　私の体はものすごーくデリケートなのよッ！！」
「ふぅ……まったく。いつまで経っても子供ね、エレンは」
「……？」
突如、気だるそうなため息をついたヴァレンシアは、怪訝そうな顔で勢いを失ったエレンに対し、小さく肩を竦めて言った。

「別にわざとじゃないんだから。いい加減許してあげたらいいのに」
「っ……き、きぃぃぃぃッ！　げ、元凶が、なにいきなり他人顔してんのよッ！！　……だ、だいたいねぇ！　あなたはいつもいつも――っ！」
「あ」
ふとヴァレンシアの視線が上を向く。
……それは明らかな異常を伝えるサインだったが、激昂した（しかも、もともと察しの悪い）エレンがそんな細かな動きに気付くはずもなく。
「――なんだから、いい加減に――……って、ちょっと！　聞いてんの、ヴァレンシアァァッ！！」
「……」
もちろんヴァレンシアは聞いていない。視線は相変わらずエレンの頭上を越え、その先を見つめたまま。
「？　……え？」
そしてエレンがようやく異常に気付いたときは……すでに遅かった。
「……あ・な・た・た・ち？」
背後で聞こえたのはやや甲高い、凛とした女性の声。
「ひっ！」
怒りで真っ赤だったエレンの顔が、サァッと青ざめていく。
数秒の硬直の後、ゆっくり、ゆっくりと視線は後方へ。
いつしか、彼女たちの周りには注目が集まっていた。激昂したエレンの声はとっくに許容範囲を“大幅に”越えていたのだ。
そして、
「いい加減にするのは、エレン、あなたじゃないの？」
それは当然、最前列で演説していたはずの上司の耳にも届いていたのである。
「ア……アマベル様……ッ！」
腕を組み、眉間に皺を寄せて仁王立ちの上司――アマベルに、エ

レンはさらに青ざめ、慌てて言い訳を始めた。
「ちっ、違うんです、これは――そ、そう！　ヴァ、ヴァレンシアが私の髪をッ！」
「……」
腕を組んだまま、アマベルがチラッとヴァレンシアを見る。
が、ヴァレンシアは我関せずと言わんばかりの顔で両手を広げると、
「エレンさんが何をおっしゃってるのかさっぱりですね。私はただ、お喋りしてた彼女を注意しただけなんで」
「なっ……！　ヴァ……ヴァレンシアァァッ！！」
青から赤へ。
「どうどう」
喰ってかかるエレンを適当にあしらうヴァレンシア。なにぶんリーチ差があるため、ヴァレンシアが手を伸ばせばそれだけでエレンの手は空を切ってしまうのだ。
と、
「……ふぅ」
それを見ていたアマベルは呆れた様子で一つため息を吐くと、
「とにかく。朝会が終わったらすぐに私の部屋に来るように。……いいですね？」
「え、ええぇっ！？」
赤から青へ。……なかなかに忙しい。
「そ、そんなぁ……アマベル様ぁ……」
「まぁまぁ、エレン」
そんな彼女に、やはり他人事の顔でヴァレンシアが肩をポンと叩いた。
「せっかくの機会なんだから。ボスの愛情がこもったお説教を、有り難くいただいてきなさいな」
だが。
「……何を言ってるんです？」

その言葉に、踵を返しかけていたアマベルは再び眉間に皺を寄せて言ったのである。
「ヴァレンシア、あなたもですよ」
「え」
きょとんとした顔で、
「……マジですかぃ？」
「当・然です。……私が冗談を言ってるように見えるとでも？」
「……いえ、あなたの冗談自体、聞いたことないっす」
「それなら、わざわざ確かめるまでもないでしょう」
冷たい言葉と仏頂面を残し、アマベルは身を翻して最前列の方へと戻っていった。
「……」
それを目で追ったヴァレンシアは頭を掻きながら、
「……あちゃぁ」
「うぅぅ……ヴァレンシアぁぁぁ……あんたのせいよぉぉぉ……」
あまり応えた様子のないヴァレンシアとは対照的に、エレンはガックリと項垂れた。
“格式あるミューティレイク家の使用人”を自称する彼女にとっては、上司に説教を喰らうということ自体、落ち込むに充分な出来事らしい。
「……」
そして一人“天災”を回避したパメラはそんな二人に苦笑しつつ、とばっちりが来ないようにそそくさと正面に向き直ったのだった。

その日の午後。
「……はぁ」
窓の桟を拭いていたパメラの口から、思わずため息が漏れた。が、まだ動き出してからの時間は短い。疲れたというわけではないだろう。
“ティーサイト＝アマルナ”という名札の掲げられたその部屋は、

パメラが担当する部屋の一つである。事情あって部屋の主は現在長期不在中だが、パメラは毎日掃除のためここにやってくる。主がいないので散らかることはないが、黙っていても埃はたまっていくものなのだ。

「……」

無言のまま、彼女の視線は部屋に備え付けの机の上に向かった。そこに置いてある小さな小瓶が目に止まる。

（ティース様……）

この部屋の主は屋敷に来てからまだ一年と経たないが、ちょっとした出来事があって以来、彼女と比較的数多く言葉を交わすようになっていた。親しい、と言うほどではないが、あまり立場を気にせず言葉を交わせる相手である。

（ティース様なら、どう思うだろう）

そしてパメラはふとそう考えた。

……サイラスという青年は優秀であり、そして人望があった。もちろん彼を慕っていた者は数多くいる。が、その中でも、パメラと同じかそれ以上に影響を受けた人物といえば、おそらくこの部屋の主ぐらいのものだろう。

だから、パメラは想像してみたのだ。

この部屋の主が、あのクリシュナという青年を見たときに、一体どういう反応を示すのか、と。

――所詮は別人だと気にも留めないのか。

――あるいは彼女と同じように動揺するのか。

とはいえ、

「……はぁ」

やがて考えても無駄なことだと気付き、パメラは窓を離れた。入り口から全体を見回し、不備がないことを確認して部屋を出る。

と、

「パメラ」

「あ」

丁度そこを通りかかった少女がいた。
比較的良く見知った、同い年だが、持っている雰囲気は幼さを残すパメラよりもずっと年上を感じさせる客人の少女。
「……シーラ様？」
だが、その相手を認識した直後、すぐに感じた違和感がある。
パメラの視線はその違和感の正体――少女の着ている衣服へと止まって、それから心配そうな表情になると、
「またそんな格好で……学園の方はどうなさったんですか」
少女が身につけている白と紺の衣服はミューティレイクの制服だった。パメラのものとは少し違ってややお洒落なデザイン――主に接客や給仕を担当する“パーラー・メイド”のものである。
それはもちろん客人であり、このネービスでも伝統のある“サンタニア学園”の学徒である彼女が着るはずのものではなく。
だが少女――シーラはその問いには答えず、両手に持った空のトレイを示して、
「朝食よ。……仕事自体は理解してるつもりだけど、いざやってみると覚えることがたくさんあって大変だわ」
「……」
パメラは困った顔で視線を泳がせたが、以前にも同じ問答をしたことがあったので、それ以上は何も言わなかった。
すると、逆にシーラの方から、
「どうしたの、パメラ？」
「……え？」
「元気がないように見えるけれど」
突然の指摘。予想してなかっただけに、パメラは一瞬うろたえたが、
「え……あ、そんなことないですよ。元気、元気です」
咄嗟にそう答え、勢いで力こぶまで作って見せる。
「……ならいいのだけど」
言葉と裏腹に納得した様子ではなかった。

見透かされてる気がして、パメラは慌てて話題を変える。
「その朝食、もしかしてレインハルト様ですか？」
「？　どうして？」
パメラは苦笑して、
「最近、シーラ様をご指名なさることが多いと、噂で聞いたので」
「ああ……そういえば最近多いわね。何か勘違いしてるのではないかしら、あの男」
シーラは仕方なさそうにため息を吐いたが、すぐに、
「でも、今日は違うわ。……今日初めて会ったのだけれど、変わった人が来たわね」
「え？　あ……」
その言葉に、パメラの視線はもう一度シーラの手にある空のトレイに止まる。
「クリシュナ様、ですか？」
「ええ」
躊躇いがちの問いに、シーラは頷いて、
「みんながうわさ話をしてるから、どんな人かと思っていたのだけど」
「……」
パメラは再び躊躇った後、
「……どんな方、でした？」
思わずそう尋ねていた。
――できる限り触れたくないと思う反面、やはりどうしても気になってしまうのだ。
「そうね」
シーラは少し考えたが、それほど迷うことなくすぐに答える。
「ハンサムだし、物腰も丁寧で紳士的だし、第一印象では非の打ち所がないわね」
「丁寧で……紳士的？」
思わず、パメラは眉間に皺を寄せた。

……初対面の人間に“田舎者”などと口走る人間が丁寧で紳士的だなどと、彼女にはとても信じられなかったのである。
「なに？」
だが、逆にシーラは怪訝そうな顔で聞き返す。
「パメラ？　何かあったの？」
「あ……いえ、そういうわけじゃ。……そうですか」
そう言いながらも、パメラの表情は自然と険を帯びる。
――見下された、と思った。おそらくあのクリシュナという人物は、相手を見て態度を変える男なのだろう、と。
胸を再びモヤが覆う。
それが普通の相手であればこれほどの嫌悪感は覚えなかっただろう。
だが、偶然とはいえ、彼はあまりにも“似すぎて”いた。いくら関係ないのだと言い聞かせてみても、それはパメラにとって容易に割り切れるものではなかったのだ。
「……」
シーラはそんな彼女を黙って見つめる。
……誰が見ても異常だと気付いただろう。彼女はそれほどに思い詰めた表情をしていた。
一つ、ため息。
そしてシーラは言った。
「パメラ。……今日、仕事が終わったら私の部屋へ来なさい」
「え？」
突然の申し出に驚くパメラ。
だが、そんな彼女には構わず、シーラは有無を言わさぬ口調でもう一度、
「話があるのよ。特別な用事がないのであれば、来なさい」
「……」
その言葉には妙な威圧感があって……パメラにそれを断る術はなかった。

夜のミューティレイク邸別館。
特別に仕事が遅くなったりしない限り、パメラがこの時間にここを訪れることは滅多にない。
ましてーーこうして客のように迎えられることなど、そうそうあるはずもなかった。
「ファナが気を利かせてくれたみたいね」
「きょ、恐縮です……」
部屋に備え付けのテーブルには紅茶のカップと、小さなシフォンケーキが二つずつ。テーブルについたパメラは言葉通りに恐縮しながら、紅茶を入れるシーラの手際を見つめている。
部屋を包むのは薄いオレンジ色の光。天井に備えられた魔界由来の照明器具は、日によって明るさや色合いにややバラつきがあり、今日はかなり赤味が強い。
「……はぁ」
「なに？」
「あ、いえ」
パメラがため息を吐くほどに見とれていたのは、オレンジ色の光に揺れる飴色の髪だった。……職業柄、高貴な身分の女性も数多く見てきたパメラだが、ここまで美しい髪を見るのは初めてーーいや、髪だけではない。このシーラという少女は、その全てにおいて文句の付けようがないほどに美しかった。
もう一度、ため息。
そしてパメラは言った。
「私、ローズ様より美しい方はこの世にいないとずぅっと思ってましたけど、シーラ様はもしかするとそれ以上かもしれないです」
「そう？　ありがとう」
素直に感謝の意を表情に出して、シーラは紅茶をパメラの目の前

に差し出した。
「す、すみません」
再び恐縮しながら受け取って、少し口を付ける。透き通った薄茶色の液体が、白い陶磁器の中で微かに波立っており、覗き込むとうっすら自分の顔が映った。
そうしながら、パメラはすぐに口を開く。
「ティース様は……いつ頃お戻りになられるんですか？」
「知らないわ」
返ってきたのは素っ気のない言葉。……先ほどまでより、少しだけ堅いように思えた。
パメラは少し怪訝そうな顔をして、
「特殊任務だって聞きましたけど、随分長いですよね。それに単独だなんて……あ、いえ、ティース様ならきっと大丈夫だと思――」
「そんなことより」
興味なさそうに話題を切って、シーラは自身のティーカップにも紅茶を注ぎながら、
「ちょっと耳に挟んだわ。あのクリシュナって人のこと」
「……そうですか」
もちろんパメラも、それが本題であろうことは予測していた。
「私は会ったことなかったからわからないけど……そっくりなんですってね」
誰に、ということはもちろん言う必要がない。
パメラは視線を泳がせて、
「……似てません」
「本当にそう思っているのなら、言うべき事は何もないわ。でも、それは嘘ね」
「……」
真っ直ぐに見つめられて断言されると、パメラは反論できなかった。
……カチャッ、と、ティーカップが音を立てる。シーラは目を閉

じて紅茶を口にすると、一度話題を逸らした。
「このケーキはフィリスが作ったそうよ。あなた、フィリスとは親しいの？」
「あ……いえ、特別親しいわけじゃ。でも、話をすることはあります」
「そう」
シーラがフォークを手にしたのを見て、パメラもまたケーキに手を伸ばした。柔らかなスポンジを口にすると微かな紅茶の香りが口の中に広がっていく。
「あなたがそんな顔をするぐらいだから、よほど似ているのね」
「……」
嘘をつく理由が見当たらず、今度は素直に頷いた。
「そう。……思い出して悲しくなる気持ちは私にも理解できる。でも、それは彼に非があるわけではないでしょう？　まだ会ったのは一度だけれど、あなたがそうやって顔をしかめるほど悪い人には見えなかったわ」
「……それはきっと、シーラ様が美しくて気品のある方だからです」
「どういう意味？」
怪訝そうな顔のシーラ。
パメラはクリシュナに初めて会ったときの一部始終を彼女に話した。
「……私はこういう外見ですから。だから、あの人はああいう言い方をしたんだと思います」
「なるほどね」
シーラはようやく納得したような顔をする。
「似てるから尚更、そのギャップがあなたには許せない。だから、そんな苦虫をかみつぶしたような顔をしてるのね」
「……そんな顔してますか？」
「してるわ。せっかくの可愛い顔が台無し」
「からかわないでください」

パメラは口を尖らせた。相手が相手だけに、そう言った類のお世辞は素直に受け入れられなかった。彼女にだって羨望の感情ぐらいはあるのだ。

だが、シーラは小さく笑みを浮かべただけで、

「もちろん、あのクリシュナがそういう人物である可能性を否定はしないわ。私だって今日会ったばかりだもの。……でも、あなたに言った言葉だって、決して悪意があったとは限らないのではないの？」

「……え？」

シーラの意外な言葉に、パメラは不思議そうな顔をする。

「田舎っぽいという言葉が悪口だって、どうしてそう思ったの？私だって、使う言葉は違ったにせよ、あなたに対する印象は似たようなものよ。でも、それは決して見下しているわけでも、蔑んでいるわけでもない。……ティースが前に言ってたわ。この広すぎる屋敷で、あなたに会うとホッとする、気持ちが落ち着く、ってね」

「え……でも、あの人の言い方は――」

「もちろん、それはあくまで可能性。別にあのクリシュナという人を弁護する気はないわ。……ただ私が言いたいのは」

シーラは真っ直ぐに彼女を見つめ、

「真実がどうであれ、あなたは最初から歪んだ眼鏡で彼を見てるのではないかしら？　……あなたが好きだったのは、サイラスという男の外見だけなの？　違うでしょう？」

答えるまでもなかった。そしてシーラもまた、パメラの返事を待つまでもなく肯定だと決めつけて言葉を続ける。

「外見なんて本当に些細なことよ」

そして再び目を閉じ、ゆっくりとティーカップに口を付けた。

「まして、ただ顔が似ているからという理由で内面まで見比べてしまうのは、本当に意味のないことだわ。私があなたの顔を持っていても、決してあなたにはなれない。あなたが私の顔をしていても、やっぱり私にはなれないのよ」

「……」

「勝手に比べて、そのことで嫌ってしまうのは、おかしいことだと思わない？」

パメラは視線をテーブルの上に落とす。

紅茶に映る、自分の顔。脳裏に蘇る、憧れた人の顔。

……そうしてパメラは今、ようやく自分の胸に渦巻いていたものの正体に気付いていた。

（私……何を期待していたんだろう……）

そう。

それは“期待”だった。

期待していたからこそ、裏切られたことに怒りを覚えた。

期待があったからこそ、興味を逸らすことができなかった。

彼女は心のどこかで、あのクリシュナという青年が、サイラスという人物を“演じて”くれることを期待していたのだ。

「……っ！」

膝の上で結んだ拳に思わず力が入った。

――演じてくれれば、それで満足できたのだろうか。“代わり”を得ることで満足できていたのだろうか。

そう考えると、自分の浅ましさに悔しくて涙が溢れてきた。そんなものじゃない、と、そう信じたかった。

と、

「落ち込むことないわ」

まるでその思いを見透かしたかのように、シーラはそう言った。

「私たちの心なんてそんなに強いものじゃないもの。……たとえあのクリシュナという人が中身までどれほど似ていたのだとしても、あなたはきっとそれを認めようとはしなかったはずよ。そう思う」

パメラは顔を上げる。

「……シーラ様」

シーラは目を細めて微笑むと、

「私はあなたの想いを良く知ってる。心配などしなくても、私がそ

れを保証するわ」
「……っ」
慌てて目を擦る。
パメラが彼女に涙を見せるのは二度目だ。前回は状況も顧みずに号泣してしまったが、今回はそれをぐっと堪え、
「……ごめんなさい、シーラ様」
目を赤くしたまま、少し無理して笑顔を浮かべた。
「ダメですね、私……同じことで二度も迷惑をかけてしまって……」
「本当。……でもね、パメラ」
シーラは空になったティーカップを置いてゆっくりと手を組んだ。
いつもの凛とした口調に、ほんの僅かな揺らぎが混じる。
「私がこうやって偉そうに言えるのは、自分がそういう立場にないからよ。……私があなたの立場だったら、きっとあなた以上に取り乱していると思うわ」
「……まさか」
「思えない？」
「想像……できません」
「そうね。……私もそう思うわ」
そう言って苦笑するシーラ。
おそらく慰めの言葉なのだろうと考え、パメラは合わせて笑った。
「ありがとうございます、シーラ様。ホントに気持ちが軽くなりました」
「そう」
頷いて、
「いつか、恩返しを期待してるわ」
冗談交じりにそう言ったシーラに、パメラもまた冗談で返す。
「大丈夫ですよ、シーラ様。ティース様はきっと、シーラ様のことを置いていったりはしませんから、私の慰めなんて必要ないと思います」
「……」

「シーラ様？」
本当ならばすぐに素っ気のない否定の言葉が返ってくるところ。
だが、
「……そうね。忘れてた」
一瞬だけ視線を流した、その端正な顔に横切ったのは、果たしてどのような想いだったのか。
「あと十日……か」
「え？」
その呟きに秘められた意味を、パメラには理解できなかった。
ただ、何かを迷っているような、そんな表情に見えた。……そう、思えた。

数日後の朝。
「――ぱんぱかぱーん♪　さぁ本日も再び新しい朝、希望の朝がやって参りました！　昨日までとは打って変わって晴れ渡った空、空気は相変わらず冷たいですが、しかしそんなことは関係ナッシング！　我々ミューティレイクお掃除部隊は今日も今日とて――」
「……う、うるさいうるさいっ！　ヴァレンシア、ちょっと黙ってて！！」
悲鳴のような声がその狭い一室に響いた。
声の主は、どうやらようやく着替えを終えたばかりのエレン。いつも結んでいるはずの髪はほどかれたままで、目の下には微かにクマが出来ている。
そんな彼女を煽るように、ヴァレンシアはさらに声を張り上げて、
「おおっと、エレン選手！　どうしたことか、時間ギリギリだというのにまだ準備ができていないぞぉっ！　これはまさか……ちっ、

遅刻かぁっ！？」
「だっ……誰のせいだと思ってんのよッ！　あんたが遅くまでわけのわからん寝言を言ってるから――」
「ほらほら、エレン。ホントに急がないと、またアマベル様にお説教されるわよ」
苦笑しながらそれを手伝うのはパメラだ。
「お、お説教……」
数日前の悪夢が蘇ったのだろう。エレンの顔がさぁっと青くなった。
「パ、パメラ！　ほ、ほら、早く。早く髪を結んでよっ！！」
その言葉に、パメラは繭をひそめて、
「ちょっと、エレン。それって人に物を頼む態度じゃないでしょ」
「じ、自分でやったら時間がかかるんだから、仕方ないじゃない！！」
「へぇー」
パメラはわざとに意地の悪い笑みを浮かべると、
「じゃあ尚更、きちんとお願いしてもらわないとね」
「ぐ……ぐぐぐ……！」
エレンは悔しそうに顔を真っ赤にしていたが、背に腹は替えられなかったのだろう。
「お……お願いします……」
「よろしい」
ニッコリと微笑んで、パメラは髪留めを手に取った。
いつもの朝だった。

「――パメラ」
「あ、シーラ様」
その日の昼を過ぎた頃、本館の掃除を終えて戻って来たパメラは、一階ホールで丁度厨房の方から戻ってくるシーラと鉢合わせた。
「って、シーラ様……また、そんな格好で――」

「顔色、だいぶ良くなったようね」
また質問に答えることはなく、シーラは腰に手を当ててパメラを見つめた。
あの日以来、二人が顔を合わせるのは初めてのことだ。が、シーラの言葉通り、はたきを手にしたパメラは明るく弾んだ口調で、
「ええ。シーラ様のおかげですっきりしました。もう大丈夫です」
「そう」
確かに、言葉で確認するまでもなかった。
「でも……シーラ様」
「うん？」
怪訝そうな顔のシーラに、パメラはわざとらしくちょっとだけ口を尖らせると、
「クリシュナ様は、やっぱり私の嫌いなタイプでした」
「……それはどうしようもないわね」
と、シーラは苦笑する。
「だってあの人……って、そうだ。シーラ様聞きました？　クリシュナ様が一撃でレアス様から一本取ったって話」
「ええ。噂では」
「でもそれ、本当は違うらしいですよ」
「？　どういうこと？」
「一撃でレアス様の剣を弾いたのは本当らしいんです。でも……」
パメラはそう言いかけて小さく周りを見回すと、少し悪戯っぽい笑みを浮かべて声を潜める。
「あまりに力んじゃったせいか、足が攣って試合を続行できなかったらしいんです」
「……それでも充分すごいことではないの？」
「それが、ですね」
パメラは笑ったまま、
「クリシュナ様って、“その一撃”を出すと必ず足を攣ってしまうそうなんです。……想像すると、なんだかカッコ悪いですよねー……

…あ、このことは一部の人しか知らないんで、内緒ですよ？」
言葉に嫌味はなかった。
シーラは苦笑して、
「噂ってそうやって広がっていくものよ、パメラ」
「私、あの人嫌いなんで、それでも構わないと思います」
しれっとした顔のパメラに、さらに苦笑。
「……そう」
だがその言い方からすると、言葉ほど嫌っているように思えなかった。
「それじゃあ、私、仕事があるのでそろそろ行きますね。……あ、私が言ったってことだけは絶対に内緒ですよ」
悪戯っぽい笑顔を残して去っていくパメラ。――もう、心配はなさそうだった。
「……」
シーラは安堵の表情でそれを見送った後、
「……さて、と」
一瞬だけ、何事か決心したような顔を見せると、ゆっくりと屋敷の中……執務室の方へ向かっていくのだった。

――とある人物と交わした賭けの賞品を請求するために。

プロローグ

その瞬間、世界は真っ白になった。

――何故？

状況を理解できぬまま、自問したのは当然の疑問。

何故、こんなことになったのだろうか、と。

唇を伝わる感触は、柔らかく、暖かく――感じる全てが初めてのものだった。

少しずつ。少しずつ。

彼の頭が認識を始める。

――鼻孔を突く心地よい香り。

――止まない胸の鼓動。

自らの唇を塞いでいるもの。

……そう。

紛れもなく彼――長身で猫背で優柔不断で頼りなく、女性が苦手で、女性アレルギーな、デビルバスター志望の青年――ティーサイト＝アマルナは、たった今、

“唇を奪われていた”

のである。

――何故、彼がこんな面白――いや、突拍子もない事態に陥ってしまったのか。

それを最初から全て説明するには、とりあえず二週間ほど遡る必要がある――

その1『サン・サラス』

比較的陽気な二月下旬のある日。

学園都市ネービスの一角にある大貴族ミューティレイク家。広大な土地と数多くの建物を保持するこの家は、当然のことながらそれを維持するために大勢の使用人を雇っている。

男性使用人たちの頂点にいるのは三十代半ばの若きバトラー、パブロ＝シンプソンだ。

その下には、主に屋敷外や力仕事などの雑用を担当するフットマン、馬車や馬の管理、世話をするグルーム。広大な庭の管理をするガードナー、料理を作るコックや給仕担当のボーイなどがいる。

一方、女性使用人たちの頂点にいるのが二十代半ばのやはり若きハウス・キーパー、アマベル＝ウィンスターだ。

その下には屋敷内の掃除や洗濯、各部屋のベッドメイクやその他雑用を担当する数多くのハウス・メイド。厨房や台所周りの手伝いをするキッチン・メイド、給仕を担当するウェイトレスのようなパーラー・メイドたちがいる。

その他、この屋敷ではバトラーやハウス・キーパーとは別に、他の使用人たちから完全に独立している当主の補佐役として二人の執事がおり、その直属に三人の侍女がいて、その他、屋敷外での仕事を与えられている者も含めれば、使用人の総数は軽く三桁に及ぶだろう。

さて、そんな数多く存在する使用人たちの中。

そこに、やや異彩を放つ二人がいた。

昼時の少し手前。

「おぅ、エル！　忙しいとこ悪ぃんだが、こいつの味を見てくんねぇか？」

「あ、うん」
ヒゲを生やした四十歳過ぎのコック長、プレスリー＝ウッズワースに呼ばれたのは、質素で清潔な屋敷の使用人服に身を包んだ、百四十センチ半ばの小柄な少女だった。その口調にはまだ幼い響きが混じっており、外見の幼さも相まって、一見、十歳を少し過ぎたぐらいの年齢にも見える。
彼女の名はエルレーン＝ファビアス。つい最近、このミューティレイクに籍を置くようになった少女である。
こう見えてすでに十五歳、二ヶ月後に十六歳の誕生日も控えていた。
「どう思う？」
「うーん……」
プレスリーの言葉に、エルレーンは少し首をかしげて、
「もう少し酸味があった方がいいと思う。柑橘系の果汁を絞ってみたらどうかな？」
すると、プレスリーは自分でも再び味を見て、
「……なるほど」
「いつも通り、保証はしないけどね」
彼女が笑顔とともに謙虚な言葉を口にすると、プレスリーは男臭い顔にニッと笑みを浮かべて、
「いやいや、お前の舌に間違いはねえ。毎度毎度悪いな」
「ううん。またボクで役に立てることがあったら、いつでも呼んで」
満面の笑みを浮かべたエルレーンは、まるで舞うようにしてクルリと小柄な身を翻す。
「……おっ、なんだ、エルちゃん。もう行っちまうのか？」
それを見て、近くで作業をしていた若いコックが声を掛けた。
「エルちゃんが居てくれると、この戦場みたいな場所も少しは潤うんだけどなあ」
確かに。今日はミューティレイク本館の方に客が訪れているため、そのランチの準備で厨房は戦場のようだった。

「ふふ、ありがと。お世辞でも嬉しいよ」
そう言って、エルレーンはそのコックに優しい微笑みを向けながら厨房の出口まで行くと、もう一度、クルッと身を翻して、厨房の全員に頭を軽く下げ、
「それじゃ、お邪魔しました。みんな頑張ってね」
そう言って手を振ると、
「おぅ！　忙しいとこ悪かったな！」
そんなプレスリーの声に続いて、すぐさま、そこにいた十人近い料理人たちから次々に言葉が返ってくる。
「エルちゃんも頑張れよー！」
「体壊さない程度にな！」
「仕事で背が届かなかったりしたらすぐに呼ぶんだぞっ！」
「ちゃんと毎朝牛乳呑めよー！」
「イジメに遭ったりしたらお兄さんが相談に乗ってやるからな！」
「ふっ、確かに可憐だが、しかしまだまだ私の美しさには遠く及ばな――」
「今晩、俺と星を見ながら語り合おうぜっ！」
「俺と結婚してくれーっ！」
「……アホか、お前らはっ！！」
最後にプレスリーの突っ込みが入って、厨房は爆笑の渦に包まれる。
「あはは、考えておくね」
いつも通りの様子に、エルレーンも可笑しそうに笑って、
「それじゃ、お邪魔しました」
もう一度、頭を下げ、未だ笑い声に包まれる厨房を後にしたのであった。

そしてその頃、屋敷内のまた別の場所。

もう一人の人物は、陽光の射し込む大きな部屋の中にいた。

「助かったわ、リィナちゃん。ありがとね」
「ええ。このぐらいはお安い御用です」
本館一階の奥にある客間。そこにはやはり、使用人服に身を包んだ二人の人物の姿がある。
片方は三十歳過ぎぐらいの、少し小太りの女性。こちらは特筆するほどの特徴があるわけではなかったが……その、もう片方の女性。
「いやあ、あたしたちじゃどうしても手の届かないところがあるのよねえ。わざわざ男どもに頼むのも面倒だしさ。リィナちゃんが居てくれて、ホント、助かるよ」
「お役に立てたなら嬉しいです」
と、はにかんだ笑顔を見せる女性。
腰まで届きそうなぐらいの、まったくクセのない艶のあるロングヘア。優しげな雰囲気を湛える大きな瞳と、やはり穏やかな印象を与える、僅かに下がり気味の目尻。
だが、それよりも、その女性にはもっと目立つ特徴があった。
「リィナちゃんなら、普通の男どもが届かないところまで届くもんねえ」
もう片方の女性がそう言ったように、彼女は一般的に言って、非常に高い身長を持っていた。
身長百八十一センチ。一般女性の平均を二十センチ以上。そして、一般男性の平均を十センチ以上、上回っているだろう。この屋敷にいる女性たちの中では、もちろんダントツでトップ。男性を合わせたところで、彼女より背の高い人物はそう多くなかった。しかもそれは現段階での話であり、年齢を考えればまだ成長するかもしれない。
なにしろ、彼女はまだ十六歳。
リィナ＝クライスト。彼女もまた、エルレーンとともにこの屋敷にやってきた新顔だった。
「ホントあんがと、リィナちゃん。また――」
女性がそう言いかけたところへ、また別のところから声がかかる。

「……リィナちゃーん！　ちょっと、こっちも頼むよー！！」
「あ、はーい」
どうやらもうしばらく、彼女の活躍は続くようだ。
と。
（心配すること、なかったなぁ）
新入りにも関わらず、思った以上に屋敷に溶け込み、それどころか人気者になっているそんな二人の様子を見て、ホッと胸をなで下ろす人物がいた。
長身でやや猫背。優しげな作りの童顔に安堵の表情を浮かべ、屋敷の玄関へ向かって歩いていく。
（リィナの方は少し不安もあったけど、問題ないみたいだし……）
ティーサイト＝アマルナ。通称ティースと呼ばれるこの男は誕生日を間近に控えた十八歳の青年で、このミューティレイクが抱えるデビルバスター部隊“ディバーナ・ロウ”の一員であり、いわずと知れたこの物語の主人公だ。
先ほどの二人は彼の昔馴染みであり、もともとは“魔”――それも強大な力を持つ“王魔”と呼ばれる存在だった。が、今は特殊なアイテムにより人と変わらぬ姿になり、こうしてミューティレイクで働くことになっていたのである。
（これで、心おきなく次の任務に就ける）
さて、ホッと胸をなで下ろした彼は屋敷を出て、冬の匂いが残る敷地内を歩いていく。
向かった先は敷地内でも外れの方に位置している一つの建物。
第四隊。
第一隊“ファントム”。第二隊“ナイト”。第三隊“カノン”。
だが、この第四隊だけは名称がないという。しかも、部隊と言いながら、所属するのは一名。
その奇妙な部隊（？）に、彼は本日を以て配属されることになっ

ていたのである。
（アルファさん、かぁ……）
アルファ＝クールラント。
それが第四隊隊長の名だ。話によればティースよりも一つ年下の十七歳。誕生日も含めていえば二歳近くは年下ということになる。
そして次に、彼の口をついたのは、
「ふぅ……」
ため息。
（……いつものこととはいえ、今回も不安だなぁ……）
その不安の原因は、数時間前に遡る――。

「第四隊？」
本日から任務復帰というこの日の朝、早速別館の執務室に呼ばれたティースは、このミューティレイク家の当主であり、ディバーナ・ロウの総帥でもあるスーパーお嬢様、ファナ＝ミューティレイクから今後のことについて聞かされていた。
「第四隊っていうと、例の――？」
「はい」
ファナは静かに頷いて、その穏やかな瞳と柔らかな微笑みを彼に向けた。
「ティースさんもすでにご存じの通り、第四隊はたった一人のメンバーによって構成されています。その方の名はアルファさん――アルファ＝クールラントとおっしゃいます」
お嬢様と言えば、お淑やかな深窓の令嬢、あるいはわがままで高圧的、というどちらかのイメージが一般的だが、このファナはいかにも前者の典型という人物だった。
ただ――十七歳、ティースより一つ年下という年齢で、当主かつ総帥という二つの職務をこなすだけあり、ただお淑やかで世間知らずという人物ではない。おっとり、のんびりとしていながら頭の回転は速く、優秀な人物なのである。

「これからティースさんは第四隊の一員となって、アルファさんと協力しながら任務に当たっていただきたいのです」
「そそ」
ファナの言葉に続けたのは、彼女のそばで事務的なサポートをする、まるで少年のような出で立ちの少女。
弱冠十二歳の執事、リディア＝シュナイダーだった。
「アルファさん以外の人が所属するのは、ティースさんが初めてだよ。心してかかってね」
「……」
脅すような言葉に、ティースが少し不安になってファナを見ると、
「大丈夫ですわ。アルファさんはとても綺麗な方ですのよ。おそらくシーラさんにもヒケを取りませんわ」
意図的か天然か、やや軸のズレた返答がいかにも彼女らしい。
「ファナさん、それ、なんのフォローにもなってない……っていうか――」
そこで、初めて気付く。
「え？　アルファさんって、女性？」
だが、ファナはクスクスと笑って、答えた。
「さぁ、どうでしょう？」
「へ？」
リディアに視線を向けると、彼女は悪戯っぽい笑みを浮かべて、
「せっかくだから、ティースさん確かめてきてよ。……ただし、遺書は準備してね」
「……はい？」

――というわけなのである。

（ったく。冗談なのか本気なのかわからないけど……）
だが、その真偽は彼にとって非常に重要である。……というのも、このティースという人物、実は“妙齢の女性に触れられると気絶し

てしまう”という厄介で奇妙な体質の持ち主なのだ。
（でも、ファナさんの言い方だと、見た目は女の人ってことか。それであああいう言い方をするんだから、要するに女の人みたいな男の人ってことかな？）
と、そんなことを考えて歩いていたティース。
そこへ、
「あ、ティースさーん」
その視界の奥。
見覚えのある少女が進行方向からやってきた。
「あ……」
しかも、やってきたのは少女だけではない。
ゾロゾロ、ゾロゾロ、と。
「うわ」
何度見ても、それは異様な光景だった。
ティースに向かって手を振りながら先頭を歩くのは、十代前半と思われる少女。パッチリとした目に、冷たい風に微かに揺れる栗色のセミロング。かなり見目麗しく、いかにも女の子らしく可愛らしい少女だ。
そして、その後ろ。
「……」
「……」
「……」
真っ黒な皮膚に、まるで無表情な無数の目。見慣れない人間であれば、威圧感どころか微かな恐怖さえ覚えるかもしれない。
黒い体躯にしなやかな筋肉を持つ――それは“犬”だった。番犬。
それが十数匹、その可愛らしい少女に追従しているのである。
それはやはり、異様な光景と言わざるを得まい。
「こんにちは、ティースさん」
セシリア＝レイルーン。彼女は“屋敷のアイドル”――もとい、“屋敷の（番犬たちの）アイドル”と称される十三歳の少女だ。彼

女が微笑むと、どんなに恐ろしい形相の番犬たちも骨抜きになって単なる愛玩動物へと変貌するという、不思議な魅力の持ち主なのである。

……ちなみにそれは一部の人間にも通用するらしいという噂だ。確かに人の目から見ても相当に可愛らしい少女なので、決してデタラメとも言い切れない。

「あれ、セシル。今日は学園休みだっけ？」

「はい。それで今日は、みんなと遊ぼうかなって」

ゾロゾロと番犬たちを引き連れて、セシルはティースの目の前で立ち止まった。途端、その背後から放たれる無言のプレッシャーが彼に襲いかかる。

（……なんだかなぁ）

その様は、そのままアイドルの親衛隊である。

ただ――その番犬の群の中に、一匹だけ異質なもの。銀色の毛を持つ“狼”が混ざっている。

その“マルス”という名の狼だけは、他と違ってどことなくまともな視線をティースに向けていた。

言うなれば、常識をわきまえた親衛隊長、といったところか。

「そっか。にしても、相変わらずすごいなぁ。そんなにペットを引き連れて――」

「――二十点」

「へ？」

驚いた顔のティースに対し、セシルはちょっと真顔で人差し指を立てた。

「ペットだなんて言っちゃ、ダメなのです」

まるで教師が生徒に指導するかのような口調で続ける。

「動物たちをペットと呼べるのは、きちんと養って、きちんと世話をしてあげられる人だけです。私は条件を満たしてないので、この子たちとは対等なのです」

「な、なるほど……それは一理あるかも」

彼女らしい理論というべきか。ティースは妙に納得してしまった。
セシルはニコリと微笑んで、
「わかれば、よろしいのです」
「はは……気を付けるよ」
思わずホッとしてしまう笑顔。
体質抜きに女性を苦手とするティースにとって、未だ女性とも言い切れない年齢の彼女は、肩肘張らず気楽に話のできる数少ない異性だった。――非常に情けない話だが。
「ところで……セシル？　その、手にしている鉢は？」
「え？　あ、これですか？」
彼女が手に抱えていたのは、直径十センチほどの小さな鉢植えだった。そこに複数枚の葉を持つ一輪の鮮やかな紫色の花のつぼみが植えてある。
「これはレツィアーレの花です。今日咲くみたいなので、あとで部屋に持っていこうかと思って」
「レツィアーレ？　今日咲くって、まだ全然つぼみの状態だけど……？」
怪訝そうに問いかけたティースに、セシルはにこやかに微笑みながら、
「レツィアーレの花は、ほんの一瞬、夕暮れが迫る頃に咲き始め、日が沈むと同時に花を閉じてしまいます。ですから、その花を見ていられるのはほんの数時間しかないのです。ちなみに――」
セシルはもう一度人差し指を立て、やはり教師のように得意げに続ける。
「花を咲かせる当日は、この下についてるたくさんの葉っぱが緑から少し赤っぽい色に変色するのです。……とても綺麗な花を咲かせるので、この花を見るためだけに戦争が一時中断した、なんて伝説が残っているぐらいなのですよ」
確かに今、その葉はほんの僅かに赤味を帯びていた。
「へぇぇ……」

もちろんティースのような男がそんな気の利いた知識を備えているはずもなく。

セシルは少し悪戯っぽい口調で言った。

「男の方でもこういう知識を少しぐらいは備えておくべきですよ？そうしないと、女の子にモテないのです」

「はは、考えておくよ」

気のない返事でティースは苦笑して、

「じゃ、俺はこれから仕事だから、そろそろ行くよ。また」

「はぁい。頑張ってくださいね」

手を振るセシルと別れ、さらには無数の無表情な視線に見送られながら、ティースはさらに歩みを進めていった。

（……冬もそろそろ終わりかなぁ）

ところどころに残っていた雪もほとんどが溶け、残っているのは端に寄せられた雪山の一部のみ。ここ数日は陽気も続いていたし、気温的にもそろそろ、だろう。

広大な敷地内でほんの僅かに春の気配を感じながら。

そして第四隊――名称がないので通称“ディバーナ・ゼロ”とも呼ばれる――その詰め所。

そこに到着したティースの第一声は、

「……なんだ、こりゃ」

だった。

彼がこのミューティレイクに来てからすでに八ヶ月ほどが経過している。が、仕事や訓練が忙しいこともあってその全てを把握しているわけではない。もちろん敷地の隅っこにある、このディバーナ・ゼロの詰め所など、見るのは初めてだった。

――詰め所？

そう表現するのが正しいか否か。

他の三部隊の詰め所は、普通の一軒家と鍛錬場が一体化したような建物であり、大きさ的にもそれなりだ。四、五人の隊員が詰めるには少々大きすぎると思うぐらいで、半永久的に生活することさえ

可能ではないかと思われるものだった。
が、しかし、この第四隊ディバーナ・ゼロの詰め所は、それと全く正反対である。
建物自体はどうやら金属製の、まるで飾り気のない四角い箱のよう。広さは……せいぜい二十畳弱といったところか。窓は南と東に一つずつ。西側におそらく出入り口であろうドアがついており、北側は何もない。南に面した窓の外には洗濯物が干してあり、厚手のトレーナー、厚手のズボン、厚手の靴下に、手袋……それを身につけている人物はよほど寒がりなのだろう。
「……ミューティレイクの敷地に、こんな建物が……？」
そんなティースの呟きは至極もっとも。まるでその建物だけ、どこか別の場所から持ってきたようなのだ。……とはいえ、まさか異次元に迷い込んだわけでもあるまい。そこがゼロの詰め所なのは間違いないことだった。
「……」
未だ半信半疑。やや不安に感じながらも、ティースは入り口に立ってノックすることにした。
一回、二回。
だが、返事はない。
「あのー……アルファ、さん？　今日から配属されたティーサイトです」
三回目。
たったこれだけの広さだ。ノックが聞こえていないはずはない。……とすると、不在か、何か取り込み中か、あるいは聞こえていて無視しているか、のどれかだろう。
「入ってもいいですか？」
それでも返事はない。
ティースは仕方なくドアノブに手をかけた。あっさりと回る。
――微かに、花のような香り。
「え……？」

一瞬立ち止まったティース。
中の風景は外観からも容易に想像できるものだった。
まるで飾り気のない壁。床も敷物は一切無く金属がむき出しのまま。部屋の隅には、少々場違いにも思える紫の花の鉢が置いてあった。一瞬だけ感じた香りは、その花のものだろう。
彼が立ち尽くした原因は、それらではない。
「アルファ、さん……？」
その鉢とは反対側の隅、そこに簡素なベッドがあり、一人の人物が腰掛けてその花を無表情に見つめていた。
と……その視線が、ゆっくりとティースに向けられる。
「――」
言葉を失った。
それは……なんと表現すべきだろうか？
腰まで届こうかという銀色の髪。肌は雪のように白く、やや切れ長の目はどこか“影”を感じさせるもの。
ファナが言ったように、容姿の端麗さでは彼の良く知る少女、シーラ＝スノーフォールにもヒケを取らないだろう。
だが……しかし。
“人形のような”とよく表現されるそのシーラですら、この目の前の人物に比べれば“陽”の美しさと言えるかもしれない。
そこにいた人物のそれは、それほどに憂いと影、脆さと儚さを同時に秘めた“陰”の美しさだった。
（――雪女）
思わずティースの脳裏に浮かんだ言葉。確かにそう表現するのが近いかもしれない。
しかし。
実を言うと、彼が絶句した理由はそれだけでもなかった。
（……にしても、このファッションセンスは――）
そう。
いや、確かにこのティースという男も、決して他人のセンスをど

うこう言える人物ではない。五段階評価をするなら万年“二”程度の劣等生だろう。

が……そんな彼をしてもそう感じさせてしまうほど、この人物の服装は極めて“特殊”だった。

クリーム色のセーター、室内だというのに水色のマフラー、白い薄手の手袋と、かなりの厚着でとても雪女らしくはない。それだけならまだしも、セーターの下にはさらに色々着込んでいるようで体はややアンバランスに膨れ上がっており、口元は幾重にも巻いたマフラーで隠れ、一見するとまるで我慢大会をやっているかのよう。さらにセーターの胸の部分には大きなハートマークが刻まれていたのだ。

本人の真剣な表情と相まって、それは微妙に笑いを誘う光景だ。

（ど……どういう人なんだ、一体……）

それだけでは、内面をとても判断できまい。ただ、ティースを見つめる視線はやけに冷たく、そこだけは間違いなく“雪女”のそれであった。

（というか……女の人、だよな？）

と、自問する。

いや、確認するまでもない、そこにいたのはどこからどう見ても女性だ。もちろん色々着込んでいるため体の線は全くわからなくなっているが、男が天然でこの容姿だとは到底信じられない。

しかし……そうするとティースはますますわからなかった。

（それじゃあ、ファナさんもリディアもなんであんな言い方を――）

「ティーサイト、だったか」

「……え？　あ、はいっ！？」

突然の呼びかけに、慌てて反応する。

声は女性にしてはやや低めでハスキーだ。第一印象から異様に無口な人物を想像し、やや不安に感じていたが、どうやらそれほどでもないらしい。

が、

「何しに来たんだ？」
「へ？」
「まだ任務はない。ここに来る必要はない」
「え？」
ティースは驚いて、
「い、いやだって、任務がなくても訓練とかあるでしょう？」
「訓練？」
視線が泳ぐ。そしてアルファは何事か考える素振りを見せた。
やがて、
「それは私が、君を鍛えるということか？」
「ええ。まぁ、たぶん……」
それ以外に何があるというのか。まさかその逆でもあるまい。
だが、アルファは真顔のままで納得したように頷くと、
「そうか。……それで、どうする？」
「へ？　い、いや、俺に聞かれても……筋トレとか、稽古とかじゃ――」
「そうか。それなら、好きなようにやって構わない」
そのまま、視線を戻してしまった。
「え？　……あ、あのー」
「……」
「アルファ……さん？」
「……」
「……」
どうやらこれ以上話してもラチが明かないようだ。
（……想像以上だな、こりゃ）
ティースは早々に諦め、仕方なくナイトで繰り返してきた基礎トレーニングから始めることにした。
「……」
彼が黙々とトレーニングをする傍らで、アルファは相も変わらず視線の先の花を見つめている。アドバイスするでもなく、もちろん

自らがトレーニングするわけでもない。まるで、自分一人の世界をそこに作ってしまっているかのようだ。

（やっぱり変な人だった……）

現在、このディバーナ・ロウに所属するデビルバスターは四人。アクア＝レビナート、レインハルト＝シュナイダー、レアス＝ヴォルクス……そしてこのアルファ＝クールラント。

ティースはこれでその全員と相まみえたことになるが、その中でも変人度では群を抜いて一番だろう。

そうして無言の時間が過ぎ――約二時間後。

「はぁ、はぁっ……ッ！！」

したたり落ちた汗が床のところどころに小さな水たまりを作っている。床は先ほども言ったように金属がむき出しになったままなので吸収されるでもなく、少しずつ乾いていく他はそこに溜まる一方なのだ。

「はぁ……はぁ……ッ！」

（そ、想像以上にキツい……）

ここに戻ってきてから本格的なトレーニングをするのは初めてだ。今までも体を動かさなかったわけではないが、それでも久々のトレーニングに使ってない部分の筋肉が悲鳴をあげていた。

「はぁっ……はぁっ……ふぅっ……」

少しずつ、ゆっくりと呼吸を戻していく。金属の床のヒンヤリした感触が心地良かった。

「あ……アルファさん……ひとまず、終わりましたけど……」

「そうか」

「……」

「……」

「あの……ふぅっ……次は、何をすれば……」

「まだ、何かしたいのか？」

「まだ、って――」
二時間前と似たような問答の繰り返しだった。
（ていうかこの人、二時間もずっと同じ格好のままだし……）
とりあえず体と床に落ちた汗を拭き取ることにする。が、そうしている間もアルファは全く動く素振りを見せなかった。
「……あの、アルファさん」
そうしてさすがのティースもようやく気付く。
どうやらここは今まで所属してきたところとは根本的に違っていて。ひとまず今日は訓練を諦め、まずは彼女とのコミュニケーションを取ることが優先らしい、と。
「少し、話をしてもいいですか？」
「話？」
切れ長の美しい目がようやくティースを捕らえた。
「ええ」
汗を拭き終え、ティースは意を決してその場に腰を下ろした。……もちろん彼は女性と話すことが苦手である。が、近付かれしなければ普通に会話することは可能だし、このアルファという女性は美しいことは美しいが、いかにも女性らしい明け透けな色香とは無縁（そのコスチュームの影響も多分にあると思うが）のようで、比較的接しやすいだろうと思えたのだ。
「しばらくチームを組むわけですから、お互いのことを色々知っておいた方がいいかなって」
だが、彼女は素っ気なく答えた。
「私には別に必要ないが」
「う……そ、その、俺には必要なんです」
食い下がる。
と。
「それなら、別に構わない。私のことを話せばいいのか？」
「え？　あ、ええ……」
意外にもあっさりした承諾に、ティースは少々拍子抜けした。が、

そんな彼の心情を気にした様子もなく、そのままアルファは自らの自己紹介を始める。

「アルファ＝クールラント。十七歳。十二月二十五日生誕。身長百七十五センチ。体重五十五キロ」

「あ、百七十五センチもあるんですね」

ティースは意外そうに呟く。……どうやら、ずっと座っているのとやや膨れた厚着せいで感覚が狂っていたようだ。

しかし、そこでふと気付いて、

「……っていうか、自己紹介って、別にそんなところから紹介しなくても――」

「性別、男」

「いや、だから――って……おっ、おとこぉおおおおっ！！？」

絶叫にも近い声が小さな建物の中に響き渡った。もし窓が開いていたなら、おそらく相当広い範囲まで届いていただろう。

「なにか？」

だが、そんなオーバーリアクションにも、彼女――いや、彼？は平然とそう聞き返した。

「い、いや、だって……え？　男？」

「私が男だと、そんなに不思議なのか？」

「……不思議っていうか――」

そのときになって、ティースはようやくファナたちの言葉の意味を悟ることになった。

「だ、だって……どう見ても、女の人にしか見えません……」

「……」

アルファは何事か考える仕草をした。長めの睫毛が微かに震える。……こうして見ると化粧もなにもしていないようで、肌の白さも長くてくっきりとした睫毛も、全て天然のものらしい。

――ますます信じがたい。

やがて、考えた末に自らの長い銀髪を指先に挟んでアルファは答えた。

「髪の長い男がそんなに珍しいのか？」
「いやいや！　髪が長いとか短いとかの問題じゃなくて！」
ティースは手を振って否定する。
というか、たとえ髪を全部剃ったところでおそらく女性にしか見えないだろう、とティースは思った。
再び考え込むアルファ。
「……身長が百七十五センチもあるのは、女にしては珍しい部類だ」
「俺の知り合いは百八十センチ以上ありますが……」
「……。普通の女はこういう乱暴な喋り方はしないものだ」
「ダリアとかドロシーはもっと乱暴かなと……」
「私が女だとしたら、もっと――」
「というか」
ティースは怪訝そうな顔のまま、突っ込む。
「本当に男なら、普通、そういう弁解の仕方はしないんじゃ……」
「……」
目を閉じて、困ってるような困ってないような微妙な表情をする。
「しかし私は男だよ。ファナに確認してみるといい」
「笑いながら、『どうでしょう？』……と言ってましたけど」
「……」
「……」
黙り込む。とはいえ、気分を害した様子ではなく、どう答えるべきか迷っていて、なおかつその言葉がなかなか思い浮かばない。……そのうちに答えるのを諦めてしまったようだ。
そんな彼（彼女？）の姿を見て、ティースは確信する。
（……男だって言ってるけど……どう考えたって女の人だよ……）
だが、その後……それ以上のコミュニケーションを諦めてそこを退出したティースは、ファナやリディアが曖昧な言葉を口にした“本当の理由”を知らされることになるのである。

「……ああ、やっぱりそう思った？　でもね。ディバーナ・ロウ的にはそういうことになってるし、戸籍的にも確かにそうなってるんだ」

夕食後、別館一階のホールにて。

アルファに対する正直な感想を述べたティースに、リディアはいつものように片手にした分厚い本を丸テーブルの上に置き、彼の正面に腰掛けてそう答えていた。

「そういうこと、って、男だってこと？　ホントにか？」

驚くティースに、リディアは小首を傾げて、

「ま、戸籍なんてアテになんないけどね。主要都市以外に住んでる人なんてかなり適当だし、いくらでも他人を名乗ることはできるからさ。ただ、わかる限りでは特に疑う余地はなし。データのみで言うと、アルファ＝クールラントは間違いなく男だよ」

「で、でも、あの人、デビルバスター試験とか受けてるんだろ？」

リディアは首を横に振って、

「デビルバスター試験に性別検査はないよ。ウチだって入隊時にいちいち調べたりしないし。ティースさん、裸にされて調べられた？」

「そ、そりゃ、されてないけど……でも、ここで暮らしていれば偶然でも誰か確認する機会もあるんじゃないか？　ほら、風呂場とかで……」

ティースは食い下がった。

ここの浴場は基本的に一人で入るタイプで、いくつかある浴場を交代で使うことになっている。が、実際のところ、四、五人で入っても充分足りるだけの広さがあるため、きっちり一人ずつ入るようなことはない。たとえそうだとしても、脱衣所で他人と顔を合わせることは珍しくなかったのだ。

が、リディアはそれに答えて、

「それがねぇ。ティースさんも会ってわかると思うけど、あの人、人前に肌をさらすのを極端に嫌うんだ。だから、お風呂も真夜中に

必ず一人で入るの。……以前、アルファさんが入ってると気付かなかった使用人の男の子が、脱衣所に入った瞬間“何者か”に気絶させられたらしいって話もあるんだから」

ティースはやや苦笑いをして、

「……それって肌をさらすのを嫌うとか、そういうレベルじゃないなぁ」

「女だってのを隠すために、とも考えられるんだけどね。ただ――」

リディアは小さく首を振って、

「あの人が男だっていう、なかなか揺るがしがたい証拠もあるんだな、これが」

「証拠？」

「うん。実は――」

と、言いかけたところへ、

「あれれ。珍しい組み合わせですね」

「ん？」

「あ。セシルさん」

振り返った二人の視線の先に、大きめのトレイを手にしたセシルの姿があった。トレイの上にはまだ手のついてない夕食が乗っている。

（あれ。でも、確かさっき、俺と一緒に食べてたはず……夜食かな？）

ティースは一瞬そう考えたが、まさかそんなはずはなかろう。彼女は確かに、その体型の割には“かなり”健康的な食欲の持ち主だったが、さすがにそこまでの暴食家でもない。

と……彼女もそんな彼の視線に気付いたのだろう。

「あ、ティースさん。もしかして私が食べると思ってます？」

「……あ、いや」

セシルは少しだけ不満げな顔をする。

「いくらなんでもそんなに食いしん坊じゃないですよ、私。……あ、今、ものすごく疑わしい顔しましたね？」

「い、いや、してないよ」
だが、どうやら信じてもらえなかったらしい。
セシルの不満顔はさらにエスカレートして、
「ひどいです。こう見えても私、今はシーラさんのように美しくなるべく、日夜ダイエットに精を出しているのです。それなのにこんなの食べてたら、すぐブタさんになっちゃ――」
そこへリディアがポツリ。
「あ、セシルさん。チーズケーキ」
「えっ、チーズケーキ!?　どこどこ、どこにあるの、リディアちゃん!?」
「……のような雲がさっきあったなぁ」
「え――」
「……」
「……」
二人の無言の追求が、冷たくセシルに突き刺さる。
「……うぅ」
セシルはちょっとだけ言葉を探すように視線を泳がせたが、やがて観念した顔でガックリと項垂れて、
「リ、リディアちゃん、チーズケーキは反則だよぅ……」
「でもセシルさんが一度に食べるケーキの総カロリーは、そのトレイに乗ってる夕食の軽く三倍はあるんじゃないかな、きっと」
「三倍って……」
言葉だけで、ティースは胸焼けを覚えてしまった。
「そ、そんなに食べるのか」
セシルはブルブルと首を横に振って、
「たっ、食べませんよっ!?」
「そりゃ、いつもそうなる前に誰かが止めるからね。そうじゃなかったら、今頃ブタどころか牛みたいになってるよ、きっと」
「うぅ」
かなり形勢不利なセシルは、たじろぎながら苦しい反論をした。

「……わ、私の故郷では、ケーキ分のカロリーはお腹じゃなくて胸に行くという素晴らしき言い伝えが――」
「それは聞いたことがないけど」
リディアは平然と答えてから、セシルの胴体をじっと見つめて、
「少なくとも実践した結果は、その言い伝えを、真っ向から、完璧に、完膚無きまでに、否定しているみたいだね」
「……くすん」
どうやらこの舌戦（？）は、最初から勝負にもなっていないようである。
と、そんな二人のやり取りにティースは苦笑しながら、
「まぁまぁ」
普段なら絶対に口を挟まないような話題だったが、相手が年端もいかない少女二人とあって（中身はそうでもなさそうだが）すぐさまフォローを入れた。
「なんていうか、まだ若いんだし。そんなの全然気にすることないよ、うん」
だが、彼のそんな不用意なフォローに、リディアが早速突っ込んで、
「うわ、年寄りくさ。とても十代の言葉とは思えないよ、それ」
「う……」
たじろいだところへ、セシルもちょっと上目遣いに彼を見つめ、
「でもティースさん。私、リディアちゃんにも負けてるんですよ……その、ほんのちょびっと」
そう言って人差し指と親指で“ちょびっと”の隙間を作ってみせる。
「は、はぁ……」
やや具体的な話になりはじめて、さらにたじろぐティース。……すでに会話に参加したことを後悔し始めていた。
「……ま、まぁ、そういうのは人それぞれに個性があって、いいんじゃないのかなぁ」

適当に濁し、会話を終わらせようとする。
が、リディアがそれを見逃すはずはなく、
「ああ、そうだよね」
手をポンと打って、
「ティースさんの場合、むしろ成長してない方が好ましいわけだから」
「……は！？　そりゃどういう意味――」
「そ、そうなんですか？　じゃ、じゃあ、私みたいな感じでも……？」
上目遣いのまま微かに頬を染めたセシルに、思うつぼだと心のどこかで理解しながらもティースは大いに狼狽した。
「ちっ、違う違う！　違うって！　俺はただ、そんなのは個性だから気にするようなことじゃないって言ってるだけで――そっ、それにセシル！　君は充分可愛いんだし、そんな自分を卑下するようなことを言っちゃ――！」
案の定、リディアはケラケラと笑って、
「ムキになっちゃって。冗談、冗談だってば」
「……あは。ごめんなさい、ティースさん」
セシルも悪戯っぽい笑顔を浮かべた。……どうやら共犯だったらしい。
「っ……」
ティースもようやく自分の声が必要以上に大きくなっていたことに気付き、慌てて口を噤む。
そして続きかけていた言葉を呑み込むと、やや落ち着きを取り戻し、
「……はぁ」
口をついたのはため息。
（……どうも、ここでは俺が一番弱い立場だったみたいだなぁ）
そんな自分の考えに、情けなさを感じるどころか、可笑しさに苦笑を浮かべてしまう。

腐っても（？）年長者ということか。平常心さえ取り戻せば、彼女らの冗談を微笑ましいと思う程度の余裕はあるようだ。
「でも、可愛いって言ってくれたのは嬉しかったです」
今度は演技でもなく僅かに顔を上気させたセシルに、リディアが不満そうな顔をして、
「変だなぁ。あたし、一度も言われたことないよ」
ティースはようやく反論する。
「だって、君の場合は言われても嬉しくないだろ？」
「わかってないなぁ。わかってないよ、ティースさん」
ため息とともに首を振って、
「女の子はいつでも可愛いって言って欲しいもんなの。そんなんだから、その歳で恋人もできないんだよ。……どうせシーラさんにも言ってあげたことなんてないんでしょ」
言いたい放題だったが、ティースは気分を害した様子もなく苦笑して、
「はは、そりゃそうだ。俺がそんなこと言ったら、喜ぶどころか気味悪いって一刀両断だよ」
「ああ……あの人なら確かにそうかも」
反論せず、リディアは納得した表情をした後、ボソッと呟いた。
「……とりあえず口ではね」
「？　なんだ？」
「なんでもなぁい」
そっぽを向いたリディアにティースは不思議な顔をしたが、それ以上突っ込むことはなく話題を変えた。
「ところでセシル。結局、そのトレイは？」
「あ、はい。これはお兄ちゃんのところへ持っていくのですよ」
ティースは少し驚いた顔で、
「え。君、お兄さんなんていたのか？」
「あれ？　言ったことなかったですか？」
セシルは意外そうにした後、ニッコリと笑みを浮かべて、

「とても優しくて、とてもカッコいい兄なのですよ。今度、ティースさんにも紹介しますから、仲良くしてくださいね」
相当仲がよいのか、セシルはまるで自分のことのように誇らしげだった。
「ああ」
確かに彼女の兄ならばほぼ間違いなく美形だろう。
自然、ティースの口元には微笑みが浮かんで、
「そっか。じゃあ楽しみにしてるよ」
「はぁい。あ、いい加減急がないと冷めちゃう。……それじゃあティースさん、リディアちゃん、またね」
「うん。またね、セシルさん」
リディアが手を振ると、セシルも手を振ろうとして——両手がトレイで塞がっていることに気付き、考えた末に恭しく一礼して去っていった。
「へぇ」
そんな彼女を見送りながら、ティースは意外そうにポツリと、
「あの子にお兄さんなんていたんだなぁ」
だが、リディアは当然のように答えて、
「そりゃそうでしょ。保護者がここで働いてなきゃ、普通の学生のセシルさんがこの屋敷に住んでるはずないじゃん」
「あ、そりゃそうか」
至極もっともな話だった。
「でも、聞いたことないなぁ。ディバーナ・ロウじゃないのか？」
「ディバーナ・ロウだよ。裏方じゃなくて、ちゃんと隊に所属してる」
「え？　でも……？」
ティースは怪訝そうに視線を流して考える。
……ディバーナ・ロウは第一隊“ファントム”第二隊“ナイト”第三隊“カノン”……そして第四隊の通称“ゼロ”で全てだ。そして彼は今までその全てに所属し、全てのメンバーと顔見知りになっ

ている。
「レイルーンなんて名字、セシル以外で聞いたことないぞ？」
「うん。セシルさん、小さい頃遠い親戚に引き取られたんだって。だから、今もそっちの名字を使ってるの」
「へぇ……ってことは、そのお兄さんは俺の知ってる人ってことかぁ」
「当ててみる？　考えればすぐわかると思うけど」
「え？　……それじゃあ」
今まで知り合ったディバーナ・ロウのメンバーを思い浮かべる。
（まず、レイさん……じゃないだろうなぁ）
当たり前だ。それだと、リディアとセシルが姉妹ということになってしまう。
（ファントムには女の子しかいないし、ナイトは……ギレットさんはさすがにないだろうから、マイルズさんとパーシヴァル……あとは……ヴィヴィアン？）
一瞬、ヴィヴィアンとセシルが並んでいる姿を想像して、吹き出しそうになった。
「ビビさんは違うよ。それじゃセシルさんがあまりに不憫すぎるし」
反応だけで彼の思考を見抜いたようだ。……知らぬところでネタにされるヴィヴィアンも少々可哀想ではある。
「じゃあパーシヴァルかな？　年齢的にも三つ？　ぐらいでピッタリだし」
「……ティースさん」
ティース自身は至極まっとうでしかも自信のある回答だと思っていたのだが、リディアは呆れたように大げさなため息をついた。
「話の流れを考えてよ。今の流れですぐわかるって言ったら、一人しかいないでしょ」
「え？　話の流れ？」
その言葉に従い、ティースの思考は会話の流れを逆に辿り始めた。
セシルとのやり取り、そしてその前の会話――

「……え？」
すぐ気付く。
そう考えてみれば確かに。その流れで行くと、回答は一つしかない。
「ってことは――……で、でも待った。だって、アルファさんはどう見ても“兄”じゃ――」
「だから言ったでしょ。なかなか揺るがしがたい証拠があるんだって」
テーブルに肘をつき、リディアは視線を横に向けた。
「実の妹――ううん、実の妹と思われるセシルさんが、あの人のことを“兄”だと認めてるの。……認めてるって言い方はおかしいかな？　最初から兄妹としてここに来たわけだし」
「……」
それは確かに、なかなかに揺るがしがたい証拠だった。
「じゃあ、本当に……？」
「だから、それがわからないから確かめてみてって言ってんの。……あ、そうだ」
ポンと手を叩いて、リディアはまるで悪戯を思いついた子供のような表情をした。
「そういや、簡単に確認できる方法があるじゃん」
「……え？」
嫌な予感。
もちろんこういう場合の彼の予感は、外れた試しがなく――
「喜んでいいよ、ティースさん。まるで役に立たないその厄介な体質が、遂にスポットライトを浴びる日がやってきたんだから」
「うわ、やっぱり……冗談じゃないぞ。俺だって気絶すんのはゴメンなんだ」
「大丈夫大丈夫。データ上、アルファさんは完璧に男だから」
「ったって、それ以外は完璧に女性じゃないか！」
「うーん、性格もって言いたいけど、ウチにはダリアさんとドロシ

ーさんがいるから弱いなぁ。あの二人、アルファさんよりは確実に男らしいし」

「……言いたい放題だなぁ」

ティースはため息とともに、

「とにかく。そんなことするぐらいなら、男でも女でもどっちでもいいよ、もう。……セシルが言ってるんだ。きっと男の人なんだろ」

「うっわぁ。つまんない結論ー」

「つまんなくていいんだよ。それに、そんなに調べたいなら、君のお兄さんとかに言えばいいだろ？　あの人なら、きっと興味があるんじゃないの？」

と、ティースは言った。

リディアの兄、レインハルト＝シュナイダーはディバーナ・ロウの第二隊ナイトの隊長であるが、女性と見ればすぐ口説きにかかる――要するに“女好き”なのである。確かにアルファが女性だとするなら、彼にとっても見過ごせないことだろう。

……と、ティースは思ったのだが、リディアはパタパタと手を振って、

「あー、アレはダメダメ。たとえ女だとしても苦手なタイプだって。……それに、いくら兄さんでも、力ずくではちょっと難しいかもねぇ」

「？」

テーブルに肘を立てて手を組み、そこに顎を乗せてリディアは彼を見つめた。

「ティースさんは“サン・サラス”っての、聞いたことある？」

「え？　ああ……もちろん」

突然の話題変化に戸惑ったが、それはもちろん、デビルバスターを目指す彼には聞き覚えのある単語だった。

“サン・サラス”

本来は神の使いと称される獣魔“光の一族”の種族名である。が、その単語にはもう一つの意味があるのだ。

ティースは答えた。
「デビルバスター試験でもっとも重要な科目“戦闘技術”に関して、その年の試験をトップの成績で通過、尚かつある一定以上の基準を満たした者に贈られる称号、だろ？」
「ご名答」
リディアはパチパチと軽く手を叩く。
「まぁ、俺にとっては雲の上の話だけどなぁ」
「だろうね」
ティースの言葉に、リディアもまるでフォローすることなく素直に頷いた。
何しろ現在、サン・サラスの称号を持ち、なおかつ現役で戦っている者は、大陸全土を合わせて二十人にも満たず、それはこの大陸に存在する領地の数より少ないのだ。
もちろん、それはあくまでデビルバスター試験終了時の評価であり、サン・サラスが常にその世代最強というわけではない。が、一定以上の実力の証明ではある。
「現在、このネービス領にいるとされる“サン・サラス”はたったの三人だよ」
リディアはそう言って指を三本立てた。……それでも三人もいるのは、大陸第二と言われるネービスだからこそ、だろう。
「ネスティアスのディグリーズ……ティースさん、ディグリーズは知ってたよね？」
「ああ。ネスティアスのトップを占める十人のデビルバスターのことだよな？」
もちろんネービスの誇る、ネービス公直属のデビルバスター部隊“ネスティアス”のことだ。彼だってそのぐらいのことは基礎知識として持っていた。
「そう。……そのディグリーズの一人で、十三年前のサン・サラス、オリヴィオ＝タングラム。そしてもう一人もディグリーズで、七年前のサン・サラス、カレル＝ストレンジ」

名前は初めて聞くものだ。が、それを二人も抱えているネスティアスは、さすがというべきか。

「そしてもう一人が、近十年で最高レベルと噂された三年前、三百十七年のサン・サラス。……誰のことかは、言わなくてもさすがに気付くでしょ？」

「え？」

言われて初めてティースは、彼女がこの話題を持ち出してきた意味を悟った。

「まさか、アルファさん？」

話の流れを考えれば、答えはそれしか有り得なかった。

もちろんリディアも頷いて、

「そう。一見、女性にも見える……ううん、女性にしか見えない、当時はまるで無名のあの人。もちろん試験官も周りの人も、アルファさんのこと女性だと思ってた。だから、そのときの試験会場は異様な雰囲気に包まれていたみたい。女性のサン・サラスは――性別検査があるわけじゃないから確実じゃないけど、一応、まだ一人も出ていないはずだからね」

「……」

ティースは驚きの表情のまま呟く。

「あの人がサン・サラス――？」

とても信じられない話だった。

あのどこかおかしな格好、女性のように（おそらくは）華奢な体、どこかピントの合っていない性格。

そこから“世代最強”を想像するのは確かに難しいだろう。

リディアは続けた。

「あの人たちぐらいのレベルになると、十回戦って十回とも勝つなんて、そんなことは滅多にない。体調、精神状態、環境、偶然……だから例えば、アルファさんと兄さんが戦ったらどっちが強いかなんて、そんなことはわかんない。でもね」

そしてリディアは悪戯っぽく笑った。

「全く同じオッズだったら、あたしはアルファさんの勝ちに賭けちゃうな。もちろん相手がアクアさんでもレアスちゃんでも同じ」
「……レアスちゃん、って」
「あ。本人に言ったら怒るから言わない方がいいよ。……ま、あたしは別にいいんだけどね。あの子あしらうのは慣れてるから」
ティースは苦笑する。
いくら同い年とはいえ、ディバーナ・カノンの隊長である少年に対しても、彼女は言いたい放題だった。
「つまり、アルファさんはそれほど強いってことか」
「ま、実際どうかなんてやってみなきゃわかんないし、今のところ、実現する理由もどこにもないけどね。……あぁ、待てよ。あと五年もすればもしかすると――」
「？」
「最愛の妹が好色な同僚の毒牙に掛けられ、怒り狂う兄の復讐劇。……どう？」
「……」
ため息が落ちる。
「あ、これだとどっちとも取れちゃうか。あたしも五年後には魅惑的なナイスバディになってる予定だし、アルファさんが男なら色香に迷ってもおかしくないなぁ。それに兄さん、とびっきり可愛い娘でも洗濯板にはあまり興味なさそうだから、セシルさんじゃ五年経っても望み薄だし……でも待てよ。逆だとしても、アレがあたしのために怒り狂うなんて、もっと、ってゆーか、絶対にない話じゃん」
「……」
「うっわ。なにその、“ありえねぇ”って目」
「……いや、ただ呆れてるだけだよ。君の言いたい放題ぶりに、ね」
ついていけそうになかった。
それに、
（ま……事実がどっちであれ、俺がアルファさんに触れないようにすれば、それで済む話なんだよなぁ。じゃあ、どっちでもいいや）

彼は比較的、野次馬根性に乏しい男でもあったのである。

その2『関係改善の決め手は温泉旅行』

まだ二月だというのに、ネービスではここ数日、まるで春のような陽気が続いていた。道の脇に微かに残っていた雪は完全に溶けてしまい、気の早い草花は今にも芽吹こうかとしている。

そんな麗らかなミューティレイクの昼下がり。

正門を抜けて敷地内に入り、本館及び別館へと向かう道を半分ほど辿った後、途中から右へ進路を変えてしばらく足を進めていくと、そこにまるで小さな丘のように隆起した場所がある。

頂上付近は大体二階と三階の間ぐらいの高さがあり、そこからはミューティレイクの庭のほとんどが見渡せる場所だ。

「平和だなぁ」

今日はそこに、ティースの姿があった。

「暖かいし、風は気持ちいいし、のんびりした陽気だし……」

そのあまりに安穏としたセリフは、今もなお、汗だくになりながら特訓を続けているディバーナ・カノンの連中に聞かれたら、速攻で袋叩きにされそうな言葉である。

「平和、だなぁ」

丘の頂上に腰を下ろし、一本だけそびえる大木に背中を預けたティースの口から、もう一度その言葉が漏れる。

彼がディバーナ・ロウの第四隊“ディバーナ・ゼロ”に所属するようになってから今日でちょうど一週間。この日の午後は執事のアオイからデビルバスターに必要な知識を教えてもらうことになっていたのだが、直前になってそのアオイが急用によって出掛けてしまい、その時間が丸々空いてしまった。そこでせっかく空いたこの時間を、気分転換のためにこうして使っているというわけである。

「ふぅ……」

涼やかな風が駆け抜けた。視線の先にはミューティレイクの本館があり、庭では使用人たちが動き回っているのも見える。

と。
「ティース様！」
「……ん？」
その声に、遠くに向けていたその視線を近い場所へ戻す。と、そこには、白と紺の清潔感溢れるミューティレイクの使用人服に身を包み、長いストレートロングの髪を微かに風になびかせ、中サイズのバスケットを片手に駆け寄ってくる顔見知りの姿があった。
「リィナ」
その姿を視界に捕らえるなり、彼の胸は意識せずに高鳴って。
リィナ＝グレイグ＝クライスト。彼にとっては昔馴染みであり、最近再会した“元”王魔グレイグ族の少女である。
（……似合うなぁ、やっぱ）
そんな少女の姿には、彼でなくとも数多くの男性が胸を踊らせることだろう。それほど、そのスタイルは彼女にピタリとハマっているようだった。
「どうしたんだ、リィナ。仕事は？」
「ええ」
ほんの僅かに息を切らせて、リィナはティースの眼前で立ち止まった。
その姿を見てもわかるように、彼女はこのミューティレイクで屋敷の掃除やベッドメイクなどを中心とした、いわゆるハウス・メイドの仕事をしている。
やや“人間世界”の常識に欠ける彼女のこと、当初はティースも上手くやれるかと心配していたのだが、どうやら上手に溶け込んでいるようだ。
「今はお昼休みをもらいました。それで、ティース様がここにいると聞いたので――」
リィナはそう言って手にしたバスケットを示し、ニッコリと笑顔を見せる。
「一緒に食べようかと思って、持ってきたんです」

「あ、そっか」
さらに胸が高鳴る。……いや、たとえ彼女に“そんなつもり”など微塵もなかったのだとしても、少なからず好意を持っている女性のそんな申し出が男として嬉しくないはずはない。
「隣、失礼しますね」
リィナは服が汚れないようにと持っていた大きめのスカーフを敷いて、そこに腰を下ろした。
少し強めの風が吹いて、長い髪がふわっと宙に踊る。
ティースはそれをなんとなく焦点に捕らえながら、質問した。
「仕事、少しは慣れたかい？」
「ええ。思っていたよりも大変です」
素直に答えるリィナ。
「だろうなぁ」
確かに、あれだけの広さの屋敷だ。いくら人数がいて分担されているとはいえ、毎日の掃除だけでも大変な手間だろう。
だが、さらに答えるリィナは笑顔のまま続けて、
「でも、楽しいです。みんな親切ですし、充実……というんですか？　とにかくそんな感じがします」
「……そっか」
その言葉に、ティースは改めて胸をなで下ろす。
彼女にとっては“仕事”というもの自体、初めて体験する行為だ。
このミューティレイクはその家柄だけあって非常に厳しい職場だが、その分、教育、環境はしっかりと整っている。仕事に対する真剣な気持ちさえあれば非常に働きやすい場所だろうし、その点、彼女にとっては最良ともいうべき条件だったのかもしれない。
（ファナさんのおかげ、だよなぁ……）
リィナもそうだし、一緒に来たエルレーンについても、こちらでは正確な戸籍などもちろん存在するはずもなく、要するに全く素性不明の二人だ。が、当主のファナはそんな二人に対し、ティースの知り合いというだけで面接を許可し、その結果、採用される運びと

なった。
　本来、このミューティレイクのような家柄のはっきりした場所では考えられないことであったが……しかし。
『あぁ、そんな恐縮しなくてもいいんじゃない？　別に珍しいことじゃないし。むしろそういう怪しいので溢れてるからね、ここ』
　とは、執事でもあるリディアの弁であり、おそらく事実なのだろう。
　さて。
　そんなこんなで、早速、彼女の持参したバスケットを開いたティース。
「じゃあ、早速いただき――」
　だが、中身を覗くなりピタリとその動きを止めた。
「……？」
　微かに怪訝そうな表情。
　バスケットの中に並んでいたのはパンの間に具を挟んだ、いわゆるサンドイッチのようなもの。……が、具の組み合わせは少々見慣れないものばかりだった。中には、食べるのを躊躇ってしまうような奇妙なものまである。
「……あの」
　そんな彼の表情に気付いたのだろう。怖ず怖ずと、リィナが説明を始めた。
「自分で作ってみたんです。……こちらの食材は見慣れないものばかりで、まだ良くわからないんですけど、自分で味を確認して、合いそうなものを選んで」
「あ、あぁ、なるほど」
　そういうことならば、見慣れない組み合わせがあるのも頷けた。
　リィナは少し躊躇いがちに、
「あの……もし口に合わないようでしたら、すぐにちゃんとしたのを持ってきますから――」
「ああ、いや。自分で味を確認したんだろ？　だったらきっと問題

ないよ」
もちろん彼には疑うつもりなどない。彼女が少ない休み時間を利用し、苦労してまで作ってきてくれたものなのだ。むしろ喜んで手を伸ばす。
しかし、
（あれ……でも、待てよ。リィナって確か――）
“それ”を思い出したのは、一つ目――見た目からして一番無難な、すりつぶした玉子の挟まったサンドイッチを口に運んだときだった。
（……！！）
食べた瞬間、口の中に広がったのは……この世のものとは思えない、甘ったるい香り。
「どうですか？」
「い、いや……うん」
狼狽しながらも、二口目を運ぶ。……背中に汗が浮かんだ。
「お、おいしい……かな」
「本当ですか？」
パァッと、笑顔が輝いた。
「それじゃあ、私も少しいただきますね。……あ、ティース様は遠慮なさらずにどんどん食べてください」
「あ、ああ……」
一つ目、完食。
再び、バスケットの中へ視線を移す。……さらに冷や汗が浮かんだ。
不味いわけではない。今、笑顔でそれを口にする彼女のように、その味を好む者もいるだろう。
だが――
（そ、そうだ……リィナって、ものすごい甘党なんだっけ……）
一つ目で、すでに彼の胸は一杯だった。……一見玉子のように見えたのは、バナナらしき甘い果物をベースにしたクリームだ。しかも、標準的なそれよりもさらに甘さが強化されている。

震える手で、次のパンへと手を伸ばした。……おそらくラズベリージャム。他の怪しげなものよりは、正体の知れているそれが一番無難だと感じた故の選択だった。

だが、それはもちろん“甘い”考えで――

「ここのジャムは少々甘さが控えめのようなので、少し砂糖を加えてみたらちょうどよくなりました」

「あ、そう……」

どう考えても、“少し”というレベルではなく――どうにか二つ目、完食。

（うっぷ……）

食べられないレベルであるなら、心を鬼にして拒否することも可能だったろう。が、なまじ普通に食べられるだけに、それもできないまま――

「ごちそうさま……」

「ごちそうさまです」

結局、彼女自身が口にした二つ以外――総計十個ほどのサンドイッチは全てティースの胃袋に収まっていた。

（うぅ、口の中が甘ったるい……何か飲み物――）

そんな彼の心情を（中途半端に）察したのだろう。リィナは準備済みのコップを彼に差し出して、

「飲み物です。どうぞ」

「……」

一見、普通の牛乳。……もちろん、それがどんな味であるかなどもはや想像するまでもなく。

なんとか牛乳らしき甘ったるい液体を飲み干して、

（……今度、それとなく忠告してあげることにしよう……）

と、ティースは心に強く決意するのだった。

そして――

「それじゃあ、私はそろそろ仕事に戻ります。……ティース様」

ゆっくり立ち上がったリィナは、弾んだ笑顔で彼を見る。

「ああ……？」
と。
顔を上げ、太陽を背にした彼女の姿を視界に捕らえた瞬間。
「……」
まるでその周りだけ一足先に春が訪れ、花開いたかのような、そんな錯覚を覚えた。
やがて、ティースはその原因に気付く。
「頑張ってくださいね。私、仕事中も、食事中も、寝る前も、いつでもティース様のことを応援していますから」
暖かな、微笑み。まるで花が咲いたかのような笑顔。
思わず胸が静かに鼓動を打ち鳴らして。
「あ……ああ」
その言葉に――胸焼けなどアッという間に消え失せた。
「ありがとう、リィナ」
あまりにストレートで、あまりに純粋な言葉は、いつでも彼を勇気付け、元気付けることができた。……彼が無自覚ながら、彼女に対して徐々に心惹かれていったのも、それは無理からぬことだったろう。
小走りに遠ざかっていく少女の後ろ姿を追いながら、ティースの頬は思わず緩んでしまう。
と。
（……あれ？）
リィナを追った視線の先。
そこに、やはり彼の方へと向かってくる見覚えのあるシルエットを見つけた。リィナとは少しデザインの違う使用人服に身を包み、何故か同じようなバスケットを手にした、輝くポニーテイルの少女だ。
（シーラじゃないか）
シーラ＝スノーフォール。彼が保護者として面倒を見る少女であり、このネービスの伝統あるサンタニア学園、薬草学科に通う三回

生……だったが、今は諸事情によって休学届けを出しており、四月から三回生をやり直すことになっていた。

（でも……なんでまたあんな格好してるんだ？）

首を傾げるティース。

確かに、彼が最近二ヶ月ほどここを留守にしていたときは、彼女自ら志願してここの使用人として働いていたようだ。が、今はもう、その必要はないはずである。

「あ、シーラさーん」

「リィナ」

微かに耳に届いた声。

二人は途中で当然のように鉢合わせ、そこで立ち止まり何事か話し始めたようだ。が、最初の第一声以外はまったく聞こえてこない。

（なに話してんだろ……？）

少し、気になった。

意外と言うべきか、あるいは当然と思うべきなのか。シーラは久々に再会した二人――リィナとエルレーンに対し、ティースがここ数年見たこともないような驚きと喜びの表情を浮かべ、僅かにはしゃぐ様子すらも見せた。

過去の関係を考えれば、当然の反応。だが、最近の彼女の様子を考えるなら、やはり意外でもあり――

（……なにが、変わったのかな……）

視線の先で言葉を交わす二人。リィナは先ほど彼に向けていたのと同じ微笑みを見せていたし、対するシーラの方も、普段彼には決して見せないような明るい笑顔を浮かべている。

どこからどう見ても、四年前と変わらない。仲のよい、友人同士の会話。……彼女があの微笑みを彼に対しても向けていたのは、一体いつのことだったろうか。

（……まいったなぁ）

苦笑しながら、胸が微かに軋む。

彼もまた、どうでもよいと思っているわけではないのだ。ただ、

慣れてしまった……半ば諦めてしまっただけで、それは彼にとって、とても淋しいことだった。

「あっ……」

どうやら会話が終わったらしい。リィナが本館の方へと戻っていく。

そして――

「おっ……おーい、シーラぁっ！」

同じようにそのまま去っていこうとするシーラを、ティースは思わず呼び止めた。

「……？」

彼女が立ち止まり振り返ったのを見て、慌てて腰を上げ走り出す。

「なに？」

「いや……はぁっ……」

慌てすぎたのだろう。大した距離でもないのに、ティースの息は少し切れていた。

ゆっくりと息を整え、それから顔を上げて、

「ほ、ほら……最初、こっちに向かって来てただろ？　だから何か用事があったんじゃないかと思ってさ」

「ああ……」

シーラは納得した顔だったが、すぐに素っ気ない言葉が続いた。

「用はあったけど、もうなくなったわ」

「え？　あ、ってことは、俺じゃなくてリィナに用だったのか？」

「……」

少し、考えるように視線が流れた。……正直に答えるか、適当にあしらうか迷ったのだろう。

その思考が一体どのような順序を辿ったのか定かではないが、結局、彼女は正直に答えることにしたらしく、

「これ」

「え？」

彼の目の前に示したのは、手にしていたバスケットだ。

「お前の昼食をエルに頼まれたのよ。あの子が自分で用意したのだけど、急に仕事を頼まれたらしくて、代わりに」
「あ……あぁ、なるほど」
「でも、リィナが先に持ってきたようだし、もう必要ないでしょう？　だから戻ろうとしただけのことよ」
シーラは片手を腰に当て、屋敷の方角を見つめる。その視線の先では、ちょうどリィナが屋敷の中に戻っていくところだった。
「そ、そっか……」
なんともタイミングの悪い話である。
それ以上、会話も続かず。
「そういうこと」
背を見せかけるシーラ。
「あっ、で、でもさ」
ティースは咄嗟に、やや強引に会話を繋ぎ止めた。
「エルのヤツ、俺のにしちゃ随分大きいのを作ったなぁ。俺、昔ってそんなに食べてたっけ？」
「……」
肩越しに振り返るシーラ。その視線が自らの手の中――バスケットへと落ちる。
確かに。それはリィナが持ってきたものとほぼ同じサイズだ。一人分としては明らかに大きすぎる。
シーラはもう一度視線を泳がせた。
が、特に偽ろうとする様子もなく答える。
「半分は私のよ」
「え？」
きょとんとした顔のティースに、シーラは少し眉をひそめた。
「なに？　私が昼食を食べることがおかしいとでも？」
「い、いや、そんなこと言うはずないだろ！　……ただ、そういうのって珍しいなと――」
言いかけた言葉を遮って、

「せっかくあの子が作ってくれたのだし、こうして詰めてくれたものをわざわざ二つに分ける必要もないでしょう。……だいたい、朝だって夜だって同じ食堂にいるわ。昼をお前と一緒に食べることに、今更一体何の特別があるというの？　馬鹿馬鹿しい」

息もつかせぬ言葉の波にティースはややたじろいだが、かろうじて言葉を返す。

「う……い、いや、でも、俺はちょっと嬉しいな。ほら、天気もいいし、気持ちのいい風が――」

「なにを言っているの？」

そう言って、シーラは眉間に皺を寄せる。

「お前はもう、リィナと昼を食べたのでしょう？」

「……あ」

本気で忘れていたようだ。

「……」

そんな彼を、シーラは呆れ返ったような視線で見つめる。

そして、そのまま背を向け――

「いやっ……あ、そ、そうだ！」

「？」

ティースはピンと閃いた。

そしてもう一度振り返った彼女に向かって提案する。

「ちょうど良かった。俺、リィナが持ってきた分じゃちょっと足りなかったんだよ！」

「え？」

呆れ顔が、少しだけ驚きの表情に変わった。

……本当のところを言えば、しっかり八分ほどの状態だった。が、まるっきり嘘というわけでもなく、彼の口は“甘い”以外の味を猛烈に求めていたのである。

ティースは自然に笑顔を見せて、

「だから、さ。やっぱり一緒に食べないか？　ほら、さっきも言ったけど天気もいいし、風も気持ちいいし、たまに外で食べるのもい

いじゃないか」
「……」
すぐには答えず、シーラは一度屋敷の方へ視線を流した。少し考えて、次に先ほどまでティースが腰を下ろしていた丘を見る。
やや強い風が吹いて、水飴のようなブロンドの髪が微かに宙に揺れた。
（……ぁ）
ティースの視線は思わずその様を追ってしまう。
見慣れていても、ふとした瞬間にこうして視線を奪われることはあった。もちろん彼だって素直にそれを、彼女のことを、美しいとは思うのだから。
やがて、
「……リィナとは、どんな話をしていたの？」
「え？」
その言葉に我に返る。
彼女が余所見をしていたのは彼にとっておそらく幸いだ。じっと見つめていたことに気付かれたら、また不審な目で見られていたに違いない。
「あ、うーん、話っていう話はしてないけど……あぁ、一応仕事の話をしてたかな」
「そう」
言って、シーラは丘の方へ歩みを進めていった。
「あ……シーラ？」
明確な返事はなかったが、その行動からすると昼食の件は承諾したらしい。
ホッとしながら、ティースはその後をついていく。
会話は続いた。
「二人とも意外に大丈夫そうね。エルは大丈夫だろうと思っていたけど、リィナは少し心配してたわ」
「そうだなぁ。初日なんて、いつ変なこと言い出すかと思ってドキ

ドキしてたよ」
　ティースはそう言って笑いながら、腰を下ろした彼女の隣へと。
何気なく腰を下ろしてから、肩が触れそうな距離に気付いたが、特に文句を言われることはなかった。
（……今日は機嫌いいのかな？）
　こんな距離で話をするのは数ヶ月、いや、下手すれば一年以上なかったかもしれない。
　大木の幹に背を預け、ゆっくりと息を吐き出す。
　そうしてふと、
（……あ。少し、背伸びた……？）
　彼女が一年前と少しだけ違っていたことに、ティースは初めて気付いた。
　この一年で五センチほどは背が伸びて、おそらく百六十センチ半ばぐらいだろうか。女性としては平均よりも若干高い方になる。
「……」
　そんな彼女の姿に、ティースの古い思い出が少しだけ呼び起こされる。
（そうだよな……あの人も周りの人よりは高かったし。顔だって、やっぱり似て――）
「背、伸びて、すごく可愛くなったでしょ？」
「え？」
　突然の問いかけに、ティースは目を丸くして彼女を見つめた。
　そして戸惑う。
（な、なんだ、突然……？）
　どう答えていいやら迷った。
　が……結局正直に答えることにする。
「そ、そうだなぁ。で、でも、ほら、背とか関係なく、昔からすごく大人びてたじゃないか。……俺が言うとまた何か言われるかもしんないけど……昔から可愛いっていうか、きっと美人になるんだろうなぁとは思ってたし……うん。実際そうだったなって、そう思う

よ」
「そうね」
どこか素っ気なく頷いて、シーラは少しだけ考えるような表情を見せる。
そして、しばらく。
（なんだろう。急にそんなこと聞いてくるなんて、一体――）
疑問に感じながらもバスケットを開き、昼食の準備をしていくティース。
やがて、
「……いいのではないの？」
呟くようにシーラの口が開いた。
「え？　なにが？」
わからない顔のティースに、シーラは小さく首を振って、
「とぼけなくてもいいわ。お前の態度を見ていればすぐにわかるもの。……好きなのでしょう？　隠す必要ないじゃない」
「……え？」
呆気に取られるティース。
シーラはさらに続けた。
「たとえば恋人として付き合うことになっても、上手く行くはずよ、きっと。問題は色々あるでしょうけど、そういうことなら私も積極的に協力するわ」
「え……えええぇッ！！？」
突然のことに、ティースは大いに慌ててしまった。
「ちょっ、ちょっと待ってくれよ！　い、いきなりそんなこと言われても、突然すぎて何がなんだか――」
だが、そんな彼の態度にシーラは目を細めて、
「隠さなくてもいいと言っているでしょう？」
「か、隠してるっていうか！！」
ティースは顔を真っ赤にしながら声を大にし、意味不明の身振り手振りをしながら、

「そ、そりゃ――お、俺はお前のことすごく大事だし、幸せになって欲しいとは思ってるけど、そ、そんな恋人だとか愛し合うとか、そんなこと考えてるわけじゃ――！！」

「――え？」

そこでようやく、シーラは“食い違い”に気付いたようだ。

が、ティースはもちろんそれに気付くはずもなく、

「そ、それに、その、もしそんなことになったら、色々と、も、も、申し訳が――」

「ちょっ、ちょっと待ちなさい、ティース」

シーラは慌てて彼を制止すると、コホンと咳払いした。

「お前……何か勘違いしていない？　私が言ってるのはリィナのことよ？」

「……へ？」

顔を上げて、間抜けな顔を見せたティース。

……考えてみれば当然のことだ。元々話題はリィナについてであり、途中で回想モードに入った彼が勝手に脱線しただけのことなのである。

しばしの思考。

ティースもようやくそのことに気付いて、

「うわぁっ！」

羞恥にさらに顔を真っ赤にすると、その場に平身低頭した。

「すまん！　お、俺、ちょうどお前のこと考えてたから、勝手にお前の話だと思ってた！」

「……」

視線を泳がせるシーラ。

どうやら頭の中で、先ほどまでの会話を追ったようだ。

やがて目を細め、

「……つまり？　私が、お前にプロポーズしたとでも？」

「うわぁッ！！」

その言葉に自分の愚かさを再認識させられたらしい。ティースは

さらに地面に頭を擦り付けて、
「すまん！　すまんすまんすまんッ！！！」
「……」
端から見たら、そんな彼らは一体どんな風に見えただろうか。
恋人に土下座して許しを請う情けない男か、あるいは主人に許しを請う使用人か。どちらにしろ、“上”と“下”がわかりやすい状況であったことは間違いない。
「……ふぅ」
やがて、大きく深いため息がシーラの口をついた。
「やめなさい。お前の大ボケはいつものことだし、別に気にしてないわ。それに――」
少しだけそっぽを向くと、いつもの凛とした口調にほんの僅かな起伏が生じる。
「背が伸びたとかの話も、私のことだと思ったのでしょう？　誉められて、別に悪い気はしないもの」
「え？　……あ」
顔を上げたティース。先ほど自分が口にした言葉を思い出してその意味に気付く。
と同時に、先日、リディアと話していた話題が脳裏を過ぎった。
（あ……気味悪い、って、言われないんだな……）
そんな彼の表情に気付いたのだろう。
「なによ？　意外そうな顔をして」
「あ……いや、お前だったら多分、そういう言葉聞き慣れてるだろうなと思ってたから、ちょっと……」
シーラはそれに対し平然と素っ気なく答えて、
「聞き慣れてるどころか、聞き飽きてるわね。それに紛れもない事実だもの」
「そ、そっか」
確かに異論を挟む余地はない。
だが、

「でも、慣れない相手からそう言われれば、私だって少しは気にするわよ」
「……」
そっぽを向いたままなのは、どうやら照れ隠しのようだ。
その一瞬だけ、いつも大人びた風を装っている彼女に、年頃の少女の一面が垣間見えた気がした。
（……？）
そんな彼女に、ティースはますますわからなくなる。
（……なんだろう）
それは決して初めて見るものではない。昔の――このネービスに来る以前、そして来てしばらくの間に、ティース自身が何度も目にしたものだ。つまり、それが本来の彼女の姿だと言ってもいい。
――環境が変わり、彼女自身も変わってしまったものと、そう思っていた。そうすることで、昔と今、その自分と彼女の関係の食い違いを納得させてきた。
だが、つい先ほど、リィナとエルレーンに対する変わらない態度を見た。そして今、久々に“彼女らしい”仕草を見た。
何も変わっていないんじゃないか、とさえ、思えてしまう。
（……俺、もっと知らなきゃ……知ろうとしなきゃ、ダメなのかもな――）
二度目の昼食を口にしながら、ティースが真剣にそんなことを考えた昼下がりの出来事。
――ちなみにこの日、彼は食べ過ぎでお腹を壊した。
ネービスの街から西に百キロほどの場所に“ラグレオ山”という

ネービス領唯一の活火山がある。実際に噴火したのはもう百年以上も前の話で、その麓の街“ロマニー”はネービス領唯一の温泉街だ。貴族や金持ちの別荘、療養所、その他に観光客用の温泉宿（全て街が直接管理する公営のものだ）などで栄え、温泉を汲み出す施設やそこにかかる人件費は温泉宿での収入の他、別荘を持つ――主にネービスの――大金持ちたちからの援助によって賄われている。ネービス公はもちろんのこと、ディバーナ・ロウの属するミューティレイクもまた、この施設に対して援助を行っていた。

その街の外れ――そこに、温泉を汲み出すための施設がある。魔の十属性の一つ“空”の魔力がこもった魔界由来の巨大な装置をラグレオ山の麓、地下深く掘った洞窟の中に設置し、そこから管を通して地上へと温泉が送られる仕組みであった。

そして……二月も半ばに差し掛かったこの頃。

この温泉街ロマニーで、少々困った問題が持ち上がっていた。

温泉は、汲み上げ装置のある洞窟付近に密集している。遠くまで運ぼうとすれば当然それだけ費用も莫大にかさむからであり、例外はネービス公や、その他有力者たちの別荘ぐらいのもの。一般客が利用する温泉施設は、全て洞窟付近に存在している。

さて、先ほども言ったように洞窟はラグレオ山の麓にあり、ロマニーという街の全体からすれば外れの方。基本的に露天である温泉は、見上げればすぐさまラグレオ山の自然が見渡せる状態であり、施設の職員は野生動物たちを追い払うのに苦慮し、ごく稀にだが、野生動物に客が襲われて怪我をするということもありえる、そんな場所にあった。

それが猿や狐だというのなら害も少なく、まだ微笑ましい話で済む。それが熊なら少々笑えない話だが、そんな事例はあまり聞かないし、それで死者が出たという話も、公式的には一つもないのだ。

だが最近、この街の温泉客を時折襲っていたのはそんな生易しいものではなく――。

ティースが腹痛でベッドに転がっていた頃、ミューティレイク別館の執務室。

「え？　アルファさんを？　ロマニーに？」

別館とはいえ、使用頻度を考えればこちらが本体と考えてもいいだろう。

扉の真正面の机には夕日を背に、屋敷の主でありディバーナ・ロウの総帥でもあるファナ＝ミューティレイクが座っている。そしてそれと直角に配された方の机には、彼女の補佐役であるリディアが座っており、疑問はその彼女の口から出されたものだった。

「あ、アルファさんっていうか、今は第四隊って言った方がいっか。“一応”ティースさんもってことだよね」

「はい」

頷くファナは手元の報告書らしきものを整理している。温泉街ロマニーを襲った事件について、依頼主及び、ディバーナ・ロウの諜報部隊“影裏”から伝えられた情報だった。

「……っていうか、あたし、やっぱ賛成できないなぁ」

首を傾げるリディアの手元にもまた、同じものがある。すでに目を通した後らしく、チラッとその上に視線を落としただけで、

「依頼主の情報と影裏の情報に食い違いが多すぎるよ。なんかすごく大袈裟に書いてる気がして、信用できないし」

ファナはそれに答えて、

「ですが、魔が街の方々を脅かしているのはおそらく確かですわ」

「でも実際のところ、まだ被害なんてほとんどないんでしょ？　あそこの街はお金あるんだし、その気になればフリーのデビルバスターだって雇えるじゃん。いざとなればネスティアスだって出るっしょ。ネービス公の別荘だってあるんだから」

キィッ……と椅子を軋ませて背もたれに寄りかかり、頭の後ろで手を組んだ。

「なのにタダでウチにやってもらおうなんてさ。なんか、足元見ら

れてるみたいで気分良くないなぁ」
「……」
そんな彼女に、ファナはやや肯定的な笑みを漏らして、
「リディアさんのお気持ちは良く理解できますわ。ですが、あの街にはディバーナ・ロウに支援してくださる方々の別荘も多々ございますから」
「あぁ、ヤダヤダ。あたしの純真無垢な心が汚れちゃう」
と言いながら、リディアの手元にはすでに制作完了した指令書がある。……彼女もこの任務の必要性は承知済みで、ただ愚痴をこぼしていただけなのだ。
やがて会話は脱線して、
「あたしも行きたかったなぁ、温泉。肌が綺麗になるってホントかなぁ。……やっぱアレ？　ファナさんの玉の肌は、小さい頃からロマニーの別荘で温泉に浸かってたおかげ？」
「さあ、どうでしょう？」
微笑みを浮かべたまま小さく首を傾けるファナ。
「でしたら、リディアさんもご同行なさいますか？　向こうでディバーナ・ロウのために宿を用意してくださるそうですから」
「えっ、マジ！？　行ってもいいの！？」
身を乗り出したリディアに、ファナはゆっくり頷いて答える。
「はい。おそらく三人よりも四人の方が、賑やかで楽しいと思いますわ」
「え、三人？　アルファさんと、ティースさんと……誰？」
どうも計算が合わないような気がした。

それから日も落ちて、屋敷の中が少し静かになった頃。
「ふぅ……ようやく収まったぁ……」
自室を出たティースは、まだどことなく違和感が残るお腹を撫で

ながら、玄関前の大階段を下りていた。夕食を抜いたためか今度は逆に空腹になり、何か食べるものがないかと下りてきたのだが――

「ん？　……やぁ、ティースくん」

「よぅ、ティース」

「あ、マイルズさん。それに、レイさんも」

大階段を下りたところ、質素な丸テーブル群の並ぶ一階ホールの一角には、屋敷の主治医であり第二隊“ディバーナ・ナイト”で医事を担当するマイルズ＝カンバースと、そのナイトの隊長であるデビルバスター、レインハルト＝シュナイダーが何やら歓談していた。

マイルズはその黒縁眼鏡の奥からティースの顔色を見つめて、

「お腹の具合は良くなったかい？」

「ええ、おかげさまで」

もちろんその症状を見たのもマイルズだ。まぁ、診断するまでもなく、食べ過ぎなのはわかりきっていただろうが。

「お腹、空いたんだろ？　君にあげた薬、消化を促進させる作用があるからね」

「そうです。それで、厨房の方に何かないかなと……」

そこへレイが口を挟んで、

「ああ。なら、ちょうどいいだろ。ここに座れよ」

「え？」

その手の中のコップには、エールらしきものがなみなみと注がれていた。

ティースは少したじろいで、

「い、いや、空腹にアルコールはちょっと……」

「よく見ろ」

そう言ってテーブルの上を示すレイ。と、そこには酒の肴だろう。夕食の残りらしきものが並んでいた。

「厨房に行っても、もうロクなもんは残っちゃいないぞ？」

「え。あ、もらってもいいんですか？」

「というより、余ってた大半が元々お前のもんだ」

「あ」
言われてみればその通りであった。もちろんティースには断る理由もなく、素直にそこに腰掛けることにする。
「――で。どうだ、アルファのヤツは？」
食事を始めるなり、レイはティースにそう尋ねてきた。
「どうだ、って言われても……」
すでに冷めていたが、テーブル上で切り分けられたチキンはまだ食欲をそそるスパイスの香りを漂わせている。マイルズから借りたフォークをそれに伸ばしながら、ティースは答えた。
「アドバイスされるでもないですし、実際に剣を交えて稽古するわけでもないですし……あの人に関しては何もわからないっていうのが正直なところです」
その返答に笑ったのはマイルズだ。
「はは、それはよくわかるね。アルファくんに関しては、僕もまだ良くわからないよ。……二年半も一緒にいて性別もわからないなんて、屋敷の主治医として失格かね、やっぱ」
レイはコップを傾けながら、
「ま、あそこまで徹底的にガード固められちゃ、逆に疑いたくなるのが心情ってもんだがな」
「……え。ってことは、やっぱり女性なんですか？」
「さぁな。俺の中じゃ半々ってとこだが」
どうやら本当に誰も真実を知らないらしい。
ティースは戸惑いながら、
「で、でも……もし女性だとするなら、当たり前だけど、セシルの本当のお兄さんではない、ってことですよね？」
「ああ……」
その問いに、レイは事も無げに答えた。
「お前、そんなこと信じてたのか？　アレが本当の兄妹なはずないさ」
「え？」

ティースは一瞬呆気に取られて、
「で、でも、戸籍上はそうだって言うし、セシルだって――」
レイは口元に小さな笑みを浮かべると、コップをテーブルに置いて、
「ま、あのセシルがどう考えてるかは知らんけどな。だが、アルファのヤツが男だとか女だとかいうことは別にして、あの二人に血の繋がりはない。九割九分、な」
「？」
未だ疑問顔のティースに、マイルズが補足するように言った。
「ティースくん。君、アルファくんとは何度も顔を合わせているだろ？　……あの銀髪はもちろん目に入ったと思うけど、瞳の色を見たかい？」
ティースは首を横に振って、
「いえ、そこまでは……」
「青っぽい色だよ。……銀髪と青瞳の組み合わせは、大陸の北西――このネービスから見て西の方向にあるブリュリーズ領の山奥に住むイスラフェルって少数民族特有のものなんだ。もちろん、色々と血が混ざってそれ以外にも青い瞳や銀髪を持つ人はいるし、遺伝の関係で兄妹が違う色になることは全く珍しくないけれど――」
中指で黒縁眼鏡をくいっと持ち上げる。
「君が言った自己申告の“戸籍”によると、アルファくんとセシルくんの出身は大陸東のラッテ領だ。セシルくんはおそらく嘘をついていないだろうから、彼女は本当にラッテ領の出身だろう。だが、アルファくんはどうかというと……ブリュリーズ領とラッテ領の位置関係を考えても、確率的にはかなり低いと言わざるを得ない」
「で、でも――あ、俺、酒はいいです」
レイに薦められた杯を断って、ティースは続けた。
「もしそうだとしたら、あの子、気付かないですか、普通？　自分の兄が入れ替わってるんですよ？　それに、髪の色や目の色もおかしいっていうなら――」

「いや。僕の言った髪の色とか目の色というのはやや専門的な知識だからね。セシルくんはもちろん、アルファくん本人も知らないかもしれない」

「いや、それもそうですけど……」

ティースはフォークに刺したチキンを口に運び、咀嚼しながら首をかしげて、

「見た目で……むぐ……わかったりとか――」

「彼女が親戚に引き取られたのは二歳になる前だそうだ。そこまではっきりと覚えてるはずはないよ」

「……うーん」

まだ疑問顔のティースに、レイがコップを傾けながら続けた。

「そう信じる何らかの要因があったんだろ。……ま、本当に信じているのか、信じてるフリをしているだけなのか知らんが」

マイルズは頷いて、

「一番考えられるのは、アルファくんが“本物のアルファ＝クールラント”と知り合いだって線かな。……あぁ、この話、セシルくんの前ではしちゃいけないよ。もし本気で信じていた場合、ショックだろうからね」

「あ、ええ。それはもちろん……」

「あいつら自身が納得してるのなら、事情なんて勘ぐるものじゃないしな。……ティース、お前だってそうだ」

「え？」

突然矛先を向けられて、ティースが呆気に取られていると、

「お前だって偽の戸籍を使ってる理由、探られたくはないだろ？」

「……えっ！？　な……なんでわかったんですか！？」

ティースは驚きに目を見開いた。

確かに。彼が普段使っている戸籍は偽造のもので、出身はネービスの田舎ということになっている。そういった適当な田舎の戸籍はひどく簡単に手に入るし、よほど公の職に就くのでない限りその辺を深く調べられることはないのだ。

レイは笑って、
「正直だな。……ま、お前とあの王女様の場合、誰がどう見たってワケ有りだとわかるさ」
どうやらカマをかけただけらしい。
「そ、そんなもんですか……」
納得できるようなできないような、そんな微妙な表情のティースに、レイはさらに続けて、
「そりゃそうさ。もし何のワケもなくあんな美人と二年間も同棲してたなら、とっくの昔にモノにしてるはずだろ？」
「……むぐっ！？　……ぐっ……」
喉を詰まらせ、胸をドンドンと叩く。
「はい、ティースくん」
「っ……っ……んぐっ……んぐっ……」
マイルズが差し出した水を流し込んで、なんとか一息つくと、ティースは少し恨みがましい目でレイを見つめ、
「モ、モノに、って……あ、あのですねぇ……」
だが、レイは意に介した様子もなく、
「それも、なんでか知らんが、あの王女様だけはお前の厄介なアレルギーとやらが反応しない。……俺がお前の状況なら、移り住んだその日に口説いてるね。なんせ、そいつを逃したら一生女に縁がない生活かもしれないんだ」
「く、比べないでくださいよっ！　俺はレイさんみたいに女好きでも軟派者でもないんだから！！」
その反論に、レイは苦笑しながら軽く両手を広げて、
「どう思う、マイルズ？」
マイルズは腕を組んで小さく首を傾けた。
「うーん。悪いけど、僕も隊長と同意見ですかねぇ。……というより男の立場としては、そういう状況になることを向こうが認めた時点で、脈ありと判断するものではないかなと」
「マ、マイルズさんまで……」

裏切り者を見るような目のティースに、マイルズは再び中指で眼鏡を押し上げながら、
「あくまで一般的な意見だよ、ティースくん。ただ、だからこそ普通に考えて――ああ、シーラくんがごく一般的な常識を持っているという前提だけども――彼女は君とそうなることを良しとする、あるいはそうなっても仕方ないという覚悟があったということになると思うけどね」
「な……な……！」
ティースは顔を真っ赤に――するかと思いきや、逆に青ざめながら興奮した様子で反論した。
「そ、そんなことは絶対に有り得ない！　あ、あいつは、そんな――」
「……どっかの誰かさんと同じ反応だな」
ボソッと呟くレイ。
「まぁまぁ、ティースくん」
マイルズは苦笑しながらそんなティースを制止して、
「あるいは常識の範囲を超えて、彼女が“そうならない”ことを確信していたということもあり得る。君が言いたいのはそういうことだろう？」
「そ、そうですよ！　それに、実際そうです！」
「はっ」
レイは鼻で笑うと、エールを傾けながら、
「自慢していいもんかどうか微妙だぞ、そりゃ」
「生物学的に言うと、恥じるべきことかもしれませんねぇ。まぁ、未だ人類繁栄に貢献していない僕が言うのも難ですが」
「それを言っちゃ俺も同じだがな」
「いえいえ。隊長の場合、知らないところですでに貢献してる可能性が高いですから。……きっとそのうち赤ん坊を連れた女の人が押し掛けてきますよ。そのときは、僕が責任を持って、無条件で隊長の子供だと認定しますから」

「おいこら。ものすげえ無責任じゃねえか」
「……」
二人の掛け合いは、残念ながらティースにとっては敷居が高すぎたようだ。
「……はぁ」
我に返って、先ほどまでの興奮も冷めてしまったらしく、
「あの。じゃあ俺、腹も膨れたからそろそろ戻ります」
ため息をつきながら空になった皿に手をかける。
「……あ、悪いね、ティースくん。肴にしてしまって」
だが、ティースは特に気にしていない様子で、
「はは……慣れてますから、そういうの」
「それも侘びしいねぇ。……ああ、そうだ」
なんともいえない苦笑を浮かべた後、マイルズは人差し指を立てて、
「お詫びに一つ、アドバイス。シーラくんのことだけどね」
「？」
皿を手に怪訝そうな顔で振り返ったティース。
「彼女が実際に何を思っているのかは僕にもわからないけれど」
そう前置きして、マイルズは言った。
「たとえどれだけ相手のことを信頼していたとしても、あの年頃の少女が男と二人で暮らすことを決意するのには、やはりそれなりの覚悟が必要だと思うよ。……彼女、何故かたまに遊び回ってる風を装ったりするけど、きっと貞操観念はかなり強い方だ。これは、隊長のセクハラ発言に対する反応からも間違いない」
「いつの間にやら、ひどい悪役だな」
「だって悪役ですからね」
レイの抗議を軽く流し、マイルズはティースに問いかけた。
「正直に答えなくてもいいけど、彼女、結構いいとこのお嬢さんじゃないのかい？」
「……え？」

戸惑ったような顔のティース。それが全く覚えのないことだったのか、あるいは突然の指摘が意外だったのか、それは見た目にはわからない。

気にせずマイルズは続けた。

「貞操観念だけじゃない。君がいない間ここで働いていたときの言葉遣い、仕草、礼儀、どれを取っても、ね。あれは一朝一夕で身に付くものじゃない」

「……」

ティースは何も答えず、ただ首を横に振った。

「うん。……ま」

マイルズはそれ以上は追求せずに頷いて、

「とにかく、そんな彼女がそれでも君と同棲することを良しとしたのは、紛れもない強い好意の現れだ。君の言う“信頼”に置き換えてもいい。……君は彼女に邪魔者扱いされていると言うけど、その好意はきっと、ちょっとした環境の変化や、僅か一、二年の新しい経験で揺らぐ程度のものではないんじゃないのかな？　まして……経済的な事情があるにせよ、つい最近までもその生活を続けていたんだからね」

「……」

意図を質すように、ティースの視線はマイルズを見つめた。

マイルズは答えて、

「つまり、ね。彼女の君に対する態度にどんな理由があるにせよ、彼女が君に寄せる好意と信頼、それにおそらく間違いはないということだよ。……だから、君が彼女との関係改善を望むのなら、いっそもっと思い切って踏み込んでみた方がいいんじゃないかな？」

「……踏み込む、ったって」

彼が弱り顔をしたのは当然だ。

「あいつ、俺がちょっと突っ込んだことを聞こうとすると、すぐに機嫌悪くしちまうし、なんていうかそれ以前の問題ですよ」

「はは、そりゃきっと、お前のやり方がよっぽど悪いせいだな」

レイは小馬鹿にしたように笑って、
「俺が今のお前と全く同じ立場だったなら、あのガードの堅い王女様を確実に落とせる自信があるね。信じちゃいないが、神に誓ってもいい」
「隊長のはすでに目的が違ってるけどね。……ま、でも、一理ある。例えば女性はムードを大事にするとよく言うし、まずは彼女の心をほぐす舞台作りが必要かもしれないよ」
「ムードって……そもそも話をする機会すら、朝食と夕食のときぐらいしか――」
「ああ。だったら、ちょうどいいじゃないか」
「ええ。ちょうどいいですねぇ」
何やら意味ありげに頷き合う二人。
「……は？」
ティースがその理由を知るのは、“当日”になってからのことであった。

「……ラダコーン草？」
「はい。シーラさんならご存じではありませんか？」
「ええ、もちろん知ってるわ。心臓の病に効く貴重な薬草だもの」
ミューティレイク別館にあるファナの私室は、本館のものと比べるとややこぢんまりとしている。というのも、もともと別館に当主用の私室などはなく、普通の客室を彼女の私室として使用しているためだ。
外は暗く、部屋を照らしているのはランプの明かりのみ。ベッドの上に腰掛けるファナはすでにナイトドレス姿で、どうやら今日はこの別館で休むつもりのようだった。
部屋には廊下への扉以外にもう一つ、隣の部屋へ通じる特別な扉が設置されており、隣の部屋には護衛のアオイがいる。……とはい

え、彼は自分の主人よりも先に寝息を立てており、本当に護衛として役に立つのかどうかは怪しい限りであった。
（屋敷の中で滅多なことなんて起きないと思うけれど……主人より先に寝て、主人より後に起きる護衛なんて前代未聞だわ……）
ソファに腰掛けてそんなことを思うシーラも、今では苦笑しか出てこない。そんな彼らの奇妙な主従関係にも、すでに何ら違和感を感じなくなっていたのだ。
ファナは続ける。
「ラダコーン草はデリケートで、栽培するのが非常に難しいと言われておりますわ」
「ええ、そうよ。自然には活火山の麓にしか生息しない。栽培するのは不可能ではないけれど、根気とコツが必要だと聞くわね」
「ところでシーラさん」
ファナは突如、話題を変えた。
「いつまでその服を着ておられるつもりですの？」
「え？　……そうね」
自分の姿を見下ろすシーラ。昼間、ティースの前でそうだったように、彼女は未だにミューティレイクの使用人服姿だった。
「特に決めてないわ。ただ、四月までは学園もないし、少しでも役に立てればと思うだけよ。……逆に迷惑でなければいいのだけど」
「いいえ。そんなことはございませんわ」
ファナは即座にそう否定した。
本来、使用人としての教育を受けていない者がここでいきなり働くことは難しい。つい先頃ここにやってきたリィナとエルレーンにしても、今は他の者に付いて色々と学んでいる身なのだ。
が、彼女――シーラの場合は少々違っていて、
「一昨日いらっしゃったディトヴィードのおじさまが、シーラさんを見ておっしゃっておられました。一体、どこの貴族の娘が花嫁修業に来てるんだ？　と」
「一昨日……ああ。あの方ね」

シーラはその類い希な美貌を活かすために接客の仕事を与えられており、その日に尋ねてきた初老紳士のことはもちろん覚えていた。

ハドリアン＝ディトヴィード。このネービスでも上位に位置する貴族の当主で、詳しいことはもちろん彼女にはわからないが、どうやらディバーナ・ロウの支援者でもあるようだった。

「シーラさんのお美しさはもちろんですが、何より礼儀作法があまりに完璧でしたので、大層お気にいられたご様子でした。もし許嫁が決まっていないのなら、息子を紹介させてくれ、とも」

「片田舎出身の平凡な一市民には荷の重すぎる話だと、断っておいて」

「おそらくそうおっしゃられると思い、丁重にお断りしておきましたわ」

シーラは興味なさそうにしながらも、チラッとファナを見て、

「そういう話だったら私よりもあなたの方が相応しいのではないの？」

至極もっともな言葉だった。

が、しかし、ファナは考える間もなく首を横に振って、

「私はどちらかと言うと、年上の男性が好みですの。おじさまもそのことは重々ご承知のようですわ」

「……その子、いくつ下なの？」

その問いに、ファナは可笑しそうにクスクスと悪戯っぽい笑みを浮かべると、

「十、ですわ」

「……」

シーラは無言で大きくため息を吐く。……つまり、彼女と比べても八つ近く年下、現在は八歳ぐらいということである。

「……それで？」

気を取り直した様子で、シーラは改めて問いかけた。

「ラダコーン草とその話、何か関係があるのかしら？」

「ディトヴィードのおじさまは関係ありませんわ。ただ……」

もう一度、ファナはシーラの身につけた衣服に視線を止めて、
「もし、シーラさんがまだお手伝いをなさってくださるのであれば、少々変わったお仕事をお頼みしようかと思うのです」
「……変わった仕事？」
「ラグレオ山の麓にラダコーン草の群生地があるのはご存じですね？」
シーラは頷いて、
「ええ。ラグレオ山はネービスで唯一の活火山だもの」
「はい。……それで、その群生地のそばにあるロマニーという街に、ラダコーン草の研究をなさっているニューマン＝アーカーソンという方がいらっしゃるのです」
「……ああ」
そこまで聞いて、シーラは理解した。
「その人に、ラダコーン草についての話を聞いてこい……ということ？」
「はい。すでにこちらでも幾度か栽培を試みたのですが上手くいかないようなので、その方に詳しいお話を聞くことができれば、あるいはと。そのお方、気難しいというほどではないのですが、まるで知識のない者がお訪ねしても何も答えてくださらないそうです。……その点、シーラさんでしたら色々とお詳しいでしょうし、適任かと思いますの」
「私もまだ学生の身だけれど」
そう言いながらも、シーラの瞳はその奥底にほんの微かな輝きをまとって、
「でも、貴重な機会だわ。もし私でいいのなら、こちらからお願いしたいぐらいよ」
ファナは頷きながら、どこか満足そうな微笑みを浮かべた。
「そのニューマンさんのご子息夫妻がロマニーの公営宿の管理人をやっておられます。滞在中はそちらで宿を用意してくださるそうですわ」

「え？」
その言葉に、シーラの眉に怪訝そうな色が走って、
「向こうで、宿を用意してくれるというの？」
「はい。シーラさんのお仕事はそう長くかからないでしょうから、その後は、他の方々の任務が終わるまで、ゆっくりと温泉を楽しんでくださいね」
「……え？　他の、方々？」
彼女がその言葉の意味を知ったのは、やはり“当日”になってからのことだった。

その3『ホントはワガママで嫉妬深い？』

ロマニーの温泉宿は全て街の管理する公営宿だ。

にも関わらず、街の外れに所狭しと並ぶ温泉宿は、実にバリエーションに富んでいる。外観に凝っているものもあれば美味い料理を謳い文句にする宿もあり、そこには確かにある程度の競争関係が存在しているようだった。

さて、そんな宿の中の一つ。

“アーカーソン”という夫婦の管理する温泉宿は、大小合わせた部屋数が三十弱。収容人数は最大百人程度という中規模の宿である。他の大半の宿とは違って混浴の露天風呂は一つもなく、男性用の風呂が一つなのに対し、女性用は景色に趣向を凝らした複数の露天風呂がある。元々温泉を好んで利用する比率は女性が圧倒的に多いため、このような経営方針は決して珍しくないのだが、その中でもやや群を抜いて女性を優待しているタイプの宿であった。

夕暮れ時。

その宿から歩いて一分程度の場所にあるアーカーソン夫婦の自宅。そこから出てきた一人の少女が、家の中に向かって一礼した。

「色々とお世話になりました、ニューマンさん」

そう言って美しいブロンドの髪を揺らせたのはシーラである。

その右手には一冊のノート。そこにはたった今、ニューマン＝アーカーソンから学んだラダコーン草に関するデータ――栽培に必要な土、水、肥料、環境、その他気を付けるべき項目がびっしりと書き込まれていた。

家の中から返ってきたのは、おそらく年輩の男性の労いの声。シーラはもう一度礼をしてその家を離れる。

「ふぅっ」

疲労を吐き出すように息を落として歩みを進めた先はもちろん宿の方角。裏口の方から宿の中に入ると、借りている部屋に向かって

廊下を歩いていった。
視線の先の通路を、どうやら温泉から上がったばかりらしい三人の女性客が横切っていく。
（ひとまず一段落）
この街にやって来たのが三日前の夕方だ。それから一昨日、昨日、今日と、三日を丸々使い、シーラはずっとニューマンの元に入り浸っていたのである。
（でも、聞いていた通り、すぐに栽培を成功させるのは難しそうね）
そんなことを思いながらノートをパラパラと眺めていたが――ともかく、これで彼女がここで果たすべき仕事は終わった。
が、実を言うと、すぐに帰路に就くというわけにはいかない。
何故なら、
（……ティースの仕事はいつになったら終わるのかしら）
そう。彼女はもう一つの目的を持ってこの街にやってきたディバーナ・ロウの第四隊、通称“ディバーナ・ゼロ”に同行してきた身分だった。
だから彼らの任務が終わるまではここを離れることができないのである。
（ファナは温泉を楽しんで、なんて言っていたけれど）
もちろんシーラも温泉というものが嫌いではなかった。美肌効果があり、健康にも良く、なおかつ気持ちがいいとなれば、彼女のような若い女性がそれを嫌う理由はなかろう。
ただ、このロマニーという街は、温泉以外にそう面白いものがあるわけでもなく、
（いくらなんでも一日中入っているわけにはいかないものね……）
しばし考えた末、シーラは視線を自らの左手の中に落とす。
「……そうね」
微かに、瞳が揺れた。
そこに携えていたのは、数十センチ四方の鍵付きの箱。
少しだけ、暗い影がその表情を過ぎる。

「もう、あまりのんびりしていられないもの、ね……」

――と。

そんな彼女が宿の玄関に差し掛かったのと、本日の任務を終えたティースが宿に戻ってくるのは、ほぼ同時だった。

「あ、シーラ！　おーい！　おぉーい！！」

先に声を発したのはティースの方である。

その声にシーラは足を止め、そして外から戻ってきた彼の方へと視線を向ける。

そして、

「……ふぅ」

そのため息の正体は、実は彼女自身にしかわからぬ複雑な心情故のものだが、それを他人に察しろというのも無茶な話。

案の定、駆け寄ってきたティースは微妙に泣きそうな顔で速度を緩め、情けない声を出した。

「そ、そんな、会うなりいきなりため息をつかなくてもいいじゃないか……」

「別に、お前の顔を見るのが嫌でため息をついたわけじゃないわ」

そして残念なことに、彼女の方にも積極的に誤解を解こうとする意欲が見られない。

「……」

続ける言葉を失って黙ってしまうティース。そんな彼に、やはり無言のままその場を立ち去ろうとするシーラ。

屋敷にいるときと何ら変わらない、何の進展もない、いつものやり取りがそこに展開されようとしていた。

……と、そのとき、である。

「あ。おかえり、ティースくん」

「え？」

変化をもたらしたのは、第三者の登場。

どことなく艶っぽい声。
ティースの目線の先――つまりシーラの後方から一つの影が現れる。
「あ――」
「今日は早かったのね」
「っ……」
シーラはあからさまに眉をひそめた。……というのも、現れたその女性は、まるでシーラの存在が目に入らないかのように、強引に二人の間に割り込んだのである。
「マ、マーセルさん」
「はぁい。マーセルさんよ」
にこやかにそう言ったのは、やや背が高めの女性だった。歳はシーラより上、ティースよりも年上、本人の申告によれば二十一歳。結い上げてうなじが見える髪型。やや目尻が下がり気味で一見大人しい印象だが、少々ラフに着崩した真っ白なバスローブからは桃色に染まった肌がかなり露出していた。
マーセル＝バレット。宿の泊まり客であり、本人曰く“某成金商人の一人娘”ということだが、その真偽は不明。
それにティースにしてみれば、その真偽などさして重要な問題ではなかった。
「昨日より帰ってくるの遅かったから、心配しちゃったじゃない」
と言って、まるでしなだれかかるように――実際には触れない距離で寄り添うマーセル。
「あ、え、ええ、今日は、ちょっと……」
当然、ティースはたじろく。
……そう。彼にとって重要だったのは、彼女が、彼のもっとも苦手とする、いかにも女性らしい色香に溢れた人物だということであり、そして何故か　――いや一応それなりの理由はあったのだが――その彼女が、彼に対してかなり際どいアプローチを繰り返しているということなのである。

「ま、何にしろお疲れさま。……ね、それで、どうだったの、今日の成果は？」

言いながら、マーセルはさらに強引に間に割り込んだ。結果、立ち尽くしていたシーラを背中で押す形になったが、彼女に対しては一瞥もくれず。

「……」

さらに気分を害した様子で目を細めるシーラ。

その表情の変化に気付いたティースは、やや慌て気味になりながら、

「え、あ、えっと、そうですね。今のところは獣魔らしき影も見えないですし、痕跡も見つかってないです。何しろ、襲われたって人の証言が曖昧で、まだ獣魔の正体も――」

「……」

「あ！　お、おい、シーラっ！！」

無言で背を見せたシーラを呼び止めようとするティース。

だが、

「い・い・か・ら」

「ぐえぇぇっ！！」

首にタオルらしきものが巻き付けられ、ティースは思いっきりのけぞった。

「マ……げほっ……マ、マーセルさん！　こっ、殺す気ですかぁっ！！」

顔を真っ赤にして咳き込みながら抗議するが、

「だって、抱き付いて引き止めたら、また気絶しちゃうんでしょう？」

「だ、抱き……って、そっ、それはそうですけどっ！！」

実は数日前、ティースはすでに彼女の前に“醜態”を晒していたのである。

と、そうこうしているうちに、シーラの姿は完全に廊下の向こうへと消えていってしまった。

「あ。あーあ……」
がっくりと項垂れるティース。
（また、これかぁ）
ここに来て早四日。
シーラとの早期関係改善を願う彼にとって、今回の任務は（偶然か意図的かわからないが）期せずして与えられた絶好の機会だった。
このロマニーの温泉というのは、健康効果はもちろんのこと、美肌効果をも大々的に謳っており、ネービスの女性たちにとっては憧れの場所と言ってもいい。一般市民にはやや敷居が高くあるが、それでも無理してお金を貯めてでも……という人は後を絶たない。女性の心をほぐす方法としては、かなり効用が高い場所だと言えるだろう。
しかし――
「そんなことより、今日の話を聞かせて？　ね？」
「は、はぁ……」
ここに来た日に出会ったこのマーセルという女性の存在は、ティースにとって完全に予想外だった。ただこうして親しく会話を交わすだけならいいのだが、彼女は何故か、彼がシーラと話そうとするたびに毎回こんなタイミングで現れ、そしてシーラはそのたびに呆れ顔で立ち去ってしまうのである。
しかも悪いことに、
「いいですけど、大して面白いことないですよ」
このティースという男、いくら相手が苦手なタイプであっても、理由もなく冷たい対応を返すなどということはほとんどない。しかも好意を寄せられて嫌な気分になるわけもなく。
そんな彼の対応がまた、さらに状況を悪化させていたのである。
「そんなことないない」
マーセルは手をパタパタと振って、それから興味津々の視線を向けると、
「デビルバスターを間近で見るのって初めてだもの。ホント、新鮮

なのよ」
「俺はまだ候補生なんですけどね……って、それなら、俺じゃなくてアルファさんに話を聞いた方がいいんじゃないですか？」
「アルファって、あなたと一緒に来た美人でしょう？　そりゃ、あんな顔でデビルバスターっていう人にも興味はあるけど――」
そう言って、マーセルは口元にやや色っぽい笑みを浮かべると、
「どうせなら男の子の方がイロイロと楽しいじゃない？」
「は、はぁ」
（あの人も一応男ってことになってるんだけどなぁ……）
どうにも、彼女の言葉はいちいち“含み”のようなものが感じられて、そのたびにティースはたじろいでしまう。
とはいえ、
（……俺って、そんなにからかい甲斐があるのかなぁ）
ティースは結局この日も、乞われるままに彼女の話し相手となるのだった。

「アルセフィ……と……そして黄昏の一葉を――黄昏の一葉……？」
外の日が完全に落ちた頃、宿の一室に明かりが灯った。
各部屋備え付けの机の上に、本のページをめくる音が定期的に響く。
「でも、これは……胸の病……か。違うわね」
その部屋の借り主であるシーラはすでにやや厚手の寝巻姿で、黒塗りの重厚感のある分厚い書物を右手に、何やら辞書らしき古い書物を左手に、その間にノートを挟み、手にはメモを取るためのペンを握っていた。
視線は真剣。時折難しそうに眉間に皺が寄る。事実、彼女が手にしている辞書は古代語の書物で、解読しようとしているのはどうやら現代語の本ではないらしい。

だが、やがて、
「……ふぅ」
ため息をついて椅子の背もたれに体を預け、天井を見上げながら眉間の辺りに指を当てる。美しく透き通るブロンドのポニーテイルが微かに揺れた。
どうやらあまり集中できていない様子だ。
（いまいち、気が乗らないわね……）
二度目のため息を落としてから、どうしようか、と、考えた。日が沈んでいるとはいえ、寝るには少し早い。かといって、温泉には今日だけでもう三度も入っている。
「……」
そうしていると、意識せず部屋の壁に視線が移動した。その壁の向こうはティースの借りている部屋。
そこに人が戻ってきている気配はない。
時間を見る。
彼女にとって寝るにはやや早いとはいえ、すでに夜だ。照明家具のない家庭の人々ならば当然に寝ている時間だろうし、そろそろ、常識的なマナーとして他人の部屋を訪ねていい時間を過ぎようとしている。
（……なにをやっているのかしら）
ほんの僅かな不機嫌が、その端正な顔に表れた。
――実を言うと、彼があのように仕事で知り合った女性に好意を寄せられるのは、それほど珍しいことではない。彼は優しい性格だったし、基本的に“いい人”だ。
まぁ、大抵の場合はその“いい人”止まりで終わるのだが――それはともかく。
シーラはそんな彼のロマンスを意図的に邪魔しようなどとは思わない。彼にもチャンスがあれば自分の恋人を捜す権利が当然にあると考えていたし、それによって自分が被害を被る――たとえば彼の支援が受けられなくなったのだとしても、それはそれで諦める覚悟

があった。彼に義務がないことを、彼女は当然に理解していたから。
ただ、
（なにを、やっているの）
この日、彼女はなかなか部屋に戻ってこないティースに対し、明らかな苛立ちを露わにしていたのである。
――理由？
あのマーセルという女性が事ある毎、彼女に対して明らかに邪険な、敵対心らしきものを見せてくること。それも理由の一つではあるだろう。それに同じ女性としても、ああいう男好きな感じのするタイプは、どちらかといえば好きな方ではなかった。
だが、彼女の苛立ちの引き金を引いた決定的なものは、それではない。
（お前は――）
その眉間に、やや深い皺が刻まれる。
（お前はリィナのことが好きなはずでしょう。だったら、あんな女にデレデレしている場合じゃ――）
コン、コン。
「！」
丁度のタイミングでノックの音がした。
シーラは壁からドアの方へと視線を移動させると、右手にしていた本をパタンと閉じる。
そして、
「誰？」
「あ、起きてたか？　悪い、遅くに」
「……ティース？」
返ってきたその声に、ほんの微かな安堵。
まだギリギリ。常識的に“単なる他人”や“ちょっとした知り合い”程度を訪ねていて不自然ではない時間帯だ。
だが、シーラは表面上、いつもの素っ気のない言葉で返す。
「何か用？」

用心のため鍵は常にかけてあった。閉じた本を元の箱の中に戻して鍵をかけ、体をドアの方へと向ける。

そこから返ってきたティースの声は、どことなく遠慮するようなものだった。

「あ、ほら……えっと、なんていうか、そろそろ色々とお互いの進行状況について話をしておきたいな、とか……時間、ないか？」

「……」

一瞬の沈黙。

彼女の脳裏に玄関での会話が過ぎった。少しだけ、頭の奥がピリピリする。

「……まだ、話し足りないの？」

「え？」

「あの女に思う存分話したのでしょう？　だったらもういいじゃない」

言ってから、我ながら意地の悪いことだと思った。もちろん彼は、その進行状況が彼女の帰還時期にも関わるからこそ、知らせに来たのだろうから。

「あ……あのさ、シーラ」

ドアの向こうの声は、相変わらず遠慮がちだった。

が、

「マーセルさん、ちょっとわがままなところがあるけど、根は悪い人じゃないんだ」

フォローするような言葉。さすがのティースも、彼女がマーセルのことを嫌っていることには気付いていたようだ。

だが、その言葉が導く結果――つまり、それがシーラの胸にさらに深い靄をかけてしまうことには気付かなかったようである。

「だから、なに？」

更に冷たい声が口をついていた。

「え……い、いや、だから、つまり……」

「私があの女に腹を立てていて、だからお前の話を聞かないのだと、

つまりお前はそう言いたいのかしら？」
「え……」
「馬鹿じゃない」
苛々してくると、言葉が止まらなくなる。右手で自らの首筋を押さえると、やがてその手は少しずつ上へ。そのままそこにある結び目の上の髪飾りに触れた。
小さく、それを引っ掻く。
「馬鹿じゃないの」
もう一度、そう言った。
――大人びている、クールだ、と彼女はよく言われる。
が、それはおそらく見当違いだ。ただ彼女は、表情と言葉を凍らせるのが得意なだけ。その胸に渦巻く感情はむしろ他人よりも強い方だった。
「そもそも、私が腹を立てるのだとしたら、それはあの女ではなく、お前に対してよ、ティース」
「……え？」
全く自覚のない返事。
また、苛々が沸き上がり、言葉は鋭さを増した。
「お前がどこの女と仲良くなろうが、どこの女と寝ようが、本来、私には全く関係のないことだわ。でも――」
言葉の途中で、びっくりしたような反応が返ってくる。
「な……ちょっ……シーラ。マーセルさんは別にそんな――」
「けれど」
抗議の声を逆に遮って、シーラは続けた。
「私ではなく、リィナにとっては大いに関係のあることなの。そうでしょう、ティース」
「え？　リィナ……？」
「せっかくだから、この場でお前に言っておくわ」
そして戸惑うティースに、きっぱりと宣告する。
「お前があの子を好いていて、そして近い将来、あの子と結ばれる

ことを少しでも考えているのであれば、私はお前の“浮気”を決して許さない。あの子を傷つけるような行為は絶対に認めないわ。絶対に」

「え……えぇっ！？」

ティースは慌てたような声だ。その表情は容易に想像できた。おそらく彼は慌てながら顔を徐々に火照らせているところだろう。

「ま、待ってくれよ！　ま、前にも話したけど、俺は別に……そ、そりゃリィナのことは可愛いと思うし、色々と助けられて感謝もしているけど、そんなことまで考えているわけじゃないよ！」

それはおそらく本心だ。たとえ彼の心が実際は彼女に惹かれていたのだとしても、自覚といえるものはなかったのだから。

が――それを信じるシーラの耳に、そんな彼の言葉はひどく言い訳じみて聞こえた。

そして、胸の苛立ちがさらに加速する。

「……そんなに」

「え？」

眉間に皺を寄せ、吐き捨てるようにシーラは言った。

「そんなにあの女が気に入ったの？　そんなにあの女を抱きたい？」

「ばっ……！」

ドアの向こうから戻ってくる声も、さすがに大きさを増した。

「い、いきなりなに言ってんだよ！　俺はただ話を――そ、それにお前だって知ってるだろ！？　俺が女の人に触れない体だってこと！！」

「……ああ、そうね」

出てくる言葉が容赦なく傷付けていく。

こうなると、もう止まらない。

「もしそうでなければ、お前は立派なプレイボーイだわ。……その体質に感謝することね、ティース。そうでなくば私だけでなく、エルやリィナもきっとお前のことを軽蔑していたでしょうから」

「なっ……違う！　俺はそんなつもりなんてこれっぽっちもないし

……お、お前だって俺のことぐらい知ってるだろ！　俺がそんなこと考えるような人間かどうか――！！」
鋭い、呼吸。
そして、
「黙れ」
「ッ……！？」
「黙りなさい、ティース」
短く、鋭利な言葉に、抗議の声は一瞬で沈黙した。
微かな空白。
その後、冷たい言葉はさらに続いた。
「お前のことなど、どうでもいい。ただ私の考えはさっき言った通り。それだけ覚えておくことよ。他に話すことなどないわ」
「……」
「部屋に戻りなさい。……聞こえた？」
返事はない。が、抗議の意思表示なのか、ドアの外の気配は動かなかった。
もう一度。
「戻れ、と、そう言ったのよ。聞こえたでしょう？」
今度は抵抗の意志はなく。
明らかに落胆したような空気を残し、気配は部屋の前から去っていった。
「……」
それでもシーラはしばらく無言で、扉を軽く睨み付けていた。
他人の前ではそう容易く見せない、感情の溢れる表情。しかしやがて、その視線は小さく下を向き、ため息がその口からこぼれる。
ほんの一瞬だけ後悔が過ぎった後、僅かな嫌悪感。視線が流れ、ゆっくりと立ち上がった足はそのままベッドへと向かう。
ぼふっ。
うつ伏せに倒れると、もどかしそうに右手が自らのポニーテイルに触れ、そこにあった髪飾りを細い指先で撫でた。

それほど高価ではないそれの装飾をゆっくりとなぞるように。
微かに目を細める。
しばしの間があって、彼女はそのまま髪をほどいた。そのまま仰向けになると、少しだけクセのついた水飴のように美しい光沢の金髪がベッドの上に広がる。
「ふぅ……」
もう一度、ため息。
怒りをぶつけたところで気分が軽くなるわけではない。いや、むしろ逆。
リィナのためだからと、そう自分を慰めてはみるものの。
（なんで私がこんなこと……馬鹿馬鹿しい……馬鹿みたい）
しかしその日、深く沈んだ気持ちが再び浮かびあがってくることはなかった。

翌日の朝。空はあいにくの雨模様。
「はぁ」
朝食後、ティースは自室にて外へ出る準備を進めていた。
ベッドに腰掛け、撥水加工のほどこされたフード付きのコートを脇に置き、滑り止め用の薄い手袋を付け、靴もぬかるんだ地面に対応するため、大きな突起のついたものを用意する。
左腰の金具に愛用の剣“細波”の鞘をしっかりと留め、固定されていることを確認。
と、そうしながら、
「はぁぁ……上手くいかない」
ため息とともに、窓を叩く雨の空を見つめた。
そんなため息の理由については言わずもがな。本日の空模様のように曇った彼の心には、昨日のシーラの言葉が重くのしかかっていたのである。

「今日はひとまず誤解を解かなきゃなぁ。リィナのこともそうだけど、マーセルさんのこともちゃんと説明して……だ、だいたい、俺がそんなこと考えるわけないじゃないか。そもそも、普段冷静なくせに変なところで早とちりなんだよ、まったく。マーセルさんだってそんな悪い人じゃないって、少し話せばわかるはずなのにさ」

ぶつぶつ、ぶつぶつと。

独り言はいつしか愚痴へと変わっていた。

そうしながら右の腰に、昼食と応急処置用の簡易な道具と薬を詰めた巾着を装着していく。今日は雨ということもあり、それほど深く入り込む予定はなかったので、それ以上の装備は必要なかった。

そこでふと思い出す。

「あ、そういやファナさん、今回は薬くれなかったな。あれ、市販のものより使いやすくて好きだったんだけどなぁ」

腰のベルトをきっちり締める。

「そういやシーラの仕事ってもう終わったのかな……こっちが先に終わったら手伝ってあげれば――あ、でも、どうせ邪魔だって言われるだけか……あーあ、なんかこう、劇的な効果のある魔法の言葉とかないのかなぁ」

結局、思考は巡って。

「……はぁぁぁぁぁ」

「どうしちゃったの、ため息なんかついて？」

「うわぁっ！」

ティースがびっくりして顔を上げると、

「マ、マーセルさん！？」

「おはよ、ティースくん」

「あ、おはようござ――って、な、なんで人の部屋に勝手に入ってきてるんですか！」

いつの間にか彼の目の前に立っていたマーセルは、相変わらずの白いバスローブ姿、今日は頭にもタオルを巻いていた。体は湯気が立ち上りそうなほどに上気しており、やはり温泉から上がったばか

りのようだ。
「だって、ドア半開きになってたから」
「え、ホントですか？」
「ええ。だから入っていいのかなって」
マーセルは平然とそう言って、ベッドと向かい合う一人掛けソファに座ると無造作に足を組んだ。
バスローブから覗くスラリとした足に、ティースは慌てて視線を彷徨わせながら、
「で、でも、それでもノックぐらいしてくださいよ。そ……それと！　その格好でそんな無造作に足を組んだりしないでください！」
「ん？」
マーセルは自分の足元に視線をやって、
「ああ……ごめん。って」
どうやら自分でも気付いてなかったらしい。バスローブの裾を直し、それから少し興味深げに呟く。
「男の人に肌を隠してくれって言われたの、父以外では初めてのことだわ。脱いでくれって言われたことは何度もあるけど」
「……」
ティースの顔は真っ赤だった。
「同じ男でも、色々な人がいるものね」
マーセルはそう言って手を組み、そこに顎を乗せ、興味深げに上目遣いに見上げる。
「あなたは、私が付き合ってきた男たちとは全く正反対。ホント、興味深いわ」
ティースはやはり視線を彷徨わせながら、
「そ、そうやって前屈みになるのもやめてください。その、み、見えますから」
「ああ。これは、ちゃんと見せようとしてるのよ？」
「うわぁっ！　と、とにかく！」
慌ててそっぽを向くなり、ティースは大きく咳払いをしてベッド

から立ち上がった。
　視線はあらぬ方向に向いたまま。
「俺、そろそろ行きますから！　マーセルさんも部屋に戻ってくださ い！　それに、そんな格好でウロウロしていたら風邪ひきますよ！」
「うーん」
　マーセルは苦笑しながら体を起こし、頭を掻いた。興味深い視線は薄れていなかったが、そこにやや怪訝そうな色も入り混じって、
「あなた、もしかしてあの娘に遠慮してる？」
「へ？」
「あの偉そうな態度の娘よ。なんて言ったっけ？」
「……シ、シーラのことですか？」
　本人に聞かれたらまた機嫌を悪くされそうだったが“偉そうな態度の娘”に該当する彼の知り合いといえば、ここではどうやっても彼女のことしか思い浮かばなかった。
「ああ、シーラとか呼んでたっけ？　あの生意気そうな子。あなたには悪いけど、私、最初から気に入らなかったのよね。あの子の目」
「目？」
　確かに、比較的冷めているように感じる彼女の視線は、人によっては嫌う者がいるかもしれない……と、ティースはそんな風に思ったのだが、マーセルが口にしたのはそれと全く正反対の印象だった。
「あれは、ね。きっと、ものすごく我が儘で嫉妬深い女の目よ」
「へ？」
　まるで予想外の言葉に、ティースは固まった。
　それから、思わず苦笑が浮かぶ。
「そ、それはないと思いますけど。我が儘かどうかはともかく、どう考えても嫉妬深いようなやつじゃないですよ」
「あら。どうしてそう思うの？」
「だってあいつ、そういう部分に関しては結構ドライですから。一応恋人がいるみたいだけど、扱いがかなりおざなりな感じですし…

…」

デートの約束をすっぽかしたり、存在自体を軽視するような彼女の発言は日常茶飯事だった。

マーセルは意外そうな顔をして、

「え、そうなの？　というかあの子、私があなたに近付くたびに、ものすごく不機嫌そうなオーラを漂わせていたから、てっきり」

「それは……」

確かにそれは今回ティースも少なからず感じていた。

とはいえ、彼女がそんな態度を露わにしたことは今までなかったし、その引き金となったのは、彼女自身が言うように、彼ら二人にとって共通の友人である少女――リィナの存在なのだろう。

（あいつ昔から、友達思いが高じて見境なくすこともあったからなぁ）

と、ティースはため息を吐く。

その点は昔から――少なくともエルとリィナに対しては、ちっとも変わっていないようだった。

「ま、何にしても、嫌な子だわ」

そう言ったマーセルはその言葉通り、ほんの僅かな不快感を表情に出して、

「言いたいこともロクに言わないくせに、自分の権利だけは一人前に守ろうとしちゃってさ。子供みたい」

「こ、子供？　あいつが？」

やはり意外な彼女の評価に、ティースはビックリした顔をして、

「で、でもあいつ、言いたいことは結構言ってきますよ。昨日だって俺、結構色々言われましたし」

だが、その言葉にマーセルはますます嫌悪感を露わにすると、

「昨日？　……ふぅん。ホント、ヤなヤツ」

さらに強い調子で断じると同時に、何やら考え込むと、

「……」

「え？」

突然立ち上がったマーセルに、ティースは不思議そうな顔をした。
そして、
「ちょっ……マーセルさん」
思わず後ずさる。
マーセルはゆっくりと彼に近付いてきた。
その声が、微かに艶を帯びて、
「仕事仲間なのか個人的な知り合いなのかは知らないけど、いくら顔が綺麗でも、ああいう性悪女とは付き合わない方が身のためよ……」
そう言って顔を覗き込むと、二人の間はすでに微かな体温が感じられるほどの距離になっていた。
「っ……」
ティースはさらに後ずさったが、彼女はゆっくりと、まるで獲物を追いつめるかのように接近していく。
やがて、背中が壁にぶつかった。
「……あ、あああああの！　マーセルさん！！」
顔が近すぎて正視することすらできず、今度は思いっきり顔を斜め上にそむけると、
「お、おれっ！　そろそろ行かなきゃ――！！」
「大丈夫。一分か二分ぐらいで終わるわ」
「な、なにがッ！？」
「ティースくん……あなた、もしかして――」
そんな彼の反応にマーセルは満足そうに目を細め、口元に妖艶な笑みを浮かべると、
「キス、って、したことない？」
「え……ええッ！？」
ティースの顔が噴火したように真っ赤になった。さらに壁に背中を押しつけ、必死に逃げ場を探しながら、
「ま、まさかっ……ま、まままま待ってくださいっ！　そっ、そんなことしたら、俺、気絶しちゃ――！！」

「大丈夫よ。気絶した後も、私がリードしてあげるわ」
「ぜっ、ぜんぜん大丈夫じゃなぁぁぃっ！！！」
ティースはそう叫んだが、マーセルはどうやら本気のようだった。体は触れないようにしていたが、顔は徐々に近付いてくる。
（ど、どうするッ！？）
心臓がひっきりなしに警鐘を鳴らしていた。……逃げ道はない。逃げる方法があるとすれば、目の前の彼女を突き飛ばすことぐらいだ。が、そんなことが彼にできるはずもなかった。
「こら、ティースくん。そうやって顔を背けてたらできないでしょう？」
「でっ、できないようにしてるんですよっ！！」
「ふーん」
するとマーセルは口元に意地悪な笑みを浮かべて、
「だったら、このまま抱き付くわよ？」
「ひっ！！」
恐怖に体が固まる。
奇妙な話だが、彼女のその言葉は彼にとって充分な“脅し文句”になるのである。
その隙を狙って、まるで懐柔するようにマーセルの言葉は続いた。
「試しに軽く、ほんの数秒よ。あなたが気絶しない程度。それにキスだったら、もしかしたら気絶しないかもしれないじゃない？」
どういう理論か謎だったが、今のティースにはそれに疑問を抱く余裕すらなかった。
ただ、混乱する頭の中で咄嗟に思ったのは――
（だっ、抱き付かれて気絶するよりは、マシか……？）
確かに。抱き付かれた場合は“確実”だ。が、彼女の言うようにほんの数秒であれば、もしかしたら気絶せずに済むかもしれない。至極単純な比較だった。
「よしよし」
観念して一瞬だけ動きを止めたティースに、マーセルは満足そう

に頷く。体の距離はほとんどゼロに近い、が、彼女は器用にも触れないようにつま先を伸ばし、顔だけを近付けていった。
動きに合わせ、微かな空気の流れが頬を撫でていく。
あと、十センチ。
「……っ」
頭の奥が熱くなって視界がチカチカし始める。石鹸の匂いが鼻孔をくすぐって、さらに心臓の鼓動音が速くなった。
と、そのとき。
「っ……！」
ふと――……脳裏に浮かんだ、少女の顔。
途端、彼は急速に正常な思考を取り戻した。
（や、やっぱダメだ！）
一瞬だけ、強引に突き放そうかと手が動きかけたが、それも彼は直前で思い直した。
そして、
「マーセルさん、やめ――！！」
そう叫び、あと僅か二、三センチまで迫った、その時。

……バァンッ！！！！

「！」
驚きにマーセルの動きが止まった。
ティースも、また。
「え……？」
「……なに？」
そして二人同時に、音の発生源――部屋の入り口へ視線を向ける。
その音は明らかに部屋の扉が立てたもの。だが……部屋の扉は閉じたまま。何の変化もない。
「何の音――」
ティースはそう言いかけて、廊下を立ち去っていく足音に気付い

た。
　真っ赤になっていた顔が急激に青ざめて、
「マ、マーセルさん、もしかして……ドア、開けっ放しだったんじゃ――！」
「え？　ああ、うーん。そういえば閉めた記憶がないかも」
「っ……！」
「あっ、ティースくん！」
　制止の声も振り切って、ティースは慌てて廊下へ飛び出していく。
「シーラ！」
　だが、そこに彼女の姿はすでになかった。
　代わりにそこに立っていたのは、
「ティース」
　首筋まで覆うほどの分厚くダボダボのセーター。そこにマフラーを巻き、さらに上から撥水用のコートを身に纏った、銀髪の雪女（？）……彼の上司であるアルファ＝クールラントだった。
「あ……アルファさん」
「出発の準備はできたのか？」
「いえ、えっと……」
　その言葉に任務のことを思い出し、それから辺りを見回す。
　が、やはりシーラの姿は見えない。
　ティースは尋ねた。
「シーラ、見ませんでしたか？」
「ああ、見た」
　と、アルファは相変わらず独特の、ややハスキーな声色で即答する。が、必要以上のことは言わないし、聞かない。
「そ、そうですか……」
「もう、準備はいいのか？」
「あ……いえ、あ……ええ、はい」
　本心では追いかけたかったが、まさか任務を放るわけにもいかず。
（シーラ……）

胸には暗雲が立ちこめていた。それも先ほどまでの単なる曇り空ではない。雷雲をも伴った大荒れの空模様だ。

（昨日、あんなこと言われたばっかなのに）

彼女は比較的静かに怒るタイプだ。先ほどのように、物に当たるような態度は珍しかった。

つまり――おそらくは“激怒”状態。

（さ、最悪だ……）

後に訪れるであろう“仕打ち”を想像し、そしてティースはガックリと肩を落としながら本日の任務へと向かうのだった。

ラグレオ山の東側、崖のように切り立った場所に掘られたその洞窟からは、地を這うようにいくつものパイプが伸びている。周囲には監視小屋のようなものがいくつも立っていて、許可なくそこに近付くことはできなくなっていた。

ここが、温泉を汲み上げる装置のある洞窟である。

「アルファさん……」

そしてロマニーの職員二人が見守る中、ティースたちは三日連続でこの場所へとやってきていた。

雨は少し強さを増している。撥水加工のコートを着てはいても、少しずつ中へと染み込んでいるのがわかった。足元も少々頼りなく、靴の周りは雨と混じった泥でぐちゃぐちゃだ。

ティースはその入り口の岩肌に触れ、それから地面を――この天気で足跡など残るはずもないが――じっと観察しながら、黙って洞窟の奥を見つめるアルファに問いかけた。

「もう三日目ですけど、ホントにこの洞窟って怪しいんですか？」

「さあ」

「さあ……って」

チラッと振り返ると、彼らを見つめるロマニーの職員二人が、ど

ことなく苛々した様子を見せていた。……それも無理あるまい。ティースは色々調べるような素振りを見せているからまだしも、アルファはただ黙って洞窟の入り口に突っ立っているだけだ。しかも聞き込み中心だった調査初日を除きそれが三日連続、今日の雨も相まって、付き合わされている方としてはいい加減うんざりだろう。

（……大丈夫なのかなぁ）

この三日間、毎日こんな様子なのである。調査とは名ばかりで手応えなどはもちろん無く、彼が心配するのも無理からぬところだ。

（何を考えてるんだろ）

ティースが不安そうに見つめる先の、その美しい切れ長の目にはっきりとした光が灯っていない。それがまた不安に拍車をかける。

少し視線を下に落とす。と、視界に入るのはその手の中にある一振りのスピア。長さはアルファの身長と同じ、百七十センチぐらいだろうか。長い柄の部分には何やら文様のようなものが刻まれており、その刃の先端はこの厚い雲の下でも微かな光を反射して――いや、刃自体が微かに発光していた。

見た目からして、明らかに曰く付きの代物である。

「あの、アルファさん。この洞窟って周りにこうして監視所もたくさんあるし、ここから獣魔が出てきたりしたらすぐわかるんじゃ」

「……」

「あのー……」

「……」

まるで返事なし。

（……ダメだ、こりゃ）

聞こえているのか、それとも聞こえていて答えないだけなのか。

……常識的に考えれば後者だろう。

（こっちも打ち解けるにはまだ時間かかりそうだ……）

と、そのとき。

カツ、カツ……カツ、カツ……

「？」

微かに甲高い音が聞こえた。見ると、アルファの持っている槍の刃先が微かに震え、足元に転がる小さな石を打ち付けている。
「……？」
アルファの顔には何の変化もない。――いや。
「あっ……アルファさん！？　どこ行くんですっ！！」
突然、歩き出す。洞窟の中――とは逆の方向。
「もう、いい」
「ええ！？　もう、いいって……今日の調査はもう終わりってことですか！？」
「……」
カツ、カツ……カツ、カツ……
返事はない。が、どうやら肯定のようだ。
「ちょっ……あ、す、すみません。今日はありがとうございました！」
あからさまに不快そうな表情の職員二人に頭を下げ、雨でぬかるんだ地面を蹴ってティースはアルファの後を慌てて追った。
「ア、アルファさん！！　もう終わりって――」
曇り空で太陽の位置は確認しづらい。が、まだ昼にもなっていないだろう。
アルファの足は確実に宿の方に向かっている。
「ま、まさか本当に終わりなんですかっ！？」
「……」
カツ、カツ……カツ、カツ……
ホントに終わりらしかった。

ディバーナ・ロウにおいて、というか部隊と名の付くものは大抵そうだろうが、隊長の命令なく勝手に調査、行動することは基本的に許されていない。部隊としての団結、及び隊員の安全を守るため、というのがその理由であり、そのため、隊長にはそれなりの判断力、決断力がなければ部隊として上手く機能しないものだ。

もちろんデビルバスターになるような人間は、魔に対する対処法は熟知しているし、それに必要な判断力や決断力は大抵備えている。

が、もう一つ、隊長として重要な要素――“指揮能力”に関しては、たとえ有能な人物であったとしても、必ずしも優れているとは限らない。

“一匹狼”とでも言おうか。他人を指揮したり他人に指揮されたりするのが性に合わない人々。このアルファ＝クールラントという人物は、どうやらその枠で括られる性格のようだった。第四隊に隊員がいないというのは、おそらくそういった事情なのだろう。

逆に言えば、それでもディバーナ・ロウで活躍してる以上、相当に有能な人物ということなのであろうが……しかし。

（俺、一体何をすればいいんだろ……）

ティースがそんなことを悩んでしまうのも当たり前のこと。はっきり言って今の彼は、ただアルファに付き従うだけの付き人、もっと悪く言えば金魚のフンみたいな存在に過ぎなかった。

（でも、もしアルファさんがそういう人なら、ファナさんは、どうして俺をこの隊に入れたのかな）

何か意味があるはずだとティースは考えていたのだ……が、しかしまぁ、実を言うとそれは今のところ些細なこと。

今の彼にのし掛かるのは、それよりもずっと大変な悩み事の方だった。

「はぁぁ」

思い出して思わずため息。

アルファに遅れること数分後。相変わらず降り続く雨の中、彼が宿に戻ってきたのは昼を少し過ぎたぐらいの時間だった。このまま部屋に直行して眠ってしまうのはいくらなんでも早すぎるし、この天気では外を出歩くのもうまくない。

なにより、そんなあからさまな態度では“逃げた”と思われてさらにひどい仕打ちに合うことは間違いないだろう。

「シーラのヤツ、きっとまだ怒ってるんだろうなぁ……どうしよう。

何かうまい言い訳を――って、別にやましいことはないんだけどなぁ」

やましいことはないというか、そもそも朝の出来事は半ば脅迫されていたにも近い状態なわけで、彼としては被害者だと言っても過言ではないのである。しかしまぁ、そんな説明をしたところで、おそらく今の彼女には言い訳としか聞こえないだろう。

「マーセルさんも冗談が過ぎるよ……ったく」

そして未だに彼は、マーセルの好意が本物だなどとはこれっぽっちも考えていなかった。女性にモテた試しのない（少なくとも自覚のない）男なんて、所詮こんなもんなのである。

トボトボと、ティースの足は宿の玄関へと達する。

「とにかく、どうにかして機嫌を取らなきゃ。顔、合わせてくれればいいけど。多分しばらくは無視されそ――」

「……」

「……」

一瞬、そこにいた人物と見つめ合う。

二秒ほど時間が止まった。

そして、

「……おわぁっ！！」

宿の入り口。

そこに、彼女はすでに立っていた。

しかも、

「ご苦労様。随分と早かったわね」

「シ、シーラ。た、ただいま……」

そこで腕を組む美貌の少女の言葉と視線は、予想通り、これ以上ないほどに凍り付いていたのである。

（や、やばいなぁ……）

引きつった笑みを浮かべるティースの背中を、冗談抜きの冷や汗が流れた。

この状況。……話す機会すら与えられないよりはマシだと、そう

考えるべきなのだろうか。いやしかし、このオーラはただ事ではない。まるで手練れのデビルバスターを目の前にしたかのような感触だった。

プレッシャーに耐えかね、妙な早口がティースの口をつく。

「ア、アルファさんが、急に今日は終わりだって言い出してさ……ま、まぁ、楽が出来てラッキーかな、って――」

「そう。ま、どうでもいいわ、そんなこと」

「……」

軽く戯けてみせても、全く効果はない。まるで永久凍土だった。

「別に、今朝のことを言い訳しろとも言わない。済んだことは仕方がないし、私が何を言ったところで過去を変えられるわけでもないわ」

ティースは慌てて、

「ちょっ、待ってくれよ、シーラ。今朝のは別に、そ、その未遂というか、そもそも何も済んでは――」

すぅっと目が細められる。

「私が喋っているのよ。いつ、誰が、お前に発言を許したというの」

「――」

反射的に全身が固まる。

気を取り直した様子で、シーラは続けた。

「私がお前に言うことは一つだけよ」

「……」

ゴクリ、と、喉が鳴った。

途端、シーラの眉がぴくりと動く。あるいは音が聞こえたのかもしれない。

(な、なんだろう。まさかこの雨の中、一日中外に立ってろとか？風邪ひく……っていうか凍死するぞ……あぁぁ、よりにもよってこんな日に雨降らなくてもいいじゃないか……)

空模様に八つ当たりしても仕方ないのだが、とにかくティースは彼女の言葉を待つ。

しっかり数秒ほどの間。
「簡単なことよ。今後、あのマーセルという女を、近付けないようにしなさい」
「……え？」
拍子抜けした表情のティースに対し、シーラは片手を腰に当てて視線を横に流すと、
「今朝のことがお前の意志でないことなどわかっているわ。けれど、ああいう状況になる可能性があると理解したならば、お前自らの手でその可能性を極力排除するようになさい、と、そういうことよ。
……簡単でしょう？」
「ま……待ってくれよ、シーラ！」
びっくりした顔で、ティースは抗議した。
簡単なこと。
それは確かにその通りだ。びっくりするほど普通すぎる要求である。
が、しかし、ティースはそれを容易に受け入れるわけにはいかなかった。
「今朝のはマーセルさんの冗談なんだってば！　そ、そこまでしなくたって……あの人は本当に俺の話を聞きたがってるだけなんだよ！」
「……」
シーラの表情が険しくなる。
そして、
「それはお前が――」
と、そう言いかけたときだった。
「ちょっと？　聞き捨てならないわね、今の話」
「！」
「あ……」
視線を横に向けると、奥からマーセルがやってくるところだった。
ちょうど良いタイミング――いや、ティースにとってはもしかす

ると、最高にバッドでデンジャラスなタイミングだったのかもしれない。
その証拠に、チラッと振り返ったシーラの眉が険しくなるのが見えた。
「何の権限があるのか知らないけど、ティースくんの言うとおり、随分と横暴な話ね」
「……」
シーラの表情がさらに険しさを増す。
案の定、マーセルの口調は挑戦的だった。いつものように温泉から上がったばかりなのだろう。見慣れた白のバスローブ姿、一歩間違えば扇情的ともいえるその格好は、お洒落でシックな装いのシーラとはまるで正反対だ。
「あなたには、関係のないことだわ」
きっぱりと、シーラはそう言い切った。彼女がマーセルと直接言葉を交わすのはこれが初めてだったが、遠慮など微塵もない。最初から喧嘩腰だった。
だが、もちろんマーセルが黙って引き下がるはずもなく、
「関係大アリよ。ね、ティースくん」
「近付かないで」
ティースに近付こうとしたマーセルを、シーラが足を小さく踏みならして牽制する。
「……」
マーセルはピタッと足を止め、そして横目で彼女を見つめると、その眉がほんの少しだけつり上がった。
「お嬢ちゃん……一体何様のつもりか知らないけど、あまり我が儘が過ぎると、彼に嫌われちゃうわよ？」
だが、シーラは冷たく答える。
「関係ないわね。あなたと違って、別に好かれようと思ってるわけじゃないもの」
「へぇ。じゃあどういうつもりで邪魔するのか、聞きたいものね？」

シーラは一瞬だけ躊躇ったが、すぐに、
「話す必要、ないわ」
「だったら、私もお嬢ちゃんの言葉には従えないわね」
軽く手を振って、再び歩みを再開する。
――空気が凍り付いた。
（え、えっと……）
その渦中で、当事者（？）のティースはただオロオロするばかりだ。が、会話が途切れたその一瞬に、どうにか勇気を振り絞って口を開く、
「あ、あの、マーセルさん。シーラは別に悪意があって言ってるわけじゃ……そ、それにシーラもそんな言い方しなくたって――」
「ああ、いいのよ、ティースくん」
必死にフォローしようとするティースに、マーセルはニッコリと微笑んで言った。
「こう見えても色々経験してるの。こ・ど・もの扱いは慣れたものよ」
「！」
（ひ、火に油ッ！！）
「……」
シーラの表情が明らかに変わった。
……これまで大抵の場合において、実際の年齢よりも大人として扱われてきた彼女にとって、その言葉はおそらく想像以上の屈辱だったのだろう。
こうなっては、ティースとしてもなりふり構っていられない。手遅れになる前に、フォローするしかなかった。
「マ、マーセルさん！　あ、あまり過激なことは言わな――！！」
だが、時既に遅し。
「ティースッ！！」
「はっ、はいぃぃっ！！」
怒鳴り声が玄関に響き渡る。ティースは体を硬直させ、そして彼

に近付こうとしていたマーセルも動きを止めてシーラを振り返った。
そのときのティースとマーセルの距離は、およそ二メートルほどだろうか。
それを睨み付けるように、
「もう忘れたのッ！？　私はお前に、その女を近付かせるなと、そう言ったのよッ！」
激昂。
まるで彼女らしくもない――……いや。それは所詮、彼女のことをよく知らない者たちの戯れ言だろう。その激しい気性は、遠い昔から彼女の中にあった変わらぬものだ。
もちろんティースは“その彼女”を知っている。が、姿を現したのがあまりにも久々だったせいか、今は動揺の方が大きかった。
「ま、ままま待ってくれ、シーラ。もっと冷静に話を――」
「……いいわ、ティースくん」
だが一人冷静顔で、マーセルは言った。
「決めるのはあなただもの。どうしようと私は文句も恨み言も言わない。決めて。あなたが近付くなと言ったなら、私は二度とあなたの前に姿を見せないわ」
「え……」
ティースは無言で彼女を見た。
あくまで落ち着き払っている。シーラのように怒鳴ることもなければ、ティースのように動揺することもない。
それを見て、ティースの心は少し落ち着いた。冷静な思考が戻ってくる。
（……俺は――）
シーラの言葉には、極力逆らわない。それが彼の基本だ。実際、彼が真っ向から逆らうことなど稀だった。半年に一度、あるかないか。
だが――。
「俺、そんなつもりはないですよ、マーセルさん」

このときばかりは、きっぱりと、あまりに明確に、ティースは彼女の言葉に逆らうことになった。

「！」

驚きの表情を浮かべるシーラ。

「ティースッ！　お前――！！」

「シーラ……」

そして、次に彼女に向けた視線は、微かな戸惑いと悲しみを纏って、

「どうしちゃったんだよ……俺のことはともかく、他の人にそんな理不尽なこと言うなんて、お前らしくないよ……俺、今回ばかりはお前の言うこと聞けない」

「っ……！」

明らかな動揺が、彼女の表情を覆った。目を見開き、口は何かを言いかけて止まったまま。手は無意識のまま首筋に触れる。

その次に表れたのは、失望。

そして――

「マーセルさんは、ちょっとふざけ過ぎるところもあるけど、悪い人じゃない。もっと、ちゃんと話してみてくれよ。お前ならきっとわか――……あっ！」

言葉は最後まで続かなかった。

「まっ……シーラッ！！」

ブロンドのポニーテイルを大きく揺らし、彼女はすでに背を向けていた。表情は見えない。追いかけることもできなかった。

「……シーラ」

ポツリと呟くティースの言葉にも、大きな動揺。

――改善を図ったはずの二人の関係は、さらに悪化の一途を辿っていた。

いつもはティースが折れることでどうにかこうにか元に戻っていた関係。だが、今回ばかりはそうもいかないようだった。

（ああ……なんで、こうなっちゃうのかな……）

絶望感に、小さく天井を見上げる。
だが……それでも。
明らかな理不尽に目をつぶってしまうなど、彼にはできなかったのだ。
（だって、マーセルさんは……）

――悔しい。
悔しい、悔しい、悔しい、悔しい！

うつ伏せにベッドに倒れ込み、シーツをグッと握りしめる。
滅多にないことだった。彼が、あんなにも明確に彼女の“命令”を拒否するなどということは。
悔しい。
その原因となったのがあの女であるということが。
思わず涙が浮かびそうになる。が、それはグッと堪えた。
――泣いてはいけない。泣けば、惨めな思いをすることになる。
それは、嫌だった。
ならば……どうする？
熱くなった頭の中、思い浮かんだのはただ一つ。
まだ確かに彼女の手の中に残っていた、圧倒的なアドバンテージ。
（リィナ……リィナ――）
下唇を噛み、ゆっくりと仰向けになる。
（心配しないで……認めないわ。絶対に――）

その4『ファースト・キスは罪の味』

まだ昼過ぎだというのに、宿の一室――ティースの部屋は薄暗い。というのは、別に意図して暗くしているわけではなく、未だ弱まることを知らない雨のせいだ。

ティースはベッドに腰掛け、その正面のソファには普段着のマーセルが座っていた。彼女がバスローブから普段着に着替えるまでの間にはまた一悶着あったのだが、それはここでは割愛することにしよう。

しかし、それにしても。

「……なんてことがあったんです。だから一口にデビルバスターって言っても、ホントに色々な人がいるんだなぁって」

意外と言おうか、あるいは当然と言うべきか。

ティースが自らの様々な体験談を話して聞かせる間、マーセルは一度たりとも彼に迫ったりすることもなく、好奇心に目を輝かせ、聴き入っていた。

そして話し終えた彼を、憧れの視線で見つめるのだ。

「……羨ましい。私も男で、もっと体が丈夫だったら、あなたみたいなデビルバスターになりたかったわ」

「はは。前も言いましたけど、俺、まだデビルバスターじゃないですよ」

一息ついたところでティースは窓の外に目を向けた。

先ほども言ったようにまだ雨は降り続いており、時折雷鳴も聞こえてくる。

（……ふぅ）

どんどん暗くなっていく空模様は、今のティースの心そのもののようだった。

少し視線を動かして部屋の壁を見つめる。

その先にあるはずの隣室――シーラの部屋からは物音が一切聞こ

えてこない。
（温泉にでも行ってるのかな……）
再び、雷鳴。
「あら……今の、近かったわね」
「……ええ」
「この雨だと、さすがに露天には入れないわ。屋根付きも悪くはないんだけど、やっぱり自然が見渡せる露天の方が開放感があっていいわよねぇ」
「……そうですね」
「今度、一緒に入ろうか？」
「ええ、そう……――って、そ、そんなことできるわけないじゃないですかッ！」
「つまんないわねぇ」
マーセルはクスクスと笑って、
「上の空でも、そういうことにはしっかり反応しちゃうのね」
「え？」
「う・わ・の・そ・ら」
どうやらしっかりと見抜かれていたらしい。
（……年の功、かなぁ）
「なんか今、失礼なこと考えなかった？」
「え！？　そ、そんなことないですよ！！」
と言いながら、過剰に否定するティース。
つくづく嘘の苦手な男であった。
だが、マーセルは特に気分を害した様子もなく、
「あのシーラって子が、そんなに気になるんだ？」
「え、いや……」
と、そのとき、丁度廊下を戻ってくる足音が聞こえてきた。
おそらくはシーラだろう。
（……やっぱ温泉に行ってたのかな）
ピタリ、と、部屋の前で足音が止まる。ティースは一瞬ドキッと

したが、足音はすぐに通り過ぎ、やがて隣室のドアが閉まる音が聞こえてきた。
「……ふぅ」
ホッ、と胸をなで下ろす。
そんな彼をマーセルはしばらく無言で見つめていた。が、やがて何事か思いついた顔で、少し悪戯っぽい笑みを浮かべると、
「今、私が大声で悲鳴を上げたりしたら、あの子、どんな顔をするかしら」
「えっ!?」
ティースはものすごい勢いで振り返ると、
「やっ……やめてくださいよ、ホントにッ！」
「そう？　やめて欲しい？　じゃあ、交換条件」
そのまま、彼女の笑みは妖艶なものへと変化する。
「キスしてくれたら、許してあげる」
「マ、マーセルさんッ!!」
「あはは、冗談冗談」
「シャ、シャレになってません……」
疲れた顔で肩を落とすティース。
「ふふ、そうね。……でも、私の言った通りだったでしょ？　あの子、きっと、ものすごくワガママな性格だって」
「う……」
確かにあんな場面の後では反論の余地がなかった。いつもは違うんだと言ったところでどうにもならない。
だが、ティースはそれでも黙っていられずに言った。
「でも……あいつ、いいところもあるんですよ」
「ふぅん、たとえば？」
「たとえば――」
考える。
良いところ。彼女の良いところ。
……だが。

「思い浮かばない、と」
「ちっ、違います！　ちょっと、今はたまたま――」
焦りまくるティースに、マーセルは小さく首を傾けて、
「可愛いところ、かしらね？」
「そ、そんな見た目の話じゃなくて！」
「ええ違うわ。顔の話じゃない」
「え？」
意表を突かれた顔のティース。
マーセルは手を組み、何やら意味ありげに微笑んで、
「ワガママにも色々あるってことよ。世の中、従順なお人形さんばかりが可愛いわけじゃないでしょう？」
「はぁ」
いまいち曖昧な返事のティース。
「……えっと、つまり、あいつのワガママが可愛いってことですか？」
だが、マーセルはきっぱりと答えた。
「ぜんっぜん。あまりに生意気で腹立つわ」
「？」
さらに混乱。
「でも、それは立場にもよるでしょう？」
「はぁ」
やはり理解できなかった。
マーセルはそんな彼の反応をいちいち面白そうに眺めている。
そして……ふと。
「ねぇ、ティースくん」
声が厚みを増した。
「はい？」
「一つ、確認させてもらってもいい？　一応、ね」
雰囲気の変化。
だが、ティースは気付かず普通に聞き返す。

「なんですか？」
マーセルは組んでいた足を下ろして揃え、穏やかに彼を見つめた。
「私、こう見えて……というか、多分見た目通り、結構遊んでる方よ。実家は田舎だけどそれなりに金持ちだったから、あたし一人を遊ばせておく余裕は充分にあってね。付き合った男なんて手の指じゃ数えられない。同時に四人の男と交際してたこともあったわ」
「……」
言葉通り、意外ではない。ティースをからかったり誘惑したりする態度は余裕に溢れていて、それなり以上の恋愛経験を積んでいることは容易に予測できる。
「でもね」
だが、そう言った直後、彼女の顔は自嘲に歪んだ。
「こんな体になってここで療養するようになってから、今までちやほやしてくれた男どもは、誰一人として顔を見せなくなったの。……まぁ、私も大して期待してたわけじゃないけど……それでようやく気付いたわけ。あぁ、私、なんてつまらないこととしてたんだろうなーって」
その話はティースにも理解できた。
それは何も彼女が被害者だということではない。彼女が逆の立場だったなら、やはり見舞いになど行かなかっただろうから。
本人たちも本当は気付いていながら、気付かないフリをしていたような、そんな関係。
「後の祭り、なんて、ナンセンスな言葉だと思ってた。だってほら。私の目の前には楽しいことばっかり転がってる。後ろを振り返る必要なんてないじゃない……なんて、ね」
自嘲を続ける彼女があまりに痛々しく思えて、ティースは言った。
「……まだ、これからがあるじゃないですか」
「ふふ、ありがと」
マーセルは素直に嬉しそうな顔をして、
「初めて会ったときも、そう言ってくれたわね。私、その言葉が本

当に、泣きそうなぐらいに嬉しかったの。……ねぇ、ティースくん。私が言いたいのは――」

言葉を切って、真っ直ぐにティースを見つめた。

冗談でもからかいでもなく。

それはおそらく、紛れもない真実の言葉。

「そのこれからを、あなたと一緒に歩めればいいなって、こと」

「え……」

「からかってないし、冗談でもないのよ」

先回りしてマーセルはそう言った。

それから小さく首を振って、

「いいえ、最初から冗談なんかじゃなかった。今朝だって、さっきだって、本当にあなたとキスができれば素敵だなって、そう思ってたのよ。……我ながら乙女チックなのが照れくさくて、冗談みたいになっちゃったけど」

「え……ぇ……え？」

思考停止。

言葉の吸収に数秒、意味の解析に数秒、その他、言葉を選ぶのに数秒。

彼が次の反応までに要した時間は、約十六秒。

「あ、あの、でも、俺、こんな体で――その」

しかも口から出たのは、気の利いてるとは到底言い難い言葉だった。

が、マーセルの方もそんなことは最初から期待していなかったらしく、

「いいのよ、そういうのは。そりゃ、あなたに抱き締められたらきっと、言葉には言い表せないほど幸せだと思うけれど、でも、そうでなくてもいい」

「……」

カァッと、頭が熱くなった。

「え、えっと……その……」

あまりのことにどうすればいいのかわからず、適当なことを口走ってしまいそうになったが、それをなんとか堪え、ゆっくりと呼吸を整えた。

真剣な想いには、きちんとした言葉で答えなければならないと思ったから。

ゆっくり、ゆっくりと、深呼吸を繰り返し、目を閉じる。

少しずつ心臓の鼓動が収まって、頭の熱が引いていく。

そんな“準備運動”の彼を、マーセルは至近距離でじっと見つめていた。

一分……いや、二分以上は経っただろうか。

ようやく、ティースは口を開く。

「すみません……俺、それには応えられないです」

「……」

マーセルは特に落胆した様子もなく。ただ、彼が最初の言葉を発したその瞬間だけ、目を閉じた。

ティースは正直な気持ちを言葉に乗せていく。

「その、マーセルさんみたいに綺麗で魅力的な人にそう言ってもらえるのは、ものすごく嬉しいです。でも俺、今は色々とやることが多くてそういうこと考えられないし……それに――」

目を閉じて一呼吸。

ゆっくり目を開け、真っ直ぐに見つめて言った。

「マーセルさんのこと、一番に考えられる自信はないです。だから……すみません」

「……」

外の雨は少しずつではあるが、徐々に弱まっていた。雷鳴も、ここ数分はその鳴りを潜めている。

静かだ。

隣の部屋で動く人の気配が感じ取れてしまいそうなほどに。

やがて――

「わかったわ」

一呼吸。
マーセルはゆっくりとティースから離れ、ソファに腰を落ち着けると、
「というか、会ってまだ数日だし、当たり前といえば当たり前よね」
少し笑う。
「自分でもまだ信じられないんだけどね。私がこんな、まるで一目惚れみたいな体験をするなんて……でも、それだけ胸に響いたわ。あなたの言葉」
「……」
マーセルは少し考えると、
「別に私のことを一番に考える必要はないんだけど……と言ったら、やっぱり困っちゃう？」
「……困ります。俺、そんなに器用な人間じゃないです」
「そっか。それなら仕方ないわね」
すっきりした様子だった。
本人が言うように、結果は予測済みだったのだろう。
「それじゃ、この話はこれでお終い。また色々な話、聞かせてくれる？」
「ええ、それはもちろん」
ホッと、息を吐く。
そして同時に、ほんの少しの不安が胸を過ぎった。
（……こんな返事で、良かったのかな）
余計なことまで言ってしまった気もしたし、もっと気の利いた言葉があったような気もした。
が、それらは全て済んだことで、考えても詮無きことだ。
なにより目の前の彼女の表情を見れば、それが少なくとも間違った言葉でなかったことは明らかで。
「ホッとした顔ね」
「あ……その、俺、こういうの慣れてないもので……」
「そう。意外ね」

そう言った直後、マーセルの表情は少し悪戯っぽいものに変わって、
「でも、安心するのは、もしかしたらまだ早いかもしれないわよ？」
「え？」
ティースが怪訝な顔をしたそのとき、隣室のドアの開く音が聞こえた。
――直後、ノックの音。
「え？　あっ……」
もちろんその主が誰であるかは明らかだった。
「どっ、どうぞっ！」
思わず腰が浮き、声が上擦る。
――それは彼にとって予期せぬ事態だった。先ほどの剣幕から、任務を終え帰る日まで顔を合わせる機会はないんじゃないかと、そう考えていたぐらいだったから。
しかしノックの音は比較的冷静。
カチャ――
「……」
ゴクリ、と、喉が鳴った。
忙しなく、心臓の鼓動音が再び高まっていく。
マーセルの告白といい、ティースにとっては不測の事態の連続だった。
（お……落ち着け、ティーサイト……わ、わざわざ向こうから来てくれたんだぞ。誤解を解いて仲直りする絶好のチャンスじゃないか！　……ああ、でも、もし絶縁状を叩きつけに来たんだったらどうしよう！　いや、それどころか訪ねてくるフリをして空気扱いされたり……いやいや、もしかしたらいきなりベッドに葬式用の花とか置かれるのかも！）
そんなことはまずないと思うのだが、とにかくなかなか見事な混乱っぷりである。
（ぁぁぁぁぁ、そんなひどい扱いされたら、俺、しばらく立ち直れ

ないぃぃ……）

「ティース」

「？」

響いた声は、やはり冷静だ。

しかも――ドアの向こうから現れた彼女の姿に、ティースは一瞬だけ意識を奪われる。

「……シ、シーラ？」

やや複雑な金糸の刺繍が入った黒いベルベットのトップにロングスカート。先ほどまでの普段着とはまるで違う出で立ちで、ドレスとまでは呼べなくとも、彼女の普段着の中では飛び抜けてお洒落ないわゆる余所行きの服だった。

「あ、えっと……」

別に彼女のその格好を見るのが初めてなわけではない。が、普段目にするのと、こうして見慣れぬ土地で目にするのとでは、印象がまるで違って見えた。

ティースはベッドから腰を浮かせながら、

「ど、どうしたんだ？　急にそんなお洒落して……」

「……」

シーラは一瞬だけソファのマーセルを見たが、すぐに彼の方へ視線を戻して、

「さっきは、悪かったわ」

「え？」

「ごめんなさい。どうかしてた」

ティースの思考は再び停止する。

「え、えっと……シーラ？」

あまりの態度の変化に戸惑いは消えなかったが、かろうじて、彼女が仲直りを望んでいるらしいことは理解できた。

「そ、そっか」

ようやく話ができるという喜びがじわじわと胸に染み出してくる。

そこまでは、良かった。……もしも彼がもう少し疑り深い性格で

あれば、かろうじて、彼女の台詞が棒読みだったことに気付けていただろう。

つまり、不自然だったのだ。

が、ティースはそれに気付くことなく、安堵の笑顔を浮かべながら、

「あ、いやいや。俺の方こそ、きちんと説明できなくてゴメンな。俺、あまり説明するのうまくないし……」

「……」

ゆっくりと部屋に入ったシーラは、無造作にそんな彼の元へと近付いていく。途中、もう一度だけマーセルに視線を送ったが、やはりすぐに戻した。

「は、はは……でも、良かったよ。俺、ものすごく怒らせたと思ってたから、もしかしたらもう口も利いてくれないんじゃないかと――……シーラ？」

ようやく異変に気付いたのは、彼女が目の前までやってきてからのこと。

相変わらずの冷静な表情。

――冷静？　いや違う。そう思っていたのは彼だけだ。

「……」

小さく息を吸う音。

それは冷静などではなく“緊張”だ。

ティースはその違いを見抜けなかった。

そして次の瞬間――

「△※□凹☆×↓＊●！！？？？？」

世界が、真っ白になる。

……いいや、世界はいつも通りだ。外の雨は徐々に弱まりつつあり、時計はいつも通りに時を刻み続け、隣の部屋ではアルファが相変わらず一点を見つめて固まっているのだろう。

真っ白になったのは、ただ一人、この部屋にいるティーサイト＝アマルナという男の頭の中だけ。……いや、正確に言えばもう一人、それに近い状態になっている者もいたが――それはともかく。

何が起きたのか。

一体どうなったのか。

ティースの頭はそれを容易には理解しなかった。

ただ感じるのは、口の中の微かな痛み。脳天にまで響きそうなその微かな痛み。

なんの香りだろうか、とにかく心地よい、それだけで胸がドキドキしそうな甘い香り。

そして。

そして唇に感じる、柔らかく、暖かな感触――

「――」

動けない。

手が添えられているのは、左の頬だけだ。そこに細く美しい指がそっと添えられている。体は、どこも押さえつけられていない。なのに、体が固まって動けなかった。

息もできない。

少しずつ白以外の色を取り戻し始めた視界の中で、透き通るような水飴の髪が微かに揺れているのがわかった。乱れた幾筋かが、首を微かにくすぐる。

心臓の鼓動は、まるで自らを追いつめる足音のようにゆっくりと、だが確実に強くなっていった。

「――」

最初の衝撃からようやく感覚を取り戻した頭は、次に、温泉に長く浸かるよりも強烈な熱と、麻薬のように甘美な快楽に侵され始める。

あと十秒もそうしていれば、彼の頭は確実にのぼせ上がっていただろう。

――実際にそうしていたのは、ほんの数秒のこと。慣れた者にし

てみれば、ほんの軽い、挨拶替わりのものかもしれない。
が、彼にとってそれは、とてつもなく長い、現実とは思えない世界の出来事だった。
そして、
「っ……っ……」
ゆっくりと離れていく。微かな吐息が、すぐ近くに聞こえた。
甘い、吐息。
「――」
思わず沸き上がった衝動。
離れていくそれを引き留めようと、手が伸びる。
――いや。
「――……は？」
それは寸前で止められた。
あまりにも遅すぎる“認識”によって。
「……あ、あれ？　……シーラ？　俺――」
頬を上気させた美しい少女の顔がすぐ近くにある。それはいつものクールで冷たいものではなく、あまり見たことのない表情。
現実味のない光景。
（ぁ……）
素直に、綺麗だと思った。
首筋に一本だけ残された、美しい黄金色の髪。
鼻孔をくすぐる残り香。
そして、口の――
「……！？」
ティースはハッと口を押さえた。
――残っている、感触。
「！！！？」
目を見開いて、眼前の熱っぽい表情の少女を見つめる。
少女――それは紛れもない、彼の良く知る少女、シーラ＝スノーフォールその人だ。

状況と記憶。
それらが彼の頭の中で少しずつその手を結び始め、そして徐々に“その出来事”を形作っていく。
「！！！！！！？」
理解し、そしてもう一度、二度目の衝撃が彼を襲った。
「なっ、なななななななっ！！！」
「……」
すぅっ、と、息を吸う音。左頬に添えられていた手が離れていくと同時に呪縛が解け、浮き上がったまま固まっていたティースの腰はストンとベッドの上に落ちる。
困惑の瞳で見上げると、シーラは彼と目を合わせようとはせず、すぐに視線を外して後ろを振り返った。
「……」
その状況を黙って見つめていたマーセルも、しばしの間、驚きの表情を崩さなかったが、やがて我に返った様子で目を細め――そして無言のままソファを立った。
――パタン。
ドアが閉じて、部屋がしんと静まり返る。
雨音がほんの一瞬だけ強さを増した。
「……」
小さく、深く息を吐く音。
それはティースではなく、シーラのものだ。……何より今の彼には、そんな落ち着いて深呼吸するほどの余裕もなかった。
口を押さえたまま青ざめて、それから再び顔が真っ赤に染まる。
「な、なななな……あ、あああああ……」
「少し、落ち着きなさい、ティース」
シーラは対照的に落ち着いた口調で、背中を見せたままゆっくりと離れ、窓際まで歩いていく。
「別に大したことではないわ」
「だ、だだだって……お、おおまえ……い、いいい今……」

呂律が上手く回っていない。彼の頭は完全にオーバーヒートしてしまっているようだ。
「いいじゃないの、キスくらい。別に初めてのことでもないでしょう？」
「――」
シーラは肩越しに怪訝そうな視線を向けて、
「……もしかして、初めて？」
「……」
黙ってコクコクと頷くティース。
「そ、そう……」
少しだけ、口調に動揺が走った。
「それは……少し、悪かったわ……そうね。お前、そんな体だものね」
「お、おおお……俺……」
言いかけて、思い出したように深呼吸。
一度、二度、三度。
そこまでやって、ティースはようやく言葉を取り戻した。
「お、お、俺のことは、ど、どうでも……そ、それより、お、お前、なななにを――」
「私はいいのよ。慣れてるもの」
シーラは素っ気なくそう言って、再び窓の外に視線を戻した。
「な、慣れ……？」
「なに？　何か不思議？」
「い、いや……」
確かに、普段の言動からすればそうであってもまるでおかしくはない……が、そう理解してはいても、不思議な淋しさが胸に渦巻いた。
だが、シーラはそんな彼の心中など察した様子もなく、
「だから、お前も何も気にしなくていいわ。いいじゃないの。初めてなら尚更、貴重な体験ができたと思えば――……なによ」

もう一度肩越しに振り返ると、口を押さえたままのティースに対し、あからさまに不機嫌そうな感情を美しい形の眉に表した。
そして少しだけ、瞼が震える。
「そんなに嫌なの？　それなら、すぐに口を濯いでくればいいじゃない」
「え……い、いや、そんなんじゃ――」
「だったら、なに？」
シーラの口調は徐々に苛立っていった。……確かにそのときのティースの態度は、女性としての彼女のプライドを深く傷付けていたのかもしれない。
だが、しかし。
彼が口を押さえていたのは、決してそんな理由からではなく――
「そ、そうじゃなくて……く、口の中……歯がぶつかったところが、痛くて……」
「……」
ハッとした様子で、シーラもまた自分の口を軽く押さえた。彼女の口の中にも、やはり同じ痛みが残っていたのだ。
少し気まずそうにしながら、
「……仕方ないでしょ。そういうものなのだから」
「そ、そういうものなのか……」
とりあえず納得するティース。
いや、納得したというより、それ以上追求する余裕がなかったというのが正解か。
「そ、それより」
話題を戻す。
心臓の音はようやく収まりつつあったものの、顔を上げて目の前の少女を見ると再び熱が上ってくる。
そこでティースは視線を外し、あらぬ方向を見ながら言った。
「お、お前、今のは一体、どういうつもり――」
「どういうつもり？　……決まってるじゃない」

対するシーラの方は目を閉じ、事も無げに答える。
「あの女を、お前から引き離すためよ」
「え？　……あ、あれ？」
そこで初めて、ティースはマーセルが部屋を出ていったことに気付いたようだった。
「マーセルさん……？」
シーラは目を閉じて続ける。
「あの女はお前には決して触れられないのだもの。こうすれば、必ずショックを受けるはずだと思ったのよ」
「え……？」
その言葉にティースは顔を上げ、それからその意味を理解すると、ゆっくりと目を見開いていく。
――頭の中に掛かっていた靄が一気に晴れた。
「……」
そして。
ドクン、と。
心臓が今までとは違う意味の鼓動を打つ。
だが、それには気付かず、シーラは深いため息を吐いて続けた。
「迷惑な話だわ。お前がもっとしっかりしていれば、こんなことをする必要はなかったのに。でも、これでリィナも――」
「……お前……」
「？」
ピタッと、シーラの言葉が止まった。と、同時に怪訝そうな視線が彼の方へと向けられる。
そして、
「お前、そんなこと――」
「え？」
それを見たシーラの表情が凍り付く。
喉を絞るようなティースの声は、それだけで、怒鳴り出すのを懸命に堪えていることがわかる。さらに声は震え、押さえきれない怒

りが視線に滲み出ていた。
「そんなことのために……！」
「……ぁ」
そのとき彼が見せたその感情は、本来、彼女に対して向けられるべきものではなかった。向けられたときの記憶を思い出すのも難しいほどに。
動揺した。
彼女らしくもなく、それを隠す余裕すらもなく。
「マーセルさんは――あの人は真剣に、俺のこと好きだって、そう言ってくれたんだ」
「え――」
シーラは目を見開いたまま。彼の本気の怒りを察してか、心なしか顔の血の気が引いているようにも見える。
「っ……」
ティースは唇を噛み、無言のままベッドから立ち上がった。
「あ……ティース……」
行動の意味を問うその声は、普段の彼女からは考えられないほどに弱い。
「……」
ティースは無言のままドアへ向かってゆっくりと歩き出し、途中、ピタッと立ち止まって視線を床に落とすと、
「……慣れてるからとか、何とも思ってないとか……それなら、それはそれでいいよ。俺はお前と違ってそんな風に思えないけど、男だからさ……でも」
彼自身、まだ気持ちの整理がついていないような、そんな複雑な表情で続けた。
「誰かの真剣な想いを、そんな軽い気持ちで、そんな卑劣な方法で踏みにじろうとしたことは……それは、絶対にしちゃいけないことだ。たとえリィナのためでも、許せない」
「！」

ハッとした顔でシーラは反論した。
「ちっ……違う！　軽い気持ちなんかじゃ――私はただ……！」
言いかけて、思い直したように止まる。
その後に出たのは、明らかに力無い言葉だった。
「ただ、あの子のために――」
「リィナは、絶対にそんなこと望んでない」
ティースは力無く首を横に振って、悔しそうな表情を浮かべると、
「……ごめん。俺、しばらくお前の顔、まともに見られそうにない」
「え……ぁ……ま……待って！　待ちなさい！　……ティース！！」
だが、早足で部屋を去っていくティースの足が止まることはなく――。

――パタン。

「ぁ――」
思わず手を伸ばす。……が、それはあまりに遅すぎた。
「……」
遠ざかっていく足音。
窓を叩く雨の音。
静けさに包まれる部屋。
そして――口の中に残った微かな痛み。
「っ……」
目を伏せて服の裾をグッと掴む。黒いベルベットの生地に大きな皺が出来たが、そんなことは気にする様子もなく。
（なんで……あんなこと――）
ズキズキと痛む。
多分、理由はわかっていた。
冷静に考えていればやる前から全て予測できたはずのこと。しかし今日の彼女は冷静ではなかった。ただ、それだけのことだ。
視線が流れる。

（……馬鹿）

窓にうっすら映った頬の上を、雨が流れた。

（馬鹿みたい……最低ね、私……）

激しい後悔と、そして自己嫌悪に包まれながら――。

――そして一方。

勢いよく部屋を出ていったティースの方は――

（……あっ、あああああ、どっ、どうしよう！　あ、あんなことまで言うつもりじゃなかったのにいいいいっ！！）

あれだけの啖呵を切ったにも関わらず、廊下に出て少しすると我に返り、すぐさま後悔に頭を抱えていた。

……こういう男なのである。少なくとも、あのシーラという少女に関しては。

（あああ、終わった。完全に終わった……くそっ、馬鹿馬鹿！　もっと他にいくらでも言い様はあったのに……そ、そういうやり方は良くないぞって、もっときちんと諭してやれば、まだ少しは――）

もちろん彼は、自分の言い分が間違っていたとは思っていない。彼女のやり方に怒りを感じたことも確かだ。が、だからと言って、彼女と絶交だとか、本気でしばらくは距離を置くとか、そんなことはこれっぽっちも考えていないわけで。

（ほ、本当にもう顔を合わせてくれなかったら、お、俺はどうすれば……い、今すぐ謝りに行けば間に合――で、でもさすがにあそこまで言っちゃったら、戻るに戻れないし……はぁぁ……なんであんなこと言っちゃったんだよぉぉぉ……）

ガックリと肩を落とす。

だが、あのときは熱くなっていて、勢いのままに想いを口にしてしまったのだ。

正常な思考を失っていた。

――怒りのせい？

それはもちろんある。
が、実をいうと、彼が正常な思考を失っていた原因はそれだけではなく。
「……」
無意識に右手が口元に触れると、途端、カァッと顔中が熱くなった。
（だ、だって、俺――）
鼻孔をくすぐった香り。
すぐ近くに感じた、体温。
柔らかな感触。
（そ、そりゃ、あいつは慣れてて平気なのかもしんないけど！　お、俺なんて初めてのことで、なにがなんだか……そ、そんなすぐ忘れられるわけないし……！！）
思い出すだけで、心臓の鼓動が異常な速さになる。ぶつかった歯はまだ微かに痛んだが、正直なところ、あのときはその痛みなど全く気にならなかった。
（あ、あんな――うぅ）
のぼせて、壁に手をつく。
（せ、背中に電気みたいのが走って……なんだか不思議な……まるで夢の中にいるみたいで……あ、あいつの体温が――って、あああ、なに考えてんだ、俺ッ！！　こっ、この不心得者ぉぉぉぉぉッ！！）
ガンッ！
「いてっ！」
「なにやってるの、ティースくん」
「うわぁっ！！」
壁に頭を打ち付けたと同時に背後から声を掛けられ、ティースは思いっきり飛び上がった。
振り返る、と。
「一見脳天気そうに見えるけど、あなたにも自殺願望なんてものが

あるの？」
「マ、マーセルさんっ！？」
「壁に頭を打ち付けて死ぬのはやめた方がいいわよ。カッコ悪いから」
クスクスと笑いながら、近付いてくるマーセル。手にはタオルとバスローブを抱えており、どうやら温泉へ向かうところらしい。
「そ、そんなんじゃ――って、そんなことより！」
言い訳しようとして思い出し、そしてティースはすぐに頭を下げた。
「さ、さっきは、その……すみません！　あ、あいつ、本当はあんなヤツじゃないんです！　ただ……その、ものすごく友達思いなところがあって、それで――」
だが、
「え？　なんの話？」
「へ？」
互いに不思議そうな顔で見つめ合う形になった。
「え、えっと……」
戸惑うティース。だが、目の前のマーセルの表情にとぼけている様子はない。何故謝罪されるのか本当に理解していない顔だ。
「私をフったこと？　それとも、もしかしてあのシーラって子のこと？」
「あ、えっと……後の方です」
素直にそう答えると、マーセルはますます首をひねった。
「どうしてあなたが謝るのかわからないんだけども？」
「あ、いえ、その……あ、後であいつの方からもどうにかして謝らせますから」
「じゃなくて」
「？」
「別にどっちにも謝ってもらう必要ないじゃない」
「へ？」

再び見つめ合う二人の脇を、温泉の方から戻ってきた三人組の女性がブツブツと文句を言いながら通り過ぎていく。どうやら今日の雨に文句を言っているらしく、確かに露天の多いこの宿では、雨が降るとその魅力も半減してしまうのだろう。

マーセルはその三人組を横目で見送りながら、

「雨、まだ上がらないみたいね。でも少し弱まってはいるみたいだし、もし夜になって止んだらもう一度入りに行こうかしら？」

「あのー……だってマーセルさん、さっき、怒って部屋を出ていったんじゃ……」

「え？」

問いかけに、マーセルは呆気に取られたような顔で振り返って、笑った。

「あはは、まさか。そりゃ全然悔しくないって言ったら嘘だけど、もうフラれちゃった後なんだし、そんなに怒るわけないじゃない」

「そ、そんなもんですか……」

「邪魔っぽかったから出ていっただけよ。あなたとの話も終わっていたし、ただでさえ私、あの子に嫌われているみたいだしね」

どうやらこのマーセルという女性、彼が思っていた以上にさばけた性格らしい。

ひとまずホッとしたティース。

だが、すぐ思い直したように視線を落として、

「あ、で、でも、後で絶対謝らせますから。あいつ、マーセルさんを俺から引き離すためだけにあんなことしたんです。それは、絶対に良くないことだと思うんで」

「引き離すため？　……そういえばさっき、友達思いがどうとか言ってたわね？」

「……ええ」

ティースは正直に事情を話すことにした。リィナという友人がいること。彼女と自分のことについて、シーラが早とちりをしていること。それが先ほどの出来事の原因だということ。

「だから……その、あいつ、ただマーセルさんに当てつけるためだけにあんなこと」

もちろん、それを話すことによってシーラの印象がさらに悪くなることも懸念した。が、たとえそれを踏まえていても、それによって嫌な思いをしたであろうマーセルに隠しておくことはどうしてもできなかったのである。

だが、しかし。

その話に対するマーセルの反応は、彼が予想していたものと違っていた。

いや、違うどころか――

「ぷっ……あはは……アハハハハハハハッ！！」

「へ？」

全く正反対だった。

「マ、マーセルさん？」

「ぷっ……くくくっ……」

体を小さく折り曲げ、右手で口元を押さえ、顔を真っ赤にしている。

「……？　あのー……」

「ごっ……ごめん……ちょっ、ちょっと……あははっ……面白すぎ……っ……！」

「？？」

ティースは全く理解していない。自分の言葉を思い返してみても面白いことなど一つもなかったし、そもそも彼は怒られることを覚悟の上で話をしていたわけで――

「な、なにか可笑しかったですか？」

「え？　あ、ううん……ご、ごめんねぇ」

言いながらも、マーセルはまだ顔を赤くして可笑しそうなまま、

「そ、それは確かにものすごく友達思いね……うん。なかなかできることじゃないわ」

「はぁ」

「あー……笑いすぎて心臓止まるかと思った」
「だ、大丈夫ですか？」
「大丈夫大丈夫」
ようやく上体を起こすと、マーセルはうんうん、と頷いて、
「そういうことなら、謝ってもらわなくていいわ。全然気にしてないし……むしろ、笑いを提供してくれて感謝したいぐらいよ」
「な、何がそんなに可笑しかったんですか？」
鈍感な彼もさすがに含みらしきものを感じたらしい。
だが、マーセルはきっぱりと、
「教えてあげない」
「そ、そうですか……」
どうにも納得できないティースだったが……それでもホッと胸をなで下ろさずにはいられなかった。
「じゃあ、ね。……あ、それと」
マーセルは両手のタオルとバスローブを抱え直して、
「生真面目なあなたのことだから、そのことで喧嘩でもしたんじゃないの？　もしそうだったら、早めに仲直りした方がいいわ」
「はぁ……」
どうにも理解できない。あれだけシーラのことを嫌っていた女性の言葉とは思えなかった。
が、マーセルはそんな彼の心を見抜いたかのように、
「だって、もうフラれたんだもの。あの子を嫌う理由の大半はなくなっちゃったじゃない？」
「お、俺、声に出してました？」
「いいえ。勘よ」
「……」
遠ざかっていくマーセルの後ろ姿を見つめながら、ティースは首を傾げるのだった。
（お、女の人って、不思議だなぁ……）

――雨はどんどん弱まっている。

「夜には、上がる……」

ベッドの上で、アルファはじっと一点を見つめていた。外なのか、あるいは窓際に飾られた鮮やかな紫の花を見つめているのか。……いや、もしかすると何も見ていないのかもしれない。

隣室での些細な騒動など、まるで気に留めた様子もなく。

その口が、微かなメロディを紡ぎ始めた。

「揺れる、揺れる、誘蛾灯……」

少し掠れた歌声が、静まり返った部屋に響く。

「おいで、おいで、光の誘うままに……」

長い銀色の髪が微かに流れる。その青味を帯びた瞳は、やはり何者も映してはいない。

雨足が弱まると同時に、西の方に傾きかけた太陽は夜の訪れを告げ始めていた。

「揺れる、揺れる、誘蛾灯……ユラ、ユラ、ユラ――」

その5『不治の病』

宿に異変があったのは、その日の夜だった。

「……ふぅ」

本を閉じて。開いて。また閉じて。

雨は止んでいた。それどころか、厚い雲が途切れて月の光さえ射し込んでくる。

「……」

長い睫毛が微かに震え、宝石を思わせる瞳は彷徨って……それはいつしか一点に止まった。

何もない壁。

首を振って、靄を振り払う。

すっきりしない気持ちのまま、シーラはこの日の夜を迎えることになっていた。

（……今更嫌われたところで、それがなんだと言うの）

左手の指が、本の背表紙を撫でる。右手は髪に触れ、髪飾りの装飾をなぞった。どちらも意味のない行動。ただ、彼女はそうすることで自分の気持ちを落ち着けようとしていたのだ。

しかし、それは彼女が望むほどの効果をもたらすことはなく――

（同じこと。嫌われたって同じ。何も変わらない……だったら、別に――）

ため息が口をつく。

（……なんて。馬鹿ね……）

いや、確かに彼女はそれを望んでいたことがある。彼を遠ざけ、嫌われるような態度を取ったことも数え切れないほどにある。

本当に嫌われたかった。嫌われる努力もした。しかし結局、彼は断固として彼女を拒絶しようとしなかった。

だが――しかし。

今、思わぬことからこんな状況になってみて、初めて気付いたのだ。

（嫌われるのは、やっぱり辛い……）

それが彼女の偽らざる素直な気持ちだった。

ゆっくりと視線を上に向ける。……天井には微かに揺らめく光源。特殊な振動に反応して発光する、比較的広くに普及している魔界由来の植物を加工した照明器具だ。

まるで宝石のように澄んだ彼女の瞳の中で、その光源がユラユラと揺らめいた。

（謝ろう。謝れば、許してもらえるかしら……）

彼女の心のそれは疑問形だったが、おそらくは間違いないだろう。……いや、先に事実を言ってしまえば、ティースの方こそどうやって彼女に謝ろうかと悩んでいたぐらいなのだから当然の話である。

シーラには自分が間違っていたという自覚があったし、謝ることにそれほどの抵抗はなかった。

「ふぅ……」

心を決めて、ようやく気持ちが落ち着いたようだ。それまで髪飾りの上にあった指がゆっくり離れ、それが口元へと移動する。

（リィナのため……とはいえ……本当に、どうかしてた）

痛みはとっくに消えていた。

（あんなことしてしまうなんて。あんなこと――）

後悔のため息が漏れる。熱い息が、指の隙間を抜けていった。

そのまま首を横に振って本を閉じる。すでに集中力はなかったし、それがなければその本を開いている意味はない。

椅子を引き、ゆっくりと立ち上がった。足を向けた先は、部屋の隅にまとめてある荷物の元。

（もう、着る機会はなさそうね……）

先ほど、暗い気持ちのままに着替えて脱ぎ捨てたお気に入りの服を手にとって広げると、綺麗に畳んで片づける。

――と、そのときだった。

（……あら？）
遠くで、誰かの声が聞こえたような気がした。
（なにかしら……？）
耳を澄ます。……しばらくは静かなまま。気のせいかと思ったその矢先、
「……！？」
もう一度、誰かの声が聞こえた。――叫び声だ。
同時に、近くで勢い良くドアの開く音。
すぐに、
「シーラッ！！」
ドンドンッ！
「！」
声の主は、先ほどまで彼女の悩みの種になっていた男だ。
「ティース？　なに――」
だが、ドアへ向かおうとしたシーラよりも先に、ティースは叫んだ。
「絶対に部屋から出るな！　いいか！　そこでじっとして、何か異常があったらすぐに助けを呼んでくれッ！！」
それだけを言い残し、足音は急速に去っていく。
（……まさか）
もちろんそれだけで、シーラは状況をすぐに察した。
（魔が……とすると、さっきの叫び声は誰かが……？）
少し思案した後、彼女はすぐに行動した。荷物を漁り、中からビンに入ったいくつかの薬を取り出す。
どれも彼女自身が調合したもので、そのうちのいくつかは、とある理由により、一般に市販されている薬よりも効果の高いものだ。
さらに取り出したのは包帯、消毒薬などの治療具一式。それらを手早く小さな鞄に詰め、肩に掛ける。さらに――治療薬とは別の特殊な薬をいくつか忍ばせて、彼女は部屋のドアを開いた。
――喧噪。それは間違いなくこの宿の中。おそらくは温泉の方だ。

辺りの状況を素早く確認する。……しばらく様子を窺ったが、喧噪が移動する気配はない。ティースが行ったからか、あるいはそれ以前にアルファが向かっていたか。どうやら鎮静の方向に向かっている、と、彼女は判断した。

躊躇することなく移動を開始する。

向かう先はもちろん、騒動のあった先。

すると、宿の中は思ったほどの混乱もなく、それを怪訝に思う間もなく、すれ違った使用人の言葉が耳に入ってくる。

「ああ、そうそう。だけどなんか知らんけど、もうやっつけちまったらしいぜ――」

「……」

（すごい手際ね、ディバーナ・ロウ……）

彼女がその働きぶりを目の当たりにしたのはもちろん初めてのこと。

（あいつは――下っ端とはいえ、そんなところで頑張っているのね……）

温泉に通じる廊下に達すると、人の数も少し多くなってきた。もちろんほとんどが宿の関係者。

「……いやぁ。にしても、助かったなぁ。まさかネービスのデビルバスターがここに滞在していたなんてな」

「どうやら、街の方で雇ってたらしいぜ。ま、とにかく怪我人も出なくて――」

会話が耳に入ってくる。

（怪我人が、いない……？　随分と手際がいいものね……まるで、襲撃を予期していたみたい）

ほんの少し、シーラの胸に引っかかるものが産まれる。

いくらディバーナ・ロウが、アルファが優秀だと言っても、この早さは確かに異常だった。おそらくはティースが到着するよりも先に解決しているのではなかろうか。

（セシルのお兄さん、相当優秀なデビルバスターだと聞くけれど…

…）

だが、それでも幾分安心して、シーラはさらに温泉の方へと進んだ。辺りの状況を見ても、すでに危険が去っていることだけは間違いない。

どうやら騒動もとっくに収まって――いや。

そう思った、その直後だった。

「……マーセルさんッ！！」

（え――）

悲痛な叫び声が聞こえたのは、進行方向の先。

（……ティース？）

聞き間違えることなど、有り得ない。それは間違いなくティースの声。

シーラは躊躇うことなく、廊下を駆けた。

……なにかあった。

おそらくはマーセルという女性の身に重大な何かが。

彼女が一日に何回も温泉に入っていたことをシーラは知っていたし、獣魔の襲撃の場にいたとしても何ら不思議はなく――そして聞こえてきたティースの声の調子は、その予測を裏付けるものだったのだ。

少しだけ集まり始めた野次馬の脇を抜け、向かった先は女性用の露天風呂。入り口付近に宿の使用人らしき女性がいて、駆けてきたシーラを驚いたように見つめたが、制止される前に強引に中へと飛び込んでいく。

もう一度、声が聞こえた。

「マーセルさん、しっかり――！」

「ティース！」

「！」

まずシーラの視界に飛び込んできたのは、脱衣所の床にかがみこむティースだった。その後ろでは、やはり宿の使用人らしき中年の女性が不安そうな顔でオロオロしている。

そして――
「！」
「シーラ……」
ティースの眼前に仰向けに倒れているのは、マーセルだった。おそらくは露天風呂に入っていたのだろう。今は裸に大きめのタオルをかけられただけの状態。
見たところ、どうやら意識がない。
「マ、マーセルさんが……獣魔に襲われて――そ、それはアルファさんが退治してくれたんだけど、きゅ、急に――」
「怪我は、してないわね」
動揺した様子のティースとは対照的に、一つ深呼吸をしたシーラはマーセルのそばにかがみ込み、すぐに脈を取る。
「シーラ――」
「続けなさい。お前が知っている事実を、全て話すのよ。……マーセル。聞こえる？」
シーラは視線を動かさずに素早く言いながら、軽くマーセルの頬を叩く。……反応はない。腕を軽くつねってみても、同じ。
「意識が、ないわ」
「マーセルさんは……心臓が悪いんだ。そ、それで――」
ティースの言葉に、シーラは眉根に皺を寄せて振り返った。
「……心臓が悪い？」
「アルファさんがすぐに駆けつけて、ぜ、全然怪我はなかったんだけど、なんか急に様子がおかしくなっ――」
言いかけた直後、怒りの声が脱衣所に響き渡る。
「だったら何故、温泉になんか入ってたのッ！！！」
「え……！！」
ティースは目を見開いて、それからまるで子供のように泣きそうな顔になる。
「な、なんでって……だって医者が、ここの温泉が心臓の病に効くって言ったらしくて――」

「っ……」

少し冷静になる。――もちろん彼が悪いわけではない。医療がそれほど発達していない地域だと、それは当然のように語られる療養法だ。知識のないマーセルがそれを信じたことも、ティースが何の疑問を抱かなかったことも、それは仕方がない。

シーラはすぐに彼女の気道を確保する。自発呼吸はない。もう一度、首筋に手を当てて脈を取る。

「……まずいわね……」

「ま、まずいって……」

ティースが泣きそうな顔のままで青ざめる。

「まさか、マーセルさん、死――」

言いかけた彼を、シーラはキッと睨み付けて、

「黙りなさい」

「！」

鋭い言葉に、ティースは口を閉ざした。

「……」

シーラは、マーセルの体を覆っていたタオルをズラして上半身を露出させると、その胸の下に手を当てる。

「心配なら後で好きなだけするがいいわ。……ここに手を当てなさい。両手を重ねて……そう。腕を伸ばして、真っ直ぐに、小刻みに圧迫するの。私がいいと言ったら、一分に百回の速さで、十五回よ」

言うや否や、気道を確保した状態のまま彼女の鼻をつまみ、ゆっくりとかがみ込んで口付け、息を吹き込む。

「……」

「いいわ、ティース。……強めに、一、二、三、四――」

「こ、こうか……」

凛としたシーラの言葉に、ティースは動揺することも忘れた様子で、必死に心臓マッサージに取り組んでいった。

すぐさま額に汗が浮かぶ。

「ええ、そう。……お前に余裕があるなら、声をかけてあげなさい」

「声……？」
十五回終えて、シーラが再び呼吸を吹き込む。
「……」
その必死な姿を、ティースはどこか呆然とした表情で見つめていた。
――少しずつ、胸に満ちていた絶望感が薄れていく。
「マーセルさん」
そして、震える口からようやく声が出た。
「頑張って、マーセルさん――」

再び、雨が降り出していた。
重苦しい沈黙。本来ならばとっくに消灯しているはずの宿。その一室には、今も明かりが灯ったままだった。
ユラユラと揺れる照明に、そこにいる二人の影が同じように揺れる。
「なんで……こんなことに」
ポツリとそう呟いたのは、ティースの方だった。
「マーセルさん、心臓が悪くて、いつ命を落とすかわからないって、そう言われてたらしいんだ。たぶん、あと一年前後だろうって」
「……」
その正面。
椅子に腰掛けたシーラは軽く下唇を噛み、目を細めて宙を見つめていた。
そこに浮かんでいたのは、紛れもない後悔の色。
「いつ発作が起きて、いつ死ぬかわからないって……それってさ。ものすごく怖いことだろ？　だけどさ。いくら病気で医者にそう言

われたからって、自分が生きることを諦めちゃったら……そうしたら、人生って本当にそこで終わっちゃうと思うんだ」

「ええ……そうね」

「だから、少しでもその力になれればと、そう思ってた。マーセルさんもそれを喜んでくれて、なのに――」

手を組み、項垂れた声が少し震えた。

「……」

シーラはその言葉に視線を泳がせ、暗闇に降りしきる雨を見つめながらゆっくりと目を閉じる。

（……馬鹿……）

彼がそういう男だということを、彼女は嫌というほどに知っていた。

自分の愚かさが身に染みる。

そして――自然と、言いにくい言葉がその口をついていた。

「ごめんなさい」

「え……？」

きぃっ……と、彼女の腰掛ける椅子が微かに軋んだ。

視線は逸らしたまま。

「今日は、本当にどうかしてたわ。自分でも、よくわからない」

「……」

顔を上げ、ティースは少し驚きの視線で彼女を見つめた。

――が、その視線は、すぐに落ちる。

「いや、いいんだ。マーセルさんも、気にしてないって言ってたし……それに、お前ってやっぱりすごいよ。俺は……武器なんて手にして、そういう場所で過ごしてるつもりでも、やっぱり身近な人があああいうことになると頭が真っ白になっちまって……」

「だって私は、そのために勉強しているのよ」

そう答えるシーラの声は、少しだけ意志の強さを増す。

「放っておけば失ってしまう命を守るために、勉強しているのだから」

「……そっか」
ティースは少し笑みを浮かべて、
「きっと、マーセルさんも喜んでるよ。……もしかしたらさ。お前とマーセルさんって、案外仲良くなれたのかも――」
「……なにを言っているの？」
その言葉に目を細めたシーラは真っ直ぐにティースを見つめて、そして言った。
「なれた、かも？　……違うわ。なれるかどうかは、これから判明するのよ」
ティースの顔に戸惑いが産まれる。
「で、でも、マーセルさんは、もう――」
「まだ、生きてるわ」
答えた声は、本来の彼女らしく凛としたものだった。
「……シーラ？」
ティースは目を見開いて彼女を見つめる。
――小康状態。
駆けつけた医者は、一両日中が峠だろうと言った。……それはどちらかといえば、その間に再び発作が起きて命を落とすだろうという、そういうニュアンスだった。誰もが――ティースでさえもそう受け取っていた。
だが――
「お前はもう、自分の部屋へ戻りなさい」
シーラは椅子を回して机に向かうと、足元にある鍵付きの箱に手を伸ばした。
「ゆっくり休むのよ。後でマーセルに元気な顔を見せられるように」
その言葉に、ティースは呆気に取られた顔で、
「で、でもシーラ。医者だって、ああやって言って――」
きぃ……と、もう一度椅子が軋む。
水飴のような美しい髪が薄暗い照明の中で小さく踊った。
怖いほどに美しく整った輪郭。

そして――
「ティース」
「え……」
彼に向けられたのは、宝石のような瞳。そして、その奥に宿った炎のように眩い意志だった。
「同じことを何度も言わせないで。私は“そのために”ここにいるのよ」
そこに秘められていたのは、普段の彼女からはとても考えられないほどの情熱――いや。
「シーラ……」
ティースは本当は知っていた。
ここに来てようやく再確認するに至った。
冷たくクールな表情が、彼女の真実などではないこと。それはここ一、二年の間に身につけたばかりの、ただの仮面でしかないことを。
「……」
無言のままゆっくりと、ティースは立ち上がる。
（……シーラ）
根拠など、あるわけではない。
いくら優秀とはいえ、彼女は所詮学生の身。今日、マーセルを見た医者は、ネービス出身で経験も深いきちんとした人物だ。その人物が半分さじを投げたのだから、本来、それを彼女にどうこうできるはずもない。
だが――
「……頼む」
グッと目を閉じ、そして思わず力の入った拳を握りしめ、そしてティースは彼女の部屋を出た。
普通に考えれば芽生えるはずもない希望。
その微かな光を、確かに胸の中に感じながら。

――指輪を外し、それを特殊な鍵穴に差し込む。
カチャリと音がして、鍵が外れた。
「……」
取り出したのは一冊の本。異様なほど重厚感のある黒表紙。明らかに古い書物であるにも関わらず、汚れも劣化も見られなかった。
タイトルは――ない。飾りもなにもない。本を開いたところで、全てのページは白紙だ。
――そのはずだった。
が、しかし。
「胸の病……もしか、したら――」
それを見つめるシーラの、まるで宝石のように輝く瞳には、その本のタイトルが確かに映っていたのだ。
黒表紙に刻まれた、古代文字。
“アズラエル”――と。

一方。
（……アルファさん、起きてるかな）
シーラの部屋を出たその足で、ティースは真っ直ぐにアルファの部屋へと向かっていた。
……さすがは“サン・サラス”とでも言うべきだろうか。先ほどの騒ぎでティースが温泉に駆けつけたとき、彼はすでに三匹の獣魔を退治し終えた後だった。怪我人が出なかったのはその尋常ならざる素早い行動故。もちろん発作を起こしたマーセルを獣魔の爪から守ったのも彼ということになる。
だからティースは任務の状況確認のついでに、その礼を言うつもりだったのだ。

……コン、コン。
部屋の前に立ち、控えめにノックする。
「……」
相変わらず返事はない。部屋の明かりもどうやら消えているようだ。
（寝てるかな……？）
だが、彼の場合、そうとも断言できない。一応、声をかけてみることにした。
「アルファさん？　起きて――」
「起きてる」
すると案の定、短い返事が部屋の中から返ってくる。
そんな彼の変わった態度にも、ティースは少しだけ慣れてきていて、
「入りますよ」
ドアを開けると、廊下の明かりが真っ暗な部屋の中に射し込んでいく。
そんな中、アルファは相変わらずベッドの上に腰掛けて、窓際に飾られた花をじっと見つめていた。
その視線は動かないまま、
「なにか用か？」
「あ、いえ、少し今日のことについてお話ししたいと思って」
後ろ手にドアを閉める。……別に閉める必要はなかったが、開けっ放しにしていると何か言われそうで、なんとなく閉じてしまった。
部屋は再び真っ暗闇になる。
「明かり、点けないんですか？」
「……ああ」
問いかけに、アルファは思い出したように答えて、
「点けたことがない。必要だったことがない」
「そ、そうですか」
確かに。特に動き回るわけでもない彼にとって、明かりを点ける

ほどの理由は何もないのかもしれない。
ティースは手探りで部屋を歩き、少しずつ慣れてきた視界の中、ようやく椅子を探り当てて、そこに腰を下ろす。
アルファの視線は少しも動かない。おそらくティースが黙っていれば、いつまでも無言が続くことだろう。
もちろんティースは自ら口を開いた。
「今日はホント早かったですね。おかげで、怪我人も出ずに済んだみたいです」
「……」
何も答えない。誉め言葉にはあまり興味なさそうだった。
（……そういえばアルファさん、宿の人にお礼を言われても素知らぬ顔だったなぁ）
他人に感謝されることに、特別なことを感じないのだろう。見た目の印象通り、無感動というか、任務だけをこなすロボットのような性格らしかった。
だが、それでも彼の素早さが事態を収拾したのは確か。ティースは素直にその能力に感心しながら、
「俺なんか、ぜんぜん気付くの遅かったみたいで――」
「明かりを、点けた」
「え？」
「明かりを点けた。来るのがわかっていたから、待ち伏せしていた」
「？？」
ティースにはその言葉が理解できなかった。
が、アルファはそれを気にした様子もなく、
「誘蛾灯」
「……誘蛾灯？」
微かに、部屋が明るくなる。
「え――」
光源は、アルファの左手のすぐそば。ベッドに立てかけてあった槍の刃先が僅かに光を放っていた。

ユラ、ユラ、ユラ、と。

「誘蛾灯……？」

「地の六十一族は爬虫類型の保護色を持つ獣魔。薄暗く視界の悪い洞窟内で戦おうとすれば、討ち漏らす可能性も高い。入り口付近で待ち伏せするにも、あの辺りは雨のせいで足場も視界も悪すぎる」

淡々と、アルファは言葉を続けていった。

「地の六十一族は雨を嫌う。知性は極めて低い。だから雨が降り止んだ後、残してきた“誘蛾灯”の明かりと人の気配に引かれて、この宿に姿を見せることはわかっていた」

ユラ、ユラ、ユラ――。

「……わかって、いた？」

呟いて、そしてティースの脳裏に今朝の出来事が蘇る。

――微かに光を発していた槍。帰り際、それがまるで目印を残すように、ところどころの石を打っていたこと。

それが、おそらくは彼の持つ“誘蛾灯”という名の槍に秘められた特殊能力なのだろう。つまり……知性の低い敵を、ある程度誘導することができる能力。

そして、そう理解した途端。

「……それって、まさか――」

ティースの心臓は一度大きく跳ね、それから泥水のようなものが胸に流れ込んできた。

「まさか、アルファさん……確実に敵を討つために、わざとヤツらをこの宿におびき寄せたってこと……？」

「そう」

「！」

アルファは呆気なく答えた。――呆気なく？　それはそうだろう。彼は至極合理的な考えに基づいて、任務を達成するために最善と思う行動を取った。その答えを躊躇う理由など、彼には微塵たりともない。

だが、

「そんな……」
ティースにとっては違っていた。
「だったら……だったら、マーセルさんはそのせいで――」
「？」
そのとき初めて、空気中に漂う微かな怒気を感じたのか、アルファはティースの方へと切れ長の美しい視線を向けた。
暗闇に浮かんだ微かに青色の瞳は、不思議そうな色を宿している。
ティースは押さえきれずに怒りを吐き出した。
「……何を考えてるんだッ！　そんなことをして、宿の人たちに被害が及んだらどうするつもりなんだよッ！！」
「及ばない」
「！」
アルファは変わらぬ調子で淡々と続けた。
「ファナと約束をした。任務は、出来る限り周りに被害を及ぼさないように達成する、と。だから私は、被害が及ぶ前に敵を排除した」
「な、なにを言ってるんだ！」
そんな彼の言葉は、さらにティースの怒りに火を付けて、
「あんただって見てただろ！　マーセルさんは獣魔の襲撃に驚いて、それで心臓の発作を起こしたんだッ！！　……そうでなくたって、何の抵抗手段も持たない人たちを囮に使うようなこと……そんなことが、許されるわけがないじゃないかッ！！」
「……」
アルファは動かない。
彼はどうやら、ティースが何故怒っているのか理解していないらしく、しばらくは答えを探しているようだった。
が、やがて――
「ッ！！」
視線が窓際へと戻る。
……いつかのよう。答えることを諦めてしまったように。
「あんたは――ッ！！」

「……」

返事はない。

「ッ――」

ダンッ！！！

床が大きな音を立てて軋む。怒りを込めた視線が、ベッド上のアルファを貫き、震える拳は今にも殴りかかりそうに見えた。

それでもアルファは動かない。まるで傀儡師を失った人形のように。

実際に、何も感じていないようだった。

翌日の朝になっても雨は降り続いていた。

宿の一室には、今も街の医師が待機している。彼が手にしているのは、ラダコーン草から作られた心臓の病に効くとされる塗り薬。

「気休め程度、ですが……」

部屋を訪れた宿の管理人、アーカーソン夫妻の問いかけに、医師はそう答えた。

一般的に普及しているその薬は、心臓の裏――つまり背中に塗布することによって、心臓の負担を和らげると言われている。が、塗り薬であるが故に劇的な効果はなく、そもそもこの大陸において、心臓の病といえばほとんどが不治の病。もともと僅かな延命の効果しか望めず、ここまで悪化した状態においては、確かに気休めにしかならなかった。

「ご家族には連絡しましたか？」

医師の問いに夫妻は頷いた。が、それに妻の方が付け加えて、

「ただ、こちらに到着するのはおそらく一週間近く後になるのではないかと……」

そう言った。

どうやら妻の方は、マーセルの家の事情を少なからず本人から聞いているようだった。……それもそのはず。何しろ彼女はもう一年近くもこの宿に滞在しているのだ。

「それでは、おそらく間に合いませんな」

初老の医師はやや冷たいとも思える口調で言った。

もちろん彼にとってこの状況は特に真新しいものではない。ラダコーン草の群生地でもあるこの街には、心臓に病を抱えた者がよく療養にやってくる。当然、この街の医師である彼は、その死に目に会う機会が数え切れないほどあったのだ。

「次に発作が起きれば、おそらく助からないと思います」

「……そうですか」

夫妻は暗い表情で頷いた。

……故郷は遠く、もちろん見舞いに訪れる人間などいない。そんな彼女の境遇に、二人は少なからず同情していた。単なる客として以上には、彼女に対して親身になっていた。

だが、どうしようもない。

医者でもない彼らには――いや、医者でもどうしようもない病を前にしては、ただ、奇跡が起きることを祈るしかなかったのだ。

そして昼。

「ヤニス、カラッサ、アルセフィ、ラダコーン……」

雨が窓を流れていく。太陽の光は厚い雲に遮られ、昼間だというのに部屋の中は薄暗い。カタカタと窓が音を立て、時折稲光のようなものが周囲を照らしていた。

「それと……黄昏の一葉」

独り言を呟くシーラの手元には、机の上に開かれた重厚な黒表紙の本、そして古代語の辞典。

その足元には何種類もの薬草らしきものが並べられ、その周囲はまるで荷物をひっくり返したように足の踏み場もないほどに散らかっている。

細めた目の下は、彼女の疲労を表してか薄く黒ずんでいた。いつも綺麗に整えられているはずの髪は僅かに乱れている。

「黄昏の、葉……」

視線が宙を泳ぐ。

黒表紙の本に記された“その薬”の材料は十一種類。そのうち三種類は彼女の手持ちの中にあり、七種類は街の薬屋で手にすることができていた。

だが、最後の一ピース。

それがどうしても埋まらないのだ。

“黄昏の一葉”

その本に記された材料は、ほとんどがキーワードのようなもので表現されている。

十一種類のうちの十種類については、今までに解読した分や、単純な発想で突き止めることができていた。が、最後の一つ。“黄昏の一葉”で示される薬草は、これまでの解読の中でも登場したことはなく、そして彼女の記憶の中にあるどの薬草も連想させなかったのだ。

「黄昏……夕暮れ……西の方角……西国……？」

あまりに曖昧すぎたし、無理にひねりすぎると今度はあまりにかけ離れてしまう。

「とすれば……」

呟きに影が落ちた。

……この本を解読するにあたって、今回のような状況は珍しいことではない。いや、すんなり解読できることの方が珍しいぐらいだ。

そして経験上、こういう場合の答えはたったの二つしかなかった。

それがすでにこの地上に存在していない植物か。

あるいは、現在、薬草として用いられることが全く認知されてい

ない植物か。
「……」
シーラは無意識に下唇を噛んでいた。
前者であれば、絶望的。後者であれば……それでも途方もない。常識の枠を外してしまえば、植物の種類などそれこそ無限に近い。その中から“黄昏の葉”などというキーワードに収まる植物を探すことなど、何らかの偶然でも起こらない限り不可能に近かった。
「……！」
机に叩きつけそうになる拳をグッと堪える。
さらに唇を噛んだ。
（よく考えるのよ、シーラ……何か、思い当たることがあるのではないの……？）
目を閉じ、深呼吸をして思考を巡らせる。が、一旦熱を帯びた頭は同じ所を行ったり来たり、しまいには考えているのか考えていないのかすらわからなくなってしまう。
（どうしてこんな大事なときに……！）
苛々が止まらない。頭が熱くなる。さらに思考が鈍る。
悪循環だった。
（最初から、基本から順に……落ち着いて、焦らずに……よく考えて――）
コン、コン。
ノックの音に、思考が途切れる。
「……誰？」
「あ……」
シーラの声は苛立ちを隠し切れていなかった。ドアの向こうでもそれを察したのか、その声はいつも以上に遠慮がちで、
「入っても、いいか？」
「ティース？　……今、忙しいのよ。邪魔しないで」
苛々をぶつけるつもりはなかった。が、声が思わず険を帯びてしまったのは、彼女が比較的激しい気性の持ち主であり、また人の子

でもある以上、仕方のないことだろう。
だが、
「……シーラ」
ドアは開いた。どうやら余裕がなくて鍵を掛けるのも忘れていたようだ。
眉をひそめて振り返るシーラ。
「時間がなくて焦ってるのはわかるけど……少しだけ、休憩しないか？」
そう言いながら部屋に入ってきたティースは、手にティーカップを乗せたトレイを抱えていた。
「なにを言ってるの？」
シーラは眉間に皺を寄せ、すぐに語尾が荒くなる。
「人の命がかかってるのよ？　休憩なんて――」
「わ、わかってるよ。でも……」
ティースはその剣幕に少したじろぎながらも静かに反論して、
「何度か様子を見に来てたんだけど……お前、何か行き詰まってるみたいじゃないか。そういうのって、あまり根を詰めすぎるとかえって悪いしさ。ほら、いったん気を落ち着けて。そうすると、案外簡単に答えが見つかったりするもんなんじゃないか？」
「……」
一瞬、何か反論しかけたシーラだったが、やがて考え直したのか少しだけ視線を泳がせると、小さく息を吐いて、
「……そうね」
結局素直に頷いて本を閉じた。
確かに思考は袋小路だった。時間をかければ抜け出せるという類のものでもない。それに、彼が様子を見に来たことにすら気付いていなかったのだとすれば、彼の言うように一旦休憩することも必要かもしれない、と、そう考えたのだ。
「……」
そんな彼女に、ティースもホッと安堵の息を吐いて空いていたソ

ファに腰掛ける。そしてテーブルの上にトレイを乗せると、
「紅茶、もらってきたんだ。あ、お菓子はないんだけど」
「いいわ。ありがとう」
シーラもまた彼の向かいのソファへ移動し、少し乱れた髪を手で整えながら目の前に出されたティーカップを手に取る。
口を付けると、暖かな液体が喉を通って体の中に染み込んだ。
……少し気分が落ち着く。
視線は窓の外へ。
外は相変わらず雨のままだった。
「……ごめんな。考え事の邪魔しちまって」
「ん」
紅茶に口をつけたまま、シーラは曖昧な言葉を返した。
「マーセルさんのことはもちろん心配だよ……でも、ホント言うと、お前のことも心配でさ。お前、昔っから結構無茶するタイプだったから……」
「……」
無言で窓の外から視線を戻すシーラ。
見つめられたティースは少し気を遣った様子で、
「あ、あ、いや、昔の話だよ。今は……今のお前はそうでもない……のかも」
誤魔化すように自分の分の紅茶に口をつけたが、すぐ思い直したように続けて、
「で、でもさ……あまり責任とか、そういうものを背負いすぎないでくれっていうか……マーセルさんのことはお前が悪いわけじゃないし……もちろん助かって欲しいけど、でもお前って昔から……あ、ああ、いや、今はそうじゃないのかも――」
「……思い出した」
「え？」
怪訝な様子で顔を上げるティース。
そんな彼に、シーラはほんの少しだけ笑みを漏らした。それから

視線を手の中のティーカップへと移す。
揺れる琥珀色の液体からは、まだ微かに湯気がたっていた。
「お前の名の由来よ。ティーサイト」
「……へ？　俺の名前？」
全く話の流れを理解していないようだった。……いや、それも仕方あるまい。確かに彼女の言葉は、会話の流れを全くと言っていいほど無視していたのだから。
「ふぅ……」
落ち着いた吐息を漏らし、無言のまま紅茶を口にするシーラ。
しばらく続く沈黙の時間。
ただ、流れる空気はいつになく和やかだった。
……ややあって。
「助かったわ」
空になったティーカップが、ティースの目の前にあるトレイに戻された。
「本当はお前の言うとおり行き詰まってた。でも、おかげでまた冷静に考え直せそうよ」
「……」
ティースはポカン、とした顔で、
「……え？」
「なに？」
「……あ、あ、いや！」
慌てて、すでに空になって置いたはずのティーカップにもう一度手を伸ばして口をつけ、中身もないのに飲み干す仕草をする。
どうやら素直に礼を言われたことが意外だったらしい。……いや、ここ最近の様子を考えればむしろ当然の反応か。
「えっと……はは、いや、役に立てたなら本当によかったよ、うん」
頭を掻きながら、手持ちぶさたな様子で下ろしかけたカップにもう一度口を付けるティース。
……が、こういう“いい雰囲気”のときにこそミスってしまうの

が、このティーサイト＝アマルナという男であり。
そんな彼に対し、シーラはほんの少しだけ眉をひそめると、
「……そのカップ、私のよ」
「え？　あ……あぁっ！！」
ガシャン！！
「うわぁっ！」
「ちょっ……ティース。落ち着きな――」
だが、言い終わる前に、ティースは口を押さえながらブンッと頭を下げて、
「す、すすすすまん！　お、俺、今、なんかボーっとしてたみたいで！」
「……見ればわかるわよ」
慌てる彼とは対照的に、シーラの突っ込みは冷静だった。
落としたティーカップを拾い、その縁を確かめながら、
「割れてないみたいね。……なに？　今度はカップにでも歯をぶつけたの？」
「っ！」
その言葉で、ただでさえ赤くなっていたティースの顔がさらに真っ赤に染まった。
「そっ……そそそそんなことッ！　べ、別にっ……！！」
どうやら昨日のことを思い出してしまったらしい。口を押さえたまま、呼吸するのも忘れているようだ。
「……」
それを見たシーラは少しだけ困ったように視線を泳がせると、やがて小さく息を吐き、口を押さえたまま固まる彼に言った。
「もう、忘れなさい。昨日はどうかしてた。でも私は気にしないのだから、お前が忘れてしまいさえすれば、全てなかったことと同じよ」
「う……あ、ああ……そ、そうは言うけどさ。でも……」
だが、もちろんティースにも言い分はある。

何しろ“それ”は彼にとって初めての体験であり、そして相手が相手でもあった。それをすぐに忘れろなんてのは、彼にしてみればあまりにも無茶な要求なのだ。

とはいえ、

「いいから。忘れなさい」

「……は、はい」

有無を言わせぬ調子でそう言われてしまえば、可能か不可能かは別として、そう答えるしかなかったのである。

「マーセルの様子は、まだ変わりない？」

ソファを立ち、再び机の方へと戻っていくシーラ。

ティースは二つのティーカップをトレイに乗せながら答えた。

「あ、ああ……今のところは。大丈夫ってことはないけど、大きな変化はないみたいだ。けど先生が言うには、いつ発作が起こってもおかしくないって……」

「そう」

その口調に、ほんの微かな焦りが混じった。だが、すぐにそれを振り払うように小さく首を振る。

「じゃあ、私はまた作業に戻るから。何か異常があったら知らせてちょうだい。それ以外は、もう来ないで」

「ああ、わかった」

言い方こそ冷たかったが、感謝の意がこもっているらしいことは鈍感なティースにもわかった。

「じゃあシーラ。最後に……ちょっとだけいいか？」

「？」

不思議そうに振り返ったシーラは、ティースが手にしているものを見てさらに怪訝な顔になる。

「なに？」

「何だと思う？」

彼にしては珍しくもったいぶった言い方だった。

「なにって……花のつぼみね」

見たままを答えるシーラ。
植木鉢に植えられたそれは、根本付近に赤味を帯びた葉をたくさんつけた一輪の花だった。
「なんの花か知ってるか？」
「……」
シーラは視線を泳がせた。
彼女は薬草についてはもちろん詳しいが、それ以外の植物については特別に詳しい方でもなかった。花を愛でる感情はあるが、殊更それに執着する方でもないのである。
考えた末、
「……わからないわね。せめて花が開いた状態でないと」
「そっか」
ティースはちょっとだけ嬉しそうに頷いて、得意げに答えた。
「これはレティオーレっていう花なんだ。ほんの一瞬しか開かないけどとても綺麗な花で、花が開く直前にはこの葉っぱが緑から赤っぽい色に――」
だが、全て言い終わる前に、
「レティオーレ？　……レツィアーレじゃないの？」
「……え」
得意げだったティースの顔が、アッという間に赤くなった。
「そ、そう。レツィアーレだ……」
一気に勢いを失った彼の姿に、シーラは苦笑して、
「誰に教わったのか知らないけど、中途半端な知識はひけらかさない方がいいわね」
「いや……実はちょっと前、たまたまセシルに教わったばかりでさ」
ティースは赤い顔のまま素直に詳細を暴露して、照れ隠しに頭を掻いて笑う。
「で、ほら、ちょうど葉っぱが赤くなってるだろ？　これが花が開くサインらしくて……あと二時間ぐらいで開くはずなんだ。セシルが言うには、戦争が中断したって伝説があるぐらい綺麗な花らしい

し、気分を落ち着けるには丁度いいんじゃないかなって」
「そうね。じゃあ……そこに置いといて」
頷いて、シーラは窓の縁を指さした。
チラッと時計を見る。
（二時間……か。それまでにはどうにか解決の糸口ぐらい見つけたいわね……）
「ここでいいか？」
「いいわ」
そちらを見ずに答えて、シーラは机に向かう。もう無駄な時間を使うつもりはないようだった。
ティースも、あとは無言で部屋を出ていくだけ。

――いや。

「……ティース？」
「え？」
出ていこうとしたティースだったが、部屋の入り口まで行ったところで、呼び止める声に再び振り返っていた。
呼び止めたのは、もちろんシーラだ。
が、
「どうした？」
ティースが振り返った視線の先で、彼女は机に向かったまま宙を見つめていた。
まるで惚けたように。
ゆっくりと……驚いた表情で彼を振り返る。
そして目を見開いたまま、言った。
「お前……さっき、なんと言った？」
「え？」
何のことかわからずに戸惑うティース。だが、そんなことを気にした様子もなく、シーラはハッとした表情で窓際に視線を移した。

その視線の先にあったのは、ティースが先ほど設置したレツィアーレの花。
「二時間ぐらい、と言った？　二時間？　……そう……レツィアーレは確か、夕方の僅かな時間にだけ花を咲かせる――」
「シーラ？」
「夕方に咲く花……夕方の花――」
その呟きは急激に熱を帯びた。
そして、
「――黄昏の花ッ！？」
ガタンッ！！
椅子が派手な音を立てて倒れ、そのままシーラは窓際に駆け寄っていった。
「お、おい、シーラ、何を――」
「ティースッ！！」
「え！？」
レツィアーレの植木鉢を手にしたシーラは、鬼気迫る表情でティースを振り返ると、
「お前は今すぐマーセルのところへ！　あと三時間……いえ、二時間でいいわ！　なんとしてでも、彼女の命を保たせなさいッ！！」
「え、えぇっ！？　も、保たせるったって、どうやって……！！」
「なんでもいい！　……とっとと行きなさいッ！！」
「は、はいぃッ！！！」
反射的に返事をして、ティースは弾かれたように部屋を飛び出していった。
それを見送ったシーラは、レツィアーレの花を抱えたままドアを閉め、鍵をかけるとすぐに机に向かった。
植木鉢を机の上に置くと、黒い背表紙の本を開く。
「黄昏の花……黄昏の葉……」
そして根本に蓄えられたたくさんのレツィアーレの葉を一枚ちぎると、それを窓から射し込む薄暗い光にかざした。

「全然聞いたことがないし、違うかもしれない……でも、やってみる価値はあるわ……」

その6『仮面をかぶった王女様』

『――でも仕様がないわ。それがあの子の性格だもの』

部屋は静かだった。物音がしないという以前に、そこを包み込む重苦しい雰囲気が静寂さを引き立たせている。

（マーセルさん……）

昨日の発作のショックで昏睡状態に陥ったマーセルは、未だ目覚めようとしなかった。いや、医者の診断によれば、このまま目覚めない可能性の方が高いという。

いつ“そのとき”が訪れるかわからない。

医者は昨日から何度か席を外しただけで、ほぼ付きっきりだ。今は宿の管理人であるアーカーソン夫妻もいる。

そしてティースはその部屋の隅で壁に背を預け、心臓を鷲掴みにされるような緊張感の中、ただ祈るだけだった。

（……シーラ）

外はすでに暗くなっており、相変わらずの雨が降り続いている。時計に目を向けると、どうやら彼女の部屋を出てから二時間以上は経過しているようだ。

（一体、どうするつもりなんだ）

視線の先、ベッドの横に待機する医者の表情は変わらない。以前深刻なまま。本来忙しいはずのアーカーソン夫妻がここに付きっきりなのも、おそらくは両親の代わりに彼女の最後を看取るつもりでいるのだろう。

部屋にはすでに紛う事なき“死の匂い”が漂っている。

それを逆転させることなどは、普通に考えれば絶対に不可能。

不可能……のはずだ。

「……」

目を閉じて、大きく、ゆっくりと、息を吐く。

しんしんと降り続く雨の音。自分の心臓の鼓動さえ聞こえてきそうなほどの、静けさ。

そんな空気に誘われて、ふとした拍子に近付いてくる情景。

（……カザロス、か――）

彼の故郷――カザロスは非常に雨の多い土地だった。だからこういう薄暗い雨の日には、目を閉じるだけでその情景が目の裏に浮かんできてしまう。

『――あの子はそういう性格なの。一途だから無茶でもなんでもしてしまうし、臆病だから一人で抱え込んでしまう。いっそ全てを晒して後悔してしまう方が楽なこともあるのにね』

「……」

ほんの三年にも満たないほどの過去。

それほど遠くない。

なのに、いつからか遠い昔だと思っていた情景――

『だけど、それがあの子だから。止めても言い聞かせても無駄。もし、あなたがそれを助けてあげたいと思うのなら――』

……ドスン。

「？」

何か重いものがぶつかるような微かな音に、ティースはハッと我に返った。

「なんだ？」

音がしたのは部屋の外だ。それが彼の空耳ではない証拠に、医師とアーカーソン夫妻も怪訝そうな顔でドアの方に目を向けていた。

「……」

結局、ドアに一番近い位置にいたティースがそれを確認することになる。

が、彼が手を伸ばすより一瞬早く、ドアは向こうから開き始めた。
ノックもない来訪者に対し、初老の医師の制止の声が飛ぶ。
「こら、この部屋は勝手に――」
「シーラ？　……おい、シーラ？」
医師の声は途中で遮られた。遮ったのは他ならぬティースの怪訝そうな声。
彼がそんな声をあげたのは、そこに明らかな異常を認めたからだ。
「お、お前――」
慌てて彼女に駆け寄るティース。
……異常はそこにいる誰の目にも明らかだった。
「っ……あまり大声は出さないで……病人がいるのだから……」
開いたドアに頼るように左手をつき、ゆっくりと部屋の中に入ってきたシーラは、肩で小さく細かい息をしながらチラッとティースを見た。
「おまっ……ど、どうしたんだよ、その顔――！」
確かに、彼女はどちらかといえば肌の白い方である。が、そのときの彼女はそれどころの話ではなく、まるで血の気がない、死人のように真っ青な顔だったのだ。
二時間前に会ったときも確かに疲れた様子はあった。が、それを考慮に入れたとしても、明らかに異常。
だが、
「どきなさい……ティース……」
シーラはそれを説明することもなく、フラフラと部屋の中に入ってきた。
「どうした？」
一度は彼女を咎めようとした医師も、その異常な様子に席を立って、
「そんなフラフラの体で。キミ、彼女を支えてあげな――」
「どきなさい……！」
「！」

射竦めるようなその視線に、ティースは思わず伸ばしかけた手を引っ込めてしまった。
それほどに強い視線だった。
そのままシーラは彼を押しのけるようにして歩みを進めていく。
フラ、フラと。
だが、その視線がベッドの上へと向けられると、口元に微かな笑みが浮かんだ。
「……よかった。まだ、無事のようね……」
「おい、キミ……」
「どいて……」
医師。そしてアーカーソン夫妻。
誰もが驚いた様子で彼女を見ていたが、やがて、
「……待ちなさい。一体、なにをするつもりだ?」
医師が、彼女の右手にあるものを認識してそう問いかけた。
咎めるような口調だった。
「なにを……?」
それもそのはず。
彼女の右手にあったのは薬包紙だ。中に何か入っていることも容易に窺える。
「薬よ……」
シーラは素直に――いや、取り繕う余裕などなかったのだろう。
そのまま答えて、
「マーセルに呑ませる……心臓の……っぅ!!」
言いかけた彼女の体が、突然膝から崩れ落ちた。
「シーラッ!」
慌てて駆け寄っていくティースだったが、シーラはすぐに立ち上がって、
「大丈夫。目眩がしただけ……」
医師が困惑の顔で言った。
「……キミ。何だかわからないが、彼女を隣の部屋へ連れていって

寝かせてあげなさい」
「え……あ」
「ダメよ……」
ティースの肩に手をかけ、深い息を吐きながらシーラはゆっくりと立ち上がった。
「……この薬を、彼女に――」
「連れていきなさい」
だが、医師はそう言って彼女の前に立ち塞がると、
「キミが何をしたいのかはわからないが、無理はいけない。後で私が診てあげるから、今は大人しく部屋で休んでいなさい」
言葉は柔らかかったが、有無を言わせぬ口調だった。
「っ……」
その言葉はもっともだ。医師として、彼女が手にしている得体の知れない薬の使用など許すはずもない。
だが、
「いいから、どくのよ……！」
シーラは引き下がらなかった。
当たり前だ。彼女は本気でマーセルを救おうとしていたのだ。引き下がるはずがない。
「……」
医師はため息とともに、ティースに視線を向けた。
「キミの知り合いだろう？　そんな状態で無理をしては危ない。早く連れていってあげなさい」
「――」
ティースは躊躇った。
正論である医師の言葉。常識人として従うべきは、もちろんそちらだろう。その言葉の正当性はティースにだって理解できたし、そうすることが当然であるとも思える。
その様子を見守るアーカーソン夫妻にしても、ティースに向ける視線は同じだ。妻の方はシーラの必死な様子に戸惑いを見せていた

が、夫の方は非常識な闖入者に対して明らかに不快な表情だ。もしティースがこれ以上躊躇えば、おそらく彼が代わりに彼女を部屋から追い出そうとするだろう。

だが――

「ティース……！」

そんな周りの雰囲気に気付いたのか。

シーラは唯一、自分の味方になりうる青年に対して言葉を向けた。

「……」

さらに躊躇うティース。……そんな彼を非難するのは酷だろう。

医師という存在は、病人に対して絶対的なものであり、たとえそれが間違いであったとしても、知識を持たない者には反論するすべがない。そしてこの場合、ティースにはもちろん反論するほどの知識などはなく、知識を持つシーラにしても学生の身。

長年医師を勤めてきた男と、未だ学生である少女。そこに存在する常識の壁は、当然の如く厚い。厚すぎる。

信頼してないから躊躇ったのではなく。

信頼しているからこそ躊躇ったのだ。

わけもわからず盲信しているのではなく、少女の本質を理解し、その上で信頼しているからこそ、そうして分厚い常識の壁に対抗してみせた。

そうしてその結果――

「……みなさん」

左腕で彼女の体を支え。

顔を上げると同時に、視線は医師、そしてアーカーソン夫妻を真っ直ぐに見つめる。

「彼女の……シーラの言うとおりにしてあげてくれませんか」

その瞬間、彼の視線の先にいる三人の表情を過ぎったのは、まったく同質のものだ。

「……」

“不可解”

それはまるで常識外の存在に向ける視線。
どれだけ彼女が必死でも。いくら彼が真摯に訴えたとしても。
受け入れがたい。
そこに存在する常識の壁は、あまりにも厚すぎたのだ。

――そして、異変は突如として訪れる。

「っ……！　っっ……！」
「!?」
それまでは比較的静かに眠っていたマーセルが苦しみ始めたのだ。
「マーセルさんっ！」
ティースたちの前に立ち塞がっていた医師が、表情を引き締めてベッドに向かう。アーカーソン夫妻もまた、身を乗り出してベッドに視線を向けた。
「っ……はっ……はぁっ……！！」
「発作か……」
医師の言葉は冷静だった。手元にあった塗り薬を手にする。気休めだった。元々劇的な効果が望めるものではない。
おそらく最期の時。
ベッド上のマーセルの様子に、誰もがそれを予感していた。
――いや。
ただ一人を除いて。
「……ティースッ！！！」
ふらつく体を押して、そして全霊を込めてシーラは叫ぶ。
「どんな手を使ってもいい……！　彼らを……彼らを全員、ここから追い出しなさいッ！！」
「え!?」
「聞こえないの……ッ!?　ティース……急いで……ッ！！」
彼女の顔は真っ青なまま。……いや、先ほどよりも悪くなっているかもしれない。

「シーラ……」
「キミ、こんなときに悪ふざけは――」
ついに堪忍袋の緒が切れたか、アーカーソン氏がシーラに向かって手を伸ばす。
「――」
おそらく彼女の体はそれに抵抗する力を持たないだろう。
「ティース……ッ！」
限界。
それはもう誰の目にも明らかだ。
だが――
「ティースッ！　私は……私は“そのために”ここにいるのよッ！」
「！」
ハッキリとした声、そして瞳の炎は、未だ確実なる意志をそこに宿していた。
眩いばかりの、強靱な意志。
「……！！」
チカチカと。
目の奥がフラッシュした。

『――支えてあげなさい。あの子の無茶を、無茶じゃないように、一番近くで支えてあげればいいのよ』

（……あぁ――）
その勘違いは、単なる錯覚だったのか。
あるいは、彼女自身がそうするように仕向けたのか。
それは、わからない。
だが、それが単なる“勘違い”であったことは、今の彼女を見れば一目瞭然だった。
（変わってなんかない。あの頃と同じ……同じ、だ――）

気付いたのは、たったそれだけのこと。
言動、態度がどうであれ。その“根っこ”の部分は昔と何ら変わりないという真実。
そして、
「……」
それだけで充分だった。彼が行動するのに、それ以上の理由はいらなかった。
もはや躊躇いなど微塵もなく。剣が鞘を擦る。
昨日の魔の襲撃以来、念のためずっと身につけていた剣――神剣“細波”。
それは“その頃”に彼が誓いを立てたものだった。

『お守りなんて、私には必要ないもの』
暖かく柔らかく細めたその目には“疑う”などという行為そのものが馬鹿らしく思えるほどの、明確な信頼の色が宿っていて――
『だって、お前が私を護るのだから。そうでしょう――？』

「動かないでください」
その一瞬、その場にいる全ての人物の動きが停止した。
そして誰もが、その彼の行動に目を見張る。
医師、アーカーソン夫妻。……そしてシーラでさえも。
「動かないで」
もう一度、ティースはそう言った。……彼が抜き放った細波の切っ先は、何もない宙を指していた。丁度、医師とアーカーソン夫妻の間を裂くように。
「この剣は、善意の人に向けるものじゃない。だから、あなた方に剣を向けることはありません。……でも、動かないで。彼女の邪魔はしないでください」
「……キミは……なにを――」
気でも狂ったのか、と言わんばかりの表情で、医師はティースを

見た。
　もちろん、ティースがネービスから来たデビルバスターチームの一員であることは知っているだろう。だからこそ、その行動はあまりにも理解しがたいものだったのだ。
「彼女の言うとおりにしてください。……お願いします」
　だが、剣をピクリとも動かさずに、ティースは小さく頭を下げた。
「何があったとしても、責任は俺が取ります。だから――」
「……なにを馬鹿な！」
　それまで穏和だった医師が、その言葉に激昂して一喝する。
「人の命がかかっているときに、責任も何もあるものか！　ふざけるのも大概にするんだッ！！」
　その言葉には、長年、患者の生と死に関わってきた者ならではの、真なる想いが込められていた。
「……だからこそ」
　だが、ティースは決して怯まずに言い返す。
「助けたいんです。俺はマーセルさんを助けたい。その希望がここにある。俺はそう信じているんです」
　グッと足指に力が入る。
　その視線をシーラの方に向けた。
「さぁ……シーラ、急いで。その薬をマーセルさんに」
「ティース……」
　さすがの彼女も、まさかティースがそこまでですると思わなかったのだろう。少しの間は驚きに固まっていた……が、やがてグッと唇を結び、薬を手にマーセルのもとへ歩いていく。
「動かないで」
　ティースがその場の三人を牽制する。
「……」
　さすがに刃物を出されては、誰も動けなかった。
　ただ、医師は顔を歪め、
「キミたちは……自分たちが何をしているのか、わかっているのか」

彼らを睨み付けるようにして言った。
「これは犯罪だぞ。彼女が命を落とせば、殺人の罪を犯したも同じことだ」
「……」
その言葉は重い。たとえマーセルが助かったとしても、あるいは罪に問われることかもしれない。
それほど、今の彼らの行動は非常識だった。
だが――
「構いません」
「！」
驚愕の表情を浮かべる医師に対し、ティースは答えた。
「俺みたいな馬鹿にだって、何もしなければマーセルさんが死んでしまうことぐらいわかります。だったら俺は――いえ、俺たちは小さな可能性にでも賭けたいんです。……助かると、俺はそう信じています」
「馬鹿な……」
医師は絶句した。が、これ以上は何を言っても無駄と感じたのだろう。その後は身動き一つせず、シーラの動きを目で追うだけだった。
「……マーセル。聞いたとおりよ」
ベッドまで辿り着いたシーラは、苦しむマーセルの体を軽く押さえ、そして薬包紙を開いた。
中に入っていたのは、ややムラサキがかった荒い粉末状の薬。
「必ず、助かるわ。……生きなさい。でないと、承知しないから――」

それから一夜、明けて。
ティースは薄暗い部屋の中にいた。
重苦しい沈黙。肌に触れる空気はどこか湿っぽく、雰囲気はまるで、あのゲノールトにあった地下牢のよう。
そして、
「……資格を持たないものの医療行為を黙認、補助したばかりか一般人を剣で威嚇」
沈黙を切り裂くように響いたのは、冷たい男の声。
「さらに、因果関係はハッキリしないものの、その行為の直後に病人が死亡、か」
「ま、待ってくれ！」
思わず反論したティースの両手は後ろ手に括られていた。
「まだ死んでなんかいない！　小康状態だって医者が――」
「いいえ」
今度は女の声だった。
「さっき死亡が確認されたそうよ。ティースくん、残念だけれど」
「そ、そんな……」
すぐ近くから、また別の声が聞こえる。
「それは仕方ないさ、ティースくん。覚悟の上だったんだろう？　ま、医者としての立場から言わせてもらえば、今回のことはなかなかに興味深い出来事だったけどね」
「……」
ティースはガックリと項垂れた。が、すぐにハッとした様子で顔を上げると、
「そ、そうだ！　シーラは？　あいつはどこ行ったんだ！？」
「ああ、彼女なら退学になったよ」
「た、退学！？　そんな！」
「ま、心配するな。あれだけの美人が、どうでもいいような一般人と付き合ってるってのは、重大な社会の損失だ。俺がその補填をしてやるとしよう」

「ええ！？　ま、待ってくれ！　あいつにはれっきとした恋人が――」
「なんだい、ティースくん。もしかして一度キスしたぐらいで恋人気取りかい？」
「ばっ……ばばばばば馬鹿な！　お、俺はそんな大それたこと――」
「大丈夫よ、ティースくん。シーラちゃんがいなくても、あたしが代わりに可愛がって、あ・げ・る」
「えっ！？」
暗闇から手が伸びる。咄嗟に身をかわそうとしたティースだが、何故か体が動かない。
「うわわわわっ！　た、助けてくれッ！　……お助けを！　か、神様ぁぁぁっ！」
そして手の平が頬に触れた瞬間、彼の意識は急速に暗闇の中へと落ちていくのだった。

……
……
……

カーテンの隙間から射し込む強烈な日差しは、昨日までの雨が嘘のような快晴であることを示している。
「は、離してくれぇ……お、俺は女の人はダメなんだぁ……」
「……」
ベッドの上で苦悶の表情を浮かべるティース。
彼の“体質”を知らない人間が聞けば何やら勘違いしそうな寝言であったが、そんな彼のそばにいたのは幸いにして事情を知る者だ。
「お、お願いだから手を離してくれぇ……気絶……気絶する……か、神様、お助けをぉ……」
さらに寝言を呟きながら身をよじると、ちょうど顔面が日差しの直撃を受ける角度になった。

「ん、んん……」
その眩しさに、ようやく彼の意識が覚醒を始める。
同時に、ギシッとベッドの軋む音。
「……あれ……？」
混濁した意識。
瞼の裏に入り込む強烈な光の刺激。
鼻孔をくすぐる柔らかな香り。
「！」
ティースは勢いよく身を起こし、自分の両手首を確認した。ぶんぶんと手を振り、窓の外に視線を向けるとホッと息を吐いて、
「ゆ、夢か……ふぅぅ……ひどい夢だったなぁ」
「随分とうなされてたわね。どんな夢だったの？」
「え？　ああ、聞いてよ」
差し出された寝覚めのミルクティーを受け取りながら、ティースは答えた。
「我ながらホントひどい夢なんだ。たぶんレイさんとマイルズさんとアクアさん……だと思うんだけど、三人が俺を囲んでて。今回のことで俺を責めまくるんだよ」
「今回のこと？　マーセルのこと？」
「ああ。夢の中じゃ助からなかったことになっててさ。それで必死に神様に助けをもとめ――って、うわぁッ！！」
そこでようやく、その不自然な状況に気付く。
「シ……シーラお嬢様！？　ど、どうしてここにぃッ！？」
シーラは怪訝そうに目を細めて、
「お嬢様？　……なに？　まだ夢の中？」
「え……あ」
ティースはハッと気付いた様子で周囲をキョロキョロと見回すと、やがて誤魔化すように頭を掻いた。
「す、すまん。その……か、神様とごっちゃになったみたいだ」
「それは理解不能ね」

苦笑するシーラ。
「……あ」
てっきり怒られるか馬鹿にされると思っていたティースは、驚きながら彼女を見つめた。
斜め上から射し込む朝の光に照らされた彼女は、お洒落な黒いベルベットのトップにロングスカート姿。手にしたティーカップに静かに口を付けるその様は、まるで現実感のない、絵画から飛び出した美しい令嬢のようだった。
「と、ところで……」
思わず視線が釘付けになりそうになるのを、どうにか理性でひっぺ返して、
「こ、こんな朝っぱらから一体どうしたんだ？」
シーラは答えた。
「ええ。お前に、礼をしようと思ったのよ」
「え……礼？」
「ええ」
そう言って、ゆっくりとティーカップを下ろして小さな皿の上に乗せると、
「……昨日のこと。元はと言えば全てお前のおかげ――」
「あああ、昨日といえばッ！！」
「？」
突然ティースは何事か思い出した様子で身を乗り出すと、
「お、お前、体はもう大丈夫なのか！？　……だ、大体なぁ！　作ったこともない薬をいきなり自分で飲んでみるだなんて、いくらなんでも無茶すぎるだろぉッ！」
「え……えぇ」
確かに彼の言うとおり、昨日、彼女は自分が作った心臓の薬を試用したために血圧が急低下してしまったらしく、あの出来事の後ですぐに気を失ってしまったのである。
幸い、二時間ほど後には意識も回復し、見る限りは後遺症などの

問題もないようだったが、それでも彼が無茶だと叫ぶ気持ちはもっともであった。

だが、それに対するシーラの態度は素っ気ないもので、

「結果的に無事だったのだからいいでしょう。そんなことより――」

「そ、そんなことぉッ!?」

その言葉にティースは怒る――かと思いきや、情けないことに泣きそうな顔になって、

「お、お前なぁ！　お、俺がどれだけ心配したことか！　あんな真っ青な顔で倒れちまうもんだから、も、もしかしたらお前、そのまま死んじまうじゃないかって……」

「……」

それに対してシーラの口から出かかった言葉は、思い直したようにため息に変わる。

こうして興奮した彼には、ちょっとやそっとの言葉などまるで無駄だということを、彼女はよく知っているのだ。

だから。

「そ、そりゃお前が一生懸命マーセルさんを助けようとしたってのはわかるけど、で、でも少しは自分の体のことも考え――」

そんなティースの言葉を遮ったのは、ちょっとやそっとの“言葉”などではなく。

明確なる“行動”

「――へ？」

それは二度目の邂逅だった。

ふわりと漂った二日前と同じ香り。

宙に小さく躍る水飴の髪。

左頬に添えられた、白く細い指。

そして徐々に頭の奥を焼いていく、甘美な熱。

ただ、二日前と僅かに違っていたのは――

「私を護って戦ったナイトに、ほんのささやかなお礼、よ」

「……」

右頬に手を当て、ティースはしばらく惚けていた。
その手の下に残っている暖かく柔らかい感触は、二日前に感じたのと同じもの。そこに残った温もりは、間違いなく目の前にいる少女のものだ。
「え……あ――」
「特別な意味も卑劣な意図もないから安心なさい。言ったように、単なる礼。それとも……頬でも恋人同士じゃなければダメかしら？」
その言葉に、ティースの顔は急速に沸騰して、
「い、いや、ダ、ダメも何も……いや、だって、その、命がけとかじゃないし……あ、いや、俺が言いたいのはそんなことじゃなくて……え、ええっと、その――」
どうやら頭の歯車が上手く回ってないらしい。
その後も何やら意味のわからないことを言いかけては思い直して止めるという作業を何度か繰り返したが、やがて最後に口から出てきたのは――
「……も、もったいない」
シーラは一瞬だけきょとんとしたが、やがてその言葉の意味に気付くと、吹き出すように笑った。
……まあ確かに。女性から祝福のキスを受けて“もったいない”などと言い出す男は、大陸広しといえどもそうそういるものではないだろう。
ティースはさらに顔を真っ赤にする。
「じ、実際にそう思ったんだから仕方な――そ、そんなに笑わなくてもいいじゃないか」
そんな抗議の声にも、シーラは可笑しそうにクスクスと笑いながら、ゆっくりとテーブルに肘をついた。
「そんなにもったいないと思うのなら……」
「え？」
そんな彼女から向けられた悪戯っぽい視線はいつもの凛としたものではなく、そこに不思議な暖かさを滲ませていて、

「いっそ、私を恋人にしてみたらどう？　そうすれば、もったいないなどと感じる暇もなくなるのではなくて？」
「ばっ……！」
ティースの心臓は一瞬だけ跳ね上がった。
「じょ、冗談はやめてくれよ。そんなことあるわけないじゃないか」
「でしょうね」
ゆっくりと顔を横に向けると先ほどまでの視線は影を潜め、代わりに作られた微笑みは気高き月の女神。地上にいる人間がいくら手を伸ばそうとも届きはしない……思わずそんな気にさせられてしまうほどに完璧な、いつもの彼女だった。
「知ってたわ、ずっと前から。そんなお前だからこそ、恋人でもないのに二年間も一緒に暮らしてこられたのだもの」
「……」
その言葉に、ティースは少し驚いた顔をした後、
（……やっぱ信頼されてたんだ）
ホッと胸をなで下ろした。
おそらくそれは事実。そしてその信頼はマイルズが言ったように今もそれほど色褪せていないのだろう。
そのことが急に誇らしく思えて、ティースはコホンと咳払いすると、
「そんなこと当たり前だろ。俺はお前の保護者なんだから、お前の望みは出来るだけ叶えてやりたいと思うし、お前が望まないことはしようと思わないよ」
「……感謝してるわ」
「え？」
「全て私のワガママだもの。私の勝手な事情でお前を傷付け、利用しているだけ。だから――」
少し、視線が流れた。
「嫌になったら、やめればいいだけのことよ」
「あ、お、おい」

彼女が立ち上がるのに合わせて、やはり心地よい香りが漂った。
「私はお前が思っているよりずっと自分勝手で悪い人間だわ。その証拠に、ほら。お前がこうしていくら頑張っても、見返りなんてほとんどないに等しいじゃない」
ティースはきょとんとした顔をして、
「見返りってなんだ？　……っていうか、それとお前が自分勝手だってこととどう関係あるんだ？」
「……」
振り返って眉をひそめるシーラ。これにはさすがに呆れたようだ。ただ実際のところ、このティースという男は自分のやっていることが“犠牲”だとはこれっぽっちも感じていないのである。そこにはもちろん彼なりの考え方があって、彼なりの理由があるのだが、まあそれを知らない人間には理解できなくとも仕方あるまい。
そしてティースは屈託のない笑顔を浮かべると、
「それに俺、お前の我が儘だったら全然嫌じゃない……っていうか頼られるのは逆に嬉しいから、どんどん我が儘を言って欲しいって気もするよ」
「……そんなだから」
深いため息。
シーラは仕方なさそうに首を横に振って、
「馬鹿は死ななければ治らないと言うけど、どうやら本当のようね」
「ば、馬鹿！？　い、いやそりゃ、確かに頭は良くないけど、そんなストレートな……」
「じゃあ強調でもしてみる？　史上最大、救いようがない、唯一無二の――」
小さく息を吸って、
「馬鹿」
「……」
これにはティースも返す言葉が出ず、ため息とともに肩を落とした。

（ああ……ちょっといい雰囲気になったと思ったのに、結局これか……）

いや、しかしそれは鈍感な彼が気付いていなかっただけのことだろう。今回の出来事は彼らの関係に確実な変化をもたらしており、それは第三者が見ても思わず首を傾げてしまうほどに顕著だ。

彼がその変化に気付くのも、そう遠い未来のことではないだろう。

ただ、それが彼にとって手放しで喜べるものかどうかといえば、断言することに多少の躊躇いを覚えないでもないが――

時と場所は移り、その日の夕方、ミューティレイクの屋敷には一台の馬車が到着していた。

「……」

音もなく馬車から降り立ったのは、長い銀髪と蒼い瞳の美青年。細身の体に季節外れな厚着、ハートマークのついたセーターは本来笑いを誘う格好であるが、実際のところそんな彼を笑う者はいない。

と、いうより――近付こうとする者がいないのだ。

このアルファという人物は、この変わり種揃いのミューティレイク家にあってもさらに飛び抜けて異質だった。そんな彼に敢えて近付こうとする者はほんの一握り。

さて。

そんな“一握り”の中に、ミリセント＝ローヴァーズという使用人がいる。

「お帰りなさいませ、アルファ様」

馬車を降りたところに直立不動で待機していたその女性は、前髪をやや横に流したショートカットで眼鏡を掛けており、見た目はどことなく生真面目な印象だ。

二十二歳の若さで“侍女長”の肩書きを持つ彼女は、当主であるファナ＝ミューティレイクの信頼厚き側近であり、執事であるアオイやリディアとは違った面でサポートをする重要人物だった。
そして彼女は、滅多に別館に姿を見せないアルファへの連絡役としての任務も持っていたのである。
「ご苦労様でした」
「別に苦労はしなかった」
玄関に出迎えたミリセントに対し、素っ気なく答えるアルファ。
まるで会話をすること自体に興味がないかのように。
「そうでしたか」
だが、ミリセントもそんな彼の反応に慣れている。事務的にそう答え、用件だけを伝えた。
「別館の方でセシリア様がお待ちです」
「セシリアが？　そうか」
特に何の感慨もなさそうに頷いて、アルファは別館の方へと歩みを進めていった。
足音もなく、その背中が遠ざかっていく。
「……ふぅ」
見送ったミリセントの口から小さなため息がこぼれた。
と、同時に、
「お、聞きました。今のため息、しかと聞き届けましたよ、ミリィさん」
「……」
無言で振り返ったミリセントの視界に現れたのは、やや調子の軽そうな十代後半の青年だ。
着ているものはやはりミューティレイクの使用人服だったが、白を基調にしたやや特殊なデザインは、彼が厨房で働くコックであることを示している。
「さすがのミリィさんも、あの人は苦手ですか」
青年は笑顔のままミリセントに近付いてくると、アルファが去っ

た別館の方角を見つめて、
「しっかし相変わらず気難しい人みたいですね。……妹の方はいつも俺のお菓子をホント美味そうに食べてくれて可愛いんだけどなぁ」
ミリセントは答えた。
「別に気難しくても問題ありません。口ばかり達者なお調子者よりは、よほどお嬢様のお役に立ちますから」
「はは、ま、そりゃそうですね」
「……」
「え、なんですか、その目……って、え!?　口ばっか達者なお調子者って、もしかして俺のこと!?」
ミリセントはそんな彼を横目で見て、
「他にいないでしょ。……せっかくの機会ですから忠告しておきますが、あまり調子に乗って遊んでばかりいるとそのうちクビになりますよ、シュー＝タルト」
「またまたぁ。ミリィさんも冗談が上手いんだから」
青年――シュー＝タルトというお菓子みたいな名前の菓子職人は、手をヒラヒラさせながら笑う。
「俺がいなくなった屋敷を想像してみてくださいって。あまりの淋しさにみんな泣き出すに決まってますから」
ミリセントは腕を組み、真面目な顔のままで答えた。
「一太刀で決めてあげるから安心して」
「つーか……“クビになる”って、そっちの意味かよッ!!」
「ま、冗談はともかく」
「ブラックすぎますよ、ミリィさん……」
ミリセントは腕を組んだまま、アルファが消えていった屋敷の入り口へともう一度視線を移動させて、
「私は構わないと思うのだけど、中にはいるのよね。彼をどうにか周りに馴染ませたいと思う方々が」
「俺もどうにかミリィさんともう少し馴染みたいなぁ、なんて」
「……」

「うわ、完全シカトかよッ！」

――と。

そんな会話が後方で繰り広げられているとも知らずに（知ったところでどうということもないが）アルファは屋敷の別館へ足を踏み入れていた。

そして彼がドアを開くと同時に、

「あっ」

幼さを多分に残した少女の声が、広い一階ホールの中に響き渡る。

「おかえりなさい、お兄ちゃん！」

栗色のセミロングが揺れた。

同時に彼へと向けられたのは屈託のない笑顔。……彼に向けられる感情としては、もっとも違和感を覚えるであろうもの。

あまりにも純粋な、親愛の情。

ただ、

「セシリア」

残念ながら、アルファから彼女に向けられたのは、先ほどミリセントに向けたものと大差ない、素っ気ない口調だった。

「私に何か用なのか？」

「三・十・点！」

「……？」

白く冷たく美しく整ったその顔に、若干の困惑した色が差す。

それに対するセシルは、いつものように人差し指をピッと立て、言い聞かせるような口調で続けた。

「おにーちゃん。そういうときは、わざわざ待っててくれてありがとーって言わなきゃダメなのですよ。……はい」

「……？」

「待っててくれてありがとー。……はい」

「……」

困惑が色を増す。
「待っててくれてありがとー」
「……」
無感動で孤独を好む兄と。
屋敷の人々に可愛がられ、人と関わることを喜ぶ妹。
おそらく、この屋敷内においてもっとも奇妙なカップリング。
それがこのアルファとセシルだった。
「あ、それとね。今日は学園で――」
「……」
そして二人の噛み合わないやり取りは、屋敷の人々の好奇の視線を浴びながら、それからもしばらくの間続くのである――。

その7『責任』

「ん……うぅん……」

朝を告げるスズメの声が清々しいと思うか喧しいと思うか、それは人それぞれ、あるいは状況次第である。

明日に大きな希望を抱く少年にとってはもしかすると輝かしい未来の象徴であるのかもしれないし、昼日中を棺桶の中で過ごす吸血鬼が仮に実在したとすれば、それはやはり歓迎すべきものではないのだろう。

そして、ここミューティレイク家の一室。

「んん……」

休日の朝はベッドの中で微睡むことが密かな楽しみという、平々凡々、何の変哲もないこのティースという男にとってのそれは、まさにささやかな幸福の象徴であり、心地よい微睡みを演出してくれる素晴らしきアーティストであった。

ディバーナ・ロウにおける完全休暇日は、通常、任務から帰還した次の日しかない。通常日も基本的に拘束規定がないものの、実際のところは遊んでなんていられないのが現実だ。

つまり、昨日ロマニーから帰還したばかりのこの日は、誰にも気兼ねせず堂々と一日中ゴロゴロしていられる貴重な、決して朝の微睡みを邪魔されることのない日なのである。

……とはいえ。

「ふはぁ……むにゅむにゅ……」

よだれを垂らし、布団を抱き締め、まるで無防備に微睡むその姿は、とても死地に身を置く者の姿とは思えない。

さて、それはともかく。

こんな姿を見せておいて難だが、誤解のないように。このティースという男、朝の微睡みが趣味とは言っても特別に寝起きが悪いということではない。過酷な訓練や任務から帰還した次の日などたま

に寝坊をすることはあるが、所詮はその程度。
で、そういうときに彼を起こすのは、大抵パメラというハウス・メイドの少女だった。
カチャ。
「ティース様……？」
このとき時計が示していたのは、午前七時を少し過ぎた辺り。この時期、使用人たちは大体日が昇る直前の五時過ぎ頃から動き出すし、それ以外の人々も大抵朝食となる七時前には目を醒ます。だから今の彼はややお寝坊さんといったところか。
「……今日はお休みですから。ゆっくりなさるつもりのようですね」
潜めた声。
足音が少しずつベッドに近付いていくが、ティースは小さく寝返りを打つだけで目を醒ます気配がない。
「あ、あの……どうなさるおつもりですか？」
よくよく聞いてみると、どうやら部屋に侵入してきた足音は二つのようだった。
「う……んん……」
ほんの少しだけティースの意識が覚醒する。瞼の裏に突き刺さる陽光に、思わず顔を背けた。
「パメラ……？　もう少し寝かせて……んん……」
半分夢の中。言葉も頼りない。
こういう場合、パメラは大抵そっとしておくことにしている。まして今日は休日。彼女もそのことは承知済みであり、無理に起こす必要などどこにもないのだから。
だが、この日は少し違った。
ベッドに射し込む陽光が何者かの影に遮られると、ティースの眉間の辺りに柔らかい何かが触れる。
「ん……？」
ひんやりとしていて、粘着質。
「な……んん……？」

そして流れてきたのは、やや鼻をつく刺激臭。
と、次の瞬間！
「い……ぎぃやぁぁぁっぁあっぁぁぁぁぁッ！！！！！」
突如網膜に流れ込んだ激痛に、ティースは跳ね起きた。いや、飛び起きた上にベッドから転げ落ち、あまつさえ床をのたうち回った。
「ひぎぃぃぃぃっ！！　……目が！　目がぁぁぁぁぁぁぁッ！！！！！」
ゴロゴロと床を転がった挙げ句、這うようにして洗面所に飛び込んでいく。
バシャバシャバシャバシャ！！！
「ティ、ティース様……だ、大丈夫ですか？」
そんなパメラの声もまるで耳に入らず、洗う。
ただひたすらに洗う。
完膚無きまでに洗う。
そして――
「……」
ポタ……ッ。
約五分後、ようやく水音が停止。周りには水が飛び散っていた。
「……」
まるで死人のような様相のまま振り返り、目をパチクリさせたティース。
二度、三度。
「……目、真っ赤です……」
心配そうなパメラの顔が視界に入る。
幸い、失明はしていないようだ。
額に手を当て、そしてティースは問いかけた。
「……パメラ。い、一体、俺の身に何が……？」
「え、あ、それは――」
だが、答えようとしたパメラの言葉を遮るように、
「効果抜群ね」

「え……？」

声はベッドのある方向。視線を向けると、先ほどまでティースが横たわっていたベッドの上には、何事もなかったかのように腰を下ろした少女がいた。

学園用の普段着の着こなしも、綺麗に整え纏め上げた飴色の髪型も、相変わらず一分の隙もないその少女の正体は言うまでもない。

「シ、シーラ？」

その姿を確認し、そして次に彼の視線が向かった先は、少女の手に握られた見慣れないビン。

中には薄緑色の、粘着質の液体が入っていた。

「目が覚めたのならさっさと着替えなさいな。いつまでその見苦しい格好を晒しておくつもり？」

「……」

確かに今の彼は大きな寝癖がついたまま、寝巻姿、しかも急に飛び起きたものだからズボンは半分脱げたような状態と、とにかくひどい格好だった。

が、しかしティースはそんなことを気にするよりも、彼女が手にしているビンの中身――嫌な予感の方が先に立っていて、

「……シーラ。も、もしかして今の、その毒々しい――」

「ああ、これ？」

シーラはそのビンを目線の高さで小さく振って見せて、

「目覚まし薬よ。眉間に塗るだけでスッキリ目が覚めるの。どう？なかなか良い出来でしょう？」

「ばっ……」

当然、ティースは猛烈に抗議する。

「……あのなぁッ！　目が覚めるどころか、目が潰れるかと思ったじゃないかぁッ！！」

「あら、大丈夫よ」

だが、シーラは涼しげな顔で、

「覚める上に、目にも優しい薬なの」

「……絶対嘘だッ！！」
これはさすがのティースも騙されなかった。
と、そんな彼の態度に、
「そんなに痛かった？　だったら改良の余地があるわね。……ま、そんなことはどうでもいいのだけど」
「ど、どうでもいい！？　お、お前なぁ、人に痛い思いさせておいてどうでもいいってことは――」
シーラはため息とともに肩を竦めて、
「いちいち細かい男ね。そんなだからその歳まで恋人もできないのよ」
「な――！」
片手を広げ、腰に手を当ててシーラはさらに続ける。
「顔も平凡だし、気も利かないし、話が面白いわけでもないのだから、せめて寛容な心ぐらい持つようになさいな。そうすれば、あるいはどこかの奇特な女の子が目に留めてくれるかもしれないのだから」
「な、な……」
言葉を返す暇もない。
その挙げ句、
「ともかく。さっさと着替えて食堂にいらっしゃい。……二度寝なんかしたら、そんなものじゃ済まないわよ」
何事もなかったかのように部屋を去っていくシーラ。
「……」
窓も開いてないのに風が吹いた……ような気がした。
（な……）
呆然。
ただ呆然。
（……な、何だったんだ……？）
パメラの同情の視線が痛かった。
「あ、あの。シーラ様、何かあったのですか。その、なんだか以前

より……なんというか……その、ティース様への当たりがさらに強くなったというか……」

「……お、俺にもわからん……」

そんな、ちょっとだけいつもと違う、完全休暇日の朝だった。

「不思議に、思ったことはありませんか？」

ミューティレイク別館の午前はなかなかに騒がしい。

もちろん使用人たちが忙しなく動いているからというのもあるが、この屋敷の使用人というのがこれまた個性派揃いであり、とにかく何事もすんなり終わることがない。曰く、この別館ではそれが許されているらしく、一定の規律の範囲内ではあるものの、とにかく賑やかだ。

今日も一階ホールでは、度を外しすぎたのか、屋敷のハウス・キーパーであるアマベル＝ウィンスターに叱られる使用人の姿があった。

……ちなみに、それはアオイが尋ねたこととは全く関係がなく、

「ティースさんは、レアス君の身長がいくつあるか知っていますか？」

現在、彼らはデビルバスター試験に向けての勉強真っ最中なのである。ティースにとっては完全休暇日の本日であるが、この勉強会はアオイの時間が空いていることを耳にした彼自身から申し出たものだ。

「え？　そうだなぁ」

アマベルに叱られる使用人の少女からアオイへと視線を戻し、ティースはディバーナ・カノン隊長である赤毛少年――レアス＝ヴォルクスの姿を頭に思い浮かべてみた。

「……百五十センチ半ばぐらいかな？　最近ちょっと伸びたように

も思えるけど」
「ええ、大体正解です。……ではもう一つ。ティースさんはレアス君に腕相撲で勝つ自信がおありですか？」
「え？　そりゃ――」
言いかけて、思いとどまる。
「普通に考えれば勝てると思うけど……どうなんだろ。少なくともレアスくんは普通じゃないからなぁ」
いくらデビルバスターとはいえ、相手は少年だ。身長だって三十センチ近く違う。技術では勝てなくとも、単純な腕力なら勝てると思うのが普通だろう。
だが不思議とティースには、自分の勝つ姿というのが想像できなかった。
「ええ、正解です」
「へ？　正解って……俺、まだどっちとも答えてないけど？」
不思議そうなティースに、アオイはニッコリと微笑んで、
「実際がどうであるかはこの際問題ではないのです。……今、ティースさんは“普通に考えれば”と言いましたね？　その“普通”というのが筋力のこと。そして“普通じゃない”と感じた部分。それが今日お話する“心力”のことです」
「心力？」
初めて聞く単語だ。一般に浸透しているような言葉ではない。
「不思議に思ったことはありませんか？」
アオイはもう一度そう言った。
「レアス君の小さな体のどこに、あのような……まるで消えたように錯覚するほどの瞬発力が隠されているのか。アクアさんやアルファさんの華奢な体のどこに、獣魔のパワーを押さえつけるほどの力が隠されているのか、と」
「……そりゃ」
言われて、ティースは初めて気付く。
それは確かに不思議なことだった。

隊長だから。
デビルバスターだから。
しかしよく考えてみれば、それはあくまで強さの証明であって、強さの根拠にはなっていないのだ。
それでもティースはどうにか答えて、
「人にはその筋力だけで括れない不思議な力がある、っていうか……」
曖昧だった。
が、その返答こそがアオイの意を得たもので、
「ええ。多くの人はティースさんと同じように、漠然とではありますが“その力”の存在を知っています。そしてある程度の基礎鍛錬を積んだ者は、意識するしないに関わらずその力を行使している可能性があります。……ティースさんにも覚えがありませんか？　たとえば攻撃を受けたのに思ったよりも傷が浅い、普段では考えられないほどの怪力が発揮された、など……」
「……」
記憶にフラッシュバックする、いくつかの光景。
「……ある、かも」
充分に覚えがあった。
彼がこの屋敷に招かれる原因となった事件のとき。あるいはリガビュールの街において、タナトス幹部である炎の将魔、ネイル＝メドラ＝クルティウスと戦ったときのこと。
確かに彼が認識する彼自身の実力を遙かに上回る力が発揮されたことがある。
「でしたら、あるいはそれが心力によるものだったのかもしれません。……通常では引き出すことのできない潜在的な能力、という言い方が一番しっくり来るかもしれませんね。ただ、それらは実を言うと、訓練によって自由に引き出すことが可能になるのです」
そう言って、アオイは手元にあった紙とペンを取る。
「さて、その心力についてですが……心力は全部で九つの要素から

構成されています」
　言いながら紙の中心に小さな丸を書き、その中に“発気”と記すと、さらにそこから八方向に引いた矢印の先にそれぞれ、
“自愛”
“鋼身”
“瞬歩”
“神足”
“流星”
“剛力”
“息吹”
“刻眼”
　と、文字を記していく。
「ええっと……？」
「一つずつ、順に説明しますね」
　困惑顔のティースに、アオイはニッコリとそう言った。

　――と、そんな彼の説明では少々長くなってしまうだろうと思われるので、ここでは要点だけを簡潔に説明することにしよう。
“心力”
　それは全ての人間が等しく併せ持つ、神秘的なパワーのことだ。
“気功”とか“オーラ”とかいえば少しはわかりやすいだろうか。
つまり人間の持つ肉体能力を高める力のことなのだが、この世界におけるその力――“心力”はそれほど曖昧なものではなく、その影響が及ぼす範囲というのはある程度明確に解析されている。
　それがアオイの言う九つの要素だ。
　まず、紙の中心に書かれた“発気”は“八気”とも言われ、他の八つの力全てに影響を及ぼす、いわば心力の基礎的な力のこと。その他八つの能力の強さはだいたいこれに比例することになる。
　さて、その他の八つの力だが、こちらもごく簡潔に記そう。
“自愛”は自然治癒能力を高め、“鋼身”は肉体の防御力を高める。

“瞬歩”は超高速の瞬発力を得、“神足”は持続的な高速移動能力を高める。
“剛力”は瞬間的な超怪力を得、“流星”は高速での打撃能力を高める。
“息吹”はスタミナ能力を高め、“刻眼”は動体視力を飛躍的に高める。
さらにこれら八つの力は個人個人によって得手不得手があり、大抵は一つか二つ、多い場合は三つの得意分野、あるいは苦手分野を持つ。
ディバーナ・ロウの三人の隊長たちを例にあげるならば、アクア＝ルビナートは“神足”と“流星”を得意とし、レアス＝ヴォルクスは“瞬歩”に特化している。そしてレインハルト＝シュナイダーは“剛力”“神足”“刻眼”が比較的得意、という具合だ。
ただ、その得手不得手はあくまでバランスの問題であり、もっとも大事なのはやはり基礎能力である“発気”ということになる。得手不得手はそこに百をかけるか、あるいは八十や六十をかけるか、という違いでしかない。
そしてこの力があるからこそ、この世界では一人の人間が十人や二十人を相手に立ち回ることも可能だし、子供や女性が魔と戦うことも不可能ではないのである。

「――少し、休憩なさいませんか？」
「え？」
心力に関しての説明が終わって二人が一息ついたとき、その間に割って入る声があった。
ティースは振り返り、そしてそこにいた人物の姿を目にすると少し驚いて、
「ファナさん？　珍しいね」
白い陶器のティーセットを手にしたファナは、相変わらずの心和むぽや～っとした笑顔で立っていた。が、そんな外見からは想像で

きないほど忙しくしている彼女のこと、こうして昼間から姿を見せることはそうあることではない。
「……姫！？」
そしてティースと同じく驚きの声を上げたアオイ。
だが、こちらはティースのものとはだいぶ意味合いが違っており……それはつまり、ここに“いるはずのない”彼女がここにいることへの驚きだった。
「い、一体どうなされたのですか！？　今日はロベルト様に御招待されて、ミリィさんと一緒に行かれたはずでは！」
ファナは小首をかしげて、
「あらあら。そうでしたの？」
「ええッ！？」
そんな彼女の不思議そうな反応に、アオイはさらに慌てて、
「わ、私ならともかく、ミリィさんがそんな、伝え忘れなんてポカをするはずが――」
「それではきっとアオイさんの勘違いですわ。夢の中のお話と混同なさっているのではありませんか？」
「え？　は……そ、そう言われてみればそんな気も……」
「……」
ティースは先ほど、外出用の馬車が本館の前に用意されているのを偶然目撃していたが、ここは敢えて口を挟まないことにした。
（色々、あるんだなぁ）
ミューティレイク家当主という、十八歳の少女にはやや重すぎるはずの肩書き。その責任を見事に果たしている彼女がすっぽかしてしまう約束など、ティースの知る限りは一種類しかない。
おそらくロベルトという男は、彼女に求婚する者の一人なのだ。
（ホント、色々あるんだろうなぁ……）
ただ、それは彼女ののんびりとした笑顔からはとても想像できないものであったが。
「お勉強は捗っておられますか？」

ティースが考え事をしているうちにファナは彼らと同じテーブルに腰を下ろし、紅茶を注がれたティーカップから湯気と芳ばしい香りが漂い始めていた。
「あ、えっとまあ、俺にできる限りはね。でも、あんま頭のいい方じゃないから」
「大丈夫ですわ。ティースさんはたいへん努力なさってますもの。――どうぞ」
「あ、どうも」
受け取って早速ティーカップを口に近づけたティースは、その香りに手を止め、そして首を傾げた。
「あれ。なんかいつもと違う……？」
「おわかりになります？」
ファナは静かに微笑んで、
「今年採れた茶葉が届いたばかりですの。この屋敷では、ティースさんが一番乗りということになりますわ」
「へぇぇ、それってなんか嬉しいなあ」
そんなささやかな幸せを噛みしめながら、紅茶に口を付けるティース。
ふと気付いたように顔を上げて苦笑すると、
「でも、それって俺みたいな味音痴にはちょっともったいないかも」
「そんなことありませんわ。香りですぐに気付かれたのですから、ティースさんは繊細な感覚をお持ちです」
「……」
そんなファナの隣では、アオイが何度も首をひねりながら懸命に紅茶の匂いを確かめていた。
「ところで、ティースさん」
「ん？」
昼が近付いているせいか、今度は厨房の方がにわかに騒がしくなっている。
そんな、大貴族の屋敷としては不自然なほどに賑やかな雰囲気の

中、ファナは和やかな笑顔のまま問いかける。
「アルファさんとは上手くやっておられますか？」
「え？　……あ、うん」
反射的に頷いてはみたティース。
……が、それは真っ赤な嘘である。あのロマニーでの一件で怒りをぶつけて以来、ティースは彼と一度も口を利いていなかったのだから。
咄嗟に嘘をついたのは、そんな個人的な感情で生じた軋轢をファナやアオイに告げていいものかどうか迷ったからだ。
だが、
「いや、実は――」
結局、ティースは相談してみることにした。
……ロマニーの温泉宿で起きた出来事。そしてその後、アルファに対して疑問と怒りをぶつけたことまで。
そして大体の事情を話し終えた後、ティースは感情を吐露した。
「後で冷静に考えて、確かにあいつの言うことにも一理あるとは思った。結果的に最小のリスクで任務を果たすには最上の選択だったのかもって。……でも、俺にはあのやり方はどうしても受け入れられない」
それから少し視線をそらして、
「それって……間違ってるのかな？」
「……なるほど」
アオイは真剣な表情で何度か頷いた。その反応は、どちらかといえば彼の意見に同意しているかのようだ。
そのまま、視線をファナを見る。
すると彼女は少し憂いを秘めた瞳をしながらも、言った。
「ですがティースさん。その状況でアルファさんが、そのマーセルさんという方の病気を察知するのは不可能だったと思いますわ」
「……ファナさんはあいつのやり方が正しいと思うのか？」
ファナは小さく首を横に振って、

「いいえ。確かに力を持たない一般の方々を危険にさらすことは極力避けるべきと考えます。……ですが、どうかアルファさんのことを誤解なさらないようにしていただきたいのです」
「誤解？」
ファナはゆっくりと紅茶を置く。
それから視線をゆっくりと横へ。……その視線の先、おそらく誰かが飾ったのであろう鉢の中には、見覚えのある紫色の花のつぼみがあった。
「あの方は決して心が冷たいわけではありませんわ。まだ、途上なのです」
「……途上？」
「はい。……ティースさん。ティースさんは……“イスラフェル”という民族をご存じですか？」
「え？　あ……」
偶然にも、彼はつい最近その名を聞いたことがあった。
「えっと、銀髪で蒼瞳の……その、アルファさんの――」
ファナは視線を戻しながら頷いて、
「イスラフェルは西のブリュリーズ領の山奥に住む少数民族です。古くから世界の秩序を護ると伝えられており、地元では神格化されるほどの民族でした。……ですが、十五年ほど前、彼らの集落は一つ残らず滅ぼされてしまったのです」
「……え？」
それは初めて聞く話だった。
「生き残られた方がおられないため、いくつかの有力な魔の組織がその容疑をかけられていますが、今のところ断定には至っていません」
「アルファさんが……その生き残りだってこと？」
その問いかけに対し、ファナは肯定も否定もせず、
「全ては憶測で、あの方がどのような人生を歩んできたのかなど私たちにはわからないことですわ。ですが、私はあの方のことを信じ

ているのです」
「……」
「今回のように常識の枠を外れた行動を取られることもありますが、それはあの方なりに最善を選ぼうとしただけですわ。どうか誤解なさらないでください」
「で、でも……」
ファナの言いたいことはティースにも理解できた。
が、それと、それを受け入れられるかということはやはり別の問題であり、
「俺はそれでも、あの人のやり方にはついていけそうに――」
だがそんなティースの反論に、ファナは彼を真っ直ぐに見つめて、言った。
「それを、ティースさんにお願いしてはいけませんでしょうか？」
「……へ？」
意味がわからずに問いかけるティース。
「私どもがこの場で語るだけの言葉ではどうしても限界があります。ですが、ともに現場で動く方々の行動は必ず心に響くものがあると思いますの。……その任に、ティースさんはピッタリですわ」
「え」
その言葉で、ようやく理解する。
それはつまり――彼に教育係を引き受けてくれ、ということなのだ。
もちろんティースは戸惑いを隠せずに、
「で、でも、ちょっと待ってくれ。そういうことならもっと付き合いの長いレイさんとかアクアさんとか――だ、大体、俺はあくまでアルファさんの部下で、結局アルファさんの命令に従うしかできないんだし――」
「？」
そんなティースの言葉に、ファナは不思議そうな顔をする。
「ティースさんはアルファさんの部下でしたの？」

「え？　い、いやだって、アルファさんは隊長で、俺は――」
「……」
ファナは少し視線を巡らせた。
それから何事か閃いたらしく、ポンと両手を合わせる。
「ティースさん。おそらく誤解、なさっておられますわ」
「え？」
口元で両手を合わせたまま、ファナはその奥で再び静かな微笑みを浮かべて、
「そもそも第四隊に隊長はおられません。ティースさんを第四隊に配属したのはアルファさんの部下としてではなく、同士、協力者として、ですの」
「え、協力者……？」
「はい。もともとティースさんには、協力して任務を遂行する義務はあっても、アルファさんの言葉に従う義務はないのです。おそらくリディアさんがお伝えになった配属の指令書にも、アルファさんの部下として、とは書かれていなかったと思いますわ」
「……う」
そんな細かいところまでティースは確認していなかった。
「で、でもさ。そうはいっても俺は未熟だし、経験だって浅いし、結局はアルファさんに従わざるを得ないっていうか――」
「はぁ、それもそうですわね」
再び視線を巡らせるファナ。
だが、やはりすぐに何事か閃いたらしく、もう一度ポンと手を打ち、
「では、こう致しましょう」
「え？」
その後、ファナの口から出たのは、あまりにも突拍子もない提案だった。
「本日付けで、ティースさんを第四隊の臨時隊長に任命致します。そうすれば全て解決しますでしょう？」

ニッコリと。
「……へ？　い、いやちょっと待っ――」
「責任重大ですわ。頑張ってくださいね、ティースさん」
「え……えぇっ、マジで！？」
恐る恐る聞き返すティースの視線の先で、ファナはニコニコと満面の笑顔のまま。
――どうやらマジらしい。
「マジで……？」
呆然と呟くティースの胸に広がったのは、突然背負わされた重い責任に対するとてつもない不安の波であった……。

一人目は、ネービス領の南東ベルンの街付近。

「～♪　～～～～～♪」
迫り来る恐怖。近付いてくる死の予感。産まれたばかりの赤子が雰囲気を察して泣き出し、母親が慌ててその口を塞ぐ。
今更騒ごうと静まろうと、何も変わりはしないというのに。
通常、馬車で長い距離を移動する場合は目的地を同じくする者たちとキャラバンを作ることが多い。それは街道に現れる盗賊対策であり、あるいは時折現れる獣魔対策でもあった。
だが今回、そこに見えるのはあろうことか馬車一台。乗っているのも四人。夫婦であろう男女、産まれたばかりだと思われる赤子が一人、そして一家が雇ったのであろう護衛が一人である。
馬車を襲ったのは猫のような形の獣魔、炎の六十八族。口から吐く熱い吐息は殺傷力という点ではそれほどでもないが、その鋭い爪と牙は充分に生命を奪いうる。

数は七匹。
普通の獣ならばともかく、獣魔が七匹ともなればその一家と雇われの護衛一人を皆殺しにして充分過ぎるほどのお釣りが来る。
そのはずだ。
……が、しかし。
「お～れは電光石火～♪　お～まえのハートに～火ぃをつけるぜ～♪」
センスのない歌詞に、音程のあやふやな歌声。
恐怖に震える一家とは裏腹に、彼らに雇われた護衛の男は上機嫌で地面に降り立った。
見たところ二十歳前後。テンガロンハットのような妙に背の高い帽子をかぶり、ジーンズと白のシャツに袖のない茶色のジャケット。身長は百七十センチあるかないかで、目は細く、唇には小さなピアス。
見た目からして、ややアウトローな印象の青年だった。
「セ、セレナスさん……」
馬車の中から震える声を発した一家の長は、まだ若い三十歳ぐらいの男だ。服装を見るにそれほど貧しくはなかったが、おそらくは何らかの事情があって、やむなく一台での移動を試みたのだろう。
そしてだからこそ、護衛には腕の立つ者を選んだ。
「ま、オイラにまかせとき」
鼻歌混じりに腰にぶら下げた武器を手にする青年。
奇妙な形の武器だ。一見レイピアのようだが、先端五センチほどが小さく三つ又に分かれている。
「さ～て、と。いっちばん御機嫌なヤツはどいつかな～？」
獣魔たちが一斉に動いた。
だが、青年のもとに向かってきたのはたったの二匹。残りの五匹は馬車を目標に定めたようだった。
「獣の分際で、えげつないねぇ～」
青年は慌てない。だが、馬車を守る気配も見せない。ただ、もと

もと細い目をさらに細め、自分に向かってきた二匹の片方に照準をセットする。

「んじゃ、おまえにき～めたっと！」

一閃。

甲高い悲鳴が響き、一匹の獣魔が青年の武器に貫かれる。

……バチンッ！！

同時に響いたのは、放電の音。

「ごろうじろ～ごろうじろ～♪」

バチ……バチバチバチ……ッ！！

一瞬で息絶えた獣魔の体が、まるで充電するかのように急速に電流を纏っていく。

「最大～七～連鎖～うまくいったら～拍手御喝采を～♪」

バチンッ！！

許容範囲を超え、獣魔の体が弾けた。

「“雷針”ライトニングイリュージョンでござ～い～♪」

バチバチバチバチッ！！

弾けた獣魔の体から飛び出た二本の稲妻は、馬車を襲おうとした五匹のうちの二匹に命中する。

「一～二～三～……さぁさぁ皆さん、拍手のご用意を～♪」

バチバチバチバチバチバチッ！！！

稲妻にさらされた二匹から、さらに二本ずつ。計四本の稲妻が、まるで自分の意志を持っているかのように、丁度残っていた四匹の獣魔に向かって伸びた。

「四～五～六～……アラ？」

だが、一匹だけ、稲妻の直撃を受けたにも関わらず、ただ弾かれただけで無傷の獣魔が残る。

「……残念。目測ミスったか」

舌打ち。

だが、すぐに青年は陽気な調子を取り戻して、

「世～の中～思い通りに行かないからこそ～面白い～♪」

たった一匹残った獣魔ごときが、そんな彼の敵であろうはずがなかったのである。

二人目は、ネービス領から南に領地二つ分離れたヴィスカイン領。

ちりん……ちりん……

幾筋もの鈴の音。

長く伸びる影。

それは夢か幻か。

三月の夕日の中に舞い散るは、白く儚い雪の結晶。

そして――

「逃げるの？」

何の変哲もない問いかけ。

だが、その声は、ただそれだけで支配すら許してしまいそうになる……あまりにも美しい響きの旋律だった。

「逃げるのならそうしてみるといい。でも無理。たとえこの場では逃げ出せても、あなたはきっとその“衝動”からは逃れられない」

琴を奏でるように、言葉を紡いでいく。

ちりん……ちりん……

女性は腰の辺りまで伸びた髪を九つに分け、その先端付近を鈴付きの紐で縛っていた。何かのおまじないなのか、その中には一つだけ真っ白の鈴が混じっている。

「戦う必要なんてないのに。楽しく暮らしていければそれでいいのに。なのに、戦うことをやめない。みんな、みんな」

一際強い風が吹き、言葉の旋律に、鈴の音が伴奏をつけていく。

そして、まるで神に仕える巫女のように神秘的な女性は、悲しげな瞳で目の前の人間――いや、魔――人魔を見つめた。

「ねえ。あなたも、私もそう――」

その手に握られていたのは、長さ二メートル近くもある棒状の杖。
……杖？
いや、違う。
それは――
「っ……！！」
ついに人魔の男が背を向けた。
下位魔。
人より優れた戦闘能力を持つとはいえ、今回ばかりは相手が悪かったのだ。
「……目覚めよ“雪姫”」
雪の結晶が杖の先端に集まり、徐々に形を成す。
「そして、歌い、舞い、踊れ――永久に、儚く……」
幻想のように美しい音色。
幻想のように美しい結晶。
幻想のように美しい彼女。
――全ての極が表裏一体であるように、美しすぎるそれは凶気を纏うことによって、やがて凍て付く恐怖と化す。
死者を誘う大鎌――氷のデスサイズ。
神秘的な彼女にはあまりにも不似合いで、それが逆に凄まじいまでの戦慄を呼び覚ます。
ちりん……ちりん……
風が吹いた。
ちりん……ちりん……
ちりん……ちりん……

……ちりん――――

「――次の世では、どうか楽しく安らかな一生を送れますように……」

三人目は、ネービス領の西、リガビュールの南に位置するグランドウッドの街から東に二十数キロ離れた森の中。

駆ける、駆ける、駆ける。

風を切る、黒い影。

夜の森は闇に生きる獣たちにとって絶好の猟場だ。

微かに見えたオレンジ色の光は、おそらくたき火の明かりだろう。

だが、彼らは火を恐れない。恐れるはずがない。

炎の六十二族と呼ばれる彼らは一見馬のような大きさと形をしているが、一般的に知られるそれよりも遙かに毛深く、また口には鋭い牙が生えており、肉食で獰猛な種族だった。

それが三頭、たき火を目指して走る。

たき火と人。

彼らは幾度もの狩猟の結果、その二つを結びつけることを覚えていた。

そして人は彼らにとって、もっとも闘争本能を掻き立てられる獲物だ。どういった事情かはわからないが、彼らが等しく併せ持つ本能は人型の獲物を見たときに一番興奮するように作られていた。

たき火の前で野宿をするのは一人。

旅の男だろうか。比較的軽装、鉄製の額当てを巻き、黒いマスク。短髪で輪郭は病的に思えるほどに細いが貧弱な印象はなく、体は無駄のない肉付きでしなやかさを秘めている。右手にのみ黒い手袋を填めており、年齢は二十歳半ばぐらいだろう。

「……現れたか」

マスクの下のくぐもった独り言は、もちろん獣たちには理解できない言葉だ。そして彼らは、自分たちが“敢えて”誘き出されたのだということにも気付いていない。

彼らの中にあった衝動はただ一つ。

目の前の獲物を、喰らい尽くせ――
「ガァァァァァァッ！！！」
まるで争うかのように、同時に襲いかかる三つの体躯。三つの牙。
たき火が揺れた。
風を切ったのは、宙を舞う男の体と、三つの苦無。
勢い余ってたき火に突っ込んだ三匹の獣の体に、それぞれ苦無が突き刺さる。
――だが。
「ガァァァァッ！！」
深く堅い体毛に覆われた獣には効いていなかった。かろうじて刺さりはしたものの、刺さっているのか体毛に埋もれただけなのかわからない程度。
獣たちは気に留めた様子もなく方向転換し、地上に降り立った男に向かって突進していく。
しかしそれも全て、男の予想の範囲内。
「強者の匂いすら嗅ぎ分けられない、愚かな獣どもよ」
黒い手袋をはめた右手を三匹の獣に向け、そしてまるで引き金を絞るように指を折り畳む。
途端、獣たちの体の一部――苦無を打ち込まれた部分が破裂した。
「ギャォォォォンッ！！！！」
「“惨響”とともに、砕け散れ」
呟く男の右手には、再び三本の苦無。
最初の一撃で体の四分の一を失った獣たちに、その攻撃を避ける術など存在していようはずもなかった。

“雷針”セレナス＝カンファイス。
“雪姫”マリアヴェル＝ソーヴレー。
“惨響”ジン＝ファウスト。

それぞれに特徴的な武器を持つ彼らは、しかし決して意図的に選ばれたわけではない。

それは単なる偶然。

事実、彼ら三人の間には一点を除きほとんど共通点らしきものはなく、出身も生い立ちも性格も様々。彼らを結びつけるものはない。

ただ、一点だけ。

彼らが持っていた明らかな共通点。

それとて絶対的な要素ではなかったが、しかし、それでよかったのだ。

それを計画した者にとっては、彼ら三人であることが重要だったのではなく、彼ら三人が“それ”であったことが重要だったのだから。

共通点。

それはつまり――彼らがデビルバスターであったこと。

……この時点では誰も想像していなかった。

主役である彼ら三人も、もう一人の主役であるアルファ＝クールラントも。そしてティーサイト＝アマルナを始めとする、その他少なからず関わることになる人々も。

時期はこのときより約一ヶ月の後。

主催は“ネアンスフィア”

その、大陸でも名高い魔の組織のことを、一部の人々は畏れを込めてこう呼ぶのだ。

魔物狩りを狩る者たち――“デビルバスター・ハンターズ”と。

幕間『ミューティレイク井戸端会議』

シュー＝タルトはネービス領東のヴァニィリッツという街に産まれた十八歳の青年だ。

父は街でも有名な菓子屋の主人。その長男である彼もまた、幼い頃から自然と菓子職人の道を歩むことになったのだが、十四歳のときに父親と仲違いし家出。

その後、ネービスの菓子屋で働きながら腕を磨き、二年前の春、ネービスで行われた若手料理人による菓子作りコンテストで優勝すると、その一ヶ月後にミューティレイク家に招かれ、現在、その厨房で菓子担当のコックとして働いている。

短髪というほどではないが、料理人としては問題ない程度には短めの髪、容姿はどちらかといえば爽やかな部類に入るだろうが特筆すべきほどのことはなく、身長は本人曰く“小数点以下を切り上げれば百七十センチ”ということだが、ゼロを切り上げるなどという暴挙はなかなか普通の人間に出来ることではないだろう。

その性格は一言でいえばお調子者。三枚目。ただ、お菓子作りに関しての情熱だけは本物らしく“誰もが笑顔になれる菓子作りがモットー”などという恥ずかしいセリフを真顔で言ってのける様を見れば、彼が悪人でないということは誰もが理解するだろう。

さて。

本日はそんな、別に隠された力も大して特殊な過去も持っていない彼の周辺に少しだけスポットライトを当ててみることにしよう。

二月下旬のとある日の夜。

ミューティレイク家別館のある場所では、秘密の会議が行われていた。

出席者は全部で四人。

その四人はミューティレイクの関係者ではあるが、ディバーナ・ロウそのものとはほとんど関係がなく、おそらく見慣れない者たちも多いだろうと思うので、先にここでまとめて紹介しておくことにしよう。

まず一人目は、一部を除いた女性使用人たちの頂点に立つハウス・キーパー、アマベル＝ウィンスターだ。通称で“ベル”などと呼ばれることもあるが、その名で彼女を呼ぶ者は非常に限られている。

ネービス領ブレインスタンという街の下級貴族の四女として産まれた彼女は、九歳のときネービスの“令嬢育成所”リーラッド学園に入学。十年前、十五歳でミューティレイク家のパーラー・メイドとなり、二十一歳のときハウス・キーパーの任に就いた、非常に真面目で仕事熱心な女性である。

現在の年齢は二十四歳。少々長めの金髪を左右から捻ってまとめた上品なシニヨンスタイルの髪型に、女性にしてはやや高めの身長、さらには非常に厳格そうな雰囲気がいかにも“管理職”な人物であった。

……ただ、実際もそのイメージ通りなのかどうかといえば、それはまた微妙に頷けないところもあったりするのだが、まあそれはひとまず置いておこう。

二人目は、接客を担当するパーラー・メイドたちの長、ローズマリー＝クロフォード。彼女の場合はアマベルとは逆に、ほとんど“ローズ”あるいは“ローズさん”などと省略して呼ばれる。

出身はネービス領の西に接するモンフィドレル領。クロフォード家といえばそこそこ名の通った上流貴族であるが、色々と複雑な家の事情のため、八年前、十三歳のときに、クロフォード家と交流のあったミューティレイク家に預けられ、そのまま現在に至る。

そんな彼女の見た目に関しては、たった二言で事足りるだろう。

“清楚”な“美人”だ。

加えてやや薄幸そうに見えるのは、容姿のせいか性格のせいか、

あるいは生い立ちのせいなのか。ともかく、少々別格のシーラ＝スノーフォールを除くと、彼女は間違いなくこのミューティレイク一の美人であろう。

ただ、その性格は少々――いや、これは後ほど実際に見てもらうこととしようか。

三人目。

掃除やベッドメイク等を担当するハウス・メイドの少女ヴァレンシア＝キッチンは、両親がもともとミューティレイクの使用人で、産まれも育ちもこのネービス。五年前に十三歳で使用人として正式に雇われ現在に至っている。

ややクセ毛のショートカットで、いつも浮かべている悪戯っぽい表情がネコを連想させるこの少女はともかく賑やかな性格だ。口を開けば持ち前のマシンガントークが炸裂し、何にでも首を突っ込んでかき回してしまう上、全然懲りる気配がない。屋敷随一のトラブルメーカーと言っても過言ではなかろう。

そして最後の一人。

冒頭でも紹介した菓子作り担当のコック、シュー＝タルト。

……一見、なんとも統一感のない顔ぶれと思うであろう。

が、この四人が集まっているのにはもちろんきちんとした理由があって――

「それじゃ、まあ」

雰囲気は重い。とてつもなく重い。

丸いテーブルに四つの椅子。それぞれに座した面々を見回して口を開いたのはシューだった。

「みなさん、どうしましょ」

「……」

少々軽い調子の声に、対面のアマベルが無言で彼を睨む。

シューは思わずビクッとして、

「ちょっ、ちょっとアマベルさん！　なんでいきなり俺を睨むんで

す！」
バンッ！
「一体誰のせいだと思ってるんですか！？」
「いや、そりゃ俺の責任もありますけど、全部が俺のせいじゃないですって！」
「む～～～～～～」
唸り声。
発したのはシューから見て左手に座っている少女、ヴァレンシアだ。
アマベルはそんな彼女をチラッと横目で見た後、またすぐにシューの元へ視線を戻して言葉を続けた。
「ともかく、私は忙しいんです！　こんなことしてる暇はないんです！」
「いや、まあそれはよく存じ上げておりますです、ハイ」
シューは素直にそう頷いたのだが、それでもアマベルは不満そうに、
「だったら、なるべく早く結論を出して下さいね！　“責任者”さん！」
「うわ。ぐさりと来ますね、その言い方」
だが確かに。今回の件は彼本人に直接の責任がなくとも、彼が担当している部門の問題である。彼が中心となって解決しなければならないことであるのは間違いなかった。
「あ、じゃあこんなのはどうです？」
そう言いながら、シューはぴっと人差し指を立てて、
「アマベルさんとローズさんの色仕掛けでとりあえず誤魔化――うおぉっ！！」
ギロリ。
殺気が迸った。
「……何か世迷い言が聞こえた気がしますけれど、もちろん気のせいですよね？」

向けられたのは、あまり見慣れないアマベルの満面の笑顔。
シューはそんな彼女の背後に鬼を見た。
「た、多分、気のせいだと思いマス」
「む～～～～～ん」
「まったく。くだらないこと言ってないで、早く話を進めてください」
「そんなこと言われましても。まず今からでは時間的に絶対無理という問題が」
「じゃあどうするんですか！」
「そりゃまあ、どうしようもないでしょう」
シューとしては至極当然の回答だった。
と、そこへ思わぬところから横やりが入る。
「……困りました」
八方塞がりの状態に、ローズマリーが頬に手を当て、はぁぁ、と深く重いため息を吐いたのだ。
「！」
そのため息に、シューとアマベルの二人がすかさず反応する。
……それは予兆だ。
「あの、ローズさん――」
咄嗟にシューがフォローしようとしたが、時既に遅し。
「……ふぅぅ」
成分の五分の一ぐらいが鉛で出来てるんじゃないかと思うほどの重いため息を吐いて、ローズマリーは顔の前で祈るように手を組むと、視線を下に落とした。
「ウィンスロー様はあの菓子がなければとても御機嫌が悪いのです。おそらく……私たちもそうならないよう努力するつもりですけれど、私ごときの力ではきっと……いえ、絶対ムリ……ムリです。ムリに決まってます……」
「あ、い、いや、ローズさん、そこまで深刻になるようなことじゃ――」

懸命のフォローを試みるシューだったが、彼女にはまるで届いた様子もなく、

「……そもそも私なんて何の取り柄もないんです。暗いし、愚鈍だし、無能だし、接客なんて向いてないんです。期待してくれる皆さんのために少しでもお役に立ちたいと思って頑張ってきましたけど……ダメなんです。何やってもダメ、ダメダメ人間……」

「ロ、ローズさん……」

そしてシューに突き刺さるアマベルの無言の視線。

「……え。もしかしてこれも俺のせいですか？」

「あ、あなたが早く話を進めないからです！」

「んな無茶な……」

だが、どもったところを見ると、どうやらアマベルも多少は無茶だと思っているようだ。

――ちなみに現在の事情を簡単に説明すると、こうである。

明日、ミューティレイク家に客人が来る。名はウィンスロー＝スナークウェザー。

スナークウェザー家はネービスに居を構える中流貴族であり、ウィンスローはその長男ということになる。一応はこのミューティレイク家当主であるファナの婚約者候補の一人だったが、本人からはあまり相手にされておらず、使用人たちには徹底的に嫌われているという少々困った人物だった。

そしてそんな彼の大好物が、寒天を使用したとある乾燥菓子……いや、というより、菓子はそれしか口にしないとのことで、このミューティレイクでも彼が訪れる際には毎回必ずその菓子を出すようにしていたのだが、今回、とある理由から急にその菓子が出せなくなってしまった。

それで、どうしようか、というところなのである。

「ふぅぅぅぅぅ～～～～～」

「おいコラ。唸ってばかりいないでお前も少しは考えろ」
先ほどから唸り続けて会話に参加してこないヴァレンシアに対し、ようやくシューの突っ込みが入った。
「……ん～、ほら。こうして一生懸命考えてるんよ」
「嘘つけ」
確かに。ダルそうにテーブルに突っ伏している彼女の姿を見れば、誰もがその言葉を嘘だと断定するだろう。
「だってさ～」
しかも当のヴァレンシアは言い訳するつもりもないようで、やはりテーブルに突っ伏したまま言った。
彼女特有の早口で。
「アマベル様とローズさんはいわば最高責任者と接客責任者なわけだしシューはお菓子作りの担当者だからわかるんだけどなんで関係のないあたしまでこの場に呼びだされなきゃならないのかってその一点がどうしても理解できないわけでどっちかとゆーと明日も早いんだしとっとと帰って寝たい気分なんだけどなー」
「……」
「……」
「……ダメに決まってる……きっとまた失敗して怒られる……」
未だ戻ってこないローズマリーはともかく。
その他の二人――シューとアマベルは無言で顔を見合わせた。
……というのは、別にヴァレンシアの言葉に考えさせられたから、ではなく。
次の瞬間、見事にハモる。
「そもそも、お前の（あなたの）せいだろうが（なんですよ）ッ！」
「おろ？」
ヴァレンシアはビックリした顔をする。
そんな彼女に、シューは勢い良く指を突きつけて、
「おろ、じゃないっつーの！　お前が俺の目を盗んでつまみ食いなんぞしなければ、こんな面倒なことにはなってないんだッ！」

だが、ヴァレンシアも反論する。
「だって、厨房のテーブルに無造作に置いてあるんだもん。食べていいのかなーと思うじゃん。お腹減ってたし」
「ぐ……だ、だからってあれだけあったのを全部食うか、フツー！」
「そ、そうですよ、ヴァレンシア！　そもそも、つ、つまみ食いだなんて女の子のすることではありませんよ！」
全く別の切り口ながら、息のあったタイミングで詰め寄るシューとアマベル。
が、しかし、このヴァレンシアという少女、その程度でオロオロするような性格ではない。
そんな二人の追求をさらりとかわすように、
「おろろ、なーんか二人して息ピッタリじゃん。……あやしいなぁ。シューってば、いつの間にアマベル様とそんな仲になったの？」
「へ？　いやまあ、そりゃ確かに俺とアマベルさんは切っても切れない、ふかーい仲――ふごぉっ！！」
ごわっしゃーん！！！
「乗せられてどうするんですか！　いい加減にしてくださいッ！！」
顔を真っ赤にしたアマベルが怒鳴る。
そして、キッと視線を移動させ、
「ヴァレンシア！」
「……ハイ」
悶絶しているシューを見てさすがにヤバいと感じたのだろう。ヴァレンシアは姿勢を正して急に神妙になった。
「確かにシューさんの管理にも問題ありましたが、あなたが元凶であることは確かなんですからね！　少しは反省しなさいッ！」
「ハイ。ゴメンナサイ」
「うぐぐ……な、なんで俺だけ」
そこで椅子から転げ落ちていたシューがようやく復帰する。
荒い息を吐いたアマベルはそんな彼を一瞥すると、気を取り直すようにコホンと咳払いをして、

「……それで。結局、どうするんですか？」
「ス、スルーですか……まぁ、そうですね。ともかく今から作るのは不可能ですから、何か代わりになるようなものを考えるか、あるいはどこかで仕入れてくるか、でしょうけど」
そう言うとシューは腕を組んで、
「マイナーな菓子ですからね。取り扱っている店を探すだけでも時間がかかるかもしんないです」
「そうですね。……ローズ。ウィンスロー様がいらっしゃるのは何時頃だったっけ？」
「……さい……」
「え？　なに、ローズ？」
聞き返すアマベル。
すると、ローズマリーはぶつぶつと繰り返すように言った。
「……ごめんなさい……私なんかが産まれてきて、ごめんなさい……」
「……」
「……」
微妙な空気が流れる。
「え、えっと、確か昼近くだったと思いますけど」
妙に白々しく明るいシューの返答に、アマベルもぎこちない笑顔で頷いて、
「そ、そうですね。それじゃあまり時間もないですね」
二人とも、とりあえず聞かなかったことにしようと必死だ。
「普通であれば何か別のものを考えるところですけど、ウィンスロー様の性格からすると、それでは納得なさらないかもしれません」
そこへヴァレンシアが口を挟んで、
「わがままだかんねぇ、あの人」
「……ヴァレンシア。失礼ですよ」
窘めるアマベルの声に、ペロッと舌を出すヴァレンシア。普段であればもっときついお叱りがあっておかしくない発言だったが、こ

のウィンスローという人物に関しては特別だった。
　要するに、彼のわがままぶりは全ての使用人共通の認識なのである。
「んじゃま、とりあえず」
　最後にシューがまとめる。
「アマベルさんの方で近くの店を当たってみてもらえますか？　俺はなんとか代用になりそうなものを考えてみますから」
「……ええ。仕方ないですね」
　アマベルが真剣な表情で頷く。
　なんだかんだと時間をかけた割には何のひねりもない結論だったが、最初からそのぐらいしか対策がないのである。
「あーあ」
　そこへ、ヴァレンシアがボソリと呟く。
「そんなツマんない結論ならわざわざあたしを呼ばないで欲しいな」
「……お前はもっと反省せんかぁぁッ！」

　――と、まあそんなこんなで。

　次の日の早朝。
「ふわぁぁぁぁ……とは言ったものの」
　ミューティレイク家別館にある厨房には、眠そうに目をこするシューの姿があり、半徹夜気味で厨房にこもっている彼の周りは、菓子作りに使う様々な食材で散らかっていた。
　あくび混じりに首を回す姿からわかるように、まだ代用品は完成していない。
「味とか食感だけなら似たようなものは作れるんだがなぁ……」
　ため息が漏れる。
「でもあの坊ちゃんの場合、形や色が違うだけで難癖つけられるのは目に見えてるし。……そりゃ確かにお菓子は見た目だって重要だけど、でもアレの場合は綺麗とかおいしそうとかって基準じゃなく

て、単なるわがままだからなぁ」
　椅子に腰を下ろしてテーブルに肘をつき、もう一度ため息を落としながら、とりあえず片手間に作ったマドレーヌを口に運ぶ。
「うーむ、これだって充分美味いんだが。他の菓子は一切に口にしないってこだわりはよくわからんが、まぁ味覚は色々だからなぁ。ぅ……ん～～～～～～っとぉ」
　大きく伸びをしてテーブルに突っ伏す。
「あーあ。仕事とはいえさすがに疲れたな……」
　時間は刻一刻と過ぎていく。いつの間にか空も白み始めて、そろそろ使用人たちが動き出す時間になっていた。
　このままでは、結局何もできずに終わってしまう。かといって、解決の糸口すらも見えないこの状況では、なかなか動く気になれないのも仕方のないことだった。
　と、そこへ、
「やっふー。頑張ってるー？」
「……」
　無言で振り返ったシューの耳に、さらに勢いを増した言葉の波が押し寄せる。
「いやー、清々しい朝だねぇ！　晴れ渡る空、涼やかな風、澄み切った空気、そして何より同室の娘っこどもより先に目覚めたというこの逆るばかりの優越感！　早起きは三文の得とはよく言ったものだ！」
　言葉通り、すでに制服に着替えたヴァレンシアは顔色もよく、まさに絶好調といった気配だ。
　だが、
「……ほぅ。超寝不足なこの俺の前で、よくそんなことが言えたものだ」
　そんな彼女とは対照的に腫れぼったくなった目を細め、恨めしそうに見上げるシュー。
「うわ、怖ッ。寝不足は体に悪いよ？」

「誰のせいじゃッ！」
身を起こして思いっきり突っ込むシューに、ヴァレンシアは少しなを作ってみせて、
「いやん。そんな大声出されちゃ、ヴァレンシア、困っちゃう～ん」
「……」
ゴンッ！
「った～～ッ！」
「気色悪い」
ヴァレンシアは後頭部を押さえながら少し涙目に彼を見つめて、
「……し、失礼しちゃうなぁ。せっかく、花も恥じらう十七歳の乙女が色っぽいポーズを取ってあげてるのに」
「恥じらうどころか尻尾巻いて一目散に逃げ出すわ、アホ」
「む～～～」
冷たい反応に、口を尖らせてヴァレンシアはかなり不満げだった。
「まぁ、そりゃあたしはローズさんほど美人じゃないし、アマベル様ほどグラマーでもないけどさぁ。でもほら、少しぐらいは――」
「“ほど”？　はっ、なに言ってんだ」
シューは途中で遮るとともに鼻で笑って、
「比べる以前にベクトルが全然違ってるっつーの。孔雀とアヒルに美しさを競わせるようなもんさ。天と地、月とスッポン、提灯に釣り鐘ってなもんだ」
「むかっ。……ふ～んだ。そんなこと言うんだったら、あたしにも考えがあるんだかんね」
「なんだよ」
ヴァレンシアは指先を勢いよくシューに突きつけて、
「アマベル様とかローズさんとかミリィさんとかに、ないことないこと全て言いふらしてやるッ！」
「待て！　ないことばっかかよッ！？」
思わず強烈に突っ込んで、さらに頭を抱えるシュー。
「そんなことされてしまったら、俺の爽やかなイメージが台無しに

なってしまうじゃないかぁぁっ！」
「バカ、そんなもん最初からないっつの。……マドレーヌいただきっ」
「あっ！」
「……うんうん、ホント、お菓子の腕だけはまともだねぇ」
「あ、あーあ」
シューはそんなヴァレンシアに非難の目を向ける。
「お前なぁ。それ、セシルにやろうと思って残しといたヤツなんだぞ」
「……うわ！　こんな身近にモノホンのロリコン野郎が！」
「違うわ、アホッ！　あの子はお前と違って、俺のお菓子をホントに美味そうに食ってくれてだなぁ！」
「だからあたしも美味しいって言ってあげてんじゃん」
うるさそうにパタパタと手を振るヴァレンシアに、シューはため息を吐いて、
「ぜんっぜん有り難みを感じねぇ言い方だな、おい。……で、結局お前は何をしに来たんだよ。何も用事ないんなら、いい加減邪魔だから帰ってくれ」
「あ、そうそう」
その言葉に、思い出したようにポンと手を叩くヴァレンシア。
意外にも、きちんと用事があったらしい。
そして言った。
……少々信じがたいことを、いともあっさりと。
「アマベル様、今日は休暇を取ったみたいよ」
「は？」
動きかけて、固まる。
「……え、なに？　よく聞こえなかった」
シューはそう聞き返したが、もちろん聞こえなかったわけではない。聞こえた言葉が信じがたいものだったから、聞き返したのだ。
だが、

「だ・か・ら。アマベル様は今日お休みだって」
聞き返しても内容は同じだった。
「……は？」
まさに寝耳に水の話。
「それで今日はローズさんが代理をやるってさ。いや、あたしも昨日のことがあったからまさかと思ったんだけど、どうもホントみたいなんだわ」
「ちょっ……それ、マジかぁっ！？」
彼が慌てたのは当然であろう。アマベルとは昨晩、協力してこの問題に当たろうと確認し合ったばかりだったのだ。まして今、彼の方は八方塞がりの状態。彼女頼みという面もかなり大きかったのだから。
ヴァレンシアは頭の後ろで手を組んで、
「マジマジ。でも、アマベル様の性格からして理由もなくすっぽかすってことは考えにくいから、よっぽどの事情があったんじゃない？　なんか遅くまで引継の準備とかしてほとんど寝てなかったみたいだし」
「そりゃそうかもしれんが……そ、そうだ！　そういうことならローズさんに改めて協力をお願いしておかないと！」
「あ。ちょっと、シュー！」
ヴァレンシアの制止の声も聞こえず、シューは厨房を飛び出した。
（冗談じゃない……いや、そりゃ頼り切ってたわけじゃないけど、でもこっちがこんな状況じゃ――）
食堂から一階ホールに続く通路を抜け、そこからさらに別の通路へ。大半の使用人たちは敷地内の別の建物に寝泊まりしているが、一部の上級使用人たちはこの別館の中に私室を持っている。
パーラー・メイド長であるローズマリーも当然、この別館の中に部屋があった。
そこへシューは一目散に飛び込んでいく。
「ローズさん！」

バンッ！

「ア、アマベルさんが休暇って本当ですかッ！？　お菓子の件はどうなって――って……うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！！！」

部屋に飛び込んだはずのシューが、断末魔の叫び（？）とともにすぐさま飛び出してきた。

屋敷内で殺人事件でも起こったのかと思わせる絶叫だったが、もちろんそんなことはなく。

バタンッ！！

「……シューさん……？」

「はぁっ、はぁっ！」

ローズマリーの怪訝そうな声。

が、シューはそんな言葉など耳に入っていない模様。

肩で息をしながら真っ赤な顔で、

「ロ、ローズさん！　な、なんて格好してるんですかッ！！」

そう。

部屋にいたローズマリーは上下ともに薄い布を着ただけの姿、要するに下着姿も同然だったのである。

「って、自分の部屋なんだから普通じゃん！」

自分で突っ込みを入れるシュー。どうやらかなり混乱しているようだ。

そして直後、扉の向こうから聞こえてきた声が、彼の混乱に拍車をかける。

「……見られた……」

「うわぁぁぁぁっ！！」

パニックになったシューは、慌てて扉に向かって土下座すると、

「ごめんなさい、ごめんなさい！　わざとじゃないんです！　ホントです！　俺なんて口では偉そうなこと言ってても、そんなことする勇気のある人間じゃないんです！　マジで！　信じてくださいぃぃッ！！」

「……ううっ……」

「ロ、ローズさん――」
混乱した頭でどうにか繋ぐ言葉を必死に検索する。
だが、
「ごめんなさい……」
「……へ？」
思わぬ返答に顔を上げるシュー。
すると扉の向こうのローズマリーは、まるで人生の終わりが迫っているかのような弱々しい声で続けた。
「ムリなんです……私なんかがアマベルさんの代役だなんて……ムリ……ムリに決まってます……きっとみんなに迷惑をかけるに決まってます……」
「え。あの、ローズさん……？」
そこでシューは気付いた。……どうやら彼女は、シューに下着姿を見られたことを嘆いているわけではないらしい、と。
そして彼女はさらに続ける。
「一晩中下着姿だったのに風邪も引かないなんて……こうなったら、もう……手首を切るしか……」
「うわぁぁぁッ！　い、いきなりなにを言っちゃってるんですかぁぁぁぁっ！！」
慌ててドアノブに手を伸ばしかけ、思わず躊躇する。
（う！　……そ、そうだ！　ローズさんはまだ下着姿――！）
「ロ、ローズさん！　馬鹿な真似はやめてください！」
「と、止めないで！　風邪で倒れられなかった以上、皆さんに迷惑をかけないようにするためには、もうこうするしかないんですッ！！」
「なんじゃそりゃぁぁぁっ！」
彼女の思考回路はかなりエキセントリックだ。
「ちょっ、ま、待ってくださいってば！　だいたいローズさん、そんなこと言って失敗したことなんてほとんどないじゃないですか！！」

慌てて扉を叩きながらそう主張するシュー。
確かに。このローズマリーという人物は美人なだけでなく、気も利く上に礼儀正しく頭も良い、まるで非の打ち所がない優秀な人物なのである。
……ただ一点、この、どうしようもなくネガティブな性格を除けば。
「ふふ……うふふ……これでもう、誰にも迷惑をかけることもないですね……」
「うわぁッ！　ロ、ローズさん！　早まらないでくださぁぁぁいッ！！」
ドンドンと扉を叩きながら、シューの頭の中ではすでに葛藤が始まっていた。
（……扉を開けるんだシュー！　人の命がかかってるんだ！　姿格好なんて気にしてる場合か！）
（ふん、そんなこと言いながら、本当は見たいだけなんだろ？　なんたって屋敷一の美人の下着姿だもんな、ぐへへへへへ）
（ち、違う！　そんなんじゃない！　ただ純粋にローズさんを助けたくて――）
（まぁまぁ、いいじゃないか。俺とお前は一心同体。幸い周りには誰もいないし、遠慮することなんてないだろ？　ドアの向こうにはこの世の天国が待ってるんだぜ）
「う……ううう……」
よくわからない数秒の葛藤の後、シューは意を決した様子でドアノブに手を伸ばした。
「……ご、ごめんなさい、ローズさん！　やましい気持ちなんて神に誓ってこれっぽっちもないんです！　ないですけど……でも人命救助のため、やむなくこの扉を開けさせていただき――ごべぇっ！！」
側頭部を突然の衝撃が襲い、まったくの無防備だったシューは情けなくも廊下にキスをするハメになってしまった。

「い、いてて……一体なにが……？」
「本当に救助だけが目的なら言い訳なんてする必要ありませんよ、シュー＝タルト」
耳を押さえながら床にはいつくばるシューの頭上から聞こえてきたのは、事務的な女性の声。
「……ミ、ミリィさん？」
顔を上げるシューの眼前に立っていたのは、前髪を僅かに横に流した生真面目そうな眼鏡の女性。レディズ・メイド長のミリセント＝ローヴァーズだった。
手には書類を綴ったものだろうか、厚さ十センチほどのファイルを手にしており、どうやらこれがシューの側頭部を直撃したものの正体らしい。
「……ご、誤解ですよ、ミリィさん！」
シューは慌てて身を起こし、即座に弁解する。
「お、俺はただローズさんを助けようと思って！　そ、そりゃまずいとは思いましたけど、他に方法が――」
「入るわよ、ローズ？」
ガチャ、バタン。
「って……ねぇ、聞いてよ、ミリィさん……」
が、そんな弱々しい声がドアの向こうに聞こえるはずもなく。
聞こえたところでどうなるわけでもなく。
ガックリと項垂れたシュー。
……と、そんな彼の視界の端に、どうやら一部始終を目撃したらしいヴァレンシアの姿が入ってくる。
「ヴァレンシア……」
シューは助けを求めように彼女を見て、
「なぁ、お前は俺の身の潔白を信じてくれるよな……？」
「スケベ」
「うっ」
ぐさっ。

「変態」
ぐさぐさっ。
「覗き魔」
どすっ……ばたっ。
ひゅうううう……
「さーて。あたしもそろそろ朝ご飯食べてこよーっと」
「……」
何故か館内に吹きさらす風の中。
あとに残ったのは無惨な屍のみ。
（お、俺、何か悪いことしたっけか……？）
おそらく、そこまで責められるほどのことはしていないのだろう。
ただ、
（……ああ、でも、ローズさんの白い太股、眩しかったなぁ……）
そんなある意味正直な彼の性格が、災いを運んできたのであろうことだけは間違いない。

さて、そんな騒動があろうがなかろうが、日はいつもと同じ速度で空に昇り、屋敷はやはりいつもと同じ時間に活動を開始する。
「……ふぅぅぅ」
結局、問題の方は何の解決策も見つからないまま。
ローズマリーに協力をお願いしようにも、あんな姿を見せられてしまっては余計な仕事を頼む気が起ころうはずもなく。
まさに孤立無援。
「誰か俺を救え……」
厨房の隅っこで、シューは途方に暮れていた。
今日はウィンスローとは別の客が午後からやってくる。むしろ屋敷としてはそっちの方が本命であり、厨房はその準備で大忙しだ。
当然、シューがのんびりと菓子を作っているスペースなどそこに

はなく、
「誰かぁぁぁぁ」
「なんだよ。なに騒いでやがんだ？」
「お？」
救世主出現を期待して振り返ったシューだったが、そこにいた少女の顔を見てすぐさま落胆する。
「……なんだ、ダリアか」
そこにいたのは、このネービスでは比較的珍しい部類であろう褐色の肌にパーラー・メイドの制服。ただし中身は気品などという言葉とは少々無縁に思える少女、ダリア＝キャロルだった。
「残念ながら、な」
そのサバサバした性格を表すように、彼女はシューの失礼な言い様にもまったく気を悪くした様子はなく、
「お前にしちゃ珍しく景気悪そうな顔してんじゃないか。またフラれたのか？」
「またってなんだよ、またって。言っとくがな。俺は産まれてこの方、女の子にフラれたことなんて一度もないんだぞ」
「フラれるところまでいかねーもんな」
「……否定できん」
シューは降参とばかりに手を広げて、
「ま、けど今回は違う。実はちょっと午前の客に出す菓子の都合がどうしてもつかなくてさ。どこか余所の店で調達しようにも、人手がなくて」
「午前の客？　……ああ、なんだ、ウィンスローか」
少し考えたダリアはまるで気にもかけない様子で、
「んなもん適当にやっとけばいいじゃねーか」
「そうしたいなぁ」
そんな二人の発言は、屋敷の使用人としては少々問題があると言わざるを得まい……が、実際のところ、その菓子が出せなかったからといってシューを糾弾する人物はおそらくいない。あるとすれば

アマベルの小言ぐらいのもので、あのおっとりとした当主のファナはもちろん、その周りの者だって“仕方ない”の一言で済ましてしまうであろう。

ウィンスロー＝スナークウェザーとはつまり、屋敷にとってその程度の存在なのである。

だが、シューはその後に続けて、

「けど、相手が誰だろうと、一度注文受けたら客が満足するもんを用意するのが筋ってもんだしさ。まして、今回はもともとがこっちのミスなんだ」

「へぇ」

ダリアは手にしていた空のトレイをクルクルと指先で回しながら、

「自分で作ったもんじゃなくてもか？」

「う……そ、そりゃ自分で作ったもんを出すのが基本だけどな」

突っ込みに、シューは少したじろぎつつも、

「けど、それがどうしても叶わなくて、なおかつ別の方法でも客が満足するってんなら、なんとかするのがせめてもの償いだろ？　たとえばそれが競合店の商品だったとしても、さ。……大事なのは自分のプライドよりも、客の笑顔だからな」

「へぇ。ま、あたしにはわかんない話だけど、お前がそう思うならそうなんだろうな」

そう言いながらも、ダリアはピタッとトレイを回す手を止めて言った。

「暇なら手伝ってやりたいとこだけどさ。ローズさんの仕事が増えたおかげであたしたちの方にもしわ寄せが来てんだ。わりぃな」

「……いや、もともと俺のミスだし」

「ま、ガンバレ」

ドンッ。

「うぷっ」

シューの背中に思いっきり張り手を喰らわして、意外に似合ってないわけでもない制服のスカートを揺らしながら、ダリアは去って

いった。
「いてて……ったく。こっちは一般人なんだから、少しは手加減しろよ……」
そんな後ろ姿に愚痴をこぼしながらも、時計を見る。
（……さて、と。本格的にどうにかしなきゃな）
現在午前八時。
ミリセントに確認したところ、約束の時間は午前十時だという。
残りは約二時間、ぐずぐずしている暇はない。
（こうなりゃ自分の足で探しに行くか……けど、徒歩で片道一時間弱っていうと限られてんなぁ）
ネービスの地図を頭に思い描くシュー。
その範囲内にある菓子屋といえば、彼の把握してる限りでは二軒しかない。しかもその二軒はここからだとほぼ正反対の方向で、つまり訪ねられるのは実質一軒のみということになる。
一軒はここから大通りに出て少し北に行ったところにある新しめの菓子屋。
もう一軒は南の一般住宅街の中にひっそりと立つ老舗菓子屋。
規模から言えば前者の方が大きい。
が、
（マイナーな菓子なら向こうだろうな。……よし。行ってみるか！大丈夫。やるだけのことをやってりゃ、神様だって絶対に微笑んでくれるさ！）
そう決意すると、作業着のままシューは屋敷を飛び出していくのであった。

――そうして歩くこと、約四十分。

パタパタ、パタパタ。
風に舞う白い髪。……いや、紙。
二月も終わりに近づき太陽が顔を出しているとはいえ、地表に吹

く風はまだまだ冷たい。いくらミューティレイクの制服がやや厚手の造りになっているといっても、寒風の中を歩き続けるにはさすがに少々心許ないものだ。

が、そんな寒風の中でシューを突き動かしたのは、信念だった。

相手が誰であろうと、注文を受けた以上は満足を与えたい。彼が菓子職人である自分に求めた、最低限のルール。

それがために彼は、やはり菓子屋を営んでいた父と対立し、そして家を飛び出すことになったという過去がある。

だからこそ、そこはどうしても譲れない部分だったのだ。

パタパタ、パタパタ。

また、少し風が強くなってきていた。

住宅街の中にひっそりと佇む老舗菓子屋“アズマ”。基本的に中流以上の人々が口にする菓子というものを、それ以下の人々にも楽しんでもらおうと立てられたこの店は、未だに創立者である六十過ぎの老人が菓子を作り続けている。

値段を控えめにしている分、日持ちのしない菓子はほとんど扱っていない。つまり大半が焼き菓子か乾燥菓子だ。

パタパタ、パタパタ。

彼が求めるものを取り扱っている可能性も低くはないだろう。おそらく五分五分といったところ。

――が、しかし。

パタパタ、パタパタ。

シューの背後を、一組の親子連れが通りかかる。

「……ママー？　あのお兄ちゃん、なんでお店の前で土下座してるのー？」

「しっ」

風が吹いた。

パタパタ、パタパタ。

店の門でたなびく、一枚の紙切れ。
そこには、こう書かれていた。

“店主、ギックリ腰のため、休業中”

「……」
五分五分の可能性は、呆気なくゼロになっていた。
「……ママー。あのお兄ちゃん、なんでお店の前でねんねしてるのー？」
「しっ。指さすんじゃありません」
もう一度風が吹いた。
「……うああ」
ゴロゴロ、ゴロゴロ。
「うあああああ」
ゴロゴロ、ゴロゴロ。
「ママー。あのお兄ちゃん、なんで――」
「近付いちゃダメよ、リョーちゃん！　ほら、行きましょ！」
「……うがぁぁぁッ！」
「！」
突然奇声を上げたシューに、親子連れが弾かれたようにその場から逃げ出していく。
が、当人はそんなこと気に掛ける余裕もなく、
「神よ！　寒風の中を歩いてきた俺の努力は！？　俺の信念は！？　この世は鬼と悪魔しかいないのかジーザスラブフォーミーィィィィィィッ！！」
まあ、思わず叫んでしまう気持ちも多少は理解できる。
が、そんなところでいくら意味のわからないことを叫んでみたところで、奇跡が降臨するはずもなく。彼に与えられるのは努力に対する祝福どころか、周りからの奇異と憐れみの視線のみだったのである。

「……はぁ」
短くなった影を辿りながら、疲労と空しさを引きずるようにして帰路につくシュー。
眩しい太陽は少しずつ頂点に近付いていた。
正確な時間を把握する術はなかったが、感覚的におおよその時間は掴める。
「あとだいたい三十分ぐらいか……はぁ。屋敷に戻ったらいい時間だろうなぁ」
憂鬱を踏みしめながら一歩ずつ屋敷への道を辿っていく。
もはや為す術はない。
「ははっ……ったく、お笑いぐさだ」
太陽を見上げながら嘲笑を漏らす。
「この程度の注文もどうにかできねーで、なにが菓子職人だ」
おそらく今回の出来事で彼を責める者はいない。
ただ一人。彼自身を除いては。
「ハァ……」
道ばたの石ころを蹴り飛ばす。
コロコロ、コロコロ。
大通りから西へ。ミューティレイクに続くやや広めの通り。
もう一度小石を蹴る。
コロコロ、コロコロ。
「お嬢様に頼み込んで、直接謝らせてもらおう……はぁ」
それで気が済むわけではない。が、何もしないよりはマシだと思えた。
「……くそ」
コロコロ、コロコロ……コツン。
「あ」
苛々して周りを見る余裕がなかったせいだろう。もう一度蹴り飛ばした小石が、少し早足で横を通り過ぎた女性のかかとに当たって

しまった。
「す、すみません」
「え？」
不思議そうな顔で振り返る女性。どうやら小石が当たったことに気付いていなかったようだ。
それでもシューはペコペコと頭を下げながら、
「あ、いや、ちょっと苛々してて、石を蹴ったら当たっちゃって……」
「え。あ、いえ、平気ですから」
女性は二十代半ばぐらいだろうか。身長はやや高めでシューと同じか若干高く、手には包みのようなものを持っている。どことなく気品のある出で立ちだが、一人で歩いているところを見ると貴族の娘というのではなく、どこかの屋敷に勤める上級使用人といったところか。厚手の上着の上からでもわかるほどにスタイルがよく、上品なシニヨンスタイルの髪が魅力的な――
「って……アマベルさんじゃないですか！」
「えっ？　あ、シューさん！？」
ビックリしたのはどうやらアマベルも同じらしい。
そして、
「「こ、こんなところでなにやってるんですかッ！？」」
見事にハモった。
その後、お互いに何度か譲り合いつつ、結局シューの方から喋り始める。
「なにやってるって、俺は例の菓子の調達に動き回ってるとこですよ。アマベルさんの方こそ！　急に休暇なんか取って、こんなところで一体なにをしてるんですか！？」
別に責めるつもりではなかった。
彼はアマベルの真面目な性格をよく知っていたし、おそらく充分に納得できるだけのやむを得ない理由が必ずあるはずだと信じていたからだ。

が。
彼女から返ってきた答えは、彼の予想を裏切った。……ある意味。
「なにをって、決まってるじゃないですか」
何をわかりきったことを、とでも言わんばかりの表情でアマベルは答えたのだ。
「近くの店を当たってくれと言ったのはシューさん、あなたの方ですよ。もう忘れたんですか？」
「……へ？」
思わず間抜けな顔をしてしまうシュー。
「なかなか骨が折れましたけど……でも、どうにか八軒目で目的のものを見つけることができましたよ」
そう言って、手にしていた包みを示すアマベル。
「……」
シューは無言のまま包みを見つめた。……確かに。その大きさは丁度菓子折ぐらい。包みに刻印された店名らしきものも聞き覚えがあるものだ。
「……」
さらに無言のまま、ゆっくりと視線を上げるシュー。
そこにあったアマベルの顔はどことなく誇らしげだった。
「……あの、アマベルさん」
そしてシューは確認するように、尋ねる。
「もしかして……自分の足で、朝から街を歩き回ったんですか？」
「え？　いえ、日が昇ってから出発したのでは遅いと思って、日が昇る少し前ぐらいに屋敷を出ましたけど、それがなにか？」
「あ、いや、そういうことじゃなくて」
「？」
アマベルはきょとんとした顔をする。
質問の意味が理解できない、といった様子だ。
シューはさらに言った。
「あの、俺が頼みますって言ったのは、誰か使いの都合をつけてく

ださいってことで……それにアマベルさんの権限なら、屋敷の馬車とかも普通に使えるでしょうし……ていうか、普通そうするでしょ？」

「え？」

「だいたい、ただでさえ忙しいアマベルさんにそんな無茶なことお願いするわけないし……なによりどう考えたってそんなの効率悪いじゃないですか。」

「え？　え？」

さらに困惑した表情のアマベル。

そんな彼女の態度は真偽のほどを確認するのに充分すぎるものだったが、シューは敢えて再確認した。

「もう一度聞きますけど……本当に自分の足で？　わざわざ休暇を取ってまで？」

「……」

片手を口に当てたまま、アマベルは固まった。

それから視線を泳がせ……少しずつ頬が赤くなり始める。

そして――

「……ぷっ」

「！」

吹き出す音に、アマベルがビクッと震えた。

「くくっ……あはははははっ！」

「シュ、シューさん！？　わっ、笑うことないじゃないですかッ！」

「い、いや……くくっ……だって！　ど、どー考えたって、ふつー……あはははははっ！！」

腹を抱えて笑い転げるシュー。

「俺、アマベルさんのそーいうとこ、めっちゃ好きだー！　すげー真面目なのに変なところで抜けてるってゆーか……あはははは、ロ、ローズさんも災難――げほげほッ！！！」

「～～～！　も、もう、知りませんっ！」

笑い止む気配のないシューに、ついにアマベルは真っ赤な顔を俯

けたまま背を向け、ズンズンと歩き出してしまった。
「げほっ、げほっ……あ、あ、待って、待って……謝ります、謝りますか――げほげほッ！！」
「こ、こんなに苦労したのに……ぐすっ」
そんな呟きも、笑い転げるシューの耳に届くことはなく。
「あ、あ、待ってくださいってば！　ホント、マジで感謝してますからアハハハハハハ！！」
「……感謝しなくていいから、もう笑わないでッ！！」
悲鳴のようなアマベルの声が通りに木霊して。
そうしてまったく対照的なテンションのまま、二人は屋敷へと戻っていくのだった。

……そしてその十数分前、ウィンスローの使いから訪問キャンセルの連絡が入っていたことを、二人はまだ、知らない――。

その1『まずはゲーム探しから』

（こいつらは確か……地の六十三族――！）

大陸でも最北に位置するという関係上、ネービス領というのは決して交通の要所というわけではない。どちらかといえば“遠い国”というのが、一般の人々の共通認識だろう。

にも関わらず、領内にいくつかある街道を馬車が頻繁に行き交うのは、学問を修めんとする人々を中心に、それだけ物資の需要量自体が多いためである。

さて、それらの馬車たちの主な終着点であるところのネービスの街。そこへ達するための道筋は主に五つだ。

西に接するモンフィドレル領からのルートが主に一つ。ネービス最西端の都市グランドウッドを通り、ネービスの中央付近にあるラグレオ山を北に迂回してホルヴァートからネービスへ到達する道だ。

そしてネービス領の南と東を覆うように接するグレシット領からは、国境付近に位置する街――かつては領土を守るための城塞都市であったユーイング、スタークホルム、ベルン、ヴァニィリッツという四つの都市をそれぞれ経由する道。

このグレシットから繋がる四つの道のうち、東のヴァニィリッツ以外の三つのルートを辿る人々は、次にネービスの街からすぐ南にあるルナジェールという大きな街を目指すのが常套だ。

ルナジェールの街。

首都ネービスから直線距離で四十キロ程度だろうか。馬車なら朝に出発すれば夕方頃には楽に辿り着けるし、徒歩でもその日のうちに辿り着くことは充分に可能だろう。

元は首都ネービスを守るための最重要拠点として繁栄したこのルナジェールの街は、今はネービスへ向かわんとする様々な人々のための中継地点として大きく栄えていた。他の領土からネービスへと

やってくる人々の、実に八割弱がこの街を一度は訪れることになるのだから、それもそのはずである。

当然、ルナジェールからネービスへと続く街道には厳重な警備が敷かれており、一時間に複数回、警邏隊が巡回を行っている。賊が出没すれば瞬く間に制圧され、魔が出現すればネービス公直属のデビルバスター部隊“ネスティアス”がすぐさま飛んでくる。

その街道は、ヘタをすればネービスの街そのものよりも安全だ……などと、真顔でそんなことを口にする者さえいるほどだった。

さて。

この物語の主人公であるところのティーサイト＝アマルナが獣魔退治の指令を受けたのは、四月初日のことだ。……いや、実際に獣魔に遭遇したこの日が四月の初日なのだから、正確にいうと指令はそれ以前に受けたものということになるか。

まあ、それはともかく。

このティーサイト――通称ティースはつい先頃、何やら成り行きっぽい展開でディバーナ・ロウの第四隊、通称“ディバーナ・ゼロ”の隊長に任じられた。

そしてこの日も唯一の“部下”であり、自らよりもディバーナ・ロウの在籍期間が長く、それ以上に遙か上の実力を備えるデビルバスター、アルファ＝クールラントを引き連れ、現場にやってきている。

その現場とは、ネービスとルナジェールを繋ぐ重要な大街道……などではもちろんなく、そこからだいぶ北東に外れた小さな街道のそばだ。平坦な道が多い大きな街道とは違い、整備もそれほど行き届いていない、非常に馬車通りの少ない街道である。

ただそうはいってもそれが道である以上、多かろうと少なかろうと利用する人は存在するのであるから、何も卑下することはない。立派な任務である。

それにまあ……今の彼の状況から言って、あまり極端なプレッシャーのかかる任務は到底不可能だという事情もあるわけで――

昼下がりの荒野の中。

しん……と、一瞬だけ静まり返る。

聞こえるのは微かな振動。

足の裏から伝わる微かな振動。

――何かが、地面の中を動き回る音。

「アルファ！」

大きめの岩山を背にしたまま愛剣“細波”を構え、油断無く辺りを窺いながらティースは叫んだ。

「そいつら、どっから飛び出してくるかわからない！　何か障害物を背にして戦うんだッ！」

言ったそばから、ティースの真横の土が盛り上がる。

「っ……！」

ティースは即座に反応した。

飛び出してきたのはモグラのような形をした“地の六十三族”。体こそ人間の半分もないが、両手の鋭い爪で土の中を高速で移動し、瞬時に飛び出しては獲物を切り裂く厄介な獣魔だ。

本来、その素早い動きと土を隠れ蓑にする戦術に手を焼くところだったが、今のティースのように大きくて堅い物を背にして戦えば話は別である。

背後から襲われる心配さえなければ、それほど手強い相手ではないのだ。

細波が獣魔の腹を真一文字に切り裂く。手の平に確かな感触。それが確実に致命傷であることを確認し、ティースは次の襲撃に備え、すぐに体勢を立て直した。

そして、

「アルファッ！！」

もう一度叫ぶ。

その視線の先。
――その声を向けられた人物――アルファ＝クールラントは何もない場所に立ち尽くしたままだった。
長い銀色の髪と季節外れのマフラーが風に踊る。
構えるわけでもなく。
視線を巡らせるわけでもなく。
まるで倒されるのを待つだけの木偶の坊のように。
「アル――」
だが、もちろんそうではなかった。
それはティースの言葉が途中で途切れたことからも容易に推察できる。
……前触れもなく、彼の背後から飛び出す地の六十三族。彼らは土の中からでも相手の背後を取る術を知っており、そうすることで獲物の反応が遅れることを知っていた。
しかし――彼らの爪が切り裂いたのは空気と、残像。
明確な感情など持っていないはずの獣魔が、驚愕にも似た反応を示す。
風か。
雲か。
……いや。
光だった。
「っ……」
何度も見たはずのその光景に、ティースはまるで色褪せることを知らない戦慄を覚えてしまう。
一閃。
まさに言葉通りの、一瞬の煌めき。
アルファの持つ光のスピア“誘蛾灯”が獣魔を切り裂く。
目にも止まらぬ動き。
それ自体は他の人物でも何度か目にしたことがある。デビルバスターと呼ばれる人々は総じて、人の目にも止まらない動きを見せる

ことがあるからだ。
しかし――それらとは少しだけ違う。
他の者たちのそれが一瞬の爆発的なイメージであるのに比べ、アルファの動きはあまりに造作なく、一連の動き全てが速かった。
表情が動かないせいもあるだろうが、そこにはある種の余裕すら感じてしまう。
真っ二つになって地面に落ちる獣魔の体。……いや、それは地面に到達する寸前、さらに四倍ほどの数のパーツに分裂して落ちる。
高速。
いや“光速”と言っても過言ではない。
その圧倒的な力の前では、獣魔が遠い昔から培ってきた戦術などまるで無意味。
「……」
そしてティースはただ、呆然とその姿を見つめていた。
いや、違う。
見つめている以外に、やるべきことなど存在しなかったのだ。
戦術などとうに超越し、造作もなく獣魔を屠っていく彼――アルファ＝クールラントの前では――

「……はぁ」
翌日の朝は何ともいえない虚脱感に包まれていた。……とはいえ、外は文句のつけようがない快晴。暖かさを増す春風は肌に心地よく、庭を見渡せば色付き始めた木花が心を踊らせる。
そんな最高の朝にも関わらず虚脱感が先に立ってしまうのは、もちろん当人の方に問題があるに他ならない。
ミューティレイクの二階にあるティースの自室。
備え付けの机の上には資料のようなものが山積みになっており、崩れた一部の資料が足元にも散らばっている。

ベッドの上には寝癖のついた頭を撫でつけながら浮かない顔をする部屋の主。

チラッと机の上の資料の山を見つめ、そしてもう一度、

「……はぁぁぁぁ。うまくいかない」

ため息と同時に、半分諦めたような呟きが口から漏れる。

なんともため息の似合う男だ。

とはいえ、そんな彼の心情も理解できないわけではない。

彼が第四隊の臨時隊長となってから早三週間。その間にこなした任務は三つ。もちろんどれも彼の身の丈に合った任務ばかりで、先の街道での任務もその一つだった。

――ミスらしいミスをしたわけではない。突然隊長に任じられて、慣れないことをやらされているわりには健闘してるといってもいいだろう。もちろん机の上の山を見ればわかるように、その陰には彼の涙ぐましい努力があるわけなのだが……しかし。

実のところ彼に期待されているのは、ただ単に任務をこなすという、ただそれだけのことではなかったのである。

（……やっぱ無理だ。だいたい向こうにその気がないのに、どうやって打ち解けろっていうんだ）

彼の部下、アルファ＝クールラントは一匹狼だ。

この三週間、ティースは自らの中でまだ燻っていたわだかまりを投げ捨て、少しでも彼の内面に迫ろうと挑戦してみた。何度も何度も話し掛け、あるいは協力を呼びかけ、そして任務の際にはフォローすることを試みた。敬語を止め、対等な言葉遣いをするようになったのも、多少強引に近付いてみようと考えた末のものだ。

しかし、悲しいかな。

その結果、結局わかったことといえば、彼が屋敷の誰ともほとんど交流を持っていない正真正銘の一匹狼であるということと、そして彼が、他人の助けなどほとんど必要としないほどの、とてつもない実力の持ち主であるということだけだった。

「あーあ……」

ぼふっとベッドに寝転がり、天井を見上げる。
（ファナさんは信じてるなんて言うけど、でも、あいつに人間らしい心があるなんてとても思えないよ……）
どちらかといえば他人の善意を信じるタイプのティースがそう感じるのだから、よほどのことだ。確かに、これほどまでに人間らしい仕草を見せない人物が相手とあっては、彼がそう考えてしまうのも致し方ない。
（……よし。ファナさんには悪いけど、いい加減辞退させてもらおう。こんなことといつまで続けてたって――）
と。
彼がそんな決意をし、ベッドから足を下ろしたときであった。
コン、コン。
控えめなノックの音。
「？」
時計を見る。掃除の時間にはまだ早い。
「誰だ？」
問いかけに返ってきたのは、明るい少女の声だった。
「あ、ティースさーん。おはようございまーす」
「え？　セシル？」
「はぁい」
「あ、ちょ、ちょっと待って」
意外な人物の突然の来訪に、ティースは少々慌てる。
その人物、セシル……セシリア＝レイルーンは、この屋敷に住む十三歳の少女だ。
ティースにとっては女性であることを意識せずに話せる年齢の相手であり、また彼女の方も話しやすいからと言って比較的彼に懐いている。いわば可愛い妹分だった。
だから彼が慌てたのは、別にそれが恋焦がれる相手だったからとか、逆にとてつもなく苦手で大嫌いな相手だったから、というわけではない。もちろん見られてマズいことをしていたわけでもない。

では、何故慌てたのかというと――
「お、おはようセシル」
寝癖を押さえつけながら扉を開けると、そこに立っていたセシルは大きく可愛らしい瞳でティースを見上げて、
「おはようございます、ティースさん。今日も昨日と同じでいいお天気ですよ」
「あ、ああ、そうだなぁ」
屈託のない笑顔に、ティースの胸を過ぎったのはほんの僅かな後ろめたさ。
だが、セシルの方はそんな彼の心情など察した様子もなく、
「こういう日は外に出て、太陽をいっぱい浴びながらもみんなと一緒にお昼寝するのです。ポカポカしてすごく気持ちいいんですよ」
「はは……いきなり昼寝するんだ？　遊んでからとかじゃなくて？」
「え？　……あ、ひどいです、ティースさん」
「へ？　なにが？」
いきなり不満そうに口を尖らせたセシルに、ティースがわけもわからず聞き返すと、
「今、そんなだから一ヶ月前に履けたはずのスカートが履けなくなるんだぞ、とか思いました？　思いましたね？」
「いや！　いやいやいや！　そんなことこれっぽっちも思ってない――っていうか、俺が知るわけないよそんなこと！」
弁解する彼の言葉は至極もっともな話であったが、それでもセシルは口を尖らせたまま俯いて、
「いいんです、事実ですから。……でも、女の子にそんなヒドいことを言うティースさんは赤点です。落第で再試験で丸刈りです」
「……ま、丸刈りはさすがに嫌だなぁ」
苦笑。
いい加減、ティースも彼女のこういう反応には慣れてきており、それが楽しく感じるようにもなっていたし、また微笑ましくもあった。

「それで？　今日はこんな朝早くからどうしたんだい？」
その問いかけに、セシルはパッと表情を変えて、
「あ、そうでした。……実はですね、ティースさんにもプレゼントがあって持ってきたんです」
「プレゼント？　今日ってなんかあったっけ？」
何も思い当たらずにティースは首を捻る。
彼の十九歳の誕生日は一ヶ月前に過ぎていたし、その他、プレゼントをもらうような心当たりもなかった。
と、そんな彼の疑問にセシルは明るく答えて、
「ティースさんは特別です。いつでも感謝感激雨霰日和ですよ」
「あ、雨霰日和？　変な日和だなぁ」
独特の物言いにもう一度苦笑。
「でもなんで俺が特別なんだ？　俺より仲のいい人なんていっぱいいるじゃないか」
そう問いかけたティースに、セシルはニコニコしながらさも当然のように答えた。
「だってティースさんは、お兄ちゃんととても仲良くしてくださるのです」
「……」
胸がチクリと痛み、ティースは思わず視線を泳がせた。……彼女の顔を見た瞬間に感じていた後ろめたさが、再び胸に浮かび上がる。
そう。
信じがたいことだが、あのおよそ人間らしくない冷徹なアルファと、この暖かく朗らかな少女セシルは、兄妹なのである。
「お兄ちゃんはちょっとだけ照れ屋さんなので、あまり屋敷の皆さんとお話できないのです。でも、ティースさんがいてくださるおかげで、お兄ちゃんは私がいないときでも一人っきりにならなくて済みます。……一人っきりはとても淋しいのです」
笑顔でそう続けたセシルに、ティースは聞こえない程度の小さなため息を吐く。

（……ちょっとだけ照れ屋さん、か）

もしそうであったなら、どれだけ気が楽になることだろう。

だが現実は、ちょっと照れ屋さんどころか、そういう類のものですらない。

それはいわば“断絶”だ。

何事を問いかけても返ってくる答えは全て事務的、機械的。そこに感情が入り込むことはなく、言葉の全ては状況描写に過ぎない。言葉は通じても、心が通じることが決してない。……言葉の通じない犬や猫の方がよっぽどコミュニケーションが取りやすいとさえ言えるだろう。

完全にお手上げだった。

微かな光さえ見えない。

だからこそ彼は、白旗を揚げることを決断した。そしてその判断は客観的に見ても、決して間違ってるとは言い切れないものだ。

だが――

「だからティースさん。これからもお兄ちゃんと仲良くしてあげてくださいね」

「……」

そんな笑顔を目の前にすると、ティースの決心はまた揺らいでしまうのだった。

その日の朝食後。

「タナトス、ネアンスフィア、ヴァルマシード、そしてベルリオーズ」

アオイの口からその四つの単語が飛び出したのは、もはや恒例となった一階ホールでの勉強会の際であった。

「――今日は私たちディバーナ・ロウを取り巻く状況について、少し詳しくお話ししたいと思います」

冒頭でそう切り出し、その後に出てきたのがその四つの単語。そのうちの一つはティースにも聞き覚えのある単語であり、そこから推測すれば、他の三つがどういった意味の言葉なのかも容易に推測できた。

「主にネービス近辺……中には大陸全土に及ぶものもありますが、そこに悪名を轟かせるのがこの四つの組織ですね」

ティースは真剣な顔で耳を傾ける。

――大陸のあらゆるところに存在する“魔の組織”。

それらは規模も目的も千差万別。二、三人で徒党を組んだだけのものもあれば、国家に脅威を及ぼすほどに統率された集団もある。ただ人を襲うことを楽しむものもあれば、何らかの明確な目的を持って戦いを仕掛けてくるものもある。……中には以前ティースが協力したキュンメルのように、救済を目的とする組織もあるだろう。

それだけ様々な組織が存在するのだから、この大陸で起こる魔絡みの事件の確実に何割かは、彼らが糸を引いていると言って過言ではない。とするならば、彼らの目的や行動理念を事前にある程度理解しておくことは、任務の際の判断材料として大きな意味を持つことになるのである。

もしも“隊長”として指揮を執る立場であるならば、なおのこと。

「まずはティースさんもよくご存じのタナトスですが……」

おそらくはアオイも、彼にそういった意識が多少なりとも芽生えていることを感じ取って、この話を切りだしたのだろう。

「彼らは“ニューバルド”と呼ばれる氷の将魔を総帥とする、比較的小規模の集団です。その他、幹部と呼ばれる将魔の存在が数人確認されているものの、明確な組織としての形態を取っているわけではありません。普段は半ば好き勝手に動き、必要に応じて招集される……そのためか個々が様々な場所で様々なタイプの事件を起こし、その真の目的もいまいち知れません。ただ、一つだけはっきりとわかっていることは――」

眼鏡の奥の穏やかな瞳が一瞬だけ細められた。

「私たちディバーナ・ロウを執拗に狙っているということ。そして私たちにとっても、仇敵と言っても良い存在であるということです」

そこに、普段の穏やかな彼には似つかわしくない炎が宿る。

「……」

もちろん、その理由をティースは知っている。

四年前の五月。

その雨の夜にミューティレイクはタナトスの大規模な襲撃を受け、当時のディバーナ・ロウは壊滅した。デビルバスター、隊員、使用人、そして前当主――つまり現当主であるファナ＝ミューティレイクの父親まで、数多くの人々が命を落とし、当時、屋敷にいた者で難を逃れたのは、両手で数えられるほどの人数だという。その、実に十倍以上もの人間がそこで命を落としたのだ。

彼らの慰霊碑が敷地の隅にあり、そして毎日必ず誰かがそこに黙祷を捧げているのを何度も目にしていた。

「ただ――」

アオイは一つ息を吐いて気持ちを切り替えたらしく、再び穏やかな表情に戻って、

「実はタナトスという組織の危険度は、五段階で下から二番目程度でして、一般的な話で言えばそれほど取るに足らない存在なんです」

「え？」

「意外ですか？」

そんなティースの反応を予想していたらしく、アオイはそう言って少し笑う。

「そ、そりゃ、あれだけの力を持ってる奴らが取るに足らないだなんて……」

それは彼には想像できない世界だった。

だが、

「いえ、彼ら個々の力が取るに足らないというわけではありません。確かにタナトスの幹部たちはおそらく全員が強大な力を持っていますし、それは他の組織の中核を成す魔よりも強力かもしれません。

……ただ、彼らの人数、目的、行動、それらを全て総合した上で、国家を転覆させるほどの力は持っていないという判断なんです」

「国家転覆……」

それもまた、なかなか想像しきれない規模の話だった。

「逆に言うと、そういう可能性を持つ組織も実際に存在しているということですよ。ヴァルマシードやベルリオーズという二つの組織は、そういった意味でネスティアスが警戒している連中ですね。ただ、逆にそういう連中は私たちと関わることはあまりないと思いますから……関わることがあるとすれば、残る一つのネアンスフィアでしょう」

「ネアンスフィア……？」

ティースは腕を組んで少し難しい顔をすると、

「そういやその名前、どっかで聞いたことあるんだよなぁ……」

首を捻る。

「ええ。一般的な知名度でいえば、おそらく先ほど挙げた四つの組織の中でもっとも上だと思います。活動範囲も大陸の広範囲に及んでいますから」

そして、一呼吸。

「――デビルバスター・ハンターズ」

「え？」

「と、そう呼ばれることが多いですね、彼らは」

「デビルバスター、ハンター……？」

復唱して、その意味を理解しようと試みるティース。

もちろんハンティングするデビルバスター、などではない。

「デビルバスターを狩る者……？」

アオイは頷いて、

「ええ。彼らはまさにハンティングをする感覚でデビルバスターの命ばかりを狙うのだそうです。正確に言えば一つのまとまった組織などではなく、同じルールに則ってそのゲームに参加する複数の魔の組織をまとめてネアンスフィアと呼びます。もちろん相手が相手

ですから、それは彼らにとっても命がけのこと。……そういう狂った連中です」

「……」

ティースにしてみれば、デビルバスターというのは雲の上の存在だ。ディバーナ・ロウの四人のデビルバスターも、これまでに何人か出会ったその他のデビルバスターも、全員がとんでもない実力の持ち主ばかりだった。

そんな彼らばかりを付け狙うデビルバスター・ハンターズ――ネアンスフィア。

「そ、想像できない世界だなぁ……」

もちろん想像できるはずはなかった。

この数日後、彼自らがそんな危ない連中と関わってしまうことになるなどとは。

「……また、増えてる」

書物というものは基本的に、というより至極当然のことなのだが、どこからでも読むことができる。内容の理解ができないとか、物語がつまらなくなるだとかそういったリスクはあるにせよ、いきなりページの最後から読み始めることだってできるし、それは全て読み手の自由だ。

が、しかし。

今、彼女――シーラ＝スノーフォールの手の中にある重厚な黒表紙の書物は、そんな常識をまったく無視した代物だった。

ページをめくる乾いた音が室内に響く。

「この前までは白紙だったのに……」

そんな彼女の呟きを、もしも間近で見ている者がいたとしたら、あまりの不思議さに首を傾げることだろう。

何故なら、目を細めながら彼女が見つめるそのページも、それ以前のページも、それ以降のページも、最初から全て白紙だ。……不自然なほどに白。古い書物に見られる黄ばみすらも見当たらない。

そのはずだった。

だが、

「……腐食の楔を……征服する……腐食の楔？」

そう呟く彼女の目は、間違いなくその白紙を捕らえている。暗唱しているようにも思えないし、どうやら彼女の目には文字が映っているとみて間違いないだろう。

片手に古代文字の辞典を手にしているところを見ると、おそらくは古い文字で書かれた何かが。

あまりに不気味な代物だ。どう考えてもまともなものではない。もちろん彼女自身もそれを認識しているようで、普段は鍵付きの箱にきちんとしまっていたし、他人の目に触れさせないようにもしているようだった。

コン、コン。

「！」

ノックの音に、シーラは本を素早く机の下に隠した。

そして平静の声で問いかける。

「誰？」

振り返ると、金糸のようなポニーテイルの髪が揺れる。これ以上ないほどに整った美貌が部屋の扉へと向けられた。

声が返ってくる。

「シーラ様。私です」

「リィナ？」

シーラはホッと息を吐いてすぐに席を立って扉へと向かう。そして彼女の表情に、旧知の友に対する親愛の笑顔が溢れた。

「どうしたの？　……あら。エルも一緒だったのね」

「シーラ、元気だった？」

そこに立っていたのは、身長百八十センチはあろうかという長身

の女性と、対照的に百四十センチ半ばしかない小柄な少女。
リィナ＝クライストとエルレーン＝ファビアスは、このミューティレイクで使用人として働く、少々ワケありの二人だ。そしてシーラにとっては先ほど述べたように旧知の仲であり、気の置けない親友なのである。
完璧な美貌を持ち、どこか気高く隙のなさそうなシーラ。
女性としては高すぎる身長に、穏やかで優しげな暖かさを持つリィナ。
そして小柄で愛らしい外見に、やはり明るい笑顔のエルレーン。
なんともバラバラな個性を持つこの三人は、その華やかさも手伝ってか、最近では屋敷でも有名なトリオとなりつつあった。
が、当の三人はそんなこと気にした様子もなく、
「ちょうど、リィナと同じ時間に昼休みをもらえたんだ。それで、シーラも今日学園休みだって聞いてたから、お昼を一緒しようかと思って」
エルレーンの言葉に、隣のリィナが同意して頷く。
「昼？　あ、もうそんな時間？」
意外そうに時計を見るシーラに、エルレーンはクスクスと笑って、
「どうしたの？　好きな男の子のことでも考えてた？」
「まさか。そこまで時間を持て余してないわ」
シーラはさらっとそう返して、
「じゃあ、どうしましょうか？　ホールに行く？　それとも――」
「ここにしよ。ホールも楽しいんだけど、たまには三人水入らずもいいでしょ？」
「薬草臭い部屋でも？」
シーラが冗談めかしてそう言うと、エルレーンはお人形さんのような小さな頭をキョロキョロと動かして、それからニッコリ微笑むと、
「大丈夫。シーラはとってもいい匂いだから」
「なんか微妙ね、それ」

苦笑するシーラに、あとから小さくお辞儀して入ってきたリィナも、ほんの少しだけ鼻を動かしながら、
「これ、何かの香草ですね。すごくいい香り……」
シーラは答えて、
「ええ。香水にも使われるいくつかの香草を自分でアレンジしたものよ。……テーブル、少し小さいけど。二人ともそっちのソファに座って」
「あ、自分で作ってるんだ。シーラ、いっつもいい匂いだもんね」
エルレーンはちょこんとソファに腰掛け、それから手にしていたバスケットをテーブルの上に乗せる。
その隣に座ったリィナも頷きながら、
「爽やかで気品があって、私もシーラ様にピッタリの香りだと思います」
「そんな大層なものじゃないわ」
その謙遜は香草の調合技術に対するものか、あるいは自分自身に対するものか。とにかく、そう言いながらシーラは自らもソファに腰を下ろした。
リィナが昼食の準備を始める。
そのバスケットを開いた途端、リンゴの甘酸っぱい香りが漂った。
「あら……」
思わず声を漏らしたシーラに、その反応を期待していたのかエルレーンは嬉しそうに、、
「リンゴ、大好きだったよね。ちょっと季節が違うけど、コックさんに干しリンゴをもらったから」
リィナがそれに続けて、
「こっちのリンゴは真っ赤なんですね。向こうでは黄緑色のものしかないので、初めて見たときはビックリしました」
「こっちにも赤以外のリンゴはあるわよ。でも、確かに赤の方が一般的ね」
シーラはそう答えながらも、何事か気にしたようにチラッと扉の

方を見る。
「あ、心配しなくても大丈夫だよ、シーラ」
その理由を察したエルレーンがすぐにそう言った。
「声が伝わりづらいように、ちょっとだけ空気の流れを調整してるから、ちょっとぐらいそっちの話をしても平気」
言って、少し指先を振ってみせる。
ひゅぅっ、と、窓の閉じた部屋に、微かな風が吹いた。
「……便利ね」
「これでも“元”王族だから」
冗談っぽくエルレーンはそう言った。
彼女たち――リィナとエルレーンは元々、人ならざる者、つまりは人魔だ。
二ヶ月ほど前“朧”というアイテムによって人に姿を変えたために魔力の大半を失った。が、それでも元が強大な力の持ち主であるため、今もそれなりの魔力を行使することができるのだ。
もちろん、その正体を周りに知られるわけにはいかない。魔であるということは、たとえ事実がそうでなくとも、人間に恐怖を与えるものだから。
――とはいえ。
「それに朧の効果は完璧だもん。ちょっとした話を聞かれたって証拠なんてないし、確かめる方法もないよ」
もっともな話だった。シーラも納得して、扉から視線を戻す。
そうして賑やかな昼食が始まった。
内容は主にリィナやエルレーンの仕事の話、あるいはこの四月からサンタニア学園の薬草学科に復学したシーラの学業の話。
同じ屋敷内で過ごしているとはいえ、三人が一同に会す機会はそれほど多いわけではなく、その分だけ話は弾む。
性格はもちろんのこと、立場、あるいは種族すら違う三人ではあったが、端から見てる限りは普通に仲の良い少女たちとなんら変わらなかった。

と、そんな中、
「そういえば……二人とも、“腐食の楔”ってなんのことだかわかる？」
「え？」
「腐食の楔、ですか？」
ふと尋ねたシーラの言葉に、呆気に取られた顔をする二人。
彼女がそれを尋ねてみたのは、ほんの思いつきだった。少なくとも一般的に意味の知られている単語ではなかったし、それならばダメ元で“一般外の知識”を持ち合わせているであろう彼女らに聞いてみようか、と思い立ったのである。
が、それは思いの外、素晴らしい閃きだったようで、
「それは魔界の言葉で、ということですか？」
首を傾げながら聞き返したリィナに、シーラは少し驚いた顔をして、
「知ってるの？」
リィナは頷く。
「はい。最近ではあまり使われなくなりましたけれど“腐食の楔”というのは魔界では幻覚能力を指す言葉です」
「幻覚能力？」
「油断とか心の隙間を突いて間接的に攻撃する性質から、昔の人がそういう言い方をしたそうですよ」
「……」
その言葉に少し考え込むシーラ。
やがて少し真剣な表情になって、
「……ねぇ、リィナ。もう少し詳しく話してもらえる？」
「え？　それは構いませんが……」
リィナは戸惑うような素振りを見せたが、それでもすぐに答えて、
「シーラ様は魔の十属性について知ってますか？」
「ええ。少し勉強したわ」
「でしたら……幻覚能力は十属性の一つ、幻の魔が使う力のことで、

大きく“感情”“五感”“記憶”の三つに分けられます。基本的には、対象者に錯覚を起こさせる能力です」

「錯覚？」

「はい。……疑惑を不信に、怒りを殺意に、主に扇動や不和を起こさせるために使われるのが“感情”の幻覚。ナイフを一輪の花に見せかけたり、私の声をエルさんの声に置き換えたり、あるいは小石がぶつかった程度の痛みを激痛に変えたりするのが“五感”の幻覚。そして記憶の混乱や置き換えをするのが“記憶”の幻覚です」

「……」

整理するかのように少し視線を泳がせるシーラ。

その説明自体は、言葉そのものから受ける印象と大差なく、容易に理解することができるものだった。

「私もそれ以上となると、あまり詳しいことはわからないのですが……エルさん」

「あ、うん」

その求めに応じ、どうやら彼女よりも詳しいらしいエルレーンがバトンを引き継いで、

「ボクもそんなに深くはわからないけどね……リィナの説明にもう一つ付け加えると、幻覚能力ってものすごく特殊な力なの。たとえば――」

そう言いながら、テーブルの上にあったナイフとスプーンを手に取ると、それらをシーラの目の前にかざしてみせる。

「ボクがシーラに対して、こっちのスプーンもナイフだと錯覚させる能力を発動しようとするでしょ？　でも、いきなりやろうとしても、それはできないんだ」

「？　どういうこと？」

「うん。幻覚能力は発動するのに必ず何らかの“条件”を必要とするの。……あくまで一例だけど、たとえば幻覚を見せようとする前に、こっちもナイフの形を相手に記憶させておきゃなきゃならない、とか」

「……なるほどね」
納得した様子だったが、シーラはすぐに疑問を投げかける。
「でも、それって特に難しいことでもないんじゃないかしら？　だってナイフの形ぐらいだいたい覚えてるでしょ？」
エルレーンは頷くと、
「この場合はね。だけど――」
そう言いながら今度はスプーンだけを置き、その手にナプキンを取る。
「同じようにボクがこのナプキンをナイフに見せかけるには、さっきよりもさらに難しい条件が必要になってくる……どうしてかわかる？」
「え？　……」
視線を泳がせて考え込むシーラ。
が、その時間はそれほど長くはなく、
「スプーンに比べると、形とか質感が遠ざかったから……？」
「うん、正解」
エルレーンはニッコリと微笑む。
「錯覚を大きくしようとすれば、それだけ発動条件が厳しくなる。それが基本。……その他にも色々な制約があるみたいだよ。一人の魔が同時に二つ以上の幻覚をかけることはできないとか、一人の人間に作用する幻覚は最大でも二つまで、とか」
「……そう都合のよいものではないということ？」
「うん。自分で使うわけじゃないからわからないけど、幻の属性は最弱、っていうのがあっちでの一般的な意見だからね。……でも」
「でも？」
エルレーンはまるで謎かけのように言った。
「――王を討つ兵は、窟の中にこそ産まれる」
「？」
怪訝そうなシーラに、エルレーンは微笑んで、
「向こうで良く口にされる教訓だよ。窟――あなぐらに隠れ住むの

はもっとも弱き者、幻属性を揶揄して使われる言葉。でも、王を討つ兵――王は格上、兵は格下、つまり格上の魔を討てるのは、唯一幻属性の者だけだ、という意味なの。……これはちょっと大袈裟な言い方だけど、でも、単純な力差を埋める可能性がもっとも高いのは幻属性。それは確かにそうかなとボクも思う」

「……使いよう、ということね」

そんなエルレーンの言葉は、シーラにも理解できなくはなかった。

――実際のところ、王魔よりも強い将魔、将魔よりも強い上位魔というのはどの属性でも存在する。どんな種族であれピンキリだし、格下が格上を倒してしまうことは、珍しいことではあっても充分に起こりうることだ。

ただ、歴史を紐解いていくと、それが起こりうる確率がもっとも高いのは、やはり幻属性がもっとも高く、そしてそれは当然、魔と魔の間に限ったことではない。

エルレーンの口にした教訓と似たようなものが、デビルバスターたちの間にも存在する。それはつまり過去、幾人もの腕利きのデビルバスターが、本来恐れるに足らないはずの幻の下位魔や上位魔の手に掛かって命を落としているということなのだ。

「……でも、シーラ様。どうして急にそんなことを？」

と、リィナが不思議そうにそう問いかけた。

それは当然の疑問。今の話は、少なくとも薬師を目指すこのシーラという少女には、全く必要のないはずの情報なのだから。

だが、

「そうね……単なる知的好奇心、じゃ答えにならない？」

さらりとかわすように答えるシーラ。

だが、リィナは納得できない顔で、

「“腐食の楔”なんて言葉、魔界でもそんなに耳にしない言葉ですから……」

「耳にする機会があったのよ。友達からね」

「シーラって変な友達がいるんだね」

そう言って、エルレーンは笑った。
シーラの言葉をそのまま真に受け止めたわけではなさそうだが、それでも彼女はそれ以上追求することはなく、
「何にせよ、少しでもシーラの役に立てたなら嬉しいよ。……ね、リィナ？」
「え……あ、はい」
その言葉に、リィナもニッコリと嬉しそうに頷いて、
「シーラ様とティース様のお役に立てることが、今の私には何よりの幸福ですから」
「あら。嬉しいわね」
シーラはもう一度苦笑した。
リィナの言葉は、まるでお芝居のセリフか、そうでなければ口の上手い商売人の常套文句だ。だが、その表情には一点の躊躇いもなく、また打算の色も皆無。
見ている者を思わず和ませてしまうような、その雰囲気。
先ほどの発言が本心からの言葉であることを疑う者は、少なくともこの場にはいなかった。
（……ホントいい子だもの、ね）
シーラも心からそう感じている。
だからこそ、多少こちらの常識に欠けていても、上手く人間たちの中に溶け込めているし、周りから好かれもするのだろう、と。
「……」
「さ、じゃあそろそろ行こっか、リィナ」
ちょうどバスケットの中身もなくなったようだ。
エルレーンが立ち上がると、リィナも頷いてそれに従う。
「では、シーラ様。また」
「……ええ、またね」
「？」
シーラの返事がワンテンポ遅れたことにエルレーンは怪訝そうな顔をしたが、それについては特に追求することもなく、

「じゃあ、シーラ。勉強、頑張ってね。――男の子のことばかり考えてちゃダメだよ？」
「ええ、そうね。あなたじゃなくてリィナのことを考えるようにするわ」
「むっ」
エルレーンはわざとらしく膨れてみせて、
「君といいティースといい、ホントに失礼だよ、もう」
「ほら。早く行かないと叱られるわよ」
「ふん、だ。いこ、リィナ」
隣でクスクス笑うリィナに、エルレーン自身も結局可笑しそうに笑ってしまう。
そんな二人に向けられたシーラの笑顔には、一点の曇りもない。
それは彼女が二人に対し、完全に心を許していることの証明であった。

衝撃。
甲高い音。
手の平を突き抜け、耳の奥と肩口に飛んでいく痺れ。
血液が体中を駆け巡り、脳の奥が熱く、全身が高揚し、汗が飛び散った。
「おぉ――ッ！」
一歩、踏み込む。普段頼りなく見えるはずのティースの長身は、鬼気迫る気迫をまとってそこに威圧感すらも迸らせていた。
「っ……」
そんな彼に対するは、彼よりも十センチ以上小柄な少年、パーシヴァル＝ラッセル。両手にはかなり長めのトンファーを携え、こちらも視線は真剣そのものだ。
「くっ……！」

一撃を受けたパーシヴァルの表情が歪む。バランスが崩れた。
好機。
その一瞬をティースは逃さない。
打ち払い、目にも止まらぬ一撃を見舞う。
勝利を確信。
――いや。
「えっ……！？」
突然、視界から少年の姿が消えた。
と、同時に、右手を襲う鋭い痺れ。
「つっ……」
甲高い音とともに宙を舞う木刀。
肩口に軽く鈍い痛みが走って、背後に気配が現れて――
「――そこまで」
喉元にグッとトンファーが押しつけられ、冷静な声が響いて、場に張り詰めていた空気は霧散。
荒い息。
外から聞こえる犬の鳴き声。
焼け付くような暑さ。
今までは意識もしなかった周囲の状況が、急にリアルに動き始めた。
「……惜しかったっすね、ティースさん」
ゆっくりと背後の荒い呼吸音が離れていく。
もちろんティース自身の呼吸も荒い。が、勝負の結果とは対照的に、どうやらパーシヴァルの方が疲労の色は濃いようだった。
「気ぃ、抜いたでしょ？　そんなんじゃいつまで経っても俺には勝てないっすよ」
パーシヴァルは息を吐きながらタオルを首にかけ、置いてあった水筒に口を付ける。
必要以上に強気な言葉は彼が思いの外追いつめられていた証のように見えたが、言葉の中身そのものは真実でもあった。

だが、ティースは納得できない顔でその場に座り込んで、
「俺が気を抜いたわけじゃないってば。君の動きが急に速くなったんじゃないか」
「はは。それを気を抜いたっていうんですよ」
パーシヴァルも壁に背を預ける形で座り込み、もう一度水筒に口を付けて喉を潤すと、
「俺たちは多かれ少なかれ、ある程度の心力を前提に戦ってるんだから、ほんの少しの気の緩みが一般人よりも遙かに顕著に跳ね返ってくるんスよ。俺も確かにピンチだったから速く動こうとはしたけど、それ以上にティースさんの動体視力が急激に落ちたんじゃないっすか？」
「……うーん」
そんなパーシヴァルの言葉に、ティースはやはり納得できない顔で頭を掻いて、
「心力がどうこうと言われても、意識してやってるものじゃないからわかんないよ……」
「そのうち慣れますよ。心力の基礎はとっくに身に付いてるみたいだし、あとは感覚をしっかり掴んで、気を抜く癖さえなくせば――」
「ま、気を抜く癖に関しちゃ、お前が偉そうに言えることでもないしな」
「……げ、隊長」
そんな二人に歩み寄ったのは、ディバーナ・ナイトの隊長であるレインハルト＝シュナイダーだ。
そしてここはもちろんナイトの詰め所。
午前中にアオイの授業を終えたティースは、午後から志願してナイトの面々とともに稽古を行っていたのである。
歩み寄ったレイは相変わらずのラフな服装にどことなく投げやりな態度で、パーシヴァルに言い放った。
「今のにしたって初撃をしっかり受けてりゃ、あそこまで追いつめられてない話さ。……ま、それで窮地に陥るのは俺じゃないから別

にいいがな」
「うぅ……すんません」
「……」
飄々とした態度の割に、彼の指導はだいたい的確だ。ただそれは、教えることに秀でているというよりも、観察力、洞察力の高さが表れているということだろう。
さらに、その言葉が今度はティースへと向けられる。
「お前はちょっとばかし自分の感覚に頼りすぎかもしれんな」
「え？」
レイは自分のこめかみ辺りをチョンチョンと叩いて、
「もっと頭を使えってことさ。相手がこう動いたから、こう返す。相手が怯んだから踏み込む、ってんじゃ後手に回りすぎる。……それもこいつみたいなアホが相手なら構わんが――」
「げ。隊長、それはちょっとひどくないっすか……」
だが、パーシヴァルの抗議はまるで無視されて、
「俺ならそれを利用して、逆にお前の動きをコントロールできる。そうして先回りすることができる。……だから、どんな状況でも、どんな窮地でも常に考えるクセを身につけた方がいい」
「戦いながら、考える……？」
「ああ。……駆け出しに特に多いんだがな。ロクに考えもしないで、簡単に捨て身とか投げやりになったり、あるいは渾身の一撃、最後の一撃とか勝手に決めつけて戦おうとする。頭のいいヤツってのは、そういう連中がどのタイミングで思考を放棄するか知っていて、そいつが罠にかかるのを待ってるもんなのさ」
「あ、頭を使う、か……」
少し情けない顔になるティース。……あまり勉学に通じてない彼にとって、頭を使うという行為はどこか苦手意識があった。
レイは少し手を広げて、
「ま、自分の感覚の方がずっと大事と主張する連中も多いがな。ウチじゃアクアなんてのがその典型だが……あいつの場合は自分の感

覚というより“野生の勘”だ。真似しようとは考えない方がいい」
「野生の勘……」
ティースはアクアの顔を頭に思い描き、吹き出しそうになるのをどうにか堪えた。
「……あーあ、隊長。そんなことが耳に入ったら、あの人また怒りますよ」
「拗ねた女の御機嫌を取るのも男の仕事、だろ？」
軽く戯けるレイに、パーシヴァルは不満顔で反論した。
「んなこと言って、隊長、いつも面倒になったら俺の方に丸投げじゃないっすか！　俺がそれで何度酷い目にあったか――」
「社会勉強だと思っときゃいいさ。あいつほど扱いやすい女はそういないし、練習台にはもってこいだ。……もっとも」
と、レイはからかうような薄い笑みを浮かべた。
「あまりデレデレしてると、肝心の本命に逃げられちまうかもしれんがな」
「な……」
パーシヴァルの顔が真っ赤になる。
「な、なに言ってんすか！　俺は硬派なんです！　デレデレとか本命とか、そんなもんは一切ないっすよ！」
わめき立てるように抗議するパーシヴァル。それだけで動揺しているのがバレバレである。
（……ああ、こういうことか）
ティースはなんとなく、レイの言う“コントロール”の実例を目の当たりにした気分だった。
（でも、なんだろ、本命って。パースにもやっぱ好きな子がいたりするのかな）
いまいちそういったことに疎いティースであったが、全く興味がないわけでもなかった。
「ま、そういうことにしとこう。……で、続きだが」
散々パーシヴァルをからかった末、レイは自分から話題を戻して、

「頭と勘、どっちが本当に大事かなんて議論はナンセンスだがな。両方備えているに越したことはないし、天性の勘ってやつはやろうと思って備わるもんでもないが、戦略ってのは知恵と経験で身につけられるもんだ。やって損はない」

「う。が、頑張ってみます」

（……でも俺って、きっとレイさんよりはパースの方のタイプだろうなぁ）

思わず苦笑するティース。それは彼の謙遜などではなく、おそらくは限りなく真実に近い実感であった。が、そういった自分の弱さを自覚している辺りは、彼の良いところともいえる。

そんな心情を見抜いたのか、レイは再びからかうような表情になって、

「ま、頭のいい男は女の扱いも上手いもんだからな。あの王女様にいいように振り回されてるお前にゃ、ちょっと難しい話か」

「……」

反論できる言葉があろうはずもなく。

と、そんなところへ、

「ティース」

「え？」

「……おや」

突然の来訪者。

真っ先にその気配に気付いたレイが振り返って、そして少し大仰に驚いて見せた。

「珍しいじゃないか。何年振りだ？」

そんな皮肉な笑みの先。

「なぁ、アルファ」

そこにあったのは、銀色の髪に蒼の瞳。相変わらずの凍り付くような雪の仮面に、まるでアンバランスなハートマーク付きのセーターとマフラー。その手に携えるのは、光の力を込められた神槍“誘蛾灯”。

アルファ＝クールラント。
ディバーナ・ロウ、第四のデビルバスターにして、世代最強を意味する“サン・サラス”の称号を持つ“公称”十七歳の青年であり、どう考えても不自然なことだが、現在はティースの部下に当たる人物だった。
「一年は経ってない」
特に面白くもなさそうに、いや、それどころか何も感じてすらいない表情でそう答え、アルファはそのままティースへと視線を向けた。
「ファナが呼んでる。任務だ」
「え、あ、ああ、わかった」
「やれやれ、相変わらずせっかちなことだ。たまには、ゆっくりしていってみないか？」
「ゆっくり？」
まるで凍り付いたままの表情の、その瞳の奥にだけ、ほんの僅かに訝しげな色が浮かぶ。
「こんな場所でも、茶ぐらいは出せるがな」
「水分なら補給したばかりだ。今、他に必要としているものはない」
「……なるほど。それじゃ仕方ない」
少々戯けた調子で、レイはお手上げとばかりに両手を広げてみせた。
（ああ、やっぱりレイさんでも同じなのか……）
それはそうであろう。何しろ、この兄のことをあれだけ慕っている妹のセシルに対しての態度さえ――少なくとも外から見る限りは、まるで変化がないのだから。
（なのに……そんな人のことを、俺がどうこうできるわけないじゃないか）
それでもセシルは彼のことを優しいと言い張る。仲良くして欲しいと懇願する。
ファナはそんな彼に対し、信じていると言う。

セシル。
そしてファナ。
「はぁぁぁぁ……」
そんな二人分の期待を否応なしに思い出させられ、ティースは今すぐにでも逃げ出したい気分になってしまうのであった。

その2『接近、第一射』

（うはぁ……）

なんの変哲もない田舎村。いや、なんの変哲もないと言ってしまうと語弊があるか。

ネービスのすぐ南にあるルナジェール。

その南西の国境付近にあるスタークホルム。

南東の国境付近にあるベルン。

その三つの大都市を結ぶ街道を三角形に見立てると、その重心に位置する地域はかなり交通の便が悪い山岳地帯であり、ネービスでもっとも開発の遅れている地域の一つだ。

そんな地域の山奥深くにポツンと位置する名も無き村が今回の仕事場である。

馬の走ることができない険しい山道を大きく迂回しながら進み、道案内がなければ迷ってしまいそうな獣道を辿って、野宿を一度挟み丸一日とちょっと。

陸の孤島と言っても過言ではないようなその村は、外よりも一回りほど文化レベルが遅れているような、そんな印象の場所だった。

とはいえ。

ティースが先ほど感嘆の声を漏らしてしまったのは、実を言うとそれが直接の原因というわけではない。

（……この規模の村にデビルバスターが四人って、すごい光景だなぁ）

と、いうことなのである。

そこは村長とおぼしき人物の家。都会で見られるような、魔界の植物を利用した暖房や照明器具などは一切見当たらず、ソファのようなものもない。木造の堅い椅子にかろうじて敷物をかぶせたような椅子が一、二……合計六つ。

一つは村長と思われる初老の人の良さそうな男性が腰かけており、

皺だらけの頬を緩めてニコニコとしている。
二つ目、三つ目はそれぞれティースとアルファのものだ。
そして残りの三つ。
「では改めて……」
一人目は細身の男。年齢は二十代の半ばぐらいだろう。
「私はジン＝ファウスト、このネービス出身のデビルバスターだ。今回はご期待に応えられるよう、尽力させてもらう」
やや病的に痩けた頬と鋭い眼光が少々とっつきにくい印象だが、口調は比較的穏やかで丁寧。今は外しているが、鉄製の額当てと口元を覆う黒いマスクを備えている。一見軽装で丸腰に見えるが、よくよく観察すると、服の下に何やら色々なものを隠し持っているらしいことがわかった。
そして右手にだけ填めている黒い手袋。
（なんで右手だけなんだろう……？）
ティースはそこに妙な違和感を覚えたが、もちろん今はそれを問い質す場ではない。
次に、その隣。
「私はマリアヴェル。マリアヴェル＝ソーヴレー」
（……うわ）
次の女性が口を開いた瞬間、ティースは背筋が軽く震えるのを感じた。
（綺麗な声だ……）
とはいえ、艶っぽいというのとは全然違う。
透き通った、それでいて心が震える響き。極端な物言いを承知の上で表現するならば“神秘的”と言おうか。もしもその声で歌ったならば、さぞ多くの者を虜にするであろうと思われた。
が、もちろん彼女は歌姫などではない。
「デビルバスターとしての経験は浅い方、かな。でも、少しでもあなたたちの力になれれば、と、思う」
ちりん、ちりん……

彼女が身につけている“振り袖”型の衣装は、他文化が集まるこのネービスでさえ滅多に見掛けることはない。長い髪を九つに分けるという変わった髪型で、髪の先を小さな鈴のついた紐で縛っている。声、少々独特な間を持つ口調、姿格好……とにかく全てが“神秘”を連想させる女性だった。

年齢はやはり二十歳を少し過ぎたぐらいだろうか。後ろに立てかけてある身長よりも長い棒のようなものが、どうやら彼女の武器らしい。

そして、最後の一人。

「おっと。オイラが最後でぃすかね？」

これまた前述の二名とはかけ離れた雰囲気の男。おそらく他の二名よりは年下、二十歳前後といったところか。

「はい！　みなさん注目、ちゅうも～く！」

パンパン！

室内にも関わらずテンガロンハットのような背の高い帽子をかぶったまま、手を叩いた青年は急に歌い出した。

「せ～いぎを胸に、悪を～誅し～弱きを助け、強きを～挫く～♪

で～んこうせ～っかのデビルバ～スタ～……オ～レは～オ～レは～つ～よくて～……あー、え～っと……」

ちょっと考えた様子で、

「……る～るるる～……セ～レナス～カンファ～イス～♪」

（ご、誤魔化した……）

パンパン。

不審そうな視線を一身に集めながらも気にした様子はなく、再び手を叩き、それからまるで道化のようなわざとらしい一礼をして、

「ってなわけで。オイラはセレナス＝カンファイス。みなさん、どぞよろしく～♪」

最後はやはり歌っぽくなった。……が、しかし、かなりの音痴であるということはキチンと付け足しておこう。

ジーンズと白のシャツに袖のない茶色のジャケット。身長は百七

十センチあるかないかで、目はかなり細く、唇には小さなピアス。どことなく狐を思わせる風貌だが、陽気な物言いのとおり人当たりは良さそうだった。

武器は腰にぶら下げた、先が三つに分かれた奇妙な形のレイピア（？）だろうか。

「ふふ……面白い人」

マリアヴェルがそう言って微笑むと、セレナスは眼球が隠れてしまうほどに破顔して、

「どもども、お美しい方。お褒めの言葉があれば、オイラのやる気も無尽蔵に湧いてこようというものさね」

「……さて」

そこに口を挟んだジン＝ファウスト。

「それでは、詳しい話に入っていただこうか」

外から聞こえてくる少年少女の遊ぶ声。

まだ日は空の中間辺り。

村長から話を聞くには、まだまだ充分すぎるほどの時間があった。

「しかしこんな小さな村にデビルバスターが四人とはなぁ……ん～～～っと……」

外に出たティースが大きく伸びをする頃には、太陽はやや西に傾きかけていた。

日が沈むまでにもうしばらくの猶予はあるものの、これから行動するには少々遅い。万全を期すため、本格的な行動は明日からということで全員の意見が一致したところだった。

四月にしては暖かな陽気。一人一人に別々に割り当てられた借家に行く前に、村の地理を把握する意味でもブラブラと歩き回ることに決めて、ティースは足を踏み出していた。

こうして歩くとわかるが、本当に小規模な村だ。山中を切り開くように作られており、畑がある分広さ自体はそれなりだが、人口はおそらく二桁、それも五十人未満で収まるに違いない。子供も極端

に少なく、村長の家を出たときに見掛けた三、四人の集団がおそらく唯一。家の中に赤ん坊などがいると考えてたとしても、一桁の年齢の子供はおそらく十人未満か。

こんな村に、よく三人もデビルバスターを雇う金があったものだと、ティースは変な感心をしてしまう。あるいは何らかの特産品があるのだろうか。でなければ、こんな不便な場所にいつまでも人が住んでいることもないだろう。

（壊れた家や荒れた畑は……多分、大規模な獣魔の襲撃があったからなんだろうな）

その爪跡はそこかしこに見受けられた。視界に入る家は半数くらいが何らかの被害を受けている。もし人が全く歩いていなければ、廃墟にすら見えたかもしれない。

そのまましばらく歩いて一回りした後、だだっ広い草むらを見つけて腰を下ろす。そのままゴロンと寝転がると、そよ風が微かに前髪を揺らした。

青空を泳ぐ薄い雲。

肌を撫でる涼しい春風。

鼻孔をくすぐる草の匂い。

（あー、気持ちいい……）

一瞬だけ仕事であることも忘れ、心地よい自然の空気を満喫する。

と、

「ん？」

ふと鼻孔をくすぐったのは、青々した草の香りとは異なる芳香。

「あれ？」

不思議に思って周りを見回しても、辺りは一面の緑で花らしきものは一輪たりとも生えていない。

が、

「あ、これか」

思い出したのは、彼自身の胸に入っていた小さな袋。手の平の半分ぐらいのサイズの小袋だが、鼻先に近づけると気分の落ち着く和

やかな香りを発している。
それは数日前の何の変哲もないあの朝に、セシルからもらったプレゼントだった。
「これ、なんだか、あの子そのもの、って感じの香りだよなぁ」
そんな彼の発言は一歩間違えればセクハラとも捉えられかねないが、まあ誰が聞いているわけでもないし、言ってる本人も何も考えていないのだから問題はあるまい。
「あぁ、それにしても気持ちいい……」
と、そうしているうちにウトウトしてきたようだ。
もしそのまま五分も経っていたら、彼の上下の瞼がランデブー状態に陥るまでそう時間はかからなかっただろう。
が、
「こんにちは、お寝坊な剣士さん。こんなところで寝ると風邪ひくよ」
「え？」
びっくりして起き上がる。さらに辺りを見渡すと、
「まぁ、いいんじゃね？　寝る子は育つってよく言うさ～♪」
西に傾きかけた太陽を逆光にして一組の男女が立っていた。
「あ、セ、セレナスさんに……マリアヴェ――いたっ！」
悲鳴とともに口を押さえるティース。
どうやら舌を噛んでしまったようだ。
「マ、マリアヴェルさん……」
少し涙目で舌を出しながら言ったティースに、マリアヴェルはクスッと微笑んで、
「マリア。マリアでも構わないよ。私の名前、少し呼びづらいでしょう？」
身に纏う神秘的な印象から厳格そうにも見える彼女だったが、見た目よりはかなり気安い口調。言葉の端々からは和やかな優しい雰囲気が滲み出ており、思った以上に取っつきやすそうだった。
そのことにティースは舌の痛みも忘れてほんの少し胸をなで下ろ

し、
「マリアさん、ですね。……あ、それじゃあ俺のこともティースでお願いします」
「ティース？　ティースさん、か。なるほど、確かにその方が呼びやすい、ね」
　琴を奏でるような声でマリアヴェルはもう一度微笑んだ。
　そこへセレナスが口を挟む。
「ほんじゃま、ティースくん。オイラのこともセレナス、で、いっちょよろしく」
「あ、はい――って、そのまんまじゃ……？」
「ああ、ダメダメ！　突っ込みはもっとこう、自信を持ってやらな！」
「え、あ、はぁ」
　こっちはほぼ見た目通りだった。
「あの、ところで、どうしたんですか？　お二人揃って」
　改めて、ティースは二人にそう問いかけた。
「うん？」
　マリアヴェルは不思議そうにセレナスを見てから、少し考えて、
「なんとなく、かな。彼と会ったのもついさっき」
「オイラも似たようなもんさ。……誰も彼もが～似たもの同士～オ～イェィ～♪」
　そのまま草むらの上にどかっと座り込むと、背の高いテンガロンハットを深くかぶり直すと、
「ま、そんな理由なんてどうでもいいさね。オイラたちがこうして偶然出逢えたのも何かの縁。ここらでちょっくら世間話でもしようじゃないの」
「え……世間話、ですか？」
　唐突な申し出にティースが戸惑うと、
「そうさぁ。ティースくんはデビルバスター志望っしょ？　先輩の話は色々聞いといた方が、後々絶対役に立つさぁ。どうさ、マリア

さん？」
　その言葉に、少し考えるような仕草を見せたマリアヴェル。
　ちりん、と、鈴が風に揺れる。
「ティースさんが望むならいいんじゃないかな。私の話が役立つかどうかはわからないけど、ね」
「あ、いえ、そんなこと！」
　思わぬことではあったが、それは確かに彼にとっても望ましいことであった。
「んじゃま、そういうことで。……あ、そういやティースくん、連れの女性はどうしたんだぃ？」
「え？　あ、アルファのことですか？」
　セシルの兄であり、戸籍上ももちろん男性であるはずのアルファは、しかしどこからどう見ても女性にしか見えない容貌をしている。……もっとも、見た目が不自然なのか、それとも戸籍が偽りであるかは、かなり微妙で五分五分といったところであるが。
　もちろんティースも、わざわざ彼（彼女？）が一応男性であると説明するようなことはない。
　と、
「あの人はデビルバスターを名乗っていた、ね。――アルファ＝クールラント」
　何事か思い出した様子のマリアヴェルは口元に手を当て、少し考えながら言った。
「私の記憶が確かなら、確か三年前のサン・サラスが同じ名前だった、かな」
「えぇ！？」
　セレナスはビックリした顔をティースに向けて、
「ティースくん、それ、マジかぃ？」
「あ、はい。俺も同じ話を聞いてます」
「へぇぇ。……おっとぉ」
　風が吹いて、彼のテンガロンハットが少しだけ煽られる。セレナ

スはそれを右手で押さえつつ、その帽子の奥から興味深そうな視線を向けて、
「そういうこっちゃぁ、後輩だからってあんま馬鹿にゃできんねぇ～」
「セレナスさんって、デビルバスターになってどのぐらいなんですか？」
今度は逆にティースがそう質問すると、
「ん？　オイラはそのアルファさんの一年前さ。ちょうど丸四年ってとこかね」
「へぇ。マリアさんは？」
「うん？　そうだね。私はちょうど七年になるかな」
「ほぇ？」
それに対し、再びビックリ顔をしたのはセレナスだ。
「七年？　ってこたぁ、あんた試験通ったの十代半ばかぃ？　……うはぁ、ほんじゃオイラの三つも先輩……これまたお見それしましたわ」
そう言って、やはり大仰に深々と頭を下げる。
マリアヴェルは可笑しそうに小さく笑って、
「ふふ、でも彼――ジン＝ファウストほどじゃないよ」
「そらそうだけど。あの人と比べる方がおかしいさ」
「え？　あの人、有名な人なんですか？」
無知をさらけ出すようで少し気が引けたものの、ティースは素直にそんな疑問を口にしてみた。
すると、セレナスはちょっと首をかしげながら、
「ん？　ああ、まぁ一般的にはそこまで知名度高いわけじゃないさね。けど、下手なベテランより確実で信頼できる腕の持ち主と言われてる」
「へぇ……」
ジンの姿を思い出す。
鋭い眼光。

厚みのある存在感。
それはおそらく確かな実力と経験、あとはある程度完成された人格に依るものなのだろう。確かにティースも、セレナスの言葉に納得できるだけのものを感じた。
「私も少し聞いていい、かな？」
「……」
「ティースさん？」
「へ？　……あ、俺ですか！？　す、すいません、ボーっとしてました！」
「ふふ、謝らなくてもいいよ」
マリアヴェルは特に気分を害した様子もなく、逆に優しげに微笑むと、
「ティースさんはきっと優しい人なんだろうね。顔にも、言葉にも、それが面白いぐらいよく出てる。……なのに」
「？」
鈴が微かな音色を奏で、そして彼女は唐突に問いかけた。
「あなたは、どうしてデビルバスターになろうなんて思ったの？」
「え？」
不思議そうに見つめ返したティースに、マリアヴェルは視線を少し横に流した。
その先を、何度か見掛けた子供の集団が楽しそうに元気良く駆け抜けていく。
彼女はそんな光景をどこか懐かしそうに眺め、
「戦うことが好きそうには見えない。だったら戦う必要なんてないでしょう？」
「え……」
そんなマリアヴェルの様子に若干の戸惑いを覚えたティースだったが、少し表情を引き締めて逆に問いかけた。
「じゃあ、マリアさんは戦うことが好きなんですか？」
「多分……ね」

「多分？」
「だって、現実に私は戦っている。本当は戦う必要なんてないのに」
「でも、こうして人助けをしてるじゃないですか」
「人助け？　ふふ、そう見える？」
マリアヴェルはゆっくりと視線を戻した。
その口元に浮かんだのは、どこか淋しげな笑み。……その陰にうっすら透けて見える葛藤の跡は、過去のものか、あるいは現在になお続く傷跡か。
「目的がどうであろうと、戦いで生まれた遺恨はさらに罪のない人も巻き込んで広がっていくもの。戦うことが正しいだなんて、どんな理由を付けようと、そんなのただの言い訳でしかないよ」
「……」
平然とした物言いの中に潜む“何か”を感じ、ティースは口を閉ざした。
それぞれに、それぞれの事情がある。
それは当たり前のことで、まして彼らのようなデビルバスターの世界は決して生ぬるいものではない。常に危険と隣り合わせに生き、数多くの絶望を見せつけられ、こうして穏やかな笑顔を見せている彼女であっても、これまでいくつもの死線をくぐり抜けてきているはずだ。
たった今の発言もそのいくつかの経験から産み出された、少なからずある種の真実さえも含んだものなのだろう。
（でも……）
彼の価値観からすると、その考えは決して受け入れられるものではない。
考えた末、ティースは答えた。
「俺、未熟だし頭も良くないから、そんな難しく考えたことないですけど……でも、たとえば目の前にある命が戦うことで守れるとするなら、好きとか嫌いとか、理由とか言い訳とか、そんなこと考えたりせずに戦ったりするんじゃないですか？」

「……」

マリアヴェルは一瞬だけ考えるように目を閉じたが、

「でも、あなたを愛する幾人かの人は、きっとあなたが戦うことを嫌う。……あなたが戦い、あなたが苦しむことで周りの人が一緒に傷つくとしても、それでもあなたは戦い続ける？」

「え？」

即答できずに、目を見開くティース。

それは少しだけ意表を突かれる問いかけだった。

（俺が苦しむことで、周りの人が……？）

彼が戦わんとする理由は、シーラが魔にさらわれた事件を発端とし、サイラスという青年やナナンという少女の死、ザヴィアという名の悪――タナトスという組織との出会い、リィナやエルレーンとの再会、ゲノールトでの一件を経て確固たるものとなった。

それはつまり――その対象が人であろうと魔であろうと――理不尽に奪われる罪のない命を救い、そんな命を奪わんとする“悪”を討ちたい……という、子供でも容易に理解できるほど単純で、そして単純であるが故に強固なもの。

だが、しかし。

ご承知の通り、このティースという男は基本的に一途であり、悪く言えば一面的な人間である。しかも周りにはそれなりに気を遣う性格のくせに、自分自身のことについては驚くほどに疎い。

だから、たった今マリアヴェルに言われたようなこと――つまり、周りが彼自身に対して持つ感情に関しては、それほど深く考えたこともなかったのだ。

（……周りの人、か）

だが、考えた末にティースはきっぱりと答えた。

「それでも……きっと、俺は戦います」

「……そう」

マリアヴェルの瞳がまるで失望するかのようにその色を薄くし、そしてゆっくりと閉じられた。

だが、
「でもその上で、理解してもらえたら嬉しいと思います」
「？」
視線が再び向けられる。
少し緊張しながら、ティースは言葉を続けた。
「俺は戦うのが好きで戦ってるんじゃない。守るべきものを、放っておけば無惨に奪われてしまう命を、たとえ一人でもいいから守るために戦っているんだ、って。そう理解してくれて、応援してくれるならすごく心強いし、苦しいことも乗り越えられるんじゃないかなって」
「……」
ほんの少しだけ見開かれたマリアヴェルの瞳が、再び色を纏い、それからまるで遠くを見つめるように細められる。
そしてゆっくりと、問いかけた。
「それは誰かの言葉？　それとも――」
ティースはハッと我に返って、
「あ……すみません、偉そうなこと言って。……その、俺、思ったことを何も考えずに言っちゃう癖があって――」
「謝らなくてもいいよ。……そう。あなた自身の言葉なんだ、ね」
マリアヴェルはそう言って考え込むように黙った。
何か思うところがあったのだろう。
そんな彼女にティースは思わず、
「……マリアさん？　どうしてそんな質問を？」
マリアヴェルは少し考えて答えた。
「なんとなく、ね」
「……」
風が吹いて、鈴が微かに振動する。
ティースはしばらくそんな彼女を見つめていたが……やがて、それ以上突っ込むことはできないと判断し、会話の矛先を変えることにした。

「そうだ。そうじゃセレナスさんはどうしてデビルバスターに――」
そう言いながら振り返ったティースは、驚きに言葉を止め、目を丸くする。
「うう、ぐすっ……」
「……ど、どうしたんですか、セレナスさん？」
唖然とするティースに、セレナスは目元をゴシゴシと擦って、
「これが泣けずにいられるかぃ……あの表情を見りゃわかる。きっとマリアさんの過去にゃとんでもなく辛い出来事があったに違いないさ」
「は、はぁ」
その予測を否定するつもりはなかったが、さすがのティースもその想像だけで泣くまでには至らない。
このティースですら、だ。
しかしセレナスは帽子をグッと押さえて目線を隠し、指を鳴らしてリズムを取り始めると、
「……君が～ど～れだけ泣いて～ても～無力な僕には～なにもできなぁい～♪　あぁぁ～泣かな～いで～僕のマイハニィィ～♪」
「……」
頭がクラクラした。
「あぁ、夕日が目にしみるさ……」
「はぁ……」
とりあえず放っておくことにして、ティースは仕方なく視線を遠くに向けることにした。
すると、
（……？　あれは――）
視界の奥。小さな畑を二つほど挟んだ先に、見覚えのあるシルエットを見つける。
（――ジンさん？）
ティースのいる場所からでは顔の詳細まで確認はできなかったが、遠くの原っぱに見えるシルエットは服装からしてジン＝ファウスト

で間違いなさそうだった。
そしてそんな彼の周囲に、先ほどティースの視線の先を駆け抜けていった子供たちが集まっているのがわかる。
「……へぇ」
その光景に、ティースは思わず声を漏らした。
「？　どうしたの？」
「え？　あ、いえ」
声を聞きつけたマリアヴェルの問いにティースは答えて、
「ジンさんってああいうことする人なんだな、って」
「……あー」
ティースの指した先を眺め、ようやく涙を拭ったセレナスが答えて、
「子供好きって噂は聞いたことあったけど、ホントだったんかな」
「子供好き？」
「あの人、稼ぎの大半は故郷の貧しい子供たちを養うために使ってるらしいさ。あくまで噂だけども、こうして見る限りはあながち嘘とも言い切れんかね」
「……へぇ」
ティースは感心した。と同時に、彼に対する興味も増してくる。
（見た目ほど無愛想な人じゃないのかも。……今度、声をかけてみようかな）
そんなことを思いながら、なんとなしに赤味を帯び始めた空を見上げてみた。
――心配事など何もない。
ティースはそのとき、そんな風にすら考えていた。
下級の獣魔を相手にする任務の内容からして。頼もしいデビルバスターが四人もいる現状からして。心配するどころか、自分の仕事があるかどうかすら怪しいのではないか、楽な任務だなと感じたのも、ある意味では当然のことだろう。
だがしかし、それはもちろん大きな間違いであり。

彼がそのことに気付くのは、これから十数時間ほど後のことであった。

――はっ、はっ、はっ、はっ。

駆ける、駆ける、駆ける。

風を切る、黒い影。

夜空が急迫し、生ぬるい空気はまるで手足を捕らえんと蠢く。

その正体は幻。

だが、わかってはいても、恐怖からは逃れられない。それがたとえ歴戦の強者であったとしても、明確なる死の感触にはそう容易く抗えるものではないのだ。

しかもそれが、まったく予期せぬ、唐突に訪れたものであるなら、なおのこと。

――はっ、はっ、はっ、はっ！

肺が焼け付くほどの荒い呼吸。

心臓が壊れるほどに脈打つ。

闇が、迫る。

狩猟者はいつも用意周到だ。

巧妙に準備され、巧妙に隠された罠。

眼前に広がる逃げ道すらも、罠でしかない。彼らは逃げ道をわざと与えた上で、少しずつ追い込んでいく。

一旦捕らわれた獣が逃げ出すことは容易ではない。

ならば、ならば、どうする？

一瞬の躊躇を挟んだ後、ようやく死を覚悟したその思考は、せめて狩猟者に一矢を報いようと、その思惑を打ち砕いてやろうと、反逆の意志を固める。

遠吠えを上げ、他の者にその危機を知らせること。……それこそが、命の残り少ない自らに課せられた最後の使命、残された最後の矜持であり、それをもって悔いのない終焉を迎えよう、と。

……だが、しかし。

聞こえたのは、そんなその心を見透かしたかのような――声。

それは窮地を救わんとする仲間の声。

――微かな希望が産まれる。

それは生き延びることへの希望。

事実この世に生きている限り、死の恐怖による呪縛を容易に逃れる術などはなく、生への欲望を断ち切ることもまた、容易ではない。

そうして産まれた希望は、せっかく産まれた覚悟の輪郭を曖昧にし、微かな安堵は緊張の糸を寸断して正常な思考力を奪った。

そして――

「っ！？」

ごぽっ……

それすらも罠であったことに気付いたとき、致命的な一撃は、その喉元に風穴を開けていたのだ。

錆びた鉄のような、死の匂い。

「ひひひ……ひひひひひ……」

光が、風が、重力が、天と地が、その意味を失う。

「ひひひひ……ひひひひひひ……」

「ヒヒ……ヒヒヒヒヒヒ……」

「へ……へへへへへ……」

どさ。

笑い声。

ギラギラと脂ぎった瞳。

「ひひひひひ……ひひひひひひひひ……」

「ヒヒヒ……ヒヒヒヒヒヒヒヒ……」
「へへ……へへへへへへ……」
不気味な笑い声は、いつまでも響き続けていた――

翌日の朝は昨日と比べると少々パッとしない天気だった。
太陽は薄く灰色に染まった一面の薄雲に姿を隠し、空気は湿り気を帯びている。雨こそ降ってはこないものの、風は少し冷たい。
「うぅ～、つめた」
外の井戸水で顔を洗うと、折から吹いた風が肌をピリピリと刺激する。
思いっきり伸びをして息を吸い込むと、
「っ、はぁ～」
村はまだ静かだ。
農業に従事する者ならばとっくに動き始めているはずの時間だったが、村人はまだほとんど外に出てきていない。なんとものんびりした人々である。
（さて、と）
ゆっくりと足を踏み出したティース。
向かう先は村の中心部。
村の建物は基本的に全て造りが小さいため、ティースたちにはそれぞれに一軒ずつ無人の借宿が与えられていた。が、少々不便なことにお互いの宿が離れているのである。
のんびりとした歩調で歩く。
ふと空を見上げると、鴉が中空を旋回していた。
（……なんか、昨日と雰囲気違うなぁ）
村の空気に、ティースはそんなことを感じていた。

天気のせいだろうか、昨日までの長閑な雰囲気は急に影を潜めており、冷たい風が埃っぽい空気を運んでくる。
昨日見掛けた子供たちの姿も今朝は見えない。
（悪いことの前触れじゃなきゃいいけど……）
そして五分弱。
彼が辿り着いた先はアルファの借りている家だった。
「おーい、アルファー。起きてるんだろー？」
と、ひとまず声をかけてみるものの、返事がないのはいつものこと。
（……はぁ）
起きているのは間違いなかった。……というより、ティースは彼が寝ているところを一度も見たことがない。寝姿を見られるのがよっぽど嫌なのか、あるいは寝ていてもすぐに目覚める体質なのか、ティースが訪れるときにはいつも必ず起きていて、それなりに身支度も済ませているのである。
（あのセーターのまま寝てるってことはないと思うけど……）
「入るぞー」
どうせ返事がないのもわかっているので、声をかけると同時に扉を開ける。
「……ったく。返事くらいしてくれたっていいじゃな――」
首を振りながら室内に踏み込んだティースの言葉が、ピタリと止まった。
眉をひそめる。
入った途端に感じたのは、どことなくいつもと違う雰囲気。
室内はまだ薄暗い。
中で動くものは何もない。……いや、あのアルファという人物は居たとしても身動き一つしないこともあるのだが、しかし。
「！？」
何気なくベッドの上に目を向けたティースの視界に、驚くべき光景が飛び込んできた。

「……うわぁぁァァァッ！」

まるでこの世のものとは思えないような悲鳴が空気を切り裂く。

その、薄暗いベッドの上。

そこにあったのは、見るも無惨な惨殺死体。あの無類の強さを誇り、魔の攻撃など寄せ付けることすらなかった、あのアルファ＝クールラントの変わり果てた姿――……だったとすれば、その悲鳴と慌てぶりも充分に納得できるというものだ。

が、実際のところはそうではない。

いや、それどころか、そのときの状況を単純に描写したならば、何故彼がそんなに慌て、弾かれるように家から飛び出してきたのか全く理解できない者さえ出てくるだろう。

何故ならその状況とは、

『ある朝、隊長（臨時）である男が、部下である男の借宿に入ったところ、部下の男は起きたばかりで着替え中であった』

という、ただそれだけのことだったのだから。

言うまでもなくティースは男性であり、アルファ＝クールラントもまた男性だ。これが故意であり、かつ加害者側に男色の気でもあったというのならいざ知らず、ティースはそういうことに関しては至極平凡な嗜好の持ち主であり、もちろん今回の出来事は純粋な事故でもある。

しかし、だ。

ご存じの通り、このアルファはそういう点で言うと少々、いや、かなり“疑わしい”人物だった。

――数秒の間があって。

「ティース」

「……お、おはよう、アルファ。け、今朝はお寝坊だったんだな……」

尻餅をついたまま出迎えたティースは額と背中に冷や汗を掻き、平然を装おうとしていながら、まったく動揺を隠しきれていない口調だった。

それに対するアルファの方はといえば……特にいつもと変わらない。ハートマークのついたセーターとマフラー、手には愛用の神槍“誘蛾灯”。まるで雪女のような冷たい表情もいつもどおり。

違うといえば、いつもならばそのまま何も言わずに通り過ぎていくところを、しばらく無言でティースを見つめていたということぐらいで――

「ううう……」

そのとき彼が感じたプレッシャーは、妄想か、あるいは現実か。

「あ、い、いや、驚かせて悪い。でも、着替えてるなら返事をしてくれれば……」

「……」

一ミリたりとも反応無し。

（き、気まずい……）

男性であるなら気にすることなど何もない。女性だったならば、彼だってあれほど無造作にドアを開けたりはしなかっただろう。

が、そのどちらでもない、ということがティースにとって不幸だった。

と言っても、もちろんオカマだったりニューハーフだったりするわけではなく、彼は公式的には正真正銘の男性。が、容貌を例えて“雪女”などと言われることからわかるように、その外見があまりにも“女性すぎる”のである。

その真偽は、今のところ誰も――ファナですらも知らないらしいのだが、今日この日、ティースは望みもしないところで、その真実にほんの一歩だけ近づいてしまった、というわけであった。

「で、でもほら！　背中向けてたし、薄暗かったし、俺もすぐ出ていったし、ほとんど何も見えなかったっていうか！」

そう。

だからあくまでほんの一歩であり、確定的な何かを目撃したわけではない。……が、彼の網膜に焼き付いた白く細い肩と背中のラインは、その容貌と同じく、やはり女性としか思えないものだった。

「……」
アルファの表情は相変わらず動かない。何か考えているように見えて、何も考えていないようにも見える。そのままただ無表情に、尻餅をついたままのティースを見つめていた。
（……ううん、ど、どうしよう。思いっきり謝った方がいいのか……でも、本人が男だって言い張っている以上、謝るってのも変だし……）
葛藤が始まる。
こういうとき思い切って開き直れないのがこのティースという男の悪いところであり、そして美点でもあるのだが……
このときは幸い、葛藤の答えが出るまでもなく救いの手が差し伸べられた。
「……」
アルファが無言のまま、ティースに向けていた視線を上――正面へと向ける。
「？」
つられて振り返る。
と、そこにいたのは、
「お～とこ～なら～、強いて～敷いても～尻に敷かれるな～♪」
「あっ、セレナスさん！　……って、なんですか、その歌……」
相変わらず意味不明だったが、ティースの顔は何故か羞恥に赤くなる。……どうやらその意味するところを何となく感じ取ったらしい。
セレナスはテンガロンハットを押さえながら、親指をグッとティースに突きつけて、
「ま、人生色々あるさね、ティースくん。強く生きなきゃダメよ」
「……」
励ましているのか貶しているのかいまいちわからない態度だ。が、少なくとも悪気はないのだろう。
幸いアルファの意識も逸れたようだ。

ホッと息をつくティース。
ようやく地面から腰を上げ、泥をポンポンと払いながら、
「とにかく、おはようございます。……マリアさんとジンさんは？」
「いや、まださ。とりあえず一番寝坊しそうな君のところが先かと、ね」
「……俺、そんなに頼りなさそうに見えます？」
少し不満そうに抗議すると、セレナスはグッと拳を握りしめて、
「そぉおおりゃぁぁぁぁぁぁ、そぉおおおさぁぁぁぁぁ～べん、べべん♪」
異様に小節が効いていた。
ティースはため息をついて、
「……じゃ、いったんみんなで集まりましょうか」
振り返る。
「アルファ――」
が、しかし。
「――アルファ？　お、おい、どこ行く!?」
アルファはすでに歩き出していた。……ただし、ティースがこれから向かおうとしていた村の中心部とは逆方向に、である。
「お、おい、アルファ！」
慌ててその後を追いかけるティース。セレナスも怪訝な顔をしながらそれに続く。
空を、鴉が旋回している。
湿っぽい風が吹いた。
呼びかけに振り返りもしないアルファに、ティースはさらに声を張り上げて、
「アルファ！　アル――！」
「……おい、ティースくん」
「え？」
突如、重みを増したセレナスの声が重なる。
鴉の声。

鳴き声が多重奏を奏でた。
「何か様子がおかしいさ……」
カチャリ、と、腰の三つ又レイピアが音を立てた。
「え？　……！」
そしてティースもまた気付く。
「……」
アルファが立ち止まって見上げたのは、半壊した家の庭に立つ一本の大きな木だった。寒さに強い品種なのか、この時期にも関わらずその枝に緑色の葉をたくさん茂らせている。
もし今日が前日のように心地よい陽気の中であれば、あの木の根元にでも寝転がって、緑の匂いを胸一杯に吸い込みながら昼寝でもしたくなったことだろう。
しかし、この日はとてもそんな気にはなれる状況ではなかった。
何故なら――
「なんだ、あれ……」
響く、鳴き声。
その木には、緑の枝葉が真っ黒になって見えるほど大量の鴉が群がっていたのだ。
「なんで、あんなに鴉が……」
異様な光景に、ティースの胸にも薄暗い雲が広がり始める。
嫌な予感。
――予感？
いや、違う。それは希望的観測による錯覚であり、冷静に状況を把握するならば“確信”と表現するべきものだった。
鴉がそれだけ群がるにはもちろん理由がある。そういった光景を、ティースはこれまでに何度も目にしてきた。
いつも、圧倒的な負の空気が支配する場面で。
（馬鹿な……そんな馬鹿な！　いつの間に……！？）
ティースが抱いたその疑問は当然のものだ。
村を囲む森のそばには決して近付かないようにと、昨日村中に警

告したばかりだ。もちろん村人たちもそれを心得ていたはずだし、自ら森に近付こうとする、森に入ろうとする者などあるはずがない。

かといって、村の中にいた者が襲撃を受けたと考えることもまた難しい。だとすれば、滞在する四人ものデビルバスターが何も気付かないはずがなかろう。

とすると。

警告を無視して何者かが森に入ったのか。

あるいは外からやってきた何者かが犠牲になったか。

ドロドロしたものが胸を渦巻く。

何にせよ、誰かが犠牲になったことはほぼ間違いのないことであり――

（……くっ）

ただ、しかし。

そこまでは確信であったとしても、おそらく、その後に待ち受けていた光景は、この時点ではまったく予測していなかっただろう。

その場にいた三人の、誰一人として。

……バサバサッ！　バサバサバサッ！

アルファが近付くと、群がっていた鴉が一斉に飛び去っていく。

中には獲物を横取りするなと言わんばかりに威嚇する鴉もいたが、相手の実力を感じ取ったのか、最終的には全ての鴉がその場を飛び去っていった。

「……」

見上げるアルファの表情は微動だにしない。ただ一度、後ろからやってくるティースとセレナスを振り返り、そして躊躇うことなく逆手に持った“誘蛾灯”を振るった。

大木が振動する。

枝葉が不吉な音を奏でる。

そしてそこから――まるで実った果実がもげるように――いくつかの物体が落ちた。

「……っ」

思わず目を背けそうになったティースだったが、そこはグッと堪える。

……嘔吐を催すほどの死臭を辺りに漂わせる、果実。

それは予測した通り、元は人だったものの成れの果てだった。

そして――

「っ……！？」

「なっ……！」

セレナスとティースの口が同時に驚きを刻んだ。

アルファもまた、無表情ながらにその視線の動きを止める。

三人の目が、その“モノ”に釘付けになった。

あまりの驚愕に。

「ばっ、馬鹿な……！」

セレナスの声がわずかに上擦る。

その視線が見つめていたものは、鴉につつかれ、肋骨が剥き出しになるほど無惨な姿になった胴体。それとは別に、緑の絨毯の上に転がった首。眼球のない空洞の瞳。

そして、その額にかろうじてまとわりついていた、額当て。

それはその場にいる三人の、誰もに見覚えのある代物。

「ジン……ファウスト――」

「っ！？」

セレナスの呟きに、ティースの背中を言い知れぬ戦慄が駆け抜けた。

（まさか――そんな馬鹿な！！）

そんなはずはない、と、ティースの思考は反射的にそう考えた。

何故ならジン＝ファウストはデビルバスターであり、セレナスやマリアヴェルが認めるほどの実力者である。

そんな人物が、そうたやすくヤラれるはずがない。

それはある意味当然の思考であり、また大体において正しいともいえるだろう。

が、しかし。

辺りに散らばる苦無。
首と離れた胴体の右手に、見覚えのある黒い手袋。
ボロボロになった服装。
その全てが、セレナスの言葉を嫌というほどに肯定していて――
「っ……」
一瞬の思考停止。
だが、ティースは奥歯を噛みしめながら口を開いて、
「……セレナスさん！　急いでマリアさんと合流しましょう！」
そんな言葉が反射的に飛び出したのは、この一ヶ月の間に培われた“隊長”としての使命感故か。
「何があったのかわからないけど……でも、考えるのは後だッ！とにかく、早く！！」
「ああ。その方が良さそうさ……」
真顔のセレナスが同意すると、アルファもまた無言でそれに従った。
そしてすぐに駆け出す。
（……何が）
駆けながら、もう一度冷たい戦慄がティースの背中を突き抜けた。
――脳裏に焼き付いた、空洞の瞳。
鴉が、一際甲高い声を上げる。
切迫する、恐怖。
（一体何が起こったんですか……ジンさん……）
だが、物言わぬ屍がそんな心中の問いに答えるはずはなく――

その3『追い込み開始』

早朝、薄曇ったネービスの空を、一匹の鴉がまるで逃げるように忙しなく飛んでいった。

雨か。あるいは厄の前触れか。

とはいえ、

「あれれ？」

そんな空の下の一角にあるミューティレイクの人々にとっては、その日は特にいつもと変わらない朝。十数分ほど前、一階のホールでヴァレンシアという使用人の少女がちょっとした騒動を巻き起こした直後ではあったが、それを含めて“いつも通り”の朝なのであった。

さて、ここはそんなミューティレイクの別館にある執務室。そこには今、いつもの三人――すなわち、当主であるファナ＝ミューティレイクと二人の執事がいる。

「ね、ちょっとちょっと、アオイさん。これ――」

「ふわぁぁぁ……はぁ、なんれすかぁ……」

入り口付近に突っ立ったアオイは寝ぼけ眼を擦っていた。首が徐々に傾きかけてはハッと目を醒まし、十秒もしないうちに今度は逆の方向に傾いていく。

「……」

そんなアオイを一瞬で見限ったリディアは、視線を百八十度移動させて、

「ねぇねぇ、ファナさん」

「どうなさいました？」

リディアの机と直角に配された執務机のファナは、貴族の娘らしい優雅な装いを整え、その表情は起きたばかりの眠気など微塵も感じさせなかった。何度もアッチとコッチを行き来している頼りないボディガード兼執事の男性とは全く正反対である。

「……これ、アオイさんにも見習って欲しいなぁ」
「はい？」
「あ、ううん、独り言。……でさ。この影裏からの報告なんだけど。六十二番ね」
と、リディアは手にしていた紙切れ――ディバーナ・ロウ情報部隊“影裏”からの報告書をファナに示す。
それを見たファナは机の上に積まれた書類の束から、何の躊躇いもなく一枚の紙を選び出して、
「この、第四隊に関する報告書でしょうか？」
「うん、それそれ」
リディアはそう言いながらピラピラと紙を振って、
「ま、大したことじゃないんだけどさ。今回の作戦に協力してくれるデビルバスターがいるじゃない？　ジン＝ファウストって人と――」
「はい。このネービス領で活躍なさっておられるセレナス＝カンフアイスさんと、もう一人は普段、大陸の中央付近で活動されている方と聞き及びましたわ」
「そうそう。その、もう一人はどうも女の人らしいんだけど」
「まぁ。では、ティースさんは少々お困りかもしれませんわね」
ほんわかとした微笑みを浮かべるファナ。もちろんそれは、ティースが女性アレルギーであることを踏まえての言葉であった。
「うん。……でさ。今回の現場って山奥の村じゃない？　で、実はその女の人、山の麓の街でお供を連れていたらしいんだ」
「？」
それは別段変わったことでもなんでもなく、ファナが不思議そうな顔をしたのは当然だ。
が、もちろんリディアも、そんなことは百も承知のようで、
「大したことじゃないと思うんだけどね。報告にもついでみたいに書かれてただけだし」
そう前置きしてから、言った。

「なんかそのお供が、少し時間を置いてから後を追うように山に入っていったんだって。……ちょっと変だと思わない？　一緒に戦うつもりなら一緒に入っていけばいいんだし、戦わないならわざわざ危険な場所に入っていくことないでしょ？」

「……」

ファナはきょとんとした顔でリディアを見た。

それから一度、二度、三度と瞬きすると、ゆっくりと頷いて、

「それは確かに、少し不思議ですわ」

「でしょ？　……まあ、だからどうだってわけじゃないんだけどさ」

そう言って、六十二番の報告書を机の上に放るリディア。

確かに些細なことだ。その些細な矛盾に対する言い訳など、考えようと思えばいくらでも思いつくであろう。

だが、

「……」

ファナは考え込んでいた。

その、些細なる不可思議。多忙な彼女であれば、まったく気にしなくても当然の、あまりに小さな報告。

実際、その情報でたとえどのような推測を立てたとしても、それを根拠に動くことなど現実には不可能だろう。また、ちょっとしたアクションを起こそうにも、第四隊がいる村は外界から隔離されているにも等しい山奥であり、魔の脅威にさらされている場所でもある以上、非戦闘員である“影裏”を現地に直接派遣するわけにもいかない。

戸惑い。

不安。

――ティーサイト＝アマルナはまだまだ未熟だ。戦闘能力はレイやアクアたちデビルバスターはもとより、同じ候補生であるパーシヴァルにも劣るし、判断力だって、長くディバーナ・ロウで働いてきたドロシーやギレットには遠く及ばないだろう。

そんな彼を隊長に据えたことには、当然、本来の任務をこなすこ

とは別の思惑、別の期待があった。だからこそ、力不足である彼に与える任務の内容には、それまで以上に気を遣ってきたつもりだった。

今回のことも、そう。

事前に情報を集めて把握している限り、敵は取るに足らない下級の獣魔たち。

それに対し、味方はアルファを含め四人ものデビルバスター。

命を賭して戦うこの世界に絶対は存在しないとはいえ、客観的に考えれば狼がネズミに喧嘩を売るような、それほどまでに容易い任務。危険など微塵も感じない。

唯一気になることがあるとすれば、先ほども言ったように、その舞台が外界とは隔離された山奥であるということだが、彼女がそこまで考えなかったことは決してミスではなかろう。というより、そんなことまで考えていては彼に与える任務など一つもなくなってしまう。

だから常識的に考えて、彼女の判断は正しいかった。

リディアの提示した“不可解”も、それが直接危険に繋がるという類のものでもなく。

そして――

「……」

漠然とした違和感を胸に抱えながらも、ファナは結局、そのままその日の執務を再開せざるを得なかったのである。

それと、ほぼ同時刻。

遠くの地にいるファナの想いとは裏腹に、ティースたちの周囲は今、緊張の渦に呑み込まれようとしていた。

「……間違いない。ネアンスフィアさ」

山奥の村は圧倒的に静まり返っている。その様はまるで廃墟、立

ち並ぶ家々が墓場のように見えるほどだった。
　薄曇りだった空は今にも落ちてきそうにその厚さを増しており、吹きすさぶ風は湿った死の匂いを運び、鴉の鳴き声はまるで死霊の雄叫びのよう。
　そして今、この押し潰されんばかりの負の空気にさらされた村の中で、アルファ、セレナス、マリアヴェル、そしてティースの四人は、村の外れ近くにあるマリアヴェルの借宿に集まっていた。
「セレナスさん、村の人たちは……？」
「皆、村の中心付近の家に固まるよう指示したさ。まあ、何も言わんでも家から出てみようだなんて、みんな思わんはずだけども」
　セレナスの返答にホッと息を吐いたティース。
　それは無論、村の人たちが少しでも安全になったことを喜んでのことであるが、そんな彼の安堵は、この状況においては少々的はずれでもある。
　なにしろ――
「ま、どっちにしろ、相手がネアンスフィアだとすりゃ、奴らの狙いは最初からオイラたちさ。村を襲撃したのもおそらくオイラたちを誘き寄せるためってことさな」
「……」
　重い空気が立ちこめた。
　デビルバスター・ハンターズ――ネアンスフィア。
　一つのまとまった組織でないが故に、その実力、危険度にはピンからキリまである。が、総じて彼らはデビルバスターにとって驚異的な存在であり、そしてそんな彼らが今、ティースたち四人の命を虎視眈々と狙っているというのだ。
　マリアヴェルが窓から外を窺っている。
　ちりん、と、鈴が音を立てた。
「力押しで迫ってこないのは、私たちを弄んでいるのかも、ね」
「奇襲でなきゃ勝ち目が薄くなるから、ってのは楽観視しすぎかぃ？」

「否定しないよ。でも、それを根拠に行動を起こすには少し心許ない、かな」
そんなセレナスとマリアヴェルの議論に、ティースが口を挟む。
「セレナスさん。敵がネアンスフィアだっていうのは、間違いないんですか？」
だが、間違いであることを期待する彼に、セレナスはあっさりと答えて、
「ジン＝ファウストの額に、ネアンスフィアの刻印が刻まれていたのを見なかったかぃ？　誰かが何らかの理由で模倣してるのでなきゃ、間違いないさね」
「……額、ですか」
ティースは眉をひそめて、それから力無く首を横に振った。
あのとき、懸命に目を逸らさないようにしていたとはいえ、さすがに生首の額に刻まれた刻印にまでは目が届かなかった。いや、あの状況では、たとえ見ていたとしても、ただ顔面が無惨に切り刻まれたようにしか見えなかっただろう。
「さて、どうすっかね」
セレナスの不自然なほど明るい口調は、それなりの死線をくぐり抜けてきたことによる自信なのか、あるいは単なる強がりか。
マリアヴェルが問いかける。
「あなたの意見は？」
「全員で逃げるのが一番さね」
それは一見情けなくも思える消極的な意見だった。
だが、マリアヴェルもあっさりと同意して、
「そうだね。間違ってない」
確かに、敵の規模がまるで見えない上、外界との連絡も容易ではない状況。圧倒的に情報が不足している現状は、彼らにとってとてつもなく危険で不利な状態である。
それはこの重い空気を肌で直接感じ取っているティースにも充分に理解できた。

が、
「……俺たちが逃げ出したりしたら村が襲われませんか？」
そんなティースの疑問に、セレナスは頷いて、
「それは充分有り得るさ。あるいはオイラたちが逃げることを見越して森に罠を仕掛け、待ち伏せてるかもしれない。どっちにしろ賭けってことさな」
そしておもむろにテンガロンハットを押さえ、歌い始める。
「人生なんて～所詮はバクチ～の～繰り返し～♪　ここが～人生の分岐点～今年一番の見せ所さ～♪　べべん……ってな感じで、そろそろ意見をまとめましょか」
「……」
ティースは即座に口を開きかけたが、すぐ思い直したように黙り込んだ。
実際のところ彼の意見はとっくに決まっていた。
（だって、村の人たちを見殺しにするわけにはいかないじゃないか……）
決して恐ろしくないわけではない。
ジン＝ファウストのあまりに呆気ない最期には途方もない戦慄を覚えた。未知の敵に対する恐怖は、死そのものへの恐怖にさえも匹敵した。
それらが心臓に爪を立て、得体の知れない力に腰が浮き上がりそうになり、不可視の圧力に足がもつれて地面に伏してしまいそうになる。
だが、それでも。
「俺は――」
「村の人を見殺しにするようなことはできない」
「え？」
「――だよね？」
言葉を遮ったのは、まるで琴線をくすぐるかのような美しい声色。
驚いて見つめたティースに、マリアヴェルはふふっと微笑んだ。

「顔に出てるよ、ティースさん。……でも、今回は私もその意見に味方してみようかな。なんとなく、ね」
「……マリアさん」
「セレナスさん？　あなたはどうする？」
「ふふん」
マリアヴェルに視線を向けられたセレナスは鼻を鳴らし、膝でリズムを取り始めると、やはりおもむろに歌い始めた。
「せ～いぎを胸に、悪を～誅し～弱きを助け、強きを～挫く～♪で～んこうせ～っかのデビルバ～スタ～オ～レは～オ～レは～つ～よくて～か～れいな無敵の～戦士～♪」
そして最後にポポンと膝を二回、強く叩いた。
「全員で逃げたところで事態が好転するとは限らんし、そもそもヒーローが逃げ出しちゃ観客の皆さんも納得しないさね。……ま、オイラにまかしとき。この正義のデビルバスター、セレナス＝カンファイスさんが華麗なるイリュージョンを披露してみせるさ～」
「セレナスさん……」
なんとも心強い二人の言葉に、ティースはじわりと胸が熱くなるのを感じた。
デビルバスター、と一口に言っても、その中身は様々だ。自らの利のみを追求する者がいれば、中には邪悪にその両手を染め、目の前に立ちはだかる者もいるだろう。
だが幸いにして、今、ティースの眼前にいる二人のデビルバスターは、そういった類の者ではなかったらしい。
（……よし）
グッと拳に力が入る。
決して事態が好転したわけではない。が、たったこれだけの決意を交わし合っただけでどうにかなりそうに思えてしまうのだから、雰囲気というのは全く不思議なものである。
そしてこうなれば、実力的に大きく劣るティースとて足手まといになってはいられない。

「じゃあ、早速具体的な方針を決めましょう」
少しでも役に立ってみせようと決意を新たにし、先陣を切って口を開いた。
「ジンさんがあんなに簡単にやられてしまうほどの相手ですし、まずはとにかく単独行動を避けるのが基本だと思いますけど……どうですか？」
セレナスとマリアヴェルの反応を伺うと、どちらも彼の提案を否定する素振りは見せない。
自信を持って、ティースは続ける。
「じゃあ、これからは可能な限り全員一緒に行動するようにしましょう。いくら敵が強いとしても、全員が一緒にいる限りそう簡単には――」
だが。
まるで、その加熱した空気に冷水を浴びせるかのように、冷たく、抑揚のない声が響いた。
「止めた方がいい」
「え？」
熱しかけていた場の雰囲気が、一瞬にして静まり返る。
全員の視線は声の主――それまで一言も発せず、まるで他人事のように窓際に佇んでいたアルファの元に集まった。
「アルファ？」
ティースの問いかけに対し、アルファはいつもの調子であらぬ方向を見つめたまま、もう一度、
「止めた方がいい」
そう言い放った。
いつもの通り多くは語らない。が、いくら変わり者とはいえ、何の理由もなくそんなことを言う人間ではない。
「死体を見た」
「え？　どういうことだ？」
アルファは淡々として応える。

「ジン＝ファウストの受けた初撃は無防備な背中から、致命傷ではないが、戦闘能力の大半を奪う一撃だ。おそらくまともに戦ってすらもいない」
「……？」
ティースはその言葉の意味をすぐに理解することができなかったが、
「無抵抗……予期せぬ一撃……」
セレナスは神妙な顔をしながら考え込んで、それからチラッとアルファを見る。
「“騙し”があった……？」
「え、騙し？　……ジンさんが、誰かに騙されて殺されたってことですか？」
ティースの問いにセレナスは腕を組んで頷くと、
「あれだけの実力者があっさりやられちまったことを考えると、むしろそう考えるのが自然かもしれんさ。もしかしたら敵に幻の人魔が混じっていたのかもしれん。けど……」
セレナスはただでさえ細い目をさらに細め、アルファを見つめた。
「どうも、先ほどの発言と合わせて考えると、そちらさんの言いたいことはそれだけじゃないっぽいさね」
「え？」
「……」
無言のアルファと、セレナスの視線が交錯する。
一度は和みかけた場の空気が、少しずつ、緊張を増しているのがわかった。
「セレナスさん……？」
わけのわからないティースを余所に、
「なるほど、ね」
今度はマリアヴェルが納得顔で頷くと、こちらはいつもと変わらない瞳をアルファに向けて、
「アルファさん。つまりあなたは、ここにいる誰かを疑ってるんだ

？」

「え？　マリアさん……？」

表情は微笑んだまま。それは意図の掴めない微笑みだった。皮肉のようにも、あるいは余裕のようにも見える。

マリアヴェルはそのままティースを見て、

「だって私たちはお互い初対面。もしもネアンスフィアが最初から計画を立てていたのなら、この中に“裏切り者”――ネアンスフィアが紛れ込んでいてもおかしくない。ジン＝ファウストの死体の状況からして、その可能性も決して否定はできない……そういうことだ、ね？」

「そんな……」

まるで予測もしなかった可能性にティースが驚きの瞳をアルファに向けると、彼は視線をゆっくりと外の方へ向けながら躊躇もせずに答えた。

「そう」

「……そんな馬鹿な！」

ティースはすぐに腰を浮かせて反論する。

「だって昨日、俺はこの二人と少なくとも二時間近く一緒にいた！　もし人魔が人に姿を変えていたんだとしたら、そんなに長い時間は保たないはずだろっ！」

だが、アルファは動じず答えて、

「“封魔”を使えば、何日でも姿を変えられる」

「それじゃ魔力が使えなくなって戦闘力が落ちる！　そこまでのリスクを侵す価値があるとは思えない！」

「……」

「……」

答えないアルファ。

睨み付けるティース。

――この場合、客観的な視点でいえば、どちらの意見が正しいかを断定するのは非常に難しい。

“封魔”は人魔が人間に姿を変えるためのアイテムだ。特別な制約もなく使用できる代わり、ティースが言ったように人間としての姿を保つ間は魔としての力を完全に失い、また一定の時間が過ぎるまで自分の意志で元に戻ることはできない。しかもこの“一定の時間”は“封魔”の種類の他に個人差もあるためいつ頃効果がなくなるかを正確には特定できず、使用するリスクは確かに大きいのだ。

しかし、だからといってメリットがないわけではない。もし敵が複数で頭の良い集団であるとするならば、使い方によっては有効な手段であるとさえいえるだろう。

と。

そんな二人の対立に突破口を示してみせたのは、セレナスだった。

「……まぁまぁ」

緊張を解すように大きく息を吐きながら、

「疑われてるオイラが言うのもアレだけど、冷静に考えて今回はティースくんが正しいと思うさ」

「……」

まるで反応を見せないアルファに対し、セレナスは軽く苦笑してみせて、

「そもそも初対面のオイラたちに化けたところで、あのジンさんがそこまで心を許すはずがないし、やっぱメリットが少なすぎる。“騙し”があったとしたら、そんなちっぽけなもんじゃなくもっと狡猾な罠さね、きっと」

マリアヴェルもまた頷いて、

「ジン＝ファウストにそう疑える傷を残したのも、あるいは仲間割れを画策する敵の思惑の内かも、ね」

「……」

ぽぅ……と、アルファのもつ“誘蛾灯”の刃先に小さな明かりが灯った。

ゆら、ゆら。

ゆら、ゆら、と揺れる。

「……」
アルファは何も答えない。反論が思い浮かばないのか、反論する気がなくなったのか。その表情から真意は見えないが、少なくとも全員の結束に賛同する気がないことだけは確かだった。
と、
「ちなみに、アルファさん？」
「……」
マリアヴェルの言葉に、ようやくアルファの視線が動いた。
そして彼女は、そのまま問いかける。
「“裏切り者”がいるとしたら、誰だと思う？」
「……」
ゆら、ゆら。
誘蛾灯の明かりがその瞳の中で踊る。
視線は、真っ直ぐにマリアヴェルを射抜いたまま、動かなかった。
そしてマリアヴェルの表情も、微笑んだまま。
「私？　どうして？」
アルファは淡々と答えて、
「セレナス＝カンファイスにはデータがある。容貌も、三つ又の細剣“雷針”も情報通り。別人である可能性は限りなくゼロに近い」
「なるほど。それに比べて、私は確かに素性不明だもの、ね」
マリアヴェルは可笑しそうにクスクスと笑った。
あまり深刻ではない。初見からそうだったが、彼女もまた、いまいち真意の知れない態度の持ち主だった。
「……」
アルファは無言のまま。
あからさまな険悪ムードにならないのは各人の性格故だろうが、場の空気は確実に白け始めていた。これから命運を共にし、協力して危地を脱しようというには、あまりに頼りなく、あまりに情けない雰囲気。
“裏切り者”など存在していないのだとすれば、それはおそらく敵

にとって思う通りの展開であっただろう。
そして、
「……もう、やめよう」
その空気をもっとも敏感に感じていたのが、ティースだった。
先ほど激昂してしまったことを反省するかのように、今度は言い聞かせるような静かな口調でアルファに言葉を向ける。
「アルファ。お前の言うこともわかるけど、俺にはマリアさんが敵だなんてどうしても思えない。確かに俺たちは昨日が初対面だけど、でも、この人が昨日見せてくれた色々な表情が偽りだなんてどうしても思えないよ」
そんなティースの言葉に、マリアヴェルは鈴のような音色で喉を鳴らして、
「巧妙な演技かも、とは思わないの？」
「……」
ちくり、と、その胸に痛みが走った。
騙された経験は、彼にとって深い傷跡だ。
だが、
「思いません。……というより」
彼の長年培ってきた人生観は、その一事だけでいきなり人間不信に陥ってしまうほどヤワでなかったし、彼の中にある基本はいつも、他人を信じる心だ。
もちろんそれがいつの場合も絶対的に正しいとは言えず、今回それが吉と出るか凶と出るかはわからないが――
「俺は、全員を信じます。……会って日は浅いし、薄っぺらいと思われるかもしれないけど、でも信じられると、俺は勝手にそう思ってますから」
「……」
「……」
マリアヴェルはゆっくりと目を閉じ、セレナスはテンガロンハットに手を置いて目線を隠した。

そしてその一言に、澱んでいた空気が流れ始める。
たったの一言だ。
根拠も何も感じられない、まるで無責任な発言。
だがこの場に限って言えば、ティースのその単純明快な一言は確実にその場にいる者の心を動かしたようだった。
いや……ただ一人を除いて。
「……」
無言のまま、アルファの視線は再び他人事のように外の景色を眺め始めていた。
動かない。……いや、この程度で動くものなら、ティースとて最初から苦労はしていないだろう。
「アルファ……協力して、くれないか？」
「……」
そんな呼びかけにも反応はない。聞こえてはいても、返答する言葉を探そうとしていない。返答することが無意味であると、そう主張しているかのように。
「アルファ……」
そんな彼の態度に、ティースは絶望する。
真摯な言葉さえも伝わらない。それが取り柄であり、悪くいえばそれしか取り柄のない――回りくどい言い回しや説得を苦手とするティースにとって、もうそれ以上の言葉は思い浮かばなかった。
と。
「なら、こうしちゃどうだぃ？」
そんな状況を見かねたセレナスが妥協案を示す。
「単独行動が危険なのはティースくんの言った通りさね。けど、疑ったまま行動をともにするってのもあんまウマくない……ってことで、とりあえず二手に分かれるのさ」
「え？　二手に？」
「そ。片方は精力的に動いて真相を暴く。もう片方は万が一に備え、村を守るためにここに残る」

セレナスは軽く両手を広げてみせて、
「ここにいるのは曲がりなりにも何度も魔と戦ってきた人間ばかりさ。一人ならともかく、二人で手を組めば、敵がよほどの手練れでもない限りあっさりやられることもないっしょ」
「二手、ですか……」
確かに悪い手ではない。全員で動くよりは危険だが、このままではアルファが単独行動を起こそうとするのも時間の問題だ。ならばそうした方が賢いだろう。
仕方なくティースは頷いて、
「……わかりました。マリアさんも、それでいいですか？」
マリアヴェルは迷った様子もなく、
「構わないよ。……ただ、希望を言ってもいいのなら」
ちりん。
「私はティースさんと一緒に行動させて欲しいな」
「え？」
ティースはビックリした。
「そ、それは構いませんけど、いいんですか？」
彼が戸惑ったのは当然だ。どう考えても四人の中でもっとも実力の劣る彼と一緒に行動することは、ヘタをすれば足手まといになってしまう可能性も孕んでおり、それを嫌いこそすれ、望む理由などあるとは到底思えない。
だが、
「なんとなく、ね」
ちりん。
もう一度鈴が鳴って、マリアヴェルは微笑でティースを見つめると、
「あなたに興味があるから」
「……え」
精霊のように美しい声色に、痺れのようなものが全身を走り抜ける。美しさと儚さが同居したその音色には、確実な引力があった。

「……じゃ、じゃあ」
ハッと我に返り、ティースは少し顔を赤くしてマリアヴェルから視線を外した。
「アルファ。お前とセレナスさん、俺とマリアさんで二手に分かれて行動する、ってことで、構わないか？」
「……」
アルファはゆっくりと外から視線を戻してティースを見つめ、そして数秒、その後ろに佇むマリアヴェルを見つめた。
視線が交錯する。
が、すぐに、
「君がそれでいいのなら、構わない」
やはり興味をなくしたように視線を外しながら、そう答えたのだった。

ザザザザザザッ！！
風の七十一族は体長一メートルほどのリスのような形の獣魔だ。鋭い爪と牙を持つのは大抵の獣魔に共通のものだが、この獣魔は背中の中心に穴のようなものが空いており、そこから瞬間的に強烈な風が吹き出る。殺傷能力こそそれほどないものの、バランスを崩したり視界を失ったりするには充分な威力であり、その動きの素早さもあって群れで現れた場合には充分な警戒を必要とする獣魔だ。
――とはいえ。
「っ……」
鋭い視線が獣魔の動きを射抜く。横にステップを踏んで風撃を避けたティースの細波が、風の七十一族の体を捉えた。
骨を断つ感触が腕を伝わって肩に抜ける。灰色の空の下に獣魔の赤い血が飛び散って、服を微かに汚す。
微かに乱れる呼吸。だが、動きにはまだまだ余裕があった。

「次――っ！」

ティースたちが二手に分かれてから二時間後。

厚い雲の向こう側で太陽が頂点に達しようとしていたこの時間、突如村に現れた獣魔――風の七十一族たちは、他の村人などまるで眼中にないかのように、村の中を見回っていたティースとマリアヴェルを目掛けて襲ってきた。

その数は四匹。

……なんとも微妙な数、と言わざるを得ない。

この小規模な村の住民だけであればそれでも充分な脅威だったかもしれないが、今、この村には都合三人のデビルバスターが滞在している。そのうちの二人が調査のため出払っているとはいえ、七十台の獣魔が四匹という戦力は、たとえ新米デビルバスター一人であっても充分に対応できるであろう数だ。

まして、この場にはそのデビルバスター――マリアヴェルだけではなく、それなりに場数を踏んだティースという存在もあるのだから。

「よしっ、二匹目……マリアさん！　そっちは！？」

「終わったよ、ティースさん」

二匹目の骸が地面に転がったのを確認して振り返ったティースの視界には、彼よりも一足先に戦いを終えたマリアヴェルの姿があった。

「……って。マリアさんのその武器……ものすごいですね」

「ん？」

周囲を伺い、敵の気配がないことを確認して、ティースはマリアヴェルへと歩み寄った。

ちりん……。

彼女が手にしている長い棒。先ほどまでは単なる棒だったはずのその先端には、いつの間にか氷で出来た刃が備わっている。

死神の大鎌――氷のデスサイズ。

神秘的な佇まいの彼女にとって、それはミスマッチのようであり

ながら、どこか絵になる雰囲気も漂わせていた。
聖者の持つ凶器。
それは堕天使のような美しさ、とでも言おうか。
「これで終わりだね」
「ええ……どう思います、マリアさん？」
ティースはそう言いながら、腰にぶら下げたタオルで細波の血を拭った。水に濡れたような細波の刀身は自ら血と脂を弾き、一拭きで使用前とまったく同じ状態に戻っていく。
「ネアンスフィアならある程度はこちらの力量も察しているはずだし、少なくとも本気ではないと思う」
パキン。
硬質な音を残し、マリアヴェルの武器“雪姫”が再びその刀身を隠した。……こちらは血を拭う必要すらないらしい。
ちりん。
風が吹いて、九つに分けた彼女の髪が揺れた。
同時に空気を震わす、鈴の音。
「様子見、ですか……？」
「そうかもしれないし、何か他の意図があるのかもしれない。たとえば私たちを、村の中に足止めしておきたい、とか」
ちりん、ちりん……
確かに実際にこうして襲撃があったことで、村を守る立場の彼らはそう容易に動けなくなっていた。
「……ふぅ」
戦いの余韻が消えると、途端に体がブルッと震えた。風は相も変わらず湿っぽく、空の雲は徐々に厚みを増している。
（まだまだ様子見、か……）
見上げると、低い空を鴉が旋回していた。
まるで次の獲物を待ち望んでいるかのように。
（……少し、不安だけど）
そのときティースが感じていた感情は、人であれば誰もが持つご

く当たり前のものだ。
細波を握りしめる手の平はじっとりと汗を掻き、何度握り直しても乾く気配がない。動悸は静かに、だが力強く肋骨を叩き続け、頭の奥はともすれば思考を放棄し、現実から逃げ出してしまいそうになった。
そよぐ枝葉に、まだ見ぬ敵の幻影が見える。
風の音が誰かの断末魔の悲鳴に聞こえる。
――だが。
（……でも、村のみんなもこんな恐怖と戦ってるんだ）
それを想像すると、彼の心は逆に奮い立つのだ。
（隔離されたこんな場所で、突然魔の襲撃にさらされて……）
決意の思考は、生き残るための最善の道を探して巡る。
（守って、そして生き残らなきゃ。なんとしてでも――）
「ふふ……いい風だね、ティースさん」
「……え？　は、はぁ」
目を閉じ、空を見上げるマリアヴェルはあくまでマイペースだった。
ちりん。
風が吹いて、鈴が揺れる。
と。
「あ、そういやマリアさん。昨日から気になってたんですけど……」
「ん？」
空を見上げたままのマリアヴェルに、ティースは尋ねた。
「その鈴、どうして一つだけ白いんですか？」
「これ？」
彼女の九つに分かれた髪のそれぞれにくくりつけられた鈴。九つのうち八つまでは普通の鈴――金のメッキだったが、よくよく見てみるとティースの言うように一つだけ色のない真っ白の鈴だった。
すると、マリアヴェルは白い鈴のついた髪の先端を左手に取って、
「これは、大好きな人からのプレゼント」

「え……あ、はは、なるほど」
その返答に、ティースの顔には思わず微笑みが浮かんだ。
（……マリアさんってちょっと不思議な感じだからあまり想像できなかったけど、でも、恋人ぐらいいたっておかしくないよなぁ）
それを想像するだけで、何となく幸せな気分になるティース。
つくづく単純というか、純粋な男であった。
……が、だからこそ気の回らない部分があることも確かで、
「でも洒落てますね、白い鈴なんて。俺はよく知りませんけど、確かネービスで主流のミーカール教では縁起のいいアイテムですよね？」
「ふふ、確かにそうらしい、ね」
マリアヴェルは少し可笑しそうに笑って、手にしていた髪の先端を再び風に流した。
鈴が鳴る。
「でも私の産まれたところでは、白い鈴は不幸の象徴だったよ」
「え？」
その言葉が纏う雰囲気に、ティースの口元に浮かんでいた笑みが止まった。
「それもただの不幸じゃなくて、不幸な幸せ、転落を前提とした幸福を意味する、とても、とても不吉な品。……もちろん、あの人はそんなこと知らずにプレゼントしてくれたのだけど、ね」
「……」
まるで他人事を語るかのようなマリアヴェルの表情に、ティースの幸せな気分はアッという間に萎み、今度は逆に胸が締め付けられる想いに襲われた。
と、同時に悟る。
……決して口に出して聞けはしないのだが、おそらく彼女の言う“あの人”は、すでにこの世の者ではないのだろう、と。
「ティースさん……あなたは、あの人によく似てるの」
突然、マリアヴェルはそう言った。

「え？」
「昨日あなたと話していたら、久しぶりにあの人の言葉を思い出した」
当然の如く戸惑うティースに、マリアヴェルは懐かしむようにゆっくりと目を閉じ、そしてその美しい声色で詩のように言葉を紡ぐ。
「救える者がたった一人であったとしても、一人でも多くの命を救うことができるのなら、他にどんな戦う理由が必要だろう……だから私は戦う。私を犠牲にしても戦い続ける。それがもしも、お前に理解されなかったとしても……って、ね」
淀みのない口調。
おそらくは一語一句、言葉の隅々まで鮮明に記憶しているのだろう。
「結局、私には最後まで理解できなかったな……」
目を閉じたまま呟くその姿に、ティースの瞼は微かに震えた。
（マリアさん……）
その背後に見えたのは、おそらくは何らかの悲劇。それを平然として語ろうとする彼女のその姿がとても物悲しく見えたのだ。
そしてティースは少し視線を斜めに落としながら、
「……マリアさんが戦い続けるのは、その人が戦っていた理由を理解したいから、ですか？」
「え？」
まるで考えていなかった、という顔だった。
だが、やがてマリアヴェルは表情を緩めると、
「……なるほど、ね。そういう考え方もあるんだ」
しゃん――
涼やかな風が吹いて、九つの鈴が一斉に美しい音色を奏でた。
まるでそれを合図にしたかのように、雰囲気が戻る。
「さ、ティースさん。敵の攻撃も終わったようだし、いったん家に戻って休もうか」
そう言って踵を返すマリアヴェル。

だが、
「……あ、いえ。ちょっと待ってください」
「ん？」
すでに歩き始めたマリアヴェルが振り返ると、
「その前に、少し村の人たちに話を聞いてみたいと思うんです」
「話？」
「ええ、昨日のジンさんの行動について調べてみようと思うんです。ジンさんが一体どこでやられたのか。村の中なら俺たちが誰も気付けなかったのは変だし、村の外ならどうして一人でそんなところに行ったのか腑に落ちない」
マリアヴェルは納得したように頷いて、
「でも、それを調べてどうするの？」
「セレナスさんが言ってたでしょう？　ジンさんほどの人が騙されたのだとすれば、それはきっと狡猾な罠だ、って。じゃあ、その罠の正体を暴くことができれば、この先の戦いを有利に運べると思うんです」
「……」
「情報を集めて、そして考える。どうすれば守れるのか。どうすれば生き延びられるのか。……でも俺はまだ未熟だし、色々見落としたり、考えが及ばなかったりすると思うんです。だから……それを補ってもらえませんか？　みんなが生き残るために、一緒に考えましょう」
そんな彼の強靱な視線を受けて、マリアヴェルは目を細めた。
やはり何かを思い出すような表情で。
「……もちろん。協力させてもらうよ」

「る～るるるる～♪　はじけと～ぶ、せ～んこぅ～♪」
弾け飛ぶ閃光。

三つ又のレイピアから迸った稲妻が、背後から飛びかかろうとした風の七十一族に命中し、何度も何度も打ち付け、吹き飛ばす。
魔力、あるいは生命力の強い魔であれば致命傷とはならない。が、最下級に位置される七十台の獣魔にとって、それは充分に命を奪いうる威力だった。
「……」
そこから視線を少し移すと、陽気な歌のセレナスとは対照的に、淡々と獣魔を退治していくアルファの姿がある。
光の力を込めた神槍“誘蛾灯”が目にも止まらぬ速さで敵を切り裂いていく。
停止と行動。
一定の速度と一定の威力。
まるで無駄がなくほとんど波のない戦い方は、まるで彼の性格を表しているかのようだった。
ただ――
「ふぅん」
すでに自らのノルマを果たしたセレナスは、まだ一匹の獣魔と戦っている彼の背中に、独り言を呟く。
「サン・サラスってあんなもんかね」
「……」
おそらくアルファの耳には届かない程度の声。
“誘蛾灯”が最後の獣魔を捉える。
もちろん常人には目にも止まらない速さ……だが、セレナスの目にはその動きがしっかりと捉えられていた。
避けろ、と言われれば、余裕を持って避けられただろう。
「……ふぅん」
狐のような細い目に少し拍子抜けしたような色を浮かべながらも、セレナスはすぐいつもの人のよい陽気な表情に戻って、
「お疲れさん～。しかしまぁ、失礼なヤツらさね。オイラたち相手に最下級の獣魔がたったの六匹とは」

振り返るアルファの表情はいつもと変わらない。
事も無げに、地面に落ちた獣魔の死体を一瞥すると、
「おそらく、これで全てではない」
「ま、それはそうさな。ジンさんがやられたぐらいだもの。……さて、どうすっかね。もっと深く行ってみるかぃ？」
セレナスはそう問いかけた。
彼らが今いるのは、村から歩いて十五分ほど入り込んだ地点だ。
今のところは敵の出方を見て、いざとなれば村にいるティースたちに救援を求めることが可能であり、なおかつ村に異変があれば戻ることもできるような位置である。
「……」
アルファは黙ったまま森の奥を眺めた。
だが、ほとんど思考することなく、ゆっくりと踵を返す。
「……戻るのかぃ？」
少し意外そうにセレナスはそう言った。
「ま、マリアさんのことを疑ってるなら、ティースくんが心配な気持ちもわからんでもないさね」
「……」
アルファは答えない。
だが、彼の判断はおそらく正しい。こうして実際に敵の襲撃があったとはいえ、まだ真相が浮かび上がったとは到底言い難い。……それどころか、レベルの低い獣魔が出現したことで、ジン＝ファウストの死がさらに不可解になったとさえ言える。
深入りせずに様子を見る。それがもっとも安全な方法に間違いなかった。
が、しかし。
そういった思惑というのは、大体の場合にして思い通りにいかないもので――
「！」
急に足を止め、振り返るアルファ。

セレナスは咄嗟に“雷針”に手をかけ、そして辺りを窺った。
「悲鳴？」
二人の耳に確かに聞こえた、助けを求めるような甲高い女性の声。
ガサガサガサッ！！
「！」
そんな彼らの視線の先からは、茂みを掻き分ける音が聞こえてくる。
さらに、
「た、助けてくれぇぇぇぇぇッ！」
今度ははっきりと、確実に助けを求める声が聞こえた。
村人か。
あるいは外から来た人間か。
「……あっちさ！」
方角を特定するなり、セレナスはすかさず地面を蹴る。
「……」
対するアルファはほんの一瞬だけ躊躇った。
――方角は森の奥。これ以上奥に入り込めば、何らかの不測の事態に対処できなくなるかもしれない。
「……」
が、結局は彼の足も地面を蹴る。
その時点で考えられるいくつかの可能性の全ては根拠の薄い推測でしかなく、助けを求める何者かを見捨てる理由にはならなかった。
また、すでに先に行動を始めたセレナスに単独行動を強いることも得策ではないだろう。
最初から選択肢はなく、止むを得ない。
「……」
表情はいつもと変わらぬまま。
アルファは長い銀髪を揺らし、セレナスの後に続いていくのだった。

「……」

騙したのは果たして誰なのか。

ジン＝ファウストの遺体の推定出血量と、その場に飛び散っていた血の量から判断すると、彼が命を奪われたのが死体の発見場所でないことはわかっていた。

村の中にそれらしき痕跡はどうやら見当たらない。

とすると、残る可能性は森の中……つまり彼はあの日、単独で森の奥へ向かったということになる。

――何故、単独で行動したのか。

たとえ腕利きのデビルバスターであっても、単独行動に大きな危険が伴うことは当然に承知しているはずだった。一人では緊急時の手当をするにも不便だし、何らかの錯誤、何らかの小さなミスがそのまま死に直結することもあり、それはどれだけ経験を積んだデビルバスターにも共通して言えることである。

しかも今回の場合は同じ村の中に二人のデビルバスターがいるのだ。たった一声かけるだけ、普通に考えれば単独行動を取る必要などない。

とすると、ジン＝ファウストの単独行動の理由として考えられるのはせいぜい三つほどだろう。

ジンが自らの力を過信し、そして命を落としてしまうような愚か者だったか。

それとも、単独で行動しなければならないほど“緊急の事態”だったか。

あるいは――“本当は単独ではなかった”。つまり、一緒に行動していた誰かが、実は敵だった、という可能性だ。

「そういや昨日の夜、日が沈んだ後、セレナスさんがジンさんと一緒に森の中に入っていったのを見ましたけど……」

「……」

今さっき聞いたばかりの村人の言葉に、ティースは考え込んでいる。

騙したのは、誰なのか。

ティースは歩きながらふと、後ろのマリアヴェルを振り返って尋ねた。

「セレナスさん、そんなこと一言も言ってませんでしたよね？」

「そうだね。彼を最後に見たのは、私たちと一緒にいたあのときだと言ってたよ」

「村の人の見間違えって可能性は……」

「でも、セレナスさんの格好はこの村じゃ見掛けないものだし、見間違える方が難しいかもしれないよ」

「……」

不可解だ。

ティースはさらに考え込む。

その証言――昨日の夜、一緒に歩くセレナスとジンを目撃したという証言をしたのは、一人ではなかった。先ほどの青年に加え、若い少女と、三十台後半の女性。

三人の村人が同じことを証言しているとすると、マリアヴェルの言うとおり、全員が見間違えたということはどうしても考えにくい。

とすると、出てくる結論はもちろん一つ。

三人の村人が嘘をついていないと仮定するならば、セレナスが偽ったとしか考えられないだろう。

「なんのために嘘をついたんだ……？」

「……」

マリアヴェルは黙ってティースを見つめていた。

「嘘をついて得することなんて何一つ――」

そう。普通に考えれば嘘をつく理由などない。

それこそ。

それこそ敵――つまり、ネアンスフィアだというのでなければ。

「……」

ティースは首を振った。

考えにくい。

どうしても、考えにくい……が、そうすると矛盾がどうしても晴れない。

八方塞がりだった。

（どういうことだ……まさか、でも――）

焦る心を懸命に落ち着かせながら、さらに思考を巡らせる。

思考を巡らせていて――ふと。

「……？」

ティースは辺りの景色が見覚えのある――昨日、セレナスたちと会話をした場所であることに気付いた。

足を止める。

目の前には、昨日寝転がった、だだっ広い草むらがあった。

――思い出す。

声をかけてきたセレナスとマリアヴェル。

被害の爪跡を残す家々を見つめながら、言葉を交わした。

青空を泳ぐ雲。

気持ちの良い春風。

鼻孔をくすぐる草の香。

楽しそうに駆け回る子供たち。

セレナスが世間話をしようと申し出た。

アルファの話題。

ジンの話題。

マリアヴェルがティースに質問し。

そんな彼女の過去を勝手に想像して、セレナスは半泣きになりながら謎の歌を歌った。

その後、遠くに子供たちと遊ぶジンの姿を見つけ。

ジンが子供好きらしいという話をセレナスから聞いて。

その後、別れ――

（……あれ？）
そしてふと、感じた違和感。
「……そんな、馬鹿な」
「？」
「なんであんな――」
ハッとして背後を振り返るティース。
目の前には不思議そうな顔をするマリアヴェル。
その向こうには一面の畑。
壊れかけの家々。
ジンと子供たちが遊んでいた広場。
鬱蒼と生い茂る森――
――蘇る恐怖。
まだ見ぬ未知の敵。
それは、その一端が垣間見えたことによる、恐怖だった。
戦慄。
恐ろしい想像。
（そんな、馬鹿な……でも、もしそうだとしたら――）
確信ではない。
微かな矛盾から導き出された、あくまで可能性。
だが、その可能性は現時点で矛盾の回答を導き出していた。
手練れのデビルバスターであるジン＝ファウストが、あまりにも無抵抗に殺されてしまったこと。
そして今、村人から得た証言。
「……」
確信ではない。ティース自身、その可能性については半信半疑だ。
だが、もしもそうだとしたら――
「……マリアさん」
内心の動揺を懸命に押さえ込みながらティースはマリアヴェルを振り返った。
落ち着いた口調。

彼としては迫真の演技だったといえるだろう。
「とりあえず、アルファたちと一度合流しましょう」
もしそうだとしたら、今のこの状況はとてつもなく危ういものだった。
最悪の可能性。
そう。
彼の中で芽生えたその可能性が事実だとしたなら、彼らは今、とてつもない“全滅”の危機に瀕しているといっていい。
（信じられない……信じられないけど、でも――）
まだ見ぬ敵。
巧妙に隠された悪意。
（敵は、もしかしたら――）
風が吹いた。
運ばれてきたのは、死の香り。
彼の閃きは重大であり……そしてほんの少しだけ、遅かった。
ネアンスフィアたちの狩りは、これからが本番なのだ――

その４『狩猟、続行』

ネービスの誇るデビルバスター部隊“ネスティアス”。その軍服風の制服は通常深緑色だったが、その中でもトップの十人にのみ与えられる“ディグリーズ”の称号を持つ人物は漆黒の制服を身に纏っている。

そしてこの日の昼過ぎ、ルナジェールの街に、その漆黒の制服を身につけている人物が二人姿を見せていた。

リゼット＝ガントレットとルーベン＝バンクロフトである。

「ルーベン、見てごらん。ほら、とても美しいイヤリング。すごく似合うと思わないかい？」

そう言ってリゼットが示したのは、一歩間違えれば悪趣味じゃないかと思われるほど大きな赤い石のついたイヤリングだった。

だが、それを見ていたルーベンは別のものを手にとって、

「そうですか。どっちかというとこっちの方がいいんじゃないかと」

これまた悪趣味な小さな髑髏――ではなく、生首型の彫刻がついたイヤリングである。

「あぁ、ダメダメ。カレルはああ見えてそういうの嫌いだから。嘘じゃないよ。長年付き合ってきたこの僕が言うんだから間違いない」

「それは残念」

ポン、と、投げ捨てるように生首型のイヤリングを元の場所に戻す。と、どういう仕組みになっているのか、生首は笑い声のような音を出した。

「じゃあ、ルーベン、次の店に行ってみよう」

結局、先ほどのイヤリングは買わないらしい。……普通に考えて正解だろう。何より、カレル――敵からも部下からも恐れられるディグリーズのカレル＝ストレンジが、イヤリングなどというものを身につけるはずがないのである。

「ああ、そうそう、受付嬢のお土産もきちんと買っていかないとね。

あの子猫ちゃんはなかなかに気まぐれだから、一度機嫌を損ねると大変なんだ」

ディグリーズの一人である“月神”リゼット＝ガントレットは、長くも短くもない長さの金髪をやや後ろに流した“男装の麗人風”の人物である。袖に書かれた字はディグリーズでは最下位の“玖”だが、もちろんその実力は並のデビルバスターを遙かに上回る。

外見、口調ともにどこか芝居じみていて鼻につくところもあるが、どうやら本人に悪気はないようで、一部の女性からは熱狂的ともいえるほどの視線が送られているという。

一方。

「気まぐれっつか、欲まみれなだけですよ、あの人。こないだラドフォードさんのお土産とか質屋にふつーに売られてましたし」

“白の御子”ルーベン＝バンクロフトは大陸全土を見渡しても非常に珍しい、先天性の白髪を持つ青年だ。が、それは今、ひさしの大きな帽子で隠されている。袖に描かれた字は“伍”。ディグリーズでは六番目にあたる。

そんな彼らの年齢は二十三歳と二十歳。

喋り方や態度を見ての通り、リゼットの方が若干年上である。

「ああ、でも困ったな。あまりお土産を配りすぎると八方美人だと思われてしまうね。やはり一人に絞るべきかな」

悩みながら次の店に向かうリゼット。その斜め後ろをトコトコとついていくルーベン。

「もう思われてますよ、きっと」

「うーん、どうしよう。カレルのニヒルな魅力にも痺れるし、かといって受付嬢の愛らしい笑顔も忘れられない。弱ったな」

「もう面倒だから、通り名を両刀使いに変えてもらったらどうです」

会話になっていない。まあ、リゼットの方が話を聞いてないのでそれも当然か。

ちなみに、二人の後ろにそれぞれの率いる部隊員がズラッと並んでいることからわかるように、これは決してバカンスなどではない。

いわば任務の合間の小休止といったところか。
中にはそんな二人の行動に眉をひそめる者もいるが、大半は慣れているのか好意的に受け止めているようで、中にはちゃっかり便乗して、家族や恋人への土産を買っていく者もいる。
と、そんな、不自然なほどに和やかな雰囲気の中。
その空気を一変させたのは、途中で入った一つの伝令だった。
「ネアンスフィア……“キラーアント”？」
リゼットの呟きに対し、ルーベン隊を含めた部隊員たちに一気に緊張が走る。
「……ネアンスフィア？」
「ネアンスフィアだって……？」
そんなざわめきを前に、馬から下りた伝令がかしこまって答えた。
「はい。それらしき情報がありましたので、至急現場に急行を願います。もしそれが事実であり、かつ可能であるならば直ちに殲滅せよとのこと。また、増援としてディグリーズ“捌”隊と、その他二部隊の計三部隊がネービスからすでに派遣されております」
「……来なくていいのに」
ボソッと呟くルーベンに、リゼットはそれを窘めるようにチラッと見て、またすぐに伝令の方へと視線を戻した。
「わかりました、直ちに急行します。……ルーベン、行くよ」
「はいはい。ふう、相変わらず人使いの荒いことですね」
「なお」
伝令はさらに言葉を続けた。
「現場である村には、ネアンスフィアの標的となったらしき三人のデビルバスターが向かったとの情報が入ってます。フリーのデビルバスターが二人と、残る一人はディバーナ・ロウの者らしいとのことです」
「ディバーナ・ロウの？」
チラッと振り返ったリゼットの視線の先で、ルーベンの表情が微かに動いた。

「……ま、それじゃ行きましょうか」
何気ない風を装ったその言葉にも隠しきれない微かな起伏が産まれ、どこか色素の薄かった瞳が急激に鋭さを増す。
その理由を知っているリゼットは、特に不審がることもなく、ただ一つだけ頷いて、
「うん。……みんな！　心の準備はいいかい！？」
部隊員を振り返って叫ぶ。
おぉぉぉぉ！　と、空気を震わすほどの鬨の声が返ってきた。
疲れなど微塵も感じさせない。
どんな状況であれ。
どんな内容であれ。
ネービス領内を脅かす者には容赦せず、躊躇せず、殲滅する。
それがネービスの誇るデビルバスター部隊、ネスティアスだった。
――とはいえ。
彼らが村に到着するには、どれだけ楽観的に見積もっても丸一日はかかる。
それまでの間、獲物となった四人がネアンスフィアの魔の手から逃れ続けられるのか、否か。客観的に言えば、答えは明らかだった。
否、である。

ザザザザザッ！
小刻みに茂みを掻き分けるその音は、その主が常人では考えられないほどの速度で動いていることを表していた。
「……」
長い銀色の髪が宙に躍り、頬に刻まれた新しい傷跡からは微かに血が滲んでいる。身に纏うハートマークのセーターはすでに敵の返り血に汚れていた。
――異常だ。

何が異常かというと、その浴びた返り血の量。
そのデビルバスターの青年、アルファ＝クールラントは光速だった。同じディバーナ・ロウのデビルバスターであるレアスやアクアのように爆発的な瞬発力を持っているわけではなかったが、一連の動き全てが淀みなく、しかも速い。返り血が吹き出すよりも速い。だから、返り血を浴びるということがほとんどないはずだった。
では、この日に限って、何故？
理由はいくつかある。このときの彼が本調子でなかったということもその一つ。が、それはともかく、あれだけの強さを誇った彼が徐々に追いつめられているのは確かだった。
「……」
一緒にいたはずのセレナスの姿はない。
視界に移るは、木々。
木。
木。
木。
――おかしい。明らかにおかしい。
いくら非常事態でも、帰り道を失ってしまうほど彼は愚かではない。入り込むときには確実な目印を残してきていたし、その目印を辿ってもきた。
が、進めど進めど、村にたどり着かないのだ。
「……アルファ！」
森の中に声が響く。
聞き覚えのある声にアルファは思わず立ち止まった。
ティーサイト＝アマルナの声だ。
――仲間の声は生への希望。死を恐れる人々にとって、それは万人に等しい安堵の快楽だ。
しばらくして、森の中から声の主が姿を現す。
慌てた様子で駆け寄ってくるティースは、同じように敵に襲われていたのか、手には剣を持ってすでに臨戦態勢を整えていた。

「……」
アルファはゆっくりと神槍“誘蛾灯”を下ろす。
そして、
「……かっ……！」
槍が一閃し、ティースの喉を貫いた。
――いや。
「……」
どさっ、と地面に崩れ落ちたのは、ティーサイト＝アマルナとは似ても似つかない、全くの別人だ。
幻覚。
……狩猟者は用意周到だった。大掛かりな罠で獲物を追い込み、弱ったところで甘い罠に引き寄せ、そして確実に狩る。追いつめられた人間に対して、それは非常に有効な手段といえる。
こうなってくると、今まで頼りにしてきた目印も、どこかで偽物を見せられていたと考えるのが自然だろう。
「……」
しばし考えた後、アルファは空を見上げる。
分厚い雲に覆われた太陽の位置を探すのは容易ではなかったが、そこらにある切り株の年輪と合わせて考えればおおよそ方角の検討はつく。現在地の把握ができないだけに決定的な方法とは言い難いが、何の頼りもなく動くことに比べればずっと有意義だろう。
「……こっちか」
そうして彼は森の中を再び歩き始める。
狩猟者の悪意が溢れる死地へと向かって。

死の恐怖。
死とは生命にとって終焉を意味するものであり、その先は疑いようもない零の世界だ。零に何を乗じても零であるように、どんなに

大きな喜楽の感情も死の恐怖の前では輝きをなくし、打ち負けてしまう。

もちろん死と隣り合わせに生きていればそれが麻痺することもある。努力によってその恐怖を押さえ込むことも決して不可能ではない。平静を装う程度のことであれば充分可能だろう。

が、しかし。

それがこんな小さな村の、ごく平凡な子供たちだったとしたら、どうだろうか。

「……そりゃ事実を目の当たりにしていないのなら、わかるんです。恐怖を実感していないという可能性もありますから。でも」

鴉が上空を旋回している。

村は丁度昼食時。だが、のんびりと昼食を摂っている者など、この村の中には一人もいなかった。

不吉な風が家のドアをガタガタと揺らす。

鴉の鳴き声。

埃っぽい空気。

無表情な足音。

「半壊したたくさんの家を見ればわかるように、今回の敵は実際村に入り込んで破壊活動を行っていて、村の人は実際にそれを目の当たりにしているはずなんです。……だから――」

「なるほど、ね」

窓際に佇むマリアヴェルはそっと頷いて、窓の外へ視線を移す。

「つまり、そういうことなんだ」

「……マリアさん」

ざっ、ざっ、ざっ、ざっ。

足音はその大きさを増してくる。

不自然なほどにゆっくりと、まるで行進するかのように。

窓の外を見つめたまま、マリアヴェルは言った。

「確かに、ね。本当に獣魔の襲撃があったなら、子供を外で遊ばせたりするはずない」

「……」
「――でも」
ざっ、ざっ、ざっ、ざっ。
足音は複数。
それも一つ、二つではない。
十か、二十か。それ以上か。
「ほんの少しだけ、気付くのが遅かった……かな」
「ひひひひ……ひひひひひひ……」
「ヒヒ……ヒヒヒヒヒヒ……」
「へ……へへへへ……」
笑い声。
「……」
無言で覗き込んだ窓の外には、脂ぎった複数の瞳が見えた。
「ひひひひひ……ひひひひひひひひ……」
「ヒヒヒ……ヒヒヒヒヒヒヒヒ……」
「へへ……へへへへへへ……」
子供。
女性。
老人。
昨日、無邪気に遊んでいた子供がいる。
道ばたで何度か見掛けた顔もある。
少し前、言葉を交わしたばかりの青年もいる。
そしてその先頭には、皺だらけの頬を緩めてニコニコとする好々爺。
村長。――村長を装っていた老人。
それらが皆、同じ笑みを浮かべていた。
引きつったように頬を吊り上げ。
前歯を剥き出しにし。
目尻にはたくさんの皺を寄せ。
そして――

「ひひひひひ……ひひひひひひひひひひ……」
「ヒヒヒ……ヒヒヒヒヒヒヒヒヒ……」
「へへ……へへへへへへへ……」
一様に、同じ笑み。
愉悦。
獲物を追いつめ、そして引き金を引き絞る瞬間の、愉悦。
「……」
異様な光景に、ティースの背筋が震えた。
誰もが、つい先ほどまでは友好的な笑みを浮かべていた。獣魔の襲撃に怯え、村を救いにやってきたデビルバスターたちを頼り、救世主と崇めていたのだ。……そのはずだった。
「村そのものが罠とはね。敵がそこまで大規模だなんて考えもしなかったよ」
マリアヴェルの呟きに、ティースは無言で窓の外を見つめる。
家を囲む“元”村人たちはその多くがすでに人魔の姿を晒していた。
おそらくは数日の効果をもたらす“封魔”で姿を変えていたのだろう。現在も五分の一ほど人間の姿が混じっているのは、個人差で封魔の効果が長続きしているためか。
とはいえ、これだけの人数であれば、そのことによる戦力減も些細な問題である。
「村は、とっくに全滅していたんですね……」
呟くように言ったティースの言葉に、マリアヴェルは窓の外を見つめながら頷いて、
「おそらく私たちの元に依頼が来る前から、私たちを罠に掛けるためだけに、ね」
「っ……」
カチリ、と、細波が音を立てた。
――沸き上がる、灼熱。
おそらくは三十人を超える人魔たちと、彼らが従えるそれ以上の

数の獣魔たち。見たところ大半が下位魔、あるいは最下級の獣魔だが、いくらなんでも多勢に無勢だった。

もしこの場にアルファとセレナス、さらにジンがいたとすれば結果はわからない。が、マリアヴェルと、そして戦力的に劣るティースの二人だけではいくらなんでも無茶な戦いと言わざるを得ないだろう。

戦えば、確実に命を落とす。

そしてこの状況では逃げることもまた難しい。

――死の恐怖。

その感情は確かにティースの胸の中にも存在する。

だが、それ以上に――

「そんなことで村の人を……ッ」

ぎりっ、と、歯の軋む音が静かな家の中に響いた。

煮えたぎる怒り、憎しみ。

それは時に冷静な判断能力を奪い、合理的とは言い難い行動に誘う危険な感情だ。……が、そう頭で理解してはいても、それを押さえることは今の彼には不可能だった。

「許せない……ッ！」

「……」

マリアヴェルはそんな彼を冷静な瞳で見つめていたが……ふと、その口元に笑みが浮かんだ。

誰も見ていない。だが、誰かが見ていたとしてもおそらくは意図の掴めない、それは不思議な感じのする笑みだった。

ざっ、ざっ、ざっ、ざっ。

ゆっくりと近付いてくる足音。

一つ、二つ、三つ。

それを遠巻きに、ニヤニヤしながら眺める群衆。

最初の一人が扉に手をかけるまで、あと三十秒とかからないはずだ。

「……」

ティースの足に力が入る。
あとはいつ、踏み出すか、だけだった。
かなり高確率の死が待ち受ける、その第一歩を。
――が。
ちりん。
「……マリアさん？」
そんな彼の機先を制するように、マリアヴェルが彼の眼前に割り込んだ。
かたん、と。
彼女の武器――“雪姫”が床を離れる。
「ティースさん」
「……マリアさん？」
マリアヴェルはニッコリと微笑んで、それから小さく息を吐いた。
「行きましょう」
ちりん――……
鈴を鳴らし、マリアヴェルはゆっくりと歩を進める。
覚悟か。
あるいは何か胸に秘めた策があるのか。
ともかく、彼女はティースよりも先に動いた。
「目覚めよ、雪姫――」
パキ、パキパキパキ。
長い棒の先に集まった冷気が、そこに大きな刃を形成していく。
生者を死に誘う大鎌――デスサイズ。
ちりん――……
美しい音色。
外の足音が少しずつ近付く。
三十メートル。
二十メートル。
そしてマリアヴェルは、一度だけティースを振り返った。
細めたその瞳を一瞬過ぎったのは、懐旧の影か。

「……マリア、さん？」
――しゃん。
九つの鈴が一斉に鳴り響く。
――しゃん。
周囲に、まるで天使の羽根のような白い結晶が産まれる。
キラキラ、キラキラと。
衣が翻る。
あまりに幻想的な彼女の姿はほんの一瞬だけティースの心を奪い、足をその場に縫い止めた。
そして――
「……ッッ！！！」
空気が真っ二つに避けた。
声にならない断末魔の叫び。
紙のように切り裂かれた木製の扉の向こうで、一人の人魔が血飛沫を上げながら倒れるのが見えた。
「歌い、舞い、踊れ――……」
デスサイズを振り抜くモーションすらも、まるで神に捧げる踊りの一部分であるかのように。
九つの鈴が宙に跳ねる。
口が琴のような音色を刻んだ。
「雪姫よ、永久に、儚く……」
――しゃん。
笑い声と怒号。
同時に、
「！！」
地を揺るがすほどの足音が響く。
敵の、一斉突撃。
「マリアさん――ッ！！」
驚くティースの視線の先で、マリアヴェルは何の策を弄すわけでもなく敵の直中に駆けていった。

鈴の音色に合わせ、薄暗い灰色の中空に舞う血飛沫。
「がぁぁぁぁぁぁぁッ！」
「きぃぃぃぃぃぃぃッ！！」
数十匹の獣魔が放たれる。
大きなリス型の風の七十一族、狼型の氷の七十一族、大柄な猿型の地の七十三族。
肉片が弾け飛び、鮮血が中空を満たし、断末魔の叫びが木霊する。
「――」
マリアヴェルはそれでも躊躇することなく、光の粒のような雪の結晶を纏いながら死地へ飛び込んでいく。
深く。
さらに深く――
「マリアさんッ！！」
ティースも慌てて細波を抜き、その後を追いかけた。
「マリアさん、待ってくれ！　せめて俺と一緒に――！」
だが、
「……え――？」
外に飛び出し、その直後の状況を目の当たりにして。
ティースはようやく気が付いた。
（マリアさん……？）
何の策も弄さずに飛び込んだ……そう見えた、その裏に隠された彼女の意図。
彼女の“作戦”に。
（まさか――）
周りを囲まれようと、背後を取られようと、マリアヴェルはまるで気にも留めた様子もなく、ただ敵の中央を駆け抜けていた。
敵の一撃がその衣を掠め、美しい髪が数本宙に舞う。
――きぃ……ん。
鈴が一つ、弾け飛んだ。
（まさか、まさか……ッ！！）

想像にティースの背筋は震える。
「マリアさんッ！！！」
一際力を込めて地面を蹴った。
そんな彼女の思惑を“阻止”するために。
が――遅い。
「ひひひひ……ひひひひひひ……」
「ヒヒ……ヒヒヒヒヒヒ……」
「へ……へへへへ……」
獣たちが血飛沫を上げながら倒れ、人魔たちは武器を振り上げて獲物を狩らんとする。
マリアヴェルの振るう“雪姫”は次々に敵の命を奪い――同時に、確実に傷ついてもいった。
美しい衣の袖が裂け、そこから白い腕が微かに覗き、すぐに赤く染まった。
「……」
それでもマリアヴェルは止まらない。
止まらずに、敵の群の中に呑み込まれていく。
そして――
「マリアさんッ！　待って！　……マリアさんッ！！！」
大波が、引いていくように。
必死の叫びも空しく、ティースは今、その場に取り残されようとしていた。
――それもそのはず。
ネアンスフィアはあくまでデビルバスターを狩ることが目的のゲームだ。その他のネズミやモグラを狩ったところで当然ポイントになりはしない。
つまりティースの存在など、最初からネアンスフィアたちの眼中にはなく。
だから――
「マリアさん！　……マリアさぁぁぁぁぁんッッッ！！」

もちろん、ティースとて二本の足を持っていて、走ることができる。ただボーっと取り残されるばかりではないが、そんな彼を、敵がいつまでも放っておくはずがない。

「っ……くっ……！！」

踵を返してきた一人の人魔に、ティースの足は否応なしに止められる。

「くそ、マリアさん……！」

最下級とはいえ曲がりなりにも人魔である。そう容易く退けられる相手ではない。

逸る心を懸命に押し込めながら、打ち、払い、斬りつける。

――どすっ。

「なんで……」

そして、ティースの口から呟きが零れた。

手の平に鈍い感触を残し、貫いた下位魔の体から細波が抜ける。

血飛沫が舞い、息の根を止めた下位魔がどさり、と地面に崩れ落ちた。

血なまぐさい空気が辺りに漂う。

両腕は、返り血で赤く染まり、飛び散った赤黒いものが頬に付着して――ティースは顔面を歪めた。

「どうして……ッ！！」

歪んだ視界の中。

まるで大波がさらっていった後のように、マリアヴェルとそれを追いかけるネアンスフィアたちの姿は、すでに彼の視界から消えていたのだ。

「っ……！」

細波を握った拳が震える。

やり場のない怒り。

あまりの不甲斐なさ。

「どうして、マリアさん……ッ！」

一緒に戦い、協力して、ほんの僅かでも生き残る可能性に賭ける

つもりだった。
一人では絶望的であっても、二人ならどうにかできるかもしれない、と、絶望的な状況であってもティースは本気でそう考えていたのだ。
しかし彼女の方は、そう考えていなかったらしい。
「どうしてそんなことするんだよッ！　生き延びるんだって！　みんなが生き残る方法を考えようって！　そう、言ったじゃないかぁぁッ！！！」
空しく吸い込まれる叫び声。
吹き抜ける灰色の風。
――あれだけの敵を相手にすれば、大陸最強クラスのデビルバスターであろうとも切り抜けることは容易でない。
奇跡でも起こらない限り、彼女は命を落とすだろう。そしてこの絶望的な状況で奇跡など起こりようもなく。
「っ……」
これまでにも幾度となく感じてきた、途方もない虚脱感。
だが、状況は、彼が立ち止まっていることさえも許してはくれなかった。
「……ォォォォォォォ――ン……ッ！！」
「！？」
突如鳴り響いたのは、地を震わすほどの叫び声。
ビリビリ、と、空気が震えた。
「な……」
常識では考えられないような強烈な遠吠え。
おそらくは村を囲む深い森の中から。
ティースはハッとする。
「……アルファ。セレナスさん――」
灰色になった胸に、ほんの僅かな灯がともる。
そう、まだ全てが終わったわけではなかった。……彼には責任がある。ディバーナ・ロウ第四隊隊長としての責任が。

「行かないと。敵のことを知らせないと――」
そしてティースは森に向かって歩き出した。
唇を噛みしめ、手にした細波に再び力を込め……一瞬だけ目尻に浮かんだ涙を払い。
悪意が渦を巻いて待ち受ける、死の森へと――

白い閃光が弾け飛ぶ。
「る～るる～、正義～無敵の～デビルバスタぁぁぁぁ～♪」
バン！　バン！　バチバチバチバチッ！！！
衝撃と、焼け焦げる匂い。
木の幹に叩きつけられ、宙に投げ出され、乾いた土の上に転がった獣魔たちは、雷針から鋭く伸びる雷に次々と打ち付けられ息絶えていった。
「ふふふ～ん、アンタら、ちょっとばかし相手が悪かったさね～♪」
現在残ったメンバーの中で、今回のような戦いにもっとも向いているのが彼、セレナス＝カンファイスだった。
彼の持つ神具“雷針”は非常にトリッキーな特性を持っている。
まず、その刀身に貫かれ生命活動を終えた者は、体内に残った魔力を雷に変換され、その骸から二本の稲妻を放出する。放出された稲妻は、最初に貫かれた者よりも魔力の弱い者――という条件付きで自動的に次の獲物を襲い、その稲妻によって命を落とした者はやはり最初の者と同じく稲妻の媒介となって、再び二本の稲妻を放出……それが延々と続いていく。
つまり、最初に集団でもっとも魔力の高い者を仕留めることさえできれば、たったの一撃で、その効果範囲内（およそ半径十メートル）にいる全ての敵の身を打つことさえ可能なのである。
“連鎖雷”
それが雷針の特殊能力だった。防御力の弱い七十台の獣魔であれ

ば、どんな集団でもただの一撃で全滅させることさえ可能な力を秘めているのだ。
「ほいっ……と」
再び七体の獣魔が雷に打たれ命を落とし、地面に転がる。
「ど～うせなら～花火のよ～うに～色鮮や～かに生きて～死んで～♪」
クルン、と、まるでサーカスの一芸のように雷針を右手の中で回転させ、左手をテンガロンハットの上に置いてピタッとポーズを決めるセレナス。
とはいえ……彼も決して無傷というわけではない。肩を見れば少々激しく上下していることがわかるし、体のあちこちには明らかに獣魔の攻撃によるものと思われる傷と相応の出血があった。
が、それさえも彼の周囲に転がる獣魔たちの代価とすれば、驚くべき軽傷であることは間違いないだろう。
「さてさて、なかなか功を奏さぬ敵役の、次なる一手は如何なるものか～♪　みなさま、刮目してご覧あれ～♪」
リズムに乗った口上は獣魔たちを使役する人魔を挑発するためのものだろう。つまりは木々の陰に隠れてなかなか姿を見せようとはしないネアンスフィアたちに対しての発言である。
と、そのように陽気に振る舞うその一方、
（……さて、アルファさんはティースくんたちのとこに辿り着けたかね）
彼は至極冷静な思考で敵の攻勢が弱まったのを見計り、懸命に息を整えようとしていた。
じわっ、と、左の脇腹から溢れた血が服の表面に滲み出してくる。
それはつい先ほど、村人を装うネアンスフィアに不意の一撃を受けてしまったときのものだった。
疲労もダメージも見た目以上に深い。
（間に合ってればいいがね……ティースくんもマリアさんも、ここで死なせてしまうには惜しい人たちさ……）

彼がアルファと別れたのは――自らおとり役を買ってここに残ったのは、この森の中でついに正体をさらけ出したネアンスフィアの正体を、村に残った二人に伝えるためだ。

無謀だ、と、冷静な誰かは言うだろう。

いくら対複数の戦いが得意だと言っても、あまりに無勢すぎる。必ず命を落とすとは言わないまでも、とてつもなく危険な状態であることに変わりはない。

森に潜むネアンスフィアたちは、村にいた者たちと比べるとその数も少なく、アルファと二人での行動を続けてさえいれば、彼の生存率は飛躍的に上がっていたことだろう。

が、しかし。

このセレナスという男は脳天気で破天荒な印象とは裏腹に、非常に義理堅く、また人情味に溢れる人物だった。手遅れである可能性に自らの身の危険をプラスして天秤に架けてもなお、彼は村にいるティースとマリアヴェルに危険を伝える選択肢を選ぶことに何の躊躇いも感じなかったのである。

「だってさ……」

ふぅっ、と、一際大きな息を吐いて、そしてセレナスは狐を思わせる細い目をさらに細め、口元に小さな笑みを浮かべる。

「信頼してもらったなら、やっぱそれに応えるのが正義のヒーローってもんさね」

それが利己的な人間に言わせれば、無意味で愚かな行為だということを当然のように理解しながら。

「……ォォォォォォ――ン……ッ！！」

突然響いた遠吠えに、大気が震えた。

ゆっくりと、セレナスの口元から笑みが消える。

「……やっぱ隠し玉があったかぃ」

周囲で蠢いていた獣魔たちが、急に萎縮して戦意を失っていくのが感じられた。

……最下級とはいえ、獣魔である。その集団をたったの一声で黙

らせるなど、そう容易くできることではない。
そして。
「……こいつぁ」
セレナスの口元にもう一度、笑みが浮かんだ。……それは先ほどとは意味合いの異なる、体を駆け抜ける緊張に思わず零れた、引きつった戦慄の笑み。
「なんだぃ。単なるザコの寄せ集め部隊かと思ったら、最後にとんでもないもんを隠してたらしいさ……」
ガサッ、と茂みが揺れる。
やがてその木々の向こうに現れたのは、一体の人魔と、一匹の獣魔。
「……へへ。役にたたねぇクソどもだ。ヒヒヒ」
人魔の方は二十歳前ぐらいの青年だ。人とは違う長い耳に数え切れないほどのピアス。セレナスと同じように細い目は、しかし彼とは正反対に濁りきり、その口元には街の片隅に寄生するチンピラを思わせる嫌らしい笑みが浮かんでいた。
「しかもよりにもよって男の方かよ。クソ面白くもねぇ。ヒヒヒヒヒ」
「……」
下位魔だろう。デビルバスターであるセレナスにとってみれば、たとえ疲労し、いくつかの傷を抱える現状であっても遅れを取ったりする相手ではなかった。
が、しかし――
「……」
その傍らに佇む一匹の獣に、セレナスの視線は釘付けになったままだ。
（風の二十七族、ウィルヴェント――）
その形は狼、に一番近いだろうか。
黒に近い深緑色の体毛はふわふわと風に揺らいでいるが、その割に金属のような尖った光沢を放ち、その全身が放つ異様な雰囲気は

他の獣魔とは明らかに一線を画している。
　鼻先は狼のように長く口も大きいが、不思議なことに牙は見えず、耳は頭のてっぺん付近に二つ……いや、頭の側面にも耳らしきものが付いていた。
（……風穴を開ける者――かぃ）
　風の二十七族、ウィルヴェント。“風穴を開ける者”という異名の由縁は決して比喩などではなく、彼の能力そのもの。牙のないその口から放たれるドリルのような形状の鋭い風は、標的に文字通りの風穴を開ける。その威力は対魔用に強化されたフルプレートにすら易々と穴を穿ち、その中身を一撃で葬るほどに強力だ。
　また、そのような特性をひとまず置いておくとしても。
　二十台の獣魔といえばその能力は将魔にすら匹敵し、単独でこれを仕留めるには中堅のデビルバスターでもなかなか難しく、通常は複数のチームで相手することが基本だった。
「また随分身の丈に合わぬペットをお持ちで……」
　それだけの力を持つ獣魔であるから、通常、彼らを使役するのは将魔でも一握りの実力者か、あるいは王魔クラス――だが、相手が獣である以上、決して不可能というわけではない。
　おそらくこの下位魔は何らかの方法、偶然、巡り合わせ……ありとあらゆるものが積み重なって、この身の丈に合わぬペットを手に入れることに成功したのだろう。
「とすると、ジンさんがヤラれたのは、ただ罠にかかっただけってわけでもなさそうかね」
　くるん、と、雷針を一回転させ、半歩下げた左足が力強く地面を抉る。バチ……ッ、と、その右腕を小さな電流が駆け抜けた。
　そんな彼の構えを見て、チンピラ風の人魔が再び下品な笑みを漏らす。
「ヒッヒ……いいのか？　それとも、あのマリアヴェルとかいう女のように抵抗して、じわじわとなぶり殺しにされる方が好みなのか？」

「……」
その言葉に、セレナスの眉がほんの少しだけ動いた。
「ヒヒ、俺は連中と違って優しいからな。抵抗しないなら、両手両足くっついたまま綺麗な姿であの世へ送ってやってもいいぞ？」
「……。それはそれは。ご忠告痛み入りまする」
あくまで陽気なピエロのような口調で、しかし細めた目には無表情な怒りを湛え、セレナスは右手に持った雷針を軽く振るった。
バチッ。
「しかしま、残念なことにオイラはこの逆境って言葉がひじょ～に大好きでね。なんつってもオイラは絶対無敵、正義のヒーローだからさぁ」
「……ヒヒ、バカが。だったら苦しんで惨めに死ね」
ためらいも、駆け引きもない。その人魔は心の底から人の命を軽んじ、それを奪うことに何の躊躇も持ち合わせていなかった。
同時に、ウィルヴェントの瞳に闘志の炎が灯る。
「オォォォォォ――ン……ッ！！」
「……」
セレナスのこめかみから一雫の汗が流れ落ちた。……が、それとは裏腹に、彼の太股を叩く左手がリズムを取り始める。
じわり、と、脇腹の赤黒い滲みが広がる。
だが、口から漏れだしたのは、やはり陽気な歌。
「……ララ～無邪気な笑顔のた～めならば～♪　た～とえこの身砕けて～流砂に成り果てようとも～♪」
バチ……バチバチバチ……ッ。
じりっ、と、左足がさらに深く地面に食い込んだ。
細い目がさらに細められ、雷を纏った三つ又のレイピア“雷針”が、人魔と、その横で威嚇の唸りを上げる風の二十七族――ウィルヴェントに向けられた。
「……さて。それじゃ始めようかね。雷光のイリュージョンを、さ」
不利であることは承知の上。

だが、それをわかっていても、もう引き下がれない。
彼はその少々脳天気な性格や破天荒な外見とは裏腹に、この目の前の人魔の言動に怒りを覚えるほどには真っ直ぐで、そしてこの場面において戦う以外の選択肢が見出せないほどには単純だった。
たとえそれが勝ち目の薄い戦いだったとしても。

一方。
ティースが森の奥にアルファの姿をようやく見つけたのは、彼が森に入り込んでから一時間半ほど経った頃である。
「……アルファ！」
深い木々の向こう側にチラリと見えた銀色の髪、若干着膨れしているハートマーク付きのセーター。
あまりに特徴的なそれらのパーツは、どうやっても他人と見間違いようがなかった。
「良かった、無事だったか！」
「……」
そう言って駆け寄るティースに対し、アルファは無言の視線を向けた。そして次の瞬間にはホッと安堵の息を吐く。
この深い森の中で偶然にも出逢えたことは、奇跡とまでは言わないまでも運の良いことだった。ヘタをすれば彷徨ったまま、一人ずつネアンスフィアたちに殺されてもおかしくない……彼らはそんな、絶望的な状況にいたのだから。
アルファはかなり疲労している様子だったが、見たところ外傷はないようだ。
ティースはさらに彼に近付いて、少し辺りを見渡しながら、
「……セレナスさんは？」
「……」
その問いに対し、黙って首を横に振るアルファ。

「そうか……」
ティースは落胆の色を隠せずそう呟いたが、それ以上詳しく問いかけることはなかった。
事情は移動しながらでも聞くことができる。今はともかく、少しでも安全を求めて移動することが大切だった。
そしてティースは、肩で息を吐く彼に手を差し伸べると、
「お前ももう知ってると思うけど、あの村はもう全員、ネアンスフィアに――」
その手を取ろうとした。
が。
「……えっ？」
その華奢な、まるで女性のような白い手が、ティースに触れる前に。
風が、裂けた。
風？
いや――それ以上か。
それは目にも止まらぬ速さ、目にも止まらぬ一撃だった。
ドスッ！
「っ……」
アルファの口から溢れた、まるで押し潰された空気のような、声にならない呻き声。
「――え？」
一瞬の安堵に気を緩めたティースの口から、まるで惚けたため息のような声が漏れた。
森の奥から光速で迫ったその一撃。
ごぽっ……
「アル……ファ……？」
彼の胸から刃先らしきものが生え、そこから赤黒い液体が溢れ出る。
左胸。もっと正確に言えば胃の少し左上――つまり、心臓を、寸

分違わず。
「――」
何が起きたのか、ティースはすぐに理解できないでいた。
もちろん、目の前の現実が信じ難かった、ということもある。
が、彼が驚愕したのはそれよりも、もう少し先の展開に対して、だった。
つまり――
「ティース」
肉を抉る生々しい音とともに、胸に穴を開けたもの――槍の刃先が体から抜け、そして呆気なく息絶え地面に崩れ落ちるアルファ。
……いや、それは正確ではないか。
ティースは呆然とその光景を見つめながら呟いた。
「アルファが……二人……？」
そう。
ティースの眼前でアルファの体を貫いた槍の持ち主もまた、アルファだった。
つまり今、その場にはアルファが二人存在していたのである。
ティースが状況を容易に把握できなかったのも当然だろう。
「なにが――」
が、言いかけてハッとする。
そして地面に崩れ落ちた骸を見下ろすと、やがて納得した顔で、
「幻覚……？」
「ネアンスフィアにはどうやら、少なく見ても四、五人の幻人魔が混じっている」
「……」
たった今地面に崩れ落ちたアルファ――“アルファだった者”は、その手に小型のナイフを握っていた。
（これが……幻覚能力――）
もしも本物のアルファが駆けつけていなかったら、どうなっていたことか。

それを想像して、背筋がゾッと冷える。
先ほど手を差し伸べたその瞬間、ティースは目の前の人物に一片たりとも疑いを抱いていなかった。おそらくはナイフが体に突き刺さるその瞬間まで――いや、ナイフが突き刺さってもしばらくは状況を理解できなかったことだろう。
もっとも、気付けないことはなかった。
安易な安堵の表情、あっさりと見せた弱気の色、それらがいつものアルファらしくなかったのはもちろんのこと、あの状況で一言も発しなかったことも、冷静に考えれば不自然なことだろう。
しかし。
そうは言っても、あの状況でそれに気付くことがどれほど難しいことか。知識ではわかっていても、いざとなるとそう容易くは見抜けない。
まして何らかの理由で焦り、あるいは安堵し、その感情に大きな波があるときであれば尚のこと。
「幻人魔がいるとわかっているときは、必ず姿とともに声も確認することだ。大抵の場合はそれで済む」
「……ああ」
いつか学んだ幻覚能力に関する知識を頭の中で反芻しながら、ティースは神妙な顔でゆっくりと頷いた。
姿と、声。視覚と、聴覚。その二つを常に同時に確認できるならば、幻覚能力は恐れるに足らない。
何故ならば、幻覚能力の基本は“一対一”なのだ。
“一人の魔が同時に使える幻覚は一つ”
“錯覚の対象物は一度に一つ”
“一人の相手に同時に起こさせることのできる錯覚は一つ”
例外として、同じ種類で、尚かつ対象物を同じくする錯覚であれば、一人の力を複数の相手に作用させることが可能――つまり一人の魔が、ティースとアルファという二つの相手に対し、同時に同じ錯覚を起こさせるようなことは（能力次第では）可能なのだが、ま

あ大体の場合においては“一対一”なのである。
「……」
それらの知識を何度も何度も頭の中で噛みしめながら、改めてティースはアルファに問いかけた。
「……セレナスさんは？」
「別れた。君もマリアヴェルとはぐれたのか？」
「マリアさんは――……」
視線を落とし、拳をグッと握りしめる。
セレナス。
マリアヴェル。
生きている可能性は低いだろうか？　いや、だが必ず死んでいるとも言い難い。彼ら二人は少なくとも数年の経験を持つデビルバスターであり、たとえ敵の戦力が勝っていたとしてもそうむざむざやられてしまうような連中でもないだろう。
と、そんなティースの心を見抜いたかのように、
「二人を探すつもりか？」
そんなアルファの問いかけに、ティースは一瞬の躊躇の後、
「……探したい」
それがどれだけ無謀であるかは理解している。
だが、それでも彼は口に出さずにいられなかったのだ。
視線を落とし。やるせなさに肩を微かに震わせながら、
「マリアさんもセレナスさんも、きっと本当にいい人なんだ。こんなところで……あんな卑劣な連中に殺されていいような人たちじゃない……！」
言葉の端に怒りが滲む。
「だから、助けられるものなら――」
「諦めることだ」
「……」
ギリッ。
淡々としたアルファの返答に、ティースの拳にもう一度力がこも

った。
――これは分岐点などではなく、正しきただ一つの道の他、全ては破滅へ通じる道なき道。
理解していた。
理解していながら、それでもティースは、そこに残った僅かな可能性を捨てきれなかったのだ。
いい人たちだと思ったから。
そんないい人たちが、許し難い悪に殺されてしまうことが、悲しく、そしてどうしても納得できないことだったから。
「わかってる。わかってるけど――！」
だが、
「……どちらにしろ」
状況は、やはりそんな彼の思いを踏みにじる。
ティースの言葉には直接答えず、アルファは相変わらず淡々とした口調で言った。
「まずは、この包囲を崩さなければならない」
「え？」
「……ひひ」
「ッ！」
風に乗った笑い声に、ティースは弾かれたように辺りを見回した。
と、同時に、
「ひひひひ……ひひひひひひ……」
一つ。
「ヒヒ……ヒヒヒヒヒヒ……」
二つ。
「へ……へへへへへ……」
三つ――いや、それ以上。
全身の神経が逆立った。
「……こいつら――！」
迫っていたのは、彼らを仕留めんとする狩猟者たちのギラついた

瞳。
　一、二、三、四、五――マリアヴェルを追いかけた連中ほど多くはない。が、それでも十人余りの人魔たちと、それを上回る数の獣魔の気配が、薄暗い茂みと木々の奥に垣間見えていた。
「こいつら――ッ！！！」
　胸に燻っていた熱が急激に勢いを増す。
「ひひひ……女だ、女の方をヤれ……」
「……」
　アルファは無言のまま辺りを見据えている。瞳の中で、槍の先に灯った明かりが微かに揺れた。
「ヒヒ……んじゃ、オマケの方は獣どもに任せとくとするか、ヒヒヒ……」
「っ……！」
　煮えたぎる。
　吐き気がするほどに心臓が跳ねた。
「へ……へへへへ……ヒへへへへへ」
「ひひひひ……ひひひひひ……」
「ヒヒ……ヒヒヒヒヒ……」
　笑い声が、反響する。
　森の中に。
　頭の中に。
　心臓が早鐘を打つ。
　ティースの脳裏に焼き付いていた映像が、瞼の裏に蘇った。
　全滅した村。
　無惨なジンの遺体。
　セレナスのひどく陽気な歌声。
　マリアヴェルのどこか影のある微笑み。
　そしてネアンスフィアたちの、異常な、あまりにも異常な悦楽の表情。
　目の奥がチカチカとフラッシュして――そしてティースは、喉を

振り絞って叫んだ。
「……お前たちの思い通りになどならない！　なるものかぁぁ――ッ！」
水飛沫が跳ねる。
細波が、風を纏う。
ざんっ、と、右足が土の地面を抉って、炎の灯った瞳は森を覆う悪意の群れを睨み付けた。
「贖わせてやる！　お前たちが奪ったたくさんの命に――！！」
「ひひひひ……ひひひひひひ……」
「ヒヒヒ……ヒヒヒヒヒヒ……」
怒りの声にも、返ってくるのは気味の悪い嘲笑のみ。
追いつめた獲物が懸命に足掻く様を、楽しそうに見つめる狩猟者の瞳。
生ぬるい風が吹いて、遠くで鴉が鳴き声をあげる。
そして、ポツリ、ポツリと。
空が泣き始めた。

甲高い、鴉の声。
まとわりつくような生暖かい空気が辺りに漂っていた。
木の幹には焦げた跡。
土の上に残る跡は、獣と人が争いを繰り広げた証。
ポツ、ポツ、ポツ。
消えた雷鳴を追いかけるように降り出した雨。
ポツ、ポツ、ポツ。
それらはさらに強さを増して、土の地面に、深い茂みに、木の幹に吸い込まれていく。
――ポツ。
最後に、水滴がその者の顔面を打った。

「……」
言葉はない。
ポツ、ポツ。
一滴、二滴、三滴――
地面に伏したまま。
ポツポツ、ポツポツ……
「……」
ポツポツポツ……サァァァ――――
雨粒が雨糸に変わっても、その者は動かなかった。
地面を汚す、赤黒い水たまり。
見開かれたままの瞳。
時計を止めた――心臓。

「……オオオオオオオ――ン……ッ！！」
そして薄い霧雨の中、勝利を意味する遠吠えが響き渡った――

その5『窮鼠にご注意』

ネアンスフィア“キラーアント”に所属する人魔の数は、今回のゲームを始める直前の時点で五十二名だ。

その内訳は下位魔が五十一人と上位魔が一人。構成人数の多さは大陸全土に分布するネアンスフィアたちの中でもトップクラスに位置するが、魔力の高い者――つまり単体でデビルバスターを相手にできるような力の持ち主は一人もいなかった。

そんな彼らがこれまでに幾人ものデビルバスターたちを仕留めてきたのは、団体のリーダーであるオークデンという男の能力に依るところが大きい。

“おかしい”

幻の下位魔であるオークデンは現在四十二歳。

七歳の頃、望まぬ偶然から人間界に流され親と生き別れた後、途方に暮れていたところをネアンスフィアの参加者に拾われ、その後、三十五年間に渡ってこのゲームに参加してきた。これまでに所属した団体で仕留めたデビルバスターの数は軽く三十人以上に上る。

彼はこのキラーアントという団体の創設者でもあり、作戦参謀でもあり、仲間たちのいざこざの調停役でもある有能な人物だった。

“おかしい”

そんな彼が強くそんなことを感じ始めたのは、太陽が頂点から西に傾き始めて三時間ほどが経過した頃のこと。

これまで、全てが計画通り。

最初の一人、ジン＝ファウストは、犠牲を出すことなく罠に捕らえ、仕留めた。

二人目のマリアヴェル＝ソーヴレーは、副リーダーである氷の上位魔率いる四十人近い主力部隊が、三人目のセレナス＝カンファイスは風の二十七族“ウィルヴェント”を連れた彼の息子が、それぞ

れ仕留めているはずだ。
残るターゲットはあと一人……それと、それにくっついているオマケのみ。それを、彼が直接率いる十人余りのメンバーで仕留める。手こずるようならば、主力部隊かウィルヴェントが合流するまでの時間を稼ぎ、獲物を疲労させておけば良い。
すでに詰めの段階。それで何の問題もないはずだった。
――しかし、おかしい。
オークデンは順調なはずの計画がどこからか歪み始めたことを悟る。

その原因は計算違い。
単純な、とても単純な計算違いだった。

森がざわめき、そこから三匹の獣魔が飛び出してくる。
「くっ……！」
充満する血の匂い。
ピンと張り詰めた集中の糸。
一瞬、一瞬の判断が生死を分ける――逆に言うと、今はまだ、集中さえしていれば充分に対処できる状況だった。
獣魔の爪をかわし、すれ違いざまに致命の一撃を見舞う。細波が宙を滑り、微かな水飛沫を撒き散らしながら獣魔の体を斜めに切り裂いた。
と、そこへアルファの鋭い声が飛ぶ。
「ティース！　右だッ！」
「！」
思わず右に視線を向ける。
――が、何もない。
「っ……！」

ティースはハッとして反射的に身を翻した。
“左”腕に激痛が走る。
「くそっ……！」
「ティース！　後ろだッ！」
立て続けに聞こえる、アルファの声。
背筋に汗が浮かんだ。
「くっ……」
「ティース！」
「くそっ……」
「ティース！」
「……くそっ！！」
ポタ……ッ、と、赤い血が地面に吸い込まれていく。
乱される集中力。
わかっている。
だが、頭でわかっていても心が乱れる。そしてその一瞬の乱れが、この圧倒的に不利な状況においては致命的だった。
羽根のように軽いはずの細波が重く感じる。
細かい出血が、じわりじわりと体力を奪っていく。
幻覚による間接的な攻撃は、精神的にも肉体的にもじわじわと、まるで真綿のようにティースの首を締め付けていた。
（くそ……どうする……ッ！）
相対するは、三人の人魔と彼らが使役する十数匹の獣魔。
とはいえ、それはこの場にいる敵の五分の一程度で、残る敵は全て、ここから数十メートル離れた場所でアルファと交戦中だった。
（どうにかして……早く助けに行かなきゃ……！）
だが、しかし。
「……くっ！」
視界に現れたアルファが、突如人魔の姿に変貌する。
わかっている。
わかっているはずなのに――躊躇いが産まれ、一度鈍った剣先は

元の勢いを取り戻せず易々と弾かれた。
（まずい――ッ！）
がら空きになった胴体に吸い込まれる敵の切っ先。
人魔の口元に勝利を確信した笑みが漏れた。
「っ！」
体がカッと熱くなる。
伸びる切っ先。
白刃。
「ッ――」
カチリ、と、彼の体の中で歯車が噛み合う。その瞬間、視界が急激に鮮明に、目に見える全ての動きがゆっくりになる。
心臓に吸い込まれるはずだった一撃は、僅かに逸れて脇腹を掠めるのみだった。
「！？」
その予期せぬ動きに、人魔は驚愕の表情を浮かべる。
ざんっ！
ティースの右足が地面を深く抉った。
「こんなところで……死ぬわけにはいかないッ！！」
速度を増した細波が、今度は人魔の胴体へと吸い込まれていく。
――が。
「！？」
突如、間に割り込んできた見覚えのある銀髪のシルエットに、再び切っ先が鈍った。
そんなはずはない。
そんなはずがないと、頭ではわかっているのに――
「ッ……！！！」
左肩に激痛が走る。
ぶしゅぅっ……と、肩口が裂けて血が噴き出した。
辺りに漂う、血の匂い。
「くっ……」

体勢を崩していた人魔が間合いを取る。ティースの肩口を裂いた獣魔は、素早い動きで離脱していった。
息が乱れる。
気持ちも、また。
（っ……どうにか、しないと――）
責任感が、焦りを産んだ。
迫る刃。
迫る敵。
体勢を立て直そうにも、四方八方逃げ場はない。
（ダメ……なのか……）
荒い呼吸。
動悸。
「ヒヒ……ヒヒヒ……そろそろ終わりだナ……」
周りを囲む人魔と、それに引き連れられた獣魔たちが、徐々に包囲を狭めていく。
（くそッ……せめて――せめて、幻覚を見破る方法があれば……！）
敵の幻覚を見極める方法さえあれば。
（でも、一体どうすれば……）
敵の輪郭がぼやけてきた。
「ひひひ……ひひ……」
「へへへへへ……」
頭の中で反響する笑い声。
意識が朦朧としてくる。
（どうすれば――）
痛む左肩。
胸をグッと押さえる。
動悸が治まらない。
血の匂い。
死の匂い。
（こんな……ところで――）

その現場から八十キロほども離れたネービスでは、もちろんティースたちの危機など知る由もなく、

「……あら？」

夕方、いつも通り学園から屋敷へ戻ったシーラは、彼女と廊下ですれ違った瞬間、すぐに違和感を覚えて問いかけた。

「覚えのない香りね。セシル？」

ミューティレイク家の客人には、奇しくも同じ名門サンタニア学園に通い、同じ学問――薬草学を学んでいる二人の少女がいる。

その片方、金髪のポニーテイルを持つ美少女シーラ＝スノーフォールはその容姿の完璧さだけが取り沙汰されることが多いが、学業においても彼女はかなり優秀だ。

何しろこの学問都市ネービスでも伝統のあるサンタニア学園で、入学当初から常にトップの座を保っているというのだから、彼女の容姿ばかりに気を取られる連中も認識を改めざるを得ないというものだろう。

そんな彼女の知識は、基本である薬――つまり怪我や病気の治療に用いるもの以外に、香草――料理や紅茶の香り付け、あるいは香水の原料になるような植物の類にも及ぶ。実際、先日リィナが指摘したように、彼女が普段のとき身につけている香水は彼女自身の手によって作られたものだ。

「え。あ、わかりました？」

と、そんな彼女の指摘に答えたのは、薬草学を学ぶもう一人の少女セシリア＝レイルーンである。

サンタニア学園に通っているという事実だけで優秀であることの証明となるが、こちらはシーラに比べると平凡な成績だ。が、彼女もまた香草の類には興味があり、シーラに教わって色々な香水を作ることがある。

先日、ティースに贈った香り袋も、彼女が自ら作ったものだった。
と、そんな彼女はシーラに違いを気付いてもらったことがよほど嬉しかったのか、ニコニコしながら答えて、
「今回はですね、いつもとちょっと違ったコンセプトなんですよ」
栗色のセミロングを微かに揺らし、誰もが頬を緩めてしまいそうな愛らしい仕草でセシルはそう言うと、手にしていた小袋をシーラの方へと差し出して、
「この前の授業で教わったことと、シーラさんに教えていただいたことを私なりにミックスして作ってみたのです。……コンセプトはズバリ“瞬間移動”です」
「瞬間移動？」
香水のテーマとしてはいまいちピンとこない単語に、シーラは首をかしげながら小袋を受け取った。
手の平にちょこんと乗るサイズの小袋は口がギュッと閉じられていたが、それでも袋を通してはっきりとした香りを発している。
「ハーモナリスの花をベースにしたのね。柔らかい香り。あなたらしいわ」
「あ、ホントですか？」
そんなシーラの感想に、セシルはますます嬉しそうに頬を紅潮させると、
「あの、実はですね。これは香水にするのではなくて、こうやって小さな袋に閉じこめてプレゼントするために作ったんですよ」
「プレゼント？」
「はい。香水ではなく、お守りなのです」
セシルは頬を紅潮させたまま胸の前で手の平を合わせ、それから想いを馳せるようにゆっくり目を閉じて、
「危険な仕事をしている私の大事な人を護ってください、って。袋を手にするたびに、遠くにいる私の想いがその近くに瞬間移動できるとしたら、ものすごくステキなことだと思いませんか？」
「……なるほど。それで瞬間移動なのね」

「はい！　願い事だってきっと、近くにいた方が叶いやすいに違いありませんから！」

満面の笑顔ではっきりとそう言ってのけるセシル。

そこには打算の色などまったく見えない。見ている者が思わず和み、感心し、同時に心配になってしまうほどの純心。

それはもちろん、シーラとて例外ではなく、

「叶うと思うわ、その願い」

「……はい！」

微笑んでそう言ったシーラの言葉に、セシルは力強く頷いた。

――まさにその瞬間、彼女の願いが成就しようとしていたことなど、もちろん彼女は知る由もない。

怒りと恐慌の狭間をティースは彷徨っていた。

（こんなところで、死ぬわけには――！！）

死ねない。

死にたくない。

何よりも、これほどに非道で許し難い連中の思惑通りになってしまうことが、許せない。

――許せない。

「っ……！」

怒りの炎がボヤけた意識を覚醒させる。

（どうにかして……どうにか――！！）

一瞬だけクリアになった思考が、懸命にその方法を探し始める。

考える。

考える。

視覚、聴覚がアテにならないのならば、残るは嗅覚だろう。

（だけど、それは――）

そのとてつもなく単純な結論は、これまでにも何度か導き出され

たものだ。が、普通に考えて、嗅覚で一人の人間を見極めることなど、犬並みの嗅覚でも備えてなければ不可能だろう。

その人物が、何かわかりやすく強烈な匂いを発しているというのならばともかく――

（……匂い？）

いや。

ピクリ、と、ティースの鼻先が動いて、

「あっ！」

閃きがあった。

胸の奥。……いや上着の奥。

そこに確かに感じた温もり――そこに確かに存在していた想いは、圧倒的とまではいかないまでも、この現状を打破する光を彼にもたらしたのだ。

もちろん彼が知りたいのはアルファの動きであり、本物と偽物を見分ける方法だ。だから彼が持っているその匂い袋ではなんの役にも立たない。

だが、

「アルファ――ッ！！！」

ティースは叫ぶ。

木々や敵の群れに阻まれて姿は確認できないが、おそらく近くで戦っているはずの仲間に向けて。

「“袋”だ、アルファ！　“袋”の口を開けてくれッ！！」

あまりに曖昧な要求。戦っている真っ最中のアルファがその意味を理解できるかどうかは定かではない。

それどころか――彼がその“袋”を持っているかどうかすら確実ではなかろう。

だが、ティースには確信があった。

（言ってた……あの子は確か俺にプレゼントだって――俺にも、プレゼントだって、そう言ってた……！）

数日前の朝、セシリア＝レイルーンが彼にも渡したプレゼント―

―それは香水のように和やかな花の香りを閉じこめた、小さな袋だった。
懐にあった袋の口を開くと、血の匂いに微かな花の香りが混じる。
（これなら――）
再び袋の口を閉じ、懐の奥深くにしまって躊躇なくティースは動いた。
（あの子が……兄をあんなに慕っているあの子が、あいつにこのプレゼントを渡していないはずがない……）
体は消耗しきっていたが、それでも最後の力を振り絞って細波に力を込める。
そして目は、動きを捕らえるためだけに。
耳もまた、その動きを捕らえるためだけに。
判別は――嗅覚のみ。
敵味方を判別するのは、血の匂いと、花の匂い。
ただ、その違いだけだ。
「……！！」
怒号が響く。
罠に捕らわれ、死を待つばかりだった獲物が急に息を吹き返したことに、狩猟者たちは驚愕し、逃すまいと迫った。
「ティース――！！」
何度も聞こえた、偽りの叫び。
何度も見えた、偽りの姿。
――だが、香りがない。
それだけで、不思議なほどに迷いが消えた。
「あぁぁぁぁぁぁ――ッ！！！」
手の平に鈍い感触が伝わってくる。
肉を裂き、骨を断ち、返り血がその身を汚した。
断末魔の表情を浮かべる、アルファ。
一瞬だけ、心が臆病になる。
が、しかし。

「っ……」

ぶしゅぅっ！！

血を吹き出して“アルファだった者”が、呆気なく地面に崩れ落ちていく。

――いや、そもそも恐れることなど何一つなかった。

あのアルファという人物が、あんな叫び声でティースを呼ぶはずがなく、またこの状況で無防備に彼のそばに佇んだりするはずもなく。

問題は彼の気持ち。

躊躇い。

万が一、万が一を想像し、切っ先を鈍らせてしまう、その躊躇う心だけ。

だから実際問題として、アルファがセシルからその小袋を受け取っていて、そして今その袋の口を開けていたかどうかなどということは、さしたる問題ではなかった。

「っ！」

太股の裏に激痛が走る。

四方八方から迫る攻撃を全て避けるのは、今のティースの技量では不可能なことで、だから彼は必要最低限、とにかく致命的な一撃を避けることだけに留意した。

全身に増える傷。奪われていく体力。

だが、それを遙かに上回る気力。

それを支える怒り。

「あぁぁぁぁぁ――――ッ！！」

……そして――

「馬鹿な」

オークデンは、驚愕の呟きを漏らしていた。

彼らに襲いかかったネアンスフィアたちは、人魔十二名、獣魔が

四十七体。
戦いが始まってから十分。
「はぁっ！　はぁっ！」
ただの“オマケ”であったはずの青年の足元には、すでに四人の人魔と十五体の獣魔が倒れていた。
「馬鹿な、これほどに――」
完全に計算外だ。
オークデンは自らの失敗を悟る。
甘く見ていたこと。
彼がデビルバスターにくっついたオマケなどでは決してなく、デビルバスターとともに充分に注意を払うべき“敵”だった、ということを。
「……」
オークデンは舌打ちし、そして即座に一時撤退の命令を出すことにした。
彼が率いる仲間は、三分の二以上がすでに地に伏している。相手の疲労も考えれば戦いの行方はわからないが、全滅の危険すらあった。
そこまで無理をする必要はない。
近くには風の二十七族――ウィルヴェントを従えた彼の息子と、彼らの主力である三十数名の部隊が迫っている。
合流してからでも遅くはなく、その方がより確実。
それは統率者に相応しい、至極冷静な判断だった。

「はぁっ！　はぁっ！　……え……！？」
敵の波が急激に引いていくのを、ティースは驚きの目で見つめていた。
――その少し前に鳴り響いた笛の音が合図だったのだろう。波が引くように、周りを囲んでいた人と獣の群が次々に姿を消していく。
「はぁっ！　はぁ……っ！」

追いかけることは不可能だった。そこまでの体力が彼に残されているはずもなく。

「……はぁっ……はぁっ……」

それが何らかの罠である可能性も捨てきれないだろう。

そうしてティースはゆっくりと視線を彷徨わせ、緊張の糸をピンと張ったまま冷静に状況を分析することにした。

「はぁっ……はぁっ……」

息を整えながら、気配を探る。

木の陰、辺りの茂み、上空を覆う木の葉の群れ。

……がさっ。

「！」

咄嗟に振り返ると、そこには、

「……」

真っ赤に染まった分厚いセーター。

手には微かに光を発する神槍“細波”。

無言のまま、アルファがゆっくりと近付いてきていた。

「……」

なおも持続する緊張の糸。

だが――

「……アルファ」

鼻孔をくすぐった和やかな花の香りに、ティースはホッと息を吐いた。

姿と、香り。

そして、

「ティース」

声。

たとえどんな状況であれ、三つの感覚が同時に幻覚の力に侵されることなど有り得ない。

彼は間違いなく、本物のアルファだった。

「はぁっ……アルファ……無事、か……？」

緊張の糸が切れると急に全身が重くなり、ティースは腰から崩れ落ちて大木に背を預ける格好になる。
とっくに限界を超えていたのだろう。
そしてティースは歩み寄ってきたアルファを見上げながら、言った。
「お前、やっぱ持ってたんだな。セシルからのプレゼント……」
「ああ」
近付いてきたアルファは相も変わらずの無表情で淡々としながら、
「セシリアはいつも、自分だと思って持っていてくれと言う。だから持っている」
「……」
荒い息を吐きながら、ティースの口元には思わず微かな笑みが浮かんだ。
それは彼の意外な一面……と言ってもよかろう。
（……そっか。こいつにとってもセシルはやっぱり特別なんだな……）
ほんの少し。あくまでほんの僅かのことだが、ティースは初めて彼の人間らしい一面を見たような気がした。
とはいえ、そんな和やかな空気も一時的なこと。
ティースはすぐに表情を引き締めて、
「行こう、アルファ。あの敵がこのまま引き下がるとは思えない。……大丈夫か？」
「ああ」
アルファは即座にそう答えた……が、
「……本当に大丈夫か？」
ティースの目にはそんな彼の足取りがどうも頼りないように思えた。
その様子は単に疲労しているものとも違う。あるいはどこか体調が悪いのか。
（そういや今朝の寝坊といい、今日はあまりこいつらしくなかった

よな……）

そんなことを思い返しつつ、

「本当に大丈夫か？　体調でも悪いんじゃ――」

おそらくは先ほどの出来事で、ほんの僅かな親近感が芽生えていたのだろう。

何も考えず、ティースの手は彼の体調を探らんと無造作に伸びていた。

と――

「！？」

触れた瞬間、アルファの体がグラッと揺れる。

「っ……アルファ！？　お前、本当に熱が――！」

いや。

「……れ？」

違う。

いや、ある意味でいうと正解か。

「ティース？」

遠くに、アルファの冷静な声。

「……あれ。揺れてるの……俺の方……？」

そう。

揺れていたのは彼の方だった。そしてアルファの額が火のように熱く感じたのは、彼の体から血の気が引いていたせいだろう。

「くっ……」

腰から崩れ落ちる。

立ち上がろうとしても、膝に力が入らない。いや、膝どころか体全体に力が入らなかった。

動けない。

「うっ……うぅ……っ！」

しかも寒い。寒いのに、左肩と、左腕と、切り裂かれた太股の裏と、脇腹だけが熱かった。

思った以上に出血が多かったのだろうか。

まるで生命力が全身から抜け落ちていくように、ティースはその場に崩れ落ちていく。
「ティース――？」
ほんの僅かに怪訝そうなアルファの声。
「……アル……ファ……」
意識が遠のいていく。
尋常ではない、抵抗の余地もない、強力な脱力感。
（……ダメだ……こんな、ところで……）
敵の主力はまだ残っている。いくらアルファでも、意識を失った彼を連れて敵の追っ手から逃れることは不可能だろう。
つまりここで意識を失うことは、死ぬことにほぼ等しい。
だが、
（っ……）
動けない。
自分の体が自分のものではないかのように、まったく動けないのだ。
（こんな、ところで……死ぬのか――？）
そんな彼の、懸命の抵抗も空しく。
（セレナスさん……マリア、さん……ごめん――）
「……」
屈み込んだアルファの細い指先が頬に触れた感触を最後に、彼の意識はそこでプッツリと途切れてしまったのだった。

翌日。
早朝の空の下。
「――七班、八班は後方援護！　九班以降は万が一に備え、この拠

点の防備に当たれ！」

山の中、中腹よりも少し下辺りに設置されたネスティアスの拠点に、凛としたリゼットの声が響いていた。

「先陣の一班から四班は特に幻覚に留意！　単独行動は厳禁！　呼びかけには必ず暗号を使用！　……いいか、決して油断するな！！」

空気を震わすほどに気合の入った返事が響く。

ネスティアスのディグリーズ玖隊。“月神”リゼット＝ガントレットの率いる部隊はどちらかといえば若手の隊員が多く、ネスティアスにおいてはもっとも女性の比率が高い部隊でもある。

「よし！！」

ゆっくりとリゼットが武器を引き抜く。

それは優男かあるいは男装の麗人かと言った容貌にまるで似合わない、大きなナタのように無骨な大剣だった。

「じゃ……行こうか、みんな」

そしてリゼットは声色を急に変え、後ろに控える部下たちに向けて軽くウインクしてみせると、

「生き延びた子には全員にご褒美をあげるから。だから頑張って」

途端、部隊員の間から失笑が漏れた。

まあ、それはそうだろう。それが金一封だというならともかく“ほっぺにキス”などというご褒美では。

……もっとも、知っていてなお奮起する者が密かに数名（男女とも）いたようだが。

と、それはともかく。

「リゼット様！！」

「うん？」

伝令がやってきたのは、今まさに、山に向かって突入を開始しようとしていた、そのときのことだ。

身につけているのはネスティアスの制服。深緑色の制服の袖にあるのは“伍”の文字。

彼らとは別の場所から突入する予定だったルーベンの部隊からの

伝令だった。
「どうしたの？　ルーベンがまた仮病でも使った？　……しょうがないな。あの子はすぐにそうやってにサボろうとする。君も真似してはダメだぞ」
「い、いえ……」
リゼットの軽口に伝令は少しだけ萎縮しながら、
「たった今、我々の部隊が山の奥から脱出してきた者を保護しました」
「……逃げてきた？　話は聞いたの？」
少し表情を引き締めたリゼットの問いに、
「はい。それでルーベン隊長がおっしゃるには、敵はネアンスフィア――前情報通り“キラーアント”で間違いなさそうとのことで、村の方はすでに全滅。ですが、まだ二人ほど仲間が生き残っているかもしれないとのことです」
「なるほどね。了解です。他には何か？」
「はい。それが……」
使いは少し躊躇った。
が、すぐに意を決したように口を開いて、
「忙しい中伝えてたのだから、使い――その、つまり私に“ご褒美”を持たせてやってくれ、と……あの、ご褒美、というのは一体――？」
「……」
再び失笑が漏れた。
「はぁ……まったく、あの子は」
リゼットもまた、ルーベンの悪戯に仕方なさそうなため息をつきながらも、ニッコリと笑顔を使いに向けて、
「君はご褒美、欲しい？」
「あ、いえ！　わ、私はそんな！」
「そっか。それは残念。じゃあ、ルーベンに伝えといてよ。そんなにご褒美が欲しいのなら、自分で取りに来なさいってさ」

「は、はぁ……」
わからない顔で戻っていく伝令の男。
「さて、と」
見送ったリゼットの表情に、再び闘志の色が差す。
と、同時に、部隊員全員にも緊張が戻る。
「油断は禁物だよ、みんな。……いかに取るに足らない相手でも、ね」
そしてこの日の太陽が僅かに顔を覗かせた頃、ディグリーズの二部隊は山の奥へ向かって突入を開始したのだった。

――はっ、はっ、はっ、はっ。
駆ける、駆ける、駆ける。
荒い呼吸。
迫り来る生温い風。
おかしい。
おかしい、おかしい、おかしい。
絶対に、おかしい！

――はっ、はっ、はっ、はっ。

単純な計算違いだ。
彼らの戦力はたとえまともにぶつかり合ったとしても勝てるだけのものであり、彼が巡らせたのは勝つための策ではなく、ただ犠牲を減らすための策だった。
ネアンスフィアは“ゲーム”である。よって狩猟の楽しみを損わ

ないようにとルール――毒を用いてはいけない、最初から丸腰の敵を襲ってはいけない、等、いくつかのルールが設定されている。
彼――キラーアントのリーダーであるオークデンはそのルールの範囲内で、出来る限り味方の犠牲を減らすためにいくつかの策を弄してきた。
ジン＝ファウストを仕留めるところまでは、上手く行きすぎたと思うほどに順調。
その後に敵を分断し、確実に勝てるだけの戦力を個々にぶつけていった。
そこまでも予定通り。
……アルファとティースに対し、一時撤退せざるを得なかったところも、想定できる範囲内の出来事ではあった。
では、どこで計画が狂ったのだろう。
いや――“誰が”計画を狂わせたというのだろうか。
「！！」
ぐにゃっ、という感触。
「くっ……！！」
足元を確認するまでもなかった。
辺りに散らばっていたのは、赤黒い肉塊。もはや元が誰であったか判別できないほどに寸断され、千切れ飛んだ生命の成れの果て。
しかも――
「全……滅……だと！！」
辺りに散らばる死体は、全て彼の仲間のものだった。
キラーアント――総勢五十一名のうちのどれだけか。少なく見ても三十人近くの死体がその三倍以上のパーツに分かれ、木々の生い茂る地面に、木の幹に、枝の上に散らばっていたのだ。
“地獄絵図”さながらに――
「馬鹿な！　そんな馬鹿なッ！！」
負けるはずがなかった。
まともにぶつかっても負けないだけの戦力のはずだった。

「こんなにも早く人間どもの部隊がやってきたとでもいうのか――！」

まさか。

それはどうしても考えにくい。あらかじめ彼らの動きを察知していなければ、とてもこの時間には間に合わないはずだ。。

だが、しかし、現実に仲間たちは全滅に危機にさらされている。

“狩られる”立場に追い込まれてしまっている。

実際に、狩られている――

「……オォォォォォ――ン……ッ！！」

「！？」

響いたのは大気を震わす、聞き覚えのある遠吠え。

風の二十七族、ウィルヴェント。それを率いているのは彼の息子だった。

まだ、戦っている。

「くっ……！」

オークデンは咄嗟に声の方向へ走った。

走る、走る、走る。

彼の息子と、その息子にだけ従順なウィルヴェントだけは失うわけにはいかない。失えば再建の望みが失われる。彼の一生を賭けたこのネアンスフィアというゲームから、永久に脱落することになる。

茂みを掻き分け、仲間たちの死体を踏み荒らし、視界を覆う木の枝を払いのけ。

走る。

走る。

「……ヒヒ」

「！」

聞き覚えのある笑い声が聞こえた。

息子の笑い声。

――聞こえたような、気がした。

ガサッ。

上空で、木の枝が揺れる。
「なに……？」
オークデンは立ち止まった。
そして見上げた上空。
そこから落ちてくる。
「な……」
反射的に手を伸ばしたオークデンの体に、水飛沫のようなものが飛び散った。
「っ……」
一瞬目を伏せる。
どさっ。
腕の中に飛び込んできたのはちょうどスイカぐらいの大きさで、生暖かい果物のような感触の物体。
赤黒く。
青白い。
「っ……っっっっ……！！」
叫び声を堪え切れたのは、戦地に身を置いてきた長年の経験故か、あるいはあまりの衝撃に言葉すら失ってしまったのか。
尻餅をつく。
ギョロリと剥いた息子の白目が、恨めしそうに彼を見つめていた。
「どっ、どうしてこんな――」
「……オォォォォ――……ッ！！」
「！」
もう一度聞こえたウィルヴェントの遠吠え。
「……ォォ……ォ……」
だが、それは不自然に途切れた。
まるで……そう、まるでそれが断末魔の叫びであったかのように。
「……」
そして静寂。
空気が質量を増したかのような、重苦しい静寂。

――単純な計算違い。

「はぁ、はぁ……」

聞こえるのは、唯一自らの呼吸音だけ。

体が動かない。

「はぁ、はぁ、はぁ……！」

まるで周りの空気に全身を押さえつけられているかのように。

「はぁ――はぁ――はぁ――……ッ！」

肺が焼け付くほどの荒い呼吸。

心臓が壊れるほどに脈打つ。

闇が、迫る。

恐怖。

押し潰されんばかりの、恐怖。

――ちりん。

狩猟者は用意周到でもなく、緻密でもなかった。

ただ、圧倒的。

ひたすらに圧倒的だった。

死の影が、彼の背後に舞い降りる。

死神が――舞い降りる。

――ちりん。

最後に彼の耳に届いたのは、涼やかな鈴の音と。

そして……魂を奪う、セイレンの歌声。

「次の世では、どうか楽しく安らかな一生を送れますように――」

薄暗い霞の空に、血飛沫が舞う――。

その6『回収、後始末』

ネアンスフィアたちに滅ぼされた山奥の村からもっとも近い、麓の街コッサール。

ベルン、ルナジェールという二つの大都市を結ぶ街道の中間地点から脇に僅か一、二キロ。旅人が体を休めるのに良い条件が整っているにも関わらずどこか寂れた田舎臭が漂っているのは、雨が降るとすぐに土砂災害が起こってしまう土壌の悪さとともに、ベルンとルナジェールを結ぶ街道が整備されるに従って一日の移動距離が伸び、立ち寄る人の数が年々減り続けているためである。

とはいえ、まあ。

この日の天気は真正面を向くだけで眩しくなるほどの快晴で、一昨日の夕方に降っていた雨もすぐに上がったため、とりあえず本日に関していえば土砂災害が発生する確率はかなり低いと言えるだろう。

さて。

そんなコッサールの街の一角にある宿屋。

「……た、頼む、見逃してくれぇ」

死に行くものの断末魔の叫びとしてはあまりにも情けなく。また、死を覚悟した勇者のものとしてもやっぱり情けない。

三流の悪役が正義の味方に許しを請う、そんな場面にピッタリな呟きとでも言うべきか。

が、それもそのはず。

彼――ティーサイト＝アマルナの発したその寝言は、死とはほど遠い安全な環境の中、身体に負ったいくつかの怪我も生命には全く危険がないと診断された、その直後に発したものだったのだから。

「た、頼むから触らないで……気絶するぅぅ……」

しかも、どうやら彼が見ているのは敵に襲われる悪夢などではなく、それとは全く別の――彼特有の悪夢らしい。

そんな彼の不憫な境遇には同情を禁じ得ないが――まあそれはともかく。
今は彼が、必死とも思えたあの山奥から生還したことを素直に喜ぶこととしよう。

さて、そんなこんなでティースが目を覚ましたのは昼過ぎだった。

「リゼット＝ガントレットです。はじめまして」
「……はへ？」
暖かな陽光。
爽やかな空気。
息づいた人々の喧噪。
「……へ？」
目を閉じる以前の暗闇はどこにもなく、その身に迫っていた死の匂いも、狩猟者たちの魔の手も、全てが跡形ない。
そこにあったのは色付いた街の風景。
生きている街の空気。
夢か、幻か。モヤのかかった彼の頭はそれすらすぐに判別できない。
が、
「な、なにが……いっ――っ！！」
脇腹に走った痛みが、彼に答えを示した。
首筋に浮かんだ脂汗を感じながら、しかめた顔で自分の手の平を、体を、布団に隠れた足の先を見つめる。
「俺……生きて、る……？」
全て、ある。
生きている証――感覚がそこにあった。
「は・じ・め・ま・し・て♪」
「え？　え、うわぁ！！」
もう一度、今度は耳元で囁くような声に、ティースは跳ね上がっ

た。
「い……ぎゃぁぁぁぁぁぁぁッ！！」
当然のように全身を襲う、激痛。
「あ、ゴメンゴメン。そんなに驚くと思わなかった」
「ぐ、ぎぎぎぎぎ……」
だが、その痛みは確かに生きていることの証。
（……そうか。俺、生きてるのか……）
状況を認識することで心に少し余裕が産まれ、包帯の巻かれた脇腹を押さえながらティースは涙目で辺りを小さく見回した。
木造の小さい部屋だ。内装は質素で脇のサイドテーブルには一輪挿しの花が飾られている。窓から見える風景を見ると、どうやら二階のようである。
部屋にいるのはベッドに横たわるティースと、もう一人。
ティースはようやく目前の人物に視線を戻して、
「あ、ええっと……」
「リゼット。リゼット＝ガントレットです」
「リゼット、さん？　……あなたは――？」
言いかけて、ティースは思い直すように口を噤んだ。
リゼットと名乗った青年の着ている、軍服風の黒い制服。
袖に刻まれた“玖”の文字。
見覚えがあった。
「リゼット……ガントレット……？」
その名前にも僅かに記憶が刺激されて。
「……まさか、ディグリーズの？」
「そう」
リゼットはニッコリと微笑んで、足を組み直した。
「ディグリーズの玖、リゼット＝ガントレットです。以後、お見知り置きを、ティーサイト＝アマルナくん」
「……」
驚愕。

と、同時に納得した。
「じゃあ……あなた方が俺たちを助けてくれたんですね……」
そう言って大きく息を吐く。
確かに、あれだけの窮地から救うことは容易ではない。が、ネスティアスのディグリーズならば……と、彼がそう考えたのは当然のことだった。
しかし、
「うーん。僕らが助けたっていうのは半分正解だけど、半分違ってるね」
リゼットは小さく首を傾けて言った。
「君を助けたのは君の仲間。僕らはそれを保護しただけ」
「え？」
「アルファ＝クールラントはディバーナ・ロウで一番の使い手だって聞くけど、噂は間違ってなかったようだね」
「！」
その言葉にティースはハッとして思い出す。
「そ、そうだ！　アルファは――そ、それにセレナスさんやマリアさんは！？　ネアンスフィアは――……いっッぅ！！」
「興奮しない方がいいよ」
リゼットはそう言って宥めようとしたが、ティースは脇腹を押さえ、額に脂汗を浮かべながらもさらにリゼットに詰め寄った。
「っぅ……みんなは……ど、どうなったん……ですか……！？」
「……」
小さなため息。
どうやら宥めても無駄だと悟ったようだ。
「あとで、と思ったけど、その様子じゃ今話した方がよさそうだね」
「っ……」
その言葉に、ティースの胸に暗い影が落ちた。……言い方からして、少なくとも手放しで喜べる結果ではないことは確かなようだ。
「まず――」

リゼットは足を再び組み替えると、軽く前髪を掻き上げながらやや上目遣いの視線を彼に向け、ゆっくりと切り出す。
「君を背負って山を降りてきたアルファくんは無事です。何故か診察を拒否されてしまったので詳しい状態までわからないけど、君よりは重傷で、でも動いているところを見る限りでは命に別状はないといったところかな」
「……」
少し安堵する。
が、リゼットはすぐに容赦なく続けた。
「セレナス＝カンファイスは残念ながら遺体で見つかりました。辺りには無数の獣魔の死骸が転がっていたそうです」
「ッ……」
その瞬間、ティースの唇が小刻みに震えた。
ゆっくりと視線が落ちる。
（……セレナスさん――）
仕方のない結果、ある程度予測できていた結末だったからといって、こみ上げる感情を完璧に制御することは不可能だった。
ティースは声を振り絞るように、
「じゃあ……マリアさんは？」
「マリアヴェル＝ソーヴレーは行方不明です」
「……行方、不明？」
最悪の結果を想像していたティースにとって、それは少々拍子抜けしてしまう返答だった。
「行方不明……ですか」
落胆と安堵、二つの感情が入り交じって胸に渦を巻く。
もちろん広くて深い山中のこと、遺体が見つからないといって無事だと考えるのはかなり無理がある。が、それでも生き残りの可能性が僅かにでも残ったのは確かだ。
……彼女が生きていたなら、心がどれだけ救われることか。
と、

「ところで、ティースくん」
そんなティースに、リゼットは唐突に問いかけた。
一見繊弱そうにも見える視線が一瞬だけ鋭い光を纏ったが、ティースは気付かず、
「え、なんですか？」
「君と一緒にいたのは、それだけで間違いない？　他に仲間は？」
「え、あ……はい。ジンさんという方が――」
「それだけ？」
「？」
ティースにはその問いの意味がわからず、眉間に皺を寄せ、窺うようにリゼットの顔を見つめ返して、
「それだけ……ですけど、それがなにか？」
「ううん、間違いないならいいんだ」
意外にあっさりとリゼットは引き下がった。
そして片方の足をタン、と鳴らすと、組んでいた足をほどいて、
「それとネアンスフィア“キラーアント”は全滅したから安心して。もし危地を脱していたなら、そのマリアヴェルさんも必ずどこかで生きているはずだ」
「え、あ……はい」
いまいち腑に落ちないティースの目の前でリゼットがゆっくりと立ち上がる。
「とにかく、もうしばらくしたらこの街を出発するから、それまではゆっくりしてるといいよ。馬車の揺れが傷に響くかもしれないけど、男ならそのぐらいは我慢できるよね？」
「あ……は、はい」
「では、お大事に」
パチンとウインクして部屋を出ていったリゼットに、ティースはしばらく呆気に取られたような表情だった。
が、やがて、
「……」

無言で視線を布団の上に落とす。
誰もいなくなった部屋は静けさに包まれ、その静寂は彼の意識を現実世界から思考世界へと徐々にシフトさせていった。
「……」
痛み。
光。
喧噪。
……生き延びた。
運が良かった、と言うべきだろう。あのとき彼が追い込まれていた状況は、実力や気力だけではどうにもならない状況だった。
もし三十余名のネアンスフィア主力部隊が彼を襲っていたら。
あるいはウィルヴェントが彼の目の前に現れていたら。
確実に死んでいた。それは努力だとか、決意だとか、そういったものが及ばない領域のものだ。
今の彼には決して左右できない、運命の力。
そして――
「セレナスさん……」
それもまた、彼にはどうしようもできない結末だったろう。
勇敢であり、人情家であったが故に失われた、尊い命。
だからこそ、悲しい。善き命であったからこそ、ティースにはその死がどうしようもなく悲しかった。
「――……っ」
目尻から溢れた涙が頬に一筋流れる。
そして、祈る。
もう一人。
僅かな可能性に賭けて。
「マリアさん……どうか生き延びててくれ……」
――一方。

「リゼットさん」
「ああ、ルーベン」
そんなティースのいる民家から出たリゼットは、道の向こうから歩いてくるルーベンの姿を目に留めて立ち止まっていた。
そして問いかける。
「どうだったの？」
歩いてきたルーベンは鍔の広い日除け帽を深くかぶり、ゆらゆらと近付いてくると、
「毎度のことながら、太陽ってホント、ウザいですよね」
「……え？」
意表を突かれた顔で、それでもリゼットはまともに答えて、
「でも、その太陽があるおかげで僕らは生きていられるんだろう？」
「だってほら。太陽ってなんかラドフォードさんに似てるっしょ」
「……」
無言で空を見上げるリゼット。
「……確かに似てるかも」
「ウザいですよね」
何の躊躇もなく言い切ったルーベンにリゼットは苦笑しつつ、改めて質問する。
「それで？　マリアヴェル＝ソーヴレーのことは何かわかったかい？」
「ええ。全然」
「どっち？」
「何もわからないということがわかりました」
「なるほどね」
得心がいったという表情でリゼットが頷くと、ルーベンは憎らしそうに青空を見上げながら、
「もっと調べればなんか出てくるかもしんないですけど、まぁ今のところは特におかしなところもないですね」
「でも、そうすると、キラーアントを全滅させたのは誰なんだろう

？」

腕を組み、思案するリゼット。

思い出すと、微かな戦慄が体を駆け抜ける。

……それは壮絶な光景だった。

薄明かりの森に飛び散る無数の肉塊。木の枝に、幹に、茂みのあちこちに、足の踏み場もないほどに散乱した生命の成れの果ては、おそらくそのほとんどがネアンスフィア“キラーアント”のものだろう。

全滅。

おそらくそう判断して差し支えのない、それほどに徹底的な、言うなれば“殺戮”だった。

リゼットは言った。

「生き延びたディバーナ・ロウの二人の証言からして、全滅させるまでのそれほど長い時間はかかってないだろうね。でも大勢でやったにしては、僕らが全く存在を感じられなかったのも腑に落ちない。あまりに鮮やかすぎる」

「少数、それも三人以内でしょうね」

そんなルーベンの言葉に、リゼットは賛同しながらもやはり腑に落ちない表情で、

「だとすると相当な実力の持ち主だ。それにやるだけやって姿を消した理由もわからない」

「ま、人にはそれぞれ事情があるってもんです。……あー、いい加減消えてくれませんかね、あのラドフォードさんみたいな太陽」

「……」

リゼットは仕方なさそうに苦笑して、

「ま、僕らの仕事はここまでだものね。ディバーナ・ロウの二人も無事助けられたことだし……ほら、これで君も少しは恩返しができたんじゃない？」

「……」

その言葉にルーベンは視線を一瞬だけリゼットに向け、そしてた

だ小さく首を横に振った。

――その山の頂上付近は周囲が全て急な崖になっており、普通の人間には決して踏み込めない領域。

訪れるのは一部の鳥、獣、虫。

だからそこにある綺麗な天然の花畑を知る者はほぼ皆無と言っていいだろう。

だが、しかし。

今、そんな未踏の領域に二人の人物がいる。

「やれやれ」

吹き抜けるのは、地上よりも少しだけ涼やかな心地よい風。

「リューゼットさんやネイルさんの自分勝手ぶりにも驚かされますが、あなたのそれも負けず劣らずですね」

一つは青年。穏やかで、知的。だが、どこか捕らえどころのない、得体の知れなさを感じさせる響きの声だった。

そしてその声が向けられた先には花畑を背に、崖っぷちに腰を下ろした一人の女性。

長い耳。

それは彼女が人魔であることの証だ。

そして、

「ふふ。でも、君がわざわざ助けに来るなんて予想外だったよ」

答えた声はまるで琴を奏でたような美しい音色。

神秘的。

青年は答えた。

「クロイライナさんがどうしても、と言うので。ま、結局はその必要もなかったようですけれど」

女性の背後、五、六メートルほど後方で大きめの岩に腰掛けた青年は頭に白いターバンのようなものを巻いている。
左右には、鋭い爪を持つ巨大な鳥――いや、鳥型の獣魔が二匹控えており、手には一本の管楽器。
その甲に浮かび上がるのは、涙型の入れ墨だった。
女性はクスッと笑って、
「いい風だね、ザヴィア」
「ニューバルド。何度も言いますが、私に自然とやらの善し悪しは理解できませんよ」
「そ」
特に気分を害した様子もなく、ニューバルド――古宗教の神名で呼ばれた女性は再び小さく微笑んだ。
「ああ、いえ」
ザヴィアは目を閉じ、わざとらしく思い出したような顔をして言った。
「今はまだ、マリアさん、とでもお呼びした方が良いですか？」
ちりん。
風に揺れて、鈴が音色を奏でる。
「どちらでも」
返った答えには少しの揺らめきもない。
「そうですか」
ちりん。
「今は……そう。夢と現の狭間。白と黒の、ちょうど中間。……そうだ、ね。あの太陽が完全に姿を現すまで、かな」
「狭間、ですか」
ザヴィアは昇りかけの太陽をチラッと見て、小さく肩をすくめた。
「……理解できませんね。タナトスなんて素晴らしく無秩序な組織を作り上げたあなたが、どうしてそんなに人間としての自分にもこだわろうとするのか」
「ふふ、だろうね。私にもわからないもの」

マリアヴェルは可笑しそうに目を細め、未だ半円型の太陽を見つめた。
「なんでだろう。なんでだろう、ね……でも」
「なにか？」
マリアヴェルは首を横に振ると、
「ううん、なんでもないよ。……そうそう。なんだか今回の“封魔”は前のより効果が短かったような気がするね」
「クロイライナさんが心配して密かに調節したのでしょう。ニューバルド。あなたがもし誰かに負けるとしたら、人の姿でいる、そのときぐらいでしょうから」
「ふふ、そうかも」
ゆっくりと、太陽が昇っていく。
「……そういえば」
ザヴィアはやはりわざとらしく、さもたった今思い出したかのような表情をして言った。
「今回のお仲間にはディバーナ・ロウが混じっていたそうですね。それもどうやら、私と少々縁のある方も一緒だったようで」
一瞬、空白。
「……ティースさん、か」
「どうでした？　なかなか見所のある方でしょう？」
「……」
どこか意味ありげなザヴィアの問いに、マリアヴェルは遠くに広がる水平線を眺めて、
「生き延びてくれて良かった」
呟くように言って、ゆっくりとザヴィアを振り返った。
朝日を背にした彼女の瞳には一点の曇りもなく――
「彼の言葉を聞いて思ったんだ、ザヴィア。この人はあんな連中に殺されてはいけない人だって……ね」
「……」
ザヴィアの口元が歪んだ。

「……あなたは本当に不幸な人だ、ニューバルド」
沈痛な言葉とは裏腹に。楽しそうに、心の底から楽しそうに笑みを浮かべるザヴィア。
「でも、だからこそ私はあなたに協力する。あなたの辿り着く先に、どれだけ皮肉でどれだけ不幸な結末が待ち受けているのか……それが楽しみで楽しみで仕方ありませんからね」
「そう。だったらザヴィア、あなたの好きにするといい、よ」
「……」
少しも揺らぐことなく平然と返したマリアヴェルの微笑みに、ザヴィアの背中には微かな痺れが走った。
――変化。
紛れもない。
「私は何も強要しないし、何を与えもしない。私はただ、私の道を進むだけ」
瞳に宿る光の質。
身に纏う空気。
――あるいは元に戻りつつあった、という方が正しいのか。
「理由なんて忘れちゃった。でも私は、ディバーナ・ロウが憎くて憎くて仕方ないの」
「……」
ザヴィアは大いなる興味と、そして微かな戦慄を胸にそんな彼女を見つめた。
（ニューバルド――報恩と復讐の女神、か……）
「……ふふ」
風に乗った、笑い声。
神秘的な装いはそのままに、ただ彼女を彩っていた色だけが剥がれ落ち、少しずつ、少しずつ狂気という名の汚泥を纏い始めていた。
太陽が、その姿を完全にさらけ出す。
「……」
ザヴィアは手の平に滲んだ汗を隠すように、手にした管楽器を口

元に運んだ。
「ふふふ……あは……」
日が昇り、女神は地に堕ちる。
地に堕ち、いつか地獄の悪魔すらも従えて人を恐怖の渦に陥れることだろう。
「はは……あはははは――」
いつか――必ず。

「どうぞ、ティース様」
「あ、どうも、すみません」
ティースたちがディグリーズとともにネービスに帰還したのは、その次の日の昼過ぎだった。
自分より二十歳近くは年上であろう御者の男性にペコリと頭を下げ、ティースは細波を片手に馬車を降りる。
「っ……！」
眩しい太陽に目を細めた。
光の中から浮かび上がるのは、綺麗に刈り揃えられた芝生と目の前にそびえる屋敷。
（アルファのヤツもたまにはこっちまで来ればいいのになぁ）
いつも第四隊の詰め所で“生活”している彼は、正門を抜けたところで一足先に馬車を降りてしまった。よって、本館までやってきたのはティース一人である。
馬車が去っていく。
と、それと入れ替わるように、
（……あれ？）
屋敷の別館から出てくる三つの人影がティースの視界に入ってく

る。
（あれは――）
「ティース様！」
そしてそのうちの一人はティースの姿を見つけるなり声を張り上げ、スカートの裾を掴んで彼に駆け寄っていった。
「リィナ？」
パーラー・メイドの清楚な衣装と、他の女性よりも頭一つ分以上抜けた身長が非常に目立つティースの昔馴染みの少女、リィナ＝クライストである。
もちろん、彼女がこうしてティースを出迎えたこと自体は別段不思議なことでもない。
ただ、
「お、お怪我はッ！？　あ、歩いたりして大丈夫なんですかッ！？」
「へ？」
その突然の慌てように、ティースは少々面食らってしまった。
「え、あ、ちょっと、リィナ？　……うわっ」
彼女の手が伸びたのを見て咄嗟に身を引いてしまうティース。……女性アレルギーであるが故の、悲しい条件反射である。
だが、一方のリィナはそんな彼の動きにも全く気付くことなく、それどころか彼の胸元からグルグル巻きの包帯が見えると、さぁっと青ざめてさらに慌てた。
「シ、シーラ様！　ティース様が、ひ、ひどいお怪我を――」
「リィナ、少し落ち着きなさい」
そんな彼女に対し、後からやってきた二人。
「見なさい。ああやって一人で立っているし、両腕も両足もきちんと付いてるでしょう」
「そうだよ、リィナ。ほら、ティースだって困ってるでしょ」
シーラの言葉に同意して頷くエルレーン。ティースにとっては幸いというべきか、二人はリィナと対照的に冷静だった。
「で、ですが万が一ということもありますし……あ、そうです！

こういうときは確か人工呼吸とかいうものをすれば良いと聞いたことがあります！」
「え〝……」
不穏な（？）発言に思わず後ずさってしまうティース。
「状態を悪化させたいのなら止めないわ」
ため息とともに肩をすくめるシーラに対し、エルレーンは苦笑して、
「と、止めてあげてよ、シーラ……」
「え？　人工呼吸ではダメなんですか？」
「うん。色々な意味で止めた方がいいと思うよ」
「で、でもそうなると一体どうすれば……ティース様がこんな瀕死の重傷を負っているというのに――」
「……随分元気な瀕死人ね」
「シーラ様！」
と。
そんな三人の会話に、
「……一体、何事なんだ？」
まるでわけがわからずティースは一人取り残されていた。
確かに今までも彼女らに出迎えられることはあったが、三人揃ってというのは今回が初めてのこと。
「そんなことを言ってて、もしティース様が危篤になられたらどうするんですか！」
「……」
もちろんリィナのこんな過剰な態度も初めてのことで、いくら彼の任務に危険が付き物とはいえ明らかに異常だった。
（な、なんかこのまま死んだことにされそうな勢いだよな……）
と。
「ティース」
「ん？」
いつの間にかエルレーンが彼の横に来て手招きしていた。

「どうした？」
耳を貸せ、ということらしい。彼らの身長差は四十センチ以上もあり、もちろん立ったまま耳打ちすることは物理的に不可能だ。
そこでティースが腰をかがめて耳を寄せると、彼女は言った。
「昨日、キミの近況についてみんな知らされたんだ」
「え？」
「敵がネアンスフィアだって聞いたからね。もちろん昨日の時点で無事だってことも聞いてたんだけど……ほら、リィナは結構心配性だから」
「……あ、なるほど」
それでようやく合点がいった。
ネアンスフィアという言葉の意味を知る者にとっては、それこそ絶望的な事故から奇跡の生還を果たしたようなものだ。そういう事情であれば彼女が過剰に心配する理由も理解できなくはないだろう。
エルレーンは続けて言った。
「もちろんボクらも心配だったんだから。でも、リィナがあんな感じだもの、ボクらまで大騒ぎするわけにいかないでしょ？」
非常に幼い外見とは裏腹に大人びたセリフで、悪戯っぽくウインクしてみせる。
そんな彼女の言葉に、
（……そっか。それで心配して出迎えてくれたわけか……）
じぃんとティースの胸に響くものがあった。
当たり前といえば当たり前のこと。だが、そういう気持ちが実際に行動で示される機会などそれほど多くはないだけに、こうしてストレートに表現されると言い様もない喜びこみ上げる。
そして、ふと思い出す。
（……そういやマリアさんが言ってたっけ。俺が苦しむことで周りも苦しむことがある、って）
今の状況。
「でも、本当に無事でよかった……」

祈るように手を組み、空を見上げて安堵の息をもらすリィナ。
「本当だったらこの手でティース様の鼓動に触れて無事を確認したいのですが……残念です」
「リィナ……」
そんな彼女の姿にティースは僅かな顔の火照りと、微かな胸の痛みを感じる。
（少しでも心配させないようにしなくちゃ、な。もっと、もっと強くなって……！）
拳に微かに力がこもって、そして彼は決意を新たにするのだった――
――と。
まあ。
それはひとまずの感動シーンであり、これがティースという男の成長だけを記録した物語であればこの辺りでパッと場面を変えてしまうのが正解だろうとは思う。
が、しかし。
「……」
蛇足であることを承知の上で、今回は敢えてその先の些細な顛末についても語っておこうと思う。
――トン。
「きゃっ」
「へ？」
前者はリィナのあげた小さな悲鳴。
後者は、意表を突かれたようなティースの声。
そのときリィナが急によろめいてしまったのは、急な目眩が彼女を襲ったわけでなければ、安堵のあまり脱力しすぎてしまった……というわけでもない。
その理由はもっと単純で、彼女の背中を不意に襲った軽い衝撃が、

単純な物理法則に従って彼女を前方へとよろめかせた、ただそれだけのことである。

前方。

その時点でリィナが見つめていた相手は言うまでもなくティースであり、彼女の両目が前方についている以上、そのよろめいた先に彼が立っていたのは当然のことであろう。

距離は、どうだろうか。

人と人との親しさは、日常会話をするときの距離でおおよそ計れるというが、そういう点で言うと彼らはかなり親しい間柄だと言ってもいい。

……と、まあ、非常に回りくどい言い方になってしまったが。

要するに何が起こったのかというと、

「――」

くらっ……

「ティース様!?」

リィナの口から悲鳴が上がる。

――突然彼女に抱きすくめられる格好になったティースは、三秒と保たずに意識を失っていた。

「ティース様!?　ティース様!　すっ、すみません!　しっかりしてください!」

青ざめたリィナは慌てて彼の体を支え起こす。

が、もちろん“アレルギー症状”を起こした彼がそんなことで目覚めるはずもなく――というか目覚めたとしてもまた即座に気を失ってしまうに違いなく。

リィナはそれを悟ると、彼の体を支えたまま後ろを振り返って、

「……シーラ様!　な、なんてことをするんですかッ!」

そこにいるシーラに向かって糾弾の声を挙げた。

ちなみにその言葉は正当である。不意をつかれたリィナが自らを支えきれなかったのは至極当然のことであり、何より彼女の背を押したシーラの行動は明らかに“それ”を狙ってのこととしか思えな

いのだから。
だが、
「心配することないわ」
シーラは涼やかな口調で視線を流し、やはり涼しげな声で答える。
「その症状は別に体に悪影響を及ぼすわけではないし、疲労した体を休めるのに丁度良いぐらい。……ああ、でも失敗ね。ここだと運ぶのに少し大変だもの」
明らかに論点をすり替えた回答だった。
もちろんリィナもそんな言葉に納得するはずはなく、
「だ、だからと言ってこんな――」
「リィナ」
さらに問い詰めようとする彼女に、シーラはゆっくりと視線を戻して言った。
「生きてるでしょう？」
「……え？」
呆気に取られるリィナ。
そんな彼女の腕の中に収まったティース。
「……」
シーラはそんな二人の姿に、急に優しげな目をして表情を緩めた。
「あなたは普段触れられないのだから、この機会に思う存分触れて無事を確かめておくといいわ。……この男だって、そのぐらいのことは許してくれるでしょ」
「え？　シーラ様？」
怪訝そうなリィナに背を向けるシーラ。
水飴のような金色のポニーテイルが宙に躍り、ふわっと香水が漂う。
と。
（……あ）
リィナはその香りに微かな違和感を感じた。
（この前のとは違う……？　でも、どこかで――）

刺激されたのはもっと遠い過去の記憶。
だが、彼女がそのことを具体的に思い出すより先に、
「ティースには後で謝っておくわ。でも、屋敷まで運ぶのはあなたに任せるわね」
「あ、シーラ様……」
背筋を伸ばし、凛としたその後ろ姿は一部の隙もなく、そのままシーラは一度も振り返ることなく屋敷へと戻っていく。
そんな彼女を、リィナは不思議そうに、エルレーンは少し思案する表情で見送って。
そして、先に口を開いたのはリィナだった。
「……シーラ様、一体どういうおつもりなのでしょうか？」
エルレーンは少し考えて答えた。
「たぶん言った通りじゃないかな。シーラはきっと、キミとティースの距離をもっと近付けてあげたいと思ってるんだよ」
「近付ける？」
リィナは不思議そうな顔で呟き、自分の両手を見つめ、腕の中で寝息を立てるティースを見つめ、それからやはりわからない顔で首をかしげた。
「近付けるというのは、どういうことですか？」
「……」
そんな彼女にエルレーンは再び思案深げな顔をして、
「うん。リィナはわからないよね、きっと」
それからそっと独り言のように呟いた。
理解できないのは、決して彼女の考えが足りないからではなく。
小さい頃からこちらの常識に触れる機会があったエルレーンはともかく、このリィナという少女は王魔と呼ばれる、人から見れば常識外の常識を持つ者たちの中に産まれた人物であり――
「難しいよね、色々と」
もう一度、エルレーンは独り言のようにそう呟いたのだった。

快晴だったネービスの空が澱み始めたのは夕方のこと。
急激に空を覆った雲は徐々にその重さを増し、日が沈む頃、雷鳴を合図にネービスの街は強い雨に包まれた。
雨。
雷鳴。
――それは彼女にとって、大いなる不吉の象徴。
「マリアヴェル、ソーヴレー……」
そして本日、彼女の心を惑わせる一つの報告が、無事に帰還したディバーナ・ロウの第四隊によってもたらされていた。
広いミューティレイクの庭はすっかり暗闇に包まれ、時々鳴り響く雷鳴が木々の陰をそこに映し出す。
窓は流れ落ちる幾筋もの雨に覆われ、薄明かりの中に佇む彼女――ファナ＝ミューティレイクをそこに映し出していた。
いつもの微笑みはそこになく。
目に浮かぶのはただ、憂いと、哀しみ。
そしてその唇が、ゆっくりと言葉を刻んだ。
「……マリア姉様」
「お嬢様」
その部屋にはもう一人いた。
が、それはいつも彼女のそばでそのサポートをする二人の執事ではなく、
「……ミリィさん。あなたは、どう思われます？」
ゆっくりと振り返ったファナの視線の先。
そこに佇んでいたのは前髪を少し横に流した、それほど長くはない黒髪の女性。生真面目そうな眼鏡が印象的な彼女は、この館の主人であるファナの世話をする侍女……その頂点に立つ侍女長、ミリセント＝ローヴァーズだった。
ミリセントは答える。

「ティーサイト様の出会われたその女性が、大罪人マリアヴェル＝リグノルドである可能性は否定できないと思います」
ファナは頷いて、
「ええ……私もティースさんの報告を聞いてかなりの共通点があるように感じましたわ」
「目的、意図、その他、納得できない部分は多々ありますが、そういう可能性があることは考慮しておくべきかと」
「ええ……」
「……お嬢様」
ミリセントの声が僅かに起伏した。
それはいつになくはっきりしないファナの態度を窘めるような、そんな口調。
そしてミリセントは言った。
「あの者は大恩ある前代様を裏切り、お嬢様の姉君の命を語るもおぞましい方法で奪い去り、あまつさえ四年前の襲撃ではその前代様と、この屋敷に関わりのあった多くの者の命さえ奪いました。……あの者は」
敢えてそこで一旦言葉を止め、眼鏡の奥からあまり感情の見えない事務的な視線をファナへ投げかける。
「……」
ファナは再び窓の外へと視線を流す。
ミリセントの口から出た二つの名は、彼女にとって特別なもの。
――父と姉。
どちらもすでにこの世の者ではなく、そして二人の命を奪ったのはいずれも同じ相手だった。
しかし、
「……マリア、姉様」
その人物の名もまた、彼女にとっては特別なもの。
「……」
外は雨。

窓の縁をゆっくりとなぞる。

――ややあって。

「……わかってます」

背中を向けたまま、ファナはそう答えた。

今度は強い意志。

「わかってますわ、ミリィさん」

穏やかでのんびりとした性格とは裏腹に、このミューティレイクを確実に支えてきた当主としての強い意志で、彼女はもう一度そう答えたのだった。

訣別は、遙か遠い昔のこと。

そんな彼らの再会の日は、それほど遠い未来の話ではない。

その7『反省会』

「うーん、おっかしいなぁ」

そんな悩ましい声が聞こえてきたのは、ティースたちディバーナ・ロウの第四隊が帰還してから六日ほど経った頃のこと。

おわかりかと思うが、悩ましいというのは決して官能的という意味ではなく、そのまま言葉通りの意味である。

「うーん」

場所は広大なミューティレイクの庭。

言葉を発した人物はこのディバーナ・ロウが誇るデビルバスターの候補生であり、女性アレルギーで高所恐怖症、馬車に乗るとすぐ酔っぱらってしまう、やや猫背でなで肩な頼りない容貌の――いや、正直に羅列するとあまりにヒーローらしくない要件ばかり揃ってしまうのでこの辺にしておこうか。

つまりその人物とは、この物語の主人公であるところのティーサイト＝アマルナであった。

「うーん」

ひょろっとした長身に乗っかった童顔が微かに傾き、腕を組んだまま唸るその様は、どこからどう見ても知的には見えず、例えるなら道に迷って途方に暮れる情けない青年といったところか。

とはいえ、いくらそんな頼りない彼であっても、歩き慣れたこのミューティレイクの敷地内で迷子になどなるはずはなく。

「このまま死ぬのかと思ったぐらいだったのに……」

彼が首をかしげていた要因は、それらとは全く関係がなかった。

『なんだ。どんな大怪我かと思ったら、かすり傷ばかりじゃないか』

彼を悩ませていたのは、六日前、彼が戦場から戻った際の、屋敷の主治医であるマイルズの言である。

事実、彼の傷はそんなにひどくなかった。あれから六日経った今日、早くも彼にトレーニング再開許可の診断が下されたこともそれ

を裏付けている。
　確かに彼らは心力の一つである“自愛”によって、一般の人々よりは治癒力が高くなっていた。その能力に長けたものであれば、常人の半分、あるいはそれ以下の時間で怪我が完治することさえも珍しくはない。
「でも、あんなに勢い良く意識が飛んだのになぁ」
　そうして彼が辿り着いた先は、敷地内にある第四隊ディバーナ・ゼロの詰め所。
「――おはよう」
　ガチャ。
　ティースの呼びかけに、扉の向こうで銀色の髪が微かに揺れ蒼色の瞳がゆっくりと動いた。
「おはよう、ティース」
　分厚いハートマーク付きのセーター、季節外れのマフラー、変化のない表情、まるで雪女のような冷たい容貌。
　アルファ＝クールラントの出で立ちはいつもと全く変わらなかった。
　が、
「お前、今日もそんな格好してるのか？　外はいい天気なんだけどなぁ」
「別に問題ない」
「暑くないのか？」
「特に感じない」
「……ならいいんだけどさ」
　そんな彼の素っ気ない態度にも、ティースは以前ほどの拒絶感は感じていなかった。
「けどお前、まさか真夏もそれで通すつもりなのか？」
　ベッドに腰掛けたアルファの前を横切って部屋のカーテンを開けると、眩しい日差しが直方体の建物を満たした。
「何か問題があるのか？」

「いや……そりゃ勝手だけどな」
真夏にこの格好で外を歩く彼の姿を想像して、ティースは少し可笑しくなった。
「夏はセシリアが着るなと言う」
「だろうなぁ。俺もその方がいいと思――」
「だからマフラーだけは外している」
「――マフラーだけッ！？」
どうやら彼の体温調節機能は相当優秀にできているらしい。
……と、まあ。
こうして見てもわかるように、彼らの関係に何か劇的な変化があった、というわけではない。アルファは相変わらずアルファ（当たり前だが）だったし、淡々とした口調も能面のような表情もどこか理不尽に思える行動も、その全てが変わっていない。……にも関わらずどこか以前と違って見えるのは、おそらくティースの中にある彼に対するイメージが変わったためだろう。
（……冷たいわけじゃない、か。確かに、ファナさんの言うとおりかもなぁ）
あの日、彼が妹――セシルからのプレゼントを大事に身につけていたことを知り、そして後日、彼がいつも身につけているハートマークのセーターやマフラーが、やはり彼女からの贈り物であったと聞かされたとき、ティースはちょっとだけそう思ったのだ。
そうして改めて見てみると、確かに彼の行動の全てにはまるで悪意が感じられなかった。
「そういやこの春から二回生なんだな」
そう言いながら、金属の床に腰を下ろす。
「……」
「ほら、セシルのことだよ」
「そうか」
いったんはそこで会話が途切れたかに思えたが、
「……セシリアはよく君の話をする。君のことがよほど気に入った

ようだ」
視線を動かさないまま、今度は自分から話題を口に出した。
「俺のこと？　へぇ、そんなに俺の話をしてくれるんだ？」
「ああ」
アルファはゆっくりと頷いて例の匂い袋を懐から取り出すと、それを目の前でユラユラと揺らしながら、
「最近はマルスの次ぐらいに君の話題が多い」
「……狼より下なの、な」
いつもセシルのそばにくっついている銀毛の狼を頭に思い浮かべて、ティースは何とも複雑な気分になった。
「……」
アルファの視線が一瞬だけ向けられる。が、それはすぐ元の位置に戻り、長い睫毛が瞬きに揺れてあとはいつもの無言。
ティースの方も特に話題が思い浮かばなかったので、ひとまず会話はそこで打ち切り、自主トレの準備を始めることにした。
（さて、と）
まずはウォーミングアップから。体の先から順番に、じっくりと時間をかけて伸ばしていく。脇腹辺りに少し違和感は残っているものの、体を動かすのに支障がないことは屋敷の主治医であるマイルズのお墨付きだ。
（……にしても、不思議だなぁ）
そうしながら、彼の思考はここに来る途中の疑問を蒸し返していた。
（確かにあのときは疲労もピークだったし、精神的にもかなり参ってたけど……）
思い出すのはあの、抵抗の余地もない強烈な脱力感。
（だってあの感じは、まるで――）
と、そこへ。
コン、コン。
「おい、アルファ。入るぞ」

ノックに続いた声。丁度、顔をしかめながら太股の裏を伸ばしていたティースは、突然の来訪者に顔を上げた。
「レイさん？」
「よぅ、ティース」
ティースの言葉通り、その扉の向こうから姿を現したのは、ディバーナ・ロウの第二隊、ディバーナ・ナイトの隊長を務める青年、レインハルト＝シュナイダーだった。
外から流れ込んだ風に、彼の頭に巻かれたバンダナの尾が微かに揺れる。
「珍しいですね、レイさんがここに来るなんて」
柔軟の手を休めずそう尋ねたティース。
「まあな」
確かに彼がここにやってくるのは珍しい。……というかそもそも、この場所をセシルとティース以外の人間が訪れること自体珍しいことだ。
「……」
一方のアルファは視線も動かさなかった。と、そんな彼に対し、レイはいつもの飄々とした口調で、
「元気そうじゃないか、アルファ。ネアンスフィアとの激戦の後で、てっきり寝込んでるんじゃないかと思ってたが」
「別に問題はないよ、レイ」
淡々と答えるアルファ。
誰を相手にしても変わらない、彼独特のペース。ともすれば拒絶しているようにも取れてしまうその口調に、レイは少し肩を竦めて、
「そいつは重畳なことだ。お前が珍しく苦戦したらしい話を聞いて、また例のモノが出たんじゃないかと心配してたんだがな」
「例のモノ？」
その言葉を聞き咎めたティースは柔軟の手を止めて、
「なんですか？　その、例のモノって」
「……」

アルファが無言でレイを見つめた。
レイは答える。
「こいつの持病さ。……なぁ、アルファ」
「……」
やはりアルファは何も言わなかった。
が、ティースはピンと思い当たって、
「あ、じゃあ……あのときってやっぱ調子が良くなかったのか？」
「なにかあったのか？」
逆にそう問いかけるレイにティースは頷いて、
「ええ。あの日のこいつ、珍しく寝坊したり……はっきりとわかったわけじゃないですけど、どことなく動きに精彩がないような感じにも見えたんで」
「ほぅ、なかなかよく見てるじゃないか」
レイは少し感心したような声で頷いた。
「いいことだ。男はマメな方がモテるからな」
「は、はぁ」
「ま、医者がどうこう言ったわけじゃない。本人も何も言わないしな。俺が勝手に想像して“持病”ってな感じに定義しただけのことさ」
「はぁ……？」
いまいちよくわからなかった。
「……」
そして相変わらずレイをじっと見つめるアルファ。見ようによっては非難しているようにも思えたが、表情自体はいつもと変わらないので気のせいだったのかもしれない。
と、レイはそんなことはまったく気にした様子もなく、
「それに、こいつにはちょっとした“法則”がある」
「はぁ……？」
ますますわからない。
が、本当にそういったことがあるのなら、一応この第四隊の隊長

として把握しておく必要がある、と、ティースは単純に考えて、
「法則ってなんですか？」
その問いかけに、レイは口元に微かな笑みが浮かぶ。試すような、からかうような、そんな明らかに何らかの意図を含んだ笑み。
「原因は全く不明だがな。おおよそにして月に一回程度、こいつは急に体調を崩すんだ」
「月に一回程度？」
「……」
無言のままのアルファ。
笑みを浮かべたままのレイ。
そんな二人を交互に見比べながら、ティースはさらに首をかしげた。
「なんですか、それ？　そんな病気あるんですか？」
だが、レイは肩を竦めて、
「さあね、俺は聞いたことがない。だから言ってるだろ？　原因は不明だ、って」
「？」
「レイ」
と、そこでアルファがようやく口を開く。
相変わらずの独特な声色は抑揚がない分低く響いて聞こえる。だが実際、それを何の先入観もなく聞けば、どちらかというと男性より女性のものに近い高さに聞こえるだろう。
「私に何か用があるのか？」
「いいや」
レイは少々戯けた調子で両手を広げてみせて、
「さっきも言ったろ？　お前の体調を心配したのと、あとは久々にその、美女も真っ青な御顔を拝みたくなった……ただそれだけのことさ」
「……」
ピクリとも動かない長い睫毛の奥で、蒼色の瞳がさらに深くレイ

を見つめた。まったくクセのないシルバーブロンドの長髪が、扉から流れ込む風に微かに揺れる。
（……でも、確かに、なぁ）
そんなアルファを見つめ、ティースは改めて首を傾げた。
女性と見紛うと言ったらそれはおそらく間違いで。
（――って、あれ？）
そこまで考えが及んだところで、恐竜の神経並に鈍いティースの頭にようやく白色電球の光が灯った。
そして思い出すのは、あの戦いの日、気を失う直前の出来事。
（そういやあのとき――）
体調が悪そうなアルファを気遣って手を伸ばしたこと。
（で、支えようとしたら、逆に俺の方が気が遠くなって――）
そして抗いようもない、脱力感。
急速に現実から剥がれていく意識。
……その“感覚”には覚えがあった。
（え……あれ？　え？）
いつもというわけではないが、何度も体験した感覚。
数日前、この屋敷に帰還した日にも体験した感覚。
そう。
それはまるで――
「……あぁぁぁぁぁぁッ！？」
素っ頓狂な叫び声をあげたティースに、アルファとレイの視線が集中した。
「え！？　え、あ……え！？」
突然の奇声とともに取り乱す彼の姿は何とも挙動不審だ。
レイが怪訝そうに眉をひそめる。
それに対し、アルファから向けられた無言の視線は――おそらくはティースの思い込みであろうが――まるで彼が気付いた“限りなく真実に近い推測”を口止めするかのように、真っ直ぐに彼の顔面を射抜いていた。

“限りなく真実に近い推測”
それは、つまり――
（ま……間違いないッ！　あのときは戦いが終わった直後で少し気も抜けてたし……それなら不自然に気が遠くなったことの説明も付く！！）
女性に触れると気絶してしまうという特異体質を持つ彼ならではの理論。
（つ、つまり、こいつ――じゃなくて、この人ってやっぱ女――）
チラッ。
「……」
（うッ！）
感情のない視線が相変わらず彼を射抜いていた。
ゆら、ゆら。
（ううッ！）
手の中で揺れる“誘蛾灯”の切っ先が、心なしか彼の方を向いている……ように思えて仕方なかった。
気のせいか。
いや、あるいは――
「おい、ティース？」
「……な、なんでもありません！」
レイの呼びかけに、ティースは反射的にそう答えていた。……いや、彼がそうしたというより、本能が彼にそう命じていたのだ。
そう答えなければ、かなりの高確率で殺られる、と――。
「……」
アルファの視線はすぐにティースから離れ、彼の視線はいつものように部屋の隅に飾られた紫色の花へと向けられた。……が、その手の中の誘蛾灯は相変わらず、まるで獲物を狙う食虫植物のように静かに揺らめいている。
ゆら、ゆら。
ゆら、ゆら、と。

（……お、俺ってもしかして……）
ゆら、ゆら。
ゆら、ゆら――
（踏み込んじゃいけない領域に踏み込んじゃったんじゃ……）
意図も望みもしていない。むしろ彼自身が踏み込んだというより、目隠しされて歩かされた挙げ句、必然として泥の沼地にはまりこんでしまったというところか。
兎にも角にも、否応なしに貧乏くじを引かされるのがこのティーサイト＝アマルナという男であり――
（ま、また厄介ごとが一つ……）
そしてティースはガックリと肩を落とすのだった。

――さて、そんなこんなで午後。

「ティースさんにとっては、これがおそらく最後の任務になるかと思います」
「へ？　最後？」
午後も三時間ほどが過ぎ、庭を照らす陽光がほんの僅かにオレンジ色を帯び始めた頃、別館の執務室に呼び出されたティースを待っていたのは、衝撃の解雇通告だった。
……と、そこへ突っ込み。
「アオイさん。その言い方じゃ、まるでティースさんヤメさせるみたいじゃん」
「え？」
パタン、と分厚い本を閉じた少女は屋敷の若すぎる執事、リディア＝シュナイダー。
そして、
「あ、ああ、あの、最後というのはもちろん、試験前の最後、ということです」
慌ててそう訂正したのが一見頼りなさげなもう一人の執事、イン

グヴェイ＝イグレシウスだった。
そんなイングヴェイ――アオイの天然ボケに、ティースはホッと胸をなで下ろすとともに少し笑って、
「あ、ああ、なるほどね。びっくりしたよ、何か悪いことでもしたのかと――って、試験？　試験ってなんのこと？」
いや。天然ボケはどうやらアオイだけではなかったようだ。
「……はぁ」
そんな二人の天然ボケラー（？）に囲まれて、一人、回転の良すぎる頭を持った少女は自らの不幸を嘆いてため息を漏らした。
「決まってるじゃん。五月といえば、大陸中のデビルバスター候補生が帝都ヴォルテストに集まる月、でしょ」
五月。帝都ヴォルテストにおいて行われる、半月にも及ぶ大陸でもっとも過酷な公式の試験、デビルバスター試験だ。
「？」
ティースがそこで不思議そうな顔をしたのは、その事実を知らなかったからではない。知ってはいたが、それを即座に自分と結びつけることができなかっただけである。
その証拠に彼はたっぷり十秒ほどの時間をかけた後、徐々に表情を驚きに染めて、
「え……も、もしかして、それ、俺も出るのか！？」
「もしかしなくてもそうだっての」
「言ってませんでしたか？」
と、不思議そうなアオイ。
ティースはすぐさま反論して、
「は、初耳だよ！　そんな無茶な！」
彼がそんな反応をしてしまったのも、まぁ無理もない。
デビルバスター試験に受かればデビルバスターになれる。逆に言えば、デビルバスターになれるだけの実力がなければ試験には受からない。それは当然のことだ。
そして、彼がこれまで見てきたデビルバスターたちはいずれも圧

倒的に格上の存在ばかりで、いつか追いつくことを目標にしてはいても、現時点でその領域に及んでいるなどとは彼には到底考えられないことだったのである。
「まぁ、アオイさんのことだし、言い忘れてる可能性もあるとは思ったけど」
リディアは平然と、微妙にアオイがヘコみそうなことを口にして、
「それはともかく。ティースさん、自信ないの？」
「そ、そりゃあ……だって俺、レイさんやアクアさんはおろか、パーシヴァルにだって負けてばっかだし――」
懸命に自分の未熟さを主張するティースに対し、リディアはほんの少し意外そうな顔をして、
「あれ？　でも負けてばっかってことは、勝てることもあるってことだよね？」
「え？　そりゃ、たまには」
「どのぐらい？」
「五回に一回か二回ぐらいかな」
「……ふーん」
「？」
リディアは少し思案するように視線を泳がせ、それから彼女の身には少々大きい執務椅子の背もたれを軋ませながら言った。
「ティースさん、もしかして何か勘違いしてるんじゃない？」
「勘違い？」
「うん。……ティースさん最近、ダリアさんやビビさんとは手合わせしてる？」
「へ？　そりゃ、最近はナイトの、主にパーシヴァルとだけ。……それがどうしたんだ？」
「んー。だろうね」
頷いて、リディアは手元の分厚い書物をパラパラと適当にめくりながら、
「ま、とりあえず自信がないなら来年でも再来年でも、好きなとき

に受ければいいんじゃないかなぁ。実際、あまりのレベル差に自信を無くす人だってたくさんいるもんね。心配なら止めといた方がいいのかも」

「……え？」

ティースは少し虚を突かれたような顔をした。

「……」

そして考え込む。

彼女の口調は決して彼の姿勢を責めるようなものではない。しかもその言葉は全て事実だろう。

合格率一パーセント未満。その数字が全てを物語っている。

しかもこのデビルバスター試験は半月にも渡る期間の長さと、唯一帝都ヴォルテストでのみ開催されるというその条件から、冷やかしで受けるような者はほとんど存在しない。つまりこの“合格率一パーセント未満”とは、それなりの可能性を持つ者たちが受験した上で、それでも合格者は常に百人に一人にも満たないということなのである。

そのレベルの高さは子供でも理解できそうなもの。実力のない者が挑めば取り返しの付かない大怪我をすることだってあるのだから、棄権することが必ずしも間違いであるとは言えないだろう。

「……リディア」

考えた末、ティースはゆっくりと顔を上げて言った。

「少し考える時間をもらっても、いいかな？」

「そりゃあもちろん。……受かる見込みがないならむしろ行かないで欲しいなぁ。ほら、ヴォルテストまでの必要経費だって馬鹿にならないし」

「……」

苦笑する。

非常に彼女らしいコメントであった。

クールで、知的。
狡猾で、計算深い。
天使、あるいは悪魔。
彼女を評する言葉は、人によって大きく違ってくる。
好意的な言葉は熱っぽく、悪意の言葉は嫉妬と蔑みを含んで。
そして学園の大半を占めるネービスの若者たちは、そんな彼女にある一つの共通する称号を与えた。

――ミステリアス。

「今月に入って、これで十三件目」
「なに？」
「あんたが振った男の子の数」
木の枝に蕾をつけて咲くチェリンという名の淡い桃色の花は、大陸でも北方の比較的涼しい地域に多く頒布する種類の樹木だ。三月下旬、春の訪れとともに蕾をつけ、四月が始まると同時に咲き始め、中過ぎ頃に儚く散ってしまうその花は、この学園都市ネービスにおける出会いと別れの象徴である。
そんな桃色の花が宙を舞う四月、今年もまたネービスの内外から学徒たちが集まり、そして一定以上の成績を残した学徒たちは次にステップへと駆け上がっていく。
そして――
「十三件中、新入生が十二件。毎度のことながら、あなたの魔性の女っぷりには脱帽だわ」
残念ながらこのサンタニア学園では、希望溢れる新入生が十二人ほど早くも人生の挫折を味わってしまったようだった。
「ディアナ」

そよ風に躍る金色の髪。美しい海の色をした瞳。そして精巧に作られた彫刻のように整った顔立ち。

いくら大都市であるネービスといえども、彼女ほどの美貌を持つ女性はそうそう見当たるまい。

そんな彼女――ここサンタニア学園薬草学科の三回生であるシーラ＝スノーフォールは、ランチタイムが終わった午後、学園内の並木道を学園の友人であるディアナ＝リーとともに歩いていた。

「私は誰もたぶらかしたりしないわ。ただ、男たちが勝手に迷っていくだけのことよ」

「出た、遠慮のかけらもない女帝発言。……ま、あんたの場合はそういう話にしろ成績の話にしろ、全部ホントのことだから手に負えないんだけど」

まるで諦めたようなディアナの言葉に対し、シーラは謙遜するでも自慢するでもなく、そっと微笑むだけだった。

「……でもさ」

さて一方、隣を歩くこのディアナという少女。

人懐っこそうな丸っこい顔立ちに、太っているというほどではないが全体的に丸みを帯びて小柄な体躯。

そして何より特徴的なのが、短めの髪をまとめて頭のてっぺんで縛った、まるでタマネギのような髪型だ。……髪の短い赤ん坊ならともかく、この年齢の少女にしては比較的珍しい髪型だといえよう。

なんとも対照的。だが、そんな彼女はシーラにとって、この学園でもっとも親しい女友達だった。

「あんたってばただでさえ誤解されやすいんだから、そういうのもほどほどにしておかないと、また――」

いや――その言い方はあるいは誤解を招くだろうか。

正確にはもっとも、などではなく。

“唯一”と言うべきだろう。

「……あら。あの子、まだ学園にいたのね」

この日はちょうど、午後から“特別講義”が開始される日だった。

特別講義とは毎年この春先にのみ集中して行われる、その名の通り“特別な”講義であり、この薬草学科に限らず、今年二度目以上の三回生を迎えた者――年度始めの基礎授業を必要としない留年組を対象とした、基本的には本来の学科の趣旨とは関係ない選択式の短期授業である。

知識の幅を広げるため、あるいは普段学ぶ機会のない珍しい知識や技術に触れるため……目的は様々であり、もちろん本来の学科の基礎授業をもう一度受ける者も多い。

今年は六種類開講されるこの特別講義の中、シーラが選択したのは“護身術の基礎”と題された講義だった。

学園内の第三区にある薬草学科の学舎から、講義の会場である屋内競技施設までは徒歩で五分強ほどの時間。

「さすがのあの子の“魔力”も卒業試験にまでは及ばなかったのでしょ――」

その途中で彼女たちの耳に飛び込んできたのは、これ見よがしなヒソヒソ声だった。

「そりゃあね。いくら色ボケした先生方だって不正がバレたら職を失うもの。そんな危険を侵して卒業までさせようとは考えないでしょうし」

「……」

ディアナが眉をひそめる。

別段気にした様子もなく通り過ぎようとするシーラ。

その距離が縮まるにつれ、ヒソヒソ声はさらに甲高くなっていく。

……いや、ここまでくると“ヒソヒソ”などという表現自体がもはや的確ではないか。

「あはは、それじゃあせっかくの苦労も水の泡ね」

「無理して涼しい顔しちゃって……内心では焦りまくってるくせに――」

それでも少女たちのそれはあくまで“陰”口。反応さえしなければそれ以上のことは何も起こらないし、シーラたちもそのことをよ

く理解していた。
が。
「ちょっと……あなたたちッ！」
わかってはいても我慢できないのが人間というもので。……とはいえ、この場合我慢できなかったのはシーラの方ではない。
「ディアナ」
すぐに制止の声を放つシーラ。だが、もちろん遅い。
「なに？」
ディアナの怒りの声に振り返った三人の女生徒たちは、すでに挑戦的な表情で彼女らを振り返っていた。
「あら、誰かと思ったら。何か用？」
白々しい、というべきか。少女たちはもちろん確信犯であり、こうして噛みつかれることもむしろ望むところだったといえるだろう。
「何か用、じゃないっしょッ！」
一方、自分が詰られたわけでもないのに顔を真っ赤にして噛みついていくこのディアナという少女は、少々正義感が強すぎるのか、あるいはよほど友人を大事に思う人物なのか。……あるいはその両方だろうか。
「気持ち悪いのよ、あんたたち！　言いたいことがあるなら、もっとはっきり面と向かって言やいいじゃないのさ！」
「は？」
三人組は当然のようにトボけた。
「いきなりなに言ってんの？　誰もあんたたちのことなんか話題にしてないじゃない」
だが、ディアナも簡単には引き下がらず、
「嘘ばっかり！　あんたたち、今日だけじゃないでしょ！　毎回毎回、あたしたちが横切るたびにヒソヒソヒソヒソ――いい加減にしないと、こっちだって堪忍袋の緒が切れるわよ！」
さらにヒートアップ。
まあ、この場合彼女の言葉は正しい。少女たちの中傷は紛れもな

く彼女たち――いや、シーラに対して向けられたものであり、百人いれば九十九人はそう受け取るだろう。
が、そうはいっても、こういう場合においてそれを立証することは難しく、本人たちがしらばっくれればそれまでの話で。
案の定、少女たちはクスクス笑いながら言った。
「言いがかりもいいとこだわ。自意識過剰なのよ、引き立て役のお猿さん」
「なっ……！」
どっ、と、笑い声が並木道に溢れる。
「……」
そのときシーラの視線が初めて三人組の少女たちへ向けられた。
「あんたたち――」
ディアナが一歩足を踏み出す。
が。
「ディアナ、止しなさい」
「シーラ……」
怒りと嘲笑が交錯する中、ディアナの肩に手を置いたシーラの声は場違いに思えるほど淡々としていた。
「私のために怒ってくれるのはありがたいけど、もういいわ」
「でも！　シーラ、悔しくないの！？」
怒る立場と宥める立場が完全に逆転しているようだが、そこは性格の違いだろう。
「あんた、最近また根も葉もないようなことばかり色々言われてるじゃない！　成績がいいのは教官に色目を使ってるからだの、人の彼氏に手を出すのが趣味だの……やっかみだか腹いせだか知んないけど！」
三人組の一人が口を挟む。
「ちょっと人聞き悪いわね。誰もやっかんでなんか――」
「別に悔しくなどないわ」
「……え？」

「だから、もういいのよ」
その場にいた全員の視線が彼女へ集まる。
意外そうな、あるいは思惑が外れたような顔で。
「……」
物憂げなため息。
折しも吹いたそよ風と宙に散った桃色の花びらが、まるで意志を持ったかのようにただでさえ美しい彼女をさらに美しく、幻想的に飾り立てた。
その場にいる誰もが視線を奪われた、その一瞬。
「行きましょう、ディアナ」
その直後、三人の少女たちに向けられたのは、魔性と称された瞳——見る者によっては太陽にも月にも、あるいは底なし沼のようにさえも思える“魔力”を秘めた瞳。
そして、そこに浮かんでいた色は——
「道ばたの石ころよ。相手しても仕方ないわ」
侮蔑。
そのまま背を向ける。
「なっ……！」
当然、三人組の少女たちは一斉に気色ばんだ。そして、背を向けて歩き出したシーラを早足で追いかけ手を伸ばす。
「ちょっ……ちょっと、待ちなさいよ、あんた——！」
「——お前たちの相手はしない、と、そう言っているのよ」
「っ……！？」
別に声を荒らげたわけではない。が、振り返ったその視線一つで、少女たちの足はその場に縫い止められていた。
見下す視線は相変わらず、そしてゆっくりと体を彼女たちの方へ向けて、
「道理も根拠もない、浅学なお前たちの醜い誹謗を黙って見過ごしてあげようというの。大人しく引き下がった方が賢いわ……もっとも」

そう言った口元が薄く吊り上がる。
「心の醜さは他人に許されたところでどうなるものでもないわね。自覚があってさえ出口の見えない者もいるのだから、お前たちのそれはきっと一生ものよ。せいぜい上手く付き合っていくことね」
抑揚のない、まるで辞令書を読み上げるかの如きその言葉は、いわゆる普通の少女たちをいっせいに黙らすには充分すぎるほどの圧迫力があった。
「ディアナ」
「え……あ……あ、うん……」
気圧されてか、冷水をかけられたかような顔のディアナが素直に頷く。
そのままシーラがもう一度背を向けると、今度は誰も追いかけてこようとはしなかった。

「――怖いなぁ」
ディアナはシーラと同じ年にこのサンタニア学園薬草学科に入学し、同じタイミングで進級して現在四年目の三回生。ほぼ入学当初からの付き合いであるから、もう三年以上の付き合いになる。この学園の学徒たちの中ではもっとも長い付き合いだ。
だから当然、この学園の誰よりも彼女のことをよく知っている。
頭がよく美人。
クールでミステリアス。
おそらくは男嫌い。……二回生の頃の実地授業において、彼女の手を取ろうとした若い教官に辛辣な言葉を浴びせかけた事件は学科内では有名な話である。
産まれ育ち――不明。彼女は学園において一切その手の話をしようとはしない。
家庭環境――不明。その自宅を知る者すら学科内には一人も存在しない。
放課後や休日の過ごし方――不明。

……要するに学園でもっとも親しいディアナですら、その程度しか彼女のことを知らない、とも言えるだろう。

「あんただったらどんなことがあっても、きっと取り乱したりすることなんてないんでしょうね」

「そんなことないわ」

問いかけに返ってきたのは至極当然の答え。普通ならば、それで当然だ。……が、ディアナは彼女が取り乱したシーンを一度たりとも見たことがない。

「想像できないなぁ」

今、こうして特別講義の舞台である屋内競技施設にいても彼女の存在だけはまるで別格で、誰もが視線を奪われ、彼女が歩けばどんなに混雑した人垣でも自ら割れていくのではないかと思わされる。

彼女は完璧に優秀であり、完璧に美人で、なおかつ感情すら完璧に統制しているのではないか、と。

もちろん、それは妄想だ。

ディアナはディアナなりに、このシーラという、おそらくは普通の人間であろう少女の本質をある程度知って——少なくとも知っているつもりでいる。

例えば先ほどの少女たちに向けた辛辣な言葉。いつもは涼しい顔のまま黙って通り過ぎるはずの彼女が今日に限ってあんな言葉を発したのは、おそらく自分が侮辱されたからではない。

“意外に面倒見が良く、情に厚いところもある”

これはディアナが三年間の付き合いの中で得た、おそらくは少数しか知らない彼女の真実。

クールな彼女が時折気まぐれで情を見せるのか、あるいは情に厚い彼女が普段はクールに装っているだけなのか、それはわからない。が、他の連中が口にするほど冷血でもなければ完璧でもない、と、少なくともディアナはそう考えていた。

そして、

（……でも、たまには憶測なんかじゃなくて、この子の意外な一面

ってのを目の当たりにしてみたいものねぇ）

なんてことを妄想してみたりするのだ。

興味本位というよりは、もっと単純に、この友人のことをよく知りたいという欲求から。

ざわ、ざわ……

室内は少しだけざわめいていた。

屋内施設の一角を仕切る形で作られたその“教室”は、広さだいたい二十メートル四方。その入り口側の方にやはり十数個の席が用意され、学徒たちはそれぞれ思い思いの場所に腰を下ろしている。生徒数の割に広めのスペースが用意されているのは、もちろん授業内容に実技の項目があるためなのだろう。

十余名。

この特別授業がほんの一部の学徒たちを対象にしていると考えても、全ての学科を合わせた対象者はおそらく百人を越えるはずだから、この人数は比較的――いや、かなり少な目だと言える。

そして定刻。

ざわ……

仕切りの奥から聞こえてきた足音――おそらくは講師のもの――に、学徒たちのざわめきが急速に静まっていく。

この特別講義、学園にはもともと存在しない授業の内容をウリとしているだけあって、講師にはほとんど外部の人間を招いている。もちろんこの講義――“護身術の基礎”とて例外ではなく。

そして、

「えー……」

「……？」

仕切りの向こう側から二人の講師が姿を現したとき、ディアナはちょっとした驚きを覚えた。

室内がざわつく中、学園の講師に連れられた特別講師は二度、三度と頭を下げながら学徒たちの正面に立つと、

「えー。こんにちは……じゃなくて、は、はじめまして、みなさん。

お元気ですか」
「？」
何とも頼りなさそうな挨拶。
もちろん“特別講師”というだけあって、中には人にモノを教えることを本職としていない者も数多くいる。その中には大勢の前で話すことに慣れてない者もいておかしくはあるまい。
が、そういった事情は考えたにせよ。
“護身術”……その授業内容から、学徒たちがその講師に体育会系のゴツイ印象を抱いていたとて何の不思議もなく、その頼りなさそうな挨拶にギャップを感じてしまうのも無理はなかった。
僅かな失笑。
各所から聞こえたその音に、講師はひょろっとした長身を少し萎縮させて、
「あ、え、えぇっと、俺、いや僕――じゃなくて私、今日から、その、こちらでお世話になる――うわわっ！」
ばさばさっ！！
脇に挟んでいた資料の束らしきものが滑り落ちてバラまかれる。
慌てて拾い集めようとする講師の青年は、頭をペコペコさせながら、
「あ、ご、ごめん！　俺、いや僕――ああ、いや、こういったものには慣れてないもんで――」
さらに失笑。
さすがにディアナも少し吹き出すと、隣に座っているシーラの袖を軽く引いて、
「ぷふっ……な、なんか頼りないなぁ？　……あ、でも厳つい“いかにも”なオッサンよりはいいか。ねぇ、よく見るとなんだか可愛い顔してるし――……シーラ？」
怪訝そうに視線を横に向けたディアナ。
「……」
「へ？　どしたの？」

そして驚いた。

そのときディアナが目の当たりにしたのは――クールでミステリアスだった彼女の、およそ見慣れない表情。

隙のない視線は微かに見開かれ、パチクリ、パチクリと二度、三度瞬きをする。他者を寄せ付けない高貴さのようなものはすっかりと影を潜め、素のままに驚きを浮かべるその表情は、同じ年頃の普通の少女たちが見せるものとまったく変わらなかった。

そしてその視線が見つめる先は、ただ一点――

「あ、改めまして。僕――えっと私、今日から約半月の間、みなさんに護身術を教えさせていただきます、ティーサイト＝アマルナです。どうぞ、よろしくお願いします」

「……」

偶然か、あるいは仕組まれたものか。

ともあれ。

「……シーラ？」

どうやら彼女――ディアナ＝リーは期せずして、ミステリアスな友人の秘密の一端に触れる機会を得たようである。

幕間『ジェニス・レディ』

午前十時。

ミューティレイク家のハウス・メイドたちにとってもっとも忙しいと思われるのが、この、朝食を終えてから昼までの時間である。掃除、洗濯、客室の準備等々……いわゆる家事と呼ばれるものの大半を受け持つ彼女たちの仕事は屋敷の女性使用人たちの中でもっとも身体を動かす仕事であり、他の使用人たちに比べ圧倒的に体力を必要とする。

と、そんな体力自慢（？）なハウス・メイドたちの中にあって、一際目立って大柄な女性がここにいた。

「ジョエッタさん。このシーツはどこに置けばいいですか？」

「ああ、そっちの、ほら。カドんとこにでっかいケースがあるだろ。そこに放り込んで――ああ、ああ、畳まなくていいからね。あとはそっちで勝手にやるからさ」

答えたのは三十代前半だろう、かなりクセの強いショートカットの女性で両手には山盛りの洗濯物を抱えている。身長は平均程度だろうが、幅が普通の女性の二人分ほどもあるため山盛りであるはずの洗濯物が少々物足りなく思えてしまうほどだ。

が、そんな女性――ジョエッタの後方にいる女性はさらにすごかった。

「よいしょ……」

声質は柔らかく、抱えたシーツの奥から時折覗く顔はいかにも優しげで清楚。長く伸びた黒髪とおっとりとした雰囲気は深窓の令嬢かあるいは聖職者を思わせるほどに淑やかだ。

しかし、である。

「ここでいいですか？」

「ああ、リィナちゃん、もうちょっと右、右……はい、おっけー」

どすん！

綿で出来ているとは思えない重い音を立てカゴの中に積まれる白いシーツ。……いや、カゴがシーツの山に埋もれたと表現した方が正しいかもしれない。シーツを取りにやってきた洗濯担当のハウス・メイドが目を丸くするのも当然だった。

さて。

見ての通り、この二人の女性はミューティレイクのハウス・メイドである。

今年三十三歳になるジョエッタは同い年の夫と三人の子を持つ通いの使用人だ。この屋敷にやってきたのは二年ほど前だがそれ以前にも別の屋敷で同じ仕事をしており、この道に関していえばそれなりのベテランであるといえるだろう。

一方、彼女の付き従う形で仕事をこなすリィナの方は現在十六歳。屋敷に来て二ヶ月程度の新米であり、まだまだ仕事を学んでいる真っ最中だ。

にも関わらず。

「……いやぁ、ホント助かるよ。リィナちゃんがいなきゃ何回も何回も往復しなきゃならんとこだからねぇ」

などと、彼女がジョエッタに感謝されることは一日に一度や二度ではない。いやジョエッタに関わらず、彼女の手が空いていると見るや否や、実に様々なところから彼女に依頼の声がかかるのだ。

「お役に立てて嬉しいです」

ニッコリと聖女のように微笑むリィナ。その様は自分が役に立てたことを素直に喜ぶ純粋で努力家の普通の少女だ。

が、しかし。

彼女には“普通の少女”であるとは言えない部分が三つあった。

「ホント、リィナちゃんがいなかったらと思うと……って、前はそれなりに何とかやってたはずなんだけどねぇ。やっぱ人間楽することを覚えるとダメだわ」

あはは、と笑いながらも賞賛の言葉を止めないジョエッタの視線は常に斜め上を向いている。……と言ってもあらぬ方向を見つめな

がら喋っているわけではない。
「でも私も早く仕事を覚えて、ジョエッタさんに迷惑をかけないようにしないと」
標準的なジョエッタの身長に対し、このリィナという十六歳の少女の身長は実に百八十二センチ。身長差は約二十センチ……ともなると、顔を見て話をするだけでも視線が斜めになるのも致し方ないところであろう。
これが、彼女が“普通”ではない理由の一つ。
そして二つ目は――
「うっきゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！」
「！」
ジョエッタとリィナが一息つきながら一階のホールまで戻ってきたときのこと。
屋敷に響いた奇声はまだ幼い少女の悲鳴だった。
「だっ、誰か！　誰か助けてぇぇぇぇぇッ！！」
「……」
一瞬顔を見合わせるジョエッタとリィナ。彼女ら二人がそれほど慌てなかったのは、その声が彼女らにとって聞き覚えのある人物のものであったことと、もう一つ。
「……またあいつらかい」
ジョエッタが呆れた表情でそう呟いたように、その悲鳴がそれほど珍しいものではなかった、ということである。
「私、行ってみますね」
「ああ、ああ、すまんね。きっとまたヴァレンシア辺りがちょっかい出したんじゃないかと思うけど」
ジョエッタの声に微かに微笑んでみせてから、リィナは一階ホールから悲鳴の聞こえた書庫へと続く通路に足を運んだ。
「エレンさーん、大丈夫ですか？」
悲鳴が聞こえた近辺で声をかけながら進む。
すると案の定。

「えっ？　あ、リィナ！　リィナ、ちょっとこれ、なんとかしてよおっ！！」
「……な、なにをしているんですか？」
リィナはとてつもなく不思議な顔をする。
さもあらん。
通路の途中。エレンという、彼女と同じハウス・メイドで年下の少女がうつ伏せの状態で通路にうずくまっていた。……そこまではいい。が、このエレンという少女、ほどけば腰よりも長い髪を頭のてっぺん近くで左右に分けているのだが、何故かその片方が通路の途中に置いてある騎士の銅像に踏み付けられる形になっていたのである。
エレンは涙目になりながら、
「わ、わからないわよぉ！　ここの床を拭いてようやく終わったから立ち上がろうと思ったら……いだだだッ！！」
「あ、動かないで、エレンさん……」
軽く二百キロはあろうかという銅像だ。当然無理矢理引き抜こうとして抜けるものではない。
「おやおや、ちょっとなにやってるんだぃ……」
と、後からやってきたジョエッタもその惨状を見て眉をひそめた。
「だ、だから知らないってばぁ！　……き、きっとまたヴァレンシアだわ！　ヴァレンシアが何か仕掛けていったに違いないのよぉぉぉッ！！」
などと、エレンは彼女の天敵でもある少女の名を上げて訴えたが、ジョエッタは馬鹿馬鹿しいという顔をして、
「あの子じゃその銅像を持ち上げるのは無理でしょ……ちょっと待ってな、今誰かにハサミもらってくるから」
そんなジョエッタの言葉に、涙目になっていたエレンの表情がさぁっと青ざめた。
「ハサミ！？　も、もしかして切るのッ！？」
「それしかないだろう？」

腰に手を当てて答えるジョエッタの言葉はもっともである。
だが、エレンは必死な形相で、
「いやよ！　いやいや！！　切るのだけはいやッ！！　……ひ、ひどいよぉ！　あ、あたし、何も悪いことしてないのにぃっ！」
とうとう本当に泣き出してしまった。
その声に何事かと少しずつ人が集まってくる。
「ったって、切らなきゃいつまでもそのまま――」
「……」
と、そこへ。
何事か考えていたリィナがゆっくりと銅像へと歩み寄っていった。
そして、
「エレンさん」
「え？」
「三、二、一で起き上がってくださいね」
「へ？」
そのリィナの行動にジョエッタが目を丸くする。
「ちょっ、ちょっとリィナちゃん。あんた一体何をするつも――」
だが、リィナは答えずそのまま銅像に手を掛けると――
「いきますよ。……三、二、一！」
ずず……。
「……え？」
どすん。
「……へっ？」
身を起こしたエレンが目を丸くする。さっきまで挟まっていた左の髪を手に取り、わけがわからないという顔で銅像を見て、そして最後にリィナを見上げた。
何が起こったのか、と、問いかけるように。
銅像は動いていない。……いや、動いていないように見える。
が、しかし。
「……」

ぽかんと口を開けるジョエッタの表情が何が起こったのかを如実に表しており――

「大丈夫でしたか？」

ニッコリと聖女のように微笑むリィナの額には、ほんの微かに汗が浮かんでいた。

「あ、あ、ありがと、リィナ……」

大事な髪を失わずに済んで本来ならば喜び勇むはずのエレンも、その、あまりに信じがたい出来事にただただ呆然とするばかりであった。

……と、まぁ。

そういった感じでいくつか“普通ではない”点のある彼女（三つ目については敢えて説明する必要はないだろう）だが、屋敷の人々の受けは非常に良い。ハウス・メイドの仕事は決して楽なものではないが、仕事そのものを楽しんでやっているというのが端から見てすぐにわかるし、努力家であり同僚思いでもある。何かと目立つ部分もあるが、だからといって驕るようなところもまるでなく。

そして何より慎み深い。相手が年下であっても礼儀正しく、年上であれば尚更相手を立てて出しゃばることがない。

屋敷の人々はいつしかそんな彼女を表す言葉として、とある単語を使用するようになった。

彼女はまるで――の、ようだ、と。

「昔々、大陸の東方に位置するジェニス領には、女から男に愛を伝えてはならないという厳格な法が存在してました。何故なら女が自分をアピールすることには慎みがなく、また男に恥を掻かせる行為でもあると広く認識されていたからで、記録によれば過去、その罪で死刑になった人もたくさんいたということです」

その日の昼下がり。

膨大な蔵書量を誇るミューティレイク家書庫の入り口には、薄暗い書庫内部とは違ってきちんと採光された読書用の席がいくつか配置されているのだが、そのうちの一ヶ所に二人の少女が腰掛けていた。

その片方がパタン、と、分厚い本を閉じる。……となれば、その声の主も大体想像がつくだろう。

難解な分厚い本がトレードマーク、弱冠十三歳のミューティレイク家執事リディア＝シュナイダーである。

「その法が姿を消した現在もなお、一部の上流階級ではその法に準ずる厳格な教育を施す家もある……これが“ジェニス・レディ”っていう言葉の起源なんだけど、今は一般市民レベルではやっぱ過去のもので、その言葉も単に“慎み深い女性”や“引っ込み思案の女性”のことをそう呼ぶようになったみたいだね」

「それって誉め言葉だと思っていいのかな？」

と、そんなリディアの説明に聴き入っていたのは屋敷の制服に身を包んだ少女だった。リィナの着ていたものと若干デザインの異なるそれは、食卓に係わる色々な仕事をこなすキッチン・メイドの制服だ。

その少女、エルレーン＝ファビアスは“まるで妖精のよう”などと表現され、彼女の正体を知るティース辺りが微妙に引きつった笑みを浮かべてしまうような、小柄で細身の少女である。

「うん。ジェニス・レディは歌劇とか物語の世界では割と一般的な題材でヒロインをイメージさせる言葉でもあるから、あんま悪い意味では使われないと思うよ」

「そっか。うん、ありがとね、リディア」

エルレーンがホッと胸をなで下ろすと、やや内側にカールしたセミロングの髪が微かに揺れた。

「いえいえ、どういたしまして。授業料はちゃんとティースさんに請求しておくから」

しれっと言ってのけたリディアにエルレーンは苦笑して、
「ティースに怒られたりしないかなぁ」
「エルさんなら大丈夫。ティースさんロリコ――じゃなくて心が広いから」
「……リディア、ボクより三つも年下でしょ」
と、エルレーンは不満そうに、だけどどこか冗談っぽく口を尖らせた。
「あはは、まぁね。……ちなみに余談だけど、本当の意味で言うジェニス・レディはどっちかっていうとあんまいい意味じゃないんだ。基本的に悲劇のヒロインだからね」
「悲劇のヒロイン？　どういうこと？」
「ジェニス・レディが好きな男にアピールする方法ってすごく限られてるっしょ。あからさまにならないよう微妙に手を変え品を変え……でも気付いてもらえない、なんて。いかにも悲恋物語のヒロインでしょ？」
「あ……なるほどねー」
と、エルレーンは真顔でしみじみと呟く。
「やっぱ難しいものなんだね、人間の恋愛って」
「ま、色恋が思い通りにいかないのは何も昔のジェニスに限ったことじゃないだろうけど」
エルレーンは不思議そうな顔をして、
「リディアにはそんな経験があるの？」
「あたし？　あはは、あるわけないじゃん」
リディアは即座に否定した。
「あたしは望みが低いから。莫大な遺産さえ残してくれれば後はどうでもいいし」
「またそんなこと言って」
苦笑する。
が、あながち完全に冗談であると断言もできない辺りがこのリディアという少女の恐ろしいところだ。

「……ジェニス・レディかぁ」
リディアと別れたエルレーンは書庫から彼女の主な仕事場である厨房へ抜ける廊下を歩いていた。
なんとも興味深げな呟き。
ジェニス・レディ。その通りジェニス領の女性を指すその言葉は、リディアの説明した通りの言葉であり、今の世では恋愛性を強く想起させる単語である。
しかしだからこそ、エルレーンはこう思うのだ。
「でも、リィナを表現するにはちょっと遠い、かなぁ……」
「――エルさーん」
顔を上げるとちょうど廊下の向こうからやってくるリィナの姿が見えた。
小さく手を挙げて応える。
「リィナ。今からお昼？」
「はい。エルさんもですか？」
歩み寄ってきたリィナは袖を捲っていかにもたった今掃除を終えてきた、というような格好だ。
「ううん。ボクは終わってこれから戻るとこだよ」
「そうですか……」
リィナは少しだけ残念そうに視線を落として、
「久しぶりにエルさんとゆっくりお話がしたかったのですが……」
「そうだね。リィナ、夜は寮に戻ってすぐ寝ちゃうもんね」
エルレーンの言葉にリィナは頷いて、
「ええ。こんなにも忙しなく動くことなんて今までなかったことですし、覚えることもいっぱいで体より頭の方が先に疲れてしまうみたいです」
「うん、そうだね」
それでもどこか充実した顔つきの彼女を見てエルレーンは満足そうに目を細めた。

そして先ほどのリディアの言葉を思い出す。
（“慎み深い女性”や“引っ込み思案の女性”かぁ……）
引っ込み思案、という表現はもちろん似合わないだろう。
「最近、変なこととかはない？」
「え？　変なこと、ですか？」
「うん。人間の生活ってちょっと勝手が違うでしょ？　戸惑ったりとか、他の子に変な顔されたりとかしなくなった？」
そんなエルレーンの心配にリィナはニッコリと微笑んで、
「あ、それはもう大丈夫だと思います。夜は寝る前に少しでも人の書いた書物を読むようにしていますし、エルさんの忠告通り“家族”とか“恋愛”とかそういう話にはできるだけ参加しないようにしていますから」
「うん、そっか」
それなら大丈夫だろう、と、エルレーンは頷いた。
……王魔である彼女たちと人間たちの間に存在する感覚の違い。
その中でもなかなかに理解し難き感情のうちの一つ。
恋愛感情。
エルレーンの方こそ幼い頃から人間界に興味を持ち、また詳しい知り合いがいたからこそ多少なりともそれを理解できてはいるが、それでも先ほどのように恋愛事に係わる様々な模様を耳にするたび、その複雑さに感心してしまうことも少なくなかった。
このエルレーンですらそうなのだ。
「でも、聞けば聞くほどわからなくなるんです。皆さん、好きな人の話をするときに多くがその理由としてカッコイイからと言うのですが……」
リィナの方は昔、二年ほどティースたちと一緒に過ごしたことがあるとはいえ、ごくまともな王魔としての感覚が圧倒的に濃い。そんな彼女がジェニス・レディ――悲恋を象徴するヒロインに例えられるとは、なんともミスマッチであると言わざるを得まい。
「カッコイイから好き、というのは、どういうことなんでしょうか。

美しいものを愛する気持ちは私にも理解できますが、皆さんの言うことはそれとは違うようで……中にはほとんどまともに話をしたことがないという人もいるようで、もう何が何やら……」

「あ、うーん……」

エルレーンにはそんな彼女の感覚がよく理解できた。

王魔にも愛情という概念は存在する。が、それは男女のそれでも家族のそれでもなく、純粋な個体そのものに向ける愛情でしかない。だから王魔に愛されるということはすなわちその存在全てを認められるということで、当然、相手をよく知らずに愛するということはまず有り得ない。

「人間は、きっとボクらより直感的に他人を愛することができるんじゃないかな」

結局、エルレーンはそんな風に答えた。

「直感的、ですか？」

「うん、本に書いてたんだ。愛とは、愛するに値する相手かどうか考える前に愛してしまうことだ、って。それはきっと良い面も悪い面もあると思うんだけどね」

リィナは困り顔で、

「なんだか難しいですね……」

「うん。ボクも完全にはわかってない」

正直にそう言ってエルレーンはクスクスと笑った。

「でも、もしボクやリィナにそれが必要だとしたら自然にわかってくることだと思うよ。運命を司る花信風のお導きで、ね」

「あ」

昼下がりの青空を白い鳥が飛ぶ。白い鳥から落ちた白い半液体状の物体はベチャリと音を立てて黒い布地の上に落ちた。

「ふーふふふふーん。ああ、俺はなんて幸せ者なんだろう。こんな

麗らかな春の日に麗しのあの方にお会いできるなんて！」
「……」
ルーベンは白い日傘の奥から前を歩く鼻歌混じりの背中をじっと見つめていた。
妄想爆発真っ盛りのためか、前を歩く男は自らの背中を汚した白い物体の存在に気付いていないようである。
「見よ、この清々しい青空を。ああ、愛しのファナさん！　今日こそはこの燃え上がる思いの丈をあなたに伝えてみせます！」
「……鳥のフン付きだけどな」
「ん？　今なにか言ったか、ルーベン？」
「いえなにも。ラドフォードさん、前見て歩かないと危ないですよ」
振り返ったライオン頭の大男の問いに、ルーベンは涼やかな顔でそう答えた。
「ん？　おお、そうかそうか。こんな大事な日に躓いて怪我でもしたら大変だ」
「そうですよ。もう手遅れですけど」
「ん？　どういう意味だ？」
「ああ、その、ラドフォードさんの熱い思いはもう誰にも止められませんね、と」
即座にそう返したルーベンの言葉に、ラドフォードは満面の得意顔をした。
「ふっ、何を今さら！　海より高く山より深いこの俺の愛が止められるわけないではないかぁぁぁっ！！」
「ええまったくそのとおり」
隣を走っていく馬車に視線を送りながら明らかに心のこもってないルーベンの返答であった。……いやこの場合、心がこもってない方がかえって有り難いというものか。
ネービスが誇るデビルバスター部隊でもトップ十のうちの二人、ラドフォード＝マティスとルーベン＝バンクロフトは麗らかな春の陽気の中、徒歩でミューティレイクの屋敷へと向かっていた。

徒歩である理由はただ一つ。
「ああ、こうして一歩、また一歩と愛しい人の元へ近付いているかと思うと、なんともいえない高揚感があるじゃないか！　なぁルーベン！」
「そうですね。これで太陽が出てなければもっといいですね」
そう言いながら日傘の奥から憎らしげに上空の太陽を見上げる。
「ついでにウザいライオン頭もいなければもっといいですね」
「なに、ライオン？」
ラドフォードは不思議そうにキョロキョロと辺りを見回して、
「なんだ？　そんなものどこにもいないじゃないか」
「比喩ですよ、比喩」
「ああ、そうか比喩か」
なんとも頭が悪そうなやり取りだ。この会話を聞いている者がいたとしても、彼らがネービスの誇るエリートデビルバスターたちだなどとは夢にも思わないだろう。
と。
そうこうしているうちにようやっと彼らの目的地であるミューティレイクの屋敷が見えてきた。
「ああ、あと言い忘れてましたけど」
そう言ってルーベンは日傘を深く傾ける。
「ファナさん、今日いないらしいですよ」
「……な、なにぃぃぃぃぃぃっ！！！？」

「どうも。情報提供、感謝します」
「いえ。どうかお役立てください」
ミューティレイク本館の応接室。誠実そうな柔らかな声質の持ち主は屋敷の執事、イングヴェイ＝イグレシウス――通称、アオイである。
そんな彼の正面、クッションの利いたソファの先っちょに腰掛けたルーベンは受け取ったばかりの紙の束に軽く目を通し、それを封

筒のようなものに入れた。
　アオイが少し遠慮がちに問いかける。
「やはり気になっていますか？　先日のネアンスフィアの事件……」
　ルーベンは小さく頷いて、
「ええ、まぁ。公にはあまり言ってませんけどかなり異常でしたから。下位魔ばかりとはいえ約三十体の魔に加え、風の二十七族ウィルヴェント。それもゲリラ的に各個撃破した形跡はなく、ほぼ一ヶ所に死体が固まってました」
「ウィルヴェント……？　風の二十七族まで混ざっていたのですか？」
　ひそめた声ながらアオイは驚きの表情を隠せずにそう聞き返していた。
「そちらの二名は運良く遭遇しなかったようですね。ともかく、普通に考えれば少なくとも数十名の戦力が必要、四、五名でやったとすれば全員がデビルバスタークラス、二、三名ならその中でも選りすぐりの手練れ、一人でやったとすれば――」
「……人間じゃ、ない」
「あるいは人類最強クラスですね」
「……」
　無言で考え込むアオイ。もちろん何かを推測するには材料が少なすぎる。が、その異常さは思わず考えさせられてしまうほどのものではあった。
　それを見つめていたルーベン。
「ところで」
　やがてトンと、手にした封筒の端で軽くテーブルを叩いて、
「アオイさん。“マリアヴェル”という名に聞き覚えはありませんか？」
「え？　あ、ああ……確かこの事件で行方不明になったデビルバスターだと聞いていますが、それがどうかしましたか？」
「未だに消息が掴めていないそうです。まぁ死んでいるとか、もと

もと余所の領地で活躍していた人らしいんでどっかで元気にやってるのかもしれませんけど。……いえ、知らないならいいんです。なんとなく気になっただけですから」

そう言ってルーベンは何事もなかったかのように室内を見渡した。

やや高めの天井。このミューティレイク本館は別館と違い内装や調度品も豪華で、もちろん別館で見られるような騒々しさは微塵もない。

と、

「ところで今日はラドフォード様も一緒にいらっしゃると聞いてましたが……」

「ああ、アレなら外で黄昏てます。まぁいつものことです。……じゃ、今日はこの辺で」

「あ、ルゥさん」

資料を手に立ち上がったルーベンをアオイは引き留めて、

「せっかく来たんですから皆さんに会っていかれてはどうです？アクアさんなんかは前回いらっしゃったとき会えなかったのを悔しがっておられましたよ」

「……」

ルーベンの表情に珍しく微かな苦笑が浮かんだ。

「遠慮しておきます。隊長の十八番を喰らうと三日は行動不能に陥ってしまいますから」

「……そうですか。ではアクアさんには秘密にしておきましょう」

「そうしてもらえると助かります。特に私の背骨辺りが」

笑い返すアオイに対しルーベンは小さく一礼した。

「頑張ってくださいね、ルゥさん」

「……」

もう一度頭を下げ、見送りを固持してルーベンは応接室を出た。

応接室からは一人の使用人に案内され、一階ホールへと。もちろん別館のような質素な丸テーブル群などはなく、厳かで気品に溢れた内装に支配されている。

別館へと続く目立たない通路。
そこへ一瞬だけ視線を送り、ルーベンは出口へと進んでいった。
夕焼けが射し込んでくる。だいぶ日差しは弱くなっていたが、それでもルーベンは目を細めながら歩いていた。
と。
「……？」
彼が一瞬そこに視線を奪われたのは特に大きな理由があったわけではない。
ただ特徴的だった。それだけのこと。
そしてたまたま視線が合った。
長い黒髪。柔和な表情。
思わず呟いてしまったのはルーベンにとって圧倒的な失点だったろう。
「フラニー……？」
「？」
足を止めた女性は彼より十センチほども背が高い。だがその割に威圧的な雰囲気は微塵もなく、どこか心和ませるオーラさえ身に纏っているような女性だった。
「私のことですか？」
「あ、いや」
不思議そうな顔の女性に対し、ルーベンはすぐにいつもの調子に戻って否定しようとした。
が、それより先に女性は自らの右手を胸の上に置いて、
「私はリィナといいます。リィナ＝クライストです。フラニーさんという方は……すみません、私、まだ全員の名前を覚えていないんです」
「……」
ルーベンは一瞬だけ言葉に詰まったが、すぐに切り返す。
「背、大きいですね」
「え？」

「知ってますか？　水属性を持つ魔の女性はとても大柄な人が多いんです」
「……え？」
「ってことでサヨウナラ」
「……」
びっくりした顔のリィナを残したままルーベンはさっさとその場を離れた。……その態度はいつもの彼を知る者からすればかなり不自然で、自らの失言を誤魔化すためのものだということはすぐにわかったはずだが、もちろん初対面のリィナがそんなことを知るはずもなく。
「……はぁ」
外に出て日傘を広げ、洩れたため息。
なんとも言えない気持ちでルーベンは日傘を傾けた。
「全然似てない」
誰にも聞こえない独白。
「背高いとこだけ。雰囲気と」
そもそも見間違えたというわけではないのだ。彼が失言を口にしたのはリィナのシルエットに対してであって、顔を見て言ったわけではないのだから。
場所も悪かった。
彼の意識が少なからず過去を遡っていたことも影響しただろう。
……とはいえ、この出来事によって何か重大な損害があったわけでもなく。その失言が産み出したものといえば、彼がリィナ＝クライストというあの少女の名を知り、彼女が――後々まで覚えているかどうかはともかく、このルーベンの顔をひとまず記憶したということ、ただそれだけだろう。
「……さて。ライオン頭でもからかって帰るとすっかな」
春の風。開花を知らせる風が吹く。
夕日に染まったネービスの街は何事もなく静かに夜を迎えようとしていた。

プロローグ

“圧倒的な力”には常にあらゆるしがらみがついて回る。

憧憬。嫉妬。打算。欲望。

それが権力であれ、金力であれ、武力であれ、知力であれ、そのしがらみから逃れる術はなく、結果としてあらゆる人々の思惑の波に呑まれることになるだろう。

その力が望んだものであろうと、また望まざるものであろうと――。

「殺して欲しいヤツがいます」

それを生業にする者たちにとって、このネービスほど住みづらい土地はないだろう。

ご承知の通り、このネービス領の首都であるネービスの街は大陸でも屈指の治安を誇り、犯罪者たちの存在を決して許そうとしない。他の街では当たり前のように起こる殺人事件も、この街ではそれほど日常の出来事ではなかった。

殺し屋。

その名の通り、生き物を殺すことを生業とする人々がいる。彼らは当然に犯罪者であり、もしその身を警邏に拘束されたならば、ほぼ間違いなく死罪が待っているであろう、この世のもっとも底辺に位置する犯罪者。

「……」

夜のネービス。

この裕福な街にもほんの僅かに存在するスラム地域。その一角に存在する無人の建物の地下に、交渉のテーブルを構えた一組の殺し屋と依頼主がいた。

「余計なことは言うな。用件など言わずともわかりきったこと」

地下室の壁に声が響く。

「ターゲットと、必要な情報、前金と成功時の連絡方法だけを残して去れ」
「……」
フードの奥から向けられた淡々とした声に、依頼主は微かに背筋を震わせた。
と、同時に期待に彩られた頬が笑みを刻む。
「こ……これが前金。ターゲットの情報はこっちの資料にまとめてあります」
お互いに顔を隠し、明かりは部屋の端に備えられた蝋燭の揺らめきのみ。もちろん彼らはお互いの素性を知る必要もなく、またそれを探ろうとすることは協定違反でもある。そのときはどちらかが血を流し、またどちらかが命を落とすことになるだろう。
ゴクリと喉を鳴らしたのは、依頼主の方。
「……」
しばらく資料を眺めていた殺し屋は、無言のまま手にした資料を懐に入れた。
それは依頼を受けたことの証。
「……お願いします」
依頼主は手の平の汗を握りしめ、奥歯を微かに震わせながら席を立った。
微かな空気の動きに、蝋燭の炎が大きく揺らめく。
――矢は放たれた。もはや後戻りはできない。
だが、それでも。
それでも、その依頼主の心には後悔よりも期待の方が大きかった。
「ふふ」
ひんやりとした夜の空気を浴びて、その頬に引きつった笑みが漏れる。
「これで私は自由になれる……」
圧倒的な解放感。
長いトンネルの向こう、自由の光はもうその眼前にまで迫ってい

て――

「これで、ようやく――！」

達成感と微かな恐怖に震えるその声は、晴れ渡るネービスの夜空に吸い込まれていった。

その1『波乱含みの講師生活』

「お前とは今日から赤の他人よ」
真っ赤な夕暮れの中、二つの長い影が佇むネービス中央広場。
休日の朝などにはカップルの待ち合わせ場所にも利用されるこの場所で、今、一つの関係が終わりを告げようとしていた。
青ざめた男が必死に言い訳する。
「そ、そんな！　そりゃ今回のことは悪かったと思ってるよ。でも、仕方ない――」
「余計なことは言わなくていいわ。私が今のお前に望むことは、ただ一つだけよ」
片方はひょろっとした長身の人の良さそうな青年。
もう片方は眩いブロンドのポニーテイルを持つ美しい少女。
青年の表情は情けなく歪み、言葉を探すように視線が彷徨う。
対する少女の方は硬い表情で念を押した。
「絶対に私に話し掛けないこと。可能なら視線も向けないで」
精巧な人形のように整った顔立ちが言葉に鋭さを加える。
「そ、そんな無茶な！」
当然、青年は反論しようとした……が、彼らの力関係を考えれば少女が青年の言葉に聞く耳を持つはずもなく、
「とにかく、そういうことよ」
「そんな……」
そんな二人。
少々頼りなくいかにも情けない男、といった印象のティーサイト＝アマルナ、通称ティースはここ学園都市ネービスでデビルバスターを目指す十八歳の青年である。
百八十センチを越えるひょろっとした長身、やや猫背、童顔であること以外に取り立てて語ることもないルックス、それなりに清潔だが凡庸としか言いようのない服装、髪型、その他諸々の美的セン

ス。……一応物語の主人公であるからどうにかして誉め言葉を並べ立てたいところなのだが、残念なことに普段の彼を誉めるとすれば“誠実”あるいは“心優しい”ということ言葉ぐらいしか思い浮かばない、まあ善人ではあるがそれ以外に特徴のない平々凡々な男なのである。

しかし。

彼と一緒にいた少女シーラ＝スノーフォールはそれとまったく正反対だった。

何一つ欠点のない年齢よりもやや大人びた美貌。隙のない凛とした姿勢で歩く姿は常に人々の羨望と憧憬の視線を集めている。

その性格を一言で表すことは難しいが、ティースに接する彼女は強気で高圧的な態度が非常に目立っていると言えるだろう。

そんないかにもミスマッチな二人は、これまでおよそ十六年弱の付き合いである。シーラの年齢が現在十五歳と十一ヶ月ほどであることを付け加えれば、彼らの関係の深さについてこれ以上言及する必要はないだろう。

しかしそんな彼らの関係も決して永遠のものではない。

「シーラ……」

「わかった？　わかったなら――」

姿を変え、形を変え、紆余曲折ありながらもこれまでどうにか続いてきた二人の関係は、この日、あまりにも一方的な絶交宣言によって終わりを告げたのである。

……のだとしたら、おそらくこの物語自体にとってもただ事ではないのだが、もちろんそんなことはなかった。

「なにボーっとしてるの。ほら、帰るわよ」

「へ？　で、でも……」

わけがわからないという顔のティースに、シーラは片手を腰に当てて呆れ顔をする。

「今の話は学園の中でのことよ。なにも普段からそうしろと言ってるわけじゃないわ」

「……あ、なぁんだ」
鳴いた鴉がもう笑った、とでもいうのだろうか。ティースは照れたように笑いながら頭を掻いて、
「ビックリさせないでくれよ。てっきり絶交されるぐらい怒らせちゃったのかと思ったじゃないか」
「……」
そんな彼の安堵した態度が気に入らなかったのだろうか、シーラは目を細め間髪入れずに言った。
「そうね。……その方が確実だったわね」
飴色の髪が不機嫌そうに夕日の中に躍る。
「え!?　うわわ、そんな！　ま、待ってくれよ！　シーラ！」
再び暗転。
と、まあ、しかし彼女が不機嫌になる理由もわからないではない。
――デビルバスター試験を一ヶ月後に控えたティースが、何故か彼女の通うサンタニア学園に護身術の特別講師として招かれることになったこの初日。
彼女にとってそのことが愉快であるか不愉快であるかということを語る以前に、彼女がその事実を知ったのは、偶然にも彼の授業を選択した彼女が授業を受けようとしたその瞬間であり、まずそこまで秘密にされていて結果的に驚かされたということが気にくわない。
それに加えて――やはり、彼が学園にやってくるということ自体も彼女にとっては決して歓迎すべきことではなかった。
「……」
「お、おぉい、シーラ！　待ってくれって！」
そして慌てて追いかけてくるティースを振り返ることもなく、シーラは不機嫌そうに沈みゆく夕日を見つめながらミューティレイクへの帰路を辿るのだった。
さて、そんなこんなで、まあいつもの調子の二人を少しだけ先回りしてみよう。

彼ら二人の帰る場所。
ネービス有数の大貴族ミューティレイク家。その一階玄関ホールには屋敷に似合わない質素な丸テーブル群が設置してある。
「――にしても」
そこに籍を置く弱冠十二歳の執事リディア＝シュナイダーは夕日に焼ける窓の外に、屋敷へ向かって歩いてくるひょろっとした青年と美しい少女――“美女と野獣”ならぬ“美女と草食動物”の何ともアンバランスな組み合わせを見つけて、一割ほどの憐憫と二割ほどの好奇の入り交じるため息を漏らした。
残りの七割？　……それはご想像にお任せするとしようか。
「偶然って意地悪だよね。まさかシーラさんがよりにもよってティースさんの授業を受けに来るだなんて」
パタン、と、彼女のトレードマークである分厚く難解な図書が質素な丸テーブルの上で乾いた音を立てる。
独り言かと思いきや、そうではない。
「ね、そう思わない、兄さん」
「ん？」
彼女の正面には後頭部で両手を組み天井を見上げる格好で座っている青年がいた。
リディアとまったく同じ濃い色の金髪を持つ青年――レインハルト＝シュナイダーはそんな、九つほど歳の離れた妹の言葉に小さく笑みを浮かべて、
「偶然なんてもんは結局は必然の積み重ねさ。ことに男と女の出逢いに関してはな」
「いや、兄さんのナンパ論になんてこれっぽっちも興味ないよ」
レイは小さく肩をすくめると、
「淋しい発言だな。お前もそろそろ少しぐらい色気づいていい年頃だってのに」
リディアはまったく動じず即座に、

「兄さんのおかげで恋愛に幻想なんて抱けなくなったからね」
「ああ……いや、それはいいことだぞ」
似たもの兄妹と言うべきか否か。
夕日に照らされたミューティレイク別館、一階のホールには彼らと動き回っている使用人の他には誰もいない。ここに姿をよく見せる面々は大半が任務か何かで屋敷を出ているようだ。
と、そこへ玄関の扉がやや重々しい音を立てながら開く。
「よ、お二人さん」
入ってきたティースとシーラに対し、レイが早速声をかけた。
「初めての学園デートの感想はどうだ？　相変わらず仲が良さそうで羨ましい限りだ」
「……」
シーラは無言でチラッとレイを一瞥するなり、
「おかげさまで。学園生活史上最悪の一日だったわ」
抑揚のない声でそう答えた。
もちろんレイの方もその不機嫌そうな返答を予想していたのだろう。苦笑しながら彼女の後ろからやってきたティースに視線を向けて、
「と、王女様は仰せだが？」
「……」
話を振られたティースは何も答えず”それ以上刺激しないでくれ”とでも言わんばかりにレイを見つめた。
それ以上は会話もなく、そのまま立ち去っていく二人。
その後ろ姿を見送りながらリディアは小さく、
「――不機嫌だったね、シーラさん」
それに対し、レイは相変わらずの飄々とした笑みで答える。
「ま、色々不都合があるんだろ。女ってのは元来隠し事の好きな生き物だからな」
「えー」
リディアは納得できない顔で、

「どっちかっていうと男の方が隠し事多いんじゃないの？　浮気とかするのだって大抵は男の方じゃん」
「そりゃ違う。男の方が浮気してるように思えるのは、単にバレる確率が高いってだけのことさ」
「あー、そうなんだ。そっか。世の中、兄さんみたいに狡い男ばかりじゃないもんね」
「聞き捨てならんな、そりゃ」
それでも具体的な反論は口にせず。
夕日を手にしたグラスに落としながら、レイは楽しそうに口元を緩めて、
「なんにせよ、ティースのヤツにとっていい気分転換になればいいが、な」
「……とてもそうは思えないけど」
なんとも微妙な表情で首を傾げるリディアの意見は、彼らのことをそれなりに知る者としてはしごくもっともな意見であった。

サンタニア学園。
シーラの通うこの学園はネービスに住む、主に中流階層の人々にとっての上を目指すための登竜門的存在である。
ネービスに数多く存在する名門学園はそのほとんどが上流階層、いわゆる貴族や金持ちをターゲットとしたものであり能力以前の問題で入学拒否なんてことは日常茶飯事だが、このサンタニア学園だけは一般階層にも広くその門戸を開放しており、しかも様々な分野で数多くの成功者を出しているのだ。
ただそれだけに能力に関する敷居は非常に高い。
高難度の入学試験をパスし晴れて入学を果たした者のうち、最短の三年で卒業できるものはそのうちの五分に満たない。
五割は卒業できずに中途退学。

三割は卒業までに倍の六年以上を費やし。
一割五分は四年から五年で卒業する。
残った五分がストレート、つまり留年せずに三年で卒業していくことになるのである。

さて、そんなサンタニア学園の昼休み。

「でも意外だなぁ、シーラさんがあの授業を取ってるなんて」
「そうかしら」
桃色の花びらが満開の並木道を歩く三人組の学徒たちの中に、昼食を終えて次の授業へと向かうシーラの姿があった。
午後の授業開始まであと十分ほど。ほとんどの学徒たちが昼食を終えて教室移動など次の授業の準備に取りかかっている時間であり、そこかしこに急いで、あるいはのんびりと授業道具を片手に並木道を歩いていく姿が見受けられる。
さて、ここはひとまず、シーラとともに歩いている二人の生徒に注目してみることにしよう。
「わかってないわねぇ、オーウェン。この子ぐらいになると護身術の一つや二つ身につけてないと、すぐ通りすがりの悪党にさらわれちゃうんだから」
そう言った少女はディアナ＝リー。シーラと同じサンタニア学園薬草学科の四年目三回生の十六歳であり、彼女の学園における数少ない友人の一人だ。
やや丸みを帯びた顔立ちと短い髪を頭のてっぺんで結んだ特徴的なヘアスタイルが愛嬌のある少女である。
そしてもう一人。
「そうなの、シーラさん？」
「そんなはずないでしょ」
「あはは、そうだよね」
笑いながらそう言ったのは柔和で穏やかな表情の青年だ。

スラッとした長身、飾り気はないが清潔感のあるスマートな服装で、なかなかのハンサム。

そんな彼、オーウェン＝トレビックはシーラたちと同じく薬草学科三回生の十七歳で、今年で三度目の三回生を迎える。

前述の通り、なかなかに顔立ちの整った好青年なのだが、性格的にやや大人しいため印象としてはそれほど目立つタイプではない。

が、しかし。

そんな彼もこのサンタニア学園においてはちょっとした有名人であった。

というのも、

「でもオーウェン、実際のところその辺どうなの？　こんな、ちょっと普通じゃない子の彼氏としては」

彼はシーラの恋人と噂される青年なのだ――噂される、などというはっきりしない表現になってしまったのは別に当人たちがそれを否定しているわけではなく、ただ周りがそれを信じなかったり、あるいは認めなかったりするだけのことである。

「どう、ってなにがさ？　俺はシーラさんが美人なのは嬉しいし、別にケチを付ける気もないけど？」

「じゃなくて」

どこかとぼけたオーウェンの反応に、ディアナはやれやれと首を振って、

「やっかみとか何だとかで色々と心配事もあるでしょ。そういう意味でどうなのよって話」

「どうなの、と言われても困るな」

オーウェンは言葉通り困ったような笑みを浮かべて、

「しょうがないと思うけど。だってシーラさん美人だし」

「……あんた、何かというとすぐそれね」

「でも事実だし」

ディアナはため息を吐いた。

「ま、あんたも結局は信者の一人だもんね。……その辺どうなって

るの、シーラ？」
「なに？」
話を聞いていたのか聞いていないのか――興味があったのかなかったのかと言うべきか――シーラの反応は何とも素っ気ないものだった。
再びディアナはため息を吐く。
「なに、じゃなくてさ……はぁ。あんたたちってば、もう一年半も付き合ってるんでしょ？」
「一年と十ヶ月かな」
と、オーウェンが答える。
「でしょう？　なのにまったく、あんたたちったらたまにお昼を一緒に食べるだけで手を繋いでるのすら見たことないんだから。友人としてはちゃんと上手くいってるのかなって気になるのは当然じゃない」
腰に手を当ててそう主張するディアナにシーラは苦笑しながら、
「あなたのは単なる野次馬根性でしょう？」
「う。そ、そんなことないわよぉ」
と、そこへオーウェンが笑いながら答える。
「付き合い始めるときに釘を刺されてるんだよ。ちょっとでも触れたら絶交だ、って」
「はぁ？」
これにはディアナも眉をひそめて、
「……ちょっと本当なの、シーラ？」
「本当だと思う？」
そんなシーラのやや冗談っぽい口調にディアナは少し考えて、
「普通じゃ考えられないけどさぁ……あんたってば二回生の頃、外傷薬の実地授業のとき――あー、なんていったかな、あのスケベそうな顔した先生」
「シェーマス＝フランシス？」
「あ、そうそう、フランシス先生。今はもういないけどさ、確かそ

の授業のとき、あの先生に向かって『私に触れるなッ！』ってものっすごい怒鳴ったことあったじゃなぁい？」

「あったかしらね、そんなこと」

とぼけたわけではない。素っ気ないのはただ興味がなかっただけだ。

「あったのよ。だからあんたってば実は男嫌いなんじゃないかって噂も一時期――」

と、まあ。

そんな思春期の少年少女に相応しい（？）恋愛話に花を咲かせていた三人だったが。

ふと。

「シーラ？」

ピタッ、と。

先頭を歩いていたシーラが足を止めたのに合わせ、ディアナとオーウェンも同じように歩みを止める。

「どうしたの？」

「……」

シーラはそれには答えず、黙って視線を正面に向けていた。

……頭上の枝から落ちた桃色の花びらがひらひらと彼女の周囲を舞う。

すれ違う他学科の学徒たちはそんな彼女に、明らかに他のものとは異質な視線を向けた。

憧憬、軽蔑、羨望、敵意――強く、両極端な感情の数々。望むと望まざるとに関わらず、それらはいつでも彼女の周囲を覆い尽くしている。

それに対する彼女の視線はいつでも無関心で、その渦の中を彼女はいつも隙のない凛とした姿勢で歩いていた。……いや、そうでなかったならば、彼女が自ら引き寄せた潮流はとっくの昔に彼女自身をどこかへ押し流してしまっていたことだろう。

彼女はこの学園においてはいつでも完璧で、かつ鉄壁だった。

が、しかし、
「シーラさん？」
「いえ……」
小さく首を振って再び歩き出すシーラ。
このとき一瞬だけ浮かんだ困惑は彼女としては――あくまでこの学園内においては――非常に珍しい表情だった。
その理由をディアナとオーウェンの二人は理解できなかったようだが……彼女のことをもう少し良く知る者ならばおそらく理解できるだろう。
「あれ。……あ、先生ー、こんにちはー」
何事かに気付いてディアナが張り上げた声。
向けられたその視線の先には、並木道を横切ろうとする一人の青年がいた。
「え？　あ……」
そのいかにも情けないというか頼りないシルエットを見間違うはずもなく。
タイミングがいいのか悪いのか。
彼女らの前にフラフラと出てきた青年は紛れもなくティースだった。
「こんにちは、ええっと……ディアナさん、だったっけ？」
そう言いながら足を止めたティース。
長身で細身、いかにも人の良さそうな童顔とどこか頼りなさそうな雰囲気が取っつきやすかったのか、ティースは初日から生徒にそれなりに受け入れられており、特にこのディアナとは帰り際にいくつか言葉を交わした間柄であった。
見知らぬ場所で多少とはいえ顔見知りの少女と出会い、ティースの顔は一瞬、笑顔を作ろうとする。
が、その直後、
「！」
その表情が一瞬で強張る。

……原因は、言うまでもなかろう。
いつもより鋭さを増したシーラの視線が、彼をその空間に磔にしていたのである。
「あ、もう覚えてくれたんですか？　……って、先生、どうしたんです？　急にそっぽを向いちゃって」
「え、ええっと……」
「……」
ティースの額にうっすらと冷や汗が浮かんだ。
「そ、その、ほら、た、太陽が眩しいなぁと思って――」
「はあ」
その言葉につられて空を見上げるディアナ。が、タイミングの悪いことに太陽はまばらな雲にちょうど隠れたところだった。
「太陽、出てませんけど？」
「え！？　あ、ははは、いや、そうじゃなくて、太陽っていうか青空、青空だよ、うん。空が眩しいなぁって――」
「……馬鹿。もっと自然に……」
「ん？　シーラさん、今なにか言った？」
「……なんでもないわ。行きましょう」
平然と受け流しながらシーラは歩き出した。隣のオーウェンもティースに軽く一礼してその後を追う。
が、ディアナは不思議そうな顔をして言った。
「え？　あ、ちょっとシーラ。どうせこれから先生の授業だもの一緒に行けばいいじゃない。……先生も教室に向かうところなんでしょ？」
「え！？　ええっと……」
「……」
無言で振り返るシーラ。
それは彼女にとって明らかに好ましくないであろう提案であり、ティースの先ほどの狼狽ぶりを見せられてしまえば、彼女でなくともいつボロが出るかと不安になるのは当然だろう。

彼はとにもかくにも嘘をつくことが苦手な男であり、シーラは当然にそのことを良く知っているのだから。
が、しかし。
「……ええ、それもそうね」
難色を示せば不自然でかえってボロが出そうな状況。
シーラはことさら無関心を装ってそう答えるしかないのだった。

そんな、こんなで。

（これはとんでもないことになったぞ……）
ティースは今、下着が背中に貼り付くほどの冷や汗をかきながら、針のむしろの上をそろりそろりと歩いているかのような気分を味わっていた。
「先生って普段はどんな仕事してるんですか？」
「え？　ええっと……」
昨日、話し掛けるどころか視線も向けるなと釘を刺された、その翌日。こうなったら出来るだけ近付かないようにしよう、などと決心したのが今朝の寝起きのこと。
しかし早くもその計画は打ち砕かれそうになっていた。
「……傭兵っぽい仕事、かな」
そんな彼はディアナの質問に回答するたび、チラチラと前を歩くシーラの様子を窺っていたが、幸いなことに今のところ失言はなさそうだった。
「傭兵ですか？　へぇ、見えませんね」
オーウェンがちょっと驚いたような顔をする。
「そ、そうかい？」
ディアナが頷いて、
「うん、ぜんぜん見えない。先生ってなんか争い事とか向いてなさそう」
「はは……って、もしかして誉められてなかったりするのかな？」

「どうだろ？　あたしはそっちの方が好ましいと思いますけど……ねぇ、シーラ。あんたはどう思う？」
そんなディアナの振りに、ティースは恐る恐るシーラの方を見る。
「……」
一瞬の間。
だが、チラッとディアナを振り返った彼女の返答はティースが予測していたような恐ろしい（？）ものではなく、
「ええ、そうね。腕力を誇示して威嚇するだけが能の野蛮人よりはマシだと思うわ」
「だって。……先生良かったですね、学園一の美女のお墨付きがもらえて」
「……」
シーラの返答が素直に喜べるような誉め言葉だったかどうかはともかく、それとは別の意味でホッと胸をなで下ろしたティース。
（よかった……まだそんなに機嫌悪くなってないみたいだ）
ともかく彼女は自分とティースの関係について知られたくない、もっと広げていえばプライベートの話を学園の中に持ち込みたくない、と、こういうことらしい。
普通の人と比較すれば特殊な環境にいる彼女のことである。それはティースにも大いに理解できることだった。
（つまり他人を装っていればいいんだよな。……よぉし、攻撃は最大の防御って言葉もあるし――）
と、なにやら妙な自信を持ったティースは（止せばいいのに）今度は自ら口を開いていくことにした。
「へぇ～、シーラさん、は学園一の美女なんだ。すごいんだね」
「……」
シーラがピクッと肩を揺らす。が、ひとまず反応はなし。
（よし。今のはいかにも初対面、って感じの反応だよな）
端から見れば少々ぎこちない芝居がかった口調ではあったが、それでもまあディアナやオーウェンは特に疑問を抱かなかったらしく、

「何を今さら」
ディアナは笑いながら言った。
「先生だってさっきからチラチラとシーラのこと見てたくせに」
「え？」
「……」
ピク。
先ほどより大きく肩を揺らしたシーラに、ティースは少し慌てる。
「あ、い、いや、それは気のせいだよ。じゃなくて……あ、いや、そ、そう。シ、シーラ、さんがあまりに美人なものだから、つい……あははは」
「そんな焦らなくてもいいですよ、先生。この子の場合、いつものことなんですから」
「あ、そ、そうなんだ」
不幸中の幸いと言うべきか、ディアナはシーラを窺う彼の視線を別の意味で受け取っていたらしい。
と、同時に
（いつものこと、か……）
ティースは思わずシーラの後ろ姿を見つめてしまった。
もちろん彼も付き合いの長いこの少女が美人であることぐらい知っている。
怖いほどに整った顔立ち。金糸のような美しい髪。
小さい頃からの彼女を知っているティースは、他の男たちに比べればその魔力に対し強い“免疫”を持っているといえよう。が、そんな彼であってさえも改めて見つめてドキリとすることがある。
それほどに彼女は美しく。
特に最近はその傾向がほんの少しだけ顕著になっていて――
（う……）
折しも吹いた緩やかな春風に乗って、鼻孔をくすぐる香水とは違う甘い香りが漂ってくる。
脳髄の奥が微かに刺激されて映像がフラッシュバックした。

「……！」
反射的に口元を押さえる。
「？　先生、気分でも？」
ディアナがそう尋ねたのも当然だ。
が、ティースの表情は青ざめるどころか逆に真っ赤になりつつあって、
（……あぁぁぁぁっ！）
ポカッ。
「いてっ」
「？　先生？」
ディアナとオーウェンは一様に不思議そうな顔をして。
「……」
シーラの方はといえばその原因が自分にあるなどとは露知らず、また始まったと言わんばかりに呆れ顔をするだけだった。
さて。
それは、そんな一行が目的地である競技施設の十数メートル手前までやってきたときのことである。
「あら？　……誰かと思えばシーラさんじゃありませんか？」
「？」
ティースの耳に聞こえたのは、やや幼さを残しながらもおっとりとして大人っぽい口調の少女の声。
そして、
「げ」
足を止め、真っ先に“非”歓迎の音を発したのはディアナである。
並木道の向こうからやってきたのは二人組の少女だ。
その片方、シーラたちに声をかけてきた方はこのサンタニア学園ではそれほど多く見掛けないお嬢様然とした巻き毛の少女。服装も明らかに他の学徒たちとは違っていておそらくは本当に良家の娘なのだろう。
「？」

この学園にやってきて二日目のティースにはもちろん見覚えがない。

（……シーラの友達かな？）

ニッコリと友好的な笑顔を浮かべる少女にティースは咄嗟にそんなことを考えたが、

「驚きました」

その少女はもう一人、同い年ぐらいの少女を引き連れるようにして彼らの目の前に立ち止まると、いったんチラッとティースを見た後、何事もなかったかのようにシーラへと視線を戻して、

「シーラさんのことですから、てっきり昨年度で卒業なさったものと思ってましたのに。やはり最終試験は運や偶然でどうにかなるものではないということでしょうか」

表面上はにこやかに。だが、薄皮一枚隔てた向こうに明らかな毒を秘めて。

（……友達じゃ、ないみたいだ）

この鈍感なティースですら気付けるのだからよっぽどである。

だが、シーラはそんなあからさまな嫌味に対しても淡々と答えた。

「ええ、残念ながら上手くいかなかったわ。努力が足りなかったのかしらね」

「そうですか。では、これからはもっと努力しなくてはいけませんわね、色々と」

「ええ、そうね」

巻き毛の少女はフッと鼻で笑って、それから再びティースへと視線を移動させる。

「あ……」

一応講師という立場上、何か挨拶でもしようかとティースが口を開きかけた、そのとき。

「……それで、こちらの何も考えてなさそうなみすぼらしい男は何者です？　いくら自由な校風とやらがウリのこの学園でも、部外者を勝手に入れるのは問題ではありませんの？」

「な、なにも考えてなさそうなみすぼらしい男……？」
思わず自分の服装を見下ろしてしまうティース。
こういうとき怒りよりも先に自分の落ち度を探そうとしてしまう辺り、まったく彼らしい行動であるといえよう。
それからちょっと情けない顔をして、
「み、みすぼらしいのかな、俺……」
そんな彼の独り言は完全に無視されたまま、ディアナが反論した。
「ちょっと！　この人は部外者なんかじゃないわ！　特別講義の先生なんだから！」
「特別講義……？　ああ、あの落第者のお遊び講義のこと？」
少女は再び再び鼻で笑って、
「なるほど、受けなくて正解でしたわ。そのいかにも主体性のなさそうな男を見るだけで内容などだいたい想像できてしまいますもの」
「なっ……先生に失礼じゃないの！　謝りなさいよ！」
ディアナが当事者たちを差し置いて真っ先に激昂する。
どうやら彼女はなかなかに感情的な性格の持ち主らしい。
「何故？」
だが巻き毛の少女は対照的に冷静に受け流していた。
「私は思ったことを正直に口にしただけですもの。……失望しましたわ、シーラさん。いくら最終試験に落ちたからといって、今度は講義の先生を丸め込んでいい点数をもらおうだなんて……私だけは、シーラさんがそのようなことをする方ではないと信じてましたのに」
「む……むっかぁぁぁぁ！　ちょっと！　ちょっとシーラ！」
さらに顔を真っ赤にしたディアナは形勢不利を悟ったのか、今度はシーラに対して捲し立てる。
「悔しくないの！　悔しいでしょ！？　ほら、なにか言い返してやってよ！」
（……いい子だなぁ）
ティースはそんな彼女の態度を一歩引いたところで眺めつつ。
（いい友達を持ったよ、シーラは。うん）

などと、自分のことが論戦の一端に上っていることなどすでに忘れて呑気に保護者気取りであった。
「あらあら、ディアナさん。そうやって顔を真っ赤にしていると、ますますお猿さんのように見えますわよ」
「む……むっきぃぃぃぃぃっ！！」
と、そんな圧倒的に形勢不利な情勢の中。
「もう、やめなよ」
「……オーウェン」
二人の言い合いに口を挟んだのはオーウェンだった。
巻き毛の少女は彼とも顔見知りなのか、今度は僅かに躊躇ったような態度を見せながら、
「オーウェン。あなた、またその子の味方をするつもりですの？」
「当たり前じゃないか」
言葉通り何の躊躇いもなく答えるオーウェン。
「……」
少女は微かに表情を歪めて憎々しげにシーラを睨み付けたが、オーウェンはそんな彼女を宥めるように、
「シーラさんに色々と悪い噂があることは俺だって知ってるよ。でも、それって全部根拠のない話だろ。俺はシーラさんがそんな人じゃないって思ってるし……」
（……悪い噂？　なんだろ……）
もちろんこの学園に来たばかりのティースにはわからないことである。が、この巻き毛の少女の物言いといい、彼女の学園生活が決して順風満帆でないらしいことはティースにもかろうじて理解できた。
（もしかしてイジメとか受けてるのかなぁ……）
と、やはり保護者チックなことを考えてしまうティースだった。
そんな彼を余所にやり取りは続く。
「何を言ってますの？　根拠のない話でしたらこんなにも広がるはずありませんわ」

「でも、君だってその根拠ってのを知ってて言ってるわけじゃないんだろ？」

そんなオーウェンの言葉に少女は馬鹿馬鹿しいとばかりに肩をすくめて、

「それはそうです。私は探偵ではありませんし、そこまで労力を費やす気にもなりませんもの」

「だったら、そういうことを言うもんじゃ――」

「もう、いいわ」

「え……？」

ふわ……っと、小さく振った首の動きに合わせて美しいブロンドのポニーテイルが宙を躍る。

微かに漏れたため息。

シーラがオーウェンを手で制して前に出ると、巻き毛の少女の表情が身構えるように微かに強張った。

「いくら言い合ったところで何が本当かなんてどうせわからないことよ。そうでしょう？」

「え、でもシーラさん……」

「いいのよ」

そう言ったシーラの口元に浮かんだのは、魔力を秘めた、魔性の笑み。

「確かに私の身体はそれだけの力を持っているもの。この子の言うようなこともあるいは可能かもしれないわね。……ねぇ？」

「っ……」

不敵にさえ思えるシーラの問いかけに、巻き毛の少女は気圧された様子だった。

だが、すぐに強気な口調を取り戻して、

「よくもまあ……臆面もなくそのようなことを。育ちが知れますわ」

シーラは即答する。

「あら、残念ね。負け惜しみにしか聞こえないわ」

「まっ……負け惜しみですって！？」

少女の頬が怒りで微かに上気する。……その様は、先ほどまでのディアナとのやり取りを逆さに見ているかのようだった。
「私の、どこがあなたに負けているというのです！」
怒りの言葉に応えたのは、薄い笑み。
「どこが、勝てると思っているの？」
「っ……！」
それはひどく屈辱的な言葉だ。
が、少女の口からはすぐに反論が出てこない。
……それもそのはず。このシーラ＝スノーフォールという人物には弱点らしい弱点が存在しないのだ。少なくとも周りの学徒たちはそれを一つとして知らない。
完璧で、かつミステリアス。
それがこの学園におけるの彼女の評価だった。
反論など、そう容易く思い浮かぶはずもない。
「ああ、それと」
じっくり二十秒ほど、少女の口から反論の言葉が出てこないのを見てシーラは思い出したように言った。
「もう知ってるようだけれど、私はシーラ。シーラ＝スノーフォールよ」
少女が怪訝な顔をする。
「……それは、どういう意味ですの？」
シーラは取り澄まして答えた。
「そろそろあなたの名前を教えてもらえないかしら？　……見覚えはあるのだけれど、誰だったのかどうしても思い出せないの」
「～～～～～～！！」
さらに屈辱的な一言に、少女はついに顔を真っ赤にして地団駄を踏んだ。
「アリエル！　アリエル＝リンプシャーよ！」
「……ああ」
思い当たった顔のシーラ。本当に知らなかったのか、あるいは演

技なのか……なんとも判断がつけにくい。
が、しかしどちらにしてもこの時点で勝負あったようだ。
（……容赦ないなぁ）
そんな彼女たちのやり取りに、ティースはほんの少しだけ巻き毛の少女――アリエルに同情してしまった。
普段彼女の容赦ない“口撃”に晒されている彼ならではの、妙な親近感故の反応である。
カラン、カラーン。
そこに鳴り響いたのは午後の授業開始を予告する鐘の音。
懸命に何か言い返そうとしていたアリエルも結局怒りのやり場を見つけられないまま、
「何をボサっとしているの!?　行きますわよ!」
「え、あ、はい……」
最後は後ろに引き連れていた一人の少女に怒鳴りつけて、そのまま腹立たしげにその場を立ち去っていったのだった。
（……うーん。やっぱ同年代の女の子でも特別なのかなぁ、シーラは）
アリエルの後ろ姿を見送りながらそんなことを考えるティースの横で、
「……まったく！　あの子ったらいっつも突っかかってきて！」
憤懣やる方無いといった口調のディアナに、オーウェンは少し苦笑いで答える。
「アイツ、昔っから負けず嫌いだから……」
「そういう問題じゃないでしょ！　……って、でもそっか。あんた、結構前からあの子のこと知ってるんだっけ」
少し口調を和らげたディアナ。
「昔から性格のキツいところはあったな。でもあんな酷いこと言うヤツじゃなかったんだけど……」
「さ、行きましょう」
そんな二人の会話を背に、先ほどまでの出来事などまるで意に介

した様子もなく再び歩き出すシーラ。
「あ、待ってよ、シーラ。……もう、あんたも少しは怒るとかなんとかないの？　ほんっとにクールなんだから」
「あはは……」
オーウェンの苦笑いが、この光景が決して珍しいものではないことを如実に表していた。
だからこそ。
この後の展開に二人が同じ反応をしてしまったのも無理からぬことだろう。
「でも……ホッとしたな」
そう言ったのはディアナ。
「なにが？」
問い返したのはオーウェン。
アリエルの出現で少しピリピリしていた空気もすぐに消え、ディアナはさっきまでの怒りなど忘れたかのように和やかな表情になって、
「いや、ほら。あんた、すぐシーラの味方してくれたじゃない？……それって当たり前のことなのかもしれないけど、この子ってば何かと敵が多いからさぁ」
それから少しだけ冗談っぽい口調になって、言った。
「さすがはシーラの彼氏だなぁ、って――」
と。
「え、シーラの彼氏……？」
そんなディアナの言葉に思わず呟いてしまったティースの明らかな“失言”は、幸いなことに誰の耳にも届いていなかった。
何故なら彼がそう呟いたとき、その場にいた誰もが彼と同様に驚いていたのだ。
……と言っても、もちろんディアナが口にした“オーウェン＝シーラの彼氏”という事に対して驚いたのはティースだけ。そんなことは当事者のオーウェンやシーラはもちろん、この学園では数多く

の人物が知っていることだ。
では、何に驚いたのか。
言うまでもなかろう。
「ちょっ……」
ディアナの言葉の直後。
おそらく思考の入る余地もない反射に近い速度で発したシーラの言葉……その反応に対して、だ。
「ちょっと、ディアナ！　余計なこと――」
「えっ……？」
ディアナがハッとした顔をする。同時にオーウェンもビックリした顔でシーラを見た。
それもそのはず。
その明らかに感情的な叫びは、おそらくこの学園の人々に言わせれば“彼女らしくないもの”であったから。
実際、彼女の言葉に起伏が見られたのはその一瞬だけのことで、
「……余計なこと、言わないで」
そこまで言い切ったとき、彼女の態度はもういつもの通りだった。
が、しかし。
「あ、う……うん」
「……」
半ば惚けたように返すディアナと驚いた顔のままのオーウェンを見れば、誤魔化しきれていないのは明白だった。
「……」
そんな二人の顔を見たシーラは微かな苛立ちと後悔の色を見せながら正面に向き直り、何事もなかったかのように歩き出す。
後ろで視線を交わし合うオーウェンとディアナ。
そしてティースはといえば、そんな三人の不自然なやり取りにはまったく気付かぬまま、
（……そ、そっか。この子がシーラの、恋人――）
今まで何度か話に聞いていたとはいえ。

突然目の前に現れた彼女の恋人の存在に、なんとも言えぬ気持ちでしばらく呆然としていたのだった。

その2『人間模様は多角形』

“春だからね”

と、誰かがこういう言葉を耳にした場合、あなたはそのときの光景をどのように想像するだろうか。

ここで一組の仲のよい恋人たちを想像したとしよう。

今まさに花開かんとする麗らかな並木道を歩く二人。暖かな陽気と、耳に心地よい小鳥のさえずりと、肌をくすぐるそよ風の祝福。そんな仲睦まじい二人にはおそらく夢と希望に満ち溢れた未来が待っているのではなかろうか。

……と、まあこんな感じであればこの上なく幸いであり、この幸せな情景を思い浮かべて吐き気を催す人間がいるとすればそれはかなりの性悪か往生際の悪い横恋慕者ぐらいのものであろう。

しかしながら。

「……春だからねぇ」

心躍る麗らかな春の陽気の中、華やかなミューティレイク邸の別館でリディアの視線の先にあった光景は、前述のように希望に満ち溢れた祝福すべきものとはあまりにかけ離れたものだった。

「――つまり、ティースさんの持つ細波を含め神具にはそれぞれ特徴があり、それを知り生かすことが戦いをより有利に――ティースさん？　……ティースさん！」

「ほへ？」

鼻ちょうちんが割れた音でも聞こえてきそうな、すっとぼけた反応のこの男。

我らがヒーロー、ティーサイト＝アマルナである。

「え。あ、アオイさん……？」

ミューティレイク別館一階のホール。その丸テーブル群の一つに腰を下ろしたティースは縦長の背中をこれ以上ないほどに丸め、両肘をテーブルに立て、重ね合わせた手の甲に顎を乗せる形でボーっ

とあらぬ方向を見つめていた。
「ん……？」
ぼんやりとしていた焦点が徐々に合わさっていく。
たっぷりと五秒。
ティースはハッとすると弾かれたように姿勢を正して、
「え！　あ、ご、ごめん！　な、なんの話だったっけ！？」
「大丈夫ですか？」
そんなどうにも頼りない彼の正面に腰掛けるのは、眼鏡と優男風の外見が特徴的なミューティレイク家の執事、イングヴェイ＝イグレシウス……通称アオイであった。
アオイは眉をひそめて心配そうに見つめると、
「慣れない仕事で疲れているのでは？　もし調子が悪いのでしたらマイルズ先生に診てもらって――」
「い、いや、そういうわけでもないんだ。ほら、その、春だからついついボーっとして」
慌てて言い訳するティース。それはもちろん口から出任せだったのだが、
「ああ！」
アオイは妙に納得顔で手をポンと打つ。
「それはよくわかります！　実は私も今朝、陽気があまりに心地よくてついつい寝坊をしてしまいまして」
「……いつもじゃん」
離れた席でそう突っ込むリディアの言葉は、どうやら二人の耳には届かなかったようだ。
ミューティレイクでは一番忙しい午前中の喧噪もある程度落ち着いて、ちょっとのんびりした空気が流れ始める午前十一時。この空気を味わおうと部屋から出てこのホールにやってくる人々も数多い。
その中の一人、と言っていいのだろうか。
「おはよー……ティースくぅぅぅん……」
このミューティレイク家が抱えるデビルバスター部隊ディバーナ・

ロウの第一隊隊長、アクア＝ルビナートが間延びした声を発しながらその場に姿を現した。トレードマークのお団子頭の後ろに右手を当て、足取りはどことなく重苦しい。
「おはよう、アクアさん。今、起きたんですか？」
そう問いかけたティースに、アクアは一度、二度と頭を振って、
「んー、昨日はちょっと飲み過ぎちゃってぇ……あぁ、頭痛い。まだ朝御飯残ってるかなぁ……。じゃ、またあとでねぇぇぇぇぇ……」
そう答えるや否や、やはりフラフラとした千鳥足で立ち去っていく。
「……」
ティースはアオイと無言で顔を見合わせながらそんな彼女を見送ったのだが、その後すぐ入れ替わるようにして、
「おぃ、ティース」
「ん？」
「紅茶二人分、持ってきてやったぜ」
彼らの前に姿を現したのは、トレイにティーカップを二つ乗せた褐色の肌を持つパーラー・メイドの少女、ダリア＝キャロルだった。
「あ、サンキュ、ダリア」
「仕事だからな」
と、ダリアはそんなぶっきらぼうな口調からは意外に思えるほど丁寧な仕草で紅茶をテーブルに配していく。中身がいくら竹を割ったような性格の彼女だとはいえ、接客用の制服を着ている以上は曲がりなりにもプロだということか。
「ところで、今フラフラ歩いてったのアクア姉か？」
ティースは入れ立てのティーカップに手を伸ばしながら、
「ああ。なんか飲みすぎたって言ってたけど、またレイさんと飲んでたのかい？　……あちぃっ！！」
「さぁ、あたしは知らないけど。つか、気をつけろよ。……ほい、アオイさん」
「あ、すいません」

二つの紅茶を配し終えたダリアは空のトレイを器用にクルクル回しながら、
「最近はお得意の失恋話も聞かされてないしな。いつものヤケ酒ってわけでもないと思うが、どうだかね」
「はは……」
笑っていいものかどうか、と、噛みつぶしたように苦笑するティース。
アオイが横から口を挟む。
「昨日は外へ飲みに行ったようですよ。誰が一緒だったかはわかりませんが」
「あれ、珍しいなぁ。アクアさん、いつもここで飲むのに」
意外そうなティースに、ダリアは悪戯っぽい口調になって、
「よくわからんけど気を付けろよ。あと三ヶ月で二十五歳。アレも相当焦ってるみたいだし、油断してると突然牙剥いて襲いかかってくるかもしれないぞ」
「はは、まさか。……でも、アクアさんならそんなに焦らなくたって大丈夫だと思うんだけどなぁ。美人だし、すごくいい人だし」
そんなティースのフォローもダリアは一笑に付して、
「それなのに今まで独り身だって事実の方に注目すべきだと思うがな、あたしは。……ま、どうでもいいか、んなこと」
どうでもいいで済まされたことを彼女が知ればまた拗ねてしまいそうだが、周囲を見回す限りその心配はなさそうである。
ダリアが話題を変えた。
「そういやお前、護身術教えに行ってるんだってな？」
「ん。あ、ああ……一応、ね」
「一応、か」
素直なティースの反応にダリアは笑う。が、そのことについては特に言及せず、
「それで、どんな感じなんだ？　ってか、大丈夫なのかよ、お前」
「え？　なにが？」

「ほら、お前の例の病気さ。教える相手も男ばっかじゃないんだろ？　護身術ってことは実技指導もしなきゃならないんじゃないのか？」

「あ、ああ……」

その言葉を聞いた途端、ティースの表情が憂鬱に曇っていく。

例の病気とは、彼の持つ持病――女性アレルギーのことである。

妙齢の女性に触れると気が遠くなってしまう、というその特異体質を思えば、彼が護身術を教えることに疑問が生じたのも至極当然のことであろう。

ティースは答える。

「今はまだ、ね。昨日と一昨日は実技やらなかったから」

「今日は？」

「一応、対策は考えてあるよ」

「そっか」

そんな彼に、ダリアは少し視線を横に流しながら、

「できれば助けてやりたいんだけどさ。あたしらも明後日から任務だからそういうわけにもいかなくてな」

「え？　あ、ああ、いや、いいよ、そんな。ダリアは俺なんかよりよっぽど忙しいんだろうし」

彼女からの思わぬ言葉にティースは慌ててそう答えながら微笑みを浮かべると、

「でも、そう言ってくれるのは嬉しいよ。ありがとう、ダリア」

「え？　ああ……いや」

ダリアは少し戸惑ったように視線を泳がせて、

「……ま、助けが必要な理由も情けないしな」

「う……た、確かにそうだけど、そんなはっきり言わなくても――」

ブツブツと不満げなティースに、ダリアはふっ……と頬を緩めると、

「ま、しっかりやれよっ！」

バンッ！

「いでっ！！」
ティースが悲鳴を挙げると、ダリアは口元に軽く笑みを浮かべ、そのまま踵を返して去っていってしまった。
「いてて……な、なんで叩かれ……？」
顔をしかめながら恨めしそうに呟くティース。どうやら本気で痛かったようだ。
アオイが笑いながら、
「おそらく、照れくさかったのではないですか？」
「照れくさい？」
「ええ。……さぁ、それはともかく。先ほどの続きをやるとしましょうか」
「え、あ、ああ――ん？」
よくわからないまま頷きかけたところに。
「ティースさーん」
立て続けにやってきた三人目の来訪者。
「お、セシル？」
ティースが振り返った先では、ちょうど外から戻ってきたらしい栗色の髪の少女――“屋敷の（番犬たちの）アイドル”セシリア＝レイルーンが玄関から手を振っていた。
「あれ、学校はどうしたんだ？　今日は早すぎないか？」
まだ午前だ。シーラと同じサンタニア学園薬草学科の一回生である彼女が帰ってくるにはいくらなんでも早すぎる。
「今日は午前の実習が早く終わったのでー！　いったん帰ってきてしまったのでーす！」
元気の良い返事。
「あ、なるほど」
と、ティースが納得するかしないかのうちに、外からは聞き慣れた犬の大合唱が聞こえてきた。
「あ、みんな、いま行くから待っててー。……あ、じゃあティースさん、私、マルスたちと外で遊んできますのでー！」

「あ、ああ、気を付けてなー」
結局何のために中に戻ってきたのか、セシルはブンブンと音が聞こえそうなほど大きく手を振ると、長めのスカートを軽くなびかせて、アッという間に外へと出ていってしまうのだった。
「……元気だなぁ」
ポツリと呟いたティースの言葉にアオイも頷いて、
「ですね。番犬のアイドルだなんて言われますけど、彼女にはむしろ人間の方がファンが多いかもしれません」
「はは、確かに。あの子なら学園でも人気者なんだろうなぁ」
そんな彼女の話題で頬を緩めるこの二人にも、充分にファンの資格はあると思われる。
同時に紅茶を口に運ぶ二人。
少々の沈黙。
ポツリ、と。
「学園でも人気者、かぁ……」
「？　ええ、セシルならきっとそうだと思いますよ。……さて」
ティースの呟きにアオイは何気なくそう答えて、
「それでは続きをやりましょうか」
と、気を入れ直した。
が、
「そりゃ……そうだよなぁ」
「ティースさん？」
物憂げなため息が落ちる。
続いたのは、呆然とした独り言。
「あいつのことだからきっと大丈夫……いやいや待てよ、頭のいい女ほど変な男に引っかかりやすいって誰か言ってたような……うーん……うーん……」
「……」
再びあらぬ方向を見つめてブツブツ呟き始めたティースに、アオイは訝しげな顔で困ったように首をかしげる。

もちろん彼にティースの呟きの本当の意味などわかるはずもなく。
「……」
と、遠くでそんな二人を眺めていたリディアはやがて軽く肩を竦め、もう一度独り言を呟くのだった。
「……春だから、ねぇ」

「春だってのに、ねぇ」
場面は変わって、ここはサンタニア学園薬草学科の実習室である。部屋に入った途端に顔をしかめてしまう強烈なカビのような匂いはこの授業で使っている薬草から発するものだろうか。
「なに、ディアナ？」
友人の呟きに、白い頭巾とマスクを装着したシーラはそう聞き返した。
頭巾は髪の毛の混入を防ぐためのもので全員が身につけているものだが、マスクは彼女のオリジナル装備で、おそらくはこの悪臭から少しでも逃れるためのものだろう。室内でそれを装備しているのはどうやら彼女だけらしい。
「いやさ。世間は麗らかな春の陽気だってのに、あたしはどうしてこんな薄暗い実習室でこんな悪臭にまみれてなきゃならないのかな、と思って」
そう言いながらディアナは彼女のマスクを少し恨めしそうに見やって、
「あんたってば、ホント準備いいわねぇ。あたしだって今日の実習がこんなもんだと知ってればちゃんと用意してきてたのにさ」
「あら。先生はちゃんとヴュルフェールの花を使った調合実習だと言ってたわ」
平気な顔でそう答えたシーラに、ディアナは不満そうに頬を膨らませて、

「そんなマイナーな原料を知ってるのはあんたぐらいのもんよ。去年の実習でだって一度も使わなかったんだから」
「苦みが強くて敬遠されがちだけれど、内服鎮痛剤としての効果が非常に優秀な原料よ。手に入りにくいから、一般に市販される薬には適さないけれども」
「つまり、フツーの薬屋目指してるあたしには必要ないってことね」
「でも、知っておいて損はないわ」
会話を続けながらシーラは小鉢の中ですりつぶした紫色の花に、あらかじめ用意してあった黄色の粉末と少量の水を加え、軽くかき混ぜて火にかけた。
ディアナはそんな彼女の手際よく手慣れた動きに首をかしげながら、
「あんたの手際っていっつも見事ねぇ。まるで何度も調合したことがあるみたい」
「ええ、あるわ」
「……あんたって」
ディアナは半ば感心し半ば呆れたようにしながら、
「ホント、三年連続学科トップの頭脳は伊達じゃないわねぇ」
「あら。あなただって何度も学費の免除を受けているじゃないの」
机の上を片づけながらシーラはそう言った。
学費の半額免除はこの学園の全学科において実施されている措置で、定期試験ごとに上位三名の学徒にのみ与えられる特権だ。学費の免除を受けている（受けたことがある）というのは、少なくとも学科内でトップ三を争えるだけの優等生ということであり、それはつまりこのディアナという少女が一見した印象に似合わぬ好成績の持ち主だということでもある。
だが、ディアナは小さく首を振って、
「どっちかというと学費の免除より素敵な出逢いが欲しい十六歳と九ヶ月の春。……あーあ、あたしにもあんたみたいな絶世の美貌があればなぁ」

「あれば？」
「もちろん。それを生かして素敵な彼をゲットするのよ」
シーラは流し目でそんな彼女を見やって、
「素敵な彼って、誰のこと？」
「……」
視線が右、左、もう一度右へ。
空白の時間はたっぷり十秒ほどあっただろうか。
「……そう言われると急には思い浮かばないけどさぁ」
「そんなものよ」
と、視線を手元の小鉢へと移動させる。
火にかけた薄紫の液体はコポコポと音を立て始めていた。
「おとぎ話みたいな素敵な彼より、将来を保証してくれる男を探した方がいいと思うわ」
「あんたって……でもほら、素敵な彼でかつ将来を保証してくれる甲斐性があればいいわけじゃなぁい？」
「妄想と現実は違うのよ、ディアナ」
あくまで冷めた物言い。その言葉を聞くと、なるほど、確かに彼女は恋愛に興味がなさそうに聞こえる。
もちろんその目の前にいるディアナもそう感じていて、それでもなお反論するのだ。
「あ、ひっどい言い方。素敵な彼って言ったって、別におとぎ話の王子様を想像してるわけじゃないんだから。そうね、たとえば――」
コポコポコポ。
火傷をしないようやや厚めの布を両手に持ち、シーラは小鉢に手を伸ばした。
「たとえば、ほら、あの、護身術の先生みたいな」
「……」
コポコポコポコポ。
「？」
コポコポコポコポコポコポ。

薄紫のドロッとした液体が振動を速くする。
「どしたの、シーラ？」
ディアナの問いかけに、ようやく彼女の長い睫毛が微かに動く。
「素敵な彼？　……あの男が？」
「え。いや、たとえばの話で、そんな、ものっすごい驚いたような顔しなくても――って、シーラ！　小鉢、小鉢！」
「え……あ、ああ。そうね」
コポッ……
沸騰寸前までいった薄紫の液体だったが、ディアナの指摘のおかげでどうにか爆発を免れたようだ。
火から下ろし、軽くかき混ぜて黄色の粉末が溶け残ってないことを確認すると、小さな団扇を手に取って今度は冷まし始める。
パタパタ、パタパタ、と。
「危ないなぁ。急にボーっとしちゃって、あんたらしくもない」
一瞬、空白。
「あなたの趣味の悪さに、ちょっと、ね」
「え、そうかな？　だってなんか可愛いじゃない、あの先生。緊張してるのがバレバレでさ。きっとすごく純粋な人なんだと思うなぁ」
「単に度胸がないだけじゃないの？」
「いやでも、ほら、ものすごく優しそうじゃない」
「そうかしら。それ以上に優柔不断そうだけど」
「一見頼りなさそうなのに護身術の先生っていうギャップもいいよね。なんかこう、ちょっとだけ謎めいているっていうか――」
「見たままの男よ、きっと」
「……」
ここまで来て、ディアナはようやく怪訝な顔で上目遣いに彼女を窺うと、
「あんたって……もしかしてあの先生嫌い？」
パタパタパタパタ……
「嫌いになるほど知らないわ。私はただ、感じたことを口にしたま

でよ」
「むぅぅ……まぁあんたの言うこともわからないではないけどさぁ」
ディアナはどうにも納得できない顔だ。が、もちろん、シーラとティースが実は知り合いだなどというところまで推理が及ぶはずもなく。
「でもでも、ほら、なんかあの先生って、外見よりも中身を見てくれそうな感じしない？　なんていうか、いわゆる性格美人のあたしとしてはそっちの方が勝算が――……って、シーラ？」
「そうね」
ほんの一瞬だけ動きを止めたシーラは短くそう答えた。
「そうかもしれないわね」
初めての肯定の言葉は今まで以上に素っ気なく。右手がそっと髪飾りを撫でる。
表情には別段の変化もなく。
そして次に口をついた言葉も、彼女らしい冷静な指摘の言葉だった。
「ディアナ。……その薬、そろそろ仕上げないと減点になるんじゃない？」
「え？　あ！」
ハッとするディアナ。
話に夢中で彼女の手は数分前から止まったままだったようだ。
「あぁぁぁーーーっ！　あと五分しかないじゃなぁいッ！」
彼女の調合はまだ小鉢を火に掛けるところまでも進んでいない。
間に合うかどうか、とてつもなく微妙な判断となりそうな情勢だ。
「だから、そう言ってるじゃないの」
「シーラ、言うの遅い！　今年こそ卒業しなきゃなのにー！！」
もちろんそんなことで文句を言われる筋合いはないわけだが、シーラは特に何も言わず呆れたように肩をすくめるのだった。
そうして授業も終わって昼休み。
「シーラさん！」

教室を出たシーラたちにタイミング良く駆け寄ってきたオーウェンは開口一番、

「今日の昼はどうする？　もし決まってなければ、クッションで今日から新作を売り始めるらしいから、ちょっと行ってみない？」

「え、ホント！？」

隣のディアナが敏感な反応を示す。

ここネービスの学園群では昼時になると、学園の許可を受けたいくつかの店が校門の前で露店を開くのだが、“クッション”はこのサンタニア学園の前で商売をしている人気ナンバーワンのパン屋である。

その新作ともなれば、初日は売り切れ必死なのだ。

「行こう行こう！　シーラ！　ほら、早く行かないと売り切れちゃう！」

ディアナは目を輝かせてシーラの袖を引っ張ったが、

「私は――」

「……って、そっか。あんたって昼はいっつも手作りだっけ」

と、ディアナは思い出して呟く。

その言葉通りシーラの手には、どうやらサンドイッチらしい小さなバスケットがあった。

オーウェンも思いだしたように、

「そういえばそうだっけ。いっつも作ってきてるんだよね、確か」

「残念だけど、私が作ったわけじゃないわ」

「お母さん？」

「小人さんよ」

と、シーラは答えた。

彼女がプライベートなことを極力口にしないのはいつものことなので、ディアナもオーウェンもただ苦笑するだけだったが、もしその言葉を彼らではなくティースが耳にしていたとしたら、おそらく彼らとは別の意味で苦笑していたことだろう。

なにしろそのサンドイッチは、確かに小人と言っておかしくない

ほどに小柄な少女、エルレーン＝ファビアスの作品だっただから。
ひとまず三人は露店のある校門前に向かって歩き出す。
外は心地よい陽気だ。先に歩き出したディアナ。シーラの動きを確認しながらゆっくりと歩いていくオーウェン。敷地内の芝生は早くも陣取った学徒たちの楽しそうな声で溢れている。
こういった光景は当たり前のようにも思えるが、実は庶民が多く通うこのサンタニア学園ならではのものだ。貴族子女が多く通う他の学園では芝生の上に直に座って昼食を摂るなどということはとても考えられず、屋外で昼食を摂る場合にも必ずテーブルに着く。ここサンタニアでも同じような屋外テーブルがいくつか設置されてはいるが、他の学園に比べ需要はそれほど多くない。
とはいえ、
「あら、シーラさんではありませんか」
もちろん生徒たちの中にはそういった、いわゆる庶民的な雰囲気に馴染めないグループもいて。まるで計ったかのようにバッタリと遭遇したアリエル＝リンプシャーもその中の一人だろう。
「げ。また出た……」
先頭で足を止めたディアナが嫌そうな顔でシーラたちを振り返る。
「ごきげんよう。これからランチですの？」
アリエルはいつものように同い年ぐらいの少女を一人引き連れ、見た目から良家の出とわかる上質な洋服に身を包み、頬には優雅な笑みを刻みながら、瞳の奥に微かな敵愾心を秘めてそう言った。
対するシーラはいつものように平然と返す。
「アリエル＝リンプシャーね。私に何か用？」
「名前を思い出していただけたようで何よりですわ」
先日の屈辱を思い出したのか、アリエルはやや口元を引きつらせ、地毛なのかあるいは付け毛なのか、妙にボリュームのある巻き毛を微かに揺らしながらさらに威圧的な視線をシーラに向けた。
だが、もちろんそんなことで彼女がたじろぐはずもない。
ゆっくりと瞬きして、

「それで？」
「っ……」
少しの揺らぎもなく真っ直ぐ向けられた視線に、逆にアリエルが少々たじろいだように見えたが、そこは彼女もすぐに持ち直して、
「今日はあなたに用があるわけではありませんわ」
そう言って、シーラの隣で成り行きを見守るオーウェンへと視線を向けた。
「？　俺に？」
「ええ、オーウェン」
シーラに向けるものよりは若干柔らかい口調でアリエルは言った。
「今日は少しお話したいことがありますの。せっかくですから、お昼でもご一緒してくださらない？」
「話？　話だったら別にここでも――」
「ここでは少し……」
そう言ってアリエルはチラッとシーラを見た。盗み見るというよりも、意味ありげな視線をわざと見せつけているといった様子だ。
と、そこへ、
「ちょっとアリエル！」
ディアナが敵対心剥き出しの口調で口を挟んだ。
「そんなこと言って、どうせまたあることないこと、シーラの悪口を吹き込むつもりなんでしょ！　そうはいかないんだから！」
「……」
アリエルは一瞬だけディアナに視線を送ったが、すぐにオーウェンへと戻して、
「どう？　オーウェン」
「ちょっ、ちょっと！　無視しないでよッ！」
ため息。
「相変わらずキィキィとうるさい方ですわね、ディアナさんは」
「むきーーーッ！　ちょっとシーラ！　あんたも何か言ってやってよッ！！」

やはり彼女とディアナでは少々分が悪いようである。
シーラは小さく首を振って、
「今のはあなたが悪いわ、ディアナ。彼女はただオーウェンを昼食に誘いたいだけだし、礼を失してもないわ。……ねぇ、アリエル？」
微笑みながら流し目をアリエルに向ける。
「も、もちろんですわ。他人にどうこう言われる筋合いはありません」
「わかったよ、アリエル」
と、そんな彼女らのやり取りがまた険悪になることを恐れたのだろう、オーウェンはゆっくり頷いて言った。
「俺も君に色々話したいことがあったんだ。ありがたくお誘いを受けることにする」
と、そんなオーウェンの返事に。
「それが賢明ですわ、オーウェン」
意外なほどにアリエルの表情がサッと明るくなった。
「そ、それに今日はあなたの分のランチも用意してますの。あなたの好みが昔から変わってなければ良いのですけれど……と、とにかく、善は急げといいますわ。さ、行きましょう」
忙しなくそこまで言い切って、傍らにいた取り巻きの少女に向かって言った。
「コートニー。あなた、今日は余所でランチにしてくださる？　用があればまた後で呼びますわ」
「はい」
連れの少女の返事を確認することももどかしく、アリエルはオーウェンの手を取ると、
「行きましょ、オーウェン」
弾んだ声と屈託のない笑顔は、シーラに向けているものとはまるで別人。
彼らが以前からの知り合いであることはシーラも聞いている。その詳しい関係まで立ち入ったことはないが、この様子を見る限りそ

れなりに親しい間柄だったのだろう。
いや、あるいは――
「……」
シーラは僅かに目を細めアリエルの背中を見つめる。その瞳に、この学園では滅多に見せない微かな揺らぎが走ったが、その場にいる誰一人としてそれには気付かなかった。

「――あー、なんか、スッキリしない！」
アリエルたちと別れた後。
予定通り校門前の露店パン屋“クッション”に向かってみたものの、お目当ての新作は売り切れた後で。
とはいえ。
ディアナがスッキリしなかったのはそれが原因ではない。
「あの子、今頃絶対あんたの悪口言ってるんだから！」
先ほどのアリエルとのやり取りが何とも腹に据えかねていたためである。
「……」
シーラはちょうど空いていたベンチに腰掛け、バスケットを太股の上に乗せる。風に泳いだ金糸の前髪を指先で軽く梳かし、僅か上空に向けた視線。
「なんなのかしら、あの子！　今度はオーウェンを使って嫌がらせ!?　あんな見え見えの芝居がかった笑顔なんか浮かべちゃって！」
「……そうじゃないわ、きっと」
シーラは小さくそう呟いたが、ディアナの耳には届かなかったらしい。
「そりゃオーウェンのことだから真に受けたりすることはないと思うけどさぁ。きっと今頃、あることないこと力説してるに決まってる！」
「……」
さぁっと春風が吹く。

「構わないわ。……誰に言われずとも、自分がどれだけ性の悪い女であるかは私が一番良くわかっているもの」
「またそんなこと言って……」
ディアナの口調はやや勢いを弱めたが、その代わりに口を尖らせ、本音を見透かそうとするかのように彼女を見た。
「あんたは自分でそうやって言うけど、でも少なくともあたしは、あんたが面白半分で男を誘惑したり騙したりするのを一度も見たことないよ。勝手に玉砕していくのは何度も見たけど」
「……」
何も答えないシーラ。
ディアナは躊躇いながら視線を流した。
少しだけ自信なさげに。
「それどころかたまに……あんたってもしかすると、自分のそういう顔があんま好きじゃないのかなぁって思うことある」
シーラはサンドイッチに伸ばそうとしていた手を止めた。
そしてディアナを見る。
「何故？」
「いや、ほら……さっきだってあたしが護身術の先生のことで、外見より中身を――なんて言ったときも、考え込むような顔してたし……」
「……そうかしら」
若干意表を突かれたようだった。それが身に覚えのないことだったからか、あるいはそこまで観察されていたことが意外だったのか、その態度からは判断できない。
「って、んなわけないか」
ディアナはそう言って誤魔化すように笑った。
「きっとあたしの気のせいよね。……っていうか、そんな贅沢な悩み、同じ女としてちょっと許せない」
「……」
シーラは黙って苦笑した。

その後はアリエルやオーウェンの話題からも離れ、新作パンの形態予想から午前中に行われた授業の話と辿って、午後の授業の話題へと移っていく。

「今日から実技演習だって言ってたよね、そういや」

と、ディアナが話題にしたのは午後の一番手に控える護身術の授業であった。

「そうらしいわね」

答えたシーラの口にサンドイッチの最後の欠片が消えていく。二切れのサンドイッチを平らげるのにかかった時間は約二十分。ディアナと会話しつつ、どうやら絶品らしいサンドイッチの味を充分に味わいながら食べたにしても遅い。

なんでもてきぱきこなす彼女にしては、と言うべきか。あるいは現実離れした気品ある容貌の彼女らしい、と言うべきか。

「どんなことやるのかちょっと楽しみだわぁ。……手取り足取り教えてもらううちに恋が芽生えちゃったらどうしよう」

バスケットの蓋を閉じながら、シーラは一言、

「有り得ないわね」

「即答!?　夢がないなぁ、もう」

「夢見るほど素敵なことも思えないわ」

ディアナは不満そうに口を尖らせたが、シーラの言った“有り得ない”は、恋が芽生える云々の部分ではなく、もちろん“手取り足取り”の部分である。

（そうよね。あいつ、触れないのよね……）

太股の上のバスケットに右手を置き、風で僅かに乱れたスカートの裾を直しながら、シーラの視線は中空を見上げた。

（どうするつもりなのかしら……？）

護身術の生徒十四名中六名の女生徒、その中でティースが触れることのできる生徒はシーラただ一人だ。他の五名であれば、触れた途端に気を失ってしまうことだろう。

もちろん触れずとも口頭で指導することも可能ではある。歳も近

く若い講師だけに、下手にベタベタ触れば逆に変な目で見られかねず、そういう点でいうと心配はないわけだが……たとえばコツが掴めない生徒などに対しては、直接の指導が必要になる場面も出てこよう。

（……私をアテにしてるって可能性もあるか）

可能性はなきにしもあらず。事前にそのような話は一切聞いていないが、あのティースのことだ。今回の一件で機嫌を悪くしていた彼女に対し、最後まで言い出せずにいたということも有り得なくはない。

「そろそろ時間だわ、ディアナ」

ベンチから腰を上げ、歩き出す。

――もしもそうだとしたら。

思考は巡る。

関係がバレかねない行動は極力避けたい。しかし――

（まさか生徒の面前で気絶させるわけにもいかないものね……）

ため息。

仕方ない、と。

小さく首を振って再び視線を正面に向けた、そのときだった。

（……え？）

次の授業の教室となる屋内競技施設まで真っ直ぐに続く並木道。

そのずっと奥、距離にして百メートル以上先。

そこに、見覚えのある特徴的な後ろ姿が見えた。

「？　どうしたの？」

シーラの歩調が変わったことに気付いたディアナが怪訝そうな顔をしたが、

（……なるほどね）

「いえ、なんでもないわ」

シーラはただそう答え、納得して歩調を元に戻した。

ふわりと金色の髪が宙に舞う。

（私の出番はなさそうね……でも）

視線のずっと先、見覚えのある後ろ姿は一足先に屋内競技施設へ入っていったようだった。
胸を過ぎる一抹の不安。
（……ちゃんと上手くやれるのかしら、あの二人……）

「えっと、えー、つまり何度も言うように護身術というものは一般的な武術と違って戦うための技術ではありません」
「……」
「……」
「……」
「えっと……」
世の中には人の視線を気にする人間と全く気にしない人間の二種類がいる。視線を気にするグループはさらに、他人の視線が集まることに喜びを感じるグループと、逆にたじろいでしまうグループに分けられる。
では現在、サンタニア学園の一角で教鞭をとっているティースは一体どこに分類されるのだろうか。
おそらく、考えるまでもない。
「……あー、えー、そのー……」
手元を見たり視線を宙に彷徨わせたり。忙しない動きを繰り返し、どもりながらもかろうじて講師としての体裁を保ちつつ授業を進めていく。
そんな彼がここで教鞭を取り始めて今日が三日目だ。
その生徒は総勢十四名だが、今日は男子が一人姿を見せていないために、男子七名、女子六名の十三名で、このサンタニア学園の男女比率から考えると女生徒の割合はかなり多い。
「つ、つまり護身術の基本は、えー、まず第一に危険を事前に回避することであります。その、まず危険な場所を歩かない、あと、え

っと……日が落ちてからは外を出歩かない、など――」

彼の授業は実を言うと今のところ好評だ。

生徒たちにとっては歳が近くて親しみやすいということもあるし、授業の題材がこの学園の生徒たちにとっては新鮮味があって面白いということもある。また、このティースという男のイメージと護身術という内容のミスマッチが多少なりとも興味をそそる原因になってもいよう。

と、まあそんなこんなで。

今日も生徒たちは当初から興味津々だったのだが――

「それでも、えー、なお、身に危険が及んだ場合には、身近なものを使って撃退することになります」

しかし。

よくよく彼らの様子を観察してみると、どうも今日に限っては昨日までと雰囲気が異なっている。

少々騒がしい。といっても授業に支障が出るほど騒いでいるというわけではなく、そこかしこで何やらひそひそ話が聞こえてくる程度のものだが、明らかに前日までより私語が多い。

今日から始まるという実技演習にワクワクしているのかと思えば、どうやらそんな風でもなく、

「……ねぇ……かしら、あの……」

「たぶん……の……じゃない……？」

「……にしても……すごい……」

「いったい……と……だろ……」

そんな彼らの視線が向けられている先は、もちろん教壇に立つティース――いや。

さらによくよく観察してみると、若干ではあるが違う。いかにも興味津々といった生徒たちの視線が注がれているのは、彼ではなかった。

「というわけで、昨日も言ったとおり今日は実際にやってみることにしましょう」

生徒たちの間にざわめきが走る。その視線が向けられた先はティースの右斜め後ろ、約六十センチの場所。

昨日、一昨日と誰もいなかったはずのその場所に、今日は人が立っていた。それだけで“何のために？”という興味が沸き上がって当然のことと思うが、生徒たちが注目したのはそれだけが理由ではない。

そこに立っている人物が、否応なしに一目を引く外見をしていたからだ。

「えっと……それじゃあその前に、今日からの実技演習を手伝ってくれる人を紹介します」

ティースの言葉に従い、柔らかい歩調で一歩前に踏み出した女性。聖女を思わせる飾り気のない淡色の衣装、そのイメージをまったく損なうことのない容姿、長い黒髪、淑やかな物腰。

そしてなにより――その身長。

女性がゆっくりと口を開く。

「――リィナ＝クライストです」

生徒たちの間には再びざわめきが波のように走った。

あくまで柔らかく、優しげな声。イメージ通りとも言えるし、その長身からすれば思った以上に可愛らしいと言うこともできるだろう。

リィナはゆっくりと生徒を見回し、そのうちの一点で止まった。

「……」

そこにいた顔見知りの美少女と一瞬だけ視線を交わし、頬に微かな笑みを刻んで再び動き出す。

そして彼女――その容貌に似合わず、おそらくこの場所にいるどの男子生徒よりも長身であろう彼女は続けて口を開いた。

「みなさん、どうぞよろしくお願いします」

そこに聖女の微笑みを浮かべ。

反応を見る限り、それだけで彼女は生徒たちの心を捕らえてしまったようだった。

「では、男性と女性に分かれてください。基本的に女性の指導は彼女にやってもらいますので、わからないことがあれば彼女に聞くようにお願いします」

これが彼が用意した女性アレルギー対策（というほどに大袈裟なものではないが）である。リィナには事前に今日の授業内容を教えてあり、指導の仕方も含めて準備はバッチリ。もちろん彼女に正当な護身術の知識などはないが、ここで教える内容はごくごく簡単な初歩の護身術だ。彼女が素人であっても数回の練習でそれなりにはこなせるようになるのである。

生徒たちが二手に分かれていくのを満足げに眺めながら、ティースはそっとリィナに耳打ちした。

「リィナ。悪いな、無茶なお願いしちまって」

だが、リィナはニッコリと微笑むと、

「いいえ。私はティース様のためでしたら、どんなことでも」

ティースはちょっと慌てた顔で、

「ど、どんなことでもって……そんな大袈裟な……」

「大袈裟ではありません。ティース様は、色のない私の生に新たな命を吹き込んでくれた、いわば命の恩人のようなものですから」

「あ、あはは……」

あまりにストレートなリィナの物言いにティースが照れて頭を掻いていると、

「……先生。皆、準備終わってますけど」

「え！？」

声に慌てて視線を向けると、すでに二手に分かれた生徒たちが何とも不審そうな顔で二人を見つめていた。……確かに。リィナとヒソヒソ言葉を交わしながら照れて頭を掻くティースの姿は、生徒たちの目にはなんとも怪しげに映ったに違いない。

（ま、まずいまずい！）

生徒を見回すと、その中の一つと視線がぶつかった。

（す、すまん、シーラ……）

警告してくれたのはどうやら彼女のようだ。ティースは一瞬視線を合わせた後に心の中で感謝の言葉を呟いて授業を再開した。

授業の最初は相手に体の一部を掴まれたときの対処法、手を掴まれたときや背後から急に羽交い締めにされたときの対処など。最終的に相手を倒すための術ではなく、いかに相手を振り払い、逃げ延びるかに重点を置いた内容である。

男子生徒に対し、実演を交えながら授業を進めていくティース。時折リィナの様子を窺ってみるも、授業と離れた質問をいくつかぶつけられている以外は特に問題なさそうだ。

やや常識的にズレたところのある彼女であるから、まったく不安がないというわけでもなかったのだが、その辺についてはティースは楽観視していた。

（それに、なにかあればきっとシーラが助けてくれるさ……）

彼女が自分以外のリィナやエルレーンに対して優しいことはすでに実証済みだ。まぁ、最初からそこまで計算に入れていたわけではないのだが……

と。

「すみません！」

突如室内に響いた大声にティースはビックリして飛び上がる。振り返ってみると、ちょうど一人の男子生徒が室内に飛び込んできたところが目に入った。

「え？　あ、ええっと……」

そういえば、と、今日、男子生徒が一人少なかったことを思い出す。

生徒の名簿に視線を落とす。

「えっと、オーウェンくん……か」

そう呟きながら反射的にシーラの方を見てしまい、睨み付けられ慌てて視線をオーウェンへと戻したティース。

オーウェンは額に汗を浮かべながら、

「すみません……遅れてしまって……」

息が切れて苦しそうなところを見るとかなり急いでやってきたようだが、授業開始からはすでに十分が経過している。うっかりして、というよりは、何か事情があって遅れたと見るべきだろうか。

（昼寝でもして寝過ごしたのかな……）

などと、シーラに聞かれたら“お前じゃあるまいし”とか言われそうなことを考えながら、

「あ、いや、今始まったところだから大丈夫だよ。でも、次からは気をつけて」

「はい、すみません」

恐縮しながら二度、三度と頭を下げるオーウェン。見る限り本当に反省している様子で、これならきつく言う必要もないだろうと判断する。まあ、このティースという男の場合、その辺のボーダーはかなり高めに設定されているに違いないのだが。

「ちょっとオーウェン、どうしたのよ」

「あ、ああ、ちょっとね……」

女生徒と二言、三言、言葉を交わし、男子生徒の輪の中に入っていくオーウェン。シーラとは言葉を交わさなかったようだ。

（……付き合ってるんだよなぁ、あの二人）

とはいえ、あの彼女のことだ、普段からベタベタされるのは嫌いなのかもしれないし、あるいは今回の自分のように色々と注文を付けてたりするのかもしれない、と、ティースは色々なことを想像しながら、

（昨日の様子だと、どっちかといえばオーウェンくんの方が熱を上げているみたいだし……シーラの方から、ってのはなんとなく考えにくいもんなぁ）

そう考えて何故だかホッとしてしまうのであった。

「あ、あれ、えっと、こっちからこう掴んで――」

「違う違う。そうじゃなくてこっちから、こう――あれ？　違った？」

授業は比較的スムーズに進んでいる。

このサンタニアは他の学園に比べ一般市民層の学徒が多い、というのはこれまでに何度も述べてきたことであるが、そうは言ってもそのほとんどがそれなりに安定した収入を持つ家庭の子供たちであり、こういった格闘術に触れたことのない者がほとんどだ。

授業も終盤に差し掛かり、現在、生徒たちが練習しているのは、簡単な打撃と手首や肩の関節技だ。これも相手を倒すためというよりは一時的に相手の行動力を奪い、上手く逃げおおせるための技である。

それはごくごく簡易なもの。

だが、生徒たちはそれなりに戸惑い、苦戦しているようだった。

そんな中、

「え……うわぁ！」

「ほら、こうやると簡単に振りほどけるんだ」

「……へぇぇ、なるほどなぁ」

「おーい、オーウェン。こっちもちょっと教えてくれー」

男子生徒八名の中、一人手慣れた手付きで練習相手を務めるオーウェンはもともと心得があるのか、あるいはよほどに筋がいいのか。遅れてきたハンデなど微塵も感じさせず、いつの間にか講師役であるティース以上にリーダーシップを発揮しているようだ。

シーラのことは別にして、人間的にオーウェンにどことなく好感を抱いているティースとしては、なんとも喜ばしいことであった。

そんな彼の活躍をひとしきり眺めた後、今度は女生徒の集団の方へ視線を移す。

そこでは、どうやらこういったものが苦手らしいディアナとリィナが会話に花を咲かせていた。

「ええーーーッ！　リィナさんって私と同い年なんですかぁぁーー！？」

「見えませんか？」

ディアナの驚きの声に不思議そうな顔のリィナだが、確かに彼女は背の高さや落ち着いた立ち居振る舞いから実年齢よりも大人びて

見える。対するディアナが実年齢よりも若干幼く見えるからなおさらだ。

「ぜんっぜん！　二十代前半ぐらいだと思ってました！　……いいなぁ、あたしもリィナさんみたいにスラッと背が高ければもうちょっと大人びて見えるのになぁ」

「いえ……私は少し大きすぎるので、逆にディアナさんが羨ましいです。背が小さい方が女性らしいとよく耳にしますから」

「そんなことないですって！　そりゃぁ“デカイ！”って感じだったらちょっとアレですけど、リィナさんは背大きくても可憐で可愛らしいですもん！」

「可愛らしい……ですか？」

リィナは意外そうな顔で少し考えて、それからニッコリ微笑むと、

「あまり言われたことないですけど……嬉しいものですね。ありがとうございます、ディアナさん」

「いえいえ。ってゆーか、あまり言われたことないってのが不思議だなぁ。誰がどう見たってリィナさん可愛いのに」

確かにそれはそうだ、と、ティースは妙に仲よさげな二人を眺めながら一つ、二つと頷いて、さらに視線を横へと移動させる。

「そうじゃないわ。ここでこう、相手の右足を思いっきり踏みつけたまま、こっちの右手を回して相手の手首を掴むのよ。そこから両腕の力で思いっきりこっちにひねる。……簡単でしょう？　てこの原理で簡単に相手の腕が折れるわ」

こっちではディアナや他の生徒で手の塞がっているリィナをサポートするかのように、シーラが他の女生徒たちにやり方を実演して見せていた。

（あれ。結構馴染んでるじゃないか）

ティースは昨日、他の女生徒とのトラブルを目の当たりにしたことで、彼女の学園での立場に一抹の不安を感じていたものだが、この様子を見ると険悪なのはどうやら一部の生徒だけらしい。

ホッと胸をなで下ろす。

「大事なのは躊躇わないこと。腕力では男に絶対に敵わないのだから、相手が油断しているうちに確実に機能を奪っておかないとダメよ。殺す気でやりなさい」

（……でもシーラ。俺、そんなことまで教えてないぞ……）

彼女の護身術講座はティースのものより何倍も過激であった。

と、そんな感じで、一見波乱含みかと思われた実技演習初日は和気藹々とした雰囲気の中で何の問題もなく進んでいった。途中、女生徒の一人が失敗して思いっきり尻餅をついたり、悪乗りした男子生徒同士の間で一瞬喧嘩になりそうな場面もあったが、結果的には大きな怪我も騒動もなく。

拍子抜けするほど平穏無事。

――しかしながら。

「では、今日の講義はここまでにします」

平穏無事であったのはあくまでこの講義、この建物内部での話。

――波乱を告げる大騒動はこのとき、建物の外ですでに起こっていたのだ。

「えっと、明日……は休みですので明後日からは今日練習した技にさらに応用を加えたものを――」

言いかけたティースは建物の外が騒がしいことに気付いて言葉を止めた。

「……なんだぁ？」

「え、なにかしら？」

生徒たちが訝しげな声を発する。

外から聞こえてきたのは慌ただしい喧噪。扉を閉め切っている建物内部でさえ明らかにわかるほどの喧噪。しかも騒ぎは徐々に大きくなりつつあって、ただ事でないらしいことは誰でもすぐに察することができただろう。

「……」

シーラがそっと視線をティースに向ける。

（……言われなくてもわかってるよ）

と、小さく頷いて、
「みんな、静かに。僕が様子を見てくるからここから動かないで」
そう言って出口へと足を向ける。
が。
「！」
彼が外に出て行くより早く、扉が向こうから開いてそこから一人の男子生徒が飛び込んできた。
ティースには見覚えのない男子生徒だ。
「オーウェン！」
入ってきた男子生徒は飛び込んでくるなり室内を見回してオーウェンの名を呼んだ。
室内がさらに騒然とする。
「……どうしたんだ？」
どうやら顔見知りらしい、オーウェンが立ち上がってそう問いかける。
男子生徒は彼の姿を見つけるなり歩み寄っていくと、青ざめた形相と震える声で、
「大変だ！　アリエルが……アリエルが……！」
「アリエル？　……あいつが、どうかしたのか？」
その形相からただ事でないことを悟ったのだろう。オーウェンの言葉は微かに焦りの色を帯び、それを周りで見つめる生徒たちも固唾を呑んで見守っている。
「……」
ティースは外へ視線を向けた。
騒ぎはさらに大きく。微かに悲鳴のような叫び声も混じっていて。
肌にピリピリと響くその空気。
ティースはその空気を何度も感じたことがあった。
（まさか……）
それは紛れもない“死の空気”だ。
「中庭で……中庭で倒れてて……」

その男子生徒は彼女とどのような間柄だったのか。ティースにはそれを知る術はなかったが、その後に続いた声は悲痛な重みを持っていた。

「呼吸してないって……なんか死んでるみたいだって――」

「！！」

ダン！

「あ、オーウェン！！」

言葉を最後まで聞くことなく、オーウェンは血相を変えて飛び出していった。

ティースもまた、すぐに行動する。

「っ……リィナ！　ここを頼む！　生徒たちは指示があるまで外に出さないようにしてくれ！」

そう言って即座に外に飛び出した。

「は、はい！　……って、あ！　シーラ様ッ！！」

「シーラ！？」

後を追いかけてきたシーラに驚いたティースだったが、結局は制止することもなく。……こういうときの彼女に何を言っても無駄なことはよくわかっているのだ。

無言の彼女は何を思うのか、厳しいその表情からは何を伺い知ることもできず。

平穏無事かと思われた講師生活三日目は、最悪の形で波乱の幕を開けることになったのだった。

その3『禁断の薬』

翌日のミューティレイク家。

「――以上が、サンタニア学園内で女生徒が突然死した事の顛末です」

「ご苦労様でした、ミリィさん。何かありましたら随時報告をお願い致します」

「畏まりました。お嬢様」

一分の隙もない礼をして部屋を出ていくのは、眼鏡を掛けたこの家の侍女長ミリセント＝ローヴァーズ。そして彼女を見送ったのは言わずとしれたディバーナ・ロウの総帥であり、このミューティレイク家の当主でもあるファナ＝ミューティレイクだ。

昨日、学園で一人の少女が突然死した事件は、サンタニアを含むネービス学園群の大半を管理する彼女の耳にも当然届いていた。

「……」

ミリセントが出ていった後、ファナは十秒ほど目を閉じて学園内で命を落とした少女の冥福を祈った。それからゆっくり目を開くと、その視線を横に移動させて、

「リディアさん。申し訳ありませんが、ティースさんをここに呼んでいただけないでしょうか？」

「ん？」

視線の先にいた執事の少女、リディア＝シュナイダーはその言葉に顔をあげた。机の上にはどっさりと書類の山が積まれていたが、彼女は平気な顔でそれらをてきぱきと捌きながら、

「ティースさんなら出掛けたみたいだよ。たぶん、今の話の関係じゃないかなぁ」

「あら、まぁ。そうでしたか」

いつものようにのんびりとした口調ではあったが、リディアはそんな彼女に問いかける。

「何か気になることでもあるの？」
「ただ、現場に近かったティースさんのお話も伺ってみたいと思っただけですわ」
「ふーん」
リディアは手にしたペンを指先でクルクルと弄びながら、
「人が死んでるわけだから気持ちもわからないわけじゃないけど、そんなことまでいちいち気にかけてちゃ体がもたないよ。ただでさえタナトスだとか何だとか、魔の活動が活発化してるせいで最近あんま寝てないんだし……それにほら、学園の方でも最近例の噂話とか……あ、そっか。それでか」
リディアは自動的にファナの言葉の真意を理解した。
クルクルとペンの動きが速さを増す。
「でもどうかなぁ。例のヤツが関わってるとしても、今回みたく死んだりはしないはずだよ」
「ええ、存じております。ですが、それに関わる何らかのトラブルがあったという可能性も考えられますわ」
ピタッとペンの回転が止まった。
「殺されたってこと？　まぁあっちの方でもその可能性を捨てきってはいないみたいだけど……でも医者は病死だって言ってるんでしょ？」
「リディアさんはどう思われます？」
「その死んだ子が関わってた疑いがあるなら、調べる価値はあるかもしんない」
ファナはゆっくりと頷いた。
「やはり、ティースさんにご意見を伺ってみることにしましょう」

ここネービス領における“信仰”はごくごく大雑把に二つに分けることができる。この地方に古くから根付きネービスの守護剣神を

奉るミーカール教と、大陸全土に広がり、この大陸におけるスタンダードとでも言うべきクライン教の二つがそれだ。

どちらも単一神教であり、節制と自戒を説く辺りはよく似た宗教であるが、クライン教の方があらゆる面で寛容であり、ネービスの国教ともいうべきミーカール教の方はより秩序を重んじ、罪に対して厳格な立場をとっている。また、恩に報いることを強く説いているのもミーカール教の特徴といえよう。

また、死者の行く末についても少々主張が異なっている。死後、時を経て再び人に生まれ変わるために現世で徳を積むのだというクライン教に対し、ミーカール教には生まれ変わりという考え方がなく、現世で信仰篤かった者は死後の世界でミーカール神の元、永遠の命を得ることになっている。

古くはミーカール教しか存在しなかったネービスであるが、暦が大陸歴と変わって三百二十年、大陸各地との交流が活発になり、また学園都市として他領から多くの人間がやってくるようになって、今はおおよそ三割弱の住民が大陸のスタンダードであるクライン教を信仰するようになっている。幸い、どちらの宗教も他の神の存在に寛容であり、またネービス自体が異文化を受け入れることで成長してきた背景もあるため、宗教間での争い事はほとんどなかった。

さて、そんなネービス領ネービスの街にあるミーカール教の教会。どんよりと曇った青空。――と、そんな奇妙な表現がその場には相応しいのかもしれない。どんなに晴れやかな日差しであろうと、どれほどに心地よい涼風であろうとも、愛する者の死に流した涙を乾かすまでには至らないのだから。

嗚咽。

吹き抜ける、重苦しい沈黙の風。

昨日、サンタニア学園で倒れたアリエル＝リンプシャーは、結局そのまま帰らぬ人となった。一時は騒然となった学園も、彼女の死因がどうやら突然の心臓発作だったらしいことが判明した後、一部を除いてすぐに日常へと戻っていった。

そしてその翌日、つまり今日。

（天の神の御許へ、か）

朝早く、ミーカール教会の火葬場の前には百人近くの人々が集まっていた。彼女の家族、友人、彼女の家で働く使用人たち……今、ティースはそんな人々を後ろから眺める位置に立っていた。

視線は少し上に。建物からたち上る煙が風に運ばれていく。

火葬はネービスの国教であるミーカール教特有のもので、大陸全土に広がるクライン教は土葬だし、他の宗教もやはり土葬が圧倒的に多い。ティースの故郷は九割九分がクライン教を信仰しているため火葬場なるものは一つもなく、彼が火葬というものを初めて見たのはここネービスにやってきてからのことだ。他宗派の信者には遺体を燃やすという行為に眉をひそめる者が多いのだが、ティース自身はこの、炎で身を清め、煙となって天に昇っていくという考えには納得できるものがあった。

（でも、いくらなんでも早すぎるよ……）

空から視線を下ろすと、死んだアリエルの母親だろうか、三十代半ばの女性が堪えきれずその場に泣き崩れるところだった。寄り添う父親らしき紳士は五十歳ぐらいだろう、そのすぐそばには同じ顔をした双子らしき二十代後半の男性二人――これは兄か――が神妙な面もちで立っている。

その誰もが予想だにしていなかったのだろう。まだ十七歳の娘が、妹が、唐突にこの世を去ってしまうなどとは。

と。

「……先生？」

「え？」

唐突に呼びかけられて振り返ると、そこには見知った顔の男子生徒、オーウェン＝トレビックがいた。学校で見るものよりもさらに落ち着いた質素な服装。死人を見送るときに派手な格好をしないのはミーカール教もクライン教も同じだ。

「オーウェンくん？　どうしてここに？」

「先生こそ」
周りの人々と同じく少々疲れた面もちのオーウェンは、ティースの前で少し無理したように微笑んでみせた。
「俺はアリエルと昔馴染みでしたから。父が美術商で、ちょくちょく彼女の家に出入りしていたもので。ちょうど今日は学園も休みですし」
「ああ……そうだったのか」
そういえば以前そんなような話をしていたな、と、ティースは思い出した。
そして問いかける。
「前に一度会ったときは元気そうに見えたけど、彼女、心臓悪かったんだ？」
「いえ……どうなんでしょう。少なくとも俺はそういう話を聞いたことありませんでしたけど、最近は昔ほど話をしなくなってたし……それに先生も前に見ましたよね。アリエルはシーラさん――えっと、先生の授業を受けているシーラ＝スノーフォールですけど――」
「あ、ああ、もちろん知ってるよ」
「彼女と仲が悪かったんです。だから俺とも自然と疎遠になって……でもたまに会うときは元気だったし、昨日の昼も少し話をしましたけど、とてもどこか悪いようには見えませんでした」
「……」
ティースはオーウェンの視線を追って火葬場の上空を見上げた。集まった人々は火葬場を囲むようにして、死者を弔う祭司の言葉に耳を傾けている。
「だから、彼女が死んだって聞かされたとき、もしかしたら“クゥエルダ”のせいかと思ったぐらいです」
「……クゥエルダ？」
「知りませんか？」
オーウェンが視線をティースに戻した。
「最近、ネービスの一部の学生の中で広まってるって噂の麻薬のこ

とです」
「麻薬？」
声をひそめたのは、その話題がこの場に相応しくないと考えたからだ。幸いにして、集団から少し離れた後方の彼らに注目している者は一人もいない。
「麻薬って……その薬を彼女が服用していたってこと？」
「いえ、まさか！」
オーウェンはすぐにそれを否定して、
「ただ、ちょうどそういう噂が聞こえてきたのが最近だったもので、ふと頭を過ぎったんです。……そうでもしなきゃ説明がつかないぐらい唐突でした」
「……」
「あ、じゃあ俺はそろそろ……」
どこか淡々として見えるのはまだ悲しみよりも戸惑いの方が大きい故か。彼自身がそう言ったように、彼女の死は本当に突然だったのだろう、と、ティースは参列者の輪に戻っていくオーウェンを見送りながらそう思った。
（せめて安らかに眠ってくれよ）
最後にもう一度少女の冥福を祈り、ティースはその場を離れる。
（しかしクゥエルダ、か。あの学園でそんなものが……？）
まさか、という思いだったが、オーウェンの口調からするとそれは単なるデマやうわさ話で済む程度のものではなさそうだった。
（シーラにでも聞いてみるか）
と。
「……先生？」
「え？」
教会を出たところで、ティースはまたもや予期せぬ人物と出くわした。
「先生も来てたんですね」
学園内でいつもシーラと一緒にいる少女、ディアナ＝リーだった。

喪服ではない。が、その口調からするとただ通りがかっただけというわけでもなさそうだ。
「ディアナさん？　君――」
ティースは彼女とアリエルとのいがみ合いを何度か目撃しているだけに意外に思って言葉を投げかけると、ディアナは彼女らしくないというべきか、どこか憂いを含んだ眼差しで答えて、
「別に来ようと思ってたわけじゃないんですけど、オーウェンの姿がチラッと見えたものだから、ああ、ここがそうなんだと思って」
「中には、入らないのかい？」
「嫌いでしたから、あの子のこと。向こうも同じでしょうし。でも」
ポツリ、と、ディアナは言った。
「今にして思えば、死ななきゃなんないほど悪い子じゃなかったな……」
神妙な言葉だった。
ティースは小さく頷いて、
「死ななきゃならない人間なんて、そういないよ」
「……ですよね」
そう言って中空を見上げるディアナ。
（……そうだよ。いくら仲が悪くたって、人が死ねば胸が痛むんだ……）
空に昇っていく煙を見つめる彼女の瞳には、紛れもない哀悼の色が浮かんで見えた。
そんな彼女に、ティースはもう一度言った。
「中に、入ったらどうかな？」
「え？」
驚いたようなディアナ。
「死んだ人が何を考えるかなんてわからないけど、でも僕だったら自分を偲んでくれることが一番嬉しいと思う。……今の君だったらアリエルさんも迷惑だなんて思わないんじゃないかな？」
「……」

ディアナはしばらくティースを見つめ、それから考える顔をした。
が、やがて、
「先生？」
「うん？」
「今日はこれから暇ですか？」
「？　とりあえず時間はあるけれど――？」
一体なにを、と、ティースがそう尋ねる前にディアナは言った。
「じゃあ今から私とデートしましょ。ね、そうしましょう！」
「……へ？」
あまりに突拍子もない申し出にティースは目をパチクリさせたのだった。

午前十一時、シーラは自室で客を待っていた。
（心臓発作、か）
細く白い陶磁器のような彼女の指先が、窓際に飾られた紫色のつぼみをそっと撫でる。
テーブルの上には小さな薬袋。物が多いにも関わらずきっちりと整頓された部屋からは聡明さと勤勉さの気配が香り立つ。
学園の人間の一人でもこの部屋に招待したならば、彼女という人間への評価が少なからず変わるのではないかと思われたが、残念なことに彼女は学園の人間を一度たりとも――同じくこの屋敷から学園に通うセシリアという少女を除いて――招待したことがない。
それは以前住んでいた借家でも同様だった。
コン、コン。
「シーラ様、お客様をお連れしました」
ノックの音に視線を移動させると、知った顔の従僕と彼に案内された一人の女性が部屋に入ってくる。
待っていた客人だった。

「あ～らら。相変わらず難しそうな顔してんのねぇ」
女性はシーラの顔を見るなりそう言った。年の頃は二十歳をほんの少し過ぎた程度、ほんの少し下がり気味の目尻と色香に溢れたいかにも男好きのしそうな、シーラとはまったく正反対なタイプの女性だった。
「何か悩み事でもあるのかしら？　でも残念。あなたの相談には乗ってあ・げ・な・い」
シーラは微かに眉をひそめて女性を一瞥すると、すぐその後ろに視線を向けて、
「ご苦労様、マグナス」
「はい。では……」
シーラに対し一礼して、退室しようとして、マグナスは自分が連れてきた女性をチラッと見る。
「ん？　なに？」
「あ、い、いえ。どうぞごゆっくり」
慌てて視線を逸らしたマグナスは、そそくさと部屋を出ていった。
すると女性はそれを可笑しそうに見送りながら、
「あの子、あたしの太股がやけに気になってたみたい」
「そうね、マーセル。この屋敷であなたほど短いスカートを履く人間はあまりいないわ」
シーラの言葉には冷たい皮肉があからさまに乗っかっていたが、女性は気にした様子もなかった。
その女性――マーセル＝バレットは二ヶ月ほど前、とある事件でティースやシーラと知り合った人物だ。元々はネービス領の南東にあるベルンという街の富豪の娘で、心臓の病のため二ヶ月前までロマニーという温泉町で療養していたが、シーラたちと出会った後にネービスに移り住んでいた。
「あたしの父は典型的な成金だから、あたしもそんなお上品な教育は受けてないのよ。それに女ってのは男の視線を集めてナンボでしょ？」

言いながらソファに腰を下ろしたマーセルはこれ見よがしに足を組んでみせる。
「ティースくんは元気？」
「生きてはいるわね。……そんなことよりあなたの調子は？」
「悪くないわ。悔しいけれどあなたのおかげでね。これ、前回もらった薬よ。使わなかった分」
「そう」
マーセルの差し出した手の平サイズの薬袋を受け取ると、代わりにテーブルに置いてあった薬袋を彼女に手渡した。
「いつも通り三回分。それと――」
「使用期限、使用量、使用のタイミングを決して間違えないこと、でしょ？」
「ええ」
頷いたシーラはマーセルから受け取った古い薬をビーカーの少量の水に溶かし、植木鉢の中に流し込んだ。
シーラがマーセルに処方しているその薬は一般には市販されていない。いや、それどころか著名な薬師ですらも調合法を知らないであろう特殊な薬で、マーセルがここに移り住んだのもそのためである。
「どんな薬にも必ず致死量があるわ。特にその薬は――」
言葉を切って、シーラは微かに視線を泳がせた。
「……マーセル。その薬、どんな味がする？」
「味？　変なこと聞くのね」
不思議そうな顔をしながらもマーセルは指を口元に当て、少し天井を見上げるようにして考える。
「まぁとにかく苦いわねぇ。使うときは味なんて気にしてらんないときが多いけど」
「そう。……そうよね」
マーセルの感想にシーラは頷いた。
実のところ、その薬がとてつもなく苦いものであることは知って

いた。マーセルに飲ませる前に自分で試したことがあるからだ。
そのときのことを思い出す。
全身から血の気が引き、平衡感覚を失い、心拍数は異常に速くなって、頭の中は真っ白に。血圧を操作するその薬は、健常な人間が服用すると当然に体調を崩してしまうのだ。
「マーセル。何度も言うけれど、その薬は決して他人に渡してはダメよ」
「ふふふ、わかってるって。よく知らないけど、真っ当な素性の薬じゃないんでしょ？　こんなの勝手に処方してたことがバレたら面倒なことになるのよね？」
「それもあるけれど。万一、何も知らない人間が口にすれば大変なことになるわ」
「わかってる」
マーセルは少し真顔になって頷いた。
「ネービスの守護神たるミーカールの名に誓って、あなたに迷惑をかけることは絶対にしない。いくら相容れない性格の生意気な小娘でも、命の恩人は命の恩人だもの」
シーラは無愛想に彼女を一瞥して答えた。
「私もあなたの価値観とは相容れないわね。きっと永遠に」
マーセルはクスクスと赤いルージュの唇を微かに歪ませると、ゆっくり足を組み替えた。
「ところで話は変わるけど……実はここに来る途中、街でティースくんらしき人を発見したの」
意味ありげに語りだしたマーセルに、シーラはまるで無関心な口調で、
「そう」
「それがねぇ。彼、実は女の子と一緒だったのよ」
「それで？」
「あら。あたしのときと比べてずいぶん淡泊な反応ね」
シーラは表情をピクリとも動かさずに彼女を一瞥して、

「本当かどうかもわからない話にいったい何を言えというの？　それにあのときは、ただ単にあなたのことが気に入らなかっただけのことだわ」
「じゃあ、興味ないのね？」
「興味ないわ」
即答する。
「じゃあ、あたしはちょっと興味本位で聞いてみていいかしら？」
マーセルは少し不思議そうに首を傾けた。
「ティースくんって、もしかして副業とかやってたりする？」
「？　どういうこと？」
マーセルは人差し指を口元にあて、思い出すようにしながら、
「だってその女の子が呼んでたのよ。確か、彼のこと“先生”って」
「……先生、ですって？」
喜ばしくないことに、シーラには心当たりがあった。

「ねぇ、先生。先生はどういう経緯でウチの学園に来ることになったんですか？」
「え？　あ、ええっと、知り合いのツテでね」
「知り合いってウチの学園の先生とか？」
「ん、あ、いや、まぁそんなとこかな……」
奇妙なことになった、と、ティースは少々困っていた。
気分転換に、という名目でお願いされ、結局断りきれずに付き合わされることになった。まぁその辺はこのティースという男の優しい（悪く言えば押しに弱い）性格に依るものだし、そのぐらいのことは特に問題ではないだろう。
しかし問題は、そこからディアナによる猛烈な質問責めが始まってしまったということだった。
何しろ彼女はシーラの友人である。うっかり余計なことでも喋っ

てしまえば後が恐ろしい……と、ティースが一歩も二歩も引き気味になってしまうのは致し方ないところで。

（参ったなぁ）

と、そんな困り果てた彼の心情とは裏腹に。休日の大通りは春らしい絶好の日和も手伝って盛況模様だった。平日の何倍もの露店が辺りに並び、少し先では大道芸人がちょっとした人垣を作っている。

「あ、すごいすごい。先生、見て、アレ」

「ん？」

ディアナが指し示したのはその大道芸人の一団である。

どうやら一輪車を使ったパフォーマンスのようだ。

（……一輪車、かぁ。懐かしいなぁ。アクアさんに練習させられたっけ）

結局まともに進むことすらできなかったことも、今となってはいい思い出だった。

立ち止まってしばし鑑賞の後、

「……あ、先生、ごめんなさい。あたし、お金ぜんぜん持ってきてなくて」

「ああ、いいよいいよ」

そう言って幾ばくかの鑑賞料を支払ったティースたちはその場を離れることにした。

「ところで先生？　先生はどこに住んでるんですか？」

それから再びディアナの質問責めが始まる。

「あー、えっと……東地区の十一ブロックだよ」

以前住んでいた借家の場所である。

「先生、独身ですよね？　家族とかは？」

「あー、えっと、故郷は田舎の方でね。名前を言ってもわからないぐらい小さな村なんだ」

「じゃあ――」

延々と続く質問にも少しずつ慣れてきて、どうにか大過なく答えていたティース。この調子なら問題なく乗り切れるかな……と、そ

れはそう思った矢先のことだった。
「ところで先生？」
「ん？」
「先生は、もしかしてシーラとお知り合いなんですか？」
「あー、えっと……えっ！？」
びっくりして立ち止まり、ディアナの顔を見つめる。と、同時に冷や汗が背中に浮かんだ。
（な、なんだ！？　なんか俺、マズイこと言ったっけ！？）
慌てて今までの会話を思い返してみるが、どう考えても心当たりがない。今日はシーラについての話題すら一つも出ていなかったのだから当然である。
もちろんティースは取り繕うと試みた。
「と、突然どうしたんだい？　そんな突拍子もない――」
だが、
「昨日のあの騒ぎのとき、先生、シーラのこと呼び捨ててたでしょ？」
平常を装おうとして見事に失敗しているティースに対し、ディアナは的確にそう指摘してきた。
「え」
記憶にない……が、言われてみればそうだったかもしれない。
（……ま、まずい）
もしそれが理由だとすれば完全に彼のミスである。シーラにバレたら何を言われるかわかったものではない。
「その前からもなーんか変だと思ってたんです。シーラってば先生がいるときに限っていつもしないような反応するんですよね。思い出してみると先生が初めて来たときも何か変だったし」
「そ、それは……」
（というか、この子、意外とよく見てるなぁ……）
と、ティースはやや感心してしまった。どちらかというと大雑把なタイプだと思っていたが、どうやら印象以上に聡明な少女のよう

だ。
「あー、えっと……」
さぁ、困った。
証拠などないのだからしらばっくれればいいだけの話なのだが、咄嗟にそうできない辺りが彼らしいというべきだろう。そもそも嘘をつくのが上手な男ではないのだ。
そのうちにディアナは自信をさらに深めたらしく、
「あ、無理しなくてもいいですよ。あの子がプライベートなことを隠そうとするのはいつものことですし……」
一瞬、その表情に淋しげな陰が浮かんだが、彼女はすぐにパッと顔を上げて、
「まぁ、とにかく深く追求はしません」
「……」
なんとも有り難い申し出だったが、バレてしまったことに変わりはないようである。
（やれやれ今日は小言を覚悟しなきゃならんかな……）
「えと、でも一つだけいいですか？」
「ん？」
ディアナは少し心配そうな顔で言った。
「シーラと先生って、恋人とか、実はとっくに夫婦とかじゃぁないんですよね？」
そんな彼女の突拍子もない質問に、ティースは思わず笑った。
「あはは、それは違うよ。というか、シーラにはちゃんと恋人がいるだろ？　君の方がよく知ってるじゃないか」
「んー、そうなんですけどー」
ディアナは何とも曖昧な顔をして、
「あの二人――っていうか主にシーラの方なんですけど、全然恋人らしくないんですよ」
「え、そうなのかい？」
「ええ、そうなんです。まぁシーラはああいう性格だし、どっちか

というとオーウェンの方が熱を上げてる感じだから仕方ないんですけど……それにしたって信じられます？　理由もなく触れたら絶交だって言うんですよ」

「え……触れたら絶交って、オーウェンくんがシーラに、ってこと？」

これにはティースも唖然とした。普段から男に対して厳しい発言のある彼女ではあったが、そこまで男嫌いという話は聞いたことがない。

それに、

「でもあいつ、休日とかよく恋人とデートだって出掛けてたけどなぁ……」

「デート？　まさかぁ。あたし、オーウェンが断られた話しか聞いたことないですよ。だから、なにかあるのかなぁと思ってたんです」

「そっか……」

（でも、だったらあいつ、誰とどこ行ってたんだ……？）

そんなことまで詮索すべきではないとは思うものの、やはり気にはなるのである。

「でもよかった」

「ん？　なにが？」

「だって」

そこはあるいは警戒して然るべき場面だったかもしれない。が、ただでさえ容量の少ない頭がシーラの行動に対する疑問でいっぱいになっていた今は、そんなところにまで気が回らなかった。

「先生はまだ独身で、シーラともそういう関係じゃないってことでしょ？」

「へ？」

弾んだ声と同時に左腕にグッと柔らかな重み。

「せっかくの機会だし、もっと先生のこと聞かせてください。ね、いいでしょ、先生？」

「……」

視線を左斜め下に向け。
ほぼ疑いようのないその（彼にとっては）暴挙を認識して。
――血液が突如、重力に従順になる。
「え！　せ、先生ッ！？」
そしてティースの意識は、アッという間に闇の中へと落ちていったのである。

「――つまり」
「……」
情状酌量の余地さえない凶悪事件の容疑者が、もはや疑う余地のない死刑判決を受けるときというのは、まさにこんな感じなのかもしれない、と、ティースは思った。
「あれだけ釘を刺したにも関わらず、よりにもよって私と一番親しい子に捕まって余計なことをペラペラ喋った挙げ句、デートだとかおだてられいい気になって良からぬ妄想をしている間に腕を取られて気絶した、と……そういうことなのね？」
「誤解だ！」
この期に及んでティースは悪あがきを試みた。いや、シーラの言葉も九割方は正解だと言えるだろう。が、
「俺はいい気になんてなってないし、良からぬ妄想なんてしちゃいない！」
そこだけははっきり主張しておきたいところであった。
「そう？　だったら、どうしてそんな簡単に腕を取られたのかしら？」
「そ、それは……」
勢いは一瞬だけだった。
まぁ、客観的に言えば完全に彼のミスだろう。ディアナの本心がどうであれデートという名目で誘われたのだし、ああして触れられ

る可能性も考慮してしかるべきだった。
「ちょっと、ボーっとしてて……」
本当のことをいうとシーラのことを考えていたわけだが、そんなことを言えば何を言われるかわかったものではない。
「そう。いつもどおり、お前らしいミスね」
「うっ……」
反論の余地はない。
なにしろ彼の失態は気絶しただけではない。あの後、偶然その場を通りかかったセシリアとアルファに屋敷まで運ばれて――それはまぁよかったのだが、あろうことかディアナが最後までついてきてしまい、ティースとの関係どころかシーラがこの屋敷に住んでいるということもバレてしまったのである。
これを致命的と言わずして何と言おうか。
「お前が学園に来てから今日で何日目だったかしら？」
天井に吊された灯りが、彼女の瞳の中でユラユラ揺れる。部屋の中に伸びた影には悪魔の尻尾が生えているようにティースには思えた。
「きょ、今日でまだ四日目……かな？」
「そう。私がディアナと初めて会ったのは三年以上前よ。三年以上、彼女が私の住む家を訪ねてくることはなかったわ」
「……すまん」
ここはとにかく平謝りするしかないティースであった。
「……まったく」
とはいえ、シーラの方もいまさらどうこう言っても仕方ないことはわかっている。
「お前のミスはともかく……どうしていきなりデートだなんて状況になるのかしら」
「い、言っとくけど、俺が誘ったとかそういうことはないからな」
今の雰囲気なら言いかねないと思ってティースが先に釘を刺すと、
「そんなことわかってるわ。だから余計すっきりしないのよ」

「はぁ」
ティースには全然意味がわからなかった。
しかしまぁ、とにかくこれ以上のお説教はなさそうだと判断して、
「じゃあ俺、そろそろ……この後、リディアに呼ばれてるんだ」
「リディアに？」
「ああ。たぶんファナさんの用事だと思うんだけど」
シーラは少し考え込んで、
「……昨日のアリエルのことかしら」
「え？　さ、さぁ、でもタイミングからするとそうかも――あ、そういや」
ティースは昼間のことを思い出して、
「シーラ。お前、クゥエルダって聞いたことあるか？」
「あるわ」
その言葉が出ることを予期していたかのような即答だった。
シーラはテーブルの上の辞典らしきものを左手でパラパラと無造作にめくっていくと、
「クゥエルダは服用することで一時的に強い開放感を得られる薬よ。おそらくお前が聞いたであろう学園での噂話も知ってるわ。――これよ」
「どれどれ……？」
身を乗り出してシーラの手元を覗くと、彼女の指し示した辞典のページにはクゥエルダという薬についての詳細が書かれていた。
「……比較的強い中毒性と、常用することで稀に幻覚などの症状を引き起こす場合があるため、大陸の八割強を占めるヴォルテスト条約加盟国では全面的に服用が禁止されて――こんなものがあの学園で、本当に？」
パタン、と、シーラが辞典を閉じる。
「あくまで噂話、ということよ。断定ならとっくに警邏隊が動いているはずでしょう」
「それもそうか……」

「ただ、噂話としてならファナだって把握してるはずだし、公的機関ではないけれどそれなりに調査にも動いているはずよ」
「じゃあ。もしかして、昨日のアリエルさんの死因って――」
「それはないわね」
シーラは即座に断言した。
「書いてあったでしょう？　クゥエルダという麻薬は確かに体に悪影響を及ぼす恐れがあるけれど、それが原因で心臓発作まで起こしたりすることはない。もちろん大量に摂取すれば死に至ることもあるだろうけれど、心臓発作とは似ても似つかない症状のはずよ」
「……ってことは、彼女はやっぱり病死ってことか」
独り言で呟いたティースに、シーラは言った。
「だと、いいわね」
「え？」
シーラは机の上に置いてあった小さな薬袋を片手に、ティースと真正面に向き合うと、
「今日、マーセルが来たのよ。この薬、覚えているわね？」
「マーセルさんの心臓の？」
「そうよ。この薬は血圧――簡単にいえば血の流れを調整して心臓の負担を和らげる効用があるのだけれど……」
さらさらさらと、彼女の細い手の平に薄紫色の粉末がこぼれ落ちる。彼女はそれをティースの眼前に差し出した。
「？」
思わず顔を近付けて匂いを嗅いでみると、いかにも薬草くさい香りがした。微かに芳しい花の香りが混じっていたのは、薬ではなく彼女の身につけた香水のものだろう。
ティースが顔をあげると、シーラは言葉を続けた。
「たとえばこの薬、この手の平の五倍の量を飲んだとしたらきっと死ぬわ。おそらく心臓発作のような症状で、ね」
「え？」
驚くティースを後目に、窓際の鉢にその粉末を流し込むシーラ。

「有害なものでなくとも、人体に何らかの作用をする以上、必ず致死量があるのよ。お前も知っての通りこれは医者も薬師も知らない薬。もしこの薬の誤使用で死んだとしたら、医者は心臓発作と診断するかもしれないわね」

「え、じゃあ誰かがその薬を――」

「早とちりしないで。この薬は苦みが強いしさっきお前が嗅いだような匂いもある。致死量を本人に気付かれないように飲ませるのは難しいわ。でも、そのように見せかける毒薬が他に存在していても不思議はないということよ」

ティースは少し考えた。

「……でも、医者や薬師でもわからない薬だったとしたらお手上げじゃないか」

シーラはチラリとティースを見て、

「仮に未解明の毒薬が使われたとしたら、それはそこいらの一般人に入手できるものじゃないわ。プロの殺し屋か、薬草学に造詣の深い人間の仕業。どちらにしても必ず理由があるはずだし辿っていくのは充分可能よ」

「理由……」

ティースの頭上にようやく閃きが灯った。

「クゥエルダ、か……」

「何とも言えないわね。確かに彼女の死は唐突だったけれど、自ら麻薬に関わるような子には思えないし、普段なら何の疑問もなく病死で処理されていたケースよ。ファナがお前に何か聞きたいというのも、たまたまクゥエルダの件と時期が重なったためでしょうね」

「……」

シーラの言うこともっともだ。

しかしもし。もし彼女の死が自然死ではなく、誰かの意志によるものであったなら。誰かの思惑によって理不尽に奪われたものだとしたら。

なんともいえない気持ちが胸にこみ上げる。晴天の下で泣き崩れ

る母親の姿が脳裏に映る。
もしそうだとしたら、その行為を許すわけにはいかない、と、そう思った。
「なぁ、シーラ。ちょっと頼みがあるんだけど……」
今日は失態を見せているだけに少々遠慮がちにティースはそう切り出した。
「なに？」
「俺、学園のこととか薬のこととかまだ全然わからないだろ？　だからお前の知恵を貸して欲しいんだ」
「調べるの？」
「ああ。……ダメかな？」
シーラは少し考えたが、すぐに、
「わかったわ。でも、学園でのルールは守ってもらうわよ。ディアナにバレてしまったことはともかく、他の子に絶対にバレないようにすること。それが条件よ」
「あ、ああ、それはもちろん。今度こそは気を付けるよ」
それは言われなくてもわかっていた。何よりティースの危惧が現実だったとすれば、身に危険が及ぶ可能性も考えなければならない。シーラとの関係については今まで以上に秘匿する必要がありそうだ。
「ディアナには私の方から釘を刺しておくわ。今日のことは絶対に他言無用だと、ね」
「……なぁ、シーラ」
そんな彼女に、ティースはふと疑問に思って尋ねてみた。
「お前が学園のみんなに自分のこと隠すのって……もしかして“追っ手”が来るかもしれないって考えてるからか？」
後半は少し声を潜めて。
シーラの肩がピクリと動き、続いて彼女は不可解そうな顔でティースを見つめた。
「なに、突然？」
「いや。ただ……今日、ディアナさんが少し淋しそうだったのを思

い出してさ。お前が自分のことは何にも話してくれないんだって言ってたから……」

「ディアナが？　そう……」

視線が斜め下に落ちる。微かな罪悪感のようなものがその表情に過ぎった。

（やっぱり、そうか……）

それはそうだろう。三年以上も付き合っている友人に必要以上の隠し事をすることが、いくらなんでも彼女の本意であるはずがない。

それを確認して、ティースは続ける。

「……なぁ。もうあれから三年も経つし、何もないのはたぶん向こうがお前を完全に見失った証拠じゃないかな。もうそこまで徹底しなくても――」

だが、シーラは硬い表情で首を横に振る。

「ダメよ。万が一何かあればファナにも迷惑がかかるわ」

「でも、そんなんじゃいつまで経ってもちゃんとした友達とか……恋人だって――」

言ってから、ティースはしまった、と思った。

シーラは探るような目でティースを見る。

「……ディアナにオーウェンのことを聞いたのね」

「え！　あ、いや……」

ティースは慌てて言い訳を探そうとしたが、すぐに不可能だと悟って、

「いや、その、ディアナさんがお前のことを心配してて……」

シーラは少し考えるように視線を泳がせて、

「じゃあ、お前から聞いたわけではないの？」

「あ、ああ。それはもちろん」

責任転嫁するようで少々気は引けたが事実である。オーウェンとの関係が気になっていたことも確かだが、そんな余計なことは言わない方が吉だろう。

「そう」

シーラは自分の眼前に右手の爪先を広げ、何事か考えながら、
「そうね、お前に詮索されるようなことではないわ。……それに心配しなくとも平気よ。私に群がってくる男なんて自分から探さなくてもごまんといるもの」
僅かに口元を歪めた彼女に対し、ティースはかろうじて反論して、
「お、お前なぁ……そういうのは友達とか恋人とかって言わないんだぞ？」
シーラは彼を一瞥し、どこか挑発的な口調で答えた。
「だったらどうするの？　お前がそういう連中を追い払ってくれる？」
「……そりゃ、必要があるなら――」
「今の私には必要ないわ。だったら問題ないでしょう」
そこでようやくティースは彼女の口調が徐々に冷たさを増していることに気付いたが、そのときはすでに遅かった。
「話は終わりよ。そろそろ出て行って」
きっぱりそう言い放って机に向かったシーラは、二度とティースの方を振り返ろうとしなかった。
「あ、ああ……」
ティースはゆっくりと立ち上がる。
一時期よりいくらかマシになったとはいえ――こうなってはもう、取り付く島もなかった。
パタン。
後ろ手にドアを閉じる。
ため息。
天井を見上げる。
（群がってくる男なんて……か。だから俺にも冷たくなったのかな……）
昼間にディアナから聞いた話と合わせ、ティースはそんなことを考えて深く嘆息するのだった。

翌日、何事もなく過ぎた放課後のこと。
「わかってるって。昨日のことは絶対に他言しない。約束するわ」
昨日とは打って変わってどんよりと曇ったどす黒い灰色の空。まだ太陽が空にある時間帯にも関わらず辺りは薄暗く、いつ雨が降り出してもおかしくない空模様だった。
実際、街の通りも人通りは少なく静まり返っていて、シーラの視界に入るのは同じように北の学園群から下校する学徒たち数人だけだ。
「でも、昨日のって確かミューティレイクのお屋敷よねぇ。あんな超豪華な屋敷に住んでるなんて、ますますあんたってミステリアスガールだわ」
と、ディアナは昨日の出来事を少々興奮気味に語ったが、対するシーラはあくまで淡々と答えて、
「単なる居候。私自身はただの一般人よ」
「ふーん。まぁ、あんたの場合、嘘でもホントでもそう言いそうだけど。……そうそう。そういえばシーラ、あんた聞いた？」
「なに？」
「シェーマス先生が今月から戻ってきてるんだって」
「シェーマス先生？　……ああ、シェーマス＝フランシスね」
二回生の頃、薬草学を教えていた若い講師の顔を思い出してシーラは興味なさそうに呟いた。
ディアナはちょっと意地の悪い笑みを浮かべて、
「大丈夫よ。今度はあの先生も学習して、きっとあんたには触れないようにするだろうからさ。……おっと。それじゃあたしはこっちだから」
「……あ、ディアナ」
「ん？」
珍しく呼び止められたディアナは不思議そうな顔でシーラを振り

返った。
「そういえば聞きそびれたけれど、あなた、昨日のことはどういうつもりなの？」
「へ？　あ、ああ、昨日のってティース先生のこと？」
ディアナはあっけらかんとした口調で、
「いやぁ、どういうつもりってほどのこともないんだけど、どんな人なのかちょっと興味があっただけ。試しに誘っても危険はなさそうだったし」
（……確かに。あいつほど安全な男もいないわね）
と、シーラは思った。
それはそうだ。触れようとすれば自ら失神してしまうのだから。
……もちろん、誘った時点ではそんなことは知らなかったはずだが。
「それに、ちょっと話してみたら想像通りの人で。あの人ってホント、正直が服着て歩いているみたいな人なのね」
「悪知恵に回す頭がないだけよ」
相変わらずシーラの批評は辛辣である。
ディアナは笑って、
「そうかもしんないけどね。でもだからこそ、たまに馬鹿正直な言葉が心に響いちゃったりするんじゃない？」
「どうかしら」
視線を流して、
「まぁ、いいわ。ちょっと確認したかっただけだから」
そんなシーラに対し、ディアナはちょっと冗談交じりの口調で、
「もしあたしが本気になったら協力してよね、シーラ」
「……それは無理よ」
「え？　どうして？」
シーラは小さなため息とともに答えた。
「他に……応援したい子がいるの」
「え。あー、そっかぁ。あの先生、ああ見えてモテるのかぁ」
「……」

それは誤解だとシーラは思ったが、敢えてなにも言わなかった。
ディアナの方もそれ以上は追求することもなく。
「じゃー、また明日ー」
「ええ。気を付けて」
ディアナと別れ、シーラは歩き出した。
（……嫌な天気だわ）
ミステリアスと評される仮面の下で、シーラは普通の人々と同じように憂鬱を小さなため息に変えて吐き出した。
雨が降りそうだからと、今朝、屋敷の者は彼女に馬車の使用を薦めたが、彼女はいつものようにそれを断った。庶民の登竜門であるサンタニアにも馬車を使う学徒は多いが、個人所有の馬車で送迎される者は一握りだ。プライベートを詮索されるような行動は極力避けるようにしていた。
――が、この日に限っていえば、素直に馬車を使った方が正解だったかもしれない。
（あら。あの店、新しくできるのね……）
あまり目立たない通りに建築中の建物を見て、シーラは少し口元を緩めた。近場だし、もし洋服店なら今度覗いてみよう、と、そんなことを考えながら歩みを進めていく。
彼女の出で立ちは紺を基調にした長袖の服と膝ぐらいの長さの深緑色のタイトスカート、茶色のブーツ。衣服の部分部分に刺繍が入っているところに彼女のお洒落に対する意識が微かに垣間見えているが、全体的にいえば割と地味な装いといえるだろう。
ただしそれでも、彼女は目立つ。街を歩いていれば通り過ぎる人々の大半が彼女に視線を送るし、彼女自身もそれを感じていた。
が、しかし。
（……変ね）
それからさらに進んだところで、突如、空気が変わったように感じた。雨が降り始める前のじっとりとした空気に混じって、さらに嫌な雰囲気。

「……」

シーラは何度もこの感覚を覚えたことがある。彼女はそういったことに比較的敏感で、そして過去に一度、その感覚を覚えた直後に二人組の暴漢に襲われたことがある。

用心するに越したことはない。彼女の圧倒的なまでの魅力は、彼女が望むと望まざるとに関わらず憧憬と嫉妬、打算と欲望を全身に集め、それらはときに牙を剥く。

彼女はこの街に来てから、それらを理解する機会に充分すぎるほど恵まれた。

辺りを窺う。

それなりに大きめの通りだったが天気のせいもあって辺りに人は少ない。人の多い大通りまではまだ距離がある。

（……まずいわね）

さっきまで潜めていた足音が背後から少しずつ近付いてきているのがわかった。

ポツ、ポツと雨が落ち始める。

「……」

振り返らずに少し歩みを速めた。

背後の足音も少しずつ速く。

辺りに人がいなくなるのを見計らっていたのか。絶妙のタイミングだった。

もう、疑う必要はない。

スカートの中に潜ませた暴漢撃退用の薬袋を右手の平で確認する。今日持ってきていたのはいつかの朝ティースを実験台にして試した薬で、目に入ると痛みとともにしばらく涙が止まらなくなる薬だ。

が、

「――!?」

前方の路地から男が二人、同時に出てきた。

足を止める。

と、同時に背後から声がした。

「叫ばない方がいい。下手をすれば命がなくなる」
「……」
背後から響いた声はシーラの背筋を微かに震わせた。
（声が据わってる……ただのゴロツキじゃない……）
全部で四人。そのうちの二人はただのチンピラのようだったが、残る二人はもっと地に足のついた雰囲気を漂わせていた。
待ち伏せされていたところをみると、最初から狙われていたらしい。
「……私に何の用？」
少なくともただの暴漢ではないことを悟ってそう詰問する。心当たりはなかった。
が、
「時間がない」
四人のうちのリーダー格らしき男は質問に答えず、親指で“ついてこい”とジェスチャーをした。
「大人しくしていりゃ命は助かるかもしれないが、騒ぎ立てれば確実に命はない。……それに、誰か通りかかったらそいつも巻き添えになるぞ」
「……」
男たちが全員懐に刃物を忍ばせていることはすぐにわかった。男たちがどうやら本気であることも。
それを確認して、
「……わかったわ」
肩を落としたシーラに、前方と背後にいた男が一人ずつ彼女に近付いていく。
「物わかりいいじゃねぇか。好きだぜ、そういう女――」
手を伸ばす。
と。
「――っ」
がしっ。

背後から肩に手をかけようとした男の体が一回転した。
「なっ！！？」
「――触れるな、下郎」
ドスッ！！
「っ！！！？」
背中からまともに叩きつけられた男が、さらに股間を全力で踏み付けられ悶絶する。
「て、てめぇっ……！」
「っ……！」
飛びかかってきたもう一人の男に対し、体をかわしながらすれ違い様、忍ばせていた薬袋を投げつける。
紐の緩んだそれは寸分違わず中の粉末を男の顔面にぶちまけた。
「な、なんだこりゃ……っ……ぐぎゃぁぁぁぁぁぁ！」
男はあまりの激痛に、顔面を抑えて地面をのたうち回った。
「――見くびらないで」
二人を撃退するまでの間はほんの五秒ほどの出来事。それは彼女が身につけた護身術と、恐怖に屈しない意志の強さの賜物だった。
「お前たちのような下衆に、簡単にいいようにされたりしないわ」
が、しかし。
（あと二人……）
奇襲と、奥の手。カードはどちらも切った。これ以上の手はない。
だが、シーラは臆することなく視線を上げ、そのリーダー格の男に鋭い視線を合わせた。
「……後悔するぞ」
男の言葉にシーラは口元を歪めた。
「やってごらんなさい。下等なお前たちと違って、私には死よりも恐ろしいものが無数にある。それを守るためなら死など少しも怖くない」
背筋に走る震えを懸命に堪えて。だが、口にしたのは心からの言葉だ。

「……」

微かに、ほんの微かに男が気圧されたように見えた。だが、それは一瞬のこと。

――動く。

「っ……」

身のこなしは明らかに武術を身につけた者の動き。護身術に覚えがあるとはいえ、一般人の領域を出ない彼女に太刀打ちできるものでないことは確かだった。

（……ティース）

それはほんの一分にも満たない出来事。

そのときまだサンタニア学園にいたティースに、それを察することなどできようはずもなく――。

雨を裂くように、甲高い鳥の鳴き声が灰色の空に響き渡った。

その4『ツバサ』

――雨の中、鳥の鳴き声が響き渡った。

距離が詰まる一瞬に、シーラの頭には様々な思考が過ぎる。

前後から同時に迫る男たちの足は素早く、静かだった。その身のこなしは常人のものではなく、明らかに戦うことを目的として鍛えられたもの。手にした刃物を使う素振りがないのは、おそらく殺す気がないからだろう。だが、だからといって大人しく付いて行ったとしても命の保証はない。いったん虜になれば非力な彼女がそこを抜け出すことは難しいのだから。

では、どうすればいいのだろうか。

彼女の手にあって武器になりそうなものは鞄と傘。傘は突き出すことで牽制には使えるだろうが、この二人の男たちを撃退するにはあまりにも頼りなさすぎる。悲鳴を上げたところで他人が駆けつけるには時間がなさすぎるし、この雨の中でどこまで届くだろうか。それに相手の力量を考えると、下手をすれば犠牲者を増やしてしまうことにもなりかねない。悲鳴を聞きつけたのが偶然通りがかった腕利きの剣士だなんて、そんな都合のいいことがそうそうあるはずもないのだから。

（……ダメ、か）

最初の二人を撃退したことで、あるいは相手が少しは警戒して時間を稼げるかとも考えたが、現実はそう甘くなかった。

八方塞がりだ。

こうなった以上は無理に抵抗せず、大人しくしている方が上策だろうか。あるいは何か抜け道が見出せるかもしれない。

と。

シーラがそう考えたときだった。

甲高い鳥の鳴き声が灰色の空に響き渡る。

（……？）
これで三度目だった。雨の中、不自然とも思える鳥の鳴き声。
それはまるで何かの合図のように。
「！」
そして遠くから聞こえてきた、軽快な足音。
「……？　なんだ？」
男たちも気付いた。
遠くから聞こえる足音。
いや。
すでに遠くない。
「！」
雨を切り裂いたのは、遠吠え。
雨粒を弾きながら疾走する、銀色の影。
銀色の獣。
「なんだ……！？　狼だと！？」
男は咄嗟に腰の短剣を抜き放った。
だが、銀の体毛を持つ大柄な狼は速度を緩めることなく、首をグッと下げ地を這うように男に迫ると、振り下ろされた短剣をかいくぐり男の下腹部に激突した。
「ぐへっ……！！」
鈍い音とともに決して軽くはないだろう男の体が宙を舞い、五メートルほども後方に吹き飛ぶ。と、狼は吹き飛んだ男に追い打ちをかけるでもなく、そのままシーラの足元に駆け寄るとそこでピタリと足を止めた。
「お前……」
シーラは目を見開いて足元の狼を見つめる。低い唸り声をあげるその姿には見覚えがあった。
「確かいつもセシルと一緒にいる……マルス？」
ミューティレイクの屋敷でいつも見掛ける狼。それが何故ここに……当然の疑問だったが、今はそんなことを考えている状況ではな

い。
「……」
男の動きは止まっていた。吹っ飛ばされた男も左手を下腹に置いて脂汗を浮かべながらよろりと立ち上がる。
目配せ。
彼らもそこいらのチンピラとは違う。おそらくマルスの動きがよく訓練された獣のものであると悟ったのだろう。
一瞬の間の後、
（！　逃げる……！？）
一言も発さずに背を向けて退散する男たち。シーラに撃退され地面を転がっていた二人も足をもつれさせながら一目散に逃げていく。
鮮やかな引き際。
やがて、パシャッと水たまりの弾ける音がしてシーラは我に返った。
「大丈夫ですか、シーラさん！」
「……セシル」
やってきた少女に視線を合わせ、ようやく緊張の糸が緩んだ。ホッと息を吐いてその場にしゃがみ込む。
「助かったわ……ありがとう」
マルスの濡れた背中にそっと手を置くと、狼はチラッと彼女を見て、なんでもないというようにすぐそっぽを向く。まるで言葉が通じているかのようだ。
彼が駆けつけていなかったらどうなっていたことか。そう考えると微かに肩が震えた。
シーラは次に心配そうな顔のセシリアを見上げ僅かに微笑むと、
「セシル。あなたが連れてきてくれたの？」
「あ、いえ、マルスは私を迎えに来てくれただけだったんですけど、セレスが危ないって教えてくれて」
「セレス？」
「はい」

セシリアがゆっくりと上空を見上げる。
と、同時に、
「！」
ばさっ、と、黒い影が視界を横切って空から舞い降りた。
「それが……セレス？」
鷹だった。黒い、まるで女性の髪のような漆黒の翼を持つ鷹。
そういえば、先ほどの不自然な鳥の鳴き声。どうやらこのセレスという鷹が発した声だったらしい。
「セレスははじめましてですか？　じゃあご挨拶。ね、セレス」
セシリアがそう言ってくちばしを撫でると、セレスはじっとシーラを見つめ喉を微かに鳴らした。
やはり言葉が通じているかのようだった。
「……あなたって不思議な子ね」
シーラは思わず笑みをこぼす。
「まるで猛獣使いのようだわ。でもおかげで助かった。本当にありがとう」
「え？　あ、いえ、それなら私ではなくー……」
セシリアは小さく手を振って、肩に乗った黒い鷹――セレスの背を撫でた。
「マルスとセレスがとてもお利口さんなのです。誉めてあげてくださいね」
「ええ。あとで何かおいしいものでもプレゼントさせてもらうわ」
ピクリとマルスの耳が動く。……どうやら喜んでいるようだ。
シーラはゆっくりと腰を上げた。傘を開き、雨に濡れてしまった髪を掻き上げて小さく整える。そういえば服もびしょ濡れだ。ピッタリと肌に貼り付く感触が何だか気持ち悪い。
「寒くありませんか？　お屋敷まで、大丈夫ですか？　もしよかったら私の上着を――」
「いいわ、ありがとう、セシル。……それより早くここを離れましょう。もしかしたらさっきの連中が仲間を連れてくるかもしれない

わ」
　一瞬見せた疲れや安堵の色はすぐに消えて。そう言った彼女の表情はいつもの凛としたものに戻っていた。

　シーラがそんな危険な目に合っていたことなど露ほども知らないティースはその頃、放課後の学園で情報収集に励んでいた。
「あの日のアリエルさんの行動ですか？」
「そう。急な心臓発作だって聞いたから、もしかしたら激しい運動でもしたのかなって」
　そのコートニという名の短いお下げの少女は、アリエルにいつも付き従っていた少女だ。一昨日も彼女が倒れる直前まで一緒にいたらしく、話を聞きに来たのである。
「一昨日は確か授業を終わってお昼を食べようとしたら、アリエルさんと仲の悪い子と鉢合わせて……その後、オーウェンっていう男の子と一緒にお昼を食べたみたいです」
「みたい、ってことは、君はその場にいなかった？」
「はい。アリエルさんが別のところで食べてくれって言ったので……でも、どうしてそんなこと？」
「あ、いや、ごめん。その、なんか気になることがあると放っておけないタチで」
　真っ赤な嘘である。放っておけないどころか、どちらかというと触らぬ神に祟りなしが信条なのだ。
「彼女、何かおかしいところはなかった？　体調が悪そうだったとか……」
「うーん。そういえばいつもと比べてまだマシ……じゃなかった。いつもほどは元気じゃなかった気もしますけど、でも私、彼女とはそんなに付き合いが長いわけじゃなかったので、よくはわかりません」

「でも君はいつもアリエルさんと一緒だったって聞いたけど？」
「最近の話ですよ。あの子、強引だったから」
「……なるほど」
素っ気ない口調から、どうもこのコートニーという少女もアリエルのことはあまりよく思ってなかったらしい。
（しかし、嫌々でも付き合わざるを得なかったってことか……）
その辺の事情がティースにはいまいち理解できない。
「あの。アリエルさん、もしかして病気じゃなかったんですか？」
と、逆にコートニーが不安そうな顔で聞いてきた。
「ああ、いや！　ぜんぜんそんなんじゃないよ！」
ティースは慌てて否定し、話を切り上げることにした。
「それじゃ、君はその後アリエルさんには会ってないんだよね？　どうもありがとう」
「いえ」
コートニーという少女はペコッと礼儀正しく頭を下げて去っていった。
（うーん。ってことは、最後に一緒にいたのはオーウェンくんか……そういや昼にアリエルさんと話をしたって言ってたっけ）
と、いまさらそんなことを思い出しながら、どんより曇った空の下、ティースは学園の敷地内を歩く。今日の授業はほとんど終わったらしく、敷地内に残っている生徒は半分ぐらいになっていた。
（雨、降ってくるかなぁ）
空を見上げる。傘は持ってきていたが、降らないのであれば降らない方がいい。
と、彼がそんなことを思った矢先。
ポツ、ポツ。
（……あーあ）
降り始めた。だが幸い雨足は遅い。
（今日はもう無理か……）
なんて心の中で呟いたとき、雨とともに人の足音が聞こえて振り

返る。
「ティース様。待ちました？」
「ああ、リィナ。いや、そうでもないよ」
やってきたのは、今日も彼の護身術の授業を手伝ってくれたリィナだ。
「降ってきましたね」
「降ってきたなぁ」
リィナの口調がどこか弾んでいるように聞こえたのは、水の精である故か。晴れの日よりも雨の日の方が元気になるようだ。
「ところで、どう？　なにかわかった？」
ティースの問いかけに、リィナは小さく首を振って、
「いいえ。みなさん、その“クゥエルダ”という薬の噂は知ってもそれ以上のことは知らないそうです」
「そっか。……そりゃそうだよな」
何しろ麻薬の話である。たとえそれ以上を知っていたとしても、いきなり尋ねて正直に話してくれるはずもない。
「ただ……その薬のこととは関係ないんですけど、亡くなったアリエルさんという方のことで……」
「ん？」
「彼女、以前はそれほど目立たない方だったらしいんです。それが一年ほど前から急にたくさんの友人を連れて歩くようになったらしいですよ」
「一年前から？」
それは確かに不思議な話だ。
（そういやさっきのコートニーって子も、ムリヤリ連れ回されてたみたいな言い方してたもんな……）
いや、しかし。いくらアリエルが裕福な家の出であったにしても、この学園でそんな横暴な振る舞いができるはずはない。人望があって人が勝手に付いてまわるというのならともかく、一年前まで目立たない程度の存在だったというのなら、なおのこと。

（……麻薬の力？）
とっさに思考が飛躍したが、いや待てと考え直す。
（シーラもオーウェンくんも、彼女はそんなことするような人間じゃないって言ってたしなぁ。それに、もともとお金持ちの彼女がリスクを侵してまでそんなものに手を出すかな……？）
ないとは言い切れない、が、腑に落ちない。
（ひとまずオーウェンくんにもう一度話を聞いてみなきゃな……）
ポツ、ポツポツ……
「うわ、強くなってきたか」
思考をいったん中断し、傘を広げる。そして同じように傘を広げたリィナを振り返って、
「生徒もほとんど帰ったみたいだし今日はこのくらいにしよう」
「はい」
もちろん今日一日で何かわかると考えていたわけではないし、あまり大っぴらに調べ回ると警戒されるということもある。
と、そこへ。
「せんせー」
「え？　ああ、オゥムくん。これから帰りかい？」
背後からやってきた小柄な少年はティースの教え子の一人だった。今日、ようやく全員の顔と名前を完全に覚えたところである。
オゥムはチラッとリィナの方を見て、
「せんせーはこれからリィナさんとデートですか？」
「へ？　ばっ……そんなわけないだろ！」
「あはは、せんせー、さよーなら」
慌てて否定するティースを可笑しそうに笑いながら、オゥムは逃げるように去っていった。
「……まったく。今時の子供は」
などと、三つか四つしか違わないのに妙に年寄り臭いことを呟くティースだったが、隣にいる少女のことをついつい意識してしまったことはいうまでもない。

しかし一方のリィナはといえば不思議そうな顔で、
「ティース様？　デートというのはなんのことですか？」
「あ、いや。うん……」
嘘を教えるわけにもいかず、かといって正直に答えるのも何やら気まずかったので、
「デートするってのは、つまり遊びに行くってこと……かな」
嘘ではない。大事な部分を端折っているだけで。
リィナはますます不思議そうに、
「はぁ、遊びに行くことをわざわざデートというんですか。難しいんですね、こちらの専門用語は」
「……」
何やら微妙にズレた知識を与えてしまったようだったが、今さら訂正するわけにもいかず。
（まぁ……きっとそのうち誰かが詳しく教えてくれるさ。うん。別に間違ってるわけでもないし）
「じゃあ、ティース様」
そんな彼の心中などもちろん知る由もなく。リィナは柔らかに微笑んで言った。
「今度休みが重なったときには、シーラ様とエルさんと四人でデートしましょう」
「……」
やはり早いうちに訂正した方がいいのかもしれない、と、ティースは思った。まあ、彼ら四人の休日が重なるなんて、どれだけ先のことになるかわからないが。
さらに雨が強くなってきた。
学園から出ると、雨に濡れた斑色の猫が前を横切って路地に駆けていく。
（チェリンの花も終わりかな……）
雨にしおれたような桃色の花びらを見て、そう思う。このネービスではこの花が散る頃から徐々に太陽の日射しが強くなってくる。

（その頃にはデビルバスター試験、か）

どうなることやら。どうにも自分が成長しているという実感はないのだが、しかしいずれは通らなければならない道である。

と。

ガラガラガラガラ……ッ

「？」

顔を上げる。

雨に煙る通りの向こうからやってきたのは何やら急いだ様子の馬車だった。それは特別珍しい光景ではなかったのだが、ティースは横を通り過ぎていくその馬車を目で追いながら、

「あれ、リィナ？　あの馬車ってどっかで見たような――」

「あ、いたっ！！」

突如、女性の声が響いたかと思うと、馬車はその場に急停止する。

「？」

「ティース様。あの馬車はお屋敷のものでは……」

リィナが言い終わらないうちに、馬車の中から見覚えのある少女がひょこっと顔を出した。

「ティース様！　リィナ！」

「あれ？　君は確か――」

見覚えはあるのだが――しばらくの空白。

「ヴァレンシアさん？」

そう言ったのはリィナだった。

「あ、そうだ。ヴァレンシアだ」

少女はミューティレイクのハウス・メイドだ。ティースの部屋を担当するパメラという少女と仲の良い子で、顔と名前までは知っていた。

「どうしたんだ？　馬車なんか使って――」

問いかけるティースに、ヴァレンシアは馬車から飛び降りるなり雨も気にせず駆け寄ってきて言った。

「迎えに来たんですってば！　ティース様！　リィナも、急いで急

いで！　シーラ様が大変なんです！！」
「え？」
「ヴァレンシアさん！　何があったんですか！？」
「説明はあとあと！　ほら、乗った乗った！！」
ヴァレンシアは慌てた様子でとにかく二人を促す。
「あ、ああ……」
戸惑いながら馬車に乗り込んだティースたちは、そこで初めて、シーラが暴漢に襲われたらしい話を耳にしたのであった。

「シーラ！」
バァンッ！
乱暴に開け放たれたドアに、室内にいた全員の視線が振り返る。が、入っていった本人はそんなことこれっぽっちも眼中にない様子で一直線に駆け寄ると、
「け、怪我は！　どこを怪我した！　大丈夫なのかッ！？　ま、まさか顔じゃ――も、もし跡が残ったりしたら申し訳が――！！」
「ちょっと、ティース……」
両腕を掴まれたシーラが困惑の表情を浮かべる。
「そ、そうだ、医者！　医者を呼ばなきゃ！　医者を――」
「医者ならここにいるよ、ティースくん」
「マ、マイルズさん！」
シーラのすぐ横にいるのが屋敷の主治医マイルズであることに気付いて、
「マイルズさん！　シーラの怪我は……いや、いったい何があったんですか！　怪我はちゃんと治るんですかッ！？」
マイルズは答えた。
「いやぁ、治すってのはちょっと難しいかもねぇ」
その言葉に心臓の鼓動が跳ね上がる。

「そ、そ、それってどういう――」
マイルズは両手を広げて、
「だって怪我してないからね。治療のしようがない」
「へ？」
シーラの両腕を掴んだ体勢のまま、ティースは固まった。そしてゆっくりと視線を彼女の方へ向ける。
「……馬鹿」
呆れたような声。
そこでティースはようやく彼女の様子を観察するに至った。
装いはまったくの普段着。顔――ティースの行動に若干驚いたようだったが、それ以外はいつもと変わらない、近くで見るとよりいっそう際だつ美しさのまま。髪が若干湿って乱れているが、泥などが付いていないところをみるとあるいは風呂上がりなのだろうか。もちろんどこかに包帯を巻いているということはないし、そもそも大怪我をしていたらこんなにも普通に椅子に腰掛けていたりはしないだろう。
「ぶ、無事なのか……？　じゃ、じゃあ、暴漢に襲われたっていうのは……」
マイルズは苦笑して、
「どうやらヴァレンシアがちゃんと話さなかったらしいね。見ればわかるように、どこも怪我はしてないよ。危なかったことに変わりはないけど、彼女のおかげでね」
「え？」
ティースはそこで初めて、室内にもう一人いることに気付く。
「セシル？　君がシーラを……？」
まさか、この可憐でいかにも非力そうな少女が暴漢を追い払ったのだろうか、などと、どう考えても有り得ないことを一瞬考えてしまったティースだったが、もちろんそんなことはなく、
「あ、いえ、私ではなく――」
セシルは小さく手を振った。

正確にいうと、そこにいたのは一人と二匹だった。
「マルスとセレスのおかげです。セレスが鳴き声で教えてくれて、マルスが駆けつけてくれたんですよ」
膝の中には体を丸めた銀毛の狼。
右肩には女性の髪のような黒羽を濡らした一羽の鷹。
「マルス……と、セレス？」
その銀毛の狼がマルスという名で、庭でよく彼女と遊んでいることはティースも知っていた。
確認するようにシーラを見ると、彼女は頷いて、
「セシルの言うとおりよ。――それより」
すっと目を細めた。
「腕、そろそろ離してもらってもいいかしら」
「へ？　うわ、ごめん！」
慌てて手を離し、さらに一歩後ずさった。
それを見ていたマイルズの眼鏡がキラリと光る。
「なるほど。シーラくんに触れても平気ってのは本当、か」
バァンッ！！
「シーラ様！　お怪我は！？　お、起き上がったりして平気なんですか！？」
「……はぁ」
血相を変えて飛び込んできたリィナに、シーラは呆れ顔でため息を吐いたのだった。

「――に、しても」
それから十分ほどして。リィナが状況を把握しマイルズとセシリアが部屋を去った頃、ティースはようやく冷静に事情を聞くに至っていた。
「どうしてこんなことになったんだ？　お前を襲った四人組ってのは何者なんだ？」
「わからないわ」

カチャ、と、ティーポットがシーラの手元で乾いた音を立てる。
その手付きを見る限りいつもと変わったところはなく、襲撃のショックも今はほとんど残ってないようだ。
答える声もまた冷静で、
「アオイさんにも話したけど、待ち伏せされていたらしいことは確かよ」
「じゃあ人さらいとか？」
治安の良いネービスの街では珍しい。だが、そういった犯罪組織がまったくの皆無というわけではないし、彼女ほどの容姿であれば商品価値も高いだろう。と、ティースはそう考えたのだが、シーラは否定的だった。
「どうかしら。ああいう連中はもっと狡猾よ。大した理由もなく今回ほどリスクの高いことをするとは思えないわ。――リィナ、砂糖は何杯？」
「あ、すみません。十杯お願いします」
「十――……わかったわ」
両手を広げて十杯をアピールしたリィナに、シーラは素直に頷いてカップに砂糖を流し込んでいったが、よく見ると口元が微妙にヒクヒクしている。彼女も一般的な女性と同程度には甘い物が好きだし、好物の林檎にハチミツをかけて食べるのが好きだったりもするが、さすがにリィナの超甘味覚にはついていけないようだった。
「はい、リィナ」
「ありがとうございます」
リィナにそれを渡した後、自分の紅茶には砂糖一杯半と少量のミルク、もう片方には砂糖一杯を入れて軽くかき混ぜ、何も言わずにティースの前に置く。
「あ、すまん。……あちち、それじゃあ――」
少し口を付け喉を湿らせて、ティースは話を続けた。
「何かちょっとしたことでも、心当たりはないのか？」
「恨みなら随分買ってるでしょうけど。ここまでのことをされると

は思えないわね」
　紅茶のセットを脇へ寄せながら、シーラは思い出したように一瞬だけ長い睫毛を震わせた。
「連中はたぶん、ああいうことを生業にしてるヤツらよ。あのまま連れ去られていれば命の保証はなかったと思うわ」
「……」
　その言葉にティースは一年前、彼女が人魔にさらわれたときのことを思い出し、いまさらながらに肝を冷やした。
　もちろん今回のことは予測のしようもなく、運が悪いとしか言いようがないのだが。
（……運？　いや、待てよ――）
　と、考え直して、
「なぁ……シーラ」
「なに？」
「今回のこと、例の麻薬が絡んでるって可能性はないのか？」
「え？」
　ティーカップを持つシーラの手が止まった。意外そうな顔だった。だが、視線を泳がせ思考を巡らせた後、
「それはないと思うわ。私は例の噂以上のことなんて知らないし、もちろん関わったこともないのよ」
「でも、相手が勘違いしたって可能性は？　アリエルさんがもし麻薬のことで何か知っていて殺されたんだとしたら、彼女とよく一緒にいたお前のことを狙ってもおかしくないんじゃないか？」
「まさか。考えられない」
　シーラはティースの推測を完全に否定した。
「アリエルが私を嫌っていたことは学園でも有名よ。その考えで行くなら、私より先に彼女の友達を狙うはずでしょう？」
「でも、アリエルさんって友達とか少なかったらしいじゃないか」
「あら、それは初耳ね。でも、だからって私があの子と親しかったなんて勘違いをする人間はいないわ。それなら……たとえばオーウ

エンの方がよっぽど危険じゃないかしら」
「オーウェンくん？　ああ、そういや彼は――」
呟くように言った後、ふいにシーラと視線が重なる。
「え、えっと……そっか、オーウェンくんの方が危険だよな。うん、そうだよな」
「……」
急にどもりだしたティースにシーラは不審そうな目を向けたが、すぐに視線を逸らして何も言わなかった。
そこへリィナが、
「オーウェンさんというと、ティース様の授業を受けている男の方ですか？　シーラ様と仲良しの方ですよね」
「あ、ああ、そう。彼はシーラの友達でね。亡くなったアリエルさんとも仲が良かったらしいんだ」
そう答えるティースに、シーラは淡々と言い放った。
「友達じゃないわ。恋人よ」
「あ、そ、そうか。ま、まあとにかく仲がいいんだ」
「……」
「恋人？」
一方、そんな微妙な空気を察した様子もないリィナは不思議顔で、
「シーラ様にはティース様以外にも恋人がいらっしゃったんですか？」
「え？」
これにはシーラが怪訝な顔になる。
（あ。リィナは“恋人”の意味を勘違いしてるんだっけ）
と、思い出したが、彼がそれを口にするより早く、
「なにを言ってるの、リィナ？　私とティースは恋人なんかじゃないわ」
「え？　でも、恋人というのは確か“大事な人”という意味では？」
「……ああ」
それでシーラもようやく理解したようだ。

苦笑して、
「それは少し違うわ、リィナ。恋人というのは……そうね。家族以外で、一番大事な異性のこと。それもお互いにそう思い合っている人のことよ」
だが、リィナはますます不思議そうな顔になった。
「それならなおさら、シーラ様の恋人はティース様ではないのですか？」
「……リィナ」
シーラは深いため息を吐くと、
「それはきっと昔のイメージよ。もう思い出せないぐらい昔の話」
さらりとそう答えた。
（……昔の話、か）
それは単に恋人ではないということを主張したいだけなのか、あるいは今はもう大事な人間ではなくなったということを言いたいのか……前者であればもちろんその通りだからいいのだが、後者であればティースにとって少々酷なことである。
（はぁ、俺は今も昔も変わらないつもりなんだけどなぁ）
「とにかく話を戻すわ。……ティース？」
「え？　あ、ああ、そうだな」
ティースは気を取り直して、
「じゃあ、今回のこととはまったく関係ないって考えていいのかな」
「断言はできないけれど……少なくとも私が狙われる理由は今のところ思い当たらないわね」
ティースは納得して、
「そっか。ならいいんだが……でも気を付けてくれよ。また同じことが起こらないとも限らない」
「ええ。さっきアオイさんと話したのだけれど、大通りまでは誰かが送ってくれることになったわ。……お前こそ、わかってるとは思うけれど、しばらくは学園での行動に気をつけなければダメよ。特に昼食とか口に入れるものは全て」

「ああ、それは大丈夫。授業はだいたい午後からだし、ほとんどここで食べてからだから」
「ならいいけど……リィナ、あなたもよ。食べ物だけじゃなく飲み物もね」
リィナはニッコリと微笑んで、
「飲み物に関しては心配ありません。液体に危険物が混入されていれば水精が教えてくれますから」
シーラは驚いた顔をして、
「今の状態でもそんなことができるの？」
もともと強大な魔力を持つ彼女も、今は人の姿と代償に大半の魔力を失っている。
だが、リィナは答えて、
「ええ、これは魔力の強さとは関係のないことです。ティース様の口にするものは私が全てチェックしますので安心してください」
ティースは感嘆の声をあげた。
「さすがは魔王の一族だなぁ……水精だなんて」
「そんな大したことでは……」
はにかんだ笑顔を浮かべると、
「その気になればティース様にもできることですよ」
「え？　まさか」
と、ティースは笑ったが、リィナは真顔で、
「水精は心の優しい人が大好きなんです。だからティース様なら大丈夫だと思います」
「でもそれって、水魔だからできることだろ？」
「ええ。でも――」
リィナはそっとティースに手を伸ばす。一瞬緊張して身構えてしまったが、彼女の手はティースの体ではなく、その脇に置いてあった彼の武器に伸びていった。
「ティース様にはこれがありますから」
「え？」

それは彼の愛剣“細波”だった。
「彼女たちはいつもティース様に呼びかけているんですよ。……もっとあなたの力になりたい。もっとあなたを助けてあげたい、と。きっと風の精たち――私には聞こえませんが同じ気持ちのはずです」
「……」
ティースは愛剣“細波”を手に取り、柄の部分に填め込まれた宝石を耳に当ててみた。
「……なにも聞こえない」
「そうですか……」
リィナは少し残念そうだったが、すぐに気を取り直した様子で、
「でも意識してあげてください。そうすればいつかきっと」
「うぅーん」
唸ってマジマジと細波を見つめるティース。……どう眺めてもそんなものが聞こえるような気はしなかった。

今日はいっそう夜の闇が濃い。
――もう一刻の猶予も許されない。
まさか。まさかこんなことになるなんて。
出来うる限り不自然じゃないように。平静を装って歩く。
しかしなんにせよもう後戻りはできない。
少しずつ歩みが早くなる。
あの講師はきっと、そう。最初から“そういう目的”でやってきたに違いないのだ。
何故最初から気付かなかったのか。クゥエルダの噂が表面化したこの時期にミューティレイクの関係者が講師を装って来るなんて偶

然のはずがないのに。
冷や汗が背中に浮かぶ。
悪くない。
私は悪くない。
悪いのはあのアリエルだ。
彼女が私を脅したりするから。私はただ、欲しがる人に薬を斡旋してあげていただけなのに。彼女が私を脅したりするから。だから私は――
いや。いやいや。今はそんなことを考えるより、どうするかだ。
いや、違う。
どうやって、あの男を黙らせるか、だ。
「……」
ピタリ、と、足を止める。
……やるしかない。
どうにかして、あの男を殺すしかない。
だが、どうやって。
殺し屋とはもう連絡が取れない。新しい殺し屋を探すにしてもそれでは時間がなさすぎる。何より、これ以上“オーナー”の手を煩わすようなことがあれば今度は自分が切られかねない。
……ああ。ようやく。ようやく憂いが消えたと思ったのに。ようやく自由になれたと思ったのに。
こんなことなら殺さなければ良かった。アリエルだって細かい証拠を掴んでいたわけじゃない。言うとおりに辛抱していれば。
でも、もう遅い。
こうなったらやるしかない。
手の中の小さな袋を握りしめる。
「やるしか……ない」
泥沼にハマろうとしているのは自分でも感じていた。
が、もう後戻りはできない――

翌日は快晴だった。
「あれ？　オゥムくんは今日は休み？」
講義開始とともに欠席者がいることに気付いてティースはそう尋ねてみたが、生徒たちからは口々に知らないという言葉が返ってくる。
色々な学科から生徒が集まるこの特別講義ではここで初めて顔を合わせるという生徒たちも少なくない。資料によるとオゥムという生徒は声楽科の所属で、その学科から来ているのは彼だけのようだった。他の生徒たちがその所在を知らないのも仕方ない。
一人の男子生徒が手を挙げた。
「朝だけど、あいつ見掛けましたよ。サボりじゃないっすか？」
「ん、そうか……」
曖昧に頷きながら昨日会ったときの様子を思い出す。
確かに真面目な生徒というイメージはないが、これまでは楽しそうに講義を受けていただけに少し意外だった。まあ、もともとこの講義自体、彼らが普段学びに来ているものとはかけ離れた内容の授業だし、突然受ける気がなくなったとしても不思議ではない。あるいは何らかの事情で遅れてくるということも有り得る。
「それじゃ今日の講義を始めようか」
ともかく、いつものように講義を始めることにした。
今日は休みを挟んで五回目の講義。実技演習は今日が三回目で生徒たちもそれなりに慣れてきたらしく、ティースが最初にやり方を教えると後はそれぞれ生徒だけで色々工夫しながら練習しているようだった。
（やっぱみんな頭いいんだなぁ。俺とは大違いだよ）
などと、部屋の端っこに座って微妙に退屈を持て余し大きなあく

びなんかしていると、
「せんせー。ちょっと、ちょっと」
「？」
顔を上げると女生徒の固まりの方で、ディアナが手招きしていた。
「どうかした？」
何かトラブルがあったのかと思ったが、女生徒たちはリィナを中心に和気藹々と練習を続けていたし、特に問題があったようには見えない。
「ちょっと、ちょっと」
ニコニコしながら手招きするディアナ。どことなく嫌な予感がしつつも無視するわけにはいかずティースは腰を上げた。
「どうかした？　練習は？」
「今は休憩。みんなで相談して交代で休むことにしてるの」
「ああ、なるほど」
適度に休むようにとは言ったものの、細かい指示を出したわけではない。見るとディアナの他にもう一人休んでいる女生徒がいた。
「ほら、座って座って。先生だって暇そうにしてたじゃない」
「い、いや、僕はちゃんとみんなが怪我しないように見守ってて…」
「あくびしてたくせに」
ハッと口を押さえる。
「そ、それはたまたまだよ。人間、あくびの一つや二つするもんだ」
なんて苦しい言い訳しながらも、促されるままディアナの隣に腰を下ろした。
するとそれを見て、休んでいたもう一人の女生徒が、
「あ、なになに？　どしたの、ディアナ？」
興味津々といった表情でやってくる。
彼女はアドーラという名の生物学科所属の女生徒だ。年齢は確かディアナと同じ十六歳。今回講義を受けている生徒の中では一番大柄で見るからにボーイッシュな少女だった。

「先生が面白い話をしてくれるんだってさ」
「へぇぇ、そりゃ楽しみ」
「ちょっ……そんなこと言ってないって、まったく」
二人の少女に挟まれてティースは何とも落ち着かない気分になった。
（参ったなぁ……）
頭を掻きながら視線を彷徨わせていると、ふと練習に励むシーラと目が合ってしまう。すぐに彼女の方から視線を逸らしたが、どうやら彼が余計なことを言わないか気になっているらしい。
（大丈夫だよ……たぶん）
なんだかんだと失態を見せているだけに強気になれないのが悲しいところだ。
「あ、先生、またシーラさんの方ジッと見てた。今日これで四回目」
「え、あ、いや」
指摘してきたのはディアナではなくアドーラの方だった。
ティースが慌てて視線を戻すと、ディアナが口元を微かに緩ませて、
「気を付けた方がいいよ、先生。この子、他人を観察するの得意なんだから」
「そ、そうなんだ？　……生物学科だからかな？」
「あははっ、それ、あんま関係ないです」
アドーラはケラケラと笑って、
「でも、先生。あの子はやめた方がいいんじゃないですか。噂じゃあの子にフラれて学園止めた講師もいるってぐらいで――」
「あ、アドーラ。それ、もうあたしがだいぶ前に言ったよ」
「え？　あ、そっか。あんたってあの子と仲良しだもんね」
「先生はシーラには興味ないんだってさ」
ディアナがそう言うと、アドーラは驚いて、
「え、ホントに？」
「うんうん。ね、先生？」

ディアナに同意を求められティースは苦笑しながら、
「え？　あ、ああ、そりゃまぁ、なんていうか、講師だからね」
「へぇぇ」
アドーラは感心した顔をして、
「でも実際、講師とかなんとか関係ないです、あの子の場合。あたしの彼なんか、一緒に歩いているときでもあの子と擦れ違うとずっと目で追ってますし。足踏んづけてやんないと元に戻んないんですよ。……まあ、正直、あたしの目から見てもしょうがないかなって思いますけど」
「……そ、そっか」
なんとも反応に困ってしまう話だったが、彼女の明るい表情を見ると、あるいは笑うところだったのかもしれない。
ディアナはうんうんと頷きながら、
「でもまあ、目で追うくらいならまだマシじゃない？　あたしもシーラのそばで色々見てきたけど、中には自分の彼女ほっぽって話し掛けてくるヤツとかいるもん」
「ああ、それよりはマシかな。……ま、どっちにしろあいつみたいな冴えない男、あの子に相手にされるわけないけど」
「あはは。聞いたら泣くよ、彼」
ティースを挟んで可笑しそうに笑う二人。
あまりに息の合ったやり取りにティースはふと疑問に思って問いかけた。
「君たちって、もしかして前から仲良しなのかい？」
「え？　あ、はい」
アドーラが答える。
「実は一回生のとき、今回みたいな学科ごちゃ混ぜの講義で私とディアナと、あとコートニーっていう社交学科の子と同じ班になって、すぐ仲良しになったんです」
「……？」
「今までずっと音沙汰なかったくせに」

ディアナがすぐに突っ込むと、アドーラはケラケラと笑って、
「ごめん。勉強が忙しくて、なかなか他の学科までは顔出せないのよ。今年三回生に上がれたのだってギリギリだったんだから」
「彼氏と遊ぶのに忙しかったんじゃないのぉ？」
「そんな余裕ないってば。ウチの店だって最近雲行き怪しいんだから……って、それならあなたみたいに頑張って学費免除受けろよって話だけど」
「あはは、あたしは別に家のために頑張ったりなんてしてないけどねー」
「でもあれからお母さん一人で大変なんでしょ？」
「いやぁ、あの母はあたしに似て、なんとなーくどうにかしちゃうタイプだからさぁ」
楽しそうに会話を続ける二人の間で、結局何のために呼ばれたのかわからないティースはしばらく黙っていた。視線の先ではリィナがシーラと何やら言葉を交わしており、そのさらに向こうでは男子生徒たちが練習を続けている。
が、ティースはそのときまったく別のことを考えていた。
（社交学科のコートニーって……あのアリエルさんと一緒にいた子のことかな……）
社交学科といえばアリエルが通っていた学科でもある。つまりあの二人は同じ学科で――まあそのこと自体は特に不思議でもなんでもないのだが。
「……」
なにか拭いきれない違和感が残った。
（コートニー＝シッドル、か……）
目立たない地味な印象の少女。だが、よくよく考えると彼女はアリエルともっとも関係の深い人間の一人で、かつその関係にはどうにも不自然な点がある。
（あの子にもう一度話を聞いてみないとな……）
そう決意したところで、ちょうど授業の終わりを告げる鐘が鳴っ

た。

――静かな、静かな道を少年は歩いている。
ここはどこだろう。何をしていたんだろう。
何も聞こえない、白く明るく静かな道。
だけどやるべきことはわかっていた。
“殺すんだ”
あいつはそう言った。あいつがそう言ったならやらなきゃならない。大丈夫、僕ならできる。今の僕ならできる。
少年は自分の懐の中にズシッと重い感触があるのを知っていた。
大丈夫。今の僕はなんでもできる。勉強だって、運動だって、その気になれば空だって飛べる。
人を殺すぐらいのことがなんだっていうんだ?
“大丈夫だから”
あいつがそう言った。だから大丈夫。大丈夫。
そっと懐に手を置く。服の上から堅い感触に触れる。
ナイフ。鉄さえも切り裂く鋭いナイフ。
あいつの言葉と、あいつのくれたこのナイフがある限り。
僕は無敵だ。
たとえ百人がかりでも僕を止めることはできない。誰も僕を邪魔できない。僕を見下す気にくわない同級生も、僕を無能呼ばわりするウザったい学園の講師も。
そうとも。今の僕ならあんな男の一人ぐらい、赤ん坊の手をひねるより簡単だ。
白く明るく静かな道の向こうに、標的の姿が見えてくる。

殺せ。
殺せ、殺せ、殺せ、殺せ！
「あれ？」
相手が僕に気付いた。
今さら気付いてももう遅い。
「オゥムくん？　どうしたんだ、こんなところで。今日の講義は？」
そんなこと決まってる。
お前を殺しに来たんだ。
いや、いやいや違う。
ああ、何故今まで気付かなかったんだろう。
僕はお前を殺すために産まれたんだ。お前を殺すために今まで生きてきたんだ。
お前を殺せばきっと、これまでにない快感を得られるに違いない。
あの薬、クゥエルダなんて及びも付かないほどの、空の果てまで昇り詰めるほどの――
懐にある堅い感触。
「！」
僕の取り出したものを見て、相手は驚愕に目を見開いた。
「オゥムくん、なにを――」
もう、遅い！
躊躇うことなく突き出した。
ああ、これで。
これで――
「！！？」
突如、激痛が右腕に走る。
ナイフが腕からこぼれ落ちた。
直後、全身の力が抜けていく。
……ああ。待って。
待ってくれ。
ナイフを拾い上げようとした手が闇に溶けていく。

待ってくれ。待ってくれ、僕のツバサ。
僕の。
僕の――
意識は突然に途切れた。

重いため息が昼の陽光に溶けていく。
「……」
ティースはその建物を振り返って、もう一度深くため息を吐いた。
そこは通常であればあまりお世話にはなりたくない場所――ネービスの治安を守る警邏隊の詰め所。
「ティース様。どうだったんですか？」
姿を認めて駆け寄ってきたリィナに、ティースは横を向いたまま答えた。
「……薬を飲んでたらしい。その効果で錯乱していたか、あるいは誰かの言われた通りに行動していたんじゃないかって」
リィナは眉をひそめ、それから彼の左上腕に巻かれた包帯を見る。
「かすり傷だよ」
相手が顔見知り――自分の講義の生徒だったことで反応が若干遅れた。それでも完全に不意打ちだったことを考えれば、かすり傷で済んだのは不幸中の幸いというべきか。
「じゃあ、今回のもやはりクゥエルダという薬の？」
「いや」
ティースはゆっくりと歩き出した。
学園までは歩いて五分ほどの距離。
「今回のはもっと強烈な薬で“ツバサ”とかって呼ばれてるヤツらしい」

「ツバサ、ですか……」
「羽根が生えたような気分になって、どんなことでもできてしまうような錯覚に捕らわれてしまうそうだよ。もちろん正常な判断能力なんて無くなって、ね」
リィナはその穏やかな顔立ちに微かな嫌悪感を浮かべた。
「まるで幻覚魔力のようですね」
「ああ。ここまで来るとそれに近いのかもしれない」
あるいは、と、ティースは考える。
この大陸に無数に溢れる麻薬の中には魔界由来のものも少なくない。今回のツバサがそういうものだとすると、魔がどこかで一役買っている可能性も否定できない。
（ツバサ、クゥエルダ……魔が絡んでいる可能性、か）
今回彼が襲われたのは間違いなくクゥエルダ絡みだろう。彼を襲ったオゥムという生徒から個人的に恨みを買っていたということは考えられないし、今回のことは間違いなく別の誰かの意志だ。
誰か。
（アリエルさんはやっぱり殺されたんだ……）
病死ではなく犯人がいる。そしてそれを調べ始めたティースを邪魔に思い、やはり殺そうとした。この推論には無理がない。そのとおりである可能性も高いだろう――が、そうするとさらに進んだ一つの推論と、どうにもすっきりしない違和感が残る。
まず、犯人は学園に自由に出入りできる人間と見て間違いないだろう。学園には一応それなりの警備が敷かれている。まったく外部の人間が単にティースのことを邪魔だと思ったなら、わざわざ学園の中で狙う必要はない。アリエルのことに関しても同様だ。
そして違和感。
「なぁ、リィナ。……あまりに稚拙すぎる気がしないか？」
「稚拙、ですか？」
「ああ」
ティースは今回の襲撃がどうにも腑に落ちない。

「アリエルさんのときはちゃんと病死か他殺かわからないように偽装されてた。なのに、今回のはあまりに危険で確実性がなさすぎるよ。反応も過敏すぎる」

アリエルのことを調べ始めたとはいっても、実際のところはまだ何もわかってないのと変わらない状況だ。にも関わらず、相手はいきなり命を狙ってきた。それもあまりに不確実な方法で。

失敗するとは考えなかったのだろうか。確かにティースが普通の人間であれば、オゥムのナイフを避けられずに命を落としていたかもしれない。だが、それにしたって博打みたいなもの。

（どうなってんだ……？）

知らないうちに真相に近付いていて、あるいは相手が何らかの理由でそう勘違いしていて、相当焦っているのか。わざと捕まろうとしているのでなければ、そうとしか考えられない。

「オゥムさんの目が覚めれば何かわかるかもしれませんね」

「いや」

リィナの言葉に、ティースは首を横に振って答えた。

「医者の話だと、たぶん前後の記憶はないんじゃないかってさ。まぁ、実際目覚めてみないとわからないらしいけど。……いや、待てよ」

ティースは足を止める。

（……理由はわからない。けど、相手が焦ってこんなことをしたんだとしたら……）

そして閃いた。

「リィナ」

「はい？」

ティースは振り返って真剣な顔で言った。

「頼みがあるんだ。もしかすると、犯人を見つけられるかもしれない」

「え？」

リィナは驚いた顔をした。

――失敗した。
もう終わりだ。何もかも。
コートニー＝シッドルは周りから不自然に見えないよう気を付けながら、しかし焦る気持ちを抑えきれずに早足で歩いていた。
おそらくあの講師はもう見当を付けているはず。いや、素人でもわかる。アリエルの死に疑問を持って、本腰を入れて調べていれば自分に辿り着くのは当たり前のことだ。
しかしまだ諦めるわけにはいかない。万が一警邏隊に捕まるようなことがあれば、上が放っておかないだろう。
――殺される。
脊髄が痺れて冷や汗が止まらない。
……やめておけば良かった。いや、最初からこんなことに手を出さなければよかったのだ。そこまでお金に困っていたわけじゃない。勉強ばかりの日々に嫌気が差して、ほんの少し遊ぶお金が欲しかっただけなのに。
とにかく。
とにかく今は最善を尽くすことだけ考えよう。
向かった先は学園からそれほど離れていない場所にある診療所。周りは意外にも静かだった。使ったモノがモノだっただけに、警邏隊の人間が出入りしているかと思ったが、幸いそんなこともなかったようだ。あるいはまだあの薬の正体に気付いていないのかもしれない。
今のうちだ。
しんと静まり返った診療所の裏側へと回り込む。隣の家の塀が高いおかげでこうしていても目立たずに済む。まだ運がある、と、コ

ートニーは思った。

……いた。

小さな診療所で入院用の部屋は二つしかない。そのうちの一つは空っぽ。もう片方には患者が一人。医者は外来の客の相手をしている。

汗ばんだ手の平で薬包紙がかさっと音を立てた。

やるしかない。

あのオゥムという男子生徒は何の恨みもない、それどころかお得意様とでもいうべき少年だった。あの“ツバサ”の影響下では記憶が残ってない可能性も高いが、それでも絶対とは言いきれない。彼の口から事が漏れれば今度こそ確実に破滅だ。仕方ない。

薬包紙の中にあるのは致死量の麻薬だ。これだけ飲ませれば確実に死ぬ。彼はもともとクゥエルダの常習者だ。上手く行けば自殺だと思わせることができるかもしれない。

手が震えた。

アリエルのときはあくまで補助的役割だった。だが、今回は間違いなく自分の手で人を殺すことになる。

窓は開いていた。不用心というべきか。いや、医者が薬の正体に気付いていないのなら不思議はない。そうに違いない。

足跡が残らないよう靴を脱ぎ、音を立てないように忍び込む。奥の方から医者らしき人間の声が聞こえた。どうやら外来の客が来ているようで、こっちに来る気配はない。

急がないと。

一メートルほどの間隔を空けて並べられた二つのベッド。空っぽのベッドの横を素通りして近付いていく。震える手の中の薬包紙をギュッと握りしめると、ふっと震えが止まった。

意外だった。震えが止まらなくなると思っていたのに。

そして同時に、今度こそ後に引けないことを悟った。

――学園を卒業したらこんなことは止めて普通の生活に戻るつもりだったのに。ほんの軽い気持ちで始めたことだったのに。なのに

もう、自分はこんなところまで来ている。
脳裏に親の顔が浮かぶ。きっと悲しむだろう。
だが、もうやるしかない。でなければ自分のみならず、家族にまで被害が及ぶかもしれない。
薬包紙を開き、中の白い粉を口に含む。舌に感じる微かな刺激。
呑み込まないよう注意しながら唾液で溶かす。
よし。これなら大丈夫。
そしてコートニーは布団に手を掛けた。
と。
「！」
違う――オゥムじゃない！
ベッドの中にいたのは女性だった。
その女性が何事か呟いた途端、異変が起きる。
「なっ……！」
突如、空中に発生した水の塊が急速に大きくなって、微かに開いたコートニーの口の中に飛び込んでいく。
「んむぅっ……！！」
それはまるで自分の意志を持っているかのように、口の中に溜めていた“ツバサ”の溶液と溶け合うと、次の瞬間、彼女の口の中から飛び出していった。
びちゃっ、と、吐き出した水が床の上に落ちる。
「っ……げほっ、げほっ……！」
ベッドに寝ていた女性――リィナは身を起こし咳き込む彼女を見て言った。
「すみません。そのまま呑み込んでは大変でしたから」
「っ……！」
「おっと。逃げられないよ。……よいしょっと」
あらかじめ待機していたティースが窓から入ってくる。
「……」
コートニーは後ずさった。

ティースは小さく息を吐いて彼女に視線を合わせると、
「君だったのか。もちろんアリエルさんのことも、君が関わっていたんだね？」
「な、なんの――」
「言い逃れようとしても無駄だ。その床に零れたものを調べれば、君が何をしようとしていたのかはすぐにわかる」
「……」
コートニーはがっくりと肩を落とした。
隠れて待機していた警邏隊の男が二人、部屋に入ってくる。
彼女はもう抵抗しようとはせず、その場に泣き崩れた。

「――アリエルさんも、やはりあの子が殺したのでしょうか？」
コートニーが警邏隊に連れられていった後、リィナが理解できない顔でそう呟いた。
「さあ……それはこれから警邏の方で調べてくんじゃないか」
だが、彼女の言葉はティースにも理解できた。……どう見ても普通の女の子だ。とても人殺しをするようには見えない。
「たぶん、あの子も思ってなかったんじゃないかな。自分が、まさか人殺しまでしなきゃならなくなるなんて。……だってそうだろ。あんな女の子が一人で麻薬なんてものを扱えるわけがないんだから」
「そうですね……」
これで全てが終わったわけじゃない。
背後に何らかの犯罪組織がある。それは間違いないのないことだった。
今回のことでせめてそれらが明らかにされてくれれば。
ティースはそう願わずにはいられなかった。

その5『心構え』

コートニーが警邏隊に捕まった日から四日後。

講義のため昼頃サンタニア学園にやってきたティースは、敷地の一角を歩くシーラ＝スノーフォールの後ろ姿を見つけた。

ちょうどランチタイムに入ったばかりだろう。

彼女は同じ学園の生徒らしき少年と一緒に歩いていて、オーウェン＝トレビックかと思ったらどうも違うようだ。

不思議に思って少しの間立ち止まって眺めていると、

「あ、せんせ。なにしてんの？」

「え？」

後ろから声を掛けてきたのはディアナ＝リーだった。

「ああ、ディアナさんか」

ティースは彼女の姿を認めると、左右に視線を動かして辺りを見回した。それから彼女に視線を止めて、

「いや、ちょっとね……」

少し口ごもったが、ディアナはすぐシーラの姿を発見したらしく納得顔になると、

「ああ、アレ？　見てたらすぐわかるよ、きっと」

「？」

その言葉が終わるか終わらないかのうちに、一緒に歩いていた男子生徒が立ち止まり、シーラはそれを振り返りもせずに歩いていってしまった。

ディアナは苦笑して、

「たぶん今月の初撃墜」

「撃墜？　ああ……そういうことか」

話ではよく聞くものの実際そういう場面を目撃するのは初めての

ことで、なんとも申し訳ないような情けないような変な気持ちだった。

誤魔化すようにティースは口を開く。

「でも他の生徒が周りにいるのに、あんなことできるなんてすごいなぁ」

「あの子ってば入学当初からああいうのは全部無視なの。どっか来てくれって言われても絶対行かないし、ゲリラ戦じゃないと告白すらできないみたい。それでも玉砕する子が後を絶たないっていうからすごいんだけど」

「なるほど……でも、それじゃあオーウェンくんは？」

と、疑問を向けてみた。

「オーウェン？　……最初は相手にされてなかったなぁ、確か」

「ふーん」

なんて頷いたところで、

「ティースさーん」

「え？」

遠くから聞こえた覚えのある声に横を見ると、並木を挟んだ向こうの道から春色のワンピースに身を包んだセシリア＝レイルーンが手を振っていた。栗色の髪から覗く水色のヘアバンドが可愛らしい。

（あ、そっか。あの子もここの生徒だったなぁ）

今まで顔を合わさなかったのが不思議なぐらいだ。

ティースが小さく手を振り返してやると、セシリアは満面の笑顔になって、

「講義、頑張ってくださいねー」

彼女は友人二人と一緒だったらしく、そのまま手を振りながら通り過ぎていった。

ディアナはそれを見ながら不思議そうに、

「あの子も先生の知り合い？」

「ん？　知ってるの？」

「下の子と同じ講義を受けることもあるから、名前は知らないけど

顔は見たことある。……ふーん」
「え、なに？」
少し意地の悪い笑みでティースを見上げて、
「先生って意外と面食いなんだなーと思って」
「へ？　あ、ああ、いや、そんなんじゃないよ。ただ、僕の仕事仲間の身内みたいなもので、それにあの子なんてまだ子供じゃ――」
「あはは、冗談だから。……でも、そういう巡り合わせってたぶん、先生の天運っていうか、そういうものだと思うなぁ」
「天運？」
「そう。可愛い女の子に振り回された挙げ句不幸になる、女難の運命」
「……」
完全に否定できない。
ティースが情けない顔をしていると、ディアナは可笑しそうに笑いながら言った。
「でも先生、女難ってゆーのは、女の子に好かれない人には起こらないんだよ。だから喜んでいいんじゃないかなぁ」
「好かれるのは嬉しいけど、災難はゴメン被るよ……」
それに自分はそんなにモテないしね、と、心の中で付け足す。
「あはは。じゃ、行こっか、先生。せっかくだし、お昼一緒に食べよ？」
「あ、いや、僕はもう食べてきたから」
「じゃあ一緒にいるだけでいいからさぁ」
ディアナはいつもより楽しそうだ。
「……そうだね」
考え、少し視線を泳がせた後、ティースはそう言って頷いた。

はっ、やぁっ、というかけ声が教室の中に響いている。

「みなさん、だいぶ慣れてきたみたいですね」
目の前にタオルが差し出され、ティースは顔を上げた。
リィナだった。
「ああ。やることなくて暇なぐらいだよ」
そう答えて笑う。
「そっちは大丈夫かい？　君だって初心者だから大変だろ？」
「ええ」
正直にそう答えながらもリィナは微笑みを浮かべて、
「でも私もみなさんと一緒に学んでいるみたいで楽しいです。向こうにはこういう風習はありませんでしたから」
「そっか」
その様子にティースはホッとしながら視線を生徒たちの方に戻した。
十四人――いや、オゥムが薬の影響で休学したため（色々調べた結果、彼は普段からクゥエルダを常用していたらしい）十三人に減った生徒たち。コートニーが捕まってからこの学園でも数人の仲間や使用者が発覚し、それぞれに処分を受けている。
クゥエルダの進入経路に関しては、今ネービスの警邏隊が必死に調べている。学園の責任者たちは多忙な日々を送っていることだろうが、大半の生徒にとっては何の関係もないことで、学園は休むことなく今日もいつも通りに動いていた。
「……せんせー」
「ん？」
講義も終盤に差し掛かった頃。
全員で同時に休憩を取っていると女生徒の一人が手を挙げた。
「先生って、護身術の他にも武道みたいのやってるんですよね？」
「え？　いやまぁ、そりゃあね」
むしろ護身術は本職ではなく、剣術の他に基本的な体術はもちろん習得している。
女生徒は言った。

「護身術とはちょっと離れるかもしれないんですけど、いっぺん誰かと実戦みたいのってやってみてもらえませんか？　そういうの、間近で見てみたくて」
「実戦？　組み手のことかい？」
戸惑った。興味本位のようだが、確かに時間も少し余っている。
ティースは軽い気持ちで答えて、
「それは構わないけど……でも誰かって、誰と？」
「そりゃ私たちじゃ絶対敵わないし、男子の誰かで」
何とも無責任な発言に男子生徒からいくつか非難の声があがった。が、発言した女生徒は平然として、
「馬鹿ねぇ、あんたたち。せっかくいいとこ見せるチャンスをあげてるのに」
しぃん、と男子生徒たちが静まった。
一瞬何の話なのかティースにはわからなかったが、男子生徒たちの一瞬の視線の動きを見て何となく事情を察した。
（……いいとこ見せるって、そういうことか）
この授業も残すところあと数回。それが終われば、ここに集まっている他学科の生徒とはほぼ接点がなくなってしまう。もちろん同じ学園内なのだからやろうと思えばいつでも会えるだろうが、簡単に自分をアピールする機会はそうそう訪れないだろう。
（みんな勉強一筋なのかと思ったら、案外そうでもないんだなぁ）
と、まあ、もちろん不真面目だなどと怒るようなことはなく、むしろ微笑ましいと感じるのであった。
（よし。じゃあ少し手加減して協力してあげなきゃ）
などと妙な親切心まで発揮してしまったのだが、しかし彼らとて考えなしではない。いくらティースが頼りない外見をしているといっても本気で勝てると思っている者はまずいないだろうし、大半が本当の初心者だ。なかなか決まらない。遊び半分ならまだしも、女生徒の発言によってどうしても無様な姿は見せられないという空気が広まってしまったようだ。

結局、事態はそのまま収束するかと思われた。
が、しかし最終的に一人の男子生徒が手をあげる。
「じゃあ、俺がやります」
「え？」
ティースは面食らって立ち上がった男子生徒を見つめた。
「オーウェンくん、君が……？」
「はい」
意外、とはいえないだろう。この講義において、彼は間違いなく男子生徒の中でもっとも成績が良かったのだから。
「……」
シーラの視線を感じる。いや、特別な意味などないのかもしれないが、相手が彼女の恋人ということでどうしても余計に意識してしまう。
しかし、一度やると言ってしまった以上はやるしかあるまい。
（……参ったなあ）
オーウェンと対峙すると、周りの生徒たちから歓声が飛んだ。
ティースは言った。
「えっとまず、絶対ムリはしないこと。怪我でもしたら大変だからね」
オーウェンは少しだけ緊張した面もちで、
「大丈夫です。子供の頃から徒手の武道場に通ってますから、だいたい」
「……なるほど」
経験者だったというわけだ。それなら他の生徒たちと動きが違っていたのも頷ける。とはいえ、もちろん負けるなんてことは絶対にないだろう。
（さて。怪我なんてさせたら本気で絶交だろうな……）
どうしたものか。手加減をするのは当然として。敢えて負けてみせるという手もあるが、それはさすがにわざとらしいか。勝つにしてもどのぐらい苦戦するか、そのさじ加減がどうにも難しい。

（うーん、悩ましいなぁ……）
「ティース様！　もう始まってます！」
「へ？」
気付いたときにはもう遅かった。
クルッと視界が回転して――
……どすん！！

「いててて……」
「大丈夫ですか？」
いや、情けないにもほどがある。まさか生徒に投げ飛ばされて腰をしたたかに打ち付けてしまうとは。
講義終了後、オーウェンは責任を感じたのか残って心配そうにしていた。
「すみません。緊張してたせいか、先生の準備が終わってないことに気付かなくて……」
「あ、いや……」
別に君が悪いわけでは、と、言おうとすると、
「あんなときにボーっとしてる方が悪いわよ」
「……」
冷たいその物言いはもちろんシーラだった。
「う、うん。彼女の言うとおりだ……」
ティースとしても引きつった笑顔でそう答えるしかない。
「あはは、でもいいじゃない。その後に仕切り直して汚名返上できたんだし」
そう言ったのはディアナだ。
「カッコ良かったよ、せんせ。なんかいつもと別人みたいだった」
「いや、はは……」
ストレートな物言いにティースが照れていると、

「当たり前じゃない。講師が生徒より弱かったら困るわよ」
「……」
そのとおりである。そのとおりではある……が、もっと言い方ってものがあるんじゃないかとティースは主張したいわけだ。
あくまで心の中で、だが。
「もう大丈夫でしょ。じゃ、私は帰るわね」
そう言ってシーラは鞄を手に――一瞬だけティースとディアナを見つめ――さっさと行ってしまった。
「あ、シーラさん。……すみません、先生。じゃあ俺もこれで」
オーウェンもそう言って鞄を手に取る。
「あ。ああ、悪いね。心配させちゃって」
「いえ。また明日……じゃなくて明後日」
手を振ってオーウェンはシーラの後を追いかけていった。
残ったのはディアナだけだ。今日はリィナも先に出て――途中でシーラと合流して一緒に帰ることにしているらしい。
ディアナは二人が出ていったのを見届けると、ティースのそばに屈み込んで言った。
「先生、どう？　そろそろ薬効いてきた？」
「え。あ、ああ。なんだかすーっとしてきたよ」
ディアナは嬉しそうに、
「その湿布用の薬液、あたしが午前中の授業で作ったんだ。あ、もちろんちゃんと使用許可もらったから」
「へぇぇ……」
「それ自体はそんな難しいものじゃないんだけどね。でも使い方を間違えると肌が爛れたりするから日が落ちる前には取り替えて……って、たぶんシーラがちゃんとしてくれると思うけど。あ、お屋敷だもんね。お医者さんもいるんだっけ？」
「ああ。でも楽になったよ。ホントの薬屋さんみたいだ」
「いちお、三年以上勉強してますから」
そう言ってディアナは笑った。そして視線を横――シーラたちが

出ていった方に向けると、
「オーウェン、今日こそ一緒に帰れるかなぁ。……って、無理か」
「ん？」
「なんか色々深い事情があるっぽいもんね。シーラって」
「……」
ティースはゆっくりと立ち上がった。腰が痛むといってもそんな大袈裟なものではない。
「さて、帰ろうか。今日も途中まで、一緒に行くかい？」
「え、いいんですか？」
「そりゃもちろん」
「やった！」
ディアナはぴょんと飛び跳ねて、鞄を手に取ると、
「じゃあ行こ行こ。寄り道とかアリ？」
「あまり遅くならないぐらいなら、ね」
ティースはそう言って頷いた。

「オーウェンねぇ、先生のこと意識してるみたいよ」
「え？」
帰り道、ティースが買ってあげた薄焼きのパンケーキを頬張りながらディアナが急にそんなことを言い出した。
「たぶん薄々気付いてるんじゃないのかな。シーラが先生と知り合いだってこと」
「え、ホントに？」
全然気付かなかった。
ディアナは二度頷いて、
「シーラの反応、先生に対してはやっぱちょっと特殊だもの。今日だって先生が投げられた途端、一瞬だけど唖然とした顔してたしさ。なんだかんだ言いながら最後まで残ってたし」
「ははは……さすがのあいつでも、俺がそこまで間抜けだとは思わなかったんじゃないかな」

「先生、あのときはやっぱシーラを気にしてたの？」
「そりゃあね。あいつの恋人に怪我でもさせたら大変だと思って」
「それで自分が怪我してちゃ世話ないなぁ」
可笑しそうに笑うディアナに、ティースは頭を掻いて、もっともだ、と思った。
見上げる空は曇っている。あまりのんびりしていると雨が降り出すかもしれない。
「……」
ティースは立ち止まって後ろを振り返った。
「？　どしたの、先生？」
「いや、なんでもないよ」
ネコが通りを横切っていく。
「あ、ブチだ」
「ブチ？」
「うん。行き帰りにたまに見掛けるネコ」
「ネコ、好きなんだ？」
「そんなこともないんだけど。どっちかというと犬の方が好きかなぁ。……パンケーキ、ごちそうさまでした」
ペコリと礼儀正しく頭を下げるディアナ。
「ああ、いや、なんでもないよ、そのくらい」
手を振ってそう言うと、
「先生、シーラにもこうやって奢ってあげたりするの？」
「え？　あ、いや、ないなぁ。こうやって一緒に歩くこともあんまりないしね」
最近の彼女との関係を考えると想像もできない。
「ふーん。まぁ、確かにシーラのそういうとこ、想像できないかも。……そういや先生、コートニーのこと聞いた？」
矢継ぎ早に次の話題へと。
「……ああ。聞いたよ」
ティースは少し表情を強張らせて頷いた。

それはコートニーが捕まった一件のことではない。彼女が警邏隊に捕まった翌日、大量の麻薬を飲んで自殺してしまったこと――いや、それはあくまで表向きだ。警邏に捕まっていた彼女が大量の麻薬など入手できるはずもなく、自殺だったとしても誰かが警邏隊の目を盗んで彼女に接触していることになる。

つまり殺されたも同然だった。

「でも、どうしてそんなこと？」

ティースがそう尋ねると、若干空気が動いた気がした。

ディアナは少し考えながら言葉を選ぶ。

「……ねぇ、先生。先生は前、死ななきゃならない人間なんてそういないって言ったでしょ？」

「ん？　うん」

「あの子のことはどう思う？」

「コートニーさんかい？　……さぁ、それはなんとも言えないな。でもそういう話とは別に、可哀想だとは思う」

「そっか。……ね、先生」

「ん？」

もう一度、空気が動く。

「もう気付いてるかもしんないけど……あたしのうち、貧乏なんだ」

目まぐるしく変わる話題は、彼女の心が不安定になっている証だろうか。

ティースはあくまで追求せず、黙って先を促すように彼女を見つめた。

「ん、ほら、いっつも先生に奢ってもらっちゃってるし、先生なら話してもいいかなと思って。……もともとはそうでもなかったんだけど、二年ぐらい前に父さんが事故で死んで、母さんも最近は病気で自由に動けなくなってね。だからあたしが卒業して働いて……弟が二人いるんだけど、あいつらが一人前になるまであたしが頑張らなきゃなんなかったんだ」

「……そうなのか」

ティースは少し考え込んで、そしてポツリと言った。
「それじゃあ……大変だろうね」
「ホントは今年の三月で卒業だったんだけど……卒業試験に落ちちゃって。あのとき受かっていればなぁ」
「……」
ティースはピタリと立ち止まった。
ここはディアナの家に続く帰り道。その中でもっとも人気のなくなる場所。
ディアナはグッと口元を引き絞った。
「……先生。お屋敷って、こっちじゃないよね。もう、通り過ぎてるよね」
「今日は、最後まで送っていくよ」
ティースは頷いて、
「受かっていれば、か。……そうだね」
感慨深げに呟いて、ゆっくりと腰の剣に手をかけた。
「君が受かっていれば……少なくとも、こうしてシーラを悲しませるようなことはなかったのかもしれない」
「！」
ディアナも“それ”に気付いた。
雨が落ち始めるのを待っていたかのように。
「おそらく、こうなるんじゃないかと思っていたよ……」
言葉は厳しく、どこか哀しげに曇って。
男が三人、武器を片手に路地から現れたのを見て、ティースは腰の細波を抜きはなったのだった――。

「……降ってきたわ」
帰り道、リィナと合流したシーラが屋敷に戻ってきたのとほぼ同時。

雨がポツリポツリと落ち始めていた。
「雨。嫌ね、雨が多いと」
部屋の窓から雨に煙る庭を眺める。外にいた使用人たちが慌てて戻ってくる姿が見えた。
「シーラ様」
そばにいたのはリィナだ。彼女の本職であるパーラー・メイドの仕事着に着替え、手にはティーセットを持っていたが、これはシーラが彼女と話したいときによく使う口実だ。
「カザロスの街も雨が多かったですね」
「ええ……そうね。雨が降るたびに思い出すわ」
「私にとってあの頃の記憶は、掛け替えのない記憶です」
「……」
「シーラ様は、どうですか？」
視線を外に向けたまま、シーラは応えた。
「あなたと同じよ、リィナ。あなたやエルは、私の掛け替えのない友人だもの」
微笑むリィナ。
だが、その口元はすぐに憂いを伴って、視線は斜めに落ちる。
「ディアナさんも……そうですよね？」
「あなたたちほどではないわ」
視線を動かさず、シーラは抑揚のない声でそう答えた。
「……」
リィナは同じように窓の外へ視線を向け。
ポツリと、
「ティース様、遅いですね」
「そうね……きっと」
得も言われぬ重い空気。
シーラはゆっくりと目を閉じた。
「馬鹿な子だわ。本当に……」

ゴッ！！
「くはっ……！」
剣の柄が顎を直撃して男が宙に浮く。
「このっ……！」
「――」
同時に斬りかかってきた男の太刀を円の動きで捌き、細波を絡ませて相手の剣を弾き飛ばすと、右足を振り上げた。
「ぐへっ……」
自らの勢いで、ティースの膝が鳩尾にめり込む。反吐を吐きながら倒れ込んだ男を一瞥すると、ティースは細波の切っ先を残るもう一人の男に向けた。
残った一人は覆面の上からでも人魔の証である尖った耳が見える。
「悪いけど、この子には指一本触れさせない」
細波を相手に向け、ティースは鋭い視線でそう言い放った。
「貴様……ただの講師じゃないな」
人魔の男が緊張感の溢れるくぐもった声でそう言った。
ピシャッ。
返事を待たず、水たまりを弾いて人魔が地面を蹴る。
――普通の人間とは明らかに違う、超人的な速度。
「先生！　危ないッ！！」
背後にディアナの悲痛な叫び声が聞こえた。
が、
（……大丈夫だ。見える）
集中すると、超人的な敵の動きさえもスローに見えた。
風の下位魔だ。今まで彼が対峙してきたタナトスのザヴィアやネイルといった本当の化け物連中に比べれば、何のことはない。
余裕を持って、牽制に放たれた風弾――空気の固まりを弾き、迎え撃つ。

体がカッと熱くなった。
――動く。
「え……っ！？」
おそらくそれなりに実戦を経験してる下位魔が、なんとも間抜けな驚きの声をあげる。
「お前は……まさかデビル――」
言い終わらないうちに、細波の一撃が下位魔の意識を寸断する――

――ザァァァァァ。

カチリ、と、鞘に戻した細波が音を立て、ティースは振り返った。
「先生……」
塀を背に、ディアナは放心した様子で見つめた。驚きに目を見開いたまま、表情が見つからず引きつったような笑み。
「……先生って……すごい人だったんだ……」
「そんなことはないよ」
ティースはそう答え、地面に倒れ伏す三人を見下ろした。
先ほど、そばを通りかかった者に通報を頼んだ。おそらくもう何分もしないうちに警邏隊が駆けつけるだろう。
「コートニーさんを死なせてしまった。最初からこういう可能性を考えていれば、彼女は死ななくて済んだかもしれない」
「それは先生の責任じゃないですよ……お金に目が眩んだあの子が悪いんだもん」
ディアナは泣き笑いのような顔をした。
「ここ数日一緒に帰ってくれてたのは、私を守るため？」
「うん。たぶん、こうなると思ったからね」
「……先生は、優しいなぁ」
ディアナは雨を気にした様子もなく、ゆっくりと塀から離れた。
「いつから気付いてたの？　私がコートニーの仲間だ、って」
ティースは剣の柄から手を離しディアナに歩み寄っていくと、

「確信があったわけじゃないけど……前のアドーラさんの話が引っかかってたんだ。一回生の頃、彼女と君とコートニーさんが仲良かったって話」

「……」

やっぱり、という顔だった。

「その割にどっちも他人みたいに振る舞ってたし、何かあって絶交したのかなってことも考えたんだけど、コートニーさんが例の事件の犯人だってわかったとき、もしかしたらってね。もしかしたらわざと関係ないフリをしてたんじゃないかって」

少し間を置き、歩み寄る足を止める。

「コートニーさんは俺がミューティレイクから来た人間だって知っていたんだ。そのことを知ってる人はそんなにいないはずだし……そういやシーラが襲われたのも、君が偶然屋敷にやってきた翌日のことだった。だから」

頭を掻いてディアナは笑った。

「アドーラの話は何気ないフリで誤魔化したつもりだったんだけどね。コートニーと仲が良かったなんて知ってるの、あの子ぐらいだったのに……ツイてないなぁ」

すぐに手を止め、硬い表情になると視線を落とす。

「……あの子にはただ、先生がミューティレイクの人らしいって教えただけなの。……でも今にして思えば失敗だった。あの子、疑心暗鬼になっちゃって、それで焦ってあんなことを……」

ティースは問いかける。

「君は、どういう風に関わっていたんだ?」

もう逃げられないと悟ったためか、ディアナは素直に答えた。

「最初はコートニーに助言したりしてちょっと報酬をもらってただけだったの。……麻薬なんて使ったこともないし、そのものを触ったこともないし……でも仲間が増えてからは分け前とか売りさばき方とか考えるようになって、いつの間にか一目置かれるようになって。でも、実際に触れるわけじゃないから罪悪感はあんまなかった。

アリエルがあんな風になるまでは……」
ディアナはチラッと地面に倒れる男たちを見て、
「“上”と接点があったのは私とコートニーだけ。だからたぶん、捕まった他の子は命を狙われたりしないと思う」
「そうか」
ティースもそれは心配していた。
それから少し間を置いて、
「……シーラや俺を襲わせたのも君の考えかい？」
「！」
ディアナはハッと顔を上げた。反射的に何事か言いそうになったが、考え直したように口を閉じ、それから力無く視線を落として、
「……シーラや先生のことは、何も知らなかった。失敗したって聞かされて初めて……知ってればそんな馬鹿なことさせなかったし、それにシーラは……友達だもん」
そしてもう一度顔を上げた。
「ね、先生、信じて。私、シーラを危険な目に合わせるようなことは、一度も考えたことない」
ティースは何も答えずに、
「じゃあ、アリエルさんのことは？」
「……」
ディアナは悲痛な面もちで項垂れ、そして呟くように答えた。
「……私の指示じゃない。でも、薄々勘付いてて、でも止めなかった」
「そうか」
あの日、アリエルの葬儀にやってきた彼女の表情が脳裏に蘇る。
おそらくは後悔が彼女に足を運ばせたのだろう。
ディアナは続けた。
「アリエルはコートニーが何か悪いことをしてるって気付いたらしくて。どこでどうやって、どこまで知ってたのか、それは結局わからなかったけど……あの子、とにかくシーラに対抗心燃やしてて、

どうしても仲間が欲しかったらしくて、それをネタにあの子たちを従わせていたの。あたしは先生も知ってのとおり、意識してコートニーと他人のフリをするようにしてたから大丈夫だったけど……」
「たぶん、麻薬だなんて知らなかったんだと思うよ。知ってたら真っ先に通報していたんじゃないかな」
「……」
ディアナの唇が震えた。
大きく息を吐く。
「君は頭のいい子だ。俺に疑われてることも気付いてたんだろ？……でも君は結局、俺やシーラに何もしようとはしなかった」
一拍置いて、
「だから君の言葉は信じるよ」
「！」
ディアナが顔を上げた。
「君のしたことは悪いことだけど、でも、君はそれが悪いことだと理解してる。理解してできっと償える人間だと思うから」
「先生……」
涙顔でディアナはティースを見た。
「もしかすると君の証言があれば背後が明らかになるかもしれない。ちゃんと協力すれば悪いようにはならないはずだ。……君はまだまだ若いんだし、やり直すチャンスはきっとある」
「……ホント？」
「もしそのときが来たら、俺も微力ながら協力させてもらうよ」
ディアナは泣きながら、ホッとしたように笑った。学園でいつも見せていたような笑顔だ。
「先生……シーラにごめんなさいって、伝えてくれる？」
「ああ、言っとく。まぁ、落ち着いたらあいつが直接行くかもしれないけどね」
「……先生は、ホントに優しいね……」
呟くようにそう言うとディアナは素早く顔を寄せ、雨に濡れるテ

ィースの頬にそっとキスをした。
気絶せずに済んだのは、緊張していたからか、あるいはそれがほんの一瞬だったためか――。

「――と、いうわけで」
時は流れ。
……というほど時間が経ったわけではないが、半月に渡った全十三回の護身術の講義もついに最終回。途中、生徒が二人減るというアクシデントがあるにはあったが、講義自体は全て滞り無く終了していた。
「しつこいようだけど、君たちに教えたのは戦う手段じゃなく、いかに身を守り、いかに危険を回避するかということ。その最低限の技術だ」
十二人の生徒の視線が集中している。だが、ようやくそれにもだいぶ慣れ、最初に比べればどもることも少なくなっていた。
「忘れちゃいけないのは、危険はいつも危険だとわかる形で横たわっているわけじゃないということ。危険はとても身近にあって、それはときに誘惑という形で近付いてくる。誰もが欲しがる強い誘惑には多くの危険が付いて回る」
いつもはメモを手元に置いて喋るのだが、今日は用意していない。どうやら必要もないようだ。
「護身術に一番大切なのは心構えだ。技術があっても強い心がなければ使いこなせない。危険を察知しても誘惑に負け自ら近付くようじゃ意味がない。……これは君たちだけじゃなく僕自身の課題でもあるし、目標でもある」
ティースは室内の生徒たちを見渡した。

一呼吸。
そして締めの言葉を口にする。
「短い間でしたが、僕の教えたことが君たちの未来の糧になれば幸いです。――以上で、講義を終わります」
一拍置いて。
拍手がパラパラと沸き起こった。

「――ふぅっ」
講義の終了を学園長に報告し、外に出て大きく息を吐くと、なんともいえない充足感が胸に残る。
最初はどうなることかと思った特別講師の任もこれで終わり。慣れないことで戸惑ったが、案外自分にはこういう仕事も向いているのかもしれないな――などと、ちょっと甘いことを考えながら歩いていると、
「ご苦労様」
「え？　あれ、シーラ――シーラさん？」
学園の中心から出口に伸びる一番大きな並木道の途中で、シーラが彼を待っていた。
「ど、どうしたんだ？」
辺りには下校する生徒たちの姿もちらほらと見える。こんなところで立ち話をしていいのかと思ったが、その疑問の答えは彼女の口から語られた。
「生徒代表よ。偶然私が選ばれただけ」
そう言った彼女の手には小さな花束とメッセージカード。
「本当は講義の終わりに渡す予定だったらしいわ。でも都合でどうしてもギリギリ間に合わなくてね」
「……」
受け取る。小さな花束と、メッセージカードには生徒全員から一言ずつコメントが寄せられている。……ちゃんと十四人分の名前があった。都合というのはおそらくそういうことなのだろう。

「ありがとう」
晴れ晴れとした気持ちでティースはそう言った。
それに釣られたのか。
シーラの顔にも――おそらくは素の――微笑みが浮かぶ。
「よくやったと思うわ。お前には案外向いているのかもしれないわね」
「俺も一瞬そう思ったよ。でも、みんなだってこれから護身術の道を目指すわけじゃないからなぁ。みんなにはみんなの、俺には俺の目指す道があるわけだし」
ティースはそう言って視線を遠くに向ける。
視線の先に、講義を終えた生徒たちが校門に向かって歩いていくのが見えた。
「そんなこと考えたら、やっぱり今年のデビルバスター試験受けてみようって思ったよ。リディアに言われてホントはちょっと迷いがあったんだけど、時間は待ってくれないし、今やれることをやらないで後悔しても遅いんだよなって。……まぁ、受かる受からないは別にして、さ」
シーラは少しの間ティースの顔を見つめたが、すぐに視線を逸らして、
「ホント、先生みたいなこと言うのね」
「“まだ”先生だよ」
笑う。
「でもたまには、こうやって先生をやるのもいいかもなぁ。うん。なんか清々しい」
「……すぐいい気になるんだから」
「ん？　何か言ったか？」
「何でもないわ」
そう言いつつ、シーラも満更でもない表情だった。
――こうしてティースの講師生活は無事に幕を閉じたのである。

その6『前々日』

ぶっちゃけて言うと、彼女の仕事はとても暇だ。

「ふんふんふふふ～～～～ん♪」

まだ日が高いこの時間、手鏡片手に鼻歌でも歌いながら、ほんのちょっとだけ高価な櫛でショートボブの髪を梳かし、さらにのんびりと眼鏡の手入れまで済ませてしまったりしても、彼女の仕事には何ら支障がなかった。

何しろ客らしい客が訪れることなんて日に数える程度しかない。来たところで適当に笑顔でも振りまきながら、それが顔見知りだったなら軽口でも叩いて世間話をしていればそれでいいのである。

そもそも彼女――ネスティアスの受付であるところのアレッタ＝サプレス嬢（二十四歳独身）の家はかなり裕福だしネービス公とのパイプもあって、彼女がこうしてネスティアスの受付に収まっているのも半分いや九割以上はコネだった。

とはいえ、彼女は元来愛想も良く頭も決して悪くはないため、受付嬢として不足があるわけではないのだが――

さて。

「あら？」

そんな彼女が本日三人目の客を視認したのは、日が西に傾きかけてから二時間ほどが経過した頃のこと。長身の割にひょろっとしていてどこか頼りない、やや童顔の青年がどこか遠慮がちに建物に入ってくるのが見えた。

「……」

しばしの思考。

そしてアレッタはポンと手を打つ。

「こんにちは」

怖ず怖ずと挨拶してきた青年に対し、アレッタは仕事用と素の笑

顔を半々に織り交ぜて、
「ティーサイトさん、だったっけ。レイから話は聞いてるわ。……また、うちの候補生と練習試合がしたいのよね」
「あ、はい。よろしくお願いします」
ティースは丁寧にペコリと頭を下げたのだった。

――この二時間前。
ミューティレイク、ディバーナ・ナイトの詰め所。

「くっ……そぉぉぉぉッ！！」
ティースの気合が訓練場に木霊した。
頭は冷静に。
体は燃えるように熱く。
「……」
対峙する少年、パーシヴァル＝ラッセルの表情も真剣そのものだった。目には殺気に至る一歩手前の気配を漂わせ、両手にした柄の長いトンファーを構える。
限りなく実戦に近い組み手。互いの手にした獲物も、彼らが本来使っている武器に模したものだ。
距離が一気に詰まる。
リーチは身長差もあってティースの方が勝っているが、二本のトンファーを使ったパーシヴァルの防御はいつも鉄壁だった。
打ち合う。
舞い散る剣戟。
「おぉぉぉぉぉッ！！」
休む間を与えない連撃。僅かでも鈍れば即座に反撃が飛んでくる。
汗が飛び散り、衝撃に頬が歪む。奥歯を噛みしめ、体の中心に力を込めて足を踏み出していく。
「くっ……」

先に崩れたのはパーシヴァルだった。ついに堪えきれなくなって距離を取ろうとする。
きゅっ！
踵が鳴った。
「！？」
ティースは、ほぼ無意識に反応していた。
「な……っ！」
予想外の速さにパーシヴァルは絶句する。左手のトンファーを合わせていこうとするが、まるで間に合わない。
「くっ……」
「おぉぉぉぉ――ッ！！」
「そこまで！！」
「！」
ピタリ、と、両者の動きが同時に停止した。……乾いた音を立て、トンファーが床の上に転がる。
荒い呼吸音。
ピリピリと張り詰めた空気。
ポタリ、と、パーシヴァルのこめかみから汗が落ちた。……ティースの模造刀はその胸元まで迫っていた。
「三度目の正直だな」
レインハルト＝シュナイダーがそんな二人に歩み寄っていく。
「ティース。お前の勝ちだ」
「勝っ……た……？」
確認するようにティースは彼を見た。
遅れて、喜びが体を駆け抜ける。
「よしっ！！」
思わず飛び出たガッツポーズ。
「……」
対するパーシヴァルは悔しそうに顔を歪め無言でティースから離れていくと、

「くそっ！！」
手にしたタオルを頭からかぶって、どすんとその場に腰を落とした。
ティースはそんな彼の後ろ姿を見送りながらゆっくりと天井を仰ぎ、
「ふぅぅぅ……」
どっと体の力が抜けていった。
レイが言ったように今日三度目の対戦だった。三度目の挑戦でようやくパーシヴァルに一矢報いることができたのだ。
（……って、ダメだな、このぐらいで満足してちゃ）
首を振って自戒する。
もちろん成果は感じていた。ほんの少し前まで十回に一回勝てるかどうかだった相手に、三回に一回というレベルまで迫ったのだ。充分な成長速度だといえるだろう。
が、しかし。
半月後に迫ったデビルバスター試験のことを考えると、そう浮かれてはいられなかった。
（そうだ。できればパースと五分五分ぐらいにまで……）
「……ティースさん」
「ん？」
パーシヴァルがタオルの奥からティースの方を見ていた。
「あとでもう一回。今度は負けないっすよ」
「あ……ああ、望むところだ」
自然と笑みが浮かんだ。
パーシヴァルは本気で悔しがっているようだ。それはつまり、彼が本気で戦って負けたという証拠でもある。
「一回と言わず、二回でも三回でも頼む。今はやればやるだけ強くなってる実感があるんだ」
と、そこへ、
「二人でやる気になってるところ悪いが、それは無理だな」

レイが口を挟んだ。
「ティース。お前にはこの後、場所を変えて続きをやってもらうことになってる」
「え？」
何も聞いてないティースが驚いた顔で見ると、
「お前、受付のアレッタには会ったことがあっただろ？　もう話は通してある」
「へ？　アレッタ、さん？」
聞き覚えのある名前だった。
そして思い当たる。
「……ネスティアスの受付の人？」
「ああ、練習試合さ。やってみたいだろ？」
ニヤリ、とレイは笑った。
「……」
ネービス公の抱えるエリートデビルバスター部隊“ネスティアス”。ティースは以前、そのデビルバスター候補生との練習試合に挑み、まるで歯が立たずコテンパンに打ちのめされたことがある。
あれから半年ほど経っただろうか。しかし、その記憶はまだ彼の中で新しい。
ブルッと体が震えた。
もちろん恐怖ではない。
緊張？　……確かに。半分以上は緊張だろう。
だが、残りの半分は恐怖でも緊張でもない。
（ネスティアスの候補生と練習試合、か）
それは、興奮。
彼はどちらかというと、事実よりも自身を過小評価するタチだ。
だが、そんな彼であっても、最近はある程度の手応えを感じていた。
何より、あの頃とは意識そのものが違う。
当時は強くなることに強迫観念にも似た焦りを感じていた。その

結果、必要以上に体を酷使し、冷静な判断すらもできなくなっていた。

だが、今は違うのだ。

リィナ、エルレーンという昔馴染みとの再会の過程において、まだ漠然としながらも自身の成すべき事の輪郭がぼんやりと見えてきていた。今はそのための階段を一歩ずつ上っている段階だと、はっきり自覚できている。

（もう、一度――）

仕返しなどという気持ちは微塵もない。ただ単純に、今の自分の力を確かめたい。

あるいは再び打ちのめされるかもしれなくとも――

（ヤバイヤバイ。えっと――）

時と場所は戻って。

アレッタは少々慌てながら手元の書類を漁っていた。

レイから話は聞いている――なんて軽々しく口にはしたものの、実のところつい先ほど彼の姿を見るまではスポーンとそのことを忘れていたのである。

とはいえ。もちろん今も奥の鍛錬場では何人ものデビルバスター候補生が戦闘訓練を行っているし、相手がいないというわけではない。ネスティアスとディバーナ・ロウは同じ街のデビルバスター部隊として関わりは深いし、お互いを高めるための練習試合というのもたびたび行っていることである。これには何の問題もない。

が、しかし。

だからといってちょこっと鍛錬場に赴き、誰でもいいから相手してやって――と、そんな風に簡単にはいかない事情もある。

というのも――

（ルーは確かさっき出てったばっかだっけ。カレルさんも今日は出てるはず――……つか、ラドフォードの野郎、こんなときにのんびり休暇なんて取ってんじゃねーよ！）

アレッタ個人の認識で言えば、ネスティアスとディバーナ・ロウの繋がりは、どっちかといえば“面倒事”のイメージの方が強い。

ネスティアスは縦割りの組織だ。実行部隊のトップを占める十人のデビルバスター“ディグリーズ”がそれぞれに部隊を持っており、それを一単位として行動する。正規の隊員から訓練生までほぼ全員がどこかの部隊に所属しているため、練習試合の相手を選ぶにしてもトップであるディグリーズかそれに近い立場の者の承諾が必要となる。

ただ、それも決して誰でも良いというわけではなく――

「……あの？」

「あ、あぁー、ちょっと待っててね。どうぞ、そっちにお掛けになってお待ちください」

怪訝そうなティースの問いかけに、アレッタは顔を上げずに備え付けのベンチを指し示す。

「あ、はい」

不思議そうにしながらも素直に従うティース。

その後ろ姿をチラッと横目で見やると、

（まいったなぁ。よりにもよって面倒なとこしか残ってないや……）

アレッタは気付かれないようにため息を吐いた。

――派閥、だ。

このネスティアスには、大きく分けて三つの派閥が存在し、そのうち二つの派閥は色々な方面で意見を対立させ、色々な場面において様々なことを争っている。

その“様々”の中の一つ、ディバーナ・ロウへの接し方という点で言うと、単純に“親”と“反”、そして“中立”の三つに分けることができる。

壱部隊、ラドフォード＝マティス。

肆部隊、カレル＝ストレンジ。

伍部隊、ルーベン＝バンクロフト。

玖部隊、リゼット＝ガントレット。
この四部隊がいわゆる“親”ディバーナ・ロウ派だ。そして残る六部隊中の四部隊は“反”であり、二部隊は中立および無関心。
当然、面倒事を避けるという意味では“親”派閥から相手を選ぶのがいいのだが、生憎、その四部隊のトップはいずれも不在だった。

せめて中立の二部隊から、と思ったのだが、
（ジャマール爺もいないし、ってことはナイジェル……うわぁ、それはないなぁ……）
片方はやはり不在。そしてもう片方は人間性的にオススメできない人物だった。
「？？」
思い悩むアレッタに、ティースはますます不思議そうだ。
（さて、どーっすかなぁ）
と、そんな彼女のもとへ。
「アレッタ？　どうした？　その男は何者だ？」
「え？」
奥から姿を見せた人影があった。
「あ……」
一見してわかる、他とは違う漆黒の制服はネスティアスのトップ十――つまりディグリーズの一員であることの証。
顔を上げたティースの顔に明らかな緊張が走る。
それとは対称的に、アレッタはホッと安堵の息を吐いていた。
「なんだクインシーじゃない。ちょっと。驚かさないでよね」
「なんだ？　君が勝手に驚いただけじゃないか。失礼な」
クインシーと呼ばれたその男は前髪を軽く掻き上げながらそう言った。
歳は二十歳を少し過ぎたぐらい。背は高くティースほどではないにせよ百八十センチはあるだろうか。どこか気品のある顔立ちで物腰も柔らかい。前髪は少々奇抜で全体を横に流したような形だった。

「あ、でもそっか。あんたならまだマシだな……」
アレッタはピンと閃いたようだ。
「？　何の話だ？」
「いやね。実はこの子……」
アレッタはティースの方を指して、
「ウチの候補生との練習試合を希望してるの。今年のデビルバスター試験を受けるらしくてね。……あ、素性はしっかりしてるから。あたしの知り合いの頼みでね」
「ほう」
クインシーは少々興味深げにティースを見ると、ゆっくりと彼に歩み寄った。
ティースは慌てて立ち上がる。
「ディグリーズの参、クインシー＝フォーチュンだ」
差し出される右手。
（ディグリーズの参……ってことは、トップに近い人だ……）
ディグリーズの参“聖天使”クインシー＝フォーチュン。その名前はティースも何度か聞いたことがあった。
慌ててズボンで手を拭き握手に応えると、
「あ、え、ええっと、俺はティーサイト＝アマルナといいます。よろしくお願いします」
「ティーサイトくん、か。歳は？」
「十九歳です」
「なるほど。……いい目をしているな」
ふっ、と、クインシーの目尻が一瞬だけ緩んだ。
振り返ると、
「わかった、アレッタ。引き受けよう」
アレッタはホッと安堵の息を吐いて、
「お願いね、クインシー」
「ああ。では来たまえ、ティーサイトくん」

「あ、はい」
歩き出したクインシーに付いていこうとするティース。
すれ違いざま、アレッタが耳打ちしてきた。
「……自分がディバーナ・ロウだってこと、できれば言わない方がいいよ」
「え？」
問い返す暇などなく。
ティースは首を傾げながらクインシーの後についていったのだった。

ちょうどその頃、ミューティレイクの屋敷では――

「よぅ、ルーベン。最近よく会うじゃないか」
「レイさん。どうも」
応客室のソファに天然の白髪の少年が座っていた。ディグリーズの一人“白の御子”ことルーベン＝バンクロフトである。
「ウチのボスはもう少し時間がかかるそうだ」
「待ちますよ。子供の使いじゃないですから」
「――失礼します」
ノックの音で入ってきたのは接客を担当するパーラー・メイドの少女だった。
少女はレイがいることに少し戸惑ったような顔を見せたが、
「ああ、俺のことは気にしなくていい」
レイのその言葉に頷き、
「紅茶です。どうぞ。――失礼します」
と、ルーベンの前に紅茶を置いて出ていった。
「……」
「――リィナ＝クライスト。ちょっと前に来た新しい子だ」

「？」
ルーベンが怪訝そうに顔を上げると、
「今、目で追ってただろ？」
「名前なら、もう知ってます」
「ほぅ。手が早いじゃないか」
「それはもう。講師が優秀だったもので」
「なるほど。ディグリーズにはよほど軟派者が多いと見える」
「……」
ルーベンはレイをチラッと見て、それから微かに苦笑した。
「どうせわかってるんでしょ。ちょっと知ってた子に似てると思ったんですよ」
「だろうな」
レイはそれ以上追求せず、ルーベンの向かい――ファナの座る場所に腰を下ろし、頭の後ろで手を組んだ。
「ところで今日、ウチの見習いをそっちにやったんだ。てっきりお前に世話になるものと思ってたんだが……アレッタのヤツから聞いてなかったか？」
ルーベンはちょっと視線を上に向けた。
特徴的な白い髪がパラパラと後ろに流れる。
「ああ……思いっきし初耳です」
「……だと思ったよ」
と、レイは苦笑する。
「今日はカレルさんもライオン頭もいないはずですよ」
「リゼットは？」
「所用でどっかに出てたと思いますけど、今頃はもう帰ってるかな。帰ってたらいいですね」
「なるほど」
レイは可笑しそうに呟いた。
「戻ってなかったら“事故”か」
「いやあ、どうでしょう、五分五分ぐらいかと。チンピラブラザー

ズなら事故でしょうけど、他なら、まぁそうとも限らないというか」

「他ってのは誰のことだ？」

「残ってるのは、ナイジェル＝ローゼンとクインシー＝フォーチュンですよ。知ってのとおりどっちも変人……って、まぁ、ライオン頭とか両刀使いとか、ウチもまともな人間の方が少ないですけど」

レイは鼻で笑って、

「ま、いいさ。仮に門前払いでも喰らったならまた後にすればいい。アレッタのヤツに一つ、貸しもできるしな」

ルーベンは少し考えて、

「見習いってのは、ティーサイト＝アマルナさんのことですか？」

「知ってたのか？」

「ええ。以前、ネアンスフィアの事件のときに少し。直接話してはいませんけどね」

「ああ、お前らに世話になったんだったか」

レイは思い出した顔をして、

「そういや誰かが言ってた。ティースのヤツを見てると、お前のことを思い出す、ってな」

「……」

ルーベンは少し視線を泳がせてから、

「なら今頃、ネスティアスの訓練生をそれはもうコテンパンに伸してるに違いない。ええ、そうに違いない」

レイは笑った。

冗談に対する笑いではなく。

もっと意味ありげに。

「賭けでもするか？」

「……」

ルーベンは微かに眉を動かした。

……言うまでもないことだが、ネスティアスの訓練生は大陸各地にいる同じデビルバスター候補生の中でも明らかにレベルが高い。

当然だ。ネービス公の援助のもと、毎日高いレベルの指導を受け、デビルバスターとして必要な要素の全てを叩き込まれるのだから。

ディバーナ・ロウのそれと比べても、遙かに上。

しかし、それはあくまで平均値の話だ。全てが全て上回るなどということはない。それはルーベンもよくわかっていて、

「やめときます。あなたのはほとんど詐欺ですから。結果、わかってるんでしょ？」

そう答えた。

ティーサイト＝アマルナは以前、ネスティアスの訓練生に同じように挑み、そして目も当てられない惨敗を喫した。

今回は二度目の挑戦。

時期は――デビルバスター試験を間近に控えたこの時。

そんな大事なときに、このレインハルト＝シュナイダーという人物が、練習試合とはいえ勝ち目のない人間を送り出すとはとても思えなかった。

「そうか」

レイは薄く笑った。

「大したことはないさ。パースのヤツと十回やって三回勝てりゃいい方だ」

「パース？　……パーシヴァル＝ラッセルに十回中三回？」

ルーベンは呆れてため息を吐いた。

「いよいよひどい人だ、あなたは。ウチの訓練生があいつとやって何回勝てるか――」

そのときカチャッとドアが開き、ルーベンは言葉を切ってすぐに腰を上げた。

入ってきたのは屋敷の主人ファナ＝ミューティレイクと執事兼ボディガードのイングヴェイ＝イグレシウス――アオイだ。

ファナの表情が綻ぶ。

「ルーさん。ようこそいらっしゃいました」

対し、ルーベンは深々と頭を下げて、

「ご無沙汰してます、ファナさん。御健勝のようで何よりです」
「あら。またその言葉遣いですの？」
「……」
ルーベンは頭を下げたまま動かなかった。
「姫」
「ええ」
アオイに促され、ファナは頷いて彼の向かい――レイはとっくに席を空けていた――へ腰を下ろす。
「じゃ、俺は退散するとしようか」
「いえ、レイさん。レイさんもそちらへ」
レイは怪訝な顔をして、
「なにかあるのか？」
「今日のお話はレイさんにも関係のあることですわ。……ルーさん。お願いします」
「はい」
ルーベンは腰を下ろし、レイを見て、ファナを見た。
「最近、タナトスに少々不審な動きが見られる……そんな情報がウチに入ってきているようです」
「不審な動き？」
「ええ。……みなさんもご存じの、学園群で起きた麻薬事件。アレ、どうもタナトスの一員が一枚噛んでいたようで」
「……」
レイは無言で腰を下ろした。

（この青年――）
その光景に、クインシー＝フォーチュンは目を見張った。
「そ、それまで！！」
訓練場に響く審判役の声。

クインシーの目の前には項垂れるネスティアスの若い訓練生と、どこか驚いたような顔で立ち尽くす青年がいた。

勝敗が決したのは誰の目にも明らかだ。誰もが一瞬静まり返ったのは、その結果が予想の真逆だったことと、そしてそこに至る経緯があまりにも鮮やかすぎるせいだろう。

「あ、えっと……」

ぽかんとした青年――ティースの顔に勝った喜びらしきものは微塵も感じられない。それほどにその勝負はアッサリしすぎていた。いや、もっと言うならば――“勝負”になっていなかった。

「……」

結果がその逆であればクインシーもそうは驚かなかっただろう。ネスティアスの訓練生は個々の違いこそあれトータルでいえば非常にレベルが高いといえるし、今回相手に選んだのも、トップクラスにはほど遠いとはいえ、それなりに見所のある訓練生の一人だ。

クインシーは認識を改めた。

そこにいるティースという青年が、どうやらネスティアスの訓練生でいえばトップクラスの実力の持ち主であるらしい、と。

「見事だ、ティーサイトくん」

手を二度、三度と叩きながら歩み寄っていく。

「あ、はい……」

なんとも頼りない反応。

クインシーは興味深い目をしながら横に流した前髪を右手で軽く掻き上げ、チラッと敗北した訓練生を見るとティースに尋ねた。

「ティーサイトくん。彼の剣はどうだった?」

「え?　えっと……」

少し考えて、ティースは正直に答えた。

「そ、そうですね。どことなく荒いっていうか、無駄が多いっていうか……あ、いや!　でも太刀筋は鋭かったし、捌き方も――」

「なるほど、ありがとう」

クインシーは口元を緩めると、もう一度、訓練生の方を見て言い

放った。
「慢心するから、そうなる。貴様は基礎クラスから出直しだ」
「……」
訓練生はガックリと項垂れた。が、自分の不甲斐なさを自覚しているのか反論する気配はない。
クインシーはティースに向き直ると、
「ところで聞いてなかったな。……いや、正直言うと今の戦い振りを見て興味が沸いてきた。――君は一体どこの者だ？　誰に師事している？」
「え……」
ティースはドキッとした。
“ディバーナ・ロウであることは言わない方がいい”
アレッタに言われたその言葉が脳裏を過ぎる。……彼はネスティアスとディバーナ・ロウの関係など何にも知らない。いや、知らないというより、同じ街の同じデビルバスター部隊、当然仲間であり、掛け値無しの友好関係にあると思っていた。
だからほんの少しだけ少し迷った後、正直に答えたのだ。
「ディバーナ・ロウです。今は主にレインハルト＝シュナイダーさんに教わっています」
その途端、辺りがざわついた。
少しだけ、極端に。
（……え？）
それはもちろんティースにも伝わった。
理由はわからない。
だが、
「ディバーナ・ロウ……？」
直後、僅かに強張ったクインシーの表情から、ティースはアレッタの言葉の意味をほんの少しだけ肌で感じることができていた。
が、それでも。その変化の意味まではわかるはずもなく、
「クインシーさん？」

クインシーの瞳の奥で困惑のようなものが交錯していた。
やがて、
「……なるほど。アレッタめ。言い忘れたわけではなかったか」
「え？」
クインシーはティースに視線を合わせ、一歩、歩み寄った。
その瞬間、
「っ……！」
急速に迸る威圧感。
そこに先ほどまでの友好的な雰囲気はなく。
「しかし正直に答えたということは、何も知らないということだろうな。……ならば」
そしてクインシーは目を細め、驚くべき言葉を口にした。
「ウチに来ないか、ティーサイトくん」
「……え？」
ティースは目を丸くする。
クインシーは気にせず続けた。
「ディバーナ・ロウを抜けて、ウチに来ないかと言ったのだ。君には見所がある。素質が感じられる」
「……」
「私に付いてくれば、必ずデビルバスターとして君を大成させよう。必ず、だ」
ティースは驚いてクインシーを見つめ返した。
何を言っているのか瞬時には理解できなかった。
（ウチ？　ウチって……？　付いてこいって……え、まさか――）
“引き抜き”
ようやくその言葉が頭を過ぎったのはたっぷり十秒以上の時間が経ってから。
……それもそうだろう。そもそもこのティースという男、基本的に自分を過小評価する傾向にある。そんな彼がいきなり、ネービス最強のデビルバスター部隊、そのトップ十に君臨する男から部隊に

誘われたというのだから、戸惑うのも当たり前のことだ。
しかし、クインシーの顔はどう見ても冗談ではない。彼は本気でティースの素質を評価し、本気で勧誘している。
そのぐらいのことはティースにもわかった。
本気だ。
本気で自分を欲しがっているのだ、と。
「君のような人材をディバーナ・ロウに埋もれさせるのは惜しい」
ティースが返す言葉を探しているうちに、クインシーは立て続けに言った。
「そもそも君は、あのディバーナ・ロウの本当の目的をまだ知らないようだ。ならばなおさら、ウチに来るべきだ」
「え？　……本当の目的？」
何のことかティースにはわからなかった。
クインシーは続けた。
表向きは冷静に、だがその内には確かな熱を秘めて。
「今のうちだ、ティーサイトくん。……私のところへ来い。その方がいい。今のうちにディバーナ・ロウを抜けなければ、きっと取り返しのつかないことに――」
と。
「クインシー」
「！」
彼の言葉を遮るように、少しハスキーな声が訓練場に響き渡った。
コツ、コツと軽快な足音が響く。
クインシーの振り返った先――ティースの視線の先には、見覚えのある人物が立っていた。
「イケないナァ。そうやって言葉巧みにウブな若者を誑かそうとしちゃ」
黒い制服――ディグリーズの証。その肩には“玖”の文字。
リゼット＝ガントレット。

“月神”の異名を持つディグリーズの一員で、ティースは以前に少しだけ言葉を交わしたことがあった。

「リゼット……」

クインシーの呟きにリゼットは微笑みを浮かべる。……その笑みがどこか倒錯的に感じるのは、彼の装い、仕草、声……その他諸々が男装の麗人、あるいは女形のような雰囲気を纏っているからだろう。ネービスの国教であるミーカール教において月の神は両性具有の神とされており、そう考えるとなるほど“月神”とは彼にピッタリの称号だと思えた。

「どうせ誑かすなら女の子の方がいいんじゃないかな。いくらそうやって配下を増やしたところで、彼らは誰も君をキモチ良くしてくれないよ？」

「……」

クインシーは何も答えずに視線を横に逸らすと、

「誑かすなどと人聞きの悪い。私は彼に正しい道を示そうとしたまでだ」

「正しい道、ね」

リゼットはクスッと笑って言った。

「そんなヘンな髪型の人に言われても説得力ないな、なんか」

「……」

クインシーは咄嗟に髪――真横に流した前髪に手を触れると反論した。

「なにを言うのだ、リゼット。よく見ろ、風もないのになびくこの髪を。これが今後のトレンドだと何故気付かん」

リゼットはため息を吐くと、

「君のセンスの悪さは薄々気付いてたけど、ここまでとは思ってなかったよ」

「……」

何やら妙なことになってきたぞ、と、ティースは少々困りつつそんな二人のやり取りを眺める。……訓練生たちの姿がいつの間にか

消えていることには気付かなかった。
クインシーはリゼットの頭を指して、
「貴様こそなんだ、その髪型は」
「え、僕の髪は普通じゃない。ねぇ、ティースくん？」
「へ？」
いきなり話を振られて固まってしまった。リゼットはどうやら以前一度会っただけのティースをよく覚えていたらしい。
ティースは少々たじろぎながらも、
「ふ、普通だと、思いますけど……」
そう答える。
実際、リゼットの髪は耳が半分隠れる程度の金髪を自然に後ろに流したもので、特別お洒落というわけではないが、クインシーほど奇抜でもなかった。
「ありがと、ティースくん。……ちゅっ」
ウインクと同時に投げキッスが飛んでくる。一瞬ドキッとしてしまったティースだが、彼がもし男だったらと考えると今度は寒気がした。
それからクインシーに向き直って、
「ほらね。ティースくんも君の髪型がヘンだって」
「え！？　言ってな――」
「……貴様」
地から響くような声にティースはドキッとしたが、幸いその言葉が向けられた先は彼ではなくリゼットだった。
「貴様には言われたくない。――未だ、他人の背中を追いかけることしか能のない貴様には、な」
「……」
空気が変わった。
リゼットの言葉も微かに低くなる。
「……別にそういうつもりはないよ。髪型が似ちゃったのもただの偶然。でも……君はもう、追いついたつもりなんだ？」

「追いついたのではない。追い越したのだ、リゼット。とっくの昔に、な」
そこで交わされたのはティースには理解のできない内容の会話。
だが、異変にはすぐに気付いた。
空気が沈み込む。
重く、重く。
危険だ。
――何が？
いや。
（っ……！？）
気付く前に、体が勝手に後ずさっていた。
その場に満ちる、得体の知れない威圧感に気圧されて。
「じゃあ……せっかくだし、久々に見せてもらおうかな」
リゼットの頬に微笑が浮かぶ。
――先ほどのものとは明らかに質が違っていた。挑発的な笑み。
「僕が審査してあげるよ。君が本当に、言うほど強いのかどうか」
「……」
リゼットの挑発に、クインシーは微かに躊躇を見せた――ようにティースの目には映った。が、次の瞬間にはゆっくりと腰の獲物に手をかける。
……訓練用の武器ではない。おそらく彼がいつも使っている武器だ。
「いいだろう。リゼット。そうすれば貴様も認めざるを得まい。この私の言葉を」
「ふふ……」
リゼットはチラリとティースを見た。
「いい子だから下がっててね。ティースくん。あとでアメ玉あげるから」
「え？　ちょっ、ちょっと――」
忘れ去られていなかったのは彼にとって幸いで、その場の空気は

すでに“アメ玉”に突っ込む余裕もないほどに張り詰めていた。
先に武器を抜いたのはクインシーの方だ。鞘から抜いたのはオーソドックスな中サイズの両刃剣。鍔が二重の輪になっている以外はごく普通だが、刀身がほんの微かに発光しているように見えた。
（あれは、アオイさんのと似た光……）
ディグリーズであれば当然というべきか、おそらく普通の破魔具ではない。光属性の魔力を秘めた神具だろう。
対するリゼットはクインシーのものと比べると幅も長さも一回り大きい、やはり両刃の剣だった。細身の彼には少々身に余っているようにティースには思えたが、持ち主のレベルを考えれば大した問題ではないのかもしれない。
――動く。
「！」
一、三、七、十撃――
（っ、速い……！！）
一つ一つを数えることが不可能なほどの打ち合いが繰り広げられ、ティースは身の危険を感じてさらに後ずさった。
「！」
すぐに背が壁にぶつかる。
（……すごい）
迫り来る竜巻を眼前にしたかのような、そんな圧迫感。
目の前で繰り広げられる常人を遙かに超えた競り合いに、じわじわと胸に恐怖心が沸き起こってきた。
……大丈夫。彼らはティースの存在を忘れているわけではないから危害が及ぶことは考えられない。だから大丈夫。
理性ではそう感じていながら、恐怖は消えない。
そして、
ドクン……っ！
同時に、その奥底で。
微かに沸き起こる、マグマのような熱情。

（なんだ、これ……）
……ざっ！
数え切れないほど打ち合った後、二人の間合いが開いた。
空気が張り詰める。
リゼットは手にした剣でくるっと円を描くと、言い放った。
「廻って巡れ――“玉兎（たまうさぎ）”」
「！」
きぃぃ……ん、と甲高い音がして、リゼットの持つ剣の刀身が少しずつ黒ずんでいく。
「残影“十六夜”の型――」
リゼットが床を蹴った。
クインシーの視線が鋭さを増して。
再び、打ち合う。
「……？」
一見、先ほどまでと何も変わっていない。
いや、
（クインシーさんが少し押されてる……？）
さっきまで余裕のあった（少なくともティースにはそう見えていた）クインシーの反応が、明らかに先ほどまでと変わっていた。
鈍くなっている。……いや鈍くなっているというより、迷いが産まれていると言った方がより正確だろうか。
何故、と、考えて、ティースは目を見張った。
（あれは……？）
リゼットの剣がおかしい。
（二本……？　いや――）
目をこらすと、刀身が二本に見えた。だが、手にしている剣は確かに一本。速すぎて残像が見えているのかとも思ったが、ほぼ同じ速さで動くクインシーの剣は普通に見える。
（さっきの力……あれが何か――？）
正体はわからない。だが、間違いないだろう。何かしらの“能力

”なのだ。
「っ……！」
たまらずクインシーが間合いを広げた。
リゼットは追いかけない。追いかけず、再びくるっと円を描いた。
「当たると大怪我するよ、クインシー」
「！」
「――飛閃“三日月”の型」
リゼットはそう呟き、その場で一太刀振るった。
どう見ても届いていない。
が、
「！？」
ティースは目を見張った。
振るった剣の軌跡が宙で型を成し、空気を切り裂きながら飛んだのだ。……それも一撃だけではない。二撃、三撃――リゼットの斬撃に合わせ、近距離にいるのと大差のない鋭く速い斬撃がクインシーを目掛け飛んでいく。
「ち……」
クインシーは足を止め、それらを打ち払っていく。
（これじゃ近付くこともできない……）
ごくりと喉が鳴った。
手が汗ばむ。
左手はいつの間にか腰の細波を震えるほど力強く握っていた。
（どうするんだ……？）
彼がこのままで終わるとは思えなかった。その漆黒の制服に刻まれた数はリゼットよりも格上。であれば、ここまで一方的に打ち負けるはずがない。
必ず反撃するだろう。
……見たい。
そのときティースの心の中に、確かにそんな欲求が生まれていた。

遙か雲の上にいる、彼らの実力をその目で見届けたい、と。
「リゼット……」
瞬間。
背中を戦慄が駆け抜ける。
クインシーが本気になった。――ティースは漠然とそう感じた。
「！」
振るった剣で、飛ぶ斬撃が四散する。
そのまま、切っ先をリゼットへ向けた。
「貴様こそヘマをするなよ。……死ぬぞ」
「――」
リゼットの斬撃が止まった。その“気配”を感じたのか微かに表情を強張らせ、再びその手の剣“玉兎”をくるっと回転させる。
クインシーの視線がリゼットを射抜いた。そっと左手を刀身に添える。
「裁きの光……迸れ“天輪”――」
「奥義――“望月”の型――」
衝撃が、訓練場に満ちた。

「――どうした、ティース？　自分の剣をジッと見つめて」
その日の夜。
屋敷一階のホールで一人考え込んでいたティースの元に、麦酒の杯を手にしたレイがやってきた。
「あ、レイさん。いや、ちょっと……」
「リゼットとクインシーの戦いに当てられたか？」
「そんなとこです」

ティースは正直にそう答えた。
レイが正面に腰を下ろす。
この時間、使用人たちはほぼ仕事を終え、自宅、あるいは寮の方へ帰っている。今、この建物にいるのは一部の使用人とティースたち客人扱いの者のみだ。
ティースは顔を上げて質問した。
「レイさんも確か……“夜叉”でしたっけ。不思議な力の武器を持ってるんですよね」
「ん？　ああ」
腰にぶら下げた二本の曲刀を軽く手で撫でる。それからニヤッとティースを見ると、
「考えなくていい」
「え？」
「結論から言うと、可能だが……なんだ？　要するに、そういう不思議な技が自分にもできないものかと考えてたんだろ？」
「え……あ、ええ、その通りです」
あっさりと見抜かれていたようだ。
レイは麦酒を一口、二口と呑んで続けた。
「魔の連中が使うヤツと違って、こいつらの力ってのはあくまで補助的だ。制約が多くて見た目ほど使い勝手のいいもんじゃない」
「制約？」
「いずれわかる。まずはそんなものナシで戦えるようになることだな」
「はあ……」
ティースはテーブルの上に視線を落とす。
見とれるほど美しい“細波”の刀身が照明を反射して輝いていた。
「ところで」
レイは再び杯を傾けて話題を変えた。
「お前、試験の同行者のことはもう聞いたか？」

「え？　同行者？」
「ああ。試験の会場である帝都ヴォルテストまでは結構な長旅だから、コンディション維持と安全確保のサポート役として同行者が付いていく。今年はお前とパーシヴァルの他に四人の予定だ」
「へ？　コンディション維持と安全確保ってったって……馬車に乗って行くだけですよね？」
　このネービスからデビルバスター試験会場のあるヴォルテスト領の帝都までは五つの領土を横断し、アクシデントがない限りはおよそ二十日間の行程だ。デビルバスター試験の受付締切は五月の末日で、ティースたちはその二十五日前……明後日にここを発つことになっている。
　レイは笑って、
「過保護だとは思うが、その程度で少しでもリスクを減らせるなら安いってことさ。ウチにとっちゃお前もパースも貴重な人材だからな」
「へぇ」
　至れり尽くせりだなぁ、などと、半ば他人事のようにティースは感じていた。
　もちろんその時点で、その“何でもない”はずの行程にアクシデントが生じることなど推測できたはずもなく。
　そしていよいよデビルバスター試験、出発の前日を迎えるのだった。

その7『六人』

今年、ディバーナ・ロウからは二名がデビルバスター試験を受験する。

また、彼らのサポート役としてディバーナ・ロウ、ミューティレイク家から四人が同行し、合計六人が試験会場である帝都ヴォルテストへ向かうことになっていた。

北方にあるこのネービスから、大陸のほぼ中央に位置する帝都ヴォルテストまでは、主となる街道を馬車で片道およそ二十日の行程。さらに試験そのものが半月にも渡って行われるため、再びこのネービスに戻ってくるのは約二ヶ月後だ。

さて、その六人の中の一人、パーシヴァル＝ラッセルはティースとともに試験を受験するデビルバスター候補生である。

人生なんてわからないものだ。

パーシヴァルは現在十六歳で一応大人として認められる年齢ではあるが、まだ人生を振り返るほどの歳ではない。

しかし、彼は思うのだ。

人生なんてわからない。この自分がデビルバスター試験を受けることになるなどとは……三年前の知り合いはきっと誰一人として想像できなかっただろう、と。

彼はこのネービスの中でもほんの一握りの貧困層の家に産まれた。

十ヶ月年上の兄は二歳のとき肺炎で命を落とし（もちろんその記憶など彼にはない）四つ年下の妹は彼が九歳のとき、自宅そばの壊れた古い排水坑に誤って転落し命を落とした。

そして父親は、そのときのほんの僅かな見舞金を持って姿を消してしまった。

しかしまぁ不幸中の幸い。母親には親切な知人が多く、パーシヴ

ァルは彼らの力を借りてどうにか無事に成長していった。
しかし十歳になった頃。どこでどう間違ったのかあまり質の良くない友人ができると、それからの三年はズルズルと引きずられるまま悪事に手を染めるようになる。
ディバーナ・ロウに拾われたのは、本当に後戻りできなくなる一歩手前だった。
引き返すことができたのは彼自身の本質が正しい方向を向いていたためだろうが、結果として悪事を行ってきたことは間違いなく、そのことは今も忘れていない。
運が良かったのは、彼を拾ったのがこのディバーナ・ロウだったということ。ここには彼と似たような境遇の人間がたくさんいて、まともな素性の人間を探すのに苦労するぐらいだ。
相談できる相手もいたし、彼を理解してくれる人間もたくさんいた。
だから、彼はここまで来ることができた。
恩を返したい。
似た境遇の仲間たちと同じように。

「……ふぅ」
朝の涼しい空気がパーシヴァルの全身を満たす。
緊張するにはまだ早い。試験は一ヶ月近くも先のことだ。
しかし――やはり緊張する。
「……もうちょっとやっとくかな」
と、パーシヴァルがストレッチを再開したところへ、
「パースくん」
「ん？　あ、よぅ、フィリス」
彼の元へやってきたのは、ここの当主であるファナ＝ミューティレイクの侍女の一人であり、ディバーナ・ロウの仲間でもあるフィリス＝ディクターだった。
子羊を思わせる外見のこの少女は彼より半年ほど年下だが、ミュ

ーティレイクでは一ヶ月ほど先輩であり、そして彼が一番最初に打ち解けた相手だ。……というより、彼女がいたおかげですんなりここに溶け込めた、そう言った方がより正確だろうか。

そういう意味でパーシヴァルにとっての彼女は恩人であり、友人であり……そして本人は顔を真っ赤にして否定するが思い人でもあった。自称“硬派”の彼はまだその想いを伝えてはいないが、知らぬは当事者ばかりなり、という状態である。

「いよいよ明日出発だね。パースくん。体調は万全？」

「完璧に決まってるだろ？」

パーシヴァルがそう言って力こぶを作って見せると、フィリスは笑顔になった。

「良かった。お母さんにはちゃんと報告した？」

「半年ぐらい前からもう言ってあるよ。あの人は心配性だから早めに言っておく方がいいんだ」

「じゃあ安心だね。……しばらく見ててもいい？」

「ん？　ああ……別にいいけど」

フィリスはスカートをうまくたたんで庭石の上に腰を下ろした。パーシヴァルは彼女に背を向け、ストレッチを続ける。

「……」

「……」

しばらく無言だった。パーシヴァルは時折気になって後ろの彼女の様子を窺ってみるのだが、彼女の方は邪魔したくないとの思いからか一言も喋ろうとしない。

「……なぁ、フィリス」

やがてパーシヴァルは振り返って、

「なんか黙られるとかえって気になる」

「えっ、あ、ごめんなさい……」

申し訳なさそうなフィリス。

「いや、謝んなくてもいいけど……なんか面白い話とかない？」

「お、面白い話？　え、ええっと」

フィリスはあたふたしながら、
「じゃ、じゃあ、詰め所の屋根の下に巣を作ってるスズメの話とか、どう？」
「スズメ？　詰め所ってファントムのか？」
あまり面白くなさそうだとは思ったが、パーシヴァルはストレッチを再開しながら話の先を促すことにした。
「うん。南側の窓のひさしのところに、いつの間にかね、巣を作ってたの」
「へぇ」
下手したらそれで会話終了かなとパーシヴァルは思ったが、幸い彼女の話には続きがあった。
「それで……それで私、昨日気付いたら嬉しくなって、すぐにその話をドロシーさんにしたの。そしたら――」
フィリスの眉間に少し皺が寄る。
「ドロシーさんったらいきなりその巣をナイフで打ち落とそうとしたの」
「へ？」
思わぬ急展開だ。
「だから私、びっくりして必死に止めたの。それで、なんでそんなことするんですかって聞いたら、なんて言ったと思う？」
「なんて言ったんだ？」
さらに眉間に皺が寄る。
「スズメの味が懐かしくなって、つい、って」
「……ああ、でも」
パーシヴァルは真面目な顔で返した。
「スズメってあれで結構美味いんだぜ。サイズ的にちょっと物足りないんだけど味はなかなか――」
ピタリ、と、パーシヴァルの口が止まる。
「……パースくん……」
「あ……いや、別にそのスズメを取って喰おうとかそういうことじ

ゃなくて――っていうか、聞いた話だよ、聞いた話！」
慌てて弁解する。
「……パースくんは食べたことないの？」
「ないよ！　あるわけない！」
嘘である。確かにここネービスでは一般的にスズメを食用とする風習はないが、それはあくまで一般の話。スズメを食べることを規制する法などもちろんないし、彼は何度か野生のスズメを食べたことがあった。
しかしここはまぁ、彼女の悲しそうな顔を見せられてしまっては、咄嗟に嘘をついてしまった彼を責めることはできないだろう。
するとフィリスは言った。
「そうなんだ……私はね、昔、お父さんに騙されて食べたことあるんだ」
「……え、あ、そうなのか」
ちょっと気の抜けた声を出してしまう。
「うん。それがショックでね、私、今でも鶏肉が食べられないの」
そう言ってから彼女はホッと息を吐いて、
「でもよかった。そうだよね、スズメは食べるものじゃないよね」
「あ……ああ、うん、そうだよな」
何となく後ろ暗い気持ちながら、パーシヴァルはそう言って頷くしかなかったのである。
午前五時半。
使用人たちは朝食を含めた一日の準備に忙しくしている。その他の人々もそろそろ起きてくる時間だろうか。
「……じゃあ、邪魔しちゃ悪いからそろそろ行くね」
フィリスがポンポンと裾を払いながら立ち上がった。
ディバーナ・ファントムの隊員であるとともに屋敷のレディズ・メイドでもある彼女は通常屋敷の制服を着ているのだが、今日は珍しく私服だ。あるいは今日そっちの仕事は休みなのかもしれない。
「え、もう行くのか？」

パーシヴァルは少々拍子抜けした。
明日から二ヶ月も会えなくなるのだし、彼としてはもっと名残惜しむというか“気を付けて”とか“淋しくなるね”の一言でも期待していたのである。
しかし、
「え？　何かあった？」
などと、不思議そうに返されては、自称“硬派”の彼としてはそれ以上どうすることもできず。
「あ……いや、別に。えっと、なんだ。元気でな」
そう言うのが精一杯である。
するとフィリスはきょとんとした顔で、
「元気で、って？」
「いや、ほら……二ヶ月ぐらい戻ってこないから。いや、お前には別に関係ないことだろうけど……」
ふてくされているのを悟られないようにしながらも微妙に隠しきれていないという、第三者から見るとなんとも微笑ましい態度のパーシヴァルに、フィリスはますます不思議そうになって言った。
「え？　でも私も一緒に行くんだよね？」
「……え？」
パーシヴァルは間抜けな顔をした。
「あ、あれ？　私の聞き間違いじゃないよね？　私、一昨日、執事様にそう言われて準備していたんだけど……」
「……」
完全に初耳だった。いや、確かに同行者が付くことは知っていた。アクアのときは先ほどの話に出てきたドロシーとダリアの双子姉妹が付いていったらしいし、レアスのときもやはり何人か同行したと聞いている。
「でもファントムの活動はどうするんだ？　二ヶ月間も活動停止するわけじゃないだろ？」
「パースくんとティース様の抜ける二ヶ月間は隊を再編成して当た

るんだって。ナイトだってパースくんが抜けたまま活動するわけにはいかないでしょ？」

「あ、言われてみりゃそっか。……」

パーシヴァルは頭をポリポリと掻きながら、

「ん……まあ、そんじゃよろしくな。準備とかできてるのか？　忘れ物すんなよ？」

「うん、大丈夫。パースくんこそちゃんと荷物チェックしないとダメだからね」

「ああ、わかってる。ってか、付いてくるのってお前だけじゃないよな？　ティースさんもいるんだし……他には誰が来るんだ？」

パーシヴァルの問いかけに、フィリスはちょっと視線を上に向けて答えた。

「えっとね、確か――」

一にコンディションの維持、二に身の回りの世話、三に安全のための護衛。

フィリス＝ディクターがこのうちの一と二を兼ねて選ばれたのだとすれば、パメラ＝レーヴィットが選ばれたのは二番目の役割をメインで張るためである。

「パメラちゃん、おめでとーーどんどんひゅーひゅーぱふぱふーー」

「やめてってば、ヴァレンシア」

使用人寮で同室の先輩、ヴァレンシア＝キッチンの祝福にパメラは心の底から迷惑そうな表情を浮かべた。

ご存じの方もいるかと思うが、彼女、パメラ＝レーヴィットはミューティレイクのハウス・メイドの一人であり、毎日の客室掃除ではティースの部屋の担当もしている、二本の短い三つ編みとそばかすがトレードマークの十五歳の少女だ。

「ありゃ。嬉しくないのかぃ？」
時刻は午前十一時。パメラは明日以降の準備のため今日一日の仕事を免除されていた。
ちなみにヴァレンシアは先ほど交代制の昼休み（本日一番乗り）を利用して戻ってきたところである。
「なに言ってるの。嬉しいとかじゃなくて大事なお仕事でしょ。浮かれる理由がないじゃない」
「なにをおっしゃるウサギさん」
荷物を準備するパメラの前、ベッドの上に腰掛けたヴァレンシアはチッチッと人差し指を横に振って、
「二ヶ月も一緒に旅をするのよ？　そしたらもう、やることは決まってるっしょ」
「なに？」
パメラが怪訝そうな顔で聞くと、ヴァレンシアはわざとらしく声を潜めた。
「この際どっちでもいいからモノにしてきなさい」
「……ヴァレンシア」
「あ、なんかすごい顔。の割に赤くなってるところが、カ・ワ・イ・イ」
「馬鹿なこと言わないでってば、もう……」
顔が赤くなっている自覚はあったので、パメラは荷物を詰め込むフリをして顔を伏せた。
だがヴァレンシアはニヤニヤしながら、
「別に馬鹿なことじゃないと思うけどなー。パースのヤツだってもし受かったらいいよデビルバスターよ。下手すりゃパーシヴァル様よ。高収入よ。玉の輿よ。悠々自適で豪遊し放題の奥様ライフよ」
「なんだかよくわかんないけど……パースさんはフィリスのことが好きだってもっぱらの噂じゃない」
手早く荷物を詰めていく。
「ああ、そっか。ならティース様でいいっしょ」

「……ちょっとヴァレンシア」
パメラは手を止め、眉をひそめて顔をあげた。
「見た目が頼りなさそうだからみんな色々言うけど、ティース様はとても立派な方なんだから。そういう言い方ってないと思う」
「別にダメだなんて一言も言ってないじゃん」
「まあ……そうだけど、でも……」
ヴァレンシアの言うとおり、ティースの評判は決して悪いわけではない。しかし毎日顔を合わせて言葉を交わしているパメラの立場からすると、見た目のせいか態度のせいか、どうにも不当な評価を受けているような気がして、それが常日頃から納得いかないのである。
「でもほら、中身とかはともかくさ。見た目ならパースの方が間違いなく上っしょ」
「……そうかなぁ。そりゃパースさんはカッコいいけど……」
納得いかない。いや、確かにパーシヴァルは屋敷でも指折りの美少年だ。単純に比較すれば彼の方がカッコいいに決まっているし、多数決を取れば九割以上は彼に軍配を上げるに違いないだろう。残りの一割弱も残念ながら“ティースカッコいい派”ではなく、まるで興味がない者を含めた“どちらともいえない派”であるが、パメラはこの一割弱の住人の中でもかなりティースびいきの評価だ。もちろん毎日顔を合わせていて親しいというひいき目込みで、だが。
「……ともかく」
ポン、と、最後の荷物を鞄の中にしまい込んで、パメラは目の前の少女を見上げる。
「そんなこと言ってないで。ヴァレンシア。私がいない間、エレンのことお願いね」
「それはもぅ！」
ヴァレンシアは力強く頷いて、
「このヴァレンシアさんにお任せなさい！　なんたって同室のカワイイ後輩だもの、徹底的に面倒見てあげちゃうわ！」

「じゃなくて」
気合の入るヴァレンシアに、パメラはごくごく冷静に返した。
「何もしなくていいから。……お願いだから何もしないであげて」
「ええ！　な、何故に！？」
オーバーリアクションで抗議の意を示すヴァレンシア。
パメラはため息を吐いて、
「私がいないんだから止める人がいないでしょ。あなたの巻き添えであの子までアマベル様に叱られたら可哀想じゃない」
「むー仕方ないなぁ」
ヴァレンシアは困った顔で首をひねって、
「あ、でもアレだよね？　寝てる間に顔にラクガキするのはセーフだよね？」
「アウト」
「えー。だったらお下げを引っ張ってお馬さんドウドウごっこは？」
「アウトだってば」
「エエー。じゃあじゃあ顔洗ってるところでタオル隠して水も滴るいい女ごっことか髪飾りをあの子のギリギリ届かないところに置いて高い高いごっことかも――」
「ア・ウ・ト！　……アマベル様に言いつけてくる」
「わ、待って、冗談冗談！　ヤだなぁ、パメラちゃんってば、もう！」
パメラは仕方なさそうに腰に手を当てて振り返る。
「……心配だなぁ。ホント」
「なにをおっしゃるウサギさん」
「それ、二回目」
「大丈夫だいじょーぶ」
ちっとも大丈夫そうに思えないのが彼女のすごいところだ、と、パメラは呆れ、もう一度ため息を吐きそうになるのをなんとかこらえ――ふと顔をあげた。
「あれ。この足音――」

「パメラ！　パメラパメラパメラ～～～～～ッ！！」
バタン！！
噂をすれば影、である。
勢いよくドアを開けて飛び込んできたのは、この寮部屋のもう一人の住人でありパメラと同い年の少女エレン＝ライブリだった。
「あっ、パメラッ！　ちょっと！」
と、エレンは“触覚”だとか“手綱”だとかヴァレンシアにからかわれる二本の長いお下げを揺らし、小さな肩で息をしながら彼女は一気にパメラに詰め寄ってきた。
「ちょっとちょっと！　どうして秘密にしてたの！？　ずるいじゃないのぉ！！」
パメラはすぐに彼女の言わんとしている意味に気付いて、
「別に秘密にしてたわけじゃないってば。それに仕事で行くんだからずるいもなにもないでしょ？」
宥めるようにパメラはそう言ったが、反論するエレンの口調ははさらに勢いを増して、
「し、仕事だったらなおさら、あなたじゃなくて私の方が相応しいのにぃ！　あ、も、もしかしてアマベル様におねだりしたりしたわけーッ！？」
「そんなことできるわけないじゃない」
「じゃ、じゃあ、ティース様だ！　ティース様にお願いしたんでしょ！？」
「だからしてないってば！」
なんとなくこうなることはパメラも予想していた。だから彼女にはギリギリまでわざと知らせなかったのだ。
「ずるい！」
「ずるくない！　……もう、エレン。そんなことよりお仕事は？」
「……お昼休みよ」
エレンは口を尖らせながらトコトコとベッドに歩み寄り、ボスン！　と、ふてくされたように勢いよく腰を下ろす。

パメラは彼女に気付かれないようにため息を吐いた。
……これで常日頃から“格式あるミューティレイク家の使用人”を自負しているというのだから呆れるというか微笑ましいというか。
「……ちょっとヴァレンシアぁ。なに笑ってるのよぉ」
「べっつにー。さて、あたしはそろそろ戻ろうかなっと。アマベル様に怒られたら大変タイヘンっと」
恨みがましいエレンの視線を軽く流して、ヴァレンシアはさっさと部屋を出ていった。
「ふん。なんか嫌な感じ。いつもだけど」
半ば八つ当たりのようにそうこぼすと、
「ともかくパメラ。……選ばれちゃったのはまぁ仕方ないけど責任重大なんだから。いつもヴァレンシアとやってるみたいな恥ずかしい真似だけはしないでよ」
「はいはい」
パメラは適当にあしらいつつ、さっきまでのあなたみたいな真似もね、と、心の中で付け加えておくことは忘れなかった。
「仕事で行くんだから。いくら帝都で珍しいものがあったって遊んでたらダメなんだからね」
「わかってるわよ。大丈夫」
「……」
エレンは急に無言になると、やはり恨みがましい目でパメラを見る。
「なに？」
聞くと、彼女はしばらくの間真剣な顔で悩んだ後、少々遠慮がちに言った。
「……やっぱりお手当とか出るの？　街の中見て歩いたり出来るの？」
パメラはすぐに察して苦笑すると、
「わかったわよ。もし時間があればだけど、綺麗な髪留め買ってきてあげるわ」

エレンの顔が輝いた。
「ホント!?」
「嘘言ってもしょうがないでしょ」
「あ、じゃあ――」
そう言ってエレンはベッドサイドにある私物入れの引き出しを開けてガサゴソと漁り始めて、
「これ。この前のお給金で買ったのだけど、こんな感じのちょっと大人っぽいのお願い」
パメラに見せたのは小さな赤いバラの形をあしらった髪飾りだ。
「でもそういうのはこっちでも買えるでしょ?」
「だからこういう感じので、でも向こうにしかないようなのを選んできて」
「……あまり自信ないなぁ」
そもそも都会の良家に生まれたエレンと田舎生まれのパメラではそういうセンスにかなりの開きがある。彼女の気に入るようなものを選べる自信はなかった。
だがエレンはそのことを百も承知のようで、
「別にあなたのセンスに期待してるわけじゃないの。一緒に行く人の中にいるじゃない。とてもセンスのいい殿方が」
「センスのいい殿方?」
少し考えた。
(ティース様のことじゃないよね、きっと……)
いくら贔屓しているパメラといえど、彼のセンスが一般的に言ってそんなによろしくないことはさすがに理解している。パーシヴァルにしても顔はいいが美的センスに関してはごくごく普通というか比較的無頓着だ。
他、一緒に行く男性といえば一人しかいない。
「……あ。アレでいいんだ」
「え? パメラ、今何か言った?」
「ううん」

パメラは何とも言えない顔で首を横に振った。
「わかったわ。一応お願いしてみるけど……どうなるかはわからないからね」
「わかってる。あの方だってお忙しいに決まってるんだし。……あ、でもパメラ。言っておくけど仕事で行くんだから。浮かれてあの方にベタベタしたり、抜け駆けしたりしないでよ」
そんなエレンの言葉に、パメラはキッパリと答えた。
「それは心配ないわ。私には合わない方だと思うから」
「あ、そうよね」
エレンは思い出したように笑って、
「あなたはどっちかというとスマートな方より泥臭い方が好みなのよね？　すっかり忘れてたわ」
「……」
そんなことはない。が、そもそもパメラの目には彼女の言う“あの方”がそんなにスマートだとは到底思えないのだ。
いや、それどころかむしろ――
「ああ……」
そんなことをパメラが考えているとは露知らず、エレンは浮き浮きした顔で胸の前で手を組んだ。
「楽しみだわ。クリシュナ様が私のためにお土産を選んでくださるなんて……」
「……ちょっとエレン。買ってくるのは私なんだからね」
「わ、わかってるわよぅ。わかってるからちゃんと買ってきてよね」
パメラはため息を吐いた。
「わかってる。その代わり、私がいない間よろしくね」
「その点は心配ないわよ。あなたの一人や二人いなくたって、私がいくらでもカバーできるもの」
と、自信ありげ言い放つエレン。
「……ホント、大丈夫かなぁ」
パメラは失礼な彼女のその物言いより、本当に大丈夫なのかとい

うことの方が気になって、もう一度ため息を吐くことになったのだった。

パメラたちの話題に上った“もう一人の男性”クリシュナ＝ガブリエルという青年は、四ヶ月ほど前、今年の一月にディバーナ・ロウに加わったデビルバスター候補生である。

「――あ、クリシュナ様だわ」

「今日もステキね……どこに向かわれるのかしら」

年齢はティースより一つ下、パーシヴァルより一つ上の十八歳。身長は百七十センチ半ばと、この職業を目指す者としては標準ぐらい。無駄のない体付きで爽やかな正統派の好青年。

出で立ちは膝丈ぐらいの前が開いた装飾付きのコートに半ズボン、ハイソックスといった少々オールドな“貴族風”の衣装に、ミスマッチな古い薄黄色のゴーグルを額に備えている。ハイセンスであるとは言い難いが、個性的であるということと、何より元値が高いということがあって、逆にセンスがいいという評価になっているようだ。

そして特に……そう。

笑顔、だ。

誰かと向かい合っているときは常に笑顔。それも嫌味のない至極爽やかな笑顔。これが女性たちの心を捕らえて離さない。

加えてパーシヴァルのように特定の誰かとの浮いた噂があるわけでもなく。

「ねぇ、聞いた？　クリシュナ様、今回の試験に同行するそうよ」

「クリシュナ様なら今年お受けになられてもきっと合格するのに……どうして受けさせてもらえないのかしら……？」

現在はレアス＝ヴォルクス率いるディバーナ・カノンの下に付き、デビルバスターを目指して訓練中。ミューティレイクの使用人たち

の間ではディバーナ・ロウ始まって以来の天才という評価が定説となっている。
それも決して根拠のない噂などではない。実際入隊試験の際にデビルバスターであるレアスを追いつめたという実績があった。
有能でハンサム、真面目そうで人当たりもいい。
これで目立つなという方がどだい無理な話で、女性使用人たちの間における一番人気は（あくまで人数の上では）彼だと言い切って間違いないだろう。
「……クリシュナ様！」
「ん？」
昼過ぎ。別館一階のホールから外へ出ようとしていたクリシュナを呼び止めたのは、ミューティレイクの使用人の少女たちだった。
一人ではなく四人、全員が十代前半から中過ぎぐらいだろう。
クリシュナは足を止めて振り返った。
四人とも見覚えがある。何度か話したこともあるだろう。名前は覚えていなかった。
自然と微笑みが浮かぶ。
「どうした？」
「……ほ、ほら。はやく渡して」
「ちょっ、ちょっと待ってよ……」
四人の中のおそらく一番年長と思われる少女が、他の少女たちにせっつかれて懐から何か取り出す。
「あの、これ持っててください」
「？」
受け取ったそれはどこかで見たことのあるお守りだった。
（……なんだ。そこの教会で売ってる旅行安全祈願のお守りじゃないか）
クリシュナはすぐに顔を上げて少女に尋ねる。
「これは？」
「あの、それ、旅行安全祈願のお守りなんです。クリシュナ様が明

日から遠出されると聞いて、みんなで買ったんです。ね？」
彼に見つめられ、年長の少女が後ろの三人に同意を求めると、少女たちは一斉に頷いた。
「ああ、そうか。旅行安全の……これを俺に？」
「は、はい」
クリシュナはマジマジとお守りを見つめて、一呼吸。
ニッコリと笑顔を浮かべて、
「嬉しいよ。ありがとう」
「あ、いえ、その、役に立たないかもですけど、でも、もしかしたら……」
「俺、こういうの結構信じる方だから。ホントどうもな」
もう一度礼を言って、さらに頬を赤くした少女たちと別れた。
玄関から外に出る。
少し強くなった日射しの中、緑の芝生の上をしばらく歩いた後、
「……やれやれ」
クリシュナはそう呟いて手の中のお守りを目の前にぶら下げた。
空いた左手でポケットを探る。
まったく同じものが目の前に二つ、ぶら下がった。
ため息。
まぁ、少女たちの好意は素直に受け取っておくにしても。
「あれ。こういうのって返品して換金したりとかできるのか――」
「クリシュナ様！」
「！」
お守りをポケットに隠して振り返る。
やってきたのは先ほどの四人組のうちの一人、お守りを渡してくれた年長の少女ではなく、後ろにいた三人の中の一人だった。
反射的に微笑みが浮かぶ。
「どうした？　何か――」
「これ、もってってください！」
小声で、しかし勢い良く。耳まで真っ赤にした少女は視線を伏せ

たまま、手にした何かを押しつけるように渡してきた。
「えっと――」
問いかけるよりも早く。
少女はアッという間に走り去ってしまった。
しばらく呆然とした後、なんとなく辺りを見回す。幸い、誰もいなかった。
「……」
視線を手元に落とすと、そこにあったのはやはり旅行安全祈願のお守りだった。……先ほど少女たちからもらったのと違うのは、ミーカール教で縁起の良いとされる白い鈴と小さな宝石が組み合わされていることだ。
「これは、また……」
宝石自体はそれほど質の良くない安物だが、値段にすれば先ほどのお守りの軽く数十倍、おそらくあの少女たちの月給の何分の一かに相当するものだろう。
顔を上げた。
すでに少女の姿はない。
「抜け駆け、ってヤツか……」
とてつもなくわかりやすい好意の表現。それ自体はもちろん喜ぶべきことだろう。
が、しかし。
「やれやれ。俺はこういうの信じてないんだが……」
扱いに困る高級お守りを見つめながら、もう一つため息。
「……この高い方はどこかで換金できるかな……」
お守りをポケットに入れて歩き出す。
と。
「ん？」
視線の向こうから歩いてくる人影に気付いた。
知っている人物だった。
「ああ、パメラじゃないか」

パメラ＝レーヴィット。特に接点があるわけではないのだが何かと縁のあるハウス・メイドの少女で、今回も仕事で一緒に帝都ヴォルテストへ赴くことになっている。
クリシュナは気安く声をかけた。
「ちょうど良かった、パメラ。ちょっと明日のことで聞きたいことが――」
「……」
スタスタ、と、短いお下げの少女はそのまま横を素通りしていく。
「パメラ？　あ、おい……パメラ？」
「？」
ようやくパメラが立ち止まって振り返った。
「私ですか？　すみません、聞こえませんでした」
「ああ、そうか」
彼の声は比較的低音が強い。その響きにうっとりする女性も多いが、決して聞き取りやすいものではない。
クリシュナは意識的にはっきり発音するようにし、改めて尋ねた。
「それでな、パメラ。キミに聞いておきたいことが――」
「知りません」
「……」
一瞬の沈黙。
「え。あ、まだ何も言ってないんだが……」
「何ですか？」
パメラが真っ直ぐに見つめてくる。
「あーっと……あ、忙しいのか？　だったら後でもいいんだが……」
「暇ではないですけど。後、って一ヶ月後とかでもいいんですか？」
「……」
何も返せずにいると、パメラはしばらく黙った後、急に表情を緩めた。
「それで、何ですか？」
「あ。ああ、実は一緒に行くメンバーのことで――」

どうにも調子が狂う感じだ。
もちろん使用人の全部が彼に好意的なわけではない。が、このパメラに関しては完全に嫌われているというわけでもなく、かといって先ほどの少女たちのように好かれているわけでもなさそう、という、なんとも奇妙な態度なのだ。
（ホント、なんなんだか……）
思い返してみれば、最初に会ったときから何とも微妙な距離感だった。とてつもなく冷たい態度を取られたかと思えば、時折遠くから見つめられている。そこで積極的に話し掛けてみるとさっきのように冷たい態度で返される。それが彼女の性格なのかと思えばそうでもなさそうだ。
（何か嫌われるようなことでもしたか……それにしちゃ時たまこっちを気にしてる素振りを見せたりもするし）
何とも掴めなかった。
――もちろん彼は知らないのだ。以前、サイラス＝レヴァインという自分に瓜二つの人間がこの屋敷にいて、そしてその人物が彼女と親しかったことなど。
クリシュナは気を取り直して言葉を続けた。
「ティーサイト＝アマルナとパーシヴァル＝ラッセルだろ？　それにキミとフィリス＝ディクター。そして俺」
「はい」
「そこまではわかるんだが、あと一人誰が行くのか知らない。キミは知ってるか？」
「え、聞いてないんですか？」
「いや、俺が聞き逃したわけじゃない。最初から聞いてないんだ」
パメラは少し眉をひそめて、
「だから、聞いてないんですよね？」
「あ、ああ……キミが世話担当で、フィリスが医事担当、俺が護衛担当だから――」
「あ」

話の途中でパメラの目線が横に逸れる。
「シーラ様！」
「あら、パメラ」
やってきたのはシーラ＝スノーフォールだった。
「今、お帰りですか？　今日はずいぶんと早いですね？」
打って変わって弾んだパメラの声。
「ええ。ほとんど去年のうちに習得しているから、あまり必要ないのよ」
「そ、そうなんですか。シーラ様、すごいですね……」
「きちんと学んでいれば当然のことよ。……あ、それとパメラ。今晩、少し用意してほしいものがあるのだけれど――」
「なんですか？」
「実は――」
と。
そんな二人の会話を眺めながら、
（……やっぱ嫌われてると見るべきかな、これは）
放置されたクリシュナはなんとも居心地の悪い気分だった。
（いや、別にいいんだが。けど理由もわかんないってのはすっきりしないというか）
とりあえずその場を離れることにした。
残りの一人のことは明日になれば嫌でもわかるだろう。パメラに尋ねたのもたまたま思い出しただけのことで、特別気にかかっていたわけじゃない。口うるさいヤツじゃなければいいなと思うぐらいのことだ。
（しかし、ティーサイト＝アマルナとパーシヴァル＝ラッセル、か。ほとんど話したことがないな……）
どっちも自分とタイプが違う、話が合わないだろうという認識はあった。そう考えて同行するメンバーを思い浮かべてみると、気軽に喋れそうなのはフィリス＝ディクターぐらいだろうか。
一人でいるのは特別嫌いではないが、会話のできない相手と長時

間一緒にいるのは間違いなく苦痛だ。
（……やれやれ。勉強になるとはいうが、二ヶ月もってのは正直しんどい……）
「あ、クリシュナ様ー！」
「……ああ。キミは確か――」
これなら屋敷でキャーキャー言われてた方が何倍も気が楽だな、と、そんなことを考えながら、クリシュナ＝ガブリエルはいつもの微笑みを浮かべ、屋敷へと戻っていくのだった。

「……ふぅ」
ティースが全ての支度を終えた頃、外はオレンジ色から薄闇色へと移り始めていた。
ちょっとした用事で外から帰ってきた後、外で狼のマルスや番犬たちと戯れるセシリアと二言三言会話を交わし――ほつれた袖に危うくハートマークのアップリケを付けられそうになりながら――屋敷の玄関ホールへと戻ってくる。
丸テーブルの並ぶ一階ホールは比較的閑散としていたが、食堂へ続く通路からは夕食支度の喧噪が聞こえてきた。
「お帰りなさいませ、ティーサイト様」
「え、あ、た、ただいま戻りました」
ちょうど出くわしたのは、屋敷の女性使用人を束ねるハウス・キーパーのアマベル＝ウィンスターだ。
長いブロンドのシニヨンスタイル。眼鏡の奥の顔立ちは二十代半ばという実年齢やその職種から受けるイメージよりは幼く可愛らしい形をしているものの、女性にしては上背があり、表情は大体の場合において厳格さを保っているため、総合的には取っつきにくいという印象があった。

多分に漏れず、ティースも彼女の前では萎縮してしまう一人で、こういうときの挨拶のやり取りぐらいしか言葉を交わしたことがない。

と、しかし。

「あ。ティーサイト様」

「え？」

今日は珍しく彼女に呼び止められる。

「あ……はい。なんですか？」

ちょっと緊張しながら振り返ると、アマベルは思い出したような顔で、

「実は今晩、お嬢様のご意向でささやかながら壮行の催しを行う予定なんです。ですから御夕食は食堂の方でお願いしたいのですが……」

「え？　あ。わかりました」

もちろん支障はない。何も用事がないときはいつも食堂で夕食を摂っているのだ。

アマベルはほんの微かに口元を緩め、軽く会釈して、

「よろしくお願いします。午後七時よりお嬢様も同席いたしますので――」

「アマベル様ぁぁぁっ！」

「！」

突然の悲鳴にアマベルはビクッとして顔をあげた。

「大変！　大変ですぅぅぅっ！」

「な。な、何事ですか！」

真っ青になって駆け寄ってきた――おそらく新人だろう――十代前半ぐらいのまだまだ幼さの残る使用人の少女に、アマベルは少々不安げな顔で問いかける。

「じ、じつは、今晩の御夕食のことで――と、とにかく来てくださいぃぃ！　わ、わたしもう、どうしたらいいか――！」

少女は今にも泣き出しそうだ。

「ま、まずは落ち着きなさい。すぐ行きますから。――す、すみません、ティーサイト様。これで失礼しますっ！」

自身も微妙に平静を失ったままそう言ってティースに一礼すると、

「さ、どこ？　どこでなにがあったの？」

「じ、じつはヴァレンシアさんが――」

二人はそのまま早足で食堂へ続く通路へと消えていった。

「……」

アッという間の出来事に、半ば呆然とそれを見送ったティース。

とはいえ特別珍しいことではない。このミューティレイク別館はたわいのないトラブルの発生率が異常に多い場所だ。――それが天災なのか人災なのか、真偽のほどは不明であるが。

「でも……そっか。壮行会か……」

その言葉に、まだ少し漠然としていたものが急に輪郭を帯びてきたような気がした。

明日、出発。

そこからまだ日にちがあるとはいえ、あとは試験会場へ一直線だ。戻ることはない。

ピタッと大階段の前で足を止めた。

少し上を見上げると、ミューティレイク家のシンボルである六剣の紋章がある。

心が引き締まる感じがした。

デビルバスター試験。

大陸の八割以上を占める数々の領地から数千人が受験するが、受かるのはその百分の一未満と言われる。しかも危険を伴う試験のため、受験するのは皆それなり以上の鍛錬を積んだ者ばかり……その中の百分の一未満、なのだ。

超難関であることは言わずもがな。しかし受ける以上は可能性がないわけではないし、もちろん受かるつもりでいる。

そしてもし受かれば――

（……っても、突然何か変わるわけじゃないか）

受かるのが目的ではない。
脳裏を過ぎったのは、今までに感じてきた様々な想い。
そこに一歩近付く――受かることでデビルバスターとして様々な特権も授与されることになるが――個人的にはただそれだけのことだ。
体が熱くなった。
進んでいる実感がある。
一歩ずつ。
いつか誓った、目標に。
そしてもう一歩。
思いっきり踏み出す。
いや――
「あ……」
階段を一歩上ったところで、ティースは足を止めた。
ふと心に引っかかったもの。
「そうだ。シーラのヤツに言っとかなきゃ。まぁ知ってるだろうけど……二ヶ月もいなくなるんだしな……」
独り言を呟いて、以前屋敷を空けてしまったときのことを思い出す。
考えてみればそのときのことが原因で彼女は卒業できず、今も学園に通うことになっているのだ。
「今年こそは卒業してもらわなきゃ。それで――」
思わず言葉が止まって、
「……その後って、どうすんだろ」
ふとそんなことを考えた。
まったく抜けてるというか、彼はそれを全然考えていなかった。
……名門サンタニア学園の薬草学科卒、となれば、彼女の夢である薬師への道は半分以上開かれたと言ってもいい。基本的にはどこかの薬師に弟子入りするのだろうが、好成績で卒業することが濃厚な彼女の場合、援助さえ受けられるならすぐに店を開く道もある。

「店、かぁ……それってネービスでやるのかな。それとも――」
そこまで考えて、ティースは再び上を見上げた。
彼女が今日、早くに帰ってきていることは知っていた。
「……そういうことって、話しておかないとダメだよな。そろそろ」

壮行会、とは言っても特に派手なことがあるわけではなかった。
ただ、いつもより若干多くの人が食堂に集まり、いつもはしないような話をする。
そこには屋敷のデビルバスター全員がいた。
アクア＝ルビナート。
レインハルト＝シュナイダー。
レアス＝ヴォルクス。
そして、アルファ＝クールラント。
いつもより少し豪華な食事と、少し高級なお酒。
アクアはいつもより一割ほど増して饒舌に絡んできたし、レイはいつもと変わらぬ飄々とした態度で時折ティースやパーシヴァルをからかい、レアスは他の面々が手にした酒の杯をどことなく憮然とした顔で眺めていた。……自分のジュースには一度も手を付けず。
アルファは相も変わらず、どこか一点を見つめたまま動かなかったし、場の雰囲気に呑まれたアオイは早々に酔いつぶれ、主人であるファナに介抱される始末。
そんな雰囲気の中、
（あ、もうこんな時間か……）
ティースもまたいつもより飲みすぎた。といっても明日に支障があるほどではなく、ちょうどほろ酔い気分といったところか。
テーブルの料理は八割方片付けられ、何人かがすでに退席した頃。
「……あれ、ティースさん。もう戻るんスか？」
パーシヴァルの呼びかけにティースは頷いて、

「ああ、パース。ちょっと飲みすぎたみたいでね。……じゃアクアさんの相手、よろしくな」
「え！？　ちょ、ちょっとティースさん――！」
抗議の声が最後まで聞こえることはなく。
「パースくぅん……おねーさん、遠くから応援してるから、頑張ってくるのよぉぉぉぉ……」
「えっ、う、うわっ、ちょっ、まっ、ア、アクアさ――うわぁぁぁぁぁっ」
「……すまん、パース」
珍しく他人に厄介ごとを押しつけることに成功して、ティースは食堂を出た。
時間は午後九時半を過ぎたぐらいだろう。屋敷の中は静かで、食堂以外を担当する使用人たちは今日の反省会も終えて各々寮や自宅へ戻ったようである。
「……ちょっと飲みすぎたかな」
相変わらず雰囲気に弱い性格だなと少しだけ自嘲して、歩き出す。向かう先はもちろん、彼より十五分ほど先に退席したシーラの部屋だ。
階段に足をかける。
玄関ホールには誰もいない。
しぃん、と。
賑やかだった食堂とは雰囲気が一変。
紅い月と、照明の薄明かりの中、頭上に見える六剣の紋章にチラリと目をやって階段を上った。
遠くで聞こえる犬の遠吠え。
階段の途中から見える外の景色は、緑の芝生が春風にそよぎ、桜色の花がはらはらと舞う、雅やかな月夜の情景。
食堂を出てから階段を上りきるまで、誰にも出会うことなく。
彼女の部屋の前もまた、静寂の中にあった。
「……」

少し胸がドキドキしているのはアルコールのせいだろうか。
（……灯り、消えてるみたいだ）
ドアの隙間を見てティースはそう思ったが、まだ食堂を出てからそれほど経ってないし寝ているということはないだろう。
あるいはどこかに行っているのだろうかと思いつつ、軽く扉をノックする。
「開いてるわ」
「あ……」
意外にもすぐに反応があってやや戸惑ったが、すぐに返事をする。
「あ、シーラ。俺だけど……」
「ええ。……言わなくてもノックの音でわかる」
「あ、そっか……」
納得しながらも、少しいつもと違う空気があった。その理由はドアノブをひねって中に入った瞬間にわかる。
「あれ……」
部屋の中に微かに果実の香り。
「なんとなくだけど、来るような気がしてたわ。……ファナの口癖じゃないけど、本当に、なんとなく、ね」
もしかしたら寝支度をしているかと思っていたが、その予想は見当違いの方向に外れていた。
「お前、それ……」
彼女は窓際の椅子に腰掛けていた。
金糸の刺繍が入った黒いベルベットのトップは彼女のお気に入り。お気に入りだが滅多に着ることはない。
ティースが前にそれを目にしたのはいつだったか――
そして薄暗い室内の月明かりに浮かぶ、ぞっとするほど美しい彼女の横顔。
そこにほんの少しだけ紅が差していた。
紅い月のせいではない。
「どうしたの？　ああ、これ？」

シーラは彼の表情を見て、そしてすぐに視線を右手のワイングラスに落とし、少し上擦った声で答えた。
「変かしら。でも今日からは私がこうしていても誰も眉をひそめたりはしないのよ」
「今日から……？　あ、そうか。今日って――」
言われてティースは思い出した。
「今日で十六歳か……」
そう。今日は彼女の十六歳の誕生日だ。
「そっか……そうだよな……」
彼がそのことを失念していたのは決して彼女をないがしろにしていたからではない。それは彼らの産まれたジェニス領に誕生日を迎えた本人を祝う風習がなく、代わりに親に感謝し親孝行をする日とされてはいるものの、近くに親のいない彼らにとってそれほど重要な日ではないためである。
が、このネービスで十六歳といえば確かに、完全に大人として認められる年齢であり、彼女の言うようにお酒を飲んでもなんら問題のない年齢でもあった。
「立ってないで中に入ったら？　それとも用事もなくノックしたの？」
「――」
彼女の視線を受けて、ティースの心臓は少しだけ速さを増した。
（うわ、まずい……）
アルコールでほんのりと赤くなった彼女の顔。その表情が彼に、思い出してはいけないこと――いつかの、不可抗力（？）で彼女とキスしてしまったときのことを思い出させてしまったのだ。
（……あああっ！　しっかりしろ、俺！！）
首を振って手綱をギュッと引き絞る。とてつもなく強固な鎖で作られたそれは、僅かに波立った彼の心を半ば強制的に抑え込み、そこに秩序を呼び戻した。
そして口を開く。

「ああ、いや。実はちょっとお前に話があって」
動揺しないよう、意識的に語気を強めた。
「話？」
ティースは後ろ手にドアを閉じ、薄暗い足元に注意しながら進んで、彼女から一メートルほど離れたソファに腰を下ろした。
背の低いソファに座ることでちょうど彼女と目線の高さが同じになる。
「まだ先のことなんだけどさ……俺、二ヶ月も留守にするし、それに大事なことだから早めに決めておいた方がいいと思ってさ」
「大事なこと？」
シーラは少し不思議そうな顔でワイングラスをガラステーブルの上に置いた。
その仕草がいつもより艶やかに見えるのはやはりアルコールのせいだろうか。
またどきりとして、ティースは慌てて言葉を続けた。
「ああ。その、単刀直入に聞くけど……お前、学園を卒業した後のことって考えているのか？　どうするつもりなんだ？」
真剣に尋ねたつもりだった。
が、予想に反し、シーラはふっと口元を緩めて微笑する。
「もちろんずっと前から考えているわ。……今まで聞かれなかったから興味がないものとばかり思ってたけれど、違ったのね」
痛いところを突かれた。
「うっ……い、いや、俺もだいぶ前から気にはしてたんだけど、ほら、なんとなく聞ける機会がなくて……」
「そう」
信じたのか信じてないのか何とも言えない微笑を浮かべたまま、シーラは少しだけワイングラスに口付けた。
「……」
また少し、動悸が早くなる。
「そ、それで、どうするんだ？」

「どうすると思う？」
「え……」
珍しく悪戯っぽい口調に戸惑いながら、ティースは彼女の手元に視線を移した。
（……結構、飲んでるのかな）
ワインのビンに残った量を見ると、どうやらそれが最初の一杯ではない。ワイングラスにして三杯目ぐらいか。無茶な量ではないが、何しろ初めて口にするアルコールなのだろうし、それなりに酔いが回っているのかもしれない。
そしてどうしようか、と、迷う。
こんな大事な話をこんな状態で続けるのは良くないが、今日を逃せば次に話ができるのは二ヶ月後だ。
少し迷った後、
（……結論は前から決まってるみたいだし、いいのかな……）
それに、と、ティースは思う。
ほんの少しだけ、楽しい。
アルコールのせいだけじゃない、少し浮かれた気分。
会話もいつもよりスムーズだ。最近ではあまりないことで、そんな状況がもう少し続くならそれも悪くはないと、そう思ったのだ。
「飲まない？」
「え？」
シーラが空のワイングラスをティースに差し出した。
「え？　あれ、なんでグラスが二個……」
「……ああ、そっか。でも俺は下で結構飲んだから――」
「だから言ったでしょう。なんとなくお前が来る気がしてたのよ」
「そう。だったら、私が全部飲んでもいいかしら？」
「え、全部って……それ全部か？」
ワインのビンにはまだ七割以上残っている。初心者の彼女にはいくらなんでも無茶な量だ。
「じゃあ……もらうよ」

仕方なく、ティースは差し出されたワイングラスを手に取った。
「そう。じゃあ……」
頷いた彼女は少し嬉しそうに見えた。
「……」
ワイングラスに注がれる紫水晶の液体を無言で見つめ、ティースはそれに口を付け、喉に流した。
二口、三口。
ワイングラスはアッという間に空になる。
シーラは目を丸くして、
「……意外ね。お前のことだからお酒も弱いと思ってたわ」
「よく言われるよ。でもこれでも案外、普通の人ぐらいには飲めるんだ」
苦笑し、二杯目を受ける。
悪い気分ではない。いや、むしろ楽しい。彼女とお酒を飲む機会が訪れるなんて今まで想像したこともなかったが、決して悪いものではなかった。
そしてティースは先ほどの問いかけに答える。
「たぶん……この近くで店を出すとか、弟子入りするとか……そういうこと考えてるのかなって思ってたけど……」
少し言葉を切って、それから少し躊躇いがちに加える。
「あとはカザロスに戻る……とか」
「カザロスに？」
まったく考えてなかったのか、意外そうな顔だった。
ティースは視線を落とし、ワイングラスを両手で包みながら、
「ああ。いや。誕生日だからってことじゃないけどさ……でもお前にはまだ親がいるんだし、そういうことも考えてるのかなって」
「……」
シーラは少し黙って、窓の外に視線を移した。
そしてポツリと、
「そうね。来年の今頃なら、どうしてもここにいなきゃならない理

由もなくなってるだろうし」
「……」
何も言葉が思い浮かばず、ティースは黙ったまま手持ちぶさたに三杯目のワインに口を付けた。
「お前は、どう思うの？」
シーラはそう言って彼を見つめる。
「それも悪くないんじゃないか……とは思うよ」
ティースは手元に視線を落とした。
……勢い良く飲みすぎたのだろうか。少し頭の回転が鈍くなっていた。
そのせいだろうか。
普段はあまり口にしないようにしている話題。
この日は自然と口をついて出てきた。
「……ちょうど三年だよな。あれは確か、お前の十三歳の誕生日だったから……」
思い出す、故郷の情景。
このネービスより少し南東の方角、大陸全体からみると東の端に位置するジェニス領のカザロスという街。自然が多く雨の多い、少し山側の農業の盛んな街。
――目を閉じると今でも鮮明に思い浮かぶ。
黄土色の緩やかな坂を上ったところに見える、赤い屋根と白い壁、その左右には綺麗な花畑があり、背中には緑の森を背負って、玄関の前には飾り気のない大きな馬車。
坂を上りきって振り返ると、ポツポツと見える家々と黄金色に輝く広大な穀物畑があって、小さくなった人々が一生懸命に動いている。
呼びかける声に再び振り返ると――そこには赤と白でできたカザロスでもっとも大きな建物。玄関の前には姉代わりだった面倒見のよい使用人の女性と、両親を亡くした彼を長い間可愛がってくれた好々爺然とした執事の男性。

そして――

ティースは呟くように言った。

「……俺、お前をここに連れてきたことは後悔してないよ。いつも遊び回ってるようなことを言ってたから不安に思ったこともあるけど……でも実際は学園でもトップクラスの成績だっていうし、ディアナさんもお前のこと、浮ついたところなんてちっともないって言ってた。だから」

シーラはじっと彼を見つめていた。

「でも……」

ティースは視線を上げないまま、続けた。

「同時に悪いことしたなってことはいつも思ってる。だって、そうだろ？　……あなたは――ああ、いや」

首を振る。

「お前は、旦那様にとってたった一人の娘で……優しかった奥様の忘れ形見で……それを俺なんかが連れ出しちゃって。旦那様が、親切にしてくれた他のみんなが、今どんな思いでいるんだろうって。たまに想像して夢に見るんだ」

一瞬だけ、沈黙。

シーラは再び視線を窓の外に移して、

「……お前が気にすることではないわ。私が命令してお前はそれに従っただけだもの」

だが、ティースは少し笑って言った。

「違うよ。だって俺はあの前の日の夜、眠れずに一晩中悩んだんだ。悩んで、悩んで、それで決めたんだ。俺は……どうしてもあなたに幸せになって欲しくて……」

「……」

美しい睫毛が微かに震えて、シーラはそれを抑えるように眉をひそめた。

なにか言いかけて、やめる。

「だから……ああ、いや、でも、もし戻ったりしたら、きっとリィ

ナもエルも淋しがるな……」
「そうね。……それにお前はもう戻れないわ。私が戻ったらもう――」
「……」
「……」
長い、長い沈黙だった。

「……ティース？」
彼女が寝息の音に気付いたのは、それから五分近くも経ってからのことだ。見ると、彼はいつの間にかテーブルに頭を乗せてすやすやと眠っていた。
無理をしたのだろう。彼が飲んでいたのはここに来てから五杯目。ワインのビンはほとんどカラになっている。
「……」
シーラは少しそんな彼を眺めた後、小さく口を開いてため息をこぼすと窓の外に目を向けた。
「……本当に人がいいんだから」
残ったワインをグラスに注ぎ、ゆっくりと飲み干す。
アルコールを口にするのは正真正銘、初めてのこと。だが、しかし、両親のどちらから受け継いだものか、彼女は滅法強い体質のようだった。頭が少しぼんやりしてはいるものの、思考は完全にいつもどおりだ。
「お前がそうでも、私はとても後悔してるのよ、ティース……そう、とてもね」
きしっと椅子が鳴る。
美しい紅月夜。ワインと同じ色の月が彼女を見下ろしている。
もう一つ、深いため息。
「でも……」
シーラは視線を落とし、ティースの寝顔を見つめた。

静かに微笑が浮かぶ。
「最近のお前を見てたら……結果的にはこれでよかったのかもしれないわね。……お前はもっとたくさんの人に必要とされているようだもの……」
背もたれに体重を預け目を閉じる。
そしてシーラは、少し火照った体を冷ますようにしばしの間、ゆっくりと流れる時間に身を任せたのだった。

その翌朝。
小鳥の囀りが意識を運んでくる。
「ん……んん……？」
まだ少しどろどろとした意識の中、ゆっくりと身を起こしたティースは自分の体に起きていた異変にすぐ気付く。
「い、いてて……」
関節が痛い。
それもそのはず。彼が目を覚ましたのはいつもの体に馴染んだベッドの上ではなくソファの上、それも体を前に折り畳んで突っ伏した形だったのだから。
「んー……あ、えっと昨日は……？」
頭も痛い。
そこで彼はようやく、昨日酒を飲んだことを思い出し、
「あ、そ、そうか、昨日は確か壮行会があったんだっけ――」
二日酔いのようだがそれほど酷くはない。
「あれ、でもその後確か……あれ？」
肩に毛布がかかっているようだ。
が、彼はそれを視認できなかった。
「……へ？」
目の前が暗い。……いや、外から射し込む光は認識できたから失

明したわけではないが――どうやら目の前に何か布きれ……目隠しのようなものが巻かれているためだ。
「なんだ、これ……いったい誰がこんなこと――」
呟いて、ほどこうとして……そしてハッとする。
「あれ……昨日って確か――」
昨日、最後に意識を失った場所。そしてぼんやりとしていた鼻の粘膜に、特徴ある清らかな香水の匂い。それはこの屋敷でおそらく一人しかつけていないものだ。
「……あ」
思い出した。
と同時に急激に冷や汗が浮かんだ。
目隠しをほどこうとした手をそっと下ろす。
彼自身は昨日と同じ体勢のまま。あれから移動した形跡はない。
遠慮がちに、口を開いた。
「シ……シーラ……？」
間違いない。ここは彼女の部屋だ。昨日酔いつぶれたまま、彼女の部屋で一晩を明かしてしまったのだ。
「シーラ……？」
さらに遠慮がちにもう一度。
今は何時だろうか。まだ寝ているのかもしれない。だとすると起こすのはまずい。といって目隠しを外すと、彼女の寝顔を見ることになってしまう。……それもちょっとまずい。バレたら恐ろしいし、それはものすごく悪いことのような気がする。
とすると――
（目隠ししたまま……出るしかないか……）
室内で人が動いている気配はない。とすると、彼女は寝ているか部屋の外にいるかのどちらかだろう。
幸い、部屋の状況は昨日の記憶がある。薄暗かったが、鮮明に記憶していた。
（よ、よし……）

肩に置かれた毛布を畳んでソファの上に置き、ティースはゆっくりと動き出した。
ゆっくり。
ゆっくり。
と。
（……あれ？）
ティースは気付いた。
部屋の右手から微かな水音がする。
（えっと、あっちは確か……）
部屋の入り口ではない。
だが、そこにもう一つ部屋があることは知っている。
「！」
そしてティースは、この目隠しの本当の意味を理解する。
……そこは一階の大きな浴場とは別に、客間に備え付けてある小さな湯浴場だった。
それを理解すると同時に、
「うわぁぁぁぁぁぁっ！　すっ、すまんっっっ！！！！」
ティースは目隠しを投げ捨て、勢いよく駆けて部屋から飛び出した。
バタン！！
「……はあっ、はあっ……」
壁に背を預け、ズルズルとそこにしゃがみ込む。
心臓がバクバクいって、二日酔いなど一瞬で吹っ飛んだようだった。顔が火照って、なんだかとてつもない罪悪感が芽生えてくる。
（ま、待て、落ち着け！　俺は何も見てないし、何も聞いちゃ――いや音は聞こえたけど、そ、そうだよ。ただ顔を洗ってただけかもしれないじゃ――）
「どしたの、ティース？」
「おわぁぁぁぁぁぁぁっ！！」
急に声をかけられてティースは文字通り飛び上がった。今度こそ

本当に心臓麻痺を起こしそうだった。
動悸を抑えながら振り返った視線の先――
「な、なんだ、エルか……お、驚かさないでくれよ！」
そこにいたのはティースやシーラと幼なじみの少女、エルレーン＝ファビアスだった。
「お、驚いたのはこっちだよ、もぅ」
もともと愛らしく大きな瞳をさらに見開いたエルレーンはそう言って、大きく深呼吸。妖精のように小柄で可憐な少女は胸をなで下ろす仕草をした。
「それよりどうしたの？　そこシーラの部屋だよね？」
いきなり答えにくい質問だった。
「へ？　あ、いや。その……えっと、いや、その、実はほら、今、あいつにいつもみたいに怒られちゃってさ。そ、それで慌てて出てきたんだ」
「怒られた？」
エルレーンは不思議そうな顔で小首を傾げる。
「でもシーラ、今は湯浴中でしょ？　だって、ほら。ボク、さっきシーラに頼まれて、洗濯終わった着替え持ってきたんだよ？」
「え……あ、い、いや……」
ティースの顔は真っ赤になってどこからどう見ても怪しい態度だが、見つけたのが彼女だったことが幸いだった。
「あ、言いにくいことがあったならいいよ。キミがシーラに悪さするなんてことあるわけないもんね」
「……」
事実そのとおりだし信頼されていることは嬉しく思うが、何故かほんの少しだけ後ろめたい。
「……あ。そうだ、エル」
「うん？」
ドアノブに手をかけた体勢でエルレーンが振り返る。
ティースは言った。

「ちょっと前に言ったと思うけど、俺、今日から二ヶ月ぐらいいなくなるからさ」
「あ、うん。最近、みんなの間でもその話で持ちきりみたい。……大丈夫。難しいっていうのは聞いてるけど、キミならきっと受かると思う。応援してるよ」
「サンキュ」
彼女の言葉はいつも真っ直ぐで、聞くだけでホッとする。仕事場ではマスコットのような存在だと聞くが、それも頷ける話だとティースは思った。
ティースは続けて、
「えっとリィナはもう仕事だよな？　今、いったい何時なんだ？」
「六時半。さっき丁度朝ご飯の準備が終わったとこだから、顔洗って、食堂に行った方がいいよ。リィナは今、ちょうど忙しい時間じゃないかな？　見送りには行くって言ってたけど……」
「あ、そうか……」
若干遅いがそれでも大寝坊したというわけではないらしい。
「んじゃ、会えるかどうかわからないし、リィナによろしくな。それとシーラにも。あいつ、いつ出てくるかわからないし……」
「え？」
だが、エルレーンは怪訝そうに首をかしげた。
「よろしくって、どういう意味？」
「え？」
そんなにわかりにくい言葉だっただろうか、と、ティースの方も少々怪訝に思いながら、
「だから、ほら。一応あの二人にも言ってあるけど、二ヶ月って結構長いし、まぁ、俺がいなくても特に困ることはないと思うけど……」
「……あれ？」
エルレーンは不思議そうにシーラの部屋のドアを見つめ、それから再びティースを振り返ると、突如驚愕の言葉を口にした。

「だってシーラも一緒に行くんだよね？」
「……へ？」
ティースはびっくりして、
「いや、そんな馬鹿な。そんなわけないだろ、だってあいつには学園の講義があるじゃないか」
「え？　でもボクはそう聞いてたけど……」
「どうしたんですか？」
そこへちょうど、リィナが山のような洗濯物を抱えて通りかかった。
「ねぇ、リィナ。今日だけど、シーラも一緒に行くって言ってたよね？」
「？」
抱えた洗濯物の奥でリィナは少し首をかしげて、
「ティース様の試験の話ですか？」
「うん、そう」
リィナは不思議そうにティースの顔を見て、
「ええ。そう言ってましたけど……それがどうかしたんですか？」
「い、言ってたって、誰が？」
狼狽えるティースにリィナは答える。
「シーラ様ですよ。一昨日、確かエルさんと一緒にいるときに。ですよね？」
「うん。講義は去年のうちにほとんど終わってるから本当は試験以外行かなくても大丈夫なんだって。……ティース、聞いてないの？」
「き、聞いてないも何も……昨日の夜だってそんなこと一言も……」
――
それは彼にとって想像外の、まさに晴天の霹靂の出来事であった

幕間『美しき紅月夜の下で』

さぁっと春風が緑の芝生に波を立て、桜色の花がはらはらと舞う雅やかな月夜の晩。

静かに流れる丑三つの夜、そびえ立つ一本の大木の下に一つの影があった。

「今宵はいい月だな……」

大木の根元に背を預け、見上げる。

「こんな夜は心が震える。ついつい声を張り上げたくなる」

どこか遠くで犬の遠吠えが聞こえた。

そこへもう一つの声。

「確かに。いい風だ」

姿は見えない。声の方向は彼の頭上……木の葉の生い茂る枝の上にいるようだった。

「翼を広げればあの月にさえ手が届きそうな気がするよ。たとえそれが叶わぬ幻想だとわかってはいても、そう思えて仕方ない」

男は意外そうに頭上の女を見上げる。

「あんたでもそんな途方もないことを考えたりするのか？」

女は答えた。

「私にとって夜の闇はあまりにも深すぎる。だからこそ夜空に輝くあの月は、私の永遠の憧れだ」

「なるほど。わかる気もする」

男はゆっくりと目を閉じた。耳を立てて風の薫りを感じ取る。

女は首を斜め上に向け、夜空に浮かぶ月を見つめた。

今宵の月は赤みがかっている。

まるで幻想世界のような、神秘の夜。

「ところでセレス。つかぬ事を尋ねるが……」

そして、男は言った。

「“ダイエット”というのは、いったいどういう意味なんだ？」

「……ダイエット？」

「決めたよ、マルス。私、今日からダイエットするから」

目が醒めた。耳をピクピクと動かして現状を確認する。

いつの間にかウトウトしていたらしい。昨日、悩みすぎて夜更かしをしたせいだろうか。

『ダイエット？』

顔を上げて頭上を見ると、彼の主が何やら決意に満ちた表情をしていた。

そう。それだ。

マルスはその意味がわからずに昨晩中悩んでいたのだ。

『しかしダイエットとやらは確か昨日からだったはずでは……』

「あ、今からじゃなくて、今日の午後から、ね。今朝はね。シューさんからとってもおいしいマドレーヌをいただいたの。だから今日の午後からね」

嬉しそうな主の笑顔は、まるで薄紅の花弁を優しく運ぶ春の風のようだ。

同時に鼻の奥をくすぐる甘い香り。

『はあ』

これまでの主の発言とそのときの状況から推察するに、ダイエットというのはこの甘いお菓子と関係があり、どうもこのお菓子を食べるのはそのダイエットという行動に反することのようだ、と、そこまでは理解していた。

そして今、主は自分の決意に反する行動を取ろうとしている。

主は決して意志の弱い人間ではない。しかし甘いお菓子のこととなると話が別だった。

ここは自分が止めるべきなのだろうか。

しかしそこまで口を挟んでいいものか。

などと、マルスが真剣に悩んでいると、
「おー、セシルちゃーん。ちわーっす」
やってきたのは一人の少女。その出で立ちから、この屋敷の使用人であることはすぐにわかる。
「あ、こんにちは、ヴァレンシアさん。休憩時間ですか？」
ヴァレンシア＝キッチンというその少女はマルスもよく知っていた。もちろん主――セシリアの敵ではない。
「そそ。つかセシルちゃん、随分とおいしそうなの持ってんじゃん？　それ、どしたの？」
「あ、これは先ほどシューさんにいただきました。シューさんの作るお菓子はいつもおいしくて百点満点なのです。ヴァレンシアさんもお一ついかがですか？」
「……またか。あのロリコンめ」
「？」
「あ、なんでもないなんでもないよーっつか純真無垢なセシルちゃんはあんまあの男に近付かない方がいいよー変な病気移されるからねー」
「え？　病気？　シューさん病気なんですか？」
「そらもう。病気っつーかあいつ自身が病原体。バイ菌そのもの」
「あ。えっとー……」
苦笑するセシリア。
マルスは表面上は興味なさそうに、ただ耳だけをそばだてて二人の会話を聞いていた。
話の中身はだいたい理解できる。シューというのは今朝方セシリアと話していた若い屋敷の使用人のことで、彼女の手にしている甘いお菓子を作る人間のことだ。
と、そこへ、
「あ、いた！　ヴァレンシア！」
もう一人やってきた使用人の少女。やはり敵ではない。
「おぃっす、パメラー。どーしたのさ、そんなに慌てて」

「どーしたじゃないよ、もう。……あ、セシル様。すみません、騒がせてしまって」
パメラという少女がペコリと頭を下げる。
「いえいえ。それよりなにかあったんでしょうか？」
「あ、いえ、そんな大したことでは――ちょっとヴァレンシア！　あなた、またエレンに何かイタズラしたでしょ！」
腰に手を当てたパメラがヴァレンシアに詰め寄った。
「えぇぇ、身に覚えがないなぁ。うーん、あれかぁ。それともあっちかなぁ……」
「覚えあるんじゃない！　もう！」
「……ありゃしまった。このヴァレンシアさんともあろう者が」
「わざとらしいんだってば、もぅっ！　ほら！　さっさと行って謝ってくる！」
「えぇぇ」
「えぇぇ、じゃない！」
ヴァレンシアは渋って、
「でも何から謝ればいいのかわかんないしー」
「全部謝んなさいっ！」
ズルズルとパメラに引っ張られていくヴァレンシア。
去り際、ペコッともう一度頭を下げるパメラ。
なんとも騒々しい。
だが、セシリアはそんな二人のやり取りを楽しそうに眺めていた。
「じゃーまたねー、セシルちゃーん」
「はい。またよろしくです」
ニッコリと見送るセシリア。
マルスはそれを見上げて気持ちが暖かくなる。
……主の幸せは自分の幸せでもある。だからマルスは、彼女を幸せにしてくれるあの二人のことが嫌いではない。いや、この屋敷の人間はほとんど嫌いではない。
つまりマルスの主である少女は、屋敷の人間にとても大事にされ

ているのだ。
「笑ったらエレンさんに悪いかな。でも本当はすごく仲がいいんだよ。ね、マルスもわかるでしょ？」
『イオタとガンマのようなものでしょうか』
いつもセシリアの気を引こうと喧嘩している二匹のことを思い浮かべてみると、なるほど、その言葉は正しいような気がした。ただ、あの二匹はたまに度が過ぎて本気になることがあるのが困りものである。今度、よく言って聞かせなければならない。
「うんうん。パメラさんも大変だよね、きっと」
最後のマドレーヌが彼女の口の中に消える。と、その口から突然ため息が漏れた。
「……うぅ。半分は明日にしようと思ってたのに」
『明日、ですか？　しかし、明日からは確かダイエットとやらをするはずでは？』
それともダイエットと甘いお菓子には何の関係もないのだろうか、と、マルスが微妙に混乱していると、セシリアはさらに呟いた。
「でも大丈夫だよね。うん。ティースさんも前に全然太ってないって言ってくれたし、今食べた分は全部胸の成長に回るはずだもん」
主は決して妄想癖があるわけではない。しかし、胸の話になると何故か現実逃避してしまうようだった。
『しかしセシリア様はもともと戦闘向きではありませんし、胸筋はそれほど必要ないかと思いますが……』
「うぅ、でも私、やっぱり半年前から何も変わってない気がするよ。ううん、絶対成長してない」
『胸筋が、ですか？』
「あ、そうだ。リディアちゃんなら色々知ってるかも。今度聞いてみようかな」
『はあ』
「――なあ、セレス」

今宵も紅い月が美しい。
「胸が発達しているかどうかということは、雌――女性にとってそれほどに大切なことなのか？」
「胸？」
相変わらず枝の上にいるセレスの姿は見えない。
「胸というのは胸筋のことか？　それとも乳房のことか？」
「ん？」
マルスは少し考えて、
「ああ、いや、よくわからない。だが、セシリア様がそのことをしきりに気になさっているのだ」
「なるほど」
納得したような声だけが頭上から聞こえてくる。
「人間の世界ではそれが女性としての魅力の一つの要素になり得ると聞いたことがある。おそらくはそういうことだろう」
「そうなのか。であれば、セシリア様の悩みは相当深刻だな」
マルスは真顔で、本人が耳にすれば間違いなくヘコみそうなことを呟いた。
セレスはそんな彼を見下ろして、
「あくまでいくつもの要素のうちの一つということだ。人間たちの価値観は我々と違って多種多様だからな」
「そうか。難しい」
夜空を見上げる。
「ああ、見ろ、セレス。今日も綺麗な月だ」
「私はここの月が好きだよ。光が柔らかい」
「柔らかい？　……なるほど、そんな気もするな」
マルスは少し間をおいて続けた。
「だが、きっとセシリア様の手の方が柔らかい。俺はセシリア様の手があの月よりも好きだ」
頭上の枝葉が微笑するかのように揺れた。
「お前らしい発想だよ、マルス」

白い蛾が月に向かって飛ぶ。
りぃ……ん、という虫の鳴き声が聞こえて。
そして夜はさらに更けていった。

マルスの目の前には今、主であるセシリアの他にもう一人の少女がいる。
「え、マルスにですか？」
「ええ。この前暴漢から助けてくれたお礼。彼の口に合うかどうかわからないけれど」
シーラ＝スノーフォールというその少女は、セシリア曰く、すごい人物らしい。昨日まではどこがどうすごいのかマルスにはわからなかったのだが、改めて見てみると、なるほど、確かに胸は主より発達しているようだ。
『しかしそういう意味で言うと、ジョエッタ殿の方がすごいのでは』
マルスの頭に浮かんだのは恰幅と切符のいい年輩の女性使用人の姿だったが、どうやらそういう単純なことでもないらしく。
難しい。
と。
まぁ、そんなことに散々悩みつつも、マルスはシーラの持ってきたお礼――鳥の筋胃部を茹でたもの――を口にしてご満悦だった。
「ありがとうって言ってます」
「そう。喜んでもらえたのなら嬉しいわ」
チラッと見上げると、シーラは優しげな微笑みでマルスを眺めていた。
「よかったね、マルス」
皿はアッという間に空っぽになった。物足りない気はしたが、それを言うのは贅沢というものだろう。
「まだあるわ。食べていいわよ」

『……！』

至福の時が訪れた。

「ところでシーラさん。あの私、少し悩みがあるのですが、聞いていただいてもよろしいでしょうか」

「悩み？　どうしたの？」

ピク、と耳が動く。

いくら目の前に大好物があっても主の言葉は聞き逃さない。

悩み。

ダイエットのことだろうか。

あるいは昨日言ってた胸の話だろうか。

「実はその、最近、あのお化粧というものが気になって気になって仕方ないのです」

『……おけしょう？』

どうやらまた新たな悩みのようだ。

「気になるって？　お化粧をしてみたいってこと？」

「はい」

真顔で頷くセシリアに対し、シーラは少し考えるような顔をして、

「何か理由があるの？」

「シーラさんもたまーにお化粧なさってますよね？　たまーにですけども」

「え？　ああ、そうね」

一瞬だけ視線が泳いだ。

人間がああいう仕草をするのは何か隠したいことがあるときだと知っていたが、セシリアは気付かなかったようだ。

「ぶっちゃけた話をしますと、ですね」

セシリアは改まってそう言うと、少し不満そうに頬を膨らませる。

「私がお兄ちゃんと並んで外を歩いているときなのですが、何故か道行く男の人がみんなお兄ちゃんの方を見るのです。それはまぁいいのですが、でも誰一人として私の方は見ないのです。うわ、すげぇ美人――あの背の高い方な、とか、それはもぅサクサクッと言わ

れてしまうのです」
「ああ、アルファさんね……確かに、あの人は――えぇ、とても男性とは思えない姿をしているわね」
その言葉にセシリアはますます不満そうな顔になって、
「確かにお兄ちゃんが綺麗な顔をしているのはホントのことですし、妹としてそんな兄がちょっとだけ自慢だったりするのも確かなのですが、しかしこれは女としてあまりに屈辱的な話であります！」
主が珍しくヒートアップだ。
眉間に皺を寄せ、口元を引き締め、右拳を握りしめて空を見上げる。
「だから次回のお出掛けのときにはお化粧でもして見返したいのです！　せめて、ああ、でも隣にいるのもなんか女の子みたいだぜ――ぐらいにはっ！」
「……ささやかね」
シーラの苦笑に、マルスもまた同感であった。

「――なぁ、セレス」
「どうした？　また彼女のことか？」
三日連続で綺麗な月夜だった。
「ああ。俺は、セシリア様以上に素晴らしい人間は――シルヴァーナ様を除いてはいないと思っているのだが、どうやら人間の世界ではそうでもないようだ」
「人間と私たちでは価値観が違う。当然のことさ。……しかし」
セレスは顎を上げて中空に浮かぶ月を見つめた。
「お前はまた少し人間じみてきたな、マルス」
「？　なんの話だ？」
意味がわからず問いかけると、セレスは枝の上から彼を見下ろして、
「お前は今、彼女とシルヴァーナ様を天秤に架けた。本来、私たちはそういうことをしないものだ」

「なんのことだ？」
わからない顔のマルスに対し、セレスは短く問いかけた。
「マルス。お前の主は誰だ？」
マルスは即答する。
「それはもちろんシルヴァーナ様だ。だが、シルヴァーナ様からセシリア様のことを任されているのだから、セシリア様も私の主だ。そうじゃないのか？」
少し間を置いてセレスが答えた。
「それだよ、マルス。私たちの世界に“二人の主”などという考え方はない。自分の体が一つしかない以上、必ずどちらかを裏切らなくてはならない事態も起こりうるだろう？　私たちにとって主を裏切ることは死を意味する。生命ではなく、存在の死だ。存在意義の消滅だ。だから本来そういうことは有り得ない」
「……」
マルスは神妙な顔で視線を落とした。彼女の言いたいことは理解できた。
「だから人間じみてきたと言ったのだよ、マルス。それは人間には珍しくない感情だ」
枝葉が微かに揺れる。
セレスは続けた。
「私だって何かあれば彼女を護るように言われている。しかし、ただそれだけだ。お前のようにそれ以外のこと――彼女の悩みをどうこうしようなんてことは考えもしない」
「……」
マルスは神妙な様子で、やはり夜空の月を見上げた。見上げながら、そういうことを諭す彼女もまた、少し人間じみてきているんじゃないかと漠然と思った。
「……二人の主、か」
月は素知らぬ振りで、ただ柔らかな光を二人に注ぎ続けていた。

「帝都はやはり人がたくさんいますか？　休日の中央市場よりたくさんですか？」
「ん、ああ、そうだね。特に前回行ったときはちょうどクライン教の神祭の時期だったからものすごい混雑ぶりだったな。ちょっと油断すると隣の人とすぐはぐれるぐらいだったよ。今は――どうだろう。大きなイベントといえばデビルバスター試験ぐらいだし、こことそう変わらないんじゃないかな」
「へぇぇ……」
通常、秩序に守られたこのネービスの街を、体の大きな狼が人間の付き添いもなく歩いているということは考えられない。犬であってもそれが飼い犬ならば飼い主が付き添うし、野良犬なら運が悪いと捕まって殺処分されてしまう。
しかしマルスは特別だった。
首飾りに目立つよう刻まれたミューティレイクの紋章。
人間はそれを見て安心する。その狼が特別に訓練され、決して人に害を加えることはないものだと理解するからだ。
セレスと違って翼を持たない彼にとって、これは非常に有り難いことだった。
朝、主であるセシリアを学園まで送った後、彼はだいたい一匹で屋敷まで戻り、夕方になると再び学園まで主を迎えに行く。主や主の周りに迷惑をかけないよう寄り道などは一切しないし、できる限り道行く人々を怖がらせないように気も遣う。
そんな彼の日課。
この日の朝もマルスは、セシリアを学園まで送っていくところだった。
「じゃ、俺はこの辺で。早く帰って姉さんの出発の手伝いしなきゃならないから」
「はーい。気を付けてくださいね」

去っていったのはセシリアと同じ学園に通う少し年上の少年だ。
友人というよりは顔見知りという程度だが、通学する時間帯が近いためかたまたまこうして会話を交わすことがあった。
「聞いた？　すごいね。私も一度ぐらいは帝都に行ってみたいな……ね、マルス。マルスは――」
下りてきた視線が少し不思議そうになった。
「――どうしたの、マルス？　変な顔してるよ。何か悩み事？」
『……？』
我に返ってマルスは主の顔を見上げた。
太陽は少しずつ南へ向かって上り始めている。
少年が去って今はセシリアと二人きりだ。
『変な顔？』
人間と違って彼らの表情の変化はそう大きくない。もちろんそれに気付く人間も稀にはいるし、彼女がその中の一人であることも知ってはいたが、それでもマルスは虚を突かれた思いだった。
『悩み事？　俺が、ですか？』
悩んでいるという自覚はなかった。
彼らは人間と比べると単純な世界に生きているため、悩むこと自体がそんなに多くない。しかし言われてみればなるほど、昨日といい一昨日といい、彼は悩んでいるようだった。
昨日と一昨日は主の悩みに対して。
そして今日は、昨晩セレスに言われたことで。
「マルスはどんなことを悩むの？　御飯がおいしくないとか？　あ、それともそろそろ恋人が欲しいなぁとか？」
セシリアは歩きながらそう言った。
『いえ、そんなことは』
「……？　違う？」
『違います、セシリア様』
「……」
セシリアは少しの間マルスの顔を見つめて、

「違うんだ？　じゃあ、うーん……」
『……』
言葉が通じていないことをマルスは理解している。主は彼の言葉を理解できない。それは当たり前のことだ。
しかしながら、だいたいの場合において意志は通じる。
マルスは空を見上げた。
朝の陽光の中に、彼の良く知る“戦友”の影がチラリと見える。
「あ」
セシリアは足を止め、やはり空を見上げて言った。
「セレス？　お散歩かな？」
『……そのとおりです、セシリア様』
とても人間の視力で見える距離ではない。
「手振ったら見えるかなぁ」
おそらく空を舞う彼女からは簡単に見えるだろう。
セシリアが空に向かって大きく手を振ると、周りの人々が少し不思議そうな視線を彼女に向けた。
マルスは確認しなかったが、空からの反応はなかったようだ。
何事もなかったかのように再び歩き出す。
「……セレスっていつも忙しそうだよね。でもそうだよね。余所見したら危ないもんね。落ちちゃったらタイヘン」
マルスは何事か考えて。
『セシリア様は――』
言い切る前にセシリアの方が口を開いた。
「ねぇマルス。今日の帰り、寄り道に付き合ってね」
『え、あ、はい。それはもちろん』
「香草を買っていくの。でもお料理じゃないよ。この前のお守りをティースさんがとても気に入ってくれたみたいだから、また作ってみようかなって」
『それは良い考えです。帝都までは長い旅になりますから』
「ねぇマルス。喜んでくれると思う？」

『そう思います』
セシリアは本当に言葉が通じたように、嬉しそうに微笑んだ。
春風が吹いて。
やはり温かくなる。
そうこうしているうちに、
「おぉーい、セシルぅーー」
「あ、コレット。シリウスくんも、おはよー」
主の学友たちがやってきた。
別にマルスたちだけではない。学園でも屋敷でも、彼女は基本的にいつも人に囲まれている。彼女が与えてくれる安らぎは、おそらく彼だけが感じているものではない。
『……』
学友たちが横に並んだのを見て、マルスは無言のまま一歩後ろに下がった。

「……セレス。やはりセシリア様も俺の主人だ。俺にとって特別だ。シルヴァーナ様と同じように。考えたが、そう思う」
欠けた月明かりの一部を遮って、枝の上から視線が下りてくる。
セレスは一呼吸置いて特に驚いた様子もなく言った。
「そう思うことを咎める者はここにはいない。しかし難解な生き方だよ、マルス」
「それは構わない。俺が恐れるのはあの方の笑顔が永遠に曇ってしまうことだ」
マルスは月を見上げた。
「きっとあの月が厚い雲に覆われて二度と見られなくなってしまうような、そんな苦しさに違いない」
「ズルいな。そう例えられてしまえば、私もお前の気持ちを理解せざるを得ない」
セレスの視線も月を追う。
「……ここは一見平穏な場所だ。我々がここに来たのが三年前の夏。

それ以降、少なくともこの敷地内では危険なことは何一つ起きていない。しかし……」

セレスはゆっくりと視線を正面に向け、遠い地平線を見つめた。

「この平穏が永遠に続くことはないだろう。いずれこの場所にも、彼女の身にも危難が降りかかってくる」

「何故そう思う？」

「直感だよ。……少し冷えてきたな」

背の黒い翼がゆっくりと華奢な彼女の体を包み込む。

「そうか？　俺は少し鈍感みたいだ」

「いや。私が敏感すぎるだけだよ」

確かに昨日までよりは少し冷えているようだ。

風が吹いてマルスは無意識に首を竦める。そうするほど寒かったわけではないが、どうやら彼女の言葉に影響されたらしい。

セレスは言った。

「人間の持つ曖昧さは時に致命的となる。お前のそれも。だから難解だし、困難なのだ、マルス」

「……」

叢雲が月を覆った。

マルスは視線を地上へと降ろした。

少し考えて、

「危難というのはやはりシルヴァーナ様の――か？」

「とも限らない。ここの人間たちは危険な過去を背負ってきている者が多いのだろう」

「？　それも直感か？」

「直感だよ。お前と違って盗み聞きできるほど耳はよくないんだ」

そこまで言ってセレスは言葉を止め、視線を横に向けると居住まいを正した。マルスはそれを不思議に思ったが、その理由はすぐにわかった。

気配が彼らの元へと近付いてくる。日が変わってすぐのこの時間に動いている人間はそう多くない。

マルスも姿勢を正した。
近付いた影が言った。
「マルス、セレス」
「「はい、我が主」」
ざぁっと春の風が吹いて夜に照らされた薄紅色の花弁が無数に舞い上がる。さざめく薄緑色の芝生の海の中、夜空を支配する月のごとき冷厳かつ清廉な――彼らの主、シルヴァーナ＝イスラフェルは僅かに桜色に染まった姿でそこに現れた。
身が引き締まる。
セシリアに接するときとはまったく別の感覚。しかしよくよく思い出してみれば、それこそが正しい――“主”と接するときの正しい感覚だったような気がする。
（とすると、セシリア様はやはり“主”とは違うのだろうか……）
また少し混乱する。
しかし彼が深く思い悩む前にセレスが枝の上から問いかけた。
「主。また、ここを離れるのですか？」
シルヴァーナは無言のまま頷いた。
セレスが言った。
「お供します」
「必要ない。それより、またやってもらいたいことがある」
「はい。何なりと」
彼女はセシリアに貼り付いているマルスと違い、主のために何かと飛び回っている。時には何十キロも離れた土地に向かうこともあったが、聡明で冷静な彼女は顔色一つ変えずにそれをやってのけるのだ。
唯一の主。その主の言葉は絶対。それがどんなに難解なことであろうとも。
そんな彼女の姿こそが本来の彼らの姿である。
「マルス」
「はい」

「彼女の様子は？」
「特に変わりありません」
「そうか」
シルヴァーナはなんの感慨もなく頷いた。
実のところ、その主の真意がマルスにはまだわからない。出来る限り彼女のそばを離れぬように、と言われてはいるものの、それが護衛なのか監視なのかすら定かではない。主の真意について何一つ聞かされていないのだ。
全ては推測の類。
ただマルス自身は勝手に護衛であると思いこもうとしている。でなければ、彼女が“もう一人の主”たり得る要因が何一つなくなってしまうのだ。
（二人の主……自分の体は一つか……）
セレスのその言葉が胸に重石を残していた。
――有り得る。それは充分に有り得ることだ。
たとえば今は平穏なこの場所が危険に晒されたならば。
セレスはきっと迷うことなくこの主を守ろうとするだろう。
ならば自分は？　自分はどうする？　どちらを守る？
きっとそのとき、自分はセレスの言うとおりに苦しみ迷うことになるだろう。
守れ、と明確に命令されていたならば、そういう主の真意が確認できていたならば、それが主の意志であり、それがもう一人の主を守ることに繋がるのだから問題ない。しかし今のところはそれが確認できない。主の“もう一人の主”に対する感情も、マルスにはまったく読めない。
判断のしようがない。
シルヴァーナがゆっくりと彼らに背を向ける。
そして、
「マルス」
「はい、我が主」

視線がゆっくりと振り返る。
マルスはその瞳に夜空に浮かんでいるはずの紅い月を見た。
息が詰まる。
ああ、やはり自分の主は――
そう思って背筋が緊張で固まる。
あるいは、セレスがあれほどに月を奉拝するのも、この主の中に月を見ているからなのではないか、と、そんな風にさえ思える。
絶対なる月の主が、ゆっくりと口を開く。
そこから放たれた言葉はやはり、冷厳で、清廉で――

「……ダイエット、というのは、どういう意味なんだ？」

「お兄さん、お兄様、お兄ちゃん、兄上、兄者、兄貴――」
「……」
『……』
淡い栗色の髪の少女は二人――いや一人と一匹の視線を受けながら、鼻歌を交え、ユラユラと体で怪しげなリズムを取りながら何やら呪文のような言葉を口にしている。よほど機嫌が良いのか――彼女の機嫌が悪いことなどそうそうないのだが――擂り鉢を操る手も何やら浮き浮きしている。
部屋中に漂うのは爽やかな香草の香り。
マルスはくしゃみを堪えた。
「たまには、アルファさん、なんてのもいいと思わない？　ね、お兄ちゃん？」
「……何の話？」
抑揚のない声が流れる。

対するは、あどけない少女の明るい声。
「もちろん、今日のお出掛けの話。ちょっと雰囲気変えて呼んでみたらどうかなって」
「ああ」
『……』
もちろんマルスには彼女――セシリアの意図はわからなかった。
ベッドの上に座っているアルファの返答も完全に生返事だ。
そんな彼らを見つめて。
セシリアはやおら口を開くと、言った。
「四・十・点！」
マルスはちょっとビクッとしたが、どうやら劣等生のレッテルは彼ではなくアルファに向けられたものらしい。
「？」
不思議そうなアルファに対し、セシリアはまるで教師のような口調で言った。
「いくら妹でも女の子なのです。一緒にお出掛けするのですから、もっと楽しそうにして欲しいのです。そんなだからお兄ちゃんは女の子より男の子にモテてしまうのですよ」
「……」
それとこれとはたぶん話が別だ、と、マルスは思った。
「ね、マルス。マルスもそう思うよね？　マルスは女の子に優しい男の子だもんね」
『はあ』
マルスはチラッとアルファの顔を見てから困って視線を逸らしてしまった。もちろんそんな問いかけに答えられるはずもないのだ。
「……」
アルファもまた何も答えられず――答える気がないのか――セシリアから視線を逸らし、そしてつい先ほど彼女からプレゼントされたばかりの花の刺繍が入ったお守り袋を見つめる。
セシリアはそれに気付くと、聞かれてもいないのに得意そうに解

説を始めた。
「あ、お兄ちゃんのはこの前のを改良してみたの。明日からお仕事でしょ？　シーラさんに色々教えてもらって、ちょっとした自信作なのです。兄を想う妹の気持ちが袋いっぱいに詰まっているのです」
「……」
アルファは何も反応しなかったのだが、セシリアは勝手に続けた。
「あ、今作っているのはティースさんのだよ。お兄ちゃんも私もたくさんお世話になってるし、とにかく無事にって神様にお願いしておかなきゃ」
ようやく視線が動く。
「ティース？　私は別に何も――」
「三・十・点！　お世話になった人には感謝のキモチを忘れちゃダメです！　そんなだからお兄ちゃんはいつまで経ってもおヒゲが生えてこないのです！」
「……」
そこに何の因果関係もないであろうことはいくらマルスでもわかる。
「あ、これじゃ香りが長く保たないかも……うーん、二ヶ月だもんね。何かいい方法ないのかなぁ。シーラさんなら知ってるかな。知ってるよね、きっと。ね、マルス？」
『は、はぁ』
もちろんマルスに答えられるはずもなく。
アルファはまた手元のお守りに視線を落とした。遮られた言葉の続きを言うつもりはないようだ。
そんな兄妹の会話――ほぼ一方的に喋っているだけだが――に、マルスはホッと一つ息を吐いて、そして決して心地よいとはいえない剥き出しの床の上に丸まった。
そうしながら、あるいは無用な心配なのかもしれない、と思った。
「ねぇ、お兄ちゃん。ここ、そろそろ何か敷いた方がいいと思うよ。だってほら、マルスだって冷たそうだし……」

「でも邪魔――」
「二十点。そんなだからお兄ちゃんは私より男の子の視線を集めてしまうのですよ――くすん……」
「……」
どうあれ今の屋敷は平和そのものだし、しばらくはセレスの直感が現実になることもなさそうなのだ。
マルスはそんなことを思いつつ、東日を銀色の体に浴びながら少しウトウトし始めたのだった。

幕間『無秩序な景色』

「ネービスへ――」

そこは真昼にも関わらず薄暗い。しかもカビ臭い。屋内であることは確かだろう。頭上を覆う屋根の隙間らしきところから微かに陽光が漏れている。

しかし少なくとも一般に使われる住宅ではない。なにしろ窓がない。塞いだというわけでもなさそうでどうやら最初から存在していないのだから、当然人が快適に住むことを前提として作られた場所ではない。

あるいは死刑囚などの凶悪犯罪者を閉じこめておく特殊な牢獄だったのだろうか。

しかし……何にせよ。

そこは今現在、本来の目的としては使用されていない、廃屋のようなものであり、当然そこにいるのも死刑囚などではなかった。

――それよりも、凶悪な者たちだ。

「行ってこようかと思っています」

青年だった。静かで紳士的、しかしどこか得体の知れなさを感じさせる青年の声。その場の雰囲気にそぐわない、まるでちょっとそこまで買い物に行ってくるかのような、何気ない言葉。

「構いませんよね？」

薄暗闇の中、壁や天井、その辺に散らばる瓦礫に反響して微かに不気味さを増したその声は、もちろん独り言などではない。

そこには青年の他、さらに複数の気配があった。

「んー……これ、むっつかしぃなぁ……あぁ、もうやんなっちゃうナー」

聞こえたのはまるで子供のような言動、だがその姿を見れば、それが充分に成長した女性のものであることがわかる。

女は手にパズルのようなオモチャを持っていた。
「ねぇねぇリューちゃん。これ、やってー」
「……」
女性の声が向けられた先に、寡黙そうな男の気配。
「ねぇ、リューちゃんってばぁ――」
低く精悍な男の声がした。
「ネービスへ？　どういった風の吹き回しだ。貴様のことだ、あの男――クロイライナを助けに行くというわけではないのだろう」
「ええ、リューゼットさん。もちろん、そんな気はこれっぽっちもありません」
青年は答える。薄い氷のような笑みを口元に貼り付かせ、ゆっくりと壁から離れて歩み出す。
そしてまるで詩をそらんじるような口調で続けた。
「それにそもそも助けなど必要もないでしょう。彼のことだ。今回のことぐらい想定の範囲内で、もちろん集めた金を持ってネービスから脱出する方法――プラスアルファぐらいのことは考えてあるに違いない。……そうですよね、ニューバルド」
――ちりん。
微かに、澄んだ音がした。
ニューバルド――“報恩”と“復讐”を司る古の女神の名で呼ばれた女性――マリアヴェル＝フューレ＝ソーヴレーは短く口を開いた。
「そうだ、ね」
途端、換気口のない部屋に冷風が満ちる――そんな錯覚に襲われる。悪寒とは違う。威圧によってムリヤリ引きずり出されるものではなく、あまりの神々しさに自ら自主的に頭を垂れそうになる、そんな感覚。
彼女は神秘的だった。大陸でも珍しい振り袖型の装いと、九つに分けた髪にくくりつけられた鈴の音もまた、その雰囲気に輪を掛ける。

――ちりん。
澄んだ音が薄汚れた瓦礫の山に反響する。
マリアヴェルは続けて言った。
「どうしたの？　楽しそうだね、ザヴィア」
そんな彼女を見つめ、ザヴィア＝フェレイラ＝レスターの口元がさらに歪んでいた。
「ええ……」
白いターバンに添えた左腕が目線を隠す。その手の甲には涙型の入れ墨が三つ。黙っていれば優しげな好青年だが、その笑顔は確実に歪んでいた。
彼は夢想してしまったのだ。
目の前にいる神々しい彼女の未来を。彼女の道の先にある破滅を。
そのとき訪れるであろう極上の愉悦を。
「……ニューバルド。あなたという女性は、いつでもこの私を幸せにしてくれます」
「そう」
見つめるマリアヴェルの瞳は確実にその内なる欲望を見抜いている。しかし彼女はそれを咎めることはない。彼女にとってそれは些細なことであり、興味もないことなのだ。
と、そこへ。
さっきまでオモチャで遊んでいた女性が口を開いた。
「クロちゃん帰ってくるの？」
「そうみたいだよ、ネイル」
「そっか～～じゃーあのマズくて固いパンともお別れだね～～」
ネイル＝メドラ＝クルティウスはやはり子供のようにはしゃいでピョンと立ち上がった。裾のギザギザになったスカートがふわりと揺れて、それに合わせるように外側に跳ねたクセのあるロングヘアが踊る。
そして不思議そうにザヴィアを見つめた。
「あれ？　ザッピー、どっか行くの？」

ザヴィアは苦笑して、
「ええ。今さっきまで、その話をしていたのですがね」
「ほぇ？」
「無駄だ、ザヴィア。その阿呆が聞いているはずもない」
「あ～～！　リューちゃん、また私のこと阿呆って言った～～～！」
「阿呆を阿呆と言ったまでだ」
リューゼット＝カサ＝ドゥギラスは戦闘時と変わらぬ騎士のような甲冑に身を包み、瓦礫に腰を下ろして鋭い視線を正面に向けている。隙のない、威圧感漂うその姿は、並の人間ならば出会っただけで腰を抜かしてしまうだろう。しかし粗暴な雰囲気は微塵もなく、そこには隠しようもない知性の色も浮かんでいる。
「阿呆！　リューちゃんも阿呆！」
――タナトス。人々は彼らのことをそう呼ぶ。
神出鬼没、残虐非道。ただ獰猛な快楽殺人集団で、金品には目もくれずに殺戮を繰り返したかと思えば、襲った行商人やその家族には目もくれず、子供のオモチャを二、三個強奪していくだけだったりと、彼らがこの大陸で起こす事件はあまりにも無秩序で予測できない。中には彼らに命を救われたと――真偽のほどはわからないが――主張する者もいる。それほどに彼らの正体は一般の人々にとってあやふやなものだった。
また彼らは強大な力の持ち主ではあるものの規模が小さく、国家レベルでは脅威と認識されていないため本腰を入れて討伐しようとする国もない。稀に正義感に燃える者や被害にあった者たちが彼らを討伐しようとしても、ことごとく失敗に終わっていた。
そんなタナトスの中核を為すのが、今、ここにいる四人に、クロイライナという青年を含めた五人、なのである。
「……おや」
微かな気配。
ザヴィアが視線を横に動かした。
「誰か来たようですね」

空気が微かに動く。
「ザッピーも阿呆！　ヌーボーも阿――」
ゴン！！
「いった～～～～～っ！！」
「少し黙れ」
立ち上がったリューゼットがゆっくりと音もなく歩き出す。
ちらり、と、マリアヴェルの方を窺った。
ネイル以外は、近付いてくる気配に気付いているようだった。
「……」
気配は二つ。ここは人里から遠く離れた廃屋だ。何の目的もなく人が訪れるような場所ではなく、迷子にしては足取りがしっかりしすぎている。足音そのものに闘気がある。
人間の雇った刺客――デビルバスターか。
――いや。
リューゼットが入り口の前に立つ。
気配が無造作に近付いてくる。
緊張が高まる。
と。
ゴォッ……
「！」
突如、辺りが明るくなった。
オレンジ色に。
――敵の攻撃？
いや、違う。
「バルちゃん――」
「なっ……」
“味方”の攻撃だった。
ゆらりと立ち上がったネイル。後頭部を押さえる彼女の背後に、大柄な炎の狩人がその姿を現していた。
「リューちゃんにもたんこぶ作ってあげてっ！　私とお揃いのっ！」

「ネイル、貴様――！」
リューゼットが振り返る間もなく、炎の狩人は――明らかにたんこぶ程度では済まないであろう――幾本もの炎の矢を放った。
ザヴィアはいつの間にか軌道上から横に避けている。
マリアヴェルは少々驚いたような顔でそれを見ていた。
轟音。
鋼鉄で出来た扉が外側に吹き飛んだ。
「あはははは。リューちゃん、吹っ飛んじゃった――あれ？　あれ？　避けた？」
「貴様……」
リューゼットは避けていた。が、それでも僅かに爆風を浴びたらしく、髪の先が少し焦げ、頬には黒い炭と微かに血が滲んでいる。
「なぁんだぁ、避けたのかぁ……つまんないの～」
「……」
拗ねるネイルの姿を映したリューゼットの瞳には明らかな殺意が浮かんでいたが、残念ながら彼の希望は果たされなかった。
「――ああ、やはりそうだ」
声。
マリアヴェル、ザヴィア、リューゼット、ネイル――そのどれでもない。四人の視線を集めた者は建物の外にいた。
「タナトスの――方々ですね」
逆光を浴びて、二つの影が浮かぶ。外まで及んだネイルの“暴挙”の影響を受けた様子はなく、平然と立つ二つの者。
ただ者ではない――とわざわざ言う必要もないだろう。
男と女だった。
片方は漆黒の正装に漆黒のマント、漆黒の髪、漆黒の瞳――黒ずくめの男。物腰は高貴な者のそれで、一礼するとまるでそこが宮廷のパーティホールであるかのような錯覚に襲われそうになる。
耳は尖っている。
人間ではない。

人魔だ。
一方。
女の方は銀髪で男と対照的な白色の正装。白色のマント。美しくどこか儚げな少女……いや、女性というべきか。
こちらは耳が尖っていない。
人間か。
あるいは人に化けているだけか。
「ほぇ？」
ネイルは惚けたように闖入者を見つめていた。彼女は誰かが近付いていたことすら知らなかった（聞いてなかった）らしい。
「おや、久々に客人が来たかと思ったら、まるでオセロのような方々ですね」
ザヴィアが楽しそうに呟く。
「……」
リューゼットは無言で目を細めた。
そんなタナトスの面々を見回し、黒い男が口を開く。
「まずは誤解のなきよう。我々は敵ではありません。今日はあなた方にお話があって参上いたしました」
隣の白い女は黙って静かに微笑んでいる。
「話？　……面白そうですね、ニューバルド」
ザヴィアがそう言って振り返る。
「……」
マリアヴェルは最初の位置から微動だにせず、二人の侵入者をただ見つめていた。
――ちりん。
「あなたがタナトスのリーダー、ニューバルド様ですね」
黒い男が畏まる。
白い女も畏まる。
「お噂はかねがね。途方もない実力の持ち主であることも、もちろん――」

「サーヴァイン＝ジーン＝ベルリオーズ」
「……」
マリアヴェルの言葉に、全員の視線が集中した。
「隣の子はフレア。フレア＝ベルリオーズだね」
黒い男は少し虚を突かれた顔をしたが、すぐに元に戻って、
「ご存じでしたか」
「ベルリオーズというと――」
ザヴィアが少し意外そうな顔でマリアヴェルに問いかける。
「こちらの世界では最大の人魔の組織“ベルリオーズ”のこと、でしょうね」
「そう。この二人はそのベルリオーズの王子と王女。そうだよ、ね？」
「……いかにも、私の父はベルリオーズの王です」
やはり礼儀正しく、サーヴァインは改めて畏まる。
「私はその長男で、闇の王魔ジーン族の血を引く者、サーヴァイン＝ベルリオーズ。こちらは妹の――」
「フレア、と申します」
静々と女は礼をした。やはりどこか儚げで、とてつもなく大雑把な括り方をすればマリアヴェルと雰囲気が似てなくもない。
「ほう」
ザヴィアは薄い笑みで二人を見やった。
「ベルリオーズの頭は王魔でしたか。なるほど、人間たちが戦々恐々とするわけですね」
「それで？」
問いかけたのはリューゼットだった。
「そのベルリオーズの者が何の用だ？」
サーヴァインがすぐに答える。
「ええ、それはとても簡単な話です。実は――」
その言葉を言い終わる前に。
「バッカだなぁ、リューちゃん」

浮き浮きした表情で、ネイルが言った。
「遊びに来たに決まってるじゃない。ねぇ？」
ゆらり、と。
ネイルの背後で陽炎が揺れる。
「……」
無言で顎を動かしたサーヴァインと、ネイルの視線が重なった。
ネイルは言った。
「おーま、って、こないだの風の子と同じだよね。もっかい、試してみたいと思ってたんだ。ねぇ、ヌーボー。やってもいいよね？」
向いた視線の先。どうやらマリアヴェルに向けて言ったようだ。
マリアヴェルは答えた。
「好きにしたらいいよ」
サーヴァインが少しだけ驚いた顔をする。
「ニューバルド様。我々は別に戦いに来たわけではなく――」
「話は聞くよ、サーヴァインさん」
「ルルー」
会話を続けている間にも、辺りに急速に魔力が満ちていく。
炎の天使が産まれる。
「でも、私は別にこの人たちを支配しているわけじゃないから、ね」
ザヴィアは苦笑してその状況を見つめている。
リューゼットは腕を組んだまま微動だにしない。
マリアヴェルは――微笑んだまま。
建物が震える。
地の底から震えが迫る。
サーヴァインが眉をひそめた。
ようやく彼ら――タナトスが“通常の組織ではない”ことを理解したようだ。
漆黒のマントが熱風に揺れる。
「では……ニューバルド様。私が自らの身を守り、仮に彼女の身を害したとしても、あなたは私に敵意を抱かない……そう判断しても

よいのでしょうか」
マリアヴェルは絹糸のような声で答えた。
「さあ」
「……わかりました」
仕方ない、といった様子でサーヴァインは隣を見た。
「フレア。私の後ろに」
「はい。お兄様」
白い女が黒い男の後ろに隠れる。
途端。
男の雰囲気が変わる。
満ちる。いや、溢れ出す。
それは強大な――いや、王魔であることを考えればむしろ当然というべきか。強大な、あまりにも強大な魔力。
「……」
ザヴィアの顔から笑みが消えた。
リューゼットの目つきが厳しくなる。
マリアヴェルは――やはり微笑んでいた。
「いけ～～ルルー～～～っ！！」
炎の天使が手にした球体をサーヴァインに向けた。
そしてその手から球体が波動となって放たれ――いや。
放たれようとしたその刹那。
「！」
サーヴァインの背後から白い影が飛んだ。
一瞬。
天使が準備を整え、そして放つまでのその一瞬。
その瞬間、ネイルは完全に無防備だった。
それはほんの僅かな隙間だ。
にも関わらず。
白い衣の女は神速で翔んで間合いに踏み込んだ。
「兄様を傷付けようとする人は、許しません――」

「――」
ネイルが目を見開く。
フレアの体が懐に入った。その手には接近戦に特化した短いスピアが握られている。
「っ……」
ネイルが何事が呟くと、炎の天使が揺らいで、炎の騎士へと姿を変える。――変えようとする。が、遅い。とても間に合わない。フレアの一撃の方が圧倒的に速い。
一閃。
しかし――
ネイルを切り裂こうとした斬撃に対し、ぼんやりとした炎の騎士の中から突如、もう一人の騎士が姿を現した。
「……リューちゃん！！」
「……」
火花と、衝撃。
いつの間にかネイルのそばに移動していたリューゼットが、その一撃を防ぐ。
「……」
フレアが驚いた顔をする。その細い眉に微かな憂いを浮かべ――すぐさま標的をリューゼットへと変えた。
一方のリューゼットは、自らの腕を襲った衝撃に驚愕するとともに、
――好敵手。
咄嗟にそう判断し、その口元に愉悦の笑みを浮かべる。
「下がっていろ、ネイル」
短くそう言い放って剣を払う。
ぎぃんっ！！
「っ……」
フレアとの間合いが広がった。
仕切り直し。その間は一秒の半分ほどだろうか。

二人が動く。
そして二撃目――は、なかった。
「フレア！　そこまでだ！」
「！」
ハッとして、白い衣の女が飛び退く。
――速い。
リューゼットは一瞬躊躇したが、結局追わなかった。
「申し訳ありません、兄様……つい……」
サーヴァインの後ろまで下がったフレアが申し訳なさそうに視線を落とす。
「いや。……気が済まれましたか？」
サーヴァインはそう言って視線をネイルに言葉を向けた。
「……む～～」
不満そうだった。黙っていればもう一撃、放っていたかもしれない。
が、それを制止したのは、それまで黙ってそのやり取りを見守っていたザヴィアだった。
「もういいでしょう、ネイルさん。私はこの方々のお話に興味があるのです」
ザヴィアがそう言うと、ネイルは渋々――口をいっぱいに尖らせて、
「……つまんないのっ」
奥の方に歩いていくと背中を向けてペタンと座り込んでしまった。
ガサゴソと辺りを探って先ほどのオモチャを見つけだすと、不満をぶつけるようにガチャガチャと乱暴に遊び始める。
リューゼットがそんなネイルを一瞥して、小さく息を吐く。
手にしていた剣が光の形になって四散した。
「……」
その右手に残った痺れ。
儚げで細い体躯からは想像もできない身体能力だった。

……好敵手ではある。そんな強い敵と戦うことは彼の生き甲斐でもあったが、それはあくまで一対一のという状況が前提だ。この場でその望みは叶いそうにない。

だから、体の奥底に沸いていた熱はすぐに静まった。

ザヴィアが言った。

「それで？　お話というのはどのようなことでしょう？」

「……」

サーヴァインはネイルをチラリと見て、それからマリアヴェル、最後にザヴィアへと視線を移すと、

「簡単なことです。あなた方には、我々の仲間になってもらいたい。その交渉をするために参上いたしました」

と、言った。

「……確かに。簡単なことですね」

予測していたのか、ザヴィアはクスクスと笑った。

「簡単なことですが……賢い提案とはお世辞にも言えませんね。いえ、失礼を承知の上で言わせてもらえば、とてつもなく馬鹿馬鹿しい提案だ」

サーヴァインは怯むことなく生真面目に答えた。

「もちろんそれなりの見返りはご用意いたします。なんでも、というわけではありませんが、あなた方の望みも大抵は叶えられると思います」

それを受けて、ザヴィアはますます愉快そうだ。

「だ、そうですよ、リューゼットさん、ネイルさん。お願いを聞いてくれるそうですから試しに言ってみたらどうです？」

刹那。

「そこの二人と、リューちゃんを丸焼きにしたい！！」

背を向けたまま、ネイルが即答する。

リューゼットはそんな彼女を見下したように一瞥すると、腕を組んで目を閉じた。

「そうだな。その後ろの女――その女と、どちらかが死ぬまで一対

一で闘わせてもらえるなら考えないでもない。もちろん“前払い”で、だ」
「……」
サーヴァインが眉をひそめるのがわかった。
からかっているようにも見えるが、おそらくどちらも本気だ。
「ね、馬鹿馬鹿しいでしょう？」
ザヴィアがククと喉を鳴らして笑う。そしてチラリと一番奥に視線を向けた。
「ニューバルド。あなたはどうです？」
「ない、よ」
――ちりん。
マリアヴェルは至極簡潔に答えた。
「あなた方に叶えられる私の望みは、一つもない。今も、この先も、ずっと、ね」
「あなたはネービスの――ディバーナ・ロウとかいうデビルバスターの集団を敵対視していると聞きましたが……我々が代わりにそれを徹底的に、二度と復活できないように叩き潰してさしあげる……と言ったら、どうでしょう？　それでもいけませんか？」
サーヴァインがそう言うと、マリアヴェルは少し意外そうな顔をした。
どこからそんな情報を手に入れたのか。――いや、この大陸の各地に勢力を持つ組織だ。その程度の情報収集能力はあっておかしくないだろう。
「ふふ」
マリアヴェルは喉の奥で琴のような美しい音色を奏でると、それからゆっくりと視線を持ち上げた。
ザヴィアが目を細める。
ネイルの手の動きが止まる。
リューゼットのこめかみがピクリと動いた。
彼ら三人が同時に動きを見せたのは、決して偶然ではない。

――彼らのごとき無法者でさえ――従う、従わざるを得ない――
それは。
「生きてここを出たいのなら――ね……」
「！」
その瞬間、サーヴァインは世界が全ての動きを止めたような錯覚に襲われていた。
――ちりん。
――ちりん。
――――ちりん。
微かな鈴の音が何度も耳の奥で反響する。
切り取られて網膜に焼き付いた視界の中、ただ一人、その中心にいる神のごとき女性の視線だけがゆっくりと動き、それが網膜を突き破り、脳の中心を焼いた。
脳髄を満たす、痺れ。
「言わない方がいい。言わない方がいいと思う、よ。ましてや、それを実行しようだなんて――ふふ……」
その言葉に戦意はない。
ないように見える。
今は。
しかし。
「――」
サーヴァインは絶句した。
彼は王魔。そして目の前にいる女性は――情報が間違いでなければ――将魔である。
“王”と“将”の差は“上位”と“下位”のそれより遙かに大きい。
“王”は戦う技術に長けていないと言われる場合も多く、それはある意味真実でもあったが、彼は違う。
戦うことに長けた、本当の意味での王魔である。
だから通常、考えられない。とても考えにくいことだ。
将魔である彼女の視線だけで、王魔である彼の背筋が緊張に震え、

冷や汗が浮かぶなどということは――。
しかし。
サーヴァインはすぐに認識する。
それは現実だ。
ザヴィア、リューゼット、ネイル――視界に在る彼らと戦ったところで、まともであれば決して負けないだろうという自信が彼にはあった。二人、いや、三人を同時にしたとしてもそれは同じだろう、と思っている。だからこそ彼は堂々とたった二人でこの場にやってくることができたのだ。
そしてマリアヴェルに対しても、つい先ほどまでそうだと思っていた。
しかし。
認識は改められた。
彼女と闘ったならば――あるいは一対一で負けることも――あるかもしれない。
それは彼が矜持を持たないからではなく、聡明な人物であったが故の正常な分析だ。
それほどに――彼女の身に纏うものは“異質”なのだ。
「サーヴァインさん」
その“異質”を表情に纏ったまま、マリアヴェルは続けた。
「それはとても無駄なこと。ただ気付いてくれるだけでいい。それだけで誰も死ななくて済むし、誰も悲しまなくて済む」
マリアヴェルの声はどこか悲しげで、しかし優しく微笑んだまま。まるで声と表情が別の生き物のようだ。
――おそらく、彼女は異端なのだ。下位魔、上位魔、そして将魔――そんな括りを与えることが間違いなのだ。
それはその強さだけでなく、性質も然り。強さは同じ境地であったとしても、決して――相容れない。
「……残念です、ニューバルド様。今回のお話は諦めます」
サーヴァインは礼儀正しくそう言った。

周りから見れば呆気ないように思えるほどだが、決して相容れない――これ以上が無駄であることを悟った今、彼にしてみれば当然の決断だった。

「ですが」

そう言って毅然と、まっすぐに、堕天の女神を射抜く。

「我々は近いうちにネービス領にも進出いたします。その邪魔だけは決してなさいませんよう」

「邪魔？」

「あなたのおっしゃる“無駄なこと”が起こらないことを祈っております。……では」

そうしてサーヴァインとフレアは去っていった。

ほんの五分ほどの交渉だった。

からん、と、瓦礫が音を立てる。

開けっ放しになった入り口から風が吹き込んで粉塵を空気中にばらまいた。

ザヴィアは貼り付いた笑みで入り口を見つめたまま、リューゼットは腕を組んだまま微動だにせず。そしてネイルは思い出したように再びオモチャを弄りだした。

一瞬の沈黙。

「――けほ、けほっ」

マリアヴェルが小さく咳き込んで、全員の視線が彼女に集まった。

袖で口元を覆ったマリアヴェルは少し困ったように辺りを見て、

「ん。ああ……風が入ってくるからかな。すごい埃。ザヴィア。あなたの力でどうにかならない？」

まるで来客などなかったかのような、平然とした振る舞いだった。

おそらく。真実、彼女にとって、ベルリオーズの来訪など気に留める必要のない出来事だったのだろう。

ザヴィアはそんな彼女を見て、あらためて薄い笑みを浮かべる。

「残念ですが、そういう使い方はしたことがないですね」
「そう。それじゃあ仕方ない、ね。じゃあ……そろそろクロイライナとの待ち合わせ場所に移動しようか。……ザヴィア。あなたはネービスへ行くんだったよ、ね？」
「ええ。そのつもりです」
「リューゼット。ネイル。あなた方は？」
「私はお前についていく。特に用もない」
「んじゃ私も～～～ん～～～むつかしいよぉぉぉ～～～」
ガチャガチャ、ガチャガチャ。
「そう」
マリアヴェルは微笑んで頷く。
そして、
「あ」
と、ちょっとだけ驚いたような顔をする。
途端。
くるるるるぅ～～～という奇妙な音が鳴った。
「？」
リューゼットとザヴィアが不思議な顔で見ると、マリアヴェルはほんの少しだけ頬を染め、視線を泳がせて小さな声で呟いた。
「……お腹減った、ね」
「お腹減った～～～！」
ポーン、と、ネイルがオモチャを放り投げる。
「固いパンも飽きた～～～！」
マリアヴェルはゆっくりと頷いて、
「ふふ、私も飽きたよ。……そうだ、ザヴィア。出掛ける前にみんなで食事でも行ってこようか」
ザヴィアは一瞬考えて、
「ネイルさんが恥ずかしい真似をしないと約束してくれるのであれば」
「え、私？　ザッピー、恥ずかしい真似って何のこと？」

「行儀悪く食い散らかした挙げ句、下に落ちた肉を拾って食べたりする――あなたの食事マナー全般のことですよ、ネイルさん」
マリアヴェルは真顔で頷いて、
「ああ。それは良くないよ、ネイル。お腹壊すから、ね」
「大丈夫だろう。犬猫が喰って大丈夫なものを、こいつが喰って腹を壊すはずがない」
「ん？　リューちゃん、それって、どういう意味なの？」
「要するに貴様が犬畜生と一緒ということだ」
「犬？　なぁんだ、そっかぁ」
何故かネイルは機嫌をよくしたようだ。
マリアヴェルもザヴィアも彼女にその言葉の意味を教えてやるつもりはないらしい。
「五月だ、ね」
外に出ると生い茂った枝の隙間から眩しい陽光が射し込んでくる。
「デビルバスター試験……か」
「風の噂では、ディバーナ・ロウからも受験するそうですよ」
後ろからついてきたザヴィアが言った。
「ティースさんも、受けるかもしれませんね」
マリアヴェルは振り返って、
「受かる、かな？」
「さぁ、どうでしょうか」
後方で爆音が上がる。
どうやらネイルとリューゼットがまた諍いを起こしているらしい。
「そう」
「受かって欲しいですか？」
「どちらでも」
小鳥の囀りが耳に心地よい。
「そうですね。どちらでも――」
ザヴィアの笑みが悪辣に歪む。
「どちらでも、あなたにとっては同じだ。デビルバスターであろう

となかろうと。ディバーナ・ロウである以上、全て同じ。ただ――
殺すときに涙を流すか流さないか。それだけの違い。でしょう？」
「ふふ……涙は出ないよ。出し方がわからないから、ね」
「だから、あなたは彼らを殺すのですか？」
「さあ」
――ちりん。
澄んだ音。
水色の小鳥が飛んできて――
「あ」
肩に止まる。
マリアヴェルは小さく微笑んで、腰の袋から細かくちぎったパンくずを手の平に乗せ、差し出した。
「平和だね。ザヴィア」
「平和、ですか。……あなたの口からそんな言葉が出てくることが、不思議です。あなたの感覚にはさすがの私もついていけません、ニューバルド」
ザヴィアは未だ爆音の止まない後方の“戦場”を見やり――それから手にした管楽器を口にする。
「ふふ……そう、かな？」
――ちりん。
鈴の音に合わせて、不思議な音色が流れ出した。
ちちちち、と、小鳥が飛んだ。
爆音。
長閑な陽気。
剣戟の音。
微笑む女神と、悪辣な奏者。
――それは、とてつもなく無秩序な景色だった。

その1『不条理』

不条理だ。

と、彼はいつもそう思うのだ。

たとえば手の中に立方体の賽があったと仮定しよう。

六面であるから一回振って一の目が出る確率は六分の一だ。二回振って二回とも一の目が出る確率は三十六分の一である。三回振って三回とも……となれば二百十六分の一だ。

その辺りの計算――いわゆる数学という――その理論の詳細は無学な彼にはわからない。ただ、説明されればなるほどと思う程度の脳みそはあるし、その理論が理解できなかったにしても、一回や二回程度ならともかく、三回、四回と立て続けに出る確率が単純に考えてそう高くないことだけはわかる。

そう。確率なのだ。

ティーサイト＝アマルナは食後のぼんやりとした頭の中で、さっきからずっとそのことを考えているのである。

魔を狩る者――デビルバスターの見習いである彼が、デビルバスター試験のために本拠地であるネービスのミューティレイク邸を離れたのは、この日の太陽が顔を出して三時間ぐらい後のことだ。今は太陽が空の真ん中を通過してからちょうど一時間ぐらい。とすると、屋敷を出発して五時間ほど経ったことになるだろうか。試験の行われるヴォルテスト領――帝都ヴォルテストまでは約二十日ほどの行程であるからまだまだ先は長い。

その五時間を費やした一行がどこまで進んだのかというと……実はたった今、ようやくネービスの街を出たところだった。

道先案内をするかのように、雄々しい一匹の鷹が青空を飛んだ。

ガラガラガラガラ。

造りのしっかりした馬車は、こうして街道を走っている分には揺

れが小さい。乗り物酔いしやすいティースにとっては喜ばしいことのはずであったが、それすらも今は仕組まれたことのような気がしていた。

――具合が悪ければ余計なことを考える余裕もなくなるのに、と。

ネービスの大貴族ミューティレイク家の紋章が刻まれたその中型の馬車には、六人用の比較的ゆったりとした座席が向かい合うように配置されている。六つの席にはティースを含めてちょうど六人の人間が座っており、彼が座っているのは進行方向と逆に向いた座席のちょうど真ん中で、外の景色を眺めるには最悪の席だった。

しかし、まぁ。ネービスの街からすぐ南の都市、ルナジェールへと続く街道は彼にとって見慣れた道だ。無理に見たい景色でもないし、どうしても見たければ誰かに場所を変わってもらえばいい。それは大した問題ではない。

いや、違う違う。

ティースは首を振って満腹感がもたらす脳裏の靄を振り払った。

それこそが問題なのだ。

景色は確かにどうでもいい。

問題は――気まずい雰囲気になったときに視線を誤魔化せる場所がない、ということなのである。

右を向けばそこには、ともにデビルバスター試験を受ける仲間、パーシヴァル＝ラッセルという二歳と三ヶ月ほど年下の少年がいる。

左を向けばそこには、この旅の護衛役であり、デビルバスター見習いとしては後輩にあたるクリシュナ＝ガブリエルという十ヶ月年下の青年がいる。

別にそんな彼らとの仲が悪いわけではない。そうではないのだが、気まずくなったからと言って彼らの方に視線を逸らしてしまえば、向こうは怪訝に思うだろう。まさかじっと眺めているわけにもいかないし、まさか後ろを向くわけにもいくまい。そうなれば完全に変な人である。

さて。

馬車に乗る六人は性別で分けるとちょうど三対三である。とすると、ティースの両脇にいるのがどちらも男性なのだから、彼の視界の中心を占める向かい側の三人はもちろん全員女性となる。

向かって左にいるのがパメラ＝レーヴィット、十五歳と五ヶ月。

正面にいるのがフィリス＝ディクター、十六歳と五ヶ月。

そして右にいるのがシーラ＝スノーフォール、つい昨日十六歳の誕生日を迎えたばかり、である。

十九歳となって二ヶ月ほどのティースから見れば、いずれも三つか四つほど年下の少女であり……そうやって改めて考えてみると、この六人の中では彼が一番の年長者であった。

年齢順でいうとティース、クリシュナ、パーシヴァルの男性陣が上に来て、その後にフィリス、シーラ、パメラと続く。一番年上のティースでさえ十九歳になったばかり、一番下のパメラが十五歳だから、ややもするとネービスの裕福な学徒たちが小旅行を楽しんでいるようにも見えるかもしれない。

それは年齢のせいばかりではなく。

なにしろティースを始め、クリシュナもパーシヴァルも、およそ戦う人間のようには見えないのだ。

ティースは言わずとしれた、ボーっとして頼りなさげな、ただとりあえず人だけは良さそう、というような外見だし、クリシュナは額の黄色いゴーグルこそ異色を放っているが、基本的には気品があって理知的な美青年、パーシヴァルはどう見ても誠実で裏表のなさそうな美少年だ。

顔の造形でいうとティースだけがだいぶ劣っているのだが――まぁ、ネービスの名門学園に通う由緒正しい家柄の仲良し三人組、のように見えなくもない。

一方の女性陣はというと――これは一言で足りる。

どこぞの高貴な家柄の御息女と侍女二人、である。

――いや、実際のところフィリスは屋敷で兼業侍女（？）をやっているし、パメラは侍女でこそないが使用人の一人である。だから

この場合、事実と乖離しているのは“御息女”の扱いだけで、それも彼女ほどの美貌の持ち主であればやむを得まい。

そして。

ティースにとって一番の問題は言わずとしれた、その高貴な家柄の御息女に例えられたシーラ＝スノーフォールの動向なのである。いや、動向というか表情というか――まぁ要するに機嫌なのだ。

機嫌が良くないのである。

なんだか最近こんなのばっかだなと思って記憶の糸を辿ってみると、そう。つい最近、彼女の通うサンタニア学園に臨時講師として赴いたときもこんな感じで始まったのではなかったか。

もちろん彼女の機嫌が悪いという一点のみを取ってそう思ったわけではない。そんなことを言っていたら彼の場合は毎日がデジャビュだ。

似ていると思った理由は、そこにある要因の中身が同じだったためであり、似ているというより繰り返しだったと言った方が正しいのかもしれない。

違うところといえば、前回は彼に少なからず非があって謝り通すしかなかった――謝ることができた――のだが、今回は彼には何の非もないために謝ることすらできないということである。

最悪だ。

だからそれは“不幸な確率”であり、やはり“不条理”なのである。

「――不思議だよね。シーラ様と似てるわけでもないのに……」

と、フィリス＝ディクターが言った。

子羊を思わせるふわふわの髪を持つ少女は、屋敷にいるといつも年上の女性たちに弄られてしまう役回りであるが、この中の女性陣では最年長ということもあって今日は積極的に会話をリードしようと頑張っている。

「でも、フィリス」

そう言ったのはミューティレイク家ハウス・メイドの少女、パメ

ラ＝レーヴィットだ。
「もともとそういう例外はあったんだし、私は特別不思議なことだとは思わないな」
そばかすと短い二本の三つ編みがいかにも素朴な印象で、年齢相応の幼いところもあるが基本は真面目でしっかり者――ティースの認識はそんなところで、それはおそらく実態とほぼ相違ない。
「あ、うん、私もそう思うけど、でも実際にはずっと唯一だったから、えぇっと……パースくんはどう思う？」
「え？」
パーシヴァル＝ラッセルは惚けた顔をした。それから少々困った顔でチラッと隣を見ると、
「本人に聞けばいいじゃないか。ねぇ、ティースさん」
「へ？」
急に振られてティースは間抜けな声を発した。
――ちなみに、現在ここで語られている話題は実のところ“確率”も“不条理”も関係ない。いや、ある意味確かに“不条理”ではあるのだが、彼がさっきまで呪っていた不幸とは全く別の話。
全く別の不幸である。
「い、いや、どうかなぁ。自分のことながら何が何やら。そりゃ、その、元々女の子と話すのは得意じゃない――緊張しちゃうタチだったけど……こうなる前は普通だったし、こうして話している分には何の問題もないしなぁ」
言わずもがな。彼の特殊体質――妙齢の女性に触れると気絶してしまうという“女性アレルギー”についての話題だった。
この体質そのものも不幸なら、その秘密がすでに屋敷の大勢の知るところとなっているのもまた不幸なことなのであるが、こっちの不幸についてはすでに慣れっこであまり不幸であるとも感じなくなっていたりもする。
そんなティースに対し、パメラは少しだけ年相応の好奇心を覗かせた。

「ダメだと知っているからみなさん触れないようにしてるのだと思いますけど、でも、意外と大丈夫な人がたくさんいるのかもしれませんよ？　たとえば私も――あ、いえ、その、別に試してみたいと思っているわけではないのですが」

「いや、たぶんダメだよ。セシルぐらいの歳ならまだわからないけど、君はどこからどう見たって立派な女の子だから」

するとパメラは少し恥ずかしそうな顔をした。ティースがその反応に気付いていたなら自らの言葉の意味を考えた後、少なからず顔を赤くして“深い意味はない”などと弁解するのだろうが、彼は幸い気付かなかった。

考えていたのだ。

――この特殊体質については彼自身わからないことだらけである。少なくとも“女性”に反応することだけは確かで、それも厳密にいえば“妙齢の女性”であり、赤ん坊だとかお婆さんが平気なことから、自身が“女性”を意識してしまう相手に反応するのではないか、というようなことを一応は推測できる。

とすると、たとえ女性であってもそれを意識しない相手ならば大丈夫ということになるのだが……それもどうやらおかしい。

例外的存在――シーラがいるためである。

チラッと盗み見た。

彼女は会話に参加せず、未だ不機嫌なのか、あるいは何か考え込んでいるのか、黙って外を眺めていた。

その横顔は微動だにしなければ彫刻と錯覚してしまうほどに整っている。あまりに整いすぎていて現実味がないほどだ。

考えようによっては――極めて原始的な女性としての魅力――性的魅力という点でいうと、彼女はそれほど優れているわけではないのかもしれない。

彼女を見る者にほんの僅かでも神秘を崇める心があったなら、彼らは意図するしないに関わらず、自らの邪な想いに自戒の鎖を巻き付けざるを得なくなるだろう。

それほどに彼女の美しさは神がかっている。
しかし、ながら。だからといって彼女を女性でないと思いこむのはいくらなんでも難しい。たとえ彼女が侵し難い神々しさをその身に備えていたとしても、それは男神でなければ両性具有神でもない、紛うことなく女神のそれである。
彼女は“女性”だ。“彼女”はどう足掻いても“彼女”だ。
それは当然、ティース自身の認識とも大きく離れてはいない。不可抗力で顔が近付けば頭に血が上るし、心臓は馬鹿みたいに早鐘を打つ。――いつかの温泉街での出来事以来それは非常に顕著になっていて――アレルギーの症状でなくとも距離が詰まれば平常心は保ちづらくなる。彼はそのたびに自己嫌悪に陥って、不届者、と、自分の頭をぽかりと殴りつけるのだから。
にも関わらず、触れて気絶することだけはない。頭が真っ白になったとしてもそれは極めて正常な範囲での反応で、つまり彼は彼女が女性であることを認識した上で触れて、それにも関わらず彼の体は彼女を拒絶しないのである。
だから、この体質はそれほど単純なものではない。
ティースはそう認識していた。
とにかく、これまで――極度の緊張状態だったりという例外を除けば――アレルギー反応が起きなかったのは五十、六十歳を過ぎたお婆さんや、あるいは十歳にも満たない幼い少女、そして今、視界の右隅で外を眺めている美しい少女しかいなかったのである。
いなかった、のだ。
つまり――そう。単純なものではなく、理解できないものでもあるからこそ、未知の部分が眠っていたとしてもそれは決して不思議なことではなくて――
「でもそれじゃあ――」
パメラが言った。
「あの人は、どうして大丈夫だったんでしょう」
一瞬だけシーラの視線が動き、横目でティースの顔を捉えた。だ

が、それはすぐ戻って彫刻になる。
不機嫌なのか、考え事をしているのか。
――いや、両方だろう。
不機嫌なのは確かだが、彼女もまた不思議に思っているのだ。
彼女以外で初めて、平常状態のティースがアレルギー反応を起こさなかった、その女性のことが。

少し、時間を巻き戻すとしよう。
その女性のことと――冒頭でティースがぼやいた“不幸な確率”の出来事は、ほぼ同時に発生したものなのである――

キャラバン協会というのは一言でいって、旅の安全を斡旋する組織である。
街道が整備され、治安部隊がその安全を確保すべく懸命に働いているとはいえ、街から街へ移動するには相応の危険が伴う。盗賊による金品目当ての襲撃はもちろんのこと、獣魔――大半が主人を持たないものであるが――などの襲撃もそう珍しいことではなく、この広い大陸の中、その全てを公的部隊の力によって防止することはほぼ不可能だ。
自分の身は自分で守る。その目的を効率よく達成するためには同じ目的地を目指す者たちが一緒に移動するのがもっとも手っ取り早い。
至極単純な話である。
キャラバン制度は暦が大陸歴となる以前から大陸各地で自然発生的に存在していたものであり、暦が代わった後、その有効性に着目し、長距離移動の利便性や安全性向上を目的として大陸全土に設立

されたのがキャラバン協会だ。
その役割は簡単にいうと、仲介と調整と斡旋である。
同じ方向に向かう者たち（基本的には登録のある協会員からの申請による）を集め、日程などを調整し、護衛を生業とする傭兵等の斡旋を行う。こういった共通の経費についてはそれぞれの人数や規模、目的地までの距離などを計算して按分し出資する。だから最終目的地が一緒でなくとも途中まで一緒であればキャラバンには参加できるし（この場合共同出資にかかる費用は当然安くなる）途中で二つや三つに分岐したり、途中で参加する場合もある。
さらに大事なのは、このキャラバンに参加するには協会員としての登録が必要であるため、その身分が保障されるということだろう。キャラバンメンバーによる盗難や強盗などのリスクが低いのだ。
ミューティレイク家はもちろんこのキャラバン協会に登録している。帝都ヴォルテストまでの移動に際し、この制度を利用することになったのも自然なことだろう。
そして――
「え？」
「……え？」
この短く、しかし予測外の出来事に対する驚きの表現としては充分すぎるほどのニュアンスをもった男女の呟きこそが、ティースの嘆いた“不幸な確率”の正体であった。
「シーラさん？　それに……ティース、先生？」
キャラバン協会ネービス支部の玄関付近。
何枚かの書類を右手に外から入ってきた少年の姿に、ティースとシーラは同時にその動きを止めたのだ。
そして咄嗟に思ったのが六面の賽。六面の賽を三回振って全て一の目がでる確率は二百十六分の一であるが、この事象は少なくともそれより遙かに低い確率であろう、と。
彼の頭ではそれがどれだけの確率であるか計算することも不可能であったが――

「君、オーウェン……くん」
昼も近くなった頃。
必要な手続きを全て終え、キャラバン協会ネービス支部の建物から出てきたティースたちの前に現れたのは二人にとって非常に見知った少年、オーウェン＝トレビックだったのである。
ご存じのとおり、彼はシーラと同じサンタニア学園薬草学科に通う学徒であり、ティースが特別講師を勤めた際には彼の生徒でもあり――シーラの恋人だった。
それがどれだけ予想の範囲外の出来事だったか。
それはティースの隣にいるシーラでさえ、驚きに立ち止まったまま二の句が継げないでいる姿からも充分に推察できるだろう。
普通に考えて、彼がこんなところにいるはずがないのだ。この時間であれば学園に行っているはずだというのはもちろんのこと、ここにいるのは、ヴォルテスト方面に向けて一時間後に出発を予定しているキャラバンのメンバーだけなのだから。
「……えぇと」
驚きのまま見つめ合う三人の中で、一番早くそこから脱却したのはオーウェンだった。
見開いていた目をゆっくりと元に戻し、温厚そうな目元を微かに緩め、無意識に手にした書類を顔の前でパタパタと二、三度揺らすと、先んじるように言った。
「いや、実は俺、先生とシーラさんはたぶん、最初から知り合いなんだろうなってことは思ってたんです。講師と生徒が知り合いっていうのは言いにくいことだと思うし、隠したのは当然のことだと思います。だから」
「え……あ、えっと」
ティースはまだこの不測の事態に対応できないでいる。
「だから気にしないでください。あ、いや、なんか俺、勝手によくわからないこと言ってますね……」
オーウェンは少し笑って頭を掻いた。それから横に視線を動かす。

「シーラさん。二ヶ月休学するって、こういうことだったんだ。病気にでもなったのかと心配したよ」
「……ええ」
シーラの方は平常を取り戻しつつあった。ティースに比べると（比べる対象のレベルが低すぎる気もするが）何倍も適応力がある。
「仕事なの。詳しいことは聞かないでもらえると助かるわ」
「聞かないよ。ずっとそうしてきたし」
「ありがとう」
シーラはいつもの調子でそう言ったが、どことなく後ろめたさの残る口振りだった。
「ところでオーウェン、あなた――」
「オ、オーウェンくん。な、なんでこんなところに……？」
「……」
ティースの横顔に冷たい視線が刺さった。
ただ一人平常心を取り戻していない彼の仕草は明らかに挙動不審で、これでは無事に収まるものも収まらなくなってしまう。
だが、オーウェンは気にした風もなく屈託なく答えた。
「家の用事なんです。ウチは美術商なんで遠方との取引があると――普段は親父が行くんですけど、今回はちょっと事情があって」
「え……美術商？　でも君、薬草の勉強してるんじゃ？」
「あ、いえ、俺は単なる付き添いです。みんな俺が後を継ぐと勘違いしてるんですけど、後を継ぐのは――」
と。
「オーウェン？　どうしたの？」
そんな彼の後ろから別の声がした。
オーウェンは振り返って、
「ああ、姉さん」
「……姉さん？」
ティースとシーラの視線が同時に注目する。
逆光を浴びて建物に入ってきたのは華奢な体躯の女性だった。

あと一歩間違えたら不健康、というほどに細く白い肌……それと対比的に濃黒の下睫毛が非常に印象的で、大きな瞳のせいかティースより年下のように見えるが、オーウェンの姉ということであればおそらく彼と同じか年上だろう。袖と服が別々になった珍しいデザインのワンピース――袖は黒、服は若草色――を身に纏い、袖と同じ色の長靴下を履いている。背は一見百七十センチ近くあるように見えたが、どうやら踵の高い靴を履いているらしい。実際は百六十センチそこそこというところか。

オーウェンが再び向き直る。

「姉です。……姉さん、この二人は――シーラさんのことは話したことあったよね？　それと隣の人はティースさん。少し前まで俺の受けてた講義の講師してた人」

「この方がシーラさん……聞いたとおりの綺麗な人」

女性は少し眩しそうに目を細め、それからニッコリと微笑み頭を下げた。

「ネイリーン＝トレビックといいます」

いかにも女性っぽい女性、だとティースは思った。色っぽいというわけではなく、少女のように華奢で可憐なところが思わず守ってあげたくなるようなタイプである。

シーラが軽く礼をした。

「はじめまして。シーラ＝スノーフォールです」

「あ、えっと、ティーサイト＝アマルナです。よろしく……」

釣られて挨拶はしたもののどこか上の空だ。というのは別に彼女――ネイリーンに見とれていたというわけではなく、未だ最初の衝撃から立ち直りきっていないためである。

すっかり平常を取り戻したシーラがそんな彼に呆れた視線を向けたのも仕方あるまい。

「ということは、あなたはお姉さんの付き添いで――つまり同行者――ということね？　……奇遇ね、本当に」

最後は半ば諦めたような口調だった。不本意なのは当然で、言う

までもなく彼女は学園とそれ以外の日常を三年以上も切り離して生活してきた。それが望みもしないのにここにきて一気に暴露されつつあるのだ。

しかし――前回はともかく――今回に関しては誰が悪いわけでもない。

ただ、あまりにも運が悪かっただけで、聡明な彼女をもってしてもティースと同じように不幸な確率を呪うしか手段はなかった。

「……じゃあ俺はちょっと手続きしてくるから、姉さんはそこで待ってて」

「ええ。頼むわね、オーウェン」

オーウェンが建物の奥に入っていくのを見送って、ネイリーンは入り口付近の椅子にふわりと腰を下ろした。

つ……とあげた視線がティースを捉える。

微笑んだ。

「恥ずかしい話ですが、一人では何もできないもので。弟にいつもこうして世話を焼いてもらってます」

「あ、はぁ……」

生返事のまま、ようやく現在の状況を把握しきったティースはちらっと隣の少女を見た。

明らかに不機嫌だ。――それはそうだろう。しかし何度も言うように、今回に限っては彼が悪いわけではない。完全に不可抗力だ。どうしようもない。

ネイリーンはその微妙な空気を察した様子もなく会話を続けた。

「ティースさん、と呼んでいいのかしら。ティースさんはディバーナ・ロウの方なんですか？」

「……え？」

完全に虚を突かれた。

何故わかったのか、と、問いかける前に彼女の方から答える。

「先ほど、六剣の馬車から出てくるのが目に入ったもので。今月はヴォルテストでデビルバスター試験のある月ですし、それならばも

しやと」
「あ、ああ……」
六つの剣を組み合わせた形の紋章がミューティレイク家のものであることは当たり前に知られている。そのミューティレイクがディバーナ・ロウに対して支援を行っていることもそれなりに知られていることであるから、なるほど、彼女がそう推測できたことは不思議でもなんでもない。
ネイリーンはティースの表情からそれが正解だと悟ったらしい。
「心強いですね。旅はやはり危険が付き物ですから」
「いや、といっても俺は、そんなに頼りにされるほどのものじゃ……」
本心である。が、現実にいえば彼とパーシヴァル、それにクリシュナの三人は護衛役としても充分すぎる戦力だろう。共に行く人間からしてみればこの上なく心強い。
す……と、ネイリーンは視線を横に動かした。
「とすると、シーラさんもディバーナ・ロウの？　弟の学友だと聞いていましたけれど……」
「副業です。三月で卒業できなかったものですから、新たに学費を稼ぐ必要ができてしまって」
シーラは淀みなく答えた。
よくこうも咄嗟に破綻のない嘘を吐けるものだ、と、ティースなどは感心してしまう。
「副業というと――」
言いかけてネイリーンはシーラとティースを見比べる。
そしてクスッと笑った。
「ごめんなさい。なんだか逆に見えますね」
「逆？」
シーラが怪訝な顔をすると、
「いえ。まるでティースさんの方が付き添いのようで」
言って、ネイリーンは可笑しそうにクスクス笑い出してしまった。

「……」

それはよくよく考えると結構失礼な物言いだったかもしれないが、実際がどうであれ、彼女の隣にいればどんな人間でも従者のように見えてしまうのである。

もちろん気になどならない。

ブゥゥゥン、と、大きな羽虫の飛ぶ音に、ティースは視線を動かした。

いつの間にか外が賑やかになっている。

開け放たれた建物の入り口から見ると、同じキャラバンの同行者たちがどんどん集まっている様子が見て取れた。商人風の男たちばかりだ。もともとキャラバン協会の会員は商人が圧倒的に多いからそれも当然だろう。積み荷やスケジュールの確認を行っている様子だ。

ここに集まるのは八組、護衛として雇った五人の傭兵を加えて総勢五十名余り、と聞いている。もちろんそれはあくまでここを出発する段階の人数であり、この先大きな街に立ち寄るたびに増減はあるだろうが、そこまで詳しいことは聞かされていなかった。

なんとなしに眺めていると、一際頑丈そうな造りの馬車が止まっているのに気付く。

（……なんだ、あれ？）

目を引いた。

通常、人が乗ることを前提として作られた馬車は窓がついている。当然だ。そうでなければ中に乗る人間は外も見られずに昼も夜も暗闇の中で過ごすことになってしまう。

それが当たり前である。

しかし。

（なんだろ、あの馬車……）

黒っぽい色の無骨で無機質な馬車にはどう見ても窓らしきものがついていなかった。ティースが見ているのは右側だけだから、あるいは左側についているのかもしれないが、なんとなくそうは思えな

い。
入り口とおぼしきところには大きなかんぬきがついていた。
「……」
馬車の傍らに立っているのは屈強そうな二人の男。護衛のようだが、共同で雇った傭兵とは別だ。おそらく馬車の持ち主が個人的に雇ったものだろう。
怪訝に思いながら眺めていると、その護衛に男が一人歩み寄っていくのが見えた。
どこか鋭利な刃物を思わせる細長い目の男。三十歳前後だろうか。髪は短く背は高い。……が、体は細目で短めの袖から覗く腕はそれほど筋肉質ではない。
察するに、あの黒い馬車の所有者か関係者だろう。
何事か話しているが、もちろん声は聞こえなかった。
「ティース？」
怪訝そうなシーラの呼びかけに我に返る。
「あ、いや、なんでもないよ」
奇妙な馬車のことはすぐに頭の隅に消えた。
振り返ったところでオーウェンが戻ってくるのが視界に入ってくる。
「お待たせ、姉さん」
「ありがと。ごめんなさいね、面倒なこと全部任せてしまって」
「オーウェン。あなたたちはどこまで？」
「終点――ヴォルテストまでだけど、シーラさんは？」
「同じよ。そう。最後まで一緒なのね」
まあ、こうなってしまえばどこまでだろうとたいして変わらない、という半ば投げやりな気持ちのこもった声だった。
だが、それとは裏腹にオーウェンは爽やかな笑顔で言った。
「シーラさんはどうかわからないけど俺は素直に嬉しいよ。ヴォルテストまで三週間、顔を合わせる機会があるのとないのとじゃ天と地ほど違うからね」

「あら」
驚いたような声を出したのはネイリーンだった。
「オーウェン、あなた、彼女とはそういう関係なの？」
「ああ、いや違う、姉さん。俺の一方的な思い込みだよ」
（……？）
ティースはその言葉に引っかかって、チラッと隣の少女を見る。
「なに？」
「あ、いや」
盗み見たつもりがあっさり気付かれてしまった。慌てて目を逸らす。
が、やはり気になった。
（……恋人同士なのに“一方的”なんて）
そういえば。
やはりそんなようなことを言っていた彼女の友人――ディアナ＝リーのことを思い出すと、ティースはそのまま逸らした視線で今度はオーウェンの顔を捉えた。
（……うぅん）
一目で見て、好青年である。決して派手ではないし特別優雅でもないが、穏やかで和やかな印象。そういう意味ではティースと雰囲気が酷似しているが、ハンサムで優柔不断でも頼りなくもない辺りが違う。――要するにベクトルは同じだが判定は圧倒的大差の敗北である。
（……シーラのやつ、この子のどこが気に入らないんだろうなぁ）
疑問だ。
いや、本当に気に入らなければ彼女のことだ、まるで路傍の石ころを相手にするかのように視線すらも合わせないに違いない。そんな彼女が――実態はどうであれ――公式に恋人として認める存在なのだから、もちろん好意は持っているのだろう。
しかし彼女の友人である少女の言葉を借りれば、彼らはちっとも恋人らしくないのであり、先ほどの発言からすると当事者であるオ

ーウェン自身も自覚があるらしい。
ティースが疑問に思うのは、何故、好意を持っていて、なおかつどう見ても非の打ち所のない青年に対し、恋人であるとしながらも恋人らしいことを何一つしようとしないのだろうか、と、そういうことなのである。
その気がないなら付き合わなければいいだけなのだ。まさかムリヤリ付き合わされているというわけでもあるまい。
――いやまあ、ティース自身女性と付き合った経験が皆無なので、その辺の事情とやらにはあまり詳しくないのだが。
「じゃあ、シーラさん。ティース先生――っていうのも変ですね。ティースさんも、また後ほど」
「あ、ああ、また……」
相変わらずの生返事である。
「姉さん。行こうか」
声をかけてオーウェンが外に出ていく。
「ええ」
ネイリーンはゆっくりと彼の後を追う――追おうとして、ふと思い直したように――ティースの眼前で――立ち止まると、正面に向き直ってそっと手を差し出した。
「旅の間、よろしくお願いしますね」
「あ……」
自分に向けて真っ直ぐに差し出された手。
焦った。――もちろん女性アレルギーである彼はその手を握り返すことなどできない。
と。
「よろしく」
「……」
隣のシーラが差し出した手に、ネイリーンは戸惑ったような顔でティースを見た。
が、すぐ思い直したように少し体の向きを変え彼女と握手を交わ

す。
（……サンキュ、シーラ）
思わぬ助け船だった。
「私たちも行きましょう。みんな待ってるわ」
握手を終えると、シーラは間髪入れずそういって踵を返した。
ふわり、と、目の前で金糸の髪が踊る。
「あ、ああ、そうだな」
ティースも慌ててその後を追う。
追おうとして、
「……」
立ち止まってネイリーンを振り返った。
……こういうところが彼の悪いところである。止むに止まれぬ事情があったとはいえ握手を無視してしまったのだから、せめて何か一言フォローを入れなくては、と考えてしまったのだ。
ティースは少しどもりながらも言った。
「あ、えっと……長旅は慣れてないもんで、色々迷惑をかけたりするかもしれないけど……こちらこそよろしく」
「……」
ネイリーンは少し不思議そうに見つめてきたが、やがてニコリと微笑んで、
「ええ。旅は道連れと言いますから――」
そう言った。
すでに握手を交わすほどの距離ではなく。そのまま別れれば心に引っかかるものもなく万事円満解決でめでたしめでたし。
で、あったのだが。
ブゥゥゥゥン、と。
「？」
大きな羽虫が飛んだ。
先ほど外で飛んでいた虫だろう。固い殻を持つ体長七、八センチほどの黒い虫が顔の横を通り抜け、飛んでいった。

「うわ」
あまりにも顔に近かったので、ティースは少し顔を背けた。……いくら頼りないだの情けないだの散々な言われようであろうとも彼は一応男である。小さい頃には虫を素手で捕まえたこともあるし、その程度で過剰に驚くようなことはない。
が、しかし――
「え……きゃっ」
ネイリーンは過剰に驚いた。華奢で可憐な彼女らしく控えめな悲鳴で、甲虫を避けようとした体はバランスを崩し、その手は支えを求め宙をさまよって――
「――へ？」
放っておけば転倒していたであろう彼女に、思わず手を差し伸べてしまったのは彼の性だろう。別に自分の体質を忘れてしまったわけではなく、ただそれを考えるより先に手を差し伸べてしまったというだけのことだ。
その瞬間、しまった、と考えはしたものの、だからといって今さら手を引っ込めることができるわけでもない。
こうなった以上は受け止めて、なるべく早く離れるしかない、と。
しかし。
その思惑は想像もしていなかった方向に大きく外れることとなった。
先ほどの“へ？”は、そういう意味の呟きだったのである。
「ご、ごめんなさい。私、ああいう昆虫がものすごく苦手で……」
支える腕を掴んだまま、ネイリーンは少し青ざめた顔でティースを見上げていた。
一秒、二秒……五秒、十秒……
「……」
ティースは惚けた顔でネイリーンを見つめる。
おかしい。
すでに接触から十秒以上は経っている。にもかかわらず――通常

であれば五秒も保たないはずの――彼の意識は未だ現実に留まっていた。

留まっているどころか、いたって正常だ。

具合が悪くなることも、気が遠くなることもなく――

「……ティースさん？」

ネイリーンは不思議そうに。

「――」

ティースは驚きに目を見開いたまま。

二人はそれからたっぷり一分ほど――外から彼を呼ぶシーラの声が聞こえてくるまで――無言で見つめ合っていたのだった。

「――怒らないでくださいね。私、なんだか少し浮き浮きしてるんです」

「？」

濡れた髪にそっと櫛を通しながらシーラは振り返った。

一日目の目的地、ネービスのすぐ南にあるルナジェールという街はネービス十大都市のうちの一つである。その昔は国防の要所として、現在は交易の要所として変わらずに栄えている街だ。

初日の宿は二階建て、三人部屋だが小さな湯浴場のついた部屋だった。旅の宿として一般人が泊まるものとしてはかなり良質のものである。

宿に入って色々と仕事――シーラとフィリスは同行者の健康チェックが今回の任務の一つである――を終えた後、フィリスとパメラに勧められるまま、一番最初に湯浴みを済ませた。今はパメラが使っていて、一番年上のはずのフィリスが遠慮して最後である。

シーラはベッドの上にちょこんと腰掛けたフィリスに尋ねた。

「どうしたの、突然？」
　正直なところ、シーラと彼女との仲はそれほど良くない。別に嫌っているわけではないが、接点がないのであまり親しくはないのだ。またフィリスはフィリスでどことなくシーラのことを怖がっている――おそらく第一印象のせいだろう――ようなフシもあった。
　改めて見ると、やはり子羊のような少女である。身長だってシーラはもちろんのこと、さらに年下のパメラより小さくおそらく百五十センチほどしかない。以降、逆転することはおそらくないだろう。
「私、お屋敷では一人部屋なんです。ですから、その、こういう機会というのはなかなかなくて……」
「ああ、あなたは侍女だものね」
　シーラは納得して頷く。
　同じ使用人でも役割によってやはり格の違いはある。パメラたちハウス・メイドは通常女性使用人寮での三人部屋だが、当主であるファナ＝ミューティレイクの三人の侍女たちは全て屋敷別館の一人部屋で過ごしている。つまりシーラやティースといった客人扱いの者たちに近い待遇なのだ。
「でもあなたは確か第一隊の隊員でもあるのよね？　その任務でこういうことはよくあるんじゃないの？」
「あ、え、ええ、確かにそうなんですけど、でも、その、ファントムの皆さんは年上の方ばかりですので、どうしても……」
「話しにくい？」
　フィリスは慌てて手を振って、
「いえ！　皆さんとても優しくて、その、それはそれでとても楽しいんですけど……なんというか……」
　もじもじしている彼女を見て、シーラは小さく頷く。
「なるほどね。わかるわ」
「わ、わかりますか？」
「ええ」
　ただでさえ控えめな彼女のことだ。いくら仲が良くても目上の人

間には話しづらいというようなこともあるのだろう。
髪を梳かしていた櫛をおいてゆっくりと自分のベッドへ移動する。シーラのベッドは入り口から一番遠い窓側、フィリスは一番入り口に近い方だ。
ベッドに腰を下ろすと、その動きをフィリスがずっと追っていたようだ。
「どうしたの？」
「シーラ様、髪を下ろすと……その、ますます大人っぽく見えます」
「そう？」
それはあまり言われたことがなかった。――当然か。人前で髪を下ろすことなんてほとんどない。
手にした髪飾りをサイドテーブルの上に置く。
外は真っ暗だ。少し風が強い。雲も出てきたようだ。
明日は雨かな……なんて考えていると、フィリスがやはり遠慮がちに言った。
「シーラ様はパメラちゃんと仲がいいんですよね」
「そうね。屋敷の中ではよく話す方よ」
「じゃあエレンちゃんとかヴァレンシアさんのことも知ってます？」
「ああ……パメラの同室の子だって聞いたことあるし、顔ぐらいはなんとなくわかるけれど、それ以上のことは知らないわ」
「そ、そうですか」
少しの間、沈黙。
「……あ、シーラ様はもう赤ちゃん見ましたか？」
「赤ちゃん？」
「はい。ラナさんの――あ、ラナ＝パークスさんっていうキッチンの方の……えっと、その、知りませんでしたか？」
「ラナ……ええ、わからないわ。でも赤ん坊の話は確か――前にセシルがそんなこと言ってた気がするわね。先月の話かしら？」
「あ、そ、それです！　ラナさんの赤ちゃんなんです！　ラナさんは住み込みの方ですし、旦那さんもお屋敷の方なので、家族寮に行

くと赤ちゃんに会えるんですよ！」
シーラはじっとフィリスを見つめて、
「なるほどね」
「あ……」
フィリスは少し落ち込んだ顔をした。
「す、すみません。ぜんぜん興味なかったですか……？」
だが、シーラは笑みを零した。
「そんなことないわ。戻ったら是非会ってみたい」
「……」
ホッと安堵の息を吐くフィリス。
また少し沈黙。
会話を探そうとしているのがわかる。
そしてフィリスは考えた挙げ句、先ほどまでとは少し違う表情で上目遣いにシーラを見ると、言った。
「シーラ様は……好きな男の人っていますか？」
「え？」
少し意表を突かれた。が、すぐに取り繕って、
「どうしたの、急に？」
「あ、いえ……」
フィリスは自分から赤くなった。
「同い年ぐらいの子だとやっぱりみんなそういう話をするんです。でも私、そういう機会ってあまりないですし……それに、その、シーラ様って少し特別な感じですし、どうなのかなってふと……ご、ごめんなさい。聞かなかったことにしてください」
「……ということは、あなたにはいるのね？」
ズルいなと自覚しながらも話の焦点をすり替える。
「もしかしてパーシヴァル＝ラッセル？」
「え……」
フィリスはさらに顔を真っ赤にしたが、どうやらそれは外れだったようだ。

「パ、パースくんはそんなんじゃないです」
「そうなの？　とても仲が良さそうに見えるけれど」
シーラがそう言ってじっと見つめると、フィリスは膝の上で指先を弄ばせながら少し頬を緩ませて答えた。
「パースくんはお屋敷の同期なんです。私が来て一ヶ月後ぐらいだったかな……優しいから色々助けてくれます」
「そう」
確かにそういうものと恋愛感情は必ずしもイコールではない。脈がまったくない場合もあるし、別の感情で覆われて気付かない場合もある。
「じゃあ……」
シーラはそこまで言って止めた。“誰？”とまで言ってしまうとプレッシャーになると思ったからだ。無理に聞き出すつもりはなかった。
案の定、フィリスは耳まで真っ赤になった。が、迷っているということは案外聞いて欲しいのかもしれない。
（叶わぬ恋、かしらね……）
それを見てなんとなく、そう思った。
彼女の性格故なのかもしれないが、最初から諦めているような雰囲気が見て取れる。だからこそ、誰かに聞いて欲しいと思ったのだろうか。
「……様が……」
「？　……」
ほとんど聞き取れない声だった。が、口の動きでシーラは察した。
少し考えた後、
「……そう」
と、だけ言った。
彼女が口にしたのはディバーナ・ロウのデビルバスターの名だ。
シーラにとってはどちらかというと嫌いなタイプの人間……だが、ポテンシャルが高いのは間違いないし、理解不能ということはない。

しかし何らかの助言をすることは不可能だった。しようとすればきっと、否定的な言葉が口をついてしまうに違いないのだから。

結局、それ以上はなにも言わなかった。

「あの……それで、シーラ様は……？」

怖ず怖ずとフィリスが視線をあげる。今度は少し好奇心の色が混じっている。

「あ、あの、まさか――」

「心配ないわ。あなたと同じということはないから」

そういうとフィリスはホッと息を吐いた。

同時にパメラがちょうど湯浴場から出てきて、話はそこで打ち切りとなった。

（……なるほどね）

消灯して布団に身を沈める。

シーラは瞼の裏にその男の顔を思い浮かべた。

――わからないことはない。切れ者でどこかアウトローな雰囲気を漂わせた男。単純にそれをカッコイイと思う場合もあるだろうし、あるいはシーラの知らない一面を知っているのかもしれない。

が、しかし。

（あの男は――）

好きになれない。

実のところ、その男は彼女にとって命の恩人でもある。ティースがディバーナ・ロウに参加する前の事件で救われたことがある。そのときのいきさつを考えても、決して悪人ではないのだろう。

ただ、それでも好きにはなれない。軟派者であるとかそういう表面的な理由ではなく――それも一つの要因ではあるが――もっと根本的な部分。

その理由を考えて、すぐに思い当たった。

信用できない、のだ。

常に何か別のことを考えている。常に表面とは別の考えがあって、見た目の行動とは別に裏の目的がある。

そんな風に思えて仕方ない。
あるいは偏見なのかもしれない。
だが、それはその男に対するシーラの正直な感想だった。
視線を横に動かす。
――窓の外は夜闇。
そうして彼女たちの一日目は暮れていった。

「――よぉ、悪いな、こんな時間に呼びつけたりして」
リィナ＝クライストは戸惑っていた。
外は夜闇の中。屋敷は静まり返っている。
それもそのはず。今は夜の十一時。ほとんどの人間が寝静まっている時間。他人を部屋に呼びつけるにはあまりにも非常識な時間だ。
「しかしま、こいつはあんたにとってもあんま他の連中に聞かれたくない話だ。俺なりに気を遣ったってわけさ」
男は薄く笑う。
そして――言った。
「だろ？　水の王女様。水の王魔でクライストならグレイグ族だ。リィナ。リィナ＝グレイグ＝クライスト――が、正式なフルネームか」
「――」
それは驚くべきことではなかった。
この男には“あのとき”一度顔を見られている。実際に戦った相手でもあるのだから、気付いていたとしても不思議はない。
が、何故、今になって？
彼女がこの屋敷に来てからもう三ヶ月以上経っている。まるで――ティースとシーラの二人が屋敷からいなくなるのを見計らったか

のようなタイミングだ。
リィナにはその意図がまるで掴めなかった。
「わかりません。レインハルト様。私に何の用です？」
そう言ったリィナに対し、レインハルト＝シュナイダーは頭に撒いたバンダナの上から軽く頭を掻いて、ふっと笑みを漏らした。
「とりあえず何を言われてもしらを切り通す、どちらにしろ客観的な証拠はどこにもないんだから……って感じで示し合わせてた。ティースのヤツと」
「……」
まったくの図星だ。
「けど、甘いな。確かに朧による人化を見極めるのは不可能だというが、それはあくまで“通常の方法では”って話だ」
「……」
何も言わなかった。リィナとてこの男が切れ者であることはわかっている。下手なことを言えばそこから突き崩されかねない。
レイはそれすらも予測通りといった顔で続けた。
「確認する方法は皆無じゃない。非人道的な方法でなら、いくらでもある。たとえば――朧ってのは必ず契約を交わす人間が必要になる。その人間が誰だかわかっていれば話は簡単だ。なにせ、その人間が死ねば自動的に解けるんだからな」
ざわ、と。
リィナの黒髪が夜闇に溶け込んだ。
「あなた、は……」
「まあ待て、早合点するな。前にも言ったが、あんたみたいな若くて綺麗な女を敵に回すのは趣味じゃないんだ」
「……」
言葉通り殺気はない。正体を暴いて始末しようと考えているわけではないらしい。
そんなリィナの反応を――心の中の動きすらも見透かした目で――レイは少し楽しそうに眺めていた。

「エルレーン＝ファビアスもそうか？　とすると、身請けをしたのはさしずめあの――人間の方の王女様ってとこか」
「……」
「ま、そっちはあくまで推測でしかないがな。……さて」
ゆっくりと椅子から立ち上がる。
口元にはいつもの酷薄な笑みを浮かべたまま。
「話は簡単だ、リィナ＝クライスト。ただ――そう」
近付いてくる男をリィナは微動だにせず見据えた。
「悪役風に言えば、本当のことをバラされたくなきゃ言うことを聞け、って、ただそれだけのことなんだから、な」
「……」
リィナは動かなかった。
ただ――逃げる術がないことだけはハッキリとしていた。

その2『逢い引き』

「あれ？　エルのやつ今日は寝坊か？」
ミューティレイクの厨房に男の声が響くと、辺りは好意的な失笑の渦に包まれた。
厨房に入ってきたのは白いコック衣装に身を包んだ青年。まだ若くおそらくは十代だろう。白い帽子に包まれた頭髪は短く少し赤みがかっている。どちらかといえば童顔だ。
このシュー＝タルトという名の青年は若干十八歳にしてミューティレイクの菓子作りを任されている菓子職人である。少しおちゃらけて不真面目に見えるところもあるが仕事に関しては誠実そのもので、その才能はコック長のプレスリー＝ウッズワースも認めるところであった。
そんなシューが厨房に入ってくるなり、辺りをきょろきょろ見回しながら口にしたのが冒頭のセリフなのである。
そして、
「ちょっと、シュー？」
そんな彼の言葉に返ってきた、不満そうな少女の声。
聞こえたのは彼の真っ正面。ただし彼がきょろきょろやっている辺りからはほんの――いや、かなり下の方からだった。
「ボクならここにいるけど？」
視線がゆっくりと下へ。
「おぉ、いたのか、エル！　すまん、小さすぎて見えなかった！」
「……」
見上げる少女――エルレーン＝ファビアスはクルクルとした大きな瞳を今は僅かに細め、不満そうに目の前の菓子職人の少年を見つめると、
「いくらなんでもそんなに小さくないよ。相変わらず失礼だね、キミって人は」

「まぁまぁ、そう膨れるなって。ああ、ほら。アメ玉やるから」
そんなシューの言葉に、むぅ、と不満そうな声を漏らしてはみるものの、本当に怒っていたわけでもないので結局苦笑しながらアメ玉を受け取ることにした。
仕方ないだろう、と自分でも思うのだ。
先月十六歳になったばかりのエルレーンは身長が百四十センチほどしかない。それほど大柄ではない目の前の少年と見比べても頭一つ以上は違うし、同じ屋敷にいる二つ三つ年下の少女たちと比べてもやはり五～十センチは小柄だ。
だからキッチン・メイドである彼女の仕事場――このミューティレイクの厨房ではそのことがよく話題に上り、そのたびに彼女は不満そうな顔をしてみせるのだが、実のところそれほど気にしているわけでもない。周りの人間たちのその言葉には悪意がほとんどないのだから怒る理由もないのである。
そんないつもの朝の風景とともに――午前五時。
朝食の準備向けて厨房が動き出す。キッチン・メイドの名のとおり彼女たちの仕事は厨房や台所でのコックたちの手伝いがメインである。
「おーい、水！　水持ってきてくれー！」
「そっち片付けといてくれ！　すぐ使うから速攻で頼む！」
「邪魔だーどけどけー！　ぼーっとしてっと危ねぇぞっ！！」
「ふっ、料理とは過程すらも美しくなくてはならない。この私のように――」
「水！　水はどうしたぁっ！！」
火加減の管理や洗い物、その他雑用諸々……
屋敷では基本的に男性使用人と女性使用人で明確に命令系統が分かれているが、ここ厨房は唯一それが曖昧な場所であり、彼女たちは実質的に本来の上司であるハウス・キーパーではなく、厨房の主であるコック長の配下だと言ってもいい。
余談だが、それが理由なのかどうかは定かではないものの、他の

ハウス・メイドやパーラー・メイドたちと比べ、この屋敷におけるキッチン・メイドは使用人同士での恋愛・結婚に至る割合が高い……らしい。昨晩、使用人寮でエルレーンと同室の少女たちが話していたことで、言われてみればなるほど、先日赤ん坊の産まれたラナという女性はキッチン・メイドであり、旦那もやはりここの使用人だった。

エルレーン自身はどちらかというとそういう話に疎い。屋敷に来てまだ三ヶ月しか経っていないということもそうだが、それ以上に彼女はそもそも人間ではなく、そういった男女間特有の愛情という文化自体が存在しない“王魔”の少女なのだ。

まぁ、それでも。

彼女は例外的に、ある程度は人間の恋愛感情というものを理解してもいるのだが――

「おぅ、エル！　忙しいとこ悪ぃ！」

「ハーイ」

火の番をしていた彼女を呼んだのはコック長のプレスリー＝ウッズワースだ。プレスリーは口ひげを生やした四十歳過ぎの粗野な口調の男性だが、その印象とは裏腹に料理の味付けは華麗で繊細との評価を得ている人物である。

火の番を別のメイドに頼み、コック長の元へ向かう。四十歳を過ぎているとは思えない細身で筋肉質のコック長はうっすら額に汗を浮かべながら鍋と格闘しつつ、エルレーンの方を見もせず、

「ハーブが何種類か切れそうでよ。そこの紙に書いてあっから、ちょっくら行ってもらってきてくんねぇか？　わかんなきゃガードナーかマグナス辺りに聞きゃわかる。頼んだ」

早口にそれだけ言った。

料理台の上のメモ書きに視線を落とすと、そこには何種類かのハーブの名が書かれている。いずれも屋敷の中で栽培されているものだ。彼の言うとおり敷地内で栽培されているものばかりだから行けばすぐに手に入るだろう。

五時半を過ぎた。これからが一番忙しくなる時間だ。
紙を手にして厨房を出ると屋敷の中はハウス・メイドたちが忙しなく動いている。使用人以外の人々――いわゆる客人扱いの者たちもそろそろ目覚め始める頃だろう。
エルレーンはこの喧噪が好きだ。他人と関わっている自分を強く自覚できる。集団の中にいる自分を強く認識できる。
彼女が人間の世界に憧れたのは、それが一番の理由だった。――つまり彼女は何でもいいから集団の一員となりたかったのである。
彼女たち王魔の社会というのは基本的に“個”しか存在しない。彼女たちの社会には全個体の欲望を満たしても有り余るほどの資源の供給があり、個体が好き勝手に暮らしても社会は何ら破綻することはない。義務といえば子孫を絶やさぬようにという程度のもので、それとて明確に子を何人産んで育てろとかそういう決まりがあるわけでもなく、ただ年頃になればなんとなく、面倒だけどそろそろ子供産まなきゃな、ぐらいのもので、当然、その義務を放棄する者も出てくる。
結果、彼女たちの個体数は現在、少しずつ減少している。
エルレーンは小さい頃からそんな仲間たちのあり方が正しくないものだと感じていた。それは同時に自分たちとは違う価値観を持つ人間たちへの憧れとなり、やがてあるきっかけ――偶然人間界に流され、そこでティースやシーラと過ごした二年間を経て――確実なものとなった。
別に人間の思想を持ち帰って仲間たちに伝えようなどとは思っていない。
ただ、彼女は人間のように生きたかった。
小さい頃から憧れていた人間たちの仲間になりたかったのだ。
……その点、リィナとは少し違う。リィナの憧れは人間全体ではなく、ティースやシーラという限定的な個人に向けられたものだから。
（あれ？　そういえば……）

そんなことを考えていて、彼女はふと気が付いた。
（今日の朝会、リィナの姿が見えなかったな――）
「おはよ。エル」
そこへタイミング良く、見知ったハウス・メイドの姿が視界に入る。
「あ、おはよ、ジョエッタさん。……リィナは？」
「ん？　リィナ？」
両手一杯に洗濯物を抱えた三十代の恰幅のいい女性は、いつもリィナと一緒に仕事をしている女性だった。その両手の荷物もいつもはリィナが抱えているはずのものである。
ジョエッタは不思議そうな顔をして、
「あんた、聞いてないのかい？　あの子、今日からしばらく暇もらったんだろ？」
「え？　お休み？」
「ああ。あたしも急な話だったから何かあったのかって聞いたんだけどさ。何も言わなかったし……あんたも聞いてないってことは何か急な家庭の事情でもあったのかねぇ？」
初耳だった。
リィナはハウス・メイドだから使用人寮の部屋もまったく別で、毎日顔を合わせたり話をする機会があるわけではないが、だからといって彼女が何も言わずに休みを取るなんて明らかに奇妙である。そもそも王魔である彼女たちにはこちらの世界に帰るべき実家があるわけでもなく、知り合いが多いわけでもない。急に体調を崩したというなら別だが、他に突然休みを取らなければならなくなる理由など思い浮かばかった。
「それとも男でもできたのかねぇ？」
ジョエッタは笑いながらそう言った。
「ま、どっちにしろ心配はいらないよ。あの子、しっかりもんだからさ」
「うん」

エルレーンはひとまず笑顔を返して屋敷の外へ出た。
（どうしたんだろう、リィナ……）
ジョエッタはああ言ったが、やはりどう考えても腑に落ちない。
何かあったのだろうか。
何か。
――彼女に起こりうる“何か”といっても、思い当たるフシはそう多くない。
少し気になり、仕事が一段落した頃合いを見計らって他のメイドたちに聞いてみることにした。
「……リィナ？　そういえば昨日、夜中に長い時間部屋を出てたっけ」
「そうそう。屋敷の中に男でも出来たんじゃないって話してたんだけどね。ほら、あの子ってちょっと大人びてるし」
リィナと同室の少女たちの話を聞いて、不安はさらに強くなる。
もちろん彼女が夜中に部屋を出た理由は、少女たちが話すような色恋沙汰ではないだろう。それが有り得ないことはよくわかっている。
（そういえば……）
ピタリと足を止めた。
（今朝の食事……あの人の分がなかったな――）
ふと頭を過ぎったのはリィナがティースと再会したときの出来事だった。
そのときのことは話に聞いただけだったが、ずっと頭には引っかかっていたのだ。
リィナが唯一人魔としての姿を見せている、レインハルト＝シュナイダーという男のこと。
「……」
歩みを再開する。
急な休みを取ったリィナと、いなくなったレインハルト。いや、レインハルトの方は仕事なんかで屋敷から出ていくこと自体は特別

でもなんでもないが、この符合はやはり気になる。
彼に正体を知られているであろうことが危険という認識はリィナもティースも当然持っていた。が、聞くところによるとレインハルトという男はそのときにリィナたちを窮地から逃がしてくれたらしく、またティースがリィナやエルレーンを連れて屋敷に戻ってきたときも何も言わなかったそうだ。
だから大丈夫なのだと安心していたところもあるし、やぶ蛇になることを恐れたというのもある。
しかし――いや。
予断でしかない。リィナとて何かまったく他の理由で休みを取ったのかもしれないではないか。
――それでも考えるに越したことはないのだろう。
なら――
昼休み。
エルレーンは食事も摂らずに別館を出た。
実際のところかなり迷った。相談しようにもティースもシーラもいない。屋敷の人間は基本的に好人物ばかりだと思っているが、それでも気安く相談できる内容ではない。
結局、彼女の頭に最後に浮かんだのは一人の青年の顔だった。
その青年についてエルレーンはそれほど知っているわけではない。周りから話を聞かされ、一、二度会ったことがあるぐらいだ。親しく話をしたことは一度もない。
だが、一目見た瞬間に感じた強烈な印象があった。
“裏のない”人物。――彼にその表現を使えば、おそらくほとんどの人間が呆気に取られた顔をするだろう。むしろ彼はどこか得体の知れない人物としての評価が大勢を占めているほどだ。
しかしエルレーンはそう思わなかった。
彼はただ想いを外に見せないだけで――だから中身が見えづらいだけで――その本質は多分“純粋”――レインハルトとは対極にいるはずだ。

それも予断。
それでも間違っていない自信はあった。さりげなく情報を引き出すだけならおそらく与し易い相手だ。
外は快晴だった。この天気が南の方まで続いているなら、ティースたちの旅もさぞ快適になっていることだろう。
出逢いと別れを象徴する桃色の花が散り始めて、少しずつ夏の息吹が聞こえてくる。
暖かな日射し。
虫の声。
緑の風。
そして――
その建物はその全てを拒絶するかのような金属色をしていた。
「エルレーン」
青年――青年と呼ぶのが憚られるほど美しい顔をしたその青年は視線を動かさず、呟くように彼女の名を口にする。
一度しか名乗っていなかったが覚えていたらしい。
建物の中は薄暗い。金属の床、天井、壁、飾り気のない部屋の片隅に飾り気のないベッドがあり、南側に配置された窓のそばに一輪の花。そしてベッドの上に座ったままじっと花を見つめるのはディバーナ・ロウのデビルバスター、アルファ＝クールラントだった。
「私に何か用なのか？」
抑揚のない、一見突き放しているようにも聞こえる言葉。
だが、エルレーンは即座に、
「うん。そうだよ」
「セシリアなら学園だ」
「ううん。キミに話があって来たの」
まともに会話をするのは初めて。繋がりといえば彼の妹であるセシリア＝レイルーンと仲良くしていて、その中で二、三度言葉を交わしたという程度の関係だ。
視線がゆっくり動いて、初めてエルレーンの顔を捉える。

雪女を思わせる儚げな容姿、銀色の髪、冷たい眼差し。雪のような肌は妖精と形容されるエルレーンよりもさらに白く、まるで彼の周りだけ時が凍っているかのような錯覚さえ覚えてしまう。

しかし決して気後れすることなく、エルレーンは単刀直入に問いかけた。

「レイさんがドコに行ったのか知らない？」

アルファは無言の瞳で彼女を見つめ返す。

「レイなら今朝出掛けた。そして――」

まるでビー玉のような瞳。澄んでいるのか、あるいは死んでいるのか――三メートル弱のこの距離では判断がつかなかった。

「出掛ける前にここに来て、そうだろう、と言っていった」

「？　……！」

最初は何のことかわからなかった。が、エルレーンはすぐに理解して、

「そうだろうって、まさか――」

「君がここに来て、私にそのことを聞くだろうと……レイがそう言っていた」

「……」

エルレーンは愕然とした。

まさか。そんなことを予測するなんてできるはずが――

いや。

実際はそうでもないかもしれない。

少し冷静になって考え直す。

リィナがもし疑われていたのなら、同時期に同じ経緯でやってきた彼女も当然疑われていたと考えるべきだろう。そこまで疑っていたなら、リィナが突然いなくなったときに彼女がどういった反応・行動をするかといった予測も決して不可能ではない。

難しいとすれば話を持ちかける相手がアルファだったという部分であるが――彼女の交際範囲や性格からある程度絞り込むことはできるだろうし、絞り込めたならその何人かの人間に同じことを言っ

ておけばいいだけのことだ。七、八割の確率でアルファ、ぐらいまでは予測できたのかもしれない。

だから、この場合そんなことは問題ではない。あのレインハルトという男が切れ者であることは彼女も承知済みだったし、すでに正体がバレているのであればこの行動が予測されていたこと自体は大したことではない。

この場合問題なのは、彼が何故、そんなことをしたのかということだ。

つまり。

彼が伝言役としたアルファに対し。

延いてはエルレーンに対して。

次にどのような行動を望んでいるのかということ――。

エルレーンは頷いて問いかけた。

「他には何か言ってた？　――もちろん言ってたよね？」

「ああ」

アルファは淡々と頷いた。

おそらく彼には何の思惑もないのだろう。リィナやエルレーンの正体に気付いているかどうかはともかく、彼女たちに対し何らかの意図を持っているようには見えない。

しかし、どちらにしろ――

気づかれぬよう密かに深呼吸する。

リィナの失踪にレインハルトが絡んでいることがこれでほぼ確実になった。エルレーンの行動を見越して伝言を残したことから考えて、それが“彼女たちの正体”絡みであることも間違いないだろう。

慎重にならなければ。

言い聞かせる。

レインハルトが何を考えているのか――その行動が彼個人の意志なのか、あるいは組織的な――つまりディバーナ・ロウ、ミューティレイクの意志なのかそれはわからない。

悪いことではないと信じたい。

強く願いながらエルレーンはまっすぐに目の前の青年を見た。
そして言った。
「じゃあ……聞かせて。彼が残していった言葉を」

時と場所は移って、それから二日後――つまりティースたちが屋敷を出発してから四日目の朝。
キャラバンが昨晩の宿を取ったのはネービス領の南端、南に接するグレシット領との境からいくらも離れていない場所にある小さな宿場町フォックスレアだった。ティースは以前ディバーナ・ロウの一員として任務で訪れたこともあり、なかなかに思い出深い街である。
今日はキャラバンに新たな一組が合流することになっており、出発は午後からの予定になっていた。午後から数時間でネービス領最南端の町に到達し、明日にはいよいよ南に接するグレシット領へと足を踏み入れることになる。
午前中。
ティースを含めたミューティレイクの六人は、この余った時間をどう使おうかと協議しているところだった。
フォックスレアの町はただの宿場町で観光町ではない。特に見るべきところがあるわけではないが、それでも普段ネービスの町から出ることのない人間にとってはなかなかに興味をそそる場所ではあるようで、
「お買い物とかどうでしょう？」
パメラ＝レーヴィットは使用人らしく控えめながら、いつになくわくわくした顔でそう言った。
彼女の言う買い物はどうやら何か買いに行くというわけではなく、

どんなものがあるかと店先を回る、いわゆるウィンドウショッピングのことであるらしい。旅先でちょこちょこ買い物できない経済事情というのもあるようだが、帝都での“本当の”買い物に備えているというのが本当のところだ。

それに対して異議を唱えたのはミューティレイク一の色男の名高いクリシュナ＝ガブリエルである。

「でもさパメラ。買い物ったって、ここだったらネービスの方がよっぽど物が揃っているんじゃ――」

「どうでしょう、ティース様」

「え？　俺？」

びっくりしてパメラを凝視し、それからちらっとクリシュナの方を見ると、何ともいえない不可解そうな顔をしていた。

まあ当然だろう。ほとんど無視された格好なのだから。

（パメラって……もしかしてクリシュナと仲悪いのかな？）

鈍感なティースもこの三日、四日でなんとなくそんなことを感じていたが、まぁティースとてこのクリシュナという後輩のことはまだよく知らない。屋敷の女の子たちに絶大な人気であることと、一昔前の貴族みたいな変わった格好、それとミスマッチなゴーグルが印象的な青年ではあったが、中身については何一つわからないのである。

第一印象ではそれほど悪いイメージはなかったが――

結局、クリシュナは何も言わずに視線をあらぬ方向へ向けてしまった。

ティースも返答に困って視線を動かした。

正直言って、パメラの提案にはあまり興味がない。どちらかというと買い物は買うべきものを買ってとっとと終わらせるというのが彼の考え方であり、つまりウィンドウショッピングなるものは彼の行動原理の中にはないのである。

とはいえ、みんなが行くなら一緒に行こうかな、なんて相変わらず主体性のないことを考えてもいたりするわけで、結局彼の視線は

他の意見を求めて部屋の中を彷徨うことになった。
昨晩、ティースとパーシヴァル、クリシュナの三人が寝泊まりした部屋は、六人入るとさすがに少し手狭に感じられる。
入り口の一番に近くにいた子羊のような少女に視線を止めた。
「フィリス。君は？」
「え、あ、はい。私もパメラちゃんと一緒に行きます。ここにいてもすることもないですし……」
確かにすることはない。
とすると、おそらくシーラも一緒に行くのだろう。
なんてことを疑いもせず考えて彼女を見ると、その視線にすぐ気付いたのか、
「私は行かないわ」
「え？」
「シーラ様、今日もお勉強ですか？」
パメラが少し残念そうに言った。
「勉強？」
パメラが少し困り顔でティースを見る。
「ティース様。ティース様からも言ってあげてください。シーラ様、昨晩もその前の晩も暇さえあればずっと部屋で勉強なさっているんです」
そりゃ彼女はネービスの誇るサンタニア学園の学徒であり、その本分は学業であるからそれは本来感心すべきことである。
が、しかし、
「まだ先は長いですし、少しは息を抜かないと体を壊してしまいます」
と、パメラが言うのも一理ある。ほとんどの時間を馬車に揺られているだけとはいえ、それはそれで体力を消耗するものだ。勉強するなとはもちろん言えないが、こういうときぐらいはちょっと外に出てもいいんじゃないかと思った。
だが、シーラは事も無げに言った。

「別に無理をしているわけではないし、それに下手に外に出るよりはずっと落ち着くの」
そんなやりとりに、こそっとパーシヴァルが耳打ちしてくる。
「……シーラさんって意外と出不精なんスか？」
「ん、いや、そんなことはないと思ったけど……」
反射的にそう返したが、考えてみると積極的に外を歩き回る方ではないようにも思えた。用があれば外に出るのは当たり前だが、それ以外では家の中にいることの方が多く、出不精とまでは言えないが、どちらかといえばインドア派といえるかもしれない。
「クリシュナはどうする？」
「ん？」
クリシュナは少し意表をつかれた顔をした。話しかけられたこと自体が意外だったのか。
「ああ、俺は――悪いけど行けない。ちょっと野暮用があって」
「パースは？」
「え？　俺？　俺は別に何も決めてないっすけど……」
「じゃあ行こうよ、パースくん」
「ん……」
フィリスの誘いにパーシヴァルは少し視線を彷徨わせ、少し考える顔をした。
「あ、そうね。パースさんも来てくれるとちょっと心強いかも」
と、パメラが後押しすると、
「まぁ……別にいいけどさ。ここにいてもやることないし」
パーシヴァルはさっきのフィリスみたいなことを言って頷いた。
どうやら決まったらしい。
「それでティース様はどうなさるんですか？」
「へ？」
再度、パメラから質問される。最初に話を振られたにも関わらず返事が最後になってしまう辺り、いかにも優柔不断の彼らしい。
「えっと……」

さて、どうしようか、と悩む。
結局、買い物に行くのはパメラ、パーシヴァル、フィリスの三人で、シーラは宿に残って時間まで勉強、クリシュナは別口で外には出るらしい。
みんなが買い物に行くなら付いていこうかと考えていた彼にとって、なんとも中途半端な状況である。
シーラを一人にするのもなんだし残るべきか、いやしかし、勉強するのであればかえって邪魔になるのかもしれない。どっちにしろ彼女は女性陣の泊まった部屋に戻って勉強するのだろうし、なら彼が残っていようといまいと何の関係もないのかも……などと、思考を一転二転させていると、そのうち見かねてシーラが言った。
「一緒に行ったら？」
いや、それは気を遣ったというより、どちらかというと邪魔だから行ってくれというようなニュアンスだったかもしれない。
さらに続けて、
「パーシヴァルが一緒なら平気だと思うけど、宿場町だし色々な人が来ているわ。虫除けは多いに越したことはないでしょう？」
言ってることはもっともだが、後付のようにも聞こえる。が、そういうことであれば、ティースとしても意地を張ってここに残るつもりはない。
「そっか。それじゃあ――」
一緒に行こうかな、と、言おうとしたところへ。
コン、コン、と。
控えめに、ノックの音がし、続いて女性のものらしき声が聞こえてきた。
「すみません。こちら、ティーサイト＝アマルナ様のお部屋でしょうか」
「え？」
聞き覚えのある声だった。
シーラがティースを見る。どうやら彼女にもその声の主が誰なの

かわかったらしい。
「ネイリーン＝トレビックです。あの――」
「あ、はい。ちょっと待ってください」
背中にパメラたちが顔を見合わせる気配を感じながら、不審そうなシーラの視線を横切るようにして扉へと向かう。
――何故、彼女が？
同じキャラバンとはいえ宿はそれぞれ別である。昨晩、ネイリーンたちがたまたまティースたちと同じ宿に泊まった――というような偶然があったわけでもなく、みんなが不審に思うのは当然だしそれはティースも同様であった。
「おはようございます、ティースさん」
扉を開けるとそこには初めて会ったときと同じ（当たり前だが）嫋やかな女性の姿があり、そして顔を合わせるなりネイリーンは微笑みながら言った。
「それで、支度の方はできまして？」
「へ？」
ティースは目を丸くした。
「支度って何が……？」
「あら？」
ネイリーンは少し不安そうな顔をした。その視線が一度部屋の中を僅かに彷徨い、やがてティースの顔へと止まる。
「ティースさん。あの日の約束、もしかして忘れてしまいましたか……？」
「え？　約束？」
背中にいくつかの視線が集まるのを感じながら、ティースは少し前の記憶をたどってみた。
そういえばそんなことがあったようななかったような――いや。
いやいや。
「あ、そっか。約束」
そう。言われてようやく思い出した。

ティースは初めて彼女に会ったあの日、別れ際に約束をしたのだ。
「ティース？　どうしたの？」
不審そうなシーラの声に振り返って、
「うん。実は俺、前にこの町に来たことあってさ。その話をしたら彼女が町を案内してほしいって言って、それで……」
「案内する約束をしたの？」
シーラは少し眉をひそめた。
その表情にティースは少しだけたじろいでしまって、
「あ、いや、その、ここで半日余裕があるのはわかっていたし、それでその……」
「私がどうしてもとお願いしました。あの、ご迷惑だったでしょうか……？」
と、ネイリーンが助け船を出してくれる。
「……」
シーラは彼女に視線を止め、しばらくの間無言で見つめた。友好的ではない。が、別に敵意があるというわけでもない。
ただ彼女の意図を探ろうとするかのような視線だった。
確かに。顔を合わせて間もない男性に――それが弟の顔見知りであるとはいえ――いきなり二人きりでの案内を頼むというのはあまり常識的ではない、と、ティース自身思う。おそらく彼女も同じ事を考えているのだろう。
いつまでも黙っているシーラに、ネイリーンは一度ティースの方を見てから、改めて彼女の方に向き直って、
「あの、もしご迷惑だったのであれば――」
「いいえ」
だがシーラはすぐに頭を振る。
「その男もちょうど暇を持て余していたようです。どうぞ、好きなように使ってください。……パメラ。そういうことのようだから、フィリスとパーシヴァルの三人で行ってらっしゃい」
あっさりとそう言った。

ティースは少し眉をひそめて、
「使ってって、おいシーラ、そんな人を物みたいに――」
「もっとも芸のない男ですから、虫除けぐらいしか使い道がないと思いますけれど」
抗議する隙もなかった。

結局――ティースは簡単に身支度を整えてネイリーンとともに出ていき、それを追うようにクリシュナも出掛けて、部屋に残ったのはシーラを含め四人。
「い、いいんですか、シーラ様」
ずっと成り行きを見守っていたパメラが、ちょっと困り顔でシーラに問いかけた。
「いいって、なにが？」
「いえ、その、さっきの方のことです」
シーラは何事もなかったかのように彼女を見て、
「約束したのなら果たすべきよ。あいつにしてはずいぶんと軽はずみな約束をしたものだとは思うけれど」
「でも……」
何か思うところがあるのか、パメラは少しもじもじしながら言い淀んでいる。
「なに？　どうしても連れていきたかったの？　……まさかと思うけれど、あなた、あの男のこと――」
パメラは真っ赤になって手を振った。
「ち、違います！　ティース様は立派な方で尊敬してますけど、それだけで、そういうことは全然ありません！」
「ごめんなさい。冗談よ」
その慌てぶりを見てシーラは少し可笑しそうにしながら、
「でも、だったら何も問題ないでしょう？」
「はぁ……」
パメラは拍子抜けしたような声を漏らし、それ以上は何も言わず、

意見を求めるように後ろの二人を見る。
その二人――パーシヴァルとフィリスも、パメラが言いたかったことは何となくわかっていた。
この目の前の完璧すぎる美少女と、なんだか頼りないノッポの青年が屋敷にやってきて一年弱。
屋敷の大半はまだこの二人の本当の関係を正確に計りきれずにいる。
特異な容姿を持つ少女絡みであるが故に色々安っぽいうわさ話も溢れているが、いくつかの与太話は論外としても、彼らが実はいわゆる恋愛関係にあるんじゃないかという話はそれなりの真実味を帯びた話として口の端に上ってくる。
フィリスなどは普段のシーラの態度からそれはないんじゃないかと思っているが、パメラはどちらかというとその可能性を信じているクチであった。
だからパメラは聞いたのだ。
特にあのネイリーンという女性は、今まで唯一だったシーラと同じ――つまりティースに触れることができる女性だったから。
しかし。
「そろそろ行かないと時間がなくなるわ。ここを出たら……そうね。ヴィスカイン領までこういう機会はないはずよ」
シーラはそう言って席を立った。どうやら部屋に戻って勉強を始めるらしい。
やはりまったく気にも留めていない。
パメラはわからなくなった。
あのネイリーンという女性がティースに興味を持っているのは間違いないだろう。でなければああして誘ったり――さっきの話だと初対面から間もなく約束したらしい――そんなことをするはずはないのだから。
パメラがシーラの立場で、もしティースに恋愛感情を抱いていたとするなら――やはり気にするだろうと思った。――以前彼女が慕

っていた男性も好青年で、ティースよりもよほど女性に縁のある人物だったから、これは実体験に基づいた信頼性の高い推測である。

（シーラ様は気にしない性格なのかな……それともティース様を信頼しているのかな）

そのどちらでもないという可能性もある。

パメラは部屋を出ていくシーラを見送りながらため息を吐き、心でそっと呟くのだった。

（ティース様とシーラ様、とてもお似合いなのに……）

残念ながらそれは極めて少数派の意見である――

――カチリ。

奇妙な穴に指輪を填める。

指輪はその小箱の鍵になっている。中には黒い表紙の本が入っている。

窓の外からおっとりとしたフィリスの声が聞こえた。あの三人はどうやら出掛けたらしい。

シーラは扉の施錠を目で確認して、再び黒い本に向き直り手をかけた。

乾いた紙の擦れる音。

ページを一つ一つめくっていく。

そうしていると、ふと脳裏に浮かぶ。先ほどティースを迎えに来た女性の姿。

嫋やかな、いかにも女性らしい人物だ、と、シーラは思う。

ページをめくる。

左手に小さな辞書。右手にペンを持つ。

読み解く。

しばらくはその作業に没頭する。

そうしていて、ふと――誕生日のことを思い出した。

きっかけはない。

いや、あるとするなら――出発前、彼女の誕生日の夜、ティースと二人きりで話をしたことがきっかけといえばきっかけだろう。

だが、彼女が思いだしたのは、そのとき話題に上った――彼らが故郷を出た――三年前の誕生日のことではない。

そのさらに一年前――それも彼女の誕生日ではなく、彼の誕生日のこと。

その出来事が誕生日だったことに意味はない。それは偶然といってもいいだろう。

しかし。

それは忘れられない出来事。忘れられない記憶。

ページをめくる。

おそらく彼は忘れているだろう。

しかし彼女は覚えている。

あのときから、彼と彼女の関係は圧倒的にややこしくなってしまった。

いや――“あのときから”というのはやや正確さに欠けるだろうか。正しくは“あのときの出来事があったから”と言うべきで、ややこしくなったのはもう少し後のことだ。

それがなければ話は簡単だった。

それがなければもっと早くに――彼と彼女は別れることができたのだ。

ページをめくる。

いや、それでも悪いことばかりではない。

それがあったから彼と彼女は今も一緒にいて、一緒にいたからこそ彼はデビルバスターへの道を志すことになり、それがあったからこそリィナたちと再会できた。ミューティレイクの人々と出会うこともできた。

悪いことばかりではない。

悪いのは。

悪いのは――
……ハッとする。
右手が知らず知らずに髪飾りを弄んでいたことに気付き、少し憂鬱になった。
手を戻してページをめくる。そして、そもそも自分はどうしてこの旅に付いてきたのだったか、と、考える。
依頼されたのは出発の四日前のことだったろうか。学業に支障がないからというのは本当のことだったが、もちろん断ることはできた。
しかし。
たぶんここが一つの区切りだと心のどこかで感じていたのだ。
このデビルバスター試験。
受かるかどうかはわからない。もしも受かれば彼はもはや見習いではない。
受かれば――
それが何を意味するのか。
簡単だ。
彼は“デビルバスター”になる。
今まで“デビルバスター見習い”だったそれは、彼を構成する要素のいくつかを後ろに追いやって“デビルバスター”として上書きされるのだ。
それは別に悪いことではない。当たり前のことだ。
ただ、区切りである。
いい加減に区切らなくてはならない。
区切るためには――やはり調べなければならない。
頭を振って思考を明晰にする。
再び熱中した。
――そうしてどれくらい時間が経っただろうか。
廊下を歩く複数の足音に我に返った。
時計を見ると三時間以上経っている。出発まで一時間を切ってい

た。思いの外没頭していたようで――とすると、あの足音はパメラたちが戻ってきたものだろう。
出発の準備はあらかじめ整えてある。荷物の大半は隣の部屋に集めてあった。
もう少ししたら隣に顔を出そうと決めて、再び解読作業を開始する。
そうして……さらに二十分ほど経っただろうか。
突然、廊下をバタバタと駆ける音が聞こえてきた。
そして、
「シーラ様」
コンコンと、心なしか早いリズムのノック。
「パメラ？」
時間を見ると出発まであと三十分を切っている。
本を箱に戻し鍵をかけ、シーラはゆっくりと立ち上がった。
「どうしたの？」
扉の向こうのパメラは少し慌てて見えた。
「あ、いえ……」
そういってパメラはシーラごしに部屋の中を見回すと、再び視線を戻して、
「シーラ様。ティース様はこちらにお戻りになられてないですか？」
「え？」
思わず振り返って部屋を見回したが、もちろんこっちにいるはずもない。
「まだ戻ってないの？」
「はい……確か一時間前には戻るとおっしゃっていたと思うのですが、まだ」
「……」
どこで道草を食っているのだろう。まさか出立時刻を忘れているというようなことはないと思うのだが――この街に時間を忘れて見とれてしまうようなものもないだろうに。

少し考えて、シーラはすぐに決断した。
「パメラ、あなたは出発の準備をしてて。私は少しその辺りを見てくるわ」
「あっ、シーラ様――」
そのまま部屋を出る。
「うわっと！　あ、シーラさん」
出たところでパーシヴァルと鉢合わせた。
「ティースさんを探しに行くんスか？　じゃあ俺も――」
「いえ、いいわ。すぐ近くを見てくるだけだから」
もちろん町中を探し回るだけの時間はない。その辺りを見回ったところで大した意味がないことは承知しているが、帰り際、その辺で話し込んでいるという可能性も――ないわけではない。
こんな大事な旅の最中に、と思わなくもない。が、その一方、あの男のことだから何かやっかいなことに巻き込まれたのかもしれない、とも思う。
だいたいあの男は人が好すぎるのだ。トラブルはゴメンだと言いながら見知らぬ人間が困っていると見て見ぬ振りをすることができないし、その上押しにも弱い。ネイリーンの頼みを断れなかったのもどうせそれが一番の理由だろうし、お願いされれば時間ぎりぎりまで案内を続けてしまうことだろう。
宿を出て、そこに横たわる大通りの両方を眺め、あの惚けた男の顔を探してみる。
見当たらない。背が高いのでいればすぐにわかるはずだ。
少しここで粘ってみようとも思ったが、宿の裏にも通りがあるのを思い出してそちらに回ってみることにした。
人間三人分ぐらいの幅の路地を抜けて裏の通りへ。表に比べれば人通りが少ないものの、人の影はちらほら見える。
三軒ほど隣の店先では路上に土産物らしきものを広げている若い男がいた。所々閉まっている店は近くの旅館に泊まる者をターゲットにした居酒屋だろうか。

その居酒屋の向こうに――

（……いた）

見覚えのある後ろ姿が見えた。

その長身で撫で肩の後ろ姿は何年も見続けてきたものだ。見間違えるはずもない。

しかし。

（なにをボーっとしてるのかしら……）

ティースはこちらに背を向ける形で一人ぽつんと突っ立っていた。

あるいはそこでネイリーンと別れ、それを見送っているのかとも思ったが、その先にそれらしき人影はない。

なんにしても――みんな心配して待っているというのに。

ため息一つ。

ゆっくりと歩み寄っていく。

「ティース。お前、そこで一体なにを――」

言おうとした言葉は尻窄みになった。

「――？」

最初は彼が右腕にタオルのようなものを巻いているのかと思った。

しかしそれはよくよく見てみると人の手だった。

風が吹く。

見慣れた後ろ姿の陰から、濃黒の髪がなびいて見えた。

シーラの位置からそれが見えなかったのは、ティースが相手よりかなり長身であったことよりも――その二人の距離が限りなく近かったことが原因だろう。

抱き合っている。

はっきりとは断言できないが、彼女の位置からはそんな感じに見えた。そうでなかったとしてもかなり接近しているのは確かだろう。

「……」

近づくでもなく、離れるでもなく、ましてや隠れるでもなく。シーラは動きを止め、そこでしばらくその光景を眺めていた。

五、十……三十秒ぐらいはそうしていただろうか。

二人が離れる。
ようやくネイリーンの全身がシーラの視界に映った。が、向こうからは近くの店先の看板で死角になっているらしい。気付いた様子はなかった。
何事か言って、ネイリーンが去っていく。
ティースはしばらく動かずにそれを見送っていた。
五、十……やはり三十秒ぐらいそうしていただろうか。
ようやくティースが踵を返してこちらにやってくる。
そして――気付いた。
「え……あ、シーラ？」
予想に反し、彼の態度はいたって普通だった。見られていたとは思わなかったのだろうか。
「どうしたんだ、こんなところで――あ」
そう言いかけてから、ようやく可能性に気付いたのかハッとして、
「み、見てたのか、今の……」
「見えただけよ」
即答すると、ティースは慌てたようだった。
身振り手振りを加えて弁解しようとする。
「ち、違うんだ、今のは。今のはただ、目にゴミが入ってとれないっていうから俺が――」
「……ちょっと。みっともないからやめて」
この男は慌てるとすぐ声が大きくなる。
端から見たら浮気の言い訳をしてるみたいに見えてしまう。
――いや、実際からそれほどかけ離れてもいないか。
そう考えて自嘲気味に苦笑した。
彼が慌てた理由はわかる。おそらく彼は以前、マーセル＝バレットという女性との絡みで彼女が機嫌を損ねたことを覚えているのだ。だから今回も怒られると思ったのだろう。
もちろんそんなことはない。あのときのことは彼女にとって思い出したくないほどの失態の記憶だったし――今回に関しては怒る理

由など一つもないのだから。
「そんなことより行くわよ。もうみんな待ってるわ」
踵を返して右足を一歩、前に出す。
そしてピタリ、とその動きを止めた。
「ねえ……ティース」
「？」
振り返ると、彼は突っ立ったままだった。
「お前――その体質、どうしても治したい？」
「へ？」
呆気にとられた顔。
だが、すぐに我に返って、
「アレルギーのことか？　そ、そりゃ治したいに決まってるだろ。そんな当たり前のこと聞かないでくれよ」
「それもそうね。……じゃあ質問を変えるわ」
シーラは意識的に目を細めた。
威圧の意志を込める。
逃げられないように。
嘘をつけないように、と。
「今、好きな女の子はいる？」
「……へ？」
いつもの二倍ぐらい間抜けな顔になった。
別にそんな変な話ではないと思う。パメラにはいたし、パーシヴァルにもいる。そういうのに縁遠そうなフィリスにもいると聞かされた。他にも、そういう話はいくつも耳に入ってくる。たぶん、あの年頃ならそういう相手がいて当然なのだろう。
もちろんその中には――目の前の男とて含まれている。はずだ。
だが、ティースは不審そうに、ほんの少し顔を赤くしながらも答えた。
「い、いないよ」
「リィナは？」

ティースはさらに赤くなった。
「そ、それは前も言ったけど――そりゃいい子だし、大事な友達だけど、でもそんなんじゃ――」
「そう」
誤魔化しているわけではないのだろう。そうなる可能性はあったとしてもまだはっきり自覚しているわけではない――そんな感じか。
「誰かを好きになったことはないの？」
「……」
その辺りでティースは怪訝そうな顔になった。
「いったい……どうしたんだ？　そんな質問ばっかり。お前らしくもない」
「らしくない？　そうかしら……」
そうかもしれない。いや、ここしばらくはそう思われて仕方ないような態度を取ってきたし、野次馬的な意味でいうとあまり興味がないのも確かだ。
「でも、私にだって好きな人ぐらいいるのよ」
そう言うと、ティースは目を丸くした。
「え……あ、で、でも、そうだよな。だってお前、オーウェン君と付き合って――」
「オーウェンは違うわ」
「え？」
少し迷った。
だが、偶然とはいえ彼らがここまで顔を合わせることになった以上、隠しておく必要もないだろうと考え、シーラは言葉を続けることにする。
「彼は恋人のフリをしてくれているだけよ。虫除けにね」
案の定、ティースの目はさらにまん丸になった。
「ふ、フリ？　フリって――で、でもオーウェン君はどう見たってお前のこと……」
「それも知ってるわ」

彼は彼ですべて理解している。
――二年前の夏のことだったろうか。
言い出したのは彼の方で、普通に告白され、おそらくそれまでの彼女の人生の上でもっとも丁寧にその申し出を断った後のことだった。卒業まで恋人のフリをする。オーウェンはそうすることで自分のことをもっとよく知ってもらいたい、それでダメなら諦める、と言った。
馬鹿げた話だった。普通に考えてありえない話だ。
だが、彼女は考えた末、結局その話を受けることにした。
理由は簡単だ。
そのとき、彼女は思ったのだ。
彼の言うとおり、もしかしたら自分の気が変わることもあるかもしれない、と――
結局、そういうことは――今のところなかったのだが。
「そういうことよ。さあ、私のことを話したのだから、お前も正直に答えなさい」
気持ちを切り替えてもう一度。
「誰かを好きになったことはないの？」
「……」
目が泳ぐ。と言っても誤魔化そうとしているわけではないのだろう。
本気で考えているのだ。
「……ないよ」
「……」
「ほ、ホントだってば。そりゃホントに小さい頃の話をすれば……いたけどさ」
そういって視線を横に向ける。
別に意識したわけではないだろうが、彼が顔を向けたのは太陽の昇る方角――彼らの故郷のある方向だった。
シーラはそれを察して、

「誰？　ルナリア？」
故郷にいた頃の――彼らより少し年上の女性の名を出すと、ティースは小さく首を振った。
「ルナ姉さんもまだいない頃だよ。奥様――だから」
「……母様？」
彼女の記憶にはない女性だ。とすると、本当に小さい頃――彼が四つとか五つぐらいの話で、結局のところ男女の恋慕とは違うものだろう。
少し拍子抜けした。
おそらく――嘘を言っているわけではないだろう。本当にいないのか、あるいは彼自身に自覚がないかのどちらかだ。
「そう……」
しかし、たとえそうだとしても。
いずれは誰かを好きになるだろう。
いずれは恋愛をして結婚するのだろう。なんとなく――彼は情熱的な大恋愛をするタイプのように思えた。
そう。きっと……厄介な“あの体質”さえなければ。
「――わかったわ。行きましょう」
戸惑うティースを後目に、シーラはそう言って歩き出した。
右手が――無意識に髪飾りを弄んでいた。

その3『情景その一』

少年の心にはその情景が焼き付いている。

黄土色の緩やかな坂。
赤い屋根と白い壁。
綺麗な花畑。
緑の森。
黄金色の穀物畑。
そして――灰色の空と雨。

のどかな情景。
日常の情景。
幸せな情景。
そして。
そして――今は亡き、大切なものの影。

大切にしていたものは少女だった。
恩人から託された宝物。
美しい少女だった。
少年の脳裏にはいつでも鮮やかに蘇る。
太陽の光のような髪。
太陽の結晶のような瞳。
あまりにも大切すぎて、少年はそれを宝石箱の中から出すことさえ恐れていた。
万が一、汚れてしまったら。
万が一、傷付けてしまったら。
万が一、なくしてしまったら――

――どこでどう誤ったのだろう。
少女は死んでしまった。

だから少年は旅をしている。
少女は少年の全てだった。
全てをなくしてしまった。
だから。
少年は旅をしている。
少年の全てだった少女を奪った、ある男を捜すために。
ある男を捜して。
捜して、そして――

蘇る記憶。

少年の心にはその情景が焼き付いている。

ネービスを出て六日目の午前中。
一行のキャラバンはネービス領の南に接するグレシット領へと入った。
グレシット領――かつてはその南に接するエヴラール領の一部であったが、大陸歴以前に内戦によって分裂・独立し、大陸歴元年のヴォルテスト条約によって初めて国家として認められた領土である。エヴラール領時代には北に接するネービス領およびその同盟国だった北西のモンフィドレル領とは犬猿の仲であったが、分裂後から現在に至っては比較的良好な関係を築いており、現在は主にネービス

から、あるいはネービスへと向かう旅行者に対し遊行や宿泊、観光などの資源を提供することによって栄えている。

「そういえば、さ――」

地図を眺めていたパーシヴァル＝ラッセルが不思議そうな顔を上げた。

「予定からすると、この後はフィンレー領を抜けてさらに南のヴィスカイン領に入るんだっけ？」

誰に向かって問いかけたわけでもないが、その問いにはフィリス＝ディクターが頷いて答えた。

「うん。そこからさらに南にグリゴラ山脈を迂回してヒンゲンドルフ領側から帝都ヴォルテストに入る予定だよ」

ネービスから帝都ヴォルテストまでは直線距離にすると実はそれほど遠くはない。が、その間に存在する、このグレシット領内にも横たる大山脈の存在により、大きく迂回しなければ辿り着けない構造になっているのである。

「ああ、それはわかるんだけどさ。これ、見てみろってば」

言いながらパーシヴァルがフィリスの前に地図を広げてみせる。フィリスと一緒に隣のパメラ＝レーヴィットも興味深そうにそれを覗き込んだ。

「これ、ほら。今俺たちがいるグレシット領ってのは真南にエヴラール領、南東にフィンレー領とくっついてるわけだけど、最終的に俺たちが向かうヴォルテスト領はグリゴラ山脈を南に迂回してから西の方だろ。ってことは、南東のフィンレー領を通るより真南のエヴラール領を通っていく方がどう考えても近いじゃないか」

「あ、そういえばそうだよね……」

フィリスが小首を傾げる。パメラも不思議そうな顔で頷く。

彼らが不思議に思ったのは当然だろう。距離にすればそれほど大きな違いがあるわけではないが、直線で進めるところをわざわざ斜めに迂回して移動するのだから。

そんな彼ら三人に、シーラ＝スノーフォールは本から顔を上げて

言った。
「それはね。昔、エヴラールとネービスの仲が悪かった頃の名残なのよ」
透き通るような凛とした声に三人の視線が同時に動いてシーラへと集中する。
「エヴラール領の人はネービスからの旅行者をあまり歓迎しない。だから余計なトラブルを避けるために、少し遠回りだけどフィンレー領を通っていくのが定石なの」
三人にそれぞれ宝石のような瞳を向けた後、真正面のパーシヴァルを見つめて、
「納得できた？　パーシヴァル」
「あ、はい。……シーラさん、物知りっすよね。やっぱ頭いい人は違うなぁ」
腕を組んで感心したように頷くパーシヴァル。
「大したことじゃないわ。歴史か旅行術のどちらかを嚙っていれば常識よ」
そう答えたが、気付くとフィリスやパメラからも尊敬の眼差しらしきものが浴びせられている。
シーラは小さく肩をすくめて、窓の外に視線を向けた。
西の方角から少しずつ迫っていた灰色の雲はそろそろ彼女たちの頭上にさしかかろうとしている。この様子だと明日辺り雨が降り出すかもしれない。ここまでの道程はほぼ当初の予定通りで、よほどのことがない限り試験に間に合わないということはないはずだが、それでも雨は歓迎すべきものではなかった。
視線を動かす。
正面にパーシヴァル。その隣ではクリシュナ＝ガブリエルが優雅に足を組んだ格好でシーラと同じように本を読んでいる。
そしてその隣――
「……」
パメラがその視線の動きに気付いた。何か言いかけて、やめる。

そこにいるはずのティーサイト＝アマルナの姿はない。
シーラはパメラの困ったような視線に気付いていたが、気付かない振りをして窓の外に視線を戻した。
そうしながら今朝のことを思い出す。
今朝――ネービス領とグレシット領の国境に一番近い小さな宿場町の朝のことだ。
『ティースさん。支度の方はできまして？』
昨日と同じ台詞で彼女たちの泊まる宿を訪れたネイリーン＝トレビックが、やってくるなりティースの手を引いて自分の馬車へと連れていってしまったのである。
どうやら昨日、フォックスレアの町で彼女に付き合った際、移動中も色々話を聞かせてほしいとせがまれ、約束してしまったらしい。
あの男にしては軽率な話だ、と、シーラは思う。他人の頼み事を断れないのはいつものことなのだが、相手が女性でしかも二人きり――聞くとネイリーンは弟のオーウェンと別々の馬車で移動しているらしい――となれば、いつもならもっと後込みしているはずなのに。
あのネイリーンというのも、また不思議な女性だ。
それは彼女に対してティースのアレルギーが反応しないというだけの意味ではなく――今更言うまでもなく、あのティースという男は大したハンサムでもなければ話が面白いわけでもない。初対面の女性が興味を持つとすればせいぜいその頼りない外見とデビルバスター候補生という肩書きとのギャップぐらいであろう。
にも関わらず、彼女はティースにかなりの興味を見せている。
確かに、以前もマーセル＝バレットという女性が同じように彼に興味を持ち、色々な話をせがんだという例があるが、あれは初対面の時点で、彼女が自殺志願者であり彼がそれを思い止まらせた命の恩人、という特殊なケースだった。
今回は出会いだって特別インパクトがあったわけではない。
にも関わらず――

あるいは。

彼女がよほど特異な価値観の持ち主で、よりにもよってあのティースがその嗜好のど真ん中だったというのか。

――いや。

シーラは心の中でその可能性を即座に否定した。

それはない。その可能性だけは明らかにない。

彼女がティースに向けているのは男女の恋愛感情など一欠片も絡まない、純粋な興味、好奇心である……はずだ。

だからこそシーラは余計に不思議だと感じるのである。

そんなティースに対し、まるで好意を寄せているかのように振る舞う、あのネイリーンという女性のことを。

「そういえばシーラ様、お聞きになられましたか？　あの黒い馬車のこと」

「？」

突然のパメラの言葉にシーラは怪訝な視線を返した。

もちろん同じキャラバンで一際目を引く黒い馬車のことは彼女も知っている。とても人が乗るようには見えない堅牢で不気味な馬車のことだ。

「あくまで噂ですけど」

シーラの興味を引いたことを確認して、パメラは前置きしながら言葉を続けた。

「あの馬車にはヴォルテストの凶悪な政治犯が乗っているそうなんです」

「政治犯？」

シーラは思わず窓の外に視線を移した。が、そこからあの黒い馬車は見えない。

すぐに視線を戻して、

「そんな凶悪犯がネービスの検問を抜けたということ？」

ネービスや一日目の宿を取ったルナジェール等、大きな街の中心部では出入りの際に必ず身分チェックがある。キャラバンの場合は

出立時に厳しいチェックがあるので道中ではそれほど厳しく検分されないが、そもそもその出立の時点でよほどうまくやらない限り、そんな凶悪犯がすんなりネービスから出てこれるはずもない。

が、パメラは違いますと首を横に振った。

「逆なんです。あの馬車はネービスで捕まったその凶悪犯をヴォルテストまで護送していて、カモフラージュのためにこのキャラバンに紛れたんだとか」

「ああ、そういうこと」

であれば――出立前、あの馬車の周りにいたゴツい男たちは実のところ憲兵か何かで、そうだとすればすんなり検問を通っているのも頷ける。

が。しかし。

「でも本当かしら」

とても信じられない。

そんな危険なことに協会のキャラバンを利用したりするのか、百歩譲ってそういうことがあるのだとして、キャラバンに紛れたのがその凶悪犯の奪還を目論む敵勢力の目を欺くためと考えたにしても――

「どうなんでしょう。でもよく考えたら私の耳に入ってるぐらいだから、ちょっとウソっぽいですよね」

まさにそのとおりで、パメラ自身もそれほど信じていない様子だ。

――どうもシーラが考え込んでいるのを見て、気を遣って無理に話題を振ってきたというのが本当のところらしい。

（でも――確かに不思議ね）

少し気にはなった。

噂が根も葉もないものだと仮定したとして――そんな噂、いったい誰が口にしたのだろうか、と。

冗談がたまたま尾ひれをつけて広がったのか。

それとも――

「――妙な噂が流れている。本当に大丈夫なのだろうな、クロイライナ」
「なにがです？」
ガラガラという音に、時折混じる上下の揺れ。
昼間にも関わらずそこは薄暗い闇の中。鉄の板で塞がれた窓の隙間からほんの微かに射し込む太陽の光が唯一の明かりだった。
中には四人の男がいる。
その中の一人、馬車の持ち主であるハービー＝スピンネルは、鋭利な刃物を思わせる切れた細い目を正面に向けた。
「確かにお前のおかげでネービスでの商売はうまくいった。事が露見するタイミングもお前の読み通り。事前準備の甲斐もあってこうして無傷で脱出することもできた。だが――」
「それで何が不満なのです？」
少し甲高い声だった。
「俺は未だ、お前を完全に信用することができんのだ。クロイライナ」
「それは私が魔だから、でしょうか」
「そうかもな。……いや、違うかもしれない」
曖昧な返事だ。
ハービーの座席がきしむ。
正面にいる男――クロイライナ＝ソーン＝ファヴィニエはそんな彼に問いかけた。
「一体なにを恐れているのです、ハービー」
「……」
少しの躊躇の後、こめかみ付近に指を当てながらハービーは呟くように言った。
「このキャラバンに、あのディバーナ・ロウが紛れているというではないか」

――やはりか。

予想通りの返答にクロイライナは口元をゆがめた。が、その仕草は闇に飲まれ目の前の男たちの網膜には届かない。

「心配ありません。前にも言ったとおり彼らはヴォルテストのデビルバスター試験を受験しに行くだけ。ただの偶然です」

「お前はそう簡単に言うが――もし俺たちのことがバレているのだとしたらどうする？　いや、たとえ気付いていなかったとしても、妙な噂も流れている。そのうち気付くかもしれない」

ハービーは少し考えて、

「いっそのこと強引にキャラバンを離れてしまってはどうだ？　ネービス領を抜けた今が絶好のチャンスではないのか？」

「……」

クロイライナは視線に侮蔑の色を込める。

所詮この程度。くだらない小さなことに気を取られてその裏で動く大きな流れにも気付けない愚かな小心者。……もちろんそれは最初からわかっていたことで、だからこそ利用しやすい人間だったのだけれど。

「今動くのはかえって危険です」

クロイライナは口調を和らげて言った。

「心配ありません、ハービー。あなたの身とあなたの築いた財産、それと――」

馬車の室内におかれた不自然な衝立の奥。

「その貴重な魔石の安全はこのクロイライナが保証します。今までどおり、私に任せてもらえれば、必ず」

「……」

ハービーの視線が衝立の奥に動く。

小さな頑丈な鋼製の箱。

その中に入っている青色の宝石は“雫”と名付けられた魔力のこもった石だ。ネービスのとある学園に保管されていたもので、ネービス脱出の直前に麻薬中毒になっていた学園関係者を利用して盗み

出したものだった。
ハービーの視線が揺れた。
貴重なものだ。うまくいけば麻薬で稼いだ以上の財を産み出すだろう。
そして、しばしの逡巡の後、
「本当に、大丈夫なのか？」
クロイライナは再び口元を緩める。
「信用できませんか？　でも、あなたのことが露見すれば私も無傷ではいられません。ならば私があなたを裏切るはずがない、と、そうは考えられませんか？」
「確かにそれはそうだが……」
もちろんそんなはずはないのだが、このクロイライナという男の目的そのものを誤解している彼に、その嘘を見抜くことは難しいだろう。
ネービスの学園における麻薬の売買――それで稼いだ金銭の何割か――そんなものはもとより彼の眼中にはなかったのだから。

その日の夕方、ネービスの西空には雨雲が迫っていた。隙間から、かろうじて夕日が顔を覗かせている。
そのオレンジ色の光を浴びて、ファナ＝ミューティレイクはタラップに足をかけゆっくりと馬車から降り立った。
「ご苦労様です、リードさん」
肩越しに振り返って御者に声をかける。
正面に向きなおると一人の男性が恭しく彼女の手を引いた。
「姫、お疲れ様でした」
彼女の執事兼ボディガード、イングヴェイ＝イグレシウス――アオイだ。
ファナはそんなアオイに微笑み返して、

「アオイさんの方こそお疲れではありませんの？」
「は……？」
「先ほどの会談の最中はとても眠そうに見えましたけれども」
「そ、そんなことは――」
そこまで言いかけて萎んでしまう。
どうやら図星のようだ。
ファナはクスクスと可笑しそうに笑って、
「構いませんわ、アオイさん。昨日から忙しくてずっとお休みになってないのでしょう？」
「い、いえ。執事たるもの、そういうことは関係なく常にしっかりしてなければ――」
「参りましょうか」
意図的に遮って歩き出す。
近くの使用人たちの最敬礼に、主としては少々丁寧すぎるのではないかと思うほどの挨拶を返しつつ、その足で屋敷の本館ではなく別館の方へ向かった。
今日の“公務”はすべて終わり、あとはプライベートの時間となる。今日は久々に屋敷で時間通りの夕食を摂ることができそうだ。
別館の入り口では一人の使用人が待機していた。
「お疲れ様です、お嬢様」
「ミリィさんもご苦労様です」
侍女長のミリセント＝ローヴァーズだ。その後ろから、ほんの少し急いだ様子でハウス・キーパーのアマベル＝ウィンスターもやってくる。
「お帰りなさいませ、お嬢様。本日の御夕食はいかがいたしましょう？」
「今日はこちらでいただきます。よろしくお願いしますわ、アマベルさん」
「かしこまりました。――ヴァレンシア！」
「はいはーい」

脳天気な声とともに駆け足でやってきた少女は、アマベルに睨み付けられて急にしずしずと――少々奇妙な動きで――ファナの前までやってきた。
「厨房へ伝えてもらえる？　今日のお嬢様の御夕食は別館の食堂の方へ、と」
「イエッサ！」
ビシッと軍隊式の敬礼をした彼女に、再びアマベルの視線が突き刺さる。
「……ハイ。了解デス」
そう言ってヴァレンシアはそそくさと逃げていった。
別館はいつも賑やかだ。
その後ろ姿を見送ったアマベルが苦虫を噛みつぶしたような顔で、
「申し訳ありません、お嬢様。あの子ったらいつまで経っても……」
ファナはニッコリと微笑んで、
「構いませんわ。いつでも元気なところがヴァレンシアさんの長所ですもの」
「それはそうかもしれませんが……限度というものもございます。あの子はたまにハメを外すところがありますもので――」
「アマベル。そんなことより……」
侍女長ミリセントの言葉に、アマベルはハッとして少し慌てる。
「あ、申し訳ございません。お疲れのところお引き留めしてしまいまして」
「いいえ。久々の夕食、楽しみにしておりますとコック長のプレスリーさんに伝えてください」
「はい。それでは――」
ガッシャーンッ！！
「きゃぁぁぁぁぁぁぁッ！　ア、アマベル様ぁ――ッ！！」
「な、何事ですかッ！？　――お、お嬢様、失礼します！！」
なんとも慌ただしく、アマベルは先ほどのヴァレンシア以上の速度でアッという間にファナの前から消えてしまった。

それを見送ったミリセントが淡々と、
「――アマベルがいつ過労で倒れるか、心配でなりません」
「ええ。アマベルさんにはそろそろ休暇が必要かもしれませんわ。少し検討してみることにいたしましょう」
「あの子は休暇の使い方も下手ですから、いっそのこと歌劇のチケットでも強引に渡してしまうのが良いかもしれません。ちょうどウィンチェスター劇場であの子の好きな恋愛物の上演が始まるそうですから」
ファナはクスッと笑って、
「では全てミリィさんにお任せしますわ。それと……その間の代役はまたローズさんにお任せすることにしましょう」
「ローズはローズで心配ですが、他に適役がいませんし仕方ないですね」
接客担当のパーラー・メイドたちを束ねるローズマリー＝クロフォードは、使用人一と言われる美人で非常に有能な人材でもあるが、少々度を越したネガティブな性格が玉に瑕なのである。
「お部屋に戻られますか？」
ミリセントの言葉に、ファナはすぐに答えた。
「いいえ、執務室へ向かいます。アオイさん、昨日の例の件、詳しく報告をお願いしますわ」
アオイはびっくりした様子で、
「で、ですが姫、少しは休まれてから――」
「大丈夫です。ミリィさん。先日のカノンからの報告書は今日中に目を通しておきます。それと、リディアさんを執務室まで呼んでいただけますか？」
「かしこまりました」
素早く動き出すミリセント。
ファナは一つ頷いて、言葉通り執務室――別館の執務室へと向けて歩き出す。
ミューティレイクとディバーナ・ロウは表面上、あくまで経済的

援助のみによる関係だ。だからミューティレイク当主であるファナにとって、ディバーナ・ロウに関する仕事の大半は公務ではなくあくまでプライベートなのである。

「――リーラッド学園から盗まれた魔石“雫”に関することです」

アオイはそう言った。

ファナは頷いて、そのまま少しの音も立てずにふわりと執務椅子に腰を下ろす。――彼女の所作はまるで体重が無いかのようだ。

「報告によると“雫”は――」

「待って。そこからはあたしがやるよ、アオイさん」

そこへやってきたのは弱冠十二歳のミューティレイク家執事、リディア＝シュナイダーだ。

男物の執事服に身を包んだ少女は濃い金髪の先を右手でクルクルと弄びながら定位置に腰掛けると、少し呆れたような顔でファナを見た。

「もぅ。帰ってきて少しぐらいは余裕あるかと思ってたらすぐ召集だもんなぁ。あたしにも心の準備ってものがあるってのにさ」

「あらあら、そうでしたか」

ファナは少し意外そうな顔をした後、ニコリと言った。

「それでは次回はアオイさんではなくリディアさんに付き添いをお願いすることにいたしましょう。それでしたら心の準備も必要ありませんものね」

「あたし、心の準備だけは人一倍早いんだ」

コロリと態度を変えてしまった少女にファナとアオイは苦笑する。

リディアはいつもの調子で口を開いた。

「ま、そんなこんなで……まずは学園調査班からの報告だけど、やっぱ例の麻薬事件と今回の“雫”強奪が関係があるのは間違いなさそうだよ。最初から“雫”の強奪が目的だったのか、ついでだったのかはわかんないけど」

アオイが口を挟む。

「例の麻薬事件と関わりがあるということは、確かその、以前ネス

ティアスの――ルーベンさんがおっしゃってたように、タナトスの一員が絡んでいるということですよね。とするとやはり最初から“雫”が目的だったと考えるべきではないかと――」
「不思議、ですわ」
「え？」
いつもどおりのんびりとした口調のファナに、アオイが怪訝そうな視線を向ける。
「姫。なにが不思議なのですか？」
アオイがそう問いかけたタイミングでノックの音がして、背の高い侍女が紅茶を運んできた。
一呼吸。
侍女が出ていった後、ファナは紅茶を一口含んでからゆっくりと顔を上げると、
「ルゥさんからの情報が確かであれば、ネービスに潜入していたのはクロイライナ＝ソーン＝ファヴィニエ――タナトスの中で最も正体の知れない者、のようです」
「それのどこが不思議なのですか？」
アオイはますますわからなくなって――紅茶で舌を火傷しそうになりながら――そう問いかけた。
代わりにリディアが答える。
「“雫”は確かに貴重なものだけど、魔石の中では特別強力なものでもないしね。タナトスが今更そんなもの必要とするのかなぁ、ってこと。だよね、ファナさん？」
ニッコリ。
「ええ、そのとおりですわ」
「なるほど……ですが、リディア。それは単に活動資金の足しにするためではないのですか？」
リディアは羽根の付いたペンを人差し指と中指で弄びながら、
「そりゃその可能性もあるよ。でもリスク的にどうかなぁ。結果的にあたしたちは“雫”から辿って犯人の行方に見当をつけたわけだ

し」
「え？　見当を……つけた？」
「そ。――実は今日ね。二人がいない間にもう一個、犯人を追ってる方から報告が来たんだ」
言って、リディアはピラッと一枚の紙を二人に示した。
「本命はこの男。ハービー＝スピンネル、三十六歳。八年前に死んだ親の小売業を継いだけど他の商売に手を広げようとして失敗。最近は立て直した様子だけど商売自体に不透明なところがあってキャラバン協会でも会員資格の一時停止を検討してたみたい」
「その者がタナトスの？」
「ううん。この人はキャラバン協会でも要注意者としてマークしてね。念のため今回の出発前に同行者の使用人二人と半日がかりの人魔判定チェックをやってる。だからタナトスが化けてることはないんだけど……どうもこれが怪しいみたい」
「なるほど。……いえ。ちょっと待ってください、リディア」
アオイが何事か気付いた顔をした。
「そのキャラバンはもしや六日前に出立したキャラバンではないですか？　つまり――」
リディアは頷いた。
「たぶん、ね。ほら例の――“雫”の反応を追う方法で。痕跡がピッタリあのキャラバンの通り道と重なってるみたいだから」
ファナの表情に微かな憂いが浮かぶ。
「ティースさんたちの無事は――確認できてますの？」
「うん。……ひとまずフォックスレアまでは、ね」
「……」
西空から雲が迫っている。
キャラバンは今頃すでにネービス領を出てグレシット領にまで入っている。
何か悪いことが起こっているような、そんな予感がした。

――昔の夢を見た。
彼女がまだ周りから“お嬢様”と呼ばれていた頃。
父は忙しい人だった。
母の顔はぼんやりとしか覚えていない。
乳母は優しかったが、優しいだけの人だった。周りもみんな優しかったが、やはりただ優しいだけだった。
甘やかされ当然のようにわがままに育った彼女は、その一方で周りが自分に無関心であることも幼心にぼんやりと理解していた。結局のところ彼らは、彼女が本当に困っているときに限って見て見ぬ振りをするのだ、と。
とはいえ、別にそれが腹立たしかったわけではない。彼らが彼女に接することはあくまで仕事で、彼ら自身の生活のためであり、自らが職を失う危険を侵してまで彼女のわがままに付き合う理由などこれっぽっちもないのだから。
まして。
そのために命を賭けることなど、あろうはずもない――
――茶色の土をどす黒く染めた血の色。
――徐々に薄れていく呼吸。

脇腹の激痛。
それが気にならなくなるほどの吐き気。
頭の中がガンガンしてグルグル回る。
あのときの気持ちを彼女は一生忘れることはないだろう。
いつもなら誰かが助けてくれるのに。
どうしたのですか、と、誰かが手を差し伸べてくれるのに。

――いつも手を差し伸べてくれた人は、今、眼前で血塗れになっていて――

産まれて初めて触れた、死の感触。

そうして――彼女は薬師を目指すようになったのだ。

忘れもしない。
七歳の年の初春――

グレシット領での最初の朝。
どうにも頭が重い。
少し本の解読に根を詰めすぎたか、あるいは風邪でもひいてしまったか、と考えながらシーラはベッドの上に身を起こした。
ズキ。
「っ……」
右の脇腹に鈍い痛みが走る。――いや、走ったような気がしただけだ。気のせいだということはわかっていた。
左右に視線を動かす。同じ部屋の二つの寝息はまだ静かだ。外の明るさからするとまだ太陽が頭を微かに覗かせた程度の時間だろう。
起こさないようにベッドから下りて鏡台に向かった。
――ひどい顔だ。このまま学園に行けば半数ぐらいは幻滅するんじゃないだろうか、と、そんなことを考えながらシーラは洗面台へと向かう。
水音を極力抑えて顔を洗った。
宿の中もまだ静かだ。隣の男性陣もまだ目覚めていないのだろう。
そういえば、と、シーラは昨晩、その男性陣の中の一人――ティースの姿を結局見ていなかったことを思い出す。この町に到着した後もなんだかんだでネイリーンに連れ回されたらしく、シーラはシ

ーラで部屋にこもりっきりだったため顔を合わせる機会がなかったのだ。
足音からすると部屋には戻っているようだったが――
髪を整え、寝間着から着替えると部屋を出て一階に下りた。
「あら。おはようございます」
一階は飲食店を兼ねている。少しおしゃれな作りの店で、カウンターの中では三十歳ぐらいの女性が準備をしており、シーラが丁寧に挨拶を返すと紅茶を煎れてくれた。
「ネービスから来られたんですってね。じゃあこの後はフィンレーの方へ？」
「ええ。――朝、早いんですね」
紅茶を一口。ミューティレイクのものに比べるとさすがに劣るがなかなかのものだ。
「そりゃあもう。お客様より遅く起きるわけにはいかないでしょう？」
女性は気さくな感じで笑って、何かあったら声をかけてください、と、そう言い残して奥の方へ消えていった。
また静かになる。
外は曇り空なのだろうか、なかなか明るくなる気配がない。
と。
二階の方で扉の開く音がした。
ぎしっと廊下を歩く音はやがて階段の方へと移動して――
「シーラさん？　もう起きてたんだ？」
「あら……おはよう。オーウェン」
やってきたのは昨晩、たまたま同じ宿に入ったオーウェン＝トレビックだった。
こんな早朝にも関わらず緩んだところなくしゃきっとしている。
早朝の彼に会うのはもちろん初めてのことで、そんな彼の姿にシーラは何故か違和感を覚えた。
その理由を考えて、すぐ思い当たる。

彼女が人生の中でもっとも多く見てきた男は――特別朝に弱いというわけではないとはいえ――どちらかというとスロースターターだった。

「シーラさんも朝早いんだ。らしいね」

「そう？」

そう答えながらシーラはオーウェンの後ろに視線を向けて、

「ネイリーンさんは？」

「え？」

オーウェンは意表を突かれたような顔をした。が、それからすぐ思い出したように、

「ああ、姉さんならまだ寝てるんじゃないかな。……でもよく知ってたね。姉さんが俺の隣の部屋だって」

「？　普通そうじゃないかしら。そんなに広い宿でもないもの」

「そうかな。……ちょっと外を散歩しようと思ってたんだけど、せっかくだから隣、いいかい？」

「ええ。構わないわ」

オーウェンは隣の椅子に腰を下ろした。

それを視界の隅に捕らえながらゆっくりとティーカップを揺らす。琥珀色の液体に薄く自分の顔が映っている。

しばらく沈黙が続いた後、シーラは横にいるオーウェンを見て言った。

「なにか私に聞きたいことがあるんじゃないの？」

「え？」

オーウェンは少し言葉に詰まる。

「まぁ、そりゃあね。でも何も聞かないって約束だから」

「そう」

律儀な男だと思う。が、シーラはこういう馬鹿正直というか生真面目な人間が嫌いではないし、だからこそ疑似とはいえ――恋人関係にもあるのだ。

「それともこういうときって、少し強引にでも聞いてみた方がいい

のかな？」
「少なくとも本人に尋ねることではないわね」
苦笑してそう答えると、オーウェンは少し考えた後に、
「じゃあ……」
結局質問を口にした。
「この六日間色々考えてたんだけど……シーラさんってもしかしてミューティレイク家の使用人なのかい？　将来有望な使用人に学問を学ばせることとって結構あるみたいだし」
どうやら彼も馬車に刻まれたミューティレイクの紋章には気付いていたようだ。
シーラは紅茶を一口含んで、
「違うわ。いくらミューティレイクでもただの使用人に三年も四年もかけて薬草学を学ばせたりしないわよ」
「じゃあもしかして……ミューティレイクの親類とか？」
「いいえ。ただの居候よ」
「居候？　でもあそこの居候ってだけでも結構すごいけど……」
オーウェンはそのまま信じたわけではなさそうだが、シーラにしてみれば限りなく事実に近い返答をしたつもりだった。
結局、オーウェンはそれ以上のことを何も聞いてこなかった。
本当に律儀で生真面目な人間なのだ。
だからこそシーラはこの青年のことを嫌いになれなかったし、もしかしたら――まるで同じ年頃の少女たちがするように、過去の色々なことを忘れて彼に恋をすることができるかもしれないと考えたのだ。
実際のところ、それは未だに実現していないわけだが。
いや。
シーラは自戒する。
――実現などするはずもないのだ。それは他の誰のせいでもなく、彼女自身がまだそのスタートラインに立とうとしていないのだから。
「……そういえばオーウェン」

会話が途切れたところで、今度はシーラの方から質問を向けた。
「ネイリーンさんのこと、少し聞いてもいいかしら？」
「え？　姉さんのこと？　あ……もしかしてティース先生――ティースさんのことが気になってるとか？」
どうやらオーウェンもここ数日の彼らのことを知っているようだ。
「ええ、少しね」
「……」
オーウェンは少し不思議な目でシーラを見た。
「あまり深くは聞かないって約束だったけど……シーラさん。もしかしてティースさんって、君の――」
「え？　あ、ああ……いえ、そういう意味じゃないわ」
どうやら別の方向に誤解されたようだった。
「ただ、あんな男を好きこのんで連れ回す彼女のことが不思議だっただけよ」
「そうかな？　あの人って結構女の人に好かれそうだけど……って、男の俺が言ってもあまり説得力ないけどね」
「……」
絶対に間違っているとは言い切れない。確かに彼は好かれることは好かれるのだ。ただ深い関係になることがないだけのことで。
「姉さんは見てのとおりマイペースな感じの人だよ。それでいて実は頭良さそう――っていうのが俺のイメージかな」
「独身なの？」
「え？」
オーウェンは意表を突かれた顔をして、
「そりゃ……独身じゃないとああやってティースさんを誘ったりしないんじゃない？」
「……変なこと聞くようだけど」
シーラは真顔で問いかけた。
「彼女、普通の男性を愛せる人なの？」
「え……え？」

ますます混乱したようだ。
「それってどういう――」
「……ごめんなさい。忘れて、今のは」
シーラは誤魔化すように視線を逸らし、ティーカップに口をつけた。
オーウェンが混乱するのも当然だろう。それに――どうやら今の反応を見ると、少なくとも彼は――事実がどうであれ――何も知らないらしい。
外が少し明るくなっている。そろそろみんな起き出す頃だろう。
「じゃ、そろそろ支度があるから戻るわ」
「あ、そっか。じゃあ俺も散歩に行ってくるかな」
オーウェンと別れる。
「行ってらっしゃいませー」
先ほどの店の女性の声が背中に聞こえた。
そのまま部屋に戻ると、パメラがすでに起きていた。
「あ、シーラ様。おはようございます」
「寝癖ついてるわよ、パメラ」
「え？　あ、ホントだ……」
鏡を覗き込むパメラの後ろを抜けて自分のベッドへ腰を下ろす。
フィリスの方はまだ少し微睡んでいるようだ。
そのまま身を屈めて足下にある荷物の確認を始める。
そうしながら考えた。
（今日は……来るのかしら、あの人）
たぶん来るような気がする。来て、おそらくまたティースを連れていくのだろう。
ひどく気になるが、気にしていることは表面に出さないようにしている。出せばきっとパメラ辺りが勘違いしてますます気を遣うだろうから。
違うのだ。パメラが心配しているようなことやオーウェンが勘違いしそうになったようなことは、シーラはこれっぽっちも心配して

いない。
彼女が気にしていることはもっと別のことだ。
不自然。
そんなことはないはずなのに、そのように見える。
それが不自然。
しかし何故なのだろう。
それがわからなくて気になるのだ。
そもそもの発端は出立のあの日の出来事で、それが全ての不自然さの原因となっているのは間違いない。
それさえなければその後のことは――趣向が人それぞれ千差万別であるということを考慮にいれるのであれば――不自然でもなんでもないのだ。であればパメラの心配は決して的はずれでもないだろうし、シーラ自身、もっと別のことに対して気をもんでいたかもしれない。
（ネイリーン＝トレビック……）
疑問が拭い去れない。
何故彼女はあんなにもティースに興味を示すのだろうか。彼に恋をしているわけでもないというのに――
頭を振って、シーラはベッドから立ち上がった。
日中、ずっと馬車に揺られているからだろうか、思考が堂々巡りばかりしている。
少し気晴らしが必要かもしれない。
「パメラ。私、ちょっと外を散歩してくるわね」
洗面台のパメラに声をかけると、
「え？　あ、はい。気を付けてください。あまり離れたところには行かないでくださいね。ネービスほど治安が良いわけではないですから」
「わかってるわ。ありがとう」
外からは少しずつ人の声が聞こえてきている。人のいるところを歩けばさすがに危険はないだろう。

そのまま部屋を出て、階段を下り、店の女性に挨拶をして外に出た。

やはり曇り空。

まばらな人々の視線を頬の辺りに感じながら、ゆっくりと歩いていく。空気は少し湿っていて道ばたにはいくつか水たまりも出来ていた。気付かなかったが、昨晩は少し雨が降っていたらしい。

（そういえば……リィナたちはうまくやっているかしら）

水たまりを見て水の王魔である彼女のことを思い出す自分の思考の単純さに少し自嘲しつつ、屋敷にいる二人の幼なじみのことを脳裏に思い浮かべる。

エルレーンの方は順応性の高い少女で何の心配もない。問題はリィナの方だ。だいぶこっちの世界にも慣れてきてはいるが、今もたまに非常識な言動で周りを驚かせているらしい。

ティースと二人で出てきて、フォローできる人間が少なくなっているだけに少々心配ではあった。

（とはいっても……あの子たちのことだから、正体がバレるようなことは絶対にしないでしょうけど――）

「――シーラ＝スノーフォール」

突然。

「！」

低い男の声にシーラは反射的に振り返った。

声は通りの路地の奥からだった。

「声を出すな。妙な素振りも見せるな。でなければ――お前の友人、リィナ＝グレイグ＝クライストが大変な目に遭うことになるぞ」

「！？」

声を上げそうになって、ギリギリのところでこらえた。

リィナ＝グレイグ＝クライスト――それはリィナの“本当の”フルネームだ。真ん中に種族名が挟まっていること、それはその人物が人魔であることを表していて――そして声の主がそのことを知っているということに他ならない。

辺りを観察する。
人はまばらにいる。いざとなれば助けを呼ぶことはできるだろう。
が、しかし――
「わかったらそのまま、自然に路地の中に入ってこい」
男の声。
「……」
少し躊躇した後、シーラは路地の中に足を踏み入れた。
普通に考えれば不用心だといえるだろう。が、それでも彼女が路地に足を向けたのは――もちろんリィナのことが大事だったということもあるが――その声が彼女にとって、確かに聞き覚えのあるものだったから。
男は袋小路の路地に、深いフードをかぶった姿でレンガの残骸の上に腰掛けていた。
五メートルほどの距離をあけてシーラは足を止める。
右手を腰に当てて。
シーラはまっすぐにフードの男を見つめた。――いや、睨み付けた。
「これはいったい何の冗談なのかしら？　……レインハルト＝シュナイダーさん？」
フードの中から、見覚えのある皮肉な笑みが返ってきた。

少年の心にはその情景が焼き付いている。

夕日の残光。
古びた髪飾り。

反射する鈍い光。
路上に乾いてこびりついた血の色。
胸を蝕んでいく――絶望。

大切にしていた少女は少年の前から突然姿を消した。
その気持ちをなんと表現すればいいのだろう。
世界そのものが足下から崩れていく。
決して地上に辿り着くことはない、永遠の落下。
なぜなら――少女は少年の全てだったから。

だから少年は旅をしている。
少女の命を奪った、ある男を捜すために。
ある男を捜して。
捜して、そして――

蘇る記憶。

少年の心にはその情景が焼き付いている。

その４『情景その二』

――少年の心にはその情景が焼き付いている。

カビの臭う薄暗い地下通路。
カンテラの明かり。
石造りの四角い部屋。
死の匂い。
黒い塊。
人の成れの果て。
少女の成れの果て――

少年の心にはその情景が焼き付いている。

シーラが戻ってこない。
パーシヴァルが寝耳に水のそんな話をフィリスから聞いたのは出発一時間前のことだった。
「戻ってないってどういうことだ？　どこかに出掛けてたのか？」
朝食のトレイをサイドテーブルに置いて、ベッドから足を下ろし靴を履く。紐を結びながら顔を上げて部屋の入り口に立っているフィリスを見た。
フィリスは普段から困ったように見える顔をさらに困ったようにして、胸の前で右手を握りしめながら、
「パメラちゃんの話だと、二時間ぐらい前に散歩に行くと言って出

掛けたみたいなんだけど……」
「二時間か。そりゃ確かに長いな」
ここはごく普通の宿町で基本的に見るべきところのある町でもない。
「それでちょっと心配になって……あれ？　ティース様は……？」
キョロキョロと部屋を見回すフィリスだったが、もちろん捜さないと見つからないほど広い部屋ではない。視界に入らないということはつまり室内にいないということである。
「ティースさんなら今さっき、朝飯食べてすぐ行ったよ」
「行ったって……あの、ネイリーンさんという方のところへ？」
さすがのフィリスも少し不審そうな顔だ。実際、彼女はここ二、三日はティースとほとんど言葉を交わしていない。
もちろんパーシヴァルもそれを感じている。が、ティースのことだから何か理由があるのだろうと考えているし、それほど心配はしていなかった。
今はそれよりシーラのことだ。
パーシヴァルのイメージからすると、彼女は時間にうるさい人間だ。実際この旅の最中も必ず時間に余裕を持った行動をしていたし、時間に遅れそうなティースを探しに行ったりもしていた。もちろんまだ一時間もあるから何かあったと見るには早すぎると思うが、フィリスが心配になる気持ちもわからないではない。
「わかったよ。じゃあ俺が少し捜してくるから、パメラ二人で出発の準備をしててくんないか？」
「う、うん。パースくん、お願いね。……あれ？　そういえばクリシュナ様もいないの？」
「ん？　ああ。あの人も毎朝散歩に行ってるみたいだから」
クリシュナとはあまり会話をしていない。屋敷で遠くから見ていると愛想のいい人物のように見えていたが、実際接してみると取っつきにくい人間だとパーシヴァルは感じていた。
「んじゃちょっとその辺見てくるから」

「……ん？」
と。部屋を出ようとしたところでちょうど戻ってきたそのクリシュナと鉢合わせる。
クリシュナは一瞬だけパーシヴァルを見てそれからすぐフィリスに視線を向けると、
「なにか……あったのか？」
「あ、はい。実はシーラ様がまだお戻りになられてなくて、それで、パースくんにお願いして探しに行ってもらうところです」
「シーラ？　彼女ならさっき戻ってきたと思うが」
「え？　ほ、ホントですか？」
「いや、後ろ姿をチラッと見ただけだから断言できないけれど、おそらく」
バタバタバタ！
「フィリス、ごめん！　パースさん、もう行っちゃった！？　あ。クリシュナ様……すみません」
慌ただしくやってきたパメラが入り口に立つクリシュナと衝突しそうになる。
「パメラちゃん。シーラ様、戻ったの？」
「うん。ゴメンね、私の早とちりだったみたい。パースさんもすみませんでした」
「いや、それはいいけど」
どうやらクリシュナの言ったとおりだったらしい。
クリシュナは何事もなかったかのように自分のベッドに戻って出立支度を始めた。
フィリスとパメラは騒がせて申し訳ないと言いながら部屋に戻っていく。
ティースのベッドには誰もいない。
「……」
パーシヴァルはそのとき、初めて何か不自然なものを感じたが、それはあまりにも漠然としたもので結局形をなすことはなかった。

毎日毎日すみません、とネイリーンはいつものように申し訳なさそうに言った。

その日もティースはネイリーン＝トレビックの馬車の中で揺られている。

不思議な人だ、と、ティースは思っていた。

誘い方が強引な割に、こうして馬車に乗ると口数は少ない。世間話的なことを話して、お互い相づちを打つ程度。もちろんティース自身話が上手い人間ではないし、会話が盛り上がるようなことは一度もなかった。

にも関わらず、居心地は悪くないし、どことなく放っておけない感じがする。

それはただ単に、彼女の外見がどこか儚げであるというだけではなく。

なんだろうか。

誰かに似ている気がするのだ。

誰だろう。

気になっている。それが気になるから、こうして連日のように話に付き合っているのかもしれない、と、ティースは思った。

相変わらず会話は弾まない。

視線を馬車の外に向ける。

町を出て二時間。キャラバンは森を切り開いて作られた少々険しい道に入っていた。

砂埃が舞い上がっている。

空は曇り空だ。

雨が降らなければいいのですが、と、ネイリーンも不安そうに空を見上げていた。

確かに、雨が降れば移動距離も短くなるし日程も狂ってくる。あ

る程度は想定に入っているとはいえまだ先の長い旅だ。できることなら降って欲しくない。
と。
「！」
周りを流れる木々の隙間を何かが横切った。
……なんだ？
あまりに一瞬のことでそれが何なのかティースにはわからなかった。
が、右手は反射的に脇の愛剣“細波”を握っていた。
それは正解だ。
ネービスを出て初めての災厄が、彼らのキャラバンに襲いかかろうとしていた。

握った拳に使い慣れた柄の感触。
パーシヴァルは誰よりも早く馬車の外に飛び出した。
「クリシュナさん！　あとはよろしくっす！」
「！？　おい――」
「パースくん！？」
クリシュナとフィリスの声にも彼は微塵も躊躇することなく、愛用している二本のトンファーを手に馬車から飛び降りた。
湿った風が全身を包み込む。
と、同時にパーシヴァルの耳に届いたのは獣のうなり声。
キャラバンの護衛たちが指示を飛ばしている。突然の事態に少々混乱しているようだったが、守りの方は任せても問題ないだろう。
自分の役割はわかっている。
少しでもキャラバンへ到達する敵の数を減らすこと。被害をできる限り最小限に抑えること。
草木を震わせて迫り来るのはこの地方に多く生息する小型のオオ

カミの群だ。
数は十……いやもっと。二十以上いるだろう。
小さく口を開いて鋭く息を吸い込んだ。
戦闘モードへ。
パーシヴァルが“心力”を解放する。
ドクン。
心臓が大きく脈打って、全身に熱い血が巡っていった。
パーシヴァルの心力は八つの力――自愛、鋼身、瞬歩、神足、流星、剛力、息吹、刻眼のうちの一つ“息吹”に特化している。
愛用の二本のトンファーは右と左で長さが違っており、左が百二十五センチ。右が七十二センチ。どちらもトンファーというには長すぎるが、パーシヴァルにはそれがちょうどいい長さだった。
左は長剣であり、盾である。
右は短剣であり、盾である。
だからパーシヴァルの戦いは常に鉄壁だ。
草木を割って、地を這うように獣たちが姿を現す。
鋭い爪、牙。
「一」
右のトンファーが回転する。
爪を弾かれ、体勢を崩した獣が地面に着地する前に左のトンファーがその喉元に、正確無比なカウンターの一撃を打ち込んだ。
悲鳴のような獣の声が響き渡る。
まるでそれが合図だったかのように、獣たちはまるで狂気に駆られたかのように次から次へとパーシヴァルに襲いかかっていった。
「四、五――」
しかしパーシヴァルは少しも慌てることなく。弾き、流し、フットワークも軽やかに、時には真っ向から打ち砕いていく。
鋭い爪も、牙も、その身には決して届かない。
「七、八――」
キャラバンの方では護衛たちの怒声が聞こえた。さすがにパーシ

ヴァル一人で全てを相手にすることはできない。が、キャラバンを守る護衛たちもそれなりの手練れだし、いざとなればクリシュナとティースもいる。心配はないだろう。

パーシヴァルはただ目の前の獣たちに集中した。

もともと野生で小型のオオカミの戦闘力は、デビルバスターを目指そうとする人間にとってさほどの驚異ではない。

厄介なことがあるとすれば、その数だろう。

どんな人間であれ、スタミナには限度がある。戦い続ければ動きは鈍ってくるし、つまらないミスを侵すことだってある。

だが。

「十三、十四――」

パーシヴァルの動きは鈍らない。鈍らないどころが徐々に鋭さを増していった。

「十八、十九――」

中には一撃がトドメに至らず、再び起き上がって向かってくる獣もいる。しかしパーシヴァルは一向に気にしない。

「二十三、二十四――」

微かに汗が飛び散る。

だが、その顔に疲労の色はほとんどなく。それどころか口元には余裕すら漂っている。

それもそのはず。

鉄壁の防御。

そして――“息吹”に特化した心力がもたらす無尽蔵のスタミナ。

それこそがパーシヴァル＝ラッセル最大の武器なのだから。

「三十！」

キリのいい数字で辺りから獣の声が消え失せた。

「！」

と、同時に、パーシヴァルは“それ”を発見する。

木々の奥に、襲ってきたオオカミたちとは明らかに違う、紫色の体毛を持った奇妙な形の獣が二匹。

パーシヴァルの視線が鋭さを増す。
「やっぱ、いやがったか……！」
その紫の獣は“幻の六十八族”と呼ばれる獣魔である。
キツネに似た長いしっぽを持ち薄紫と白の混ざった体毛が特徴的な彼らは、低脳な獣を自在に操る能力を持つ。多いときでは数十匹の獣の群を支配下に治め、彼らを利用することによってエサを獲るのだという。
ただし。
自らの狩猟能力は著しく低い。
一閃。
「ぎゅうううううう～～～っ！！」
奇妙な鳴き声を上げ“つがい”らしき二匹の幻の六十八族はパーシヴァルの一撃によって絶命した。

「……ふぅっ！」
息を大きく吐くと、疲労がパーシヴァルの全身を襲った。トンファーについた血を軽く拭い、二本を重ねてパチンと金具で止める。
これで終わりのようだ。
茂みをかき分けて元の道へ戻っていくと、キャラバンの方もどうやら片がついたようだった。地面に倒れるオオカミたちの中にはまだ完全に絶命していないものもあるようだが、再び襲ってくる心配はないだろう。
「おい！　平気か！」
護衛の一人が馬に乗って近付いてくる。歳はパーシヴァルよりも十歳ほど上だろうか。護衛隊五人の隊長格の男だ。
パーシヴァルは軽く頭を下げて、
「平気っす。それより、全員の無事を確認したらすぐに移動しましょう。ここじゃまた襲われる可能性もありますんで」
「ああ、……おい！」
まだ少しざわめいているキャラバンの中に護衛の男たちが散って

いく。
見たところキャラバンに被害が出ている様子はない。馬たちが少し暴れた形跡もあるが暴走までには至らず、今は静まっているようだ。
しかし、よりにもよって獣魔に襲撃されるとは。
自分たちのキャラバンで良かった、と、パーシヴァルは思う。でなければ、まったくの無傷とはいかないだろう。
ミューティレイクの馬車は一番近いところに止まっており、そこからフィリスが少し身を乗り出していた。
「パースくん！　だいじょうぶー！？」
「……あ。ああー！　大丈夫に決まってんだろー！」
わざとぶっきらぼうに返して、パーシヴァルはやや駆け足にミューティレイクの馬車へと戻っていった。
と、そのとき。
「――おい！　みんな、こっち来てくれ！！　はやくっ！」
「？」
パーシヴァルは馬車の眼前で立ち止まって振り返る。
その緊迫した声は馬車の群の一番奥から聞こえたようだった。
護衛たちが声の方へと集まっていく。
今の位置からでは他の馬車に遮られてよく見えない。
「なにかあったの？」
フィリスの後ろでシーラが怪訝そうな顔をしていた。
「いえ、ちょっとわからないっすけど……」
パーシヴァルはそう答えながらもう一度声の方を見た。
一体なんだろうか。騒ぎの起きている辺りは襲撃から一番遠いはずなのだが――
周りの馬車でも静まったざわめきが少しずつ戻っている。
「ちょっと見てきます」
パーシヴァルはそう言って、馬車を離れた。
一番向こう側にある馬車。

それは、どうやらあの黒い馬車のようだった。

「……何かあったみたいだ」

ティースはパーシヴァルたちよりも騒ぎに近い場所にいた。窓から覗いたその視線のすぐ先には黒い馬車。そこにキャラバンの護衛たちが集まっている。

視線を戻す。

そこには不安そうな顔のネイリーンがいた。

「ネイさん。俺、ちょっと見てきます」

「ええ。気を付けてくださいね」

ティースは愛剣“細波”を手にしてゆっくりと馬車を降りた。

一体何の騒ぎなのだろう。

獣たちの襲撃があったのは隊列の反対側で、ここはそのポイントからもっとも離れている。実際、黒い馬車の周辺に獣の姿はなく襲撃を受けた様子もない。

と。

「ティースさん！」

まだ少しざわめいている馬車の群を縫うようにパーシヴァルが駆け寄ってきた。

「パース。なにがあったんだ？」

「それはこっちの台詞っすよ。こっちの方で何かあったんスか？」

「いや、俺はずっとそこの馬車にいたし、特におかしなことはなかったけど……」

と、ティースが言うと、パーシヴァルはネイリーンの馬車に視線を向けた。黒い馬車のすぐ近く。その距離を確認して納得した顔をする。

そう。何事かあれば当然に気付くはずの距離だった。

そのままパーシヴァルとともに黒い馬車に向かう。

護衛たちの様子から、何か不吉なことが起こったのであろうことは察しがついた。

大きく開かれた黒い馬車の黒い扉。
さらに近付くと護衛の一人が気付いて、一瞬“来るな”というようなジェスチャーをしかけたが、それがティースとパーシヴァルであることに気付くと、逆に“来てくれ”というジェスチャーに変わった。
「……」
相変わらず不気味な馬車だ。
が、馬車そのものに損傷はなく、やはり獣に襲われたような様子ではない。仮に襲われたのだとしても頑丈な造りの馬車だからそう簡単には破られないだろうし、そこまでの騒ぎになれば近くにいたティースどころか、離れたところにいたミューティレイクの馬車でも——正面からの敵に気を取られていたとはいえ——おそらく誰かは気付くはずだろう。
「どうしたんです？　その馬車の中で何か？」
ティースの問いかけに護衛たちのリーダーが親指で黒い馬車の中を指し示す。
「死んでるよ」
「え？」
思わずパーシヴァルと顔を見合わせて、約一秒。
「死んでるって……？」
「この馬車の持ち主、ハービー＝スピンネルとおそらくその連れが二人、中で殺されてる。……見るか？」
まさか、と思ったが、彼が嘘をつく理由もない。
少し考えてティースは頷き、開け放たれた黒い馬車の中を覗き込むことにした。
「っ……」
むっとした空気を鼻を突く。
外観と同じく黒い内装。
……嫌な気分になった。
頭を振り、目を細めて中を見つめると、まるで靄がかかったかの

ように薄暗い馬車内には、確かに三人の男が倒れていた。
しかし。
ティースは驚きとともに呟いた。
「……これは――獣の仕業じゃない」
「だろうな」
わざわざ口にせずとも、誰でもわかることだった。馬車の持ち主、ハービーと思われる仰向けに倒れた男性の胸にはナイフが突き刺さったままになっているのだから。
パーシヴァルが床の血だまりに指を伸ばした。
「まだ新しいっすよ、これ……」
「新しい？　じゃあ、まさか――」
「おそらく」
護衛の男が厳しい表情で言った。
「今の襲撃の最中にやられたんだ。今の混乱の最中に、誰かがこの馬車にやって来て三人を殺していったんだろう」
まさか。
いや。
確かにあの襲撃で辺りは騒ぎになっていた。正面から来る獣の群に気を取られていて、最後尾にある黒い馬車の周辺など誰も気に留めていなかっただろう。
だとすれば、不可能だとも言い切れない。
しかし。
そうだとして一体誰が？　何のために？
周囲に神経を張り巡らせる。人の気配はもちろん、遠ざかっていく馬の蹄の音も聞こえない。
普通の賊なら馬車一台だけ密かに襲って去っていくということはないだろう。
とすると、最初からこれが目的だったと考えるべきか。
いや、あるいは。
その前のオオカミたちの襲撃すらそのためのものだったという可

能性も――
「ひとまず一人を先行させて一番近い町の憲兵に連絡させる。そこからキャラバン協会の方にも連絡することになるだろう。他の連中にはまだこの馬車のことは言わないでおいてくれ」
護衛たちが慌ただしく動き始めたのを、ティースは呆然と眺めていた。

やはりおかしい。
キャラバンはその日の予定を急遽変更し、事件発生現場からもっとも近い小規模な町に立ち寄ると、そこでの二、三日の足止めが確定した。ハービーたちが何者かの手で殺されたのが明らかである以上、キャラバン内部の人間がシロであることが判明するまで動けなくなった上、悪いことに、町の近くに大きな都市がないため、キャラバン協会からこのキャラバン参加者たちの詳細なデータが届くのが明日の夕方以降になるというのだ。
殺されたハービー＝スピンネルの馬車からはいくつかの違法な品が発見され、その中には盗難品と思われる貴重な魔石もあった。
ネービスを出るときの荷物検査で何故引っかからなかったのか。
ハービーたちを殺したのは誰なのか。
その目的は？
わからないこと、おかしいことはいくつもある。
だが、しかし。
シーラがそのときにおかしいと感じていたのはそれらとはまったく別のことだった。
夕暮れに染まる町。あと三十分もすれば、彼女のような女性が一人歩きするには危険な時間帯になるが、心配はない。
彼女の目的地はすぐ目の前だった。
「いらっしゃい」

少し陰気な感じのする店主の声。大きな通りから少し外れた目立たない場所に建つその宿は、今晩シーラたちが取った宿に比べて建物も古く、目立たない、お世辞にも繁盛しているとは言い難いところだった。

「ええっと……」

店主に声をかけようとして、思い直す。

階段の奥に、手が見えたのだ。

何者かが、正面にある階段の二階から手だけを出して手招きしている。

シーラは迷わずに階段に向かった。店主は怪訝そうに彼女を見たが何も言わなかった。

階段に足をかけると驚くほど大きく軋む。体重の軽い彼女ですらそうなのだから、大柄な男が乱暴に踏みならしでもすれば崩れてしまうのではないかと思った。

慎重に八段の階段を上り終える。と、先ほどの手の主はそこにはおらず、今度は廊下の一番奥の部屋の扉の中から手招きしていた。

眉をひそめ、そちらへと向かう。

そしてドアノブに手を掛けると、

「かつての命の恩人にこんなことを言うのも気が引けるのだけど――」

シーラは嫌みを込めて言い放った。

「私、あなたのタチの悪いジョークは大嫌いよ」

「おや」

扉の向こうにあったのは軽薄な笑み。

「王女様はユーモアにも厳しいな」

そう言って声の主――レインハルト＝シュナイダーは軽く両手を広げてみせた。

「……」

その仕草をさらに不機嫌そうに一瞥し、シーラは部屋の奥へと視線を移す。

瞬間、その表情が急に和らいだ。
「シーラ様！」
奥にいた人物がフードを払うと、その長身には似合わぬ穏和な女性の顔が現れる。
シーラはホッと息を吐いた。
「リィナ。平気？」
レイの横を抜けて彼女の元へと向かう。部屋の中には両方の壁際にベッドが一つずつあってリィナ＝クライストはその片方に腰を下ろしていた。
そしてもう片方のベッドでは――三十歳を越えた隻眼の男、ディバーナ・ナイトの一員であるギレット＝フレイザーが無言で武器の手入れをしている。
――彼らがここにやってきていることを知ったのは、今朝のことである。
リィナはニッコリと微笑んでそっと頷いてみせると、
「ええ、大丈夫ですよ。もともとティース様を捜して旅をしていたことだってあるんですから」
だが、シーラは首を横に振って、
「そういうことではなくて。あの人から何かイヤらしい嫌がらせされなかった？」
「おいおい」
ドアを閉めたレイが苦笑いで戻ってくる。やはり両手を広げたジェスチャーをしながら彼女たちをは反対のベッド、ギレットの隣に腰を下ろすと、
「何かとんでもなくひどい誤解があるようだが、俺は基本的に紳士だぜ？　女性が気分を害するようなことはしないさ」
細めたシーラの視線がレイを射抜く。
「よく言うわ。リィナを脅迫してここまで連れてきたくせに」
「だからそれは軽いジョークだって言ってるだろ？」
「だからあなたのジョークは大嫌いだと言ったのよ」

「やれやれ」
「いいんです、シーラ様」
そこへリィナが口を挟む。
「私も最初は驚いてどうしようかと思いましたけど、でも彼は私の正体を知ってどうしようというわけでもないようでしたし……」
レイが当然だと言わんばかりに、
「でなきゃ最初から見て見ぬ振りなどしてないさ。ただ今回は、彼女の――王魔の特別な力がどうしても必要になって、な」
「それが――水の精の声を聞く力？」
シーラはその力のことを、学園での事件のときにリィナ本人から聞いて知っていた。
「ああ。今回リーラッド学園から盗まれた“雫”は偶然にも水の魔石だったからな」
つまり彼らは“雫”の痕跡を辿るために、水精の声を聞くリィナの力を必要とし、その力を利用してここまでやってきたのだという。
「ま、魔石が盗まれただけならわざわざこんなことしなかったんだが、今回はタナトスが絡んでいる可能性が高いってんでな。……しかし」
軽薄な声がほんの僅かに輪郭を露わにする。
「やられたな」
ガタン、と、風が窓を鳴らした。
「聞いた話じゃハービー＝スピンネルの馬車からは“雫”と見られる魔石があっさり見つかっている。どうやらタナトス――クロイライナのヤツには別の目的があったらしい」
クロイライナ＝ソーン＝ファヴィニエ。
その男の名を聞くのは今朝が初めてだった。が、そのタナトスという組織がディバーナ・ロウの敵で、ティースも何度か刃を交えていることぐらいはシーラも知っている。
「別の目的って？」
「ああ。たとえば――俺たちにわざと後を追わせて、ミューティレ

イクの守りを手薄にする、とかな」
「……」
シーラは一瞬の思考の後、言った。
「それはおかしいわ。だってあなたの話だと、あなたたちがここまで追ってこられたのはリィナの力のおかげでしょう？　もしリィナがいなかったらここまで追いかけてきていない……だったらそのタナトスの男はリィナの正体まで知っていなきゃならなくなるじゃない」
レイはニヤリと笑った。
「あんたはティースのヤツより鋭いな。けど、こういうのはどうだ？」
そう言って人差し指を立てる。
「確かにヤツはリィナの力のことを知らなかった。だから俺たちがその力で雫の痕跡を追ってくることまではわからない。が」
言いながら、中指、薬指、小指、親指……片手を広げる。
「実は俺たちが辿れる道は一つじゃなかった、としたら？」
「……わざと痕跡を残してきてるってこと？」
レイは満足そうだった。
「俺はたまたま今回のような方法を使ったが、リィナがいなければ他の方法を捜しただろう。やろうと思えば、結果的にこのキャラバンの存在に辿り着くよう誘導することはできる。ま、到達する時期に一日や二日のズレは生じるだろうがな」
シーラの胸に不安の影が落ちる。
屋敷にいるエルレーンや他の人々の顔が頭をよぎった。
「じゃあ、本当にミューティレイクの屋敷を――？」
「いや、それはジョークだ」
「……だったら？」
さすがにシーラもあまり動じなくなってきた。
「今はネスティアスもクロイライナのネービスへの侵入を認めて警戒を強めている。それに屋敷にはまだアルファもアクアもレアスも

残っている。だから――狙うとすれば、むしろこっちかもしれん」
「え？」
意味がわからなかった。
「おっさんはどう思う？」
水を向けられてギレットは隻眼をレイの方へと向けた。
「可能性とすりゃあるかもしんねぇな」
「どういうこと？」
シーラにはいまいちピンと来なかった。
レイは不敵にも見える笑みを浮かべて、
「あんたも知ってのとおり、ハービー＝スピンネルが殺されたことでキャラバンはここで二、三日の足止めを喰らうことになった。一方、俺たちがクロイライナに誘い出されたのだと仮定すると、最速で今日、遅くとも明日か明後日にはこの町でキャラバンに追いつくことになる」
「どっちにしてもこの町に留まることは予測できる、ということ？」
「この町への滞在は予定通りか？」
「……いえ。あんな事件があったから急遽立ち寄ったのよ。予定通りなら今日のうちにもっと南まで進んでいたわ」
「いよいよクサいな」
レイは窓から外を見た。
夕日が少しずつ沈んでいく。村に近い規模の小さな町はこの時間ですでに喧噪がなくなっていた。
「安全面からいって今回のような非常事態でもない限り、キャラバンはこういう小さな町への滞在を極力避ける。こういう町なら、魔が侵入、潜伏するのもたやすい」
ゆっくりと視線を戻すレイ。
「獣魔による襲撃、ハービーの殺害……どちらもキャラバンを、他のどこでもない、この町に足止めするためのものだとする。だが、どう考えてもキャラバンそのものにタナトスが標的にするようなもの見当たらない。とすると……奴らの目的が見えてくる気がしない

か？」
「……」
今度はおそらくジョークじゃない。
「そこで王女様に今一度確認したいんだが」
と、レイは言った。
「状況からいってハービーを殺したのはクロイライナかその仲間で間違いない。話を聞く限りじゃ外部の誰かが殺していったとも考えにくい。つまり――クロイライナ＝ソーン＝ファヴィニエがあのキャラバンの中に紛れているのはおそらく間違いない」
シーラは険しい表情で視線を横に流した。
「……わからないわ。今朝、あなたに言われてから注意して見ていたつもりだけれど、特別に怪しい男なんて――」
「男に限定しなくていい。……もしかしたら女装しているかもしれないだろ？」
「……」
レイの言葉は冗談のようだったが、シーラの脳裏には瞬時にネイリーン＝トレビックの顔が浮かんでいた。
まさか。
彼女は違う。彼女はオーウェンの姉だ。オーウェンが嘘を吐く理由はない。
しかし――。
あり得ないことではない。
シーラはリィナやエルレーンから聞いて知っている。魔の中には幻覚という能力の持ち主がいる。感情の幻、記憶の幻、そして五感の幻――たとえば視覚を誤魔化してオーウェンをだましていたという可能性はないのか。
それならオーウェンの姉としてうまくキャラバンに潜り込むことも――。
いや。
幻覚能力は“一”が基本だと聞いた。だから同時に一つの感覚し

か誤魔化せないという。オーウェンとは面と向かって会話していたのだから、視覚と聴覚を同時に誤魔化していることになってしまう。

あるとすれば姿形、あるいは声のどちらかが偶然にもオーウェンの姉と酷似しているという可能性か――それも考えにくい。

そこまで考えてハッと我に返る。

可能性の話をすれば彼女以外にも怪しい人間はいくらでもいる。

何しろシーラはその大半と面識がないのだから。

それに、そう。

ネイリーンがハービーを殺せるはずはないのだ。

何しろ彼女は今朝、前の町を出発してからあの事件が起きるまで、一瞬たりともティースから離れていない。

だからどう考えても不可能。

――いや。

ティースを視覚の幻で誤魔化して――

「……」

すぐに思考を打ち切った。

馬鹿馬鹿しい。そんなことをするぐらいなら最初からティースを馬車に招く必要なんてないのだ。

「そうか」

レイは落胆した風でもなく頷いた。そして視線を横に動かすと、

「リィナ。あんたは今からあっちと一緒に行動してくれ」

「え？」

「あんたの役目は終わっちまったからな。ま、理由は適当につければいいさ。ティースのヤツが恋しくてはるばるネービスから追いかけてきた、とかな」

「？」

リィナはいまいち（二つの意味で）理解できてない様子だったが、シーラは彼の意図を理解した。

彼の周りは危険になる可能性がある。

王魔とはいえ、朧で力の大半を封じられたリィナは――戦う力は

残っているもののデビルバスターレベルの戦いでは命を落とす危険が高いだろう。もともと彼女は、魔力以外の戦闘技術など皆無に等しい。

シーラはリィナの肩に手を置いて、それからレイを見た。

「あなたもこちらに合流したらどう？　パースもいるし、ティースだってああ見えていざとなれば少しは役に立つ男よ」

「相変わらず素直じゃない言い方だな。ティースのヤツも可哀想に」

レイは笑って、

「ありがたい話だが、相手が相手だけにな。万全の体勢を敷いているとすれば被害者を増やすだけになっちまう」

シーラは少し眉を曇らせた。

「……これからどうするの？」

「さて、どうするかな。ま、実際、タナトスは常に統率が取れているような連中じゃないし、大軍勢で待ち伏せてるって可能性は実のところそれほど高くない。とはいえ、何かしらの罠があると考えて慎重に動くとするかな。……なぁおっさん」

「……」

ギレットは何も答えず、黙々と武器の手入れを続けている。怯んだ様子はなく、来たら返り討ちにするだけだと言わんばかりである。

結局、シーラは彼の言葉に甘えることにした。

「リィナ。行きましょう」

「え、ええ。でも……シーラ様」

「いいのよ。これが彼らの仕事なのだから」

レイはいつもの調子で、

「ま、そういうことさ。――リィナ、なかなか楽しい旅だった。よかったら今度は俺の人生の旅にも付き合ってくれ」

「？」

「リィナ。相手にしなくていいわ」

ブロンドの髪をなびかせて部屋に背を向ける。

「送ってやりたいとこだが、あまり人目につきたくない。平気か？」
「ええ。まだ明るいわ。――みんなには話さない方がいいの？」
「揃いも揃って隠し事の下手な奴らばかりだからな。ま、敵さんには気付かれてる気もするが、積極的に話す必要はない」
「わかったわ」
リィナを連れて部屋を出た。
レイはああ言ったが、リィナを連れていくとなれば説明せざるを得なくなるかもしれない。
黙っておいてくれと言わなかったのはその辺りを考慮してのことなのだろう。
宿を出る。
――それにしても。
シーラは再び考える。
先ほどレイが予測した、敵――クロイライナという男の思惑の話はそれなりに筋が通っていてその場ではなるほどと思ったものの、果たしてそこまで予測して思い通りに運べるものなのだろうか。
確かに不可能ではないと思う。
だが、可能性としては――。
いや、違うのか。
そこまで考えてシーラは思い直した。
確かにレイがここまで来る可能性は百パーセントではなかっただろう。五十パーセントか、それよりもっと低かったかもしれない。
だが、きっと敵にとってはそれでよかったのだ。
レイの言葉を思い出す。
――辿れる道が一つじゃなかったとしたら。
同じ理論だ。
クロイライナという男が最初から何一つ危険を冒していないのなら。学園に麻薬を蔓延させたときも、“雫”をリーラッド学園から盗み出したときも、そしてキャラバンに侵入してハービー＝スピンネル一行を殺害したときも。

リスクがないのなら、見返りがなくても一向に構わないと考えるだろう。
どちらに転んでも決してマイナスにはならない。
そんな思惑を張り巡らせているのだとしたら――
「……シーラ様。大丈夫ですか？」
「え？」
よほど難しい顔をしていたのだろうか。リィナが心配そうに彼女を見つめていた。
少し肩の力を抜く。
――考えすぎかもしれない。
大きく深呼吸すると草の匂いがした。
リィナに平気だと伝え、頭をクリアにして再び考え直す。
いくらなんでも敵がまったくリスクを冒していないということはないだろう。少なくとも今回のハービーの一件は、クロイライナという男がキャラバンの中にいるという可能性を高め、その中で襲撃時のアリバイが証明できないものはさらに疑いが濃くなって――
――だから。
脳裏をよぎる可能性。
（つまり……本当にそこまで頭の回る男なのだとしたら）
ハービーの一件がリスクにならないのだとしたら。その一件で逆に疑いづらくなっている人物が逆に怪しいということにならないだろうか。
脳裏をよぎる顔。
自分でもこじつけじゃないかと思ったが、それでもやはり頭から離れない。
（ネイリーン＝トレビック……）
彼女はオーウェンの姉だから、素性が確かだ。
少なくとも女性である以上、今回の敵の姿には該当しない。
ハービーの件ではアリバイがはっきりしている。
「……」

疑う要素がない。
にも関わらず。
シーラはいつからか、やはり彼女を疑っている。
――いや。
いつからか、という表現は正しくないかもしれない。
最初から。
最初から疑っていた。
今朝、レイからキャラバンに紛れ込んだタナトスの話を聞く――
それよりもさらに前から。
それは、そう。
彼女は――明らかに偽っているから。
ティースに対する態度。まるで彼を恋い慕うかのようなあの態度が、紛れもなく偽りだから。
――それはあのティースという男がそんなにモテるはずがないとか、あるかどうかもわからないシーラ自身の女の勘だとか、そういう曖昧なものではない。
シーラは確信している。彼女はマーセル＝バレットとは違う。彼女はティースに対しこれっぽっちも恋愛感情など抱いていないし、この先、どのような天変地異が起ころうとも抱くことはあり得ない。
――とすると。
根拠はないが、考えられなくもない。
あのネイリーンという女性が、実は――
と。
「あれ、シーラさん？　え、隣の人は……もしかしてリィナさん？　どうしてこんなところに――」
「え？　オーウェン……？」
道の向こうからやってきたのはオーウェン＝トレビックだった。
ちょうど聞きたいことがあった。
ちょうど確かめたいことがあった。
――思った矢先に、現れた。

何故か不安になった。
「こんにちは、オーウェンさん。実は、その、私は――」
「オーウェン。聞いても……いいかしら」
リィナの言葉を遮ってシーラは問いかけた。
「え？」
オーウェンがビックリした顔をする。
「ど、どうしたの、シーラさん？　そんな真剣な顔で――」
得体の知れない不安を感じながらも。
シーラは問いかけざるを得なかった。
「ネイリーンさんは……あの人は、本当に本人なの？」
「え？　い、いきなり変なこと聞くね。一体――」
確かに急にそんなことを尋ねられれば戸惑うだろう。
「答えて、オーウェン。大事なことよ。あなたのお姉さんは、本当にあなたのお姉さんなの？」
「……」
そのときのオーウェンの表情の動きは、シーラが想像していたどの可能性とも違っていた。
気圧されるでもなく。
質問の意図を考えるでもなく。
ただ。
ただ、唖然と――
「……え？　姉さんって、誰が？　誰の？　俺の、姉さん？」
「――」
一瞬、呼吸が止まった。
「あれ、俺、シーラさんに姉さんの話をしたことあったかな？　確かに俺の姉さんはネイさんと同じ名前だったけど、俺が小さい頃に病気で死んじゃったよ」
心臓が微かに鼓動を早める。
「で、でもオーウェン、あなた、彼女のこと姉さんって――」
「え？　あ……あははは。違う違う。姉さんじゃなくてネイさん

だよ。シーラさんらしくないなぁ、そんな勘違い――」
「……」
まさか。
そんなはずはない。
そんな馬鹿な勘違いをするはずがない。
「でも確かにネイさんとはこのキャラバンで一緒になる前からの知り合いだったよ。最近ちょっとしたことで知り合って、死んだ姉さんと同じ名前だったからか仲良くなってね――」
「……」
違う。勘違いではない。
シーラはオーウェンに姉がいたことも知らなければ、その姉がネイリーンという名前であることも知らなかったのだ。彼女がオーウェンの姉だと思った理由はただ一つ、彼が彼女のことを姉と紹介したからに他ならない。
――いや、しかし。
思い返してみると不自然な点はあった。
姉弟なのにも関わらず別々の馬車を使っているのも不自然なら、今朝、彼女について質問したときの彼の反応も確かにどこか不自然だった。
ならば――どういうことだろう。
今のオーウェンが嘘をついているとは思えない。だが、初対面のとき、彼は確かに彼女のことを“姉”だと言った。彼女の記憶が確かならそれは間違いない。
じゃあ……そのとき？
そのとき、たった一度だけ。何らかの方法で、どこかで、オーウェンに自分のことを姉だと勘違いさせたのだとしたら――
可能なのか。
いや。
何にせよ今はそこまで考える必要もない。あのネイリーンという女性が素性を偽っていたことは紛れもない事実だ。

じゃあ――彼女は一体何者なのか？
それこそ考えるまでもない。シーラはすでにその答えを知っていた。
――レイに知らせなくては。
と、彼女がそう思い立ったところへ、
「あ、いた！　おぉーい、シーラ！」
「え？」
全員が視線を集中させる。
と、向こうからやってきたのは長身でどこか頼りない、シーラにとって一番見慣れた男の姿。
「ティース？」
シーラは驚きに目を見開いて見つめた。
間が悪いときの方が圧倒的に多い男だというのに、今回に限ってはなんというタイミングのよさだろうか、と。
「なかなか戻ってこないから心配して――オーウェンくんと一緒だったのか……それに……って、え、リィナ！？」
ビックリして足を止めるティース。
だが、今はそんなことを語っているときではない。
「説明はあとよ。そうね……ティース、せっかくだから私と一緒に来なさい」
「え！？　お、おい、シーラ！？」
「リィナ、あなたは先に宿に戻ってて。オーウェン、あなたも宿に帰りなさい。今日は外に出ない方がいいわ」
シーラは唖然とするティースの手を取って、矢継ぎ早にそう言った。
事情をほとんど理解しているリィナはともかく、ティースとオーウェンはキツネにつままれたような顔をしている。
「シーラさん？　急にどうしたの？」
「お、おい、シーラ！　説明してくれ！　一体何が、なんだってリィナがここに――」

「説明はあとだと言っているでしょう」
そんなティースの手を強引に引っ張って今来た道を戻っていく。
出立前、ネービスのキャラバン協会でオーウェンが二人分の登録を済ませたのを、シーラは自分の目で目撃していた。つまりネイリーンは――ネイリーン＝トレビックを語るあの人物は、何らかの方法でオーウェンを騙し、その同行者としてキャラバンに潜り込んだのだ。
とにかくレイにこのことを伝えなければならない。あの女性こそがタナトスの――クロイライナという男だという可能性も充分あり得る。女性ではなく男性だったのだと考えれば、ティースの特異体質が反応しなかったことも至極当然だ。
先ほど出てきたばかりの宿が視界に入ってきた。
「おい、シーラ。わかった。わかったから引っ張らないでくれ」
どうやらティースも観念したらしい。
「それで？　あの宿に何かあるのか？」
「ええ。敵の正体がわかったのよ」
「敵？　敵って――？」
もちろんティースは全然理解していないようだった。
今はいい。あとでレイの口から話してもらった方が早いだろう。
しかし。
シーラはまだ不気味なものを感じている。
やはり……まだ、何かおかしい。
さっきオーウェンと鉢合わせたときに感じた、首筋を襲う悪寒のようなもの。
再び思考が巡る。
ネイリーンと初めて顔を合わせたときのこと。
何度思い出しても、オーウェンは彼女のことを姉だと言ってシーラたちに紹介していた。家業は姉が継ぐとかいう話もしていた。
おかしい。
小さい頃に死んだ姉が家を継ぐなんて――そんな話、どう勘違い

していても出てくる話ではない。
どう勘違いしていても――
宿の中は相変わらず薄暗く、店主は無愛想だった。
レイはすでにシーラたちの再来訪に気付いているだろう。客は彼らだけのようだった。
ティースの手を引いて階段を上っていく。
「お、おい、シーラ。手、そろそろ離してくれよ」
「え？　あ、ええ、そうね……」
考え事に夢中で気付かなかった。
手を離し、二階の短い廊下を進む。
「？　ここに誰かいるのか？」
「ええ」
ドアノブに手をかけて。
ふと気付いた。
――あり得る。その勘違いもあり得る。
幻の力は大きく三つに分かれると聞いた。
感情の幻。
五感の幻。
そしてもう一つは、記憶の幻。記憶の錯覚だという。
死んだはずの姉が生きていた、と――オーウェンがあの瞬間、そう錯覚していたのだとしたら？
そう簡単に記憶をすり替えることができるのか。
できるとして、矛盾が生じたりはしないのか。
その辺りのことは専門家ではないシーラにはわからない。以前エルレーンから、記憶を錯覚させる力は扱いが難しく、使用条件も厳しいという程度のことを聞いてはいたが、ネイリーンを名乗るあの女性は以前からオーウェンに接触していたようだし、素人考えでもチャンスはあったように思える。
記憶の錯覚。
――そう考えた瞬間、また首筋に寒いものを感じた。

何か。
彼女は何かを見落としている。
だが、それが何なのか彼女にはわからなかった。
材料は揃っているのに。
気付かない。
ただ、デビルバスターであるレイならば詳しいだろうと信じ、宿の奥の部屋へ向かった。
――どんなに優秀だろうと、彼女はその道に関して言えば素人も同然であり、何より考えるために与えられた時間が少なすぎた。
だから気付かなかった彼女を責めるのは酷だろう。

そのチャンスがあったのが、オーウェンだけではなかった、ということに――。

ゆっくりと、扉が開く。

――少年の心にはその情景が焼き付いている。

カビの臭う薄暗い地下通路。
カンテラの明かり。
石造りの四角い部屋。
死の匂い。
黒い塊。
人の成れの果て。
少女の成れの果て――

気が狂いそうになる。
叫びそうになるのを必死にこらえた。
気が狂いそうになる。

意味がないことなどわかっている。
そんなことをしても死者は生き返りなどしないのだと。
しかし、それでも。
それでも少年はそうするしかなかった。
それしか生きる道が見つけられなかった。
なぜなら――少女は少年の全てだったから。

だから少年は旅をしている。
少女の命を奪った、ある男を捜すために。
ある男を捜して。
捜して、そして――殺す、ために。

蘇る記憶。

少年の心にはその情景が焼き付いている。

「――え？」
シーラは言葉を失って立ちつくした。
ぴっ、と。
頬に血が跳ねて。
夕日にきらめく美しい銀色の刃。
不敵な金髪の男が、床の上に崩れ落ちた。

何が起きたのか。
彼女にはわからなかった。
ただ、彼女の眼前にあったのは、彼女にとってもっとも信じがたい光景だった。

「思い出した――だから俺は旅をしていた」
きっと自分は。この日のために。偽って生きてきたのだ。
何かを目標にしていた日々も。
誰かと楽しく暮らした日々も。
夢も、希望も、喜びも。
記憶に焼き付いたその情景の前では、全て偽りでしかない。
世界には顔のない人々ばかりで。
太陽も、雲も、星空も、目の前に広がる大地でさえ、白と黒で構成されている。
内にあるのは色鮮やかな思い出と、あの日の情景。

手にした愛剣には確かな手応え。
目の前に崩れ落ちるのは、捜し求めた――仇の顔。

蘇る記憶。

夕日の中に残された髪飾り。
薄暗い地下通路の死臭。

大切にしていた少女を無惨に失ったという、偽りの記憶。

彼の心にはその情景が焼き付いていた。

その5『情景その三』

～十七年前～

その地方は大陸でも雨が多い場所としてよく知られている。

鬱蒼と茂った森の道。
追う者と、追われる者。

追われる者は咎人と罪のない赤子。
咎人は最初、赤子を連れていくつもりのようだった。
しかしやがて重荷となり、赤子は見捨てられた。

追う者は主に雇われた者たち。
咎人を追う。見捨てられた赤子のことなど気にも留めずに。
それが仕事だった。

追われる者は奪った宝石を。
追う者は奪われた宝石を。

咎人の赤子は見捨てられ、見向きもされず生涯を終えるはずだった。

しかし。

『――子供を、捨てようというのですか。あなたたちは子供よりもその色の付いた石ころの方が大切だというのですか』

赤子は覚えている。
重い雲に覆われた空。
雨に煙る森の中。

『ならばその宝石は差し上げましょう。ただし、その子だけは無傷でこちらへ渡しなさい。それが――条件です』

覚えている。
その、太陽のごとき輝きを持つ女性の姿を。

～三年前～

今日はいい天気だ。
タイをきっちりと締め、紺色の上着を身に纏い、鏡の前に立つ。
大丈夫。乱れはない。
カーテンの隙間から光の筋が射し込んでくる。
ちゅん、ちゅん、という小鳥の囀り。
太陽のオレンジが目に染みる。
部屋から廊下に出る。朝独特の清々しい空気の中を歩いていく。
ふと。
その途中で足が止まった。
右手の壁、目線の高さに――標準的な身長の人間であれば目線より少し上になる――小さな肖像画が飾ってある。
正面から向き合う。
美しいブロンドの髪。あまりに現実離れした美しい顔立ち。――にも関わらず、人懐っこい、春の太陽のように暖かな微笑みを浮かべる女性。
その肖像画を描いた絵師はきっと天才だろうと思った。

美しく、優しく、暖かい。
その絵は、生前の彼女の全てをその平面な画材の上に見事に表現しているように思えた。
右手を胸に置いて目を閉じて軽く頭を垂れる。
毎朝の日課。
加護を願うわけではない。
ただ、有り余る愛を与えてくれた彼女へ感謝を伝えるだけの儀式。
『――今日も行って参ります、奥様』
目を開くと女性が微笑んでくれて、それだけで全身は活力に溢れた。

そうして彼の一日は始まる。

レビナス家はジェニス領の北の田舎町カザロスに存在する旧家だった。かつては国の中枢にも深く関わった由緒正しい家柄で、三百年以上前にその位置から退いてカザロスに移ってきてから国政にはそれほどかかわらなくなったが、時折一族から優秀な人材を中央に送ることがあって、地方貴族の中では一目置かれる家系である。

ただ、もちろん。
そんなことは屋敷で働く一使用人にはそれほど関係のないことで――

『ぅ……ん～～～～』
軽く伸びをしてから玄関の扉に手をかける。
朝の掃除を一通り終え、今度は屋敷の外だ。
扉を開くと目の前に黄土色の緩やかな坂。屋敷の背後には緑の森、左右には綺麗に手入れのされた花畑。――花はまだあまり咲いていない。
『まだ少し寒いなぁ』

初春の冷たい風に首をすぼませていると、
『おはよう、ティースくん』
『あ』
花畑の方から人がやってくるのが見えた。後ろで結い上げた髪に白いヘアバンドを付け、全体的にふわっとした印象の穏和そうな女性だった。
『おはよう。ルナ姉さん』
『昨日の雨が嘘のようね。いい天気だわ』
そう言って青空を見上げる。
ルナ――ルナリア＝ローレッツはティースの仕事仲間だ。歳は四つ年上の十八歳。まだ若いがこの屋敷で十年近く働いていて、住み込んで働いている使用人の中ではもっとも歳が近いこともあり、彼にとっては姉のような存在だった。
と。
『あれ？』
いつも屋敷の脇に置いてある馬車がなくなっているのに気付く。
『旦那様が、もうお出かけに？』
『ええ、今朝は日が昇ると同時に。色々とお忙しいみたいよ』
『そうですか……』
主人が忙しいのはいつものことだが、最近は以前にも増して屋敷にいることが少ないようだ。
『それより』
ルナリアが視線を上げる。
最近、身長が急に伸びて彼女との身長差は十五センチほどに広がっていた。
『さっきから、あなたのこと捜していたみたいよ』
『え？　誰が？』
『決まっているじゃない』
そう言ってルナリアはティースの背後――開け放たれたままの扉の中を指さした。

『シルメリア様が、ほら』
『……』
振り返る。
と。
正面の階段を下りてくる少女の姿が視界に入った。
――脳裏に、肖像画の女性が蘇る。
透き通る金の髪。
陶磁器のような滑らかな肌。
魔性を感じるほどに整った顔立ち。
似ている。記憶にある女性よりはずっと幼いが、それでも瓜二つ。
唯一違うところといえばその瞳が優しい春の太陽ではなく、夏の日射しを彷彿とさせる、宝石のようにキラキラと輝くものだったということか。
シルメリア＝レビナス。それはその名の通り、この屋敷の主人――その一族に名を連ねる少女だった。
『ティース。そこにいたのね』
シルメリアは玄関の前にいるティースの姿に気付くと、その歩みをほんの少しだけ早めた。宝石の瞳がさらに輝きを増し金色の髪が踊って、まるでプリマ・ドンナのように優雅にふわりと階段から降り立つ。
『捜したわ。それはもう、屋敷中捜したのよ』
『は。俺に何か御用ですか？』
少女の口元が微かに緩む。
『馬鹿ね、用がなければ捜したりしないわ。おはようルナリア。今日はいい天気ね』
大人びた微笑み。
大人びた口調。
おそらく初対面の者は誰も彼女がまだ十二歳の少女だとは思わないだろう。
『おはようございます、シルメリアお嬢様。確かに良いお天気です

が、まだ風は冷たいのであまり薄着では過ごされませぬよう』
『ええ、大丈夫よ。ありがとう』
『あの、お嬢様。俺に御用というのは……？』
少し遠慮がちに口を挟むと、シルメリアはクスッと笑い、少々歳不相応な艶のある流し目でティースを見た。
『もう忘れちゃったの？　今日はヴィリオンまで買い物に行くと言ってあったでしょ？』
『え。……あ』
確かに記憶にあった。
が、名誉のために断っておくと、彼は別にそのことを忘れていたわけではない。
『それって、俺も一緒に、ということですか？』
『そういう意味で言ったのだけれど、そう聞こえなかった？』
『す、すみません。てっきり旦那様と行かれるものとばかり』
しかしどうやらその線はない。先ほどルナが言っていたとおり、屋敷の主人――彼女の父親は朝早くにどこかへ発っている。
『そんなはずないでしょう』
一瞬だけシルメリアの表情が硬くなる。が、別にティースの受け答えに気分を害したわけではないらしく、すぐ気を取り直した様子で、
『それなら改めてお願いするわ。ティース。ヴィリオンの町まで私の供をしてちょうだい』
そう言った。
断る理由はなかった。
『かしこまりました、お嬢様』
軽く頭を垂れると、彼女はそのときだけ年相応の顔になった。

少し小高い場所にあるカザロスの町から緑に囲まれた緩やかな坂道を下っていくとヴィリオンの町が見えてくる。農業従事者が八割を越えるカザロスの町と違い、こちらはその他の様々な産業が栄え

ていて、この近辺では一番の先進町だ。
ティースはここに来るといつも人の多さに圧倒される。もちろん本当の都会に比べれば大したことはないのだろうが、どこを向いても人がいる光景は、カザロスでは滅多に見られない光景だ。
『イヴァン。お前はここで待ってて。大丈夫よ。日が傾く頃には戻るから』
馬車を降りたシルメリアは御者の男にそう言った。
そのままティースを振り返って、
『それじゃ行きましょ、ティース』
『あ、はい』
さっさと歩き出した少女の後に慌てて付いていく。
今日付き従うのは彼一人。いくら昼間で安全な時間帯とはいえ、彼女の外見は人目を集めやすい。目を離すわけにはいかなかった。
大きな通り。
喧噪。
人の波にぶつからないように、周りの人々の邪魔にならないように、気を遣いながら主人の斜め、一歩前を歩いていく。
途中、ティースはチラッと振り返って、
『ところでお嬢様。今日のお買い物というのは一体――』
途中で言葉を止めた。
振り返った瞬間、彼を凝視していたシルメリアと目が合ってしまったからだ。
『……え、あの、俺の背中に何か付いてます？』
『いいえ。なにも付いてないわ』
そう言いつつもシルメリアは目をそらさない。
『はあ』
もしかして服の選択を誤ったのだろうかと少し不安になったが、彼女はいつも通りの上機嫌だ。別に彼に落ち度があったわけではないらしい。
シルメリアは少し口元を崩して、

『何を買いに来たか気になる？　それとも早く帰らなければならない用事でもあるのかしら？』
『あ、いえ、そんなことはないですけど……』
もともと彼の本職は彼女の従者だ。空いた時間を使って他の仕事を手伝いはするが、彼女に付き従うことが何物にも優先する。だからそれ以上の用事などはない。
『ただ、昨日まで一週間も屋敷を離れておられたでしょう？　お疲れではないのですか？』
『ええ、そうよ。それで精神的に疲れたから、こうして気分転換をするの』
『はあ』
ティースはもちろん肉体的な疲れのことを指摘したつもりだったのだが、彼女の言葉を額面通りに受け取るなら、どうもこの一週間の間に精神を酷使するような出来事があったらしい。
『それって俺は聞いてませんけど、どんな御用だったんですか？』
『つまらない用事よ』
シルメリアは簡潔にそう言ってティースから視線を外した。
ティースはそんな彼女を見て、本当に何か不本意なことがあったのだろうなと思い、それ以上は何も言わないようにした。
そのまま周囲に目を動かす。
『それにしても、今日は一段と人が多いですね』
シルメリアもそんな彼の視線を追いながら、
『そうね。昨日までずっと雨だったから、かしら』
そう言って快晴の青空を眩しそうに見上げる。
太陽。
その姿があまりにも彼女に似合いすぎて、ティースは言った。
『お嬢様は何となく、晴れの日が好きそうですよね』
『あら。お前は雨の方が好き？』
突っ込まれて少し慌てる。
『あ、いえ、そういうわけではないですけど、お嬢様の方がより好

きそうというか何というか……』

『なに、それ』

シルメリアは可笑しそうにクスクスと笑って、

『お世辞を言うつもりならもっとストレートでないとダメよ。それじゃなにがなんだかわからないじゃない』

『え。あ、いや、そういう意味じゃ――』

『あら。だったら何か悪い意味だった？』

『……』

三つも年下の少女にやり込められてティースは少し情けない気持ちになったが、もともと口の上手い性格ではない。いつものことなのである。

『いえ、本当に深い意味はないんです。ただ何となく、お嬢様には薄暗い雨の日より今日みたいな晴れの日の方が似合うと思っただけで……』

正直にそう言うと、

『そっか。ありがと、ティース』

短くそう呟いただけだったが、そのときの彼女はとても嬉しそうだった。

再び二人で歩き出す。

煉瓦の道。

どこからか聞こえてくる唱歌。

『ねぇ、ティース』

『はい、お嬢様』

『たまには二人でこうして町を歩くのもいいと思わない？』

大人びた少女は時折年相応の表情をする。

そのときの顔が一番あの人に似ている、とティースは思った。

そして、そんな彼女を見るたびに誓いを新たにするのだ。

自分は一生、この人を守っていくのだ、と――。

「――本当に？」
「え？」
「本当にその女の子は助かったのですか――？」
その人が囁く。
そっと触れた指の先から何かが染み込んでいく。
浮遊感。今までに感じたことのない感覚。
太陽のオレンジが目に染みた。

～十六年前～

使用人であるアマルナ夫妻の間に産まれた男の子は“ティーサイト”と名付けられていた。その名は、将来仕えるであろうレビナス家の人々にとって安らげる場所であれ、という意味を込めたのだという。
その願いが叶ったかどうか定かではないが、ティーサイト――屋敷の人々からは“ティー”や“ティース”の愛称で呼ばれていたその赤子はどちらかといえば大人しく、素直で、手のかからない子供だった。比較的大きく丸っこい顔立ちで可愛らしかったこともあり、両親以外の使用人たちにも可愛がられ、特にレビナス家の“奥様”には、合間を見ては抱き上げ、おしめを変えてくれるほどに気に入られていた。
それは彼の両親が屋敷の宝石を持って姿を眩ました後も何ら変わることなく――現在の彼の性質の大部分は間違いなくこの頃に形成されたものだろう。
『ティースくん』
中でも“奥様”の存在は、彼にとってとても大きいものだった。
たまに機嫌を損ねて泣き出したときも“奥様”の一言でピタリと

泣きやむほどに。
朧気に……そう、朧気に覚えている。
暖かな布団の中よりも。
与えられた数少ないオモチャよりも。
ティースは“奥様”のことが一番大好きだった。
そして――それは彼が三歳の誕生日を迎えて間もない頃のこと。
『……』
まだ幼かったから、そのときのことはそれほど鮮明に覚えているわけではなかった。だが、そのときのイメージは朧気ながら、頭の中に残っている。
春の麗らかな日差しがカーテンの隙間から射し込む中。
乳母車で寝息を立てる産まれたばかりの赤ん坊。
ティースは口をぽかんと開けたまま。
それがあの人――奥様の子供だということは理解していた。
微かに生えた髪は奥様と同じ飴色だ。
好奇心から赤ん坊に話しかけようとするのを、失礼だからと周りの使用人たちに止められた。
だが、赤ん坊の母親――奥様はそれを許してくれた。
そして言った。
『ティースくん。この子のこと、色々と助けてあげてね』
と。
そのときの言葉は、今でも耳の奥に残っている。
優しかった――奥様の言葉。
そのときの言葉は、今でも――。
～三年前～

『お断りします』
彼女――シルメリアがその言葉を口にしたのは、このヴィリオンの町に来ていったい何回目になるだろうか。おそらく十回目か十一回目だと思うが、ティースは正確な数を数えていない。
相手は様々だ。貧乏そうな男もいれば裕福そうな男もいる。歳だって十代半ばから三十代後半までいただろう。
『……まったく。うんざりするわ』
その十回目だか十一回目だかの交際の申し込みを断った後、シルメリアはその美しい形の眉を煩わしそうにひそめてみせた。
『ただ遊びに来ただけだというのに、どうして関係ないことにこんなにも労力を費やさなければならないのかしら』
ティースは苦笑して、
『それは仕方ありませんよ。だってお嬢様は――』
そんなにもお美しいのですから、と、そう言おうとして言い淀む。
それは彼自身の素直で正直な感想だ。事実、彼女は母親譲りの筆舌に尽くしがたいほどの美少女であり、こうして町を歩くだけでも人目を集める存在である……が、彼は昔からそういう言葉を躊躇ってしまう性格なのだ。それは小さい頃から見知っているこの少女が相手でも変わらないのである。
だが、シルメリアはそんな彼の様子に気付いたらしい。
少し笑みを浮かべて、
『なに？　続けて、ティース』
ティースは少々慌てながらも無難に返した。
『あ、いえ。町中ではやはり少々目立ちますから。その格好は』
『……』
シルメリアは少し拍子抜けした様子だったが、彼女もそんな彼の性格をよく理解しているようで、
『そうね。こんな格好をしていたら誰でも目立つ。……なら普通の格好だと地味すぎて、お前と町中ですれ違っても気付いてもらえな

いかもしれないわね』
『え、あ、あ、いや、そ、そういうことでは……』
『なんて、ね。冗談よ』
やはりクスッと笑ってシルメリアは歩き出した。
『だいたいあの男たちは隣にいるお前の姿が見えないのかしら』
『はは……仕方ないですよ。俺なんてどこからどう見ても従者にしか見えませんから』
『だから私服を着てきなさいと言ったのよ』
シルメリアは不満そうにそんなことを言ったが、私服を着てても同じだろうとティースは思った。そういう問題ではなく、単純に釣り合いの問題なのだ。
『それにお前は仕方ないと言ったけれど、他の領地ではそう簡単に初対面の女性に交際を求めたりしないと聞くわ。どちらかというとここが特殊なのよ』
『はぁ、そうなんですか？』
初耳だった。
確かにここジェニス領において、出会って間もない女性に愛を告白することは珍しいことではない。そしてそれが男の美徳だとする風潮が強い一方で、ジェニスの男たちは一途であるともされる。
手は早いが二股はかけない。
それが一般的なジェニスの男たちの評価である。
シルメリアは悪戯っぽい目でチラッと彼を振り返って、
『きっと他の領地にいるのはお前のような男ばかりなのね』
『へ？　どういう意味ですか？』
シルメリアは答えず、
『……ねえ、ティース』
そう言って足を止め、振り返った。
ティースも足を止める。
黒いベルベットの大人びたワンピースは彼女のお気に入り。ティースもまた、その彼女が一番美しいと思っていた。

飴色の髪がふわりと風に踊る。
天空には初春の太陽。
そして彼女の瞳の中にも、太陽がある。
眩しくて思わず目を細めてしまいそうになる。
大切な人から預けられた、大切な宝物。
だからきっと――こんなにも愛おしい。
彼女は言った。
『私がどこか他の領地に行きたいと言ったら――お前は私に付いてきてくれる？』
どこか冗談のようにも聞こえる口調。
ティースは深く考えずに答える。
『もちろん。旦那様のお許しがいただけるのであれば』
『お父様の許しがなかったら？』
『え？』
予想外の問いかけにティースは言葉に詰まった。
『それは――』
『……なんてね。冗談よ、ティース』
シルメリアはそう言って表情を崩した。
簡単には答えられない。そんなことは彼女も承知の上だったのだろう。
――ただ。もしも。それでも、どうしても答えて欲しいと言われたのであれば。
きっと答えは――決まっていた。

「――助かったんだ。だから俺はデビルバスターを目指すようになって、そのためにこうして旅を」
「本当に？」
「本当――」

「本当に、そのために旅をしているのですか？」
車輪の回転する音が頭の奥に留まって響き続ける。
頭蓋骨に反響していつまでも消えない、声。
「違う、でしょう？」
「違――」
遠くにぼんやりと浮かび上がる。
あれは。
薄暗い地下通路。
あれは――
強烈な腐敗臭。
泣き崩れる青年。
あれは。
あれは自分だ。
あれは過去の自分だ。
自分の中にある、確かな過去の記憶だ。
だったら――
「違う、でしょう？」
「……違――い、ます」
そう答えた瞬間、ずっと遠くにあったはずの地下通路の情景が視界いっぱいに迫ってきた。

～十四年前～

奥様が急にいなくなった。
“天国に行ったのだ”と言う。
ティースはそのとき五歳だったから、どうして突然そんなことになったのかわからなかった。もっと大きければ彼女が普段から病弱であったことと関連付けることもできたのだろうが、まだ幼い彼に

はその理由なんてわからなかった。
ただ、わかっていたこともある。
“天国に行く”ということがつまり“人が死ぬ”ということだと。
自分に深く関わった人が死ぬのは、少なくとも彼が“死”を理解してからは初めてのことで、何が何だかわからないままに、ただ時間だけが過ぎた。
偉い人なのにも関わらず、自分の面倒を見てくれた人。
『みんなには内緒よ』
悪戯っぽくそう言って、お菓子を作ってくれたこと。
そしてあの雨の日――自分を抱き上げてくれた、柔らかい腕の温もり。
あの瞳。
大好きだった。
……初めて涙が溢れたのは、みんなが一通り泣き終わった後のこと。
屋敷がいつもの雰囲気に戻り始めたとき、そこに彼女の姿がないことに気が付いてからのことだった。
『この子のこと、助けてあげてね』
泣きながら、頭の中でその言葉だけをひたすらに反芻し続けた。
そのときの赤ん坊はまだ二歳だった。

～三年前～

『――ええ、構わないわ。全て買ってくれるのであれば、多少安くとも』
『え、あの、お嬢様』
ヴィリオンでの買い物は、ティースには理解しがたい展開になっていた。

二人がやってきたのは仕立屋でもアクセサリーショップでもなく、宝石店だった。それも普段彼らが利用するような格式ある店などではなく、裏通りの薄暗い、何割かは偽物が混じっているのではないかと思えるような――いや、実際に混じっているだろう――胡散臭い店だ。

こんな店で買い物をするというだけでも疑問だらけだというのに、シルメリアはいきなり懐の袋から大量の宝石類――おそらく彼女の私物の大半だろう――それを店主の前にぶちまけ、買い取りを依頼したのである。

ティースが理解できなかったのも当然だろう。

『い、いったい何をするつもりですか？　そんなにも高い服を買うんですか？』

『馬鹿ね。そんなはずないでしょ』

その量にさすがの店主も最初は驚いた様子だったが、今は必死に鑑定をしている。が、調べるまでもなく全て本物なのはわかりきったことだ。

『これは――いざというときのための、準備よ』

『？』

ティースには彼女の言っていることがまるで理解できなかった。

『……ああ、もう一つ忘れてたわ』

くすんだ室内に、飴色の糸が広がる。

ティースはさらに驚いた。

『お、お嬢様。その髪留めは――』

シルメリアが店主に差し出したものを見て、ティースは慌てる。

『それは旦那様からの贈り物で――』

『いいの、ティース。何も言わないで』

それでもシルメリアの口調は崩れない。――ただ、表情はさすがに少し強ばっているように見えた。

そのときになってようやく気付く。

『お嬢様。もしかしてなにか――』

言いかけて、問いかけるのを躊躇う。
――きっとなにかあったのだ。鈍い自分には気付けなかったけれども、きっと今日最初から彼女は何かを抱えていたのだ、と。
それはたぶん。
屋敷を留守にしていた一週間。
その間に起きた何かなのだろう、とも。
『……』
彼女の横顔を見つめる。
黒いベルベットの上に広がった金糸の髪。
髪をほどいた彼女は変わらず美しい。
憂いを帯びた瞳さえ美しい。
たぶん彼女は、怒っていても、悲しんでいても、変わらずに美しいのだろうと思う。
――だけど。
何があったのか、と、そう聞ければどれだけ楽だろう。しかし使用人である彼にはそれなりの領分というものがある。だからしつこく問い質すことはできない。
ならば――
視線が室内を彷徨った。
何を探しているのか自分でもわからない。ただ、そうすることで何かが見つかるのではないかという根拠のない期待に操られて。
そして、ふと。
薄暗い棚の上に、それを見つけた。
歩いていって、手に取る。
室内と同じようにくすんだ色の髪留めだった。素人目にも高価には思えない地味なデザイン、地味な鈍色。たぶん、彼女の美しさの前にはかすんでしまって存在感すら感じなくなってしまうのではないかと思えた。
けれど。
地味でも。彼女に釣り合わなくとも。

それがほんの少しでも彼女の役に立つのであれば。
手持ちと値段を見比べる。
そして――
『お嬢様』
宝石店を出たところでシルメリアを呼び止めた。
太陽は少し西に傾きかけていて。
『どうしたの？』
振り返ったシルメリアはいつものポニーテイルではなくなっている。
もちろんそのままでも彼女の美貌が崩れることはない。
ただ。
『お嬢様の好みではないかもしれませんけど……よかったら、これを使ってください』
『……え？』
シルメリアは目を丸くしてティースの差し出した髪留めに見とれた。
『どうしたの、これ？』
ゆっくりと視線が動いて、宝石のような瞳がティースの顔を捕らえる。
その表情にティースの動悸は少し早まった。
『あ、えっと……センスとか、そういうのはないかもしれません。安物ですし……いらなかったら捨ててくれてもいいですから――ただ、その』
シルメリアは相変わらず彼を見つめている。
言葉を止めると間がもたなくなる。
慌てて言葉を続けた。
『お、お嬢様が何を悩んでいるのかわかりませんけど、俺は、何でもいいからお嬢様の力になりたいんです』
言葉を探す。
場を取り持つ言葉を。

だが、彼の頭は気の利いた言葉など何一つ思い付くことはなく、結局思い浮かんだ何の装飾もなされていない言葉を選択した。
『俺はいつでもお嬢様の味方、ですから――』
『……』
ありがとう、と。
きっと彼女はそう呟いたのだと思うが――髪留めを受け取ったときの笑顔があまりに印象的すぎて、それ以外のことはあまり覚えていなかった。
あまりに印象的すぎて――

「――そう、それはあなたにとってとても大事なものだった。だけど」
「ぅ……」
何度も何度も声が反響する。
触れた手のひらから、濁流のようなものが流れ込んでくる。
「だけど女の子は助からなかったのです。あなたはそのときにどう思ったのですか？」
「俺は――」
涙が溢れてくる。
あんなにも。あんなにも大切だったのに。
それは二度と戻らない。
そう思うと、世界がそこで途切れてしまったかのように感じた。
「どうして、あんなことに――」
「……辛かったでしょう。我慢する必要はありません」
その人の両腕が肩を包み込んだ。――心地よい。
「さあ、思い出してください。女の子を殺めたのは、いったい誰ですか？」
「それは、その奥の部屋にいた人魔が――」

「いいえ。他にも誰かいたでしょう？」
「それは、一緒に助けに行ってくれた――」
「違う、でしょう？」
染み込んでいく。
染み込んで、脳裏にシミが残る。
黒いシミ。
「……違、い、ます」
その人が、満足げに微笑んだのがわかった。

～三年前～

その日もカザロスの町は雨だった。
『俺は――いつでもお嬢様の味方です』
迷った末に、いつか買い物に出掛けたあの町での言葉を繰り返す。
それは紛れもない彼の本心。
小さく潜めた、だけどしっかりとした口調でそう答えた。
『あなたのために、何かしてあげられたらと、俺はいつでも、そう思っています』
窓を叩く雨の音。
ゆらゆらと揺れる瞳。
お嬢様は泣いていた。いつ以来の涙だろう。最近では記憶にない。
泣きながら、悲痛な表情で、それでも逸らさずにティースを見つめて問いかけた。
『それは……父様に逆らうことになっても？』
『俺は、お嬢様の味方、ですから……』
『――』
小さく短く息を呑む。

そして一呼吸。
『そう。――その言葉、取り消すことは許さないわ。ティース』
涙を拭う。
決意の表情で、ゆっくりと手を伸ばす。
指の隙間から揺れる瞳が覗いた。
強い口調――だけど、その手は微かに震えていて。
掠れた声が、彼を真っ直ぐに捕らえた。
『私を連れて、逃げなさい。遠くへ……父様の手が届かないところまで――』
――お願い。
最後に、小さな声でそう呟いたように聞こえて。
その細い手をそっと握った。
全てを賭けて必ず守り抜くのだと、そう誓って。

「だから俺は、だから――」
薄暗い宿の部屋。
射し込む西日。
手には細波の感触。
「くっ……」
仇の男が苦悶の表情でうずくまっている。
その奥に隻眼の男。
背後には一人の少女。
――誰だっただろう。
わからない。
しかしそれでも構わなかった。
誰であろうと構わない。
どうなろうと構わない。
全てを賭けた誓いが破れ、彼の世界はそこで終わったのだ。

何もない。
あるのは、ただ、不毛だとわかっている憎しみだけ。
最初の一撃には確かに手応えがあった。
もう一撃。
手にした“細波”を振り下ろすだけ。
それで全てが終わる。
「――仇を」
涙が、溢れた。
「お嬢様の、仇を――」

「――記憶というのは意外に適当なものです」
クロイライナ＝ソーン＝ファヴィニエは細い指を眼前に広げ、その先に赤い爪化粧を施しながらそう言った。
「私はただ、過去のある一点にもう一つの可能性を与えてあげるだけ。そうすれば彼ら自身が矛盾が生じないよう周りの記憶を勝手に作り上げてくれる。あのときこうだったのだから、その後はこうだったはずだ、今はこうなってるはずだ、と」
「なるほど。しかし、クロイライナさん」
夕日を背負った町が、どんどん小さくなっていく。
大きな翼が羽ばたいて、怪鳥の背に乗った二人の服が風になびいた。
ターバンの青年、ザヴィア＝フェレイラ＝レスターはチラリと後ろを振り返って、
「記憶の幻術は幻魔の力の中でもかなりのレアスキルだと聞きますが、せっかくの力をあっさり彼らに明かしてしまってよいのですか？」
「ただ夢を見せるだけの、本来使い物にならない力ですもの」
赤いルビィのピアスを耳に付けて、指に絡まった髪を風に流す。

ザヴィアはその様を僅かに苦笑して見ていた。
「こうして暗示をかけるだけでもかなりの時間を必要としますし、記憶をすり替えたところでその後の行動を操れるわけではない。今回はたまたま条件が整ったので使ってみただけのことです」
「そうですか？　ですが、行動を操れなくともその後の展開を予測することはできるのではないですか？　たとえば今回の――」
いったん言葉を止め、本当に我々に縁のある人だ――と心で呟きながらザヴィアは続けた。
「ティースさんがどうなるのか。あなたの希望どおりにレインハルト＝シュナイダーの命を奪ってくることができるのかどうか」
クロイライナは小さなため息とともに目を閉じて、
「もしそうなればニューバルド様の障害が一つ減ることになって喜ばしいのですが」
「なるほど」
確かにレインハルト＝シュナイダーはそれほど生易しい男ではない。いくらうまくやったところで、油断しているところに手傷を負わせる程度が関の山。――と、クロイライナがそう考えたのは当たり前のことで、実際そうなる確率が高いだろう。
しかし。
ザヴィアは右の手の平を見つめた。
ネービスの北の街で、ティースと対峙したときの記憶が脳裏に蘇る。
――たぶん彼は普通ではない。
ザヴィアはそう思っていた。勘ではない。実際に手を合わせたことによる正直な感想だ。
火事場の馬鹿力などというものは、実際それほど大したものではない。どれだけ怒ろうとも、どれだけ憎しみを燃やそうとも、どれだけ死ねない理由があろうとも――強大な力差の前には全てが無意味だ。事実、ザヴィアはそういう相手を何人もその手にかけてきた。
誇りをかけた男を。

家族の復讐に燃える男を。
最愛の恋人を守ろうとした男を。
しかし。
「クロイライナさん。あなたが植え付けた偽物の記憶は、彼にとってどれほどの衝撃なのですか？」
「世界を見る目が変わるぐらい、でしょうか」
「ほう」
「それがどうかしました？」
ザヴィアは面白そうに笑みをこぼして、
「だったら意外にやるかもしれませんよ。もしかしたら、あのレインハルト＝シュナイダーの命を獲るかもしれない」
クロイライナは目を細めた。やや怪訝そうではあったが反論しようとはしない。このザヴィアという男が根拠もなくそんなことを言うはずがないとわかっているのだろう。
「あの人のアレは火事場の馬鹿力などではありませんからね、きっと」
「あなたはずいぶんと彼に肩入れしているのですね」
「肩入れ？」
意外そうに呟いて、ザヴィアはにこやかに答えた。
「ええ、そうですよ。ああいう人が苦しむ姿を見るのが私にとって至上の喜びですから」
「……趣味の悪い」
言葉だけでなくクロイライナの表情にもうっすらと嫌悪が浮かぶ。
「ははは、あなたのその力ほど悪趣味ではありませんよ。楽しんでいようがいまいが、相手にとっては同じこと。でしょう？」
「議論するつもりはありません。私があなたのことを快く思っていないということを言いたかっただけです」
「そうでしょうねぇ。あなたはタナトスの中でも最もまともで最も忠誠心の厚い方ですから。私のことを好きであるはずがない」
「……」

「ともかく期待するとしましょう。彼が――予想を遙かに上回る力を発揮してくれることを」

あのときのようにね、と、ザヴィアは相変わらず楽しそうにそう呟くのだった。

その6『"お嬢様"』

「お嬢様の、仇――」

誰が見ても明白である。

今は緊急事態だ。

剣を振り上げるティースの表情は尋常ではなく。肩から血を流して膝をつくレイの表情にはいつもの余裕がない。

――止めなくては。

――怪我の治療を。

瞬時に脳裏を駆け巡る選択肢。

しかしそれらはただ駆け巡るだけ。

シーラは動けなかった。

「シルメリアお嬢様の仇を――！」

「！」

足がその場に縫い止められた。

ガキン、と、宙に火花が散る。

動けないレイに向かって振り下ろされたティースの剣は、咄嗟に事態を把握したギレットによって防がれていた。

「くっ……！」

ティースが後ずさる。

「記憶の幻術かよ。厄介なもんに捕まりやがって」

「オッサン……」

ギレットはチラッとレイを振り返って言い放つ。

「おめぇにしちゃ随分と油断したもんだな。浅くねぇだろ。下がってな」

ピッケルのような武器を片手で構え、隻眼を鋭くティースに向けた。
「おい、ティース。タナトスの連中に何を吹き込まれたか知らねぇが、早いとこ目ぇ覚ましな。でないと――」
「っ……邪魔を……しないでくれッ！　俺は、そいつを、その男を――！！」
ガキン！
再び火花が散って近距離で睨み合う。
「おめぇ……ここで死ぬことになるぞ」
ギレットの殺気がティースを射抜いた。
「っ……」
反射的に剣を振り払おうとするティースだが、ギレットの腕はピクリとも動かない。
かなりの実力差がある。ただ一度武器を合わせただけだが、傍目にもそう思えた。
が。
「死んだって……構うものか」
歯ぎしりの音。
「！　……」
ギレットが眉をひそめた。
ギリギリ、と、刃先が擦れ合う。
少しずつ。少しずつ。
ティースの剣がギレットのピッケルを押し始めた。
やがて。
「――構うものかぁぁぁぁぁッ！！」
ガンッ！！
ギレットの上体がのけぞる。明らかな驚きがそこに映っていた。
「……」
目を細め、ギレットが自ら動く。
ティースが応じる。

「おおおおお――ッ！！」

一合、二合、三合――

思うように動きの取れない狭い室内で、足を止めたまま打ち合う。

が、その打ち合いは決して一方的にならない。数秒前までそこにあった力量差が、ほんの一瞬のうちに縮まってしまったように思えた。

「……」

ギレットは少し不可解そうにしながらも油断なく武器を繰り出す。

「……！　……！！」

ティースが断片的な単語を叫びながら応じる。

夕日、髪飾り、地下室、死臭――

憎しみを込めて。

「なるほど、な」

壁際まで下がったレイが額に脂汗を浮かべながら呟く。

ティースの叫ぶいくつかの単語は、すぐに一つの情景を思い起こさせた。それはおよそ一年ほど前、彼がデビルバスターを目指す最初のきっかけとなったある出来事だ。

「あのときの記憶を都合のいいようにイジられたか……とすると、シルメリアとかってのは――」

ちらり、とシーラを見る。

だが、シーラはそれに気付かずその端正な顔を微かに強張らせて、打ち合う二人を見つめていた。

「……！！　……！！」

声が少しずつ大きくなって、タガが外れていく。そのたびにティースの剣筋は鋭さを増した。

ギレットの顔が歪む。

そして、

「邪魔するな！　邪魔をしないでくれ！　俺は仇を！　この命に代えても仇をッ！！」

ぎぃ……ん！！

一際大きな音が鳴る。

「あの人は俺の全てだった――あの人は俺の全てだったのに、それを、それを――！！」
「……おい、シーラ」
「！」
シーラはハッと我に返ってレイを見た。
流れ落ちた彼の血が床の上にまで滴っている。ギレットの言ったとおり決して軽傷ではない。
それでもレイはいつもの口調で言った。
「事情はわかるか？　いや、わからなくても詳しく説明してる暇はない。お前が止めろ」
「……私が？」
意外な言葉ではなかった。が、シーラは思わず聞き返していた。
「記憶の幻術を解くにはイジられた記憶に矛盾を作ってやるのが一番だ。あいつを死なせたくないならお前が止めるしかない」
「……」
シーラは打ち合う二人を見つめる。
事情はだいたい理解していた。
ティースがオーウェンと同じように記憶に何らかの細工をされたのであろうことは状況から簡単に理解できるだろう。彼の叫ぶ断片的な記憶は滅茶苦茶に混線し、彼は、彼の大事な何かがレイの手で奪われてしまったと思いこんでいるのだ。
それはわかる。
だが――
「今のあいつはどうやら、お前が誰なのかを認識できていない。が、お前がお前だってことをあいつに認識させることができれば、それが決定的な矛盾になる。……わかるか？　あいつを助けたいなら、それしかない」
「……」
そうかもしれない。それは考えた。
しかし――

躊躇った。
そうじゃないかも――しれない。
レイはさらに言った。
「記憶をイジられたって人が変わるわけじゃないんだ。なら、あいつを止めることは難しいことじゃない。早くしないと手遅れになるぞ。――あの様子じゃ、オッサンもそろそろ手加減しきれなくなる」
「……」
打ち合う二人を睨んだ。
ギレットの目には真剣の炎が揺らいでいた。その間にあった差はもうほとんど見えなくなっている。
「何も、何もなくなっちまって、俺は、俺は――！！！」
耳が痛くなるほどの、金属音。
複雑な感情が胸の中を渦巻く。
――いや、今は考え込んでいる場合ではない。
レイの言うとおりだ。
止めなくては、どちらかが大怪我を、あるいは命を落とすことになる。
止めなくては。考えるのはあとだ。
シーラはそう決意すると拳を握りしめ、剣戟の衝撃に逆らうように爪先に力を込めて叫んだ。
「やめなさい、ティース！！」
「！」
一瞬、二人の動きが止まった。
ティースの視線がシーラを捕らえる。
その目は真っ赤に腫れ上がっていて、その顔を見た途端、シーラは無性に悲しい気分になった。
それを思い切り振り払い、拳をさらに強く握りしめて近付いていく。
「この――」
無造作に近付く彼女に、ギレットの制止の声が飛んだ。

「おい、待て！　そいつは、今――！」
「……」
正気は戻っていない。シーラを見つめる目は見知らぬ誰かを見る目だ。剣を握る手にもまだ力がこもっている。
だが――それは無用な心配だ。
レイの言ったとおり。彼は、たとえ赤の他人だったとしても――偽りの記憶で心が憎しみに染まっているのだとしても――丸腰の少女を問答無用で切り伏せるような男ではない。
無造作の方が、かえって安全。
彼の性格はこの世の誰よりもよく知っている。
「な――」
案の定。
彼は無造作に近付く“見知らぬ少女”に、ただ驚くだけだった。
そして、
「この……馬鹿ティースッ！！」
ゴッ！
「っ……！！？」
握りしめた拳が見事に彼の顔面を捕らえ、よろめいたティースは壁に尻餅をついた。
「な――」
呆然としている。
大丈夫。
記憶がどう改竄されていようとも、彼は彼だ。
それならどうにかできる。
まずは後ろのギレットに言った。
「ギレットさん。ちょっと下がってて」
「おめぇ――」
「手を出さないで。私が彼に殺されるまで」
「……」
ギレットはティースの反応を窺った後、チラッと背後のレイと視

線を合わせ、何事か納得した顔で後ろに下がった。
シーラはゆっくりとした動作でティースに向き直った。
「君……君も、俺の邪魔をするのか――」
「少し黙って」
「――」
凛、と。
条件反射というべきか。まるで魔法をかけられたようにティースの動きが止まる。
シーラは腰に片手を当て、尻餅をついたままの彼を見下ろした。
「邪魔だと思うのなら口を開く必要などないでしょう？　その剣で私を斬り殺せばいいだけだわ。そうでしょう、ティース？」
「な――」
正気は戻っていない。
にも関わらず、動揺している。
「斬らないの？　お嬢様とやらの仇を討つのではなかったの？」
「――」
瞳の奥に黒い炎が灯った。
ほとばしる殺意。
――大丈夫。怖くない。
殺意はシーラを体をすり抜けて後ろにいる二人にまで届いた。
「……」
ピクリとギレットが肩を揺らす。
「待て、おっさん……」
レイが制止した。
少し外が騒がしくなってきた。宿の主が事態に気付いて何らかのアクションを起こしたのかもしれない。
騒ぎの中には覚えのある声も混ざっていた。
この状況。
あまり騒ぎを大きくしてしまうとマズいことになる。
再び意を決し。

聞きなさい――と、シーラは語尾を強めた。
「そんなことをする必要はないのよ、ティース。命に代えてもだなんて――誰もそんなことは望んでないわ」
「な……」
明らかに動揺が大きくなる。
「そ、そんなこと、君にわかるはずないじゃないか！　君なんかに――」
「わかるはずがない、ですって？　……」
シーラはほんの一瞬だけ躊躇って、意を決し、右手で自らの美しいブロンドのポニーテイルに触れる。
「――？」
怪訝そうに見つめるティースの眼前で、シーラはそれを束ねていた地味なデザインの髪飾りを外した。
「それは本気で言っているの――？　本当に――」
ふわり、と、飴色の髪が広がる。
薄暗い部屋に光が射したようだった。
「本当に、私が誰なのかわからない？　ティーサイト＝アマルナ」
「！」
ただそれだけのこと。
ただそれだけのことであるにもかかわらず、ティースは大きく揺らいだ。
「あ……あなたは……お嬢様――シーラ……お嬢様……」
目の色が変わる。
見知らぬ誰かから、彼にとってよく見知った人間へ。
もう一押し。
「お前は勘違いしてる。誰も地下通路でなど死んでないわ。お前が勘違いしただけ。誰も死んだりはしていないのよ、ティース」
「で、でも、お嬢様は、確かに死んで――」
「……違う」
近付く。

「あの地下にいたのは私。でも私はこうして生きているわ。そうでしょう？」
「え……でもそんなはず……違う……違……確かに……確かに、お嬢様は死んでしまって――それで、それで俺は――」
「……」
混乱している。
もう少し。もう一押し、彼の記憶を刺激する何かが欲しい。
思いを巡らせる。
方法はすぐに思い当たった。
――だけど。
いや――
躊躇っている場合でないことはわかっていた。
ティースの眼前に屈み込み、少し体を伸ばして彼の肩に手をかける。
抵抗はなかった。
「思い出して――」
――何を？
沸いた自問に何とも言えない気持ちになりながら、シーラは彼と唇を合わせた。
「――！！？」
僅か数センチの距離で、ティースが目を白黒させたのが――目を閉じていたので見えはしなかったが、頬に添えた手の平からそれが伝わってきた。
さすがに頭が熱い。
そして。
それから――
少し途方に暮れた。
離れるタイミングが掴めない。
前回のときように彼がわかりやすく我に返って飛び上がってくれればわかりやすいのだが、残念なことに彼は未だ石像のように固ま

ったままだった。
――もう、いいだろうか。
いや、焦って失敗してもつまらない。どうせだったら何か反応があるまで――
あと、三十秒？　一分？　それとも――そもそも、今、どのぐらいの時間が経っているのか――
きっかけは、階段を駆け上がってくる覚えのある声だった。
バン！　と、扉が開く。
おそらく異変に気付いて戻ってきたのだろう。
「シーラ様！　ティース様！　大丈夫ですかッ！？」
そうして飛び込んできた長身の少女を横目で見ながら――シーラはほんの少しだけ絶望的な気持ちになった。
ああ、なにも。なにもこのタイミングで――向こうの宿で待っている全員を連れてこなくてもいいのに――と。

「――やはり、失敗ですね」
「失敗？　どのように？」
「幻術が解除されてしまったようです」
クロイライナは淡々と言った。
可能性はゼロではなかったから残念でなかったといえば嘘になる。が、ひとまずネービスに潜入した当初の目的は達していたし、それ以外の出来事は結果がどうであろうと長期的には支障はない。
しかしザヴィアは少し興味深げだった。
「おや。記憶の幻というのはそれほど簡単に解けるものなのですか？」
「先ほども言ったとおり、それほど強制力のある力ではありませんもの。それに……彼の場合、解けやすい要素がありましたから」
「それは？」

「一番大きいのは、記憶に深くかかわる人物がすぐ近くにいたことでしょう」
「なるほど。ニセの記憶に矛盾が生じやすくなる状況だったということですか」
「ええ」
思い通りの行動を取らせようと思えば影響力の強い人物にかかわる記憶を改竄する必要があるが、影響力の強い人物は大抵の場合においてターゲットとの接触が多く、それによって偽りの記憶に矛盾が生じやすい。
今回のケースはその典型だ。
「よくわかりました。とりあえずティースさんは無事だということですね」
クロイライナはチラッと彼を見て、
「嬉しそうですわね、ザヴィア」
「ええ。もしあなたの目論見が成功していたとしたら、私は最高の見世物を見逃してしまったことになる。そういう意味ではホッとしていますよ」
クロイライナは彼に向けた軽蔑の視線を沈んでいく太陽の方へ移動させた。
話題を変える。
「ところで……サモンがネービスで命を落としたというのは本当なのですか？」
するとザヴィアは一転、今度はそれほど興味のなさそうな顔になって、
「ええ、私は意味のない嘘は言いませんよ。こちらへ来る前にネービス領をウロウロしてましてね。たまたまその近くに居合わせたものですから」
「それで、仲間を見殺しにしたのですか？」
クロイライナの言葉は問いつめるものではない。が、ザヴィアはわざとらしく怯えたような顔をしてみせて、

「ウチの女神様やリューゼットさんならともかく、私ごときにどうにかできる相手ではありませんでしたよ。あのネスティアスのカレルとかいう人は、ね」
「……」
サモン＝グリット＝メッツァーという男――いや、少年は、タナトスの一員である雷の将魔だ。総帥であるニューバルドに忠誠を誓っていたわけでもないし、その目的に賛同していたわけでもない、力を持て余し、遊び感覚で参加していただけの子供である。ただ、子供とはいっても将族であることに変わりはなく、未熟な面があったとはいえ魔力はタナトスの他の幹部たちと比べて劣っていたわけではない。
「ディグリーズの肆、カレル＝ストレンジ……やはりネスティアスの壁は相当厚いようですね」
「おやおや。あなたの方こそ、大事な仲間の死をそれほど悲しんでおられないように見えますよ、クロイライナさん」
わかっているのにわざわざ尋ねてくる。
だからわざと能面のような口調で答えてやった。
「仲間であれば全て同じというわけではありません。分けて考えてますもの」
「なるほど。では、私が彼と同じ枠の中に入っていないことを祈るとしましょうか」
「私が考えるのは、ニューバルド様の役に立つかどうか、ただその一点のみです。それなら、あなたが私にとってどういう存在であるかなんてわざわざ尋ねる必要もないでしょう――？」
「ごもっとも」
ザヴィアは深く頭を下げた。
慇懃無礼という言葉はまさにこの男のためにある言葉だ、と、そんなことを思いながら、クロイライナは夕焼け空を見上げた。

「ん……ぅぅ……朝か……？」

覚醒する。どうにも瞼が重い。体もいつもより疲れているようだった。

ネービスを出てから一週間以上経っている。少し疲労が溜まっているのかもしれない――いや。

そういえば昨日は何かあった。

……そう。確か昼間、獣魔の襲撃があって――そう。キャラバンのメンバーが犠牲になったのだ。

それで――

頭が重い。

まだ寝ぼけているのか、思い出すのは断片的な記憶だけだった。

そう――確か犠牲になったのは黒い馬車の持ち主で――それでしばらくこの小さな町に逗留しなければならなくなったのだ。

それで疲れているのかもしれない。

ゆっくりと目を開く。

見覚えのない天井だ。

「あれ……こんな宿だったかな――」

凛、と。

「覚えがなくて当然よ。お前は気を失ったまま運ばれたのだから」

少女の声がそれに答えた。

「え？　むぐ……っ……」

ビックリして上半身を起こしたところへ、あんぐりと空いた口に果物らしきものが突っ込まれる。

歯に当たったところから甘酸っぱい果汁が染み出した。

「林檎……？」

「パースとクリシュナに感謝なさい。お前をここまで運んでくれたのよ」

「え。あれ、シーラ？」

「それに今は朝じゃないわ。昼もだいぶ回ってる。お前、昨日の夕

方から一日近く寝ていたのよ」
まるで病人を看病するかのように、果物ナイフを片手にベッドサイドの椅子に座っている見慣れた少女。
「あ、えっと――」
いまいち状況が理解できない。
だが、言われてみれば確かに、昨日は宿に入った記憶がなかった。
町に着いて、馬車を降りて、それから、それから――
ゴクリ、と、口の中の林檎を飲み込んだ。
「あれ。俺、まだ寝ぼけてるのかな……」
「ボケてるのは普段からでしょ」
「あ、あのなぁ……」
咄嗟に反論しようとしたが、その先は出てこなかった。
「でも……何か、ものすごく懐かしい夢を見ていたような気がする」
故郷の屋敷。
懐かしい光景。
懐かしい人々。
カザロスの町。
レビナス家の屋敷。
遠い昔に病気で亡くなった恩人の顔。
そして――
「あれ。でも、やっぱり夕方からの記憶が――」
そこで、鈍い彼もようやく異常事態に気付いた。
懐かしい夢の感触。――その裏に確かに残っている、どす黒い感情の燃えカス。
「悪い夢を見ていたのよ」
「悪い夢？」
シーラの顔を見ようとすると、窓から射し込む太陽が逆光になる。
眩しさに視線を上方にずらした。
（あれ……）
彼女のポニーテイルを留める髪飾りを見た瞬間、何かが脳裏を過

ぎった。
　ノックの音がしてドアが開く。
「あ、ティース様。お目覚めになられたんですね」
　洗面器を両手に入ってきたのは子羊のようなふわふわの髪の少女、フィリス＝ディクターだった。
「よかった。なかなか目覚めないから心配していたんです。体の調子はどうですか？」
「体？」
　言われて、首や肩を回したり膝を曲げたり伸ばしたりしてみる。が、特におかしなところはない。少し右肩の辺りに疲労が溜まっているぐらいか。
「いや、特に悪いところはないよ。……よくわからないけど心配かけたみたいですまないね。ありがとう」
　状況はまだ理解できていなかったが、とりあえず迷惑をかけたのは間違いがないようだ――と、そう考えて礼を言うと、フィリスはとんでもないという風に手を振って、
「お礼なら私なんかよりシーラ様に言ってください。ずっとティース様のことを見ていてくださってましたし、それに昨日なんかは身を挺してティース様を――」
　と、そこまで言って、何故か急に顔を真っ赤にして口ごもった。
「その、か、体を張って、ティース様を助け出したというか……」
「へ？」
「フィリス。余計なこと言わなくていいわ」
　シーラはあまり触れて欲しくなさそうな顔だった。――が、ティースにはなんのことだかさっぱりである。
「す、すみません。ですが、あれは、その、お、乙女にとっては重大な出来事で、ば、場合によってはティース様に責任を取っていただかないと――」
「平気よ。私はあなたほど純粋ではないの」
「え、責任？　それってどういう――」

一体何をしでかしてしまったんだろうか――と、ティースがそのことに思い悩み始めたところで、ようやくシーラが彼に向かって言った。

「深く考えることないわ。それより体が平気なら少し付き合って」

「付き合う？」

立ち上がった彼女のポニーテイルが妙に気になった。

「買い物よ。昨日のことも簡単に説明してあげるわ」

「買い物――」

買い物のお供――

また懐かしい匂いがした。

ティースは道すがら、おおまかに昨日の出来事を聞いた。

自分が幻術に囚われていたこと。

ネイリーンがその犯人で、彼女はすでに町から姿を消していたこと。

リィナやレイ、ギレットがこの町にやってきていること。

自分がレイを襲ったらしいと聞いたときには何とも情けなく申し訳ない気持ちになったが、大事には至らなかったということでひとまずホッと胸をなで下ろした。

「あとでレイさんのとこに謝りにいかなきゃ……」

一歩斜め前を歩くシーラが答える。

「明日までは町にいるそうよ。リィナは彼らと一緒に戻ることにしたみたい。結局“魔石”とかいう目的のものは取り戻せたようね」

「なんか……お前にも迷惑かけちゃったみたいだな」

素直に謝ると、シーラは正面を向いたままで素っ気なく、

「そうね。二度とこんなことがないようにしてもらいたいわ」

「わ、わかってる」

もちろんティースも猛省している。

町の表通りは賑やかだった。埃っぽい風が路地から路地へ吹き抜けて、通りに並ぶ屋台の暖簾を揺らしている。眩しい太陽。青空の

上を綿のような雲が東の方へ向けて滑っていく。
視線を感じた。
すれ違う人々。
店先の売り子。
溢れるいくつもの視線の、そのうちのかなりの数が自分の動きに合わせて動く。
それを集めているのはもちろん彼ではない。
あの頃と変わらないな――と、ティースは思った。
あの頃。
――ああ、そうか、と、ようやく納得する。
懐かしい空気。
自分はきっとあの頃の夢を見ていたんだ、と。
「シーラ、お前――」
反射的に口が動いた。
「あのときの髪留め、まだ使ってたんだな」
「……」
ピタッとシーラの足が止まる。
美しい髪に隠れて目立たない髪飾り。

『俺はいつでもお嬢様の味方、ですから――』

どうして今まで気付かなかったのだろうか。
その美しい髪と不釣り合いな地味なデザインの髪飾りは、紛れもなく昔、彼が彼女に贈ったものだ。
古い記憶が急に鮮やかに蘇ってくる。
赤と白の屋敷。
色とりどりの花畑。

『――捜したわ。それはもう、屋敷中捜したのよ』

黄金色の景色。
隣町の風景。

『私がどこか他の領地に行きたいと言ったら……付いてきてくれる？』

夏の太陽のような少女の眩いばかりの笑顔。
雨夜の涙。

『……私を連れて、逃げなさい――』

彼女は覚えているのだろうか。
気分が高揚する。
が、すぐに思い直した。
もう……忘れてしまったのかもしれない、と。
「シーラ、その髪飾り――」
「……」
立ち止まったシーラは右手を動かして、自分の髪に、髪飾りに一度、二度、触れた。
そして、
「あまり覚えてないわ」
「……」
やはり、と、落胆しかけたティースだったが。シーラは肩越しに振り返って言った。
「いえ。そうね……お前にもらったものだということはわかっているけれど、それ以外のことはあまり覚えていない。そういうことよ」
「え？」
それ以外というのは、贈ったときの状況ということだろうか。しかしティースはもともとそこまで求めていたわけでもない。
「あ、いや、別にそんな深い意味で言ったわけじゃ。ただ付けてい

てくれたんだなって少し嬉しかっただけだよ」
ほんの少し。
シーラは不思議な感情の目でティースを見た。
「そう。だったらいいの」
喧噪が戻ってきて二人の両脇を駆け抜けた。
「それより……ティース」
「へ？」
急に手が触れた。
「へ、じゃないでしょ」
シーラは足を止めて振り返り、睨むようにティースを見上げて言った。
「気付くまで黙っていようと思ったけど……お前、最近後ろを歩くようになったのね」
「え、あ……」
自分の位置。
彼女の位置。
そういえば――あの頃と逆だ。
「小さい頃に教わらなかったかしら？　女性と町を歩くときは――」
「す、すまん」
ティースは慌てて斜め一歩前に出た。
――故郷の教えだ。斜め一歩前に出て女性を護る。故郷は大陸でも指折りの男権社会だが、同時に大陸一の女性尊重社会でもあり、女性を大切にしない男はそれだけで周囲から蔑まれ、人間失格の烙印さえ押されかねないのだ。
とはいえ。
ティースだって別にその教えを忘れていたわけではない。
ただ、最近の彼女の性格からして、むしろ自分から前を歩く方がいいんじゃないかと、そう思って身を引いていただけのことだ。
そう。そもそも仕事以外のことでこうして二人で町を歩くことだって、いつ以来のことか――

入れ替わるとシーラは満足そうに言った。
「さ、行きましょう」
きっと機嫌がいいのだろう、と、ティースはそう思った。
歩き出すと、その位置が不思議にすぐ馴染む。
姿が見えない分、かえって斜め後ろにいる彼女の存在が強く感じられる。
気配。
息づかい。
あの頃の空気。
高揚感を感じた。
人の波にぶつからないように、周りの人々の邪魔にならないように、気を遣いながら、斜め、一歩前を歩いていく。
時間が止まって、記憶が巻き戻る。
鼓動が少し早くなって。
思い出す。
あのときのこと。
一生、この人を守っていくのだ――と、そう誓ったときのことを。

キィッと古びた木の扉が軋みながら開く。少し照明の暗い店内には客が一人しかいなかった。
その客が彼女の姿を確認するなり口を開く。
「……美男美女の組み合わせはもちろんだが、美女と野獣ですら状況次第ではそれなりに絵になるってのに――」
剥き出しの左肩に血のにじんだ包帯。出血量の割に軽傷だったとはいえ、もうしばらく安静にしている必要があるはずなのだが――
シーラがレイを訪ねたとき、彼はベッドから抜け出して宿の近くにある食堂で遅めの昼食を採っているところだった。

「あれではまるで絵にならないな。つくづく不似合いなヤツらだ」
彼が言っているのはもちろん、シーラがティースを正気に戻すときに使った“方法”のことである。
「ギレットさんは？」
無視してシーラが問いかけると、レイは右手だけで手を広げるジェスチャーをして、
「宿の部屋で武器の手入れさ。年寄りはヘンに神経質になっていかんな」
確かにギレットはシーラの父親と同じぐらいの年齢だが、まだ年寄りというほどではないだろう。
正面に腰を下ろす。注文する気はなかったが店員がやってきたので紅茶を頼むと、店員は変な顔をした。注文する人間がいないためだろう、と、その時点で嫌な予感はしていたが、ほどなくして出てきた紅茶の味は予想以上に渋かった。
唇を濡らす程度に口をつけて放っておく。
レイがおもむろに口を開いた。
「どうだった、ティースの様子は？」
「あなたの言ったとおり、昨日のことはほとんど忘れているみたい。あとで謝りに来るって言ってたわ」
「なるほど。ってことは王女様のキスの味も忘れちまったってことか。そいつはもったいない」
軽蔑の視線がレイを射抜く。
「下品ね、あなた」
「お嬢様のように育ちがよくないものでね」
「そうでしょうね。でも、だから何を言っても許される、とは思わないことね」
レイは素直に手を挙げた。
「悪かった。……ま、しかし予想通りだったな」
「なにが？」
「あんたとティースのことさ」

そう言いながら、片手で器用にナイフを使って固そうな肉を切り分ける。

「どこぞのお嬢様と使用人、か。別に踏み入るつもりはないがな。偽の籍を使ってるぐらいだから家の許可を得ているわけじゃないだろうし、かといって詩人の語るロマンティックな駆け落ちって風にも見えない」

「ご想像にお任せするわ」

シーラもなんとなくこの青年の扱い方がわかってきた。

おそらく口止めをする必要はないだろう。口止めしなくとも必要がなければその情報を悪用することはないだろうし、彼にとって必要であれば口止めしていてもきっと無意味だ。

ならば必死に口止めしようとしてからかわれるだけ損である。

「なるほど」

レイは明るく笑った。

そのときばかりはまったく悪気のない口調だった。

恭しく、一礼する。

「だったら勝手に想像させてもらうといたしましょう。シルメリアお嬢様」

「……」

その言葉は意外ではなかった。昨日、ティースがシルメリアの名を口にしたし、その後のことを考えても彼がそこに思い至るのは当然のことだ。

「シルメリアをもじってシーラ、か。愛称にしちゃ少し変わってるな」

果物を一切れ放り込んで、楽しそうに。

おそらく本当に悪気はないのだろう。それは話を弾ませるための彼なりの話術で、それを悪用しようなんてことはまるで考えていない。

たぶんそうだろうと思った。

だから。

それだけに――
「レイさん」
言っておかなければならない、と、シーラはそう思った。
「一つ、お願いしてもいいかしら」
「？　なんだ？」
彼は敏感だ。おそらく空気が変わったのを察したのだろう。
何故か喉が急に乾いて、二度と口にするまいと思った紅茶に一度、二度と口を付けることになった。
「そのシルメリアという名前、ティースの前では口にしないで欲しいの」
見つめると、レイはほんの僅かに戸惑った顔をした。彼にしては珍しく、彼女の言葉の真意がまるで掴めなかったらしい。
それはそうだろう。
普通であれば、そう思う。
彼女が彼の立場であってもそう思う。
そう“勘違い”するだろう。
――しかし。
普通じゃない。
今の彼と、彼女の関係は――
「シーラというのは私の本名よ。ファミリーネームは架空のものだけど、それだけは本当の名前。偽名でも愛称でもないわ」
「……なんだと？」
レイが目を見開いた。
自分の勘違いに気付いたのだろう。
同時に変な顔をする。
それも必然。
普通であれば。あのときのティースの反応、あのときのティースの言葉を聞けば、そう思って当然なのだから。
彼の推測はおかしくない。
おかしいのは――

「シルメリアは――」
シーラは目を伏せた。――それは目の前の男に対してではなく。過去の出来事から目をそらすように。
「シルメリアは彼が――ティースがとても大切にしていた女の子。昨日あなたも見たとおり、命に代えても護ろうとした子の名前よ。でも、それは私のことじゃない。私は……シルメリアじゃないわ」
「……」
レイは考える顔をした。昨日の記憶を辿ったらしい。
「……双子、か？」
早い。
「なるほど。あのとき、あんたがティースに向かって髪をほどいてみせたのはどういう理由かと少し疑問に思っていたんだが――双子を見分けるのに髪型を変えるというのはよくあることだ」
さすが、というべきか。
彼の頭は一瞬で真実に近いところまで辿り着いていた。
「しかし――そうすると、もっと大きな疑問が生じるな」
そこで話が終われればシーラとしてはどれほど気が楽だったことか。
しかしレイは当然のように納得できない顔で続けた。
「あのときのティースは“髪をほどいた”あんたを見て“シーラお嬢様”と言った。だったら本来、髪をほどいたのがシーラで、髪を束ねているのがシルメリアだったってことになる」
「……そうね。そうなるわね」
「なのに、今、俺の目の前で髪を束ねているあんたはシルメリアじゃなくシーラ、か？　それにあのとき、ティースのヤツは地下通路で死んだのがシルメリアだと思いこんでいたな。あの地下通路にいたのは間違いなくあんたで、どうやっても勘違いのしようがないのに……変じゃないか？　まるで――そうだな」
顎に手を当て、視線を斜め下に流して考える。
「そう。まるであいつの中で、シーラとシルメリアの区別がついていないかのような、そんな不自然さがある」

「……」
シーラはただ黙っていた。
彼の鋭さ、頭の回転の早さは充分に理解している。この状況ではたとえ誤魔化そうとしてもすぐに見抜かれるだろう。
ただひたすら表情を動かさないように、それでも気丈に目を逸らさず見つめる。
しばらく。
「――色々考えられるが、一つだけ、確認しておくか」
おそらく彼の中ではすでにいくつかの仮説が完成しているのだろう。しかし彼はそれらの仮説については一切口にせず、言った。
「シルメリアってのは――」
「死んでいるわ。三年以上も前に」
短くシーラが答えると、レイは頷いて両手を広げた。
「オーケー。それ以上は聞かない。あんたに悪意があるとは思えないし、俺としちゃあいつの働きに影響がないなら何の問題もない。――それに何より」
ほんの少しだけ困った顔で頭を掻いて、言った。
「女を泣かすのは、俺の主義じゃなくてな」
「……え？」
「だから見なかったことにしてやる。ほらよ」
テーブルの上にハンカチを放ってレイが席を立つ。
「なにを言っているの？　泣いてなんか――」
本当に、そう思っていた。
だが、
「……あ」
すぐに、それが自分の勘違いだと気付く。
ほんの少しだけ、目尻に涙が溜まっていた。
理由はわからない。
緊張のあまりか。
あるいは――

「そういやリィナが言ってたな。あんた、昔は引っ込み思案だったそうじゃないか」
レイはシーラの視界を出たところでピタリと足を止めた。
少しの空白。
無意識に、右手が髪飾りに触れた。
「その髪型――もしかして、その性格も“そう”なのか？」
「……」
「まさかな。それに――仮にそうだったとしても、そこまで演じればもう本物、か」
バタン、と。
扉の閉じる音がひどく遠くに聞こえた。

「……ああ、そうだ。聞くのを忘れていました、クロイライナさん」
と、ザヴィアは言った。
「なんでしょう？」
「ティースさんの幻術が解けやすくなっていた原因で“一番大きかったのは”記憶に深くかかわる人物がそばにいたからだ、と、確かそうおっしゃいましたね？」
「ええ」
「私は自分の興味のあることに関しては、たとえ細かいことであっても気になって気になって仕方がなくなる性分なんです。……その他の原因というのも、よろしければ教えていただけないでしょうか」
クロイライナは特に興味もなさそうに答える。
「彼の記憶の一部に強固な鍵がかかっているために、あまり深くまで潜り込むことができなかったのです」
「鍵」
逆にザヴィアは興味深そうに目を細めた。
「あなたより先に何者かが彼の記憶に幻術を？」

「幻術ではなく呪いの類でしょう。放っておけば半永久的に消えない――我々が人に化ける、あの“朧”のような強力な呪縛のアイテムを使用したのでしょうね」
「強力な呪縛、ですか……」
「ですからきっと、彼の体には何らかの副作用が出ているのではないでしょうか。朧が魔力の大半を封じてしまうように」
「副作用？　……なるほど……それは興味深い」
ザヴィアは笑った。
無邪気な笑みだった。
そして、言った。
「クロイライナさん。本当にあなたの目論見が失敗してよかった。彼はやはりとても面白い存在のようです。色々な意味で、ね――」

その7『賽は投げられた』

約二週間後。

ネービス領から数えて五つの領土を横断し、間に横たわるグリゴラ山脈を南に迂回して回ったところにそれはある。

ヴォルテスト領――大陸の中心からほんのわずか西に位置するその領地には多くの文化が集まり、多くの富が集まる。大陸一の宗教であるクライン教の総本部もこの帝都ヴォルテストの中にある。

そんな帝都にあって、デビルバスター試験は重要な催し物のうちの一つだ。

年に一度、五月の末から六月の中旬までおよそ半月渡って行われるこの試験のために、毎年二、三千の受験者が訪れ、その関係者を含めれば五千人以上もの人間が半月もの間、この帝都に滞在することになる。これに加え、人魔に対抗しうる優秀なデビルバスターを確保しようと各領主から命を受けて訪れるスカウトたちまで数えれば、帝都が一種のお祭り騒ぎになることも容易に想像できよう。

さて、そのデビルバスター試験は大きく分けて四つの科目から構成される。

体力、聖力など最低限必要な基礎能力を計る“測定”。

魔に関する知識を問う“筆記”。

仕掛けの施された広大なフィールドで状況判断力や戦術技能を試す“サバイバル”。

そして一対一における純粋な戦闘技術を競う“トーナメント”である。

このうち最後の科目であるトーナメントは一般公開されて毎年大いに盛り上がる。この最終科目まで辿り着けばだいたい三人に一人は合格すると言われているが、全体の合格率が一パーセント未満で

あることを考えれば、そこまで辿り着くことの難しさは自ずとわかるだろう。

トーナメントまで辿り着けるのは三パーセント弱。ここに集まった手練れ二千数百人のうちのほんの六十人ほどである。

「半分以上は最初の“測定”で落ちるらしいっすよ」

パーシヴァルの言葉にティースは寝起きの顔を向けた。

いい天気だ。

あと三日で五月も終わる。これからは少しずつ暑くなってくるだろう。

ティースは寝惚け眼でベッドの上で上半身を起こした体勢のまま、ほんの数分早く起きたらしいパーシヴァルの背中に視線を向けて、

「測定？　っていうと、あの最初にやる体力測定みたいなやつのことか？」

「ええ、そうです」

「……クリシュナは？」

もう一つのベッドに目を向けると、そこの主はすでに姿がなかった。

「さあ。どこ行ったんスかね？」

試験前日。もちろん彼らが泊まっているのはデビルバスター試験の開催される帝都ヴォルテスト内の宿だ。護衛役としてやってきたクリシュナの役目はこれで半分終わったようなものだし、あるいは朝早くから帝都見物にでも出掛けたのかもしれない。

ティースは再びパーシヴァルに視線を戻して、

「でも俺、試験は二つ目の筆記から本番だって聞いてたけどなぁ」

「ティースさんにとってはそうかもしれませんね。“測定”といっても、みんなが落ちるのはその中の“聖力測定”らしいっす」

「ああ……」

聖力はデビルバスターとしてもっとも大事な要素の一つだ。どれだけ戦闘技術があっても、魔力の壁を破れないのではなんの意味もない。

「これぱっかりは生まれつきですしね。ま、みんな一点集中でどうにか基準値以上を叩き出そうとするわけですけど――ここが最難関だって言う連中もいるぐらいっすから」

そういう意味でいうと、生まれつき聖力に恵まれているティースなんかは一次試験を免除されたようなものである。

「パース。君は大丈夫なのか？」

一瞬、間があった。

が、

「大丈夫っすよ。全身を巡る聖力をどこまで一点集中させられるか、要はそこっす」

「集中、かぁ……」

その理屈についてはティースも理解しているし、実際に扱うこともできている。が、はっきりと見えたり感じたりできるものではないため、いまいち実感のないものだ。できていると思っても実際には上手くいってなくて、そのまま測定し不合格――なんて流れも容易に想像がつく。

「ま、実際の戦闘では命にかかわることですしね。一瞬の好機をそれで逃すこともあり得るわけで」

もっともな話だ。

ティースもようやくノロノロと着替え始める。

「ところでティースさん、今日はどうします？」

「へ？　どうするって？」

見るとパーシヴァルはすっかり普段着に着替えていた。

「試験の受付も無事終わりましたし、今日一日空いてますよね？」

「ああ、それはそうだけど……筆記の勉強でもしてようかなって」

「筆記、ヤバいんスか？」

「いや、大丈夫だと思うけど、一応……」

パーシヴァルは少し笑って、

「あまり根を詰めすぎるのもよくないっすよ。それこそ筆記なんて普通にやってれば滅多に落ちるもんじゃないし、コンディションを

維持する方に集中した方がいいっすよ」
「うーん」
あまりに正論すぎて返す言葉がなかった。事実、筆記に自信がないというよりは、試験に臨む緊張感を紛らわせるために勉強でもしようか、と、そう考えていたわけだから。
「そういう君はどうするつもりなんだ？」
「え？　あ、俺は、その――」
パーシヴァルは急に口ごもってバツが悪そうに視線を逸らした。
「帝都を見て回りたいって言うから、人も多いし、一緒に行ってやんなきゃならないかなって――まあ俺はあんま気が進まないんスけど……」
「へ？　見て回りたいって、誰が？」
おそらくこんな気の回らない反応をするのは彼ぐらいのものであろう。
「いや……」
案の定、パーシヴァルは言葉に詰まってしまった。
と、そこへ控えめにノックの音がして、
「パースくん。準備、いいかな？」
「あ……」
顔を出したのはフィリスだった。
パーシヴァルがティースの視線を遮るように慌てて彼女のところまで駆け寄っていく。
小声になって、
「あ、ああ、こっちはいつでもオッケーだけど……」
「本当に大丈夫なの？　明日から試験なのに」
「え、あ、いや、気にすんなって。前日ってのはかえって何もしない方がいいんだ。だからほら――あ、ティースさん。俺、仕方ないからちょっと行ってきます」
「え？　パースくん、仕方ないって――」
「あ、いや、こっちの話。いいからいいから。ほら、行こうぜ」

フィリスの背中を押して忙しなく出ていこうとするパーシヴァル。
（……あ、なるほどね）
鈍感なティースもようやく気付いた。
パタン、と閉じたドアの向こうから無邪気なフィリスの声が聞こえた。
「せっかくだからパメラちゃんも誘ったの。三人で一緒に行こ？」
「……え？　あ、ああ、べ、別にいいけど……」
しかし、前途は多難のようだ。
（頑張れよ、パース）
さて。
ベッドのサイドテーブルには昨晩少し開いた筆記試験用のノートが置いたままになっている。が、先ほどのパーシヴァルの言葉を聞いた後だとそれを開く気にはなれなかった。
快晴の青空。
見たことのない町並み。
少しだけ好奇心が疼く。
“年寄り臭い”とか“枯れている”とか散々なことを言われる彼も、一応まだ十代の青年である。大陸一と言われる都会にまったく興味が沸かないはずもない。
しかしながら。買い物がしたいとか名所を見るだとかの目的があれば、えいやっと外に出ることもできるのだろうが、いかんせん考えても何も出掛ける理由が思い浮かばない。別に欲しいものもないし、見たいところも——まあ彼が知らないだけなのだろうが——特にない。
目的もなくブラブラするぐらいならやはり勉強していた方がいいのではないだろうか。
そんなことを考えて椅子に着き、窓から覗く景色に席を立って、いやいやと考え直して再び椅子に腰を下ろす。ノートを一ページ開いてみたが頭に入ってくる気がしないのでまた閉じた。
なんというか。

こうしてみると無趣味な人間なのである。
じっとしていると、今度は明日から始まる試験のことで頭がいっぱいになった。
緊張感が押し寄せてきて胃がきゅうっと締め付けられる。
――ダメだ。
やはりじっとしているのはよくない。
ようやくそこに思い至って椅子から立ち上がる。
何も目的がなくたっていい。とにかく街を見てこよう――と。
ノックの音がする。
「ティース。いる？」
「いるよ。どうぞ」
「相変わらず暇そうにしてるわね」
入ってくるなりそんな憎まれ口を叩いたのはシーラである。いつものように全身隙なく整えていて、寝癖の残っているティースとはまるで正反対の装いだ。
「別に暇そうになんかしてないだろ。ほら、今勉強してたんだよ」
ちょっと反論してみると、彼女はチラッとテーブルの上のノートに目をやって、
「あら。そんなに最初のページに執着があるの？」
「うぐ……」
あっさりと見抜かれてしまっては返す言葉もない。
「他の二人はどこか行ったのね」
と、シーラはふわりと微かな香りをなびかせながらティースの眼前を通り抜け、さっきまで彼が座っていた椅子に腰を下ろしてノートを手に取る。
「パースはフィリスやパメラと一緒に街に出たよ。クリシュナは起きたときもういなかった」
「それでお前は一人いい子でお留守番？」
バカにしたような物言いに、ティースは少しムッとして、
「そういうお前はどうなんだよ。フィリスたちと一緒に行かなかっ

たのか？」
　シーラは当たり前でしょ、と言わんばかりにため息を吐いて、
「本当はパメラも遠慮してたんだけど。……あそこまで鈍感だとさすがにパーシヴァルが可哀想になってくるわね」
「あ」
　なるほど、と、思った。
「じゃあ、やっぱりパースのヤツ、フィリスのこと――」
「周知の事実よ。知らないのは本人だけ」
　だが、ティースはそれを微笑ましく思って、
「はは、ま、そういうのって案外気付かなかったりするからなぁ」
「……お前が偉そうに言えることじゃないと思うけど」
「ん？」
「なんでもないわ」
　なんとなく馬鹿にされているであろうことは想像できたが、わざわざ追求して情けない思いをすることもないだろう――と、かなり消極的な理由でティースは話題を変えることにした。
「ところで何か用か？　お前の方から訪ねてくるなんて」
　シーラは少し不思議そうな顔をした。
「用があったように見える？」
「……いや。だから来たんじゃないのか？」
「そう……そうよね」
　と、納得した顔をする。
　なんだかよくわからなかったが、いつもとちょっと違う感じはした。
　……いや、実を言えばここ数日、彼女はだいたいこんな調子である。最初は旅の疲れかとも思ったが単純に元気がないというわけではない。先ほどのようにきちんと（？）痛いところを的確に突いても来る。
　ただ、たまに。
　ふ、と。

何事か考え込むような顔をするのだ。
（変だなぁ……）
そして実を言うと、彼自身も何か変だ。
最近、妙に昔の夢を見る。それも決まって三、四年前の、彼が故郷を出る直前の夢ばかり。試験が近付いて緊張しているのかなと思っていたりするのだが――
やはりパーシヴァルの言うとおり、気分転換が必要なのかもしれない。
そう考えて、目の前の少女を見つめた。
ふと、先日久々に二人で買い物に行ったことを思い出す。
（そっか。シーラと一緒に行くのもいいかもな）
ただ、それを言い出すにはほんの少しだけ勇気が必要だった。
「なぁ――」
しかし――彼が言うより早く、彼女が言った。
「ティース。お前、帝都は初めて？」
「あ、ああ……」
出鼻をくじかれて、せっかくの決意が萎んでいく。
しかし。
「そう。暇だったら、気分転換に少し歩いてみる？」
「え？」
やや戸惑いながらも少し考えて。
「あ。いや、俺もそう思ってたんだけど、一人で目的もなく歩くのもどうかなぁって」
「ええ、そうね。だから誘っているんじゃない」
再び、少し考える。
そして、
「……え。一緒に、ってことか？」
「それ以外にどう聞こえたの？」
呆れた顔だった。もっともな話である。即座に伝わらなかったのは単にティースが若干被害妄想的な思考――一緒に、とは言ってな

い――そんなこと言うはずがない――という風に辿ってしまっただけのことである。
それでもティースは言い訳して、
「いや、だってほら、お前いっつも俺と一緒に歩くの嫌がってたじゃないか」
「ネービスだと知り合いに見られたときに説明が面倒だったからでしょ。正直に言えば変に勘ぐられるし、かといってそのたびにいちいち嘘を吐くのもね」
「え？　それだけか？」
シーラは少し肩をすくめて、
「一緒に歩くのも嫌な男と二年も暮らせるはずがないじゃない」
もっともな話だ。
「それで？　行く？　行かない？」
「……」
顔を上げて少女を見る。
事実であれ勘違いであれ、今、こうして誘われていることは間違いのないことで。
もちろんティースにそれを断る理由はなかった。

結い上げた髪に白いカチューシャ。
角度を変えて、私は何度も鏡の中の自分をチェックする。
大丈夫。
少し旅の疲れは出ているけど及第点だ。
窓を開け放つと早朝のさわやかな空気が流れ込んでくる。
まだ太陽が顔を覗かせ始めたばかりで薄暗いが、今日はいい天気になりそうだ。

ベッドから聞こえる寝息。

まだもう少しだけ寝ていても大丈夫な時間なのだけれど、小さい頃から身に染みついた習慣はそう簡単に変えられない。この時間に起きて、掃除して、食事を作って……何か体を動かしていないとどうにも手持ちぶさたでいけなかった。

もちろんここは屋敷でもなければ自宅でもないから、そんなことは不可能なのだけれど。

そんな自分の性質に苦笑しつつ、私は町並みに目を移した。

帝都と呼ばれるだけのことはある。きちんと整備された町並み、建物。もう少し時間が経てば通りには人がたくさんあふれ出すだろう。

でも、個人的な話をすれば少し苦手だ。

もっと長閑な環境がいい。

もちろん遊びに来たわけではないから、文句なんて言ってられないのだけれど。

そうして私はベッドの中の夫が目を覚ますまで、帝都の町並みを眺めていた。

おはよう――と、挨拶を交わして一日が始まる。

五歳年上の夫は領主様に仕えていて、色々な領地を飛び回ることが多い。といっても別にスパイとかではなく――まあ単純で嘘のつけない人だからそんな仕事はできないと思うけれど――本人曰く“雑用係”とのことだけれど、歳の割に領主様の信頼は厚いようだ。

今回の仕事は明日から始まるデビルバスター試験で、将来有望な新米デビルバスターをスカウトしてくること。大事な任務だ。別に妻のひいき目というわけではないけれど、やはり領主様の信頼は厚いのだと思う。

結婚してちょうど一年ぐらい。

家にいる日はその四分の一ぐらいだろうか。

もちろんそうなることは結婚する前からわかっていたことで充分に理解しているつもりだ。夫はそのことでいつも気を遣ってくれるし、私自身、何の不満があるわけでもない。

ただ……今回は行き先が帝都だということだったし、滞在中に結婚記念日を迎えるということもあり少し無理を言ってついてくることにしたのだ。

朝食が終わると、夫はすぐに外に出る。何か私にも手伝えることがあるといいのだけれど、今のところは宿で帰りを待つだけだ。記念日に向けてコッソリ編んでいた冬用のマフラーも昨日で完成してしまった。

一週間近くお世話になっている宿の部屋を掃除して、夫の洗濯物を片付けてしまうといよいよすることがなくなってしまう。

掃除がしたい。

洗濯がしたい。

宿の仕事を手伝おうなんて言うとかえって気を遣わせてしまうので断念した。

女将さんは昼寝でもしたらなんて冗談交じりに言うけども、私にはそれができない。横になっていても動きたくて体がウズウズしてしまう。

仕方がない。

窓の外に目を移す。

予想通りいい天気のようだし――人混みは少し苦手だけれど――外を歩いてみよう。せっかく帝都に来ているのだし、そういう体験をするのも貴重な機会だ。

もしかしたら親とはぐれて泣いている子供がいるかもしれないし。

親が恋しくて鳴いている子猫に出会えるかもしれない。

拾ったりしたらまた夫に呆れられるかもしれないけれど――

よし。

決心して再び鏡の前へ。

大丈夫。

ステキな出会いがありますように――

そう願って、私は部屋を出た。

昔の夢をたくさん見たからだろうか、ティースはここ数日、これまでの自分を振り返ることが多くなった。

隣には彼が大事にしている少女がいる。

薬師になるという彼女の夢を叶えるため、二人でネービスに着いてから三年。

最初の一年は暮らしと学費を確保することに夢中でいつの間にか過ぎていた。

二年目を迎えようとしていた頃、少女はいつの間にか彼に対して冷たい態度を取るようになっていた。きっかけは彼にはわからない。

そして三年目。

デビルバスターになるという決意をしてからちょうど一年。彼女の態度はいつの間にか変化しているように思えた。

――いつの間にか。

この“いつの間にか”という言葉はものすごく情けないことなのかもしれない、と、ティースは今更ながら反省している。

いくらシーラがしっかり者だとはいえ、まだ十六歳になったばかりだ。心の中にはまだまだ余白がたくさん残っていることだろう。

新しい環境になり、新しい人々に触れれば変化していくのも当然だ。

彼はその変化にまるで付いていけなかった。

だから、その変化に少しでも付いていけるように、もっと彼女を視ていなければならない。いつの間にか変わっていた――そんな情けない言葉が出てこなくなるように。

幸い――そう、幸いにして、今、彼女との関係は一年前と比べて格段に良くなっているのだから。
「なぁ、シーラ。もしも。もしもだぞ」
ティースはそう切り出した。
彼女が視線を動かしたのがわかった。
足を止めて振り返る。
「もしも俺が今回の試験に受かったら――一日だけ。一日だけでいいから付き合ってくれないか？」
視線が怪訝そうな色を含んだ。
「……急に変なこと言い出すのね。どういう意味？」
「今日みたいにさ。歩いてみたいんだ。ネービスの街を」
視てなかった時間を少しでも取り戻すために――と、その言葉は呑み込んだ。そんなことをいえばいっそう変な顔をされるに決まっている。
「ネービスを？」
シーラは目を細めて言った。
「さっき、あまり気が進まないと言ったと思うけど？」
予想通りの返答だった。
「だから頼んでるんだ。一日だけ……ダメか？」
「……」
戸惑ったように見えた。
やっぱりダメか――と、ティースがそう思った直後、
「……いいわ。試験に受かったら、ね」
「え、ホントか？」
「自分で言って不思議そうな顔しないで」
少し不機嫌そうにシーラは言ったが、照れ隠しのようでもあった。
さらに彼女は付け加えた。
「ま、私もお前に一つ願いを叶えてもらうことになっているしね」
ティースは目を丸くして、
「え？」

「え、じゃないわ。まさか忘れたわけじゃないでしょうね」
と、ちょっと怖い目になる。
「……あ」
少し考えてようやく思い出した。
一年ほど前、彼が初めて仲間の死に直面した直後の約束。
“一年以内にある願い事をする――”
確かに彼女はそう言った。
そしてティースはそれを了承したはずだ。
「それでこれとでおあいこよ。その方が私も遠慮なく言えていいわ」
「う、それは――」
何か嫌な予感がしたが、いまさら引き下がれる流れではない。
そんな彼の心境を悟ったのか、シーラは少し意地悪な微笑みを浮かべた。
「でも、受からなかったらお前だけ損をすることになるわ。せいぜい頑張りなさい」
少し楽しそうに彼女が歩みを再開する。
やぶ蛇――そんな言葉を頭に思い浮かべながらティースも歩き出した。
ただ、嫌な気分はなかった。
むしろ清々しい――長年の心の支えが少し取れたような、そんな気分だ。
変わるかもしれない。
そんな予感があった。
ティースは少し早足になってシーラの隣に並び、一歩だけ前に出た。
隣の空気が、ふ、と和んだ気がする。
またあの頃の空気だ。
彼女がまだ“お嬢様”――“シーラお嬢様”だった頃の。
あの頃の――
（……あれ？）

変な違和感。
一瞬だけ、頭を過ぎった。
髪飾り。
髪。
（……シーラ……お嬢様……？）
後ろ姿が、ダブついて見えた。
「！」
キャン、キャンという鳴き声が聞こえて我に返る。
違和感は四散した。
そして聞こえたのは、女性の声。
「ああ、よしよし。いい仔ですねー。飼い主さんは？　迷子になったの？」
見ると、道ばたに白い子犬とその前に屈み込む若い女性の姿があった。少し歩調を緩めて注視すると、その子犬の頭には赤いリボンがついていて、どうもどこかの家で飼われている様子だった。帝都では動物をペットに飼っている家の割合も結構多いと聞くから、迷い犬というのも珍しいことではないのかもしれない。
女性は困った様子で何事か呟いている。
「どうしましょう。私、この町の人間じゃないからあまり詳しくないの。ああ、困ったわ。誰か――」
と、子犬を抱きかかえて振り返る。
「！」
ちょうど真後ろにいたティースをぶつかりそうになった。
「きゃっ……」
「あ、すいません」
慌てて一歩後ろに下がった。激突はどうにか避けられたようだ。
「ちょっとティース。なにやってるの」
シーラがそう言ってティースの袖を引く。
別に彼が悪いわけではなかったが、少しボーっとしていたことも確かだ。謝ろうかと思ったところで、子犬を抱えた女性が先に口を

開いた。
「あ、ごめんなさい。私が急に動き出してしまったんです。本当にごめんなさい」
と、頭を下げる。
白いカチューシャが印象的な女性だった。
慌ててティースも応える。
「あ、いえ、僕は大丈夫です。だからそんなに謝らないで――」
女性が顔を上げて。
――ピタリ。と。
「……あれ」
「……え？」
止まったのは同時だった。
ティースは女性を真っ直ぐに見つめたまま。
目の色が変わっていく。
女性も怪訝そうにティースを見つめたまま。
少しずつ見開いていく。

脳裏の奥で無数の目を持つ賽が転がった――

「まさか――」
キャン、と、腕の中の子犬が鳴いた。
「ティース……あなた、ティース、くん――？」
女性の声を耳に反響させながら、ティースは半ば放心していた。
――それはネービスでオーウェンにバッタリ出会ったときとは桁の違う確率。
この広い大陸の中で、その人物に出会う確率は――
「……ルナ、姉さん……」
昔の夢の中でしか会うことのない――半ば夢の世界の住人となりつつあった女性が今、彼の目の前に立っていた。
結い上げた髪に白いカチューシャ。

穏和で優しい声。
三年ぶり。けれど、昔とほとんど変わらない。
違っているところといえば、着ているものが使用人服ではないことぐらいか――
ルナリア＝ローレッツ。
ティースが生まれ育った屋敷で姉代わりだった女性。
昔の彼を知る者――
「……」
言葉が出ない。
彼にとって彼女はかけがえのない人間の一人だった。その顔を見て、その声を聞いて、泣きたくなるほどの懐かしさがこみ上げてくる。
しかし。
素直に喜ぶことはできない。
何故なら――
「ティースくん……だったら、後ろの、あなたは、まさか――」
ルナリアの視線がゆっくりと彼の後ろに伸びる。
「……ルナ、リア」
強張った――青ざめた表情でそう呟いたのは。
彼とともにネービスに来た少女。
三年前――屋敷の全ての人間を欺いて、飛び出してきた。
だから――
「っ……！」
シーラが咄嗟にティースの服の袖を掴んで踵を返す。
「待って、ティースくん！　それに、シ――」
一瞬の躊躇い。
そして、ルナが叫んだ。
「シルメリア……シルメリアお嬢様ッ！」
「――え？」
駆け出そうとしていたティースの足が止まる。

「……シルメリア？　シルメリアって――？」
「ティース！　走りなさいッ！！」
シーラがヒステリックな声を張り上げて彼の袖を強く引っ張った。
「え、あ――」
慌てて走り出す。
「ティースくん！　待って！　――お嬢様！！」
遠ざかっていくルナの声と子犬の声が混じり合って頭の中で反響する。
少し追いかけてきたようだったが、もともと運動の得意な女性ではないし、子犬を抱えている。ティースたちとの距離はみるみるうちに開いて、両者の間にはすぐに人の壁が出来た。
「……」
それでもシーラは速度を緩めず、息を切らせて走り続けた。
前を向いたまま。表情は見えない。
そしてティースは混乱している。
懐かしい人に再会した喜び。
ついに見つかってしまったという不安。
だが、それよりも何よりも――
（シルメリア……シルメリア――？）
ひどく聞き覚えのあるその名前。
反芻すると目の奥に熱いものがこみ上げる。
（……知ってる。俺、その人を、知ってる――）
やがて息を切らしたシーラがようやく速度を緩める。それでも早足で、一度も振り返らずに肩を上下させていた。
「……」
逃げたのは当然だ。
しかし――
「……もう大丈夫。ルナ姉さんは追いかけて来てないよ」
また少し歩みを緩める。
シーラは前を向いたまま。声を掛けづらい雰囲気だ。

流れていく人々が少し怪訝そうに二人を見ている。
ティースは気を遣って独り言のように呟いた。
「ま……まさかこんなとこでルナ姉さんに会うなんて……ビックリしたよ」
「……」
「会ったのは偶然だと思うけど、もしかしたらお前を連れ戻そうとするかな……この広い街だからそう簡単に見つからないと思うけど――」
「……ティース」
「え……」
立ち止まった少女の声が別人のように聞こえた。
（あれ……？）
ポニーテイルの後ろ姿に違う人物のシルエットが重なる。
ゆっくりと振り返った少女は努めて冷静を装おうとしているように見えた。だが、その表情はティースの知っているどの表情とも違っている。
――いや。
昔に見た記憶がある。
そして彼女は、言った。
「ティース。私が誰か、わかる？」
「え……？」
流れる人々が。
街の建物が。
真っ黒いシルエットになった。
心臓の鼓動が乱れた。
ティースは答えた。
「シーラ……突然、どうしたんだ？」
「……」
少女がホッと息を漏らした。
「――なんでもないわ」

強張りがなくなって、緊張の糸が緩む。
音が、景色が蘇って。
「そうね。私も少し気が動転していたみたい。気にしないでちょうだい」
まだ少し無理のある、それでも気を取り直した様子で前向きに微笑んで。
「ひとまず宿に戻るわ。ルナリアのことは……それから考えましょう」
くるりと背を向けて、ポニーテイルが眼前で踊る。
そして、ティースの胸に今日一番の強い違和感が産まれた。
「あれ、シーラ――」
思わず、口が開く。
「お前、その髪型……いつ変えたんだ？」
そして再び、町並みが黒いシルエットに変わった。

幕間『エリートたちの日常』

「リゼットとクインシーのヤツが私闘を？」
早足で歩く黒服の青年が眉をピクリと動かす。
その後を、同じデザインで深緑色の服を着た少年が駆け足でついていく。
「はい、カレルさん。なんでも訓練所で真剣を抜いて争った、とか」
「原因は？」
「はっきりとはしませんが、どうも……ちょうど手合わせに来ていたディバーナ・ロウの方が原因ではないか、と」
「ちっ」
舌打ちだけを鳴らして不機嫌そうに廊下を歩いていく。
いや“不機嫌そうに”ではない。
カレル＝ストレンジはこのとき、実際に不機嫌だった――なんてことを言うと、ネービスが誇るデビルバスター部隊“ネスティアス”の隊員たちは一様に怪訝な顔をするだろう。
というのもこのカレルという男、ハンサムではあるものの眼光は獣のように鋭く、細身でいかにも神経質そうな外見をしているものだから、周囲からはいつでも不機嫌なように見られてしまう。つまり不機嫌が標準な状態だと思われているのだ。
しかしもちろんそんなことはない。このカレルにだって普通の気分のときもあれば機嫌のいいときだって（たまには）ある。
しかし。
今、このとき彼は本当に不機嫌だった。
「だからいつも言ってんだ。ディバーナ・ロウの連中は厄介事しか持ってこないから中に入れるんじゃねぇと――ああ、いや、お前には関係ないことだな。事情はわかった。戻っていいぞ」
「は、はい！」

少年は過剰なほどきっちりとした敬礼を残して去っていった。
「ったく」
カレルは訓練所の横を通り抜けてネスティアス本部の中心部、ネスティアスのトップを占める十人のデビルバスター“ディグリーズ”たちの隊舎へと向かった。が、彼が向かったのは自分の隊“肆隊”の隊舎ではなく、同じくディグリーズの一員であるリゼット＝ガントレットが隊長を務める“玖隊”の隊舎だった。
部隊長室の前に着くと、一度ノックして、
「リゼット。おい、いるんだろ」
返事が戻ってくる前にドアノブに手をかけ、バン！　と、蹴破るような勢いでドアを開ける。
「カレル？」
奥の部屋から怪訝そうな声が返ってきた。
男にしては女っぽい。
女にしては男っぽい。
何とも表現のし難い中性的でハスキーな声だ。
「どうしたの、急に？　ついに若い欲望が爆発して僕の寝込みを襲うことにしたのかい？」
カレルは不機嫌そうに椅子に腰を下ろして足を組んだ。
「気色ワリィこと言ってねえでとっとと出てこい。話がある」
「気色悪いって……傷つくなぁ。ちょっと待っててよ。汗掻いちゃってさ、ようやく身体を拭き終わったところなんだ」
カレルは何も答えずに部屋を見回した。
調度品を極力排除した内装。金目のものは一切見当たらず、壁には使い古された竹刀が三本かかっているのみ。禁欲的な空気の漂う部屋だった――……にもかかわらず、ひどく散らかっている。
散らかっているのは主に紙の書類だ。必要なのか必要ではないのか、机の上には整頓されていない紙の山ができており、それを見るだけで部屋の主が整理整頓及び事務処理能力に難のある人物であろうことが予測できた。

もちろんカレルは知っている。
実際に苦手なのだ、と。
視線を上げるとようやく奥の部屋から、カレルと同じ黒の隊服に身を包んだ男装の令嬢、あるいは女顔の美青年が出てきた。
ディグリーズの一員“月神”リゼット＝ガントレットだ。
金色の髪の先が微かに湿っている。
「お待たせ、カレル。飢えた狼のような目つきが今日もステキだね。ゾクゾクするよ」
と、艶っぽい調子で言ってパチリとウインクをする。
カレルは無視して、
「お前、クインシーのヤツとやり合ったんだって？」
「耳が早いね」
事務机に着いたリゼットは手にしていた愛剣“玉兎”を壁に立て掛け、執務椅子に腰掛けた。
「互いの技術向上のために手合わせしただけだよ。さっきちゃんとお偉方にも説明に行って来た」
「下の連中がしきりに噂してる。派閥争いがエスカレートしたのか、ってな」
「まさか」
そんなカレルの言葉をリゼットは一笑に付した。
「他の人たちならともかく、僕とクインシーがそんな理由で争うわけないじゃないか。もっと個人的なことだよ」
「ディバーナ・ロウが来てたそうだな」
「来てたよ。僕も前にネアンスフィア絡みで会ったことある、ティースくんっていう可愛い男の子」
少しだけ、カレルの目尻が鋭くなる。
「またレインハルトのヤロウか」
「どうかな。特に裏はなさそうだったけど……話って、そのことなのかい？」
「……いいや。もっと胸くそ悪い話だ」

「あれ。毛嫌いしてる彼以上に、ってことはよっぽどだね。じゃあ会議の結果、やっぱり思わしくなかったんだ？」
カレルは悪態をついて、吐き捨てるように言った。
「結局、来月からの戦力配置はオリヴィオ派の意見そのままで決定だ。わかっちゃいたことだが、納得はできねぇ」
「そっか」
リゼットは顔の前で手を組んで、顎を引き、上目遣いにカレルを見つめる。
「でも向こうは最近活躍めざましいから仕方ないよ。オリヴィオさんはもちろん、フェリックスの成長は著しいし、カフィーもそれなりにやってる。クインシーだって、ね。それに比べてこっちは――」
と、軽く肩をすくめた。
「ラドフォードさん、今日は近所の新婚夫婦の引っ越しの手伝いだって」
「……あの、馬鹿」
リゼットは苦笑して、
「いいんじゃないかな。今回の配置の件では結構無茶したみたいだし――それに、ヘンに得点稼ぎに走らないのはあの人のいいところだよ。……お茶、飲む？」
「ふん……」
カレルは相変わらず不機嫌そうだったが、異論はなさそうだった。
射し込んでくる夕日が黒ずんできている。
夜がすぐそこまで迫っていた。

零――“天帝”オリヴィオ＝タングラム、三十一歳。
壱――“獅子王”ラドフォード＝マティス、二十七歳。
弐――“清流”ジャマール＝グランジャー、四十六歳。
参――“聖天使”クインシー＝フォーチュン、二十三歳。

肆――“疾風牙”カレル＝ストレンジ、二十二歳。
伍――“赤薔薇”ナイジェル＝ローゼン、二十九歳。
陸――“白御子”ルーベン＝バンクロフト、二十歳。
質――“黒貴子”フェリックス＝トリート、十九歳。
捌――“双頭龍”カフィー＝マーシャル、二十一歳。
玖――“月神”リゼット＝ガントレット、二十二歳。

ディグリーズでは年に一度、功績に応じて入れ替えが行われる。
これら十人のディグリーズたちは常々いくつかの派閥に分かれ、組織内での発言力を競ってきており、今は四、四、二という三つのグループに分かれている。
ディグリーズのトップであるオリヴィオに組する者――クインシー、フェリックス、カフィー。
ディグリーズのナンバー二であるラドフォードに組する者――カレル、ルーベン、リゼット。
そしてそのどちらにも属さない二人――ジャマール、ナイジェル。
これが現在の状況である。現在の主流はオリヴィオ派であるが、それでもこれほどに力関係が拮抗しているのはディグリーズの歴史の中でも非常に珍しいことだ。
そしてデビルバスター試験を間近に控えたこの時期は彼らにとって重大な時期である。将来有望な配下の訓練生たちを一人でも多くデビルバスターにすること――それが結果的に勢力争いにも大きく関わってくるからだ。
だから彼らの身辺は水面下でにわかに騒がしくなってくる。

――と。

そうなるのが常、なのであるが――

「決めた！　俺は決めたぞ、カレルぅぅぅぅッ！！」

「……」
吠えている。獅子のたてがみのようなふさふさとした髪。男臭い彫りの深い顔立ちとゴツい体型。美形とは明らかに対極に位置しているがどこか憎めない、愛嬌さえ感じる男。
そして、顔は心を映す鏡――そんな言葉がよく当てはまる。ラドフォード＝マティスというのはそんな感じの男だ、とカレルは思っている。
「決めたぞ、カレル！　俺は決めた！」
「……」
「決めた！　……決めたぞ、カレル！　……決め……決めたんだぞ～～～おーい、カレル～～～～」
「……」
書類に落としていた視線をゆっくり持ち上げると、その先にいた獅子のような男の顔がパッと明るくなった。
グッと拳を握りしめ、斜め上を見上げる。
「決めたぁぁぁぁぁぁッ！　俺はもう迷わないぞぉぉぉぉぉぉッ！！」
「先に言っておくが」
カレルは短く言った。
「ミューティレイク公の私設警備隊に捕まっても、今度は助けに行かねえ」
「右に同じ。僕らもそんなにヒマじゃないしね」
「そうですね。ラドフォードさんヒゲ濃いですし」
リゼット＝ガントレットとルーベン＝バンクロフト。
デビルバスター試験を間近に控えたこの時期、ラドフォード派のディグリーズ四人は通常任務の終了後、ディグリーズ“肆隊”隊舎の隊長室、つまりはカレルの執務室に集まっていた。
と、いっても、別にデビルバスター試験対策の打ち合わせとかでもなんでもなく、単にたむろっているだけである。
「お、おおお前ら……！」

ずずい、と、ラドフォードは拳を握りしめながら三人に詰め寄って、
「一つ問おう！　お前ら、この俺の熱い決意に激励の言葉はないのかッ！？」
すると三人は答える。
「ねーよ」
「僕もないかな。ミューティレイク公に悪い気がするし」
「ないですね。ラドフォードさんヒゲ濃いですし」
ラドフォードは泣きそうな顔になって、
「な、なんて冷たい後輩たちだ、くぅぅ――……ってか、おい、ルーベン！　危うく聞き逃すとこだった！　ヒゲは関係ないだろ！」
ルーベンはいつも通りの物憂げな表情をラドフォードに向け、四つ葉のクローバーを指先でクルクルと回しながら答えた。
「残念。ヒゲがファナさんと釣り合っていません」
「ヒゲが！？　ヒゲが釣り合わないってなに！？」
「あと顔も。ぶっちゃけ。全部？」
「ヒゲを強調した意味はッ！？」
「……ふぅ」
カレルはため息を吐いた。
デビルバスター試験は間近に迫っている。受験する部下たちに対してやるべきことはやったし今さらアタフタしても仕方ない――とは思うものの、ネスティアスの誇るデビルバスター“ディグリーズ”が四人も集まったとは思えない、いつものことながら緊張感のない集団だ――と、半ば呆れながら右手の紙切れに視線を落とす。
と。
「む？　なんだ、カレル。その紙は？」
ラドフォードが目ざとく見つけて顔色を変える。
「ま、まさか恋文ではあるまいな！？　――ゆ、許さんぞ、カレル！　先輩でかつ五歳年長の上に未だ独身であるこの俺を差し置いて結婚を前提にしたお付き合いをしようなどとは！」

「全然違うっつーの。つか、お前が差し置かれているのは俺のせいじゃねぇだろ」
「む。そ、そうか。恋文ではないのか……ふぅ」
ホッと胸をなで下ろすラドフォードに、リゼットが可笑しそうにクスクスと笑いながら口を挟んだ。
「大丈夫だよ、ラドフォードさん。カレルにラブレター渡そうなんて命知らずがこのネービスにいるわけないんだから。ねぇ、カレル？」
「うるせえ」
まあ恋人らしき女性がいないことは事実であるが、そもそもカレルはあまり興味がない。歳を重ねて悟ったわけではない。昔からそうだし、これからもそうだろう。
だからそんな風にからかわれても何も感じない。
何も感じない、のだが――
「ちなみに僕は今月四通目、と五通目。差出人は某貴族の末っ子のお嬢様と、前の任務で知り合ったサンタニア学園の女子学生」
ピッ、と、リゼットが人差し指と中指の間に挟んだ封筒をカレルの眼前で見せびらかす。
「……世の中、どうかしてやがる」
「人間というのは美しいものに惹かれる生き物なんだよ、カレル。男女問わずね」
ちゅ、っと投げキッスのポーズで妖艶に微笑んでみせるリゼットに対し、ルーベンが横から口を挟む。
「美しいっていうか、単にエロいだけですよね、リゼットさんは」
「失礼だなぁ、ルーベン。こう見えて僕は純愛派なんだから」
「……そりゃ嘘だろ」
「む」
呆れ顔のカレルにリゼットは相変わらず不満げだったが、
「まあいいや。それはそうと、カレル。その紙は結局なんなのさ？」
「ああ」

カレルは思い出したようにその紙切れを指先で弄びながら、
「任務の依頼が来ていたんだが……どうしたもんかと考えていたところだ」
「任務の依頼？　なんだそりゃ？」
と、ラドフォードは変な顔をした。通常の任務なら、それに対して“依頼”なんて言葉を使うことはない。
カレルは答えた。
「ユーイングの街まで公女の護衛任務だ」
「公女様だぁ？」
「ああ。ほら」
驚き顔のラドフォードに紙切れを放る。それを手にしたラドフォードの後ろからリゼットとルーベンが覗き込んだ。
「……へぇ。ネービス公家絡みの任務はだいたい持ってかれるのに、珍しいね」
「で、カレルさん。一体誰にワイロを贈ったんですか？」
「アホか」
と、カレルは鼻を鳴らして、
「なんでワイロ贈ってまで、んなめんどくせぇモンもらってこなきゃなんねーんだ」
「ふむ。しかしまぁ」
ラドフォードはドカッと椅子に腰を下ろすと偉そうに腕を組んで、
「公女――サイア様の護衛ともなれば大事な任務ではないか。何しろあの方は以前にも魔の襲撃にさらされたことがある。そんな任務が来るということは、いよいよお前の実力が本当の意味で認められたということだ。いやぁめでたい」
「そうかい」
と、カレルは素っ気なく言った。
「けどこういうの、俺の性に合わねーんだ。来るかどうかもわかんねー敵をじっと待ってるってのはな」
リゼットが大きなため息を吐いた。

「これだから、もう……。いっそこの機会に色仕掛けで公女様を籠絡するぐらいの気概を見せて欲しいよ」
「テメーみたいな色情狂と一緒にすんな、アホ」
「ちょっ、だから僕は純愛派だって――」
ルーベンが間に割って入る。
「まぁまぁ、リゼットさん。どっちにしてもカレルさんには酷な話ですって。こう見えて女慣れしてませんからね、この人は」
「あ、そっか。じゃあ出立の日までに僕がレクチャーしてあげちゃおうかな」
「……」
勝手に言ってろ、と、カレルは二人を見切り、手元に戻った紙切れを改めて眺める。
（――公女の護衛、か）
確かに。リゼットとルーベンの言うようなことは論外としても、公女と面識を深めておくのはいいことなのかもしれない。
このカレルという男、本質は一匹狼だが、それでも組織の一員だという自覚は充分にある。部下がいるし仲間もいる。自分のことだけ考えて行動できるわけではないことは充分に理解している。
（毎回毎回オリヴィオ派の連中にいいようにされるのも面白くねぇしな……）
「……ところで、お前ら」
ふと。カレルは顔を上げて言った。
「公女ってのはどんなヤツなんだ？　まだガキなのか？」
ラドフォードは腕を組んだまま驚いた顔をして、
「なんだ、カレル。お前、サイア様のことも知らんのか？　顔もか？」
「ああ。別に興味なかったし、絡む機会もなかったからな」
「絡むだなんて――」
リゼットがふっと頬を染め、人差し指を口元に当てる。
「だったら僕のことも絡め取って欲しいな。その艶めかしい細身の

肢体で」
「死ね。三秒以内に死ね」
「死ね！？　ひどい！」
そんな二人のやり取りにラドフォードが大声で笑いながら言った。
「サイア様は今年十四、いや十五歳だったかな。公子のアシール様とは確か六つ離れておられる」
カレルもさすがに時期ネービス公となる長子アシールのことは知っている。アシールがカレルより二つ半ほど年下だから、サイアは八つ半年下、とすると十四歳である。
「まだガキだな」
呟いたカレルにリゼットがすかさず異論を挟む。
「それは認識が甘いよ、カレル。女の子は早熟なんだから。現に先日、僕にラブレターを持ってきてくれたのはまだ十三歳の女の子だよ」
「そういうことするからガキなんだろ」
にべもなく言い放ったカレルに、リゼットはふう、とため息を吐く。
「……ロマンの欠片もないね。わかってたことだけど」
そう言いながら机の端に軽く腰を下ろし、少々心配そうな顔でカレルを見た。
「くれぐれも公女様に失礼のないようにね。ラブレターはともかく十四歳にもなれば立派なレディだよ」
「お前に言われるまでもねーよ」
馬鹿馬鹿しいと言わんばかりにカレルは反論した。もちろん礼儀作法は（それなりに）知っている。少なくとも護衛として失礼のない態度ぐらいは心得ているつもりだ。
しかしリゼットは不安そうな顔のままだ。
「キミは剣術に関すること以外は不器用だから心配だよ。僕と違ってレディをエスコートすることにも慣れてないだろうし」
「あぁ？　エスコートってのはなんだ？　俺は護衛するだけだぜ」

「……」
真顔のカレルに無言で顔を見合わせる三人。
やがて、肩をすくめたリゼットがポツリと言った。
「すぐにわかるよ。とにかく、失礼のないように気を付けてね」
「？」
まだ、その言葉の意味はわからなかった。

そして数日後。
公女一行がネービスを出発する前日のことだった。

カレルはネービス公家のことをそれほど知らない。この場合の“それほど”は“必要最低限は知っているが余計なことは知らない”という意味で、現ネービス公が四十代半ばで比較的領民の評判はよく、アシールという名の長男とサイアという名の長女がいて、どうやらチェスが好きらしいという、その程度のことは知っている。
ただ主人ともいうべきネービス公のことですらその程度だから、その息子、娘のことについての予備知識は紛れもなくそれ以下であり、先日ラドフォードの前で公女サイアのことをほとんど知らないと言ったのが嘘偽りのない真実であることもわかっていただけることだろう。
そんなわけで。
カレルの頭の中にあるネービス公女のイメージというのは、いわゆる没個性的な一般市民が抱く“公女”、“姫”のような世間知らずのお嬢様的イメージだった。
しかしながら。
世の中の公女たちが全てそんな性質の持ち主であるはずもなく――
「そなた、名はなんという」
「は。オーデルと申します。公女様におかれましては本日もご機嫌

麗しく何よりと存じ上げます」
「うむ。……次の者。名は？」
「はっ。イスカと申します。この度は公女様の護衛という大役を仰せつかり身に余る光栄で御座います」
――なんだ、これは、と。カレルは立ったまま大木に背を預け、やや遠めからその様を眺めていた。
出立の前日、ネービス公家の本邸に集まった護衛は総勢十名。いくら公女といっても出掛けるたびに大名行列を作って歩くわけではないから、少数精鋭、集まった十名はカレルを含め、このネービスでも腕利きの男たちばかりだろう。
それはいい。その方が仕事がしやすい。
それはいい、のだが、そこに集まった十名にはおそらく――いや明らかに、一つの共通点――しかもカレルにはいかんとも理解のし難い共通点があった。
「最後の一人。どうした？　こちらに来ぬか」
どうやら他の者たちは全て挨拶を終えたらしい。
「……」
カレルは腕を組んだまま大木から離れ、ゆっくりと声のした方へ歩み寄っていく。
両脇からひそひそ声が聞こえた。
「――おい。あいつ、ネスティアスのディグリーズじゃないか」
「カレル＝ストレンジか。あのネスティアスでも問題児といわれる――」
チラッと一瞥すると男たちはすぐに黙った。
“疾風の牙”ときには“狂犬”とも揶揄されるカレルの名はネスティアス以外にも知れ渡っている。別に素行が極端に悪いわけではないが、御しがたいという意味であればそれは的を射た二つ名であるということも言えよう。
真っ二つに割れた男たちの間を歩く。軽く顎を上げ、淀みなく、遠慮なく、無造作に歩いていく。

そして辿り着く先。

「そなた――」

僅かに逆光になってカレルは目を細めた。ただでさえ鋭い視線がさらに凶悪になる。

三段ほど高くなったテラスの上から、一人の少女がカレルを見下ろしていた。

（これが公女――サイアか）

ネービス公家に縁のある者は赤みがかった髪を持つ者が多く、本家だけあって公女の髪は遠目でもわかるほど赤かった。前髪は眉とほぼ平行の角度にV字型に切りそろえられ、横と後ろはストレートに伸ばされている。ややつり目気味なところは父ではなく母親譲りだろう。背丈は年齢を考えると標準、百五十センチを少し超えたぐらいだろうか。純白のドレスとのコントラストが妙に鮮やかで、その色のドレスでもかなり細身に映るところを見ると華奢な体格をしているに違いない。

左右には専属の侍女だろうか。同じ顔をした双子らしき女性が控えていた。

少女が口を開いた。

「そなた、名はなんという？」

「カレルです。公女様」

そう答えて軽く頭を下げる程度の会釈をする。

失礼にならない程度の、最低限。別に突っ張っているわけではない。彼にとっては何も意識しないごく自然の行動だ。

赤髪の公女は目を細めた。

「では、早速問おう、カレルよ。そなた、何故私が命じたとおりの服装で来ぬのだ？」

カレルは視線を上げた。

確かに。

先ほど述べた男たちの“共通点”――カレルにだけはその共通点がない。

「正装でと命じられました。俺の正装はこれ以外にありません」
他の男たちは全員、正装だった。憲兵の制服ではない。使用人としての正装でもない。とても護衛の集まりとは思えないパーティー用のタキシードだ。
そんな男たちの中、カレルは一人だけディグリーズの黒い隊服に身を包んでいる。
「ほぅ」
そんなカレルの返答に、サイア＝ネービスは少し口元を緩めた。別に大人びているようには見えない。外見は年相応の少女だ。
だが、
「明日は着替えてこい。二度は言わぬ。私はそういう粗雑な服が嫌いなのだ」
「……」
なるほど、と、カレルは数日前のリゼットの言葉の意味を理解した。
理解してすぐに、
「わかりました」
意地を張らずに引き下がることにした。
護衛をするのにパーティ用のタキシードなど馬鹿馬鹿しいとは思うが、相手が背伸びしたがるほどのどうしようもない子供であるなら張り合う方がさらに馬鹿げている。ならば素直に引き下がるのが上策だろう。
確かどこかに一度か二度しか着ていないタキシードがあったはずだな――と、そんなことを考えていたカレル。
そこへ、
「それと――髪だ」
「……は？」
怪訝な顔を上げたカレルの頭に人差し指を突きつけ、サイアは目を細めて矢継ぎ早に言った。
「その無造作な髪をどうにかしろ。それに、靴。汚いし艶が足りな

い。それと全体的に――姿勢はいいが愛想がなさすぎる。まったく、その歳になって身だしなみに気を遣うことも知らんのか」

「……」

一瞬何を言われたのかわからなかった。こんな年下の少女に面と向かってここまで言われたことも記憶になかった。

「――おい、お前たち」

と、公女は呆然とするカレルのことなど気に留めた様子もなく、双子の侍女を近くに呼び寄せて、

「この男をコーディネイトしてやれ。明日までに少しは見られる格好にしておくのだ。他はもういいぞ。解散だ」

慇懃に畏まって他の護衛たちが退散していく中。

「……」

カレルは一人、返す言葉も見つからずその場に立ちつくしていた。

「――ぷっ。あはははははは」

「なにが可笑しい」

睨み付けてやると、リゼットは笑うのをやめようともせずに答える。

「いや、ふふ……可笑しくなんかないよ、カレル。うん。とてもよく似合ってる」

「ふん」

見ているとはらわたが煮えくり返りそうだったのでカレルは憮然とした顔のままリゼットの前を通り抜けて部屋のドアを開けた。

リゼットの部屋よりもさらに殺風景、かつそれなりに整頓された（というよりあまり物がない）この部屋は言うまでもなくカレルの部隊長室である。

結局、公女の侍女たちに解放されたのはあれから一時間も後のことで、明らかに不機嫌そうな彼に対し、侍女たちはおっかなびっくりに、しかし容赦なく彼の全身を見事にコーディネートしてくれた。

蝋のように固められた黒髪。大きく開いた金ラメ入りの襟と紫色

の蝶ネクタイ、胸に刺さった赤い薔薇。
　完全に道化である。
「ほらほら、カレル。ただでさえ怖ろしい顔が魔物みたいになってるよ。そんなんじゃ部下の子たちも怖くて近寄れないんじゃないかな？」
　と、後をついてきたリゼットが執務机の端に軽く腰掛ける。
　妙に楽しそうなその態度がいつも以上に癪に障る。ついでにいうと、この結果がわかっていたかのように部屋の前で待ち伏せしていたのも気にいらない。
「――あの、クソガキ」
　机の上に置いた握り拳に自然と力が入る。
「こっちが何も言わねぇのをいいことに調子に乗りやがって。公女ってのはアレか。まともな教育を受けてねぇガキのことを言うのか」
「うわ。いいのかい、カレル。公女様のことそんな風に言って」
　と、リゼットがわざとらしく大袈裟に驚いてみせる。
　――この時点で。普段のカレルであればその態度に何らかの不信感を抱いていたはずだが、このときは冷静さを欠いていたのだろう。立て続けに公女への不満をぶちまけた。
「フン、馬鹿馬鹿しい。公女だかなんだか知らねぇが、壁に耳が生えているわけでもねぇだろ。……たとえ聞こえてたって構うもんかよ。クソ生意気なガキンチョだってことに変わりはねぇ」
　ふと視線を下に向けると、金ラメの襟が視界に入ってまた気分が悪くなる。
「……まぁ、いい。とりあえず着替えて――おい、リゼット。てめぇもこんなとこで遊んでられるほど暇じゃねぇんだろ」
「ん、まぁ、そうなんだけど」
「？」
　何とも微妙な物言いを不審には思ったものの、カレルはそのまま着替えを取りに奥の部屋へと向かう。
　明日になればどうせまたこの格好にさせられるのだろうが、今は

少しでも早く解放されたい。
と。
リゼットが急に言った。
「そうだ、カレル。ゴメンよ」
「あぁ？」
不機嫌なままで振り返ると、リゼットは少し上目遣いになってクスッと微笑んだ。
その表情を見た瞬間。
カレルの全身を嫌な予感が駆け巡る。
「言うの忘れてたんだ。キミが戻ってくる少し前から、奥の部屋でお客様がお待ちかねだよ」
「……」
無言で奥の部屋に視線を向けるまでもなく。
そこから一人の少女が姿を現す。
真っ先に視界に飛び込んできたのは――眉と平行に揃えられたストレートロングの濃赤の髪。
「――似合っているではないか、カレル＝ストレンジ」
片手を白いドレスの腰に当て、口の端を小生意気に軽く上げて少女はカレルを見上げていた。
「公女……様」
一瞬何が起きたのかわからず、ポカンと口が開いてしまった。
しかしすぐに状況を理解するとともに我に返って、
「……てめぇ」
もちろん公女に向けた言葉ではない。後ろでそっぽを向いている確信犯に向けたものだ。
「ふむ」
ネービス公女、サイアはまるでバレエを踊るときのようにリズミカルに軽々と近付いてくると、カレルの眼前で立ち止まり腕を組んでカレルの全身を下から上まで眺め回した。
そして再び口の端を緩める。

「それで？　先ほど私のことを何か言っていたようだが……カレルよ。改めて聞かせてはくれぬか？」
「……」
咄嗟に返す言葉がない。
ネスティアスで鬼のように恐れられる彼も、さすがに公女相手に簡単に開き直れるほどアウトローではなかった。
「まともな教育も受けていないクソ生意気なガキンチョ様だそうですよ、サイア様」
リゼットが楽しそうに余計なことを言う。
「くっ……リゼット、てめぇ……」
「ほう」
サイアは真っ白なドレスの腰に片手を当て、もう片方の手で赤みがかったストレートの髪をさっとなびかせると、少し顎を上げてまるで見下ろすようにカレルを見た。
「噂には聞いていたが、なかなかのやんちゃ者のようだな。お前は」
「……」
どうやら言い訳のできない状況のようだ。
ならば仕方がない。
すぐにカレルは開き直った。
「……んで？　こんなところに一体何の御用でしょうか、公女様。わざわざこの俺をからかいに来た、というわけではないでしょうね？」
そうだ、とでも答えたら本気でげんこつでも喰らわしてやろうか、などと頭の隅で考えていたカレルだったが、
「もちろんだ」
サイアはゆっくりとカレルの眼前を通り過ぎ、そのまま彼の執務椅子に腰を下ろすとクルッと彼に向き直った。
「カレル＝ストレンジという男に少々興味があってな。少し話をしたかった」
大人びた口調だった。

意図を計りかねた。
「……どういう？」
「額面通りの意味だ、カレル＝ストレンジ」
サイアはやはり大人びた目でカレルを見た。
「領地の防衛というカテゴリーにおいて、対魔という視点から見れば、お前たちネスティアス、とりわけ十人のディグリーズたちはその要だ。そんなお前たちの人となりがどのようなものか、気にならぬ方がおかしい。ただ、私はお前たちと関わり合う機会をなかなか作れない。だから今回の護衛にわざわざお前を選んだ。……実を言うとな。こっちのリゼットにも以前、お前と同じ理由で護衛を務めさせたことがある」
「……」
それでリゼットが今回のことを予見できたわけだ。
サイアはさらに続けた。
「お前のことはリゼットから聞かされていたし、どのような男かもだいたいは想像できたのだがな。それでも自分の目で確かめねばわからぬこともある。だから、どんな用で来たかと問われればお前個人に対する興味、ということになる」
「……なるほど」
予想外にまっとうな答えが返ってきて、カレルは驚きを表に出さないように驚いた。
どうやら、ただの大人ぶった我が儘な子供というわけでもなさそうだ。
ただ――
「では、公女様。今語っていただいた理由と、俺が無理矢理させられたこの格好との間にどのような関連性あるのか、ってことも俺にわかるように説明してもらえますかね」
「ふむ」
サイアは表情を一つも変えずに答えた。
「それは単なる私の趣味だ」

「……このクソガキ」
「なにか言ったか？」
「いいえ。別に」
「そうか」
サイアは気にした様子もなく、ストレートにした髪の先を軽く弄びながら、
「まあ公女などという堅苦しい肩書きを持っているとはいえ、私だって年頃の女子だ。どうせ囲まれるなら洒落た男たちに囲まれた方が楽しいに決まっている。護衛というとゴツくて無粋な男が多すぎてな。別に話術で楽しませろとまで言ってはいない。ただ任務に支障のない範囲で、見た目だけでも華やかにしてもらいたいのだ。そういうものだろう？」
「……そりゃごもっとも」
カレルは投げやりに言った。
リゼットが横から口を挟む。
「それで公女様？　カレルのことはお気に召しましたか？」
するとサイアは意外にも即座に頷いて、
「うむ。スマートさはお前と比べるべくもないが、こういう御し難い性格も嫌いではないな。男はただ黙って従っているよりも多少の反骨心があるぐらいの方が良い」
「……そりゃどうも」
もうどうでもいい気分になっていた。
「さて、と」
サイアはキシッと椅子を軋ませて立ち上がると、片手を腰に当てて真っ直ぐにカレルを見上げる。
「では明日から頼むぞ、カレル。働きによっては――そうだな。お前のような男ならば、私の婚約者候補に加えることを考えてやってもいいぞ」
（……なんだそりゃ）
冗談にしてもタチが悪い――なんて言葉をどうにか我慢して、部

屋から出ていく公女を見送った。
やれやれ、と、さっきまで彼女が腰を下ろしていた執務椅子に座って脱力する。
「モテモテだね、カレル」
「うっせえ、黙れ」
疲れた。
文句を言う気力もない。
リゼットは笑った。
「でもま、歳の割には見識の高い方だよ」
「……」
少なくともただの馬鹿ではない、ということはカレルにもわかった。
「ネスティアスの内情にも詳しいし、最近じゃディグリーズの内部事情についても色々調べてるみたい。――そういう意味じゃ、将来的には僕らの強力な後ろ盾になってくれるかもしれないね。どちらかというと今は僕らに好意的のようだし。……これは僕の功績なんだけど」
「……フン」
リゼットの言いたいことはカレルにもわかっている。
現ネービス公はディグリーズの首席であるオリヴィオ＝タングラムに全幅の信頼を置いている。公子のアシールもはっきりどちらの味方ということはないものの、父が信頼を置くオリヴィオをやはり一番頼りにしている。
そんなオリヴィオと対立する次席のラドフォード派――つまり彼らは、どちらかというと日陰者だ。
しかし、あの公女が味方に付くということであれば少しは勢力図も変わってくる。女で次子であるとはいえ、このネービスは他の領地に比べて女性の発言が力が持つ土地柄だ。しかも見識も学もある公女の言葉となれば――今後、歳を重ねる度にその発言は無視できないものとなるだろう。

それはわかる。
そのために何をするべきかもわかっている。
しかしカレルは――見てわかるだろうが――おべっかを使うのが苦手だ。剣一筋に生きてきたから社交性もあまりない。頭は悪くないので最低限の礼儀は身につけているが、過剰に装飾された言葉は持ち合わせていない。
「カレル。今回の任務……重要だよ」
リゼットが真面目な顔でそう言った。
一拍置いて。
カレルは答えた。
「わかってる。ガキじゃねーんだ。上手くやるさ」

数日後。

「――愚か者。確かに話術は必要ないと言ったがそれは言葉の綾だ。たとえその技術がなくとも男が女と二人きりになれば気を遣って何かしら話題を提供して退屈させないようにするものではないか。まったく。剣に熱心なのも結構なことだが、少しはそういったことも学習せねば男として大成できぬぞ」
「……」
リゼットにはああ言ったものの――何故、俺はいきなり八つも年下のガキに説教されなければならないのだろうか――と、そう考えるとどうにも納得できず、カレルは愛想などという言葉とは全く無縁の憮然とした顔で馬車に揺られていた。
だいたい――男として大成できないとかは非常に大きなお世話だし、男と女が二人きりになれば云々の話もこのカレルという男の辞

書には存在してしない。というか、そもそも二人きりじゃない。この馬車の周りは十人もの護衛が固めているし、それ以前に公女の左右には同じ顔をした双子の侍女が控えている。

楽しい話がしたいなら両脇の連中に言えばいいだろうに――なんて言葉はどうにか喉の奥に引っ込めて、カレルはようやく口を開いた。

「あー……あそこに見える山の麓にあるロマニーという町は温泉で有名だそうで」

「……お前、ネービスの公女である私が、ネービスでもっとも有名な温泉町の存在を知らないとでも思ったのか？」

「知ってましたか。それは失礼」

会話終了。

それからも少し（三秒ほど）話題について考えてはみたものの何も思い浮かばなかったので、カレルは結局開き直り、公女を無視して外の景色を眺めることにした。

今回の目的地であるユーイングの街はネービス領の南西端、国境付近の大きな街である。ネービスからは通常馬車で三日の距離だが、今回の旅はまだ子供である公女の体を考慮して余裕を持った五日間の日程となっていた。

何事もなく一日目が過ぎ、二日目が過ぎ、三日目が過ぎて――そして三日目の宿を取った大都市ブレインスタンを発って二時間。

太陽がちょうど真上を通り過ぎようとしていた。

進行方向の左手、街道の南側には緩い丘陵が続いている。右手はここから少し距離があるものの森が生い茂っていて、その先には麓に温泉町を有するラグレオ山が見える。

進行方向は少しずつ上り坂になっており、少しずつ辺りの見通しも悪くなってきて、もう少し進めばそこはネービスからユーイングへ向かう道程でもっとも険しい道だ。

つまりもっとも気を引き締めなければならないポイントである。

――が。

（ったく。ガキの子守をするために付いてきたんじゃねーぞ）
ネービスを発ってからこの方ずっと、カレルはそれ以外の余計なことに気を取られてしまっている。
もちろんカレルだけが特別扱いというわけではなく、護衛の男たち全員がこうして交代で一人ずつ公女の話し相手を務めている。喜んでやる者もいれば仕方なくやる者もいたようだが、やる気のなさではおそらくカレルが群を抜いてトップだろう。
「まったく。変わった男だ」
自分を無視して外を眺め始めたカレルを見て、サイアは仕方なさそうに首を振った。
チラッと公女の表情を盗み見る。
さすがに気分を害したのかと思ったが、彼女は不機嫌というよりは興味深げな表情でカレルを見つめていた。
「カレル。お前、少しは私の心証を良くしようとは考えないのか？　お前たちディグリーズは二つの派閥に分かれて争っているそうではないか。私を味方に付けたいとは思わないのか？」
「……」
なるほど、そのぐらいのことはお見通しらしい。
「父上や兄上の信頼はお前たちの対抗勢力であるオリヴィオ＝タングラムの方が厚い。ならばなおのこと、私を味方に付けようと努力すべきではないか？　それとも、こんな小娘にはそのような力などないと侮っているのか？」
「これでも心証を良くしようと努力してんですよ、俺は」
カレルはため息を吐いてそう答えた。
サイアは心底呆れた顔をした。
「本当にか？　てっきり気にくわないガキだからと、ワザと嫌われるようにしているのかと思っておったぞ」
「……」
半分ぐらいは当たっている。
カレルは両手を広げて、

「何にせよ。俺の本職はあんたのご機嫌を取ることじゃない。だから上手くできない。ただ、それだけのことです。それに――」
公女を真っ直ぐに見る。
「見え見えのおべっかに無邪気に喜ぶような人間には見えないもんでね」
「……なるほど」
サイアは納得したようだった。
「ならば問おうか。――カレルよ。お前の本職とは、なんだ？」
「……なに？」
意表を突く問いかけに、口調が思わず素に戻ってしまった。
試されようとしている――カレルはすぐにそれを感じた。
「お前の本職とはなんだ？　お前たちディグリーズは……ネスティアスとは何のための組織だ？」
「……」
意図を計り損ねて、カレルはひとまず無難な言葉で答えた。
「ネービスを魔から守るための組織――でしょう」
「そうだな。では、その“ネービス”とはなんのことだ？」
「意味がわかりません」
いや、わかるような気はした。が、カレルは思うところがあって敢えてそういう答え方をした。
そんなカレルの考えを知ってか知らずか、サイアは続けた。
「最近は大きな魔の組織の動きが活発になっていると聞く。それに備え、ネスティアスはネービスの街を中心とした大都市周辺の守りを重点的に固めているそうだ。……クレイドウル、ルナジェール、ヴァニィリッツ、ブレインスタン、ホルヴァート――いわゆる戦乱時代、近衛都市と呼ばれた五都市を中心に、だ」
「よく御存知で」
もう驚くことはない。確かにこの公女はよく勉強している。
「しかし当然のことながら戦力は有限だ。ネービス近辺を固めればネービスから離れた地域は手薄になる。たとえば今、我々が向かっ

ている大都市ユーイングもそのうちの一つだ」
サイアはゆっくりと窓の外に視線を移動させた。
「お前ならば当然知っていよう。ユーイング近隣では一ヶ月も前から同じ魔が頻繁に事件を起こしている……が、未だ掃討できていない。犠牲者は増えるばかりだと聞く。あれだけ大きな街の近くであるにも関わらず、だ。……カレルよ。この現状を見ても、お前たちはネービスを守っていると胸を張って言えるか？」
「……お言葉ですが」
カレルは畏まって答えた。
「そこまで勉強されているのなら御存知だと思いますが、最近ベルリオーズという非常に危険な魔の組織がネービス領近辺で不穏な動きを見せております。ネービスの街を守るには現状ですらまだ完璧ではないと思いますが」
淀みなくスラスラと答えると、サイアは初めて不快そうな顔を見せた。
「それと同じ話は父上や兄上から嫌というほど聞かされている。……つまり、お前も首都とその周辺さえ守っていれば良い、と、そう考えるのか」
「ネービスの街が魔の手によって侵略されるようなことがあってはならない、と、そう考えるのは当然のことかと」
「……そうか」
サイアは短くそう言って黙った。違う返答を期待していたのだろう。失望したようにも見えた。
「ならば、今回はお前にとって意味のないことに付き合わせてしまったかもしれんな」
「意味のないこと？」
「……」
サイアは答えずに顔をそむけた。
カレルはその横顔をじっと見つめながら、
「なるほど。この旅自体が父上の方針に対する抗議、ということで

すか」
「……」
何も答えない。が、どうやら図星のようだ。
確かに最初から少々変だとは思っていたのだ。近辺で魔の出没が報告されているこの時期に、わざわざ公女がユーイングへ向かうという話。よほど外せない公用なのかと思いきやどうやらそういう感じでもない。
つまり――
ふてくされたような公女の横顔に、カレルの胸にはこみ上げるものがあった。
「……なにが可笑しいのだ」
密かに笑うカレルに気付いたのだろう。
「いや、すまない。しかし、ま、やっぱ子供は子供だと思ってな」
「なに？」
明らかに気分を害した様子でサイアは彼を睨み付ける。初めて見る彼女の不機嫌そうな表情は年相応の子供っぽいものだった。
「なにが子供だというのだ？　私はネービスに住む者たちが等しく、魔に怯えず暮らせるようになってほしいと考えるだけだ。――私はお前たちも同じように考えていると思っていた。だが、どうやら見込み違いだったようだ」
矢継ぎ早にまくし立てる。
西日を浴びて赤みを帯びた髪が真っ赤に燃えているように見えた。
カレルは笑いをこらえながら、
「そういうことじゃない。そういうことじゃなく、子供ってのは――後先考えてないところが、さ、公女様。……あんた、この旅の途中、本当にその魔の一味に襲われたらどうするつもりだったんだ？」
馬鹿馬鹿しい、とばかりにサイアは鼻を鳴らして、
「そのために腕利きの者たちを連れてきた。連中が姿を現してくれるならいっそ好都合ではないか」
カレルも鼻で笑い飛ばす。

「だからわかってないっていうのさ」
「なに？」
馬車は険しい山道に入っている。
コト、と、カレルは手元に置いた剣に軽く手を置いた。
「公女様。あんた、この近辺に現れた魔のことはちゃんと調べたのか？」
「当然だ。一ヶ月ほど前から旅の者を襲っている。金品が狙いではなく、ただ命を奪っていくだけ。胸の悪くなるような愉快犯だ」
「そうじゃねぇよ」
「なに？」
「その魔が何者かわかってんのか、ってことさ。公女様」
「……何者？　だから旅の者を襲う魔の――」
「ああ、それは間違っちゃいねえ。けど、そいつはそれ以外にも別の個性を持っている」
「個性？」
「そいつはただの賊なんかじゃない。タナトスっていう魔の組織の一員なんだ。タナトス幹部の一人、サモン。サモン＝グリット＝メッツァー」
「サモン……メッツァー……？　タナトスというと――」
タナトスという単語は知っている様子だが、詳細まではさすがに知らないようだ。無理もない。先に出したベルリオーズなどに比べるとそれほど危険視はされてない組織だ。
が、それは単に組織の規模と目的の問題である。個々の能力に関していえば彼らが最高クラスの危険度であることをカレルは知っている。
「なら、こう言った方が公女様にゃわかりやすいか。そいつは雷の将族だ」
「将族……？　――将族だと！？」
瞬時に狼狽の色が走った。
無理もない。通常、魔といえばほとんどが下位魔と上位魔であり、

その上の種族と出くわすことを想定することなど多くはない。公女が魔の一味と聞いて下位魔、最悪でも上位魔だと考えたのは当たり前のことなのだ。

「ば、馬鹿な！　将族！？　もしそうなら、お前以外の者は――！」

冷ややかにカレルは答える。

「誰一人、歯が立たないだろうな。今、あんたを守っているのはただの紙の兵隊たちさ」

上位魔までなら外を固める護衛たちでも――もちろん全員が腕利きでもあり――戦力にはなるし、充分に退けられるだろう。だが、相手が将魔ともなれば話が違う。デビルバスターか、あるいは一部の特殊な人間以外、攻撃のほとんどが魔力の壁によって阻まれ、傷一つつけることが叶わないのだ。

「……」

「……」

サイアの左右に座る侍女たちが不安そうな顔をした。

「し、しかし、皆もネスティアスの者もそのようなこと一言も――」

「そりゃ知らなかっただけだろうな。こいつは入ってきたばかりの最新情報だ。事情があって今は俺を含めてネスティアスでも数人しか知らない」

「――！」

サイアの表情が変わった。先ほどまでとは明らかに違う。自分の身に確実に迫っている危険にようやく気が付いたようだ。

「カ……カレル！　お前――そこまでわかっていて何故そのことを黙っていた！　ま、万が一、その者に襲われたらどうするつもりだッ！？」

その反応はカレルの想像通りだった。

だから淡々と答えた。

「実感したか？　あんたの父上や兄上が何故ネービス周辺の守りを固めようとしているのか――単純な話だろ。敢えて自分の身を危険に晒すってのはものすごく勇気のいることだ。口で言うのは簡単で

も、な。――できもしない理想を語るのは子供だってことの何よりの証拠、だろ？」

「……！」

ハッ、と、公女の目が大きく見開かれた。

そのまなじりにほんの僅かに涙がにじんでくる。

カレルはそんな彼女を再び鼻で笑い飛ばした。

「あんた、味方になって欲しくないのか、と、さっき確か俺にそう言ったよな？　……答えはイエスだ。なって欲しくなどない。張りぼての味方なんてのは居てもただ邪魔くさいだけだからな。あんたには無理。あんたは俺たちの味方になど、なれない」

剣の柄を握る。

――感覚が研ぎ澄まされて、匂ってくる。

万が一、ではない。

必ず来る。

チラッとサイアの顔を見る。

混乱した様子だ。まだ状況が整理できていないのだろう。いくら博識だとはいっても子供は子供。無理もない。

無理も――

（……？）

その瞬間、カレルの脳裏に走った一つの予感。

（なんだ……？）

戸惑った。

それがどこから産まれたものなのかカレルにはわからない。ただ、目の前にいる取り乱した公女の顔を見た瞬間――カレルは思わず口を開いていた。

「……もう一つ、教えておいてやる、公女様」

そう言った。

言う必要のない――いや、言うべきことではない、とわかっていたにもかかわらず。

カレルは“事実”を口にした。

「あんたの情報を流させてもらった。タナトスってのは基本的に愉快犯――人間が大混乱に陥るのを喜ぶ連中だ。そういう意味じゃ、あんたのことはヤツをおびき出すのに好都合だったからな」

「な――」

それ以上は公女の言葉を聞こうとせず、カレルは剣の柄を握ってゆっくりと腰を上げる。

「俺たちは魔の手からネービスを守るためにいる。ああ、そうさ。俺が守るネービスはネービス領の全てだ。だからそのために最善だと思えば、なんでも利用する。ネービス公家の人間だろうと勝手に利用させてもらう。……そういうことだ」

「お前は――私を――」

ついにサイアの目から涙が溢れ、彼女はその目でカレルを睨み付けた。

「フン」

カレルは鼻を鳴らして、

「公女様。あんたは大人しく父上にでも従ってりゃいいのさ。あんたにゃ自分を犠牲にすることなんざ、できねぇよ。この程度のことでビビって取り乱しているあんたには、な」

「ッ――!」

パンッ!!

左の頬に痛みが走った。

「……って」

避けるつもりは最初からなかった。が、思った以上に痛かった。

横目で見ると、振り抜いたままの公女の右手が怒りに震えている。

そこでカレルはようやく冷静になって、そして少し後悔した。

(……ちっ。またリゼットのヤツにうるさいこと言われるな)

これで公女まで敵に回してしまった。彼自身にも後々何らかのお咎めがあるかもしれない。

まあいつものことだが――

――何故、余計なことを言ってしまったのだろう。

それは考えてもわからない。カレルには元来そういうところがある。周りからは（一部を除いて）冷静で冷徹な性格だと思われているが、最終的に自らを動かすのは得体の知れない第六感だったりすることが多い。

獣じみているとでも言おうか、そういう意味で“疾風の牙”と名付けられた彼の称号はなかなかに的を射ている。

今回もおそらくはそういうことだ。

ただ、その第六感が上手く働かなかったということか。

仕方ない。

それに、どうせこの公女は本当の意味で彼らの味方になどなれないのだ。だから……いい。もともと後ろ盾の有無で行動を決めるつもりなどない。ラドフォードだってきっと同じことを言うだろう。

だから、いいのだ。

変に味方面をされてまとわりつかれるよりもこの方がすっきりしていてわかりやすい。

柄を握る手にさらに力がこもる。

――匂ってくる。

まだ距離はわからない。が、確かに進む先にいる。強い敵の気配が――。

その頃、夕焼けに染まるネービスの街。

（カレルたちはそろそろユーイング近辺か……）

落ちていく夕陽を眺めながら。

そのときリゼットはデビルバスターを目指す部隊員たちの指導を終え、訓練場を出て隊舎へ戻るところだった。

と、そこへ、

「リゼット隊長！」

「うん？」

呼び止める声にリゼットはクルリと振り返り、乱れのない姿勢で片手を腰に当てる。――ピンと伸びた背筋に凛とした立ち姿はウィンチェスター劇場の舞台の上でも映えそうなほどにキマっていた。

「どうしたの？」

駆け寄ってきたのはリゼットの部隊員でデビルバスター志望の少年だった。歳はリゼットの記憶が確かならば十四歳。

（十四か、若いなぁ……）

十四歳といえば件の公女と同じ、カレルもまだネスティアスに入隊する前の歳だな――なんてことを考えながら、リゼットは八つも年下の少年にやや艶っぽく問いかけた。

「あ、デートのお誘いなら、残念。僕の予定はずっと先まで埋まってるんだ」

「あ、いえ、それが……」

「？」

普段なら真っ赤になって否定する純情な少年だったが、今日はどうも反応がおかしい。怪訝に思って再び問いかけようとしたところで、リゼットは気付いた。

顔を上げる。

「よぅ。ここにいたのか。リゼット、さん」

上げた視線の先に、リゼットと同じ黒い隊服に身を包む青年がいた。

「……カフィー」

その黒い袖に刻まれた文字は“捌”。リゼットより一つ上のナンバーを持つディグリーズの一人、カフィー＝マーシャルだ。彼はリゼットより一つ年下の二十一歳だが、その年齢よりは幾分幼い少年のような顔立ちをしている。ネスティアスに入ったのもディグリーズとなったのもリゼットよりちょうど一年遅れであり、同じ部隊に所属していた期間も長く、直接の先輩後輩という間柄だった。

「案内ご苦労だったな。もう行っていいぜ」

「は、はい」

少年は心配そうにチラリとリゼットを見たが、リゼットが微笑んでみせると頷いて立ち去っていく。
後には二人だけが残った。
リゼットは部隊員の少年に向けた微笑みを今度は目の前の童顔の青年に投げた。
「カフィー、どうしたの？　僕に用かい？」
「ああ、ちょっとあんたに聞きたいことがあってな。――っと、その前に」
と、カフィーは笑顔を返した。
「体の調子はどうだい？　無茶してねぇか？」
「？　別に普通だけど、どうしたの、急に」
「いや」
カフィーはさらに笑いを振りまきながら言った。
「降格したディグリーズの最下位ナンバーはよく命を落とすって話だから心配になってよ。崖っぷちで功を焦っちまうのかね。ははっ、あんたも気を付けた方がいいぜ」
「……」
悪気がない――わけではもちろんない。
黙ったリゼットに対し、カフィーは少し顔を近付けた。
「ま、無茶すんなってことだよ、リゼットさん。いくら頑張ったところで来年にゃディグリーズから外れるに決まってんだからさ。あんたは、所詮――」
「心配ありがとう、カフィー。でもいらないよ」
リゼットは途中でその言葉を遮った。
表には出さない。だが、手の平には自然と力が入っていた。
「それで？　僕に聞きたいことって？」
「……フン」
つまらなさそうに鼻を鳴らしたカフィーは急に人相の悪い顔つきになり、半身になって軽く顎を上げ、見下ろすようにリゼットを見た。

「新しい部隊配置の話、あんたらも聞いてるはずだよな？　にもかかわらず、ルーベンの野郎が勝手に変な動きをしてるって話を聞いたもんでな」
「知らないよ、僕は。それに今後の配置の話は小耳に挟んだ程度で、指令だって正式に届いてないからね。どっちにしても来月以降の話じゃないのかい？」
「……気に入らねぇな。その、抵抗する気マンマンって態度がよ」
カフィーが睨め付けたが、リゼットは微動だにせず淡々と答えた。
「キミが気にすることじゃないでしょ、カフィー。別にキミ個人に対してどうこうするわけじゃないし」
「生意気なこと言うじゃないか」
気分を害したらしいカフィーの顔を見て、リゼットは逆に冷静になった。
「キミも言うようになったよ。昔に比べれば、ね」
「――カレルさんは公女の護衛任務に出てるそうだな。悪あがきでもしようってのか？」
「何の話？」
「……まあいいさ」
カフィーはリゼットから離れ、黒いズボンのポケットに両手を突っ込んだ。
リゼットは微笑んで言った。
「話はそれで終わり？　良かった。僕にだって一応好き嫌いはあるからね。キミに誘われたらどうしようかと気が気じゃなかったよ」
「……」
余裕の態度が気に触ったのか、カフィーは強烈にリゼットを睨み付け、そのまま立ち去っていった。
見送って、視界から消えてからさらに数秒。
リゼットはホッ……とようやく肩の力を抜いた。
――嫌いな人間の応対を冷静にしようと思えば気も遣うし精神的にも疲れる。特にあのカフィーという男は気に触る部分を的確に突

いてこようとするから尚更だ。
（カレル、上手くやってくれればいいけど……）
天井を見上げながらそう願い――半瞬後にはため息が口をつく。
（って、そんなのムリかな。相手は“あの”カレルだもんね……）
上手くやらなくてもいいから、とりあえず公女の機嫌をヘタに損ねないで欲しいな――と。
少しハードルを下げておくことにして、リゼットは自分の隊舎へと戻っていくのだった。

「馬車を――止めろッ！！」
「？」
突然の叫び。
カレルは遠くの敵に馳せていた意識を正面に戻した。
「……なに？」
馬車が急停止して、周囲を走っていた護衛たちが何事かと戸惑う。
カレルは目の前の公女を見た。
公女は腰を浮かせ、顔を真っ赤にしていた。
涙はまなじりにうっすらと浮かんだままだ。
カレルは眉をひそめて言った。
「引き返すつもりか？　やれやれ。さっきまでの威勢はどこへいったんだ？」
「――」
サイアはキッとカレルを睨み付けた。
「……？」
その表情。
初めてカレルは気付いた。
それがどこか――彼の予想していたものとは違っていたことに。
「誰か！　三人、来い！」

サイアが窓の外に向かって叫ぶ。周りにいた護衛たちが近付いてくると、彼女は続けて左右の侍女に言った。
「ララ、シィ、お前たちは彼らの馬に乗れ。それともう一人は御者を馬の後ろに乗せてやれ」
「なに？」
これにはカレルもさすがに戸惑った。
「おい、あんた。そりゃ一体何のつもり――」
「二人とも急げ。馬から振り落とされないよう気をつけるのだぞ」
「おい――」
「……」
サイアは答えない。侍女も護衛たちも一様に不審そうな顔をしていたが、それでも公女の剣幕に気圧されて大人しくそれに従った。
そして馬車にはカレルとサイアの二人だけが残される。
そして最後に、彼女は言った。
「よし。――外の全員に告ぐ！　お前たちはこれからすぐにブレインスタンへ引き返せ！！」
ざわ、と。
当然の困惑が周囲に走った。
困惑したのはもちろんカレルも同じだった。
「おい……公女様。あんた、一体何のつもり――」
キッ、と。
サイアは涙の浮かんだ目でカレルを睨み付け、そして声を張り上げた。
「私を、侮るなッ！！！」
「――！」
まだ幼さの残る声を張り上げ、毅然とカレルを見据える。
その視線に。その威圧感に。
カレルは不本意にも一瞬だけ思考を停止させてしまった。
「……カレルよ」
サイアは目を細めて言葉を続ける。

その声は再び理性的になっていた。
「将族が相手ならば外の者たちはまったく歯が立たぬ。だが、彼らはそれでも私を守ろうとして何人かは犠牲となるだろう。――勘違いするな。私を囮にして魔をおびき出すというのならばそれは私にとっても望むところだ。だが……それが目的ならばお前と私の二人がいれば事足りる。他の者を危険に晒す必要はない」
「――」
カレルは言葉を失った。
「違うか？　カレル」
「……」
その強い視線。
――カレルはようやく悟った。
肩を震わせ怯えていると思ったのは、侮られたことへの悔しさと怒り。
取り乱したのは、護衛たちが無意味に危険に晒されることを憂えたため。
つまりは――そういうことだろう。
「……は」
微かに開いていたカレルの口が、知らず知らずのうちに歪んでいく。
「ははっ……」
それが笑みの形を作るまでにそれほどの時間はかからなかった。
――この公女はどうやら本当の変わり種だ。
剣の柄をさらに強く握りしめる。
口元を野蛮に歪めて、カレルは問いかけた。
「本当にいいのか？　公女様よ」
サイアは両手を真っ白なドレスの膝に置いて毅然とカレルを見つめた。
濃赤の髪はやはり真っ赤に燃えているように見えた。
「私にも信念がある。私の守りたいネービスもお前と同じ、このネ

ービス領の全てだ。父上や兄上にそれぞれ考えがあるように、私にも私の考えがある」
「……いい返事だ。悪かったな。俺は確かにあんたを侮っていたようだ」
「もちろん」
サイアは最初に会ったときと同じように口の端を軽く上げ、高慢な表情でカレルを見た。
「お前は私を全力で守ってくれるのだろうな？　その命を賭して」
「ふん……」
カレルは悪態を付きながら手を伸ばし、馬に鞭を入れる。
一回大きく上下に揺れ、馬車は戸惑う護衛たちを置き去りにゆっくりと走り出した。
「俺たちゃいつだって命懸けだ。けど、いつだって信じてるのさ。俺たちの力が、確実に俺たちの守りたいモンを守れるってことを」
近付く、気配。
少しずつ、少しずつ。
極限にまで研ぎ澄まされる感覚。
「あんただって例外じゃない。あんたはネービスの一部で、俺の守るべき対象だ。だから守ってやる。……この命を賭して、な」
「……」
サイアが満足そうに微笑んだ。
それ以上言葉を交わすことはなく、カレルは全ての意識を迫り来る戦いへ集中させる。
全身に生えた産毛の一つ一つまでがまるで触角のように。
そして突如――閃光。
向かう先、悪意を持つ者が放つ稲光。
それと同時に。
カレルは風を巻いて獣のように馬車を飛び出した。

「……」
そして――カレル＝ストレンジは今日も不機嫌だ。
「どしたの、カレル？」
ブスッと執務机に着いたカレルに、リゼットは相変わらず机の端に軽く腰掛け、その顔を覗き込むようにした。
「眉間に皺寄ってる。ね、ルーベン。何かあったの？」
「さあ」
室内にも関わらず日傘を手にしたルーベンが興味なさそうに答える。
「昨日盗んだ下着の隠し場所でも考えてるんじゃないですかね」
「そうなの？　なぁんだ。わざわざそんなことしなくとも、僕の下着だったら快く提供してあげるのに」
「残念です。カレルさんの触角は十歳以下にしか反応しません」
「あ、どーりで。僕がいくら誘惑しても反応しないからおかしいなぁ、と」
「まあ、リゼットさんの場合はきっとそれ以前の問題ですけど」
「……」
カレルは時折不思議でたまらなくなる。
自分の部屋は何故こんなにも考え事をするのに不適な環境なのだろうか、と。
「幼なじみとしては責任感じちゃうな。そういう性癖はだいたい幼い頃に形成されるっていうし。僕がしっかりカレルを導いてあげていればこんなことには――」
「それじゃ別の間違った方向に向かうだけです、きっと」
「……うっせぇぞ、お前ら。勝手に人を変態扱いしてんじゃねぇ」
バン、と、机を叩く。
まともに相手にするのも馬鹿らしいが、放っておけばいつまで続

くかわからない。
　リゼットが再びカレルの顔を覗き込むようにして、
「なぁんだ。聞こえてるんじゃない。で？　なにかあったの？」
「なにもねぇよ」
「なにもないって顔じゃ――あれ？　なに、この封筒」
　書類に埋もれていた封筒をリゼットが目ざとく発見する。そしてカレルの許可もなく勝手に開いてしまった。
「招待状？　ネービス公家主催の夜会？」
「……」
　無言のカレルを見て、リゼットは僅かな思考の後、
「……へぇ。やるじゃない、カレル」
　事情を察したようだ。少し意地の悪い笑みを浮かべてそう言った。
「どうやったのさ？　その顔で甘い言葉を囁いたのかな？　それともキミらしく力ずくで――」
「刺すぞ、てめぇ」
「うわわっ。カレル、目、目がマジだよ」
「俺はいつだって本気だ。改めて確認してみるか？」
「じょ、冗談だってば。ほ、ほら、カレル、落ち着いて。早まらないで。思い出してみてよ。キミと僕との輝かしい思い出の日々を」
「……」
「うわわわッ！　目がさらに怖くなってるよ！」
　喉元に突きつけられた銀色の切っ先にリゼットが慌てて両手を挙げながら後ずさる。その手から落ちた夜会の招待状をルーベンが空中でキャッチした。
「でもアレですよ。確かあの公女は二十人近く婚約者候補がいるって話ですし、色々バリエーションを揃えておきたいだけじゃないんですかね」
「だ、だとしてもすごいことだと思うよ……そ、そっかぁ。ようやく僕以外にもカレルの魅力に気付く人が現れたんだぁ」
「フン」

カレルは鼻を鳴らしてリゼットを一瞥し、パチン、と剣を鞘に収める。
リゼットはホッと両手を下ろして、
「でも実際どうだろ。ネービス公は婿選びを娘に一任する方針みたいだし、ひょっとしたらひょっとするかも？」
「するか、アホ」
馬鹿らしいと言わんばかりに戻ってきた招待状をビリビリと破く。
「あ！　あーあ……もったいない」
「タキシードなんざ俺には似合わねぇよ」
紙屑になった招待状をぽいっとゴミ箱に捨てる。
「そうかなぁ。キミが興味持ってないだけでしょ」
リゼットはそれを視線だけで追いながら、
「もしかしたらネービス公家の一員になれるかもしれないんだよ？　そうなれば危険な戦いをしなくても生きていけるようになるのに」
と、すでに答えを知っている顔で問いかけた。
「これっぽっちも興味ねえ」
ため息が漏れた。
「ホント、不器用だなぁ。そんなんじゃきっと一生剣を手放すことができないね」
「……元からそのつもりだ」
「そ、っか」
リゼットはどこか嬉しそうに微笑んだ。
「ね、カレル。久しぶりに僕と手合わせしてみない？」
「はぁ？」
唐突な申し出にカレルは眉をひそめて、
「別に構わんが、少しは上達したんだろうな？」
「うっわ。天下のディグリーズの一員に言う台詞じゃないなぁ、ソレ」
カレルは不機嫌そうに鼻を鳴らして、
「知らねぇよ。なんだろうとテメェはテメェだ。リゼット＝ガント

レット。俺に一度も勝ったことのないヘタレ剣士だろ」
「む。ウソだよ。何回も勝ったことあるじゃない」
「いつの話だ？」
「もぅ、カレルってば自分に都合の悪いことはすぐ忘れちゃうんだから。……ほら、たとえば十一年前の九月の――」
「……もしかして後ろからいきなり脈絡なくブッ叩いてきたときのことか？」
「それと九年前の一月――」
「……風呂場に突然乱入してブッ叩いていったときのことか？」
「それ以外にも確か色々と――」
「……」
すくっと立ち上がってカレルは脇の愛剣を手に取る。
「来い、リゼット。相手になってやる」
「え？　あれ？　カレル、なんか目がコワいよ？」
「怖かねぇよ。――いいから来いよ、コラ」
「……あ。あれ」
リゼットは助けを求めるようにルーベンを見て、
「あ、ね、ねぇ、ルーベン。僕、もしかしてなんか早まっちゃったかな？」
ルーベンは四つ葉のクローバーを指先でクルクル回しながら答えた。
「ご愁傷様です、リゼットさん」
「……」
リゼットの笑顔が引きつる。
「――早く来いっつてんだろうがッ！！」
「うわわっ、ご、ゴメンよ、カレル！　全身全霊を込めて謝るから、だからどうかお手柔らかに～～！」
リゼットがバタバタとカレルの後を追っていく。
「お疲れさまです」
ペコリと頭を下げるルーベンの視線の先でドアがバタンと閉じた。

特に珍しくもない、ディグリーズでの日常の一コマである。

プロローグ

目的の人物の名前を宿の青年に伝えると、2階の南側、1番奥の部屋だと丁寧に教えてくれた。

礼を言ってカウンターを離れる。コツ、コツと階段を上り左右に伸びた廊下を右へ。突き当たりに窓があってそこから正午の光が射し込んでいた。

ドアの前で立ち止まり、ノックをしようとして僅かに躊躇する。

しかし。

左手の中の手紙に視線を落とす。

差出人の名はルナリア＝ローレッツ。彼女はどういう方法でか、この短期間の間に私たちの宿を突き止めたようだ。文面からすると彼がデビルバスター試験を受けるということも知っている。――なら、ここで逃げ出してもどうにもならない。

グッと右手に力を込め、ノック。すると、すぐに部屋の中で人の動く気配がしてドアが開いた。

現れた顔を見た途端、胸の中が色々な感情で満たされていく。そして、それは決して悪い感情ばかりではなかった。

何もなければ――そう、何もなければ、私だって彼女と話したいことが山ほどあるはずだったのだ。

「お嬢様――」

呟くようにそう言った彼女に対し、私は感情を隠して視線を向けた。

ゆっくりと、ドアが大きく開け放たれる。その向こうにいる女性は雰囲気こそ僅かに変わってはいたものの、基本的には私の古い記憶のままだった。

「手紙1つでお呼び立てしてしまった御無礼をお許し下さい。本来なら私の方から出向かねばならないのですが、お嬢様には複雑な御

事情があるものと感じましたので、それならばこちらの方が話がしやすいだろうと勝手に判断いたしました」

「賢明な判断だわ。さすがね、ルナ」

私がそう言うとルナ――ルナリアは少し表情を崩して微笑んだ。

懐かしい――

その一瞬だけ私の心は温かいもので満たされた。

が、それはすぐ現実に戻ってくる。――そう。今は手放しで懐かしんでいられる状況ではない。彼女がどこまで知っているのか。そしてこれからどうするつもりなのか。

それを確かめ、そしてどうするべきか、判断しなければならない。

「どうぞ中へ。今、主人は仕事で外に出てますから」

促されるまま部屋の中へ足を踏み入れる。キャンという鳴き声に視線を動かすと、白い子犬が人懐っこい目でこっちを見ていた。

どうやら先日の捨て犬を結局拾ってきてしまったようだ。

「比較的長く滞在するつもりですから。その間に飼い主が見つからなければそのまま連れて帰ろうと思っています」

ルナはそう言った。

彼女らしい――そう思いながらさらに部屋を見渡す。彼女が1人でないことはすぐにわかった。明らかに2人分以上の荷物がある。

「いつ結婚を？」

「ちょうど1年になります。――どうぞお掛け下さい。今、紅茶を煎れますから」

「相手はどのような方？」

「ジェニスの領主様にお仕えしております。今回はデビルバスターをスカウトする仕事でこの帝都へ」

なるほど、偶然というのは重なるときは重なるものだ。

「それでティースのことがわかったのね」

「はい。ネービスの名家、ミューティレイク家の支援を受けている団体に所属しているとのことで驚きました。宿を突き止めるのには少しお金を使いました。でも主人にはまだ何も言っていません」

コポコポと琥珀色の液体が真っ白なティーカップの中に注がれてアッという間に満たされる。
差し出されたカップを無言で受け取り一口。
――これも懐かしい。
「最初に1つ確認させてください。お嬢様」
「なに？」
ルナは自分の分の紅茶は煎れずに膝の上に両手を置き、ひどく畏まって真っ直ぐにこちらを見た。
窓から射し込む陽光に彼女の白いカチューシャが輝いた。
「あなたは本当にシーラ様なのですか？　それともシルメリア様ですか？」
予想していた問いかけだ。私は淀みなく、逆に問いかける。
「それは私が聞きたいわ、ルナ。あのとき何故、私のことをシルメリアと呼んだの？　シルメリアはもう3年以上も前に死んでしまっているのに」
「もちろんそうです。そのはずです。けれど」
視線を流して難しい顔をするルナ。
「御存知のとおり、私はお嬢様方が常日頃から頻繁に入れ替わっていたことを知る唯一の人間です。――あの日も、そう。朝からお二方が入れ替わっていたことも知っていました」
「そう」
知られていることは私も知っていた。だから先日の呼びかけもおそらくそういう意味だろうとわかっていた。
「ならこう答えさせてもらうわ。私は“世間的には”レビナス家の次女、シーラ＝レビナスよ」
ルナは残念そうな顔をした。
「本当のことは教えていただけないのですか」
「それを尋ねることに意味があるのかしら」
私は緊張を悟られないように平静を装い、密かに乾いている舌を潤すために紅茶を手にとってそっと口を付けた。

「あなたも知ってのとおり、私たちは小さい頃からことあるごとに入れ替わってきたわ。だから、産まれた瞬間とあなたに初めて会ったときではすでに違っていたかもしれない。そもそも、あなたが本当のシーラだと思っている方がシルメリアなのかもしれないのよ」

稚拙なすり替えなのはわかっている。それでも私はいったん言葉を切って、少し考えてからさらに続けた。

「だから“世間的には”シーラ。それでいいでしょう？」

ルナはゆっくりと目を閉じて考え込んだ。

少し鼓動が早くなる。

たぶん、見抜かれている。

「では、質問を変えさせてください、お嬢様」

ルナは閉じたときと同じようにゆっくりと目を開いて、そして言った。

「お嬢様はティースくんのことをどう思っていますか？」

「ティースのこと？　どういう意味？」

戸惑う。が、次のルナの言葉ですぐにその真意が掴めた。

「私がシーラ様だと思っていた方は彼のことをとても慕っていました。逆にシルメリア様だと思っていた方は彼のことを疎んじていました」

「……」

ルナは私に考えるヒマを与えずに付け加えた。

「私があなたのことをシルメリア様とお呼びしたのはそういう意味なのです。そして私はそれを一番知りたいのです」

さらに鼓動が早くなる。カマをかけてきている可能性もある。私は何も答えなかった。極力何の感情も表情に出さないように気を付けてルナの言葉の続きを待った。

「私が何故このようなことを尋ねるのか、聡明なシルメリアお嬢様であればおわかりでしょう」

ルナはもう疑問の言葉を口にしない。はっきりとその名で私を呼んだ。

「私が心配しているのはティースくんのことなのです。……彼があなたを連れて屋敷を出ていったとき、私は本当に悲しかった。私に何も相談してもらえなかったことが本当に寂しかった」

そう言ってルナは視線を伏せた。

子犬が彼女の足下にすり寄って慰めるような声で鳴く。

ルナはそっと子犬の背を撫でた。

「それでも、あなたが本当にシーラ様であったなら私はそれを喜んだでしょう。シーラ様はティースくんのことを慕っていましたし、ティースくんはシーラ様のことを本当に大事に思っていましたから」

「……そうね」

頷くしかない。それは紛れもない事実だ。

「お嬢様」

ルナは優しい顔で子犬を抱き上げる。子犬は安心したように目を細めた。

「私は本当にただ、姉としてティースくんのことが気にかかっているだけなのです」

「……」

私はルナのことを本当によく知っている。のんびりとしたその外面とは裏腹に頭の回転の速い女性だ。それだけじゃない。誰も嫌わず、誰にも偽らず、少しも驕らない。聖女を絵に描いたような人。私も幼い頃、彼女のようになりたいと何度思ったことか。

そんな彼女が口にする言葉は、何らかの特別な事情がない限り、表向きの意味そのままだ。

つまり――彼女が“気にかかっていた”ではなく“気にかかっている”と言った以上、それは紛れもなく現在進行形だということ。

これから続くであろう彼女の言葉が、私にとって決して愉快ではない内容になることは火を見るより明らかだった。

「ですから、シルメリアお嬢様。これはおそらくお嬢様にとって決して愉快ではない質問だと思いますが、私の気持ちを汲んでどうか偽ることなくお答えください」

彼女もわかっている。
わかっていて質問してくる以上は、逃げられない。
ルナは言った。
「お嬢様は、彼を――ティースくんをどうなさるおつもりなのですか？」
「……」
どうするつもり――か。
おそらくルナはもう彼女なりの答えを持っている。だからこその“心配”なのだ。
胸に浮かんだ様々な感情を余所に、私は答えた。
「あの子が死んだ責任を取ってもらうつもり……と言ったら？」
ルナの表情が瞬時に歪んで悲しそうな顔になった。
ズキン、と胸が痛む。
「シーラお嬢様のことはティースくんの責任ではありません」
「そうね。でもそう思ってない人もいる」
私はゆっくりと目を閉じた。
その瞼の裏に浮かんだのは、私と同じ顔をした少女の姿。彼女は3年以上前に死んだ。それは紛れもない事実。しかし――その“彼女”が“誰だったのか”という疑問を向けられたのはこれが初めて。そしてきっと最初で最後だろう。それを疑える可能性のある者は彼女しかいないのだから。
「どうするつもり……なのかしらね」
「お嬢様……？」
可笑しくなった。まるで誤魔化しのように聞こえるその呟きが、現状をもっとも正確に表現している。
「少し休憩しましょう、ルナ。私も頭の中を整理したいの」
ルナは不思議そうな顔をしたが、すぐに私の言葉の意味を理解したのか柔らかい表情を見せた。
「紅茶のおかわりはいかがです？」
「いただくわ。……あなたの煎れる紅茶が一番好きよ。本当に。あ

なたのご主人が羨ましいわ」
ルナはクスクスと笑って、
「あの人、紅茶は飲みませんから」
コポコポと白いカップが湯気を立てる。
「あら。勿体ないわね。こんなに美味しいのに」
「光栄です、お嬢様」
そんなルナの優しい微笑みを見ていると、あの頃の風景が蘇ってくる。
……それもいいのかもしれない、と、ふと思った。そうすることで、もしかしたら何かが見えてくるかもしれない——そんな淡い期待を抱いて、私は少し記憶の中を旅することにした。

その1『サバイバル』

帝都の早朝。
その一角のとある宿に慌ただしい物音が響いている。
「ティースさん！　早く早く！　受付、始まっちゃってますって！」
「す、すまん、パース！　お前だけ先に行っててくれ！」
そこが1階で、かつ泊まり客の少ない宿であったことが幸いだった。でなければ他の泊まり客からクレームが来ていたに違いない。
「なに言ってんスか！　ここまできて遅刻で不合格なんて目も当てられないっすよ！　待ってますから急いで急いで！」
部屋の入り口でそう急かす少年の名はパーシヴァル＝ラッセルという。この6月、帝都で開かれるデビルバスター試験の受験者の1人で、デビルバスター集団“ディバーナ・ロウ”の一員である。
平均よりやや小柄であるものの、なかなかの美少年だ。
そしてもう1人――
「わ、悪い、パース。え、ええーっと何か忘れ物は――」
「あ、ティース様！　武器が置きっぱなしに――」
「う。さ、サンキュー、フィリス！」
「ティ、ティース様！　受験証をお忘れです！」
「あ！　す、すまん！　助かったよ、パメラ！」
「ティースさん！　急いで急いで――！」
見送りの少女たちにペコペコと頭を下げながらようやく部屋を飛び出したのがこの物語の主人公、ティーサイト＝アマルナその人である。
ひょろっとした長身、撫で肩、やや猫背で童顔というなんとも頼りなさそうな外見だが、彼もまた大陸屈指の難関であるこのデビルバスター試験の受験者だというのだから世の中わからないものだ。
さて、そんな彼らの現状をおさらいしておくとしよう。

ディバーナ・ロウのデビルバスター候補生であるティースとパーシヴァルが、年に1度のデビルバスター試験を受けるため、帝都ヴォルテストにやってきたのが10日ほど前のことだ。

そんな彼らの他、ディバーナ・ロウの後輩である護衛役、クリシュナ＝ガブリエル、身の回りの世話や体調の管理役、シーラ＝スノーフォール、フィリス＝ディクター、そしてパメラ＝レーヴィットの3人の少女たちも一緒である。

さて、目的であるそのデビルバスター試験は1週間前からすでに始まっており、一昨日までに2科目が終了した。

なお、このデビルバスター試験は全4科目で構成されており、毎年2千人余りの受験者は最初の科目“測定”試験で半数近くが落とされ、2つめの“筆記”試験で千人以下にまで減る。今年はこの時点で残りが800人余り。

ティースとパーシヴァルの2人はこの800人余りの中にどうにか残っている――と、そんな状況であった。

「――じゃ、じゃあ行ってくるよ！」

「ほら、ティースさん！　早く早く！」

ドタドタドタ、ガチャ、バタン！　と。

遠くなっていく慌ただしい足音。

そんな2人の足音を聞きながら、部屋に残された2人の少女はホッと胸をなで下ろした。

「どうにかなりそう、かな……」

「だね」

互いに顔を見合わせ、苦笑を交わす少女たち。慌ててはいたが、急げば受付には充分間に合う時間。何事もなければ遅刻するということはないだろう。

「さて、と」

グッと軽く背伸びをしたのは純朴そうな少女――パメラ＝レーヴィットだった。

「フィリスは今日どうするつもり？」
問いかけられた――まるで羊を思わせるふわふわの髪の大人しそうな少女、フィリス＝ディクターは、少々困った顔で首をかしげる。
「なにも考えてないけど……パメラちゃんはどうするの？」
「私は屋敷のみんなのお土産をみてこようかなって。エレンに髪飾り頼まれてるし……」
と、パメラは答えた。
２人の受験生が万全の状態で試験を受けられるようにと、身の回りの世話役として派遣されてきた少女たちだったが、主役であるティースとパーシヴァルがいない間は基本的に暇である。もちろん何かあったときにはその対応やミューティレイクへの連絡を手配したりしなければならないが、基本的に何も問題が起きなければ何もすることがない。
滅多に訪れる機会のないこの大陸一の都でゆっくりと観光を楽しむことも充分可能で、彼女らの同僚たちがこの任務を羨ましがったことも、あながち的はずれなものではなかった。
ただ、この２人の少女に関していえばどちらも根が真面目なこともあり、それほどハメを外すことはなく。
フィリスはニコリと微笑んでパメラに言った。
「いいよ。じゃあ私、お留守番してるから」
「ごめんね。……クリシュナ様がいたら２人でお出かけしたいと思ってたんだけど……」
パメラは残念そうに呟いた。
さすがに宿を空っぽにするわけにはいかない。サポート役としてついてきたうちの１人、クリシュナ＝ガブリエルは今日も朝早くから姿が見えなかった。
「たまには留守番ぐらい引き受けてくださってもいいのに。そりゃクリシュナ様は護衛役として来られたのだから、しばらくお役目はないのだけれど……」
不満そうに呟いたパメラに、フィリスが言った。

「そういえば今朝はシーラ様も早くにお出かけになったみたいだね」
シーラの名前が出ると、パメラはパッと表情を変えて、
「あ、うん。シーラ様だったらお知り合いに会いに行かれたみたい」
「え？　帝都に知り合いがいるの？」
「うん、すごいよね。でもシーラ様ならなんか納得かなぁ」
そう言ったパメラの目は憧れの色で輝いていた。
「シーラ様って一般人なのにどこか高貴な雰囲気をお持ちだもの。シーラ様ならきっと帝都の社交界に出てもまったくヒケを取らないんじゃないかな」
「う、うん、そうかもね……」
フィリスは少し控えめに相づちを打った。パメラの意見に異論はなかったものの、崇拝のようにも感じられる彼女の態度に少々気圧されてしまったのである。
（でも……）
言葉には出さず、フィリスは視線を外に向けた。
（シーラ様、最近少し様子がおかしいような気が……）
確信ではない。というより思いつきに近い。元々フィリスはそれほど勘が鋭いタイプの人間ではなく、どちらかといえば鈍い方だ。そのことで使用人の同僚や、彼女が所属するディバーナ・ファントムのチームメイトにもからかわれている。
ただ、そんな彼女が感じた違和感。――今回に限って言えば、それは少なからず的中していたといえるだろう。
もっとも――彼女がその違和感を口にすることは最後までなかったのだが。

ざわ、と。
周りがざわめいた。
「やっぱ注目されてるっすね」

その動きに先に反応したのはパーシヴァルだった。
そして、
「え？　なにが？」
と、相変わらず鈍感なティース。
だが、そんな彼も周りに視線を動かしてようやく気付いた。
デビルバスター試験の受付会場には受験者の他、たくさんのスカウトたちも姿を見せている。そんな受験者、そしてスカウトたち。その両方から様々な思惑のこもった視線がティースたちに向けられていたのだ。
「？」
最初、どうして自分たちが注目されているのかわからなかったティースだったが、パーシヴァルが誇らしげに言った次の言葉で理解した。
「ま、聖力測定であれだけ高い数値が出せば当然っすけどね」
「ああ……いや、まぐれだよ」
ティースが照れ隠しにそう返すと、パーシヴァルは即座に答えた。
「聖力の数値にまぐれはないっすよ」
そう。
その原因は数日前に行われた第１試験“測定”試験に遡る。
第１試験“測定”は、デビルバスターとして決して欠かすことのできない“聖力”の測定試験である。“魔”の纏う絶対防壁“魔力の壁”を破るための基本的な能力――聖力は鍛錬によってある程度鍛える（正確には全身に巡る聖力を一点に集中する）ことはできるものの、他の要素と比べ圧倒的に天性の素養に左右される割合が大きい。そのため、各国のスカウトたちの中には戦闘技術そのものより重視する者も多い。
そんな聖力の測定試験において、ティースはなんと、この２千人を超える受験者の中で上位１０名の中に入ってしまったのだ。
デビルバスター試験そのものの合格者が毎年だいたい２０名余りだから、聖力の数値だけ見れば彼は悠々と合格ラインを突破したこ

とになる。
結果、ほぼ無名だった彼はいきなり各国のスカウトとライバルの受験者たちに名前を覚えられることになったわけである。
――本人にとってはまことに厄介なことに。
（これじゃ変にプレッシャーになっちゃうなぁ……）
第２試験の筆記は対照的にギリギリでの通過だったものの、今日の様子を見る限り、周囲からの注目度に変化はないようだ。
「筆記なんて合格さえすれば点数なんてどうでもいいわけで」
とは、パーシヴァルの弁である。
「ま、どっちにしても本番はこれからっすけどね」
パーシヴァルは笑っていた表情を急に引き締めて周りを見回した。
広大な会場にはここまで残った８００人余りの受験者たちが勢揃いして次々に受付を済ませていく。
第３試験“サバイバル”――
「例年、この試験で５０人ぐらいまで落とされるらしいっす」
「５０人、か……」
単純計算で１６人に１人。最終的な合格者が２０名強だとすると、この第３試験さえ突破すれば残った半分近くが合格する計算になるのだから、まさに正念場といえるだろう。
その第３試験は“サバイバル”の名が示すとおり、実戦さながらの生き残り戦である。
唯一、帝都の外に移動し、高い塀に囲まれた１つの街より大きい広大な森に１０日分の水と食料を持って入り、特定の条件を満たしつつ生き延びる。“生き延びる”という条件からわかるとおり、その森には敵――数種類の最下級獣魔が放たれている。
最下級とはいえ、獣魔は獣魔。毎年、必ず死者の出る過酷な試験だ。
「――なお、特定の条件とは、君らの手元に配られたその袋を１０日間守り抜くことだ」
全員が受付を済ませた後、８００人の受験者を前に５０歳ぐらい

の試験官がよく通るバリトンの声で第3試験の説明を始めていた。
「その袋はこの試験において“クライアント”と呼ばれる。その名のとおり、デビルバスターとなった君たちの仮想依頼主・依頼品だと思ってくれればいい。その袋からはほんの僅かではあるが森の獣魔たちを引き寄せる匂いが出ており、そのクライアントを獣たちの襲撃から10日間守り抜くことが合格の条件だ。ただし――」
と、初老の試験官は淡々と続けた。
「身の危険を感じ、限界だと感じたときは迷わずそれを放り投げて逃げた方がいいだろう。この試験はいつでも君らのリタイアを認めている。試験は今年だけではない。死んでしまえば次のチャンスは永遠にやってこないのだからね。なお――」
説明が延々と続く。
（10日間、か……）
ティースの手元にも先ほど説明のあった袋“クライアント”がある。鼻に近付けてみたが特にそれらしき匂いはしない。
「なあ、パーシヴァル」
ふと、思った。
「？　なんスか？」
「この試験って受験者同士が協力するのはいいのかな？　目的が身を守るってことなら集団で動けばそれだけ有利ってことになるだろ？」
「え？　それはまあ……そうっすね」
パーシヴァルは意表を突かれたような顔をした。
「ここにいる800人全員が協力すれば10日間生き延びるなんて簡単なことじゃないのかなぁ」
まさにそのとおりである。それは極端な例であるとしても、たとえば5、6人のチームを作って行動するようにすればそれだけで生存率はグッと上がるだろう。
しかし、それだと受験生の間で不公平が生じることになるのではないだろうか。たとえばティースとパーシヴァルのように、元から

の知り合いがいたほうが有利、つまり最終的には何らかの組織に属している受験生が圧倒的に有利になってしまうのではないか。

（でも禁止なら禁止って言うはずだよな……）

初老の試験官はそのことには一切触れていない。パーシヴァルもわからないらしく首をかしげていた。

説明が終わったら質問してみるべきだろうか――なんて考えていると、後ろから突然声が聞こえた。

「そいつぁ自由だよ。まぁ、実際やるかどうかは別だがな」

「え？」

ティースとパーシヴァルが同時に振り返ると、そこには無精ひげを生やした一見汚らしい風貌の男がいた。ずっとそこにいたのだろうか。記憶にない。

驚く2人を余所に男は続けた。

「ただし、森に入るときは５０カ所もある入り口に全員がランダムで振り分けられる。だからあんたたちみたいな元からの顔見知りが示し合わせて協力するってのは現実にはなかなか難しい」

「あなたは？」

パーシヴァルがそう問いかけると、男はそのひげ面に似合わない人懐っこい笑みを浮かべて名乗った。

「いきなりですまん。俺はシアボルド＝マティーニ。シアでいい。あんたたちは？」

と、シアボルド――シアは2人を見た。

無精ひげのせいか一見２０代後半ぐらいに見えたが、よく見ると童顔で笑顔も幼い。ティースと同じかあるいは年下なのかもしれない。

「ティーサイト。ティーサイト＝アマルナといいます」

「パーシヴァル＝ラッセルです」

「よろしくな」

差し出された手を軽く握って挨拶をかわす。小さな手だった。よくよく見ると身長的にもやや小柄、平均より小さめのパーシヴァル

よりもさらに背が低いようだ。
「あ、それで、シアさん――」
「シアでいい。俺も呼び捨てにさせてもらうしさ」
と、シアは再び人懐っこい笑みを浮かべる。
ティースも了解して口調を砕いた。
「えっと……じゃあ、シア。今の話だけど――」
「ああ、協力プレイはまったく問題ない。……なんで知ってるのかって聞きたそうだな？　俺は今年で４回目の受験なんだ。だから信用してもらって構わないぜ？」
「あ、いや、そうじゃなくて……」
それについてはティースは最初から疑っていなかった。
「その後の“やるかどうかは別”ってのはどういう意味なんだ？　問題ないのなら協力した方が絶対に有利じゃないのか？」
「ああ、そっちか」
シアはフフンと笑った。
「簡単なことさ。――さっきも言ったように顔見知りが森の中でうまく再会できる保証はない。つまり協力プレイをするとなれば、ほとんどの場合はまったく見知らぬ他人同士で組むしかない」
ここがミソさ、と、人差し指を立てて難しい顔をした。
「重要なのは、この試験に合格してもまだデビルバスターにはなれない、ってとこだ。最終試験のトーナメントはいわば椅子取りゲーム。そこで誰もが考えるのは――」
「ライバルは少ない方がいい……ってことスか？」
パーシヴァルの回答にシアはニヤリと笑った。
「そう。しかも最終試験は純粋な力比べだ。だったら皆、手強そうなヤツにはこの第３試験で消えて欲しいと考える。何故なら――」
シアは自分の首にぶら下げたクライアントを指さした。
「この試験では実力で相手を倒す必要がないからだ。ちょいと頭を使ってこいつをかすめ取ってしまえば、それでゲームオーバー。強力な競争相手が消える」

「……」
「……」
ティースとパーシヴァルは顔を見合わせた。が、なるほど、言われてみればその通りだろう。クライアントを狙ってくるのは何も獣魔だけではないというわけだ。
と、そんな意表を突かれた顔の2人を交互に見て、シアは満足そうに頷いた。
「やっぱ声をかけて正解だったな。2年前は俺もそんな感じでよ。それで去年と一昨年の2度、痛い目にあった。……ちなみに最初の1回は甘く見ていた筆記で落ちたんだけどな」
言って、笑う。
「俺は腕の方には自信あるんだが頭がなかなか回らなくてね。2年も無駄にしちまった。だからあんたらみたいのはどうしても放っておけないんだ」
「そっか……忠告してくれてありがとう、シア」
ティースは素直に感謝した。確かに、彼の忠告がなければそういう考え方に気付かなかったかもしれない。
シアはひげ面に人の良さそうな笑顔を浮かべた。
「いや、感謝されるほどのことじゃない。じゃ、俺はこれで。あんたらの健闘を祈ってるぜ――って、おっと」
いったん立ち去りかけて、シアは足を止めた。
「そうそう、もう1つ忘れてた。……ティーサイト。その首にぶら下げたクライアント、実は種類があるってことは知ってるか？」
「種類？　いや、全然」
と、ティースは首にぶらさげた袋を見下ろす。
知るはずもない。見ることも初めてなのだ。
シアはティースのところまで戻ってきて、自分の首のクライアントをプラプラと揺らした。
「実はそれぞれに配られるクライアントには4種類あってな。見た目にはわからないがそれぞれに違う匂いを発していて、引き寄せや

すい獣魔の種類が決まっている。それを知っていれば森のどこに滞在するのが有利か、ってこともわかってくる。ま、これも過去2年の失敗と引き替えに手に入れた知識だがな。貸してみな。調べてやる」

そこまで一気に言って、シアは相変わらずの人懐っこい笑みを浮かべながらティースに向かって手を出した。

「わかるのか？」

「一見しただけじゃわからないが、実は確かめる方法がある。ちなみに俺のは地の獣魔を引き寄せやすいタイプだ。地の獣魔が少ないのは森の東北辺り。つまりその辺りを中心に動くと危険度はグッと減る。これを知ってるのと知らないのとじゃ全然違うぜ」

なるほど、とティースは思った。

「じゃあ頼むよ、シア」

と、首にぶら下げていたクライアントを外してシアの方に差し出す。

「あ、じゃあ俺もお願いしていいっすか？」

パーシヴァルも続いた。

「ああ、もちろんさ。んじゃティーサイトの方からな。ちょいと借りるぜ。微妙な違いだから少し時間が――」

相変わらずの人懐っこい笑顔を浮かべてシアがそう言ってティースのクライアントに手を伸ばした、そのときだった。

「――待ちなさい、シアボルド＝マティーニ」

少し特徴的なアクセントを持つ男の声が響いた。

「またそうやって他人を陥れるつもりですか？　相変わらずですね」

「え？」

そう言いながら近付いてきたのはこれまた20歳前後の男だった。丸い眼鏡に切れ長の細い目。地方の伝統衣装だろうか、どこかで見たような複雑な文様の長羽織。

男は眉間に皺を寄せてシアを見つめ、それからティースたちに視線を移動させると冷たい声で言った。

「それをその男に渡したら偽物にすり替えられて戻ってきますよ。必死の思いで10日間守り通してみたら真っ赤な偽物で失格……ひどい話です」

小さく首を振った男は、再びシアを鋭い視線で捕らえた。

「去年は世話になりましたね、シア。おかげで1年も無駄にしてしまいましたよ」

「ルドルフ＝ティガーかよ。……ちっ」

舌打ちしてシアは手を引くと、小馬鹿にしたような顔でティースを一瞥する。

「え、シア……？」

ティースの言葉には反応せず、シアはふてくされた様子でそのまま立ち去っていった。

「……え？　あれ？」

呆気にとられるティースたち。

長羽織の男は言った。

「気付きませんでしたか。どうやら聖力測定のときから目を付けられていたようですね」

「え……」

ルドルフは再びシアが去っていった方角に視線を移す。

「シアボルドは毎年ああやって有望そうな受験生を潰して回っているのです。私も去年騙された口でしてね」

そう言って再び眉間に皺を寄せた。

「試験はもう始まっています。広大な森の中では試験官の監視にも限界がありますし、受験者同士の騙し合いどころか殺し合いだって起こり得る。実際――」

と、ルドルフは右手をゆっくりと会場内の一点に向けた。

まず複雑な文様のバンダナが目に入った。よく見てみると大柄ながら細身の男で、背中には長めの槍と短めの剣を1本ずつ背負っている。顔は遠くて見えない。

「彼はヒューイット＝レーゼルといいます。昨年の受験者で最終試

験に残った1人ですが、この第3試験において受験者を2名殺害した疑いがもたれている男です。あくまで疑い、ですが……」

「同じ受験者を……殺した……？」

驚きに目を見開いたティースたちに、ルドルフはさらに別の人物を指さす。

「ファティマ＝ヴェルニー。女性では今回の最有力候補です。ただ、元々は南の発展途上地で盗賊稼業を行っていたという噂があります。これもあくまで噂。そして――」

と、最後に1人の人物を指さす。

「悪い噂があるわけではありませんが、今回合格確実と言われている男です」

壁際で腕を組んで立っている黒い軽鎧の男。

「イストヴァン＝フォーリー。彼のことを知る受験生の多くは、最終試験で彼と当たらないことを今からすでに祈っているそうです」

いずれにせよ、この先甘い気持ちでは危険ですよ――と、そう言い残してルドルフは去っていった。

「……」

少しして。

ティースは改めて周りを見回す。

８００人の受験者たち。

その全ての視線が自らの胸元――守るべき依頼主に向けられているような錯覚に囚われた。

急激に身が引き締まっていく。

第3試験“サバイバル”。それはこのデビルバスター試験においてもっとも過酷な、文字通りの生き残り戦なのである。

「イストヴァン、ファティマ、ルドルフ、か……」

「あら？　レイくん、なに見てるの？」

その声に、レインハルト＝シュナイダーは手にした書類から視線を上げた。

歩み寄ってきたのは頭に2つの団子を結った女性――彼と同じディバーナ・ロウのデビルバスター、アクア＝ルビナートだ。

「よぅ、アクア。相変わらず暇そうにしてるじゃないか」

アクアは眉間に微かに皺を寄せて、

「それ、あたしが昨日遅かったの知ってて言ってる？」

「もちろん」

悪びれもせず即答したレイに、アクア＝ルビナートは小さく肩をすくめて彼の正面に腰を下ろした。

ここはミューティレイクの1階ホール。朝のもっとも慌ただしい時間が過ぎてやや緊張感が解れ、掃除に勤しむハウス・メイドたちの口からも時折仕事とは関係のない雑談がチラホラ聞こえてくる、そんな時間帯である。

「それで、レイくん？　一生懸命なにを見てたの？」

アクアが気にしたのはレイが手にしている書類だ。名簿のようである。

「これか？　こいつは第2試験までの合格者リストさ」

「ああ、デビルバスター試験の？　って、じゃあティースくんたちの結果も来てるの？」

「朝一番でな。ここまではどっちも順調に通過したそうだ」

アクアは目を見開いた。

「すごいじゃない！　第2試験ってあのわけのわからない筆記のテストよね？　あれ、ものすごく苦戦した記憶あるわ～。じゃあ2人ともう合格したようなもの？」

「そう思うのはお前を含めた一部の連中だけだ」

ちなみに第2試験の“筆記”は4つの試験の中で不合格率がもっとも低い試験であるが、どうやらアクアを初めとする一部の“特殊なタイプ”の人々には超難関試験に変貌したりする場合もあるらしい。

「それで、レイくん？　じっと眺めてたってことは、他の合格者に気になる子でもいたの？」
「ああ、そうでもないが……去年の最終試験まで残った何人かと、ネスティアスの訓練生の一部ぐらいはな。五体満足でトーナメントまで残れば合格確実、ってのは４、５人か」
どれどれ、と、アクアがレイの手元を覗き込む。
「……ん～、全然知らないわぁ。あら？　このファティマってもしかして盗賊ファティマ？」
「らしい噂は聞いたことあるが、どうだろうな」
「大丈夫かしらね、ティースくん。美人だって聞いたことあるけど」
関係ないだろ、とは思ったがレイは口に出さなかった。いくら彼が女難体質だといっても、あの過酷なサバイバルの最中にそんなことを気にしなければならない状況に陥ることなど、まあないだろう。
（ま、トーナメントで当たることになれば、多少はやりにくいかもしれんが……）
「ふーん。あとはよく知らないわね……あ、リィナちゃーん！」
と、アクアは近くを通りがかった背の高いハウス・メイドの少女を呼び止めた。
「はい？」
呼ばれた少女――リィナ＝クライストがやってくる。
「あたし朝ご飯まだなんだけど、こっちに用意してもらっていい？　厨房のエルちゃんに言えばすぐわかると思うから」
「わかりました。すぐに御用意します」
「あ、それとねー」
すぐに踵を返したリィナの背中に言った。
「ティースくんたち、２つめの試験受かったらしいわよー」
「え、本当ですか！？」
と、顔を輝かせたリィナ。
その後ろをちょうど通りかかったダリア＝キャロルがそれを聞きつけ、意地の悪い笑みをアクアに向けた。

「バカだなぁ。アクア姉でも受かった筆記試験なんだから、あの2人が落ちるわけないだろ」
「ちょっ、ちょっとちょっとぉ。ダリア、それ、どういう意味ぃ？」
「まんまの意味だろ。……でも、そっか。順調みたいだな、あいつら――お、セシル！　ちょっと来なよ！」
「？　何のお話ですか？　え？　ティースさんとパースさんが？」
そこに番犬たちとのコミュニケーションを終えて外から戻ってきたセシルがやってきて、さらに話を聞きつけた数人の使用人たちも集まってきた結果、ホールはアッという間にちょっとした騒ぎになってしまった。
「……やれやれ。本番はまだまだこれからだってのに」
爆心地となったテーブルからさっさと避難したレイのもとに、アクアも苦笑しながらやってきた。
「ティースくんとパースくんが屋敷のみんなに愛されてる証拠ね」
「パースのヤツは見てくれがいいからともかく、ティースみたいな冴えないヤツが人気者ってのはどうも納得いかんな」
レイがそう呟くと、アクアはバカねぇ、といわんばかりの顔をして、
「男は顔じゃないわ。ハートよ、は、ぁ、と」
「ハート、ね……」
「そうそう。ティースくんはなんていうか、こう、無条件に安らげるというか、そんな雰囲気があるのよねぇ。顔だってこう、母性本能を無性に刺激されるというか――ふふ、レイくんとは正反対ね」
「そいつはさすがに認めるが」
レイは苦笑し、目を細めてやや上を見上げた。
「鈍感で馬鹿正直ってのは、まあ紙一重だな」
「紙一重？　何の話？」
「いや」
レイはそれには答えず、ただ呟いた。
「あいつら、あれ以上ややこしいことになってなきゃいいが、な」

アクアは不思議そうな顔でそれを見つめていた。

目を閉じると今でも容易に浮かんでくる光景だ。
黄土色の長い坂。
赤い屋根と白い壁の屋敷。
色とりどりの花畑。
背後に広がる新緑の森。
そして黄金色にさざめく穀物畑――

『――今日はあなたが私で、私があなた。いい？』

事故が起きたのは今から3年半前、私が12歳の晩冬のことだった。
その日は年に何度かある長雨の途中で、雨が降り出してから1週間ほども経っていただろうか。
馬車の事故だった。
隣町から帰ってくる途中、馬車の馬が何かに驚いて突然暴れ出し、馬車は勢いよく横転した。御者は放り出されて鎖骨と両手首を骨折する重傷。馬車に乗っていた2人の従者は1人が軽傷、もう1人は外に投げ出され頭を打って昏倒し一時は生命を危ぶまれたが約半月後に意識を回復した。
ただ1人。そこに乗っていたもう1人――当時12歳の少女だけが、事故の衝撃で馬車の外に放り出された上、運悪く横転する馬車の下敷きとなって命を落としてしまった。

「――あれは不幸な事故でした。同乗していただけのティースくん

に防げるようなものではありませんでした」
ルナの言葉に、私の意識は記憶の中から現実世界へと戻ってくる。
と、同時に、眩しい陽光が目に射し込んだ。
ここに来てからいったいどのくらいの時間が経ったのだろう。太陽の位置からするとまだ1時間程度だろうか。
ティースたちはちょうど第3試験の受付を終えた頃か。
少しぬるくなった紅茶の残りを口にすると喉の奥から良い香りが鼻に抜けて、私はホッと息を吐く。
かちゃり、と、ティーカップを置いてルナを見た。
「あなたは、あの日の朝から私たちが入れ替わっていて、あのとき死んだのが本当はシルメリアではなくシーラの方だった、と、そう思っているのだったわね」
ルナは躊躇いもなく頷いた。
「ティースくんはシルメリア様の侍従でした。シーラ様はティースくんを連れ出す口実として、よくシルメリア様のお名前をお借りしていましたね」
「……屋敷の他の人間は誰も気付いてなかったのにね。ティースですら」
その私の言葉が半ばルナの言葉の正当性を裏付けてしまっていることには気付いていたが、もう私は自分の正体を隠すつもりはなくなっていた。
いずれにしてもルナはもう確信している。これ以上しらを切り通すことに意味はないだろう。
ルナは優しい笑顔を浮かべた。
私が“それ”を認めたことを評価したのか、あるいは懐かしい過去に思わず笑みがこぼれてしまったのか、それはわからなかった。
「その、髪飾り――ティースくんがシーラお嬢様に贈られたものですね」
髪飾りに手をやる。
とても馴染んだ感触。

「ええ、そうね。正確にいえば、私のフリをしたあの子に、あいつが贈ったものね」
「シーラお嬢様は複雑なお気持ちだったかもしれませんね」
「……」
髪を束ねていたのは私――シルメリアの方。
だから。
ああ、そうだ。あのとき――

『これ、あなたに頼まれてた、宝石を売ってきたお金。それと――』
妹のシーラがそう言って、ひどく寂しそうな顔をしたのをよく覚えている。
『ティースが、私に――いえ、シルメリアに、って』
『？　髪飾り？　私に？』
怪訝そうな顔をした私に対し、シーラは少し目線を斜め下に落とした。
『何でもいいからお嬢様の力になりたいんです。……だって』
『え？　だってそれはあなたに贈られたものじゃないの？』
私は当たり前のようにそう言ったが、シーラは首を横に振った。
『違うわ。髪飾りなんだから。あなたのものでしょ。ティースは私のことをシルメリアだと思っていたんだし』
『……』
妹は小さい頃から面倒を見てもらったその使用人を心の底から慕っていた。立場、性格上から公の場でそれを口にすることはないが――

私は言った。
『でも……ほら。彼、たまに私たちの入れ替わりを見抜きそうになることがあるじゃない。案外気付いている……とか』
すると、シーラは少し考えて、
『……そうかしら。確かにそういう風なところはあるけれど……』
そんな根拠のない言葉にも、嬉しそうな顔をするのだった。

――不思議なものだ、と、そんな彼女を見て私はつくづく思う。
この歳にしてジェニス領一の美人姉妹などと謳われる美貌に加え、田舎とはいえ過去には栄華を誇った名家の家柄の少女である。それが――よりにもよってあの、ひょろっとして頼りなく、お世辞にも決してハンサムとは呼べず、お金も地位も家柄もないに等しいタダの使用人であるあの男に、これほどまでに心を奪われているというのだから。
不思議だ。
するとシーラはそんな私の心を読んだかのように言った。
『でも不思議だわ、シルメリア。あなたは私よりずっと長い時間を彼と過ごしているのに、ちっとも彼の良さをわかろうとしないんだもの』
『別にそんなつもりはないけれど……』
『もっとも、今から方針転換されたらそれはそれで困るけど。ティースってば、私よりシルメリアの方が大事みたいなんだもの』
冗談なのか本気なのかわからない表情でそう言ったシーラに、私は少しため息混じりに答えた。
『それはただ、彼がたまたま私の侍従をしてるからってだけじゃない』
『そうかしら。……まあいいわ。私にとって人生最大の僥倖は、あなたが恋のライバルではなかったことよ、シルメリア』
『……大袈裟なんだから』
私が呆れ顔をすると、シーラは子供のように無邪気に笑った。
大袈裟は大袈裟だ。ただ、きっと本心だろう。
恋は盲目、という。
――だからきっと、恋をしているのだろう、と思った。
私の分身とも言える彼女にそれほどまでに慕われる青年、一見大した取り柄もない平々凡々とした青年――。
私はそのことに、いつもほんの少しだけ苛立ちを覚える。
『……何にしても入れ込みすぎないでね、シーラ。あなたは少し思

慮深さに欠けるところがあるから』
『あら、シルメリア。もしかして嫉妬？　大事な妹を取られて寂しいの？』
シーラは冗談めかして言う。
私はほんの一瞬だけ言葉に詰まって、
『そんなんじゃ――』
『ふふ、冗談よ、シルメリア。でも相変わらず淋しがりやね』
『……怒るわよ』
私の言葉に、シーラはおどけながら部屋を出ていく。まるで子供のように無邪気に。
私はそんな彼女をわざとらしいため息で見送って――。

彼女が命を落としたのは、それから1ヶ月ほど後のことだった。

「そして――」
ルナの言葉に私は再び現実に戻ってきた。
窓の外を見る。
太陽の位置は変わっていない。少し長く回想していたような気がしたが、実際にはほとんど経っていないのかもしれない。
ルナが私を見ている。
「……」
私は彼女を視線を合わせた瞬間、思わず視線を少しずらしてしまった。
たぶん彼女が口を開くより先に、私は彼女が何を言うのか想像できたからだろう。
「事故の半月後に意識を取り戻したとき、ティースくんはシルメリアお嬢様に関する一切の記憶を失っていました」
「……そうだったわね」
「ティースくんが不思議な体質になったのもこのときからでしたね。結局、屋敷の女性は誰もティースくんに触れることができなくなっ

てしまいました」
「……」
ひどく馴染んだ罪の意識がまた少し深さを増す。
「お嬢様。ティースくんはまだ、あのときのままなのですね？」
女性アレルギー。
特定部分の記憶喪失。
「ええ。そうよ」
「……」
ルナはひどく困惑したような表情をした。
不可解――それはそうだろう。あの特異体質も、限定的な記憶喪失も、通常の現象では容易に説明できるものではない。自然発生したものとは考えにくい、が、誰かがやったのだとして――誰が、どうやって、そもそもそんなことが可能なのか――と。
たぶん彼女は当時から疑問を感じていたのだろう。そしてきっと、自然現象でないならそれは“誰の意志なのか”という部分に関しては結論を見つけているに違いない。
ただ、ルナはその結論をなかなか口にしようとはしない。
それもそのはず。
ルナは聡明だが、人間世界“以外”についての知識は皆無に等しい。だから推測しかできないし、根拠のない推測で私に疑いを向けることに躊躇いを覚えている。
そのまま誤魔化すこともできただろう。
ただ――
私は言った。
「それは私がやったことよ」
「！」
ルナがその温厚な視線を目一杯に見開いて私を見た。
――もともとこのデビルバスター試験は私にとって1つの区切りだった。その区切りでこうして彼女に出会ったのは何かの運命なのかもしれない。

いや、もしかすると。
もう、自分だけで抱えることが嫌になっただけなのか。
「あいつの特異体質も、記憶のことも、私がやったことよ。事故のショックで記憶喪失なんて真っ赤な嘘。全部……私のやったことだわ」
「……」
ルナの時間が止まっている。突拍子もない話ですぐには信じられないという顔……ただ、数秒後には今の状況と私の性格を考慮し、最終的にはそれが事実であるという結論に達するだろう。
右手が無意識に髪飾りに触れた。
事実だ。
全て事実。
また胸の中の暗闇が深みを増す。
そんな私の懐には今もあの、黒い背表紙の本があった。

「えやあああぁぁあぁぁぁぁぁあッ！！」
3度目にティースの手の平に伝わってきた感触には、確実な重みがあった。
引き抜いた剣――細波の刀身が西日に煌めく。と、同時に、獣魔の黒い体躯がズシャリと土の地面に落ちた。
「はぁっ、ふぅっ……」
注意深く視線を辺りに動かす。血をまき散らして土の上に伏した獣魔は痙攣を繰り返しているが、もう立ち上がることはないだろう。
荒くなった息を整えてさらに周囲に注意を配る。
――気配はない。それに元来群れを好まない性質の獣魔だ。おそらく大丈夫だろう。

ふぅっと大きく息を吐き、まずは胸元にぶら下げたクライアントの無事を確認すると、剣を鞘に収めた。
西の方角にはオレンジ色の太陽。
1日目が終わろうとしている。
（パーシヴァルは無事だろうか……）
今日1日でどのぐらいの受験生がリタイヤしたのだろう。１０日間で７００人以上が脱落するのだから、単純計算で７０人ほどか。いや、後半になるほど厳しくなるだろうから今日は５０人程度かもしれない――などととりとめのないことを考えながら、ティースは場所を移動することにした。
（想像以上にきつい、な……）
早くも全身を疲労が覆っている。この数時間ですでに5回の襲撃を受けた。それが他の受験生と比べてどの程度の水準なのかわからないが、これが１０日間続くのだと考えるとかなり厳しい。
体力のある初日はまだいい。しかしこれが3日、5日……1週間後にはどうだろう。その間は睡眠だってまともに取れるものじゃない。
ティースは初日にして、この第3試験が最難関と言われる理由を体で感じていた。
ひとまず――そう。日が落ちるまでに拠点を探すことだ。少しでも仮眠が取れる場所の確保。そこには獣魔の襲撃に備えてトラップの準備しなければならない。
（どこか洞穴のような場所があれば――）
と。そんな彼の祈りが通じたのだろうか。１５分ほど彷徨ったところ、生い茂った木々の密度がやや薄くなってきたかと思うと、その先の少し小高くなったところに洞穴のようなものが見えた。
「……」
逸る気持ちを抑え、ティースは慎重に細波を抜き放った。
獣魔の巣になっている可能性もある。
ティースは気配を潜めながらゆっくりと近付いた。

ゆっくり。
ゆっくりと。
気配は感じない。
頭の中をいくつかの獣魔の特徴が駆け巡る。それらの獣魔が突然襲いかかってきたときの対策をシミュレートしながら、一歩、一歩と。
木々が開ける。
洞穴まで3メートル。
「……大丈夫らしいな」
どうやら洞穴の中には何もいないようだ。中の様子を見てみなければなんとも言えないが、どうやら使えそうだ。
一応剣は手にしたまま洞穴へと近付く。かなり大きな穴だ。傾斜も急にはなっていないし、人が入るには持ってこいだろう。
状況によっては10日間をここで過ごすことになるかもしれない。
まずは穴の深さを――
と、ティースがその洞穴を覗き込もうとした、そのときだった。
「！」
鋭い風切り音。
獣の疾走？
いや、飛び道具だ。
振り向きざま、射線から体を捌きながらほとんど勘を頼りに剣を合わせる。
カン、と、軽い音がした。
「誰だ！？」
さすがのティースもそれが悪意のある人の仕業であることはすぐに理解した。
「……」
返答はない。
辺りは少し暗くなってきている。
気配――微かにある。1つか、2つか。

ヒュッ……

「っ……」

木の陰からもう一射。真っ直ぐに飛んできたそれは木を削り出して作られた矢だった。

「この……っ！」

第2射を避け、矢の飛んできた方向に駆け出すと、その先からざざざざっ、と茂みを掻き分ける音がした。

どうやら逃げるようだ。

「待て！　いったい何の真似だッ！！」

ティースは懸命に追ったが、如何せん、薄暗くなりつつある森の中である。最初から距離が有りすぎたことと、相手の逃げ足が速かったこともあって、１０分も経たないうちに見失ってしまった。

（……逃げられた。なんだったんだ、いったい）

もやもやした気持ちを抱えながら。ティースは洞穴へ戻ることにした。

追いかけるのに夢中になって道を忘れたりしなかったのは幸いだ。

（明らかに人だった。他の受験者が、俺を狙ってきたのか……）

事前のルドルフから受けていた忠告でそういうことが起こり得るのは知っていた。が、やはり実際に狙われるとなると気持ちが悪い。

（……くそっ）

さすがに苛々を感じながらティースは洞穴まで戻ってきた。

だいぶ時間を無駄にした。

早いところ準備をしなければ日が暮れてしまう。

まずは洞穴の状態の確認を――と、ティースが洞穴を覗き込もうとした、そのときだった。

「……ん？」

「へ？」

にゅっ、と。

洞穴の中から人の顔が出てきた。

「うわぁっ！」

思わず飛び退いて細波に手をかける。
――油断していた？　いや、確かに少し注意力が散漫にはなっていたが警戒を怠っていたわけではない。
相手が気配を完全に消していたのだ。
が、幸い、今度は悪意のある人間ではなかったようだ。
「ああ、お前もこの洞穴を目当てに来たのか？　残念だな。ここは今し方私が占拠した」
洞穴から出てきたのは女性だった。
「あ……」
見覚えがあった。と言っても知り合いではない。つい最近、厳密にいうと今日の午前中、ルドルフから名前を聞いたばかりだった。
「確か、ファティマ――」
「ん？」
少し女性の視線が鋭くなった。
「私を知っているのか？　……ああ、いや。そんなことはどうでもいいな」
ファティマはそう言って片手を腰に当てると、西の方角に視線を移した。
「もう日が沈む。急がなければ夜の森をアテもなく彷徨うことになるぞ」
「……あ」
急に全身の力が抜けた。
先ほど彼女は“今し方”と言っていた。とすると、ティースが謎の敵を追いかけている間に占拠されてしまったということだろう。
（ついてない……）
とはいえ、仕方ない。先に見つけたから譲れと主張するわけにもいかないだろうし、主張したところで譲ってくれるはずもない。ティースが潔く諦めて別の場所を探すことにした。
と、そこへ、
「ああ、ちょっと待て。お前。なんだったらここに泊まっていくか

？」
「へ？」
立ち去ろうとしたティースは意外な提案に驚いて足を止めた。
ファティマがズボンをパンパンと払いながら無造作に近付いてくる。その行動があまりにも自然すぎて警戒することも忘れてしまった。
「見たところお前は今回初受験のようだ。だったらおかしなことを考える余裕もないだろう」
「……」
意図を計りかねて言葉を探していると、
「ん？　わかりづらいか？　要するに協力しないかと言っているんだ」
「……どうして俺に？」
あまりに突然の申し出に、ティースの心には少し警戒心が産まれていた。それはそうだろう。いくらお人好しの彼でも即座にじゃあそうしましょうと答えるわけにはいかなかった。
ところが、ファティマはあっさりと、
「なんだ嫌なのか？　だったらさっさとどこかに行ってくれ。それとも何か？　私とこの場所を賭けて争いたいのか？」
「あ、いや、そういうことじゃなくて……」
「別に無理にとは言ってない。ただ、この第3試験はどう考えても協力者がいた方が楽だからな。お前がその気ならと思っただけだ」
「あ、いや、だから……」
あまり人の話を聞かないタイプなのか。口調も何かを誤魔化そうとか隠そうとして早口になっているというより、元来のそういう気質が表に現れているだけのように思える。
ティースはようやく自分の主張を口にした。
「つまり、俺が聞きたいのは……どうして名前も知らない俺なんかを協力相手に選ぶ気になったのかってことで……」
ファティマは即答した。

「自分以外に名前を知っている奴はいない。誰を選んでも同じことだ」

「……なるほど」

至極明快な回答だった。

「どうする？」

再びの問いかけ。

ティースは考え込んだ。

確かにこのサバイバル、１人と２人では難易度が格段に違ってくる。１人だと運が悪くれば１０日の間一睡も出来ないことさえあり得るが、２人なら交互にほぼ確実に休息を取ることができる。

もちろん相手が１００パーセント信頼できる相手あれば、という条件つきだが。

一種の賭けである。

――皆、そう考える。

ティースはさらにその先に考えを巡らせた。

皆、誰か協力者が欲しい。ただ、誰かが裏切る危険は常に潜んでいる。だから誰もが、必要最低限の人数にとどめたいと考えるだろう。不必要に仲間を増やすことは賢いことではない。

つまり、日が進めば協力者は探しにくくなる、と考えるべきだろう。

１週間後、限界を感じて協力者を求めたとしても、受験者の数自体が減っている上、残っている受験者たちもおそらく受け容れてはくれないだろう。

協力者を作るなら早いほうがいい。

「……」

しかしティースは一度シアボルドという男に騙されそうになっている。あっさりと信用していいものか、と自問する。

――自分が彼女の後にここにやってきたのは偶然だ。向こうから話しかけてきたシアボルドのときとは状況が違う。ただ、完全に安全だというわけではない。何しろ協力を提案してきたのは向こうだ。

（どうする……？）

２度、３度と色々な考えが頭を巡って――

「……ティーサイト」

「ん？」

「ティーサイト＝アマルナだ。よろしく、ファティマさん」

と、ティースは言った。

何か決め手があったわけではない。正直に言えば、１人ではおそらく厳しい、ということだが、はっきりとした彼女の物言いに好感を持ったということもある。

一瞬の間があって。

「ファティマ＝ヴェルニーだ。よろしくな」

ニコリともせずにファティマはそう言った。

第３試験“サバイバル”初日。

こうしてティースに予期せぬパートナーが誕生したのであった。

その2『サバイバル～3日目～』

「――っ！　てめぇ、一体何のつもり――！！」

戸惑いの声をあげながらも、男は素早く体勢を整えていた。

――さすがはデビルバスターを目指そうとするだけのことはある。

否応なしに気分が高揚した。

『故意に他の受験生を傷付ければ失格』――そんな規定には脅しの効果すら無い。１つの街よりも広いこの森を１０人余りの試験官が完璧に管理などできるはずもなく、この試験で毎年のように出る死人はその半数近くが森に放たれた獣魔ではなく同じ受験生同士の争いによるものだ。たまにそれが理由で失格し法の裁きを受ける者もいるが、それは全体からするとほんの一握りの、運と要領の悪い連中だけである。

つまり表向きはどうあれ、この第３試験“サバイバル”はその名の通りの生き残り戦。事実上、他人を実力で蹴落とし、踏みにじることも暗黙のうちに許された試験なのだ。

「……こんなものか」

動かなくなった名も知らぬ受験者の亡骸を見下ろすと、その胸にぶら下がったクライアントの袋には目もくれずに背を向ける。こうしておけば、クライアントの匂いに引かれた獣魔たちによって死体は見つかりにくくなる。見つかったところで、目撃者がいなければ何の問題もない。

薄暗くなった森の中を自らのねぐらに向かって歩き出す。

別に殺人狂というわけではない。ちょっとしたイザコザがたまたま刃傷沙汰に発展してしまったというだけのことだ。

ざっ、ざっ。

辺りの気配を探りながら森を歩く。

そうしていて、ふと、自分の視線が他の受験者たちを探している

ことに気付いた。
「……」
仮にあと1人や2人殺したとしてもたいした問題にならないことはわかっている。受験者が命を落とすことなどそう珍しくないし、すでに各国の様々な思惑が交錯しているこのデビルバスター試験は、試験そのものが無効になってしまうことをもっとも恐れている。よほど明確な事実がない限り主催者側がそういったイレギュラーな出来事を隠してくれるだろう。
時間はあと1週間以上ある。
もちろんそれが目的ではないが――
「……」
明らかに尋常ではない目つきのまま、その者は薄暗い森の奥へと消えていった。

「……おっと」
ポロッ、と、指の隙間から干し肉がこぼれ落ちる。地面に落ちたそれを拾い、2度、3度と土を払って口の中へ。
ガリッ、と音がして、ファティマは眉をひそめた。
「マズいな」
「それは干し肉が不味いわけじゃ……」
たき火を挟んだ向こう側にティースは呆れてそう言ったが、ファティマはそんな彼を少しも表情を動かさずに一瞥すると、再び干し肉を一口。
ガリッ。
「……マズい」
「ちゃんと洗えば大丈夫だって。ほら、貸して」
水筒の水で干し肉を軽く洗い、彼女に返してやる。
無言でそれを口に運ぶファティマ。今度はマズいと言わなかった。

やれやれ、と、ティースは自分の夕食を再開する。
――サバイバル3日目の夕方。初日に同盟を結んだファティマ＝ヴェルニーというこの女性は、いかにも尊大そうな第一印象や、小耳に挟んだ噂話――元盗賊というイメージとは少々違った性質の人物らしかった。
妙に子供っぽいところがある。
……いや、その言い方は正確ではないのかもしれない。
実際、おそらくはまだ子供と言っても過言ではない年齢だろう。
（15、6歳かな……）
無表情に干し肉を噛る彼女を眺める。
初対面のときはその尊大な態度に惑わされたが、実際に近くで見るとかなり小柄だし、やや鋭い目つきの顔にもほんの僅かに幼さの影が残っている。仮に実年齢よりも幼く見える顔なのだとしても、ティースよりは年下だろう。
そのぐらいの年齢でこの試験を受けることは驚くほど珍しいことではない。特に彼の身近には11歳でそのデビルバスターの称号を手に入れたレアス＝ヴォルクスという存在もいる。
ティースはその、尊大な態度の幼きデビルバスターの顔を頭に思い浮かべながら、干し肉の最後の一切れを口に運んだ。
「にしても、昨日、今日とビックリするぐらい平穏だったなぁ」
「……」
同じタイミングで夕食を終えたファティマが顔を上げてティースを見た。
「俺は最初の日は5回も獣魔に襲われたよ。まあ寝床を探してウロウロしてたせいもあるけどさ。それに比べて昨日と今日は楽だった、ってね」
「同じだ」
と、ファティマは短く答えた。どこまで同じなのかわからないが、やはり彼女も初日は少なからず苦労したのだろう。
それに比べてこの2日間ときたら、昨日は2度、今日に至っては

水を汲みに出たときに1度戦闘になっただけだ。しかもこちらの戦力は初日の2倍。加えて夜は交代で睡眠が取れる。これが大きい。

「私のおかげだな」

何の躊躇いもなくそう言ったファティマに、ティースは苦笑した。確かに彼女のおかげであるが、もちろんその恩恵は彼女も受けているはずで、実際はお互い様である。

「さて、と」

ティースは西の方角へ視線を向けた。日が沈むまではあと1時間ほどだろう。

寝床を準備すべく、焚き火から離れて洞穴へ向かう。穴は入り口が広くそれほど深くない。寝床はそこにボロい布を敷いただけのものだが、穴の向きや角度のおかげか風がほとんど入ってこない。今の状況で準備できる環境としてはかなり良質だといえるだろう。

「よし、と」

寝床の準備といっても下に敷く布の泥なんかを払って気持ち綺麗に敷き直すぐらいだ。ものの1分ほどでそれらの作業を終え、ティースは洞穴から顔を出した。

「ファティマー。今日は昨日と逆でいいか？　俺が先で――どうした？」

ファティマが焚き火の向こうから意味深な視線で彼を見ていた。

「ティース。お前は変わったヤツだな」

「え？」

突然の言葉にティースは戸惑った。……まあこういう男である。変わっていると言われることにはそこそこ慣れている。が、その都度“その根拠となる部分”が微妙に違っているので、ああ、あのことか、と瞬時に理解できるわけではない。

「変わってるって？　なにが？」

膝の泥を払いながら洞穴を出たティースに、ファティマは言った。

「自己主張が弱い。デビルバスターを目指す人間には珍しいタイプだ」

「別に主張が弱いわけじゃない。争い事が嫌いなだけだよ」
少し強がってみたが、
「それが珍しいと言っているんだ」
なるほど、言われてみればその通りかもしれない。
「そして――」
ファティマは続けて言った。
「私は疑い、見極めようとしている。お前のその態度が演技なのか本質なのか」
「疑う？　ああ……」
一瞬何のことかと思ったが、彼女の立場になって考えればわかる話である。
ティース自身、この第3試験の開始直前に思い知らされたとおり、受験者同士は基本的に競争相手だ。協力する振りをして油断させ、利用し、最後の最後に裏切る、なんてシナリオは、あまりに簡単すぎて三流の吟遊詩人でさえ何の苦もなく1つのチープな物語にしてみせるだろう。
もちろん、彼の内面に触れたことのある人間であれば、彼がそんな企みを行うことがどれほど有り得ないことかすぐにわかる。が、出会って3日の彼女にしてみれば疑いを持っても仕方のないことだ。
どうやって誤解を解こうか、と、ティースは少し考えてやめた。彼は基本的に口べたな人間である。それが誤解であると主張すればするほど、相手がますます疑念を抱くかもしれない。
「演技するのは苦手なんだ」
結局最低限の言葉だけで答え、再び焚き火の前に戻った。
温い熱風が前髪をなびかせる。
「奇遇だな。私もだよ」
そう言ってファティマは傍らに置いた剣の鞘を撫でた。その返答は彼女にとって、少なくとも悪い印象ではなかったようだ。
ティースは少し考えて切り出した。
「ファティマはどうしてデビルバスターを目指すようになったんだ

？」
「突然だな」
「いや、なんとなく……っていうか、こういうことを話せば少しは信用できるようになるのかなって」
「……」
ファティマはやや呆気に取られたような顔をした後、
「いいだろう。では、私から話そう」
案外素直にそう答えた。
それぞれの武器の手入れをする傍ら、遅めの自己紹介を始める。
「生まれは南方だ。2年前までは盗賊稼業をしていた――」
その噂がすでに知れ渡っていることを意識したのか、彼女はその話題から切り出した。ただ、そこに至るまでの経緯について詳しくは語らず、その2年前に、自ら思い立って盗賊団を抜けたところから、紆余曲折を経て、とある資産家の後ろ盾を得ることでデビルバスターへの道を歩み始めたことまでを語った。
「ケチなヤツでな。1発で合格しなければ次の機会はないと言われている。だから今回合格できなければ色々と面倒なんだ」
ケチなヤツ、とは、彼女の後ろ盾となっている資産家の話らしい。何気ない口調だったが、その出会いが彼女にとって良いものであったことは言葉の端々から感じることができた。
「……そんなところか」
せいぜい5分ほどだったが、それで彼女の話は終わった。もちろん細かく追求するつもりなどティースにはない。この話はそういう趣旨のものではないのだ。
「次はお前の番だ。ティーサイト」
その言葉に応じ、ティースも語る。語るほどのこと――は意外と多かった。彼は自らを凡夫であると評価しがちだが、彼の歩んできた道は決して平坦なものではなく、凡庸なものでもない。
とはいえ。さすがの彼も馬鹿正直に生い立ちの全てを語るようなことはなく、語ったことは略歴のようなものだ。東方の出身である

こと。元は屋敷の使用人だったこと。理由があって故郷を離れネービスに移り住んだこと。デビルバスターを目指し始めたのはちょうど1年ほど前だったこと、などである。

語っていたのは2人合わせてもせいぜい20分程度だろうか。

ふと気付けば森に射し込むオレンジ色は少しずつ黒に近くなってきていた。

「そろそろだな」

と、ファティマが腰を上げる。焚き火が作る影が薄暗い森の奥に揺らめきながら伸びていった。

そんな彼女にティースは言った。

「ああ。なかなか有意義な時間だったよ、ファティマ」

「そうか。――私もだ、ティーサイト」

出会って初めてだろう。焚き火のオレンジに照らされたファティマの頬に、ほんの僅かな笑みが浮かんだ。そこに年相応の幼さが滲む。

（……この子は信用してもいい、かな）

競争相手であることに変わりはない、が、少なくとも奸計によって自分を陥れるような人物ではないだろうと思った。

（レイさんあたりには、また甘いとか言われるかもしれないけど……）

しかし結局のところ、それがこのティーサイト＝アマルナという人物の欠点であり、そして長所でもある。この本質だけは何度騙され、何度陥れられようと変えられそうにない。

「じゃあ俺が水を汲んでくるよ。君はここを頼む」

就寝前の最後の仕事だ。ここから徒歩で10分もかからない川に行って水を汲んでくること。

「ああ。気を付けて行けよ」

「わかってる」

昨日は聞かなかった言葉だった。

（少しは向こうも信用してくれたのかな……）

立ち上がってあたりの気配を探るティースの耳に、遠くの獣の遠吠えが届いた。警戒するような距離ではない、が、今もどこかで獣魔と戦っている受験者がいるのかもしれない、と、そう考えると全身を再び緊張が駆け抜けた。

「じゃあ、行って来る。君も気を付けて」

そう言い残してティースは焚き火を背にした。

パチ、パチ、パチ……

焚き火の炎が少しずつその存在感を増してきている。

……生い立ちを語って時間をロスしてしまったのは失敗だったかもしれない。

と、ファティマは今になってそう思っていた。

語ったこと自体を後悔しているというわけではない。それに闇が森を完全に覆い尽くすにはまだ時間がある。水を汲みに行った彼が道を見失うことはないだろうし、暗闇に足を引っ張られて獣魔に遅れを取る可能性も低いだろう。

問題はそっちではない。

こっちだ。

「いい拠点だな」

木々の影から姿を現した男はそう言って無造作に彼女に近付いてきた。

「どうだ、お嬢ちゃん？　ここ、俺にも使わせちゃくれないか？」

ファティマは即答した。

「断る。ここは定員オーバーだ」

「定員？　そいつは残念だな」

大柄な男だ。身長はティースよりさらに大きい。ファティマより２０センチ以上高く、おそらく１９０センチぐらいあるだろう。

「だったら仕方ないな。ここは俺が１人で使わせてもらうことにしよう。お嬢ちゃんは余所へ行きな」

ゆっくりと、ファティマは立ち上がった。
「それも断る。どうしてもここを使いたいなら腰の剣を抜け」
「……」
男の口元に笑みが浮かぶ。話が早くて助かる、と、いったところか。
もちろんファティマとて相手も見ずにいきなり喧嘩を吹っかけたわけではない。ティースと同じようにその男の噂は耳にしていた。ヒューイット＝レーゼル。昨年のデビルバスター試験で受験者を殺害したという噂のある男。
「その返り血は獣のものか？　それとも――」
ファティマは正面からその男に向き合った。男はにやけた顔のまま何も答えようとはしない。
「お前は“それ”が目的なのか？」
「お嬢ちゃんは確か……ファティマ、とか言ったか。女だてらに有力候補とか言われてるそうじゃないか。強いんだろうな、きっと」
「お前よりは強いよ」
先に剣を抜いたのはファティマだった。
それを見て、ヒューイットもニヤリとしながら剣を抜く。
形状は互いにオーソドックスなミドルソード。ヒューイットの方がサイズ、質量ともに少し大きいが、体格差のためかファティマのそれの方が大きく見えた。
「そうそう。さっきの質問だが……」
ヒューイットは口元をさらに歪めながら答える。
「別に“それ”を目的としてるわけじゃない。ただ俺は、他人の俺に対する礼儀にうるさいだけさ」
「狂人だな。……なら」
嫌悪の色を言葉の端に乗せてファティマは呟くように言った。
「手加減しきれずに殺してしまっても私の心が痛むことはないな」
「心が痛む？　ぬかせ」
ヒューイットは嘲るように笑った。

「お前だって人殺しの目をしてるぜ。心が痛む？　嘘をつくなよ」
「……」
ティースが戻ってくるまでおそらくあと１０分はかかる。決着がつくには十分すぎる時間だ。
構えたファティマの剣先が焚き火の炎で鈍色に輝いた。
「人を殺してしまうのは、およそ2年ぶりかな……」
そんな彼女の鋭い殺気を浴びながら、なおもヒューイットの顔には愉悦の笑みが浮かんでいる。
その直後、動いた。焚き火が掻き消えてしまいそうなほどの風を巻いて、ファティマの小柄な体躯が駆ける。１０メートルほどあったヒューイットとの距離が一気に詰まる。
対し、ヒューイットは緩慢な動きでそれに応えた。
間一髪。
急所を狙い澄まし振り下ろしたファティマの一撃がヒューイットの剣に防がれる。
その瞬間。
「っ！！」
ファティマの体が地上から浮き上がった。咄嗟の判断でファティマはそこに自らの力を加え、後方に飛んで距離を取る。
すぐに体制を立て直した。
「馬鹿力か……」
ヒューイットは追ってこない。
手が痺れていた。剣を弾き飛ばされなかったのが幸いだった。
ファティマは即座に再び前に出る。
「っ……」
ヒューイットは意外そうな顔で一歩後ろへ下がった。
今度は下から上へ、低い体勢からファティマの剣閃がヒューイットの顎を狙う。
キンッ・・・！
今度も間一髪でヒューイットの剣がそれを防ぐ。

「……」
ヒューイットの口が歪んだ。低い体勢のファティマを地面に叩き付けるべく剣を持った腕に力を込める。
だが、その瞬間。
甘い、と。
ファティマの口が動く。
瞬間。
「!?」
ヒューイットの腕にかかっていた彼女の圧力が急に消失する。まるでネコのようなしなやかさで、小柄な少女の体は飛び込んできたときと同じ、いやそれ以上の速度で飛び退く。
飛び退いただけ、ではない。
血が宙を舞った。
「っ……てめぇっ……！」
自らの利き腕を襲った鋭痛に、ヒューイットが彼女を睨み付ける。
飛び退きざま、急激に変化したファティマの剣閃がヒューイットの右腕を切り裂いたのだ。
「浅いか。落とすつもりだったが」
ファティマが軽く剣を振るう。血雫が飛んだ。
ヒューイットの右腕を血が伝い、地面に落ちる。手首と肘のちょうど中間ぐらいに開いた傷口は骨までは達していないが、決して浅い傷ではない。
「調子に乗るんじゃねえ……っ！！」
力を込めた腕の傷口から血が噴き出す。
今度はヒューイットの方から動いた。
「……」
ファティマはまともには相手をしない。あの傷の様子からすればまともに力は入らないはずだが、薄暗いから実際にどの程度のダメージがあるのか正確に把握できなかったし、動きは相変わらず緩慢だとはいえ、その異常なまでのパワーは侮れない。

（――殺すと決めたからには）

殺すまで油断はしない。ファティマはそういう世界を生き抜いてきた。持ち前の瞬発力を生かし、決してヒューイットの剣線の正面には入らない。

「相手を間違えたな、お前……」

先ほどよりも大きな血しぶきが舞った。

「っ……ぐぁぁっ！！」

ヒューイットが苦痛の叫びを上げる。今度は二の腕を縦に切り裂いた。いくらタフでもこれで右腕は使い物にならないだろう。

「っ……くっ……てめぇ……っ」

先ほどまでの威勢もなく、ヒューイットは右腕を押さえてうずくまった。力無くだらりとなった右腕から剣が落ちて地面に刺さる。

「殺す……殺してやる……っ！！」

「お前には無理だよ」

見逃す気などさらさらなかった。それは向こうも同じだろう。……試験への影響、なんてこともチラリと頭をかすめたが、ここまで来たらそうも言っていられない。

それに――

「……死人に口なし、か」

ファティマにとってあまり好きな言葉ではなかった。が、それはきっとこの試験における残酷な現実だ。受験者が受験者を殺すのは珍しくないと風の噂に聞く。にも関わらず、それで失格となった話をほとんど耳にしないのが、その証拠だ。

「ちくしょう……小娘が……！」

落とした剣を左手に持ち変えて立ち上がるヒューイット。

「予想外だ……くそっ……！」

「……」

ファティマは油断無くヒューイットの一挙手一投足を見つめた。

足下にブレはない。まだ戦う力は残している。剣を持つ左手……おそらく左でも剣を扱えるだろう。油断はできない。ただ、右腕は

さすがに使い物にならないだろう。ファティマの与えた2つの傷は明らかにその機能を奪っていた。

剣を構えた。

――特に感じることはない。

そう。

確かに彼女はかつて人殺しだった。盗むだけではない。人の命も奪ってきた。言い訳をするつもりはない。ただ、自分が生きるために殺してきたから。

今もそう。

だから心は痛まない。

ただ――

「……」

いい気分ではない。

殺したいわけではなかったから。

それがたとえ、狂人のごとき男だったとしても。

「……」

ファティマの足が地面を蹴る。

血飛沫と、断末魔の悲鳴が森に響き渡った。

「あら。今日はこの前とは違う葉ね。でも、なんだか覚えのある香りだわ」

「はい、お嬢様。これはレビナスのお屋敷で使っていたものと同じ紅茶です」

「そうなの」

言われてみれば、と、思った程度。それほど詳しいわけではない。

「この帝都では色々なものが比較的簡単に手に入るようですから。いかがですか？」

「悪くないわね」

私がこうしてルナのところにやってくるのは今日で3日連続だった。デビルバスター第3試験も今日でちょうど3日目。その途中経過を私たちが知ることはできないが、リタイアした者はすぐにでも戻ってくるはずだから、今のところはまだ頑張っているということになる。。

日は頂点に近づき始めていた。

最初の日――結局ルナはティースの記憶のことで私を問い詰めようとはしなかった。その手のことは彼女の知識の範囲外だ。それ以上追求していいものかどうかすぐには判断できなかったのだろう。

それは、口を滑らせてしまったとすぐに後悔した私にとっても好都合だった。

そんな思惑もあって、私たちは今日も取り留めなく、昔一緒にいた頃の思い出話を続けている。

「先ほどのお話の続きですが……」

自らのカップに紅茶を注ぎ終えたルナはそう言って穏やかに私を見つめた。

「お嬢様方はなぜ、お互いに入れ替わったりなさっていたのですか？」

「大した理由じゃないわ。それこそ髪を束ねるのが嫌だから代わって、とか。あとは単純にみんなに気付かれないのが面白かったというのもあるわね」

一番最初は悪戯心からだったと記憶している。それがあまりにも上手くいったものだから何度も繰り返すようになったのだ。

「でも本当の意味で入れ替わったのは2、3回だけよ。確かなのは9歳ぐらいのときに入れ替わって、私がシルメリア、あの子がシーラになったこと。あの子が死んだときに、私がシーラに戻ったこと」

「そのときは何故入れ替わられたのですか？　つまり、シーラ様だった貴女が、どうしてシルメリア様に？」

「あの子が――」

私は少し躊躇したが、相手がルナであることを思い出して言葉を

続けた。
「あの従者を好きになった、と、そう言ったからよ」
ルナはすぐに察したようだ。
「シルメリア様には許婚がおられたから、と、そういうことなのですね？」
「そうね」
長女であるシルメリアには許婚がいた。それが恋するあの子にとって枷になったのだ。
「お嬢様は、どう思っておられたのですか？」
「うん？　あの子とティースのこと？」
「はい」
少し考える。
「興味なかったわ。……ああ、いえ、違うわね。その頃の私はよくわかってなかったのよ。でも、あの子が嬉しそうにしているのは嫌じゃなかった。たぶん、そのぐらいのことしか感じてなかったと思う。あなたは――私がそれをよく思ってなかった。そう考えているのでしょう？」
「はい。その頃からお嬢様が急にティースくんに素っ気無くなった、と、そのように私には見えました」
「それは違うのよ」
私は当時のことを思い出しながら苦笑する。
「そういう理由で入れ替わったのだけれど、あいつは“シルメリア”の方の従者だったでしょう？　だからあの子は入れ替わった後も何度も私の名前を借りていったの。私は私でシーラの名前が必要になるときがあったからお互い様だったけれど」
いったん言葉を切ってテーブルの焼き菓子に手を伸ばす。手にとってみるとそれぞれ何らかの動物を模した形であるのがわかった。見覚えがある。おそらくルナが焼いたものだろう。
「相変わらず綺麗に作るわね。――それで、あの子はそんな風に私の名前を借りて、あいつを連れ出して……でも、いつも複雑そうな

顔をして帰ってきたわ」
ルナは少し考えてすぐに解答を出した。
「御自分が本当はシルメリア様ではなかったから、でしょうか？」
頷く。
「他人から見れば私たちはどっちがどっちでも同じだったのだし、気にすることではなかったと思うのだけれど。でも、あの子はしきりに気にかけていたわね」
あいつの忠誠心があくまで“シルメリア”に対して向けられていた——あの子はそう思っていたようだ。
「だから、私がシルメリアを演じるときは意識してあいつを避けるようにしていたの。——今にして思えば、何の意味もないことだったのだけど」
そのときのことを思い出し、可笑しくて自然と笑いがこみ上げてしまった。
「ティースは時折ものすごく困惑した顔をしていたわ。それはそうよね。同一人物のはずなのに、私とあの子であからさまに態度が違うのだから。でも——」
そういえば、そう。
屋敷の中ではあの男だけが時折、私たちが入れ替わっていることに気付いた。
話しているうちに、その頃の記憶が鮮明に蘇ってくる。

『——ねぇ、シルメリア』
『なに？』
金糸のような髪が白壁の上を踊っている。鏡越しに見える自分と同じ顔をした妹の顔。
窓から射し込むのは朝の日。雨の多いこのカザロスの町にあってはそれなりに貴重な光と小鳥の囀りの中。
片方はベッドの端に腰掛けて、もう片方はベッドの中央にペタンと座り込んで、もう片方の髪を梳かしている。

『いたっ。ちょっとシーラ、もっと丁寧にやってよ……』
『やってあげてるのに、ひどい言い様ね』
シーラはそんな姉の言葉に苦笑して櫛を持つ右手の力を少し緩めた。サラサラの髪を少しずつまとめて束ね上げる。
『元はと言えばあなたから言い出したことじゃない』
『私のせいでその髪型を強要されてるお姉様に、せめてもの罪滅ぼしのつもり』
澄まし顔でそう言ったシーラに対し、シルメリアは面白くなさそうに言った。
『そう思うのだったら、また入れ替わってくれればいいのよ」
『それはダメよ。お父様が考え直して、お姉様の婚約を解消してくれたなら話は別だけどね』
『勝手なことばっか』
『だって私は自分が一番大切だもの』
でも――と、シーラはクスクスと笑って続ける。
『その次ぐらいにはあなたを大事に思ってるわ、シルメリア』
『……別に嬉しくないわよ』
『可愛くないわね……はい、終わり』
最後の髪飾りをパチンと止めてシーラが離れる。シルメリアは無言で鏡台へ移動し横を向いたり斜めを向いたりとその出来具合を確認していたが、やがて満足したのかクルッとシーラの方へ向き直る。
『まあまあね。誉めてあげるわ』
『偉そうに』
お互いにツンとした顔で睨み合い、数秒後には同時に笑い出した。
仲は良かった。喧嘩した記憶すらここ数年の間はない。
『そういえばさっき何か言いかけてなかった?』
『え? あ、そうそう。忘れるところだったわ』
と、シーラは笑いながら言った。
『シルメリア。明日、またあなたの体、借りてもいい?』
『体? ああ、名前を貸してってこと?』

『体を借りるようなもんでしょ。私たちの場合』
そう言ったシーラが片手で長い金髪を1つにまとめてみせると、そこにいる2人はまったく見分けが付かないぐらい瓜二つになった。
周りもそう。
『シーラお嬢様。まだお休みになられてなかったのですか？』
『シーラお嬢様。何かお持ちしましょうか――』
『シーラお嬢様――』
すれ違っていく使用人たちの言葉には何の疑いの色もなく、誰もが彼女のことを妹のシーラだと思い込んでいる
ただ――
『あれ。どこへ行かれるのですか、シルメリアお嬢様』
そんな使用人たちの中に、1人だけ違った反応を見せる少年がいた。
『……』
『お嬢様。あの……シルメリアお嬢様？』
シルメリアはようやく自分が呼ばれているのだと気付いて振り返る。
やってきたのはどこか頼りない、ひょろっとした長身の、だけど顔はまだ少年のあどけなさを残した人物。
彼は専属の侍従だ。いつもは彼女の、しかし今は彼女に扮した妹の侍従。
『あ、あれ？　あ、すみません。ひょっとしてシーラお嬢様、でしたか？』
怖ず怖ずとそう尋ねる少年の姿に、自然と頬が緩む。
『ええ、そうよ。私がシルメリア姉さんのように見えたの？』
『す、すみません。あんまり似てらっしゃるもので……そ、そういえばそうですよね。シルメリアお嬢様なら髪を縛ってるはずですよね――』
少年はそう言ってひたすらに恐縮する。
産まれたときからの付き合いで、接する時間は実の父親より長か

った。とはいえ、それは何も彼に限ったことではない。
なのに何故か彼だけが特別だった。

「本当に、不思議だったわ。普段はあんなにぼさっとしているのにね――って」
ふと気付くと、ルナが面食らったような顔で私を見ていた。
「どうしたの、ルナ？」
「あ、いえ……」
困惑したような態度。
その理由が私にはまったくわからなかったが、
「彼のことでそのように笑うシルメリア様は、初めてだったものですから」
と、ルナはそう言った。
「そう？　……そうだったかしら」
あの頃の自分はそんなにも冷たく当たっていただろうか、と記憶を掘り起こしてみたが、他でもないルナがそう言うのだ。私自身の意識はともかく、外からはきっとそのように見えていたのだろう。
「……ティースくんの記憶のこと」
「！」
急速に現実へと引き戻された。
僅かに緊張しながら、言葉を発したルナの顔を見る。
彼女はまだ少し、困惑したような表情。
ただ、私を見つめる視線は一昨日、その話をしたときよりずっと穏やかだった。
「あの事故のあと、シルメリア様に関する記憶を失ったティースくんを無責任だと罵る方はたくさんおられました。旦那様の御配慮で、幸い、本人の耳に入ることはなかったようですけれど」
「……そうだったわね」
「でも私は――」
ルナのその細い指が子犬の背をゆっくりと撫でる。子犬は気持ち

よさそうに寝息を立てていた。
「私は実は少しホッとしていたのです。無責任どころか、責任感の有りすぎる子ですから。あのときの彼がその死を受け容れられたかどうか――下手をすると」
その可能性を恐れるかのように、ルナは言葉を途中で止めた。
受け容れられたかどうか――そう言われて私は数日前の出来事を思い出した。
幻覚に惑わされ、混乱し、レインハルト＝シュナイダーに憎しみと殺意をぶつけた、彼のあの姿を。
「……」
勘違いとはいえ、その感情は紛れもなく彼自身の中から産み出されたものであり――
少しだけ背筋が震えた。
あいつでも、あんな顔をするのだ、と。まったく知らなかったわけではないが、それでもその姿は私にとって衝撃的だった。
あいつにとっての“彼女”はそれほどに大事なものだったのだろう。
そして最悪なことに、それは嘘から出た実でもある。
実際、彼女は3年も前に死んでいるのだから――
――その事実を知ったとき、彼のあの怒りは誰に向けられるのだろう。
慣れた罪の意識が再び胸の中に渦巻く。
考えなかったわけではない。
わかっていたことだ。
すべてわかっていてやったことなのだ。
黒い背表紙の本。
握り締めた小瓶。

意識のないあいつの寝顔――

「……私はお嬢様のことを誤解していたようです」

唐突なその言葉に我に返り、ルナを見て、そして驚く。

「え？」

ルナが私に向かって頭を下げていたのだ。

わけがわからず、私は少し慌てた。

「どうしたの、ルナ。突然」

ルナはゆっくりと頭を上げて、そして申し訳なさそうに言った。

「あの頃の私の目には、お嬢様がティースくんを疎んでいるようにしか映りませんでした。お恥ずかしい話です。本当は……逆だったのですね」

「……」

戸惑う私に、顔を上げたルナは穏やかな微笑みを見せて、

「一昨日のお話を伺ってからずっと考えていました。記憶を奪った方法は知識のない私にはわかりません。でも、それでティースくんが救われたことは紛れも無い事実です。もしお嬢様が本当にティースくんを恨んでいるのであれば、そのようなこと、なさるはずがありませんもの」

「……そうかしら」

私はその言葉を素直に受け入れられなかった。

「そうだとしても、私は今もティースを騙しているわ。故郷を捨てさせて、こんな危険な仕事までやらせてる。私が、自分の夢をかなえるために」

真実を告げることがあいつのためにならないのだとしても。あいつをその束縛から解放する機会はこれまで何度もあったのに。

だが、ルナは微笑んだままだった。

「お嬢様。もう一度、同じ質問をしてもよろしいでしょうか？」

「なに？」

確かに同じ問いかけ。

ただ、ルナの表情と口調は、そのときとは大きく違っていた。
「お嬢様はティースくんを、どうなさるおつもりなのですか？」
「……わからないわ」
「もし――」
膝の上に抱えた子犬の背を撫で、ルナは彼女らしい優しい目をした。
「お嬢様が御自分の夢のためにティースくんを利用なさっているという、ただそれだけのことなのであれば、私はそれでも構わないと思っています」
私は眉をひそめて問いかけた。
「どうして？　この前、それでティースのことを心配していると言ったじゃないの」
「いいえ。私が心配していたのは、お嬢様がシーラ様のことでティースくんを恨んでいるのではないかということだけです」
「騙して、利用しているのだとしても――？」
「どのような問題があるのでしょう」
ルナはクスッと笑った。
「ティースくんがそれを望んでいるのですから」
「……それは違うわ」
なぜか私は少しムキになっていた。
「あいつは単純にシルメリアを忘れたわけじゃない。シルメリアとシーラが最初から1人だったと勘違いしているの。だからあいつは私の中にあの子もいるものだと思っている」
数日前の、あの姿が脳裏に蘇る。
「あいつがきっと命を張ってでも守ろうとしたあの子が。だから――」
「あの頃のティースくんがシルメリア様とシーラ様のことをどのように思っていたのかは私にはわかりません」
ルナの口調はまるで諭すかのようだった。
「ですが、あれから3年も経ちました。私とティースくん、お嬢様

との関係も大きく変わりました。それでもティースくんが今、貴女のことを守ろうとしているのであれば、あの子の今の気持ちを知るにはそれで充分ではありませんか？」

「……」

胸を渦巻くいくつかの感情。

納得したわけじゃない。

ルナはそれを見透かしたように言った。

「ありがとうございます、お嬢様。きっと長い間、ティースくんのことで心を痛めてくださっていたのですね」

あの頃によく見た、慈母のような微笑み。

「……」

悪いことだとわかっていながらも。

その言葉に、心が少し軽くなった感じがした。

「……？」

誰かいる、と、ティースが再びそう感じたのは、川で水を汲み、ファティマの待つ彼らのねぐらまであと少しというところだった。

日はもうほぼ沈んでいる。目指す先には焚き火の明かりが見えていて、特に物音はしない。ファティマがいるはずの焚き火の元からは微かにうごめく影が伸びているのがわかる。

が――

（誰だ……？）

その影、どうやらファティマのものではない。

これまでの経緯もあってティースは警戒心を強めた。

争っているような気配はない。

だが……

（血の匂い……？）

微かに、ほんのわずかに鼻腔をくすぐったその感触に、ティース

は迷わず腰の剣に手をかけ地面を蹴った。
「ファティマ！」
「！？」
焚き火のそばにいた人物が飛び退る。と同時に抜刀した。だが、戦う意思は見せず、
「待て！」
そう言って武器を持たないほうの手を広げてティースに向けた。
「お前は……」
見覚えがあった。
「シア？　シアボルド＝マティーニ？　何故――」
それはこの第3試験開始直前、ティースをだまして“クライアント”を摩り替えようとした男、シアボルドだった。
それが何故ここに、と、口調を鋭くして問いかけようとしたティースは、その途中で言葉を失った。
「な……」
焚き火の前に倒れる人影に視線を奪われる。
そこに血みどろの人影があった。
見覚えのある小柄な女性。
「っ！！　貴様……ッ！！」
カッと頭に血が上り、ティースは目の前の小柄な男を睨み付けて剣を構えた。
……焚き火の前に倒れているのはファティマだ。その腹部には大きな傷口があり、この暗闇でもわかるほどおびただしい量の出血。明らかに絶命している。
状況から、咄嗟に目の前の男の仕業だとティースが考えたのは至極当然のことだろう。
だが、
「待て！　俺じゃねぇ！　その女をよく見ろ！！」
シアボルドはさらに一歩ティースから離れ、そして焚き火の前に倒れるファティマを指差した。

「なに……！？」
言われて気付く。
シアボルドが手にしている剣に血が付いていない。拭いたらしき痕跡も――暗がりではっきりとはわからないが――見当たらない。
それで少し思考能力を取り戻したティースは、もう一度焚き火の前に倒れるファティマを見た。
そして、気付く。
「なんだって……？」
仰向けに倒れる彼女の下の土が、こんもりと盛り上がっていることに気付いた。
いや。
「これは……どういう……」
土が盛り上がっているのではなかった。ファティマと重なるようにして大柄な男が倒れていたのだ。
その男のシルエットにもティースはほんのわずかに見覚えがあった。
シアボルドが言った。
「ヒューイット＝レーゼルだ。あんたも聞いてるだろ？　“受験生殺し”のヒューイットだよ」
「どういう……ことだ」
２人の死体から視線を動かしシアボルドを見据える。
ティースの殺気が治まりつつあるのを感じたのか、シアボルドは構えた剣を静かに下ろして言った。
「まずは互いに武器を収めようぜ。どっちも殺したのは俺じゃねぇ。……初対面であんなことをした俺を信じられないのはわかるが、俺は殺しはしない。リスクが高いからだ」
「……」
それで完全に信じたわけではなかったが、今はひとまず状況を整理する必要がある、と、そう考え、ティースはゆっくりと剣を鞘に収めた。

それを見て、シアボルドも剣を収める。
「お前、その女……ファティマと組んでたのか？」
「……そうだ」
さらに思考能力が戻ってきて、今度はやるせない気持ちが湧き上がってきた。
どうであれ、さっきまで普通に会話していた少女が命を落としたのは紛れもない事実だった。
初めての経験ではない。が、いつになってもこの無力感には慣れることがない。
「そうか。そいつは残念だ。まともなら、この試験は突破したも同然だったのにな」
そんなティースの気持ちには気付かない様子で、他人事のようにシアボルドは言った。
ティースは唇をかみ締め、そして問いかけた。
「お前は……どうしてここにいたんだ？」
まだ疑いが晴れたわけではない。その一挙手一投足に注意を払い、また周囲にも気を配りながらゆっくりと焚き火に近づいていく。
「弔うつもりか？　下手に触らないほうがいいぜ。試験官にあらぬ疑いをかけられるからな」
「……」
シアボルドの言葉はもっともだった。ただ、そのままにしておくのは忍びない。ティースは洞穴の中に入って敷いていた布を回収し、それを2つの遺体の上にかけた。
その間、シアボルドはそれを手伝おうとはせず、
「俺はずっとそこのヒューイット＝レーゼルを監視してたんだ。そいつは実力も確かな男だからな。他の受験生に手を出した証拠が掴めれば、戦わずに失格にしてやれるだろ？」
手強いライバルは少ないほうがいいからな、と、シアボルドは言った。
悪びれもしないその態度に、逆に真実味があるように感じた。

「かといって、ビッタリくっついていて気付かれずにいられるほど簡単な相手でもない。　見失ったり見つけたり……そんなことを繰り返していて、最終的に辿り着いたのがここだったのさ。どうやらその2人はここで剣を交えたらしい」

彼はティースが戻ってくる前に簡単に遺体の検分を済ませていたらしい。その言葉を信じるなら、ヒューイットの腕の傷はファティマが付けたもので、戦いはファティマが優勢に進めていたようだ。

ただし、

「2人とも致命傷となった傷はまったく別のものだ。つまり、2人が戦っているところに誰かがやってきて、2人とも殺していった。そういうことだろうな」

「……それは、本当にお前じゃないんだな？」

ティースがそう疑いを向けると、シアボルドは小馬鹿にしたような態度で両手を広げた。

「んなわけないだろ。この2人を殺せるぐらいの実力があるなら、いちいちお前をハメたりとか下手な小細工打つかよ。もちろん獣の仕業でもない。こいつは人間がやったことだ」

死体の傷は見慣れている、と、シアボルドは言った。過去にそういう仕事をしていたらしい。

「おい、ティース。1つ提案があるんだが――」

そしてさらにシアボルドは言った。

「俺と組まないか？　こいつが誰の仕業なのかはわからない。けど、そういうイカレタ奴がうろついているのは事実だ。俺たちはそのことを知っている。……いろいろ、メリットがあると思うがな」

第3試験“サバイバル”3日目。

雨を予感させる空模様とともに、試験は一気に血なまぐささを纏いつつあった。

その3『サバイバル～5日目～』

「30名？　それはリタイアした人数、ではなくて、か？」
「はい。第3試験でこれまでに“命を落とした”受験生の数です」
第3試験“サバイバル”が始まって5日目の朝。第4試験“トーナメント”の審査員としてネービスから招待されていた“ディグリーズ”のクインシー＝フォーチュンはその知らせに大いに眉をひそめた。
目の前にいるのは、デビルバスター協会所属の事務官である。
10日間の日程で行われる第3試験。今日は5日目。
「全試験を通しても死者は毎年10名前後のはずだが……」
もともと危険な試験であるとはいえ、受験者はデビルバスターを志すようなツワモノばかり。毎年引き際を心得ない者が無茶をして命を落とすことはあるが、それはクインシーの言うように2桁に乗るか乗らないかという程度である。
それが第3試験だけ、それも途中、確認できた限りで30名にも達したというのだ。
「去年までと比べて特に過酷な環境になったわけでもないだろう。ということは、なにか起こっているのではないか？」
「それについては調査中ですが……」
事務官は微妙な表情で肯定も否定もしなかった。
「……なるほど」
それだけでクインシーは察した。何もないのであればそれを隠す理由はない。ということは、何かある、あるいはその可能性が高い、ということなのだろう。そしてこの事務官がはっきりと口に出せない理由も大体想像がつく。
（遺体に刃物傷がある、ということか……）
本来の敵である獣魔以外のものによってもたらされた致命傷。毎

年必ず噂に上り、しかしそのほとんどが有耶無耶のままにされてしまう受験生同士の争いによる死者。その犠牲者が３０名の中に相当数いるということなのだろう。

受験生がグループを作って潰し合いでも始めたか、異常者が紛れ込んだか、あるいは――。

いずれにしても異常であることは明らかだ。それは目の前の事務官、さらにはその上にいる協会の上層部にもわかっていることだろう。

だが、それを容易に公にできない事情もクインシーは理解している。

この試験には受験生個人とデビルバスター協会だけではなく、多くの国の色々な事情が絡んでいるためだ。だから、この試験の運営にかかわっている者は誰もが試験が“無効”となることを恐れている。デビルバスター協会自体はどこの国にも属さない中立の存在だが、試験の中止がもたらす不利益が各国々だけではなくこの協会にも及ぶのだから、彼らが可能な限りそれを避けようとするのは当然のことだった。

受験生の不可解な死は毎年発生しているにもかかわらず、過去、デビルバスター試験が無効、あるいは延期となった例はたったの２回しかない。

だから、基本的には何が起ころうと自己責任。

それがこの試験の暗黙のルールである。それを当たり前のこととして受け取る者もいれば、必ずしもそうでない者もいるが、少なくとも現時点では、協会の上層部も、クインシーと同じ立場の試験官たちも、試験の中断を訴える者はいない。

「……死者の発生している地域はほぼ限定されています。本日からはその地域の試験官を増やして監視に当たっていただく予定です」

「そうか」

おそらく無意味だろうと思ったがクインシーはあえて何も言わなかった。あの危険な森を監視する試験官を務めるには、デビルバス

ターか、あるいはそれに準じる実力が必要だ。何か起きたからといって右から左へぽんぽんと連れてこられるものではない。増やすといってもせいぜい2、3名だろう。あの広大な森ではほとんど意味がない。

（せめて……）

背もたれにゆっくりと身を預け、クインシーは祈った。

せめて前途有望な者たちが1人でも多くこの試練を乗り越えてくれるように――と。

2024

「イストヴァン＝フォーリーだろうな」

ティースの目の前にはシアボルドがいた。朝の陽が木立の隙間から射し込んできている。

第3試験“サバイバル”折り返しの日。

そしてファティマが何者かに殺害されてから2日目の朝。

その朝をティースはシアボルド＝マティーニとともに迎えていた。

ティースは疑いの目を彼に向ける。

「イストヴァンっていうと試験の最有力候補って人だろ？　あんたに騙されそうになった直後にルドルフさんから聞いた。……彼が怪しいって言うのか？」

「そうそう。そのルドルフ＝ティガーも怪しいな」

ティースはため息を吐いた。

殺されたファティマとヒューイットは受験者たちの中でもかなりの実力者だった。だったら、その彼らを殺したのも相当の実力者に違いない、と。それがシアボルドの意見だ。

言うことはわからないでもない。

が、ティースは必ずしもそうではないと考えている。

たとえば犯人が1人ではなく複数だったら。あるいは、ファティマとヒューイットがお互いのことしか見えなくなっているところを奇襲されたのだとしたら。――それ以前に、ヒューイットがその犯人の仲間であった可能性もある。ヒューイットの遺体はファティマの下敷きになっていた。複数の敵を相手にして、ファティマがヒューイットだけをどうにか仕留め、その後に力尽きた。そんな可能性も十分にあるだろう。

もっとも後者は――シアボルドの言葉によれば“ありえない”らしいが。

「まあいいさ。どっちにしろそいつらの“獲物”を片っ端から調べていけばいい。そうすりゃいずれ見つかるんだ」

シアボルドはそう言った。

このシアボルドという男、昔医者を志していたことがあるとかで、傷口からその武器の形状がほぼ正確に特定できるのだという。ヒューイットの腕などにはファティマが与えたものと思われる傷が多数あり、2人が戦闘状態になっていたのは間違いないと考えられるが、致命傷となった傷は双方ともまったく同じ、かつどちらのものでもない別の武器――つまり第三者の手によるものだという。

……その者が持つ武器を見れば、犯人が特定できるという特技の持ち主。それが、ティースが彼と行動を共にした理由の1つだった。もちろん彼の言葉をすべて鵜呑みにしたわけではないし、チームを組むのにふさわしい相手だとは今でも思っていない。が、それでファティマの仇に少しでも近づけるのであれば、と、そう考えた末の判断だ。

「あとは、そうそう。パーシヴァル＝ラッセルも、だな」

「パーシヴァル？」

「ああ。俺の情報によれば奴もかなりの実力者らしいからな。何でもすでにネービス辺りでデビルバスターと一緒に“魔”を狩ってるらしいって」

シアボルドは思い出したようにポンと手を叩いた。

「そっか。そういやお前と知り合いだったっけ」
　といっても人の内面なんてわからんもんだがね、と、シアボルドはどことなく小馬鹿にしたように言ったが、もちろんティースは気にも留めなかった。そもそもパーシヴァルの武器は極長のトンファーである。いくらなんでも打撃と斬撃による傷を見間違えることはない。
　それからは特に会話を交わすことなく朝食を終え、ティースたちは動き始めた。
　この第３試験は本来、水・食料を確保できる環境を探し出し、そこからあまり動かずに１０日間を乗り切ることが突破への最短ルートである。
　が、犯人の手がかりを探す――つまり他の受験生と出会うためにはそうしてはいられない。動き回って情報を集めることが必要だ。
　最初、ティースがその方針を伝えたとき、シアボルドは大いに反対した。そもそも彼がティースと組もうとしたのはあくまで身を守るため、つまりはこの第３試験を無事に突破することが目的だったらしいからそれも当然だ。
　もちろん、ティースとてこの試験の結果がどうでもよくなったわけではない。が、ファティマの仇を討つ機会はおそらくこの試験中しかないだろう。それだけではない。ここで犯人を野放しにすることは、結果、同じ受験生を手にかけるような卑劣な人間をデビルバスターとしてこの世に放してしまうことにもなりかねない。
　デビルバスターを目指す人間として、それは絶対に許せないことだった。
　ティースが率直にその旨を伝え、それを協力の条件として提示すると、シアボルドは最初唖然とし、信じられないものを見るような顔をして、しばし思案した後、渋々といった様子でそれを――条件付きで、承諾した。
　それから２日。
　これまでに出会った他の受験生は４名。いずれも顔の知らない受

験生だったが、彼らについてはシアボルドが即座に“白”と断定した。ファティマとヒューイットの命を奪った凶器はかなり重量の剣、もしくは斧のようなものらしく、出会った４名はいずれも標準サイズの中剣を手にしていたからだ。

そういう意味での収穫はゼロだったが、その４名のうちの１人からティースたちはとある“有力な情報”を手にすることができていた。

「……ったく。ほんと気が知れないぜ」

ティースの前を進みながらシアボルドはまたブツブツ言い始めた。

「こんな、アテもなくぶらぶらしてたって偶然犯人に会える可能性はかなり低いんだ。あの拠点にいれば寝床に困ることもなかったのによ」

「そんなことわかってる」

１日に２人の受験生に会えれば上出来とすると、残っている受験生の分母を考えれば犯人にたどり着く確率の低さは言わずとも十分に想像できる。それに加え、うろつくことによって獣魔に襲われるリスクが高まり、寝床、食料、水の確保、あらゆる面でデメリットしかないことも承知の上だ。

ただ、それがまったく無駄な行動かというと、決してそうではない、と、ティースは思っている。

「少なくとも犯人はまだこの辺りにいる。シアボルド。お前だってそう言ってたじゃないか」

ティースは正面を向いたまま、その声に怒りをこめた。

「犯人はファティマを殺した後、別の受験生も何人か手にかけている。それもこの近辺で、だ」

それがティースたちがこの２日間で手に入れた“有力な情報”である。昨日出会った受験生の１人が、人の手によるものと見られる別の受験生の遺体を２つ発見していたのだ。

「そりゃ、まだこの辺りにいる可能性はある、とは言ったがね……」

いや、その可能性は高いのだ。犯人がどういう目的を持って行動

しているのかはわからないが、少なくとも獣魔へのリスク、寝床、食料、水などの問題を抱えているのはティースたちと同様のはずで、だとすれば、絶えず広範囲を動き回っているとは考えにくい。

おそらく犯人はこの辺りを拠点としているはずだ。とすれば、こうして歩き回ることは決して無意味ではない。

少なくともティースはそう考えている。

そうして歩いているうちに、行く先から川のせせらぎが聞こえてきた。

ちょうど良い、と、軽くなっている水筒を満たすため、2人は音のする方角へ歩みを進めた。

「水場があるなら、この辺りにも誰かいるかもしれない」

少し開けた場所だった。ゆるい傾斜を川端まで下りて行く。川底には魚の影が見えた。綺麗な水のようだ。

「“毒見草”は？」

あとから下りてきたシアボルドがそう聞いてくる。

「持ってるよ。大丈夫だ」

そう答えてティースは懐の薬袋から一枚の葉を出し、川に浮かべた。

サバイバル時の必需品として知られる“毒見草”――正式には違う名を持つ植物の葉なのだが――は、一部の地の獣魔が持つ毒に反応して色を変えるという特徴を持つ。この毒は空気に触れるとすぐに毒性を失ってしまうが、水中ではしばらく毒性を維持し、体内に入ると、死に至ることはほとんどないが、全身に強い痺れの症状が現れる。

だから獣魔が徘徊するような場所では、必ずこの毒見草を川に浮かべ、その毒が混入していないことを確認するのがセオリーなのである。

「……おい、少し休もうぜ」

水筒をいっぱいにして歩き出そうとしたティースに、シアボルドが人差し指を真上に向けながらそう言った。見上げると、川の形に

ぽっかりと切り裂かれた青空のど真ん中に太陽が昇っていた。時間の感覚がなかったが、正午ぐらいだとすると、歩き始めてから4、5時間は経っていたらしい。

よっぽどお腹が減っていたのか。その辺で木の実でも取ってくる、と言ってシアボルドは森の中へ消えていった。付いていこうかとも思ったが、誰か水を汲みに来るかもしれないからここにいろ、という彼の言葉に従い、大粒の砂利の上に腰を下ろす。

がさがさ、というシアボルドの気配が森の奥に消えると、あとは川のせせらぎしか聞こえなくなった。

この辺りは虫の鳴き声もほとんど聞こえない。試験用に作られ、獣魔の放たれたこの閉鎖空間は、外の世界の森とは生態系が大きく異なっているようだった。

目を閉じて耳を澄ませる。

瞼の裏に、3日前の夜の光景が浮かんだ。

――何故。

心で呟いたその疑問は、ファティマの理不尽な死に対して向けたものではなかった。

その彼女と一緒に死んでいた受験生――ヒューイット＝レーゼル。

言葉すら交わしたことのない、巨漢の男。

何故、彼はあそこで命を落とすことになったのだろう、ということだ。

シアボルドの言葉を聞くまでもなく、彼がファティマと剣を交えたのは明白である。ほんの数日とはいえ彼女とともに戦ったティースには、ヒューイットの体に刻まれたいくつかの傷が彼女の攻撃に因るものだという確信があった。

ファティマがヒューイットを狙う理由はおそらくない。それでも2人は戦いになった。

噂を信じるのであれば、ヒューイットが一方的にファティマの命を狙い、ファティマが応戦したということになるだろう。客観的に見てもそれが真実である可能性は低くはないし、ティースもそれで

間違いないだろうとも考えている。

腑に落ちないのは――その結果が何故“ヒューイットの死”でも“ファティマの死”でもなく“双方の死”だったのかということだ。

ひどく“計画的”な匂いが感じられて仕方ない。

つまり、犯人は偶然剣を交えていた2人を奇襲したのではなく。計画的に2人を戦わせ、タイミングを見計らって両方を殺害した――その結果の裏側にはそんな何者かの意図が見え隠れしているような気がしてならないのだ。

――犯人は？

この試験場の中、容疑者となるのは受験生か試験官しかいない。それ以外の者が紛れ込んでいる可能性もゼロではないが、この試験場は入り口以外は高い塀で囲まれているし、試験官や係員がその入り口を監視している。部外者が侵入するのは容易なことではない。また、監視に当たっている試験官はそのほとんどが素性のはっきりしたデビルバスターである。こちらも可能性はゼロではないが、やはり受験生が犯人である可能性が一番高い。

――ファティマがターゲットになった理由は？

いくつか考えられるが、真っ先に思いつくのは合格が有望視される人物だった、という点だろう。もし犯人の目的がライバルを減らすことにあったのなら、ヒューイットをけしかけて争わせ、隙を見て2人を殺害したというのは十分に考えられる話だ。

その筋――ライバルを減らすのが目的だとすれば、犯人は当落線上の受験生、ということになるだろうか。ただし、合格が確実な受験生などほんの一握りだから、その場合はほぼすべての受験生が容疑者ということになってしまう。しかし、そう考えたなら、イストヴァン＝フォーリーやルドルフ＝ティガーといった有力どころは逆にシロだろう。黙っていても合格する可能性が高いのだから、受験生を殺すなどというリスクを侵すのは賢い考えではない。

……いや。

そもそも、第4試験のトーナメントはあくまで“内容”が評価さ

れる試験だ。シアボルドは“椅子取りゲーム”などと表現したが、実際には椅子の数は定まっておらず、1回戦で負けた者が合格することもあれば、決勝までいった2人しか合格しなかった年もある。有力選手がいなくなってトーナメント自体のレベルが下がれば、逆に合格へのハードルが上がる事だって有り得る。

だったら――個人的な恨み？

確かにファティマの過去は、噂と、本人から聞いた話を総合すると、誰にも恨まれることがないと断言できるような類のものではない。が、そうすると、ファティマ以外に複数の犠牲者が出ているらしいことの説明がつかない。

すると――

草を掻き分ける音がして、ティースはとっさに振り返るとともに剣の柄に手をかけた。

やってきたのはシアボルドだった。ティースは緊張を解いて柄から手を離し、それからシアボルドの姿を見て首をかしげた。木の実を取りに行ったはずの手には何も持っておらず、その顔が緊張しているように見えたからだ。

「どうしたんだ？」

足音を殺しながらシアボルドが駆け寄ってくる。

そして開口一番、言った。

「……見つけた。ヤツだ」

「ヤツ？」

「ルドルフ＝ティガーだ。いたんだよ、向こうに。1人だ。仲間らしきやつは見当たらない」

「ルドルフさんが？」

当然のことだが、ティースはシアボルドの言う“ルドルフ犯人説”にはまったく賛同していない。彼とは一度話しただけだがとても悪人には思えなかったし、そもそもシアボルドの言う説はあまりにも根拠が薄すぎたからだ。

だからシアボルドがそう言って駆け寄ってきたときも、ルドルフ

が何か有力な情報でも持っていればいいな、ぐらいの気持ちだった。
しかし、
「さっき言ったときは半分冗談のつもりだったが……本当にヤツかもしれない」
「……なにがだ？」
間抜けな聞き返しだった。それほどに、ティースの頭に“ルドルフ犯人説”は無かったのである。
が、すぐにその言葉の意味に気付いて、
「ルドルフさんの――武器が、ってことなのか？」
そういえばティースは彼の武器を見ていない。試験開始前に話しかけてきたときはどこにも武器を持っていなかったように記憶している。
シアボルドはさらに声を潜めた。
「かなり重量級の両刃だ。条件に合致する。それに、ヤツなら実力的にも申し分ない」
「でも――」
ティースは反論しようとして、言葉に詰まった。考えてみれば反論するだけの材料をほとんど持ち合わせていなかった。
あるとすれば――
「――あの人はお前に騙されそうだった俺を助けてくれた。ライバルを減らすのが目的なら……辻褄が合わないじゃないか」
言っていて、その反論にほとんど意味がないことは気付いていた。
案の定、シアボルドは言った。
「それが目的じゃなかったとしたら？　噂によれば、殺されたヒューイットのヤツもそういう目的じゃなかったと聞いたがね」
シアボルドの言うことはもっともだった。受験生の中で絶対に犯人じゃないと言い切れるのはパーシヴァルぐらいのものである。まして、現時点においてほぼ唯一の手がかり――遺体の傷口の形状に合致する武器を持っているというのであれば確かめなければならないだろう。

「とにかく行ってみよう。案内してくれないか？」
そう言ってティースは腰を上げた。
が、シアボルドは少し困惑した顔をして言った。
「ちょっと待ってくれ。俺は行かないぞ」
「なんだって？」
「条件、覚えてるだろ？」
「……もちろん」
協力関係を結ぶときにシアボルド側から提示した条件。
ティースから出した条件は、犯人探しに協力すること。
そしてシアボルドから出した条件は――
「危険なことはゴメンだ。もしヤツが犯人だったとしたら近付くのも危ねえ。場所は教えるから、とりあえずお前1人で行ってくれ」
ルドルフのヤツにゃ顔も知られてるからな、と、シアボルドは言った。
これにはティースも少し眉をひそめて、
「それじゃ確証が取れないじゃないか。遠目からじゃ、それがファティマを殺した凶器かどうかはわからないんだろ？」
それができるという話だったからティースは彼と手を結んだのだ。
シアボルドは少し怯えたような顔をして、
「そりゃそうだ……けど、ヤツが本気で“そういうこと”をするヤツだったら……」
「そのときは俺が相手をする。お前はその間に逃げればいい」
ティースはすぐにそう答えたが、シアボルドは馬鹿なこと言うな、と吐き捨てて、
「ルドルフの野郎が本気だったら俺もお前も逃げる暇なんかあるもんかよ！　あいつは去年の時点でも楽にこの試験を突破できる実力だったんだ。今年はもっと強くなってるに違いない」
そうなのだろうか。
実力者であることはシアボルドの話から理解できているが実感はない。

いずれにしてもこれ以上は話しても無駄なようだ。
「わかった。じゃあとりあえず俺1人で行くよ。シアボルド、お前は隠れながら付いてきてくれ」
「どうする気だ？」
「まずは話をしてみる。うまく武器を見せてもらえることになったら出てきてくれ。もしルドルフさんが犯人で戦いになったら出てこないでそのまま逃げればいい。それならどうだ？」
「ほ、本気か？　殺されるかもしれないんだぞ」
「……」
もちろん自信があるわけではない。が、容疑者が有力候補だからといって引き下がるのだったら、そもそも最初から犯人探しなどしていない。
シアボルドはやはり何度か逡巡した後、
「……わかった。けど、雲行きが怪しくなったら俺は逃げるからな」
と、言った。
そして2人は川を離れて再び森の中へ向かっていく。
途中、ティースはその男の顔を頭の中に思い浮かべた。
ルドルフ＝ティガー。
言葉を交わしたのはほんの僅かだったとはいえ、恩のある相手である。ファティマの仇は見つけ出したい、が、彼が犯人であって欲しくはない、という、なんとも複雑な気分だ。

1日ぶりだった。

たった1日空いただけで“ぶり”という表現はおかしいのかもしれない。それでも、昼近くになってルナと再び会った私の頭は、無意識のうちにそんな表現を浮かべていたのだ。それはきっと、それまで3日連続で通っていたから――というだけではない。

おそらく私は、この数日で2年もの時間を飛び越えてしまっていたのだろう。

毎日のように顔を合わせていた、あの頃に。

「はじめまして。ルナリア＝マジェットといいます」

私はそのとき初めて彼女の新しい姓を聞いた。結婚したのだから当然のことだったが、彼女はもうルナリア＝ローレッツではないのである。

そんなルナの目線の先にはフィリスとパメラがいる。

そう。

今日は彼女が私たちの宿を訪れたのだ。

言い出したのはもちろんルナのほうだった。特に拒む理由はなかった。いや、あるいは私もそれを望んでいたのかもしれない。

言葉だけでは伝えきれない、私の今の状況を知ってもらいたくて。

「あ、えっとはじめまして。私、フィリス＝ディクターです」

「あの……パメラ＝レーヴィットです」

2人とも若干人見知りする性格だ。歳も5つ以上離れているから少し気後れしているのだろう。

するとルナがすぐに言った。

「パメラさんのお父様はフィンレー領のご出身ですか？」

「えっ……？」

パメラは一瞬困惑した。一拍遅れて驚いたように目を見開く。

「あ、はい。父ではなく、祖父ですが、もともと……はい。フィン

レーからネービスに移り住んだみたいです。まだ父も生まれてない頃ですが」

それから不思議そうに、何故わかったんですか、と質問する。

ルナはいつものように穏やかな微笑を浮かべ、簡単なことですよ、と言った。

「レーヴィットというのはもともとフィンレー領の秘境にあった村の名前なんですよ。その村の住人はもともと姓というものを持っていなくて、村が開かれて外に出るときに全員レーヴィットという姓を名乗ることになったそうです。その村があったフィンレー領の東部はつい最近まで閉鎖的な地域でしたから、住人が他の領地に出て行くことはそれほど多くなかった。ですから、レーヴィットさんというと最近までフィンレー領にいたという方が非常に多いみたいです。私はフィンレー領の東側に接するジェニス領の出身ですから、たまたまそういったお話を耳にしたことがあったのです」

「へぇ……」

パメラは知らなかったようだ。もちろん私も知らなかった。およそ歴史にかかわる話でもないから知らなくて当然の知識であるが、ルナの引き出しの広さは雑学にも及んでいる。

“パメラ”というのもフィンレー領に深いかかわりのある名前ですよ。お父様がネービスに来てからお産まれになったということであれば、もしやパメラさんの名付け親はお祖父様ではありませんか？」

「あ、はい。私が物心付く前に亡くなったんですけど、父からそう聞いています」

「おそらく、お祖父様は初めてのお孫さんが可愛くて仕方なかったのでしょうね」

そう言ってルナはクスッと笑った。“初めての孫”というくだりはパメラが言ったわけじゃないから、おそらくルナの言う“その名の由来”にかかわることなのだろう。図星だったようで、パメラも否定しなかった。

「――あ、フィリスさん」
「え？　はい？」
フィリスはちょうど紅茶の準備をしようとしているところだった。
「お近づきの印に、お茶は私にご用意させてください。準備も整えてきました。お湯だけいただいてもよろしいですか？」
と、ルナは自分で持ってきたティーセットを広げる。
「は、はい……」
フィリスはテキパキと動くルナの様子を眺めて、圧倒されたような呟きを漏らした。
「フィリスさんもパメラさんもお屋敷に仕える方のようですね。私も昔はさるお屋敷にお世話になっていたことがあります。もしよろしければ、ジェニス流の紅茶の淹れ方を学んでみませんか？　ついでに、私にもネービスの流儀を教えていただければ幸いです」
ニッコリとそう言って、そこから小一時間ほどは紅茶の煎れ方の話題となった。実のところ、ネービス領とジェニス領で紅茶の淹れ方に大きな違いなどない。ただ、その技術にはかなりの差があるようで、結局はルナのこだわりの淹れ方に、フィリスとパメラが何度も感嘆のため息を漏らすことになった。パメラなどは途中からメモを取っている。
そうしているうちに、いつの間にか2人はすっかりルナと打ち解けてしまった。
さすがというべきか。彼女のこういうところは私にはとても真似できない。
その間、私は少々手持ち無沙汰になって外を眺めていた。
小さく開けた窓からは暖かな風が差し込み、少し日に焼けたカーテンがひらひらと揺れている。帝都の喧騒は町外れの宿にも小さな波となって流れ込んできている。
少しの間、目を閉じてその喧騒を浴びていると、ふいにネービスの朝が恋しくなった。
この喧騒は学園に向かう途中のそれとよく似ている。

――いや、それは勘違いか。

私はいつもその喧騒の只中にいたのだから、実際はそこで感じていた喧騒の方がずっと近くて大きかったはずだ。時間的距離と物理的距離が頭の中でごっちゃになってしまったのかもしれない。

なんにしても、私はほんの少しだけ感傷的な気分になった。

ホームシック、とでもいうのだろうか。

――柄じゃない。

「シーラ様？」

一瞬、誰の声かわからず視線を彷徨わせた。ボーっとしていたこともあるが、ここにいる3人が3人とも私のことを様付けで呼ぶからだ。

私を呼んだのはどうやらルナだった。彼女は本来私のことを“お嬢様”と呼ぶのだが、私の立場に気を遣ってかこの場ではそう呼ばないことにしたらしい。それでも明らかに年上のルナが私に対してへりくだるのは本来不自然なはずだが、フィリスとパメラの2人は特に疑問を口にはしなかった。何か察して気を遣っているのか、特に何も疑問に感じていないのか、2人の反応を見る限り半々というところだろうか。

「なに？　どうしたの？」

ようやく私が言葉を返すと、ルナはほんの少しだけ不思議そうな顔をした。見ると、フィリスとパメラも同じような表情をしている。

私は事情を察した。

「ああ、ごめんなさい。ボーっとしていて話を聞いてなかったの」

どうやら私に対して何か話が振られたところだったようだ。

その言葉に、フィリスは何を勘違いしたのか、

「そういえば試験も5日目ですね。ティース様とパースくんは無事でしょうか……」

「そうね」

2人の安否を気にしてボーっとしていたわけではないが、言われてそれも気になった。

「おそらく無事でしょう」
ルナがそう言った。
「第3試験は続行が不可能となった時点でリタイアが許されるそうですから。まだこちらに戻られないのは無事であることの証ではないでしょうか」
夫が言っていたことの受け売りですけれど、と、付け足す。
「そういえばルナリアさんの旦那様は新米デビルバスターのスカウトが目的でいらしているんですよね」
その話は、おそらく私がボーっとしている間に聞いたのだろう。
パメラが興味津々といった様子で言った。
「だったら、ティース様やパースさんのこともご存知なんですか？」
するとルナは小さく首を横に振って、
「夫は仕事の話をほとんどしない人なんですよ。ティースくんのことは個人的によく知っていますけれど」
それでもパメラは興味のありそうな顔をした。
「ティース様とは、えっと、どういうお知り合いなんですか？」
少しだけ私のほうを気にしながらそう尋ねる。
彼女は年相応の少女らしい好奇心の持ち主だが、かといって無闇に他人の過去を暴いて喜ぶようなタイプの性格でもない。今回好奇心が勝ってしまったのは、おそらく彼女が、ティースの部屋を担当するメイドであるということ以上に、彼に対して特別な親しみを感じているためだろう。
その理由をだいたい理解している私は、特に彼女の質問を遮ろうという気もなかった。私と古い知り合いであるという時点でティースとも何らかの関わりがあるであろうことは容易に想像できることだったし、私にとって本当にばらされたくないようなことをルナが口にするとも思えない。
そう思いながらルナを見ると、彼女は少し嬉しそうな顔をしていた。
今日会ったばかりでティースとパメラの関係を知らない彼女でも、

そこにある感情が好意的なものであることを感じられたようだ。
「ティースくんは弟です」
「えっ！？」
案の定、パメラが驚いた顔をして、隣のフィリスも目を丸くした。
ルナリアは微笑んですぐに補足する。
「もちろん血は繋がってませんけれど、小さい頃から弟のように思っていました。ティースくんも同じように思っていてくれたものと思います。私たちは互いに兄弟がいなかったものですから」
そう言うと、2人は一斉になるほどという顔になる。
そんな様子を見て、私はふと、ルナがミューティレイク家にメイドとしてやってきてくれることを妄想した。それは残念ながらあり得ないことではあるが、きっと色々な人に良い影響を与えてくれるに違いない、と、そう思った。
それはもちろん、私やティースを含めての話で――
……いけない。
頭を振る。
どうもここ数日は郷愁めいた感情が抑えられない。今の妄想も、ネービスの風景を懐かしく思う感情も、出所はたぶん一緒なのだろう。
過去を懐かしむのは現状に不満があるからなのだろうか。
まだ来ぬ未来に期待が持てないからなのかもしれない。
ルナと楽しく会話する2人の少女に、過去の自分たちの姿が重なった。
故郷を出てからこれまで、そんなこと一度も考えたことはなかったのに――

「……お屋敷に戻られる気はありませんか？」
だから、だろうか。
そんなルナの言葉に、私は即答ができなかった。
外の生暖かい風が遠い喧騒とともに頬を撫でていた。
結局、3時間以上は居たのだろうか。私がルナとともに宿を出た頃、太陽はかなり西の方角に傾いていた。
西日を背にしたルナの表情はうっすらと翳って見える。
「戻る？　レビナスの屋敷に？」
即答できなかったから、私は意味のない疑問を彼女に返した。
それは私にとってとてつもなく意外な提案だった。
ルナはゆっくりとうなずいて言葉を続ける。
「今すぐということではなく、お嬢様の夢――薬師になるという夢を叶えた後で良いのです。すでにお屋敷を出た私が言うのは差し出がましいと、それを承知の上で申し上げております」
わかっている。彼女が敢えてそれを言うのは、たぶんそれが大勢の人間の幸せに繋がると、そう思っているからに他ならない。
「学問を修める場所としてネービス以上の土地はこの大陸には存在しないでしょう。ただ――」
「わかってるわ、ルナ」
薬師として生計を立てるのに適しているとはいえない、ということ。
考えればすぐにわかることである。優れた学校があるということは、優れた人間が多く集まるということで、もちろんそのままネービスで開業する人間も多い。いくら人口が多いといっても、ネービスはやはり供給過多な土地であるといえるだろう。
その点、故郷のジェニス領は雨が多く比較的住みにくい土地だから、ネービスで学んだような薬師がわざわざ移り住むケースが少ない。
おそらくは“ネービスのサンタニア学園でトップクラスの成績を

残した薬師”という肩書きだけで、自分1人の生計を立てるのに困ることはなくなるだろう。

「お嬢様が嫌がられていた縁談も破談となりました。あのお方もすでに他のお相手を見つけられたようです」

「……そう」

それは初耳だった。当時は嫌なヤツだと思っていたが、今にして思えば悪いことをしたという気持ちもある。会ったら一言くらい詫びるべきかとも思ったが、相手にしてみれば余計なことだろうか。

会ったら――か。

それも、あの日、屋敷を飛び出してから一度も考えたことのない未来だった。

“会ったら”

その単語が、別の情景を私に想像させる。

ルナが私を見ている。

不思議と、私は彼女がどんな言葉を期待しているかすぐにわかった。……いや、違うか。正確には、私がなかなか口に出せずにいる言葉をすでに察していて、その言葉が私の口から出てくるのを待っている、のだ。

私は言った。

「……お父様は、お元気かしら」

その問いを躊躇った理由は、それもやっぱり私の罪悪感からだろう。

そもそも私は父が嫌いだったわけではない。屋敷を出た理由の1つ――許婚のことだって、長く離れて、月日が経って、当時の父の苦悩を推察する程度の経験も得た。

言葉にすると、大きな感情の波が胸の中に押し寄せた。

「寂しがっておられます。それを表に出す方ではありませんでしたけれど」

ですが、と、ルナは付け加える。

「お嬢様が戻られることを信じておいでです」

「そう……」
懐かしさがこみ上げる。
でも――
私はそれを押さえ込んですぐに言った。
「戻れないわ」
「卒業なさった後でも――」
「そうじゃなくて」
もちろんそれもある。ただ、それは一番の理由じゃない。
私は肌身離さず持っている黒い本の背表紙をそっと撫でた。
「いい加減、あの男を解放してあげようと思っててね。ずっと探しているの。その方法を」
「……？」
ルナは珍しく一瞬だけ戸惑った顔をしたが、やがてその言葉の意味に達したようだ。
「お嬢様、それはティースくんの――？」
私は彼女を制した。
言いたいことはわかっている。
「あいつはもう自分自身の目的を見つけている。やり方さえ間違わなければ、本当のことを思い出したところで道を失うことはないと思うわ」
「……」
その程度の強さは持っている。いや、ああ見えて芯はそこそこ強い男なのだ。
私はそこで微かに頬を緩めさせた。
「どの道、ずっとこのままじゃいられないじゃない。だってこのままじゃあの男、好きな女の子と触れ合うことすらできないのよ。この呪いの副作用で、ね」
そう言って頭に思い浮かんだのはリィナの顔だった。
……実際どうなのかはわからないけれど。その機会ぐらいは与えてあげないと可愛そうだ。

ふと見ると、ルナが心配そうな顔で私を見ている。
なんとなく、彼女の言っていることがわかるような気がして、私は答えた。
「本当のことを知れば、きっと恨まれるでしょうね。でもいいのよ、別に。これまで散々利用させてもらったのだし」
そ……っと、無意識に、手が髪飾りに伸びた。
「……お嬢様がそこまでお考えなのであれば。今のあの子のことは、きっと――私よりお嬢様の方がお詳しいのでしょうから」
そう言ったルナの表情は少しだけ寂しそうだった。
私はそんな彼女から視線をそらして西日の方角を眺める。
「それが終わったら――そうね」
乾いた風の音が妙に胸に響いた。
「考えてみてもいいかもね。あなたの言うとおり……」
学園を卒業し、あの男がデビルバスターになって――そう。
その頃にはもう、私がネービスに留まる理由はなくなっているかもしれなかった。

“今度は君か”と。
ルドルフ＝ティガーはそう言った。

“君のような人材が一番危険ですからね”
と、付け加えるように言った。

「君たちと近い場所でスタートすることができたという意味では、とても運がいい」

「!?」
それが合図だった。
聞いたことのない鳴き声で数羽の鳥が飛び立つ。上空の枝葉がざわざわと揺れて、抜刀の音がそれに重なった。
ルドルフ＝ティガーの武器は抜き身の大剣だ。
抜刀したのはティースのほうである。
いきなりの事態にもちろん戸惑った。
丸い眼鏡も、細い切れ長の目も、奇妙な文様の長羽織も、最初に会ったときとなにも変わっていない。
ただ、ティースに向けられた殺気は間違いなく本物で、彼はそれを隠そうともしていなかった。
これだけの明白な事態なら、ティースとてモタモタしてはいられない。
迎え撃つ。
躊躇なくしかけてきたルドルフの動きは、大きな剣を携えながらも俊敏だった。
「くっ……」
襲い掛かった一撃を受け流そうとしたティースの体がバランスを崩す。
その武器の形状から容易に想像できたことだが、重い。

片膝をついて転倒を回避すると、次の一撃に剣を合わせながらティースは叫んだ。
「待ってくれ！　何か勘違いを――」
その言葉に剣戟の音が重なった。
ルドルフは何も答えず、ただ大剣を打ち振るう。
今度は鍔を合わせる形になった。
片膝をついたティースに対し、ルドルフは上からぐいぐいと力を込めてくる。
（……この、剣――）
顔からほんの数センチ。やや刃こぼれの目立つ大きな剣は血の跡がこびりついたままだった。“切る”というより“切り潰す”という表現が似合いそうなその武器は、特別な知識を持たないティースにさえ、あの夜に見たファティマの傷口を連想させるに十分な形状をしていた。
（なら――）
シアボルドの言葉、そして今のこの現状。
“まさか”
“なんのために？”
湧き上ってくるそれらの疑問を頭の隅っこに追いやって、スイッチを切り替える。
そう。
おそらく犯人は――彼だ。
そう認識した瞬間、心臓から全身へ熱い血が駆け巡る。試験のことも、目の前の相手との実力差のことも、一時的に頭の中から消え失せる。
ただ、最後に一度だけ問いかけた。
「貴方が……ファティマを殺したのか？」
「……」
ルドルフは答えない。表情すらも動かない。丸い眼鏡の奥の目はただ無機質な殺気だけを放っていた。

それで、ティースの覚悟は完了した。
ざっ……！
ルドルフの右足が跳ね上がる。鋭い蹴りはティースのわき腹を狙ったものだったが、ティースはそれを狙い済ましたように全身に力を込めた。
「はぁっ！」
押し込む。
「っ！？」
ルドルフの体勢が崩れる。右足の蹴りは大きく軌道をそらし、ティースの眼前で空を切った。
その間にティースは間合いを取って体勢を立て直す。
「……」
同じく、素早く体勢を立て直したルドルフが油断なくティースを見据えた。
「聖力値が高いだけかと思ったら、意外と戦い慣れしていますね」
意外そうだった。
どうやらすぐに決着がつくものだと考えていたらしい。
「少なくとも、昨日始末した連中よりは手強そうだ」
そう言って構えを直す。
「……」
ティースも剣の柄を握りなおした。そうしながら意識を僅かに辺りに向ける。
人の気配は感じない。シアボルドは言葉どおり逃げたのだろうか。あるいは気配を消して様子を見ているのか。いずれにしてもこの状況では、彼が加勢してくることはないだろう。
「……どうしてこんなことをする？」
「どうして？」
「お前は普通にしていても合格できるだけの実力者なんだろ？　こんなことをしたって何の意味もないじゃないか」
「意味はありますよ。といってもヒューイット＝レーゼルのような

イカれた理由ではなく」
説明する気はありませんが、と、ルドルフは冷笑して、再び動いた。
「なら……！」
覚悟はできている。
結果は考えなかった。全身を駆け巡る血液がそれを拒否している。
今はただ――目の前の“悪”を討つ。
彼の気合に呼応したかのように、愛剣“細波”の刀身が瑞々しさを増して煌く。それとは対照的に無骨なルドルフの大剣が重なって甲高い金属音が響いた。今度は力比べにはならず、互いにすぐさま切り返す。
剣戟の音に遠くの獣の遠吠えが重なった。
（重い……っ！）
手のひらがしびれる。それほど大柄ではないが、あれだけの大剣を振り回しているだけあって、ルドルフの斬撃には重みがある。
あっという間にティースは防戦一方となった。
受けて、流す。
受けて、流す。
すぐに相手の動きを注視する。
次の一撃を受け流すべく。
受けて、流す。
受けて、流す。
受けて――
と。
（……なんだ？）
やがて、ティースはその“違和感”に気付いた。
（手を抜いているのか……？）
確かにルドルフの一撃は、気を抜いていたら手が痺れ、剣を落としてしまいそうなほどに重い。が、それはティースが対応できないほどのものではなかった。事実、今のティースは体勢を崩さず、相

手の次の一撃を待ち構える程度の余裕がある。
逆の言い方をすると。
反撃のチャンスがある。
防戦一方だったのは、強敵であるが故に、敢えて防御に重点を置いて戦っているからだ。
加えて、ルドルフの動きはどこか緩慢に見えた。重量のある武器を振り回しているのだから、それも当然なのかもしれないが、相手はこの試験でも1、2を争うほどの実力者なのだ。そんなことはあるはずがない。
そう思えた。
逆に実力差がありすぎて遊ばれているのかもしれない。
だとしたら、いや、そうだとしても――
「……っ！」
しかし。
ふとした瞬間に、ティースはその認識を改めることとなった。
「おおおおお――っ！！」
先に張り詰めた声を上げたのは、ルドルフのほうだった。先ほどまでの落ち着いた気配はすでになく、仮面のようだったその表情には明らかな“誤算”が浮かんでいる。
まさか。
いや、そうか――
そこに至ってティースはようやく気付いた。
直線的な斬撃を受けて、流す。
直後、ティースは反撃に出た。
おそらくはじめての反撃。
「くっ！」
それだけでルドルフは僅かに崩れた。ティースの剣筋に、その速度に、反応しきれていない。かろうじて剣の鍔で防いだが、慌てて後ろによろめいた。
互角？

いや――
一瞬で立場が入れ替わる。
“細波”の繰り出す斬撃に、今度はルドルフが防戦一方となった。
そこでティースははっきりと認識する。
（パーシヴァルほどじゃあない……！）
はっきりとわかった。タイプは違えど、パーシヴァルほど手ごわい相手ではない、と。
それはつまり勝てない相手ではない、ということ。
ガキィン！！
再び鍔が重なり合う。今度は互角の体勢。
「……ルドルフ＝ティガー」
カチカチ、と、刃と刃が乾いた金属音を立てる。
「！」
「もしお前が犯人でないのなら、今のうちにはっきりと言ってくれ。じゃないと――後悔するぞ」
３０センチほどの距離で、互いの視線が絡まる。
「……」
１秒。
互いに離れ、すぐに次の一撃。
ティースは下段に。
ルドルフは上段に。
切っ先が動いたのはルドルフの方が早かった。
だが、遅れたわけではない。
あえて遅らせたのだ。
凝視する。
両手でぐっと“細波”の柄を握る。
斜め上段から。
ルドルフの持つ禍々しい大剣が振り下ろされる。
その動き出しを凝視する。
そして次の瞬間。

「！」
ティースは下段に構えたまま突っ込んだ。
傍から見れば無謀な、捨て身のようにも見える突進。
「！？」
ルドルフの驚愕の表情が見える。
おそらく彼の目には、ティースがまるで博打の一手を打ったように映っただろう。
だが、違う。
――見えていた。
まるでスローモーションのように。
時間が止まったように。
ルドルフの剣の動き、角度から、一瞬の未来に訪れるであろう、その斬撃の軌道。
（避ける……！）
無駄な動きを一切省き、ギリギリで、かつ自らの一撃を保つ。
無謀ではない。
ティースには自信があった。
受けることは考えず、ただ次の一撃を確実に決めることだけを考えた。
振り下ろされる重い一撃。
……だが、その一撃がティースの体を捕らえることはなかった。
捌いた体のほんの数センチ横、凶刃が空気を裂く。
と、同時に、
「懺悔しろ……ルドルフ＝ティガー――ッ！！！」
振り上げたティースの剣が、完全に無防備となったルドルフの体を捕らえた。
手ごたえ。
肉を裂き、骨を絶つ感触。
「ッ――――！！！！」
声にならない絶叫がルドルフの口から漏れた。

血飛沫がティースの体を汚す。
大剣が斜めに地面に突き刺さった。
少し遅れて、体を離れたルドルフの右腕が地面に落ちる。
「っ――が……っ！！」
ルドルフは膝から崩れ落ち、左手で、肘の先の無くなった右腕を押さえた。
「終わりだ……」
勝負はあった。
そう言ってティースはルドルフに剣を向ける。
極度の緊張が緩んだせいか、全身からどっと汗が吹き出した。
「ぅ……ぎ……っ！！」
ルドルフは奥歯をかみ締め、声をどうにか抑えながらティースを睨み上げた。
「大人しくすれば、命までは取らない。お前には……本当のことを話してもらう必要がある」
すぐに手当てをすれば命は助かるだろう。もちろん殺す気はなかった。
「……」
しばらくティースを睨みつけていたルドルフだったが、やがて諦めたように視線を落とす。彼がいくら強靭な精神力の持ち主であったとしても、これ以上戦うのは不可能だろう。
「……止血するから、大人しくしていろ」
ルドルフは何も答えなかった。
一応、油断なく、右手に剣を持ったまま、ティースは左手で懐を探り、止血用の包帯を取り出す。
抵抗するような気配はない。武器を隠し持っているような気配もない。どうやら本当に観念したようだった。
と。
「……？」
ふと視線を上げて気付いた

視線の奥。
木々の生い茂る森の、奥の奥。
そこに、それまで感じなかった人の気配が生まれた。
集中していて気付かなかったのか。
あるいは相手が完璧に気配を消していたのか。
嫌な気配。
――殺気。
同時に、風切音が鳴った。
「っ！　伏せろっ！！」
叫んだが、遅かった。
「！？」
どすっ、と。
鋭利なものが肉にめり込む鈍い音。
ルドルフの体が仰け反った。
顔は驚愕と苦痛に歪み。
上空を向いた喉からは、２本、木の枝が突き出していた。
いや、枝ではない。
堅い木の枝を削って作られた矢だった。
（――っ！？）
ルドルフはそのまま仰向けに倒れた。
「……誰だっ！！」
攻撃に備えながら、矢の飛んできた方向に駆ける。
が、次の攻撃はなかった。
それどころか、そこにあった気配は逃げ出すこともせず。
ざっ、と。
森の奥から姿を現す。
「っ……お前――！」
「よお、ティース。危ないところだったな」
「シアボルド……」
姿を現したシアボルドは右手に弓を抱えていた。

その場に似合わない、呑気な顔と声。
別れ際、ルドルフに怯えていたときの面影はどこにもない。
「ま、言葉どおり逃げようかとも思ったんだがな。お前が思ったより善戦してたようだから、咄嗟にその辺のものを使って弓矢を作ったのさ。いや、お前ががんばってくれて良かったよ」
そう言いながら、シアボルドはティースの脇を抜けてルドルフのもとへ向かう。
「――おい」
「ああ、これがルドルフ＝ティガーの武器か。間違いないな。ファティマとヒューイットを殺ったのはこいつだ」
こつん、と、地面に突き刺さった大剣をつま先で軽く蹴り飛ばし、そのままくるっと身を翻して戻ってくる。
「おい、シアボルド！」
「ん？　なんだよ」
シアボルドは怪訝そうにティースを見た。
「心配すんなって。これまでの経緯を話せばきっと試験は続行できるさ。こういうケースはこれまでにもあったんだ。つまり――」
と、完全に事切れたルドルフの遺体を見下ろす。
「よからぬことを考えて試験に参加した悪党とやむを得ず戦った。結果として相手の命を奪ってしまった。まあこれは正当防衛だな。俺とお前の証言、ファティマとヒューイットの死体。ルドルフの武器、その他諸々……ま、俺たちの正当性を示すには十分すぎる証拠がある。こういう場合、この試験では大抵お咎めなしになる」
得意そうにそこまで言って、シアボルドは軽く両手を広げた。
「……おいおい。剣を下ろせよ、ティース。何のつもりだ」
「それはこっちのセリフだ、シアボルド」
ティースは両手で“細波”を構え、シアボルドを睨みつける。
ある“疑念”が生まれていた。
「お前――何が目的だ」
「何のことだ？」

「とぼけるな！」

ルドルフの喉を貫いた矢は、サバイバルの初日の夜にティースを襲ったものと同じだった。もちろん即席で作られた木の矢はそれほど珍しいものではない。だが、シアボルドが手にしている弓は明らかに既製のもので、最初から持ち込んでいたものだ。

獣魔を相手にするというこの試験の性質上、弓を武器として持ち込む受験生は多くない。

つまり――あの日、ティースを襲った矢の持ち主は彼である可能性が高い。

加えて、今のこの状況。

「勝負はついていた！　彼を殺す必要はなかった！」

「なんだって？　いや、遠目だったんで状況がわかりにくくてな」

シアボルドはさらにとぼけた。

あり得ない。

しかし――そうだとして、シアボルドが敢えてルドルフを殺した理由は？

すぐに思い浮かんだことがあった。

……ルドルフとシアボルドが“グル”であったという可能性。

「まさか、お前――」

考えてみれば、ティースと相対したルドルフの態度は最初からおかしかった。まるでティースが来ることを知っていたかのようで――そしてティースをルドルフのもとまで案内したのはシアボルドだ。

ならば。

もしそうだったとして。

仲間だったルドルフを殺した理由は？

簡単だ。

――口封じ。

「なにを邪推しているかは知らないけどよ」

ティースの視線に何かを感じ取ったのか、シアボルドは少し距離を取った。

「証拠がないなら迂闊なことは考えないほうがいいぜ。下手なことすりゃ、試験失格どころか犯罪者となって牢獄行きだ。ま、お前ならそんなことしないだろうけどさ」

「……！」

確かに証拠はない。たとえその推測が真実だったとしても、ファティマたちを殺したのはやはりルドルフなのだろう。

とすると、その推測を裏付けることは難しい。

「……」

「ま、いいさ。何にしろ、良かった。これでお前と俺が組んでる理由もなくなったな。じゃ」

そう言って立ち去るシアボルドを追求する手段は思いつかなかった。

第3試験“サバイバル”5日目。

ティースはこの日、事態の説明のため試験を中断することとなった。

その４『サバイバル～１０日目～』

幸いなことに、その日はどこからでも太陽の姿を確認することができた。雲ひとつ浮かんでいない蒼空の下、ある者は落胆し、ある者は疲弊した体を引きずり、そしてある者は次のステージへ向けて気を引き締めなおしながら。

１０日目の正午。

この時間をもって、５０箇所あるリタイア用の入り口は第３試験“サバイバル”合格者たちの通用門へと変わる。それから６時間以内、つまり１８時までに“クライアント”を手にしてここを出た者のみが最終試験“トーナメント”へ駒を進めることができるのだ。

最初の合格者が生まれたのは１２時１３分のことだった。それからパラパラと――途中、森を出ようとした受験生に獣魔が襲い掛かって試験官に退治されるというようなアクシデントもあったが、１５時までに９名の合格者が産まれた。

そして、その頃の帝都。デビルバスター試験会場の待合室では、合格者の名前が逐一発表され、そのたびに各国のスカウトや受験者の身内などがどよめきを上げていた。

「――番。ステルシア＝ブライトン。第３試験、１０人目の合格者とする」

１０人目、本試験では初めて女性の合格者が発表される。

時間は１６時を回っていた。

――例年よりもかなり少ない。

――今年はレベルが低いのか。

――いや何かアクシデントがあったらしい。

会場が例年以上にざわめき、憶測の入り混じった情報があちこちで乱れ飛んでいたのは、ファティマ＝ヴェルニーやルドルフ＝ティガー、ヒューイット＝レーゼルといった、試験前に有力候補として

囁かれていた面々の名前が、いつまで経っても合格者として挙がってことなかったことが原因だった。

そんな中、

「……ティース様もパースくんも、なかなか戻ってきませんね」

フィリスが心配そうにそう呟きながら視線を彷徨わせる。

羊を思わせるくせっ毛が心配そうにふわふわと揺れた。

「そうね。なにをのんびりやっているのかしら」

そんな彼女に隣で言葉を返したのはシーラ。

2人はティースとパーシヴァルの結果を聞くため、パメラとクリシュナを留守番役に残し、朝からこの会場へとやってきていた。

ティースもパーシヴァルも、今のところリタイヤしたとの情報は入ってきていない。つまり2人ともまだ試験会場である森の中にいるということになる。

通常だと、ここまでリタイヤしていないのは、第3試験を突破する可能性が極めて高いということになるのだが、今年の試験がなにやらキナ臭い雰囲気であるらしい噂は、すでにシーラたちの耳にも届いていて、2人とも言葉には出さないものの、若干の不安を覚えている。

合格までのタイムリミットはあと2時間弱。にもかかわらず、ここまでリタイヤしていない受験生の数は４０名。うち１０名はすでに合格者として発表されていたから、森に残っているのは約３０名ということになる。

これは異常なことだった。

“クライアント”を所持し、合格条件を満たしている受験生は、１２時を過ぎてすぐに試験会場から出てくるのが普通だ。例年、１５時を過ぎる頃には残った受験生の９割程度は合格者として森から出てきている。試験会場に長く残っていても何のメリットもないのだから、当然のことである。

にもかかわらず、今年は１６時時点で４０名中１０名しか戻ってきていない。

残った３０名。

これがどういう状態なのか、考えられるケースは３つある。

１つは合格条件を満たしていながら森から出られないケースだ。道に迷って出口の場所がわからなくなっていたり、出ようとする途中に獣魔の襲撃を受け、撃退にてこずって出口まで辿り着けずにいる者、中には日付を勘違いしていて翌日が試験終了日だと思っていた、なんてケースも過去には何度かある。

このケースの場合、事情があって遅れているだけなので、タイムリミットにさえ間に合えば何の問題もない、つまり合格する可能性がまだまだ残されているグループである。

２つ目は現時点で“合格条件を満たしていない”ケースだ。つまり合格条件である“クライアント”を獣魔から守りきれずに失ってしまった者である。この場合、タイムリミットギリギリまで自分の、あるいは他人のクライアントを求めて森を彷徨うことになる。が、獣魔に奪われたクライアントはボロボロに破壊されてしまっているのが普通だし、他人が誤って落としたクライアントをこのタイミングで偶然発見できるなんてことはまずあり得ない。だから、このケースの受験生たちはタイムリミット後、不合格者として森を出てくることがほとんどだ。……中には出口付近で別の受験生を待ち伏せしクライアントを奪おうとする者もいるが、相手も警戒している上に、試験官の目も光っていることから成功する可能性はほとんどない。

そして３つ目は、すでに命を落とし、あるいは動けなくなるほどの重傷を負って、かつ試験官にまだ発見されていないケースである。

これら３つのケースのうち、１つ目と２つ目のケースに当たる人数は、年毎に大きな変化がないのが普通で、つまり今年の場合は、３つ目のケースに該当する受験生が異常に多いのではないかと考えられていた。

その噂が会場内のざわめきを大きくしていたのである。

と。

そのとき、会場の隅がいっそう大きくどよめいた。
シーラが騒ぎの方向へ視線を移すと、そこには、デビルバスター協会の事務官らしき男と、その彼の言葉に俯いたまま動かない女性の姿が見えた。
なにか悪いことがあったのだろう、と、容易に想像できた。
無言で視線を逸らす。隣を見ると、フィリスも同じものを見ていたのだろう。少し表情を強張らせていた。
直後、1名の受験生のリタイヤが会場に告げられる。
先ほどの女性はおそらくその受験生の関係者なのだろう。
「……」
いつの間にか、シーラとフィリスの間には会話がなくなっていた。
ふと会場の外に視線を向けると、外はだいぶ暗くなっている。時間を見ると17時近かった。
10人目の女性以降、合格を告げる事務官の声は聞こえていない。代わりに、この1時間で11名のリタイアが発表された。その大半が死亡によるリタイヤであろうことは、会場の雰囲気でなんとなく察することができた。
17時を回って、さらに3名のリタイアが告げられる。
幸か不幸か、その中にティースとパーシヴァルの名前はない。
「遅い……ですね」
「そうね」
不安になっているのだろう。フィリスの声は少し小さくなっていた。
もちろん、シーラも何も感じていないわけではない。ただ、何も情報がないのだから、余計なことを考えても仕方ないと割り切っているだけだった。
「駄目なら駄目で、とっとと戻ってくればいいのに。待つ方の身にもなってほしいものね。……寒くない？　フィリス」
「え、あ、はい。大丈夫です」
開け放たれた入り口から入り込んでくる風は少し冷たくなってい

た。が、会場にはたくさんの人が詰めているので、それほど寒さは感じない。
残りは１５名ほどだろうか。
１７時３０分。
１名のリタイアが告げられる。
「――番。シアボルド＝マティーニ。要件を満たさなかったため不合格とする」
その名に反応する者は会場には誰一人いなかった。
「……」
「……」
会場もしんと静まり返っている。
あと２０分。
会場の外から馬のいななきが聞こえた。
１人の事務官が駆け込んでくる。おそらくは試験会場からの早馬だろう。
またリタイヤだろうか。
それとも――
「――番。パーシヴァル＝ラッセル」
ハッとする。
隣を見ると、目を大きく見開いたフィリスと視線が合った。
２人同時に視線を事務官のほうへ向ける。
息を呑む。
「第３試験、１１人目の合格者とする」
はっきりと、事務官の言葉が聞こえた。
と、同時に、フィリスが文字通り飛び上がって手を叩く。
「……やりました、シーラ様！　シーラ様！　パースくんが！」
「落ち着きなさい、フィリス。試験が終わったわけではないのだから」
そう言いながら、シーラもホッと短く息を吐く。
喜びよりもどちらかといえば安堵の方が強かった。

それに、まだ――
「あ――」
そんなシーラの心情を察したのか、一転してフィリスの表情が曇る。
「そ、そうですよね。まだティース様が……」
そして申し訳なさそうに声を小さくして言った。
シーラはそんな彼女に微笑みを向けて、
「違うわ、フィリス。まだ最終試験が残っているという意味よ。ティースのことはまた別の話」
そうしているうちに、残り１０分を切った。
あるいはパーシヴァルと一緒に行動していて、立て続けに名前を呼ばれるのではないかと微かに期待していたが、どうやらそうではなかったらしい。
シーラはフィリスに言った。
「あなたは先に宿に戻ってなさい。パーシヴァルもあと1時間もすれば戻ってくるだろうし、出迎えてあげるといいわ」
だが、フィリスは首を横に振った。
「いえ。私もティース様の結果が気になります。それに宿にはパメラちゃんやクリシュナ様もおられますし」
「……あなたが出迎えてあげることに意味があると思うんだけど」
「？」
「まあ、いいわ」
これ以上は余計なお節介になりそうだったので、シーラはそれ以上何も言わなかった。
そんな話をしているうちに、とうとう時間は１８時を回る。
「……ダメ、かしらね」
まだ完全に締め切られたわけではない。試験会場からここまで早馬で２０分はかかる。１８時ギリギリに合格者が出たとすると、それがここで発表されるのが１８時２０分頃。試験官が締め切りのアナウンスをするまで、可能性はゼロではない。

が。

先ほどもいったように、合格者は前半に集中するのが普通である。パーシヴァルのように17時台で合格者が出ること自体が稀だ。だから18時過ぎてから合格者が発表されるなんてことはほとんどない。

だからシーラもフィリスも半ば諦めムードだった。あとは無事に戻ってきてくれさえすれば、と願うのみ。

――と。

そのときだった。

「おおーい」

結果の出た受験生の関係者たちがいなくなり、結果を待つ人々の姿も半分ぐらいに減った会場の中に、妙に聞きなれた声が響く。

「え？」

フィリスは最初気付かなかったらしい。

が、シーラはすぐにそれが誰の声なのかわかった。

「シーラ様？」

辺りを見回すシーラに、怪訝そうな視線を向けたフィリス。

だが、

「おおーい、こっち、こっちー」

次の呼びかけに、フィリスも気付いたようだ。

「え……」

2人で辺りを見回すと、会場を埋める人垣の中、他の人々より頭1つ分ぐらい抜けた、見覚えのある顔の青年が、彼女らに向かって手を振っているのが見えた。

「ティ、ティース様！？」

「ティース？」

パッと顔を輝かせたフィリス。

だが、シーラは喜ぶよりも先に怪訝そうな顔をした。

そんな2人のもとへ、人垣を掻き分けながらティースがやってくる。

……その格好を見て、シーラはますます怪訝な顔をした。
服装こそ、試験を受けにいったときと変わらない。だが、１０日間を森の中で過ごした直後にしては、髪や体が汚れていない。
いや、そもそも――
「２人ともやっぱり来てたのか。パメラは留守番か？　パースの結果はどうだった？」
相変わらずのとぼけた笑顔を浮かべながらティースは矢継ぎ早にそう質問した。
「ちょっと待ちなさい」
が、シーラは眉間に皺を寄せてその質問を遮る。
当然の反応であった。
「お前のほうこそどうしたの？　合格もリタイヤもまだ発表されてないわ。それにその格好……」
するとティースは一瞬頭の上にハテナマークを浮かべて、
「え？　あ、そっか。まだ発表されていないのか」
「どういう意味？」
と。
シーラがそう質問したところで会場の外から再び馬のいななきが聞こえた。
早馬だ。
おそらくは１８時時点の最終結果を伝えるものだろう。
駆け込んできた事務官が、発表担当の事務官に何事か伝える。
そして場内にアナウンスがあった。
「――番。ティーサイト＝アマルナ。第３試験、１２人目の合格者とする。なお、これをもって第３試験は終了したものとする」
「……え？」
その事務官とティースの顔を見比べながらフィリスが不思議そうな顔をする。
「……どういうこと？」
その疑問は当然だった。終了時刻ギリギリに合格したのだとする

と、ティースがすでにここにいることの説明がつかない。かといって、もっと早い時間に合格していたのならば、発表が最後の最後になる意味がわからない。

「ああ、えっと……」

無言で説明を求めるシーラに、ティースはちょっと困ったような顔をして、

「ちょっと面倒な話なんだ。とりあえず宿に戻ってから説明するよ」

と、言った。

そこへ事務官のアナウンスの声が続く。

「これより第3試験を合格した12名の名を読み上げます。――番、イストヴァン＝フォーリー。――番、――、――番、パーシヴァル＝ラッセル。――番、ティーサイト＝アマルナ。――番、――」

人々が次々と会場を出て行く。

「なお、残る13名の受験生についてはこれより試験官による状況確認が行われます。この後2時間はこの会場において逐次状況をお伝えします――」

ティースの“ちょっと面倒な話”については、そこから30分ほど時間がさかのぼる。

「……合格、ですか？」

ティースは驚きとともにそう聞き返していた。

帝都内にあるデビルバスター協会本部、3階建ての2階にある客用の個室で、ティースはクッションのきいた1人がけソファの上にいた。

「ああ、そうだ」

机を挟んで向かい合っているのは顔見知りのデビルバスター、ネスティアスのディグリーズの1人であるクインシー＝フォーチュンだった。変な、いや、少々特徴的な、全体を横に流した前髪を軽く

手で梳くように直して、クインシーは机の上で手を組み、まっすぐにティースを見つめている。
「協議の結果、そういうことになった。私としては妥当な判断だと考えるがね」
「え、でも……」
ティースは戸惑いの声をあげる。
あの日――ルドルフと剣を交えた後、ティースは試験を中断し、状況をデビルバスター協会へと伝えた。それから3日の間、宿には戻らずにずっとこのデビルバスター協会本部に留まっていたのである。
クインシーは言った。
「この3日間の調査で、死亡したルドルフ＝ティガーが数名、あるいは数十名の受験生を殺害したのはほぼ間違いないと判断された。なおかつ、君がその情報を持ち帰って調査を開始して以降、受験生の不審死はぱたりと止まった。それが君の功績であることに疑いはないし、それをもって第3試験に合格したと見做すことは決しておかしなことではない、と、私は思っている」
ティースの証言を聞いて、最初は協会側の動きも鈍かったのだが、ちょうど最終試験の審査員として帝都にきていたクインシーと再会したことで事態は急速に動いた。ティースの証言を元に試験の裏では調査が行われ、その結果、クインシーが言ったように、多くの受験生たちの不審な死が、そのやり口、傷口の形状などから、ルドルフの仕業であることが証明されたのである。
それは結果的に、ティースの証言が正しいことの証明ともなった。
「まあ、それでもだいぶ揉めたがね。私と同じような外部のデビルバスターたちは皆、君を合格させるべきだと主張したのだが、デビルバスター協会の連中はどうにも頭が固くてな。前例がないことに後ろ向きなのはどこの組織も一緒のようだ」
「……」
「どうした？　あまり嬉しくなさそうだが」

クインシーは怪訝そうだった。
もちろん嬉しくないわけではない。ティース本人はリタイヤしたつもりでいたのだから、なおさらのことだ。
ただ――
「シアボルドは？」
すっきりしなかった。
「……シアボルド＝マティーニか」
クインシーは少しだけ視線を流した。
「君も理解していると思うが、彼に関しては証拠がなにもない。君自身、決定的な何かを掴んでいるわけでもないのだろう？」
「それは……そうです」
そのことはティースにもよく理解できていた。そもそもティースが彼を疑ったのは、彼の態度や、状況的に必要がなかったにもかかわらずルドルフを殺したこと、あとは彼がそのときに使った武器が、以前ティースに向けられたことがあること……それらを総合して“推測”した結果だ。つまりどれも決定的な証拠がない。ティースの証言が１００％信用されるという前提でさえ、すべては状況証拠に過ぎなかった。
そんな、納得できていないティースの表情を見て、
「君は、なかなか正義感の強い性格のようだ。それは私にとっても好ましいものではあるが、ね」
クインシーは言い聞かせるような口調で言った。
「少なくとも君はファティマ＝ヴェルニーの仇を討った。自らの身の危険や不合格となるリスクを負って、実力のある相手に果敢に挑み、それを成し遂げた。……それ以上を求めることも決して悪いことではないが、妥協点を探すことも大事なことだよ」
「……」
「つまり、そろそろ自分の試験に集中してはどうか、という、まあいわば提案だ」
「……はい。ありがとうございます」

クインシーの言うことは十分に理解できた。現時点でシアボルドを糾弾することが難しいことも。それに、再び試験に挑戦できるという事実は、ティースにとってやはり魅力的なことでもあった。

クインシーは満足そうに頷く。

「礼には及ばないよ。……礼などいらないから、君がディバーナ・ロウを抜けて、私のもとに来てくれればそれが一番良いのだが」

「はは……」

冗談だと思い、ティースは笑って返したが、クインシーは最後まで冗談だとは言わなかった。

「これは私の推測だが、ルドルフ＝ティガーはおそらく“魔”の協力者の一味だろう。公にはなっていないが、過去にも何度かそういう輩が試験に紛れ込んだことがあるらしい」

ティースは驚いて、

「魔の協力者？　魔の組織に協力している人間ということですか？」

「珍しいことじゃないよ。特にヴォルテスト条約に加盟していない南の国々にはそういった連中が多いと聞く。連中にとってこのデビルバスター試験は、将来有望なデビルバスターの卵たちを潰すのに絶好の機会というわけだ。シアボルド＝マティーニについてもそっちの方向で秘密裏に調査が継続されることになる。だから、仮にあの男がクロだったとして、来年も同じことをしようとしたとしても、おそらく今年と同じようには行くまい」

「そうですか……」

その説明に、ティースは少しだけ胸のつっかえが取れたような気がした。

クインシーは満足そうに頷いて、

「さあ、君もそろそろ会場のほうに向かったらどうだ？　君の合格の報を待っている者がいるのではないか？」

と、言った。

「あ」

と、ティースは宿で待っているシーラたちのことを思い出す。

パーシヴァルが合格できたのかどうかも気になった。
ゆっくりとソファから腰を上げる。
「それじゃあ失礼します。クインシーさん、今回はありがとうございました」
「先ほども言ったが、礼には及ばんよ」
そんなクインシーに対し、ティースは精一杯の感謝を込めて一礼すると、部屋を出たのだった。

ティースとパーシヴァルが第3試験に合格した夜、ささやかなお祝い会が催されることになった。
「……協力してた人に最終日の朝にクライアントを盗まれてしまいまして。正直、もう間に合わないかと思ったっす」
会場は宿から徒歩5分ほどの場所にある小さな酒場。宿に留守番のクリシュナとパメラを残し、ティース、シーラ、パーシヴァル、フィリスの4人が顔を揃えていた。
「そいつはどうやら初日にクライアントを失くしていたらしくて、最初からそのつもりで俺に近付いたみたいっすね。結局逃げたそいつを見つけて奪い返すことには成功したんですが、今度は道に迷ってしまっていて」
「それであんなにギリギリだったのね。なかなか出てこないものだから心配してたのよ」
シーラは呆れたように言った。色白の頬が今はほんの少しだけ朱に染まっている。手には果実酒。それで3杯目だった。
「面目ないっす」
パーシヴァルは肩を落としてそう言うと、まるでそれが罪滅ぼしだとでもいわんばかりに、半分ほど残っていた麦酒を一気に飲み干した。
隣のフィリスが眉をひそめる。

「パースくん。そういう飲み方、あまり良くないってマイルズ先生が言ってたよ」
　するとパーシヴァルは笑いながら胸を張って、
「まだ2杯目だから大丈夫だって。……ティースさん、もう一回乾杯しましょ、乾杯。まだイケますよね？」
「ん、ああ、まあね」
　ティースはちびちびとようやく1杯目の麦酒を消費しきったところだ。
　フィリスを除く3人はいずれもアルコールを注文していたが、いずれもハメを外して飲むようなタイプではなく、場は比較的落ち着いた雰囲気だった。
「じゃあ、乾杯」
「かんぱーい！　……そういや」
　同時に運ばれてきた麦酒で本日2度目の乾杯をした後、パーシヴァルは何事か思い出した様子で言った。
「俺、シーラさんがお酒飲んでるの初めて見たかも。屋敷でも普段あんま飲まないっすよね？」
　そんなパーシヴァルの疑問に、シーラが答える。
「そうね。堂々と飲めるようになったのは先月のことだもの」
「へ？」
　と、パーシヴァルはきょとんとした顔をした後、
「え。そういや先月の誕生日……って。じゃあシーラさん、まだ16歳っすか！？」
「ええ、そうよ」
「パースくん、知らなかったの？」
　フィリスが驚いた顔でそう言うと、パーシヴァルは何やらショックを受けた様子で、
「知らなかったっつーか……今、初めて年下だと気付いたとゆーか……」
「あれ。パースも16歳じゃなかったっけ」

ティースがそう言うと、パーシヴァルは頷いて、
「でも来週で17歳になるっす」
「ああ、そういや6月だったか、誕生日。……フィリスは12月で17歳だよな、確か」
「はい」
今は3人とも16歳だが、誕生日からするとパーシヴァル、フィリス、シーラの順で、生まれた年でいうとシーラだけ1年遅い。ちなみに、他の屋敷の面々ではリィナがパーシヴァルたちと同じ年の生まれである。
シーラは果実酒の杯を傾けながら、
「そんなに意外かしら？」
「少なくとも、俺やフィリスより下には見えないっす」
と、パーシヴァルは正直に言った。
その気持ちはティースにもよく理解できた。
（シーラのヤツ、昔から大人びてたからなぁ）
ミューティレイクの屋敷に来る前など、3歳差、身長が20センチ以上違うにも関わらず“姉弟”に間違われたことがある。それはもちろんティースが童顔であることも大きな要因であるが。
そこでフィリスが言った。
「でもシーラ様、髪を下ろしたらもっともっと大人っぽく見えますよね」
「そう？」
少し首を傾げて、シーラはそっと右手を頭の上――ポニーテイルをまとめた髪飾りの上へと置いた。
パーシヴァルが言う。
「あ、そういや俺、シーラさんが髪を下ろしたとこ、見たことないかも」
「あら」
シーラは悪戯っぽく微笑んで、
「髪をほどくのは寝る前だけよ。見たいなら夜中に忍んで寝室まで

来てもらうしかないわね」
「ぶっ！！」
パーシヴァルが盛大に吹き出して咳き込んだ。
「あ、い、いや、俺……ゲホッ！　そんなつもりで言ったわけじゃ……ゲホ、ゲホッ！！」
顔が真っ赤なのは、おそらくアルコールのせいだけではないだろう。
シーラは苦笑して、
「冗談よ。あなた、レイさんの下で働いている割には初心なのね」
「そ、その言われ方、年上の男としては少し釈然としないっす……」
しょんぼりとした様子のパーシヴァルにシーラは微笑んで、
「好意的に思っているわ」
「そ、そうっすか……」
言われて、パーシヴァルはやはり真っ赤になった。
なんとも微笑ましい。
ティースはそんな彼女に口を挟んだ。
「お前、そうやって年上の男をからかったりするから年相応に見えない、なんて言われるんだぞ。たまには年相応の女の子らしくだな……」
なんて。
酒の勢いに任せて慣れないことを口走ってしまったのが運の尽きだった。
シーラはチラッとティースの顔を見て、
「あら。だったらお前も年上の男らしく振る舞って欲しいものね。聞いたわよ。試験の初日、遅刻しそうになってフィリスやパメラにだいぶ迷惑をかけたそうじゃない？」
「……う」
「大方、緊張しすぎて前の日に寝られなかったんでしょうけど」
「……」
あの日、シーラはその場にいなかったはずだが――と、フィリス

を見ると、彼女は少しバツの悪そうな、すまなそうな顔をしていた。
もちろん彼女はこれっぽっちも悪くない。
「何か言いたいことはある？」
「……俺が悪かった」
結局、彼らはいつもどおりである。
「素直でよろしい」
ただ、そう言って笑うシーラは少し機嫌が良さそうだった。
アルコールの力なのかもしれない。
（……そういや）
と、ティースは思い出す。
（あの日もちょっと陽気になってったっけ……）
ネービスを発つ前の日、壮行会の後のことだ。彼女がティースの前でアルコールを口にしたのはそのときが初めてだった。ティースはそのときすでにかなりの酒を飲んでいて、彼女より先に酔いつぶれてしまったため、詳細まで思い出せない。ただ、そのときもシーラは少し陽気になっていて、いつもはしないような話をしたような記憶がある。
（ああ、そうだ。故郷の話をしたんだっけ――）
２杯目の麦酒を飲み干して、少しだけ酔いが回り始めた。
「そういや――」
と、ティースは言った。
「シーラ。あの後、ルナ姉さんには会ったのか？」
「ん……会ったわ。何回かね」
「そっか……」
入り口から新たな客が入ってきて酒場は少し混み始めていた。
パーシヴァルとフィリスは２人で何か話をしている。
「元気だったか？」
シーラは少しの沈黙の後、３杯目の果実酒を空け、それから少しドキッとするような流し目でティースを見た。
「ルナに、会いたい？」

「……そりゃ、できるなら、な」
ルナリアはティースにとって、言葉どおり“姉のような”女性だ。単純に会いたいという気持ちの他に、黙っていなくなったことを謝罪したいという気持ちもある。
ただ、シーラがそれを嫌がるなら、無理に会いたいとは言わないつもりだった。
ティースは自分とシーラの分の飲み物を注文し、それからテーブルの上のチーズに手を伸ばして口に運ぶ。少しクセのある味だ。ネービスのものとはかなり風味が違う。
「……でも、そっか。何度か会ってるってことは、やっぱりお前を連れ戻そうってつもりはなかったんだな」
「そうね」
「じゃああのとき、別に逃げる必要なかったんじゃないか」
「……逃げた理由はそれだけじゃなかったけど、覚えてないのね」
「ん？」
「なんでもないわ」
それからしばし沈黙。
やがて、シーラは言った。
「明日でも、会ってきたら？」
「え？」
「ルナの宿は知ってるわ。今を逃したらいつ会えるかわからないんだし、会ってきたらいいじゃない」
「……いや、明日はやめとくよ」
どうして――、と、シーラが口にする前に、ティースは言葉を続けた。
「今は試験に集中したいからさ。せっかくここまで来たんだ。それに姉さんの旦那さんはデビルバスターのスカウトなんだろ？　だったら最終試験には絶対に顔を出すはずだし、姉さんだって見に来るかもしれない。会おうと思えばそれが終わってからでも大丈夫だよ」
「そう。……そうね。お前のことだもの、下手に会ったりしたら気

が抜けて使い物にならなくなるかもしれないわね」
そう言ってシーラはクスクスと笑った。
「なんだか引っかかる言い方だなぁ」
とはいえ、ティースはそんな彼女の物言いにはもう慣れっこだ。
（なんせこいつは昔から――）
昔から。
自分で思いついたその表現にティースはふと違和感を感じる。
（……昔から、だったっけ）
昔の彼女は。
……もっと優しかった気もするし、もっと冷たかったような気もする。
酔っているのだろうか。それとも幻魔の術にかかった後遺症だろうか。少々記憶が混乱しているようだ。
「……どうしたの？」
「あ、いや……」
なんでもない、と、そう答えたものの、今度は目の前のシーラの姿が二重に見えた。
（あ、あれ……）
しかも、ぼんやりと重なって見える彼女は、目の前の彼女とまったく同じではなく。
（シーラが……髪を下ろしてる……？）
パーシヴァルがあんな話をしたからだろうか。
髪を下ろした彼女の姿は、不思議と違和感がなかった。
（なんだ……？）
そのお祝い会は夜遅くまで続き――その“幻”はその間、何度かティースの目の前に現れた。
第3試験の合格者には疲れを癒すために2日間の休日が与えられ

る。それは第3試験がすべての試験の中でもっとも過酷であることの証明であるとともに、一般公開される最終試験に向けての、ギルド側の準備期間という意味もあった。

その最終試験“トーナメント”はその名のとおりトーナメント形式による受験生同士の試合であり、帝都内のスタジアムに一般の客を招いて開催される。デビルバスターを目指す者たちのハイレベルな、かつ実戦的な戦いが見られるとあって、帝都ではスポーツをベースとした武術会よりも圧倒的に人気が高い。

今年の出場者は12名。

例年だと50名近くが出場して20名程度が合格するのだから、今年は圧倒的に少なく、最終試験での合格率が約4割であると考えると今年の合格者は5名程度と見込まれる。

つまり、受験生にとっては好内容で1回戦を突破することが合格の1つの目安となると考えられていた。

そして――ティースたちがお祝い会を催した夜の、次の日。つまりは最終試験の前々日。

抽選によるトーナメントの組み合わせが発表されるその日に、ティースとパーシヴァルは連れ立って会場へとやってきていた。

「できれば決勝で当たりたいっすね」

と、パーシヴァル。

その言葉にはティースも同意だった。決勝だなどと贅沢なことは言わない。ただ、一回戦で潰しあうようなことは避けたかった。

（ここまできたら、2人そろって合格したいもんな……）

と、ティースはトーナメント表を見つめた。

表には1番から12番までの番号が振られている。1から4がAブロック、5から8がBブロック、9から12がCブロックで、B、Cブロックの2回戦を勝ち上がった者たちが準決勝を行い、そこでの勝者がAブロックを勝ちあがった受験生と決勝戦を行う。Aブロックに入ると若干有利になるが、各ブロックの勝者は合格がほぼ確実なので、試験の結果という意味ではそれほど差はない。

だから問題はどのブロックに入るかよりも、同じブロックにどんな相手が入るか、もっといえば1回戦の相手が誰になるか、であった。

抽選は午前中の間にくじによって行われるが、くじを引くのはデビルバスター協会の事務官であり、受験生はこの場にいなくても好きなときに結果を確認できる。それでも周りを見ると、第3試験の合格者と思われる受験生が5、6人は確認できた。

なお、くじは第3試験を合格した順番の逆順で行われる。つまりはティースが1番目、パーシヴァルが2番目だ。

「緊張するっすね……」

パーシヴァルの呟きに、ティースは黙って頷いた。

緊張で体が少し堅くなっているのを感じる。

そうこうしているうちに、

「あ、始まるみたいっす」

事務官がくじ箱の前に移動し、声をあげる。

「それでは、これより抽選を行います。ティーサイト＝アマルナ」

続けて事務官がくじ箱に手を入れ、手にした紙を読み上げた。

「――2番。Aブロック」

「！」

「い、一番最初の試合っすね……」

パーシヴァルも緊張しているのか、微かに唾を飲み込む音が聞こえた。

（最初の試合か……）

いいのか、悪いのか。いや、何も考えずに試合に挑めるという点ではいいかもしれない。それにB、Cブロックに比べれば決勝までの試合数が1試合少なくて済む。

ティースはあえて悪いことを考えないようにした。

「次、パーシヴァル＝ラッセル」

ティースとパーシヴァルは同時に事務官を見つめる。

1番なら1回戦で当たることになる。3、4番であれば2回戦で

当たる。
それ以外であれば――決勝までは当たらない。
「――7番。Bブロック」
「！」
「！　……ふぅ」
パーシヴァルは胸を撫で下ろし、ちょっと笑ってティースを見た。
「同士討ちはなんとか避けられたみたいっすね」
「……ああ」
ティースの口にも自然と笑みがこぼれた。
何しろパーシヴァルとの稽古では未だにティースが劣勢だ。勝つ見込みがないわけではないが、少し分が悪い。
「これで2人揃って合格できる可能性が出てきたかな」
「ええ」
と。
「――8番、Bブロック」
「あれ？」
次に読み上げられた番号に最初に反応したのはティースだった。
「8番ってパースの最初の相手じゃないか？　誰だったんだ？」
「え？　あ、えっと」
どうやらパーシヴァルも聞いていなかったようだ。
トーナメント表を見ると、まだティースとパーシヴァルの欄しか埋まっていない。
「10番目に合格した人っすよね。ってことは――」
なんて考えてはみたものの、2人とも合格した順番など知っているはずもなく。そのうち事務官がパーシヴァルの隣に受験生の名前を書き込んで、ようやく確認することができた。
「……ステルシア＝ブライトン。女性で唯一の合格者っすね」
「女性、か」
ティースはふと、ファティマのことを思い出す。彼女は確か女性で一番の有力候補だと言われていた。その彼女とパーシヴァルとの

比較なら――少なくとも圧倒的に劣っているとは思えない。
とすると、単純に考えて、その一戦はパーシヴァルのほうに分があるのではないかと思えた。
もちろんあくまで世間の評価。絶対というわけではないだろうが――
「ステルシアさんって、ティースさん、知ってます？　俺、どんな人かまったく知らないっす」
「いや、俺も知らないよ。でも――」
ティースは先ほど会場を見回したときに第３試験の合格者らしき女性がいたことを思い出し、再び会場を見回した。
すると、
「パーシヴァルさん、ですね」
「ッ！」
目の前に、その女性がいた。
「へ？　あ、そうっすけど……あなたは？」
「よろしく。あなたと一回戦で当たることになったステルシアです」
その女性は、明らかに年下であるパーシヴァルに対しても非常に丁寧な口調でそう言って右手を差し出した。
歳はおそらくパーシヴァルより――いや、ティースよりも上、おそらくは２０歳を越えているだろうか。
身長も女性にしてはやや大きめで、パーシヴァルとほぼ同じだから１７０センチぐらいか。短めの髪をてっぺんで縛っていてまるでパイナップルのような頭をしている。小奇麗な服装をしていて、腰には幅広で短めの剣を２本差していた。
「あ、どうも。パーシヴァル＝ラッセルです」
「存じております。確か――ネービス領出身の方ですね？　それと、こちらは聖力試験で非常に優秀な成績を残されたティーサイト＝アマルナさんですね」
「あ、ええ」
同じく差し出された右手に、ティースは悪いと思いつつも気付か

ない振りをした。
　ステルシアは特に嫌な顔もせずに右手を下ろし、
「聖力試験上位１０名の中でここまで残ったのはティーサイトさんだけのようです。ここで優秀な成績を残せば３年ぶりの“サン・サラス”に選ばれる可能性もあるかもしれませんね」
「……いえ、そこまで高望みはしてません」
　と、ティースは答えた。
「そうですか。……そうですね。まずはデビルバスターとして認められることが優先です」
　ステルシアはそう言って頷いた。
　口ぶりや振る舞いが、どことなく知的なイメージの女性だった。
　ティースは逆に尋ねた。
「ステルシアさんは、どこから？」
「ヴィスカイン領です。ヴィスカイン領出身の受験生はどうやら私だけになってしまったようですし、“騎士の国”として、合格者ゼロという不名誉は避けたいところですね」
「ってことは、ステルシアさんってもしかしてヴィスカイン領の女性騎士っすか？」
　と、今度はパーシヴァルが尋ねる。
　古くから“騎士の国”の名で呼ばれるヴィスカイン領は、ティースたちがこのヴォルテスト領に来る途中で通過した領地の１つである。領主が抱える精鋭部隊はヴィスカイン騎士団と呼ばれ、その中には対魔騎士隊と呼ばれるデビルバスターだけの部隊も存在しているという。
「いえ。私はまだ騎士にはなれていません。ですが、この試験に合格した暁には対魔騎士隊へ入るつもりです」
「へ？　でもここまで来れるぐらいなら、騎士団の入団試験ぐらい合格できるんじゃ……」
　と、パーシヴァルが尋ねると、ステルシアは少しだけ眉をひそめた。

「父がどうしても認めてくださらなかったのです。どうしても騎士団へ入るつもりならば、デビルバスター試験に合格して対魔騎士になってみせろ、それ以外は認めない、と」
ティースはそこでふと気付いて、尋ねた。
「ステルシアさんって貴族の家の出身だったりします？」
「ええ」
「なるほど」
事情がなんとなく見えた。
彼女の父親はおそらく、騎士団に入ろうとする娘を諦めさせるためにデビルバスターになれと言った。が、彼女はそれを本気にして、そしてそれを実現させようとここまでやってきた、と、そういうことなのだろう。
「へえ、ヴィスカイン領ってのは貴族の娘でも騎士になったりするんスか？」
パーシヴァルの問いに、ステルシアは頷いた。
「騎士となるのはむしろ家の誇りです。私には姉が2人いるのですが、男兄弟がいません。私が騎士にならなければ、私たちの代では騎士がいなくなってしまいます。それは家にとっても不名誉なことなのです」
「へぇ……」
貴族ならぬティースとパーシヴァルには、わかるようなわからないような、そんな話だった。ただ、彼女のこの試験にかける意気込みだけは理解できた。
と。
そこでステルシアはハッとした様子で口元に手を当てて、
「少し話しすぎてしまいましたね。申し訳ありません。挨拶だけのつもりだったのですが」
「問題ないっす」
と、パーシヴァルは笑って返す。
ステルシアも微笑んで、

「明日は良い試合をしましょう」
最後にそう言って去っていった。
「……みんな、色々事情があるんスねぇ」
そんな彼女の後姿を見送って、パーシヴァルはポツリとそう言った。
ティースは頷く。
ファティマもそうだった。いや、そもそもそんな目的もなしにここまでたどり着けるほど甘い試験じゃない。確固とした目的や事情があるのはむしろ当たり前のことだろう。
「けど、絶対負けないっすよ、俺」
と、パーシヴァルは力強く言った。
そう。それはティースも、そして聞いたことはないが、おそらくパーシヴァルも同じなのだ。
体を包んでいた緊張は、やがて武者震いとなる。
（よぅし、俺も――）
視線を正面へ移す。
抽選は1人を残し、すべての枠がすでに埋まっているようだった。
（ええっと、俺の相手は――）
視線をAブロックの第一試合へと移す。
が、
（あれ？）
まだ埋まっていない。
ということはつまり、最後の1人がティースの相手ということになる。
ちょうど、事務官がその最後の1人の名前を読み上げるところだった。
「イストヴァン＝フォーリー。1番。Aブロック」

「……イストヴァン＝フォーリーか。よりにもよって」
第３試験の合格、そして最終試験の組み合わせ。その２つの報がミューティレイクの屋敷に届けられた夜、レイはいつもどおり屋敷の１階ホールで酒を飲んでいた。
そして、
「強いの？　その人」
そんな彼の正面に座っているのは屋敷の執事にして彼の妹でもあるリディア＝シュナイダーである。レイが酒を飲むとき、よく話し相手となっているアクアは今は任務でネービスを離れていた。
「会ったことはないが、俺の知ってる限り、この１２人の中じゃ一番強そうだな」
「ふーん」
「で？　なんだ、そいつは？」
と、レイはリディアの胸元を指差す。
「この子？」
その腕の中には白い猫がすっぽりと収まっていた。
リディアはその子猫の前足を指で持ち上げて、レイに向かって小さく振ってみせる。
「ジョエッタさんの家で飼ってるんだって。……たった１日で屋敷の女性たちの心を鷲掴みにしちゃったんだから。兄さんも見習ってみたら？」
「冗談じゃない。俺は可愛がるほう専門なんだ」
興味なさそうにレイに対し、リディアは少し考えて、
「んー、まあ、そうか。確かに頭撫でられてる兄さんの姿を想像したら気味悪いね」
そんな妹の物言いにレイは苦笑して、
「お前、そんな俺の妹であることを忘れるなよ？」
「あたしはほら。ミューティレイク家のマスコット的立場を確立しつつあるから」
「ミューティレイクのアイデンティティが危ぶまれるような話だな、

そいつは」
「で、パースさんの相手はどうなの？」
と、リディアが話題の方向を修正する。
ああ――、と、レイは頷いて、
「ステルシア＝ブライトン。１２人の中じゃ唯一の女だな」
「強いの？」
「いや、聞いたことがない名前だ」
「ってことは、合格できそう？」
少し弾んだ声でリディアはそう言ったが、レイはそれを否定する。
「考えてみろ。３年前の“サン・サラス”だって、試験前はまったくの無名だっただろ？」
「ああ、アルファさんね」
リディアは一瞬で納得した。
「デビルバスター試験じゃ珍しくもないことさ。……ま、いずれにしても、どっちかには受かって欲しいところだな」
ぐいっと残っていた麦酒を飲み干して、レイは少し真面目な顔をした。
「少しキナ臭い話も聞こえてきてる。ウチとしても戦力はあるだけあったほうがいい」
リディアは腕の中の猫をあやしながら少し上目遣いに兄を見て、
「来年までにはもう１部隊ぐらい増やしたい、って、あの話？」
「できれば、な。ただ、どっちにしても、あいつらのどっちかが受かってくれなきゃどうしようもない話さ」
空になったジョッキをテーブルに置いて、レイは天井を見上げる。
ヴォルテストからの早馬がネービスに到達するまでの日数を考えると、向こうではすでに結果が出ているはずだった。
「さて、どうなっていることやら――」

その5『トーナメント～前日～』

「ティースくん。……久しぶり」
「あ……」
宿泊している宿から徒歩でおよそ２０分。
とある食事処に入ってその女性の姿を視界に捉えたとき、あらかじめ頭の中に準備していたいくつかの言葉は一瞬にして霧散し、ティースは感嘆符の先の言葉を紡ぐことがなかなかできなかった。
厳密に言うと会うのは２度目だ。ただ、前回は名前を呼び合い、お互いがお互いであることを確認しただけで、再会というにはあまりにも時間がなさすぎた。
が、今日は違う。
それぞれの間に流れた３年の歳月を確認し合う程度の時間は用意されていた。
だからこそ。
その第一声をどうするべきか、ティースは迷ってしまったのである。
「えっと……」
「どうしたの？　立ったままではボーイさんも困ってしまうわ」
そんな彼とは対照的に、ルナリアは落ち着いた様子だった。
「あ。そ、そっか」
と、ティースはようやく自分に用意された椅子へと腰を下ろすことができた。
正面に視線を移す。
結い上げた髪に、白いカチューシャ。
――変わらない。
シーラから聞いてはいたものの、ティースはようやくそれを実感するに至る。

正確に言うと外見は、少し変わった。彼女はティースよりも4歳年上だから、最後に別れたときが20歳で今は23歳。日を追うごとに変化するというような年頃ではないにしろ、やはり3年という歳月はそれなりに大きい。以前は屋敷の使用人服で会うことがほとんどだったから私服姿にも違和感があったし、もともと大人びた雰囲気ではあったが、その佇まいはさらに落ち着きを増したように見える。

落ち着いて見えるのは、結婚したから、という先入観のせいもあるかもしれない。

「その、結婚おめでとう、姉さん」

ティースはまずそのことから口にした。

するとルナリアはにっこりと微笑んで、

「ありがとう。ティースくん」

と、言った。

その表情だけで、彼女の結婚が幸せなものであることを悟り、ティースはホッと胸を撫で下ろす。

「良かったわ、あなたに知ってもらえて。あなたに報告できないことだけが心残りだったの。――お昼、まだ？　どうぞ」

「ありがとう」

メニューを受け取って目についたものを適当に注文すると、一息ついてティースは店内を見回した。食事処は帝都内にもたくさんあるが、この店はその中でも上品な雰囲気の――どちらかといえば上流階級の人々が利用する店だろう。この店を指定したのはティースではなくルナリアのほうだった。

彼女の旦那がジェニス領主の下で働いているのはシーラから聞いている。デビルバスターのスカウトは重要な仕事だから、おそらく使用人の中でもかなり上の身分だろう。地方貴族であるルビナス家――シーラの実家で働いていたルナリアと直接の接点はなさそうだから、誰かの紹介で知り合ったのだろうか。

「何から話したものかしら。話したいことは色々あるけれど――」

「そうだね。そういや俺のこと、シーラからどのぐらい聞いてる？」
ティースがそう尋ねると、ルナリアはちょっとビックリした様子で、
「……ティースくん、お嬢様のことそうやって呼ぶようになったの？」
「え？　あ、うん。ネービスに来てすぐ……だったかな。周りの目もあったから“お嬢様”も“敬語”も禁止されてさ。最初は戸惑ったけど、今は、もう慣れたよ」
そう答えるとルナリアは納得した様子で頷いた。
「今のあなたの事はお嬢様から色々教えていただいたわ。もちろんデビルバスター試験を受けに来たことも」
「そうなんだ。びっくりした？」
「デビルバスターを目指していること？　いいえ、別に驚かないわ」
「ホントに？」
逆にティースがビックリした。
ルナリアは言った。
「だって、お屋敷にいた頃のあなたが、お嬢様をお守りするために強くなろうとしていたことを私は知っているわ。それが、お嬢様以外の人も守りたいと思うようになっただけ。でしょう？」
なんでもないことのようにルナリアはそう言った。
「……なんか、今でも何でもお見通しなんだなぁ、ルナ姉さんは」
「大げさね。それに、わかるのはティースくんのことだけよ」
「あんま変わってないってこと？」
「ええ。変わってなくて安心した」
そう言ってルナリアが微笑むと、ティースはなんだか妙に気恥ずかしくなって頭を掻いた。
そこへ注文した軽食が運ばれてくる。一緒に紅茶を頼んだつもりだったが、注文が聞こえていなかったのか付いてこなかった。
ティースは表面を軽く焼いた薄手のパンを一口、口に運んで、
「シーラのほうは？　どうだった？」

「お嬢様は――」
すぐに感想が出なかったのか、それとも言葉を選んでいたのか。
ルナリアはほんの少しだけ言葉に詰まって、
「私の記憶にあるお嬢様とは少し違っていたかしら。でもこれは、私の印象のほうが間違っていたみたいね」
「そっか」
彼女がシーラのことをもともとどのように思っていて、それが今どう変化したのか、それはティースにもわからない。ティースにとっては姉代わりの存在だった彼女も、あの頃のシーラにとっては単なる一使用人に過ぎなかった。歳が近いから他の使用人よりは近い立ち位置だったにしても、もともとお互いの内面を深く知り合うような仲ではなかったはずだ。
そこからしばらくは帝都の町の話になった。
ルナリアは帝都に来るのは初めてではないらしい。オススメの店やお土産用の特産品を買える店など、ティースは色々なことを教えてもらった。
それから話題は故郷の話へと移る。
「そういえばジェニスのほうは最近どう？」
大陸の東端に位置していて農業を主な産業とするジェニス領は、古くは大陸でも有数の力を持った東の雄であったが、近年は他の地にアピールできるような目立った産業もなく、雨が多くて住みにくい土地柄であることも手伝って、お世辞にも裕福な地であるとはいえなくなっていた。
もちろんたった3年でそこに劇的な変化が訪れるはずもなく、
「私は詳しいことはわからないけれど、あまりいい状況ではないみたいよ。古い建物を目玉に人を呼び込もうとしたり、色々考えているみたいね」
と、ルナリアは答えた。
「そんな状況でもこうして毎年わざわざスカウトしに来るぐらいなのだから。デビルバスターという人たちはやっぱりすごいのね」

「強いデビルバスターを集めることは、国力を誇示することにもなるらしいからね。……まあ、俺には縁のない話だけど」
ボーイが食器を下げに来る。それとなく紅茶のことを言ってみると、どうやら向こうがうっかり忘れていただけのようで、ティースはホッとした。
やはり飲み物がないと落ち着かない。
「だけどティースくんはそのデビルバスターになるための最終試験に残ったのよ。すごいわ、本当に」
「俺も未だに信じられないよ」
これは本心だった。第3試験だって本当は途中でリタイアしたつもりだったのだ。例外として合格扱いにしてもらったのは単に運が良かっただけに過ぎない。ただ、ここまで来た以上は何が何でも合格したいとも思う。デビルバスターになったからといって自分の中の何かが変わるわけじゃないが、合格したことは間違いなく自信になる。
と。
ルナリアがチラッと時計を見た。
「そろそろかしら」
「え？　あ」
その言葉で、ティースは今日、もう一人、会うべき人物がいたことを思い出す。
ちょうどそのタイミングで、
「あ、いたいた。ルナリアー」
店に入ってきた男性が手を振りながらティースたちのほうへとやってきた。
「君がティースくんかい？　はじめまして。僕はパウロス。パウロス＝マジェットだ。よろしく」
「あ、はじめまして」
慌てて席を立ってその男性に挨拶をする。
その男性はパウロス＝マジェット。ルナリアの夫だった。

もちろん会うのは初めてである。
背は男性としては僅かに低いほうで、１６０センチ半ばというところだろう。眼鏡をかけていて少し丸顔だが体型としては痩せているほうだろう。お世辞にもハンサムとはいえない顔立ちだったが、真面目で優しそうな印象を受ける。
年齢はルナリアの５つ上ということだから２８歳。
その年齢よりは若く見えた。
「うわ、デカいね～。さすがデビルバスターを目指す人は迫力あるなぁ」
「そ、そうですか？」
迫力があるなんてことを言われたのは久しぶりだったので、ティースは少し戸惑ってしまった。
「あなた、お昼は？」
と、ルナリアがそう言いながら２人に座るよう促す。
「いや、まだなんだ。最終試験に残った受験生たちの情報を集めるのに忙しくてね。何人かは直接話を聞くこともできたんだが、本命のイストくんには会えなかったよ。……って、君にこんなことを話してもしょうがないか。あ、すみませーん」
席に付いてもパウロスは忙しくなくそう言って、再びティースへと視線を向けた。
「でもよかったよ。まさか最終試験に残った受験生の中にルナリアの知り合いがいたなんてね。知り合い特権でこうしてインタビューもできるわけだし」
「ティースくんはそのために呼んだわけじゃありませんよ」
ルナリアがそうたしなめると、
「ああ、わかってるわかってる。今日の僕はあくまでおまけだからね。でもスカウトの材料として彼の人となりを探らせてもらうぐらい文句はないだろう？　ま、君が可愛がっていた弟分なら、人間性には太鼓判を押してもらったようなものだけどね。……ティースくん、君、魔についてはどういう見解を持っているんだい？　無条件

に敵対する存在、あるいは共存すべき存在、前者が主流だとはいえ、今は色々な意見もある。受け入れがたいと言う人たちもその力を日常生活の中で無意識に利用している場合も少なくない。たとえば照明。これは刺激を与えることで発光する魔界由来の植物を利用したものだが、こちらの世界で栽培できるようになってからすでに長い年月が経っていて大陸の９割で利用されている。あまり広く知られていないが、これはもともとは人間と交流のあったという、とある光の将魔族が持ち込んだものだ。その光の将魔を生涯の友としたのはこの帝都ヴォルテストの１２代前の領主でね。ヴォルテストが大陸の盟主たる地位を確立したのは、この出来事があったからに他ならない。それ以外にも、たとえばほら、この店でもおそらく使われているであろう厨房の火の――」

「あなた」

と、ルナリアが少し強い口調でもう一度たしなめる。

「おっとっと、ちょっと焦りすぎたかな。いや、すぐに答えてくれなくてもいいんだ。僕はその間に腹ごしらえをさせてもらうつもりだからね」

そう言ってパウロスは照れくさそうに笑った。

「あ、えっと……」

そんな彼の勢いに圧倒されていたティースだったが、

「……意外でした。スカウトって実力を見てするものかと思っていましたけど、そんなことを質問したりするんですか？」

「ん？　ああ、まあそれは人によるかな。ジェニスはほら、ヴォルテスト領やここの南東のヒンゲンドルフ領、それにネービス領なんかと違って裕福ではないから。スカウトして失敗したからじゃあ次ってわけにもいかない。だからこそ人間性や考え方を重視するんだ。もちろん実力が伴っていることが最低条件だけどね」

「なるほど……」

それはわかる話だった。

「でも、ジェニスは確か、お抱えのデビルバスターってほとんどい

なかったと思いましたが、今は違うんですか？」
　そう尋ねると、パウロスはうなずいて、
「もともとはそうだったんだ。有事にはフリーのデビルバスターに依頼して解決する方針でね。ただ、それだと主に緊急時の対応が難しくて。そういった魔が絡む事件から国を守る方法を模索すべきだという声は内外からずっと上がっていたんだ。かといってお金はない。どうしようもない話でね。結局僕のような使用人が足を使って条件も人柄も良くて実力を備えたデビルバスターを探してくるしかないという結論になったわけだ。まあそんな人は簡単には見つからないんだけど。そんなこんなで新婚からずっと長いこと家を開けっ放しでね。ルナリアにはホント苦労をかけているんだ。……君には怒られてしまうかもしれないけれど」
「あ、いえ、そんなことは」
　ティースにそんなつもりはないし、弟のような存在だったとはいえ、屋敷を出るときに何も告げずに行ってしまった身だ。そんなことを言う権利があるはずもない。それに彼女のことだから、そんなことは承知の上で彼と結婚したに違いないのだから。
　そう思ってルナリアのほうを見ると、彼女はティースの考えていることを察したのか、彼に向かって小さく頷いてみせた。
「……そうだ」
　ちょうど運ばれてきた食事に手を伸ばしかけたところで、パウロスは思いついたように言った。
「ティースくんはジェニスの出身なんだろう？　どうだい？　試験の結果はわからないけど、もし合格したらジェニスに戻ってくる気はない？　ああ、いや。別に故郷のために奉仕しろと言っているわけじゃなくてね。もちろんそれなりの待遇で迎えさせてもらうつもりだよ」
「え？」
　それはたぶん社交辞令のようなものだろうとティースは思った。ティースはまだ先ほどのパウロスの質問にも答えていないし、まさ

かルナリアの昔なじみというだけで人間性に合格の判を押したわけでもないだろう。
　ただ、いずれにしてもティースは首を縦に振るつもりはなかった。
「すみません。俺にはもうお世話になっているところがありますので」
「ん？　ああ、そうなのか。それは残念だなぁ。……ちなみにどこ？　ネービスから来たんだったよね？　まさかネービス領主のお抱えの、ネスティアスかい？」
「いえ。ディバーナ・ロウ、っていうところです。ご存知ですか？」
　ネスティアスに比べればディバーナ・ロウは遥かに小さな集団だ。知らない前提で聞いたのだが、パウロスはあっさりと頷いて、
「ああ、ディバーナ・ロウか。確かネービスの貴族――ミューティレイク家が支援している組織だね。所属するデビルバスターは3人、構成員は１０人程度だったかな」
　スラスラと出てきた言葉はティースを驚かせた。
「……よくご存知ですね」
「ディバーナ・ロウはその規模の割には比較的有名だよ。ネービスでも有数の大貴族の支援を受けているということと、3年前のサン・サラスが所属していることでね。アルファ＝クールラント。君の仲間だろう？」
「え、あ、はい」
「彼は近年のデビルバスター試験では一番の有名人だ。あの年――3年前のデビルバスター試験は戦前からハイレベルだと囁かれていてね。そんな中、まったくの無名だった受験生があろうことかサン・サラスの称号までもぎ取っていったんだ。しかもこの年のトーナメント準優勝はあのルーベン＝バンクロフトだ。君なら知ってるだろう？　今や泣く子も黙るネスティアスのディグリーズ、その１０人の中の１人だよ。しかもアルファくんは合格後、誰にも気付かれずに風のように姿を消してしまってね。最後まで性別不詳だった、なんて少し神秘的なエピソードも加わって――って、君なら知ってる

よね。結局彼は男なの？　女なの？」
「あ、えっと。実は、俺もよくわかりません」
正直な回答である。
「ってことは、彼は今もあんな感じなのかぁ。会ってみたいね。ああ、でもウチには来てくれないよね。そんなことしたらティースくんのところだって困るだろうし。見込みがないのにネービスまで旅行なんてさせてもらえないだろうなぁ」
少し肩を落としながらそう言って、パウロスはようやく食事に手を伸ばし始めた。
（よくしゃべる人だなぁ……）
ティースのような人間には、途中で口を挟むことすら難しい。ただ、いい人そうに見えたので、その点については安心した。
「ああ、そうそう」
と。
そんな風にのんびりしていられたのもほんの2分ほど。
驚くほどのスピードで食事を終えたパウロスが再び口を開いた。
「君は明日のトーナメント、初戦にイストくんと当たるんだったね」
「ええ、そうです」
「んー」
パウロスは少し難しい顔をしながら隣のルナリアをチラッと見て、少し唸って、再びティースのほうへと視線を戻した。
「試合前の君にこんなことを言うのが正しいのかどうかはわからないけど、イストヴァン＝フォーリーはとても優れた戦士だ」
「それは俺も聞いています。今回の試験の有力候補の1人だと……」
「そのとおりだよ。いや、もちろん君に勝ち目がないと言っているわけじゃないんだ。実を言うとね。今年は戦前の評価がそれほどでもなかった受験生に、ダイヤの原石が眠っているんじゃないかとも言われている。君もその中の1人だ。出どころはわからないけど、第3試験で、イストくんと同じく有力候補だったルドルフ＝ティガーと君の間でいざこざがあって、君が彼を圧倒した、なんて噂も耳

に入ってきてる。いや、それが本当かどうかというところまで詮索する気はないんだ。でもそれがもし本当なら、君はイストくんと十分戦えるだけの力があるということになるかな。それに聖力測定の結果だね。聖力の基礎値は、今残っている受験生の中で君がダントツでトップだ。戦闘技術は今後向上の余地があっても、生まれ持った聖力は基本的には成長のしようがないからね。将来性という意味で君に注目している人は結構多い。……それだけに、くじの結果はちょっと残念だったね」

「えっと……」

あまりにも色々なことを言われて、どんな反応をすべきかティースは戸惑ってしまう。要約すると相手は強いが健闘を期待している、というような意味になるのだろうか。

「俺は、その、相手が誰とかはあまり関係ないと思ってます」

パウロスは意外そうな顔をして、

「そうかい？　でも今年の試験の合格ラインは1回戦突破だと言われているし、関係ないってことはないんじゃないかな？」

「あ、えっと、そういう意味ではそうですし、ここまで来たら合格したいですから、ぜんぜん気にならないって意味じゃないですけど……」

ティースは少し言葉に詰まる。

目の前のパウロスほどスラスラと言葉が出てくるタチではない。

「つまり合格することが最終目標ではないですから。くじ運で合格しても意味がないですし、くじ運が悪かったせいで不合格になったからといって俺の目指している道が潰えるわけでもなくて、その」

「……なるほど」

しどろもどろな説明でも言いたいことは伝わったようで、パウロスは真面目な顔で頷きながら隣のルナリアを見た。

ルナリアは微笑を浮かべたまま何も言わない。

「デビルバスターになることは最終目標じゃない。いや、確かに君の言うとおりだ。……ちなみに君の目指している道というのは、デ

ビルバスターになって魔を退治することかい？」
「いえ。デビルバスターになって、魔の脅威にさらされる人たちを守ることです」
今度はすんなりと言葉にできた。過去に同じようなことを聞かれた記憶があったが、誰から聞かれたものかすぐには思い出せなかった。
満足そうに頷くパウロス。
――彼がここにきた直後の問いかけといい、彼はもしかすると魔という存在に対してある程度理解のある考えの持ち主なのかもしれない。
「……ああ、もうこんな時間か」
そう言ってパウロスは慌しく立ち上がった。
「すまないね、ティースくん。僕はこれから仕事が会って、残念だが先に失礼させてもらうよ。いや、しかしさすがはルナリアの弟くんだ。君をスカウトできないことが非常に残念で――ああ、まずいまずい。じゃ、急ぐから失礼するよ」
パウロスはほぼ一息でそこまで言い切ると、こちらこそ――と言い掛けたティースの言葉も待たずに、立った椅子を元の位置に戻すのももどかしそうに、さらには2度、3度と客や店員にぶつかりそうになりながらバタバタと店を出て行ってしまった。
「……」
時計を見る。
パウロスが来てからまだ15分しか経っていなかった。
「……勢いのある人だね」
と、ティースは正直な感想を口にした。
ほとんどの時間を彼がしゃべっていたからか、15分どころかもっと長い時間話をしていたような気がする。よくよく考えてみると、彼がいる間、ティースはほとんど相槌程度のことしか口にしていなかったし、ルナリアにいたっては2言、3言、口を開いただけである。

ホッ、と、自然に吐息が漏れた。
彼の迫力に、知らずに緊張していたのかもしれない。
ティースは言った。
「あの人、姉さんと2人のときもあんな感じなの？」
「ええ、そうよ。ただ、普段、仕事のことはあまり喋らないのだけれど」
慣れているのか、ルナリアは事も無げにそう言ってから少し気遣うような表情を見せた。
「ティースくん、疲れた？」
「少しね」
と、ティースは苦笑する。
ルナリアのように頭の回転が速い人間にとってはどうということはないのだろうが、ティースのように口下手で会話スキルの低い人間にとっては少々苦手なタイプだった。
ただ、悪い印象はない。いい人そうだったし、仕事もできそうな人、というのが、パウロスに対するティースの感想だった。
「そういえばティースくん。試験が終わった後はすぐネービスへ帰ってしまうの？」
「いや、2日ぐらいは滞在するつもりだよ」
と、ティースは答えた。
“2日ほどはゆっくり帝都観光でもしてきてください”と、これは雇い主であるファナから出立直前に言われた言葉である。
そう伝えると、ルナリアは少し安心した様子で、
「じゃあ試験が終わった後、今度はお嬢様と3人で会えないかしら？　せっかくこうして再会できたのだから、これでお別れというのは寂しいわ」
と、言った。
もちろんティースにその提案を断る理由はなく、
「聞いてみるよ。たぶんシーラのやつもまた会いたがってると思う」
「期待してるわね。……じゃあ今日は帰りましょうか。明日の試験

の準備もあるでしょう？」
「あ、うん。まあ」
反射的に頷いてしまった。が、次の機会があるのなら、確かに試験が終わってからのほうが気兼ねなく話もしやすいかもしれない。
ルナリアが先に席を立つ。
椅子を戻して、ふと、彼女の視線がまっすぐにティースの顔を捉えた。
一瞬、驚いたような顔。
「？」
なんだろうか――と、疑問に感じた直後に気付く。
座ったままのティースと彼女の目線の高さがほとんど一緒だった。
――あの頃は、こんなにも違っていただろうか。
と。
同じことを感じたのだろうか。
ふ、ルナリアの表情が緩んだ。
「言い忘れてたけど――」
それを見た瞬間、ティースの脳裏に赤と白の屋敷のある風景が浮かんでくる。
ああ、変わらない――
ティースの胸に郷愁の想いがこみ上げた。
「大きくなったわね、ティースくん。……少し頼りなく見えてた頃の君が、ちょっとだけ懐かしいわ」
「……姉さんは変わってないよ。昔の、優しいままの姉さんだった」
ティースはそう言って少しだけ目線をそらす。
「俺も言い忘れてた。……ゴメン。姉さんに黙って出て行って……本当にゴメン」
視線を逸らしたのは罪悪感ではなく、こみ上げた涙を見せないようにするためだったが、そのときルナリアはすでに背を向けていた。
ティースのほうからも、彼女の表情を窺うことはできない。
「いいの。無事でいてくれて、それどころかこんなにも立派な夢に

向かって進んでいるんだもの。文句なんて言ったら、神様に叱られてしまうわ」

「……うん。ありがとう、姉さん」

「……」

何か言おうとして、ルナリアはそれをやめた。深呼吸の音。搾り出すように彼女は言った。

「……また」

「うん。また」

そんな短い言葉を交わして、ティースは彼女と別れた。

最終試験はただの通過儀礼である――というのは、数十年前にデビルバスター協会の会長を勤めていた男の言葉である。デビルバスターとしての素養は第3試験までにすでに証明されていて、最終試験は単なる儀式に過ぎないというのだ。

その言葉はさすがに言いすぎではある、が、２０人に1人しか合格しない第3試験と違い、約半数の人間が合格することや、生命の危険がほとんどないことなどから、難易度、過酷さの双方において第3試験より容易いというのは衆目の意見の一致するところである。

なお、このトーナメントにおいて使用される武器は摸擬刀、あるいはそれに準ずるもので、受験生の希望に応じた形状の武器が提供される。また、急所を保護する防具の着用が義務付けられている。試合は点数制。試合中の有効打に対し、５名の審査員たち（いずれも現役、あるいは引退したデビルバスターたちだ）がその場で点数を付け、それが１００点を超えた時点で試合終了となる。

実戦的な第3試験と比較すると、やはり競技的な側面が強い。

そして――

「第1試合――」
場内アナウンスが対戦する受験生の名を読み上げると、その始まりを今か今かと待ちわびていた円環状の観客席からうねるような歓声が沸き起こった。
真上に広がる丸い空は透き通るような蒼色。
太陽の位置は往路のだいたい7合目といったところだろうか。
「ティースさん、どうっすか？」
観客席へ戻ったシーラを出迎えたのはパーシヴァルだった。
「ダメね。ガチガチになってたわ」
と、シーラは答えた。
彼女はティースの健康を管理するという職務を果たすため、入場の直前まで付き添っていたのだが、大きな歓声が聞こえるたびに緊張が増しているのが手に取るようにわかる状況だった。
「あれじゃ、試合場に出てくる頃には石になってるかもしれないわ」
シーラがそう言うと、パーシヴァルは意外そうな顔をした。
「そうなんすか？　昨日までは結構リラックスしているように見えましたけど」
「昔から本番に弱いのよ。あの男は」
素っ気なくそう言ってシーラは自分の席に腰を下ろす。
そこは最前列のいわば特等ともいえる席で、シーラが聞いたところによると、1年前、ティースがディバーナ・ロウに入った少し後ぐらいからミューティレイク家が押さえていた席らしい。
（まさか、その頃からここまで来ることを予想していたわけじゃないでしょうけど……）
波のように押し寄せる歓声に背中を預けるようにして小さく息を吐く。
熱気。
緊張感。
数万人の観客と、試合場。シーラたちのいる席はちょうどその狭間にあって、さしものシーラも雰囲気に少し飲まれつつあった。

そんな状況だから、ティースが緊張するのもある程度仕方ないとは思う。
「まあ、ティースさんが本番に弱いのは確かにそうかもしれないっすけど」
また歓声が大きくなる。
シーラたちが試合場へ視線を向けると、ちょうどティースが試合場に姿を現したところだった。
パーシヴァルは言った。
「あの人のすごいところは、本当の土壇場になると逆に強くなることっすよ。……って、これはレイ隊長の言ってたことっすけどね」
改めて、2人の受験番号と名前が場内にアナウンスされる。
シーラは先に試合場に入っていた対戦相手の男を見た。イストヴァン＝フォーリー、という名前だけは彼女も聞いていた。
大男というわけではないが肩幅が広くがっしりとした体型。ひょろっとして撫で肩、猫背なティースとはまるで逆の、素人が見ても戦うことを生業としていることを想像させるだけの雰囲気がある。
外見だけではない。観客の大歓声にも腕を組んだまま微動だにせず。
どことなく不安そうに入場してきたティースとはまったく正反対の相手である。
「……本当に場違いね」
「え？　……ああ、ティースさんっすか」
シーラの呟きに、パーシヴァルは改めて試合場を眺めて、
「確かに性格はデビルバスター向きって感じじゃないっすよね。……そういや俺、ずっと疑問だったんですけど、ティースさんはどうしてデビルバスターに？」
そう言ってパーシヴァルはシーラの顔を見る。
「……」
シーラは一瞬だけ無言を返してから、
「……そういうあなたはどうなの？」
「え？　俺っすか？」

逆に質問されるとは思っていなかったのか、パーシヴァルはびっくりしたような顔をした後、
「俺は……恩返しですかね」
「恩返し？　ミューティレイクの人に、ってこと？」
「あ、いえ、それもありますが、なんというか、その……」
パーシヴァルはちょっと照れくさそうな顔をして言った。
「周りのみんな、というか、俺に優しくしてくれた全部の人、というか……」
そう言って頭を掻く。
「恩返し、ね」
そんなパーシヴァルの態度が見慣れた男の仕草と重なる。
シーラは言った。
「もしかして、あなたも本番には弱いタイプなんじゃない？」
「へ？　……どうしてわかったんですか？」
シーラは思わず苦笑して、
「なんとなくね。……ティースの動機もあなたと似たようなものよ。あいつはたぶん、誰かを助けたり、守ったり、そんなことを続けていないと生きていけないんだわ。もしかしたら――」
シーラは試合場を見つめて言った。
「守る相手がいなくなったことに、どこかで気付いているのかもね」
「守る相手？　……それって、シーラさんのことっすか？」
シーラは答えた。
「違うわ。違うから、あいつはあそこに立っているのではないかしら」
「？」
「ところで」
と、シーラは不思議そうな顔のパーシヴァルを見て、
「この試合に勝ったら合格は確実だと聞いたけど、本当なの？」
「え、あ、そうですね。相手のイストヴァンって人は有力候補ですし、この試合に勝てばほぼ間違いないっすね」

「勝てる可能性はあるの？」
「もちろん」
パーシヴァルは即答した。シーラに気を遣ったという風ではない。
「俺も相手のことは噂ぐらいしか知りませんけど。でもティースさんの実力で勝てる見込みゼロなんて、そんな相手、この試験じゃ３０年に１人出てくるかどうかっすよ」
「……そうなの」
シーラは正直なところ、この試験のレベルも、ティースの実力がどの程度のものなのかも、正確なことは何もわかっていない。シーラがわかっているのは、ティースが見た目の印象よりは戦える人間だという、その程度のものだ。
「逆に、楽に勝てる相手なんてのもまずいないでしょうね」
と、パーシヴァルは付け足した。
試合場ではすでにティースとイストヴァンが定位置に付いて対峙している。
手にしているのは両者とも標準的なサイズの両刃の剣。刀身部分の幅や全体の大きさもほぼ同じものに見えた。
試合場の東側と西側には２つの鐘が設置されていて、試合で有効打があるとその点数に応じて鐘が打ち鳴らされることになっている。１０点を越えるごとに１回。つまりこの鐘が１０回鳴らされた時点で試合終了である。
また、負傷による戦闘不能、あるいは戦意喪失などにより、審判、あるいは本人の申告により試合が決することもある。
試合場は直径約８０メートルの円状。故意に場外に出た場合はその時点で失格。不慮の場合であっても５秒以内に試合場に復帰しなければ失格となる。
攻撃禁止部位などの制限は基本的にはない。唯一“必要性の認められない攻撃によって対戦相手を死に至らしめた場合は失格”との規定があるが、このルールが適用されたことは長い歴史の中でもほとんどない。

と、審判によるルールの説明が終わった。
シーラはふと、隣のパーシヴァルを見て、
「そういえば、パメラたちはどうしたの？」
「パメラとフィリスはクリシュナさんと一緒に来てますよ。だいぶ後ろのほうの席ですけど」
「……あら。珍しいわね」
と、シーラが言うと、パーシヴァルは一瞬不思議そうな顔をした後、
「ああ、クリシュナさんっすか？　まあ、ちょっと変わった人っすけど、デビルバスターを目指している以上、観戦することは勉強になりますから――」
そう答えた。
その、直後のことだった。
「！」
耳をつんざくような大歓声。
ついに試合が始まったのか――と、シーラは試合場に視線を移そうとしたが――
違う。
カン、カン、カン、カン、カン――！！
「！？」
狂ったように鳴り響く鐘の音。
悲鳴のような観客の大歓声は、開始僅か数秒で決まったその有効打に対しての歓声だった。
鳴ったのは東の鐘。
ただ、それがどちらの有効打を示すものなのか、シーラはすぐに思い出せなかった。
「――まさか」
呆けたようなパーシヴァルの呟き。
シーラはようやく試合場に視線を戻すことができた。
「！」

心臓の鼓動が僅かに早まった。
ティースが試合場の中心でうずくまっていて、審判が2人の選手の間に入っている。
試合が止まっている。
「……まさか……終わったの？」
シーラの問いかけに、パーシヴァルは試合場を凝視したまま言った。
「鳴ったのは8回ですから、まだ、終わってはいないっすけど……」
2人の視線の先――ティースがゆっくりと身を起こしていた。
左の脇腹を押さえている。
いったい何が起こったのか。
シーラには何もわからなかったが、ただ、
「あのイストヴァンって人、もしかしたら本当に、30年の1度の相手かもしれないっす……」
強張った表情でそう言ったパーシヴァルの言葉が、やけに耳の奥に残った。

“心力”とは人間の持つ基礎的な能力を高める、筋力とは異なる非物理的な力のことである。男性よりも筋力に劣る女性がデビルバスターとなって魔と互角に渡り合えるのは、この心力が優れているからに他ならず、デビルバスターやデビルバスターを目指す者は、誰もが通常の鍛錬の中でこの能力を無意識に会得し、無意識に活用している。
そして8種類あるとされる心力のうち“剛力”と呼ばれる力は、瞬間的に怪力を発揮できる能力のことだ。重量級の武器を扱うデビルバスターたちは、この“剛力”に優れている者が多いとされ、女性デビルバスターの多くもこの力で筋力不足を補っている。
ティースも同じく、戦いの中で無意識のうちにこの力を振るって

いる。彼の場合、本質的にいえば“剛力”の才能に恵まれているわけではないが、それでもある程度の底上げはされているし、それでも足りないパワーについては他の技術でカバーして戦っている状態である。

ただ――

「っ……！」

脂汗がこめかみを流れ落ちる。吐き気を催すほどの動悸。そして左脇腹の激痛。

防具の上からだったにもかかわらず。

いや。

その前に自らの武器をぶつけ、威力を削いでいたにもかかわらず。

イストヴァン＝フォーリーのその初撃は、ティースの持っていた武器をまるで木っ端か何かのように易々と弾き飛ばし、そのまま彼の左脇腹に吸い込まれたのだ。

咄嗟の判断で飛び退ったため、完全なクリーンヒットではなかった。そうでなければ試合はその時点で終了していただろう。実戦なら胴体を寸断されている。それほどの一撃だった。

試合でなかったら――

落とした剣を拾い上げ、ティースは審判を挟んで再びイストヴァンと対峙する。

（信じられない……なんてパワーだ……）

相手は決して大男というわけではない。身長はティースよりも少し低いぐらいだし、体つきも、筋肉質であることは黒い軽鎧の上からでも想像できるが、全体的な筋肉量が抜群に多いようにも見えない。

それでいて、まともに受け止めることすらできなかった、万力のような一撃。

かつて対峙したことがないほどの、“剛力”に特化した才能の持ち主。相手がそういった人物であることは想像に難くなかった。

――試合はいったん止まっている。

その間、ティースの頭は必死に回転していた。
あの初撃。
油断していたわけではないが、かといってそこまでの威力を想定していたわけではない。受け止めた後のことを考えながらの防御だった。本当に防ぐことだけを考えれば、止めることはどうにかできるかもしれない。
いや、しかし。相手だってそれが全力だったとは限らない。
もしも受け止めることができなかったら――
全身が緊張に包まれる。
それならば、先手を取るべきなのかもしれない。相手が万全の一撃を放つことができないよう、まずは手数で圧倒すること。
もちろんそうなった場合の相手の実力は未知数だ。
まともに打ち合えば、パワーに優れる相手が有利だろうか。
ただ、スタミナや剣さばきはどうなのだろう。
“剛力”に優れる者は、スタミナに劣る場合が多い。ただ、それはあくまで一般論であって、目の前の相手がそうであるという保証はない。
攻めるか。
守るか。
――試合が再開される。
（……攻めるしかない！）
決意を固め、左脇腹の痛みを振り払うように、剣を握った両手に力を込める。
先のイストヴァンの一撃に対しては、別に反応できなかったわけではない。打ち合いになれば、そう一方的に負けるとは思えなかった。
踏み込む。
イストヴァンは最初と違い、いきなり打ち込んでこなかった。
向こうにとってもティースの力は未知数で、同じ戦法を取ることへの躊躇いがあったのかもしれない。

攻守が逆転する。
１合。
振り下ろし重なり合った剣から、相手が力を込めた感触が伝わってくる。
力比べになることを避け、ティースはすぐに離れて横に動いた。
足を使う。
そのまま、もう一撃。
２合。
「……」
イストヴァンの眉が微かに動いた。
おそらくはティースの攻撃の意図を悟ったのだろう。
さらに離れて、動く。
３合、４合。
イストヴァンの足が後ろに下がる。
（いける――！）
５合、６合、７合――
さらに打ち合う。
足を止めないように、相手が万全の体勢で打ち込めないように。
８、９、１０――
観客の間にどよめきが走った。
１１、１２、１３――
さらに打ち合いの音が響く。
１５、１７――
打ち合う。
２０――
そして、
（え――！）
止まる。
止まったのは――ティースの足だった。
２２、２５――

「う……ぐっ……」
次々と繰り出される剣撃。
足が止まって、下がる。
３０――
いつの間にか、攻守が逆転していた。
（この、人――力だけじゃない――！）
下がって、受ける。
下がって、受ける。
淡々と繰り出される、攻撃。
あの初撃ほどの威力はない。
ただ、速く、そして防ぎにくい箇所を狙った正確な攻撃。
鍛錬された、剣さばき。
下がる。
下がる。
下がる――
横に動くことすら許さない、計算された緻密な連撃に、ティースは防戦一方のまま試合場の端に追い詰められつつあった。
（こ、このままじゃ――！）
場外へ出てしまう。
自ら下がっている以上、この場外は故意とみなされるだろう。その時点で負けが確定する。
かといって――
（……右！）
動こうとしたその方向から攻撃が来る。
どうにか受けて、後ろへ。
（だったら前に――）
足を止めた瞬間、右肩辺りを狙った突きが繰り出される。
「くっ……！」
瞬間的に床を蹴り、飛び退りながら相手の剣を右に弾く。
切っ先が、僅かに右腕を掠めた。

鐘は、鳴らない。
ただ――
（まずい――！）
よろめいた右足が試合場の端を踏んだ。
これ以上は、下がれない。
そして一瞬の空白。
「！！」
眼前にいるイストヴァンの体がふた回りほど大きくなったような、
そんな錯覚を感じた。
（来る――！）
あの初撃と同じ。
受けることはできない。
後ろへ下がることも許されない。
脊髄から脳髄へ電流のような緊張が走って――。

歓声。
そして、イストヴァンの有効打を示す東の鐘の音が試合場に響き渡った。

その6『トーナメント～決勝～』

夜、ミューティレイク本館の1階ホールには、いつものようにだらしない格好で足を投げ出し、麦酒の杯を傾けているレイの姿があった。

「あ、いたいた！　レイくん！」

そんな彼に声をかけてきた人物の正体は、振り返るまでもなくわかった。使用人たちの多くはすでに使用人寮へ戻っている時間だったし、そもそもこの屋敷の中で彼のことをそんな風に呼ぶのは、同じディバーナ・ロウのデビルバスターであるアクア＝ルビナートしかいない。

「アクアか。相変わらず騒がしい――」

ところが、振り返ったレイは少しだけ意外な顔をする。

「……っと、珍しいじゃないか」

その視界に入ってきたのはアクアだけではなかったのだ。

「……」

アクアの後ろに見える、別に不機嫌でもないはずなのに不機嫌そうな顔をしている少年は、やはりディバーナ・ロウのデビルバスターであるレアス＝ヴォルクスだった。

11歳という歴代最年少の若さでデビルバスターの称号を手に入れたその少年は、お世辞にも社交性が高いとはいえない性格だ。主にコミュニケーションを取ることが目的のこのホールに姿を現すことは、レイの言うとおり比較的珍しいことである。

「あー、疲れた！　あ、そこのワイン、もらおうかな」

アクアがレイの向かいの席に腰を下ろし、テーブルの上にあった赤ワインのビンを指差す。

「好きにしな。……レアス、お前も飲むか？」

「いらん」

レアスはやはり不機嫌そうに断ってアクアと同じように席に着く。
2人はつい先ほど、揃って任務から帰ってきたばかりだった。
午後10時を知らせる時計の鐘が鳴る。人が少ないせいか、その音はいつも以上に大きく聞こえた。
アクアが自分で持ってきたワイングラスに赤紫の液体を注ぎ、レイは手にしていた杯の麦酒を飲み干す。
レアスはそんな2人を退屈そうに見つめて。
言葉を切り出したのはアクアだった。
「で？」
「で、とは？」
言葉を向けられたのはレイ。わかっている口調で、わからないと聞き返す。
続けたのはレアスだった。
「連中の結果は？」
「ああ。試験の話か」
わざとらしく思い出したように呟くレイ。それが彼のいつもの言い回しであることを知っている2人は特にそのことを突っ込むでもなく、ただ彼の言葉を待った。
レイは少しからかうような口調をレアスに向ける。
「なんだ。アクアはともかく、お前まで気にしてたとは意外だな」
「そんなんじゃねぇよ。ただ、事実の確認をしたいだけだ」
無関心を装いながら話の先を促そうとするレアスに、レイは小さく笑って、
「ついさっき、ちょうど決勝の結果が入ってきたところだ。ちなみに決勝の組み合わせは――」
「……じゃ、なくてさー」
と、少し焦れたのかアクアが不満そうに口を尖らせる。
「あたしたちはまず、ティースくんとパースくんの1回戦の結果が知りたいの。ちょうど仕事だったからまだ何も聞いてないのよ。意地悪しないで早く教えないよー」

「やつら、1回戦は通ったのか？」
と、レアス。
その言葉はもちろん、合格のボーダーが1回戦通過であることを意識した上でのものだ。
レイはそんな2人の言葉を聞き流すようにして言った。
「決勝の組み合わせは、ステルシア＝ブライトンとイストヴァン＝フォーリーだ」
「だから、決勝の組み合わせじゃなくってぇ――」
「……ってことは」
再び不満声を上げようとしたアクアを遮って、レアスが眉間に皺を寄せる。
「え？　……あ」
不思議そうな顔をしたアクアはそんなレアスの表情を見て、それからようやくレイの言葉の意味を悟ったようだった。
「ステルシアとイストヴァン、って、それって確か、ティースくんとパースくんの……」
「1回戦の相手だな」
「ってことは――」
呟いて、レアスが小さなため息を漏らす。
「ああ、そういうことだ」
レイはそんな2人を交互に見て、それから淡々とした口調で答えた。
「どっちも1回戦敗退だ。残念ながら、な」

ヴォルテストの突き抜けるような青空の下、試合の決着を告げる西の鐘が盛大に鳴り響く。
最終試験の決勝、イストヴァン＝フォーリーとステルシア＝ブライトンの試合は、スタジアムに集まった大観衆が期待したどおりの

熱戦――とはいかず、試合は時間にして１０分も経たずに決着を迎えていた。
勝ったのはイストヴァン。
結果は１００対０。
つまりは一方的な試合だった。
「……」
優勝者を祝福する大歓声。
地鳴りのようなその歓声の中、ティースは無言のまま、じっとその試合場の中心を見つめていた。
「結局、イストくんは決勝戦も完封か。彼は5年、いや１０年に一度の逸材かもしれないね」
「……パウロスさん？」
そんな彼の背後に現れたのはルナリアの夫、パウロス＝マジェットだった。よくこの大観衆の中で――と、思ったが、よくよく考えればティースほど長身の人間はそう多くない。客席が偶然近ければ、彼を見つけるのはそんなに困難なことではないのかもしれない。
「そうですね。……強いです」
視線をスタジアムの中央へと戻す。
イストヴァン＝フォーリーが勝利したことを告げるアナウンスが場内に響き、再び大歓声が上がった。
パウロスはちょうど途中退席で空席となっていたティースの隣の席に腰を下ろし、ティースと同じように試合場の中心を見つめながら、
「ステルシア＝ブライトンに運が無かったことも確かだね。パーシヴァル＝ラッセルとの初戦は、近年でも屈指の熱戦だった。あれだけ消耗して、そのあとの2戦を無難に勝ち上がったことだけでも、彼女の実力が近年の合格者の水準を上回っていることはわかる。けど……どうだろうね。彼女が万全だったとしても、おそらくイストくんには歯が立たなかったんじゃないだろうか。ティースくん、君はどう思う？」

相変わらず早口なのに聞き取りやすい口調で、パウロスは一気にそこまで言った。

ティースは試合場を見つめたままで答える。

「どうでしょう……俺はステルシアさんとは戦ったことがないので」

「でも、君はパーシヴァルくんとは同輩だし、イストくんとは実際に剣を交えている。パーシヴァルくんとステルシアくんとの試合は見ていたのだから、想像はできるんじゃないかい？」

再度の問いかけに、ティースは少しだけ考えて、

「……パウロスさんの言うとおりだと思います」

と、素直に答えた。

ティースは1回戦でイストヴァンに敗北した後、観客席からその後のすべての試合を見てきた。

もちろん自分なんかに他の受験生を評価する資格なんかはない、と思う。ただ、イストヴァンが今回の受験生の中で抜けた実力を持っていることは素人目にもわかることだった。

「そうか。やはりそうだろうね」

それはパウロスたち各国のスカウトたちの目も同じだった。

結局、今年の試験の評価は、イストヴァン＝フォーリーが頭2つほど抜きん出て、ステルシア＝ブライトンが水準以上、その他の4名の合格者たち――といっても正式な発表がされたわけではないので、あくまで1回戦を勝ち上がった受験生という意味だが――は、例年ならば合格ラインに達していない、との見方が大勢となっていた。

ティースは逆にパウロスに問いかける。

「お仕事のほうは、どうなんですか？」

「ん、ああ、スカウトかい？」

ジェニスからデビルバスターのスカウトに来ている彼は、当然、イストヴァンやステルシアの他、合格が濃厚な受験生たちに接触しているはずで、おそらくはすでに交渉も進めているはずだった。

パウロスは苦笑いを浮かべて頭を掻いた。

「いやぁ～、正直今回は厳しいねぇ。イストくんほどハッキリとした実力を示されてしまうと、どうしても条件が釣り上がってしまう。そうなると貧乏な我が国には厳しいよ」
「ステルシアさんは？」
「もっと無理だろうね。彼女はもともとヴィスカイン領の貴族で、祖国に貢献するためにデビルバスターを目指していた娘だ。一応話をすることはできたが、一番最初に、どこかの国に仕えるつもりはない、と断りを入れられたよ」
そういえばそうだった、と、ティースは彼女自身から聞かされたその話を思い出した。
（そっか。ってことは、彼女はその目的を達したわけか……）
ステルシアとは一度言葉を交わしたきりの関係だったが、それでも自然と祝福の言葉が胸に浮かんだ。
パウロスは続ける。
「他の４名は……こう言っては彼らに悪いが、正直惹かれるものがなかったなぁ。もちろん彼らにはこの先成長する可能性も十分にあるのだが……私だったら、そうだね。１年後に期待してパーシヴァルくんを先物買いするほうが上策だと思うね。１回戦を見る限り、現時点でも彼の実力はステルシアくんにもそう劣らないだろう」
と、パウロスは言った。
それはもちろん、パーシヴァルがティースの同僚で、同じようにスカウトするのが不可能であることを承知の上での、半ば冗談交じりの発言だ。ジェニス領はもともと抱えているデビルバスターがいなくて、今は即戦力を求めている。いつデビルバスターになれるかわからない人間を気長に育てる余裕はないはずだった。
「そういや、パーシヴァルくんは一緒じゃないのかい？」
「ええ」
パーシヴァルは初戦敗退後、この会場には一度も来ていなかった。１回戦での敗退にやはりショックを受けているようで、ティースたちの前では元気に振舞っているものの、あれ以来宿から外に出よう

とはせず、夜になると宿の小さな庭で延々と素振りを繰り返しているようだ。

間近で試合を見ていたティースには、そのパーシヴァルの気持ちはよくわかった。

どうしても勝てない試合ではなかったのだ。

パウロスは“ステルシアにもそう劣らない”と言ったが、ティースの目からすれば、パーシヴァルとステルシアの実力はほぼ互角だった。試合の結果は１００対９０。序盤にいきなり奪われた５０点を少しずつ詰めて、詰めて、長期戦になったこともあって、中盤から終盤にかけてはスタミナに優れるパーシヴァルがずっと優勢に進めていて――結局ギリギリ届かなかった、という、そういう試合だった。

油断していたわけではないが、気持ちが入る前に奪われてしまった序盤の５０点。

パーシヴァルの後悔はそこに集約されていることだろう。実戦なら最初の一撃で勝負が決まっていたかもしれないのだから、未熟といえば未熟。その後を５０対９０で進めたからといって、本当はパーシヴァルのほうが上だった、なんてことは言えない。

ただ――やはり考えてしまうのだ。

「あの５０点が無ければ、なぁ……」

「それを言うなら、君も同じじゃないのかい？」

と、パウロスは言った。

「え？　あ、いや、俺は……」

自分が声に出していたことにも気付かず、突然の問いかけにティースはモゴモゴと口ごもった。

だが、パウロスは続けた。

もしかすると、最初からそのことを話題にするつもりだったのかもしれない。

「イストくんほどの相手に、開始数秒で８０点。パーシヴァルくんよりもよっぽど厳しかったんじゃないかな」

「……俺は、パースと違って惜しかったわけでもないですから」
「ま、結果を見たらそうかもしれないね。でも――」
パウロスはそう言っていったん言葉を止め、視線をティースから試合場のほうへと戻した。
「……ずいぶんと真剣に試合を見ていたようだね。実を言うと試合中にも2、3度声をかけさせてもらっていたんだが、それにも気付かないほど集中していたのかい？」
「え！　そ、それはすみません！」
まったく気付いていなかった。
パウロスは手を振って、
「いやいや、いいんだよ。君にしてみれば、こうして試合を見ることも修行のうちなんだろうからね。……それで、何か“見えた”のかい？」
「え？」
不思議そうな顔のティースに向けられた視線は、よく口の回る、いかにも人の良さそうな男の目――ではなく、受験生たちの素質を見抜き、その実力を計ろうとする厳格なスカウトの目だった。
パウロスはその目でティースを見つめたまま、続けた。
「イストくんと君の試合は、実に不思議な試合だったよ。開始数秒でイストくんが80点取った。その後も君は防戦一方。やがて試合場の端に追い詰められ、万事休す。その展開はイストくんの2戦目、そして今の決勝戦と、彼が完封した2つの試合とまったく同じだった。……“そのとき”まではね」
「……」
「あのとき、君には何が“見えた”んだい？」
ティースは沈黙を返した。
脳裏に、フラッシュバックする。
その――感覚。

「止まった、ような気がしたんです」
「止まった？」
「ああ、いえ！」
パウロスの真顔の問いかけに、ティースは慌てて首を横に振った。
「たぶん気のせいです。ただ……止まったような気がした、そのときに、イストさんの体の向き、腕の筋肉の張り具合、両足の位置、視線の方向……そのすべてが頭に入ってきて、それで次の太刀筋が予測できたというか、なんかそんな感じがしたんです」
そのときのことを思い出し、しどろもどろになりながらティースはそう説明する。
実のところ、その一瞬の感覚は、ティースにとって初めての経験ではない。以前にも何度か、それが訪れたことがある。
たとえば――そう。
タナトスの将魔、ネイル＝メドラ＝クルティウスと戦ったときもそうだった。降り注ぐ幾筋もの炎の矢が、一瞬停止したように見えて、そこにギリギリ体１つ分、避ける隙間を見つけることができた。
あの、感覚。
だからティースはあの試合以降、ずっとこの試合場に足を運んでいたのだ。
それがもう一度、呼び起こせないかと、そう思って。
「……それで、あんな、素人目にみても無謀としか思えない突進を？」
「あのときは、それしかないと思って……」
やはり誰の目にも無謀だったのか、と、ティースは少し恥ずかしくなって頭を掻いた。
だが、パウロスは真剣な顔のままだった。
「……なるほどね。けど、結果的にはそのおかげでイストくんの剣は空を切った。いや、正確には君の左肩を掠めただけで、鳴った鐘の音は１回だった。それで９０対０。……その後も“見えて”いたのかい？」

「どうでしょう……」
正直に言うと、よくわからない。その一瞬ほどはっきり見えていたわけじゃないが、それまでより相手の太刀筋は見えていたと思う。
「そうか」
パウロスは満足そうに頷いて、それから腕を組んで何事か考え込んでいた。
そしてしばらく。
次に口を開いたとき、パウロスの視線はいつもの人の良さそうな温厚な視線に戻っていた。
「なんにしても相手が悪かったね。前のときは一般論でそう言ったつもりだったけど、今は本当に、心からそう思うよ。初戦の相手がイストくんでさえなければ、君は間違いなく合格していたと思う。妻の弟分だというひいき目は一切なしでね」
「はは、ありがとうございます」
それが社交辞令なのかそうではないのか、そんなことは考えるつもりもなかった。なんであろうとティースは初戦で敗退した。そしてパウロスはそれに気を遣って、実力を認めるコメントを送ってくれたのだ。
それだけで今のティースにとっては十分だった。
その気持ちを和らげるには十分だった。
そして、
（……あ、そっか）
その言葉が妙に心に沁みた、その理由をティースはようやく思い知る。
――後悔していたのだ。
出会い頭に致命的な一撃を受けて、きっと悔いがあるだろうなと、ティースが先ほどそう考えたのはパーシヴァルの心を推察したからではない。
ティース自身の思いだった。
パーシヴァルのように接戦だったわけじゃない。

それは確かにそのとおりだ。
だけど――
モヤモヤしたものが胸の中に渦巻いている。
できることなら――やり直したい。
もう一戦して、ボロ負けするならそれでもいい。それはそれで納得できるし、来年に向けてまた努力するだけのことだ。
ただ、今はどうしても考えてしまう。
あの最初の８０点がなければ、勝てた可能性があったんじゃないか、と。
たぶん、それを確かめたくてティースはこの試合場に通っていたのだ。イストヴァンの太刀筋が止まって見えた、あの一瞬の出来事が気のせいなどではないことを確認するために。
「……さて、ティースくん」
そんなパウロスの呼びかけでティースは我に返る。
辺りに目を向けると、観客たちもすでに帰路に付き始めていた。
「決勝戦も終わったことだし、そろそろ協会の会場に向かったほうがいいんじゃないかな。合否の発表があるはずだよね」
「あ、はい。そうですね」
ティースは頷いて、立ち上がった。
ティースたちの不合格も、１回戦を突破した受験生たちの合格も、まだ正式に決まったわけじゃない。
そうしてティースはパウロスに別れを告げ、スタジアムを出てデビルバスター協会の試験会場へと移動した。

そこで、本当に予想と異なる事態が訪れようとは、その時点では思いもよらずに。

「――で？　そのイストヴァンってヤツはサン・サラスになったの

かよ」
　レアスが厨房から水差しを手に戻ってくる。
　珍しく長いこと話をしていて喉が渇いたらしい。
「あー、もうもう、レアスくんったらぁ。その人のことなんてどうでもいいわよぉ。……あたしホント、ガッカリしすぎて、もう吐きそう……」
「それはお前が空きっ腹に大量のアルコールを投入したせいだろ」
　テーブルにぐったりと突っ伏したアクアに、レイが的確な突っ込みを入れる。
　3人がここに集まってはや2時間余りが経過していた。話題はいったん、直前までアクアとレアスがついていた任務の話に移ったが、ここに来て再びデビルバスター試験の話題へと戻っている。
「……おい。アクアのヤツ、大丈夫なのか？」
　レアスが眉間に皺を寄せる。
　レイは軽く手を振ってそれに答え、
「ああ、気にするな、いつものことだ。本当に吐きそうになったら自分でどっか行く。その辺に撒き散らかして、あとでアマベルに叱られたくはないだろうからな」
「そうか……」
　自分で酒を飲まないからか、レアスはアクアの様子が少し気になるようだったが、やがて気にしないことに決めたのか、水差しを手にしたまま椅子に腰を下ろし、自分のコップに水を注いで一気に飲み干した。
　そんなレアスに対し、レイは先ほどの質問に答える。
「イストヴァン＝フォーリーはサン・サラスにはなれなかったようだな」
「どうしてだ？　決勝までそれだけ一方的な試合だったなら、なってもおかしくないんじゃねぇのか」
「全体的にレベルが低いと見られている、ってのはある」
「それだけか？」

「いや。もちろん違うな」
「だったら――」
さらに問いかけようとしたところで、レアスが急に言葉を切り、視線を横――ホールの暗がりへと向けた。
レイの視線も同時に動いている。
それはほんの僅かな、常人では気付くことはないであろう微妙な空気の動き。それでもその場にいた面々は――酔って突っ伏しているアクアを除き、このホールに入ってきた“誰か”の気配を感じ取っていた。
時間は――ちょうど日が変わろうとしている時間であり、屋敷の大半の人間は寝静まっている。
と。
そんな風に警戒したのはほんの一瞬のこと。
「……」
その正体に気付いて、レアスは息を吐く。
その、特に忍ぼうとしていない割に、そこにいるデビルバスターたちでさえほんの僅かな気配しか読み取れない人物。
その人物の正体に、レイもレアスも十分すぎるほどに心当たりがあった。
「……なんだなんだ？　今日はずいぶん珍しいのが集まってくるじゃないか」
レイが茶化したような口調でホールの暗がりに声をかける。
「……」
無言のまま、採光用の窓から差し込む月明かりの中に、ゆっくりと浮かび上がった人影は、彼らと同じこのミューティレイクのデビルバスター、アルファ＝クールラントだった。
これで、この屋敷にいるデビルバスター全員がここに集まったことになる。
レアスが声をかける。
「アルファ。お前も試験の結果が気になって来たのか？」

「試験？　いいや」
短く、答えた。
じゃあ何故、と、続けて問いかけるまでもなく彼の目的はすぐにわかった。
「ああ……風呂か」
彼が脇に抱えているのはタオル、それに着替えと思しき布切れだった。
彼が夜中、誰もいなくなった時間に風呂に入ろうとするのは屋敷の誰もが知っている。屋敷ではそんな彼のために、日付が変わってから太陽が昇るまでは風呂場に進入してはいけない、という暗黙のルールまであった。
と。
必要最低限の返事をしてそこを素通りするかと思われたアルファは、彼らのテーブルを通り過ぎようとしたところで足を止め、そしてテーブルの3人に向かって言った。
「……試験というのは、ティースの？」
無機質で無感情なその問いかけに、レイが答える。
「ああ。ま、パースのヤツも一緒だけどな。……なんだ？　やっぱり気になるのか？」
するとアルファは、頷きも、首を振りもせず言った。
「セシリアが、聞きたがっていた」
なるほど、と、レイは納得し、アルファに対し、目の前の空席を顎で示す。
「なら、たまにはそこに座って聞いていったらどうだ？　風呂なんざ、３０分や1時間でどっかに逃げてったりするもんでもないだろ？」
「……」
少し考えるような間があったものの、アルファは結局レイの提案を受け入れ、唯一空いていた席に腰を下ろした。
その音に、テーブルに突っ伏していたアクアが顔を上げる。

「……あらぁ？　アルファくんみたいな人があたしの目の前に座ってる……」
どうやらまだ夢と現実の狭間を彷徨っているらしい。
急に声を張り上げて、
「……アルファくん！　ちょうどいい機会だわ！　いい加減白状なさい！」
「？」
ゆっくりと視線を向けたアルファに対し、アクアは完全に座りきった目を向けて、
「あなた、本当は女の子なんでしょ！　じゃないと説明できないわよぅ！　その綺麗な肌！　どうなってんのよ、それ！　女の子じゃないなら女の子になりなさい！　いえ、あたしと交換しなさいッ！」
無茶苦茶なことを言い出した。
「私はセシリアの兄だ。だから女の子じゃない」
「嘘おっしゃい！！」
「嘘ではない」
完全に酔っ払ってタガが外れたアクアと、そんな彼女にいつもどおりの言葉を淡々と返すアルファの組み合わせは、かみ合ってなさすぎて少々滑稽だった。
レアスがそんなアルファを見て、ぽつりと呟く。
「ったく。相変わらず無愛想なヤツだぜ」
「お前が言えることか。……っと、今年のサン・サラスの話だったな。３年前のサン・サラスも来たことだし、ちょうどいいか」
レイはそう言って、わーわー騒いでいるアクアを放ったまま話題を元に戻す。
「イストヴァン＝フォーリーがサン・サラスになれなかったのは、単純な理由だな。全体のレベルが低かったこともそうだが、重要な最終試験で圧倒的な成績を残せなかったのが一番の原因だ」
「なに？　おい、言ってることが違うじゃねぇか。そいつ、全試合パーフェクトだったんじゃないのか？」

怪訝そうに眉間に皺を寄せたレアスに、レイは小さく笑って、
「決勝と、その前の試合が完封だったって言っただけだろ。イストヴァンはそのもう1つ前の試合で60点を失っている」
「その1つ前？」
レアスは自問するようにそう呟いて、そしてその言葉の意味に気付いたようだ。
「……ティースが、60点取ったのか？　その、イストヴァンってヤロウから」
「ああ、そうだ。……で、意外にも、いや当然、というべきか。デビルバスター協会は再試験が必要だと判断したらしい」
「……再試験？」
その言葉に真っ先に反応したのはアクアだ。少し正気を取り戻したのかアルファに絡むのをやめ、充血した目を今度はレイに向ける。
「再試験ってティースくんの？　ってことはもしかして、まだ合格の可能性がある？」
「ってことになるな」
頷いたレイに、今度はレアスが問いかける。
「再試験ってのは、イストヴァンってのと再戦か？」
「いや、違うな」
レイはやはり愉快そうに続けた。
「実は……偶然にも、この試験には似たような境遇のヤツがもう1人いてな。これまたそこそこの実力の準優勝者と1回戦で当たって、そこでほぼ互角の戦いをしながら負けちまった、っていう、なんとも運の悪いヤツなんだが――」
「……」
レアスもアクアも、そこでようやくレイのもったいぶった態度の理由を悟る。
「じゃあ、レイくん。その再試験って――」
アクアの言葉に、レイは皮肉な笑みを浮かべて言った。
「運が良いのか悪いのか、どうやら我がディバーナ・ロウに新たな

デビルバスターが誕生するのは、ほぼ間違いなさそうだな」
その言葉に、アクアとレアスは何とも微妙な表情で顔を見合わせたのだった。

リィィ……リィィ……
甲高い、細かく震えるような虫の声。
「……なんの虫かな」
と、パーシヴァルは小さく呟く。
故郷のネービスでは耳にしたことのない音だった。
このヴォルテスト領の北方には、北西のブリュリーズ領から東のヒンゲンドルフ領にかけてグリゴラ山脈が横たわっており、その北と南では気候や生態系が大きく異なっていると聞いたことがある。
ネービス産まれ、ネービス育ちのパーシヴァルが見たことのない生き物もたくさんいるのだろう。
夜の風は同時期のネービスに比べ、どこか生ぬるい。湿気も多い。
そして、ふと。
宿の中から明かりが漏れてきていることに気付いた。
顔を上げる。
「パースくん、どうしたの？」
宿から出てきたのはフィリスだった。と、同時に宿の中の微かな話し声が外まで漏れてくる。
「あぁ。少し涼んでいたんだ」
そういってパーシヴァルは座っていた大きな石に両手を付いて夜空を見上げた。
夜空の星がネービスよりも少し遠い気がするのは――これは気のせいだろうか。
パタン、と、扉の閉じた音。
見上げていた視線を下ろすと、近付いてくるフィリスの姿が視界

に入った。
それを見て、パーシヴァルは口を開く。
「……しっかし、皮肉な話だよなー」
フィリスが何を言い出すかはわかっていた。
「再試験がよりにもよってティースさんとだなんてよ。ティースさんのことだから、きっと気を遣ってやりにくいんじゃないかな」
「……それってパースくんもでしょ？」
パーシヴァルは笑って、
「なに言ってんだよ。俺は意外とそういうの、気にしないほうだぜ？」
「嘘ばっかり」
フィリスは小さく笑って足を止めると、さっきパーシヴァルがしていたように夜空を見上げる。
「……」
パーシヴァルはそんな彼女をしばらく無言で見つめていたが、やがて我に返ったように視線を逸らす。
ただ、少々不自然なその動きはフィリスに気付かれてしまったようだ。
「うん？」
「ああ、いや……」
パーシヴァルは視線を泳がせながら、適当に誤魔化した。
「なんだ、その、そういや、俺が屋敷に来てからもう４年にもなるんだなー……って」
「？」
フィリスは突然の話題の転換に少し不思議そうな顔をしたが、素直に答えて、
「４年と、半年ぐらいかな？　１１月だったよね、パースくんが来たのって」
「……だったかな。よく覚えてないや」
パーシヴァルがそう言うと、フィリスはころころと笑って、

「私が屋敷に来たちょうど1ヶ月後だったからよく覚えてるよ。懐かしいなぁ。初めて会ったとき、すごく睨まれて怖かったんだったっけ」

「そ、そうだったか？」

初対面の記憶は、パーシヴァルの中にはない。実際、そのときは眼中に入っていなかったのだろうと思う。

「うん。あの頃はまだアクア様とレインハルト様しかいなかったんだよね。レアス様もいたけど、デビルバスターにはなってなかったから。……あ、あの頃はまだ“レアスくん”だったんだっけ。まだ8歳だったもんね」

パーシヴァルは首をかしげて、

「んー、俺、最初の頃のことはあんま覚えてないんだよな。右も左もわからなかったし、これからどうなるのかとか、どうすればいいのかとか、そんなことばっか考えてたから」

ただ、そんな状況の中で、同い年の少女がそこにいたことにとてつもなく安堵したことはよく覚えている。

パーシヴァルがミューティレイクに来た当時、屋敷にいた面々で歳が近かったのはフィリスの他に、1つ年上のドロシー、ダリア姉妹がいたが、年上の女性がどうも苦手――というより、接し方を知らなかったパーシヴァルは、結局、フィリスと一番最初に仲良くなった。

歳はぜんぜん違ったが、小さい頃に事故で亡くした妹と重ねた部分もあったように思う。

だからパーシヴァルにとって、フィリスは今でも、屋敷で一番身近に感じている存在だった。

「4年半、か……」

5年目にして、初めて辿りついたデビルバスター試験。

パーシヴァルはフィリスに問いかけた。

「ティースさんは、どうしてる？」

「え？　えっと、確か、ちょっとジョギングしてくるって言って出

て行ったみたい」
パーシヴァルは怪訝そうに眉をひそめて、
「あれ。……さっき外を走って戻ってきたばかりじゃなかったっけ」
「そういえば……そうかも」
そう言ったフィリスとしばし顔を見合わせ、それから可笑しくなって笑った。
仲間同士での、再試験。
当然ティースにも、おそらくは色々と思うところはあるのだろうと推測できた。
……厳密に言えば、ティースとパーシヴァルは2人で1つの椅子を争うわけではない。
試験官曰く、これはあくまで再審査をするための再試合であり、どちらかを必ず合格させるわけではない、両方不合格の可能性もあれば、両方が合格することだってある。
だから双方とも全力を尽くしなさい、と。
その試験官はクインシー＝フォーチュンというネスティアスのデビルバスターで、ティースとパーシヴァルがディバーナ・ロウの一員であることを知っている。
つまり仲間同士で良い試合を“演じる”ことのないように、と、釘を刺されたわけだ。
もちろんパーシヴァルにそんなつもりはない。というより、ティースもパーシヴァルもそんなことができるほど器用な人間ではない。
お互い、相手のことは気にせず、全力を尽くす。
再試合が告げられた直後に、ティースとそんな約束も交わしている。
だからもう、とにかくやるしかないのだ。
ただ――
「……なぁ、フィリス。お前は、どっちが勝つと思う？」
「え」
その問いかけにフィリスはびっくりしたような顔をした。その言

葉の意味を考えて、理解して、それから眉を曇らせて悲しそうな顔になる。
　衝動的にその質問を口にしたパーシヴァルは、すぐにそれを後悔した。
「あ、いや、すまん。……いやさ。ティースさんは、まだディバーナ・ロウに来て1年なんだよな。俺のほうが3年半も先輩でさ」
「……うん」
「でも俺、ティースさんのことを新入りだとか、格下だとか、そんな風に思ったことはほとんどないんだ。……どうしてか、わかるか？」
「……年上、だから？」
　フィリスの問いかけに、パーシヴァルは首を横に振った。
「あの人と1対1の稽古をしていると、時折違和感があったんだ。……なんだか手加減して戦ってるような、そんな感じがして仕方がなかった」
「え？」
「もちろん実際には違う。あの人はそんなことをする性格じゃないだろ？　……あの人は全力なんだ。全力だけど、全力で戦えていない。それが俺の印象だった」
「……」
　フィリスは黙って聞いていた。
　パーシヴァルは続ける。
「それだけなら俺の勘違いだって、そう考えることもできるんだけど……でも違うんだ。印象だけじゃない。稽古で俺が10回中9回勝てていた頃も、残りの1回は、急にまったく手も足も出せなくなって負けたりする。……俺が油断してるわけじゃない。あの人が、ふと、急に強くなるんだ」
　パーシヴァルが視線を地面に落とす。
「だから、俺は思ってる。あの人が1年でここまで来たのは、ものすごいスピードで成長したわけじゃなくて、もともと持ってる力を

使いこなせるようになったからなんじゃないか、って。力をつけたんじゃなくて、力の引き出し方を身に付けてきただけなんじゃないか、って。あの人は、最初から俺より強かったんじゃないか、って。……そしてあの人がもともと持っている力ってのは――」

そこまで言って、パーシヴァルはハッとしてフィリスを見上げる。

「……悪い。お前にこんな話しても、わかんないよな」

「あ、ううん。わかんないけど、でも……パースくん、あの、もしかして……」

フィリスはそこで口ごもった。

言いにくそうにしている。

「つまり――」

パーシヴァルは目を閉じて、おそらくはフィリスが躊躇ったのであろう言葉を自ら口にした。

「……自信がないんだ。俺は」

ポツリ、と。

「……パースくん」

フィリスはそんなパーシヴァルの姿に、少なからず動揺した。

どちらに勝って欲しいか、と聞かれれば、フィリスには答えられない。彼女にとってティースとパーシヴァルはどちらも屋敷の仲間であり、特にフィリスは優しいお兄さんのようなティースの性格に好感を持っていたから。

ただ、それでも。

「パースくん……」

心の中では、パーシヴァルを応援したい気持ちのほうが僅かに強かった。

彼の４年間を知っている。

訓練の過酷さに挫折しそうになったことも。

壁に当たって苦悩したことも。

任務で多くの人の死に触れ、涙を流したことも。

それでもなお、デビルバスターを目指し、ようやくここまで辿り

ついたことも。
「……」
思わず、フィリスは拳を握り締めて、言った。
「大丈夫だよ。……きっと勝てるよ」
「……え？」
「パースくんなら、ティース様にも勝てるよ。だって……」
そこまで言って、フィリスは再び口ごもる。
続く言葉をまったく用意していなかった。もともとが根拠のある主張ではない。ただ、パーシヴァルを元気付けようとしただけの言葉だ。
「あ、えっと……」
何か続けようとして、眉をひそめ、口ごもり、それから困ったような顔になる。
結局は、無言。
口下手な彼女らしいといえばらしい。彼女のことをよく知らない人間であれば、彼女が何を思い、何を言おうとしたのか気付かないかもしれない。
ただ。
パーシヴァルには伝わったようだ。
「……悪い。なんだか無理やり言わせちゃったみたいだな」
「あ、べ、別に無理に言ったわけじゃ――」
「いや、いいんだ」
反論しようとするフィリスを制して、パーシヴァルは勢い良く立ち上がった。
「でも、そうだよな。やる前から自信がないとか、そんなこと言ってちゃダメだよな。サンキュー、フィリス。ちょっと気が軽くなった」
そう言って笑いながらズボンの埃を払う。
「負けらんない。来年もあるったって、早いほうがいいに決まってる。ティースさんには悪いけど――」

そう言ってポケットに両手を突っ込み、夜空を見上げる。
我ながら単純なものだ、と、パーシヴァルは思った。が、それでも心は本当に、嘘のように軽くなっていた。
これなら全力を尽くせる。
そんな確信がパーシヴァルの胸の中には生まれていて、
「……明日は絶対に勝たせてもらう。絶対に、な」
そう宣言して、パーシヴァルは満面の笑顔をフィリスに向けた。
「……」
そんな彼に、フィリスは少しだけ複雑な胸中――どちらも合格すればいいのに――なんてことを思いながら、笑顔を返したのだった。

その7『トーナメント～再試験』

「これは――クリストフ先生」

開いた扉の陰から現れたその人物の姿を見た瞬間、クインシーは一瞬だけ言葉に詰まり、それから素早く立ち上がって深々と頭を垂れた。

ティーサイト＝アマルナとパーシヴァル＝ラッセルの再試験が決まった日の夜。本来ならば、この日の決勝戦をもって審査員のお役御免となるはずだったクインシーの部屋を訪れたのは、真っ白な白髪の老人だった。

「お初にお目にかかります。私は――」

「３１３年合格のクインシー＝フォーチュンだろ。覚えとるわ」

「……」

老人の言葉に、頭を下げたままのクインシーの顔が僅かに紅潮した。羞恥ではなく、名前を覚えてもらっていたという喜びのためである。

「あれからもう7年か。頑張っておるようだな」

老人は扉を閉じ、その外見に似合わない素軽い足取りで部屋の中央まで進み、ソファに腰を下ろした。

それを見て、クインシーも老人の正面のソファまで移動する。

「何か、飲み物でもご用意しましょうか」

「いや、構わんでくれ。今回の審査員の中で、お主だけ卒業以来だったものでな。どんな男に成長したか見たくなっただけだ。長居するつもりはない」

老人――クリストフ＝ベルクールはこのデビルバスター協会の会長である。

大陸で最年長のデビルバスターでもある彼については様々な逸話があり、若い頃には、神話上の生き物に等しい“一桁台”の獣魔と

対峙したこともあるとされ、見た目は６０歳前後に見えるが、そのときに浴びた獣魔の返り血の効能で老化が極端に遅くなっていて、実年齢は１００歳を越えている、というような噂もある。

それらの噂について本人は一度も肯定したことはなく、その多くが実際の出来事を誇張したものであることは想像に難くないにせよ、多くの“魔”を退治し、多くのデビルバスターを育て、数々の輝かしい功績を残した大陸でもっとも有名なデビルバスターの１人であることに間違いはない。

故に、クインシーのように直接師事したことがなくても、この老人のことは敬意を込めて“先生”と呼ぶ者が多いのである。

クリストフはソファの背もたれに身を預け、懐かしむように目を閉じた。

「３１３年か。あの年はなかなかの豊作だったな。あの年のサン・サラス――カレル＝ストレンジとお主の一戦は良く覚えておる。ヤツは元気か？　お主たちは確かネスティアスの同僚であったと記憶しておるが」

「はい。今は共に部隊長として配下を率いる立場です」

「ふむ。ネスティアスのディグリーズは相変わらずの逸材揃いだの。羨ましい限りだ」

そう言って小さく笑った後、少し黙り込んで、クリストフはゆっくりとクインシーを見つめた。

「……お主らのその力、いずれ借りるときが来るかもしれん」

「と、いうと？」

クインシーが眉をひそめる。

デビルバスター協会はあくまでデビルバスターの資質を持つ者を選別し、その称号を与えるだけの機関である。その後の管理は基本的には行わないし、彼らを統率したり命令したりという権限も一切持っていない。クインシーがこうして審査員として出向いているのも、いわば恩返しのボランティアのようなものであり、それ以外、協会との接点は無きに等しい。特にネスティアスという組織に属し

ているクインシーにとって、奉公すべき相手はネービス公であり、デビルバスター協会ではないのである。
クリストフとて、そんなことは百も承知のはずだ。
にもかかわらず――
……と。
そんなクインシーの反応は予測済みだったらしく、クリストフはすぐに言葉を続けた。
「お主、“ベルリオーズ”という連中の話は聞いておるか？」
「はい。最近、ネービスでも警戒を強めている魔の組織の１つです。……今のところ表立った動きはないようですが、力の強い魔が集結しつつあるとの情報も聞いております」
「さすが、ネスティアスも耳が早いな」
クリストフはゆっくりと頷いて、
「こちらでも帝都のデビルバスターたちと協力して情報を集めているが、お主の言うとおり表立った動きがない故、ぼんやりとした情報しか得られておらぬ。ただ、連中のトップはどうも、王魔族のようでな」
その言葉は、クインシーの表情を瞬時に険しくさせた。
「王魔？　王魔族が、こちらの世界に？」
“魔王”級の輩が２名以上、しかも、退屈した王魔の気まぐれ、ではなく、こちらを侵略する意思がある輩、と、私は見ておる」
「……もしそれが事実であれば由々しきことです。もちろん、我々ネスティアスも協力を惜しまないでしょう」
さらに表情を厳しくして、クインシーはそう言った。
王魔は魔界の支配者層で、本来、好戦的な存在ではなく、人間界に姿を現すこともほとんどない。
ただ、そんな彼らがひとたび牙を剥くと、その脅威は大陸中を震撼させる。
王魔自体、基本的には人間の手に負える相手ではないのだ。完全に孤立させた状態で、選りすぐりのデビルバスターたちが複数名で

相手をし、ようやく打ち倒すことができるかどうか、という存在なのである。

それが、人間界にいる将魔や上位、下位魔たちを集め、集団となって侵略してくるというのであれば、その危険性については改めて説明するまでもないだろう。

過去、そういった事態に、国境を越え、大陸中のデビルバスターたちが協力して対処したという記録は１００年に１度ぐらいの頻度で、いくつか残っている。

クリストフが言っているのは、つまりそういう事態に発展する可能性がある、ということなのだろう。

「まだ推測の段階だがな。年寄りの杞憂で終われば良いのだが」

「なるほど。しかし、それで得心がいきました」

クインシーはそう言って目の前の老人を見つめた。

「今回、再試験の実施を決められたのはクリストフ先生だと伺いました。近い将来、１人でも多く、優秀なデビルバスターが必要になるかもしれない、と、そう見込まれてのことなのですね？」

「ま、それだけではないが。……ところでクインシーよ。お主はあの２人、どう見る？」

クリストフは少し口調を変え、口元を緩めてクインシーの顔を真っ直ぐに見た。

「……」

試されている気がしてクインシーは僅かに緊張した。が、この老人の前で取り繕うのは無駄な気がして、結局彼自身が感じているままの感想を口にした。

「パーシヴァル＝ラッセルは“息吹”に特化した性質を持っています。あの２本の長いトンファーを攻撃に、防御に、と、常に動かし続けられるのは無尽蔵なスタミナを有している証でしょう。……将来、有望な少年だと思います」

「ふむ、同感だ」

クリストフは大きく頷いた。

「“剛力”に優れるイストヴァン＝フォーリーもそうだが、特化型の心力を持つ者は自らの戦術を定めやすいというメリットがある。その点、バランス型のステルシア＝ブライトンは、優秀だが、この先、しばらくの間は苦労するかもしれんな」

クインシーは少し考えて、

「集団の中では、どちらも使い方次第だと思います、が、1対1の試合形式では、特化型が優位であることは否めません」

そう言ったクインシーに対し、クリストフは細い目を少し大きめに開いて、

「ならば、再試験はパーシヴァル＝ラッセルが優位と見るか？」

「いえ」

クインシーは即座に首を横に振った。

「ティーサイト＝アマルナも特化型です。あの力の特化型は客観的に見ることができない分、非常にわかりづらいですが、おそらく間違いないでしょう」

「お主も、気付いていたか」

クリストフは満足そうだった。

どうやらクインシーは“見る目”について合格点を与えられたようだ。

「再試験はおそらく互角でしょう。……そういう試合になれば、私は双方合格とすることを主張しようと考えています。彼らはすでに、それに値するだけの力を見せています」

と、クインシーは言った。

が、

「ふむ。まあ、仮に良い試合になったとすれば、それも検討するとしようか」

クリストフはその件についてはあまり肯定的ではないようだった。

試験当日。
その日は曇り空だった。風上の空には黒に近いグレーの雲が広がり、雨が降り出すのは時間の問題だ。
ただ、もちろん天候に関係なく再試験は実施される。
再試験は本戦と同じ会場で行われるが、本戦と違うのは無観客で実施されることだ。正確に言うと受験生の関係者や各国から訪れているスカウトなどは観戦可能だが、それ以外の一般人は基本的に入場禁止となっている。
試合開始予定は正午ちょうど。
その、３０分ほど前のことである。
「あら？」
観客席の最前列に姿を現した女性は、そこに見覚えのある男が座っているのを見つけ、躊躇うことなく近付いていった。
「イストさん。あなたも来られてましたか」
「……ステルシアか？」
呼びかけにゆっくりと首を動かしたイストヴァンは、その声の主が昨日の決勝戦の相手であることを知って少しだけ目を大きく見開いた。
ステルシアの服装は試験のときとは打って変わり、胸元に蒼い宝石をあしらったワンピース姿で、パイナップルのように束ねていた髪も全て下ろしていた。昨日とはまるで別人のような装いで、イストヴァンが少し戸惑ったのも無理はない。
「怪我はもう、平気なのか？」
「ええ。打ち込まれたアザが上半身に集中していて助かりました。腕の怪我は長袖で容易に隠せますが、足の怪我を隠すのはなかなか苦労するのです」
「驚いたな。……」
そう言って何か言葉を続けようとしたイストヴァンだったが、結局何も言わずに口を閉ざした。
どうやら、もともと口数の多いほうではないようだ。

ステルシアも特に追求することなく、彼の隣に腰を下ろして試合場に視線を送った。
「イストさんもこの再試験に興味がおありでしたか」
「実力の近い人間の戦いは色々と参考になる。……君も、同じだろう？」
イストヴァンの言葉に、ステルシアは微笑みながら首を横に振った。
「私は単純に、あの2人のどっちが強いのか、興味本位です。あなたやパーシヴァルさんの戦い方は、私にはあまり参考にはならないのです。真似、できそうにないですから」
「ん？　君は、パーシヴァルやティーサイトと知り合いなのか？」
ステルシアは頷いて、
「はい。この試験の直前に話をさせていただきました」
そう答えると、イストヴァンは理解できない顔をした。
どうやら彼が言った“知り合い”の定義とは違っていたようだ。
が、それも特に口にすることはなく。
ステルシアが観客席をぐるりと見渡して、
「スカウトの方々も、何人か見に来ておられるようですね。……あそこにいるのは、身内の方々でしょうか」
と、2時の方角を見てそう言ったが、イストヴァンはあまり興味がなかったのか軽く一瞥しただけだった。
「イストさんはこの後、どちらへ？」
「この後？　……ああ。フィンレー領で活動する予定だ」
「フィンレー？　今年はスカウトの方を見かけませんでしたけど、フリーですか？」
「ああ。集団で行動するのはあまり得意じゃなくてな」
「そうでしたか」
ステルシアはそれについては特にコメントすることなく、
「いずれにしてもフィンレーであればお隣様ですね。私はヴィスカイン領で騎士となる予定です。またお会いする機会があるかもしれ

ません。……そうそう。今日、再試験を受ける御二方はネービスのようですから、皆、比較的近所ということになりますね」

「……」

イストヴァンは何か言葉を返そうとして、結局何も思いつかなかったらしく口を開かなかった。

少し強い風が試合場の中に吹き込んでくる。

無言が少し長く続いた後。

今度はイストヴァンのほうから口を開いた。

「君は、どちらが勝つと思う？」

「パーシヴァルさんが勝つと思います」

即座に答えたステルシアに、イストヴァンは少し驚いた顔をした。

「……理由は？」

ステルシアはそんな彼を横目に見て、

「根拠はありません。実は私、あなたとティーサイトさんの試合を見ていないのです。ですから、正直にいえば予想はできません。ただ、心情的に、私と戦ったパーシヴァルさんに勝って欲しいと思っているだけです。……あなたは？」

イストヴァンは少しの間、黙り込む。

やがて、呟くように言った。

「……わからん」

そんな彼に、ステルシアは少し吹き出すように笑って、

「それでは予想にならないではありませんか。ずるいです」

「ああ、いや。そういう意味ではなく。いや」

と、イストヴァンは意外にもうろたえたような様子で、

「言葉足らずですまない。わからないのは試合の結果ではなく、あのティーサイトという男のことだ。……いや、だからこそ試合の結果もわからないということになるのだが、つまり、私と戦ったとき、あの男は前半と後半でまったく違う戦い方を見せた。その、どちらが出るかで、再試験の結果も正反対になる、と、そう思っている」

「まったく違う戦い方……？」

「戦い方、というのも正確ではないか。まるで別人になった、というべきかもしれないな」

そういってイストヴァンは試合場を遠い目で見つめた。

……その目には、あるいはそのときの試合の光景が映っているのだろうか。

ステルシアはそんなことを思いながら小さくうなずいて、同じように試合場を見る。

「あなたにそこまで言わせるのであれば、何か持っておられるのかもしれませんね。私もティーサイトさんと戦ってみたくなりました。……意外、ですか？」

イストヴァンの視線に気づき、ステルシアがそう尋ねると、

「ああ、いや、すまない。そういうことに興味がありそうには見えなかった」

「私だってこの世界で生きている人間ですから」

ステルシアはさも当然のようにそう言ったが、今日のお嬢様然とした彼女の装いではイストヴァンの戸惑いのほうが正解だろう。

やがて、彼らから見て反対側の通路から審査員たちが1人、2人と姿を現し始めた。

そろそろ時間だ。

審査員たちの大半が席についた辺りで、選手入場口から再試験を行う2人、ティースとパーシヴァルが姿を見せる。本試験と違い、紹介のアナウンスもなければ観客の歓声もない。淡々と、静かに試合の準備が整えられつつあった。

「どちらもリラックスしているようですね」

そこから見える2人の表情を見て、ステルシアがそう言った。

どちらも本戦第1試合以来、十分な休養を取っている。おそらくは力を出し切れる状態だろう。

武器は、ティースが標準サイズの中剣。

パーシヴァルが標準よりかなり長い2本のトンファー。

試合場の中央で、2人が向き合う。

イストヴァンは特に意味もなく上空を見上げた。
頂点にあるはずの太陽は、雲に隠れて見えない。
そうして彼が試合場に視線を戻した、ちょうどそのとき。
前振りもなく、審判員の声が響いた。
「――はじめ！」

その場にもし、人の心を読むことのできる人間がいたとするならば、その試合場の2人の心を覗いて、おそらくその頬に苦笑を浮かべたことだろう。
“相手は自分より格上だ”と。
滑稽なことに、その場にいる2人はそのどちらもが目の前の相手にそんな印象を持っていた。
ティースはこれまで何度も稽古で剣を交えてきたその結果を思い返して、勝率で大きく上回るパーシヴァルを格上の相手と見ていたし、パーシヴァルはパーシヴァルで、ティースが自分より上だと感じる理由があって、結果、2人は“今までの稽古と同じように戦っては勝つのは難しい”という結論に達していた。

パーシヴァルは一晩考えた。
今まで培ってきた自分の戦い方を完全に捨てて戦うことなんてできるはずもない。
だからパーシヴァルは、稽古のときよりもよりシビアに勝ちを求めることにした。
彼の持つ2本のトンファーは攻防一体の武器だ。その両方の武器に攻・防をどのぐらいの比率で乗せるかで、戦い方はがらりと変わる。
そしてパーシヴァルは戦士としての自らの長所もよく知っている。
それは無尽蔵の――といってしまうと語弊があるが、他人よりも

圧倒的に優れた持久力だ。
２本の武器を振り回すパーシヴァルは、普通に考えればティースに比べてスタミナの消耗も激しい。が、彼はそれを補って余りあるだけの持久力をその体の中に宿していた。その証拠に、稽古の結果を見ても、試合が長引けば長引くほどパーシヴァルの勝率は良くなっている。
ただ。
これまでパーシヴァルは意図的に試合を長引かせようとしたことはなかった。
理由は簡単だ。実戦では試合のように１対１になる状況のほうが珍しく、無闇に戦いを長引かせて得をすることはあまりないから、である。実戦に向けての稽古、という意味では、試合を長引かせて勝つことのメリットが何もないのだ。
が、しかし。
今日、この再試験という場においては、違う。
勝つこと。
勝ってデビルバスターの称号を手にすることが、パーシヴァルにとって唯一、最大のメリットなのである。
もともと、格上の人間を相手にするとき、序盤は防御重視で始めることが多い。が、それでも攻・防の比率はせいぜい３対７ぐらいだった。
しかし。
今日、この試合は可能な限り、防御に徹しようと決めていた。
１時間戦おうが、２時間戦おうが構わない。
ティースに一撃も決めさせることなく、スタミナ勝負に持ち込んで、勝つ。
それがパーシヴァルの考えた、必勝の作戦だった。
一方――

ティースの考えはもっとシンプルだった。

今までどおりやっても、勝てる可能性はよくて2、3割。その2、3割に賭けるのは悪くはないな、なんて少し考えてしまったのはティースらしいといえばらしいが、今の彼はその2、3割よりももっと大きな誘惑に心を揺さぶられていた。

“あの感覚”である。

それが先のイストヴァンとの試合、あの一度きりのものであったなら、こんなにも心を揺さぶられることはなかっただろう。

だいたいティースは一か八かとか、当たって砕けろとか、そういう博打みたいな考え方は基本的には好まない。どうしようもなくなって無謀な手段に出ることはあるが、そうでない選択肢があるのなら、そちらを選ぶ。

当然だ。砕けなくて済むのならそのほうがいいに決まっている。ただ。

今、ティースの中の“あの感覚”は、一か八かの世界ではなくなりつつある。

イストヴァンに敗北した後、すべての試合を見つめてきて、そして“それ”が気のせいなんかではないことを確信した。

今にして思い返せば、その感覚はずっと彼の中にあったのかもしれない。

実戦ではいつも必死になっていて一瞬一瞬のことを思い返すだけの余裕がなかったし、稽古では今日は調子がいいとか、相手の調子が悪いんだろうとか、安易に考えて、真剣にその感覚を追求することはなかった。

イストヴァンとの一戦がきっかけとなった、その理由は何故だろうか。

最初に圧倒的な実力差を見せ付けられた。

にもかかわらず、あとでそれを――ひっくり返すまではいかなかったものの、それに伍するだけの戦いができた。

その理由が、“あの感覚”。

それをはっきりと認識し、常に念頭において他の試合を見つめていると、それは思った以上に頻繁に自分の身に訪れていることがわかった。

気のせいなどではない。

それは紛れもなく、彼の中にある“力”だった。

次にティースは、その感覚を操ろうと試みた。

ずっと見えているわけではない。じゃあ、その見える瞬間を自分の好きなようにコントロールすることはできないだろうか、と。

……それについては、まだ結論が出ていない。正確にいうと、上手くできているかどうかを試す機会が得られていなかった。それはやはり、自ら戦いの場に身を置いていなくては、はっきりと体感することができないものだったのだ。

そして、あれ以来、初の実戦。

ティースはこの場でそれを確かめようと考えていた。昨日までの試合を見つめてきた中で、それが一か八かの範囲を超えた、という手ごたえがあったから。

それがティースの、パーシヴァルに五分以上の確率で勝つための作戦だったのである。

「ティースさん」

「……！」

集中しすぎていたせいだろうか。

一瞬、それが誰の声かわからなかった。

試合場の中心。

そこにいる人間は2人だけ。

その声の主が誰であったかなど、改めて確認するまでもなかった。

パーシヴァルの視線がティースを捉えていた。

頬には微かに笑みが浮かんでいる。

それが余裕の笑みか緊張の笑みか、はたまたまったく別の意図が込められているのか、ティースには判断できなかった。

「もちろん、勝たせてくださいなんて言うつもりはありません。で

も、今日は俺が勝ちます」
まだ試合は始まっていない。しかし、パーシヴァルはもう構えていた。
腕から肘を覆うようにトンファーを握り、両手を胸の前に持ち上げる構えはまるで空手のよう。あのまま盾のように斬撃を受けることもできるし、長い柄を回転させて殴りつけることも、短いほうの柄で突きを放つこともできる。滅多にやらないが、握りを長い柄の部分に持ち替えて槍のように使うことも、握りの部分を刃に見立てた長柄の鎌のように使うこともできる。
ティースはそんなパーシヴァルに対し、同じような笑みを返して、
「俺だって、負けるつもりはないよ。パース。君が相手でもね」
不思議と――と、いうべきか。新しいことを試そうとしている割に緊張しないのは、相手がパーシヴァルだからかもしれない。
この光景は、ネービスで幾度となく繰り返してきた光景。
観客がほとんどいないこともティースにとっては幸いだった。
緊張せず、全力を出せる。
自然と、ティースも剣を構えた。
焦点を目の前の少年に合わせる。
（長引けば、俺が不利になる……）
双方ともそれを理解していて、互いがそれを理解していることまで理解している。
だからパーシヴァルが守り主体で来るだろうこともティースは予測していた。
少年が携える2本のトンファーは、頑丈な盾だ。
ただし油断してはいけない。その盾は時折、思わぬところで剣や槍に化ける。
そんな彼に勝つためには――
（やるしか、ない）
その力が自分のものであることを、信じて。

2人が構えて向かいあったまま、5分ほどが経過しただろうか。
少し遅れていた最後の審査員が姿を現して、すべての準備が整うと、前置きもなく試合は唐突に始まった。
「――はじめ！」
その声が響いて、試合場の空気が瞬時に重くなる。
強い風がティースの髪をなびかせた。
いや、風が吹いたのではない。
ティースが動いたのだ。
「はぁっ！！」
2人の距離が瞬時に縮まる。
先に仕掛けるのがティースであることは、わかりきっていたことだった。その動きを予測していたパーシヴァルはほんの僅かに後ろにステップする。
一撃の重さ、速さは、両手で武器を扱えるティースのほうが上だ。
パーシヴァルの動きは、自分にとって一番有利な距離、つまりはティースの攻撃が最大の力を発揮できない距離を保つためのものだった。
ただ――
「――？」
パーシヴァルは少し怪訝そうな表情を浮かべ、
「！？」
次に、そこに驚きの色を浮かべる。
ティースの突進を牽制するために、左のトンファーを僅かに動かした。それは攻撃するためのものではなく、あくまで牽制。攻撃が来ると思わせて、突進を躊躇わせるための動きだった。
だが――
ティースの突進はまるで鈍らなかった。
「っ！」
パーシヴァルは咄嗟に両方のトンファーを体の前で交差させた。
直後。

ティースの初撃が、交差したトンファーの上からパーシヴァルの体を薙ぐ。
「っ……！」
重い。
躊躇のない一撃だった。
（一か八か……！？　それとも……牽制だと見抜いたのかっ……！）
その初撃はどうにか防ぎきったが、ティースに万全の体制で撃たれては、パーシヴァルも片手で受けきることができず、2本の武器を活かすことができない。
基本、パーシヴァルの長所は相手を戸惑わせるトリッキーな戦い方にある。
そのまま3合ほど打ち合って、再び距離を取った。
パーシヴァルの脳裏に迷いが生まれる。
（……どうする。ティースさんが捨て身で来るのなら……！）
それは同時に、打ち込む隙があるということでもある。
事実、さっきの牽制をもし本気で放っていたなら、その一撃は間違いなくティースの体を捉えていただろう。
なら――
いや、それがティースの作戦なのかもしれない。
パーシヴァルの頭がぐるぐると回り始める。
――どうする。
初心を貫き、防御に徹するか。
翻って、攻撃に転ずるべきか。
パーシヴァルの選択は――前者だった。
いや、正確にいうと、もう一度ティースの出方を見る、という選択だ。
これは実戦ではなく試合だ。仮にもう一度様子を見て、たとえ僅かな点数を失うことになったとしてもまだ挽回のチャンスはある。
攻撃に転じて、隙を突かれ、致命的な一撃をもらうよりマシだ、と、そう考えた故である。

（もう一度、確認したい……）
パーシヴァルの頭はまだ冷静だった。
距離を空けていたのはほんの僅かな時間でしかない。短期決戦を望むティースと、長期戦を望むパーシヴァル。その構図に依然として変化はないのだから当然のこと。
動いたのはやはりティース。
パーシヴァルが迎え撃つ。
今度はパーシヴァルも踏み込んだ。
踏み込んで、右のトンファーを動かす。
だが、それも牽制だ。攻撃的な態勢になりつつも、実際には2本ともティースの攻撃に備えている。ただ、体勢が違えば今度こそティースも警戒するだろう、と、そう考えたのだった。
しかし――
（……ティースさん――！？）
やはり、動じない。
「どうして――ッ！」
思わず、声に出た。
鋭い一撃がパーシヴァルを襲う。備えていたため、すぐに防御の体勢を取ることはできたが、完全ではなかった。
力強い横薙ぎに、右の壁がほんの僅かに崩れる。
ティースはそれを見逃さなかった。
「はぁ――ッ！」
「くっ……！」
立て続けに繰り出された突き。
パーシヴァルが後ろにステップを踏む。
「おぉぉぉ――ッ！！」
ティースが追って、さらに剣を突き出す。
パーシヴァルは左のトンファーでその剣の側面を打とうと試みたが、それは間に合わなかった。
咄嗟に体をひねる。

「ッ……！」

ティースの剣の切っ先はパーシヴァルの右脇腹に微かにめり込んでから、防具の表面を滑るようにして外に流れた。

カン、カン――！！

すぐに、有効打を示す鐘の音が2回鳴り響く。

２０点。

パーシヴァルにとっては、その程度で済んで良かった、と思える点数だった。

大きく距離を取る。

ティースも決めるつもりの突きだったのか、体勢が崩れていたため追ってこなかった。

そのタイミングで、審判の判断で、いったん試合が止まる。

有効打があったときに試合を続行するかいったん止めるかは審判の判断だ。基本的に大きな有利不利がないときに限り試合を止めるが、これは、ラッキーな一撃からなし崩しに試合が決まってしまうことを極力防ぐためのルールである。

ただ、体力を回復するほどの間はない。

すぐに2人は中央で向かい合った。

構える。

パーシヴァルは点を失いはしたものの、防具の上からの一撃だったので痛みはない。

だが、

（……まさか、ティースさん、本当に捨て身で――）

ここにきて、パーシヴァルは少なからず動揺していた。

今まで、稽古の中でティースが捨て身になったことなんて――最初の頃、少しムキになっていた時期に何回かあった程度で、それ以外はほとんど見たことがない。

――いや。

考え直す。

よく考えてみればこれはいつもの稽古ではない。試験だ。だから

こそパーシヴァルはいつもよりも防御を固めて望もうと考えた。
それも“いつもとは違うこと”だ。
ならば――ティースが同じように、いつもと違う戦法を取ったとしても、それは不思議なことではないだろう。
――どうする。
二度目の自問。
牽制が通じないのであれば、防御に徹しても、いずれ先ほどのように崩されることになるだろう。
――そう考えさせることが作戦だろうか。
再び、頭がぐるぐると回る。
きりがない。
もう一度仕切りなおして、同じ失敗をしたら、また同じところに戻ってくるだけだろう。ただし、今度はもっと大きな点を失っているかもしれない。
なら――
攻撃に転ずるしかない。
パーシヴァルは決断した。
他に選択肢はなかった。軽くてもいい。こちらに攻撃の意思があることを示さないと、攻撃を防ぐ手がなくなってしまう。長期戦を考えるのは、そうしてからでも遅くない。
試合が再開される。
3度目も、最初に動いたのはティースだ。
これはたぶん、10回やれば9回は同じ結果になるだろう。互いの戦いのスタンスを知っているが故の必然である。
ただ、今回は前の2回とは違う。
トンファーを握る手に力が入る。
今度は牽制ではない。
右のトンファーは防御用に力を込めて。
左のトンファーは微かに握りを緩める。手首を返せば回転したトンファーが瞬時にティースに襲い掛かるだろう。

（3度も、同じ手は通じない――！！）
そして3度目。
2人の影は、試合場の中心で交差した。

「……イストさん」
ステルシアの言葉はイストヴァンの耳には届いていたが、視線は試合場の上に釘付けになったままだ。
微かな風が円状の観客席を渦巻いて2人の髪をなびかせる。
もしもこれが本戦であったなら、熱を帯びた歓声が試合場に送られていたことだろう。
ステルシアの言葉にも、それに近い熱が籠もっていた。
「あのティーサイトさんは……“どちらの”ティーサイトさんですか？」
「……どちらも、なにも」
イストヴァンは視線を動かさないまま、答えた。
「あれがあの男の本当の力なのだろう」
その声は冷静だ。イストヴァンはそれを一度目の前で体験している。驚きも戸惑いもなかった。
「そうですか」
一方のステルシアの言葉には明らかな驚きと、興奮が含まれている。
その証拠に。
そうしてイストヴァンに話しかけるステルシアの視線は、ずっと試合場に釘付けになったままだった。
「……どうやって、見切っていると思います？」
「“見えて”いる。ただ、それだけだろう」
「それは……わかりやすいですね」
そう言いながらも、ステルシアの声には、賛同しがたい、という

色が多分に含まれていた。
実際にパーシヴァルと戦った彼女にしてみればそれも当然のことだった。試合結果を見ればわかるように、彼女はパーシヴァルとの幾度かの駆け引きの結果、最終的に勝ちを手にした、という、ただそれだけのことだった。
今のティースがやっているように、それらをすべて見切った上で戦っていたわけではない。
ステルシアはさらに問いかけた。
「ティーサイトさんは、あなたのときも、そうだったのですか？」
「……」
イストヴァンは無言のままで頷く。
“見えて”いる。
その結論に達して、イストヴァンは納得した。
彼と戦ったときもそうだった。別に動きが速くなったとか、斬撃が急に鋭くなったとか、そういうことはまったくなかった。
ただ――いうなれば、的確に動くようになった。
細かいフェイントに動じなくなって、攻撃をまるで先読みできているかのように動くようになった。
それはたぶん、時間にしてコンマ数秒の優勢。
しかしその時間は、彼らの戦いの世界では圧倒的優位に立つのに十分すぎるほどの時間だ。
「あの男はおそらく、その“時間”を自分のものにしたのだろう」
イストヴァンがそう言うと、ステルシアは初めて視線を試合場の上から彼に移し、そして言った。
「イストさんは、もう一度やっても彼に勝てますか？」
「……」
「……すみません。意味のない、失礼な質問でしたね」
ステルシアはすぐにそう言って謝罪すると、付け足すように言った。
「私はきっと、今のままでは彼に勝てないでしょう。……合格に浮

かれていてはいけませんね。この世界にいる限り、上は果てしなく、遠い。……私は、もう戻ります。あなたは？」
「俺は最後まで」
「そうですか」
そう言ってステルシアは立ち上がる。
言葉は少し落ち着いていた。
「ヴィスカインに寄られた際には是非ブライトン家をお尋ねください。粗酒粗餐ではありますが、宿を御用意させていただきますので。機会があれば、あの御二方にもお伝えください。……では」
「……ああ」
彼女が立ち去る際も、イストヴァンは終始、試合場を見つめたままだった。

ティースは手ごたえを感じていた。
それは、今までと違う感覚だ。
はっきりと、今までとは違う。
違う世界が見えていた。
トンファーの動きに気を取られ、今まで見えていなかった、手の動き、足の捌き、力の入り具合、それによる次の行動の予測――
咄嗟に左のトンファーに攻撃を合わせると、それは甲高い音を立ててあっさりとパーシヴァルの手を離れた。
（ここだ――！）
パーシヴァルの表情が強張ったのがわかった。
彼を守る盾はあと1枚。
しかもティースの予想外の攻撃に体勢は崩れている。
夢中で、ティースは畳み掛けた。
パーシヴァルも咄嗟に右のトンファーで――防御を諦め、相打ち狙いの一撃を放ってくる。

それも“見えて”いた。
「はぁぁぁぁぁ――ッ！！」
そのトンファーを、柄の余った部分――剣首で弾く。
「ッ！？」
パーシヴァルの表情がゆがんだ。
２枚目の盾も崩れ落ちた。
あとはもう、打ち込むだけ。
袈裟懸けに、振り下して――。

ティースの勝利を告げる鐘の音は、彼の剣がパーシヴァルの体に届く前に鳴り響いていた。

その8『ディバーナ・クロス』

ティースたちが帰ってきた頃、ネービスでは月が替わって7月になっていた。

午後の日差しは確実に夏の訪れを感じさせていたが、肌に感じる風は6月の帝都よりもむしろ涼やかで、この地が余所よりも寒冷な土地であることを改めて認識する。

帝都に比べると幾分穏やかな喧騒の中、2ヶ月ぶりにミューティレイクの屋敷へと戻ってきたティースたちを迎えたのは、先に試験の結果を聞いていた屋敷の人々からの労いと祝福の声だった。

そう。

ティースは晴れて、デビルバスターとしてこの場所に戻ってくることができたのである。

「おめでとうございます、ティースさん」

執務室で聞いたファナの声が、ティースの耳にはひどく懐かしく聞こえた。

「ありがとう。ここまで来れたのも、ファナさんのおかげだよ」

「私は何も。すべてティースさんの努力の結果ですわ」

「いや、そんなことないよ。ファナさんが俺をここに招いてくれなかったら――」

「あー、はいはい。謙遜合戦はそのぐらいにしておいてよね」

2人の会話に口を挟んだのはファナの隣に控えていたリディアだった。

まじまじとティースの顔を凝視して、

「にしても、見えないなぁ。デビルバスターになってもティースさんはティースさんのままだね」

ティースは苦笑して、

「当たり前じゃないか。脱皮するわけじゃないんだから」
「まあね」
リディアはころころと笑った。
ショートヘアーと男物の執事服のせいで時折少年のようにも見えてしまう少女だったが、今日は不思議とそういう印象がなかった。少し、髪が伸びたせいだろうか。こんな大きな屋敷の執事をやっていて、歳の割にしっかりした性格をしているからついつい忘れてしまいそうになるが、日に日に成長していく年頃でもある。
「それにしても、お見事でした。ティースさん」
と、その場にはもう1人。ファナを挟んでリディアと反対側に控えているのは、ファナの執事兼ボディガードのアオイだ。
「私は正直なところ、合格する可能性はそれほど高くないと考えていました。いえ、実力的には申し分ないとは思っていましたが、本格的にデビルバスターを目指し始めてからわずか1年ということもありましたので」
するとリディアも深く頷いて、
「この中じゃ本気で期待してたのってファナさんぐらいじゃないかなぁ。……でも、パースさんも惜しかったね」
「ああ……まあね」
リディアの言葉にティースは少しだけトーンを落とす。
再試験が１００対０という一方的な結果となり、パーシヴァルはもちろん不合格となった。ティースはそれが自分とパーシヴァルとの本当の実力差だとは思っておらず、もう一度やればまた違う結果になるだろうと考えている。もしかすると両方合格なんて結果もあり得たのかもしれないと考えると、少し残念な気持ちにはなる。
ただ、結果は結果。
パーシヴァルも試合直後は茫然としていたが、すぐにいつもの調子を取り戻した。ショックがなかったといえば嘘だろうが、それを糧にできるだけの前向きさを持っている。来年は間違いなく合格できるはず、と、ティースは勝手にそう信じていた。

と、そんなティースの想いを察したわけではないだろうが、アオイが口を開いて、
「パースくんには来年またチャンスがあります。彼はまだ若いですし、合格する機会はきっとこれからいくらでもあるでしょう」
そんなアオイの言葉に、リディアがちょっとだけ眉をひそめて、
「そんな、何回でも、みたいなこと言わないでよ。帝都までの遠征費用だって馬鹿にならないんだからね。移動だけで往復1ヶ月以上、交通費に加えて本人とサポーターの宿泊費――あたしの給料何年分になるんだろうって考えたら背筋が寒くなるよ。……そうだ。試験に落ちるたびに本人給料をカットしてくってのはどうかな？　ね、ファナさん？」
ファナは微笑んで返した。
「でしたら、リディアさんも悪戯のたびに給料をカットしていくということでよろしいですか？」
「……まあ、頑張って働いている人の給料をカットするのは、モチベーション的にあまり良くないよね。うん」
あっさり手のひらを返したリディアに、ティースとアオイは視線を合わせて苦笑した。
「さて、ティースさん。今後のことですが――」
「あ、はい」
ファナの言葉にティースは少しかしこまった。
「まずはティースさんに御判断いただきたいと思います」
と、ファナは言った。
「判断？　なにを？」
「もちろん、今後もディバーナ・ロウに残り私たちに協力していただけるのかどうか、ですわ」
「へ？」
完全に想定外の質問だった。
「当たり前じゃないか、そんなの――」
当然のように肯定しようとする。

が、
「待ってください、ティースさん」
その言葉を遮ったのはアオイだった。
「そのお返事をいただく前に、少しお話させていただかなければならないことがあります」
「え？　話」
「姫。私からお話ししても？」
「ええ。お願いします、アオイさん」
ファナが頷く。
「？」
ティースはますますわからなくなったが、ひとまず黙ってアオイの言葉を待つことにした。
アオイはティースのほうに再び向き直って言った。
「お話しさせていただくこととというのは、このディバーナ・ロウの本来の在り方……つまりは存在理念についてです」
「存在理念？」
「はい。……リディア。呼んできてくれますか？」
「はーい」
アオイの言葉に、リディアは素直に頷いて部屋の外へと出て行く。
「？」
わけがわからないままリディアを見送ったティースに、アオイは続けた。
「これからお話しすることは、この屋敷の中でも一部の人間しか知らないことです。後ろ暗いことではありませんが、おおっぴらにできることでもありません。ですから、もしもティースさんがこの話を聞いて、ここを離れることになったとしても、このことについては……時が来るまでは他言はしないよう、お願いします」
「……」
真剣なアオイの物言いに、ティースは少し不安になってファナの顔を見た。が、ファナのほうは特に深刻そうな顔をするでもなく、

いつもの穏やかな微笑みのままだ。
それで少し心が軽くなって、ティースはアオイに向かって頷いてみせた。
「わかりました。続けてください」
アオイは頷いて、
「簡潔に言います。……この屋敷には幾人かの“魔”が暮らしています」
「……え!?」
ティースは思わず大きな声を上げてしまった。
といっても、それはアオイが口にした事実に対しての驚きではない。
当然、ティースは知っているのだ。リィナとエルレーン――彼の友人である2人の“魔”がこの屋敷に暮らしていることを。
しかし、
「ティースさん。アオイさんがおっしゃったのは、ティースさんのご友人のことではありませんわ」
「え?」
「ディバーナ・ロウは、もともと“そういう”部隊なのです」
「……そういう?」
ファナの言葉にティースがさらに困惑したところで、リディアが戻ってきた。
「連れてきたよー」
そして、
「や。おかえり、ティース」
「ティース様。御無事でなによりです」
「……リィナに、エル?」
リディアの後ろに、その2人――リィナとエルレーンの姿を認めて、ティースはますます混乱した。そして混乱したままで視線を正面に戻したティースに、アオイは言った。
「“キュンメル”という組織を、ティースさんはご存知ですね?」

「え？　あ、ああ……」
それは以前、ティースがエルレーンと再会するために訪れたリガビュールという町で偶然知り合った、エルバートという風魔の少年が所属している魔の組織の名前だ。
「人間に不当に虐げられている魔を救済する組織、だったっけ？」
アオイは頷いて、
「表立ってはいませんが、キュンメルとディバーナ・ロウは協力関係にあります。ですから、あのころリガビュールの町でティースさんが何をしていたか、そして――」
と、アオイは入り口付近に立ったままのエルレーンに視線を送り、
「エルさんがどのような経緯でティースさんと再会したのか、我々は大体のところを知っているのです。もちろん彼女が“人”でないことは最初からわかっていました」
リディアが続ける。
「リィナさんは、ウチの兄さんが直接会ってる――どころか戦ってもいるしね。ティースさんだって、本気でバレてないなんて、まさか思ってなかったでしょ？」
「……まあ、そりゃあ」
リディアの言葉に曖昧に頷きながら、ティースはようやく事態を飲み込めてきた。
アオイが“判断する前に話さなければならない”と言った理由も。
「つまり、ディバーナ・ロウの存在理念というのは――」
アオイは深く頷いた。
「魔の脅威にさらされる人々を助け、かつ不当に虐げられる魔を救い、最終的にはこのネービスに魔との共生体制を作り上げること。それがディバーナ・ロウの本当の目的です」
「……なるほど」
驚くべき事実ではあったが、今にして思えばディバーナ・ロウのメンバーには魔の存在を許容するかのような発言が多かった気がする。レイがリィナのことを黙っていたことにも合点がいく。

納得するティースに、アオイは続けた。

「人々に魔を受け入れてもらえるようにするには、まず魔の存在が脅威ではないことを示さなければなりません。我々が悪意ある魔を退治するのはそのための手段であって、本当の目的ではないのです。……40年ほど前、帝都の魔界学者が、良い心を持つ魔――“善魔”と、悪意を持つ魔――“悪魔”という呼称を用いるようになって以来、魔と共存しようという空気が大陸に広まったことが何度かあります。ですが、そのたびに“悪魔”の組織が大きな事件を起こし、機運は急速に萎んでいく……その繰り返しです。結局、魔の存在を受け入れてもらうには、まずはその脅威を排除しなければならないのです。“善魔”がその協力をしてくれたとなれば、説得力はさらに増すことになるでしょう」

アオイは熱っぽい言葉で語ったが、“善魔”や“悪魔”という呼称はティースには初耳だった。つまり、それはまだ一般的な認識ではないのだろう。ティースとて、魔がすべて悪ではないと知ったのは、リィナやエルレーンとの出会いがあったからだ。いわば偶然である。

「さて、ティースさん」

と、ファナが言った。

ティースは顔を上げて彼女の顔を真っ直ぐに見る。

「今のアオイさんのお話を踏まえた上で、再度、お伺いいたしますわ。……今後も私たち、ディバーナ・ロウにご協力いただけますか？」

「え？　あ、えっと……」

ティースは言葉に詰まった。

といっても、別に迷ったわけではない。

「もちろんだよ。っていうか……今の話って、俺にとってはむしろ有り難いことっていうか」

あまりにも自分にとって都合のいい事実だったものだから、逆に戸惑ってしまったのである。

「喜んで、協力させてもらうよ」
ファナはにこりと微笑んで、アオイは少しほっとした表情をした。
「あー、よかったよかった。あたしなんかもう、ティースさんが出て行っちゃうんじゃないかって、気が気じゃなかったよー」
と、棒読みのリディア。
どう考えても嘘である。
ティースはアオイに視線を戻して、
「そういやアオイさん。この屋敷にいるリィナたち以外の“魔”って誰のことなんですか？」
と、聞いた。
するとリディアが自分に人差し指を向けて。
「あたし」
「いや、冗談じゃなくてさ」
「冗談じゃないってば」
と、リディアが口を尖らせる。
ティースはそれでも彼女の言うことを信じる気になれなかったが
「ホントだよ、ティース。ボクもびっくりしたけど、リディアは空魔の一族だよ」
と、ティースの後ろからエルレーンがそう言った。
「……へ？」
びっくりして振り返ったティースに、リディアはあっけらかんと言った。
「といってもハーフだけどね。あたしは覚えてないけど母親がそうだったみたい。あ、もちろんレイ兄さんもハーフだよ」
「レイさんも！？」
あんぐりと口を開けたティース。
エルレーンはちょっと思い出すようにしながら、
「でも気まぐれで嘘つきなところは確かに空魔っぽいよね。２人とも」
「ひどいなぁ。あたしをあんな性悪と一緒にしないでよ」

「……まあ、その辺りの詳しい話は追々」
と、アオイが脱線しかけた話を軌道修正する。
「それでは引き続き、ティースさんの今後のことについて話を続けましょうか。……まず1週間ほどは、ゆっくり旅と試験の疲れを癒してください。正式なお話はその後になりますが、ティースさんには他のデビルバスターの方々同様に、隊を1つ率いていただくことになります」
「……」
自然と頬の筋肉が固まった。
誰かの下で働いていた今までとは責任の重さが違ってくる。
「隊名は――姫？」
「ええ。ティースさん。以前、私がお渡ししたブローチをお持ちですか？」
「ブローチ？　え？　あ、ああ――」
と、ティースは襟の辺りにつけていたブローチを確認する。
十字架の模様が刻まれたそのブローチは1年前――ファナと初めて会ったとき、エメラルドのブローチと一緒に贈られたものだ。エメラルドのブローチはシーラが、そしてこの十字架のブローチはティースが、ずっと身に着けている。
「これが、なにか？」
そう尋ねると、ファナは頷いて言った。
「それが、ディバーナ・ロウの第5隊“ディバーナ・クロス”の隊章です」
「え？」
ティースは思わず間抜けな声を発した。
「隊員はすでに2名決まっています。……エルさん、リィナさん。よろしくお願いいたしますね」
「ええっ！？」
さらに驚愕の声を上げて振り返ると、リィナとエルレーンはすでにその話を了承済みだったらしく、

「よろしくね、ティース」
「ティース様。私、ティース様のお役に立てるように精一杯頑張ります」
2人揃って、ペコリを頭を下げる。
当然、ティースは納得できずに、
「ちょっ……ファ、ファナさん！　それって一体――！」
だが、ファナはいつもの穏やかな口調のまま返した。
「ティースさんがご不在の間に、エルさん、リィナさんとは色々とお話をさせていただきました。そして、“朧”を用いて人に変化してなお、魔としての力を強く残し、ティースさんのサポートをするのに十分な力があることも確認させていただきました」
「だ、だからって――そ、そうだ！　いくら力があるっていっても、人前でそんな力を使うわけにいかないじゃないか！」
「人前で力を使うことに関しては――」
と、ファナは机の中から2つの指輪を取り出す。
サファイアのような青い宝石。
エメラルドのような緑の宝石。
深い色の石をはめ込んだその指輪は、遠目にも不思議な力を持っているのがわかる代物だった。
「それぞれ水と風の魔石を填めた指輪ですわ。微々たるものですが、実際に力を行使できるアイテムです。これを身に着けておけば疑われることはないでしょう。それに疑われたとしても“朧”の力は絶対です。魔であると悟られることはまずありませんわ」
「あ、い、いや、だからって――！」
「待って、ティース」
さらに声を上げようとしたティースの言葉を止めたのはエルレーンだった。
「……エル？」
振り返ると、彼のすぐ後ろまで近付いてきていた小柄な少女は、長身のティースを見上げるようにして言った。

「それはボクのほうから言い出したことだよ。……キミには何度も話したと思うけど、ボクはもともと魔と人間の共存について興味があったんだ。ディバーナ・ロウの活動は、そんなボクの理想に合致してる。だから協力したいと思った。それだけだよ」

「……」

エルレーンの真摯な視線に何も返せず、ティースは無言のまま、リィナに視線を送った。

リィナは小さく頷いて、

「私はティース様やシーラ様のお役に立ちたくてこの世界に来ました。ティース様のお仕事のお手伝いができるのなら、それは私にとってこれ以上ない喜びです」

「……」

これまた言葉を返すことができず。それでも10秒ほどの間、どうにか説得する言葉を探していたが、結局諦めて、ティースはため息を吐きながら再びファナのほうへと向き直った。

大陸暦320年、7月7日。

こうして、ディバーナ・ロウの第5部隊“ディバーナ・クロス”は仮結成された。

ジェニス領――大陸の北東に位置する森と雨の国。

「目ぼしいデビルバスターは見つかったのかい？」

隠れ家を思わせる薄暗い小屋の中に、そのフードの男は待っていた。

パウロス＝マジェットはその男が待ち合わせていた人物であることを確認し、小屋の扉を音を立てずに閉じた。

パラパラ……と、雨が屋根に落ちる音。

まだ太陽が上空に君臨している時間帯だったが、厚い雲に覆われ

て地表に届くのはほんの僅かな光。小屋の中には3本のろうそくが灯っていた。

「フードを取ってくれないか？　シアボルド＝マティーニ。知ってのとおり、僕は陰気な空気があまり好きではないんだ」

「おぅ。そいつは失礼」

フードの奥から現れたのは無精ひげの男。

今年のデビルバスター試験を途中リタイヤしたシアボルド＝マティーニだった。

シアボルドはテーブルの上にあったコップを顎で示して、

「お互い、無事に仕事を果たせたようじゃないか。とりあえず乾杯といかないか？」

「遠慮しておくよ。仕事中だからね」

「真面目だねぇ」

シアボルドは気にした様子もなく、コップの中に入っていた酒を一気に呷った。

「それで返答は？」

饒舌なパウロスにしては珍しく、少しでも短く話を切り上げたがっているのがありありと見て取れる問いかけだった。

シアボルドは酒を飲み干して満足そうな息を吐くと、

「人間として一番の盟友の頼みだ。断るはずもない。任せておいてくれ。……とさ」

「……そうか。助かる、と、マスター殿によろしく伝えて欲しい」

パウロスは感情のこもっていない礼をした。

「けど、その代わり」

シアボルドは軽薄な笑みを浮かべる。

「前にも話した“探し物”。いい加減、何らかの情報は欲しいもんだ」

「……“アズラエル”のことか」

シアボルドは人差し指をパウロスに向けて。

「そう。その黒い背表紙の魔法書をベルリオーズの皆様は欲してお

られる。２０年ほど前、とあるデビルバスターがジェニス領に持ち込んだことまでは確認できているらしい。ま、今もジェニスにあるかどうかはわからんが、そっちの力で追跡ぐらいはできるだろ？」

「……そのことで、未確認ながら」

少しの間。

パウロスは顔を上げて言った。

「本当にその魔法書かどうかは確認できていない。ただ、異様な、タイトルのない黒い背表紙の本の目撃情報があった」

「……ほう？」

シアボルドは意外そうな顔だった。

「で？　そいつは今、どこに？」

「目撃されたのはヴォルテスト。ただ、持ち主は今、ネービスにいる」

再び、長い間があった。

「持ち主の名は、シーラ＝スノーフォール。ジェニス領カザロス出身の娘だ」

「！」

パウロスの言葉に、シアボルドの目が大きく見開かれ、それから口元に再び軽薄な笑みが浮かんだ。

「……面白い。面白い話だな、そいつは。例のデビルバスターが最後に滞在していたのが、カザロスの町だと聞いている。……ネービスか。ちょいと厄介だが、なに。ネービスにはもう１つ、ベルリオーズの皆様が求める宝がある。２つ一ぺんに手に入ると考えればむしろ好都合だ」

「……」

パウロスはまったく表情を変えず、少し興奮した様子のシアボルドを黙って凝視していた。

「その情報が本当だったなら、大手柄だ。ベルリオーズはお前たちを永遠の盟友と認めるだろう」

「……」

パウロスの表情は変わらない。
「本格的にやるのはもう少し準備が整ってからだが、少し探りを入れてみるか。……そのシーラとかいう女について、もっと詳しい情報が欲しい」
「……」
「……おい、パウロス」
「ああ」
そこにほんの一瞬浮かんだ躊躇いの色。
頭に過ぎった妻の悲しそうな顔。
それらは次の瞬間、国を想う心に押し流されて消えた。
すべては祖国のため。
パウロスは顔を上げて、言った。
「知っている限りのことを話そう」

ネービスの北方に広がる巨大山脈“ヴァルキュリス”。
あまりの険しさと、そこに生息する数多くの獣魔に恐れをなし、人々がほとんど足を踏み入れることの無い“魔の山”。
その山脈の一部である山の峰に“タナトス”と呼ばれる凶悪な魔の集団のアジトがある。
そのアジト――小屋の中は20畳ほどの広さで、真ん中から真っ二つに仕切りが設けられている。その間を行き来するには仕切りをぶち壊すか、いったん外に出て2つある入り口のもう片方から入るかの2通りしかない。もっとも前者の行動は、その仕切りを作った人物の機嫌を著しく損なってしまうことが目に見えているため、これまで誰も実践したことはなかった。
そして今日も、無難に後者の選択肢を取ったターバンの男――ザヴィア＝フェレイラ＝レスターは、いったん外に出て澄んだ山の空気を胸に吸い込んだ後、もう1つの入り口の前に立ち、そしてドアをノックした。

「開いてるよ、ザヴィア。メイルはまだ寝ているけど」
「失礼しますよ」
ゆっくりとドアを開き、ザヴィアはその場で慇懃に一礼をした。
部屋の中には2人の女性。
隅に敷いた布団の中ですやすやと子供のような寝息を立てているのが、このタナトスの幹部であり、炎の将族でもあるネイル＝メドラ＝クルティウス。
そして、大きな姿見の前で腰の辺りまである長い髪を結っている振袖姿の女性が、ザヴィアのノックに対して返答をした、このタナトスの総帥、マリアヴェル＝フューレ＝ソーヴレーである。
「おや。まだ身支度の途中でしたか。これは失礼を」
「いいよ」
琴を奏でたような不思議な声色でそう言うと、マリアヴェルはようやくザヴィアを振り返った。
「それで、どうしたの？　何かいいことがあったような顔してるけど」
「ええ。まあ、あなたにとっても少しは興味深い話かと思いましてね」
「なに？」
「ティースさんが、デビルバスター試験に合格したようです」
「ああ、そうか。そういえばそんな時期だったね」
「私が見込んだ人ですから、まあそのくらいは当然なのですがね」
マリアヴェルは何も言わずに白い鈴を長い髪の先端に結ぶ。
ちりん、と、甲高い音が鳴った。
「ただ――」
ザヴィアは腕を組んで、フフッと笑みをこぼした。
「もう少し、放っておこうかと。もっと色々な人から頼りにされて、色々なものを背負って、それから摘み取ってあげたほうが、きっといい顔をすると思うのです」
「キミの好きにするといいよ、ザヴィア」

「おや？　あなたは彼に執着はないのですか？」
　意外そうなザヴィアに、マリアヴェルは流した視線を彼の顔に止めて、
「私はただ、ディバーナ・ロウが憎いだけ。ティースさんがディバーナ・ロウでなくなるのなら、キミを殺して彼を助けるかもしれないけどね」
「よくわかりませんね、あなたの思考は」
　マリアヴァルは鈴のように笑って、
「冗談だよ、ザヴィア」
「でしょうね。冗談でなければ、私は今頃この世には存在していないでしょうから。それこそ――そう。昨日、あなたとリューゼットさんが楽しそうに皆殺しにしたベルリオーズの尖兵たちのように、ね。……良かったんですか？　これであの恐ろしい王魔たちを敵に回したことになりますが」
「関係ないよ」
　本当に気に留めた様子もなく、マリアヴェルは言った。
「このネービスで好きなことはさせない。そう、警告したつもりだったんだけど」
「……ま、私はどっちでもいいですけどね。怖い人たちはあなたとリューゼットさんにお任せしますよ」
「どこに行くの？」
「少し気分転換に」
　ザヴィアが懐から取り出した笛を吹くと、無音の音色に誘われた巨大な鳥型の獣魔が小屋の外に舞い降りた。
　その鳴き声に、眠っていたネイルが目を覚まして不機嫌そうな声をあげる。彼女が不機嫌に任せて炎の騎士たちをけしかける前に、ザヴィアは獣魔の背に乗って空へ上っていった。
　見送ったマリアヴェルは布団の上で目をこすっているネイルを振り返って、
「おはよう、ネイル」

ちりん――と、鈴が音を鳴らす。
「んー、おはよー」
「いい天気だよ。……ああ、そうだ。こんな日はお弁当を作ってピクニックに出かけたいね」
「ぴくにっく？　なに、それ？」
「ああ、キミは知らないんだね。じゃあクロイライナとリューゼットを誘って行ってみようか。きっと楽しいよ」
マリアヴェルがそう言うと、
「昨日の殺し合いとどっちが楽しい？」
「さあ。同じぐらいじゃないかな」
「じゃあ行く！」
ネイルは少し眠気が飛んだらしくパッと顔を輝かせた。
そんな彼女に微笑を漏らし、マリアヴェルは小屋のドアを開いた。
差し込んでくる――眩い陽光。
眩しい、光。
目を細め、彼女が見つめるその先にはネービスの大地が広がっている。
「――。」
何事か呟いて。
そうして扉の外、陽光の中へと歩を進める。
ちりん――
優しい鈴の音。
そうしてマリアヴェルの姿は、外に広がる朝の陽光の中へと溶けていった。

第1部（1話～10話）の後書き

『デビルバスター日記』作者の黒雨みつきです。
ここまで読んでくださった皆様、本当にありがとうございました。

この『デビルバスター日記』は第十話をもって第一部『見習い編』が終了となり、第十一話からは作中時間が一年ほど飛んで第二部の『デビルバスター編』に入ります。

ここまでがプロローグ、というと少し言いすぎになりますが、ここからが本筋であることは間違いありませんので、まだ先は長いですがもうしばらくお付き合いください。

また、こちらのサイトでは一日一つ以上のペースで投稿を続けてきましたが、書き溜めがあったのが第十話までですので、ここからはマイペースとなります。投稿ペースはガクンと落ちると思いますが、気長にお付き合いいただければ幸いです。

それでは、これからも『デビルバスター日記』をよろしくお願いいたします。

２０１１／１０／２８　黒雨みつき

幕間『ミューティレイクの菓子職人』

空と大地の境界線から、太陽の光が僅かに零れ始める頃、ネービスの大貴族であるミューティレイク家に仕える使用人のほとんどは、男性使用人の長であるパブロ＝シンプソンと、女性使用人の長であるアマベル＝ウィンスターの元に一斉に集合する。

毎朝欠かさず行われる朝会では挨拶、訓辞と始まって本日の予定や注意事項の確認をした後、使用人たちはそれぞれの持ち場へと向かう。この中には男性使用人であるフットマンやボーイのほか、屋敷の手入れを主な仕事とするハウス・メイド、来客に備えて様々な準備をするパーラー・メイドたちの姿もあり、およそ9割強の使用人たちがこの時間から動き始めることになる。

そしてこの場にいない残りの1割弱――厨房の主役であるコックなどはここに含まれており、だからミューティレイクの菓子職人であるシュー＝タルトの朝は、他の大勢の使用人たちと比べるとほんの少しだけ（本当にほんの僅かながら）遅く始まるのである。

「――なんか腹立つ夢を見た気がするな」

窓から射し込む朝の光にチカチカする目をこすりながら、シューはむくりと上半身を起こした。

外の明るさ、陽光の射し込む角度からすると5時半ぐらいだろうか。やや寝過ごしてしまったのかもしれない。

アクビと同時に背伸びをして、のそのそとベッドから這い出す。カーテンを開けると眼下には薄緑色の広大な庭が広がっていた。

季節に関わらず、見慣れたこの光景を見るたびに、ああ、今日も1日が始まるのだと実感する。

――パン！

両手で頬を叩き、気合を入れてシューの朝は始まった。

青年、シュー＝タルトはミューティレイク家の若き菓子職人だ。誕生年月は大陸歴３０１年の１１月だから、ティーサイト＝アマルナと同年の生まれであり、月数にすると８ヶ月ほど年下の１８歳である。

そんな彼がこのミューティレイクで働くようになったのがちょうど2年前。菓子作りを専門とするコックが彼だけであることを考えると、若くしてかなりの才覚を周りから認められているのだと考えるのはさほど難しくはない。

と、まあ。

彼はこのように決して凡庸な人材というわけではないのだが、特殊な才覚を持つ人々の多く集まるこのミューティレイク家においては、逆に言うとその程度、とも言えるのかもしれない。

つまり剣や対術の達人だったりするわけではなく、またウインク１つで女性の胸を高鳴らせるほどのハンサムでもない。菓子作りに対する情熱と才能以外はいたって凡庸な年相応の青年なのであった。

「ああ、そうか……」

制服の袖に手を通したところで、シューはようやく夢の内容を思い出した。

「ヴァレンシアのヤツがフライパン叩きながら起こしにくる夢だったっけ。……ちぇっ」

思い出さないほうが良かった、と舌打ちする。

ひどく損をした気分だった。

なお、ヴァレンシア――ヴァレンシア＝キッチンは屋敷で働くハウス・メイドの１人である。シューよりも１つ年下で、しかし屋敷の使用人としては彼よりもだいぶ古株の、彼にとってはやかましい妹分のような少女だ。

念のため部屋を見回してみたが、もちろんそこに彼女の姿はない。

華やかさのかけらもない無機質な部屋の壁があるだけだ。
「ま、いくらあいつでもこんな朝っぱらから押し掛けてくるはずないか……」
シューの寝泊りするこの男性寮は女人禁制だし、女性寮は男子禁制である。いや、それがなかったとしても彼女の使用人としての1日はすでに始まっているはずで、昼の休憩まではそんなことをして押しかけてくる余裕もないだろう。
「……たぶん、な」
と。
どう考えても当たり前のことなのにそう付け加えざるを得ない。
ヴァレンシア＝キッチンはその程度には非常識な少女なのである――
「――あたしはこう考えるわけよ。あたしたちって毎日毎日同じところを同じように同じだけの時間をかけて掃除するわけだけどそれってものすごく無駄なことなのよね。毎日使う部屋があれば1週間に1度しか使わない部屋もある。いやいやもしかしたら1年に1回しか使わない部屋もあるかもしれない。人の出入りがあるかないかで汚れ方は全然違ってくるわけだしもっと言えば使う人間によっても違ってくる。そこんところを考えてやればもっと効率的に掃除ができる。効率的にやれば時間が節約できる。時間が節約できると昼休みが長くなる。昼休みが長くなるとあたしが喜ぶ。だから」
す、と、目の前に指が突きつけられる。その向こうにややクセ毛の、ネコのようにクルクルと表情の変わる瞳を持つ少女がいた。
「あんたは昼までに、あたしのためにお菓子作っとくこと。いいね？」
「……つか」
普通の人間なら息もつかせぬ彼女のマシンガントークに気圧されてしまうかもしれない。が、幸か不幸かシューはそんな彼女に慣れっこになってしまっていた。

そう。
彼女こそが今朝のシューの悪夢の元凶、ヴァレンシア＝キッチンである。
「なんでそんな偉そうなんだ、お前……」
シューはヴァレンシアにそう切り返しながら、彼女の前を素通りして食器棚へ向かい、棚から半球型の木の器を取り出す。
ちなみにコックである彼の仕事場はもちろん屋敷の厨房であるが、菓子専門のコックである彼の持ち場は他のコックたちがいる厨房の少し奥にある、こじんまりとした一室“菓子厨房”の中である。本体の厨房が戦場となっているときでも比較的静かで集中できる環境となっており、シューはこの環境がひどく気に入っているのだが、主の威厳の無さのせいなのか、時折ヴァレンシアのような若い使用人たちの休憩所（時には隠れ家）になってしまうことが悩みの種でもあった。
「珍しく仕事の話でまともそうな切り出しかと思ったのに。どうして俺がお前の菓子を作ってやらなきゃならんのだ」
そういうとヴァレンシアは当たり前だと言わんばかりの顔で、
「えー、だってあんた菓子職人じゃないのさ」
器に木の実や焼き菓子の生地を入れ、力を入れてこねる。
そうしながらシューはチラッとヴァレンシアを見て、
「この屋敷の、な。俺の作る菓子はお嬢様や客人のものであって、お前に振る舞うためのものじゃない。まして自分の仕事をさぼるだけじゃ飽きたらず、こうして他人の邪魔までしてる不良メイドなんぞに配る菓子はないな」
「さぼりとは失礼だなぁ。今はちゃんと休憩時間。それにファナ様だって常日頃から仰ってるじゃない。つまみ食いはバレないようにやれって」
「意味わからん。つーか、お嬢様がつまみ食いなんて俗っぽいこと言うわけないだろ」
「うわ、キモッ。シューってば女の子に幻想抱いちゃうタイプ？」

「ま、その点については心配いらないな。お前のおかげで夢も幻もとっくに粉微塵だ」
シューが冷静にそう切り返すと、何故かヴァレンシアは誇らしげに胸を張った。
「男どもの淡い夢を打ち砕く、ドリームブレイカーとでも呼んでくれたまえ」
「嫌な称号だな、おい！　つか、誉めてねぇからな！？」
「そう？　結構世の中の役に立つ職業だと思うけどなぁ」
「少しは夢ぐらい見させてくれよ……」
シューは別に世間を知らない温室育ちの純真無垢な少年というわけではないが、それでも屋敷のお嬢様であるファナや、その他の美しい女性たちに対しては少しぐらい幻想を持ちたい、そんな年頃でもあるのである。
とまあ。
そんな風に他愛無い話でヴァレンシアの相手をしながらも、シューは菓子職人らしく慣れた手付きで焼き菓子の生地を一口サイズに整えていく。今日の客が幼い子供を連れてくると聞いていたので、いつもより小さめのサイズに作ることにした。
そのままヴァレンシアとの会話も続ける。
「ま、いずれにしてもお嬢様はお優しいからな。たまには皆さんにもお菓子を振る舞ってあげてくださいね――なぁんて、あの麗しいお声で仰られたことは確かにある」
「ほらほらぁ。でしょ、でしょ？　だ・か・ら」
ヴァレンシアが手を差し出した。
その、ずうずうしい態度にシューは眉をひそめて、
（……ったく、こいつは）
確かに彼は彼女たちハウス・メイドと違って毎日が忙しいというわけではない。自由にできる時間がそこそこあってその間に試作品としての菓子を作ることは不可能ではなく、限度はあれど主人であるファナからもその許可が出ている。

しかしながら。
「……」
手を差し出したまま、満面の笑顔のヴァレンシア。――そういう顔をされると、とりあえず意地悪したくなるのが人のサガというものである。
「そりゃまぁ、お前の言うことにも一理ある。が」
と、シューはわざとらしく難しい顔をして唸って見せる。
「どうしようかなぁ。それって俺の貴重な時間が犠牲になるわけだろ？　どうせなら心から喜んでくれそうな人のために作ってあげたいよなぁ」
「するする。感謝してあげちゃうよん」
「馬鹿。お前なんぞに感謝されても何の足しにもならん」
シューが即答すると、ヴァレンシアは予想通り不満そうに唇を尖らせた。
「むー。なにさそれー。じゃあ誰ならいいっていうのさー」
「ん？　そうだなぁ」
シューは仕事の手をいったん止めて頭の中に屋敷の人々の顔を思い浮かべてみた。思い浮かべたのが女性ばかりだったのは、彼が健全な青少年である以上誰にも責められないだろう、
その中でも真っ先に思い浮かんだのは、物憂げな表情が印象的な金髪美人の顔だった。
「やっぱローズさんかなぁ」
主に接客を担当するパーラー・メイドたちの長、ローズマリー＝クロフォード。容姿端麗な者が選ばれるパーラー・メイドたちの中でも一番の美人――つまり屋敷の使用人の中でもっとも美しいと評される女性である。
もちろん、彼女は多くの男性使用人たちにとって憧れの的でもあった。
「あのちょっと憂いを秘めた瞳をほんのりと輝かせて感謝の言葉なんか言われた日にはさすがの俺でも舞い上がっちまうね、絶対」

自然と頬が緩んでしまう。
しかしヴァレンシアはあっさりと言い放った。
「あぁ、ダメダメ。ローズさんはそういうの受け取ってくんないよ」
「へ？　なんでだよ」
「超ネガティブだから」
「は？」
意味不明だ。いや、確かにローズマリーという女性は思考がやや――いや、かなりネガティブすぎるところがあるのだが――
「それとこれと、どういう関係があるんだ？」
「だからさ」
ヴァレンシアは人差し指をピッと立てて、
「自分なんかがプレゼントなんて大層なものを受け取ったりしたら、相手に絶対悪いことが起きる、って、そう信じ込んでるから」
「……」
そんな馬鹿な――とは思わなかった。
「……あの人なら、まぁ、そうかもなぁ」
シューも接客担当責任者である彼女とは仕事上の打ち合わせをすることが多い。このローズマリーという女性は外面が美しいだけではなく、聡明で気の利く、能力的にもまったく申し分のない人物なのだが、何故か自分に自信が持てない性格のようで、ことあるごとに謝罪の言葉を連発する。しまいには『産まれてきてごめんなさい』などと突然言い出して場が凍り付き、打ち合わせが意味不明のフォロー大会になることも珍しくはないのだ。
「不思議だなぁ。ローズさんって何の欠点もない完璧な人だと思うんだけど」
「あたしだってそう思うけどね。あまり追求したことはないけど。変に突っ込んで首吊りでもされたら困るし」
「笑えないよ、それ……」
そこまでは、と思うものの自信を持って可能性を否定することはできない。

ローズマリーという女性はそれほど“筋金入り”なのである。
「ま、あの人のアレはお屋敷の七不思議に数えられるぐらいだから。ともかくローズさんはやめた方がいいよ。やぶ蛇になるからマジで」
「なんじゃそりゃ。……まぁいいよ。それならアマベルさんかな」
「え、ウチのボス？」
ボス――もとい、アマベル＝ウィンスターはヴァレンシアたちハウス・メイドたちを統括し、なおかつ一部を除く女性使用人全体を管理するハウス・キーパーである。ローズマリーほどではないがやはり美人の部類に入るだろう。長身のモデル体型にシニヨンスタイルのボリュームある巻き髪と一見ゴージャスそうな外見にも関わらず、童顔に眼鏡という、なんともアンバランスな魅力の持ち主である。極端に生真面目な性格が災いしてか男っ気はまるでないのだが、やはり男性使用人からの人気は高い。
「ダメだってばさぁ。ウチのボスなんかさ、逆に怒られちゃうよ」
そう言うとヴァレンシアは胸を張って顎を上げ、左手を腰に当て、くいっ、と、有りもしない眼鏡を人差し指で上げる仕草をした後、ビシッとシューを指さした。
「シューさん、あなたはこのお屋敷の菓子職人でしょう！　お嬢様のために振るうべき腕を他のことに使うとは何事です！　……ってさ」
「……お前、物真似上手いな」
別人だとわかっていながら、ついつい萎縮しそうになってしまった。
「そう？　似てた？　完璧？」
と、ヴァレンシアは嬉しそうに何度も架空の眼鏡をくいくいと動かす。
「ああ、まるで本人かと思ったぞ。その起伏のない体型にさえ目を瞑れば――」
ゴスッ！！
「～～～～～～！！」

すねをかかとで思いっきり蹴飛ばされて、シューは悶絶した。
「いくらあたし相手でも言っていいことと悪いことがあるぞ、こら」
「すまんかった……」
これは自分が悪かった、と、シューは素直に謝った。
気を取り直して。
「し、しかしまぁ確かにアマベルさんなら喜ぶより先にそんなこと言いそうだな。だったらアレだ。ローズさんもアマベルさんもダメなら――」
「ミリィさんとか？」
「そうそう。……つか、なんでわかんだよ」
「わかるに決まってるっつーの。それってウチらのボス３人衆じゃんか」
ヴァレンシアは両手を広げて心底呆れたようなため息を吐いた。
彼女の言うとおり、ミリィ――ミリセント＝ローヴァーズも女性使用人たちのボス、もとい、責任者の１人であり、当主であるファナの身の回りを担当する侍女長である。基本的に厳格な性格は先ほど話題に上ったアマベルと共通であるが、生真面目ながらどこか抜けたところのある彼女と違い、こちらはウイットにも富んだ、知的なクールビューティである。
「いいだろ、実際に３人とも美人なんだから。みんなまだ若いんだし」
「若いったってみんなあんたより４つも５つも年上だっつーの。ったく、年上趣味もいい加減にしろよなー」
「別にそういうわけじゃないけどな」
というか、この話自体ヴァレンシアにちょっと意地悪をしてやろうと思って始めたものである。心にもないことを言ったわけではないが、ヴァレンシアの言うとおり彼女たちは年齢的にも立場的にも上の存在で、現実にそういう対象として見ているわけではない。
「とにかくだ、ヴァレンシア。そんな話より――」
シューがそろそろ切り上げようかとしたところへ、ヴァレンシア

は何事か思い出した顔で手をポンと打った。
「でも、そういやあんたってば上だけじゃなくて下もイケるんだもんねー。セシルちゃんなんかにもセコセコ餌付けしてるみたいだし。……熟女好きのロリコンとかどんだけ悪食だよ」
「はぁ!?」
なんだか予期せぬ方向に話が進み始めた。
セシル――セシリア＝レイルーンは屋敷の客人扱いの少女だ。将来とんでもない美人になることが容易に想像できる顔立ちをしているが、今はまだ可愛らしさが先に立つ１３歳である。ついでに非常に愛らしい笑顔の持ち主なのでシューもついつい余った菓子などを振る舞うことが多いのだが、もちろんヴァレンシアの言うようなやましい気持ちなど抱いたことはない。
そしてシューはここに至り、ようやく“マズい”と感じ始めた。
「ちょっと待て！　餌付けってなんだよ！　俺はただ――」
ヴァレンシアはご覧のとおりのマシンガントークの持ち主である。彼女の手にかかれば、どんな根も葉もないデマ話であっても半日後にはまるで真実であるかのように屋敷中を駆け巡っているに違いない。
そして今回の場合、それはシューという人格に対する屋敷内での評価が大暴落することを意味している。
「俺はただ、あの子がものすごく喜んでくれるから、つい！」
「黙れ、変態」
「へんた――って、ちげぇよ！」
まずい。
とにかくセシリアのことから話題をそらさなければならない、と思い、シューは慌てて、
「だ、だいたいな！　お前、アマベルさんたちの年齢がどうのこうの言ってるけど、１番年上のアマベルさんだってまだ２５歳じゃねーか！　まだギリギリ！　ギリギリ適齢期だってーの！」
まくし立てた、その瞬間。

ニヤリ、と。
「!?」
ヴァレンシアが気味悪い笑みを浮かべたのが見えて、シューは背筋がぞくっとした。
「ギリギリ？　ギリギリって言った、今？」
「え、あ……」
はまった、と、そう思ったときには手遅れだった。
ヴァレンシアは今にスキップでも始めるんじゃないかと思うほどの上機嫌で、
「そっか、ギリギリかぁー。そうだよねー。ギリギリだよねー。うんうん。ギリギリ適齢期。うーん、いい響きだねぇ」
しまった――と、そう思ったときにはもう遅い。
「おい、ヴァレンシア、お前――」
ポンとヴァレンシアが手を打つ。
「そーだ。あたしアマベル様に用があったんだった。……じゃーね、シュー。あ、お菓子は別にいらないから。なんかそんな気分じゃなくなっちゃった」
素っ気なくそう言って踵を返し、
「さーて、ギリギリ様――じゃなかった、アマベル様のとこに行ってこよーっと」
「こ、コノヤロウ……」
「ん？　どーしたの？」
「……」
足を止めて振り返ったヴァレンシアはニコニコしている。――その勝ち誇った笑みに、このときばかりはシューの胸に殺意が芽生えた。
とはいえ。
「……リクエストは？」
口は災いの元。背に腹は変えられぬ。
後日の復讐を密かに心に誓いつつ、シューはガックリと肩を落と

すのだった。

そんな昼の出来事の後――

「今にして思えば今朝の夢は凶兆だったか」

夕方の菓子厨房にて。

余分に作らされた焼き菓子の後かたづけをしていると、シューの中には腹立たしさが蘇ってくる。結局ヴァレンシアの分だけではなく、彼女と親しい使用人たちの分まで作らされてしまい、正直後でアマベル辺りに怒られてしまうのではないかと少しヒヤヒヤしていた。

もちろん怒られてしまうときはヴァレンシアも道連れにしてやろうと考えてはいる。

「まったく。あの不良メイドときたら……」

と言いつつも。

「……ま、菓子自体は上出来だったみたいだから、良しとするか」

と、ヴァレンシアたちがワイワイ言いながら菓子をほおばっていた姿を思い出し、最初から素直に作ってやっても良かったなぁ、なんてチラリと考えてしまうのは、悲しき菓子職人のサガだろうか。

午後に屋敷を訪れた客人も彼の手がけた菓子を褒めていた、とローズマリーから聞かされたこともあり、今日は彼にとってそこそこ満足度の高い1日だった。

と、そこへ、

「あれ？　どうしたの、シュー？」

菓子厨房に響く、彼の作る焼き菓子よりも甘ったるい少女の声。

「肩落としてるのに頬が緩んでる。何かあったの？」

「うッ……」

そう指摘されて、シューは自分がいつの間にかニヤニヤしていたことに気付く。

傍から見るとかなり不気味な光景である。

シューはどうにか表情を取り繕いながら、声の主を振り返って、
「あぁ、エルか」
そこにいたのは厨房でよく顔を合わせるキッチン・メイドの少女、エルレーン＝ファビアスだった。シューよりも2つ、3つほど年下だと聞いているが、見た目はそれよりもさらに幼く見える、最近この屋敷に仕え始めた少女である。
両手には使用済みの皿を大量に抱えており、どうやら主人と客人との晩餐会も無事に終了したようだった。
「ああ、そっか。足りなくてこっちから皿を持ってったんだったな。……あとは俺がやるから、その辺に置いといてよ」
「うん。……それで、何かいいことあったの？」
「いや、別にないよ。それどころか、またヴァレンシアのヤツに菓子を作らされてご機嫌斜めさ」
「ああ、なるほど。それで、ね」
エルレーン＝ファビアスは一瞬で事情を察したらしく、抱えていた皿を置いてひょいっとシューの元に戻ってきた。
身長差は25センチぐらいあるだろうか。近づくと下から見上げるような格好になる。シューの背が高いのではない。彼女の背が低いのである。
「キミとヴァレンシアは本当に仲いいよね。兄妹みたい」
「兄妹？　冗談じゃない。あんながさつでうるさい妹はゴメンだよ」
と、そうは言ってみたものの、逆に兄と妹ってのはこんなものなのかもしれない、と思った。妹どころか他の兄弟もいないシューには想像することしかできないのだが。
「そういうエルは？　兄弟いるのか？」
と、逆に質問してみると、
「うん。弟が1人ね」
「へぇ、ってことはお姉さんか。見えないなぁ」
するとエルレーンは不服そうな顔をして、
「それって、ボクが子供っぽいからってこと？」

「まあ、そうだな」
笑いながらそう返すシュー。
エルレーンのこういう怒ったような態度はだいたい冗談である。外見や口調は確かに幼いが、中身は同世代の少女たちよりむしろ大人びている。それがわかっているからこそ、シューとしても冗談の言いやすい相手だった。
案の定、エルレーンはすぐに尖らせていた口を微かに緩めて、
「でも、お兄さんみたいな人はいるかな」
「ん？　ああ、ティースさんのことかい？」
「うん。小さい頃からの知り合いだし、ボクの中では兄弟みたいなものだよ」
彼女と、リィナという名のハウス・メイドの少女が、屋敷の客人であるティーサイト＝アマルナの知人であることはシューも知っている。
「なるほど、ねぇ」
ちなみにそのティースに対するシューの印象はかなり薄い。背が大きい割に存在感がなく、まるで空気のような男だ、とシューは思っていた。同い年であることも知っていたが、会話をする機会もほとんどなく、彼が屋敷に来て確か1年ぐらい経つと思うが、言葉を交わしたことも数えるくらいしかないだろう。
と。
「キミって、なんだかティースと似たところあるんだよね」
「へ？」
思いもかけない言葉がエルレーンの口から飛び出した。
「俺が、ティースさんと？　どこが？」
空気みたいなところ、と返されたらどうしようかと思っていたが、
「なんだかんだ言ってお人よしなところ、かな」
「……お人よしって」
どう言い返してやろうか、と、シューは僅かに思考を巡らせたが、続いたエルレーンの言葉によってその考えは途中で阻まれた。

「キミのそういうとこ、ボクは好きだな」
「……ばっ、馬鹿言え」
あまりにも不意打ちでストレートな物言いに、一瞬で顔が赤くなる。それを見られまいと咄嗟に顔をそらし、一時止めていた片付け作業を慌てて再開した。
そうしながら、取り繕う言葉を口にする。
「俺のどこがお人よしだってんだ。ったく、考えなしにそういうこと言うから子供っぽいって言われるんだぞ、お前」
そんなシューに対し、背中の向こうにいるエルレーンがクスッと笑うのがわかった。それでさらに顔が熱くなったが、不思議と悪い気分ではない。彼女に邪気がないことがわかるからだろうか。
「……あれ？」
と、エルレーンが怪訝そうな声を上げた。
「ん？」
振り返って見ると、エルレーンはテーブルの上にあった、とあるモノに視線を止めていた。
「このお菓子、どうしたの？　今日お客さんに出したものと違うみたい」
「ん？　ああ、試作品だよ。今日は少し余裕があったからレパートリーを増やそうと思ってね」
「パイ？　中身は――赤ワインみたいな色だね。この香りはルバーブかな？」
「正解。ルバーブとストロベリーのパイだよ。……ってかよくわかったな」
確かにルバーブには独特の酸味と風味があり、大陸の西方でよく使用される食材だが、このネービスではそれほど一般的なものではない。何の知識も無い人間が即答できるものではなかった。
「食いしん坊だから、かな？　きっと」
エルレーンはクスッと笑ってそう答えたが、彼女は食いしん坊どころかどこからどう見ても小食の部類である。

（そういやコック長も褒めてたっけ。新入りにしてはいい感覚を持ってるって）

そんな彼女に、シューは少し好奇心を刺激されて言った。

「せっかくだから食べて感想を聞かせてくれないか？」

「え？　うん、いいよ」

小さく切り分けたパイの一切れをエルレーンが口に運ぶ。

シューは少しドキドキしながら彼女の言葉を待った。

「……」

少し時間をかけて租借し、コクリと飲み込んだ音が聞こえた。

同時にシューの喉もゴクリと鳴る。

「少し酸味が強い、かな」

エルレーンはすぐにそう言った。

予想通りの回答だった。

シューは頷いて、尋ねる。

「これでも砂糖を多めに入れてるんだが、増やしたほうがいいか？」

「うーん、でも、あまりやりすぎると独特の良さがなくなっちゃうかも。これはこれで完成品として、なにか他のものを合わせてみるのはどうかな？」

「……なるほど」

シューは密かに舌を巻いた。彼女の抱いた感想はシューが感じていたものとまったく同じであったが、彼はこのパイそのものの味をどうするかということばかり考えていて、これをそのままに、他のものを付け合せるという発想は盲点となっていた。

「ちなみに――」

ピン、とひらめくものはあったのだが、シューは敢えて尋ねた。

「なにを合わせればいいと思う？」

「……」

エルレーンは少し視線を泳がせ、やがて何か思いついたような顔でシューを見上げた。

そして彼と目が合った瞬間、まるで彼の中にあった“それ”を見

透かしたかのように、その幼い顔に大人びた微笑を浮かべる。
「バニラフレーバーのアイスクリームはどう？　これから暑くなるし、お客さんも喜んでくれると思う」
「……ビンゴだ」
もちろん心を読む術を持っているわけではなく、単に彼女の感性が優れているのだろう。
心に、何か得体の知れない高揚感が産まれた。
「……なぁ、エル」
「うん？」
大きな瞳がシューを見上げる。
高揚感がさらに強くなった。――といってもそれは色恋の高揚ではない。彼女の協力を得ることで何か新しいものが産み出せるのではないか、という、菓子職人としての心が熱くなったのである。
「時間があるときでいい。次もまた意見を聞かせてもらっていいか？」
同じコックという分類であっても、この屋敷で菓子職人といえるのはシューただ1人である。それは主や周りから腕を認められている証拠であるし、彼にとっての誇りでもあるのだが、それは同時にすべてを独りで模索し、独りで作り上げなければならないことを意味する。まだ若い彼はいったん煮詰まるとそこから抜け出すのに時間がかかる。先ほどのルバーブとストロベリーのパイのように、簡単な発想さえも出てこなくなることがあるのだ。
そんなときに彼女の助けが得られれば心強い、とそう思ったのである。
「え？　それはもちろんいいけど……」
エルレーンは即答したが、少し戸惑っているようでもあった。彼女自身には、自らの舌が優れているという自覚はないのかもしれない。
「助かるよ。じゃあ早速試してみるか、バニラのアイスクリーム。……といっても完成は明日になりそうだけど」

「あ、それじゃあ明日の試食にはボクの友達を呼ぶよ。感想は多いほうがいいよね？」
「ん？　ああ、もちろん」
それは彼女の言うとおりだった。パイの大きさからして、４、５人はいたほうがいいだろう。エルレーンの友人といえば先ほど話題に上ったリィナ、それに最近はセシリアと仲がいいという話も耳にするので、おそらくは彼女たちのことだろう。もう１人、シーラという屋敷の有名人もいるのだが、残念ながら彼女は今、遠方に出ている。
「そこで評判が良かったら明後日にでも早速お嬢様にお出しするとしよう」
シューは久しぶりに胸がワクワクするのを感じた。考えてみると新作を主に出すのは久々のことであり、どんな反応が返ってくるかと、早くも期待と不安で胸が高鳴る。
「なんだか、楽しそうだね」
「ん？　そうか？」
楽しいかといわれれば楽しいに決まっていた。が、男があまりニヤニヤしているのもアレなので表向きは素っ気無いフリをする。
「じゃあ明日は――いや、明日からもよろしくな、エル」
この日以降、エルレーンは半ば助手のような形で菓子厨房に頻繁に出入りするようになり、彼が菓子職人として飛躍するための助けとなる――のだが。

後日。

「――うわ、ロリコンが来た！　近寄るな、変態！」
「だからちげぇってッ！！！」
そんな彼が再びヴァレンシアの理不尽な罵声を浴びてしまったことは言うまでもない。

プロローグ

――雨だ。

サァァァァァ……という細かい雨粒が地面を叩く音に気付き、男は目を覚ました。

ゆっくりと顔を上げ、周囲の状況を確認する。

カビの匂い。

湿った空気。

偶然見つけた洞穴の中で息を潜めていたつもりが、いつの間にか眠ってしまったのだろう。

眠る前に握っていた短剣はそのまま右手の中。

――夢じゃなかったのか。

男はそのことに落胆しつつも、さらに外の様子を観察することにした。

洞穴から見える外の景色はほんの少しだけ明るくなってきている。

朝、時間は午前五時ぐらいだろうか。とすると、二、三時間ほどは眠っていたことになる。

風の音。

草木の擦れる音。

ざわ、ざわ、と。

その音が聞こえるたび、心臓が早鐘を鳴らす。体とともに眠っていた恐怖心が、再び胸の中に沸き上がってくるのを感じた。

どくん、どくん、と。

胸が締め付けられるように痛む。

とても恐ろしい。

――ヤツはもう、どこかに行っただろうか。

――それともまだこの辺りをウロウロしているのだろうか。

外に出てそれを確かめたかったが、恐ろしさのあまり実行に移すことはできず、結局男はさらに二時間ほど、その狭い洞穴の中で息を潜めじっとしていた。

雨足は強くなっている。外は明るくなってきてはいるようだが、モヤがかかっていて全体的に視界が悪い。洞穴の中には雨水が少しずつ染み込んできて、うつ伏せになっている男の服はもうびしょぬれになっていた。

腰にぶら下げた袋に乾パンが入っていることを思い出し、体力を維持するためにと少し湿ったそれを口の中に入れたが喉を通らず、結局吐き出してしまう。

――早く帰りたい。

男は体を丸め、こらえきれずに嗚咽を漏らした。

昨日まで一緒にいた四人の仲間のうち二人が目の前で撲殺された。

“ヤツ”――その獣は体長三メートル以上はあっただろうか。二人の仲間たちは斧でその獣を迎撃しようとしたが、体中を覆う黒い体毛はそれらの刃物をまったく通すことはなく、逆に丸太のような腕が二人の頭部を叩き割り、首をへし折って、まだ明るかった森に大量の血飛沫を撒き散らした。

その無惨な最期は、今も脳裏に焼き付いたまま離れない。

男が残る二人の仲間とともに逃げ出すと、巨獣はすぐにその後を追ってきた。巨大な体を持つ獣の動きは見た目に反して明らかに彼らよりも速く、やがて仲間の一人は叫びながら道を外れて山の斜面を駆け下りていった。

巨獣はそれを追い、男は直後、仲間の断末魔の叫び声とともに、何かが砕かれる鈍い破裂音を聞くことになる。

そこからはもう記憶が曖昧だ。

夕闇に包まれつつあった山の中を逃げ惑い、いつの間にかもう一人の仲間ともはぐれ、やがて夜の闇が深くなる頃に人が一人ようや

く入れるほどの小さな洞穴を発見して、そこに身を潜めたのだった。
――あの獣はなんなのだろう。
洞穴の中で体を丸め、恐怖と闘いながら男はその巨獣の姿を再度頭に思い浮かべる。
男は小さな村の若きハンターとして、十年ほど、村の近くにあるこの山の害獣駆除を担ってきた。村の農作物を荒らすサルやイノシシ、家畜を襲うオオカミやキツネ。仲間たちと協力してクマを狩ったことも何度もある。
今回の目撃情報を耳にしたときも、その類だと思った。
一緒に狩りに参加した四人のハンター仲間たちも同様に考えていたに違いない。
しかし――
体の大きさはともかくとして、斧の一撃も、矢の一撃も、すべて無効化してしまう巨獣の存在など、男は聞いたことがなかった。
そうしてさらに一時間。
男はついに、洞穴を出て山を降りることを決断する。雨とモヤで、洞穴の中から周囲の状況を把握するのは絶望的となっていたが、視界が晴れるまでこの洞穴にいては、いずれ山を降りる体力すらも削り取られてしまうだろう。あの巨獣がまだこの辺りをうろついている危険も十分にあったが、いずれにせよこのままじっとしているわけにはいかなかった。
狭い洞穴の中で、太ももの辺りを軽くマッサージする。
途中で脱げることがないよう、ヤギの皮で出来た革靴の紐をしっかりと結び直した。
――行こう。
男は決意してゆっくりと身を起こす。
と――そのとき。
男の耳がこれまでにない異質な音を捉えた。

雨の音。
風の音。
草木の擦れ合う音。
それらに混じって聞こえてきたのは、ずる、ずる、という足を引きずるような音だ。
男は再び姿勢を低くして、息を潜めた。
やがて――
男の心臓が一際大きな鼓動を打った。
モヤに包まれた景色の中に浮かび上がる、巨大な黒い影。
その大きさ、その息遣い。
それは昨日、男たちを襲った巨獣に間違いなかった。
男は咄嗟に口を両手で押さえ、息を殺す。
ドクン。
ドクン、ドクン――と、早鐘を打つ心臓。
その恐怖に自然と震えだす体。
恐ろしい。
ただ、恐ろしい。
幸い、その巨獣は洞穴目掛けて近付いてきているというよりは、その前を斜めに横切ろうとしているようだった。
男は巨獣がこちらに気付かないことを必死に祈りながら、ただひたすらに脅威が去るのを待つ。
ずる。
ずる、ずる――
やがて、モヤの中から黒い体毛に包まれた巨獣の姿が現れた。洞穴の中にいる男の存在に気付いた様子はなく、左手前方から近付いてきて、右手後方へと向かっている。
早く。
早く過ぎ去ってくれ――と。奥歯をグッと噛み締めた男は、やがてその巨獣の後ろに奇妙なものを発見した。
尻尾、だろうか。

巨大な獣の腰の辺りに、長い尻尾のようなものが見える。先ほどから聞こえていた、ずる、ずる、という音は、この尻尾を引きずる音だったようだ。

しかし――

男は巨獣と出会ったときのことを思い出す。そのとき、その獣に尻尾のようなものは――少なくともこれほどに長い尻尾は見当たらなかった。

ずる、ずる。

ずる、ずる――

やがて。

巨獣が洞穴の前を横切ろうとした、そのとき。

男はその尻尾――いや、尻尾だと思っていたものの正体を知ることになる。

「！」

それは巨獣に引きずられた、最後の仲間の死体だった。

血まみれの顔、生気を失った目が、ギョロリ、と、男を見つめる。

「――ギャァァァァァッ！！」

男はついに悲鳴を上げ、洞穴から飛び出した。

もう、何も考えられなかった。

雨にぬかるんだ地面を蹴り、草むらを掻き分け、途中、手にしていた短剣を振り返りもせずに後方へと投げ捨てて、一目散に駆ける。自分でもよくわからない叫び声をあげ、喉が破れるほどに荒い呼吸を繰り返し、木の根に足を取られそうになりながらも懸命に走り続けて――

ふ、と。

無意識に後背を振り返った男は、

「ッ――！！」

すぐ目の前に黒い巨体が迫っているのに気付いて、声にならない叫びを上げた。

と。

そのとき――
「……そのまま走ってッ！！」
森に響き渡ったのは、少女の声。
この場面にあまりにも不釣合いな、幼い少女の声だった。
しかしその声は幻聴ではない。
その証拠に――
「！？」
男の周囲を、急に不自然な風が渦巻く。
そして、
「グォォォォ――ッ！！」
男のすぐ背後まで迫っていた巨獣が、怒りの声を発した。
「え――」
男には何が起きたか理解できなかった。巨獣の顔にはいつの間にか小さな刃物傷のようなものが複数出来ており、そこからは血のようなものが流れていたのだ。
さらに、
「そのまま！　こちらへ走ってください！！」
今度は別の、柔らかな声質の大人の女性の声がした。
「！」
わけもわからずに、それでも男は弾かれるようにして声のした方角へと走り出す。
そして、
「エル！　リィナ！！」
モヤの中から浮かび上がるようにして長身の影が現れた。
その青年は男と入れ替わるようにしてすれ違い、腰の鞘から両刃の剣を引き抜きながら巨獣へ向かって駆けていく。
「地の四十二族だ！　リィナは男の人を！　エルはこっちの援護を頼む！」
「了解！」
「任せてください！」

やがて息を切らせて走る男の視界に、二人の女性の姿が映る。
小柄でおとぎ話に出てくる妖精のような雰囲気の少女と。
修道女のようなフードをかぶった黒髪で長身の女性。
「ッ……！」
足がもつれ、転びそうになった男を長身の女性が抱きとめる。
「安心してください。もう大丈夫です」
「あ……あんたたちは――」
「私たちは――」
女性がその名を名乗る前に。
男は気付いていた。
自分たちを襲った規格外の化け物――異世界の生物、獣魔。
そんな化け物たちを専門に退治する者が、この大陸には存在することを。
「デビル、バスター……」
男はそう呟くと、ようやく命が助かったことを悟り、気を失ったのだった。

デビルバスター。
これはその称号を受けた者たちによる、戦いの記録の物語である。

その1『卒業』

大陸第二と謳われる北方の雄、ネービス領。
その首都“学園都市”ネービス。
約四十万人が住むとされる大陸有数のその都市は、街の中央を分断するかのように南北に大きな通りが走っており、それぞれ東地区、西地区と呼ばれ分けられているのだが、その両者の間に何らかの明確な区別があるわけではない。区別があるのはむしろ南北のほうで、町の南側には一般市民の多く住む一般住宅街が広がっており、中央の大通りを北に向かって三分の二ほど進んむと、そこには貴族や大金持ちの多く住む高級住宅街がある。
つまりこの街は基本的に、北に行くほど裕福な人間が住んでいるのだ。
そこからさらに北に進んで終着点付近にはネービス領主であるネービス公家の屋敷があり、そこに辿りつく直前にはこの街が“学園都市”と呼ばれる理由――あらゆる種類の学び舎が並ぶ“学園群”があった。

さて。

その学園都市ネービスの中央大通りを北に三分の二ほど進み、一般住宅街と高級住宅街のちょうど境目辺りを左に折れて西地区に入ってからしばらく歩くと、高い塀に囲まれた大きな敷地が見えてくる。
そこはこの学園都市の中でも三本の指に入る実力者であり、ネービス公家とも遠い血縁関係にある大貴族“ミューティレイク家”の所有地だ。
目を見張るほどに広大でありながら、通りを挟んだ場所にまった

く普通の一軒家が立ち並んでいるというこの妙な敷地の門をくぐり、そこから真っ直ぐに数百メートルを歩く。途中で左右に視線を向けると、住み込みの使用人たちが住む男性、女性それぞれの使用人寮のほか、一見しただけでは使途のわからないいくつかの小さな建物が視界に入ってくる。

そうしてようやく到達する、二つの大きな建物。

ミューティレイクの屋敷。

左が本館。

右が別館だ。

その右側、つまり別館の大きな扉を押し開けると、そこに広がる一階玄関ホール付近では多数のメイドが右へ左へと忙しなく動き回っている。

今――午前中は彼女たちにとってもっとも忙しい時間帯だ。

そんな彼女たちの働きを見つつ正面に視線を向けると、広い玄関ホールの中央には二階へと続く大きな階段があった。

大きなシャンデリアを頭上に見ながらその階段を上りきると、目の前には細い通路が伸びている。床にはふかふかのカーペット。通路の奥には大きな窓があってそこから太陽の光が細長く射し込んでいた。

その通路の左右に目を向けると、そこにはいくつもの扉が並んでいて、そのうちのいくつかには名前の書かれたプレートが掲げられていることから、その一つ一つが個室への入り口になっているのだということにすぐ気付くだろう。

その中の一室。

“ティーサイト＝アマルナ”。

そのプレートの掲げられた部屋の中に入ると、意外と質素な内装に驚かされることだろう。

そしてその奥には二つの人影がある。

「ゴホ、ゴホッ！」

まずはベッドの上。

グーにした拳を口元に当て、大きく咳き込んでいる青年。
彼の名はティーサイト＝アマルナ。通称ティース。名前でわかるとおりこの部屋の主で、数日後に二十歳の誕生日を控えた男性である。年齢の割には幼さを色濃く残した童顔、今はベッドに隠れているが、かなりの長身ながらひょろっとした体型をしている上に少々猫背気味の姿勢で歩くため、彼のことを良く知る人間には“枯れ尾花”だの“カカシ男”だの、悪意がこもっていないにしてもひどいあだ名で呼ばれることが多い。
そんな青年である。
一方。
彼の横たわるベッドの脇にはサイドテーブルが置いてあって、その上には氷水の入った木製のボウルがある。
そのすぐ隣。
椅子に腰を下ろし、氷水に浸したタオルを絞っている少女の姿があった。
「ゴホッ！　ゴホッ！」
「馬鹿」
苦しそうに咳を繰り返す青年――ティースに冷たい一言を浴びせ、少女はタオルを絞る。息を詰め、きつくタオルを絞り切った後、小さく息を吐いて首を横に振ると、朝陽の中に透き通る金糸のポニーテイルが僅かに踊った。
そんな少女にティースは抗議をする。
「あ、あのなぁ……馬鹿ってこたぁ――ゴホゴホゴホッ！」
少女は形の良い眉をひそめて、
「今のお前を見れば、それ以外に形容のしようがないわ。だいたい」
そう言うとタオルをパンパンと軽く叩き、それを放るようにしてティースの額へ乗せた。
「まだ雪が溶けたばかりなのよ。なのにそんな長時間冷たい雨に当たっていたら風邪を引いて当たり前じゃない」
「し、仕事なんだから……ゴホッ！　仕方ないだろ……ゴホゴホッ

！」

「そんな掠れ声じゃ何を言ってるのかさっぱりわからないわ」

そう言って少女は呆れ顔をした。

この少女は名をシーラ＝スノーフォールという。今は十六歳だが、二ヵ月後に十七歳の誕生日を控えていてティースとの年齢差は三歳と少し。もちろん彼女が年下ということになるのだが――美しく整いすぎた容姿のせいだろうか。ティースが童顔であることと併せ、二人を見比べると危うく彼女が年上でないかと感じてしまうことも多い。

そんな少女である。

この二人の関係を一言で表すことは難しいが、あえて簡潔に言うならば“扶養者と被扶養者”といったところか。

血縁はなく、姻戚でもない。

もちろん婚姻関係にあるわけでもない。

「そういやシーラ……お前、学園のほうは？」

咳を交えながら、どうにか聞き取れる程度の声でティースはそう尋ねた。

枕から少しだけ首を上げたその顔は真っ赤で、朝から熱が三十九度を越えている、といえば、彼がどれほど悪質な風邪に捕まってしまったのかは容易に想像できるだろう。

「今日は休みよ。数少ない休日をこうしてお前の看病に費やしているの。感謝なさい」

シーラはそう答えると近くの盆の上から林檎を一つ手に取り、その表面に果物ナイフと当てると、するすると見事なナイフさばきで皮を剥いていった。

「……すまん」

どうやら喋るたびに彼の立場はどんどん悪くなっていくようだった。

「……」

シーラは力なく項垂れたティースをチラッと横目に見て、すぐに

視線を手元に戻すと、
「冗談よ。卒業が近いから今月はほとんど休みなの。だからお前に付き合ってやるぐらいは大したことじゃないわ。……はい」
そう言って一口サイズに切った林檎をティースの口元に運ぶ。
「ん、サンキュ。……そっか。早いなぁ」
口をモゴモゴさせながらティースが少し感慨深げに言う。
シーラがこのネービス内のサンタニア学園で薬草学を学ぶようになって早四年。この三月は、つい先日の卒業試験をトップの成績で通過した彼女の卒業の月でもあった。
シーラは視線を窓の外へ移動させて、
「昨日の大雨が嘘のようね。いい天気だわ」
「そりゃ、晴れる日もあれば雨の日もあるよ。……お前はカラッカラの晴天が好きそうだもんなぁ」
と、ティースは少し笑いながら言った。
シーラはその言葉の裏に隠れた意図に気付いて、
「悩みがなさそう、とでも言いたいの？」
「だって自由気ままに生きてるだろ？」
さっきの仕返しのつもりなのか、ティースがからかうようにしてそう言うと、
「あら。私にだって悩み事の一つや二つ、あるわよ」
「どんな？」
そんなティースの問いかけに、シーラは彼を悪戯っぽい流し目で見て、言った。
「冷たい雨の中に飛び出して風邪をひく、手のかかる馬鹿な男が隣の部屋に住んでいる、とかね」
「……ぅぐ」
その言葉にティースの口は完全に封じられてしまったのである。

……コン、コン。
昼を過ぎ、熱に浮かされながら夢の世界をフラフラと彷徨っていたティースの意識を呼び戻したのは、部屋のドアを叩く小さなノックの音だった。
「どうぞ」
答えたのはシーラの声。
薄っすらと開いたティースの目に、手にした本を閉じて顔を上げるシーラの姿がぼんやりと映った。
ずっとそこにいたのか、あるいはちょっと前にたまたま戻ってきただけなのか。午前中からずっと眠っていた彼にはわからない。
カチャリ、と。
ドアの開く音がほとんど聞こえないぐらいに静かだったのは、その向こうにいた人物が、病人であるティースのことを気遣っていたためだろう。
そのことは、直後の潜めた声からも窺えた。
「……様子、どう？」
子供のような幼い、甘ったるい声。
（エル、かな……）
ティースはそう思ったが確証はなかった。
まだ十分に覚醒しておらず、思考が混濁している。
「寝てるの？」
「ええ。そのようね」
シーラの窺うような気配を感じて、ティースは彼女たちに何か反応を返そうと思ったが、頭が重くて声を出すのが億劫だった。
「休憩中？」
と、シーラが部屋に入ってきた少女へと問いかける。
「うん。ボクのところはお昼が終わると少しの間、楽になるからね」
小さな気配がベッドの横まで近付いてきたようだった。
ふわり、と、鼻腔をくすぐる森の薫り。
そこに住む妖精のような少女の姿を脳裏に浮かべながら、ティー

スは覚醒を諦めて、薄っすら開いていた目を閉じた――。
「――ティース様は」
そして急に。
さっきまでいなかったはずの人物の声が聞こえ、ティースは再び薄っすらと目を開けた。
（……リィナ？）
一瞬の混乱。
しかし、まぶたの裏に焼きつく光が微かに橙色を帯びていることに気付き、どうやらまた数時間眠っていたらしい、ということにティースは思い至った。
「あら。いらっしゃい。ようやく休憩時間？」
シーラの声が先ほどまでと同じ位置から聞こえた。
「はい。今日は本館に複数のお客様がお泊りになられるので大騒ぎでした。今も十五分の休憩を交代で取っているところです」
パタン、と、ドアを閉める音。
近付いてくる足音はゆっくりだったが歩幅は大きい。その声の主、聖女のような穏やかな女性の姿を脳裏に浮かべながら、ティースは再度覚醒を試みた。
「お昼、食べたの？　十五分しかないのならこんなとこに来てる暇ないじゃない」
「いえ。ティース様のご様子が気になってしまって……」
「大丈夫よ。頼りない男だけど、体だけは意外と頑丈なんだから」
「それでも心配ですから」
結局、リィナはそのままシーラの隣に腰を下ろしたようだった。
そのタイミングで、ようやくティースの目がゆっくりと開く。
「う……リィナ？」
「あ。すみません、ティース様。起こしてしまいましたか？」
ゆっくりと開けた視界に、心配そうに覗き込むリィナの顔が大きく映った。
――近い。

ティースは思わず呼吸を止めてしまう。
「危ないわよ、リィナ」
シーラが苦笑しながらそんな彼女の肩を軽く引いて言った。
「あなたが触れてしまったらまた面倒なことになるんだから」
「あ、そうでしたね」
リィナが離れて、ティースはホッと安堵の息を吐いた。
そしてリィナは申し訳なさそうな顔をする。
「でも、残念です。こんなときにティース様の看病もできないなんて……」
「……気持ちだけで十分だよ。君が悪いわけじゃないんだし……」
ティースはじくじくと痛む喉から声を絞り出すようにしてそう言った。
そう。彼女には何の非もない。
リィナがティースの看病をできない理由は、もちろん仕事が忙しいということもあるのだが、それ以上に彼の特異体質によるところが大きいのだ。
“女性アレルギー”である。
あまり耳にすることのない彼特有のこのアレルギーは、女性に触れられるとその瞬間から急激に意識が遠のき、数秒で気絶に至ってしまう、というものだ。だから手で熱を測ったり、食事で上半身を起こすのを手伝ったりすることさえできないため、とても看病どころではないのである。
ちなみにこの女性アレルギー、ある程度歳の離れた女性であれば問題なかったり、ティース自身が極度の緊張状態にあると大丈夫だったり、また、彼にとって一番近しい女性である少女――つまりシーラに対しては絶対に発生しないという、なんとも不可思議な性質も持っている。
原因は今のところ不明だ。
「……あ、そろそろ休憩時間が終わってしまいますね」
五分ほど他愛のない世間話をした後、リィナがそう言って立ち上

がった。
　ティースはそんな彼女を見上げるようにして、
「忙しいのにわざわざすまなかったな、リィナ」
　するとリィナは彼女らしい柔らかな微笑みを浮かべて、
「いいえ。私が勝手に来ただけですから。早く良くなってくださいね、ティース様」
　と、部屋を出て行く。
　ティースは枕から首だけを上げてそんな彼女の姿を最後まで見送っていたが、やがて彼女の姿が見えなくなると枕の上に頭を戻してホッと息を吐く。
（心配、してくれてたんだなぁ……）
　忙しい中、たかが風邪のことでわざわざ心配して来てくれたということを考えただけで、ティースの胸には暖かいものが広がっていった。
　シーラがそんな彼を見て、
「現金なものね。ずっと寝てたくせにリィナが来たとたん目を覚ますなんて」
「……たまたまだよ、そんなの」
　からかうようなシーラの言葉にそう返して何気なく彼女の脇にあるサイドテーブルを見る。
　と。
「あれ？」
　そこに、いかにも難しそうなタイトルの本が五冊も積まれているのが見えた。
　ティースは視線を上げてシーラの顔を見ると、
「お前、もしかして今日はずっと看ててくれたのか？」
　そう尋ねると、シーラは肩をすくめながら小さく首を振って答えた。
「そこまで暇じゃないわ。お前が寝付いてすぐ部屋に帰ったし、ここに戻ってきたのは今さっきのことよ」

「……そっか」

ずいぶん早読みなんだな、と、ティースはそう思ったが、彼女に怒られそうな気がしたので口には出さなかった。

その代わり、

（早く、治さないとな……）

エルレーンを含め、多くの人間に心配をかけてしまっていることを自覚したティースは心の中で堅くそう決意したのだった。

ネービスの北西、モンフィドレル領との国境にごくごく近いヴァルキュリス山脈の麓のあたりは、昔から“ヴァルキュリスの怒りに触れた土地”とされ、原因不明の局地的な大地震に見舞われることが多い場所である。周囲の土地はその影響によると思われる巨大な隆起で大きく波打ったような形状になっており、住みづらく、また交通の便も悪い地域だった。

その地域で唯一人間が生活している場所に、スピンネルという名前の村がある。

村の人口は老若男女合わせて約五十人。かつてヴァルキュリスの怒りを静める巫女の住まう村として一部の人間からの信仰の対象ともなっていたが、近年は貧困と定期的に発生する地震に耐えかねて外へと移り住む村人が増え、急激に人口を減らしつつあった。

一人の旅人がそのスピンネルの村を訪れたのは、一ヶ月ほど前のことである。

かつてスピンネルを出て行った村人の孫だというその青年が、祖父から譲り受けたという一枚の紙切れ。

それが、この事件の発端となるのであった。

「お体の具合はいかがですか、ティースさん？」
おっとりとした口調の中に隠しきれない気品と知性。
親しみやすい雰囲気なのにその前に出ると思わず姿勢を正してしまう。
屋敷の主にして、このネービスでも三本の指に入る大貴族ミューティレイク家の当主、ファナ＝ミューティレイクはそんな感じの人物だった。
「やあ、ファナさん」
当主といってもティースより約一歳ほど年下で未婚の十九歳。ほんの少し垂れ目がちなおっとりお嬢様で、声を荒らげるようなことはほとんどない。平均年齢の低いこの屋敷の使用人たちにも非常に慕われていて、ふとこうして唐突にティースの部屋を訪れたりするような気安さがありながら、ネービスの社交界でその家柄以外の理由でも一目置かれているような人物でもある。
「それにアオイさんも。わざわざ来てくれたのか」
ベッドから身を起こし、二人の来客を出迎える。
あれから三日。この日の昼過ぎになって熱はようやく下がっていた。……病は気から、とはよく耳にする言葉だが、やはり気力だけだとどうにもならないこともあるようだった。
「結構長引いたけどもう大丈夫だよ。明日ぐらいからは仕事にも復帰できると思う」
「それは良かった」
と、ファナの後ろにいた男性――彼女の護衛兼執事であるイングヴェイ＝イグレシウス、通称アオイがそう言った。
黒い正装姿が堅い印象を与える男性だが、口調はファナと同じで柔らかく、穏やかな人柄を感じさせる。
「先ほど、先日ティースさんが助けた男性からお礼状が届いていましたよ。後ほど誰かに持たせます」

アオイがそう言いながら後ろ手にドアを閉める。
ファナはゆっくりと、まるで足音の立たない優雅な足取りでベッドまで近付いてくると、そこにあった椅子にふわりと腰を下ろした。
「本日は、シーラさんはどちらへ？」
「今日は学園だよ。よくわからないけど卒業前に一回生相手の講演があるとか言ってたな」
「そういえばシーラさんは卒業試験で首席合格でしたわね」
「うん。勉強できない俺にはよくわかんないけど、あいつはすごいよ、ホント」
と、ティースは言った。
彼女が通うサンタニア学園は、この学園都市ネービスにあってさえトップクラスの伝統と実績を誇る学園である。その学園の薬草学科を首席卒業ということは、この年代で薬草学を学んだすべての者の中でトップであるといっても過言ではない。
もちろん学園を卒業することが終着点ではないから、これからの努力も必要不可欠ではあるが、少なくともこの先、薬師としての成功はほぼ約束されたと考えてもいいだろう。
「……」
ティースは思わず黙り込む。
ファナが言った。
「……寂しいのですか？」
「え？　あ、いや、そんなことはないけどさ」
おっとりとしたファナの視線に心を見透かされたような気がしたティースは、慌てて彼女から目を逸らして弁解した。
「やっとあいつも一人前になるんだなって、そう思っただけだよ」
するとファナはクスクスと笑って、
「そういうのを寂しがっている、というのですよ？」
「う、ま、まあ」
ティースはなんだか気恥ずかしくなって軽く頭を掻いた。
「なんだかんだで、あいつを卒業させることは俺の目標の一つだっ

たからね。まあ、そういう意味ではちょっと寂しいといえなくもないかな？　それにあいつ、卒業後は――」

コン、コン。

部屋に響いたノックの音に、ティースは言葉を止めて返事をした。

「どうぞ」

「……あ、やっぱりいた！」

かちゃり、と、ドアが開いて、その向こうから姿を現したのは男物の執事服に身を包んだ少女――もう一人の執事、リディア＝シュナイダーだった。

「やぁ、リディア」

と、ティースは軽く手をあげて少女を迎える。

一年前は男装がよく似合っていた少女も、一つ年齢を重ねて濃い金色の髪をほんの少しだけ伸ばし、その格好に少しの違和感を感じるようになっていた。

ただ、本人はその服装がいたく気に入っているらしく、女物の服に着替えるつもりは今のところないようである。

「ちょっと、アオイさん！　こんなとこでのんびりしてたらダメじゃん！」

「は？」

入ってくるなりまくし立てたリディアの言葉に不思議そうな顔をするアオイ。

だが、やがて、

「あっ！」

慌てた様子で辺りを見回すと、ティースに向かって言った。

「ティースさん！　い、今は何時でしょうか？」

「今？　ええっと……」

ティースは視線を動かして部屋の隅の時計を見る。

「もう少しで三時半になるけど」

「さ、三時半！？」

その言葉にアオイは色白な顔をさらに青ざめさせる。

そして、ファナに向かって言った。
「ひ、姫！　今日は確かネービス公のお屋敷に招待されていたのではありませんかッ！？」
「あら？」
ファナは小さく首をかしげて、
「そうでしたか？　私には初耳ですわ」
「えッ」
するとアオイは呆気に取られた顔をしてから、次に自分の記憶を辿るように視線を泳がせて、
「！」
ハッとする。
「も、申し訳ありません！　今日は五時から、その、ええっと……い、今すぐ準備いたしますので！！」
「急いで急いで！　ミリィさんにはあたしからもう伝えてあるから！」
リディアがアオイを追い立てる。
弾かれたように部屋から飛び出していくアオイ。
それに対してファナが、
「転ばないよう気をつけてくださいね」
変わらずのんびりとそう声をかけたが、ものすごい勢いで遠ざかっていく足音の主にはおそらく届いていないだろう。
（というか、のんびりしすぎだよなぁ……）
そんな彼女を見てティースはそう思う。
ネービス公といえばこのネービス領を収める領主、いわば王様であり、その人物との約束の時間が迫っているのであればもっと慌てていてもよさそうなものだ。必ず間に合うという確信があるのだとしても、である。
そんなティースの考えを余所に、ファナはそこに腰掛けたときと同じく、やはりのんびりとした感じで音を立てずにゆっくり立ち上がると、

「それでは私も支度に戻りますわ。バタバタしてしまって申し訳ありません。久々にティースさんとお話をしたかったのですが」
「ああ、いや。忙しいのにわざわざ様子を見に来てもらった嬉しかったよ。体のほうはもう大丈夫だから」
ファナは穏やかに微笑んで、やはり音もなく踵を返すと部屋を出て行った。
「はぁ……」
あとに残されたリディアが大げさにため息を吐く。
「あの二人は相変わらずだなぁ、もう」
「ご苦労さん、リディア」
ティースがそう言うと、リディアは大きく肩をすくめてみせて、
「まったくだよ。そもそもアオイさんは時間の感覚が鈍いから、スケジュール管理の仕事は向いてないんだよね」
と、言った。
確かにティースから見てもアオイは基本的におっちょこちょいな性格だ。低血圧で寝起きも悪く、リディアのいうように時間の感覚も鈍い。そんな人間が当主であるファナのスケジュール管理をするのは、リディアでなくとも非効率的だと考えて当然だった。
ティースは提案する。
「ファナさんに言ってみたらどうだい？　いっそのことガードのほうに専念してもらうとか」
だが、リディアは諦めたような顔をして、
「言ってるんだけど、ファナさんは“大丈夫ですわ”の一点張りだよ。……実際、ああやってドタバタすることはあっても大きな失敗はしたことないんだよねぇ。リカバリー能力が高いっていうのかな。それにまぁ」
そう言ってリディアはストン、と、ベッド脇の椅子に腰を下ろす。
「アオイさんのあの慌てっぷりを見てるのもそれはそれで楽しいんだよね」
「……ひどいな、そりゃ」

相変わらずな彼女の物言いにティースは苦笑する。
ティースは彼女たちの仕事に深く関わったことがないから、その辺りの詳しい事情はわからない。ただ、とりあえずファナが困っていないのならそれはそれでいいのかな、と思った。
「ところで、リディア」
と、ティースは話題を変える。
「ん？」
「なにか話があるんじゃないのか？」
「どして？」
「だって」
怪訝そうな顔のリディアにティースは言った。
「君のことだから、まさかそこに座って俺の様子を見に来たわけじゃないだろ？」
「む。なんか引っかかる物言いだなぁ。あたしがティースさんの心配したらおかしいっての？」
リディアは不満そうに口を尖らせてそう言うと、
「ま、そのとおりなんだけど」
「……やっぱりか」
苦笑。
ティースと彼女の付き合いももう二年近い。十歳そこそこの頃からこのミューティレイク家で執事をやっている、この抜け目ないドライな少女のことはティースもそれなりによくわかっていた。
「病み上がりのティースさんに頼むのもどうかと思ったけど、動けそうなのが“クロス”しかいなくてね。だいぶ調子も良くなったって聞いてたから先に話だけでもしておこうかと思って」
仕事の話だ。
大きく頷いて、ティースはリディアに言葉の先を促した。

ティースが所属するデビルバスター部隊“ディバーナ・ロウ”。ミューティレイク家の全面的なバックアップを受けて活動するこの

組織は全部で五つの隊により構成されている。
第一隊、“ディバーナ・ファントム”。
第二隊、“ディバーナ・ナイト”。
第三隊、“ディバーナ・カノン”。
第四隊、“ディバーナ・ゼロ”。
そして、ティースの第五部隊“ディバーナ・クロス”である。
各隊はデビルバスターを中心とし、“ゼロ”以外の隊には数名のサポートメンバーがついて、だいたい三人から五人で構成される。
また、それぞれの隊にはおおまかな役割が決められていて、隠密や潜入行動を得意とする“ファントム”。
あらゆる任務をオールマイティにこなす“ナイト”。
戦闘行動に特化した“カノン”。
サポートメンバーの立ち入れないような危険な任務をこなす“ゼロ”。
と、なっている。
なお、ティースの率いる第五隊“クロス”はというと――

「今回も人助けがメインだよ。ディバーナ・ロウのイメージアップ頑張ってね」
と、リディア。
その言葉どおり、ディバーナ・クロスに与えられる任務は“人助け”がテーマである。
もちろんディバーナ・ロウ自体が魔を退治して人を助けることを目的とする組織だし、他の四つの隊も人助けを行うことはしょっちゅうあるのだが、それは魔を退治したことの結果だったり、他の目的と平行して行われるものが多い。
それに比べ、ディバーナ・クロスの任務というのは、ただ単純に人助けを目的とする。他の隊の場合は魔が絡んでいることがほぼ明らかである場合にのみ動くが、クロスはその可能性が低くても動くことができる。

結果的に魔が絡んでいなかったとしても人助けができればそれでいい、ということだ。

この考え方はティースがデビルバスターとなった理由とも親和性が高く、彼自身も非常にやりがいがあると感じている。もちろんリディアが口にしたように全体のイメージアップという側面があることも確かだったが、それはティースにはあまり関係のないことだった。

ちなみにこうしてリディアが持ってくる話に対し、各隊を率いるデビルバスターたちには拒否権がある。手に負えないと感じたり、その内容に疑問がある場合は基本的に仕事自体を断ることも可能だ。

ただもちろん、ティースのほうに断る理由はなく、

「聞かせてくれ、リディア」

サイドテーブルのメモ紙とペンを手に取り、彼女に先を促した。

リディアは満足そうに頷いて、

「ティースさん、スピンネルっていう村を知ってる？」

「スピンネル？　聞いたことあるけど……」

「だよね。一応ネービス領だけど、下手したら一番名前を知られてない村だし」

そう言ってリディアはポケットから小さいサイズの地図を取り出し、ティースのベッドの上に広げると、指先をつつ、と滑らせて、やや横に長いネービス領の北西の端辺りを指す。

「ここのリガビュールの街は知ってるよね？」

「ああ、それはわかるよ」

ネービス領随一の歓楽街リガビュールは、ネービス領の北西、西に接するモンフィドレル領にかなり近い場所にあり、ティースにとっても思い出のある街だった。

「そのさらに北西。地図上だとヴァルキュリス山脈の中にあることになってるけど、この辺はまだ山の中じゃなくてね。デコボコに隆起した変な土地なんだけど、その奥辺りにある村だよ」

「ああ、なんか聞いたことあるな、それ」

地図上では確かにヴァルキュリス山脈の中に埋まるようになっていて、しかもネービス領なのかモンフィドレル領なのかもよくわからない、そんな辺境の土地に村がある――そんな話を以前、ティースは誰かから聞いたことがあった。

「そ。ここにスピンネルって村があるんだけど、依頼はそこの村人からでね。その人の名前はアメーリア＝スピンネル」

「……女の人か」

ティースは自然と眉をひそめてしまう。女性アレルギーである彼としては仕方のない反応でもあった。

もちろんそんな彼の特殊体質と心情を知っているリディアは楽しそうな笑みを浮かべて、

「歳は聞いてないけど若いみたいだよ。美人だったらいいね」

「……勘弁してくれよ」

ティースは傍目に可哀相なぐらい沈んだ顔をする。

普通の男であればリディアの口にしたようなことを願うのかもしれなかったが、ティースにはとてもそんな風には考えられない。だいたい彼は女性アレルギーであることを除いたとしても、綺麗な女性を前にすると緊張してしまったりしてそれほど上手く話せないタチなのだ。

だからこういう場合はむしろ、そんなことを気にしなくてもいいぐらいのお婆さんだったらいいのに、と、そう思ってしまうのである。

「……って待てよ。アメーリア＝スピンネル？」

ティースはハッとしてリディアを見る。

女性というところにばかり気を取られてしまっていたが、もう一つ気にすべき点があったことに気付いたのだった。

「そのスピンネルって村の名前じゃないのか？」

もちろんリディアもそのことは知っていたらしく、小さく頷いて、

「うん。まぁ昔は村の名前をファミリーネームにすることは珍しくなかったけど、この村は違うみたい。むしろスピンネルさんは他に

いないらしいから、たぶん村の代表みたいな家の人なんじゃないかな」

「ああ、そうか」

そういうことならば納得がいく。

リディアは続けた。

「依頼の内容は単純で、村の近くにある洞穴から獣魔らしきものがたびたび出てきて村人を襲っているから退治して欲しい、ってことみたい」

「獣魔の特徴は？」

「うん。それがね」

と、そこでリディアが少し言いよどむ。

「集めた情報だと、いまいち特徴がはっきりしなくてさ。オオカミぐらいの大きさだって言う人もいれば三メートルぐらいある巨獣だったって言う人もいて。……困ってるのは本当っぽいんだけど、いまいち信憑性のない話が多いんだってさ。それで、まぁ、もしかしたら、本当は獣魔なんかじゃなくて、ただの害獣退治にこっちを利用しようとしてるんじゃないかって。小さい村で男手もそんなにないみたいだからさ」

「ま、その辺は実際に会って話を聞いてみればわかるか」

ティースがそう言うと、リディアは驚いたような顔をして、

「あれ。あっさり受けちゃうの？　怪しい話だから断ってもいいかなって思ってたんだけど」

そう言ったが、いかにもわざとらしい。ティースが断ったりしないことを最初からわかっていた表情だ。

ティースはそんな相変わらずの彼女に苦笑しながらも、

「困ってるのは本当っぽいんだろ？　それに特徴を掴めてないから信憑性がないって決め付けるのはどうかと思うぞ。獣魔なんて普通の人には馴染みのない存在だし、じっくり見るわけにもいかないんだから」

「ん、まー、そうだけどね」

と、リディアは何か含むような言い方をした。
……他に何か気になることがあるのだろうか、と、ティースはさらに聞いてみようと思ったが、それよりも先にリディアは席を立った。
「まぁ正式な話は明日、ティースさんが全快してからね。エルさんとリィナさんはあたしから伝えておくから」
「ああ」
言いかけていた言葉を飲み込む。出かかった疑問もそのときにぶつけることにした。
「……」
リディアが出て行くと部屋の中に静寂が戻った。窓から見える茜色の空。学園に行っているシーラもそろそろ戻ってくる頃だろう。
ベッドの脇にあった愛剣“細波”を手にとって膝の上に置く。
デビルバスターとなってから約八ヶ月。
このディバーナ・クロスでいくつかの任務をこなし、そろそろ彼も新米とはいえなくなってきた。
（……一人前、か）
新米デビルバスターからの卒業。
卒業――。
「……」
三月に入って最初の任務。
帰りにはどこかで卒業祝いでも買ってこようか、などとティースは考える。

大陸暦三百二十一年三月。
この月はティースにとって忘れられない一ヶ月になりそうだった――。

その2『風の刃と水の盾』

“秘境”。

その村の姿を視界に捉えた瞬間、ティースは思わずそんな単語を頭に思い浮かべていた。

やや横長になったネービス領の北西、西に接するモンフィドレル領にもっとも近く、北に横たわるヴァルキュリス山脈の麓にある――地図上では山脈の中にあることになっている――スピンネルという名のその村は、山の奥地にあるわけでもないし、鬱蒼と生い茂る森の中にあるわけでもなかったが、そこは確かに秘境であるといっても過言ではない場所だった。

最も近いリガビュールの町からスピンネルへと続く道は、複雑かつ不規則に大きく隆起した大地に阻まれていて馬車を使うことはできず、徒歩での移動が基本となる。地図を見る限りでは徒歩で一日程度の距離なのだが、実際には早朝にリガビュールの町を出発し、途中で二晩野宿をして、ティースたち一行がスピンネルの村付近に辿り着いたのは二日後の昼過ぎのことだった。

「聞いていた以上にひどい悪路だな……」

ブクブクと沸騰している水の表面がそのまま固まったかのようなデコボコの大地に足を取られないよう注意しながら歩き、左手にある土の斜面から不自然にせり出した尖った岩に頭をぶつけないよう身をかがめながら進む。

そうしながらティースは後ろを振り返った。

「二人とも、大丈夫か？」

向けた視線の先には二人の少女。

「平気です」

すぐ後ろを歩いていたリィナはやはりティースと同じように身をかがめてせり出した岩を回避し、彼の眼前まで歩いてきてホッと息

を吐く。
「着替えてきて正解でした。いつもの服装だったらいろいろなところに引っ掛けてみっともない姿になっていたところです」
そう言ったリィナはいつものロングスカート姿ではなく、男性用のズボンを履いていた。これはリガビュールの町でたまたま知り合った旅の人間に忠告されて急遽調達したものだったが、この状況を見ると確かに正解だったようである。
「ああ、俺もまさかここまで険しいとは思ってなかったよ。……エル！　大丈夫か！」
「大丈夫だよー」
一方、一番後ろを進んでいたエルレーンはいつもと変わらないヒラヒラのワンピース姿だ。無造作にひょいひょいと身軽に進んでいて歩きづらそうにしている様子はないし、かなり険しい道を来たにも関わらずほとんど汚れてもいなかった。
小柄だということもあるが、三人の中では一番苦労してなさそうに見える。
……いや、よくよく見ると。
「エル。その服ってなんか特殊な服なのか？」
「え？」
「いや。ほら」
ティースが指差したその先。岩場を進むエルレーンの服の袖やスカートの裾は、彼女が動くたびに宙を踊って、尖った岩や折れた木の枝に引っかかりそうになるのだが、そのたびに、まるでそれ自体が意思を持っているかのように不自然に動いて、岩や木の枝をふわふわと回避しているのである。
「あ、これ？」
エルレーンはぴょんぴょんと跳ねるようにしてティースの眼前までやってくる。小柄な彼女はティースやリィナが屈んで避けた岩もまったく気にせずに通り抜けてきたが、そのときもやはりスカートがふわっと踊って足場のすぐそばから突き出ていた木の根っこを回

避していた。
「今日はみんなの機嫌がいいみたい」
と、エルレーンは言った。
「機嫌がいいって？」
「風の神気が、ね」
「神気？　なんだそれ？」
どこかで聞いたことのある単語だったが、ティースはすぐに思い出せなかった。
そんな彼の顔を見て、エルレーンは大きな瞳を少し泳がせながら小さく首を傾げて、
「こっちの言い方で言うとなんだろね？　風の精霊、って言えばイメージ沸くかな？」
「ああ、それなら」
自然そのものに宿る霊、ティースの頭の中には手のひらサイズの羽の生えた女の子が飛び回っているようなイメージが浮かんだ。
「これだよ」
エルレーンがそう言って自分の体を指差す。
一瞬の後、彼女の体全体がぼわっとした薄い緑色の光のようなものに包まれた。
「あ、それ……」
それを見てようやくティースは思い出した。
……その光は、彼女と再会した事件の際、難敵と戦っていたときに彼女がその身に纏っていたものだ。そのときの敵が“神気”という単語を口にして、それをティースは耳にしていたのだった。
「それって普通の魔力と違うのか？　上位版みたいなもんかと思ってたが……」
エルレーンは小さく首を横に振る。
「まったく別物だよ。魔力の強弱にかかわらず、神気を使えるのは王魔か神魔だけなの」
そう言われて、あのときの敵が、神気を纏っているから王魔だ、

と言っていたことを思い出す。
「じゃあ、神気っていうのは――？」
「ティース様、エルさん」
そこへリィナが口を挟む。
「せっかくですからそこで休憩しながらお話ししませんか？」
と、近くの大きな岩場を指差した。平たく、ちょうど三、四人程度腰掛けることができそうな頑丈な岩場だ。
ティースにもエルレーンにもその提案を拒否する理由はなく、三人はそのまま今日の昼食を済ませることにする。
そうしてティースが岩場に腰を下ろそうとすると、
「？」
ぴゅぅと小さな風が吹いて岩場の石ころや泥をさらっていった。
「……今のも？」
中腰の体勢でティースが尋ねると、
「話題にされたから喜んだのかな。よっぽど機嫌がいいんだね。ティースがボクの友達だってわかってるみたい」
「へぇ」
ティースは感心して、
「いい子なんだなぁ。どうもありがとう」
何もない岩場に向かって小さく頭を下げると、エルレーンとリィナの二人は可笑しそうに笑った。
三人並んで腰を下ろし、腰に下げた袋から乾パンを取り出して分ける。食料を持っているティースが自然と二人に挟まれる形になった。
ゆっくりと乾パンを咀嚼しながら視線を上げて辺りの景色を見る。波打つ地形の中でも小高い場所にあるその岩場からは、目的地であるスピンネルの村がすでに見えていた。
「で、さっきの話の続きだけど……」
と、ティースがエルレーンに話題を振ると、
「うん。神気っていうのは風の精霊で、それを纏えるのは意思を交

わす力を持ってるってこと。魔力はあくまで自分の力だけど、神気は自然の力を借りるんだよ」

「それができるのは王魔と神魔だけってことなのか」

ティースが口をモゴモゴさせながらそう言うと、逆サイドのリィナが補足した。

「視認できるほどの神気を纏うのは王魔でもほんの一握りです。ですから、エルさんは王魔の中でも特別なんですよ」

「へぇー」

「ちょ、ちょっと、やめてよ、リィナ」

二人の感嘆の声に照れくさくなったのか、エルレーンの顔が真っ赤になる。

真っ赤になったまま、

「そ、それでね。神気そのものはそれほど強い力はないんだ。でも魔力と融合させることで力を増幅したり風の声を聞いたりできるの。風は気まぐれだから、ちゃんとしたことはほとんど聞けないんだけど、雨雲が近づいてきてるとかそういう話が聞けたりすることもあるよ」

「へぇ。すごいんだなぁ」

ティースは正直な感想を改めて口にしただけだったが、

「だからやめてってば、もぅ……」

やはり照れくさそうなエルレーンに、なぜか怒られてしまった。

彼女は見た目や口調に似合わぬ大人びたところのある少女だが、どうやらあまり誉められ慣れてはいないようで、その反応は見た目どおりの子供っぽさに彩られたものだ。

「あれ、でも……」

ティースはふと気づいて、

「それって“朧”の影響は受けないのか？　二人とも力を制限されてるはずだろ？」

と、尋ねた。

魔が人へ姿を変える手段の一つである“朧”は、本人が持つ力の

大半を捧げ、人間のパートナーとともに念じることによって、ほぼ完全に人の姿に変わることができる特殊なアイテムだ。エルレーンの場合はシーラが、リィナの場合はティースがパートナーとなり、その代償として彼女たちはすでに王魔としての力の大半を封印されている。

それについてはエルレーンも、憶測だけど、と前置きをして、

“朧”で制限されるのは魔力だけみたいだね。神気と融合させる魔力が大幅に減ってるから使える力が小さくなってることには変わらないけど、神気自体を使うことにはなんの影響もないよ」

「ふーん」

小さく頷きながら乾パン二つを胃袋に収め、水筒に口をつけて喉を湿らすと、ティースは視線を再び正面へ向けた。

眼下に見える、スピンネルの村。

あと二時間、といったところだろうか。

「……じゃ、そろそろ行こうか」

他の二人が食事を終えるのを待って、ティースはそう宣言した。

乾パンの入った腰の袋の紐を締め直し、後ろに置いてあった愛剣“細波”の鞘を右手に握る。

と。

そのときだった。

「？」

鼓膜が小さな振動を捉える。

ちり、ちり、と、何かが細かく擦れるような音。最初は耳鳴りかと思ったが、やがて、どうやらそれが耳の中ではなく外で鳴り響いているものらしいと気づき、ティースは辺りを見回した。

リィナとエルレーンの二人も同じものを感じたらしく、怪訝そうにした三人の視線がそれぞれに絡み合う。

その、直後だった。

「！」

ドォンッ！　と、破裂音のようなものが足元から聞こえ、大地が

大きく揺れる。
「え……地震!?」
「大きいぞ！　二人とも気をつけろ！」
即座に周囲を確認し、今の岩場がもっとも安全そうだと判断したティースは二人に声をかけながらその場で身を低くする。かなり大きい。ネービスではあまり体験することのない規模の揺れだった。
木の枝に止まっていた鳥が一斉に飛び立って頭上を越えていく。何かの砕けるような音が聞こえて視線を向けると、両手をいっぱいに広げたぐらいの大きさの岩が眼下の斜面を転がっていくのが見えた。
一瞬、足場にしている岩が砕けないかとティースは心配になったが、それは杞憂に終わり、縦に揺らぐようなその振動は二分ほど続いた後、発生したときと同じように唐突に、まるで力尽きたかのようにぷっつりと終息した。
「……大丈夫か」
収まってから様子見の空白を一拍子置いて。
ティースは同じように身を低くしていた二人の少女にそう声をかけた。
「すごい揺れだったね。こんなの、こっちの世界に来て初めてかも……」
ぴょんと跳ねるように立ち上がって、エルレーンは周囲を見回すと、
「リィナ。大丈夫？」
「は、はい」
リィナもゆっくりと腰をあげてホッと息を吐く。
ティースはそんな二人の無事を確認して、さらに周囲を見回すと、今の振動によって崩れた斜面と崩れ落ちた岩がティースたちの歩いてきた狭道に流れ込んで道を塞いでしまっているのに気付いた。リガビュールからスピンネルに続く道は複数あるので帰れなくなるような心配はなかったが、そこを歩いている途中で今の地震に襲われ

ていたらと考えると背筋がぞっとする。
「もしかして、今のが“ヴァルキュリスの怒り”なのか……？」
この辺りが“ヴァルキュリスの怒りに触れた土地”と呼ばれ、局地的な大地震によく見舞われる場所であることはティースも予備知識として知っていた。
エルレーンもティースの視線に気付き、彼と同じ方向を見ながら、
「そういえばあの旅の男の人、スピンネルへ向かうルートは週替わりだ、なんて言ってたよね。……こういう意味なのかな」
ティースは頷く。
「何にしろ、土砂崩れに巻き込まれなくて良かったよ。……行こうか」
もうこの場所に長居する気にはなれなかった。
足場を確認しながら岩場を下りる。すぐ後に続いたエルレーンは相変わらず身軽に飛び降りたが、リィナは先ほどの地震の影響か、少し恐る恐るだった。
そんなリィナの緊張をほぐすように、エルレーンが軽い口調で言う。
「気をつけてね、リィナ。転びそうになってもティースは助けてくれないんだから」
「……エル。そんな言い方はないじゃないか」
冗談交じりのその言葉にティースは形だけ抗議したが、確かに彼女が転びそうになっても手を差し出すわけにはいかないのは事実だ。なにせ彼は女性アレルギーなのだから。
と、そんなティースをフォローするようにリィナは言った。
「平気です。ティース様のことは最初からアテにしていませんから」
「……」
絶句。
「……え？　ティース様？」
情けない表情で振り返ったティースに、リィナが不思議そうに首を傾げる。

エルレーンが苦笑して、
「リィナ。それじゃティースが頼りない人みたいに聞こえちゃわない？」
「あ、ち、違います！　そうじゃなくて、ティース様にはそうそうご迷惑をかけられないという意味で――」
「いいよいいよ。わかってる」
もちろん彼女に悪気がないのはティースも最初からわかっている。ただ、そんな彼女の言葉で自分の情けなさを再認識してちょっとへコんでしまっただけなのだ。
いわば、いつものことである。
三人は岩場を下りて予定通りの道を進んだ。幸い、ここから先は今まで歩いてきた道に比べると道が広く、それほど困難な足場ではない。万が一先ほどの地震が再び襲ってきたとしても、土砂崩れや落石に巻き込まれる心配はないだろう。
ティースはそんなことを考えていて、ふと。
（……不自然だな）
そう、思った。
ここまで歩いてきた道。
そしてこれから進もうとしている道。
その二つを見比べて、その不自然さに。
（村の周りだけ、ずいぶんと綺麗だ……）
ティースがそう感じたとおり、ここまで辿ってきた道は、まるで神様がこの大地でアスレチックを作って遊んでいたのではないかと思うほど不自然な隆起とデコボコの道に阻まれていたが、彼らの視線の先に小さく見えるスピンネルの村周辺、目測で半径一キロメートル程度は不自然に――いや、ネービスのその他の土地との比較でいえばごくごく自然な平らな地形になっていた。
あの不自然な隆起が、頻発する局地的な地震に端を発するものだとして。
その地震が器用にあの村だけを避けているというのだろうか。

「ねぇ、ティース」
「ん？」
呼びかけられて隣を見ると、エルレーンが彼の見ていた視線の先――それよりもだいぶ手前のほうを指差していた。
「あの辺、なにかおかしくない？」
「え？」
ティースが視線を手前のほうに動かすと、ちょうど今、彼らが下っている斜面の一番下の辺りで土埃のようなものが宙に舞っているのが見えた。
が、
「なんだ、あれ？」
土埃はその一部分だけに、しかも極端に濃く舞い上がっていた。風で巻き上げられているにしては確かに不自然で、しかも――
「人がいる……？」
人、それも集団だ。まだ距離があることと宙に舞っている土埃のせいでよく見えなかったが、十人ほどはいるだろうか。その集団が何やら慌てふためいたように動き回っている。
「！」
そしてティースは状況を悟った。
言葉を発する前に地面を蹴り、愛剣“細波”の柄を握り締めて叫ぶ。
「地の七十五族だ！　救出する！」
「了解！」
「わかりました！」
エルレーンとリィナの二人も即座に状況を理解し、ティースの後に続いた。足の速さはティースとエルレーンがほぼ同等で、リィナがやや遅れ気味になる。
……地の七十五族。彼らは体長十五センチほどのモグラに似た獣魔だ。手の平が体と同じぐらいの大きさに発達していて、柔らかい土の地面に潜み集団で人間を襲う。また、行動するときは土の中と

外を頻繁に行き来するため、彼らが行動する場所ではあのような不自然な土埃が舞い上がることが多い。その攻撃は手の爪によるものが主で、一撃で致命傷となるほどのものではないが、たいてい数十匹の集団で行動するため、大人の男数名が一度に犠牲になることも少なくはなかった。

十名ほどの集団はどうやら大人の男ばかりのようだったが、魔に対抗できる人物はいないらしく、手に持ったつるはしのようなもので応戦する者がいても、まったく歯が立っていない。

そのうち、集団は二手に分かれるようにして逃げ始めた。

（……まずいな）

これはティースにとって不都合な展開だった。片方ずつ助けていては手遅れになる可能性がある。

「……エル、リィナ！　お前たちは向こうを頼む！」

ティースはそう言って、彼から見て右手に逃げた集団を指した。

「任せて！」

エルレーンが元気よく地面を蹴り、身軽に、宙を飛ぶようにして右手の集団を目指す。かなり遅れていたリィナの耳にはティースの声が届いていなかったが、彼のジェスチャーで意図を悟り、分かれたエルレーンの後を遅れて追っていった。

男たちの悲鳴が聞こえてくる。よく見ると、押さえた腕からかなりの量の血を流している者もいた。

“細波”を鞘から抜く。

そうしながらティースは叫んだ。

「こっちだ！　固まってこっちへッ！」

「！」

ティースの声に気付いた男たちが一瞬の躊躇の後、一斉に彼の方へ向かって逃げてくる。全部で六名。幸い全員まだ走れるようだ。

それよりも先に。

「っ……」

地の七十五族がティースの存在に気付いていた。彼から見て二時

の方向で土が盛り上がる。
――見逃さない。
「はぁっ！」
土の中から獣魔の小さな体が飛び出した瞬間、瑞々しい細波の剣身が陽光にきらめく。
確実な手ごたえ。
切り返して、九時の方向。
同じく、二匹目の獣魔を一撃で仕留める。
「あ、あんたは――！？」
ちょうどそのタイミングでティースは男たちの集団と合流することができた。
足を止め、油断なく“細波”を構えて、
「俺はデビルバスターです！　周囲に背中を見せないように固まってください！　武器がある人は構えて！　適当に振り回しても牽制にはなります！」
指示を出し、辺りの地中に向けて神経を巡らす。
五感を研ぎ澄まし、気配を捕まえる。
そして思わず舌打ちを鳴らした。
（多い……ッ！）
地上に姿を見せているだけで八匹。地中にはどうやらその倍以上潜んでいる。最下級の獣魔で、この数を相手をすること自体には何の問題もないが、この状況、剣一本で七人もの人間を同時に守るのは困難だった。
男たちを逃がすことも考えたが、獣魔の何匹かは間違いなく土に潜んだままそちらを追うだろう。地の七十五族が地中を進むスピードは並みの人間の足よりは速い。そうなればきっと犠牲者が出ることは避けられない。
取り囲むように周囲の土が一斉に盛り上がった。
男たちの悲鳴が上がる。
（……だったら――）

決断とともに、ティースは“細波”の平が見えるように眼前に構え、そこに左手の平を重ねた。
「――静かに波立つ海よ」
濡れたような“細波”の美しい剣身に広がる、一雫の波紋。
その柄にはめ込まれた宝石が清廉な青い輝きを放つ。
「悪意を弾く盾と成れ――！」
ティースの口から静かに紡がれた言葉とともに青い輝きは急速に力を増し、“細波”がそこに秘めた力の一つを解放する。
「！？」
男たちの悲鳴が驚きの声に変わった。
彼ら全員を包み込むように広がった青い光はやがて薄い水のカーテンとなり、一斉に襲い掛かってきた獣魔の爪を防ぐと、小柄な獣魔たちをすべて外側へ弾き飛ばしたのだ。
水の結界に弾かれた二十匹以上の獣魔が同時に宙に浮かぶ。
ティースはその瞬間を見逃さなかった。
宙に浮いた獣魔のすべてをその視界に捉え、意識を高める。
その一瞬。
彼の視界の中の、時が止まる。
（一撃で、決める――！）
二十一個のターゲット。動きのベクトル、速さ――攻撃が到達する時点での予測位置。時が止まった一瞬にそのすべてを判断し、ティースは“細波”を両手で構えた。
「穏やかに凪ぐ風よ――」
剣身が渦巻く風を纏い、宝石が緑の光を放つ。
「悪鬼を挫く剣と成れ――！」
呪文とともに“細波”を振り抜くと、纏っていた風の渦が破裂音を立てて数多の刃となる。その数、ちょうど二十一。それらは弧を描くように宙を飛び、驚愕に固まる男たちを大きく避けながら、それぞれのターゲットに向かっていった。
奇怪な断末魔の鳴き声。空中で思うように動きの取れない獣魔た

ちの体を、風の刃が次々に切り裂いていく。
舞い上がった土埃に、彼らの血飛沫が混じり合った。
「ふぅ……っ」
成功を悟ったティースが息を吐くのと、最後に切り裂かれた獣魔の体が土の地面に落ちたのはほぼ同時。
そして一瞬の沈黙。
呆気に取られていた男たちから大きな歓声が上がる。
「油断しないでください。まだ何匹かは地中に潜んでいます」
ティースは彼らにそう注意を促したが、結局、様子を見るようにウロウロしていた地中の二、三匹ほどの気配は一分ほどして逃げるようにその場から遠ざかっていった。
それで、今度こそ終わりだ。
ティースはすぐに視線を横に滑らせてエルレーンたちの状況を確認する。
そして、
「……」
ほっと息をこぼす。
彼の視線の先には手を振りながらやってくるリィナとエルレーンの姿があったのだった。

「……いやぁ、助かった！　まさかこんな辺鄙なところでデビルバスターの兄ちゃんに助けられるとは思わなかったよ！」
その集団のリーダー格らしき男は、どうやらティースより十歳ほど年上の、長方形を連想させる大きな顔をした大柄な人物だった。
ネービスの人間にしてはずいぶんと日焼けして浅黒くなった肌、その抱えている荷物の中からスコップやつるはしらしきものが覗いているところを見れば、どういう職種の人間であるかはだいたい想像できる。
「俺はリージス。リージス＝マクニエル。見ての通り、普段はリガビュールで体を使った仕事を色々やってる。後ろの連中は俺の手下

が四人と、その他いろいろとかき集めてきた日雇いの連中だ」
と、その男――リージスは男くさい顔に満面の笑顔を浮かべてそう言った。
「あ、えっと、俺はティーサイト＝アマルナです。ネービスでデビルバスターみたいなことをやっています」
「みたいなこと？」
「あ、いえ。じゃなくて……デビルバスターです」
ティースが言い直すと、リージスは不可解そうな顔をした。
特に意味は無い。ただ、胸を張って“俺はデビルバスターです”と言うのが未だに照れくさいだけなのである。
そこに突っ込まれないようにと、ティースはすぐに言葉を続けた。
「後ろの二人は俺の仲間で、こっちがエルレーン。こっちがリィナといいます」
「エルレーン＝ファビアスです。よろしくね」
エルレーンは朗らかに挨拶したが、リィナはちょっと笑顔を浮かべて小さく会釈をしただけだった。
「へぇ、そのお嬢ちゃんたちもデビルバスターなのかい？」
「デビルバスターなのは俺だけです。でもご覧になったとおり、魔と戦うことはできます」
「そういやなんか、魔と同じような力を使ってたっけな。あんたもそうだったが……」
と、リージスが少し不可解そうな顔をする。
それについてティースが説明をしようとすると、
「あー、知ってる知ってる」
リージスの後ろで怪我の手当てをしている男たちの中から声が上がった。
「デビルバスターって、何か魔法のアイテムみたいの持ってて色々できるんだよな。俺、前にもそんな感じので助けられたことあるわ」
「なんだよ、お前。そんなしょっちゅう魔に襲われてんのか？　まさか今回のも、お前が引き寄せたんじゃねぇだろうな？」

「うわ、そりゃひでぇよ。俺だって好きで死にそうな思いしてるわけじゃねえっての」
男が少し情けない声を上げると、集団の中から大きな笑いが起こった。
それでようやく緊張の糸が完全に緩んだらしい。
「おーい。誰か包帯持ってないかー！　布切れが足りねぇよー！」
「あ、私持ってます」
集団の中から上がった声に、リィナが即座に反応する。
続いてエルレーンが、
「じゃあ、ボクらも手当て手伝おうか。ティース、いいよね？」
「ああ、頼むよ」
ティースがそう言うと、彼女らは応急手当用の袋を手に、男たちの集団の中へ入っていった。
「……お。おーい。なんか美人さんが手当てしてくれるってよー」
「マジで!?　おい、誰か、いったん俺の包帯ほどいてくれー！」
「うるせーよ、バカ！」
再び男たちの笑い声。その中からエルレーンやリィナの声も混じって聞こえてくる。どうやら若い男が多いようで、パッと見、ティースより年下と思われる少年もいるようだった。
そんな様子を苦笑して見ながら、ティースはリージスに尋ねる。
「リージスさんたちはどうしてこんなところに？　目的はスピンネルの村ですか？」
普通の人間である彼らがこんな場所にいる理由は、スピンネルの村に行く途中か、あるいは帰る途中かのどちらかしか考えられない。ただ、スピンネルという村は人口百人にも満たない小さな村だし、生活用品を運ぶ行商人ならともかく、彼らのような肉体労働者が、しかもこれだけの集団であの村に用があるというのは、なかなか考えにくいことだった。
それに対し、リージスは答える。
「もちろんだ。仕事でな」

「仕事？」
「見てのとおり、穴掘りさ」
そう言って、リージスは手元のスコップをバンと叩く。
「なんでも、あの村の洞穴で金が掘れるらしくてな。……ああ、この話、他にはばらさないでくれよ。助けてくれたあんただからこっそり教えるんだ」
「あ、はい」
後から釘を刺されても遅いが、もちろん彼はもともとそんなことを他言する人間ではない。
リージスは続けた。
「んで、あの村は若い男もそんなにいないし、とても手が足りないってことで俺たちが行くのさ。金が出れば報酬もたんまりいただけるってんでね」
そういうことか、と、ティースは納得したが、スピンネルで金が掘れるという話は初耳だった。ディバーナ・ロウの情報収集部隊である“影裏”からもそんな情報は聞いていない。おそらくはごく最近、新たにわかったことなのだろう。
「ところで、ティーサイトさん。あんたはどうしてこんなところに？」
今度はリージスが逆に質問してきた。
「あ、ティースと呼んでください。……俺も同じです。仕事で。最近スピンネルの村で獣魔らしきものが出るって――」
そこまで言って、ハッとする。
（そういや村の洞穴から獣魔が出てくる、って、そういう話だったな……）
金。
そして獣魔。
……無関係だろうか。
いや。
（……なにか、あるか）

ティースが呼ばれたタイミング。
リージスたちが呼ばれたタイミング。
洞穴から発掘される金と、獣魔。
その一致は、偶然の一言で片付けられるものではなさそうだった。

想像どおり、スピンネルの村は寂れたところだった。
村の入り口らしきところに立っていた案内板は腐って半分折れかかった状態で放置されていたし、その周囲には廃墟のような無人の家ばかりが並んでいる。そこから少し奥に進むとようやく人の住んでいる気配の家があって、畑や鳥小屋のようなものも確認できたが、いずれも規模は小さく、出歩く人の姿も極端に少ない。外向けの産業があるわけでもなく、あったとしても交通に難のある土地だから、ほぼすべての世帯が自給自足の生活を送っているのだろう。明かりを灯す習慣もあまりなさそうで、夕日が射し込むこの時間になって人影がほとんど見えないのはおそらくそういう理由からだ。
そんな中、初めて出会った村の人間に素性を明かすと、ティースたちは村の中心付近にある一つの家へと案内された。
大きな家だった。他のものと比べると造りも良く、若干新しい。
「ここがスピンネルさんの家ですか？」
そこまで案内してくれた老婆にそう尋ねると、
「いえ。ここは村長のお家です」
「僕はアメーリア＝スピンネルさんという方に呼ばれてきたのですが――」
「巫女様も今はこのお家におられますよ。あなた様のご到着を心待ちにされておりました」
「あ、そうでしたか。どうもありがとうございました」
ティースが納得して礼を言うと、老婆は小さく頷いただけでその場を去っていった。

「……巫女様、か」
ヴァルキュリスの怒りを鎮める巫女の住まう村――このスピンネルが昔からそう言い伝えられている村であることはティースも予備知識として知っている。
どうやらその風習は今でも残っているようだ。
「入ろうか」
と、ティースは後ろのリィナとエルレーンを振り返る。リージスたち一行とは村に入ったところで別れており、どうやら彼らは別のところに案内されていったようだ。
ドアをノックするとすぐに人が出てきて、ティースたちは家の中へと招き入れられた。
大きな家、といっても、もちろんミューティレイクの屋敷のようなとてつもない広さではない。平屋で一辺がせいぜい二十メートルぐらいだろうか。あくまでこの村の中の建物としては大きいほう、という程度だ。
その中の一室に通される。
「ようこそいらっしゃいました、ティーサイト様」
そこは二十畳弱ぐらいの広さの客間で、まず視界に入ったのはその中央、この村の雰囲気に合わない一人がけのソファから立ち上がった初老の男。年齢は五十歳ぐらいだろうか。その年代にしては背が高く、百七十センチほどはある。かなり痩せていて頭頂部は綺麗に禿げ上がっていた。
「村長のアルフレッドです。遠いところからわざわざお越しいただきまして、本当にありがとうございます。……さぁ、おかけになってください」
細い目が見えなくなるほど笑顔になると、頬の皺がさらに深くなる。物腰は柔らかく、いかにも好々爺といった雰囲気の人物だ。
彼が指し示した先には、やはりこの村には似合わない三人がけのソファがあった。
ティースは一礼して、

「ディバーナ・クロスのティーサイト＝アマルナです。デビルバスターとしてはまだ新米ですが、問題の解決に全力を尽くさせていただきます。後ろの二人は僕のサポートをしてくれる、リィナ＝クライストとエルレーン＝ファビアスです」

その紹介に、後ろの二人が揃って頭を下げる。

村長がほんの一瞬だけ怪訝そうな視線を二人に送ったのがわかったが、その反応には比較的慣れていたのでティースは特に気にせず、勧められたソファへと腰を下ろした。

「ところで――」

と、ティースはこの部屋の中にいるもう一人の人物――その会話の間中、村長の後ろでずっと黙ってたたずんでいた一人の女性へと視線を向ける。

土色のベースに雪の結晶のような文様が入った古いデザインの衣装。この村で会った他の人々は比較的一般的な服装をしていたから、彼女のそれがこの村においても特別なものであることは容易に推測できた。

つまり彼女が、老婆の言った“巫女様”――アメーリア＝スピンネルなのだろう、と。

「ああ、自己紹介させましょう。……アメーリア。ティーサイト様にご挨拶を」

村長がそう言うと、その女性は少し伏せていた視線を上げ、初めてティースの顔を見た。

「アメーリア＝スピンネルと申します。以後お見知りおきください」

掠れた小さな声。

第一印象は、寡黙で儚げな女性、だった。

「……終わりか？　相変わらず愛想がない子だ」

村長は少し不満そうだったが、すぐに気を取り直した様子でティースたちに向き直る。

「ティーサイト様もご存知でしょうが、この村はヴァルキュリスの怒りを鎮めるために作られたとされる村でして。この子はヴァルキ

ユリスに祈りを捧げる巫女の家系の娘です。そういったこともあって少々おかしなところがありまして。無礼がありましたらどうか―
―ティーサイト様？」
「え？」
ハッとする。
ティースはいつの間にか、どことなく神秘的な雰囲気を漂わせたその巫女に長いこと視線を奪われていたらしい。
ティースは慌てて取り繕うように、
「ああ、いえ。無礼だなんて、僕らはぜんぜん気にしません。どうかお気遣いなく」
「……そうですか」
そんなティースの反応に、村長は後ろのアメーリアをチラッと振り返り、
「では、今日はそろそろ日も沈みそうですし、ティーサイト様も長旅でお疲れでしょうから、詳しい依頼のお話は明日にしましょうか。夕食をすぐにご用意いたします。その後、お休みいただく家を案内させますので、今日はゆっくりと疲れを取ってください」
そう言って、使用人らしき女性を呼んだ。

夕食後、ティースが案内されたのは村長の家から百メートルほど離れた小さな家だった。村長の家と同じように村の中では比較的新しくしっかりした造りの建物で、部屋の仕切りや生活用品らしきものはなく、こうして客人を村に迎えるときのために用意された家なのかもしれない、とティースは思った。ただ、小さいとはいっても家全体が一つの部屋なので、一人で寝泊りするには少し寂しい。リィナとエルレーンはさらに二十メートルほど離れた家に案内されていて、外見を見たところでは、ここと同じ造りの家のようだった。
（ミューティレイクでも部屋は広いけど、あっちは隣とか周りに人の気配があるからなぁ）
太陽はもう完全に沈んでいる。この村にはネービスで使われてい

るような魔界の発光性植物を応用した照明器具がないらしく、明かりはロウソクが二本立っているだけだった。

（……寝るか）

こうなるとすることがない。彼の体内時計的には二時間ほど早かったが、仕方なく用意されたベッドの中に身を潜らせることにした。

ベッドからはほんの少しだけカビのような匂いが漂っている。

ロウソクの火を消すと室内が一気に暗くなったが、月が出ているのでまだ薄っすらと明るい。

そうして体中の力を抜くと、意外にもすぐに眠気が襲ってきた。

（ああ。今日は“力”を使ったからか……）

その体は彼が自分で思う以上に疲れていたようだ。

獣魔が出没する危険があるため完全に気を緩めるわけにはいかないが、野宿をしたこの二晩よりはゆっくり休めそうだった。

目を閉じて。

そのまぶたの裏に、

（……それにしても、あの女性）

先ほど会ったばかりの女性――アメーリアの姿が映った。

女性、といっても、おそらくは彼より年下、リィナやエルレーンと同年代だろう。女性というよりは少女に近い年齢だと思われたが、その割には不思議なほど落ち着いた態度だった。巫女として育てられたから、と言われると、なるほどと必要以上に納得してしまう、浮世離れしたその雰囲気。

その割に、村長からの扱いが多少ぞんざいに見えたのも気になった。この村における巫女の存在が、昔ほどは神聖視されていないのだとして。あの場にいながら、結局自己紹介の一言しか口を開かなかった彼女の立ち位置はいったいどういうものなのだろう――と、ティースは部外者ながらそんなことが気になっていたのである。

と。

「……？」

家の外から人の気配が近付いてくるのにティースは気付いた。一

瞬、剣に手を伸ばしかけたが、それはどうやら村人の気配だ。
カタン、と。
玄関のドアが小さな音を立てる。
ティースはベッドの上に身を起こした。
「どなたですか？」
そう声をかけながら取っ手のついた皿型の燭台に手を伸ばす。
返事はない。
返事がないまま、ドアがゆっくりと開いた。
「？」
目を細める。ティースのベッドからは月明かりがちょうど逆光になっていて、入ってきた人物の姿は輪郭しか見えなかったが、輪郭と雰囲気から、どうやら件の巫女――アメーリアらしいということがわかった。
「アメーリアさんですか？　なにか用ですか？」
再び問いかけるティース。
扉が後ろ手に閉じられた。相変わらず返事はない。
「……アメーリアさん、ですよね？」
声が聞こえていないはずはない。
さすがにティースも怪訝に思い、燭台を手元に引き寄せ、マッチを手に取った。
無言のままに近付いてくる人影。
敵意を感じたわけではない。
ただ――
「……」
背筋に正体不明の悪寒が走って、ティースは燭台のロウソクに火を灯す。
そして――
「……――うぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！」

「！」

「ティース様！？」

二十メートルほど離れた隣家から聞こえてきたその叫び声に、リィナとエルレーンが飛び起きて、そしてその家に駆けつけるまでの時間は、僅か二十秒程度だった。

「ティース！」

先んじたエルレーンが、玄関のドアを壊れるほどの勢いで開ける。

少し遅れたリィナが、

「ティース様！　何があったんですかッ！」

そう叫びながら家の中に踏み込む。

そこで彼女たちが見たものは――。

「……え？」

「ティース……様？」

青い顔で情けなくベッドに横たわるティースと、

「……」

二人を無言のままに振り返る、一糸纏わぬ姿の巫女――アメーリアの不思議そうな顔だった。

その3『ヴァルキュリスの巫女』

「本当に失礼いたしました！」
「は、はぁ」
翌日の朝、ソファに座った自らの膝よりも低く頭を下げて謝罪する村長、アルフレッドに対し、ティースは困惑の表情を浮かべてそう呟くしかなかった。
昨日と違い、村長の後ろに彼女――アメーリアの姿はない。
「あの娘はなんといいますか、いきなり突拍子もない行動をすることがありまして、それであのような真似を。どうかご容赦ください」
「……」
ティースは何も言えずに村長から視線を逸らす。
――昨晩の出来事については、何が起きたのかよくわからないというのが正直なティースの気持ちである。彼が覚えているのは、彼の寝所にアメーリアらしき人物がやってきたというところまでで、そこから先のことは気絶してしまったためほとんど記憶にない。
ただ、ティースの悲鳴を聞いてすぐに駆けつけたエルレーンとリィナの話によると、発見時のアメーリアは身に何も纏わぬ姿だったらしく――その辺りは彼もおぼろげに記憶していたが、話を聞くまでは肌色の襦袢か何かを着ていると思っていた――彼女らに発見されたときは、気を失ってしまった彼のことを不思議そうに見下ろしていたのだという。
いったい何が目的だったのか。
いや、何をするつもりだったのかという点については、あの年頃の娘が裸で男の寝所に忍び込んできたのだから、いくら女性に免疫のないティースでも想像することはできた。
問題は“何のためにその行動を起こしたのか”という点である。
「ヴァルキュリスの巫女という立場上、村の男と接触する機会のな

い娘ですから。外から来た貴方に、まあ、いわば一目ぼれでもしてしまったのでしょうな。それで衝動的にあのようなことを」

「……はぁ」

アルフレッドの言葉に気のない返事をするティース。

普通であればその発言に多少なりとも舞い上がってしまうのかもしれないが、残念ながら彼はそういった類の自惚れとはとことん無縁の男であった。

そんなことはあり得ない、と確信している。

つまり彼女があんなことをしたのには何か別の理由があるということだ。

「いや、しかしティーサイト様はさすがですな」

アルフレッドはただでさえ細い目がまったく見えなくなってしまうほどに表情を崩す。

「なんです？」

昨日は好々爺のように思えたその笑みが、今日は少し印象が違って見えた。

「意思がお強いということです。村の男たちはよく言っておるのですよ。あの娘は巫女にしておくのがもったいない女だ、と。あの娘に迫られて自制できる男など、ティーサイト様の他にこの村にはおらんのではないかな」

アルフレッドは声をあげて笑った。

「はあ」

ティースの場合は自制したわけでもなんでもなく、やむにやまれぬ事情から気を失ってしまっただけのことである。……ただまあ、気絶しなかったとして、彼がその据え膳に手を出せたかどうかはかなり疑問の残るところではあったが。

「ははは……おっと、こんなことを口にしてはヴァルキュリスの怒りを買ってしまいますな。くわばらくわばら」

「はあ」

どんな言葉を返せばいいものかわからず、ティースはオウムのよ

うに同じ言葉を繰り返した。そうしながら、胸の中に起きていた疑問の回答を見つけるべく頭を回転させる。

昨日も感じていたことだったが、やはりアルフレッドの言葉からは、ヴァルキュリスや、その怒りを鎮める役目を担っている巫女に対する敬意のようなものは感じられなかった。

そしてそのことはティースの胸に一つの疑念を呼び起こす。

つまり、アルフレッドが、アメーリアの昨晩の行動の理由を知っているのではないだろうか、ということだ。

はっきりとした根拠があるわけではない。ただ、彼女の行動に隠された目的があるという前提に立てば、その目的はティースがこの村に呼ばれたことと関係があると考えるのが自然だ。そしてディバーナ・ロウへ依頼をしてきたのはアメーリアだが、昨日、真っ先にこの家に案内されたことからわかるように、実質的な依頼主は村長のアルフレッドだと考えていいだろう。

とすると、昨日の彼女の行動について彼がまったくの関係がないとは思えないのである。

ただ、

「……それはそうと。今の状況について詳しいお話を聞かせてください」

その疑念はおくびにも出さずに、ティースは話題を変えた。

すべては薄い憶測に過ぎなかったし、獣魔を退治するために呼んだ彼に危害を加えようとした可能性も今のところは低い。

ならば、あえてこの場で追求する必要はないだろうという判断だった。

「ああ、そうでしたな」

アルフレッドは自分しか笑っていなかったことにようやく気付き、こほんと咳払いをする。

「獣魔が現れるようになったのは一ヶ月ほど前のことです。採掘に行っていた若者が三人、怪我をして洞穴から出てきたのが最初でした」

「洞穴というのは？」
「後ほど見ていただきますが、村の北側、ヴァルキュリス山脈に近いところにある洞穴です。中はかなり深くヴァルキュリス山脈の奥にまでつながっているとされています」
「村の中にも獣魔が現れていると聞きましたが……」
「ああ、ええ。ただそれは一度だけです。一度だけ、洞穴から村の中に出てきた獣魔がいました。それでいよいよ放っておけないということになり、ティーサイト様をお呼びした次第です」
「被害の状況はどうなんです？」
「被害にあったのは採掘を行う若い男ばかりです。十三人やられています」
「やられたというのは――」
ティースはいったん言葉を切って、
「命を落とされた、という意味ですか？」
「あ、いえ。幸い、命を落とした者は一人もおりません。村の男どもは小さい頃から体をよく動かしておりまして、一人で熊を狩る者もおるほどですから、みな、どうにか逃げおおせております。獣魔が相手となるとさすがに逃げ足を生かすしかなかったようですが」
「そうですか」
ティースはホッとする。
これから何人もの遺族の話を聞きにいかなければならないのかと少し憂鬱な気持ちになっていたところだ。
「ところで――」
もう一つ。
確認のためにとティースは尋ねた。
「採掘といいましたが、なにが掘れるんです？」
「それは――これです」
アルフレッドはソファから腰をあげると、棚から親指の先ほどの小さな鉱物の塊を取り出してティースに見せた。
「金、ですか」

人差し指と親指の間で鈍い輝きを放っている金色の石。
リージスから聞いた話と一致している。
「この村唯一の収入源と言っても過言ではありません。これが採れなくなるとこの村はおしまいです」
アルフレッドはその小さな塊を大事そうに棚の中へ戻し、ソファへ戻る。
「ティーサイト様。どうかお願いです。また金の採掘ができるよう、洞穴に住み着いた獣魔を退治してください。報酬は……このとおり貧乏な村ではありますが、可能な限りの金額をお支払いさせていただきますので、どうか」
再び、膝よりも深く頭を下げるアルフレッド。
「あ、いえ、そんなにかしこまらないでください」
禿げ上がったその後頭部を見せられて、ティースは逆に恐縮しながらアルフレッドの頭を上げさせた。
「報酬については事前にお伝えしてあるとおりです。それ以上いただくつもりはありません」
ディバーナ・ロウの各部隊はその活動資金を少しでも補うため、依頼主から報酬を受け取ることを基本としてはいるが、他のデビルバスターたちと比べて安い料金を提示する場合がほとんどだ。
その中でも彼のディバーナ・クロスは最初から人助けを一番の目的としていることから、他のディバーナ・ロウの部隊と比べても依頼料はさらに安く、相手の経済状況によっては無償で働くことも珍しくはない。
だからティースは報酬の多寡を交渉するつもりなど最初から微塵もなかったのだ。

――その後、今日一日は獣魔に襲われた男たちの話を聞くことや、洞穴の場所、状況などについての情報収集に費やすことについての了承をもらい、本格的な獣魔退治は明日から始めるということで話し合いを終えた。

さらさら、さらさら、という音が聞こえてきてティースはふと足を止めた。

このスピンネルの村には道らしき道が一本しか作られておらず、昨日も今日もティースはこの道を往復していただけだったのだが、村長の家からティースが借りている空き家の前を通り過ぎた後、道を脇に逸れ、ヴァルキュリスの山々を正面に見ながら獣道のような草むらを二、三分歩いていくと、村を斜めに横切るように流れている小さな川を見つけることができた。

澄んだ色の綺麗な川だ。ヴァルキュリスの山々から流れてきて、どこへ向かっているのだろうか。

（リィナだったら水の精霊みたいなものに聞いたりできるのかなぁ。……ああ、精霊じゃなくて神気、だったっけ）

川端に座り込んで澄んだ水を掬い上げる。獣魔の毒を判別する“毒見草”をそこに浮かべてしまったのはデビルバスターとしてのほぼ無意識の行動だった。

もちろん異常はない。

その水で軽く喉を潤し、膝に手をついて立ち上がる。

腰の剣がカチャリと音を立てた。

すると、

「……ん？」

水の撥ねる音。

音の方角に視線を向けたティースは、川の上流側に人影があることに気付く。

（あれは――……）

しばし逡巡した後、ティースは軽く決意を固めてその人物のもとへと近付いていった。

「アメーリアさん。……こ、こんにちは」

「？」

昨日と同じ奇妙なデザインの衣装。土色の服に雪の結晶のような模様――と思っていたが、近付いてよくよく見てみると、それは雪の結晶ではなく、細長い三日月が四つ絡み合ったような奇妙な模様だった。

ヴァルキュリスは“地の四族”であり、土色の服はおそらくそれを表現しているのだろうと思ったが、この模様についてはどういう意匠なのか不明である。

「こんにちは、ティーサイト様」

昨日のことがあって、ティースなどは話しかけるのにそれなりの勇気を必要としたのだが、一方の彼女は特に気まずく思っているわけでもないらしく、昨日、村長であるアルフレッドの後ろに佇んでいたときとまったく変わらぬ態度だった。

そんな彼女の態度に、ティースは一瞬、昨日の出来事はすべて夢の中の話で、リィナやエルレーン、村の全員で自分をからかっているのではないか――なんてことを思ってしまったが、もちろんそんなことはあろうはずもない。

ただ、彼女のそういう振舞いは、ティースにしてみればありがたいことだった。

「なにをしているんだい？」

いくぶん気が楽になって、そう尋ねる。

川端にかがみこんだアメーリアは手に緑色の何かを持っていた。

「笹舟を流していました」

「笹舟？」

「はい。ティーサイト様もいかがですか？」

と、アメーリアは手にした笹舟をティースのほうへ差し出してくる。

「……あ、えっと」

どうしたものかと思いつつも、ティースは恐る恐るそれを受け取った。

「これは……あれかい？　巫女としての、神事みたいなものなのかい？」
「いいえ。ただの暇つぶしです」
「あ、そうなのか」
果たしてこんなことで暇が潰せるのだろうか、とティースは疑問に思ったが、手際よく笹舟を折っていく彼女の仕草を見て、逆にこういう単純作業のほうが暇つぶしには最適なのかもしれないと思い直した。
そしてふと。
「……？」
見下ろした彼女の白い首に鎖のようなものが巻かれていることにティースは気付いた。
一瞬昔の奴隷が巻いていた首輪のようなものを想像してしまったが、よくよく見てみるとそれほどゴツイものではなく、どうやらペンダントか何かの首鎖の部分が覗いているだけのようだった。
早とちりだったことにホッと胸を撫で下ろして視線を逸らし、今度はもらった笹舟を目線の高さまで持ち上げる。
その出来栄えに感心していると、やがて舟の中に白い花びらが乗っていることに気付いた。
「この花は？」
「そこで咲いていた花です。名前は……わかりません。ただ、誰か乗っていないと舟も寂しいだろうと思ったので」
「ふーん」
やはり少し変わった女性だ、とティースは改めて思った。
ただ、
「ところでさ」
一つだけ、昨日までと印象の違っていたところがあり、ティースはそれを尋ねてみることにする。
「君、歳はいくつなんだ？」
アメーリアは少し不思議そうにティースの顔を見上げたが、すぐ

に視線を正面に戻し、ポツリと呟くように言った。
「十四歳です」
「十四、か……」
昨日のティースであればその回答にビックリし、間違いかと思って聞き直していたかもしれない。
が、今なら少し納得できた。
（……昨日とはまるで別人だ）
川を見つめながら細い指で笹舟を折るその横顔には、昨日、村長の後ろで控えていたときや、その後ティースの寝所に忍び込んできたときには見られなかった幼さがありありと浮かんでいたのだ。
（十四歳ってことはセシルと同い年だな……）
ミューティレイクにいる、動物に異常に好かれる少女のことを思い出す。アメーリアはその少女よりはだいぶ大人びて見えたが、それでも同い年だと言われれば、ああ、そうなのかと納得できる範囲だった。
「……」
ティースは無言でアメーリアの隣にかがみこみ、もらった笹舟をそっと川に浮かべる。舟は緩やかな流れに乗り、右へ左へ、ときには回転しながらフラフラと下流のほうへと流れていった。
横を見ると、アメーリアがその舟の動きを視線で追っている。
「昨日は……どうしてあんなことをしたんだ？」
決意して、ティースはその話題を口に出した。
それが歳の近い女性だったら恥ずかしくて聞けなかったかもしれない。だが、相手が六つも年下の、ティースにとってはかろうじて“子供”といえる年齢の少女だとわかったことで、彼の中では照れよりも保護欲のようなものが上回るようになっていた。
アメーリアはティースの顔を見ずに、
「お礼です」
「お礼？」
「ティーサイト様はこの村を救ってくださる方ですから。喜んでい

ただけると思ってやりました」
「……それは君の考えで？」
「はい。そのための作法は母から学びました」
「……」
「どうしました？」
少し呆気に取られていたティースを、アメーリアの深緑色の瞳が不思議そうに見つめた。
「あ、いや。ごめん。なんだか……俺の知ってる同じ年頃の子たちとは言うことがずいぶんと違っていたものだから」
無言で視線を正面に戻すアメーリア。
気分を害したのかと思ったが、
「それはきっと私が特別なのでしょう。巫女は村の男と子を成すことを禁じられています。ですから数少ない外からの客人が来る日に備え、小さい頃からそういったことを教わるのです。母もそうでしたし、私も妹もそうして産まれました」
淡々と述べるアメーリアの顔から先ほどまでの幼さが少しずつ抜け落ちていく。
ああ、昨日の貌だ――と、ティースは思った。
「村の外から来た男を婿として迎え入れる、ということかい？」
「いいえ。巫女が人間の男と婚姻を結ぶことはありません」
ティースは眉間に少し皺を寄せて、
「じゃあ、お父さんは？」
「少なくともこの村の中にはいません」
「……」
なんとなく理解した。
――ヴァルキュリスの巫女と呼ばれる彼女たちは、婚姻を結ぶことなく跡を継ぐ子を授かる。おそらくは建前上、それは人間の子ではない、ということなのだろう。相手を村の外から来た男に限定するのは、それらの神秘性を確保するためだ。
それが現在、村人たちにどの程度信じられているのかは別として

――
「じゃあ、昨日のことも？」
自分が“そういう男”だったら、あるいは次代の巫女の父親になっていた可能性もあるのだろうか、なんて、そんなことを考えながらティースはそう尋ねたが、
「いいえ、昨日のことはただのお礼のつもりでした。……結果としてそうなっていたかもしれませんが、それはそれで構わないことでしたから」
「そういうものか……」
ティースは神妙な顔で川の流れを見つめる。
彼にとってはいまいちピンと来ない考え方だった。ただ、そういう風習もあるのだと理解できる程度の思考の柔軟性は持ち合わせている。
と。
アメーリアはそんなティースの横顔を見つめて、
「もしティーサイト様が受け入れてくださるのであれば、今晩、また――」
「あ、いや。それは……ごめん」
無理な相談だった。
もちろん女性アレルギーという特異体質が一番の理由だが、それだけではない。
「俺はその、君たちの考えと相容れないのはわかってるけど、女の子はやっぱり好きな男と一緒になって、好きな男の子供を産むのが一番だと思ってるから。俺は男だけど、そういう風に考えてるし、みんなそうであって欲しいと思ってるから……だから、無理だ」
「……残念です」
つ――、と、アメーリアは指先を川の上に伸ばし、笹舟を浮かべる。
「私には他に、貴方様に報いる手段がありません」
「君がそんなこと気にする必要はないよ。仕事の報酬はきちんとも

らうんだからね」
「……」
アメーリアは無言でゆっくりと立ち上がると、裾に付いた砂を軽く払った。
ティースに向き直り、そして深々と頭を下げる。
「この村をよろしくお願いします。ティーサイト様」
「あ、ああ……」
最後は大人びた――巫女の貌でそう言って、アメーリアは小走りに立ち去っていった。

村を一周し、獣魔が出るという洞穴の入り口付近までの確認を終えた頃、時間は正午を過ぎていた。
村の人口は約五十人程度と聞いていたし、けが人も多数いるはずだから、村の中でほとんど人と出会わなかったのは想像していたとおりだったが、廃屋らしきものが目立つのが気になった。廃屋がたくさんあるということは人が減っているということだろう。
中には、火事か何かで焼けた家がそのまま残されているものもあった。
（獣魔が出たこととは関係なさそうだけど……）
廃屋はいずれも、大昔のものではないが、つい最近まで住んでいたという感じでもない。数年から十数年といったものが多いようだ。
つまり人口の減少は何かのきっかけで一気に、というわけではなく、徐々に減っていっているものだろう。
しかし――と、ティースは疑問に思う。
確かに最近はネービス領でも大都市近郊への人口の集中が進んでいて、特に目玉となる産業を持たない辺境の村々はどこも人口の減少が続いている状態だと聞く。このスピンネルの村は地形的にも不便なところだし、地理的な条件からいえば人口が減少することは不

思議なことではない。
ただ、村長のアルフレッドが言っていたように、この村ではどうやら金が採れるようだ。
それがどの程度の量なのかはわからないが、その事実だけで村にやってくる人間はいくらでもいそうなものである。
そういった外の人間を締め出す風習でもあるのか。
あるいは――人が寄ってこない何らかの理由があるのか。

「――あれ？」
そんなこんなで、昼食がてら、朝から情報収集に動いてもらっていたリィナたちと合流しようと家まで戻ってきたところ、中で何やら人の動いている気配がしていた。
村人が掃除でもしてくれているのだろうかと思ったが、聞こえてきた声ですぐにそうではないことを悟る。
「……だから。ボクは別に止めないけど。ティースはきっと困った顔すると思うよ？」
「どうしてですか？　私はただ――」
聞こえてきたのはエルレーンとリィナ、二人の声だ。
嫌な予感がして、ティースは家のドアを開ける。
「あ、ティース様。おかえりなさい」
リィナは何故かベッドを運び込んでいる最中のようだった。
長身とはいえ華奢な体つきの彼女が重たい木のベッドを一人で運んでいるというのはなかなか異様な光景だったが、ティースとしては気になったのはそっちのほうではなく、
「リィナ……なにしてるんだ？」
「なにって――」
当然といわんばかりの顔でリィナは答えた。
「今晩からは私もこちらに泊まります。また昨晩のような襲撃があったら困りますから」
予想通りの返答に、ティースはちょっと顔を青くして、

「ちょ、ちょっと、それはまずいよ……」
「なにがまずいんですか？」
いつもにこやかなはずのリィナの表情が、今日はどことなく硬いように見えた。あまり機嫌が良くないようだ。
「なにがって。おい、エル――」
ティースは助けを求めてリィナの隣にいるエルレーンに視線を送ったが、彼女は仕方なさそうに肩をすくめてみせただけだった。
どうやらすでに説得を試みた後で、それでも効果はなかった、ということらしい。
「ティース様の安全を守ることは私の使命です！」
そんな二人のやり取りを見て、リィナが声を張り上げた。
いつも大人しい彼女のこういう態度は珍しいことだが、一度言い出したら聞かない頑固なところも彼女の一面である。
「いや、そうはいっても……やっぱまずいってば」
まあ、第三者の視点から見れば、この二人が寝所を共にしたところで“何か”が起きる可能性などゼロに近い――というより正真正銘のゼロであることはわかりきっていることで、当事者であるティースもエルレーンももちろんそう思っているし、リィナにいたっては、起きるかもしれない“何か”が何なのかすら予測できていない状態なわけだが――しかし。
そうであったとしても、ティースはそんな彼女の主張をすんなり受け入れるわけにはいかなかった。
理由は至極単純で、そんな状況ではとても心穏やかに睡眠を取れない、ということだ。
もちろん、旅の途中では彼女のそばで睡眠を取ることは珍しいことではない。が、その場合は大抵どちらか、あるいはエルレーンが起きて見張りをしているし、そもそも危険に対する緊張感もあるからそれほど意識することはない。
このように、暗く静かな家の中で二人きりになるのとは、まったく事情が違うのである。

「だって……ほら、着替えだって困るだろ。ここ広さはあるけど、仕切りがぜんぜんないんだし。わざわざ別の場所で着替えて寝巻き姿でここに戻ってくるのか？」

「それは――」

考えてなかったのかリィナは少し言葉を詰まらせたが、すぐに、

「ティース様の身の安全を守ることに比べたら些細なことです」

「いや、だから、昨日のは別に襲撃とかじゃないんだって。あれは――」

言葉に詰まる。

男女の仲やそういった行為について、人間とはかなりかけ離れた価値観を持つ彼女に対し、先ほどアメーリアから聞いた昨晩の行動の意味をどのように説明すればいいのか。

難しいことだった。

それに実際、そういった行為がすべて“子孫を残すために支払うべき代償”であり、男女を問わず、肉体的にも精神的にも苦痛を伴う“忌むべき行為”であるという彼らの価値観に照らし合わせてみれば、昨日のアメーリアの行いは確かに襲撃以外のなにものでもないのだ。

同じ人間であるアメーリアとでさえ、認識の違いを埋めることはできなかったというのに。

さらに食い違っているリィナを納得させる自信はティースにはなかった。

と。

そんな理由から言葉に詰まっていた彼を見て、

「とにかく。この村に滞在している間、夜はおそばに控えさせてもらいますから」

リィナは再びベッドを運び込む作業に戻ってしまう。

そんな彼女にティースは困り果てて、

「……おい、エル、なんとかしてくれよ。昨日のあれは襲撃とかじゃないんだって、リィナに説明してやってくれ」

結局、もう一度エルレーンに助けを求めて耳打ちする。
リィナと違い、彼女は王魔と人間の両方の価値観を理解している希少な存在である。だから、その食い違いを上手く説明できるのは彼女しかいない――と、そう思ってのことだったが、
「……無理だよ。ああなっちゃったリィナはもう止められないもん」
諦めた顔でそう言った後、エルレーンはちょっと視線を逸らした。
「それに、その、ボクだって人間のそういうことは一般的な知識として知ってるだけで、あのアメーリアって子の気持ちがわかるわけじゃないし。人間の男はそういうのを無条件に喜ぶって聞いたこともあるからティースの気持ちだってホントのところわかんないし――」
「いや、俺は――っていうか、昨晩のことはここ特有の儀式みたいなもので、別に悪意とか変な意図があったわけじゃないらしいんだ。だからそこらへんの違いをリィナに説明して――」
「……だ、だからぁ」
エルレーンは不満そうに言った。
「ボクだって“そんなこと”をリィナに具体的に説明したりできないってば。……人間の知識があるんだから、なおさらだよ……」
「え……あ」
そっぽを向いたまま、顔を少し上気させている彼女を見て、
「す、すまん」
慌てるあまり、どうやら少々デリカシーのない発言をしてしまっていたようだった。
「もぅ……」
そして数秒――気まずい沈黙。
ガタガタ、と、リィナがベッドを動かす音だけがしばらく響いていた。
「……とりあえず」
コホン、と、沈黙を破ったのはエルレーンのほうだった。
「リィナのアレはもう認めるしかないよ。諦めよ？」

「いや、だけど――」
それでもどうにか抵抗しようとしたティースに、エルレーンは言った。
「だからさ。ボクも一緒にここで寝るよ。それなら少しは気が楽でしょ」
「え……」
そんな無茶苦茶な、と、思ったが、よくよく考えて、それは名案かもしれないと考え直す。
この状況で一番問題となるのは、ティースがリィナの存在を意識しすぎてしまうということである。だからエルレーンも一緒にいるとなれば――彼女には少々失礼な物言いかもしれないが、きっと緩衝材のような役割を果たしてくれることだろう。
「着替えはほら、ティースが後ろを向いていてくれればそれでいいよ。それは野宿するときとそんなに変わらないし」
「まぁ……」
雰囲気が違うので同じとは言い切れなかったが、もちろんティースはそれについて――多少理性を働かせて精神が削られる可能性はあるものの――邪な考えを抱いていたりはしない。
それに、いずれにしても――
ティースは振り返る。
リィナはベッドの設置をすでに終えていた。汗一つ掻いてないところを見ると、彼女にとってあの数十キロあるベッドを動かすのは、花瓶の位置を移動させる程度のものだったのだろうか。
（……仕方ないか）
ため息を吐く。
どうやら、彼女の意思を変えるのは難しい。となれば、エルレーンの提案を受け入れるしか道はなさそうだった。
「リィナ！」
と、そんな彼女にエルレーンが駆け寄っていく。
「ボクもここで寝ることになったから。悪いんだけどボクのベッド

も運んでくれる？」
「え？　あ、はい。もともとそのつもりでした。エルさんだけ仲間外れにするわけにはいきませんからね」
当然のように頷くリィナ。
そんな彼女に、ティースはやれやれと苦笑しつつ、
「リィナ、俺も手伝うよ。エル。念のため、村長さんのところに行ってこのことを報告してきてくれないか。理由は……そうだな。離れていると仕事の打ち合わせがしづらくなるからとかなんとか、そんなんで」
「うん。わかった」
頷いて軽快に家を飛び出していくエルレーン。
なにか下世話な勘繰りをされるかもしれないが、まぁ仕方ない――と、ティースは半ば諦めた気持ちで、
「じゃあさっさと運び込んじゃうか。それが終わったら昼食を食べて、それから情報交換だ」
すると、リィナは少し視線を落とした。
「……すみません、ティース様。なんだかワガママを言ってしまったみたいで」
「え？　ああ、いいよいいよ。俺を守りたいって言ってくれる気持ちは嬉しいし。俺のほうこそ、こんなことで心配かけちゃって申し訳ない気持ちだよ」
それは紛れもないティースの本心だった。
「はい。……ありがとうございます」
リィナはようやく笑顔を見せる。
彼女らしい聖女のようなその微笑みに、ティースはつまらないことにこだわっていた先ほどまでの自分を恥じ、同時にほんの少し気分が高揚していくのを感じたのだった。

村長の家に招かれての昼食を終え、ティースたちは再び彼らの借り家へと戻ってきた。

だだっ広い部屋の奥にはベッドが三つ。二つと一つが部屋の隅と隅に離されていたのは、ティースのせめてもの抵抗の跡である。

リィナとエルレーンの二人はそれぞれのベッドの上に腰掛け、ティースは木の椅子を持ってきて彼女たちと向かい合っている。

「では私から。獣魔の被害にあった方々からお話を聞いてきました」

リィナがそう切り出して、情報の共有が始まった。

「負傷された十三名のうち、十名の方から当時の状況を伺うことができました。……洞穴の中で彼らを襲ったのは首の長い鴨のような鳥型の獣魔だったそうです。体毛は、暗い洞穴の中ですので見間違えや思い込みもあったのか、異なる証言がいくつかありましたが、総合したところ灰色かクリーム色の柔らかそうな体毛だったそうです」

「風の七十五族か？」

頭の中の知識を引っ張り出してティースがそう呟くと、リィナは頷いた。

「聞いた限りでは私もそうかと思いました。何人かが突風のようなものに飛ばされて負傷したという証言もありましたから」

「じゃあおそらく間違いないな」

風の七十五族は、鴨、というよりはアヒルに似た形の獣魔だ。体毛の色は灰色で、翼を持つが空を飛ぶことはできない。地面から頭までの高さは一メートルから一メートル半。羽を広げることで突風を発生させ、敵を攻撃する。足の速さは獣魔にしては遅いほうで、一般的な成人男性と同等程度だ。村長のアルフレッドが言っていたように逃げ足に自信のある人間であれば、遭遇して攻撃されたとしても逃げ切れる可能性は比較的高い。

しかし――と、ティースは少し考えて、

「エル。風の七十五族って森に住んでるイメージしかないんだけど、洞穴の中に生息することってあるのか？」

エルレーンは即座に答えた。
「あるよ。森に住んでることが多いのは確かだけど、彼らの主食は昆虫類だから、それが獲れる場所ならどこでも。鳥型だけど夜目は利くほうだし」
「そっか。なるほど」
ティースもデビルバスターとして魔の知識は豊富に持っているが、それでも魔界の住人だったこの二人には及ばないところもある。
そういった意味でも彼女たちのサポートは有用だ。
リィナが続ける。
「襲撃された場所ですが、いずれも洞穴を三十分ほど潜った辺りだったそうです」
「ああ、そういえば確認してなかった。負傷したのが十三人という話は聞いたけど、結局何回襲われたんだ？」
「四回です」
「そんなに、か……」
普通であれば一回、せいぜい二回襲われれば危険だと判断して、諦めるか、退治するためにデビルバスターを呼ぶかを考えそうなものである。金の採掘がこの村の生命線なのであれば前者の選択肢はなかったのだろうが、後者の選択をするまでにも随分と時間がかかっている印象だ。
閉鎖的な村で、外から人を呼ぶことにためらいがあったのか。
あるいは獣魔の危険性に対する認識が甘かったのか。
すぐにデビルバスターを呼ぶだけの財力がなかった、という理由も考えられるが――
「風の七十五族の生活範囲はそれほど広くないんだし、同じ相手に襲われたんだとすると、迂闊といえば迂闊だよね」
エルレーンもティースと同じ意見のようだった。
「襲ったのが別の集団だったって可能性もあるか？」
「複数の集団が同時に洞穴に棲み付いたってこと？」
「考えにくいか？」

「証言では」
と、リィナが補足する。
「襲われたのはそれぞれ別の場所だそうです。洞穴の中はかなり広いそうで、危険だとわかって別のルートを行こうとしたそうですが、大体同じ深さの、まったく別の場所で襲われてしまったみたいですね」
エルレーンが不思議そうな顔をして、
「じゃあ別の集団なのかなぁ？　今までいなかったのに、急にいくつもの集団が棲み付くなんて、なんだか変な話だね」
（……いや、もしかすると）
そんなエルレーンの疑問に対する回答を、ティースはなんとなく見つけていた。
が、ひとまずそれはまだ胸のうちに留めておく。
その後、リィナは集めてきた証言をさらに細かく語ったが、その他に有用と思われる情報はなかった。
「じゃあ、次はボクだね。村の人から世間話をしながら色々聞いてきたんだけど……」
と、エルレーンが話を始める。
「関係なさそうなことも一応話すよ。まずはこの村の状況についてだけど――」
そこで彼女の語ったことは、村の貧しい経済状況や、人口が減少し続けている現状など、ティースが村の景色を眺めて何となく感じていたことを裏付けるものだった。
「それとあの子、ヴァルキュリスの巫女についてだけど……一年ぐらい前に、母親と叔母、妹を火事で亡くしてるみたい」
「火事？」
「うん。かなりおおごとだったみたいだよ。下手をしたら巫女の家系が途絶えてしまうところだったって。人が三人も死んだんだから、それだけで充分おおごとだと思うけどね」
そういえば――と、ティースは村を見て周っているときに見つけ

た焼け跡を思い出す。
（アメーリアも妹がいるような話をしてたっけ……そっか。もう死んでるのか）
とすると、彼女は天涯孤独の身なのだろうか。
一人、笹舟を流していた姿を思い出して、ティースは少し切ない気持ちになった。
かつての巫女たちがそうしてきたように、彼女も子供を産めば少しは幸せになれるのだろうか――、と、余計なお世話だと思いながらも同情的になってしまう。
「巫女に対する信仰のようなものは、話した印象だと四十歳ぐらいを境に若い世代で急激に薄れてる感じだったね。彼女と同世代の子なんかは、どうせ自分たちと変わらない普通の人間なのに――って、悪口みたいなことも平気で言ってたよ」
「……そっか」
村長のアルフレッドは四十歳をとうに過ぎているはずだが、アメーリアに接する態度はそれほど丁寧ではなかった。とすると、その世代でも人によってはすでに薄れつつあるといえるのかもしれない。
「それと洞穴のこと。これはおばあちゃんがポツリと呟いていたんだけど、あの洞穴は何か特別な場所らしくて“ヴァルキュリスの顎門”って名前がついてるみたい」
「ヴァルキュリスの顎門？　……不吉だな。入ったらそのまま喰われてしまいそうじゃないか」
「おばあちゃんもそんなこと言ってたよ。その洞穴に入ることに対して、恐れ多いって」
「まあ、ヴァルキュリス山脈の中にまで続いている洞穴らしいから、ネーミングとしては正しいのかもしれないけど……そっか。恐れ多い、か」
その証言は、なんとなくティースの胸のうちにある推測の正しさを裏付けているように思えた。
そこでティースはふと思い出し、

「そういえばリィナ。今朝頼んだこと、見てきてくれたか？」
「……あ、言うのを忘れてました」
リィナはすみません、と言って、
「ティース様の言ったとおり、負傷者の自宅には採掘道具がありましたけど、どれも比較的新しいものばかりでした。少なくとも使い込んでボロボロという感じではなかったです」
「やっぱりか……」
「どうしたの？」
不思議そうな顔のエルレーン。
そんな彼女に、ティースはほぼ確信に変わった胸の中の回答を口にする。
「さっきの疑問だけど、エル。風の七十五族はやっぱり急に棲み付いたわけじゃなさそうだよ」
「どういうこと？」
「うん。おそらく――」
ティースはエルレーンとリィナを交互に見て、
「金の採掘がこの村の生命線だっていうのは、嘘だ」
「嘘？」
「ああ。……実際には、金が採れることが判明したのはごく最近なんじゃないかと思う。それで掘りに行ったら風の七十五族に襲われた。つまり風の七十五族は最近棲み付いたんじゃなくて最初から洞穴にいたんだ」
「あ、そっか。それなら複数の集団が棲んでいてもおかしくはないね。でも……どうして嘘だと思ったの？」
「理由は色々あるんだけど。俺も――というか、ディバーナ・ロウの情報部隊もこの村で金が採れるなんて話を知らなかった。盗掘者を寄せ付けないために村人以外に隠していた可能性もあるけど、最近は村から出て行く人が多いみたいだし、普通だったらいずれそこから漏れちゃうもんだ。それが漏れてなかったってことは、つい最近まで、村人すらそれを知らなかった可能性が高い。エルが聞いた

っていう老婆の証言からしても、村人にとってあの洞穴はもともと禁忌の場所だったと考えられる。……だから、さ。この金は昔からの村の産業なんかじゃなくて、最近判明した、危機的状況にある村を再興するための希望、といったところなんじゃないかな。もちろん、大事なものであることに変わりはないけどね」

「でも」

リィナが当然の疑問を口にした。

「どうしてそんな嘘をつく必要があったんでしょう？」

「それはわかんないけど……」

ティースは今朝の村長の顔を頭の中に思い浮かべて、

「僕らや――労働力として呼んだリージスさんたちに、固定報酬じゃなく相応の分け前を寄こせと言われるのを恐れたのかもしれないね。村の産業だということならまだしも、最近採れることが判明して、しかもどれだけの量になるかわからないとなると、そういうことを言い出す連中もいるかもしれない」

「そうだったとしたら、ティースはどうするの？」

「もちろん、どうもしないよ」

エルレーンの疑問に、ティースは笑って答えた。

「人里のすぐ近くに獣魔が棲み付いているのは確かだ。もともと棲んでいた獣魔たちには申し訳ないけど、人里に出て危害を加える恐れがある以上は放ってはおけない。依頼どおりに獣魔を退治して、予定どおりの報酬をもらって帰るだけだよ」

その言葉にエルレーンは頷きながらも、ちょっと不服そうに、

「でも信用されてないみたいってのは、なんだかすっきりしないね」

「仕方ないさ。俺たちは彼らにしてみれば完全な部外者なんだから。ただ、元から獣魔が棲んでいたとなると、どれだけの数がいるかわからないし、場合によっては浅い辺りに棲み付いている獣魔だけを退治して、深い場所での採掘は諦めてもらうかもしれない。それは必要に応じて村長さんに話をするよ」

ただ――、口に出しはしなかったものの、ティースは新たな疑問

を覚えていた。
“ヴァルキュリスの顎門”
その名称や、老婆がそこに立ち入ることを恐れていたらしいという話から、おそらく“ヴァルキュリスの巫女”に何らかの関わりがある場所なのだろう。
そんな、村に関わりの深い場所で、金が掘れることが判明した。
今更になって。
……ティースはそのことに少々違和感を覚える。
もし神聖な場所としてこれまで不可侵だったのなら、少なくともそこを採掘することになった何らかのきっかけがあったはず。
誰が誘導したのだろう。
巫女、だろうか。
不可侵な場所だったとしても、巫女だけは立ち入ることを許されていた可能性はある。
彼女がそこで偶然金を発見し、村長に伝え、そして村人たちが採掘に向かった。
そういうことだろうか。
結果、村人たちは獣魔に襲われ怪我をした。
そのことでティースが呼ばれ、巫女は自分が発端となった出来事だけに責任を感じ、村の救世主となるティースに対し“お礼”として昨晩のような行動に出た――
これで辻褄はそれなりに合う。
が――
（……なんかしっくりこないんだよなぁ）
事実にたどり着くにはまだ情報が足りない気がした。

……と。

村人が息を切らせながら飛び込んできたのは、そのときだった。
「大変です！　デビルバスター様！」

見知らぬ顔の初老の男は飛び込んでくるなり、額とこめかみに汗を滴らせながら震える声を張り上げて、
「洞穴の中から、獣魔が――！」
「！」
その言葉を最後まで聞く前にティースは愛剣“細波”を手に取り、リィナ、エルレーンと視線を交わし合っていた。
「リィナは村人たちの安全確保を優先！　エルは俺と一緒に迎撃だ！」
二人の返事を聞きながら家を飛び出す。
外に出ると、向かって左手の道から数人の村人たちが逃げてくるのが見えた。
“ヴァルキュリスの顎門”のある方角だ。
（風の七十五族なら足は遅い。これなら被害が出る前に――！）
そうして辿りついた、“ヴァルキュリスの顎門”の前。
「！？」
そこにいたのは風の七十五族――アヒルのような小型獣魔――ではなかった。
「あれは――！」
狼のような容貌。
長い鼻先。
その姿を目にした瞬間、ティースの背中を戦慄と緊張が駆け抜けた。
「まさか、“ウィルヴェント”――！？」
風の二十七族“ウィルヴェント”――それは“風穴を開ける者”と呼ばれ、過去に多くのデビルバスターの命を奪ってきた種類の獣魔だ。
咆哮が村の中に響き渡る。
その背後にある暗黒の洞穴“ヴァルキュリスの顎門”は、今まさ

に、ティースたちをその巨大な顎で飲み込まんとしているかのように映っていた――。

その4『暗躍する意志』

二十番台の獣魔は手だれのデビルバスターにとってさえかなりの難敵とされている。

その存在が事前に知れている場合は複数のデビルバスターで退治に向かうのが半ば常識とされており、それぞれの特性に応じた罠や作戦を用意することも多い。逆に言えばそれは、一人で何の準備もなく出会ってしまった場合、命を落とす可能性が非常に高い相手ということだ。

そんな、デビルバスターにさえ死を予感させる獣魔――風の二十七族“ウィルヴェント”の姿を目の当たりにして、ティースは戦慄が背中を駆け上っていくのを感じていた。

（これほどの獣魔が潜んでいるなんて……）

ウィルヴェントは体格こそ普通の狼を一回り大きくした程度のものだが、風の獣魔の特徴の一つである高い敏捷性に加え、牙のない口から放たれる長細い螺旋状の“穿つ風”は、フルプレートすら容易に貫く必殺の一撃だ。

デビルバスターになってまだ一年未満の彼には手に余る相手である。

（……かといって、下がるわけにはいかない）

ティースはグッと愛剣“細波”を握り直した。

彼の背後では村人たちが息を潜めている。もしもウィルヴェントが彼らにその照準を定めたら最後、この凶悪な獣魔から逃げ延びられる可能性は無きに等しい。

この規模の村なら、二時間もあれば全滅だろう。

（やるしか――）

と。

「……あれはウィルヴェントじゃないよ、ティース」

「え？」
そう言ったのは隣のエルレーンだった。
「似てるけど違う。よく見て。ウィルヴェントなら四つあるはずの耳が、退化しちゃってて二つしかないし、口には牙が生えたまま。……あれはウィルヴェントの亜種、風の三十七族だよ」
言われて視線の先の獣魔を改めてよく見てみると、ウィルヴェント――風の二十七族であれば深緑色であるはずの体毛は僅かながらそれよりも黒に近く、耳の数も牙の有無もエルレーンの言うとおり、その獣魔がウィルヴェントであることを否定していた。
「風の三十七族。……そうか」
どうやらそのシルエットを見ただけで動揺し、思い込んでしまっていたようである。
未熟者だと密かに反省するティースに、エルレーンは続けて、
「間違えるのも無理ないよ。似てるし、それに風の三十七族は魔界でも希少種だから。こっちの世界で見ることなんて滅多にない」
風の三十七族は身体能力自体はウィルヴェントとほとんど変わりないが、身にまとう魔力は本物の半分程度とされ、その最大の脅威である“穿つ風”を持たない。振られた番号が大きくなっていることからもわかるように、ウィルヴェントに比べればかなり組し易い相手である。
「でも手強い相手に変わりはないから、気をつけて。今のボクじゃ、あのレベルの魔力は相殺しきれない」
「ああ、わかってる」
もとより、このティースという男は実力の過信による油断などとは無縁の男だ。
剣を構えたままにらみ合う。
互いの距離はおおよそ三十メートル。周囲は比較的平坦で動きを阻害するものは少ない。足場が悪い地形ではどうしても四足の相手に分があるため、これはティース側に有利な条件だ。
「エル。あの獣魔、“つがい”の可能性はあると思うか？」

風の二十七族及び風の三十七族は基本的に群れることはないとされ、実際こちらの世界で発見されるときは大半が単体での目撃だ。
ただ、それにも例外がある。
その獣魔が“つがい”――つまり夫婦だった場合だ。
普段群れることのない風の三十七族だが、“つがい”となった相手とは生涯をともに行動しつづけると言われている。こちらの世界での目撃例は少数だが、その場合はもう一頭の獣魔の存在も念頭に置く必要があった。
しかし、そんなティースの懸念にエルレーンは首を横に振って、
「たぶんないと思う。あれは見たところ雌のようだけど、つがいの場合、敵の矢面に立つのは基本的に雄のはず。少なくとも雌だけが出てきて雄の姿が見えないってことはないはずだよ」
「そうか」
少し安堵して、
「エル、もう少し下がって援護に徹してくれ。万が一お前が狙われても、まともに相手するなよ」
「了解。キミに任せるよ」
エルレーンの気配が後ろに下がっていくのを感じながら、ティースはそこから一歩も動かずに風の三十七族を睨み続けた。
背中にはまだ、ここから離れようとする村人たちと彼らを誘導するリィナの声が聞こえてきている。
（もう少し、離れるまでは……）
単純な直線の競争でいえば、ティースの足は風の三十七族のそれには到底及ばない。だからその獣の視界に村人の姿があるうちは、なるべく戦端を開きたくなかった。
その気になれば一瞬で詰められる程度の距離を保ったまま互いに牽制し合い、そのまま二分ほど経過しただろうか。
やがて――相手は意外な行動に出た。
「……なに？」
突然唸り声を止めクルリと背中を向けた風の三十七族が、背後の

洞穴――ヴァルキュリスの顎門の中へと戻っていったのである。
「え……」
驚きの声は彼の後ろにいるエルレーンの口からも漏れていた。
ティースよりも獣魔に詳しい彼女にとってさえ、それは意外な行動だったようだ。
（追うか？　いや――）
ティースがチラッと背後に視線を向けると、道の向こうでリィナが足の悪い老婆を含む家族を誘導しているのが見えた。
ここで追って無闇に刺激するのは得策ではない、と、判断する。
剣を手にしたまま、ぽっかりと闇色の口を開けた洞穴の入り口を油断なく注視し、そこに変化が表れないことを確認すると、
「エル」
「うん。気配はないよ」
彼女の言葉に頷き返し、ティースはゆっくりと洞穴の入り口へ近付いていく。
エルレーンもその後に続いた。
「でも……ヘンだ。あの獣魔、完全にボクらを敵視してたみたいなのに、何もなかったみたいに引き下がるなんて」
「あの手の好戦的な獣魔にしちゃ珍しいな」
「うん。ウィルヴェントもそうだけど、あのクラスになると格上の相手にも平気で食って掛かっていくから。野生の風の三十七族が人間相手に引き下がるなんて普通は考えられないんだけど……」
言葉を交わしながらも注意深く洞穴の入り口まで辿りついた二人。
思ったとおり、獣魔の気配は完全に消え失せていた。
ただ――
「っ……！」
ティースは息を呑む。
そこには濃厚な血の匂いが漂っていた。
「これは――」
外から斜めに射し込む陽光が、洞穴の入り口付近に撒き散らされ

た血の跡を照らしている。
その、少し奥。
深遠の闇の縁に、ティースが偵察したときには無かったはずの黒い塊が転がっていた――

死体発見の報を聞いて、村長アルフレッドは驚愕に目を見開いた。
「ま、まさか死人が出るなんて……」
腰が抜けたようにソファに座り込み、ガックリと項垂れる。
そのショックの大きさを表すように顔面は蒼白だった。
「……」
そんなアルフレッドの後ろには、初めて訪れたときと同じようにアメーリアが佇んでいる。彼女はアルフレッドのように大きな反応を見せはしなかったが、少しはショックを受けているのかやや目を伏せていた。
ティースは小さく頭を垂れて、
「僕らがいながら、こんなことになってしまい申し訳ありません。……犠牲となった方の身元は確認できますか？」
洞穴の入り口から発見されたのは若い男の死体だった。喉から顔面にかけて鋭い爪と牙の跡がついていて人相の確認できない状態だったが、この狭い村だ。若い男が一人いなくなっていればすぐに身元がわかる。
が――
「すぐに確認したのですが……」
と、客間の入り口付近にいた初老の女性が困惑の表情を浮かべて、
「村の男はみな無事なんです。いなくなった者は一人もいません」
「そうですか。なら――」
その返答はティースの想定の範疇だった。
そんな彼の想像を裏付けるように、部屋の外から荒々しい足音が

聞こえてくる。
「……村長！　聞いてねぇぞ、こんな話！」
ドアを蹴破るようにして飛び込んできたのは、労働力として外から呼ばれた一団のリーダー、リージス＝マクニエルだった。
「……おぅ。デビルバスターの兄ちゃんもいたか。ちょうどいい」
リージスは入ってくるなり、長方形をイメージさせる大柄な体を怒らせながら部屋の中心まで進み、そこにあったテーブルに大きな手の平を打ち付ける。
「おい、村長さん！　村の中は絶対に安全って話じゃなかったのかい！」
「ま、待ってくれ。それは――」
その剣幕に、蒼白になったアルフレッドが何事か言おうとするのを遮って、
「リージスさん。犠牲になったのはやはりあなたの？」
問いかけたティースを振り返って、リージスは怒りを隠そうともせずに答えた。
「ああ、そうよ！　ウチの若いモンだ！」
「やっぱりそうですか……」
はっきりとした記憶ではなかったが、死体の着ていた服はティースにも微かに覚えがあったのだった。
それに――
「さぁ、きちんと説明してくれ！　事と次第によっちゃタダじゃ済まさねぇぞ！」
「お、落ち着いてくれ。こっちも何が何やら混乱していて――」
「混乱だぁ！？　一人死んでんだぞ！　なにを悠長なこと言ってやがる！」
「こ、これまで村の中はほぼ安全だったんだ！　あんな凶暴な獣魔が出てきたのも初めてで、私だってこんなことは想定外――」
「想定外で済むかよ！　てめぇまさか、危険なのを承知の上で俺たちに――！」

「待ってください、リージスさん」
「あぁ!?」
よほど興奮しているのか、リージスは苛々した顔でティースを振り返る。
その剣幕にティースもやや押されてしまったが、
「その……言いにくいことですが、確認して欲しいことがあります」
「確認?」
「ええ。亡くなった彼があんな場所にいた理由です」
「……どういう意味だ?」
ティースに対するリージスの声はアルフレッドに向けたものに比べればかなり落ち着いてはいたが、それとは別の不快感のようなものが混じっていた。
続ければ、さらに相手の気分を害すことはティースにもわかりきっていたが、それでも続けないわけにはいかず、
「あなたたちの宿泊している家はあの洞穴の近くではないですよね。にも関わらず、彼があんなところで遺体で発見されるなんて不自然ではないですか?」
「……なんだそりゃ。つまりなにか? あいつが無断で洞穴に入って盗掘しようとしてたとでも言いてぇのか?」
リージスの顔が怒りで赤くなる。
「おい、兄ちゃん。いくら恩人だっつっても根拠の無いデタラメを口走ったらタダじゃおかねぇぞ」
と、そんな彼にティースは少し気圧されつつも、
「こ、根拠はあります。彼を襲ったと思しき獣魔が村の中まで足を踏み入れた様子がないんです。これは足跡を見ればすぐにわかります。つまり彼は村の中で襲われてあそこまで連れて行かれたわけではなく、洞穴の入り口付近か、あるいはその中で獣魔に襲われたことになるんです。……村長さん。あなたは彼に採掘の開始を言いつけたのですか?」
「そ、そんなこと言うはずがない! それはあなたに獣魔の退治を

してもらってからのつもりだったんだ！」
「……」
リージスが村長を睨みつける。
が、やがて眉間に深い皺を寄せながらティースに向き直った。
「……それで？」
「亡くなった彼がどうしてあんなところにいたのか……それも今となってはどうでもいいです。僕がデタラメを言っているのだと思ってもらっても構いません。ただ、あなたが連れてきた皆さんに――あなたも含め、決して洞穴に近付くことのないよう改めて伝えてください。僕は――」
ティースは奥歯を噛み締め、グッと拳を握り締める。
「とにかくこれ以上犠牲者を出したくない。協力をお願いします」
「……」
リージスはやや納得できない表情のままでティースを睨むようにしていたが、やがて軽く唇を噛み、何かを振り切るようにして背中を向けると、来たときと同じように荒々しい足音を立てて部屋を出て行った。
そんなリージスを見送って、ティースはなんともいたたまれない気持ちになる。
……無惨な死体だった。理由はどうあれ、仲間の死に納得できないリージスの気持ちはティースにも理解できる。
そんなリージスが去ると、アルフレッドは彼の剣幕がよほど恐ろしかったのか安堵の息を吐いて、
「ふぅ、まったく。気持ちはわからんでもないが、私に八つ当たりされても……ねぇ」
「……村長さん」
ティースは、リージスの背中を見送った視線をそのままアルフレッドのほうへ移動させると、
「お願いがあります。僕らが泊まっている家を変えさせてください」
アルフレッドは疑問に眉をひそめて、

「というと？」
「洞穴から一番近い場所にポツンと建っている家があると思います。人が住んでいるようでしたが、そこを空けてもらいたいんです」
「ああ……なるほど」
アルフレッドはティースの意図を察したらしく、ふむ、ふむと二度ほど頷いて、
「また洞穴から獣魔が出てこないとも限りませんし、我々としてもそのほうが有難いですが――」
言葉を切って、くるり、と後ろを振り向いた。
「アメーリア。構わないかな？」
「……君の家だったのか」
少し驚いてティースがアルフレッドの後ろに佇む少女を見ると、
「ヴァルキュリスの山々に祈りを捧げる仕事がありますので出て行くことはできません。ただ、ティーサイト様が宿泊なさることについては特に問題はありません」
と、アメーリアは答えた。
ティースは少し難色を見せて、
「できれば君にも離れた場所に避難してもらいたいんだけど――」
「できません」
抑揚のない口調ながら、きっぱりとアメーリアはそう言った。
……どうやら説得は難しそうだった。
アルフレッドが間に割って、
「あの家はもともと四、五人は楽に生活できるだけの広さがあります。私の口から巫女としての仕事を放棄しろとも言えませんので、どうかこの子の言うとおりにしてはいただけませんか」
と、ようやく戻った好々爺の笑顔でそう言った。
「この子も何かティーサイト様をおもてなししたいと、昨日から言い続けておることですし――ああ、いや、別に昨晩のようなことを言っているのではありません。それについては私からもキツく叱ってやったところですから」

いまさら言わなくてもいいことを――と、ティースはアルフレッドを恨みたい気持ちになったが、幸いその話題が続くことはなく、
「今日の夕食はこの子に振舞わせましょう。こんな辺ぴな村で気の利いた料理が出せるわけではありませんが、こう見えてなかなかの腕前でして」
普段は振舞う相手もいないのですがね――と、アルフレッドはまた一人で笑った。
ティースがアメーリアを見ると、彼女は無言で小さく頭を下げる。
……仕方がない、と、ティースは覚悟を決めて、
「わかりました。サポートの二人も一緒に泊まりますので、あとで三人分の寝床を用意させてください」
「ベッドはあります」
アメーリアがそう言うと、アルフレッドが補足して、
「少し前までこの子の母と叔母、妹が暮らしておりましたので、ちょうど三人分の空きがあります。……掃除はしてあるのか？」
アメーリアが頷くのを見て、
「そうか。だったら……ティーサイト様。手荷物だけ持っていっていただければすぐにでも泊まれる状態です」
「わかりました」
アメーリアの表情を窺いながら、ティースは頷いた。
……一年ほど前に火事で三人の家族を亡くした、というのはどうやら事実だったらしい。
その話題が出た瞬間、ティースは思わず彼女の表情を窺ってしまったのだが、特に目に見える変化はなかった。
彼女の中ではもう整理されている出来事なのだろう。
そんなことを考えながら、ティースは視線を横にスライドさせて外を見る。
（日が沈むまで、あと三時間弱ってとこか）
その三時間の間にやるべきことを頭の中で思い描きつつ、
「では早速準備します。洞穴に入るのは予定どおり明日、日が昇っ

てすぐになるかと思います」
そう告げると、アルフレッドは深々と頭を下げて、
「よろしくお願いします。……アメーリア。くれぐれも失礼のないようにな」
「はい」
相変わらず淡々とアメーリアは頷いた。

洞穴の入り口を見張らせていたリィナとエルレーンに今後の方針を伝え、ティースはその足を村の南側、村の入り口ともいうべき辺りへと向けていた。
向かった先にあったのは、小屋のような小ぢんまりとした家だ。
軒には根菜が干してある。
脇には小さな畑と、元は畑だったらしき大きな荒れ地。
入り口の階段を三段上がる
足を乗せるたび、ギィ、ギィと壊れそうな悲鳴を上げた。
腐りかけの木製の扉を軽くノックすると、家の中からはしわがれた老婆の声が返ってくる。
「どちら様で？」
「はじめまして。ティーサイト＝アマルナといいます」
「ティーサイト様？　ああ――」
ギシギシと足音がして、玄関のドアが向こうから開く。
「あ……」
「はじめまして、ではありませんね。デビルバスター様」
そこから顔を出した老婆はそう言って、顔中が皺だらけになるほどに破顔する。
「あなたでしたか。昨日はどうも」
その老婆は、ティースがこの村に来たとき、村長の家まで案内してくれた人物だった。

「少しお伺いしたいことがありまして。お時間をいただいてもいいですか？」
「私に？　はて、なんでしょう？」
不思議そうな顔をしながらも、老婆はどうぞどうぞ――と、ドアを大きく開いてティースを中に招き入れる。
老婆の後に続き、ティースは家の中に入った。
狭い家だった。居住スペースは六畳ほどだろうか。右手にベッドがあって、左手の暖炉には小さな火が灯っている。暖炉の前には真ん中に大きな亀裂の入った木のテーブルと、切り出したままの形の木製の椅子。
「どうしましょう。何かおもてなしできればよかったのですが、あいにくと今は何も用意できておりませんで――」
「ああ、いえ、お構いなく。お話を聞きたかっただけですから」
困った顔の老婆に、ティースは軽く手を振ってそう答える。
すみませんねぇ、と言って、老婆はテーブルに手を付きながら椅子の上に腰を下ろした。
歳は六十歳ぐらいだろうか。少し腰が曲がっているものの、この年齢にしてはしっかりとした足取りだった。
「それでお話というのは？」
「午前中にもエル――私の仲間が色々とお話を伺ったかと思いますが……」
エルレーンによると、この老婆は、あの洞穴“ヴァルキュリスの顎門”に入ることに対して否定的な発言をした人物らしかった。
それだけではなく。
「あなたは先代や先々代の巫女と親しい仲であったと伺いました」
「……親しいだなんて、恐れ多いことです。ただ、巫女様が何かと気にかけてくださっただけ。先々代の巫女様と同じ年に産まれたというだけのことです」
「その、先代の巫女が亡くなった一年前の火事のことも、あなたから聞いたと伺いましたが……」

そう尋ねると、老婆は肩を震わせた。
「あれは――天罰です」
「天罰？」
「村人たちの無信心にヴァルキュリスが怒った結果なのです」
「……亡くなったのは巫女とその親類だと聞きましたが」
「巫女様が村人の代わりになって、怒りをその身で受け止めてくださった。その結果あのような恐ろしいことに……」
痛ましいことです――と、老婆は目を伏せた。
ティースは続けて尋ねた。
「ヴァルキュリスの顎門というのは、神聖な場所なのですね？」
「私などには詳しいことはわかりません。ただ、巫女様が年に一度、ヴァルキュリスと意志を交わすために訪れる場所だと、そう聞かされておりました。巫女様以外の者が足を踏み入れると、ヴァルキュリスの怒りがたちどころに村を襲う、と」
「そのことは今も、村の皆さんの共通の認識なんですか？」
「今の人はあまり信じておらんようです」
「そうなったのには、何か原因が？」
「それは……」
そう言って老婆は暖炉に灯った小さな火に視線を移す。
「……わかりません」
「そうですか」
嘘をついているようにティースには思えたが、それを追求することはしなかった。
その代わりに尋ねる。
「村の人がそれを信じなくなったのは、だいたいいつ頃からなんです？」
「……十五年ほど前、でしょうか」
「わかりました」
ティースが聞きたかったことは、それでほぼすべてだった。
それが今回の件にどう関わるのか、そもそも関わりがあるのかど

うかさえもわからない。
ただ、いくつかの疑問が解けたことだけは確かだった。
「……デビルバスター様」
礼を言って立ち上がったティースを、老婆が呼び止める。
「この村は、ヴァルキュリスの怒りで滅んでしまうのでしょうか……？」
「……それは僕にはわかりません。ただ、どうなるとしても、それはヴァルキュリスなんかじゃなく、人間の意志によるものでしょう」
たった今聞いた話によって、古くからあの洞穴で金を掘っていた——という村長の嘘はもう明白となった。
ただ、その嘘を表に晒す気はティースには今のところない。それが悪いものなのかどうかも判断はできない。
何もせずにいれば村が衰退する一方であることは明らかで、村長の嘘はおそらく——それが全体を思ってのことか個人の利権を守るためかは別として——村を存続させるためのものだろう。
村をどうするかは村人たちの考えることだ。
今のままが幸せな者もいれば、資金を手にしてさらなる発展を願う者もいる。……中には、村が無くなってしまったほうが幸せになれる者もいるのかもしれない。
いずれにしても、それは部外者であるティースの口出しするところではなかった。
ただ。
ティースは不安そうな顔の老婆に向かって、言った。
「僕はただ、魔の被害が村の皆さんに及ばないよう全力を尽くすだけです。……僕は魔を狩る者——デビルバスターですから」

アメーリアの家はスピンネルの村の最北端、ヴァルキュリスの顎門の入り口から歩いて五分弱の距離にあった。

ティースが旅の荷物をまとめてやってきたのは、日が沈む一時間ほど前のことで、どうやら三人の中では一番最後のようだった。

その家は他の家とは明らかに装いが違っており、建物自体、村長の家と同じようなしっかりと造りになっている他、家の周囲は高さ二メートルほどの木の柵に囲まれていて、その入り口には錠がかかるようになっている。

その光景は、今がどうであれ、ヴァルキュリスの巫女がこの村にとってどれほど特別だったかを如実に表したものといえるだろう。

柵の入り口には鍵がかかっていなかった。

ティースはそれを押し開けて、そのまま中へ入っていく。

しっかりとした階段を三段上がり、綺麗な木製のドアを手の甲で軽くノック。

「ティース様？」

先に到着していたリィナが顔を出し、家の中へと招き入れられる。

広い家だ。

入ったところは十二畳ほどの広さ。右手に二つ、正面に一つ、おそらくは各部屋に続く扉があり、左手の奥からは人の気配と食欲をそそる匂いが漂ってきていた。

「ティース様の寝室はこっちです」

と、リィナが右手の手前の扉を開ける。

中にはベッドと寝具以外に何もなかったが、一人で泊まるには充分だ。

荷物を置いて、

「エルとアメーリアはあそこ？」

と、部屋を出て正面の奥まったスペースを指す。

「仲良く夕食の準備をしてますよ」

「仲良く？」

「はい。アメーリアさんはそういったことに興味があるみたいで、エルさんが色々と。といってもお屋敷と違ってここの設備でできることは限られているみたいですけど。……どうしたんですか？」

「あ、いや」
微笑みながら話すリィナの顔を思わず凝視していたことに気付き、ティースはそんな彼女から少し視線を逸らして、
「こんな短時間で、ずいぶん打ち解けたんだなと思ってさ」
「え？　……あ」
リィナは彼の疑問をすぐに悟ったらしい。
少し苦笑いして、
「私も最初は警戒してたんです。昨晩あんなことがありましたから。でも……」
と、厨房らしき場所に視線を移動させる。
そこからはエルレーンの明るい声と、相変わらず物静かなアメーリアの声が聞こえていた。
「少し話をしたら、すぐに悪い人じゃないとわかりました。……やっぱりティース様がおっしゃっていたように、私などにはわからない理由があったのですね」
「……そっか」
リィナとアメーリアのことについては、ここに泊まる上での一番の懸念だっただけに、屈託のない彼女の笑顔を見て、ティースはホッと胸を撫で下ろしたのだった。
と、そこへ、
「あ、ティース！」
エルレーンが奥から顔を覗かせる。
その後ろからはアメーリアが、金属製の鍋らしきものを携えて姿を現した。
どうやら今日の夕食は煮込み料理らしい。少し冷え込んでいるこの夜にはもってこいだ。
ティースは視線をアメーリアに向けて、
「こんばんは、アメーリア。どのぐらいの期間になるかわからないけど、お世話になるよ」
「はい。たいしたおもてなしはできませんが……」

そう言ったアメーリアの顔は、川で笹舟を流していたときの幼い彼女のものだった。
自宅だからか。
あるいはエルレーンやリィナと打ち解けたからなのか――。
ティースは、そんな彼女の歳相応の表情を見て、やけに安堵している自分がいることに気付いた。
――どうやら彼は、自分が思っている以上にアメーリアのことが気にかかっているようだ。
村長の傍らに佇む彼女。
川で笹舟を流していた彼女。
老婆から聞いた話。
この村における立場。
……彼女にとっての幸せ。
ハッと頭を振って、ティースはそれらの考えを吹き飛ばす。
――それもまた、この村の行く末と同じ。部外者の彼が無闇に口を出すことではないのだろう。
そんな自分を誤魔化すように、ティースは口を開いた。
「準備も出来てるみたいだから、早速夕食にしようか。俺も腹ペコだよ」
そんな彼の提案に反対する声はもちろんなく。
鍋の中身は野菜と鶏肉のシチューだった。
この村で鶏肉はかなりの贅沢品だろうとティースは思ったが、そのことは口には出さず、ただ美味であることを伝えるとアメーリアはほんの少しだけ表情を崩した。
そして、
「どうぞ」
「……え？」
お代わりをよそったアメーリアが突然、鶏肉の乗ったスプーンをティースの鼻先に突き出してくる。
ティースは困惑して、

「あ、いや。そういうのは――」
「熱いのは苦手ですか？」
勘違いしたのか、アメーリアはいったん息を吹きかけて冷ましてから、再びそれをティースの口元へ差し出してくる。
「いや、そういうことじゃなくて。自分で食べられるから……」
ティースがそう言って断ると、アメーリアは困った様子で、
「させてください、ティーサイト様。私には本当にもう、このようなことでしか貴方に報いる手段が見つからないのです」
「だから――いや」
さらに断ろうとして、彼女の表情を見たティースはそれを考え直す。
（……昨晩みたいなことがあるよりはマシか）
どうやら彼女は本当に、彼に対して何かしら報いたいと考えているようだった。とすれば逆に、無茶なもの以外は叶えてあげたほういいのかもしれない――と、ティースはそう考えて、
「じゃあ、一口だけ……」
そう断って、彼女の差し出したスプーンに口を付ける。
……相手が十四歳の子供だとわかっていても、恥ずかしさで心臓の鼓動が速さを増した。
いや。
十四歳といってもアメーリアは大人びた外見をしているし、そもそも十四歳は状況によっては充分に大人と扱われてもおかしくない年齢である。それでもティースが彼女のことを子供と表現するのは、ただ単に、彼自身が彼女のことを子供と思い込みたいだけなのだ。
すぐにパッと顔を離し、咀嚼してゴクリとそれを飲み込むと、
「……うん。おいしい」
正直なところ、味を感じている余裕はなかった。
それでも、ホッと胸を撫で下ろすような仕草をしたアメーリアを見て、こんなに喜んでもらえるなら多少恥ずかしいぐらいはいいか――と、ティースは考えてしまう。

どこまでもお人よしな男なのであった。
――と。
「……」
一人。
そんな彼らの様子を不思議そうに見つめている者がいて。
「ティース様――」
「……え」
別の方向から、やはり同じように差し出されたスプーン。
何が起きたのかと、ティースはそのスプーンの先にいる人物を見て、
「リ、リィナ？　いったい何の真似だ？」
「どうぞ、ティース様」
ニッコリと笑顔を浮かべたリィナがそこにいた。
まるで邪気のない聖女の微笑み。
その隣でエルレーンが、あちゃぁ……という顔をしている。
「食事を食べさせるという行為は看護のときばかりではなかったのですね。……考えてみれば、看護は愛情をもって行うものですし、もっと早くに気付くべきでした。すみません」
「い、いや、どちらかというと元の考えのほうが正し――」
「どうぞ、ティース様。……あら？」
横からもう一つのスプーンが差し出される。
「……」
アメーリアが無言でティースを見つめていた。
「ア、アメーリア……」
さぁっとティースの血の気が引いていく。
「い、いや、だから一口だけって――お、おい、エル！　二人に何か言ってやってくれ！」
「……ボクも参加したほうがいい？」
仕方ないな、という顔をしながらも、エルレーンはティースをからかうように悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「じょ、冗談はやめてくれ！　誰か――」
と。
そんな助けを求めるティースの叫びが聞こえたわけではないだろうが――
「邪魔するぜ！　デビルバスターの兄ちゃんは――」
ノックの後、返事も待たずに入ってきたのはリージスだった。
その乱暴な闖入者は室内を見回し、テーブルで繰り広げられている惨劇（？）に目を止めると、
「あれ。なんか悪いタイミングだったか？」
「そんなことないです！　リージスさん！」
大義名分を得て、ティースは勢いよく席を立った。
「あ……」
残念そうな二人の声を聞かなかったことにして、ティースはリージスのもとまで歩いていくと、
「そ、それで。突然どうしたんですか、リージスさん？」
「……なんだ。美女を三人侍らせていい気分になっていたのかと思いきや、そういうわけでもなかったみてぇだな？」
昼間のような剣幕はなく、それどころかリージスは軽い口調でニヤリと口元を緩めた。
「揃って俺をからかってただけですよ……」
「俺ならその状況をきっちり楽しんでやるんだが、世の中上手くいかねぇもんだな。……兄ちゃんはアレかい。もしかして女嫌いってやつなのかい。男が好きって風にも見えねぇけどな？」
「そ、そんなわけ――って、そんなことより！」
「ん。ああ――」
リージスはまだテーブルの様子が気になっている風だったが、リィナとアメーリアが諦めて自分の食事に戻ったのを見て、再び目の前のティースに視線を合わせると、
「さっきのこと謝りにきたんだ」
「謝る？」

「あんたを嘘つき呼ばわりしたことだよ」
そう言って後ろ手にドアを閉める。
「どういうことですか？」
ティースがそう尋ねると、
「あれから仲間全員に問いただしたんだ。まさか目を盗んで金を掘りに行こうなんて考えてるヤツはいねぇだろうな、ってよ。……そうしたら」
苦々しい顔をしてリージスは視線を横に逸らした。
「一人、聞いてやがったんだ。死んだアイツが“それ”をやろうとしてたってことをさ。あまつさえ、そいつはアリバイ作りに協力してて、上手くいったら分け前をもらう約束もしてたらしい。……だから、あんたの言うとおりだった。アイツはきっと勝手に金を掘りに行ってそれでやられちまったんだ」
リージスは悔しそうだった。
おそらくは仲間を信じていたのだろう。それがあっさりと裏切られてしまって、しかしその相手はもうこの世にはいない。
その複雑な心中は、鈍い鈍いといわれるティースでさえ察して余りあるものだった。
「村長さんにも謝りに行ってきたとこだ。ウチの馬鹿が迷惑かけてスマン、ってな」
「……」
そんなリージスに対し、ティースはかけるべき言葉を頭の中で巡らせて、
「リージスさん――」
それを口に出そうとした。
が、それよりも早く、
「けど――」
リージスは悔しそうに唇を噛み締めて続ける。
「自業自得だし、アイツは俺が思ってたようなイイヤツじゃなかったかもしんねぇけど。でも、あんな無惨な死に方しなきゃならない

ようなヤツでもねぇ……俺は今でもそう思ってんだ」
「……はい」
その言葉はティースが彼にかけようとした言葉とほぼ同じだった。
そんなティースの両肩にリージスは軽く手を置いて、
「だから、頼む。アイツの仇をとってやってくれ。あんな暴言吐いた後でムシのいい話かもしんねぇけど……」
少し声が震える。
屈強な男の目が僅かに潤んでいるようにティースには見えた。
――仲間であること以外に、死んだ男とリージスがどんな関係だったのかティースにはわからない。が、死者の無念を思うリージスの心は、ティースの琴線を充分に震わせた。
「もちろんです、リージスさん。犠牲になった人の無念を晴らし、生きている人をその脅威から守る。……それが僕らデビルバスターの仕事ですから」
「……頼む」
グッ……と、一瞬だけティースの肩を強く握り、リージスは離れた。
「俺に協力できることがあったらなんでも言ってくれ。足手まといにしかならないかもしれんが、暴言吐いちまった借りもあるしな。……嬢ちゃんたちも、邪魔したな。今日はもう来ねぇから存分にさっきの続きでもやってくれや」
「ちょっ……リージスさん！」
「んじゃな」
最後に意地の悪い笑みを浮かべて、リージスは出て行った。
「……まったく」
どうして自分はこうも他人にからかわれるのだろうか――と、ティースは理不尽な思いをしつつも、先ほどのリージスの表情を思い出し、明日からの戦いへの決意を新たにするのだった。

なお、幸いにしてその日、リージスの言う“続き”が行われるこ

とはなかったが、リィナは終始、残念そうな顔でティースを見つめ続けていたようである。

その5『ヴァルキュリスの顎門（あぎと）』

不気味なほどの静けさとひんやりとする風。付近には黒くなった血の跡がはっきりと残っていて、無惨に散らされた命の無念をティースに思い起こさせる。

その洞穴の入り口は生理的にも嫌な雰囲気を漂わせていた。

しかし。

もちろん怯むわけにはいかない。

明かりと食糧、そして愛剣“細波”。その他、応急手当などに用いるいくつかの道具はパートナーであるリィナが持つ。

「じゃあ、エル。あとは頼む」

と、ティースは見送りにきたエルレーンを振り返ってそう言った。

――ティースたちが洞穴に潜った後、獣魔が嫌うとされる魔除けの香を入り口付近で焚く手はずになっていたが、それは一種のおまじないのようなものであって絶対的な効果があるわけではない。

エルレーンは洞穴から獣魔が現れたときのための留守番だった。

リィナではなく彼女を残すのは、単純な戦闘能力であれば彼女のほうがリィナよりも上だからである。

「それと、万が一風の三十七族が出てきたら、絶対に無理するんじゃないぞ」

「ボクはそんな命知らずじゃないよ。今の身の程はわきまえてる。任せて」

なお、村人たちはあらかじめ、この洞穴から遠い場所に避難させてあった。――たった一人を除いて。

「ご武運を。ティーサイト様」

体の前で手を重ね合わせたアメーリアは、昨晩と違い大人びた“巫女の貌”をしていた。……いや、そう見えたのは、あるいはティースたちのことを案じて緊張しているせいなのかもしれない。

ティースにとって、この不思議な少女の内心を窺い知ることはまだ難しかった。

ただ、彼女の言葉に対しては素直に応えて、

「ありがとう、アメーリア。君の村を守るため、全力を尽くさせてもらうよ」

「……はい。よろしくお願いします」

目を閉じ、アメーリアは小さな声で深く深く頭を下げる。

そんな彼女に頷いてみせ、ティースはリィナとともに洞穴の中へと足を踏み入れていった。

――想像したとおり洞穴の中はひんやりとしていたが、空気は意外に乾燥していた。風が結構強めに流れているところを見ると、他にも外に通じる口があるのかもしれない。

足元はデコボコしていたが、歩くのに苦労するほどではなく。幅五メートルほどのゆったりとした傾斜を、二人は辺りに注意しながら進んでいった。

入り口付近はほぼ真っ暗でカンテラが必須だったが、少し奥に進むと、昼間だけ自ら発光する魔界由来の苔が生えていて、やがて満月の夜ほどの明るさになる。

その段階でティースはカンテラの明かりを消した。

「静かですね……」

呟いたリィナの声が乾いた洞穴の壁に僅かに反響する。

「この辺に獣魔はいないみたいだ」

風の三十七族も風の七十五族も、自ら息を潜めるほどの知能は持っていない。

不意打ちされる可能性が低いのは、こういう場所では有り難いことだった。

そうして何事もないまま、十五分ほど進んだだろうか。

「……ん？」

道が二つに分かれていた。

（……まるで食道と気管だな）

ティースはそんなことを考えて、本当に巨大な獣魔の体内にいるかのような錯覚に襲われたが、彼の想像したそれはあくまで人間の体内構造がベースだ。ヴァルキュリスの体が本当にそんな構造になっているのかどうかは定かではない。

ともかく、二人は分岐点に最初の分かれ道を示す印を付け、左の道に進んだ。

この辺りはまだ村人たちも踏み込んだことのある場所で、どちらを選んでも後で合流するらしいという話を聞いている。

さらに五分ほど進むと、また道が二手に分かれていた。

ティースは後ろのリィナをいったん振り返って、

「これ、右はさっきのところに戻るんだったよな？」

「そう聞いてます。目印、付けておきますね」

リィナがその分岐点に二つ目の目印を刻み、二人は奥へと向かう左の道を進んでいく。

それからさほど進まないうちに、今度は広間のような少し大きな空間に出た。

「広いな……」

天井は十メートルほどあるだろうか。左手は数メートル先が崖のようになっていて、先に入った村人が立てたのか“危険！”と書かれた看板があり、右手は半円状に大きく広がっていて、先に進めそうな道が二つ。それとは別に直進する道もあった。

「村人が襲われたのはいずれもこの先、という話でした」

リィナの言葉が微かに緊張を含んだ。

つまりこの分岐の先がどうなっているかは、誰にもわからないということになる。

「ここからは少し慎重に進むことにしよう」

ティースがそう言うと、

「金の採れる場所もこの先だと聞きましたけど……」

「……それも一応確認しようか」

本当に金が採れる場所があるのかどうか。村長を含め、そこまで嘘をつくメリットはないはずだとティースは考えているが、確認しておくに越したことはない。

もっとも――

「金ってパッと見でわかるもんだろうか？」

「どうでしょう……でも金塊が地面に埋まっていればすぐにわかるんじゃないでしょうか」

リィナの回答にティースは苦笑する。

「さすがにそれはないよ。金は確か、それをたくさん含む鉱石を掘り出してナントカって魔界の植物を溶かした水に沈めて数週間かけて分離抽出するんだ。純粋な金がいきなり掘れるわけじゃないんだよ」

するとリィナは少し頬を赤くして、

「そ、そうでしたか。すみません。私の里では金を装飾品として重宝する文化がないものですから」

と、言った。

「あ……ああ、こっちこそゴメン。それなら知らなくて当然だよな」

ティースは改めて彼女が魔界でも特別な世界の住人であることを思い出し、得意げに語ってしまったことを後悔するのだった。

それにそもそも、彼だって得意げにするほどの知識があるわけではない。

ティースはフォローの意味も込めて、

「金のことは、できれば確認しておく、ぐらいにしとこうか。目視だと区別できないものかもしれないし」

「はい。そうですね」

そうして結局、二人は三つある道のうち、正面の道を選択することにした。

代わり映えのしない道をさらに進むこと十分。

洞穴に潜ってからおおよそ三十分が経過した頃。

――微かな物音が、彼らの鼓膜を震わせた。

細かい空気の振動。

地を擦る音。

複数の気配だった。

「……」

ティースが無言で目配せすると、リィナも気付いていたようでやはり無言のまま彼に頷き返す。

まだ少し距離があるようだった。気配から察するに、どうやら彼らはまだティースたちの存在に気付いていないようだ。

（五匹、ってとこか）

動いている気配はそれほど大きいものではない。そこから察するに、おそらく村人たちを襲撃したという風の七十五族たちだろう、とティースは思った。

油断がなければ、彼がてこずるような相手ではない。

リィナに向かって“援護に回れ”というジェスチャーをして、気配を殺したまま近付いていく。

――と。

そのときだった。

「……ティース様！」

突然、リィナが大きな声を出した。

「え――」

道の先にいる風の七十五族たちがその大声に反応し、一斉に敵意の鳴き声を上げる。

「リィナ？」

何故――と、彼がそう問いかける前に、大きく目を見開いたリィナが叫ぶ。

「足元です――ッ！」

「……えっ！？」

とっさに視線を落とした地面。

――洞穴の壁と地面のちょうど境目辺りに、緑色の小さな光が見えた。
それはちょうど、ティースが足で踏み込もうとしていた場所――
（これは――ッ！）
パン、と、緑色の光がシャボン玉のように割れる。
直後。
「……ティース様！！」
「ッ――！？」
彼の足元から、刃物のように鋭い風の渦が巻き上がった。

地の四族“ヴァルキュリス”は体長百メートルを越える巨大な竜である。
いや。
正確には、巨大な竜であると“言われて”いる。
彼ら一桁台の獣魔は“神獣”とも呼ばれ、人魔の最高位である“神魔”同様に神のごとき存在であり、広く認知されてはいても人が彼らの姿を目の当たりにすることはまずない。
それは人間だけでなく、魔界に住む王魔以下の人魔にとっても同じことだった。
風の王魔の中でも名門中の名門の血筋であるエルレーンでさえそれらと直に接触したことは一度もなく、ヴァルキュリスが本当にそんな巨大な竜の姿をしているのかどうかは、実際のところ定かではないのだ。
だからこそ、
（これ――）
部屋の壁に描かれたその画を見たとき、エルレーンは戸惑いこそしたものの、ああ、これはヴァルキュリスなんだ――と、すぐに納

得することができたのだった。
そこに描かれたヴァルキュリスらしき獣魔は、竜というよりは大きな鳥のようだった。ただ、翼を持ってはいるものの、実際に空を飛べるかどうかは疑問だ。体と翼の大きさのバランスからいえば、地の七十五族のように飛べない鳥という可能性もあるだろう。
実際、描かれたその絵の中のヴァルキュリスは空を飛んではいなかった。巨大な二本の足を地に付け、首を大きく伸ばし、天に向かって大きな咆哮を上げている。
周囲の地面が大きく隆起しているのはその力の強大さを表したものだろうか。
（……頻発する地震も、村周辺の隆起も、全部ヴァルキュリスの仕業ってとこかな）
村の人間は巫女を通してヴァルキュリスに祈りを捧げる。結果、このスピンネルの村だけは大地の隆起による崩壊を免れている。――大雑把に言って、この村のヴァルキュリスに対する信仰はそういったものなのだろう、とエルレーンは理解した。
ただ――
（この絵、ちょっとヘンな気がするなぁ……）
改めて全体を眺め、エルレーンは首を傾げた。
そこに描かれているのは咆哮を上げるヴァルキュリスと、隆起する大地。逃げ惑う人々と必死に祈りを捧げる人々。
神であるヴァルキュリスと、許しを請う人間。
それだけなら非常に単純な図式で、おかしなことは何一つない。
――が、しかし。
その絵にはもう一つ、明らかに余分な要素が描かれている。
それは咆哮を上げるヴァルキュリスの頭上――
（風神の紋章……かな？）
細長い三日月が四つ絡み合ったような印。それは彼女の故郷で見かける風の神の紋章によく似ていた。
その紋章が本当に風の神を表したものだとするなら、不自然なこ

と極まりない。
（地の神獣ヴァルキュリスの頭上に風の神の紋章なんて……）
魔の十属性において、風と地は対極に位置するものである。炎と水、闇と光の関係と同様だ。
にもかかわらず。
地の神獣の頭上に輝く、風の神の紋章。
……不自然な図だった。
「エルさん――」
「！」
背後からの声に驚いてエルレーンは振り返る。
そこには、土色の衣装に身を包んだアメーリアが立っていた。
エルレーンはホッと息を吐いて、
「あ、ゴメン。ここ、キミの部屋だよね。ドアの隙間からこの立派な絵が少し見えてたものだから、つい――入っちゃダメだった？」
「いいえ。そんなことないです」
怒った様子もなく、アメーリアはチラッと壁の絵に視線を向けた。
「その絵は最近書き直された模写なんです。その元の絵も模写だったそうです」
「元の絵は？」
「二百年以上前に失われたと聞いています」
「そんな古いんだ」
エルレーンはそう呟きながら壁いっぱいに描かれたその絵の端から端までを見回し、最後にアメーリアの元へと視線を戻す。
そして気付いた。
（……風神の紋章？）
アメーリアが着ている衣装の模様。昨日、初めて会ったときは辺りが暗かったせいか気付けなかったが、彼女が着ている土色の服に無数に配された模様は、その絵に描かれているものと同じ紋章だった。
（どういうこと……？）

さらにエルレーンは混乱する。
巫女が身に纏う土色の服、それに描かれた風神の紋章。
巫女の部屋に描かれた地の神獣と、風神の紋章。
――それだけじゃない。
あの洞穴で村人を襲った獣魔。昨日姿を現した獣魔。
風の七十五族と風の三十七族。
いずれも風の獣魔だ。
“ヴァルキュリスの顎門”に住み着いた、風の獣魔たち。
（……なんだろう。この符号）
ざわつく胸を右手で押さえる。
嫌な予感がそこに渦巻いていた。
「どうしたんですか？」
アメーリアが不思議そうに彼女を見ている。
「あ、ううん。なんでも……」
「そうですか」
それを追求することもなく、アメーリアは部屋の奥へと進んでいった。
「エルレーンさん。祈りの時間なので退室をお願いできますか？」
「あ、うん」
「申し訳ありません」
小さく頭を下げたアメーリアに、エルレーンは小さく手を振って、
「……ボク、ちょっと洞穴のほうに戻ってるから」
「わかりました」
アメーリアの言葉を背中に受けながら部屋を出て、エルレーンはすぐに洞穴――“ヴァルキュリスの顎門”へ向かう。
そこに行ったところで何がわかるわけでもない。
ただ、彼女は急に芽生えたその悪い予感にいても立ってもいられなくなっていたのだった。

水しぶきが宙を舞った――

リィナの叫びに呼応しティースの全身を覆った水の膜が、その足元から吹き上げた風の渦の威力を削ぐ。

「くぉ……のぉぉぉ――ッ！！」

ティースの反応も速かった。

抜き身で持っていた“細波”を足元に叩きつけると、そこに込められた破魔の力が風の魔力を押し潰す。

散った細かい刃が彼の体を掠めたが、薄皮一枚を切り裂いた程度だ。

「ティース様！」

安堵の声を上げ、リィナが駆け寄ってくる。

が、ティースはそんな彼女を制止して、

「油断するな！　風の七十五族が来るぞ！！」

道の先から押し寄せてくる気配。

ティースはそれらが視界に入ってくる前に、剣を上段に振り上げた。

「穏やかに凪ぐ風よ――悪鬼を挫く刃と成れ！！」

振り下ろすと同時に“細波”の柄に填められた宝石が緑色の光を放つ。

威力を極限に抑えて放たれた無数の“風の刃”が、周囲の壁と床を無差別に削っていった。

すると――

「……！」

正面の緩いカーブの辺りで、先ほどと同じような風の渦が巻き起こった。

「ティース様！　これは――！？」

リィナが驚きの声を発する。

「衝撃感知タイプの罠だ……」

そう言ってティースは大きく息を吐く。
“細波”の力を使ったことによる脱力感が彼の体を襲っていたが、威力を抑えたためそれほど大きな反動ではなかった。
「ひとまず今のでこの一帯は安全だ。まずは獣魔に専念するぞ！」
リィナが頷くと同時に、緩いカーブの向こうから風の七十五族の集団が現れた。
数は予想どおりの五匹。
「リィナ！　守りは任せた！」
「はい！」
ティースは地面を蹴って一直線にその集団に突撃した。
鳴き声を上げて、風の七十五族たちが大きく羽ばたく。
が――
宙に弾ける水しぶき。
羽ばたきによる風圧攻撃はすべてティースの周囲に展開した水の膜に相殺された。
ヒステリックな鳴き声が洞穴に響き渡る。
ティースは防御無視のまま獣魔たちをその射程に収めると、
「おぉぉぉぉ――ッ！！」
振り下ろし、なぎ払う――。
正確無比な攻撃はそのことごとくが獣魔の急所を捉え、あるいは両断し。

――五匹葬るまでにかかった時間は一分ほどだった。

「……ふぅ」
戦いが終わり、ティースはホッと一つ息を吐いた。
獣魔の流した血の匂いが鼻腔の奥を突く。
――どれだけ優位な戦いであっても、この緊張感が薄れることはない。
血と脂に汚れた“細波”の剣身は、軽く振るうとすぐに元の瑞々

しさを取り戻した。
「ティース様。怪我はありませんか？」
すぐさまリィナが彼に駆け寄る。
「ああ。君のおかげでね」
「頬に血が……」
「ん。ああ」
先ほどの罠で負った傷のようだった。
「いいよ。治療するほどじゃない」
手当て用の腰袋に手を伸ばしたリィナを制止し、頬の血を軽く拭ってティースは改めて周囲を見回した。
「……にしても。さっきの罠、気になるな」
「はい」
この手の魔力を込めた罠はそう珍しいものではない。人が作る罠と同じように、ちょっとしたコツと技術の修練があれば――その完成度や威力に差はあれど――ほとんどの魔が作れるようになると聞く。
そう。
修練があれば、だ。
つまり獣魔は作れない。厳密に言えば、罠を作って獲物を狩る獣魔もいないわけではないが、それは獣魔の中でもほんの一握りだった。
「獣魔の仕業なら風の六十九族があの手の罠で獲物を仕留めるはずだけど……リィナ。どう思う？」
“細波”を地面に突き立て、体についた土の汚れを軽く払いながらリィナに意見を求める。
リィナは口元に手を当て、少し考える仕草をすると、
「六十台の獣魔が作ったものにしては強すぎる気がします。私の力で相殺しきれなかったところを見ると、最低でも上位魔クラスの罠ではないでしょうか」
「俺もそう思う」

つまり――この場所には人魔が作ったと思しき罠が張り巡らされていた、ということになる。
しばしの逡巡。
ティースは口を開く。
「……いったん引き返そう」
それほど迷いはなかった。
風の三十七族に加え、上位魔クラスの人魔の意思が見え隠れしていて、さらには地の利もない。
この戦力で挑むには心もとなかった。
リィナにももちろん異論はなく。
二人は獣魔の血の匂いが立ち込めるその場所から早々に引き返すことにした。
念のため罠に注意しながら、たった今下りてきたばかりの緩やかな坂を上っていく。
と――
「……あれ？」
少し進んだところで、道が左右の二手に分かれていた。
ティースは後ろのリィナを振り返って、
「こんな道、あったっけ？」
リィナは形の良い眉をほんの僅かに曇らせて、
「いえ。私が覚えている限り、あの大きな空間までは一本道だったはずですが……」
「見落としたのか？　……来た道はどっち――」
「……ティース様」
リィナが表情を曇らせて正面の壁を指差す。
そして遠慮がちに言った。
「間違っていたらごめんなさい。来たときは確か、この壁のところが道になっていたはずです……」
「……なんだって？」
言われて正面を見ると――

「なんだ、これ……」
その壁を丸く切り取ったような範囲だけ、発光する苔がまったく生えていなかった。
明らかに不自然な壁だ。
まるで、さっきまで道だった場所を塞いだかのような――
「……」
ざわっという嫌な予感が背中を駆け上がる。
ティースは“細波”を構え、思いっきり力を込めてその壁に突き立てた。
ガリッ、という強い反動。
“細波”はその剣身の半分ぐらいまで壁に埋まったが、向こう側に突き抜けた様子はない。
「……どうなってるんだ」
正面の壁はちゃんと周囲の壁と繋がっている。落石が道を塞いだわけではないし、そもそも正面が来た道だったのなら、左右にも道があるのはおかしい。
あの広い空間からここまでは一本道だったのだから。
「ティース様――」
「……進もう」
リィナを不安にさせないためにも、ティースはその分岐点に印を付け、左の道へと足を向けることにした。
いずれにしてもそれしか手はない。
あの広い空間には三つの入り口があった。仮にティースたちの来た道が何らかの理由によって塞がれたのだとしても、他の道からあの場所に戻れる可能性はある。
ただ、
（食糧は……もって五日ってとこか）
ティースは頭の中で、すでに閉じ込められた可能性のことを考えていた。
（風の七十五族って、食べられるんだったかな……いや、一番の問

題は水か。獣魔がいるんだから水が飲める場所はあるはずだけど……）

最悪のケースを想像する。

（一日戻らなかったらエルが異常に気付く。あいつのことだから無謀なことはしない。助けに来るにしてもミューティレイクに使いを走らせてから来るはず……リガビュールまで急いで一日半、ネービスまでさらに三日。助けが来るのは――早くて十日後だな）

ただ、それは水場さえ確保できれば、計算上は絶望的というわけでもなかった。

――まずは脱出する道を探すこと。

――最低でも水場を確保すること。

自らの計算に気合を振り起こし、ティースはリィナを連れて奥へと進む。

（こっちは……あの場所には戻りそうもないな）

あの広い空間に戻れるなら緩やかな上り坂になるはずだったが、ティースの期待に反し、選んだその道は少しずつ下っていっているようだった。

戻るべきかどうかティースは一瞬迷ったが、結局そのまま先に進むことを選択する。

――戻れなかったら。

――水場が見つからなかったら。

不安が鎌首をもたげてきた。

押し殺し、さらに先へ。

それから二十分ほどはずっと静かな一本道だった。

と。

「――ティース様」

先ほどの分岐点から無言だったリィナが初めて口を開く。

「うん？」

振り返る。

「心配ないですよ」

さぞかし不安になっているんじゃないかと思っていたが、リィナはいつもと変わらぬ穏やかな表情だった。
それどころか――
「ほら。ティース様。ほっぺが強張ってます」
「……」
ティースはハッとして口元に手を当てた。
そんな彼の行動に、リィナはクスクスと笑って、
「やっぱり」
「……まいったな」
どうやら、いざというとき女性のほうが強いというのは本当のようである。――彼を例にしてそう断じてしまうのは、世の男性諸氏に若干申し訳ない気もするが。
歩く速度を僅かに緩め、ティースは大きく深呼吸する。
胸の中にたまっていた澱のようなものがすっと溶けていくような気がした。
そしてティースは正直に問いかける。
「君は不安じゃないのか？　閉じ込められたかもしれないのに」
「どうでしょう。不安でないわけではないですが――」
そ……っと、その手をティースの背中に添えた。
触れることはない。
近づけただけだ。
「ティース様がおそばにいるうちは、何があっても大丈夫です。だって私は――」
ティース様を守るために来たのですから――と、リィナは微笑んだ。
「……！」
そんな彼女の笑顔をまともに向けられて、ティースの体はカッと熱くなった。
「……はは。俺ってそんなに情けない男に見えるかな」
誤魔化し半分に言った彼の言葉に、リィナは不思議そうな顔をす

る。
「どうしてですか？」
「いや。女の子に守られるってのはさ。やっぱ男として情けないじゃないか」
「あっ、すみません。そういう意味ではなかったのですが……」
「ああ、いや。別に文句を言ってるわけじゃないよ」
照れ笑いを浮かべながら正面に向き直る。そうこうしているうちに、先ほどまでの不安が嘘のようにティースの足取りは軽くなっていった。
本当に単純な男なのである。
（……リィナを死なせるわけにはいかないしな。俺がしっかりしなきゃ）
足取りも強く、先に進んでいく。
時折、関係のない会話をリィナと交わしながら、さらに奥へ。
そうして……三十分ぐらいだろうか。ティースもリィナも時間の感覚が怪しくなりつつあったが、腹具合から考えても洞穴に入って一時間半程度だろう。
「……？」
鼓膜を震わせた音。
最初は風の音かと思った。
が――
「ティース様。この先に水場があるようです」
それが水の流れる音だと気付いたのはリィナのほうが早かった。
（水場、か……）
その言葉を聞いたティースは、救助を待つ場合の一番の懸念が解消されたことにホッと胸を撫で下ろす。
これで生存確率が跳ね上がるはずだった。
逸る心を抑えながらさらに先に進んでいく。
湧き水か。
あるいは小さな川のようなものが流れているのか。

その先のオアシスに期待しながら歩みを進めていく二人。
――そんな二人の目の前に現れたのは、予想外の代物だった。
「え――」
再び大きく開けた空間。
先ほどの空間の数倍の広さはあるだろうか。
「ティース様。これは――」
しかし二人を驚愕させたのはその広さではない。
空間の左右の壁にはいくつもの穴が開いていて、そこから綺麗な水が流れ落ちている。その流れ落ちる先には細長い池のようなものができていた。
そして正面。
その空間の奥にたたずむモノ。
「神殿、か……？」
そこにあったのは明らかに自然のものではない、何者かの手による人工建造物だった。
ティースは“神殿”と呟いたが、本当にそうなのかは定かではない。それはネービス領で多く信仰されているミーカール教のものとも、大陸の主流であるクライン教のものとも形式が違っていた。
左右に立つ大きな柱。
二十段ほどの階段の先に四角い箱のような建物。
建物のてっぺんには三日月を四つ組み合わせたような大きな紋章が刻まれていた。
そして――
「柱に、何か書いてるな……」
そこに刻印された文字。
どこかで見たような形の文字だったが、ティースには読めなかった。
が――

「エブ、リース……」
後ろから聞こえた呟きに、ティースはビックリして振り返る。
「リィナ？　読めるのか？」
リィナは小さく頷いて、
「はい。これは魔界の古い文字です。ここには“エブリースの祭壇”と書かれています」
「エブリース？　ヴァルキュリスじゃないのか？」
「違います。この文字だとヴァルキュリスは……こう書きます」
と、リィナは人差し指で空中に文字を書いてみせる。
ティースにはよくわからなかったが、柱に書かれているものと違うことだけは理解できた。
「じゃあエブリースってのは……？」
「……わかりません。私も聞いたことがないです」
申し訳なさそうにリィナが首を横に振る。
――と。
そのときだった。
「……オォォォォォォ――ッ！！」
「！」
鼓膜をつんざく遠吠え。
空気が振動する。
ティースは即座に悟った。
「風の三十七族か――ッ！！」
視線を上げると、見覚えのある黒いシルエットが階段の上に佇んでいた。
間違いない。
昨日、洞穴の前に現れたのと同じ獣魔だ。
「ティース様！」
「下がれ、リィナ！　あいつは俺に任せろ！！」
“細波”を正眼に構え、階段の上の風の三十七族を睨み上げる。
と。

「……なに？」
気付く。
（……誰か、いる？）
風の三十七族を従えるように佇む、人型のシルエット。
ティースの脳裏をよぎったのは道中に仕掛けられた風の罠のことだった。
（やはり黒幕がいたか……）
上位魔か。
あるいは将魔か。
――ゴクリ、と、喉がなる。
いずれにしても、厳しい戦いになるだろう。
「ティース様！　あの人――」
同じくその人影に気付いたのか、リィナが叫んだ。
「わかってる！　たぶんヤツが、罠をしかけた人魔だ！」
ティースはそう答えたが、
「違います、ティース様！　あの人は――」
「……え？」
改めて見上げた階段の先。
――土色の衣装がひらひらと揺れていた。
「アメー……リア……？」
同じ服を着た別人か。
――いや。
「まさか――」
「……」
微動だにせず佇むその姿勢。
その小さな手が、そっと風の三十七族の背を撫でて。
戦闘開始を告げる咆哮が響き渡った――。

その6『エブリースの祭壇』

「オオオオオ――ッ！」

咆哮をあげ、黒い獣が階段を駆け下りてきた。

「……アメーリア！」

獣の後ろにいる巫女はティースの呼びかけにもピクリとも反応することはなく、ただ黙って彼らを見下ろしている。

その構図は紛れもなく、その獣魔――風の三十七族の主人が彼女であることを示していた。

地上にいるはずの彼女が何故こんなところにいるのか。

そして何故、風の三十七族をけしかけてくるのか。

……そもそも、彼女は本当にアメーリアなのか。

いくつかの疑問がティースの頭を駆け抜け――やがてそれは四散する。

（今は……ともかく！）

駆け抜ける黒い疾風。風をまとう鋭い爪の獣――風の三十七族。

それを無力化することが何よりも優先される状況だった。

頭のスイッチを切り替え、ティースは愛剣“細波”を構えて叫んだ。

「リィナ、少し離れていろ！」

三十番台の数字を振られた獣魔たちの脅威は並みの人魔を上回る。

風の二十七族ウィルヴェントの亜種である風の三十七族の最大の武器は、突風のごとき動きを可能とするその身体能力の高さと、渦巻く風を纏い岩石をも易々と破壊する両前脚の爪だ。

特にその爪の攻撃は、まともに食らえばデビルバスターであるティースといえど一撃で戦闘不能に陥りかねない破壊力を秘めている。

ただ、それは逆に言えば、その爪にさえ注意しておけば、そうそ

う危機に陥ることはないということでもあった。
特にティースの場合、その獣魔が持つもう一つの武器――目で追いきれないほどの素早い動きに関しては、さほど気にしなくても良い“事情”がある。
（さぁ、来い！）
変則的な動きで迫ってくる黒い狼。その四本の足は風を纏っていて、地面に接する瞬間まるでバネのような作用を加え瞬発力を増強する。その動きはティースに近付くほどに速さを増し、やがて並みの人間では追いきれないほどになった。その勢いのままに突進されれば、受け止めるのも容易ではない。
ティースは簡単に的を絞らせないよう、獣魔に対して横の軸のフットワークを使いながら軽く牽制する。
やがて彼我の距離は七メートルほどに詰まった。
リーチに関しては言うまでもなくティースのほうが上回っている。が、獣魔はそれをおそらく本能で察し、その射程外から瞬きするほどの一瞬で懐に飛び込んでくることだろう。
問題はそのタイミング。
それを追いきれるかどうかが生死の分かれ目となるだろう。
――じっとりとした緊張感がティースの全身を覆う。
彼らを見下ろしているであろう巫女の存在も、そのときに抱いた疑問も、すべての雑念が頭の中から消え去った。
集中する。
ただ、目の前の獣魔の動きに――
集中する。
ただ、集中――
「！」
獣魔が一際力強く地面を蹴った。
その体が、ティースのいる方向へ動く。
（……来る！）

そして――その瞬間。
視界の中の獣魔の動きがティースの支配下に落ちた。

（よく視ろ、ティーサイト――）
獣魔の体。
足の筋肉の動き。
そして獣の視線。
そのすべてが――獣魔の中でも抜きん出て素早い風の三十七族の動きでさえ――まるでスローモーションのようになり、さらにそれらのもたらす数々の情報が、やがて来る一瞬先の未来の映像さえもティースの脳裏に浮かび上がらせる。
すなわち――
（左斜め前方、低い姿勢、左前足の爪を前にして飛び込んでくる――）
ティースはそのコンマ数秒先の未来にいる獣魔に対し、手の中の剣を振るった。

――人の身体能力を高める特殊技能“心力”は、人よりも遥かに優位にある魔と戦うデビルバスターにとっては欠かすことのできない能力である。
そしてこの心力のうち、五感に関する機能、特に動体視力を高める能力を“刻眼”という。
ティースの持つ心力はこの“刻眼”に特化していた。
鋭く研ぎ澄まされた五感は視界の中のあらゆる動きを捉え、そこからあふれ出すいくつもの情報が彼の脳に近い未来の映像をもたらすのだ。
コンマ数秒先の未来の予測をもとに行動する彼の反応速度は、人や獣の最速の反応である反射運動よりもさらに優位であり、それを彼の反射神経と定義しても良いのであれば、事実上、世界に彼よりも優れた反射神経を持つ人間はいないということになるだろう。

もちろんティースのそれはあくまで未来の“予測”に基づいた行動であり、厳密に反射神経と定義してよいものではない。ただ、“刻眼”に特化した彼の能力がもたらすその予測は――いくつかの特殊な条件下を除き――ほぼ正確であり、そして正確である以上、反射神経と定義したところでその結果に何ら影響を及ぼすことはなかった。

さらに、彼が予測できる未来の距離は、単純な思考で単純な動きをする相手であればあるほどに長くなる。

つまり知能の低い獣魔に対して、彼のこの能力は圧倒的なアドバンテージとなるのだ。

すれ違いざま“細波”の一撃が獣魔を捉える――

「キャンッ！！」

悲鳴のような鳴き声を上げ、風の三十七族の体が宙を舞った。

が――

「っ……浅いッ！？」

いや。

獣魔の堅い体毛が鎧のようになっていて刃がその上を滑り、肉体まで到達できなかったのだ。与えたのは、剣を叩き付けたことによる衝撃だけだった。

宙を舞っていた獣魔が、さほどダメージを受けていないことを証明するかのようにくるっと回転して地面に着地する。

そして、

「……ォォォォォ――ッ！！」

怒りの風が地面から吹き上げた。

ティースを見据える瞳が、まるで正気を失った狂戦士のようにランランと輝いている。

――間髪いれず、獣が動いた。

（俺の力じゃ、あの硬い体毛を正面から破れない……）

手の平に残る重たい感触に、ティースはそう判断する。
彼の心力は“刻眼”に極端に特化している分、怪力を得る心力――“剛力”のような単純な肉体強化系の才能には恵まれていない。
堅い体毛の上からでも繰り返しダメージを与え続ければいずれ倒せるだろうが、スタミナはおそらく相手が優位だ。そう悠長なことはしていられない。
（なら――）
再び襲い掛かってくる風の三十七族。
ティースは足を止め、正面から向かい合った。
距離はあっという間に縮まり、そしてさきほどと同じ距離――約七メートル。
獣魔がその距離から再び懐に飛び込んでくる。
もちろん、ティースの目もその動きを捉えていた。
が、動かない。
そして、一拍子。
（……よく、視ろ――！）
あえて発動を遅らせた分だけ、その瞬間にさらに意識を集中させる。
再び、視界の中にいる獣魔の動きが彼の掌に収まった。

――いや。

（もっと、もっと――ッ！）
さらに。
さらに深く、その深度を増していく。
体の動き。
筋肉の動き。
視線の動き。
――さらには、風になびく一本一本の体毛、宙を舞う砂埃の一粒一粒に至るまで。

視界の中にあるすべてが、彼の瞳の支配下に落ちた。

（左側面にステップして十時の方向から来る――）

体は先に動いている。

（攻撃は左前足の爪――）

未来の残像を目掛け、低い姿勢で地面を蹴った。

（標的は――）

獣魔が高く跳躍する。

腹の辺りにも鎧のような体毛があって、隙はない。

だが――

「！」

ティースは見つけた。

漆黒の体毛が風になびいたその瞬間に生じる、ほんの僅か、ほんの一瞬――ギリギリ刃を突き入れることができそうな隙間。

全身がカッと熱くなる――

「おおおおおお――ッ！！」

迷うことなくティースはその隙間を目掛け“細波”を突き出した。

――風を纏った獣魔の爪が左肩を掠める。

鋭い痛みと、微かに噴き出す鮮血。

しかし――

「っ！」

引き換えに、ティースの両手には確かな手ごたえが残っていた。

鉄の匂いがその鼻腔を満たす。

――“細波”は獣魔の左前足の付け根辺りから体の中心を貫き、右後ろ足の辺りまで達していた。

苦痛と断末魔の悲鳴が獣魔の口から放たれ、最後の抵抗か、その右足に風の渦を纏おうとする。だが、ティースはそれを許さず、そのまま“細波”を振り下ろして獣魔の体を地面に叩き付けた。

肉を潰し、骨を砕く感触。

黒い血が周囲に飛び散る。

――それで、勝負は完全に決した。
「……ティース様」
リィナが駆け寄ってくるのを視界の端に捉えつつ、事切れた獣魔の体から“細波”を引き抜く。
ぐちゃっ、という肉の裂ける音。
その感触に、ティースは眉をひそめた。
――いつまで経っても慣れないな――と、やや自嘲気味に心の中でつぶやきながら、駆け寄ってきたリィナを振り返る。
「ティース様。肩のお怪我は――」
「ああ。たいしたこと無いよ。それより」
左肩に滲む血にチラッと視線を落とし、傷口がそれほど深くないことを確認すると、ティースは視線を斜め上に動かし、階段の上を見上げる。
巫女はその場所で動かないままティースたちを見下ろしていた。
そんな彼女に対し、ティースは声を張り上げる。
「さあ、アメーリア！　説明してくれ！」
「……アメーリアさん！」
同じく呼びかけたリィナの声には困惑と心配の色が混じっていた。
……昨日一晩とはいえ、夕食をともにした少女の思わぬ行動にショックを受けているようだ。
もちろんそれはティースも同じだった。
「アメーリア！　……この獣魔は君が操っていたのか！　村人たちを襲ったり、リージスの仲間を殺させたのも君なのか！？」
「……」
返事はない。
ティースは痺れを切らし、階段に足をかけた。
「アメーリア――！」
そしてさらにもう一段上がろうとしたとき、
「……ティーサイト様」
ついに、アメーリアが諦めたようにその口を開いた。

「そちらの地上へ帰る道はすでに閉ざされました。村へ帰るためには、この祭壇の奥の通路を利用するしかありません」
それは、地上での彼女よりもさらに抑揚のない声だった。
ティースはそんな態度に少しの不安を覚えつつ、二段目で足を止めたまま彼女を見上げ、問いかける。
「……君はその通路を使ってここまで来たのか？」
「はい」
「風の七十五族たちは――」
「彼らは巫女の職責を果たすため、この洞穴に配置された者たちです。私には彼らに命令する力があります」
「村人たちを襲わせたのも？」
「私です」
アメーリアの返答に、リィナの息を呑む音が聞こえた。
ティースは声を張り上げる。
「どうしてそんなことを！　君は――」
昨日、川端で出会ったときの彼女の言葉を思い出す。
「君はあのとき俺に、村を頼むと言ったじゃないか！」
「……ティーサイト様」
まるで彼女の周りだけ時間が止まっているかのように、アメーリアはピクリとも動かなかった。
ただ、口だけが淡々と言葉を紡いでいく。
「もし貴方様が本当に理由を知りたいとお望みなのであれば――」
そしてゆっくりと、背中を向ける。
「時間の許す限り、なんでもお話しさせていただきます。……どうぞこちらへ。いずれにしても村へ戻るためにはこちらに来ていただくしかありません」
階段の上にいたアメーリアの姿がティースの視界から消えていく。
「……」
ティースは少しためらった。
――風の三十七族をけしかけたのがアメーリアだったのであれば、

彼女がティースたちを殺そうとしたことに疑う余地はない。つまり彼女が招くこの先に、罠や新たな敵が待ち受けている可能性も充分に考えられる。

ティースは無言ですぐ後ろのリィナを振り返った。

リィナはすぐに小さく頷いて、

「行きましょう、ティース様」

「……ああ」

彼女の返答にティースの中にあった小さな迷いは晴れ、そして彼は即座に頷き返した。

アメーリアが先ほど言ったように、辿ってきた地上へ続く道がすでに閉ざされていることは、彼ら自身の目で確認していたし、そして何より――

（……本当のことが知りたい）

その欲求が強かった。

アメーリアの行動の理由――それが先ほど口走った“巫女の職責”に起因するのだとすれば、そもそもそれは何を指しているのか。何のために村人たちを獣魔に襲わせ、リージスの仲間を殺し、そして今、ティースたちをも、その手にかけようとしたのか。

――その巫女の貌の裏に、歳相応の少女の顔が隠れていることを知っているだけに。

ティースはそれを突き止めたいという自らの欲求に逆らうことができなかったのだった。

「おーっす。ちっこい方の嬢ちゃんがお留守番かい」

洞穴の入り口付近にある大きめの石の上に布のシートを敷き、その上に座ってティースたちの帰りを待っていたエルレーンは、ふと聞こえてきた太い男の声にその小さな頭を軽く傾け、そして村へと続く道に一人の大柄な男の姿を見つけた。

「リージス？」
「おうよ。ほら、ちょっと早いが昼飯だ。……なんか妙な匂いがするな、この辺」
と、リージスは鼻の頭を軽く押さえながら、手にしたパンをエルレーンに手渡し、その場にどっかりと腰を下ろした。
「ありがと。これは魔除けの香の匂いだよ」
まだそれほどお腹の空いていなかったエルレーンは、受け取ったパンをひとかけらだけ千切って口の中に入れ、残りはハンカチに包んで脇に置いた。
それから土の上に直に座っているリージスに気付いて、
「ここ、座れるよ？」
と、自分の隣を示す。
そんな彼女の申し出にリージスは手を振って、
「いや、あんたと違ってこんな図体だからな。そのスペースは俺にゃ狭すぎる。……それに、ま、デビルバスターの兄ちゃんの連れを口説いてると思われちゃまずいからな」
「誰も思わないよ、そんなこと」
エルレーンはクスクスと笑って、
「せいぜい仲のよい父娘に見えるぐらいでしょ」
「そいつも無理があるんじゃねぇか？　俺みたいなゴツい男の種から、あんたみたいに華奢で可愛らしい娘が産まれるわきゃねぇよ」
実際、俺の娘は男みてぇに頑丈そうな体してるしな――と、リージスは大声で笑った。
「リージス、娘さんいるの？」
「おぅ。もう十歳になる。……ちょうどあんたと同い年ぐらいじゃねぇか？」
「そんなわけないでしょ。言っとくけど、ボクはリージスが思ってるより年上だよ、きっと」
エルレーンがわざとらしく声を潜めてそう言うと、
「わかってるさ。デビルバスターの手伝いしてるぐらいだ、十歳っ

てこたぁねぇ。つっても、十四、五歳ってとこだろ。俺にしてみりゃ娘とそんなに変わらんさ」

「……まあ、そうかもね」

エルレーンは苦笑した。

実際には、彼女はまもなく十七歳になる。おそらくこの先大きく背が伸びたりすることはないだろうから、しばらくして大人の女性の貫禄のようなものが出てくる――出てくることがあるとすれば、だが――まで、十歳を少し過ぎたぐらいの年齢だと言われ続けるのだろう。

もっとも、彼女は基本的にそういうことは気にしない。体が小さいのは風の人魔の特徴だ。彼女はその中でも比較的小柄なほう、というだけで、逆に言うと魔界にある風の人魔の集落では彼女のような外見の者もそう珍しくないのである。

「デビルバスターの兄ちゃんは、今頃化け物連中と戦ってんのかねぇ」

「たぶんね」

ティースたちが洞穴の中に入ってからすでに二時間以上経っている。村人たちが襲われたのがことごとく洞穴に入って三十分程度の場所ということだから、少なくともう最初の一団には接触している頃だろう。

そうしてふと、エルレーンはアメーリアの家で見た絵と、そのときに感じた不安のことを思い出す。

（……ヴァルキュリスの巫女、か）

今の彼女にはここでティースたちの帰りを待つことしかできない。

ただ――

「ねぇ、リージス」

ふと思いついて、

「リージスたちはリガビュールから来たって言ってたよね。娘さんもそこにいるの？」

「おぅ。不細工な嫁と一緒にな」

そんなリージスの言い方には家族に対する愛情が詰まっているように感じられて、エルレーンは思わず頬を緩めた。
「じゃあリージスは生まれもリガビュール？」
「俺も嫁もずっとリガビュールさ。俺が連れてきた連中の中にゃ他の街の生まれも結構いるが、まあそれでもネービス領以外の生まれってのはいないんじゃねぇかな」
「ふぅん。それじゃあ」
エルレーンは少し身を乗り出して尋ねた。
「リガビュールはここから一番近い街だよね？　この村のヴァルキュリスの巫女のこと、リージスはよく知ってる？」
「ん……そうだなぁ」
その問いかけにリージスは少し考えた。
「ここが閉鎖的な村だってのは知れ渡っていたし、地形のこともあってそれほど頻繁に交流があったわけじゃねぇから、正直そんなには知らん。けどまあ、それでも何人かはこの村に来たことがあったり、この村から出てきたって連中もいて、そういった奴らが喋った噂話みたいのを耳にすることは何度かあったな」
「噂話？　たとえば？」
「うーん」
リージスは身を乗り出したエルレーンの顔をチラッと見て、何故か少し困ったような顔をした。
「それって、アレか？　デビルバスターの兄ちゃんの仕事に関係がある話なのかい？」
「それはボクにもわからない。でも、もしかしたらあるかもしれないの。だから、知ってることがあるなら教えて？」
「ううーん」
それでもリージスは腕を組み、しばし考え込んだ後、
「……先に言っとくが、あんま綺麗な話じゃねえぞ？」
「どういうこと？」
「だから……なんだ。つまり、この村に来るとペッピンな姉ちゃん

がタダでアレしてくれるとか、そういう類の話だよ」
「……あ」
なるほど――と思い、エルレーンはちょっと顔が熱くなるのを感じたが、
「……うん。そんなのでもいいから。教えて」
「んじゃ、まあ……」
逆にリージスのほうが最後まで気後れしていたようだが、やがて決心したように語り出す。
――そこで彼が語ったのは、以前、アメーリアがティースに語った“巫女の父親”についての話とほぼ同じものだった。そしてその話で、エルレーンはこの村に来た日の夜の、アメーリアがティースの寝所に忍び込んでいった出来事を思い出し、ようやくその行動の意味を悟ったのである。
「……そういうわけでよ。つまり若い男がこの村に来りゃ、その巫女さんとイイコトができる、ただし気に入られなきゃヴァルキュリスの生贄にされちまう、とか、まあそういう類の下世話な噂さ」
「ふぅん……」
それが目的でこの村に来よう、などというのは確かに、いい意味でも悪い意味でも人間らしい下世話な話だとエルレーンも思う。
ただ――
（村の外から来た人を巫女の父親とする――か）
その考え方自体は、実をいうと彼女にはひどく理解しやすいものだった。
何故なら、
（それってまるで、ボクらのしきたりみたい……）
彼女たち王魔の中には、それと非常に似た考えで子孫を残していっている部族が実際にいくつか存在する。子を成す行為に愛とか欲とかそういったものがない王魔たちにとって、数少ない子供が優秀であるようにと様々な画策をするのは珍しいことではなく、子を成すためだけに外の優秀な血を引き込むというのは比較的一般的な行

為だ。
――そして脳裏に蘇る、あの絵に描かれた風神の紋章。
何かつながりがあるのだろうか――と、エルレーンは考え込む。
と。
「んで、まぁ、それ以外だと――」
そんなエルレーンの様子には気付かず、リージスは話を続けていた。
エルレーンも再びそれに耳を傾ける。
「変わったところじゃ、実際、この村の巫女の父親だって名乗ってるヤツがいたな。なんでもそいつはもともとこの村の生まれらしい」
「え？　でも……」
と、エルレーンは先ほどのリージスの話を思い出しながら、
「村の人は、父親にはなれないんじゃなかったの？」
「ああ、だからさ。タブーにもかかわらず巫女に手を出して村を追放されたんだと。だから今の巫女――いや、その話を聞いたのはもう十年近く前で、そのときは次代の巫女、って言ってたか。それは自分の娘なんだ――とかな」
「じゃあ、まさか……」
エルレーンはゆっくりと視線を横に動かした。
その先には、柵に囲まれた一軒の家がある。
「その人はアメーリアの……お父さん？」
リージスは両手を広げて、
「どうだかな。嘘かホントかもわかんねぇし、そいつはリガビュールでヤバい連中の金に手ぇ付けて殺されちまったって話だ。今更、それが本当かどうか考えても仕方ねぇだろ」
それは確かにリージスの言うとおりだった。
そのことが今回のこの件に直接関係あるとも思えない。
ただ――
（アメーリアのお父さん、かもしれない人か――）
直接的でなくとも、あるいは間接的に関わっている可能性はない

のだろうか――と。
エルレーンはぽっかりと口を開けたヴァルキュリスの顎門を見つめる。
――まだ、二人が戻ってくる気配はなかった。

「――村を追放されたその人は、私の妹の父親でした」
階段を上りきり、神殿のような建物の中に入っていくと、その奥には祭壇のようなものがあった。周囲に立ち並ぶ柱には、これまでにいくつも見てきた三日月が絡み合ったような紋章と、“エブリース”という魔界由来の古代語が刻まれている。
祭壇の前には三段ほどの階段があり、その奥には台座のようなものがあった。その上には、なにか薄茶色のものが置かれているようだったが、階段の下にいるティースからは見ることのできない角度だ。
アメーリアはその台座の前に立ち、ティースたちは階段の下、彼女から十メートルほどの距離で、彼女が語る、彼女の行動の理由について耳を傾けていた。
「その男によってしきたりは破られ、母――ヴァルキュリスの巫女は村での求心力を急速に失っていったのです」
相変わらず淡々と語るアメーリア。
……しきたりを破り、村の男の子供を産んだアメーリアの母――先代の巫女。それが十二、三年前の話だという。
ティースは問いかけた。
「その男の人は追放されるのがわかっていながら、何故？」
「わかりません。ただ、母がその人を悪く言うのを聞いたことがないので、母もあるいはすべて覚悟の上で妹を身ごもり、産んだのかもしれません。最初は妹がその人の子供であることを隠そうとしていたようですが……」

その母も妹も、火事で亡くなりました――と、アメーリアは抑揚のない言葉で続けた。

「遺された私に課された使命は、母の過ちにより失った巫女の立場を取り戻すこと。そして巫女の職責を全うし続けることでした」

巫女の職責。

ついにその言葉が出てきた。

ティースが思わず一歩足を踏み出すと、アメーリアは素早く反応し視線でそれを制止した。

近付くな、という意思表示だろう。

仕方なく、ティースはその場に足を止めたまま、

「その巫女の職責を全うするために、君は村人を襲わせたりしたのか？　いったい何故？　巫女の職責ってのはなんのことなんだ？」

「ヴァルキュリスの巫女の職責は――ただ一つ」

アメーリアが僅かに、横に動く。

その後ろに微かに見える台座。

つ……と、人差し指がその台座の隅をなぞった。

「この、エブリースの……祭壇を守ることです」

「エブリースの……祭壇」

そこにはいったいなにがあるのだろうか。

「スピンネルの村はもともと、そのために作られた村なのです。村人たちはこの洞穴を神聖な場所としてあがめ、畏れました。そのこと自体がここに立ち入ろうとする者たちへの抑止力となり、そしてすべてを知る巫女はそんな村人たちを誘導し、洞穴に配置した獣魔たちを操り、たとえ外部の人間が来てもここまでたどり着けないように仕向ける。しかし――」

アメーリアは目を伏せた。

「母の過ちにより、その仕組みは完全に崩壊しました。巫女の神秘性が失われたことにより、村人たちはその言葉に耳を傾けることもなくなり、そしてついには、自らこの場所を荒らそうとするようになったのです」

「……それで君は、獣魔たちを使って村人たちを？」
「はい」
「けど、それはちょっと変だな」
ティースはチラッと隣のリィナに視線を送った。
「……」
リィナが無言のまま、小さく首を横に振る。
会話の最中、彼女はずっと周囲に気を配っていた。罠や、あるいは柱の陰に何か潜んでいないか警戒したためだったが、どうやら今のところ変わったことはないようだ。
何もないとすれば、この場にいるのはアメーリア一人。
いざというとき、制圧することは可能だろう。
そのことを頭の隅に置きながら、ティースは問いかけを続けた。
「君はここに入ってきた村人たちに獣魔をけしかけておきながら、結局のところ怪我をさせただけで一人も殺していない。巫女の発言力を取り戻し村の人に畏れを取り戻させるのが目的なら、彼らを殺さずに逃がしたのは何故なんだ？」
事実、怪我をしただけの村人たちは金を求めて四度に渡って洞穴に潜り、その後、こうしてティースを呼んで獣魔の退治を依頼するに至った。
もし最初の一回、あるいは二回連続で死人が出ていたなら、村人たちは以前と同じようにこの洞穴を恐れ、以後、誰も立ち入らなくなったかもしれないというのに。
ただ、
「私は、ヴァルキュリスの巫女であり、それと同時にスピンネルの村の住人でもあります」
その問いかけには、アメーリアの語尾がほんの少しだけ乱れた。
「村の人たちを、殺したくはありませんでした……」
「……なるほど」
初めて、だろうか。
この場で、彼女の人間らしい心が覗いて見えたのは。……それだ

けに、その発言はおそらく彼女の本心なのであろう――と、ティースは思った。

それとともに、

（……そういうこと、か）

ティースの頭の中でいくつものパズルが埋まる。

彼女が語りつくす前に、彼女が頭の中で描いていたシナリオは彼の頭の中で形となった。

「それで、俺をこの村に呼んだんだね？」

「……」

「……どういう意味ですか？」

無言のアメーリアに、リィナの怪訝そうな声が続いた。

「この祭壇に入られるのが嫌なら、私たちを呼んだのは逆効果ではないんですか？」

「いや」

チラッとリィナを見て、それからティースは正面のアメーリアに向き直った。

「君は村人を犠牲にしたくなかった。といって、あの村長さんはどうやら怪我人が何人出ようと金の探索をやめる気配はない。……そこで君は考えた。どうすれば村人を殺さず、そして彼らがかつてのようにこの洞穴を畏れるようになってくれるか、と」

言葉にして、そして胸が少し痛む。

……今、口に出そうとしているその理由は、ティースにとっても悲しい事実だった。

それでも軽く唇を噛み、その言葉を紡ぎ出す。

「デビルバスターがここで殺されるようなことがあれば、村人たちにとってはこれ以上ない抑止力となる。……君は何度も俺に言ったね。お礼がしたい、報いたい、って。一昨日の夜に俺の部屋に忍んできたことも、昨日の夜にご馳走を振る舞ってくれたときも。……それは、生贄にするつもりで呼んだ俺に対する罪悪感の表れ、つまり――」

怒りよりも、残念な気持ちのほうが強かった。
「君は最初から最後までずっと、俺を殺すつもりでいたんだ」
「……」
アメーリアが目を閉じ、大きく息を吐く。そのときの彼女がどのような心境だったのか、ティースにはわからない。
ただ、そのことは後に回して、ティースはさらに問いかけた。
「アメーリア。……まだ一つ、わからないことがある」
「……なんでしょう？」
「この洞穴で金が採れるというのは本当なのか？　いや――」
ティースは小さく首を横に振って、言い直す。
「出るかどうかはこの際どうでもいい。……金が出るということを村人たちに伝えたのは誰なんだ？　今の話を聞く限り、それが君だったとはとても思えない。でも、いくら巫女の求心力が低下していたとはいえ、何の理由もなしに村人たちがこんな気味の悪い洞穴に入るとも思えない。つまり――村の中に、ここで金が出るなんて話をできる人間はいないはずなんだ」
「さあ……金が出るかどうかは私にもわかりません」
アメーリアはそれにはあまり興味がなさそうな顔をした。
「ただ、かつて村に住んでいた人の孫がつい最近村を訪ねて来たと聞きました。もしかすると、その人がお爺様から何か聞かされていたのかもしれません」
「その人は今も村にいるのか？」
「わかりません。……ティーサイト様」
アメーリアはその話題を打ち切るように少し強い口調でティースの名を呼び、そして小さく息を吐く。
「先ほどのお話、すべてティーサイト様のおっしゃるとおりです。最初から最後まで、私は確かに貴方様を殺すつもりだったのです。そして――」
と、その台座の中央に手をかけた。
「今も、そのつもりでいます」

「！」

アメーリアの右手の指が、そこから何かをつまみ上げる。……薄茶色の宝石のような塊だ。

さらに、彼女は懐に手を入れ、首にかけていた鎖のようなものを服の外に出す。

「……？」

よく見ると、その首鎖には何か丸いものをはめ込むような場所があり、そしてそれはどうやら、彼女が右手に持っている宝石の大きさとピッタリ一致しているようだった。

「ティーサイト様。……これが、ヴァルキュリスの巫女がここを守らなければならない一番の理由です」

「……なんだって？」

「この“エブリースの首飾り”には、この大陸を滅ぼすほどの力があると言われています。だから私は――どんな手段を用いても――」

と、アメーリアの手にした宝石が、その首鎖に填め込まれる。

背後で、息を呑む音が聞こえた。

「ティース様！　あれは――いけませんッ！」

「えっ？」

その瞬間。

「なッ！？　これは――！？」

空気が震撼する。

巨大な魔力が、アメーリアの全身から迸って――

「……アメー……リア？」

アメーリアの背中に、緑色と薄茶色の翼のようなものが見えた。

――いや、それは翼ではなく、彼女の体から迸る魔力の一端が可視化したものだ。

リィナの震える声。

「こ、これほどの魔導器が……まさかこちらの世界に存在してたな

んて……」
「魔導器だって!?　じゃあ――」
“魔導器”は、破魔具や神具の一種で、道具そのものが魔力を発現させる力を持つ特殊なアイテムのことだ。リィナやエルレーンがカムフラージュのために身に着けている指輪と同じ類のものである。
ただ、それ――“エブリースの首飾り”が秘める力は、彼女たちの持つそれとは比較にならないほど強く――
「彼女は人間の体で、これほどの魔力を――ッ!?」
将魔級――いや、それはかつて“朧”による制限を受ける前のリィナが行使していた王魔のそれにすら匹敵する魔力だった。
アメーリアの体から迸った風が荒れ狂い、神殿の中を渦巻く。
地の底から悲鳴のような地鳴りが聞こえてきた。
「……アメーリア！　待ってくれ!」
そんな中、ティースは力の限り叫ぶ。
「まだ確認したいことがある！　そもそもこの一件の始まりは――」
「ティーサイト様。……リィナ様」
だが、アメーリアはその言葉に反応することなく、
「言い訳はしません。……巫女としての職責を果たすため、お二人には死んでいただきます」
その体は自然に宙に浮かび上がるほどの魔力に包まれていた。瞳の色はそれぞれ、地の魔力を示す薄茶と、風の魔力を示す緑色に染まっている。
「アメーリア！」
「ティース様、いけません!」
そんな彼女に駆け寄ろうとしたティースを、リィナが引き止める。
「構えてください！　……来ます！!」
「――ッ！」
アメーリアの体の中心で、風が渦巻く。
（あれは――）
凶悪な威力を秘めた、あらゆるものを貫く風の槍。

風の二十七族ウィルヴェントが持つ必殺の武器“穿つ風”――
「……アメーリア――ッ！！」
呼びかけるティースの声も空しく。
アメーリアの手から“穿つ風”が放たれた――

「……ん？」
エルレーンの元を去り、待機している家へ戻ろうとしていたリージスは、その途中で一人の青年に会った。
彼が引き連れてきた人間ではない。ということは、おそらくこの村の人間だろう。
（……しかし、見慣れねぇな）
その青年は、この村の人間とは思えない格好をしていた。
「おや」
と、青年がリージスの視線に気付く。
「洞穴のほうに行っていたのですか？　あそこは今は危ないですよ」
「あんたは？　村の人間かい？」
優男だ。
「違います。ただ、実は祖父がここの出身でして。自分のルーツを辿るために来て、ここの村長さんのご好意で一ヶ月ほど滞在させてもらっている者です」
「ふぅん。そりゃ物好きだねぇ」
頭にはこのネービスでは珍しいターバンのようなものを巻いている。
「ええ、物好きなんですよ」
青年は左手を口元に当ててくすくすと笑った。
女々しいその仕草にリージスは眉をひそめたが、ふと、その青年の手の甲に不思議な形のアザがあることに気付く。

（なんだ、ありゃ……）
それはまるで涙のような形のアザだった。
それが三つ。
「……おい。どこ行くんだ？」
すれ違い、真っ直ぐ歩いていこうとする青年にそう尋ねると、
「私も少し、様子を見てこようかと思いましてね」
「……危険、じゃなかったのかい？」
「見てくるだけですよ。怖くなったらすぐ戻ります」
口元に薄い笑みを浮かべ、青年は遠ざかっていった。
一陣の風が、リージスの脇をすり抜けていく。
「……」
そしてしばしの間。
リージスはその青年の背中を不審そうに見送っていた。

その7『悪意との再会』

「――リィナ！　外だ！　外へ出ろ！」

“穿つ風”は、直撃が間違いなく即死に繋がる攻撃である。

祭壇内には身を隠す柱がたくさんあるが、アメーリアがその気になれば柱越しにティースたちの命を奪うことは容易い。

であれば、それらは逆に動きを阻害する障害物にしかならなかった。

ティースがリィナに外に出るよう指示したのは、この相手にはむしろ自由に動き回れる広い空間のほうが戦いやすいと、そう考えたからだ。

リィナを先に行かせ、神殿を出て階段を駆け下りる。

そんな彼らを追うように、二つの“穿つ風”が飛んできた。

「くっ……」

片方はリィナを狙ったもののようだったが、すでにアメーリアの視界から消えかけていたせいか狙いが甘い。

だが、少し遅れたティースを狙ったほうは確実に彼の体を目掛けて飛んできていた。

「くそっ……」

階段を駆け下りながら避けるのは不可能と瞬時に判断し、横に飛ぶ。

――間一髪。“穿つ風”は横に飛んだティースの足先を掠めるように何もない空間を切り裂き、階段の最下段に激突してそこに大きなクレーターを作った。

が、無茶な体勢で避けたティースも無事では済まず――

「っ……！」

階段を踏み外して転げ落ちていく。

「ティース様ッ！」

一足先に下り切っていたリィナが悲鳴をあげる。
が、ティースはすぐさま体勢を立て直し、近付いてこようとした彼女を制止した。
「もっと下がれ！　敵に集中しろ！　すぐ来るぞ！」
だらり、と、目の端に赤いものが見える。どうやら階段を転げ落ちる途中で額のどこかを切ったようだ。
ただ、思考ははっきりしていた。
問題ない。
袖で血を拭い、階段のほうを向いたままさらに距離を取った。
「……」
階段の一番上にアメーリアの姿が現れる。
ティースはさらに下がった。階段の上から見て、五十メートルほどは離れただろうか。
（よし……）
この距離ならば、遠距離攻撃はそうそう当たらない。彼女にティースたちを殺す気があるのなら、自ら階段を下りてくるだろう。
勝負するとしたら、その後だ。
一呼吸。
思考が冷静さを取り戻すとともに、体のあちこちの痛みが蘇ってきた。
額の裂傷は出血の割におそらく大したことはない。ただ、階段を踏み外したとき最初に打ち付けた左肩がかなり痛んだ。手に力が入らないほどではないが、それなりのダメージである。
リィナはまだ無傷だ。
アメーリアは最初からティースへの攻撃に重点を置いているようだった。
――ゆっくりと、アメーリアが階段を下りてくる。
一歩、一歩。
彼女が階段を下り切った辺りが、おそらく彼女にとっての射程圏ギリギリだろう。

チラッとティースは後ろを振り返った。……半ば予想していたことだが、ここに来るときに通ってきた穴はいつの間にか塞がれていて跡形もなくなっている。

つまりこれも、アメーリアの――いや、彼女がしている“エブリースの首飾り”の力なのだろう。

額から垂れてきた血を再び拭う。

（どうする……？）

そうしながらティースは次の一手を考えていた。

距離を取った戦いではおそらく勝ち目はない。リィナの水の魔力も、ティースの“風の刃”も、アメーリアが全身に纏うあの魔力の前では無意味だろう。

攻撃するのなら近付く必要がある。

逆に近付くことさえできれば、たとえ彼女が王魔並みの魔力の壁を持っていたとしても、彼が持つ並外れて高い聖力を“細波”で増幅することによって、打ち破ることはおそらく可能だ。

――しかしそれを実現するためには二つの高いハードルがあった。

一つ目のハードルは、彼女が放つ一撃必殺の“穿つ風”だ。

これまでの攻撃を確認した限り、アメーリアは最低でも三本の“穿つ風”を立て続けに放つことができる。

この攻撃の最大の難点は、剣で払うことが難しいということである。まともに打ち込めば剣を弾き、それを握る腕の骨を粉砕し、そのまま胴体を貫いてしまう。それほどの威力がある。

つまり避けるしかない。

避ける――そのことに注力した場合、それ自体はさほど難しいことではなかった。

その理由は、軌道がほぼ直線であること。

ティースの“視る”力があれば、アメーリアが攻撃を放った直後にその軌道を予測することができる。つまり距離さえあれば、避けることは比較的容易だ。

――そう。“距離さえあれば”である。

正確に狙いを定められた“穿つ風”が、ティースの体に命中するまでの時間、そして、彼の体がその影響範囲外に逃れるまでの時間を計算すれば、攻撃を避けるために必要な彼我の距離は自ずと浮かび上がってくる。

それはティースの目算で――完全に避けるのであれば十メートル。体のどこかを掠める危険を冒すとしてもせいぜい七、八メートルといったところだろう。

七、八メートル。

デビルバスターであるティースにとっては、一瞬で詰められる距離だ。充分勝負になる。

が――

そこで問題になるのが、彼女が“穿つ風”をいくつか立て続けに放つことができるということだ。

最後の一撃を放つのが七、八メートルの距離なら勝負にはなる。が、彼女に余力がある状態で七、八メートルだったら、避けて突っ込んだところを返り討ちにされて終わりだ。

――厳しい。

これが獣相手であれば、何らかの方法で注意を逸らしたり、無駄に攻撃させて弾切れを狙うこともできるだろう。

が――

見上げる。

アメーリアは階段の半分ぐらいまで下りてきていた。薄茶と緑色の瞳はそこに何の感情も浮かべてはおらず、表情はまるで時が止まったように凍りついたままだ。

感情を自ら殺しているのだろう。

（アメーリアはおそらく……この力を使うことには慣れていない）

と、ティースは考える。

このスピンネルの村がデビルバスターを招いたのは、村長たちの言動からして――少なくともアメーリアが巫女となってからは――おそらくは初めてのことだ。とすれば、彼女がこうして力を振るう

ほどの相手は今までにいなかったはずだと推測できる。
これが巫女としての力だというのであれば、その制御方法については先代の巫女などから学んではいるだろうが、実戦はおそらく初めて。
ふぅっ、と、大きく息を吐く。
（一か八か、突っ込んでみる価値はあるか？）
実戦経験がないのであれば、慌てて狙いがズレる可能性もあるし、反応が遅れる可能性もある。リィナに援護させれば、それに気を取られてティースへの対応が甘くなる可能性もあるだろう。
そうなれば勝敗は簡単にひっくり返る。
しかし――
（失敗すれば確実に死ぬ。成功しても――）
アメーリアを殺すことにはなるだろう。生と死の紙一重の状況で、彼女を殺さないよう手加減することは難しい。
そう、それが二つ目のハードルだ。
ティースが、彼女を殺すことをためらっているということである。
――これがもし、彼女が自ら思い立ち、私的な理由のためにティースを殺そうとしたのであれば、いくら温厚な彼とて躊躇しなかったかもしれない。
しかし、事実はおそらくそうではない。
その行動が村や自らの職責のためであるということもそうだが、それ以上に――
（彼女は――いや、村の人はみんな、騙されてる……）
祭壇でのアメーリアの話を聞いて、ティースはこの村で起きた出来事の真相をほぼ理解するに至っていた。
そもそも今回の一件が起きた背景には、村が貧困に陥りつつあったことや、巫女が求心力を失っていたことなどのいくつかの要因があるが、一番重要な原因についてはすでにはっきりしている。
何者かが“この洞穴で金が掘れるという話を伝えたこと”だ。
その話さえなければ、村が貧困だろうと、巫女が求心力を失って

いようと、村人たちがこの洞穴に侵入することはなかっただろう。
逆にいえば、いくつかある要因の一つが仮に欠けていたとしても、その原因さえあれば、欲に駆られた誰かがこの洞穴に侵入する可能性はあった。
だから、すべては“それ”なのだ。
そしてもし、その原因を作り出した人物が、巫女の真の役割と、この“ヴァルキュリスの顎門”の本当の姿を知っていたとしたら――村人たちが襲われたこと。
デビルバスターが呼ばれること。
そして――今、こうしているように、デビルバスターと巫女が殺し合いになること。
それらの出来事は、すべて予測できる。
つまり、現時点においては、村人も、アメーリアも、そしてティース自身も。
おそらくは、その“何者か”に踊らされているのだ。
「……アメーリアッ！」
「ティーサイト様――」
一段。
また一段。
アメーリアが階段を下りてくる。
あと――三段。
「これで最後です。私を恨みながら――死んでください」
「！」
全身の感覚が研ぎ澄まされる。
一瞬、世界が止まって――思考が巡る。
ティースは“細波”を構えて地面を蹴り、叫んだ。
「……リィナ！　“雨”を頼む！」
「え――は、はい！」
一瞬戸惑ったような声を出したが、リィナはすぐに体勢を整えて魔力を集め始めた。

“雨”はティースたちの中での取り決めで、牽制レベルでの断続的な援護攻撃を意味する。
もちろん全力でさえおそらく突き破れないであろうアメーリアの魔力の壁に対し、リィナの牽制レベルでの攻撃が意味を成さないことはわかりきっていて、彼女が戸惑ったのもそのためだった。
アメーリアの足が階段を下りきる。
と、同時に。
「アメーリア！　ここからは本気で行く！」
左右にステップを踏みながら、ティースは彼女に向かって突進した。
その後ろから、一足先にリィナの援護攻撃がアメーリアを目掛けて飛んで行く。
「……」
アメーリアは大きく息を吐いて――
その手に“穿つ風”が生まれる。
それを見ながら、ティースは手の平にじわっと汗が滲むのを感じた。
（イチか、バチか――！）
咄嗟に思い浮かんだ、死なずに、殺さない方法。
上手くいくかはどうかは、神――おそらくは彼女の神であるエブリースのみが知っていることだろう――

カラ、という音がした。

リージスが去った後、彼が持ってきてくれた昼食のパンを食べようとしたときのことである。
エルレーンは顔を上げて音のした方向を見たが、どうということはない。小石が洞穴の入り口のある崖の斜面を転がってきただけの

ことだった。

すぐに視線を正面に戻し、アメーリアの家がある方角へと向ける。

ヴァルキュリスへ祈りを捧げると言って部屋に閉じこもってからそろそろ一時間以上経つが、彼女が家から出てくる気配はない。

（……巫女、か）

そうしながらエルレーンは先ほどリージスから聞かされた、巫女の父親を名乗る人物の話を思い出す。……それが本当だとすれば、巫女がこの村での立場を失いつつある原因はある程度想像できた。

巫女だろうと王だろうと、あるいは聖職者であろうと、人間は所詮人間でしかない。虚構で塗り固めて無理矢理神聖化したものは――崇める人間が信じていれば信じているほど――それが剥がれ落ちたときの反動はおそらく大きい。

村の人間は、巫女もまた普通の人間であることを知り、そして急に夢から目を覚ました。所詮は夢の中のことだからと、それまでのしきたりを破ることさえいとわないようになった。もちろんそこには、村の貧困、金の発掘という二つのキーワードも影響しているが、一番大きいのはやはり巫女が巫女ではなくなったということだろう。

それがいいことなのか悪いことなのかはエルレーンにはわからない。

ただ――

（ヴァルキュリスの巫女って、結局なんなんだろう……）

その疑問が彼女の頭の中に渦巻いていた。

巫女とは通常、神、あるいはそれに準じた存在に仕え、その言葉を他の者に伝える存在だ。それはこのネービスで主流のミーカール教でも、大陸でももっとも多く信仰されているクライン教でも同じことである。

しかし、この村の巫女はそれらの宗教とは一見無関係の存在だ。

それが不自然なのである。

エルレーンは人間の文化に興味がある。その流れで、このネービスの歴史についてもそれなりに勉強していた。

――そもそもヴァルキュリスとは、ネービス領の北方に接する山脈の名前でもあることからわかるように、古くからネービス領と関わりの深い神獣だ。

当然、ネービスで主に信仰されるミーカール教の言い伝えの中にもその名前は多く登場する。

大抵の場合、ヴァルキュリスはその巨大な口から多くの魔物を吐き出し、時には自ら人間たちを食らおうとする悪しき怪獣で、最高神であるミーカールと敵対する存在であり、最後には必ず退けられる。

だからこそネービスの人々はミーカール教を信仰し、その加護を得ることによって、ヴァルキュリスの眼下でも平和に暮らしていくことができているというわけだ。つまり極端にいえば、このヴァルキュリス山脈があるからこそ、ネービスの人々は大陸主流のクライン教ではなく、ミーカール教を信仰しているのだとさえいえる。

ならば――と、エルレーンはそこで疑問に思うのだ。

ネービス領であり、そしてまたヴァルキュリス山脈の麓にあるこのスピンネルの村が、何故ミーカール教ではなく、ヴァルキュリスの巫女などというものを崇めているのだろうか、と。ミーカール教を信仰することでヴァルキュリスの脅威から逃れられるのだとすれば、そもそもヴァルキュリスに祈りを捧げる巫女など必要ないはずなのだ。

その理由。

エルレーンの頭の中には一つの仮説がある。

――それはこの村の“立地”だ。

村の周囲にある隆起。断続的に襲い掛かる地震。地殻変動。それらの現象はすべて、地の獣魔であるヴァルキュリスの力によるものと置き換えることができる。

そうだとすれば、この村の周りだけにはヴァルキュリスの力が及んでいる――イコール、ここはミーカール教の神に見捨てられた土地、と解釈することもできる。……少なくとも、かつての村の人々

はそう考えたのだろう。
だから村人たちはミーカールを信仰せず、それに代わるものとしてヴァルキュリスの怒りを鎮める巫女を崇めた。その結果、村の周囲があれだけ荒れているにもかかわらず、村の中だけはヴァルキュリスの強大な力から逃れ、こうして存在することができている、というわけだ。
ここまでが“今朝のとある時点”までのエルレーンの仮説だった。
しかし――
一つの疑問がエルレーンの頭から離れない。
本当に。
本当にこの村が無事なのはそういう理由なのだろうか、と。
――彼女の脳裏に残っていたのは、今朝、アメーリアの部屋で見た絵だ。
巨大な怪物、隆起する大地、逃げ惑う人々――
そんなすべての頭上に君臨する、風を意味する神の紋章。それはまるで、人々を襲おうとするヴァルキュリスを上から力で押さえ付けようとしているかのようにも見えた。
――あれは誰なのか。
浮かび上がってくるもう一つの仮説。
（あれこそがヴァルキュリスの巫女――あるいは巫女に力を貸している神……）
そうだとすればヴァルキュリスの巫女とはそもそも、ヴァルキュリスに祈りを捧げて怒りを鎮める存在ではなく、それを上回る力を持ってヴァルキュリスを押さえ付けている存在、ということになる。
何故、そのような絵が残ったのか。
――神話とは実話ではない。が、多くの場合、神話にはその元となった何らかの事実、あるいは願望が含まれている。
この大陸の現在において、神話の時代とはそれほど遠い昔のことではない。実際、ネービス公家には今も、最高神ミーカールが魔物を退治したときに使ったとされる神剣が、その力を保ったままに“

現存”している。
ならば。
ヴァルキュリスを押さえ付ける巫女の力というのも、あるいはまた――

突如、地響きが聞こえた。

「えっ……」
規則的に流れていた風が急激にそのベクトルを変える。
普通の人間には風向きが一瞬変わった程度にしか感じられないほどの変化だったが、エルレーンにはそれが、巨大な力に導かれる風の魔力の結集であることが即座に理解できた。
しかも――
（この、力……！）
人間界でそれほどの魔力を感じることは滅多にないだろう。
王魔クラスの力だ。
そしてその発生源は――
（ティース……リィナ！）
エルレーンの眼前にぽっかりと穴を開けた洞穴――“ヴァルキュリスの顎門”の奥からだった。
――迷う。
助けに行くべきか。
それともここで役目を果たすべきか。
この魔力に触発され、あるいは恐れをなして獣魔たちが洞穴から飛び出してくるケースは充分に考えられた。ここを離れれば村人たちが襲われる可能性がある。
かといって――
洞穴の奥にいる存在が何者なのかエルレーンにはわからなかったが、獣魔にせよ人魔にせよ、王魔級の魔力を持った魔が相手だとしたら、今のティースにはあまりにも荷が重すぎる。

行くべきか。
行かざるべきか。
――しかし、そんな彼女の迷いは結果的には無意味なものとなった。
「おや？　どこに行くつもりです、エルレーンさん？」
「！」
洞穴を覗き込んでいたエルレーンの背後に人の気配が迫っていた。
振り返る――と。
「キミは……？」
エルレーンには見覚えのない青年だった。ただ、自分の名前を知っているということは村人か、あるいはリージスの連れていた誰かだろうか――と、彼女が過去の記憶をどうにか引っ張り出そうとしていると、
「お初にお目にかかります。シルバ族の姫よ」
「！？」
エルレーンは咄嗟に身構えた。
「……キミ、は」
頭にはターバンのようなものを巻き、腰には一振りの剣。懐からは細長い笛のようなものの先端が覗いていて、手の甲には涙型のアザが三つ。
その目は――
（……この、男）
それは正常な人間の瞳ではなかった。
濁っている。
歪んでいる。
狂っている――
……男は言った。
「私はフェレイラ族のザヴィア＝レスターと申します。ザヴィア＝

フェレイラ＝レスターです。以後、お見知りおきください」
男は慇懃無礼な口調で貴族の子息がそうするように恭しく一礼してみせた。
「ザヴィア――」
エルレーンは息を呑む。
「ザヴィア＝レスター……キミが、タナトスの……？」
「おや？」
顔を上げて、ザヴィアは意外そうな顔をした。
「もしかするとティースさんから聞いていましたか？　それは光栄です。二十ヶ月ほどお会いしていませんでしたから、もうとっくに忘れ去られているものと思っていました」
「……最低の男だって、聞いてる」
エルレーンが眉間に皺を寄せて吐き捨てるようにそう言うと、ザヴィアは喉を鳴らして笑った。
「私も貴女のことはリューゼットさんから聞いてますよ。エルレーン＝シルバ＝ファビアス。……正直、半信半疑だったのですがね。風の一族でも王の中の王であるシルバ族の姫が、まさかこちらの世界で薄汚い人間と一緒に生活しているなんて」
まあ普通は信じませんよね――と、ザヴィアは口の端を小さく上げた。
腰にぶら下げた剣が鞘を擦る。
「さて、それではやりましょうか。姫」
「……一介の将ごときが、ボクと戦うつもり？」
牽制するように、エルレーンの体が薄っすらと緑色の神気を纏う。
だが、ザヴィアは口元を歪めたままだった。
「無駄な虚勢ですよ。貴女が“朧”で力を制限し、人間のフリをして生活していることは調査済みです。いくら貴女でも、その状態で私には決して敵わない」
「っ……」
エルレーンの足が一歩、後ろに下がる。

――彼の言葉は紛れもない事実だった。
ザヴィアの足もとで、風が渦を巻く。
「本当は暇つぶしにこの村で遊ぼうかと思っていただけなのですがね。ティースさんが来られるとは思ってませんでしたから。……思わぬ収穫でした。彼との再会だけではなく、まさか王魔の姫をこの手で斬り殺す機会が得られるなんて――」
ザヴィアの頬が大きく緩み、恍惚の表情を浮かべる。
じゃり、と、その足が無造作にエルレーンに近付いた。
「楽しみです。神聖なる貴女が死の間際にどのような苦悶の顔を浮かべるのか。……晒された貴女の首を見て、ティースさんがどんな表情をするのか――ああ」
これこそが、私の唯一の楽しみなのです――と、ザヴィアは呟くように言った。
「……」
それを見たエルレーンの脳裏に、洞穴に潜ったままの二人の顔が浮かぶ。
（……ティース。リィナ。キミたちは、どうか無事でいて――）
そして彼女は自らの死を覚悟した。

（やっぱりか――！）
放たれた“穿つ風”をギリギリのところで避けながら視界の端に映るアメーリアの挙動を見て、彼女にはおそらく実戦経験がないだろうという推測に誤りがないことをティースは確信した。
「っ……」
立て続けに放たれるリィナの水の矢に、アメーリアは明らかに集中力を削がれていた。身を守る魔力の鎧だけで弾き返せる程度の攻撃にもかかわらず、いちいち風を起こしてそれらを打ち落としているのだ。

――自らの力の使い方は練習すれば習得することができる。が、相手の力の強弱を見極める力は実戦や模擬戦の中でしか培うことができない。そして、首飾りの力を借りて戦う巫女に、そのような模擬戦を実施できる環境があったとは思えない。

だから実戦経験のない彼女は、リィナの攻撃が対応すべきものか否かを判断できず、結果としてそのすべてに反応する必要があったのだ。

ついでに言うとそれは、ティースの意図を即座に察し、わざと極端な強弱をつけて援護攻撃をすることでアメーリアの判断を誤らせている、リィナの密かなファインプレーでもあった。

（……これで一つ目のハードルは突破。あとは――）

リィナが攻撃しているのと逆の方向からアメーリアに近付く。

「！」

十メートルほどの距離でアメーリアが反応した。

二本の“穿つ風”がティースを襲う。

「くっ――！」

即座に軌道を予測。

身を低くして左に飛び、二つの攻撃を避ける。

（……もう一つ！）

着地点を狙ってきた三本目の“穿つ風”を地面を転がって避けると、すぐに跳ね起きてアメーリアから距離を取った。

「……」

ティースが離れたのを見て、アメーリアは援護攻撃を続けるリィナへその矛先を向ける。が、アメーリアとリィナの距離は三十メートル以上あり、リィナは自分に向けられた“穿つ風”を容易く避けると、すぐに援護攻撃を再開した。

「っ……」

アメーリアがリィナとの距離を詰めようとすれば、ティースはそれを牽制して近付く。アメーリアが彼を攻撃すればそれを避け、再び距離を取る。さらにはリィナの援護攻撃に気を取られた隙を見計

らって一気に距離を詰めようとする。
それらはすべてアメーリアの迎撃によって阻まれた。
――そんな一進一退の攻防が十分近く続いただろうか。
異変があったのはリィナだった。
「……はぁっ」
力を振り絞るように水の矢を放ち続けているが、遠目に見ても肩が大きく上下しているのがわかる。
（……まずいな）
そんな彼女の様子に気付いて、ティースはやや焦った。
いくら牽制程度の魔力とはいえ、休みなく十分近くも連続で打ち続ければ疲労は当然溜まっていく。
そして――
（俺も……そろそろか）
即死の攻撃を紙一重で避け続け、ティース自身の集中力もかなり削げ落ちていた。
しかし――
（……もう、少し）
まもなく。
そのはずだ、と。
ティースは自らの作戦――その推測の正しさを信じ、力を振り絞った。
やがて――
“予兆”は表れた。
「！」
ふ――と。
一瞬、アメーリアの身を包んでいた二色の光が消えた。

すぐに復活して――また、消える。
「……？」
アメーリアが不思議そうな顔をした。
が、次の瞬間、
「え――」
その体がグラッと揺れ、地面に膝をつく。
「な、に……？」
膝に力を込めて立ち上がろうとするアメーリア。
だが――
「な、え……？」
彼女は立ち上がるどころか、膝で立っていることもできずにその場に倒れこんだ。
それと同時に、体を覆っていた光が完全に消える。
「わ、私……あ、れ……」
「……そこまでだ、アメーリア」
ティースは剣を鞘に収め、そんな彼女に近付いていった。
「ぁ……う……」
そんな彼の行動にアメーリアは体を起こそうとしたが、手を地面につくことすらできない。
ティースは彼女のすぐ前まで近付き、
「限界だよ。……いくら王魔並みの魔力を使えるといっても、所詮人間だ。人間の体はもともと、そんな大きな魔力を使い続けられるようにはできていないんだよ」
と、言った。
ティースとて“細波”の魔力を開放した直後は疲労感と脱力感に襲われる。ましてや――彼女が使っていたのは、それとは比較にならないほど強大な魔力だ。いくらその首飾りが優れた魔導器だったとしても、いつまでも戦い続けられるはずがない。
あとは、どちらの燃料が先に切れるか。
それについては本当に一か八かだったが、どうやらリィナの攻撃

に無駄な魔力を使った分、彼女のほうに早く限界が訪れたようだった。
「君の体にある魔力は今、空っぽの状態だ。……リィナ、頼む！」
近付いてきたリィナがアメーリアの体を助け起こす。アメーリアはまだ全身に力が入らないらしく、リィナにもたれかかるような格好になった。
その体勢のまま、アメーリアはティースを見上げて、
「……なんのつもり、ですか？」
「話をしようと思ってね。さっきまではそれどころじゃなかっただろ？」
と、目線の高さまで屈み込む。
「……私は」
そんなティースから目をそらし、アメーリアは呟くように、
「動けるようになったら、また貴方様を殺そうとするでしょう」
目じりが少し震えた。
ティースは小さく息を吐いて、そんな彼女を宥めるように、
「それは無理だ。その状態になったらまた魔力を行使できるようになるまで半日から丸一日はかかる。立ち上がるだけなら二十分ぐらいだろうけどね。ま、君を説得するには充分な時間だよ」
「説得……ですか？」
「そう。まずは――」
腰を下ろして水筒を取り出す。
「水、飲めるかい？　ああ、このままだとアレだな……リィナ。水を分けてあげてくれるか？」
「はい」
と、リィナは自分の水筒の蓋を開けてアメーリアの口元に近づけたが、彼女はそれを拒否し、相変わらずの不思議そうな目をティースに向けた。
ティースは自分の水筒に口を付け、一息つくと、
「さっき途中まで話したと思うけど――金が掘れると吹き込んだ人

物のこと、教えてくれないか？」
「……どうして、ですか。今となっては、そんなことどうでも――」
「どうでもよくはない。もしかすると、すべてその人物の企みなのかもしれないんだからね」
「え？」
不思議そうな顔のアメーリアに、ティースは自分の仮説を語り聞かせた。
「――さっきも言ったけど、この洞穴から金が出るなんて話を語れる人間がいるとは思えないんだよ。……かつて村に住んでいた人の孫が、って言ってたけど、そんな昔の話ならなおさらだ。その頃はまだ、巫女は村の人たちから強く崇められていたんだろうし、この洞穴の不可侵性も今以上に保たれていたはずだからね」
「……では、村の皆が騙されているということですか？」
動けないということもあって、ようやくアメーリアはティースの話に耳を傾ける気になったようだった。
ティースは頷いて、
「そもそも、俺がこの村で金の現物を見たのはたった一度だけだ。村長さんの家で見た、加工済みの小さな金の欠片。それ以外には金どころか、金を含む鉱物らしきものすら見たことがない」
「……」
アメーリアは視線を横に動かす。
何事か考えているようだった。
やがて、
「……それが村の皆を騙す嘘だったとして、何故そんなことをするのですか？　なにか得があるとは思えません」
「それはわからないよ。その張本人に聞いてみるまではね。だから――」
ティースは真っ直ぐにアメーリアの目を見つめた。
「教えてくれ、アメーリア。その人――外から来て、かつて村に住んでいた人間の孫だと名乗り、村のみんなをそそのかした、その人

のこと」
「……その人は」
まだ半信半疑という顔。
だが、なすすべのなくなった彼女は素直に答えた。
「二十代前半ぐらいの男の方です。頭にターバンのようなものを深く巻いていて――」
「……え？」
ぞわ、と。
嫌なものがティースの背筋を駆け上がった。
嫌な記憶。
嫌な予感。
嫌な――笑み。
「穏やかな感じの方でした。いつもどこか楽しそうにしておられて、笛のようなもので村の皆を楽しませていたようです――」
「！」
息が詰まる。

――脳裏に浮かぶ、不吉な青年の顔。

「ザヴィア……レスター――」
「えっ？」
アメーリアとリィナが同時に不思議そうな顔をした。
「……アメーリア。その人――」
念を押すように、ティースは尋ねた。
「手の甲に、アザのようなものは……？」
「……確か、あったと思います」
「――」
間違いない。
「アイツだ……」
混乱で、頭の中がグルグルと回る。

そして最後に浮かぶ。
あの、笑み――
「エルが――危ない――」
咄嗟に立ち上がる。
「えっ？　ティース様、どういうことですか！？」
ティースの尋常ではない様子に気付き、リィナが少し強い調子の声を出した。
「……アメーリア。すぐに地上へ出る道を教えてくれ。エルが……いや、村のみんなやリージスたちも危ない。そいつは――」
唇をグッと噛み締め、吐き捨てるようにティースは言った。
「そいつはきっと、最終的にはみんな殺すつもりだ。すぐに戻らないと――みんな危ない」
「え……？」
その言葉にアメーリアの仮面はいともたやすく崩れ、困惑と焦燥がそこに浮かぶ。
「村のみんな、が……？」
「頼む。みんなを助けに戻らなきゃ……一刻も早く――」
脳裏に浮かぶ、最悪の光景。
それは、彼がかつて出会った、卑劣な悪意との再会を意味していた――。

その8『風裂爆弾（ブレンダー・ボム）』

まるで彼女だけが重力の束縛から解放されているのではないか――と、そう思えるほど、その動きはしなやかで軽やかだった。

そして実際、彼女の体は地上五メートルほどの高さにある。

尾を引く緑の光粒。

宙に浮かぶ姿は、まさに幻想の妖精そのものだった。

「“朧”で力を制限されてなお――」

それを見上げるザヴィアの左手から、標的を射抜く“風の短槍”が放たれる。

が――

「無駄」

緑の光に包まれた少女の体は、木の葉のようにクルリとひるがえって風の短槍を造作もなく避けた。

「キミの攻撃は当たらない。この先どれだけ続けようともね」

風の妖精――エルレーンは慇懃な悪意の男に対し、そう宣言したのである。

“ヴァルキュリスの顎門”の前で繰り広げられていたその戦いは、開戦の口火を切ったザヴィアの予想に反し、長引くこととなっていた。

その原因は二つある。

一つは、相性だ。

王魔以上の魔にのみ使うことが許される“神気”は、自らの魔力を増幅する効果だけでなく、他の者が扱う魔力を弱める効果をも持つ。かつてエルレーンが、タナトスに所属する炎の将魔、ネイル＝メドラ＝クルティウスと相対し、その魔力を完封して圧倒すること

ができたのは、王魔としての力の強さもさることながら、この敵対魔力の弱化効果によるところも大きかったのだ。

さらに神気の及ぼす効果は、その属性が近ければ近いほどに高まるという特性がある。つまり王魔の中でも特に神気の扱いに長けているエルレーンが支配するこの空間においては、風の将魔であるザヴィアがその力を存分に発揮できないのは至極当たり前のことだったのである。

そしてもう一つの原因。

それはザヴィアが、エルレーンの能力を読み違えていたということだ。

「まさか、あらゆる飛び道具を事実上無効化する“風妖精の舞（シルフィード・ダンス）”とは――」

ザヴィアの生み出す武器が短槍から刃の形に変わり、それが立て続けにエルレーンを目掛けて飛んでいく。

しかし結果は同じだった。

宙に浮かんだエルレーンはそれらの攻撃を難なく避ける。まるで伸ばした指先からヒラヒラと逃れてしまう花弁のように。

「……そのセンス。さすがはシルバ族の姫といったところですか」

ザヴィアは自らの読みが甘かったことを認めた。

とはいえ。

彼がそれを誤認識してしまったのは、無理からぬことでもある。

“王魔とは強力な武器を持った素人であり、将魔とは貧相な武器を持った兵士である”

王魔と将魔を比較するときに用いられるそのことわざは、強大な魔力を持つ王魔のほとんどが、戦闘技術においては将魔のそれに及ばないことを表している。その例え話において本当に強いのがどちらなのかはさておくとして、実際にはそれでも王魔の力が将魔を遥かに上回る場合がほとんどだ。

持っている武器の強大さゆえである。

――しかし。

この場においては、そもそもその前提条件が崩れているのだ。
ザヴィアは貧相な武器を持った玄人であり。
エルレーンはそれよりもさらに貧相な、錆びた農具しか持たない素人である。
――いや。
そうである、と、ザヴィアは思い込んでいたのだ。
しかし、実際には違っていた。
もちろん彼女は戦闘のプロなどではない。が、おそらくは馬を華麗に乗りこなすことに長けていた。歩兵であるザヴィアを翻弄する程度の馬術を身につけていたのだ。
それが彼の誤算。
短い剣を伸ばしても、馬上の彼女には決して届かない。そしてもちろん、武器らしい武器を持たない彼女が、ザヴィアの身に刃を突き立てることもないだろう。
完全なるこう着状態だ。
ただ――
長引けば、やがて彼女の騎士がこの場に現れる。
それ自体はザヴィアにとっても望むところであったが、目の前の姫を物言わぬ骸にした後、というのが彼の思い描いたシナリオだった。
そのために、どうするか。
「……仕方、ありませんね」
ザヴィアは無念そうにそう呟く。
「本来、これはティースさんを歓迎するために用意したものなのですが……」
懐に入れた手がそこから棒切れのようなものを掴み出す。
「――？」
そんなザヴィアの行動に、エルレーンは怪訝そうな顔をした。
彼が取り出したのは小さな笛だったのだ。
「私の持っているカードの中で、貴女の“風妖精の舞（シルフィード・ダンス）”を封じられ

るのは、どうやらこれしかないようです」
　迸る、甲高い笛の音。
　ザザザ――と、草木を掻き分ける音がして、上空に黒い影が飛んだ。
「！　風の五十四族――？」
　それは体長二メートルほどの、大きな翼を持つ鳥型の獣魔だった。
　しかし、それ自体は今のエルレーンにとってさほど脅威ではない。
　鋭いくちばしも、大きな爪も、おそらくは今の彼女の身を脅かすには至らないだろう。
　しかもその獣魔は飛び立った後、彼女たちの頭上をただ通過しただけでその武器を向けてくることさえなく。ザヴィアが一瞬気を取られた彼女の隙を突いてくるようなこともなかった。
　――いったいなんの意図があったのか。
　と、エルレーンがその疑問の答えを出すより先に。
「騎馬の足を封じるのに一番有効な方法をご存知ですか？」
　と、ザヴィアは言った。
「……なんの話？」
　目を細めてエルレーンが聞き返すと、ザヴィアはその口元に薄い笑みを湛えて、
「答えは簡単です。馬が飛び越えられない程度の障害物を用意してあげればいいんです。そこに鋭い刃物でもついていればなお効果的ですね」
「――」
　彼女がその言葉の意味を悟ったとき。
　その周りにはすでに“障害物”が張り巡らされていた。
「これ、は……」
　拳ぐらいのサイズの緑色の球体が、ふわふわと彼女の周りを浮遊している。
　ザヴィアの口元がさらに歪んだ。
「貴女ならご存知でしょう。それは風の魔力を練り上げて作った“

風裂爆弾（ブレンダー・ボム）”と呼ばれるものです。私はこれを作るのが非常に得意でしてね。……ああ、気をつけてください。ちっぽけなシャボン玉のように見えますが、下手に触れると――」

ギャァァァァ――という怪鳥の叫び声が、先ほどの獣魔が飛び去った方角から聞こえた。

「抵抗力のない人間なら、血も肉も骨もぐちゃぐちゃになってしまいますから」

ふふ、と、ザヴィアは可笑しそうに、

「それを獣魔に運ばせる方法は色々工夫しましてね。外の膜と内の膜を作り、外の膜は遠隔操作式、内の膜を衝撃感知式にするんです。それで今のようにばら撒かせるところまでは上手くいくようになったのですが、ああするとどうしてもいくつか翼に引っかかって残ってしまうらしく――」

私が外の膜を破ると同時に、運び屋さんはあのとおりです――と、喉を鳴らして笑う。

「……」

エルレーンは上下左右に視線を動かした。

“風裂爆弾（ブレンダー・ボム）”は鋭い刃を持つ螺旋状の風をこの球体に封じ込めた、主に罠として用いられるものである。……と言えば一見なんてことないように思えるが、実際には同じような形状の罠の中でもっとも作成難度が高く、それを作るためには魔力の強さだけでなく、魔力の形を自在に変化させる技術が必要とされ、その技術を持つ者であっても一日に二、三個作るのが限界と言われている。

その威力はザヴィアが口にしたとおり、抵抗力のまったくない一般人であれば骨まで粉々に粉砕されるほどだ。

それが――

彼女の周囲を覆う薄緑色の球体は、とてつもない数だ。

ざっと見て五十、いや百個近くはあるだろうか。

「……」

緊張に、エルレーンの喉が鳴る。

一見、ふわふわとただ浮遊しているだけに見えるが、おそらくその動きはザヴィアの意図したものだろう。ばら撒かれて無秩序に漂うだけならこれほど彼女の周りだけに密集することはないし、ばら撒いた時点でいくつかは体に触れてしまっているはずである。

つまり逆に言うと、やろうと思えばザヴィアは今すぐにでも、この百個近い“風裂爆弾（ブレンダー・ボム）”を炸裂させることができるということだ。

「ちなみに、貴女の周りにあるそれらはすでに外の膜を破った後です。触れると――まあ神気に守られた貴女なら一つや二つでどうということはないでしょうが、十、二十と……さて、何発まで耐えられるでしょうか」

全部耐え切ったら見逃して差し上げますよ――と、ザヴィアは酷薄な笑みを浮かべた。

「っ……」

冷や汗がエルレーンの背中を流れる。

何発まで――と、ザヴィアはそう言ったが、それはおそらく意味のない仮定だろう。その球体が彼の言うように衝撃を感知して力を解放するタイプなら、一つ破壊した時点で他の球体も連鎖するはずなのだ。

つまりその段階で、百近い“風裂爆弾（ブレンダー・ボム）”が彼女を一斉に襲うことになる。

その威力はどれほどのものか。少なくとも“朧”で魔力を制限された彼女がそれに耐え切れる可能性はゼロだろう。

ならば、触れないようにその包囲を抜け出す方法は――と、エルレーンは隙間を探す。が、彼女の周囲を覆うそれの密度は、降り注ぐ雨が空中に停止しているかのごとくだ。いかに小柄な彼女といえど、間を縫って抜け出すほどの隙間はない。

自力での脱出は不可能だった。

それどころか、下手に身じろぎでもしようものなら、うっかりその球体に触れてしまいかねない。

「空中で磔にされた気分はいかがです？」

身じろぎすらも困難となったエルレーンの姿にザヴィアは嬉々としながら、

「洞穴の中で渦巻いていた風の魔力が止まりました。どうやら下でも決着が付いたようですね。……彼が戻ってくるまで、最速で見積もって十五分、普通なら三十分ぐらいでしょうか」

彼女に聞かせるようにそう呟く。

「ま、何が起きるかわかりませんし、そんなに時間をかけるつもりはありません。貴女がもう少し絶望的な表情を見せてくれればなお喜ばしいのですが――」

キッと睨み付けたエルレーンを、ザヴィアは余裕の表情で見つめ返すと、

「見かけによらず負けん気の強い性格のようですね。いえ、それが王魔のプライドというものでしょうか」

「……キミみたいな最低の男を喜ばせるなんて死んでもゴメンだ」

「そうですか。まあいいでしょう」

小さく頷いたザヴィア。

エルレーンは小さく息を吸って――ゆっくりと、吐いた。

――彼女が生きてここを抜け出すには他者の力が必要だ。その力を持つ他者は今、洞穴の奥にいる。

戻ってくるまで十五分、というのはかなり用心深く見積もった結果だろう。洞穴の中の戦闘が起きていたと思われる地点からティースが直線距離で走ってきたとしておそらく十五分程度。実際にはもっともっとかかる。

彼女の目の前にいるザヴィアという男は、こうして勝負がついた後でもすぐにトドメをささないことからわかるように、相手を倒すことよりもいたぶることに喜びを見出すタイプだ。

が、それでも最低限の状況判断はできている。

ティースが戻ってくるギリギリまで彼女を生かしておくつもりはないだろう。

と、なれば――

もう一つ、深呼吸。
その事実を受け入れるにはさすがに時間が必要だった。
それはつまり――自らの生を諦めるということ――。
「では、終わりにしましょうか。運がよければティースさんもすぐに貴女の後を追うでしょう。寂しがる必要はありません」
す――と、ザヴィアが左手を彼女に向ける。
「！」
浮遊していた“風裂爆弾（ブレンダー・ボム）”がさらにその包囲を狭めた。
彼女の肌まで数センチ。
「真っ赤な血の花火です。観客が私一人というのが勿体ないですね――」
ゆっくり。
ゆっくりと左手を広げる。
「……」
エルレーンは目を閉じた。
息を吸って。
吐く。
おそらくそれが、この世で最後の深呼吸になるだろう、と、そんなことを思いながら。
――しかし。
彼女の覚悟はそこでいったん中断することとなった。
「――！？」
近くの茂みから姿を現した大柄な影。
それがひっそりとザヴィアの背後に迫っていたのだ。
（……リージス！？）
おそらくはザヴィアの意識がエルレーンへと最大限向けられる、

その好機を窺っていたのだろう。素人とは思えない絶妙のタイミングだった。
が、しかし、
「……リージス！　ダメ、離れて！」
エルレーンは大声で叫んだ。
ひっそりと忍び寄った苦労が台無しになることがわかっていながら、それでも彼女がそう叫んだのはもちろん、ザヴィアがそんなリージスの存在にとっくに気付いているとわかっていたからである。
「くたばりやがれ、この化け物がぁぁぁぁぁ――ッ！」
渾身の力で振り下ろされたリージスのスコップ。
しかし、ザヴィアはそれを避けようともしなかった。
「……どうやら観客がわざわざいらしてくれたようですね」
もちろん、避ける必要がなかったのである。
「――なッ！？」
リージスにとっては驚くべきことに、そしてザヴィアやエルレーンにとっては当たり前のごとく、振り下ろされたスコップはザヴィアの後頭部からほんの数センチのところでピタリと止まっていた。
“魔力の壁”である。
「なんと軽率な。しかしまぁ」
ザヴィアはゆっくりとリージスを振り返る。
そこには喜悦の笑みが浮かんでいた。
「っ……なんだ、こいつぁ……ッ！」
リージスは見えない壁の存在に表情を歪めつつ、スコップをもう一度振り上げ、全体重をかけて振り下ろす。
しかし結果は同じだった。
ザヴィアはふふ、と、笑って、
「危険であることがわかっていながら彼女を助けに来たというのであれば、その勇気は尊敬に値します。そして喜んでください。貴方の犠牲によってほんの数十秒、彼女は命を永らえさせることができたようです」

「くっ……！」

それ以上は無駄であるとようやく悟ったのか、リージスがザヴィアから距離を置く。

そんなリージスに、ザヴィアは左手を向けた。

「ダメ――ッ！　リージス！　逃げてッ！！」

エルレーンが悲鳴のような叫び声を上げる。

リージスは困惑と恐怖の表情を浮かべてさらに後ずさったが、もちろんそれで逃げ切れるものではない。

「いい表情です。それでは――」

ザヴィアはそこで言葉を切って。

そして――驚きに目を見開いた。

「……おおおお――ッ！！」

「……てぇぇぇぇぇ――ッ！！」

ザヴィアがリージスに攻撃を加えようとしたその瞬間、周りの茂みからさらに、雄たけびを上げながら十人ほどの男たちが飛び出してきたのだ。

手にしていたのはスコップやピッケルなどの様々な採掘道具。

どうやら皆、リージスの仲間たちのようだった。

しかし、

「っ……なんだよ、こいつ！」

「どうなってやがんだ、こりゃぁ！」

硬いスコップの先も、ピッケルの刃も、そのことごとくがザヴィアの魔力の壁に阻まれ、自ら弾き飛ばされて次々と尻餅をついた。

……下位魔ならいざ知らず、将魔が相手では一人が十人、十人が百人になろうと結果は変わらない。

ただ、彼らはその事実を知らなかった。

「こんちくしょぉぉぉぉ――ッ！」

リーダー格のリージスに従ってか、あるいは彼らにとって命の恩人であるエルレーンを自ら助けようとしたのか。男たちは決して敵うことのない相手に立ち向かい、そして魔力の壁に弾き返されてい

った。
「……」
そしてザヴィアの顔が次第に無表情へと変わっていく。
――一人が勘違いして飛び込んできたところまでは、彼にとっても余興として楽しむ価値のあるものだった。
しかし、
「……愚かすぎて、さすがに興ざめです」
呟くようにそう言って左手を上げる。
ゴォッ、という音がしてザヴィアの周囲に突風が吹き荒れ、男たちは悲鳴とともに一斉に吹き飛ばされた。
まずい――、と、エルレーンは叫んだ。
「やめてッ！！」
しかし、ザヴィアの動きは止まらない。
――全員を殺すつもりだ。
そう感じて、エルレーンはグッと奥歯を噛み締める。

――殺させるわけには、いかない。

「ザヴィア――！」
そして咄嗟に叫んだ。
「取り引きをしよう、ザヴィア！　だからその人たちには手を出さないで！」
ピタリ、と。
「……取り引き？」
振り下ろそうとしたザヴィアの手が止まり、そして興味深そうな目が彼女を振り返った。その身に纏っていた風が止む。
エルレーンは小さく頷いてみせて、
「そう。……取り引きだよ」
「不思議なことを、言いますね」
と、ザヴィアは空中に磔状態になったままのエルレーンの全身を

舐めるように見回して、
「今の貴女に、私と取り引きできる材料があるとは思えませんね。……まあ確かに、そこにいる何人かの命など私にとっても大して価値のあるものではありませんが――」
「だったら」
エルレーンは強い口調で言った。
「なおさら、キミにとってこの取り引きには価値があるはずだよ」
「……」
そんな彼女の真意を探ろうとするかのように、ザヴィアはゆっくりと手を元の位置に戻した。そして突風に飛ばされ尻餅をついて動けずにいる男たちを一瞥すると、
「伺いましょう」
エルレーンへ視線を戻した。
「彼らの命と逆の天秤に、貴女は何を乗せるつもりですか？」
「それはもちろん――」
深い緑色の瞳が引き絞られて、鋭くザヴィアを見据える。
「キミの命だ、ザヴィア＝レスター。ボクはキミの命と引き換えに、その人たちの安全を要求する」
「……」
一瞬だけ目を大きく見開いて。
にぃ、と、ザヴィアの口が楽しそうに歪んだ。

ティースは真っ直ぐに伸びる坂道を駆け上がっていた。
負けを認めたアメーリアの言葉によれば、その道は彼女の家の隠し部屋へと続いていて、ティースやリィナが通ってきた道と比べると半分以下の時間で地上へたどり着くことができるという。
ただ、それでも二、三十分はかかる道のりだった。
――長い。長すぎる。

気ばかりが逸った。
もしも、今回のことを企んだのがティースの予想通りの人物だったとすれば、それは人の命などなんとも思っていないような男だ。
つまり村の人々の命はいまや、風前にさらされた灯のようなもの。その中にはもちろん、万が一のことを考えて地上に残してきたエルレーンも含まれている。
最悪は――いや。
頭を振ってその考えを振り払う。
今はただ。
早く。
とにかく早く――
……どこまでも続くかと思われた坂道はやがて、遠く射し込んでくる陽光によってその終着点が近いことを知らせた。
ティースは抜き身の状態の“細波”を握り直し、一気に走っていく。
坂が緩くなり、道が徐々に狭くなって、そして光の中へと飛び出すと――
（ここは……？）
そこは狭い土倉のような場所だった。周囲はすべて壁で窓は一つもなく、太陽の光は天井の辺りに作られた採光口から微かに射し込んでいるだけだ。
四方の壁の一角には、一面に大きな絵が描かれている。……どうやらそこが回転する仕組みになっているらしかった。
躊躇なくそこを通ってアメーリアの部屋へ。
……しん、と静まり返っている。
家の中には誰の気配もなかった。
そして――
（あの、光は……）
ふと視線を移動させた窓の外に、微かな緑色の光が見える。
「エル！」

ティースは窓から外へ飛び出した。
その緑の光はエルレーンの神気の輝きだ。それは異常事態を知らせるものであると同時に、彼女がまだ生きていることの証でもある。
ただ、その方角から争う音のようなものは聞こえなかった。
心臓が早鐘を打つ。
どういう状況なのかを一刻も早く確認するため、ティースは速度を緩めず一気にその場所――“ヴァルキュリスの顎門”の入り口へと駆けつけた。
そして――
（あれは……）
やがて視界に、その男の後姿が映る。
黒いアンダーシャツにくすんだ灰色のベスト。頭にはターバンのような白い布。
変わらない。
一昨年の夏、北の街クレイドウルで初めて会ったときとまったく同じ出で立ちだった。
かつての記憶がティースの脳裏に蘇ってくる。
あれから一年半。
様々な出会いと別れがあって、数多の戦場を潜り抜け、残酷な現実にも直面し、いくつもの経験を得た。
それでも――なお。
その男の存在はティースにとって特別だった。
「……ザヴィア！」
「おや」
ゆっくりと、少しだけ意外そうな顔でその男が振り返る。
口元には不快感を刺激する微笑。
人を騙し、絶望に陥れ、その様を喜ぶ、歪んだ笑み。
唾棄すべき、邪悪の者。
「予想より早かったですね。お久しぶりです、ティースさん。クレイドウル以来ですか」

右手に中サイズの両刃の剣を携え、左手には細い笛。その甲には涙型のアザがある。

そしてザヴィアはゆっくりと会釈した。

「リューゼットさんやネイルさんをはじめ、貴方にはタナトスの皆が何かとお世話になっているようで。やはり私たちには不思議な縁があるようですね」

「……」

穏やかに耳障りなその言葉を聞き流し、ザヴィアを睨みつけるティース。

そうしながらまずは状況を確認する。

ザヴィアの背後、三メートルほどのところに大きな木があって、そこにエルレーンが後ろ手に縛り付けられていた。その手首には不思議な文様の入った枷がはめられ、口はタオルのようなもので猿ぐつわをかまされている。

そしてその反対側。大木を挟んで彼女と背中合わせに大柄な男――リージスが、やはり同じように縛り付けられていた。

二人とも意識はあるようで、見たところ大きな怪我はない。

「ッ……」

ティースの姿に気付いたエルレーンは、猿ぐつわの向こうから何か言おうとして諦め、眉を曇らせて申し訳なさそうな表情をした。

そんな彼女に対し、ティースは小さく首を振って、気にするな――と、唇だけを動かしてそう伝えると、すぐにザヴィアへと視線を戻す。

そして油断なく辺りの気配を窺った。

――不自然だ、と思った。

エルレーンの手を封じている枷は、人魔を捕らえたときによく用いられる魔力を封じる枷だ。物によっては上位魔クラスの魔力を完全に封じるものもあり、今の彼女では自力で抜け出すことは難しいだろう。

ならば何故、ザヴィアが彼女を生かしているのだろうか――と。

理由もなくそうしているとはとても思えず、つまり何か罠のようなものがあるのではないか、と、ティースはそう疑ったのである。

そんな彼の様子を見て、

「彼は、貴女の先ほどの話を知らないようですね」

と、ザヴィアが呟く。

ティースは一瞬戸惑ったが、どうやらそれはエルレーンに向けた言葉のようだった。

「まあ、そのほうが面白いのでいいでしょう。……さて、ティースさん」

薄笑いを浮かべたまま、向き直る。

「心配しなくとも今は彼女に手を出すつもりはありません。そして実を言えば、私にはこの場所で貴方をどうこうする気もないのです。……いえ、つい先ほど事情が変わり、それができなくなってしまったというのが正確ですね」

と、ザヴィアは言った。

その言葉の意味は理解できなかったが、

「そっちになくともこっちにはある」

周囲に何かが隠れている気配はない――と、ティースはザヴィアとの距離を詰めた。

ザヴィアはふふっと笑って、

「自信があるようですね」

「……」

かつては手も足も出ずに敗れた。

今は――わからない。が、自信のようなものはない。

彼の中にあったのはただ、目の前の醜悪な者に対する怒りだけだった。

さらに距離を詰めながら威嚇するように“細波”を握り直し、

「今度は何を企んでいた？」

「何も。今回に関していえば本当にほとんど眺めていただけですよ。ありもしない金の話をしたり、それを求める若者を洞穴の奥に誘っ

たりはしましたがね」
すべては彼らの欲深さが引き起こしたものです――と、ザヴィアは悲しげに言った。
「白々しいことを……！」
唇をかみ締め、ティースは吐き捨てる。
この村の経済状況を考えれば、彼らが金を求めたのは当然のことだった。ザヴィアは当然それをわかっていて危険な洞穴へ向かうよう仕向け、それを楽しんでいたのだ。
二人の距離が七メートルにまで縮まる。
ティースはそこで前に進むのをいったん止めた。
剣の間合いには程遠いが、その先は彼らにとって、互いに一呼吸で飛び込むとともに攻撃できる距離だ。
「ずいぶんと腹を立てておられるようですね」
ザヴィアはゆっくりと右手の剣を持ち上げ、その切っ先をティースに向ける。ただ、正式な構えではなく、左手には笛を持ったままだ。
「一つ予言をしておきましょう」
「……予言？」
「先ほども言ったとおり、私はここで貴方を殺すつもりはありません。そして貴方が私を殺すこともできないでしょう」
「さっきも言った。ここでお前を逃がすつもりはない……！」
「……やれやれ」
ティースの怒気が膨れるにつれ、ザヴィアは楽しそうに口の端を大きく持ち上げた。
「ならば仕方ありません。本当はこのまま立ち去るつもりでしたが、ほんの少しだけ相手をしてさしあげます――」
――その言葉が終わるか終わらないかのうちに。
瞬きほどの時間でティースの体は一刀一足の間合いに接近した。

「！」
それはザヴィアにとって、予想をやや上回る速さだった。
脇腹辺りを目掛けて“細波”が振るわれる。
やや引き気味にザヴィアの剣がそれを迎えた。
金属の打ち合う甲高い音。
「……魔力の壁は、なんなく越えたようですね」
「お前の予言は当たらない……ッ」
ティースは重ねた剣に力を込め、呼吸が聞こえるほどの近い距離でザヴィアを睨みつけた。
「ここがお前の最期の場所だ、ザヴィア！」
「この程度で――」
「！」
足もとから突風が吹き上がる。
危険を感じ、ティースは瞬時に間合いを取った。
「私も、舐められたものですね――！」
ザヴィアの頭上に集まった風がいくつもの刃と化し、ティースを襲う。
その一つ一つが必殺の威力を秘めた攻撃だった。
しかし、
「舐めているのは――」
世界が動きを止める。
「――お前のほうだッ！」
「！　な……ッ！？」
ザヴィアが驚愕の声を上げる。
その長身が一瞬子供に見えるほど低い体勢で突進し、ティースは剣を振るうこともなく、偶然そこにできていた風の刃の隙間を抜けた。
「っ……！」
ザヴィアは左手の笛を宙に放り投げると、両手で剣の柄を握りしめる。

ティースの渾身の力で振り上げられた“細波”が、ザヴィアの剣と真っ向から重なった。
「くっ……！」
その剣圧がザヴィアの表情から余裕を消した。
一歩、二歩と後退る。
ティースが追う。
三合打ち合って、ザヴィアの口元が再び笑みを浮かべた。
しかしそれは余裕の笑みではない。
「……驚きました。まさかたった一年半で――いや、予想通りというべきですか……」
私の目に狂いはなかったようです――と、そう言って、
「少し早いですが、ここまで、ですね。私のほうも今日は全力でやれない事情がありまして」
ザヴィアが後ろに飛ぶ。
「逃がすかッ」
「いいえ――貴方は私を逃がすしかありません」
「！」
ザヴィアは先ほど放り投げた笛を空中でキャッチすると、それをすぐに口元に運んだ。
――頭上に影が走る。
「風の五十四族！？」
それはザヴィアがかつてクレイドウルでも使役していた大きな鳥型の獣魔だ。そして、頭上を通過した獣魔がその身から緑色の玉のようなものをばら撒く。
その数は三つ。
ふわふわと向かった先は――
「さぁ、ティースさん。早くあの二人を助けてあげてください。でなければ――」
エルレーンとリージスが括りつけられた大木だった。
「あの“風裂爆弾（ブレンダー・ボム）”が、二人をミックスジュースにしてしまいます

よ」
「ッ……！」
その言葉がハッタリではないことを即座に察し、ティースはザヴィアから間合いを取って、躊躇することなく二人のもとへと向かった。
「エル！　リージスさん！」
ティースは“細波”を振るい、少々乱暴に二人の拘束を切断する。
「――！　――！」
猿ぐつわをかまされたまま、エルレーンが何事か訴えていた。
ティースは後ろを振り返る。
“風裂爆弾（ブレンダー・ボム）”はすぐ眼前に迫っていた。
「……リージスさんを頼む！」
ティースはエルレーンの手首にはめられていた枷を“細波”の一撃で破壊し、二人の背中を押して、迫りくる緑の球体へと向き直った。
「静かに波立つ海よ、悪意を弾く盾と成れ――ッ！」
“細波”が青い輝きを放ち“水の盾”がティースの正面に展開する。
背後で風が渦巻き、二人の気配が離れた。
ティースはギリッと奥歯を噛み、踵に力を込め、“細波”を正眼に構える。

――“水の盾”に触れた三つの“風裂爆弾（ブレンダー・ボム）”が弾けた。

耳をつんざく轟音。
「っ――！」
球体に封じられていた鋭い刃を持つ螺旋状の風が、周囲のあらゆるものを巻き込みながら広がっていく。
大地が削れ、大木の幹がまるでお玉杓子で掬ったかのようにお椀状に抉れた。
「くっ……！」

ティースの正面に展開した“水の盾”もその威力を押さえきることはできず、圧に耐えかねてシャボン玉のように割れてしまう。
が、それはティースの予測の範囲内だった。
「ふ――ッ！！」
息を詰め、水の盾を越えてきた風の螺旋に“細波”を叩きつけるように振り下ろすと、まるで火薬が爆発したときのような大きな音がして風が弾け飛ぶ。飛び散った風の刃のいくつかはティースの体を掠めたが、そのほとんどはやがて空中に溶けるようにして消えていった。
「……ふぅ――っ」
脅威が去ったことを確認してティースが詰めていた息を吐くと、パチパチパチ、と、手を叩く音がして、
「お見事です、ティースさん。その“風裂爆弾（ブレンダー・ボム）”は私の自信作なのですが、貴方にトドメを刺せるほどのものではないようですね。……安心しました」
「ザヴィア……貴様！」
ティースがその視界に再びザヴィアの姿を捉えたとき、その体は風の五十四族とともに高く空に上っていた。
「言ったでしょう。今回はこれでお別れです。次は――」
と、空中のザヴィアの視線がティースの後方、十メートルほどの場所にいるエルレーンへと注がれる。
「次はお互い全力で殺しあえる環境を用意します。色々と障害を排除して、ね」
「……逃がさない！」
ティースの叫びに応え、“細波”が緑色の光を放つ。
「穏やかに凪ぐ風よ――！」
「おっと、ティースさん。そんなことをしている場合ではありませんよ。ほら……」
と、ザヴィアの人差し指がティースたちから大きく逸れ、村の中心部辺りを指差す。

「あの辺りには村の人たちが大勢避難しているんでしょう？　彼らを放っておいて大丈夫ですか？」
「……なんだと？」
「急げば全員を助けられるかもしれませんよ」
ニヤリ、と笑う。
「もっとも――貴方一人で約三百個の“風裂爆弾（ブレンダー・ボム）”をすべて処理できれば、の話です」
「な――」
ティースがその言葉の意味を投げかけようとした、そのとき。
「……ティース！　風の五十四族が！」
「！」
エルレーンの指した先、村の中心辺りの遥か上空に、旋回する風の五十四族の小さな影が見えた。
ティースの背筋に冷たいものが走る。
（約三百個って、まさか――！）
ザヴィアが笛を口元に運んだ。
「さあ、ゲームスタートです。村全体に撒き散らされた三百個の“風裂爆弾（ブレンダー・ボム）”が地表に到達するまで約五分。その間にすべて破壊するのも良し、村人たちを逃がすのも良し。……ま、どちらも難しいと思いますがね」
「ザヴィア！　やめろぉぉッ！！」
「お断りします」
楽しそうにそう言って、ザヴィアは笛に口を付けた。
禍々しい音色が、青空に響き渡る。
そして、
「ティースッ！」
エルレーンの悲痛な叫び。
「――」
ティースは言葉を失う。
見上げた上空。

緑色をした無数の爆弾が、まるで青空を侵食するかのように広がっていくのが見えた――。

その9『聖女の結界』

青空を侵食する緑色の粒は、刻一刻とその面積を広げていった。
最初は砂粒ぐらいの大きさに見えていたものが、今では林檎の種ぐらいの大きさにまでなっている。
それらはゆっくりと、しかし確実に地上へと近付いていたのだ。
「くそ……ッ！」
ティースは風の五十四族とともに空へ逃げたザヴィアを追うのを諦め、エルレーン、リージスとともに、その“風裂爆弾（ブレンダー・ボム）”の落下地点――村人たちが集まっているはずの村の中心地へと走っていた。
（あの感じだと、地表に落ちるまで五分程度――）
それについては先ほどのザヴィアの言葉に嘘はなさそうだった。
が、しかし。
それは絶望的な時間だ。
彼らが村の中心にたどり着くまでどんなに急いでも三分はかかる。
そこから村人たち全員を“風裂爆弾（ブレンダー・ボム）”の影響範囲外に逃がすとなると――
「エル！　この距離であれを撃墜できるかッ！？」
ティースは正面を向いたまま速度を緩めず、後ろに向かってそう叫んだ。
村人の中には足腰の弱った老人もいるし、若い男たちも大半が獣魔に襲われ負傷している。まともにやれば決して間に合わないのが明らかだった。
それならば空中で、あの爆弾の効果が地表に及ばない高さのうちにすべて破壊できれば、と、ティースは考えたのである。
（数は多いが、うまく連鎖させることができれば……）
希望がないわけではない。
「やってみるけど――」
返ってきた声とともに、背後で突風が発生する。鋭い音を立て、

いくつもの風の刃が上空目掛けて飛び、そのうちのいくつかは落下する緑の球体に直撃した。
　が――
「ダメ！　爆発しない！」
「くっ……」
　先ほどティースを襲った“風裂爆弾（ブレンダー・ボム）”は衝撃感知型だったが、どうやら空中にばら撒かれたのはそれと違う――時限型か、あるいは遠隔操作型のようだった。
　どちらも外殻を破壊すれば強制的に破裂させることもできるが――
「この距離だとボクの力じゃ破壊できない！　近距離なら可能性はあるけど――」
「それじゃ意味がない！」
　そこまで近付いてしまっては、破壊に成功したとしても地表に被害が及ぶのは避けられないし、三百もの標的をタイムリミットまでに破壊することも不可能だ。
「リージスさん！」
　と、ティースはエルレーンのさらに後ろを若干遅れて付いてきていたリージスに向かって叫ぶ。
「おぅ！　なんだ！？」
「あなたはここから離れてください！」
「はぁ！？」
　リージスが不満そうな声を出す。
「冗談じゃねぇよ！　手を貸さなきゃ逃げらんねぇじいさんばあさんもいるんだろうが！」
「それは俺たちでなんとかします！　だからあっちへ！」
　と、ティースは続けた。
　三百個とはいえある程度は分散しているから、最悪、あの爆弾が炸裂する中心にいてもティースやエルレーンには生き残れる可能性もある。しかし、魔力に対して抵抗力のないリージスは確実に命を落とすことになるだろう。

だから、これ以上彼を付いてこさせるわけにはいかなかったのだ。
だが、
「いいや！　俺は一人でも連れて一緒に逃げるぜ！」
リージスは足を止めようとはしなかった。
「っ……」
ティースはさらに説得を続けようとしたが、もはやその余裕もない。
約三百個の“風裂爆弾（ブレンダー・ボム）”は、すでに半分以上その高度を下げていたのだ。
「――皆さん！　外へ出て！　逃げてください！！」
目的地へたどり着き、ティースが大声を張り上げると、村人たちが何事かと家から出てくる。
「何事ですか、ティーサイト様！」
中には村長であるアルフレッドの姿もあった。
「空を見てください！」
ティースの言葉に村人たちは一斉に空を見上げ、直後、どよめきが広がっていく。
続けてティースは言った。
「あれは魔の攻撃です！　皆さんとにかく村の外へ！　外のほうへ向かって逃げてください！　怪我人やお年寄りには――」
言いかけて口を噤んだ。
怪我人や老人に手を貸していてはおそらく逃げ切れない。かといって彼らを見捨てて逃げろとは言えない。
そんなティースの背後からリージスが声を張り上げた。
「おい、おめぇら！　元気の有り余ってるやつは怪我人やじいさんばあさんを手伝え！　それ以外の連中は一目散に逃げろ！　ためらってる暇ぁねぇぞッ！！」
そう言ってリージスは自ら、家を出てこようとしていた老夫婦に駆け寄っていった。
そんな彼の背中にティースは心の中で感謝の言葉を呟き、そして

空を見上げる。
（……あと二分程度――）
ティースの左右を、村人たちが必死に駆け抜けていった。
――彼らの足、“風裂爆弾（ブレンダー・ボム）”の散らばり具合とその効果範囲。
運良く逃げ延びることができるのはよくて一割程度だろう。怪我人や老人、そんな彼らに手を貸している人々は、このままだとおそらく全滅だ。
「くそ……ッ！」
ティースは背後を振り返り、空に浮かんでいる風の五十四族――高い場所から傍観を決め込んでいるザヴィアを睨みつけた。もちろんその表情まで窺い知ることはできなかったが、おそらく彼が浮かべているであろう喜悦の笑みを想像してティースの胸は熱く煮えたぎった。
（……あいつの思い通りになんか、させるもんか――！）
ぐっと拳を握り締める。
「エル！　……手を貸してくれ！」
「え！？」
手にした“細波”を地面に突き立て、上空を見上げたティースの言葉に、エルレーンは驚いたような顔をした。
「手を貸せって……ティース、まさかアレを――！？」
「それしかない！　今ならまだ、空中で全部破壊できればみんなを助けられる！」
落下まで一分未満の距離になれば、地表が爆弾の効果範囲内に入ってしまい、それもできなくなるだろう。
だから空中で破壊するなら今のタイミングしかなく、そしてティースにはそれを可能とする奥の手があった。
が、しかし、
「無茶だよ！」
エルレーンはそんな彼の正面に回って、言った。
「確かに可能性はゼロじゃないけど、失敗すればキミは死ぬ！　そ

れにアレはそういう使い方をするものじゃない！」
「わかってる！　けど、やらなきゃ俺たち以外みんな死んでしまう！！」
キッと彼女を見つめる。
「っ……」
そんなティースの強い眼差しに、エルレーンは一瞬怯んだ顔をしたが、
「……ダメ！　そんな自殺行為に手は貸せない！　そんなことでキミを死なせたら、リィナやシーラに顔向けできないよッ！」
そう言ってティースから一歩離れた。
「エル！」
その奥の手は彼女の協力なしには成立しない。
しかし、エルレーンは頑として首を縦に振ろうとはしなかった。
「……エル！　頼む！」
そうこうしているうちに爆弾はさらに地表に近付いていた。
あと三十秒もすれば、空中で破壊することさえ不可能になる。
「ティース、みんなを手伝って！　早くここから離れないと！」
「くっ――」
リージスやその仲間たちが、怪我人や老人たちを助けてその場から離れていく。が、たとえティースが手を貸したところで、彼らがあと一分半の間に爆弾の効果範囲外に逃れることは不可能だった。
（このままじゃ、みんな――）
全員死ぬ。
みんな手が届くぐらい近くにいるのに。
誰一人救うことができない。
また――
「っ……」
唇を噛み締めて。
「……エル！　もしお前が手を貸してくれないなら――！」
と。

ティースが言いかけた、そのとき。

――咆哮のような唸りを上げ、一筋の風の渦が上空に向かって飛んだ。

「……えっ！？」

ティースとエルレーンが同時に空を見上げる。

空に飛んでいった風の渦は、地表に近付きつつあった“風裂爆弾（ブレンダー・ボム）”のいくつかを呑み込み、破壊して消えていった。

「――“穿つ風”！？」

ある予感とともに、ティースがその“穿つ風”が放たれた辺りに視線を動かすと、洞穴へと続く道の途中に、緑と薄茶の光に包まれた巫女の姿があった。

「アメーリア！？」

「ティーサイト様……お逃げください。ここは私が……」

フラ、フラ、と近付き、空を睨みつける。

「この村は、私が守ります。それが私の――」

アメーリアの体が緑色に輝くと、再び“穿つ風”が上空に放たれ、空いっぱいに広がった爆弾の群れに風穴を開ける。

しかし――

「アメーリア！　やめろ、無茶だ！」

華奢な少女が地面に膝をついたのを見て、ティースは彼女に駆け寄った。

「君の力はもうほとんど尽きている！　それ以上やったら体が壊れるぞ！」

それは誇張でもなんでもない。事実、アメーリアの体は怪我をしたわけでもないのに、ところどころ皮膚が裂け、そこから赤い血が流れ出していた。

体が大きな魔力の放出に耐え切れなくなっているのだ。

「でも、私は――」

「それに、それじゃもう間に合わない！　もう――」
と、ティースは空を見上げた。
二発の“穿つ風”が破壊した“風裂爆弾（ブレンダー・ボム）”は十個か、十五個か。
いずれにせよ全体の一割にも満たない数だ。たとえ彼女の体が崩壊するまで“穿つ風”を撃ち続けたところで、おそらくはその半分も破壊できずに終わることだろう。
「でも――」
ティースが告げたその事実に、空を見上げたアメーリアの目が大きく見開かれる。
「このままでは、私の村が……私は――」
貴方様を殺してまでも守ろうとしたのに――と、声が震え、目の端に薄っすらと涙が浮かんだ。
「私は――」
「……わかってる、アメーリア」
そっと彼女の前に屈みこみ、ティースは人差し指でその涙を掬った。
「その想いは決して無駄にはならない。だから」
立ち上がって、顔を上げる。
「あとは全部任せて、ここでじっとしているんだ」
それは慰めでもなんでもなく。
事実だった。
村を心配し、まともに動かないはずの体で洞穴から出てきた。
彼女のその想いが――おそらくは村を救うことになる。
「……ティース様！」
ティースが向けた視線の先――洞穴へ続く道に、もう一つの人影。
おそらくアメーリアと一緒に出てきたのだろう。リィナだった。
ティースは叫ぶ。
「リィナ！　手を貸してくれ！！」
空に広がる緑色の球体は、その表面の光彩がわかるぐらいにまで接近していた。

もはや地表に影響を与えずに破壊することもできないだろう。
が――
「アレを、全部破壊する！！」
「はいッ！」
ティースの意図を察し、ためらうことなくリィナは頷いた。
――大きく息を吐く。
手にした“細波”を地面に突き立てた。
そんなティースの背後に、寄り添うようにリィナが立つ。
「――静かに波立つ海よ」
ティースの口が呪文を刻み、“細波”の柄にはめ込まれた宝石が青い光を放った。
そして、
「ティース様。……いきます」
後ろから抱きしめるように、リィナがティースの体に両手を回す。
その、瞬間。
「ッ――！」
ティースの全身を痺れるような魔力の奔流が駆け抜けた。
体中のすべての力が吸い尽くされる。
二人の全身を覆ったのは青い光粒――水の“神気”。“細波”の宝石がさらに眩い光を放ち、その力が“神気”によって数倍に増幅される。
「く……ぅッ！」
強烈な脱力感に震える膝に力を込め、ティースは全身の気力を振り絞った。
増幅され、凝縮した水の魔力が“細波”の剣身を満たす。
空気が。
大地が震える。
そばにいたアメーリアの目は驚きに見開かれ。

逃げようとしていた村人たちも、いったい何事かと振り返る。
村の中心には青い光。
そして、
「“細波”よ、すべてを守護する光と成れ――ッ！」
ティースの口が再び呪文を刻んで。
その剣の奥底に秘められた力が、解放された――。

「……これは」
ザヴィアは驚愕に目を見張った。
村の中心辺りに発生した青い光の膜は、今まさに村に落下しようとしていた“風裂爆弾（ブレンダー・ボム）”を押しのけるように破壊しながら広がり、村全体を包み込んで、上空に浮かんでいたザヴィアの眼前辺りまで達していた。
三百個の爆弾はすべて空中から消え。
どうやら村の中に被害はないようだ。
「……」
ザヴィアは微かに眉をひそめ、眼前の水の結界に左手を向けた。
そこに風の渦が生まれ、結界に向けて放たれる。
が――
「ビクともしない……か」
ほぼ全力で放ったザヴィアの風が、結界の表面に揺らぎすら残すこともできずに四散する。どうやらその結界は、最低でも王魔級の魔力で形成されたものだ。――いや、そうでなくてはこれだけ広範囲に、ザヴィアの爆弾をすべて防ぐほどの結界を張ることはできないだろう。
目を閉じて、しばしの思考。
「厄介ですね。あの二人――」
再び開いた視界の先に小さく映る、ティースのそばに寄り添う二

人の少女。
「……ま、いいでしょう」
ふふっ、と笑い、
「次はもう少し面白い趣向を考えておきます。……またお会いしましょう、ティースさん――」
ザヴィアは風の五十四族とともに空高く上がっていく。
そうして――スピンネルの村を襲った脅威は去っていったのである。

ティースが意識を取り戻したのは、真っ暗な部屋の片隅だった。
「う……っ」
呻き、状況を認識。
体には布団がかけられている。背中の感触からするとどうやらベッドの上のようだった。
「ここは……」
身を起こそうとしたが力が入らない。
混濁した記憶が徐々に蘇って、そしてティースはようやく思い出した。
（ああ、そうか。アレを使って――）
リィナの力を借りて“大結界”を展開した後、村人たちが全員無事であること、さらにザヴィアの姿が消えていることを確認して、そこで力尽きて――
いや。
力尽きたことも確かだが、それよりも緊張が解けてしまったことでリィナに触れられていることを思い出し“アレルギー症状”により気絶してしまったのだった。
なんともしまらない話である。
――少し気合を入れてベッドの上に上半身を起こす。

うっすらと射し込んでくる月の明かりで、どうやらそこがアメーリアの家の一室――彼が昨晩泊まった部屋であることが確認できた。
外は昼間の喧騒が嘘のように静かだ。
（……みんな助かったんだな）
そのことを再確認して、ティースは深く安堵の息を吐いた。
脅威は去った。そしておそらく、この村で起きていた金の採掘騒動も終わることとなるだろう。金が採れるというのが作り話であった以上、村人たちが洞穴に潜る理由はなくなったのだから。
もちろん、それでこの村のすべての問題が解決したというわけではない。
復興のアテがなくなり、村長はまた頭を悩ませることになるだろう。
しかし――ひとまずは。
（巫女は、どうなるのかな……）
次にティースはそのことを考えた。
彼女が上空に向かって“穿つ風”を放つ姿は、おそらく何人かの村人にも目撃されただろう。その存在がただの“飾り物”でないことはいずれ知れ渡ることになる。
信仰を取り戻すか。
あるいは迫害されるか。
……いや、それ以前に、巫女の持つ“エブリースの首飾り”は常識外の力を秘めた魔導器だ。そのことが知れればネービス公直属のデビルバスター部隊“ネスティアス”辺りが調査に動くことになるだろう。
これだけの騒ぎだ。ティースが報告しなかったとしてもいずれ同じ運命になる。
この村の未来。
巫女の未来。
それがどうなるのか、ティースにはわからないが――
（今までどおり、にはならないかな……）

脳裏にアメーリアの涙が蘇る。
――彼女は何を望むのだろうか、と。
そう、ティースが考えたそのとき、
「……？」
顔を上げる。
部屋の扉がゆっくりと開いて、そこにうっすらと佇む人影があった。
顔までは見えなかったが、体格からしてどうやらアメーリアのようだ。
「気がつかれたのですね」
別の部屋で寝ているのであろうリィナやエルレーンに気を遣ったのか潜めた声でそう言って、アメーリアはゆっくりとティースの横たわるベッドへと近付いた。
「アメーリア……ああ、もう大丈夫だよ」
一瞬この村に来た夜のことが脳裏に蘇って肝を冷やしたティースだったが、近付いてきたアメーリアはあの日と違い、きちんと寝間着を身に纏っていた。
「どうしたんだ？　こんな遅くに」
ティースがそう問いかけると、アメーリアはベッドの横に置いてあった椅子に腰を下ろし、手にしていたタオルを見せて、
「少し汗を掻いておられたようでしたから。風邪をお召しにならぬようにと」
「あ、ああ。そうか」
それでティースは気付く。おそらく彼女は今やってきたわけではなく、もともとそこに座って彼の看病をしていたのだ。タオルを取りにいったところでたまたま目を覚ましたのだろう。
「あ、自分でやるよ。ありがとう」
手を伸ばそうとしたアメーリアを制止して、ティースはタオルを受け取った。
それで首筋の汗を拭いながら、

「君も今日は疲れてるんじゃないか？　俺はもう大丈夫だから部屋に戻るといいよ」
「いえ、私は大丈夫です」
「大丈夫には見えないけどね」
この薄暗い中でも、彼女の顔に浮かぶ疲労は隠せていないし、ところどころに巻いた包帯には血が滲んでいる。
ティースは深刻そうな顔のアメーリアに対し、少し軽い口調で言った。
「寝たほうがいい。夜更かしは美貌の天敵だというしね」
「……ティーサイト様」
「ん？」
「明日には、もうお戻りになられるのですか？」
「ん、まあ……村長さんとも相談だけど、ここにいる理由はもうなくなったかな」
「……」
黙りこむアメーリア。
「……気に病むことはないよ、アメーリア」
彼女が何を考えているのかを想像し、ティースは先にそう言った。
「君の想いは理解してるし、俺には君を糾弾するつもりはない。――こんな仕事だからね。殺されかけるのなんて慣れっこさ」
最後は軽口に紛らせる。
彼女の殺意はおそらく巫女の立場を知るザヴィアによって意図的に誘導され作られたものだ。さらにリージスの仲間が命を落としてしまったことも、ザヴィアによって洞穴の奥深くまで誘い込まれた結果である。
弱冠十四歳の少女が巫女としての自らの立場に思い悩み、村を守ろうとして起こした行動だと考えれば、このティースというお人よしの男がそれに怒りを抱くはずもなかった。
「色々、あるだろうけど」
それでも黙ったままのアメーリアに対し、ティースは言葉を選び

ながら言った。
「君は村のことだけじゃなく、自分のことも少し考えたほうがいいんじゃないかな。……正直、俺は君が巫女であろうとして淡々と話す姿を見てると、無性にやり切れない気持ちになるんだ」
「やり切れない……？」
不思議そうに呟くアメーリアに、君がまだ子供だということもあるんだけど――と、言ってティースは小さく息を吐く。
「セシルという子がいてね。君と同い年で動物にものすごく好かれる子なんだけど、だいたいいつも笑顔で天真爛漫な子なんだ。だからどうしても、重ねて見てしまって――いや、ごめん。これは説教とかじゃなくて俺の願望だな」
「私はヴァルキュリスの巫女、ですから」
「わかってる。君がセシルと一緒じゃないこともね。でも、巫女としての使命ってのは、そこまで自分を殺さなきゃ本当に守れないものなのかな？　……かつて天に近い場所にいた巫女は、神秘性を失って地上に堕ちた。そうしたのは君のお母さんだったね」
「……」
アメーリアは考え込むように黙った。
「それを無かったことにして再び天に昇ろうとするのも選択肢の一つではあるけど――もしかすると君のお母さんは、すべて承知の上で“わざとそうした”んじゃないかな」
「わざと……？」
「時代が変わったんだ。昔と違って村は貧困に窮し、少しずつでも外と交流を増やさなければやっていけない状況になりつつあった。だけど“ヴァルキュリスの巫女”というこの村独自の信仰は、外の世界では異質なものだ」
だから――と、ティースはいったん言葉を切って、そして続けた。
「君はお母さんの行動を“過ち”と表現したけれど――先代の巫女は“堕ちた”んじゃなくて、敢えて地上に“降りた”んじゃないのかな」

「……母は、そんなことは一度も」
「いずれ、言うつもりだったのかもしれない。……でも不幸な火事で、君のお母さんはそれを伝える前に命を落としてしまった。あるいは自分の代ですべてを片付けてしまうつもりだったのかもしれない」
すべては憶測に過ぎないけれど――そう付け足して、ティースは口を閉ざした。
そう。その話に根拠は無く、すべては彼の願望を含めた推測だ。
……が、少なくともそこに破綻がなく、真実を知る人間がもうこの世に存在しない以上、事実がどうであろうと、あとは彼女――アメーリアがそれをどう受け取るか、ただそれだけの問題である。
巫女として生きるか、人として生きるか。
もちろん“エブリースの首飾り”という強力な魔導器の存在が明るみに出た以上、いずれは外的な要因が彼女に干渉してくることもあるだろう。
しかし、それでもまずは彼女自身の意思だ。
それらに流されないようにするためにも、彼女が自分自身の意思を強く認識する必要がある。
「……」
アメーリアが無言で視線を落とす。
――長い沈黙があった。
(すぐ結論が出るものでもない、か……)
そう思い、ティースは再び口を開く。
「さあ、アメーリア、今日はもう寝よう。……俺も眠くなってきたよ」
そう言ってわざとらしくアクビをしてみせた。
すると、
「……ティーサイト様」
アメーリアが顔を上げる。
「うん？」

アクビの涙を手の甲で拭いながら彼女を見ると、
「これからどうすればいいのか、私にはまだわかりません。頭の中も混乱していて……でも、一つだけ、今の話を聞いてわかったことがあります」
「なんだい？」
「私は――」
アメーリアは真っ直ぐにティースを見つめる。
そして言った。
「……貴方のことが好きになってしまったようです」
「へ？」
アメーリアが腰を浮かせ、身を乗り出してくる。
――ティースの頭に非常事態を知らせる警告音が鳴り響いた。
「ちょっ……ちょっと待って！　アメーリア！」
咄嗟に逃げようとしたが、昼間の疲労が抜けきらない体にはまったく力が入らない。
「ティーサイト様――」
薄闇の中。
十四歳の少女とは思えない熱っぽい瞳がすぐ目の前にあった。
「……申し訳ありません。でも私は、これ以外に想いを伝える方法を知らなくて――」
「お、落ち着いてくれ！　それは一時の気の迷いだ！　こんなことがあって君は混乱しているんだッ！」
「ティーサイト様――」
「ちょっ……まっ――」

「……――うぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！」

「ティース！　どうしたの!?」
「ティース様ッ!?」
家の中に明かりが灯って、他の部屋で眠っていたエルレーンとリ

ィナが即座にティースの部屋へと駆けつける。
するとそこには、
「どうして……？」
ティースの手を握って困惑した顔のアメーリアと。
……ベッドの上でぐったりとしているティースの姿があった。
「ティース様――」
「……あちゃぁ」
エルレーンはその光景を見て状況のすべてを理解し、苦笑いする。
「おい！　なにがあった！」
そこへ、近くで悲鳴を聞きつけたらしいリージスも家に飛び込んできた。
エルレーンは彼を振り返って、
「あ、ちょうど良かった。リージス。悪いんだけどティースの看病、お願いしてもいいかな？」
「はぁ？　俺がか？」
リージスは不審そうに聞き返して、気絶したティースとそのそばに寄り添うアメーリアを見る。
何が起きたのかまったくわからない表情だった。
――当然だろう。
「うん。ティースにとってはそのほうが良さそうだから。……さ、アメーリア。部屋に戻ろ？」
「で、ですがティーサイト様が――」
「大丈夫大丈夫。それにキミが悪いわけじゃないから心配しないで。あ、リィナ。彼女を部屋に連れて行ってあげて」
「お、おい。なにがなんだかわかんねぇぞ」
リィナとアメーリアが退室しても、リージスは状況を理解できていないようだった。
どうやら何も説明せずに納得させることは難しいようだ。
エルレーンは答える。
「ティースはその、ちょっとね。女の子が苦手でね」

「に、苦手？　苦手ってレベルなのか、あれ……」
そうだよ――と、エルレーンはそれ以上説明することなく、
「そういうことだから、疲れているところ悪いけど、お願いね。たぶん一時間もあれば目を覚ますと思うから」
「お、おぅ……」
そうして次の日以降。
スピンネルの村には、村を救った英雄として“女嫌いのデビルバスター”ティーサイト＝アマルナの名が、しばしの間、語り継がれることとなったのである――。

その道ではチェリンという名前の木が桃色の花びらを枝いっぱいに咲かせていた。
大陸暦三百二十一年三月の末。それはネービスの街にある学園群で次々と卒業式が行われ、学徒たちが旅立っていく時期だ。
そして、その学園群の中でも五本の指に入るであろう名門“サンタニア学園”。その薬草学科では、およそ十数年ぶりに入学試験から卒業試験までトップを守り続けた、才媛の誉れ高い少女が卒業を迎えていた。
シーラ＝スノーフォール。
あらゆる意味で学園の有名人だった彼女の門出は、不思議とひっそりとしたものだった。
学園の関係者を除けばそんな彼女を見送ったのはたった一人の友人だけであり。
そして彼女を出迎えたのもたった一人だけだった。
「……おめでとう、シーラ」

「一年遅れてしまったから無条件にめでたくはないけど、でもありがとう」
特別な日でもそんな彼女の態度はいつもどおりで。
ティースは胸がいっぱいになりながらも、その感情をぐっとこらえた。
そうして二人、並んで歩き出す。
――この道を一緒に歩くのは、一年ほど前、ティースがこの学園の特別講師を務めたとき以来のことだった。
「ここを歩くのも、これが最後なのね」
「……ああ」
「通い始めた頃は、まさかこんなことになっているなんて思わなかったわ。お前がまさかデビルバスターになってるなんてね」
「……ああ」
「ちゃんと聞いてる？」
「聞いてるよ」
やや不満そうな顔をしたシーラにティースはそう答える。
嘘ではない。嘘ではないが――下手なことを考えると、つい口をついてしまいそうになる言葉があって、ティースはあえて思考を麻痺させていたのだ。
その言葉とはつまり。
これからどうするのか――、ということ。
サンタニア学園をトップで卒業したとなれば引く手は数多だろう。それはネービス領の内外も問わない。すでに薬師を営んでいるところで修行することも可能だし、いきなり店を開こうとしても出資者を集めることは難しくない。
そして彼女は、おそらくはもう進路を決めているだろう。ただ、ティースには話していないだけだ。
――彼女がミューティレイクの屋敷にいるのは、ティースの被保護者という立場だからである。そんな彼女がティースの保護下から抜けるということは、それはすなわち屋敷を出て行くということで

もあった。
それでもネービスで仕事をするのならば、会いに行くことは難しいことではない。
が、もし彼女がそれ以外の選択をした場合。
――それは別れを意味する。
別れ。
その事実を認識すると、ティースの胸は寂しさと、それ以外の言いようのない感情で埋め尽くされる。
ディバーナ・ロウに所属するティースはこのネービスから離れるわけにはいかないし、たとえ、彼がディバーナ・ロウを抜けて彼女に付いていこうとしたところで、彼女がそれを認めないだろう。
なぜならば、彼が果たすべき役目はもう、終わったのだから――
「……なぁ、シーラ」
そしてティースは意を決し、口を開く。
「お前、これから――」
「ティース」
その言葉を遮って。
――おそらくは自ら切り出すことにこだわったのだろう。
シーラは足を止めた。
ティースは少し遅れて足を止め、そんな彼女を振り返る。
周囲には桃色の花びらが舞っていた。
一瞬の躊躇。
ゆっくりと、彼女の唇が開く。
「感謝しているわ。お前のおかげで、私はこうして夢のスタート地点に立てた」
「……」
その瞬間にティースは悟る。
――次に続く彼女の言葉は、おそらく別れの言葉になるだろう、と。
そしてシーラは続けた。

彼の予想通りに。
「私はジェニス領に――カザロスに戻るわ。向こうで薬師になる」
胸がきゅっと締め付けられた。
「……そうか」
「お父様のことも気になるし、ここまで来ればもう反対されることもないでしょうし。……だから」
「……いつ？」
引き止める言葉を喉の奥に飲み込んで、ティースは淡々とそう尋ねる。
返すシーラの言葉も淡々としていた。
「まだ決めてないわ。最後に一つ、やり残したことがあるから」
「……やり残したこと？」
「覚えてる？　私が一つ、願い事を残したままにしてたこと」
「……ああ」
それは、ティースがデビルバスターを本格的に目指した頃のこと。
三つの願いのうちの一つを残したままにしたことがあった。
シーラは頷いて、
「あの願いを今使うわ。ネービスを離れる前にやらなきゃならないこと――そのために行かなければならない場所があるの」
「どこに？」
最後の願いならきっと叶えてあげることになるだろう、と、ティースはそう思いながら尋ねる。
シーラはそんな彼の目を見つめ。
そして言った。
「大陸の北西――“常冬の国”クリーヴランド領よ」
そうして、おそらく最後になるであろう彼らの旅が始まる――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4042w/

デビルバスター日記

2012年1月8日15時49分発行